エターナル・ワールド・ストーリー

蒼雲 騎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エターナル・ワールド・ストーリー

【Ｎコード】
Ｎ１６０９Ｇ

【作者名】
蒼雲　騎龍

【あらすじ】
冒険が彩る世界で、それぞれ自分の何かに向かう冒険者達は、何を求め、何を知り、そして何所に向かうのだろうか・・・。一人目の旅人は、冒険者“Ｋ”。隠された過去、正体不明の男は有り得ない英雄だった。表舞台に立たなかった伝説の男は、包帯を仮面にして世界を流浪する・・・。二人目の冒険者は、若き俊才ウィリアム。その鋭い知識と、豊富な薬学知識は、いかに冴えるのか。三人目は、冒険者ポリアとその仲間達。“Ｋ”に出会って、目まぐるしく変わった彼女達の冒険の行く先は・・・。広い世界に、冒険者達の思い

が謳歌する冒険奇譚。

その男、伝説に消えた者

【エターナル・ワールド・ストーリー】

0，ファースト・プロローグ

ポリアンヌ、それが私の名前。

実家は貴族で由緒あるの。　ま、お嬢様ってとこね。

でも、2年前に家出したの。　剣と魔法が謳歌するこの世界で、冒険遣らなくちゃお話になんないわよ。

でも、ね・・・あの人・・・Kとの出会いは、私を変えた。　この冒険者と云う道の難しさや悲しさを教えてくれた。　多分、私・・・おばあちゃんになっても忘れないわね。　Kの事・・・。

1．Kと云う男

海からの風が、穏やかに晴れた街を吹きぬける。　春の風が、温かく優しい。

古代王国ホーチト

王制が数千年も続く古い国。　今はもう王が国の経済政権を大臣などに渡した政治になっている。　農業が最も盛んな国であり、野菜や果物を買いに世界から船が押し寄せる。

王都でもあり、国内最大の街マルタンは、商業の中心都市でもある。
　今日も、船で運ばれてきた大量の物資が港に降ろされる光景が広がって、港から街を賑わせる。

海を渡る唯一の手段の船だ、様々なものを運んでくる。　人・物・・・船から降ろされる荷物とは別に、港に停泊する数々の船より、旅客も降りる。　その中には、様々な姿の人達が居る。　黒い礼服やドレスなどの正装をした男女や、旅人の様な姿のもの・・・。　しかし、その中に混じり、全身を鎧など纏い武装した者や、ステッキや杖を持つ者達。　一般の者とは明らかに異質な姿。　彼らは、［冒険者］と呼ばれる。　冒険者は世界を旅するだけの旅人とは違い、その持つ武器や、魔法という力をつかって、冒険をする者達だ。

しかし、辺りの人々は彼らを特別な視線で見ることは無い。　この世界で冒険者は、特別な存在ではない。　むしろ、駆け出しの冒険者など世に溢れているし、普通に働いている人の中にも、元冒険者などたくさん居るだろう。　そう、彼等もまた唯の人なのだ。

冒険者という職業がこの地に生まれてから、遥かなる悠久の月日がながれた・・・。

しかし、まだ彼等がいるという事、それは意味があるのだと云う事かもしれない。

冒険者と見られる人々を含めて、船から降りる者、船に乗り込む者様々。　幾多の者達が、船という足に身を委ね旅を続けているのだろう。

さて、街に目を移せば、このマルタンの街の中心を東西南北に貫くレンガを敷いた大通りは、この首都の大動脈だ。

日々、港に着いた物資が国内外の交易都市に運ばれたり、国内外の交易都市から来た物資を積み込む為、都市の中は荷馬車が犇めいてる。　無論、街の中の網の目の様な通りの脇道や通りは、荷馬車以上に人が動いている訳だが。

大道路から枝分かれした繁華街へ向かう大通りを行く人々の中に、ちょっと人目を惹く二人が居た。

「なんで、いきなり呼ばれんのよ」

不機嫌に言うのは、百合の絵の装飾が美しい白銀製の上半身鎧を着たうら若い美女だ。　腰には、刃渡り９０センチ前後の柄の紅い長剣を佩き、白いマントが潮風に靡いている。　凛とした美顔に細く切れ長い眉が、切れ長の瞳に似合っている。　髪は白銀色で、長い後ろ髪をリボンにて螺旋巻きに固定して、長く垂らしている。　白い肌は肌理が細やかで透き通っているかの様だ。　スリットの入った白いスカートから覗ける素足の太股や脹ら脛は、真珠が体に成った様で、足には深紅の鉄靴を履いていた。

「ポリア様、館の主人に呼ばれたのですから、悪い話では在りますまい」

そう言ったのは、“ポリア”と呼ばれた美女と並び歩く背の低い男である。　屈強な筋肉の鎧の様な体で、日焼けした黒い肌。　ポリアより頭一つ低い体には似遣わなく長い戟槍を持っている。　男の身長の二倍は長さが有ろうか。　見た目は、船着場にて働く４０過ぎた船乗りのような厳しい顔だが。　ポリアに対しては臣下のように言葉を選んで接して居た。

「解ってるわ。　でもイルガ、昨日あれだけコケにされてよ。　んで、今日いきなり“来い”ってさ…」

二人は、往来で行過ぎる人や馬車を避けながら、

「確かに…。　ですが、仕事の斡旋は館の主人の気持ち一つです。　呼ばれたら行きませぬと」

「解ってるわよ、あ〜。　こんな事なら、二人も連れてくれば良かった」

ポリアは、軽く頭を振った。　ポリアとイルガが泊まっていた宿には、魔法遣いのマルヴェリータと僧侶システィアナが居る。

昨日、仕事を探しに行って、報酬の大きい仕事を受けようとしたのだが。　仕事に対する実力差を問われ、刃向かった言い方をしたポリアは、斡旋主に散々罵られた訳だ。

昨夜は、仲間内で大酒飲み浴びてしまった。　だから、宿の残った二人は飲み過ぎて二日酔いに…。

しかし今日の朝になって、いきなり斡旋主から呼び出しを受けたという訳である。

街の中心地の少し外れには、冒険者達へ仕事を斡旋する館が有る。

【蒼海の天窓】

が、館の呼び名。　海が広がる港の風景を一望出来る高台の曲がり道。　それを前にして館が建っている。　古めかしいが、黒くどっしりとした大きい館であった。

ポリアが館の前に遣って来た時、館の前の通りにて。

「じゃ、行こうか」

低音の声をした若い冒険者が、５・６人の仲間に声を掛けていた。
　リーダーらしき若い男は、赤い上半身鎧が春の日差しに照らされて、光沢が目映い。

イルガは、その一団を見て。

「お嬢様、あれは“グランディス・レイヴン”の一行ですな」

「そうね、この国生まれのチームじゃ、現役一番のチームだわね・・・。　はぁ～、なんか次の仕事を請けたみたい。　いいわね～、実力の違いだわ」

若い男を先頭に行く一団を見たポリアは、羨望の眼差しを向ける。

先頭で歩き出した赤い上半身鎧を着た若い男の後に、白いローブと云われる全身を包む服に身を包む清楚感溢れる女性や、大木を一撃で斬り倒しそうな大きい両刃の戦斧を背負う戦士風の大男が後に続く。

さて。　冒険者の世界にも色々と掟が有る。　例えば、仕事を斡旋してもらう為には、幾つかの条件がある。

1．二人以上のチームであること

2．仕事は、実力に似合うチームに、館の主人が選別して行うこと

3．モンスターなどの怪物や化け物以外に武器を使用することは極力避け、止む終えない場合にしても。　被害は最小限に抑えること

などなどだ。

仕事は、簡単な探し物から、遺跡調査や刑事活動まで多種に渉る。
伝説に語られる冒険者の話には、国難を救ったり、夥しい数のモンスターの討伐。　果てまたは、稀少な遺跡発掘や、剣豪伝など様々に・・・。

駆け出しの冒険者達は、そんな話に憧れたりして有名になることを望んでいる訳だ。

此処だけではなく、世界の主要都市や、大きい町には館や建物としての斡旋所が有り。　腕に相応(みあ)った仕事しか請けられない。　仕事の成果や、仕事をこなした行動は、関わる人により噂や情報として

伝えられる。　嘘や作り事など、直ぐに殆どが露呈する。　仕事の成否が一番の重要だが、その成功の導き方なども加味して主が冒険者達の実力を判断する。　その印象が反映して、チームの名前が館の主によって広めて貰えるなら、世界を渡り歩いても、色々な仕事を請けられる事になり。　難易度の高い、高額な報酬を示される仕事なども回して貰える様に為る訳だ。

さて、ポリア達は、１年半ほど前に“ホールグラス”（砂時計）という名前でチームを結成したが、今のところは駆け出しチームなワケで。　お世辞にも有名とは言えない。　ま、ポリアと、宿に残った魔法を操るマルヴェリータと云う女性の美貌だけで、微妙な有名度がちょっと有る程度だ。

「イルガ、中に入ろう」

「はい、お嬢様。　良い話だといいですな」

「だね」

黒いガッシリとした館の扉。　イルガは、ポリアより先に扉を開いて中に。　“リーン”と、呼び鈴が涼やかな音色を発した。

中に入ると、館の面前である高台通りに面した壁側はガラス窓で、外からの日差しが入って中は明るい。　百人ぐらいでダンスパーティーでも開けそうなだだっ広いロビーが広がり。　ロビーの中央には、人が３・４人くらい内側に就ける広さの円卓があるだけ。　ほかに目立った物は右手の奥に、二階へ行く、“く”の字階段が見える程度、家具もテーブルも椅子も無い。

だが、外の通りに面した窓側の壁以外、奥と左右の壁に向かって様

々な姿をした冒険者達が食い入るように向いている。　壁には、冒険者に依頼された数々の雑務や仕事が張り紙として掲示されている訳だ。

簡単な物では、農作業の手伝いを数日とか。　面倒な仕事では、迷い犬の捜索などもある。

「あら、今日は多いわね」

ざっと、館内にて仕事を探している人達は４・５０人は居る。　何時もは２０人くらいなのだが。　見る限り、新米か、それとも他から来た見かけない冒険者達がチラホラ。

「イルガ、どうもライバルが増えたみたい」

「ですな」

ポリアが先頭になって、中央の円卓に向かった。

円卓の内側には、立っている背の高い３０才くらいのバンダナを巻いた男性と、どっかりとチェアーに座った固太りの中年大男が居る。　大男の方が明らかに偉そうに見えるし、態度もデカイ。　丸坊主なくせに、モミアゲから顎にかけて態と残した髭がラインを引いている。

ポリアは、円卓に近寄ると。

「マスター、来たわよ。　話ってなに？」

ぶっきら棒で、ツンケンした言い方だ。　ポリアは、男性に恐怖症

に近いコンプレックスがある。　だから、一度でも警戒したり言い争いをした男性には、キツイ言い方を見せる傾向があるのだ。　しかも、領家のお嬢様育ちから、他人に対しても礼節は払うが謙りはしない。

「ん～？」

チェアーに座った大男はポリアを座りながら見た。

「おう、来たか」

「話ってなによ」

「おいおい、いきなりツンケンすんなってよ」

座ったままに、大男は笑い顔で言って来る。

ポリアは、プイっと顔を横に向いて。

「昨日、あんだけコケにされたらツンケンもするわよ」

大男は、顎をポリポリ掻いて。

「当たり前だろう。　腕に合わない仕事を請け様とするし、俺の判定に“ケチ”呼ばわりしたろうが」

なるべく穏便に事を考えるイルガは、ポリアに寄っては見上げ小声で。

「お嬢様、冷静に」

聞いたポリアは頷いて、主に顔を戻す。

「で？　話してよ。　今日は、宿に二人を残して来たから、お叱りなら手短にお願いしたいのよ」

すると、大男はポリアに近づくように卓上に腕を伸ばして身体を寄せると。

「お叱りじゃない。　ポリア、一つ相談が有って呼んだんだ」

この主人が、まだ中途半端の駆け出しチームのポリアに“頼み”とは珍しい話である。　ポリアは、主人である大男を見て、

「“頼み”・・・ね？　昨日の今日でどうゆう風の吹き回し？」

「うん。　実はな、昨日の夕方に一人で来た冒険者が居る。　その人物は、お前さんが昨日に遣りたがった仕事について訊ねて来た。　だから気に成って、俺もその男に色々と尋ね返した。　するとなぁ、その男の話を聞くと、ど～うもあの仕事には理解の行かない部分が出てきたんだ」

主人の話は、どうもポリアやイルガはピンと来ない。

「だから・・・何？」

「ポリア・・・あの仕事、遣ってみる気はないか？」

「えっ？　・・・昨日、散々に“無理”って言ってたのに？」

「嫌、“条件付き”でってところだが」

「“条件”？」

「おう。　その昨日の冒険者を、ポリアのチームに一時的に加える事が条件だ。　それが出来るなら、あの仕事はお前さん等に任せてみよう」

ポリアは、眉間に皺を寄せて腕組みした。

「ちょ・ちょっと待ってよ。　“流れ狼”を加えろってこと？　相手のことも知らないで、いきなりそんなこと・・」

ポリアの言葉には、いかにも“拒否”と受け取れるニュアンスが含まれた。

だが、これは珍しい事でもない。　チームに人を新たに加えるのは、チームの全員の承諾が必要に成る。　一時なりとも知らない者を易々と加入することは、稀なことだ。　新たに加入した人物によって、チームの分裂も間々あることだ。

それと。　もう一つ。

ポリアの口走った“流れ狼”。　冒険者の中には、一人でいる一匹狼が居る。　仕事を探す時だけチームを作ったり、何処かのチームに入ったりする流れ者なのだが。　これがまた、いい噂や話の少ない者が大半である。　分け前に煩く、自分勝手に行動したりする自分主義だの。　チームワークもなく、酷い話には仕事を台無しにさせて一人で逃げた・・・なんて話もある。　“流れ”・“流れ狼”は、どこに行っても敬遠される。

しかし、主人の大男は、腕を組んで身を背もたれに戻すと。

「ポリア、俺はバカじゃないぞ。　その辺の“流れ狼”と同じヤツをポリアのような駆け出しチームに入れたら面倒になるくらいの事は解ってる。　そんな面倒を、こっちがやらかすかよ」

「じゃ、一体なんでそんな事を条件にするのよ」

「決まってるじゃないか。　あの男に任せたいが、一人だし。　多分、ポリアのチームに一番足りないモノを持ってる気がしたからさ。　話を聞けば、その男は病気で冒険が出来なくなっていただけで、前は普通にチームに入っていたらしいし。　学者としての知識は随分と広そうだ。　悪いヤツではなさそうだし、ポリアにとってもプラスになる相手だと思うぞ」

「・・・」

主人の話にポリアは、腕組みしたままに悩んだ。

（新たに人を入れるなんて・・・）

しかしながら、ポリアにしても悩みの種が知識だ。　ポリアのチームは、ブレインという存在が居ない。　お陰で、頭を使う仕事や、知識を必要とする仕事の成功率は、全くの“０”と言ってもいい。

「マスター、その人ってどんな人なのよ」

ポリアが不安げに思わずと聞いた。　いきなりの話だから、無理のないことである。

「あ～、それがな。　まだ若い男だと思う、顔が解らんからなんとも言えないがな」

「え？　顔が解らないの？」

「あぁ、『包帯で隠れている』んだ」

主人の声に、いきなり何者かの声が被さった。『包帯で隠れている』に、誰かの声がダブる。

「え？」

と、ポリアもイルガも別の声がした主人の横を見る。

「あっ」

「ぬっ」

驚くポリアとイルガの顔が一瞬強張る。

「なぬっ？！」

驚いたのは、主人も一緒だ。　声のした左を見る。

そこには、スラリとした背の高い男性が立っている。　やや痩せ型で、黒の皮ズボンに黒い襟のあるロングコートを着ていた。　問題は、その顔・・・目・鼻・口を除いて、額から首まで包帯にて巻かれている。　仮面を着ける者はたまにいるが、こんな人物はその辺にいるものではない。

主人は、急なことに冷や汗を掻く。

「おお・・居たのか」

だが、その内心は酷く乱れていた。

（全く気配が無かった・・・この場にいる者の気配くらいは感じていたつもりなのに・・）

この主人も、元は冒険者として中々の仕事をしてきた男だ。　数年前に、冒険者を辞めた時にこの仕事にスカウトされたというところ。

やはり、冒険者の力量を有る程度は見極めなければならない職だ。

主人は、いつもだらけているような素振りで居るが、来た冒険者の気配から仕事を選ぶまでの姿は必ず見ている。　そんな男が、後ろから来たとはいえ、気配すらも感じられないとは・・・。

ポリアとイルガが、その包帯顔の男の姿に目を奪われている中で、包帯男先にが喋った。

「マスターさん、俺を入れてくれそうなチームは在ったかい?」

「あ?　あぁ・・今、このチームに交渉中だ。　昨日の昼に、あの仕事を請けようとしていたんだがな、ちょいと力量不足だから断った。　ま、アンタが加わるなら行けると思うし・・」

黒い姿の包帯男は、ポリアとイルガを見て、

「見た目変だが、怪しい者じゃない。　ちょっと病気でこんなに成っちまったが、オツムは普通に使える。　学者が職業だが、そこそ

こ薬の調合なんかもいける。　良ければ、チームに一時加えてくれないか」

ポリアは、困ってイルガを見たりして。

「え・・・えぇ・・・あのね、私のチームの仲間二人が、まだ宿に残ってるの。　リーダーは私だけど・・・ねぇ・・聞いていい？」

「なんだ？」

「あ～・・・なんで、あの仕事をやりたいなんて言う訳？」

「簡単な事だよ。　あの事件はタダの失踪事件じゃない」

「言ってる意味が解らないわ」

「俺は、依頼の事件が起こった町から流れて来た。　失踪の話を聞いて、少し町中で聞き込みをしたのさ。　行方不明の人物が、噂のような失踪をするとは思えない。　この事件には、裏が在る」

ポリアは、この男が何を言ってるかよく解らない。　請けようとしていたのは、失踪した女性を探すこと。　婚約者が、その女性を探して欲しいと、この館に依頼の遣いをよこした訳だ。

「どう・・・おかしいのよ」

ポリアが問う。

「どうと言うより、全てだな」

包帯男は、円卓に寄りかかり腕を組んだ。

この間に、一組のチームがバンダナを巻いた男に頼んで仕事を請けては出て行ったし。　１０人くらいの館に居た者が仕事も請けずに出ていっていた。

主人は、ポリアに向かって。

「興味があるなら請けてみたらどうだ？　別に、解決できなくても今回は評価はしない。　俺の独断で頼むわけだからな」

ポリアは、ちょっと考えてから。

「解ったわ。　それなら、この仕事中だけ加えてもいいわ」

主人は、手を叩いて笑うと。

「よし、それは助かる」

そこに、包帯男は口を挟み。

「俺は、Ｋ（ケィ）と呼んでくれればいい」

「解った、ケイな。　ポリアのチームの【ホール・グラス】に、ケイを加える」

ポリアは、仕事の内容を確認した。

―北の町オガートにて、行方不明となった女性のクォシカという女性を探す。　発見の報告は、町の町史（ちょうし）のラキーム氏に報告のこと。―

こうして、Kは私のチームに入った・・・・。

繁華街の道を、来た道の逆に戻るポリアとイルガ。　その二人の後ろには、Kが静かに歩いて続く。　やや長い前髪が、包帯の隙間に覗ける眼を隠す。　腰の辺りの服が膨らんでいるのは、サイドバックをベルトに通して付けているからだろう。

人の多い繁華街は、昼間は商店などに客が来て賑う。　こんな人通りの多い通りでは、Kは目立って仕方ない。　ジロジロとKを見る通行人や、店前に態々立つ店の主。

ポリアは、Kに。

「ねぇ、その顔は病気でって言ってたけど、なんの病気だったの？」

「ん～、“パタリ病”さ。　別名は、“剣士殺し”っても言うな」

「え〝、あの死病の“パタリ病”？」

「ああ、マジで死に掛けた」

Kは、あっけらかんと言い切る。

“パタリ病”は、大酒を飲む冒険者の特に剣士に罹る稀な病気と云われている。　言われる通り、急にパタリと倒れて、高熱を発して苦しんで死ぬとか。　生きた人間の話など聞いたことが無い。

イルガは、Kを改めて観て。

「生きれるのか・・・初めて聞いたわい」

Kは、顔を左手で擦り。

「生還率は、5分（5%）位らしいな。　俺は、丁度いい所に寺院が在った場所で倒れてさ、そこに厄介になった・・・。　高熱が半年続いて、身体中が滅茶苦茶に痛くなったままに一年。　いやいや、最悪だよ。　そのときの苦しみで、顔が歪んじまった訳」

ポリアは、生じ酒に強いだけに。

「うわわわ、ちょっとは控えようかしら」

と、お腹の辺りを、鎧の上から摩った。

「健康が一番さ、美貌を維持するのも少しの節制からだ」

Kはそう言って、周りの人の目など気にしておらず。　売っている店の品物を見回していた。

ポリアもイルガも、Kから邪気のような気配が感じられなく。　言葉のやり取りも少なく、ポツポツと・・。　気が付けば、昨夜から泊まっていた宿の近くに来ていた。

「あれ、みんなの泊まってる宿」

ポリアから聞いて、Kは立ち止まると。

「じゃ、どうする？　中に俺も入るか？　チェックアウトするんだろ？」

ポリアも立ち止まり、イルガも同様。

「待ってて、呼んでくるわ。　お近づきと仕事の話は、お昼で食べながらしましょ」

「OK、任せる」

Kは、そう言って宿屋が立ち並ぶ宿屋街の道脇に留まった。

ポリアは、一人で中に。　イルガは、Kの横に来た。

「ケイ、御主・・・得物は？」

「大丈夫だ、心配要らない。　今は、ダガー（短剣）を遣ってる」

イルガは、Kより頭二つは小さい。　彼が見上げるKはコートを捲ると、腰に刺してある長さの違う短剣を見せてきた。

「ふむ、一番長いのは４５センチは有りそうだな」

「ざっと、５０センチ強かな」

イルガはKを観て、

「元から学者だったのか？」

Kは、口元を微笑ませて。

「前は・・・格好つけて鞭を振るっていたが、もうそれも面倒になった」

「ふん、病気で筋力が落ちたか」

「そんなとこかな」

二人で話していると、ポリアの声がして宿から3人ほどの女性が出てきた。　イルガは、見て。

「出てきたわい」

「みたいね」

二人の前に、ポリアが二人の女性と共にやって来た。

「ケイ、僧侶のシスティアナ」

「よろしくで～す」

トロ～ンとした言葉の幼い感じする可愛らしい女の子だった。　背はイルガと同じくらいで、右手には木目が真新しい杖を持ち、フードの付いた純白の全身を包むローブに身を包んでいた。　背中には、金の刺繍にて、金髪の穏やかで慈しみ深い顔の女神が羽を開いて描かれる。

「こんにちわ」

Kが、頭を屈めて挨拶を。

ポリアは、もう一人の女性を紹介する。

「ケイ、こっちが魔法遣いのマルヴェリータよ」

「こんにちわ、よろしく頼むわね」

マルヴェリータと云う女性の声は大人びた物だった。

「よろしく、美人が多いな」

Kがそう言うのも頷ける。

蒼い胸開きのドレスに身を包み。　ポリアより少し背の高いマルヴェリータは、艶やかさ溢れる絶世の美女だ。　黒い髪が緩いウェーブで身体を纏うように腰辺りまで伸びている。　胸も男なら目が行ってしまいそうな張りがあり、括れた身体とのバランスは完璧であった。　右手には、純白のステッキが握られており。　ステッキの先端には、炎の鳥を模るオブジェが子供の握り拳ぐらいの大きさで付いている。

「ありがとう」

微笑するマルヴェリータは、その赤い唇を優雅に動かす。　薄めに見開かれている瞳は、男の大半が釘付けになってしまうだろう。

しかし、Kという人物はマルヴェリータにさして気も誘われない様子で。

「で？　どうする？」

ポリアは、マルヴェリータを見て、

「マルヴェリータが、美味しい店に行くって言うから。　そこで、ご飯食べながら話しよ」

「この町で、一番の店に案内するわ」

と、マルヴェリータが言えば。

「ほ～、それは豪勢なことで」

Kは、軽くそう返すだけだった。

マルヴェリータは、全員を連れて街の飲食店街の南にある5階建ての店に向かった。　アクアマリン色の外装で、壁には赴きを醸し出すためか蔦が這わせてある。

Kは、店を見て、

「こりゃ値が張りそうな」

と感想を。

この店は、この都市でも有名スポットで、料理が一流なら値段も一流のレストランである。　海の海岸から、港を一望出来るように間

取りがとられているという。

「あら、解るの？」

と、ポリア。

「ま、見てからに」

Kが言うと、マルヴェリータが入り口の両開きの扉を開いて。

「さ、中に行きましょう」

扉を開いて鳴る呼び鈴に、奥からタキシード姿で正装をした中年の紳士が現れる。　スタイリッシュな体つきで、対応丁寧に。

「いらっしゃいませ」

と、一礼。

マルヴェリータは、微笑んで。

「お久しぶり、クレオさん」

紳士は面を上げて。

「これはこれはマルヴェリータ様。　本当にお久しぶりで、二ヶ月ぶりですな」

と笑う。　どうやら、マルヴェリータは知り合いらしい。

「クレオさん、５階の部屋は空いているかしら？」

クレオと呼ばれた紳士は一礼して、

「はい、あの部屋は貴女様御一家以外は遣わせませんよ」

「ありがたいことです。　今日は、友人と来たので、料理は任せますからお願いね」

「はい、お任せください」

と、クレオは、手を叩いた。

すると、クレオの後ろから二人のメイド姿の女性が現れる。

「御案内いたします」

右のメイドが、恭しく頭を下げる。　幾分勤めた、２０半ばの落ち着いた女性である。

Kは、入り口のロビーの壁の絵、台と花瓶を見てスッと目を逸らした。　壁も、大理石をエメラルドグリーンに染めたものに、花や蝶に絵が描かれた細工の細やかな彩りを見せる。

メイドの一人に連れられて、５人は階段を上がって５階まで上がった。　５階には、踊り場から伸びる廊下を直進すると、行き止まりで扉がある。　メイドは、扉を開いて。

「こちらへどうぞ」

そこは、広々とした会食場のような一室である。　乳白色の美しいテーブルは、３０人は楽に席に就けるだろう。　椅子の細部に亘った細工・・・、テーブルに施された模様・・どれもが一級品だろう。

Kは、中に入って直ぐにテーブルを見ては、

「は～、年代物のグラッシク家具だ。　随分と金の掛かったレストランだこと」

ポリアは、言ってる意味が解らない。

「グラ、え？」

Kは、部屋を見回して歩き出しながら。

「グラッシク・・・今から３００年くらい前にいた家具職人だ。王室なんかに家具を作って卸していたんだがな、金のある貴族や商人が好んで大金払って買った家具だ。　出身が、この国」

と、説明していたが、右奥の大きい絵を見るなり。

「おいおい、コイツは珍しい。　狂人作家、エルゴーニュールの大作だ・・・」

右奥の壁には、悪魔のような奇怪な化け物に襲われた街並みが描かれている。　油絵だが、悪魔の描き方が実におどろおどろしい。

マルヴェリータは、窓を開けるメイドの後ろで海からの風を受けつつ感心した。

「良く解るわね。　ま、私はこの絵は嫌いだけど・・不気味の一言よ」

ポリアも、イルガも同じだ。

しかし、Kは絵を指差して、

「ま、この絵だけじゃ～仕方ない。　後1枚が足らない」

「え？」

ポリアは、絵を見て。

「この絵、まだあるの？」

「ああ。　この絵は、エルゴーニュールの、【殺戮と救世】と云う題で画かれた物の片割れだ。　悪魔に襲われた街と、その悪魔を倒す女神の絵が一対の筈」

「へ～」

と、ポリアが頷くと。

「俺の記憶が確かなら、片割れの絵はこの街の王室美術館にあるはず。　絵のためにも寄贈してやればいいのに」

と、Kは絵を見て言うのだ。

そこに、奥の別の扉から。

「お待たせいたしました。」

下の階で現れた別の若いメイドの女性が、台車にて飲み物を運んできた。

「座りましょう」

ポリアが言う。

Kは、素直に椅子に向かった。

テーブルには、ワイングラスとティーカップが並べられる。

Kは座ると、先ずパチンと指を鳴らし。メイドが向いたら、ワイングラスの飲み口を軽く手の平で塞ぐ。“酒は飲まない”のサインであった。

メイドは、静かに一礼する。

酒を飲まないのを言わずに知らせるのは、メイドに対しての嗜みである。

マルヴェリータは、ポリアにそっと。

（かなりの知識人よ・・・随分と物知りな人ね）

ポリアも頷く。

K本人は学者と言っていたが、その教養と知識は動く度に解る程である。

メイドが、テーブルの用意を整えて奥の扉から二人去る。

Kは、海や港を一望出来る窓を背にして座る。　その右に、イルガで、左にシスティアナ。　Kの正面にポリアで、ポリアの右にマルヴェリータが座った。

ポリアは、改めて。

「じゃ、一応はちゃんと自己紹介するわね。　私、リーダーの“ポリアンヌリファール・アルネクリス・ヴィハルト”。　剣士よ、名前は長いからポリアでいいわ」

すると、Kの視線がポリアに釘付けになり。

「“ヴィハルト”？　おいおい、まさか冗談だろ？」

その言い方に、ポリアとイルガの顔色が変わった。　イルガは、探るように。

「知っとるのか？」

「・・・そうか、それで紅の剣の柄か・・・」

Kは、一人納得したようにポリアの剣の柄の紅いのを見た。

ポリアは、驚いた顔でKに呻く様に。

「まさか・・・私のサードネームを知ってる人がいるなんて・・・」

ポットに入ったティーを、自分のカップに注ぐKは。

「“ヴィハルト”の姓は、隣のフラストマド王国の公爵家にいた天才剣士の使ったサードネーム。　それを遣うなんて、その一族くらいなもんだ」

ポリアは、焦りの滲む声で戸惑い。

「だって・・・、本当の名前で旅なんて出来ないじゃない。　でも、この名前を知ってるなんて・・・わが国の学者だって、王室学術の長しか知らなかったのに」

ソレを聞いたKは、苦笑いで。

「逆に、世間の古い学者のほうが知ってるかもな。　ま～もう古くて殆ど誰も覚えちゃない話だから使っていてもバレることは無いかもしれないが、な。　もし、チーム売れば変わって来るかも知れないぜ」

そして、Kはポリアを見つめると。

「どうやら、結婚させられそうにでもなったか？　その充てつけでその名前を？」

ポリアは、グッと息を呑んだ。

Kは、首を左右に振ると。

「図星かよ・・・跳ねっ返りが産まれちまったか。　オヤジさんも、苦笑いだな」

マルヴェリータは、Kを見てはポリアを見て。

「なんで解るの？　ポリアの家の事を知ってるの？」

「いいや。“ヴィハルト”の名前を遣った人は女性でね。“マリシナ・F・ヴィハルト”と云う。細剣を扱わせたら天才と云うか神懸り的だったらしいな。だが、その名前が表舞台に称えられないのには訳があってね。この女性、婚約した皇族との結婚を断り、何の名も無い市民と恋に落ちてしまった。だが添い遂げられない事を嘆き、二人して結婚式の日に心中しちまったのさ」

ポリアは、下を向いて黙る。

Kは、サラリと一瞥ポリアを見て。

「自由が欲しかったのか、自分の相手は自分で見つけたかったのか。飛び出したのは自分の意思だし。ま、これ以上はな～んも言わん」

と。そして、自分の番とばかりに。

「俺は、ケイ。学者だ。“パタリ病”で、自分のことの記憶がチョロチョロ抜けて名前が思い出せないから、この名前で頼む」

マルヴェリータは、横で黙るポリアを気にしながら。

「私は、マルヴェリータ・ベルバラード。魔想魔術師（イリュージョナー）よ」

その名前を聞いたKは、いよいよ呆れた素振りでマルヴェリータを

見る。

「オタクもかい。　このチームはどんな有名人の集まりだよ」

真顔に為ったマルヴェリータは、Kを見返して。

「やっぱり解るのね・・・私の家・・」

「“ベルバラード”は、この国の最高の商人である家に２００年前くらいに嫁いだ王侯貴族のサードネームだ。　王位継承権があるのに、態々それを無くしてまで愛を貫いた皇女の名前だろう？　全く、なんてチームだよ」

Kは、呆れ口調だが。　ポリアの時と同じく。

「ま、どうしたいかは自分の意思だ。　こっちも、もう触れん。　面倒だ」

イルガは、Kに向かって少し声のトーンを落として、警戒したままに。

「ワシは、イルガ。　ポリアお嬢様の従者だ」

Kは、頷くだけ。

次に、天真爛漫なニコニコ顔のシスティアナが。

「わたしはぁ～、システィアナ～ユリナエフぅですぅ～。　フィリアンタ教のそ～りょですぅ～」

Kは、頷いて。　物腰柔らかく、

「背中の刺繍で解るよ。　よろしくね」

と。

この世界には、２０を超える神々が崇められている。　その中で最も信仰の厚く信者の多いのが“フィリアンタ教”である。　古代の伝説に登場し、人に慈悲を与えて天界に還らなかった“優愛・博愛・慈愛の女神フィリアーナ”を信じる一派だ。　僧侶とは、神々に信仰を注いで、その神聖な力を授かりし救済の使徒である。　魔法の力は清らかで、怪我を癒したり、毒や大体の病も治せる。

一方、マルヴェリータの魔法は、想像の力を魔力と呼ばれる人の第六感に備わった力で具現化する超魔術だ。　なんでも具現化出来るわけでもなく。　解明された古代の魔法呪術語のほんの一部を操っているに過ぎない。　しかし、長けた者になれば、家一軒と同じ大岩を一撃で粉々にする破壊力はおろか、離れた所に移動したり、物を浮遊させたり、無くした物を見つけたりと万能呪術である。　このほかに、呪術には、幾つか種類があって、魔想魔呪術は、もっとも扱う者の多い呪術である。

さて、黙っていたポリアは、Kに向かって口を開いた。

「ねえ、なんで私の名前の由来知ってるの？　我が家の事は何も知らないハズなのに・・・」

問われたKは、紅茶を一口飲んでから、

「“炎剣ヴォルファリス”」

「え？」

「おいおい、知らないのか？」

Kは、いよいよ呆れて聞き返す。

「知らないわ・・・。　小さい頃にお父様から聞いたのは、悲恋の天才剣士だったってだけ・・・」

「ふぅ、自分の家の歴史だぜ？　マリシナの持っていた剣は、炎の精霊の長が鍛冶屋に手を貸して出来た秘剣中の秘剣だ。　ヴォルファリスの剣は、マリシナが死ぬ前にどこかに隠したとされていて、一説には結婚を迫った皇族はその剣を欲したとも云われる。　古い古い文献には載ってる。　本当に知らなかったのか？」

ポリアは、ショックな顔で、

「知らなかった・・・何も・・・」

「ま、もう数千年前の逸話かもしれないが、な。　君の家は代々に亘って剣の名手を輩出してるから、あながち本当かもね」

Kは、ここで手をタオルで拭くと、

「自己紹介も終わったし、それじゃ～仕事の話といくか？」

ポリアは、ハッとして。

「えっ？　あ、えぇ。　お願い・・」

語られ始めたKの話はこうだ。

今から4ヶ月ほど前、この王都マルタンの北にある町オガートで、一人の女性が行方不明になった。　名前は、“クォシカ”。　町娘にしては綺麗な女性で、町一番の美しさだったそうな。　依頼者の“ラキーム”とは、町の町政を司る“町史”（ちょうし）という役職で、町で一番偉いらしい。

さて、一見すると、婚約者が居なくなったラキーム氏が、愛する女性を探そうとしている様に見えるが。　どうやら裏はそんなモノではないらしい。

このラキーム氏は、実はまだ町史といっても代行であり。　その任は、まだ父親にある。　身体の悪い父親に成り代わって、ラキーム氏が代行している訳だ。　だが、このラキームという人物の評判は頗（すこぶ）る悪い。　町は、野菜や果物の生産で、春から秋の終わりまで商人が訪れて農家や地主と取引が盛んなのだが、ラキーム氏はその場に時々現れては金をせびるらしい。　しかも、女好きで女性に付き合いを迫るのも強引で、気に入れば誰とでもとか。

ポリアは、それを聞いて。

「まさか、失踪って・・・その男からクォシカって人が逃げ出したとか？」

と、呆れる。

Kは頷いて、

「町の人は、殆どがそう思っているな」

「じゃ、探さなくていいんじゃない？」

「それが、そうもいかない。　失踪しそうな女性じゃない。　聴くにしてクォシカという女性、失踪の半月以上前に、ラキーム氏との婚約を解消している。　しかも、亡くなったご両親を大切にしていて、地元の町では評判の働き者だそうな。　しかも、亡くなった父親譲りの薬草取りの名人で、町の薬剤師代わりだった芯の強いしっかりした女性らしい」

マルヴェリータは、ワインを傾けてから。

「確かに、失踪しそうな雰囲気は無いわね。　しかも、婚約を解消だなんて」

「ついでに言うと、ラキーム氏は2ヶ月後に結婚するとさ」

ポリアが、困った顔をして。

「はあ？　誰と？」

「このマルタンの街にいる伯爵家の令嬢と」

ポリア達は、訳が解らなくなった。

マルヴェリータからすれば、

「じゃ、もう探さなくていいんじゃない？」

で、ポリアやイルガも賛成である。

Kは、此処で。

「料理来たみたいだ。　食べながら続きといきましょうか」

一同が、奥の扉を見ると、

「御待たせ致しました」

と、メイド二人で、台車2つに料理を運んでくる。

Kは、その量を見て。

「なんだ、量が多いな」

すると、イルガは。

「いや、あんなもんだろう」

運ばれて来た料理が、テーブルの上に乗る。　丸鳥のグリルに始まり、サラダの大盛りのボウル。　パンは、焼きたての形のままに出てきたし。　魚のムニエルと、1メートルぐらいのスズキが姿蒸しで皿に。　6種のメインと、10種のオードブル。　10人前ぐらいのパンに、スープも似たような量。

Kは、口元を引き攣らせて。

「おいおい・・大食い大会か?」

と、小声で言う。

ポリアは、なんとでも無い顔で。

「まず、食べよっか」

仕事の話は中断した。

Kの前で、この連中ときたら食べるは呑むわ・・・・。　女性というのに、普通に食べる食べる。　食べ始めて少し、もうワインが2本は無い。　ポリアもマルヴェリータやシスティアナも呑む。

マルヴェリータは、酔い始めたやや座った瞳でKを見て。

「ケイ、“パタリ病”の原因ってなんだったの？」

すると、ポリアは、

「マルタ、お酒だってさ」

“マルタ”は、マルヴェリータの愛称である。

「へえ～。　どれくらい呑んでたの？」

Kは、魚の蒸し物を自分の皿に移しつつ。

「そうだなぁ、一番呑んでいたときは・・・一日に白ワイン２０本とか」

ポリアが、ギョッとして。

「一人でっ?!」

「ああ、仲間と行って、１５０本くらい空けた気がする・・」

イルガは、肉を食いつつ。

「そいつは病気にもなるわな」

Kは頷いて、

「すきっ腹でも呑んでたからね・・・皆さんも気をつけたほうが。目の下が少し充血してるし。休肝はちゃんとしないと、こうなりますぜ。生きていて、ね」

と、フォークで、包帯顔を指す。

すると、マルヴェリータがポリアを見て。

「明日から呑まないからいいわね」

頷くポリア。

Kは、食べつつ。

「毎朝、咽の渇きと頭痛が有るだろう。全員」

「う〜」

４人が、咽を抑えたり、お互いを見たり。

「ま、３０半ばで美容や健康に嘆きたくないなら、酒は程ほどに。
食事はしっかりと好き嫌い無く。　人は必ず老化と云う道を辿る。
それを遅らせるのは、食事・運動・好きな事をする。　そして、
人を愛する事。　心の安らかな人、優しい人は、歳を取ってもいい
顔をしているって訳」

すると、マルヴェリータはポリアを横目にして。

「あらあら、それじゃ～ポリアは大変ね～。　愛するは、男嫌いだ
から出来やしないわ」

すると、ポリアもマルヴェリータをキッと睨んで。

「だから何よ。　もう化粧しないスッピンは老化してるクセに。
ヨボヨボ顔を隠す化粧にも限界あるんじゃないの」

「なんですってっ?!」

マルヴェリータが睨み返せば。

「何よ、言って来たのはそっちじゃない！　そのあっさりしない性
格、魔法でどうにかなんない訳?」

イルガは、疲れた顔をして、

「お嬢様、マルヴェリータも、新しい仲間の前でもう喧嘩ですか。
止めてくだされ」

システィアナに至っては、肉をフォークに刺して持ったままに。

「ポ～リアちゃんもぉ～マルタしゃんもぉ～、お互いでだ～い好きなんですね～。　だ～から喧嘩するんですぅ～」

Kは、紅茶のカップを手にして、

（なんだこのチーム・・・曰く付きのチームとは本当だわ）

呆れるしかない。　もう、仕事の話どころではなくなった・・・。

ポリアは、酔い始めてか。　Kに絡み出す。

「ケイ、アンタも一杯くらいやんなさいよ」

「アホ、病気になったのに、やるかっつ～の」

「アホってなによ!!」

イルガが、酔っていながらに酔えてない顔で宥める。

「アンタも、苦労してるな」

Kが言えば、イルガも。

「何事も慣れというヤツか」

「な～る」

結局、Kは少食な方なのに、食わされてしまい。　明日のために宿を探すのに店を出た夕方には、ヨロヨロと腹を押さえて歩いていた。

2話、町に起こった失踪事件と、モンスターの存在

2.　町に起こった失踪事件

「う〜ん・・・」

Kが、幌馬車の荷台にて、魘されていた・・・。

辺りは、草原が広がり。　所々に林や茂みが広がる。　馬車が走っているのは、草原より一段低く整地された街道の道である。　石のブロックが整然と並べられ、馬車も走り易いであろう。

空は、鉛色の曇天。　御者の中年オヤジは色黒の肌で鷲鼻の渋い顔を天に向けて、良くない雲行きを見ている。

ポリアは、イルガやマルヴェリータとKの包帯顔を見ていた。

システィアナが、横からKの身体を揺すり。

「ケイさ〜ん、ケイさ〜ん、だいじょ〜ぶですかぁ?」

「ハっ」

Kは気づいて、大きく安堵のため息をする。

「はぁぁ〜・・・夢か。　凄いデカいステーキに押し潰される所だ

った」

一同は、苦笑している。

今日は、チームにKが加わって2日目。　朝、Kが前日の食べ過ぎで鈍くゲッソリしていたので。　マルヴェリータが、オガートの町にいつも野菜を買い付けている自分の父の店の馬車に乗せてもらった訳だ。

Kは、水袋の水筒で水を呑む。

空の色は怪しい雲行き。　この天候はKの予測通り。　更にKは、オガートの町に入る朝からは雨と言っていた。

ポリアは、ここで昨日の中断された仕事の話を切り出した。

「ね、ケイ。　ところで、昨日の続きを話してよ」

力の抜けた包帯男は、憔悴した声で。

「あ？　・・ああ・・え～とどこまで話したっけか？」

マルヴェリータが、心配して。

「大丈夫？　ラキーム氏の結婚の所までは聞いたわ。　令嬢さんと、御結婚とか」

「ああ・・・それだ。　問題の一つが、先ずラキーム氏が結婚するのに、なんで仕事を取り下げないのか・・・。　彼女を心配してといっているらしいが、ヤツの性格で普通なら有り得ない。　逆に考

えるなら、探さないといけない理由があるのではないか。　仕事の内容を見図るに、クォシカの無事より生死に拘ってる気がする」

イルガは、干し肉を齧りつつ。

「確かに、な」

Kは、なるべくイルガを見ないように俯いて続ける。

「第二に、失踪したクォシカの家の中だ。　異状に気づいた人によれば、丸で強盗にでも遭ったかの様に乱れていたとか」

ポリアもマルヴェリータも、

「え？」

同時に驚いて見合う。

「本当の事らしい。　しかもその家は、ラキーム氏が・・・」

“クォシカの帰る場所は俺の所だ。　クォシカの総ては、自分が預かる！”

「と言って、家も土地も取り上げて。　しかも、家は取り壊されてしまっとよ」

「なによそれ！！」

ポリアが大声を上げた。

Kは、グッと身を潜めて小声で、

「頼む、大声は止めてくれ・・・胃に響く・・」

「あ・・ごめん」

Kは、胃の辺りを擦りながら。

「しかも、だ。　今日、クォシカの失踪を唯一誘拐されたと言っていた人物がマルタンに帰る」

マルヴェリータは、首を傾げて。

「それなら、今日に会ってから町に行けばよかったじゃない」

「その人物は、クォシカの親友であり。　クォシカの家に有った家財道具をラキームから守って持って行ったらしい。　もしかすると、事件の手がかりが家財道具にあるかもしれないから、町に先回りしておけばいいさ。　その人物は、オガートの町で大規模な野菜生産をしとる地主の娘さんだそうな。　今日は、知り合いなどと野菜の買い付け値なんかの話があるだろうから、マルタンに一泊すると思う。　急ぐ必要はない」

マルヴェリータは、Kがもう全て計画済みとでも言っているように見えた。

「他には?」

ポリアは、話を進めるために突っ込んだ。

「後は～、町に行って確かめてからですかね・・・あ〃・・腹イテ・・・」

マルヴェリータは、慌てて御者に止まるように言った。

Kがトイレに行く間。

イルガは、ポリアに。

「お嬢様、如何に思われますか？」

「さぁ、町で聞いてみないとなんとも言えないわ。　只、ケイは随分とこの事件にやる気があるみたい。　お金も多い仕事だし、事件の解明が出来なくても査定はされないんだから、のんびりいきましょうよ」

システィアナは、両手を挙げて。

「さんせ～、ポリアちゃ～ん。　しごとがんばろ～」

ポリアは、首を左右に。

「頑張るように聞こえないって・・・」

Kが戻り、また馬車は走りだした。

馬車の旅は、2泊。　夜は、野原や、茂みの近くにて寝袋にての野宿。　この街道は、兵隊がオガートからとマルタンまでを行き来して警備しているからかなり安全な道である。

内乱など起こっている他の国だと、街道にすら盗賊や強盗が現れることも多いとか。

さて、旅立って3日目、朝からシトシトと雨が落ちてくる。

「ふぅ、ケイの予報通りね」

ポリアが、馬車の荷台から幌を捲って外を見る。

Kは、静かに。

「風、雲、土の温度を感じれば誰でも出来る」

「アタシ出来ないし・・」

もう、街道の両側は景色が変わり、広大な畑が耕されて黒い肥えた土が見えている。　畦と水路により区分けされた畑は見事。　ここで育った野菜は、近隣諸国世界に流通していく。　この国の、大切な財源であった。

昼を前にして、ポリア達を乗せた馬車はオガートの町についた。
大きな楡の木があるアーチの下を越えれば、そこから町の中。　土のむき出した道が先に伸びて、右も左も林が広がった。

Kは、御者に。

「建物が見えたら、右の3軒目に木造の建物は見える。　そこに止めてくれ」

「あいよう、宿だね」

「そうだ、温泉あるから、前に来て気に入ったのさ」

すると、御者のオヤジが、

「ああ、あそこはいい。“美人の湯”って有名な温泉だから」

ポリア、マルヴェリータは、ピクッと反応した。

「え？　美人？」

「まあ、良い所だわ」

Kは、関わり合わないようにしていた。

林の間を抜ければ、開けた町並みが見える。マルタンのように建物だらけではない、大木や木々を間に挟む町並み。Kの言った宿は、石造りの家の二つ先にあった。石の低い塀が囲い、敷地に生える大きな木々に囲まれるように、木造の立派で大きい屋敷の様な建物だった。

御者の男は、5人を降ろすと。

「それじゃ、私はここで別れます。お嬢様、みなさんもご無事に」

マルヴェリータが、手を上げて。

「ありがとう、父によろしくね」

「へい、では」

馬車は、町の奥に向かって行った。　この先には、噴水を中心とした広場があり。　広場は倉庫や店などで囲まれており、北側の1階が吹きぬけに成っている集会所のような場所で、日々野菜や果物の取引が行われる。　この集会所の地下には、蔵のような倉庫が何十も階層式に造られており。　毎年、雪が降るとこの蔵の部屋に運んでは温度を下げて野菜や果物を貯蔵するのだ。　各蔵の持ち主は決まっていて、雪入れの作業は町の人の総出で行われる。

野菜の取引で人が訪れる客の足は、多くないが絶えることもない。

町には、5軒ほどの宿があって、微妙に鄙びていて落ち着けるとマルタンの街に住む人は言う。　祭りや、暑い夏には、マルタンから貴族や旅行者が来る。　避暑地にもなっていると言えばいいところか。

Kは、先に開かれている木の門を越えて、石畳に沿って宿に向かう。　門より宿までは、石畳を道にしてよく手入れされている小降りの木々が佇む。　今は、桜が一番高い所で咲いているが、桃の花が奥でひっそり咲いている。　苔むした庭石、枝垂れている古木が、この宿の味わいを深くさせていた。

宿は木造だか古めかしいという印象よりは、どっしりとした大きい邸宅のようである。

Kは、入り口から入って受付のあるロビーで前掛け姿の老いた女性に声かけた。

「どうも、また泊まりにきましたえ～」

小柄で、目の大きい老いた女性は、Kを見て。

「あら、また来たのかい？」

そう言う老いた女性の目には、Kの後ろからポリア達も来て内装を見ているのが映る。　ポリア達の井出達を見た老いた女性は、半ば呆れた顔を見せて。

「なぁ～んだい、冒険者だったのかい」

この女性、この宿の女将である。　なかなか肝っ玉の据わって居そうな顔で。　痩せているが馬力はありそうだ。

「ああ、女性三人に、男二人。　四・五日泊まると思う」

女将は、ポリアやマルヴェリータを見て、

「随分な美人じゃないか。　ウチの風呂に入ったら、男が虜になって死んぢまうんじゃないのかい。　あはは」

ポリアとマルヴェリータは、笑う。

だが、Kは小声で。

「どっちの親もそれを願ってらぁ」

横に来ていたシスティアナが、

「ねがってら～」

と、復唱する。

「いいよ、別で用意してあげよう」

そう言った女将は、働いている手伝いの女性に声を掛けて案内を頼む。

女将は、Kに向かって男のような口調で姉御のように。

「で？　クォシカの事でも調べに来たって訳かい？」

「ああ」

Kは、素直に頷いた。

が。　ポリアやマルヴェリータは、なにも言ってないのに自分達の来た理由を知っていた女将に驚いた。

「女将さん、なんで知ってるの？！」

女将は、呆れてポリアを見ると。

「伊達に歳は食っちゃ居ない。　それくらいは解るよ」

すると、Kも。

「解り易いと思うがな・・・」

案内に着いて行こうとするKに、ポリアは、

「嘘っ？」

Kは、肩をすくめてから案内に着いて行った。

去って行くKを見ているポリア達。

女将は、そんなポリア達に呆れて、

「いいかい、此処じゃ狭い町の中だ。　マルタンとは違うんだよ。噂なんて、少ない町の中で直ぐに広まる。　冒険者達が、祭りもなんにも無い時期に、こんな町に長逗留なんて仕事しか無いって思うよ。　今のところ、仕事で町が頼んだのはラキームのアレぐらいなもんだ。　しかも、あっちの包帯のアンちゃんは、前にクォシカの事を聞きまわっていたし。　人数が増えてくれれば、大体想像つくだろうさ」

と、助け舟を出してやる。

「そ・・そっか・・」

ポリアも他の皆もやっと飲み込めた。

女将は、人の少ない時期だからか。

「お昼を出してあげるから、下に下りてきな。　クォシカについて話してあげるよ」

「あ・ありがとうございます・・」

「うん、だから。　納得したらさっさとマルタンにお帰り。　クォ

シカを探すなんて、詰まらない事なんだから」

女将は投げ遣りみたいに言う。

一同は、その素っ気無さに見合ってまた女将を目で追った。　女将は、階段ではなく、廊下の先の開けっ放しのドアの奥に消えていった。

「なんか・・・私達って要らないみたい・・」

マルヴェリータの言ったことは、ポリアも同感だった。

みんなが案内されたのは、三階の窓側部屋のだ。　女性三人は、五人部屋に案内された。

「うわ〜、広〜い」

ベットは、間隔をゆったり取った感じに窓前に並んでいる。　洗い晒しの白いシーツは清潔感がある。　丸テーブルに、椅子は三つ。　壁には、町の風景を鮮やかな緑の森に包まれた風景画が掛けられている。

案内の若いそばかすの多い町娘さんが。

「この宿の絵、全部がクォシカの絵なんですよ。　女将さん、クォシカの絵が好きだったから」

「へぇ〜」

答えたポリアやシスティアナもマルヴェリータも、その優しい筆使

いの絵が一目で好きになる。

荷物を置いて、三人は各部屋の絵を見ながら下に降りた。

一方、イルガとKは個室だ。　簡素な部屋だが、掃除はきちんと行き届いている。　Kの部屋に、公孫樹の森が描かれている大きな絵が壁に。　黄色の森が、夕方の日差しで陰の部分と陽に当たった部分のコントラストの美しい様子を見せている。　森の中で、見て描いた絵である。

「いい絵だな・・筆に描いた人物の心が宿ってるみたいだ」

「えっ？！」

案内する大人びた化粧っ毛の無い女性は、顔の解らない包帯顔の不気味なKを警戒していたのか、言葉に驚いた様子を出してKを見る。

「あ、ああ。　それね。　それ、クォシカの絵よ」

「なるほど、前は春の中央広場の噴水が描かれた絵の有った部屋だったが。　こっちはなんとも哀愁を感じる・・・」

案内の女性は、Kが絵を見る力が有ると視たのか。

「クォシカの絵は、どれもいいのよ。　女将は、絵の代金払おうとしてたけど、クォシカは貰わなかったみたい。　絵・・よっぽど好きだったのね」

「なるほどな・・失踪なんてさせる方が気違ってるわな」

「ホント、ラキームは大嫌いよ」

Kは、荷物を置いて一階に降りた。

女将が先ほど消えた所は、食堂である。　丸テーブルが、三～五人掛けで、１０個ほど。　長テーブルで、席に就ける場所が７列の四十席前後ある。

「いい絵ばかりだったわね。　一つ欲しいかも」

と、先頭で、階段を下りるマルヴェリータ。

「でも、この絵はこの場所が合ってるわよ」

ポリアが、後ろから言えば。

「そうで～す」

と、イルガと並んで降りるシスティアナが言った。

イルガは、ポリア達に合流して降りてきた。

四人は、ポリアを先頭に喋りながらその食堂に入った。　そして、先に来ていたKを見て四人は立ち止まった。

「ケ・イ・・？」

奥の窓の前にある丸テーブルに腰を降ろしていたKは、足を組んで肘を着いて外を見ている。　だが、その姿はとても優雅であるように見え、いつも見る冒険者の人々とは明らかに違う雰囲気が漂って

いた。

「Kって・・品があるのね・・」

「みたいね・・不思議な人」

と、ポリアと、マルヴェリータが言い合えば。

そこに、女将が料理を運んできて。

「ほら、何をボサっとしてんだい。　こっち来な」

四人は、Kの居る席に着く。

「奮発していっぱい作ったよ」

言う女将にして、Kは。

「この人達喰うよ。　こんなんじゃ～足りない。　まず」

女将は、ポリア達を見て。

「そりゃ面白い。　た～んと作ってあげるよ」

システィアナは、喜んだ。

「おいし～のだ～い好きですぅ～」

「いただきます」

と、ポリア。

Kは、一同を見て。

（遠慮しろよ・・・食ってばかりだろうが・・）

と、呆れるばかり。

まずは、野菜のスープと、野菜のグリルに始まり。　魚の生切り身のオリーヴオイル和え。　ステーキ、炒めたご飯、などなどどんどんでてくる。

Kは、自分に合った分量しか食べないが、ポリア達は食べ方は普通なのに、片っ端から皿を空けていく。

女将は、嬉しい笑い顔。

「いい食べっぷりじゃないかい」

デザートは、果物と野菜で作ったケーキや、冷たいジュースだった。

さて、料理を終えた女将は、グラスに紅茶を注いでKの横の椅子に腰を降ろした。

「美味しかったかい？」

「ええ、野菜が美味しかったです」

マルヴェリータが答えた。

「おなかい～っぱい」

システィアナが、ローブの上からお腹をパンパンする。

ポリアは、恥ずかしそうに。

「システィアナ、止めなさいって。　アンタ、アタシと同じ、二十歳なんだから」

「は～い」

Kは、十五・六歳にしか見えないシスティアナを見ては。

「ほう、多分四十になってもこんな感じだな」

と、口元を笑っていう。　嘲笑っているのでは無く。　システィアナに合わせているようだ。

女将は、Kを見て。

「で？　一体、クォシカの何がそんなに気になるんだい？　あの子は、ラキームの手を逃れて消えた・・・それでいいじゃないか」

ポリア達も、それでいいと思った。

だが、Kは。

「それなら、いいんだ。　そんな気がしないから、引っ掛かるのさ」

「そうかい？　あたしゃそんな気がしてるし、町のみんなもそう思

ってる」

Kは、ケーキをつまみつつ。

「クォシカは、自分が父親の病気の為に婚約してしまった事で、父親を死なせてる。　芯が強く、口数の少ない慈愛精神の強い女性だ。　逃げるなんて、余程の事が有ったか・・・有った後だろう。　そんな事、有ったのか？　婚約破棄した後に？」

Kが言って、女将は考えるように黙る。　皺の多い顔、白髪の頭の女将がグッと老け込んで見える。

ポリアは、むしろその話自体が驚きだ。

「お父さんを・・ってどうゆうことよっ？！」

「うん・・」

女将が応えて、語ってくれる。

クォシカは、ラキームに十四・五の頃からアプローチを受けていたが、怒る事も無くかわしてきた。

しかし、だ。　クォシカが十六の冬、父親が病気で倒れた。

クォシカの父親は、元々から病気がちで農作業はあまり出来なかった。　畑は、クォシカが手伝い。　父親は、森に入って薬草取りと薬師として収入を得ていた。　慎ましやかに、親子二人で支え合って生きてきたのだ。

クォシカの母親は、クォシカが幼い頃に病気で死んでいる。　クォシカにしてみれば、父親が唯一の家族であり。　父親の為に生きていると一緒の様なものだったらしい。

そこに、ラキームが弱みに付け込んだ訳だ。　ラキームの父親も病気になっていて、マルタンの街から交代で来る腕のいい医師によって養生している。　クォシカが自分と婚約するなら、その自分の所に来ている医者に口利きすると言ったのだ。

父親思いのクォシカは、ラキームの言いなりに成り掛けた。

だが、娘を思う強さは父親とて娘の気持ちに負けていない。　クォシカの自由の為に、父親は自らその命を絶った・・・。

―クォシカ、私の最愛の娘よ。　私と、妻の分まで幸せに・・、父の犠牲になっていけない―

そう置手紙が在るベット。　その横で、首を吊った父親の姿が在った。

クォシカの嘆きは非情なものだった。

しかし、この二人の親子に町のみんなが世話になっていた。　薬を施し、病人の為に深夜でも起きて駆けつけるクォシカと、父親。町のみんなが、クォシカに励ましを言い。　クォシカを支えてやろうとした。

クォシカは、そのお陰もあり。　父親の分までも生きる意味で、薬師の仕事も継いだのだ。

クォシカは、ラキームに婚約の解消を言って、この町にある寺院に薬草を届けたり、病人を診ながら暮らしていた。

ポリアは、父親の一件で頭に血が昇った。

「なんて奴なのよ・・・仕事を請けて損したわっ!!!」

と、吐き捨てる。

Kは、冷静に。

「ポリア、勘違いするなよ。　俺達は、あくまでもクォシカを探しに来たんだ。　ラキーム氏の為の見つけるんじゃない」

ポリアは、キッとKを睨み見て。

「でもっ、依頼主はソイツじゃない！　見つけるのは、手を貸しているのと一緒じゃないっ!!」

「冷静になれ。　義務は、報告だ。　受け渡しじゃない・・・見つけても渡さなければいいんだ。　それより、クォシカがなんで失踪しなければならないのかが解らない。　必要が無いのに失踪・・・意味の解らない部屋の荒らされ方・・・余計なラキーム氏の行動・・・どれも不自然過ぎる」

「そんなのラキームって奴が強引に言い寄ったのよっ!!」

ポリアが、感情的に怒鳴った時、Kは静かに。

「冷静になれと言ったのが聞こえなかったのか?」

と、低い声で言う。

「う〝・・・」

ポリアは、それ以上二の句が繋げなかった。　Kの気配が、一瞬だけガラっと変わったのが怖かった。　体中に、悪寒が走る。

女将も、驚いてしまったが・・・。

「アンタ、そんなにクォシカが心配なのかい？」

Kは、窓の外の雨模様を見て。

「嫌な予感がしてる・・・とにかく、一番の気がかりは依頼主が仕事として冒険者に依頼している事だ」

「どっ・どうゆう事だい？」

女将はKの言った事が胸に蟠る。

「簡単な事だろう。　ラキーム氏は、新たに女性を見つけて、しかも婚約した。　二ヶ月後には結婚するんだ。　もう、クォシカなんかどうでもいい筈。　もし、クォシカが失踪したなら好都合だ。　結婚する女性に、前の婚約者を知られなくていいんだからな。　なのに、探してる」

イルガは、腕組して。

「探す理由が解らなくなる上に、依頼主の真の意図も解らないのぉ」

「そう。　もし、仮にラキームがクォシカをどうにかした・・・つまりは誘拐とかしたとしよう」

ポリアは、びっくりして。

「ゆっ誘拐ですってっ？！！」

みんなも驚いて、Kを見る。

「仮にと言っている。　なんにせよだ。　探すフリをするなら、町史なんだから役人に探させて、“居なかった”と有耶無耶にしちまえばいい。　権力を持っているんだからな」

女将は、深く頷いて。

「なるほど・・。　確かにラキームは、クォシカを探すと役人にも命令したけどね。　有耶無耶にするどころか、直ぐにマルタンにクォシカ捜索の仕事を出したよ」

「だが、態々に冒険者に頼むなんて人に知られる事なんかするんだ？。　俺達には解らないが、ラキーム氏には意味が在るんだろう。　しかも、ラキーム氏の意図の矛先は生死だ。　・・・クォシカの失踪に、ラキーム氏は身に覚えが在る様な感じがするんだ」

マルヴェリータは、そこが良く解らない。

「でも、身に覚え在るなら・・・普通は隠したいから逆なんじゃない？」

「そう、・・・だがそうしないといけないとしたら？　理由はサッパリ解らないが、どうも裏が在るぞ」

女将は、Kを見る目が穏やかなものに変わっていた。

「あたしゃ、アンタが金欲しさにクォシカを探そうとしてると思ったけど、そんなに本気で考えるなんて思わなかったよ。　正直、心配なんだよ・・町のみんな・・・もし見つけたら、此処に連れてきておくれ。　ラキームなんかにやりたくないからね」

Kは、目を窓に向けたままに、頷くと。

「ああ、彼女も働ける場所があり、絵を飾れる場所が在る此処なら落ち着きやすいはずだ。　見つけたら、連れてこよう」

「ありがとう。　前に来てた冒険者とは違うね」

すると、Kは鼻で笑って。

「ふん。　ラキーム氏の仕事請けて来てるんだ。　違いなんかあるものかよ」

と、毒ついた。

ポリアは、Kに対して複雑な気分が湧いた。　なんで、見も知らずの女性に対して、こんなに動くのか解らない。　しかし、その頭の回転の良さや思考能力の鋭さは凄いと思った。

マルヴェリータは、Kに尋ねてみる。

「ねえ、ケイ」

「ん？」

「見も知らない女性に、なんでもここまで考えて行動するの？　貴方を見ていると、お金目的じゃない気がするわ」

「さぁ・・・探究心かもしれないし、御節介かもしれん。　ただ、何かに巻き込まれてしまっているなら、助けてみてもいいんじゃないか。　どうせ、生きている間は、人生は暇つぶしだ。　働いて、暇つぶせて、上手く行けば人助け・・・美味い生き方さ」

「他人に時間遣っても？」

「ふん。　自分に時間遣ったって、他人が居ないなら独りよがりじゃないか・・・どうせ遣うんだ・・・誰かの為でもいいじゃなかいか。　俺ら冒険者は、仕事をくれるのも、認めるのも、全部他人だぜ？　自分本位で、何が出来るって言うんだ？」

「そ・・それは・・・」

誰も、反論が出来なかった。

雨の曇り空・・・春の長雨の到来であった。

Kは、紅茶を飲み干すと。

「クォシカの親友と言うお嬢さんは、多分は明日の町への到着だろうな。　今日は、のんびりしよう」

女将は、それが誰か解った。

「それって、町一番の大地主でコルテウさん所ろの、お嬢さんかい？　名前は、シェラハっていうんだよ」

「そうそう、そのお嬢さん。　彼女が、荒らされたクォシカの家の家具を持って行ったとか」

「ああ、ラキームに噛み付くぐらいの気迫で守ったよ。　流石のラキームも、コルテウさんの所には頭が上がらないからね」

ポリアは、地主の権力じみたものを感じて。

「へぇ。　やっぱり、地主だからかな？」

すると、女将は笑って。

「それもあるけどね。　コルテウさんは、町の英雄だし。　ラキームの父親とも親友なんだよ」

「え・・英雄・・、町史の親友？」

Kが、ポリア達では解らないだろうと説明をしてやる事に。

「元々、この町の野菜の取引は、商人と町史の間での賄賂で仲良しの談合取引でね。　農家や地主に儲けなんて殆どな無かったのさ。

だが、今の町史で、ラキームの父親ってのは、私腹を肥やす役人を排除した。　地主のコルテウ氏と、町史アクレイ氏は二人で農家や地主の生活を守る為に全力を尽くした。　権力に負けず、終に農家や地主の自由取引を国に認めさせて、賄賂・談合を弾劾したのさ。

だから、二人は町の英雄であり、共にした戦友のような絆がある。
アクレイ氏が生きている間は、ラキームの専横は悪戯止まりだろうな」

「へ～、詳しいのね」

と、ポリアが言えば、女将も。

「良く知っておるね」

と、関心。

Kは、淡々と。

「画期的な事だもの、まぁ、国の面子保つために、表向きの功労者は内政大臣になってるだけだがね。　町の人は、その苦しい二人を見ていたから真実を知っているでしょうよ」

女将は、嬉しくなったのか。　当時、まだうら若い宿屋の看板娘だった当時を語ってくれた。

Kの言う通り、のんびりと過ごせそうな午後だった。　女将から、クォシカの事や町の昔が聞けて、ポリア達は知らない事の連続で、いい勉強になったようだ。

一方のKは、雨の中なのに宿の庭先に出て。　春雨に濡れる桜を見た。　淡いピンクの花びらが濡れて涙の様な雫を落とす。

（もう・・・半年・・・か）

宿の裏庭に行けば、花の色の違う桜の木が広がっていた。　木の下には、座って眺めることも出来るようにと、木製の腰掛があちこちに。　庭木は、梅に桜に桃に柳で、塀を見せないようにと囲う木々には、椿に牡丹に梔子・・・。　春先から、秋まで花が咲いている庭なのだとKは感じさせられた。

「花が・・・好きなんだな・・」

ポツリと、漏らす。

だが、夕暮れで暗く成り始める中、いきなり血の匂いが風に乗って漂って来た。

「？」

Kは、風の来る方に向かって歩く。　宿の裏手を奥に歩いて行けば。　裏の小道に出る裏出口に着いた。　丁度、食堂の左になるから厨房だろう。

「う・・うぅ・・」

人の呻き声。

Kが見れば、裏出口の先の小道に人の手が・・。　Kは走り小道に出れば、血まみれの中年男性が倒れていた。

「おい、しっかりしろっ」

見塗れの男を助け起こせば、全身に傷を負っている。　服が何か獣の爪にでも切られたかのような切り裂かれ方だ。

「うぅ・・・ば・・化け物・・・も・いちょ・・・う森に・・・ば・・・」

「公孫樹の森に、化け物か？」

Kの問いに、男は頷く。

Kは、男を抱えて厨房に行き、裏の勝手口に向かって。

「大変だっ！！　怪我人が居るっ！！」

Kの身体に似合わない大喝の一言。

「どうしたのっ？！！」

丁度、女将が居て出てきた。

「怪我人だ」

女将は、怪我をした男を見て。

「なんて、ドルインじゃないか。　さっ、こっちへ！」

Kは、大急ぎで食堂に運び込んだ。

その中で、

「女将、ポリア達を呼んでくれ」

「え？」

「システィアナは僧侶だ。　傷の治癒をして貰ってくれ」

「あ、ああ・・解ったよ」

この騒ぎに、他のお手伝いさんも顔を見せる。

「きゃーーー！！　アンタっ！！」

Kの部屋の案内をした女性が、驚いて寄ってくる。

「奥さんか？」

「そうよ・・なんで・・こんな・・」

Kは、調理台で使う長テーブルに男を寝かせる。

ドルインは、うわ言でしきりに。

「ば・・化け物が・・ば・・化け物が・・」

と、呻く。

「化け物？」

と、奥さんが聞く。

Kは自分の代わりに、傷を押さえ出す奥さんに

「公孫樹の森に出たらしい」

「そんな、この町にモンスターだなんて?!!」

奥さんは、女将が色々と他の手伝いと動くので、おろおろしてしまう。　町には、医者がいない。　丘の上の寺院に行って、寺院の僧侶に言わないといけないのだ。

Kは、仲間に僧侶がいることを言ってから。

「公孫樹の森にはどう行けばいい?」

「え?　町の広場前の道を東に・・・」

「解った」

Kは、一人で裏口に飛び出した。

「あっ、ちょっと!」

Kが出た後直ぐに、システィアナがトコトコとやってきて。　怪我人を見るなり、慌てて。

「まぁ、大変ですう〜」

と、魔法を唱え始めた。

「神よ、慈愛と優愛を抱くフィリアーナ様・・この傷に苦しみし者に癒しを与えたまえ」

システィアナの身体が淡い光に包まれ、その手の翳す傷口が見る見

る塞がる。　だが、その塞がるときに、煙がフワッと上がり。

「え？　闇の力で傷ついたのですか？」

システィアナが、驚く。

「モンスターだそうです。　包帯男の人が、モンスターの所に」

「まぁ、こんな町で・・」

そこに、ポリア達が走って来た。

「どうしたのっ？！！」

システィアナは、ポリアに向かって。

「ポリア～、モンスタ～です。　Kさんが、一人でいってしまったそうです～」

「ええっ？！！」

マルヴェリータは驚いた。　この十数年オガートにモンスター騒ぎなど聞いたことが無い。

ドルインの奥さんが、

「東の公孫樹の森ですっ。　ウチの人が、何度も言うんですっ！！」

そのときも、

「ば・・ばけ・・もの・・ば・・」

と、男はうわ言を。

イルガは、ポリアに。

「お嬢様、直ぐにケイを追いましょう」

「うん」

ポリア、イルガ、マルヴェリータは武器や杖だけ取りに行って、直ぐに雨の外に出て行った。

システィアナは、ドルインの怪我の治療に専念した。

ポリア達は、雨の外に出て、噴水の在る広場に入る前の大きい道を東に曲がって走っていく。　野菜や肉を売る店がチラホラ見えるので、どうやら町の目抜き通りらしい。　雨もあってか、通りに人も居ないし、店頭に人の姿も無い。

「全くっ、なんで一人で出て行くのよっ！！」

と、ポリアは唸る。　病気をしたKが、モンスターと戦えるとは思ってもいないからだ。

少し行くと道の左右の建物が、庭の在る民家に変わりる。　そのとき、道の反対側から槍を持ったチェーンメイル（チェーンを編んだ鎧）を着た男が歩いている。　どうも、足を引きずる歩き方だ。

「おーい、どうしたのっ？！！」

ポリア達が走り寄れば、顔や腕に引っかき傷を付けた役人であった。
この国の役人は、長槍にチェーンメイルの皮長靴が基本装備なのだ。

「おお、冒険者か？」

役人の男が、イルガに支えられた。

「そうよ、包帯男を見なかった？」

「ああ、君達の仲間か。　あ・あっちの公孫樹の森に来てくれた。
ゾンビの群れに遭ったんだっ、俺は・・助けを呼びに来たんだ」

群れたゾンビと聞いて、ポリアは驚いた。

「むっ群れ？」

「ああ、１０体以上居た。　もう、見回りの一人が殺されたっ。
クソっ、何だってこんな・・平和な町にっ？！！」

「解った、私達が加勢に行くわ」

「た・頼む、町の詰め所に居る仲間を呼んでくる」

マルヴェリータは、役人の男が右膝に酷い怪我をしているのを見て。

「大丈夫なのっ？」

「町の非常時だ、生きてる限り行く」

役人の男は、気丈にもそう言うのだが。　どう見ても、無理そうだ。

ポリアは、イルガに。

「イルガ、この人を町に連れて行って」

「お、お嬢様っ」

「つべこべ言わないっ！！」

ポリアは、森が見えている左手の民家の先に走り出した。

マルヴェリータも。

「イルガ、大丈夫よ。　早くもどってね」

と、ポリアの後を追う。

イルガは、肩を貸して役人の男を見てから、

「連れていくが、ワシは直ぐに戻るぞ」

と、町に戻る。　ポリアの命令は絶対なのだとイルガは決めていたのだ。

ポリアは、マルヴェリータと走った。　道がどんどん泥や水溜りのある野道みたくなり。　道の周りに家が見えなくなって、林と牧草の生える野原に変わった頃、左の林に森の方に曲がる狭い野道が見えた。　馬車が一つ通れるぐらいで、道の真ん中には雑草が生えて

いる。

「こっちねっ！！」

「ポリアっ、早すぎよっ」

マルヴェリータは、もう息が上がっている。魔法使いで、運動の得意な者は人による。マルヴェリータは、不得意のほうだ。

「もうちょっとよっ！」

ポリアは、そう言って道を走っていく。すると、いきなり開けた。左右に、やや広い砂利道が伸びていて、正面には公孫樹の原生林が広がっている。

「んんっ、どっちよっ。もうっ！」

と、困った時。

「あと一体だけですっ！！」

と、女性の声が左の方から。

「あっちっ！」

ポリアは、走った。

直ぐに水の流れが聞こえて、ポリアは用水路の流れる上に架かる石橋の前に出た。橋の先は少し馬車の止める引き込みの在る所だった。

「ケイっ！！」

Kは、一番長い短剣を抜いていたままに、その広がった場所に立っていた。

「やっと来たのか？　遅い」

と、脇目にポリアを見るK。

ポリアが見れば、Kの周りには、生前の姿を残したした死体や腐敗が進んで人の形だけをした肉人形のような遺体が倒れている。

「大丈夫ですか？」

ポリアの見ている前で、システィアナと同じローブを着た大人びた女性がKに歩み寄った。

「ああ、ゾンビに遣られるくらいじゃ、もう引退だ」

Kは、そう言って人の姿が残る遺体の傍らに屈む。

「ポリア、見てみろ。　ゾンビの姿に、違いがある」

そこに、マルヴェリータも来た。

「ハァ、ハァ、ケ・・ケイ、だいじょう・・ぶ？」

息も絶え絶えのマルヴェリータ。

「どっちが大丈夫だよ？　そっちこそ大丈夫か？」

ポリアは、Kの元に寄る。　Kは、息も乱れていないし、慌てた様子もない。　ずぶ濡れながら、余裕があった。

「ケイ、これ全部・・貴方が倒したの？」

「三体、そっちの僧侶（シスター）さんが」

「俺は、7体ほどか」

Kは、ゾンビの身に着けている物を検める。

「なんも持ってないな・・小銭が・・６０シフォンくらいだな」

“シフォン”とは、この世界の共通通貨で、銀貨だ。

ポリアは、死体を見て。

「なんか、冒険者みたいね。　ボロいけど、皮の胸当て着けてる」

Kも頷いて。

「ああ、冒険者の姿をした死体が、3体。　僧侶（シスター）の姉さんが倒したのは灰に成っちまったが。　俺の倒した7体は消えない。　コイツは、暗黒魔法か屍霊呪術タイプのゾンビだ。　問題は、なんでこんな所に出るのか・・・だ」

「なんで、解るの？」

ポリアは、ゾンビに違いがあるのなど知らない。　初耳だった。

「ゾンビには、2タイプあってな。　一つは、呪術の人工生物型（ゴーレム）。
もう一つは、怨霊型（アンデット）。　怨霊型は、恨みや妬みが闇の力に結びついてなるから、倒すと時間の経過が襲ってきて直ぐに塵に成る。
しかし、人工生物型は、呪術師の魔法でゾンビに成るから、倒してもただの死体に戻るだけ」

「知らなかった・・」

マルヴェリータは、倒された死体を見て。

「どうやって剣で倒せるのよ？　魔法じゃないと無理なんじゃないの？」

「ゾンビの倒し方は色々ある。　共通なのは、怨霊に然り、人工に然り、身体の何処かに身体を動かす闇のエネルギーの塊があるんだ。
ソイツを、聖なる力で斬ってしまえばいい」

「聖なる力って、貴方は僧侶でもなんでも・・・」

「別に、僧侶でなくてもいい。　聖水を剣に流してやれば、一時的に聖なる力が宿る。　その剣でもって斬ってやれば、この通り倒せる。　ま、ポリアの持ってる白銀の武器は、聖なる力が最初から宿ってるから要らないがな」

Kは、後ろを見て。

「シスター、マルヴェリータ、木の下にいろよ。　濡れ過ぎると風邪ひくぞ」

と、言う。　役人の来るのを待つ気なのだろう。　Kは、全ての死体を見て回る。

ポリアは、雨の中でそれを見ている。

マルヴェリータは、ポリアに寄って。

「ポリアも、木の下に行きましょう」

すると・・。

「マルタ・・一人でゾンビを7体も相手に出来る?」

ポリアは、真剣な目で見てくる。

「さあ、私は無理よ」

「だよね・・・私も・・無理・・」

ポリアは、前に一回ゾンビと戦った経験がある。　何処かを斬り付けたくらいでは全く倒れもしないし。　痛みも感じていないのか、凄い力で掴みかかってくる。　イルガと二人で苦戦し、システィアナの魔法で倒したのだ。

Kは、そのゾンビを7体相手にして一人で全て倒している。　Kが、並みの冒険者では無いことが解った。

「ねえ、ケイ。　一人、役人が死んだって聞いたけど?」

ポリアがこの開けた辺りを見回せど、そんな死体は無い。

「ん？　あっちだ。　木の影に隠した。　それに、まだ死んでない」

Kは、公孫樹の木を指差した。

ポリアは、マルヴェリータと近寄ってみれば、初老の役人が木の裏側に凭れさせてあった。

チェーンメイルが壊れているが、怪我のあったらしい胸などは傷が塞がっていた。　おそらく、シスターの魔法だろう。

雨の中、Kは死体を見回して。

「こいつは大変なことになった。　町にモンスターが出るなんて誰も予測してないんだからな・・・」

渋い言い方で、雨の暗くなりそうな空を見上げたKだった。

3．捜査開始

3、捜査開始

モンスターに町が襲われた夜。

ポリアを含めて、Kも宿に戻って来ている。　Kは、一人だけ後から遅く戻って今、風呂に。　ポリア達は、もう先に入浴を済ませていた。　今や、トップリと日は暮れて夕食時である。

モンスターの出現で騒然としている町にて、役人が総出で警戒に当たりだした。　警戒態勢の中、警備隊長はポリア達しか町に冒険者が居ないので、先程の別れ際に協力を申し入れてきた。

無論、ポリアは承諾したものの・・・。

「はぁ～」

ポリアは、丸テーブルにてため息を吐く。　泊り客が集まる食堂は、天井の二つの大きなシャンデリアと壁に設置された三十近いランプの明るさで、昼間の様である。

イルガは、あの後に会ってから元気の無いポリアが心配であった。　溜め息ばかりを吐いて、目も何処か虚ろなのだ。

「お嬢様、一体如何なされました？」

すると、マルヴェリータが横目にポリアを見て。

「ケイよ」

「ケイが・・・如何いたしたと？」

「7体ものゾンビを一人で倒しちゃったのよ。　剣士の面目は丸潰れよね」

ポリアは、ジロリとマルヴェリータを見返して。

「そこ、うっさい」

実際、ポリアの本音はマルヴェリータの言葉とはズレる。　内心、Kに何か勝てていないと、リーダーである自分に自信が持て無くなりそうだった。　だが、実力の差はまざまざと見えている。　剣士としてだけではなく、冒険者として・・・。

食堂には、ポリア達以外に四・五人の商人らしき客が居る。　身なりはいいが、どうも態度の悪い男や、身に着ける服が随分と上質な服を着ていたり。　だれもが、立派な髭を蓄える男性客ばかり。

さて、Kが洗った髪を濡らして、ノコノコとポリア達のテーブルに来た。　マルヴェリータとシスティアナの間に座って、受け皿を取る。

「ふ～、やっかい事ばかりだな。　明日は雨足が強いから馬車も出せないだろうし、街道の警戒警備の役人が伝えに行く役目・・・下手すれば長引くな」

Kは、良く皮の炙られた鶏肉を自分の皿に取り分ける。

そんなKを見るポリア達一同の様子はぎこちの無い。　冒険者にも不問律の掟があり。　無闇やたらに同業者の過去に踏み込まないのは、エチケットとも言える。

イルガは、酒を飲みつつ。

「ケイ。　しかし、一体何所からモンスターは来たんじゃ？」

「さ～。　怪我した役人の話だと、森から出てきたらしいね」

「なら、モンスターを産んだ主は、森に居ると？」

「そうとも言えないな。　森に死体が有ったなら、今も居るかどうかは・・」

と、肉を口にしてから。

「ま・・多分・・森に・・居るとは思うがね」

「自信は？」

「俺としては9割確定」

と、Kは咀嚼して肉を呑む。

「なら、森に行く？」

と、マルヴェリータは踏み込んで見るが。　Kは、少し首を傾げて。

「森のずーっと奥から、禍々しい暗黒の力が感じられる。　多分、森の奥になんか有るのは確か・・・でもな。　俺の言う事なんざ～役人や他が信じる訳ないし、クォシカのこともあるし。　もう少し、情報集めてからでもいいと思う」

ポリアは、やや警戒した横目でKを見て。

「そんな悠長でいいの？」

Kは、野菜を皿に取りつつ。

「この雨じゃ～森の奥に行くのも溜まりませんぜ。　明後日の夜には雨が止む。　そこからが勝負じゃ～ないっすかね。　ま、討伐を頼まれた訳じゃないし。　町にモンスターが来ない限りは安心と言った所かな・・・ん？」

のんべんだらりとしたKの口調がいきなり止まって。　Kは後ろを向く。　廊下に出る方だ。

「ど～したんですか～？」

システィアナの声がした時、いきなりカッ・カッと廊下を歩く鉄靴の音が。

Kは、顔をテーブルに戻して呆れた声で。

「あらら～。　御出でなすったか？」

「誰が？」

ポリアが聞き返した時、食堂に人が入って来た。

「此処か、冒険者が居るって言うのは？」

高圧的な言い方の男は、貴族が好むシルク地の礼服の井出達である。
胸には、金糸で豪勢な刺繍が入っていて、背がKより高い。　ネクタイ代わりの白いスカーフが目立つ。

入って来た男の後ろには、マントを背にする軍人のような制服を来たKと同じくらいの背の人物が居た。

女将は、丁度そのまん前にいて。

「おやまぁ～、ラキームの大将じゃないかい。　偉そうにお出ましじゃないか」

“ラキーム”の名前にポリア達はびっくりして、食堂に入って来た男達を見直した。

Kは、野菜をフォークで刺して。

「や～っぱり」

と、口に。

“ラキーム”と呼ばれた背の高い男が、女将の前に進み出て。

「フン。　冒険者は何所だ？」

すると、女将は少し怒ったのか。

「ラキーム、随分な態度だね。　人を訪ねる時の礼儀も知らないのかい？　ましてや、役人を助けて、モンスターを倒した町の大事なお客に対してふざけてるのかい？」

すると、

「ほほう、それはそれは素晴らしいお客だ」

と、背の高い男は、笑ってからいきなり睨み顔に成って。

「俺の仕事を請けたヤツに、俺がどう接しようと勝手だ！」

と、怒鳴った。

その声に、宿の客はそそくさと壁側に離れる。

Kは、仕方なさそうに。

「俺達だ、仕事を請けたのは」

と、声を。

背の高い男は、その声の方を向いてから。　また女将を見て。

「どいてろ、邪魔だ」

と、横を通る。

軍人風の男も後に続く。

女将は本気に怒ったのか。

「ラキーム、お前は最低だよ！」

と、二人の男の背中に怒鳴った。

ポリア達の前に、男達がやって来る。　背の高い男は、確かに悪い顔では無い人物であった。　面長で、男らしい顔つきで、肌色の顔色にして威厳に近い雰囲気がある。　だが、裏にして高圧的で優しさのような気配は無く。　見る者に、気持ち悪いくらいにキツい印象も与えている。

「貴様達か。　私の仕事を請けた冒険者とは？」

ポリアは、後ろの軍人風の男を見ていながら、

「ええ、そうよ」

ラキームは、ポリアやマルヴェリータの美しさに驚いたのだろう。
やや声色を緩めて。

「ほほう、こんな美人が来るとはな」

マルヴェリータは、素っ気も無く。

「あら、ありがと」

と、優雅に手をひらめかせてワインを飲む。

ラキームは、声を上げたKを見て。

「貴様がモンスターを倒した男か。　町を代表して礼を言いたいがな。　それより、まず先になぜ私の元に挨拶に来ないんだ?!!」

いきなり怒声に変わる。

「大きい声がうるさい。　雨の中を今日着いたんだ。　目通りなど明日でもいいんじゃないか?　大体、アンタに会うのは目当てを見つけた後でもいいだろう」

「なんだとぉっ?」

Kの態度は、ラキームを眼中に入れてない。　ラキームは、自分を気にしていないKの態度が気に入らなかった。

そのとき、後ろに居た軍人風の男が。

「貴様、町史のラキーム様に対する口の利き方を何と思っているんだ?　仕事の依頼主だぞ?」

すると、Kは軍人風の男を見た。

「詰まらない言い方するんじゃないぜ。　オタク、前は冒険者だろう?　昔、マルタンで見たことある。　冒険者と依頼主の関係は対等。　それは常識だ。　クォシカに対して、町の人以上に知ってる情報あるならまだしも、なんの情報も持たないオタク達に急いで会う必要があるのか?」

軍人風の男は、黒い上質の上着と、白いズボン。　足元は、鉄製の

長靴。　腰には、サーベルが備わっている。　顔は、油断の置けない鋭い目つきの細い瞳で、やや細面で日焼けした顔に皺がある。四十半ばは過ぎていると見えた。

「だからと言って、挨拶ぐらいは当然だろう」

その言い方、ガラガラ声な上に音程が低いので、圧力がある。

ポリアもイルガも、この男は出来ると睨んだ。　剣の腕だ。

（隙が無い・・・下手なことしたら斬られるかも・・）

ポリアは緊張が走り、背筋に冷や汗が流れる。　相手の男の気合には、そこまでも辞さない雰囲気が漂っていた。

しかし、Kは全く気にしていない素振り。

「あら、そ。　ソイツはごめんなさいよ。　これでいいだろう。とにかく、今日は疲れてるんだ。　話なら明日にしてくれないか？　此処に来るより、森の警戒でも頑張ってくれ。　じゃないと、次の町史にはなれないぜ？」

話の内容が気に入らないのか、ラキームはKを睨んで。

「なんだと、どうゆう意味だ？！」

Kは、更に料理を皿に取りつつ。

「モンスターが出る森なんて、オガートで聞いたことないぜ？　町の治安を司る町史が、対応に手間取ってモンスターの出現をも見逃

していたとしたら、それは大問題。　一回目の襲撃はまだ言い訳が効くが、二回目以降で犠牲者出たら叱責モノだよな～」

「ん〝・・」

ラキームは、当然の事だから反論出来ずに唸る。

「ま、とにかく警戒は怠らないことさ。　父親の跡を継ぎたいならな」

ラキームは、苦虫を噛み潰したような顔でポリアや後ろの女将を見てから。

「そんなことは解っているっ！！」

と、踵を返す。

しかし、軍人風の男はKを見て、グッと近寄り押し殺した声で。

「お前、何者だ・・・昔の俺を知ってるなんて・・・」

その声は、かなりの殺気が篭っていた。

Kは、詰まらなそうに。

「早く金魚の後を追いな、糞。　邪魔臭い」

全くこの男が怖くないらしい。

軍人風の男に向かって、ラキームが廊下の入り口にて。

「ガロンっ、もう行くぞっ！」

ガロンと呼ばれた軍人風の男は、舌打ちをしてラキームの後を追って行った。

ポリア達は、あの二人が行った後を少しの間見送る。

女将は、一同の就くテーブルにやってくるなりKを見ては。

「アンタ、以外に度胸あるんだねぇ。　ラキームが悔しがるなんていいもの見たよ」

Kは、食べながら。

「ま、あんなのどうでもいい奴だから」

女将は、愉快そうに厨房へと引き返して行った。

だが、ポリアは少し違う。

「ケイ。　ムカツク奴だけど、どうでもいい訳じゃないでしょ？　それに、あのガロンって奴、かなり強いよ」

Kは、頷いて。

「当たり前だ。　ガロンこそ、本当の“流れ狼”をやってた男だもの。　腕が無きゃ出来ないさ」

マルヴェリータは、グラスを置いて。

「本当に知ってたのね？」

「ああ。　アイツは分け前争いで冒険者の仲間を斬ったことも有る男で、“パーティー荒らし”の異名を持ってた」

「イヤな異名ね」

「マジの話さ。　手の足りないパーティーや、流れて来た初心者や一人の冒険者を捕まえては、実力差の有る仕事に巻き込んで怪我させたり、モンスターの餌食にしたり、足手纏いだからと置いてきたり。　とにかく、身勝手の限りで荒稼ぎした奴だ。　まさか、剣の腕を売り込んでこんなところに居るとはな。　呆れたヤツだぜ」

人を消耗品の様にする話にポリアは、眉を顰めて。

「サイテーな奴ね」

「ああ、でも強いね。　ポリアとイルガのおっさんの二人じゃ～勝てない。　マルヴェリータが上手く動けば互角かな？」

マルヴェリータは、“互角”と云うのには納得が行かなかったのか。

「三人で、互角なんてキツイわね。　魔法に剣士が勝てるかしら」

Kは、チラリとマルヴェリータを見て、

「アイツを甘く見ない方がいい。　それと、自分の力を過信するな。俺は、“上手く動けば”と言ったんだ。　今のままなら、確実に負ける」

ポリアは、マルヴェリータの目が細くなるの見る。

（マズイ、マルタがキレそう）

マルヴェリータは、男に対して非常に強気な一面がある。　貴族だろうが、大商人だろうが、全く臆さない。

「ケイ、其処まで言わなくても・・」

と、ポリアが言うのだが、Kは。

「現実だ。　アイツが真っ先に攻撃するとしたら、女性で、動きの早くないマルヴェリータかシスティアナだろう。　ポリアとイルガに動揺を誘えるし、隙を作らせる為にもな。　人質に取れたら、全員殺されるな。　野郎は、そうゆう奴なんだ」

そう言ってから、マルヴェリータを見て。

「魔力が高いクセして、ゾンビの欠点も知らない。　ポリア達の手助けになってないんだろう？　マルタンで聴いたよ。　冒険者の間で噂になってるようじゃ、お粗末様様だ。　第一に、森の禍々しい空気に気付けたか？　魔法を扱うものは、魔力に応じた感知能力を磨くものだがな」

マルヴェリータは、グッと言いかけた言葉を呑んだ。　実際、感じようとしていなかった。

「美貌にからかわれてるんだよ。　磨く所が違うのさ」

Kは、そう言うと。　女将が持ってきてくれたハーヴティーをグラスに注いで。

「テメエで考えるんだな。　俺は、最初の約束通りにこの仕事で抜けるんだが。　アンタは違うんだろうから」

と、席を立った。

マルヴェリータはそれから口を利かなくなった。

このマルヴェリータは、男に翻弄された幼少を送る。　彼方此方の貴族や商人に許嫁にと金で何度も誘われ。　魔法学院で魔法を学べど、男との噂に友達が居ない時期を送り。　故郷に戻ってくれば、うるさい求婚と見合いの連続。　マルヴェリータは、家から離れてポリアと出逢った。

マルヴェリータは、大人びているが。　実際は、まだ２３歳。　ポリアとは３つしか違わない。

「マルタ、ケイの言う事は気にしなくていいよ」

泊り客が殆ど部屋に去り、静かに為った食堂でポリアは、そう言って酒を飲む。

イルガは、ポリアとマルヴェリータの二人にしようと席を立ち。

「お嬢様、寒気がしますので先に寝ます」

「イルガ、大丈夫？　風邪ひいちゃだめよ」

「御意に」

システィアナは、怪我人の治療に疲れたのか、直ぐにうつらうつらと眠たそう。

「システィ、ホラもうねんねしていいよ」

「う～ん、寝るね～。　マルしゃん、お先にぃ～」

マルヴェリータが、頷いた。

（初めての・・・仲間・・・）

マルヴェリータは、いつも一人だった。　だが、今はポリア達がいる。　あの、前の一人の寂しさは薄らいでいた。

いつの間にか、食堂の人は自分とポリアだけになっている事に気付くマルヴェリータ。

女将が、食堂の片付けを終えて最後に二人の元に。

「ボトル、2本はおまけしとくよ。　町の危機を救ってくれたからね」

ポリアは、気遣ってくれる女将に頭を下げて。

「ありがとう」

「いいよ。　じゃ、先に寝るよ」

女将は、そう言ってポリア達の周りのランプの火以外を消して行った。

二人になった。

「ポリア・・寝ないの？」

マルヴェリータは、ワイングラスを手に言う。

「フン、モンスターと戦ってないから疲れてないわよ」

ポリアのムクレ面に、マルヴェリータは笑った。

「笑わないでよ」

「ポリア・・・」

「ん？」

「私・・チョットだけケイに嫉妬してるわ」

「強いから？」

マルヴェリータは、頷いて。

「なんでも出来すぎる・・・彼・・・」

「そうね～、仕事を請ける規約ないなら、一人で出来そうだもんな～ケイって」

マルヴェリータは、ポリアのグラスにワインを注いで。

「私達って、男にバカにされてばっかりね・・・」

「ホントだわ・・・なんかね～」

絶世の美女の二人は、随分と夜遅くまで呑んでいた・・・。

そして、夜が明けた。　次の日。

「ポ～リ～ア～ちゃん、マルしゃんも起きて～」

マルヴェリータと、ポリアを起こすシスティアナの声。　二人のベットの間に来て、枕で叩き起こして来るシスティアナ。

「つお・・ちょっと～」

「システィ～、やめてぇ・・」

二人、二日酔いのど真ん中である。　しかも、頭痛で世界が回っているから眠たくてしょうがない。　外から来る雨音が、子守唄の様に聞こえる。

システィアナは、枕起こしを止めずに。

「ケイしゃんが～呼んでるのぉ。　大地主のおじょ～さんがかえってきたの～」

ポリアは、眠くて。

「誰ぇ～？」

マルヴェリータも、朦朧とした意識で。

「じぬし～？　だれよ？」

すると、システィアナが更に枕で叩いて。

「クォシカさんのはなし～、聴きにいくのっ」

その時、ドアの外からKの声が。

「システィアナ、起きなきゃいいぞ。　二人で聴きに行こう」

ポリアが来ないなら、イルガも来ないことくらいはKは承知である。

システィアナは、起こすのを止めて。

「は～い、起きないから二人で行きま～す」

ポリアは、ベットでぐったりしつつ。

「ケイ・・行くって・・ちょっと待ってよ」

すると、ドアの外からは。

「二日酔いの寝ぼけババア二匹は要らん」

マルヴェリータも、細い目で起きていて。

「誰がババアなのよーっ！」

と、怒った声を上げた。

さて、やっと降りてきた二人は、Kに冷たい目を向けるも。　包帯男はシレ～っとロビーに立っている。

女将の話で、地主のコルテウ氏の家は町の北西方面だとか。　オガートの北西は、地主達の住み暮す所で、彼らが町の最初の入植者なんだと言っていた。

外の雨は、シトシトと降り続く。

全員、宿から雨よけのコートを借りる。　黒いザラザラとした植物の繊維が全身に付いたコートで、動きにくいのだが。　網目のキツイ織り方と表面に油を塗ってあるために、水を良く弾くのだ。

Kを先頭に、雨の中に出て行く。

まず、大通りを噴水広場に向かう。　広場の中に入ると、人が大勢集まれる広さが有る円形の広場があって、その周りを色々な建物が囲う。

北側に、一際大きな三階建ての建物が。　一階部分が、戸も無い開かれた吹き抜けの場所で。　椅子と、テーブルが幾つも有る。　どうやら、此処が噂の野菜や果実を取引している集会所ならしい。

広場の東には、石のガッシリとした建物が。　此処は、役人達の詰め所になる。　昨日、Kとイルガは此処に来た。

広場の中で、北の集会所の右脇と、西側に道が木々に囲まれて伸び

ている。

「こっちだな」

イルガが、西側の道を指す。

Kは、頷くだけだった。

西側の道に入ると、薬屋だの、食事の出来る店が数軒並んでいるだけだ。　少し行けば直ぐに林に囲まれて、泥濘に水溜りの有る野道に変わる。　馬車の往来が多いのか、道の左右は草も生えずに少し沈んでいて。　道の真ん中には、雑草が生え始めている。

「う〜、寒い」

ポリアが言うと、マルヴェリータも頷いた。　春先の雨は、以外に冷たいものだった。

その道を行くこと、半時（大体、一時間）。　今は、昼頃だろう。　森の間を抜けていくと、大きな家々と、土地を有する村の様な場所に出た。

「ほぇ〜、すんごい蔵の数」

ポリアは、敷地の中にズラズラと蔵が並んでいるのを見て驚く。

Kが敷地と敷地の間を縫うような道を歩き出す中で。

「昔から地主の財力は、蔵の数で決まると言うからな。　世界でも、此処が蔵の数なら一番かもな。　大陸の東に、商業大国のマーケッ

トハーナスが在るが。　国土が狭い分だけ蔵の規模は此処までない」

其処にイルガは、頷いて。

「懐かしい話だ。　ケイの言う通りです」

Kは、イルガに。

「おっさんは、向こうの生まれか」

「いや、冒険者をしていた頃の話だ」

Kは、それで納得した。　イルガは、今も冒険者ではあるが。　ポリアの家に仕える前にも冒険者をしていた事が在ると言うことである。

Kは、屋敷と蔵の並ぶ各家々を抜けて、一番奥の一際も二際もでっかい家の庭に入った。　庭の中には、木の囲いが在って牛やブタが放牧されている。　遠くの小屋に、牛やブタが居る。

「ウシさ～ん、ブッタさ～ん、こんにちわ～」

システィアナは、喜んで手を振る。

Kも、家畜小屋を一緒に覗き。

「お～、子牛が居る。　今年生まれたばかりだな」

「あっちに～、コブタさんがいますぅ」

まるで、兄妹の様な二人。

「なんか、似合ってて不満・・」

と、歪んだ顔のポリア。

「確かに」

と、冷めた目のマルヴェリータ。

木の柵が終わると、蔵が等間隔でずらりと。　白い土壁に、曲がったタイルの様なものを敷き詰めた三角屋根。　ポリアは、初めて見る。

「屋根が三角だし、なんかタイルみたいなものが敷いてあるわ」

イルガも、頷いて。

「本当ですな、初めて見ます」

Kは、屋根の瓦を見て。

「此処の土地の特有の屋根だ。　元々は、東方の大陸の屋根素材なんだ。　土を固めて焼いた物だが、堕ちたり、地震でもない限りは百年以上は長持ちすると聞く」

「へぇ〜、百年ねぇ」

「通気性が抜群で、雨水を凹んだほうに流して列を作らせて落とすのが特徴なんだ。　雨漏りさせない為にな」

イルガは、呆れてKを見ては。

「流石は学者だのぉ、なんでもよぉ～知ってるわい」

そこに、野太い男の声がした。

「何者だ。　此処が、コルテウ様の屋敷と知って来たのか？」

声の方を見れば、小太りで大きい体つきの男がズンズンやって来る。
　K達と同じコートを着ているが。　屋敷の方から人を訪ねて来る所を見る限り、この屋敷の使用人らしい。

Kは、男に近寄って。

「ああ、聴いてきた」

フードの下の男の顔は、警戒している顔そのものだ。　日焼けした顔が、フードに見え隠れで年齢が解らない。

「何用か？」

「クォシカの捜索で来た。　親友のシェラハさんに逢って話しが聴きたい」

「何？　お嬢様に？」

「ああ。　彼女が、クォシカの家財道具を持っていったと聴いた。
家に荒らされた形跡があったとか。　引き取った家財道具を見せてもらいたいんだ」

Kの顔を男はジッと見ている。

そして、

「・・・なら、此処で待っていろ。　お嬢様に、話をしてみる」

「了解」

男が屋敷に向かう中、ポリアがKに近づいて。

「完全に警戒してるわよ。　怪しい包帯男さん」

「好きにしてくれ」

ポリア達は、断られると思っていたが。

「お～い、こっちに来い」

と、先ほど男の声が直ぐに聞こえてきた。

「あら～」

と、ポリアが驚けば。

Kは、

「多分、昨日のモンスターの一件が効いているんじゃないか」

と。

「嘘ぉ？」

と、ポリアは驚いて返す。

屋敷の入り口に向うと、分厚い木製のドアの表には、向かい合う天馬の絵が彫られていた。　屋敷は、四階ぐらいの高さの在るものだが、幅が広い。　泊まっている宿と変わらないかもしれない大きさだ。　半分開かれた扉からロビーに入ると、大理石の床が広く。床の石には、美しい湖の絵が描かれていた。

ロビーの右には、靴などをしまう靴棚が花瓶を上に載せて存在感とインテリアの調和を見せる。

「ほぉ、これは漆を使った上質なものだ」

Kは、黒い靴棚を見て言う。

そこに、

「眼が肥えているね。　ようこそ、ウチの娘に用が在ると言うのは君たちかな？」

と、低いながら、良く通る大らかな響きの声がする。

全員が、ロビー正面の階段の脇から現れた男性を見る。　蒼いベストに、Yシャツ。　黒いズボンが折り目正しい。　男性の顔は、四十過ぎの大人びた渋みのある紳士だ。　髪は綺麗に七：三に分けてあり、髭も左右対称ににして手入れが行き届いている。

Kは、左手を胸に当てて、左足を引いて一礼した。　これは、貴族などがする礼であり、相手に敬意を払う礼なのだ。

ポリア達も挨拶しながら、Kの身のこなし鮮やかさに驚いた。

「どうやら、コルテオ氏自ら出て来させてしまったみたいだ」

と、Kは、ポリア達に言うと。

「我々は、クォシカの捜索を受けてマルタンより参った冒険者です。シェラハさんに、面会出来ますか？」

すると、コルテオ氏もKに深々と頭を下げた。

「え゛？」

ポリアは、いきなり頭を下げるコルテオの態度にびっくりだ。

顔を上げたコルテオ氏は一同を見て。

「まず、礼を言わせて貰うよ。　君達が、昨日宿で助けた男は、私の農場の働き手で、私の命で水路の具合を見に行っていたんだよ。今日帰って今さっき聞いたんだが、助けてくれたのは君達だね。いや、この通り助かった」

人柄とは、細部に現れる。　この態度、ラキームとは大違いだった。

「仕方ない、見捨てる訳にもいかなかっただけさ。　ま、無事で良かった」

Kが受け答えをすれば。

「いや、町の危機を救ってくれた恩人ですよ。　さ、こちらにどうぞ。　娘に合わせましょう」

先ほど、雨の中で出逢った使用人らしい男が、コートを脱いで案内に奥から現れた。　意外の老人であった。

応接間だろうか。　通された部屋は、暖炉に火の焚かれた一室である。　暖炉の上や窓と窓の間には、クォシカの絵があった。　Kは一発で看破して、その絵に見入っていた。

システィアナは、暖炉にポリアと当り。　マルヴェリータは、ソファーにイルガと座った。

直ぐに紅茶が運ばれて、ケーキと一緒に出された。　朝を食べていない一行には、嬉しい御持て成しである。　レモン・カシス・アップルの果実紅茶で、香りが素晴らしい。

一同が、紅茶を楽しんでいる。　Kだけは、絵を見ていた。

そこへ、コルテオ氏に連れられた女性が遣って来る。　白い肌をしたポリアよりやや低い背で、赤いドレスを着ている若い娘だ。　可愛らしい顔立ちをしているが、その顔はポリア達を警戒していて怪訝な雰囲気である。

ポリアは、立ち上がって。

「こんにちわ、冒険者のポリアといいます。　クォシカさんの・・」

と、言う途中で、いきなり女性が喋る。

「解ってるわ。　ラキームの手先でしょ？　モンスターを倒しても、ラキームの手先には変わらない。　私が話すことなんか何にもないわ。　帰って」

いきなりの、言い方だ。

「シェラハ、そんな言い方をするものでは無い」

コルテオ氏は、娘に言う。

だが、やはり親友か。　クォシカの身の上の粗方を知っているのだ。　ラキームに憤慨している訳だから、この対応も当たり前だろう。

言われたポリアも、マルヴェリータを見て困る。

その時、だ。

「この絵、本当にいい絵だな。　クォシカの絵なんだろ？」

Kが、絵を見ながら言う。

コルテオ氏が、娘を見てから。

「ああ、そうだよ」

「宿の室内にも有るんだ。　落ち着きを誘ういい絵だ」

Kが、いきなり絵を褒める。

ポリア達は、気休めの行動だと思った。

だが、Kは何事も無かったかの様に話し出す。

「俺は、クォシカの失踪に疑問を持って、この仕事を請けた。　ま、仕事の依頼主がラキームなのは仕方無い」

Kは、そう言ってシェラハを振り返って見た。

何かを言い掛けたシェラハも、包帯の巻かれたKの顔に驚いたらしい。　言い掛けた言葉を呑んでしまった。

「さて、俺が君に聞きたいのは二点。　クォシカの家から持ってきた家具を見せてくれ。　もう一つ、クォシカの好きな場所を教えて欲しい」

シェラハは、警戒する眼差しで。

「何で、家具なんか・・・」

「何で？　それは、君が知ってるはずだろう？　クォシカが失踪したのが判明したとき、部屋が荒らされていて。　君は思った。　クォシカは、失踪したんじゃない・・・連れ攫われたのだと・・？　ん？」

シェラハの顔が、ポリア達も見て解るくらいに驚きに変わっていた。

「・・・そう・・よ」

頷くシェラハは、顔が蒼褪める。

「だが、俺は思うんだ。　ラキームが、態々大金を協力会に預けてまで、誘拐が成功していて探すだろうか。　ケチで、もう別口で結婚の話まで決まっているのに」

シェラハは、Kに寄り。

「じゃあ、クォシカは誘拐もされて無いって言うの？　この町から、どうやって他に出て行くのよっ?!　門には門番が立っているし、オガートからマルタンまでは他の普通の商人達の馬車が行き来してるのよ？　怪しい馬車や旅人は、必ず街道警備の調べを受けるわっ!」

しかしKは、落ち着いた口調で、

「だから、家具を見せてくれ。　一つ一つ調べて行かなければ、現実が見えてこないんだ」

Kの瞳と、シェラハの警戒する瞳がぶつかった。　シェラハの鋭い眼差しに比べ、Kの眼差しは穏やかなものである。

程なく、

「はぁ・・・解ったわ」

シェラハは、了承した。　仕方無くだろうが、手がかりが欲しかったのだろうと見れる。

「こっちに」

Kを先頭に、シェラハの後に着いていくと。　家の奥にある離れのガラスに囲まれた部屋に出た。

「うわ、スッケスケ・・裏庭の森まで見えるわ」

ポリアの驚きは、みんなのものだろう。　天井は、研いだ鉛筆の先のような六角形の形。　母屋に通じる廊下と入り口以外は、全て窓として開くらしい。　本日は雨だから開いていないが・・。　部屋の広さは、ポリア達の泊まっている五人部屋の一回り大きいもの。　一人には、ちょっと広いかもしれない。

Kは、部屋に入るなり。

「ここは、アトリエか？　誰か、絵を描いている？」

シェラハは、驚いてパッとKに振り返る。

「まぁ、何で解ったの？」

Kは、足元を見て。

「此処に絵の具の染料が落ちてる。　こんな、ポトリと水滴を落とした様な跡は、画家の家でよく見れる」

シェラハは、Kの足元の蒼の絵の具の落とした跡の気付いた。

ポリア達も、木の床ながら古く黒ずんだ板の間にて、良く見つけたものと呆れる。

シェラハは、その部屋の一角。　鉢植えの観葉植物の横にある三つの戸棚や衣装ダンスを指して。

「これ、クォシカのもの」

ポリアは、それを見て。

「少ないわね」

「ええ。　クォシカは町でも一番小さい家だから、お金も無かったし。　クォシカの衣装タンスと、小物入れの棚は私のをあげたの」

「ふ～ん、町のみんなに薬師として役立ってたのに・・・お金を取ってなかったの？」

「最低分ね、日々生きる分だけ・・」

ポリアも、マルヴェリータも、クォシカ親子に感心するばかり。

一方、Kは衣装タンスと見て。

「なあ、鍵が壊されてるが・・・これは元々じゃないだろう？」

「え？　あ、うん・・・。　私があげた時も、居なくなる二日前も壊れてなかったわ。　・・・でも、なんで？」

タンスを除いてくるシェラハに、Kは錠を掛ける金具の壊れているのを指差して。

「この壊し方は、盗賊特有の壊し方だ。　ナイフや短剣を金具と木

の間にこじ入れて、金具ごと外す。　荒いやり方だ・・・」

ポリアをはじめ、その場にいる全員に沈黙が走る。

「しかし、物取りじゃないな・・・」

と、タンスや棚を見回してKは言う。

ポリアは、Kの横に行って。

「なんで解るの？」

Kは、他の小物入れと戸棚を次々に指差して。

「最も金のありそうな棚の鍵が壊されてない。　しかも、衣服の入ってる棚や、タンスに持ち去った服の空きが無い。　意図的な理由があって、タンスを壊したんだろう」

この言葉に、シェラハが堪らずに。

「そうなのよっ！！。　クォシカは、バックは一つしか持ってなかったのよ。　夜逃げなら、バックに服くらいは入れていくわ。　第一、お父さんとお母さんの形見を持っていかない訳無いじゃない・・・あのクォシカが・・・」

シェラハの方からKを見て、ポリアは。

「ね、もう大体解ってるんでしょ？　何が有ったの？」

Kは、ポリアを見てから、シェラハを見る。

「シェラハ、もしクォシカが襲われて逃げるとしたら・・・何所だろうか・・・。　絵の題材の一番多い所は、一体何所だ？」

「え　？」

シェラハはハッとした。　Kに問われて、直ぐに一箇所思いつく。

「公孫樹の・・・森だわ・・・」

マルヴェリータは、東を指差して。

「昨日、モンスターの出た森？」

シェラハは、ガクガクと頷いて。

「そ・そうよ・・クォシカの両親が・・・出逢った場所だって・・」

ポリアは、透かさずKを見て。

「ケイっ、まさかっ！！」

Kは、雨の外を見て。

「また、森か・・・」

シェラハの話では、昨夜にモンスターの現れた公孫樹の森は、古い古い昔から“呪われた森”と云われて来たらしい。　だから、町の人々は近寄らないのだとか。　しかしクォシカの一家は、薬を得るために薬草探しで入っていた。　クォシカが、シェラハに公孫樹の

紅葉の美しさを言っていたし。　絵の題材でも、四季折々の森の絵を描いていたとか。

Kは、考え込むだけだった。

だが、ポリアは、直感的にKはもう大体の答えが出ていたような感じを受ける。

Kは、直ぐに辞退を申し出た。

去り際、

「また来ますか？」

と、シェラハに聴かれた。　多分、シェラハも今までのクォシカの事を知ろうとした誰ともが、Kと当て嵌まらないから何か違うモノを感じたのだろう。

Kは、静かに言う。

「ああ。　多分、クォシカを迎えに行くに当たっては、君の力が必要になるだろう。　その時になったら、相談に来る」

「え？　迎えにって？　・・・どうゆう事です・・か・・？」

Kは、あえて言わない。

コルテオ氏は使用人の男に命じ、K達を送るようにと。　一応ポリアは遠慮したが、Kは受けろと言うので、乗っていく事に。

しかし、この日は色々な意味で進展が有るように運命付けられていたのか。　宿に着くなり、宿のロビーにて女将に迎えられて。

「あら、丁度いいところに帰ってきた」

ポリアが話を受けて。

「どうしたの？」

「イヤね。　警備の隊長さんが、包帯男に逢いたいとさ」

Kは、ポリアに鋭く向いて。

「ポリア、行くぞ」

と、コートを羽織って外に出る。

雨はまだ降り続いて、夕暮れ前の暗い空が不気味に広がる。　ポリア達には、未だ事件は謎めいていた。

4、事実の判明と、襲撃の夜。

4、事実の判明と、襲撃の夜。

Kは、警備をする役人の隊長に呼ばれた。　ポリア達も、着いていく事に。

噴水広場の、役人詰め所に行くと、奥の隊長室に通された。　石の建築物ながら、隊長室は暖炉や戸棚やらと揃ったしっかりとした部屋である。　床には、黒い絨毯が敷いてある。

「良く来てくれた」

30半ばくらいの逞しい身体をした警備隊長は、優しい巨漢と言った人物に見える。　髪を全部剃って、いかにも役人一筋という感じであった。　Kの前にやって来ると。

「実は、昨日のモンスターの件だ」

「どうかしたのか？」

「いや、君が言っていたろ？　あの、人の姿形をとどめている死体は、死んだ時期がずれると・・・」

「ああ。　人工的に存在するゾンビは、死んだ時の姿ではなくゾンビにされた時の姿で存在し続ける。　ゾンビに、姿の崩れで大いに

食い違いがあるのは、ちょいとおかしい」

「うむ。　その事を調べていたんだが、二つの事が解った。　一つは、あの冒険者の姿をした人物達、実は目撃されていたぞ」

ポリアは、Kを見て驚くが。

「やっぱりな。　もしかして、クォシカの失踪前か？」

Kは、サラリと言う。

警備隊長は、驚いた顔に変わり。

「どうして・・解った？」

Kは、ただ静かに。

「いや、そんな気がした」

「フム。　なかなか鋭い勘だ。　あの者達を見たのは、町の農家の一家だ。　顎に傷のある男を含めた五人に、農家の子供がぶつかって言い争いになったらしい」

「なるほど」

「あと、もう一人の目撃者は町の道具屋の娘だ。　家の庭先にいる時に、この男達の一人にまるで獲物を見るかの様に見られて隠れたらしい。　問題は、その後。　ゾンビに成った男達を、その娘の家近くで向かえに来た人物がいるんだ」

丸で全てを見通しているかの様なKは、頷く。

「誰か、解るか？」

「ああ、想像がつく。　ガロンって、ラキームの身辺警護してる奴だろう？」

「凄いな。　良く解ったな」

「フッ、蛇の道は蛇さ」

「？」

警備隊長は、Kを不思議と見返す。

Kは、話を進める為に。

「いや、それよりも、もう一つの事実ってのは、ゾンビ自体のことか？」

「あ、ああ。　調べたら、今から１００年ほど前か。　この町で、凄い数の行方不明者が出たらしい」

ポリアは、理解しがたい顔で。

「そんなに前？　誰が知ってたの？」

「ウチのばあさまは、今年で１０７歳に成る。　昨日、ばあさまがクォシカの失踪のことに合わせて、俺に話してくれたんだ」

Kが、隊長を見返し。

「詳しく解るか？」

「うん。　なんでも、昔に子供が一人行方不明になった。　ばあさまの友達で、農家の息子だとか。　当時、役人は何にもしてくれないからと、農家の若者や大人達が何十人と探しに行って戻って来なかったらしい」

「聞いた事あるな。　１００年近く前、野菜を作る量が激減して野菜の値段が跳ね上がったとか・・・。　そうか、作り手の男達が行方不明にな・・・」

「ほう、俺は全く知らなかった」

Kは、一人で納得するのか何度も頷いて。

「だろうな」

「理由は？」

「その頃は、まだ役人と商人の管制談合の時代だろう。　そんな事件が公になったら、流石に国が動く。　何もしてない役人や、町史は処罰は免れない。　だから、強制的に緘口令強いて、噂も出ないようにしたのさ。　金の無い冒険者や出稼ぎの人夫出しが町に手伝いに来ては幅を利かせていた事を、前にマルタンの飲み屋のジジイが言ってるのを聞いた事ある。　多分、国の偉い奴に金つかったんだろうが、下々の噂話に戸板は立てられないって処か」

「ふむう・・・ばあさまの言ってた事と同じだ」

ポリアは、Kの広い知識に驚いた。　地元生まれのマルヴェリータだって知らない事なのだ。

「アナタ、どんだけ知ってるのよ・・・」

「裏家業の集まる飲み屋じゃ、酔いどれたジジイや悪人が昔話して悦に浸るんだ。　金掴ませて、酔わせるといろんなことを喋る。若い頃、興味が先行してな。　危ない所に情報聴きにいったのさ」

ポリア達は、Kの病気前が怖くなった。　一体、どんな冒険者だったのか・・・。

恐れられている本人は、一人頷いて。

「凄い、ありがたみの有る情報だった。　大体の経緯が全て解ったよ」

警備隊長は、真剣な顔に変わった。

「お前、全部解ったのか？」

「ああ、所々は進んで確かめるしかないが。　凡そ、起こった事は解った・・・」

警備隊長は、頷いて力を込めて。

「なら、協力するぞ」

だが、Kは首を左右に振った。

「それは、駄目だ。　役人は、手は出さないでくれ」

ポリアは、驚いてKを見る。

「ケイっ、なんでよ？　味方が増えるのよ？！」

警備隊長も、勇んで。

「町の事件だ。　私も手伝う義務が有る」

すると・・・。

「駄目だ、このまま手伝わせたら、オタク達をラキームに逆らわせる事に成りかねない」

「なっ！」

「え〝？！」

全員が、声を上げる。

「一体、どうゆう事なんだ？」

問うて来る理解し難い顔の警備隊長をKは見つめて。

「おいおいに必ず解るさ。　なんでアンタを、ラキームの父親が選んだのか解る。　いい役人だ。　末永く町に尽くせよ。　汚れた事は、俺等が引き受けた」

Kはそう言うと、ポリアに。

「暗くなったから帰ろう。　全ては、明後日に決着を着ける」

「おっ、おいっ！！」

止める警備隊長に、Kは。

「アンタには、あんたにしか出来ない事がある。　その逆も、ある」

と、言う。

そこに、いきなりの大声が飛び込んで来た。

「大変だっ！！！　またモンスターが出たぞ！！」

Kは、パッと警備隊長を見て。

「行こうっ」

警備隊長は、剣を剣立てから取った。

声は、詰め所の入り口から。　K以下六名が詰め所入り口の所に倒れる血だらけの役人に寄った。

「おいっ、しっかりしろっ！！」

警備隊長が、助け起こす。

まだ若い役人は、身体中に引っかき傷を負い。

「たっ・たい・・ちょう・・」

「ん？　どうしたっ？！！」

「あ・・あか・い・・骨・・」

システィアナが、神聖魔法を唱える。

「しゃべちゃ～だめ～」

Kは、そこにいた役人を乗せて来た馬を見た。

「ポリアっ、この前と同じ道で向かえっ！！　俺は、裏道から行くっ！！」

と、Kは馬に飛びつく。　さっさと馬に跨るKに、ポリアはビックリして。

「はあっ？！！」

Kは、馬上から濡れるままに警備隊長を見て。

「ポリアと一緒に行って挟むんだっ！！　討ち漏らすなっ！　民家に被害が出る前に食い止めるっ！！」

これに、警備隊長は大きく頷き。

「解ったっ！」

Kは、馬の首を返しながら。

「マルヴェリータっ！！、感じ逃すなよっ！！」

と、大声で。　雨の外を馬で走り去るK。　集会所の脇の道を行くのだ。　近道で、水路に橋の掛かった昨日の場所に出る。

警備隊長が馬車の用意を叫ぶ中、ポリアの横でマルヴェリータは静かに。

「誰が、逃がすのよ」

と、真剣な眼差しでKの行った雨の後を見ていた。

直ぐに用意できていた馬車に、ポリア以下が乗り込んだ。　システィアナも。　若い役人の傷は、もう塞がっていた。

「はげしく～うごかしちゃ～だめ～」

システィアナが、役人にそう言ってペケサイン出す。　後から応援に出てきた役人に、警備隊長は大声で。

「モンスターは我々が倒すっ！！　皆は町中の見回りまわれっ！！
町人に被害を出させるなっ！！　怪我人を頼むぞっ！！」

出てきた四人の役人が見送る中、馬車はKの行った方とは逆の目抜き通りに飛び出していく。

また、雨の中の襲撃であった。　しかも、もう夕闇で暗くなり、視界が悪い。

「ハイヤーっ！　ハイヤーっ！！」

警備隊長が、馬車の馬を操る。　馬車は、幌を持たない荷馬車である。　雨足の強い中で、直ぐに全員がずぶ濡れになった。　飛ぶように走る馬車は、グングンと町を抜けて民家の中を走る。　程なくして馬車は、牧草地帯を右に、林を左にと昨日モンスターの出た近くに着く。

ステッキを握っていたマルヴェリータが、鋭く叫ぶ。

「先に居るわっ！！　降ろしてっ！！」

「解った！！」

警備隊長が、馬車を止める。

泥濘む道に下りるなり、マルヴェリータが林の先をステッキで指して。

「あそこに一体っ　その先に、二体が居るわっ！！」

「オーケー！！」

と、ポリアとイルガが向かうと、林の木を動かして、丁度ゾンビが一体現れた。　暗いので、人型の黒い生き物が蠢いているようだ。

「おりゃ！」

イルガは、先手必勝とばかりに槍にて突撃した。　イルガの槍は、

戟槍（げきそう）と呼ばれるモノで。　槍の刃先の脇に、戟と云われる剣のような刃を持っている。　突くだけではなく、薙ぎ払っても殺傷能力が高い。　向かってくるゾンビの胸元を突き、動きを止めた。　そこに、後から走ってきたポリアが気合一閃で抜き払った剣の鋭さに、ゾンビの首が飛んだ。

「おお、見事」

見ていた警備隊長が、言う。

だが、マルヴェリータが、

「まだ死んで無いっ。　行くわよ」

その声に、イルガもポリアも左右に退いた。

「魔想の力よっ！　暫撃の刃を作れっ！！」

と、ステッキを振る。　すると、マルヴェリータの頭上に瞬く間に大きな鎌のような乳白色の刃が現れて、ヒュっと呻ってゾンビに飛んだ。　ぶつかるのと同時に、ゾンビを真っ二つに裂いて衝撃が巻き起こる。　衝撃波に巻き込まれたゾンビは、肉片にまで細かくなって泥の中に散った。

「なんと・・・」

警備隊長は、こんな魔法を初めて見たのか、驚くばかり。

「さ、先にいくわよ」

マルヴェリータは、気合十分である。

ポリアとイルガの二人を先頭に、野道のような道を水しぶきを上げて走る。　水溜りに足が浸る。

道を先に行けば、左に曲がる野道が在る。　そこに差し掛かった時、正面からノソノソと来る人影が。

システィアナが、

「ゾンビしゃんで～す。　じょ～かしちゃいますよ」

と、杖を構えた。

「清き裁きのてっついさん、フィリアーナ様のお導きにてあわられたまえ～」

と、唱えれば、システィアナの身体が淡く光り、頭上には目映い黄金色の鉄槌が現れる。　その大きさ、大男の警備隊長と同じくらい。

「ゴチンゴチンです～」

と、杖を振り込めば、鉄槌はゾンビに大きく肉薄して殴りつけた。

―ウ〝ァァ・・・―

光に当たるゾンビの頭から、鉄槌に触れた部分が塵のようになって消えていく。

その時、マルヴェリータが右の林を指して、

「こっちに一体っ」

警備隊長の脇に、ゾンビが迫っていた。

「おう！！」

警備隊長は、振り向いて剣を抜き払う。　木を一本切り裂いて、その先のゾンビの身体を斬った。

だが、システィアナが前を向いて。

「先にゾンビしゃんと、人の気配がしま～す」

警備隊長は、ゾンビと対峙しながら。

「行ってくれっ、もう一人見回りの仲間が居るはずだっ！！」

ポリアは、自分の剣が白銀製だからか。

「マルタ、此処でアイツをっ食い止めて」

と、マルヴェリータに言っておいてから、

「イルガっ、いくわよっ」

「はっ」

ポリア、イルガ、システィアナが野道を走る。

マルヴェリータは、警備隊長の後ろから。

「踏ん張ってね。　林の中に気配がもう一つ」

「解った」

ポリアは、昨日と同じ砂利道の左右に分かれた道に出た。　そこには、二体のゾンビに囲まれた役人が、雨の中で砂利の上に這いつくばっている。

「う〝う〝・・・」

彼は微かに動いていた。

「息有るわっ」

と、ポリアは、右のゾンビに斬り掛かった。

「参る」

イルガは、左のゾンビに突進する。

システィアナは、役人に向かった。

ポリアが、役人に伸びそうなゾンビの左腕を掬い上げで斬り付ければ。　イルガがゾンビに突撃して役人より左のゾンビを刺し離した。

ポリアに向いたゾンビが、グアっと掴み掛かる。　左腕の骨近くまで斬られたのもなんとも無いかのように。

イルガの戟槍を受けたゾンビも、少し押し込まれてから、半歩引いた所で踏み止まり。　イルガと押し合いの力勝負になる。

「うむむ・・」

イルガの全身が力んだ。　足の具足の着いている砂利に踏み込む前足が沈む。

「ん〜、ん〜」

システィアナが、役人を少しでもゾンビより離そうと引っ張る。

先に動いたのは、ポリアだ。

襲い来るゾンビの手を剣を横にして受けたが、凄い力でグイグイ押される。　白銀の剣を握るゾンビの手の平が、ジュ〜っという音と共に焦げるように成り。　薄い夕方の宙に、その湧き上がる煙が上がる。　神聖なる白銀の効力だ。

「う〜・・・このっ！」

ポリアは、右の間に剣を引き抜きつつ避ける。　剣が、ニュルリとした感覚で引き抜けた。　振り向きざまに、

「エイっ！！」

剣を振るう。　剣の先でゾンビの首筋を切り裂いた。

―プシュ―

鈍い音がして、黒い蟠った黒い光が飛び出す。　ゾンビは、瞬間的に硬直する様に止まり、グラリと前に倒れる。

（やった！！）

運良く、Kの言っていたゾンビの核である暗黒のエネルギーを切り裂いたのである。

「ポリアしゃん、おっけ～」

システィアナの傍にポリアは寄って、

「オッケーじゃないっ！」

と、役人を引っ張った。

その時、後ろの方から。　凄まじい衝撃音が・・・。

「マルタっ？！！」

ポリアは、思わず叫んだ。　マルヴェリータに何かあったのかと。

しかし、

「大丈夫よっ、二匹を同時に倒しただけっ！！」

と、マルヴェリータの声。

（はぁ～、良かった・・・マルタ・・全力で強い呪文を唱えたのね）

Kに意識してマルヴェリータは力んでいるのか、いつもより呪文の威力が強い。　一見いいことに見えるが、魔法を強引に発動させていると精神の疲労が加速度的に増すらしいから危険でもある。

「イルガ、一気にいくわよ」

「おう！」

イルガは、その声に応じて、槍を思い切り捻る。　ゾンビの身体がグラリと前のめりに崩れた。　ポリアが、そこに踏み込んで剣を水平に振り込む。　ゾンビの腕が片方切断されて、バランスを崩した。

「ほら！！」

イルガの戟の薙ぎ払いで、ゾンビの胸が斬り裂かれた。　その斬られた所に、暗い中でも脈脈と鼓動する暗黒の光が見えるのである。

（今だわっ！！）

ポリアは、その光に向かって剣で突きを。　暗黒の光は、熟した果物が潰れるように壊れて消えた。

「お見事です」

イルガが言って、ポリアが頷いた。

「ポリア、大丈夫？」

後ろから、警備隊長とマルヴェリータが来た。

「マルタは大丈夫？」

ポリアの気遣いに、マルヴェリータは真顔で頷くと。

「ポリア、向こう」

と、Kが昨日ゾンビを倒した場所を指差す。

その時、警備隊長は、システィアナに寄って。

「まだ生きてるか？！！」

「だいじょ～ぶですぅ、気をうしなってるだ～け」

システィアナは、血の出てる傷を探して癒す。

役人を見るポリアの横に、マルヴェリータは来て。

「あっちに、何匹ものモンスターが居るわ。　でも、数は多いけど、ほらっ、また一つ減った。　誰かが戦ってる。　モンスターを次々と倒してる」

ポリアは、それが誰かは解った。

「隊長さん、ここでシスティアナと居て」

「解った、気をつけてくれ」

警備隊長とポリアは頷き合った。　ポリアは直ぐにイルガやマルヴ

ェリータと向かった。　走れば、さほどの距離では無い。　水路を流れる水の音がゴウゴウと聞こえて、橋が暗い中で形だけ見える。

マルヴェリータは魔法を遣って、ステッキから強いライト代わりの光を出した。　目映い光が辺りを照らす。　そこで、ポリア達が見たものは・・・。

「そらっ　フンっ」

Kの本領だった。　たった今、骸骨の姿をしてボロボロの剣を手にする“スケルトン”というモンスター二体に斬りつけられたKは、左右の手でスケルトンの剣を持つ腕をかわしざまに掴み。　正面に居たスケルトンの頭蓋骨に蹴りを見舞う。　一瞬、パッとKの足が淡い光を帯びて、スケルトンの頭を破壊した。

「なんで?」

ポリアは、どうして倒せたのか解らない。　だが、続けざまにKの拳を食らって、二体のスケルトンも崩れ去る。

その、次の瞬間、Kの姿がふわりとポリア達の視界から消えた。

「何所じゃっ?!!」

見回すと、先のところでKの姿が。　ゾンビ二体の急所たる暗黒の光を、首と腹に見つけて斬り倒してしまった。

「す・・凄い・・」

ポリアは、自分の父が世界一番の国土を誇る国で剣の達人と云われ

ているのだが。　Kは、そんなモノでは無い。

「なんと・・これがケイの実力か・・」

イルガも、あのラキームの警護をするガロンとかいった悪辣な印象の剣士を、全く眼中に入れなかったKの余裕をここで理解した気がする。

Kは、その場に居たモンスターを全部倒してしまった。　ポリア達が見ている中でも、十四体を数える。　しかも、倒し終わった瞬間からゾンビの姿を確かめる余裕がある。　全く、息が上がっていないのだ。

「ポリア、そっちは全部終わったか?」

人の姿をはっきりと留めているゾンビを見つつ、Kは言って来た。

マルヴェリータは、当りを見ながら。

「私の感じる気配は無いわ・・・」

Kは、屈んでゾンビの持ち物を検めつつ。

「どうだ?　今日は森の奥深くに潜む気配は感じられるだろう?」

「・・・えぇ・・不気味なくらいに静かに感じられるわ・・」

「多分、向こうから誘ってるのさ。　新たな餌食を求めてな」

「だとしたら、かなりのモンスターか・・・・頭の悪いバカね」

Kは、調べ終えたのか立ち上がる。

イルガは、マルヴェリータに聞いた。

「なんで、バカなんじゃ？」

雨の中で、怖いぐらいに白い肌をして濡れたマルヴェリータは。

「あんな・・Kみたいな凄腕を、自ら自分の住処に呼ぼうとしてるんですもの・・・。　知っているなら、絶対にしないわ・・」

Kは、森を見て。

「明日、もう一度シェラハに会おう。　明後日は森のモンスターの退治だ・・被害が最小に抑えてるうちにな」

そこに、傷を負った役人を背負った警備隊長がシスティアナと共に来た。

「終わったのか？」

隊長に問われたKは、剣に拭いを掛ける意味で振り払うと仕舞って。

「ああ、今の所は・・・って所かな」

「ふぅ～、こんなに数が多く出てくるなんてな」

「多分、今日はこんなもんだろう」

「何故解る？」

「死体も何にも無い中で、こんなモンスターを生み出せるのは魔界の魔王や魔貴族ぐらいさ。　そんなの居たら、今頃町は全滅してる。　多分は、モンスターを死体などから生み出しているんだ。　だから数に制限がある。　新たなモンスターを生み出す素材を得る為に、モンスターを嗾けてるんだよ。　ざっと今で二十体は片付けたからな。　向こうもコレだけ嗾けりゃ、様子も見るさ。　でなきゃ、本体がお出ましするはず。　この町を亡者の町に変える為にな」

警備隊長は、身震いをして。

「そんな化け物が・・この森に居たのか・・・」

Kは、脇を向いて、見る訳ではないのに横顔を見せて。

「アデォロシュの惨劇・・・・」

雨に掻き消されそうな声である。

ポリアは、一番近くてその声が微かにだけ聞こえた気がする。

警備隊長は、Kが向かってきた道に歩き出し。

「とにかく戻ろう。　身体を休ませないと」

Kも頷いて、

「戻ろう」

一行は夜になった空の下、町中に戻る。　馬車も馬も、モンスターに驚いたので町の詰め所に戻っていた。　Kは、またポリア達を先に宿に戻した。

ずぶ濡れで、疲労もあったポリア達。　宿に戻れば、心配で女将が待っていてくれた。

「あらっ、戻って来たね！」

ポリアは、頷いて。

「女将さん、また床を濡らしちゃうね」

「そんなことなんかっ！　また、モンスターが出たんだって？」

「うん。　でも大丈夫よ。　一応森から出てきたのは全部倒したわ」

「良くやってくれたよぉ～・・、ささ、お風呂に入んな」

「ありがと、後からKが来るから」

「おや、見えないと思ったら・・・怪我でもしたのかい？」

「まさか、詰め所で隊長さんと話してから来るって」

「そうかい・・タフな男だねぇ・・・あんな細っこい身体してさぁ」

女将は、厨房に戻っていった。

（ホントよ・・・まだまだ余裕で戦えたわ・・・）

ポリアは、Kの力量の差が底なし沼のように深い思いがしてきた。

「ポリア～、はやくぅ～お～ふ～ろ～」

「はいはい、いこ」

こうして、四人は先に温泉に入った。　冷めた身体を温めるには、温泉は贅沢なお風呂であった。

真っ先にイルガが出て、部屋に向かうと。　ずぶ濡れのKが廊下を歩いていた。

「おお、戻ってきたか」

「あ？　ああ、おっさんか」

「どうじゃった？　話は」

「いや～、役人が四人も安静状態だから隊長が困ってたよ。　しかも、農家の男手と地主が協力してくれるか話し合うとさ。　無理だから止めとけとは言って置いたが・・・どうだかな」

「自分達の故郷だものな」

「ああ、その通り。　風呂行って来る」

「解った」

イルガは、部屋に入ったKを見て。

（しかしアヤツ・・・何者じゃ？　昔にワシらの頃の伝説に居た双剣士のようじゃわい・・・しかし、歳が合わぬな・・）

イルガの若い頃に、年上の凄まじい腕前の二人の天才剣士が居た。

一人は、“剣神皇（けんしんのう）”と云われ。　もう一人は、“斬鬼帝（ざんきてい）”と異名をとった。　二人の駆け抜けた頃は、二人と冒険することがお陰で伝説のように騒がれて、持て囃された。

剣神皇と呼ばれた男、エルオレウは。　今は商業大国マーケットハーナスで、世界屈指の大商人の家の家督を継いで、商人として生きている。

一方、斬鬼帝と呼ばれた男、ハレイシュは。　息子のオリンティスと共に冒険者をやっていたのだが。　数年前に行方知れずになっていた。

イルガはその片方、斬鬼帝のハレイシュ氏と一回だけ組んだ事があった。　まさしくKのように強く、聡明で物静かな美男子だった。

（似とるの・・・強い者は似るのかのお）

一階に降りて、食堂に入った。

実は、ポリアの家出は強引な結婚話が引き金だが、冒険者を遣りたがり出したのはイルガの冒険談義を聞いた幼少の頃からである。

イルガからすれば、自分がうっかり冒険者の頃の話をしてしまったのが悪いと思っているのだ。

イルガが席を取る。　食堂には、足止めを喰らっている商人が、昨

日より増えて七人くらいになっていた。

「おや、そこかい」

女将が、丸テーブルに座ったイルガを見つけた。

「夜飯を頼みます」

「あいよ」

直ぐに料理が運ばれて来るのに合わせて、ポリア達がやってきた。

「お嬢様、ケイも戻ってきました」

「あら、早かったのね」

「どうやら、町の警備に農家や地主が加わるかも知れないようです」

席に着いたポリアは、ギョっとして。

「え〝っ?、大丈夫なの?」

「さあ、ケイは止めたそうですが」

「当たり前じゃない・・・只のモンスターならいいけど。　ゾンビは厄介よ」

「はい」

周りに居た商人の男の眼が、ポリアとマルヴェリータに向かった。

食堂に花が飾られたようで、だれもが手に取りたい下心の覗ける眼をしているように伺える。　商人も、その人格はピンキリで、表向きと裏向きの顔が全く違う者がゾロゾロいるのだ。

さて、Kがやってきた。　入って来たKに、女将が寄って挨拶をしていた。　女将と離れたKは、テーブルに来て席に就いた。

「ふぅ、疲れた」

「お疲れさま」

ポリアは、そっと水の入ったグラスを差し出した。

「すまん」

Kは水を受け取り、受け皿をシスティアナから貰った。

マルヴェリータは、小声で。

「もう、事件の真相は解ったの？」

Kは、野菜を取り分けつつ。

「周りで聞き耳立ててるバカ多いから、明日な」

マルヴェリータは、周りの商人の静けさに黙る。

一方、イルガは。

「しかし、なんじゃな。　ワシ等お嬢様とパーティーを組んで、こ

んなに多くのモンスターを相手にするのは、実を言って初めてじゃ。
ケイ。　御主は、そんなにモンスターを相手に戦った事があるのか？」

Kは頷いて、口に運んだ野菜を齧りつつ。

「そうね・・・ま～色々あるな。　墓荒しをとっ捕まえに行って、ピラミッドの中にゾンビが溢れたり・・・森の中で人食い蜥蜴を５０匹ばっかり相手にしたりな～」

ポリアも、マルヴェリータも、あまりの事に蒼褪める。　肉を口に運ぼうとしていたマルヴェリータが、

「や・止めてよ・・・おっかない」

「マジだもの・・・ま、色々あった」

イルガは、半ば呆れて。

「良く生きてたもんじゃ」

そこに、マルヴェリータは、ため息一つ。

「はぁ～」

ポリアは、溜め息を聞いて。

「マルタ、どうしたの？」

マルヴェリータは、包帯男を横目に。

「んん・・・ケイの相手した数を私達だけならどうなっていたかな～・・・って」

「・・・難しいわね」

Kは、食べつつ誰も見ないで。

「勝てない事は無い」

ポリアは、言い返されるのを警戒しつつ。

「そうかしら・・二十体以上も・・」

「ま、戦い方だろう。　今日は怪我人を抱えてたし、あんなもんでいいんじゃないか？」

イルガは、よせばいいのに。

「じゃ～因みに、どう戦うと勝てるんだ？」

Kは、水を飲んでから。　伝法な口調で。

「マルヴェリータとシスティアナが魔法を上手く遣えば、ポリアとおっさんがスケルトン潰せばいい話だろう」

「ふむう・・・ゾンビを十以上も二人でか？」

「遣れる。　二人が、魔法を強引に発動するのを変えればいい訳だ。至極簡単だ」

「ほう・・・あれで、強引とな」

システィアナは、照れ笑いで。

「えへへ、バレてます～」

マルヴェリータは、横を向いて。

（笑うな・・・）

Kは、料理の乗った皿を見て、何を取ろうかと思いながら。

「魔法ってのは、どの魔法にしろ魔力と集中力のかみ合いなんだ。焦って強引に唱えれば、魔力の強さが先行して程よい加減が利かない。　集中力は、そのコントロールをする訳。　この二人は、その集中力が足らないから、発動した魔法の破壊力だけ強くてデカイ。それじゃ～密集戦じゃ使えない」

「なるほど、仲間が一々避けなくてはいけないのか・・。　でも、集中すると・・どう変わる？」

「簡単だ。　今日、発動させた魔法がコンパクトに成って、威力は変わらない」

ポリアは、サッパリな顔をして眼が点に。

Kは、魚のムニエルを皿に取りつつ。

「解り易く言うなら、マルヴェリータの魔法で作られる刃が、大体

自分の身体よりデカイだろう？」

「あう、警備隊長さんぐらいはあるわ」

「ソイツが、半分以下の大きさで、威力が同じに成ると思えばいい」

「え？　マジ？」

「ああ。　集中力で凝縮してやれば、大きさの変化も出来る。　この二人は、魔法を発動させてるだけで、唱えるとは言わない」

イルガとポリアは、マルヴェリータとシスティアナを見る。　マルヴェリータは、気まずい顔をして。　システィアナに至っては、食べながら豪快に笑っている。

Kは、システィアナを見て。

「システィアナは、いずれ自然に出来るだろう。　余計な雑念が無いから、遣って行けば普通になる。　発動の経験が少ないだけ」

システィアナは、無邪気に照れ笑いし。

「えへへ～、けいけんしたぁ～い」

ポリアは、小声で。

「変なカンジに聞こえるから、言うな」

「は～い」

イルガは、マルヴェリータを見て。

「なんで、違いがあるんじゃ？」

「マルヴェリータは、魔法を遣おうとしてるんじゃない。　ただ、やるものが無いからやってるだけだ。　見てからに、魔法を好きじゃないんだろう。　冒険者として生きる意味で、出来るから手段にしてるに過ぎないと言えば正しいか」

みんなが、マルヴェリータを見た。

「・・・」

マルヴェリータは、横を向く。　Kの言った事は、ズバリ的を射ていた。

「どれ、寝る前に余興でもやってやるか」

Kはそう言って、自分のグラスに水を水挿しから移しながら。

「魔法の集中に一番いいのは、マジックミラージュ。　これは、魔法を遣える者の全てが出来る。　では・・・」

Kは、テーブルの真ん中に水の入ったグラスを置いた。　全員の目が、グラスに向かった時・・。

「あっ」

ポリアは、小さく驚きの声を上げた。　なんと、水の注がれたグラスが、二つに、分かれて・・四つに分かれて行く。

マルヴェリータは、Kを見て。

「な・なんで使えるのよ・・」

だが、Kは黙ってグラスを見ている。　グラスは、どんどん分かれて行く。　しかも、規則的では無い。　ちゃんとテーブルの墨まで行ったグラスは、分裂しないで留まっている。

「お・・おい・・アレ」

周りの商人達も、K達のテーブルの異変に気付いた。　料理の皿の上にグラスがあるのに、乗っている感じが無い。

ポリアは、そっと触ってみれば、自分の手はグラスをすり抜ける。

「全ては、イリュージョンさ」

Kはそう言って、パチンと指を鳴らす。　すると、

「あっ！！」

食堂で見ていた全員が声を上げる。　分裂したグラスが、どんどん真ん中の最初のグラスに集まって行くのだ。　そして、また一つのグラスに集まると、フワッと僅かに持ち上がり。　少しずつ左に傾いていく。　並々と注がれたグラスの水が、直ぐに零れてしまうと思ったのだが・・・。

「零れない・・・嘘・・」

ポリア、眼を疑って擦るも変わらない。　グラスは、完全に逆さまになった。

そして、グラスは皆の見る中で、スルスルと上に持ち上がって行く。
シャンデリアと同じ高さの所まで上がると・・・。

「ん？　震えてる？」

周りの商人の一人が言った。

そして・・・グラスは音を立てて砕け散る。

「キャッ」

「ウワッ」

「ちょっと！」

声がした。　みんなが驚いて、屈んだり、伏せたり。

だが・・・グラスの破片も、水の水滴一つも落ちては来なかった。

ポリアは、水を被らないのに伏せた顔を上げる。

「あ・・あら？　あらら？」

辺りにも、何の変化も無い。

Kは、静かに席を立って。

「こんなのでも、いい練習になるのさ」

と、先に寝る為か部屋に戻っていく。

イルガは、テーブルの真ん中に、グラスが残っているを見て。

「なんてことだ・・・真ん中にグラスが残ってる・・」

マルヴェリータは、Kの後ろ姿を見ている。　・・・なんとも寂しい眼であった。

ポリアは、マルヴェリータを見てから、Kの背中の影を追った。

女将も、お手伝いさんも、商人達も、ポカ～ンとして固まっていた。

5、Kの推理、森の奥に潜む闇の根城へ

5、Kの推理、森の奥に潜む闇の根城へ

朝、Kの予想通りの雨。　昨日ほどの寒さは無いが、ポリアもマルヴェリータもベットから離れたくない。

kがシェラハの元に行こうと言って来たのは、ポリア達が起きてからの事だった。

「？　あら、ケイ・・・あなた、雨に濡れたの？」

マルヴェリータは、食堂にて見たKの髪や包帯が濡れているのに気付いた。

「ああ、詰め所に行って来た。　あれからどうなったのか聞いて来たよ」

「で？」

「農家と地主の元で働く力自慢な男が数人出張るらしい。　みんな、町を守る為に本気みたいだよ」

「そう、モンスターに遭遇しないといいわね」

マルヴェリータの顔は、やや曇り気味である。　役人ですら勝てな

いモンスターに、一般人が太刀打ち出来るわけが無い。

「だな。　だから、これからシェラハの所に行く。　日中のうちに話しておかなければならない」

「じゃ、明日は動くの？」

「当たり前だ。　あんな数のモンスターを嗾けてる。　向こうだって只嗾けてる訳じゃなく、皆殺しにする為によこしてるんだ。　痺れを切らせて、町に親分が来られたら厄介だ。　動ける時を十分に利用しないと」

「勝てるの？」

「さあ、勝てなきゃ町が不味いんじゃ～ないですか」

Kは、余裕を残して食事に入った。

全員揃っての食事・・・。　ポリアも、もうあれこれと言う気力が失せていたから、食事は静かなものだった。

そのうち、食堂に警備隊長がやって来た。

「あらら、なんかあったの？」

と、ポリアが問えば。

Kが。

「いや、俺が馬車を頼んだ。　シェラハの家までね」

「へ？」

「どうしても、事件の一連の事を知りたいんだと」

Kが、自分達の居るテーブルに向って来る警備隊長をフォーク指し、ポリアは頷くだけ。

警備隊長は、K達の前に来て。

「馬車、持ってきた」

「ありがとう、行くとしますか」

ポリアは、宿の女将にまだ泊まることを告げて、シェラハの屋敷に向かった。

雨の中、幌馬車に乗って向かう。　だれもが、黙っていた。

さて、シェラハの家に着くと。　シェラハが、待っていたのか直ぐに出迎えてくれた。

通された応接室には、K達五人に加えて警備隊長と、シェラハにコルテウ氏が集まった。　立っているのはKのみ。　他はソファーなどに座り、暖炉の前にKが立つ。

Kは、皆に先ずこう言った。

「これから話す事は、俺の推測が混じる。　流れを推理して分析して見たモノと思ってくれ」

誰もが、頷く。

Kは続けて。

「隊長さん、それからコルテウさんは、このことを誰にも言わないで欲しい。　ラキームの地位に関わる事だ。　下手したら、どんな事態になるか解ったものでは無いからな。　いいですか？」

「解った」

「約束する」

コルテウ、隊長がそれぞれ言った。

Kは、それを見てから。

「では、話す」

Kの話は、シェラハには信じ難いモノであった。

「先ず、クォシカの安否だが。　俺が思うに死亡している可能性が高い。　おそらく、クォシカの亡骸は公孫樹の森の中だろう」

Kの推理はこうだ。　ラキームは、クォシカとの結婚が破談したことに怒り。　何としてもクォシカを自分のモノにしようと、ガロンを使って無頼の金でなんでもする冒険者を雇った。　だが、クォシカは誘拐される前か、襲って来た時に捕まらないで森に逃げ込んだのだろうと。

あのゾンビとして現れた冒険者の死体は、その誘拐犯であり。　冒険者が目撃されたのが、隊長の詳細によればクォシカ失踪の前日であり。　その冒険者と会っていたのが、ガロンである事を言う。

「なんてことよ・・クォシカっ！！！」

シェラハは、顔を両手で覆った。

さて、ラキームは一番焦った本人だろう。　クォシカを捕まえに遣った冒険者も、クォシカも居なくなったのだから・・・。　冒険者達がクォシカを連れ去ったのではと思ったラキームとガロンは、苦し紛れからその行方を別の冒険者に探させることにした訳だ。　ラキームとの関係がバレなければ、万が一に事態が漏れても言い訳が効くと踏んだのだろう。　ラキームも手元にクォシカが居ないのは、色んな意味で不安だから。

Kは続けて言う。

「恐らく、ラキームも事態は察しているはずだ。　昨日の夜、ガロンが俺達の倒したゾンビを検めに来たと言うから。　一体どう判断するかは知らないが、安心はしただろう。　死人にクチナシ・・・だから」

ポリアは、ラキームの汚らしさに激怒して、

「そんなの最低じゃやないっ！！！　人一人死に追いやっておいてさっ！！」

「だな・・・だから、明日はラキーム氏にも森の捜索に来て貰おうと思ってる」

「言ったって来るわけ無いじゃないっ！！」

ポリアが怒鳴った。

「いや、方法は有る。　シェラハの行動で、動いて来ると思う」

シェラハは、涙の滲む赤い眼をKに向けて。

「一体・・どうすればいいんですか？」

Kは、声を緩やかにして。

「いいかい。　ラキーム氏に来て貰う意味は、あくまでも事件の現実たる解明だ。　仇を討てるかどうかは、解らない。　しかも、君に魔物の棲む森に来てもらわなければ、意味が無い。　来るなら、我々が全力で守るけど、危険な所だ」

それを聞いたコルテウ氏は、大いに慌てる素振りで。

「一体、むっ・むむ娘に何を？」

「簡単な事ですよ。　彼女に、一芝居を演じて貰う。　クォシカが生きていて、森に居るから迎えに来て欲しいと手紙が来たとでも言ってもらえればいいんです。　彼女がラキームにそう言って迎えに行くと言えば、ラキームも焦って出て来るでしょう。　俺等は、ラキームからの要請があれば、ラキーム側。　無ければ、シェラハに頼まれたと着いて行けばいい」

シェラハは、直ぐに。

「それなら、直ぐにやりますっ」

コルテウ氏は、ギョっとして。

「シェラハっ、そんなこと簡単に言うもんじゃ・・」

だが、シェラハは、Kの心情を一部詠んでいたのか。

「お父様、町に来るモンスターにクォシカが殺されてるかも知れないし、今は町にモンスターが来てるわ。クォシカの捜索は、多分モンスターの退治にもなるわよ。この人は、そこまで考えてるのよっ」

と、Kを指差した。

ポリアもマルヴェリータも、以外に鋭い感性だと思った。

Kは、頷く。

「ま、そうゆう事でもあるな。クォシカの遺体が有るなら、恐らくはモンスターの主の元・・・。向こうも、我々が侵入してきたなら帰すはずが無い。退治してしまうのが、手っ取り早い」

コルテウ氏は、蒼褪めた顔で。

「でっ・・出来るのか？」

「出来ないことなら遣らないさ。ミイラ取りがミイラになってはどうしようもない」

「しかし・・・」

うろたえる父親に、シェラハは言う。

「お父様、モンスターがもっと多く襲って来たら・・みんな死んじゃうよ。　大丈夫。　この人達、強いから・・・」

Kは、心配するコルテウ氏を含む一同を見て。

「もしやるなら、今日の明るいウチにやるしかない。　我々が自主的に行動した場合、ラキームの町史は安泰だ。　町の人が騒ごうが、ラキーム氏は父親の死後に町史と成って圧制にでるだろうな。　あの性格だもの。　ラキームには、それだけの権力があるから」

ポリアは、その意味が良く解らない。

「町史でも、そんなに権力あるの?」

「ラキームの父親ってのはな、実は今の現国王の弟なんだよ」

全員の動きが、ピタリと止まった。　ポリア、Kを見返して。

「う・・嘘でしょ?」

「ラキームの父親、アクレイ氏はな。　前国王と、専横激しい内政大臣の娘との間に生まれた子なのさ。　だが、アクレイ氏は学者肌の正義感溢れる人物だし、実の弟だ。　兄の現国王が即位した後に、町の圧制を憂いで居たからな。　権力に勝つ為に自分の弟を指名したのさ。　ま、表向きは弟じゃなくて、王の友人で同学の士でと言

ったけどな。　アクレイ氏が、現国王の弟と知る人物は、この場の人間を除いたら十人と居ないんじゃないか」

「ま・・まさか・・」

驚くコルテウ氏に、Kは呆れさえ見える口調で。

「あのな。　この町の町史は、アクレイ氏以前は代々に渡って私腹を肥やす内政大臣なんかを歴任した男の一族が世襲してきたようなものだったのは、町のみんなが知っていたはずだろう？　その挿げ替えに、その辺の一般人が選ばれるものかよ。　この町の利権に商人と役人の癒着があったのを知っていて、その一族の遠縁にて王の肝入りで息の掛かったアクレイ氏が選ばれたのさ。　ま、当時の内政大臣は、自分の娘の子供だから本当に首の挿げ替えと思っていただろうから。　アクレイ氏が改革に乗り出したのは、全くの大誤算だったろうがな」

コルテウ氏の驚きの顔は相当なものだ。　アクレイ氏と2人、怪物の様な権力者との戦いである。　2人、一般人と重い苦労を分かち合った仲だと思って来た。　コルテウ氏自身、そう思っていたのだ。

Kは、更に続けて。

「あの専横激しいラキームの事だ。　親父が死んだら、また昔に戻してしまうつもりだろう。　今の内政大臣も欲深い男だし、ラキームとの接触はあるみたいだ。　美味しいお金の生る町の復活を大喜びだろうさ。　ラキームを町史にさせないようにするには、手立ては一つしかない・・・」

コルテウ氏は、震えた声で。

「な・なんでそんなことを・知ってるんだ?」

「ラキームの曽祖父にして、アクレイ氏の母親の親父さんは、この四・五年前に死んでる。　九十八まで生きやがった妖怪だが、その死は暗殺だと云われててな。　その頃に、俺の居たチームが、その暗殺に係わる事件にヤッカイに成った訳さ。　事件は、国の方で内々に処理・・・だから黙ってた」

この話は、有名で有る。　病気にも罹っていないその老人の変死は、町にまで噂が流れた程なのだ。

「そ・・そうか・・・アクレイが・・あんなに命を張って町のために頑張ったのは・・・自分の家の・・・」

コルテオ氏だから、共に戦ったから解るのだろう。　町史アクレイ氏は、町に蔓延る不正の全てを憎んだ。　そして、不正に敢然と戦い、国に対しての訴える影響力が強かった。　今思えば、どうして上手く行ったのか。　コルテオ氏は理解が行く。

シェラハは、父親に。

「お父さん、私、やりたい。　クォシカの遺体を取り戻したいし。ラキームに町の平和を乱されたくない」

コルテウ氏の目に涙が溢れた。

「好きにしなさい・・・。　病気のアクレイも、どうせラキームの悪行を止められるなら、私の身内の方がいいと思うだろう」

すると、Kは短く。

「お嬢さんの安全は、この我々が責任を持つ」

コルテウ氏は、深々と頭を下げて。

「お願いします」

Kは、警備隊長を見て。

「解ってる、男の約束だ。　俺はアクレイ様に仕えてる。　ラキームに仕えているわけでは無い」

「いいか、誰にも言わないでくれよ」

Kは、シェラハに、細かい芝居の内容を説明した。　そして、終わるなりポリアに、

「ポリア、帰るぞ。　後は、事態が動くまでは静かに待つだけだ」

と。　話が終わったのなら、直ぐにこの家から去るというのである。　長居していて、町の噂にされても困る。　町に買い付けに来ている商人の中には、あくどい者も居るのだ。　金に成る為なら、何でもやる者も居る。

警備隊長の馬車にて、全員が宿に戻った。

シェラハの家は、アクレイの病気の為にと毎日野菜を卸しているらしいから。　大方、K達が去った後にでも行ったのかもしれない。

Kも、ポリア達も、宿に戻ると部屋から出ないで夜を待った。

Kがどこまで予測しているのか・・・。　また、どんな解決を望んでいるのかは全く解らない。　ただ、ポリアには、夜になってラキームとガロンがまた宿に遣って来た時。　Kの思惑は全て予定通りに運ばれているのだと認識した。

「どけっ」

K達が、のんびりと夕食に向かっていると。　食堂へロビーから遣って来た男が、入り口付近に居たお手伝いさんに乱暴な口を利いたのが聞えたのだ。

Kは見ない。　ポリア達が見れば、またラキームとガロンが遣って来た。

（ホント来たぁぁぁ～）

驚くポリア。

（ですな）

イルガも、ラキームを見るまでは半信半疑であったが。　こうなると、Kの相手の行動を読む力が空恐ろしい。

ラキームとガロンは、ズンズンとポリア達の前に遣って来た。

「あら～、町史さんどうしたの？」

と、ポリアがビックリして見せた。

ラキームの顔は、かなり焦っているようで。　イライラが面に出ていた。

「どうしたもこうしたも無いっ!!!!　お前達っ!!　情報を俺に何で流さないんだっ?!!!」

Kは、全く知らないような素振りで。

「あ?　情報?」

すると、ガロンが。

「今日、コルテウの娘から言われたのだ。　クォシカの行方が解ったと。　明日、森に来い」

「おいおい、どうゆうことだよ。　居たならいいじゃないか」

すると、ラキームは怒りに任せて大声になった。

「クォシカが居るのは公孫樹の森だぞっ!!!!　呪われた森に我々だけ行かせる気かっ!!!!」

ガロンは、周りの客や宿の人の眼も在るのを見据えて、ラキームの興奮を宥めつつ。

「いいか、モンスターの出て来た森の奥に行かなければならない。　我々だけでは手が足らぬ。　コルテウの娘を守るのには、御主等の手助けが必要なのだ。　クォシカが生きていたら尚の事。　モン

スターの根城を確かめる為にも、明日は森に付き合ってもらう」

ポリアは、困った顔で。

「濡れるのイヤだわ。　毎日、モンスターでずぶ濡れだったし・・・ねぇ」

最初の打ち合わせ通り、Kに言われた通りに渋って見せる。

ラキームは、右手に有った膨らんだ小袋を、“ドン！！”と、テーブルに置いた。

「あわわ～」

システィアナやイルガやKが、勢いで落ちそうになった皿やコップを受け取る。

「これでどうだ！。　中には、別手当てで三千シフォン入ってる！！」

Kは、袋を見て頷く。

「なんとも妥当な危険手当だな」

ポリアは、態と。

「うはは～、報酬と合わせたら八千だわ～。　凄いわ～」

と、喜んで見せる。

Kは、ポリアに。

「リーダー、引き受けるかい？」

「いいんじゃない？　明日は、雨が上がりそうだって町の人が言ってたし。　濡れなきゃいいわよ」

Kは、ラキームに、

「引き受けよう。　で？　我々はあの地主の娘の護衛と、モンスターの排除でいいんだな？」

ガロンは、Kのセリフを聴いて。

（地主の娘か・・・。　やはり、夕方に来たシェラハの様子と合わせると。　対して繋がりの有る訳でも無さそうだ・・・）

ガロンは、自分で人を欺いて生きてきた。　シェラハとK達が会っていたのは知っている。　余りにも仲が良い雰囲気なら、怪しく思えるが。　見たところは、そうでもないようだ。　シェラハが、K達のことも含めて、冒険者を信用してない素振りを見せていた。

全て、一応の安心材料であった。

ポリアがお金に眼が眩むのも。　シェラハの事を他人行儀に言うのも。　仕事にやる気の無い素振りも、全てがKの計画に入った。

だから、Kは女将にまで見て見ぬ振りを密かに頼んでおいたのである。

「明日の朝には森に来いっ　遅れるなよ」

ラキームは、威張り腐ってこう言った。

「へ～へ～」

Kは言えば。

「ほ～いほ～い」

と、システィアナも続く。

「フンっ、全く金ばかり使うわっ」

と、ラキームが言うと。

「女は、金が掛かるモノよ」

と、優雅にマルヴェリータが言うのだから。ラキームも二の句が繋げなかった。

「帰るぞっ、ガロン！」

「は」

二人は、図々しい限りで来て、帰る。

それを見送ってから、ポリアは肉を食べつつ。

「いよいよね」

Kは、金の入った袋をイルガに渡して。

「持っててくれ。　邪魔臭い」

「うむ」

Kの計画の行うままに、ラキームは手玉に取られた訳だ。　全員が、早く寝る為に部屋に戻った。

女性三人の部屋で、寝る準備に入った三人。　ベットの上で、マルヴェリータはポツリと。

「どうするつもりかしらね」

ポリアは、雨の弱まった窓の外を見て。

「何が？　クォシカの事？」

「ううん。　全部・・・ラキームの事とかも」

「さあ、私達がどうしていいか解らないのに、Kの頭の中なんかサッパリ解んない」

「ね・・クォシカさんって、本当に死んでるのかな？」

ポリアは、黙った。

マルヴェリータの気持ち、ポリアも解る気がする。

「マルタ・・・もう寝よう。　明日は、その答えも解るし・・・」

マルヴェリータは、俯いて髪に顔を隠して、

「そうね・・負けられないのもね」

二人の耳に、システィアナの寝息が聞こえていた。

次の日

「ふわ～あ」

ポリアが、まだ日の出過ぎた早朝に起きた。　昨日が早く寝たからだろう。　マルヴェリータも、システィアナもまだ寝ている。

「早すぎたか・・・」

窓を見れば朝日が綺麗で、雲は大分に晴れた。　少しして、Kが呼びに来た。

朝、女将しか居ない中で、五人は軽い食事だけする。

女将は、Kに。

「ちゃんと、みんなで帰って来るんだよ」

包帯男は、スープを飲んで。

「味付けが薄くないか？」

「贅沢を言うんじゃないよ」

「解ったよ」

女将はそれだけを聴くと、厨房に下がった。

Kとポリア達が宿を出たのは、まだ早朝だ。　町の農家の人たちが、晴れた事で畑に出たり、牧草刈りに出たりと動き出している。　ただ、どうも不安な面持ちの人が多いのは、モンスターの影響だろう。

さて、モンスターと二日続けて戦った公孫樹の森の前の道。　やって来てみれば、誰も居やしない。　砂利の道は濡れているから、朝日の光がオレンジに光っている。

ポリアは、ラキームの腹立たしい顔を思い浮かべて。

「あんにゃろ～、来て無いじゃない・・」

Kは、

「直ぐ来るさ。　それより、今日は波動がキツイな・・・大して強くなってないのに」

システィアナは、イヤイヤして。

「おっかないです～・・気絶しちゃったらごめんですぅ～」

僧侶は、闇の波動に対する感受性が強い分、感じる畏怖も強い。

強敵のアンデットモンスターの前では、恐怖に打ち勝たないと僧侶

は気絶してしまう。

「ま、そん時はそん時だ」

Kは、然程も気にしていない。　イルガ辺りからすれば、この余裕か消えたらKはどうなるのかが怖い。

直ぐに、ラキームが眠い眼を擦っていたような顔で、ガロンと三人の兵士を連れてきた。

「遅い登場ね」

ポリアが、呆れる。

「フン、真打は遅くていいのだ」

イルガに然り、ポリアに然り、ラキームの連れて来た兵士が、見回りをしていた役人とは腕が違うのは解った。　装備も、幾分しっかりしている。

現実、ラキームからすればこれでも不安だ。　昨日の夜。　Kの元に行った後に、警備隊長にも同行を求めていた。　だが警備隊長は、町の人や病気のアクレイ氏の安全の為に、自分や寺院の僧侶は町にいるべきと主張した。

実は、これもKの先読みで、警備隊長はKの言う通りにした。　本来なら、警備隊長が先頭切って行くべきなのだ。

そこに、町の裏道からシェラハが遣って来た。

「あ〝、ラキームっ!!　それに、彼方達もっ?!!」

シェラハは、当初の予定通りに行動する。

ラキームが、一歩前に出て。

「シェラハ、私達もクォシカの迎えに同行するよ。　モンスターが出る森だ。　君とクォシカの安否が気に掛かる」

シェラハは、グッとラキームやK達を睨んで。

「そんなの要らないわっ!!」

すると、Kが直ぐに話の切り替えで。

「所で、本当に君はクォシカの行き先を知ってるんだろうな?　ガセ掴ませて無駄骨折らせるなよ?」

と、シェラハに冷めた眼で言う。

シェラハは、その怖さにビックリして後ずさった。

「し・知ってるわよっ。　この森の奥には、古いお城があるんだから」

「ほう」

Kが関心するように言う。

そこに、ラキームも。

「それは、本当だ。　この森の奥には、昔の領主の城が有ると文献にあった」

Kは、ラキームとシェラハを交互に見て、

「そうか、じゃ～そこに行けばいいんだな？」

ラキームは威張って。

「そうだ、恐らくクォシカは其処に隠れているに違いない」

Kは、シェラハに寄って、

「じゃ、道案内を頼む。　とにかく、夜までに行かないと、モンスターが活発化する」

「わ・解ったわよ・・」

ポリアは、笑って。

「ま、安全は保障するわよ」

と、警護を買った事を言う。

「お金？　冒険者らしいわね」

シェラハが、ポリアに言う。

「金かなければ、飯も食えん」

イルガが言う。

ガロンは、それをしっかり見ていた。

シェラハを先頭に、公孫樹の森に入った。　春先で、新緑の青い葉が、濡れた枝に生えて光っている。

「凄い森だな・・」

ラキームは、蒼い上質の服にシルバーメイル（銀製の上半身鎧）を着て、白いマントを負う。　マントが汚れないようにと歩くのだが、木々が密集していてマントが濡れる。　無駄な努力だった。

Kは、公孫樹の木々を見て。

「こりゃ～原生林だな。　大木もあるが、手入れが入ってないから進むには難しい」

すると、シェラハは。

「もう少し先に、街道みたいな道に出るわ」

これは、シェラハが幼い子供の頃にクォシカに連れられて来た経験だ。

Kは、頷くと。

「もしかして、周りより少し窪んだ道か？」

「ええ、そうよ」

「なるほど、昔の花道か」

ラキームは、バカ面で。

「なんだ？　その花道ってのは？」

Kは、珍しく。

「ポリア、説明しやれよ」

ポリアは、眼を細めてKを見ると。

（この～、誰でも知ってる事を振ってさ～）

と、思いつつ。

「王城や、大邸宅の正門に行く道の昔の呼び名よ。　昔は、王や王妃なんかの偉い家主が通る道沿いには、花壇を作っていたからそう言うのよ」

ラキームは、ポリアを見て。

「流石は美しい者だな。　知識も豊富だ」

ポリアからすれば、こんなのは王都に居る子供でも知っている。

ましてや、Kに褒められるなら嬉しいが、バカ面こさえたラキームとなると、逆に屈辱に思えてくる始末。

（う〜、なんかバカにされてる感じが・・）

そこに、心を察したKが。

「素晴らしい説明だ」

と言うし。

「せつめいだ〜」

と、システィアナまで続く。

（くそ〜、完全にバカにしてる・・）

シェラハの言った通り、半時（約一時間ほど）行った所で。　ガクッと下がった道に出た。　手入れがされていないから、道に木が生えていたりもするが。　馬車三台は横になれる余裕のある道だ。　手入れがされていれば、街道のような立派な道だろう。

Kは、道に下りて。

「向こうは、途絶えてる」

と、南の道を指差す。　少し先で、道が森に変わっていた。　水の音もする。

シェラハが、

「向こうは、川の氾濫があった場所よ。　父の話じゃ、地盤の沈下が有ったって。　でも、森が怖いから、沈下した所は埋め立てて森

にしちゃったみたいよ。　水の音は、町に来てる水の分流みたい」

Kは、北東に伸びる道を見て。

「どうやら、なんか居るな」

解っていることだが。

モンスターの巣窟と解ったガロンからすれば。

「死霊使いか、暗黒魔法使いか・・・いずれにしろ、厄介な相手だ」

と、認識する。

すると、ラキームは。

「しかし、妙だ。　私が調べた文献なら、昔の領主の城は天高く聳えるものとか。　全く見えないのは、崩壊でもしてるのか？」

と、森の先を見た。

Kは、笑って歩き出し。

「恐らく、マジックモニュメントの技術の一つ。“ハーミストケイジ”だな」

ポリアは、チンプンカンプンだ。

「あの～、解りません・・・センセ～」

システィアナは、ポリアにニコニコ顔で。

「しらないって～、ポリアの～お～ばか～ちゃん」

「グッ、システィっ！！、アンタだって知らないでしょっ？！！」

「は～い」

Kは、賑やかな二人を無視して。

「今に言うなら、“隠者の籠”か。　広大な土地を持って、その中心に建物を建てる。　建てる周りの土地を、起伏のある波状にしながら擂り鉢状にするんだ。　しかも、螺旋まで画いているし、木々に魔法で建物が見えないように幻視の効果を与えるんだ。　古と言うより、３００年以上前の、魔法技術崩壊前に見られた超技術さ。　今でも、各国の観光古代遺跡には、施してあるのがあるぜ」

誰もが、ポカ～ンと包帯男を見る。

Kは、全員を見て。

「ほら、行くぞ」

「あ・・はい・・」

シェラハが、続く。

ガロンは、ポリアに寄り。

「アイツ・・何者だ？」

「近寄らないでよ。　何者でも無いわ、学者なんだから博識なのは当たり前でしょ？」

ガロンは、急速にKに対しての興味が湧いた。　ガロンとて、様々なチームの者と組んで冒険をしているが。　こんなにも博識な男は珍しい。　今の学者なんてのは、本の読んだ知識を言うだけの者ばかりと思っていたからだ。

さて、道を行くこと、更に半時ほど。　大体、太陽の傾きで時間が解ってくる。　森に囲まれた道が、一回り狭まった。

Kは、背負っている荷物を突然に降ろして歩きつつ。

「マルヴェリータ、コイツを持っててくれ」

差し出したのは、二本の短い杖で有った。

「これ・・・ライトスタッフ？」

「ああ、そのうちに必要になる」

Kが差し出したのは、光の魔法が杖の先に宿るアイテムだ。　一昨日、マルヴェリータが暗くなった道を照らした魔法である。　封印された魔法を開放してやれば、二刻（四時間）位は光を放っているだろう。

「？」

マルヴェリータは、こんな明るい時間におかしいと思ったのだが。

さて、森を奥へ奥へと向かうにつれて、苦しさを見せるシスティアナが居る。

ポリアが、見るに苦しそうなシスティアナを心配して。

「大丈夫？」

「だ・だいろ～ぶで・です～」

「ケイ、少し休んだら？」

と、ポリア。

Kは、システィアナを見て。

「無駄な事を言うんじゃない。　休んで変わるくらいなら、もう休んでる」

「どうゆう事？」

「暗黒の力が強まっている。　それに、後ろを見てみろ」

Kの声に、皆が後ろを振り返ると・・・。

「あ〝っ！！　道が消えた！！」

後ろを見ると、どす黒い渦の巻いた空間が広がっている。

「ケッケイ！！」

叫ぶポリアに、Kは。

「ダークネス・フィールドだ。　暗黒魔術師より、死霊使い（ネクロマンシャー）や、最高位の死霊モンスターが僧侶を拒む為に張る結界だよ。　此処を抜けない限り、システィアナの疲労は増すばかり」

「だだだ・大丈夫なのかっ?!!」

ラキームが叫び上げる。

「一度入ったら、主を倒さない限りは出られない。　先を急ぐぞ」

ポリアは、冷静なKを見て。

（知ってたのねっ!!）

と、思う。

システィアナに、ポリアは寄って。

「大丈夫?　苦しいならおぶるよ?」

すると、システィアナは笑った。

「だいろ〜ぶです〜、しゅ〜ちゅ〜してましゅから〜」

ポリアは、パッとKを見た。

（まさか・・一昨日まであんなにマルタやシスティにハッパ掛けてたのは・・この為？）

ポリアは、Kの思考能力が底知れない物に思えた。

だが、Kからするなら、場数の違いなのだろう。

さて、進むにつれて鬱蒼としている森の中を通る道だが。　薄暗くなるどころか、一気に夜のように暗くなり始めた。

「おっおい！！！」

煩いラキームに、Kは。

「最後の壁に入ったんだ。　戻るなよ、魔法に呑まれて気が狂うぞ」

マルヴェリータが、杖に解呪の魔法を唱えて、光を生み出した。

Kは両方貰い。　一つをガロンに投げ渡した。

森がドンドンと闇に包まれて、気付けば洞窟の中の様な暗黒の世界で、森も道も解らない。

ラキームは、ガロンの後ろにへばり付いて。

システィアナは、ポリアに手を引っ張られて進んだ。　システィアナの表情は、死人のように蒼褪めて、冷汗は大粒に流れ出す。

システィアナを見るマルヴェリータは、

（いけない、このままじゃ・・）

もう、気絶してもおかしくない状態だ。

そこへ、Kが。

「そろそろ抜けるぞ。　真直ぐ来れたみたいだ」

と。

「ん？」

ラキームが辺りを見回せば、不気味な森の中に出ていた。　街道のような道はまだ続きながらも、鬱蒼とした公孫樹の原生林は茂っている風景は変わらないのだが・・。

「なっ・・なんだこの天気はっ！！　紫の色をしているぞ」

空は、鉛色の雲に覆われていて、先の所で渦を巻いて動いている。
夕方の様な、赤紫色の光が雲に染み込んでいた。

ガロンは、こんな空模様は初めてだ。　今は、まだ昼くらいだろう。

「一体・・・これは・・・」

Kは、森の先に塔の様な建物が聳えているのを指差して。

「ほら、塔が見えてる。　アレが、そうなんじゃないか？」

ガロンは、辺りに感じる不吉な気味悪さに、

「こんな所にクォシカが逃げ込んだのか？　おい、本当に生きているのか？」

と、シェラハに。

「生きてるわ・・手紙がきたもの・・」

精一杯の嘘である。　咽元まで、罵声が出掛かった。

ポリアは、楽に成ったシスティアナに話し掛けていたが。

（こんな所で無事な訳ないじゃないっ！！）

と、心の中で吐き捨てた。

イルガは、Kの後ろにて。

「いよいよ、ゾンビどもの主が根城に行くわけじゃな？」

Kは、辺りを見回して。

「さ～、そう簡単に行かせてくれるかな・・・御出なすったぜ」

ポリア、マルヴェリータ、システィアナが、森を見る。　ガサガサと、茂みが動き出した。

「キャーーーっ！！！」

シェラハの悲鳴が響き渡る。

一体、また一体と、道にスケルトンとゾンビが現れて来た。

Kは、狼煙代わりに。

「マルヴェリータとシスティアナは戦うなっ。　シェラハを守ってろ。　数は少ない、一気に潰せっ！」

ポリア、ガロン、イルガに三人の兵士が、武器を構えてモンスターに向かった。

6、森の奥に在る巨城に棲まう魔物達

6、森の奥に在る巨城に棲まう魔物達

現れたスケルトンやゾンビの数は、総勢１５体。　Kは、大した数では無いと言い切る。

兵士達３人は、ラキームを守って率先した戦いは行わない様だった。

一方、スケルトン十匹に、イルガやガロンが向かう。

「ポリア、イルガに着け。　ゾンビは俺一人で十分だ」

Kの声は簡潔にして、響きがいい。

ガロンとて、ゾンビが斬ったくらいで死ぬことが無い事は承知である。　しかも、ポリアの剣が白銀製であることも。　異論を唱えようとした瞬間、Kはツカツカと歩み寄ったゾンビの首筋を掬いに斬った。

「なっ」

驚くガロンの前で、ゾンビの首から暗黒の光が飛び散って、ゾンビが倒れる。

Kは、素早かった。　直ぐに先の四体に走って行く。　一体は、腹。
二体は首。　最後の一体は咽元にエネルギーが在ったが。　全て、
Kに斬り払われて、その場に崩れる。　なんと、スケルトンが半分
倒される前に終わっているのだ。

「たあっ！」

「うおりゃ！！」

ポリアと、イルガが次々とスケルトンを破壊する。

「ふん！！」

ガロンが、二振りの斬り払いで二匹を破壊して。

「御主、一体どうして普通の剣でゾンビを斬れる。　しかも、急所
のエネルギーが解るのか？」

Kは、口元に不敵な笑みを見せて。

「対処の仕方を考えておくのも努力のウチさ。　人間には、大抵強
かれ弱かれ魔力は有る。　有るものをフル活用するのも、自分の気
持ち次第だ」

だが・・・。

（どんな努力よ・・・）

マルヴェリータは、心の中で呻いた。　実は、魔力を使えるように
なる訓練は生半可なことでは無い。　魔法を教える学院で教わる引

き出し方ですら、ほぼ全ての魔術師の卵達が気絶するほどの訓練で引き出せるのである。　問題は、Kのやり方。　マルヴェリータは、Kに聴いてはいないが、Kが魔法学院を出ていないと思っている。　剣を極めて、Kは体術も扱える。　しかも、時間の掛かる学院の修行法など、いくらKでもやる時間は無いはずなのだ。

（おそらく、戦いの中で覚醒したのね・・・魔法を扱う精神の遣い方に）

これが、どれほどに恐ろしい事か・・・。　例えるなら、体中を縛りつけ。　水に顔を入れらて死ぬギリギリで引き上げられる行為を何百回も繰り返す。　死ぬのが先か・・覚醒が先か・・・危険はそれほどに付き纏う。　普通の精神で行えるものでは無い。

ポリアとイルガが、最後のスケルトンを半壊させて戦いは終わった。

Kは、直ぐに。

「行くぞ。　もう、相手の腹の中。　休みは、歩きながらだ」

誰もが、身体にこの場所の只ならぬ空気を感じていた。

Kを先頭に、全員が歩き出した。

森を少し行くと、川が流れる上に架けられた橋に行き着いた。　町に在る橋よりも造りが立派で、手摺りなどには、風雨で削れているが素晴らしい模様の彫刻があった。

Kは、間近に迫った城の外壁を森越しで見て。

「おいおい、昔の“神殿風雅造り”じゃないか・・・流石はなぁ～」

ガロンは、四角い土手の外壁が十メートル以上の高さを誇り。　その土手の上に建てられていると見えた巨大な塔を見上げている。

「この建物を知っているのか、ケイ？」

イルガが尋ねる。

「システィアナにはいい話じゃないな。　昔の王侯貴族は、自分の権威を神に似せる為に、建築物を荘厳華麗にして、天に近づくと云う意味で神殿と同じ物を造り始めた。　今から三百年以上前に、魔法技術が大崩壊をして世界の人口が６割減った。　時空のズレが起って、三百年前とは時間にすれば千年近い時が過ぎている。　その名残がこうゆう建物さ」

「えらぶったらいけないんです～」

システィアナは、ムクれて言う。

「当時、何が起ったのだ？」

「さ～、現実を知る者は全て消えた。　人伝に聞くのは、魔法の臨界点を超えた超魔術によって魔法を遣う者が魔法に滅ぼされてしまったとか。　世界の都市が死滅したとか・・・色々だな」

Kは、川を渡りつつ。

「言える事は、大改革が世界中で巻き起こったのは、事実か。　民衆の政治に転換したのが、その頃だろう。　この国でも、“無血の

交代”と云われる改革が行われたしな」

ポリアも、後を行きつつ。

「ウチの国でも、学力と政治に明るい市民が参加出来る様になったわ。　ま、貴族の権力や威光はまだ根強くあるけどね」

全員が橋を渡った後、森を抜けてKは建物の傍に来た時。

「さて、全員走る準備してくれ」

ラキームは、恐怖からやや引きつった声で。

「な・なんでだっ」

「道はこっちだ」

と、Kは森が建物の脇で洞窟のように暗黒の口を開けて茂る道を指す。

「真っ暗だわ・・」

ポリアは、シェラハを背にして道を覗く。

システィアナが、ブルブル怯えた顔で。

「このなかは～モウジャさんがい～っぱいいますよぉぉぉ・・・」

ラキームは。Kに噛み付くぐらいの勢いで。

「ふざけるなっ！！！　私を殺す気かっ！！！」

怒鳴られたKは、耳に右の小指を入れて困った様子。

シェラハは、道を見て。　Kに顔を移し。

「行かないといけないんですか？」

「当たり前だろう。“ゴーストネスト”だ」

「それは、一体・・・」

と、問い返すシェラハの前で、ガロンが訝しげにKを見て居ながら。

「死霊の巣窟・・・暗黒の空間の中に、夥しいゴーストが居る。道の距離はさして無いが。　立ち止ってしまったら最後・・・ゴーストに取り憑かれて死に至る」

ラキームは、怯えだして。

「い・イヤだっ！！！　私は行かないぞ」

すると、Kは。

「あ、そう。　じゃ、此処に居てくれ。　そのうち、ゴーストが痺れを切らして出てくるわな。　ちょいと、システィアナ」

と、システィアナを見て。

「なんですか～？」

「此処に残って、コイツのお守りするか？」

と、ラキーム達を指差す。

「イヤで～す。　シェラハさんのおまもり～ぬで～す」

Kは、ラキームを見ると。

「ゴーストに剣は効かない。　倒せるのは、俺と、システィアナと、ポリアのみ。　誰も此処に残らないから。　じゃ、いくか」

ポリアは、怯えるラキームがいい気味で仕方ない。

「オーケー、先に誰が入るの」

「ポリアとシスティアナが先頭だ。　次がイルガとマルヴェリータ。走れ、止まるな。　ゴーストは、俺が潰す。　シェラハは、ポリアとマルヴェリータの間で前だけ見ろ。　決して、振り向くな」

ラキームは、勝手に動き出すK達を見て、更に慌てだす。

「おっ・おい、おいおいおいいいいいいっ！！！　勝手に行くなーーーっ！！！」

シェラハは、ラキームを見て。

「私は、クォシカを迎えに来たのよ。　アナタに指図される覚えは無いわ」

するとガロンは、ラキームに寄って。

「ラキーム様、此処は入ったほうが得策です。　先に入れば、殿は包帯男です。　取り憑かれるのは、あの男が最初です。　ゴーストは、人の歩く速度ぐらいしか動けませんから」

「そ・そうなのか?!!　なっならいこうっ!!　物共っ、行くぞ!」

ラキームは、われ先と兵士より先に走り出す。　兵士達も、慌てて追う。

その様子にKは呆れて。

「やりゃ出来んじゃないか。　早よしろよ」

と、ポリアに光の杖を渡す。

「行くわよ」

ポリアは、みんなを見て走り出した。　走り込んだ道は、本当に森の中と云う感じでは無く。　漆黒というか暗黒と云うべき真っ暗な洞窟でしかない。

「うわっう〝わ〝ーーーーっ!!!」

先で、ラキームの絶叫が上がる。

「走ってっ!!!　さぁっ!!!」

ガロンの叱咤が飛ぶ。

その意味が直ぐに解った。

―あ〝あ〝あ〝・・・―

不気味な人の唸り声・・・。　嫌、“人”というのは声になっているからであって、声の質感はゾンビの声に似ている。　地の底から湧き上がる不気味な音といってもいい。

「キャッ！」

シェラハの横に、ボンヤリと人の死んだ姿が浮かび上がる。　青白い、眼球の無い顔である。

「走って！！　止まっちゃ駄目よっ！！」

ポリアの声がした。　辺りから、どんどんとゴーストが湧き上がるように現れる。

振り返るポリアと、マルヴェリータ。　直ぐ後ろで、青白い色に黄色や赤の炎の様な色の混じるゴーストが、一瞬の黄金の光によって直ぐに苦しみ悶えて消えていくのが見えた。

（ケイ！！）

どうやって倒しているのか。　二人にはさっぱり解らない。

「どんどん走れーーーーーーーっ！！！！！！！！！　遅いっ！！
追いつかれて死にたいかっ！！！！！！！」

暗闇の空間に、Kの大喝が。

「わっ!!、なんて声よっ」

ポリアの方が、その声に震えるぐらいである。

前のガロンは、闇の中で走りながら。

（なんて声だ・・・余程の者だな、あの男）

これは、手練を積んだ者なら解る。　腹からの声は、その鍛え方に比例するからだ。　現に、走り去る脇に居たゴーストが、Kの声に怯えたようで動けずに蟠っていた。

兵士の一人が、前に出口が見えて。

「ラキーム様、あと少しです!」

「おっおわおわおわお」

情けない声のラキームだった。　杖の光で見えるラキームの顔は、鼻水と涙で酷い間抜け面である。

どんどん出口に近づいて、ラキームと兵士が出た。　ガロンも、出た。

「ん?」

ガロンの脇で息の荒いラキームは、転がり這いつくばっている。

ガロンは、ラキームよりも目前に広がる森に囲まれた湖が気になった。

（なんと不気味な湖だ）

まず、臭い。　腐った水の匂いが漂う。　水面すら濁り、突き出している木の枝なども、苔生しているのではなく。　なんとなく腐って爛れているように見える。

「うは～、でれました～」

と、システィアナが。

「早く早くっ！！」

ポリアが、声を出しながら出た。

イルガとシェラハが出て、マルヴェリータが出る。

そして・・・。

「うわっ！！」

あお向けて空気を貪っていたラキームの前に、ゴーストに纏わり憑かれたKが出てきた。

「あわあわあわわわわ・・・」

ビックリして、腰抜けた這い蹲りで逃げ出すラキーム。

Kは、気にもしてない様子で、

「全員出たか？」

と。

「ケっ、ケイ！！」

ポリアが声を上げる。　ゴーストの顔が歪み悪鬼の様になって、Kに襲い掛かった。

が・・・。

Kの剣が閃いた。　五・六体のゴーストは、瞬時にバラバラに斬られた。

―お〝お〝お〝・・・―

気持ちの悪い呻きか唸り声を上げ、ゴーストは消えていく。

Kは、消滅するゴーストを気にも留めず、湖に歩み寄ってを見て。

「厄介だな。　湖全体が、腐って死霊の巣になってる」

ガロンは、この稀に見る腕前の包帯男を見て。

「やはり、取り憑かれてるか？」

「ああ、早く中に入る所を探そう。　その内、湖からモンスター共が這い上がってくるぞ」

ラキームは、鼻水に土が着いて汚れた顔で。

「そんなの、どこにあるっ?!」

Kは、建物の土台にして下の階層を持つ、四角い巨大建造物を指差して。

「“ゴーストネスト”になってるのが、建物の南側の茂みだ。　湖の前が、建物の西側」

「だからどうしたっ!!!!!」

怒鳴る声すら、泣き声のように聞こえてくるラキームに、ポリア達はうんざり。

Kは、詰まらなそうに続けて。

「昔の建造物は、太陽に窓を向けて光を拝む造りになってるんだ。入り口は、全て西側」

「早く言えっ!!!!　この愚か者っ!!!!」

ポリアは、イライラしてきた。

「うるさいわね〜、その汚い顔はなんとか成らないの?」

ラキームはハッとして、急いで服の袖で拭うも。

マルヴェリータが、冷たく。

「あら、余計に汚い顔になったわね。　土の方が、綺麗だったわ」

と、歩き出すKの後に続いた。

シェラハなど、ラキームの顔すら見えてない。

さて、森と湖に囲まれた神殿城は、巨大な正方台形であり。　その土台の中心にして、土台の上に円錐の山のように聳える塔を有する。　土台の下の壁は、真っ白い石だったのだろうが。　今は不気味な苔と蔦が外壁に生えて見栄えは悪い。

ガロンは、その塔の上に雲が渦を巻いているのが気になった。

「あんな風に雲が渦を巻くのか・・・初めて見る・・・」

Kは、ガロンに。

「あんなの、今に出てきたら大問題だよ。　此処は、怨霊によって異世界化した幻想空間だ」

「な、なんだとっ?!!　現実の世界では無いのか?」

「ああ。　此処は城に居る主がテリトリーとして、過去の世界を生み出す為に時間の流れを移したんだろう。　凶悪なゴーストモンスターが持つ能力さ」

冷や汗を顔に滲ませたガロンは、驚いてKに近寄った。

「お前っ!!　こんな能力のモンスターなどそうそう居ないだろう

っ？！！」

Kは、苦く笑って。

「当たり前だろう。　最高位のゴーストモンスターさ」

ガロンは、ゴーストが倒すのに面倒なモンスターなのは十二分に承知だ。　ゴーストの上位モンスターの恐ろしさも知っている。　ガロンの顔が焦りに染まり、怒鳴り声が出る。

「見当がついてるなら言えっ！！　一体、どんなモンスターなんだっ！！」

「遭うまでは、コレとは言えないが。　多分・・・赤い炎のような人型なら“ジェノサイスホロウ”。　黒い人型で、骸骨姿ならアビレイス・インフェルノ”かな」

「な〝っ・・・」

ガロンはその場に震えて黙りだす。　モンスターの名前を聞いて、目の前が真っ暗に成る思いがする。

ラキームは、ガロンに寄って。

「な・・なんだ？　ガ・ガロン？　アビレなんとかとか・・ジェノなんとかホロウってなんだ？」

涙目のシスティアナが、ブルブル震えて。

「そんなのかてませ～ん。　どっちも、死霊の最強モンスターです

〜」

ポリアも、事態の意味が解ってきた。

「待ってよ・・・死霊って・・・高位に成ると、人を呪い殺す呪術を遣うんじゃないの?!」

Kは、頷いて。

「ああ。　種類にも由るが、ここのボスなら、訳無く使えるんじゃないか?」

全員が、アッサリ言うKを見た。

もう、恐怖に気が狂いそうな顔のラキームが。

「かかか勝てるかぁっ?!!!」

Kは、歩いて。

「何で、死にに来るんだ?　早くいくぞ。　日が暮れると、それこそ俺以外は死んじまうぞ」

ガロンは、Kに確かめたかった。

「お前っ、全て知っていたのかっ?!!」

Kは、其処に落ちた物でも拾うかの様にあっさりとしていて。

「ああ、此処で起った事件の歴史は知っていたからな。　大体の想

像はついてるさ」

「何で一人で来なかったっ？！！！！！！」

ガロンは、Kの今に悪意染みたモノを感じていた。

Kは、立ち止まって横を向くと。　ガロンやラキームを見る訳でもない素振りながら、やや間を置いてから。

「・・・・・・・・・・、決まってんだろうが。　テメエと、そのバカの町史のお陰で死ぬハメに成った女の弔いだからよ。　しかと見ておけ、自分達の撒いた悪行の末をな」

そう言って、ガロンとラキームに向くと。

「雇った冒険者達がクォシカを誘拐したとして、お前達はどうした？　クズ野郎共が」

すると、ラキームが慌てて、

「ううううウルサイっ！！　クォシカが悪いんだっ！！　俺の女になれば良かったモノを・・・断りやがって！！！」

すると、シェラハが堪らずにラキームに寄った。

「やっぱり・・やっぱりクォシカを襲わせたのねっ？！！　最低よっ！！！！」

ラキームは、シェラハにヒステリックに怒鳴り返す。

「ウルサイっ　ウルサイっ　ウルサイっぃ！！！！！！！！　俺は町史だぁーーーーー！！！　お前等とは違うんだぁーーーーっ！！！！」

その時、誰よりも先に、ポリアが剣を引き抜いてラキームの首に突き付けた。

「はぁっ」

ラキームが、息を呑んで声が出なくなる。

「貴様っ！！」

兵士とガロンが怒鳴って剣に手を掛ける。

ポリアは、ガロンや兵士を睨んで。

「勘違いしないで、煩いのよコイツ」

と、言ってからラキームを見て。

「もう、帰れないんだから。　死なないように協力しなさいよ。アンタの撒いた種でしょ？　死にたくないなら、コッチの妨げにならないでよね」

「はっ・・はいっ」

言ったラキームの首から、剣は離れた。

「シェラハ、行こう。　クォシカを見つけるのが先よ」

ラキームを睨んだシェラハだが、ポリアの言葉に従った。

Kは、それを見て。

（いい冒険者になるな～。　ま、まだまだ経験が足りないがな）

そのまま歩いて、入り口を探した。歩く西側の壁伝いの湖の全体を見渡せるまん前付近で、大きな二枚の木の扉がある。　高さが三メートル以上はありそうだ。　だが、風化してが、朽ちて壊れかかっている。

ラキーム達は、K達より離れて歩いていた。

「ケイ、開きそう？」

見ているKは。

「こんな扉、もう中身が腐ってるから蹴り倒すしかないさ」

と、おもいっきりでもない足蹴を見舞えば・・。　“ギギギぃ～”と建物の中に扉が倒れて、“バタァ～ン！！！”と、埃を舞い上げた。

Kは、中を見て。

「ほ～、流石だね。　建物の中は、昔の芸術品の塊だこりゃ」

と、中へ。

「学者って、こんな非常時に知識欲が沸く訳？」

と、ポリアはKの知識欲に呆れた。

「ですな～」

イルガは、シェラハを気遣いつつ中に入った。

入った中は、何百年も経っているのに、当時の権威を窺わせるものだった。　広がるロビーは、埃と蜘蛛の巣が体積してゴミばかりなのに、床に見える絵は、天地創造の大作である。

周りを見れば、入り口の壁に沿って入った直ぐの左右に廊下が広がり。　少し行った二階へ上がる大階段の脇に左右へドアの有った枠だけが口を開けていた。

二階は、高く七・八メートルは上に上がっていて。　埃塗れで朽ち掛けながらに、分厚い最上質の絨毯が敷かれていた。　上がった先は踊り場になり、前方に上へ行く階段と左右に二階の壁に設けられた円形の廊下に行く為の回廊が。　二階の廊下は、グルリとロビーを見下ろせるバルコニーの様だ。

「凄い・・・かもね・・・」

ポリアも、その広さと造りの全てに圧倒されそうだ。

「お嬢様、こんな建物はお城でも在りませんぞ」

イルガも圧巻だった。

この時、ラキーム達も中に入って来た。

「な・なんて広い建物だ・・我が屋敷など蟻のようだ・・・」

誰もが、ロビーだけで圧倒される雰囲気に呑まれている。

そこに、Kが気付けのように言葉を投げる。

「さて、檻に入った俺等を殺しに亡者共が現れるぜ」

全員が辺りを見て警戒した。　廊下・・・ドアの先・・・階段・・・二階・・・。

しかし、Kは前を見たままに。

「違う。　湖さ」

全員の顔が外に向いた瞬間。

―う〝う〝・・・あ〝あ〝・・・・―

「なっ!!!!　なんだぁっ?!!」

ラキーム、不気味な声に反応する。

湖より、一体・・また一体とモンスターが這い上がってくる。　ゾンビ・・・スケルトン・・・ゴーストに加えて、蒼い色の肌をしたゾンビも現れた。

「ケっケイっ!!　数が尋常じゃないわっ!!!!」

マルヴェリータの声が、建物に響いた。
現れたモンスターも群れは、ざっと数えても四・五十以上。
「どどどうするんだっ？！！！」
ラキームが、ガロンと共に階段に来た。
Kは、皆に。
「周りに隠れてろ。　俺に照準を合わさせるんだ。　息を殺して、声を出すな。　早く、散れ」
と。　一人、皆の間を抜けて入り口に向かった。
「ラキーム様っ、早くこちらへ」
兵士とガロンに連れられて、もう腰砕けのラキームは右のドア枠の先の部屋に隠れた。
シェラハを庇い、隠れるマルヴェリータやイルガ達。
ポリアだけ、Kの傍に居て。
「一人で大丈夫なのっ？！！！」
「足手纏いが邪魔だ。　お～ば～かちゃんのポリアに心配されるとは、俺も引退期が近いかね～」

ポリアは、もう入って来ようとしているモンスターの群れを見て。

「駄目だったら化けて出てやるんだからっ！！」

と、隠れる為に離れる。

（駄目なら、俺も死んでるってよ・・・）

Kは、詰まらなくも笑えた。

ゴーストが、壁を突き抜けてKに襲い掛かる。　Kの剣は腰から抜かれていて、二体のゴーストが斬られて掻き消されるように薄れて消える。

一方、隠れたシスティアナが、ガタガタ震えて。

（アワアワアワ・・レヴナントまでいましゅ～こ・こわい・・）

マルヴェリータは、知らない名前に。

（なんなの？　蒼いゾンビ？）

（そ・そそ・・憎しみでゾンビしゃんになったモンスターで・・人のオニクかすきなんですぅぅ。　たべられちゃうと・・死んだ人は呪いでゴ～ストになちゃうんですぅぅぅ）

（ちょっと、嫌ね）

（ししかも～、レヴナントは猛毒をツメと～歯にもってましゅ・・ドクドクネイルとドクドク噛み噛みですぅ～）

（システィ、ここでもそんな言い方出来る余裕あるのね）

（くっクッセ～でしゅ）

（クセでしょ？）

こんな話の中でも、Kは先行するゴーストを斬り払いつつ、ゆっくりと後退する。

ガロンは、態と後退しているのは解ったが・・・。

（一体、どうするつもりだ）

Kは、左手だけで斬っている。　右手は、ダラリと背中のコートの下に入れているだけだ。

二十体以上のゴーストを倒した時、スケルトンやゾンビ達が全てロビーに入って、何十もの群れとなってKに襲い掛かるべく歩みを速めた。

するとKは、一気に大階段まで走って、三段目ぐらいまでに駆け上る。

（何っ？！！）

見ていたガロンを始め、ポリア達も固唾を呑む気持ちから、手に汗握る息の詰まった状態に来た。

「そら、喰らえ！」

Kは、モンスターの群れに向かって、右手の何かを投げた。

（あ゛）

（何っ?!）

白い、拳大の真珠のような珠であった。　流れる様に放物線を描く珠が、見ている皆にはゆっくりとした光景に見えたのは、一瞬の事。

吸い込まれる様にモンスターの群れの中に落ちた後。

「うわっ」

「キャ」

「ちょっ」

白い目映い光が、落ちた場所から零れだす。　光は一気に膨張して、ポリア達もラキーム達も見ていられなくなった。

（ケイっ!）

と、ポリアが一瞬だけ見たKは、光に背を向けて。　立っていたのだった・・・。

光の中からは、白い鳥の羽が溢れんばかりに現れて飛び散り降り注ぐ・・・。　光は、モンスターの身体を貫いて、舞い降り降り注ぐ羽はモンスターの身体を溶かすように光を放つ。

すると・・・どうだろう。　スケルトンは剣を落として崩れて逝き。

ゾンビやレヴナントも、憎しみ苦しむ歪んだ顔が、心なしか穏やかに成って塵になって逝く。

「・・・」

見直す全員の前で、羽に浄化されたモンスターは塵と成り果てて、床に落ちて消える羽と共に姿は消えた・・・。

全てが消える中で、ポリアがロビーに出て来た。

「き・・・キレイ・・・な、何？」

Kは、ポリアの方を向いて。

「“天使の羽ばたき”と云う魔宝珠だ。光の上位精霊が、天使でな。その力を、三百年前はこうして宝珠に出来たらしい」

マルヴェリータは、最後の羽を見て。

「なんか・・ゾンビの顔が穏やかになったけど・・」

すると、システィアナは喜んで出てきた。

「み～んなみ～んな開放されたんですぅ。にくしみやうらみから～。フィリア～ナ様みたいですぅ」

出てきたラキームは、Kに向かって胸を張った。

「フン、いいもの持ってるじゃないか。後は、主だけだろう？」

「バカ、まだ居るよ」

「あ？」

「この建物の上部の階層から、雑魚モンスターの気配がしてる。此処まで倒した数で、ざっと全体の七割くらいか」

「なんだとぉ・・・まだ残ってるのにあんなもん使ったのかっ？！！！」

「ああ、最後の群れは、町史さまの武勇伝に取っておいてやった。頑張って、倒してくれ」

「うむむ・・・ふざけるなぁっ！！！」

と、怒鳴ったラキームに、ポリアが青筋を立て、

「首斬られないと解んないかしらね」

と、唸る。

ラキームは、殺気を感じてガロンの後ろに隠れた。

さて、此処でおかしい点に気付いたのはマルヴェリータだった。

「ケイ、待って・・・なんか変じゃない？」

「マルタ、どうしたのよ急に」

ポリアに問われるが、マルヴェリータは包帯男に問う。

「ケイ、モンスターの数が多すぎるわよ。　だってそうでしょ？　百年近く前に行方不明に成った町人は五・六十人でしょ？　ゴーストの数にしたって、ゾンビの数にスケルトンの数を足したら、ゆうに二百は超えちゃうわ」

Kは、然して驚く事も無く。

「だねぇ」

ポリアは、それを見て。

「まさか・・・この城って・・・主だけじゃないの？」

Kは、呆れたように。

「ポリア、世界の城で主だけの城なんてそうそう有る訳ないですぜ」

マルヴェリータは、確信した。

「やっぱり・・・アナタ、此処がどうゆう所か知ってるのね？」

「ああ、此処は知られない惨劇の舞台さ。　そう、“アデオロシュの惨劇”のな」

誰も、聞いたことが無い言葉だった。

Kは、続けて。

「この国の国民が知る歴史・・・“無血の交代”。　アレには裏が

在ってな。　この場は無血の中に語られぬ、ある流血惨劇があった場所さ」

“無血の交代”は、ホーチト王国の誇れる歴史転換事件。　この国生まれのマルヴェリータは、この国の歴史を汚された気がして。

「嘘よっ！！。　レブセテイル王の行った革命に血なんて流れてないわっ！！！」

すると、Kは不敵に笑って口元を変えた。

「おいおい、そんなに人間がキレイなモンかよ・・・ま、改革の旗印になったんだ。　それくらいの伝説も必要だわなぁ～」

Kは、階段を上がって踊り場にいった。

“無血の交代”・・・それは、このホーチト王国の栄光だ。　三百年前の或る時まで、この王国も絶対王政にして、厳しい階級制度と、貴族政治が上に君臨していた。　革命前の王は、専横の激しい冷血人間だったが。　自分の息子の中でも、第八子のレブセテイルを可愛がっていた。

その当時、ホーチト国の北に在る国は、内戦状態にあり。　ホーチト国は、国境を封鎖していたのだ。

しかし・・、北の国の解放軍も、王国軍も、ホーチト国に戦争介入してもらい泥沼にして、勝機を得ようとしていた。　その手は、当時の王に子供に対しての不信感を与える事に繋がっていて。　この国王は、息子八人の内、五人を疑心暗鬼から殺していた。

レブセテイルは、新しい国の構想を持っていた。　階級制度を緩和して、商業・農業を一般国民に開放しようというのである。　当時、全ての土地・商業・農業の権利は貴族が持ち。　一般の民は生きてるだけの奴隷に近かった。

転機は、レブセテイルの結婚にあった。　皇族の遠縁にて、当時の軍事権の大半を持っていた大将軍の娘が妃である。　この将軍は、レブセテイルこそ新たな国を創る王に成ると信じて、レブセテイルの父親が死んだときに、殆どの貴族が集まった時に合わせてクーデターを起こしたのだった。

レブセテイルを王と認めさせて、民衆に開放を宣言。　自由の息吹に湧いた国で、新たな政策が産まれた。

レブセテイル王は、商人の崇める王であり。　無血の改革の象徴として世界に有名な王となった。　だからこそ、レブセテイルをバカにする者など、ホーチト王国には居ないのだ。　悪く言うのは、貴族だけである。

今や、商人達が力を持ってしまい。　貴族出の大臣達とて、商人達を無視できない。　国政に入る半分の政治役人は、商人や学者などの知識人だからだ。

マルヴェリータは、焦りの篭った眼差しを包帯男に向けて。

「ケイ、一体どうゆう事よ？」

「あのさ。　普通なら、レブセテイルが王位に就くんだ。　クーデターなんか必要ないだろう？　必要だから、クーデターを起こしたんだ」

イルガも。

「して、その必要とは？」

「この国の人で、アデオロシュ家を知る者は殆ど居ない。　知っていても、改革当時に居た皇族ぐらいしか知らない。　何でだと想う？」

マルヴェリータは、首を振った。

踊り場にて、Kは上を見た。

「アデオロシュ家・・・改革直前の当時、第三の王位継承権を持ち。武勲で有名な皇族だった。　当時、貴族達はレブセテイルの性格を知っていてね。　専横政治を続ける為に、このアデオロシュ家の当主、アデオロシュ十四世を王にしようと画策していたんだよ」

「まさか・・・」

「当たり前だろう？　貴族の誰もが、権力の上で楽園人生だもの。なんで、手放したいと全員が想うんだ？　例えば、今の商人達で、自分の財力を全て捨てていいって想うの何人居る？」

誰もが、黙った。　商人の娘であるマルヴェリータは、返す言葉など見つかる訳もない。

「アデオロシュ十四世は、非常に気性の激しい人間で。　貴族・絶対王政に拍車を掛けたいとすら想っていた野心家だ。　北の内戦状態の国も、アデオロシュの王位を望んでいただろう。　だから、大

将軍としては、アデオロシュを生かしておけなかった。　いや、クーデター直後に殺しておかないと、貴族の加担で反旗を翻す事は確実だった・・・。　だから、無血の為に必要な流血を行った」

ガロンは、階段の前に来て。

「お前・・・なんで知っているんだ？」

「アデオロシュのこの神殿城へ、クーデターの在った夜に将軍の配下の軍勢が押し寄せた。　町の民にはこれからの自由を説いて、緘口令を敷き。　深夜に攻めた。　その時、唯一この城に知らせに走った者がいたのさ。　この城に、自分の家族が奉公していた学者だ。　だが、間に合わなかった・・・」

ポリアは、起ったことを想像して、ゾッとした。

「ま・・・まさか、無血の改革の為に・・・生き証人は作らなかった？」

「その通り。　レブセテイル王すら知らない事実。　この城は、その日は死んだ王の為に葬儀に行く仕度のアデオロシュ一族を始め、迎えの貴族も合わせて数百名が居た。　その全員が襲われた。　そして、アデオロシュの子供も、使用人も、住み暮らしていた奉公人も、女中も全てが殺された」

「嘘・・・本当なの？」

「信じられない・・」

マルヴェリータもシェラハも、愕然とした。

Kは、言う。

「この呪い・・この亡霊が何よりの証拠であり。　アデオロシュ家は、交差する二本の剣と燃え上がる炎が家紋なんだ」

と、後ろを指差して。

「ポリア、杖を高く掲げてみろ」

ポリアは、みんなを見ながら杖を掲げると・・・。

「あっ」

ポリアやマルヴェリータは声を上げ、シェラハは口を手で押さえた。

Kの後ろにあるステンドグラスには、紅い炎に交差する青白い二本の剣があった。

Kは、その家紋を振り返って見て。

「唯一の生き証人。　知らせに走った学者は、一人で逃げた。　家族を殺されて・・・改革の波に飲まれて事実を語れず、そして落ちぶれて友人の家で死んだ。　その時、彼を愛して居たのが友人の娘であり、俺に証拠のアデオロシュの内情を語った学者の母親だ。ある仕事で、家に取り憑いた幽霊を払った時に、成仏させる為に色々と知る事に成った。　まさか・・・その惨劇の地に来ようとは想わなかったがな」

ポリアは、Kの立つ階段を上って。

「アナタが、成仏仕切れなかった生き証人の学者さんを・・・？」

「ああ、仕事だもの」

Kは、そう言ってから一呼吸おいて。

「ま、こんな事を世間で語っても、誰も信じはしないがな」

マルヴェリータは、アデオロシュの事が気になった。

「ケイ、そのアデオロシュ家の当主が、何でモンスターに？」

「考えてみろ。　家臣を殺され、家族を皆殺しにされて・・・。当時、オガートの花と歌われた彼の妃を自分で殺した男だ。　話は、こうだ・・・。　血で染まった城のこの階段で、アデオロシュ候は叫んだ」

―おのれっ！！　下衆な将軍の兵士共めっ！！　この高貴たるわが身体に貴様らの刃を入れて死ぬなど出来ぬわっ！！！　覚えていよっ・・・全てを呪い・・全てを怨み・・命の全てを滅する怨念と成ってくれるわっ！！！！！！！！！―

「彼は、そう言って自分で自分の首を斬った。　そして、将軍の兵に紛れて居た当時の魔術師が、この神殿城を森ごと封印したんだ。　時間を掛けて埋葬したら、事件が明るみに出るからな。　この場所に誰も入れないようにした。　だが、返ってそれが亡者の温床となり、遂にアデオロシュ候が怨霊のモンスターに成った」

ポリアは、その無情な仕打ちに顔を歪める。

「最低じゃない・・・勝手に殺しておいて」

「レブセテイル王に知られるのが、何よりまずいからね。　知られたら、あの王の性格からして弔うだけじゃなく。　何らかの処罰を自分に下しただろう。　無血の改革に流血の事実は必要無く、新しい国の維持に向かう王には無粋な現実は必要無かった訳さ」

「ケイ・・・」

悲しそうなポリアだ。

だが、Kはハッキリしている。

「だがな、今のアデオロシュは人でもなんでもない。　生命を憎んで、人を亡霊に変える怨霊でしかない。　俺からすれば、時代そぐわず。　時代に逆らった愚か者だ。　自分の寿命も、一家の寿命も消したんだ。　地位の為にな」

すると・・・いきなり上から声が。

―言うてくれるな、侵入者の分際で―

「わっ」

「な・何っ?!」

「こわいです～、人じゃないですぅ！」

システィアナには、その声の主が生きているか、いないかが解る。

Kは、上に伸びる塔を見上げて。

「声だけか？　アデオロシュ」

誰もが、Kを見て驚く。

上からの声は、威厳に満ちた男の声である。

―我が名を口にするな、下等の民がっ―

「ひぃっ！！」

ラキームは、その場の平伏した。

（なんて圧力のある声なの）

ポリアも、皇族に近い家だが。　こんな威厳のある声は聞いたことがない。

だが、Kだけは恐れも無いらしい。

「家柄に縛られてる戯け者よりマシだよ。　これから、払いに行ってやる。　上で待つか？　それとも、こっちの手間省きに降りて来るか？」

上から響く声は。

―大そうな自信だな。　我が、貴様の身体を八つ裂きにしてくれよう。　上って来い、我は最上部で待ってやろう―

せせら笑う顔のKは、

「どこまでも上からだね～」

ポリアは、ポツリと。

「似てるわ・・・」

Kは、ガロンを見て。

「俺は、上に行く。　御宅も来るか？　それとも、此処の調査でもしてるか？」

ガロンは、Kの腹を読んでみたように。

「貴様の手には乗らん。　我々は、この場の調査と、退路の確保をする」

Kは、あっさりと頷いて、上を目指すようだ。

「ちょ・ちょっと！！！」

ポリアは、Kに待ったを掛ける。

「ん？　どうした？」

「“どうした”じゃないわよ。　私達はどうするのよっ？！！」

Kは、頭を掻いて。

「さあ～。　ラキームと手分けして調査してていいぞ。　クォシカの遺体が何所にあるか解らないから。　目的は、それだ」

ポリアは呆れた。

「目的って、当たり前じゃない。　クォシカの遺体が、その主のところに在ったらどうするのよ？」

「それは、持って来るが・・・」

「こんなデカイ城みたいな場所を、私達だけで探してたら明日になるわよっ！！！！」

「なら、待ってろよ。　こんなデカイ城ですから。　上に行く“魔法床陣”はあるだろう」

ポリアは、ここまで来て一人で行くとは想わなかった。

Kは、ラキームを見て。

「ま、俺が抜けても。　この人数なら、そのバカ殿を守れるだろう。一番の心配は、クォシカの今の姿だ」

マルヴェリータは頷いて。

「まだ・・・モンスターとして出てきてないものね・・・」

Kは、上を向いて。

「アデオロシュは、元々から烈気激しい上に今は魔物・・・。　クォシカみたいな者には、どんな事をするか解ったものじゃない。そして、アデオロシュの呪いを終わらせる事が、倒して直ぐに出来るとも限らないし・・・」

ガロンは、それが聞き捨てならない。

「お前、主を倒せば終わると言ったではないかっ」

Kは、頷く。

「確かに、言った。　正しく言うなら、倒して手順を踏めば終わる。だから、足手纏いは今は困るのさ」

「“手順”だとぉ？」

「この辺り一帯を異空間と変える結界を張った魔方陣が何処かにある。　奴の元に在るならいいが。　無いなら、探さないと・・・。問題なのは、野郎が態と怨念を見せびらかすようにして、魔方陣の波動を消してやがる。　奴の元に無いなら倒してから、波動を探さないと。　俺は、上の始末をして、探すよ」

ラキームは、唸りながら。

「我々は、下からか・・」

「ああ、アデオロシュを倒せば、マルヴェリータやシスティアナが感じられるはず。　死人が出ても困るし、そっちに手は多いほうがいい」

Kは、あくまでも勝った後を考えていた。　その言動、ポリアやガロンには受け入れ難い。

しかし、Kは上に上がって行ってしまう。　Kが三階より、螺旋階段となる塔の上部へと消えて行くのをポリア達は見上げていた・・・。

7．摩天楼に君臨する王と、堕ちたヴィーナス

7．摩天楼に君臨する王と、堕ちたヴィーナス

Kが消えて、ポリアは仲間を見た。

「じゃ、捜索しましょうか・・・待ってても仕方ないし」

イルガは、マルヴェリータやシスティアナに。

「のお、そんなに上の主の力は強いのか？　感じないワシには、ただ不気味というか・・薄気味悪い印象しかないんじゃがの」

マルヴェリータは、ドレスローブの身を自信を両手で抱く様にして。

「凄い波動よ。　まるで、生きてる事自体を責められてるみたいに・・・。　だから、湖から出てきたモンスターの気配さえ感じられなかった・・・」

システィアナも、ブルブル震えて。

「うえのひと、こあいですぅ～」

「ふむ、余程の相手と云う事か」

マルヴェリータは、Kの消えた上を見て。

「正直言って、上の主に直接会ったら、私やシスティは気絶するかも・・・。　この距離で鳥肌どころか気分が悪いもの」

ポリアは、Kがコレも頭に入っていたのかと考えたが・・、今はその議論をする時でも無いと思い。

「とにかく、動きましょ」

「そうね」

と、マルヴェリータ。

ラキームは、ガロンと目を合わせてからポリアに。

「じゃ、我々は一階を見る。　一番逃げるのにいいからな。　お前達は、二階でも行け」

ガロンは、こんな横柄な言い方では、ポリアがまた怒るのではないかと思ったが。

「丁度いいわ。　バカの面倒見なくていいんだから。　さ、上行きましょう」

ポリアは、ドライに対応する。

「バカだとっ?!」

怒るラキームに、ポリアは。

「アナタのお父さん、病気なんだろうけど。　息子がこんなバカに育って悲しい限りよね。　凄い人みたいだけど、子供にどんな教育してたのか呆れるわ。　もし、しっかり教育してアナタがこんなだとするなら、鷹がバカ産んだわけよね？」

これは、ラキームの怒りに油を注ぐことになる。

「ふざけるなっ！！！！！！　我が父を侮辱する事は許さないぞっ！！！！！」

金きり声のような、奇声に近い声。

ポリアは、益々呆れてしまった。

「一番の侮辱は、アナタの存在よ。　せっかく町のために頑張ったのに、息子のアナタがそんななんだもの。　しかも、町に人に愛されたクォシカを死に追いやって・・・・自分のやった行為に恥すら感じないんだから、しようがないわ」

と、二階に上がる。

マルヴェリータや、システィアナは口も利きたくないので、黙って後に続く。

イルガの前に居たシェラハは、怒りに顔の歪むラキームを見て。

「アクレイ様を面会謝絶にして、自分の自由に遣りたいようだけど。　絶対にそんなことさせないから・・・クォシカの仇は、貴方を町史にさせない事で討ってやるんだからねっ」

「うぬぬぬ・・・」

ラキームは、ポリア達を睨む。　憎しみめいた眼であった。

ガロンは、ラキームを見て。

（町史に成れないようなら、コイツに着いているのも無駄な話だな・・・だが。　此処を脱して成り行きを見守るためにも、コイツを守らねば・・・）

ガロンからすれば、冒険者を半ば引退したようなもので。　ラキームの出世は、自身の安泰だが。　万が一にもラキームの地位が失われれば、ガロンとて金の入る宿主を失う訳だ。　しかも、ラキームの警護を受けている身なのにラキームに死なれては、自分に責任が及ぶというものである。

ま、ガロンにしては、ラキームはステップの最初に過ぎない。　更なる上の地位を持つ者に取り入ろうと思っていた。

さて。　ラキーム達は、階段脇から右の扉の奥を見に行こうとしていた。

「クソ・・あんな女に侮辱されるとは・・・剣の腕さえなければ俺の奴隷にしてボロボロにしてやりたい」

この期に及んで、なんたる一人言か・・・。

兵士もガロンも、閉口してしまう。

一方、二階に上がったポリア達。　踊り場から回廊を渡って、二階

廊下に行った。　二階の廊下は、鋼鉄の手摺りと壁に挟まれたロビーを上から取り囲むような円を描く。　手摺りが風化してか錆びてはいるものの、全く触ってもグラついてはいなかった。

ポリア達は、二階左側に渡った。

「しっかし、埃っぽい」

ポリアは、埃と蜘蛛の巣だらけの至る所を見回して、空気の悪さが胸に嫌悪感を催して来るのが嫌だった。

円を描く廊下だから、成りに歩けば、一周してしまうが。　手摺りの反対の壁には、部屋へ行けるドア枠が開いている。　一階の構造に合わせると。　右側の廊下にはドアは2つ程しか開いていない。　左半分は、建物内に入って来た湖側の玄関の上辺りから、大階段の裏に掛けて七つほどの扉があった。

ポリアは、一つの部屋に顔を覗き込ませた。　ドアは、上からポリアに腰辺りまで朽ち壊れ、下の部分はかろうじて引っかかっている様な感じである。

「うあ～。　真っ暗・・・しかも部屋の中はグチャグチャよ。　入る？」

イルガも、中を覗く。

「これは酷いですな～。　戸棚が全て傾いている・・・、しかも、人が奥に入って行くゆとりがありませぬな」

「そうね・・・倒れ掛かってる棚が崩れ落ちそう」

マルヴェリータが、後ろから。

「中に入れないのなら仕方ないんじゃない？」

ポリアは、万一も考えて。

「一応、入るわ」

と、朽ち残るドアを蹴った。　埃を立ててドアは崩れる。

「カビ臭い・・・」

腕の服で、口と鼻を押さえた。　ライトスタッフを持つポリアが中に入って、辺りを見回す。　此処は書庫らしく、無数に散かった本がボロボロでもう読める状態ではない。　しかし、その崩れた本棚から出ている本の数はかなりの量だ。　後ろを見れば、滅茶苦茶になった部屋が続き、先の上の所から、光が薄っすらと篭れていた。

「どうやらこの部屋は、此処から部屋が奥に伸びてるみたい。　先の廊下からも入れるみたいよ」

「ポリア、他にかわったところは？」

ざっと見て、全員が入れる間は全く無い。　ポリアとマルヴェリータが入ったら、立ち往生していまう。

「ん～、向こうから入ってみよう。　こっちは、ちょっと本棚が倒れて朽ちて奥に入って行けないわ」

ポリア達が二階を捜索し始めていた頃。　下では、ラキームが広い広間に居た。

「クソっ・・言いたい放題言いやがって・・・」

まだ、ポリアの言った事に腹を立てているらしい。

先頭のガロンは、入って行くにしたがって左右の壁が、丸で降り階段の手摺りのように下がって広がるのが不自然に思えたのだが・・・。

「ほう、これは・・」

広い、円形の広間に出た。　どこも埃が堆積しているが、どうやら舞踏会などを催す演芸場の様な場所であった。　ライトスタッフで辺りを照らしてみれば、右手には壇上になるステージもある。　ステージはかなり広い。　凝った演劇もすんなり出来る広さはある。

ラキームは、呆られたバカらしく。

「なかなかいい所ではないか・・・後で清掃させれば住めそうな」

ガロンは、内心に流石に呆れて。

（止めとけ、バカ殿。　こんな所、お前の自由勝手で住んだら国から叱責を受けるわ）

と、思いつつも。

「ラキーム様、あちらに」

と、バカ・・・いや、ラキーム左側に誘導して。　一人の兵士に、

「おい、ステージの上を見て来い。　此処に居る」

「は」

兵士は、ステージに向かって行き、自分の肩ぐらいの高さの壇上に這い上がった。　ガロンは、周囲を他の兵士に警戒させて、自分は行かせた兵士を見ていた。

兵士は、右に左にとステージを行き。

「ガロン様、左の奥に下り階段があります」

ガロンは、湖側の入り口の壁に沿った廊下を思い出し。

「多分、玄関に行く廊下に当たっているはずだ。　ま、いい。　先に奥だ」

「は」

兵士は、戻ってきた。

ラキームは、円形の舞踏場の周りにある観覧席を見る。　一階、二階、三階まであって、五百人くらいは楽に入れ席に就けそうだ。観客席であったであろう木の朽ち果てた残骸が、辺りに散らばって視るも無残である。

「しかし、昔の皇族とは凄い権威が有ったのだのう・・・。　俺も、

それくらいの権威を我が物にしてみたい」

「ですな。　ラキーム様なら、町史として威光を強めればいずれ辿り着きましょうと」

ガロンの下手なお世辞に・・・いや、お世辞にも映らないような言葉だが、ラキームは頷いて。

「うむ、その通りだ」

兵士も、ラキームを見ていない。

さて、Kはどうしていたか・・・。

三階から、螺旋階段で上に上に・・・。　各階層に行く回廊が、木の枝のように伸びていく。　だが、Kは、階段で上しか目指さない。　走っている。　もう三十階以上は上がっているのに、全く息の乱れがみえない。

（どんどん、近づいているな）

身体に感じる怨念のエネルギーは、徐々に強まりつつある。　黒い豹のような軽やかさで、コートの裾をはためかせて更に上を目指した。

実は、K。　四階で、各階に行く魔法の床が移動出来る空間を見つけていた。　だが、肝心の床が無いのだ。　恐らく、アデオロシュが上にあげたのではないかと踏んで、一気に上に走っているのだ。

そして、この今のKを見たなら・・・ガロンは、Kとは死んでも喧

囁はしないだろう。　そう・・・Kは明かりを全く持っていない。
その理由・・・名うての汚い冒険者だったガロンなら解るはずだ。
そして、ガロンはそれに、この時に気付くのだ。
「ラキーム様、どうやら奥にも廊下に通じる出入り口がありますな」
舞踏場の左奥には、客席を二分するように切れ間があり。　その切れ間が、通路として奥の廊下に繋がっていた。
ラキームは、ふと思って。
「ガロン」
「は？　どうしましたか」
「あの包帯男・・・ケイとかいう者だ」
「は？　あの男が如何致しました？」
「いや、私の家臣に出来ぬものかと・・・な」
「何ですと？」
ガロンは、ラキームのバカが筋金入りを超えて、神様級に思える。
（本気か？）
ラキームは、ふざけているのか、ガロンに気を遣うような言い方で。

「御主の下に置ければ、いい働きができそうな男ではないか。　ん？」

ガロンは、本人の前で無い事を助かったと思う。　正直Kの方が、剣の腕も、頭の回転も上なのだ。　あんな者を配下にしたら、ラキームは絞首刑に最速で向かうハメになるだろう。　まずは言ってみても、了承はしまい。

「ラキーム様、あの男は信用に置けませぬ。　冒険者をやっているうちは、無理かと・・」

これが、ガロンに言える最大のフォローであった。

「ふむ、そうか・・・確かにそうだな。　ガロンの言う通りだ」

（当たり前だ、大バカが）

ガロンが、そう思った時・・・。　ラキームは、この時二階でもポリア達が同じことを言い合っている内容を口にする。

「しかし、不思議な男だの。　あの包帯男、自分は明かりも持たずに暗い上に行きおったわ。　こんな暗い中、どうやって見えるのか」

ラキームの言葉に、ガロンがハッとして立ち止まる。

（明かりも無く・・・身のこなしが軽い・・急所を・・・・まさかっ！！！！！）

ガロンも、冒険者を離れてやや久しい。　冒険者をやっていたなら、直ぐに辿り着いた答えかもしれない。

（な・・なんて事だっ。　この俺が、こんな事も忘れているとは・・・あの男は、マズイっ・・マズイぞっ！！！！！！）

パッと振り返り、自分を眺めていたラキームを見て。

「ラキーム様っ」

と、言った時である。　暗い闇の中を戦ぐ風の様に。

―ラキーム・・・・・・・・・・ん？―

声だ。　まだ若い女の声である。　微かながら響いた感じがした。

「ん？　ガロン・・・なんだ？　今の声は？」

ラキームは、ガロンの言葉も、女の声も気に成った。

そして・・・また・・。　ガロンが廊下に行きかけたのを止めて。

「ラキーム様、女の声ですか？」

と、ポリアが悪口でも言ったのだろうと思ったが。

「ラキーム・・・あぁ・・・ラキーム・・・」

こんどは、確かにステージの方から、絹を擦るような細い音で女の声がした。

ラキームは、この声に聞き覚えが有った。

「ん？　知ってる様な・・・声だな」

兵士の一人が、

「ラキーム様、向こうの壇上から聞こえて来ました」

と、後ろを指差した。

ラキームは、ガロンと見合って兵士に。

「今し方、あの壇上には見に行ったではなかったか？」

ガロンは、ラキームの横を行き。　また舞踏場の中央付近に戻った。

「ラキーム様の名前を呼ぶのは何者かっ？」

後ろに、兵士に囲まれたラキームも続いた。

明かりに照らされた壇上の右隅に、風化して壊れかかったテーブルが有ったのだが・・・。　その上に、何かが乗っていたのが見えた。

「ん？　ガロン、今のは・・」

と、ラキームが言うのに合わせて、ガロンが明かりを戻せば・・・。

「あ〝っ！！　クォシカっ！！！！！！！！！」

ラキームの驚きの声は、ポリア達にも聞こえた。　埃に塗れて、書

庫を探し回っていた所だった。

「ええっ？」

驚くポリアに、マルヴェリータが。

「ポリアっ、下に」

「クォシカっ、ホントに?!」

驚くのは、シェラハも同じ。

全員で廊下に出て、大階段の踊り場に向かおうと回廊に入った時だ。

「あ〝、モンスターっ!!!」

三階から、スケルトンが来ていた。　しかも、紅い・・・。

―う〝あ〝・・・・・―

ゾンビの唸り声が、三階から聞こえて・・・ポリア達が見ていた視界の中で、三階・四回の階層から、ゾンビが四体近く一階のロビーに落ちて行く。

イルガは、事態が一気に切迫したのを感じた。

「お嬢様っ!!」

ポリアは、紅い血の色の汚れた感じのスケルトンに斬りかかった。

「たぁっ！！」

しかし、

「えっ？」

ボロボロの剣で、簡単に防がれた。

「イルガっ、シェラハを！！」

マルヴェリータが、一階に落ちたゾンビに向かう為に、ポリアの背後を走り階段を駆け下りた。

そして、ラキームの。

「う〝ぎゃあああああああああーーーーっ！！！！！！！！」

と言う大絶叫が上がって、戦いの幕は上がった。

ポリアの助太刀で、イルガが突き出した槍を簡単に避けた紅いスケルトンは、パッと階段の上に飛びのいた。

「イルガっ、コイツ強いっ！」

「はっ」

踊り場で、ポリアとイルガで紅いスケルトンを向かえ討つ。

一方、ラキームの方は・・・・。

壇上のテーブルの上に、クォシカの顔があった。　黒い髪が濡れているかのように艶やかで、スッキリとした小顔の美しい娘である。
　鼻筋の通りから、眼の見開かれた作りなど確かにラキームが好きになるのも解る。

「クォシカ・・生きて・・」

と、近寄ろうとしたラキームを、ガロンが止めた。

「お待ち下さいっ　あの者、ヘンです」

ガロンは、肩まで見えているクォシカが何も纏っていない白い蝋のような肌を魅せ。　更にネコの様な瞳を輝かせるクォシカに異変を見た。

クォシカの口元・・・白い肌に美貌を生み出す為に取って付けた様な赤々とした鮮血のような唇が、突然に“ニヤリ”・・・と笑ったのが、刹那。

「ラキーム・・・来てくれたのね・・・」

喋りながら伸びる紅い舌は、毒々しいくらいに紅い

ラキームは、幻の美女を見るかのように。

「クォシカ・・逢いたかったよ・・」

すると、クォシカの口が、ニパァ〜っと尋常では無い裂け方で、耳の近くまで切れて開かれる。

「ひぃっ！！」

ラキームが、怯えてたじろいだ瞬間。

「気をつけろっ！！！！」

と、ガロンが叫んだ。

だが、兵士も、ラキームも、ガロンですら驚いたのは、この次の瞬間だ。　いきなり、クォシカの身体がユラユラと揺らめきつつ、ぬ～っと伸びていく。

「あ〝っ！！」

クォシカは裸である。　胸が露わに・・・。　だが、それよりも驚くのは、その伸びた胸から下である。　長々と蛇の胴体と思える身体に変わり果てていた。　その伸び上がった高さ、見上げること五メートル近い。

「あ・あわあわあわわわあああわわわあわわわわ・・・・」

ラキームが、ワナワナと振るえて後ずさり。

揺らめくクォシカの変わり果てた異形の者は、不気味に光る猫の目の様な瞳をラキームに向けて。

「ラキーム、待ってたわ・・・。　さぁ、私にその血肉をよこしなさいっ！！！」

その声に合わせて、観覧席から何かが飛び降りて来た。

「ハッ?!!」

ガロンが振り向けば、そこには紅いスケルトンと、蒼い全身のゾンビが・・・。

「お前・・ギーシン!!」

そのゾンビの男・・・まだ人の姿をしっかり保っていた。　そう、ガロンの元手下で、クォシカを攫う為に雇った冒険者のリーダーであった。

眼がやや飛び出て、顔や手の皮膚が傷だらけで化膿したように爛れていた。　だが、何よりも、ギョロギョロと動く眼が、ガロンに止まり。

「グへへへ・・肉・・肉くれよ・・・」

ガロンは、異常を悟り、

「下がれ!!!!!　ロビーに出ろっ!!!!!」

その時、クォシカが壇上から滑る様に下に降りて、ラキームに向かう。

「う〝ぎゃあああああああああーーーーっ!!!!!!!!」

ラキームの絶叫が上がった。

さて、こうしてまた戦う局面を迎えた訳だが。　いきなり、強敵達

に囲まれたポリア達。　Kが居たさっきまでとは、形勢は違った。

ポリアと、イルガの二人で掛かる紅いスケルトンは、普通のスケルトンと一味違う。

「そらっ！！」

イルガが突いて、隙を作っても。　ポリアの斬り込みを開いた右手で受け止めたり。　逆に鋭く斬り返して、二人で防がないと。　シェラハが危ない。

一方、マルヴェリータがその実力発揮だ。

「想像の力は万理の力・・・我が魔力にて破壊のナイフとなれ」

杖を胸に念じれば。　頭上に現れる渦を巻いた乳白色の力。　マルヴェリータが杖を振るってゾンビに向ければ、渦から現れたナイフが無数にゾンビに襲い掛かった。　瞬時に、身体に十数のナイフを受けたゾンビの身体に巻き起こる衝撃の爆発。　ゾンビの弱点の黒い光を引き裂いて倒した。

一方。

ガロンは、化け物と化した元仲間に斬りかかり。

「ラキーム様を守れっ。　強い奴には束で掛かれっ！！」

兵士三人が、跳び掛かってきた紅いスケルトンに向かう中、ラキームは一目散にロビーへ走った。

「ラキームっ」

クォシカの姿をしたモンスターが、その太い蛇の胴体をうねらせて、ラキームの後を追った。　ロビーに向かうクォシカの蛇の胴体が、競りあがっている左右の壁を壊した。

「うわあーーーっ！！！」

ロビーに出たラキームは、歩いていたゾンビを見て。

「うぎゃあああああああっ！！！！！」

涙眼で大声を上げて、ロビーを走って横切り左の扉へと逃げる。

「待てラキームっ！！！」

ゾンビと跳ね飛ばし、クォシカの姿をしたモンスターは、ラキームを追う。

「な・なによアレっ？！！」

マルヴェリータが、四体のゾンビを倒し終えた時に、異形の姿をしたクォシカを見た。　ズルズルと出て、隣の部屋に入って行く蛇の胴体から尻尾は、優に七・八メートルは超えている。

だが、その姿を二階から見かけたシェラハは、ビックリして言葉を失った。

「う・・そ・・クォシカ・・」

それは、あまりにも変わり果てた親友の姿であった。

ポリアは、スケルトンと剣を交えていながら、それを見た。

「何でよっ、あんなにすんのよぉぉぉっ！！！　最悪じゃない！！」

「お嬢様っ、今はコヤツをっ！！」

二人は、唸って力んだ。

誰もが、包帯男を思った。

「着いたか・・・・」

その頃、Kは最上階に来ていた。　いきなり最後の階段は、真直ぐに伸び上がり、上がった先には、両開きの重々しい黒いドアが。

ドア前に立ち止まるKは、登って来た階段を見下して。

「そろそろ、下でもおっ始まってる頃か・・」

小声で呟く。　階段を走っている間、下に向かうモンスターの気配があった。　出遭ったものは全て倒したが。　残ったモンスターは、まだ多い。

（さて、さっさと片付けますか）

Kは、重々しい黒い扉を開いた。　開いた瞬間、黒い空気のような風がKの方に吹いて来る。

（お〜お〜、息巻いて怨念を妖気にして吐き出してらぁ〜。　ポリ

ア達を連れてこなくて正解～。　居たら、全員が気絶してら～な）

Kは平気そうだが、重々しい空気には瘴気が含まれる。　メンタルにダメージを与えるモンスターのオーラであった。

Kは、部屋の中に踏み込みながら。

「あら～ま～、随分とオンボロになったみたいで・・・部屋か？」

と、周りを見渡した。　広い広い一間。　正面の先に、窓らしき枠が見えている。　大きいバルコニーに出るような窓だ。

Kの右手奥に、禍々しい気配を発する何かが居る。

「おいおい、せっかく来たのに労いの挨拶もないのかい？」

すると。

「フフフ・・・口が達者なようだな。　良く来た。　我が下僕にされたいようだな・・・、ノコノコと遣って来よってからに」

Kは、部屋を見回しつつ、

「来なくたって、御宅を倒さないと出れないから一緒じゃないか？」

「フン、戯言を。　私を倒すだと？　この不死身に成った私を」

Kは、やっと声のする右を見た。　紅いチリチリとした炎のようなエネルギーが、奇妙な形に枠を作っている。　どうやら、椅子に座る人の形である。

「おいおい、魔域の結界陣はここじゃないのかよ。　参ったな～」

いきなり、Kの口調が伝法になる。

すると、いきなり正面の窓が全て開いた。　ボロボロの暗幕が、バタバタと外にはためいた。

「？」

あの、渦巻く不気味な紫色の空の鈍い光が入って来た。　Kは、視界が良くなったので再度見回した。　どうやら、謁見の間のようである。　長方形の間取り。　汚れて色の剥げが見られる蒼い壁は、昔から人気の高いマラカイトの壁細工だ。

「ほ～、向こうの壁にあるのは大昔の画家クックの作品かよ。　随分な格式だこと」

Kが見るのは左奥の絵。

その逆、右の奥には玉座が光を失いかけた金色で存在し。　長い総髪を後ろに流した初老の男が居た。　優雅に足を組み、礼服の貴族が好んだガウン風の服装に、フリルの襟・袖の白いブラウスがいかにも高貴な人物を生み出す。

「三百年・・・いや、もっと時間が経っているのに、良くその絵が解ったな。　どうやら、そこらのバカじゃ無いな」

Kは、話し掛けて来た男を気にしていないままに、部屋を見て。

「全く。　結界陣は無い、クォシカの遺体も無い・・・痛い時間のロスだぜ」

男は、自分を気にしていないKをギリリと睨んだ。　細長い瞳は、如何にも気性が激しそうで、面長の顔に蓄えられた髭は、豊かにして長い。　髪も髭も白くなっていて、生気が宿った色は無い。　Kから感じる気配は、武術の心得など無いものと思えたのか。　この人物は、無知なバカにからかわれているようである。

「貴様、私を無視してるのか。　それとも、恐れて見れまいか」

Kは部屋の出口、階段に身体を向けて。

「悪ぃ、先に結界陣を探させて貰うわ。　御宅と遊んでられない」

と、出て行こうとする。

「ふざけるなっ」

男が言うと、階段へ戻るドアが閉まった。

「あ～あ、面倒臭いなぁ。　時代錯誤のアデオロシュじいさんと遊ぶのかい？」

その素振り、完全にバカにしている。　男・・・いや、アデオロシュ十四世は、立ち上がった。

「貴様、私を愚弄してヌケヌケと帰れると思っているのかぁっ！」

Kも、アデオロシュを見た。

「愚弄？　当たり前の事を言ったまでだろう。　御宅の時代は、昔の貴族の存在の意味を失った時代だ。　なのに、何時までも階級格差制度が在り続ける訳が無い。　時代の流れを読めなかったのは、自分だろう？」

アデオロシュは、Kより頭一つ半以上も高い背丈の男だった。　ゆっくりとKに近づく。

「時代だと？　なんの才も持たぬ下賤な民が横行するのがかっ？！！」

「ああ。　貴族とは、神と悪魔の戦い、世界の危機に人の為に戦った人物の血筋。　しかし、今も昔も、そんな奴が何人いた？　私欲と権力をさも才能のように言う阿呆が。　クォシカの遺体を捜しに来たんだ。　ドア、開けてくれるか？」

Kは、閉まったドアを左親指で指した。

アデオロシュは、鼻で笑ってマントを翻す。

「フン。　あの美しい娘は、私の愛妾となっておるわ。　遺体も、御主の探す結界陣の元に安置してあるわえ。　人に殺されし哀れな娘は、憎しみの仲間に加わったわっ！！」

「殺された？　追っかけてきた冒険者にか？」

「そうよ。　如何わしい不埒者が、その後に私に逆らおうて死によった。　今では、忠実な下僕だがな」

Kは、疲れたように。

「おいおい、疲れるなぁ～。　ここから出て、下に行って探して・・・上に来てコイツを倒す？　何往復すんだよ」

アデオロシュは、ほざくKを見て。

「私を倒すだと？　お前のような手負いがかっ？　片腹痛いわっ！！！！　じっくりと痛ぶって殺してやろう」

Kは、呆れた口調で。

「俺、手負いじゃないよ。　な、結界陣って、何階だ？」

Kのふざけた口調に、遂にアデオロシュが怒りだした。

「おのれっ！！　捨て置けば無礼な口ばかりっ！！！！　死ねっ！！！」

自身の腰に有った美しい金細工の鞘にあるサーベルを、構えもしていないKに向かって一閃した。

「おっ、あぶね」

Kは、ちょっとギリギリでかわす。

アデオロシュは、Kの身のこなしに嘲笑う。

「ほう、運が良かったな。　それで何時まで持つか？　私を倒して、地下の結界陣に行けるのか？」

Kの包帯より覗ける眼が、ギリッと細まった。

「ありがたいね、教えてくれて」

と、腰から一番長い短剣を抜いた。

「むっ」

アデオロシュは、Kの身体から気配が消えたのを感じて驚いた。

「貴様っ、まさか・・態と」

Kは、アデオロシュの瞳を睨んで、口元で笑うと。

「一々本領を出すなんて、底が浅いんだよ」

と、瞬く間に斬りかかった。

「ふっ！　はっ」

Kの太刀筋は疾風のようで、アデオロシュは一気に防戦に。　守ったアデオロシュの剣をKは蹴り上げて、がら空きの胸に剣で斬り込んだ。

「ぬわっ！！」

アデオロシュは、後ろにドッと倒れこんだ。　完全に斬り裂かれた衣服と、胸部。　だが、傷口は黒々としていて、血も出ない。

Kは、窓と窓の間の壁の影にいて、黒くなるままに。

「三百年、こんな所で隠れて遊んでるから外が解らないんだよ。
何時までもアンタに、対処が出来ない奴ばかり来ると思ったらぁ～、
そら大間違いだぜ」

「おのれっ！！！」

アデオロシュは、フワリと身体が持ち上がり体勢を戻すと、Kに向
かって斬りかかった・・・。　その剣が、Kの喉元に届こうとした
一瞬だ。　Kの身体が、闇の中に解けて消えた。

「なにっ・・・」

アデオロシュは、空を斬って完全にKを見失ってしまった。　斬っ
た其処に、人は居ない・・・。

そして、アデオロシュの耳元で、

「冒険者、なめるなよ」

Kの声。　だが、明らかに先ほどまでのKの口調では無かった。
低く、心を斬り殺すかのような凄みがあった。

「・・・」

アデオロシュの声は、出なかった。

―ゴトリ・・・―

床に、アデオロシュの首が落ちた。　アデオロシュの背後には、Kが立っている。

「・・・」

黙ってKは、剣を仕舞った。　人を斬ったのに、血すら着いていないのだ。　そしてKは、アデオロシュの前に戻って、バルコニーの外を見ると。

「おいおい、芝居なんてするな。　アンタ、芸人じゃないだろう？」

すると・・・落ちたアデオロシュの首の瞳がギョロリと動いた。　彼の立ったままの身体、落ちた首が、解けるように赤々とした炎に変わっていく。　そして・・・消えた。

「フフフ・・・アハハハハハーーっ」

部屋中に、アデオロシュの声が響く。

「なんという剣の腕だ。　これは御見それしたな・・・。　では死んでくれ、恐ろしき剣士殿。　もう、剣などは利かん」

アデオロシュの身体が、また玉座に現れた。　今度は、燃え上がる炎に包まれて、腰から下は、ボンヤリして判らない。

Kは、アデオロシュを見た。

「やっと本領発揮かい？　死体を見せて隠れてるなんて、遣り方セコいぜ」

瞳すら、炎のように燃えるアデオロシュ。　おぞましきモンスターだ。

「喧しいわっ、これで終わりだっ！！！」

アデオロシュの口が、裂けて花瓶の入り口のように開いた。　その中は、あのゾンビのエネルギー源の暗黒の光が黒々と渦を巻いて蓄積されていた。　そこから・・・ヌウ～っと骸骨の姿をした黒ずくめの化け物が這い出てこようとする。

Kは、サッと腰にコートの下に左手を入れると、

「待ってた」

と、何かを投げた。

“ヒュッ”と音が空気を斬った。　Kが投げたのは、白いナイフである。　ナイフは、現れ出そうとしている化け物と一緒に、アデオロシュの口を貫いてその身体ごと後ろに引きずった。　そして、“ドス”と音を立てて、飛ばされたアデオロシュは後ろの壁に突き刺さった。

アデオロシュは、直ぐに壁から離れようとするも・・・。

「ンガ・・・ぬ・・ぬげん・・・」

アデオロシュは、壁より離れようとせども、ナイフが刺さって体が動かない。　そして、刺された骸骨の化け物は、刺された場所から異様な白い煙を上げ始め、のた打ち回るように狂いだした。

Kは、アデオロシュに一瞥すると、

「あばよ、昔のバカ殿。　こっちは忙しいんだ」

と、アデオロシュとは反対の絵の飾られた壁に向かう。

「う〝ががががああああ・・・」

急に、アデオロシュが苦しみ出した。　ナイフが、煌々と白い光を発し始めて。　口の中に渦巻く暗黒のエネルギーを吸収しだしたのだ。

「きぎざまあああああっ・・なああんんだっ！！！」

声が割れて、身の毛がよだつような耳障りな声。

アデオロシュに背を向けたKは。

「ソイツは、鎮魂の遺碑架（イヒカ）。　死んだ僧侶が、真摯に生涯を神に捧げつつ生きた時。　死の淵で神を見ると云う。　その安らぎの心が、時として肌身離さない遺品に神懸かる力を与える。　退魔の力を持ち、あらゆる亡霊や亡者を静めるんだ」

と、説明してから、振り向く。　其処には、全身から煙を上げて、炎が消えかかるアデオロシュの姿が在った。　身体中がブルブルと振るえ、苦しんでいた。

「もうじき、楽になる。　憎しみに残って、これ以上家名を辱めるな。　滅びる時は、人は自分から滅ぶさ・・・。　じゃ、な」

「お〝・・にょ・・・れ〝え・・・」

アデオロシュは、そう言った直後・・瞬間に全身が埃のように色褪せて、ナイフを残して床に崩れた。　ボロボロの服が、崩れた埃塗れになっていた・・・。

「やっと、消えた。　こっちか、魔法床陣は？」

Kは、部屋の奥で、円形のなにやら難しい文字のような物が画かれている床を見つける。　文字の部分が蒼・緑・赤・黄色と光っては消え光っては消えるのを見た。　これが、魔法床陣らしい。

「さて、もう一仕事だな」

乗って、やや中心のボコッと出ている丸い突起を踏むと・・・。
ス～っと下に降りていく。

さて、Kがアデオロシュを倒したのは、下で戦うポリア達に追い風を呼んでいた。

「あっ」

「まぁ」

マルヴェリータ、システィアナが、ゾンビをほぼ全て倒した時。
自身の身体に感じる重々しい気配が軽くなっていくのを感じていたのである。

「ポリアっ、Kが上の主を倒したわっ！！」

マルヴェリータは、腕の服の裾が切られて、白い肌が露わになり。
すこし、引っかき傷があった。　顔にも、疲労が見えていて、息が荒い。

「解ったわ！！」

まだ、イルガと紅いスケルトンを中心に、ロビーにてスケルトンやゾンビも相手にしていたポリアだ。

イルガは、渾身の突きで、紅いスケルトンが飛ばされたのを見た。
今まで、受け止められていたのに。

「お嬢様っ、どうやら主が倒されてモンスターが弱まりましたぞっ！！」

顔や、腕や、太股に掠り傷のポリアは、少し荒い息ながら、

「イルガ、一気にいくわよっ！！」

「はっ」

ポリアは、踊りかかって剣を振れば、防げないスケルトンがまた飛ばされて、階段にぶつかった。

（手応えあるっ）

マルヴェリータ・システィアナの後ろで、大階段の裏に隠れていたシェラハは、必死でクォシカを探していた。

「聞こえたかっ、主が死んだぞっ！！」

ガロンも、レヴナントにされた元仲間のギーシンと一進一退の攻防を強いられ、兵士三人は紅いスケルトンに防戦一方であり。　兵士の一人は、足を引きずっていた。

逃げようにも、もう逃げる暇が無かったのだが。

「このっ」

ガロンの一撃が、ギーシンの顔を斬った。

「あ〝〜？　おかおがさけたぁ〜」

耳の後ろまで斬り込まれたので、顔の上唇から上が、後頭部に向かって後ろにもげ返っても良さそうなくらいに斬られているのに、ギーシンはガロンに襲い掛かる。　顔が、口より上が異常に揺さぶれる。

（チっ、やはり魔法じゃないと倒せぬか）

魔法の遣えるマルヴェリータやシスティアナに任せたいが、近いロビーの出入り口はクォシカの姿をしたモンスターが壊して塞がっている。　ガロン一人なら逃げてもいいが、今逃げ出したら、この兵士達は殺される。　一人だけで生き残れば、それなりに説明しないと町史アクレイには言い訳が立てない。

（冒険者と同じでは、中々いかぬわ）

ガロンは言葉成らずも唸る。

しかも、ガロンはラキームを探せずにいた。　ラキームの姿が・・・・
ポリア達にも見えてはいなかった・・・。

8、全ては、光に帰る

8、全ては、光に帰る

（ややややややばばばばばいいいいいぃ！！！！！！！！！）

死に物狂いで慌てるラキームは、三階に居た。

あのロビーを横切って入った部屋を、クォシカに追われてボロボロの木や鉄屑の何かを蹴っ飛ばし、暗い中で二階への階段を見つけた。

後ろより、木屑や鉄くずを勢い凄まじく飛ばす音が迫る。

二階に上がったラキーム。　ポリア達の居た書庫に逃げ込んで、崩れた本の残骸を乗り越えてロビーを見下ろせる内廊下に出た。　下では、マルヴェリータが、大階段ではポリアとイルガが戦っている。

それを避けるように廊下を半周してガロン達が戦う観客席二階に出て、右往左往して走り回るうちに、三階の階段を発見して逃げ込んだ。

そして、今。　倒れ掛かった棚の下に入って息を殺して隠れるのだ。

真っ暗な中、此処は部屋であり。　ボロボロの木の塵が床一面に散らかっている。

ラキームの脳裏に、戦う気は無い。　ガロンも誰もどうでもいい、自分が助かればいいのでしかない。　クォシカの変わり果てた姿、無数のゾンビ、骸骨・・・怖くて怖くて、ラキームはズボンを濡ら

していた。

―ズル・・ズル・・ズルズル・・・ズルズルズル・・・―

遠くでクォシカの蛇の胴体が、床を這う音がする。

（あわあわあわわわわわわわわわ・・きききたたたたたたた）

怯えるラキームの耳に、クォシカの声がする。

「ラキーム・・・ラキーム・・・私の男・・・私の全て・・・ラキーム・・・何所っっっっ?!!!!!!」

（あわわわわわわああわわわわ）

ラキームは、こっそりと大きな棚なので、木枠の中の引き出しに隠れた。

すると・・・“バキ・・バキバキバキっ!!”、と木の折れる音がしたり、壁に叩きつけられる棚の壊れる音が鳴り響く。　まだ音は、ずっと離れた場所だ。

「何所っ?!　何所に居るのラキームっ!!!」

クォシカの声が響いた。　ラキームは、こんなに叫ぶクォシカを見た事が無い。　脳裏では、別人じゃないかとすら思った。

だが、壊れる棚の音は、どんどんと近づいてくる。　震えるラキームの潜む棚まで、あと少しの距離に来ていた。

（死にたくないっ、死にたくないいいっ！！！、死にたくないいいいいっっっ！！！！！！）

思う中で、ラキームの居た棚が持ち上がった。

（あああああっ）

身体の存在感覚が浮くことで無くなり、思い切り飛ばされた。

“グワッシャーーーーーン！！！”

凄い音を立てて、

「うわあああああっ！！！」

ラキームは壁に叩きつけられた。　ズルリと、逆さで壁伝えに床に落ちる。

「んっ？！！　ラキームっ、其処にいるのねっ」

「あわわあわわわわあわわ・・・」

ラキームは、情けない声を出して這い、立ち上がって足を縺れながらも光の方へ。　行って見れば、ロビーを見下ろせる円形の内廊下に出た。

「たったたたすけてくれ～っ！！」

埃だらけの顔も、哀れな姿。　そして、クォシカが木の破片を蹴散

らかして、

「待てっ、ラキームっ！！」

この時、一階ではまだKがアデオロシュを倒す前で、下ではポリア達が死にもの狂いの攻防で三階に居るラキームに気付く訳がなかった。

ラキームは、直ぐ近くの部屋に逃げ込んで、崩れた棚の上を越えて奥の暗い廊下に抜け、逃げ回る。

クォシカも、その後を追うが、何分に身体の蛇の胴体が太く、散乱したゴミなどを蹴散らす分に遅れてしまう。

ラキームは、その間に四階へに走り。　また、近くの部屋に逃げ込んだ。

この時だ。　クォシカは自分の身体に漲るラキームへの憎悪がやや薄れ、眩暈を覚えてハッとした。　身体から、力が抜ける感じを覚える。　追うのを止めて、上を見た。

「アデオロシュ様が・・・死んだ？　そんな馬鹿な・・・」

ラキームも、ポリア達が活気付いて、

“Kが主を倒した”

の声に。

「倒した？　ホントかっ？！！　かっ帰れるのかっ？！！」

と、下に降りる道を探し始めた。

ラキームの声に反応したクォシカは、四階に向かう階段に入った。
クォシカの蛇の胴体が細まって、クォシカの胸部と同じ太さになっていた。　長さも、一メートル以上は、縮んだ。

逃げるラキームは、四階でクォシカに追い回されていながら、まだ下に向かう途中のスケルトンに出会ってはまた逃げ回り。　かくれんぼ、追いかけっこをしている中で、スケルトンの隙を見つけて・・・。

「おわおあわあああ・・・」

と、情けない叫びを上げながら、廊下の手摺り前に来ていたスケルトンを突き落とす。

“カシャーーーン!!!”

いきなり、シェラハの横にスケルトンが降ってきたものだから、

「きゃーーーーっ!!!!」

シェラハは驚いて大階段の裏からロビーに現れた。

ポリアとイルガは、紅いスケルトンを三階の踊り場で追い詰め。
マルヴェリータとシスティアナは、ガロンの声に反応して、クォシカの崩した壁の瓦礫を魔法で取り払った為に、レヴナントのギーシンをロビーに出してしまった。

「コイツを浄化しろっ！！」

ギーシンと戦うガロンに、マルヴェリータが加勢し。　システィアナは、大怪我をした兵士の傷の治療をする為に、ガロンの落としたライトスタッフを手に、舞踏場に入って魔法を唱えていたから、シェラハの声は、驚きだった。

「シェラハっ、外へっ！！」

マルヴェリータは、魔法の集中時に襲ったアクシュデントに、気を逸らせて言った。　だから、魔力の制御が利かずに、

「衝撃の剣よっ、我が敵を打ち破れっ！！」

強引に魔法を・・・。　マルヴェリータの頭上に、マルヴェリータよりも大きい乳白色の半透明な剣が現れた。　マルヴェリータが、魔法を支え切れずに直ぐギーシンに杖を向け、魔法の剣を飛ばす。　疾風の勢いで宙を走る剣は、レヴナントを横から突き刺してふっ飛ばし、左側の部屋に壁を壊してレヴナントを部屋の中に。

ガロンが、崩れた壁が落ちきったときに近づこうとすると、“シュバーーン！！！”と、空気を振動させるほどの衝撃音が響く。

「おおっ」

驚くガロンに、

「は・・早く・・シェラハを・・・」

と、力の抜けて跪くマルヴェリータ。

だが、ガロンは見上げる上の四階から、

「ガローーーーンっ！！！！　ここだっ！！！　助けてくれっ！！！！」

と、ラキームの声。

息荒いマルヴェリータを、ガロンは見ずに。

「モンスターの討伐と、あの娘の護衛はお前達の仕事だ。　私は、ラキーム様を守らねば成らぬ」

と、冷徹な言葉を残す。

「くっ」

マルヴェリータは、朦朧とした眼差しで、大階段に向かうガロンを睨んだ。

シェラハは、スケルトンから逃げようとしたものの。　目の前をマルヴェリータの魔法を受けたレヴナントが飛んでいったのに驚いて、腰が抜けてしまった。

「あ・あああああ」

シェラハの後ろでは、“カシャ・カシャン”と音を立て、スケルトンが起き上がる。

「シェ・・シェラハっ・・に・逃げて・・・」

絞るような声で言うマルヴェリータに、シェラハはスケルトンから逃げるようにマルヴェリータに這って寄る。

「マ・・マルヴェリータさ・ささん・・」

ポリアは、紅いスケルトンの腕をヘシ折った所で、

「マルタっ!!!　二人で離れてっ!!!」

イルガが、紅いスケルトンの肋骨に槍を突き込んで動きを止めた。
刹那、走って来たガロンが、スケルトンの頭蓋骨を剣で切断した。

「ふん、半人前が」

ガロンは、そう言って四階の踊り場に走って行く。　ラキームも、内廊下をガロンに向かって走った。　クォシカが、その時初めて内廊下に出て、シェラハの存在を知る。

（あれは・・・シェラハっ?!）

一方、ポリアがロビーに走り降り。　ガロンから眼を離したイルガが走ろうとしていた。

そして、ロビーでは、スケルトンが階段影より飛び出して、シェラハとマルヴェリータに向かって歩き始めていた。

マルヴェリータは、自分に来たシェラハを逃がそうと。

「そ・・外に・・出な・さい・・」

と、押し退けようとするが、力が入らない。

しかもシェラハは、マルヴェリータを庇うように、

「ダメっ、犠牲は誰もいらないわっ」

と、マルヴェリータを立たせようと・・・。

しかし、この時に、舞踏場の兵士達が堪え切れなくなり。　紅いスケルトンと共にロビーに飛び出してきた。　紅いスケルトンに斬り込まれ、兵士二人は大階段のまん前まで後退する。　其処には、丁度降りて来たポリアの前だ。

「チョットっ！！！！」

進行を阻害され、ポリアは全身で怒ったが。

「ウルサイっ！！」

兵士達は、紅いスケルトンをポリアに預けるように、ガロンとラキームの声がする方に二人走る。

「え　ぇ？！！」

ポリアは、いきなり紅いスケルトンが自分を向いたので、マルヴェリータとシェラハに向かえない。

「どいてっ！！！！」

と、斬りかかる時、落ちてきたスケルトンが剣を構えてシェラハに斬りかかろうと。

「シェラハっ！！！！」

渾身の力で叫んだマルヴェリータを、シェラハが庇ってスケルトンの前に立ちはだかった。

ガロンですら、見ていて“斬られる”と思った時である。

いきなりスケルトンの後ろに、クォシカが四階より蛇の尻尾を手摺りに絡ませながら降りて来たのであった。“ドスン”と云う音に、スケルトンが後ろを向いた瞬間。クォシカの両手のツメが剣のように１０本伸びていて、凄まじい速さで振るった。

「あ〝っ！」

「なぬっ？」

剣を交えたポリア、見下ろしていたガロンが声を上げた。スケルトンが、ツメに掬われて二階の廊下へと飛ばされたではないか。

シェラハは、クォシカと眼が合った。

「クォシカ・・・た・助けて・・・くれたの？」

クォシカの顔は、苦痛に歪んだ顔ながら。

「シェラハ・・・どうして此処に？」

泣きそうなシェラハは、クォシカに寄って。

「どうしてって・・・貴女を迎えに・・迎えに決まってるじゃない・・。　こ・こんな姿なんて・・・どうして、どうしてなんにも悪くない貴女がっ?!!!」

「シェラハ、私は・・、二ヶ月前にラキームの差し向けた人たちに捕まりそうになったの。　でも、なんとか必死に此処まで・・・。　でも、私は死んだ・・・。　そして、此処の主であるアデオロシュと云う人にモンスターにされたわ」

「ひ・・酷い・・」

シェラハの瞳から涙が落ちる。　クォシカの身の上を想像しただけで、涙が止まらない。

クォシカは、四階のラキームとガロンを見た。

「ラキームっ、ガロンっ・・・貴方達の差し向けた人達は、私を捕らえて辱めようとしたわっ!!!!　おまけに、私を遠くの国に売り飛ばす気だった・・・。　激しく抵抗した私を、リーダーの男が殴りつけて、私は・・・胸に木の尖った先が刺さって死んだ。　全て、貴方達の所為っ」

やはり、事態はKの想像通りであった。

「何よコレ・・・最低じゃないよぉぉぉーーーーっ!!!!!」

紅いスケルトンを斬り飛ばしたポリアが、絶叫を上げてギリッと二人を見上げた。

ラキームは、ガロンの横でオロオロして、パニックのままに奇声を上げた。

「う・うるさいうるさいうるさいっ！！！！　俺は、クォシカを捕らえて来いと言ったんだっ！！　そうだ、そそそそ・・そいつ等が勝手な事したのが悪いんだっ！！！！　俺の責任じゃ無いっ！！」

ラキームの言動は、何所までも自分本位だった。　流石のポリアも、モンスターと一緒に斬り捨ててやりたくなった。

ガロンは、頷いて。

「哀れだが、運命だ。　世の中、死ぬ奴など腐るほどおる。　諦めて貰おうか」

イルガも、紅いスケルトンを槍と戟の間にて押し込みつつ。

「なんという事だ・・・それでも御主、主君を持つ役人かぁっっ！！！　恥を知れい！！」

汗と疲労の滲むイルガだが、あまりの汚らしさに怒りが湧き上がり、いつもにない大声を上げる。

クォシカは、ズルリ、ズルリと大階段に寄って。

「ラキーム、ガロン。　貴方達のお陰で、私は呪いを掛けられて、もう人に戻れない・・・。　それ以上に、アデオロシュを倒されたら、貴方達だけを呪う呪いが野蛮化して、人の全てを憎んで人としての思いも・・・思い出も無くすわ・・・だからっ！！！！」

と、階段をポリアの脇を通って上りだし。

「死になさいっ！！！！　私と一緒に死になさいっ！！！！」

シェラハは、その声にクォシカの慟哭を聞いた。

「こんな・・・こんな事って・・・」

マルヴェリータは、もう立てないながらにガロンとラキームを見て。

「二人して、クォシカに殺されればいいんだわ・・」

と、悲しい声を吐いた。

其処へ、システィアナがフラフラになって来た。　兵士の傷が予想以上に深かったのだ。　全力で魔法を遣ったのだろう。　唇が血色を失っていた。

「さいて～です～。　泣きたいですぅ・・・ケイさん～何所ですかぁ～」

「シ・・システィ・・」

マルヴェリータの横に来たシスティアナは、クォシカを見て。

「“復讐の女蛇（ラミア・リベラルド）”のノロイですぅ・・・呪術の下法で・・されたらもう元に戻せません」

「ホント・・なの？」

「はいぃ。　死んでも浄化されません・・永劫に呪いが魂をくるしめますぅぅ・・・・」

システィアナは、その悲しさを知る余りに涙で床に・・・。

マルヴェリータは、ガロンとラキームを見て。

「男なんて・・・男なんて最低よおおおっ・・・」

マルヴェリータの出ない低い声、自分の悔しさに連動してか、憎しみが篭っていた・・。

ポリアの眼にも、クォシカに対する同情が沸いて涙が溢れた。

ガロンと二人の兵士が、クォシカを迎え撃つ。

「死んでっ！！！！　ラキームぅ！！！」

「させるかぁっ！！！」

ガロンが、左のツメを防いで。　右のツメは兵士二人掛りである。

ポリアは、怒りに気炎を発し。　見事、紅いスケルトンの頭蓋骨を斬り砕く。

「お見事っ！！」

イルガが、荒ぶる声で言う。

二人は、仲間の元に行った。

「マルタ、大丈夫？」

ポリアの見るマルヴェリータは、疲労がピークになって身体が言う事を利かない様だ。

「だ・だいじょう・・ぶよ」

マルヴェリータの見るポリアも、大粒の汗を落として肩で息をしている。　顔や衣服の腕、太股には細かい掠り傷や切り傷が・・。

「お嬢様、如何いたしますか？」

「イルガ、みんなを守って。　私、ケイを探して来る」

「はぁ？　ケイを？」

ポリアは、真剣な眼差しで。

「ケイなら・・彼ならクォシカを助けられるかも・・・私達じゃ、クォシカを救えない」

システィアナも、涙ながらに。

「そ～ですぅ。　ケイさんなら～なにかしってるかもです～」

その時。　マルヴェリータは息荒く、ポリアに。

「お・・男に出来るの？　あ・・あん・・あんな目にしか、女を出

来ない男たちに・・・」

「マルタ・・・」

だが、シェラハは、ポリアに訴えた。

「とにかく、探してくださいっ。　クォシカを・・・このままじゃ救えない・・」

苦しい思いながらにポリアは、頷いた。

だが・・・。

「ギャーーーっ!!!」

大階段から、クォシカの滾るような声が上がって、ポリア達が見た時。

「あ〝っ!!」

クォシカの身体が、大階段から転落して転がっていた。　階段に激しく身体を打ち付けて、ロビーまで落ちてくる。

「クォシカっ!!!」

シェラハがビックリして寄ろうとする。

しかし、クォシカは蛇の胴体で身体を持ち上げつつ尻尾をその間振り回し、シェラハを寄せ付けずに低い声で・・・。

「こっ、来ないで・・・」

「クォシカだってっ・・」

「来ないでっ！！　・・・もう、記憶が・・・消えそうなの・・・」

クォシカは、二段目の踊り場まで降りてきていたガロンを睨みつつ。

「わた・・し、しぇらは・・・ころし・・たくない・・・」

クォシカの声が、奇妙にブレた。　クォシカの綺麗な声では無い、不気味な声である。

ガロンは、何が起ったか解った。

「フン。　主が死んで制御する者を失った訳か。　望み通り殺してやる」

と、斬りかかる。

ラキームの居る所で、兵士一人が守り。　もう一人の兵士は、床に崩れている。　クォシカの尻尾の体当たりを喰らって立てないのだ。

クォシカの左手のツメが四本折られており、胴体にはガロンの斬った傷から青緑の血が流れていた。

「そらっ！　はぁっ！！」

ガロンは、流石に腕が立つ。　クォシカの攻撃を避けては、胴体を

更に斬り払う。　また血のような体液が飛び散り、クォシカが苦しそうに顔を歪める。

「やめてっ！！　もうやめてっ！！！」

シェラハが泣き叫ぶ中で、ガロンはクォシカの尻尾を斬り。　痛みによろけて伸び上がったクォシカに走り寄り、彼女の胸部から下一メートルを残したところを掬い斜めに斬り上げた。

「ウギャアアアアーーーーっ！！！！！」

クォシカの斬り離れた身体が、ポリアの横に落ちて転がった。　離れた蛇の下の胴体と、尻尾がガロンの周りでバタバタと動き暴れて血を撒き散している。

その時だ、四階よりラキームが。

「ガロン、クォシカを殺せっ！！　化け物に用は無いわっ！！　この先邪魔だ」

ガロンが、口元にニヤリと下衆な笑いを作り。

「心得ております」

と、クォシカを見た眼に、残虐な光が宿った。

クォシカは、苦しみに染まる顔で息を荒げて、人の姿のか細い腕で立ち上がろうと・・。

ポリアは、もう我慢の限界で、ガロンに斬り掛かろうと剣を握り締

めた。

ガロンも、その殺気にポリアを睨んだ。

イルガも、ポリアに合わせるつもりで槍を握り絞めた。

その・・・全ての緊張がロビーに張り詰めた時・・・・。

「ふぅ～、間に合ったか？」

クォシカ以外、みんなの聞き覚えの在る声だった。

全員が、湖前の玄関口の左から出てきた包帯男を見た。

「ケイっ！！！！！！！」

ポリア、イルガ、マルヴェリータの声が、重なった。

ロビーに現れたKは、その腕にクォシカの亡骸を抱いていた。　素朴な桃色のワンピースの服は、埃と汚れで黒ずんでいる。　だが、顔を見る限りは腐敗も見れず。　まるで、気絶しているような感じである。

Kは、玄関前の脇にクォシカの遺体を置いて。

「いや～、魔方陣にモンスター住まわせやがって、面倒ばっかりだったぜ」

ガロンの眼が、立ち上がれないクォシカに向いた時。

「もういい、オッサン余計な事するな」

と、Kの声が走って来た。

（ハッ！！！！！！！）

ガロンは、言い知れぬ殺気にKを見直した。　今の言葉に、魂をギュっと掴まれた想いが恐怖となり、身体を痺れのような衝撃が走る。

「・・・」

Kは、クォシカの遺体を寝かせ終わった所であった。

「ガロンっ！！！　何をしているっ。　早く、早く殺さぬかっ！！！！」

ラキームが叫ぶ。

だが、ガロンは・・・。

（き・・・斬れぬ・・・俺の身体が・・・奴を怖がっているのか・・・・）

今さっきの一言を受けて、ガロンの心に恐怖が居座った。　完全に、クォシカに向けた気力が削ぎ落とされたのだ。

Kは、歩き出しながらラキームを見て。　床に手を付いたモンスターのクォシカに向かって歩きながら。

「お前、ウルサイよ」

と、指を指すような動きを。

ラキームは、一人怒り。

「ぬわ・・うぎゃっ！！！！！！！！！！！！！」

怒声を吐こうとした時、Kが投げた壁の破片が肩に当たって激痛が走ったのだ。　その場にうずくまり、痛みに悶えだす。

遣って来たKは、ガロンの肩にポンと手を乗せて。

「どけ、死にたいか？」

と、小声で・・・。

「わ・・解った・・・」

頷くガロン。

ポリアは、理解がいかなかった。　ガロンは、Kが現れるまで余裕さえあって、残虐味の宿る顔をした時、顔が黒ずんで怖いくらいだった・・。　なのに今は、顔中に冷汗を掻き始め、震えているのではないかと思える。

Kは、ラキームの元に戻るガロンを見てから、クォシカの前に近寄った。

「助けに来るのが遅くなった。　随分と斬られたな、大丈夫かい？」

と、彼女の目の前に屈む。

白い、蝋のようなクォシカの肌が、心なしか肌色に変わってきた。
クォシカは、怯えるというより、恥ずかしいような素振りで横を向き。

「来ないで・・・」

透かさずKは、スッと手を動かした。

「あ」

ポリア、マルヴェリータ、そして・・・クォシカの声が重なった。
クォシカの頬に、Kの左手が添えられて、自分に向かせたのである。

「恥じる必要は無い。　キミは、何も悪い事はしてないさ。　さ、両親の所に帰ろうか」

Kの声、ポリア達にも響く優しい声だった・・・。

「出来ない・・・出来ないわ・・・」

クォシカの瞳が、潤みだした。

「大丈夫さ、もう大丈夫。　遺体も持ってきたし。　後は、キミが天に召されないと」

Kの声に、クォシカは声を震わせて。

「無理・・・無理よ・・・呪いが・・この蛇の呪いがっ・・」

すると・・・Kは、両手でクォシカの頬を触れて、顔を近づけた。
Kの優しい瞳と、クォシカの悲しみの瞳が逢う。

「クォシカ、キミは呪われちゃいない。　だから、大丈夫。　心の中のアデオロシュの言葉を消してごらん。　さ、どうだい？」

Kの言う事が、クォシカにはおろか、ポリア達ですら理解がいかない。

「ど・どうゆう・・こと？」

「“復讐の女蛇（ラミア・リベラルド）”ってのは、本来は死んだ時に誰かを憎み怨んだ魂にしか利かないんだ。　アデオロシュは、キミに中途半端な呪いを掛けた」

クォシカは、震えて小さく顔を左右に・・。

「で・・でもっ・・私・・・ラキームやガロンが・・」

Kは、クォシカを見て頷き。

「そう、アデオロシュは、キミに呪われた身体を与えて、見せて。“憎しむしかない”と言った・・・違うかい？」

「う・・うん・・」

「でも、今は？　どうだい、憎いかい？」

クォシカは、ガロンに斬られるまで憎かったのだから・・・と思うが・・・。

「え？　・・ど・どうして？　・・にくく・・ない？」

クォシカの心に広がっていた、怒りや憎しみの心。　今の今まで、狂うぐらいだった怒りが、スゥ～っと消えていた。

「だろう？　アデオロシュは、キミに憎いと思わせて、呪いを成立させたんだ。　キミが、一瞬でも憎しみを忘れた時、呪いは呪いで無くなる。　さ、立とう」

Kは、クォシカの両腕を抱えた。

「たっ・立てないわっ」

クォシカは慌てた。　蛇の胴体は、ガロンに斬られた。　斬られて残る胴体は立てる長さが無い。

だが、Kは、気にもしていない。

「もう、蛇の身体は要らないさ。　キミの魂は開放されてる。　さ、ゆっくり、行くよ？」

優しい、ゆっくりとしたKの声に、クォシカは頷きながらも不安げな顔で頷く。

すると・・・。

「あ・・え？　うそ・・・」

ポリアの見ている中、クォシカの身体が、蛇の胴体から抜け出た。
一糸纏わぬ産まれたままの姿のクォシカが、Kに支えられて立ち上がった。

「ほ・・ホント・・に・・」

自分の身体を見るクォシカは、美しく、キラキラと輝きだす。

「な、もう大丈夫さ」

クォシカは、Kを見て。　取り戻した宝石の様な優しい笑顔で、微笑む。

「ありがとう・・私・・私、憎くない・・誰も憎くないわっ」

Kは、頷く。

「ああ。　キミは、死ぬ時ですら、誰も呪わなかった。　だから、開放されてる。　遺体見た瞬間に、大丈夫と思った」

「え？　どうして？」

Kは、クォシカの遺体を指指して。

「呪いの掛かった者は、呪いに応じた姿で遺体の顔が変わってしまう。　でも、キミの姿はそのまんまさ。　心が、呪いに掛かってなかった証さ」

クォシカは、自分の遺体を見てから、再びKを見て。

「ありがとう・・・ありがとう・・・」

その瞳から、涙が溢れる。

「さ、光に任せて、穏やかに」

と、Kが言うと。　クォシカは、Kに近寄る。

「貴方は?、お名前を教えてください・・」

「ケイ、つまらん冒険者さ」

クォシカは、Kの顔に両手を伸ばす。

「ケイさん、私の恩人ね・・・」

と、包帯の頬を摩る。　その手つきは、まるで愛おしい人を感じるようなものだ。

「醜い顔の恩人だな」

と、Kが口元を笑わせると。

「キレイ。　ケイさん瞳・・・凄く綺麗よ。　あぁ・・・生きて・・・生きて逢いたかった・・」

クォシカが、Kに抱きついた。

Kは、静かに。

「ちょっと、遅かったな・・・。　済まない、生きて助けれずに」

クォシカを抱きしめてやる。

その姿、ポリアやマルヴェリータには、恋人のように見えた。　まるで、理想の・・・。

クォシカは、頷いてKの顔に顔を向ける。

「貴方・・・大切な人を・・・失ったのね・・・」

この言葉、ポリア達には聞き取れないくらいの小さな声。

Kの頷いた仕草は、ほのかに淋しいモノだった。

「可哀想に・・・」

Kの頬を撫でるクォシカ。

「ありがとう」

Kに、クォシカは笑いかけると。

「私が消えるまで・・・抱いていてくれますか？」

「あぁ、構わないよ・・・」

クォシカは、Kに軽くキスを・・・。

「ありがとう・・・・最後は・・・せめて、女として死にたかった・・・・」

クォシカは、Kに強く抱きつく。

「優しい・・・温かい・・・・」

呟くクォシカの身体が更に強く光る。　そして、ポツリ・・ポツリ・・と、身体から光の粒が浮いては・・上に上って消えていく。

（悲しまないで、貴方はきっと大丈夫・・・貴方に幸せは訪れる。
でも私の・・世界で一番の王子様だから忘れないで・・・私の事・・・）

クォシカの声が、Kの心に響いてKは、笑った。

その瞬間。

「あっ！！」

ポリアの声。　クォシカの全身が光の粒になって、Kを包むように。
そして、天に向かって上がっては・・消えて行った・・・。

最後の光の粒が、Kの頭上で消えた時。　Kは、ゆっくりと瞳を開いた。

「キレイだった・・・」

と、言うと。　ポリアを見て、悪戯っ子のように口元を笑わせて。

「チェっ惜しかったな～。　生きてりゃ結婚だぜ？　あの美人とさぁ～」

ポリアは、Kが凄く不思議な男に見えた。　呆れ笑いの顔で、

「バカ、一緒に行っちゃえば？　あの世」

言ったポリアは、少しクォシカに嫉妬していたのかもしれない。

Kは、ガロンに。

「おい、終わったぜ。　テメエの仲間は自分で持って行けよ」

クォシカの遺体に向かうK。

立ち上がったマルヴェリータは、シェラハとポリアに支えられて。

「見せ付けててくれるわね、　美女四人も居る前で・・」

と、みんなを見る。　顔は、微笑みが浮んでいた。

「ですぅぅっ。　やぁ～っぱりケイさんすご～いですぅ」

システィアナは、嬉しそうに笑っていた。

ガロンは、ラキームが泣いて肩を摩っているのも無視して。

「ありゃ・・ホンモノだ・・・・やり合わなくて正解だ」

と。　こんな事態を解決してしまう冒険者など、そうそう居る者で

は無い。

全員で出た外は、夕方の晴れ空だ。　暗雲も晴れ、不気味だった紫の光が綺麗な茜空である。

「二ヶ月前に死んだのに・・キレイね」

ポリアが、Kの腕の中のクォシカを見る。

「呪いで、全ての時間が止まってたのさ。　だが、今日中に埋葬してやらないとな」

シェラハは、強く頷いて。

「任せて下さい。　全て、私が町に帰って手配します」

帰る景色は、来た時とは違っていた。　呪われた森も無く。　腐った湖も嘘のように綺麗で、結界が消えた所為か、公孫樹の新緑が夕日に照らされて、紅葉したように黄色く見えた。

クォシカが愛した、公孫樹の森の本来の姿だった。

9、Kの本音と、全ての終焉。　そして、伝説は続く

9、Kの本音と、全ての終焉。　そして、伝説は続く

町に帰った私達は、Kとシェラハに全てを任せて宿に戻った。　マルタも、システィも、休ませないといけなかった。

宿の入り口からロビーへ、みんなで行った時・・・心配していてくれた女将さんが嬉しそうに迎えてくれた。

「おやっ、戻って来たんだねっ?!」

「ただいま、女将さん」

私、女将さんの顔にホントにホッとした。

ぐったりしたマルヴェリータは、今はポリアに支えられている。
シェラハの家に行くのは、K一人である。

女将は、Kが居ないのを気付いて。

「包帯男はどうしたの?　まさか・・・」

と、女将が言葉を詰まらせるも。

「大丈夫じゃ、クォシカの遺体を、シェラハさんの家に持って行く

と」

システィアナを背負うイルガが説明すると。

「え〝っ・・・ク・・・クォシカだってぇっ?!!!」

失踪・・それは、願いでも有ったのだ。　多分、町の人の・・・。

クォシカの自由を信じての。

ポリアは、先ずマルヴェリータとシスティアナを休ませる為に宿の中に。　二人を寝かせてから、女将の元に行こうと部屋を出る時だ。

マルヴェリータは、短く。

「ポ・リア・・」

「ん?　マルタ、どうしたの?」

マルヴェリータは、潰れそうな眼で。

「夜・・声を掛けて・・クォ・シカの葬儀・・・出る」

ポリアは、自分でも気を抜いたら倒れそうな疲労なのに。　マルヴェリータが立てる訳が無いと解ってた。

「マルタ、無理しちゃダメよ。　明日、町を出る前にお花をあげていこう。　葬儀には、Kが居れば大丈夫。　クォシカを助けた彼が居れば十分よ」

マルヴェリータは、静かに瞳を瞑って頷いて。

「そうね・・・ホント・・変わった男・・・・・・・・・」

寝息に変わっていた。

ポリアは、下に降りた。　ポリアが女将にあらまし説明をするが、Kに言われた通り。　ラキームの悪行には触れなかった。　Kが、硬く言うなと口止めをしたのである。

一方、暮れなずむ町の中心の噴水広場でも。　クォシカの亡骸を抱えたKとシェラハが通った事で、野菜の取引どころでは無くなった。　葬儀の準備を急ぎだす人、棺桶を作ろうと言う人々。　クォシカの死を悼むあまりに泣いている人・・・クォシカが町の人の心にいかに残っていたか。　良く解る。

さて。　Kとシェラハは、役人の詰め所にて。　警備隊長から馬車を借り受けて、シェラハの家に行った。

シェラハの家の前に馬車を止めた隊長の元に、屋敷から飛び出して来たコルテウ氏が駆け寄る。　荷台から降りたシェラハを見たコルテウ氏は走り寄り。

「シェラハっ！　無事だったかっ！！」

「お父様っ！！」

抱き合った二人。　シェラハは、父にクォシカの亡骸の事を告げる。

「おお・・・なんと・・なんということか・・・」

コルテウ氏のクォシカの遺体を見ての涙は、クォシカを見守ってき

た父性の情が溢れていたもので。　Kは、クォシカの遺体を託し。

「葬儀の時は呼んでくれ。　出席する」

「解った。　私と娘が取り仕切る。　是非、出席して下さい」

頷いたKは、シェラハを見る。

「シェラハ、コルテウ氏に全てを語ってやってくれ。　ただ、外には口外してはいけないよ。　ラキームの事は、いずれに裁きが下る」

「解りました」

Kは、馬車の御者をしている警備隊長の横に座った。

馬車が、町の中心に戻って行く。　シェラハは、それを消えるまで見送っていた。

（一体、ラキームの事・・・どうするのかしら・・・）

不安という訳ではないが、先が見えなくて心がおぼつかなかった・・・。

Kが宿に戻った時、もう夜になったばかりだ。　老いた女将の泣き顔を見たKは。

「うわ〜、皺が歪んでゾンビみたいだ」

と言って、女将に怒られた。

もう、ポリアもイルガも待てずに寝てしまったとか。　食堂の椅子に座ったKは、運ばれたポテトのスライス揚げを齧りつつ。

「だろうなぁ。　明日まではまぁ～ず動けないよ。　全員、お疲れだった」

女将の見るKは、大して疲れてもいない様子。　しかし、ポリアは女将に。

「ケイが、モンスターの主を倒したのよ。　そうじゃなかったら、私達がゾンビに成る所だったわ」

と、言っていた。

（こんな包帯男がねぇ・・・見かけに由らないものだねぇ～）

と、ご飯の用意を。

Kは、食事後に果物のジュースで、シェラハをのんびりと待っていた。

シェラハが遣って来たのは、もう夜更けに近い。

「お、来たか」

黒の礼服に着替えたシェラハは、なんだか大人びて女性らしい。

「変な言い方だが、似合ってるな。　まったく、なんて事の成り行きか」

Kは、ポリアに試しに声を掛けてやろうと思ったが、止めた。

シェラハの案内で、噴水広場に。　焚き火が焚かれ、広場にはあちこちに篝火が。　随分な人数の人が集まっていた。　老若男女、家族で来ている者が大半だった。

寺院の女僧侶が葬儀を取り仕切った。　Kは、シェラハの計らいで、コルテウ氏やシェラハと同じ席にて、参列する人達の姿を見ていた。

町人の中には、ラキームに雇われているKの参列や、席に着くのを問題視する声を上げる人も居たらしい。　だが、シェラハが、それを一蹴した。　それはそうだろう、あの幸せそうなクォシカの魂を見たら・・・。

深夜まで続いた葬儀、ラキームは現れなかった。　ま、神殿城にて、あれだけ走り回ってクタクタだったラキーム。　Kの投げた壁の破片がぶつかった痛みを、帰りにウジウジと言う姿を見ているシェラハからすれば、来たら追い返してやろうかと思った。

参列者が全てのお悔やみを終えたのは、もう朝方に近づいた頃。

シェラハやKは、埋葬に向かう為に花束を全て荷馬車に乗せる。　クォシカの棺と共に。　参列者の任意で、埋葬まで来るのは任せたが。　全員が来た。　泣く知り合いの女性や若者。　女将も、参加していた。

北の共同墓地に、クォシカの両親の墓があり。　クォシカも、そこに埋葬されることに。　空の星空が美しく、遠くの東の空には夜明けが見えていた。

さて。　Kは、全てに付き合って、明け方の早朝に女将と宿に戻る。

「うぅ・・なんで・なんでクォシカなんだい・・アタシが代わりたい・・」

戻れば、食堂に明かりを入れる女将。　Kにジュース、自分には酒である。

「おいおい、女将・・・飲むの？」

「当たり前じゃないかいっ・・こんな日でも宿は開けてなきゃいけないんだ。　酒の一杯ぐらいで潰れるアタシじゃないよっ」

「そうですか・・・」

二人で、夜明けの飲み会であった。

だが、少しして。　そこに、ポリアが起きてきた。

「あれ？　二人で何してるの？」

「ポリア、こっち来て呑むか？　女将が自棄酒してる」

「はぁ？」

「クォシカの葬儀が終わったんだ」

すると、普段着の首と背中を紐で縛る衣服一枚ながら、スリットスカートをなびかせながら髪も結わないままの姿で、ポリアもテーブルに坐る。　剣士と云うより、貴族の令嬢と見える。

「そっか・・・終わっちゃたか・・・・・・」

椅子に座ったポリアは、今日に町を出るので酒ではなく、ジュースを貰い。

「・・・なんか、凄く悲しい事件ね」

すると、酔い始めた女将が、ポリアに。

「なんだってラキームが生きてるんだい？　え？　どうせ、アイツの仕業も絡んでるんだろ？　あんなバカ、一緒にモンスターのエサにでもしてしまえば良かったのに・・・・。　クォシカぁ・・可愛そうに・・可哀想に・・・おおおお・・」

と、泣き出してしまった。

ポリアの本心は、モンスターのエサか叩斬ってやりたい気持ちなのだが。　Kは、黙っていた。

Kは、結局一睡もしないで、朝も過ぎた頃に起きてきた皆に。

「さて、ラキームのバカたれに挨拶して、クォシカの墓行って、マルタンに戻ろう」

マルヴェリータは、もう一泊したかった。　なにせ、疲労で全身がバリバリいって、おばあさんみたいに歩かないといけないような痛みである。

しかし、Kは。

「多分、もう一泊は無理だね。　こっちがしたくても、ラキームがさせないだろう。　俺達は、最悪の目撃者だから」

と。

その意味を、ラキームの元に行く事でポリア達も理解するに至る。

町の東の外れにある丘の上、ラキームやアクレイ氏の住まう屋敷があった。　訪ねて面通しを願うと、大きな屋敷の一角にある応接間に通された。

黒いティーテーブルを前にして、Kが一人座席に腰を降ろし。　ポリア達は、ソファーに座った。　中々の広さで、椅子は上質な素材のものを使った凝った代物。　壁はモスグリーンで、春らしい今に合う部屋だ。

ティーが出されて、待つこと少し。　ラキームが、入ってくるなりに一同に言う。

「なんだ、まだ居たのか？　金を受け取りにさっさとマルタンに帰れ。　クォシカの葬儀も終わったんだろ？」

窓の前のデスクに備わったチェアーに、ラキームはどっかりと腰を降ろした。　ラキームの後ろには、ガロンが立つ。

「・・・」

ガロンは、Kをかなり警戒している眼差しだった。

Kは、早く話しを終わらせる為に、早速用件を切り出した。

「話しは、簡単だ。　ま、どうせクォシカの事件のことは公にならんだろうが。　一応、全てを知りたい。　だから、簡潔に聞く。ラキームさん、御宅はクォシカを誘拐してどうしたかったんだ？」

ポリア、マルヴェリータは、もちろんギョッとしたし。　ガロンも、ラキームも、狐につままれた顔になった。　ガロンとラキームは、見合う。

しかし、Kは、続けて。

「貴方は、クォシカに婚約を破棄されて、頭にきて誘拐しようとした訳か？」

ポリア達は、静かに下を向いた。

ラキームは、Kを汚い光を宿した眼で見る。

「だとしたら？」

Kは、続ける。

「答えになってないな。　この仕事を頼んだのはアンタだ。　事実くらい、最後に言ったらどうだ？」

「ふん」

ラキームは、一つ鼻で笑うと。

「ま、いいだろう。　貴様等のお陰で、父上にクォシカの遺体を取

り戻した私の武勇を語れたのだからな。　そうだ、お前の言う通りさ」

ポリアもマルヴェリータも、ラキームが都合良く言っているのを知った。　多分、自分達が去った後、勝手な話しを言いふらすのだろう。

ラキームは、お手伝いが出して行った紅茶を飲んでから、下劣な光を眼に宿して。

「全く、クォシカには困ったモンだったぜ。　せっかく、嫁にしてやろうと言ってるのに。　俺の女になれば、なんの不自由もなく可愛がられて生きて行けるのに。　断りやがってっ！！」

と、机を叩いた。

「じゃ、冒険者を雇った訳か？」

Kの問いに、ラキームは異常者のように嬉しそうに笑い。

「そうさぁ～。　こうなったら、フン捕まえてモノにしちまえばいいと思ったのさぁ＾。　いやぁぁ、金で雇ったギーシンとか言う男。　ガロンに頭が上がらない感じだったから大丈夫だっておもったのによぉぉ。　思いっきり裏切ってくれて、サイアクだぁ～」

と、ラキームは机をさらに叩き。

「フタ開けてみれば、なんだコリャっ？！！　あのバカ共のお陰でクォシカ喰い損なったわっ！！　捕まえて、服をひん剥いて、泣き叫ぶのを押さえ込んで喰い散らかしてやろうと思ったのによおお

おっ」

ポリアは、悔しさと汚い言い方に怒りが全身に駆け巡る。　強く強く握る拳から、血が出た。

マルヴェリータも、もう冷めた瞳が幽霊のように生気が無くなり、人を殺す事すらいとわない目つきである。

イルガ、システィアナは、服をギュっと握り、怒りを堪えている。

Kは、予めに言ってある。

“これから、ラキームを罠に掛ける。　どんなことがあっても、怒ったり騒ぐな。　出来そうに無いなら、同席するな”

だから、誰もが堪えていたのだ。

話に呆れたKは。

「なるほど、そうゆうことか・・・。　つまり、クォシカは、捕まる前に気付いた訳か・・それであの森の奥の神殿に・・」

ラキームは、詰まらない素振りに変わり、ツメを弄りながら。

「せっかくのお楽しみ人生が台無しさ～。　ま、可愛い貴族の女見つけたし、そっち可愛がるわ・・・。　話は以上だ。　解ったら、さっさと出て行け」

Kは、頷いた。

「言われなくとも。　いや、正直、もう少し早く町に来たかった」

と、Kは立ち上がった。

「どうゆう意味だ？」

言ったガロンを見るKは。

「クォシカが生きてれば、テメエ等を斬り倒してクォシカとめでたく結婚できたかもしれん」

Kの戯言に、ポリア達が立つ。

ラキームは、Kを睨んで。

「キサマ・・・この町史にふざけた口を利く気かぁ？」

すると、Kは、意外にもにっこり。

「いいえ」

と、言った後に、眼元と口元を真顔に戻して。

「首を洗っておけ、ギロチンで斬り易いように。　よ～く垢を落としておけな」

ガロンは、ハッとした。　首切り刑は、法の中において最悪の罪人の処刑だ。　貴族などが宣告される場合は、もっとも極悪非道な事例のみ。　今此処で、Kの口からそれが出た事に、凄まじい不安感が感じられた。

「待て、キサマ・・・何か企んでるな？」

Kは、ガロンを睨む。

「だとしたら？　俺を斬れるのか？」

「くっ」

ガロンは、Kの気配の消えたのに殺気を覚えた。　今剣を先に抜けば、Kに斬られるかもしれない。

Kは、手でポリア達に“出ろ”と合図して、外に出させる間はガロンと対峙する。

「なっなんだ？　ガロン？　どうしたっ？」

慌てるラキームなど、二人は眼中に入れていない。

Kは、ポリア達が出て行ったのを感じて。

「ガロン、気が変わった。　黙って行こうと思ったが、少し悪戯をしてやろう」

と、口元に笑みを。

一方のガロンは、Kが目の前に居るのにその存在が感じられず。

四方八方から狙われている感覚に恐怖した。

「お前・・一体なにを？」

「簡単なこと。　死ぬまで、此処でそのバカと怯えるがいい。　もし、後で逃げたのが解った時は、俺がキサマを直々に斬ってやろう。　ガロン、死神の誓いだ。　覚えておけ」

ガロンの瞳が、グワっと見開かれた。

（やっやはりこやつっ！！！！！）

ガロンは、全身から汗を噴き出して振るえが止まらなくなった。

ラキームなど見ずにKは、退席して行った。

「ガロンっ？　どうした？　なにか知ってるのか？」

ラキームは、このガロンの怯える姿に、自分が恐ろしくなる。　立って、ガロンの肩を掴んで揺さぶったが・・・。

外に出たKは、普通のKだった。

「さて、行くか」

玄関先の櫻の大木から、ハラハラと淡い桃色の櫻が舞い落ちる。　櫻の雪の中、ポリアを先頭にクォシカの墓参りに向かう。　ラキームの敷地内の並木道の櫻は、儚げでキレイであった。

行く途中、ポリアは、ラキームの言動にイライラしながら。

「ケイ、一体どうするつもりなの？」

マルヴェリータは、呆れた声でポリアに。

「教えてくれないわよ。　着いて行きましょ。　解るわ」

Kは、マルヴェリータを見て、

「解ってきたね～・・・。　しっかし、歩き方がおあばさんだぜ？」

「う〝、うるさいわよ」

マルヴェリータは、マルタンへの帰りも馬車で帰ると。　荷馬車をもう手配してしまった。　なにせ、歩くのが苦痛なのだ。

しかし、イルガもシスティアナも、ラキームの話しを聴いているだけに笑えなかった。

昼過ぎ。

五人の姿は、墓地にあった。　花束に囲まれたクォシカ一家の墓石。

春の風に乗り、辺りに咲く桜や桃の花が舞っていた。

「・・・、」

Kは、碑に花を手向けて。

システィアナは、懸命に祈っていた。

ポリア達は、Kの言う通りに直ぐに王都マルタンへ戻るべく、オガートの町を後にした。　見送りに、シェラハと、宿の女将の娘が来てくれた。　町の入り口の大きな楡の木の下。　シェラハは、みん

なを乗せた荷馬車が消えるまで見送ってくれた。

Kは、馬車に乗っかるなり寝る。

疲れているのは、皆同じ。　ポリアやイルガとて、全力を出し切って筋肉痛が襲ってきていた。　それぞれが、食事くらいしか起きない。

御者の男は、老練の無口だが。　マルヴェリータの家に雇われたしっかりした人物だ。　なんもしないようで、水場に寄ったり、夜の夜営場所は抜かりのない場所にする。

夜。　Kとこの老練な男性が、世界事情で話しが合えば。　様々な、文化、流通、名勝などが話題に上って、聴いていて暇にならなかった。

さて、マルタンには、約二日半。　着いたのは、オガートを経って４日目の朝である。　マルヴェリータの体調に合わせた結果だ。もう、マルタンに近づくと、あちこちから来た荷馬車や乗用馬車が街道に列を作り出す。

今日は、少し雲が多い。　Kは、空模様と風を感じて。

「あ～あ、こりゃ夜は雨くせ～な」

ポリアは、内心。

（雨に匂いは無い）

マルタンの街に入るための巨大な城門のような鉄の扉を潜り抜けた

先は、海の香りが漂うマルタンだった。　道を歩く人の多さ。　通りを右往左往する馬車。　賑う雑踏、帰ってきたのだ・・・この大都市に。

街に入って、協力会の斡旋所【蒼海の天窓】がある道に入る手前で降ろしてもらった。

斡旋所に向かう途中、知り合いの冒険者達に会うポリア達だが。チョットだけ仕事の出来が上だから、ポリア達よりマシな仕事を貰うだけで自慢する者達だ。　リーダーの男に絡まれたポリアだが、今までなら苛立つのが、妙にからかわれても気に為らなかった。

なにか気の削がれた彼らは、去るポリア達を逆に見送っていた。

さて、協力会の館の前に来た一行。　館の前からいきなり港を一望できる。

「なんか・・戻って来たのね」

マルヴェリータが、漏らした。

ポリアも、

「だね。　なんか・・・半月くらい戻ってない気がしてた」

システィアナは、海を見て。

「ここからの～うみさんは～とお～～ってもキレイですぅ」

イルガは、しみじみと。

「悲しい仕事じゃったわい」

それぞれが。　クォシカの事件が衝撃的過ぎたのだ。

だが、Kは。

「まだ終わってないぞ～」

と、館の中に。

館の中の一階。　中央に有る丸いカウンター内から、K達を見たあの剥げた館の主人が席より立ち上がった。

「オイオイ、良く帰って来たな」

Kは、カウンターに近づきながら。

「どうやら、俺達より噂のほうが早かったか？」

主人は頷いて。

「ああ、行方不明の女の遺体見つけたんだろ？」

「解ってるなら話しは早い。　金」

ポリア達は、Kの捌ける姿に言葉が出ない。　今、金だのと貰うキモチには成れないのだが・・・。

主人が、カウンターの下に在る金袋を出して、

「しかし、凄いな～ポリア。　まさかとは思ったが、こんな難事件解決するたぁ～驚いた」

ポリアは、詰まんない様子で。

「解決したのは、ケイよ。　アタシは、モンスターと戦っただけ」

「ほぉ。　どんなのだ？」

マルヴェリータと、ポリアが見合ってから。　ポリアが、

「ゾンビとレヴナントとスケルトン。　あ～・・・紅いスケルトン？」

Kは、透かさずに。

「紅いスケルトンは、“ブラッディロア”。　死肉を喰らう大蛇の牙から生み出されるゴーレムだな」

金を小袋に入れる主人の手が止まり。　カウンターの内側に居る30くらいのバンダナ姿の男もポリアを見たし。　話しを聞いていた回りの冒険者達も、カウンターを見た。

大男の主人は、Kやポリアを見て。

「嘘・・・言ってないよな？」

ポリアは、あの激戦を思い出すと呆れてしまう。

「嘘言ってどうすんのよ」

「お前、“ブラッディロア”なんて生み出せるモンスターなんかそうそう居ないぞ？」

Kは、呆れた様子で。

「アホ。　クォシカに、ラミア・リベラルド掛けるぐらいの奴だぜ」

主人はギョっとした顔で、Kを見て興奮した言葉で。

「あっ・あんだと？　誰と戦ったんだ？！！」

Kは、あっさりと。

「根城に巣食ってたのがジェノサイスホロウ。　地下には面倒なガーディアンレウス居たし。　全く、疲れる仕事だった」

主人の手が完全に止まり、Kを凝視している。

「おい、早くしろ。　今日は忙しいんだ」

Kに言われて、ハッとした主人は、Kを見返しながら。

「おっおお・・・す・すまん・・」

（ふざけるなよ・・・そんな凶悪なモンスターを倒せる奴がいるのか？）

主人は、どう捕らえていいか解らない。　話しに出たモンスターの

一部は、冒険者時代かなり有名だった主人自身だって戦った事が無い相手・・・・。　ただ、仕事は成功している。

「ほら・・五千シフォン」

Kは、金の入った袋を受け取るとポリアに渡して。　主人に、

「嘘だと思うなら、明日にでもジョイスに聞け。　これから、ジョイスの所に行くから」

主人は、聞いたことが有る名前だ。

「ジョイス？　ん？　聴いたことあるが・・・？」

そこへ、マルヴェリータが、声を震わせてながら。

「ケ・・ケイ、まさかっ、ジョイスって・・・・王国宮廷魔術師総師団長の・・・ジョイス・・・様？」

Kは、主人やマルヴェリータを見て。

「他に誰が居るんだよ。　七年前はモンスター見て気絶しかけてたジョイスが、偉い身分に成ったもんだぜ」

と、言うと。　Kは、主人に。

「じゃな、お世話様」

と、背を向けた。

ポリアは、辺りを見る。　駆け出しの冒険者達が俄に騒ぎ始めていた。　今まで、ポリアが向こう側だったのに・・・。

イルガが。

「お嬢様、Kが出て行きますぞ」

「え？　あ、あぁ、うん」

Kの後に続いていたシスティアナが、ドアを開けて待っている。

Kは、外に出ていた。

館の外に出たポリアは、Kに。

「なんか、中凄くなっていたわよ」

「そ」

マルヴェリータは、半信半疑の面持ちで。

「本当に、ジョイス様を知ってるの？」

「疑うなら、着いてくるか？　ジョイスのゴミ屋敷」

「え？」

「アイツ、片付けられない男だから、屋敷ン中足の踏み場も少ない。それでもいいなら、来るか？　本の津波に呑まれも、俺に文句言うなよ」

「イクっ！」

ポリアは、勢いで言った。

Kは、通りを戻ってマルタン最大の大通りに出ると、ひたすらに王城の方に歩き出した。　マルタンの商業中心地から、王城にはかなりの道のりがある。　歩いて半刻（1時間くらい）か。

空はウォーターブルーで、雲が多い。　政治の行われる行政区と、商業区の狭間には、広大で緑の豊かな植物園が在る。　毎日、何十万と云う人が訪れて、憩いの一時を過ごしていく。

噴水をベンチが囲む緑の女神広場が中心で、温室公園、野原公園、花園、林間公園の四区に分かれていて。　訪れる時期に合わせて四季折々の草花が楽しめる。

街を貫く大通りは、その一角も通り抜けている。　春の陽気がまだ続いて、蝶が何種類も花に止まっていたりするのどかな様子を見て歩く。

さて、行政区に入るとその景色は一変。　兵士の大きな宿舎や、日々の訓練所、各行政詰め所など、夥しい数の建物が、王城から街に向かって波状方に区画正しく整理されて並ぶ。　道に歩くのは、繋ぎの制服に身を包む兵士や、役人たち。　大通りの真ん中には黒い乗用の馬車が行き交う。

人も多いから、活気はあるが。　やはり、規律の中に生きる場所と云う雰囲気が強い。

「へぇ～、始めてきた。　結構、雰囲気あるわ」

ポリアが、周りを見て口にする。

一方、ポリアとマルヴェリータの美貌は、こんな所でも人目を引く。
歩いている兵士や役人も目を奪われていた。

しかも。

一同の歩く脇で馬車がいきなり止まり、黒い車体の窓が開く。　真横で止まるから、Kですら立ち止まると。　髭を持った初老の紳士が顔を出して。

「貴女は、ミス・マルヴェリータ？」

マルヴェリータも、父親の事が在る手前。

「はい、そうですが」

「おお、やはりトルメイニ氏のご令嬢で有りましたか。　私、お父上の知人です。　お見知りおきを」

「それは、わざわざ立ち止まってのご挨拶、ありがとうございます」

と。

Kは、馬車が行ってから。

「ま、この国一番の商人だものな、トルメイニ氏は」

マルヴェリータは、詰まらなそうに。

「私が継ぐわけじゃない家よ。　関係ないわ」

Kは、歩き出して。

「関係無い訳に行かないだろう。　キミと結婚すれば、政界にも、商業界にも幅が利く。　野心家や強欲な者からすれば、なまじに絶世の美人なキミを放っておかないさ」

マルヴェリータは、黙った。

ポリアは、話題を変えようと。

「ジョイス様の家ってまだなの？」

と、その時。　Kは、通りをすれ違うように近づいてきた紅い車体の馬車を見るなり、いきなり馬車前に出た。

「うわっ」

ポリアが驚き。

「どうっ、どうどうっ」

御者が、馬車を慌てて止めた。

「こら、危ないじゃないかっ！！」

御者の横に座る刺繍派手やかな高官の服装をした男が怒った。

だが、Kは気にしていない。

「おい、ジョイス。　何所行くんだ？　この忙しいときに、また本屋巡りか？」

いきなり、馬車に言う。

「え　？」

「はあ？」

ポリアと、マルヴェリータが見合って、また馬車を見る。

高官の男が、

「こらっ！！　ジョイス様を呼び捨てにするとはなんたる輩だ！！！」

と、怒った時。

「ん～？」

馬車の窓から、ボサッとした頭の男性が顔を出して。　Kを見るなりに顔を明るくさせて。

「あ～、リーダーっだ！！」

と、驚く。

高官の男は、馬車から顔を出す男性を見て。

「ジョイス様、お知り合いでしょうか？」

「うん、私の師匠だ。　今、降りる」

ポリアとマルヴェリータは、声を合わせて。

「しっ師匠ぉ？！！」

Kは、降りるジョイスの元に行くなり、まだ降りきらぬジョイス氏の頭を“ペシっ”っと叩く。

「アイタっ！」

つんのめって出てくるジョイス氏。

ポリアもマルヴェリータも驚いて。

「ちょちっちょっとっ！！」

高官の男も驚いて。

「きっキサマっ！！！」

だが、立ったジョイスは、Kに腰が低くて。

「リ～ダ～怒らないでよぉ～。　ちゃんと待ってたじゃ～ん」

しかし、ジョイス氏を見るKは、呆れた口調で。

「お前が俺に話しを持ってきたんだろう。　また、タラ～ンと読書と研究ばっかりしてたんだろうが」

ジョイスと云う男性、Ｋよりも頭一つは高い背で、見ればまだ３０前後の優しそうで知的ないい男なのだ。　しかし、Ｋに敬礼して。

「そんなことありませ～ん。　ちゃんと待ってました。　ハイ、仕事して待ってました」

「はっ、お前の粗方知ってる俺が、信じるかっ～の」

言い訳が通じないのでジョイスは、Ｋに縋って。

「リ～ダァァ～、マジですって」

普段、王国宮廷魔術師総師団長ジョイス＝クライムスレイとしての威厳は・・・・どこにも無い。　マルヴェリータは、パーティーなどでこの男を何度か見ている。　しっかりした姿で、王の横に居た姿しか知らない。

結局・・・ジョイスの据え膳上げ膳の謝りで、Ｋを含めてポリア達も馬車に乗って、ジョイスの屋敷に戻る事になる。

馬車の中　キリリと姿勢を正したジョイスは、確かに風格があった。

「こんにちわ、ポリアと申します」

ポリアが挨拶すれば。

「ご丁寧に、ジョイスです」

と、頭を下げるジョイス。

「ちょちょっと、頭など下げないで下さい」

慌てるポリア。

だが、Kは。

「コイツに遠慮はいらね～よ。　お前、またネコ被ってやがるな」

と、また頭を叩く。

「ういてっ、リィ～ダ～。　仕事上、建前もいるってぇ～」

と、ジョイスが弱々しくなる。

マルヴェリータは、興味深深になった。

「ジョイス様、マルヴェリータと申します。　商人トルメイニの娘です」

「ん？　あぁ、見た事ありますね～。　一年前の王の誕生パーティーかな？」

「はい、お見知りおきありがとうございます。　あの・・・ジョイス様は、ケイを知ってるんですか？」

すると、ジョイスは笑って。

「知ってるも何も、リ～ダ～は、私の最初の入ったチームのリ～ダ～だもの。　いやぁ、いい思い出だぁ～。　あの、一生懸命に冒険した頃・・・」

感慨深いジョイスの横で、Kは口元をワナワナさせて。

「ほぉぉ・・・。　モンスター見て気絶して、知ってる魔法を間違って唱えるし、挙句にパニックで女風呂に突入したお前の日々が、一生懸命だったか？」

「へ？」

「はぁ？」

「ほう」

「う～ん」

ポリア、マルヴェリータ、イルガ、システィアナが眼を細めてジョイスを見る。

ジョイスは、パッとKを見て。

「リーダーっ、それは言ってはいけませんっ！！」

シレ～っとするKは、横を向いた。

ジョイスは、七年前にKと一年近く冒険者のチームに居たらしい。

その後、Kは抜けて。　チームは解散し、ジョイスは残った仲間

と新しいパーティーを組んだ。

【ライアットウィング】

今から二年前まで、世界を駆け抜けたジョイスの超有名チームである。　こう見えて、ジョイスの魔法は、世界五指に入ると謳われる。　特に、幻術や魔想魔術の補助魔法に掛けては世界一だとも・・・。　冒険者の引退と云うか、活動休止をした時、この国の宮廷魔術師の下っ端として仕官することを条件に入ったのだが。　やはり腕が良すぎるために、逆に閑職のこの地位に据えられたと云われる。

しかし、一見自由気ままのジョイスだが、その知性と正義感は並の思いでは無い。　だから、王に土下座されてこの地位に。

さて、くだらない話しは途中で終わった。　そう、ラキームの調査をKに依頼したのは、なんとジョイスであった。　事の始まりは、二ヶ月前。　クォシカの失踪前にまで遡る。　ラキームは、他にも問題を起こしていたのだ。

野菜の取り引きに来ていたある商人が、マルタンから来ていた別の商人の娘にちょっかいを出していたラキームに対して、勇敢にも怒って叱責をしたのだ。　ラキームは、その時はかなり酒に酔っていたらしく。　商人に剣を抜いたらしい。

その場は、ラキームの付き人らしき剣士が抑えたというから、ガロンが抑えたのだろう。　しかし、その商人は、その二日後に死体となってしまった。　オガートから半日と離れていない畑の中で。

しかも、十日前にKがそれを聴きに行ったら、穿り出てきたのがクォシカの事件。

ジョイスの屋敷に着いて、話しは中断した。

まるで森の中に家を建てたような、そんな印象のジョイスの屋敷。

Kは、

「野人か」

と、言い捨てる。

二階建てながら、奥行きもある大きな屋敷、、白い石壁の外見はステキな家とポリア達は褒めたのだが・・・・。

「ちょっと散らかってるけど、どうぞ～」

と、玄関を潜ると・・・。

「あの～・・・」

ポリアもマルヴェリータも、眼が点に。　玄関から、もう人一人歩くスペースを残して、本や研究にでも使っていそうな素材が塔を作っていた。

マルヴェリータは、本の上に脱ぎ捨てた服があったり、自分ぐらいの長さをした何やらモンスターの角みたいなものが、本の塔と塔の間に入っていたりするのを見て。

「“片付けられない”んじゃないわ・・・片付ける気が無いのよ・・・」

と、頭痛がする。　なにせ、ジョイスはこう見えてモテる。　もう噂によれば、見合いの話しも半端な数では無いモノが来ているとか。　だがこの様子では、その気が無いのか。　結婚は難しいだろう。

さて。　本の塔で出来たうねくる迷路を、なんとか抜けると。　ソファーやダイニングの見え隠れするリビングに。

「さ、どうぞ。　楽にして」

「・・・・」

ポリア達は、返す言葉が出てこない・・・本の塔に囲まれている。　かなりの圧迫感がある。　しかも、座れば背後に、だ。

Kは、さっさとソファーに座りつつ。

「アホ、最初でゆったり出来ンのはお前ぐらいだ。　後ろに不安定な本の山があるのに、オチオチ背もたれも出来ね〜よ」

ポリア達は、そ〜っとソファーに座る。

「え〜、僕は毎日此処にすんでるんだよぉ〜」

「テメエを基準にすんな」

ジョイスがお茶を入れる間、Kは皆に。

「いいか、デカイ声出すな。　本の雪崩が襲ってくる」

ポリアは、恐る恐る。

「倒れるの？」

「前来た時、ポリア達に会う半日前に。　あのバカが大声上げて、この一帯が崩れた」

「ふっ、ふふ」

珍しく、イルガが笑っていた。　顔はかなり引き攣っている。

さて、紅茶のカップが回り。　Kは、ジョイスに。

「ホレ」

と、何かを渡す。

「は～い」

ジョイスは、真四角な拳大の水晶を受け取る。

それを見たマルヴェリータは、驚いた。

「ええっ！！　メモリアリー・ジュエルっ？！！」

大声が上がったその時、離れた隣の部屋で、“ズズズズ～ン！！”と云う音が。

「あ」

「あ～あ」

ジョイスと、Kが。

マルヴェリータは、音の方を見て。

「え？」

Kが、先に。

「崩れたな・・・山一つ」

「うん・・・確実・・」

と、投げやりのジョイス。

「ご・ごめんなさい」

マルヴェリータが、口に手を当てて謝る。

「いいのさ～、どうせゴミ屋敷だから・・あはは～」

ヤケクソの様に笑うジョイスだった。

ジョイスは、直ぐにクリスタルを手に眼を瞑った。

ポリアは、マルヴェリータに小声で。

（ね、メモリアルジュエルって、何？）

（オールド・レア・アイテムの一つよ。　魔法の解呪の魔法を受けると、肌身離さず持っている人物の見たままの映像を記憶出来るの。　記憶出来る長さは、長くて二日ぐらいって聞くわ。　解呪と、封呪の呪文で、記憶する時を自分で決められるの）

（そんなアイテム在るの？）

（今では、とても造れないアイテムよ）

ポリアは、あの最後の旅立ちの日、どうしてKがラキームに事件の真相を言わせたかが解った。

黙る中で、どんどんジョイスの顔が見ている他人にも解るくらいに険しいモノに変わった。

紅茶が・・湯気を上げなくなった頃。

「リーダー・・・これは、捨て置けないね・・・王に言わなくては・・」

と、ジョイスが眼を開けた。

Kは、静かに頷くと。

「最後のラキームを見たか？」

「うん」

「あの笑う面（ツラ）、死んだ曽祖父に当たるクソジジイにそっくりだ。全く、血は争えない」

「そうか、リーダーはあの5年前の事件・・・当事者だもんね」

「まぁな」

ジョイスも、全てを知る人物であるようだった。

ポリアは、ラキームのこれからが、Kのお陰で台無しになるのだと悟った。

ジョイスは、Kを見ると。

「リーダー、変わったね。　女性を救うなんて、僕とは大違いだ」

「はっ、生きてりゃ人も変わるさ。　お前だって、不幸にした訳じゃないだろう？　ただ、運が悪かったのさ・・・」

二人の語り合う姿が、少し侘しいモノになったのをポリア達は見た。

「うん・・・コレ、預かる」

「ああ、早く処理しちまいな。　遅々としてたら、ラキーム親父が死ぬ。　息子の不祥事だ、下手すると事がバレる。　お前が早急に動けば、王の心の痛みも少なくて済む」

「オーケー、リーダーは頭がいい」

「お前が、悪いんだ」

「クぅ〜、勝てない」

「お前に負けたら、もう墓に横になるしかないな」

「うわ。　酷い言い方だなぁ～。　傷付いた、僕のピュアハートが傷付いたぁ～」

二人の下らない言い合いが始まった時、ポリアは。

「あの・・」

と、声掛けるのだが・・・。　ジョイスとKは言い合いを始め。

「だいたいなぁ～、お前は・・・」

「りーだーはさぁ・・・」

ポリアは、また聞きたくて。

「すいませんが・・」

だが、二人の掛け合いはエスカレート。

イラっとしたポリアは、本気になって。

「ちょっとっ！！！！」

と、机を叩いた。

瞬間。　Kと、ジョイスが止まって。

「あ」

「え？」

いきなり、周りが揺れた。

「うわっぁーーー

ジョイスは、ポリアに。

「で？　お話はなあに？　キレイな剣士さん」

と、笑ってお世辞も込めた。

腕組むポリアは、引き攣る口元を隠さずに。

「アデオロシュ様の城は如何に？」

ジョイスは、Kを見て。

「そうだね～。　ラキーム氏の事後、王国の学者と魔術師に調査させるよ。　無論、亡骸は王に申し上げて丁寧に葬らせてもらう。これ以上、悪霊になられても困るし」

ポリアは、それを聞いて安心した。

「それは、安心したわ。　Kから聞いて、なんか人事のように思えなかったから」

Kは、立ち上がった。　部屋が暗くなり始めた。　外が、夕方になって、雲が多くなったようだった。

ジョイスも、ラキームの事を政務官と話し合う為、K達と外に出る。

屋敷の前が、王国の馬車が止めてある駐車場である。　紅い馬車は、ジョイス専用車だ。

「便利な立地だわなぁ」

Kが言えば。

「うん。　直ぐに本を買いに行ける様に」

と、ジョイスが言うなり。

「おいおい、私的流用じゃね～か」

Kは、呆れた。

ポリア達を、乗せて街に送るようにジョイスが計らってくれた。

馬車に乗る前、マルヴェリータはジョイスに。

「ジョイス様、一つ・・・お伺いしてもよろしいですか？」

「ん？　なんだい？」

マルヴェリータは、一瞬躊躇うように下を向いてから。

「私・・・魔術師として、仲間を助ける知識を持ちません。　たまにお伺いして、色んなお話を聞かせていただけませんか？　Kを見て・・・そう思ったんです・・・」

ジョイスは、最後に残るKを見る。

「ジョイス、真面目にこのお嬢さんは知識無い。　魔術師になる目的が、みんなと違ってた。　駆け出しの魔術師と変わらない」

ジョイスは、マルヴェリータを見ると。

「何時でも訪ねて来ていい。　もし、冒険や仕事で手に余るような事や、知らない事には知識を貸してあげよう」

マルヴェリータは、ホッとしたように笑った。

「ありがとうございます」

「うん」

ジョイスは、その時、初めてマルヴェリータがキレイと思えた。今までは、キレイさがキツイとすら思えるような冷めたモノだったのに。　今の笑顔は、とても無防備でよかった。

Kは、ジョイスに寄って。

「お守りは代わったぜ」

と、言って馬車に乗った。

（お守りかよ）

ジョイスは、納得した。　何故、Kがポリア達を連れてきたのか。

こうして、全ては終わる筈だった。　Kとポリア達が別れて、全ては終わると・・・。　Kも、ポリア達も。

だが、　全ては夜に一変した。　霧雨が煙り、夜の天気はKの予想通りに。

風呂に入り、寝る前の晩酌を楽しむK以外のポリア達四人が居る宿の一階のバーカウンター。　オガートの仕事の感想や、思い出に浸り出している時。

「おいっ！！、此処に包帯を顔に巻いた男は居ないかっぁ？！！！」

宿に泊まったポリア達の元に、夜中近くになって斡旋所の主人の使いが遣って来たのだ。　宿の従業員の案内よってバーカウンターに現れた斡旋所の手伝いの男の顔は、必死の形相で、全身が汗か降る雨なのか解らないくらいに湯気立って濡れて息が荒かった・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー前半完ーーーーーーーーーーーーーーー

１０、突発の仕事

１０、突発の仕事。

深夜の霧雨の中、Ｋを呼びに来た斡旋所の使い。　食堂の一角のバーカウンターで呑んでいたポリア達を見るなり。

「居たっ、おいっ！！　包帯男は居るかっ？！！」

全身ずぶ濡れで、かなり焦った様子の使いに、ポリア達が驚いて。

「ええ・・上で寝てるわ・・」

と、言うポリア。

マルヴェリータは、グラス片手に。

「どうしたの？」

「なんかあったのか？」

イルガも続く。

使いの男は、案内してきた従業員に向かって。

「おいっ、部屋を教えてくれ」

かなり焦って切羽詰まっている。

使いの男はロビーに戻って、階段の下で上がって行った従業員を目で追った。

ポリアやマルヴェリータは意味が解らない。

「何よ・・・説明なし?」

「ポリア、一緒に行く?」

「ん~。　K次第・・・じゃない?」

まだ、食堂にも数名遅く来た客が食事中で、慌しいこっちを見ていた。

さて、少しして・・・。

「おいおい、寝てるのに何事だ?」

と、包帯男Kが、黒い襟の高いコートに黒皮のズボン姿で現れた。

髪はやや前髪が長く。　眼、鼻、口、耳以外は包帯で巻かれた顔。

一目で怪しき人物のように見える。　現実、冒険者としての知識・剣や武術の腕前・経験の幅広さは底なしで、ポリア達もKの実像を把握しきれない。

使いの男は、Kが来るなり近づいて。

「・・・・・」

耳打ちをした。

Kは、ずっと見ているポリアを見た。

ポリアは、

「行くの？」

Kは、使いを見てから。

「どうやら、マズイ事態らしいな。　行ったほうがいい」

「私達は？」

「いや、いい。　それより、明日にチームから俺を外しておいてくれ」

ポリアは、頷く。

「お願いします」

使いは、Kに頭を下げた。

「ま、話しを聞いてからだ。　行こう」

Kを連れ立って、使いの男は外に出た。

ポリアは、ワイングラスを持って。

「Kにだけ用事って訳ね。　今回の仕事に関してじゃ無いみたい・・・。　でも、なんだろう」

マルヴェリータは、黙っていた・・・・。　なにか、嫌な感じがしたのである。

その時、システィアナがカウンターに凭れこんだ。

「シっシスティ・・・・・」

驚いたポリアだか、寝落ちた様子である。　システィアナが、寝息を立てていた・・・。

その夜、Kは宿へは戻ってこなかった・・・。

朝、いや、昼前に起きたポリア達。　お腹を満たそうと降りて来れば、宿の主人がやって来て。

「なあ、包帯男の荷物はどうするんだ？　バック一つだが、今日中には取りに来て欲しいんだがな」

４０過ぎの太った男だが、どうも目つきも言動もあまりいい響きに聞こえない。

ポリアは、以前にも泊まった時。　女好きのこの主人にえらい絡まれた経験があり。　一度、口論をしたから、向こうも随分と強気な言い方だった。

ポリアは、起き抜けで言われたものだから、ムスっとして。

「あ、そう。　食事終わったら引き払うときに持って行くわよ」

と、ぶっきら棒に。

イルガも、主人の言い草に棘を感じた。

いざ、広い食堂の一角に座ったら。

「あ、帰ってきた・・」

従業員の男がポリア達に水を出そうとしていた所で、そう言うものだから。　ポリア達も、ロビーの方を見れば、Kが二階に上がって行く所である。

「ケイが帰ってきたわ」

「真っ先に上ですな、お嬢様」

「うん」

注文を従業員に言う間に、Kは荷物一つで下に降りてきた。　そして、ポリア達の元に従業員と入れ替わりで来る。　衣服が濡れていて、包帯もかなり濡れていた。

「お帰り・・で？・・行くの？」

Kは、ポリアに頷き。

「ああ、ちと急な仕事になりそうだ。　俺は、今日は協力会の館に

泊まる」

というなり、踵をかえして。

「みんな」

「ん？」

「もう逢う事もあるかどうか解らんが。　ま、元気でやれ」

Kは、ロビーへ消えた。

「え？」

ポリア達は、ポカ～ンだった。　昨夜は、急がずにラキームの事件がどうなるのかを見守ると言っていたKだったのに。　気の抜けた食事になった。

Kのメンバー外しを行う為に、宿を後にする昼下がりの雨の午後。

　直ぐ隣の店先で傘を手に入れて、【蒼海の天窓】に向かう。　ポリアは、今日は寒いし風も冷たいので、何時ものスカートの下に薄い青のタイトな長ズボンを穿き、マントも身体を包むように纏っていた。

イルガも、上に紺のマントを纏い。　マルヴェリータは、衣服の上から厚手の紫のローブにフードまでしている。

さて、遣って来たのは港を一望出来るカーブの高台にある冒険者(ギル)協力会(ド)依頼斡旋施設＝通称：“斡旋所”、“協力会の館”と呼ばれる所。　要は、仕事を請け負える場所である訳だ。

用事は、Kをメンバーから外す。　次の仕事は、まだいいような気がしている。　それだけ、数日前のクォシカの一件が衝撃的だったのだ。

中に入るなり、館の広い一階の壁に貼って有る仕事の張り紙を見ている他の冒険者の数名が、ポリア達に気付いた。

「おい・・アレだろ?」

「ああ、この間の話しの奴ら」

「ポリア達だぜ・・・本当の話か?」

ヒソヒソ話が起こっていた。　中央の円形カウンターに向かうポリア。

(うわぁ〜、なんか見られてる・・・)

と、マルヴェリータに言えば。

(でしょうね。　事件を解決するまで、私達が向こうに居た側だもの)

ポリアは、Kが抜けた後の事が心配になった。

「おう、どうした?　主人の話しを聴く気になったって訳か?」

いきなり、カウンターに行くなり、バンダナを巻いた男がカウンターの内側から声を掛けてくる。　館の主人の代理であり。　一階の

壁に貼ってある仕事の請負から報酬の支払いもする。

ポリアは、Kのチームからの除名を頼んだ。

すると、また後から来た冒険者チームが居たようで、ドアが開いた。

雨の音が入り足音がする。

「お～、ポリアじゃないか。　やっぱりマスターに呼ばれたのか？」

いきなりのドスの効いた低くしゃがれた声がする。　ポリアはその声に聞き覚えが有った。

「ん？」

ポリア達が見返ると、そこにはかなり大きなガタイの男性を先頭に、五・六人の男達が立っていた。　顔に見覚えはある。

ポリアが、先に。

「ゲイラー」

と、筋骨隆々とした大男に呼びかけた。

「おう、元気そうだな。　聞いたぜ、オガートで活躍したそうじゃないか」

筋骨隆々とした男を先頭に、男達がやってくる。

ポリアは、“ゲイラー”と呼んだ男に疲れた顔をして。

「解決したのは、私じゃないよ。　今、奥に居る包帯男よ」

黒い頑強な作りの上半身鎧を身に着け、背中には自分の背と同じ長さの大きな大剣を背負う。　ゲイラーの筋肉の素晴らしさには、イルガはただの子供のようだ。

「おう、ソイツさ。　こんどのヤマ（仕事）のリーダーなんだよ。」

ポリア達は、意味が解らずに仲間の皆で見合う中。　システィアナが、ゲイラーの前に進み出て。

「ゲ～イラ～さん、こんにちわ～」

すると、厳つい顔のゲイラーが起立をするかのように立ち。

「システィ、こ・・こんにちわ」

と、緊張した顔になる。

「ゲ～イラ～さん、ケイさんは～チ～ムは作ってませんよ～」

すると、ゲイラーは緊張した声のままに。

「ち・違うで～あります。　今回のヤマは、合同チームのよ～であります」

ゲイラーの後ろに立つ、小型の斧を背負う中年のテッペン剥げオヤジが。

「おいおい、ゲイラー。　いい加減に慣れろや」

すると、ゲイラーは後ろを向き。

「ウルセエ・・・俺にとってはシスティの愛らしさは神と一緒だ」

呆れるゲイラーの仲間。　ポリアですら呆れて。

（アンタのバカさも神レベルだと思う）

このゲイラーという男は、背中の剣を扱う腕は確かなモノで。　この街にいる冒険者の中でも、三本の指に入れてもいいのだが。　システィアナに怪我を治された一年前から、彼女に惚れ続けている。

しかも、晩熟で、この通りだ。

ポリアは、ラチが明かないから、システィアナのフードを手繰り寄せて、前に立つと。

「話しがサッパリよ。　どうゆう事？」

ゲイラーは、普通に戻り。

「それはこっちもだ。　マスターが、お前の所の包帯男をリーダーにして、俺のチームとフェレックのチームとの合同で仕事をやって欲しいなんて言い出しやがる。　文句の一つも言いたくてな。　こうして来た訳よ」

マルヴェリータは、腕組みして。

「あのフェレックにですってっ?!!　・・・まさか、マスターの気が触れたのかしら?」

ポリアは、両手を挙げて。

「さあ、それだけ凄い仕事なのかも」

マルヴェリータは続けて。

「ま、一つ言える事は、Kのリーダーなら文句は言えないわね。実力がこの場にいる誰よりも上で違い過ぎるわ。フェレックにKのリーダーなんてもったいないわ」

ポリアも。

「まぁね～。出来すぎだもん」

ゲイラーは、二人の会話に割って入った。

「おいおい、随分だな」

その後、ゲイラーの後ろに居た若い男が前に出てきて。

「ちょっと、言い方が酷くないか？　フェレックは、性格は悪いが腕は一人前だぞ」

グレーがかった髪は長く耳を隠すほどで、見開かれた眼は柔らかいが身のこなしはしっかりした剣士である。ポリアと同じサイズの中型剣を左に佩いている。皮の軽量鎧を膝まで身に着けている、なかなかの顔立ちの整ったいい青年である。

ポリアがその男性を薄目に見返し。

「ダグラス、言い過ぎじゃないわ。　知らないからそう思うだけよ。もし一緒にチーム組んだら、誰も頭が上がらなくなっちゃうわよ」

“ダグラス”と呼ばれた若い男は、ややキョトンとした顔で。

「マジかよ？」

その時だ、二階から主人（マスター）の声がする。

「おいっ！　上に上がって来い。　フェレック達はもう待ってるぞ」

ゲイラーは、上を見て。　剥げた大男のマスターが何時もよりも声が強く、言い方が険しいのに気を奪われた。

「ん？　怒ってるのか？」

ダグラスも。

「珍しいな」

ポリアは、毎度の事。

「アタシなんか、毎回怒られるか、どやされてるからな～んも思わない」

ゲイラーのチームにも、笑いが起こった。

ゲイラーのチームが、一階の右奥に在る“く”の字階段に向かった。

ポリアも、カウンターで自分達の事を言っていたので。

「着いていってみようか？」

と、仲間に。

マルヴェリータは、呆れて。

「Kが抜けたら用は無いんじゃない？」

「ま、怒られたら。　降りよう」

「ポリアも、ホ～ントにオバカチャンね」

「う〝っ、それは言わないでよ」

ポリアは、ゲイラーのチームの一番後ろから着いていった。

【蒼海の天窓】に限った事では無いが。　大きい都市の斡旋所には、前部屋と、本部屋と呼ばれる場所で区別される。　ここで言うなら、一階はさほどの難事件と思われない仕事の依頼が中心であり。　二階で受ける仕事は、難易度の高い仕事なのだ。　二階の仕事は、駆け出しのチームなどには決して回らない。　実力差で失敗されても、協力会に非難が出るだけだし。　死人が出るのは協力会としても意味の無い仕事の遣らせ方なのだから。

ポリア達は、二階を見るのは初めてだ。　黒い木の床は光沢が栄えている。　一階の三分の一程の広さの間取りに、向かい合って座れる長椅子と長いテーブルは四列ほど。　観葉植物の植木蜂に囲まれた、バーのようなカウンター一の向こうにあの剥げた大男の主人が居た。

主人は、壁に灯されたランプの明かりでポリア達を見るなり。

「おい、ポリア達の来たのか？　呼んで無いぞ」

と。　その声は鋭い。

「あは・・・やっぱり・・・ダメ？」

ポリアが言う。

すると、一番カウンターに近い右側のテーブルに座っていた男達の一人が立ち上がった。

「マスター、ポリア達もいいじゃないか。　こっちは、アンタのふざけた呼び出しに来てやってるんだ。　眼の保養ぐらいさせろ」

そのテーブルの男達がドッと笑った。　言った男は、マルヴェリータと同じ魔法遣いなのか、蒼いローブ姿で杖を持っている。　長い金髪で、ローブの背中に流れてフードを隠すほどであった。

ゲイラーが、その男達のテーブルと通りの隙間を挟んだ左のテーブルに座りながら。

「マスター、今回の仕事のリーダーになるのは、ポリアのチームに居る男なんだから、ポリア達も聞く権利が有ると思うが」

すると、マスターは。

「もう、今、除名作業をしたんだろう？　ポリア達に用は無い。

聞かせるだけ無駄な話だ」

と、怒る言い方で突っぱねる。

（ポリア・・ヤバくない？）

マルヴェリータも、今日の主人の怒りようは何時もの叱りとは明らかに違っていたのが解る。

（だね、退散しよう）

ポリアが言うと。　また、右のテーブルの魔法遣いの姿の男が、

「マスター、ポリア達は来ないのか？　なら、俺等は行かないぞ」

その我儘な態度に、遂に主人がその男に向かって怒鳴る。

「フェレックっ！！　ふざけるなよ！　今回の仕事はポリア達はおろか、貴様等束でも当たれるかどうかの大仕事なんだぁっ！！！！！　この館の主人の俺を本気で起こらせたいのかぁっ！！！！」

凄まじい怒声である。“フェレック”と呼ばれた男は、声の大きさと云うより、主人の気構えに驚いて黙った。

その時である。

「マスター、いい。　今ので、判断出来た」

と、声が上がった。

ポリアは、Kの声にハッとした。　嫌、ポリアだけでは無い。　マスター以外の居た全員がハッとして、カウンターの横の三人掛けのソファーを見た。　包帯を顔に巻いた男が、優雅に足を組み、背もたれに左腕を預けて座っていたのだ。

（ゲイラーっ！！！）

ダグラスが瞬時に、小声で言う。

（ああ・・・見えなかった・・・）

ゲイラーは、それ以上言えなかった。　二人の居たチームの、正に目の前にこの男が居たのだ。　なのに、声が聞こえるまで見えていなかったのである。

「お・おい・・お前、誰だ？」

フェレックも、今までいたこの場に、包帯男が居たと認識していない。

まさに、誰もKの姿が見えていなかったのであった。

「おい、ケイ・・・」

主人は、包帯男に声で縋るような素振りだ。

Kは、静かに。

「いいか、マスター。　合同の仕事なんて、矢鱈滅多等あるものじゃない。　二つ以上のチームを用意する意味は、一つのチームでは

到底手に負えない仕事だからだ。　それは、それだけの危険と、仕事に対するチームの実力評価に差があるのだが、緊急を要するから組む遣り方なんだよ」

と言ってから、フェレックを見ると。

「こっちのリーダーの男は、そこが解ってない。　しかも、マスコット代わりに実力伴わないポリア達を巻き込もうと考える態度を見る限り。　仕事に向かっても使えない、ポリア達以上に無駄な奴らだ」

ポリアは、フェレックを見た。　自信家で、魔法の力が強いことを自負して止まない男・・・。　そして、マルヴェリータに熱を上げる一人である。

フェレックと呼ばれた男は、まだ３０ぐらいのインテリ然とした長身の男性だった。　鋭い眼を尖らせて、Ｋに怒った。

「キサマ何さまだっ！！　この俺様を無駄呼ばわりをするだとっ！！！」

Ｋは、軽く笑ってから。

「要らんと云う事を前提に話してやる。　今回の仕事は、此処から北北西にある魔の森“マニュエル”を抜けて、モンスターの巣窟と化した山“アンダルラルクル”に入り。　行方不明になったチーム“グランディス・レイブン”の僧侶、オリビアを救出しろと云う内容だ」

「え〝っっ？！！！！！！！」

「なんだとっ?!!!!」

「・・・」

一斉に声が上がり、誰もが驚いた。

Kは、更に続けて。

「ま、知ってる奴も居るだろうが。　オリビアとは、この主人の一人娘だ。　親馬鹿の甚だしい依頼を持ってきやがった訳さ。　あの山に入る事自体が命懸けなのに、ふざけた気持ちの馬鹿を連れて行ける訳ないだろう?」

ポリアは、Kに。

「ケイっ、私達見てる・・・。　Kを紹介された日・・・そのチームを見てる」

そう、あの日。　呼び出されて此処に来た時、紅い鎧を着た男をリーダーとしたチームの一団を見ているのであった。

主人は、唸るように。

「そうだ。　丁度、ポリア達と入れ替わりだったな」

ポリアは、主人に向かって。

「じゃっ、サーウェルス達がしくじったの?」

「・・・・」

主人は黙る。

剣士“サーウェルス＝オフネリット”率いるチーム“グランディス・レイブン”は、このホーチト王国のチームでは、現役最強のチームだ。　もう陸続きで、左右の国三ヵ国を跨いで冒険をしている勇名高いチームで、去年は王に謁見までしている。

このチームの女僧侶“オリビア”は、サーウェルスとは恋仲で、主人の一人娘なのだ。

主人曰く。　あの日、ポリア達とKが出会う時、席を外していた主人の居ない間にサーウェルス達が仕事の依頼を持ってきた村人と現れた。　内容がただの薬草探しで、悪名高い魔の森である“マニュエル”に行くのだ。　サーウェルス達は、今は森に行けるチームは自分達しか居ないと自己判断し。　今下に居るカウンターの男に請け負いさせたのである。

「全く。　本来なら俺が取り仕切る仕事だってのに、あのバカサーウェルスの奴が内容の誤報を村人に持ちかけたんだろう。　薬草探しだからとウチのオリビアも人助けで請け負いたがったもんだから、易々と請けさせちまった訳だ」

ポリアは、驚いて。

「それって、不正じゃないっ！！！！」

だがKは、冷静に。

「いや、不正でもなんでもない。　他にやれるチームが居ないから回しただけだろう。　俺も下の奴に聞いたが。　右から左に受け流しをやってしまっただけさ。　この主人は、娘を寝取られたから、そのリーダーの男に嫉妬してるだけ」

「ケッ！！」

主人は、唾すら吐きそうに言う。　この主人が、サーウェルスを好んでいないのは、有名な話である。

Kは、全員を見て。

「お前達じゃ、この仕事は無理だ。　ご苦労様、前金は用意させるから持って行け」

と言うと、主人に。

「マスター、俺一人で行く」

「えええええっ？！！！」

主人は、驚くが。

「足手纏いが居ないなら、女一人連れるぐらいは出来る」

「ほ・・本気か？」

「ああ、死人出す真似など出来るか。　大体な、そのサーウェルスって奴のチームと、この二チームを足した比較で同レベルの実力が在ると思ってるのか？」

「いや・・・それは・・・」

主人は、口ごもった。

Kは、フェレックやゲイラー達を見て。

「遊び気分で仕事やってる奴らなんかは、子供と同じだ。　少しは出来ると聞いたが、剣や魔法を振り回してる曲芸軍団で、あの魔の森、魔界地獄なんて言われる山に入れる訳が無い。　眼球が娘の事で鈍ってるんだろう？　とにかく、こいつ等を帰してしまえ。一人で、準備してくる」

Kが、斬り付けるような鋭い言い方で、主人に言う。

その言い方に、遂に怒ったフェレックが。

「貴様ぁぁっ！！！！！　言わせておけばコケにしやがってぇっ！！！！！」

と、魔法を遣おうと、杖を振り上げた一瞬だ。

「なっ！！」

カウンターの前からKの姿が陽炎のように消えた。　驚きの声を上げて、フェレックの振り上げた杖はそこで止まった。

そして、刹那。

「死にたいのか？」

声がした。

「あ・ああ・・・」

怯え出すフェレックの後ろに、Kの姿が。

「ケイ・・・」

声で向いた皆に眼の中、ポリアの横のフェレックの後ろに包帯男が居たのである。　しかも、フェレックの喉元に剣を突きつけていた。

「あ〝っ・・俺の剣・・・」

フェレックの右隣に居た男の剣が鞘から抜かれていた。

薄暗い部屋だが、主人のいるカウンター周りにはランプが幾つも有ったのに。　誰にもKの動きが見えなかった。　今度こそ、本当に緊張が走る。

（ダグラス・・・解るか？）

ゲイラーが、震えた声で言う。

（いや・・・この男の殺気が・・・身体から感じられねええ）

冷汗が出始めたゲイラーやダグラス。　Kの殺気が部屋全部の四方八方から感じられて、見えているKから感じられないのだ。

Kは、そのままに。

「テメエみたいな奴は、俺から言わせればポリア以下の駆け出しだ。物事の考え方も出来てない、自分の力や気性を抑える節度も知らない。　チームに組むだけ、リスクが増えるだけだ。　解るか？」

ガタガタと、フェレックが震えていた。

ポリアは、前に仕事でラキームの警護をしていたガロンが、どうしてKを恐れたか。　今、その理由を垣間見た気がする。

「お・おい、此処で殺生は止めてくれ」

主人が、苦い思いを声に滲ませる。

Kは、剣を喉から離して、横の剣士の前のテーブルに置く。

「フッ、殺す価値すらない。　黙らせただけだ」

―ガタッ―

フェレックが、力が抜けて椅子に崩れた。

その時だ。　Kは、主人に顔を鋭く向けて。

「所で、この場の人間以外にも、呼んだ人間がいるのか？」

「あ？　そんなの居ねえよ」

主人が言うと、Kは階段を指差した。

全員が、一階に行く階段を見る。　そこに、丁度白いシスティアナと同じローブを着た男性が来ていた。

「あっ！！！」

驚く全員。

そして、主人が。

「マクムス大司祭様っ！！！」

と。

現れたのは、５０半ばくらいの年齢と見受けられる男性だ。　持っている杖は金色で、先の装飾には、女神“フィリアーナ”の姿が。

背丈は、ポリアと同じくらいで、パッと見ても行動に至らなさの無いしっかりした人物に見えた。

「みなさん、失礼いたします」

マクムスと呼ばれた男が、全員に挨拶を。　システィアナと、フェレックのチームの太った僧侶男と、ゲイラーのチームの紅い神官服を着た男が、立ち上がって神の祈りの様な挨拶を。

主人が、態々カウンターから出てきて。

「大司祭様。　一体、どうされました？」

すると、Ｋが。

「おいおい、マスター。　話の用件は、アンタと一緒だよ」

「え？」

と、聞き返すのに。

マルヴェリータが。

「そうだわっ、サーウェルスの所の魔法遣いデルモントは、大司祭さまの甥よ」

主人は、ハッとして。

「そうか・・・甥子さんの・・・」

マクムス氏は、主人の前まで来ると頭を下げた。

「良く、お解かりで。　そう、その事をお頼みに参りました」

マクムス大司祭は、一万シフォンという大金を持って、ここに依頼に来たのであった。　サーウェルスのチームの全員の生死の確認と、遺体・怪我人の回収である。

全員が席に着き。　Kは、ソファーに座って、主人とマクムス氏の話を聞くだけであった。

主人とマクムス大司祭は、後ろのテーブルに着き。　ゲイラーやフェレック達に囲まれて依頼を話した。

主人は、マクムス氏に現状の難しさを語り。

「大司祭さま、今やサーウェルス達に敵うチームはこの国には居りませぬ。　しかし、事態は猶予が御座いません」

「はい・・・誠に・・」

「本来なら、冒険の仕事で死んだものは致し方なしとするのが慣わしですが・・・、私も娘の身の上があります故、そうゆう訳に行かせられません。　今、このケイという人物に頼んでいます」

「ほぉう」

マクムス氏が、眼を瞑る包帯男を見た。

「彼なら、それが出来ると？」

「はい。　今や、彼だけが森に行った経験のある人物。　合同チームを組織して、彼にリーダーを任せる以外に、方法は無いと思っています」

すると、マクムス氏は立ち上がった。　そして、Kの前まで歩いて来ると。

「私は、神官の身ながら甥を亡き妹より引き受け、育ててまいりました。　恥ずかしながら、これでも父性としての情もある一人の人間です。　どうか、私の甥を助けてくださいませんでしょうか。せめて、遺体だけでも・・・息子をモンスターにはしたくは有りません。　例え、今の職を離れる事になっても構いません。　もし、手が足りぬのなら、及ばずながら私も行かせていただきます」

と、見も知らぬKに、この街最大の寺院の最高長官である男が土下

座をしたのである。

「マクムスさま～・・・おいたわしや・・・」

システィアナが、涙ぐんでKの前に。

「ケイさ～ん、私からも～おねがいします～」

そこに、太った僧侶と、紅い神官服を着た男も来て。

「私からもお願いいたします。　この仕事のためなら、チームから離れることも謗りも受けまする。　どうか・・どうか・・・お力を」

「信ずる神は違えど、私もお供いたします。　この身、使ってください」

Kは、眼を瞑ったままに。

「この仕事のリスクは、人生の終焉すらも含む。　つまりは、“死”だ。　その辺のモンスターと戦う危険の百倍の危険を覚悟して貰わないと・・・出来ない」

すると、ゲイラーは。

「俺は、行っていいぞ。　チームを解体して、来る奴だけでもいいと思う。　俺は、アンタの実力を見たい。　どうせ、今まで命懸けだったからな。　覚悟は出来てる。　アンタみたいな人がリーダーなら、俺は文句は無い」

フェレックや、みんながゲイラーを見る。

「ゲイラー、本気か？　此処まで来て？」

フェレックが、気違いを見るように言う。　二人のチームは、もうこの国では有名だ。　もうそろそろ、他国にどんどん出て行こうと考えているチームなのだ。　チームを解散すれば、今に受けているレベルの仕事を回してもらえる可能性は、激減するだろう。

ダグラスが、

「俺も行く。　人生懸けて冒険者になったんだ。　死ぬことは厭わない。　ま、死ぬ気も無いけどね」

そして、Kがサッと瞳を開いた瞬間。

（？！！）

全員に風が駆けた感覚が走った。　風は起こりえないが、身体を貫く電流のような衝撃だった。　誰もが黙り、生唾を飲んだ。

Kは、静かに。

「全員立て」

皆が、その場に立った。　それを見て、Kはまた喋った。

「では、チームを合同で組織する。　参加意思の有る者は此処に残れ。　実力、経験を問わない。　命を懸ける気持ちの有る者だけ残れ。　気持ちの有る者は席に、無い者は即刻去れ」

その言葉に、即座に反応した者が・・・。

「おっお嬢様っ！！！」

「あら、さき越された？」

と、マルヴェリータも席に着く。

イルガの驚く声も二人には聞こえていないのか、真っ先に席に着いた二人。

システィアナも、トコトコと席に。　続いて、二人の神官の男性も。

マクムス氏も、ゲイラーも、ダグラスも、席に着く。

ゲイラーのチームの、剥げた斧を背負う男も座り。　その同時に、フェレックのチームの武器も杖も持たない無口の男性が座った。

フェレックは、

「俺様の実力が子供騙しかどうか見せてやる」

と、席に。

結局、全員が座った。

Kは、座った一同を見て、

「もう、二度と意思の確かめはしない。　マスター、紙と筆を用意

してくれ」

いきなり、Kはそう言う。

「え？　紙？　筆？　なんだ？　制約でも書くのか？」

Kは、首を傾げて。

「阿呆、お勉強だ」

「はあ？」

全員が驚いた。

Kは、皆の前に立つと。

「いいか、これから言う物は必ず持ち込むようにして欲しい。　森はまだいいが、山に入ると危険が多い。　中でも、持ち込みの道具で防げる危険は、毒や病気だ。　モンスターの三割が毒を持ち。山に住む吸血生物の全てが何らかの病気を媒介している。　これから言う物は、それに関わる物だ」

全員が、Kが言う事をメモった。

「これからは、仕事が終わるまでは一つのチームになってもらう。　持ち寄った物の効能や使用説明をするから、仲間、自分のいざと云う時の対処にしろ。　中には、食して免疫を高める物もあるから、しっかり覚えろ」

ポリアは、Kの説明が手際よく。　上手いのに驚いた。

（まったく、どんな頭してんのよ・・・冒険者育成学校とかつくったらどう？）

僻みであった。

説明を終えたKは、

「先に、前金を報酬として配る。　各自で買い物の身銭の足しにしてくれ。　明日の早朝に、北北西の村、トルトに出発する。　村までは二日。　着いて一日は休養してから、四日目に森に入る。　焦り、勝手は厳禁。　仕事の計画は、休養日の夜に話す。　以上、解散」

主人は、一日の休養が気になった。

「おい、一日休むのか？」

Kは、腕組みして。

「当たり前だ。　トルトに二日で行くには、馬車で全力だ。　揺れる荷台で休むに休めんし、緊張もある。　強引に行けば、体調不良も起こし事態が悪くなる。　俺がリーダーである以上、無駄な無理。必要のない行動はさせない。　ミイラとりがミイラになれるか」

主人は、この降る雨がまだ続きそうな現状も踏まえて、この包帯男は、全てを含んで考えて居る事が薄々解りだす。

（任せるしかないな・・・焦ってダメなら全滅だ。　助けに行く側の万全がなによりだ・・）

マクムス氏も、

「流石ですね、なんとか落ち着いてきましたよ。　冒険はもう二十年は遣っていませんが息子共々宜しくお願い致します」

と、頭を下げて、引き返して行った。

ダグラスは、メモの内容を見て。

「リーダー、良く全部覚えてるな・・・忘れそうだ・・・俺」

ゲイラーが、ダグラスに向かって。

「お前の頭は、筋肉で出来てるんだろう？　俺でも、覚えられるぞ」

「ち、筋肉バカに言われちまった」

と、笑いを取る。　講義に引き締まりに、もう微々たる一体感が現れ始めていた。

ポリアやマルヴェリータは、あのジョイス氏が此処に居たら何というか見てみたかった。

１０、突発の仕事（後書き）

今や、インフルエンザっちで、半死シテマスター（；；）

なんとか、頑張って生きて書きます。　後半は、主に冒険内容ですが、お付き合いくださいへへ

この“Ｋ”の連載が１部終了を持って、違う冒険者の話に移行し、“セカンド”として別話にして、“Ｋ”の話は間隔連載で続けます。

本編が長いので、ホントすいません。

読んでいただき、ありがとう御座います。

蒼雲　騎龍

11、前夜は明るく、旅は雨

2、前夜は明るく、旅は雨。

合同チームを結成した夜。　ポリアとゲイラーのチームは、同じ宿に泊まった。　最高級の高い宿だ。　マルヴェリータが口利きしたから泊まれるのであって。　普通なら、冒険者など世界的に有名なチームでもないと泊めて貰えない様なランクの宿である。

Kが、

「もしかしなくても、死ぬかもしれん。　最後になるやもしれないから、いい宿に泊まったらどうだ？」

と、言ったからだ。　一泊で、一人三百シフォン。　この金額は、一家五人家族の一月の生活費に等しい。

さて、K達は、総勢十一名で個室の会食場を貸しきっていた。　立派で、煌びやかなシャンデリア。　白い金糸の刺繍の入ったカーテン、窓の枠の細工も美しく。　部屋の内装は、金色に包まれるイメージで、長方形の長い食台表面の透かしで入れた蝶の舞う絵を見る限り。　流浪の冒険者達の泊まる所では無い。

食台の右側には、ポリア達が陣取り、左側にゲイラーのチームが。

問題は・・・、

「ゲ～イラ～さん、えんりょは～いりませ～んよ」

「はい、死ぬまで食べます」

向かい合う、デカ男ゲイラーとシスティアナの訳が解らないゆる～い雰囲気が、長い食台の真ん中から左右を分けていた。

（食いすぎで死んでしまえ・・・ケイが見えない・・・）

ポリアは右を向くと、いつものキャラでは無いゲイラーの姿が見えて、呆れてしまう。

マルヴェリータも、Kは一番左でダグラスなどと話しているので、彼のの話が聞けずにいるのが、どうも歯がゆい。

（はぁ、詰まらないわ・・・）

マルヴェリータの少し離れた横には、緑のローブを纏った魔法使いのキーラが居る。　マルヴェリータよりやや低い背で、あどけなさの残る青年だ。　短い短髪で、顔はのんびりした印象の眼が大きくて鼻が低い。　いい男とはお世辞にも言えないが、嘘をつくような性格にも思えない。

一方、Kの右には、剣士ダグラス。　左には、斧を背負っていた剥げ頭の中年戦士ボンドスがいて、Kの右前には、紅い神官服のゲイラーに近い背丈の男セレイドが居て、左前にはスラリとした初老に近い印象の男レック（本名パチョレック約してレック）が居た。

ダグラスの姿は、若々しい顔立ちの整ったいい男で、ポリアと同じ剣士。

ボンドスは、半そでのヨレタ厚手の皮製の上着を着ていて。　頭の天辺が剥げた訝しげな印象の色黒男。　人相も良くないが、顔のふてぶてしさは、嫌味というより苦労人と云った感じの印象を受ける。

レックは、スラリとした均等の取れた体格で、背もKよりやや高い。　黒の皮ズボンに、白いハーフコートと、洗い晒しの草臥れた感の見える襟のあるシャツを着た、渋みというか苦味の効いた紳士風のナイスミドルだ。　ただ、彼は変わっていて、武器が弓なのだ。　撫で付けた髪は真ん中分けで、やや灰色ががっている。　見た目通りの落ち着いた雰囲気の有る男性である。

そして、ゲイラー並の高い背に、ガッチリした体格の紅い神官服を着た男、セレイド。　頭は、スキンヘッド。　神官服のローブの背には、金の刺繍で右手に長い槍、左手には中型剣を持った、全身鎧のうら若き女性が画かれる。　セレイドの信仰するのは、世界で信者数が四番目に多い“アテネ＝セリティウス”。　別名を、戦陣に吹き荒れる戦女神とも。　この神を信仰する冒険者は、ほぼ全員が武器も扱える。　大抵が、ハンマーや棍棒などだが、中身は剣を扱う小数派も存在する。

さて、話の話題は仕事に関してが中心になった。

ダグラスは、見た目はチャラチャラした雰囲気があるが、以外に情に厚く優しい男だ。　しかも、あまり物怖じしない。

「なあ、リーダーさんよ」

パンを片手に、Kは。

「ん？」

「その、サーウェルス達の行った山って、何でモンスターの巣窟に成ったんだ？　確かに、古の神と悪魔の古代戦争の跡地だとは聞いたが・・・もう何万年も前の話なんだろう？」

「ふむ。　あの山は、古代戦争において魔王の召喚された場所の一つだ。“マニュエルの森”に“アンダルラルクル山”は、その神と悪魔と人の争う激戦地にして、魔王が封じ込められた場所。　倒せなかったのさ。　だから、封印した。　山の奥に魔王が居るんだもの、常に瘴気が渦巻いていて魔界からモンスターを呼び寄せていた」

セレイドが、真剣な顔で。

「魔王か・・・我々で倒せる相手では無いな」

Kは、頷く。

「だろうな。　でも、もう死んだ」

「なにっ？！」

「マジ？！」

ダグラスとセレイドが声を上げて、ボンドスやレックも手を止めた。

ボンドスが、イガイガ声で。

「死んだって・・寿命か？」

「嫌々。　何年前かな、噂にすらならないまま倒された。　山には魔王はもう居ないんだが、長い時間あそこに居続けたからな。　強烈な瘴気と魔王の遺体が温床に成っていて、魔界のモンスターを呼び寄せる。　魔王が召喚されて、魔界との通り道が出来ちまったからな～。　あと、ン千年はあんなまんまだろうな」

セレイドは、顔に血管を浮かび上がらせ。

「何所で、聞いたんだ？」

「聞いたんじゃない。　前に俺達がチームで入った時、山の山頂付近から入れる洞窟の中に入って見たんだ。　魔王の死体でっけーのなんの。　人の十倍は有ったぜ、体のデカさ」

ダグラスは、Kの居たチームがそんなに奥地まで入れるのは、かなりの実力が有ったのだと思い。

「リーダー、アンタの居たチームの名前は？」

Kは、スープを啜って。

「忘れた。　病気のお陰で、微妙な部分が抜けてる」

ダゲラスは、なんともむず痒い。

「オイオイ、そりゃぁ～ないっしょ～よ」

「だって、マジだもの」

ボンドスは、Kに。

「しかし、何だってまた・・・その洞窟に？」

Kは、スプーンを手に思い出す素振りで。

「確か・・・ブルーレイドーナの調査だったような・・・」

聞いていた全員の手が止まり、Kを見た。

ダグラスは、目が点になり。

「み・・見たの？　ヤツ・・・」

「ああ、丁度子供が居た」

「ふぅ～、どんなチームだったんだ？　ありえねぇ～」

ダグラスは、もう呆れるしかない。　ブルーレイドーナとは、モンスターの別名。　本当の名前は、“ジュエルスカイドラゴン”という竜（ドラゴン）なのだ。　身体の大きさだけで、町くらいは覆うと云われ。一度怒れば暴風雨を巻き起こし、雷を招雷する神に近い生き物。見るだけでも命懸けだろうに、調査・・・・とは。

聞いていたレックが、

「なるほど、ポリアが言っていた意味が解った。　確かに、我々などのリーダーには勿体無いな・・・それこそ、今の“スカイスクレ

イバー”にだって入れる」

ダグラスは、苦虫を噛み潰す不満顔に為って。

「より上かもよ・・・アソコに奴らも行ってないべさ」

と。　Kの素性が気に為り始め、痒い所に手の届かない話に何とも・・・であった。

今話に出た“スカイスクレイバー”＝“摩天楼”と云う名前は、現役世界最高の名声を誇る冒険者チームの名前だ。　リーダーは、絶世の美男の剣士と謳われる男、“アルベルト＝トルネード”。　今や、彼らの立ち寄る国では、彼を会食に招かない王は居ないとさえ聞くほどだ。

ボンドスは、Kに。

「リーダーさんよ。　もしこの仕事が成功したら、また一人かい？」

Kは、頷く。

「ああ、もうべったりであちこち行くのはうんざり。　終わったら、金貰って旅行するの。　記憶取り戻す、のんびり旅」

ダグラスは、ズイと顔を近づけて。

「もったんね～だろう？　その腕で、世界で一番のチーム作ったら？」

「興味無いね。　それなら、流れ狼遣ってる方がギリギリ感あって、

面白〜い」

「マジっすか・・・信じられん・・・」

ダグラスは、今二十三歳。　世界に名を馳せるチームを求めて止まない。　ゲイラーと二人、同じ故郷の田舎育ち。　一年半前に、偶然四つ年上のゲイラーに逢って、二人で頑張ろうと今のチーム、“パワーオブドーン”を結成した。　ボンドスやレックは、その時からのメンバーで。　セレイドとキーラは、半年前に加わった。

年齢もバラバラながら、ゲイラーとダグラスの二人の腕が良いから、ボンドスもこのチームに居ついている。

しかし、どの面々も、K程の知識は聞いたことが無い。　キーラや、セレイドはまだまだだが。　他の四人は、実力、経験の面から、Kの底知れぬ実力を薄々に感じている。　何より、先ずKは足音がしない。　しかも、いい加減そうに見えて、辺りの事を誰よりも早く察知している。　そして、見た人物や起きている物事に応じての推理力も・・・。

だからか、ダグラスとゲイラーが、いち早くKに従う姿勢を見せている。　ゲイラーやダグラスなどは、経験や生きた知識の大切さはよくよく知っている。　それこそ、ポリアの二の舞は最初の駆け出しの時点で卒業しているのだ。

一方・・・。　デカイのと、のほほん娘は・・・・。

「ゲイラ〜さん、ほっぺに〜ソ〜スがついてますよ〜」

「おおっ！！　気付かなかった！　流石はシスティ、ありがとう」

「えへへ～」

どんな会話だろう。　方や二十歳。　方や二十七歳である。

もうポリア達は、Kの話が聞けないものだからワインをがぶ飲みして腐っていた。

さて。　Kと、リックなどが早々に寝てしまい。

遅いポリア達ですら、深夜前には寝た。　シトシトと降る雨音は、なんとも心地の良い子守唄であった。

次の日も、雨だった。　暗いどんより空は、鉛色で重く重く垂れ込めている。

K達が、早朝の人通りもまばらな通りを来て、斡旋所の【蒼海の天窓】に来て見れば。　もう、二台の馬車が用意されていた。

Kは、馬を見て。

「ほほう、良い馬だ。　まだ若いの二頭と、やや年寄りの組み合わせか。　良い判断だ」

ポリアが、

「なんでよ？」

Kは、応えない。

そこに、

「馬は、若い馬だけだと、いざと云う時にバラけてしまう。　リーダーは、やや年の行ったしっかりしたのがいいのだよ。　しかも経験の多い馬は、一度でも来た道を忘れない。　万が一の時も、近くの町にでも引き返す」

と、声が。

見てみれば、黒い防水のコートに身を包んだマクムス氏が、フェレックのチームの太った神官と一緒に来ていた。

ポリアを始め、全員が挨拶をし。　Kが進み出て。

「長旅になる気構えは持ってくれ」

マクムス氏は、頷いて。

「ええ、解っています。　昨日、副神官長に代理をお願いしてきました」

「ならいい」

Kは、だれにも謙らない。

フェレック達も、直ぐに来た。

二台の馬車に、全員がバラけて乗り込んだ。

斡旋所の主人が出てきていて。

「娘を頼む」

と、Kに。

頷くKは、御者に出発を命じた。

二台の馬車は、街の北門に向かう。　まるで、王城の大門のような鉄の門の前で、馬車は兵士に止められた。　通りのど真ん中でだ。

Kは、なにか有ったのかと兵士に尋ねると、紅い馬車が横に着けて来た。　車体の窓から、王国宮廷魔術師総師団長のジョイスが顔を見せる。

「なんだ、ジョイスか」

素っ気無いKとは裏腹、ゲイラーやフェレックなどは本当に驚いて馬車から降りたほどだ。

ジョイスは、真面目な顔で。

「リーダー、一緒に行けなくてごめん。　一昨日の事件が動きそうだから、僕が此処を離れられない」

「解ってるさ。　ラキーム達の一件を、しっかり頼む」

「うん。　一応、リーダー達が下山してくるって言ってた五日後辺りから、トルトに三・四日か馬車を手配させるよ。　助けた人を乗せる為に」

「おう、助かる」

「じゃ、気をつけて。　マルヴェリータにも言っておいて」

降りていたマルヴェリータは、ハッとしてジョイスに。

「大丈夫ですよ。　ジョイス様」

降りていたマルヴェリータに、ジョイスは驚いた。

Kが、降りた一同に。

「早く乗れ、時間は無いぞ」

ジョイスは、マルヴェリータに向かって。

「リーダーの言う事に一つの間違いも無い。　しっかり聞いて、サーウェルス達を助けてくれ・・・死ぬな」

マルヴェリータは、頷いて馬車に乗った。

Kは、窓から見てて、

「お前・・・本気？」

ジョイスは、呆れて。

「預けたの誰？　死なせたら怨むよ～」

「ケッ、後で助けに来い。　ボンクラの白馬王子」

全員が乗ったのを見て、馬車は二台走り出していく。　ジョイスは、消えるまで見送っていた。

さて、馬車の中、

マクムス氏が、Kに。

「ジョイス殿ともお知り合いですか？」

Kは、腕組みして、眼を瞑りながら。

「ああ、ま～ね」

マルヴェリータが、元本当にリーダーだった事を告げた。

「なるほど、流石に」

一緒のダグラスと、ゲイラーは。

「人脈も鬼じゃないっすか・・・」

「俺も、そう思う・・・」

もう一つの馬車に乗っているポリアは、フェレックの煩い質問責めに遭っていた。　イルガと二人で、耳を塞いで寝たフリである。

三チーム、合わせて総勢十八名は、トルトに向かってひた走る。

休憩は、水のみ場で馬を休めるのみ。　殆ど徹夜で走る。　揺れる馬車は、長く座るほどに疲労が来る。　寝ようとしても寝れるもの

では無い。

車体の中は、３列のシートがあり。　前と中間のシートは向かい合っている。　だから、どうしても暇だと誰かと話したくなるのだ。

Kは、やはり落ち着いたもので。　ダグラスやゲイラーとは、暇つぶしの雑談はするし。　マクムス氏とは、世界の情勢や、やはり“アンダルラルクル”の話をする。

それは、マルヴェリータも余り知らない内容だった。

二日目の雨が降る街道上を走る馬車の中、丁度昼の話である。

Kとマクムス氏が、かなりの深い意味で山の話になる。　マルヴェリータが、聞いた話だ。

アンダルラルクルとは、昔の古代の言葉で“魔域”を意味し。　魔王の力の復活と共に、モンスターが溢れ出し、その都度に多きな被害を近隣の町や国に与えてきた。

それが、今から千年前の事。　大賢者ヴォルマリフと云う男と、その妻の天司祭イクマリスの二人が。　冒険者八人とでこの山に分け入り、六ヵ所の祭壇を築いた。　その結界が今に至るまでモンスターを山に封じて来た訳だ。

さて、結界の力も万能では無い。　だから、数十年に一回は、選ばれし司祭が出向いて結界を張り直して来なければならない。　時には、帰らぬ司祭も大勢居た。　モンスターに変わっている者も・・・。

マクムスが、若くして神官の長になったのも、二十年前に結界を張りに向った神官長が、戻ったトルトの村で死んだからだ。

マクムス氏曰く。

「知らなくて当然だ。　魔王の話は、寺院でも緘口令を敷いているんだよ。　魔王の存在を今に知れば混乱を招くだろうし。　しかも、暗黒魔術を用いる者が魔王の居場所を知ったら、それこそ一大事だ」

Kは、

「もう、死んでたがな」

「な・なんだってっ?!!」

マクムス氏が、魔王の死を知ったのはこの時であった。

「でも、死体も残ってたし、瘴気も消えてない。　かなりの長い間は、結界は必要だ。　ま、全滅させることも、犠牲を払えば出来ない事も無いが」

マクムス氏は、Kに寄って。

「本当ですか?」

Kは、雨の外を見て。

「冒険者を軒並み集めて、山に退治に行かせる。　ま〜、八割は死ぬな。　でも、絶対数の激減は狙える」

マルヴェリータ、人を物として見る消耗戦だと思った。　感情的に為って、思わずKに向って。

「そんなの、出来る訳ないじゃないっ！！！」

Kは、頷いて。

「だな。　俺も賛成はしない。　ただ、昔はそうして減らしていた過去がある」

マクムス氏は、愕然とした。

「そ・・そんなことが？」

「ああ、結界が出来る前の話しだ。　大賢者ヴォルマルフと天司祭イクマリスは、それでかつての仲間と、実の息子を亡くし・・・命を懸けた結界の設置に乗り出したのさ・・・」

今まで聞いた事の無い話ばかり。　ゲイラーは、

「良く知ってるな？」

「昔。　遺跡の発掘の仕事で、あの山の西の麓にある寺院に行ったことがある。　もう、結界の中で、モンスターの巣窟だったが・・・壁画に当時の事が画かれていた。　ま、みんなが溢れるモンスターに故郷や、街を襲われるくらいなら、自分からと志願したそうだ。　寺院の中に、その当時の事を記憶した“メモリアルジュエル”もあった・・・」

誰もが、その当時の事を考える。　恐らくは、壮絶な戦いだったの

だろう。

ダグラスは、山に入った事がもっと聞きたかった。

「なあ、山って禿山なのか？」

「とんでもない。　俺等が行くルートは、一番モンスターの少ない森林地帯ルートだが。　西の方に行けば、毒ガスの池群や底なし沼などが広がる“闇沼”がある。　あの辺は、おぞましいモンスターの巣窟だしな。　その上には、死霊の蠢く“幽幻ヶ原”って草原がある。　いっつも瘴気を孕んだ霧が立ち込めていて、モンスターの魅せる幻覚に一度でも堕ちたら・・・狂って死ぬだろう」

ダグラスやゲイラーの飲み込む生唾の音がした。

マルヴェリータは、思う。

「ケイ・・・、どうしてサーウェルス達の行った方を絞れるの？」

「言ってたろ？　仕事は、“薬草取り”。　西側の草は、全てが瘴気や毒に侵されていて、薬用効果が無い。　薬草は、森と山の狭間辺りにあるんだ。　ソイツは、山の正面から東側に掛けてだ」

「ねえ・・・、Kって・・少し怒ってる？　なんか、クォシカの事件は、あんなに率先してたのに・・・今回は私達お荷物を抱えてるから・・・？」

マルヴェリータは、Kの態度の多からずも少なからず、冷めた感じか見受けられる気がしたから。　思わず聞いた。

すると・・・Kは、マクムス氏を見て鋭い口調で。

「いや、正直な話。　助けたくも無い」

「！！！」

そこに居た全員が、驚いた。

Kは、更に口調を変えずに続けて。

「あの山に入るには、先ずは装備の充実を図って、モンスターや地理を調べて、万全の対処をして望むものだ。　冒険者とは、仕事を請けたからにはそれだけの責任もある。　なのに、だ。　行方不明の冒険者共と来たら、準備もして無い上に、興味本位で仕事をマスターに通さずに請けさせた」

マクムス氏は、頷く。

「確かに、不注意過ぎる・・・」

Kは、更に上乗せし。

「俺が急いで村に向かってるのには、訳がある」

ゲイラーは、深刻そうに、

「な・なんだ？　なんかマズイ事でも？」

すると、Kの声のトーンが少し下がった。

「行方不明のバカ共は、なんでも草の知識も無いからと、半ば言いくるめて村人を案内に連れて行った。　その村人が、大怪我して戻って来て失敗が解ったんだが。　今や、その村人が瀕死だと」

ダグラスが、気の毒と思って。

「そうか・・・そりゃ～災難な・・・」

その時、Kは怒りを気合いにして込めた口調で。

「何が災難な物かっ！」

と、吐き捨てた。

これには、マルヴェリータも、ゲイラーやマクムス氏も一種の恐れを覚えた。　まるで、斬り込む剣士の気構えみたいな気合があった。　言うなれば、言葉で斬られた・・そんな印象を受ける。

Kは、マクムスも居る手前で、声を少し落ち着けては続けて。

「いいか、覚えておけ。　無関係の人間を巻き込むなら、テメエが死んでもその人間は守れ。　テメエの無知、至らなさ、思慮・配慮の無さを棚上げして一人で逃がすだと？　村人が安全に山から降りられるなんてな、砂浜の砂粒一つくらいの確立だ。　俺から言わせるなら、自業自得。　行方不明に為ったソイツ等は死んで当然だ」

マクムス氏は、Kに言う言葉が見つからない。　確かに、どれを取っても失敗の原因はチームに有る。

Kは、最後に。

「どうせ、持ち物も足らずに、生きてればみ～んな毒や病気に苦しんでる頃だ。　多分、主人の娘のオリビアが、魔法でなんとかしているだろうが。　日数を見ても、あと五日もすれば全滅だろう。何が、この国一番のチームだか」

Kの評価は、辛辣だった。

しかし、ゲイラーもダグラスやマルヴェリータなども、Kは、それだけ冒険者としてしっかり遣って来た中で、経験も踏まえて言っているのが解った。　だから、何も言えなかった。

マクムス氏が、謝った。

「誠に、息子も居たながら申し訳ない」

「仕方無い。　どっちにしろ、あのバカ主人もこんな寄せ集めの死ぬの解ってるチームを組ますんだ。　誰か、保護者が必要だろう・・・生きてたら、息子をブン殴っておけよ」

マクムス氏は、深く頷いた。

マルヴェリータは、今になってこのKが、マクムス氏や斡旋所の主人の親心に対して動いたのだと感じた。　今のKに、名声や財を求める気は無いのだと知った・・・。

（やっぱり・・・本当は優しいのね）

何故、ジョイスがああも言われても慕うのか、なんとなく解ってきたマルヴェリータであった。

11、前夜は明るく、旅は雨（後書き）

こんにちわ、騎龍です＾＾

“K”シリーズも十一話になります＾＾

宜しく、お付き合い下さい＾＾

１２村にて。　Ｋの存在感は・・・煌く星のように

１２村にて。　Ｋの存在感は・・・煌く星のように

マルタンの街を出て、二日目の深夜。　雨の上がった曇り空の中、一行は“マニュエルの森”の入り口であるトルトの村に入った。辺りは鬱蒼とした森林地帯で、森の中の丘一帯にまばらに点在する民家に明かりなど灯ってもいない。

一行は、村の中心にある商店街に向かった。　そこには、村で唯一の宿屋があるとか。　行って見れば、ちょうど入り口のドアを閉めようとしていた。　建物としては、オガートで泊まった宿より一回り小さいログハウスのような建物だった。

Ｋは、宿の女将と掛け合った。

「あんれまぁ、こんな時間にお客かい？」

でっぷりとした、迫力のある中年の女性だ。

「先日、冒険者達が来たろ？」

「あぁ～、来た来た・・・レナードを森に連れて行った人達だろう？」

「ああ、その冒険者達の救出に来た。　数日、宿を借りたい」

女将は、包帯顔のKを訝しげに見て。

「ほぉ、まぁ～いいけど。　何人だい？」

「全員で、二十名だ」

「いいよ、全員泊まれる。　ご飯は？」

すると、後ろからゲイラーが。

「くれ、ガッツリいけるやつ」

「あいよ～。　ま、中に入んな～」

全員で、ゾロゾロと中に。

御者の男達二人は、馬の世話に入る。

さて、男達は、四人から五人の相部屋で。　ポリア達女性は、三人の相部屋になった。

Kは、休む事も無く。　一階の、奥に広がる食堂にて。

「女将、聞きたいことがあるんだが？」

「なんだい？」

女将は、ぶっきら棒な雰囲気を見せる初老の旦那と二人で食事を作

り出す中で、Kに受け答えをする。　厨房には、暖炉を幅広くした竈があり。　早速野菜が焼かれ始める。

「怪我して戻って来た、そのレナードと云う人物は何所に？」

女将は、顎で北東をしゃくり。

「丘に上がった寺院さ。　今日の昼に傷口が腐り出血が酷かったらしいから、もうダメかもしれない。　魔法が効き難いってさ」

「丘の上か。　助かる」

Kは、そう言って出て行こうとする。

マクムス氏も、聞いていて。

「私も同行いたしましょう」

「好きに」

Kとマクムス氏が、その夜遅くに外へ出て行った。

さて、四・五人の冒険者は、馬車の揺れと寝不足で食事もせずにダウンした。

部屋に行って、荷物を置いて降りてきたポリア達。

マルヴェリータが呆れた口調で。

「フェレックもキーラって子もダウンね。　死んだ人みたいな顔で

部屋に入っていったわ。　Kの言う通り。　明日に強引に森に入っても、体調不良でダウンだわ」

ダグラスは、パンを齧りながら。

「ああ、あのリーダーは、その辺は抜かりねぇ～な」

システィアナが、眠い眼でゲイラーの元に来て。

「ゲイラ～さ～ん」

ゲイラーは、いきなりキリリとなって。

「どうした？　システィ？」

「マクムス様と～ケイさんは～どうしたんですかあ～？」

「おお。　二人なら、怪我して戻って来た村人を見舞いに行ったぞ」

「そ～ですか～。　わたしも～いきたかったで～す」

「うむ、システィの気持ちは最もだ。　だが、今のシスティはフラフラだ。　返って、迷惑になってしまうかもしれない。　明日、行ってみたらどうだ？　着いて行くぞ」

「は～い」

「うんうん、システィは賢い」

システィアナは、ポリアを見て。

「ポ～リ～ア～、ほめられた～。　ポリア～は～、お～ば～・・むぐ」

ポリアが、口を塞いだ。

「言うなっ」

マルヴェリータが、ニヤリと笑うと。

「言うなよ・・・心に留めてよね」

ポリアが睨む。

「あらあら、ケイと組んでから察知が鋭くなったわね」

「フン！」

結局、フェレック、キーラ。　そしてあの、太ったシスティアナと同じ神を信仰するハクレイと云う神官と、細剣（レイピア）を扱う剣士コールドと云う男がダウンしてしまった。

ポリア達は、他愛無い雑談と共に食事して。　終わったら、Kの言う薬草の煎じたお茶を飲む。

「うげぇ・・にげえ～」

ダグラスは、舌が麻痺しそうになった。

笑うポリアが、

「格好付けて、長く茹でるからよ」

マルヴェリータは、顔を顰めて。

「一杯で十分だわ」

その横で、半分寝ながら呑んでいるシスティアナを見て、ゲイラーは真顔で。

「イイ・・・神だ・・・・・」

ボンドスは、むず痒くなって。

「お前の顔で言うな」

ゲイラーは、ボンドスに。

「人の事言えるか」

以外に、大人数ながら面白いチームだ。

さて、呑み終えた面々は、女将に礼を言って寝ることに。

ベットにシスティアナの身体を運ぶゲイラーの嬉しいやら恐れ多いと思う顔の歪み様は、ポリア達には滑稽なお芝居を見ているような感じで笑えた。

誰も酒も呑まないで、眠りについた・・・・。

さて、日が明けて。　次の日は、雲は多いが晴れていた。

昼前に、全員が起きて食堂に集まった。　前夜に、薬草のお茶を飲んでいた皆は、疲労が無く森に入れそうだ。

代わって、直ぐに寝たフェレック達は、気だるい雰囲気で眼の下に隈が出来ていた。

血色良くいつものように美しいマルヴェリータを見て、ゲッソリしたフェレックが。

「随分元気そうじゃないか・・」

マルヴェリータは、今日はフリーだからか。　肩の露出しているドレスローブ姿で、腕組してフェレックを見返す。

「ケイの言ってた事、もう忘れたの？　持って行った薬草は、食事と一緒に飲むと疲労回復の効果が有るって」

「飲んだのか？」

「ポリアも、ゲイラー達も。　今日は飲んだ方がいいわよ」

ゲッソリしたフェレックは、頷いて。

「今、飲む・・」

ポリアは、一緒の部屋にKとマクムス氏を含むダグラスに。

「ねえ、ケイとマクムス様は？」

「いや、まだ戻ってない」

「最悪・・・かな」

ポリアは、渋い顔をした。

だが、食事をし出した頃にマクムス氏が戻って来た。

「マクムスさま～」

「マクムス様」

システィアナ、セレイド、ハクレイの三人が立ち上がり、戻って来たマクムス氏を迎えた。

「今、戻りました」

システィアナが、憔悴した顔色のマクムス氏に。

「お顔のいろが～悪いですぅ～」

ハクレイも、セレイドも心配するも。　しかし、マクムス氏は、穏やかな笑顔になり。

「いやいや、疲れているだけだ。　村人が助かったのだから、ホッとして疲れたのだ」

ポリアは、驚いて。

「助かったんですか？」

マクムス氏は、ポリアの前の席に来ながら。

「ああ。　ケイ殿が、奇跡の妙薬（エリクサー）の原料を殆ど持っていてね。　寺院にも、その穴埋めの素材が在って、ケイ殿が調合した。　いやいや、なんとも言えぬ手並みだった。　毒と怪我の回復の妨げになっていた病気が消え失せたので。　私が好機と見て、全力で傷を塞いでしまったから、もう大丈夫です」

フェレックは、集めるだけで一生懸かるとさえ云われる奇跡の妙薬の素材を持ってたと聞いて、腰が抜けそうだった。

「な・・・何モンなんだよ・・・」

其処に、Kが戻って来た。

「ケイっ」

間近に居たマルヴェリータが、彼の名を呼んで。　全員が、包帯男を見た。

「ああ～、眠い」

ポリアが、水を差し出して。

「お疲れさま」

受け取るKは。

「ああ、ホント危なかった。　多分、朝方まで到着がずれたら死んでたな」

マクムス氏も。

「如何にも」

そこに、調理場から女将が出てきた。

「レナードは・・・助かったのかい？」

長テーブルを前に、椅子に向かうKが水のコップを手にしながら。

「ああ、夜には意識は戻るんじゃないか？」

すると、女将の顔が明るくなった。　昨日までは、訝しげだったのに。

「なんて事だい。　ささ、料理をドンと出そうじゃないか。　これで、ミーナも泣かずに済むってもんだよ～」

Kは、席に着きながら。

「ああ・・・うわ言で、その名前を口にしてたなぁ」

マクムス氏も頷く。

女将、曰く。

「レナードの一人娘さ～。　今、十二歳になったばかりなんだよ。

もう怪我してからは、毎日毎日泣いてねぇ・・・。　今、近くの町に泊りがけで薬の買出しに行ってる」

「そうか・・・帰って来たらビックリするな。　疲れて寝てるから、死んだみたいに見える」

Kが、悪い冗談を言う。

「ケイっ、それはないでしょ～が」

「フッ」

ポリアに怒られたKが、皮肉めいた口元で鈍く笑う。

ケイは食事を終えると、薬のお茶をマクムス氏と呑んで休む事にする。

二人が休んだ後、ポリア達がクォシカの事件の回想をゲイラーやフェレック達に語って聞かせているうちに、夕方前に為り。　宿の食堂へ、裏口からお客が現れた。

「すみません・・・此処に包帯を顔に巻いた方と、高位の司祭様が居ると聞いたのですが」

入ってきたのは、黒い髪が膝まで伸びた可愛らしい女の子であった。

ポリア達みんな居た中で、少女に間近いフェレックが疲れた声で。

「上で寝てるぞ」

と。

気づいたポリアも、少女を見て。

「ケイに用？」

すると、ゲイラーが。

「助けた村人の娘さんじゃないのか？」

女の子は、頷いて。

「はい・・父を助けて頂いたお礼・・・言いたくて・・」

マルヴェリータは、その女の子の前に行って、微笑む。

「代わりに聞いておくわ。　助かって良かったわね」

「は・はい・・・」

まるで、ヴィーナスのような美しいマルヴェリータに、少女は見とれてしまい。

「あ・あの・・コレ・・・」

と、モジモジした様子で麻の小袋を差し出す。

「？　なあに？」

「お金は無いんですが・・・ウチの畑で取れた果物で作った物です。

今日、作ったばかりで・・せめて・・」

受け取るマルヴェリータは、

「渡しておくわ。　気にしないで、元は同業者がアナタのお父さんを森なんかに連れて行ったから・・治せるなら治すのは当然よ」

「ありがとう・・」

そこに、ポリアが来て。

「ね、薬草が必要だったのよね？　名前だけでも教えてくれる？」

その会話に、面倒くさそうな面持ちで見ていたフェレックが。

「おい、ポリア。　薬草なんて、聞いて解るのか？」

ポリアは、見ないで。

「上に居るでしょ。　多分、ケイも同じ事するわ。　直ぐに似たような依頼回されても困るでしょう？」

「ちげえねぇ」

ゲイラーも、ボンドスも伝法な口調で頷く。

「んなこと言ったって・・やるか？　普通・・」

フェレックは、お人よしにも程があると思った。

しかし、Kが、夕方にマクムス氏の後に起きてきた。
マルヴェリータが、来た娘さんのお礼と、贈り物を渡す。
受け取った包帯男は、袋の中を見て。
「お・・おお・・・おおおっ、これはいいもん貰った」
と、以外に嬉しそう。
システィアナが、Kの横で。
「なんですかぁ～？」
「飴～。　明日、食べよ」
ダグラスは、羨ましげで。
「いいなあ～、くれ」
「明日な」
飴は、作るのが楽な砂糖だけの物と、果物の果汁を加えた物と値段が三倍は違う。　少女が持ってきたのは、野いちごと、柑橘類の飴で、安売りしているものではない。　Kは、こう見えてかなりの甘党だ。
マクムス氏は、子供が居たと聞いただけで更に助けれた事に安心した。

「良かった・・良かった・・」

さて、Kは、厨房に立つ旦那に一つ注文をした。　旦那は、無言ながら頷いて了承してくれた。

少しして、外を散歩がてら見てきた男達も戻り全員が揃った。　もう、空はすっかり晴れて、星が瞬いて夜の帳が降りている。

四人掛けの長テーブルが、八列在る食堂の中央テーブルに、宿の旦那がKより頼まれた物を大皿に盛ってドンと出した。　豚肉の塊焼きだ。　丸々一頭分。　周りには、緑の生野菜がふんだんに盛られていた。

「美味そう・・・っすね。　リーダー？」

言う、ダグラスに、頷くゲイラー。

ボンドスや、フェレックのチームの鞭遣いの学者で、テンガロンハットに皮ベストの男イクシオが。

「でわ、早速」

「待て。　お預け」

其処に、Kが、

ボンドスは、薄眼で。

「犬か？　俺等は・・・」

「話が終わったら、食べていい」

と、言うと。　Kは、席から立ち上がり、全員を肉の前に集めた。

「いいか、明日の山に分け入る計画の話をする。　この肉の塊が、“アンダルラルクル山”、周りの野菜が“マニュエルの森”と思ってくれ」

仕事の話と解ると、全員の顔が引き締まった。

Kは、先ず赤と緑と黄色のパプリカに、白いブロッコリーを持ち出して。

「白いのは、北。　緑が西。　赤が南で、黄色が東と、方角だ」

と、解りやすいように、皿の端に置いた。

そして、皿の方角から見て、南南東の付近の皿の縁にスプーンを凭れさせる。

「此処が、村の位置。　そして・・・」

爪楊枝に紙を切って巻いた、旗の様な物をつけた物を肉の六ヵ所に刺した。

「この、旗の有る場所が、避難も可能な祠の有る場所だ」

ゲイラー、見て曰く。

「なんとも解り易い」

Kは、説明を続け。

「我々は、明日。　近くの森の入り口から入り、一直線に北に向かう」

そのまま行けば、山の南の祠にぶつかるのは、誰もが解った。

ポリアは、見る限り迷う感じもしない。

「楽ね」

「見た目はな。　だが、森は磁石が利かない上、似たような景色が続く。　しかも、森の地形が起伏して波打っているから、以外に迷いやすい」

ダグラスは、急に心配になった。

「リーダー、迷わないで」

「目印が有る。　方向音痴のポリアと一緒にするな」

「どうせ・・・方向オンチよ・・・」

ポリアは、なんか嫌な方向ばかりに引き合いに出されている。

「さて。　森に入る一日目が一番道のりが長いから、色々と疲れるだろう。　祠に着いたら、しっかりと休んでくれ。　そして、次の日。　この南の祠を出て、東の迂回ルートで次の祠に向かう。　此処が、多分は最大の激戦が予想される」

フェレックは、西側のルートに気が向き。

「探す方向は、そっちでいいのか？　西側は？」

其処にゲイラーが。

「そっちは、前に話しに聞いたが。　毒ガスを充満させてる沼や、池の群れだと。　リーダーの話からしても、そっちに行ってたら即死じゃないか？」

Kは、スマートな動きでテーブルに腰を寄り掛け。

「その通り。　それに、こっちには見たメモに載る薬草は一つも無い。　全て、こっちの東側だ。　それと、付け加えて。　朝方、寺院の老僧に聞いたが。　村人は、薬草に最も近いルートの東から森に入る為、冒険者達と早朝に別ルートに入っている。　つまりだ。　我々は南の祠から、東周りで遭難した冒険者達の居ると思われる祠三つを回る」

フェレックは、更に解せない。

「なんで、同じルートで行かないんだ？」

「うん。　実は、傷ついて戻った村人は、一つだけ薬草を握って帰ってきたのさ。　その薬草、森に無いものだ」

「って事は、森には居ないってか？」

「森に居るなら、聞く実力からして戻って来れるチームだ。　山に

入ってから、立て続けに襲われた可能性が強い。　東の祠と、北北東の祠、そして南の祠に逃げ込んだ可能性が強いのは確かだと思う。
問題は・・・このチームで、夜に着く山で凶暴化したモンスターに勝てるか・・・」

全員が、黙った。

「俺は、言った筈だ。　無駄な無理も、必要ない行動も取らない。
全員を生かして、見回る事を第一にする。　南からのルートが、一番山に入ってから祠に近く、安全なルートだ」

ダグラスは、東の祠までの環境を聞く。

「南から、東の祠まではまばらな林だ。　只、どんどんマニュエルの森とは落差が生じて、森には逃げられない。　後ろの退路を塞がれたら、戦って切り開くしかない」

マクムス氏は。

「では、北北東の祠までは？」

Kは、頷いて。　北北東の祠を示す旗を手に取った。　そして、弄りながら。

「実に。　こっちに行くのは、最悪の場合だ。　この北北東の祠は、山の中腹にある。　此処に行くには、どうあっても難所を選んで行かなければならない。　多分、俺が守って行けるのは十人以下。
行くときは、人を選ぶ」

「森では無いのかね？」

Kは、深く頷いた。

「先ず、安全を選ぶなら。　下のまばらな森を行って、直線状になった辺りから、一気に祠を目指して上るのがいい。　ただ、これはまあまあ遠回り。　疲れていたら、祠手前に広がる“魔樹の林”にて蔓延る吸血樹木モンスターに取り囲まれる」

ポリアは、何が何だかだ解らない。

「何、そこ・・・」

「様を言えば、生き物の血肉を求めて動き回る植物のモンスターがウジャウジャいる。　一番デカイモンスターは、樹齢百年を超える大木の様なやつもいる」

「じょ・冗談でしょ？」

見上げる様な大木を想像したポリアは、ギョっとした顔を青ざめさせた。

代わって、ゲイラーは。

「最短ルートは？」

「それが、それが最大の問題だな・・・。　俺が一人で行くことも考える程にヤバイ場所なんだ」

「どんな場所なんだ？」

「うん・・・そうだな。　河幅が四キロぐらいある大河があるとしてくれ」

「デカイ河だな」

みんなが、それだけでも想像が難しい。

なのに・・・。

「その河の中が、全て骨だ」

Kの話を聞きながら喋っていた者も、聞いていた者も動きが止まった。

ゲイラーは、確かめるように。

「ホ・・ネ・・あの、俺等の身体の？」

「そうだ。“屍渓谷”と云う場所だ。　古代の文献に出る、山に向かった人の群れが、魔王の放った地獄の業火で瞬時に焼き殺されたと書かれる最悪の戦場の一つ。　死んだ屍が呪われ続けて、死霊モンスターを生み出す子宮となっている。　薄い霧が立ち込めていて、足場が全て骨だ。　気力をしっかりしないと、僧侶は動けなくなる」

ポリアは、その想像だけで身の毛がよだつ。

「ふ・普通でも・・おかしくなりそうね」

「だな。　俺も、此処に行くのは気が引ける」

「ねえ・・・ケイ・・」

「ん？　なんだポリア」

「あのさ・・クォシカの時に、凄いモンスターが上に居た・・じゃない？」

Kは、ポリアの言いたい意味がなんとなく解った。

「そう、アレくらいのがウジャウジャいる」

フェレックは、声を高くして。

「おっ・おい、本当に奴等は生きてんのかっぁ？！」

Kは、野菜をつまんで。

「さあ、遺体も回収する仕事の内容だ。　死んでいても、モンスターとして出てきても、戦って倒して回収せにゃ～な。　とにかく、先に行った奴らの生死を調べるのが大前提の話・・・だろ？」

と、野菜を口に放り込む。

全員、今になって仕事に向かう場所の恐ろしさを感じるようになった。

フェレックは、唸る。

「クッソぉ～、サーウェルスの奴っ！！　生きてやがったら、ぶん

殴ってやる」

Kは、大いに頷いて。

「許可する。　思いっきり杖でいいぞ」

と、言ってから。

「全員、聞いてくれ」

皆が、Kを見た。

「戦いの中で傷ついた場合は、決して無理はするな。　直ぐに僧侶の手当てを受けろ。　全員が、皆をチームと思って行動する事。尚、大怪我をして、途中で祠に残さなければならない場合には、誰かを一緒に残す。　それは、実力ではなく、個々に相手を決め合ってもいい。　薬や、持ち物の効能の復唱をするから。　再度確認してくれ」

と、Kは、薬の確認をする。

しかし、ゲイラーの周りでは、もう皆がチームと成り始めているのか。　ゲイラーのチームのセレイドが、フェレックのチームのハクレイに残るのを頼んでいたり。　ポリアに、ダグラスが残る役を買ってやったりと、纏まりが結束に変わりつつある。　ゲイラーは、自分の周りを見て・・・。

（これがリーダーか・・・俺には無理・・・かな・・・）

ゲイラーは、Kに対して尊敬の念さえ感じていた。

そんなゲイラーの元に、システィアナが来て。

「ゲ～イラ～さん」

「おお、システィ、どうした？」

「わたしがぁ～けがしたら～ゲイラ～さんが、のこってくれますかあ～？」

ゲイラーは、直立して敬礼し。

「はぁっ、ゲイラー残りますっぅ」

フェレックは、立ったゲイラーでKが見えず。

「デケ～の座れっつ～のォっ」

マルヴェリータは、ポリアに。

「残ってくれる？」

ポリアも、

「お互いさまよ。　どうせ、足引っ張るの私達なんだもん」

「だわね」

ボンドスが、イルガに。

「アンタ、俺の時、残ってくれるか？」

イルガは、Kがいるから安心できる。

「いいぞ」

ボンドスも。

「アンタの時は、俺が残る」

「心得た」

復唱を終えたKは、宿の旦那に合図して。

「さ、明日からは気が抜けない。しっかり食べて、しっかり寝てくれ」

こうして、夜の食事が始まった。

なんだかんだいっても、やはり冒険を求めた者同士、話に花も咲けば色んな話が飛び交った。

星が深ける夜の空に輝きを増し始め、頃合を見て全員が薬膳のお茶をシメにして眠りについた。

いよいよ、森に入るときが迫った。

１２村にて。　Ｋの存在感は・・・煌く星のように（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

前の十一話と、今回の十二話は、続きだったのですが。　どうも長くなりそうだったので、分けました＾＾

いよいよ、十三話より森に突入いたします＾＾

楽しみにしていてください＾＾

13、デビルフォレスト

13、デビルフォレスト

朝、東の空に太陽が大分に見えてから、全員が起きた。

「おはよう、ポリア」

「おはよう、ダグラス。　今日から、頼むわよ」

「任せとけ」

食堂に来た面々が、お互いで挨拶をしている。　朝食になり、冒険者達は、お互いで気のついた者に水を汲み合う。　これは、冒険者達の“杯交わし”で、滅多にやらない行為だ。

さて、Kは、黙って食事をしている・・・。　その横で。

「お前と組むなんざ～何年ぶりか。　死ぬときは一人で逝けよ」

と、ゲイラー。　言われたフェレックは、鼻先で笑い。

「ケッ、図体ばかりデカくても、剣の腕は進歩してんのか？　お前が殺されたなら、涙なしで語ってやるぜ」

「口は、変わんね～な」

「そっちこそ」

この二人、駆け出しの頃に一緒のチームだったのだ。　しかし、フェレックとゲイラーの冒険者としての姿勢の違いが1ヶ月で表面化して、チームが決裂した。

今もこの二人には、お互いで歩み寄らない姿勢が見受けられた。

一方、ダグラスやポリア達は殆ど全員から水を受けて、また返している。　コミュニケーションを取る気構えは、確かなようだ。

さて、Kが食事を終えた頃を見計らかって

「よし、準備してくれ。　直ぐに出立する」

全員が、直ぐに部屋に帰り、支度をして出てきた。

Kですら、背負う袋が重みを見せて膨らんでいる。　魔術師の面々には、ちょっと重い荷物である。　Kや心得のある者は、ベルトにサイドポケットなどを着けて、重さのバランスを上手く均等化するのだ。

村の外れから、森に続く山道へとKが誘導して行く。　森に囲まれた野道の入り口で止まり。　Kは、後ろの全員に言った。

「これから隊列を組む。　魔法遣いは、中心に居てくれ。　今日は、魔法遣いの前面の魔法使用は避ける。　敵の撃退は、全て肉弾戦を中心とする」

と、人員配置を行った。

ポリアは、ダグラスと、マルヴェリータやマクムス達の右に。

ゲイラーとフェレックのチームの細剣士コールドと左に。

最後尾の後ろには、イルガ・ボンドスにフェレックのチームの学者イクシオがついて。

Kの後ろには、フェレックのチームにて、全く口の利かないヘルダーと、大型棍棒を持つデーベとハンマーを操る神官戦士の紅いローブのセレイドが。

弓遣いのレックが、

「俺は？」

Kは、頷いて。

「魔法遣いと真ん中に、意味はいずれ解る」

レックは、頷いて文句も無く従う。

Kは、移動が終わると全員を見て。

「いいか。　人数が多い分、狭い道は窮屈になる。　また、森の奥に入れば、もう道は無い。　近くに居る相手は、絶えず目で確認しておけ。　森に入る」

Kを先頭に、森に入った。　軽い雑談を交える皆の行く道が、最初

はやや間隔の広い道であったのに。　野道が次第に獣道に変わって行く。　周りは、最初は林のように木々に空間が広く周りを見渡せたが。　徐々に空間は狭まり、蔦や蔓などが密集した森の木々を縛りあい、鬱蒼とした密林地帯に変わった。

「妙に涼しいな・・・」

レックは、元は狩人として森に暮らしていたとか。　陽が出ているのに、風も無くしてヒンヤリしているのが不気味に見えた。

ポリアが周りを見ながら、全く喋らない自分と似た背のヘルダーの横に居て。

「武器、持たないのね」

と。

ヘルダーは、手にも腰にも武器らしい物を持っていなかった。　耳が隠れる程の髪に、細い眼。　口は開かないし、のっぺり顔の細身の男。　これが、ヘルダーの印象である。　服は、腰から下の前後の前掛けが付いている繋ぎのような黒い全身服で、厚手の物だ。胸には、鋼鉄の細いチェーンで作られた胸当てを。　背筋がピッシッとして、重い荷物にも全く動じていない。

「・・・」

拳を見せるヘルダー。

ヘルダーの横から、棘の付いた鉄の棍棒を持ったデーベが。

「ヘルダーは、格闘術の使い手だ。　戦いになれば、得物が解る」

デーベの持つ黒い鉄の棍棒は、持つ柄の先辺りから太くなり始め、途中から太い男の太股ぐらいに。　長さも一メートル半ぐらいで、太く成り切った真ん中から先の所には、無数のギザギザした棘を持っている。　こんな物で殴られるのは、モンスターでも真っ平御免だろう。　デーベは、若くてごっついアニキみたいな風貌だ。　バンダナを頭に巻いて、Kよりやや高い身長のガッチリした体格である。

ポリアは納得して、

「へぇ～。　格闘遣いは、ケイ以外は初めて見るわ」

ヘルダーは、直ぐにKを見た。　先頭を行く包帯男は、丸で気配も隠さないし格闘のプロとは思わない。　ただ・・・やはり足音がしない。　枝を踏もうが砂利を踏もうが、枯葉を踏んでも出ない。

「・・・・」

ヘルダーは、Kを不思議に思った。

Kが、ポリアに、

「ポリア、その男は“オシ”だ。　口が利けないのさ」

ポリアはヘルダーを見ると、頷くヘルダー。

「だが、武術の腕前はキミより格段に上だ。　いざ戦闘になったら、迷わずにダグラスとヘルダーの間に入れ。　二人が、ポリアに助太

刀に入りやすいようにな」

後ろを見ないで、Kは、淡々と言う。

その言い方は、まだポリアを未熟視しているものだ。　聞いていたフェレックやダグラスは、ポリアの性格からして怒りそうな印象を抱いたのだが。

「はいはい、アタシより強そうだから、そうします～」

ポリアは、以外に素直に返す。

ダグラスが不思議に思って、ポリアに小声で。

「珍しく怒らないな」

ポリアは、笑って。

「ケイのああゆう助言に間違いは無いわ。　第一、私の先走りはみんなの迷惑でしょ？」

ダグラスは、好意を持つ分だけにポリアの気性は理解しているつもりだった。　前なら、怒って意地になっている。

（少し見ない間に、成長しとる・・・リーダーの影響か？）

ダグラスもまた、Kを見た。

だが、これは、マルヴェリータにも同様の事が言える。　以前のマルヴェリータは、尊敬出来る人や信じる人意外に会話を交わす事を

嫌う素振りが有ったが。　今は、キースやハクレイなどが傾ける雑談に、素直に応じている。　見ているフェレックには、信じられない光景だった。

さて、そろそろ太陽が昼に近づいた頃、Kが。

「そろそろ、道が無くなる。　森の中を行くからな。　足元には気をつけろ」

Kは、そのうちに獣道を外れて森の中へ。

背の高い針葉樹林が多く。　倒木や、傾いた木々が見受けられる。　上に伸びた背の高い木々が日差しを遮り、奇妙に薄暗い。　丸で、どんよりと曇った日の朝方のように。

「すんげ～暗いな」

ゲイラーの方にいるコールドが言う。　碧い眼の中年オヤジのような風貌で、上半身には鉄の鎧を着ている男だ。　不思議なのは、右の腰には細剣を、左にはポリアやダグラスと同じ中剣を佩いている事だ。

後ろでは、テンガロンハットに皮のベストを着て、左の腰に棘付きの金属鉄線の鞭をぶら下げるイクシオも同様の事を。

「不気味な暗さだな・・・」

Kは、歩きながら上を指差して。

「この辺一帯は、“マクシムチンパンジー”っていう動物の縄張り

だ。　奴等は、寝る時に木の上の枝を結んだり、折り重ねてベットを作る。　だから、枝が密集して光が来なくなる。　そして、ここは奴等の狩場でもある」

全員が、ハッとして辺りを見る。　すると少し離れた所で、“ボオオ～”と云う唸り声が。

ポリアは、警戒しつつ。

「ケイ、狩りって・・・人間？」

「ま、含むな。　腹が減ってれば」

どんどん森の間を歩いて行くに従って、“ボオオ～”という唸り声は数を増して、どんどん膨張するようなイメージを受ける。

「なんか・・数が増えてないか？　声の・・・」

コールドが言うのに対して。　Kは、上を見て。

「随分向こうも警戒して数を集めてるな～。　そろそろ襲ってきてもいい頃なんだが」

「戦いか？」

ゲイラーが、緊張の見える顔で聞いた。

「ああ・・・。　でも、襲って来る気配が無い。　面倒臭い事考えてるかな？」

「“面倒臭い”？」

「奴等、群れを作るんだがな。　かなり腹が減ってる上に相手が強い見ると。　他の群れや、大型猿の“イビルコング”を呼びやがる。“マクシムチンパンジー”は、体長５０センチぐらいだが。“イビルコング”は、一メートル近い大型の肉食サルだ」

「そりゃ面倒だ」

ポリアは、普通に。

「ムカツク相手だけど、協力してるのね」

すると、Kは、軽く笑って。

「ハハッ、とんでもない」

「え？」

「マクシムチンパンジーは、何時もは襲われて食われる側なんだが。態と声でコングを呼び寄せて相手を殺させるのさ。　お零れに預かる為にな」

「うわ、汚ァ～い」

「生死の世界だからな～」

Kは、そこで言うのを止めて立ち止まった。

「どうした？」

聞くダグラスに、

「どうやら、コングのお出ましだ」

Kが、前を指差す。

全員に緊張が走った。

―ウウウウオオオ～～～～ゥ！！！―

丸で、凶暴な人の声のような吼え声で、暗がりの中にこげ茶色の毛をしたゴリラが数匹現れた。　口元が犬のように突き出て、太い腕に短い足。　だが、身体の高さはポリアの腰ぐらいは完全にある。

明らかにゴリラの様な姿だが、その瞳は狂った人の様で、見ていて背筋に悪寒が走る。

Kは、鋭い口調で。

「奴等は、もうモンスターの領域にいるバケモノだ。　魔界の瘴気で生態が変わってる。　手加減は要らない。　倒せ」

「オーケーっ！！！」

「おしゃ！」

ダグラスと、ゲイラーが声を出して応じた。

Kは、すぐさまにリックを見て。

「上に注意しろ、濁った黄色に光る両目がマクシムチンパンジーだ。居るなら、直ぐに射落としてしまえっ」

「承知した」

リックは、素早く弓に矢を番えた。

Kの脇や前で、散開したポリアやダグラスが襲って来たコングと戦い始めた。

「そりゃあああっ」

ダグラスは、素早い剣の振込みでコングを早々と斬り倒し。　ポリアと力争いをしているコングに向かう。

「この・・・」

剣で向かえ撃ったのに、短いが鋭いツメで受け止められて、押し合いになったポリア。

一方で、コング二匹を自分にた向かわせたヘルダーは、サッと腰に両手を回すと、ス～っと何かを取り出した。　持つのは、一本づつの短剣の様な棒・・・だと思った瞬間。　パッとその棒が扇型に開いた。

堕ちていた木の枝の先を短剣（ダガー）で斬って先を尖らせて、投げナイフ代わりにしていたKは。

「ほう、戦扇子（バトルファン）か。　珍しい」

と、言って、上で隙を窺うサルに投げつける。

フェレックが、偉そうに。

「ヘルダーは、その辺の剣士より強いぜ」

と、言った時だ。　イルガの後ろに、“ドサッ”と何かが落ちた。

「ムっ」

イクシオと、コングに向かったイルガは、小刻み動いている動物を見た。

（なんと・・・これが）

濁った乳白色の黄色い眼をして、赤黒い体毛に細く鋭い牙を持った小型のサルがソレだった。

Kとレックは、自分達の頭上に来たサルを打ち落とす。　暗い森の枝に、静かに忍び寄っているのが小型のサルだ。　炯炯と光る黄色い眼が、かなり凶暴な印象を受ける。

ポリアは、ダグラスの加勢を受けて、一気にコングを突き倒した。

「残りはっ」

と、見た先で。　二匹のコングを華麗に動いて喰らい付きをかわし、擦れ違い様にその喉笛を斬り裂いて倒したヘルダーを見た。

「わぁ～お」

と、ダグラスが言い。

「凄い」

ポリアも驚いた。

しかし、やはり豪快なのはゲイラーだ。

「おおおりゃーっ！！！」

気合一閃、コングを真っ二つに切り倒し。　近くに居たコングもなで斬りにして、奥から来ていたコングに向かいつつ。

「まだやるかあああっ！！！！！」

と、咆哮を上げる。

「わっ」

と、近くにいた棍棒を構えていたデーベが驚くほど。　ビリビリっと、威圧を覚える。　足元には、動かなくなったコングが・・・・。

コング達は、それに怯えたのか戸惑った。

Kは、頭上のサルが見えなくなったので、

「ゲイラー、もういい。　無用に殺すな」

ゲイラーは、じりじりと後退するコングを見つつ。

「いいのか？」

「ああ、遣りすぎると必死になって疲れる。　撃退すれば、もう帰りも襲って来ない」

「解った」

倒したコングは、総十体。

Kとレックが打ち落としたサルは、十五匹くらいだ。

Kは、出発を号して。

「もう少しで、川原に行く。　そこで、少し休憩だ」

隊列を直して、出発する。

屍骸を見たフェレックは、Kに。

「おいおい、リーダーさんは前面で戦わないのかよ」

Kは、アッサリと頷く。

「面倒」

ポリアも、続けて。

「こんだけ人数いて、のっけからKに出張られたらこっちが恥だわ。

せめて、森抜けるくらいはKが居なくても行けるぐらいじゃないと」

マルヴェリータも。

「だわね・・・私達が只のお荷物で終始終わるんだもの・・・」

ゲイラーは、意気揚々と、

「任せろ、山でも出番無くしてやるさ」

しかし、レックは違った。　先に行くKを見ながら、

「だが、凄い技術だ・・・あの木の枝でサルを倒すなんて・・」

フェレックは、レックが真剣に言うので、

「そんなモンか？」

「当たり前だ。　じゃ、お前が木の枝を投げて木の上のサルを落としてみろ」

後ろから、ボンドスが。

「確かに、見てて簡単にしてのけてた・・・。　狙いも正確で、急所を確実に突いてある。　そして・・・あんな耐久性の無い枝が、しっかりと刺さってた。　その辺の木に枝を投げて、抜けないぐらいまで刺せる奴が此処に居るか？」

フェレックは、此処まで言われてようやくKの手練を理解し始めた。

マルヴェリータは、フェレックに向かって。

「理解の出来ないフェレックは、確かに頭悪いわよね」

「うグ・・・」

悔しくなったフェレック。　マルヴェリータに言われるのが一番プライドに響く。

その時だ、マクムスが。（チーム行動になったので、氏を外します）

「その辺でいいでしょう。　無駄話も体力を使いますよ」

と、笑って嗜める。

マルヴェリータも、ペロっと舌を出して前を向いた。

イルガは、前の仕事のKも見ているだけに。

「ま、あんな芸当はケイの実力に一片に過ぎぬ」

さて、歩き出す中でダグラスはポリアに。

「ポリア、腕が少し上がったな」

ポリアは、呆れて。

「助けられちゃ意味ないわ。　ソレより」

と、ヘルダーに寄って、

「バトルファンって、初めて見たわ。　凄い切れ味ね」

口の利けないヘルダーは、二度頷いた。

一方、ゲイラーに細剣遣いのコールドは。

「御宅、さすがに凄い手並みだな。　大ザルを一刀両断とは」

ゲイラーは、素直に。

「大剣は攻撃が遅いからな、一撃一撃が勝負なんだ。　次の一撃より、この一撃が全てなんだよ」

初めてのチームの実践は、お互いの力量を推し量るにはまだまだな内容だった。

さて、Kの後を行くこと、半刻（約一時間）程で川のせせらぎが聞こえてきた。

ポリアが、

「水の音がするわ」

と、言えば。

レックが。

「先ほどから、水の匂いがしていた。　川幅は大して大きくないが。

綺麗な水のようだ」

見ても無いのにと、フェレックがレックを見返し。

「ンなこと解るのか？」

「ああ、森に二十歳まで居た。　モンスターに森を襲われるまでは、平穏で水の匂いが何時もしている所に居たんだ」

Kは、横目にレックを見て。

「出身は、スタムスト自治国かい？」

レックは、微笑み頷いた。

「ああ、良く解ったな」

Kは、皆に。

「右手に川原がある。　休憩だ」

と、言ってからレックと並ぶようになって。

「スタムストは、このホーチト王国に北に位置し。　国の左を“魔の温床・ダロダト平原”に面し、南西にマニュエルの森を持つ。昔、大規模なモンスターの暴走が有ったらしいし・・・。　アナタの訛りが、な」

レックは微笑み。

「祖国の証さ。　もう直る物じゃない」

「直す必要ないさ」

Kも、口元を微笑ませる。

日の光が嬉しい程に、川原には明るい日差しが注がれていた。　川幅は三・四メートル程だが、流れている。　大小の小石や岩が転がっている川縁で、昼食の支度に入った。

レックが、火を起こす為に簡易的な竈をゲイラーと作った。

水を金(かな)の柄杓で掬ったポリアは、水が赤いので。

「ケイ、水が赤いわ」

Kは、水を飲みつつ。

「レックに説明して貰え、飲める」

ポリアは、ナイスミドルの紳士狩人を見た。

レックは、頷いて。

「赤いのは、草の成分だ。　ちと渋みがあるがしっかり飲める。少し沸かしてあげよう」

「解ったわ。　じゃ、汲んで持っていくわ」

レックは、ゲイラーの横で、岩に座るKを見て。

「ほんに、良く出来た男だわい」

ゲイラーが。

「リーダーか？」

「ああ。　誰も持たない知識は言うが、誰かが知った知識は任せる。チームのバランスを考えて、ああして交流の機会や接点を持たせてるんだろう。　これがフェレック辺りなら、親の仇を取ったみたいに言い触らすわい」

「な～る。　まだ若そうなのにな～」

レックは、ゲイラーを悪戯っぽく見て。

「負けて居れないな、“ウチ”のリーダー」

「んだ」

そこに、システィアナが遣って来た。

もう、ゲイラーに人権は無い。　敬礼して出迎える。

さて、疲れてきた一行には、いい休憩になっていた。　ま、マルヴェリータがフェレックの自慢話にイライラしていたのは別にして。

Kとマクムスが二人で語り合っていた所に、キーラが遣って来た。

緑色のローブ姿のキーラは、Kの前に立った。

「あ・・あの、少しいいですか・・・」

Kは、キーラを見て頷いた。

「座りな」

右の岩の上を薦めたKに、頷いたキーラは岩に凭れて。

「ありがとう御座います」

「どうした?」

キーラは、そう言われて躊躇いの表情を見せる。

「あ・・あの・・僕・・怖いです。　正直・・・フェレックさんみたいに・・・戦えないかもしれません。　もし・・南の祠に誰か居たら・・・僕、残ります」

Kは、マクムスとチラリと見合った。

マクムスは、仕方の無い事だと思った。

「なら、仕方ありませんね。　無理強いはしません」

だが、Kは。

「言う意味は解った。　だが、誰を残すかは、その時に決める」

キーラは、怪訝にKを見た。

Kは、水の入った金のカップを手にして、

「大怪我してる奴等がいて、魔術師残してどうするんだ？　それなら、システィアナみたいな僧侶を残す。　キミが残るべきか、否かは。　その現場の判断だ。　言ったはずだ、この全員がチームだと」

キーラは、自分の判断が勝手な判断だと悟った。

「す・・すいません」

Kは、頷いて。

「解ればいい。　それから、もう一つ」

「はい？」

「フェレックを手本にするな。　あんなのは、魔術師のクソだ」

キーラも、マクムスもKを見て驚いた。

キーラは、さも凄い様に。

「でも、フェレックさんは凄い魔力ですよ。　それに、高位の魔法も・・」

だがKは、鼻先で笑った。

「はっ、あんなの凄くもなんともない。　あれぐらいの魔術師なんか、世界にゴロゴロしてる。　第一、魔力だって、マルヴェリータやシスティアナの方が潜在的に上だぜ。　ただ、ああして長年遣っ

てるから慣れて、魔力がまあまあ高いから扱えてるだけ。　普通、あれぐらいの魔力あるなら、もう世界に渡り出てるさ」

「で・でも・・もう・・世界に」

キーラは、そろそろ世界に出ようとしているフェレックは、順調のように思える。

Kは、マルヴェリータの自慢話をしているフェレックを遠くに見て。

「世界に出るのに、もう十年掛かってるんだろう？　ゲイラーは、あれはいいリーダーに恵まれないだけだが、フェレックは違う。仕事の対する姿勢も、魔法をどう扱うかも、眼に見えない所で判断されてるんだ」

キーラは、良く解らなかった。

「ゲイラーさんも、フェレックさんも、違いがあるんでしょうか？」

Kは、キッパリと。

「対極だね」

聞いていたマクムスが、Kに。

「そんなに違うんでしょうか？」

「ああ。　ゲイラーは、長く流れながらあっちこっちのチームに入っていた。　それに比べて、聞く処のフェレックは、チームのリーダーであり続けている。　今回でもう４度目のチームと云うんだか

ら、奴がチームの決裂を生んでる元凶・本体だろう。　自分がチーム成長を妨げてるんだ。　こんなに滑稽な話も少ないぜ」

「なるほど・・・それは確かに違いがハッキリしていますな」

「フェレックの魔法がどんなものかは、見てみないとなんとも言えないが。　あの魔力をしてこれだけ時間が掛かって居る所を見る限り、今のままじゃもう頭打ちだろう。　マルヴェリータが、そのうち一番解るはずだ」

Kは、そう言うと腰を上げた。

「そろそろ出立だ。　ハンターが偵察隊を向けてきたしな」

全員、パッと立ち上がって、身構えた。

「相手は何所っ？」

と、ポリアが聞く。

Kは、荷物を背負いつつ。

「川の向こうだ。　森の中に“ストレイフ・ウルフ”の斥候が来た。先を急いで、迎撃出来る所に出よう」

ゲイラーは、川の向こうの森を見て、

「戦わないのか？」

Kは、対岸の川原を見もしない。

「斥候は沢山いる。　道に反れて倒しに行くほど時間は無いし、無駄。　逆に距離を取って向こうが逃げる。　群れの本体に誘い込む為にな」

弓を取って矢を番えたレックは、その言葉に構えを解いた。

「ふう、もう出発かよ、って・・・あ」

フェレックがため息。

マルヴェリータは、ハクレイやシスティアナと先に行ってしまった。

さて、一同は森に戻る。

森の中は、更に倒木などが増え、もう避けては通れない。　だから、乗り越えるしかない。　凄い湿気が辺りを包み、倒れた木の根や、枝などが露を滴らせているし。　歩く地面も、枯れ草とコケ生して柔らかい。

「なんだよこの道はっ！！！」

フェレックが、文句を。

レックが、

「恐らく、先ほどの川の本流は、この下の浅い所を細かく分かれて通っているのだろう。　地面が水分を多く含み過ぎるから、大きな木が根腐れをおこして倒れてしまうのだろう」

と、説明してやると。

「んなことどうでもいいっ！！！　はあ、はあ、全く・・魔法遣いに・・こんな体力を使わせやがってっ！！！」

と、文句ばかり。

マルヴェリータは、横で白い手袋を汚して進むシスティアナやハクレイにマクムスを見る中で。

「うるさいわね・・じゃ帰ればっ」

と、怒った。

「う〝」

余りの迫力に、フェレックもビックリ。　Kと行動を共にしているマルヴェリータは、こう強くなった気がする。

「はぁ、はぁ・・」

システィアナも、大粒の汗を流して行く。

ゲイラーは、負ぶって遣りたいが、

「みなさんも～おんなじです～」

と、さっき言われたから、もう言えない。

（大汗のシスティ・・・可愛い・・負ぶってあげたい・・・ハッ！

！・・・システィを・・・負んぶ・・・？　そしたら・・・あの・・可愛らしい胸が・・・おお俺の背中に・・・）

ゲイラーが、違う方向にフラフラと反れて行きそうで。

「おういっ！！！」

何事かと、Kが声掛ければ。

「あ？」

ゲイラーが、Kの方を向いて。

「あ、そっちか」

Kは、戻って来たゲイラーを見て、

「お前さん、何で鼻の下が伸びてるんだ？」

ゲイラーは、ハッとして。

「な、何を言ってんだっ、い・イクぞ」

おめでたい方だ。　鼻血が出てないだけマシかもしれん。

さて、太陽の傾きが如実に夕方だと解る頃、森の切れ間に有る丘のような野原に出た。　森と森の間が、百メートルも無い。

「うわわ、川だ」

ダグラスが、左手に“ゴウゴウ”と水の流れる音を見に行ったら、断崖絶壁の下はさっきの川の三倍は激しい流れの川だった。

Kは、休憩を言い渡し。　近くの岩に寄り掛かる。

「これから、ここで“ストレイフ・ウルフ”を待つ。　向こうも、動かない我々に向かって来るだろう」

やはり、体力の差か、ハクレイやシスティアナなどは、もう肩で息をするほどに疲れていた。　座って休む者も多いし。　フェレックなどはゴロンと横になっていた。

レックは、森の向こうを見て。

「何か、嫌な殺気を覚える・・・獲物を窺う獣の気配だ・・」

ゲイラーは、Kに。

「その狼は、モンスターなのか？」

「ああ。　元々は、魔界との結びつきの強い処に居たモンスターの成れの果てだ。　一匹の“シルバーデビル”と呼ばれるボスと、“ファイター”と云う戦闘部隊と、“シーカー”と呼ばれる斥候部隊からなる群れを作っている」

フェレックは、身を起こして水を飲みつつ。

「数は？」

「百から二百くらいか」

「ぶっ！！！　・・・おい！！！！　そんなに相手出来るかっ！！！」

マルヴェリータも、困った顔になって。

「凄い数ね」

Kは、以外にも短絡的に頷く。

「ま～な」

マクムスは、疲れる皆を見てから。

「全滅まで、やるのですか？」

「いや、二十か三十で大丈夫。　奴等は、何よりも嫌うのが、群れの絶対数が減る事。　何故なら、奴等もこの森や山では頂点に君臨するバケモノの餌に過ぎない。　群れて勢力を守っているから、全滅までは決して遣らない。　短時間でシーカーとファイターを倒してしまえば、シルバーデビルは出てこないさ」

イルガは、険しい顔つきで。

「大きさは？」

「シーカーが一メートルぐらい、ファイターは三メートル近くかな。　シルバーデビルに居たっては、七・八メートルから、それ以上か」

「でっ・デカイな・・・」

学者のイクシオは、更に興味が湧いて。

「ボスは倒さなくていいのか？」

「一回撃退してしまえば、帰りも襲って来ない。　この森の奴等は、山のモンスターの餌的存在だから、一度でもやられた相手には向かって来ない。　寧ろ、ボスを倒すと散り散りに為って統率を失い凶暴化する」

レックは、頷いて。

「なるほど、習性が故に対処も利くという処か・・・全部を相手にするのは流石にの・・」

すると、Kは。

「ま～そんな処だな。　だが、二百を相手にするならやり方を変えるだけ。　別に、今回は普通でやるだけさ」

と、森と森の中間の所に歩いて行く。

「どうした？」

座って水を飲んでいたコールドが、立ち上がる。

Kは、先の森を見て、

「集まってきた、ボスも居る。　ざっと、今は５０くらいか・・・そろそろ来るな」

Kの声に、全員が森を見る。

Kは、森を不敵な笑みの口元にして見ながら。

「来るぞ、さあ・・・今日の大一番だぜ」

ポリアも、ヘルダーも身構えた。

Kが、動く森の気配を察知し。

「ストレイフ・ウルフは、通称が“森の門番”。　コイツ等潰せないなら森に入る資格は無いぜ。　魔法遣いは、俺の後ろに。　イクシオと、セレイドは、魔法遣いの後ろを守れ。　三匹回り込んでる。出てきたら倒せ。　他は、俺より二十歩以上前で迎え撃て。　レックは、俺と後方支援だ。　さ、くるぞっ！！」

鋭く、早く、聴き易いトーンで言うK。

ポリア達が前衛に走り込んだ時だ、前の森の中から鈍く青白い光が見えた。

「来いっ！！」

ダグラスの剣を抜いて言う一言で、全員が武器を構えた。

ーワオオオーーーーンンー

森より、六匹の灰色の毛をした狼が飛び出して来たのであった。

13、デビルフォレスト（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

遂に、森の突入編です＾＾

いやいや、天気の悪い日には偏頭痛に悩まされて、ちょっとグロッキーしてます＾＾；

いよいよ、後半編の中盤に来ました。＾＾

お楽しみ頂ければ、うれしいです＾＾

でわ、読んでいただいてありがとうございます＾＾

１４、森から山へ。　激闘の幕開け。

１４、森から山へ。　激闘の幕開け。

「うおおおらァァァっ！！！」

ゲイラーの大剣が唸りを上げて、シーカーを斬り倒した。

両サイドには、ボンドスと、デーベが居る。

ポリアは、ダグラスとヘルダーの間に。

イルガは、ボンドスと、コールドの間に。

灰色の体毛に、太やかな尻尾。　青白い凶暴な瞳で、二十センチは伸びた長い犬歯。　シーカーと云われる“ストレイフ・ウルフ”の斥候は、次々と森から現れる。

「それっ、だああっ！！」

イルガの槍が、コールドに斬り付けられて、避けまわるシーカーを倒した。

「サンキュー」

コールドは、言って次のシーカーに向かう。

乱戦の中で、ピュっと走った弓矢が、ポリアと戦うシーカーの背中に刺さって動きを止めた所に、

「たああっ！！」

ポリアが踏み込んで斬りかかった。

倒れたシーカーを見てから、

「助かるわっ！！」

と、声を。

その前に、三匹のシーカーが飛び出してきた。

「ハッ」

ポリアが驚いた時、“ドン”と鈍い衝撃音がして、シーカーの一匹がナイフを眉間に刺して森に戻し飛ばされた。

「礼は後だっ！！　前を見ていろっ！！！！」

と、Kの声。

ポリアは、一匹のシーカーに向かう。

もう一匹は、ヘルダーが向かった。

Kの後ろでは、背後に回りこんで来たシーカー一匹を、イクシオと、セレイドが迎え撃っている。

「そら、そら、そらァっ」

鞭で、動きを制して、本気の振込みで右足を絡め取るイクシオ。

「フン！！！」

セレイドが、鉄の大型ハンマーで薙ぎ払った。　シーカーは、森に飛ばされた。

シーカーが、二十匹以上は倒された時。　一匹のシーカーが、

―ウオォォォーーーーーーーーッ―

と、遠吠えを上げる。

それを見たKが、

「さぁ、ファイターが来るぞっ！」

シーカーの生き残りが、森に逃げて行く。

―ガオオオオーーーーーン！！！―

威圧感の有る雄たけびと共に、森の茂みを破り割るような勢いで大きな黒い塊が飛び出して来る。

「うわっ」

「デカいっ」

「マジだ」

前線の者から声が上がった。

「・・・こ・・怖い・・・」

対峙したポリアが、ファイターを見て漏らす。　大きな身体と凶暴な瞳に恐ろしさが先行してしまった。

黒く汚い体毛は色濃く、身体の高さがポリアの胸部と近い。　ギラギラした瞳は異常に残虐性が強く。　犬歯の長さは、五十センチを超える。

ピュッと、レックの弓矢が走って体に刺さったが、突き刺さらないまま地面に落ちる。

「硬いな」

レックは、目を細めて呟いた。

現れたファイターは、四匹。

ゲイラーが、一匹を引き受けつつ。

「組んで戦えっ」

ダグラスが、ポリアに寄り、ヘルダーが一匹。　ボンドスは、ゲイラーを気にしつつコールドとイルガに寄った。　デーベは、ゲイラーとヘルダーの間で、二人の間合いに合わせてファイターと牽制す

る。

「どりゃあああ！！！　そらあああっ！！！」

ゲイラーは、流石に恐怖は克服しているからか。　直ぐに斬りかかり、一刀避けられても、かわしたファイターの方へ更に剣を薙ぎ払う。

ヘルダーも、ポリアに二匹を近くさせない様に、我先に躍り掛かり。
ファイターを森手前に押し込んで距離を離し、一気に肉薄して戦扇子の先で耳を斬った。

「耳と、眼と、口と、喉は柔らかい」

と、K。　レックに助言して、イルガの前のファイターに投げナイフを投げつけた。

イルガと、ボンドスの間をナイフが走り、ファイターの眉間に“ドン”と突き刺さる。

―ギャオンっ！！！！―

ファイターの身体が、その衝撃で後ろにもんどりうって反って行く。

ハッとして驚くボンドスやイルガ達三人に、Kが。

「次々来るぞっ！！　気を抜くなぁっ！！！　更に四匹だっ！！」

また、ポリア、ゲイラー、イルガ達の前にファイターが四匹現れた。

「負けてられっかあああああっ！！！！」

ボンドスが、両手にした片手斧二振りでファイターに向かう。　イルガとコールドも続いた。

「そらっ、たあああああっ！！！」

ダグラスが、ポリアに気の取られたファイターの喉笛を二振りで切断した。

ポリアは、全力の突き込みで、

「えいいいい！！！」

と、ファイターの眉間を突いた。　ファイターの瞳の焦点が、合わなくなった。

その時、

「危ないぞっ！！　ポリア殿っ」

と、声が。

「ハッ」

ポリアの左に、ファイターが回り込んでいたのだ。

レックの放った矢が、そのファイターの耳に刺さった為に、ポリアが剣を引き抜く時間は出来たが。　気にせずに襲って来たファイターだった。

「うわああっ！！」

ポリアは、目の前に鋭い牙が襲って来るように見えて、無我夢中で剣で受け止めた。

「うぐ・・」

呻くポリア。

「ポリアっ！！！」

マルヴェリータと、ダグラスの声が交錯する。

鋭い牙で噛み付いて来たファイターの長い牙を受け止めたポリアだったが、下あごの犬歯に腕を薄く斬られた。　ポリアの顔の正面には、生臭いファイターの口の中が見えている。

ダグラスが助けようとした時、前に新たなファイターが飛び出して来て。　行く手を塞がれた。

「どけえええええっ！！！！！！！」

ダグラスが、何振り構わずに斬り込んだ時。

「ハッ」

イルガも、このときにポリアを見た。

―ウガアアア！！！―

ファイターが、一気に暴れて力でポリアを押し倒そうと伸び上がった時。

（殺られるっ！！！！）

と、思ったポリア。

だが、“ドスっ”っと自分にも伝わる程の衝撃と、鈍い音がした。

「え？」

ポリアに圧し掛かろうと伸び上がったファイターの力と体重が、スゥ～っと抜けて行き。　ファイターの身体がポリアの右側へと流れて行く。　ポリアも、崩された体勢のままに尻餅を着く様に倒れてしまう。

「あ・・・・」

ポリアが、ファイターの頭部を確認できた時、側頭部にナイフが刺さっていた。

ファイターは、その一撃で絶命したのだ。

魔法遣い一同は、Ｋを見た。

「・・・」

包帯男は、もうダグラスやゲイラーに視線を移している。

ポリアは、地面に崩れた時にKを見たが。

（なんて強さなのよっ！！！）

と、自分の不甲斐無さに悔しくて、直ぐに立ち上がり。　ダグラスの戦っているファイターに向かって、剣を握り直して走り込んだ。

Kは、レックの横で、ポリアを見ずして。

「フッ、ようやく恐怖に勝ったかな？」

と、呟いた。

（態とやってるっ？）

マルヴェリータは、Kが態とギリギリで助けていると解った。　見ていてKは、余裕すら持って戦いを監視している。

「ゲイラーっ、ヘルダーっ、ボンドスっ、前から一匹づつ来るっ」

Kは、声で次のファイターの出現を言い。　戦況を見ているのだ。

正直な話。　魔法遣い達は、Kも見ているのだが、ナイフを投げる一瞬は素早すぎて見えない。

そして、ゲイラーが三匹目のファイターに向かった。　流石に、相手に攻撃のチャンスを与えずに、デーベの動きも把握して大剣の圧力で斬り倒す。　更に噛み付かれても、その長い犬歯の間に態と剣を挟ませて、自慢の怪力で振り飛ばすのだ。

デーベは、ゲイラーとヘルダー間で、二人の補助に回りながら、ファイターの狙いを集中させない。　時には、注意の削がれたファイターの身体に棍棒を振るい込む。

ヘルダーも、新たに現れた三匹目のファイターに向かう。　ヘルダーは、ゲイラーとは対照的。　素早く動いて、ファイターの照準から外れて、足や喉を斬り裂いて行く。　丸で、ヘルダーが踊っているかのようにして、ファイターは倒れていくのだ。

この時だ。

「うごおおおっ？！！！」

「だああっ？！！！」

「げっ？！！」

いきなり、驚きの声が上がる。　森から現れて突進してきたファイターに不意を突かれたボンドス・イルガ・コールドは、倒していないファイターから離れたり、飛び退いたり。　Ｋの声が、動き回っていて聞こえていなかったのだ。

所が、この飛び出したファイターがそのまま魔法遣い達の方に、向きを変えた。

「あっ」

「まずいっ」

「ちぃぃっ！！」

三人が、驚いて動き出した。

しかしだった。

Kが、なんと低い大勢に踏み込んでアンダースロウの投げ方でもってナイフを投げた。

ポリアに加勢して矢を放った後、ゲイラーに加勢したリックは、次の矢を背中の矢筒から抜く時に、その不思議な行動のKを見た。

「？」

もう、背後がら来たシーカーを倒しきったセレイドもイクシオも、マルヴェリータやシスティアナ達と共にKの行動を見ていた。二人も、Kの前に出ようかと動き始めたのだが・・・。

地面すれすれに横の回転で飛んで行ったナイフは、Kに向かって走り始めたファイターの顔下まできた所で、なんとクイッと天に向けて飛び上がったではないか。

「え〝っ？」

「何ィィっ」

誰もが、息を呑んだ。

走り始めたファイターの身体は、直ぐに歩くように止まる・・・・。

そして、徐に顔は下に落ち、身体は左に傾いて倒れた。

「ダ・・・ダンシング・・・・・ダガーの・・妙技！！」

マクムスは、Kを見て鳥肌が湧き立つ。　畏怖は隠せ無い・・神業に感歎したのだ。

ボンドスが、いきなり現れたファイターが倒されたのを見て。

「コイツに掛かれっ！！！」

と、倒していないファイターに襲い掛かった。

「おううっ！！！」

イルガも、応じて突進に入った。

コールドは、一人で残ったファイターを牽制していたが、二人の声に勇躍してファイターに斬りかかった。

「このおおおーーーっ！！！」

ポリアの全力の斬り抜けが、ダグラスに襲い掛かろうと伸び上がったファイターの心臓を斬り裂いて倒し。

「ナイスっ、ポリアっ！！」

ダグラスの声が上がる。

ゲイラーが突進からの斬り上げで、ファイターを斬り裂いて森に飛ばしてしまえば。　ヘルダーの両手の扇子がファイターを地に沈め。

ボンドス・イルガ・コールドの三人が、ファイターを倒した。
それ以上、ファイターは出てこない。
Kは、森の中の気配を探って。
「どうやら、諦めたようだ。　一番デカイ気配が遠ざかって行く」
との声に、ポリアはドッと緊張から開放されて、膝をクタクタと崩した。
「はぁ、はぁ、はぁ・・・終わった・・・・」
ポリアは、死に物狂いの気持ちだった。
Kは、システィアナを見て。
「怪我は直ぐに塞いで貰え。　黴菌が入る」
マクムス・システィアナ・ハクレイにセレイドが、戦った者達の所に行った。
見ているKに、フェレックが近寄った。
「お・お前・・何者なんだ？　ダンシング・ダガーなんて、なんで扱えるんだっ？」
Kは、詰まらなそうにフェレックを見返すと。
「お前より、努力してるから」

と。

「大丈夫？　ポリア～？」

魔法を遣う時に成ると、妙に口調がハッキリするシスティアナは、ポリアの怪我を治す。

「あ・・ありがとう・・システィ・・」

腕、顔、太股に切り傷があり、長袖、長ズボンが裂けていた。

「ポリア、随分と気合が入ったなぁ～」

ダグラスが、言う。

「はぁ、・・・・まあね・・」

ポリアは、Kを見た。　包帯男は、フェレックからも離れて、のんびりと荷物の前に居る。

（凄かった・・・あのナイフの衝撃・・・）

戦っていた誰もが、Kを見ずには居られなかった。

「・・・」

ヘルダーが、使えるナイフを抜いて行こうとしたが。　どれも安物で、深深と刺さっていながら衝撃で壊れていた。　だが、幾ら安物であっても、成りに耐久性はあるのだ。　突き刺さって壊れるのは、

ファイターの皮膚が硬い為に、ナイフが強烈な衝撃でぶつかった証。

ヘルダーに、ゲイラーが寄って。

「どうやら、リーダーの能力の片鱗が現れたかな？」

ヘルダーは、抜けないナイフを持って、頷いた。

近寄ってきたマクムスが、二人の怪我を診ながらに。

「最後の一匹を倒す時、ダンシング・ダガーの技を・・・並の手練ではありませんね」

ゲイラーは、ポカーンとして。

「・・あの・・・、投げるダガーが生きてるみたいに飛び上がる方向を変えるという？」

マクムスも、今だ見ていて信じられないといった表情だ。

「ええ。　私が扱える者の噂を聞いたのは、もう三十年以上前の事です。　大盗賊の頭だった女性が使えたと聞きましたが・・・。まさか、この歳で語り草の妙技を眼にするとは・・・世界は広いですな～。　さ、傷はありませんかな？」

Kは、少し皆が休む時間を無言で設けていた。

ダグラスや、ポリアは、改めて近づいてきたレックに挨拶とお礼を言いに。

紳士のレックは、微笑んで。

「いやいや、無事でなによりだ。　しかし、森でこんなに激戦とはな。　明日はどうなるやら、少し怖いな」

ポリアは、Kを見て。

「多分、益々ケイが凄くなりますよ。　まだ、前線に来てないし・・・」

レックは、包帯男を見てから、

「彼も剣術が？」

ポリアは、頷いて。

「斡旋所で、フェレックが斬られそうになったのを見たでしょ？」

「ああ」

「ケイは、剣も格闘も、魔法も一部使えます」

「ふむ・・・なんと万能な・・・」

Kは、頃合だと思い。　夕日に染まる丘の中。

「そろそろ出発しよう。　あと少しで、祠だ」

皆が、疲れながらも準備した。

さて、森に入って直ぐになだらかな下りになる。　倒木などが無くなり、木々の間隔も幾分か広がった。　だが、祠手前で、急角度の上り坂に変わって、K以外は這って歩くようになる。

ポリアは、余りの角度に驚いた。

「ケ・ケイっ、この道って、あり～？！！」

包帯男は、頷いて。

「ありあり、上れば祠」

「お坂さんです～こ～んなきゅうきゅうなのは～はじめてですぅ～」

ゼ～ハ～言いながら暢気なシスティアナに、ポリアは睨んで。

「ピクニックじゃね～んだよぉぉ～！！！」

左のゲイラーは、大汗掻いてるのに、顔が幸せそうだ。

コールドは、場違いな笑みの大男を見て。

（恋は盲目か・・・いや、アホか・・・）

ようやく上った時は、もう星が空に輝き。　西の空に赤い色が残るだけだった。

暗くなった中、ゼーハー言って、全員が上った上の林の中で空気を貪る。

Kは、

「正面に、祠がある。　どれ」

と、ズボンのポケットから何かを出した。

ダグラスが、横に居て。

「今度は、な・なんだ?」

Kは、小さく何かを呟くと・・・・。

「おあっ、な・なんだよっ!!」

いきなり、Kの手の中が光り始めた。

フェレックが、それを見て。

「あ・明かりの魔法・・・」

Kは、手の平を開くと。

「明かりの魔法を閉じ込めた水晶の粒だ。　一つ、持っててくれ」

Kは、ダグラスにマメ粒くらいの光る水晶の粒を渡した。　そして、Kは、全員を見て。

「これから、虫除けを祠で焚くから、合図したら全員入って匂いを服に付けてくれ。　モンスターは入れないが、吸血生物は別話だ」

Kは、そう言うと前に歩いて行った。　ダグラスが、手の中の明かりで辺りを照らせば、切り立った崖の壁があり、そこにぽっかりと洞窟の入り口がある。

「あれが、祠か・・・」

呟くゲイラーに、マクムスが。

「素晴らしい力だ。　フィリアーナ様の息吹を感じるようです」

ゲイラーは、マクムスを見てから、また祠を見て。

「ふ～ん、そうなのかね～」

すると、システィアナが横に来て。

「ど～くつのなかから～、やさしい～ちからがあふれてますぅ～。
フィリア～ナ様の、むねにいだかれるかんじですぅ～」

ゲイラーは、システィアナを見て。

「む・・胸に・・い・抱かれる・・・で～ありますか？」

と、敬礼。

「そ～ですぅ～」

ゲイラー、システィアナの胸を見て固まっている。

ポリアは、その光景を見て、

「あのバカデカ男、モンスターの餌にしたろうか」

マルヴェリータは、呆れて。

「男も色々ねぇ～」

ダグラスは、祠からモクモクと煙が上がってきたのを見て。

「お、どうやら焚いたみたいだな。　行こう」

と、洞窟に向かう。

フェレックは、虫除けの煙の匂いくらいは知っている。

「ケ、なんだってあんな煙たいのを身体に浴びないといけねぇんだよ」

と。

Kの声が、洞窟から。

「もういいぞ。　少し息苦しいが、我慢しろ」

洞窟に近寄った一行で、最初に入ったのはマルヴェリータなど、女性三人。

マルヴェリータが、

「ケイの言う事だから仕方無いわね。　帰ったら、思いっきり温泉浸かりたいわ」

と、入り。

ポリアも、

「だわね。　ま、虫に刺されて死ぬよりマシだわ」

と。

システィアナに居たっては。

「けむけむもくもくしてます～。　くんせいさんができます～」

と、喜んで入る始末。

ダグラスは、流石にゲイラーを見て。

「アレが良い訳？」

しかし、ゲイラーは、頷いて。

「なんて純真なんだ・・・やはり女神・・・」

と、入って行く。

ダグラスは、ボンドスやイルガと見合って、

「盲目？」

ボンドスは、呆れて。

「只のバカ」

イルガは、

「似合い過ぎじゃわい」

と、三人揃って中に。

マクムスと、セレイド、ハクレイは苦笑し合って入る。

イクシオなども、咳き込みながら中に。

結局、大人三人は手を横にして並べる程の祠の入り口にて、入らないのはフェレックのみ。

「ケ、入れっかよ」

と、煙が無くなるのを待とうとしたとき。

―ブーン、ブーン―

なにか、聞き覚えのある音が・・・。

「ん?」

森の方に振り返ると、向こうから空中を浮んで何か黒い影が近づいてくる。

「なんだあ?」

眼を凝らすと、そこら中に黒い物体が浮んでいる。

「我が思い、昼間の如き明かりを」

と、魔法を唱えた。　フェレックの杖の先のレリーフから、パーっと明るい光が出て・・・。

「うわわわっ!!!　なっ・なんだあああああっ!!!!!!!」

フェレックは、その空中に浮ぶモノを見て驚いた。　なんと、自分の顔と同じか以上の大きさの蚊が居た。　しかも、もう辺りに十匹くらい集まっている。

「わっ、わっ、くっくるなあああっ!!」

光る杖を振り回す。　集中が切れて、杖の光が消えた。

そこに、

「おい、何してるんだ?　早く入れよ」

と、Kが明るい光の粒を持って現れる。　後ろには、ゲイラーとシスティアナも、顔が見えている。

「こっ、コイツ等なああなんだあああっ?」

Kは、集まって来た蚊を見て。

「“病運び”って渾名の蚊だ。　何種類もの病気持ってる。　村人が死に掛けたのも、コイツに刺されたからだ」

「ううわわわわっ、早く言えぇぇーーーっ」

フェレックは、大急ぎで祠に駆け込んで行く。

Kは、周りを見る。　寄ってきたのは、蚊だけでは無い。　地面には、拳くらいのダニも来ている。

「チッ、普通は冬に入るモンなのによ・・・一番虫が腹減ってる時期に入るなんざ～アホだぜ」

と、ダニを踏み潰してから祠に戻った。

システィアナは、大きい蚊を見て。

「ホ～ントにおおきいですぅ～。　コレゾ、“デッ蚊”です～」

と、キャッキャ言ってKの後を戻る。

ゲイラーは、真顔で。

「“デッカ”・・・”デッ蚊”・・・面白い」

と、祠の中に。

さて、煙が静まってから。　皆、改めて洞窟の中を見た。

祠の中は、蒼い宝石を鏤めたような壁で囲まれていた。　中の構造は大きい洞窟と、奥の小さい洞窟の二間があり。　小さい洞窟の中には、優愛・慈愛・博愛の女神フィリアーナの像が安置されていて、その力で清められた水が湧く泉が水溜り程度にある。

「おお、フィリアーナ様」

マクムス、システィアナ、ハクレイが祈りを捧げ。　他神信者ながら、セレイドも礼儀正しく祈りを捧げる。

マルヴェリータが、祠を見回して。　青白い仄かな光りを放つ壁を見てウットリした。

「キレイね・・・宝石みたい・・・」

ポリアも、

「サファイアとかだったりして・・・」

すると、Kが。

「水晶だ。　ただ、特殊な技術が使われているがな」

イクシオは、天井などを見上げながら。

「“特殊”？　どう、特殊なんだ？」

Kは、竈代わりの焚き火に、持ってきた枯れ木をくべて。

「この壁の淡い光は、光り苔だ。　魔法技術が隆盛を極めた三百年

以上前の“超魔法時代”、水晶の中に光り苔を閉じ込めて、時間の経過をも閉じ込める技術があってな。　こうして、今でも夜になると、苔が光りを放つ。　もう、今は失われた技術だ。　コイツは、古い古い建築物には良く残ってるポピュラーなものだから、冒険続けてればまた見るかもな」

マクムスが、戻ってきて。

「この壁なら、魔法学院の地下や、西のフィリアーナ様の都“クルスラーゲ”に行けば見られますな」

と。

マルヴェリータは、

「流石ですね。　学院の地下に入られたのですか？」

「はい、まだ若い頃ですが」

今居るこの大陸から海を渡って、東の大陸の北部に位置するのが、魔法学院自治領国、“カクトノーズ”。　魔法を扱う全ての修行をした者の学び舎と言える。　入学は、何歳でもいい。　ただ、十年で卒業する。　魔法を遣えるかどうかは、本人次第である。　マルヴェリータやフェレックは勿論、システィアナもマクムスも卒業している。

このカクトノーズの学院地下は、学院の運営部や政治の中枢であって、生徒は入れない。　マクムスは、この国の寺院の責任者に成る時の任命で入ったのだろう。　学院に勤める先生は、教師でもあり、政府としての役人でもあるのだ。

もう一つ。

この、ホーチト王国の在る大陸は、世界で一番大きい大陸であり。
六カ国が分割する。　ホーチト王国は、丁度中央に位置し。　西に、宗教王国“クルスラーゲ”、北には、スタムスト自治国、東には世界最大の国土面積を持つフラストマド大王国がある。

クルスラーゲは、国教をフィリアンタ教としている宗教国家だ。
だが、他宗教でも住めるし信教の自由もある。　マクムス達司祭達の総括責任者が居る国で、フィリアンタ教の総本山といえばいいか。

ゲイラーは、天井の淡い光の壁を見て。

「あ～、早く世界に渡り歩けるチームになりたい」

ダグラスも。

「んだな～」

それぞれが食事や、休む準備をする。

Kは、ゲイラーに。

「この仕事が終われば、チーム名に箔が付く。　成功すればの話だがな」

と、言ってから。

「じゃ、薪代わりになる物探してくる。　いいか、モンスターが来

ても刺激するなよ。　朝まで入り口に待たれても面倒だ」

マクムスは、

「お一人で？」

Kは、頷いて。

「薪探しまで足手纏いは要らないさ、みんな歩くので疲れたろう」

フェレックは、苦虫噛み潰した顔で。

「クタクタだぜ」

Kは、黙って外に出て行った。

皆、食事をしたり、語り合ったり。　食事も、遣りようによっては楽しめる物で。　野菜は、ジャムや乾燥させた物をスープに入れたり。　肉は、干し肉や燻製。　他、チーズや焼き米などで、雑炊なども出来る。　乾燥麺（パスタが主流）もあるし、凝る人間は、作ったりもする。

「ん～、チーズ最高おお～」

ダグラスは、実は無類のチーズ好きで、旅にチーズは欠かさないらしい。　ゲイラーもダグラスも、牧場や農家の次男や三男などで、家を継ぐに値しないから冒険者になったようなものだ。

コールドと、ボンドスが孤児で、流れているうちに冒険者になったとか。　少しだけ持ってきた酒を飲んでいる二人。

みな、それぞれの生き様がある。

見たままに近いのがフェレックで。　貴族の出身なのだ。

さて、Kが出て行って暫く。　疲れた一同が横になったり、もう寝そうな者も居た。

ふと、ダグラスが耳慣れない振動に似た音を感じて。

「ん？　外になんか居るか？」

と、祠に入り口を見れば、全員が身を起こしたり。　振り向いて入り口を見た。

「モンスターか？」

と、言ったフェレックの横をヘルダーが通り過ぎて、入り口に壁伝いに近づこうとしたとき。

―ドスン・ドスン・ドスン―

と、何かの音が近づいてきて、振動が伝わってきた。

「シー・・」

ゲイラーが口に指を立ててから、ヘルダーに“近づきすぎるな”とジェスチャーをした。

近づく音は、振動にリンクしているから足音だと解った。　祠前ま

で来た足音が止まり、影が入り口に差した。

そして、いきなりヌ～っと大きくおぞましい顔をしたモンスターが現れた。

「っ！！！！！！」

叫び声を上げそうになったハクレイの口を、イクシオが抑える。

（ポリア～っ！！！！）

システィアナが、怖くてポリアにしがみ付く。

（大丈夫・・・）

ポリアは、そう思って抱きとめるも、内心自分がビビッた。

ゲイラーの体格に匹敵する顔は、青黒い皮膚で、眼は瞳孔が開いた狂人のような異常の光りに満ちている。　口は耳元まで裂けていて、鼻はつぶれた感じ。　そして、口からは上下に鋭い刃の様な牙が・・・。

フェレックが、杖を構えた。

（止めろ、向こうは見えてない）

と、ダグラスが杖を抑えた。

現れたバケモノは、入り口でクンクンを匂いを嗅ぎつつ、中を見回すのだが見えていないようだ。　そして、スッと顔を引いた。

足音が、次第に遠退いていく。

「ふ～」

ダグラスがため息一つ。

「離せ」

フェレックが掴まれていた杖から、ダグラスの手を振り解こうと動かせば、ダグラスは手を先に放した。

ゲイラーが、緊張で噴出した汗を拭って。

「本当に見えてないんだな～。　顔を見たときは、流石に驚いたぜ」

イクシオは、戻って来たヘルダーを見て。

「大きかったな・・・我々の三倍以上は有るんじゃないか？」

「・・・・」

頷くヘルダー。

マクムスは、また外への入り口を見て。

「ケイさんは大丈夫でしょうか・・・。　アレほどの大型相手では、些か一人では難しいかと」

フェレックは、鼻先で笑い。

「フン。　マクムス様が心配する必要も無いですよ。　自分で行ってるんですから」

そこに、

「その通りだ」

と、Kの声。

ハッと全員が入り口を見れば、Kが入って来ていた。

「ケイ、今、でかい奴が・・」

ポリアの声に、Kは、頷いて。

「ああ、見た。　あれが、いわゆる“オウガ”だ」

「なんですとっ?!!」

マクムスの驚きの声に、

「あ・・あれが・・」

と、驚くダグラス。

Kは、持ってきた薪を火にくべて、腰を降ろす。

「太古の古代戦争時代から居る、巨人族の一種。　肉食で、凶暴で、知能が低く。　巨人族の中では比較的小さい部類だが、最も凶暴な

種族。　限られた地域にて生息している闇の狂人族とも云えるな」

ダグラスは、外に指差して。

「かなりデカかったせ？」

「だろうな。　成人のオウガは、大体ゲイラーの二・五倍から、四倍はある」

「よっ四倍っ？！！！」

数人が大きな声で驚く。

Kは、続けて。

「だが、オウガですら山に生息するモンスターの中では中級だ。更に、異なる生き物の三つの顔を持つ凶獣キマイラや、地獄の狂犬ヘルバウンドも居る。　上に行けば・・・」

と、皆を見る。

“ゴクリ”・・生唾を飲む音が、幾つも・・・。

フェレックは、怯えながらもカラ意地張って。

「な・何が・・居るんだ？」

「ああ。　“屍渓谷”には、ポリア達と前に受けた仕事で出遭ったレベルの“アビレイス・インフェルノ”や“ジェノサイス・ホロウ”の様な亡霊・死霊の最高位モンスター。　“デュラハーン・ロー

ド”や“デス・スカルノ”などの不死系の最強モンスターも居る。
　山の上の洞穴の魔王の居た場所に行けば、“カオス・デーモン”なんかの、大悪魔すらな・・・」

全てのモンスターの名前は、伝説的に伝わる最凶にして最悪のモンスター。　一体、どれだけの冒険者が命を落とした話があるか解らない。

ボンドスやリックは、恐ろしさに冷汗が流れて、手で拭いたのにまた流れる。

マクムスは、己の持ち込んだ仕事の無謀さを思い知って・・クタクタとその場に崩れた。

「な・・なんと云う事だ・・私は・・私はそんなモンスターの棲む場に・・・皆さんを招いたのか・・」

Kは、皆を見ると。

「ま、最悪の奴と戦う気は更々無い。　最小限のリスクでやるつもりだ。　予想して、半数の奴等が半殺し手前で帰れる様には考えてる。　死なれちゃ面倒だから」

だが、こう言うこの包帯男が、誰もが余裕に見えるのは、何故だろう。

ゲイラーは、水を水筒から飲んで。

「ま、明日で決着付けてえ～な」

ダグラスも、震える声を宥めつつ。

「だな・・死ぬのは無しだぜ・・みんな纏めて」

Kは、一人ゴロンと横になり。

「さ、明日が本番だ。　さっさと寝ろ。　寝る前に、誘眠効果のあるお茶でも飲んどけ。　ビビッても寝られるぞ」

と言ってからKは、マクムスを見て。

「山のモンスターの恐ろしさは説明はしたハズだ。　悩むのは後回しにしてくれ」

誰もが、包帯男の指示に従って寝た。

ポリアやマルヴェリータも、寝たかったからお茶は飲んだ。

さて、朝は何時もと変わらない様に、普通に遣って来た。

晴れた朝日が、入り口から祠に漏れ込んでいる。

「ん・・ん？　朝？」

ポリアは、身を起こした。

見れば、まだ皆が寝ていた。

「？　アレ？　ケイが居ない・・・」

起きて、祠を見回せどKの姿は無い。

「ううん・・」

色っぽい声で、マルヴェリータも起きた。

「ポリア・・お早う」

「マルタ、おはよ。　ケイが居ないわ」

「え・・？」

その時だ。

―グアアアアーーーーーっ！！！！！！！！―

いきなり、空気を爆発させたような轟音を上げて、獣の雄たけびが上がった。

「うわっ」

「何だっ？！！！！！」

誰もが飛び起きた。

ポリアが、いち早く。

「外だわっ」

と、剣だけ手に祠の外に。

外に出てみると、

「あっ！！！　ケイっ！！！！」

祠の前から離れた先で、坂の斜面手前にKが立ち。　その少し離れた前方に、大型の像の様な大きさのモンスターが居る。

―グルルル―

唸るモンスターは、黒い身体は墨のように黒く。　身体の高さがポリアよりもず～っと高い犬のような姿であった。　瞳は真っ赤に燃えるような光沢を放っていて、口からはモクモクと煙が上がっている。

「おいっ！！！　なんだあのモンスターっ！！！！」

驚くデーベに、ゲイラーやフェレックが、

「言ってる場合かよっ！！！！」

と、走り出した。

その時である。　モンスターが、グッと身を屈めるようにしたあと、いきなり轟音の吠え声と共に口を開いて、火の玉を吐き出した。

―グアアアアアアーーーッ！！！！！―

火の玉はKを飲み込みそうな大きさで、かなりのスピードで佇むKに向かっていく。

動かないKに、ポリアは驚いて。

「ケェェェェーーーーイッ！！！！！！！！！」

と叫び上げて走り出した。

（ぶつかるぅっ！！！！）

見ていた全員が思った時、フッとKの姿が霧の様に消えた。

「何だとォっ？！！」

走ったダグラス、ゲイラー、フェレック、ヘルダーは、Kが見えなくなったのに驚いて立ち止まる。

「嘘っ？！！」

ポリアも、途中で止まった。

刹那。

―ギャァァァーーーーッ！！！！！！！！！・・・・・・・・―

断末魔の悲鳴と思える声が上がり、

「うおっ」

「なぬっ」

声の方であるモンスターの方に、皆向いた・・・・。

巨体をグラリと横に倒して、黒い大きなモンスターは坂道の下に転げて消えた。

そして・・・Kは、モンスターの居た場所に立っていた・・・・。

１４、森から山へ。　激闘の幕開け。（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

もう１４話になりました＾＾

もうあと４・５話くらいで、Ｋ編の初めも終わります＾＾

宜しく、お付き合いください＾＾

15、魔域

15、魔域

Kは、のんびりとした足取りでポリア達の方に歩いて来ていた。

フェレックが緊張しながら確かめる様に、間近に来た包帯男に。

「何が・・あった？」

Kは、包帯から覗ける鋭い瞳で、ゲイラーやフェレックを見て。

「いや、別に。　いくら祠でも人の匂いまでは消せるわけ無いから、モンスターが集まっていたって所さ。　18人もいれば、ま・・・当たり前か」

ダグラスは、モンスターの転がった先を指差して。

「だから・・・倒したと？」

「ああ。　それもあるな。　だが、理由の大半は別」

「別？」

「今、モンスターの死体をああして転がしておけば、腹を空かせたモンスターが喰いに来る。　死臭の方が強いから、いい眼くらまし

になるだろう。　さ、皆起きたなら、手早く食事を済ませて出発しよう」

Kは、簡単に震えの来そうな事を平然と言って祠へ。

見るKの姿に怪我した雰囲気も無ければ、疲れた様子も無い。

ダグラスは、急いで倒されたモンスターの姿を見に行った。　後には、ゲイラーも、フェレックも着いて行く。

坂の上から見下ろした三人の眼下には、今倒された大きな黒い犬のモンスターの他に、あの昨日現れた“オウガ”と呼ばれた怪物や。
　風も無いのに枝や根をクネクネと動かしている倒れた木があったり、一角のトラの様なモンスターなど、五・六体のモンスターが倒されていた。

三人の横には、ポリアも来た。

「やっぱり・・・」

四人は、最後にKが倒した黒い犬のモンスターの倒され方を肉眼で見れなかったが。　転がった死体は、キレイなまでに真っ二つだった。

震えるダグラスは、

「リーダー・・・剣なんて、あの短いショートソードだけ・・・だよな？」

ゲイラーも、信じられる光景じゃない。

「ああ、どうやって斬ったのか・・・解らねえ・・・」

フェレックは、Kを見返して。

「つーか、斬る所も、移動も見えなかった・・・レベルが違いすぎる・・・」

Kが戻った祠では、急速に出発の準備を皆が整えた。　時折、外にモンスターの足音や、唸り声が聞こえてくる。

だが皆はなにより、急にKが怖くなった。　慣れているのは、元からの面々ポリア達とマクムスぐらいだろう。

準備が終えた。　Kは、外に一人出て、辺りを窺ってから。

「よし、行くぞ」

と、声を掛ける。

外に出た一行。　しかし、モンスターの転がっていった坂の下からは、モンスターの唸り声や、いがみ争う声がしている。　見たくも無いが、食べ物を巡って争っているのだろうか。

Kと一行は、祠を出て右の東側に向かって歩き始めた。　祠の穴が開いた岩壁に沿って東回りに行くと。　右側のマニュエルの森の木々が、徐々に眼下に見えるようになっていく。　標高が上がっているのだ。

歩いて、半刻（1時間）もしない所で、Kが止まった。

ゲイラーは、緊張して。

「モンスターか？」

Kは、前を指差して。

「ああ、面倒な奴だ」

と。

全員が前を見ると、何か蠢く塊が・・・・。　近くまで来て、それがヘドロの塊のようなモンスターだと解った。　こげ茶色のドロドロした身体が波打っている。　形は、高さも幅も一メートル半ぐらいの岩のような姿。　地面に付着する身体がモゾモゾと動く。

「“スライミー”の一種だが、弱点の核が四つもある。　一気に行かないと面倒な奴だ」

すると、フェレックが前に進み出て。

「一気に終わらせてやらああっ！！！」

と、杖を振り上げると。

「創造の力は、想像にあり、我が敵を滅する刃となれっ！！」

フェレックの頭上に、半透明で乳白色の鎌が無数に現れて、

「ゆけっ！」

と、フェレックが杖を振り込めば、驚くべきスピードで飛んでいくのだ。

「終わるかな？」

ダグラスが呟く時、　鎌がスライミーのゼリー状の波打つ身体に突き刺さって炸裂するように衝撃波を生み出す。　モンスターの体液が飛び散り、スライミーはその場でどんどん小さくなっていった。

最後の鎌が突き刺さって、黒い石ころの様な核を壊して、スライミーは跡形も無く消えた。

「フン、私の力を持ってすれば、こんなもんだ」

フェレックは、不敵に笑った。

Kは、フェレックの肩に手をやって。

「上出来」

と、歩き出す。

ダグラスや、ゲイラーも。

「流石だね」

「魔法は楽だな」

と。

しかし、マルヴェリータだけは、ポツリと。

「あれじゃ、次の祠までは持たないわ」

横に居たキーラが、

「え？　今・・・なんて？」

マルヴェリータは、真剣な眼差しでフェレックを見て。

「無駄に魔力を使い過ぎてる・・・。　フェレックの実力からするなら、今の五分の一の魔力で同じ威力の魔法が撃てるわ」

と、歩き出す。

「？　何って？」

キーラは、マルヴェリータの言ってる意味がサッパリ解らない。

さて、歩き始めたのもつかの間。　今度は、崖の上からモンスターの群れが現れた。

まず、長い触手をクネクネさせるのは山に棲むタコのモンスターで、毒々しい紫色の“エビルオクトパス”。　身体の大きさは、ゲイラーよりやや高く、足が9本ある。　足の一本一本が太く、ゲイラーの太股並みにある上に三メートル位の長さがある。

次に、トカゲの様な大きい五メートルくらいのモンスターは、“ドラゴエディア”。　名前の通り、頭部に二本の角を持ち、鼻脇には

一メートルぐらいの髭もある龍（ドラゴン）なのだ。　深いグリーンの身体ながら、獰猛な瞳は炯炯と白く光る。

そして、人の十二・三歳の子供ぐらいの大きさをした、猪と人の間のような姿をしているのは、“オーク”だ。　非常に好色で、人間の女性を攫っていく性格だとか。　毛むくじゃらの裸で、手には木の棒を武器に持っている。　四体で群れて現れた。

Kは、直ぐに。

「オークを全員で倒せ。　後の二匹は俺が引き受ける」

と、先に歩いて来るオーク達に走りこむ。

「おっおいっ」

ゲイラーが言う時。　Kは、オークの頭上を飛び越えて、一匹の頭を蹴飛ばして前のめりに転ばした。

ダグラスが、隙だらけのオークに向かって、

「行くぜえええっ！！」

と、抜刀して戦闘に入った。

―グゲェ、グゲェ―

オークも、また人間を敵視している魔界の住人だ。　木の棍棒を片手に襲い掛かってきた。

ポリアも、先頭で戦う。

「このっ」

剣を振り込んだポリアは、オークの棍棒と打ち合い力比べに。　流石に怪物だけあって、腕力は強く、ポリアはグイグイ押された。しかも、女のポリア相手だからか、鼻息荒く興奮して涎を垂らし始めた。

マルヴェリータが、

「ポリアっ、行くわっ」

と、鋭く言うのに合わせて、ポリアはサッとオークの棍棒から剣を外してしまう。

―ゲッゲ！！―

バランスを崩したオークの脇腹に、

「魔想の力よ、衝撃の鉄槌となれっ！！」

マルヴェリータの声に応じて現れた魔法の大金槌が振り込まれ。

―グギャアアアアアっ―

ぶっ飛ばされたオークは、そのままマニュエルの森へと落下して行く。

見ていたマクムスが、

「ほう・・・成る程」

と、眉を寄せた。

震えていたキーラは、良く見えていなかっただろうが。　フェレックには、その意味が解った。　マルヴェリータは、暫く見ない間に驚くべき成長を遂げていたのである。

（な・なんて無駄が無い・・・マルヴェリータはこんなに集中出来たのか？）

魔法を扱う者なら、魔法を放つ時に見えないながらに魔力が身体の表面に浮き出る気配を感じれる。　無駄に魔力を使ったり、強力な魔法を遣えば、その魔力は大きく収縮する。　逆に、集中して魔力のコントロールが出来れば、収縮の幅は小さい。　それは、遣う時に直ぐに解るのだ。

マルヴェリータは、前のクォシカの事件の時。　大量のモンスター相手に戦って、限界ギリギリの戦いにおいて、集中の仕方を会得したのだ。　Ｋから言わせれば、今のマルヴェリータですら中途半端なのだが、進歩の度合いは目覚しい物が有ると言える。

「マルタっ、サンキュー！」

ポリアは、そう言ってゲイラー・ダグラス・ヘルダーにそれぞれ倒されたオークの上を越えて、Ｋの方に向かったのだが・・。

「あ」

先に向かったゲイラー達が立ち尽くす。　Kは、モンスター二体をもう倒していた。

「早い・・・」

ポリアは、呟く。

エビルオクトパスは、丸で“骨抜き”のように地面に潰れてドロドロした汚泥の様になり。　ドラコエディアは、三枚に卸されていた。

Kは、皆を見て。

「どんどん進むぞ。　休憩は歩きながらだ」

ダグラスは、Kを見ながら呆気に取られて。

「だって・・・さ」

「ああ」

ゲイラーは、そのまま歩き出した。

草原のような短い草と、まばらな木の生えるなだらかな坂道は、変わることが無く続く。　それから暫くは、モンスターとの遭遇は、オークなどばかり。

戦いが終われば、怪我のある者が居る時だけ止まり。　そうで無ければ、歩く。　水も、歩きながら飲むし、腹が空いても歩いて何かを。

さて、それは昼を前にしての事。　今まで、マニュエルの森を見下ろせる崖を脇に歩いて来たのを、Kが祠に向かう為にと、左の崖を上ろうと言った。　南の祠が有った所では、崖の高さは十メートル近かったのに。　今は一メートルぐらい、ポリアなら一人で上れるくらいだ。

崖を上って直ぐ先の林を手前にした大岩の幾つも転がる影で。

「もう、後歩くのは半分も無いな。　休憩しよう」

と、　Kが言う。

「お～、やっと休める」

「うん、緊張するな・・」

と、皆に会話が出た。

Kを囲んで離れずに皆座った。

ポリアが、Kに。

「あと、どれくらい？」

「そうだな、もう三分の二は来た」

「もう一踏ん張りね」

「ああ・・・だが、気になる事がある・・」

全員が、Kを見た。

ダグラスは、齧り掛けのパンを片手に探るように。

「な・なんか悪い感じで？」

「ん～、さっきから気に成っていたんだが・・・。普通、オークって奴は、単独行動なんだよな～。それが、今日は何匹も纏まってる。もしかして、なんか探してるんじゃないか・・とな」

「なんかって・・・何？」

「オークは、凄い好色で、人間の女性に眼がない。雄しか生まれないからな、この世界じゃ。魔界ならどっちも生まれるそうだが。それで、人間の世界だと人や動物をを攫って繁殖する・・・。」

男一同は、ポリアやマルヴェリータを見る。勿論、ゲイラーはシスティアナを。

「モンスターの変態ヤローね」

と、冷めたポリア。

「全く、好かれるのも辛いわ」

と、艶やかにマルヴェリータ。

システィアナに居たっては・・・。

「ブーさんと結婚したくないです～」

と、イヤイヤしていた。

（可愛い・・・俺が・・・結婚したい・・・・）

不毛な男の顔は、ふと見たKが呆れたほどだ。

（コイツ、気持ち悪いな・・・）

Kは、ゲイラーから眼を剝らして。

「思うに、行方不明のチームのも二・三人女性いたよな」

ダグラスは、頷く。　指折りしながら、

「ああ。　斡旋所のマスターの娘で、シスターの“オリビア”。気の強い元盗賊の“アリューファ”、それから学者でムーンワッシャー（三日月のブーメラン）を持つ“ミュウ”の三人」

Kは、腕組して。

「もしかしたら・・・ま、その匂いがオーク達を元気にさせてるのかもな。　もう月末だし」

ポリアもマルヴェリータもKを見て。　ポリアが、

「女性の匂いは増えたものね、なら色めき立つかも」

と、呆れるのに対して、マルヴェリータは困惑した。

（まさか・・・アレ？）

Kが口にハッキリ出さないのは、出さなくてもいい事か。　出すに出すのも控えたい事か。

Kは、皆が食事を終えたのを見計らって、

「じゃ、行こうか」

と声を掛ける。

立ち上がるイクシオは、

「しかし、これから先は、林の中か」

鞭が使いづらい。

デーベは、棍棒を振るって、

「気合入れよう」

と、声を掛け合った。

だが、Kは、歩き始めて林に入った所直ぐにて。

「ん？　不味い・・・かな？」

と、立ち止まる。

間隔の広い林の中に入った所で、止まったK。　済まして、何かを

感じているようだ。

ダグラスは、もう剣を抜いている。

「どうした？　モンスターか？」

Kは、森の奥を見ながら、

「かなりの数のモンスターが、こっちに向かって進路を変えた。四・五十は居る」

「何だってっ！！！！」

驚くハクレイに、フェレックが。

「声デケえー」

と、釘を刺した。

「どうする、やるのか？」

ゲイラーは、大剣を背中から取った。

Kは、頷いて。

「やるしかないみたいだ・・・が」

と、全員を見ると。

「気配からして、大半はオークや人食いダコだ。　みんなが強力す

れば倒せる。　問題は無い。　だが、中に“オウガ”や“キマイラ”の気配もある。　俺が一人先行して、危険な奴等を倒しに掛かるから。　皆は、モンスターが見えたら戦い、俺の行った方に進行してくれ。　最悪な事に、祠の有る方から来てる。　逃げれないし、オークが鼻の鋭い奴だから隠れきれない。　戦って切り抜けるしかないな」

ポリアは、昨日の“オウガ”には遭いたくなかった。

「ケイ・・・大丈夫よね・・・」

「ああ、この面子なら、十分に勝てる相手だ。　数が多いだけ」

Kは、そう言って林の奥に走り出した。　木々の間に入って、姿が消えた。

「消えた・・・」

驚く、コールドやイクシオ。　遠くに消えたのでは無く、離れて行く途中で見えなくなる。

「見てる前だから、凄いわよね・・・」

ポリアも、言葉はそれくらい。　驚きしかない。　そこに、マルヴェリータが来て。

「ねえ、ポリア・・・」

と、耳打ち。

ポリアは、こんな所で言う話では無い内容に。

「マルタっ、一体何を聞くのよっ」

と、赤面した。

マルヴェリータは、いたって真面目な顔で、

「ヘンな意味じゃないわよ。　Kのモンスターの話・・・女性の匂いって・・・」

ポリアも、パッと気付いて。

「あ・・ああ・・・アタシ、トルトの村で・・・」

マルヴェリータも頷いて。

「私も、着いた夜よ」

ポリアは、パッと頷いて。

「生きてる？　もしかして・・・」

マルヴェリータも頷いて。

「かも」

ダグラスは、そんな二人に向かって。

「どうしたよ・・・何の話？」

男性陣も、興味津々の顔。

ポリアは、女性の話なだけに。

「男はウルサイっ！！！」

切れるように言うので、全員が驚いて。

「ハイっ」

と、姿を正す。

ポリアは、林の向こうが揺れだしたのを見て。

「来たわっ、ヘンタイ共をボッコボコにしてやるんだからっ！！行くわよっ！！！」

と、号令を掛ける。

勢いに釣られて、男達は一斉に。

「おーーっ！！！！」

と、声を上げた。

―グゲグエグエ―

林の奥からオークの一団、五・六匹が姿を見せた。

マルヴェリータは、みんなの前に出て。

「蹴散らすわっ！！」

と、美しい黒髪を靡かせた。

「魔想の力よっ、無数の飛礫となりて我が敵を撃ち抜いてっ！！」

杖を振り上げたマルヴェリータの頭上に、夥しい小石の粒のような飛礫が現れる。　やはり、半透明で乳白色ながら、姿形はしっかりと小石のようだ。

「行ってっ」

杖を振り込めば、数十と云う飛礫がオークに飛ぶ。　マルヴェリータは、次々と飛礫をオークに向けて飛ばした。

―グギャ！！！　ギュギョオオオ！！！！―

オーク達は、飛礫を受けてもんどりうって転び。　弾ける飛礫の衝撃に沈んで行く。　現れた最初のオーク達は、マルヴェリータの魔法で倒された。

ポリアは、新たに林の中から、さっきも現れたタコのモンスターエビルオクトパス二体が右に、ドラコエディアが左から。　正面には、オークが数匹来たのを見て、

「やるわよっ！！」

と、タコに向かう。

「よっしゃ！！」

ダグラスも、タコに。

「おう！！」

イクシオと、デーベと、コールドがドラコエディアへ向かい。

「向こうは我々が」

オークを見たイルガの声に、ボンドスとセレイドとレックが頷いた。

ゲイラーは、フェレックに。

「タコに行くっ、魔法支援を期待してるぜっ！！！」

ヘルダーも、タコに向かった。

「フン、言われなくても」

フェレックは、不敵に返した。

マクムスは、

「みなさん、無理はいけませんよっ！！！」

と。

Kは、助ける一行の生存も視野に入れ、激戦の予想から僧侶には攻

撃魔法の抑制を言っておいた。　だから、システィアナもハクレイもマクムスも支援に徹している。

マルヴェリータは、ポリアのタコ二体に注意を。　フェレックは、ドラコエディアとオークに気を傾けた。

（こ・・怖い・・・）

キーラは、怯えて足が竦んでしまっていた。　戦わなければいけないのは解っていたが、ゲイラー達と旅してモンスターと戦った回数はまだ片手の指ぐらい。　しかも、殆どがゲイラーなどが倒して、自分は戦っていないのが現状だった。

フェレックは、怯えて動けないそれに気付いて。　キーラを睨んだ。

「なんだ、お前怖いのか？　使えない奴だ」

そしてフェレックは、鼻で笑って歩きながら。

「ゲイラーも可愛そうな、仲間がこんなんじゃな」

キーラは、震える身体のままに下を向いた。

（くそ・・う・動かないよお・・・か・身体が・・動かない・・・）

さて、戦い始めた皆。

「そらあああっ！！」

イルガの槍がオークを突いて、引き抜き様に横のオークの背中に振

り当てる。　バランスを崩したオークに、ボンドスの両手の斧が襲い掛かった。

一方、

「そらそらっ！」

イクシオの鞭を、身体をくねらせて交わすドラコエディアの動きは、トカゲより蛇に近い。

―シャアアア―

威嚇の音と共に、長い髭をしならせてイクシオの鞭に逆に絡める。

「オッとっ」

コールドは、牽制して動く尻尾と格闘していて。　デーベは、新たに現れたオークの一匹に注意を削がれた。

イクシオとドラコエディアが引っ張り合いでイクシオが引き摺られ出す中で、ドラコエディアの口が俄に煙出す。

それを見ていたマクムスが、

「いけないっ、火炎ブレスだっ！！！」

と、叫んだ時だ。　マルヴェリータもフェレックも、他何人かも声に驚いてイクシオを見た。　フェレックは、マルヴェリータに注意が行っていて、イクシオを見ていなかった。

だが、誰より先に動いたのは・・・・。

（魔力を、どう使うかだ・・）

キーラがKの言葉を思い出し、自分の中で葛藤していた怯えとの鎖を断ち切るように眼を開いた。

「イクシオさんっ、避けてええっ！！！」

キーラの声が飛ぶ。

「うおおっ」

驚くイクシオの前でドラコエディアの口が開いた時、口の中は燃え滾る炎の海で、拳大ほどの火の玉が湧き上がる。

「やべえっ！！」

イクシオは、吐き出される火の玉を避けようと仰けに反るようにして後ろに倒れた。

そこに、

「剣の刃と化し魔想の力よっ、我が敵を貫けえええええ！！！！！！」

と、一瞬早く魔法を発したキーラの創りし魔法の剣が放たれた。

剣の大きさは、然程に大きくはないが、しっかりと具現化されていた。

―シギャアアアっ！！！―

火の玉を吐き出したドラコエディアだが、飛び出した火の玉を空宙でキーラの魔法の剣が次々と粉砕して散らす。　そして、ドラコエディアの開いた口の中に魔法の剣が飛び込んだ。

―シィ！！！―

叫ぶ声と共に、ドラコエディアは剣を飲み込んだ。

「？」

イクシオが、コールドが。　そして、ドラコエディアがピタリと止まる。　刹那・・・魔法が炸裂する衝撃音がドラコエディアの体内で鳴り響くのと同時に、

―シギャァァーーー！！！！―

ドラコエディアの絶叫が上がった。

「うおおおっ」

「のわああっ」

イクシオ、コールドは暴れだしたドラコエディアから離れた。　とぐろを巻く様に激しく悶えるドラコエディアは、ぐったりして動かなくなった。

イクシオは、落としたテンガロンハットを拾うと。　キーラに。

「助かった、サンキュー」

頷いたキーラだが、自分の手を見て。

「思わず・・・動いた・・・」

と、呟いた。

さて、次々と現れるオークに、コールドやイクシオも加勢に向かう。

問題は、エビルオクトパス。　長い触手を振り回し、中々身体に切り込めない。

「このおおっ！！！」

ポリアが、斬り込みから、掬いに斬り返して二本の足を切断したのに、直ぐに斬った足は生えてくる。

ポリアに襲い掛かった残りの足を、ダグラスとヘルダーがさせじと斬り払った。

「ありがとうっ」

ヘルダーは、頷き返す。

ゲイラーは、一人で一匹を相手にしつつ。

「全く、なんて身体してやがるっ。　先に行ったリーダーは良く瞬殺できたもんだっ、ちきしょうめっ！！！」

長い大剣で、足四本を一気に斬った。　飛んだ足が、辺りでバタバ

タと動く。

しかし、残った足の二本が襲い掛かって来て、剣で防いだがゲイラーは弾き飛ばされる。

「うおおおおおっ」

なんとか、転がって受身を取る。

その時、ポリアはダグラスに斬り込まれても、なんとも無い様に動く足の中で。　大きな頭がムクムクと揺れて居る背後に、筒の様な白い九本目の足が一本だけ動いているのが見えた。

（そういえば・・Kって・・・さっき倒した時、後ろに回りこんで立ってた・・・まさかっ!!）

気付いたポリアは、ダグラスとヘルダーがタコ一匹に襲い掛かっている中で、ゲイラーにノソノソと向かうもう一匹のタコが見えている。　白い九本目の足が細くチロチロとゲイラーに向く身体の裏側で動いているのが見えた。

（よしっ）

ポリアは、マルヴェリータを見て、眼が合った時。

（魔法、アイツに）

目配せを。

頷くマルヴェリータは、

「魔想の力よ・・剣の姿で我が敵を撃てっ！！」

と、放つ。　先ほどから、何回もブヨブヨの身体に撃ち込んでいるが、直ぐに破れた身体が修復されてしまうので、マルヴェリータは様子を見ていたのだ。

マルヴェリータが放った魔法の剣は、ゲイラーに向かうタコの丸い頭に突き刺さり、衝撃と共に炸裂して頭に穴を開けた。　空洞の頭の中が丸見えだった。

そこに走り込んだポリアは、ゲイラーに気を取られて、魔法で動きの鈍ったタコの目の反対側に回り込み、地面に着く身体の内側より伸びた白い足を斬り払った。

「えいっ！！」

斬って直ぐパッと飛び退いたポリアと、迫られたゲイラーの間で、タコは急激にブルブルと痙攣したように震え出す。

「ん？　どうしたんだっ？！！！」

驚くゲイラーの前で、タコは先ほどKに倒されたようにベタ～っと地面に伸びて潰れていく。

ポリアは、ダグラスとヘルダーに。

「背後の白い足っ！！！　コイツの急所だわっ！！！」

ダグラスは、ニヤリと笑って。

「オーケーっ」

ヘルダーも、微笑んで頷いた。

ポリアも、一気に加勢し。　三人で三方から斬り込まれて、ヘルダーがタコの頭上を飛び越えて背後に回って白い足を斬った。

「終わったど！！！」

ボンドスが、オークを倒しきって、声を上げると。

ポリアは、

「怪我の手当てを急いで、ケイの後を急ぎましょう」

マクムスやシスティアナ、ハクレイが怪我の手当てに回った。

イルガは、デーベを庇ってオークの棍棒にて腕の骨を折り。　イクシオは、さっきのドラコエディアの火の玉を粉砕した時に顔や腕に火傷を。

キーラは、イクシオに謝った。

だが、イクシオは。

「いやいや、火の玉食らってたら動けなかったろう。　コレなら、動ける。　格段の違いさ」

マクムスの魔法で、完全に腕の骨がくっ付いたイルガも、

「流石に、流石に。　痛みまで引いた」

マクムスは、

「無理に動かせば、また離れます。　無理をしないで下さい」

と、イルガに言った。

ポリアは、自分達以上にモンスターを相手にしているKを案じて。

「行きましょう」

皆、頷いた。

林を行けば、またオークとスライミーの纏まりに遭う。

「しつけえぞお前等っ！！！」

オークにゲイラー達がかかり、マルヴェリータの代わりに、キーラが前に出て。

「僕がスライミーをやります。　お二人は、休んで下さい」

フェレックは、呆れ笑いで。

「ほ～、そいつは」

すると、マルヴェリータは頷き返してキーラを見て。

「解ったわ。　いい、強引に唱えちゃダメよ。　しっかりと集中して、一念を持って」

キーラは、杖を握り締めて。

「ハイ、遣ってみます」

スライミーは二体。　キーラは、モゾモゾと寄ってくる前に立ち。
大きく深呼吸をして、睨んだ。

（怖くない・・・怖くない・・・・？　怖い・・・怖いさ・・・でも、逃げたくないんだ・・）

自分の心を認めて受け入れる事で自然と震えが緩まり、キーラも集中した。　ス～っと杖が持ち上がり、

「魔想の力は、創造する想像の力・・・我が魔力にて具現化せよ。
敵を撃ち抜く無数の矢よっ！！」

しっかりとした詠唱で、ハッキリとした声が魔法に力を与える。
キーラの頭上に、何十の矢が。　コールドの細剣と同じ大きさ位で現れる。

フェレックは見て。　嘲笑うように

「フン、数は多いが。　小さい矢だ」

だが、マルヴェリータは、

「違うわ。　コントロールされた大きさよ。　大きく作っても、小

さく作っても、魔力に比例するだけだから威力は変わらないわ」

と、否定する。

「ゆけっ！！！」

キーラが、鋭く命じれば、段階的に幾つかの矢は空を走ってスライミーに襲い掛かった。　モゾモゾ動くスライミーの身体に深く刺さった矢は光りに似た煌きで炸裂して衝撃波を生み出す。　次々と矢は突き刺さり、スライミーのゼリー状の身体を弾け飛ばし、一つ・・・また一つと黒い核を壊してスライミーの身体を削っていく。

「・・・」

キーラは、しっかり集中していて、スライミーが倒されるまでコントロールして矢を放ち続けた。

ポリアやゲイラー達がオークを倒しきる前に、スライミーは倒されて原型は留めていなかった。

「チ・・・」

フェレックは、無駄が少なく魔法を放ったキーラに舌打ちする。

マルヴェリータは、フェレックに。

「無駄、多いのはアナタのほうかもね。　新人に先越されるんじゃない？」

「フン、無駄が多いか少ないかで全部決まるかよ」

「そう、じゃ疲れて倒れても知らないわ」

マルヴェリータは、キーラの方に向かった。

（チキショウ・・・何でマルヴェリータが・・・あんなに魔法に長けたんだ・・・包帯野郎か）

フェレックは、木に凭れてキーラに声を掛けるマルヴェリータを見る。

「お疲れさま、ポリア達も終わったみたい。　先を急がないと」

マルヴェリータに声を掛けられたキーラは、集中した後に来る疲労感にて汗を掻きつつ。

「そうですね、リーダーは一人で大丈夫か心配です」

マルヴェリータは、微笑んで。

「大丈夫よ。　ケイは尋常じゃないくらいに強いから」

「そう・・ですか」

キーラがまだ今一つ、Kの事を飲み込めて無い素振りの顔をした時だった。

―グアアアアアアーーーーーーーッ！！！！！！！！！―

「うわああっ」

「なっ何だあああっ?!!」

「キャっ」

「こわ〜いいい」

空気を振動させる程の唸り声が林の先から響いて来た。　皆驚き、フェレックは後ろに倒れて尻餅を着いた。

全員が、声の方に注目していると・・・。“ズシーーーン!!!”という振動が地面を伝って来た。　何かが、倒れたのか・・・もしくは落ちたのか・・・何れにせよ、大きなモノであると思えた。

「ケイ・・・」

ポリアが、走り始めた。

「おっお嬢様っ!!」

「ポリアっ」

イルガとダグラスが走り出したポリアを追って走る。　後に、皆も続いた。

林の中を走り抜けた一同。　まだ、空気を揺らした大きな唸り声は何度も響いて来る。　どんどんと走れば・・・。

「わっ!!」

ポリアは、倒されたオウガの首の無い死体や、真っ二つにされたヘルバウンド・・・亀・獅子・山羊の頭を持った、十メートル以上の巨体を誇るモンスターの死体がゴロゴロ転がっている場所に出た。

「すげえ・・・何匹倒してるんだ・・」

ダグラスは、オークやエビルオクトパスなどの倒された夥しい数に驚く。

ゲイラーは、その倒されたモンスターの斬り口を見て。

「凄い・・・斬り口が鮮やか過ぎる・・・何の抵抗も無く斬られているんだ・・・」

ゲイラーを含め武器を扱う皆、こんなに鮮やかな倒し方は初めて見る。

更に唸り声が近くなる林の先に歩けば、

「どわわわっ!!!!!　なななな・なんだあっ?!!!!!」

ダグラスが、大岩のように転がっていたのが、一つ目の巨人の頭だと気付いて度肝を抜かれた。

マクムスが、そのモンスターの顔を見て驚愕といった顔で。

「コレは・・・サイクロプスっ!!!!!!」

フェレックは、その有名過ぎる名前に、

「何だとおおっ？！！！　魔界の一つ目巨人じゃないかっ！！！！」

巨人の名前で、これ程に有名な物は無い。　オウガよりも数倍大きく、凶暴で、冒険者の間で語られる魔界の暴徒の有名株だ。　青い肌に、黒い一つ目、前頭部には角を生やして、肉を求めて彷徨う地獄の巨人とも伝えられるのだが・・・。

何かを見つけて走ったポリアは、木々をなぎ倒し倒れている身体を見つけて。

「向こうに身体があるわっ！！！」

集まった皆は、動かない巨人を見る。

「・・な・・なな・・こ・コレも・・・ウチのリーダーが・・・倒したの・・か？」

イクシオは、震える声で喋る。

デーベも、冷汗を手で拭って。

「死んだのは・・今みたいだ。　多分・・・そうじゃないか・・・」

倒れた身体の長さは、オウガの遺体の長さよりもずっと大きい。

無くなった首元から、夥しい青い血がダラダラと垂れている。

その時、またもや。

―グオオオオアアアァァーーーーッッッ！！！！！！！！！―

凄い近い先から、爆音の様な唸り声が響いて来て耳を劈く。

「うあああああっ！！！」

「キャアアっ！！！」

全員がその場に身体を竦めて耳を塞いだ。

“ズシーン！！　ズシーン！！！”　と、何か巨大な歩く音がする。

見上げたゲイラーが、林の木の先に一つ目の巨人を見て、

「向こうにまだ居るぞおっ！！！！」

ポリアは、頷いて。

「ケイもそこよっ！！！」

と、走り始める。

「おいっ、ポリアーーーっ！！！」

「チョット待てええっ！！！」

「行く気かよっ！！！！」

男達は、驚いて躊躇った。

だが、皆の気持ちの中に、“本当にこのモンスターの群れを倒せる者が居るのか？”という疑問が湧いて、自然と向かって行くのだった。　衝動に突き動かされ身体が動いていた。

15、魔域（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

遂に、Kの本領の発揮ですね＾＾

この先、いかに進展するか、こうご期待＾＾

ご愛読ありがとう御座います＾＾

１６、魔域に吹き荒れる一陣の嵐・・・そして

１６、魔域に吹き荒れる一陣の嵐・・・そして

ポリア達は、見た。

「はあ、はあ、居たわっ！！！」

そこは、開けた一帯だ。　木々がなぎ倒され、辺りの視界の開けた林の切れ間。　たどり着いた一行のずーっと先、Ｋがユラユラとコートの裾をはためかせて立っていた・・・。

そして、Ｋの先には・・・、一つ目の巨人サイクロプスが居る。高い・・・背の高さはオウガの三倍は有るだろう。　林の木々より高くて、頭や肩が見えてしまう。　長い牙が口からはみ出して、ギョロギョロとした一つ目の大きいこと。　しかも、そのおぞましき鬼気迫る顔も、異常にギョロギョロ動く眼も、何もかもが見る者に畏怖を与える。

ポリア達は、此処にもモンスターの倒された無数の死体を見る。

「怪我・・・無いみたい・・」

見るＫは、一番長い刃渡り五十センチどうかという短剣を持っている。　あの短剣、見たところに刃毀れも歪みも無い。　コレだけの

モンスターを斬り払って、有り得ない。

「おい、動き出したぞっ！！！」

“ズシーーン！！！　ズシーーン！！！”、地響きを起こして、サイクロプスがKに向かって歩き出す。　巨体故に、Kを見下ろす様はもう子猫を人間の大人が見るようなモノだろう。

「ああっ」

「消えたああっ！！」

サイクロプスの影がKに掛かった時、走り出したKの姿は消えていた。

―オウウオオ・・・・―

サイクロプスが動きを止めた時、

「あああああああっ！！！」

「足元っ」

サイクロプスの足元に、ユラ～リとKの姿が見えた。

―ウガアアア

ポリア達は、あまりの大声に動けない。　耳を塞いで、屈んで見るしかなかった。

しかし、Kを掴んだかに見えたサイクロプスだが・・・。

―ウガガ・・・―

開いたサイクロプスの手には、Kの姿など無い。

そして、サイクロプスはそのままの体勢で動かなくなった。

「？」

「どうした？」

「う・・動かない・・・ぞ？」

と、皆が見た中で、ポリアは・・。

「巨人の・・・肩に・・・ケイが・・」

そう、太陽に照らされて、巨人の肩に佇むKの姿が見えた。

そして、・・・・・・・・・皆は息を呑んだ。　小石を転がすかのように微風にて落ちるサイクロプスの首が地面に転がった。　遅れてグラリと傾いた巨体の身体が首の前にのめるように崩れる。

「・・・・」

Kは、落ちる前に飛び退いて、地面に着地した。

それからだ。　サイクロプスの落ちた頭の目がギョっとして、身体がもがいて転がって動かなくなったのは。　ドバッと噴出した青緑色の血が、サイクロプスの死を物語る。

全員は、夢を見ているような気分だった。

Kが、ポリア達の目の前に歩いて来て、

「おい、何固まってんだ」

誰も、声など・・・出ない。

Kは、辺りを見てから、

「行くぞ、モンスター共が寄ってくる前にな」

ポリアは、震える声で。

「ね・・ねえ・・アレだけ斬って・・・何で刃毀れも無いの・・・？」

歩き出すKは、

「剣で斬ってないからだ」

コールドは、理由が解らずに畏怖と恐怖に怯えて。

「有り得ないだろうがっ！！！」

と、上ずった叫び声の様な声を上げた。

するとKは、ピタリと立ち止まると。　振り向かないままに。

「足手纏いのヒヨコが、無駄口か。　なら・・・教えてやる」

空気が張り詰めた。　先ほどの戦闘の緊張感など、生温く感じるくらいの緊張度だ。　誰もが生唾を飲み、黙りこくった。

Kは、向かう先に、亀、獅子、山羊の大きな顔を持ち、トラの様な姿の十メートル近い巨体を有するモンスターが歩いて来るのを見て。

「いいか、アレがキマイラだ。　魔法の暴走によって生み出された魔界の凶獣。　異常にデカイ顔は、火炎と、酸の霧のブレスを吐く。　ま、ポリアやゲイラー達には敵わない難敵だ」

Kは、ゆったりとした歩調で歩き出す。

「だが、あんなのは俺には雑魚、剣なんてのは斬るから刃毀れする。　剣で斬らなきゃいいんだ。　こんな風にな」

Kに近寄ったキマイラの獅子の顔が、カッと開けた口。　灼熱の炎が沸き立ち、火炎の波が吐き出された。　火炎のブレスがKに届きそうになった瞬間。　Kの剣を持つ左手が掬いに振り上がっていた。

「あ゛っ」

一斉に皆が声を上げたのは、斬ったKの剣の動きは見えなかったが。　斬った剣の剣圧なのか、キマイラの噴出した火炎のブレスが真っ

二つに斬り裂かれて行く。　しかも、斬られるブレスはキマイラの元まで地走る衝撃波を伴って斬り裂かれて行き・・・。

―ズバアアアっ―

丸で、大木を上から唐竹割りのように真っ二つに斬り裂く音が轟音を上げて、キマイラは二つに斬られた。

ドスンと地響きを伴い、キマイラは左右に倒れる。

鮮やかで、恐ろしい手練だ。　ゲイラーもダグラスも言葉が出ない。

Kは、皆を見ると。

「剣圧で斬れば、剣は傷など付かない。　解ったか？」

コールドは、怯えや恐れ多いながらに必死で頷いた。

「なら、行くぞ」

言うKの声が・・・さっきの林の中に消える前より、低くて心に刺さるような響きに変わっている。　これが、彼の本領なんだと思った。

歩き出した一行は、Kの恐ろしい手練と夥しいモンスターに対する緊張で麻痺していたが、疲労は溜まってきていた。　汗が滲み、黙る一同。

Kは、歩く林の中でモンスターの気配を先読みして、ポリア達に手の余るモンスターは瞬く間の一撃で斬り倒す。

そして、だ。　明らかに樹齢の異なる一際大きい二股に分かれた幹を持つ大樹の前に来る。

Kは、此処で止まった。

「リーダー、どうした？」

聞くボンドスに、合わせてKは振り向くと。

「いいか、この木の後ろ真直ぐに祠がある」

ゲイラーは頷いて、

「どうした、問題があるのか？」

「ああ、大問題」

フェレックは、オドついた表情で。

「な・・何だ？」

Kは、ピースサインの右手で。

「問題は、二つ。　一つ、祠の中に人の気配がしてる」

ポリアは、驚いて。

「生きてるのねっ？」

「ああ、だがモンスターが人の匂いを嗅ぎつけて祠の周りに屯ってる。　問題の二つ目。　こっちに、サイクロプスが一匹と大型モンスターが向かって来てる」

「な！！！！！」

全員が驚いた。

マルヴェリータは、気付いた。

「手分けね」

頷くKは、

「ただ、祠の前にモンスターの死体を残すのは不味い。　だから、なるべくおびき寄せないと」

その時、

―ウガアアアアーーーーーーーーっ！！！！！―

全員が、声のした西側の方角を向いた。　サイクロプスの雄叫びの様な声が・・・。

ポリアは、険しい顔で。

「そんなに遠く無いわ・・・」

ダグラスは、ここ一番の真剣な顔で、

「祠のモンスターは？　規模は？」

「オウガが1匹いるな。　・・・あとは、倒せるモンスターばかりだ。　数は、ざっと四十匹前後。　戦う間に、嗅ぎつけて来るモンスターも含めて五十と思っていい」

ゲイラーとダグラス、見合って頷く。

ゲイラーは、Kに。

「行ってくれ、祠のモンスターは俺達が。　せめて、ちょっとは格好つけたいからな。　リーダーが帰って来るまで、救世主気取りにさせてくれや」

Kは、口元を微笑ませると、

「解った、任せる。　祠には、モンスターは入れない。　怪我したら、無理はするな。　僧侶は皆、祠に急いでくれ。　どうも、重体の奴がいる。　死に掛けの感じだ。」

マクムスも、薄っすらと人の気配を感じるのか。

「任せて下さい。　貴方が戻るまでには、手当ては怠りません」

Kは、斜め左の林の方に歩み出して。

「いいか、協力すれば、オウガでも勝てる戦力だ。　無理や無駄をするのではなく。　上手に分断して戦え。　死ぬなよ」

と、言った瞬間に、フワリと消えた。

「はっ・・・」

皆、Kが飛んだ気がした。　跳躍したのだと、ようやく解った。

直ぐに、ポリアは。

「じゃ、私が行くわ」

ダグラスは、驚いて。

「おいおい、何をっ」

ポリアは、ダグラスや皆を見ると。

「多分、オークが居るはずよ。　オークは、女性の匂い・・・言うの恥かしいけど。　月に一回来る生理の匂いを感じて色めき立ってるみたい」

男性陣は、ピタリと全員固まった。

ポリアは、その雰囲気が気に入らなかったが。　続けて、

「マルタじゃ、走ったら疲れるから。　アタシがおびき寄せてみる。Kは、今、上手く分断しろって言うから、オウガをソロに出来れば十分に勝機あるわ。　システィやマクムス様、そしてハクレイさんが、モンスターと入れ換わるように祠に向かえばいいでしょ？」

イルガは、困った顔で。

「しかし、お嬢様・・・」

「イルガ、Kの話を思い出して。　オークは鼻がいいから、ギリギリまで近づく必要無いハズ。　オークが動けば、他のモンスターも動く。　迎え撃つ形でやった方が、群れに飛び込むよりマシだわ」

マルヴェリータは、ポリアを見て。

「オークの花嫁になるとこ、見てみたいわね」

「ウッサイっ」

と、ポリアは言ってから、額に汗で付く髪を指で避けて。

「とにかく行くから、システィやマクムス様も祠に第一で行ってね」

「解りました」

「は～い」

ポリアは、そっと大樹の陰から向こうに回った。　Kの言う事が間違いなく、今までのモンスターの群れを見て、祠の周りに居るモンスターの大半がオークだと悟ったのだ。

そして、木の陰になるように、林の中を歩いて行く。　まだ夕方まで時間があり、林の木々に降り注ぐ日の光が木漏れ日となって、視界はハッキリしていた。

ポリア、木を伝いに七本ぐらい先に行けば、遠く見える所に切り立った崖が見えて、穴がポッカリ開いていた。

（あった・・・しかも・・居るわ～）

祠の周りには、オーク達がウロウロしているし。　ドラコエディアが木々の木陰にとぐろを巻いて休んでいるのも見える。　祠の周りの絶壁には、ウネウネとタコのエビルオクトパスが何体も徘徊している。

そして・・・、緊張した。

（い・・・・居る）

祠に近い大樹の幹に寄りかかり、グースカと大きな身体の怪物が寝ている。　オウガだ。　しかも、昨日の夜に見かけたオウガに似ている。　ポリアは、今日。　モンスターを沢山見て、初めてモンスターでもそれなりに“顔”と云うべき微妙な違いがあるのだと知った。

寝ているオウガは、耳の伸びた先が折れ曲がっていて、しかも口から伸びる牙の右側の牙の先が虫歯のように黒ずんでいる。

（昨日見たオウガだわ・・・大きい・・・ゲイラーの二倍強はありそう・・・）

ポリアが窺っている時、緩やかに風が南風に変わりつつあった。

―グゲ・・ゲググー

ポリアに最も近い、五メートル程先のオークが、頻りに匂いを嗅ぎだした。

（あ・・気付いた・・・・）

ポリアは、木の陰に成る様に、ソロソロと後ろに後退して行く。

―ゲグググっ。　ゲグゲグ・・・。　ッゲゲグゲ―

何体かのオークがなにやら言い合っているような素振りになり、ポリアの居た方に歩いて行く。　ポリアが、ある程度の距離でまた木の幹に隠れて窺う中、オークはポリアの居た木の根元まで来て、また執拗に匂いを嗅ぎだした。

見ているポリアは、オークの口から透明な粘液が垂れたのを見て。

（うえええ～汚いっ。　でも、アレは興奮して気付いたっぽいね。　下がろう・・・）

ポリアの見方は、的中。

―グゲグゲグゲエエーーーーっ！！！！！―

オークの一匹は、大声を上げる。

祠の周りのオーク達が一斉に声を上げたオークを見て、途端に走り出した。

ポリアを追い駆けるオークは総勢三十近く。　オークの姿を見たエビルオクトパス・ドラコエディアも起きて動き出す。

一方、皆の待つ大樹の元に走り寄ったポリアは、

「オークが来るわっ！！！　みんな出てきてっ！！！！」

ダグラスは、もう気が悶々としていたので、イルガより先に飛び出して。

「ポリアっ、でかしたっ！！！！」

と、見た瞬間。　わらわらと来ているオークの群れに。

「うげえ、フェロモン有り過ぎじゃね？」

イルガは、真顔で。

「お嬢様の美しさは、世界共通と云う訳だ」

と、迎え撃ちに走った。

ゲイラーは、マクムスやシスティアナ、ハクレイを守りつつ出た。

マルヴェリータは、ポリアの後ろにオウガが見えなくて。

「ポリアっ、オウガは？」

皆に合流したポリアは、オークに向かって、

「向こうでまだ寝てるわ。　そのうち起き出すわよっ！！！！」

フェレックは、杖を振り上げて。

「よし、雑魚だけ片付けちまおうぜっ！！！！」

と、無数の鎌を呼び出して、先手とばかりにオークに薙ぎ払った。

レックの矢が、次々とオークの手に刺さり棍棒を落とせば、デーベのトゲ棍棒が唸りを上げてオークをブっ飛ばす。　イクシオの生きているような鞭に打たれて、オークはもんどりうったり、ひっくり返ったり。　ポリア・ダグラス・コールドが次々と止めを。

「いくぜえっ」

「助太刀する」

「よしっ」

ボンドスの切り込みに、イルガが参戦。　脇には、セレイドの姿も。

全力の応戦は、オークには不意打ちにも似た混乱を呼んだ。　しかし、オークが八割ほどやられた所で、後から来たタコやドラコエディアの集団で大混戦に。

「ウオりゃーーーっ！！！！」

ゲイラーがタコと互角に戦えば、ドラコエディアの立て続けの火炎ブレスにイクシオやコールドはタジタジになって逃げ回る。

「せいやっ！！」

ポリアが跳躍して飛び込み、ドラコエディアの頭に剣を突き立てて倒せば。　そのポリアを掻っ攫おうとオークが飛び掛って押し倒す。

「きゃあああっ、ちょっとっ！！！！！」

鎧の上から、胸を掴まれたポリアは、もがく。

「・・・」

ヘルダーが走りより、鋭い蹴りでオークの股間を蹴り上げた。

―グオオオオオオオォォォ・・・・―

オークは股間を押さえて、悶えるように転がっている。

「ありがとう」

起こされたポリアはヘルダーに笑って言うと、転がってるオークを見て。

「キサマあああああっ、無礼を償う覚悟は出来ておろうなぁぁっ！！！！！！」

と、貴族言葉をむき出しにして斬り掛かった。

ヘルダーは、変わったポリアの余りにも激しい言葉に、

「・・・・」

キョトンと。

ダグラスは、弱点の解っているタコの相手をしながら、

「レックっ、タコは後ろの白い足が弱点だあっ」

レックは、スッと矢を番える。

その横には、キーラが居て。

「助太刀します」

キーラの顔を見たレックは、その真剣な眼差しに。

「成長したじゃないか、よろしく頼む」

と、矢を放った。

「魔想の力よ、その多き飛礫で我が敵を討て」

キーラの頭上に、マルヴェリータが先ほど放ったのと同じ小石の集まりが現れる。　マルヴェリータに比べると、数は少ないが。　集中してるのか、形はしっかりと成している。

「行けっ」

キーラの魔法は、タコの急所を狙ったり、イクシオやコールドに向かうデラコエディスの火の玉を粉砕したり、ゲイラーに襲い掛かるタコの触手を攻撃したり。　攻撃を補助に上手く使い始めている。

実は、Kが先ほど合流してから、キーラに言ったのだ。

“魔法は、相手を攻撃するだけに見えるが。　使い方次第では、防

御も出来る。　どう上手く使ってチームを支えるか。　本人の目の付け所が、使い方に繋がる。　覚えておけ”

キーラは、マクムスやシスティアナが祠に助けに行けば、癒し手が減ると認識し。　仲間を守る魔法の遣い方に切り替えてみた。　だが、これはとても神経を使う。

「はぁ、・・・次は」

周りを見るキーラの額は、汗で濡れていた。

レックは、キーラを気にしつつ。

「いいか、無理はするな」

と、またタコの急所に矢を放ち、直ぐに番えた二の矢でオークの背中を射た。

さて。

オークやタコなどの背後にようやく回ったマクムスやシスティアナ達。　一緒にいるのは、マルヴェリータと、道を切り開いたヘルダー。

「はっ・・・」

マルヴェリータは、祠に向かう前方にオウガが来ているのを見た。

「うわわ～、きょじんさんです～」

「なんと、今来たか」

システィアナもマクムスも慌てた。

ヘルダーが、向かおうとした瞬間。

「待って」

マルヴェリータが留める。

「・・・・」

ヘルダーが、麗しき美女を見た。

「私が、アイツの動きを止めるから。　ヘルダーは後ろから敵が来ないようにして」

マルヴェリータは、マクムスやシスティアナやハクレイを見て。

「いい、魔法が成功したら。　オウガは一時的にね、眼が見えなくなるわ。　その隙に、祠に走って。　チャンスは、この一回よ」

マルヴェリータは、ジョイスのような大魔導師では無い。　だから、オウガ相手にも放てる魔法に限りがある。　モタモタして仲間にオウガが当たれば、怪我人は必死なのだ。　だから、ワンランク上の魔法に挑戦しようというのであった。

マクムスは、緊張して。

「マルヴェリータさん、一体何を?」

マルヴェリータは答えずに、オウガの方に向いた。　瞳を閉じて、両腕を交差させて小指と中指だけ立てて神経を集中する。

（確か、ジョイスさまの得意分野・・・魔想魔術の真髄の入り口の魔法は・・・幻想呪術・・・・・）

マルヴェリータの気持ちが、グッと一点に集中する。　そして、カァっと見開いた。

「創造せし幻惑の力は、想像されし意思の力。　彼の者に魔想の幻を魅せよ。“ミラージュミラー・カレイドスコープ”」

マルヴェリータの周りに一瞬紫色の電流が光り、マルヴェリータの瞳が紫色に染まる。　そして、マルヴェリータが杖をオウガに振り向けた。

刹那・・・・。

「うわっ」

ハクレイが驚いた。

マルヴェリータの杖から、紫色の蛇が現れ。　空をうねって走り、オウガの両目に向かって飛びついたではないか。

―グオオオっ!!　オオガガアアっ!!―

オウガは、俄に唸り声を上げて眼を擦ったり、目蓋を腕で拭ってみる仕草をし出した。

マルヴェリータはその場にガクリと膝を着く。　大粒の汗を噴出して、脱力してしまう。

「はあ、はあ、はあ・・・い・・行って・・・」

「しかしっ、キミも動けないだろう。　あんな高等魔術を使って。さ・・」

マクムスは、マルヴェリータの遣った魔法は見た事がある。　だけに知っていた・・・その難しさを。

「ハクレイ、彼女と一緒に祠に向かいます」

ハクレイは、慌てて驚き。

「あ・・あっ、は・ハイ」

システィアナは、直ぐに。

「では～さきにアナさんにいきます～」

システィアナに、マクムスは頷く。

マクムスは、ヘルダー以下皆に。

「マルヴェリータさんが、幻視の術でオウガを止めていますっ！！！　早く他のモンスターを倒してっ！！！！　先に祠に向かっています」

「おう！！」

男達が合図を。

ポリアが、マルヴェリータとマクムスのところに来て、

「祠まで着いて行くわ。　マルタ無茶したわね」

マルヴェリータは、朦朧としていたが。

「フッ・・・」

口元を微笑ませた。

こうしてオウガの脅威が去った訳では無いが。　足止めは出来た。

　オウガは、見えない事に恐怖を感じたのか暴れだした。　見当違いの方向に暴れだしたからいいが。　逆に言えば近づけない。

―ウガアアアっ―

殴った先の木の幹がへし折れて、蹴っ飛ばす岩を転がした。

「・・・」

ヘルダーは、近づき難い暴れるオウガを捨てて、他のモンスターに斬って掛かった。

さて、祠に近づいたシスティアナは、横の木の陰から現れたオークに驚いた。

「わわわわ～ブーさんだぁ～」

オークは、システィアナに飛びつくも、かわされる。

「やっぱり居たっ」

ポリアは、システィアナに向いて背中を見せるオークをバッサリ。

「あやや～ポリアあ～り～がと」

「早く行ってっ」

「は～い」

祠の方に、システィアナが走る。

マルヴェリータを抱えたハクレイとマクムスも、ポリアに見守られて祠の中に。

「あ～あ～あ～いきてましゅ～」

祠に入ったシスティアナは、祠の中に横たわってる冒険者達を見つけたのだった。

「あっ・・・・・だ・・だれ？」

祠の入り口から入って降りの先。　大きい洞窟の壁に、汚れた白いローブの女性が凭れて座っていた。　声に気付いて、システィアナを見て言った声はか細い物だった。

「オリビアさま～、助けにきましたよ～」

システィアナは、大人びた女性を覗き込む。

「ああ・・あああ・・・たっ・・助けが・・・」

埃と汚れでローブを黒くしている女性が喜びの声をあげた。

そこに、マルヴェリータを連れ込んでマクムスとハクレイが入って来る。

「皆、生きているかっ?!　助けに来たぞっ!!!」

マクムスの声。

奥の寝かされた冒険者達の中で、汚れた黒っぽいのローブ姿の男が掠れた声で。

「と・・とう・・さ・・ん・・」

と、呟く。

壁に凭れ座らされたマルヴェリータは、腰の布袋にソロソロと手を伸ばして。　袋の上から。

「ふ・・ふうじられし・・・ちから・よ・・あ・・明かりを・・・・」

Kから貰っていた、あの明かりの魔法を閉じ込めた小石程の水晶だ。

マルヴェリータの袋が急激に光り、気付いたハクレイが近寄ると。

「ふく・ろ・・に、あ・・明かりの・・・」

頷くハクレイは、

「解った。　ありがとう、もうやすみなさい」

マルヴェリータは、頷いて気を失った。

さて、ハクレイとシスティアナとマクムスが見て、驚くべき事に全員が生きていた。

ただ・・・。

「うぬ、リーダーの男が居ない・・・・」

ハクレイが、言った・・・・。　赤い鎧を着た大剣遣いのリーダーがサーウェルスの姿が見えなかった。

さて、ポリアは、皆が祠に入ったのを見届けて、戦いの中に戻った。

「あ・危ないっ」

戦いの騒ぎに、またオークやら蜘蛛のモンスターが新たに現れていた。　大きさが五メートル近い、毒々しい赤紫色の大蜘蛛である。

ポリアは、ゲイラーの背後に回った蜘蛛に近寄って、

「はっ、えいっ」

水平の斬りから、回し斬りにて足の一本を切断して、飛び退いた。
最後のオーク二匹を撫で斬りにしたゲイラーは、ポリアに気づいて。
「ありがとよっ、戻ったか」
「ええ、マクムス様達は祠に辿り着いたわ」
頷くゲイラーは、蜘蛛を見て。
「よし、さっさと片付けよう」
すると、ポリアは。
「コイツはダメよっ。　ケイの話に有った毒蜘蛛だわ」
「あ・・どうする？」
そこに、フェレックが。
「俺に任せろ、向こうでオジン共が苦戦してるぜ」
二人の見たフェレックは、やや息の上がった疲労に滲む顔。
ゲイラーは、蜘蛛を牽制して、足をまた一本斬り落としてから離れて。
「疲れてるな～大将」
すると、フェレックは杖を振り上げて、

「うるせえっ」

と、魔法を。　頭上に幾つもの魔法で出来た剣を生み出して、動きの鈍った蜘蛛に突き刺した。

だが、蜘蛛の体液が猛毒なのだ。　ゲイラーは距離を置いたが。

フェレックは魔法に集中しすぎて、距離が幾分近かった。　魔法が炸裂して、蜘蛛の身体を突き破る。　その飛び散った赤紫色の体液が、フェレックの腕に。

見ていたのは、ポリアだ。

「あわわわバカっ！！！！」

「あ？」

フラフラのフェレックに近寄ったポリアは。

「体液が毒だってケイが言ってたでしょっ！！！！！！」

「あ・・・やべえ」

フェレックは、もう力の無い様子で座り込む。

「おいおいっ」

ゲイラーも近寄って、二人でローブを切り裂いて捨てたのだが・・・。

「あ〝あ〝・・・いでえええええっ！！！！！」

フェレックが絶叫を上げた。　毒は強烈な酸も含む。　皮膚に付着してしまったから、皮膚の表面を溶かし始めたのだ。

ポリアは、ゲイラーに直ぐ顔を向けて。

「セレイドさんを呼んでっ」

ゲイラーは、痛みに苦しみ出したフェレックに驚いて狼狽した。

ポリアは、もう一度。

「早くううううっ！！！！！！！！」

「ああっ」

ゲイラーが立ち上がり、最後のオウガ以外のモンスターと戦うセレイドを呼ぶ。

ポリアは、セレイドが気付いたのを見て、

「ゲイラー、セレイドさんと代わって。　オウガもそろそろ魔法が解けるわ。　見て、闇雲に暴れていたのが、変わって来てる」

「何？」

ゲイラーは、見る。

オウガが、また眼を擦ったり、拭ったりしては戦う者達を見て、ま

た眼を擦る。

「チッ、もうか」

ゲイラーは、大剣を手にオウガに走って行こうと・・。

其処にポリアは、ゲイラーの気持ちに気付いて鋭く激しく。

「一人で戦っちゃだめっ！！！！！！　ケイの言う事を思い出してっ！！！！！」

ゲイラーは、その場に立ち止まった。

「そんな今更っ、じゃどうするんだっ！！！！」

「私に考えあるからっ、後二匹のモンスターを排除してっ」

セレイドが、ポリアやゲイラーを見ながら。

「どうした、何が？」

と、やってきた。　腕を押さえて痛がるフェレックを見る。

ポリアは、もう時間がないので。　腰からナイフを取り出して、

「痛いけど、最善の方法でいくからね」

フェレックは、痛がりながら頷き、セレイドは二人を見る。

いきなり、ポリアはフェレックを斬った・・。

「うぎゃあああああっ！！！！！！！！」

フェレックの大絶叫。

「なんだ？」

「あ？」

皆が、見る。

「おいっ、なにするんだっ！！！！」

セレイドも、驚いた。

地面には、薄皮のフェレックの皮膚が切り取られて落ちている。

薄っすらと、肉も・・・。

ポリアは、セレイドを鋭く見て。

「毒よっ、触れた皮膚を剥いだの。　直ぐに魔法で傷を塞いで」

セレイドは、頷きつつも事態を理解するのに戸惑った。

ポリアは、剣を手に立つ。

（力を合わせれば、オウガでも勝てる戦力だ）

心の中でＫの言葉を反芻した。

―シギャーーっ！！！―

イクシオが鞭で絡めたドラコエディアの動きを封じて、ボンドスとゲイラーが斬って倒し。

最後のタコのモンスターのエビルオクトパスは、ダグラスとヘルダーが倒した。

遣って来たポリアは、イルガとコールドが怪我だらけで、キーラがもう失神寸前。　デーベが、棍棒を杖代わりにしているのを見て。

「戦える者だけで、オウガをやりましょう」

ボンドスは、大きく息をしながら。　引き摺る足と、肩を抑える。
骨折していたのに、無理したのだ。

レックが、掠り傷のある顔で。

「どうやって、みんなで束になってか？」

ポリアは、先ずレックに。

「レックさんっ、オウガの眼を射抜いて」

レックは、驚いてポリア見るが・・・・頷く。

ポリアは、ヘルダーとダグラスに近寄って。

「オウガが眼をやられたら、足を私と一緒に斬って」

そして、ゲイラーに向くと。

「ゲイラーっ、オウガの体勢が崩れたら心臓を狙って。　大剣で一気に」

ゲイラーは、オウガを見て頷く。

「お・・俺は？」

顔や足に切り傷のあるイクシオが、肩で息しながらポリアに声を掛けた。

「出来れば、オウガを尻餅つかせたいの。　ゲイラーが心臓を突き刺せるように・・」

イクシオは、汗と汚れの混じる汗を流しながら頷いて。

「オーケー、それならやれるかもしれん」

ポリアは、オウガを見て。

「ケイは、もっと凄いモンスター倒してる。　せめて、オウガくらいは倒さないと、チーム名に箔がついても格好つかないわ」

ダグラスは、最後の気力を込めて息を整えながら。

「ああ、やってやるさっ」

ポリアは、レックを見て。

「やってっ」

レックは、

「解ったっ、行くぞっ」

と、踏み込んで矢を番えた。

一気に、ゲイラー以外が動いた。

イクシオは、オウガの後ろに回るように走り。　ポリアとダグラスは、オウガの右に。　ヘルダーは、オウガの左へ。

この時オウガが、目を擦るのを止めてゲイラーとレックを見た。

見えたのだ。

―ウガア・・・―

同時に、“ヒュっ”っとレックの矢が放たれ、向いたオウガの左眼にグサリと刺さる。

―アガアアアっ！！！！―

オウガは、いきなり事に驚いた。　左目に刺さった矢を引き抜くと、不気味な色の青く黒ずんだ血が流れ出た。

レックが、更に右目を狙う中。　ポリア・ダグラスと、ヘルダーが頷き合って左右からオウガの足に襲い掛かった。　大きいオウガだ。

ポリアの背丈は、まだ膝にも達しないくらい。

「うおりゃああっ！！！」

ダグラスが脹脛に斬り込めば、青緑色の血飛沫が飛ぶ。

―ウガアアっ！！　ウガッ！！！―

オウガが痛みに怒り、もう闇雲に暴れ出す。

ポリアが向こう脛を斬る時、ヘルダーがオウガの地面に着こうした左のアキレス腱辺りを斬った。　グラッとオウガの巨体が揺らいのだが、直ぐにオウガの跳ね上げた左足の踵がヘルダーに当たり、蹴飛ばされる形で吹っ飛ばされてしまう。

「ヘルダーっ！！　チキショウめっこのっ！！！！」

ダグラスが、右のアキレス腱に全力の突きで剣を深深と差し込んだ。
ポリアも、走り抜ける形で、ヘルダーの斬った左のアキレス腱の血の出ている所を再度斬る。

オウガが、バランスを崩して両膝を地面に着こうとした時。

「そっちじゃねえ！！！！」

イクシオが、オウガの首に鞭を絡めた。

「うおおおおおおおおっ」

渾身の力で引くイクシオに、

「加勢するっ」

と、セレイドが加わった。

「一気にひくぜえええええっ」

二人掛りで、オウガをグィっと引っ張った。

―アガアっ！！―

バランスを崩したオウガは、ドスンと後ろに尻餅を着いた。

ポリアは、全身の力を振り絞って、

「ゲイラアアアアーーーーーーッ！！！！！！！！！！！」

そのタイミングは、正にドンピシャだった。

「解ってらあああああああああーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

やや大剣を上向きの脇構えの体勢のままに、怒声の咆哮を上げてゲイラーは、オウガの心臓目掛けて渾身の突進突きで飛び込んだ。

“ドサっ！！！”

辺りに、突き刺さる音が響いた。

オウガは、まだ見える右目をこれ以上開けないほどに開いて、

―ギギャアアアアアアーーーーーっ！！！！！！！！！！！―

と、凄まじい大声を爆発させる。

誰もが、オウガとゲイラーを見た。

・・・・・・グラリと、オウガの身体が後ろに倒れた。“ドスン”と地響きをさせて、最後のモンスターは倒された。

「は・・・はあああああああ・・・・」

ポリアは、膝を崩して脱力した。限界を超えて緊張したのが緩み、疲労が津波のように襲ってきたのだ。

「やったあああああっ!!!!!!!」

ダグラスが、大声で喜んだ。

ポリアの横に、ヘルダーが来た。見上げて、

「大丈夫?」

ヘルダーは、腹を抑えているが頷いて。そして、遣っていた鉄扇子を見せる。

「あああ・・・凄い・・・」

ポリアは、二枚重ねてオウガの蹴りを防いだ鉄扇子が、ボコンと凹んでいるのに驚いた。

ゲイラーは、剣を引き抜いて。

「良く倒せたもんだ・・・、ポリア。　いい作戦だった」

ポリアは、ボンドスがよろめいて居るのを見て、立ち上がり。

「祠に行きましょう。　みんなで、出来る者が手当てを。　ボンドス、肩を貸すわ」

すると、ゲイラーが。

「いや、俺で十分だ。　不細工に、美人の肩は身体に悪い。」

と、ボンドスの身体を支えた。

ボンドスは、苦痛に歪ませながらも笑って、

「ちぇ・・・せっかくの・・・チャンスなのに・・・馬鹿リーダー。
あはは・・いでで・・」

ポリアは、腕を押さえて来るフェレックに、

「ゴメン、いきなり斬って」

フェレックは、イライラした顔で。

「ウルセエっ！！！　いきなりで死ぬかと思ったぜっ！！！　フン、まあ毒で死ぬよりマシだから感謝してやるぜえっ！！！！　いでででで・・・チッ」

イクシオは、フラフラの身体ながら。

「おうおう、無駄口出るだけマシだぜ。　フェレック」

ポリアは、イルガとコールドの間に入って、祠についていく。

「イルガ・・大丈夫？」

片腕、片足に肋骨も折れているイルガ。　コールドもデーベもボンドスも、皆がイルガに庇われたのだ。　イルガは、人を守る事に徹していた。

「大丈夫です・・お嬢様・・・お嬢様さえ無事なら、このイルガは・・・」

すると、ポリアは優しい顔で。

「バカ。　イルガ、私が老後を看るんだからね。　死じゃ駄目よ。
それにまだまだ冒険するんだからねっ」

イルガは、ポリアを見て。

「は・はあっ、有り難き幸せです・・」

全員、ポリアには内心驚いていた。　気品、優しさも然ることながら、リーダーシップがこんなにしっかりしているとは。

さて、やっとK以外の全員で祠に入った。

「おお、これはみなさん仕事を増やしましたな」

マクムスが、怪我だらけの皆を見て、嬉しそうに言った。　皆、生きていたからだ。

ゲイラーは、“グランディス・レイヴン”のリーダーのサーウェルス以外が生きているに驚いた。

１６、魔域に吹き荒れる一陣の嵐・・・そして（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

さて、K編ももう少しで一部終了ですね＾＾

一気に駆け抜けさせますよ＾＞＾

ご愛読、いつもありがとうございます＾人＾

17、愛の愚行とKの選択

外が暗く成り掛けていた。

マクムス・システィアナ・ハクレイ・セレイドは、祠の中で怪我人達の治療に追われていた。　Kの言った通り。　チーム“グランディス・レイブン”の男二人。　剣士のオリバー。　大戦斧遣いの戦士ダイクスは死に掛けだった。　肉体の骨が十数箇所折られて、黴菌が傷口から入りもう全身が青黒く浮腫んでいた。

「本当にケイの言う通りだわ・・・。　薬も大して持ち合わせて居ないのを、オリビアが一人で保たせていたみたい・・・」

怪我の治療に立ち会ったポリアが、戻って来たゲイラーに言った。

「そうか・・・生きるといいがな・・・」

ポリアは、心配そうな顔で。

「ゲイラー、ケイは居なかったのね？」

疲れの色が強いゲイラーは、頷いた。

そこに、イクシオが。

「大丈夫さ、あんな強えぇ～冒険者が殺される訳無い。　多分、暇つぶししてるのさ」

どっかりと座り、怪我の治療を終えて水をのんでいるイクシオ。
テンガロンハットは被ったままに、上着のベストなどを脱いで、下着のシャツ姿だ。

ポリアは、黙って自分の疲れも省みずにシスティアナの手伝いに行こうとした時だ。

「おい～ス。　暇つぶしから帰ったぜ」

Kの声に、起きている全員が祠の入り口を見た。

「あ・・生きてた・・・」

ゲイラーが自分の前を歩く包帯男を驚きの眼差しで見た。

ポリアは、Kに立ち寄り。　Kの全身を見て。

「無事・・・みたいね」

Kは、皮の小袋をポリアに差出して。

「ホラ」

ポリアは、小袋を見て。

「何？」

「村の依頼の草。　薬草だ」

「あ・・・」

受け取ったポリア。

ゲイラーは、驚いて。

「探してたのか？」

「当たり前だ。　暗くなる前の方がいいからな」

ボロボロの姿のボンドスが、小声で。

「スゲエ・・・すっかり忘れてたぜ」

Kは、周りを見て。

「どうやら、全員生きてるみたいだな」

ゲイラーは、頷きながらも。

「ああ、だが一人だけ居ない。　リーダーのサーウェルスだ」

Kは、口元を歪ませて。

「阿呆が、何所に行ったんだ？」

その時だ。

「も・・もっと、奥・・です」

いきなり、声が。

手当てをする以外の者が、オリビアを見た。

ポリア、ゲイラーが彼女の前に行き、屈んで。　先にゲイラーが。

「奥？　更に先の祠かよ？」

頷くオリビア。

ポリアは、驚いて。

「何で？」

「わ・・私達を・・祠に逃がすため・・・巨人に・・・襲われたの・・」

ポリアは、ゲイラーを見て。

「サイクロプスよ・・・サーウェルス達なら、オウガは倒せる」

「ああ、恐らく・・・」

ゲイラーも同感だった。

オリビアは、絞るような声で。

「サーウェルスが・・助からない・・なら・・私・は・・此処に・・の・残り・・・ます」

ゲイラーは、睨むぐらいの顔で。

「ふざけるなっ。　アンタ等のお陰で、俺等も、斡旋所のマスターのオヤジさんも、マクムス様もどれだけ苦労と心配と迷惑掛けて此処まで来たと思ってるんだっ！」

オリビアは、真剣な眼差しで・・。

「イヤ・・・そんな・・の・・あい・・してるも・・の・・」

実はポリアは、倒れていた女性のケアをシスティアナとした。　予想通り、寝たきりの女性二人は、下着が血で汚れていた。　だが、オリビアはそうでもない。

だから、ピンと来た。

「ねえ、オリビアさん。　もしかして・・・お腹に子供居るの？」

すると、オリビアの顔が驚いた顔に変わった。　そして、横を向く。

（やっぱり・・・なんか、お腹の膨らみがヘンに思ったのよ・・・）

目立つ膨らみでは決してない。　ほんの少しなのだ。

「イヤ・・・サーウェルスと・・結婚するって・・決めたんだもの・・・」

ゲイラーは、怒った顔で。

「ふざけるなっ、男の為に・・・。　アンタ、自分と子供の命も捨てるのかよっ！！」

オリビアは、涙を浮かべて震えながら横を向くまま。

ポリアも。

「そうよ。　お腹の子供・・・絶対にマスターも大切にするわ。此処で二人を置いて来たら、マスター・・ううん。　お父さんは気が狂うわよ」

すると・・・オリビアは啜り泣きながらサーウェルスの事を悲しみ出す。

ポリアも、ゲイラーもどうしていいか解らなくなった。

その時だ。

「クックッ・・・アハハハハハ」

いきなり、Kが笑い出した。

起きている全員が、腕組して笑う包帯男を見る。

「ケイ・・・」

ポリアが、困った顔で見ると。

Kは、オリビアの前に来て。

「随分とふざけたチームだな。　仕事は中途半端、人の迷惑を顧みず。　村人を強引に道案内にした上に瀕死にしてほったらかし。挙句の果てに親に迷惑掛けて、冒険者を借り出させる事態を招いて。　その上止めに、誰か居ないと死ぬってか？　気違いだ、気違い。　片腹いてえな」

オリビアは、睨む瞳でKを見た。

Kは、呆れ笑いで。

「おうおう、叱られたら睨むってか。　僧侶の風上には置けないね。　このバカ娘、父親が自殺覚悟で居るって知らねえらしい。　そうだな、コイツを置いて行って一家心中でもしてもらうか」

ポリア達は、その言い方に驚いた。　ゲイラーも、流石に悪い印象を持ったが・・・。

「おお・・・おとう・・さん・・・・ううう・・・・ううう・・・」

オリビアが、本当に泣き出した。　自分の父親の事だ、誰より自分が良く解る。　このポリア達を、どんな思いで派遣したか・・・。

すると、Kは、オリビアを見下して。

「いいだろう。　明日、俺が捜しに行ってやる」

起きている全員が、Kを見た。

ポリアは、驚いてKに近寄って。

「本気なの？」

涙眼のオリビアは、Kを見上げた。

Kは、キラリと瞳を細めて光らせると。

「条件は一つ。　オリビア、明日はキミにも着いて来て貰う」

ゲイラーが、弱ったオリビアを見てからまたKを見て。

「無理じゃないか？」

すると、Kは。

「だから、だ。　この山がどんな所か。　どれだけ恐ろしいか、腕も乏しいテメエ等の軽はずみの根性の意味を解らせてやる。　ポリアやゲイラーが、どれだけ命張ったか。　今度は、このバカ娘が命懸けて知る番だ」

ポリアは、立てもしないオリビアを指差して。

「こんな状態じゃ無理よ・・・明日で立る体になんか成らないわよ・・・」

Kは、香水や薬品を入れる小瓶を腰のベルトに着けた皮製の入れ物から取り出した。

「三本ある。　一つは、オリビア。　一つはマルヴェリータ。　も

う一つは、グランディスの一番健康状態のいい奴に飲ませろ」

ポリアは、小瓶を受け取って。

「これは？」

「エリクサー（神秘の秘薬）の手前のものに、代用物で類似させた薬さ。　飲ませて今夜を寝かせれば明日にはかなり良くなる。　マルヴェリータは、今回はジョイスに手土産を持たせる為の見物人代わりだな」

Kは軽く笑って、水を飲みに行った。

ゲイラーは、ポリアと見合って。

「飲ますのか？」

「しか・・・ないわ。　リーダーのケイの考えだもの・・・それに」

ポリアは、オリビアを見た。

オリビアも、ポリアを見ている。

「死ぬなんて命を懸けるなら、その覚悟と私達の苦労を確かに見てもらいたいわ。　なによりも、勝手な行動でこの事態を招いた人達に。　ケイ、遂に本気になったのよ・・・。　明日のケイは・・・多分は本当のバケモノになるわ・・・。　この仕事、捨てる気なんてさらさら無いわよ・・」

ゲイラーは、今までも十分凄いのに。

「今・・以上ってか?」

ダグラスも、近くで二人を見てから、Kを見て。

「俺も・・・行っていいのかな?」

と。

Kは、奥の水飲み場から戻ると。　ざっと場を見回して。

「今から伝えておく。　寝てるのには、後から誰か伝えてくれ」

マクムスや、寝ているイルガも向いた。

「ポリア、ゲイラー、ダグラス、マルヴェリータ、システィアナは、明日俺と行動を共にしてもらう。　ヘルダー、イクシオ、マクムス、セレイド、レックは、明日で我々が戻らない場合。　明後日の朝には、動けるようになるであろう全員を連れて山を降りる役目を言い渡す。　後で、レックにマクムスとイクシオとヘルダーの四人には、帰り道を教えておく。　以上」

全員が、Kを見ていた。

イクシオが、

「引き受けた。　明日中に帰ってきてくれ。　俺は、リーダーに従う」

「俺もだ」

ボンドスが。

ヘルダーは、Kの前に出て軽く頭を下げた。

マクムスは、難しい顔ながら。

「解りました。　承りました」

システィアナは、疲れた顔を嬉しそうに。

「わ～い、つれていって～もらえます～」

ポリアは、システィアナが随分とKを信じていると思った。　システィアナとて、事態はしっかり把握はしているハズだから。

そして、自分も・・・。

「解ったわ・・・明日は、ケイとね」

頷くKは。

「ああ、屍渓谷を横断する。　ポリア、考えろ」

ポリアは、ギョッとした。

「マジ？」

Kは、短く。

「二度も言わせるな。　あと、バカ娘にも説明しておけ。　いきなりで驚かれて、流産されてもの困る」

ゲイラーは、意味が解っただけに。

「おいっ、なら別のっ・・・」

と、言った声をポリアが遮った。

「いいから、もう決定よ」

ゲイラーは、酷く困惑する。

Kは、奥の壁の近くで、焚き火の前に座った。　そして、一人黙る。

ポリアは、システィアナと二人で、オリビアとマルヴェリータを起こして薬を飲ませた。　そして、ヤキモキする男性達を他所に、“グランディス・レイヴン”の面子を見た。

（先ず、瀕死だった二人は無理ね・・・。　“考えろ”、連れて行ける人じゃない・・・戦える人・・・）

ポリアは、マクムスの養子の魔想呪術師のデルを見た。　目鼻立ちの整った、まだ若い青年だ。　病気に罹っていて、明日連れて行っていい人物とは思えなかった。

（魔術師・・・）

そして、もう一人。　疲労と病気で苦しんでいた、大人の印象強い女性。　学者で、体つきがスラッとしながらも、無駄な肉のない身

体は引き締まっている。　長い睫毛ながらに男っぽい印象もある。
首筋に纏わる灰色の髪が、女らしいと思わせた。

（この人、武器は？）

ポリアは、失礼して腰にある手に収まりそうな丸い皮鞘を見た。
珍しい飛び道具。　三日月型の、ブーメランだ。　外側は、鋭く刃のように尖っている。　しかも、白銀の武器だ。

最後のもう一人は、勝気な顔をした若い女性で。　赤い髪、きれ長い眼と褐色の肌の美人だ。　武器は、剣の刃が針の様に細く伸びる細剣。　コールドと同じ武器。　普通の鋼鉄製で、しかも刃毀れが激しい。

（せっかく助けたのに、マクムス様の息子さんを連れて行くのは酷だわ。　それに、毒が比較的回っていなかった女性の学者さん・・・ミュウさんが一番ね）

ポリアは、彼女に秘薬を飲ませる事にした。　チラリとKを見たが、全くコチラを見る気配すら無く。　寝ているようだ。

ミュウを起こし、小瓶の薬を飲ませた。

ゲイラー達は、Kが何故こうしたのか解らない。　一番重症の二人の助けた男と、ボンドスかイルガに飲ませるのが妥当だと思うのだが・・・。

システィアナと、ポリアに、外が暗くなった頃にマクムスが。

「お二人は、明日があります。　もう、お休みなさい」

と。

ポリアは、正直もうクタクタであった。

「ポリア、もういいよ。　な、休め」

ダグラスも言う。

「うん・・・」

皆、疲れた顔をしていた。　魔法遣い達はもうグッタリして寝ている。　イルガやボンドスも痛みが引いたのか寝息を立てている。助けたグランディス・レイヴンの一行も全員が薬で眠っていた。夜はこれからだが、確かに休まなければならない。

（寝てる・・・明日・・・どうする気なんだろう・・・）

Kは、もう動かない。　ポリアも、マルヴェリータの横に座った。　システィアナが来て、二人で食事をして。　沸かされたお湯を貰って、薬湯を飲んだ。　もう、ミュウ・オリビアにはこの薬湯は飲ませている。

（明日・・・解る）

Kが、必要な事を必要な時にしか言わない事は先刻承知だった。眼を瞑って、心に言い聞かせた。

そして・・・それはどのくらいの時間が過ぎただろうか。

「？・・・」

ポリアは、肩を揺り動かされて気付いた。　瞳を開ければ、そこにはオリビアが自分の顔を見ている。

「起こして・・・ごめんなさい」

言葉遣いがハッキリしている。　碧い瞳、ローブより覗ける赤い髪。　斡旋所の主人には似ていない。　母親似なのだろう。　印象深い清楚感と、優しい顔立ち。　オリビアは斡旋所の主人の自慢の娘であった。

「いいのよ・・・どうしたの？」

ポリアは、皆も見た。　起きているのは、看病をしているマクムスぐらい。　他、皆は寝ている。

オリビアは、ポリアの横に座ると。

「明日・・・サーウェルスを助けに行ってくれるって本当なの？」

「・・・ええ、ケイが言ったのだから、本当よ」

「ありがとう・・感謝いたします」

オリビアは、まだ二十半ばだろう。　随分と大人びていて、年増に見えるというより、マルヴェリータと同じく魅力的に見える。

ポリアは、オリビアの肩を触って。

「でも、そんなに簡単じゃないわよ。　いいえ、寧ろ貴女は・・・最悪の危険が待ってるわ・・・・。　どんな事があってもしっかりしないと・・・お腹の子供が先に・・・死ぬかもしれない」

「え？」

ポリアは、Kを見てから・・またオリビアを見て。

「明日行く道は、数万年前にあった古代戦争の激戦地だそうよ。広大な川の中は水では無く、かつて死んだ夥しい兵士達の屍ばかりが敷き詰まった“屍渓谷”と云われる場所よ。　僧侶の貴女は、その怨念の力をモロに感受してしまうわ。　下手したら、サーウェルスを助ける前に・・・流産してしまうかも」

オリビアは、恐れを感じて・・お腹を触った。

「オリビア・・夕方の貴女の発言は、覚悟としては愛の篭った言葉だけど。　周りから見れば、悲しい発言よ・・・。　ケイは、凄腕でサイクロプスですら瞬殺出来るけど・・・。　貴女のお腹の子供までは守れないわ。　明日、行くか行かないか・・・ハッキリ決めて。　別に、貴女が行かなくても、サーウェルスを助けに行くと思うの・・・。　ケイは、言った事を途中で曲げる卑怯者では無いから・・・」

オリビアは、体を震わせて涙を流して。

「この森の事・・・何も知らなかった・・・。　聞いた事・・・伝わってる事が全てだと思ったわ。　でも、この森は地獄よ・・・サーウェルスにも途中で戻りましょうって言ったの。　でも、オウガや・・・数々の魔物に襲われて、仲間が毒や病気で倒れて・・。

村の人に助けを呼ばせる為に一人で行かせた・・・。　何もかも、私達の失態だわ・・」

その時だ。

「ええ、そうね。　その通りよ」

マルヴェリータの声。

ポリアは、ハッと隣のマルヴェリータを見て。

「マルタ、起きたの？」

マルヴェリータは、眼を開けて。

「ええ、下らない懺悔に起きちゃったわ」

と、言ってから、オリビアを見て。

「私達、貴女のお父さんとマクムス様に動かされて来たわ。　でも、理由としては半分よ」

オリビアは、涙ながらに頷いて。

「ええ、報酬も高いから・・・私達を助ければ・・・チーム名の知名度も・・」

「違うわ。　見くびらないで」

と、オリビアの言葉を、マルヴェリータは遮った。

「え？」

オリビアは、麗しきマルヴェリータを見る。

マルヴェリータは、Kを見た。

「彼・・・リーダーが居たから来たのよ。　こんな悪魔の棲む地獄に、報酬やチームの知名度上げる為に来るのは知らないバカよ。ケイは、此処がどんな場所か教えたわ。　それでも、あのリーダーが居る限り、生きて還れると踏んだから来たの。　貴女のお父さんが、この男なら娘を助けれると思った彼を・・・みんな見たくて来たのよ・・・」

オリビアは、黙って動かないKを見る。

「そんなに・・・強いんですか」

ポリアは、頷いて。

「まともなレベルじゃないわね。　ケイが居ないなら、私達はモンスターに・・病気や毒に死んでいたわ。　確かに、ケイの実力がどれだけあるのか・・・知りたい。　でも、未だに限界は見えてないわ。　もう、大型モンスターや巨人族を百は相手にしてるのに・・・怪我すらない」

マルヴェリータは、オリビアに。

「ケイは、明日貴女を連れて行くわ。　貴女の愛の気持ちのバカさがどうゆう場所に向かわせる事になったのか・・・。　そして、サ

ーウェルスに逢わせるでしょう。　最悪の結果で逢うのか、それとも最良の結果で逢うのか。　貴女の心構え次第。　どの結果にしても、引き金を引いたのは貴女・・・後悔しなようにしてね・・・眠いわ・・・」

マルヴェリータは、水袋から一口水を飲んで、また眼を閉じる。

「マルタ・・」

ポリアは、マルヴェリータが一番Kの意図を悟っていると感じた。

そして、オリビアは。

「私も、寝ます。　明日・・・必ず一緒に行きます。　私達の至らなさから出た事・・・、そして私の我儘に道連れになるのでしたら、逃げる訳には参りません。　サーウェルスを、見つけるためにも」

と、また自分の居た場所に戻った。

ポリアは、正直複雑に思える。

（明日、本当に流産したりしたらどうするのよ・・・命ってそんなに・・・軽いの？）

むしゃくしゃしそうになる。　その時だ、

「あの、チョット宜しいですか？」

マクムスが、ポリアに声を掛けた。

「えっ・」

いきなりで驚いた。　だが、マクムスの顔は疲労も有るからか、とても真面目な顔だった。

「あ・・・ハイ」

ポリアは立ち上がり、マクムスに呼ばれるままに奥のフィリアーナの石像がある小洞窟のほうに。　青い光苔の光る中で、マクムスは小声で・・・。

「実は・・・・・」

ポリアは、その話の内容にハッとしてKを見た。

マクムスは、最後に。

「お任せしていいと思いますよ・・・。　では、これで」

ポリアは、Kから眼が離せなかった。

（どこまで・・・・）

ポリアは、素直に全てが腑に落ちた。　だから、悩まずに寝る事にする。　その夜はモンスターの忍び寄る気配もなく。　誠に静かな夜だった・・・。

朝は、祠に吹き込む風と注がれた光によって知らされた。

「ん・・・ううん・・・あさ？」

起きたポリアは、背伸びをして洞窟内を見回してみた。

マクムスが休み、換わってセレイドとハクレイが起きている。　まだ寝ている者も多い中で。　外から、誰かの声が聞こえて来た。

「外？　・・誰？」

洞窟内をもう一度見回せば、Kとオリビアとミュウの姿が見えなかった。　立ち上がって、外に向かってみると。

「冗談じゃないわよっ。　オリビアを連れて行くですってっ？！！
貴方気は確かぁ？！！！」

ハスキーな女性の声だった。

「・・・・」

オウガが昨日寝ていた大樹にポリアは凭れて見た。　黙って立っているKに、あの秘薬を飲ませた女性、学者のミュウが食って掛かっている。　身のこなしの素早いミュウは、学者でもあるが、どちらかと云うと薬師の技能が長けた者だ。　草の知識や、薬の調合も出来る飛び道具遣いと云った処。

Kは、黙って腕組みして聞き流している。

今日は風が幾分強く、空は曇りがち。　Kの予想通り、明日には雨でも降りそうな様子。

ポリアの見る中、オリビアはミュウを説得していて。　ミュウはオ

リビアを心配している様子。　昨日の苦労で、今日にこの調子はチョット見たくない。　少し、成り行きを見ていたが、ミュウは一方的で。　もう一人の気の強い女性アリューファと間違えたかと思う。

「ミュウ、お願い。　一緒に来て。　サーウェルスを助けないと・・・」

オリビアが言えば。

「解ってるわよっ！！！！　代わりに私が行くわっ。　貴女は此処に残って、お腹の子供にもしもの事あったらどうするのよっ！！！！」

どうも平行線だ。　ポリアは、Kは言う気も無いのだろうが。　マクムスの言った事が事実なら、この言い争いは只の茶番だ。　多分Kは、反省を促す意味も込めて事実を黙っているのだろう。　だが、もうそろそろ皆を起こして、助けに行かなきゃいけないのだから・・・だから。

「ケイ・・・事実を教えてあげれば？」

K以外の、オリビアとミュウが、ポリアを振り返って見た。

Kは、詰まらなそうに。

「なんだ、知ってたのか？　大方、マクムスの大先生が教えたか」

ポリアは、頷いて。

「うん。　見てて茶番だから・・・詰まらない」

Kは、呆れて。

「起きてコレだ。　礼も言わなきゃ反省も無い。　癪だから黙って様かと思ったか・・・ならポリア、任す。　腹減った」

Kは、そう言って祠に向かう。

「チョットっ！！！！」

ミュウが大声を出す。

ポリアは、なんだか気が抜けて。

「ウルサイわ・・・モンスターを呼びたいの？」

「うぐ・・」

ミュウが、言葉を詰まらせる。

オリビアは、ポリアに向かって。

「何を言ってるの？　何を知ってるの？」

ポリアは、頷いて。

「昨日・・オリビアの助かった時点でお腹の赤ちゃん・・・死ぬ所だったって・・・マクムス様が」

「え・・・」

オリビアは息を呑み、ミュウはオリビアのお腹を見る。

「マクムス様も、その事を伝えたらオリビアがおかしくなるかもしれないから。　村に帰ってから・・・」

オリビアもミュウも、震えて愕然となった。　今にも泣きそうなオリビアに、顔を強張らせるミュウだが。

「でも、安心して。　今は、生きてる。　昨日、ケイが飲ませたエクリサーの秘薬のお陰で、生き返ったって。　マクムス様が」

ミュウは、オリビアを見て。

「生きてるのね・・・まだ・・生きてるのね？」

「ええ。　問題は、サーウェルスの方・・・」

オリビアもミュウも、サーウェルスの名前にポリアをまた緊張の眼差しで見た。

オリビアは、緊張した震える声で・・・。

「どうゆう事？　サーウェルス・・・どうか・・」

ポリアは、オリビアに冷めた眼を向けた。

「生きてるか、死んでるかは行って見ないと解らないわ。　ただ、マクムス様は仰った。　愛する子を宿した僧侶の癒しの力は、熟練の司祭の力を超えるって・・・。　もし、虫の息でもサーウェルス

が生きているなら。　オリビアが居るなら、強い癒しの力で傷を癒せると」

二人は、行ったKの後を眼で追った。

ポリアは、祠に戻りつつ。

「明日には還らないと。　雨は降るし、太陽が出なかったら亡霊や死霊までがこの辺りにも出るそうよ。　最短で戻る為の最善策・・・ね。　助けてもらってるんだから、少しは言う事聞いたほうがいいわよ」

ポリアは、正直な気持ちを心の中で。

（自分で言ってよ・・・面倒臭いでしょ）

さて、Kは、行くメンバーを起こした。

ダグラス、ゲイラー、システィアナ、ポリア、マルヴェリータ、オリビア、ミュウの七名と、Kがリーダーだ。

マルヴェリータは、秘薬のお陰でピンピンしている。　身体を動かしながら、

「すごい効き目だわ。　疲労感も何も無い」

一方、フェレックはもう体は重いし、痛いし、調子も良くない。疲労による頭痛もある。

「くそおお・・・俺に飲ませれば良かったじゃないか・・・」

一人、唸っている。

また、イルガはKに。

「お嬢様を頼む」

と、包帯だらけの体で頭を下げる。

Kは、サラリと。

「大丈夫だろ。　死にやしないさ、オークの女王様は。　な？」

ポリアは昨日の一件も在るだけに、ムカムカした顔で。

「だ・れ・がっ！！　女王なのよっ、荷物持ちにでもしてやらないわっ」

マルヴェリータは、頷き。

「オークに押し倒されてブチ切れたモンね～。　凄かったわ」

Kは、ポリアを見て軽口を叩く。

「ほぉ、オークになぁ～。　良かったじゃないか、ポリアでも愛してくれる種族がいるのか。　幸せなこった」

K、マルヴェリータ、システィアナが同時に頷いた。

「うう・・・おのれえ・・・」

ポリアの顔が、怒りに変わり。　ダグラスは見ていて。

（もう・・・その辺にしてくれ・・）

と、嘆く。

ゲイラーは、ポリアから人選の理由を聞かされて。

（言われてもどうせ信じられないから言わないだけか・・・。　なんでもお見通しなんだな～。　でも、ず～っとリーダーに成られたくは無い人物だ）

Kの事が、尚更怖くなった。

食事を終えた一行は、残る面々に後を託して外に出た。

「あ゛」

ゲイラーは、出た所でオウガに遭った。

だが、

「あらっ?!!」

ミュウが、目の前に居たKが居なくなったのに気付いた時。　オウガの体がグラリと前に倒れて地響きを立てる。

「・・・・・」

目を見張ったのは、オリビアとミュウ。　倒れたオウガの背後にKの姿が見えていたからだ。

「は・・・早いぜ、大将・・・」

ダグラスが、自分達の出番の無さに呆れる。

Kは、倒れた後にもがいて死んだオウガも見ずに。

「今日のポリア達は、オリビアの護衛だ。　オリビアを守ってればいい。　相手にするのは雑魚でいい。　怪我してもらっては困る」

Kは、そう言って。　昨日に、最後一人でポリア達チームと別れてモンスターを倒しに行った方に向かい始める。

ミュウは、ゲイラーに。

「み・・見えなかった・・・斬った所も・・・斬りに行く瞬間すら・・・」

「ああ、だから言ったろう？　俺等の理解出来るレベルじゃ無い」

オリビアは、静かに。

「この森に来て余裕がある訳が解りました。　さぞ、名前の知れた方ですのね」

ポリアは、歩きながら首を左右に。

「ムカツクぐらいに知らないわ。　自分の名前も、病気に成る前の

チーム名も覚えてないって・・・」

オリビア・ミュウは、

（在り得ない）

と、二人で見合った。

さて、切り立った祠の設けられていた絶壁に沿って、山の北側では無く中央に入って行くように山の中腹へと登って行く。　林の中を歩いて、行けば行くほどに湿気を帯びた涼やかな空気になって、森へと変わりって行くのだった。

だが、この時。　Kが歩きながら言う。

「そろそろ戦闘態勢整えろ。　この先、俺が昨日モンスターを倒した所だ。　倒されたモンスターの遺体を喰らいにモンスターが集まってるだろう。　気配がしてる」

ポリアは、マルヴェリータやダグラスを見て。

「解ったわ・・」

と、剣を動かないように留めて置く留め金を外した。

１７、愛の愚行とＫの選択（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回は、１７、１８話の掲載になります＾＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

18、絶望の流れる河・・・Kの本領。

18、絶望の流れる河・・・Kの本領。

「はっ！！」

ミュウの投げた三日月型のブーメラン“ムーンワッシャー”が、離れた先のオークを倒して戻る。　受け取ったミュウは、オリビアを背にして周りを窺った。

森に木々が、サイクロプスが倒された事で無残に何本も薙倒されて広い切れ間を生み出している。　Kの言った通り、Kの倒したモンスターの死体に違うモンスターが腹を満たす為に集まって来ていた。

「えいっ！！　たあっ！！」

ポリアが地獄の番犬ヘルバウンドの後ろ足に斬りかかり、ヘルバウンドに炎を吐かせない様にとマルヴェリータが飛礫を生み出してぶつける。

「どおおりゃ！！」

ゲイラーがヘルバウンドの土手ッ腹に大剣で斬り込めば、ダグラスも顔正面から一撃必殺で頭を狙いに行く。

だが、ひとたびヘルバウンドが暴れてしまえば、皆は警戒して間合いを計らないと噛まれそうになったり、蹴飛ばされそうになったり。

Kが、昨日の朝に南の祠で瞬殺した黒い象の様な犬のモンスターは、ポリア達では総出で立ち向かって互角である。

オリビアは、離れた所で襲い来るモンスターの屍の山を築くKから、視線を外せずにいた。

オウガ・ヘルバウンド、キマイラ、黒い一角馬のドレイカクコーン他。　龍の種類でドラコエディアよりずっと大きく凶悪な、“ゲルドレックス”と云う赤い鱗をしたドラゴンですらも、Kの前には成す術も無いままに斬り倒される。

自分達が驚く程に苦戦して、戦う事すら躊躇われるモンスターを一呼吸の間も無く倒されるのは、信じ難い光景だ。

「ミュウ・・・彼は神の化身でしょうか・・・」

モンスターより、Kに恐れを抱く思いのオリビアは、冷汗に額を濡らす。

ミュウも、周りを警戒しながら。

「私達、世界を股に駆ける自信を失いそうね。　あんなに強いのに、名前が知られて無いなんて有り得ない。　でも、あの若さであんなに強い冒険者なんて聞いたことが無いわ」

これが、Kの最大の謎である。

「神聖なるフィリアーナ様の加護よ～、私の仲間を守る力をくださいな～」

システィアナが、杖を手に念じれば。　ヘルバウンドと戦うポリア、ゲイラー、ダグラスの体に聖なる白い光りが降り注ぐ。

Kは、遠めから。

「それ。　守りの祝福がモンスターの攻撃のダメージを軽減するぞ。三人で、早く倒してみな」

と、傍観体勢で言う。

ポリアもゲイラーもダグラスも、全力でヘルバウンドに斬りかかった。

ポリアが、ヘルバウンドのライオンの尻尾のような先端の赤い尾を斬り、ダグラスとゲイラーが必死でヘルバウンドの頭に剣を突きたてて、漸く倒した。

Kは、見ていて。

「そうだ。　戦う時にダメージを考えるようでは甘い。　一撃一撃が全てだ、もう皆の実力は、ヘルバウンドなら倒せる処に来ている。後は、如何に恐れを振り払い、集中するかだ」

「はあ、はあ・・・」

ポリア達三人は、お互いを見合う。　ポリアが一番息が上がっているが。　ゲイラーやダグラスも真剣そのもので、顔に汗を浮かべて

いる。

Kは、辺りのモンスターの気配が消えたのを感じて、

「さて、行こうか。　この先が問題の“屍渓谷”だ」

ポリアは、マルヴェリータやシスティアナが集まって来たのに合わせてKの元に。

Kは、先頭に立ってまた森に分け入って行くのだが・・・・。

森に入って、大して歩かないうちに、辺りに薄っすらと靄(もや)が掛かり出した。

オリビアは、向かう先から怨念の放つ絶望を含んだ瘴気の波動を感じ始めて。

「皆さん、そろそろ近いですよ」

と。

ポリアも、マルヴェリータなども、生唾を飲んで緊張した。

だが、Kは、いきなり歩みを止めると、振り返る。

オリビアは、何かあったのかと緊張して。

「どうしたの？」

と訪ね返すと。

Kは、オリビアと、システィアナを見て。

「いいか、屍渓谷には怨念が渦巻く。　普通なら、僧侶は立ち入るべきではない。　だが、二人居るなら、アレが使えるだろう？　戦う必要は無い。　皆を守りながら後を着いて来い」

その言葉にオリビアはハッとして、Kが二人も僧侶を連れた訳が解った。

システィアナは、右手を挙げて。

「は～い、“レクイエムソング”の契りをつかいま～す」

オリビアは、システィアナに。

「解ってたの？」

システィアナは、ニッコリと。

「は～い」

オリビアは、歩き出したKの後ろを見て。

「では、行きましょうか。　皆さん、私とシスティアナさんの傍から離れてはいけませんよ」

と、言う。

ミュウは、意味が解らずに。

「オリビア・・・何のこと?」

歩き出すオリビアは、説明をしだした。

僧侶は、神を信仰する代わりに加護を得る。　一つは、神聖魔法。
　二つは、歌。　三つは、怨霊や死霊などのアンデットモンスターやゴーストに対する鋭い感知能力。

今回、Kが言うのは二つ目の、歌。

歌と言っても、種類もそれぞれ。　信仰する神によって多種に分かれる。　どの僧侶に共通するのは、レクイエム（鎮魂歌）なのだが。
　この鎮魂歌という歌の使用用途は、使い方次第で様々な応用が利くのだ。

基本は、浄化したい怨念の事を思って歌うと、ゴーストやアンデットモンスターを塵にして成仏させる。

しかし、仲間を思い守る気持ちで歌えば、怨念の波動を寄せ付けない守りの障壁を張ることも可能なのだ。

オリビア、システィアナが、声に出して鎮魂歌を歌いだした。　神に仲間の無事を祈り、博愛の精神を保ち続けなければならない。
二人の柔らかく優しい歌声が響くと、間近に居るポリア達の周りを白く光るベールのような半透明のカーテンが包み出した。

Kは、歩きながら。

「いいか。　無条件で俺を信じろ。　でなければ、レクイエムカー

テンは消滅するぞ。　集まるモンスターは、全て俺が倒す」

周りを包む靄は何時の間にか霧に代わり、深く濃くなる霧の帳は視界を遮った・・・。　もう、カーテンに包まれる一行は、Kの背中が見えない。　オリビア、マルヴェリータ、システィアナの三人が、感じる波動でKを捕らえているだけだ。

そして・・・ついに。

“カラっ”・“パキっ”っと、乾いた木の枝でも踏む音がしたと思ったポリアが下を向くと・・・。

「あ〝っ!!!!!」

思わず、大声が。

ダグラスも下を向いて、

「げっ!!!　ガ・・・ガガガガガガ・・・骸骨だっ!!!!」

そう、皆が歩いている足の下は、人のしゃれこうべ。　頭蓋骨や肋骨の集まりが敷き詰められている。

するとKの声が飛んで来る。

「黙れっ!!!!!!!!　僧侶の集中を邪魔するな馬鹿者っ!!!!!!」

その鋭い声に、

「ゴメンっ」

「はっ、ハイっ！！！！」

二人は謝る。

ゲイラーとミュウは、パッとシスティアナとオリビアをそれぞれ見た。

笑顔で歌う二人。　優しく、慈しむ気持ちに必死ならしい。　額には冷汗が流れ、掲げている杖を持つ手が震えていた。

ゲイラーは、グッと真剣にみて。

「システィ、大丈夫だ。　俺もポリアも居る。　システィなら、必ず大丈夫だ。　俺は信じるぞ」

マルヴェリータも、

「そうね、Kが一緒だもの。　大丈夫ね。　私もシスティを信じてるわよ」

システィアナが頷いた。　汗に濡れる顔が蒼褪めているようにも見えたが。　その声に笑顔が自然になって、生色がみるみる甦る。

信じる心は、僧侶の心の絆。　愛する心は、僧侶の精神の支柱。

ポリアも、オリビアに。

「お腹の赤ちゃん守って、サーウェルスを助けるのよ。　私も、そ

の事を信じて二人を信じるわ」

ミュウも、オリビアに、

「オリビア、サーウェルスを迎えに行こう。　私は、死んでもオリビアを信じる。　貴女なら、絶対に出来る」

オリビアの心にサーウェルスの顔が浮べば、愛の想いが溢れて自然と震えが止まって来た。

Kは、前から声だけで。

「そうだ、信じろ。　守りたい者、助けたい者。　いいか、“生は死よりも強い”。　立ち向かう想い、慈しむ心、愛する絆。　信じる力は、前進して蟠り滞る闇も怨念も寄せ付けない。　光りとは、諦めぬ者が見る意思だ。　希望とは、絶望の中で誓う信念だ」

力強い声が響いた。

ポリアは、薄っすらと霧が晴れだして行く中で、前のKを見つけた。

「あ・・あああ・・・ウソ・・・・煌いて・・・・る」

ダグラスも、見た。　全員が見た。　あたり一面の広がる骨の骸の河の上に、金色の煌きを足元から滔滔と緩やかに湧き上がらせて。

右手におぞましき亡霊のモンスターの顔を鷲掴み。　左手には短剣で刺したレヴナントを引き摺りながら消滅させるKの姿が・・・。

ゲイラーは、

「な・何でだ？　僧侶でも無いのに・・・アンデットやゴーストを消滅させられるのかっ？！！」

そう、Ｋの体を取り巻く金色のオーラに触れたアンデットやゴーストなどのモンスターは、燃やされた灰のように塵に変わって行く。

しかし・・・Ｋの前方に、様々な種類のモンスターが何百と集まっていた。

「なんて・・・・なんて数よっ！！」

ミュウは恐れ戦き怯え上がった。

見て解るモンスターも居る。　紅い炎に包まれた亡霊・・・前の仕事でクォシカを醜い蛇のモンスターに変えた“ジェノサイス・ホロウ”であろう。　黒ずんだ光り中に、仄蒼い亡霊で苦しむ人の顔が憎憎しい様に変化する骸の姿をしているのが“アビレイス・インフェルノ”

そして・・・。

馬の歩く音が響いた。　首の無い黒毛の馬に、高貴な者が好む刺繍派手やかな丈の長い上着を着て、白いスカーフをネクタイ代わりに巻く貴族の将校が跨っている。　しかし・・・首が無い。　しかも、服を着る肉体はどす黒いオーラを纏った骸なのだ。　右手には、刃渡りの長い長刀が握られ、左手には・・・・。

ポリアは、そのモンスターを凝視出来ない。　怖くて怖くて、左手に抱えるモンスターの頭は、干からびていながらも狂気を渦巻くギラギラした瞳を持って居る。

ダグラスは、立ち竦む足の震えを堪えながら。

「あ・・アレが、噂の“デュラハーン・ロード”（首なし公爵）・・・恐えぇ・・・う・動けねぇ・・・」

流石は、死霊・亡霊モンスターの最強の中の最強だ。　誰も、動けない。　体に暗黒の恐ろしいオーラを感じる。　システィアナとオリビアのレクイエムベールが無ければ、もう発狂しているだろう。

オリビアも。

（なんて夥しい数と恐ろしいオーラなの・・・声が・・・出無くなりそう・・・アノ人のオーラが・・・私達を・・・守ってる・・・）

そう、オリビアとシスティアナは解る。　Kの体から溢れている金色に煌くオーラが、自分達とモンスターの狭間で流れて来る暗黒のオーラを緩和しているのだ。

Kは、モンスターの大群にも恐れていない。

「おうおう、無駄に集まってるじゃないか・・・そんなに滅びたいか？」

と、口元をニヤつかせる。

曇る空と垂れ込める霧でこの渓谷全体が暗い印象すら受ける。　古代戦争の再来すら彷彿とさせそうな只ならぬ気配が辺りに満ち始めていた。

刹那、デュラハーンロードの長い剣が振りあがる。　いきなり、紅い血の黒ずんだようなスケルトンや、真っ黒い血肉の腐りながらもこびり付いたスケルトン。　青い皮膚のゾンビであるレヴナントが何十体・・・いや百体以上を超えて進撃し出したではないか。

だが此処で、遂にゲイラーもポリアも皆、Kの本領の片鱗を垣間見た。

パッと消えたKが、先頭のモンスター達の群れに立ちはだかった瞬間、小気味良い破裂音が皿を割れるかのように鳴り響く。　四・五体のスケルトン達が頭蓋骨を破裂させて、金色のオーラに首の骨から侵食されて塵に変わる。

「すげえ!!!」

ダグラスが思わず声を上げた。

Kの振り込む拳が見えないが、当たっているのであろう。　レヴナント数体が、土手ッ腹を金色のオーラに突き抜かれてぶつかるように飛ばされた。　空中で、全て塵に変わる。

もう、一騎当千などと云う次元では無い。　Kが駆け抜けて、数十体のモンスターが次々と塵に散れば、引き抜いた剣から放たれた金色のオーラを纏った衝撃波がモンスター達をぶっ飛ばしながらも塵に変え。　止め様と立ちふさがったデュラハーン・ロードと似た姿で、騎士の様な甲冑姿の“デュラハーン”にぶつかった瞬間に、辺りのモンスターを巻き込んで落雷が落ちたかのように光を天に巻き上げてモンスター達を消滅させてしまった。

もはや、成す術無く倒されるのはモンスターであって、誰もその絶対無比の力が炸裂する戦い方に声など出ない。

Kが姿を消して、何体か居るアビレイス・インフェルノとジェノサイス・ホロウの間にいきなり現れた上に、

「滅しな」

と、言ったのと同時に煌くオーラに体や頭を撃ち抜かれて消滅してしまう。　もう、此処までモンスターの群れの半分は消え去った。

Kは、辺りを見回して。

「コラ、全滅したいだろう？　どいつから消えたいか？　前に出ろ」

ミュウは、見ている中でモンスターがKに向かうのを躊躇しているかに見える。

「凄いわ・・・モンスターが躊躇ってる。　初めて見たわ・・・」

ゲイラーも、本音で。

「二度と見れない・・・かもな・・・。　こんな現実・・・」

“カシャンカシャン”と・・・。　なんと、ある紅いスケルトンが後退りを。　だが、その瞬間に、Kはフワリと消えた。

そして、

「おい、逃げんのか？」

と、その紅いスケルトン、“ブラッディー・ロア”の肩に手を回した。

“カクン”と音を出して横を向いた紅いスケルトンの左肩から、煌くオーラが侵食して行く。　前に歩み出しながら激しく苦しんで倒れて、紅いスケルトンは塵に・・・。

何より見ている皆に信じられないのは、Kの体に湧く煌くオーラが、弱まるどころかどんどん強く煌く事である。　丸で、強い金色の光りを放つ火の粉が舞い上がる様だ。

さて。　モンスターの中で、腐った血の色をした肉の塊が浮いている。　大きさは、大型のブタぐらいなのだが、その体の表面には苦しむ阿鼻叫喚に悶える人の顔が無数に浮かび上がる。　“レギオン”・・・恐るべきモンスターの一種で、長年存在し続けたレギオンは、最強の死霊と同じく、人の命を瞬時に奪う“デットエンド”（死の訪れ）と云う呪いを使える。　前に、クォシカをモンスターに変えたアデオロシュが死に際に使った死神召喚の邪術だ。

「あ〜」

ポリア達は、声を上げたり。　息を呑んだり・・・。

レギオンやアビレイス・インフェルノやジェノサイス・ホロウが一斉にあの邪術を唱え始めたのだから。

しかし、Kは、ユラユラと立っているだけ。　亡霊達が大きく開いた口より、大鎌を携えたズタボロのマントを着た骸骨が次々と現れ

る。

―キエエエエ！！！！―

十数体は召喚されたか。　気味悪い奇声を上げて死神達は群れてKに襲い掛かった。

「ケーーーーーイっ！！！！！」

動かないままのKだから。　驚いたポリアの声が響き渡った。

大鎌がKに振り込まれる。　死神の大鎌は、何も斬れない。　しかし・・・命の灯火だけが例外なのだ・・・。

ポリア達が見張る視界の中で、Kの体を大鎌が幾つも通った。

一瞬、歌う声すら止んだ。　全ての時間が停滞したように思えるのだが・・・。

「おい、インチキ手品師か？」

Kは、その死神達を見回して声を出す。

「あ゛・・・生きてる」

信じられない一同。

「あ～・・・」

オリビアもシスティアナも、驚きつつも歌を続ける。

Kは、高笑いすらして、

「雑魚が寄り集まって、骨の寄り合いか？　暇つぶしにもならねえな～。　そろそろ、目障りだよ・・・お前等」

瞬間、Kの体から一瞬だけ爆発的にオーラが広がって、周りに集まった死神達を滅ぼした。

―ナニモノダ・・・キサマ・・・―

くぐもった不気味な声で、デュラハーン・ロードの左手の顔が喋った。

Kは、不敵に笑って。

「テメエ等を滅ぼす為に参上した。　ホンモノの・・・死神さ」

近くのアビレイス・インフェルノが、いきなり横に現れたKに驚いた。　しかし、気付いた瞬間に横腹を左から右にオーラが突き抜けて消滅する。

Kに群がる前に、暗黒魔法を唱える前に、モンスターは倒された。

そして、前が見えない程に居たモンスターは、デュラハーン・ロードを残すのみとなったのである。　あれだけ居たモンスターが、つかの間の一瞬で滅び去った。

―一騎打チ・・・カ。　ソレモヨカロウ―

デュラハーン・ロードの抱える左手の顔が喋る。

Kは、コートを靡かせて対峙し。

「御託、吐く身分かよ」

―笑止ッ！！―

遂に、デュラハーン・ロードが動き出す。　首の無い馬は、正確に突き進んで素早くKの面前に走り込むと。

―死ネッ！！―

と、刃渡り三メートルを超す剣がKに突き込まれた。　が、一瞬手前でフッとKは姿を消す。

―ムッ―

デュラハーン・ロードは、小刻みなステップを馬に踏ませて右に跳んで、パッと現れたKがデュラハーン・ロードの居た場所に現れた。

「避けたああっ！！！」

驚くダグラス。

しかし、Kとデュラハーン・ロードはそのまま動かなかった。

一瞬どうしたのかと思うのだが・・・。　何か違う違和感に気付いたのは、ミュウだ。

「も・ももも・・持ってるっ！！！！　アノ人・・・首を・・・」

そう、デュラハーン・ロードの首がロードの左手から、Kの左手に移動していた。

“カタカタカタカタカタカタカタ・・・・・・・・・・”。Kの手に握られた、頭の毛を鷲掴み状態のデュラハーン・ロードの顔が、震えてか歯を噛み鳴らしている。

Kは、その顔に向かって、持ち下げながらに。

「おやおや、地獄に聞こえた死神公爵の異名。　嘘っぱちか？　ビビッても、チビれないな～。　体が骨だものな～」

―ハナ・・ギャア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ーーーーーーッ！！！！

Kは、口元をニヤニヤさせて。

「頭と体が離れ離れとは可愛そうな。　くっ付けてやろうかぁぁぁーーーっ！！！！！」

そう大声を上げて、ポーンと馬の背中に飛び上がった。　首なし馬に跨る体の後ろに立つKは、一気に左手に煌くオーラをギラギラ光らせながら、

「くっつけーーーっ！！！！」

デュラハーン・ロードの顔は、怯えた絶叫を上げて。

―ヤアアアメエエエレエエエエエエエエ！！！！！

「今が渡り時だ。　着いて来い」

と、歩き出した。

オリビアは、モンスターに怯えるのか、それともKに怯えるのか解らない震えと冷汗を背筋に覚えつつ歩き出した。

ゲイラーは首を左右に振って。

「もう、絶対逆らわない・・・死にたくネエ・・・・」

ダグラスは、引き攣った笑い顔で。

「あ・・あははは・・・凄いじゃんか・・・」

ポリアも、流石にKの恐ろしさが身に滲みた。

（モンスターに・・・同情したくさせる冒険者って・・・アリ？）

間違っても、Kに喧嘩などは売りたくない。

全員、そんな感想を抱いた。

ミュウは、朝に食って掛かっただけに、自分の身の程をモンスターで知った。

そして、その渓谷を歩いてどの位だろうか、随分歩いたような・・・。　以外に進まなかったような感じのままに。　ポンといきなり霧が晴れた。

「うおっ」

「わあっ」

ゲイラーと、ポリアは驚いて声を上げた。　左に切り立った絶壁。　右には、雲すら見下ろせる崖。　歩ける幅は人二人ぐらいの岩肌の露出した山道であった。

「うひょ～・・・落ちたら死ぬな・・・」

ダグラスは、崖の下に流れる雲を見る。

「あれ・・・ケイが・・・・居ない」

ポリアは、オリビアの先に出て歩いた。　もう、オリビアも歌を止めている。

歩いて行くと、直ぐに緩やかなカーブの所、左に祠の入り口が開いていた。

「在ったわ、こっち・・」

ゲイラーは、なまじ体がデカイだけに道幅が矢鱈に狭く感じて、右の崖が奈落の底に見えてくる。

「ち・・・高所はキライだ・・・」

と、呻いた。　高所が苦手な彼である。

マルヴェリータは、Kから預かった光りの小石をまた光らせて祠の

中に入って行く。

蒼い洞窟の中で、Kが立っている足元に紅い鎧を着た男がボロクソになって倒れていた。

「サーウェルスっ！！！！」

オリビアが驚いて走り寄った。

Kは、

「生きてる。　随分な怪我で体中に黴菌が回ってるが。　助かるな・・・」

オリビアは、全身全霊を込めて癒しの魔法を唱えた。　システィアナも、加わった。

白い純白の光りが照らす顔。　かなりの整った顔立ち、ブラウンカラーの髪は長くて首まで伸びる。　Kより頭半分高い背丈の若者・・・。　これが、グランディス・レイブンのリーダーでゲイラーと同じ大剣遣いのサーウェルスだ。

Kは、傷口の消毒を急ぎ、システィアナとオリビアが塞いで行く。

Kの言う通り、オリビアの魔法による傷口の塞がる速さは早い。

ものの四半刻（三十分）程か。　サーウェルスの怪我の手当ては終わった。

Kは、ゲイラーに。

「このバカたれを担でくれ。　今は昼過ぎだから、戻れば夕方には

戻れる」

「おう、解った」

怪力のゲイラーだ。　鎧と装備でかなりの重量にはなるが、サーウェルスを担いで歩ける。

Kは、汚れた顔のサーウェルスを見て。

「運のいい男だ。　俺なら引き摺って、途中で捨ててるかもな」

ポリアは、困った顔でオリビアを見ながら。

「捨てたら、マズイでしょ・・・」

「フン・・・」

戻りは、モンスターも少なくて楽であった。　夕方には、サーウェルスを連れて一行はマクムス達の待つ祠に戻る。

殆ど無傷で戻った一同に、残っていた面々は拍子抜けですらあった。

１８、絶望の流れる河・・・Ｋの本領。（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回は、１７、１８話の掲載です＾＾

もう、Ｋ編も残して二・三話になりました＾＾

後少し、Ｋとお付き合いして下さい＾＾

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

１９、Ｋの謎が残るままに、雨に誘われた村への帰還

１９、Ｋの謎が残るままに、雨に誘われた村への帰還

誰もが黙っている。　今、夜中だが。　大半の者が起きていた。

Ｋは、隅っこで寝そべっている。

ポリアは、そんなＫが恨めしい。　Ｋについて解った事は“完全無比”という事で、恐ろしい強さを持っているというだけ。“どうして？”の謎は、何一つ解決していなかった。

サーウェルスを膝枕し、ずっと看病しているオリビア。

傷ついた者達を見回るセレイドとハクレイ。

眠っているのは、グランディス・レイヴンの重傷者と、イルガ・ボンドス・コールド・マクムス。

他の皆は、Ｋの戦いぶりを聞いて寝れないイクシオやヘルダー、フェレック達。　Ｋの神懸りな強さを目の当たりにしたポリア達は、尚更眠れそうに無い程に記憶に焼きついていた。

「薬湯・・・飲もうかな」

ポリアが、そう言うと。

「俺も・・・飲むかな」

ゲイラーがボンヤリと・・・。

ダグラスは、苦笑いで。

「俺は・・・飲んだんだけど・・・もう一杯・・・」

イクシオは、横になっているKを見てつくづくと言った顔つきで。

「道理で、最初に“一人で行く”って言った意味が解ったぜ」

フェレックは、自分が今まで反抗的な態度をして来たのに、よく怒られずに済んでいたと思って黙っている。

しかし、答えが一つ解明した事がある。

ヘルダーは言葉は話せないが、文章は書ける。Kの、ゴーストやアンデットモンスターを倒した金色のオーラについて教えてくれた。

格闘術にも、色々な技がある。その中に、“体気仙”（たいきせん）と呼ばれる技があるのだとか。身体の生命エネルギーを、魔想魔術のようにイメージで具現化出来る。“気孔”と云う気力の流れを用いた体術。ただ、それは腕や足などにプロテクターを着けるのと一緒で、防御を念頭に置いたダメージ軽減体術なんだそうな。

しかし、格闘武術を極限まで極めて、この体気仙を呼吸するように

無意識レベルまで扱えるようになると、その扱い方を攻撃に利用出来ると云う。　生命エネルギーは、プラスの力であり。　ゴーストやアンデットモンスターは負のマイナスの力。　強いどちらかの力は、弱い力を破壊する。　ヘルダーは、Kがその力を利用しているのだと教えてくれた。

しかし、ヘルダーの技量ではKの力にはまったく足元にも、いやもう砂粒と大地の大きさを比べるようなモノで。　到底太刀打ち出来るレベルでは無いとも・・・。　Kの若さで極めた者など、聞いたことすら無いらしい。

普通のレベルでは計れない・・・それがKだとしか解らなかった。

さて、その中で。

フェレックは、神妙な面持ちで起きている仲間に。

「所で、一つ提案があるんだが」

イクシオ・ヘルダー・デーベは、リーダーに注目した。

デーベは眠たい顔で。

「ん？　どうした？」

フェレックは、やや思い詰めた顔のままでチームの仲間を見て。

「ああ。　今回の仕事終わったら・・・チームを解散しようと思う・・・」

聞いていたポリア・マルヴェリータが眼を見張った。

ポリアの横で、システィアナがうつらうつらしている。

イクシオは、テンガロンハットを脱いで横に置くと。

「国を変えるのか？」

「ああ～・・・。　と云うか・・・一端国に帰ろうと思う。　このまま仕事が成功しても、俺には背負い切れないくらいにチームの知名度が上がりそうだ。　それに、仕官の道を模索してみようと思ってる」

イクシオは、なんだかフェレックが変わった気がした。　只、それは責めることでもないし、人の道それぞれだ。　だから・・・。

「フェレック、言う意味は解る。　ま、みんなそれぞれだ・・・。　それも、選択肢の一つかもな。　別に、文句も無い」

すると・・・。

「俺も、同じ事考えてた」

いきなり、ゲイラーの声。

ポリアは、ビックリだ。

「ゲ・・ゲイラーまで・・」

ダグラスは、青い洞窟の光と魔法の小石に照らされるゲイラーを見

て。

「マジ？」

ゲイラーは、真顔で頷き。

「ああ・・・。　俺は、リーダーのようなキレも無いし・・・ポリアのようなリーダーシップも無い。　前から、誰かのリーダーの下でやる人間とは自覚してたんだ・・・。　こんなに、違う世界が見れた。　いい機会だと思う・・・・・・で。　相談あるんだが・・・ポリア」

ポリアは、見られてビクっとして。

「な・・何？」

「いや、・・・俺を仲間に加えてくれないか？」

一気に、起きていた一同がゲイラーを見た。

ポリアは、キョトンとして・・・。

「マ・・・マジで？」

「ああ、大マジだ」

マルヴェリータは、寝始めたシスティアナを見て。

「システィが居るから？」

ゲイラーは、二人の美女を見てからシスティアナを見つめて。

「理由の一つには、それもある。　だが、俺のチームもフェレックのチームも、このまま行っても、多分は世界に出た所で終わりそうな気がするんだ・・・。　むしろ、ポリアの方が羽ばたけそうな気がする」

ポリアは、しどろもどろで。

「ゲゲ・ゲイラーっ、ちょっと待って。　私達は、貴方のチームよりグレード低いチームよ。　今回だって、思い切りお荷物だし・・・Kのお陰でそう見えるんじゃない？」

すると、ダグラスはアッサリと。

「そうとも限らないだろう？　ポリア」

ポリアも、マルヴェリータも、見合って困った。

ダグラスも、遠くを見るような瞳で天井を見上げて。

「確かに、ポリアのチームはグレードは低い。　でも、前のオガートの事件と、今回の一件でグレードは上がるさ。　しかも、この東の祠に来る間。　リーダーの言葉を一番ヒントに出来たのはポリア達だ。　オークとオウガを分断したのも、オウガを倒した時も、エクリサーの秘薬を飲ませる相手の選択。　よくよく考えると、ポリアの選択にも間違いは無かったと思う」

「ダグラスまで・・・」

ポリアは、困った。　これでは丸で、前にKから話に聞いたチームの解体だ。

（どうしよう・・・チームの分裂じゃない・・・・）

だがそこへ、イクシオは言葉を添える。

「いいんじゃないか、加えても。　俺は、世界を放浪して新しいチームを探してみようと思う。　いい加減、男ばかりのチームにも飽きたし、この国は仕事が少ない」

イクシオは、爽やかに笑った。

デーベは、眠い顔で。

「とにかく、仕事が終わったらみんなで飲んで決めようや」

ヘルダーが、静かに頷いた。

ポリアもマルヴェリータも、それぞれ男達が寝る中で。

「男って、勝手よね・・・」

「ま、そこがいいのかもね・・・・」

と、言い合って眠りについた。

さて、ついに。　この山を降りる日がやって来た。

朝。

「ん～・・・・・」

ポリアは、眼を覚ました。　何だかガヤガヤと煩いから。

開いた眼の先には、起き出しているグランディス・レイヴンの面々。

サーウェルスが、Kの前に居た。

「迷惑を掛けた・・・申し訳無い」

土下座に近いサーウェルス。　Kは、座って黙っていた。

マクムスに、息子のデルが怒られていたり・・・、ミュウとオリビアが起きた面々に助かった成り行きを説明していた。

「起き抜けに・・・忙しいわね・・・」

見れば、ゲイラーのチーム、フェレックのチームもそれぞれ集まって何か話をしている。　昨日の解散の事だろうか・・・。

システィアナは、もう起きてイルガの怪我を見て頷いている。

「システィ、イルガは大丈夫？」

「あ、ポリア～。　もう、動けます～」

と、システィアナ。

イルガも、

「お嬢様、ご心配をお掛けしました」

と、座ったままに頭を下げる。

ポリアは、幼い頃からの従者イルガが心配だったから。　笑顔が自然と出て。

「無事で良かった」

そこに、Kが立ち上がり。

「いいか、皆」

話声がピタリと止んだ。

「今日の夕方前には雨が降る。　山を降りて、森を東から南に横断して戻る。　怪我・傷の深かった者は戦う必要は無い。　夜の入りまでには、村に戻る予定で行く。　今日が最後の一日だ。　気を引き締めて行くぞ」

各自、了承の声が上がった。

食事をして、支度をして外に出れば。　どんよりとした鉛色の雲が小さく千切れて、白い雲の下を流れている。

（マジで降りそうね）

もう、日の光は見えない。　ポリアの見上げる空には雲が天を覆っていた。

さて。　先頭は、Kとポリアとダグラス。　右にミュウとイクシオとセレイド。　左にゲイラーとヘルダーとレック。　殿は、サーウェルスとアリューファ。　戦わない者や魔法使いが真ん中だ。

「俺も、もう大丈夫だってっ」

ボンドスが、Kに言う。

「無理は要らない。　帰りは戦闘も少ない。　何より、雨に降られる前に少しでも村に近づきたいんだ。　誰か怪我したら、その時交代だな」

マクムスは、Kが全員の怪我や疲労を踏まえての態勢を理解しての事は承知。

「ボンドス殿、まだ肋骨がくっ付いたばかり。　イルガ殿のように、安静になさいませ」

「そうじゃ、迷惑を掛けてはならん」

イルガの声にボンドスは、渋々に魔法使い達のいる隊列の中に入った。

Kは、直ぐに出発した。　南の祠には向かわず。　山を東側から下って行く。

大して進まない内に、オーク達の集まりに出くわしたが。　もう、ポリア達の敵ではなかった。　連戦して、戦い慣れた分、恐れも無く自然と身体が動く。

Kは、戦いもしないで、のんびり見てて。

「お～い、おっせーぞ～。　オークの女王様、早くシバけよ」

ポリアは、キッとKを睨んで。

「うっさい！！」

ダグラスは、Kの様子に呆れて。

「もう、余裕なのね・・・そらっ！！！」

と、オークを斬って倒す。

ゲイラーも。

「昨日で、出番十分だろう？　ドリャア！！！」

二匹を一撃で薙倒した。

オークを倒し終わると、Kは歩き出す。

「さて、行くぞ。　遠くに、サイクロプスの気配してる。　こっちに、気付いてるからな」

サーウェルスや、ミュウなどは凄い真顔に成った。

「戦うのか？」

サーウェルスに聞かれたKは。

「追いつかれたら、な」

と、歩き出す。

ポリアは、先を見て。

「早く森に抜けましょう。　構ってる暇はないわ」

さて、サイクロプスの名前に、誰もが真剣な顔になった。　あの巨体は恐ろしき脅威。

だが、山から森に抜けてしまえば・・祠に施された結界でこちらの存在が解らなくなる。　さらに、森に貼られた結界は、外にモンスターを出さない。　この二重の結界で、モンスターは森の外に出られないのだ。

だが・・・。

一行は、山を下って森へ抜けそうな時。　後ろからは“ドスン・ドスン”とサイクロプスの足音が近づいていた。

「もう少し、森は見えてる」

と、Kが落ち着いた声で、坂の下のマニュエルの森を指差した。南の祠の手前に見られた坂が、コチラにもあったのだ。　転ばないように、落ち着いて下る一行。　Kも、幾分は昨日で疲れているのだろう。　戦う気は見えなかった。

しかし、全員が坂を下って森に入った時だ。

「うわうわ、来たああ～」

ポリアが、坂の上に一つ目の巨人のサイクロプスがヌ～っと姿を現したのを見て怖がる。

サーウェルスは、殺されそうになった巨人を改めて見て。

「恐ろしいバケモノだ・・・もう二度と遭いたくない・・・」

と、皆が安堵する中で、Kはサイクロプスを見返して。

「アイツは・・・あの時の・・・・」

小さく呟く。

「んあ？　何だって？」

ゲイラーが、聞き返すと。

「此処で待ってろ・・・直ぐ終わる」

Kの声が、いきなり戦闘モードの低いトーンに。

「え〝！！　森に出たじゃんか！！」

ダグラスは言うが、Kは。

「アイツには、借りがあるんだ」

と、また森から山の中に戻りだした。

「ちょちょチョット、ケイっ！！」

ポリアが言う時、Ｋの姿がフワリと消えた。

「なっ、何だとぉ！！！　・・・そんな・・・消える技・・・・暗殺闘技じゃないかっ！！！」

サーウェルスが驚いた。　いや、その顔は愕然とした怯えも孕んでいる。

だが、彼だけでは無い。　全員の顔が、Ｋの消える技能の名前を始めて聞いて驚いた。

一方で、Ｋの姿は去ろうとしているサイクロプスの直ぐ後ろに見える。

サーウェルスは、驚愕と恐れを滲ませる顔でＫを見て。　搾り出すような声で。

「バカな・・・闇に暗躍する暗殺者の者が・・こんな表舞台に現れるのか？」

ゲイラーは畏怖に歪んだ顔のままに、サーウェルスを見てからＫを見てやって。

「リーダーの消えるのは・・・人殺しの技ってか？」

暗殺闘技・・・誰もが耳にしかしない事だ。　この世界には、極々

少数の暗殺を生業にする者達が居ると言う。　金で人を殺す。　だが、その存在は噂の中だけで、誰も存在を見た事が無いと云う。

皆の見る中でKは、サイクロプスに向かってあろうことか、

「おい！」

と、声を掛けた。

―ウウウ・・・・・―

高々と聳える大木のようなサイクロプスが、声に気付いて振り返る。

Kは、包帯から覗ける眼をギラギラさせて。

「今から十三年前を覚えてるか？　テメエの腕の傷を覚えてるかっ！！！！！！」

Kの鋭い声が、響いた。

ポリアは、その言葉に怪訝な顔に・・・。

「十三・・・年前？　ケイ・・・・まさか・・・調査以外にも、この山に来てたのね・・・」

Kが語った山のドラゴンの調査は、三・四年前の事。　十三年前では決してない。

ポリアの言った事とは別に。　ゲイラーは呟いた。

「なんか、あのサイクロプス・・・様子が違うな・・・」

この感想は、何度もサイクロプスを見ていた者達の共通のモノだろう。　今見えているサイクロプスの顔が何と云うか違う雰囲気がした。　角が欠けていて、腕に凄い傷跡があり。　肌の色も青く無い。　どちらかと云うと、茶褐色に近い赤。

マクムスは、静かに震え。

「おそらくはあれが、“ギガンデス”。　サイクロプスの古代種です」

ポリアは、巨人を見て。

「ギ・ガンデス・・・」

「“その悪鬼、血を吸った赤のよう・・幾多の人を喰らい貪る巨人の王”・・・古代神闘記に書かれる一説の通りだ・・・」

呟いたマクムスも、こんな伝説のモンスターを拝む事になろうとは思わなかったろう。

だが、Kは、鋭い眼で赤いサイクロプスの王であるギガンデスを見上げて。

「その腹に在る物・・・返して貰うぞ」

するとギガンデスは、

―ウゴゴゴオオオオオオーーーーーーーーっ！！！！！！！

！！！！！―

と、凄まじい雄たけびを上げてKに掴みかかったのだが。

Kの振り込んだ短剣から放たれた衝撃波によって、唐竹を割られるように真っ二つに斬られて・・・・倒された。

新たに加わったサーウェルス達は、丸で幻想的な幻覚を見ているようだ。　実力を褒められた自分達は、世界でも二十の指に入るチームと自負していた。　この森や山でも、オウガ辺りなら引けも取らない。

だがKは・・・・、あのオウガなどが赤子のようにしか見えないような強大で巨大なサイクロプスを一撃だ。

皆が見ている坂の上。　Kは、斬られたギガンデスの身体の内臓に向かった。　見回して、赤黒い血が一面溢れる中で、光る何かを見つけた。

「・・・まさか・・取り返せるとは・・・な」

拾い上げたのは、指輪だ。　エンゲージリングでは無く、神への祈りを捧げた文字の施された装飾指輪。　白銀製であるが、もう光沢は失われていた。

「あの時は、俺が・・・・。　これからは、俺と夢を見よう・・・。
・・さん・・・」

Kの口元、目元が震えていた。　微かに、誰かの名前を呼んだようだった。

少しして、Kがポリア達の元に。

「待たせた、戻ろう」

明らかにKの様子は暗く、何か有ったと確信出来る。　だが、その雰囲気は人を拒絶する物で。　Kは、無駄な口は一つも利かなくなった。

こうなると、ポリア達も話掛けずらい。　無言のままに、森を行くことに。

マニュエルの森を靄が掛かる・・・。　高々と聳えて伸びる森の木々の中、Kの行く方に着いて行けば。　来る時に休憩をした川の対岸に出た。　全く、モンスターには襲われないままにだ。　やはり、来る時のKの言う事に間違いは無い。

「休憩だ」

もう昼頃だろうか、川を渡った所でKが言う。

皆、それぞれ休憩に入った。　忙しいのは、僧侶達だろう。　まだ、身体の動きの悪いグランディス・レイヴンの重体だった二人の男や。　ボンドス・コールド・イルガ達の体調を看なければならない。

Kは、皆とは離れて一人で岩に座る。

ポリアが、そんなKに用があって向かった。

ポリアが近づいた時。

「何だ？　俺の事は聞くなよ」

ポリアは、釘を刺された様な感じだったが・・・。

「あ～・・・チョット・・・相談あって・・・」

横目でポリアを見るKは、

「ふうん。　ま、いいさ。　大体予測は付くが・・・言ってみろ」

「う〝・・解るの？」

「ああ、昨日の夜中の話と、朝のゲイラーやフェレックの話からしてな」

ポリアは、腹を読まれてる。　Kの座っている岩近くの岩に腰を降ろして。

（か・隠し事出来ない・・・）

と、思いつつ話した。

「実は・・・」

そう、チームの解散の話を、今日の朝にゲイラーもフェレックも言い出した。　そして、なんと、だ。　ポリアのチームに、ゲイラーとダグラスとあのヘルダーが加えて欲しいと願い出て来たのだ。

また、キーラとレックにコールドやボンドスなどは他国に渡ってチ

ームを新たに結成しようと言い出しているらしい。
Kは、仲良さそうに喋ってる皆を見ながら聞いていて。
ポリアが、
「どうしよう・・・私、そんなにリーダーの向きじゃないよ・・・」
と不安な顔で寂しがる。　自分の影響で、ゲイラーのチームの解散を招いたような気がしてならないのだ。
すると、Kは、曇る空を見上げて。
「羽ばたきたいか？　ポリア」
「え？　あ・・・ん～・・・今は良く解らない」
「そうか。　だが、俺が見るにだ。　この場に居る奴で最もリーダー向きはキミだと思うがな。　本音で、だ」
ポリアも、雨雲の欠片が流れる空を見上げて。
「そうかな・・・自信ナイ・・・かな」
「俺が所々で言った言葉を一番理解していたのは、君とマルヴェリータとシスティアナだ。　しかも、オウガを倒した話も聞いたが、ゲイラーの一人試合を止めたのも、全員で戦う事もポリアが指揮したんだろう？　結果が全て。　俺がして欲しい指揮をしたのは君だ。
誰も、それに逆らわなかった。　答えが、そこにある」

ポリアは、長く伸びている後ろ髪の束ねた根元を掻いて。

「あん時は・・・一生懸命で・・・大して考えて無かった」

Kは、鼻で笑って。

「はっ、考えてないで出来たなら、尚更じゃないか。　それに、サーウェルスを助けると決まった夜。　俺は、ポリアに薬を飲む人員を決めさせた。　ミュウの人選は、俺の利に適ってるぜ」

ポリアは、あの時の事を思い出した。

「あれは、悩んだけど・・・ミュウさんが適任と思った・・・武器が、白銀製だったし」

「違うな」

Kは、直ぐに返す。

「え？」

ポリアは、言われて顔をKに合わせた。

「ポリアの頭にあったのは、そっちじゃないだろう？　それは、結果的な理由に過ぎない。　一人、デルはどうして連れていかなかった？　もう一人、アリューファは、どしてダメだった？」

「それは・・・二人とも傷が以外に重いから・・・」

Kは、やや肩身の狭そうなグランディス・レイヴンを見て。

「キミは思った。　デルには父親のマクムスが居る。　せっかく助けて直ぐに危ない場所に借り出すのはどうだろう・・・。　そして、気の強いアリューファ。　オリビアの事などで、言い争いになったらどうしよう・・・オリビアが孤立する」

ポリアは、ズバリと腹の中を読まれた。

「わ・・解るんだ・・・ははは・・・凄いね」

苦し紛れと浅はかに自分が思えて、苦笑した。

だが、Kは、ポリアを見て。

「いや、それが正解さ。　オリビアと行動を共にして、最後までオリビアを見放さずに女のオリビアを気遣い出来たのはミュウだけだろう。　そこだ、その考え方だ、ポリア」

「え？」

「チームの戦力を考える者・・・つまりゲイラー辺りなら、魔法使いのデルか、戦力の補強でボンドスやアリュ－ファを取ったろう。　もしかしたら、三本有った小瓶を、オリビアを連れて行かないで、最も傷の深い者に飲ませたかもしれない」

ポリアは、むしろそれが正しいと思える。

だが、Kは。

「ポリアは、俺が言った事を曲げないと解って最良の判断をした。

そして、夜はオリビアに来るか、来ないかの判断を任せた。　マルヴェリータの言った事は俺の考えの代弁に過ぎないが。　キミは考えたろう。　もし、オリビアが来ない選択をしたら、俺を説得する道を」

「う・・うん」

これは、ポリアのあの時の本音だ。

「それでいい」

「え？　でも・・・」

「いや、俺が説明をしていない中で、あの判断をしたなら人として間違いはない。　ポリアは、人の心を最大限考慮した。　人を思う心で判断した事なら、ずれていても間違いではないさ。　むしろ、そこを外して考えると、後々に説得も説明もした所でもう悪い方にしか行かないだろう。　その考え方が出来るポリアは、最もリーダーに適した人物だ」

ポリアは、こう言われて複雑だ。

「でも、今回は解んないよ・・いきなりチームに加えて欲しいなんてさ」

Kは、ゲイラーを見て。

「みんな、解らんさ・・・。　答えなど進んで見て、反ってくる事実が答えでしかない。　だが、ゲイラー達も、フェレック達も、自分やチームに足りないモノを踏み込んで考えたんじゃないのか？

成長したポリア達に、変われない自分達の有様を」

ポリアは、納得しきれない顔でKを見て。

「答えをくれないのね」

Kは、口元を笑わせて。

「俺はポリアじゃない。　その答えは、ポリアの心にあるさ。　自分で素直にどうしたいか・・・考えてみな。　腕前の問題じゃない。　それは、今回の事件の発端を招いた奴等を見れば解るだろう？」

ポリアは、サーウェルス達を見て、Kの言葉を反芻した。　何か、気が楽になって行く気が。

さて再出発して、トルトの村まで戦闘は無かった。　来る時に襲ってきたサルやゴリラのようなモンスターは、ポリア達を見るなり逃げていった。

しかし、代わりに雨が降り出してしまった。　夕方、もう辺りが暗くなる頃に、一行はずぶ濡れでトルトの村に戻ったのである。

宿に帰って、ビショビショのK達を見た女将さんは、眼を丸くした。

「はぁ～、あの山に入って帰って来るとはねぇ・・・。　幽霊かと思ったけど、足あるわ」

Kは、呆れて。

「勝手に殺すな」

そこに、あの無愛想な料理をやる主人が、食堂でKを見るなり。

「おう、ちと話ある」

Kは、女将からタオルを借りて主人の元に向かった。　厨房のカウンターを挟んで、Kと主人。

主人は、Kに南の方を指差して。

「なんでも、今夜か明日には、国からの馬車が来るとさ。　使いがあった」

Kは、頷いて。

「そうか、ま～もう急ぐ必要ないし。　此処で、もうちょい金を落としてから行くかな」

「ありがてえ事だね。　身銭を全部置いて行ってくれや」

主人は、そう言ってから厨房内の上の棚に置いてあった手紙をカウンターに出した。

「ん、男が持ってきた。　アンタに渡せと」

Kは、眼を細めて差し出された手紙を見た。

「解った」

手紙を取るKの後ろに、大きいタオルを持ったポリアが来て。

「オヤジさん、ご飯お願いね。　？・・・・ケイ、何かあったの？」

Kは、森に入る前は作戦会議もしたこの食堂にて。

「ポリア、役人からの使いだとさ。　どう思う？」

「え？　いや・・・どうって・・・」

「考えろ。　ジョイスは、五日後には馬車を待たせておくと言ったのに。　遅れてる。　しかも、遅れるだけなら、こんな手紙は要らない」

ポリアは、ジョイスがクォシカの事件を扱っているのを思い出し。

「まさか・・・何かあったとか」

頷くKは、手紙を見て。

「だな。　どうやら、嫌な予感が的中してる」

「え？　・・・どどっどうゆう事？」

Kは、ポリアを振り返って見て。

「ガロン、覚えてるか？」

ポリアは、あのラキームの片腕を遣っていたガロンの顔を思い出して、怒るように顔を変え。

「忘れる顔してないわ」

「だな・・・、奴が逃げた」

ポリアは、ハッとした。

「マジ？」

「ああ、役人を四・五人斬って逃走したらしい」

ポリアは、Kから手紙を受け取って確かめた。

―ジョイス様より伝言です。　ガロンが逃走致しました。　取り押さえる際に、兵士三名が死に、二名が負傷してしまいました。　馬車の到着が遅れます。　誠に申し訳ありません　―

Kは、口元を僅かに笑ませた。

「どうやら、死にたいらしいな」

ポリアは、殺気を感じてビクっとした。　Kが今言った言葉には、本気の殺気が篭っているように感じたのだ。　モンスターを倒す気配では無い。　危険な、人を殺す殺気と感じられる。

「ケ・・ケイ・・・どうしたの？」

Kは、ポリアに横顔だけ見せて。

「飯だと言って、全員集めてくれ。　話がある」

「う・・うん。　解った」

ポリアは、全員に言いに行った。　Kが怖くて、逃げるように・・・。

外の雨は、春の長雨らしいシトシト降り。　風は南風。　涼しいくらいの空気がヒンヤリとして雨の匂いを運んで来る。

さて、荷物の一部を残していた一同は、着替えたり身体を拭ったりして食堂に集まった。

皆が揃ってKは、ゆっくりとした口調で言い出した。

「いいか。　食べながらでいい」

その声に、ボンドスやコールドが頷いて手を動かし始める。

Kは、水を飲むポリアの横に立ち。

「冒険者の掟の中で、万が一にリーダーが居なくなったり死んだりした時の取り決めがある」

「ぶっ」

ポリアは、話の内容に驚いた。

マルヴェリータやシスティアナはおろか、サーウェルス達もKを見る。

Kは、続けて。

「正直、俺は知名度など欲しくないし。　金も要らん。　しかも、チョイトこれからの用事が出来たから。　ここで、別れる」

「何だって？」

「おいおい・・・マジ？」

「えあ？　いや・・・そんなの」

騒ぐ一同に、Kは続けて。

「いいか。　万一リーダーを失っても、リーダーの代わりが居ればいいだけだ。　俺は、適任はポリアだと思うから、ポリアに後を任す。　全員、ポリアの指示に従ってくれ」

「え〝え〝っ？！！　わ・私？」

ポリアは、全員の顔が自分に向いているのにビビッた。

しかし、Kはポリアを無視して続け。

「いいか、俺が居なくなった時点でポリアはこの仕事のリーダーだ。　彼女の命令は俺の命令だと思っていい。　それから、助けられたチームは、仕事の内容に置ける必要人物だからな。　マルタンの街にて斡旋所のマスターに会うまでは、ポリアの指揮下に入ってもらう。　報酬はチームの状態に因るから、ふざけるなよ。　以上」

ポリアは、Kが荷物を纏め出したのを見て。

「ケイ！！　勝手に決めないでよ！！！！！」

と、席を立つも。

Kは、静かに。

「仕方ない、ガロンを逃すわけには行かない」

マルヴェリータも、やや慌てて。

「そんな・・この雨の中でガロンを探しても見つかる訳無いわ」

Kは、マルヴェリータを見返すと。

「探す必要は無い。　先回りするだけさ、奴の行動など手に取るように解る。　明日の早朝、俺は発つ」

と、断言。

そこへ、ゲイラーが。

「どうしてもか？」

Kは、開いて来たゲイラーの前、ダグラスとヘルダーの間の席に向かいながら。

「悪い、これは決定事項だ。　あとは、マルタンに戻って各自自由に。　俺が受け取るはずだった報酬は、ポリアが受け取ればいい。　サーウェルス達は、じっくりとマスターに叱られるんだな」

すると、ゲイラーは。

「仕方ないなら、ポリアのリーダーには賛成だ。　以外はシスティ以外は認めない」

と、言う。

「えっ？　あっ、チョット！」

と、驚くポリアに、ボンドスも。

「俺も、ゲイラーに同じ。　これで、サーウェルスやフェレックにされるなら、御嬢の方がいい」

すると、イクシオも。

「だな、リーダー命令だし。　俺も、それなら文句ない」

サーウェルスのチームに異論は出せる状況では無い今、ポリアにリーダーを任せる話に反対は誰も居ない。

ポリアは、本当に困った。　今度は、いきなりKの代わりにリーダーにされるのだから。

マルヴェリータは、横から。

（どうせ戻るだけだし、いいんじゃないの？　誰も、文句無いって）

（ウルサイ！！！！　今までの説明どーーーすんのよっ！！！！！！）

ポリアは、Kの勝手さにもう怒りすら沸いて来た。

食事後、サーウェルス達は疲れている所為が直ぐ寝るし。　イクシオやデーベなどが酒を久々と呷っていた。

そして・・・夜中だ。

「グ～ス～」

「もう・・・飲めねえ・・・バカ・・・」

「ハゲ・・光って・・・まぶ・・しい・・・」

食堂に酔い潰れたボンドスやイクシオなどが居る。　もう、長椅子やテーブルに寝てしまっていた。

そこに、足音も無くKが二階より降りてきた。

「フッ・・・久々に面白い奴等とチームを組んだもんだ・・・・」

酔い潰れてる面々を見ているKが呟いた。

そして、雨の外に出て行く。　入り口の外に出たKの右脇には、葉桜になり掛けた櫻の巨木がある。

「・・・・」

雨を葉や花で受けて落とす桜をKが見上げた時、少し強い風が吹いた。　パッと揺れた枝から雨粒と残り少ない櫻が散ってKに降り注

いだ・・・・。

もう、包帯男は闇夜に消えていた。

１９、Ｋの謎が残るままに、雨に誘われた村への帰還（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ちょっと慌しい日々の中で書いてます＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

20、人生は運命という時流の川が流れるままに、全ては名残り惜しむ春の嵐

20、人生は運命という時流の川が流れるままに、全ては名残り惜しむ春の嵐

ポリアは、馬車に乗るままに黙って手紙に目を通す。　Kからの手紙、もうこれで見るのは何度目だろうか・・・。　窓の外からは、別の馬車の走る音や、雨が車体に当たる音がする。

ジョイスが差し向けてくれた馬車は、四台。　全部乗用の黒い車の付いた馬車で、それぞれ自由勝手に乗り込んでいた。

今日は、マルタンに到着する日。　連日の長雨の中で、馬車の進行も遅れて三日を丸々使い。　今朝は、四日目だ。

そして・・・、Kが居なくなってから、五日目。　ポリアは、Kが消えた後、もう一日トルトの村で休み、それから馬車に皆を乗せたのだ。　馬も皆も疲れていたし、急いでも仕方無いのが現実だった。

だが、Kからの手紙を見ながら休んだ一日。　雨音に紛らせてため息ばかり吐いていたポリアに、あまり他人の声は聞こえては居なかった。

「ポリア、何度読んでもKは帰って来ないわよ」

横のマルヴェリータの声すら、ポリアの耳には入っていないようである。

★

―ポリアへ

悪くないチームだった。　手も焼かされたが、それも仕方無い。
俺は一足先に行く。　もう戻らないから・・・お別れだ。　自分の選んだ答えは、自分の、チームの道だと腹に入れとけ。　それだけでいい。　もし、ポリアの剣の腕とチーム名が世界に響く時、もう一回くらいは前に現れてチーム組んでもいいぜ。

さて、俺から、キミへの餞別を二つやろう。　一つは、今回の仕事の記憶だ。　ジョイスにでも渡してやってくれ。　ジョイスが調べ終えた後は、それはお前達にやるから、上手く活用してみるといい。
二つ目は、同封しておいたその碧い鱗だ。　それは“ブルーレイドーナ”・・あの山の頂上に住む神龍の鱗だ。　もしかしたら、持っていて使う時が来るかもしれんからやるよ。　売ってもかなりの値が付くし、活用の用途は好きにしていい。

俺は、山で思い出の品を取り戻した。　この仕事やクォシカの仕事が無ければ取り戻せなかったかもしれないから・・・その運命に対しての礼とでも受け取ってくれ。

達者でな。　チームの名前を、時と云う時代の河に刻んでみな・・・
・サラバだ―

★

ポリアは、左手にその貰ったアイテムを持っている。　一つは、前回もKが使った“記憶の水晶”だ。　四角い水晶の塊である。　もう一つは、ポリアの手の中にもすっぽり納まる菱形の碧く煌いた宝石の様な物なのだが、透明なその鱗の中には静かに風が吹いている。
　とても信じられない物だった。

（ケイ・・・あの時、何を拾ったの？　貴方、あの山に・・・何で・・・・）

ポリアは、Kとのこの二十日ちょっとの過ごした記憶を、何度も思い返した。　何より引っかかるのは、帰りのギガンデスを見たKだ。　何故、倒さなければならなかったのか・・・。　十三年前と口走ったKの様子が、明らかにそれまでのKとは違っていたのは何故だろう。

ポリア達を乗せた馬車は、午前中にマルタンに入った。

小雨の振る中、遂に馬車は斡旋所【蒼海の天窓】に到着。　入り口前に降りたポリア達の前に、いきなりドアが呼び鈴を強く鳴らして先に開いた。

「マ・マスター！」

ポリアの目の前に、剥げた頭のドッシリと太った大男のハズのマスターが現れたのだが・・・。　今は、見る姿は違っていた。

「ポ・ポポ・・ポリア・・・むっ・娘は？　オ・オリビアは・・」

ろくに食事も睡眠も取ってないのか、憔悴しきってげっそりこけた

顔と二回りは痩せた身体で、クタクタと歩いて来てポリアの前に膝間づいた。

「大丈夫、生きてるわ・・・」

ポリアは、微笑んで言う。

「はあっ・・・」

グッと息を呑んだマスターの耳に、

「お父さんっ」

と、オリビアの声が。

パッと左を向いたマスターの眼の中に、馬車を降りてきた娘の・・オリビアの姿が・・・。

「あ・・あああ・・・おおおおおお・・・・・」

マスターは、大きい顔に涙をボロボロ流して、その顔を大きい両手で覆った。

オリビアも、流石に父親の・・・全ての建前を捨てた男の泣き姿に居た堪れなくなって目の前に小走りでやって来た。

「ごめんなさい・・お父さん・・・」

謝るオリビアを前に、

「い・いぎてたあ・・・おおっ、生きていた・・・オリビア・・オリビアがあっ・・・」

マスターは搾り出すように咽び叫ぶ。

「お父さん・・・」

雨の中、オリビアもこんなに弱った父親を見るのは初めてだったのだろう。　自分の身勝手さが身に滲みて解り、父親に抱き寄った。

マスターは、涙でクシャクシャになった顔で娘を見て。

「お前は・・私の宝だ・・死んでたら・・・死んでたら死のうかと・・死のうかと思っていた・・・。　おおお、生きて・・お前の母さんに・・・約束したのに・・・守れなかったらどうしようかと・・・おお・・良かった・・・生きてて・・・良かった・・・」

「ごめんなさい・・ごめんなさいお父さん・・・」

オリビアが父親に抱きついたのは、オリビアがまだ幼くして母を亡くした時に見た弱弱しい父親の姿が今再び重なったからだ。　父は、変わらない父のままだった。

見ていたサーウェルスが、自分の不甲斐無さに横を向いて。

「俺は・・なんと・・・・」

親などに祝福されなくても・・と、オリビアと二人で語り合った自分は。　結局は他人の心内を知らなかったのだと思い知らされる。

ポリアは、マスターとオリビアの前に屈んだ。

「マスター、とにかく中に入って話しましょう。　オリビアは、お腹に赤ちゃんが居るの」

マスターは、大口を開けて驚いた。

「な・・何だって・・・」

見られるオリビアは、頷いて。

「ごめんなさい、報告が遅れました・・・サーウェルスとの子供よ」

言葉にならないままに口をパクパクさせるマスターに、サーウェルスが謝り。

「事実です。　済まない」

マスターは、娘を見ていたが・・・どんどん穏やかな瞳になって。

「そうか・・そうか・・・じゃ、雨は身体に悪いな・・。　中に入ろう・・・」

オリビアもサーウェルスも怒鳴るかと思われたが、すんなりだった。

館の中には、数組の冒険者達が居るだけだった。　長雨と仕事の少なさで、他の冒険者達はどうしただろうか。　ゾロゾロと入って来たポリアやマスター達に気付いて見返してくる。　中にはサーウェルス達も居るから、興味がそそられるのも無理は無い。

周りに見られながら二階に上がって、一同はマスターに仕事の報告をした。　Kの離脱を聞いて、マスターは。

「そうか・・・アイツは、初めからこうする予定だったのかもな・・・。　掟には、仕事の達成時に居ない者の名は、成果に加えられないのを知ってだろう。　不思議な奴だ」

そして、フェレックと、ゲイラーがそれぞれチームの解散を申し出した。

「あ？　辞めるのかよ・・・・」

ポカーンとしたマスターの顔が、憔悴したタコの様である。

ポリアは、マスターに続けて。

「マスター、ゲイラーとダグラスとヘルダーが私のチームに入りたいって言うの。　だから、チームに追加申請もするわ」

「何だってええ?!!」

ポリアと、ゲイラーやダグラス達を交互に見るマスターだ。

「ゲイラー達が言い出したの。　今でなくていいわ。　明日、もう一度来るから、その時で」

マスターは、とにかくなによりもと。

「解った。　全部、解った。　フェレックとゲイラーのチームの解散、ポリアのチームへの追加・・・全部やっておこう。　んじゃ、

ポリア」

「ん？　何？」

「お前リーダーだから、アイツの受け取るはずだった報酬を受け取れや」

と、小振りながらギッシリと何かが詰まった皮袋をカウンターに置いた。

「全部で、三十ガラッド入ってる」

フェレックが、思わず大声で。

「さっ三十ガラッドおおおっ？！！！！！」

皆に、ざわめきが起こった。“ガラッド”は、この世界の最高の通貨だ。　全て金と宝石から造られた記念硬貨で。“古代メダリオン”とも言われる。　一枚の値段は、たった一つで数万シフォン以上。　三十などと言ったら、恐ろしい値段になるだろう。

ポリアも驚いたが・・・Kの仕事を考えると、妥当かもしれない。

「有り難く受け取っておくわ」

と、受け取ってから、一同を見て。

「今日は、部屋も酒代も奢るわ。　一番高い宿で行こうね」

と、笑えば。

ボンドスは笑って。

「いいねえ、ドンチャン行こうぜ」

ダグラスは、親指立てて。

「大賛成だ」

セレイドも、

「神とリーダーの懐に感謝します」

と祈る。

ポリアは、マクムスやサーウェルスのチームを見て。

「マムクス様もサーウェルス達も一緒して。　最初で最後。　合同チームの仕事の成功と、全員の生還を祝って」

マクムスは、穏やかに微笑んで。

「お受けいたしますよ。　冒険者の身を、楽しませて貰います」

サーウェルスも、頷いた。

「恩人の誘いだ。　受けない訳には行くまい」

すると、オリビアは父親を見て。

「お父さん・・・お父さんも来て・・・・」

全員が、マスターを見た。

「・・・・・」

見られてマスターは、一同を見た後に。　ギリリとしかめっ面になって。

「ああ・・・父親として・・・説教してやるわいっ」

と、サーウェルス達を睨んだ。　普段のふてぶてしいマスターの顔だ。

「如何にも、私も参加いたします」

と、同意したマクムスは、息子の顔を横目に見た。

息子のデルは、バツが悪そうな。

フェレックは、マジ顔で。

「そりゃ〜いい、俺も加わりたい。　たらふく嫌味を吐いてやる」

ゲイラーは、仲間を見て。

「合同チーム別れの最後だ。　死ぬ気で飲み尽くせよっ」

「おおっ！！！！」

皆が大声を上げた。

ポリアは、笑ってマルヴェリータに。

「予約の口添えお願いね～」

「いいわよ。　有り得ないぐらいに騒いでやるわ」

と、腕組みして済まして言ったマルヴェリータは、いきなり破顔させて笑うと。

「ジョイス様も呼んでみようかしら」

それは・・・、現実になった。

まず街の宿屋街に向かった一同は、超豪華ホテルをマルヴェリータの口添えで抑えた。　それから皆を降ろしたポリア達四人は、馬車を返す名目でジョイスに会いに行った。　あのK曰く、“ゴミ屋敷”にて。

「や～、御揃いで・・・あれ？」

屋敷の入り口で、のんびり顔でボサボサ頭の起き抜けジョイス。

皆を見てKが居ない事に気付いて、ガロンを追った事を聞くと。

「あ～あ、馬鹿だな～。　この世界で最悪の刺客を敵にしたんだ・・・これは捜索必要ないなぁ～」

と、納得顔だ。　しかも、飲み会の誘いにも行く気満々である。

ポリアは、直ぐに。

「ジョイス様。　Kは、暗殺者だから・・・ですか？」

すると、ジョイスは否定した。

「ん～。　リーダーは、暗殺者ではないよ。　只、その技が使えるだけ・・・いや、盗んだのかな。　見様見真似でね」

「見様・・・見真似？」

「じゃ、馬車の中で話してあげるよ。　僕の知ってるリーダーの事・・・。　でも、他人には内緒にしてね。　いい話じゃないから・・・皆さんの心に留めておいて」

頷く、ポリア達。

支度をして出てきたジョイスは、自分の馬車に全員を乗せて宿に向かった。

馬車の中でジョイスが語った話は、ポリア達には信じられないKの一面だった。

ジョイスとKが会ったのは、お互い十八歳の頃だとか。　黒いマントに、黒い戦闘服を纏い。　一人でいたKと、魔法学院を卒業し立てのジョイスは、別の国にてチームを組んで半年以上の間、一緒に冒険をした。　チームのメンバーは、結成当時は五人。　最終時は、七人だったとか・・。

最初、確かにKは、凄腕の剣士だったが。　格闘術は知らなかった

らしい。　だが、ある時に格闘術と体気仙を使う冒険者を仲間に一時加入した時で、Kは真綿が水を吸い込むように格闘武術を物にしてしまったらしいのだ。

ジョイスは、その時を振り返り。

「元々、剣で極められた身体と感性が可能にしたんだろうね～。我流で覚えて、素手で石壁を平気で壊せるんだもん。　驚いたですよ～」

そして、Kが一人になる切っ掛けは、在る貴族の家督争い。　泥沼のいがみ合いの中で、暗殺された様な死に方だった当主の事件を調べる依頼を請けて。　事件を調べて行くうちに、その家督争いに飲み込まれてしまい。　Kは、調べる相手方の首謀者と、欲望・専横激しい依頼主をゴタゴタに紛れて斬ってしまったのだ。　そして、両家に話を着けて強引にいがみ合う根元を断った。

その時、後の遺恨をジョイス達に及ばないように解散と云うか、除名したのだとか。

ポリアは、其処までで驚いた。　依頼主を斬るだなんて・・・・・・。

「有り得ない・・・そんな・・・」

ジョイスは、昔懐かしむ様に。

「ま～ね～。　今のリーダーと違って、あの時のリーダーはもっと怖かったもの。　それこそ、腹の腐った相手には容赦無い。　何故なのか、理由は何一つ教えてくれなかったけどね」

さて、ジョイスの話の続きだ。

Kは、それから、“始末屋”とチーム名を付け変えた。　コードネームはパーフェクトの“P”。

だが、その請け負う仕事は、最も汚く危ない仕事ばかり。　解決しても決して表に出ない物ばかり。　暗殺などとは違うが、国の汚れた汚職や隠蔽されし事件・事故、他には誘拐や一歩間違えば犯罪者になるような仕事だ。　斡旋所に持って来られる依頼の中でも、おいソレと回す冒険者の居ないような仕事ばかりだったらしい。

所が、Pが請け負う基準は一つ。“やり方はPに任せる事”だ。

ジョイスが薄っすらと聞いた話では、中には気に入らない依頼主を斬り捨てた事も一度や二度では無いらしい。　しかも、人生に訳在りの凄腕冒険者達が集まり、闇に埋もれた最強チームに僅か一年で成り上がり。　突発の依頼で危険極まりない何の情報も無い遺跡に潜入したり、国の内々的な覇権争いや内部告発などを無名のままに解決したり。

ジョイスは、考えて。

「多分、リーダーに刺客は何度も差し向けられたろうね・・・暗殺者も・・。　戦う中で、逆に倒した相手の技術を盗んだんだろうと思う」

ポリアは、Kの以前のリーダーとしてのチームを率いていた時が、凄まじい殺伐の中に居た事だけは想像出来た。　馬車の中、下を俯いて考え込む。

「ケイ・・・でも、どうして解散したんだろう・・・チーム」

ジョイスは、外の雨を見て。

「理由はさっぱりだね・・・。　疲れたのか、仲間がバラけたのか・・・」

だが・・・ポリアは、Kの言葉を思い返して居る内に・・・。

（あ・・・も・もしかしてっ？）

ポリアは、パッと一つの仮定が浮んだ。　もしかしたら、Kの言っていたアンダルラルクル山の地中奥深くに居たと云う魔王。　それを倒したのがK本人で。　全ての目的は、其処に在ったとしたら・・・。　やるべき事が無くなったから・・・冒険者に興味が無くなったのではないかと・・・・。

ポリアは、ジョイスを見て。

「ジョイス様、もしかして・・・Kから十三年前の話・・・何か聞いてませんか？　マニュエルの森やアンダルラルクルの山に関係あると思うんですけど・・・」

ジョイスは腕組みして。

「う～ん、聞いたことないなぁ。　僕も、出会う前のリーダーの一切は知らないんだ。　リーダーは、過去を一切話さなかったし・・・」

ポリアは、なにが凄く真相に迫った気がしただけに。

「そう・・ですか・・・」

と、気落ちした言葉になった。　何故だろうか・・・こんなにもKの何かが知りたいのは・・。

さて、宿屋街の一等地。　港の風景を一望出来る高台の広い敷地に作られた白亜の大きな建物は、貴族や商人御用達の高級宿。　一泊が四百八十シフォンとずば抜けて高い。

「うほほ～い、スゲ～ぜ」

ボンドスと相部屋のダグラスは、真っ白なカーテンに、真っ白なベットとシーツ、純白の部屋の内装に興奮していた。

ボンドスは、こんな綺麗な部屋は初めてだった。

「なんと言うか・・新築の家みてえだな～」

と、感歎した。　今まで、安い宿しか泊まった事が無いからだろう。

別室では、フェレックがヘルダーと相部屋で。

「フン、まあまあの部屋だな。　手入れが行き届いてる」

無言のヘルダーは、頷きながら部屋の中を見回してる。

フェレックは、ヘルダーのそんな姿を見て。

「ヘルダー、ポリア達と一緒に頑張れよ」

振り向いたヘルダーは、フェレックの素直な顔を初めて見た気がする。

「世界に名前が響いたら、家に招いて豪華なフルコースを食べさせてやるぜ」

笑うフェレック。

「・・・」

ヘルダーは、頷いて拳を握った。

一方で、レックと同室になったキーラは、

「レックさん、綺麗な部屋ですね・・・初めて見ますよこんな部屋」

レックも、同意見だ。

「ホントだな～。　こんな部屋は、二度と泊まれないかもな」

キーラは、穏やかな声のレックに向かうと。

「明日からは、宜しくお願いしますね」

「おお、こちらこそ。　ボンドスやデーベも来るからな。　船の上でチームの名前でも考えようか」

「はい」

レックは、キーラの成長に内心喜びを感じていた。　あの弱弱しい感じだったキーラは、今は落ち着きが出始めている。　今回の仕事が、皆に与えた影響は計り知れないモノだろう。

さて、別室では。

「いいかっ、認めた訳じゃないぞ！！　部屋割りが悪いんだからなっ！！！」

“バタン！！！！”。　斡旋所のマスターが強く閉じたドアが閉まったのは、サーウェルスとオリビアの部屋だ。

「・・・当分、怒られっ放しだな」

サーウェルスは、苦笑い顔だ。

だが、オリビアは俯いて。

「サーウェルス・・・お父さん、素直じゃないだけよ」

「ああ、解ってる。　それに、今回は俺に全責任がある・・・いくら怒られても仕方無いさ」

見詰め合う二人の時間は、静かに過ぎる。

しばらくして、一同が夕方頃に会食場に集まった。　豪華絢爛・美麗優美な円形のダンスホールのようなフロア。　流離う冒険者達にはどう見ても場違いのような場所だ。　輝く大きなシャンデリアと壁掛けランプの明かりの中で、豪勢な料理がテーブルに並び溢れ、

酒もたらふく用意されていた。

ポリアが、剣も鎧も外した姿で幾分令嬢ぽい格好となって、上手（かみて）の大きい絵の掛けられた壁を背にして立ち全員を見た。　全員も、ポリアを見る。

「仕事は終わり、明日からはみんなそれぞれの道に別れるわ。　だから、仕事の成功と、全員無事の帰還。　そして、サーウェルス達が生きて返った事、全部含めて祝福しよう。　みんな、お疲れさま～。　カンパ～イ！」

「カンパーーーイ！！！」

一斉のグラスが鳴り合い、皆が飲めや喋れのパーティーになった。

マスターは、早速オリビアと居るサーウェルスににじり寄って。

「いいかぁっ！！！　オリビアとその子供に後ろ指なんぞ刺される生き方や、悲しませる生き方しやがったら只でおかねえぞおおっ！！！！　解ったかあっ！！！　大体なああ・・・」

と、説教が始まり。

ゲイラーは、システィアナの横にて。

「システィ、何か取ろうか？　ハム？　お野菜？」

と、借りてきたネコ状態に。

ダグラスは、イクシオやコールドと別れを惜しんで語らい。

マルヴェリータとジョイスが、ペアで飲んで仕事の内容を話す。

「なんとか、幻視の呪術を使ってみたの・・・」

「ほぉ～、頑張りましたねぇ」

「でも、何度もは無理ですね」

「精神の集中と、イメージを繊細に細部まで構想する事が大事です・・・云々」

と、難しい話に。

フェレックは、デーベとレックとキーラを交えて、これからの冒険者としての計画や旅の話を。

ポリアは、イルガやヘルダーとアレコレ食べる事に。

ヘルダーは、ポリアに頭を下げる。　身振り手振りが、ポリアに言いたい意味を伝えようとしていた。

「うん、これからは宜しくね。　私も、足手纏いにならないように頑張るわ」

イルガも。

「うむ、ワシも。　まだまだ見習いますわい。　これからはお互い頑張ろう」

と。　一緒に戦った間だからか、打ち解けやすい。

マクムスと、ハクレイやセレイドは、サーウェルスのチームの面々と飲みながら雑談をしている。

もう、誰もKの事は深く口にしなかった。　これは冒険者の掟。仕事に最後まで居なかった者の評価はしない。　まさに、ソレだった。

まだ、雨が小雨ながらに降る外は、春の嵐を名残惜しむかの様に風が強かった。

明日には別れる皆は、全力で楽しんでいた・・・。

そして、それから二日後の昼。　ジョイスを通じて、逃げたガロンが国境都市モーンブルクにて惨殺死体で発見されたと聞かされたポリア達だった・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーエピローグーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ハア・・ハア・・・」

都市の入り口である正門近くの木の陰に男が隠れている。　窺っているのは、門に入った先に居る見張りの役人一人。　安物の長槍に、皮の胸当てをしている。

時間は、今は夜中。　春の長雨が断続的に降り。　生暖かい風が海から吹いている。　海岸の国境都市モーンブルクの入り口で、逃亡者ガロンは、都市に潜入する機会を窺っていた。

「・・・・」

ギラギラした瞳は獣の様で、顔も衣服も汚れている。　オガートの町を脱走して追手から逃れる為に、どぶの中や茂みの中を通り、殺した動物の生肉を齧って生きて来た。

（捕まるかっ！！　逃げ延びていつか・・・アイツ等を殺してやるッ！！！！！！！！）

脳裏にあるのは、ポリア達の顔。　Kは、どう見ても勝てそうにないが、ポリア達を人質に取れば勝機も有ると思っている。　とにかく、今は逃げてほとぼりを醒ますのが先決と思っていた。

ガロンは、拳くらいの石くれを掴んで、門の外に架かる橋の下を流れる川に投げた。　都市をグルリと囲む様に、川が流れている。海岸都市の為に、飲み水の確保として作られた水路だ。

“ドブン”と立った音に、

「ん？　何の音だ？」

と、役人の男は門の外に出てきた。　そして、ガロンの前で、整備された水路の方に降りていく。

（チ・・殺して・・・イヤ・・・今のうちだ）

殺して、川に突き落とそうと思ったが、後々が面倒と思ってコッソリと門を潜った。

モーンブルクは、国境の衛星都市で、整備の進んだモダン都市。街中の中心地から外へ向かう通りはどれもレンガ道で、道の両脇は石やレンガで造られた建物が区画正しく並ぶ。　道並みも等間隔で植樹がされており、道幅も広く洗練された都市だ。

ガロンは、やや霧の掛かった人気の無い通りを静かに中心地に向かった。

この都市を抜けた先は、他国で、“神聖自治国クルスラーゲ”へ出る。　只、今夜はもう怪しまれるから出れないだろう。　大勢の人が出入りする時間に合わせて出ようと思っていた。

ガロンは、歓楽街に向かった。

街灯のランプが並ぶ道。　街の眠らない一角、飲み明かせる店が幾つも開いている道に入る。　直ぐに数人の酔っ払いと擦れ違った。
　店の前には、肩がガラ空きで胸元丸見えの客引き嬢が、黄色い声や甘い声で客を誘っている。

ガロンは、並ぶ店の中でも、女の客引きの居ないひっそりとした店を探していた。　そうゆう店は、如何わしい店でこっそりと女と泊まれる店なのだ。

だが・・・。

「おい」

いきなり、ガロンの耳に聞き覚えのある声が響いた。

（あ〝！！！！）

ギョッとしたガロン。　その声の主を忘れる訳も無い。　疎(まば)らに客が往来する通りで、振り返った。

「・・・？」

店から漏れる明かりが道を照らすが、見える視界にあの包帯男は居ない。

「ねえ、オジサン」

いきなり、ガロンは腕を掴まれてバッと激しく右に振りかぶった。

視界には、ビックリした若い客引き嬢が立っていた。

「どうしたのさ・・・。　飲んで行かないかい？」

緊張で、冷汗が濡れた前髪から雨の雫も連れて顔を流れる。　ガロンは、手でそれを拭った直後に。

「あ〝っ！！！」

ガロンは、見えた前方を限界まで開く瞳で見張った。

「・・・・」

店の入り口、自分の眼の前の客引き嬢の後ろに、包帯を顔に撒い男

がユラリ・・ユラリ・・と立っていた。

「ねえ、飲んで行かないの～？」

と、女が甘えた時、ガロンは怒って。

「ウルサイっ！！！！」

と、客引き嬢を撥ね退ける。

「キャアっ！！！」

路上に倒れた女には眼もくれず。　ガロンは前を確かめると・・・

包帯男は居なかった。

（クソ！！！！！　どうなってるんだっ！！！！）

道を先に進み出す。

「このバカヤロおおおっ！！！！！」

倒れた客引き嬢が、罵る声を吐く。　通りを歩いている人々が、ガロンと起き上がる女性を見たりした。

だが焦ったガロンには他人の目や、女性の声それすら耳に入らない。

酔っ払いや道行く男女が、異様な面持ちのガロンを見て行過ぎる。

衣服も汚れているし、汗などで少し臭っても居たかもしれない。

そして、また・・・。

「あっ」

道行く人の中で包帯を巻いた男が擦れ違った。　ガロンは、パッと立ち止まってまた振り返る。

（いいっ・今・・居ただろう?!!!）

だが、居ないのだ。　もう、ガロンは何がなんだか解らなくなって、早足で道を抜けようとするも・・・・。

「よお」

とか。

「また遭ったな」

と、包帯男・・・Kに声を掛けられたり・・・後ろから肩を叩かれたりしておかしい動きになる。

一方、ガロンを見ている通行客は。　ガロンが一人でクルクル回ったり、走り出した先で驚いたり。　挙動不審というか、怪しい人物に思える。

「おい、アイツはなんだ?」

「さあ、頭おかしいんだろうさ」

ほろ酔いの男二人がそう言っている。

だが、ガロン自身は、Kの姿を見失っては存在だけが匂い。　探して見ると何所にも居ないのだ。

「うわあああああああーーーーーっ!!!!!!」

遂に、ガロンが発狂したように走り出した。　歓楽街を走り抜けて、宿屋街に出て行く。　通行客は、イカれたオッサンの様なガロンの走る姿を見送った。

街灯のランプは、深夜を過ぎた頃に消えるように油が調節してある。　ガロンが走って来た宿屋街は、もうランプの明かりが消えていた。

そして。

「ハア、ハア、ハア・・・」

ガロンは、暗がりの宿屋がズラリと並ぶ通りのど真ん中で立ち止まった。

風がやや強く吹いてくる。　宿の殆どの部屋は明かりも無く、通りに漏れる光は無いに等しい。

すると・・・。

「苦しいなぁ〜」

ガロンの耳に、またKの声が響く。

「んあっ?!!」

前を向くと、後ろから。

「許せネエ～なぁ～」

「ぐっ！！」

振り返るガロン。

しかし、Kの姿は見えない。　ところが今度は真後ろから。

「俺から逃げれるか？」

ガロンが、前に顔を戻した時。　いきなり喉元に拳が飛び込んだ。

「おぶう！！！」

息を半分また飲み込む形で噎せ返り、声に成らないままに呻いたガロン。　苦しくて呼吸が出来ずにその場に屈む。　蹲る目の前には、皮靴をした足が見える。

見下ろしているのは、Kだった。

「ガロン、言ったろう？　逃げるなら、俺が殺すと・・・。　全く、世話焼かせやがって」

Kは、右足のつま先でガロンのアゴを掬って上を向かせた。

「うぐぐぐ・・・」

怯えたガロンの瞳に、細めた眼のKが見えた。

「お前、役人も殺したってな。　どうにも救い様が無いぜ。　クォシカの分も含めて、十回は死んだ気にさせてやろう」

ガロンの眼がその言葉にギョッとした瞬間、Kは右足を跳ね上げた。
ガロンの身体がフワリと持ち上がって、Kはガロンの喉を左手で掴んだ。

「うげぶうう・・・」

ギリギリと掴み絞られて、苦しくなるガロンはもがく。

Kは、ガロンの顔を涼やかに見て。

「暴れるのは・・煩いな」

ビクン!!!、とガロンの身体が震えた。

「ごあがが・・・・」

篭る声は苦しげなのに、両腕は動けないのかダラリと垂れ下がる。
骨が・・関節で外れた。

「行こうか・・・地獄に案内してやろう」

Kは、ガロンを掴むままに連れて闇の中に消えていった・・・・・。

そして、次の日。

港の木造の倉庫が密集する一角でガロンの死体が見つかった。

【K編、一部完】

次回より、探偵冒険者ウィリアム第一部をスタートさせます。

20、人生は運命という時流の川が流れるままに、全ては名残り惜しむ春の嵐

どうも、騎龍です＾＾

K編の一部ラストです。　Kは最強過ぎるキャラクターなので、この先は中々登場はありませんが。

話は、世界を引き継いでウィリアムへと引き続きます＾＾

そちらも、お楽しみくださいな＾＾

では、ご愛読ありがとう御座います＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ１、その出会いは、雨の日に・・・・。

１、その出会いは、雨の日に・・・・。

海風が吹く港街。　青い空・・・カモメが港の上空を飛んで行く。

朝、この港に渡って来た大型船が何艘も港に入り、大勢の客と荷物を降ろしていたり、乗せていたり・・・・。

その、港から都市の中心伸びる大きい通りの上での事だ。　大勢の旅人や商人、荷を運ぶ荷馬車や、手押し車などが行き交う港からの入り口にて。

「うわぁっ」

青いローブと言われる全身服を着た若者が、突き飛ばされて路上に尻餅を着く形で倒れた。　音を立てて、若者の横に持っていた杖が転がる。

その若者を突き飛ばした男性も含めて、数名の男女が若者を囲んで見下ろしていた。

赤毛の髪を背中に垂らし、細身の剣を左の腰に佩いたやや下半身の露出が強い女性剣士が腕組みして、倒れた若者を見下ろす。　表情には、怒りを孕んでいる様に見える。

「ロイムっ、此処でお別れだよ。　アンタを入れておいたらチームに儲けが入ってこないからねっ」

すると、鋼鉄の鎧を首から下全身に纏い。　ガッシリとした身体つきで背の低い訝しげな厳つい顔の中年男が、同じく倒れた青年を見下ろして。

「やっとテメエとオサラバ出来るわ。　嬉しくて涙がでるよ。　あっ?!　ふざけたクソガキがよっ!!」

と、罵声を浴びせる。

「ああ・・ゴ・ゴゴ・・・ゴメンナサイ・・・」

倒された青年は、可愛らしい顔つきの十・・五か六歳程の若い男の子のような印象を受ける。　涙眼で、弱弱しく一瞬女の子ともとれるかもしれない。　フードが斜めに頭に掛かり、金髪の髪を隠して顔にまで掛かる。　背も余り高く無い。

背中に弓を背負う髪の長い細身の若い女性が、都市部に向かって歩き出しつつ。

「もういいわ。　早くロイムをパーティーから外しに行きましょう」

ちょっと背が高く、黒い厚手の神官服と云われる特殊な刺繍を背中に入れたローブを着た男性は、細い黒目でギロリとロイムと呼ばれた青年を見下ろして。

「クズが。　次見かけたら斬ってやる」

と、凄みを利かせてからローブをはためかせて振り返り、先に歩き出した仲間の後を追って行きだした。　ローブの背中には、恐ろしい憤怒の形相をした悪魔の刺繍が施されている。

周りの人も、何人かは立ち止まって見ていたり、歩きながらその光景を眼にしていた。

「・・・・」

ロイムは、消えて行く仲間達を見送った後。　転がった杖を手にして起き上がった。

「ハア・・・これで六度目か・・・」

しょんぼりしたロイムは、街の人ごみに消えていった。

ーーー

その建物の扉の前に、彼の青年ロイムが立っていた。　オドオドした様子で、建物に入るのすら決めかねている様子。

入り口の上に掛かる木の看板には、【爽風に吹かれる白亜亭】と、書かれている。　此処は、冒険者と呼ばれる者達がチームを結成したり、仕事を貰う為の言わば斡旋所である。　剣や魔法などで活躍する冒険者達も、それなりのルールや掟に則り生きている訳だ。

（どうしよう・・・入ろうかな・・・でも、カリミア達が居たら、どやされるよぉ・・・）

なにか思い詰めるロイムが中に入るのを躊躇っていると、いきなりパッとドアが開いた。

「アッ」

ロイムは驚いて横に退いた。　一枚の大きい引き戸が開かれて、ワイワイガヤガヤと明るい声の冒険者達が出てきた。

「おい、明日でいいか？」

「いいんじゃない？」

「じゃ、明日行こう」

「賛成っ！！　飲もうっ！！」

と、男女の元気な声が飛び交う。

「・・・・」

ロイムの目の前の冒険者達は、どうやら仕事に有りついたようだ。

（ハァ・・・）

ロイムは、入れ替わる形に館の中へと入った。　中に入ると、円形の奥まで吹き抜けるフロアになっていた。　フロアの真ん中には、長さ七・八メートルはある長い木の黒い掲示板が幅に余裕を持って三列並ぶ。

その両側に貼られた紙の群れを見つめる冒険者達が三十人近くは居るだろうか。　話し合う者達、後ろと前に掲示板を見て、アレコレ話す者達が真剣な眼差しで何かを探している。

この掲示板は、一般公開されている仕事の張り紙が貼られているのだ。　人捜し、物探し、怪物退治、薬草採取、洞窟捜査、海賊退治・・・などなど多種な仕事がある。　問題は、それをこなせる腕が自分達にあるか。

斡旋所の仕事を紹介している主人とて、失敗を前提に仕事を与えるお人よしでも無い。

冒険者達は、二人以上でチームを組むことを義務付けられている。　そのチームの名前が、仕事の成功率や、遣りこなす態度や、内容の査定を受けて、噂の様に広めて貰えるのだ。　結成したてのチームは、どの国に行こうと大した仕事には有り付けず。　有名なチームには、ドンドン仕事の幅も広がって、内容のグレードが高い仕事が開放されて行く訳だ。

つまり、如何にバランスの良いチームを結成するか、仕事に有利なチームを結成するかにも鍵がある。　世界のチームの中には、固定の二・三人のメンバーで、仕事に応じてメンバーを追加するチームもあるし、変わった者には仕事に応じて、その場でチームを結成したりする者も居るわけだ。

しかし、千年以上も続くと云われる冒険者達の歴史。　世界で名を馳せた歴代に渡るチームは、殆どが固定でしっかりとチームを組む者達だ。

何故なら、とにかく知らない者同士だと問題が多い。　報酬の取り分け分に始まり、仕事における活躍度などを一々査定する細かい者も居る。　仕事を闇雲に選んで、達成できずにチーム内で議論が巻き起こり、喧嘩したなどの類のイザコザは掃いて捨てる程ある話。

人の社会故か、面倒な事も多いと言う訳だ。

さて、ロイムはフロアの左側に歩いて行き。　側面の壁に窓が並ぶ壁際に置かれた椅子の一つに腰を降ろした。

二人掛けのテーブルと椅子の組み合わせから、八人で囲める円卓の大型テーブルとソファーまで色々ある。　基本的に、仕事の受注はリーダーがやる。　話し合いの間待ってる仲間などは、のんびり待つしかない事もある。　ロイムのようにチームに入るのを希望する者達や、新しくチームを結成する気で冒険者を探しに来ている者は、此処で見ながら人を捜すわけだ。

一方、フロアの右側には、長いカウンターがあり。　剥げ頭をした初老と見られる主人が腕組みして、斡旋所内に居る冒険者達を見つめている。　この主人が、仕事の斡旋からチームの色々な相談を受

ける主と云うわけだ。

どこの斡旋所の主人も、仕事の受理にはウルサイ。　失敗しそうなチームになら、容赦なく仕事の受注は撤回させるし、鋭いアドバイスも言う。　何度も言うが、失敗は極力避けなければならないのだから。　危険な仕事の場合は、チーム全員の全滅とて在る。

「はあぁぁ・・・」

ため息を吐いてボンヤリとするロイム。　同じこの建物内には、ワイワイガヤガヤと喋ったりしている冒険者達が居て。　ロイムは、丸でその者達とは透明な仕切りで区切られている様な孤独感を覚える。　目の焦点が定まらないロイムは、ボ～っと冒険者達を見つめていた。

ロイムは、二十歳になる。　十八歳で魔法学院を卒業して・・帰る場所も無いからボンヤリと冒険者になった。　本当は、故郷の魔術師団に入りたかったのだが、試験に落ちたのである。　緊張し過ぎて、試験の時に魔法を発動出来なかった。

それから、ロイムはあちこちで捨てられた。　魔法を唱える事に緊張するロイムは、モンスターが出たら失神し、ビックリし過ぎて戦う仲間から逃げた事もある。　唱える呪文を間違えて、建物に被害を出した事も有った。

そんなロイムだから、もう懐も寂しい。　全く収入がないまま半月いる。

この世界では、一月が五十五日。　一年が十ヶ月の五百五十日だ。

半月は、二十日以上にもなる。

ロイムは、フロアを見つめながら八日前を思い出していた・・・。

今日の朝に、港で自分を捨てたチームとは、船に乗る前の大陸で仕事を一緒にやったのだが。　請けた仕事は盗賊退治。　仕事を請けた夜、ロイムは仲間と盗賊を逮捕に向かった。

ロイムは、仲間一人と手分けして盗賊を夜の街で捜していた・・。
　そして、出くわしたのだが・・・・逃げた。

しかも、仲間にも役人にも連絡せずに。　お陰で、盗賊の大半は逃亡。　捕まえた下っ端が吐いた潜伏場所はもうもぬけの殻と言った感じである。　一網打尽が出来る捕り物劇で、戦う手数が欲しいと云う中の依頼だから、この内容は失敗と同じ。　報酬は殆ど出なかった。

その仕事の内容はお笑い種で、同業者にも大声で笑われてしまい。
　チーム自身が大変な恥を掻いた結末の末、他国に逃げるように移動と云う結果に至る。　そして、我慢出来ないチームの総意で、ロイムはこの島にある都市に捨てられた訳だ。

思い返しているロイムは、時間の経過が麻痺していたのか。

「お～い、そこの若いの。　・・聞いてるか、テーブルに座ってる奴っ」

「あっ、え?」

周りを見ると、もう誰も居ない。　窓から刺す日差しが赤く、もう夕方に成っていた。　見れば、老いた感じの男性が、カウンターの

奥の端っこから出てきて、自分に向かって来ている。

頭の天辺が剥げて、周りの髪が白髪である。　背丈は百六十半ばぐらいのオーバーオールの黒い服に、長袖の襟首のあるシャツを着ていた。　中肉中背で顔つきは日焼けしたやや強面だ。

「おい、もう誰も居ないぞ。　ポツンと一人でどうする気だ？」

ロイムは、オドオドした身振り、慌しげな手つきで杖を取っては立ち上がり。

「す・すいませんっ。　考え事してたら・・・帰ります」

すると、老いた主人は、立ち去ろうとするロイムに。

「今は、大陸から来た奴等はみんなチームばかりだぞ。　結成しようとしても、何時になるか解らん。　どっかに渡ったらどうだ？」

ロイムは、入り口で主人に深深と頭を下げて出て行く。

すると・・・。　主人は。

「ふぅ～。　アレか、午前中に来た奴等に捨てられた魔法使いってのは・・・。　気の弱い奴が冒険者に成るなんて、時代かねぇ～」

と、呆れてロイムの去った後の扉の鍵を閉めて戸締りをした。

所にも因るが、此処の斡旋所は日没と共に閉まるのがこの主人の普通であるらしい。

ロイムは、夕方の色が夜に変わって行く中で街の中心に出た。　港から続く大通りから都市の左側は、宿屋と飲食店が乱立する繁華街だ。　仕事から上がった都市の住人達や、船乗り達も繁華街に繰り出して行くし。　歩く客の中には役人らしき者達も見える。

（ああ・・・どうしよう・・・また一人だ・・）

ロイムは、もう船賃も無い。　今夜の宿代すらも儘ならない次第だ。　トボトボと通行人が歩き流れる方へ向かって行った。

（あ・・・いい匂い・・・）

空腹に気付いて見れば、露天商がおいしそうな料理を作っている。　街角の広い曲がり角。　大きな建物の前で、長椅子に座った人々が木のテーブルを前にして料理を楽しんでいた。

「・・・・」

ロイムは、行過ぎる往来の中で、それを見て切なくなった。　田舎には帰れない。　ロイムは八人兄妹の六男。　多すぎる大家族の中で、自分は要らない子だった。

（もう・・・帰る所も無いや。　どうしてこうなんだろう・・・）

ロイムは、俯いて繁華街のざわめきの中に消えて行った。

ーーー

ーーーーーーーーーーーー

五日後。　朝。

ロイムの姿は、都市の中央にある公園広場にあった。　なんだかふっくらとしていた顔が痩せこけて、衣服も汚れが目立ち、眼に生気が無い。　万年初夏の気候のこの島で、凍死は無いだろうが・・・。
　かなり弱っているのは事実だった。

ロイムが居る島は、“コンコース”と云う名前だ。　中継点・通過点と云う意味から来ているらしい。　この直径数十キロと云う島の今居る大都市にして貿易都市ノルノーは、人口をなんと五百万も有するのだ。

この都市の事は、後に主人公から説明してもらうとして・・・・。

さて、ロイムは噴水の水で顔を洗う。　湧き出る水を啜って一息ついて、ベンチに腰を降ろした。

（もう・・四日は食べてないや・・・このままじゃ死んじゃうかな・・・）

空腹を通り越して、無気力に成っていた。　先日は、夜中に酔っ払いに絡まれて蹴飛ばされた上に残り僅かな有り金を持って行かれた。

（行ってみようかな・・・僕・・・死にたく無い）

ロイムは、もう一度行こうと決心した。　斡旋所の【爽風に吹かれ

る白亜亭】に。　昨夜から雲行きが怪しく、星が出ていなかった。
　今はもう、雨雲が掛かって晴れ間は所々の切れ目だけ。　いずれは、雨が降るだろう。

港に、大小の船が出入りし出した頃。　ロイムは港近くの【爽風に吹かれる白亜亭】にやって来た。　五日前に出てから、何を言われるか怖くて来れなかったが。　今日は、勇気が振り絞れたようだ。

“カランカラーン”

ロイムが入り口のベルを鳴らして中に入った。

「・・・」

眼の合った右のカウンターに座る主人は、自分を見て困った顔になる。

（おいおい、またかよ）

この斡旋所の主人にしてもだ。　例え一人の冒険者でも、個々によりけり。　ロイムのような流れ者で、しかもチームに捨てられた落ち零れを拾うチームを探してやるのも面倒だ。　一度やれば、みんな面倒を見なければならない。　それが義務に為ると、責任も伴う。
　紹介して、仕事を失敗ばかりされても困るし。　ロイムの様な者が居るチームに、お人よしに仕事を回せる程この主の家業も楽では無い。

ロイムは、主人に一つ挨拶だけしてまた左の席に腰を降ろした。

「ねえ、コレは？」

「さあ、こっちが手軽そう」

何組もの冒険者達が、アレコレと掲示板を見て話をしている。

「・・・・」

カウンターの主人は、ロイムに気を配りつつ雑務をこなしていた。

（アイツ・・・何やってるやら）

見ていれば、ロイムは仕事を探している冒険者に話掛けては首を振られている。　チームに加えて貰いたくて相談をしているが、直ぐに断られているのだろう。

ロイムを捨てたチームも、ロイムの容姿を細かく語って使えない事を言い触らした様だ。　こんな狭い島で、そんな噂を流されたら大変だ。　先ず、一緒に組んでくれるチームなど出てこないだろう。

途中加入で他のチームに参加出来る可能性は、限られる。　仕事に必要な知識の無いチームが一時加入を考える場合。　誰かが抜けてしまった穴埋め。　そして、新チームの結成。

だが、新チームの結成以外は、どちらもチームリーダーが斡旋所の主人の紹介で新たに加入するのがセオリー。　何故なら、流れ冒険者は、“流れ狼”とか、“流れ”とか云われ。　イザコザの元に成る事が多いからだ。

そして、流れ狼に多いのが、自分からの押し売り。　ロイムがどう言おうとも、そう思われても仕方無い。　あんなにやつれて、不気

味なくらいだから・・・尚更だ。

主人は、困り始めた。

（追い出す訳にも行かないし・・・誰かに紹介するにも信頼が出来ない）

何せ、命を張る冒険者家業だ。　ロイムのような人間は、チームのお荷物どころか全滅の元にすら成る。　危ない仕事も多いのだ。　ロイム自信が、何所まで自覚しているのか・・・自分の存在の危うさを・・。

さて、午後に差し掛かる時間（とき）、外に小雨が振り出して来た。　その中で、ベルを鳴らして二人の男が入って来る。

一人は、・・・・デカイ。　身長二メートル・・・いやもう少し高いかもしれない。　屈強な筋肉の鎧のような身体に、短い黒髪の厳しい顔つきだが歳でも無い。　黒い鋼鉄の上半身鎧を身に着けて、腰には同じ金属のプロテクターを巻く。　青い皮のズボンを含めて、圧巻と言った風貌である。　しかも、背中に背負うのは、柄の長さだけで二メートル近い戦斧だ。　先には、太い大木も一刀両断しそうな大きい斧の刃が、向かい合って円を画くように付いている。　一応は、皮のプロテクターを被せてはいるが。　重量はいかほどだろうか・・・。

対して、連れのもう一人の男性は、スラリとした身体で青いマントを羽織る。　上半身は軽い金属の黒鎧に、下はスタイリシュなオーダーメイドの皮ズボン。　色は黒いズボンだが、中々作りがいいのか身体に似合って足が長く、背丈も百八十をどうかと言った処。　腰には、金色の柄をした剣が。　中剣（刃渡りが一メートル以内の

物）の様だが。

「フッ」

二人を見てきた掲示板の前に居た冒険者達に対し、このスラリとした男は長い雫を被った前髪を掻き上げて見せる。　中々の男前（ハンサム）だ。

まだ歳もそんなに上ではなかろう。　薄い唇に、切れ長の眼。顔もキリリと引き締まり、程よい高さの鼻に加えて顔自体にニヒルな渋みもある。　男は、後ろ髪も長く女性受けしそうだ。

「・・」

女性の冒険者の何人かが、ヒソヒソと話し出す中。　この二人の男達も掲示板に向かって仕事を探し出した。

ロイムは、虚ろな眼でこの二人も見たが、どうも怖くて声を掛けられない。

一方、顔のイイ男は、仕事を探す中でも、女性とすれ違う時。

「あ、ゴメンね」

とか。

「後ろ、イイ？」

とか言うので。　女性の方が顔を赤くしたり、緊張した顔になっていた。

そんな館の中に、また訪れる冒険者が・・・・一人。　その若者は、

二人の男の後にやって来た。　また、ドアの開くのを呼び鈴が教える。

冒険者の何人かも、ロイムも見た。

入って来たのは、背丈が百七十やや上で、細身の青年だ。　白み掛かった灰色の髪はクセ毛で、先端でウェーブが掛かっているままに両目の脇に凭れている。　澄み切った瞳に、インテリ風の利発そうな顔立ちは柔らかく、これまた中々の好青年。　皮の動きやすい鎧を上半身に、膝には皮のプロテクターを。　具足は金属の物を履いているが、腰周りに武器は見えない。　小さい荷物を入れる小物入れがベルトのやや背中の方に二つ。　背中には、軽そうに萎んだ背負い袋があるだけである。

青年は、真直ぐにカウンターに向かった。

「こんにちわ、サルトさん」

柔らかい声で、主人に声掛けると。

「おお、ウィリアム。　良く来たな」

“ウィリアム”と呼ばれた青年は、微笑んで頷く。

「ええ、ついに時が来ましたからね。　冒険者に成ろうかと思いました」

主人は、冒険者達を見る眼とは明らかに違う目で、親しみやすい声で。

「おお・・そうか。　やはり、な。　丁度、お前にしか頼めない仕事がある。　金も割合いいし、最初には最適のヤツだぜ」

ウィリアムと云う青年は頷いた。

其処に、あの巨漢の男が声を上げた。

「おいマスターっ、何だ聞いてれば。　いきなりの初心者に美味しい仕事を渡すのか？」

野太い声で、ドスも利いた大きい声だった。

もう一人の、顔のイイ男も。

「そうだぜ～、美味しい話はみんなに教えないとさ～」

すると、主人はギロリと二人を睨んだ。　二人の態度に同調しそうな冒険者も居たが。　この睨みで声が引っ込んだようだ。　そそくさと掲示板の影に隠れた者が数名。

主人は、二人に。

「お前達、昨日も来てたな。　そう言うなら聞こう。　“祈り草”を知ってるか？」

大男は、首を左右に振ってもう一人の連れの男前に顔を向ける。

「さあ」

と、こっちも。

主人は、立て続けに数種の草の名前を言う。　しかし、二人はどれも知らなかった。

主人は二人を見て、

「いいか。　それなりの仕事が欲しいなら、それなりの知識も持って来い。　何も知らねぇ～で、デケエ口を叩くな」

二人は、見合って黙った。

すると、他の冒険者の一人が、恐る恐るに。

「なら、その知ってる若いヤツをチームに紹介しても良かったんじゃ～・・・・・」

すると、主人は。

「隠れて言うしかない奴が偉そうに言うな。　この仕事は、危険も然る事ながら、確実性も信頼性も問われる。　大して名前も売れてねぇ輩に回せるかああっ！！！！！」

言った若い冒険者の男性は、ビックリして首を引っ込めた。

その間。

「・・・・・」

「・・・・・・」

「・・」

「・・・・」

ウィリアムと、屈強な男、男前の男、そしてロイムは、見詰め合っていた。

（僕も・・・見てる）

ロイムは、その青年の澄んだ瞳に吸い込まれてしまいそうなくらいに興味が湧いていた。

先に声を掛けたのはウィリアムと云う青年。　彼がこの劇場と化したフロアの中で、屈強な戦斧を背負う男とハンサムな二人の男にだ。

「あの、最初に声を出したお二方。　宜しければ、一緒に仕事をやって見ませんか？」

大男も、男前も、パッとお互いで見合った後で。　先に、男前の方が。

「いいのか？」

ウィリアムと云う青年は頷いて。

「ええ、丁度チームを作ろうとしていたので」

屈強の大男は。

「お前さんが・・・か？」

「ハイ」

ウィリアムは、そしてロイムに向かって。

「ねえ、そこの魔法使いさんもどう？」

ロイムは、言われて。

「えっ？！」

と、声を上げて辺りを見る。　周りには、誰も居ない。

しかし、だ。

主人は、ウィリアムと云う青年に。

「ウィリアム、アイツは止めとけ。　仕事が失敗ばかりするぞ。何度もビビッて仕事を放棄した奴だ。　お前のチームにはお荷物過ぎる」

と、大きい声で言う。

（ああ・・・・・）

ロイムは、助けの誘い(いざな)に、一瞬湧き上がった心の震えにも似た衝撃が、主人の言葉の響きと共に壊れて消えて行く音を聞いた。　今まで自分の噂を聞いた冒険者達が、失望と蔑みの眼差しを何度したことか・・・。　ロイムは、力が抜けて項垂れた。

だが・・・、全ては終わっていなかった。

「！！」

なんと、自分の前の視界に人の足が・・・・。　ロイムは、生唾を飲んで徐に顔を上げると・・・・。

「キミも、チームに加わらないか？」

ウィリアムと云う青年の姿が、其処には在った。

震えるロイムは、微かな声で。

「マ・マスター・・の・言ってる事・・・ホント・・だよ・・・。五日前に・・・この島に・・置き去りにされたんだ・・・。　仕事から・・・逃げて・・・・」

しかし、ウィリアムはロイムの瞳から視線を外さない。

「そんな過去はどうでもいい。　やる？　やらない？　世界を突っ走ってみないか？」

その言葉に、ロイムはドキンと心が共鳴したような感覚を受けた。

そして、思うが侭に・・・。

「やる・・・」

ウィリアムと云う青年は、頷いた。

その後ろに、あの男達二人もやってきた。

屈強な大男は、

「本当に俺達もいいのか？　今、“世界を突っ走る”って言ったが・・・本気か？」

ハンサムな男は、

「口だけなんて勘弁だぜェ～」

と、ノリが軽い口調で聞いて来る。

ウィリアムと云う青年は、言い訳もせずに。

「向こうのテーブルで四人で決めましょうか。　チームの名前を」

と、言うだけだった。

ーーー

最初に話を進めるのは、灰色の髪をしたウィリアムと云う青年だ。

「さて、自己紹介から行きましょうか。　俺は、ウィリアム・オリンスターと言います。　年齢は二十一です。　武器は有りません。　格闘術で戦います」

屈強な大男は頷いて。

「俺は、アクトル・ムーアだ。　見ての通り、この戦斧を扱う戦士だ。　歳は二十六」

ハンサムな男は、腕組をしていながらサラリと前髪を掻き上げて。

「俺は、スティール・ハート。　剣士だよ。　歳は・・・ご想像に～」

すると、アクトルが、

「何が“ご想像に”だ。　俺と同じだろうが」

ウィリアムは、笑って。

「アクトルさんとスティールさんは、仲が宜しいんですね～」

アクトルは、スティールを親指先で指し示し。

「コイツとは、同郷で同い年なんだよ」

頷くウィリアムは、ロイムを見た。

ロイムは、ヨロヨロと立って。

「僕は、ロイム・・ケインです・。　イ・イリュージョナー（魔想魔術師）です・・二十歳・・・です」

アクトルは、スティールと見合ってから。

「お前、大丈夫か？」

ロイムは、クタクタと座って。

「スイマセン・・・捨てられてから・・・殆ど水だけで・・・生きて・・ましへ・・」

呂律が回らなくなっていた。

ウィリアムは、笑顔で。

「じゃ～早く結成して、仕事請けましょうか。　どうせ、ご飯は只になりそうですしね」

スティールは、ウィリアムを横目に。

「何で、メシが只に？」

「いえ、薬草採取の仕事の依頼主は自分の知人なんですよ。　多分ですが、行って事情を話せば、ご飯くらいは食べさせて貰えますよ」

だが、アクトルは、ウィリアムに再度尋ねた。

「だが、ウィリアム。　お前さん、この島の出身なんだろう？」

ウィリアムは、すんなりとした態度で。

「ええ、そうですよ」

「本当に、この島を離れる気が有るのか？」

頷くウィリアムは、

「ハイ、もう家族も五日前に失いました。　天涯孤独の身に成りましたんでね。　この島に拘って生きるのも面倒です」

スティールが、気遣った柔らかい声で。

「親かい？」

ウィリアムは、首を左右に。

「親代わりでしたがね。　祖母です」

誰もが、黙った。　肉親の訃報は、誰の物でも寂しいモノだ。

ウィリアムは、皆を見て微笑み、悲しみをおくびにも見せず。

「さて、チーム名をどうしましょうか。　自分も、これには拘り無いんでね～」

スティールは、頷くと・・・。

「よし、こんなのどうだ。“勇者スティールの伝説”・・・・」

“ゴキン！！！”

アクトルが、いきなりスティールを殴った。・・・スティールの頭から煙が上がっている。涙目のスティールは、雨模様の見える窓の方に向いて。

「い・・・痛ェ・・・」

見ているウィリアムは、半笑い顔である。

（“ゴキン”ってスゴイ音したな・・・生きてるのか・・・この人・・・）

そこに、ビビリ声のロイムが弱弱しく。

「あの・・・“セフティ・ファースト”ってどお・・・ですか？」

その提案に、パッと三人がロイムを見た。

アクトルは呆れ顔で。

「おい、“安全第一”ってよお・・・なんだそら」

スティールも、キザに瞑目して。

「フッ・・・ダサイ。　却下だ」

しかし・・・・。

「プ・・・クックックッ・・・・・アハハハハハハハ・・・・」

いきなり、ウィリアムが一人でテーブルを叩いての大爆笑を。

「はあ？」

と、スティール。

「余りも詰まらなかったか・・・」

と、アクトルは困った顔でロイムを見るのだが・・・。

「ヘンだよね・・・ごめんなさい」

と、ロイムは力無く謝る。

だが・・・・。

「いやいや・・・アハハ・・・それで行こう！」

ウィリアムは、大喜びで決定した。

スティールは、席でズルッと腕組みしたままにズレて。

「あの・・・マジで？」

ウィリアムは、頷いて嬉しそうに言い出した。

「いや～。　その手がありましたね～。　実は、俺の職業名は“挑

戦者”ですよ。　それが、チーム名に“セフティ・ファースト”（安全第一）だなんて在り得ない。　インパクトあるな～。　いや、最高」

と。

だが、この話に驚いたのは他の三名だ。

アクトルは、ギョッとした顔で。

「オメエ・・・マジか？」

スティールも、やや鋭い視線で。

「“挑戦者”だって？。　意味・・・解って云うつもりかよ？」

ロイムに至っては、絶句して口を開いたままにウィリアムを見る。

ウィリアム自身は、すんなりと頷いて。

「ええ。　“挑戦者”は、古来より無謀な事を承知でも挑む冒険者の異名。　決して差し出された仕事の依頼を断れない・・・イヤ、断らない者。　“世界を駆け抜ける”と云う以上は、それくらいのハンディは必要でしょうね」

三人は、笑うウィリアムの顔の中に、何か光る鋭い気迫を感じた。

覇気に近いモノとも言える。

しかし、だ。　今や戦争も無く、世界の流れは穏やか。　“挑戦者”などと云う職業は昔に居た者で。　今は、聞いたことも無い。

何故なら、この職業名は仕事の依頼を断れないし、決して立ち止まる事が許されない名前なのだ。　仕事の失敗も、仕事の選択も時には許されないままに、主人が薦める仕事は断れない。　今時、そんなに危険を冒してまで冒険者をやる者も居ないご時勢なのだ。

しかし、アクトルは中々どうしての笑い顔。

「・・・ナルホド。　どうやら、世界に向かう気持ちはホンモノらしいな」

スティールも。

「随分と酔狂な奴も居た者だ・・・でも、面白そうだ。　俺は、ウィリアムに乗った」

アクトルも、頷き。

「俺もだ」

ロイムは、もう空腹が辛くて。

「お仕事出来るなら・・・頑張ります・・・」

ウィリアムは、笑って。

「んじゃ、結成しますか。　初仕事、頑張りましょう」

と、立ち上がる。

主人が、心配そうにウィリアムを見ていた。

ｓｅｃｏｎｄ1、その出会いは、雨の日に・・・・。（後書き）

どうも、騎龍です（￣～（￣）

桜がいきなり散って花見も出来ない自分ですが（「○｜；）

皆さんは出来ましたか？

さて、ウィリアム編の始まりです（「∀｜）

ご愛読、有難うございますｍ（＿＿）ｍ

ｓｅｃｏｎｄ2、仕事と・・・ウィリアムの過去

2、仕事と・・・ウィリアムの過去

挑戦者ウィリアム、傭兵戦士アクトル、剣士スティール、魔想魔術師ロイムは、チーム“セフティ・ファースト”を結成した。

雨の降る午後の事、【爽風に吹かれる白亜亭】には衝撃が走っていた。ウィリアムが、チームの結成に当たる中で、職業を“挑戦者”と告げたからだ。まだ、館に二十人くらいの冒険者達が残っていて、ざわついた中で仕事を請けた。

「では、では行きましょうか」

ウィリアムは、スティール、アクトル、ロイムに声を掛けて館を出て行く。

（おいおい、ホントに大丈夫かよ?）

斡旋所の主人ですら、ウィリアムの“挑戦者”には驚いていたほどだ。だから主人もウィリアムの事は良く知っているのか、心配が顔に表れていた。

「うは、おもっきり雨だ」

と、スティールはげんなり。

「フン、雨や雷が怖くて冒険者をやってられれっか」

アクトルは、身体に似合ったタフな言動を吐いて捨てた。

「・・・お腹・・・空いたぁ・・・」

ロイムは、仕事を請けて喜びたいが。　なんだか急に力が抜けてきた。　安心した所為だろうか。

ウィリアムは、雨空を見上げて。

「これは通り雨ですね。　今日の夜には止むかな」

と、歩き出した。

「ホントかい」

スティールが続いて、アクトルも。　ロイムは、フードを被って後に続いた。

さて、ウィリアムが受けた仕事は、薬草採取である。　この都市でも指折りの道具屋の商人オロス氏が、薬の元になる薬草を採って来て欲しいとの事だった。

雨脚は然程の強さは無い。　だがやはり、雨は外出には嫌われるのか、普段よりグッと通りの往来が少ない中を四人は歩く。　港や、最も大きい都市中央に向かう大通りですら歩く人は数える程で、荷馬車の数も極端に少ない。　なだらかに港へと降る大通りの道は、

石で出来ているから水が膜を張るように流れていた。
ウィリアムの横を歩くスティールは、マントの一部を頭に被りつつ。
「しっかし、薬草ぐれ～自分で取りに行けっていうの～」
と、無気力な言い方をする。
アクトルは、呆れて。
「バ～カ、こっちの仕事が無くなるわい」
ウィリアムは、微笑んだ。
「どっちも一理塚ですね～」
と、言ってからロイムを気にした後で、更に話を続けて。
「でも、薬草の有る森にはモンスターが出ますからね～」
スティールは、ウィリアムを見て眼をパチパチ。
「出るの？　そら・・・、頼むわな」
「ええ。　しかもオロスさんは、この都市の商業会の理事やってて忙しいんですよ。　ノコノコとモンスターにやられてしまう間抜けな人でもありませんしね～」
ロイムは、“モンスター”の言葉に、

（あうあうあう・・・・、でっ・・出るんだ・・・怖い・・・）

と、震えが背中を走って顔が益々蒼褪める。

「おい、お前大丈夫か？」

アクトルが、ロイムの唇の紫に気付いた。

「あわわわわ・・・い・いえ・・・だい・じょうぶ・・です」

ロイムは、必死に平気そうに振舞ったが、全く大丈夫そうでは無い。

ウィリアムは、三人を引いて大通りを歩いては、ロイムが今朝まで寝泊りしていた中央公園の入り口を前にするT字路に来ると立ち止まり。

「左です」

と、言ってから歩き出して曲がった。

この通りは、港から続く大通りとぶつかるメインストリートで。

左右に五百メートルの幅広い大通りが伸びて店が並び犇く。　大体、何処の街でも手に入る物や装備や雑貨や薬が手に入る。　宿や飲食店は少しだけ、殆どの店が専門店か雑貨屋ばかり。　通称“目移り通り”とまで云われている程。

そして、曲がった直ぐに通りを向かいへ渡ったところに、赤い屋根の大きく丸い一風変わった四階建ての館が見えた。　最高の立地条件にある建物をウィリアムは指差して、

「ホラ、此処がそうです。　早く中に入りましょう」

スティールは、たがが道具屋と思っていたのに・・・。

「ウハっ、デカ・・・これで道具屋？　武器とかも置いてるんじゃないか？」

アクトルは、

「ホントでかいな。　これで道具屋とは・・・」

ロイムは、ズバリ。

「ま・・迷いそう」

と、呟いた。

全員、入り口の前の屋根がある石畳の玄関口で雨を払って、緑の透明なガラス戸を開けて中に入った。“リンリーーン”と、涼やかな呼び鈴が鳴り、

「いらっしゃいな」

と、魅惑的な声をした大人っぽい女性の声が。

「ムッ」

スティールの顔が、いきなりキリリと引き締まった。

「はぁ～？」

ウィリアムが、いきなり顔がシッカリとしたスティールに驚いた。

アクトルは、顔に右手を掛けて。

「済まない・・・アイツの女狂いは病気なんだ。　最悪、俺が葬るから・・許してやってくれ」

呆れるウィリアムは、半笑い顔で。

「ハイ・・・ですか・・」

二人のやり取りの間にも、もうスティールは奥のカウンターにまっしぐらである。

さて、人一倍も二倍も高い身長のアクトル、その見渡せる整然と並んだ棚の広がる店内に感歎したい気分だ。　赤い絨毯と白い貝殻の内側の様な壁の店内は、落ち着きと明るさがあり。　棚の並ぶ列が十以上はカウンターに向かう形で扇状に向かっていた。　建物の中の構造が、半円を描いていた。

「凄いなあ・・・」

ロイムが、カウンターに向かいながら棚にズラズラと並ぶ薬に驚いた。

細かい症状に合わせた薬の種類が豊富に取り揃い、尚且つ原料も乾燥品として並ぶ。　飲み薬、塗り薬、消毒薬から胃腸調整薬などもう細分されたコーナーに圧巻する。　しかも、ショウウインドゥの様なガラス戸の棚は、造りのしっかりした素晴らしい物。　大陸の

店でも、此処まで内装が素晴らしい店もそうそう何処にでも在るものではない。

一方で、スティールがカウンターに向かえば、店の主人と思われそうな中年の美女が居た。　少し厚い唇に、細く伏せめがちの瞳。白い肌は潤い、長い睫毛と、右瞳の下の小さい涙黒子が色っぽい。

金髪の髪は柔らかい印象で後ろにい結い上げられ、覗けるうなじや首元が何とも色気を醸し出す。

「おお・・・」

スティールは、その女性に近づいた。

カウンターの中に居る女性が、白いゆとりのあるドレス姿で豊満な胸の前で組まれた腕を解き。

「いらっしゃいませ、ごゆっくりどうぞ」

と、スティールに微笑む。

すると、スティールは回りも見ずに、

「ええ、ありがとうございます。　もし・・・よろしければ・・・このまま貴女を見続けてもいいですか？」

と、キザに前髪を掻き上げる。

女性は、少し笑って。

「あら、お上手ね」

スティールは、瞑目して首を左右に振ると。

「いや・・・俺は、上手な言葉など言えてない・・・。　貴女の美しさには、言葉など・・・無力だ」

と、女性を見た。

グラマラスで、優しい微笑みの美女はクスクス笑って。

「ゴメンナサイね。　夫が居なければロマンスも悪くないけど。私、夫しか見えない不器用だから・・・」

スティールが、ここぞとばかりに決め台詞を吐こうとした瞬間。

「オイ!!!」

スティールの頭を、アクトルが鷲掴みに、

「あ〝」

と言うスティールを、アクトルは少し宙に持ち上げて、クルリと自分に向ける・・・。

「うおおあああ!!!!」

スティールの絶叫が上がった。　鬼のような形相のアクトルが、殺気剥き出しで居たのだ。　アクトルは、顔が厳つく強面だ。　それが怒っているのだから怖くない訳が無い。

ロイムは、アクトルの怖さに驚いてパッと右手で男の前を押さえる。
その顔は・・・泣き顔に近い。

その中で、アクトルは。

「オメエ・・・。　一体、何回俺に恥を欠かせりゃいいんだ？　しまいにゃ～、葬るぞっ」

と・・・ドスの利いた低い声。

「は・・ハイっ。　・・・あ・アーク（アクトルの愛称）・・・ゴメン」

スティールは、もはや謝る以外に打つ手は無い。

ウィリアムは、もう呆れ笑いしか出ない中で、カウンターの前に出た。

「こんにちわ～、キャリーさん」

と、笑ってカウンターの女性に声を掛ける。

だが、此処でアクトルとスティールも驚く事態が。

いきなり、カウンターにいた女性が、

「んまあーーーっ！！　ウィリアムちゃんじゃないのーーーっ、どうして直ぐに来ないのよっ！！！」

と、大慌てでカウンターから出てくる。

アクトルは、スティールをウィリアムと美人女性に向けて、ソレを見てからアクトルはスティールを自分に向けて。

「え？・・・ウィリアム・・“ちゃん”？」

スティールも、アクトルに。

「ですって・・・よ」

二人、またウィリアムに向けば。

「こんにちわ・・キャリーさん・・・」

と言うウィリアムに、“キャリー”と呼ばれた美人女性は抱き纏わりついて。

「あらっ、濡れてるじゃないのぉ～。　何で歩いて来るのよ～、もうっ。　使いをよこせば馬車も出したのに～。　ホラ、背中まで湿ってる」

と、丸で子供を甘やかす母親の様だ。　ウィリアムが、半笑いで疲れた顔色の様子。

「え？　ええ？」

驚くロイムも含めて三人も、またキャリーと言う美女の声に驚いて、上の階から降りてきたお客もボー然だった。

その時だ。

「どうした？　キャリー、何を騒いでいる？」

と、声からして紳士めいた落ち着きの在る物腰柔らかい男性の声がして。

「うおっ！！」

スティールを声の方に向けたアクトルも、スティールと同時に声を出す。

カウンターの奥の飾り布（暖簾の様なもの）で仕切られた所を越えて現れたのは、何ともダンディな中年紳士である。

スティールは、思わず。

「チッ・・・俺よりイイ男・・・」

と口走ったが、直ぐに我に返って。

「い・いや・・同等の相手だ」

と、言い直す。　・・・いや、我には・・・返って居ないのかな？

キャリーと呼ばれる女性は、そのダンディな男性を見るなり。

「あら、アナタ。　ウィリアムちゃんが来てくれたの～。　御持て成ししていいわよね？」

ウィリアムとそのダンディな男性が顔を合わせれば、先にウィリア

ムが恐縮そうに。

「オロスさん、こんにちわ」

と、挨拶を。

相手の“オロス”と呼ばれた男性も、柔らかい笑みで。

「いや、ウィリアムではないか。　良く来てくれた。　妻はキミの大ファンだからね、ゆっくりと居ておくれ」

と、言う。

またアクトルは、スティールを自分に向けて。

「何ぃ～、大ファンだぁ～？」

スティールは、瞳を凝らして。

「なんだと、俺を差し置いてかっ？！」

と、言い合う。

しかし、ウィリアムは、笑うオロスに向かって。

「オロスさん、お話があります」

と、真面目な顔に。

オロスも、ウィリアムの格好やアクトルやスティールを見てから。

「どうやら・・・そうらしいね。　まさか、キミが？」

と、探る様に言えば。

「ハイ、請けてきました」

と、ウィリアムが返す。

オロスは、自分とウィリアムを見ているキャリーに向いて、

「キャリー、どうやら・・・ウィリアムは冒険者に成ったらしい。
私の依頼を請けに来た様だ」

「え・・・ウソ・・・」

キャリーは、パッとウィリアムを見る。

ウィリアムは、苦笑い顔でキャリーを見ずらい雰囲気だった。

「嘘よおぉぉーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！」

キャリーの大絶叫が、店内から外に突き抜けた。

ーーーーーーーーーーー

さて、雨の夕方。　大分に暗くなってきた午後の事。

「シクシク・・・・シクシク・・・・・・シクシク・・・・・・・・」

夫のオロスに言いつけられて、ウィリアム達を店の裏の自宅に案内するキャリーが。　メソメソして、ハンカチ片手に男にでも裏切られた女みたいな眼で、ウィリアムを見たりしながら中庭を囲う回廊のような外廊下を行く。

アクトルもスティールも、悲しい女のジト眼にウィリアムへ声を掛けずらい・・。

（どうなってんだ？　アーク？）

（俺に解るかっ！！！　女はお前の領域だろうがっ）

（おっ、そうか・・・）

ウィリアムは、キャリーの脇でもう笑うしか無い顔でいた。　一体、どんな関係なのか。

さて、広い噴水を有する中庭を抜けて、奥の屋敷に入ると・・・。

「あら、お母様。　まあ、ウィリアムも。　いらっしゃい」

と、赤いドレスを着た可愛らしいポニーテールの美少女に会う。

白い肌、金髪の髪が良く似合うスマートな、大人に成る階段を上がり出した印象の美少女。

「ぬわにっ」

と、言ったスティールの後頭部に、“バキィ！！！”と、鈍い音が・・・。

「死ねい」

アクトルは、気絶したスティールの首根っこを掴んでウィリアムの後に着いた。

「や、レイチェル。　こんにちわ」

ウィリアムが、そう声を掛けて。　アクトルとロイムに、オロス夫妻の次女のレイチェルを紹介する。

「ど・どどど・どうも・・・」

ロイムは、可愛らしい利発そうなレイチェルに挨拶されて気を失いそうになるくらい緊張してしまった。

流石は、都市有数の商人オロスの屋敷だ。　石造りの豪邸で、廊下の一つ一つが広く。　何気ない壁の絵や、廊下に置かれた花瓶などが落ち着いた調和で魅せる。

また、応接間に通されるまでに、ガラス戸越しに見える部屋の内装がまた素晴らしい。

ロイムも、アクトルも、かなり貧しい家に育ったほうだから、圧倒的な豊かさを見せ付けられた感じで少し侘しくなった。

「さあ、此処に。　今、何か持ってくるわ」

と、金色の暖炉を前にした広々とした部屋に案内される。

ロイムとアクトルは、恐縮の余りに固まるも。

ウィリアムは、慣れているのか。

「あ、キャリーさん」

「ん？」

「お腹空いてるんで、何か頂けませんか？」

すると、キャリーは嬉しそうに笑って。

「あら、ウィリアムがそんな事を言うなんて嬉しい。　じゃ、夕食一緒しましょう。　動けないくらいに食べさせてあげる」

ロイムもアクトルも、恐れ多くて言葉も出ずに頭を下げるばかり。

去るキャリーの後を見てウィリアムは、暖炉の前にある四人掛けのソファーと、三人掛けのソファーを手で差して。

「座りましょう。　直にオロスさんが来て説明してくれま・・・・」

振り返ると、アクトルの手に首根っこを掴まれた死んだ様なスティ

ールが眼に入った。

アクトルは、床にスティールを荷物の様に置いて。

「すまん、やり過ぎた」

ウィリアムは、首を傾げて笑い。

「楽しいくらいの癖ですね～。　これは、楽しい人だわ」

と、三人掛けのソファーに向かって。

「スティールさんも、向こうの大きい方に」

こうして、三人はソファーに腰を掛けて、一人は白眼を向いて伸びていた。

その内、さっきの次女のレイチェルが、三女のルミアを連れて紅茶とお菓子を台車で運んで来ると・・。

「あ～、本当にウィリアムだぁ～」

三女のルミアもまた、キャリーとオロスの娘らしく可愛らしいお人形のような女の子。　赤みの強いブラウンヘアーは、柔らかなウェーブを纏って背中まで伸びている。　オレンジ色のドレスは、フリルが一杯で、尚更可愛く思える。

「こんにちわ、ルミア。　久々だね～」

ウィリアムと話しながら紅茶などの用意をする二人の美少女姉妹。

この二人の美少女の姉妹は、ウィリアムと兄妹の様に仲が良いようだ。

しかも、冒険者の三人にも全く差別や蔑む態度は無く。　オロス氏とキャリーの教育の良さが窺える。　ま、気絶しているスティールには驚いてはいたが・・・。

ロイムは、お腹が空いていたのか。　瞬く間にケーキの一欠けらを食べた。

「これもいいよ」

ウィリアムが、自分のを出した。

「ごめん、ありがとう」

ロイムは、風呂も入れずにいるみすぼらしくあった自分が、とても恥かしかったが。　温情も有り難かった。

さて、息を吹き返したスティールは、全く黙ってレイチェルやルミアに絡まない。　いや、愛想はよく、キザにしているが口説かない。

アクトルは、小声で。

（偉い、ようやく節操が解ったか）

スティールは、泣きそうな避難の目で、

（ウルヘエっ、さっきはお花畑が見えたわっ！！！）

と、訴えた。

さて。　薫り高い紅茶を啜っていると、左目にだけ眼鏡（レンズ）を填めるオロスがやってきた。

「いや、待たせたね。　ウィリアムがやってくれるとは心強い」

四人の前に立って言うオロス氏は、動きに無駄のない堂々とした姿。
黒い私服は作りの確かなスーツ。　身だしなみも、言葉使いも、スラリとした身体も、何所を見ても文句の付け所の無い男だった。
オールバックの髪からは、爽やかな整髪料の香りがする。

ウィリアム一同は立ち上がり、リーダーのウィリアムが。

「オロスさん、チーム“セフティ・ファースト”のリーダーとして仕事を請けて来ました。　自分にも含めて、仕事の内容の説明をお願いします」

と、言うと。

「うそ・・・」

「え・・・」

近くに居たレイチェルとルミアが驚いた声を発し、サッと仕切りから応接間のウィリアムを見てきた。

オロスは、ウィリアムに頷いてから。

「こら」

と、言うと、娘の二人は、また仕切りの影に引っ込んだ。

「？」

これが、アクトルやスティールやロイムには謎だった。　冒険者を夢見る若者は多く、ウィリアムが成るのに何らおかしい事は無いハズなのに・・・。　このオロス一家には、驚くべき事なのだろうか・・。

「では、掛けてくれたまえ」

と、オロスが椅子に腰を向けてから、ウィリアム達が座る。

オロスの話は、一見は簡単である。　北西の森に行って、五種類の薬草を採ってきて欲しいと云うことだ。　薬草はウィリアムが知っているので、何等問題は無い様に見えたのだが。

ウィリアムは、直ぐに聞き返した。

「一つ、質問が」

オロスは、紅茶のカップを手にして。

「ん？　何かね」

ウィリアムは、オロスを見て。

「納期は、何時ですか？」

すると、オロスの紅茶を飲む手がピタリと止まった。　そして、軽くまた手を動かして紅茶を啜ってから。

「五日後だ」

頷くウィリアムは、真剣な声で。

「では、期限は明日一杯ですね」

と。

アクトルもスティールも、それに目を見張った。

スティールは、気の無さそうな言い方で。

「仕事に期限は無かったハズだが・・・」

頷くアクトルとロイム。

だが、ウィリアムは。

「仕事に期限は有りません。　ですが、オロスさんの面子には・・・期限が在ると云う事ですよ」

と、オロスを見た。

オロスも、才気溢れる瞳でウィリアムを見返して。

「だな・・・。　だが、仕事に期限は設けない。　薬草の二種類は、森の奥だ。　しかも、春先で森のモンスターも蠢き活発だ。　安全

第一で、チームの名前の通りにやって欲しい」

「解りました。　では、明日からやらさせて頂きます」

ウィリアムが頭を下げれば、

「いやいや、三カ月もやってくれる冒険者が居なかった。　感謝するよ、ウィリアム、そして皆さん」

と、オロスが頭を下げた。

スティールやアクトルには、オロスの様な豪商が冒険者風情にこんな礼をするとは思わなかった。

「いえ、頑張らせて貰います」

「確実にやりますよ」

と、言った。

顔を上げたオロスの顔は、優しい商人の顔に戻っていた。

そんな所に、キャリーがやって来て。

「さあ、ご飯の支度出来ましたよ。　みんな食べて行って」

と、言う。

オロスは、ウィリアムに向かって。

「キミが食事を強請ったらしいね。　珍しい、腹いっぱい食べてくれ」

と、笑った。

「ええ。　仲間にキャリーさんの腕前を教えてあげようと思ったのと・・・・、島を離れたらこの機会が何時になるか解りませんからね」

オロスは、ウィリアムを見て頷くだけだったが・・・・。

そこへ、透き通る大人びた美声で。

「ウィリアム、来てるの？」

と。

立ち上がった応接間の全員が、キャリーの後ろから現れた女性を見てしまった。

「・・・・」

「すげえ・・・」

絶句したアクトル。

言葉がそれしか出なかったスティール。

「うわわわ・・・」

驚きのあまりのロイム。

現れたのは・・・どう形容してようか解らない美女だった。

黒い髪は濡れているように艶やか、瞳がオロスに似て切れ長い知的な眼。　白い肌は肌理細かく抜けるようで、瞳の下の泣き黒子が完璧の美貌に色香を魅せる。

「我慢できん・・・うおっ」

口説こうとしたスティールの首を、アクトルが掴みつつ呆けてしまっていた。

ウィリアムは、その美女に近づいて。

「クリスフィ、御久。　冒険者に成って、オロスさんの仕事を請けて来た」

“クリスフィ”と呼ばれた美女も、ウィリアムを見て瞳を広げた。

「遂に・・・成ったんだ・・・。　寂しく成るわ・・・」

と、儚げな顔をしてウィリアムを見る。

「ぬおおおっ、アークっ!!!　はっ放せええっ」

スティールは、ジタバタと暴れてもがくが・・・。

「ダメ・・・だろう・・・」

アクトルは、完全にクリスフィの美しさに見とれてしまっていた。

さて、オロスの家の食堂に一同は集まった。　何処かの高級レストランの貸切部屋のような食堂で、シャンデリアの光りに照らされた長いテーブルの元。　皆が席に着いていた。　使用人二人に加えて、初老の男性と、メイド姿のふくよかな中年女性が世話をしてくれる。

（クソクソクソおおおおおおおおおおおおっ）

スティールは、一番端っこの席に座る。　ロイムの横で、前はアクトルだ。　クリスフィとキャリーの間に座ろうとしたのだが、アクトルの鬼の顔に睨まれたのだ。

ウィリアムは、右にオロス、左にクリスフィで。　前にキャリーが居る。

ロイムの逆の横には、ルミアが居た。

さて、明るい食卓になった。　スティールとアクトルは、もう八年も冒険者をやってるから経験上で話題が豊富に有る。　オロスと酒を交えて話が進んだ。

その中で、キャリーと娘達に絡まれてるウィリアムを横にしたスティールは、羨ましく思いつつオロスに聞いてみた。

「あの、ウィリアムって、キャリーさんとかにも子供みたいに思われてるっすね。　アイツ、自分の家は凄い貧乏って言ってましたが・・マジっすか？」

オロスは頷いて。

「ああ。　多分、ウチの娘達が人を差別しないのはウィリアムのお陰だろう。　彼の家は、東の住宅街の奥に広がるスラムだ。　此処の辺とは、全く生活環境が異なる荒んだ住宅地だよ」

アクトルは、不思議に思う。

「ウィリアムは・・・そんなに荒んでは見えないですね」

「うん、だな。　彼自身が、人に例えられないぐらいの頑張り屋だからだろう。　赤子の頃に病弱の母親と、夫の母親に当る祖母と三人でこの都市に来たらしい。　物心ついた頃には、スラムの劣悪な環境にいた。　だが、何と言うか・・・。　彼は、周りの子供とは明らかに違っていたよ」

アクトルは、ウィリアムを見つつ、

「へえ・・・苦労してんだな・・・」

オロスは、静かに深く頷く。

「人の数倍は・・・な。　五歳の頃から、母親の薬代を稼ぐ為に都市の中心に来て働いていた・・・。　最初は、りんごの叩き売りの仕事だったが、同業者の大人より物を売ってたね」

スティールは、眼を丸くして。

「マジっすか？」

「ああ。　大きく明るい声で掛け声を出して、笑顔いっぱいでお客を褒めたり、周りのりんごとの違いをハッキリ言っては冗談も交えてお客を笑わせてな。　毎日港では人だかりを作ってた。　私の店の手伝いも、七歳の頃から来てた。　他には、酒場の手伝いや、斡旋所の主人が身体を悪くした一時期は手伝いに行ってたよ」

ロイムは、びっくりしつつも。

「そっか、だからあのマスターと知り合いだったんですね」

頷くオロスは、少し上のシャンデリアを見上げて。

「しかし、ウィリアムの凄さはそれだけじゃない。　蔑まれても、馬鹿にされても怒ったりして問題は起こさない。　仕事に行って、三日で仕事を覚え、五日で要領を知りだして、一ヵ月もしたらプロと変わらなくなるし。　時には、その持ち前の知識と推理力から、難事件などの刑事事件の解決も何度もやってる。　だから、刑事活動をしている役人から、良く手助けを頼まれていたらしいし。　それで居て、必要以上に受けた報酬のお金は、身の回りのスラムの人達にくれてやっていたらしいね。　だから、あの荒んだスラムでも、ウィリアムに手を上げる者は居なかったと・・・。　暴力が渦巻き、三日と殺人が無い日は無いと云われるスラムでな」

アクトル、スティール、ロイムは、ウィリアムの生活の一端を聞いただけで、斡旋所の主人がどうしてあんなにウィリアムを信用していた素振りを見せたかの理由が解った。

スティールは、キャリーに泣かれて迫られているウィリアムを見て。

「なんか、アイツが凄く見えてきた・・・」

オロスは、静かに。

「凄いよ。　この私も・・・かつては窮地を救って貰ったしな」

三人は、オロスを見た。

オロスは、口元を笑ませてステーキを切りながら。

「昔、悪い渡り商人に騙されて、ご禁制の薬を販売する片棒を担がされそうになった事が在ってね。　その時に色々と疑いを掛けられた。　だが、直ぐに彼に救われた。　他にも、在る薬が足りなくなった事が有った。　島に大陸渡りの疫病が蔓延してね・・。　妻と、ルミアと、クリスフィが、病気に罹って死にそうに成った。　その時も、ウィリアムは、都市に居た冒険者を口上で丸め込んで、薬草を採りに行かせて、自らガイドを買って出たんだ・・」

三人は、元気な娘達とキャリーを見て。

「助かったんだ・・・」

「やるねえ」

「俺には無理だ・・」

と、次々に。

オロスは、肉の一切れを食べてから感慨深く。

「今でも・・思い出す。　夜に、店の玄関を激しく叩く音がして。

知らせに来た手代に付いて行ったら・・・・、薬草を一杯に背負い袋に詰めて、血を流して傷だらけで帰ったウィリアムが荒い呼吸で座ってた。　途中まで一緒にいた冒険者は、モンスターに逃げたと云うのに・・・。　本人は、一人命懸けで・・・採って来てくれたんだ。　その時は、彼はまだ十二歳くらいだったよ」

三人は、黙った。

オロスは続けて。

「彼の母親が、その時の疫病の蔓延で高騰した薬の値段で、医者にすら診てもらえずに死んでね。　更に祖母も同じ病に・・・。　しかも、ウチの家族や知り合いや、島中の人に広がりつつあったから、死に物狂いだったのだろう。　あれからウィリアムは、都市の隠れた英雄さ。　本人は、そんな事はどうでもいいみたいだがね」

アクトルは、そうまで云われるウィリアムを見て。

「アイツ・・・、それなのに冒険者で世界に出る気なんだな～。　此処で幸せに成れるだろうに」

と、云うが。　スティールはニヒルに笑って。

「俺等と根っこが同じなのさ。　それだけの才気なら、このちっぽけな島に納まっていられね～べさ」

と、言ってから、オロスの前だと思って。

「あ、スイマセン」

と、謝る。

オロスは、首を左右に振り。

「いや、その通りさ。　ウィリアム自身、幼い頃から一人になったら冒険者に成ると言ってたし・・・。　ま、家族同然の我々には寂しい話だが・・・仕方あるまい。　彼も、男だ」

と、言う。

ロイムは、凄い生き様のウィリアムを羨ましく思い。　自分が詰まらなく思えた。

（僕なんかのリーダーなんてもったいないよ・・・。　お金入ったら、早く抜けよう。　邪魔もお荷物にも・・・成りたくない・・・・）

と、思った。

ｓｅｃｏｎｄ2、仕事と・・・ウィリアムの過去（後書き）

どうも、騎龍です＾―＾

ウィリアム編も、やっと2話目のなりましたね＾―＾

有る意味“K”と似ていて、また違うウィリアムとその仲間達の物語を楽しんで頂けたら嬉しいです＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ3、薬草採取は人助け

3、薬草採取は人助け

夜。　オロス氏の自宅を後にしたウィリアム達。　雨の上がった満天の星空の下、店の犇く通称“目移り通り”の通り上にて。

「うおおおいっ！！！！！　何で断るんだあああああーーーー！！！！」

スティールが、大声を上げてウィリアムにキレている。

雨が止んで、往来には活気ある人の勢いが戻り。　行き交う大勢の人が歩きながらウィリアム達を見ていた。

「あははは・・・失礼でしょう・・・」

苦笑いのウィリアム。

スティールは、真面目に怒った顔で。

「ウルセエっ、向こうがオッケーしてんだあっ！！！　何で泊まらないんだああっ！！！　うぬぬぬ・・・・・ちきしょう・・・俺よりアークが・・・何でだあああっ！！！！」

叫び上げるスティールが恥ずかしくて、ロイムはススス・・・・

っと離れた所に逃げる。

一方、

「・・・・・」

アクトルは、ボー然と突っ立っているだけである。

これは、何事か・・・。

ウィリアム達が帰ろうとした時、オロス夫妻も姉妹達も泊まって行って欲しいと願い。　ウィリアムが断った訳だ。

が・・・。　別れ際の事。

なんと。　あの美しさ神の如きクリスフィが、アクトルに最後近づいて。

「あの、また今度会えますか？」

と。

ウィリアムも含めて、一同が驚いて見ている中で。

「ああ・・いや・・・仕事が・・成功すれば・・・多分は・・」

と、必死に言葉を繋いだアクトルに、クリスフィは微笑み。

「では、必ず帰ってきて下さいね。　今度会う時は、その背中の武器・・・一度ゆっくりと見せて頂きたいの。　素晴らしい武器をお

持ちみたいなので」

と、言うのだった。

「はっ・・・はいっ」

アクトルは、そう返したきりで、精神がどこかに飛んでしまった。

スティールの方は、アクトルに指名が行ったのが気に入らないらしく、この通りと云う訳だ。　人通りも気にせずに、夜の空に怒声をぶちまけるスティール。

ウィリアムは、もう呆れて笑いしか出ないと云う感じで、アクトルとスティールの腕を掴んで引っ張って行く。

このチーム、何かと騒がしくて退屈と言う日は無さそうな感じである。

さて、ウィリアムは、暴走するスティールを引きずって、都市の中でも宿屋街と歓楽街のやや間にある安い宿を見つけて泊まることになった。　小さい三階建ての建物で、金が安い分だけあり泊まりのみの宿屋だ。　もっとも安い部屋で、狭くてベットが四つ並ぶ四人部屋。

「ブツブツブツ・・・なんで・・泊まんねーんだ・・ブツブツブツ・・・」

と、スティールは不貞腐れっぱなし。

「・・・・」

アクトルは、毒気が抜けたようにポーっと立ちっぱなし。　寝るまで世話が焼ける。

ウィリアムは、ロイムに苦笑いで。

「忙しいチームだねぇ～」

ロイムは、

「騒がしいですね」

と、笑った。

そして、夜は過ぎて行った。

次の日。

快晴に恵まれた朝。　ウィリアムは、皆を起こして宿を出た。

「ふあ～あ」

「ねむ」

と、大あくびのアクトルと、ボンヤリ眼のスティールは、どのくらい寝たのか。

「ありがとう。　宿代」

ロイムは、ウィリアムにしきりに謝った。

ウィリアムは、朝の眠りだした歓楽街の一角にはみ出た宿から、少し上がって繁華街に出た。

「ほ～、朝でも人居るわ」

スティールは、その賑わいに目を見張った。早朝にも拘らず、飲食店の扉が開き、街角の至るところに屋台が出て。仕事に行く人や、船乗り達の胃袋を満たしている。活気があり、ざわついた人ごみが出来上がりつつ有った。

ウィリアムは、流石にこの街に詳しい。しかも・・・。

「お、ウィリアムじゃね～か、お早いね～。なんか、食ってけよ」

と、屋台のオヤジ達に声を掛けられては、焼きたて揚げたての軽食を人数分貰える。

そして、ウィリアムが冒険者に成ったと聞く人々は揃って。

「なんだい、オイ・・・そうか～。冒険者が嫌になったら戻って来いよ～。手伝いなんかなら直ぐにやらせてやるよ。飯の食いぶちくらいは、確保してやっからな」

と、人情味が篭った声が掛かった。

ウィリアムと、次々と屋台巡りをしただけで、皆に十分の食事が回った。

スティールは、昨日のオロスの言っていた事が、嘘では無いと解り。

「お前、スゲエ～な。　みんな只でくれる・・・」

アクトルも、食べ歩きながら。

「ホント、飯に困らねえ～」

ロイムも、

「便利だ」

と。

本人は、嫌味もなく笑っていて。

「あ、あそこ。　あの店には、変わった飲み物あるんです。　まだ、席空いてる時間ですから、入りましょう」

と、木造の白い建物に向かった。　二階建ての可愛らしい店で、通りに面した店の前には、鉢植えなどの植物が並んで、花も見せる。

押し戸を開いて中に入れば、でっぷりと太ったオバサンがモップで床を水拭きしている最中。

「ん？　あんれ、ウィリアムじゃないかい」

と、手を休めてオバサンが言えば。

「おはようございます。　一杯いいですか？」

と、ウィリアム。

オバサンは、アクトルやスティールなどを見回して。

「お客連れとは珍しいじゃないかい、すわんなよ」

と、笑顔でカウンターに回る。

ウィリアムは、十二あるカウンター席の真ん中に皆を座らせた。

「狭い店だが・・・ミルクのいい匂いがするな・・」

と、アクトル。

カウンター以外に席は、窓の前の合い席掛けの円卓テーブル席のみ。
カウンターの後ろは、直ぐに壁で。額縁に入った花の絵が飾られていた。アクトルは、背中の得物がぶつかりやしないかと心配になった。

ウィリアムは、席に座ると。

「ほら、カウンターの方の壁に、野菜や果物の名前がメニューにありますでしょ？　オーダーに合わせて、ミックスミルクにしてくれますよ」

スティールは、メニューを見ながら。

「ほぉ～、紅茶もあるんか。　ミルクの柑橘ティーでも貰うかな」

と、頼んだ。

ウィリアムは、ロイムの分もお金を持って、何種類か野菜と果物の果汁やミルクミックスを頼んだ。

スティールには、レモンとライムの効いたミルクティーが。　アクトルには、野菜と果物のミックスが。　ロイムには、林檎とメロンのジャムティーが。　ウィリアムには、野菜と果物のミックスジュースと、オマケで果物の軽い盛り合わせが出た。

店のオバサンは、ウィリアムが冒険者に成ったと聞くや。　カウンターの向こうでため息を吐いた。

「はぁ。　やっぱりねぇ～、お祖母さん亡くなったし、前から言ってはいたものねぇ・・・」

と、しみじみ言う。

スティールは、味の良さに気持ちを良くして。

「だ～いじょ～うぶ、このスティール様が着いてる。　島に戻るまで死なせやしないっすよ」

と、調子イイ。

アクトルは、横目に。

「フン。　どうせオロスさんとこの娘さんか目当てだろうに・・・浅はかモン」

スティールは、アクトルをジト目で見返して。

「ウルヘエ。　クリスフィさんに誘われたヤローに言われたかねえ」

と、睨み返す。

店のオバサンは、大きく笑って。

「オロスさんの所は、お嬢さんが三人も居て。　み～んなとびきりの美人揃いだから大変だわ。　キャリーさんは、ウィリアムに誰か貰って欲しいみたいだけどねぇ～？」

ウィリアムは、急に果物を喉に痞えて咳き込んだ。

「ゴホッゴホゴホ・・・お・・オバチャン・・・いきなり・・・言わないで・・」

持ち込みのもらい物と、飲み物でのんびりとした和気藹々な朝食の時間が流れる。

一人・・・また一人と、お客が入り、食べ終わったウィリアムは、皆を見て。

「では、そろそろ行きましょうか。　お客さんが増えて来ましたしね」

「おう、んじゃ」

アクトルがスティールの分を払い、ウィリアムがロイムの分を払った。

「オバサン、美味しかったぜ」

スティールが、最初にカウンターの女性に言って外に。

「またどうぞ～」

と、言うオバサンに、アクトルやロイムがお礼を言う。

最後に、ウィリアムにオバサンが。

「ウィリアム、死なないでよ」

ウィリアムは、顔に微笑を浮かべて頷くだけだった。

さて、島に来て泊まっていた来訪客達らしき旅人や旅行者などの姿が目立ち出した。　宿で食べる料理も不味くはないが、繁華街の方が味は美味い。　朝に港を出る前に、旅客の多くはこっちに来るのだ。

「では、もう森へ向かいます。　何か、用意のし忘れなどはありませんか？」

と、ウィリアムは、やや狭い路地上にて、仲間に確認を取る。

アクトルは、スティールから立て替えた代金を受け取りながら。

「いや、俺は無い」

スティールも。

「俺も～」

ロイムは、いよいよと強張った顔で。

「な・無い・・です」

ウィリアムは、頷いて。

「じゃ、森に行きましょうか」

と、歩き出した。

やや狭い路地を大通りへでは無く、繁華街・歓楽街の方に戻る形で進み。　裏路地を、クネクネとウィリアムは進んで行く。

繁華街の区域では、働く人や観光客など人がごった返していたが。　歓楽街・宿屋街に戻れば、チェックアウトした旅客達とすれ違ったり。　夜の仕事を終えた女性達が、爛れた雰囲気を魅せてお帰りの姿がチラホラ。

「うひょ～」

と、スティールは喜ぶのだが。　此処でも・・・。

「あら～、ウィリアムじゃない？」

「あ～、ホント～」

と、まだ若い、キワドイ服装の女性達が寄ってくる。

「オハロ、稼いだ？」

と、ウィリアムは、そんな夜の蝶達にも何の障壁も持たない素振りで返す。

アクトルもスティールやロイムも呆れた程に、この若者ウィリアムの顔は広い。

酒気帯びた、少し足元覚束無い女性達五・六人に囲まれたウィリアム。皆、ウィリアムが冒険者に成ったと知れば。

「うっそ～、マジ？」

「イヤイヤぁ～、死んだらいやよ～」

「そうよ、私の旦那にするって決めてるのに～」

「誰がアンタの旦那よ～。化粧濃いから嫌がるわ」

「ハ～イ。ワタシの、旦那～」

「バカいうな～」

と、楽しく盛り上がる女性達。

スティールは、しかめっ面で。

「うむむ・・・面白くねえ・・・」

と。

アクトルは、サラリと。

「向こうは庭、お前はアウェー」

ロイムは、脱力して。

「モテモテだあ～」

ウィリアムは、適当に会話して女性達を返した。　女性達を見送るウィリアムに、スティールが小声で言い寄る。

「ウィリアム・・・今度飲もうぜ・・・」

アクトルは、ウィリアムをダシに使う気だと直ぐ解り。

「底が浅い・・・」

と、呆れてしまうのが・・・。

ウィリアムは頷き。

「時間あれば、いいですよ。　沢山、お金使ってあげてください」

と、微笑む。

スティールは、以外な言葉に感心。

「ほう、大人だねぇ～」

「ええ・・・みんな、スラムに近い所の人ですから」

アクトルは、去っていく女性達を見て。

「生活の為に・・・か？」

ウィリアムは頷いて。

「ハイ。　みんな、生活と、家族や夢の為に・・・。　少しでも、この仕事の時間が短くなるようにお金使って下さい。　だから歓楽街でお金を使うのは、自分は悪いとは思いません」

三人は、ウィリアムの環境が如何に社会の影に近いか・・・解った気がする。

ウィリアムは、また歓楽街を抜ける路地に歩き出して。

「がんばりましょう～。　この仕事はお金もイイですからね」

さて、更に路地を行けば、今度は石造りの寂れた建物群が現れた。

どれも、似たり寄ったりの建物で、貧しい生活臭が滲み出た所だ。

ウィリアムは、説明する。

「こっちは、スラムとは逆ですが、ダウンタウンです。　この辺一帯は安い借家ばかりです。　治安もあまりいい訳ではないんですが、スラムほど悪い訳でもないんで。　お年寄りと、貧しい人が多い所ですね」

納得する三人の前で、ウィリアムは、仕事に向かう身なりのあまり

立派とは言えない労働者とすれ違いながら、挨拶をしている。

「おう、ウィリアムおはよ」

「おはよ～ございます」

「ウィリアム、どうした？」

「冒険者に成りまして。　森に、初仕事ですよ」

と、会話している所に、別の初老の労働者が。

「おはよう。　ウィリアム、何？　冒険者になったって？」

と、また人だかりが。

「此処もかよ・・・」

スティールは、都市の全員と知り合いなのかと思ってしまった。

ウィリアムは、また少しで話を切り上げる。　仕事に行く人々を見送りながら。

「さ～て、行きましょう」

アクトルは、腕組みして。

「しっかし、ホントに顔広いなあ～。　御見それするぜ」

汚れた路地、ゴミが散らかるわき道の行き止まりが見えたり。　何

処と無く元気の無い雰囲気が立ち込めたこの借家一帯は、生活観がこれはこれで良く解る。　二階、三階の窓に干された洗濯物が、太陽の光に当たっても少し汚れて見えるのは、侘しい感じがした。

さて、ダウンタウンを過ぎると、しっかりした一軒家の集まる区域に出た。

ロイムは、働きに出る人や家事をする女性を庭先に見て。

「普通の・・・感じ」

ウィリアムは、

「だね。　この辺一帯は、住宅街だよ。　家族住まいが殆どかな。この区域を抜けると、草原に出て、森に近い」

と、説明しつつも。　歩く人に知り合いがいて。

「おう」

「おはようございます」

「あら、ウィリアム、この時間には珍しい。　おはよう」

「どうも、おはようございます」

と、挨拶を交わして道を進む。

アクトルは、小さな水路に架かる石橋を越えながら。

「しかし、こっちは随分と明るい雰囲気だな・・・。　さっきのダウンタウンとは違い過ぎるな」

確かに、アクトルの言うのも解る。　庭付きの一戸建てや、二階建ての裕福さのあるちょっと大きい家も見え。　先ほどのダウンタウンとは、全く違う土地の様な印象だった。　生きる人の顔つきが、先ほどとガラリと違っていた・・・。

ウィリアムは、歩きながら。

「このノルノーは、高だか島の交易都市なんですが人口が五百万を超えています。　しかし、交易の利潤で潤う人の割合は、所詮は商人や役人が上に来ますから。　自然と働く環境に応じて差別が生まれます。　ダウンタウンですら、この島の利権階級で言うなら、中の下か下の上です。　スラムに行けば、下の下です」

その、言う言葉遣いは客観性も含む以上、冷めているような雰囲気も。　聞く三人は、ウィリアムが急にクールに見えた。

ロイムは、きちんとした垣根や土塀に囲まれた家々を見ながら。

「でも、五百万って凄いよね・・・島の都市なのにさ」

「だね。　実は、どの大陸と大陸の間も、最短航路は渦潮やら濃霧やらが絶えずあって、渡れない難所ばかりなんだよ。　このコンコース島は、周囲の海域の海流がとても穏やかなんだ。　しかも、この世界に広がる三つの大陸のどれとも同じ位の距離にあるから、古い昔から中継地点として利用されて来た歴史が続いてる。　世界の交易船の大陸移動船は、全てコンコース島のこの都市ノルノーに来るから、どうしても栄える。　商業を中心に、荷物の入れ替えや、

旅客の移動もあるから、尚更お金が都市に落ちる。　食料や生活燃料の補給は全て此処。　潤って当然。　だから、人口も増える」

アクトルは、ウィリアムの背中を見て。

「お前、随分と知識が深いな～。　学校には行ってたのか？」

すると、スティールが。

「アーク、俺らだって一応は行ってたろ？　ウィリアムだって・・・」

と、言った途中を、ウィリアムは遮って。

「自分は行って無いですよ。　学校行く時間が無かったですし。スラムの人間には教育権が有りません」

「はあ？」

「マジか？」

スティールと、アクトルは見合う。

ロイムが、ウィリアムの前に出て。

「本当なの？」

「うん。　スラムの人間は、大体八十万ぐらい居るんだけど。　働かない限り税金は取られない。　代わりに、島の住民としての権利は何も無いんだ。　教育権も、永住権もね。　だから、スラムで殺

人や盗難なんかの事件が有っても、役人は来ないよ。　スラムの支配階層の悪党やマフィアの手下が、仲介したり、死体を片付けたり・・・。　女性なんかは、攫われる可能性が強くて日中でも外に出れないよ」

聞いていた三人は、その凄まじさに固唾を飲んだ。

スティールは、なんだか怖くて。

「お前・・・・良く生きてたな・・・。　おっかさんも・・・」

ウィリアムは、少し横向きに頷いて。

「コツ・・・ですかね。　母は、身体が弱すぎたのが幸いして襲われませんでした。　ま、スラムにも比較的安全な家庭区域とか、危険な“テリトリー”と呼ばれる場所とか、色々ありますしね」

アクトルは、ウィリアムに疑問に思った事を聞いてみる。

「な・・なあ」

「ハイ？」

「お前の事・・・少しばかりオロスさんに聞いたが。　小さい頃に稼いだ金とか、パくられ無かったのか？」

ウィリアムは、微笑んで。

「ま～、何とか。　蛇の道は蛇って奴でしてね。　少しお金を握らせる場所を心得てしまえば、然程は盗られる事も無いんですよ。

周りに余ったお金をあげたのも、半分は慈善、半分は処世術の為・・・。　母や祖母を守る為です」

（コイツ・・・見た目以上にタフだな・・・。　とんでもない奴がリーダーだわ。　こりゃ～面白い）

アクトルは、ウィリアムが尚更面白い人物に思えた。

歩いているうちに、空の太陽が高く成り始めた。　この都市の外れに来ると、外壁となる高い石積みの壁が見えた。　もう、住宅街も過ぎて、畑などの耕作地が広がるのどかな風景と変わっている。

「ほ～、畑も作ってんだぁ」

スティールは、島の一角にこんな田畑があるとは思っても見ない。

ウィリアム、曰く。

「元々は、海風の影響で作物は出来ない土地だったのですが。　防衛・暴風・防波堤の目的で作られた壁の御蔭で、最近作れるようになったんですよ。　一応、地元のブランドになってます」

「ほ～」

感心するスティールに付け加えて。

「オロスさんも、畑を持ってますよ。　やっているのは、クリスフィ達がお手伝いさんとやってます」

スティールは、ピクッと反応して。

「ぬわに・・・あの美しい手を汚してかっ？！」

「ええ。　特にクリスフィは、自分が畑に出る事に対しての抵抗が無く。　安く薬を提供するために、熱心ですよ」

すると、道肌が石から土へと変わっている路上にて、アクトルは腕組みして。

「あの美しさでな～。　普通なら、嫌がるだろうに・・・偉い」

スティールに至っては・・・。

「そんな暇があるなら・・・・俺とベットにでも・・・・・」

と、言った直後・・・。

（ヤバイ・・・非常にヤバイ・・・・デカイお方が・・・・怒っちょる・・・殺気が・・・・ヒシヒシと・・・・）

スティールは、アクトルの方向から恐ろしい熱気を感じて黙った。

ロイムは、怒ったアクトルが怖くて、お漏らししそうで男の前を押さえて歩き出す。

（怖いよ～・・、アクトルさんがモンスターみたいだよおお～）

そんな時だ、もうあと少しで王宮の城門のような高く大きい鉄門が見えた時、スティールは思い出して。

「所でウィリアムよ。　お前、昨日変な事を言ってたな」

「何がです？」

「嫌、ホレ。　仕事の期限がどうこう・・」

アクトルも思い出し。

「ああ、そういや・・・。　オロスさんの面体に関わるのどうこう・・・」

「ああ、アレですか。　説明しますよ」

と、ウィリアムは、語る。

今から、十年近く前の事。　この都市に流行病の“季節病魔”（インフルエンザの悪性と思ってください）が流行った。　感染力が強く、旅行者の持ち込みから、商人に伝染し、直ぐにスラムで爆発的な感染拡大が起こった。　そして、徐徐に都市を蝕んだ・・。

被害者は、ざっと百二十万以上。　特に、スラムの人口の六割以上が死に、都市部でも一割以上の人が死んだ。　感染数はもっと上だが、感染拡大初期に薬が買えたり、医者に診てもらえる人は比較的助かったが。　感染拡大の後半には、薬が枯渇して死人が一気に増え始めたのである。

スラムでは、医者も来ないし。　薬は有っても売ってもらえない差別で死者が増えた。

ウィリアムが決死の覚悟で薬草を採りに行った後。　商候会が多額

の金で冒険者を数チーム雇い。　森に薬草を大量に採りに行かせて、後々薬は間に合った訳だ。

しかし、最初の功労者と成ったオロスは、商候会で副理事長に抜擢され。　今では最も信頼ある相談役の一人になっている。　所が、こうゆう立場を維持するには、一番薬を多く商候会の交易部に納入する者が、強みになるんだとか。

特に、あの流行病以来、薬の納入数も種類もオロスが一番。　しかも、オロスが一番だから、薬の値段が高騰せずに、安定供給されているらしく。　オロスの地位低迷は、弱い階級の人々に薬が回らなくなる恐れが強いとか・・。

アクトルは、事を察して。

「その納期が五日後って訳だ」

ウィリアムは頷いて。

「ハイ、薬草を薬に変えるのにも時間掛かりますからね。　いくらオロスさんが優秀な薬師でも時間は無視出来ません」

スティールは、頷きつつも。

「そんなに、重要な事なのか・・・面倒な話だ」

「ですね～。　薬商人の大半は、“金のある奴以外に薬は要らぬ。　金の無い奴は死んでしまえ”と思っている人や、薬を過剰に輸出して儲けたい根性の人ばかりですよ。　十年前に、オロスさんが格安で自分が採って来た薬草で薬を販売して、一般の人から神様扱い

されているから、その影響力が無視出来ないんです。　オロスさんの店は、同業者にも原料を卸す都市最高の店ですから。　今の所は、オロスさん抜きでは話し合いも出来ないんですよ」

貧しい生まれの三人には、こう聞けば尚更オロス氏には頑張って貰いたい。

ロイムは、恐る恐る。

「その・・・薬草って・・・そんなに奥に行かないと・・・いけないの？」

「あ～・・・どうかな～。　モンスターも出ないなら、夕方前には余裕で森から抜け出せる位の時間の範囲だよ。　ただ、春先はモンスターも活動が活発だからな～」

アクトルは、背中の戦斧を指差して、

「クリスフィさんとの約束もあるしな、モンスターなんぞは俺が全て薙ぎ倒す」

スティールは、ムッとして。

「俺の剣で三枚卸しだ」

ウィリアムは、笑って。

「心強いッスね～」

と、城門の様な鉄門を通り抜けて、一同は外側の草原地帯に出たの

だった。

ｓｅｃｏｎｄ３、薬草採取は人助け（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編の第三話です＾＾

ウィリアム編の冒頭文章が書いてあったのに見つからないので。
資料だけで再度構想を練り直してやってます＾＾；

あ～、一部思い出せない；０；

泣きながらも、なんとか書いております＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ４、薬草の在り処と、モンスターと・・・・ロイム大先生？

４、薬草の在り処と、モンスターと・・・・ロイム大先生？

ウィリアム達四人は、高々と聳える山を遠くに見据えながら、広大な林の中を歩いていた。

「なんか、木が多いな～」

辺りを見るスティールがボヤくと、ウィリアムが。

「このコンコース島は、島なのに世界最高峰の山を抱えていましてね。　前方に見えているのが“セブレロタイナ山”、通称がセブレ山です。　標高が二万六千メートルの高さで、今も噴煙を上げる活火山。　ですから、ノルノーの宿には温泉宿が多いんですよ」

スティールは、前方に見える中腹までしか雲が掛かるために見えない山を見ながら。

「なる。　島に来た初日に入った。　キモチ良かった、女が一緒なら文句なしっ！！！」

と、声を張って言うと。

アクトルは、周りを見ながら。

「ウルセエな。　モンスターを呼びたいのか？」

と、窘めてから。　ウィリアムに。

「んで？　薬草はまだ無いのか？」

快晴の空の下、太陽は少しづつ昼間に近づいていた。

ウィリアムは、来た道の方に指差して。

「向こう、一つ有りましたよ」

スティールは、後ろを振り返り。

「帰りか？」

「ハイ、向こうに生えてる薬草は千切ってからが痛みが早いんですよ。　ですから、帰りに」

「ほお。　そうなのね。　・・・お前、便利だねぇ～」

スティールは、感心ばかりしている。

そんな時だ。

「あ」

「あら」

「ん」

ウィリアム、スティール、アクトルが、少し先の木陰からブタの様な姿の生き物が現れたのを見て、声を出した。

その中で。

「うあああああああああっ！！！　でっでででで出たあああああああああーーーーっ！！！！！」

とんでも無いデッカイ声を上げて、ロイムが逃げ出したのだ。

「あら」

「うへ？」

「あんれ？」

三人は、ロイムの方を振り返ったら、ロイムは一目散に来た道を帰ろうと走り出す。

スティールとアクトルは、呆れて目を細めた。

ウィリアムは、大して動じる事も無く。

「ロイムーーっ、そっち帰り道違うよ～」

すると、ロイムパッと立ち止まり、

「えっ？！　どっちっ？！！　どっちっっ？！！」

一気にパニックとなり、立ち止まった場所で右往左往し始めた。

ウィリアムは、それを見てニッコリ。

「これで、よし」

スティールは、モンスターの方に向き直りつつ。

「成る程、ありゃ捨てられる訳だ」

と、冷ややかに。

アクトルは、淡々と向き直り。

「はなっから役立たずだな」

そこに、ウィリアムが。

「少し違うでしょう」

スティールは、唸りこちらを警戒しているモンスターを見ながら。

「ムコウはやる気満々だの。　で？　どう違うと？」

ウィリアムは、モンスターを見て居ながらに。

「本人の経験の問題です。　モンスター、嗾(けしか)けてみましょうか？」

アクトルは、ギョッとして。

「あ゛？　ロイムにか？」

「ハイ。　多分、大丈夫ですよ」

と、そこにスティールが、突進して来るモンスターの姿が見えて。

「あ・・・来るなぁ～」

ウィリアムも、のほほんと。

「ですね」

アクトルは、困惑して。

「マジでやるのか？」

ウィリアムは、当たり前の如く頷く。

「ま、見ていれば解りますよ」

と、間近に迫ったブタの様なモンスターは、浮腫んだ黒い肌がゴツゴツした犀の様で、体毛は全く無い。　身体の大きさは普通のブタより二周りは大きいだろう。　目つきは凶暴で、涎を垂れ流しながら“ブゴブゴっ！！”と、鳴き声を上げて向かって来ている。

ウィリアムは、

「今ですっ」

と、ヒョイっと横に飛んだ。

「ホ」

スティールも避けた。

「・・・」

アクトルは、黙って避けた。

ウィリアムは、避けて直ぐに。

「ローイムっ！！！　モンスターが行ったよっ！！！！！！」

と、大声で叫んだ。

ロイムは、ハッとしてモンスターを見た。

「あああああわわわわわわわわわ・・・」

うろたえるロイムに、ウィリアムは。

「逃げても無駄だよっ！！！！！　死ぬまで追いかけるッ！！！　倒せっ！！！！！　死にたくないだろうっ！！！！！」

すると・・・泣き顔のロイムは杖を振り上げた。

「魔想のぢからよおおおーーっ！！！　敵を打ち砕く魔鏡を生み出せえええっ！！！！！！」

大声で唱えるロイムの目の前に、乳白色の半透明なガラスの壁が現れた。

モンスターは、急に止まれる性格では無いのか、その壁に突進した。

“ゴツン！！！！”っとぶつかる音がしてモンスターは止まり。

“ブゴゴっ”と、悲鳴じみた鳴き声を上げて、モンスターは後ずさる。

だが、ロイムの魔法はここからだった。

「弾けろっ！！！！！」

ロイムの泣き声で、いきなりガラスの様な壁はコナゴナに弾けてしまうのだが・・・。

「あら・・・落ちねぇ」

スティールは、砕け散った壁の破片が地面に落ちないままに空中に残ってるのに目を見張った。

ロイムは、必死の形相でモンスターに向かって杖を振り込むと同時に。

「刺されっ！！！！！」

刹那。　いきなり砕けた破片は、頭を振っているモンスターを取り囲むように散らばると、その鋭い破片の先を向けてモンスターに襲い掛かったのだ。

“ブゴゴゴギュウゥゥ”

・・・・モンスターは、呆気ないまでにあっさりとロイムに倒されたのである。

「ほう・・」

と、アクトルは腕組みして意表を突かれたと言った感じ。

「あらら～、一撃でしたねぇ～」

と、ウィリアムは目を丸くするが・・・。

スティールは、それを見てムッとした顔で、いきなりズンズンとロイムの方に歩いて行く。

一方、モンスターが動かなくなって、ロイムの過度の緊張は緩んだ。

「ハッ・ハッ・ハア・・ハア・・・はぁあ・・・」

その場にへたり込んだ。　目の前には、自分の倒したモンスターが体をヒクヒクさせて横に倒れている。

「ご・・・ごわがった・・・」

ガタガタと身体を震わせて泣きべそをかくロイムの前に、影が射した。

「？」

見上げると、スティールの怒った顔である。　スティールは、腰に両手をやり。

「オイてめえっ！！！！　ふざけてるのかっ？！！！」

ロイムは、逃げた自分の事を思い出して、ワナワナと震えて。

「ずず・・スイマ・・・セン・・・」

と、謝ると・・・。

スティールは、ロイムの顔に自分の顔を近づけて。

「このクソガキっ。　戦える力持ってんじゃねぇかーーーーっ！！！　なんで逃げる必要あるんだっ！！！！」

ロイムは、スティールに怒られてアワアワと口を震わせて右手を口に添える。

「ゴゴゴゴゴ・・・・・」

もう、言葉を喋れないくらいに脅え慄くロイムに、スティールは睨みつけては。

「いいかっ！！！　次逃げたら、俺が斬ってやるっ！！！！　絶対に逃げるんじゃないぞぉっ！！！！」

「ハヒいいいいいっ！！！！！」

ロイムは、その場で土下座して謝った。

それを見ているウィリアムは、穏やかな顔である。

だが、アクトルは理解に苦しむ顔で。

「おいウィリアム。　何で嗾けた？　ロイムがヤラれたら・・・どうする気だった？」

しかし、ウィリアムはサラリと。

「ロイムがヤラれる訳ないですよ。　戦う力が無い訳じゃ無いんですから。　ロイムは、逃げる事しかして来なかったから、逃げるのが身体に染み付いているだけ。　軽く追い込んでやれば、実力を出しますよ」

アクトルは、言ってる意味が飲み込めなかった。

「じゃ・・・お前、ロイムがヤラれない自信があったのか？」

ウィリアムは、アクトルを見て。

「無いのに追い込んだら酷でしょ？」

「根拠は？」

すると、ウィリアムは、ロイムの方に歩き出しつつ。

「人生に根拠なんかないです。　有るのは、信じるか、疑うか、考えないか、そんな所でしょう。　明日が解らないで根拠が無いから立ち向かわないのですか？　ロイムは、自分の自己が見つからない

だけですよ」

アクトルは、ウィリアムがすんなりとモンスターを嗾けた事が本当に怖く思えた・・・。

（コイツ・・・只者じゃ・・・）

さて、スティールに怒られてるロイムの元に、ウィリアムが来た。

「ロイム、やれば出来るじゃない。　逃げる必要無いよ」

泣き顔のロイムは、ぐずりながら。

「はじめでたおじた・・・・」

スティールは、耳を疑い。

「え？　モンスターを・・か？」

「うん・・」

スティールは、信じられないと云った顔で。

「冒険者に成って何年目だよ？　二年も経って初か？　女の子みたく、お祝いしてやろうか？」

ロイムは、激しく首を左右に振った。

笑っているウィリアムは、

「さて、先に進みましょうか」

と、二人を催促した。

歩き出したウィリアム達。

スティールは、ロイムを見ながら。

「まったく、速攻で逃げやがって。　ウィリアムが嘘を言わなかったら、今頃ノルノーに直帰コースだお前」

ロイムは、項垂れて。

「ご・・ゴメンナサイ・・・」

笑うウィリアムだが。　直ぐに一言。

「嘘は言ってませんよ」

「は？　だって・・・向こうはよ」

スティールは、そんな筈は無いと思うのだが。

「ロイムの行った方向は、ノルノーではなく向こうの海岸にある村の方です。　ノルノーは、今のもっと南側」

スティールは、似た景色の続く林の中で、頭がこんがらがり始めた。

「あら？　・・・ああ・・もう帰り道が解らねぇ」

ウィリアムは、首を傾げて。

「困った皆さんですねぇ。　もし自分が死んだら、南に下って海岸まで行って、そのまま西に向かって下さい。　そうすれば、確実です」

と、言っていきなり走り出した。

「えっ、おっおいっ」

「どうしたっ」

アクトルとスティールが、走り出すウィリアムに驚いて声を掛けた時、視界の先からまたあのブタのようなモンスターが・・・。

「またかよっ！！」

「ブタの群れだっ」

ウィリアムの向かう先には、三頭位のモンスターが集まっている。

「あわわわ・・・・」

ロイムは、恐ろしくなってその場に立ち竦んだ。

一方、ウィリアムは行動が素早かった。　モンスターに近づくなり、ウィリアムに気づいて向きを変える先頭のモンスターの手前でポ～ンと飛び上がり。　クルリと空中で一回転して、鉄の具足の踵で踵落としを見舞った。

「ワ〜オ、やるじゃないの」

スティールは、身軽で鋭い攻撃に一声。

アクトルは、

「いい動きだ」

と、背中の戦斧を両手に一匹に狙いを定めた。

鈍い“ガツン”と云うぶつかる音がして。

“ブギギィィッ！！！”

と、モンスターの悲鳴が上がる。　残る二匹が、転倒したモンスターの近くで向きを変えようと動くが。　動きが機敏ではない。　どうやら、突進以外は動きが鈍いらしい。

ウィリアムは、向きを変えようとしている二匹の脇を走ってすり抜けた。

モンスター二匹は、ウィリアムに向かって動きを変えようとして。

スティールとアクトルに一撃で斬り倒されてしまった。

ーーー

昼時。

「ふぃ～。　森の中ってのは、こんなにうっとおしいモンかね～」

スティールは、密林のような鬱蒼とした森の中を歩くのが嫌になりそうだ。

ブタのようなモンスターを倒した後、先に進めば進むほどに木々が密集していき。　今では、ジャングルのような密林へと踏み込んでいた。

ウィリアムは、先頭にて蔦を切ったり、歩く方向を確かめながら。

「こんなモンですよ。　人が危険を恐れて踏み込まない僻地は」

アクトルは、少しムシムシしている所為か、汗ばむ額を拭って。

「ウィリアム、一つ質問」

「ハイ、なんです？」

「此処は・・、“世界の腹”（赤道の事）って云われてる地域だろ？」

「ですね。　万年常初夏のような気候です」

「んなら、何でモンスターが活発になる“春”が有るんだ？　気候は・・おっと、蛇。　同じだろう？」

アクトルは、目の前の木の枝に蛇が動いているのを見て背を屈めて避けながら問うた。

スティールも、言われてから気づいて。

「あ、なるほど・・・言われてみれば・・・」

ウィリアムは、密集する木々の木陰から望める太陽を見ながら。

「この島は、確かに気候は一定ですが、季節に応じて風の向きと海流が微妙に変化します。　冬とまではいきませんが、涼しい気候が二ヶ月ばかり来るんですよ。　雨が極端に降らないので、風が変わるまでは、モンスターも動物も動きが鈍ります」

その後ろに居たロイムが、蜘蛛の巣に顔が触って驚いていた。

アクトルは、拾った木の棒でロイムの顔の前の蜘蛛の巣を払ってやり。

「なるほど、それで“春”ね」

「ええ。　この島では、雨が降らないので“渇水期”と云いますが。魚も獲れないので、漁師さんは港の手伝いに行きますね」

スティールは、剣で蔦を切りながら。

「そりゃ～大変だわ」

ウィリアムは、立ち止まる。　周りは、密林だと云うのに。

「お・・どうした?」

後ろを歩いていたアクトルが、急にウィリアムが立ち止まったので驚いた。

スティールは、目を細めて。

「まさか・・・迷った・・・とか?」

「えええええええっ」

ロイムが大声出して驚くも・・・。

ウィリアムは、木の枝に絡まる蔦の葉っぱを見て。

「そろそろ、この密林はお終いですね。　森に出ます」

三人は、見合ってからウィリアムを見る。　本人は、また先に進み出した。

・・・・そして、程なくして。

「あら～、ホントだよオイ。　森と湖が・・・」

スティールの言う通り、四人は密林を抜けて森に囲まれた溜池のような湖に出た。　森の中に切り開かれた間のような所に、泉が滾滾

と湧き出して綺麗な水を湛えている。

新緑の葉を漲らせた太い巨木の木々に囲まれるその湖の前に来たウィリアムは、三人を振り返り。

「この水は綺麗で飲めますよ。　こも森の水場の中でも、自分が知る限りで一番綺麗な水です」

ロイムは、パッと喜んだ顔で湖を見て。

「うわ、やっと一息つける」

と、水を飲みに向かう。

「ふ～。　まだ、一個も薬草を採って無いぜ」

と、スティール。

ウィリアムは、湖の脇に生えている蒼い色の花を指差す。

「帰りに採りますが。　アレが、目的の一つです」

「ぬわにっ。　早く言えよ、どれどれ・・」

スティールは、ズンズンと花に向かった。

「ん、これか・・」

しゃがんで、指し示された花を見た。　蒼い花は、菊の様に沢山の花びらが、チューリップの様に器を作る控えめな印象の花だ。　茎

は、根元から一本がスラッと伸びて、細長い葉は根元から四枚。
地面に這うように伸びていた。

スティールは、その姿勢でウィリアムを見て。

「後、三つか？」

水筒に水を汲むウィリアムは、湖前の湖面に顔を覗かせていながら。

「ですね～。　ウチ残り二つは、直ぐに見つかります」

「なんだ、一個は遠いのか？」

ウィリアムは、アクトルの分まで水を汲んでやりながら。

「いえ、一つは果実なんですがね。　実るまでに五十年以上は掛かる気難しい木に生えるんですよ。　だから、在るかどうかは運次第って言われます」

「なぁ～ぬぅ～っ！！。　それじゃ、来た意味無いのかもしれないって訳？」

此処まで来た意味が無いかも知れない話にスティールは、腰を上げて立ち上がった。

ウィリアムも立ち上がって、水筒をアクトルに渡しながら。

「ま、そう言ってもいいかもしれません。　俺は、在ると踏んでますがね」

スティールは、ウィリアムに向かって歩き出し。

「根拠は？」

ウィリアムは、考える素振りで。

「勘・・・ですかね」

「頼りねぇ・・・」

スティールは、呆れてしまった。

ウィリアムは、笑って。

「一応、経験上の根拠は在るんですが・・・実が無かったらカッコつきませんです」

アクトルは、この若者を横目に見て。

「ウィリアム、お前さんは何度も採取に来てるんだろ？」

「ええ、まあ」

「なら、大丈夫だ。　俺は、何時でも行ける。　他は？」

スティールは、慌てて屈み。

「アーク、急かすなよ。　まだ水を汲んでないんだからさ」

「はよせい」

アクトルは、腕組みして言う。
無言のロイムは、美味しい水をガブ飲みしてはまた汲んでいた。
だが・・。
「あら？」
っと、ウィリアムが声を・・・。
「ん？」
と、スティールは辺りを見てから。
「どうした？　モンスターか？」
アクトルも、辺りを見て。
「どうした？」
ロイムが、オドオドした動きに成って水筒を閉まった。
ウィリアムは、スティールの背後に指差して。
「その木・・・もっと後ろに在りませんでした？」
「んあ？」
スティールは、言われて後ろの間近に見える木を見た。　不気味な

くらいに黒い木で、老木の様な印象を受けるのに、木の高さは然程に大きくない。　太めの幹周りは、アクトルでも無い限りは抱いて腕は回せないだろう。　折れ曲がった木の枝具合は奇妙で、しかも木の根っこが随分とむき出して地面に・・・。

ウィリアムが、ハッとして。

「魔樹だっ！！！！　スティールさん離れてっ！！！！！」

と、言うのと。　スティールに根っこが忍び寄ったのが同時だった。いきなり、“ヒュン”と空気を切って根っこがスティールの足に絡み付こうと跳ね上がる。

「わっ！！」

ロイムが驚いて、両手で顔を覆った。

だが、スティールはそんな軟な男で無かった。

「ふん」

と、根っこに絡め取られる前に、右側に手も着かず側転して抜き打ちに剣で斬り払いつつ着地した。

「スティールっ、一気に行くぞっ！！」

と、アクトルが戦斧を手に走る。

スティールは、自分が斬った根っこの先端が地面に落ちてバタつい

ているのを見ながら。

「オーケー、薪にしてやるさ」

と、不適に笑って動き出す。

“魔樹”と呼ばれたモンスターは、その本性を現した。“ガサガサ、ピキピキ”と、枯れた様な枝や根っこを動かして、スティールやアクトルに襲い掛かる。　幹の部分には、目や口の様な虚（うろ）と思われる穴があり。　まるで、苦しみ歪む老人の様で、かなり不気味だ。

ウィリアムは、脅えているロイムに寄った。

「ロイム」

「ハヒィっ?!」

ロイムは、泣き顔でウィリアムを確認した。

ウィリアムは、真剣な顔で言った。

「ロイム、アイツの弱点は木の真下に隠れてる白くて短い根っこだ。アイツの枝や根っこは、先っぽ以外は、すご〜く硬い。　魔法で、アイツを転がして」

「へエッ?!」

ロイムは、アクトルやスティールを見てみると。

「うおらあッ!!」

と、アクトルが大声上げて振り込んだ大型の戦斧が、魔樹の太い枝に受け止められてしまう。

「硬てええぞっ、コノっ！！！」

と、スティールが振るった剣が、根っこの太い部分に弾き返される。

ウィリアムは、ロイムに。

「ロイム先生、一発ドカンとかましてくだせえ～な」

と、拝み込む。

「えっ、あっ、う・・うん」

ロイムは、なんだかウィリアムの態度に恐怖が和らいで、やってみようと思った。

ウィリアムは、戦ってる二人に。

「魔樹の枝や根っこは、先端以外は凄く硬いんですっ。　ロイム先生が一発やってくれますからぁ！　隙を突いて木の下に隠れてる白い根っこを斬って下さ～いっ！！」

アクトルと、スティールは、役に立たないロイム頼みな発言に。

「だと、スティール」

「ヘン、何時、ドカンとやってくれんだ?」

と、二人で苦い顔をした時だ。

「魔想の力より生み出せし無数の剣よおおッ。　我が敵をう・撃てえええええっ」

と、ロイムの声がして。　いきなり二人が離れて魔樹を牽制している間を、乳白色に光る大剣の形をした剣が、二振り飛び過ぎた。

「あら」

スティールは、いきなりの事に驚いて。

「ん？　あっ、刺さったぞっ」

見ている前で、剣が鋭く魔樹に幹に突き刺さり、“ドン！！　ドン！！”と刺さった剣が弾けて衝撃を起こす。　魔樹は、炸裂する魔法の衝撃に身体を大きく揺さぶらせて後退する。　魔法で生み出されし武器は、物理的な殺傷力も持ち合わせながら、ただ硬いからといって弾かれると云う性質でもない。　だから、刺さるのである。

魔法は、意思と集中力と魔力に応じて、その威力を格段に変えられる万能のスキルなのである。

アクトルは、魔法に驚いてロイムを見れば。

「ささささ・さあいごおおっ」

と、ロイムは、頭上に残る三振りの剣の形をした魔法を、杖を振り込むのと一緒に放った。

（やるじゃないか・・・“先生”・・・・か）

アクトルは、ウィリアムが上手くロイムを安心させて担ぎ出したのと理解した。　そして、放たれた魔法が脇を過ぎる中で、スティールに。

「一気に行くぞおおおっ」

と、魔樹に走りだした。

「おろっ、まだ魔法が有ったでを」

と、田舎訛りでスティールも走り出した。

ロイムの最後に放った三振りの剣が、また魔樹に突き刺さって衝撃波を炸裂させる時に、アクトルは魔樹のまん前まで踏み込んで。

「どおおりゃああッ！！！！！」

と、一回転振り回してからの勢いを乗せた戦斧を、掬い斬りに魔樹の根元に振り込んだ。

“ガチイイイーーーーーーーン！！！！！”

まるで金属度同士を激しくぶつけた様な音が辺りに鳴り響く。

「うわっ」

ロイムが、驚いて耳を押さえて伏せる時、魔樹の身体がグラリと後ろに傾いた。

「たおれっ・あにっ?!」

スティールが、魔樹が倒れずに傾いただけと思いきや、いきなりウィリアムが走り込んできた。

「せいやあっ!!!!」

飛び込んでの回し蹴りが魔樹の顔の様な所に決まった。　グラリと、魔樹が身体を後ろへと倒したのだ。

「決めるぜっ!!」

スティールは、裏側になって木の真下が丸見えになった所に近づけば、白く丸い根っこがクネクネと動いている。

「コイツかああっ」

スティールは、狙い定めて剣で斬った。　湖に、真上の森の隙間から差し込む太陽の光に照らされて、斬り飛ばされた根っこが浮かびあがった。　そして、湖に向かって落ちていきそうなのを、ウィリアムが取った。

ウィリアムの手に掴まれてはみ出てる根っこが、ジダバタと生き物の様に暴れる。

一方、弱点の根っこを切り離された魔樹は、ワサワサと枝や根っこをバタつかせるも。　次第に動きが緩慢になり、動かなくなっていった。

「いや〜、ナイスです」

ウィリアムが、動かなくなった魔樹を見て笑って言う。

スティールは、目を細めて。　ウィリアムの手の、ダラ～ンとしてしまった白い根っこを指差して。

「お前、なんでソレを掴んだんだ？　シロイ、チ●チ●みたいだし・・・」

ウィリアムは、小分けに出来る小袋に白い根っこを入れながら。

「魔樹の根っこは、高く売れるんです。　スティールさんが、綺麗に斬ってくれたので、みんなの副収入として持ち帰りましょう」

「なるほろ。　あ～お前、マジ便利だわ」

感心するスティール。

アクトルは、ロイムを見て。

「先生、カッコいい魔法ありがとよ。　中々なもんだ、驚いたぜ」

蹲ってたロイムは、恐る恐る立ち上がって。

「もう・・・死んじゃった？」

ウィリアムは、にこやかに。

「バッチリ。　ロイムセンセーのナイス魔法で」

スティールは、剣を仕舞って。

「ま、根っこ斬ったのは、俺だが。　ナイス手助け・・・ってトコか。　うんうん」

アクトルは、呆れた顔でスティールを横目に。

「何気取ってるんだ。　お前は美味しい所を持っていっただけだろうが。　ウィリアムとロイムが居なかったら、どうする気だよ」

スティールは、瞑目して前髪を掻き上げた。

「フッ、その時考える」

スティールを見た三人は、

「・・・・・・・」

無言で。

（アホだな～）

ウィリアムは、苦笑いだった。

ｓｅｃｏｎｄ４、薬草の在り処と、モンスターと・・・・ロイム大先生？（後書

どうも、騎龍です＾＾

眠い中で今・・・掲載しています＾＾；

文章が乱れていたらゴメンナサイ～；＞；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ５、薬草は揃ったか？

５、薬草は揃ったか？

さて、ウィリアム達は少しでも暮れる前に薬草を探そうとしていた。
薬草は、全部で五種類必要だ。

1. 祈り草
2. ストキリーネ
3. フウジバカマ
4. ヤブジラミン
5. アマンドクロ

祈り草は、葉っぱが合掌するような形で、とても小さい赤い葉っぱの草だ。　林の手前の草原に生えている。　湖の所に有ったのが、ストキリーネ。　別名を“蒼貴婦人”と云う。

さて、魔樹を倒した後。　直ぐにウィリアム一行は、森を北西に行く。　歩く四人から見て北側にズデ～ンと聳えて、山の半分以上は雲の上に隠れる霊峰セブレロタイナ山が、森の上の木々の切れ間から覗けている。

巨木が多く。　雑草の生える地面から、巨木の根っこが大きく出っ張った光景が見える。　樹齢五百年以上は下らない古木ばかりとウィリアムが言う。　アクトルより高々と地面から出っ張った木の根は、森を迷路に変える壁の様だ。　木々は多いが、古木や巨木が主体に広がる森なので、視界も開けているし、歩くのも楽だった。

「あ、此処だ」

ウィリアムは、古木の根っこと根っこの折り重なった抜こう側に薬草の一つが有ると言う。

スティールは、壁のような根っこを見て。

「おいおい、ど～やって行くんよ」

「上る必要は無いですよ。　根っこと根っこの間が通り道ですから」

アクトルは、ガタイがデカイだけに。

「あんまり狭いと入れないぞ」

ウィリアムは、笑って。

「大丈夫ですよ」

と。

空を見上げるような巨木に近づいて、根っこの端に行ってみれば・・・。　アクトルでも通れそうな隙間が薄暗く伸びる。

「暗くてジメジメしてますが、ちゃんと向こうに抜けれますよ」

ロイムは、モジモジして。

「暗いよぉ～・・・モンスターとか出て欲しくない・・・」

スティールは、ロイムを睨んで。

「オメエなぁ・・・あんな強力な魔法遣えて怖がんなよっ」

「いひいぃぃ、ご・ゴメンナサイ・・・」

ロイムは、何故か謝る。

ウィリアムは、木の根っこに挟まれた間に入りつつ。

「スティールさん、いっぺんロイムをオネーサンの居る飲み屋にでも連れて行ったら如何です？　度胸付きますよ」

スティールは、ロイムを続くアクトルとの間に挟んでウィリアムの後を行きながら。

「あ～、そりゃ～いい。　ロイムは可愛いから、モテるかもしれないしな。　抱きしめてスリスリして貰おうか」

ロイムは、顔を真っ赤にして涙目になり。

「だっ・駄目だよおっ。　そんなの死んじゃうっ！！」

スティールは、半笑いで。

「ええじゃないの～ええじゃないの。　ふくじょう死だぜオイこら」

アクトルも、笑って。

「アハハ、スティールと一緒に殉死か？　洒落にもダサイが。　ま、いい経験にはなるぜ」

ロイムは、一人真面目に怒って。

「やっ止めてくださいっ」

と、ムキになった。

さて、クネクネと波打つ曲りくねった木の根っこの迷路を抜けてゆくと、巨木の向こう側に抜けて、巨木の根っこに囲まれた小ぢんまりと開けた光の木漏れる場所に来る。

「行き止まりか？」

スティールが辺りを見回す中で、ウィリアムが。

「ほら、あの先に苔の変わった色の物が有りますでしょ？」

「ん？　どらどら・・」

スティールは、歩いていくと。　草が生える木の根っこの根元の湿った所に、人の親指の爪の様な半透明の物が、粘膜の様に纏まって貼り付いているのだ。

「おぉ～これかぁ」

ウィリアムは、

「触らないで下さいね。　今、剥がしますから」

と、歩いて来る。

「わ～った。　んで？　コレは何に効くの？」

ウィリアムは、苔の前に屈んで。

「解熱ですね～。　凄い効力ですよ。　これが、ヤブジラミンです」

「ほぉ」

「あ」

ウィリアムは、フッと思い出し。

「因みに、さっきの魔樹の根っこは精力剤ですよ。　薬で飲んだら、丸二日は元気ですね」

スティールは、笑って。

「うはっ、あはは。　俺も、もう少し年食ったら必要かもな～」

アクトルは、毎日女しか見ていないスティールを見ているだけに。

「お前には、起たなくなるまで要らんだろうが。　つ～か、世界の女性の為にも使えなくなれ」

スティールは、アクトルを見上げて。

「アークには、一生不必要な薬かもな」

「フン、要らん。　毎朝、ビンビンだ」

ウィリアムは、不毛な言い合いの下で、ナイフで綺麗に根っこの表面から剥ぎ取ると。　ガラスの小瓶の中に入れた。　キチンと、羽毛と伸縮性の強い蔦で作られた小袋に入れてから、背負い袋に仕舞う。

まだ、日差しを見る限り昼下がり。

ウィリアムは、採取を終えては立ち上がり。

「もう一つのも、近い場所にありますよ」

と。

また戻り、木の根の畝食った根っこ道を戻って森に出て。　森を更に奥に行けば、ロイムでも跨げる様な池が幾つも点在する綺麗な景色の場所に来た。

アクトルは、小さい池が有るのを見て。

「ほう、いい場所だな。　水も有るし」

すると、ウィリアムが池に近づきつつ。

「此処は、チョット危ないんですよ～」

アクトルは、スティールと見合ってから。

「何でだ？　モンスターか？」

「いえいえ、モンスターも近づきません」

聞いた三人は、これは本当に危険な話だと思って。

「理由は？」

ウィリアムは、池を指差して。

「湧き出してる池は安全なんですが。　溜池と化している池には有毒な成分が含まれます。　この周りに生える特殊な木の実が、水に沈んで腐る為なんですがね」

スティールは、恐る恐る池を覗きながら。

「オッカない話だな・・・」

だが、覗いてみると・・・。

「お～い・・・どれも透明で深いなぁ～。　湧き出してるかどうか解んね～ぞ」

ウィリアムは、別の池を見て頷く。

「でしょう？　菌が分解を素早く行うので、透明なんです。　しかも、池の底は凄く深くて湧き出してるかどうか解らないんですよ・・・。　あ、有った」

ウィリアムは、池と池の間の畦道のような場所に生える草に向かう。

スティールは、何処にでも有りそうな草なので。

「な～んか、草原にでも有りそうな草だな」

ロイムも、頷いた。

が。

ウィリアムは、苦笑して。

「これが、フウジバカマ。　見てくれは普通ですが、この島のこの時期だけしか取れない貴重品で。　最も高騰する乾燥期には、ちっさい小瓶に入った僅かな乾燥品で二千シフォンもするんですよ」

「なぁぬうううっ！！！！」

スティールは、ウィリアムが取る草を見て。

「ンな物が・・・二千・・・・アホちゃうか？」

「この草は、万能でしてね。　消毒や腹痛にも効くんです」

アクトルは、感心して。

「良く知ってるなぁ～。　流石は働いていただけある」

ウィリアムは、採取しながら笑って。

「薬屋だけではなく、医者や薬師の元にも手伝いに行っていたんでね・・・。　どうしても、覚えてしまうんですよ」

スティールは、口元を歪めて。

「島だけでもそれだけ知ってりゃ～大したモンだ」

「あはははは」

と、ウィリアムは笑ってから。

「島以外の薬や草も解りますよ。　買い付けに、他国の都市へは何度か行ってますから」

「あっ?!!　大陸の草木も解るのか?」

「ええ。　暇な時間は、図鑑や本で埋めて居ましたし。　別の大陸に買い付けに行った時には店で聞いたりして、現物を見てきますから。　大体は、解りますよ」

スティールは、腕組みして。

「うぬぬぬぬ・・・出来る・・・」

遣る瀬無い顔のアクトルは、スティールを見下ろして。

「やっぱり、女狂いとは違うわな～」

と・・・・。

しかし、スティールは、ハッと何かに気づいて。

「ハッ、・・・そうか・・・俺には女が有るっ！！！」

アクトルは、呆れてしまい。

「ウィリアム、コイツに付ける薬ね～か？」

ウィリアムは、草を採取してから立ち上がり。

「さて・・・一服・・・盛ります？」

と、呆れ笑い。

アクトルは、スティールを見て。

「な～る。　それ以外に付ける薬無いか・・・。　ある意味では最強だわな」

スティールは、パッとアクトルを見て。

「やっと解ったかい？　俺の凄さが」

アクトルは頷いて。

「ああ、再認識した。　お前のバカさのレベル」

と、ウィリアムの方に歩く。

「んだと？」

と、言うスティールの前を同じく歩くロイムが、半目で怪しい人でも見るかの様に歩いていく。

スティールは、ムスっとして。

「なんだよその目は、オイっロイムっ！！　コラっ」

と、後に続いた。

ウィリアムは、その池群の一帯から抜けて、また森の中に入って歩く・・・。

そして・・・。

辺りが暗くなり始め、森に差し込む日の光が夕日に変わろうかという頃まで歩いた。

途中、ちょっと背丈の低い木に生っている毒の果実をスティールが齧ろうとしたり。　ロイムが小さい蛇に驚いて、大声を上げてモンスターを呼んだり・・・。　アクトルが、寝ているモンスターの尻尾を気づかないで踏んだり・・・。

短時間で濃密な戦いをした一行。

「うお～い、まだかよぉ～。　疲れた・・・」

スティールが、グダグダになって言う。　衣服が幾分か土に汚れている。

アクトルが、汗に塗れた顔をキツくさせて。

「ウルサイ、疲れてるから黙れ」

「んだとおッ?!!」

「なんだ?」

スティールとアクトルが、向かい合うと。　やや疲れた顔にウィリアムが青筋を額に浮かべて、やや俯き加減で、静かに二人を睨み。

「なんで大声出す訳?　二人・・・・森に置いて行こうか?」

ニコニコのウィリアムは、消えた・・・。

「はうっ」

ロイムは、ウィリアムの顔に驚いて股間を押さえる

（も・・・漏れるゥ・・・・ウィリアム・・・こあいよお・・）

ロイムは、顔に泥を付けて疲れた様子ながら。　逃げずに付いて来ていた。

アクトルは、いきなりのウィリアムの青筋が怖くて。

「おっおい・・・じょ・冗談だよ・・。　な・なあ、スティール」

スティールも、ウィリアムの睨みが純粋におっかなくて、作り笑いで顔を引き攣らせて。

「あ・ああ、そうさ～。　ホラっ、俺達幼馴染だからさっ・たま～にこうして・・・その・・なんだ・・・じゃれあうのさ・・アハハハハ、ケンカなんかしないさ～」

なんとか誤魔化そうとして、アクトルと肩を組んでみたりして・・・。

ウィリアムは、スッとロイムを見ると。

「漏らした？」

「ヒイィっ・・・・チョット・・・・」

ロイムは、涙滲む目ながら・・・歪んだ笑顔で言う。

「フウ・・・」

流石に、三回も不注意でモンスターと戦うのはマヌケな話だ。　ウィリアムは、詰まらないため息を吐いてから。

「前、見てください」

と、指を刺す。

三人が前を見ると・・・。　夕日が差し込む森の中のポッカリとした隙間のくぼ地に、やけに横に広い大きな木が一本生えていた。

「アレか？」

と、スティールが言えば。

ウィリアムは歩き出して。

「行きましょう。　日が暮れる前に密林は抜けたいです」

「お・おおっ」

スティールはアクトルを見て言えば、アクトルも頷いて同意していた。

なだらかな坂を降って行けば、大きな木の伸びた枝の影に入る。

高さは十メートルも無いのに、伸びた枝の長さは、右から左まで行ったら高さの倍は有りそうな・・・。　幹は太くて、色はこげ茶の濃い感じ、ゴツゴツとした皮肌をしている。　随分とイジケているのか、枝が蝕食って伸びている。

ウィリアムは、上を見上げて。

「あ～、有りますね。　一・・・二・・・四・・・へぇ～、凄いや。　結構生ってます。　全部貰って行こうかな」

と、木の幹に向かって、近づいて。　ヒョイッと木を登り始めた。

見上げるアクトルは、自分には出来ない事。

「ほう、上手いモンだ」

スティールは、ボソっと。

「サル・・・」

ロイムが、プッと吹いた。

だが、上に行くウィリアムの声だけが降りてきた。

「スティールさん、仕事終わったら別行動で。　クリスフィやキャリーさんに会わせない」

スティールは大慌てで。

「いよっ、木登りの天才っ!!　ワールドスタンダードっ!!」

ロイムは、

（世界基準って・・・なんだろう?）

と、苦笑した。

さて。　ウィリアムは、上に登るとカサゴソと木の枝を動き回った。

流石に身軽だけ有って、折れそうに見える枝でも、難なく伝って行く。

夕日が更に傾いて、木陰がグンと暗くなる時、ウィリアムは木から下りてきた。

「よっと」

地面に降りるウィリアムに、アクトルは確かめる様に。

「按配はどうだい？」

ウィリアムは、麻の皮袋のこんもりしたのを手に。

「例年に見ない大量です。　一つ、食べようかな」

と、ウィリアム。

スティールは暗い辺りを見ながら。

「いいのかよ。　売り物だぜ？」

ウィリアムは、笑って。

「オロスさんが期待してるのは、精々二・三個です。　それに、このアマンドクロは滅多にお目に掛かれない“果物の秘宝”とまで云われるんですよ。　それこそ、ノルノーの都市中の店を探し回っても有るかどうか。　買うとしたら、一個一万シフォンはしますよ」

「ぶっ」

スティールは、余りの高額な値段に驚き吹いて。

「い・いい一万だとおおおお・・・・」

ウィリアムは、麻袋から一つを取り出して、アクトルにやった。

「ハイ、回してみんなで食べて下さい。　貴重ですからね」

と、ウィリアムは戻る方に歩く。

「・・・・・」

アクトルは、黒っぽく見える果実を手にして、訝しげに見つめて黙り。

「・・・・一万だぞ・・・」

スティールは、驚き震えるような声で言う。

とにかく、夕日の下で果実の姿を拝みたいとウィリアムの後に続く。

そして、何となく甘い香りが漂う果実を、三人は夕日の下、坂道に掛かる所で見れば。

「わああっ」

と、驚くロイムは尻餅をついて倒れ。

「うおおおっ」

と、驚くスティールは、目が凝視して固まる。

「・・・・マジ・・・か？」

アクトルも、余りのインパクトに唖然とした。

アマンドクロ。　青緑の美しい球体の果実なのだが、表面には黒い筋が入り。　その筋が、髑髏のしゃれこうべの様な模様なのだ。苦悩にのた打ち回る髑髏の歪んだしゃれこうべ模様が、アクトルを見ている。

「お・・おい。　ウィリアム・・・コ・・コイツは・・・」

振り返るウィリアムは、一つ手にしていて。

「見た目はグロテスクですが、その黒い筋が甘さの印です。　一番甘いのをあげたんですよ。　ま、試しに・・・」

アクトルは、震える巨体で林檎のような果実を見る。

スティールは、ワナワナした脅えた姿で、

「食うのか？　止めとけ・・・死ぬぞ・・・・コイツは・・・おかしいってっ！！！」

ロイムも立ち上がり、ブルブル震えて。

「こ・・・こんな木の実あるなんてえええ・・・」

だが・・・アクトルは夕日に染まりながら・・・。

（こ・・この甘い匂い・・・・どうなんだ？）

と思いながら、口に運んだ。

「うおおおっ」

「あああああばばば・・」

スティールとロイムが、大慌てして抱きつく中、アクトルは果実を食べた。

「んんッ！！！！！！」

アクトルの身体が、グッと直立して瞳がギョッとした。

「アークっ、吐けっ！！　不味いなら飲むなっ！！！！」

「アバアバアバ・・・」

アクトルの腕を掴んで心配したスティールと、慌てて訳の解らない踊りの様な動きのロイム。　知らない人が見たら、アブナイ人達であろうが・・・・。

「うまい・・・・うまあああああいっ」

アクトルは、いきなり大声を上げてまた一口、二口と果実を齧った。

「あら・・・」

「え？」

スティールとロイムが、キョトンと見る中、アクトルは幸せそうに果実を齧る。

見ていたスティールが、その齧った所から放たれる甘くて爽やかな香りに気づいて、

「ちょちょちょ・・待てッ！！　アークッ！！！！　一人で食うなっ」

と、アクトルにしがみ付く。

「ん？　あああ、悪い・・・・これは凄いぞっ。　食ってみろ」

差し出された果実を見るスティールは、アクトルを一回見てから果実を受け取りつつ。

「マジでか？」

と、疑りつつも一口。

「むんっ・・・」

スティールも、食べて驚愕。　梨の様な食感で、桃と苺の間のような甘みと酸味、果肉は噛めば口の中の熱で蕩けて行く。　瑞々しくて、驚きの旨さである。

スティールは、大慌てで。

「うおおおおおっ、うめえええええ」

と、二口食べてから、ロイムに渡す。

「お前も食えっ！！　これは、自然の奇跡だっ」

渡されたロイムは、果肉を舐めてみた。

「うわぁっ！！　あっまぁ～いっ！！」

アクトルは、ウィリアムに。

「もう一個」

ウィリアムは、ニヤニヤした横目で。

「一万と・・・食べるのとど～します？」

「うぐ・・・」

アクトルは、思い出して黙った。

だが、ウィリアムは笑って。

「嘘ですよ。　全部オロスさんに渡します。　もう一個くらいならいいですよ」

と、また麻袋から一つ出した。

アクトル・ロイム・スティールは、こんな甘い果物は初めて食べた。

その素晴らしい味にリフレッシュしたのか、帰りに魔樹と戦った最初の湖でまた別の魔樹と遭遇したが・・・。

スティールは、剣を勢い良く抜き払い。

「くのクサレオンボロ木がああっ。　天才剣士スティール様と、大魔法遣いロイム先生の力で瞬殺してくれるわっ！！！　序にチ●チ●よこせっ！！！」

と、勢い付く。

ウィリアムは、ニタニタして。

「根っこ、もう一つ行きましょうかぁ」

と、商い人の様に手を擦り擦りして。　見ていたアクトルが、

「お前さんに掛かったら、モンスターも売り飛ばされそうだな」

と、苦笑しながら戦斧を持った。

四人は疲れてはいたが、戦い慣れてきたのか。　もう一々どうこう云う間も無く。　ロイムがビビッてもしっかり唱えた魔法の剣が、命中すれば。

「おっしゃ！！　ナイスセンセー」

スティールの前で魔樹は転倒してしまう。

しかも・・・。

「よっと」

ウィリアムが、裏返った魔樹の弱点の白い紐のような根っこを踏みつけて押さえる。　そこに、アクトルが踏み込んで、突き込む斧の

刃で切断してしまった。

「どあああああっ、アークそりゃないぜっ！！！」

スティールは、完全にいい所を取られてビックリ。

戦斧の柄を地面に置くアクトルは、スティールを見ずに。

「天才剣士様は、鈍足剣士かな？」

スティールは、格好良く斬って捨て台詞まで考えていたのに・・・。

「うがあああっ、でっかいのなんかキライだあああああっ。　モンスターっ、ワンモアッ！！！」

大声上げて言うスティール。

ウィリアムは、呆れて。

「冗談言わないで下さい。　行きますよ」

と、斬られた根っこを持つ。

スティールは、ウィリアムを涙目で見て。

「りぃ～だぁ～っ！！！。　俺の見せ場がああっ・・・」

呆れたウィリアムは、湖で採る予定の薬草を採ると。

「スティールさん、最初に有ったでしょ？」

と、密林の方に歩いて行く。　もう、辺りは暗くなり、日の光も僅かしか無いから、森や密林は闇の中に近い。

ロイムは、その仄暗いのがイヤで。　密林に向かうウィリアムに、

「ウィリアムゥ～」

「ん？」

「あのさ、光の魔法は駄目？」

「ああ、明かりね。　別にいいよ。　ま、モンスターには発見され易いけど・・・。　任せる」

と、ウィリアムが言うと、“ズドドドド”っと、スティールが怒涛の勢いで走って来て。　ロイムの肩をガッシリ掴む。

「うわああ」

驚くロイムに、真剣なスティールは・・・。

「ロイム君、いや・・ロイム大先生っ！！。　光の魔法いって下さいっ。　ピカっと、テカ～っとやって下さいっ！！！」

「えええええっ、でもっ、モンスターがぁぁ・・・」

脅えるロイムに、マジ顔のスティールは。

「俺が倒すんだおおお。　俺がやっつけるんだよおおっ」

と、言い聞かす。

「あうあうあう、わ・解りましたあああ～」

ロイムは、光の魔法を唱え。　杖に光を宿したのだが・・・。

結局出てきたのは、ブタのモンスター一匹であった。

結局、帰りはあっさりと帰って来れた。　林も抜ける頃は、もう満天の星空に変わった夜空が綺麗である。　最後、草原で小さな白い豆粒くらいの花を咲かせる草を採取して、仕事は完了したのだった。

渋々顔のスティールは、トボトボと歩くが。

アクトルは、思い返して・・。

「この仕事は、案内が居るか居ないかで全く違うなぁ～」

すると、ウィリアムは微笑んで。

「感謝してますよ・・・皆さんには」

スティールは、項垂れたままに。

「オロスさんの窮地を救えたからな～」

ロイムは、もうモンスターが出ないと安心してか笑顔で。

「ですね」

しかし・・・。

ウィリアムは、前を見ながら歩いたままに。

「それだけでは有りません。　個人的にも・・・ね」

スティールもその言葉に顔を上げ、アクトル・ロイムも・・・三人がウィリアムを見た。

アクトルが、

「何で？」

と、問うと。

ウィリアムは、下を向いて苦笑し。

「最初に命懸けで森に入った時、魔樹の殺されそうに成りましてね。帰り・・・薬草の一部を落としてしまいまして・・・・。　魔樹に勝ってこの仕事を終えたのは、今回が初めてです。　だから、感謝ですね」

アクトルは、納得の顔でスティールを見た。

「・・・」

スティールも、頷いて返す。

アクトルは、ロイムも見て。

「俺達、相性良さそうだな。　いっちょ、世界を目指すか」

ウィリアムは、星空を見上げて。

「ですね・・・。　幸先はいいです」

と、屈託の無い笑みだった。

ーーー

ｓｅｃｏｎｄ５、薬草は揃ったか？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

庭の桜が散りきって、切ないさいきんです＾＾；

そして、スランプが・・・＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ６、そして、事件に迎えられ・・・。

６、そして、事件に迎えられ・・・。

ウィリアム一行は、星空の夜の下で大都市ノルノーに戻った。　都市に入る門の中で、西にある“大門”と呼ばれる門だけは、閉まらずに開放されている。　そこは、休み無く警備の衛兵が立つ場所だからだ。

そこから都市に入り。　ウィリアムは、入って直ぐの石畳の大通りの右手にある馬車屋に寄った。　今で言う“タクシー”と一緒で、お金を払えば都市内のどこでも連れて行って貰える。　ま、スラムは例外だが・・。

「すみません、馬車、お貸し願えませんか？」

ランプ明かりの篭れる大きな木の小屋みたいな建物からは、飲みだした男達の声が溢れていた。

天辺ハゲで、太った紳士風の中年男性がグラス片手に現れた。

「おいおい、ウィリアムじゃないか。　こんな夜に、一体どうした？」

ウィリアムは、事情を話すと、男性は少し焦った態度になり。

「お～い、誰か出れるか？　ウィリアムを、オロス様ンところに連れて行け。　急ぎだ」

すると、カウボーイハットの、ニヒルでスラリとした初老の背の低い男性が椅子から立ち上がり。

「俺が行こう。　ウィリアムには、母ちゃん（奥さん）が世話になったしな。　直ぐに、馬車を引いてくる」

外で聞くスティールは、ロイムやアクトルを見て。

「何処にも知り合いいるよ・・コイツは」

と、建物の中を指した。

アクトルは頷いて。

「お前は、何処の都市に行っても女にだけは不自由しとらんな。しかも、金ばかり掛かる」

スティールは、胸を張り。

「俺様の愛は、全ての女性に注がれるのさ。　・・・ま、年端もいかね～子供と、七十過ぎたら・・・・遠慮するけどね」

と、言う。

アクトルは、本当に顔の優劣で女性と付き合う、付き合わないの差別はしないスティールだから。　そこは、偉いと思っていた。

さて、直ぐに幌馬車ではなく、お客を乗せる黒い車体の馬車が出てきた。

「うおっ、マジ馬車じゃね〜か。　料金・・・高い？」

スティールは、驚いた。

が、御者の男性は、スティールを見下ろして。

「おいおい、オロス様の所に幌馬車で客を連れて行けるかよ。　しかもウィリアムを・・。　ま、格安料金で、特別ってヤツだ」

ウィリアムは、店から出てきて。

「さあ、乗りましょう。　薬草の痛みが進む前に」

こうして、一同は一気に“目移り通り”まで、馬車で移動出来た。

夜の歓楽街が隆盛を極めだす頃、ウィリアム達は、オロス氏の店の前に連れて来られた。　御者の背中の車体の一部に付いた窓が開き。

「着いたぜ」

ウィリアムは、もう立っていて。

「はい、ありがとうございます」

と、言ってからドアを開けて外に出た。　四人が外に出て、お礼を言えば。

御者の男性は笑って、

「いいってことさ。　ウィリアムには、安く薬を作ってもらって、ウチの母ちゃんが助かってるしな。　これくらい、大した返しにもならんて」

ウィリアムは、払える代金を渡して。

「馬にいいエサ、あげて下さい」

馬車屋の馬は、働く御者達の持ち込みである事が多く。　馬の世話代を運賃で生活費と共に稼ぐのだ。

「おお、済まない。　また、言ってくれ。　急ぎのときは、金無しでも乗せてやっから」

「はい」

「冒険者になっても、辞めて落ち着くなら戻って来いや。　待ってるぜ」

渋くキメて、御者の男性は馬車を返した。

アクトルは、ウィリアムの手で一体どれだけの人が助かっていたりするのか興味が沸いた。

さて、店の明かりは落ちているオロス氏の店。　しかし、ウィリアムが呼び続けていると、執事の様な役割をしている老人のガルオーンと言う老紳士がランプ片手に出てきた。

「おお、ウィリアムじゃないか。　もう店仕舞いしてるが、オロス様に何ぞ用かえ？」

「ガルオーンさん、オロスさんに頼まれた薬草を持ってきました」

「なんと・・・一日でっ？！！　あ～、入ってっ、さあ～入ってっ！！」

急ぐ様に店の中に招き入れられた。

スティールもアクトルも、この時この紳士に全く隙が無く。　普通の一般人には無い気配が薄っすらと感じられた。

ガルオーンの持つランプ明かりの中、ウィリアムはオロスの家の方に連れて行かれて。　応接間では無く、貴賓来客室に連れて来られた。

ウィリアムは、小声で。

「誰か、お客できているんですね？」

ガルオーンは、頷いて。

「ああ。　オロス様から薬の原料を買いに来る商人達が、納入期限を守れるのかどうか聞きに来ておる。　その持ってきた薬草で、オロス様の面子を保っておくれ」

頷くウィリアム。

スティールは、ロイムやアクトルに。

「俺ら、かっこよくねえ？」

アクトルは、小声で。

「お前じゃねぇ。　ウィリアムだ」

「同じチームだべさ～」

ウィリアムは、春の花が咲き乱れる美しい小庭園を前にした部屋に入った。

「ん？」

オロスは、長く幅広い趣のあるソファーに座っていたが、ウィリアムとガルオーンの登場に目を見張った。

オロスの両脇にある五人掛けのソファーに、三人と二人の年の差ある男達が座っている。　業突くな顔の、訝しげな中年男や。　優雅なスーツに身を包むキザな印象の若い男など・・・商人のようだ。

オロスは、やや精彩を欠いた疲れた顔でガルオーンに向かって。

「今はまだ話中だよ。　一体、どうした？」

ガルオーンは、恭しく一礼し、

「はい、旦那様。　ウィリアムが、頼まれていた薬草を全部採ってきたとの事です。　今から仕込みに掛かれば、納期を前に原料が出

来るかと・・・」

オロスは驚いた目で、ウィリアムとウィリアムの後ろの仲間の皆を見た。

「もう・・・採ってきたのか？」

ウィリアムは、蝋燭の飾台が並ぶ手入れの行き届いた大理石の床の上を進み歩き。　オロスの目の前に屈むと。

「はい、もう終わりました。　ここに、全部並べますので、品定めをお願いいたします」

と、パンパンに膨らんだ背負い袋を下ろした。

さて、商人達も見る中で、大瓶に取り分けられた薬草四種はまだ劣化が始める前。　アマンドクロの実に関しては、なんと十一個も・・・。

「おおおお・・・なんと新鮮な薬草で・・・。　しかも、アマンの実が・・・」

「おい・・・十一個だと・・・」

「量も多いし、新鮮だ。　これは、納期に収めてもおつりがくる・・・」

商人達が、挙って囁き合う。

キザな若い商人が、

「オロス殿、悪いのだが・・・。　アマンドクロ一つ、・・いや、二つ程・・・譲って頂けぬか？　ワインの原料のコレを探しておったのだ」

すると、業突くの中年男も、

「それなら、私も実を一つと、ヤブジラミンをこのまま少々頂きたい」

いきなり、商談が始まった。

オロスは、ウィリアムを見て頷き。

「皆様、では商談をしましょう。　ウィリアム達は、台所で何か食べていて貰えるか？　報酬をやらないといけないから」

すると、ウィリアムは立ち上がり。

「いえ、明日また伺います。　今は忙しいですし、仲間も疲れていますので・・。　今日はこれで」

ウィリアムは、忙しくなるオロスを気遣った。

すると、オロスは、態々立ってチームに一礼した。

「ウィリアムも、皆さんも。　鮮度の良い草や、貴重な実を沢山集めて頂き。　このオロス、感謝しか言葉出ませぬ。　明日、見合う報酬をご用意しますので。　ただ・・ただ・・ありがとうございました」

「いえいえ、では、失礼します」

ウィリアムが一礼し、アクトル達も頭を下げた。　自分達に、財力も権力も有るオロスが頭を下げたのだ。　しかも、人前で・・。

如何にオロスが感謝していたか・・・、如何に窮地に居たか・・・

慮(おもんぱか)れる。

さて、廊下に下がったらスティールが、

「なあ、金だけ貰っても良かったんじゃ～ないか？」

ウィリアムは、暗い中の月明かり差し込む庭前で。

「いえいえ。　オロスさんは、これから寝れずに忙しくなります。煩わしい客など居ないほうがいいですよ。　そ・れ・に・・」

と、半目のニヤリ顔でアクトルを見る。

「う〝・・な・何だ？　俺が・・・どうし？」

たじろぐアクトルを見て、ウィリアムは含み笑いをして・・・。

「うふふふ・・・クリスフィに明日、ゆ～っくりと戦斧を見せてあげたらどうですか？」

「あ〝」

ウィリアムの言葉に、スティールも気づいた。

「そうか・・・、アークの恋愛が掛かってるなぁ～」

しみじみ言うスティールに、アクトルは声を押し殺して。

「おっ・おおいっ！！。　話を飛躍させるなっ・・・戦斧を見せるだけだろ～がっ」

すると、ウィリアム・スティール・ロイムが半目の疑い顔でアクトルを見て。

「へ～・・・み～せ～る～だ～け～？」

と、言って外に出る方の廊下に歩いて行く。

（な・・何だっ？！！　あの連帯感っ・・どっ・どうして・・・俺だけ・・・）

アクトルは、自分にクリスフィが気があるなどとは思ってもいない。

ただ、本当に珍しい武器であるこの戦斧が、普通に見たいだけなのだと思っていた。　今まで、何度もあったことだ。　大金積まれて、“売ってくれ”と懇願されたことだってある。

（どうせ・・・今回も同じさ）

アクトルは、一人遅れて後を追った。

店の外までガルオーンに見送られて出た一行は、その足取りのままに歓楽街に向かった。　大きい店構えの飲み屋で軽い打ち上げをすることに。　無論、お金を貰って無いから、女の子を頼む余裕は無い。

「くう〜っ、仕事終わりの一杯の酒と、このム〜ドっ！　あぁ・・・女が欲しい〜ぜ」

スティールは賑やかな店内で、運ばれた麦酒を片手に唸る。

大型の大衆飲み屋では。　派手ながら安っぽい肩空き・胸空き・背中空きの色々なドレスを着て、若い女性から中年のお姉さんが黄色い声を上げて働いている。　お客も、紳士然とした者や、裕福な者の姿は少なく。　仕事帰りの都市の人や、役人、労働者達に、冒険者や旅人が混ざっているような客層で、かなりの賑わいだ。

「おいネ〜チャン、ちょっとこっちに着いてくれや」

客の中から、酒を運ぶ女性に声が飛ぶ。　すると、若い綺麗な女性がウインクして。

「はぁ〜い、私は高いですよぉ〜」

と、胸元を男に覗かせながら席に座る。

酒気が漂い、乾杯の音や、笑う声が響きあう。　都市の夜の憩いのひと時が垣間見れる。

アクトルは、グラスの大瓶で一気に麦酒を呷って。

「ふぅ〜、旨い。　仕事が成功しての一杯は、格別だ」

と言ってから。　斜め前のテーブルを挟んで座り、ワインを舐めながら野菜の炒め物や、焼き魚に手を伸ばすロイムを見て。

「見直したぜ、ロイム。　これからも、逃げずに頼むわ」

「あ・・・うん」

いきなり言われて頷くロイムに、スティールが肩に手を回しては。

「ロイムちゃ～ん、向こうに行ってオネ～チャンを呼んで来てぇ～」

「えええええっ！！！！」

周りの喧騒に負けぬ声を上げたロイムは、もう顔が赤くなる。

「ぼっぼぼぼぼ僕には、む・無理ですっ！！！」

スティールは、目を細めて脅すように顔を近づけると。

「あぁ～？　誰に口利いてんだ？　ロイムセンセ～、行って来い・・」

半分冗談、半分本気のスティール。

だが、ロイムは脅えて、

「わかりまつたよおぉ～」

と、泣き顔に近い表情で立ち上がる。

スティールは、拍手して。

「いよっ！！　ロイム先生っ！！　魔法だけが取り得じゃないね～」

と、自分も立って奥の席のロイムを通路側に出しては、勢い良く後押しを。

アクトルもウィリアムも、苦笑して見ている。　虐めているのでは無く、じゃれているのだ。

しかし・・・。

ロイムが行って・・間も無く。

「つつつ・・・連れて・・・きましだああ」

ロイムの声が、いきなりするもんだからスティールは驚いて。

「おっわあああっと・・」

と、左の通路側を見ると。

「なぬっ！！」

スティールは、ロイムの後ろに、赤い髪をしたかなりグラマラスな女性が、際どい紫のワンピース一枚で立っているのを見て驚いた。

ロイムが、泣きそうな顔で。

「ももも・・もう駄目・・・」

と、ウィリアムやスティール等が向かい合って座る前の長方形の四

人用テーブルの下に潜り込んで行く。

スティールは、女性に。

「ようこそ、レディー。　私の隣、如何ですか？」

と、席から立ち上がった。

女性は、ニッコリ笑って。

「おに～さんお上手ね。　失礼しま～す」

かるぅ～いノリで、女性は長椅子のスティールの奥に、ロイムとの間に成る様に座った。

スティールは、心配そうに見るロイムに、

（でかしたーーーーーーーっ！！！！！！）

と、親指立ててグーサインを送った。

そこに、ウィリアムが、

「ハンナ、お金無い僕らで良いのかい？」

と、苦笑交じりで言う。

女性も、ウィリアムを見るなり。

「あぁぁ～、ウィリアムだ～」

と、喜ぶ。

「やはり、お知り合いですか・・・」

アクトルは、水商売の女性にも知り合い多いウィリアムにこそ苦笑して言う。

すると、大人びた印象なのに、若い女の子の様な声を出すノリの軽いハンナは。

「ですですぅ。　ウフフ、ウィリアムは～、此処で働いてたもん。ね～」

スティールは、ギリギリと目元を振るわせつつ。

「ほ～う、呑み屋でか？　ウエイターでもしてたのか？」

すると、ハンナはテンションを上げて、

「そ～なのぉ～っ。　しかもねぇ、十五歳でバーテンダーやワインテーラー（ソムリエ）もやってたのよぉぉ～。　お酒のカクテリング、すんごい上手だったんだから～」

ウィリアムは、気恥ずかしいと横を向いて、頭の後ろをポリポリ掻いている。

スティールは、ど～しても自分より先に出るウィリアムが・・・・憎らしい。

（おにょれ～・・・・）

結局、ハンナは、自分の仕事も忘れてこのテーブルに居着いてしまった。　酒が入り、酔うと更にイケイケゴーゴーで、スティールと恋人みたいに向かい合って話したり。　可愛いロイムに抱きついては頬ずりしたり。　ウィリアムに笑ってクダを巻いたり・・・。

楽しく笑って過ぎ去る時間は、一気に過ぎた・・・。

真夜中も遅く。　盛況だった盛り場も客が少なくなり。　酔い潰れている客や、泥酔酩酊の客ばかりが目立つ頃。

「んじゃ、帰りますか～」

顔の赤いウィリアムは、かなり飲んだ。　それでも、慣れているのか目も声もハッキリしている。

「お～、ん？　ロイム先生は潰れたか？」

赤い顔のアクトルは、ロイムを見る。

泣かされっ放しで、頬にハンナのキスマークを二つ三つ貰ったロイムが、ス～ス～と寝息を立てている。

対照的に、酒に強いスティールは結構呑んでいるのに、顔は白い印象で。　やや目が据わってキザに磨きが掛かった様子。

「今日の仕事で疲れたんだろう。　宿に運ばないとな」

アクトルは、頷いて。

「よし、俺が背負う」

ウィリアムは、笑って。

「では、一応お金払ってきますよ」

スティールは、

「あ？　金あんの？」

と聞けば、笑うウィリアムが、

「なけなし・・・あはははは」

すると、アクトルが。

「俺の金も使えや。　どうせ、明日の日中には金入るだろう」

すると、スティールが、前髪を掻き上げて。

「なら、宿代は俺が有り金出すわ。　ハンナが、俺と泊まりたいらしいから。　懐を叩いてやるよ」

ハンナは、スティールの腕に絡み付いて。

「スティールちゃんス・テ・キ・。　ふふふ」

スティールは、ハンナの顎に手をやって。

「可愛い子猫ちゃんを一人にしておけないさ」

「ニャ～ン」

アクトルとウィリアムは、苦笑交じりで見合い。

「死ぬまで治らん」

「の、タイプですね」

と、言い合った。

客の居ない席の上のシャンデリアのランプは火が落とされ。　全体の四割ぐらいしか明かりが灯っていない中、ウィリアムは代金を払いに行くと・・・。

「ん？　ウィリアムか・・・」

白髪交じりの鼻髭を蓄えた、Ｙシャツに黒いズボン、蒼いチョッキを来たダンディーな男性が、支払いを確認しつつウィリアムに声を掛ける。

「どうも、冒険者に成りまして・・・お幾らですか？」

「ほ～。　二百三十シフォンだ」

ウィリアムが金を出している所に、ダンディーな男性が。

「仕事は？」

「ああ、今日一つ終わらせました。　オロスさんの依頼」

「ああ・・・もう薬草取りに行く奴居ないんじゃないかって言われてたのだな。　それは、ご活躍だ」

ウィリアムは、なんとかアクトルの財布と合わせて払う。

すると、受け取った男性は、ウィリアムに一礼して。

「ご利用ありがとうございました」

と、言ってから。

「ウィリアム、世界に出るなら気をつけろよ」

ウィリアムは頷いて。

「ハイ」

だが、ダンディーな男性は、客相手とは違う男の顔で。

「イヤ、お前は鋭すぎる。　人の業に巻き込まれるタイプだ。　自分がシッカリし過ぎる分、背負い込む。　潰れるくらいなら・・・島に戻って来い」

と、男性は言う。

パッと、ウィリアム・スティール・アクトルが、男性を見返した。

男性は、真面目な眼差しでウィリアムを見ている。

ウィリアムは、ゆっくりと頷くと。

「はい、此処で酒の色々を教えて貰ったんで。　駄目なら、戻りますよ」

男性は頷き、バーカウンターの中に入って、奥の方に引っ込んだ・・・。

アクトルは、男性を見送ってから。

「ウィリアム、お前は帰る所があるな・・・。　いや、自分で作ったのか・・・」

ウィリアムは、微笑んで。　店の出口に向かいつつ。

「みんな、何処かに帰る場所は有るものですよ・・・。　なかなか、気付かないだけ・・・ですかね」

アクトルは、自分の経験だけを考えると。

「そんなもんかねぇ～」

と。　素直に受け入れられない。

しかし、スティールは、ハンナを連れ立って歩きながら。

「ウィリアムの言うとおりさ。　探して、自分に素直なら、必ず待ってくれる女は居るさ」

と、ハンナを見る。

ハンナは、スティールの腕に絡み付いて。

「スティールちゃん、カッコイイ～」

と、ウットリして肩に甘える。

アクトルは、スティールに呆れて。

「確かに、お前なら何処にでもいそうだな」

ウィリアムは、外に出る押し戸を開いて、皆を外に導きつつに。

「アクトルさんの帰れる場所・・・近くにあるかも・・・ですよ」

東の空が、薄っすらと明るくなりそうな夜空下に出た一行。

アクトルは、ウィリアムの言葉にやや憮然として。

「簡単に言うな」

しかし、ウィリアムは目を細めてスティールに寄る。

「スティールさん、実はね・・・」

と、ウィリアムが含む言い方をすれば。

アクトルは、ムスッとして。　ズレ落ちそうなロイムを背負いなおしながら。

「おいおいおい、仲間で差別するなって」

だが、ウィリアムにスティールが寄って。

「教えろ、い～から」

と、アクトルをウィリアムと見てからかう。

ウィリアム達は、宿屋街の中にある宿でも、特にゆっくり出来る大きな宿に入った。　ま、お金を出す上に女性連れだから、スティールが選んだ。　前払いで、スティールも懐をスッカラカンにして、自分とハンナだけ別室に。

二階の三人部屋に行くウィリアム達と、クラシカルルームのツインに行くスティール・ハンナとは、階段でお別れ。

「じゃねぇ～」

「ひと時のサラバ～」

二人が、階段を上がっていく。

アクトルは、暗く長い廊下の小さいランプの明かりの前にて、ロイムを背負いながらスティールとハンナの上がった階段を見上げて。

「しかし、好きだな。　夜の女も女だ」

と、呆れる。

しかし、ウィリアムは微笑み。

「仕方無いですよ。　男と女なんて、そんなもんです。　別に、スティールさんがイヤイヤさせている訳ではありませんしね」

「まあ・・・そうだがよ」

アクトルは、やはり何処か純粋なのか、今一な顔。

ウィリアムは、部屋の扉に向かうべく廊下を行き出しながら小声で。

「夜の仕事は、欲望に塗れます。　人の温もりや優しさが恋しく成るんですよ。　俺は、ソレを一時でも満たす男気を持つスティールさんは大したものだと思いますよ。　ハンナさん達は、普通の人たちよりお金を稼いでも、明日と云う意味では地道な生き方の貧しい人たちよりも不安定かもしれません。　刹那の快楽も、小さな幸せの一つなんですよ」

ウィリアムの言葉は、小声なのにアクトルの心には静かに沁みた。

（コイツ・・・、どれだけの汚れ事を目の当たりにしてきたんだろうか・・・）

アクトルの見るウィリアムは、それを感じさせない爽やかさがある。

なんとも、対等に扱ってしまいたくなる相手だった。

「ここですね」

ウィリアムは、部屋番号を確かめてドアノブを開いた。　暗い部屋の中に、柑橘系の消臭剤の匂いがする。　柑橘類の皮は、捨てずに乾かして粉末にし、掃除の際の使うのだ。　高価な宿は、こうゆう

所に配慮が見られる。

部屋は、窓側と、左右の壁際に一つづつにベットがある。　広さは、狭くないと感じさせるくらい。　四人で結成初日に泊まった宿の部屋に比べたら、倍の広さがあるかもしれない。

「さ～て、寝ましょうか」

ウィリアムは、三つ並ぶベットの左壁のベットの上布団を捲って、アクトルを見る。

アクトルも、承知しているようにロイムを寝かせた。

赤い顔のロイムは、完全に酩酊状態。　うわ言を言いながら、寝息を立てる。

ウィリアムは、もう二日酔い特有の頭痛がきたので苦笑して。

「あ〃～頭痛い。　ロイムも何だかんだで呑むな」

アクトルは、少し酔いが覚めてきた顔つきで、暗い中で笑み。

「ま、楽しいから良かったじゃないか。　さ、俺達も寝よう」

「ですね。　懐はオケラですから、風邪ひかないようにしないと」

「上手い事言うなぁ」

二人は、アクトルが窓側に、ウィリアムが残りのベットに向かい。

それぞれ休んだ。

ーーー

さて、オロス氏のお店に向かう一行。　路上で、いきなり・・・・。

「ムフ・・ムフフフ・・・・」

スティールが、いやらしい手つきで変な仕草をしながらロイムに。

「解るか？　若者よ」

ロイムは、二日酔いの頭痛でクラクラしているので、やや苛立って。

「解りませんよっ。　ヘンタイっ」

スティールは、目を細めて。

「誰がヘンタイだ？　コラ。　可愛いロイムちゃんが、抱きしめてチューしたろか？」

「い・・イヤだ・・・」

ロイムは、最悪とばかりにアクトルの影に隠れる。

スティールは、苦虫を噛み潰した顔に成るが・・・。

アクトルが、スティールに。

「俺ともチューするか？　スティールちゃんよ」

「プッ」

ウィリアムが、吹いた。
スティールは、難しい顔でワナワナと。
「アーク、何でそうなる」
「ロイムに出来るなら、俺にも出来るだろう？」
「ウッセエっ、冗談に決まってんじゃね～か。　大体、アークなんか抱け無ぇよ。　デッケえガタイしてからに」
「フン」
ウィリアムは、困った笑い顔で、通りの往来の多い人の中で目立つ仲間を見ていた。
さて、ウィリアム達がお昼過ぎにオロス氏の店に行けば・・・。
「あらーーっ、ウィリアムちゃんっ！！！」
店にカウンターに向かった瞬間に、ウィリアムはキャリーに捕まり。
　仕事の成功でオロスの面子が保てたものだがら、異常な興奮状態で接待を受ける。　スティール達三人が唖然とする中で、キャリーはウィリアムにチューまでしていた。　受けるウィリアムは、ほぼ脱力状態・・・・。
また、店の裏の屋敷に連れて行かれて、応接室では無く。　食堂に直行でお昼を世話になって、終わったら応接に通された。
応接室は、円形の部屋が数字の“８”を描くように作られている。

手前の円の部屋には、赤いバラ模様の絨毯が敷かれて、小物などを仕舞う色々な棚が配される。　奥の円の部屋は、小庭園や裏庭に出る広い窓があり。　蒼いバラの絨毯が敷かれて、接客用のソファーや椅子やらテーブルが中央に配される。

黒いガラスのティーテーブルは、さり気無い光沢を湛えて光る。
四人は、テーブルを囲むソファーや一人掛けの椅子に座って紅茶片手に、のんびり待つと・・・。

「おお、良く来てくれた。　昨日は、忙しい中で報酬も渡せずに済まない」

やってきたオロスは、やや疲れた顔で笑顔を宿してチェアーに座ると。　ギッシリと詰まって口の閉じた絹の黒い袋をウィリアムに。

袋を一目見たウィリアムは、オロスを見返し。

「・・・多いですね。　幾ら入ってます?」

オロスは、サラリと。

「八千だ」

ロイム、アクトル、スティールは、ハッと息を呑んだ。　契約報酬の倍額だ。

ウィリアムは、静かに。

「やはり、ギリギリだったんですね」

オロスは、恐らくは薬の精製に徹夜でやっていたのだろう。　何時もの整髪が少し乱れていた。　頷くオロスだが。

「君達の御蔭で、納期は間に合うし。　面子は愚か、採取された量の多さで目論んだ以上の報酬が約束された。　この払った報酬ではキモチが足りないが・・・な。　多額の報酬では、ウィリアム。君は多過ぎると返すだろうと思った。　だから、倍額で止めた」

ウィリアムも、長年の付き合いのオロスに慮られてお金を渡された。　この額なら、仲間で山分けして二千・・・丁度いい臨時収入だろう。　これからは、海を渡って世界に出るなら、それなりお金も必要になる。

スティール達三人は、ウィリアムを見た。　やはり、リーダーに全ては任される。

「・・・・」

ウィリアムは、刹那黙り袋を見てからオロスに顔を上げて言った。

「丁度これからお金が大事になりますし。　仲間も文無しで困っています。　オロスさんのお礼の気持ちも汲んで、頂きます。　報酬の増額、感謝いたします」

オロスもまた、姿勢を正して。

「ありがとう。　色々な意味で助かった。　懐分の増額を受け取ってくれるなら、コチラも安心だ。　ウィリアム、それからみなさん。　ありがとう、助かりました」

オロス氏は、深深と頭を下げる。

（これが、本当の商人のプライドか・・・。　俺達の及ぶ所じゃないよな）

アクトルは、オロスの態度に紳士（真摯）を見た気がした。　今まで自分が見て来た何れの商人達より、潔さも度量も違っている。

ウィリアムは、ロイムに金袋を渡して。

「二千で山分け。　ロイムから取って行って」

ロイムは生まれて初めての大金に、身震いして。

「ううう・うん・・」

と、受け取った。

其処へ、

「お父様、お話は終わりました？」

と、クリスフィの声が・・・。

「キタっ」

と、立ち上がったスティールは、アクトルに背中を掴まれてまた座る。

「おっ」

怒ろうとしたスティールは、背筋に死の予感を覚える。　見たアクトルの顔が、普通では無かった。

影が差すアクトルは、静かに。

「解るよな？　・・・義兄弟（きょうだい）・・・・」

スティールは、ガクガクと頷いてチョコンと正しく椅子に座った。

オロスは、来たクリスフィや他の娘達を見て。

「終わったよ。　さ、こちらにおいで」

応接間に入ってきたオロスの娘達は、ウィリアム達にお礼を言った。
どうやら、オロスの悩む姿を見ていたのだろう。“ありがとう”に込められた思いは、嬉しく笑う顔に現れていた・・・・。

さて、クリスフィは、アクトルにもお礼を言った。

「ありがとうございます・・・父が助かりました」

アクトルは、緊張のあまりにカチンコチンに成り。

「いえー、ウィリアムが・・・やりましたー。　お・俺らは、手助けに・・・過ぎません」

スティールは、その緊張のガッチガチの兄貴分を見て、ウィリアムに耳打ちで。

（おいおい、なんだありゃ。　言語に狂いが出とる）

（緊張してるんですよ。　いいから、気付かないフリで）

（おう・・・）

言うスティールは、流石に女性には手馴れてる。　来た三女のルミアに声掛けられても、笑って面白く返していた。

さて、クリスフィに、アクトルは戦斧を差し出して。

「や・約束ですー。　みみみ・見てください・・」

スティール、それに吹いて。

「ブッ、ア・アークっ！！　女性に持てる代物かよっ！！　中庭にでも持っていって見せてやれよ」

アクトルは、ハッと気付いた顔で。

「そそそ・そか・・そうか・・わ・・わかた・・・解った・・」

クリスフィは、そんなアクトルが気に入ったのか笑って、

「ウフ、では、向こうで見せてくださいな」

と、小庭園に誘う。

「は・・ハイっ」

アクトルは、ズバアっと立ち上がる。

「うあああ～・・」

ロイムが、お金の袋を落としそうになり、

「うわ、ばかっ」

と、スティールが手助けを・・・。

行くアクトルとクリスフィ。　その姿を、ウィリアムとオロス一家が見る。

「有り得ない・・・・。　でも、かもしれない・・・」

ウィリアムは、真剣な顔で言う。

オロスも、目を丸くして。

「・・・ウチのクリスフィが・・・・男を・・・ふむう・・・」

次女も、驚いた顔で。

「お姉ちゃん・・・まさかっ？」

三女のルミアも、ビックリした顔で。

「恋・・・ウチのお姉ちゃんに限って・・・ウソおおおっ」

スティールは、皆の態度が解らない。

「？」

と、ロイムと見合う。

スティールは、ウィリアムの肩を掴んで。

「話が・・・見えん」

ウィリアムは、スティールに向かずに。

「あのクリスフィは、アレだけ綺麗なのに、男性を生理的に拒絶するんです。　今まで、自分から話すのは・・・俺と、執事さんや・・・農家の手伝いのお爺さんと、従兄弟の子だけ。　子供は好きなんですが、・・・成人男性には全く見向きも・・・しないんです」

すると、オロスも頷いて。

「全くだ。　もう、何処かに嫁に出す頃なのだがな～。　本人が、結婚を拒絶するんだ。　親としても、どうしようもない。　最悪、ウィリアムに貰ってもらおうとキャリーと話してる」

スティールは羨ましい話に。

（なにいいいいッ！！！！！）

と、ウィリアムの肩をまた掴む。　力任せにギリギリと揉む。

（お・俺の責任じゃないですよおおおっ！！！！）

ウィリアムは、怒ったスティールに弁解した。

ウィリアムの話に因ると、クリスフィは幼い頃から美貌が迸り。周りから求婚や許婚の切望が後を絶たないらしい。　しかし、過度に幼い頃から男性に欲望と異常な色眼鏡で見られて迫られる事の多かったクリスフィ。　攫われそうな事も一度や二度では無く。　男に対して熾烈な警戒心が生まれてしまった。

だから、自分から客に対しても、商人に対しても、話し掛けるのは仕事の話のみ。　色恋に匂いを匂わそうものなら、斬り付けるような目で相手を見るのだ。　しかも、元は冒険者だった執事のガルオーンに請い、剣術を教わっていて。　何時も杖を持っているが、仕込み杖で剣が仕舞ってあるらしいとか。

スティールは、

「なるほど、なんか動きが隙の無い感じかと思ったら・・・なるほど・・・」

スティールは、クリスフィにしろ、ガルオーンにしろ、何となくそんな感じがしたのだ。　だが、そして本題に気付く。

「んじゃ・・・あんな風に・・・男と連れ立って行くのは・・・？」

キャリーが、

「ウィリアム以外じゃ初めてよ」

スティールは、凄まじい深い衝撃を受けた。

（なあああああああああにいいい

ガルオーンは、ウィリアムを見た。

「？」

ウィリアムも、ガルオーンを見れば、頷くガルオーン。　ウィリアムは立ち上がり、ガルオーンの元に向かった。　幾らか疲れたガルオーンは、ウィリアムに耳打ちを・・・。

ウィリアムは、パッと真剣な顔でガルオーンを再度見る。

「御行きなされ、島を離れる前の最後かもしれん」

「・・・」

ウィリアムは頷く。

スティールが、急激に変わった雰囲気のウィリアムを見て、

「どうした？　なんか有ったか？」

ウィリアムは、真面目な顔で。

「人が殺されたそうです」

ロイムはビックリ、スティールは眉を顰めた。

オロス氏は、ウィリアムに向かって。

「モルビット氏が？」

ウィリアムは頷いて、

「はい、来てくれと役人の方を使わせて自分を探しているそうです」

スティールは、やや声のトーンを落として。

「行くのか？」

「はい。　恩人なので、島を離れる前に最後の手助けをしようかと」

「おし、解った。　俺も行く」

「行動は制限されますよ。　しかも、大変ですから軽率な行動は謹んで頂かないと」

「解った。　仲間として、手助けもできるかもしれん」

ロイムは、アクトルがああなので。

「僕も・・・行っていい？」

ウィリアムは、逆に。

「ロイムには、同行を頼もうと思ってるから、是非。　魔術師の力が必要になるかも知れないから」

「う・うん・・解った」

ロイムは、紅茶を飲み干して杖を取る。

ウィリアムは、キャリーに。

「アクトルさんは、後で迎えにきますよ。　悪い人じゃないですから、クリスフィの男嫌いの治療には最適です」

と、言い置いて、ガルオーンと応接室を出ようと歩く。

「ウィリアムっ」

キャリーが、声を掛けた。

「？」

立ち止まったウィリアムがキャリーを見ると。

「怪我しないようにね」

「ええ、大丈夫ですよ。　モルビットさんが、現場にいるそうですから」

スティールは、キャリーの前に出て。

「奥さん、大丈夫。　この天才剣士スティールが一緒ですし、大魔法使いロイムもいますから」

ロイムは、顔を真っ赤にして左右に振る。

「だだ・・大魔法・・・使えないよぉぉ～」

ウィリアムは、微笑んで外廊下に出て、ガルオーンの後に続いた。

ウィリアム達三人が、ガルオーンに連れられて店の外に出れば、黒い全身服の繋ぎに、十字に交わる杖と槍のエンブレムを胸のポケットに刺繍した役人風の男が立っていた。

ウィリアムは、ガルオーンに一礼してから、役人の男に頭を下げて。

「お久しぶりですね」

「ああ、まだ居てくれたか。　冒険者に成ったというから、居ないのかと思ったよ」

役人の男性は、四十近くの少し無精髭の目立つ落ち着いた雰囲気の人物で。　長槍を片手に、店の前に通りに立っている。

ウィリアムは、役人の男性の横の大通りに出て、

「現場は？」

男性は、頷き。

「北西のハイセクタリアの屋敷さ」

「富豪さんですか」

「ああ」

「では、歩きながら聞きますよ」

と、スティールとロイムを見る。　二人は、了解したようにウィリ

アムの後ろに着いて来た。

役人の男性の話に因ると、死んだのは都市でも指折りの大富豪チェルナーと云う男だ。

ウィリアムは、役人と共に“目移り通り”を西に歩きながら、驚いた顔で。

「あのチェルナー氏・・・ですか？」

頷く役人の男性は、難しい顔で。

「以外に居るまいて」

ウィリアムは、前へ向き直り。

「ですね・・・」

と、真剣な顔になった。

さて、話の続きであるが。　午前中、私室の書斎にてチェルナー氏は書き物をしていて、休憩がてら紅茶を飲んでいたら・・・突然に苦しみ出して血を吐いて死亡してしまったとのことだ。

聞いていたスティールが、

「一緒に誰か居たのか？」

役人の男性は頷いて。

「メイドの若い娘が一人。　書斎に入って直ぐは、執事の女性や用人の男は居たがな。　苦しむ前は、メイドと二人きりだったそうだ」

「ふぅん。　じゃ～そのメイドちゃんが怪しいね」

「ああ。　だが、もう泣いて泣いて“自分じゃない”の一点張りだ。刑事長も困っているところさ」

ウィリアムは、考えながらに静かに言う。

「問題は、殺され方・・・ですね。　毒殺のようですが、使われた毒を特定しないと」

役人の男性は、ウィリアムを見て。

「そうなんだ。　死んだ様子は毒殺なんだ。　でも、紅茶の使われたお湯、茶葉、そして食べた菓子には、毒は含まれていない。　カップは苦しむ時に落として割れたが。　その周りに何か付着していれば、初期検査の動物検査で死ぬ動物が出るが。　今回は全く無いんだ」

この世界では、科学捜査などないから、原始的な捜査が基本となる。

ロイムは、怖がった顔で。

「うわああ、本当の殺人事件だあ」

と、小声で言った。

ウィリアムと役人は、商店の並びが途切れる、都市の北西に向かう

通りに折れて入った。

「へえ・・・」

スティールが、左右の通り沿いに設けられた鉄の格子柵の長いことに驚いた。　見たことが無いからでは無く。　こんな島にある事に・・・。

道に入って歩いてゆけば、直ぐに右手に広大な芝生の生え冴える庭園を持った豪邸が見える。

「うわ～・・・ここ？」

ロイムが、驚きの眼差しで見ると。

ウィリアムが、

「違うよ。　こっちは富豪ばかりが住む豪邸街。　用無く普通の人がウロウロしてると、白い目で見られたりする」

と言うと。　役人の男性が、

「それならいいさ。　下手すると、気に入らないだけで役人を呼んで排除しようとする奴も居る」

と、言う時、一台の馬車が向かってくる。　真っ直ぐの一本道だから、良く解る。　ウィリアム達が、左に避けて馬車をやり過ごそうとする時、オープンタイプの馬車だから乗っている人がウィリアム達にも見えるし。　相手も同じこと。

「・・・」

華麗優美な青紫のドレスに身を包む太った貴婦人が、娘らしい若いドレスの女性とこちらを見るなりに、羽扇で口元を隠しながらなにやら言っている。　貴婦人の方は、あからさまに不愉快な顔で見てくるし。　娘のほうも、怪訝な疑る目つきだった。

馬車をやり過ごしてから、スティールが。

「こっちを見てたが・・・いい目じゃないな。　キャリーさんが女神に見える」

ロイムも馬車を見送りつつ。

「うん・・・同感・・・・・」

ウィリアムは、役人の男性と歩き出しつつ。

「文句言われないだけマシ・・ですね」

隣の役人の男性が。

「うむ。　自分が居るからそうそうには言われないハズだが・・・」

と、応えた。

さて、昼下がりの曇り空の下。　ウィリアム達は、北西の野原が見える郊外に近い所まで来ると。　隙間の開いた感じで、区画に仕切られた土地に立てられる館があちこちに点在する所までやって来た。

“目移り通り”から折れて入った通りの途中までは、広大な庭園が右にも左にも見えていて。　どの曲がり道を行っても左右は豪邸ばかりが目立っていたが。　ここは、庭が大してに広くなく。　ただ、大きい屋敷が道で区画整理された空き地に建っている印象に思えた。

スティールは、ちょっと気抜けした面持ちで。

「なんか・・・さっきより若干チープな高級豪邸街だな・・・」

ウィリアムが、声のトーンを落として。

「この辺りは、元は地元・島の富豪では無い、新興入植の富豪達が住み暮らす屋敷が多いんですよ。　古い富豪達ともソリが合わずに、体面ばかり威張る者達の集落みたいなモンです」

スティールは、意味が解って。

「な～る。　来るのもイヤになりそうな御土地なのね」

“土地”に丁寧な言い方は、スティールなりの嫌味だろう。

さて・・・、その区域の一画に、黒い土塀の城を小さく造ったような館が有った。

「ここだ」

スティールは、なんと言うか佇まいの雰囲気悪い屋敷を良く見回してから。

「ココかあ?」

ロイムは、館の入り口に二人の役人が立ち、屋敷の入り口も開放されて役人達が出入りしているのを見て。

「みたい・・・、うん」

ウィリアムは、館を真剣に見つめて。

「こんな形でこの館を見るとは・・・・別の形で見たかった」

と、言った。

スティールとロイムはふざけているのかとウィリアムを見たが。

真面目な顔には、からかう言葉も、問う言葉も憚られる思いがした。

ｓｅｃｏｎｄ６、そして、事件に迎えられ・・・。（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

やっと、ウィリアムの話も本題に入ると言った所＾＾

ウィリアムの行動と、周りの人が織り成す模様はどう変わって行くのか・・・。

お楽しみに＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ７、事件に向かうのは、恩人への置き土産

７、事件に向かうのは、恩人への置き土産

ウィリアムを連れた役人の男性が、館の中に入った。

黒い石の床が広がるロビーが伸びる先に、二階へ上がる白い乳白色色の階段近くに目立つ男性が立っていた。　普通の役人とは明らかに違う黒白の全身服を着て、ガッチリとした均等の取れた体格の男性の下に連れて行かれる。　アクトルにも似た長身の男で、短い頭髪に陽焼けた肌はこげ茶を超えて黒い。　眉が太く強面だが、スティールは見るなりに。

（出来るな・・・）

と、武術をの腕に覚え有りそうな男性と看破した。

役人の男性が、敬礼をし。

「フォレスト様、モルビット刑事長は何処でしょうか？」

すると、その男性は役人を見て、ウィリアム達を連れているのを見て。

「こいつ等は？　関係者か？」

「いえ、モルビット様が呼んで来るようにと仰った方です」

すると、“フォレスト”と呼ばれた男は、ウィリアム達を睨んで。

「では、事件の関係者ではないかっ。　事情聴取か、俺が直々に行う！！！」

と、大声を出した。

しかし、ウィリアムはフォレストには眼もくれず。

「随分と変わった造りの屋敷ですね。　二階へ行くのに態々大理石で螺旋階段とは・・・。　吹き抜けのロビーの高さがあるのはいいですが・・・ステンドグラスが北側とは・・・。　何を考えて設計してあるんだか・・・理解に苦しむ館です」

と、館内を見回して言う。

スティールは、ウィリアムを睨んでいるフォレストを見て、ウィリアムに小声で。

「おい、なんか雰囲気不味いぜ・・・」

ウィリアムは、フォレストを見た。　こちらを向いて、戦いでもしそうな雰囲気である。

「失礼ですが、モルビットさんは何処ですか？　貴方に構ってる時間は無いので、変わってもらえますか？」

すると、フォレストが怒り出して。

「貴様っ、モルビット様になんの用があるというのだっ!!　部外者がノコノコと来たわけではあるまいっ!!　事件の関係者なら、奥で身柄を拘束させてもらうぞっ!!」

と、辺りに聞こえる大声で言った。　仕事をしていた役人が、みんな手を止めた。

（こわいっ）

ロイムは、来なければ良かったかと思ってしまった。

そこに、二階から顔を覗かせたのは、かなりの高齢と思われる皺くちゃの顔をした役人だ。　服の色が、役人達と同じである。　螺旋階段の行き着く先の二階踊り場の白い柵の手摺りより身を乗り出して、フォレストとウィリアムを目視するなり。

「お～い、フォレスト～」

と、皺枯れた声を柔らかく出した。

強面の役人フォレストが上を向くと、長年役人として仕事をする最年長の役人のクレマソンが居た。

「おお、クレのオヤジさんか。　どうした?」

老人役人クレマソンは、ウィリアムを見ながら。

「お主は、先月に役人になったばかりだから知らないがの。　その若者ウィリアムは、モルビットの旦那とは大の親友で、幾つもの事

件を解決してきたパートナーじゃ。　邪険に扱ったら、お前さん、モルビットの旦那にシバかれるぞ」

フォレストは、凄いスピードでウィリアムを見た。

「えっ!!　この若造がかっ?!!!!!」

上から、クレマソンは。

「早く、上にウィリアムを上げてくれ。　わしも、ちと相談があるんじゃ。　事件の現場や遺体を見てもらわんと困る」

と、身体を引いて二階の奥に消える。

フォレストは、デカイ身体をたじろがせてウィリアムを見ている。

ウィリアムは、静かに。

「上ですね」

と、フォレストに言ってから、脇をすり抜けて階段に向かった。

スティールは、恐らくは剣の腕は自分と互角の力量があると見たフォレストが、肝を潰す程に驚くモルビットという男性に興味が沸いてきた。

ロイムは、恐る恐る。

「失礼します・・・」

と、フォレストの脇を通る。

さて、白い大理石は、金持ち達が挙って使う石素材のスタンダード。
美しく磨かれた階段は、最初の上がる一段目はウィリアムが両手を伸ばしても、まだまだ幅のある広さだが。二階に上って行くほどに幅が狭くなる。二階の踊り場まで来るときには、両手を広げると手が外にはみ出す。フォルム的には美しいが、実用的ではない。

踊り場には、白い絨毯が敷かれて、T時の廊下の中間に当たる。
ウィリアムが廊下の左右を望める所に来ると・・・。先ほどのクレマソン老人が、廊下の左を少し行った部屋の入り口から顔を出して、

「こっちじゃ」

と、手招きを。

ウィリアムは、頷いてからスティールには。

「くれぐれも、物には手を触れないように」

「わかた～」

ロイムには、

「気付いた事あったら、教えて」

「ううん・・」

そして、ウィリアムは、現場に足を踏み入れた。

夕方前。　曇り空のフィルターを抜けて差し込む日差しが、正面の一面窓がある方から部屋に入って鈍く薄暗い。　部屋は、広々とした大部屋と言える。　もう夕方に差し掛かるとあって、明るさを出すために、天井のシャンデリアには一回りだけ蝋燭の灯りが入れられていた。

スティールは、中を見回して。　だだっ広く本棚も置かれていない室内に呆れて。

「おいおい、こんなに広くて書斎かよ」

ウィリアムは、部屋の中を見て。　奥に見渡せる壁や、入って来た入り口の壁沿いにも絵が有るのを確認し。

「自慢部屋なんでしょう・・・。　いいご趣味の絵が、いっぱいありますよ。　スティールさんの好きそうな」

「ん？」

スティールは、言われて絵を見る。

ロイムは、絵を見るなりに顔を赤くして背けた。　女性の裸婦画である。　かなり細部にまでリアルな絵であった。

ウィリアムは、絵には眼もくれずに、正面の先に置かれた重厚な木のデスクに向かった。　デスクを見たウィリアムは、

「お金有りますね～。　都市でもコレだけ素材にこだわっての漆遣

い・・・値段もバカになりませんよ」

近くに立つ老人のクレマソンは、腰に両手を回して。

「ま～ったく、どこから金を儲けてるやら。　最近の富豪は、怪しい奴ばっかりじゃわい。　ウィリアム、遺体じゃ」

ウィリアムがデスクに備わったチェアーを除けて、奥に向かってデスクに隠れるように倒れてる大太りの男性を見た。

「うわわわ・・・」

白目を向いて口から血を吐いて死んだと思われる男性を見て、ロイムがビビッてスティールの後ろに隠れる。

「ソーゼツだね」

と、小声でスティールは呟いた。

白い背広に身を包み、ずんぐりむっくりの良く肥えた男性。　頭は禿げて来ていて、鼻髭を紳士風に左右に流して生やすが、どうにも顔は人相が宜しくない。

ウィリアムは、周りを見てまず死体の脇に落ちているペンを見るに。

「インク・・着いてませんね」

クレマソンが、頷く。

「うむ、書き物をしていたのにの～。　ペン先にインクは着いてお

らん」

ウィリアムは、デスクの上も見て。　インクのビンの隣にある、似たようなガラス瓶に入れられた白い粉と、蓋がずれて開いているのを見てから。

「“筆粉”も着いてませんね」

クレマソンは、筆の元に歩いていってしゃがみ。

「・・・フム、着いておらんな・・・これは、不思議じゃ」

と、ウィリアムを見た。

“筆粉”とは、真っ白い粉だ。　サラサラしていてとても粒子が細かい粉で、食用にも使われる。　高価なペンは柄が宝石で出来ているので、手の油や、指輪、爪などで擦って汚れや傷がつかないように、金持ちは筆粉を指につけてから書き物をする。　筆粉は、油分も水分も吸って、汗ばむのを抑えるので、好んで使われる。

ウィリアムは、クレマソンに提案する。

「自分にも、事情聴取させてくださいませんか？　関係者の皆さんに、後でででいいですよ」

クレマソンは、頷き了解する。

ウィリアムは、死体に目を遣りながら近づいて、その傍らにしゃがみこんだ。　顔の部分を注意深く見て、何かを調べている。

スティールは、自分達の近くに戻ったクレマソンに。

「ウィリアムって、事件の現場に顔パスなんスね・・・」

クレマソンは、スティールを見て。

「お主は？」

スティールは、ウィリアムを顎でしゃくり。

「仲間。　手助けも出来るかも知れないから着いて来た」

クレマソンは、ウィリアムに向きを直して。

「もう、彼是十年近いな。　或る殺人事件に、オロス様が巻き込まれてな。　一緒に居たウィリアムが、疑われたオロス様の冤罪を晴らした事があった・・・」

「な～る」

スティールもロイムも、オロス氏がウィリアムに対等に近い扱いをする理由が解って来た。　オロス氏が、

“色々と助けられてな・・・”

と、言ったのは、いろんな意味を含んでいたのだ。

クレマソンは、スティールをチラリと見て続ける。

「その殺人事件で、ワシとモルビットは、初めてウィリアムに出会

い。　更にその時に殺害方法も使われた毒も特定されて、今まで培ったプライドの鼻っ柱を折られた。　それから、知恵が足りぬ時は・・・特に毒殺の場合はウィリアムに来てもらっていた。　下手な医者より検死が早いからの・・・ふぉふぉふぉ・・」

ロイムは、注意深く死体を見るウィリアムが、尚更に凄く思えた。

その時だ。　ウィリアムが、手を挙げて・・。

「クレマソンさん、変ですね」

クレマソンは、前に進んでウィリアムに寄りながら。

「どうした？　何か変か？」

ウィリアムは、死んでいるチェルナーの右手の指を指して。

「爪の間、粉が詰まってます。　しかも、茶色に変色して」

「なんじゃと？　やはり・・・筆粉・・」

「今、取り出しますね」

ウィリアムは、身の細いナイフを腰の鞘から抜いて、白いハンカチを腰のサイドポケットから取り出すと、慎重に右手指の巻きつかせるように包む。　そして、自分の膝に右手を乗せて、繊細な手つきで爪の間に挟まった異物を掘り出した。

ウィリアムは、異物を取り出しながら。

「油の様ですね・・・混ざっているのは」

「“油”とな？」

「ええ、食用の・・・甘い香りがします。　菓子を食べて血を吐いたと言いましたね？」

「ああ、ケーキじゃ。　・・・しかし、ウィリアム」

「ええ、菓子には毒は入っていない・・・でしょ？」

「うむ。　そうじゃ」

ウィリアムは、直ぐに。

「俺が言いたいのは、粉が油に因って固まったと云う事ですよ」

クレマソンは、考えて・・。

「すると・・何か？　チェルナーは・・・被害者は、確かに筆粉を使っていたと云う事か？」

「ええ。　しかし、ペンには粉が着いてない」

「拭き取った・・か？」

「ゴミ箱やこの部屋に抜き取った物は？　メイドさんの話に拭き取ったとありましたか？」

「あああ・・・イヤ・・」

クレマソンは、そう言ってから一呼吸置いて。

「実は・・そのメイドの若いのが・・・フォレストに取り調べを受けて怒鳴られてな～。　パニックを起こして、その～・・倒れた」

ウィリアムは、鋭くクレマソンを睨んだ。

「誰も止めなかったんですか？　まだ、確証が有ったのでは無いでしょう？」

クレマソンは、老いた顔を困らせて。

「フォレストは、軍人上がりで最近こっちに赴任したんじゃがな～。どうも、突っ走って軍人気質を丸出しにするんじゃ。　モルビットも困っておっての～」

ウィリアムは、遺体に目を戻すと。

「さっきの自分に対する態度がそのまんまでしたね。　捕り物専用員で、捜査をする人間じゃない」

クレマソンは、頷いた。

「スマン」

「俺に謝ってどうするんですか？　メイド・・・いえ、ロゼッタですか？」

クレマソンは、驚いた顔でウィリアムを見て。

「な・・・なんで・・・娘の名前を・・・」

「彼女は顔が綺麗ですが、スラム近くの民家の娘でしてね。　俺とは顔見知りですよ。　三月前かな、チェルナーに大金積まれて、兄弟と親の為にメイドとして行ったと聞きました」

スティールは思わず。

「すげえ・・・。　そうか、アイツ・・・さっきの会話でもう推理してたのか・・・」

スティールもロイムも、ウィリアムの推理が事件の話を聞いた時点で始まっていたと気付いた。

ウィリアムは、爪の中の異物を取り出して、そっとハンカチを遺体から外して、遺体を元の姿に戻して立ち上がった。

クレマソンが、向かうと同時にウィリアムはクレマソンに向く。

「はい、爪の間の異物です」

クレマソンは、慎重に受け取った。

「うむ・・・ハンカチが白くて見難いが・・・茶色に染まった砂粒の様な塊の部分と、粉のままの物があるわい・・・。　確かに、これは筆粉のようじゃが・・・」

と、ウィリアムを見る。

ウィリアムは、デスクの引き出しを指差し。

「デスクの引き出し・・・お調べになったのでしょう?」

「ああ・・・。　でも、フォレストの一件で、お前さんを呼ぼうという事になってな。　捜査は、最低限しかやってない。　まだ、引き出しの中のものの確かめは中断したままじゃ。　証人の重要人物が倒れたからの～」

「ショックが強すぎて、気を失ったのでしょう。　もう、自分が立ち会いますよ」

ウィリアムが真顔で静かに言う。

クレマソンは、ハンカチの上の物を見つつ。

「うむ、ウィリアムが知り合いなら、その方がエエの～。　相手も安心する」

そこへ、後ろから。

「ウィリアム、居るか?」

と、太くドッシリとした男の声が聞こえてきた。　少し枯れ声は、独特のものだった。

振り返るスティールと、ロイム。

だが、ウィリアムは見ないで。

「モルビットさん、随分と不手際ですね。　取調べで、参考人を気絶させるなんて」

スティールは、

（コイツが・・・）

現れたのは二人、。　一人は、大きい身体を小さくして済まなそうにしているフォレスト。　そして、もう一人は、眼帯を左目にしている。　頭が白髪交じりの無駄の無い体格をした男だ。　多分、四十・・・半ば・・・いや、五十以上かもしれない。　上が白い色で、下が黒い色の繋ぎ服を着ているが、フォレストは逆の色。　そして、胸のエンブレムも、刺繍が金糸だ。　しかも、日に焼けた顔は渋い苦労人のような皺と、鋭く雄々しき眼光を湛える中々の人物と思える。

モルビットは、フォレストを伴い中に入りながら。

「ウィリアム、済まない。　どうしても、手を借りたくなった」

ウィリアムは、下を俯いて。

「でしょうね。　殺されたのは、あのチェルナー・・・・。　本来なら、自分とモルビットさんが二人で捕まえたかった相手なんですから・・・。　解ってますよ」

モルビットは、ウィリアムに向かう。　スティールもロイムも、道を空けた。

モルビットは、真っ直ぐにウィリアムに向かった。　スティールに

も、ロイムにも目を一瞥向けただけで。　問答は無い。

（出来る・・・このオッサン・・・）

スティールは、モルビットがこの現場に無駄が無いと思って自分達に尋問しないのだと目を見て悟った。　モルビットには、なにか男気と大きな心を感じる。　中々出会える人物では無かった。

さて、ウィリアムはモルビットに向かうと。

「今、クレマソンさんに渡しましたが、色々と矛盾が有りますね。　現場検証もいいですが、関係者一人一人に事件の話を聞きましょうか。　この殺人は、証言を聞けば一気に終わります。　もう、想像レベルですが、毒の特定もついてます。　殺害方法も・・・」

モルビットの後ろに居たフォレストが、ムッとした顔で。

「嘘を言うなよ・・・若造がッ！！！！！」

と、怒ると・・・。

モルビットは、ジロリとフォレストを睨んだ。

「あ・・」

フォレストは、驚いたようにその大きな身体を縮めて畏縮する。

ウィリアムは、自然な様子で憤ったフォレストを見る。

「フォレストさんでしたか？　やる気が無いなら、帰っていいです

よ」

「なっ！！！！」

それは、フォレストには屈辱的な言葉だ。　フォレストの顔は、俄に顔に怒りを募らせる。

だが、ウィリアムは、冷静な顔で続け。

「怒るのは勝手ですが。　今日此処に来て、何をしましたか？　メイドを一人気絶させた以外に？」

「あぐっ・・」

フォレストは、グッと言葉を呑んだ。

「今、貴方の御蔭で捜査が中断してます。　貴方の所為で、事情聴取も出来ません。　何しに、現場にいらっしゃったんです？」

「そ・・・それは・・・・・」

横を向き口篭るフォレストに、ウィリアムはハッキリと言った。

「やる気が有るというのは、“その物事をどうしたら解決出来るか”と云うことについて考えて行動することです。　周り、全体を考えて・・・。　出来ないなら、邪魔ですから。　帰っていいです」

フォレストは、唇を噛んで黙った。

モルビットは、ウィリアムを止めなかった。　かつて、自分も言わ

れた言葉であるからだ。

ウィリアムは、モルビットに向きを変えて。

「モルビットさん、とにかく事情聴取をしましょう。　メイドのロゼッタは、一番最後でいいですよ。　最初に、執事の女性からお願いします」

「・・・・」

モルビットの顔が、いきなり険しくなった。

スティールもロイムも、そしてフォレストですらそれが解ったほどだ。

ウィリアムは、モルビットに踏み込み。

「モルビットさん、今回で決着を着けましょう。　最初で最後の機会です」

「・・・だな。　解った・・・準備しよう」

モルビットは、鈍く頷くままに俯いた。　そして、顔を上げると、クレマソンとフォレストを見て。

「オヤジさん、フォレスト、行くぞ」

モルビットは、フォレストとクレマソンも連れて部屋を出る。　そして、最後に自分が出る形を取って、ウィリアムにこう言った。

「ウィリアム、君がまだ居てくれた事に・・感謝するよ」

ウィリアムは、静かに首を左右に。

「お互いの為です。　礼には及びません。　まだ、事件も何もかも解決していないんですから。　さ、お願いします」

モルビットは、頷いて出て行く。

スティールは、重たくなった空気を嫌ってか・・。

「お～お～、この館の主人も俺以上のスキモノだね。　エロい絵が沢山飾ってあらぁ～」

と、部屋の中を見回して、壁に掛かる裸婦画に目を向ける。　しかしながらスティールは、この裸婦画が好きには成れなかった。　題材の女性達が、苦しむ様な・・・険しい顔ばかりしていて、辛そうな印象しか受けない。　スティールは、女性に言い寄るが。　力任せに抱くことは絶対にしない男だ。

ウィリアムは、それぞれ絵を見回して。

「スティールさん、この絵・・・唯の裸婦画とは違うんですよ・・・」

と、侮蔑も込めた苦い言い方で言う。

「なんで？」

「全部・・・借金のカタとか、弱みを握って・・・悪質な手段で描

かせた恐喝の為の絵です。　俺の知ってる女性の顔が・・・幾つも」

すると、スティールの目がギラリと光った。

「逃がさない為の、・・・・か？」

ロイムですら、二人の言っている意味が解り。　嫌になって顔を背けた。

ウィリアムの語るチェルナーと云う男は、悪魔そのものだった。安い利子で謳い金を貸し、どんどん利子を引き上げて、財産から土地まで奪う。　特に、女性に目が無く。　その汚い毒牙に掛けられた被害者には、首を括って死んだ者も一人二人では無い。

スティールが、怒りに顔を紅潮させて。

「汚ぇクズ野郎がっ、恋愛感情もお互いの合意も無ぇで金・腕づくか・・・。　死んで正解だってんだっ！！！」

吐き捨てる様に言う。

ウィリアムは、横を向いて。

「モルビットさんと何度か事件の捜査をする中で、裏で暗躍していたチェルナーの存在を知り。　何度も捕まえようとしましたが、代わりの“蜥蜴の尻尾”を用意されましてね。　捕まええられなかった・・・」

スティールは、苛立ちを隠さぬ顔・格好で歩き。

「なら犯人の逮捕なんかいいじゃないか・・・悪党を殺したんだ。ほっとけよっ」

「そうは行きません」

「なんでっ?!」

向き直ったスティールを、ウィリアムは真っ直ぐに見て。

「スティールさん、こんな悪党でも殺せば人殺しです。　しかも、手も汚れてしまう・・・。　悪党や冒険者ならいざ知らず。　普通の一般人なら・・・どれだけの重い十字架を背負うか・・・。　そして、苦悩に際悩まされるか。　それ以上に、法の敷かれた国で、事件や違反を見逃せば横行します。　だから、駄目です」

スティールは、怒った顔でウィリアムを見て。

「こんなグズのブタ野郎を殺して、それで刑にだなんて二重苦だろうがっ!!!」

ウィリアムは、静かに頷き。　暗い夕日に変わる外を見て言う。

「法に心なんてありませんよ。　ただ・・・罪を明らかにして、他の人々に同じ過ちをさせないように制限したり、争いや悪徳な行為を減らして規制する方便に過ぎないんです。　・・・人が作り出した物に、完全な万能は無いんです。　金ですら・・・魔法ですら・・・ね」

スティールは、目の前の女性の裸婦画に歩み寄り、悲しい顔をした裸婦画を憎たらしく見て。

「殺った奴が悪党だと願うぜっ。　ブタを殺してもなんとも思わねぇ～・・奴だってなっ！！」

ウィリアムは、振り返ってスティールの背中を見て思う。

（熱い人ですね～。　キライじゃないですよ。　女性に対しても、あくまで愛してる・・・面白い人だ）

その時だ、ロイムが。

「ねえ・・・ウィリアム・・・・」

「ん？　なんだい？」

ロイムは、入ってきた入り口から左の行き当たりの壁に有る絵を見て。

「あの絵・・・何で裸じゃないんだろう」

ウィリアム、スティールが向いた。　その絵は、白いベールに白いローブに身を包む女性が、牢獄で赤ん坊を抱いている絵だった。

スティールは、腕組みして眼を背け。

「ケっ、聖母を牢獄へだなんてクズ野郎の頭が狂ってるだけさ・・・。　見たくも無ぇっ」

だが、ウィリアムは・・・どんどんその絵に近づいていく。

「・・・聖母が・・・牢獄に・・・・しかも・・・・あっ！」

ウィリアムは、驚いて絵に更に早足で歩み寄っていく。

スティールは、冷静だったウィリアムの態度が一変したのに、腕組みを解いて。

「お・おい・・どうした？」

ウィリアムは、絵の真ん前まで来て。

「なんでだ？　なんで・・・この絵だけ・・・」

スティールとロイムは、お互いに見合って、ウィリアムに近づいた。

ロイムが、探るように・・。

「う・・ウィリアム？」

スティールも

「マジ・・・どうした？　お前・・・」

ウィリアムは、絵に指を向けて。

「見てくださいっ、此処っ！！」

と、聖母の足元の後ろを指差す。　聖母は嘆く顔で赤子を抱きながら、向かって左の下に注意を向けているような体勢だ。　聖母の周りは、藍色の強い色で、暗黒の世界と、灰色の滲む様な色使いで牢

獄の格子戸をイメージさせているのだが・・・。

「あ・・？」

スティールは、ウィリアムの指差した場所を見ると。

「何だこの・・・円が歪んだような物に・・・・突き出た先は・・・黒だが・・・」

すると、ロイムが。

「あああああっ・・・船だっ。　ほ・・ホラ・・・この黒い縦のの人型・・・何か持ってるしっ。　これ・・・水の上に浮ぶ船と水面に映る月なんじゃない？」

「おお・なっ・・なるほど・・・」

スティールも、ロイムに言われて解った。

ウィリアムは、少し冷静さを欠いた様子で、二人に・・・。

「いいですか？　他の絵は、あくまでも女性一人の絵で、しかも絵の視点は女性の肉体を描き。　尚且つ、絵描きがその姿を見て描いているようです。　ですが、この絵は聖母が中心のはありますが。　全体的に人物画では無く風景画を描いている様に見えます。　しかも、女性が裸では無いし、赤子と・・・船頭らしき人物も・・・。　これは、もしかしたら蓋かもしれません」

スティール、ワインのコルク抜きの仕草で。

「コノ、蓋？」

頷くウィリアム。

「ええ。　ま、仕舞ってあるのはワインではありませんでしょうが・・・」

と、絵を捲る。

「・・・・・」

スティールは、捲った裏に只の壁が有るのに思わず黙ったが・・・。

ロイムが、ワナワナしだして。　その捲った絵の下に見えた壁を指差す。

「う・うう・・うっ・・ウィリアムっ！　ままま・・魔法のチカラ・・・感じる・よ」

ウィリアムは、絵の裏側を見て。

「そうか・・・純度の高い白銀か。　魔法のオーラを隠すんだよね・・確か？」

と、ロイムに向き直って確かめる。

ロイムは、ガクンガクン頷いて。

「絵を捲ったら、いきなり感じられたよ」

ウィリアムは、絵を脇に外して。

「ロイム、ディスペル（解呪語）の魔法を頼めるかな？」

ロイムは、震える手つきで頷いた。

スティールは、何がなんだかで。

「おいおい、どっどうゆうことよ・・」

ウィリアムは、スティールの腕を引っ張りロイムの後ろに下がりながら。

「いいですか。　魔法の中でも、ロイム達が使う魔想魔術は、魔法の種類が多彩で最もポピュラーなのですがね」

と、小声で話し出す。

「ンなこたぁ〜俺だって・・・」

ウィリアムは、もうロイムにしか目が行っていない。

「はい。　しかし、魔想魔術の真髄は幻覚呪術です。　物を隠したり、見えなくしたり、敵の視界を塞いだり、眠らせたり・・・高度に成れば、人を操る魔法すらあるとか・・。」

「え？　マジ？」

「ハイ。　ただし、殆どの魔術師は攻撃型だそうです。　幻覚魔術は、個性と言う点で適正が必要な上に、とても使える人が少ないと

言います。　ですから、高位の魔法使いでも、幻覚術は初歩の物を隠すイリュージョン（幻術）のみと聞きます。　恐らく、ロイムが絵を捲った場所から魔法の力を感じたので、魔法が掛かっているかと・・・」

と、説明を受けたスティールは壁を見て。

「でも・・・誰が・・・？」

ウィリアムは、小声で。

「チェルナーは、元々冒険者で魔法遣いです」

「なに？」

「なまじ魔法が遣えるので、用心棒は置かなかったのですよ」

ロイムが、集中する中。

「でもよ、・・・死体の周りに杖ないぜ？」

ウィリアムは、小声のままに。

「指輪ですよ。　媒体は杖で無くてもいいとか・・。　チェルナーが長く悪事を働いていたのには、その辺も関係しています」

その時だ。　ロイムが杖を前で回しながら、

「想像の力は具現の力、想像の力は幻惑の力、想像の力は創造の力の源なり・・・幻を解かし在るべき姿を見出せ・・・解放呪語術っ（ディスペルマジック）

！！！！」

と、ロイムが額に汗を浮かべて杖を壁に向けると・・・。

“パキイイイイーーーーーン！！！！”

剣を幾重にも重ねて叩き割った様な、金属が割れて壊れるぐらいの小気味良い音が鳴り響く。

「うんッ？」

スティールは目を細め。

ウィリアムは凝視した。

「・・・・」

三人が見守る中、絵の裏側で壁にしか見えなかった所の一部が、グニャ・・グニャリと歪み出す。

スティールは、思わず一歩前に出て。

「変化し出した・・・コレが・・幻術？」

ロイムが、二歩ほど下がって。

「うん。“インビジブル”（見えざる姿）の魔法だよ・・・」

ウィリアムは、ゆっくりとそこに近づいた。壁の幻覚は晴れて行き、壁の中に正方形を刳り貫いた凹みがあった。

ロイムの後ろに来たスティールは、ロイムに。

「本・・・みたいな・・・感じか？」

と、顎でしゃくる。

「みたいです・・・」

ロイムも同意した。

凹みの棚には、分厚い本のような物が置かれていた。　チョット大きい、重みの在りそうな本だ。　抱えられるくらいだが・・・厚みは手でつかめるギリギリの幅。

ウィリアムは、その黒い皮製の表紙をした本手にして、中を開いて確かめた。

そして、少し目を通して読み進めてから、フッと顔を上げると・・・。

「ああ・・・・・これが・・・・全てだ・・・」

と、嘆く。　夕日が雲で遮られて鈍い光を差し込む中。　シャンデリアの最低限の明かりがウィリアムを照らし、壁に伸びた二重のシルエットが俯く。

スティールは、ウィリアムに問う。

「それ・・・なんだ？」

ウィリアムは、透明感のある静かな声で。

「死の・・・・黙示録・・・・・」

何か怖いその言葉に、スティールとロイムは、そのまま・・・動けなかった。

程なくして・・・、モルビットが事情聴取の準備が出来たと言いに。

ウィリアムは、その本をロイムに託して隠した。　そして二人を見て、真剣そのものの眼差しで。

「これから、辛い話になって行くと思われます。　ロイム、巻き込んでゴメン。　スティールさん、どうやら犯人は悪党では無いようです」

二人は、決意を決めたウィリアムが居ると感じている。　だから、喋らなかった。　ただ、頷くのみ。

ウィリアムは、場所を移動した。

ーーー

一階の玄関ロビーから二階に上がる階段前を、右の廊下へと入っていくと。　廊下に沿って幾つかの部屋に入る扉が見えていた。　その中の一番手前に、赤い扉の一部屋がある。　簡素な白い壁の部屋だ。　さほどに広くも無く、宿でいうなら一人部屋だろう。　窓が北側なので、もう薄暗い部屋にランプの明かりが灯って。　一人目の関係者が、テーブルを前にして座っている。

「・・・・」

黙る女性は、金髪で背丈のある美しい中年の美女だった。　白い肌は美しく、高い鼻は品格を魅せる。　綺麗に高等部に結い上げた髪は柔らかそうで、円熟した女性の美の最高の美人と謳ってもおかしくない。　彼女の名前は、“アリネット”。　中々の手際で雑務処理をする執事の役割で、メイドの教育係でもある。

「・・・・」

窓に佇むモルビットが、その女性の横顔を見るに見えない様子で俯く。　モルビットの脇の窓には、雨粒が張り付き出していた。

窓を背にドアに向いて座るアリネットの前には、ドアに背を向けて座るウィリアムが対峙。　ウィリアムの左手にスティール・ロイム・フォレストが並んで立っている。

フォレスト以下、三人は喋らないでとウィリアムに言われていた。

ウィリアムは、アリネットにまず。

「いつぞやは、ありがとうございます」

と、礼を・・。

顔を上げたアリネットは、驚いた顔で・・・。

「何のことでしょうか？　それに、何故アナタが取り調べを？」

ウィリアムは、アリネットの目を見て。

「お礼は、十年前・・・。　自分の所にしつこく来ていた人買いの男。　チェルナーの手下が私に、大金で働きに出ないかと巧みに言ってきていたのに。　突然にそれが止みました。　風の噂で、貴女が私の悪口を言ったからと・・・」

アリネットは、スッと横を向き。

「本当のことよ・・・。　君の噂は聞いていたわ。　人の下で働く人形に・・・君は適して無いから・・・」

ウィリアムは、そこからズバリ。

「アリネットさん。　亡くなったチェルナー氏が、奴隷貿易をしていたのはご存知と云う訳ですね？」

「？！」

ウィリアムの言葉に、驚いた顔のフォレスト。

「なっ？！」

声を出したモルビット。

「えっ？！」

ハッと顔を上げたアリネットの顔は、非常に強張っている。　しどろもどろの様子で、アリネットは言い訳をし始める。

「奴隷・・・？　違うわ・・・出稼ぎよっ！！　ただ、いい・・・働き口では・・・無いわ・・。　そう・・チェルナー様から・・・聞いています」

アリネットは、実はモルビットより一つ下の四十八歳だとか。　横を向くアリネットの顔は苦渋に満ちているが、三十五ぐらいとしか見えない。　知的な印象が強く、肉体はスラリとしているが胸の張りはかなりの物。　男が放っておく女性では無かった。

だが、スティールは、この女性を見た瞬間に、このアリネットには言い知れぬ影が在る様に思えた。

また、フォレストやロイムは、ウィリアムが事件と直接関係の無い部分を聞いている気がした。

ウィリアムは、アリネットの顔を見つつ。

「では、事件の事をお尋ねします。　チェルナー氏は、書斎で書き物を始める前に、貴女や用人のペトルさんを呼んだそうですが・・・。　用件は？」

「ハイ・・・」

アリネットは、そっとモルビットを見る。

モルビットは、深深と頷き。

「彼の取調べは、私がしているのと同じと思って下さい。　答えて・・」

アリネットは、その言葉に顔を上げて、気品のある顔をウィリアムに向ける。

「私が呼ばれたのは、ごく簡単な事だと思います。　私は、主が書き物をしている間、人が来たら重要な仕事の話以外は私が聞いておけと。　ペトルさんには、私とはしない特別な話もある時が・・・。　それに私は、先に退室いたしましたから、ペトルさんの方の話は一切わかりません」

ウィリアムは、手をテーブルの上に重ねて、アリネットに顔を近づけた。

「アリネットさん。　貴女は二十年近く前、チェルナー氏の下に雇われたましたね。　理由は・・お金ですか?」

頷くアリネットは、少し俯き。

「ええ・・・主人の・・・店の借金がかさみまして・・・」

また、事件とはズレる質問だった。

ウィリアムは、身を戻して。

「では、チェルナー氏が死んだ時・・・貴女はどうしていましたか

？」

「は・・ハイ、いきなりメイドのロゼッタの叫び声が・・・。　私は、一階の使用人達の詰める部屋にて、書き物と調べ物を・・・」

「なるほど。　それで？」

「声を聞いて・・・私とペトルさんが・・・飛び出しまして。　その・・二階の書斎に行ったら・・・チェルナー様が血を・・・吐いて・・・倒れられていました」

「ロゼッタは、どうしていましたか？」

「大量の血を見て・・・泣き叫びながら・・チェルナー様を揺すっていました。　私は、彼女を退かせて、確かめると・・・瞳孔が・・・。　ですから、ペトルさんに・・・役人と医者の手配を頼みました」

「解りました。　所で、部屋にはお二人が残った訳ですか？」

「はい。　でももう・・い・息も・・・死んでいると・・・思いまして。　ロゼッタを先に見に来た年上のメイド達に連れて行かせて。　私は・・・窓の鍵だけ閉めて・・・部屋を去りました」

ウィリアムは、納得した頷きを見せて、更に質問を重ねる。

「所で、チェルナー氏の指なんですがね」

アリネットが、パッと顔を上げた。　その顔は、衝撃を受けた顔である。

「ゆゆ・・指・・・でしょうか？」

声が震えている。

「ええ。　筆粉が爪の間には入っていたのに、見ては綺麗に拭き取られていました。　アリネットさんが見た時、指はどうでしたか？」

アリネットは、少し狼狽した様子で。

「よ・良くは見てませんでしたが・・・綺麗だったような・・・。いえ、無事を確かめるのに必死で・・・良くは・・・見てません」

「そうですか。　解りました」

モルビットは、明らかに動揺したアリネットの態度に疑問を覚えた。

これは、フォレストやスティールも同じである。

しかし、ウィリアムはアリネットを退室させた・・・。

誰もが、ウィリアムの心理を解らない。

ただ、モルビットは、ウィリアムを苦渋に満ちた顔で見ている・・・。

これは、一体どうゆうことなのだろうか・・・。

ｓｅｃｏｎｄ７、事件に向かうのは、恩人への置き土産（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編の本題に入る所に来ました＾＾

最近、色々と忙しい日々と、鬱の影響で更新が遅れましたが。　また、ポツポツと書いて行きます＾＾；

ウィリアム編１章１章の間に、“Ｋ”編と、ポリア編を前編後編で書いて行こうと練った話が入ります。　予定としては、始まりは６月か７月になると思いますが。　そちらも、お楽しみに＾＾

後、友人のネタ振りで書いてる“ミシェル”もヨロシク～（＾；＾）／～～～

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ８、事情の中に見える疑問と真実

８、事情聴取の中に見える疑問と真実

ウィリアムの事情聴取は、次の人物を迎えていた。　厨房にて料理を任されているシェフとお手伝いで来ているオーウィン夫妻。

ウィリアムの座る位置は変わらず、彼の正面に二人が並んだ。　大きく太った奥さんのテレサと、無口朴訥な雰囲気を漂わせる旦那のエイムズ。　エイムズは、俯きながら白い衣服のシェフの姿で黙り、テレサは黒い上下の服とスカートにエプロン姿で、商店の店先にて働く女性に多い格好をしていた。

ウィリアムは、形式礼儀のように挨拶をして。　いきなり、言う。

「今回は、明らかに毒殺です」

その一言に、二人は衝撃を受けた顔になり。　震えた様子で、シェフのエイムズが・・。

「おおお・・俺じゃ・・・ない・・・おっ俺じゃ・ない・・・俺じゃないっ！！！」

と、いきり立って机を叩き椅子を後ろに転がした。

スティールとフォレストが、何時何が起きてもいいようにと壁に背中を預けるのを止め。　ロイムが脅えた。

「・・・・」

ランプの明かりだけが主な明かり。　ウィリアムは、エイムズの目をみる。

奥さんのテレサが、エプロンの端を掴んでいた。

ウィリアムは、静かに。

「犯人は、貴方ではありません。　ただ、殺害方法を言ったまでです。　落ち着いてくださいな」

エイムズとテレサが、ウィリアムを見て止まった。

モルビットは、黙って見て居ながら。

（また、やった・・）

ウィリアムの手段の一つである。　疑いが掛かっているように思わせて、そうでないと言う。　だが、本当の事を言わないと、疑われたままだと言う。　主持(あるじ)ちの人々は、その権威に縛られて中々口を開かない。　その壁を破る為の心理戦法の一つだ。　ウィリアムは、人を視てコレを使い分けるのにも優れる。

「あ・・・」

エイムズがフラフラとその場に砕けて、床に座る。

ウィリアムは、床に座ったエイムズを見て。

「ですが・・・」

エイムズが、ウィリアムをパッと見る上げる。

「ですが、本当の事を仰って頂かないと、ロゼッタを含めて疑われたままになります。　どうか、お座り直して、質問に答えていただけると、助かります」

ウィリアムの“助かります”は、捜査陣の事も言うが・・・夫妻の事も含む。

エイムズが脅えた。　四十始めの老いに差し掛かった皺が滲む顔を震えさせて、テーブルに這い上がる。

「言うっ。　何でも言う・・・頼むっ、まま・まだ・・・まだ子供が小さいんだっ！　・たす・た・助けてくれ・・・」

ウィリアムは、大きく緩やかに頷いた。

この世界で、疑われたままで生きるのは、生き地獄のように厳しい現実が待つ。　料理人のエイムズなどは、なまじ客商売が生業なだけに、その辛さは見て知っていた。　しかも、主人はもう死んでいる。　忠誠や権力に怯える必要からは、開放されていた。

暗くなった外。　少し強い風が窓に吹いて、張り付いた雨粒を揺らしている。　モルビットは、腕組みのままに外を見ていた。

ウィリアムは、座り直したエイムズとテレサの夫婦を見て、

「まず、お伺いしたいのは、この屋敷の住まわれて居ないお二人ですが。　チェルナー氏と、メイドさん達や執事のアリネットさん、そして用人のペトルさんなどは、どうゆう扱いだったのでしょうか？」

夫婦は、お互い見詰め合ったあと・・・。

まず、ペトルについてだ。　痩せ型のひ弱そうな男のペトルは、力仕事よりもチェルナーの虐められ役と、用足しの手足だったとか。

　チェルナーは、イラついた時は良くペトルを虐めたり、叱責したりしていたとか・・・。　だが、逆に月極めの報酬は結構高く、無償に近いアリネットやメイド達に比べると、破格らしい。　何でも、誰にも話さない用事をペトルだけには申し付ける事が多く。　何がペトルの仕事かは、良く解っていないのが実情らしい。　馬車の運転も、買い物もペトルなのだが・・・アリネットとは、また違う隠れた部分があると言った。

しかも、ペトルは家庭もあり。　一日おきに屋敷に泊まるようで、住んでいる訳では無い。

次に、メイド達。

エイムズが、俯いて。

「私にも娘がいますんで・・・本当に可哀想だと思います・・」

と・・。　日中は、それこそメイドとして振舞っているが、夜はチェルナーの横暴に脅える毎日らしい。　この屋敷は牢獄であり、借

金と自分達の身売りで得た金が家族を養っている現実・・・。　逃げられない、逆らえない、幸せも無い、まさに地獄であるとか。

メイドに続いて、アリネットの話も出た。

テレサは、涙ながらに。

「アリネットさんみたいな真っ直ぐな人が、あんなご主人さまに雇われているのだって借金の為です。　逃げたら、アリネットさんのまだ残る親戚と老いたお母さんにどんな災難が降りかかるか・・・。　ウチのご主人様ってのは・・・悪魔ですよ。　殺されても仕方ないです」

そう言った。

スティールとフォレストは、その話に静かに拳を握り絞めて力が篭っている。　あまりの下劣さに、怒りが心頭してるのだろう。

ロイムは、壁に顔を向けて身体を揺らしている。　おそらく・・・可哀想で泣いているのだろう。

モルビット以外、悪い奴の噂は耳にするが、ここまで悪辣非道な輩の話は始めてのようだった。　ウィリアムが、良くも冷静に居られるものだと思える。　あの若さで。

ウィリアムは、次に。

「では、事件の日のことです」

と、アリバイを訊ねる。　そして二人は、厨房仕事に追われていた

事を話した。

「最後に、変わったことはありませんでしたか？　なんでもいいんですが」

と、聞くと。　二人は少し考えてから。

先に、テレサが。

「そういえば・・・変と云うより何時もと違った事が・・・一つ」

「何ですか？」

「はい。　その・・去年から、旦那様は太りすぎを考えて、書き物の時のお茶受けは甘さと油を控えた物をお求めでいたのに・・・・」

と、言うと。　夫のエイムズも頷き。

「そうだ・・・そうだな。　確か、メイドのメイラが言いに来ました。　今日のお茶受けは、甘くて旦那様が一番好きな物をと・・」

ウィリアムは、テーブルに手を組み置いて。

「つまりは、油っぽくて甘いあのケーキは、求められて作った訳ですね？」

エイムズが、ガクリと頷いて。

「はい・・・」

と、テレサと見合った。

ウィリアムは、テーブルの上に現場で落ちていたペンを置いた。
琥珀の柄、ペン先の金属を押さえるのは金とダイヤモンドと云う物だ。

「これ・・・現場に落ちていた物なんですが」

二人は、そのペンを見る。

エイムズは、確認するなり。

「旦那様の使っていたペンです・・・間違いないと・・・思います」

だが、テレサは顔色を怪訝に変えて。

「でも・・・変だわ」

ウィリアムは、ペンを手で示して。

「このペンが・・ですか？」

「ええ・・・、一ヶ月くらい前かしら。　このペンは、旦那様のお気に入りだったのに無くなってしまったハズよ・・」

すると、エイムズも思い出し。

「あっ、そうだ。　無くなって騒ぎになったな・・・。　誰かが盗ったんじゃないかと、メイドの子達が疑われたとか・・・言ってたな」

ウィリアムは、再確認するように尋ね返す。

「無くなった？　このペンが・・・ですか？」

夫妻は、しっかりと頷く。

ウィリアムは、モルビットと見合った・・・。

さて・・・。

ウィリアムは、次に。　メイドとして働く三人の娘達の中で、やっと目を覚ましたロゼッタを抜いた二人を呼んだ。

「・・・」

「・・・」

並んで座る二人の女性。　ウィリアムから見て、右の背の低い可愛らしい髪の毛がカールしているのがメイラ。　そして左の、蒼い目のブラウンカラーの髪の女性は、メイラよりも頭一つくらい背が高く、とても寡黙な印象の地味な女性で、名前はジェシー。　メイラは、二十三歳、ジェシーは二十五歳と云うが、逆な印象がする。二人とも、メイドの格好をしていて、下を俯いて黙っていた。

ウィリアムは、二人に向かって最初に聞いたのは・・・。

「お二人とも、チェルナー氏に雇われたのは、借金ですか？」

二人が、ピクリと震えた。　下目使いで、お互いを見る。

ウィリアムは、二人を黙って見ている。

先に、メイラが開きたくない様な口をモゴモゴと開き。

「あ・・わ・・私達は・・・その・・・何も・・・」

ウィリアムは、メイラを見て。

「何もしていない・・・。　でも、結果的に何かをしています」

その言葉に、二人のメイドがパッと顔を上げた。

ウィリアムは、二人の視線が自分に来て。

「このペンなんですが」

と、現場に落ちていたペンを、今度は最初に出す。

「あ・・」

「それは・・」

二人のメイドが、ペンを見て小さく声を上げた。

ウィリアムは、二人の顔が驚きに変わったのを見て。

「このペン、無くなったと・・聞きましたが？」

メイラが先に頷いて。

「コレ・・無くなったんです。　ご主人さまのお気に入りだったのに・・・。　どうして？　昨日まで無かったのに・・・」

ウィリアムは、ペンを見て。

「昨日までは、無かったんですか？　今、此処に在るのに？」

ジェシーが、か細い声を絞り出す様に。

「昨日・・その・・書斎で書き物を・・・していらっしゃったとき。このペンの・無いのを・・・ご主人さまが・・・文句を・・・」

「このペンが無いのを、何か言っていたのですか？」

頷くジェシー。

メイラが、言葉を挟む。

「昨日は、私とジェシーさんが、書斎で相手をしていました。　そのペンが無いと、筆が進まないと・・仰っていました・・・」

ウィリアムは、チラリとモルビットを見てから、

「このペンは、そんなに大切だったのですか・・・。　しかし、別に使っていたペンはどうしたんでしょうか。　一応、引き出しの中のペンを全て持ってきたのですがね」

ウィリアムは、他四本のペンをテーブルの上に並べた。

だが。

「あら・・・・無い」

見て、メイラが言う。

「昨日・・使っていたペンは、この中には・・・無いです」

と、ジェシーも。

ウィリアムは、それを聞いて頷く。

「ナルホド」

そして、ウィリアムは事件の事を尋ねる。

「今日の朝、事件の起こる前。　メイラさん。　貴女、チェルナー氏の要望をシェフのエイムズさんに伝えましたね？　何時もは、油や砂糖を軽減していたチェルナー氏が、その日に限ってあんなに甘く油ッ気の多いケーキを頼んだとか。　理由は、何でしょうかね」

すると、二人はグググっと下を向いた。

ウィリアムは、モルビットやスティール達を見てから。

「正直に話してくれませんか？　疑いが掛かりますよ」

と、言ってから間髪を入れずにズバリ。

「貴女方が、チェルナー氏から受けている事実も解っています。

隠すのは、やめてください」

メイドの二人は、パッとウィリアムに顔を上げた。　悲しそうな、衝撃も混じる悲壮感漂う顔であった。

ポツリ・・・ポツリ・・・と二人が語った事実は、男の皆には耳の痛い話でもある。

チェルナーは、積もり積もった借金のカタに人妻や若い娘をメイドにし、自分の夜の慰み物にしていた。　しかも、書き物をする時は、決まって誰かメイドが日中から肉体をさらして餌食になるのだという。　しかし、メイドに成りたてのロゼッタは、アリネットが身を挺してチェルナーの欲望から守っていたらしい。　いや、かつては、ジェシーやメイラも同じように守られていた。

そして、アリネットは、今までもメイド達がチェルナーの欲望に汚されるのを、極力少なくする為。　夜になると、自らチェルナーの元に赴いていたと云う・・・。　その御蔭で、メイド達が暴力を受ける確立は減った・・・。　アリネットが、影でチェルナーに受けていた暴力は、酷い物だったとか。

さて、春前から此処最近まで忙しかったチェルナーが。　この数日、仕事が落ち着いて暇になった。　そして、今日・・・。　遂にチェルナーが我が物にしようと、書斎詰めの相手にロゼッタに選んだらしい。　アリネットは、まだ仕事を覚えていないと朝に言ったらしいが。　チェルナーが聞かなかった。

本当にこの数日前までは、船で他国に行ったりしていたチェルナーが帰ってきて落ち着くのは、メイドとっては地獄の日々の訪れだというのだ。

今日の朝、チェルナーは汚らしい下世話な笑みを浮かべてメイラを見て言ったらしい。

“今日は、いい汗を掻きそうだ。　ちょっと栄養の在る物が欲しい。　ケーキで頼む。　前に出して貰ってた、甘～いヤツでな”

と。　昨日は、メイラとジェシーを散々に玩び、貪り尽くしたと云うのに・・だ。

思わず、聞いていたスティールが怒りに堪らず声を出そうとしたが。

「・・・」

ウィリアムが、スティールの顔に先んじて見て止めた。

ロイムの鼻水を啜る音が、部屋に響く。

ウィリアムは、漸く事態が解り。

「なるほど・・・ようやく解りました。　犯人が、丸で自分の存在を残すかのように不手際だらけの殺人をやってのけようとしたのか・・・」

メイラは、ウィリアムを見て。

「アナタ・・・犯人が解るの？」

「ま・・・死体を見て、在る物も見つけてしまったからね」

メイラとジェシーは、お互いで見合う。　その顔は、“まさか”と思う顔だった。

ウィリアムは、メイドの二人に。

「犯人は、貴女方ではありません」

と、二人を退室させた。　席を立ち、去っていく二人のメイド・・・。　欲望の獣に突き立てられた爪痕の傷に苦しんでいるようで、言い換えられぬ影が背中に漂う。

さて、メイドが去った部屋。　皆が黙っている。　もう外は真っ暗な夜で、雨が強く降り出していた。

スティールは、何処までも冷静なウィリアムを見て。

「お前、本当に冷静だな・・・スラムって所は、今の話より酷い所なのか？」

ウィリアムは、その質問に答えず。　代わりにモルビットを見て。

「モルビットさん、ロゼッタを呼んで下さい」

腕組みしていたモルビットは、扉に向かった。

モルビットが出て行った後、直ぐにフォレストが。

「お前、本当に犯人解ってるのか？　間違いじゃ済まないぞ」

ウィリアムは、座って前を向いたままに。

「解るも何も。　毒が決め手です。　今回使われた毒は、非常に特徴的でしてね。　本来、使われては絶対にならない毒なんですよ。　その毒を造れるのは、唯・・・一人」

フォレストは、そう言ったウィリアムに言い返せなかった。　目を瞑り、静かに瞑目し出したウィリアムに、声を掛けていいものか解らなくなったのだ。

そして、モルビットに着き添われて、ロゼッタが入って来た。

「・・・」

ヨタヨタした足取りで、黒く長いメイドスカートを引きずりそうな感じで入って来た。

大きな目、可愛らしい鼻、肌色の若々しい肌は瑞々しく、十九歳の年齢の割には大人びた綺麗さと可愛らしさの混じるメイド・・・それがロゼッタだった。　黒い髪を、頭の上の左右にお団子にしているのも、なんとも似合う。　背丈もロイムより高く、体つきはしなやかでスマートながら、出る所は出る。　チェルナーで無くとも、男目を惹きそうだ。

「あ・・・う・・・ウィリアム？」

ロゼッタが、テーブルを通り過ぎた時にウィリアムを確認して言う。

ウィリアムも、笑って。

「やあ、久しぶり。　面倒な再会の仕方だね」

ロゼッタは、フォレストやスティールに脅えた様子で、モルビットに勧められるままに椅子に座り。　そして正面のウィリアムを見る。

「どうして・・・どうしてっ、う・ウィリアムが・・此処に?」

「うん。　今回の殺され方が毒殺だから・・。　ホラ、俺って薬師や医者の助手してて詳しいでしょ?」

ロゼッタは、ぎこちなく頷き理解した。

ウィリアムも、決してモルビットとチェルナーを追っていたとは言わなかった。

ロゼッタは、ウィリアムに縋り付くように言う。

「ウィリアムっ、犯人は・・私じゃない・・私じゃないっ!!」

「うん。　解ってる」

ロゼッタは、ウィリアムがすんなり言うのに口が止まった。

ウィリアムは、直ぐに続けて。

「ロゼッタに毒は作れない。　ロゼッタにチェルナー氏を殺した手口は思いつかない。　ロゼッタが犯人なら、余計な事はしない・・・。　犯人は、一時だけ犯人を別の人物と思わせたいだけ。　多分、まだ心残りが在るんでしょう」

「ウィリアム・・・犯人が・・・解るの?」

「ああ、島で色々仕事してたから、知らなくていい事情まで知ってる・・・。　だから、解る。　でも、ロゼッタにも協力はして貰わないと」

「わわ・・私の？　何を・・すればいいの？」

ウィリアムは、また現場に落ちていたペンを見せた。

「コレ」

「あっ」

ロゼッタは、ペンを見るなりに声を上げて、

「無くなった・・・ペンだわ・・」

と、ウィリアムを見て。

「どうして、これが・・・」

ウィリアムは、驚くロゼッタの顔を見て。

「このペン、チェルナー氏が今日使っていたペンじゃ無いんだよね？」

ロゼッタは、もう何がなんだか解らない顔で頷く。

「うん・・・」

「じゃ、死んだ時ってどうだった？」

「・・・・」

ロゼッタは、人が死ぬ所は初めて見たからか、恐怖が沸きあがり黙った。

ウィリアムは、静かになった。

フォレストが、じれったくなって動こうとしたとき。

「フォレスト」

モルビットの声が飛ぶ。

フォレストは、グッと我慢する顔になって止まる。

雨の窓を打つ音が流れる。　少し黙っていたロゼッタは、ポツリ・・ポツリと下を向きながら話す。

「今日、初めて・・・一人で書斎の付き詰めになったの・・・。ずっと・・・ご主人さまは、仕事や商談で忙しかったから・・・この日が来るのが・・・怖かった。　朝・・・ご主人さまに指名されて、書き物を始める頃に呼び出されました。　先に・・・アリネットさんと、ペトルさんが呼ばれていたようで。　アリネットさんが・・・廊下で・・私を抱きしめて・・・くれました。　“大丈夫・・・大丈夫よ・・”って。　覚悟して、書斎に入る時に・・ペトルさんと・・・入れ違いで・・・中に」

モルビットと、フォレストが見合う。　喋らせる必要が無いと確認

し合ったのだろう。

ウィリアムは、静かにロゼッタの話に頷く。

スティールは、ウィリアムの横顔を見て。　その、ロゼッタが躊躇ったり、苦しんで黙ったりしながら話す事に素直に待てるウィリアムに、男としての心広さを見る。

（待てるんだなぁ・・・俺じゃ無理だ。　・・・只者じゃね～だろ？　この若さで・・・）

少し落ち着いて来たのか、ロゼッタの話す速度が上がり続ける。

「最初、ずっとご主人さまは書類を書いていました。　このペンじゃなくて、柄が黒い物です。　新しいペンなので・・筆粉を指に着けて・・。　この無くなった筈のペンでは、ご主人さまは筆粉を使わないで、指輪も何もかも外すと聞いていたのですが・・。　ご主人さまは、筆粉を使って書いていました」

モルビットは、雨の外を窓から見ていて。

（そうか・・・そうゆう事か・・・）

と、殺害方法を理解した。

ウィリアムは、ロゼッタに穏やかな声で。

「休憩したの？」

と、問えば。

「・・・うん・・」

ロゼッタは、震えた声で頷く。

「ゆっくりでいい、。　その時の事、出来るだけ正確に教えて」

ウィリアムの声は、穏やかで・・・静かで・・・染み渡る。

頷くロゼッタは、フォレストをチラリと見るが・・・。

「・・・」

フォレストは、黙って横を向いていた。

ロゼッタが、ゆっくりと思い出しながら・・語り出す。

「休憩されて、筆を置かれて・・・。　私に・・・ご主人さまは・・お茶の用意を・・・。　私は、ご主人さまが休憩に熱すぎるお湯を嫌うと・・、アリネットさんから聞いていたので。　予め用意しておいたお湯を・・・使って紅茶を・・・。　料理長のエイムズさんが、時間の頃合いで先に持ってきてくれたケーキを・・・切って出したの。　ご主人さまは、私が近づいて用意する様をずっと・・・見ていたわ」

ウィリアムは、話を聞いて頷く。

「チェルナー氏が書き物の手を休めて、休憩を言い渡すのは、メイドの女性の人に蝕指を伸ばす時・・・なんだよね？」

ウィリアムは、ゆっくりと・・・ハッキリと聞いた。

ロゼッタは、震える顔を頷かせる。

「ケーキには・・・フォークやスプーンを用意して置いたのに。ご主人さまは・・・素手で掴んで食べ始めたわ。　・・・アリネットさんが・・・言ってたの。　ご主人さまは、北の大陸の出身で、ケーキは素手で食べるって・・・」

その時、スティールはピンと来る。

（冒険者の時のクセだな・・・）

冒険で旅の途中は、殆どが素手の食事になる。　フォークやナイフを使いもするが、洗う面倒を考えると。　大抵の者が素手になる。

ケーキの中でも、チェルナーが食べていたロールケーキは、冒険者達なら素手で取り分けて食べる。　チェルナーが、元は長く冒険者をやっていたとスティールは踏んだ。　しかも・・・食った後は、ロゼッタを汚す気だったのだろう。　ウィリアムから聞くチェルナーと云う男の性格からして、その辺には大雑把なのだったかもしれない。

ウィリアムは、それを口で言う。

「そうか。　多分、チェルナー氏は元々が冒険者だからね。　一々匙を汚す事が面倒なんだろう」

モルビットも頷いて。

「だな。　役人の中でも、元々が冒険者出の者にはそのクセの者は

多い」

ロゼッタは、合点がいったらしい。　頷いて、話を続ける。

「で・・ケーキを食べながら・・・私に言ったわ・・」

“ロゼッタ、今日の相手はお前だ。　今まで忙しくて構えなかったがな。　これから毎日喰ってやろう。　まだ、男を知らないお前の乱れる様が・・・待ち遠しいなぁ～。　さ、服を脱げ。　裸になって、机の上に座れ”

「って・・・」

ロゼッタが、恥ずかしさと拒絶感・・・そして嘆きを思い出して・・震えていた。

「そうか・・」

だが、ロゼッタはウィリアムに食いつくように身を前に乗り出して。

「でもっ！！　その時にいきなり苦しみ出したのっ！！　ケーキを食べ終えて・・・私に言い終えた直後に・・・私は何もしてないっ！！！」

ウィリアムは、フォレストとモルビットの視線が自分に向いた時、意味深に二人の目を見てから。

「ロゼッタ。　チェルナー氏が苦しみ出す直前の行動は？　チェルナー氏は、ケーキを食べ終えた後に何をしてた？」

ロゼッタは、怖がるように席に身体を戻して。

「指・を・・舐めていたわ・・・。　私の・・身体を見ながら・・・ケーキの油・・・筆粉と混じって固まっていたから・・・ドロドロしてたから、舌で・・舐めてたわ」

フォレスト・スティール・ロイムの三人が、証言したロゼッタを見た。

モルビットは、唇を噛み締めて窓の外の雨に目を向ける。

「・・・・・」

ウィリアムが、黙った。

ロゼッタは、周りの男性達が自分を見たり、黙ったりと、理解が出来ない様子に成る事が解らない。

「私じゃない・・・私は何も・・・」

フォレストは、脅える目で自分や周りを見るロゼッタに向かって。

「・・・犯人は・・・、お前じゃない」

ロゼッタの瞳が、フォレストの高みにある瞳と合って動かせなくなった・・・・。

どのくらい、沈黙が流れたか。　ウィリアムは、静かに瞑目したままに。

「ロゼッタ・・・」

ロゼッタの顔が、ウィリアムに向く。

「え？」

「チェルナー氏の身の回りの世話は、全てアリネットさんかい？使う物の用意の全ては？」

「えっ？　あ・ええ・・・そう。　だって、私達はこの家から出て行ってはいけない契約だもの・・・。　アリネットさんが・・・買ってきて欲しい物を・・・ペトルさんに・・・・」

「そう・・・解った。　ありがとう」

ウィリアムは、ロゼッタを退室させた。

ーーー

ウィリアムの目の前。　テーブルを挟んだ椅子に、オドオドした様子で、ヒョロっとした少し背の高い男性が座っている。　パッと見た印象で、一目で中年に差し掛かったと云った感じ。　周りのモルビットやフォレストに脅えつつ、やや崩れながらも七：三に分けた赤い髪、黒いネクタイ、白いYシャツ、ベストに、フォーマルな黒いズボンを穿いたカマキリの様なギョロ目の男性。　この男が、用人のペトルであった。

ウィリアムは、もうペンは出さなかった。　聞くことはズバリ。

「ペトルさん。　貴方は、時折チェルナー氏と二人きりでお話されるようですが。　内容は、一体なんですか？」

いきなりだった。

モルビットも、フォレストやスティールですら聞く順序が違うと思った。

「え〝っ？！！　・・・どどど・・・どうゆう事ですか？　大した・・用では・・ありませんが・・・」

うろたえるペトルは、一気に警戒した様子になる。

だが、ウィリアムの手中にもうペトルは堕ちていたのだった。　ウィリアムは、冷静な口調は変えないままに。

「大した話では無い訳ないでしょう？　ペトルさん。　貴方とチェルナー氏は、人払いまでして話をしていると云う周りの証言があります。　答えて貰いましょうか」

慌てるペトルは、興奮し出して。

「事件に関係無いじゃないかっ。　だ・第一っ、何でお前なんかに質問されるんだっ?!」

「いえ、事件の経緯を知る一環で質問しています。　殺されたチェルナー氏には、色々と別件の事件の容疑がありましてね。　今回は、その全てに関連させて捜査をしています。　モルビットさんと自分は、チェルナー氏の裏の顔について知っているのでね。　ペトルさんには、是非にご協力を願いたい」

モルビットの顔が一気に引き締まり。　目を瞑った。

ペトルは、もう慌てふためいて。

「わっ私はっ、主人を殺し・」

と、云うのを、突然にモルビットの声が遮り。

「吐けぇっ!!!!」

と、怒鳴った。

「え?」

「わっ」

スティールも、ロイムも驚いた。

フォレストも、部屋を震わすかのようなモルビットの声に驚いてた

じろいだ程だ。

ウィリアムの目が、スッとやや細まって。　ペトルを凝視する。

（な・・何だ？　コイツ・・・マジになったのか？）

スティールは、ウィリアムから殺気じみた冷たい気配を感じる。

メイドを取り調べていたウィリアムでは、無い。

ウィリアムは、ペトルに身体を少し近づけると。

「去年、冬。　とある酒場の倉庫で、ある人物と会ってましたね。

冒険者風体の中年の剣士です。　店は、歓楽街にある大型の飲み屋の“海の式場”と呼ばれている場所です」

ペトルは、俄に震えて目を開き、緊張からか額に汗を掻き始めて・・。

「お・・俺は・・・何も・・・・あっ・・会って無いっ！！！」

と、否定を。

ウィリアムは、“ふざけるな”とばかりに首を左右に振る。

「言い訳は、無駄です」

「俺はあっ！！！」

と、ペトルが大声を上げた時。

“バン！！！！”

モルビットが近づいて、テーブルを叩いた。

ペトルが言葉を飲み込んで、テーブルの脇に立ち自分を睨むモルビットを見る。

モルビットは、今までの落ち着いた雰囲気を捨て。　怒りの形相を浮かべて、押し殺した声色でペトルに近づいて言う。

「言い訳は要らん。　その様子は、俺とウィリアムが見ていたんだからな」

ペトルの顔の血色が、一気に蒼褪めた・・・。

ウィリアムは、ペトルにあくまでも言葉遣い冷静に。

「あの時、貴方を捕まえても良かったんですがね。　下手をすると、貴方をチェルナー氏が“トカゲの尻尾”にして切りそうなので、泳がせたんです。　会っていた男の名前は解りませんが。　何度も手配の似顔絵が配られた人物ですから・・・言い訳は利きませんよ。　チェルナー氏が死にましたし・・・、生きて居れると思って答えて頂けませんか？　さもないと・・・拷問が待ちますよ」

ペトルは、話すウィリアムから、拷問”の言葉が出て、パッとモルビットを見た。

「・・・・」

険しいモルビットの顔は、警察員の怖い一面の顔に変わっていた。

この世界では、悪人には取り調べの最中に拷問に近い捜査も行われている。　大陸では、禁止されている所も多いが。　島国のコンコース島では、犯罪の蔓延を防ぐ一環から古い風習も残るのだ。

ウィリアムは、やや声のト～ンを下げて言う。

「チェルナー氏に掛けられた容疑は・・・十では下りません。　貴方が喋らないと言う事は、つまりは貴方もその犯罪に加担して、お零れに預かっていた共犯・・・と云う事ですか？」

ペトルは、大慌てで首を左右に振って。

「違うっ！！　わっ・・私も脅されていたんだっ！！！！　主人から・・・ポ・ポポ・・ポールへの連絡係をっ・おお・押し付けられたんだっ！！！　断ればっ・・・悪事を知らされたから家族を殺されるっ！　ほ・・ホントだっ！！！　喋るっ！！！　全部喋るっ！！！！」

ペトルは、モルビットの腕にしがみ付く。

すると、モルビットはペトルを睨み。

「ペトル・・・お前には、おいおい全部の罪を償って貰うぞ。　俺と・・・彼女の宝を奪った共犯なんだからなぁっ！！」

と、その腕をモルビットは振り払った。

ペトルは、モルビットを見て戦慄の湧き上がる顔で。

「あっ!!　・・やっぱり・・・そうだったのか・・・」

モルビットの顔は、もはや怒る顔と云うか・・・憎しみめいた顔だった。

スティールもロイムもそうだが。　フォレストも、モルビットの怒りの様子の意味が解らなかったが。　唯一つ、モルビットとウィリアムの様子からして、事件の展開は広がりを見せているようだ。

ウィリアムは、モルビットと目を合わせ。

「一部の人間を、警察部署に連れて行きましょう。　メイドの三人、エイムズ・テレサ夫妻は、口止めだけして家に帰していいと思います。　後日、事情聴取すればいいと」

モルビットは、ウィリアムを怪訝な顔で見る。

「ウィリアム・・・事件を明らかにしないでか?」

「ええ・・・物語のような場面は要りませんよ。　そんな事をしたら、犯人を追い込み兼ねない。　モルビットさん、犯人は・・・いえ。　アリネットさんは、ペトルさんも殺す気なんですよ。　思い早まってチェルナー氏を殺してしまったから、ペトルさんを殺して、自分も自殺する気・・・でしょうね。　もうアリネットさんの心に、希望が無いのですから・・・」

二人の会話に、ペトルは慌てて。

「どどど・・どうゆう事だっ?!!!　アリネットは・・・まだ知らない筈だろっ?!!!!」

と、話す二人を見た。

また、逆にウィリアムとモルビットも、ペトルがある事についての事情を知っていたような発言に、ジロリとペトルを睨む。

蚊帳の外であるスティール・ロイム・フォレストは、全く理解が行かなかった。

ウィリアムは、ペトルを無視してモルビットに。

「いいですか。　これから、アリネットさんを個室に連れて行って、裸にしてください」

「なッ！！！」

いきなりの話に、フォレストが声を上げる。

スティールは、ウィリアムを鋭く見て。

ロイムは、唖然と口を空けた。

だが、モルビットは・・。

「まだ・・・毒が有るかも知れない・・・からか？」

と。

頷くウィリアムは、

「ええ・・。　死なす訳には・・・行きませんから・・・」

ウィリアムの頭の中は、一体何を考えているのだろうか・・・。

ーーー

アリネットが、名前を呼ぶ。

だが、モルビットは険しい顔で。

「事件の重要参考人の全員を、警察部署に連れて行く。　全員、毒を所持している疑いがあるから、服を着替えて貰う。　俺が、君の服を脱がす。　裸になったら、ベットの上に置いた服を着てくれ」

すると、アリネットの顔が少しだけ横に向いて。

「そう・・・犯人・・・解ったのね？」

と、アリネットが動いた・・・。

モルビットが、アリネットに飛びついた。

「はな・・してえ・・・」

アリネットが、必死の顔で礼服の胸元に入れた右手を振るわせる。

アリネットの腕を抱きすくめて押さえるモルビットも真剣な顔で、

「バカな真似は止めろっ。　もう・・・もう全てが解ったっ！！！
ジョルジュの事も・・・君の身の上も・・・」

アリネットの顔が、モルビットを見て止まった・・・。

「あ・・・あの子・・？　モ・・モル・・・モルビ・・・ット・・・
」

何かを必死で我慢する顔のモルビットが・・・。

「アリネット・・ま・任せてくれないか・・・。　俺も君も・・・
何かが狂ってしまって・・・此処まで来たっ。　終わらせよう・・・
この三十年の苦しみを・・・。　だから、だから・・・俺とウィリ
アムに・・任せてくれないか・・・」

アリネットの目から、ジワリと涙が流れた。

モルビットは、ダラリと力の抜けたアリネットの右手を胸元から引
き抜いて、その手の中の小さな小指と似た大きさのガラスの小瓶を
もぎ取ると・・。

「アリネット・・・死なないでくれ・・・頼むっ」

と、アリネットを抱きしめる。

「ああ・・・モ・モルビットっ」

アリナットが涙を流してその場に崩れる。

一緒に崩れたモルビットは、アリネットを抱きしめて。

「もう・・・離さない。　誰にも・・・渡さない・・・」

と、呟いた。

この二人・・・一体。

雨音が、部屋の一角にある小窓から流れ込む。　泣き啜るアリネットと、アリネットを恋人にように抱きしめるモルビットは、ベット脇で蹲っていた。

ｓｅｃｏｎｄ８、事情の中に見える疑問と真実（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

たまに、聞かれますが＾＾；

ウィリアム編のこの１章は、“推理”では無く。　あくまで、“探偵”の小説として書いているつもりです＾＾；

推理させる腕が無いので、逆の形をとって描いてみました＾＾；

さて、次の章はポリアと、Ｋの章になるのですが・・・＾＾；

ポリアの話が、以外に固まりきらないので苦戦している最中なのです＾＾；

では、次話もお付き合い頂けたら幸いです＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ９、幕は降ろされて、悲劇の復讐者は縛られる。

９、幕は降ろされて、悲劇の復讐者は縛られる。　綺麗な幕引きを望まない探偵は、何を知るのだろう・・・。　そして、全ては明かされる。

「で？　ウチのリーダーは、そのまま役所に行っちまった訳か？」

困惑した顔でウィリアムの行き先を聞いたのは、オロスの家で夕食まで馳走に成っていたアクトルである。　やっと夜遅くに、スティールとロイムが二人で馬車で送られて来たと思ったら。　肝心のリーダー、ウィリアムが居ない。　話を聞いて見たら。　役人達と、アリネットとペトルだけが取り調べの為に、遺体と証拠と一緒に警察部署と呼ばれる石造りの神殿に連れて行かれたと云うのだ。

応接室にて、ソファーに集まって座る三人の中、スティールは難しい顔して唸る。

「う～ん。　半分解って、半分解らねぇ～。　モヤモヤしっ放しの状態さ」

だが、ロイムは半べそ顔で、紅茶を啜り。

「人の可哀想な話なんて知りたくないよ・・・。　聞かなくて正解だよ・・・」

と、鼻水を啜る。

アクトルは、話が見えないままだった。

「んで？」

と、言うアクトルに、スティールは間抜けにも。

「んぁ？　何が？」

「リーダーは、何時頃にお帰りだ？　金は手に入ったし、そろそろ島から出る準備しないと」

スティールは、アクトルが云わんとする意味が解り。

「ああ、それか。　数日は、無理みたい」

アクトルは、困った顔になり。

「あ？　なんで？」

「ウィリアムは、まだ遣り残しが有るってさ。　それに、これから数日は雨で、海の方は荒れるから、無理に航海に出る事も無いと。　正直、俺は真相を知りたいから、それでいいと思ってるが」

アクトルは、奥でキャリーがオロス氏とこっちを見ているのに、気まずい雰囲気を感じた。

（あぁ・・・、なんとしても早く島から出たい）

其処へ、スティールが。

「んで？　アーク」

「ん？」

「美女との“おでいと”は・・・・どうでした？」

デートを、変に言うスティールに、アクトルは更に困惑した顔になり。　コソコソ話でロイムも含めて前屈みになって。

（それがなぁ～、変な雰囲気なんだ・・・。　オロスさんの家族全員が、俺に良くしてくれる・・。　なんか・・・怖いぐらいに・・・・）

スティールは、静かに奥の円の部屋で紅茶を啜るクリスフィをチラッと見てから。

（アーク・・・マジで脈が有るんじゃ～ないか？）

アクトルは、信じられない顔で。

（無いだろうぉ～・・・・俺の顔で。　多分は武器が珍しいだけだと思うんだが・・・、何でだ？　ウィリアムに聞きたかったんだが）

スティールは、指でクリスフィを指して。

（今夜、泊まっちまえよ。　カマ掛けてみろよ・・・駄目元でさ）

（バっ・バカ言うなっ！！　失礼だろうがっ！！！　・・・お・お前と一緒にするな・・・）

アクトルは、クリスフィの顔を見れないままの姿で、スティールにそう言った。

しかしスティールは、どう見てもクリスフィはアクトルに好意が有ると踏むので、晩生の義兄弟にむず痒い思いがした。

紅茶を飲んで、退散しようとと思った三人だが・・・。

いざ、その話をオロスとすると。

「いやいや、いいではないか。　二・三日、泊まって行ったらいい。どうせ、ウィリアムも直ぐに旅立てないだろう。　明日から雨も続くしね。　少し、話し相手に居てもらいたい」

と、言われる。　しかも、オロスもキャリーも、アクトルを見て話す。

スティールは、直感的に。

（こりゃあ～完璧だぁぁぁっ！。　ウィリアムの話からしても、クリスフィお目当ての相手はアークだ・・・）

と、感づいた。

スティールは、キャリーと話を合わせて、泊まることに決めてしまった。　アクトルの困った苦々しい顔は、スティールには面白い物である。　ロイムは、呆れてケーキばかりを摘んでいた。

ーーー

「・・・・」

モルビットと揉み合った後のままの姿で、結い上げた髪は崩れて、放心状態のアリネットはボンヤリとした生気の無い姿である。

モルビットは、アリネットの服を脱がした。　直ぐに事件当時から紛失したはずの買ったばかりのペンも、服の内側にある腰の所に差し込んであった。　チェルナーの殺害も、アリネットは認めた。だから、こうして逮捕された訳だ。

そして、牢屋には・・・モルビットも入った。　そして、フォレストが鍵を掛けた。　二人の入った房は、個別独房で。　檻が一つ一つ個室の中に設けられた牢屋だ。　主に、女性や訳在りに人物を入れる特別の牢屋。

「？」

アリネットは、何故モルビットが入っているのか解らなかった。

簡素なベットに座るアリネットは、石の床に座るモルビットの背中を見る。　頭の髪は白くなり、随分と苦労が滲む雰囲気が漂う背中。

「モルビット・・・」

アリネットは、部屋の四隅に灯されたランプの灯りの中で、モルビットの名前を呼んだ。

すると、モルビットは振り向かずに。

「アリネット、まだ死なないでくれ・・・。　どうしてもと云うのなら・・・俺も連れて行ってくれ・・・」

アリネットは、身体を震わせて涙を流す。

「ゴメ・・・ごめんなさい・・・三十年前のあの時・・・私が・・・」

搾り出す様に謝るアリネットに、モルビットは静かに。

「もういい。　全て終わった事だ。　俺の身の上を思った君の行動だもの・・・。　今さっき、辞表を出してきた」

「えっ？」

アリネットは、赤い涙目をモルビットに向けた。

モルビットが警察部の幹部になったのは、十五年以上前の事。　都市でも評判の人情役人であり。“慈悲のモルビット”と呼ばれるほどに人の心を理解した役人と、都市の人に云われて信頼の厚い男だった。　その噂は、アリネットも知っていた。

モルビットは、俯き。

「全ては、チェルナーを逮捕する為に・・・。　だが、もう奴は死んだ。　俺も・・・疲れた・・・失う物ばかり・・・疲れたよ」

アリネットは、モルビットの背中にかつての愛おしい男の在りのままの姿を見た。

そう、この二人は、若かれし頃に恋人同士だった。

アリネットが立ち上がった。　そして、モルビットの背後に寄り、床に座ると彼の背中に寄り添った。

「モルビット・・・愛してる・・・。　どうしても・・・・忘れられなかった・・・」

モルビットは、眼帯とは逆の瞳を閉じた。

ーーー

ウィリアムは、フォレストを鋭く見た。

「本当に、解決する気・・・あります？」

フォレストは、真剣な真顔で頷き。

「当たり前だ。　モルビット様が引退だなんて・・・俺には信じられない。　この事件の真相が何か、知りたいんだ」

クレマソンは、腰に手を当てて立ち。　微笑んだ。

「ほっ、フォレストがそんなこと言うか。　コイツは面白いわぇ」

ウィリアムは、笑わずに。

「実は、まだ最大の問題が残っています」

と、廊下に顔を向けて言う。

フォレストは、漲るやる気を声に含ませ。

「なんだ？」

「はい。　チェルナーの屋敷で見つけた書類には、明後日の夕方に取引があると書かれていました。　恐らく、密売貿易の事・・・手下のあの男が来るはず」

フォレストは、解せない顔で。

「“あの男”？　どの男だ？」

クレマソンが呆れて、

「フォレスト、何を考えて居るんじゃ」

「いや・・・真剣に・・・・・」

「多分は、ウィリアムとモルビットが見た、冬にペトルと会っていたヤツじゃろう」

「あっ！！」

フォレストは、やっと話が繋がって理解が行く。

ウィリアムは、フォレストを詰る事も無く。

「いいですか。　あの男がチェルナーの手先で、密売貿易の現場担当の実動犯です。　何度も役人に見つかっても、取り押さえようとした役人の人々を斬り殺して逃走をしたグループの頭でしょう。最近まで、チェルナーが島から離れて活動していたのには、悪徳商売の仕事の為でしょうから。　何らかの取引があるのかも知れません」

フォレストは、いよいよと言葉に力を入れて。

「それは・・・。　チェルナーが死んだ今、一網打尽に出来る最後の機会かもしれん」

ウィリアムは、フォレストを睨むくらいの目で見て。

「しなければなりません。　奴らを逃せば、後々でどれだけの危険と、逆恨みを残すか。　此処で、全てを終わりにしなければ。　チェルナーの死亡の噂は、数日で街に広がりましょう。　どうにかして、捕まえなければっ」

頷くフォレスト。

クレマソンは、ウィリアムを見て。

「して、方法は？」

ウィリアムは、切れる様な瞳で二人を見ると・・。

「知っている人物の事情聴取が先でしょう。　必要とあらば、囮に使ってでも・・・ね」

二人は、誰の事を言っているかは解った。

フォレストは、急に困った顔になり。

「ウィリアム。　意味は解るが、あの男は脅された被害者だろう？　囮にまで使うのか？」

囮は、危ないやり方なのだ。　いざとなれば、囮が死ぬ事もある。　一般的に、囮はしないのが方針だ。

しかし、ウィリアムは平気に頷いた。

「ええ、当たり前です。　あの男が、有る意味ではモルビットさんとアリネットさんを不幸に落とし込んだ張本人ですからね。　自分

の・・・自分達の欲望の為に」

フォレストと、クレマソンは意味が解らずにお互いで見合った。

そして、もう夜中だと云うのに・・・・。

「此処だ、入れ」

フォレストに連れられて、ペトルが連れて来られた。　神殿の二階の右隅にある、取調べ室。　白い壁に囲まれた部屋だ。　狭い部屋の中央に、丸いテーブルが一つ。　背もたれの無い木の丸椅子が幾つか部屋の片隅に置かれているだけの殺風景な場所である。

時間が時間なだけに、眠気と疲労から憔悴した顔が脅えているペトル。　部屋に入ったペトルは、静かに瞑目してテーブルを前にして座るウィリアムの背中を見た。　緊張して生唾を飲んだ音が、部屋に小さく響いた程。

フォレストとクレマソンが、ペトルの後から部屋に入り。　クレマソンは、ウィリアムの左後方に椅子を置いて座り。　フォレストは、ウィリアムと対峙させるように、椅子を置いては。

「座れ」

と、ペトルを座らせて。　自分は椅子を持って出入り口の前にドッカリと座った。

用意が整い、ウィリアムは瞳を開いた。

「・・・・」

ペトルは警戒心を全身に表し、脅えて疑る目を回りに向けた。

ウィリアムは、静かに尋問を始める。

「ペトルさん。　チェルナー氏の館の二階。　書斎の絵の下に隠して在った書類の事は、ご存知ですよね？」

「えええっ？！！！！」

ペトルは、いきなりの事に度胆を抜かれた思いがして、思わずに声を上げた。　あの場所は、誰にも見つかる筈が無いと思っていたのだから。　チェルナーが、絶対の自信を持っていた隠し場所なのだ。

ウィリアムは、口元の片方を上げて。

「驚かれる事も無いでしょう？　自分の仲間に魔法遣いがいましてね。　あの隠し場所を見つけた訳ですが・・・。　さて、あの書類には貴方のお名前の記名も在りましたし、“ポール”と呼ばれるあの男の名前もありました」

ペトルは、もうガタガタと震えて。

「そそそ・・それ・・で？」

「ええ。　明後日、何か取引が在るそうですねぇ？。　明記して在りましたよ。　何でも、人一人と、六万シフォンを渡す取引とか・・・。　随分と大金ですが・・・一体何処で、取引をなさるんですか？」

ペトルは、ブルブルと首を左右に振り。

「わっ・わたしッ！！　・・・・そこまでは・・・知りません・・」

動揺したペトルの顔を見て、ウィリアムはペトルの背後のフォレストを見る。

「・・・？」

フォレストは、何ゆえに見られたか解らなかったが・・・。

ウィリアムは、突然に話題を・・・変える。

「解りました。　では、二十五年ほど前のお話・・・いたしましょうか？」

クレマソンも、フォレストも、いきなりの質問の変更に少し身を動かして驚いた。

ペトルですら、困惑と戦慄の混同する顔が歪み。

「そ・そんな・・・昔の事・・・」

と、言うのだが・・・。

「二十五年前、アリネットさんと、ご主人のウィアーさんの一人娘であるジョルジョが行方不明になりました。　覚えて無いとは・・・言わせませんよ」

と、ウィリアムが言うと。

「はぁっ・・・」

と、ペトルは息を呑み、益々声を震わせて。

「どどど・・どうして・・・その・・事を・おおお・・」

ウィリアムは、ズボンのポケットから茶色い粗紙を取り出して、広げると・・・。

「モルビットさんから教えて貰って、秘かに捜査を手伝っていたものでね。　色々と知ってますよ。　アリネットさんと結婚していたご主人のウィアーさんは、繁華街の一等地付近で飲食店をやっていました。　しかし、今ではその場所は、貴方の弟さんがレストランをやっていますねぇ。　しかも、大して美味しくもないのに随分と高い食材をお使いとか・・・。　仕入れ先は、チェルナー氏が営む貿易店からと調べがついてます。　これが、知らないで済まされますか？」

ペトルは、荒い呼吸となり目を全開にしてギョロギョロとさせて、

「しっ知らないっ！！！　私はっな・ななな何も知らないっ！！！！」

と、怒鳴り上げる。

ウィリアムは、冷静に。

「ふむ、そうですか・・・。　しかし、それですと変ですねぇ～・・・」

と、ペトルの目を見つめる。

「何がだあああああッ？！！！」

いよいよペトルが興奮し、激怒しそうな様子に成った。

ウィリアムは、そこに水を打つような言葉を流す。

「チェルナー氏の隠されていた本の最初に、こうありました」

“ペトルの密告で、薔薇の様なアリネットを手に入れる。　ペトルのヤツ、面白い事を襲えてくれたモンだ。　あの美人を、俺の玩具にできるとは、美味しい事だ”

「とね」

ペトルの動きが、ピタリと止まった。

フォレストも、クレマソンも、部屋中央の二人を見る。

ウィリアムは、スッと顔を笑わせて。

「云いましたよ。　自分はモルビットさんと親しいと・・・。　何も知らないと、思っているのですか？　云わないならそれで結構ですが。　お喋りになりませんと、それなりの事・・・しますよ」

ペトルは、顔色を戦慄に染めて涙目になり。　追い詰められている自分を必死に隠しているつもりで。

「な・・何を・・・するつもりだ?」

「自分がモルビットさんから聞いた話を疑惑としてフォレストさんに言ったら・・・貴方は生きている人では最大の被疑者の一人。そこに居るフォレストさんは、非常に気が短いので。　拷問もいとわないでしょう。　痛い目を見てまで・・・隠します?」

ウィリアムは、寧ろその方が面白そうだと云わんばかりの顔で言う。

ペトルは、パッとフォレストを振り返った。

フォレストも、事がモルビットの事で只ならぬ事と感じた。　だから、拳をバキバキと鳴らしては。

「お前・・・何した?　力づくで、吐かせてやろうか?」

と、鬼の形相で言う。

ペトルは、プルプルと左右に顔を振るって。

「言います・・いい・言いますから・・・拷問は止めて下さいっ」

と、顔面蒼白で言った。

その話は、クレマソンも始めて聞く話しであり。　フォレストにとっては、怒りが全身から噴出してペトルを斬って捨てようかと思うに至る話だった。

ペトルの実年齢は、アリネットと同じ。　しかも、アリネットやモルビットと同じ教育を受ける学校に通っていたのだ。　十八歳の時、

ペトルは仕事の事故で父親を失い、学校を卒業してから働きに出た。

それから、数年後の事。

ペトルの弟ペテルは、十四・五で伯父の料理店に修行に出されて、二十の頃に店を持ちたいと野望を持ったと云うのが事の発端だった。

ペトル自身も、賃金の安いレストランのボーイとして、兄弟六人を養う立場に在ったから。　弟が店を持つのには賛成で、あわよくば自分が店のオーナー兼支配人でもと、夢を持った。

だが、腕の無いペトルの弟に、そんな甘い話が転がり込んでくるわけも無い。

そうして、更に一年以上が過ぎた。

ペトルは、当時島に来たばかりで、土地勘の無いチェルナーに引き抜かれて用人として仕え始めた頃。　或る晩にチェルナーへ、弟の店の事で泣きついた。　土地と金の融資を求めたのだ。

すると、チェルナーは顔を悪魔の様に変えてニヤけさせて。

「手助けしてやれん訳でもないが・・・・。　その話に見合うだけの美人をよこせ」

と、ペトルに言った。

ペトルは、直ぐにアリネットを思い出した。

店の客として、アリネットの店に行ったチェルナーは、知的で気品

溢れるアリネットを一瞬で気に入った。

そしてペトルに、その夜の事・・。

「アレなら、話に乗ってもいいぞ」

と、・・・囁いた。

さて。　ペトルは、もう何かにとり憑かれたかのように必死になってアリネットの周りを調べた。　そして、学のある故か、ある事に気付いた。　アリネットの娘のジョルジュは、緑の瞳だ。　蒼でも無い、特別に数が少ない目の色・・。　アリネットの家系も、ウィアーの家系も、島の人種で緑の目は出ない。　だが、モルビットの家は、歴代に渡って当主は奥さんを大陸から娶らせているし、モルビットの母親も、祖母も、緑の目なのだ。

更に調べて行く内に、アリネットの出産は、結婚から僅か四ヶ月足らず。

この世界では、一月の日数が五十五日。　四ヵ月では、赤子は早産で死産になる。　なのに、アリネットは元気な女の子を・・・。

この事をペトルは、チェルナーに伝えると。

「そうか、そいつは面白いぞ・・」

チェルナーは、遂にその悪魔の本領を発揮した。　まず、安い金利でウィアーに金を貸した。　そして、相場を言い訳に、どんどん利子を吊り上げた。　そして、苦しむ頃になって、屋敷に返済の延滞を言う為に来たウィアーに娘の瞳の事を言ったのだ。　そして、こ

う言ったらしい。

“お前の借金・・・只にしてやってもいい。　アリネットと・・・娘を売ってくれ”

それから、ウィアーは性格が変わり。　家庭内で暴力ばかり振るう男になる。

アリネットが、仕事すらもしなくなった夫に悩み、困り果てる。

更に、アリネットの隙を見てウィアーは、こっそりと手引きして娘のジョルジュをペトルに渡した。

娘を失ったアリネットの悲しみは非情なもので、毎日の様に街を彷徨い歩いて探すようになったとか・・・。

そこに、正義顔で手を差し伸べたのが、チェルナー。　裏の力で、娘を探すとアリネットに近寄り・・・館に引き込んで我が物としてしまった。

アリネットも、誘拐したのがチェルナーだと気付いて、奴隷になる事を受け入れた訳だ。

そして、ペトルはアリネットの店の利権をチェルナーから譲り受け。　高価な品物を仕入れて貰う事に成った。　しかし、チェルナーもそんな甘い男では無い。　ペトルの弟に店をやらせる代わりに、店を密輸の隠れ蓑にしてしまう。　禁制の薬物や、盗品を、一旦ペテルの店に流して隠し、ほとぼりを冷ましたりするのに使っていたと。

フォレストが、そこまで聞いていて、遂に我慢が限界に達した。

「貴様あああああっ！！！！！！！！！！！！！　人を陥れて平気だった訳かぁっ！！！！！！　俺がこの場でモルビット様に変わって成敗してやるわあああああっ！！！！！！」

大声を上げて、軍用剣（サーベル）を引き抜いた。

ペトルの慌て様は、瞬時に臨界点を超えた。

「たたた助けてくれえええっ！！！！！」

椅子を転ばせて床に降り、這い蹲ってウィリアムに縋り付く。

「フォレストさん、まだ聞く事在りますよ」

と、ウィリアムは、ズンズンと寄って来たフォレストを見上げる。

「何だとおっ？！！」

ウィリアムは、涙目のペトルを見下げて。

「もう一度聞きます。　ポールと云う方との取引は、何時頃です？」

「あああ明後日にい・・港のそそ倉庫っ・・・夕方前ぇっ・・」

ウィリアムは意味深にフォレストを見上げて頷く。　フォレストは、八つ当たりの勢いでサーベルを仕舞い。

「クソっ！！　悪党達の面体を改める為にも、コイツは殺せぬっ！！！」

と、ペトルを睨みつける。

ウィリアムは、フォレストに。

「フォレストさん、奴らはバラけて街に入り。　集まるのは取引の時のみ。　明後日まで、知る限りの人に緘口令を・・」

フォレストも、これは私的な感情ではいけないと悟ったのか。　鼻息荒くも、落ち着き始めて。

「解った。　気付かれない為にも、目立った動きは明日はしないほうがいいな」

「ハイ。　港の管轄をする海運部署にも通達を出した方がいいと思います」

「解った、向こうに知り合いが居る。　俺が直に行く」

ウィリアムは、クレマソンに。

「クレマソンさん、モルビットさんが辞令を出してしまった以上。　クレマソンさんとフォレストさんで指揮を。　俺も、仲間に連絡取って明後日は、張り込みます」

老体のクレマソンながら、モルビットに起こった身の上に心が苦しむ。

「おいさ。　この老体、大捕り物に掛けてやるわい」

と、勇んで立ち上がる。

ウィリアムは、それからペトルをまた見下して。

「欲望の赴くままに生きた罪は、ご自分で償って頂きますよ」

と。　冷静な容赦の欠片も無い声。

フォレストは、身を屈めてペトルを睨み。

「貴様、極刑も覚悟しろよ。　チェルナーに加担した罪、洗い浚い暴いてやるからなっ！！」

と、ドスの利いた言い回しで言い放つ。

「ううう・・・うあああああ・・・・うわあああああああーーーっ！！！！！」

ペトルが、その場に泣き崩れた。　チェルナーが死に、真実は有耶無耶に葬られると踏んだペトルは・・・・甘かったのだ。

ーーー

次の日、もう島は厚い雨雲に覆われて、雨が降り続いていた。

ウィリアムは、一旦早朝にオロス氏の店に行った。　スティールとロイムを送った馬車が、オロス氏の店で降ろしたと言うからだった。

しかし、まさか泊まっているとは・・・。

店先で、執事ガルオーンに迎えられ、奥の館に向かったウィリアム。

（よほど・・・アクトルさん気に入られたかな）

と、推測した。

ガルオーンに起こされたスティール・アクトル・ロイムは、応接室でウィリアムと合流した。　暖かい紅茶と共に真相を聞くや。　皆が怒ったり、悲しんだり。

ロイムは、泣きながら。

「最低だ・・・クズだ・・・」

と、漏らす。

スティールは、ギリギリと睨む目を雨の中で濡れる中庭の花に向け。

「捕り物に参加、上等じゃないか。　全員、叩き斬ってやる・・・」

と、殺気すら含む声を低く言ったのは、まだ寝ているオロス氏達への配慮からだ。

ウィリアムは、三人に頭を下げた。

「これは、冒険とは関係ありませんが。　自分の親友の事で、大事な一件・・・手を貸してください。　相手は、無頼の冒険者。　一網打尽にするには、役人たちだけでは・・・難しいですから」

アクトルは、大きく頷く。

「頭上げろや。　リーダーのお前の大事は。俺らの大事。　しかも、話が話だ。　是非参加させてくれ」

ウィリアムは、顔を上げると。

「ありがとう・・・みんな」

スティールは、意気込んで。

「そいつ等とっ捕まえれば、全ては終わる」

と・・・。

しかし、ウィリアムは、スッと視線を外して外を見る。　躑躅の一種のピンクの花が、雨に打たれて濡れていた。　冷たい雨で、花が萎れて今にも枯れそうな姿であった。

まだ・・・何かあるのだろうか。

そして、ウィリアムは、この日も休まなかった。　また、一人で警察部署に戻ると。　フォレストに頼んで、アリネットの事情聴取に臨んだ。

取調べ室では無く、モルビットの私室にて。　モルビットとアリネットの二人を呼び。

「こちらにどうぞ」

と、ソファーに二人を座らせた。

上級警察役人のモルビットの部屋は、広い割りに簡素で味気も無い。　窓際の黒い机の上には、ウィリアムが持ち込んだ一輪挿しの花瓶があり。　部屋の中央に置かれた丈の低いティーテーブルの上には、薫り高いラズベリーティーが煎れられ。　ソファーに座る二人を出迎えていた。

モルビットの机には、誰も座らず。　ウィリアムが、二人の前にソファーで対峙するように座る。

クレマソンとフォレストの二人は、ウィリアムの後ろ後方にテーブルと椅子を並べて座った。

一夜明けた中、良く眠れていない様子のアリネットとモルビットは、只管に黙っている。

ウィリアムは、アリネットを見て、まず口を開いた。

「お爺さんから、あの毒の極秘性を聞いて無かったんですか？　使えば、死罪どころか一族処刑の重罪ですよ？」

モルビット・クレマソン・フォレストが、ギョッとした顔に成った。

アリネットは、死人の様に蒼褪めた顔に、涙を流す。

「あの毒・・・もう・・・誰も知らないと・・・思ったのに・・・」

すると、ウィリアムが少し怒った顔になり。

「バカな。　未だに、あの毒を探す殺し屋などの裏家業の捜索が在ると聞きます。　やっと歴史の闇に消えた悪魔をまた呼び起こすなんてっ・・・」

フォレストが、ウィリアムの後ろから。

「そんなに凄い毒なのか？」

ウィリアムは、首だけで肯定して見せた。

「正式名称は、“メイロホトトゲ草”。　昔の別名は“闇送り”」

クレマソンが、俄に驚愕の顔に成った。

「なんとっ！！！　あの“悪魔の毒”とも、“死人造り”とも呼ばれて、大昔に暗殺の為に頻繁に使われた猛毒ではないか・・・。ま・・まさか・・」

モルビットも、驚くべき事態に声を詰まらせて。

「れ・歴史の伝説に載る・・・毒薬か・・・」

ウィリアムは、俯くアリネットを見ながら。

「あの毒は、無味無臭。　体内に入ると、血管の血液を凝固させて心臓を止める。　しかも、喉の粘膜を溶かして血を吐かせる。　特定が難しく、数百年前まで暗殺に使う毒として持て囃され、毒の特産地であるこの島はその密売で莫大な利益を上げたんです」

フォレストは、直ぐに問い返す。

「何で、伝説になったんだ?」

「メイロホトトゲ草は、この島の野原に普通に生える雑草です。その茎や葉を茹でて煮詰めていけば、出来上がる安価で簡単に誰でも作れる毒・・・・。　暗殺が暗殺を呼び、復讐が復讐を呼び、世界での毒の使用が乱用などと云う域を超えて広がりました。　当時、その密売に手を染めていたのが、ノルノーを治める当時の領主。しかし、大陸の一部で端を発した貴族支配から脱却が世界で始まり。　このノルノーもその波に飲まれて、領主は自分で売っていた毒で暗殺されました。　そして、新しい政治を担った領主は、この毒を封印しようと島に緘口令を敷き、重い重罰を課し、もう草は採り尽くしたと宣言したんです」

クレマソンは、長く生きながらに初めて知る歴史の暗部に驚きながら尋ねる。

「じゃ・・・在るのに・・・無いと?」

「ええ。　この事は極僅かの人が知るだけ・・・。　俺も、昔に暗殺者を家業にし、領主が変わってからは薬師に代わって生きてきたという一族の最後の生き残りだったオルレーンさんに聞いたんです。　何でも、この毒に係わる法律は、代々島で裁きの法律を受け継ぐ長官のみが極秘に受け継ぎ。　誰にも言わない口伝のみの黙秘事項

だと・・・。　オルレーンさんは、その毒を特定する役割だったと聞きます」

モルビットは、驚愕の事実にワナワナとアリネットとウィリアムを交互に見回しながら。

「では・・何でアリネットが・・・知ってるんだ?」

ウィリアムは、少し黙った。

まだ降り止まぬ雨が、窓に滴る。

「・・・オルレーンさんの話ですと・・・毒の存在ことなら、古くからの薬師は知っていると・・・。　知っているのは、その昔にその毒を売って生計を立てた裏家業の一族だそうです」

「な・・なんと・・」

モルビットは、驚いてアリネットを見る。

「こりゃ・・・」

クレマソンも、ビックリしてアリネットを見た。

アリネットは、全てを秘かに知っていたのか。　黙って、俯くのみだ。

しかし、ウィリアムがその後に言った言葉は、アリネットすらも驚愕させる事になる。

「そして・・・。　密売が横行していた時代に、その薬師や密売人達を束ねて、領主と結託していた商人の筆頭が・・・モルビットさんの家です・・・」

その場の全員が、ウィリアムを見る。

アリネットは、瞳を大きく見開いて震える声で。

「う・うそっ、・・嘘でしょ？」

フォレストが、立ち上がり。

「嘘だっ！！　モルビット様の家がっ・・そんな血で汚れている訳ないだろうっ？！」

モルビットは、険しい顔つきのまま・・・受け入れ難い様子で。

「ウィリアム・・・本当か？」

ウィリアムは、強く頷く。

「見れば一目瞭然ですがね。　モルビットさんの古い家紋は、天に伸びる一輪の草花と、それを守る天馬・・・。　あの草花が・・・メイロホトトゲ草です・・」

話を聞いたアリネットが、

「あっ」

と、声を出して両手で口を覆った。　体を雷が貫いた様な・・・そ

んな衝撃だった。

モルビットは、険しい顔でアリネットを見る。　毒を作ったなら、植物も解るはずだろうと思い。

「アリネット・・・本当か？」

顔を覆うように手で隠したアリネットは、声を強張らせて。

「確かよ・・・」

と・・。　まさか、毒を巡ってモルビットと自分の家に暗い闇の共通点が在ったとは・・・。　アリネットには衝撃的すぎる。　そして、なんと云う因果の巡り会わせか。

モルビットは、深いため息を吐いた。　そして、ウィリアムを見るなり。

「ウィリアム、お前・・・知ってて黙ってたのか？」

「当たり前ですよ。　毒殺事件が起きなければ、口外するつもりなんて・・・。　闇に葬られた事実ですからね」

「そうか・・・」

モルビットは、ウィリアムに対して済まない気がした。　聞いた事がバカらしい。

フォレストは、ヨナヨナと椅子に座った。　まさか、こんな事実が有ろうとは。

クレマソンは、ウィリアムに。

「して、このアリネットはどうして犯罪に至ったのじゃ？」

ウィリアムは、顔を覆って前のめりに沈んだアリネットを見ながら。

「先にハッキリ言うならば、毒は筆粉に混じっていたんです。　しかし、筆粉をチェルナーは、元の愛用のペンでは使わない。　だから、アリネットさんはペンを盗んだ」

モルビットは、聞き返す。

「だが、解らない事が多い。　盗んだのは一月以上も前。　何故、直ぐに殺さなかったのか。　そして、何故に昨日は実行したのか・・・。　解らぬ」

モルビットは、そのことをアリネットに尋ねられずに昨日を過ごした。　だから、そこは聞いて置きたかった。

「解るか？　ウィリアム？」

「簡単ですよ。　恐らく、一ヶ月前にそうしなければならないに至る動機が出来たんです。　例えば、もう直ぐチェルナーの元から離れなければならないとか。　自分が殺されるとか」

アリネットは、ハッと顔を上げ。　涙ながらに、

「何で・・・解ったの？」

「昨日、チェルナーの隠していた書類にこうありました」

“長く薔薇は置いておけん。　いずれは棘が鋭くなる。　枯れ始めた薔薇は、綺麗なうちに消してしまおうか”

「多分、薔薇はアリネットさんの事でしょう。　その薔薇を長年欲しがった寄生虫が居るともありました。　これは、恐らく密売貿易の実働犯であるポールと云う男ではないかと思います。　何度も、書類には出てくるんですよ」

“寄生虫が、薔薇を欲しがって困る”

「とね。　多分、アリネットさんが長く傍に居る様な生活の中で、何時か自分を欺くとチェルナーは危険を感じ始めていたんですよ。　ロゼッタが来て、代わりが出来た。　自分の悪事を知るアリネットさんが、そろそろ目敏くなり始めたんでは？　書類に書かれた明日の取引に、六万シフォンと共に用意される人一人とは・・・恐らくはアリネットさんではないかと」

アリネットは、深く深くため息を・・・。　瞑目して、観念したように項垂れた。

モルビットは、確かめたくて。

「アリネット、本当か？」

「・・・ええ。　彼の、言うとおりよ。　私、明日に殺されるはずだったの・・・。　悪党連中に差し出される手はずだった・・・」

フォレストが思わずに踏み込むように。

「チェルナーがそう言ったのかっ？」

アリネットは、顔を上げて窓を見る。

「いえ。　でも・・・解るわ。　今まで、私の後に来た女性のメイドの数は五十人以上は居たのよ・・・。　みんな、飽きられて、処分に困ったチェルナーが悪党にくれてしまった・・・。　死ぬまで大勢の悪党達に嬲られて・・・最後は殺される。　港・・・夜の人気の無い通りに捨てられた遺体は、何人も・・・」

と、アリネットは、全てを語ることが汚らわしくて口を噤む。

代わりにモルビットが、悔しそうに。

「何度その遺体を見たか。　惨たらしいまでに、汚されていた・・・。　何度・・・何度チェルナーの斬ったトカゲの尻尾を掴まされたか・・・」

ウィリアムは、アリネットに。

「では、やはり殺す気だったんですね。　ペンを盗んだ時点で」

「・・え・・ええ。　一ヶ月前のある日、呼び出されて言われたの。“新しい主人を見つけておいた”って。　私・・・遂に死ぬんだって・・・悟ったわ。　子供の居場所も解らないまま死ぬくらいなら・・・一思いにあの男を殺してしまおうと・・・。　計画を練って、ペンを盗んだんだけど。　いざ殺そうとしたら、いきなりあの男の仕事がまた忙しくなって・・・。　殺す機会を失ったわ・・。　帰ってきても、直ぐにまた・・・」

ウィリアムは、それで納得が行く。

「なるほど。　そして、いきなり落ち着いたら、ロゼッタを辱めようとしたから・・。　焦って、昨日に実行を・・・」

アリネットは、ジワジワ泣き出した。

「みんな・・・ジョルジュと似た年で・・・。　どの子も汚され・・・捨てられて・・・殺される・・・。　もう・・・もう我慢出来なかったのよっ！！！！」

ウィリアムの脳裏に、昨夜の事が思い出される。　実家に帰されるメイド達は、アリネットの事を母親の様だったと言う・・・。　辱められたメイドも、アリネットが居たから自殺しなかったと・・・。

　モルビットやウィリアムに言って、アリネットの情状酌量を訴えた。

「アリネット・・・済まない」

モルビットが、泣き崩れたアリネットの背中を摩った。

アリネットは、モルビットに泣き付いた。

「なんでっ！！　何で助けてくれなかったのよぉぉぉっ！！！！」

激しく、モルビットの胸に拳をぶつけて、そのうち泣き止まなくなった・・。

モルビットは、ひたすらに謝り続けた。

泣くアリネットの声は、部屋に響き渡る・・・・。

クレマソンも、フォレストも声が出ず。　無力感に獲り憑かれた。

一人の悪人の残した傷は、何人もの人の人生を狂わせていた。

ーーー

アリネットの家は、街では最高の薬師と云われた人物の孫として生まれた。　祖父は、必要以上に金を取らず。　タダで薬を調合する事もある人格者だった。　アリネットもその知識を受け継いで、若くしてその才能の頭角を現していた。　しかし、家は貧しく。　モルビットの家とは月と鼈の差があった。

二人は夢を持って、結婚する気だったらしいが・・・。　モルビットの家では、アリネットとの結婚も大反対、モルビットの家出もとんでもない話だった。

モルビットは、十九歳でアリネットとの夢を叶える為、自分で小さな船を買って交易業をし始めた。　独立し、アリネットと結婚するために・・・。

しかし、その時。　モルビットの父親がアリネットに秘かに会い、卑劣にも脅しを掛けた。　高齢のアリネットの祖父は、病床に着き。　希少で高価な薬が必要だった。　その事に目を付けられて、薬と金を引き換えに、別の人物との見合い結婚を迫られたのだ。

アリネットは、自分以外にもまだ四人の歳の離れた弟妹の事、大切な祖父、そして未来有望なモルビットの為を思って・・・その話を受けてしまった。　そして、生んだ子供がジョルジュである。

ペトルは、アリネットの年齢としては一つ下で、同じ教育館に行かされていたから。　その辺の事を良く知っていた。　何せ、一度はアリネットに好意を抱いて求婚したペトルなのだから・・・。

さて、アリネットの決断に、モルビットは失意の底に落ちて堕落の一途を辿り。　荒れたモルビットに、父親も手を焼いて家から追放

したのは、モルビットが二十三歳の頃。

だが、これはモルビットの作戦でもあった。　もう、アリネットの幸せだけを願う自分に、家も島も未練は無く。　一人気ままに、仕事と酒だけに生きて行こうと決めた決意の果てだった・・・。

しかし、悲劇は起きた。

アリネットが、ペトルの所為でチェルナーの物になった事だ。

実業家に成っていたモルビットが交易を終えて久しぶりに島に戻り、この事を知るや大激怒した。　しかも、チェルナーの噂はいい物は一つも無い。

（おのれチェルナーめっ！！！！、俺がジョルジュを見つけて、アリネットを助ける！！）

と、店を畳んで、役人に成ったのが二十七歳くらい。

モルビットの家柄は、皮肉にもモルビットを短期間で警察役人の下っ端から、捜査指揮権のある上級役人に昇進させた。　モルビットの人柄がまず第一であるが、家柄も無視出来ないものがある。

モルビットは、殺人事件の解決率は常にトップであった。　だが、チェルナーの事に関しては異常な執着がある為に、度々に渡って注意も受けていた。

モルビットは、アリネットとジョルジュを助ける事しか頭に無く。
　部下には慕われるが、上や同僚には敬遠される存在となった。
それ以上の昇進も、付き合いもしないのだから。

そんな時、ウィリアムと出会う。

二人の出会いは、殺人事件を通じてであり。　その後、モルビットは、チェルナーを逮捕するためにウィリアムとコンビを組んで、難事件を解決する事になった。

アリネットとモルビットの出会いも運命であるなら、モルビットとウィリアムの出会いも運命だったのかもしれない。

そして、今・・・。　その全てが一つの終わりに向かっていた。

ーーー

て、終わらせます。　だがら、お二人も生きてください」

ウィリアムは、朧気ながら二人が死ぬ覚悟ではないかと・・・。
感じていた。

アリネットは、ユラユラと死人の様な顔をウィリアムに向けた。

「生きる希望なんて・・・もう・・無いわ。　それに・・・あの毒を・・・使ったのよ。　生きれる訳・・・ないじゃない」

モルビットは、遣る瀬無い思いを顔に満ち溢れさせて。

「ウィリアム・・・二人に・・・してくれ・・・」

ウィリアムは頷く。　席を立ち、アリネットに言う。

「この際です。　俺も、命張りますよ。　でも、もし司法裁判で死刑でなかったら、生きて下さい。　俺が冒険者として大陸に渡り、チェルナーの売ったジョルジュさんを探しますよ。　生死が解らないなら・・・解るまでね」

二人が、ウィリアムを見上げる。

モルビットは、篭る声で押し殺したように言う。

「アリネットが・・・助かる可能性が・・・あるのか？」

ウィリアムは、向かうドアを向いて。

「今はなんとも。　ですが、目の前の知り合いは、愛した女性と子

供を助けるために。　時には眼帯の下の目を悪党に奪われ、時には自分自身をチェルナーの手下に殺させて永久指名手配犯にしようとした・・・」

「え？」

アリネットは、モルビットを見る。

「ウィリアムっ」

モルビットが、声を出すが・・・。

ウィリアムは止めずに。

「だって、そうでしょ？　俺が助けを呼んでくれれば、体中に剣で斬られた身体を引きずって、悪党達に自分を殺させるのと同時に、役人に捕まえさせるために都市内部までおびき寄せて来たモルビットさんは。　助けられた時に、俺に怒鳴った」

“何で俺を助けたああっ！！！！　奴らが先だっ！！！　俺が死ねばっ、チェルナーの屋敷に捜査に入れただろうがあああああっ！！！！！　ウィリアムっ！！　ウィリアム何でぇっ？！！！”

その時、担架の上で血だらけのモルビットが、ウィリアムの胸倉を掴んで絶叫じみた声を上げたのだ。　切り刻まれた腕から力んで飛び散った血飛沫・・・ウィリアムは、モルビットの覚悟を見たのだ。

ウィリアムの話に、モルビットは横を向く。

「モルビット・・・あ・貴方・・・」

アリネットは、知られざるモルビットの命懸けの過去を聞き、心が熱く打ち震える。

ウィリアムは、また歩き出しながら。

「いささか、策があります。　上手く行くかどうかは・・・運次第ですが。　俺は、掛けます。　以上」

そして、ドアを開けたウィリアムは、閉める前に。

「アリネットさん。　モルビットさんの裸・・一見の価値ありますよ。　愛する者に命捨てるって事がどうゆう事か、良く解ります」

と、言ってドアを閉める。

アリネットは、また今度は謝罪の涙を流し始め。

「ゴメン・・・なさい・・・私ばかり・・・ああ・私ばかり・・・」

モルビットは、首を振る。

「君の悲しみに比べたら、身体を斬られる痛みなど・・・」

「モルビット・・・」

部屋は、夕方の中で暗くなってゆく。　絡み合った二人の影は、離れる事は無かった・・・。

ｓｅｃｏｎｄ９、幕は降ろされて、悲劇の復讐者は縛られる。（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編も、そろそろ１章の終わりが近いです＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ１０、ウィリアムとチームの捕り物劇

１０、ウィリアムとチームの捕り物劇

夜。　ウィリアムは、フォレスト・クレマソンと打ち合わせをしていた。

ペトルの話では、悪党達はもう使われていない旧倉庫群に集まって、取引をすると云う。　取引は、ペトル自身が担当で、チェルナーは行かないらしい。　密貿易を手がけるポールと云う男は、抜け目も無ければかなりの残忍極まりない極悪人で。　首謀者のチェルナーですら、人知れぬ場所で会うのを憚る相手とペトルが言う。

しかも、今回は大金の交換で、一旦身を潜める前の最後の取引なだけに、全ての悪党連中総勢二十一名が現れるという。

クレマソンは、海運部・港貿易省からフォレストが持ってきた倉庫群の地図を見て。　警察部の事務室にて唸る。

もう、殆どの役人達が家に帰った後。　三人は、木のデスクが所狭しと並ぶ刑事部オフィス中、フォレストの机を前にして、三人並んでいた。　ウィリアムも含む三人の座る木のデスクの上のランプだけが灯り。　真下の地図を照らしていた。

少し年もあってか、疲れ気味のクレマソンは、地図から目を離して

前を見る。

「昔の旧倉庫の場所っていったら、かなり広い。　どこから集まって来るか解らぬ悪党達に気付かれずに隠れるのは、ちと大変じゃな～」

すると、ウィリアムは。

「いえ、隠れるのは簡単です」

フォレストは、正確に海沿いに並んで、三キロ四方に広がる倉庫群の地図を見て。

「何処にも三十人近い我々が隠れる場所なんて無い・・・と思うが。大体、見張りが居るのだろう？」

ウィリアムは、ペトルが印をつけた大きい倉庫の裏に左指を当てた。

「この倉庫は、海鮮物を仕舞っていた倉庫で、地下倉庫も持ちます。そこなら、広い地下なので見つからないでしょう。　此処に行くのに、隠れ通路もありますし」

「ほ～、なるほど」

感心したフォレストに、ウィリアムは真剣な顔で横向き。

「ただ・・・難点が」

「ん？」

フォレストが聞き返すが、ウィリアムは答えない。

「おい、なんだ？」

フォレストは、いきなり黙るので、何かあるのかと思うと・・・。

ウィリアムは、クレマソンとフォレスト細い目で見て。

「この倉庫は・・・ムチャクチャ臭いんですよ。　しかも・・・首吊りや殺人の事件現場で、幽霊出るとか・・・・噂が・・・」

フォレストは、ムッとして。

「何かと思えば下らない。　潜伏捜査だ。　それくらいの事は、耐えられる」

ウィリアムは、ニコッと笑い。

「そうですか、それは頼もしい。　ならば、明日の早朝には潜伏して下さい。　昼間にフォレストさんの様な目立つ人や、役人がゾロゾロ向かったのでは目立って仕方ありませんので」

フォレストは、雄々しく頷いて。

「任せろ。　捕り物専用の役人を、三十人程集めて隠れる」

クレマソンも、ニコニコして。

「うむ。　ならば、こっちは変装させた役人を五十人ほど街中に紛らせて、徐々に倉庫群を取り囲もう。　悪党共が集まった頃に、一

気に突入出来るように向かう」

ウィリアムは、目的の倉庫手前にも隠れる場所があり。　其処に自分達チームが隠れる事を告げてから。

「いいですか。　相手は、剣の使い手も魔法遣いも居ると言います。逃さない為にも、最大限注意して下さい。　かなりの手練の相手だそうです」

フォレストは、腰のサーベルの柄を叩き。

「俺様の剣で捕らえてやるわ。　見ておれ」

クレマソンは、ウィリアムに仲間の事を聞く。

「ウィリアムのチームも助けてくれるのか？」

「ええ、そのウチ二人は、フォレストさんに負けない腕してます」

フォレストは、やや横目で。

「昨日、事件現場に来ていた男前か？」

「はい。　そうです。　スティールさんは剣士としてはフォレストさんとは互角です。　もう一人の戦士アクトルさんは、かなり強いです」

「ふ～ん、会ってみたいな。　もう一人にも」

フォレストも、スティールの動きを見て、隙の無い動きに感心して

いたのは確か。　だから、気になるのだ。　見ていないもう一人・・・。　アクトルの事を。

クレマソンは、目をパチクリして。

「ほほう。　人数は少ないが、なかなかいい面子が揃ってるチームじゃないか。　事件が片付いたら、別れる前に一杯やりたいわい」

ウィリアムは、笑って頷き。

「それはいいですね～」

と、返した。　明るく呑むのは楽しいし。　島を離れる前の思い出になる。

さて、フォレストは腕組みし。

「しかしなあ・・・。　あのモルビット様の過去が、あんなに波乱に満ちていたとは・・・。　驚きだ・・・。　ウィリアム、聞きたい」

と、真剣な声。

「はい？」

フォｒストは、暗い声で。

「あの殺人犯のアリネットって云う女性・・・だがな。　裁判になったら・・・極刑か？」

クレマソンは、スッと黙って紅茶のカップを手に取る。

ウィリアムは、カップの紅茶を見つめた。

フォレストは、その沈黙に声を聞く。

「そうか・・・そうなんだな・・・。　だから、モルビット様は辞表を・・」

フォレストは、鈍いながらに気付く。

「ウィリアム。　もしかして・・・モルビット様は、死ぬ気・・・か？」

クレマソンは、一つため息を吐き・・・言う。

「ふぅ・・・。　フォレスト、気付くのが遅いわぇ・・・」

フォレストは、ガクンと項垂れる。

「そうか・・・おやっさんもウィリアムも気付いていたのか・・・。それほどに・・・それほどにモルビット様は、あの女性を・・・」

二人は、気位の高い役人の多い中で、大らかで人の事を深く考えるモルビットのような役人が居なくなるのがどれだけ寂しいか・・・。

しかも、クレマソンは長年仕事を共にし、フォレストは軍人上がりの愚直な自分をお払い箱にせずして置いてくれる。　そんなモルビットを失う事など・・・考えたくも無い。

ウィリアムは、ゆっくりと見ずして脇の二人に顔を少し向け。

「可能性は低いですが・・・」

二人が、ウィリアムを見る。

ウィリアムは続けて。

「アリネットさんを殺さずに済む方法があります」

・・・。

二人は、ウィリアムの話に耳を傾けた。

ーーー

部屋の四方の壁には、もう朽ちかけた木の棚があり。　古びた笊や切れた網袋などが乗っている。

とにかくカビ臭く。　奥の天井からは、縄がぶら下がっていた。

「あれか・・・」

フォレストは、事実を知っているだけに、縄を見て背筋が寒い。

（しかしながら・・・世界は広いなあ～）

フォレストは、静かに息を潜めつつ。　早朝に会ったアクトルを思い出す。　大きな身体に、柄の長い見事な戦斧を担ぎ、堂々と歩く様に一手試合をしたくなった。

だが、それ以上に凄いのが・・・ウィリアムである。　港の海岸西方に広がる倉庫群に来るなり。　潜む悪党の密偵が居るのを看破し。　見つからずして、潜入するルートを案内する。

（なんで解る）

その場に居た全員の思いだが。　ウィリアムは、事件などで何度もこの場所を訪れ。　地理も倉庫の全体も把握している。　しかも、普通に手伝い仕事で、この倉庫群の一角の倉庫の解体も携わったらしく。　隠された地下の倉庫に通じる入り口まで知っていた。

ウィリアムの話では、この海岸は大昔に砂金などを採る為に掘られた地下道が来ていて。　海岸に聳える岸壁や岩の中にまで空洞があるとか。　貴族が世界の政治を握っていた数百年前は、密輸や悪党

の隠れた抜け道だったらしい。

スティールが、何とも云えぬ顔付きでウィリアムを見て。

「お前、知りすぎて怖い・・・。　ヘンタイか？」

ウィリアムとロイムは見合って。

「ヘンタイにヘンタイって言われたね、ウィリアム」

「ほ～んと、女狂いに言われちゃった」

アクトルも、腕組み。

「スティールに、ヘンタイって言える資格ねえ」

と、次々に。

「ぐふ・・・みんなウィリアムの見方かい・・」

フォレストから見るスティールは、肩身が狭そうであった。

さて、フォレストは、倉庫群の西方にある岸壁の広がる一角から秘密の地下通路をウィリアムの案内で行き。　倉庫群の中心地に広がる“土蔵”の一つの地下室に入ったのだった。　丁度、悪党の集まる土蔵の真後ろに当たり。　フォレスト配下見張りの一人だけが上で外を見ている。

フォレストは、気が付けばウィリアムに信頼を持っていた。

（不思議なヤツだな・・・。　でも、本当にあの女を助けられるのか？）

アリネットの事は、間違いなく死刑と思える。　この都市の裁判とは、絶対悪を裁く場であり。　普通の悪党などは、上級役人の裁量で裁ける。　裁判に行くのは、表立って掟に背いた者に極刑を宣言する場の様な所。　アリネットの事は、昨日でモルビット達上級役人を束ねる刑事総領と云う役職の人物に立件して書類を出した。

恐らく、秘密裏に裁判が行われる。　殺人などの犯罪刑罰は役人でも出来るが、禁制の毒薬や事柄、背任や貿易犯罪などの特別な犯罪は裁判に成る。　裁判になったら、司法総領と刑事総領の二大トップの前で裁かれ、ほぼ百％の確立で死刑になる。　特に、司法総領の老人は頑固な堅物で。　自分の正義観念を曲げない。

（モルビット様は・・・お覚悟を決められているのだろうな・・・）

モルビットの事を考えると、フォレストはチェルナーと悪党共、そしてペトルとその弟を手打ちにしてやりたかった。　自然と、拳を握って力が入るのだった。

一方、フォレストの潜む倉庫から、悪党共が集まる倉庫を挟んで先の倉庫に、ウィリアム達四人が潜む。　こっちは、倉庫の中にワインセラーの貯蔵庫がある蔵。　元々が酒蔵だった為か、アルコールの褪せた匂いが、葡萄の醗酵した薄い匂いと共に倉庫に満ちている。
　倉庫壁には、木組みの四段ぐらいの酒樽を置ける棚が作られ。　アクトル達が潜む下段の間には、捨てられたワインボトルが転がっていたり、木箱などが朽ちて残っていたり。

埃だらけの床を払い、スティールはゴロンと横に。　流石は、冒険の旅などで汚れる事も成れたアクトルやスティール。　静かに時の満ちるのを待つべく寝ている。

逆に、ロイムは暇そうで。　魔法で作った水晶のような球体を、想像の力と魔力で消したり、増やしたり。　今まで、こんな集中に修行をしなかったロイムだが。　今は、ウィリアムに見捨てられたくない思いが表れて、練習をしようと考え始めていた。

ウィリアムは、暗い倉庫の一階。　大きな両開きの入り口で、壊れた鍵穴から外を見ている。

（気付かれずに行けるか・・・囮のペトルが使えない。　奴らが集まったら、一気に・・・）

フォレストやクレマソンが、ペトルを殺されるのを躊躇い囮を許さなかった。　だから、頃合いにペトルが現れないなら、相手も当然警戒するだろうし。　もう、チェルナーの屋敷の通りは、役人達が厳重警戒をしているから、怪しんで全員が集まらないかもしれない。

（こんなあやふやな賭けもしなきゃならないなんて・・・）

ウィリアムは、今日しか悪党達を一網打尽にすることが出来る機会は無いと踏んでいるだけに、内心は心配でもあった。　悪人達は、数が多ければ多いほどその警戒網も広く、そして全員を捕まえるのは難しい。

だが、今回。　ウィリアム達に運が見方していた。　一つは、ペトルが警察役人に捕らわれていながら、連衡したのが夜で人目につかなかった事と。　緘口令を敷くのが早く、チェルナーの殺害が外に

噂として漏れていなかった事である。

そう、街では、先んじて潜入して来た悪党共の密偵と、役人達の情報・探索戦争が続いていたのである。

ーーー

ナーは、マント男に向かって立った。

「ポールか・・・。　また、仕事かい？」

すると、フードをポールは取った。

「ああ、今回で当分取引が無い。　今年最後の大仕事さ」

色黒で、ややシミや汚れの見える顔だが、面長でいい男なポール。
だが、細く見開かれた目には、悪党でも悪辣な光が宿っていて気味が悪い。　背丈は、スティールよりもやや高く。　身のこなしに隙は無い。　髪は乱れているが長く、耳の左側が切られたのか半分無い。

ドナーは、チェルナーの店の主人を任されて居る為に、この悪党ポールと付き合うが。　家庭もあるドナーには、ポールは気味悪い上に危険過ぎる男で嫌いだ。　しかし、嫌とは言えない関係だから仕方なく。

「昨日、ペトルの遣いが来た」

ポールは、金属の補強入りの靴を鳴らしてドナーに近寄り。

「ほぉ～。　で？」

「大変だ。　チェルナー様が死んだ」

ポールは、ニヤついた顔をスッと引き締め、急に焦る声を出した。

「何だとっ？！　なっ・・どうしてだっ？！」

「お前が今日欲しがっていた女に、毒で殺された・・・。　一昨日の昼前だそうだ」

「チッ」

ポールは、横に向き直り苛立ち始める。　見た目三十過ぎくらいのポールだが、実年齢は四十歳を超える。　チェルナーと元々は同じチームの冒険者で、つい犯した犯罪から悪党の道に進み。　今ではすっかり全身が染まっている。

「で？　他にはっ？」

ポールは、長い後ろ髪を乱したままにイラつき始めた声鋭く、ドナーに聞き返す。

ドナーは、モップを動かしつつ。　暗い中で。

「約束の金の内、五万は持って逃げれたとさ。　今日、“ウィー”って若い男に持たせるから受け取れと。　女は、捕まって役人に連れて行かれたし。　他の金の在り場所は、チェルナーしか知らないから、それ以上は無理らしい」

「クソっ！！　女に殺されるたぁ・・・チェルナーらしいぜっ！！！」

益々イラつくポールに、ドナーは。

「ペトルは、そのウィーって男に金の分け前貰えると言って雇ったそうだ。　口封じに殺して欲しいとさ」

ポールは、雨の出入り口を睨み見て。

「言われなくても誰が分け前やるんだっ。　ぶっ殺してやるさ」

「それから、繋ぎから連絡も来た。　チェルナー様の屋敷は、今も役人の管理化にあると。　港の旧倉庫群の方には、役人の手は回っていないから集まってくれとさ」

ポールは、この日の為に六人もの手下を前日に街へ着く船で潜伏させた。　雨の影響がなければ、更に二日前には潜伏していただろう。

「これじゃ、明日には船に乗らないとまずいな」

ポールは難しい顔で唸る。　本当なら、受け取った金を山分けした後に、受け取ったアリネットを存分に玩ぶ気だったのだが。　チェルナーが死んだとは、実に劇的な展開だ。

ポールは、ドナーに聞く。

「で？　ペトルの弟のペテルに預けてる物達（ブツ）はどうするんだ？」

「さあ。　金を受け取ってから奪いに行ったらどうだ。　ただ、騒げば直ぐに役人に見つかるぜ」

ポールは、汚らしく笑い。

「ケッ。　いざとなれば役人なんざぁ～ぶっ殺せばいいし。　船も奪えばいい。　束になれば、ちょいとした強盗団より力はある。

よし、今夜ペテルの一家皆殺しにして、物だけ奪うか。　ペテルのかみさんも娘も、船旅のお供に丁度いい」

と、下衆な笑みを浮かべる。

ドナーにも年頃の娘が居る。　ポール達には決して見せない。　もう、今日で最後だと腹を括っていた。

「ポール、休むなら倉庫使え。　ゲルダやソインも来てる」

「そうか、じゃ」

ポールは、頷いて店のカウンターに向かった。　客席のストゥールに足を掛け、ヒョイっとカウンターを飛び越える。

「へへ、貰い」

カウンターの後ろの棚に置かれた酒のボトル瓶の幾つかをポールは両手に持つ。

見ているドナーは、軽蔑の目でポールを見ていた。

実は、ウィリアムは、クレマソンとフォレストに一計を預けた。
ドナーを見方に付ける事である。

クレマソンは、秘かに客として前日に店に来て、このドナーに接触した。　全てを黙って聞いたドナーは、取引に躊躇無く乗った。
チェルナーが居なくなった今、役人に協力すれば嫌々に手を貸していた罪を軽減すると云うのだ。　もう、ポールへの悪事の加担にウンザリしていたドナーは、人生をやり直す決意をしていたのである。

ドナーの話に出てきた“ウィー”とは、実はウィリアムであり。ウィリアムは、自ら囮になる決意で一網打尽に向かったのだ。　その事に、スティールもアクトルも、三人でやろうと言うが。　数が多いと怪しまれると却下された。

旧倉庫で潜むウィリアムの後ろには、五万シフォンの大金の入った様に見せる鉄くずと綿の入った抱えんばかりの麻袋がある。

もう、ウィリアムは、クレマソンとフォレストを交えて、出来うる限りの策を考え。　手配を済ませていた。　実は、海の船着場には。　最悪の事態も想定して、島政府の兵士二十人が隠れて待機しているし。　ペトルの弟のペテルの店には、役人の手配が回って密売品の押収が終わっていた。

ペトルは、協力的では無かったが、弟のペテルとドナーの協力は相手を欺くに最適だった。

ペトルの弟のペテルは、ペトルがアリネットを売った事も、子供をペトルが売った事も知らなかった。　ただ、土地を騙し取っただけだと思っていたらしい。　現実の真実に、鈍い太ったペテルは驚き泣き出した。　そして、協力に承諾した。　ペテルも、子を持つ親だから、アリネットとモルビットの憎しみや執念が理解出来たらしい。　ペテルの方は、子供思いの情け無い旦那と変わっていたのだった。

一時の夢を押し通して欲張った人間達と、その欲望に翻弄された人達。　それぞれ、事件に合わせて伸びる道が違い始めた。

そして絶望的な運命の道を変えようと、ウィリアム達は全身全霊を

尽くす。

ーーー

「おう、セイン。　まったく本当だぜ。　俺が今日受け取るはずだった女に、毒殺されたとさ」

“セイン”と呼ばれた男、先の丸まった杖を持ち、蒼いローブに身を包む。　禿げた頭に潰れた顔で、右目だけ異様に開かれ、左目は潰れているようだ。　魔法使いで、ロイムと同じ魔想魔術師。　歴戦の悪党の一人だ。

セインは、横向きになり。

「あの女狂いがぁ・・・。　全くっ、飼い猫に噛み殺されてどうする・・・」

集まる男達十～五・六人の中で、ポールの脇に座るのは、痩せて背の低い黒ずくめの服の男。

「セイン、嘗ての同期を殺されて悲しいかい？」

と、笑う。　温度の感じない白い肌、木のコップで酒を舐める舌は、丸で蛇のようにチロチロと動く。　この男は、ソイン。　似た目三十半ば。　盗賊上がりの殺し屋だ。　ポールに誘われて仲間になり。　幾度となく人を平気で殺して来た。　腰のダガーは、どれだけの人の血を吸っただろうか。

「フン、所詮は表に出るのを嫌った横着者さ。　遊んでるから、カンも鈍ったんだろう。　自業自得さ」

そう言うのは、奥の酒樽から酒をコップに注ぐ背の高い均等の取れた体格の男。　彼の腰の左には、長剣が佩かれている。　蒼い目で黒っぽい灰色の髪は短い。　白い汚れたバンダナに、皮の上半身鎧、

皮のズボン。　左頬と、左手の甲に古びた斬られ傷の見える男だ。

セインは、その男を見て。

「ゲルダ。　それより、買い手売り手を探す主が居なくなったんだ。探さないと金が入らなくなる。　貧乏はゴメンだ」

セインは、ふんぞり返る姿でゲルダを見た。

ポール・ゲルダ・セイン・ソイン。　この四人が、悪党団の中軸であり。　他の悪党共は、駆け出しの冒険者が落ちぶれた者達ばかり。

ポールは、グッと酒を呷ってから立ち上がり。

「セイン、心配するな。　いざとなれば押し込みで人殺して奪えばいい。　とにかく今は、ペトルの持ち出した五万が先だ」

セインは、ほろ酔いのポールを見て。

「ペトルは？」

「さあ、来ない。　ビビッて隠れてるみたいだ。　代わりに、ウィーとか云う男が来るそうだ」

セインは、訝しげにポールを見て。

「罠の可能性は？」

ポールは、酒樽に干してあったマントを肩に掛けつつ。

「だから、全員で行くんだ。　嘘でも、何かは知ってる。　捕まえてペトルの居場所を吐かせてもいいさ」

床に座って酒を酌み交わしていた男達が、皆立ち上がった。

ポールは、グルッと全員を見て。

「いいか、これから倉庫に向かう。　俺、ソイン、セイン、ゲルダに別れて、それぞれに散れ。　何か有ったら直ぐに騒げ。　邪魔なものは、人でも役人でも全て殺せっ。　騒いだ奴は、歓楽街に戻ってこの場所に。　こっちも、気付き次第に戻る」

男達が頷いた。

ポールは、更に続けて。

「雇い主が死んだ。　って事は、役人に手配が回ってる可能性もある。　無理に隠れるより、バレてるなら派手に暴れた方がいい。　役人は、大して強くない。　押し切れ、殺せ、助かる為に暴れろ。　これから先は、俺達は盗賊団として一つになり、世界を暴れてやる。　その手始めだと思え。　行くぞっ」

外は、激しい驟雨と変わっていた。　其処に、男達が出て散り始めた。

最後に出たポールとソイン。　ソインが、ポールに。

「ドナーは？　殺らなくていいのか？」

「後だ。　避難場所で、先に殺しが有ると隠れるのに面倒だ」

「解った」

雨の中、悪党達皆は散散りに成った。

だが、この様子は。　酒蔵の向かいの狭い建物の二階から、役人達が監視していたのだ。　こっそりと此処を借り、見張って居た訳だ。

簡易的な椅子に座って休んでいた若い役人が、監視していた老いた初老の役人に呼ばれ。

「おい、動き出した。　クレマソンさんに知らせろ」

「はっ・はいっ」

初めての潜伏の張り込みなのか、簡素な板の間の二階で若い役人は慌てて言った。

ペテルとドナーを引き込み。　クレマソンは、ウィリアムの提案の元に悪党の密偵達を見つけてはやり過ごし。　嘘の情報を流して倉庫に集める事に成功したのである。

こうして、その時は近づいた。

ーーー

夕方。　黒い曇り空の影響からか、既に暗く成り掛けの街。　港から来る人は少なく。　早々と店仕舞いに忙しい店がちらほら。
だが、やはり歓楽街に向かう旅客や労働者は居る。　飲食店には灯りが入り。　いつもより通りを歩く客足は少ないが、ランプの街灯が灯り。　酒を求め、腹を満たしに店に入る人もまばらに増え始める。

そんな街中。　あちこちから、薄皮の水を弾く麻布や、ロープを羽織った顔の見えない人達が見える。　歓楽街を数人で固まり歩いていたり。　港の方から来たり。　この人の一団達、交差路で会っては話し合い。　港に逆戻りし始める。　クレマソン達、役人達だ。
だが、もう悪党達は倉庫群に向かっている。

港から西に海岸を下ると、使われなくなった船着場や壊れた船の置き場が続く。　漁船や、借り置きの船が陸揚げされて、海岸沿いに並んでいる光景。　暗雲広がる夕暮れの中では、なんとも不気味な光景である。

その先にずっと行けば、海岸からずらりと暗い夕闇の中に広がる倉庫の群れが見える。　倉庫群の外側は、風雨に晒されてしまう為に、建て替えやすい木造の小屋のような倉庫だが、奥の中心に向かって行けば、どっしりとした蔵のような倉庫が見え始める。

やや風が北から強くなる中、ポールが手下四人と倉庫群の一角に向かうと。

「リーダー、こっちです」

暗い壊れかけの小屋の様な倉庫から、男の声がする。　ポールは、手下に“リーダー”と言わせている。　もしかすると、まだ冒険者への未練が残るのか。

「おう、どうだ？」

ポールは、辺りに注意しながら小屋に入る。　もう、木の板の壁は、風雨で朽ちてあちこちに穴が開いていた。　天井からも、雨水が漏れて滴っている。

見張りの男は、厚手のマントに身を包み。　ずぶ濡れで居ながらに、ポールに謙った格好をして。

「今日は、怪しい奴は来ちゃいません。　役人はおろか、ペトルの旦那も見えてねぇです」

ポールは、暗くなる雨の空を見て。

「解った、もういい。　見張り二人残して、お前達は俺と来い。もしかしたら、このまま弟のペテルの店に押し込むかもしれん。人手が要る」

マントに身を包む見張りの男は、グッと顔を引き締めて頷いた。

「解りやした。　残す奴に繋ぎをつけて、直ぐに後を追いやす」

「いいか、今日が正念場になる。　覚悟しろ」

「ヘイ」

倉庫が立ち並ぶ外に見張りの男が出て行く。

ポールは、フードを深く被って外に出た。　そのまま、ウィリアム達が待つ倉庫群の中央へ闇に紛れて向かって行く。

旧港側からは、ポール達が。　北側の方からは島を一周する街道沿いから、ソインとセインの一団が闇に紛れて倉庫群に入って行く。

一方で、ポールと反対の岸壁側からは、ゲルダが倉庫群に入って行く。

それぞれが、約束の待合場所に向かう。

一方で、

（おい、見つかるな。　大きく囲め）

（は、伝えます）

暗く為る夕闇の中、陸揚げされた船の群れの間を隠れ進む一団が。

ポールの後を追って来た、クレマソンや役人達だ。　風と船の陰に隠れ、先回りしていた潜伏班が隠れていながらポールを確認し。

来たクレマソンに教える。　全て、このやり方はウィリアムが考えた。　ポール達を無理に確認しようと追えば、向こうが察知してバレる。　だから、予めに通りそうな場所に潜伏し。　隠れて確認し、クレマソンに教える。

実は、役人にも危険な潜入捜査や、潜伏捜査を経験する男達がいる。

この者達は、盗賊上がりだの、悪党の手先上がりで、こうゆう仕事に慣れている。　命の危険と、ひっそりとした生活を強いられる

代わりに、給料は平役人より高い。　特に、モルビットの抱える密偵役人は、モルビットを信頼しているだけに優秀だ。　今回も、その男達が動いてポール達を追跡していたのだ。

黒ずくめの汚れた服に、顔まで煤で汚す密偵達は、ウィリアムの教えた地理に従い。　倉庫にも潜んでいる。　モルビットの窮地だ。

　嘗て助けられた男達は、モルビットの為にと全力を尽くしていたのだ。

さて、ウィリアムは、まだ隠れていた。　夕方の闇に紛れて、まず一人目の悪党達の手下らしき男が、そっと現れて辺りに気を配りつつ待合いの取引現場に入ったのは、ポール達が倉庫群に入った頃。

ウィリアムは、七段くらいの木の階段が必要な酒蔵の段差下の床に隠れるスティール達にそっと寄った。　ウィリアムもまた、歩む足取りの音が殆ど無い。

（どうやら、集まりそうです）

スティールは、声も小さく。

（本当に、一人で大丈夫か？）

暗闇の倉庫の中、段差上のウィリアムは頷いて。

（怪しまれないためにも、最初は一人の方が安全ですよ。　とにかく、声を上げるまでは潜んで下さい。　恐らく、相手も倉庫群に監視は残します。　クレマソンさん達が近づく時間を作らないと・・・）

アクトルは、ウィリアムに寄り。

（お前がリーダーで世界を行くんだ。　生きていなきゃあの世で殴る）

ウィリアムは、アクトルが自分をリーダーと認めた意味に頷く。

ウィリアムは、三人の最後にロイムに寄った。　ロイムは、暗闇に強張る顔を白くさせている。　震えているのだろうが、騒がないし。逃げない。

（ロイム、出来る事でいい）

頷くロイムは、しゃがんだ。　人の足音がしたからだった。

ウィリアムが、そっと入り口の鍵穴に近づけば男の声がする。　倉庫と倉庫は、対になるように扉が向き合う。　盗賊の盗難の防止に、それぞれ対の向かい合う扉の倉庫は、全て同じ向きの入り口では無いのだ。　倉庫と倉庫の間は、人一人がすれ違える程度の道。　この幅は、ワイン樽の幅であり、麻袋の一番大きいサイズの運べるギリギリの幅。　盗む時に苦労する造りなのだ。　しかも、縦横で三つの倉庫の先は、太い道が北か東に伸びる。　海岸や岸壁方面には逃げ難く、物も運びにくい構造に倉庫群は成っていた。

「俺だ、空けろ」

取引場所の入り口の戸に、誰かが声を掛けていた。　背の高い男を中心に、三人のマント姿の手下を連れて倉庫に入った。　最初に来たのは、ゲルダの一団である。

（四人・・・）

ウィリアムは、数を数えている。

少しして、倉庫群の並ぶ合間の通り道を北東側から来た一団三人が入る。　一人小さいマントの人物が、ウィリアムの潜む倉庫の方を見たのは、何かを感じたのか。

「ソインさん、どうぞ」

名前を呼ばれたマントの人物は、雨の中で辺りを見回してから黙って中に入って行く。

（七・・・）

ウィリアムは、この名前の呼ばれた男に見えない殺気を感じた。恐らく、殺しのプロだと解った。

そして、また直ぐ後、北西から一団が。　やや動きの鈍いマントの男の足元には、杖が見える。

（魔術師・・・）

ウィリアムは、来た人物の事を直ぐに把握した。　四人の一団が、また中に入って行く。

（これで十一・・・）

そして、程なくして雨脚が少し弱まった頃だった。

（来た！！）

ウィリアムは、身体にゾワリと汚らしい纏わりつく嫌な気配を感じた。　ウィリアムの潜む扉の前に、一番多い足音の数と共に、殺気というのか不気味な気配を垂れ流すマントの人物が、五人の手勢を引き連れる形で、取引場所の蔵にやって来たのだ。

ポールは、辺りを見てから扉に向かって。

「おい、来たぜ」

ウィリアムは、音も無く黒い布を腰から取り出し。　サッと顔を隠して目だけ見えるように被った。　床の埃を少し手のひらに付けて、濡れた泥も触ってから布につけた。　みすぼらしく、見てくれをらしくしたのだ。

開いた扉にポール以下五人が入り、中には十七人の悪党が揃った。

ウィリアムは、西の蔵と蔵の間の通路に気配が有るのを感じていた。　その見張りに気付かれない様にか、贋金に見せる麻袋を手にすると、前の扉ではなく。　右脇の梯子を上った二階の壁の壊れた切れ間に向かう。　扉を開き出るのは、あからさまに怪しいだろうし。　万一に、仲間の潜伏を曝け出す事にも為りかねないからだろう。

（ウィリアム、ムチャすんなよ）

アクトル・スティールが、ウィリアムが壊れた壁から外に飛び出したのを見て思った。

ウィリアムは、右隣の蔵との間に音も少なく飛び降りた。　雨が屋

根を伝い、蔵と蔵の間の道に流れ落ちる様は水、の紐の様に見える。
暗くなり、もう夜と同じ暗さだ。ウィリアムは、黒い服装で、闇に紛れてゆっくりと入り口に近づく。急げば、動く黒は見つかり易いし、変に急げば怪しまれる。

ウィリアムは、悪党達が集まった倉庫の扉の前まで濡れて歩いた。
扉の中から、微かに話す声が聞こえる。

すると、ウィリアムは事も在ろうか。

“ガン！！！”

なんと、扉を態と蹴った。

「誰だっ？」

鋭く、平静を装う声。

「ウィーだ。金を持ってきた」

一瞬、永遠のように雨以外全てが静まり返った。

そして・・・。

「入れ。今、開ける」

声がして、扉が開いた。ランプの灯りが灯っているのだろう。
灯りが零れてきた扉の開いた隙間へ、ウィリアムは、ゆっくりと入った。

ーーー

この倉庫は、酒樽を寝かす蔵だ。　朽ちて壊れた樽が、蔵の壁際を取り囲むように残され。　出入り口の前三メートル先には、階段の備わった窪んだ中地下一階と云うべき間がある。　蔵の大きさは、奥行きがざっと二十数、横幅が十五メートル以上の広い酒蔵だった。

「・・・」

ウィリアムは、入って左右に悪党達の手下二人が自分を挟み討ちにする形でいるのを見ても動じない。　二歩ほど前に歩いて、窪んだ中地下一階の段差に集まる一味を、覆面の隙間に開いた目から見て。

「頭は誰だ？　ペトルの阿呆から、金を渡せと頼まれたんだがな」

何時ものウィリアムの口調では無く。　少し乱雑な言い方をする。

段差の広間の真ん中で、古びた木箱にランプを灯して、子樽を椅子にするポールがニヤリと笑い。

「大したモンだな、お前。　左右を囲まれているのに、全く気にして無い。　中々の度胸だ。　俺が、リーダーのポールだ」

ウィリアムは、スタスタと歩いてはピョンと飛んで段差下に下りた。

ポールは、ウィリアムに更に感心した。

「ほう、降りる音も殆どねぇ・・・。　ソインと同じ殺し屋か？」

ソインは、ジリっとウィリアムを睨む。　自分よりも足音が静かなウィリアムに、警戒と嫉妬が湧いたのだ。

ウィリアムは、十五人の悪党達を前にして、持っている袋を床に置いた。

「褒めなんざぁ～要らん。　それより、早く取り分を決めてくれ。　さっき、ペトルが役人に捕まって、俺の身も危ねーんだ。　さっさと逃げねーと、直に此処にも役人が来る」

この話に、ポール以下悪党一同の顔つきがガラッと変わった。

ソインは、脅すような殺気の篭った声で。

「オイっ！！！　今、何て言ったっぁ？！！」

ポールは、立ち上がり。

「本当かッ？！！」

ウィリアムは、いい加減そうに頷いて。

「ああ。　本来なら、金の受け渡し後に二人で落ち合うはずだった。　だが、隠れていたペトルの弟の店に役人が来やがって。　ペトルを逮捕したから、店の倉庫を捜索するとかで、役人がごっそりと来やがった」

ポールは、店の見張りにやっていた手下が返って来ないのが、今になって心配になる。

「ちっ、ペトルめっ！！！　何処までも使えないっ」

ウィリアムは、悪党達を見て。

「悔しがるのは後にしてくれ。　俺は、金を受け取って街から抜け出す。　早く取り分を決めろ」

若い声のウィリアムながら、堂々と歯切れ良い言い方が悪党らしい。

ソインは、イラついた声で。

「ウルセエっ！！！　テメエに分け前なんぞ有るかっ！！！！」

ウィリアムは、グルリと悪党一同を見た。

「フン、やっぱりな。　そ～んなこったろうと思ったぜ。　ペトルも、アンタ等も信用出来ない」

ポールは、嫌な感じの声に。

「お前・・・何した？」

ウィリアムは、袋を片手に持った。

「ペトルが、何度もお前達は到底信用出来ないと言っていたからな。　こんな事もあろうかと思ってた訳さ」

ゲルダは、スッとマントを開いて腰の剣に手を掛けた。

ウィリアムは、後ろの男二人も身構えたのを感じていながらに。

「俺を殺すってか？　フッ、舐められたモンだね」

ゲルダは、スラリと剣を抜きながら。

「ノコノコ出て来たお前がマヌケなのさあっ！」

と、長剣を構えた。

だが、ウィリアムは余裕を残した姿で、ゆっくりと後退しながら。

「は？　マヌケ？　どっちがだよ。　ゾロゾロと、こ～んな囲いの檻の中のような場所に集まる方が阿呆だぜっ」

ソインは、サッと細い短剣（ダガー）を引き抜いて。

「ぬかせっ！！！」

と、ウィリアムに投げた。

だが、ウィリアムはパッと持ち上げたた袋で短剣を受け止めた。

「おっと、アブね」

そして、短剣を引き抜くウィリアムを見たポールが。

「お前っ！！！　謀ったなっ！！！」

ウィリアムも、気付かれたので。

「だから、マヌケはどっちだよ。　こんな危ない取引に、不必要な人質の金を持って来るかって～の。　自分の命が掛かってるんだ。

頭使えよ」

ウィリアムは、左手で引き抜いた短剣で頭を指す。

ソインが、またもや腰に手を回して。

「テメエ・・・俺達を舐めてるなぁぁっ！！」

ポールは、一気に声を上げる。

「捕まえろっ、殺すなっ！！」

段差上の退路を塞いでいた悪党二人が、ウィリアムに向かって飛び降りて来た。　ゲルダも、グッとウィリアムに肉薄するが・・・。

ウィリアムは、すすっと右に退いて。　右手一つで、東側の壁の方に段を上がろうと。

「この野郎っ！！！」

ゲルダが追い駆けて、掬いに剣を振り上げたが。　ウィリアムは、一足早く壊れ朽ちた樽が並ぶ上の段に上がった。

「逃がすかっ」

ソインも、素早くウィリアムに走る。

だが、ウィリアムも負けてはいない。　左手に袋を持ち替えて、パッとポール達の頭上へ放り投げると。　壊れた樽の一部に足を掛け、何段も階層に成っている樽の上に上って行く。

「ちきしょうめっ！！！」

唸ったセインの頭上へ、ウィリアムが投げた袋から零れ出す鉄屑などが落ちる。

「うわっ、おい、いててっ」

拳の半分ほどの石塊や鉄屑が、セインと手下数人の頭に降り落ちる。

その時だ。　倉庫内で、俄に騒がしく叫びまわる声に反応したアクトルとスティールが、扉を開いて突入して来た。

「オラオラっ！！！　一人だけだと思うなよっ！！！」

「何っ？！！」

ポールは、現れた巨体のアクトルに驚いた。

先に、スティールが走って段を飛び降りるなり、直ぐ近くに居た悪党二人を見て。

「フンっ、はっ！」

抜くままの剣の柄を鳩尾に突き込み一人。　慌てたもう一人の喉下に、握りなおしての柄の一撃を見舞った。

「ううううう・・・」

「うげえっ！！！」

悪党二人は、激痛に呻いて誇り積もる土間に崩れた。

アクトルは、スティールに斬りかかろうとしたゲルダに斧を向け、牽制しながら階段を下りて来る。

この騒ぎに、ウィリアムは、無駄無く動いた。　先ほど抜いたダガーを、ポールに投げつけたのだ。

不意を突かれたポールは、慌てて身を捩って剣で抜き弾いた。　が。

「うぎゃ！！！」

いきなり悲鳴を上げたのは、魔術師セインだ。　ポールの弾いた短剣が、セインの肩口に刺さる。　ポールが油断していた為に、ナイフを弾くのがギリギリ過ぎた結果だった。

「セインっ！！！　大丈夫かっ？！」

ポールの驚きに、セインは肩に刺さった短剣の柄を持ちながら。

「うるせえぇぇ・・・早く・・・早くあいつ等を始末しろおおおおっ！！！！！」

と、ナイフを引き抜く。

ポールは、アクトルとスティールを見て。

「殺っちまえ！！！！」

と、声を上げてから、自身はウィリアムを見た。

「死ねえええええっ！！！！！」

ゲルダがアクトルに向かう時、スティールの視線の先には、ユラユラと立つソインが映っていた。

「・・・・・・」

「・・・・・」

アクトルは、斬り込んできたゲルダの一撃を戦斧で難無く打ち返した。

「うおおっ！！　マジかよっ」

ゲルダは、打ち返された衝撃に手が痺れて驚いた。

アクトルは、不敵に笑って。

「お前一人で、俺と遣り合えるか？」

「ぐっ」

言い返せないゲルダは、顔を歪めては二歩下がって剣を構え直す。

この時、外から騒ぐ声がする。　フォレストの声で、

「見張りを全て捕まえろ！！！！！　見つけ次第に抵抗するなら斬って捨てても構わん！」

ポールは、歯軋りをして倉庫を見回した。

「クソっ！！！　囲まれてやがるっ！！！！！！」

ソインとスティールが、悪党達の間で走り寄った。　スティールの剣と、ソインの長い刃渡りの細剣のような小剣（ショートソード）が撃ち合った瞬間でもあった。

肩から血を流し、唸ったセインがついに右手に杖を握り。　絶体絶命の境地に狂い出した。

「破れかぶれだっ！！！！！　死ぬまで全てをぶっ壊す！！！！！」

と、杖を振り上げる。

ウィリアムが最も恐れていた事は、悪党の魔法遣いの暴走だ。　魔法の威力は、今までに書いた通り。　破壊行動で人に遣えば、死人も容易く出てしまう。

「マズイっ」

ウィリアムが、樽から飛び降りた。

「我がぁっ・・」

セインが、アクトルやスティールに向けて魔法を唱えようとした瞬間である。

パッと、入り口にロイムが現れて。

「幻惑は魔想の真髄っ、アイツの目を塞げっ！！　っ！！！」

と、いきなりセインに杖を振るった。

「なにいいいいいいっ！！！！！」

セインは、突然に魔法のルーンを唱える者の出現に、完全に不意打ちとなり集中が切れた。　ロイムの全身が赤紫に光り、魔法の蛇がセインに向かう。

「なんだありゃ！！！　このっ」

ポールは、セインに向かう赤紫に光る長い大蛇に驚いて剣を振り込むのだが・・・。

「えいっ」

ロイムはしっかり集中して、杖を揺らして蛇の起動をポールの剣から逃がした。　魔法の蛇は、フワリとポールの剣を避けてからセインに襲い掛かる。

「うわわわっ」

逃げようとするセインだが、肩の怪我の痛みで思うように逃げれず。
　襲ってきた蛇に顔を取り巻かれた。

「余所見するなあああっ！！！！」

初めて見る幻視の魔法に驚いたゲルダは、アクトルに怒声と共に続け様に攻め立てられた。

「うわうううっ」

防戦になったゲルダに、手下の悪党三人が短剣や鎖鎌を持って向かう。

アクトルは、大きく戦斧を振るって斧の刃の側面で一人を薙ぎ払い、手下二人の動きを止めた。　しかし、目はしっかりとゲルダを見据える。

「うわあああーーーッ！！！　見えんっ！！！　幻覚で前も何も見えん！！！！！」

セインは、魔法の幻覚に取り付かれてしまった。　もう、暫くは怪物や人に襲われる幻覚ばかりが見えて、戦力には成らないだろう。

「セインっ！！！！　ちきしょうめえええええっ！！！！！」

床に転がってのた打ち回るセインの姿に怒ったポールは、ギラッとロイムを睨むのだが。

「ロイム、ナイスっ！！！」

と、声が。

「ん？」

ポールが後ろを振り返れば、覆面男のウィーが近場に降りていた。

ポールは、歯が壊れんばかりに歯軋りをして。

「うぬぬぬ・・・貴様あああっ！！」

と、睨む。　流石は悪党の首領だ。　睨む目に篭る邪気は、殺気を孕んで恐ろしさすら感じられる。　戦い慣れた者でなければ、怖くて足が竦んでしまうかもしれない。

だが、ウィリアムは全く動じる気配も無く。　顔を隠していた覆面を剥いで、そして薄く笑った。

「今まで散々に自由して暴れたでしょ？　そろそろ、御自分の行いの罪の清算しないと」

何かポールが言おうとした時、ロイムの背後にフォレストがサーベルを抜いて現れた。

「悪党共っ！！！　警察局の刑事部員のフォレストだっ！！！！神妙に縛(ばく)に付けっ！！！！　さもなくば、斬るっ」

ポールは、絶体絶命だと悟った。

「うむむむ・・殺せえええええっ！！！！　捕まりたくなければ殺せえええっ！！！！！！！！」

と、大声を上げてウィリアムに斬り掛かった。

「うわあああーーーー」

悪党一同が、アクトルやスティールに襲い掛かった。

一方、フォレストも加勢しようと、アクトル達の居る段の下に飛び降りた。　向かってきた悪党三人を相手に、フォレストは引けを取る訳も無く。　直ぐさまに一人の足を斬って、首筋に剣の柄で一撃を加えて気絶させる。

それぞれに戦う中。　最初に決着を付けるのは、アクトル。　悪党一人を足蹴していなし、戦斧の柄の中ほどを持って旋回させて、もう一人の振り回す鎖鎌の鎖を絡めて引きずり倒す。　最後には、斬り込んで来たゲルダの剣を受け止めて、そのままに押し込んで怪力を持って捻り崩してしまった。

「のわっ！！！」

倒れこんだゲルダを、更に踏み込んで思い切り蹴り上げるアクトル。

「うぎゃっ！！！」

アクトルの身長より飛び上がったゲルダは、また埃の積もる土間に落下して肋骨を砕かれ呻くだけに。

フォレストは、怪力を存分に生かす戦いのアクトルに、悪党をまた一人斬って伏せてから。

「やるな」

と、声を掛ける。

アクトルは、悪党一人と対峙しながら、スティールに顎をしゃくる。

フォレストが見れば、素早く斬り結ぶスティールとソインだが、やはり純粋に腕の差が出始める。

「チィ！！」

舌打ちしたソイン。　斬り込んでも動いても、スティールはしっかり着いて来る。　しかも、剣先の鋭さは、スティールの方が上だ。

焦ったソインが、走りこんで突き込んだ瞬間、スティールはかわした後にソインの右腕を斬り裂いた。

「あぐうっ！！」

切り裂かれた黒装束から血が飛び、よろめいて崩れたソインに、スティールは追撃の鋭い一振りを。

“カキィィィィーーーーン”

小剣が弾き飛ばされた音である。

「くそおおっ」

ソインは果敢にも素手で立ち向かったが。　スティールの剣の柄に拳を撃たれて隙を作り、首筋に剣の柄で一撃を入れられた。　そのまま気絶である。

だが、アクトルとスティールが、共に心配してウィリアムを見た時。

「あら・・・」

「おおっ」

二人して、小さく驚いた。

ウィリアムは、無手ながらにポールと戦っていた。

「・・・・・」

声も発しないウィリアムは、ダラリと両手を下げている。

「テメェ・・・何で無手の技を・・・」

剣を構えたポールは、ウィリアムに斬り込めない。　斬れる感じがしないのだ。

ウィリアムの後ろに、一人の悪党が短剣を手に立っている。　ウィリアムは、後ろを見ないで。

「襲ったら、最後ですよ」

と、後ろの悪党に言う。

その悪党とポールは、頷き合って一斉に斬り掛かった。

「うわーーっ」

「死ねえええええ!!!」

一瞬、スティールもアクトルも走って助けようとしたのだが。　必要無かった。　ウィリアムは、素早く前屈みに成って、左周りで旋回して動き二つの攻撃を避けた。　しかも、起き上がったウィリア

ムは、悪党の背後になる。

悪党越しにウィリアムと目の合ったポールは、左腕を捩じ上げられて骨を折られる手下を見るしか術が無かった。

「うぎゃあああっ！！！」

肩の骨を折られて、土間に崩れた手下の左腕は、くの字の逆に曲がっていたのだ。

「おお・おめえぇぇ・・・・」

俄に、ポールの身体が震えたのを、アクトルもスティールも見逃さなかった。　勿論、ロイムやフォレストでさえ。

今度は、ウィリアムが先に動いた。　ポールに向かって走ったのだ。

「来るなッ！！」

右、左と斬り込まれた剣だが、ウィリアムは綺麗に避けた。　そして、左に流れたポールの剣を持つ右手の甲に、鋭い手刀を薙ぎ込む。

「うわあっ！！」

“ミシィ！！！！”　っと鈍い音がしたのは、骨が砕けた証。　ウィリアムは、素早い右手の拳で怯むポールを殴り倒した。　血が飛び、ブレたポールの身体は倒れて床に崩れる。

「ひゅ〜、やるねぇ」

「凄いな」

口笛を吹いたスティールと、感心したアクトル。

残り二人の悪党を沈めたフォレストは、

「何だ、強いじゃないか」

と、ウィリアムに呆れた。

だが、ウィリアムは、直ぐにポールの首を左足で押さえた。

「ぐあ・・・い・・いき・・・が・・・あ・あぱぱ・・・」

苦しみ出したポールに、驚く一同。

「ウィリアムっ!!!」

声を出したのは、ロイムだ。

頷くウィリアムは、ポールを見下ろして。　足を離すと、また瞬時に蹴りの一撃を顔に。

「・・・・」

ポールも、その一撃に気を失った。

スティールは、チョット呆れて。

「なぁ〜にげに激しいねェ」

そこに、外へ到着したクレマソン達が雪崩れ込んで来た。

「ウィリアムーーっ、無事かっ！！！！」

フォレストが、ビショビショのクレマソンを見て。

「おやっさん、大丈夫だ」

棍棒片手のクレマソンは、疲労の濃い顔ながら笑った。

「そうか・・そうか。　いや～、良かった。　それ、全員ひっ捕らえろ！」

と、雪崩れ込んだ役人達に命じた。

一気に、五十人以上の役人が倉庫に入って来た。

やはり、ウィリアムの睨んだ通り。　ポールは、秘かにペトルの言った以上に人を雇い入れていた。　冒険者崩れの者三名が、外でフォレストの率いた役人達を相手に戦っていたのだ。　やはり、モンスター相手に戦う冒険者は、訓練だけの役人とは一味違う。　少し苦戦したようだった。

悪党一味は、こうして全員が捕まった。

連行に付き合うウィリアムは、アクトル達を途中でオロスの下に戻した。　なにせ、キャリーがウィリアムとアクトルの事を相当に心配していたと云うのだから。　ウィリアムは、後々を考えても煩くないように戻したのだった。

ｓｅｃｏｎｄ１０、ウィリアムとチームの捕り物劇（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

最近、教習所に行き始め、書くペースが前の半分に成りましたが。
読んで下さる皆さんが居ることに感謝で書いています。

他、別の作業等でペースは落ちましたが、書き続ける事は続けますのでよろしくお願いいたします＾＾

さて、ウィリアム編も残すは、今回を別に2話。　どうなるか、結末まで読んで頂けたら有り難いです＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ１１、裁きの前のひと時。

１１、裁きの前のひと時。

逮捕の終わった夜だった。

夜も遅く成り始めの頃。　フォレストは、アリネットと一緒に牢屋に居るモルビットに会った。　行って見れば、黙ってアリネットをベットに座らせて。　その愛おしいアリネットを守るかの様に、牢屋の入り口に座るモルビットが見えた。

「・・・フォレストか」

モルビットが、訪れたフォレストに気付く。　黒い岩がゴツゴツしている壁に囲まれた牢屋の中、唯一の灯りのランプも最小限の油で灯されているので薄暗い。

フォレストは、憔悴して黙ってしまっているアリネットを見てから。

「モルビット様、ウィリアムの助けで悪党一味を全て捕獲致しました」

モルビットは、薄く微笑んでフォレストを見上げた。

「そうか・・・大手柄だったな。　フォレスト、俺に“様”は要ら

ん。　もう、只のジジイだ」

すると、フォレストは、握った拳を胸に当てて敬礼し。

「は。　ですが、その只のジジイと、元人命救済に尽くした薬師の孫に当たる女性に対し。　救済減刑を求める嘆願書が届き始めています」

この話にモルビットは驚き、立ち上がってフォレストを見る。

「どうゆう事だ？」

フォレストは、モルビットを見ずに上を向いて。

「は。　夕方に、市民情報誌（瓦版・情報掲示張り紙）で号外が飲み屋に貼られました。　事件に係わった関係者のメイド達、それに使用人などの緘口令の約束は悪党達の逮捕されるまで。　夜の入りには終わりましたので、早速メイド達などがお金を出して張り紙を出したとの事です」

「なんと・・・許したのかっ？」

モルビットは、まだ悪党達を捕まえただけで。　詳しい取り調べもして無いのに、事件の話が巷に流れるのもおかしな話と思うのだが・・・。

フォレストは、姿そのままに。

「しかし、もう嘆願書が届いております。　ウィリアム以下、冒険者四名の嘆願書。　私を含めた下級・上級役人達三百名の嘆願書。

メイド達や使用人達の家族など二十名の物」

「フォ、フォレスト・・・お前達まで？」

「出す権利は有ります。　裁判は、三日後だそうです。　全ての願書は規定に則り、司法総領にお届けいたします。　では、これで失礼いたします」

丸で他人行儀な喋り方のフォレストは、呆気に取られたモルビットを他所に上に消えていった。

「・・・」

モルビットが、アリネットを見れば。

「・・・彼ね」

アリネットは、二日ぶりに感情的な笑みを見せた。

「・・・ウィリアム・・・お前」

モルビットは、呟くように洩らした。　信じた若者が、その頭脳を動かしている。　自分とアリネットを救う為に。

ーーー

さて、夜を徹して悪党達の取調べがそのまま敢行されていた。　各取調室に主要メンバーが入れられて、容赦ない尋問が繰り返される。

「うぎゃあああああーーーーっ！！！！」

絶命じみた絶叫が上がった。

うだうだと屁理屈を捏ねたゲルダに、クレマソンが強行をしてのけたのだ。　ゲルダは、椅子を転がして床に倒れて喚き回り右手を抑えていた。　中指が、在らぬ方向に曲がっている。　年齢八十歳を超えたクレマソンだが、極悪人と渡り合った年月は現役最長。　・・・いざとなった時の行動は、フォレストですら驚くほどだ。

もう、手下達はペラペラと白状してしまっている。　どの道、ポール達四人は極刑に行くのだろう。

ただ・・、静かな部屋が一部屋。　ポールの部屋だ。

「・・・なんで、お前なんだ？」

ポールが、腕を縛られて椅子に座らされているが。　目の前には、ウィリアムが座っている。　どの部屋も、ペトルが取り調べられていた部屋と同じ間取り・様子の部屋だ。

ウィリアムは、もう夜更けだと云うのに。　仲間の元にも帰らずに居た。

冷静な顔のウィリアムは、開口一番に。

「税金の納め時・・・、もう終わりです。　薔薇も、手に入りませんよ」

ポールはスッと目を細めて、右の眉を吊り上げる。

「お前・・・、チェルナーみたいな事言うなぁ。　あの女を知ってるのか？」

だが、ウィリアムは話を変えた。

「さあ。　それより、冒険者していたのに、なんでこんな悪党に？」

「あ？」

「見た処、お仲間の腕を見ても悪くないチームですが・・。　横道反れるには、不自然な感じですがね」

ポールは、後ろで腕を縛られていながら、口元を血でよごしたままに。

「へっ、説教かい？」

ウィリアムは、以外にも素直に笑って。

「いえ、興味本位ですよ」

「は～？　変わった奴だな・・・。　お前、冒険者か？」

ポールが、探るように聞いて来るのに。　ウィリアムは、頷いて返す。

「ええ、駆け出しですがね」

ポールは、一瞬ウィリアムを真顔で見てから、破顔して。

「嘘いうな～、お前が“駆け出し”だってぇ？　俺らが“善人”と云うのと一緒だぜぇ？」

ウィリアムは、自然な言葉使いで、

「本当ですよ。　つい数日前、この島でチームを結成したばかりです」

ポールは、ウィリアムを見て止まった。

「マジで？」

「ええ、マジ」

ポールは、少しづつ苦笑顔に。

「そうか・・・そうか。　俺等・・・冒険者としての腕もゴミ屑って訳か・・・」

と、ウィリアムを見て。　ポールは困った顔で続けた。

「俺は、生まれながらにして捨て子でな、人売りに捕まって見世物小屋に売られたのさ。　ま、飯は食えたし。　世界を旅回るのは性に合ってた。　だけど、ある日・・俺が十一の時に親方が死んで、一座は解散。　仕方ないから冒険者になった・・・」

ポールの話だ。

ウィリアムとポールを見守る外の監視員の役人は、扉の上の覗き窓から見て思う。

（取調べじゃないな・・・意味が無い）

だが、ウィリアムは静かに聞いていた。

「ま、それからはご想像通り。　年端もいかね～ガキ扱いで、あちこちのチームを転々と・・な。　で、初めて纏まってチームを組んだのが、リーダーをチェルナーがやってたチームよ」

「へえ。　あのチェルナーが、リーダーですか」

ポールは、珍しがったウィリアムを見返して、少し自慢気に。

「笑うなよ。　あれでも、女癖さえ無ければ結構リーダーの手腕はあったんだぜ。　交渉力も洞察力もな」

ウィリアムは、確かに納得した顔だ。　今度は、自分が苦笑い顔で。

「でしょうね。　この数年、何度も尻尾捕まえても“蜥蜴の尻尾”用意されて、ほとほと困りました。　頭の回りは、確かに・・・確かに・・・」

ポールは、良くウィリアムが人を見ていたと思い笑って。

「ま～な。　でも、十三歳の俺と会ったチェルナーは、貿易商人と

しての顔も持っていた。　冒険者としてのチームは、元手と商品を見つける為の組織みたいなモンだったさ。　でも、俺とセインは長く一緒だったのは、アイツの金払いの良さと・・・腐れ縁のような相性だったのかもな。　しっかし、俺が十五の終わりに、チェルナーが失態をした。　悪い癖が・・・収まり利かなかったのさ」

ウィリアム、一つの人生の核心だと思った。

「ほう・・・、あのチェルナーが失態ですか・・」

「ああ。　或る仕事で、遺跡の調査隊の護衛をした。　強くは無かったが、遺跡や渓谷でモンスターとも遭遇したし。　途中の山道で山賊も出た。　問題は、仕事を成功させて近くの町に戻った時だ。　俺等の護衛した魔法遣いの学者の二人が、持ち帰った遺跡の品の取り分で喧嘩になった。　俺等からすれば、下らねぇ～喧嘩さ。　博物館に寄贈するだのしないだのとな」

「なるほど、随分貴重な遺物が出たんですね」

「ああ、そうみたいだな。　だが、その内の一人が、次の日の朝に殺された」

「言い争いが元で・・・ですか？」

「みたいだ。　そして、俺等もその町に役人によって足止めされた。　それが、悪かった」

「と・・・言いますと？」

ポールは、自虐的な笑い顔で。

「俺等チームは、チェルナーの影響でかな～。　男ばかりの女好きばかりが揃っちまってさ。　五日も足止めされて、女に餓えた・・・。　チェルナーが、殺された学者様の奥さんを食っちまおうと・・・。　遺産も、盗って逃げようと言って来た・・・」

「随分な凶行ですね」

「初め、俺と他の奴はびびったから躊躇った。　だが、チェルナーとセインは、魔法でどうにかしようと・・・嘘言ってさ。　奥さんを町外れの襤褸屋に・・・。　事はすんなり行った。　みんな一通り楽しんで、奪う物も奪ってさ・・・。　でも、其処に宿の亭主がなぁ～、役人が探してるからと俺等を探しに来ちまった。　バレる前にと、奥さんと宿の亭主を殺したのが始まりさ。　逃げる金も欲しくて、民家に押し込んだ・・・。　そん時のチェルナーって云ったら、鬼のように気が狂ったみたいでよ。　ビビッた俺とかを殴りつけて、半ば強引に殺しを遣らせた・・」

ウィリアムは、チェルナーの性格を考えて。

「どうやら、どの道その時すでに、チェルナーは冒険者からは足を洗う気だったのでしょうね。　未練が無いから、最後に最大限の利益を得ようとしているようですから・・」

ポールは、遣る瀬無い苦笑い顔で。

「だな・・・、お前の言うとおりさ。　チェルナーは、その後に自分達のやった事をぜ～んぶ前に戦った山賊の所為にしてさ。　態々、一度山賊の手下を殺しに行って・・・死体を用意したんだぜ・・俺。　筋の通らない話だったからなぁ～。　役人とかには疑惑止まりの

ままで、事の事実がグチャグチャに成った途端。　捜査の隙を見て仕事請けた大都市にごり押しで戻って、チームは解散・・・。　そして、悪党組織として、俺やセインは奴に飼われた・・」

「流れ・・・ですかね」

ウィリアムは、あくまでも冷静だった。

ポールは、観念しているのだろう。　俯いて。

「多分な・・・」

と、言ってから、素直な顔でウィリアムを見た。

「お前は、流れに逆らいそうだな・・・。　死ぬ前に、面白そうな奴に会うなんてよ・・。　俺も運が悪ィ～や・・・へへッ」

それからのポールは、ウィリアムに素直だった。　今までの悪事、チェルナーの相手していた貿易商人など、全て喋った。

全てを終えて、ウィリアムは、何処と無く寂しげな感情を見せて。

「死ぬまでは、時間は少ないでしょうが有ります。　何か、食べたい物あるなら看守に言って下さい。　差し入れしますよ」

すると、ポールは静かに俯く。

「無理だ・・・。　俺が食いたいのは・・・母親の愛情。　欲しいのは、おっかなかったが面倒見の良かった死んだ親方・・・」

やはり、人の生き様に悪人も善人も無いのだろうか・・・。　ポールの目は、丸で淋しくて泣く子供の様だった。

ウィリアムは頷いて、ポールを監獄に戻す為に役人に言いに立った。

だが、ふと或る事を思い出して。

「ポールさん、最後にもう一つ聞いていいですか？」

「ん？」

顔を上げたポールに、ウィリアムは詰め寄って・・。

「今から二十年以上前ですが、ジョルジュと云う可愛らしい女の子を売りませんでした？」

ポールは、前を向いて。

「名前なんか知るか・・。　何百人と売ったんだぜ・・チェルナーに引き渡されてよぉ」

「そうですか・・・。　緑色の目の、六歳ぐらいの女の子なんですがね」

と、ウィリアムが言うと。

「あっ、・・・まさか・・・最初のガキか？」

と、ポールがウィリアムを見る。

「最初の？　どうゆうことですか？」

ポールの話では、ポールが手伝う以前から、チェルナーは人売りに手を貸していたらしい。　使用人、子供の出来ない親、慈善活動を謳う政治家の養護施設の頭数、影武者・・・、売春、子供の売れる先は多い。　裏家業に通じる人夫出しには、こんな組織が絡んでいたりする訳だとか・・。

さて、ポールが始めて人売りの仕事で、子供達を連れて行った二十数年前。　数人居た子供の中に、そんな容姿の子供が居たらしい。
北の大陸で、人売りの業者に渡したのだが・・。

「あのガキは・・・別口だって言ってたな・・・何でも、専用の言葉で“鏡”って言われてた。　俺は、赤子の時に売られて意味は解らないが。　特別な感じの分け方してたぜ」

ウィリアムは、全身に雷鳴で射抜かれた衝撃を受けた。

「そんな・・・“鏡”（ミラー）か・・・」

「お前ぇ、知ってるのかっ？」

ウィリアムは、鋭くポールを見て。

「ミラーは、鏡・・・。　誰かの影武者や、人身御供を指すんです。誰かの人質とか・・・貴族のお嬢様の身代わりとか・・・」

「なんでそんな事を知ってるんだっ？」

ウィリアム、困った顔で外の役人に言ってポールを牢屋に戻した。
直ぐにウィリアムは、モルビットの元に向かった。

牢屋の中で、アリネットがベットに寝て。　モルビットは傍らの床に居た。

上からの階段を下りる足音が少ないウィリアムは、モルビットに気付かれなかった。

「モルビットさん・・・モルビットさん・・」

ウィリアムの呼びかけに、モルビットもアリネットも起きた。

「ん？　ウィリアム・・か。　どうした？」

ウィリアムは、膝を降ろして跪いて。

「今、悪党の一人の証言で、ジョルジュさんは北の大陸に連れて行かれたと解りました」

アリネットとモルビットは、共に驚いて鉄格子ににじり寄った。

「ウィリアム本当かっ？！！」

「ホントなのっ？！！」

二人を前にして、ウィリアムは話した。　チェルナーの書類に有ったジョルジュの売りの記録と、ポールの話。　総合しても、嘘とは思えない。　ジョルジュにしかり、誰に然り。　見目のいい子供と悪い子を分けて、等級を付けて売買していたのは事実らしい。　ならば、ポールの話もあながち嘘では無いと思う。

「あぁ・・、いっ生きてるかも・・知れない・・・。　あの子が・・・あの子がっああ・・・」

アリネットの顔が憂いを帯び、瞳が涙に染まる。

泣き崩れるアリネットを抱くモルビットは、ウィリアムに。

「探してくれるか？　我々の代わりに・・・」

ウィリアムは、冷静な顔はそのままに。

「二人の約束です。“見つけるまで”・・・でしょ？」

モルビットは、まだ十二歳だったウィリアムと十年近い前に交わした約束を思い出した。　オロスが巻き込まれた殺人事件を解決した後。　チェルナーの関わったと思われる殺人事件に、モルビットは躊躇無くウィリアムへ助力を求めた。　そして・・・解決はしたが。　結局チェルナーは逮捕出来ないままの心残りから、モルビットがウィリアムに全てを話し。　二人は約束を交わしたのだ。

モルビットは、何の取引も無いのに約束を守るウィリアムに心が震える思いがする。

「ウィリアム・・スマン。　もう・・お前にしか委ねられない・・・頼む」

するとウィリアムは、アリネットとモルビットの二人を見つめた。

「約束を守りますから。　お二人には、是が非でも生き残って貰いますよ。　この島に生きて、残って貰います」

アリネットは、どうして此処までウィリアムがしてくれるのか解らずに問うた。

「ウィリアム・・・どうし・て・・・そこまで・・・」

ウィリアムは、答えなかった。　スッと立ち上がり、上に戻るべく歩き出す。　だが・・・階段の手前で立ち止まり。

「悪党達は、明日の夜には処刑されるそうです。　明後日は・・・運命の日です。　終わるのか・・・待てるのか・・・。　覚悟と娘さんの安否・・・祈って下さい」

暗がりからそう言うと、上に上がって行った。

モルビットは、ウィリアムが消えるまで見送ってからアリネットを見て。

「アリネット、終わりを宣告されて決まるまでは諦められないな。　ふ・ふふ・・ウィリアムめ、どうして・・中々諦めさせてくれん」

アリネットは、自暴自棄に成っている自分が何も出来ないのが・・・悲しくて・・悔しくて。

「返す言葉が無いわ・・・。　貴方が信じるなら・・・私も信じるわ」

「ああ、アリネット。　ジョルジュが・・・ジョルジュが生きているかもしれない・・・」

「モルビット・・・」

二人、あの別れた時からお互いの愛を封印し、子供のジョルジュを思って生きていた・・・。　もう、駄目だと思っていたのに・・・。　此処に来ていきなりの進展だった。　生きていれば、ジョルジュは二十九歳に成る筈である。

ーーー

今夜スティールは、あの前に会った水商売の女性ハンナと会うんだそうで。　ロイムに絡む。

「おう。　いい天気だぜ。　アークは、クリスフィさんとデート。　俺は、今夜にハンナとお楽しみ～。　うむ、ロイムセンセーはどうよ？　え？　え？」

ロイムは、紫陽花が青紫に栄える前の椅子に腰掛けて居ながらスティールを横目で。

「誰も居ないですよ。　もう行っちゃえばいいのに・・・」

スティールは、目くじらを立てて素っ気無いロイムを睨み。

「ええ？・・ロイムセンセーよぉぉ。　なんか文句でもあんの？」

ロイムは、虐められてると思って。

「大声出そっかな・・・キャリーさんとかに聞こえるように・・」

スティールは、女性には弱い所を逆手に取られた思いだ。　大声出されたら、それこそ泊まってるだけに格好悪い。

「お前ぇ・・・、無駄な知恵付きやがって・・・」

スティールは、難しい顔で苦虫を噛んだ。

さて、ウィリアムは、ぼ～っとしていながらに。

「昨夜・・・ポールと話をしました」

と、紅茶を啜る。

ロイムは、嫌な顔をした。　余り、人の悲しい話や汚い話は嫌いなロイムだ。

スティールは、サラッと。

「どうせ、いい話でもないだろう」

ウィリアムは、昨夜の話をして。　冒険のついでに、モルビットとアリネットの娘を探すと言った。

スティールは、生じ貧乏な生活の幼少を過ごしただけに、ポールの苦労も解る気がする。

「・・・アイツも、可哀想な奴だ・・・。　巡り合う相手が悪かった。　もし、その遺跡調査の時に途中からでも逃げていたら、人生変わってたろうになぁ～。　ま、娘を探すのは賛成だ。　あのお二人の娘さんだ、さぞかし美人かもしれん・・ぬふ・・ぬふふふ・・・」

下心見え見えの笑い。

ロイムは、真顔で俯いて。

「でも・・・悪い事していい理由じゃない・・・」

「ふっ」

スティールは、ロイムの言葉に軽く笑った。

ロイムは、スティールを見て。

「可笑しい？　・・・僕・・変？」

すると、スティールは微笑み首を左右に。

「ロイムが正しい。　貧富は、悪事の切っ掛けには成るが、正当な理由には成らない。　素直なロイムが・・羨ましいだけさ」

と、紅茶を飲んだ。

ロイムは、珍しくスティールが自分を褒めるので、ウィリアムを見て。

「ウィリアム、やっぱり明日は雨で正解だよ。　スティールさんが、僕を褒めたモン」

ウィリアムは、雲が多く。　早く流れる空を見て。

「あははは、だね～」

と、笑う。

スティールは、同じく上を見て。

「チンチンに毛も生えてないガキに言われたぁぁぁ～」

ロイムは、顔を真っ赤にして。

「生えてるモンっ！！！」

と、ムキになる。

「えっ？！！　マジ？」

スティールは、態と驚いて見せた。

ウィリアムは、笑って上を見ていた。

一方、街の店にクリスフィと買い物に出たアクトルは、チェルナーの事件が公に成っているのを知った。　あちこちの店先で、チェルナーの悪口や、死んで当然な言い草の客の声がするのに驚いた程だ。

アクトルは、紫のドレスに着替えているクリスフィに聞いた。　横道に入った、狭い路地の活気ある商店街でだ。

「あの、聞いていいですか？」

緊張気味のアクトル。

何時もは澄まして微笑みすら無いクリスフィが、穏やかに微笑んでアクトルの横を歩く。

「はい、何でしょう？」

「あ～、チェルナーって男は、随分と有名人なんですね。　街の人が名前を聞けば解るみたいで・・」

クリスフィは、少し顔を曇らせた。　少し黙っていたが・・・、アクトルに悪いと思ってか。

「ですわね。　綺麗な娘の居る家には、自分から金を貸しに来る程の人です・・・。　私の家にも、しつこく来てましたわ」

アクトルは、その言葉でオロスの奥さんのキャリーやクリスフィを含む娘達も狙っていたと悟った。

「なるほど・・・」

それしか言えなかった。

しかし、街の人の中には、アリネットの事をアレコレ言う人も居れば、同情している人も居る。

街の人中で。

「おい、あの昔の薬師さんの孫が犯人なんだろ?」

「みたいだ」

「このままだと死刑だとさ」

「えっ!!　あんな悪人殺してか?　害虫駆除したようなモンだろう。　俺の爺さん、あの家の先代に助けられてよぉ〜」

「おお、ウチは、俺が助けられた・・。　昔、馬鹿なのに流行病で死に損なった時だ」

「へ～、死んだ方が良かったりしてな。　あははは・・」

「お前も口悪いな～。　でも、死刑を止めてもらう嘆願書を書いてる人居るってさ」

「なら、俺も書こうかな。　・・・下手したら、娘がチェルナーの所に行きそうだったし・・」

「おお、書いた方がいいさ。　俺も書く」

「じゃ、後で周りに声掛けてみるわ。　先代の薬師さんにお世話に成った奴一杯居るし」

「ああ、俺も声掛けてみるよ」

アクトルは、クリスフィとその会話を聞いて。

「噂に違わない人だったんだな、犯人の女性の祖父ってのは・・」

アクトルが感心すると。　クリスフィが笑って。

「私も書きますわ。　嘆願書」

「え？」

アクトルは、クリスフィを見る。

クリスフィは、アクトルを見返して微笑む。

「アクトル様も書かれたのでしょう？」

「あ・ああ、ええ・・・ウィリアムから聞いて、助けてやりたいと・・思って」

アクトルは、顔を逸らして恐縮そうに言う。

クリスフィは、穏やかな顔で頷いて。

「私の父の薬学の師が、その人です」

「えええっ？！」

アクトルがクリスフィを見つめると。　クリスフィはまた頷いて。

「素晴らしい薬師だったそうです。　人としても、薬師としても」

アクトルは、その薬師さんが“生き神様”と崇められたのも頷けた。

二人して、道具屋や武器屋を巡る。　アクトルが驚いたのは、クリスフィの知識の広さだ。　武器に使われる金属の産出国から、武器の種類によって作られる国の違いなども良く知っていた。　しかも、話方に嫌味も無かった。

さて、二人して広い繁華街を隅々歩いて随分と時間が経った。　一息着こうと、アクトルを連れてクリスフィは中央公園に来た。　夕方前の、風が冷たい頃である。

チーム結成前に、ロイムが野宿した公園で。　四季折々の草や木の花が咲く公園だ。　春の今は、多種の花が咲いて。　広大な公園には老若男女が訪れては、歩いて散歩していたり、話し合っていたり。

無邪気にはしゃぐ子供達が、友達と一緒に遊んでいたりしている。
また、公園の正面入り口。　港をなだらかな降り坂で見下ろせる正面の噴水広場には、出店や屋台が昼間から出ている。

「ちょっと待ってて下さいね」

美しい笑い顔でクリスフィは、アクトルにそう言って屋台に向かう。

「あ・・はい・・」

アクトルは、女性とは経験が無い訳では無い。　しかし、こんな風に付き合う経験は全く無い。　初めての経験だった。

「・・・」

自分の分まで、果物の切った盛り合わせを買うクリスフィを見て、アクトルは不思議な感覚に成った。

（結婚なんて・・・ないよな・・・。　冒険者・・・辞められる訳無いし・・・）

ふと、色々と頭に浮ぶ。

戻って来たクリスフィと、白い石のベンチに腰掛けた。

「はい、どうぞ」

渡された三角錐の陶器の器に入った果物から、甘い匂いかする。

「すいません。　お金は、後で・・・」

顔を赤らめるアクトルは、クリスフィから受け取る時に言った。

クリスフィは、笑って。

「いいですわ。　これくらい」

と、添えつけに刺してある細い木串でフルーツの切った物を一口。

「甘い・・・」

笑うクリスフィ。

アクトルには、その顔が眩しく映る。

「頂きます」

フルーツだなんてデカイ身体には似合わない。　だが、食べれば美味しかった。

クリスフィは、夕日に変わる雲の切れ間からの日差しを受けていながら、アクトルを見た。

「アクトル様、一つ伺って宜しいですか？」

話す言葉が見つからないアクトルは、猛烈に果物を食べていたが。

聞かれて、ピタリと止まった。

「は・・・はい・・何でも」

クリスフィは、やや顔の色を染めて。

「アクトル様には・・・誰か待ってくれる人は居るんですか？」

アクトルには、意外な質問だった。　こんな質問、誰にもされた事が無い。

「いえ・・・。　故郷にも、誰も居ません」

クリスフィは、アクトルの顔をしっかり覗き。

「お父様やお母様もですか？」

頷くアクトル。

アクトルの家は、鉱山の麓にある農村だ。　鉱山の労働者と、僅かな農地、山の恵みでささやかに生きる貧しい村だった。　北の大陸に在るスタムスト自治国の中央に、その村は有る。　丸で、広大な森の中に聳える山の南西に、スプーンでチョコット掬って木々を退けた後に村が有る様な、そんな感じである。

アクトルの父親は、鉱山で働く鉱夫達の頭（かしら）で。　“親方”の愛称で皆に慕われていた。　アクトルに似たゴツイ顔と思いきや、意外にいい男で。　村一番の色男の様に言われていたとか。　アクトルの母親は、村に住む農家の娘で、物静かなスッキリとした清楚な女性だったらしい。

だが・・・。　アクトルは、クリスフィの顔から、目を逸らして俯き。

「俺が九歳の時です。　鉱山の坑道の中で大雨による崩落が有りまして・・・。　崩落の時に中で働く鉱夫の中には、スティールの親父さんも居たんですよ。　俺の親父・・・仲間を助ける為にあちこちで崩落が起こった坑道の中に入ってしまって・・・身代わり死にました」

「あ・・・」

クリスフィは、よもやこんな過去が有ろうとは思っても居なかったので、自分も俯いた。

「ごめんなさい・・・」

謝るクリスフィに、アクトルは続けた。

「いや、謝らないで下さい。　過去は変わりないから。　それからは、俺は鉱夫として働きました」

「えっ、九歳で・・・ですか？」

驚くクリスフィは、またアクトルの顔を見た。

「はい。　俺の母親は、身体が丈夫で無かった。　親父の訃報に、尚更弱くなってしまった。　俺が・・・俺が・・・と働きました。　育つにつれ、この通り身体が大きくなりまして。　周りの人の助けも有ったので、十二歳で一人前に働けました」

「・・・」

クリスフィの様に何不自由無く暮らしている者には、少し想像出来ない。　だが、大変さだけは解る。

「しかし、運命なんですかね。　母が・・丸で、“アーク、もういいわ。　自由にして”・・と言わんばかりに、俺が十九の時に死にました。　泣く俺の前で、凄い安らかな顔して・・・。　スティールも兄貴が居て、街に出た兄貴が家族を養うべく同じ頃に呼ばれて。　だけど、兄貴の世話に成ったら無駄飯食らいが増えるだけだ・・・と。　だから、二人で冒険者に成りました。　ですから、故郷にも何処にも待ってる人なんていません」

アクトルは、話して楽に成った気分になり。クリスフィを見る。

逆に、クリスフィは少し悲しい顔で。

「私・・・幼い頃から男性に好かれました。　異常なまでに・・・」

「・・・でしょうね・・・綺麗ですから・・」

言ったアクトルは、恥ずかしくて顔が赤くなる。

クリスフィは、最初に見た澄ました冷たい女では無かった。　丸で、仮面を外した物憂げな美女である。

「はい・・・。　でも、それも良い事かどうか解りません。　大金を持って、私が十歳だと言うのに結婚して欲しいと四十過ぎの方に言われた事もあります。　攫われそうに成った事も、犯されそうに成った事も・・・」

「・・・大変ですね。　綺麗と云うのも」

アクトルは、母親の影響もあってか、強引に女性をどうこうするのは大嫌いである。　真っ直ぐというか、なんというか・・・。　硬派なのかもしれない。

クリスフィは、アクトルを見て。

「ウィリアムだけに普通で居られたのは、ウィリアムが私も周りも差別しないから。　丸で兄妹の様に思えたから。　でも、貴方は違う・・・。　私は、一緒になる男性は自分で決めたいと思う中で、貴方なら一緒に居れそうな気がするの。　貴方の持つ武器は、只の武器じゃない・・・」

「ええ、魔法の掛かった特殊な武器ですから・・」

一応、アクトルはこう言った。　だが、少し話しの筋は違うと思ったのだが。

すると、クリスフィは首を左右に振るった。

「違う、そうじゃないわ」

「え・・・いや・・・」

クリスフィは、アクトルに向かって云う。

「貴方の持ってる武器は、“ブレインズ・ブレード”。　別の名前では、“インテリジェンス・ウェポン”とも・・・。　古代の力と魔法文字で、武器の中に強力なエネルギーと意志精神を閉じ込めた物なの・・・。　ただの魔法武器とは、訳が違う・・・」

アクトルは、耳慣れぬ言葉に首を傾げた。

「ブレインズ・・・ブレード・・・ですか？」

「そう、いずれ貴方が強くなれば、あの武器の声が聞こえるはずよ。
あの武器の中には、古代の頃から生きる神の精神が入ってる。
武器が力を委ねられると感じた持ち主だけに・・声は聞こえてくる。
私、幼い頃からフェアリーアリスの力が在るの」

アクトルは、びっくりした。

「ええっ？　あ・あの・・魔法の力やモンスターの気配などを感じる異能ですよね・・・」

「そう、ウィリアムに聞いて貰えば解るわ。　でも、驚いた。　私の前に、この世に幾つも無い武器を持ってる人が現れるなんて・・・。　武器は、貴方を認めてる。　だから、魔力の一部を発揮してる。
あの斧に閉じ込められた神は、森に住んでいた厳格な神様よ。
そんな神に認められるのは、貴方が優しいから。　貴方が、心澄んだ人だから・・・。　ウィリアムが貴方を連れて来た時、あの武器が私に語り掛けた・・・」

“どうした、娘よ。　何を泣いている”

「って・・・」

アクトルは、混乱する頭の中で。

「“泣く”？　どどどっ・どうかしたんですか？」

クリスフィは、アクトルを見て。

「貴方やウィリアムの受けてくれた仕事・・・。　薬草の原料納期に間に合わないなら・・・契約を破棄するって・・・商人の皆が。　間に合わない場合の契約維持の条件が、商人の誰かと私達姉妹の結婚・・・」

アクトルは、横暴な話にムカっと来て。

「なんて奴だ・・・人を物みたいに・・・」

と、前を向いたが。

クリスフィは、微笑み。

「でも、斧が言ってくれたわ。　貴方達に任せれば大丈夫、必ず切り抜けるって・・・。　本当だった・・・。　斧が語ってくれましたわ。　アマンドクロを食べた貴方の事も、樹木のモンスターと戦ったウィリアムや貴方の事も・・・。　今まで、汚い仕事の誘いを断って、野宿した事も有ったと・・・うふふ・・」

「あ・・・ええっ？　あ・・・いや・・・」

アクトルは、まだクリスフィはおろか、ウィリアムにすら話して無い事を知られていて驚いた。　クリスフィはスティールとは話したがらないから、知らない筈の事を、クリスフィが知っている。

「あの斧・・・そんな事まで・・・話しているんですか・・」

焦るアクトルを見て、クリスフィは・・。

「アクトル様。　私は、こんな気難しい女なので・・・男性を直ぐに信用も出来ませんし。　遠ざけます。　でも、貴方なら素直に受け入れられそうです・・・。　もし、冒険が終わっても、行く所が無いと云うのなら・・・、私と一緒に成って下さいませんか？　今、冒険者を辞めて欲しいとは思いません。　ウィリアムとの冒険が終わったあと・・・宜しければ・・・帰って来て下さいませんか？」

「・・・」

アクトルの意識が・・・遠くに飛んだ。

（在り得無ぇ・・。　う・嘘だろおおおお・・・・）

ｓｅｃｏｎｄ１１、裁きの前のひと時。（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編も、十二話が一部最終回になろうかと思います。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ１２、死刑を超えて・・・旅立ち

１２、死刑を越えて・・・旅立ち

運命の日、朝から雨だった。

今日は、アリネットの刑を決めるべく裁判が行われる日である。

朝帰りしてきたスティールは、前日の夕方が暮れるまでアクトルとクリスフィの帰りを待っていた。　しかし、一向に帰って来ない事に、意味深な笑いを残していたのだが・・。

「でくの坊の・・・骨抜き・・・ってヤツか？」

オロスが用意してくれた馬車に乗って、警察局部に向かうチーム一向。　馬車の中、魂の抜け殻と化したアクトルの放心した顔の生気の無さに、スティールですら気味の悪さを覚えてしまった。

ウィリアムは、スティールの耳元で。

（昨日の夜、帰って来てからあのままです）

（何時に帰ってきた？）

（スティールさんが行った直後）

そこに、向かい合う車内のシートで、アクトルの横に座るロイムも身を前に乗り出して。

（キスぐらいしたんでしょうか・・・）

と、話に加わる。

スティール、呆れた顔で。

（お前、アークを馬鹿にするな。　一応は、ロイム童貞王子とは違って経験者だぞ。　敬え）

ロイムは、むくれて。

（ぼ・・僕だって一応は・・・）

スティール・ウィリアムは、グッとロイムに顔を寄せて。

（ロイム・・・マジ？）

（ロイム・・見かけに因らないね・・・）

ロイムは、顔を真っ赤にして。

（遊ばれただけ・・・だけど・・・）

スティールは、大いに頷き。

（見たままだ・・・）

ウィリアムは、微笑んで。

（それでも、一応は。　しかし、するとアクトルさんは・・・それ以上の衝撃を受けた訳ですか・・・。　やっぱり・・・婚約かな～）

スティールは、グッと前にのめり。

（んだべ・・。　アークにとって、向こうから・・・しかもあんな美人に受け入れられるのは衝撃だろ～。　フラれたのとは、明らかにちげ～ッスよ・・・。　この状態は・・・）

その時だ。　馬車が止まった。

「着いたぞ」

御者の声が外から来た。

雨の中、降りる四人は神殿の様な建物の前に。　三棟の建物が集う丘の上は、天馬の銅像を有した噴水広場と石畳による舗装の敷かれた道路に面している。　雨の中、それぞれの施設に向かう役人達が、色の違う衣服で出勤している風景が降りた四人は見れた。

剣の先端の様な施設の入り口の門の頭上に、鳥の嘴の様に伸びる庇（ひさし）の下で、門を守る衛兵がウィリアムを見て寄って来た。

「ご苦労。　フォレスト様がお待ちだ。　詰め所に行ってくれ」

ウィリアムは、もう冷静な顔の彼だった。

薄暗い天気の中、灯りの落とされた薄暗い廊下を通り。　ウィリア

ムは、役人達をかわして詰め所に向かった。　下級役人と、中級役人、そしてモルビット達上級役人と細かく内訳される階級の中で。
　詰め所に入れるのは中級のみ。　下級役人は、大部屋の待機室で何百人と云う中で休む。

だが、各国において、階級や役職は別々であるとだけは言っておこう。

ウィリアムは、詰め所の前にて振り返り、仲間に言う。

「ここで、待っていて下さい。　役人さんは、部外者がウロウロするの嫌いなんで」

アクトルやスティールは、役人の嫌な部分は良く知っている為か。
　直ぐに頷いた。

さて、詰め所にウィリアムが入ると、中級役人達がヒソヒソと囁きあう。　今回の一連の逮捕劇は、前例が無いに近い異例の事態であり。　注目が集まるのは当然だ。　しかも、モルビットの今の現状、アリネットと云う女性が何故か裁判に掛けられる現実。　憶測と噂が飛び交う。

中級役人達も、それぞれ配属される上級役人は違う。　長年クレマソンのみを相手にしていた優秀なモルビットが、フォレストの様な直情的な男を部下に引っ張った事自体が他には羨ましい妬みになっているとクレマソンが語ってくれたが・・・。

数十人の中級役人が出勤して慌しく蠢く詰め所内において、ウィリアムがフォレストに近づくと・・。

「失礼」

優雅な鼻髭を伸ばすスマートな中年紳士風の男が、ウィリアムの前で立ち止まった。

「はい、何でしょう？」

ウィリアムは、失礼の無いようにと笑顔だ。

暗がりの部屋の中、フォレストも離れた場所で見ている中で、その中年紳士はウィリアムに。

「今回は奇跡的なお手柄でしたね。　同じ役人としてお礼を申します」

と、一礼。

ウィリアムは、低く謙った一礼で。

「いえいえ、手柄はモルビットさんとフォレストさんです。　自分は、運が良かっただけですから」

「フム。　ナルホド・・・・。　今回の事件は、相当市内でも騒ぎに成っていますが。　無駄な事だけは・・・しないで下さいね」

恐らくは、アリネットの事だとウィリアムは理解した。　笑顔のままに。

「無駄はしません。　出来る事をしているまでです」

と、また軽い一礼でフォレストの元に行った。

フォレストは、机の前でクレマソンと立って、ウィリアムを見守っていた。　クレマソンは、この島の貧しい家の出身。　フォレストは、実は官僚の子だが、直情を馬鹿にされる落ち零れ。　二人は、意外に此処では肩身が狭い。　モルビットに付いて、なんとか周りに対等にしておれる身だった。

ウィリアムを向かえたフォレストが。

「良く来た。　スマン。　嫌味言われたか？」

ウィリアムは、笑顔で返し。

「慣れてますから」

クレマソンは、隅の見える顔で。

「全く、偉ぶる事しか知らん連中だでな」

と、苦笑い。

さて、ウィリアムがまず二人から聞いたのは、ポール達の処刑だった。　主要メンバーを含めて、関わった犯罪の数で、五人を残して死刑に成ったらしい。　喚き散らす連中の中で、唯一静かなポールは、ウィリアムに伝言を残して暴れも無く首を刎ねられたとか。

ウィリアムは、やや顔を俯かせてポールを思う。

「やはり・・・死に際でその観念。　まともに冒険者やってたら、

そこそこ名前は聴こえたチームに居たでしょうにね・・・」

クレマソンは、ポールの伝言を伝えた。

ウィリアム、ス～っと上を向き。

「了解・・・」

だが、感傷に浸る暇は、今には無い。

フォレストは、どうも理解が出来ない感じの声で。

「それで、だ。　お前に、裁判への出頭命令が来た。　俺が申請する要求では無く。　司法総領から、お前に直々の申し入れで、だ。　ウィリアム、司法裁判において、部外者を招くのは異例中の異例だとか・・・。　お前、一体何した？」

ウィリアムは、“ふ～”とため息を吐いてから。

「呼び出しの意味は、直ぐに解ります。　呼び出された理由は、“刑の確定”と“歴史の代弁”・・・でしょうね」

と、二人を見る。

クレマソンもフォレストも、お互いで見合ってから。　またウィリアムを見た。　意味が飲み込めなかった。

ーーー

前にも述べたが。　この役人達の集まる行政役所の裏手から少し離れた場所に、青々と茂る林に囲まれて黒い館風の建物が建つ。　外目からは、林の木々の上に突き出た黒い三角屋根の一部しか見えず。　その建物の全体を見渡すことは叶わない。

だが、それは、何も一般の人だけではない。　この建物に入館を許されるのは、司法・警察部の総領に認められた者だけであり。　刑事活動をする役人達ですら、おいそれと入れない裁きの聖域なのだ。

だから、フォレストがウィリアムの入館を、総領の側から申請された事がなによりの謎になったのが頷ける。　上級役人ですら、自ら関わった事件なのにも関わらず、総領二人に蹴られたら裁判に参加出来ないのに。　ウィリアムは、身分も疑われそうな一般・・・いや、スラム住まいの“ハズレ”（差別用語で、スラムなどの住人の事）を召喚するなど有り得ない事なのだ。

この特別なその事が、今回の事件の全ての事柄を総括する意味を含んでいた。

昼前。　裁きの場である“審判の黒令”と呼ばれる建物に、雨の中、ウィリアム以下ロイム・アクトル・スティールの四名。　役人の側としての出席で、フォレスト・クレマソンの二名が連れ立って移動した。

林に囲まれる黒い石造りの館は、部分に寺院の様相を見せる造りがあり。　何本もの石の支柱が館を包む。　辺りが厳かで厳粛な空気に包まれている様な雰囲気を受ける。　外見は、楕円の造りの館だ

が。　いざ、中に入れば、神々を祭る神殿の様に、円形の闘技場のような造りだった。

東側から入った一同。　見下ろす形でその館の中を見た。　まず中央に円の間が直径二十メートルの幅であり、間のど真ん中には西向きで黒い椅子が有る。　その椅子には、もう赤いドレス姿のアリネットが、座っていた。

アリネットの頭上の真上には、三角のとんがり屋根が突き出ていて。　透明な窓を斜めに有し。　アリネットを雨空の鈍い光が照らしていた。

（もう来てる・・・）

スティールが小声で言う。

そう、もうアリネットが入廷していたのだ。　白い肌は死人の様に青白く。　俯き目を瞑る様は、死刑になる罪人の様に思えた。　それながら、乱れた髪、人形の様に動かない姿。　美しいアリネット。　チェルナーが“薔薇”と喩えた意味は理解出来る。　赤いドレスに身を包む今、正しく“真紅の薔薇”である。

空気は冷え、臨界点に向かって張り詰めた雰囲気だ。　声を立てる事も、恐れ多いと感じる。　静かさに彩られ、黒い建物内は、外見以上に厳粛な世界だった。

さて、アリネットから半径五メートルの南北の場所には、彼女を挟む形で木目の見える、青い色の背凭れと、白い色の背凭れをした椅子が見える。　北に白。　南に青。　二つは、机を前にして存在し。　まだ、空席のままだ。

そして、アリネットを中心に半径十メートルの円の内と外は。　黒い円の柵が場を隔てる。　隔てられた外側は、波状型で段々に競り上がる観客席の様な傍聴席が設けられている。　背もたれの有る黒い長椅子が、北東・南東・南西・北西に設けられた下る階段のそれぞれ間際まで曲線美を見せて存在するのだ。

さて、もう一人。　傍聴席の西側で、アリネットの顔を見るように東向きにポツンと座っているのは、モルビットだ。　アリネットの身の上を知る人物であり。　刑事総領が呼んでやったのだろう。眼帯を・・・外していた。　傷痕が生々しく、完全に片目を失っている。　ウィリアムの話では、数年前に悪党に一味に捕まって抉られた。　その痕である。　役人の服装では無く。　灰色の礼服に身を包む紳士の様で、やはり雰囲気が家柄を魅せる。

さて、円形の中央の間には、黒い礼服で鋭い目つきの役人がサーベルを腰に佩いて東西南北の四方に一人づつ立っている。　その中の一人で、北に立つ立派な口髭を生やす厳格な顔のスラリとした中年男が、モルビットの横に下りて行こうと向かうウィリアム達一同に顔を向けた。

「おい、お前達。　中に、総領に直々呼ばれた者で、名を“ウィリアム”と申す者が居るか」

その場に居た礼服の役人以外全ての者が、フォレストの後ろに居たウィリアムを見る。

「自分です。　自分が、ウィリアムです」

ウィリアムは、臆することも無く手を挙げた。

すると、白黒の線で模様が縦二つに分かれる布地のネクタイを締める北に立つ役人は、ウィリアムを見つめて。

「解った。　そなたは、此処に来るが良い」

男が示したのは、北の柵の内側に置かれた白い背もたれの椅子だ。
机を前にする椅子の後方に位置し。　呼んでいる役人の直ぐ隣に置いてある。

（おいおい・・・ど～なってんの？）

（さ～）

ロイムとスティールは、顔を見合わせて理解出来ないと云う素振り。
だが、衝撃の雷に撃たれているのは、フォレスト・クレマソン、そして・・・モルビットだ。

「な・・何故？」

モルビットが、思わず声を出した。

ウィリアムは、モルビットの元に向かう一同と離れ。　中央円形の間の中に、役人の開いた柵を越えて入った。

「座ってくれ」

ウィリアムが前に来ると、オールバックの髪型をした鋭い目つきの役人は、脇の席を勧める。

「失礼致します」

ウィリアムは、彼に一礼して席に座った。

さて、モルビットの元に向かった一同。　皆を迎えたモルビットは、驚きと焦りに似た言葉遣いで。

「フォレスト・・何故ウィリアムが・・・向こうに？」

困惑のフォレストは、狼狽るままに。

「い・いえ・・私にも何がなんだか・・・」

アクトルは、モルビットに近づいて。

「ウィリアムがあそこに座るのは、何かマズイ事でもあるのですか？」

「マズイとかそうゆう次元では無い・・・」

声を押し殺しながらも、苦渋に満ちたモルビットの説明によれば。

白い席は、司法総領が座り。　青い席には、刑事総領が座る。

それぞれ、事件について知っていて。　青い席の刑事総領は事件の調査報告と妥当な刑罰を意見で述べる。　それに代わり、白い席の司法総領は事件の調査を聞き。　更に事件の及ぼす影響や罪の重さを表して死刑を宣告するのだとか。

スティールは、その事実に驚いて。

「えっ？　じゃ・じゃあ・・・ウィリアムが向こうに呼ばれたって事は、死刑を確定させる為に呼ばれたって・・・事ですか？」

モルビットは、絶望的に頷いた。

一同は、ウィリアムを見た。

「・・・」

ウィリアムは、瞑目して何も見なかった。

全ての意味において、ジンジンと痛みが湧き上がるような緊張が誰にも感じられていた。

ーーー

刺繍で描かれる。

対して、白い法衣の老人は、細い瞳で厳しさの逆る厳格さを纏う怖い雰囲気だ。　法衣には、杖と天秤を持つ隠者の神が刺繍で描かれる。

まず、青い法衣の警察部刑事総領が席の後ろに立ち。

「本日、行う裁判の刑事総領ロナウドだ。　皆、神聖なる裁判を汚さぬように」

と、声を出して周りを見てから椅子に座った。

そして、白い法衣の老人が椅子の後ろに立つと、まずはウィリアムを含めて皆を見て。

「随分と客が多いの。　死刑を宣告される者を見たがるとは・・・情けない」

と、呟きの様に喋る。

（なんか・・・ヤバイ・・・感じ？）

スティールは、細く老いた声の司法総領ながら、もう腹の中は死刑と決めて来ている様な印象を受けた。

そして、白い服の老人は席に着く前に。

「私は、司法総領のロバートである。　裁判になる意味とは、禁じられた絶対悪行為。　裁かれて当然、裁かれるのが裁判の意味であ

る。　ここに、事件を起こした者の罪を明らかにし、相応の罰をもって断罪する」

と、細い瞳に、絶対の決意を秘めて皆を見た。

（ヤバイ・・・この人ヤバイよおおお・・・）

ロイムは、情けも温もりも無い言葉に、死刑の確信を感じてしまった。

そして、それはアリネットも同様だった。　ググっと項垂れて、観念した様子を見せた。

そして、裁判は開かれた。

まず、刑事総領が事件の経緯を読み上げる。

「犯人アリネットは、チェルナーを毒をもって殺害した。　その理由は、自らの命が悪党達によって消されると知り。　攫われた子供の行方を知る機会を無くす事に因っての絶望からであり。　・・・」

長々とした文で、事件の経緯。　アリネットの殺意の理由。　チェルナーの積み重ねた悪事。　そして、モルビットとアリネットの関係から、アリネットの子供の本当の親は誰かまで克明に明かされていく。

その説明の中で、司法総領は静かに瞳を閉じて聞いていた。

アクトル、スティール、ロイムは、再度聞かされても絶対悪はチェルナーであり。　アリネットの行動には減刑の理由は幾つも有ると

思った。

モルビットは、アリネットを厳しい瞳で見ていた。

（俺は・・・俺はっ何でこんなに遅くなったのかっ?!!。　ああ・・・やはりチェルナーを一思いに殺せば良かったのだろか・・・）

知らず知らずに力が手に籠もり。　握った服の一部を握り潰す。

だが、殺さなくていいと言ったウィリアムの声も蘇る。

“モルビットさん、殺したら奴と同じ場所に堕ちますよ。　しかも、お子さんの所在が解らないままに成るかも知れません。　アイツは・・・チェルナーは、裁くべきです。　司法の裁きで、全てを明るみに出して、アリネットさんとジョルジュさんを助けましょう”

そう・・・モルビットは、娘ジョルジュの事も不安だった。　今回は、運良くロイムと云う魔法遣いが居て、魔法で封印されたあの書類を発見してくれた。　だが、警察部に魔法遣いは少ない。　しかも、協力的な役人の魔法遣いは居ない。　もし、昔にチェルナーを殺していたら・・・。　アリネットは助かったかも知れないが、ジョルジュの情報は無かっただろう。　そして、自分がこの場で裁かれてるのだ。　警察局の役人の重大犯罪は、死刑に相当する大罪なのだから。

（これが現実か?　俺が裁かれるのが良かったのか・・・?　アリネットなのかっ?。　道はどちらにしか無かったのかっ?!!!!!　ウィリアムっ!!　何が正しい方向なんだっ?!!!!）

モルビットは、静かに瞑目しているウィリアムを見る。　睨むくら

いに・・。

「・・・」

ウィリアムは、ピクリとも動かなかった。

さて、全ての経緯の説明が終わり。　アリネットの素性を元に、刑事総領のロナウドは言う。

「彼女は、子供を助ける為に奴隷に成った。　そして、幾度と無く後から来た娘達を庇い、悪人チェルナーから暴力を受け。　子供の事を利用されて陵辱された。　しかし、今回の犯行までに悪事の加担は無く。　ペトルとチェルナーの所為で、苦しむ立場に有った。　これは情状酌量に値する。　更に、彼女は偉大なる薬師の孫娘で、嘗ては彼女自身も貧しい人を救う立場に在った。　この意味は大きい。　この数日で、彼女とモルビットに対しての温情賜り意見書や、嘆願書が届き山を築く。　その数、解っているだけで八十万。　市の民の意見も、重要な判断材料だ。　最後に、彼女の御蔭で、長年に渡って悪事を働いた極悪非道な悪党達が捕まった。　全てを踏まえて、彼女、罪人アリネットには島からの追放刑が相当と思う。刑事総領の意見陳述、これにて終わる」

傍聴席の皆は、モルビット以外は顔が明るくなった。

「随分、酌量の在る意見でしたな」

フォレストがモルビットに言う。　助かりそうな予感に、やや声が上ずっていた。

だが、モルビットは黙って頷くだけ。

スティールやロイム達にも、凄くいい意見に思えた。　助かりそうな雰囲気が出ていた。

すると、ガァっと司法総領は目を開く。

「意見、しかと聞きました」

司法総領は、答えた。

そして、アリネットを見ると。

「罪人、アリネットに問う。　お主は、今回の事件で使用した毒の歴史は・・・知っておろうな。　祖父より聞いて居ったはずじゃが・・・どうじゃ」

アリネットは、頷き。

「聞いていました」

司法総領は、頷く。

「毒の歴史は、他の毒とは一線を画す。　あの毒は、絶対に扱われてはならない物じゃ。　今まで、幾度か使った者数名は、秘密裏に死刑となり。　その存在は封印されつつ在った。　じゃが、今回で毒の事は表に炙れそうに成っておる。　司法の理を預かる者として、それは断固として阻止しなければ成らぬ。　その最王手とは・・・遣った者を生かさぬ事。　これに尽きる。　今までそうして来た。　毒を封じ込める為にな・・・」

老人の話が進むと、この場に緊張の糸がピンと張り詰めた。

温情の欠片も無い言葉。　例外は許さないと言わんばかりの瞳は細く鋭い。　今までの歴史、これからの歴史に、封印した毒の一切を表さないと言っているに等しかった。

（ああ・・・やはり・・・）

モルビットと刑事総領が頭を垂れた。

司法総領は、あくまでも司法を守り。　規律を乱さず。　秩序や隠滅した負の遺産や暦事に蓋をする門番でもある。　最も厳しく封印される事項の毒なのだ。　例外は、許される事は無いのである。

「申し訳ありませんでした。　犯した罪は、裁きに応じて償います」

アリネットの声が響いた。

モルビットは、涙を流して謝罪するアリネットに思わず身体が動きかけた。　刑が決まりそうな雰囲気で、黙っていられそうに無く・・・。

（ウィリアムっ！！！！！！！！！！）

傍聴席の全員が、緩やかに情状酌量に傾き掛けた天秤が、死刑に一気に傾いた事で黙る若者に目が向かった。

その時だ。　司法総領が、背後のウィリアムを見た。

「証人ウィリアム、立たれよ」

裁判になって、初めてウィリアムが瞳を開いた。

「はい、失礼します」

ウィリアムが立った・・・・。

ーーー

刑事総領ですら驚きを顔に表し。　思わずモルビットを見た程である。

司法総領は、自分の前に立たせたウィリアムに質問した。

「我が兄の弟子であるウィリアムよ。　そなたに、問う。　毒の歴史と、その極秘性を」

「解りました」

ウィリアムは静かに、毒に使われた草・・・歴史・・・封印に至った経緯を話した。

その話を聞いてから、司法総領は言った。

「良いか。　未だに毒の元の草は原生し、その作り方は至って簡単じゃ。　しかも、毒の事をかぎ回る暗殺者の者に知れては恐ろしい現実が待つ」

司法総領は、ウィリアムまた問う。

「ウィリアム、この毒の使用における刑は何だ?」

ウィリアムは、淀み無く答えた。

「はい、本人及び、一族極刑」

アリネット・モルビットに合わせて、誰もがウィリアムを見た。

その語る言葉に感情は無く。　冷静で、丸で宣告と同じだった。

（おいおい・・・助けるんじゃ無かったのかよっ！！！！！）

スティールは、睨む位の勢いでウィリアムと司法総領を見た。

司法総領は、刑事総領に言う。

「刑事総領閣下、何か不満は有ろうかな？」

刑事総領は、黙った。　このまま行けば、恐らくアリネットの一人の死刑だけが宣告されるだろうと。　一族死刑の宣告を無くす代わりに、本人に秘密をあの世に持っていって貰おうと言うのだと確信出来た。

（一族刑死よりは・・・）

そう、この法令は刑事総領とて知らない。　全ては、司法総領に一任されている秘密罰なのだ。　誰も、この領域には踏み込めない。

例え、刑事総領であってもだ。

その想像が、現実に成った。

司法総領は、アリネットに一族刑は情状酌量によって無くす代わりに。　アリネットの死刑だけで抑えると提案した。　衝撃が傍聴席の皆に走り、全ての経過が遅くなってしまう感覚に囚われる。

アリネットの一家は、まだ三十人くらい居る。　その全てを自分の行動で死罪にさせる訳には行かなかった。

（モルビット・・・ごめんなさい）

（アリネット・・・こんな・・・俺が・・・・・遅すぎたばかりに・・・）

二人の目が噛み合って居る。　死の覚悟を決めた涙目のアリネットと、突きつけられた現実に途方に暮れたモルビットの目が・・・。
お互いの心を教えていた。

（終わった・・・・・）

フォレストは思った。　全身から、急激に力が抜けて行くのが音を聞くかの様に解る。

アリネットが決意の瞳で司法総領を見る。

「わ・・解りました。　私・わ・私一人で家族が助かるなら・・・その宣告をお受けいたします」

館内に響いたアリネットの言葉。　その響く声に、誰もが時間の経過が元に戻る感覚を覚えた。　全てが決まったのだと・・・確信した。

ロイムやスティールも、アクトルでさえ気持ちが身体から離れる思いだった。　助かると思っていたのに。

全てが終わる。　そう・・・終わる雰囲気だった。

司法総領は、最後にウィリアムを見る。

「オルレーンの弟子のウィリアム、今回は足労ありがとう。　これ

で、終わりにしたいが。　何か意見は有るかな」

その時ウィリアムの瞳がキラリと細まった。　ゆっくりと司法総領を見て言うのだ。

「大有りですね。　失礼ですが・・・それで解決できませんよ」

全ての死刑宣告に、魂が抜け掛かった一同が。　ウィリアムの言葉にす～っと気を取り戻した。　ブレて視線が定まらなくなったのに、ウィリアムの言葉が耳から腹に沁み込んで、視点がまたウィリアムと司法総領とアリネットに集まった。

「解決出来ぬと？　・・・一体、どうしてじゃ？」

司法総領の顔に、明らかな険が見えた。　終わったと・・・決まったと思える裁判に、水が差されたからだった・・・。

ーーー

「解決出来ぬとは、どうゆう意味じゃ」

ウィリアムは、ゆっくりと歩いてアリネットの周りを歩き始めた。

「いいですか。　今まで毒の使用者を死刑で解決してきたのは、殺人は毒殺されたというだけの事実で。　犯人は一度も表沙汰に成らずに、極秘の秘密裏に処理されていたからです。　ですが今回、もう犯人はアリネットさんだと島中の人が知りました」

司法総領は、鈍く頷く。

「ふむぅ、だがそれは大した事では無いだろう？」

ウィリアムは、僅かに口元に笑みを浮かべて。

「それは・・・思慮が浅いかと・・・」

「何と？」

司法総領の老人が、やや感情的に身を前に乗り出す。

ウィリアムは、穏やかに説明を続けた。

「いいですか。　今回は、今までの毒の使用例とは、明らかに異例です。　この毒に置ける死刑の意味は、全ての秘密を明るみにしない為。　ですが今、島の市民が知る事実は、アリネットさんが毒を使って殺したというだけに過ぎない。　だが、何十万もの嘆願書などが届き、明らかに悪人であるチェルナーを、捨て身で殺したアリネットさんを死刑にした場合。　誰もが不思議がるでしょう。　関

心は、そうなると何処に向きますかねぇ～・・・？」

「あ！」

司法総領の老人の顔が、見る見る青く成る。

ウィリアムは、その老人の頷きを肯定するが如く頷く。

「そうです。　死刑にしなければ成らない何かが有ったと・・・思うでしょう。　そうなると、事件の関係者・・・つまりはメイドや使用人に皆が聞きたくなりますね～。“どんな重罪が在ったのか？　何がそんなに悪かったのか・・・”。　噂は、事実を隠す時も有れば、浮き彫りにも出来ます。　既に、関係者だけは、毒が特殊なのは知っています。　作り方や使用された草は知りませんがね。・・・ですが・・・いいんですか？　この島で、不審な毒物による殺人・・・。　噂が立てば、メイロホトトゲ草の存在も炙り出しますよ。　未だに毒の所在を捜す暗殺者の聞き込みが街の暗部であるとか・・・ないとか・・・聞きますがね」

意味深にウィリアムは、はぐらかす様な素振りさえ見せて言う。

司法総領は、ブルブルと俄に震え出した身を席に戻し。

「それは・・・そっそれは・不味い・・・」

ウィリアムは、頷いて歩きながら言う。

「第二に、自分は、今回の事件の終了で島を離れます。　冒険者に成りましたので・・・。　そうなると・・・もし仮に、仮に・・・また同じ毒が使われた場合は特定する人物が居なくなると思います

が・・・、それも不味いかと」

司法総領は、驚いた姿丸出しになって机に身を乗り出して。

「おっオイ!!　そんな・・馬鹿なっ!!!!!　君が居ないなら誰が毒を特定出来るっ?!!!!!」

ウィリアムは、間髪を入れずに。

「使用した本人」

「んっ?」

司法総領、刑事総領の顔が一斉にパッとアリネットに向いた。

アリネットも、自分の周りを歩くウィリアムを見てから、二人の総領を見る。

この時、モルビットは力を込めて思った。

（これかっ、これを狙ったかっ!!!!）

ウィリアムの脳裏に渦巻く画策の奥深さが、今見え始めたのだ。

アクトル、スティールも見合う。

（アイツ・・やりやがった）

ウィリアムは、静かな言葉遣いのままに。

「それだけでは有りませんよ。　このアリネットさんを死刑にした場合・・・お二人の地位も危うく成るのではないかと思います。ええ・・・多分・・・」

頷き、頷くウィリアムの姿は、なんとも不思議なくらいに注目したくなる。　刑事・司法の総領を見てウィリアムは言う。　チラリと視線を合わせたり、外したりしながらに。

司法総領の老人は、眉間に皺を寄せて。

「どうゆう事じゃっ？」

それには、刑事総領が立ち上がり。

「御老、考えて下され。　今、解っているだけで八十万の嘆願書ですぞ。　もう、任期不変の一季は、我々も島の領主をしておられるマクファイン様も同様。　一季が過ぎたら、毎年市民の六分の一の不満・意見票が集まると領主は解任。　そして、選挙が行われる。　我々は、領主に任命される立場だ。　八十万の数は、その解任に必要な六分の一を超えますぞ・・・。　この女性一人を死刑にさせて、不満が出たら・・・我々の地位も危ういのでは？」

「むむむ・・・・」

司法総領ロバートは、焦りの滲んだ困惑の顔でアリネットを見た。　高が一人の女なのに、こうして考えると、その裏には様々な要素に繋がる糸を持っていると思える。　いや、ウィリアムに思わされたのだ。

そこに、ウィリアムが言葉を垂らす。

「確か・・・先年の暮れ。　マクファイン様は、女性との不祥事や大火事の時の不手際を理由に、五十万近い意見・不満票を集めたとか・・・。　アリネットさんの死刑は、不満に追い討ちを掛ける可能性が有ります。　それに、ただ罪に照らし合わせての死刑にしては、少し罪が軽いと思いますがね・・・」

最後の語尾は、とても意味深な匂いが漂った。

司法総領は、ウィリアムに掴み掛かる勢いで机の上に手を付いて立ち上がった。

「他に刑が有るというのかっ？　死刑で軽いなら、一体どうするっ！！」

ウィリアムは、アリネットやモルビットを見て。

「アリネットさんを生かして、“無給慈善償刑”・・・どうですか？　アリネットさんの持つ薬学知識は、事件の検死に役立て、国の運営する学校にて無償で教師をさせるとか。　他に考えまするに。　市民に支持を多く獲得しているオロス氏の手伝いなどで、貧しい方にも無償で薬の調合などをさせて、人気獲得を狙っては如何かと。　長い刑期を付けて、そこに座るモルビット氏の家で監視の下、刑期を終えるまで生活させる」

司法総領は、モルビットを見る。

「うむむ・・・」

唸る司法総領。

逆に、顔を明るくさせる刑事総領は。

「なるほど。　市民の意見を受け入れて彼女を生かし。　無償の奉仕活動で刑への償いをさせて、数多い貧民の支持を得る。　彼女が生きていれば、また毒が使われてもモルビットの傍に置けば直ぐ解るし。　生かして毒の存在を隠せる。　そうか・・・その手があるかっ」

司法総領は、ウィリアムに言葉で詰め寄る。

「じゃがっ！！　あの毒を使った事実はどうするっ！！」

ウィリアムは、立ち止まった。

「其処です。　毒の事実は、この場に居る方々のみの知る所。　いっそ、大嘘をかまして処刑した悪党と、チェルナーが密輸していた異国渡りの特殊な毒としてしまいましょう。　この島で出来た事実を有耶無耶にしてしまえばいい訳ですからね。　幸い、アリネットさんは優秀な薬師であり、調合の技術も兼ね備えている。　チェルナーの悪名を練り込んで噂を流せば、皆が信じて疑わないと思いますよ。　噂を逆手に取って・・・事実を隠蔽してはどうかと・・・」

アクトルもスティールもモルビットも・・・全員が、ウィリアムの悪魔染みた口車に恐れすら感じた。　アリネットを生かす為に、あえて大嘘をでっち上げると云うのだ。

だが、司法総領は宙を見ながら頷き出して・・。

「なるほど・・・なるほど・・・そうか・・その方法があるかっ！

！！」

司法総領は、刑事総領を見る。　向こうも、見て頷いた。

ウィリアムは、自分を見上げるアリネットに顔を近づけるべく前屈みなった。

（死んで償える罪では有りません。　貴女は、これから毒を封印する側に回ってもらいます。　罪の意識と、事実を曲げて生きる苦悩にさい悩みながら生きるんです。　その苦しみが、貴女の背負うべき刑です。　ジョルジュさんがもし見つかれば、さらに悩み悲しむでしょう。　モルビットさんと一緒の幸せと、苦悩、しっかり抱えて生き抜いて下さい。　その全てから逃れて死ぬだなんて・・・俺は絶対に許さない）

「はっ・・・」

アリネットは、ウィリアムの真摯な目を見て頷いた。　生きる事は・・・まともな人間なら、罪を背負っては茨の道になる。　アリネットの様な人間性の豊かな人であるなら・・・尚更だ。

（ああ・・・なんて・・・裁かれたのね。　ああ・・・）

顔を覆って泣き出したアリネットは、生きてしまった。

司法総領は、ウィリアムの提案を丸受けしてアリネットに言い渡した。　そして、モルビットにも、警察役人に戻り。　アリネットの監視と、動けなくなるまで警察役人として島に尽くすように言い渡された。　一度確定した刑は、覆されない。

瞬く間の逆転だった。　フォレストもクレマソンも、ロイムやアクトルなども喜ぶまでに達しない内に全てが決まって判決が出る。

夕方を前にして、裁判は終わった。

ーーー

アクトルは、ウィリアムをマジマジと見て。

「コイツがこれからリーダーなんだな～。　どんな旅になるやら、先が怖いぜ」

と、呆れる。

ロイムは、ジトっとした目でウィリアムを見て。

「でも、なにもあそこまで引っ張らなくていいじゃん。　最初から、提案して良かったと思うよ。　心臓がず～っとバックバク鳴ってて ハラハラしたよ・・・」

赤い瞳・・・ロイムは泣き出しそうだったらしい。　アリネットの死刑が言い渡された時に。

ウィリアムは、冷静にソファーに腰を降ろして。

「あの司法総領の方は、意固地な方です。　最初から話を阻害して言っても、逆に感情的に成られて受け入れません。　まず、向こうのしたい事を全部させて、油断させたまでです」

と、出された紅茶のカップを手に取った。

その前に座るアリネットは、ウィリアムを見て。

「貴方が、私とモルビットにジョルジュの事を約束してくれた様に、私も約束するわ・・・。　この毒の罪、生きて償う。　どんな現実にも・・・逃げないわ・・」

ウィリアムは、言葉に出さずに黙った。

モルビットも、黙る。

恐らくこの三人は、これからの生きる時間がどれだけの重荷を背負っての歩みになるか・・・理解していた。　悪人とは云え、人を殺した罪。　おぞましい歴史を秘めた毒を使った罪。　そして、事実を捻じ曲げた罪。

一人では無い。　多くの人と接して生きるのだ。　人を思う余りに掛ける言葉、人の過ちを正す言葉、人を許容し愛す中での言葉。生きる全てに、この罪の重みが圧し掛かる。　だから、ウィリアムは、アリネットとモルビットを一緒にしたのだ。　二人なら、助け合えると思って・・・。

口数の多いアクトル達や、一安心して喜ぶクレマソンやフォレストを他所に、ウィリアムは静かだ。

（俺もこれで罪人・・・だな。　手と心を汚して歩くのか・・・。
自分の身になっても、少し重たいや・・・）

そして、外が暗くなる夕方。　クレマソンとフォレストは、数日振りに家に帰る事にする。　ウィリアム達も、オロスの屋敷に戻る事にした。

モルビットが馬車を用意してくれた。　黒い車体に、交錯する槍の模様が見える。　雨粒が車体に降り、側面に糸を引いている。

スティールやアクトルなどは、先に乗り込んだ。　役所の前で向き合うのは、ウィリアムとモルビットのみ。　まだ、帰宅時間でも無

く。　帰路に向かう役人はどの建物を見ても少ない。

モルビットは、ウィリアムの右肩に手を置いた。

「アリネットの事・・・ありがとう。　俺は、命に代えても守る。
ジョルジュの事・・・頼む」

ウィリアムは、頷くだけ。

「お前には、辛い事をさせたな。　嘘で事実を塗るなど・・・すまない」

ウィリアムは、髪を濡らし始めて。

「いえ、綺麗な幕引きなんて嫌いなんで。　これも、自分の行動です。　大勢の人を騙しての嘘を吐かせて、役人の保身の道を見つけた罪は、自分の責任ですよ。　これは、モルビットさんには関係有りません。　選択したのは、自分です」

モルビットは、今更ながらウィリアムの性格は知っている。　柔軟に見えて、真の意固地はこの若者なのだと・・。

「ああ、お前に無駄な気苦労は言わないさ。　さて、今回の捜査協力には、報酬が出るだろう。　一応、金は旅には必要だ。　後日、受け取りに来てくれ」

「・・・お金ですか・・・」

困惑するウィリアム。　車内からは、スティールが期待の篭る顔で見てくる。

ウィリアムは、その顔を見てからにモルビットに云う。

「お金は少量で構いませんが・・・、協力会に噂を頼めませんか？
事件解決にチーム“セフティ・ファースト”の助力あり・・・と。
その方が、異国に渡っても仕事にありつけそうなので助かります」

モルビットも、冒険者の事は良く知っている。

「そうか・・・そうだな。　こうゆう突発の事件の解決は、チームの自力を窺えて評価は高いんだったな・・・。　他国に渡るとなるなら、その方が金以上の利益になる。　解ったよ。　明日には、協力会のオヤジに頼んでおこう」

ウィリアムは、頭を下げた。

「ありがとうございます。　助かります」

モルビットは、逆に恐縮だ。

「おいおい、正当な報酬だ。　礼を言うのはこっちだ。　頭を上げてくれ」

ウィリアムは、頭を上げると。

「では、今日はこれで帰ります」

「ああ」

ウィリアムは、馬車に乗り込んだ。

走り出す馬車を見送るモルビットは、深いため息を吐く。

（これで・・・全てが終わるんじゃない。　始まるんだな・・・）

モルビットは、ウィリアムには謝っても謝りきれない貸しが出来たと思った。

ーーー

「正しい選択だな。　これから俺達はチームとして一つになる。一回こっきりのチーム編成じゃないんだ。　リーダーとして、ウィリアムの判断は正しい」

するとウィリアムは、アクトルに意味深な細目を向けて。

「ですが、恐らくは明後日の朝には旅立つかと・・・。　思い残しは・・・無い方がいいと思います」

「う〝・・・」

アクトルは、目を細めて余所見を。

スティールは、アクトルの傍に寄って。

「美女でも連れて行くか？　剣の腕も有るしなぁ～・・・ウケケケケ・・・」

と、からかう。

ロイムは、スティールのイヤらしい顔に脅えて。

（こ・・こあい・・・）

と、離れた。

アクトルは、スティールを訝しげに見て。

「気持ち悪い阿呆・・・誰が連れて行くか。　・・・断るさ・・・」

と、窓に目を戻す。

スティールは、腰を戻して。

「勿体無えぇ。　待たせればいいじゃないか」

ウィリアムも同意だ。

「ですね～。　あのクリスフィは、その辺の女性とは違う変わり者・・・。　いや、蛇以上の執念深い女です。　多分、数年なら余裕で待ちますよ。　ま、数年も旅を続けるかどうか・・・自分で解りませんがね」

アクトルは、ウィリアムをジロッと横目に向いて。

「お前・・・随分と怖い言い方するな・・・」

ウィリアムは、自分の両肩を抱きすくめて。

「アクトルさんは、クリスフィの過去を知らないから・・・。　第一、あの美人がそうゆう部分も無く今まで一人で居れますかっ？。　クリスフィは、確かに子供は好きで優しいですが、一端怒ったら手が付けられない位の激情家でしてね。　自分の欲求する枠を狭める代わりに、一度決めたら死ぬまで貫く意志があります。　もぉ～し求婚されたとしたら、例えその人が断っても諦めません。　多分、決めた一人に対してはどんな手でも使います。　クリスフィは、そうゆう頑固さを持っているんです」

スティールは、目を点にして。

「それって・・・一度気に入られたら最後？」

ウィリアムは、震えて。

「それ位の覚悟は必要ッスよ・・・」

アクトルは、ウィリアムの話が信じられなかった。　昨日のキスをくれたクリスフィが眩しくてしょうがない・・・。

暗くなる宵の前、ウィリアム達はオロスの店に戻った。

「あら～、おかえりなさい。　ウィリアムちゃん」

店を閉める用意のキャリーは、黒いドレスで色っぽい。　だが、ウィリアムを見ると丸で母親のようだ。

「あははは・・・。　ただいま・・・です」

汗すら浮ぶウィリアム、この年でキャリーに撫でられる。

（うらやましいぃっ！！！！！　俺も撫で撫でされたぁ～～～いっ！！！！！）

と、スティールはロイムを抱き寄せて撫でる。

「うわあああああ～。　やめれ～」

ジタバタもがくロイムの姿に、呆れて笑う店先のオロスだ。

まだ客も数人残る中、オロスがウィリアムに。

「裁判は・・・どうだった？」

ウィリアムは、頷き。

「逆転させました。　アリネットさんも、モルビットさんも生きてます。　ただ、これから長い刑で、無償の労働が課せられます。一般の中で生きて、人々の為に尽くす事になるでしょうね」

キャリーは、ウィリアムに抱きつく。

「んもーっ！！！　流石はウィリアムちゃんだわ～っ。　抱っこしてあげましょうか」

「い・・いえ・・・要らない・・・」

タジタジに変わるウィリアム。　笑うオロスは、

「キャリー、もっと褒めていいよ。　いやいや、あのアリネットさんならウチで雇いたい。　明日にでも、刑の仕事先はウチにして貰おう」

と。　やはり、オロスも恩師の孫娘で、一緒に薬を学んだ事もあるアリネットを案じていたらしい。　その顔には、安堵の表情が見えていた。

ウィリアムは、キャリーに絡まれながら。

「明後日の朝に、島を離れて北に行こうかと思います」

キャリーもオロスも、ピタリと動きを止めた。

オロスが先に。

「そうか・・・。　なら、ウチの交易船で行くといい。　丁度、北の大陸のフラストマド大王国に行く予定だ。　海賊などの為の護衛には、最高のメンバーだ。　歓迎するよ」

ウィリアムは、頷く。

「ええ、最後の甘えで乗らせて貰います」

「明日は、ゆっくりしてくれ。　ウチのクリスフィも、急に出て行かれるよりはいい」

オロスとウィリアムの目が、静かに握手していた。

それから、皆はそれぞれに勝手となった。

スティールは夜の街に消える。　ハンナと約束でもあるのだろう。

ウィリアムとロイムは、キャリーやオロスに次女のレイチェルと三女のルミアを交えて雑談に成り。

アクトルは、クリスフィに呼ばれて別になった。

深けて行く夜が明けて、次の日。

ウィリアムは、ルミアとレイチェルにせがまれて、ロイムと曇り空

の街に出た。　街では、アリネットの裁判が早くも号外の張り紙で知らされて、悪党達の処分に加えて、最近の街中に暴れる悪党達の一斉排除を行うなどの市政のニュースが書かれたり。　街の住人の反応が頗る良い。

だが、張り紙の裁判の欄にウィリアムの事は何一つ書かれていなかった。　当たり前だろうが、向こうから見てウィリアムは下の下と云う存在。　その意見を取り入れたと解れば権威は張れない。　だが、ウィリアムからすれば、そんな事はどうでもいい。　犯人逮捕、悪党団の身柄確保の手柄にチーム名が絡めば御の字である。

「おっ、ウィリアム。　チーム作って直ぐにご活躍たぁ～流石だね～」

知り合いの店先からは、こんな声で呼び止められる。

ウィリアムは、ロイムを見せて。

「ウチには、大魔法遣いがいますからね」

と。

ロイムは、もう顔を真っ赤かにして、

「ぼぼぼぼ・・・僕はただのおおおお・・・」

だが、店先のオヤジやおかみさんは、ロイムを見て。

「はぁー、見かけに依らないね～。　ウィリアムのチームに大魔法遣い様がねぇ～」

と、真顔。

ロイムは、もうルミアやレイチェルにまで担がれて、大恥を掻いた気分であった。

だが、ロイムが一つ解った事は、どの人もウィリアムに深くは何も聞かない事だ。　街中で大人が立ち止まっていて、アリネットの事やチェルナーの事を囁くのに。　ウィリアムには、深くは何も聞かずに、”良かった”、“これで安心だね”としか言わない。　別れが明日と聞いても、淋しがるが・・・返って来るのは“疲れたら戻って来い”、“落ち着くなら島に戻って”とだけだ。　何か、こう信頼のような雰囲気が漂う。

ロイムは、ウィリアムの事が解ったような・・・解らなくなったような変な感覚で見ていた。

その夜も、スティールは戻らず。　アクトルとクリスフィは殆ど部屋から出て来なかった。

男と女の事だ。　他人には、関係の無い話になる。

一日は、瞬く瞳の如く、笑って話してあっという間に過ぎた。

そして、旅立つ日の朝だ。　朝靄が薄くかかり。　雲は幾分取れて、青空の方が目立つ。

アクトルが、早朝からオロスの屋敷内部の中庭でオロスと話をしている。　もう、アクトルの出で立ちは旅支度であり。　オロスは私服のままだ。

「アクトルさん、娘の事。　忘れないで下さい」

オロスは、朝露に濡れる池の蓮の葉を見下ろす。

アクトルも、蓮の葉を見ていながら。

「戻ります。　冒険が終わったら、ウィリアムの首根っこ捕まえて」

オロスは、微笑み頷いた。

「頼もしいな。　君は苦労してる分だけいい男だ。　私もキャリーも、決して嫌いでは無い。　それだけだ」

「有難うございます」

中庭を見る、木陰の石の柱の影にウィリアムとロイム。　二人も、もう旅支度は完了していた。　オロスの船は、早朝に出る。　だから、まだキャリーも娘達も起きては居なかった。

アクトルが外で待とうと、店と屋敷の間の大庭園に来れば。　ウィリアムとロイムが噴水の前で立っていた。　見つけて、近寄り。

「行こうか」

ウィリアムは、アクトルを見て。

「心残りは、置き去りですよ」

と、笑えば。

「無い。　もう、無い」

と、アクトルも笑う。

三人で店の外に出れば、夜明けの赤い太陽が建物の屋根に光るのが見えていて。　大通りの港へ行く道とぶつかっている所に、スティールが立っていた。　脇には、ハンナが居る様だが。　スティールがウィリアム達を確認すると、ハンナは離れてスラムの方に行く。

ウィリアムは、大通りに出ながら。

「ウチのチームは、恋多きチームだな～」

と、笑い。

「スケベだよね」

ロイムは、真顔で言う。

港に向かい、見送りに来ていたモルビットとフォレストに挨拶して。　木造大型貨物船に乗り込んだ一向。　高みから見下ろすウィリアムは、街を見て。

（もう・・・帰らない・・・。　母さん、婆ちゃん、サヨナラ・・・）

今日は朝から風が優しく、たおやかだった。　街から・・・島から離れるウィリアム達の頬を撫でる風。　何か、扉が開く感じがした・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーウィリアム編旅立ち・完ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次回から、前編ポリア・後編を“K”の特別編に移ります。

ウィリアム編のセカンドシーズン予告

［北の大陸の港に着いたウィリアム一行。　だが・・・降り立って瞬く間に港で起こる大事件。　スティールが、借金二十万シフォンをこさえてしまうのだった・・・。　借金王スティールの責任をチームとして背負うウィリアム達・・・。　スティール君は必要か？　暗雲・不運に取り憑かれるウィリアムは、危機を脱出出来るのだろうか・・・。　ウィリアム編次号！！　「借金王は捨てようか？」　その内、掲載］

ｓｅｃｏｎｄ１２、死刑を超えて・・・旅立ち（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

・・・ウィリアム編一部終わりです＾＾

ウィリアム達のチーム結成話が・・・こんなに長くなるとは＾＾；

整理しないでやると、１，５倍は長い話ではありましたが。　色々、後で書こうとはしょりました＾＾

では、次回はポリア達の特別編を送ります。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編

特別編：在りのままに、素のままに、赴くままに。

春の終わりの風が吹く王都マルタン。　ホーチト王国最大の都市である。　交易都市、商業都市、王都と三つの顔が合わさったマルタンは、人・物・金が集まる。　港には、大小何百と云う交易船や旅客船が停泊している。　活気在る船着場では、積み込み・積み下ろしの荷物が船乗りによって行われており。　船乗りの男達の声が飛び交う。

また、乗り降りする客の数も生半可なものでは無い。　優雅なドレスに日傘を差す貴婦人と正装した家族達や、マントに荷物を背負う旅人。　船上の縁、又は港で荷物を気にする男などは商人であろうか。　他に目を移すせば、弓を背負った皮の胸当てを付ける女性や、背中に金糸で神々を刺繍する神官らしき人物なども。　冒険者達と推察出来る。

一日で、多い日は十万人は利用する港。　都市に住む人の人口は五百万を超えているのに、その人々を養う営みが動いているのだ。

さて、この街に衝撃が走ったのは二日前。　三つのチームが合同編成して、北西にある魔の森や呪われた山に分け入り。　行方不明に成っていた有名な冒険者チームを救出して来た事。

そう・・・ポリア達の事だ。

包帯男“K”の指揮下で、見事に行方不明に成った死に掛けのチームを救出して戻ったのである。

“K”編でその活躍は解ると思うので深くは書かないが。　戻った三チームはバラバラに成って皆がそれぞれの新たな道に進んだ。ポリアのチーム、“ホール・グラス”（砂時計）には、ヘルダー・ゲイラー・ダグラスと三人の新たな加入をして、七人という集団に成った。

その新始動の幕開けは、一つの知らせからだ。

ポリア達は、もう駆け出しのチームとは違う流れに突入したのだ。

　そう、羽ばたく・・・空へ駆け上がる流れに飲まれてゆく・・・・。

1、続きの基点は二日後。

都市内の港から、海風が吹き込む近場に大きな宿屋がある。　港のまん前に建てられた石の建物で、十三階建ての白い外壁。“ホテル・シーサイド”。　店名は在り来たりだが、雰囲気には合っていた。

その、共同リビングのある一階の受付に、白いマントを背に流す美女がチェックアウトの手続きをしていた。

白銀製の上半身鎧の胸には百合の花が描かれている。　切れ長い瞳、瑞々しい白い肌。　赤い唇・・・顔は凛々しく。　美しさが逆っているような雰囲気を受ける。　白く銀色の長い髪は、やや上向いたポニーテールに結い上げられて。　黒く長いリボンで、結った先から伸びる髪を螺旋の巻いて一本の帯状にしてあった。　真紅の柄の剣は長剣で、白銀製の業物だ。　その辺で売られる安物とは見てくれが違う。　スリットがきつく腰近くにまで切れる前後ろに長いスカートは白い。　スラリとした背丈は百七十センチは超えており、なんとも美しき若娘かと見惚れてしまいそうだ。

そう、この美女がポリア。　隣の国の公爵家に生まれ、領家の男性との結婚を決められた事に納得行かずに家を飛び出した。　今は、冒険者として生きる事を決めている。

金を払ったポリアを、ホテルの出入り口で見ている六人の男女。

ゆる～いウエーブの掛かった黒髪は、流れる水の様にその美女の身体を纏う。　やや細め開きの目、程よく高い鼻。　薄めの唇は魅惑的で、白い肌は白浜の様だ。　白いドレスは肩空き、背中開きの露出の多い物。　純白のステッキを持つ右手、緩やかに下ろす左手には服の色に合わせた婦人用の手袋を腕までしていた。　右肩だけに掛ける青いマントは気取っていても嫌らしさでは無く、様になる。

ポリアより気持ち背の高い、大人びた魅惑の美女はマルヴェリータ。　魔想魔術師で、その潜在する魔力は折り紙が付く。

一方、マルヴェリータやポリアとは違う、ほ～んわかした可愛らしい少女の様な女性が、システィアナ。　背中には、穏やかで優しげな羽を持つ女性の神を刺繍した厚手のローブという全身服を纏っている。　木目の新しい木の杖は買ったばかりのようだ。　見た目、十五・六の少女の様だが、年齢はポリアと変わらない。　優しい心

を持つ、慈愛・博愛の女神“フィリアーナ”を信仰する僧侶である。

入り口で、マルヴェリータと反対の壁際に立っている男は長い“戟”と呼ぶ刃を持った長槍を片手にする。　ポリアより頭一つ・・いやもう少し低い背の中年の色黒い男で、名はイルガ。　ポリアの幼い頃から御付の従者で。　冒険者に成ったポリアを守る為に着いて来た。　元々、若い頃に冒険者をやっていた過去があり。　ポリアは、イルガの冒険者の頃の話から憧れて冒険者に成った事に責任を感じているのだ。

イルガの後ろに立つのがヘルダー。　ヘルダーは、手にも腰にも武器らしい物を持っていなかった。　耳が隠れる程の髪に、細い眼。　口は開かないし、のっぺりとした顔をした細身の男。　これが、ヘルダーの印象である。　服は、腰に前後の前掛けが付いている繋ぎのような黒い全身服で、厚手の物だ。　胸には、鋼鉄の細い鎖を編んだ軽量の鎧だけ着ている。　彼の武器は、自分自身。　拳・蹴りに加えて素早い動きと様々な体術。　格闘技に秀でた、珍しいタイプの戦士であると言えよう。　そして、格闘術にて扱う鋼鉄の扇子。　腰の後ろに隠されて居るが、その切れ味は恐ろしい。　このヘルダーは、オシ・・・つまりは口が利けないのだ。　だが、その戦力は、ゲイラーと双璧である。

扉の外に出て待っている男二人のうち、スラリとした若い男がダグラス。　グレーがかった髪は長く眼を隠すほどで、見開かれた眼は柔らかいが身のこなしはしっかりした剣士である。　ポリアと同じサイズの中型剣（長剣）を左に佩いている。　皮の軽量鎧を膝まで身に着けて、なかなかの顔立ちの整った好青年である。　剣の腕は、ポリアと互角か少し上だ。

もう一人。　筋肉隆々にして、高い背丈。　背中の大剣は大人の人

間を一刀両断してしまいそうな感じだ。　黒い上半身鎧は壁のようで、見てからに戦う為だけに生まれてきたような男。　それが、ゲイラー。　短い髪、厳つく面長な顔、太い眉と大きく見開かれた瞳。　肩がぶつかっても、彼にはケンカは売りたくないと思える。　背中の大剣を使わせたらかなりの剣士だが。　システィアナに惚れる純粋な大男でもあった。

この七名が、今や一つのチームとして、新たな冒険に挑む事になる。

ポリアは、マルヴェリータに近づくと。

「さて、どうしようか」

と、連れ立って外に出て行く。　脇にはシスティアナ・イルガ・ヘルダーが着いて、外に出てダグラス・ゲイラーと合流して港の慌しい広場に出た。

ゲイラーは、野太いしゃがれた声で。

「なんか仕事探してみるか？」

街の中心に向かって歩き始めたポリア達。　旅人・旅客・運ばれる荷物などに気を付けながらポリアは。

「う～ん。　斡旋所（ギルド）行って見ようかと思ってる。　ただ、良いの無ければ街を出てもいいかな～って」

ダグラスは、イイ匂いの果物が運ばれる木箱など見ながら。

「それも一つかも。　あの包帯男（リーダー）様の御蔭で、な～んとなく遣り難

い感じだし。　違う土地でやってみるのも一つだぜ」

ダグラスの話は、皆の心に在る思い。　包帯男“K”のインパクトは強すぎた。　未だに、思い出てくるあの戦いぶり・・・。　理解出来ないくらいの強さは、神レベルだと思う。　あまりの圧倒的な強さに、自分達を何と考えて良いか・・・。

だが、ポリアは少しづつその強さに近づきたくもなって来ていた。

（ケイ・・・本当に・・強く成ったらまた逢える？）

別れの手紙に綴られた言葉が・・・心に熱く蘇る。

システィアナは、のろ～んとした口調で。

「お～しごと～、お～しごと～」

その言葉に反応したゲイラーは、突然に真顔に成り。

「うむ、働こう！！」

マルヴェリータは、ゲイラーのシスティアナへの陶酔にアホを見る気がする。

（なら、そこに在る荷物でも運べば・・・荷物持ちに丁度いいかしら・・・）

と、ゲイラーを見て思ったりした。

ポリア達は、太い大通りを途中から曲がった。　商店の並ぶ通りで、

飲食店と専門商店だらけの路並みは、朝も遅くの今では、買い物客の歩行者天国だ。　若い男女、子連れ、家族連れなどが露店に集まっていたり。　冒険者達が武器屋から出入りしていたり。　大いに活気が溢れていた。

暖かな日差しに明るくなる道を、西に歩いてい行くと暫く（しばら）。　曲がり角の海側に建物が途切れ。　落下・転落防止の石の低い手摺りを兼ねた壁が見えて、青い海と港が一望できる。

その景色を前にした石畳道路を挟んだ向かいに、黒い趣ある大きな館がドッシリと居座っていた。【蒼海の天窓】と名づけられた館で。　冒険者達に仕事を斡旋する紹介所である。　古い昔に定められた掟に則り、世界の主要都市や大きな町にはこう云った斡旋所がある。

ポリアは、館を見て。

「うは～、ケイと別れてから一昨日来たばっかりなのに・・・。な～んだか凄い前に来た気分だわ」

自分で呆れてしまう感覚。　今は、唯単にKが居ないというだけなのに、酷く昔の記憶に成った風なのはどうしてか。　戦うKの姿は、鮮明に覚えているのに・・・。

ポリアは、中に入るのが少しだけ躊躇われたが。

「おし、行こう」

と、動きを止めていた一同を率いる様に歩いた。

“チリンチリ～ン”

入り口のガラス扉を開けば、呼び鈴の涼やかな音が響く。　中に入ったポリアは、広く見渡せるフロアを見回しながら直進した。　部屋の中央には、仕事を請ける為の手続きをしたり、チーム結成の手続きをする円形のカウンターがあるのだ。

ポリアは、やはり右奥の“くの字”階段を上がるまでの腕があるとは過信はしない。　まず、下のカウンターで仕事の話を聞こうと思った。　入って来たドアの壁側は一面のガラス張りだが。　その他の壁には、様々な仕事が張り紙で張り出される。　人捜し、物探し、怪物退治、遺跡調査、色々と仕事は有るが。　そう何時でもドキドキするような仕事が満載とはいかない。　この間まで、多い仕事は作物の苗植えや、害虫駆除などだ。　今に成って、このチームで駆け出しの仕事もどうかと思う。　だから、聞くのだ。

中央のカウンターに行けば、バンダナを締めた若く目つきの鋭い男が、皮のチョッキに青いズボン姿で立っていた。

「おはよう」

ポリアが、目が合ったので声掛けると・・・。

（おいおい、アレ・・・。　ポリアのチームだぜ）

（スゲ～、ゲイラーとダグラスがいるよ）

（まさか、色仕掛けで加え込んだとか？）

（この前の仕事の成功って、本当かな～）

（ま～な～、ポリアだもんなぁ。　多分、ゲイラーやダグラスやフェレックの御蔭じゃないかぁ～）

壁に貼られた仕事の張り紙を見ていた冒険者達が、ジロジロと振り返って噂話をし出す。

ポリアは、ゲイラーやダグラスに聞いては居たが。　Kの御影で三回目のこの状態にも、まだ慣れる気にはなれない。　やはり、自分の身の上に降り掛かる事態で味わうと、この嫌味ったらしいヒソヒソ感は気持ち悪いものが有った。

（うう・・・なんか・・・嫌味ったらしい視線が・・）

と、ポリアはマルヴェリータに。

（ほっとけばいいわ。　羨むだけの者に、ケイとの仕事は勤まらなかったわ。　ま、それだけの事したのよ）

ゲイラー・ダグラス・ヘルダーの三人は、先にこの道を通ってる所為か。　気にもしていない顔で喋ったりしている。

カウンターの前に、ポリア達が到着すると。　バンダナをした男は右後ろに指を向けた。

「ポリア、聞いていたのか。　もう馬車来てる。　向こうから上に上がって、マスターの話を聞いてくれ」

「・・・」

ポリア達は、何のことかサッパリ解らずにポカ～ンとしてしまった。
仲間達と見合ったりして、沈黙を流す。　カウンター内のバンダナ男も、黙って見返してくるので。　ポリアは、困惑の顔で。
「あ～・・のね、話なんて知らないんだけど・・・、何で・・・上？」
マルヴェリータも。
「聞いてるって・・何？」
バンダナ男が、今度はポカ～ンとして。
「あ？　・・・ジョイス様の・・・使い、い・・・行かなかったか？」
イルガは、直ぐに。
「何？　ジョイス様が上に居られると？」
「いや・・・何か話有るみたいでさ。　アンタ等に使いを出したってさ・・・」
ポリア達は、皆で見合ってしまう。
其処に。
「お～い、こっちだ～」

二階から男の低い大声が。　広間に居る皆が声の方に顔を向ければ、大男で固太りの主人が居る。　この館の主人で、元は名うても冒険者チームに居た男である。　可愛い一人娘のオリビアの為に、Kに前回の大仕事を頼んだのは記憶に新しいだろう。

ポリアは、大男のマスターを見上げて。

「声・・・デカ・・・・」

呆れたマルヴェリータは。

「一昨日あれだけ泣いたのに・・・もう元気そうね」

ダグラスは腕組みして。

「なんか・・・減った体重がもう戻ってないか？　爆食してるんとちがうか？」

同意の頷きのヘルダー。

ゲイラーは、元気なマスターの姿に。

（アイツも山に連れて行けば良かったか・・・）

と、思ってみたりして。

さて、ポリア達が向かう二階は、上級というかハイレベルな仕事を請ける所で、駆け出しの冒険者達では決して拝めない場所だ。　ゲイラーやダグラスなども、この二階に上がれるのは一年に一度くらいだった。　なのに、Kと関わってから頻繁だ。　何か、感覚がお

かしくなる。

二階に上がると。　黒い漆塗りのテーブルが並び。　柵付きのバーカウンターが二階の北側正面に見えて、下の一階とは雰囲気の違う場に成り変わる。

剥げ頭の熊みたいな主人は、血色の良い顔を見せて。

「おう、良く来た。　使いに会ったか？」

ポリアは、首を左右に。

「ううん。　今来て、下で聞いたわ」

頷く主人は。

「そうか、解った。　とにかく、先に話す。　ジョイス様が昼過ぎに屋敷に来てくれと。　何でも、ガロンって男の行方が解ったとさ。　他、色々と報告有るから来て欲しいと」

ポリア・マルヴェリータ・システィアナ・イルガの顔が、“ガロン”の名前に一瞬で引き締まった。　Kと最初の仕事で、影の悪党の一人である。　我儘な町史代理をしていたラキームに入れ知恵していた元冒険者だ。　あの二人の悪辣さは、忘れたくとも忘れられない。

ポリアは、主人に一礼した。

「マスターありがとう」

「おいおい、礼を言うのはこっちさ。　娘と・・・孫の命のな。さ、送ってやるよ。　館の裏手に馬車を呼んでおいた。　使え」

頷くポリアは、手間を省く為にと。

「マスター、ちょっと聞いていい？」

「ン？」

「今、なんか仕事有る？」

すると、主人の顔が少しキリッとして。

「いや～。　今は、お前さん達に回せる仕事は無いなぁ。　良ければ、北のスタムストに行ってみな。　向こうでは、仕事が炙れてるって噂だぜ」

ポリアは、笑った。

「情報、ありがとう」

主人も笑う。

「恩も有るし。　この情報も〝ロ・ハ〟でいい。　お前達以外なら、金取るがな。　アハハハ～」

マルヴェリータは、苦笑して。

「ガメツイわね」

ポリアは、主人に別れを告げる。

「じゃ、ジョイス様に会ったら、後はそのまま北に行くわ。　また、帰ってきたらお願いね」

「へっ、ヘマして帰って来るなよ。　名前挙げて帰って来い」

ポリアは、爽やかに頷くだけ。

皆が、主人に一言出して行く。　ヘルダーは、お辞儀一つだった。

ポリア達は、主人の用意した黒い車体の馬車に乗って、ホーチト王国宮廷魔術師総師団長と云う肩書きの学者男であるジョイスに会いに行った。　ジョイスは、世界でも五指に入ると謳われる大魔法遣いだ。　特に、魔想魔術の真髄である幻覚・幻惑魔術に優れた天才。　元の駆け出しの頃は、あのKに扱かれた一人で。　Kの事をそれなりに知る、今の所唯一の人物の一人だ。

マルタンの都の東部は、行政の中心地。　軍事施設から、役所や、政治の会議なども行われる建物が区画整理された土地に整理整頓された様に建ち並ぶ。　だが、東部の左右に外れた土地には、役人や重要人物達の住まいも広がる。　その中には、通称“ゴミ屋敷”とKが呼んだジョイスの屋敷もある。

ゲイラーは、馬車の中でダグラスと“ゴミ屋敷”との話に“言い過ぎだろう”と笑っていた。　だが、ポリア達元からの事実を知るメンバーは、目を瞑って黙った。

（大声は出さない・・・大声は出さない・・）

ポリアは、今から覚悟しようと心に誓う。

さて、昼頃にジョイスの屋敷に到着した。　ジョイスの屋敷には、先客が居た様で。　馬車から降りた一行は、庭先で話すジョイスを見た。　今日は、頭がボサボサしておらず、六：四ぐらいに分けられた髪は柔らかく、珍しい細い伊達眼鏡をし、総師団長の証である金糸で龍の絵が刺繍された純白の礼服姿に成っている。

ポリアは、少し驚いて。

「あら、まっとも～」

マルヴァリータは、やや嬉しそうに。

「ステキだわ・・・」

ゲイラーは、優雅なドレス姿の貴婦人と軍服姿の黒尽くめの中年男を交えて話すジョイスを見てから、ダグラスを見て。

「ジョイス様を見るのは三回目だが、・・ゴミ屋敷の主に見えるか？」

ダグラスはフリフリと首・手を動かし。

「見えん見えん見えん・・・」

と。

ポリアは、庭の入り口に立ち止まると。　姿を少し見せて待つ。

ヘルダーが、ポリアの肩を叩き。

「ん？」

と、ポリアが向くと、ジョイスに指を指すヘルダー。

ポリアは、ヘルダーを微笑見て。

「これは、先客がお庭に居る場合の礼儀ある待ち方なの。　屋敷ならば、玄関前で静かに道を空けて待つのよ」

ヘルダーは、喋れないながらに関心して納得の顔。

ダグラスは、目を丸くして。

「ほ～。　ポリアって、礼儀のアレコレ知ってるんだ・・・。　何か、貴族みたいだな」

事実を知るマルヴェリータ・イルガ・システィアナは、目を閉ざして首を動かさない。　だが、内心は・・・。

（そのまんま～）

ポリアは、苦笑である。　多分、自分の実家に皆を連れて行ったらどんな顔をされるだろうか解らない。

さて。　ジョイスは、お客を連れ立ってポリアの方に歩いてきた。

近づいて、話が聞こえて来る。

「ジョイス殿、どうかご考慮頂きたい。　わが娘とて、何処に出し

ても恥ずかしくない娘に育てたつもり。　一度は、ご面談を」

ジョイスは、笑って。

「私は貧しい平民出です。　高貴なお宅のお嬢様とはとてもとても。それに、私は、いずれ冒険者に戻ります。　今の地位は、王の願いで受けた、一時の留まり宿としての暫定的なものです。　どうか、もっと相応しい方をお選び下さいませ」

ポリアは、マルヴェリータと見合った。

そう、ジョイスの見合いの話であった。

このジョイス、今まで数多くの縁談を蹴って来た変わり者でもある。

今日も、縁談を申し込まれたのだろう。

ポリア達の前で、やんわりと相手を追い返した。

先客の馬車が行き・・。　ジョイスはポリアとマルヴェリータを見て。

「やあ、来てくれたね」

優しい知的なお兄さんと云った印象のジョイスだが、顔の整いは良い。　確かに、熱を上げる女性が居て然るべきだ。

「呼ばれましたので」

と、言うポリアの後ろで、ガチンガチンに緊張しているゲイラーとダグラスとヘルダー。

「どどどどど・・どうも・・・おま・御招き・・・アリガ・・とう・・ゴザイマス」

途中から片言に成るゲイラーの左右で、礼ばかりするヘルダーとダグラス。　何せ、肩書き以上に、世界最高の魔術師をの謳い文句も、緊張に繋がる。

「あはははは・・・」

面白い三人の顔に笑うジョイスだが。　ゲイラーを見てやや真剣な面持ちに変わり。

「う～ん・・・マズイかな～」

ゲイラーは、何か失礼が有ったと思って、驚いて土下座しそうになるのだが・・。

ポリアが、先んじて

「ジョイス様、外でもいいです・・・。　ゴミの津波・・・要らない・・・」

と、難しい顔に成って言えば。

「あはははは・・・やっぱり・・・はぁ～」

と、ジョイスはげんなりした・・。　やはり、ゲイラーの体格は、ジョイスのゴミ屋敷には企画的に合わないらしい。

外のテーブルと椅子にジョイスは皆を案内する。　森に囲まれたジョイスの屋敷だが、庭も有る。　芝生が青々と生い茂る庭先。

ゲイラー・ダグラス・ヘルダーは、家の中にカップやお湯を取りに行くジョイスが出入りする玄関先で、道を開けながら家の中を覗いて固まった。

「はいはい～、通るよ～」

と、出てくるジョイスを避けるゲイラーは、玄関前でドアの様な動きをしてゴミ屋敷たる様相に度胆を抜かれた思いである。　実は・・・ゲイラーは、凄く片付けられる男なのだ。

（あ・・・有り得ない・・・こんな家・・・）

ゲイラーは、卒倒しそうだった。　母親に片付けを厳しく躾けられたゲイラーには、・・・この家は・・・イケない場所と感じた。

さて、紅茶で一服する一同。　白いテーブル・椅子にジョイスを中心に囲み、芝生の上の麗らかな昼間だ。

ジョイスは、ポリアやマルヴェリータを見て。

「まず、お礼を言うよ。　オガートの街での事。　本来なら、役人が調査しなければならない事だからね。　しかも、友人のサーウェルスも救って貰ったし」

ポリアは、首を左右に。

「いいえ・・・それはもう。　それより・・・どう・・なるんです

？　ラキームと・・・アクレイ様は？」

ジョイスは、紅茶を一啜りしてから。

「うん。　実は、ラキームのお父さん・・・国王陛下の腹違いの弟さんになられる町史様は、病気だから解任される。　ラキームの悪事が知れてしまって、自殺未遂をしてしまったが。　命は取り留めた。　今日、国王様が自身で引き取ると仰せに成った」

ポリア達は黙った。

特にポリアは、生じ公爵と云う王族に序列に居るだけに他人事と思えない。

それから、ジョイスは続けて。

「ラキームも、助からない・・・」

ポリアは、クォシカの事を思うと。

「当然よ・・・、刑を受けないと・・・」

頷くイルガやマルヴェリータだが・・。

ジョイスは、やや沈んだ声で繋ぐ。

「いや・・。　それが、ラキームは死んだ」

「え　？」

ポリアが驚く。　驚くのは、皆一緒だ。

ジョイスは、真顔になり。

「事態を聞いた町史殿が、自らの剣で・・・ラキームを斬った。
そして、自決した。　ラキームの悲鳴が先で、町史殿の一命に間に合った。　駆けつけるのにね」

やはり・・・と、ポリアは思った。　話に聞くラキームの父親は、高潔な人物なのだろうと。　息子の悪事に、指を拱(こまね)いて見ていられる性格では無かったのだ。

イルガは、俯いて。

「やはり、そうゆう御仁であったか・・。　一度、挨拶してみたかった」

沈黙が流れる。　風が海側からそよいで、紅茶の沸き立つ香りを連れ去って行く。

ジョイスは、頃合いを見て。

「んで、ガロンなんだけどね・・」

ポリアは、真剣な顔で。

「ケイに捕まったんですか?」

「・・・」

聞かれて、ジョイスは黙った。　皆を見るジョイスの顔には、一種の躊躇いに似た曇りというか、陰りが見える。

皆がジョイスを見つめる。

ジョイスは、紅茶を飲んでカップをテーブルに置く。　その時間が、酷くゆっくりに感じられた。

「結論から言って、ガロンは西の国境都市で死んだ」

ポリア・マルヴェリータ・システィアナ・イルガは、下に俯く。

ゲイラーは、恐る恐る。

「ケイの・・リーダーの仕業ですか？」

ジョイスは、深く一つ頷く。

「リーダー以外に考えられない・・・。　その場に、あの世界最高の冒険者チームのスカイスクレーバーの面々が居たとか」

「ええッ？！！」

一同が声を上げた。　チーム“スカイスクレーバー”（摩天楼）は、世界で今一番の有名なチームだ。　リーダーのアルベルトは、世界最強の呼び声高い美男剣士である。

ジョイスは、背凭れに頭を転がし足を組んで。

「その彼等のリーダーである天才剣士のアルベルトさんがこう言っ

たとさ」

“この男を殺った相手は、化け物か天才だ”

「とね」

黙る一同の中で、ゲイラーが。

「どんな感じだった・・・んです？」

と、探るように聞けば。

「かなり痛めつけた痕が有ったらしいが。　止めは斬られた首だってさ。　完全に切断されていた。　恐らく、状態を見るにガロンは相手と・・・、リーダーと戦った・・・。　だが、腰の骨を砕き折られて座った様に成った所で、首を刎ねられた・・・。　しかし、その斬られた首は、全くズレずにくっ付いているかのように有ったらしい。　斬る速さがもう玄人の手練ですら無いから、全てが繋がったままのように在り続けて・・・だって」

ダグラスは、有り得ない斬られ方に思わず声が出る。

「マジ・・ですか？　血も・・・出てないとか？」

「うん。　朝、役人とアルベルトさんが見つけて、生きていると思って揺さぶったら首が落ちたらしい。　普通、斬ったら血が飛沫を上げて噴出す・・。　なのに、傷口は鮮やか、斬った痕に血が内部で溢れて固まって、繋がった様な状態に在った。　しかも、斬られて少しガロンは生きていたらしい。　そうゆう風に・・・リーダーが斬ったんだ。　生きて・・・死に向かって薄らぐように。　動け

ば、ガロンも首が落ちると解ったから、動けなかった。　やっぱり、リーダーは悪魔と神の間の人だ・・・。　普通じゃ無さ過ぎる」

聞いてる全員・・話すジョイスですら背中に戦慄を覚えて冷や汗が出る。

「あの時・・・本当に言ったんだ・・・」

ポリアは、顔を両手で摩りながら言う。

マルヴェリータも、横を向いて。

「そうね・・。　あのラキームに会いに行った時、別れ間際にケイはガロンに何か言ってたってポリアが言ったけど。　死の呪いの言葉を残したのね。　普通に捕まって死んだ方が、ずっと怖くなくて良かったでしょうにね・・・。　逃げるからだわ」

ポリアは、Kの言動からそう推察していたのだが。　今に思えば、Kは明らかに何か言ったのだろう。

“逃げるなと言ったのに・・”

Kが、ガロンの逃亡を知ってそう呟いた気がする。

ダグラスは、鳥肌の立つ腕を撫でながら。

「やっぱ、あの山ン中でモンスター共を震えさせただけある。　悪党一人殺すのも化け物じみてる・・・。　ケンカしないで良かった」

すると、ポリアは俯いて涙ぐむ。

「違うわ。　ケイ・・・多分・・・クォシカの事・・・」

マルヴェリータも、同調する。

「そうね。　好きだった・・・・。　ううん、クォシカは、一瞬でケイを愛した。　たった太陽の傾きすら僅かな時の間で、ケイを一瞬で愛した。　ケイも・・・応えてあげたかったのかな・・。　だから、全ての償いに変えて・・・そんな行為を」

あの、助けられたクォシカの顔の安らかだった事。　今でも、目を閉じれば浮ぶ光景だ。

ポリアは、ジョイスを見返して。

「教えて下さってありがとうございます。　これで、心置きなくスタムスト自治国に行けます。　感謝いたします」

と、頭を下げた。

ジョイスは、ポリアを見て。

「えっ・・・移動するの？」

顔を上げたポリアは、ジョイスを見て涙目のままに笑うと。

「ハイ。　仕事薄い（少ないの意）みたいなので、北に一時移動してみようかと」

ジョイスは、“ポン”と手を叩いて。

「うわ、丁度いい。　僕も行く」

全員の動きが、ピタリと止まった。

涙を零す程に眼を見開いたポリアは、内心で。

（え？　・・・・今・・・・何と？）

2、ジョイスとぼ～けんに行きましょう（泣き）

ポリアは、呆れを通り越して。　げんなりする。

「そうなんです。　でね・・・ケイたっら・・・・」

馬車の中、もう夕暮れだが。　ポリア達は、大きい車体の国用の馬車に乗っていた。　横では、マルヴェリータとジョイスとシスティアナにゲイラーなどが加わって雑談している。

（なんで・・・なんで一緒に・・・）

そう。　ジョイスは、ポリア達チームに願いが有ると言うので北に向かうのに同行して来た。　北の町のオガートまで馬車で行く事に・・・。

今、もう一向はマルタンを馬車で出て。　オガートの町に向かう街道の上だ。　新緑が夕日に染まる林、草原などを抜ける整備された街道の上を馬車で走っている。

（やっぱ、ケイの友達よね・・・。　微妙に強引なんだわ・・・）

ジョイスは、一緒に行くと決めて、わざわざ国に登城して言ってきたとか。　宮廷魔術師の一師団十人前後のお供と共に、こうしてオガートに向かっている。　ポリア達を運ぶ馬車の前後には、その師団に属する魔術師が馬車に乗り込んで護衛じみた様相で同行していた。

黒い向かい合う馬車の中のシートは柔らかく座り心地良い。　流石に客人用の馬車だ。　ゲイラーやダグラスを乗せても狭い感じがしなかった。　が、ポリアは、妙にジョイスとマルヴェリータが馴れ馴れしくしているのが煩い。　ジョイスも、あれだけ婚約を破棄して居るくせに、マルヴェリータにはどうも対応が緩い

（デキてるんと違います？）

と言いたいぐらい。

だが、話の中でマルヴェリータはポリアの心中も理解してか。

「ところでジョイス様、一つお聞きしても宜しいでしょうか」

ジョイスは、“ジェスチャーサイン”（手話）でヘルダーと会話して後に。

「ん?、何?　何でもどうぞ～」

と、笑う。

「ハイ、どうして私達と一緒に?」

「うん。　実は、王命でアデオロシュの居城の調査を言われてね。君達が北に向かうと云うから、道案内を頼もうとさ」

ポリアは、パッとマルヴェリータと向き合う。

ジョイスは、二つのメモリアルジュエルを懐から取り出して。　Kの持っていた物だからとポリアに渡した。

「ハイ、リーダーの残し物」

ポリアは、システィアナとマルヴェリータに一つづつ渡す。

ジョイスはそれを見ていながら。

「いや～、リーダーの見ているみんなを見たら、冒険したくなってさぁ～。　モンスターにゾロゾロ魔術師だけが戦うのもつまんなぁ～いし・・。　お近づきに一緒にってね」

ゲイラーは思うに、もう“グランディス・レイブン”のサーウェルス達も怪我から復帰している頃だから。

「俺達でいいのですか？　サーウェルス達も復帰していますが・・・」

ジョイスが、メモリアルジュエルを指差して。

「リーダーのご指名付き」

ポリアは、また・・更に驚いた。

「ケイ・・が？」

ジョイスは、マルヴェリータを見て。

「リーダーは、ポリアさんとかマルヴェリータの事を買ってたよ。駆り出せる事件になら駆り出せってさ～。　もう、そのジュエルの記憶は消してあるから、自由につかってねェん」

ジョイス自身も、どうやらポリア達には余所行きの姿では無くなって来ている。

（ケイ・・・）

ポリアが俯く。　Kの事が、また心の中に溢れる。

マルヴェリータは、ポリアに覗き込んで。

「試験出されたみたいね」

ポリアは、薄く笑って目配せした。

夜、街道に設置された夜営をする広場が有る。　国が街道を警備する巡回兵の休憩場なのだが。　オガートまでは、全五カ所ある。
その最も手前の夜営地広場にポリア達の一行は泊まって休む事に。
建物としての宿泊施設は役人専用だが。　その周りの煉瓦敷きの広場には冒険者や旅人も泊まっていいのだ。
さて、ポリア達は冒険者なので、外に出て休むのだが・・・。
魔術師師団の数人が、二階造りの簡素な施設の入り口でジョイスを説得している。
焚き火を起こして、食事のポリア達は知らん顔で休憩していた。
「だ～か～ら～、僕は元冒険者だよ。　外での夜営なんて当たり前なんだって。　僕の部屋になんて、君達が寝ればいいじゃないか～。　外も中も変わらないって～」
「ジョイス様っ。　今は師団長としての地位か御座いますっ」
喧々諤々の水掛け論に発展している口論。　ジョイスは、ポリア達と冒険者気取りで行きたいらしい。
「アホよね」
ポリアは、アホ臭い事だと知らん振り。
「う～ん・・・。　どっちが正しいやら・・・なぁ？」
と、ゲイラーはダグラスに振る。

「おおっ・俺に解るかって～の」

と、困るダグラスの横で、ヘルダーが合掌している。

マルヴェリータは、ジョイスの考えを尊重したいらしく。

「元々冒険者で慣れてるんだから、外でもいいのにね。　役人は頭固いわぁ～」

その横で・・・、ワインを飲んで酔っ払っているシスティアナが、ワインの酒瓶抱えて。

「いいじょ～いいじょ～もっとやれ～。　外でも中でも寝たらいいでしゅ～ゴロンゴロンしちゃえばいいですぅ～」

イルガは、一気に高いもらい物のワインを飲まれて困る。

「システィ、返してくれ。　呑み過ぎだ」

システィアナは、涙浮かべた笑い顔でイルガの背中をバシバシ叩いて。

「細かく言わなくていいでしょ～、オジサンも呑め～呑んで忘れちゃおぅ～」

「痛いいてて・・システィ・・コラ・・」

システィアナは、時々酔うと悪酔いする。

ダグラス・ヘルダー・ゲイラーは、ポッカ～ンと豪快な口調のシスティアナに呆気に取られる。

ダグラスは小声でゲイラーに。

（女神さんは、酒癖悪いな）

しかし・・・。

「いいな～、背中ぶたれたい・・」

ポツリと漏らすゲイラーに、ダグラスはゴロンと横に成って。

「だめだ～この人～」

ヘルダーは、少し距離を離した・・・。　意味深に・・・。

星が綺麗に輝く夜空の下。　夜更けには、ポリアのチームに偉大（？）な魔法遣いが加わって大の字に大鼾で寝ている。

本来なら、野宿の時は一人づつ当番で警戒に起きるのが通例だ。だが、此処は警備の役人が居るので、見張りをしない一行だが。横向きに寝てるポリアは、目を瞑りながら・・・。

（鼾・・・ウッサイ・・・なあ・・・）

Kが、平気で彼の頭（ジョイス）を叩くのも解る気がして来たポリアだった。

さて、ポリア達は二日半掛けてオガートに向かった。　実は、オガートは町としては終着点に成る。　オガートから先の北に向かうに

は。　少し戻って、北に向かう街道に入らないと駄目だ。

ポリア達も、差し迫った用事も有る訳では無いので。　ジョイスの暇つぶしに付き合っている訳という所。

今、時期は春の終わり。　気候も安定し、寒くも無く。　過ごし易い。

オガートの町に入った馬車。　ホーチト国のエンブレム入りの大きい馬車だから、街中に入れば目立つ。　三台の馬車は、町の中央にある広場の右手にある警備隊詰め所に着けられた。

ジョイスは、ポリア達を連れて直ぐに下りた。　其処に、魔術師達の男女が急いでくるが、定例行動は遣らせてもらえない。

本当ならば、まずは詰め所の隊長を呼び出し、敬礼待機させた上で、

“王室魔術師総師団長ジョイス様の御成り！！！”

と、部下の一人が言ってからジョイスが下りるのだが。　ジョイスはこの形式辞令が嫌いなのだ。

さて、ジョイスはポリア達を連れると。　部下達に向かって。

「では、明日に手筈通りに戻って貰います。　いいですね、王に送り届ける重要任務ですから。　シッカリと」

十人の魔術師達のうち、四人がジョイスに一礼して杖を胸に当てて敬礼した。

ポリアは、途中で聞いていた。　ジョイスの目的の一つは、王家の血筋を引くアデオロシュの居城の調査。　そして、もう一つは、ラキームの父親の搬送である。　実は、ポリア達を乗せた大きい馬車の真の目的も其処にある。

町の住民や商人が、田舎には珍しい馬車と、物々しい魔術師達の一団が降りてきたのに噂して集まり出す。

「どなただ？」

其処に、騒がしい外を見に来たあの優しい巨漢と云う印象の警備隊長が出てきた。

「あ・・お前達・・」

見覚え新しいポリア達を見つけて驚く警備隊長。

「どうも・・・来ちゃった」

ポリア達は、少し苦笑い。

そこに、ジョイスも参戦する。　白い総師団長の礼服姿なのに、警備隊長に深深と礼をして。

「こんにちわ、来ちゃいました。　王室魔術師団の総師団長のジョイスです」

その場の全ての人も馬も止まった。

ポリアは、顔を抑えて横を向く。

（お前が、“来ちゃった”言うな・・・）

警備隊長は、一瞬なにがなんだか飲み込めなかったが・・・。

「あ・・・王宮・・・からのお・御遣い・・・で？」

ジョイスは、ニッコリして。

「ハイ、色々用がありまして。　お話有りますので、何処かでお話出来ませんか？」

警備隊長の顔・・身体が・・・ワナワナと震え出す。

午前の青空に、

「スミマセンでしたあああッ！！！！」

警備隊長の悲鳴じみた声が・・・・響く。

ポリアは、本気で思った。

（叩きたい・・・ペシって・・・・・。　ケイ、やっていい？）

恐らく、Kがその場に居たら・・・了承していたかもしれない。

ポリア達にジョイスを含めた八人は、警備隊詰め所の奥の応接室に案内されていた。

石造りの詰め所の中で、シッカリしたソファーとティーテーブルな

どと云う気の利いた物がある唯一の部屋だ。　王国のエンブレムの旗と、持て成す最低限の食器などがある戸棚しかない青い壁・床の部屋。

「誠に申し訳有りませんでした」

警備隊長は、日陰前の窓を開け放つ。

ジョイスは、困った顔である。

「いえ～、急に来ましたので御気に為さらずに。　いや～、オガートは久しぶりですが。　マルタンよりまだ気温が低くて爽やかですねぇ。　これから益々暖かくなって、農業にはいい時期になりますな」

気さくな話題に、警備隊長はコーヒーを入れる。

「ハイ、今年も豊作を願って皆畑仕事に出ております」

ジョイス・マルヴェリータ・ポリアは、コーヒーの香りに気付いた。

ジョイスが、お湯に挽いたコーヒー豆を入れてコーヒーを造るのを見て。

「コーヒーですか。　珍しい・・・」

ポリアとマルヴェリータも、見合って驚きの顔だ。

恐縮する警備隊長は、全員分のカップに注ぎながら。

「実は、一昨年の貯蔵の残りです。　こんな時にでしか出せませんが・・・。　どうぞ」

コーヒーの産地である西の大陸が、王族・地方部族などを巻き込んで泥沼の内戦に突入して三十年。　コーヒー豆が急騰して、今では一部の金持ちだけの嗜好品となる。　豆一つの価格が、今や金と匹敵しそうなのだ。

運ばれたコーヒーに、ジョイスは頷いた。

「久しく口にしていないです。　頂きます」

ソファーに座るのは、ポリア・ジョイス・マルヴェリータの三人。
ゲイラーやイルガなどはコーヒーを受け取って窓に行ったり。
観葉植物の鉢植えの傍に居たり。

一人掛けの椅子に座った隊長に、ジョイスは今回の来た事の次第を伝えた。

隊長は、アクレイを心配していたから、安心した。

「アクレイ様は・・・ラキーム様の事で嘆きの底に・・・。　よろしく、お願いいたします」

「ええ、王も深く心配されてますので、そちらは大丈夫だと思います。　ただ、次の町史が決定するまでは、代理の方を派遣します。
ですから、町の警備や農業の監督は、貴方にお願いしていきます。
地主の方々にも、協力を願っておきますので、どうか力を合わせて頑張ってください」

隊長は、ジョイスがこう言うのに驚いて。

「はっ・ハッ！　今まで通りに頑張らせて頂きます」

ジョイスは、カップを置いて。

「アクレイ様の後任ですが・・・。　今回の一連の事件を踏まえても、商業・農業を私物化しない人物の人選を念押しで王に頼みました。　もし、今後。　ラキームの様な・・若しくは過去に戻るような政策をする町史が現れた場合。　秘かに国に遣いを出して下さい。　私が居るのなら私に直に面会を求めて構いません。　クォシカと云う女性、ラキームを注意して殺害された方の二の舞を出さない為にも」

ジョイスの顔は、真面目である。　やはり、ヘラヘラしているようで、その下には正義を隠してるジョイス。

（なるほど・・・ケイが信用する訳だわ）

ポリアは、ジョイスの姿に消えたKの姿が少しダブって見える。

他に皆も、静かに話しを聞いていた。

ジョイスは、アデオロシュの居城を視察するので数日町に滞在して行くが、気遣いの無用と、相談の遠慮の無用だけは言って置いた。

さて・・・。

町には、寺院の方に公的施設の宿泊所が有る。　警備隊長と握手して別れたジョイスは、魔術師達をそっちにやって、自分はポリア達

と宿に泊まると言う。

ポリアは、疲れてゲンナリしている魔術師達を横目に、ジョイスに小声で言う。

（あの～・・・、少しは向こうの方々を困らせるの止めた方が・・・）

ジョイスは、ポリアを見て噴水のある公園広場にて。

「嫌だぁ～、“美人の湯”に僕も入りたいし。　クォシカさんの絵とか見たい〜い～」

真面目な顔で、駄々っ子の様な事を抜かす大魔法遣い。

ポリアの右手が、ピクリと動いた。

（ケイじゃない・・・私はケイじゃない・・・抑えて・・・抑えて・・・・）

やはり、形式に束縛されてなんぼの公務だ。　あまり自由奔放なのもどうか・・。　ジョイスは、自分から宿の方に歩き出して。

「宿は、確か～あっちだね。　五年前に泊まったんだよ～。　みんなで綺麗になろ～さぁ～」

ジョイスは、学者気質が強く。　好奇心の赴くままに行動するタイプとKが言っていたが。　正しくそのまんま。

（ケイが世話焼かされたのも・・・理解できるのアタシだけ?）

ポリアは、ジョイスにKとは違う意味で困惑と・・・頭叩きたい衝動に駆られるのでる。

昼過ぎ。

「こんにちわ~。　宿をお借りしたいんですが」

ジョイスが、あの前に厄介に成った老いた女将の営む宿に来た。
ポリア達は、変わらない表の庭の風景を楽しみながら後を着いて来る。

「はいよ。　いらっしゃい」

あのラキームにすら堂々と口を利いた細身の老婆が、紺色の前掛けに手ぬぐいを姉さん被りして食堂から出てきた。　顔は、前より老けて苦虫を噛み潰したような顔に成っている。

まず、老女将はジョイスだけ見た。

「お客さん、随分身なりいいね。　で？　一人かい？」

ジョイスは笑顔で。

「いえいえ~、八人です。　男五人に女性三人」

老女将は、大人数だから。

「男女分けるとし・・」

相部屋かどうかを聞こうとした時、ポリア達が目に入った。

「あらっ！　あ・アンタ達・・・この前の・・」

ポリアなどKと一緒だった四人は、この老女将に頭を下げた。

マルヴェリータが、先に。

「チョット事情有って、また来ちゃった」

と、苦笑い。

ポリアも。

「美人の湯に浸かりに来たの」

すると、老女将の顔が笑顔に成った。

「いらっしゃい、歓迎するよ」

さて。　ジョイスは・・・。

「いいじゃないか～、同じチームだしょ。　相部屋、相部屋～」

男五人は、相部屋と勝手に決められた。　ポリア達やゲイラーなども、やはり同じ部屋はどうかと躊躇したが。　ジョイスは、もう同じチーム仲間に成っている。　我儘炸裂させて、ポリアがグッと手を挙げ掛けるまでに。

何時だろうか・・・。　ポリアが、Kの後を受け継ぐ日は・・・。

三階の五人部屋、四階の三人部屋にそれぞれ割り当てられた。
部屋に案内されたポリア達。　小麦が黄金に色づく時期のクォシカの絵が飾られた部屋だった。
ポリアは、窓側の壁に三つ並ぶベットの真ん中に寄って荷物を下に置きながら。
「う〜、ジョイス様って、なんか甘えてない？」
と、不満顔。
微笑むマルヴェリータは、荷物を置きながら。
「多分、そうよ・・・。　ケイが居なくなって、冒険者として同じ目線で話せる相手居ないから・・。　もう少し、楽しみたいのよ。　子供みたいでカワイイ」
ポリアは、窓を開けて風を入れながら。
「幾つですか〜？　マルタ、ジョイス様の事好きなら結婚したら」
マルヴェリータ、ベットに座って。
「向こうがオーケーなら、構わないケド・・・」
と、ポリアを見て微笑む。　あの作り笑いしかしなかったマルヴェリータが・・・。　今は、素の微笑みを浮かべている。

ポリアは、あの男嫌いだったマルヴェリータが、笑って言うなんてに驚いた。

「マルタ・・マジ？」

マルヴェリータは、少し俯いて淋しく。

「ケイ・・・見てたら。　男も悪く無いかな～って思って。　別に・・ケイじゃなくて、好きになれそうな誰か・・・なら・・・。　でも、無理ね。　ジョイス様は、冒険者としての友達が欲しいのかも。　でも・・・私は好き・・・かな」

「ヒュ～ヒュ～、マルタしゃんやります～。　アタ～ック、アタ～ックです～」

システィアマが、蟹歩きのように横移動しながら騒ぐ。

ポリア、同い年のシスティアナの姿にゲンナリ。

（アンタ・・・歳を考えて・・・）

だが、ポリアには、マルヴェリータの心境が解らなくも無かった。

ベットに座り。

「マルタも羨ましかった？　ケイとクォシカさんの姿・・。　オリビアの姿・・・」

マルヴェリータは、窓の外に枝を生やす葉桜の木を見て。

「羨ましいっていうか・・・なんて云うか・・・。　誰か、信じれ

る人を愛してみたく成った・・・のかな。　・・・うん。　ケイに出会ってから、男の人を見る目・・・少し変わったのかも」

ポリア・マルヴェリータは、二人して黙る。

廊下には、女性達を呼びに来ていたイルガが立っていた。

四十過ぎた苦労人のイルガの顔が、静かに笑っていた。　意地張って、弱みも無い様に振舞うポリアとマルヴェリータは、過去から男性に好意を持てずに居た。　だが、Kとの冒険で人の心を様々に垣間見て、心が成長したのだ。

（礼を言いたいが・・・居らん。　憎い男よ・・・）

包帯を巻いたあの男の顔が、皆の心に焼き付いていた。

ポリア特別編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

作ったポリア編を勢いで突貫徹夜で仕上がってしまいました＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編2

特別編2：ケイの軌跡

3、残された人

ポリア達は、昼下がりに廊下を下りて食堂に向かった。　お腹が減ったのだ。　イルガに呼ばれて下りて来た時、食堂に曲がるゲイラーの背中が見える。

「ゲイラーだわ」

マルヴェリータが、呟く。

ポリアは、Kを思い出しながら食堂に入った。

（変わってないわ・・・当たり前ね）

たった二十日前後しか経っていないのだから当たり前だろう。　そう、あの食堂の景色は変わらずに在った。　昼時ながら、客が出払っているのか他の旅人は全く居ない。　奥の大きいテーブルに男達が座っている。

前菜の野菜と生ハムにチーズのサラダを運んで来た老女将は、丁度来たポリアに。

「下りて来たね。　あの憎たらしい包帯男が居ないとは寂しいねぇ」

ポリアは、静かに頷く。

マルヴェリータは、ゲイラーとジョイスの間の腰を降ろしながら。

「やっぱり、そうかも・・。　冒険者って、以外に寂しいのかもね」

と、サラダを置く女将に言った。

ゲイラーは、水を飲んでからサラダを見て。

「おいしそうだな～。　なんか、野菜が生き生きしてら」

ダグラスは、早速とばかりに皿に取りながら。

「移動の食事は偏るが・・。　こうゆうの見ると俄然食い気出る。うまそ」

ジョイスは、ポリアとマルヴェリータを見て。

「さ、頂こうか。　リーダーも味の保障してた野菜を。　宮廷料理って、堅苦しいからこうゆうのがいいよね～」

ポリアは、自分でサラダを取り出しながら。

「ジョイス様、今日はどうするんです？」

バリバリ野菜を噛むジョイスは。

「うん・・むぐ・・きょ・・・これから・・・ん・・・アクレイ氏に会う。　同行して」

イルガは、フォークの動きを止めて。

「我々・・・も？」

「うん。　アクレイ氏は、ラキームの悪事を暴いて、政府に事を預けた冒険者、・・・つまりK（リーダー）や君達にたいそう敬意してありがたがっていたとか・・・。　多分、感情的に成らずに、正しい裁きに導いた事に感謝したんだろうね。　今は死にたがっているらしいけど、説得しないといけないから。　着いてきてくれると助かる」

ポリアは、仲間と見合う。　何せ、もう手が離れている事なのだ。

だが、ジョイスは、美味しい野菜をまた受け皿に盛りながら。

「ま、リーダーの代わりに来てよ。　本当なら、説得にリーダーを同行させようかな～って思ってたら。　サーウェルス達の捜索事件起きてそれ処じゃ無くなっちゃったし」

ポリアは、Kを連れてくるはずだったと聞き前のめりで。

「えっ？　ケイが来るはずだったって・・・最初から？」

頷くジョイスは、野菜を口に運ぶ前に。

「リーダー言ってたでしょ？　僕達が早く動かないとマズイ展開に成る・・・って。　ここまで想定してたから、リーダーは成り行きを見守っていようとしてたのさ。　ま、君達にサーウェルス達の一件で見せたくない力まで見せたから、面倒でゲタを預けて消えたんだと思う」

マルヴェリータは、食べる事を忘れて。

「ポリア・・・ケイ・・全部予期してたのね。　多分、アクレイ様が自決しそうな事も」

ポリアは、オガートから戻った直後にジョイスと会って、Kがその事を仄めかした事を思い出して。　パッと思う。　まさかと思って、ポリアは聞く。

「ジョイス様、あの時に解っていて、自決を許してしまったのは・・・もしかして？」

「うん・・先に派遣した・・・役人の・ふてじ・・不手際だよ」

そう、解っていたのだ。　ジョイスもその事はよくよく言って行かせたのだろうが。　やはり、注意し切れなかったのだ。

皆が、黙る。

口を空にしたジョイスは。

「役人の人って、どうも人の心情を慮るのに疎いよ。　ラキームを確保して言えって言ったのに・・・。　言って軟禁しておこうとしただけって・・・、そりゃオヤジさんにラキームも助け求めるわな

～。　アクレイ様も息子の悪たれには愛想尽かすだろうし・・・、普通ああなるって想像出来ないかね。　リーダーに知られたら、僕がブン殴られる」

ポリアは、少しジョイスがいい加減だと思った・・・。　他人行儀な静かな言い方になって。

「そう言えば、良く助かりましたね。　アクレイ様」

水を飲むジョイスは頷き。

「うん。　運が良かった。　リーダーが、どうせアクレイ氏を移動する事になるなら、医者を同行させろって言ってたから。　王宮司祭様から一人シスターお借りして同行させてたのさ。　今に思えば、そこまでリーダーは読んでたのかも」

ポリアは、俯いて。

「はぁ～・・・。　オリビア達の事が有ったから・・・こう言うのも変だけだど・・・。　ケイと後処理までやれば良かった・・・。　ラキームを正しく罰せられたかも」

「お嬢様・・・」

イルガは、ポリアの心情が良く解ったので心苦しい。

マルヴェリータは、野菜を弄りながら。

「多分・・・アクレイ様の生まれがネックだったのよ。　ラキームも一応は王族になるし、多分、逮捕して監禁するのに躊躇いが・・・

」

ジョイスは、フォークをマルヴェリータに向けて。

「ご名答。　僕が、全部監督役人にだけ話したのが悪かった。　躊躇して、アクレイ様の命に従ってしまったんだと。　全く、血や階級に縛られない為に専用の役職に就いてるのにね。　僕は、流石に怒って怒鳴ろうかと思ってる。　監督役人に直々に行けとも言ったのに、部下を遣わせるし」

ジョイスは、やんわりとだが。　漸(ようや)く心を語った。

アクトルは、話を聞いていて感じるままに。

「あの～・・若しかして・・・ケイ・・リーダーが指名してたとか？　ポリアの事・・・」

全員が、ゲイラーを見る。

ジョイスは、ゲイラーからポリアに目を移動して。

「メモリアルジュエルに、最後にこう言ってた」

“ジョイス、ガロンが逃げた以上役人もパニックになるだろうな。
もし、どんな事が起こっても、始末だけは付けなくてはいけない。
万が一に、お前が出張るなら、ポリアも連れて行け。　町の人も、役人には協力を避けても、あの時のメンバーなら大丈夫かもしれん。
大丈夫、ポリア達は相手の心もちゃんと考える。　もし、アクレイ氏が云う事聞かないなら、ポリアにラキームと事件の全てを語らせてやれ。　お前が行くより効果あるかもよ”

「だって・・・」

皆、ジョイスの話を聞いてから、ポリアを見る。

「・・・」

俯くポリアは、何故か呆れ笑い顔だ。

「勝手な人・・・。　でも、最後まで見ろって事ね・・・。　包帯巻いた・・・バ～カ男・・・」

ポリアは、そう言ってサラダを食べ始めた。

マルヴェリータも、スッと笑んで。

「ホントね。　後始末任せるなんて・・・ケイにしたらマヌケよね。　でも、ご指名受けたらやるしかないわ。　ケイにね」

ポリアは、うんうん頷いて。

「ま、ね。　大金貰っちゃったし。　アホみたいに凄い経験させられたし。　ま、いいわ」

ポリアは、そう締めくくった。

システィアナは、バリバリ野菜を食べ始めながら。

「ケイさんのお願いごと～。　がんばりますぅ～」

と、笑顔。

ダグラスにしろ、ゲイラーにしろ、ず～っと見て来たイルガにしろ。
　ポリアやマルヴェリータやシスティアナの顔が、少しだけ大人びたのは確実に感じた。　Kに会う前の三人、特にポリアとマルヴェリータの言うセリフでは無かった。

ダグラスは、内心に。

（なんか・・・と～おくから一気に走り抜かされた感じすんな・・・。　結局、ポリアのリーダーとしての能力を見抜いてたのK（リーダー）じゃんか・・・）

どんどん運ばれてくる料理に向かう一同。　老女将とポリア達の話が進んで。

「あら～。　アクレイ様は、都にお戻りになるのかい？　寂しくなるね・・・益々」

老女将が、テーブルの上の不要な皿を別の机に退けて、料理の盛った皿を置きながら言うのだ。

「うん。　アクレイ様の親族が都に居るんだって」

と、ポリア。

「あら。　それならいいわ。　もう奥様も、ラキームの死とクォシカの死で倒れちゃったのよ。　それなら、その方がいいかもねぇ～・・・」

この町の人にとって、アクレイは英雄だ。　ラキームが馬鹿でも、一応の教育をしていたから親の責任とも言いずらい。　ラキームが体の悪い親の目を盗んでやっていた事に不満があるが。　まだ町の人々の生活が落ちていないから、皆は親子を分けて考えているのだ。

しかし、犠牲は大きい。　人二人は確実にラキームの所為で死んでいるのだから。

食後、老女将に挨拶をして宿から出た。

ジョイスは、歩きながらの散歩の様に町を抜けて行こうと言う。

（馬車・・・使えよ・・）

ポリアは、町の公園前の大通りを右に曲がりつつ思う。

多分、全員が思った。

先頭のジョイスは、クルリと皆に向かった。

「いま・・・何か思った？　もしかして、“馬車使え”って思ったでしょ？」

全員が、町に顔を向けて喋る・・・。　ジョイスを無視だ。

（あぐ・・・無視か・・・。　僕って・・威厳な～い）

ジョイスは、ションボリ前を向いた。

だが・・。

あの、町の郊外で、ゾンビと二度に渡って戦った場所に来る。　野道に右の牧草地帯が広がり、左に林が有る場所まで来たら・・・、急にジョイスの顔がキリリと引き締まった。

「ちょっと、時間貰うよ」

ジョイスは、瞑目して精神を集中し始める。

いきなりの変化に、皆は草の香りが風に乗る野道で黙った。

（どう・・したの？）

と、ポリア。

（さぁ～、何かあるのかも）

マルヴェリータは、ジョイスを見ながら返す。

ジョイスは、少しして風に前髪を揺らされながら目を開く。

「やはり・・・。　リーダーの言う通りだ」

ゲイラーは、脇に行って。

「なんか・・あるのですか？」

ジョイスは、公孫樹の森を指差して。

「ヘイトスポットが出来てる・・・。　まだ、ゴーストを生み出す

温床が残ってるな～」

ポリアは、ジョイスの脇に出て。

「それって、ケイや私達が討ち洩らしたアンデットモンスターの事ですかっ?!!」

「いやいや、違うよ。　ヘイトスポットは。　怨念が長く留まっていた場所の近くに出来る自縛念温床っていう基点だよ」

「じ・・じばく?」

ポリアは、聞いた事が無い。

そこに、システィアナが。

「暗黒まほ～とかぁ～、死霊まほ～を掛けられた土地さんには～。　怨念の溜まり易い場所さんがあるんですぅ～。　そこは～、まほ～が解けても怨念が集まり易くて困ったチャンな場所になるんですぅ。　それが～ヘイト（憎む）スポットで～す」

マルヴェリータは、考える。

「つまり・・呪いの呪術は解けても・・・そのスポットが出来たらまたモンスターが生まれるって事?」

システィアナとジョイスは二人して胸を張り。

「そうだよ」

「そうです～」

と、肯定する。

ポリアは、二人を無視して。

「つまり、三百年続いた呪いは一筋縄ではいかないって事ね・・。
危険を取り除く為にも、なんとかしないと」

システィアナは、ポリアの脇に来て。

「そう～りょが居ればだいっじょっぶ」

と、再度胸を張る。

ポリアは、システィアナに向かって。

「じゃ、お願いね」

「は～い、そ～りょのたぁ～いせつなお仕事です～」

ジョイスは、完全に無視されげんなりした。

「僕も・・・解るのに・・・解るのに・・・」

マルヴェリータは、ジョイスの気落ちを宥める。

ポリアは、ワザとらしい様子をわき目から。

「早く、アクレイ様の所に行けば・・・」

「あ・・・そうだ」

ジョイスは、急に動き出す。

ポリアは、目を細めてジョイスの後を追う。

さて、ラキームとガロンにポリア達が最後に会った町史の家に続く道。　丘の上に向かってなだらかな桜並木の通りは、もう葉桜で殆ど花びらは見えなかった。　夕日に変わり行く太陽の日差しが、緑の葉っぱの隙間から注いで来る。　なんとも、哀愁の漂う並木道である。

立派な屋敷の前に来れば、屋敷の周りには役人の兵士らしき者が数名で巡回包囲しているのが見えた。

ジョイスが屋敷の前にやって来れば、兵士達が敬礼をする。　下級役人の方が、偉い地位の人を良く覚えている。

直ぐにドアが開かれて、観察役人が待機しているあのラキームに話を聞いた応接室に入ると・・。

「誰だ？　今頃」

と、中年の感じの悪い狐のような顔をした男が、何とラキームが座っていたあの机を前にした席でぞんざいというか、横柄と云うべきか、いい加減そうな態度で座っていた。

「まぁ・・」

マルヴェリータは、その態度に呆れた声を出す。

ポリアや他の皆も、感じが悪過ぎてムッとする。

すると・・。　ジョイスは、案内して来た役人に。

「君、この女性達をアクレイ様の部屋に案内してくれたまえ。　私は、少し彼に話がある」

「え？」

ポリアは、いきなりの事に驚いたが・・。

「おい、お前誰だ？」

観察官の中年男は、ジョイスの事を知らないらしい。

ジョイスも、ニコニコ顔が消えていた。

「向こうに説明頼むよ」

ジョイスの真顔に、ポリアは声も出ず。　頷くだけだった・・・。

（怒ってるぅぅ）

ダグラスが小声で言う。

ヘルダーは、瞑目して合掌した。

ジョイスを残して扉が閉まった。　ポリア達を二階に役人が案内し

ようと階段に導いた時。

「貴様っ！！！　何の為に私の命を王命で聞いてきたぁっ！！！！！」

いきなり湧き上がるジョイスの怒声に。

「うわっ」

役人を含めて驚いた。

ポリアは、ドアの向こうから男の謝る声が響く中で。

「お・・怒ると怖いわね・・・。　ケイに似てるわ・・」

マルヴェリータも、今別れるまでとのギャップに少し驚いた。

「やっぱり、それなりに怒ってたのね・・。　私達に見せないだけで」

ジョイスの怒声を背中に受けて、役人の案内で、一部木造の館内の台所前の入り口先にある階段を上って行った。　上がった前には、一本廊下が伸びていた。　案内されるままに連れて行かれると行き止まりに青いドアが。

「こちらです。　中には、見守り役のクラン様がいらっしゃいますので」

ポリアは、仕方なく頷き。

「解ったわ。　ありがとう」

と、役人と入れ替わってドアを開いた。　中に入って行くと・・・。

（この人が・・・）

ポリア達は、あのラキームの父親であるアクレイ氏に対面したのだ・・。

木の床、簡素な間取りの広い部屋に、窓側のベットが置かれた上にその男性は寝ていた。

「彼方方は・・・誰？」

声を掛けてくるのは、その男性の枕元に椅子を置いて座る初老の礼服を着た痩せ型の女性だ。　顔を見る限り、かなり憔悴した疲れ顔である。

ポリアは、ベットの足元に方に椅子を置いて座る白い僧侶特有のローブを纏う三十前後の大人びた女性を見て、“クラン”と呼ばれる相手を確認してから。　目を初老の女性に戻した。

「不躾の訪問、失礼致します。　私の名前は、ポリアと申します」

初老の女性と、恐らくはジョイスの使わした僧侶であろう女神官が、二人して見合ってからポリアを見た。

まず、ポリアは、女性神官に向かって。

「貴女が“クラン”さんですか？」

女性神官は、頭を無言で下げるシスティアナを見てからポリアを見る。

「ええ・・・私が、クランです」

ポリアは、一礼して。

「私達は、ジョイス様と一緒にこの町に来ました」

女性神官クランは、“ジョイス”の名前に驚いた。

「え？　ジョイス様が・・・この町に？」

「ええ・・。　今・・下で、監督者に・・・その・・叱責を・・・」

クランは、立ち上がり。

「彼方は・・・一体？　国の手の者とは思えませんね」

「ええ。　私達は、冒険者です。　チーム“ホールグラス”。　ラキーム氏の関わっていた事件を、仕事で請けた者です」

「まぁ・・・」

クランが声を上げた。

其処に、枕元の初老の女性も加わる。

「ああ・・・彼方方が、クォシカの遺体を見つけて・・町に現れた

モンスターを退治してくださった方達？」

ポリアは、頷いてから。

「失礼ですが・・アクレイ様の奥様でらっしゃいますか？」

「あ・は・ハイ。　失礼致しました。　私、妻のカテリナと申します」

ポリアは、もう頭髪が白く成る初老の女性を見て。

「実は・・・国王様がアクレイ様の任を解しました。　身柄を、王都マルタンに移して欲しいとの事です。　どうか、ご用意をお願い致します」

アクレイ氏の妻のカテリナは、事情の飲み込めない事態に驚き、両手を口に。

「まあ・・・まさか・・主人にも裁きが？」

ポリアは、この言葉に。

（まさか・・・この人・・・知らないの？）

と、思った。

「あ・・あの～、ご存知に成らないのですか？」

ポリアが聞けば、

「え・・・」

カテリナは、クランと見合ってから。

「な・・何を?」

と、その時。

「客人・・・そこまで・・で・・・」

アクレイ氏が声を出した。

アクトル達も、皆が眠っていると思っていた弱って痩せこけた顔の男性を見る。

「アナタ・・・起きてらっしゃったの?」

カテリナが声を掛ければ。

長い顎鬚を流す温厚そうな面持ちで、面長の青い目をした男性が顔を妻に向けた。

「ああ・・今・・起きた。　カテリナ・・・少し・・席を外してくれないか」

「アナタ・・でも・・」

弱弱しい男性は、皺の多い顔をポリアに向け。

「この方と・・話がある。　我が息子の・・悪行を止めてくださっ

た・・方々だ。　どうか、話をさせておくれ」

アクレイ氏は、最初から起きていたようだ。

カテリナとクランは、心配そうにポリアを見る。

「お願い致します」

ポリアも頭を下げた。

・・・・。

夕方の涼やかな風が吹き込む窓を、マルヴェリータがそっと閉めた。

「風が冷たいですわ。　お体に障るといけません」

アクレイ氏の枕元の椅子に、ポリアだけが座った。

アクレイ氏は、ラキームと顔の感覚は似ているが。　温厚、知識的な面持ちの穏やかな男性だった。　だが、まだクォシカの親友であるシェラハの父親と歳の差は余り無いのに。　その顔の老い方は老人だ。　恐らく、苦労によるものだろう。

アクレイ（対等にする為、一時“氏”を省きます）は、ポリアを寝ながら見て。

「随分・・美しい方々ですな・・。　私が・・アクレイと申します。　息子・・ラキームめの・・馬鹿を正して頂き・・・感謝で・・一杯です・・。　本来なら・・体が悪くなければ、こ・この私が為さねば成らぬ事ながら・・・。　体の自由利かず・・誠に申し・・訳

ない・・次第。　厚く・・厚く・・お礼を・・」

と。

ポリアは、静かに。

「いいえ、私達は仕事で・・。　だた、ラキームの事は・・・早まりましたと思います。　人に被害が出て事件に成っているので。アクレイ様がお手を下すのは・・自分勝手に・・成ります」

アクレイは、目を瞑った。　頷き、震える体のままに。

「その通り・・。　我が身内の恥・・余りの汚らしさに・・怒りと恥辱に・・勝てませんなんだ。　すみません・・・」

ポリアは、アクレイの顔を覗き込んで。

「アクレイ様、その陳謝は・・・私にでは無く。　クォシカと・・法治を司る国王様に申されるべきです。　貴方の腹違いの御義兄様の国王様が、貴方様の身柄の引き取りを申し出されたそうです」

アクレイは、目を開いた。　涙の浮ぶ目だ。

「あ・・兄上が？」

ポリアは、頷く。

「ハイ。　馬車の中で聞きましたが・・、国王様も病気のアクレイ様を心配していたそうです。　何でも、一人この町の町史の候補がいらっしゃるとか・・・。　その方に、ご養生しながら任命の時ま

でのご教育を願っているそうです」

「な・・なんと・・。　だが・・町史を不在にするのも・・・」

「大丈夫です。　一時的に、地主の皆様と、警備隊長と、国からの臨時町史の三方で暫定統治にするとの事です」

アクレイの顔は、ホッとする顔だ。

「そ・・そうか。　警備隊長や地主の皆が協力すれば・・なんとか大丈夫だな・・」

ポリアは、アクレイを真摯な目で見て。

「アクレイ様。　今回の事件を解決したのは・・・。　今はチームに居ませんが。　“ケイ”と申します冒険者です。　そのケイが言っていましたが・・。　正しく後継者を造れないなら、駄目と一緒だと・・。　失礼ですが、今のお体では町史の任も儘ならないと思います。　それならば、ラキームの事に報いる為にも・・・。　王都に戻り、新しい町史候補の方を・・教育なさる任務が優先です。　この機会は、アクレイ様が町史として・・・悪政を壊した仕事の最後を締める責任に成るのでは？　どうか・・細かい事や自分の事だけに縛られないで下さい。　ラキームに死に追いやられた・・クォシカや、商人の男性の為にも」

「・・・」

アクレイは、ポリアに諭されて黙った。

ポリアは、やはりアクレイは、自分自身にも始末を付けるつもりが

在ったのだろうと確信していた。　放っておけば、いずれ隙を見てまた自分の命を・・。

其処に、ドアが開いて。

「王宮魔術師総師団長ジョイスと申します。　入室、失礼致します」

ジョイスの声がした。

ポリアは、席を立って入って来るジョイスを見る。

ジョイスは、一人だ。　ポリアの前に来て、瞑目しているアクレイを見る。

「ありがとう」

ジョイスが、ポリアを見て笑った。

ポリアと入れ替わりで椅子に座るジョイスは、アクレイ氏に言う。

「お初にお目に掛かります。　ジョイスと申します」

「アクレイです」

弱弱しい声ながら、アクレイ氏が挨拶を。

そして、ジョイスはいきなり驚くべき事を・・口にする。

「アクレイ様。　実は、貴方様の祖父に当たる内政大臣はご存知ですね？」

「ああ・・忘れたくても・・・忘れられない人だ・・。　特に、ラキームでまた思い出した」

「実は・・・あの方には二人娘が居まして。　長女が、貴方のお母様。　ですが、次女の方にも子供が居りました。　その子供は、貴方の従兄弟に成るのですが・・・。　数年前に死んだ祖父様に軟禁されておりましてね。　女性です」

アクレイは、女に汚い自分の祖父・・・。　Kの話していた、九十八歳まで生きて化け物を称された祖父の顔を思い出す。

「まっまさか・・まま・孫に・・・手を掛けたのか？」

「いえ。　ただ・・・その女性も、貴方と同じ気質だったようです。　何かと政治に闇から手を回す祖父を憎んで、結婚した身ながら訴えようとして・・・逆に・・・軟禁されたとか」

「な・・なんと・・・」

「その女性を助けたのは、後ろのポリアさんのチームに今は居ないですが。　ラキーム氏の悪事を暴いたケイと云う人です」

アクレイは、ポリアを見る。

ポリアも、知らない事に驚いた顔だ。

（ポリア・・）

（ケイ・・やっぱり・・五年前に関わった時から・・・深く知って

たんだわ）

マルヴェリータとポリアは、まだ裏が在ったと驚いた。

ジョイスは続けて。

「アクレイ様。　王は、その女性を保護し、未だに養っていらっしゃいます。　その女性の子供は、学者で未だ若く勉強中とか・・・。　その方を行く行くは町史になさりたいとのご意向なのです。　どうか、その若者に会って、良き手本になって頂けませんか？」

「罪人の親の私に・・・人を・・指導せよと？」

アクレイ氏は、グッと目を瞑る。

ジョイスは、笑顔で。

「過ちを知るからこそ言える事・・・出来る事・・・有るのでは？　貴方がこの町に出来る事は、まだ在ります。　どうか、町の農民の為にも」

アクレイの目から、一筋の涙が落ちた。

「ああ・・・天は私に・・・まだ死ぬなと云うのか・・・。　恥を忍んで・・・。　だが、町の為・・・不正を無くす為の後輩の指導とあらば・・・兄上の命とあらば、果たさねば成るまいな・・・。　ジョイス様、全て・・・お任せ致します」

Kは・・、何処まで読んでいたのか・・。　こうなる事も、予測していたのか。

ジョイスは、クランに全てを言って手筈をした。　そして、後を任せてポリア達と宿に戻るべく夜道を月明かりで戻る。

ジョイスにポリアが聞けば、その元内政大臣に軟禁されていた女性は正義感の強い女性で。　婿に来た内気な夫が、祖父から不正の手助けを言われて困り相談を受けた。　そして、自ら秘かに弾劾しようとして失敗。　軟禁されてしまう。　その救出に雇われたのが・・・Kなのだとか。

ポリアは、聞けば聞くほどに・・。

（まさか・・・その内政大臣のジジイを殺したの・・・ケイじゃない？）

と、疑いたくなる。

ジョイスは、笑って。

「その悪人ジジイって、病気で心臓止まって死んだらしいけどね。　死んでなかったら・・・リーダーにガロンみたくヤられてたかもねぇ～。　あははは～」

（笑って言うな・・・）

ゲイラー達は、ジョイスに内心に突っ込んだ。

ポリアは、呆れ顔で夜の闇の中。

「でも、あんな話有るなら私達要らなかったよ～な気がしますけど

ぉ～？」

と、横目に。

ジョイスは、曖昧な態度で。

「さあ～、どうでしょ～。　ま、ラキームの悪事を暴いたみんなには、アクレイ様も会いたがってたし。　悪くは無かったんじゃない？　現実、リーダーだと冷静な態度のキツイ言い方で迫るだろうな～と思う。　ポリアさん達の方が柔らかくていいんじゃ～ない」

だが、ジョイスと話し終わって入れ替わったアクレイ氏の奥さんとクランが、アクレイ氏の顔に感情が出てきた事に驚いていた。　多分、ポリアの話、ジョイスの話は悪く無い方向に向かわせたのだろうと思っている。

「ハア～。　なんか、凄い根の深い事件だわね・・」

ポリアは、ため息を吐いた。

マルヴェリータは、美しい夜月を見上げて。

「国政に一般人が参加してやっと貴族政治が薄らぎ始めてまだ時間が短いんじゃない？　ジョイス様みたいな方が王宮政府に加わる事も、よくよく考えると進歩なのかもね」

ジョイスは、マルヴェリータを見て。

「嬉しい事言ってくれますね～。　一応、これでも頑張ってるんですよぉぉ。　僕」

ポリアは、横の闇に向いて小声にて。

（見えん）

ゲイラーは、ダグラスやヘルダーに小声で。

（見えるか？）

二人は、左右に顔を避けて答えを逃げる。

ジョイスは、皆をみて。

「ああ～っ！！　信じて無いなぁ～っ！！　ホントだって、絶対頑張ってるって～」

ジョイスの訴えは戯言か・・・本当か。

今夜の夜空は、素晴らしく月が美しく。　夜は冷えた。

4、ヘイトスポットと、アデオロシュの居城

「じょ～かしちゃいます～」

良く晴れた朝も大分に過ぎた頃。　あの公孫樹の森に中に、ジョイスも含めたポリア達一行の姿が有った。

アデオロシュの居城に伸びていたであろう街道跡の荒れ果てた道の途中、川が流れる付近のくぼ地にシスティアナが聖水を撒いてレクイエムを唱える。

“ジュワっ”

何か焼けた物を水に浸けた様な音が暗がりの地面からして、黒い煙がモワ～っと浮き上がって消えた。

見ていたポリアは、もう四カ所目になる浄化を見て。

「黒い煙が人の苦悩する顔みたいでイヤね・・」

赤いドレスのマルヴェリータは、薄い白のガウンを羽織っている。

「ホントね。　でも、やっぱり凄い人の数が亡くなっているのね。
こんなにヘイトスポットが出来てるんですもの」

だが、この公孫樹の原生林に踏み込むのが二回目のポリア達と違い。
初めてのゲイラー達は、森も放置された街道にも興味が先行している。

「へぇ。　本当にこんな場所があるのか・・。　オガートなんて、温泉と食い物だけって思ってたから意外だ」

「マジだな～。　しっかし、こう考えると。　包帯男（リーダー）様の実力っておっそろしいよな～。　殆どなんでも知ってたんだもんなぁ。　ド

ンだけの知識力よ」

ダグラスは、Kの事が益々凄く思える。

ゲイラーも、自分ではどう逆立ちしても勝てる要素が全く無いので。

「だな～。　チームをあのリーダーが造ったら、半年要らないでスカイスクレーバーを超えるんじゃないか」

システィアナが、ポリア達とくぼ地から上がってきた。

ジョイスは、話しながら辺りを見る二人に。

「戦士は今回はヒマヒマだね～。　ま、モンスターが現れたら背中に隠れさせて貰うよ」

ヘルダーは、呆れた言い草にため息。

ポリアは、ジョイスに睨みを効かせて。

「世界五指に入る大魔法遣いが聞いて呆れるセリフ吐くのね」

ジョイスは、胸を張り。

「苦労はしたくありまてん」

ポリアは、目を細めて。

「何か・・・違う意味でケイに会いたいわ」

ジョイスは、Kの名前に嫌々しては頭を抱えて。

「うう・・・リーダーはコアイ・・・当分逢いたくないッス・・」

ゲイラーもダグラスも、少しジョイスに同情する。

さて、この日は居城には行かず。　周りのヘイトスポットの浄化に努めた。　Kとラキームの事件で来ていた時に会った寺院の女性僧侶も、ヘイトスポットを地道に浄化しようと試みていたらしい。だがら、寺院から水筒に入れた聖水がシスティアナの腰周りに何本も有った。

モンスターは出なかったが。　ゲイラーやダグラスなど男手で、倒れた樹木などを退けて。　密林状態の森の中などのヘイトスポットを浄化して回った。

今日で、大半を浄化。

次の日は、一日遅れで王都に発ったアクレイ氏家族を見送る。　地主達を集めて見送り、後は今後の協議をジョイスがシェラハなどを交えて話す。　その間に、システィアナと、寺院の女僧侶が二人掛かりで二手に分かれて公孫樹の森を浄化し回った。

四日目。　寺院の方から、荷馬車を運び込めそうな獣道の草刈りをジョイスは街人の協力で行い。　ポリア達は、地理に長けたシェラハとヘルダーの二手に分かれて、最後の浄化に繰り出した。　あのシェラハ、もう公孫樹の森の大体Kと歩いた範囲は完璧に覚えている。　方向音痴のポリアなどには、感心しか出ない。

「久しぶりっ、シェラハさん元気?」

「ポリアさん！！　お久しぶりっ！！」

やはり、女性は会うと話が弾む。　システィアナに着いて来たゲイラーは、自分の入り込めない女性のお喋りにはげんなりである。

シェラハは、Kが居なくなったのには気を落とす。　やはり、憧れに似た感覚が在るのだろう。

「ケイさん居なくなったんですね・・・。　ハァ～、クォシカ愛した人・・・、カッコ良かったのになぁ」

苦笑するポリアにマルヴェリータ。

ゲイラーは、自分の存在が消えそうだ。

（あのリーダーは・・・そりゃ～カッコいいだろ～よ）

と、納得しか出ない。

青いズボンに丈が長いワンピースのシェラハは、汗塗れになっても汚れても倒木を越えて、森の奥まで着いて来てくれた。

そして、五日目。　馬車を荒れた街道に通して、ポリア達とジョイス。　そして、六人の魔術師達はアデオロシュの居城に向かうのだが・・・。

さて、この日。　一同は向かう前に噴水公園に集まった。

王宮から来た魔術師達は、毎日汚れたりポリア達と動いていたジョ

イスに言う。

「ジョイス様、失礼しますが。　師団長として、そう動くのもどうかと・・。　雑務は、冒険者や町人。　警備役人に任せればいいと思います」

と、進言した。　基本的に、王宮の役職に就く人々はそうなのだが・・。

ジョイスは、魔術師達に言った。

「ほう・・。　任せる？　私は、冒険者時代は全て自分達でやった。　だから、感性も磨かれるし、人の苦労も解る。　どんな時に、どうすればいいかもな。　君達は、この数日勝手に過ごしていたが。　何をして来たのだ？　そして、これから何をする？　何をしなければ成らない？　解る者は居るか？」

魔術師の一人は在り来たりの様な事だと思い。

「それは、古い城に行って遺体の回収だと思いますが」

ジョイスは、俄に顔を怒らせた。

「馬鹿者っ！！」

と、怒鳴る。　見ていたポリアや、同行を申し出たシェラハなども見ている。

ジョイスは、更に続けて。　魔術師一同を見回しながら・・。

「この数日、怨念の蟠る場所を浄化していたのは何の為だっ！！！
町の人に手伝わせてまで草刈りをしたのは何の為だっ。　この町に、再びモンスターが現れない為にだ。　もし、居城にモンスターが現れれば、我々は命を賭して戦わなければ成らぬ身だぞっ」

と。

魔術師達は、ビシッと立ち直す。

「大体、人に全てやってもらおうなど間違っている。　皆と動いて、常に状態を確認しない輩に事態の察知や収拾などまともに出来るかっ！！。　やる気が無いなら結構。　優秀な冒険者達に手伝ってもらう。　だが、君達の成果は無し。　悪いが、遊びに来たんじゃ無い」

魔術師達は、急に慌てだす。　取り繕う言葉をジョイスに投げ掛ける。

だが、ジョイスは、魔術師達を黙らせて言った。

「私は常日頃、皆に言っていた筈だ。　言われるまで黙って動かない者に進歩は無いと。　そんな事で、将来の要職に就けるか」

見ているマルヴェリータは、呆れ顔。

「役人慣れよ。　だから、役人って嫌い。　あれと見合いさせられるこっちの身に成ってってお父様に良く言ったわ」

ポリアも、似たような境遇なのだ。

「アタシもど～かん。　やっぱり、こうゆう点じゃ～ケイは違うわ」

シェラハは、横向いて。

「比べないでください」

確かにダグラスなどは、全く動かない魔術師達に文句も言っていた。

ジョイスは、なるべく部下には率先した行動をして欲しくて。　態と言わない。　手伝いを申し出る者、見に来た者すら居ないのは、悲しい状況である。

町の人々も、魔術師達には呆れ顔だった。

さて、この日はやや雲の多い日。　一応の護衛で、警備隊長も部下四人を連れて同行する。　もう、地主達と警備隊長の連携は早く。　見回りに地主達が下男や奉公人を連れて見回るとか。

ジョイスは、警備隊の荷馬車の幌の掛かる中、荷台にて。

「は～。　ウチの部隊の新参は、何時に成ったら自分から動くやら」

と、嘆く。

マルヴェリータは、笑って励ます。

「心中お察し致します。　総師団長も大変ですね」

ゲイラ・ダグラスも。

「うんだうんだ」

イルガは、腕組みにて。

「若いクセして情けない。　我がお嬢様の爪の垢でも煎じて飲ませたいわい。　ま・・・無いがな」

ポリアは、イルガに笑って。

「最後までフォローが効いてるぅ」

システィアナは、頑張った自分なので。

「おしおきだ～おしおきだ～」

ジョイスは、真顔で。

「お仕置きか・・・。　何がいいか・・」

ポリアは、呆れて。

「マジで・・・考えるの？」

ジョイスは、シラ～っとした顔で。

「これが冒険者なら、飯が食えない事態かもしれましぇ～ん。　ちょっとぐらいは、ビシビシ行かないと」

マルヴェリータは、感心して。

「ですわ。　やはり、ケイに扱かれたジョイス様ですね」

ジョイスは、小窓の外を見てニヒルに変わり。

「フッ・・・、リーダーの扱きは、こんなもんじゃ～なかったです」

シェラハは、飲み込みが早いので。　小声で。

（よ・・酔ってる）

と、呆れ笑い。

皆、同じ。

システィアナは、笑って。

「ビッシビシ～、鞭とかでビッシビシ～」

一人笑わないポリア。　声を出して。

「見てる限り、も～少し扱かれて良かったのかもね～。　女性用のお風呂に突入したことあるとか・・・無いとか・・・ケイが言ってたわねぇ～」

「ゲホ！　ゲホゲホ！！　ンンッ！！！　誰の事だったかな・・・」

ジョイスは、焦り顔で繕う。

「へ～」

シェラハ・ゲイラー・ダグラス・ヘルダーに寺院の女性僧侶も合わさり。　ジョイスに白けた目を向けた。

（権威・・・失墜ね）

マルヴェリータは、苦笑してジョイスを見ていた。

さて、昼までまだまだと云う頃。　一同は、アデオロシュの居城手前の古くなった橋にまでやって来た。

ここからは、歩きで行くとジョイス。

もう、あの時のように暗雲は無く。　雲が流れる晴れ空。

だが。

ジョイスは、居城周りにて。

「フム。　まだまだ闇のエネルギーが僅かに膜を張るように残ってるね。　此処はもうアデオロシュが死んで闇の結界も消えてるから。　下級のモンスターも入り込める。　気を付けないと」

ポリアは、辺りを見回して。　鬱蒼とした木々の緑が栄える森林地帯を見回し。

「まだ、モンスター居るの？」

ジョイスは、先頭で歩き出しながら。

「いや、居るとは断言出来ない。　ただ、ボスが居なければ、流れ

てくる雑魚も威勢を張る。　モンスターにも色々いるが。　怪鳥などのモンスターは、こうゆう所好きだよ」

「か・・会長？」

ポリアは、一瞬別の人を思う。

マルヴェリータは、ポリアの目が点に成っているのに引いて。

「ポリア・・・怪鳥って・・・鳥のモンスターとかよ」

「あっ、・・・あああ・・・・そっ・そうか」

システィアナ、みんなの見える前にトコトコと走って。

「ポリア～って～お～ば～・・」

ポリアは、いきなりの全力ダッシュでシスティアナに寄った。

「まていっ！！」

システィアナの口を押さえたポリア。

「フゴ・・」

ポリアも、流石に怒鳴るのだけは大勢の人前なので我慢して。

「言うな・・・みなまで言うな」

解る仲間内では、引き攣った笑いが起こるが・・。

しかし・・・。　それを見ていたジョイスは、一人驚いた顔で。

「ハッ、これが・・・メモリアルジュエルで見た“ポリアのお馬鹿チャン”かっ！！！」

全員・・・、全ての時が止まった気がする。

そして、直後。

“バシィィィッ！！！！”

小気味良い音がして、木の上に止まっていた小鳥が飛んだ。

さて、一同は馬車を引いて居城に向かう。

「・・・・」

後頭部を抑えたジョイスの顔は涙目だ。

横を歩くイルガやマルヴェリータは、周りに恥ずかしくて顔が赤い。

ゲイラーなどは、笑い死にしそうなくらいに笑ってお腹が痛い様だ。

叩いた方は、手のひらをヒラヒラさせて。

「硬い頭ねぇ・・・。　流石はケイだわ、この石頭を平気で叩くなんて」

ジョイスは、泣き笑い顔で。

「鍛えられました・・アハハハ」

また、一同にドッと笑いが。

そして皆、あの神殿の間近にやって来た。

シェラハは、嘗てゴーストネスト（死霊の巣窟）と成っていた神殿城と森に挟まれたトンネル状になっている場所に来る。

「・・・なんだか・・・凄い・・昔の記憶みたいですね。　此処が、幽霊の一杯出た真っ暗な場所だったなんて嘘みたい」

木々から木漏れる日差しが、緑の葉っぱの下に薄い光を伸ばす。

ポリアは、此処を走り抜けて。　絡まれたゴーストを一瞬に切り倒すKの姿を思い出す。

「不思議よね。　有った出来事は遠い記憶みたいなのに・・・。　ケイのした事だけは、鮮明に思い出せる。　丸で・・・昨日の事の様に」

ジョイスは、ポリアとシェラハが先に歩いてトンネル状の木々の下を潜って行く中で。　自分も歩き出しながら。

「でも、リーダーは変わったよ・・。　前のリーダーなら、あのメモリアルジュエルの中の様な事はしない。　この辺で、ガロンとラキームを殺してモンスターの餌にしてたろうね。　全く、心境の変化って凄いよ」

ゲイラーやダグラスには、その話はビビリ物だ。

「餌・・・ね」

「おっかねえ」

馬車を引く警備隊長は、此処まで始めて来る。

「凄い建物だなぁ。　なんで、町から見えないんだ？　古代の知識とはこうも凄いのか？」

魔術師達も、高さ百メートルを由に越える高さのこの神殿城が、町から見えないなんて驚きだろう。

そして、一行は湖を見渡せる所へと。

システィアナは、湖を見て。

「なつかちぃ～ですぅ。　此処から悪霊サンとか～死霊サンが～、ワ～ラワラ出てきましたぁ～」

ポリアなど知る皆は、

「懐かしいかっ！！！　おぞましかったわっ！！！」

と、声を揃える。

だが、ゲイラーだけは。

「うんうん、いい思い出だ～。　矢鱈滅多にそんな体験は出来ない」

呆れるデカバカ男に、ジョイスも。

「だよね～。　記憶見ててハラハラしたよ～。　ハラスメントだった～」

と、同調。

ポリアは、言葉も言う気に成れず。

（ウルサイ。　お前の存在がハラスメントだわい）

ポリア、呆れて固まる警備隊長を引っ張り、神殿城の入り口まで案内した。

神殿城に、皆で調査のために早速入った。

Kの残した記憶から、アデオロシュ王の遺体は砂に成っているが、最上階に在ると解っていた。　妻の遺体は、最上階へ行く途中。他、上から警備兵士達と魔術師達が一緒に成って見回る事に。　まだ動く魔法陣床が在るから、手間は省けそうである。

だが。　ポリア・シェラハ・イルガ・システィアナ・マルヴェリータは・・・一階ロビーに残る黒いクォシカの“ラミア”と化した身体の消えた黒い跡を見ると・・・。

「ごめんなさいっ」

と、シェラハが顔を抑えて外に出た。

クォシカの姿は、最後は天使の様だった。　だが、その前はモンスター。　無理やり奪われた命は、もう戻らない・・。

ポリア達は、静かに遺体回収に散った。

さて。　ジョイスは、どうしても自分の目で確かめたい物が有った。
Kがクォシカの遺体を抱えて出てきた入って左の壁側の通路を行く。　程なく行けば、ラキームがラミアと化したクォシカより逃げようとして駆け上がった、二階に上がる階段が在るのだが・・。

（在った・・・）

暗い。　窓はず～っと先の壁側。　上に行く階段の裏手に、下に下りる階段が在った。

（リーダー・・・。　貴方は・・・やはり神に近いのか・・・）

ジョイスは、Kに渡されたメモリアルジュエルの記憶の中でも、クォシカを助けた場面より、アデオロシュと戦った場面より記憶に残る場所に下りた。

「魔想の力よ。　明るい光を・・」

ジョイスのステッキの先端。　丸い水晶の球体がある部分が俄に光りだした。　灯りの魔法だ。

螺旋状に下りた階段の下には。　広さ横に二十メートル、縦に二十半ばくらいの楕円の石壁、床、天井に怪物のオブジェばかりが目立つの間が在った。　間に入って直ぐの場所に、砕かれた石像が在る。
顔がコナゴナで、身体は人型のトカゲの様。　背中には、羽。

四メートルぐらいの長い尻尾。　これが、“ガーディアンレウス”。
悪魔の顔をしたゴーレムだ。　元が石、その強靭な硬さは並みの武器では逆に壊れる。

（・・・一撃だし）

ジョイスは、このモンスターをクォシカの遺体越しに見たKが、本気に成って一撃の元に頭を粉々にして壊したのを見ている。　ジョイスも負ける相手では無いが、Kの様には行かないだろう。

そして、最大のKがバケモノの証は、広間の中心に在った。

「あ・・・あああああ・・・・あ・・あ・・・・・」

ジョイスは、肉眼でその光景を確認して、思わずため息と驚きの声を混じえて漏らした。

杖の明かりに照らされて見えるのは、地面に書かれた魔方陣だ。
古い古い古代の暗黒象形文字を、幾重にも描く大小の円の中に刻み。
結界などの維持・創造に使う。　この魔方陣を壊すには、幾つかやり方が在る。　適当に刻まれた文字を削ればいいとかでは決してない。　難しい方法なのだ。

だが・・・。　見事に魔方陣の文字の彫られた床の半分が壊れて原型を留めていない。

あの時、Kは此処に来て見た。　この、魔方陣を。　そして、悠長に手順を踏んでいられない状態だから、あの“体気仙”のエネルギー技を瞬間爆発させて、暗黒のエネルギー波とぶつけてエネルギーの崩壊消滅を促した。

これがどれだけ危うい事か。　失敗して、そのエネルギーのどちらかの均衡が勝てば、エネルギーは全て自分に跳ね返る。　Kの実力だ。　自分に跳ね返るなら、K自身がが危うい。

なのに・・・Kは、一瞬で均衡を保って崩壊するエネルギーの割合を把握したのだ。

例えるのも難しい話だが。　この神殿城を宙に浮かす力を一瞬で把握するのと一緒だ。

（僕には・・・僕には出来ない・・・）

魔法なら、魔法ならKには歩合有ると思っていたジョイスだが。
あの離れ業に脱帽だった。

其処に。

「ジョイス様、此処でしたか・・・」

灯りの魔法を宿したステッキを持ったマルヴェリータが来た。

「うん・・・」

マルヴェリータは、倒されたガーディアンレウスを見て。

「キャ・・・せ・・・石像?」

ジョイスが。

「リーダーが・・・。　此処を守っていた守護者を倒したのさ」

「ああ・・・。　凄い・・・顔を一撃？　流石だわ・・」

ジョイスは、褒められるKに呆れる。

「なら、こっちはもっと凄いよ」

と、魔方陣を見せて、説明してやる。

マルヴェリータは、その魔方陣を見て。

「ケイ・・・みんなの為に一生懸命だったのね。　足手纏いの私達や・・・クォシカの事も」

ジョイスは、魔方陣を屈んで見るマルヴェリータを見る。

「君も・・リーダーの事凄いと思うかい？」

魔方陣を見てマルヴェリータは頷いた。

「ええ・・凄いって云うか・・・雲の上の人みたい」

ジョイスは、マルヴェリータから目を外して。

「だよな～。　僕も・・・一生勝てないや・・・」

すると、マルヴェリータは顔を上げて。

「ジョイス様、子供みたい・・。　うふふ」

と笑う。

ジョイスは、無理な笑いで。

「そうかな・・・子供か・・・。　リーダーにも言われるな」

マルヴェリータは、ジョイスに思うままに言った。

「ジョイス様、ケイに勝つ必要なんて無いと思いますわ。　ケイはケイ。　ジョイス様はジョイス様。　こうしてジョイス様が為さってる事は、ケイのすべき事じゃない。　人それぞれに、やるべき事があるだけですわ」

ジョイスは、マルヴェリータに叱られた気がした。　優しく窘められた様な。

「・・・そうかもね」

マルヴェリータは、立ち上がり。

「ジョイス様、もう大体の遺体は回収されました。　後、何か必要な事有りますかどうかお確かめ下さい」

「うん。　先に上に・・。　直ぐ行く」

ジョイスは、マルヴェリータを上に上げた。

ジョイスは、壊された魔方陣を見ながら。　Kが、態と・・・。

いや、自分の為も含めてポリア達にこの仕事の同行を指名して行っ

た様な気がする。

（リーダーは・・・一人で大丈夫なんだ・・・。　でも・・・僕は・・・。　一人じゃ、生きて行けないよ。　リーダー・・・あの時の諦め・・・今度は・・・）

ジョイスは、立ち去ろうとして。　また、魔方陣を振り返り。　また、上の階段に向かう。

ポリア特別編2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾；

今、少しの余裕の時間の全てをコイツにつぎ込んでいます＾０＾

徹夜も二日目・・・。　眠い＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編

特別編：K

0、プロローグ

ゴウゴウと砂嵐が吹く。　昼間の今は、この砂塵を巻き上げる荒野の温度は５０℃に近い。

北の大陸の中央付近に位置するホーチト王国から西に陸路で進むと。

　広大な大地溝帯が幅４００キロの長い荒野を生み出している。

陸続きで、ホーチト王国と西の隣国“神聖皇国クルスラーゲ”との国境には、緩衝地帯としてこの大地溝帯がある。　砂漠と荒野だけが広がる厳しい自然環境が広がる地で、仙人掌やアカシアなどの乾燥に強い植物が広大な何も無い砂地や硬い土の剥き出しになる荒野にポツンポツンと生える。

厳しい自然環境と、その環境に適応したモンスターの影響で、この溝帯を横断して旅する者は居ない。　皆、無理してでも金を払って船で海路を足に移動する。

この溝帯は、大陸の南北に横断し、上下の果ては海まで。　東西の左右の果ては、緑の無いゴツゴツとした岩山だ。　２０００～４００メートル級の山に阻まれて雲も流れ込まないのである。　雨な

ど・・・数年に1度降るか降らないか。　溝帯の右の山が、ホーチト王国と、北のスタムスト自治国の西の国境になり。　左の山が、クルスラーゲの国境だ。

・・・。

その溝帯のど真ん中。　雲の姿も無い天空に、一羽のハゲワシが飛んでいる。　大きく、グルリグルリと舞っている。　そのハゲワシの目には、荒野を行く黒い点が見えていた。

「・・・・」

その黒い点は人であり。　生地は薄めだが、縫い目の締まったロングコートを羽織る。　砂が入らないようにコートの首元などはしっかりとボタン留めされていた。　コートの下に着るYネックの黒シャツは、襟だけ伸ばしてコートの高い襟を越えて顎周りを隠す。下のズボンも黒皮の全身黒ずくめ。

その者、コートに付けたヨレヨレのフードを被り顔が見えない。痩せた体つきだが、この灼熱の荒野を行きながら。　汗を流して死にそうな雰囲気でも無い。　中身の少ない背負い袋に、砂塵が舞って落ちる砂粒が酷く降り積もっていた。

ハゲワシは、砂塵が低地で風に吹き上げられる中、その者が力尽きると見ていたのか。　だが、直ぐにその場から離れていった。

一方、歩く者は真昼の暑い中で立ち止まった。　砂塵が、自分中心で吹いているのだからか。

「・・・詰まんねぇだろう」

男の声だった。　このフードを被った黒ずくめは男らしい。

その時だ。

“シャアアアアアっ！！！！！！！”

突如、爆発的に蛇の威嚇音の様な大きい音が、男の真下で響いた。

刹那・・・。

いきなり、荒野の大地が轟音を上げて砕けて跳ね上がった。　黒い目の怪物染みた鰐が男を地面の中の真下から一飲みせんと姿を現したのだ。　硬い土を空中へ高高くに跳ね上げて・・。

２０メートル近く飛び上がり現れた鰐は、まだ後ろ足は地面の穴の中。　つまり、それだけ大きいと云うのだ。　地響きを上げて前足が乾燥した地面に着いた時。　鰐の怪物は口の中に入ったと思われた黒ずくめの男の肉を味わうべく噛んだ。

しかし、鰐は久しぶりに味わう筈の血の味が口の中に広がらないので動きを止めた。

もし、ハゲワシが天空から見ていたら、鰐の頭の上に立っている黒ずくめの男を見ただろう。

それから、時間は経過した。

夕日が荒野を赤く染める頃。　あの鰐は現れた場所にて身体を３枚に下ろされて死んでいる。　その遺体に、ハゲワシが何百匹と群れて啄ばんでいた。

1、冒険者K

神聖皇国クルスラーゲ。　慈愛・博愛の象徴である女神フィリアーナを信仰する“フィリアンタ教”が母体に統治される宗教国家だ。　信仰の自由も在り。　宗教信者が国民に多い国。　銀山・鉱山を主流に鉱物の輸出で国の経済が成り立つ。

国の南は海、左はギャンブル国“グッドラック”、右は溝帯の入り口の山。　そして、北は高い山脈が並ぶ。

このクルスラーゲの玄関口になるのが、河川交易都市バベッタ。

石造建築都市で、歴史的に古い。　人口２００万人。　城塞都市ながら、都市の中を何本もの河川が流れて水郷を造り。　南の貿易都市スペラングに荷物を運ぶ河川運搬の中継都市に成っていた。

北の街道が都市に繋がる門は、鉱石を運んできた荷馬車などが頻繁に出入りする。　都市内に走る河川上には、大小の木造船が行き来して荷物を運び出したり。　別の場所に動かしたりと人の働く姿が目に映る。

この都市の中心で、人の賑やかな目抜き通りは、川と川に商店街が挟まれて南北に１キロも伸びる。　晴れた今日は、南に向かう客が連日降り続いた雨から開放されて旅立とうと用意に追われているの

か。　随分と目抜き通りを歩く人が多い。

その中、通りの南沿い。　武器屋や防具屋などが多く軒を連ねる場所で、３名の男女が川を見下ろせる店と店の切れ間の休憩場に居る。

赤い髪の若い男が。

「しかし、武器は高いな～。　どれも手が出ない」

黒い鉄の上半身鎧を身に付ける若い男は、背丈は１６０半ば。　肌は褐色で、無駄の無いスリムな身体つき。　左の腰脇には、鎖と鎌の繋がる武器をぶら下げていた。　鎌の刃渡りもやや長め、柄も市販の草刈り鎌とは違う金属製。　済んだ目、小ぶりの鼻、中々のスッキリ顔だ。

「でも、先にチームを再結成しないと。　チームがバラけた以上は、早く結成して仕事しようよ」

そう若者に訴えるのは、白い肌の女性だ。　黄緑色の瞳、赤い唇、尖がった耳。　綺麗な顔立ちだが、やや勝気の性格も香る。　黒の中に蒼色が光る髪は長く後ろに流してあった。　背丈は若者より頭半分高いが、身体の華奢さはまだ１３・４の少女の様。　黒いジャケット、皮の膝上スカートを穿き。　背中には背丈の半分以上の長さがある銃が背負われている。　何か、普通の人とは少し異なった容姿の女性であった。

その二人を見下ろすような大男が、寡黙に立っている。　ツルッ禿の頭、捻くれた唇、ニキビの痕がゴツゴツした顔。　瞑っていそうな眠い目、団子をくつけた様な鼻のうだつが上がらない雰囲気の中年男である。　右手には、汚れた木の杖を持っていて。　薄い緑の

コートローブを着ていた。

「セシル、じゃ～チームの結成しよう」

若者は、女性に言った。

「ええ、いいわ。　リーダーは、ステュアートでいいわよ」

「解った」

“ステュアート”と呼ばれた若者は、中年の大男にも。

「オーファー、斡旋所に行こうか」

大男は頷く。

「解かりました。　でも、三人じゃ手数が足りませんよね？」

以外に、姿に似合わぬ澄み切った声で、態度も温和な大男のオーファーだった。

三人は、賑やかな人通りの多い目抜き通りを北に歩き出して行く。

南北に伸びる目抜き通りの真ん中付近。　十字路に店の切れ間が見える左右には、川を越える為に左右へ通りが伸びて石の立派な橋が架かる。　馬車や人が激しく行き交う。　この十字路の、右上の角に赤い外壁で洒落た3階建ての建物が在る。　建物の通りと面する縦横の軒下には、鉢植えの草花が並び。　とても親しみやすい印象の店構え。

だが、この店。　花屋でも、飲食店でも商店でも無い。　列記とした冒険者協力会斡旋事務所なのだ。　店の名前は、【明日の薫る川面】と云い。　２年前に、女性の主人に代わった斡旋所である。

ステュアートは、オーファーとセシルの二人を連れてその建物の扉を潜った。

「コンニチワ、コンニチワ、ノンビリシテネ」

店の入り口に置かれた鳥篭の中の九官鳥が三人を出迎える。

「うわ・・」

ステュアートは、入った中の向かい合って腰掛けるテーブルに何十人と冒険者達が集まって居るのに驚いた。　三人は、教皇王の居るこの国の首都“聖都クリアフロレンス”から来たのだが。　向こうの斡旋所と居る人数が変わらないのだ。　人口では、首都の方がバベッタの３倍は有ると云うのに。

入って左側先に伸びるカウンターは、２０人前後の座れるストゥール席が並び。　入って飲食店のような腰掛けれるテーブルと椅子の組み合わせが４０前後。　１５０人は入れる店内だ。

ステュアート以下、３人が直進してカウンター前のストゥール席の後ろを行くと。　途中にて、カウンターに居る静かにグラスを磨く女性が３人に声掛ける。

「いらっしゃい。　仕事探し?」

「あ・・」

気付いたステュアートは、女性に向いた。

（うわ・・・美人・・・）

黒い貴婦人用のドレスを着た女性は、青い目のグラマラスな大人の女性だった。　セミロングの黒髪はシルクの様に柔らかそうで。グラスを磨く手元を前にしている胸元の出っ張りは、色香が漂う。　首筋の白い肌、優雅な手つきの細い手。　思わず見てしまう美女である。

（コラっ！！！）

セシルは、ステュアートのお尻を抓った。

「イギっ！！！！」

ステュアートは、強烈な痛みにギョッとする。

オーファーが、一礼して。

「すみません。　チームの結成したいのですが」

前髪が、緩やかにウエーブを掻いて目元や鼻上に触れる美人女性は、客が態と前に居ないように間を空けたストゥールとストゥールの間のカウンターの内側で、ガラスのコップを横に置いて前のめり姿で３人を見てくる。

「わわわ・・・」

ステュアートは、胸の谷間が見えるので驚いて顔を赤らめた。

「可愛い子ね」

美人女性は、ステュアートを見て言った。

セシルの顔が、急激に不愉快に変わる。

美人女性は、セシルを見て。

「あら、彼女？　だったら、ゴメンなさいね」

セシルは、プイっと横を向いて。

「違うわっ」

すると、美人女性はステュアートに向かって。

「リーダーは・・・君？」

「あああ・・ハイっ」

ステュアートは、ビシッと立ち直す。

美人女性は、優雅な手つきで肘杖を付いて。

「見るに初心者じゃ無いみたい。　チーム解散しちゃったの？」

「ハイ」

頷くステュアート。

セシルが、ガヤガヤとしている辺りを見ながら。

「仲間の一人が引退したの。　他二人は、親友のチームに入りたいからって・・。　この中にリーダーが居なかったから、解散よ」

美女は、セシルに。

「前のチーム名とリーダーは？　座って、ゆっくり聞くわ」

ステュアートとセシルは見合う。

こうゆう場合、前のチームの知名度などはこれからに微妙な影響を与える。　しかも、斡旋所の主人らしき相手が話したいというならいい加減にする訳にも行かない。

3人は、女性の左手のストゥールに座る。　だが、オーファーは大き過ぎて座れなかった。　だから、空いている椅子を一つ取ろうと、通行路先の二人掛けの向かい合った席が見える仕切りの中に身を入れると。

「・・あ、失礼」

仕切りで見えない内側の席に人が居た。　フードを被った者で、仕切り壁に凭れて寝ている様だった。

仕切りは、2メートルぐらいの折りたたみが利く簡易的なもの。
オーファーは、寝ている相手を起こさぬように静かに椅子を取り出して、仕切りを戻しておいた。

さて、話を進めるステュアートは、

「チームの名前は、“ガンダールナイツ”（桃源郷の騎士）・・・」

と、言うと、美女は直ぐに反応して。

「まあ、クルフのチームじゃない」

と、驚いた様に見せる。

セシルは、美人に出された水入りのグラスを片手に。

「知ってるの？」

美人女性は、頷く。

「当たり前よ。　私は、この斡旋所を姉妹で受け継ぐ2年前まで冒険者だったわ。“片目のクルフ”。　片手斧を使う勇猛な冒険者、モンスター討伐の仕事の成功率はトップレベルだった」

セシルは、姉妹と聞き。

「“姉妹”？」

美女は、頷いて店の奥を指差す。

やって来たオーファーと振り返れば、席に座る冒険者達のそれぞれチームに、メニューを受け付ける様にメモ紙とペンを手にしているカウンターに居る美女に似た美人女性を見て取れる。　青いワンピース姿で髪がカウンターの美人より長い。

オーファーは、座りながら。

「まさか・・・“リスター・ザ・ウィッチ”（三ツ星の魔女）」

すると、カウンターの美女は微笑して。

「ご名答。　私は、三女のミラ。　向こうが、次女のミルダ。　上の上級受付が、長女のミシェルよ。　のんびり3人でやってるの」

セシルは、ミラを見て目を丸くする。

「まだやれるって噂のままに辞めた有名チームじゃない。　何で、辞めたの？」

ミラは、笑って。

「姉さん二人が電撃結婚してね。　私も、結婚したく成ったから、3人で辞めちゃった」

「相手は居るの？」

ミラは、右手を頬に添えて上に顔を傾げる。

「候補はね～。　でも、なんか今一燃えないのよ～」

「ふ～ん」

ステュアートは、躊躇いがちに。

「募集したら如何です・・。　凄く集まりそうですよ・・アハハ・・」

「そうね～。　それもいいかも～。　でも、なんでも最近、凄い美女二人居るチームあるって噂よ～」

セシルは、水を飲んでから。

「綺麗だけの噂なら、見せ掛けね」

ミラは、右手をヒラヒラさせて。

「そうでも無いわよ～。　なんでも、町で失踪した女性の難事件解決したっていうし。　あの有名な“グランディス・レイブン”の面々がモンスターの巣窟に成ってた山に行って行方不明になってたのを、合同チームで行って、救出して来たとか～。　マニュエルの森や、奥の山に行って帰ってきたなんて凄腕よ」

オーファーが、水の入ったグラスに口を付けながら。

「ホーチト王国の方ですか？」

「ええ、昨日入って来た噂よ。　ま、確認も取れてるわ。　チームの名前は、“ホールグラス”って言うのよ」

セシルは、ツンケンした顔で。

「あっそ。　他のチームの成功なんてどうでも良くない？　それより、こっちの結成を早くしてよ」

ミラはスッと細まった瞳で、セシルを見る。

「結成は自由よ。　ただ・・・貴方達にまともな仕事は回せないわ」

セシルの顔は、急激に温度の低い冷めたモノに変わって行く。　ミラの言葉に、目に、棘を感じたからだ。

「それ、どうゆうことよ・・・アタシ達に仕事を回さないって？」

ミラは、3人を見て涼やかな顔をして言うのだ。

「いい、もう貴方達の元有能なリーダーのチームは解散したの。私達姉妹が辞めてから、ガンダールナイツのチーム名の噂は少ないし。　クルフが請ける訳でも無い。　たった3人でどの程度の力量があるかも解らないし。　今の貴女みたいな態度でしか接しない人に難しい仕事を回す気には成れないわ。　冒険者達は、もう斡旋所の扉を潜る時から主人に見量られてるのよ」

ステュアートとセシルは、前のチームが初のチームだった。　クルフと云う長身の戦士がリーダーの時は、彼任せであり。　セシルなどは横から口槍を入れるぐらいの者で。　戦う以外の活躍はした事無いのも確か。

ステュアートも1年半程チームに居て、モンスターと戦ったのは5・6度。　他は、薬草探しや遺跡の調査など。

唯一、5年以上一緒に居たオーファーは、リーダーには成りたがらない。

ステュアートは、ミラに。

「でも、駆け出しの仕事なら請けれますよね？」

ミラは、腕組みして。

「草むしりや、害虫駆除・・・やるの？　見た所、狩人も学者も居ないんじゃ～薬草探しだって任せられないわよ。　一応、こっちも信用第一で依頼を依頼主がら請け負ってるんだから、失敗しないチームに任せたいのはホンネ」

セシルは、食いかかる様な目でミラを睨み。

「それって、私達に実力が無いって事・・」

「同じ事ね。　クルフのチームで、エンチャンターや鎖鎌の若い子の噂は聞かないし。　ま、オーファーの事はいい判断材料にしてもいいけど。　最初からクルフの時と同じレベルの仕事を請けたいなんて思わないでね。　冒険者の世界って、そんなに甘くないわよ」

セシルは、まるで扱き下ろされたような感覚に怒りが湧き上がる。

睨む目、握る拳・・・気性の激しい性格ならしい。

其処に。

「ねね、ちょっと。　主人からケンカ吹っかけてるみたいよ。　あんまり、キツクしちゃ相手も可哀想だわ」

と、綺麗な通りの良い女性の声が。

振り向けば、そこには背のやや高い女性の剣士が立っている。　青

い上半身鎧に、白い膝宛、具足をし。　左の腰には、黒い柄、鞘の長剣が佩かれていた。

ミラは、鈍い笑い顔で。

「エルレーン、なにか用？」

“エルレーン”と呼ばれる女性は、ミラの前に来る。

「用じゃないわ。　いきなりチーム結成に文句つけても仕方無いでしょ？　どうせ、このままじゃ大した仕事は回せないのは同じだわ。　もっと、アドバイスをあげなさいよ。　忠告にすら成ってない言い草よ」

歩いて来るエルレーンの脇を、お手伝いで働く女の子が紅茶を入れたグラスをトレイに載せてテーブルの方に運んでいった。　安い茶葉なので、只であるから。　休憩がてら、ミラ・ミルダの見物に訪れる冒険者も居るとこの斡旋所の噂が他の街でも聞こえている。

エルレーンは、セシルの隣に座った。

ステュアートは、エルレーンに挨拶した。

「どうも・・。　ステュアートです」

白い瞳、黒い髪、蝋燭の蝋のような白い肌。　小顔で愛らしさも滲むエルレーンだが、鼻が尖り鼻で奇妙な印象の女性だ。　悪い顔では無いが。

セシルは、エルレーンを見て。

「貴女・・・“エンゼルシュア”？」

エルレーンは頷いて。

「ええ、貴女は“エルファレイム”ね」

セシルは頷き返す。

エンゼルシュアもエルファレイムも。亜種人の系統である。“エルフ”（自然の精霊人種）と呼ばれる民。“エンゼリア”（天使の落とし子）と呼ばれる民が居る。人の様な姿をした者達で。人とは違う異能に長けた者だ。その種族の中には、違う亜種人と結ばれたり、人と結ばれたりして人里に住み暮らす方向に転向したのがエンゼルシュアやエルファレイム。見た目は人と少し違うが、もう人間の世界に溶け込んだ種族である。

この種族は、非情に女性の出生率が高く。結婚する場合は、殆どが人間の男性であるとか。見た目が可愛らしいのと、甘い若々しい女性の声が特徴と成るばかりか、死ぬまで見た目が２０歳ぐらいのままで老化しない変り種。その方向の好きな男性にこよなく愛される種族なのだとか・・・。

エルレーンは、ステュアートに。

「ね、チームを結成するなら、私も加えてくれない？」

「はあ？」

セシルは、いきなりの事にポカンとするし。ステュアートも。

「え・・あ～・・・ええッ？」

聞いていたミラは、呆れた笑い顔で。

「エルレーン、貴女・・・また前にチームを抜けたの？」

エルレーンは、ミラに向かって膨れ顔になり。

「当たり前よっ。　男ばかりのチームに入った御蔭で、セクハラば～っか。　酔っ払うと“声出せ～”とか、“見た目変わんないのイイね～”とか。　も～嫌味ば～っかり。　あんなチーム、こっちから願い下げ」

すると、セシルは同調して頷き。

「ホ～ント、男ってキモイ」

ステュアートは、オーファーと見合う。

「僕達も・・・男だよね」

「気にするな・・・気にすると面倒だ・・・」

オーファーは、水を飲む。

セシルは、ステュアートに向くと。

「ステュアート、この人も入れよう。　どうせ、３人じゃ手が足りないでしょ？」

「え・・・あああああ・・・うん。　僕は別に構わないよ」

オーファーも。

「自分も、左に同じ」

と、同意。

エルレーンは、顔を綻ばせて。

「良かった～。　長く居させて貰えそうなチームを捜してたのよ～」

その後にオーファーが、ミラに尋ねた。

「所で、あの仕切り席の内側に座っているのは・・・何方ですか？」

「え？　・・・ああ、黒いフードの人？」

「はい」

セシルやステュアートはオーファーを見る。

「誰？」

と、セシルが聞けば、オーファーは横を向いて自分が椅子を持ってきた仕切りの中を指差したのだ。

ミラは、木と厚紙で作られた壁の様な模様の仕切りを見て。

「黒ずくめの人。　朝来たのよ・・・。　土埃を服に付けてね。全く、大地溝帯でも渡って来たのかしら」

ミラは、右手を頬に当てて傾げるが・・・。

エルレーンは、いきなり笑い出す。

「アハハハ・・・ミラったら。　在る訳無いでしょう、そんな事」

セシルは、エルレーンを見て。

「何で？」

エルレーンは、涙さえ浮ぶ目を指で擦って。

「だって、溝帯は今や乾燥季よ。　水気は無いし、歩いて来るのに１０日以上は掛かるわ。　死んじゃうわよ～。　大体、今は溝帯には“テザードアルゲリーター”って云う巨大砂漠鰐が大量発生して行き来出来ないって評判だわ～」

ミラも、思い出したようだ。

「あ・・そうだわね。　確か、溝帯に住む部族が全滅を逃れてクルスラーゲやホーチト王国に逃げ込んだって・・・。　じゃ～溝帯を渡って来た訳じゃ無いのね」

オーファーは、女性２人から視線を外してまた仕切りを見る。

その時だ、

「あ・・」

カウンターの前を、丁度仕事を請けて出て行く冒険者達の一行が通り過ぎた直後であった。

ミラが、立っているフードを被った黒ずくめの人物を見て。

「お・・起きちゃった？」

すると、その黒ずくめの人物はフードを取った。

「わっ！！」

「キャっ！！！」

セシルとエルレーンが、驚いて声を上げる。　ステュアートもギョッとしたし。　ミラも、声を出せなかった。

店の中の冒険者達も、カウンターに向いた。

立っていた男の顔は・・・包帯だらけ。　包帯の覆面であった。

そう、Kだ。

「俺の話するのはいいが。　紅茶のお替りくれないか？」

ミラは、其処にあったガラスのコップに冷めた紅茶を急いで注いで。

「は・・ハイ」

と、カウンターに置いた。

Kは、そのコップを取る。　そして、オーファーを見て。

「アンタ、俺を加えると言ってたが。　本気か？」

と、一口飲む。

「あ・・・仲間が・・・良ければ・・」

オーファーは、音も無く立っていたKに完全に驚いて肝を潰してしまった。

セシルは、慌てふためく手でステュアートにしがみ付く。

ステュアートは、ドキンドキンする鼓動をそのままに。

「あああ・・・いい・・一緒に・・・チーム・・・あ・いや・仕事・・・ややや・やりませんか・・」

髪が目に鼻に凭れるミラと似たKの頭には、赤い土埃が薄っすらと掛かっている。　耳の脇に伸びたモミアゲにも土埃が。　Kは、グラスの紅茶を飲んでカウンターにグラスを置くと。

「ああ、構わないな。　ただ・・一つ忠告」

ステュアートは、ビクッとして。

「ハイっ、な・なんでしょうか・・」

Kは、包帯から覗く目でセシルを見ながら。

「チームの組み始めは、お互いに慣れてない者同士なら駆け出しの仕事からやるのが一番だ。　それぞれどんな特徴があるか直ぐに解る」

「はあ～・・・」

セシルもエルレーンも、普通の忠告に安心して脱力する。

確かに、いきなり顔を包帯で巻いた怪しい男が現れたら驚くのも無理は無い話だ。

ステュアートは、ガクリと項垂れた。

2、仕事をしてみよう

自己紹介をするそれぞれ、最初にKがして。

剣士のエルレーン。　鎖鎌を使う戦士のステュアートは、いいが。

「私、エンチャンター。　武器は、ガンよ」

と、セシルはカウンターで言う。

Kは、セシルの背中の長い銃を見て。

「随分長いな。　破壊力重視か」

「ええ、良く解ったわね。　連発出来ないけど。　一撃で大木もへし折るわよ」

セシルが銃を指差して言えば、Kとエルレーンが。

「ほ～」

「へ～」

と、感心。

さて、エンチャンターとは、魔力を魔法で武器に宿して戦う特殊な戦士だ。　人や亜種人には、魔法に遣う古代ルーンに拒否反応を示す体質の者が居る。　魔法の要領で魔力を武器に宿して殺傷力を増すのがエンチャンター。　エンチャンターは、魔力を使う為に素早く動いて重たい武器を持つと体力と精神力を激しく消耗してしまう為。　弓やナイフなどの投擲・発射武器を扱う者が多いが。　セシルの様な破壊力重視のエンチャンターは稀である。

さて、オーファーだが。

「私は自然魔法遣いのオーファー・カーンです。　以後、よろしくお願い致します」

Kは、オーファーを見て。

「珍しいね～。　魔想魔術以外の魔道士は久しぶりだ」

オーファーは、静かに頷いた。

自然魔法遣いは、魔力を天変地異に使う魔法である。　相手の足場が岩なら地割れを起こす。　雨の日なら、凄まじい集中豪雨を局地的に降らせたり、風の強く吹く場なら、カマイタチを起こしたりと。

　様々な天変地異を相手の居る極小範囲で起こすのである。　高度な魔法には、天地の助けを借りずに天災起こす魔法があるとか。

だが、この魔法は気象や自然を感じる能力の長けた者でないと無理と云うハードルを課せられる為に、扱う術者が非情に少ない。

因みに、魔想魔術と、神聖魔法は扱える者は多いのだが。　この自然魔術師存在の割合は、魔想魔術師との世界的な割合の比例で７０：１となる。　更に低いのは、精霊魔法遣いで、その対比率は、自然魔術師との対比で５０：１と非常に少ない。

リーダーは、ステュアートで全員一致。　チームの名前は、“コスモラファイア”（たゆたう炎の意）で決まった。

さて、仕事だが・・。

K曰く。

「な～んでもイイ」

エルレーンも、

「私も何でもいいわ」

ステュアートには、一番難解な返答だ。

そこで、お昼過ぎ。　ミラからサンドイッチの差し入れと一緒にメニューの様な冊子を渡される。

「ハイ、コレが仕事の一覧表よ」

受け取ったステュアートは、青空の絵が描かれた表紙を見ると。

“依頼一覧”と、書かれている。

紅茶のグラスを傾けるKは。

「全く、料理のメニューかっつ～の。　適当に各席のテーブルの上に置いてあるからな～。　斡旋所とは思えねぇ～」

ミラは、にこやかに笑って。

「うふ。　ウケ狙いじゃないわよ。　斡旋所って入りにくい雰囲気あるでしょ？　それを払拭したくて」

セシルは、花の多い店内を見て。

「ま～可愛らしい店内だけどね～。　こう・・・仕事したい気分には・・・成り難い場でも在ると・・・思う」

店内は、正しく可愛い茶屋である。

メニューを開いて、依頼を見るステュアート。

「う～ん・・・。　何か一杯在りますね」

エルレーンは、サンドイッチに齧り付いて。

「どんなの・・・アンの？」

ステュアートが読むに。

【子犬が居なくなりました。　白黒の耳の大きい大型犬の子犬です・・・】

【ウチの主人が、他で女を作っている様なので確かめてくれませんか・・・】

Kは、紅茶のグラスを片手に。

「生々しいな・・・不倫・・プリンちゃんだぜ・・」

ミラを含めて笑いそうになったり、食べてたものを噴出しそうになったり。

ステュアートは、続けて。

【私・・・隠し事なんですが“痔”なんです。　よく効く薬・・・探してくれませんか。　近所に知られたくないんで・・内密に願います。　・・・御代は１５００出します】

オーファーは、静かにお尻を摩る。

セシルは、詰まらなそうに。

「医者にいけ～」

だが、Kは。

「おい、それ請けよう。　薬渡して１５００シフォンだぜ」

セシルは、嫌な顔して。

「え～・・・、そんなのに効く薬なんて知らないわよ～」

Kは、口元を笑わせて。

「俺は、学者で薬の調合も出来るって言ったろ～」

オーファーは。

「薬を取りに行くのですか？」

Kは、首を左右に振って、

「易ければ１５０シフォンで原料が買える。　この街で」

と、店の床に右手の中指を向けた。

ステュアート達全員はおろか、ミラですらKに視線を止めている。

ミラは、口元を引き攣らせて。

「ホント？　ボ・・ボロ儲けじゃない・・」

Kは、頷く。

「んだ。　薬に精通してないとムズイが。　この手の依頼は身分の然るべき輩が辺りに知れないようにしたいってヤマだ。　だから、アホみたいに礼金を弾む。　バカ様のお～か～げ～」

ステュアートは、確かに美味しい仕事かもしれないので請けてみる事にした。

ミラに申請して、受理の手続きを踏んで昼下がりの午後に外へ。

「ん～。　空気が気持ちいいな～」

と、伸びるステュアート。

「そうね。　連日の大雨だったものね」

と、エルレーン。

Kは、ボソリと

「土埃一色」

と、言ってから。

「さて、手早く薬屋回ろうか」

一同、Kと共にまた目抜き通りを歩き出す。

・・・さて、Kが去った後の事。

ミラがカウンターを拭いていた。　テーブルに屯(たむろ)していた男ばかりのややヤサぐれた雰囲気の戦士ばかりの汚いチームがミラに。

「やかましい連中がカウンターを占拠してたな～」

「うへへ・・・、ミラの顔見たくなって来たぜ」

と、カウンターにやってくる。

（お前達は、それ以上に醜い・・・）

ミラはそう思いながらも。

「そうでも無いわ。　以外に面白かったわよ」

男達5人が、カウンターに腰掛けてミラに絡みだした頃である。

カウンターの奥、二階へ上がる階段がある。　木造の内装なだけに木の階段で。　左右の挟む壁は白いマーガレットの柄の壁紙だ。

「ミラ・・ミラ、居る?」

二階から、ミラより頭一つ低いスレンダーな姉が降りてくる。　紫のドレスに、背中に掛かるくらいの黒髪が美しい。　だが、ミラよりソバカスの痕が残る目元や、低い鼻、どうも美人ではない。

ミラは、男達にグラスで紅茶を出しながら。

「何？　姉さん、居るわ」

すると、下りて来たミラの姉のミシェルは、少し動揺したような顔だ。

「どうしたの？　姉さん・・・なんか顔色が悪いわ」

ミシェルは、ミラを呼んだ。　２人、階段の方に行く。

ヒソヒソ話をして、ミラが驚いた。

「え”っ！！！！！　ホントっ？！！」

頷くミシェル。

上に居たミシェルは、館の主人だけが見れる特殊な黒皮のブ厚い手帳を見て驚いたのだ。　いきなり、仕事の一つで。　溝帯に爆発的に繁殖した巨大鰐、“テザードアルゲリーター”の掃討が有ったのだが。　それが消えた。

この本は、全ての斡旋所で書かれてある依頼は違ったりするが。共通に情報をやり取り出来るメモ欄が有る。　書くと、何処の国の何処の街のまで指名が出来るし。　世界で起こってる状況をある程度の短い時間で共有出来る。　様々な事の出来る本なのだが。

ホーチト王国の国境都市からの情報で、“テザードアルゲリーター”の大量な死体が確認されたと有った。　溝帯を横断する形で、数キロ間隔で遺体が点在していたとか・・・。　３０メートル以上の巨体を誇る鰐が、どれも斬られてハゲワシの餌食に成っていたらし

い。

ミラは、出て行ったKの後を見るように出入り口の扉を見た。

（ま・・・まさか・・・一人では・・無理よね）

さて。

Kを先頭に、街の目抜き通りを北に向かって食料品や薬を売っている店が多く並ぶ場所へ。

Kは、直ぐに何軒か見回った。

そして、買わずに外に出て来ると、店と店の切れ間の川を下に見下ろせる所に来る。

オーファーは、道の方に向く。

Kは、オーファーに。

「あら・・・オーファーは高所恐怖症か?」

オーファーは、頷いた。　実は、この見下ろせる川が凄い下なのだ。

多分、落下防止の石の格子手摺りから５０メートル以上は下だ。

この目抜き通りや、居住区や宿屋街などは、川の増水にも影響受けない様に高く作られている。

「ああ・・・。　ま～いいや」

Kは、ステュアート達を見て。

「易くていい材料を買うのに、ざっと１２０シフォン。　俺、身銭の６０出す。　他、カンパして～」

と、手を出し。　自分の身銭を乗せた。

ステュアートは、何とも言いがたい顔でＫを見て。

「ケイさん・・・まさか・・・それが全財産？」

Ｋは、全く普通に。

「うんだ。　文句有る？　ビンボー人に文句あるか～」

と、開き直り。

余りの少ない身銭に、皆が呆れて怒りも出ない。

「ハイ、アタシが３０」

セシルが出す。

エルレーンも。

「私も、３０」

Ｋは、頷いて。

「よし、これでいい。　さ、買いに行こう」

一瞬、皆は騙されていそうな気持ちにも成ったが。　Kは店をコロコロ替えてアレコレと5種類の薬を買う。

買えば、人の往来の中で飲食店に入り。

「お湯貰ってくれ」

と・・。

向かい合うテーブル席の外れで、Kは器用に草を煎じたり、実を潰したり、3種類の草を煎じてから、2種類の粉を入れると・・・。

観ていたセシルが、小さく。

「あっ」

と、声を上げる。

借りた店のマドラーでかき混ぜる液体が、一気にどろ～っとした。

「おし、出来上がり」

Kは、半透明のドロドロした液体を蓋の有る白い陶器に入れた。

ステュアートは、不思議そうに。

「ケイさん・・・それが・・・薬?」

Kは、冷めたハーブティーを飲んで。

「ああ。　痔は、体質もあるが、基本的な原因の一つはお肌の不衛生。　多分、汗っかきの男か、丸々太った男とかだ。　あと、用を足してから拭く時に唾を使う人とかも成り易い。　辛い物好きや、肉食などの偏りすぎた食生活も要因の一つ。　とにかく、できたら・・・薬を塗ってお肌を綺麗に維持するべし」

エルレーンは、Kを細めた目で見て。

「お医者みたいね～・・・・。　病気でも治せそう」

Kは、皆を見て。

「治す金は取らんが・・・薬の材料くらいは自己負担で」

4人は、Kを見て敬礼し。

「リョーカイ」

ただ、この仕事の変わった所は、クライアントに会う会い方だった。

ステュアートは、紅茶を飲みながら。

「しかし・・・直接会って薬渡せないって・・・どうゆう事なんだろう・・」

指定された手順は、まず・・・。

店を出た5名は、とある目抜き通りの南方に在る宝石商に入り。

貴族っぽい髭も髪の毛もカールしたヒョロ細い奇抜な服装のピエール氏に面会。

「アイーン様に仕事を頼まれた者です。　妙薬が出来ました」

と、ステュアートが告げれば。

「あら～ん、出来たのねぇ～ん。　いいわ、連絡しちゃう」

ピエールと云う気色悪いホモ男のようなその男性は、小指を立てて腰をクネクネ振って店の奥に消えてゆく。

見るセシルは、呆れた顔で。

「ダイレクトにキモイ」

Kは、もう見ない。

「関わり合いたくない人種だ。　いざって時は、オーファーに相手してもらうか」

仲間は、一斉にオーファーを見上げる。

「・・・・嫌だ・・・・」

鼻水垂らしたオーファーは、蒼褪めた顔をする。

さて、戻って来たピエールは、ステュアートに愛想の良い顔でウィンクしながら近寄って。

「おまたせ～。　アイーン様は、今夜の～深夜に受け取るってよぉ～。　場所は～貴族地区のテンシの、こ・う・え・ん・だって～」

エルレーンもセシルも、余りの気色悪さに突っ込みも出ない。　もう、Kはいつの間にか出入り口に居た。

「行こう。　宿でも探そうか」

外に出ると・・・。

「ん、リーダー」

Kは、ステュアートに薬の入った容器を渡す。

「え?!　ああ・・ハイ」

受け取ったステュアートに、Kは。

「一日、二回塗れと・・・。　なんか、クライアントにも会いたくない気がしてきた。　そうか・・・痔の原因は・・・最悪の方向かもな～」

ステュアートは、容器とKを交互に見て。

「えっ　え”っ?!　ケイさんっ、どうゆうことっ?!!」

その答えは、・・・深夜に解った。

夜、急激に下がる気温と水の温度の気温差で霧に包まれる都市内。
　都市の北東には、貴族が住み暮らすモダンな貴族地区がある。
その地区の入り口は、蔦を絡ませた鉄格子の仕切り壁があり。　地区に入って直ぐの右手に、天使の石像が噴水をしている公園がある。

ステュアート以下、全員がそこにて待っていると。

もう、どの家庭も寝静まる深夜に、街灯の灯りが油切れ寸前でチカチカしている中で馬車の音が・・・。

「馬車？」

セシルが、貴族地区の中に進む石畳の道路を見て言った。

「凄い霧だわ・・何も見えない」

エルレーンが、辺りの見通しも聞かないくらいに立ち込める霧に不安を覗かせた。

霧の中から響く馬車の音は、どんどん近づいて来て・・・。

「どお・どどお」

屈強な体格の御者が馬車を止める。

5人の前に馬車が来た。　真紅の色をした車体に、白き鳩の絵が施された馬車。　車体のラインも、滑らかな器型、金が掛かっていそうな馬車である。

すると、ドアが開いてシルクハットに、黒マント、丸い眼鏡を掛けたかなり長身の紳士が下りて来た。

「私が依頼者だ。　例の薬は、持っているかね？」

ステュアートは、おずおずと前に出て。

「あ・あの・・これです・・。　いっ一日・・2回・・塗って下さい」

と、薬の入った容器を差し出す。

紳士は、それを受け取って容器を見た後、ステュアートをジッと見る。

「・・・」

セシルやエルレーンから見るに、その紳士は中々の渋みの利いたダンディだが・・・。

「君、これから・・・我が屋敷に来ないかね」

と。　紳士はステュアートの頬を触れて撫でる。

「え”・・・僕だけ・・ですか?」

紳士は、甘い目線でステュアートを見下ろす。

ステュアートは、何か非常に貞操の危険を感じて。

「いいいっ、いえっ。　ももも・・眠いので宿に戻りますッ!!」

と、逃げるように身を引いた。

セシルと、エルレーンは事態が解って蒼褪める。

Kは、終始反対側を見ていた。

オーファーは、ホッとして。

（良かった・・・顔が悪くて・・・悪くて得する事もあるんだな・・・）

と、胸を撫で下ろした。

紳士は、ステュアートに。

「残念だ。　もし、生活に困ったり、お腹が減ったらあの宝石商に来なさい。　悪いようにはしないよ」

と、馬車に乗り込んで行く。

馬車が来た道を戻っていく。

「やはり・・・最悪の方向か・・・ヘンタイ紳士だ」

Kは、やっと前を向いた。

ステュアートは、いきなりKに掴み掛かった。

「知ってたでしょっ?!　僕にお誘い来るって悟ってたでしょっ?!」

涙目のステュアート。

「アハハハハハ・・・・」

Kは、半笑いだった。

K特別編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

短編・・・いや・・中篇のK編のスタートです＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編2

特別編：K2

3、続・お仕事しましょう

「う～ん・・・」

斡旋所カウンターにて考え込むステュアート。

「どれどれ」

「ナニナニ」

左右から覗き込むセシルとエルレーン。

あの、深夜に薬を渡してから次の日。　報酬を貰おうと斡旋所に来て見ればもう依頼主からの連絡が来ていた。　１５００シフォンの報酬を貰い。　全員で等分して、今はミラの前のカウンター席で次なる仕事の選択中。

ステュアートは、メニューを開き、セシル・エルレーンと睨めっこ。

「ふぁ～」

Kは、風呂に入ってサッパリした身体で、オーファーと2人でのんびり紅茶をシバく。

「ケイさん、昨日の噂ですがね・・・」

と、オーファーが話せば。

「ほお～。　溝帯のワニさんを全滅ね～。　そりゃ～、凄い冒険者も居たもんだ」

Kは、溝帯に居たテザートアルゲリーターの話に適当染みた返答を返す。

ミラは、汚れた服が幾分綺麗になったKを見て横目に。

「何処の冒険者かしら～。　無償で人助けなんてカッコいい～。キスしちゃいたい」

と、色っぽく言う。

Kは、紅茶のお替りを要求して。

「だが、倒したって言ったって、親を倒しただけじゃ～ないか？砂漠の鰐は、地中深くに卵を産んで、雨が降る時に合わせて孵化しやがるとか・・。　数年前に溝帯に雨が降ったんだろうからな・・。　平和は、たったの１０数年だけさ」

オーファーは、紅茶を飲む手を止めて。

「そうなんですか？」

Kは、冷めた紅茶をミラから受け取って。

「ああ、本ではそうなってる。　溝帯に現れ出したのも、２０数年ぶりの雨の後だってからな。　ま、死んだって云う鰐の掘った穴から入って、地中深くの卵を全て壊さなきゃ～平和は仮初めだ」

ミラは、感心した顔で。

「随分知ってるわね。　その辺の蓄蓄学者より知識深いわ」

そこに、ステュアートが、

「ケイさん、オーファー。　報酬高く無いけど、結婚指輪を無くした奥さんの指輪捜索依頼があります。　やってみませんか？」

オーファーは、頷き。

「うむ、やろう。　結婚指輪か・・・無くしたままでは心苦しい」

Kも、グラスを置いて。

「・・・捜してやるか」

セシルとエルレーンは、ミラに申し立てを云う。

「結婚指輪ね～。　無くす方がどうかしてるわ」

と、ミラは冷めた言い方。

セシルは、自分の身を棚上げで。

「相手探して、未だ見つからない誰かさんには、とお～い話よね～」

ミラは、スッとセシルを睨む。

Kは、出入り口に向かいつつ。

「おいおい～い、面倒はヤメレ～」

ミラとセシルは、どうも合わない。　目で火花を散らす2人。

ステュアートは、アワアワしながらそれを見ている。

オーファーは、テーブル席から注がれる夥しい視線に、

（は・・・恥ずかしかぁ・・・）

瞑目して、顔を赤らめ静かにKの方に歩いて行く。

Kは、来たオーファーに。

「全く、オンナってのはど～してこうもメンドイかね～」

と、呆れ口調で外に出る。

さて、この指輪を見つける仕事、Kが屋敷に入って初老のマダムに説明を受けて直ぐに見つけた。

「あら・・こんな所に・・」

室内の観葉植物の水差しの中に落としていたのだ。

「おばさん、アンタ指輪を外した時に酔ってたろ？　旦那死んで一人が寂しいのは解るが。　夜に植物に水やったらいけない。　根腐れする。　鉢植えのどれも水がヒタヒタだぜ。　見るからに金在りそうだ。　新しい趣味や楽しみでも見つけな」

Kは、そう言って締めくくる。

エルレーンは、屋敷の敷地から出てくる中で。

「良く解ったわね～」

Kは、ズボンに両手を入れながら。

「ああ、昼の水遣り観てたが。　鉢の下の受け皿が水で一杯になって零れたし。　指輪は痩せてブカブカだって言うしな～。　水差しの水が動く度に鈍い音してた。　話によると、旦那亡くして毎日酒だけ呑んで、旦那の残した観葉植物見てると・・・。　近くに有ると踏んだら、ありますな～。　間近に」

ステュアートは、まじまじとKを見て。

「ケイさんって、仕事慣れしてますね。　見習います」

Kは、素晴らしい陽気の太陽を見上げて。

「違うだろ～。　習うより慣れろ。　回数こなして慣れろ」

ステュアートは、益々感心して。

「あ、ハイ」

こうして、Kの授業のような仕事は更に進む。

次の日に請けたのは。

「ま～ったく、害虫駆除って・・ど～すんのよ～」

「ホント」

ちんぷんかんぷんのエルレーンとセシルは、最初からやる気なし。

ステュアートが請けたのは、バベッタの城塞の外に有る農業地“ベジタガーデン”（専用農業地）に発生した害虫駆除だ。

Kは、手順を教えてやる。

「いいか、害虫駆除ってのは、まずは現状調査からだ」

5人で、バベッタの外、西側の農地にやって来た。区画整地された農地は、一面にキャベツなどの栽培がされているのだが・・。

Kは、畑を見回して見て。

「おいお～い、全く雑草が無え～。畔道や野原まで草取ってる～」

ステュアートは、見て整然としていていいと思う。

「何がいけないんです？」

Kは、呆れて畑を指差す。

「いいか、基本的にな。　雑草より、人の食べる野菜の方が虫にも美味しいんだ。　栄養豊富な土を山から持ってきてるから、尚更野菜の育ちもいい。　こんな所だ、害虫だって、食う物が野菜しか無いし。　人が植えてやってるんだからそりゃ～野菜を食うわさ」

「・・・なるほど、目の前に餌有るのと一緒ですね」

Kは、耕された畑を見ながら。

「そうだ。　そして、問題は。　その害虫を食べる虫の住み場が無え～。　これじゃ～害虫天国だぜ。　敵が居ないんだ。　そりゃ～増えるってよ」

5人に付き添って来た農家のオッサンは。

「な～るほど。　最近、自給率を上げようってバベッタの政策で畑始めたんだが。　整地し過ぎたのか～」

Kは、植えたばかりの野菜の苗を見て。

「あ～あ、蝶々の幼虫や蟻巻きなんかが一杯ついてら・・・」

Kは、バベッタに戻り。　農家の人達を連れて図書館に。　街の中央に、都市政府の建物内に有るというので。　其処に向かった。

そこで、Kは農家達に害虫駆除する益虫の存在と。　害虫を守る蟻

のライフスタイルを教える。　蟻の巣穴は薬草と灰汁などを使って駆除し、益虫を取ってきて、生活させる環境を整えて。　農家がそのバランスを保つように指導する。

なにせ、農薬など無ければ、魔法で・・とも行かない。

セシルは、学者らしい学者を始めて見たと感心。

ステュアートも、本の凄さが今さら解った。

本は、全て魔法による自動書記の複製品が主流で、値段が高い。若いうちに、本を沢山読む人口は極めて少ないのだ。

この日は、近くの野原まで益虫を夕方まで取って畑に放したり。蟻の巣を塩と虫避けの草の汁を散布していたりと。　冒険者とは全く違う日を送る。

夜、宿を取ればセシルもエルレーンも足が筋肉痛と浮腫みでパンパンだ。

食堂でテーブルを囲う中。

ワインを飲みながら、エルレーンが。

「うう・・・冒険者じゃないわ・・・農家よ・・」

と、Kをジト目で見る。

だが、Kは何事にしても精通しているのか。　苦労もしてない雰囲気で。

「フン。　カッコいい冒険者なんて下らないね。　どんな依頼もこなせる冒険者は、何処の地に行っても食い逸れしない。　しぶとく、どんな仕事も当たり前に出来るのが最高だ」

セシルは、汚れて擦り傷だらけの手を見せて。

「お肌が荒れちゃうわよ～」

と、泣き言を。

だが、オーファーは、肉を切りながら。

「それも青春だ。　ま、有名になっても、いちいち仕事を選んでたら突発の仕事に対応出来ない。　私は、ケイと組んでから日々が充実しているから、嫌とは思わない。　寧ろ、いい勉強だ。　冒険者を引退したら、農家も悪く無い」

女性2人、全く嫌どころか。　久しぶりにいい顔をしているオーファーとステュアートが居るだけに文句も言い切れない。

ステュアートは、終始Kの言っていた事をメモし出したり。　自分で、何でもやろうと率先する。

セシルの家は、貴族だとか。　下級貴族ながら、上級貴族と体等に仕事する家柄だとかで、プライドが高いのも頷ける。

エルレーンは、冒険者同士の結婚で生まれたようで。　親は、別の国の街で永住して商人の所に手伝いで働きに出ているとか。

オーファーの家は、なんと魔法学院が自治する国、カクトノーズで大臣の職に就いているのだとか。　人付き合いの下手なオーファーは、それが嫌で冒険者になったらしい。

ステュアートは、今や内戦状態の西の大陸から来た。　父親は、若い頃は冒険者だったらしく。　今ではある都市の斡旋所の主人であるとか。

呑んで、喋れば以外にホロホロと過去が出る。　Kは、無難に話を右に左に受け流して聞き手に回っていた。

次の日は、前日の続きと。　消毒液の作り方をKが教える。　灰汁は、草の汁と混ぜて使えば効果が高い。　益虫がとても食べつくせない害虫の一杯な苗を抜いたり。　色々と対策をしてみる。

そして、一週間後。　害虫は激減していた。

雨が降るその日。　ステュアート以下全員は、斡旋所で農家の人達と挨拶をして仕事終了。　報酬以外で、お昼を馳走になって来た。

農家の人達が帰ったあと。　ミラの居るカウンター前で、セシルが。

「ま、感謝されるのは悪く無いわね。　報酬も２５００出たし。少ない気もするけど、文句は言わないわ」

K・ステュアート・オーファー・ミラは。

（思いっきり文句言ってる気がする・・・）

エルレーンは、紅茶の入ったグラスを見て。

「ま、報酬に見合った仕事したんだから、いい運動したってことにしとくわ～」

ミラは、Kに紅茶のグラスを出す。

「感謝するわ」

Kの後ろで、薄暗い店内にランプの灯りを入れる次女ミルダの、手を上に伸ばす仕草に座る男の冒険者が無防備に見えるのか。　鼻の下をダラ～ンと伸ばしているのをオーファーは見ながら。

「感謝されるような事をしたかな？」

と、Kに。

「さあ」

Kは記憶に無い。

ミラは、Kを見て微笑み。

「貴方が、どんな仕事でも遣って退けるから・・・他のいい仕事しか狙わない駆け出しチームが、色々仕事をやる気になってねぇ～。　見て、何時ものような屯姿（たむろ）が無くなったわ」

オーファーが見るに、確かに殆ど冒険者達が店に居ない。　こんなにガラ～ンとした斡旋所も珍しい。

ステュアートも。

「本当だぁ～。　安い駆け出しのやる仕事が、メニューに少ない。
う～ん、次の仕事は、どうしよう」

と、仕事の依頼メニューを見て悩む。

Kは、本降り前の外をガラス窓越しに見て。

「大体な。　駆け出しの仕事は、要領あれば短時間で、少ない人数でも儲かるんだよ。　何でもデカい仕事やればいいってモンじゃ～ない。　人に感謝される仕事の仕方すれば、確実にいい噂が流れる。
有名に成るのは早くは無い。　だが、確実でブレない進み方なんだよ」

聞いているオーファーが、Kを見て。

「うむ、地に足が付いていまするな」

ミラは、コップを拭きつつ感心した顔つきで。

「・・・深い・・・」

セシルは、エルレーンと見合って。

「実証されてるから反論出来ない・・・ううう」

「だわね～。　今更、凄いと思うわ。　もう、一人１０００シフォン近く稼いでるし・・」

Kは、昼を馳走になって動きたくないのか。

「ステュアート、のんびり選べ。　今日は、動きたくねぇ～」

セシルも、腹を摩って。

「同じです～。　リーダー」

エルレーンも、手を挙げて。

「わちきも～」

そんな時だ。　二階からミラの姉のミシェルが下りて来た。

「ミラ、ちょっと」

ミラは、

「ゆっくりしてね」

と、二階の階段に向かう。　二階の階段で、姉とヒソヒソ話をする。

Kは背凭れにダラ～ンとして頭を後ろに反らせて、靴を脱いで足を椅子に上げて雨音に耳を傾けていたのだが。　ミラとミシェルの話の最中に、バッと顔を上げた。

「おいっ。　そりゃマズイぞっ！！」

いきなりの鋭い声が響いた。

4、地獄谷に消えゆ人

「え”っ？？？？！！！！」

Kがいきなり鋭い声を上げたのに対して。　ビックリしたミラ・ミシェルに加えて、ステュアート達やK達の後ろに居る次女やテーブルを拭くお手伝いの少女までKを見た。

Kは、ミシェルに向かって鋭い目で。

「今言ったのは本当か？」

ミシェルは、ミラと見合ってから。

「やだっ、聴こえたの？」

セシルは、エルレーンと見合って。

「何？　なんか聴こえた？」

「さあ・・何も」

Kは、ミシェルに声のトーンを真面目に変えて。

「北の山間の洞窟に入ったら死ぬぞ。　前から人が行方不明に成ってただろうが・・」

ミシェルは、そのKの言葉に顔が驚いた。

「貴方・・・り・・理由を知ってるの？」

ミシェルがKに聞くのに対して、Kは口元を歪めて。

「人が入るなんてバカな・・・。　何で、人を入れるんだ？　雨の多い時期に人を入れたらいけない取り決めだったはずだ・・・」

と、下を見る。

ステュアートも、オーファーなどもKが俯いた意味が解らなかった。

ミシェルは、Kを見て。

「ねえ、知ってるなら詳しい話しを教えてくれない？　もう、調査に行った冒険者達が１０日も戻ってないの。　その前に行った兵隊さんは、２０日以上も・・・」

Kは、ミシェルを厳しい目で見る。

「無理だ。　全員・・・死んでる」

その場に居た全員が、Kを見た。

ミラが、カウンターの横を通ってKの元に。

「ねえっ？　死んでるって・・・どうゆう・・・事？」

K、紅茶のグラスを空にして。　前のカウンター奥の使われないグラスの束を見つめながら。

「いいか、北の山脈地帯でも、溝帯寄りの岩山は昔から危険と言われる。　それは何故か知ってるか？」

ミラは、戸惑いながらも。

「ええ・・・この国の北には、山脈を越えると悪魔の生まれ出る地・・・ダロダト平原があるから・・」

Kは、鋭く頷く。

「そうだ。　神々と悪魔の激戦地の一つ。　ダロダト。　平原、凍土、の二面を持ち。　今も開けられたままの魔界との通行口“ファンタムゲイト”が幾つも存在し。　最小限しか開いちゃいないが、その扉を潜ってモンスターや悪魔が這い出る。　北東の岩山は、そのダロダトから山脈続きで存在する連山なんだっ。　だから・・・、あの岩山地帯には、鉱石が多く眠っているのに人里すら無い」

ミシェルも、Kの横に来て。

「でも、北の山脈地帯には、魔物が入って来れない結界が有る筈だわ」

Kは、横を向いて。

「甘いっ」

と、鋭く言葉を吐いた。

「えっ？！」

ミラが、受ける。　結界が有る限り、このクルスラーゲの国は、危険なダロダト平原を北にしていても安全だと云う認識が有るからだ。

「いいか。　このクルスラーゲに張られた結界ってのは、西側の教皇王の住む皇都クリアフロレンスが中心なんだ。　国の西側８割までは山脈奥深くまで結界が張ってある。　だが、このバベッタの辺りは、溝帯や魔物に嘗て汚染された山が近い為に、岩山の入り口ぐらいまで。　川の源流まで上った所はその境。　結界の効力は薄まっている。　日中の岩山の外には出れないが、夜や岩の中ならモンスターも居れるさ」

ミシェルは、妹を見て涙を浮かべて。

「そんな・・・ユレトン達・・・死んじゃったの？」

ミラは、その場に顔を抑えて崩れた。

Kは、斜め下にミラを見て。

「知り合いか？」

ミラは、震えた声で泣きそうに・・。

「あ・・ああ・・・お・・幼馴染・・・の・ちー・・む・・」

Kは、ミシェルに直ぐ。

「何で、そもそも兵隊が行く事に成った？」

と、聞いてから、見てくるミシェルに。

「いや・・・その先は・・仕事の内容に触れるな・・・」

と、主人の領域に踏み込むと判断し。

「いいか。　もう、誰も行かすな。　被害は最小限にしろ」

と、忠告した。　これ以上は、Kの踏み込む領域でもなかった。

だが、ミシェルはKに。

「貴方・・・モンスターが何か解るの？」

「当たり前だ。　この国の古い文献・・・クリアフロレンス辺りで調べれば解るはず。　全く、最近の冒険者は、文献や本を深く読むのを嫌う。　細かい情報は、昔から在るってのに・・・。　横着ばかりしてるから、知らずに危険に成る」

Kは、苦い感情を目と言葉に滲ませる。

ミシェルは、Kに縋るように寄り添い。

「教えて・・・何が・・居るの？」

Kは、ミシェルを見て。

「知ってどうする？」

ミシェルは、涙声で泣き出し。

「ユレトンは・・・私・・・わ・・私達の・・・・甥なの・・・・た・助けて・・」

Kは、上を見た。

（またかっ？！！　前と同じだろうがっ！！！）

ポリア達の時と同じである。

しかし、Kも数年前の自分でも無い。　仕方無いと思ってか。

「・・・。　“デプスアオカース”。　名前は、“深みある貪欲”と云う意味だ。　表向き、体長５～８メートル、体高が３～５メートルの蛙の様なモンスターだ。　肉食で、言語は無いが、頭がいい。　幅７～１０メートルの深い穴を掘り、岩山の獲物が入って来そうな場所にポッカリと開ける。　奴等は、身体に茸の菌糸を付着させていてな。　洞穴の入り口から、然程の奥まで行かない所に、強烈な催眠効果の在る茸を生やす。　この茸、青い毒々しい色で、大雨が降ったり、深い霧で水気を多く感じると・・・毒の胞子を撒き散らす」

セシルは、恐ろしげに。

「まさか、雨宿りで穴に入った獲物や人は・・・その茸の胞子で眠っちゃうの？」

Kは頷き。

「そう。　デプスアオカースは、嗅覚が異常に発達してて、獲物の匂いを深い深い穴の奥底からでも嗅ぎ分けて出てくる。　後は、丸呑み・・・。　生きてる訳が無い。　１０日前なら、生き残った奴等は生還して来れる」

ミラは、Kを見上げて。

「可能性は・・無いの？」

「さあ・・崖崩れなどのアクシュデントとかで生きてるなら・・・可能性はな。　だが、デプスアオーカスは、非常に血の匂いに敏感だ。　夜なら、奴等も外に出れる。　何にせよ、雨続きの山は危険だ」

其処に、次女ミルダが蒼褪めた顔で来た。

「姉さん、私が助けに行くわ。　私の夫の・・・弟・・だもの」

Kの脳裏に、

（方向性・・・最悪・・・）

其処に、ステュアートが。

「ケイさんっ、見てみぬフリ出来ませんっ！！！！」

（や～っぱりな）

げんなりするK。　ポリアと居た時の、サーウェルス達の救出と同じ雰囲気が充満している。

次女ミルダは、ステュアートに向かって。

「嬉しいけど・・・死ぬかもよ・・・。　足手纏いは、要らないわ」

エルレーンは、ミルダを見て。

「生意気言わないで。　2年もブランク抱えて、貴女以外の誰と行くのよ。　仕事なら、一人で請けれないのは貴女も知ってるでしょ？　行方不明捜索は、依頼があれば仕事として成立するわ。　一人じゃ、無理よ」

オーファーも、静かに。

「このケイ殿が今の情報を言うまで何も気付かなかったなら、今のリスター・ザ・ウィッチはケイさん以下でしょうな。　ケイさんを足手纏い扱いして、助けに行かれるとは・・・。　魔女達も堕ちた者だ」

ミラ・ミルダ・ミシェルは、オーファーを見た。

オーファーは、続けて。

「私は、リーダーに従うのみ。　助けに行けと仕事を請ければ行くのみ」

Kは呆れてオーファーを見て。

「以外に辛口だの～」

オーファーは、微笑していた。

ミルダは、Kに。

「もし、戦う事に成るなら・・・勝てる？」

「あのな・・。　相手は狡猾だと言ったろ？　奴等は、怪我した者のみを狙うなら出てくるだろうが。　普通の者が傍にいるだけで出て来ない周到さだ。　捜すなら、巣穴の奥に行く事は絶対条件。巣穴の最深部に近づけば、穴の大きさは倍以上。　奴等も、戦う事も考えてスペースを確保してる。　戦うなら・・・じゃなく。　戦うんだよ」

セシルは、Kに。

「随分詳しいじゃない。　戦った事在るの？」

Kは、少し不貞腐れた態度で。

「フン、戦わないで巣穴の奥が解るか。　昔、在る突発の依頼で戦った」

「うわ・・経験者だ」

セシルは、エルレーンと見合う。

ミルダは、Kに。

「お願い、力・・・貸して」

Kは、ミルダを見て。

「俺はリーダーでは無い。　頼む相手が違うだろ」

ミルダは、ステュアートを見る。

頷くステュアートが、全てを示していた。

さて、捜索が仕事に成ると、Kは先ず。

「とにかく、準備をしっかりやってくれ。　雨は、明日の昼には上がる。　出発は、それでいい。　俺は、夜まで別に行動するから、昨日と同じ宿で待機しててくれ」

ミルダは、カウンターで一緒に座っていて。　Kに噛み付く。

「そんな悠長なっ！！　一刻を争うのにっ」

Kは、のんびりと。

「悪いがな、遅い。　今は、津波が地震で襲ってきた後と同じ。もう、天災の災害が襲ってきて何日も経過してるのに、焦って動いて無理してど～するんだ。　今夜の夜は、雷雨で夜営も無理だぞ」

オーファーは、Kを見て頷く。

「いい読みですな。　風、雨脚、温度を読むからに、これからが雨

の本番。　確かに、急いで動いても、直ぐに足止め喰らいますな」

Kは、ミルダに諭す。

「いいか、目的が目の前で全てが把握出来てるなら無理もいいだろう。　何も見えてないのに、ミイラ取りがミイラに成る行為は詰まらん。　冒険者をやってたなら解るだろう？　有名に成ったオタク等まで世話焼かすな」

ミラは、Kに。

「夜まで何処に？」

Kは、雨の外に目を移しながら。

「対策さ」

「対策？」

Kは、席を立ち。

「毒がネック・・・なら、解毒剤・・・作らないとな・・・。　薬の原料高いから、値切り仕込まないと」

と、ミラを見た。

「つ・・・作れるの？」

Kは外に歩き出しながら。

「ま、エリクサー（万能蘇生薬）よりはお手軽ですな」

「いえっ？！！」

驚いた声のセシル。

Kを見たのは、全員だ。

雨の外に出て行ったK。

ステュアートは、尊敬の目で見る。

「やっぱり・・・凄い人なんだ・・。　あんなに、色々薬を作れるなんて・・。　リーダーを替わって貰いたい」

セシルは、パッとステュアート見て。

「な～に言ってのよっ」

と、背中を叩く。

「あ痛っ！」

痛がるステュアートに、セシルはにじり寄って。

「気合入れろッ！！　新チームの一大大仕事だよっ！！」

驚いたステュアートは、ガクガク頷く。

オーファーは、Kの行った後を見ながら。

「素晴らしい読みだ・・・ブレてない。　自然魔法遣いと同じレベルで天候の読みが出来るのですね・・・。　今まで黙ってたのは、私の事を考えて・・・ですかね。　一緒に仕事出来るのは、感謝すべきかな？」

ミラは、オーファーに。

「本当に、今夜は雷雨なの？」

オーファーは、悪戯っぽく笑って。

「賭けてもいいですよ。　キスでもしてくれます？」

ミラは、ムッとした顔で。

「バカっ！！！　不謹慎っ！！！！」

と、そっぽを向いた。

オーファーは、苦笑いであった。

ステュアートは、ミルダと明日の昼に落ち合う事で合意し。　斡旋所を夕方に出た。

そして・・・・、その夜遅くだ。

「マジ・・・ッスか？」

セシルは、暗い空に轟音を上げて光る雷を見る。　宿屋の窓の外は、

大雨もいい所。　もし旅立っていたら・・・・。

セシルと同じ部屋のエルレーンは、ピンクの下着姿でベットに座りセシルを見て。

「ねえ・・・ケイって、本当に凄い冒険者かな」

セシルは、ベットに飛び込んでから寝そべるままにエルレーンを見て。

「経験は豊富なのは確か・・・みたい。　天候も当てたし、薬師としての腕も、確か」

エルレーンは、前のめりでセシルに寄って。

「戦いはどうかしら・・。　病気してたって言うし・・・。　アタシ達の方が上・・・だよね？」

「さあ～。　もしかしたら、同レベルだったりして」

と、笑う。

その頃。

男3人の部屋では。

ピチャン・・・ピチャン・・・ピチャン・・・。

Kは、窓の前に寝ていながら。

「雨漏りね～。　水難の卦でも有ったか？」

オーファーは、困った顔で寝ながら。

「スマン。　安さに釣られて・・・つい・・・飛びついた」

ステュアートは、完全にベットに潜り。

「スミマセ～ン。　僕が安い部屋って言いました～」

部屋の入り口、右奥、Kのベットの目の前、あちこちに金のバケツが置いてある。　部屋は、湿気でジメジメしていた。

「覚悟決めて寝るか・・」

Kは、横に向いた。

「・・・」

ステュアートは、そろそろと顔を出す。

オーファーも、Kを見るが。　ステュアートに視線を移して。

「寝る」

と。

5、山の中に残る爪痕・・・そして、Kの読み

ステュアート達に、ミルダを加えた6人は。　バベッタの街を出て2日目の昼を迎える頃。　もう、今は岩山の中を歩いている。　草も岩の隙間に生えるくらいの、岩が剥き出しの岩山であった。

ミルダは、ステュアート達を無視して行こうとしていたが。　夜の入りには雨脚が強まっていた出発前夜に。　ミシェルとミラに諭されて我慢した。

ミシェルからすれば、バベッタには腕っ節の強いチームは他にも居たが。　知識と妹の女としての安全を考えるに。　任せられるのがステュアート達しか居ないので必死に言い聞かせた。

さて、黒いローブに身を包むミルダは、黒いステッキを右手に汗を流して岩山の登山道を歩いていた。　旅立って見れば、昨日から好天が続き。　今日は暑いくらいの陽気である。

Kは、ステュアートと先頭を歩きながら。

「岩が多い。　環境が厳しい分。　特定のモンスターが生息する。　岩場の影、曲がり道の先、岩の上、見えない部分にも気を張れ」

Kは、ステュアートに師匠のように、時々言うのだ。　また、ステュアートも、真面目に聞く。

セシルは、そんな2人が息が合っているみたいで妬ける。

そして、岩と岩の壁に挟まれる細い通りに来た時だ。

「モンスターが居る。　戦う準備はオーケーか？」

Kは、伸びる岩の壁に挟まれた道を見た。　人が2人も並んでは行けない道である。

セシルは、ステュアートの後ろから道を見て。

「な～んも居ないじゃない」

Kは、岩の壁を見ながら。

「モンスターを察知するのは、魔法遣いの役目。　生命波動や殺気を感じろ」

オーファーは、岩壁を見て。

「居るのは解るが・・・擬態かな？」

Kは、壁の一部を指指して。

「そうだ。　岩場で擬態して獲物を待つ“インビジバルアレコ”って云う亀だな」

ミルダが、ステッキを構えて。

「何処っ？！！」

Kは、ミルダの前に立ち阻む。

「待った。　アンタは、出張るな」

ミルダは、キリっとKを睨む。

「焦るな。　こんな細い道で魔法を遣ったら岩が落ちる。　以外にこの岩はモロい。　帰りまで考えろ」

ステュアートは、もう鎖鎌を外して左右の手に持つ。

「何処なの？」

エルレーンが臨戦態勢準備ＯＫとばかりに前に出る。

Kは、笑って。

「焦るな。　いいか、魔法はセシルだけでいい。　奴の弱点は、頭と手足。　背中は硬いが、腹に裏返せば柔らかい。　そのヘンは普通の亀と変わらない。　セシル、岩は絶対に撃つな。　ステュアートと、エルレーンのサポートに専念しろ。　俺が、走って奴等を見せるから。　しっかり見て戦え」

と、Kはステュアートとエルレーンの間を割って前に歩き出した。

岩場に挟まれた道は、削った岩の剥き出したまま。　Kは緩やかに走りながら進む。

「あっ」

ステュアートは、Kの顔が出っ張った岩の壁に近づいた時。　岩の

表面がグニャリと歪み、動く何かがKの顔に襲い掛かった。

「本当に居るっ」

エルレーンは、道の上にKにかわされて落ちた岩色の生き物を凝視した。

「行くよっ！！」

ステュアートは、その物体に走った。

「あっ、待って！」

エルレーンも、慌てて動く。

Kは、また岩が動く場所で、屈んで前に転がるままにモンスターを見ず。

「2匹目だ」

と、教える。

ステュアートが、一匹目のモンスターの背中に飛び乗って踏み台にしながら、

「エルレーンっ、ソイツ任せたっ！！！」

と、Kの行った方に大きく飛び越えて行った。

「了解っ！！！」

エルレーンは、岩色の動くモンスターの鞘の付いたままの剣で背中に振り下ろす。

“ガツンっ！！！”

硬い物同士がぶつかる音がして大き目の桶と似た丸い物が動く。

エルレーンは、相手の居る場を確かめたのだ。　直ぐに振り返り。

「セシルっ、持ち上げたらブチかましてっ」

もう、背中の長い柄の銃を構えるセシルは。

「準備はオッケーよ」

長さ、１メートル以上。　筒の先端に開けられた穴は直径５センチかどうか。　セシルは、予めに、鋭い鉄の矢を装着してある。　そう、これはボウガンなのだ。

セシルが、エルレーンの頭上付近に目安を設けて構える時、

「姿見せろっ！！！」

と、エルレーンがモゾモゾ動く岩色のモンスターにまた踏み込んだ。

硬いと聞いたので、無理に斬るよりセシルに任せようとエルレーンは思ったのだ。　鞘から抜かないままに、踏み込んで剣で掬いに思いっきりの両手持ちの斬り込みで振り上げた。

“バガン”と、鈍い衝撃音を上げる。　エルレーンが力を込めた時、かなりの重さが感じられたが、気合いで振り上げる。　“キューー

ーー”と、鳴き声と共に岩色のモンスターが宙に持ち上がったではないか。

「イッケェーっ！！！」

セシルの目が青白く光り、瞬間的に淡く光る銃の銃口から“シュパン！！”と音が炸裂した。

「キャ」

と、驚いたミルダの目の中に、青白く光る一筋の矢が岩色のモンスター目掛けて瞬く間のスピードで飛んでいったのが映る。

エルレーンは、屈んでバックステップする中で、岩色のモンスターに矢が自分と入れ替わる様に飛び込んで行くのが見えた。

“ドスっ！！！”

空気を唸らせる衝撃音と共に、モンスターは矢を受けてエルレーンの前方に飛び落ちて行く。そして・・・。“シュパーーーン！！！”と、魔想魔術特有の炸裂音が上がった。

「凄いな、流石に」

オーファーが感心とばかりに云う。

セシルは、銃の構えを解いて。

「ま～ね～」

一方。　エルレーンは、道に落ちて転がったモンスターを見る。ジタバタ動く岩色が急速に変化をし始めて、茶色とこげ茶色の混ざる色をした亀が現れたではないか。

「やだ、本当に亀だわ・・」

丸い身体はエルレーンの両手で抱えるくらい。　持ち上げる時、ズシリと重さが掛かったのも頷ける。　力尽きて、ビローンと伸びる首。　顔を見れば、亀なのに口の縁が鮫の牙の様にギザギザしていた。

そこに、ステュアートの声が。

「これで終わりだあああーっ！！！」

エルレーンが、ハッとして前を見れば。　ステュアートが鎌で亀を倒していた。

「もう一匹は？」

ステュアートの更に先で、亀を踏みつけているKが見える。

「うそお・・マジ・」

と、エルレーンがしっかり立ち上がった。　後ろには、セシル達も。

その見ている前で、Kが。

「ステュアート、そらっ」

と、Kが擬態を解いている亀を蹴り上げる。

「はいっ」

ステュアートは、飛んできた亀の急所を鎌で斬った。

モンスターは、呆気無く道に沈んだ。

Kは、エルレーンの方に。

「さ、行くぞ。　この晴天は此処では何日も持たない。　北の洞窟に行くには、今日で山間の宿場に着かないと」

ステュアートも、鎌を拭いて皆に歩くのを促す。

オーファーは、ミルダを見て。

「どうやら、我々の出番はまだ先のようですな」

と、笑って歩き出す。

ミルダ、セシルやエルレーンを見て。

（意外に強いのね）

と、後を着いて行った。

さて。　夕方だ。　曇り空の夕方で、かなり薄暗い山中にK達は入り込んでいた。　岩の切り立った壁に囲まれた一部に、木の生えた林程度の地面の見える場所に出た。　川が流れる、急流域に沿った

林だ。

Kは、前を見ながら。

「この流れに沿った先に、山の宿場がある。　そこに行けば、何か手掛かりが在るかもしれない」

セシルは、山登りが疲れたのだろう。　汗で顔を濡らしながら。

「ハア、ハア、ハア～やっと休める～。　汗出るし、急に寒くなるし、風邪ひきそ～」

オーファーも。

「うむ。　空を見るに、天候の変化の兆しが見える。　今夜からは、断続的に雨の可能性があるな」

Kと歩くステュアートは、Kに。

「はあ、はあ、しかし・・ケイさんは・・・あちこち・・良く知って・・ますね。　す・・すご・い・・」

息も乱れぬ涼やかな包帯男は。

「ま～な～。　世界の大体は旅で歩いたし。　ま、冒険者も長いしな～」

エルレーンがその時、林の隙間の少し先に黒い影を見つけて。

「ね・・ねえ・・・あ・あ・・・アレ・・じゃない？」

「そうだ」

セシルは、肯定したKに。

「ね・・ねええ・・・一晩・・・幾らよ・・宿・・って?」

「金は要らないぞ。　誰も居ないから」

「はああっ?!!」

Kは、脇見で皆を見て。

「山の宿場は、無料の山小屋が有るだけだ。　勝手に泊まるのみ」

「あぶ・・・野宿の山小屋ヴァージョンですか・・」

「そうだな～」

セシルは、旨い料理にあり付けるのかと思ったのだが・・・駄目だった。

だが・・・・山小屋の建てられた場所に行ってみれば・・・。

「な・・・何コレっ?!!!」

ログハウスのような山小屋が、４棟ほど有ったのだ。　林に囲まれて、井戸を中心に。　しかし、そのうち2棟が、メチャメチャに壊されている。

Kは、ミルダに。

「済まないが、明かりの魔法を頼めるか？」

ミルダもう暗くなる中で魔法を唱えた。　ミルダの杖の先に明かりが宿り、辺りが明るく見える。　光で見る中、太い丸太がヘシ折られて砕けているではないか。

Kは、丸太を注意深く見て。

「もう、水分が奥まで染み込んでる・・・。　しかも、蟻が巣穴作ってるし・・昨日今日壊れた形跡では無いな・・」

ステュアートは、壊れ崩れたた木の間から、冒険者の荷物らしい物を見つける。

「ケイさん、これっ」

集まって、Kは背負い袋を開く。　干し肉や、焼き米、乾パンなどか。

「保存食が腐りだしてらぁ・・・。　今日の晴天じゃなく、前の晴天も経験してるな・・・この荷物は。　こうなった状況は、恐らく俺達がチームを結成した日の後何日か以内・・・」

ミルダは、興奮して。

「何で解るのよっ？！！」

「食べてる物の量が少ない。　買って、それほど使わなかった。

腐敗が始まるにも日数が必要だしな。　此処に来る中継地はバベッタ以外に無いし。　総合して行くと、五日・・・以上前に放置されてると考えていい。　問題は・・・山小屋をこうした奴・・・。見てみろ」

Kは、壊された木の破片の一部に立って指を向ける。　一同の目、魔法の光が向かうと・・。

「あっ・・・何か光った!!」

エルレーンが、その場に向かう。　壊されて砕けた木の一部に、ヌメヌメした七色に光る液体が・・。　木の破片を手にエルレーンが触れると、ネバ～っとしていながら、プニプニとしたゼラチン質のような感触も。

オーファーは、Kに。

「あれは？」

「あれは、デプスアオカースの身体を保護してる粘液・・・」

ミルダは、Kの目の前に立って悲壮感に満ちる顔で叫び上げそうな声にして。

「此処までやって来た訳っ？!!」

「おそらく、怪我人が逃げてきた・・。　その血の匂いを追って、奴等が来た。　で、此処で休んでいる時に・・・襲われた・・。そんな所だろうな」

Kの話の後直ぐ、明かりが消えた。

「あ・・あああ・・・ユレトン・・ああ・・」

ミルダの集中が切れたのだ。

Kは、暗くなった中で。

「とにかく、残った小屋のどれかに入ろう」

と、周りに言う。

ステュアート達は、泣き出すミルダに気が行ってしまった・・・。

Kは、一人で近い山小屋に向かって行く。

ステュアートは、ミルダに近寄って肩を触る。

「さ、行きましょう。　まだ、全員がそうなったと決まってません」

セシルやオーファーも、ステュアートに手を貸した。

山小屋に入って、Kが火を熾す。

窓も無い室内は、１０人ぐらいが泊まれる雑魚寝部屋だ。　部屋中央に囲めるかたちの竈が有って、Kは部屋の隅に残る薪で直ぐに火を熾して火を安定させながら。

「ミルダ、いい加減に教えてくれないか？　なんで、元々兵士が洞窟に行く事に成った？　依頼に人選を焦ったとミシェルがミラに言

ってたが。　何でだ？」

ミルダは、パッとKを見て。

「な・・何で知ってるの？　ま・・まさか・・・・姉さん・・・掟を？」

Kは、チーズとパンを出して火の前に座る。

「そんな事したら暗殺モンだろうが。　俺の耳は地獄耳なのさ。少し離れたぐらいの話し声なら、唇の動きや音の響きで解る。　ま、事が事なだけに聞いてみたのさ」

「スゴ・・・」

セシルは、ビックリしてKから離れる。

ミルダは、もう仕事として関わっているので仕方無いと思い。

「バベッタの都市総括長官イスモダル様が、新たな鉱石鉱山を捜していたらしいの。　都市の財源確保に・・・。　でも、半年前から、数度に渡って調査兵を派遣したけど、２ヶ月前まで、全く見つからなかった・・。　なのに、山に薬草を採りに入る樵が、いきなり洞穴見つけたって進言して来たらしいわ」

Kは、ナイフでチーズを削いで、火に炙りつつ。

「な～る。　それで、穴に兵を送った訳だ。　だが、経過を見るに、一度じゃないな？」

ミルダはガクリと頷いて。

「3回・・・」

エルレーンは、呆れて。

「まあ・・そんなに？」

Kは、パンとチーズを挟んで。

「情っさけない。　1回目か2回目でクリアフロレンスに聖騎士を要請すればいいものを・・・。　面子を保つ為か、自分の独断行為か、叱責を受けるのを恐れて3回目。　しかも、手に負えないと判断して、冒険者にこっそり依頼・・・。　テメエがまず行けってよ」

ミルダは、Kを睨む。

「な・・何で・・解るのよ」

Kは、金の器で水を沸かしつつ。

「そうゆう奴等の事は、凡そ良く解る。　昔、色々あってな」

ミルダは、床に目を移して。

「イスモルダ様は、事を隠密裏にする為に、高額のお金で依頼してきたわ。　しかも、今月中に始末着けろと・・。　最初は断ったんだけど・・・来月の教皇王様の訪問までに何とかしないと・・・、わ・・私の夫の所為にして処罰するって・・」

セシルは、一気に感情的になって。

「そんなっ！！　丸で横暴じゃないっ！！」

ミルダは、床に爪を立てて掻きながら、涙声で唸るように。

「でもっ、・・・財源確保の・・・方法を提案したのは・・・お・夫・・なのよぉぉ・・・あああっ！！！」

Kは、ミルダに。

「旦那は、内政官か？」

ミルダは、嘆きながら頷く。

（ふ～・・・。　これは難しい事になるな～）

Kは、ミルダの泣く姿を見る仲間達を見回す。　誰もが、複雑な顔つきで言葉が見つからないようだった。　だが、直ぐに思いつき。

「ミルダ、所でもう一つ。　その行方不明に成った兵士の家族達からは、捜索依頼は斡旋所に届いて無かったのか？」

Kの質問に、ミルダはガバッと泣くままの顔をギョッとさせて起こす。

Kは、その顔で何かを悟った。

「そうか・・・そうゆう事か・・・。　長官の野郎は、お前達姉妹に多額の金と脅しの引き換え条件にその仕事の揉み潰しも謀ったな」

「あああ・・・・そ・・そんな・・・」

ミルダの顔も体も、ブルブルと震え出す。

皆、ミルダがKを見れなくなったのに、その事実を見た。

セシルは、震えそうな声で。

「ね・・ねっ？　マ・ママ・・マジ・・なの？」

ミルダは、力が抜けて。

「あ・・・あ～・あぁぁ・・・」

と、その場に崩れた。

オーファーは、その様子を見て。

「どうやら、そのようだな・・。　なんて事だ。　只の人探しが・・・陰謀の一端に繋がって居るとは・・・」

ステュアートは、Kを見て。

「ケイさん、良く解りましたね・・・心が読めるのですか？」

Kは、火を見ながら。

「いや・・・人の汚い裏側を・・・病気に成る前に見て来た・・・」

エルレーンは、Kに干し肉を持ちながら。

「ねえ、これからどうするの？　このままじゃ・・・仕事の成功とかって話じゃ～無くなるわよね？」

セシルは、すすり泣くミルダを見ながら。

「なんか、ムカつく・・・。　権力を笠に着て・・自分勝手に都合良くってさあ・・・」

オーファーは、セシルに片目を上げて微笑み。

「貴族の出身の割には清い事を言うではないか」

セシルは、ムッとした顔をオーファーに向けて。

「貴族だからって、同じにしないでよっ」

と、怒りそうな勢い。

ステュアートは、セシルを宥めた。

「ま～ま～、怒る時じゃないよ～。　オーファーも、セシルに突っかからないでよ」

「スマン」

オーファーは、直ぐに謝る。

ステュアートは、変わってKに。

「ケイさん、どうにか出来ませんか？　幾ら依頼でも、今回のは少し汚いですよ・・。　それに、他の依頼を握りつぶすなんて・・・許可されてないでしょう？　僕の父だったら、怒って相手に斬りかかる。　どうにかして、正す事は出来ませんか？」

Kは、チーズをまた削ぎ。

「ま～な～。　俺が聞いて思わず掘り起こしちゃったのが原因だしね～。　方法は・・・有る」

セシル、Kに這って近寄り。

「マジっ？」

「ああ。　ま～・・そ～な～、ミルダとミシェルの旦那は、役職をクビに。　ミルダ達も厳重注意か、斡旋所の主人を辞めなきゃ成らんが・・・。　なんとか、それで収まるなら」

ミルダは、ヨロヨロと顔を上げて。

「そんな・・こっ事でいいなら・・・受け入れるわ・・・。　お・・教えて・ど・・・どうす・・れば？」

Kは、ミルダを見て黙る。

皆、Kを見ていた。

K特別編2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K編も中盤です＾＾

これから、また更新のスピードが遅れますが＾＾；

ゴメンナサイ＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編3

特別編：K3

6、だから、Kは恐ろしい

小雨が断続的に降る山小屋の夜。

Kは、ミルダにオーファーとセシルを付けて朝にバベッタに戻るように指示した。　為すべき事を教えて。

セシルは、ステュアートと一緒に行くと駄々捏ねるが。

Kは。

「じゃ～、キモイ巨大蛙と戦って、重たい荷物を運ぶか？」

と、投げやりに問い掛ける。

「う”・・・むぅ～・・・」

セシルは悩む。

オーファーは、怪訝に。

「ケイさん、一体・・・何を？」

Kは、紅茶を作りながら。

「証拠が必要なんだ。　確たる証拠。　つまりは、兵隊さんの服とか、武器とか、洞窟に行かされたと云う証拠」

ステュアートは、Kに寄って。

「では、洞窟にはその為に？」

Kは、ミルダを見ないで。

「仕方ね～から。　少し本気ダシテあげるわよ～。　デプスアオカースなんぞ俺一人十分だが。　荷物持ちに、エルレーンとステュアートに来て貰う。　もしかしたら、生存者も発見出来るかもしれんし。　証拠も見つけないといけないしな～」

セシルは、気持ち悪そうに。

「ねえ・・服とかまだ在るの？」

Kは、紅茶を注いだ金（かね：金属製）のカップの香りを嗅いでから。

「基本、デプスアオカースの行動は蛙と同じ。　丸呑みして、食べれる物だけ消化して、残った異物は胃ごと口から吐き出して裏返してポイっ。　多分、巣穴の奥に服や武器の塊がゴロゴロしてる」

エルレーンは、震えて。

「コアイ・・・キモイ・・・カエルさんいやいやだ～」

Kは、オーファーを横目に見て。

「オーファーは一番思慮深いからな。　ミルダ達の協力には持って来い。　セシルは、護衛だな」

ステュアートは、正座して。

「頑張ります」

Kは、エルレーンとステュアートにと、腰のサイドポケットから黒い丸薬を包んだ油紙を出す。

「コイツは、デプスアオカースの巣穴に生える茸に対する免疫解毒剤だ。　効き目は半日。　明日の朝にでも飲んでくれ」

「ハイ」

ステュアートが受け取る。

Kは、更に。

「今から言う。　デプスアオカースは、目の回転で催眠術を仕掛ける。　万が一にも戦うなら、絶対に目を直視するな。　それから、舌がとにかく伸びる。　先端は硬いが、中間から喉元は柔らかい。　斬るならそこだ」

ステュアートは、目をパチパチさせて。

「催眠・・ですか・・・。　凄い・・・モンスターですね」

エルレーンは、見たくも無いと言った顔で。

「りょ～かい。　ケイさんのホンキに期待するわ～」

ミルダは、引き返す事になるからこそ、不安で。

「本当に3人で大丈夫なの？　それに・・・もう生存者なんて・・居ないんじゃ・・」

と、弱々しく横を向く。　此処に、死にに来たのではない。　まして、犠牲者など出すわけには行かない。

Kは、紅茶を啜りながら。

「一つ、生存してる可能性の高い事例がある」

全員の目が、Kに集まった。

セシルはギョっとした目を向けて。

「まだ、隠してる事あったの？」

「嫌。　実はな。　デプスアオカースは、繁殖の為に獲物を生け捕りする。　丸呑みして、巣穴の奥に持ち帰り。　吐き出して、ドロドロした泡の中に閉じ込める」

ミルダは、Kににじり寄って。

「まさか・・生きてるかも？」

Kは、鋭い目線でミルダを見る。

「だが、その泡の中は奴等の卵だらけだ」

セシルは、想像して。

「ウエ～」

と、口に両手を当てる。

「卵から孵ったオタマジャクシの子供は、閉じ込められた者の口や尻などから体内に入って体を食い尽くす」

エルレーンも、セシルを同じに口を手で覆って気持ち悪がった。

ミルダは更に詰め寄って。

「ケイ、孵化までの日数はっ？」

「湿気次第。　今夜の雨ぐらいじゃ～孵らないだろうが。　２・３日前の大雨だと確実じゃ～ないか。　朗報じゃないから、黙ってたが」

ミルダは、もどかしい悲劇に蹲るように前のめりに。

Kは、ミルダの背中を見て。

「最悪の事態を想定して・・・見ないほうがいいだろう。　とにかく、俺達に巣穴は任せろ。　大体、こんな事を隠蔽する奴が、御宅の旦那や姉の旦那をおめおめ生かすか？　この仕事の後片付け次第では、証拠隠滅に殺されるぞ」

ミルダは、心当たりがあるのか・・・また呻きだす。

ステュアートは事が事なだけに慌てて、Kに。

「ケイさん、それじゃ・・・どっちにしろミルダさんやミシェルさんの旦那さんは・・・殺される運命に有るって事ですか？」

Kは、呆れた顔を目元口元に見せて。

「テメエの権威失墜の火種をのうのうと残す無能なら。　証拠隠滅など依頼しないし、脅しもしねえ～だろう。　寧ろ、早く戻って監視しないと、自分の嫁の将来をネタに自決でも迫られたらど～するよ・・・。　ステュアート、お前の嫁がセシルで同じ立場なら、迫られてどうする？」

セシルは、ビックリの話に顔を赤らめて。

「バッバカ男っ！！　なんて引き合いにするのよッ！！」

だが、ステュアートは、素直に考えて。

「愛した人を守れるなら・・・するかもしれません・・。　失うぐらいなら・・・自分が・・」

セシルは、益々真っ赤になって。

「ババババババ・・バカっ」

と、狼狽の極みに。

近くのエルレーンは、半目の呆れ顔で。

「“例え話”・・・だしょ？　結婚するの？」

「う”・・・・」

どうやら、トドメだったらしい・・・。　セシルの頭から、プッシューと蒸気が・・・。　倒れたようだ。

オーファーは、真面目な顔で転がったセシルを見て。

「若い女子（おなご）には刺激が強すぎたか・・・。　手厚く祈る」

Kはセシルを無視して、ミルダに冷静な声で。

「過ぎた事は取り返せない。　だが、迫る危機や想定出来る危険は取り除ける。　泣くのもいいが、全て終わってからでも出来る。明日からは、腹に気合入れろ」

と、荷物を枕に横に成る。

オーファーは、雨音に耳を澄ませて。

「雨音は優しい子守唄・・・。　ミルダ、涙は雨と一緒に此処で流しておけ。　明日からは、無用に情けはしないぞ。　未来の為にもな」

その夜の小雨は断続的で、林に降る音は優しかった。

さて、その次日の朝。　早朝、先に立つミルダ達が外に出る。

「うはっ、凄い濃い霧」

外に出たセシルは、立ち込める深い霧に驚いた。　となりの山小屋も、壊れた山小屋も見えない。　辺りの林は、緩やかな霧の流れの切れ間に霞む程度。

しかし、旅立とうとするミルダ達3人が出た後、Kも出てきて。

「おい、待て」

川原に向かおうとするミルダ達を止めた。

セシルが、

「何さ」

「いや、行く前に運動するか?」

Kの言動の意味が解らないミルダ・オーファー・セシルは黙る。

Kは、皆の前まで出てきて。

「今、戻る途中の川原にデプスアオカースが1匹居る。　霧に紛れて這い出てきたんだろう」

ミルダは、眉間に皺を寄せて。

「潰してやるわっ」

と、川原に向かう。

「おっ、おいっ！！」

オーファーは、慌てて後を追う。

「うわあああ、勢い有り過ぎっ」

セシルも追う。

Kは、黙って霧に溶けた・・。

走るミルダが川の音のせせらぐ所に来ると。

「あ・・・あれが、デプスアオカースっ！！！」

霧の中、幅の狭い川を渡って来る黒い影・・・。　スッと霧の切れ間に、角を有したドデカイ蛙が現れた。

「あいは～、デ・・デカ～」

セシルは、見上げる程に大きい蛙に脱力しそうである。

身体の色は、やや薄い黄緑を中心で、赤や茶色の保護色の斑模様。
顎から下の腹に掛けては薄まった灰色で白に近かった。

ミルダは、杖を構えて。

「魔想の力は創造の力・・・マジックライトニングっ！！！」

集中して、大きく杖を振り込んだ。　黒く燃える杖の先の蟠った黒いエネルギーは。　迸る雷の様に迸ってデプスアオカースに襲い掛かった。

“グゲエエグゲグエェ・・”

稲妻が落ちたようにデプスアオカースを貫く魔法の雷。　デプスアオカースは、身体を走った電撃の威力に負けたのか、ヨロヨロとよろめいて、ドスンと裏返しに。

「おおっ、流石にリスター・ザ・ウィッチっ！！！」

オーファーは、一撃でモンスターを気絶させたと驚くが・・。

「まだよ」

ミルダは、指をパチンと鳴らした。

刹那・・。

“バリバリバリっ　シュパーーン！！！！　”

と、デプスアオカースの身体に残って光る黒い電流が膨張してスパ

ークする。

「きゃあっ！！」

セシルは、あまりの音に驚いて屈んだ。

オーファーとセシルの見ている前で、体高５メートル近いデプスアオカースがスパークで１０メートル近く持ち上がった。

“ドスンッ！！”

鈍い振動を立てて落ちたモンスター。　その振動がオーファーにも伝わる。　かなりの重さがあると見て取れた。

デプスアオカースは、ピクピク動いていたが。　直ぐに瞳孔がガバッと開いて手足や口の中の舌がビロ～ンと伸びる。　死んだのだ。

魔想魔法の中でも、炎や雷など森羅万象の姿を強く模る魔法は強力な分、細かいイメージと研ぎ澄まされた集中力を要求される。　追加効果を及ぼす場合も、イメージの持続と魔力の消耗を余儀なくされるため。　中級レベルの技量が必要とされる。　ミルダは、その魔法を瞬間で遣って退けるのだから、引退しても実力は衰えて居ないらしい。

ミルダを先頭に霧の中で死んだデプスアオカースを見ていると、モンスターの脇にＫが姿を見せる。

「お～お～、派手にやってしまったね～。　もう、他には居ない。　コイツも死んだしな。　気を付けて行けよ」

Kはモンスターに一瞥してから、ゆっくりとした足取りで山小屋に向かって歩く。

ミルダは、デプスアオカースを睨んでから、

「解ってる。　こっちは姉さんと話して上手くやるわ」

Kは、右手を上げて応えた。

Kが、霧の中に消えて。

「行きましょうか」

ミルダが二人を促す。

オーファーは、デプスアオカースを見て。

「変な言い方だな・・・」

歩き出そうとしたセシルは、オーファーに向かって。

「何がよ」

オーファーは、セシルに顔を向けて。

「今のケイさんの言葉・・」

「何処が？」

「“他には”、“コイツも”とは、丸で他にも居るようではないか」

セシルは考えて。

「全体的にじゃない？　洞窟の方も含んでるのかも」

「フム・・・」

オーファーが、理解し兼ねる顔をした時。　冷えた風が吹き始めた。

ミルダは、自分の倒したデプスアオカースの先の川原の向こうに、何かを見た。

「あ・・・・ねえ・・向こうに何か・・・転がってるわ」

「ん？」

オーファーも、セシルもミルダの指す方に向く。

冷たい風が吹き始めて、霧が靄の様になり下に降り始めた。　３人は、川原の前まで来て、怪訝な顔で霧の中に見える影を確認しようと・・・。　そして、その中に見えたのは・・・・。

「え”・・・・マ・・マジ？」

セシルは、半分に斬られたデプスアオカースの転がった死体を見た。

いや、モンスターは一匹では無い。　岩色の保護色に成る亀や、デプスアオカースの様に大きなカメレオンのモンスターの死体も転がっているではないか。

「こ・・これは・・・バジリクスの亜種だっ」

オーファーは、この山に住む最悪のモンスターの中には、睨む者を石化させるカメレオンのモンスターが居ると聞いた。　頭に赤い鳥の羽のような鶏冠を持ち、岩色の巨大なカメレオンだと・・・。

セシル、そのモンスターの姿に釘付けになりながら。

「コレ・・・全部・・・ケイが？」

オーファーは、唸り。

「うぬぬぬ・・・昨日・・・深夜に2度・・・用を足すと外に出たが・・・。　恐らく忍び寄ってきたモンスターを・・・始末しに出たのだな」

ミルダ、そのモンスターの姿に、パッと山小屋の方に向いて。

「ああ・・・溝帯で死んでいた鰐も全て鮮やかに斬り倒されていたって・・・。　やっぱり、彼が・・・」

セシルは、Kの手練を見て腰が抜けそうだ。

「あわわわ・・・凄い生意気な口利いちゃった・・・」

モンスターとはバケモノの事か、Kの事か・・・。　やはり、Kは恐ろしい。

しかし、ミルダは歩き出す。

（彼の実力が解った以上、尚更今回は従った方が正解ね・・・。　姉

さん、待ってて。　直ぐ、戻るわ）

7、カエル・カエル・カエル・カエル・・・洞窟はカエルの帝国。

霧が晴れた朝、陽も上がった頃。

「コレ・・・み～んなケイさんが？」

洞窟に向かおうと川原に出たステュアートとエルレーンは、モンスターの墓場と化した川の向こう岸に唖然としてしまう。

Kは、川を渡るために足場の石を探しながら。

「手前のカエルはミルダだ。　いやいや、流石は腕のいい魔法遣い。
デプスアオカースを一撃だったぜ」

と、Kは川を渡り始める。

エルレーンは、そうゆう問題では無いと思う。　恐らく、普通の冒険者の全員が真っ先に思う疑問。　それは・・・。

「そ・・そうじゃ・・・なくて・・。　なんで、こんな駆け出しのチームに加わるの？」

Kは、小川の上でモンスターの屍を見て。

「もう、名前売るだの飽きた。　のんびりが一番・・・でも、厄介事を穿るんだよな・・・癖に近いなあ～・・・。　気を付けナイト～」

Kは、胸の前で握り拳を・・・。

ステュアートは、開いた口が塞がらず。

（今・・・朝ッス・・・）

ステュアートもエルレーンも、生じに刃物を武器にしているだけある。　近くに寄って、モンスターの斬り口の鮮やかさに驚く。　丸で、岩を斬った跡に水を掛けた様に血が出た跡。　全く噴出したとは思えない。　これは、斬るスピードも然る事ながら、相手に抵抗が全く無く。　最も最適の角度で武器を振るっている証拠。　真似が出来るとは思えない。

「ねえ・・・気分どう？　あんな人のリーダーに成ってる感想・・・」

エルレーンは、リーダーのステュアートに聞く。

「・・・・」

ステュアートは、言葉が出なかった。　なんと言ってよいか。

さて、Kを先頭に、川を越えて石と石の断崖絶壁に挟まれる狭い小

道を歩いていけば。　澄んだ水が崖を流れ落ちる滝の前に出た。
滝壺は幾らか深そうな、落差５０メートルも有るかどうかの滝である。　辺りは、一面砂利や大小の岩がゴロゴロしている。

Kは、２人を見て。

「この水は、飲める。　飲むなら、滝の水をなるべく飲むといい。
あと、入る洞窟は、アレだ」

と、滝壺の左上に空いた洞穴を示す。

２人、それを見上げて確認した。

流れ落ちる滝の見上げる落下の始まる所の左に、ポッカリと穴が岩の壁に空いている。　しかも、其処まで行く事が出来る、人工的に作られたとみれるジグザグの上り坂が岩の崖に設けられていた。

「ご丁寧に、道が有るわ」

ステュアートは、見て。

「多分、薬草採りの目的で元からあったか。　兵士さんが、入るために作ったんじゃない？」

Kは、浅い滝壺から伸びた水の溜まり場を歩きつつ。

「苔の感じや、ぶら下がる蔦を見るに、この上り坂は古いな」

エルレーンは、後を追いながら・・。　Kの足元を見て。

（嘘・・・水場歩いてるのに音してない・・・。　丸で・・・水の上を歩くみたいに音してないよ・・・）

Kの足音はせず。　自分とステュアートのパシャパシャという音だけがしていた。

早朝の冷たい風で、日陰の滝はひんやりとしている。

「あ・・・アレだ」

Kは、崖の上り坂の入り口手前、滝壺に近い砂利の上に、黒ずんだ塊を見て指差す。　丁度、洞穴の真下近く。

エルレーンとステュアートは見合って直ぐに其処に早歩きで向かう。

「何コレ・・・服？」

エルレーンは、黒ずんだ丸い物が、服の様だと解った。　取れかかったボタンが見えたからである。　何か白っぽいテカテカした糸を束ねた様な繊維質の物が服の見た表面にくっ付いている。

ステュアートは、その服を丸めるテカテカした物を、鎌の刃で斬ろうと。

「退いて、斬る」

そこに、Kが緩やかな言葉使いで。

「駄目だ、刃物が駄目になる。　ナイフやろう」

振り向いたステュアートにナイフを投げた。

エルレーンは、ナイフを見て。

「安物ね」

「使い捨て出来る」

ステュアートは、屈んで斬ると・・・。

「うわ・・・ネバネバしてる・・」

テカテカした白っぽい物は、ナイフにベタア～っと絡みつく。

Kは、それを見ながら。

「それが、デプスアオカースの胃液だ。　非常に強い酸で、粘着質。
胃の中に入ったら、もう助からないのはその胃液の御蔭と云う訳ですな」

腕を組み、斬るステュアートを見て説明する。

エルレーンも、落ちていた木の棒を掴んでステュアートの手伝いを・・。

「これ・・・マントだわ・・・。　しかも、僧侶の・・」

エルレーンは、刺繍の解け掛かっているが、服の背中に女神フィリアーナの姿を見た。

ステュアートは、Kを見て。

「確か、ミルダさんの甥のチームには男女の僧侶が居たって・・・言ってましたよね？」

頷くK。

エルレーンは、襤褸屑の様な下着を見て、黒い男物のパンツを見つける。

「ねねっ、コレ。　男物じゃない？」

「うん・・・そうみたい」

ステュアートが、見て肯定する。

Kは、これから入る穴を見て。

「チームは、全員で6人と言ったか・・・。　元のチームが4人・・・仕事で一時的に2人加入・・。　誰かでも、生きてるならいいがな・・」

エルレーンは立ち。　少し声のトーンの落ちた声色で。

「私・・・そのチームに入ろうとしたわ」

「えっ？！！」

驚いて立つステュアート。

Kは、エルレーンを見て。

「腕の差別で撥ねられたのか？」

エルレーンは、複雑な顔で頷く。

「腕より・・前のチームを夜逃げ同然で・・逃げたから・・」

「な～る。　でも、貞操の危機有ったんだろ？」

エルレーンは、俯いて。

「うん。　分け前の取り分が私少なくて・・。　等分にしてって言ったら・・・裸になってチームに・・貢献しろって・・」

ステュアートは、難しい顔だ。

「酷い・・・そんなの貢献じゃ無い」

Kは、俯いているエルレーンを見て。

「ま、このチームならそんな事も有るまいに。　しかし、事実を知ってエルレーンを弾いたのは・・・。　力量がもっと上の奴が居たか・・・。　エルレーンより加えた奴がチームバランスに沿っていたのか・・。　悪い噂でも、流されたか？」

エルレーンは、Kを上目使いに見て。　何で解ったかのか信じられない。

「・・・身体・・・売り歩く流れ狼・・・・」

Kは、

「あはははは・・・」

と、波顔して笑う。　そして、坂を上り始めるべく歩き出した。

「ケっケイさんっ！！！」

ステュアートが驚いて、声を出せば。

「ああ、悪い悪い。　エルレーンなら、亜種族でも美人に入る。
冒険者なんかに安く売る身体でも無い。　随分安く見られたモンだ。
仕事成功して、一つ見返してやれよ。　あははは、言う噂も詰まらんチームだわな」

ステュアートは、ビックリしてエルレーンを見ると・・・。

エルレーンは、Kを見上げて微笑んでいた・・。

「エルレーン・・・」

ステュアートの声に、エルレーンは歩き出し。

「その通り、あんな汚い奴等に小銭で渡すほど安い身体してないっつ～の。　売るなら、世界最強に冒険者か大金持ち捜すって。　売って欲しいなら、其れなりに金持って来いって～のよ。　チームの名前売って、イイ男探しでもするわ」

Kは、上に上りつつ。

「全くだ、女王エルレーン様とか狙うか？」

ステュアートは、エルレーンの姿に・・・。

「元気に・・・なっちゃった」

若いステュアートには、まだ女性の心持が理解出来なかった。

ステュアートも、エルレーンの後を追う。

エルレーンも、女性の亜種族の独り身で冒険者などやっていれば、それなりに欲の汚い部分を垣間見るだろうし。　もう、軽い戯言で怒るほど新米でもない。　Kのブラックジョークが、面白かったのだ。

さて、ジグザグと坂を右に左に。　最上段まで上がると、なだらかに上りで滝の脇に向かう。　洞窟の前に来て見ると・・・。

「グ・・臭い・・・」

エルレーン、洞窟の奥から黴臭い風が、さめざめとした温度で吹いてくるのに鼻を摘んだ。

Kは、高さなどを見てから。

「ホラ、洞窟の奥。　青白い茸が生えてる。　アレだ、毒キノコ」

ステュアートは、エルレーンと出てくる前に薬を飲んだ。

「薬飲みましたから、大丈夫です」

Kは、ステュアートを見て。

「あくまでも予防だ。　ぶつかったりして胞子を大量に吸うと、薬との抵抗反応で頭痛するから気を付けろ」

「ハイ」

Kは、エルレーンに。

「じゃ、女王エルレーン様に近づく為にいきまっか？」

「ういす。　何時か、抜けたチームの奴等を膝間付かせるわっ。靴でも舐めさせてやるっ」

Kは呆れ笑いで洞窟内部に踏み込んだ。

洞窟の中は、毒キノコが発光茸なので蒼白い光を鈍く放つ。　暗い闇の中で、Kは前回も使った光の魔法の封じられた小石を持って来ていた。　この魔法を発動させる“解呪術魔法”（ディスペル）は、魔法の根源的基礎魔法。　Kも、亜種人のエルレーンも遣える。

Kは、態とエルレーンに小石を渡して魔法を頼んだ。

「へ～。　エルレーンって、魔法遣えるんだ・・・凄いなあ～」

感嘆するステュアート。

Kから小石を受け取ったエルレーンが魔法を発動させたが。

「ま～ね、亜種人の特性だから」

と、ステュアートに笑って返しながら、光る小石を1つ渡した。

光に照らされた洞窟の中は、横幅、縦幅、川原に倒れていたデプスアオカースの大きさとピッタリの幅。　しかも、下の地面は石だが。　天井や横は、あの壊れた山小屋に付いていたヌメヌメの粘液がベタベタ付いていて。　そこから、ニョキニョキと茸が・・。　青白い茎に、ドス青い斑点がベタベタ付いたような笠の部分。　長い物は、中指程か。　根元から、何本も生えている茸もある。

エルレーンは歩く途中に、ポロポロと茸が落ちているのを避けて歩きながら。

「朝のカエルが落としたのね。　狭い所を無理矢理出てくるからよ・・・一杯落としてる」

ステュアートは、緩やかに下る洞窟の奥を見ながら。

「随分奥まで掘るな～」

Kは、前を見ながら。

「もっと奥の最深部は凄いぜ。　巨大な洞窟が広がり、何百匹と奴等が居る」

エルレーンは、驚いて顔が引き攣った。

「なっ、何百・・・・」

「ああ、“カエル帝国洞窟編”って感じ。　とにかく、ウザイくらいに居る」

ステュアートは、冗談混じりのKが余裕に見える。

（知ってて、平気なんだ・・・凄い）

Kは、続けて。

「だが、カエルだけ気を取られるなよ。　昔の話だと。　カエルの洞窟がダロダト平原に近い所まで有って。　平原に住まう強力なモンスターがやって来る事も有ったらしい。　何が出るか解らん」

「サイテーのカエルね・・・」

エルレーンは、とんでもないモンスターの登場は勘弁願いたい処だ。

どのくらい歩いたか・・・。　後ろの方に振り返っても、もう光さえ見えない頃。

Kが止まった。

「あれ？　どうしたの？」

エルレーンは、先とKを交互に見る。

Kは前を指差して。

「カエルの子供がお腹減ったらしいね。　俺達の匂いを嗅ぎつけた

ようだ・・」

「え”・・・子供って・・・オタマジャクシ・・・ですか?」

ステュアートが、前の暗い洞窟の先を見る。　此処は水の中でも無いのに、オタマジャクシとは・・。

「そう。　もう、後ろ足は生えてるだろうな・・・。　口の中が鰐か鮫みたいになって、肉に喰らい付くと一瞬で喰いちぎる」

その言葉に、エルレーンは戦慄を覚えて震える。

「や・やだぁ〜」

しかし、ステュアートは、Kに難しい顔を向ける。

「ケイさん・・・それって・・・誰か犠牲に成ったって事ですか?」

Kは、チラリとステュアートを見る。

ステュアートは、それが肯定と解った。

「あぁ・・やっぱり・・・2・3日前の雷雨で・・・誰か・・・」

悔しい思いに染まるステュアート。

洞窟の奥から、“キュキュッ・・キュッキュ・・・・・”と、不気味な鳴き声のような音がする。　洞窟だから共鳴するので何重にも響く。　数はどのくらいか全く想像出来ない。

エルレーンは、剣を抜き払って。

「敵討ちだわっ」

ステュアートも、鎖鎌を腰から外して。

「必ず戻るっ」

と、前を見る。

Kは、光の小石を持ちながら。

「来たぜ」

と、光の照準を合わせた。

奥から、黒い塊が壁や天井を這って来る。

「うわっ、数多いっ」

エルレーンも、ステュアートも、それぞれ光の小石を一つづつ貰い持っている。　エルレーンは、胸のペンダントに引っ掛けていた。

Kは、一歩前に出て。

「いいか、俺の討ち洩らしだけに専念しろ。　お前達に危険は任せない約束だからな」

「ハっ・・あ・・・」

ステュアートが返答しようとした時、もうKの姿は消えていた。

「嘘ッ！！」

エルレーンの驚き・・・。　洞窟の中で、一陣の刃の旋風が駆け抜ける。

瞬時に、どうなったのか黒い人の子供くらいの大きさのオタマジャクシが、バタバタと壁や天井から落ちた。　オタマジャクシの大きさは、個体差が有る様だが、どのオタマジャクシも後ろ足だけ生えていた。

「見えない・・・」

エルレーンもステュアートも、全くKが見えない。　しかも、だ。　オタマジャクシは、落ちてからパックリと縦や横や斜めに斬られて割れる。　血が出るのは、その後だ。

「ゆっくり後から追って来い。　動いてるのは気をつけろ」

洞窟のかなり先から、Kの声が響く・・。

エルレーンと、ステュアートは、見合って頷き合った。

「行くわよ」

「ハイっ」

2人、Kの後を追って走り出す。　途中、シッポだけ斬られたオタマジャクシが、凶暴な牙を白く見せて蠢くのを、エルレーンが飛び

越えざまに斬る。

ステュアートは、一匹でウネウネ動いてくる天井のオタマジャクシを、

「そらっ」

と、鎖を擲って先端の分銅で頭部を撃つ。

“ギュギュウ・・・”

不気味な呻き声を上げて、天井から落ちる所に駆け込んで斬る。

走り抜ける床には、夥しい数のオタマジャクシが斬られて落ちる。

（なんて手練よっ！！！）

エルレーンは、洞窟に広がるモンスターの体液の匂いに鼻を歪ませつつ走った。

平坦な場所を走り、大きい洞窟の分かれ目を右に左に走って行けば。

何本もの洞窟が、石の柱の隙間を通じて繋がっているような広がりが見え出す。降り坂と、平坦を繰り返す洞窟。丸で、地下迷宮の様だ。

「エルレーンっ、何か洞窟が大きくなってるよっ」

「ええっ、多分カエルの帝国が間近なのよっ」

洞窟自体にも変化が見える。土の部分が見え始めたのだ。岩に

混じって、土壁が・・。

Kは、エルレーンと、ステュアートに分かれ目の時だけ姿を見せて、行く先を見せて直ぐに消える。

エルレーンと、ステュアートも、必死に着いて行き。　Kの討ち洩らしたオタマジャクシを沈めて行った。

8、カエルの帝国発見。　カエル帝国よっ、永遠に・・・。

「うわああっと」

「うひゃ～ああ～」

ステュアート、エルレーンは、遂にとんでもない大きな空洞に出る。

「ひ・・広いわあ・・・」

エルレーンの声が、スぅ～っと響き渡る。

ステュアートは、上に光を向けて。

「凄い・・・上が良く解らない・・・。　回りも・・・・」

丸で、町1つそっくり入りそうな広い空洞なのだ。

「ケイ・・何処？」

エルレーンは、Kを捜す。

すると、Kの声が

「真っ直ぐだ。　カエルの吐いた兵士の服が有る」

と、かなり離れた所から。

2人、Kを捜して歩いていけば・・・。

「居たっ」

ステュアートが声を上げる。

デコボコした岩場の向き出した所に、Kが屈んでいた。　何かを見ている。

近づいてきた2人に、Kは立ち上がって。

「此処が、奴等の住処さ。　昼間だから、寝てるがな」

ステュアートは、光を上に向ける。

「へえ・・・凄い空洞ですね・・・」

だが、Kの居る石壁から先は無く。　壁を見上げて行くと・・・。
壁の中に、ポッカリと穴が・・・。

「エ？　あ・・・穴？」

エルレーンが、壁に段々で何十と穴が空いているのに目を奪われる。

穴の大きさは、結構な物だ。

Kは、穴を見上げて。

「寝る時は、この穴の中の奥で寝てる」

と、言ってから。　自分足元を見て。

「ホラ、此処に兵士の衣服が有るぞ」

エルレーンは、下に顔を向けて。

「ねぇ、カエルの胃液付きでしょ？　どうやって持っていくの？」

Kは、腰の水袋の1つを取ると。

「酸を中和してやればいい。　貝殻などの粉と、この山の水は酸を中和する性質がある。　混ぜて掛ければいい」

と、エルレーンに渡した。

「ええっ？　アタシ・・・やるの？」

Kは、背負い袋から丈夫な紐を出して、ステュアートに渡すと。

「ああ。　左奥の場所に、人の生命波動を弱く感じる。　俺が行くから、2人で水を掛けて、紐で頑丈に縛って引っ張っていけ。　重くないから、大丈夫だ」

ステュアートは、Kの腕に掴み掛かって。

「い・生きてるんですね？」

頷くKは、ステュアートの目を見て。

「いいか。　幼生、つまり俺等が斬った子供の体液の匂いがこっちに深く満ちれば、親が起きる。　もう、俺達の膝まで匂いが来てるから、カエルがウジャウジャ起き出すのは目の前。　何時でも逃げれるように、用意してくれ」

と、幾分いつもより真面目な声。

エルレーンもステュアートも、大きく頷いた。

Kが、左の壁伝いに向かって行く。

エルレーンは、水袋の口を開いて。　白い紙に包まれた粉を水袋の中へ。　ステュアートは、Kが示した丸まっている黒ずんだ衣服の塊を2つ、エルレーンの足元によこした。

一方、壁の外れ。　白い泡がこびり付く洞穴にKは入った。

「・・・」

入って、少し行けば高さは入って来た洞窟と変わらないが。　横に大きく広がる空間に出た。
　壁や天井には、例の茸が繁殖してびっしりと・・。　そこには、白い卵を含むカエル達の泡状の塊が所狭しと有る場所だった。

（凄い卵が孵ってるな・・・さっきの幼生にも個体差あったし・・・。　何人も・・・か）

白い泡のような物質が、天井からぶら下がる繭のように床へ伸びる。
　繭のような白い泡の物質はもう硬くなっているが、人が一人入れるようなスペースが隙間から覗ける・・。

「・・・」

Kは覗いてみると、硬くなった白い物質に同化した人の衣服が血を滲ませて残っていた。　網の目のように空く物質の隙間は、拳大。
　さっき倒した幼生の小さいものがそれくらいだった。

（卵を含んだ泡に人なんかを包んで、此処にぶら下げるのか・・・。
以前に見たときは、壁のように何十も奥に繋がってたが・・・。
産み方は、色々あるのか・・・）

奥へ奥へとKは歩いて行けば。　繭のようなものがまだ隙間を作らない白い塊で在るのを見つける。

「これだ・・・中に誰か居る・・・」

感じる生命波動は弱まっているが。　生きている。　しかも、女性

のようだ。　だが、Kは白い物質の奥に蠢く何かを見た。

（チィっ、幼生も孵る直前じゃないか・・・。　このまま連れて行ったら・・・幼生を斬った洞窟内の体液から出た水分で孵るな・・。
仕方無い、我慢して貰うか・・・）

Kは、もう左手に一番長い短剣を構えて、一閃。　パックリと十字に繭が斬れた。　切れた隙間から、２０半ばどうかの金髪の女性が見える。　白いローブを纏っていた。　更に、一閃すれば、十字に斬れた繭を模る泡状の物質が壊れ、更に女性のローブも斬れた。

「・・・」

前に倒れこんで来る裸の女性をサッと受け止めれば、、髪の毛などに鶉（ウズラ）の卵ぐらいの半透明な物がこびり付く。

「ケっ。　すっかり身体を為してら・・・」

半透明の丸い中蠢くのは、オタマジャクシ型の黒い幼生。　Kは、直ぐにその幼生を剥ぎ取り始めた・・・。

その時だ。

エルレーンと、ステュアートは、紐にグルグル巻いた黒ずむ衣服を引いて走ってきた洞窟の出口に向かおうとしている。

“ゲコ・・・・・”

エルレーンは、背中の方から変な鳴き声がするので。

「はぁっ?!!」

と、振り返る。

「どうしました?」

ステュアートは、エルレーンに聞く。

エルレーンは、辺りを見回して。

「え・・・何か・・・鳴き声・・・聴こえた」

ステュアートは、驚き右手の光の小石を高く掲げて辺りを見ると・・・。

「あ・・・・右の壁っ」

「えッ?」

右手の壁に光を向けると、穴の中からモゾモゾと動き出てくるカエルの頭部が見える。

エルレーンは、直ぐに。

「ケイっ!!!!!　気付かれたっ!!!!!」

と、ステュアートをと出口の洞窟に後退りする。

この声の時、Kは女性の下着すら脱がせていた。

「おいっ、起きろっ」

Kは軽く頬を叩く。

「う・・・ううあぁ・・・だ・・れ・・？」

呻くような返事の女性は、血色の悪い蒼白い顔だ。

Kは、女性の中々お目に掛かれない位の大きい胸やしなやかな背中を見て、幼生の付着の有無を確かめながら。

「いいかっ、しっかり聞け。　助けに来た。　だが、身体のあちこちにモンスターの幼生が着いてる。　体内はどうだッ？」

すると、女性は弱った声で、掠れながらに。

「に・・・にげ・・・もう・・・口からも・・・下からも・・・は・・入って・・・」

Kは、女性の薄く開いた目を見る。　不敵に笑いかけると。

「フッ、死なすには惜しい女だ。　少し苦しいのと、軽い衝撃あるが、我慢しな」

僧侶の女性は、弱く頷く。

その時、またエルレーンの声で。

「ケエエエィっ！！！！　スンゴイ出て来たあああぁッ！！！！！」

Kは、苦笑いで。

「女王様の声で、カエルさんが膝間付きに出てきたのよ～」

と、言った瞬間、右手を淡く光らせて女性の顔から喉、胸、腹、と滑らせて、下腹部で密着させた。　瞬間、淡いKの右手の光が消え、女性の身体の全身に迸った。

「ぎゃあああッ！！！！」

女性が、ギョッと目を開いて滾(たぎ)るような声を上げて全身をツップさせる。　直ぐにぐったりと脱力する。

Kは、女性をうつ伏せの体勢にすれば・・・。

「おえええっと・・おううう・・」

女性の口から汚泥のような幼生の塊がドロドロと。　下半身の太股にも、ドロドロと流れ出た幼生の孵化直前の卵達・・。

Kは女性が吐かなくなってから、腕に抱える。　ローブに包んで遣りたかったが。　カチカチに固まっていたので、自分のコートを外して包んだ。

（全く、女を助けるのは俺の宿命か？）

左手に短剣。　右手に女性。　Kは、素早く空間に解けるように消えた。

一方。

「どうなってのよッ！！！　このカエルの群れッ！！！！」

空洞の至る所に空いていたカエルの塒（ネグラ）から、デプスアオカース（通称：カエル）がわんさかと溢れ出て来る。　エルレーンとステュアートは、まだ小型のカエル３匹を倒してＫを待っていた。

倒されたどのカエルも目が潰されており。　エルレーンとステュアートは、Ｋの注意を覚えていたようだ。　しかし、エルレーンの顔には擦り傷が、ステュアートは、右肩から血を流している所を見ると、苦戦している様だった

２人、何十匹と迫るカエルに脅えて洞窟の方に後退りしていたが・・・。

“ギュゲエエッ！！！！　ギェアアアっ！！！！！”

いきなり断末魔のカエルの鳴き声が奥から、１０匹近いカエルが宙に飛ばされてバラバラに砕ける。

エルレーンは、その光景に。

「来たッ！！！」

ステュアートも。

「ケイさんっ！！！！」

と、声を。

すると、Kが声だけ飛ばして来る。

「外に走れっ！！！　振り向くなぁっ！！！！」

と。

エルレーンは、ステュアートに向かって。

「いくわよおおおッ！！！」

すっかり、女王様の命令口調のように。

「ハイっ、行きましょうっ！！」

2人は、洞窟を抜けるべく走り始めた。

さて、2人が走って行った後。　Kは、戻る洞窟とこの広い空洞の境に現れて、カエルの方に向き直る。

腕の中の女性は、死に損いの顔でKを見上げて。

「に・・・にげ・・・ない・・・・」

Kは、警戒しながら固まってにじり寄って来るカエル達を見ると。

「いいか、御宅みたいに弱ってる生き物をこのカエル達はおろか、山のモンスター達は執拗に追いかけるんだ。　夜に襲われても面倒だぁ」

女性は・・・力弱く。

「おい・・・て・・・にげ・・・」

Kは、包帯顔を女性に向ける。

「そんなら、助けるかよ・・。　ま、コイツ等でも鎮魂歌でも心で歌ってやんな」

Kの左手が、何時の間にか上に上がっていた。　目前に迫ったカエル5匹が、ピタリと止まるのは・・・。　斬られたからだ。

Kは解っていた・・・入って来た洞窟を壊しても、このカエルは別にも出入り口を幾つか設けているのは。　しかも、いずれは、事が上手く運べば、この場に人が調査に来るかもしれない。　なら、モンスターをおめおめ残すのも情けない話だと。

だから。

Kの腕の中の女性は、僅かに開いた目で、真の化け物を目の当たりにする事になる。

（おお・・・神・・・よ。　貴女の化身が・・・私の目の・・・前に・・・居られるのですか?）

K特別編3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K特別編も、この次のお話で休憩。　次次回からは、ウィリアム編2部に移行です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編４

特別編：Ｋ４

９、陰謀を逆手に取る遣り方は・・・。

深夜、バベッタの唯一開かれている北門から。　黒いローブ姿のミルダ・オーファー・セシルが入った。　Ｋと別れてから、殆ど休み無しで丸半日以上歩き続けてきた。　ミルダは、夫と姉夫婦の事が関わるのだから、もう周りが見えていない様子である。　オーファーは、門を潜る前にミルダにＫの言葉を復唱する。

“決して焦る姿を見せるな。　門を潜る処から、全ては始まっている”

Ｋが先に行かせた3人に残した言葉だ。　ミルダの事は、監視されているとＫは言った。　だから、焦ったり、異常な様子を見せるなと。

「おい、待て」

門の衛兵が、ミルダに声掛けた。

ミルダは、衛兵の男を見る。

「何？　何か問題でも？」

衛兵は、訝しげに。

「俺は、数日前も見ていたが。　御宅達は６人だったろ？　残りはどうした？」

ミルダは、Ｋに言われた通り。　笑い顔で。

「仲間なら、明後日よ。　仕事は終わったけど、怪我してるから休んでから来るのよ。　もう、モンスターの脅威も無いしね」

衛兵は、ミルダに。

「そうか、モンスターは脅威だ。　退治、ご苦労」

と。

ミルダは、お返しに。

「アリガト。　全く役に立たない連中を連れていったから、御陰で怪我されて面倒だったわ。　ま、無事に仕事終わったし。　足手纏いは置いて帰って来た訳よ。　じゃ～ね」

と、せせら笑いさえ浮かべて言ってやった。　腹の中では、この役人に憎悪に塗れた言葉を吐きながら・・・。

セシルも、オーファーも黙っていた。

ミルダは、自分達3姉妹が暮らす屋敷に直行した。
深夜に、ミルダが屋敷に帰るなり。

「まあっ、ミル・・」

と、驚く姉と妹にミルダは口を紡ぐ様に言った。

この時、オーファー・セシルとは別れている。　2人は、何でもない顔で宿に。

さて、明かりも灯さない暗いままの屋敷の中だ。　ミルダは、自分の夫と、ミシェルの夫を起こした。　そして、Kの言いつけ通り、事を問質(といただ)した。

最初、警備隊長、内務財務官の2人は厳しく口を噤んでいた。　しかし、ミルダがもう何もかもKが悟り、動いていると告げると・・・自然に本音が・・・。

正しく、2人は都市総括長官イスモダルから自決用の毒を預かっていた。　そして、こう言われていた。

“良いか、両名。　冒険者の仕事が済み次第。　遺書と共に自決しろ。　それが出来ないなら、今、ミシェルの腹に居る赤子と、ミラを人質によこせ。　赤子は人質、ミラは俺の愛人として可愛がってやる”

イスモダルは、こう言って2人を追い込んでいたのだ。

イスモダルの計画とは、こうだ。　まず兵士達を調査に行かせた北

の岩山に、極秘に兵士捜索として冒険者達に捜索依頼を出したが。
帰って来た冒険者達の捜索にも関わらず兵士達が居た物証は何も無かったとする。　そして、警備隊長と財務官が自殺した後に出てきた遺書を元に内部調査の結果。　財務官が、私利私欲で警備隊長を唆し、西の溝帯へ行く途中に眠ると長年噂される山賊の宝探しに兵隊を使った事が明らかに成ったとふれ回り。　イスモダルが命じた鉱山調査を利用した悪質な犯罪とでっち上げるとの話であるとか・・。

だから、今。　都市内では、行方不明に成った兵士達の事について、イスモダルは

“都市の重要任務遂行中”

とだけしか発言していない。　何せ、行政の議会では其れなりに兵士の使い道の議論しているのだろうから。　いざ、教皇王が来た時に市民に嘆願でもされれば、イスモダルとて秘密にしては措けない。
だから、悪人を作って疑惑と不満をそっちに向け。　事を有耶無耶にしてしまう気なのだ。

「・・・・」

暗い中、ミラ・ミシェルの姉妹は、赤・黄色の個人の特有の魔法のエネルギーを目に宿す。　リスター・ザ・ウィッチの怒りに火が灯ったのだ。　この3人。　本気に成った時はかなり危険と噂だった。

だが、ミルダは。

「ミラ、姉さん、怒らないで。　ケイ・・・。　あの包帯男は私達以上の冒険者よ・・。　彼が、直に証拠を持って来るわ。　身勝手

に事を起こせば、相手の思う壺よ。　とにかく、今は黙って・・・」

ミシェルは、お腹に子供が居るのだから。　怒りも一入、ミラも自分と家族の命を預けるなど出来様筈も無く怒りに身を震わせる。
だが、行く時とは逆に、ミルダが必死に2人を宥めるのだった・・。

次の日。

真っ先に動いたのは、セシルとオーファー。

セシルは、斡旋所に。

だが・・・オーファーは・・・・。

（此処か）

都市の北部。　行政区の裏側に行くと、閑古鳥に纏わり憑かれたような、寂れた人も居ない枯葉などがほったらかしの狭い路地になる。
　そこを行くと、汚れた白い石で出来た小屋のような無人の建物があるでは無いか。

「・・・」

オーファーの見る視界には、丸い形状の屋根の下の受付の窓には、グースカと眠り扱けている汚い役人の姿が・・。

オーファーはその男の前に行き。　Kに言われた通りに。

「失礼、堕ちて来たナイフを見つけたので置いていきます」

と、錆びたナイフを眠り扱ける男の脇に置いた。　見れば、髭も伸び放題の、酒臭い５０絡みの垢染みた男なのだ。

（ケイさん、これでいいのか？）

オーファーは、その場を去った。

すると、男は寝ぼけ眼を擦るように起きた。　そして、錆びた鞘の短剣を引き抜いて・・・。懐に仕舞った。

一方、Kはミルダに言って置いた。

“いいか。　必ず、身近に密通者がいる。　冒険者だけとは限らない。　見つけておけるなら、見つけておけ。　只、相手に知られるくらいならするな。　俺が戻ってからでもいい”

そして、もう1つは。

斡旋所の2階。　モダンな暖炉などを持つ広い部屋の中。　ミシェルが何時も控えるカウンターと、その前には椅子とテーブルのセットが幾つか用意されている。　広々とした応接間のような場が2階だった。　そう、2階は上級依頼受付で、誰でも入れる訳ではない。　今、此処に入れるクラスの冒険者チームは都市に居なかった。

今、Kの言い渡した事から、カウンターの内側にてミルダとミシェルが打ち合わせする。

「ミルダ・・・本当に・・・コレでいいの？」

ミシェルは、不安に顔を染めて蒼褪める。

ミルダは、もう覚悟が出来ていた。

「ええ、どうせよ。　1つくらいは、過ちは減らしておくべきだわ」

そう、Kが言ったのは。　行方不明に成っている兵士の捜索依頼が来ているのを、束ねて1つにしてミルダ達が請け負うと変更する事なのだ。　イスモダルの遣した行方不明に成った兵士捜索依頼でも、冒険者達の捜索では無く。

こうすれば、Kが見つけて来た物が尚更意味を持つのだ。　都市の市民誰もが、行方不明になった兵士達のが山に行ったとはまだ知らない。　何せ、調査名目で山に向かわせたのは、3回。　だが、イスモダルの独断での事。　こっそりと、地下の非常用脱出水路を使っているので殆ど誰も知らない。

Kはあの夜、ミルダから聞かされたその他の話で。　イスモダルは、冒険者に捜索させて戻って来たら、“何の証拠も無かったと証言させろ”と、ミシェルに脅しを掛けた事も聞いて、凡その事を読んでいた。　だがら、それを逆手に取り、証拠を有るとしてしまう事を狙ったのだ。　しかも、依頼主は役人のイスモダルでは無く。　兵士達の家族としたほうが事を大きく出来ると踏んで。

仕事にすれば、その依頼が有った事が証拠として斡旋所の主人が持つ黒皮の書類に載る事も計算に入れている。

さて、ミシェルが悩みながらも依頼内容を変更した昼過ぎ頃。

2階と1階を繋ぐ階段を、こっそりと下から2階を覗くお手伝いの11・2歳くらいの少女のの肩を、セシルが掴んで口を抑えて上に。

「まあっ、ど・どうしたの？」

驚くミルダとミシェル。

もがく少女の身体を拘束するセシルは。

「盗み聞きよ・・・働いてるなら、上の此処のお話は聞いちゃいけないの知ってるでしょうに」

ミルダは、少女を見て。

「サリー・・・まさか・・・貴女が？」

「ううううう・・ウムムンヌウウ・・・」

もがく少女に、ミシェルは杖を持って近づく。

「サリー、少し寝て貰うわよ・・・」

赤く光るミシェルの目は、少女を驚愕させるに十分だった。　蛇に睨まれる蛙の如く、ビクッと固まった少女に、意識昏倒の魔法を遣ったミシェル。

気を失った少女を受け止めたセシルは、ロープで縛り。　ミシェルの案内で3階の奥に少女を仕舞った。

それから、昼過ぎ成ると先に自宅の屋敷へと戻って行くミシェルとミルダ。　後は、ミラが引き受ける。

屋敷に夕方、ミルダとミシェルの旦那が帰って来た。　憔悴した2人、イスモダルに自殺を強く念押しされたのだ。

（凄い・・・こんな事まで・・・読んでる）

Kは、この警備隊長と財務官の2人が最も危険なのは、ミルダ達が戻ってからK達が戻ってくるまでの間だとミルダに強く念押ししていた。　まさに、その通り。　戻って来た二人は、妻達に泣き付き。　自殺を願い出る。

だが、こうなるとミシェルとミルダは自殺などさせる訳には行かなかった。　どう転ぶか全く解らないからだ。

夕の入り頃、遂にK達3人が戻った。

Kは、ミルダの夫の弟ユレトンが一時加入でチームに入れた僧侶のアンジェラを助けて来た。

ミラの居る斡旋所は、K達の凱旋で今日は閉める事になる。

瀕死間近まで弱ったアンジェラだが、Kの薬で会話は出来るまでに回復している。　まだ歩けはしないが。

ミラの問いに答えるアンジェラは、ユレトンなどがデプスアオカースに食べられた事を告げる。　しかも、仲間の半分以上は、幼生達の餌にされたのだ。

ミラは、想像以上に甥のチームが苦しんだ事を嘆く。

その時だ。

“コンコン”

と、斡旋所のカーテンを掛けられて閉まった入り口を叩く音。

「誰よ・・・」

涙顔のミラに、Kは。

「恐らく、ジェラーディ。　弾劾総務官だ」

「え？」

Kは、入り口を見て。

「入れてやってくれ」

慌ててミラが開けてみれば、黒く襟の高い貴族の好む服の様な礼服に身を包んだ５０絡みのオールバックの威厳有る男が立っている。

「包帯男が居るのは、此処か？」

立っていた男は、重い男声を出した。

ミラは、驚いて。

「ええっ？　あ・・・ええ・・」

と、中に通す。

眉間に皺の寄った黒い礼服の男は、中に入ってKを見る成りに僅かに顔を緩ませて。

「お久しぶりですな」

Kも入って来た彼を見て頷き。

「ああ。　悪いが、アンタの出番だぜ。　北のモンスターの巣に冒険者達を探しに行ったら、警備隊の兵士の服や装備品が出て来た。　どうやら、警備隊長と財務官が何か知ってるらしいな。　ミラの姉2人の旦那だと」

黒い礼服の男を見るオーファーは目を見張った。

（あの時の・・・酔っ払った受付役人・・・）

そう、朝に短剣を届けた相手だ。　今は、かなり凛々しい格好だが。　見間違えない顔である。

弾劾総務官ジュラーディは、Kから証拠の品を受け取る。

「なるほど、コレは・・・正しくこの都市の警備隊の服・・・。　なんでも、80人近い兵隊が行方不明だと聞いていたが・・・」

Kは、ジュラーディに。

「協力は惜しまない。　手伝おう。　アンタが居ない事も睨んで、公に騒ぐ手筈も整えておいたが。　今回は、アンタに全て任せる」

ジュラーディは、Kを見て軽く目礼し。

「では、明日にもう一度。　これから、警備隊長や財務官に話を聞きます」

Kは、ミラに。

「ミラ、万が一だ。　護衛に行け。　皆も」

セシルは、Kに。

「貴方は？」

Kは上を見て。

「少し、スパイしていた女の子を調べてみる。　念のため、エルレーンだけ残ってくれればいい。　アンジェラの護衛も必要だ。　生き証人の一人だしな」

この判断が、全てを決める。　もし、Kが少女の取調べを後回しにしていたら・・・。

いや、それは無いから。　先の未来に進もう。

ジュラーディ自体、剣の達人だ。　だが、他の色々の手助けも含めて。　ミラ・オーファー・セシル・ステュアートが着いていく。

Kは、3階からサリーをミラに連れて来て貰ってから行かせた。

グッタリしていたサリーだが、起きるなりに悲壮な顔で。

「離してっ！！！　私は何もしていないっ！！！！」

と、叫ぶ。

Kは、腕を組んで1階カウンターの前でストゥールに座って少女を見ていた。

黙っていると、騒ぐ少女は泣き出して。

「お願いッ！！　私を放してっ！！！！！　お母さんが死んじゃうっ！！！！！　イスモダル様から貰ったお薬飲ませないと死んじゃうッ！！！！」

と、イスモダルの名を云う。

Kは、少女に。

「なるほど、お母さんの薬の代わりにスパイとして動いたのか・・」

と、腕組み。　だが・・Kは、この話に嫌な予感がした。

泣く少女に、Kは・・。

「処で、君のお母さんが病気って・・・本当かな・・・。　君の身体から、奇妙な薬の匂いがしてる。　人が飲んだらイケない薬の匂いだ。　何を持ってる？」

サリーは、もう混乱した顔で縄を解こうと暴れるままに、母親の事を叫び散らす。

エルレーンは、見ていて居た溜まれず。

「ケイさん、嘘・・・言ってないと思う」

Kは、少女の前に屈み、嫌がる少女のスカートのポケットから白い薬を包む紙を奪った。

「返してぇっ!!!!」

と、泣き叫ぶ少女だが・・。

Kは、その包み紙を開けた瞬間、少女に向かって。

「君のお母さん、どれだけ痩せたっ?!!　もうっ、水すら飲まないのかっ?!!」

と、鋭く聞き返す。

驚くのは、少女の番だ。

「え・・・な・なんで・・・し・しし知って・・るの?」

ピタリと泣き止む。

Kは口元を歪めて、脇と睨むと。

「クズ野郎共が・・・なんて事をっ・・・」

と、吐き捨てた。

アンジェラが、少女を案じて。

「ケイ様、そのお薬は？」

すると、Kの口から衝撃の事実が・・・。

「この薬は、麻薬だ」

「ええッ？！」

「まああっ？！」

驚くアンジェラとエルレーン。　少女ですら、言葉が出なくなる。

Kは苦々しい口調。

「コイツは、ケシとサボテンの根っこの混合麻薬。　少量でも飲めば、一日寝ないでも元気に見える。　だが、食欲中枢を徐々におかしくさせるから。　物を食べる気力が無くなり、衰弱して行く。しかも、薬が切れると幻覚症状が出て暴れるんだ。　死ぬ間際に成ると、水も飲みたくなくなるんだよ・・・脱水症状起こしてるのにな」

少女サリーは、もう驚きとパニックが頭を染める。

「そんな・・そんな・・・お母さんが・・・お母さんの今の状態だわ・・。　う・・嘘だった・・。　身体に効くなんて・・・嘘だった・・・」

と、泣き出した。　そう・・・正にKの言ったままの症状で、母親

は痩せるし。　薬の効力が切れる夕方を過ぎると酷く脅えて暴れるのだ。

その時だ。　Kは、俄に立ち上がる。

「へえ・・・あぶねえ奴等も雇ってるじゃ～ないか」

いきなりの発言・・・この場に合わない。

エルレーンは、何事かと思う。

「えッ？　・・・ケイ、何よ？」

Kは、エルレーンに。

「いいか、娘とアンジェラを守れよ」

と、言った時。　上の2階と、この1階の路地側の窓ガラスが割れた。

「何っ？！！」

エルレーンが振り返れば、黒い口元を覆う布を巻いた黒装束の男が2人居た。

Kは、静かに。

「殺し屋・・・だな」

アンジェラは、驚き。

「駄目っ」

と、よろめきながらサリーに抱きついた。

だが、Kの口元は場違いなまでに笑みを見せる。

「好都合だね・・・。　そっちから尻尾出してくれるとはな～」

Kの声に合わせる様に、2階の階段から下りて来た黒装束の禿頭の大男。　この禿頭の大男は1階の奥に現れた2人の男に。

「全員殺せ。　終わったら、出て行った冒険者を追う」

と、命令した。

だが・・・それを聞いたKがジロリと大男を見て。

「俺を、殺るってえ？　薄汚ぇ暗殺者崩れが、道も究められずに逃げた雑魚がよぉ」

と、消えた。

「うぎゃあああ！！！！！」

いきなり、禿頭の大男が絶叫を上げて店の天井にぶっ飛ばされ、床に落ちた。

「ぬっ！！！」

いきなりの事に、1階奥の2人の男は動けなかった。　2人の見ている前で、命令した禿頭の男の腕や足が在らぬ方向に曲がって白目を向いてる。　2人の男は、Kに鋭い警戒を見せてショートソードを構えるのだが・・。

Kは、禿頭の大男の前で2人に背中を向けながら。

「有がてぇな～。　殺し屋はお前等だけか。　俺達を殺してから、向こうに行くって？　無駄な事・・・ベラベラ言ってくれて感謝だあ～」

2人の殺し屋は、Kに畏怖を感じる。　だから、エルレーンやアンジェラを盾に取ろうと見た瞬間。

「おい、俺が先だ」

2人の背中から、Kの声が響いた。

「・・・」

2人の暗殺者は、動けなかった。

「ど・・・どうして・・・・そ・・そんな・・・」

1人が、呻くように言う。　後ろにKが居るのは確定だ。　だが・・・Kの気配が、四方八方からするのだ。　丸で、この店の至る所にKが何十人も居る様に・・・。

エルレーンの見ている前で、殺し屋2人が泣き顔に近い脅えた目で、その場に崩れたのが見えた後ろに、包帯男が立っている。

Kは、気絶した2人を見下ろして。

「俺に喧嘩売る以上、感情すら死滅する覚悟しろい・・・・って。
気絶したか」

エルレーンは、恐怖が去るとまだKが怖くて膝が笑ってしまった。

「こ・・・腰・・・抜けた・・」

クタクタと床に座るエルレーンは、涙が出ている。

凶悪なモンスターですら震え上がらせるKに。　高々殺し屋が勝てる訳が無い。

Kは、後の2人の殺し屋を縛って猿轡をして、1階奥の倉庫の柱に縛り付ける。　禿頭の大男はほったらかし。

それより、問題は少女の母親である。　Kは少女の縄を解く。　アンジェラをエルレーンに任せて3階に隠れさせ、少女を背負ってダウンタウンに向かって消えたのだ。

10、断罪は正しき方法で。　逃れようとする者は、死神の手で。

次の朝。

バベッタ市内の北側中央。　高い塔型の教会風の建物の表門。　白いローブ、白い繋ぎの様な服に身を包む役人達が、真珠色の表階段を上って出勤している。　この国に勤める役人は、魔法を遣えなくとも宗教信仰者が殆ど。　国の法や教育基準が宗教なので、制服もフィリアーナ神の刺繍入りである。

さて、朝の陽に照らされるこの行政神殿の表門前、石畳道路に。白い車体を白い馬が引く馬車が見目麗しく停車した。　御者の大男が降りて、車のドアを開けば。

「ウム、ご苦労」

と、高貴な絹地のローブを纏った初老の背の高い男性が降りてくる。　その姿は威厳に満ちる。　赤い女神の刺繍の入るガウンのような上着を着るその男は、他の役人の姿とは明らかに違う。　右手には、王冠を象った装飾の杖を持ち、首から服の胸元に掛かるネックレスはダイヤを鏤めた女神の姿を象る物。　黒い眉は太く、鋭い瞳は如何なる者も平伏してしまいそうな・・。

「おお、イスモダル様。　おはようございます」

近くを通る役人達が屈んで片膝を下に着けて、挨拶を。

「うむ、出勤、皆ご苦労」

都市総括長官イスモダルは、いつも通りに登庁して挨拶しながらゆっくりと階段を上がって行く。

（フム・・・今日は、朗報を聞けるだろうかな。　せっかく、2人の清い殉死の弔いを我が手筈で整えているのだ・・・。　そろそろ、死んで貰わないとな・・）

イスモダルは、正門から施設に入り。　静かに礼伏す役人達の間を抜けて、長官室のある5階まで図書館脇の魔法昇降陣で上がって行く。　この魔方陣は、イスモダル専用である。

何時の間にか、昇降陣には黒装束姿で覆面をした顔の解らない男が立つ。

「ゼク、か？」

イスモダルが、声を出せば。

「はい」

黒装束の男は、片膝を着く。

イスモダルは、ゆっくり上がる中でステンドグラスを見ながら。

「どうした？　こんな時に現れるとは・・・」

黒装束の男は、そのままの体制で。

「それが、部下達からの連絡が途絶えました」

イスモダルは、パッとゼクと云う黒装束の男を見て。

「なぬ？」

と、昇降陣を止めた。

「小娘の母親は、始末致しましたが・・・。　小娘が、居ないのです。　冒険者の斡旋所に差し向けた部下は、噂ですと捕まったかと・・・」

イスモダルの顔が、一段と険しい物に。

「な・・・なんと・・・。　お前の部下を捕まえる冒険者が居たと？」

「は、どうやらそのようです。　例の依頼仕事で洞窟に向かった冒険者達は、兵士の捜索だけではなく。　遺留品までも持ち帰ったと・・」

「なんだとっ?!　それでは・・・話が違うではないかっ!!!　モンスターの討伐だけで、兵士の行方は解らなかったとする筈ではないかっ。　うぬぬ・・・あの姉妹達めェ・・・、私を甘く見て反抗しよったかっ・・・」

イスモダルは、俄に怒り出し。　高潔そうに見せていた顔を憎悪に染める。

「如何致しますか？」

ゼクと云う男が問えば、イスモダルはゼクを見下ろして。

「隠れておれ。　今日、あの姉妹の旦那の役職を解き。　私が自決に追い込む。　その後、お前はあの姉妹を深夜にでも捕まえろ。

いいかっ、殺すな」

「はっ」

「見ていろぉ・・あの姉妹めっ！！！　どこぞの悪党共に、地獄のような殺させ方で死に追いやってやるわっ」

怒りに狂うイスモダルの姿は、悪魔に近い。

5階の長官室がある前の廊下にイスモダルが降りた時。　ゼクの姿は消えていた。

「・・・」

イスモダルは、素早い足取りで専用の通路を歩き長官室の前に来ると。　御付の2人の秘書官である美女が長官室のドアを開けるべく左右に分かれて持ちながら。

「イスモダル様、中でお客様がお待ちです」

と、ドアを開く。

（はて、客？　今日は、誰も来ない筈だが・・・）

と、イスモダルは怪訝な顔で扉の中に入る。

豪勢な刺繍の絨毯、高い書物が収められた戸棚の前でイスモダルは自分のデスクのある方を向くと・・・。

「おっ、お前達ッ！！！」

3段階段を上がる高みのデスクの前には、黒い礼服を着た男が敢然と立っていて。　その左右には膝間付いてミシェルとミルダの夫が2人左右に分かれて控える。　しかも、更に部屋の壁際、窓際には、剣を佩いた全身鎧を着た騎士の男女数名が・・・。

イスモダルは、デスク前に立っている男に向かい、狼狽した様子で怒り声を上げた。

「きっ貴様っ！！！　私は総括長官のイスモダルなるぞッ！！　我が部屋の中で何をしておるかっ！！！」

すると・・。　黒い礼服の男は、イスモダルを見て。　落ち着いた声で。

「そうか、登庁ご苦労だ。　私は、弾劾総務官ジュラーディ」

「な・・・」

イスモダルの顔が、“弾劾総務官”の名前にギョットした目つきで驚愕のものと成った。　見れば、黒い礼服の胸元には、悪魔を足蹴にする女神フィリアーナの姿が刺繍されている。

（そんなっ・・・この街に弾劾総務官が居ただとおおおおっ！！！！！）

イスモダルの動き・・・心臓すら一瞬止まったかも知れぬ。　この国の弾劾総務官は、各都市を治める総括長官を無視できる唯一の役職。　総括長官ですら、弾劾総務官の命は絶対なのである。　総括長官の罪を表沙汰にし、裁く断罪者。　もう、イスモダルの権威は、

消えたのだ。

ジュラーディは、クタクタと床に砕けるイスモダルに向かい。

「長官イスモダル。　お主、自分の私服を肥やす為に、新たな鉱山の発見を目指して北の山に兵士達を派遣したそうだな。　それが還らぬのに、何度も派遣し。　行方不明の罪を逃れようと警備隊長と財務官に罪を擦り付けて自殺せよとは何たる所業だっ！！！」

「あああああ・・・・・」

イスモダルは、ワナワナと震えて脅える。

ジュラーディは、睨む瞳を光らせて。

「しかも、貴様・・。　冒険者協力会の斡旋所に脅しを掛けて、証拠を隠滅しようとしたり。　その斡旋所の監視にと働いている少女の母親の病弱な身体を餌に、嘘の薬を渡して買収するなど汚らわしい輩にも程があるっ。　昨日、その母親に毒が盛られて死んだわっ！！！　この罪っ、決して逃れられると思うなよっ！！。　既に、殺し屋の手下共は此方に身柄がある」

イスモダルは、震える身体で騎士達やミシェル・ミルダの夫達の顔を見る。　もう、誰もが昨日までの敬服した感情を全身に宿して居なかった。　今さっき、登庁して来た威厳は、消えてしまった。

イスモダルの身柄をジュラーディの命で騎士達が抑えた。

その日は、ジュラーディの命令で、一部の業務以外の全ての仕事は中止された。　ジュラーディの管轄下で、ミルダの夫である警備隊

長と、警察活動をする警務役人の長が合同でイスモダルの専横実態の解明調査が行われ始めたからだ。

イスモダルがジュラーディに捕まる頃。　冒険者斡旋所には、兵士の家族達で捜索依頼を出した人たちが集められ。　現実の実態を報告された。　泣き叫ぶ者、イスモダルを罵る者、斡旋所は何時もの雰囲気では無く。　異様な雰囲気に包まれていた。

昼前。　家族達が去って、冒険者達も居つけない雰囲気の斡旋所の中には、Kを抜いたステュアート達に、僧侶アンジェラとミシェルやミラなどリスター・ザ・ウィッチの面々。　そして、あのお手伝いの少女サリーが居る。

カウンターに座る皆。　カウンターの内側には、ミラとミルダが居る。

セシルは、困惑の暗い顔で。

「家族の人達・・・凄かったね・・・。　今日中に噂・・・広まる」

オーファーは、静かに頷くのみ。

ステュアートは、カウンターの隣の席に座ってるミシェルに。

「あの・・・冒険者協会は・・・何と？」

昨日、ミシェルが代表で、黒皮の書類を使って冒険者協力会の長と事の次第の説明と今後についてやり取りしたらしい。　ミシェルは、蒼褪めた憔悴の態で。

「厳重注意・・・ですって。　今、替わりも居ないし。　この事を肝に命じて業務を続けてくれって・・・」

「そうですか・・・」

ステュアートも、貰うように項垂れた。

サリーは、赤い目をして魂が抜けた様に成っている。

エルレーンは、サリーを見ると心が痛い。

サリーとKが母親を助けに向かえば、もう母親は毒を飲まされた後。
事態を有耶無耶にしようと動く殺し屋ゼクとは入れ違いだった。
狭い土地に丸で押し込められた様な、みすぼらしい石の家の中の狭い間取りの1間にて。　血を吐いて悶える痩せ細ったサリーの母親を見つける事に。

Kも驚いたのは、サリーの母親は飲まされているのが麻薬の類だと知っていた事だ。　あのゼクと云う男は、秘かに母親に会って、その事を告げて置いた。　母親は、娘の命の為に。　あえて黙って薬を飲み続けたのだ。

“む・・・むす・め・・を・・・おね・が・・・い・・・”

と、血みどろの顔でKに願い出る母親。　Kは、母親を抱き起こし。

「解った。　あんなクズの手にやらないから、安心して眠れ・・・もう・・苦しむな」

と。　言うKの声の包容力は、痩せて老婆のような母親に笑みを齎

した。

Kは母親の遺体を背負ってサリーと斡旋所に戻る事に・・・。　その痩せた母親の身体は、サリーよりもずっと軽かった。

隠れていたエルレーン・アンジェラを連れて、Kはミラ達の居る屋敷へと向かった訳だ。

今、イスモダルの逮捕劇が行われた今日、サリーの母親の遺体はミラ達が屋敷で安置していて。　明日に、葬儀をしようと・・。

しかし、今。　Kの姿は無い。　昨日、ジュラーディとミラ達の屋敷にて何時の間にか消えてから、ずっと居ないのだ。

アンジェラは、大分に良くなった身体で歩ける。　サリーを撫でながら。

「しかし、ケイ様は何処に行かれたのでしょうか？」

セシルは、外を見て。

「最大の謎・・・だわね」

と、呟いた。

この日は、事件に関わる誰もが長い1日と感じていただろう。　そう、罪を犯した側にも。

夕方、バベッタの都市内を流れる川の中で、最も西側にある細い川幅の侵入禁止と成っている水路縁の歩道にあの黒装束の男ゼクの姿

が見える。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・」

覆面が斬られ、顔が見えている。　猿のような顔で、鼻が上向き、丸い輪郭の４０男。　それがゼクだ。　大きく肩で息をし、顔は悲壮感の滲む汗塗れ。　右手が手首から無い。　血が滴る。　服の一部か、止血の為に手首を巻いているが。　こんなに息が荒いようでは、それも意味無く命に係わるだろう。

そのゼクの向く目の中。　少し先に、Kが居る。

「な・・何が・・望みだ・・俺の命かっ?!!」

ゼクは、震える声に脅えを含ませてKに問う。

Kは、冷めた目で。　軽く横を向くと。

「・・・俺の願い?　違うなぁ。　お前がどっちを選択するかだ」

と、ギロリとした瞳をゼクにまた向ける。

ゼクは、ビクっと後退りして。

「お・俺の・・選択だと?」

Kの姿はユラ～リ・・ユラ～リと川面に映るが・・・直に見ると動いていない。

「そうだ。　親分の長官と一緒に、楽に刑死するのか・・・。　逃

げて、俺に地獄の苦しみを味合わされるか・・・。　死神の誓いだ。
　好きな方を選べ。　お前の殺し方は・・・・・」

Kは、ゼクを見て。　以前にガロンにも言った言葉を口にする。
更に、逃げた場合の殺し方まで宣告する。

Kの話す内容に震えるゼクの顔に絶望が満ちる。

「ああ・・・あああああ・・・し・・死神の・・呪い・・・あああああ・・」

ガクリとゼクの膝が石の川縁歩道に落ちる。　ゼクの身体から、逃げる事はおろか、生きる希望すら望む気力の全てが消えた。

夜の入り、ゼクがヨロヨロと行政神殿に赴いた。

逮捕した騎士は、1階で仕事をしているジュラーディの前にゼクを引っ立てたのである。　ジュラーディは、ゼクを見て殺し屋なのに出頭などとは珍しいと思わずに質問した。

「ほう、殺し屋なのに出頭して来おったとな・・・。　逃げようと思えば逃げれたのではないか？　お前達にとって、表沙汰に死ぬとは、役人などに捕まって刑死とは1番の恥だろうに」

と。

聞かれたゼクの目には、殺し屋としての冷徹な目は無かった。　脅えるままの声で、ゼクは言う。

「出来るかっ・・・死神の呪いを吐かれて・・・。　自殺すら・・・

許されぬ身に成ったわっ・・。　どうせ死ぬなら・・・楽なほうがいい」

ゼクは、その夜に刑死した。　もう、イスモダルが全て自白し始め、ゼクを生かす必要が無い上に。　手早い事の実行で、市民に安心を齎す為だった・・。

しかしながら、一流の殺し屋にすら絶望を与えるKの言う“死神の呪い”とは・・・。　おぞましい程に恐ろしいのだろうか。　前、ラキームに使えていたガロンの死に方を見れば、それも頷けるかもしれぬ。

11、冒険者・・・Kは。

都市にイスモダルの逮捕と云う激震が走った次の日は、ミラは大忙しだ。

ミシェルもミルダもジュラーディに呼ばれて行政神殿に出頭。　夕方からは、サリーの母親の葬儀だと云うのに。　他の仕事を請けていた冒険者達が報告に集まって、その処理に追われる。

前の日の夜に戻ったK。　サリーは、何故かKの傍に・・・それからKの傍を離れない。

今、忙しいミラを前にして、カウンターにはステュアートの面々が座る。

皆、なによりの心配は一言も口を利かなくなったサリーだった。
母親に知らずと麻薬を飲ませていた事に悩み、心が壊れそうだったのだ。

しかし、今日・・・。

「え～っと・・仕事は何っ?!!」

と、冒険者達の対応に追われているミラを見るKが、ストゥールに座るサリーを撫でて。

「サリー、仕事しようか。　俺と紅茶入れよう。　さ、グラス運んでくれ」

セシルは、無感情のサリーに仕事などと思ったのだが・・。

「うん・・」

サリーは、母親が死んで以来、初めて返答をした。

ミラが、サリーの声に動きをピタリと止めて見る。

「・・・喋ったし・・・」

セシルも、呆けてこう言った。

Kとサリーは、冒険者達に紅茶を配りだした。

（サリーが・・・喋った・・・。　最初から思ってたけど・・・何て不思議な男なんだろう。　顔もよく解らないのに・・・）

ミラは、Kに深い興味を覚えた。

さて、この日。　Kは夕方にサリーの母親の葬儀に出てきたジュラーディに言って置いた。

“いいか、この一連の事件は御宅で解決した事にしておいてな～。　俺等に、英雄染みた噂が来ないように頼むぞ。　勇気を出したミルダ達の成果にでもしてしまえ。　今の俺のチームに、今回の評価は過剰過ぎるんでな”

ジュラーディは、表立ってK達の評価を言わなかった。　証拠提出の手柄は、斡旋所にしてしまう。　なにせ、Kにミラ達姉妹が逆らえる訳も無く。　夫の無実を晴らすための、妻達の勇気が事件を明るみにした・・・と噂に成った。　ステュアートやエルレーンの活躍も、Kの手柄では無くミルダの指揮の元の手柄となり。　結局、チームの知名度は殆ど上がらない状態と成ってしまった訳だ。

だが・・・。　ステュアート達以下、5人には。　ジュラーディの出した報酬と、兵士達の家族が出した捜索願い金、ユレトン達が受け取るはずのイスモダルの出した報酬。　そして、秘密裏にミルダと捜索に行くために請けた仕事の報酬の全てが総額で払われた。

その額、3万シフォン。

Kは、一部貰って、後は“知ら～ん”と・・・。　オーファーも、

同じだった。

ステュアート・エルレーン・セシルは、２万以上の金を前にして。

一生に一度の買い物と、武器屋に直行。　材質、製品の精度に拘った無駄遣いをした。

その後もＫはチームを抜けなかった。　理由の１つは。　巨乳の美女アンジェラがこのチームにどうしても加わりたいと願い出た事・・・。　ではなく。　オーファーとＫの２人、北の大陸の最西に在る国で、国益を１００％バクチで成り立つ国に行ってバクチをしようと盛り上がった事が理由の１つ。

そして、サリーをミラ達姉妹が引き取ったのだが。　直ぐにサリーを１人にするのを躊躇した結果だ。　２ヶ月近く、Ｋ達はこの都市で、のんべんだらりと駆け出し仕事をテキトーにこなしては。　暇な日を斡旋所で潰し、サリーの良き話し相手に成る。　特に、Ｋの語る“インチキ冒険者の黙示録”は大好評だった。

サリーがミラに、後に語る。　事件から半年ぐらい後の事だ。　Ｋから受け取ったナイフを何時も大切に磨くサリーが斡旋所で休憩している時。

「サリー・・・ケイを好き？」

と、ミラが聞けば。

笑顔を取り戻したサリーは、頷いて。

「うん」

「どおして？」

「だって、あの人に抱きかかえられて・・・お母さんの顔・・穏やかに成ったもん」

そう、サリーの母親の葬儀に立ち会って皆が驚いたのは。　憎んでも悲しんでもいない、母親の穏やかな顔だ。　何がそんなに安心だったのか解らないくらいに、安らかだった。

しかも、サリーは後に続けてミラに言うのだ。

「ケイさんが言ったの、ベットの中で泣く私に」

“サリー、君のお母さんは、何で安心したと思う？　君を守って死ねたからだ。　負けたんじゃない、怨んでもいない。　君は、お母さんから命の受け渡しをされたんだ。　サリー、君はお母さんに良く似てる。　泣いて自分を責める事が、お母さんの望みだろうか。　ゆっくり考えな”

「って。　お母さん、病弱な身体で私を守ってくれた・・・。　ケイさんは、私とお母さんを助けてくれた。　私は、お母さんに成りたい・・。　何時か・・・何時か、お母さんになりたい。　子供を守れるお母さんに・・・」

それをミラが聞いた時は、もうKもステュアートも居ない時だが。

ミラは、芯の強いサリーを見て、Kに感謝した。

（あ～、アタシもお母さんになりたいな・・・。　あの包帯男・・・女の真心を引き出すの上手ねぇ・・・。　しっかし、イイ男いないわァ・・・アノ、弾劾総務官でも誘惑しようかしらねぇ～）

と、苦笑したのだった・・・。

さて。　ジュラーディが、一応は教皇王の訪問式も取り仕切ったのだが。　何時の間にか、新しい総括長官が赴任して、彼の姿は消えた。

「グ～ガ～・・・グ～ガ～」

替わりに、北の外れの人も来ない裏路地にある何の受け所か解らぬ場所に、また酔いどれ役人の居眠り姿が・・・。

K特別編４（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回で、K編は終了です＾＾

次回からは、ウィリアム編2章、3章に成ります。　K編は、冬に近く成るまでは無いと思いますが。　ポリア編は、各章の間に入れて行ければと思っております＾＾

ご愛読、ありがとうございました＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　借金なんて聞いてないっ！！

ウィリアム編セカンドシーズン：借金王スティールの大冒険前編

1、いざっ！！！　来たの（北の）大陸へ

早朝、一日良く晴れそうな快晴の空。　初夏に相応しい爽やかな海風に運ばれて、一艘の木造貨物運搬船が北の大陸に向かっていた。

「ん～。　もう直ぐだぁ」

甲板の先で、船の向かう先を見ている若者が居る。　背丈が百七十よりやや上で、細身の青年だ。　白み掛かった灰色の髪は、クセ毛で先端でウェーブが掛かっているままに両目の脇に凭れている。澄み切った瞳に、インテリ風の利発そうな顔立ちは柔らかく、これまた中々の好青年。　皮の動きやすい鎧を上半身に、膝には皮のプロテクターを。　具足は金属の物を履いている。　腰周りに武器は見えない。　小さい荷物を入れる小物入れがベルトのやや背中の方に二つ。　背中には、軽そうな萎んだ背負い袋があるだけである

そう、彼の名はは、ウィリアム。　五日以上前、コンコース島の交易都市ノルノーから旅立った青年である。

「お～、なんか北の大陸を目前にしてくると、来たな～って感じがするなぁ～」

枯れ声に近い迫力ある声の男は、身長二メートル・・・いやもっと高いかもしれない。　屈強な筋肉の鎧のような身体に、短い黒髪の厳しい顔つきだが歳でも無い。　黒い鋼鉄の上半身鎧を身に着けて、腰には同じ金属のプロテクターを巻く。　青い皮のズボンを含めて、圧巻と言った風貌である。　しかも、背中に背負うのは、柄の長さだけで二メートル近い戦斧だ。　先には、太い大木も一刀両断しそうな大きい斧の刃が、背を向かい合って円を画くように付いている。

一応は、皮のプロテクターを被せてはいるが。　重量はいかほどだろうか・・・。

彼は、アクトル。　ウィリアムの“世界を駆け抜ける”と云う言葉に釣られて一緒のチームに入った。　だが、のっけからウィリアムの才能に魅せられ、リーダーとして彼を認め始めている。

「ふあああぁぁぁ～～～。　まだ、着くの後だろぉ～？　・・・もう少し寝ようぜ」

大あくびをする男性は、スラリとした身体で、青いマントを羽織る。

上半身は軽い金属の黒鎧に、下はスタイリシュなオーダーメイドの皮ズボン。　色は黒いズボンだが、中々作りがいいのか身体に似合って足が長く、背丈も百八十をどうかと言った処。　腰には、金色の柄をした剣が見える。

彼はスティール。　中々の男前（ハンサム）だ。　まだ歳もそんなに上ではないだろう。　薄い唇に、切れ長の眼。　顔もキリリと引き締まり、程よい高さの鼻に加えて、顔自体にニヒルな渋みもある。　後ろ髪も

長く女性受けしそうだ。　アクトルとは同郷で義兄弟の仲らしいが。

そのスティールを細めた横目で見る青年は、可愛らしい顔つきの十・・五・六歳程の若い男の子のような印象を受ける。　一瞬女の子ともとれるかもしれない。　青い全身を包むローブと云う服に身を包み、被るフードから金髪の前髪が漏れていた。　背も余り高く無い。

右手に杖を持っている。

「それは～眠いでしょうね～。　船員さんと夜遅くまでカードゲームして、深酒してヘンタイ話に花咲かせてるし」

彼の名前は、ロイム。　魔想魔術師だ。　野垂れ死に寸前をウィリアムに助けられた弱虫である。　しかし、心根の優しさと、潜在能力的魔力はウィリアムも認める逸材。　問題は、直ぐ逃げるし、隠れるし、お漏らししそうに成るし、泣く処・・・だ。

スティールは、自分を横目の不審な目で見るロイムにススッと近寄る。　自分も、細めた目でロイムを見て。

「ほ～・・・ロイムせんせ～よぉぉ・・。　俺にナシ付けンの～？　今度は、ロイムせんせ～の初夜スト～リ～を教えて貰おうじゃんか～」

ロイムは、ビクンと目を丸くさせて顔を真っ赤に染める。

「なななっ・・なんで僕がああああっ」

スティールは、ロイムに抱きつく。

「うわあぁ～っ」

「ロイムく～ん。　どんな感じだったか・・・事細かに教えてもらお～じゃん」

「いやだぁっ！！」

ロイムが、もがいてジタバタと暴れだす。

ウィリアム達が島を旅立った事は、前回で書いたので深くは語らぬが。　ウィリアム達は、世界を駆け抜ける冒険者に成りたくて、こうして世界へと第一歩を踏み出したのである。

ウィリアムは、水平線の先に姿を見せる太陽の光を背に、ロイムとじゃれ合うスティールを見て。

「スティールさん。　多分、そろそろ貿易都市アハメイルが見えますよ」

スティールは、ロイムとピタリ止まって。

「あ？　到着はまだだろ？」

アクトルは、呆れてスティールを見る。

「おめえ、昨日さ。　早く着くって、船長に聞いたの忘れたか？雨の区域を早く抜けたから、少し早く到着するって言ってたろ？」

スティールは、目をパチクリさせ。

「初耳ッス」

其処に空かさずウィリアムは、ボソッと。

「船長さんが恋した女性の特徴は？」

スティールは、ロイムを開放して胸を張り。

「股に大きい黒子が有った～美人の踊り子ぉっ！！」

ロイム・アクトルは顔に手をやり。

「阿呆が・・・」

「そ～んなんばっかり覚えてる～」

言わせたウィリアムは、苦笑いであった。

さて。　船は広げた帆によって南東風を受けて速度を上げる。　朝日が、水平線から船の高さを超える角度に上がる頃。　コンコース島の大都市ノルノーを超える広い港が見えていた。

フラストマド大王国。　世界最大の国土面積を誇る国であり、国の古さも世界最古。　国の人口が五億を超えていて。　世界の国のリーダー的存在の国でもある。　フラストマドの王は、代々穏健派が勤め。　世界に和平を促して、今日の安定世界が実現している。

ウィリアム達が船と共に乗りつける港のアハメイルは、世界最大の貿易・交易都市であり。　人口が二千万を優に超えている。　日中の人が一番多い頃は、四千万人に近いのではなかろうか。

交易都市ながら、各省庁の監督庁があり。　軍隊も二万が常時駐屯していると云われる。

アクトル・スティールは、この都市を中心に前のチームと活動していた。　云って見れば、古巣のような物だ。　ロイムも、前に捨てられたチームとこの街から船で旅立ったので知っている。

この都市には、船を停泊させる湾が四つある。　しかも、一つの湾で大型船を縦に2隻も船着き出来る船着場が１００本以上も。　湾から外れた場所にも漁船や個人の船なども停泊外付けの港の広さが、2キロに及ぶ。

船が全ての人の唯一の移動手段であり、荷物を運ぶ輸送手段でも有る為に、アハメイルには毎日夥しい船が出港し、入港する。

ウィリアム達を乗せた船は、馬の馬蹄型の湾“ホースネイル”に入港した。

ウィリアムは、甲板の高みから周りを見るが。　島のように突き出た４つの港を見渡しきれない。　心から感心して。

「凄いですよね～。　広大な大都市を囲むように、湾が４つもあるなんて・・」

アクトルは、鴎が飛ぶ空を見上げながら。

「ああ、この都市は本当にデカい。　迷子になるぜ」

スティールは、アクトルに。

「アーク、ホースネイルだと・・・。　都市に一番離れてる湾だよなぁ？」

「あ？　ホースネイルだから。　港町前の湾だから近いぞ。　遠いのは、ホワイトティース湾だな」

「ああ、そうか」

ウィリアム達を乗せた船は、積み上げ・積み下ろしをする船の出入りの激しい処から、数本船着場を離して停泊した。

直ぐに橋が架けられ、ウィリアム達は港に降りたのである。

ーーー

「おいっ、邪魔だ邪魔っ！！！」

「おか～さん、見て見てっ！！！　お船が一杯あるよ～」

「荷物どっちだ～？」

「お前っ、乗り遅れるぞっ！！！！」

様々にあちこちで声が飛んでいた。

ウィリアムは、海上に港が有るのは初めて見る。　かなり大きい船などを見上げながら。

「凄いな～。　コレが、世界の最大貿易都市かぁ」

アクトルは、爽やかな風を受けながら。　中々見ない大型の船なども見える中で。

「此処は、本当に凄い。　人も物もな。　有りすぎて、溢れ返ってる感じだよ」

ロイムは、汗ばむ杖を持つ手に困りながら。

「あれ～？　スティールさんは？」

この時、ウィリアムは何かすご～く嫌な予感を覚えた。

（なんだろう・・・スティールさんの名前を聞いて、嘗て無い震えを感じる・・・。　冒険者としての凄さじゃなく・・・凄く嫌な・・

・）

ウィリアムのこのカンは、的中である。

ウィリアム達が見上げている大型旅客船の甲板から、数人の若い女性が降りてきていた。　皆、様々な色のドレスを着て、きゅ～てぃ～な日傘を差し、若さの弾ける声でお話しながら。

船が着くと、移動式の階段が据えられて、旅客が降りる訳だが。

その若い女性達の先頭では、三人の女性の中でも一番の美女が降りる時だ。

「お嬢さん、お手を」

スティールが、何時の間にやらウィリアム達から離れて船の横側に移動していたのである。

「え？」

美人女性は、後一段降りれば港だと云う処で、前に男が現れて手を差し伸べて来るのにキョトンと。

スティールは、キザッたらしく目を細めて。

「お嬢さん、下を御覧なさい」

美女達の集まりは、降りる港の足元を見れば、港の建設に使われている船着場の石材にヒビが入り。　ハイヒールの先が細い物はヒビに挟まりそうなのだ。

スティールは、女性達を見て。

「せっかくの楽しい観光を、怪我などで台無しにしてはいけない。さ、お手を貸そう。　跳び避けて」

その現場を、ウィリアム達は船の前の方から見つけて見ている。

「好きだねぇ～」

同郷で付き合いの長いアクトルは、もはや病気と割り切っている。

「ですね・・・。　あんなお金持ちみたいな女性まで落とすんだ」

ウィリアムは、幅の広さに呆れ感心した。

ロイムは、恥ずかしそうに。

「歩く痴人・・・生けるヘンタイ・・・人型モンスター・・・」

三人が見ている中で、スティールは跳び超える女性をサッと抱き上げた。

ロイムが、

「出た・・・お触り変質者」

と、横を向く。

「きゃーーーーっ！！！　離してぇぇぇぇっ！！！」

と、嬌声が上がる。

「やってるな・・」

と、呆れて他人のフリを決め込むアクトル。

「もはや、犯罪レベルですねぇ～」

と、傍観のウィリアム。

女性は暴れて、スティールは叩かれる前に女性を下に下ろした。

が。

「ヘンタ～～～～～～～イっ！！！！」

と、女性が日傘をスティールに投げる。

「褒め言葉かな・・フッ」

スティールは、開かれた日傘を難なく避けた。

だが、その日傘は転がって女性の降りた船の反対側に停泊している積荷の真っ最中の船の方に、サッと強く吹いた風で転がりに勢いが・・・。

その時、赤い宝箱のような箱を抱える二日酔いのショぼけた顔をした船員の足元にその日傘がぶつかった。

「おわああっとおおおっ！！！」

足と足の間に日傘が入り、大きくバランスを崩す船員。

積荷を行う船の船長が、上からその状態を見ていて目をギョッとさせる。

「おいお前っ！！！！！　それは最後に積むやつと言っただろうがあああああッ！！！！！！！！　落とすなあアアっ！！！！！」

と、ドデカイ声で叫ぶのだが。　バランスを崩した船乗りの真後ろに迫っていた、大きい荷物を抱えた別の船員が気付かずにぶつかってしまった。

「あわあああああ・・だあああああっ」

宝箱のような箱を持っていた船員は、前に押されて大きく倒れた。

ポ～ン投げ出された箱は、激しく船着場の床石の上に落ちて転がり、借り置きしてあった碇のスペアに“ガツン！！！”と音を上げて当たったのである。

その光景を見た船長が、瞬時に死に物狂いの形相で、

「魔法爆弾に衝撃が入ったぞおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！　全員海か遠くに逃げろおおおおおおおおお

途端。

「うぎゃあああッ！！！！」

「おかあああちゃーーーーーーんっ！！！！！！」

「死にたくねえええええっ！！！！！！」

何十人と云う船員達が死に物狂いで逃げ出した。　船から海に飛び込む者。　全力ダッシュでウィリアム達の脇を走り去る者。

「へ？　何だって？」

スティールが、船長を見上げる時。

ウィリアムが、辺りに聴こえる様に全力の声で。

「鉱石発掘に使う強力爆弾だあああーーーっ！！！！！！　皆さん逃げてえええええっ！！！！！！」

スティールが、その声にハッと気付けば、下りて来た美女達はスカートの裾を両手で捲くり。　下着のスッリプが丸見えに成りながら、必死にウィリアムの方に走っていた。

スティールは、ニヤケて。

「あ、へイッ。　ハニ～、そんなに驚いて逃げるのさ～。　下着が丸見えだぜぇ～？」

と、ヘラヘラした顔でランニング程度に走り出した。

ウィリアムは、もう気が狂いそうで、スティールに喉が壊れんばかりに叫び上げた。

「スティールさんっ！！！！！！！！！　全力で走ってえええええっ！！！！！！」

アクトルも、スティールの様子に気が狂いそうな顔で。

「バッカ野郎ぅぅぅっ！！！！！！！！！　ハッパが弾けるんだよおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！」

スティールは、その鉱山の抗夫言葉で初めて気付いた。

「うおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！　チョットまあああああてえええええええっ！！！！！！！！」

と、いきなり全力疾走に成った。

ウィリアムは、転がった箱の蓋がパキンと外れて開いたのを見た瞬間。

「膨張したぞおおおおっ！！！！！！！！　海に飛び込めエエエエっ！！！！！！！！」

と、周りに大声を出して、先に逃げたロイムの方を向くと。　走りながら、

「伏せてえええええええええっ！！！！！！！！」

と、前の石の道に飛び込んだ。

アクトルも、ウィリアムの脇に倒れて伏せる。

スティールが船の先端にたどり着いて飛ぼうとした瞬間。

“ドッッッッカアァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーンン！！！！！！！！！！”

凄まじいと云うべきか・・・・。　噴火でも起こったような空気を揺るがす大爆音が起こり、瞬時に爆風が当たりに襲い掛かった。

「ウオアアアアアアアアっーーーーーーーーっ！！！！！！！！」

スティールは、地面に飛び着くより先に爆風に攫われて飛ばされた。

ウィリアム達の頭上を越えて、港とビーチの間の海の中に放り込まれたのである。

ウィリアム達の身体を撫でる爆風・熱風は、砂浜のビーチまでに及んだ。

「ううう・・・・耳・・・・・が・・・・・」

ウィリアムは、耳を劈いた爆音が引いた後。　直ぐだか、少し時間が経過したような感じで、朦朧とした様子で起き上がる。

その時、遠くで。

“バキバキバキィィィ・・・・”

と、鈍い木でも倒れるような音がするのを辛うじて聞くのだ。

頭を振り、前を見れば。　離れた先の渡し場の道上で、何人もの人がウィリアム達が見ていた船の方を指差し驚いている。

「・・・・」

アクトルが起き上がる横で、ウィリアムは振り返った。

「あ〝っ！！！　あ〝あ〝あ〝あ〝っ！！！！！！」

ウィリアムは、振り返って目の前の光景に驚いた。　停泊していた船４隻が、バラバラに砕けて海に沈んで行くのが見えたのである。

耳が爆音で遠退いて、音が聞こえ難かったのだ。

（そん・・な・・・・コレは・・ないよ・・・・スティール・・・さん・・・）

見上げるばかりの大型の船が、大破して真っ二つに割れて沈む様子など・・・有り得なかった。　全身から力が抜けて、クタクタとその場に沈んだウィリアムである。

ーーー

昼前、ウィリアム達の身柄は、都市の東に広がる行政地区に有った。
行政地区の中心には、軍の総司令本部が有る。石の建築ながら、威風堂々とした黒い大きな城の様な佇まいは。素晴らしいの一言。

その指令本部北西部の離れに、この総司令部を治めるリオン氏の私室と、お客用の応接室がある。

リオン・・・。北の大陸でこの名前の知名度は絶大だ。彼は、フラストマド大王国の第二王子にして、総身優美の武人として知られる軍部総司令・近衛騎士団総師団長の肩書きを持つ天才剣士として有名なのだ。

だが・・・、このリオン。まだ２６歳ながら内面が中々の錬れた人物で。信用の置ける者に軍部の仕事を任せては、秘かに冒険者として名を馳せる砕けた一面も持つ。チーム“スターダスト”のリーダーで、剣士リファランス・ハピルマッハが、リオンその人であり。時折、姿を変えて市政の中に一般人として紛れて活躍する。

ま、今。ウィリアム達と、船主の男の前に居る総司令リオンは、緑の軍服に身を包む威厳の漂う若者として。起こった事件の収拾に動いている訳だ。

柔らかい金髪、スティールよりやや高い背丈、整った顔は凛々しき王子と云う形容そのままである。

「双方の言い分は、しかと聞いた」

総司令リオンは、眉間に僅かばかり皺を寄せて頷く。　応接室のリオンの座る椅子から、右手に船主のホロー・オフグリが、四十半ばを超えた、太り捲くった巨体を揺らして怒りを込めて被害を更に訴える。

リオンの左手、四人掛けのソファーには、ウィリアムと、スティールとロイムが座り。　アクトルは、後ろに大きな椅子を用意してもらって座っている。

ウィリアムは、終始弁解はせずに謝罪を続けた。

リオンは、ウィリアムに厳しい顔つきで。

「全く、いくらなんでも女性に絡んでこんな被害を出すなんて前代未聞だ。　あの船着場は、来月の修理予定地だから、壊れたとしても直せばいいが。　船四隻の弁償は、此方では到底手に負えぬ。死人が出なかったのが幸いだが。　怪我人が、四十名。　中には妊婦が衝撃で破水して大変だった。　とにかく、ホロー氏に対する弁償金の二十万シフォンは、なんとか自分達で用立ててくれたまえ」

リオンは、ウィリアムに最後の口調を強めて言い渡した。

「はい、了解しました」

ウィリアムは、頭を下げる。

リオンは、更にホロー氏を冷めた目で見ると。

「しかしだ。　落ち度は、あんな爆弾を通常荷物として用意したホロー氏にもある。　輸送荷物の運搬規定に反する訳だ。　船長の誤

判とは云え、貴方にも監督不行きの責任で罰金を払って頂くから。
　そのつもりで。　喧嘩両成敗で、法的な罪には不問とする、以上」

業つく因業商人を絵に描いたようなと云った顔のホロー氏。　黒い髪は気味悪く長い、脂ぎった顔、デカイたらこ唇。　唾を飛ばしてウィリアム達を罵り、金・金・金と吐く様子には、ウィリアム以上に、リオンも醜さと見ただろう。

リオンが、脇に控えて立っていた黒い軍服姿で五十近い印象の軍人を伴って応接室を後にした後だ。

商人ホローは、立ち上がり。

「お前等っ！！！！　良くも私に大損害を与えてくれたなっ？！！！！　この弁償は命を捨ててでも返して貰うぞっ！！！！　いいかっ、三ヵ月だっ！！！　三ヵ月で二十万シフォンを耳揃えて返せっ！！！　返せないなら、命で償わせてやるぞっ！！！！！！」

と、言いたい放題怒鳴って、怒りに身を包みながら出て行った。

「ふぅ～・・・・・」

ウィリアムは、全身から力が抜けて前にのめる。

「す・・・スイマセン・・・・・・」

スティールは、まだ濡れてる服や髪のままにパッとソファーの上に正座して土下座した。

ロイムは、ほぼ気絶状態で、後ろに凭れて天井を見ながら白目を向

いて死んでいる。

アクトルは、音も少なく立ち上がり。　ムンズと、スティールの首根っこを掴み上げた。　スティールの身体が軽々と持ち上がり、そのままの体勢でグル～っと怒りの形相のアクトルに顔に対面した。

「あ・・・あはははは・・・・アーク・・・そんなに、コア～イ顔しないでよ・・・。　な、俺・・・悪気ないしさぁ～・・・あは・あはははは・・・」

鬼の顔のアクトルは、ギラギラ光る目をスティールに睨みつけて。

「オマエ・・・は・・・。　死にたいか？　何時も何時も・・・・女で迷惑かけてよぉ・・あぁっ？」

取り繕う間も無いスティールは、涙顔で。

「アークぅ～・・・御免よおぉぉ～・・・・。　爆弾なんて有るなんて知らなかったんだよぉ～」

「うるせえっ・・・・知る知らん以前の問題だっ！！！！！！」

アクトルが、殺気すら孕む怒声を上げた。　その時だ。

「フッフッフッ・・・・・」

と、ウィリアムの声が。

パッと、アクトルもスティールも、気絶し掛けていたロイムですら危ない気配を感じてウィリアムを見る。

ウィリアムは、前屈みで髪が顔に掛かり見えない。　不気味な印象だ。

「・・・女性に絡んで・・・・船四隻大破・・・・借金が・・・二十万・・・・たったの三ヵ月で返済・・・・・・。　在り得ない・・・在り得無すぎる・・・・・」

アクトルは、ウィリアムがぶっ壊れたと確信した。　背筋に汗が流れる。

「ウィリアムっ、コイツも反省してる。　その～・・・何だ。　殺すなら、金を作る過程で抹殺しよう・・・・な？」

ロイムは、ウィリアムの不気味さに脅えて股間を抑えて反対を向く。

（ごっ・ごごゴアイよおおおお・・・・ウィリアムが・・・壊れたよおお～・・・）

ウィリアムの顔が、チラリとスティールに向く。　顔は見えないが、目の辺りがギラリと光って。

「当然・・・命捨てる気は在りますよねぇ～？」

スティールは、首根っこを捕まれたままの体勢で、空中で姿勢を正して土下座した。

「在ります。　満々です。　このスティール、ウィリアム様の為ならば、例え火の中水の中、棺桶の中まで行かさせて頂きます。　へへぇ～」

と、言葉を並べ立てるが、内心。

（ウィリアムっておっかねええっ！！！！！）

涙が本気で出そうである。

アクトルも、

（本気だな・・・義兄弟だが・・・そろそろ今生のお別れか？
ウィリアムを怒らせるのだけは・・・辞めたほうがイイ・・・俺は・・・しない）

と、脅えた。

さて、ウィリアム達一行は。　軍司令部を出て一路また港に戻った。

（おいおい・・・なんだアレ？）

（しらねぇ・・・罪人じゃないか？）

待ち行く大通りの溢れ返った通行人が、ウィリアム一行を見てボソボソと話している。

それも、そのはずだ。　スティールの腕は、アクトルの持つロープでグルグル巻きにされて拘束されていた。　アハメイルの商業区は、非常に人がごった返す。　馬車の入れない歩行者天国になっている道では、晴れた日ならば歩く人が込み合い流れが出来る程。　その街中を、スティールの様な人物を連れていては目立つ事目立つ事。

スティールの姿に恥ずかしがるロイムを他所に、ウィリアム一行は商業区を通り抜け、港に向かう浜辺前の海岸大通りへと。　丁度、商店区と宿泊区の境で、海岸に並ぶ倉庫群が見える。　此処は、湾ホースネイルと、湾サンライズハーバーの間で。　突き出た島や岩場を埋め立てた倉庫群を形成する場所なのである。

この倉庫群は、貯蔵庫でもあるが。　一部には、船員の仮泊まりの宿泊施設もあるのだ。　ウィリアムは、あの船の船長さんが此処に居ると聞いて遣って来た訳だ。

白い石壁の倉庫から荷物を出し入れする船乗りや、運搬業の働き手などに訪ねつつ。　ウィリアム達は、三階建ての古い木造の箱型宿舎に着いた。

ウィリアム達は、仕事の足を失わせた事で船長には酷く怒られるのを覚悟した。　中に入って。　二階ハンモックの並ぶ男の汗の匂いがする部屋の外れで、後始末に残っていた船長と面会した。

「あんた達、さっきの？」

倉庫群を望める窓。　ガラスなど入っていない、木枠のみの窓の前。　昼下がりも過ぎた頃、青い空が少し赤みを帯びた中で、ボロい机の前に座っていた船長がウィリアム達を見て声を上げた。

「先ほどは、大変すみませんでした。　船のお金、必ず弁償しますし。　皆さんが受け取る筈だった賃金も、立て替えます」

ウィリアムは、先頭に立って頭を下げる。　後から、一同頭を下げた。

日に焼けた、四十超えの燻し銀と言った印象の船長は、白髪混じりの髭を動かして。

「ああ・・・。　ま～派手に遣ってくれたぜアンタ等は・・・・・・。　でも、少し気が晴れたがな」

と、力なく笑う。

ウィリアム以下、皆は顔を上げて船長を見る。

「は？　“気が・・晴れた”って・・・どうして？」

すると、船長は外の空を見る。

「俺ぁ～、雇われ船長さ。　元々、大型じゃ～無いが船持ちでやってたんだが、あのホローに船もみな取られた。　船の無い船長なんて、その辺の雑務やってる船員に毛が生えたようなモンだ・・。　ホローのバカ垂れに安い賃金で雇われて・・・毎日毎日ギリギリの生活と、仕事の毎日・・。　だがら」

船長は、ウィリアムに顔を戻して。

「船がぶっ壊れて、開放感は有ったな」

ロイムは、難しい顔で。

「そんな・・・船を動かせて、安全に航海してるのに・・」

スティールは、何とも言えない顔で。

「皆・・・クビか？」

船長は、疲れた顔で俯き。　首を左右に振る。

「いやいや～。　俺達船乗りは、船主との契約で働いてる。　ホローとは、無期承諾契約させられてる。　船が用意出着次第に、もっと安い賃金で働かされるだろうよ・・・。　アイツは、そうゆう事を有耶無耶にする金は惜しまないが。　人を雇う金には、尋常じゃ～ないケチだから」

ウィリアムは、船長の前に進んで。

「この国にも、海運省と労働省はあるはずですよね？　そちらに、もう袖の下が回ってるんですか？」

船長は頷いて。

「俺も、二重契約書を書かされるとは思わなかった・・・。　少し相場より安いが、仕方無いと思ったら。　ホロ～の野郎、俺等を騙しやがって・・・」

アクトルは、鈍い顔で。

「酷いな。　だが、証明が出来ないなら、どうしようも無い・・・。　鉱山の抗夫の契約と変わらないんだなぁ～」

船長は、アクトルに目を向けて。

「その通りさ。　とにかく、アンタ等。　ホローに弁償金を請求さ

れたろ？」

ウィリアムは、仲間を見て。

「ええ、二十万ほど・・・」

船長は、横を向いて。

「ケっ、そこまで価値なんぞあるか・・・。　ホローめ、今回を機に新しい船にするつもりかよ」

スティールは、驚いて船長に寄る。

「そっ・それは・・・どうゆう事だよ」

船長は、呆れた顔でスティールを見て。

「俺達が今まで使わされていた船は、お払い箱に成った廃棄船だ。
ホローは、一・二万シフォンで買いって来て、俺達に渡した。
航海で沈んだら、俺達の死んだ後に遺族へ弁償を請求するって言いやがる。　皆、必死で修理して、この二年も使ってた。　もうそろそろ限界だった筈だ。　アンタ等の破壊は、奴にしたら渡りに船だったのかもな」

スティールは、顔を怒らせてウィリアムを見て。

「おい・・・なんだコレ」

しかし、ウィリアムは冷静だ。

「証明が出来ません。　しかも悪いのがこちらですし、言い訳出来ません」

「クソっ・・・何で爆弾なんか・・・」

スティールは、悔しくなって横を向く。

船長は、スティールの背中を見ながら。

「あのホローって奴は、裏に回るとかなりの黒い面（ツラ）が有る。　奴を告発しようとした奴が、今まで何人も暗殺されたか・・・。　馬鹿な考えは止めたほうがいいぞ。　とにかく、俺達の事はいい。　自分達の心配をしてくれ。　キチンと謝ってくれたなら、それでいいさ」

スティールは、生じ自分が貧乏なだけだったから。　船長に向いて。

「だがよっ、こっちの事はいいがっ・・・、アンタ等船員が給料下げられたら・・・一体ど～すんだよ」

船長は、弱弱しく笑い。

「ま～ったくだな。　実は、あの港で爆破した爆弾は、俺とホローしか知らない積荷だった。　あんな危険な積荷は、本来は金を掛けてさ。　輸送するんだよ。　だが、金をケチったホローが、俺に秘かに運ばせようとしたって訳。　海運省や商務省のお役人には、どうせ金掴ませて黙らせるが、悪者は必要だ。　だから、間違って俺が船に積もうとしたって事になるらしいな」

ウィリアム達は、とんでもない爆弾を爆発させてしまった事に後悔

の念が浮ぶ。

ロイムは、暗い顔で。

「酷いね・・・。　スティールさんの・・・バカ・・・」

スティールは、堪らず。

「すまねえ・・・」

と、洩らす。

船長は、頷くと笑って。

「成るようにしかならねぇ～さ。　さ、アンタ等も殺し屋にヤられたくないなら。　稼ぐ手段を探しな」

ウィリアムは、船長に一礼すると。

「では、お言葉に甘えます。　それから、コレは前の仕事で多めに貰った報酬の一部なんですが。　船員さん達の生活の一部にして下さい」

と、モルビットから渡された三千シフォンの入った金袋を机に置いた。

船長は、片手で持て無い様な膨らみに。

「おいおい・・・コイツは・・・」

ウィリアムは、笑い。

「人助けで得たお金です。　自分達の行動で迷惑に成った方に、是非」

船長は、ウィリアムを見上げて。

「いいのか？」

「ええ。　船長は、船員を養って何ぼとか・・。　これ以上賃金下げられたら、船長さんの立つ瀬も無いと思います。　どうか、一時金みたいな物ですが。　納めて下さい」

船長は、金袋を見て頭を下げる。

「済まない。　船員の中には、まだガキが小さい奴が一杯居る。俺も、な。　有り難く、受け取る」

こうして、ウィリアム達は夕日の中で。　砂浜の倉庫群から去った。

ーーー

アクトルは先頭に立ち、斡旋所に向かいながら。

「全く、とんでも無ぇ～紐を引っ張ったモンだぜ。“藪を突いたら、モンスター”、みたいだなぁ。　・・・しっかし、買った倍以上の値段吹っかけるなんざぁ～相手もやり手だ」

後ろのウィリアムは、店頭に人だかりを作る店などを見回りながら。

「ですね。　とにかく、あのホロー氏は評判悪そうだ。　よりによって悪辣非道な方に喧嘩売りましたね」

スティールは、船長・船員達に悪い事をしたと塞ぎ気味である。

ロイムは、二十万をどう返せるか、不安を超えて胃が痛い。

さて、商店通りを抜けて。　更に、分岐したYの字の路地を右に。

人が通る数が少なくなり、行き違える人の姿に冒険者が目立つ。

冒険者達の中には、アクトルやスティールを知っているのか。

手を挙げて来たり、挨拶して来たりする一団も。

だが、スティールの顔は冴えないままだった。

さて、その通りの行き止まりには、“ダンス・カエサール”と、デカデカ大きく看板を掲げたショーパブ劇場が店構えを現した。

ウィリアムは、キワドイ衣装の踊り子の挿絵が入り口に置かれ、街灯の下にてチラホラと客が集まりだすショーパブを見て。

「此処・・・ですか？」

アクトルは、ショーパブ入り口に見える、両開きのガラス戸が八枚も対合わせで並ぶロビー前を指差し。

「外ドアを潜ると、ショーパブに入る内ドアと、地下の斡旋所に行く階段に別れてる」

「成る程、地下ですか」

「ああ」

ロイムは、別の道からショーパブ目当てに来る客達を見て。

「凄い構造だよね・・、何時見ても」

ウィリアムは、進みだして。

「ま、お金を稼ぐ場所と使う処が融合してるんですからね。　客観的には、合理的ですね～」

アクトルも歩き出しながら。

「かもなぁ。　でも、高いぞ～。　パブは」

ウィリアムは、呆れ笑いで。

「ぼったくりバーですねぇ～」

スティールは、今はパブを見ても何も言えない様子であった。

さて、曇りガラスの外ドアを引いて開けると、中央には進行出来る

廊下が有って。　先には、お客の案内をするバニーちゃんが二人。
　曇りの無いガラス戸の内戸越しに見えていた。

そのショーパブに行く直進通路の両サイドには、下に下る階段がある。

ウィリアムは、ウサちゃんの女性を一瞥して脇の階段に向かう。
ロイムは、何故か顔が赤くなっていた。

さて、夕方も大分暮れた中、暗くなる階段を下に降りれば。　フカフカのマットを壁にした様な、重厚な合わせ扉がある。　ドア前の天井には、グラスランプの灯り二つが灯っていた。

ウィリアムがドアを押して開けば・・・。　いきなり、雑踏が出迎えてくる。

「へぇ～」

シャンデリアの灯りが、あちらこちらに煌々と光って降り注ぐ。
丸で、広々とした立食パーティー会場の様な広いフロアに出た。
フロアには、入り口から波状型に十歩ほど距離を離して、レストランの様に、大小の円卓テーブルと、椅子を備えた席が奥まで広がる。

「あら、アクトル。　また、戻って来たのかい？」

赤い髪を長く伸ばしたスカート姿で、見るからに男っぽい感じの女性が声を掛けて来た。

ウィリアムは、その女性を見て。

「どうも」

と。

短い膝上のタイトな黒スカートに、上は黒皮のジャンパー。　左の腰の辺りに、打たれたら痛そうな刺付きの鞭が見える。

アクトルは、奥を見ながら。

「アジェンテ、ま・・・そんな所さ」

スッキリとしたボディーラインを、開かれたジャンパーの隙間から下に着るカジュアルシャツや生足に魅せるアジェンテと云う女性は、勝気な顔を微笑ませて。

「港で派手にやったらしいね。　もう、噂だよ」

アクトルは、呆れたため息一つ吐いて。

「はぁ、御蔭で借金地獄さ」

と、応えてから、ウィリアムに。

「奥に、カウンターがある。　そこで、聞こう」

「はい、解りました」

ウィリアムは、そう返してアジェンテを見ずに。

「失礼」

と、脇を通った。

ロイムや、アクトルも続く。

アジェンテは、最後に行くスティールに。

「浮かない顔ね。　ま、お荷物チームに加わったみたいだから、借金は大変ね」

すると、スティールは笑顔になり。　塩に汚れた髪をゴワゴワさせていながらに。

「アジェンテ。　俺を甘く見るなとは言わないが。　ウチのリーダーを甘くは見ないほうがイイゼ」

アジェンテは、ウィリアムを見て。

「彼？」

スティールは、アジェンテの脇を行きながら。

「一ヶ月。　それで、十分だ。　アジェンテのチームを抜くのはな」

「え？」

アジェンテは、スティールの言葉に動きも表情も止まった。　アジェンテのチームは、彼女をリーダーにした五人編成の“サルヴァートゥーレ”。　この都市では、中級の知名度が有る。

（私達を、一ヶ月で抜くですって？　あの女狂い、遂に強がりしか言えなくなったの？）

アジェンテは、耳を疑った。　まだ、四・五十人ほどの冒険者達が、席に座ったり。　立ち話で情報交換したり、仕事についてチームで話し合ったりしている中に。　ウィリアム達が消えて行くのが見えた。

しかし、スティールの言った事は、決して強がりでは無かった。

ウィリアムが、一番奥に有る半円形のディーラーカウンター前に来て。　黒髪をオールバックにした白いＹシャツに赤いベスト姿のダンディな中年男を見ると。

「すみません。　仕事の紹介お願いします」

ダンディな受付の男性は、鋭い目線でウィリアムを見返す。

「チームの名前は？」

「はい、セフティー・ファースト」

ウィリアムが名前を名乗ると。　男性の顔は少し窺う面向きに成り。

「待て、その名は・・・。　悪いが、こっちでは難しい。　地下二階に行ってくれ」

と、男性の後ろの壁の右手側に有る。　白いチェック模様をした扉へ促される。

アクトル・スティールは、お互いに向き合って。

「アークっ、“開かずの子供部屋”へ・・・だぞ」

「ああ・・・初めてだな・・」

そう、地下二階は、上級依頼を受ける場所だ。通称が、“開かずの子供部屋”。殆どの冒険者達が入れない奥。スティールやアクトルは、世界に名を馳せると云った有名チームのみが潜れる場だと思っていた。

ウィリアムは、ダンディな受付に冷静な声で。

「解りました。奥ですね」

と、白い扉に向かう。

後から追ってきたアジェンテは、ウィリアム達が地下二階に消えて行くのに驚いた。

（えッ？）

周りでも、初めて地下二階へ入る冒険者を見た者も居るのだろう。

「おい、今・・・」

「ああ・・・地下二階行ったな・・」

「アレ誰だよ・・・」

「よそ者が何で？」

冒険者達の声が飛ぶ中、アジェンテは受付のダンディな男性に詰め寄った。

「コーデュっ！！！　何であの四人が下に行くのよっ？！！！　何処の有名チームよっ！！！」

受付の男性は、アジェンテに鬱陶しい様な顔をして。

「コンコース島でチームを結成したばかりのチームだな。　活躍の度合いが早すぎて、チーム名の広がりが追いつかないみたいだ」

アジェンテは、意味が解らない。

「チョット待ってよっ！！！　結成仕立てで、何で地下二階に行ける訳っ？！！！　こっちは、結成して三年っ、仕事だって五十はこなしてるわっ！！！！」

アジェンテの方が、ウィリアムやロイムよりキャリアは上だろうし。
腕っ節だけのアクトルやスティールより、難しい仕事を遣ってきた自負がある。

すると、受付の男性コーデュは、呆れた顔でアジェンテを見る。

「アジェンテ、お前・・・何か勘違いしてるな」

アジェンテは、これほどにプライドを傷つけられた事は無いと思い。

「何がよっ！！！！！」

と、吼え上げた。　周りの冒険者達も、コーデュと云う男性を見た。
だが・・・。

「いいか。　仕事を何百やろうが、何千やろうが。　それだけじゃ、上には行けないんだ。　たった一回の仕事でも、最良の方向に運んだチームと。　ただ、クリアーの評価だけを狙ってやるチームでは、評価そのものが根底で食い違う。　お前の遣り方は、その辺に幾らでも居るチームの仕事の仕方。　今、下に行ったチームは、短時間に二つの仕事を、最良の方向に運んでいる。　お前さんには、悪いが。　比べるに値しないんだ。　理解してくれ」

冷静に言われたアジェンテは、握る拳でスティールの言葉が浮ぶ。
“ウチのリーダーは、甘く見ない方がイイゼ”
（何よ・・・何よコレ・・・・・な・・何なのよぉぉ・・・・）

ーーー

スティールは、上を見て。

「あ～あ、アジェンテは多分ブチ切れるな～」

ウィリアムは、スティールの声を聞いて後ろに声を。

「そうなんですか？」

アクトルが、六十段ほど階段を下って来て、先に見えた降り立つ床を見定めておいて。

「後で話してやるよ。　アジェンテと俺等の因縁」

すると、ウィリアムは、頷きながら微笑み。

「大体、解りますよ」

と、赤い絨毯が敷かれた少し証明の暗い、ムード感溢れるバーラウンジの様な場所に来た。

「ふ～ん」

アクトルは、それだけ返した。

ウィリアムは、降りた所の左右にさり気無く置かれた観葉植物の鉢を見たり。　フカフカしていそうなソファーと、テーブルの組み合わせを見て。

「雰囲気ありますね～」

と、感想を述べた。

其処に。

「ようこそ、いらっしゃいませ」

左手から、紳士風の言い回しで声が。

「・・・」

一同、左に向くと。　赤い蝶ネクタイに、黒いモーニングを着た落ち着いた雰囲気の初老の男性が佇んでいた。

ウィリアムを先頭に、その男性の前に歩いて行った。　丸で、接待を受ける高級バーのような部屋の中で、その初老の男性と対峙する一同。　初老の男性は、手入れの行き届いた鼻髭を蓄え、朗らかな微笑みを湛える優しそうなジェントルマンだ。

「失礼致します。　チーム、セフティー・ファーストのリーダーでウィリアムと申します。　上に仕事の斡旋を窺ったら、コチラへと案内されまして」

「ほほほ、そうですか。　急激にコンコース島で活躍されたチームが現れたとお聞きいたしましたが。　随分とお若いリーダーですな」

ウィリアムは、その流れに沿い。

「スミマセンが、今日この都市に着きまして。　港で少し大事を起こしまって、どうしてもお金が欲しいのですが」

すると、初老の紳士は一同を見て。

「ま、お掛けに」

と、右のソファーを進めて来る。

ウィリアムは、皆を座らせて自分が最後に座った。

四人でテーブルを囲う前に初老の紳士は佇み。

「どうやら、港の一角で爆発騒ぎが有りましたと噂が・・・。　皆様でしたか」

ウィリアムが、

「お恥ずかしい限りです」

と、一礼すれば。　皆も頭を下げる。

「嫌々、あのホロー氏の船を壊されたとか。　中々の勇気、寧ろ面白いかと思いますよ。　ま、死人が出ていないのが幸いで・・・と云う前提になりますが。　ほほほ」

スティールは、ロイムの耳に。

（イヤミンだよな・・・）

（云われても仕方無いでしょ）

（うぬぬ・・・）

ウィリアムは、仲間を見ないで。

「我々に出来る仕事は、ありますでしょうか？」

すると、初老紳士は頷き。

「ハイ。　ま～、仕事は多く依頼を承っておりますが。　貴方のチームに是非任せてみたい御仕事が一つ」

一同が、紳士を見上げる。

紳士は、スッと後ろに回した手を前に戻せば黒皮の書物を持っていて。

「本来なら、スターダストやスカイスクレイバーの方々にお任せしようかと思っていた御仕事なんですが。　実はこの仕事、依頼の前提に早くに済ませて欲しいとの注文付きでしてな」

と、聞いた瞬間。

「いいいえぇぇっ？！」

「スッ・スターダストやスカイスクレイバーだってええっ？」

アクトル・スティールが驚いて見合い。

ロイムは、名前の出たチームに驚いて。

「あわあわあわあわあわあわあわあわ・・・」

と、うろたえる始末。

ウィリアムは、初老の紳士を見上げて静かに。

「その御仕事は、其処までのチームに任せなくとも出来ると御思いで？　それとも、仕事を出来る冒険者チームが今居ないからですか？」

初老の紳士の目が、ウィリアムの目を受けて見返してくる。

「ほほう。　そう読まれますか。　御自分のチームを過信しないのですね？」

「ええ、十日とちょっと前に結成したチームですから。　此処に来るのも驚きですね」

「確かに、確かに」

ウィリアムは、驚いている一同を見ながら。

「どうやら、ご主人は確かめたいのですね。　我々の力量を・・・。ですから、仕事の按配のあえて計れぬ御仕事を回そうと。　出来れば、問題なし。　出来なくとも、必要な情報を持ち帰るならば、それで良し。　我々に、斥候代わりをしろと仰せですか？」

「・・・・・」

沈黙が、皆に広がる。

アクトル・スティール・ロイムは、恐る恐る初老の紳士を見上げると・・・。

「・・・」

初老の紳士は、ウィリアムを見て微笑んでいた。

そして。

「其処まで読まれるならば、是非お任せ致したい。　実は、仕事の内容が曖昧過ぎるのですよ。　この仕事、中級のチームに任せましたら、八人のチームが再起不能に近い大怪我で戻りましてな。　有名なチームが不在の今に、こちらも困り果てていたのです」

ウィリアムは、初老紳士を見上げて。　にこやかに。

「構いません。　お受けしましょう。　仕事の説明、頂けませんか？」

その返答に、

「いえッ？！！」

「うそおっ？！！」

「マジかよ・・・」

仲間三人は、ビックリしてウィリアムを見た。

初老紳士と、ウィリアムだけ。　静かに・・・意味深に・・・微笑

んでお互い見合っていた。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　借金なんて聞いてないっ！！（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編のシーズン２ですね～＾＾

時間があれば、どんどん更新していきますのでよろしくお願いします＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　ワダルの町で

2、ワダルの町の出会い・・・それぞれに。

辺りの草原の草が、暖かい初夏の風に揺らいでいる。　空は、快晴。
　雲一つ無い。

交易都市アハメイルから、北に伸びるレンガ敷きの舗装された街道を歩くウィリアム達が居る。　すれ違う馬車の一団をやり過ごし、また街道に広がって歩き出した。

黄色い蝶が草原に舞うのを見ながら、スティールは。

「ウィリアムよ～。　今回の仕事はァさ、報酬五千だって言ってたけど。　上級の割りに安くなかったか？」

ウィリアムは、スティールに脇目を向けて。

「いえいえ、運次第では報酬なんかよりお金が稼げるかもしれませんよ」

「へ？」

意味が解らずに聞き返すスティールに、ロイムが。

「スティールさん、契約内容では、祠の中の物は全て僕達の物だそうです。　ワダルに山なんて有りません。　多分、人口的な祠でし

たら、古い昔の遺物を発見できるかもしれませんよ。　もしかしたら、宝石とか見つければ一気に大金の変わるかも」

スティールは、期待の膨らむ夢のある話に。

「おおっ、借金を一挙に返せるかもしれね～なっ。　そうか、なるほど～」

ウィリアムは、ロイムに笑って。

「ロイム、まだ何とも断定出来ないんだから。　美人局（つつもたせ）したら駄目だよ」

「は～い・・・。　でも・・・そうであって欲しいよ」

ロイムは、幾らか声のトーンを落として返す。

アクトルは、前の伸びる街道を見渡して。

「しかしなぁ～。　アハメイルに着て初日が驚きの連続だったな～。　コイツの爆破事件といい、斡旋所の地下二階といい・・」

と、高みからスティールの頭上に指を向ける。

ウィリアムも、前を向きながら。

「ですねぇ～。　モルビットさんの紹介が利きましたね。　突発事件の解決は、活躍の紹介を斡旋所に頼めると聞いていましたが・・・。　遣るのも、見るのも初めて・・・。　体験すると、凄いですね」

一行は、世間話をしながら。　北の町、ワダルへと向かっていた。

中継都市ワダル。　フラストマド王国の首都アクストムと、貿易都市アハメイルの中間に位置する。　アハメイルから北に向かう人や荷物の中継地で在る事はもちろんだが。　首都のアクストム周辺の村や町へ行く中継地でも有り。　アハメイルに向かう国内の荷物・人の六割以上がワダルを通る為。　休憩・宿泊地として賑やかな町だとか。

さて、ウィリアムが請けた仕事であるが。

“ワダルの西の外れの森に、近年何か不可解な出来事が起きていると云う。　森に生きる狩人は屋敷を見たと言い。　薬草採取に森へ入った女性は、寺院のような祠を見たと言う。　しかも、その場所へ行けるのは、誰とでもとは行かず。　中には森で三日も彷徨って居ただけの者も居る。　至急、その調査を依頼したい。　出来るなら、詳細な情報を求む”

と、言う内容。

しかも、ウィリアム達が請ける前に請けた冒険者達は、再起不能になるまでの大怪我で半数が、その後に亡くなっていた。　喋れる者全員が口を揃えるのは、古い寺院が有り。　奥に祠が。　中に入れば、迷路が有って。　彷徨った上に、いきなり断崖絶壁の外に放り出された・・・と証言する。

あの斡旋所の主人である初老の紳士は、魔術師のロイムが居るので。　ウィリアム達に、【記憶の石】事“メモリアルジュエル”を渡して、冒険の記憶を記録して欲しいと言った。

ロイムは、“メモリアルジュエル”などと云う高価なオールドアイテムを持つのは初めて。　懐に大切に仕舞ってある。

とにかく、急ぎの仕事で。　記憶の内容次第では、千から三千の幅で、追加報酬も有ると言う。　ウィリアムは、試された上にチャレンジャー。　仕事を断るのも意志に反するし、この仕事を成功させれば、信用も増して更なる扉を開けると踏んで請けた。

しかもアハメイルに居ては、借金をしたあのホローと云う男の取立てに煩い日々と解る。　なら、尚更動き回っていた方がいいと思うのは当然の事。

ワダルまでの道のりは、日数にして三日。　今朝、アハメイルを発ったから、着くのは明後日の夕方頃だろう。

ーーー

（汚い表現・・・）

ウィリアムは、雨がまだ降らない中で。

「なんとか、雨の前にワダルに来れましたね」

と、石で出来たワダルへの門を潜る。　幅は馬車五・六台分。　高さは、ざっと七・八メートル。　上の屋根のアーチ部分に、“ようこそっ、ワダルへ！！！”と、書かれていた。

スティールは、暑かった昼間の手前。

「早く一杯やりてぇ～」

アクトルも。

「同感だ。　汗掻いたしな」

ウィリアムは、今夜はゆっくりしてもいいと思った。

石畳に変わる町への道を行けば、両脇に馬車の停留所が見えた。
借り馬車や、送迎馬車の店だろう。　馬の声が聞こえ、テンガロンハットの男達が雨に成りそうな空を、店の前で眺めている脇を通り。
ワダルの街中に入った。

「おおっ、麗しき女性がっ」

スティールは、フリル付きのドレスを着た貴婦人の姿を見て思わず言う。

「・・・・」

皆の反応は無いが。　スティールの背中には、刺す様な殺気が向けられているのが解る。

（ヤバイ・・・背中に刃物のよ～な視線が・・・イタイ・・・・）

町中は、軒が連なる長屋店舗の様相で、左右に店が伸びる。　石畳の道路は続き。　馬車の往来や、人の往来も賑う。　飲み屋や、飲食店に明かりが灯り。　冒険者や、旅人、働き手の人々が腹や喉の欲求に応えるべく店の物色をしている光景があちらこちらに。

「さて、宿を探しましょう」

ウィリアムは、通りを直進しようと。

アクトルは、

「ウィリアム、待て」

と、呼び止めて。　振り返ったウィリアムに。

「この町の宿は、この通りの左に曲がって交差道二本先の通りからだ」

ウィリアムはその説明に、近くの曲がり道を見て。

「あっちですね」

「ああ。　ただ、飲食店街に近い宿は“駆け込み宿”（泊まるだけの宿）だ。　いい宿は、更に交差道一本・二本曲がったままに直進して行かないと」

「なるほど。　ま、数日は泊まる予定ですし。　荷物の管理も考えると、少しいい宿を考えましょうね」

「ああ、その方がいいな」

こうして、ウィリアム達は近くの道を左に曲がった。

アクトルの言う通り。　二つ交差する道の左右は、飲食店ばかり。　三つ目の十字路に来れば宿らしき看板は見えるが。　建物が小さく、泊まるだけの夜をやり過ごす目的の宿ばかり。

宿は、店構えや敷地の大きさなどで内容が異なる。　長期滞在するなら、金の余裕がある限りは少しでもいい宿に泊まるのが無難だ。　風呂や温泉もあるし、更に宿で酒が呑めたり、食事も出来る。　豪華な宿には、温水プール（湯治用）や、ダンスホール、公共の賭博所もあるし。　何店ものレストランが内に犇く宿などもあるのだ。　しかも、安い宿だと盗難などの心配も多いのだ。

ウィリアム達は、道を五本も突っ切って、大浴場と寛げる共用リビングが各階にある黒いレンガ造りの宿に入った。　大体の宿の看板には、宿の提供する施設内用が書かれているから、一目瞭然と云う訳である。

「いらっしゃいませ」

宿に入ると、スティールと年齢の変わらない感じのスッキリした男

性が、正装姿で受付のカウンター内から声を出してくる。

ウィリアムは、

「こんばんわ、男四人で少し長期滞在するかもしれませんが。　部屋、有りますか？」

「ハイ、御座いますよ。　宿泊形態は、個室、二人づつ、四人のどれでも構いませんが。　どうされますか？」

ウィリアムは、面倒と思い。

「四人部屋を。　ランクは少し上でも構いません」

「承知致しました。　ご用意致します」

と、呼び鈴を鳴らす。

ウィリアムは、信用第一と。

「一泊、お幾らですか？」

受付の男性は、カウンター内側のなにかノートを見て。

「お一人様、７５シフォンです」

「解りました。　三日分、前払いで」

と、金を出す。

案内のベルボーイが来た手前で、受付の男性は笑顔で。

「前払い感謝致します」

宿賃の踏み倒しも、時には起こる。　前払いは、怪しさを窺わせない冒険者の処世術の一つ。　金に困る姿は、疑いの元にも成りかねない。　ま、とんでもない借金に困っているが。

さて、金を払って部屋に行けば。　間取りの広い四人部屋。　しかも、角部屋で、窓が二つ。　ベットは、窓側に二つづつ並んでいた。

案内されて、ベルボーイが去ってから。

荷物を置きながらスティール。

「中々落ち着いた部屋だの。　壁掛けのランプグラスも洒落てらぁ」

ウィリアムは、確かに手入れの行き届いたオリジナルチェックの壁紙や、クラッシックな趣の部屋に、居心地の良さを見出して。

「この部屋なら、長逗留も悪く無いですね。　では、何か食べにでも行きますか」

一同、外に出て食事をする事に。

外に出れば、暗くなった外には街灯が灯り。　雨の前の湿った肌寒い風が吹き出していた。

ウィリアムは、雲が垂れ込める夜空をお見上げて。

「そろそろ、雨ですね」

アクトルは、

「だな。　仕事に影響出ないといいがな」

ロイムは、

「降る前にお店に入ろうよ」

スティールは、

「ま、濡れてもいい男だから俺はいいがな」

と、キザに。

ロイム、スティールをジト目で見て。

「じゃ～野宿したら？」

スティールは、目を瞑ってガックリと下を向いた。

肉料理を謳うステーキハウスに入って、食事をする事に。　男客が圧倒的に多い店内、田舎風のざっくばらんな店内だ。　ビールやワインの香りに、焼かれる肉にタレの香りが混ざってスタミナが付きそうな匂いに包まれる。

アクトルが、四人合い席に腰掛けて。

「あ～ブタ一キロ、二枚。　ビール、バケットで」

と、注文すれば。　辺りの男達が見てくる。　ステーキ、一キロの切り身二枚に、バケツサイズの大きいグラス“バケット”でビールを注文するなど中々居ない。

固太りで大柄の、農家で働く農夫のような店の主人が。

「体に似合った注文だな。　少し焼けるまで時間貰うぜ」

と、嬉しそうに注文を聞いて行った。

ウィリアムは、店の主人の男性が肉を焼き始める炭火キッチン前のカウンターに向かい。

「すいません。　少し、お伺いしていいですか？」

「おう、なんだ？　肉が焦げる前に終わる質問にしろよ。　あははは」

と、からかわれて。　笑って頷きながら。

「あの、この町の西に、不思議な事が起こってるって聞いて来た冒険者なんですが。　詳しい方、解りますか？」

主人、肉を長い網の上に十枚ほど並べて炭焼きしながら。

「お～、アレかァ～。　森に見に行ったのは、薬師のやっとこ（奴の田舎訛り）や、狩人のヨーゼフだ。　昔から、あの森は神聖な場所だからと、町の人間は近づかないぜ」

「そうですか。　その薬師の方と、狩人の方の居場所を教えて頂けますか？」

「ああ。　なら、明日の昼にまた来なよ。　案内してやるさ。　狩人のヨーゼフは夜が早いから、明日の方がいいだろう」

「はい、助かります。　手間賃代わりに、限界まで食べて行きますよ」

ウィリアムが笑って云うと。

「おお、男だね～。　死ぬ手前まで食わせたるわ。　がははははは」

陽気な店主だった。

ビールが来れば、一気にバケットの半分を飲むアクトルは、肉が来れば豪快に切って食べる。

スティールは、よそ者をからかいに来た別の客に絡んで、酒をつまみに世間話。　ロイムを引き合いに、エロ話に花を咲かせる始末。

入店して直ぐに雨が降り出した外を他所に、一行かなり酔って笑って楽しんでいた。

さて、街灯の油が切れて灯りが落ちる始めた頃の深夜。　ウィリアム達は、かなり酔って外に出た。　雨がまだ降っている。　店の軒伝いに、宿までなるべく濡れないように行こうと歩いて行く中で。

夜目の利くウィリアムは、街灯の灯りが薄くなる暗がりの中で。

白い服の何者かが、数人の誰かに追われているのを見た。　行った

方向は、飲み屋が多いと聞いた宿屋街の並びとは並行する手前に道である。

「誰か追われてるっ」

ウィリアムが、雨に濡れる石畳に道に飛び出した。

「んあ？」

「ええっ？」

酔ったロイムとスティールは、キスしそうな顔の間合いで見合ってから、ウィリアムを目で追った。

アクトルも、酔っていながらにウィリアムの後から走っていた。

ーーー

「構わないでっ！！！」

女性は、脅えて走りながらそう叫んだ。

飲み屋街では、女性と男性のイザコザなど日常茶飯事。　こんな事で、役人が呼ばれる事は無く。　雨の音と、酔っ払った者の血迷い話で疲れ始めた店などの中では、また男女のケンカかと知らん振りである。

走る男の脚が早く、五人のウチの先頭を走る身軽そうな男が、女性に追いついた。

「クローリアっ、待てっ」

と、腕を掴む。

「止めてっ！！！！　離してっ！！！」

女性が、男に向かって抵抗する。

七：三分の男は、ローブのフードから赤い髪を洩らした女性を見て。

「いいからっ、今夜は付き合えって！！　誰も殺すなんて言ってねえっ！！！　一夜、相手しろって言ってるだけだろうがっ！！」

女性は、白い肌のうら若い顔を強張らせて。

「嫌っ、もう夜の仕事なんかしてないわっ。　変な事だってしてないっ！！！」

そこに、後から来た男達四人も女性を囲む様に回りに立つ。
ガタイの太い、背の高い男は下世話な笑みを雨に濡らして。
「へへへ、随分と綺麗な顔してるじゃないか。　楽しめそうだ」
と、女性の顔を自分に向けた。
別の陰気な様子を見せる小男は、腕を掴む男に。
「どうする？」
嫌がる女性の腕を掴む男は、
「何処かの空き家にでもずらかろう。　酒の相手させて、あとは順番に楽しめばいいさ」
と、下衆な笑いを見せる。
其処に、真っ先に到着したアクトルが、雨に濡れた顔を薄っすらと光る街頭に照らされながら。
「おい、女一人を相手に、男が五人も集ってなにしてる」
女性を囲む男五人は、アクトルの方に向いた。
「な・」
威勢のいい言葉を言おうとした五人だが、二メートルを超す大男の登場に声が出せなかった。　背中の大斧の一部が、雨に濡れて鈍く

光るのが見えたのだ。

一番身体の大きい男が、

「な・なんだテメエは・・。　こっちの話だ。　返れっ」

と、人数に余裕を見て言う。

アクトルは、ウィリアムが見えないと思いながら。

「こっちもそっちもあるか。　こんな夜中に、女一人を追いかけるなんざまともな奴じゃ～ないな」

すると、女性の腕を掴んでいる男が。

「にいさん、勘違いしないでくれよ。　この女は、元々は夜の店で働いていた女で、俺はその店の元常連。　昔話をさ、したかっただけさ」

アクトルは、ジロリと睨んで。

「昔は昔、今は今。　嫌がってる、離せ」

話の合間に小男が、見られないようにスラリと腰のダガーを抜いて、仲間に目配せした。

その時だ。

「うぐぅっ！！！！」

女性の腕を掴んでいた男が、急に呻き上げた。

「？！！！」

一同が、女性も含めて声の方を見れば・・・。

「あっ、なんだテメエはっ？！！」

女性の腕を掴んでいた男の首を、若い男が掴んで居た。

小男が動こうとする時、ウィリアムの声がする。

「動かないほうが、この人死にますよ」

仲間四人は、動き出し掛けた身体を止める。

雨の中、何時の間にかウィリアムが四人の男の輪を潜り、女性を掴んで居た男の背後に回っていたのだ。

アクトルが、

「ウィリアム、居ないかと思ったぜ」

と、言う時に。

「アークっ」

ロイムとスティールも来た。

ウィリアムは、アクトルに。

「言っても聞く気なさそうな方々みたいなんで。　実力行使ですよ」

と、言ってから、首を掴んでる男を見て。

「今、貴方の首の間接を極めてます。　変な動きしたり、周りの人が干渉すると、二度と歩けない身体になりますよ」

大男は、苛立たしげな声で。

「テメエぇっ、一体何者だっ?!!」

ウィリアムは、大男を見て詰まらなそうに。

「見て解りません?　同業者ですよ。　ま、夜に女性を攫うゴミでは無いですがね」

と、言ってから、首を掴んでいる男に向かって。

「さ、彼女の手を離しましょうか。　開放して、もう近づかないならこっちも面倒はこれで終わりにしますが」

「わ・・わが・・た・・」

ウィリアムに首を掴まれた男は、女性の腕を掴む手を離した。

ウィリアムは、女性に。

「さ、向こうの大きい人の方に」

もう、驚くばかりの女性は、頷いてアクトルの方に歩みだす。
女性を囲んだ男達の一人で、年配の一人が首を掴まれた男に目配せを送るが。
首を掴まれた男は、ギョロっとした目で相手を見て。
「い・・いい・・・いか・・せろ・・・」
白いローブ姿の女性は、男の囲みを抜けてアクトルの方に抜けた。
ウィリアムは、首を掴む男の顔を覗いて。
「へえ、俺に気付きましたか。　好都合ですね。　ま、そうゆう事で、もう面倒はナシでお願いしますよ」
男は、頷けないままに、目で合図する。
ウィリアム、男から手を離した。
「あぐう・・・・グホッ・・ゲホ・ゲホ・・・」
咽る男は、ウィリアムから必死で退いた。
女性がウィリアムを返り見る。　アクトルやスティール・ロイムも。
「はっ・・・・」
開放された男は、女性を見て苦し紛れに。

「クローリアっ、おまえはマグダ・リアだっ！！！　その穢れた意味は変わんねえぞっ！！！！」

と、痛む首を抑えて吼える。

その男の言葉に、ウィリアムがアクトルに向かう途中で止まった。

そして、街灯の届かない暗闇の中に溶けて。

「煩いな・・・・マジで」

明らかに何時ものウィリアムの言い方では無い、苛立たしげな声だ。

スティールは、ビクッとして。

「アレ・・・アーク、ウィリアムの奴・・・・怒って・・・・る？」

ロイムも、ビックリして。

「みたい・・・です」

アクトルは、いきなりの事に目を瞬きさせ。

「どうした？」

ウィリアムは、闇の中で男達にまた身を向ける。

「気に障る言葉ばっかり吐いてさ・・・・・死にたいか？」

暗闇に入ったウィリアムからは、明らかに殺気が感じられた。　スティールもロイムもアクトルも、ウィリアムが解らなくなる。　女

性を助けたのに・・・。　ウィリアムはどうしたと云うのだろう。

「ウルセエっ！！！」

ダガーを抜いていた小男が、声を出してウィリアムの居る場所にダガーを向けて飛び込んだ。

が、直後に。

「うぎゃあああっ！！！」

小男が、弾き飛ばされるように悲鳴を上げて道の反対の街灯の近くまで飛ばされて、地面に倒れたら顔を抑えて転げまわる。

女性を掴んだ男は、退き始めた。

「や・・止めろみんな・・・。　コイツ、近づくのに気配も少ねえし・・・足音も殆どねえっ。　闇の格闘術を使ってるっ、殺されるぞ！！」

この言葉に、周りに居た男達が驚いてウィリアムから離れ始めた。

ウィリアムは、闇の中から。

「解るなら、サッサとあの転がってる奴連れて消えろ・・・。　次、遣り合うようなら、手加減しない」

と、殺気を含んだ低い声で・・。

「わ・・解ってるっ、みんな・・・消えるぞっ」

女性を掴んで居た男が声を掛けて、男達は転がっていた男も連れて町の北側に消えていった。

降る雨に、全員がびしょ濡れに成っていた。

ウィリアムは、女性も居るみなの前に歩いて来て。

「宿に帰りましょうか・・・。　スイマセン、なんかカッとしてしまって」

ロイム・スティール・アクトルは、激しく首を左右に振る。

スティールは、ウィリアムが怖かっただけに。

「いいと思うよ。　悪いのアイツ等だしさ～」

ロイムも。

「そっ・そうだよ・・・あはは・・・助けれて良かったね・・・・」

アクトルは、クルリと向きを変えて。

「や・・・宿は、どっちだ?」

その中で、女性がウィリアムに寄った。

「危ない所を助けて頂き、ありがとうございます。　皆様との出会いに、感謝いたします」

と、頭を下げてくる。

ウィリアムは、女性を見ずに。

「いいえ。　夜遅い上に、一人歩きはいけませんよ。　宿は、どちらですか？」

「はい、すみません。　今さっき、町に入ったばかりで宿はまだです。　スミマセン、まだ何処のチームにも入れないままに、此処まで来ましたもので」

ウィリアム以外の三人が、女性を見る。　知的な若い女性だ。　大人びているが、白い肌の顔は、まだ二十そこそこだろう。　ローブを着ている上に、ロイムと同じ杖まで・・・・。　同業者と思える。

だがスティールは、この女性に人としての影を見る気がする。

（な～んか・・ちぃ～っと暗い女だな）

ウィリアムは、雨の中で宿の方を向き。

「では、自分達の泊まってる宿に行きますか？　風呂とティーラウンジはある宿です。　女性ですから、一人部屋。　空いてるかもしれません」

女性は、頷いて。

「はい、お言葉に甘えます。　私の名前は、クローリア。　知識の神、“アウスレーヴィア”を信仰します僧侶です」

と。

スティールは、大げさに。

「おおっ、神官様だぜっ。　お嬢さん、どうせならこのままウチのチームに如何？　癒し手はまだ居ね～し、グットでゴットなタイミングぐ～」

アクトルは、歩き出して。

「阿呆、不躾にいきなり過ぎるだろう。　風邪引く前に宿に帰るぞ」

ロイムは、震えて。

「う・うん・・帰ろうよ・・。　風も冷たいし・・・寒いよ・・」

だが。

「・・・・」

ウィリアムは、無言だった。

ーーー

て、皆と一夜を同じ宿で過ごした。

朝を過ぎて、もう陽も随分上がった頃にウィリアムが起きた。　まだ寝ている三人を部屋に残し、四階から一階へ降りて行く。　宿の一階には、男女別に浴場が有るし。　落ち着いた木材のインテリアが並ぶティーラウンジが有った。

ティーラウンジに入ったウィリアムは、ぐるっと店内を見回す。　カウンター席が七・八席。　テーブル席が、二人から六人の合い席で十組ほどか。　ラウンジの右手は、窓で外の通りが見える。

「すいません。　無糖のフルーツティーと、ケーキを」

ウィリアムは、注文をしながらカウンターに腰を降ろせば、六十絡みの知的な男性マスターが受けてくれる。

今、客は一番少なく。　ウィリアム以外は、二人席に夫婦のような男女が紅茶の香りを楽しんでるだけだ。

ウィリアムの前に、フルーツティーが湯気を上げて出された。

「いい香りですね。　リンゴと、ブドウだ。　リンゴを強くして、ブドウは少し・・・。　素晴らしい、ワインも使ってる」

出したマスターは、驚きの笑み。

「おやおや、言い当てられてしまいましたなぁ～。　お鼻が肥えていますね・・・」

「ああ、スミマセン。　薬師の技を少々遊んでますから・・・」

「お～、なるほど」

ウィリアムは、紅茶を一口して。

「いいですね・・・。　フレッシュフルーツの果汁と、ドライフルーツ・・少しリキュールに浸してから乾燥させて、ワインで煮戻して紅茶と合わせる。　分量が違えば、味が壊れるのになぁ」

マスターは、笑いながらケーキを焼き。

「もう、この仕事が四十六年に成ります。　しかし、最近味の感覚が鈍る時が有りましてねぇ～」

「お年を召されると、皆そうなるようですね。　苦味を使った薬用の治療法が有りますよ。　お試しになりますか？」

マスターは、大いに微笑み。

「それはいい事を。　是非、お願いします」

ウィリアムは、昨夜の事を微塵にも見せない様子で、マスターと他愛無い雑談などを始めた。

その時、遅く起きたクローリアは、アクトル達の部屋を訪ねていた。

昼間に見れば、昨夜の薄暗い照明の下で見た彼女とは違う。　少し切れ長い澄ました印象ながら、クローリアの美しさに、全員が気を削がれた。

クローリアを含めた一行は、一階に降りる。　ティーラウンジに、笑ってるウィリアムを見つけた。

ロイム。

「お・・怒ってない・・・ね」

スティール、腕組みして安心の様子。

「ウム、大丈夫の様だな・・・」

アクトルは、笑って。

「ウチのリーダーは、お前等ほど中身の狭い男じゃ～ない」

ロイム・スティールは声を合わせて。

「ホイ」

と。

アクトルが先頭に。

「ウィリアム、起きてたか。　いい匂いだな～。　何を飲んでる?」

ウィリアムは、ストゥールと一緒に回って。

「フルーツティーですよ。　ハーブティーや、ストレートもありますよ」

昼前、昨夜の飲食で疲れ荒れた胃を紅茶で癒す。

さて、ウィリアムは隣に座るクローリアに。

「所で、昨夜はどうして襲われたのです?」

「はい・・・お恥ずかしい話なのですが・・」

クローリアは、魔法学院カクトノーズについこの前まで在籍し、僧侶の修行していた学生だった。　冒険者になり、知識の幅を広げようと思い立ったが。　いざ、この国のアハメイルに着いて、自分を加えて貰えそうなチームを捜していたら。　昨夜の一団に出くわしたとか。

“クローリア、俺のチームに入れよ”

リーダーの男は、クローリアが若い十二・三の頃に、横暴な父親の御蔭で飲み屋の接待嬢として働かされて居たのを知っていた。　だから、脅し紛いの脅迫をして、仲間に加えようとしたとか。　嫌で、ワダルに逃げて来たのだが。　なんと、追いかけて来ていたと云う訳である。

スティールは、呆れて。

「ドイツもコイツもトンコツも・・・」

アクトルは、

「お前と、アイツ等はポンコツだな」

と、紅茶を飲む。

「ア～クぅ～。　あないまで俺は酷くないってぇ～」

「ど～だか」

と、眼を細めて云うロイム。

スティールが、クル～リと動かす顔に合わせて、ロイムも逆側に顔を背ける。

ウィリアムは、聞いて納得。

「ナ～ルホド。　災難の一言ですね～」

と、紅茶を飲む。

クローリアは、ウィリアム頭を下げて。

「あの、私で宜しければ・・・お仲間に入れて頂けませんか？　この神より授かった力で、お力添え致します」

と、頼んできた。

ウィリアムは、口を少し曲げて。

「ふむ～」

クローリアは、自分の過去の影から上目遣いでウィリアムを見て。

「私では・・・駄目でしょうか？」

スティールは、直ぐにキザったらしく前髪を掻き上げて。

「俺は大賛成。　女性を助けるのが、男の生きがいさ・・・フッ・・・（決まった）」

ウィリアムは、スティール見て。

「難色を示ざる得ない原因の方が、ふつ～言いますか？」

アクトルも。

「同じく」

ロイムも。

「全く、ウィリアムに一票」

スティールは、カウンター前にドロリと溶けそうな様子でげんなり。

クローリアは、皆を見て目をパチクリ。

「はぁ？」

ウィリアムは、カップを置いて。

「ウチのチームは、普通のチームと違います。　一つは、リーダーの自分はチャレンジャーなので、紹介された仕事は断りません。ですから、普通以上に危険な仕事を請ける可能性があるチームです」

アクトルが続いて。

「二つ目。　今、俺達は二十万シフォンっていう大金の借金がある。　三ヵ月以内に返さないと、暗殺者に狙われる可能性が。　因みに、原因は全てあのバカ」

スティールは、顔に手をやってキザに。

「フッ・・・少し、お痛が過ぎただけさ・・・」

ロイムは、スティールの脇で、

「三つ目～。　僕の右に居る人が諸悪の根源で、尚且つヘンタイ大王です。　女性が加わったら、セクハラにあいま～す」

「・・・・・」

スティールは、またロイムを苦々しく見るが。　ロイムは顔を逸らして、舌を出す。

ウィリアムは、クローリアに。

「ま、初心者の方には、非常に危険なチームって事ですよ。　貴女は綺麗だし。　障害が無ければ、普通にチーム入れて貰えると思います。　アハメイルか、アクストムまで送り馬車でも使って行くのもいいかと」

アクトルは、上を向いて。

「二十万の借金だもんな・・・、ホントに返せるのかも微妙だしな～。　チームとして、クローリアさんの様な僧侶は有り難いが。報酬を殆ど借金に持って行かれる自体を考えると、仲間を増やす事自体に抵抗が有る」

と、ため息。

「そう・・・ですか・・・」

クローリアは、下を見て力を落とす。

ウィリアムは、落ち着いた美女クローリアを見た。

赤い髪は、深紅の色合い。　切れ長の瞳と繭の調和は神の均衡だ。　薄紅色の唇、程よい小ぶりの高い鼻。　昨夜の男達が、狂う気も解らない訳では無い。

スティールは、ガクリと力を落とし。

「ううう・・・爆弾の御蔭で・・・仲間から嫌われる・・・」

ウィリアムは、そろそろ昼に成るので。

「スティールさん、一つ約束出来ます？」

スティールは、パッと顔を上げて。

「ン？　何？」

「嫌、借金返せない時、俺と二人でホローを始末するって？」

「え゛？」

一同、ウィリアムの言葉に驚いた。

スティールは、ビックリしたままに困って。

「始末って・・・なあ・・・」

ウィリアムは、笑って。

「始末ってのは言いすぎですが。　相手の悪事を暴いて、借金チャラに・・・」

スティール・ロイム・アクトルは、パシッと手を叩いてウィリアムに向く。

「名案～」

ウィリアムも、頷き。

「今、考えました。　ま、あくまでも返せない場合ですがね～」

スティールは、ウィリアムに食いついて。

「あっ・・お・・おま・お前っ、何で今すぐ遣らないの？　最高の名案だろうが？」

ウィリアムは、微笑みながら綺麗な花柄のカップを見つめて。

「偶然の災難で二十万なんて大金の借金背負いましたが・・・。期限内に返してみれば、至上最速でこんな大金の借金返した冒険者の噂だせますしねぇ～。　試練は、乗り越えて試練でしょう?。ホロー氏の悪事はこれからも続く訳ですし。　返せた後か、出来ない時に、の保険で、彼の足元を掬うって事で如何かと・・・」

アクトルは、アリネットの一件でのウィリアムを見ているだけに。

「お前・・・怖いねえ・・・。　もう、借金を逆手に取る事を考えてるわけか?」

ウィリアムは、あっけらかんと頷き。

「ええ。　どうせ、逃げれませんし。　前向きに、利用出来る所は利用してみよ～かと」

スティールは、一人真顔で。

「いよっ、われ等がリーダーっ!!!　結成十数日で上位の仕事を請けた男っ!!　天才、色男、伝説の冒険者に相応しい人っ」

と、どこから出して鉢巻を締めたか解らないが・・・、応援する。

ロイム、唸るままに信じられないと云った顔つきで。

「ああ・・・アホと鬼だぁ～」

ウィリアム、こうまで言ってから。　呆けてるクローリアを見て。

「かなりデンジャ～なチームですが。　それでも加わります?」

と、口の片方を上げて笑い聞く。

「・・・・・」

クローリアは、こんなに何か違う世界を魅せる男性は初めてだった。

「わ・・・私で・・・宜しいの・・なら・・・・・・是非・・・」

「美人は嫌いでは無いんで、歓迎しますよ。　では、今回の事件が解決したら加入申請しましょうか。　それまでは、協力者って事で」

「は・・・はい・・・」

クローリアの目が完全にウィリアムに奪われて居た。

ーーー

スティールが、応えて。

「ああ、昨日に一本釣りが成功したのさ～」

ロイムは、呆れた顔で。

「ドヘンタイ」

と。　何処で釣るのか・・女性を。

さて、主人の案内で、石畳の道を町の中心街へ進めば。　樹木の多い公園と水路が町並みを彩る綺麗で自然豊かな町中に。

ステーキハウスの主人が教えてくれたが、この町の中心が元々から有った町なんだそうな。　今の飲食店街や宿屋街は、後々に拡張して移ったんだとか。　専門店や古い酒造元の酒蔵なども見え、生活用品などは、こっちに来ないと買えない。　不便なようだが。　この分離が、町の利潤攪拌に役立っているのだと云う。

そんな町中で。　全ての建物が、噴水の有る中央広場を中心に、広場に表を向いて螺旋状に道を挟んで立ち並ぶ場所が在る。　その建物の中でも、噴水を眼の前にした薬屋に来た。　赤い布の日よけ軒先に掛けた古い店だ。

「おーい、入るよ」

主人が先に声を掛けて中に入れば、

「誰だい？」

と、草臥れた中年男が店の奥から出てくる。　黒縁眼鏡に、白い作業着を着た、少し頑固そうな男性である。　ステーキハウスの主人を見るなり。

「おう、肉屋のとこのエドかよ。　どうした、見かけない顔の若い奴連れて」

「いや～さ。　アハメイルから西の森を調べに冒険者が来た。　お前さんに、西の森へ入った時の話さ聞きて～とよ」

眼鏡を凝らして、薬屋の主人はウィリアム達を見て。

「ほ～、そうか。　ま、いいや。　こっち、奥に入ってくれ。　話す」

店の奥に、椅子が並ぶ店内の休憩場。

ウィリアムが、この薬師に森の中に入った話を聞いた。

この薬師の話では。　毎年、季節限定で採取出来る薬草を娘と採りに森へ入った時の事。　例年なら、在る所まで行くともう森が終わって断崖絶壁に成る筈の場所が、何故か森に成っていたと云う。時間の余裕から、森を奥まで進むと娘の方が靄の立ち込める森の中に祠の様な寺院を見つけた。　依頼の話に在った女性が、この娘さんだとか。

薬師さんは、ここまで話してからウィリアムを見て。

「娘は中に入ろうとしたが、俺が止めた。　地元の俺達が聞いた事の無い寺院だ。　あの森に建物が在るなんて聞いた事無いからな、

娘を止めて引き返した。　最初は、我々だけかと思ったが。　町で森に行く人に聞いて回ってら。　森に入って狩りをしてる狩人のヨーゼフも、森の同じ場所に屋敷を見たと・・・」

ウィリアムは、

「前までは、そうゆう噂は・・・？」

と、質問すれば。

「いやいや。　あの森は、何故か昔から神聖な森で神様が住むと云われた森だ。　誰でもおいそれと入ったりしない」

「そうですか」

ウィリアムは、了承するのだが・・。　薬屋の主人は、何かを思い出したかの様に。

「でも・・・あれは確か・・」

「何か？」

「ああ、大昔っから、神聖な森の言い伝えに因んでだろうが・・・。行方不明の迷い人の話はチラホラ有ったようだな」

「と・・・言いますと？」

薬師の男性は、冷ましの薬膳茶を飲みながら。

「うん、あの森の奥には、森を守る守護者が居ると。　だから、無

闇矢鱈に知らないものが入って、森で行方不明になった者が居るとじいさんから聞いたな・・・。　助かった者、帰ってこなかった者、様々らしい」

「へぇ～。　凄い、迷いの森ですね」

「まぁ～、事実は定かじゃ無いが。　帰って来た者は、皆が用心の為に目印を着けた者ばかりだとさ」

ウィリアムは、気に成り。

「その・・・森に入る人は、皆・・目印を？」

「ああ。　私も、今年で三十六年、娘と入り出して十七年、目印は一度として欠かさない。　森の中は、何時も何時も靄が掛かり。生える木々が皆曲がっている。　靄が影響して、木の曲がり具合と云った特徴が掴み辛いんだ。　狩人のヨーゼフも、私も、他の薬師や町人も、入る森の奥は決めた場所までしか踏み込まないし。　皆、目印は必要としている」

「なるほど、ありがとうございました。　参考に成ります」

薬師の男性は、ウィリアムに。

「アンタ等も森に行きなさるなら、目印は持った方がいい。　それと、寺院は行き止まりの絶壁の様な場所に在った。　森の、西方向へ真っ直ぐの場所だと思う」

と、付け加えてくれた。

ウィリアムは、再度礼を述べて。

「お店の薬、いい鮮度の物が多いですね。　森に入る前に、また寄らせて貰います。　お客として」

と、言葉を残して店を立ち去った。

second episode2 ワダルの町で（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編は、長々と行きますが。　よろしく、お付き合い下さい＾＾

エピソード2と、3の間か。　2章3章の後に、またポリア編の特別編を掲載すると思いますが。　まだ、未定です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　交差点上の冒険者達

3、新旧の歴史に埋もれた男と男・・・・。

ウィリアム達は、狩人のヨーゼフにも会った。　だが、云うのは、薬師の人と同じ事だった。　やはり一致するのは、真西に向かった場所で見掛けた事。　そして、昔から神隠しの事件などは靄の掛かる森の奥でだと云う。

夕方、ウィリアム達は食事をする為にステーキハウスの主人と飲食店街に戻った。　途中で、ステーキハウスの主人が、弟のやってる店だとレストランを紹介してくれる。

店に入って、案内するボーイの男性に誘われるままに、奥の五人席に通された。　席に座ってテーブルを囲む。　スティールとウィリアムが、運ばれたコップを配る中。

アクトルは、ウィリアムに。

「ウィリアム、明日には森に行くか？」

ウィリアムは、洒落た水差しの様な注ぎ口が鶴の頭に似た紅茶入れを持ち。

「いえいえ、順序があります。　行くのはイイですが、下見ですね」

と、皆に紅茶を注ぐ。

ロイムは、紅茶を受けて。

「ありがとう、そうだよね。　まず、あの森が何なのか、それから調べないと。　有名なら、書物に載ってるかも」

クローリアも、同じ意見だ。

「ですね。　先に請けた方々が大怪我されている以上、何らかの危険があるのでしょうから。　出来うる限り情報は集めませんと。そう言えば・・・“守護者”がどうとか・・・仰っていましたね」

ウィリアムは、アクトルの前にグラスを置いて紅茶を注ぎながら。

「ですね～。　モンスターなのか。　はてまた、別の意味があるのか」

アクトルは、まどろっこしいと思い。

「モンスターなら、ねじ伏せるまでだ」

ウィリアムは、最後に自分のに注ぎながら。

「モンスターが勝てる相手なら・・・それでも。　勝てない相手なら、それなりに考えませんとね。　とにかく、闇雲に突っ込むのは、マヌケです。　明日は、二手に分かれましょう」

スティールは、クローリアを見てキザに。

「フッ、クローリアは、この俺が守ろうか？」

クローリアは、苦笑いで。

「あ・ありがとうございます」

ロイムは、横向きで。

「はぁ～、死ぬまで無理だわ～この人」

ウィリアムは、普通に笑って。

「では、ロイムとクローリアさんは、町の中心地に在る図書館に行って森と町の歴史なんか調べて下さい。　スティールさんとアクトルさんは、クローリアの護衛で一緒に」

スティールは、キザなポーズして。

「任せとけ。　フッ、世界の女性を愛する俺に為に有る仕事・・・いや、使命だね」

アクトルは、ウィリアムに。

「お前は？」

ウィリアムは、ボーイが遣ってきて。　メニューや手拭きを置いてゆくのを見てから。

「自分は、まず森に軽く入って見ますよ。　モンスターが居るわけ

ではありませんしね。　一人で十分です」

スティールは、直ぐに注文するウィリアムを真顔で見返して。

「ウィリアム・・・まさか」

と、クローリアに視線を動かす。

「？」

クローリアは、スティールを見返してから、ウィリアムも見る。

ウィリアムは、首を傾げ。

「いえ、用心ですよ」

と、笑った。

アクトルは、ウィリアムを見るだけだった。

（コイツ・・・何か企んでるか・・・。　覚（さと）ってるな・・）

アクトルは、そんな感じがした。

さて、料理を頼んでから雑談していると・・・。　脇のテーブルから話し声がする。

「おい、聞いたか？　スカイスクレイバーの面々が、大怪我したってよ」

「ああ、知ってるよ。　何でも、魔の山に行ってだろ？　ホーチト側か、スタムスト側か知らないが」

「そう、確か北のスタムスト側から入ったらしいな。　でも、去年だか、一昨年だか。　別の冒険者達も入ったって言ってたよな？　合同チームでさ。　あぁ～・・・ホラっ、リーダーの名前何だっけ？　美人で・・・剣の腕の達つ・・」

「“ポリア”だろう？」

「あっ、そうそう。　あの娘って、凄い美人じゃないか。　俺、間近で見たことあるけど、好きだね～あの娘」

「まぁ～な～。　俺は、どっちかと云うとマルヴェリータだっけか？　魔法遣いのさ。　あっちの方がイイな～。　胸が大きくて、凄い女らしい」

ウィリアムの席に、旅人風の男性達三人の話し声が流れてきた。

アクトルが、旅人を横目に。

「しかし、あのスカイスクレイバーでも大怪我だとよ。　最強の冒険者集団なのにな～」

ウィリアムは、紅茶を片手に。　運ばれて来たアツアツのオードブルの唐揚げを取りながら。

「あのホーチト王国と北のスタムスト自治国に跨る魔の森マニュエルや呪われた山には、強力なモンスターと厄介な病気が蔓延しているとか。　恐らく、入る前の予備知識・情報・用意によって格段の

差が生じる筈。　最強の冒険者でも、侮れば怪我くらいしますよ」

「なるほど」

スティールは、ウィリアムの話から考えたのか。

「アーク。　俺等は、ウィリアムの御蔭で上級の仕事を請けてる。もう、闇雲に突撃すればイイって訳に行かない処に踏み込んで来たな」

と、正論を言う。

アクトルも、生じ最強冒険者の怪我の後。

「だな。　俺も、流石にクリスフィの手前で死ぬ訳には行かない」

「お～お～。　妬ける発言だねぇ～。　アークの口からそのセリフが出るとは」

「るっせ～」

しかし、スティールの顔は微笑み。　言うアクトルの顔もまんざらでも無い。　この二人、やはり親友と云った処の友情がある。

ロイムは、唐揚げをスティールと奪い合いっこしながら。

「でも、チーム・“ホール・グラス”って、たった一・二年で爆発的に有名に成ったよね。　聞けば、最初は有名になる要素ゼロチームだったって云われてたみたいだよ。　リーダーのポリアさんと、魔術師のマルヴェリータさんの美貌だけが有名で」

スティールは、

「うぬぬぬ・・・是非、御近づきになりたや～」

と、ロイムの伸ばした唐揚げの半分を千切って奪った。

ーーー

た石の大きな建造物が。　真四角に近い形で、周りの建物より倍以上高く大いに目立つ。　近寄って日陰の壁を見れば、苔や植物の蔦が伸びた外壁もあり時間の経過を感じさせる。

ロイムは、見上げて。

「町中にあるんだ～。　町に有るのに、結構大きいし」

アクトルは、小難しい顔で。

「本読むなんて・・・何年ぶりだよ・・」

スティールは、辺りを見て。

「最悪、死ぬな・・。　俺とアークは・・・脳みそが爆発しないよ～に鉢巻するか」

こうして、四人は図書館に入った。　何階にも渡って、膨大な本が納められた館内だった。　基本、借りる事は出来ない。　入館料を払えば、閲覧と書き写しは自由なので、情報を持ってゆく訳だ。

ズラリと並んだ本棚が、受付の円形カウンターの先に広がってる。

アクトルは、頭を掻いて。

「将来の勉強するかぁ」

スティールは、顔を歪め。

「なんとか・・・女を口説く方法でも・・・調べるか」

と。

・・・・・・・・・。

その頃。　ウィリアムは、西の森に入り込んでいた。　町の西側に広がる森と云うより。　見た目はこじんまりとした林の入り口に見える。

「あれれ。　靄・・・無いな」

歩く林の様な木々の間隔が開く視界に、靄は無い。　ただ、何となく不気味と云うか、奇妙な気配を感じる森であるとは思った。

早い歩みで獣道の草を踏んで歩く。　空に太陽が斜めに見上げる頃まで歩いて行けば、林が森の様に見え始める。　木の間隔が詰まって来た訳だ。　町の中は風が吹いてカラっとしていたが。　森の中はジメっとしていて、少し汗が額に浮ぶウィリアム。

「ナルホド・・靄も出るかも」

と、口にして。　ウィリアムは、真後ろの林と森の境の様な方に振り向いた。

「いい加減、顔くらい見せたら如何です？　アハメイルからず～っとでしょ？」

すると、獣道の少し先の木々の木陰から人影が見えた。

「分かってた居た訳か？」

黒いズボンに、紺色の上着を着た男が三人だ。　口元を布で隠し、髪はそれぞれだが。　目に宿る光は、陰険な物である。

喋った男は、一番背の低く髪の長い男。

ウィリアムは、その男をリーダーと見た。

「殺し屋ですか。　しかも、姿を見せるなんて・・。　一体?」

歩み寄ってきた男達と、ウィリアムの幅は十歩と少し。

髪の長い男は、細面の顔をやや下向きに。

「お前のチームに、女が加わったようだな。　ホロー様への借金の形で、あの女を預かろうとな・・・。　嫌、お前達に借金を返せる能力は無いと見た。　久々の殺しがしたくて、疼いてるんだ」

ウィリアムは、ガタイの大きい男と、痩せた背丈の少し高い男を見て。

「ナルホド。　殺しがしたくて先走った訳ですか。　嫌な方々ですね〜」

大男は、髪の長い男に向かって。

「アニキ、もう殺していいか?　一昨日の冒険者だけじゃ足りねえ」

髪の長い男は、ウィリアムをニヤリと見て。

「だとさ。　見た所、お前が一番厄介な相手。　お前さえ殺せば、残ったバカ共や女は、楽そうだ」

ウィリアムは、少し顔を険しくして。

「“一昨日の冒険者”って・・・どうゆう事ですか？」

すると、髪の長いリーダー格と思える男が、ニヤリと笑い。

「ああ～、気付いたか？　お前等の事を知ってるかと思ってさ～、一昨日の夜中に捕まえて聞いてみたんだが・・・。　女以外の事は知らないって一点張りで。　遣りすぎたみたい、み～んな死んじまったぁ～。　ケッケッケッ」

ウィリアムの目が、スゥ～っと細まった。

「どうやら、手加減要らないみたいですね」

リーダー格の男は、目玉をギロギロと見開き。

「“手加減”だぁっ？！！　ソイツはこっちのセリフだぁっ。　お前を痛ぶって嬲り殺すのになっ！！！」

殺し屋三人と、ウィリアムが睨み合う。　お互いに、殺気が溢れ出した。

そこに、また別の声が突然に流れてくる。

「おい、俺も混ぜろや」

ウィリアムを含めて、殺し屋達もビクンとした。　全く気配の無い場所から声がするからだ。

ウィリアムは、声のした左に向き。

リーダー格の男が、

「誰だっ？！」

と、焦り声を飛ばす。

森の太い木の陰から、何者かがスルリと姿を現す。

「え・・・ほ・・包帯？」

現れた男は、スラリとした痩せ型の体格で、顔を包帯で覆面した男性だった。　ウィリアムより少し背が高く。　黒いコートに黒いズボンの姿。

包帯男は、ゆっくりとウィリアムの脇に出ると。

「若いの、助太刀させて貰う。　コイツ等には、少し貸しが有って捜してたんだ。　それから、今の話に出た冒険者達の二人は、命だけは取り留めた。　ま、もう冒険者としては絶望的だがな」

ウィリアムは、その気配の全く無い包帯顔の人物を見て。

「貴方は？」

包帯男は、殺し屋を見ていながら。

「俺の名前はケイと呼んでくれ。　コイツ等、俺の友人の命を奪ったのでな、アハメイルから追い駆けて来たんだ。　ようやく、追いつけた」

殺し屋の中で、痩せ型の背の高い男が。

「なんかウゼェ～のが出てきたな。　頭、面倒だから殺そう」

リーダー格の男が、ギリギリと睨む目でウィリアムと包帯男Kを見て。

「当たり前だぁ～。　俺等の姿を見られてるんだからなぁっ！！！」

すると、Kと名乗る男は、ウィリアムの前に出て。

「若いの。　お前さんの腕を蔑む気は無いが、ここは俺に譲ってくれ。　その代わり、何か出来る事を協力しよう」

ウィリアムは、包帯男Kを見て。

「敵討ち・・・ですか？」

Kは、ウィリアムを見ずに。

「ああ、半分以上は・・・。　残りは、なるべく今は手は汚すな。いずれ、お前の腕なら汚す時が来る」

と、言った瞬間にKと云う人物は消えた。

「あっ」

ウィリアムは、ハッとして思わず声を上げた。　Kの動きが全く見えなかった。

「んあっ？！！」

驚いたのは、殺し屋達も。　Kが、リーダー格の男の目の前に突然現れたからだ。

「遅い」

ユラリと立ったKの言葉が流れるの同時に、リーダー格の男はフラ～っと倒れる。

「アニキっ！！！」

と、声を出す大男の方が倒れたリーダー格の男を確認した瞬間。
リーダー格の男は、真っ二つに分かれていた。

（凄い・・・血が・・・吹き出てない）

ウィリアムは、今に成って血が流れ出す男の斬られ方の鮮やかさに動けなかった。

「テメエぇぇっ！！！！！」

背の高く細身の男と大男がキレて、Kに襲い掛かったのだが・・・。
　この二人に、包帯男は到底勝てる相手では無かった。　背の高く細身の男は、心臓を自分が掴む形で死を徐々に迎える地獄を味わい。

最も冒険者達を痛ぶった大男は、首・腕・足など。　あらゆる体の表に向く部分を反対方向に折られて曲げられてしまう。　生き地獄の末、喉も潰されて高い木の上に縛られた。

下りて来たKは、木の枝や葉っぱでもう見えない上の大男に向かって。

「俺の友人を半殺しにした上で、野良犬の餌にしやがって。　お前は、カラスの餌だ。　今お前に振り掛けたのは、死肉の匂いを出す花の花粉だ。　本来は薬だが、お前を食べる為にカラスを誘き寄せる目印さ。　存分に、地獄を味わえ」

声は、帰って来なかった。

ウィリアムは、その圧倒的な強さの包帯顔をした男を目の前にして、背筋に冷たい汗を流した。　何故なら・・・。

「スミマセン・・・聞いていいですか？」

Kは、ウィリアムを見て。

「ん？」

ウィリアムは、信じられないと云った顔で。

「貴方は、暗殺闘武を遣ってる・・・。　なのに、それは暗殺闘武の純粋な技では無い。　一体・・・何者ですか？」

包帯顔のKは、口元を緩やかに微笑ませてウィリアムを見る。

「フム。　どうやら暗殺者の一族か・・、その流れに近い者らしいな。　君も、いずれはその技を遣う以上は壁にぶつかるだろう。俺は、暗殺者に幾度と命を狙われて、暗殺技術を盗んだが・・。それだけでは物足りなくてな。　自分なりにアレンジしたのさ。それが、今の俺の遣う業・・・と説明すればいいか・・」

ウィリアムは、顔中に掻いた汗を拭い。　大きく深呼吸した。　今、この男と戦っても絶対に勝てない。

「とにかく、お礼を言います。　自分は、ウィリアムと云います。助かりました」

Kは、口元を笑わせて。

「礼には及ばないさ。　それに、君なら一人で全員を倒せた。　俺の勝手でしたことだ・・・。　それより、こんな森の中に何しに来た？　奴等を誘き寄せる為か？」

「あ・・・、半分は」

Kは、森の西側を見て。

「フム・・・森に施された大昔の魔法が解け掛かってる。　大魔法遣い“オルロック”の屋敷にでも行こうとしていたか？」

ウィリアムは、今度は本当に驚いて。

「えっ？！！　この森の謎を知ってるんですかっ？！！」

Kは、ウィリアムを見て。

「ああ・・。　文献には殆ど載ってない事だがな。　別の遺跡で、この森の主の事を知ってたから」

ウィリアムは、珍しく口を開けてKを見ていた・・。

ーーー

「相手は男だと言ったが。　信用は？」

「出来ると思います。　それに、今回の一件にあの方の知識は十分過ぎる物。　実際に、その森の奥まで行って確かめましたが。　見えたのは、屋敷でも祠でも無く。　今回は神殿でした。　俺には意味が分からなかったんですが、その方は何でか知っています。　とにかく、今回だけ仕事に同行してくれるらしいので。　お話を」

ロイムは、目を丸くして。

「図書館に載ってない話を知ってるなんて・・・、凄い学者さんだね」

クローリアも、ロイムと見合って。

「ですわ」

実は、どれだけ調べても、森に関する情報は推測と憶測からの昔話ばかりで、コレと云った事実が見えなかったのだ。

こうして、八人部屋の会食室に案内された一行は、包帯男Kと出会うのだった。

曇りガラスの壁に囲まれた部屋。　ランプの灯りがエキゾチックに灯る長い部屋である。

先に来て座っていたKを、ウィリアムが紹介した。

「この人が、ケイさん。　病気で顔が歪んでるから隠してるだそう

で。　基本は学者さんだけど、薬師・レンジャーとしての知識も深いです」

Kは、のんびり構えて。

「よろしく」

と、左手を上げた。

だが、スティールは慄く。

「アーク・・」

「ああ・・・」

二人、Kを見て驚く。　そう、気配が全く無いのだ。　目に見えているのに・・・。　気配が感じられない。

ウィリアムは、お互いの紹介も手短に。　森でKに会った後、森の奥で見た神殿の事を話した。

二人は、森の奥で断崖絶壁の丘に佇む古びた神殿を見た。　近づけば、中を見る事が出来ず。　黒い暗黒の世界が、開かれたままの入り口から見えた。

Kは、ウィリアムの仲間一同を見回し。

「俺達が見たのは神殿だが、前に見た人とは形が違う。　だが、それは当然。　現実に、あの建物は毎回見える姿が異なるニセモノだから。　本物がどんな姿か分からないが。　恐らく、普通の家だろ

う。　人の住める、な」

スティールは、理解が出来ず。

「なんだそれ？　ニセモノでって・・・本物の家は？」

「其処にある。　同じ場所にな」

スティールとアクトルは、意味が解らずに困った顔だ。

だが・・。　ロイムは、ワナワナと震えだして。

「ままままっ・・・まさか・・・マジック・・モニュメント？」

Kは、ロイムを指差して。

「ご名答、学が高いね」

スティールは、直ぐに。

「ロイム先生、なんだその・・なんたらモニュントって？」

ロイムは、スティールの胸倉をガッシリ掴んで、脅えた焦り声で。

「“マジックモニュメント”っ！！！　伝説の魔法建造物ですっ！！！！　建物の主以外、部外者には迷宮の底なし沼と化す謎だらけの建物・・・。　あわあわあわあわ・・・」

脅えるロイムは、スティールの首をガクンガクン振る。

「うおぇ～・・止めれセンセえええ・・」

アクトルは、意味が解らずにKに尋ね返す。

「それは、一体何ですか？」

Kは、最初から説明してくれた。

今から、ざっと五百年以上前。　この世界が、超魔法世界として、魔法の力が隆盛期の絶頂に達していた時代に、ある伝説の魔術師が居た。“隠者（ハーミット）：オルロック・コルロスワロージュ”。　現代に残る魔法建造物の父と謳われた大魔法遣いで、その名前が偉大過ぎ当時の周りの魔術師達に羨望と嫉妬を買う。　そして、極度に偉大視される事を嫌い、隠者と成り果て。　嫉妬と嫌悪感を世間から買って、記録を抹殺されて時代に埋もれた男。

この男性は、今や文献などには名前の無い人物。　世界の魔法建造物の中に、僅かな名前を残すだけと云う。

オルロックの天才技能は、このロイムの口からも出た“マジック・モニュメント”に有る。

普通、魔法建造物とは、巨大な建造物を地形を変えて見えなくしたり、強力な魔法で見えなくしたり。　移動床や、浮遊建造物などに及ぶ。

だが。　このオルロックは、唯一次元の壁を破り切った男なのだ。

館の主以外には、別の様々な建物に見えて。　しかも、侵入したら最後、見た目とは全く異なる広大で高層階層の迷宮に迷い込み。

脱出が出来なければ、そのままに虚無の世界で命尽き果てるまで

彷徨い続けると云う。

例えば、一軒の小さな家が有ったとして、此処に泥棒が入ったと仮定する。　見た目は、二間と少しの小さいボロ家と見えていたのに。　進入したら、いきなり何百もの階層を持ち、一階一階が巨大で広大な迷宮の様に変貌するのである。

スティールは、聞けば聞くほどに恐ろしくなり。

「そそっそれじゃ～・・・脱出は無理じゃないか」

アクトルも。

「そんな恐ろしい魔法の事なんて・・・聞いた事が無い」

Kは、首を左右に。　この話には、まだ続きが在ると。

「この魔法。　建物一つが在れば出来るらしい。　どんな綴りの古代文字で、どんな魔法なのかは解らないが。　白紙の設計図にとある魔法を施す。　そして、思うままに設計図を書き込んで行くんだとか。　外部からの見え方、内部の構造、罠の種類や、脱出方法をね。　書けば地図に文字が消えて、膨大な迷宮が誕生するとか・・・」

クローリアは、今の言葉に反応して。

「脱出・・方法？」

Kは、上質な香りの紅茶を楽しみつつ。

「そ。　マジック・モニュメントにも、魔法で在る以上は制約が必要なんだ。　魔法とは、全て制約で成り立つ。“こうしてはいけない”、“こうゆうことは出来ない”と制約の壁で囲って、魔法と云う超技術を現実に起こす」

ウィリアムは、直ぐに理解し。

「つまり、最も素早く魔法を形として成立させて唱える為に。　剣の魔法なら、剣の形以外は駄目とか、制約を設ける訳ですか」

Kは笑って、ウィリアムを見る。

「聡いね～、その通り。　例えるなら、魔想魔術は想像でその魔法を遣う時に、古代魔法文字を想像する事で唱えて行う事を短縮し、口に魔法の様相を念出して制約を成立させる訳。　自然魔法なら、思う中に起こす現象を含む魔法文字がある。　ま、どちらも集中力と精神力とイメージの力が強ければ強い程に、早く強力な魔法を唱えられる訳だが」

ロイムは、Kに身を乗り出して。

「じゃっ?!!　マジックモニュメントにも・・・構成する制約が有ると?!!」

Kは、短く頷く。

「そう。　まず一つ。　迷路を構成する魔法を維持する魔力球を必要とする。　つまりは、魔法を維持させるエサだな。　魔術師の全生命力を賭けて、水晶に魔力を閉じ込めるんだそうな。　だが、此処にも制約があり。　この魔力球と云う魔力の塊を作るためには、

その魔力と開放する何かを必要とする事と」

ウィリアムは、考えて。

「と・・・云う事は。　呪文なり、合言葉なり、何らかの方法、または手順を踏めば魔力が開放されて魔法が解けると云う事ですか？」

「そうだ」

スティールは、ウィリアムを驚愕の顔で見て。

「お前・・・この学者さんの言ってる意味が解んの？　なんでだよ・・」

横で、ロイムが驚愕の顔で。

「それはスティールさんが、バ・・痛いィ」

“バカ”と言おうとして頭を叩かれたのだ。

ウィリアムは、バ・・・いや。　スティールを脇に置いて。

「他にも制約が？」

Kは、ロイムの“ご愁傷様”とばかりにカップを傾けてから。

「ああ。　階層や形に制約は無いが。　基本的に、“出口と入り口を必要とする”、“出口と入り口は繋がっていないといけない”、“人に知られてはいけない秘密を設ける”などだ。　つまり、無茶苦茶に広大で、無限に階層が続くとしても、出口と入り口が有るし。

秘密の合言葉を知られたら、マジック・モニュメントは消滅する」

ロイムは、頭を抑えながら。

「じゃ、必ず出口が有るんですね」

と、安心した時。

「チョット待った・・・もしかして・・・」

ウィリアムが、Kを見る。

「ん？　気付いたか？」

Kは、ウィリアムを見ずに紅茶を飲む。

「ウィリアム・・・何？」

ロイムが、何か解らないから脅えて聞いて来る。

ウィリアムは、Kを見て顔を険しくし。

「まさか、・・・我々の前に来た冒険者達が断崖絶壁から投げ出された穴って・・・出口？」

Kは、口元を微笑ませる。

「ご名答。　制約では、出口は一つ以上と成っている。　一つでもいい。　魔力の少ない者なら、制約を一杯守らないと・・・つまりは、例えるなら出口を矢鱈に設けないと出来ないだろうけど。　オ

ルロックのレベルなら、出口と入り口は一つで十分だろうな。　ま、他にも、“構造を示す地図は、人の手の届く場所になければ成らない”、“地図の魔法を解かれては成らない”とある。　俺が前に迷い込んだ迷宮は、最上階に地図が在った。　地図の魔法を解除して脱出。　元の家は、平屋の粗末な家だった」

アクトルは、Kが過去に迷宮に踏み込んでいる事に驚いた。

「け・・経験者っ?!!　まさか・・・元は・・・有名冒険者・・・ですか?」

Kは、呆れ笑いで。

「うははははは、記憶無ぇ～し」

一同、あまりの軽い言い方に脱力する。

だがロイムは、直ぐにウィリアムを見て脅えた顔で。　非難がましい目を向けて。

「ウィリアムぅ～、そんなコアイ所に行くの?　・・・死んじゃうかもよ・・・。　情報だけでもいいんじゃないかな・・・入るの止めようよ・・・僕・・嫌だよぉ」

ウィリアムは、困った顔で苦笑する。

「行かないと・・・仕事に成らないよ」

スティールは、感情的にロイムを見て。

「おめえっ！！！　この一か八かの事態で泣き言を言うかっ？！！！」

アクトルは、スティールに呆れ顔で。

「お前は必死だわな。　借金を返せるか否かだもんな」

「うぐ・・それは・・・」

スティールが、唸る。

すると、Kは誰も見ずして。

「魔術師が行けないなら、この仕事は無理だ。　建造物の内部の記憶を“メモリアルジュエル”に納めないといけないし。　もしラストで地図を見つけても、魔術師が居ないと困る。　僧侶一人に全ての重荷を課す事になるぞ」

と、言ってからロイムを見ると。

「いいかい。　魔力が高くとも、知識が深くとも、勇気が無いならゴミと同じだ。　逆に言うなら、仲間をサポート出来る魔術師が居るか居ないかは大きい。　羽ばたくチームから零れ堕ちれば、のらくらした世界が待つ。　望む望まぬ事では無い。　挑むのみ、それがチャレンジャーだ。　君のリーダーの職業だ。　チームになれば、決意以外、一緒に居る間は一つだ」

スティールは、“決意”（自分の道）に行くまでは、Kの言う通り一つだと思う。

アクトルは、ロイムに対してまた諦めと云うか、呆れが先行したが・・。

スティールは、ロイムに頭を下げた。

「ロイム先生っ！！！　お前が頼みだっ！！！　どうか俺と一緒に行ってくれっ！！！」

（まあ・・・）

クローリアは、プライドは高そうなスティールが頭を下げるに驚く。

ロイムは、スティールを涙目で少し見た後。

「生きて還ったら奢りで御飯だからねッ！！！　一番高いワイン飲んでやるっ！！！！」

ウィリアムも、アクトルも、ロイムを見た。　まさか、行くと言うとは思っていない。　駄々を捏ねそうな様子だったのに・・・。

スティールは、顔を上げてロイムに抱きついた。

「うわあっ」

驚くロイムに、スティールはスリスリと頬ずりして。

「ロイムちゃ～ん、いい子だや～。　戻ったら、女の子居る店行こう～」

「うわああ～・・。　そんな所行ったら死んじゃうよおっ！！！！」

「何を言うかぁ～、天国じゃ～天国じゃ～」

其処に、突然Kが加わり。

「実は・・・な」

意味深な言い方に、全員が注目すると。

Kは、スティールとロイムを横目に見て。

「アハメイルのとある場所に、かなり可愛い子ばっかりが揃う飲み屋が・・・。しかも、料金は高いが・・・全員下着のみで、接待・・・お触り自由と云う伝説の店が・・」

ロイムは、顔を真っ赤にして。

「えええっ!!!!　下着ってええっ?!!!　・・・あわあわわわ・・・お触り・・・自由・・」

と、驚くのに。

スティールは、Kを鋭く見て。

「お主・・・出来るな。して、テイクアウトは?」

「懐次第で・・・何人でも・・・」

スティールは、ロイムを抱えながら燃えて立ち上がる。

「うおおおおっ！！！　天国の行き場所は決まったぁっ！！！！。
後は・・稼ぐのみっ。　待ってろ、下着のウサギちゃんっ！！！」

ロイムは、泣き出してジタバタし。

「ウィリアムっ！！！　助けてえええ」

ウィリアムは、完全に呆れ笑い顔で。

（近場に、スティールさんの分身が居やがったし・・・どうにでもなれさ。　・・・行けばいいよ・・森に、仕事にさ・・・あは・・あははは・・・）

アクトルは、横を向いて知らない振りの平静を装う。

（阿呆が増えただけじゃ～ないか？）

クローリアは、絶句して顔を赤らめて下を俯くだけだった。

しかし、ロイムが行くと言ったのはウィリアムもアクトルも驚いた。
スティールの頼む前の様子では、かなり説得しないといけないかと思われたのに・・。

（何時か、聞いてみようかな・・・）

ウィリアムは、そう思った。

ーーー

ーーーーーーーーーーーーー

さて、その日の夜更けだ。

Kとウィリアムは、宿の四階の廊下の行き止まりに設けられた共同リビングにて、ゆったりソファーに寝そべっている。　客が少ない上に、夜遅いから誰も来ない。　六つあるソファーの二つを占領していた。

「スティールさんの土下座じみた態度に驚きました」

ウィリアムは、笑って言う。

Kは、ぼんやりしながら。

「本気だったからな、通じたんだろう。　仲間意識も有るしな」

「ケイさん、実は・・・」

ウィリアムは、クローリアとの一件を語り。

「ケイさんの助けた冒険者達と、イザコザが在りまして・・・」

Kは、ウィリアムを脇目に見て。

「いいんじゃ～ないか？　チームに欠けてた癒し手が加わったんだしな。　ま、あの女性に然り、隠す事も少なくて済むから気楽なんじゃないか？　過去は、気にしてると一生憑いて回る悪霊みたいな

モンだ。　自分が悪ければ別だが、強引に影を背負うのも少々痛い」

ウィリアムは、声のトーンを落として。

「そうですね・・」

Kは、ウィリアムより先に起きて。

「ま、明日は昼前から雨だ。　準備が出来てるなら、午前に行くのがいい。　それから、マジックモニュメントの内部では、昼夜の感覚が無くなるから。　宿は長めに取っておいて損は無いぜ。　俺も、前に迷い込んだ時、やっとこさ出てきて都市に戻った時は、二日後だった」

ウィリアムは、先に寝るKに。

「了解しました。　明日、四日分払って置きます」

Kは、自分の部屋のある二階に戻りながら。

「ま～俺も行くが。　腹は括っておけよ～。　恐らく、しんどいぞ」

と、手だけヒラヒラさせて廊下を歩いて行く。

ウィリアムは、不思議な安心感の香るその背中に。

「ハイ、ありがとうございます」

と、礼を投げた。

所が・・・。　Kは、先に寝る予定で降りたのだが・・・。

「あら・・」

部屋の前に、クローリアが。

「夜分に・・・スミマセン・・。　目が覚めて、気に成る事が有りまして・・。　お話いいでしょうか？」

Kは、ランプの光の弱く落とされた暗い廊下で。

「構わないが・・・。　リビングに行くか？」

クローリアは、頷く。

Kは、灯りが無いので仕方なく、下のティーラウンジに。　ベルボーイしか居ないので、紅茶を頼んでクローリアとラウンジの一番窓側の二人席に着いた。

クローリアは、直ぐに真剣な顔で声のトーンを落として。

「私は、駆け出しですが、その・・ウィリアムさんのチームに居たいと思います。　私は、何が出来ますでしょうか？　正直、冒険もこれが始めてなので・・・。　何を考えていいか・・・解りません。　ケイさんは、冒険者として経験が豊富とお見受け致します。　何か、注意は有りますでしょうか？」

Kは、話を聞いて紅茶が来るのを待った。　すると、温度の高すぎる紅茶が出される。　Kは、出して行った後のベルボーイを見て、クローリアに。

「仕事は出来るが、この紅茶は無いな～。　せっかくの香りが熱気で飛んでる。　冷めると、香りの薄い紅茶の出来上がりだ」

クローリアは、カップを持てない紅茶に、

「ですかね・・」

Kは、角砂糖を入れながら。

「冒険ってのは、何時も行動と思考の連続なんだ。　立ち止まってる暇が有ればいいが・・・無い時も有る。　この紅茶と一緒さ。朝から昼間は、あの爺さんが入れてるから、美味しい紅茶が出てくると思う。　だが、夜中の時間に成れば、こうして予想外の紅茶が出てくる」

クローリアは、自分も砂糖を入れながら。

「は・・はあ・・・」

Kは、クローリアのもどかしそうな顔を見ながら。

「でも、紅茶は飲める。　旨いか、否かは別にすれば、頼めば出てくる。　チームとは、そうゆうものさ。　仕事は、何時も最良の終わり方など無理だし。　失敗も出す。　意見の食い違いとかもな・・・。　だが、それで不審を抱いたら、次の冒険も最良の結果は出せるかどうかとても難しい・・・。　正直、望めなくなる」

「・・・・」

クローリアは、Kを見た。

Kは、微笑み。

「まず、信じて全力を尽くす事だ。　君を助けた彼らを、君が助けたいのら。　先ず、チーム内で綻びを作らない事。　そして、先ずは自分の出来る事を最大限出来るように心掛ける。　全ては、一からスタートするんだ。　五や十を望むのは後。　自分を出来るように魅せる前に、出来る事を見せるんだ。　まず、この紅茶の様に、出てくるだけと一緒さ。　味や香りは後任せ。　経験を積めば、自ずと味わいも香りも出せるようになる」

クローリアは、紅茶に目を落として言葉の意味を噛み砕いた。

「・・・ハイ。　スミマセン・・・不安で・・・お荷物に成りはしないかと・・」

Kは、クローリアを見ていながら紅茶を啜った。

クローリアも、熱そうに口で取っ手を吹いてから紅茶を啜る。

「熱い・・・ですね」

Kは、ベルボーイの行った後を見て。

「マジ、入れ方知らね～や」

と、苦笑する。

クローリアは、微笑み。

「飲める事を感謝しますわ。　明日は、よろしくお願いいたします・・・アツイ・・・」

Kは、上を見て。

「上で寝てるリーダーさんは、世界に出るなぁ。　もっとチームは有名になる。　彼自身が知的でいい判断力をしてるからだ。　だが、それが仇にもなる」

クローリアは、カップを置いて。

「それは・・・どうしてですか？　ウィリアムさんに、何か落ち度が？」

Kは、首を振り。

「いやいや、逆さ。　落ち度が少ないから、望まれる、頼まれる、背負わされる。　自分で全てやっているようで、やらされてもいるんだ。　それに疲れた時、最大の試練が来るな。　だが、チャレンジャーは止まれない。　その時、君がまだチームに居たなら・・・支えてやるといい」

と、クローリアを見つめ返した。

クローリアは、不思議と考えも少なく・・・。　いや、素直に腑に落ちてか。

「はい・・私で出来るなら」

Kは、紅茶に気を戻した。　紅茶には・・・文句が有りそうだった。
　Kが説明するに、この紅茶はティーポットを使わず。　湧いている鍋か何かに茶葉をぶち込んだだけの物だと云う。　長い時間、火に掛けっ放しのままだったのだろうと。

クローリアは、そんなKの話を聴きながら、熱い香りの薄い紅茶を啜った。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　交差点上の冒険者達（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回は、予定通り合同チーム結成にあいなります＾＾

問題は・・・次のポリア編が固まらないので、遅らせる可能性が大きい事かな＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　深層のラビリンスへ

４、時代に消えた超魔術の姿・・此処に蘇る。

朝、ウィリアムは、全員起きたのを確かめると。　受付にて、全員から集めた金で部屋をキープした。　冒険者には、こうゆう事は良く有る事だが。　四日とは少し長い。

さて、曇り始めた空は鉛色。　風は生暖かく、なんとも不気味な陽気だ。　昨日までとは違い、居る今の世界すら別世界に迷い込んだ様な感覚を覚えるのは何故だろうか。

森へ向かう一行。

驚くべきは、林に入って直ぐに靄が掛かっていたことである。

ウィリアムは、湿気の強い森にて。

「昨日より、湿気が多いなぁ・・・。　靄が掛かってたのは、昨日は建物の近い周りだけだったのに」

スティールは、森を見回して五歩先の視界が悪くて、最早もう霧と呼んでいいと思う中。

「ま～雨降るし。　靄でも霧でも出るんじゃないの？」

そこに、Kが。

「嫌、この霧こそ普通の自然現象さ。　建物の周りの靄は、自然現象じゃない」

ウィリアムは、Kを見て。

「“普通”じゃ無いって・・・どうゆう意味です？」

Kは、霧に変わる辺りを見ながら。

「この森は、急激に標高が高い場所に向かう。　緩やかに上り坂が蛇行していながらに、波打つ形だから気付かないだけさ。　しかも、森の地形が異常な変化に変えられているんだ。　水分が蒸発せず。　こうして湿気が多いと直ぐに靄や霧になる。　だが、建物の周りの靄は、水気が全く無い」

アクトルは、理解出来た。

「魔法・・・か？」

「ん～。　魔法であるが、魔法とだけ云えない」

ロイムが、其処に。

「昨日、ウィリアムから聞きましたが。　この森自体にミラージュの魔法が幾重にも効力を増す形で掛けられていたと。　でも、その魔法が五百年以上も続く事自体が凄い魔力。　でも、何時かは薄れてゆく・・・。　もしかして、その時の為に、何か別の防衛の仕組みを用意してあるんじゃ～ないですか？」

ウィリアムは、パッとロイムを見て。

「それだっ。　靄は、隠すためのもう一つの魔法だ」

納得する一同。

Kは口元を笑わせて、パチンと指を鳴らす。

「結成直ぐのチームとしては、その判断力は上出来。　でも、もう少し事態はヤバイね」

これには、全員が包帯男を見る。

クローリアが。

「ケイさん、まさか・・・何かあるのですか？」

「ま、経験が一番だが。　あの建物の靄はミスト状の魔力。　もし建物に入ろうとすると、部外者を排除する用心棒が登場する仕掛けですな」

「“用心棒”？」

クローリアは、復唱してハッと気付き。　ロイムと見合って。

「“守護者”っ？！！！」

と、二人で言い合う。

ウィリアムは、難しい顔で。

「昔の冒険者話に出てくる“ガーディアン”か・・・。　魔法で生み出されるモンスターの姿をした、魔法人工生物（ゴーレム）・・・」

スティールは、その名前に困った顔。

「おいおい、ゴーレムって石だの炎だの普通の武器が効かないモンスターだろ？　まして靄ってさぁ・・・どう戦うよ？」

アクトルは、背中の戦斧を触り。

「俺の武器で倒せればいいが・・・」

そこに、Kが。

「恐らく、ガーディアンは建物に侵入しようとした瞬間に姿を現し、進入者と共に建物入って、進入者を殺そうとするだろう。　一度踏み込んで変わりだした建物内では、入り口は消滅する。　倒さないと、先にも進めないだろうし、中は相手の庭だ。　ま、俺が何とかしよう」

アクトルは、強く出たKに。

「学者さんなのに、大丈夫なのか？」

Kは、頷きながら。

「ま、なんとか。　但し、問題がある」

と、左の人差し指を立てた。

スティールは、ゴクッと唾を飲んで。

「な・・何？」

Kは、ウィリアムを見て。

「経験上、ゴーレムって奴は庭（テリトリー）に入ると異常に強くなる。　しかも、厄介な魔法とかも遣う。　だから、もしゴーレムを簡単に排除出来ないなら、俺がゴーレムを惹き付けるから。　全員は、建物に入れ。　モタモタしてると、変化が始まるぞ。　マジック・モニュメントは、他者の進入の頻度が重なれば中身が激変して切り抜けるのに大変になるそうだ。　前に一度冒険者達が侵入している以上、難易度は上がっているはず」

ウィリアムは、首を傾げて。

「でも・・、前に侵入した冒険者達の話にはガーディアンの事は無かったような・・・」

Kは、鋭く目を細めて。

「甘い、ガーディアンの能力はモンスターだけじゃないさ」

ロイムは、怪訝に。

「どうゆう事・・・なんですか？」

Kは、ロイムを見ると。

「魔想魔術の姿が、攻撃だけでは無いのと一緒さ。　靄を迷宮の中で発生させられたら、小さなヒントは見落とす可能性が出るし。目の錯覚を利用した迷路なら、黒い入り口を行き止まりと勘違いするだろう。　相手は、歴代の魔術師の中でも幻惑魔術の天才だぞ。　生じモンスターの方が楽さ」

ウィリアムは、Kが出来うる予想をしていると思う。

「ケイさん、もし・・・。　我々が別れ別れになって、ケイさん無しでも切り抜けられると思えますか？」

するとKは、呆れた笑いを口元に。

「チャレンジャーの口にする言葉じゃ無いな。　それに、チームに知識が無い訳じゃない。　俺が居るか居ないかでは無く。　皆が、如何に協力するかだ。　俺は、手助けであって、仕事を請けた者じゃない」

と、言ってから。　付け加えるように。

「ヒントを今から出すなら、“記憶を研ぎ澄ませ”・“相手は男だ”・“あくまでも迷宮などはまやかし、理は存在する”。　この三つは忘れるな」

スティールは、漠然として尚且つ今までの復唱にも思える様で。

「意味が解らねぇ～よ」

と、顔を歪ませる。

「考えろ。　今考えても仕方無いが・・・いずれ、必要に成るだろう」

Kは、誰も見ずにそう言った。

さて、話している内に、靄に変わり。　獣道が開けて、小さな花が咲く草原に変わった。

ウィリアムは、

「この先です。　もう、目の前ですよ」

と、皆に。

草原を行くと、断崖絶壁の先が無い丘の上に。　黒い不気味な屋敷が現れていた。

Kは、靄の中の視界が極めて悪い中で、屋敷だけがハッキリ解る事に。

「凄い魔力だな・・。　こんな魔力、人で有り得るのかいな」

ロイムは、震えながら。

「で・ででも・・嫌な魔力じゃ・・ないですね・・・」

クローリアは、Kを見て。

「この魔力が・・・魔法生物なのですか?」

Kは、頷くのみ。

目の前まで見える距離まで歩いて行けば、黒い石壁の館は立派な様相を見せていた。　石階段を備えた玄関は、重厚な趣の二枚の開き扉で閉じられる。　窓は、全てカーテンが掛かっていた。

「どれどれ・・・ん？　何にも見えないなぁ」

スティールは、窓から覗くが黒い闇が支配していて全く内装が見えない。

ロイムは、ワナワナ震えて。

「ややや・・やっぱり・・・マジック・モニュメントだ・・。文献に・・・のの載ってるままだぁ・・」

スティールは、漠然として実感が湧かず。

「ふ～ん。　そう」

ウィリアムは、ロイムとスティールに。

「中に入りますよ」

と、玄関前から。

「おい～す」

「う・・うん」

二人、ウィリアムの下に。

Kは、靄を見ている。

ウィリアムは、石段を四段登って、玄関前に立った。

K以外全員が、ウィリアムに注目する。

「・・・」

ウィリアムは、ドアノブに手を掛け、ゆっくりと捻って扉を開けた。

「・・・凄い・・・何も・・・無い」

開かれた扉の中には、普段の家の様相は全く無い。　只只、真っ暗い世界が広がっている。　K以外の全員がウィリアムの後ろに居た。

「なぁ～んにも起こらんな」

と、アクトルが。

だが、皆の背後でKが。

「こっちはバッチリ起こってるぜ」

ウィリアムを含めた皆、パッとKの方に振り返ると。

「うわあああああっ！！！！！」

ロイムは、大声を上げて腰を抜かしそうに・・。

「これが・・・ゴーレムっ?!!!」

ウィリアムの声。

皆の見る視界の中、靄の中から悪魔の顔をした羊の顔に、燃え上がる炎の様な体の大男のモンスターが何体も現れ出す。

しかも。

スティールは、辺りの土の中よりモコモコと何かが隆起し出すのを見て。

「地面にも何か居るぞっ!!!」

Kは、スルリと一番長い短剣を抜いていた。

「さ、此処は俺が引き受けた。　全員、早く中に入れっ」

アクトルは、病み上がりと聞いたKに心配が走る。

「アンタ一人で戦えるのかっ?!!」

すると、Kの目つきがキリリと細まり。

「フッ、駆け出しが舐めるな。　それより、早く中の迷路の謎を解いて来い。　それとも、魔法生物の倒し方を知ってるのか?　こんな風にっ」

俄に、Kの体に白いオーラが湧き上がる。　全身を包む炎の様に・・

。

ウィリアムは、凄まじい覇気に驚いた。

「ア・・・アンリミテッド・・・オーラ・・・・凄い・・・で・伝説じゃなかったっ?!!」

スティールもアクトルも、ウィリアムを見て驚愕の顔。

「あれがかっ?!!!」

「戦う覇気がエネルギーになるって云う・・・闘志のエネルギー・・・」

二人、Kの技量が自分達の比では無いと悟る。

Kは、土から這い出た身の丈四メートルの化け物を見て。

「お前達が入るまで食い止めておくから、早く入って変化させろ。変化してしまえば、外からの干渉は出来なくなる」

と、剣を一閃。　凄まじいエネルギーの波動が爆発した。

「うわああっ」

「きゃあっ」

ロイムとクローリアが驚いた。

空気を揺るがすエネルギーの波動は、一瞬にしてゴーレムと呼ばれ

る人工モンスターを十体ばかり消し去った。
ウィリアムは、K以外が残ってもゴーレムを倒せないと判断し。
「解りましたっ！！！　行って来ますっ！」
と、声を上げてから、仲間を見て。
「さっ、早く中に入ってっ」
と、尻餅着いていたロイムの腕を掴む。
先に、クローリアが入り。　アクトルがロイムを抱えて中に。
スティールは、Kに。
「出来れば生きてオネ～チャンとこに呑みに行こうやっ！！！！」
と、建物の中に。
Kは、瞬く間に靄のモンスターも数体消滅させておいて。
「奢れよ」
と、口元を笑わせる。
ウィリアムは、険しい顔で眩いオーラに包まれるKを見て。
「ご無事でっ」

Kも。

「帰って来い。　館の魔法を解いたらまたサポートしてやる」

と、脇目にウィリアムを見て笑った。

ウィリアムは、Kを残して飛び込み。　ドアを閉めた。

真っ暗に成った中に、全員が入った。

アクトルは、見えない辺りを見回しながら。

「はぁ・・・なんて凄い冒険者だよ・・・。　何でピンで流れなんかやってるんだ？」

スティールは、消えたドアに向かって。

「剣の動きが見えなかった・・・。　上には上が居るが・・・、あン人は凄いな」

武者震いする身体を摩る。　全身に立った鳥肌を沈ませるのだった。

その時、クローリアが。

「皆さんっ、何か振動してきましたよ」

“ズズズズズズズズ・・・・・・・・”。

不気味な振動が、ウィリアム達を包む。

ウィリアムは、真っ暗な空間の中で。

「変化が・・・始まった?」

ロイムは、下の床にへばっているままに。

「床が・・・沈んでるっ。　地下に潜ってるんだぁ・・」

皆が、気を引き締めた。

ーーー

Kは、見えない動きでクルリと剣を振るう。　白い波動の衝撃波を生み出して、辺りに寄って来たゴーレム達を一気に半分以上消滅させる。　魔力も、一つのエネルギー。　その生体エネルギーを超えるエネルギーにぶつかると、弱いエネルギーは消滅するのだ。　本来普通ならば、そのぶつける力は魔法だが。　Kは、己の闘志をエネルギーに変えてぶつけている訳だった。

さて、Kはベールに包まれた敷地の中の外れに、何か石の様な物がポツンと置かれた物を見て。

「ん？　あれは・・・墓石か？」

また湧き上がるゴーレムも他所に、見える所に歩いて行った。

「・・・こ・・コイツは・・・」

ベール越しに見たのは、こじんまりとした墓石だった。

縦、三十センチくらい。　横、五十センチほどの長方形の古びた墓石は、小さな花に囲まれる。　その彫られた名前に、Kは。

「“クラウディア”・・・オルロック氏では無く？　何故だ？」

Kは、謎を知るべく。　ウィリアム達に今回は最後まで付き合う事を本気で決めた。

その頃・・・。　ウィリアム達は、変化の終わった館内に居た。

「凄い・・・な」

アクトルが辺りを見て驚く。

土色の壁が囲む、長方形の地下迷宮が出来上がっていた。　横幅だけでも十メートルはあろうか、天井までも、アクトルが武器を持って伸ばしても届くかどうか。　かなり、広い。

スティールは、壁の左右に等間隔でランプが灯るかの様に明るいのを見て。

「ほえ～。　視界も雰囲気あるな～。　灯り無いのに明るく見えるし・・・便利だ」

そこに、ロイムが。

「違うよぉぉぉ・・だから怖いんだよぉ～」

と、涙声。

「はあ？」

スティールが見る。　アクトルも、ロイムを見た。

ロイムは、前に伸びる回廊の先を見ながら。

「“見せれる”って事は、“見せなく”も出来るの・・。　こうして見えると思ってる間の影の部分に何かを隠したり。　色んな事が出来るの・・・」

スティールは、訝しげに伸びる唯一の先を見て。

「よ～く解らんが・・・注意しろって事ね」

ウィリアムは、仲間を見て。

「では、行きましょうか」

と、歩き出した。

ロイムは、懐の石を確かめる。　館に入ってから、メモリアルをし始めた。　Kとモンスターに驚いて、最初を忘れて居た訳だ。

さて、真っ直ぐ行くこと少し。　先に、行き止まりが見えた。

スティールは、呆れた声で。

「おいお～い、イキドマリンだぞ」

ウィリアムは、其処にポツンと何かが有るのを見て。

「何も無い訳では無いようですね」

行った先には、一回り広くなった行き止まりの広間で。　広間の真ん中には、ポツンと石の台座が有る。

ロイムは、自分の背丈の胸ほどの台座の上に填まった石版を見る。

「これ・・・取れって事だよね？」

ウィリアムは、頷く。

「だろうね」

と、石版に手を伸ばす。

スティールが、それを見ながら。

「手に取った瞬間・・・床が無くなったりして・・・」

ウィリアムの手が途中でピタリと止まり。　皆が、スティールを見る。

ウィリアムは、少し戸惑いの有る声で。

「怖い事云わないで下さいよ・・取れなくなる」

アクトルも、スティールを睨んで。

「じゃ～、お前取れ。　俺等、離れて見てる」

ロイムは、顔を蒼褪めて。

「口にしないでバカっ！！　言った事や思った事を起こせるトラップだってあるのにっ！！」

スティールは、その場に座って済まなそうに。

「しゅみましぇ～ん」

と、土下座。

ウィリアムは、呆れ笑いで石版を取った。
すると・・。
「あ・・・」
スティールが座ったままに声を上げる。
ウィリアムも。
「消え・・・ましたね」
そう、石の台座がスぅ～っと消えてゆくのだ。　そして・・・。
辺りが振動し始める。
「ん？　道が開けるのか？」
アクトルは、辺りを見回す。
ロイムは、震えてアクトルの後ろに寄った。
クローリアは、自然とウィリアムの間近に。
ウィリアムは、立ち上がるスティールを他所に石版を見る。
「ん～、文字が浮んで来てますね・・・」
“この石版は扉を開く鍵である。　この石版を失う事は、死を意味する”

「だそうです」

ウィリアムの周りに皆が集まり石版を見る。　確かに、インクを垂らした様な文字が浮んでいた。

クローリアが、アクトルの後ろを指差し。

「アクトルさん、後ろ・・・。　道が」

全員が、そっちに向いた。

ロイムは、今度はウィリアムの左にも道が出来てるのを見て。

「あっちにも、道が開けたんだ」

左右に開けた道にウィリアムは眼もくれず、石版に目を落とす。

「コレだけなら、石版は要りませんねぇ・・・他にも何か・・・」

と、裏側を見るとき。

「歩きながらでいいじゃんか～」

と、スティールが、ウィリアムの右手の通路に向かいだす。

アクトルは、心配でスティールに。

「急がなくてもいいだろう」

ウィリアムは、石版の裏にも文章が浮んでいるのを見て。

「こっちにも、文章が浮んでいますね・・。　ええ～っと・・」

“人の道は風の道、風に逆らう事は罷り成らぬ理　坂を上がる事は、道を汚すこと成り　これも、理　天への道は、一筋の鉄なり　理は、即ち法なり”

「ですか・・・」

その時だ。　スティールが右手より。

「こっちから風が吹いてきてるぜ。　出口あるんじゃ～ないか」

と・・・。

ウィリアムは、スティールの“風が・・・”に瞬間反応して。

「風に逆らう事・・・罷りなら無い？　あっ！」

ハッとしたウィリアムは、直ぐにスティールに向いて。

「スティールさーーーんっ！！！　直ぐに戻ってくださいっ！！！！」

二十メートル近く先に進んだスティールは、顔だけ後ろに向けて。

「んあ？　戻れって？」

と、言ったその時だ。

“ヒュ～ゥウゥウ・・・・”

いきなり風が強さを増してスティールに吹きつけ始めた。

「うおっ、なっ？！！」

驚くスティール。

強風は、ウィリアム達にも吹きつける。

「何だっ？！！　一体コイツはっ？！！！」

アクトルは、風に手を翳して顔を守りながら、先に進んでいるスティールを見る。

「道を間違ったんですっ！！！　皆さんっ、早く通路の見える場所から外れて下さいっ！！！」

ウィリアムが、クローリアを庇いながら皆に言った。

「凄い風です・・・どんどん強く成ってる気が・・・」

クローリアは、ローブが風で捲くれそうに成るのを必死で抑えながら言う。

ロイムは、泣き顔で。

「やっぱりアノ人バカだあああああっ！！！」

と、アクトルの体の背後を伝って風の吹く通路の見える場所から、来た道の方に外れた。　すると、全く風の影響を感じない。

「皆早くっ、こっちは風が全然来ないよっ！！」

ロイムは、ウィリアム達を見た。

一方、スティールは、もう身動き出来ない程に強く吹く風の中に居た。

「うおおおおおおっ、なんじゃこりゃあああああああっ！！！！！」

台風の強風でもこんなのは滅多に無いほどの突風レベル。　少しでも気を抜いたら、足元から持って行かれそうな強さなのだ。

ウィリアムは、クローリアを庇ってアクトルと共に風の範囲から抜けると。　直ぐに来た道とスティールの居る道との境の壁際に立ち。　急いで荷物からロープを出すと、自分を縛り始めた。

アクトルは、ウィリアムに。

「どうする気だ？」

ウィリアムは、ロープの端をアクトルに渡し。

「とにかくスティールさんを助けます。　この端をシッカリ持っていて下さい」

「お・・おう」

アクトルが端を持った瞬間。

スティールが風に耐え切れずに。

「ぬおおおぉぅ・・もう・・駄目だあああああっ！！！　おわあああああああ・・・・・」

体が仰け反り、足が取られて空中に飛ばされた。

その同時に、ウィリアムが風の吹く通路側に出た。

「あっ」

ロイムが驚いた瞬間、ウィリアムはパッと飛び上がりながら、吹っ飛ばされて来たスティールの体を受け止める。

一気にアクトルの持つロープが張り、ウィリアムとスティールは凧状態に成った。

「う〝・・うぐぬぬぬぬ・・・・・」

アクトルは、強力な風圧を受けて浮く二人の重さに怪力で踏みとどまった。　ロープをこれ以上に手繰る事が出来ない程の風の力であった・・。

スティールが居なくなったからなのか。　強風は、徐々に収まって行くのであった・・・。

ーーー

解るでしょ」

と、苦笑する。

「なるほど」

クローリアも、怒られるスティールを見て苦笑した。

ロープを仕舞ったウィリアムは、アクトルやロイムを見て。

「そろそろその辺にしましょう。　先に進みますよ」

アクトルは、スティールを下に見下ろして。

「お前と冒険してたらっ、命が幾つ在っても足りねぇよっ」

ロイムも。

「下着が足りないよっ！！！」

と、怒鳴った。　すこ～し、チビっていたらしい。

さて、台座の在った場所から、左の道に入れば。　背中に緩やかな追い風を感じる。

ウィリアムは、床や壁をみながら。

「上手く出来てますねぇ」

と、感嘆した。

ロイムは、脅えの覗ける顔付きで。

「想像の産物だからね。　でも、こんなに細部まで表現出来るのは、術者の集中力と魔力の高さが尋常じゃ無い証だよ」

アクトルは、少し先に分かれ道が見えるのを確認して。

「また、分かれ道だ」

スティールは、アクトルの後ろに回り。

「この階は、アークの前には出ません」

と、ショボクレた姿で言う。

「ふん！！」

アクトルと、ロイムは、鼻息荒くソッポを向いた。

さて、“Ｙの字”の交差地点。　前の左右の道からもそれぞれ風が吹き、来た後ろ側からも追い風が吹いて、風同士が当たり良く感じられない。

ウィリアムは、左右の道を見る。

クローリアが、困った顔で。

「風が良く解りませんね」

アクトルは、スティールを見て。

「コイツをどっちかの道に投げ込んで見るか。　向かい風が吹いたら別の道に駆け込むとか」

スティールは、アクトルを見上げて泣きそうな顔で。

「もう・・いいです・・・風は嫌です」

ウィリアムは、笑いながら。

「まあ～、そんな事しないでも解りますよ。　右手とか入れてもいいんですがね～・・・。　いきなり強風吹いたり、トラップとか発動してもこまりますしね」

と、腰のサイドポケットから紙を一枚取り出す。

ロイムが脇にやって来て。

「どうするの？」

ウィリアムは、短いダガーでそれを細かく切り裂きながら。

「紙吹雪作って、撒けば解るよ。　向かい風なら戻るし。　追い風なら行っちゃう」

アクトルは、感心して。

「あ、ナルホド・・・」

と、スティールを見て。

「コイツは、最終手段だな」

「アーク、マジ勘弁してぇ～」

スティールの事は横にして。　ウィリアムは、紙吹雪をロイムやクローリアにも渡し。

「ロイム右、俺は左。　クローリアさんは、どっちか無くなったら次で」

と、ロイムと二人で巻いた。

「あっ、行っちゃった・・・」

と、ロイム。

ウィリアムは、足元に戻って来た紙を見て。

「右だね」

と。　どうやら、人が侵入しない限りは、強風は吹かないようだった。

迷路を進んで行けば、十字路や変則な交差地点、六差路なども現れた。　交差する道数の多い場所では、同じ追い風の道でも一つ間違えばグルリと迂回して同じ場所に戻ったり。　網の目状に繋がる複雑な道にぶつかる。　ウィリアムは紙吹雪を態と残して、道標の代わりにした。　何せ、壁に文字を書いても消えてしまうので。　紙

を残すのが手っ取り早かった。

歩く感じは、建物と建物の間が広がる大都市の中を歩いているようで、狭い範囲をグルグル回る感じはしなかった。

どの位の時間を掛けたか・・・。

「あ。　あれ・・・なんだ？」

道の先が、ポツンと明るくなっていて。　そこに何か線が見える。

行ってみれば、そこには鉄の棒が上に向かって伸びていた。

ウィリアムは、それを見て。

「ナルホド・・・。　“天に向かう道は、鉄の”・・・、コレか」

ロイムは、見て。

「ええっ、僕は上れないよお・・」

アクトルも。

ウィリアムは、皆を見て。

「俺も、木みたいに足を掛ける場所が無いのはキツイな」

「自分が上に行きますよ。　上って安全を確かめたらロープを下ろしますから」

スティールは、身軽なので名誉挽回とばかりに。

「俺も行くで」

ウィリアムは頷くと、鉄の棒に飛びついて上り始めた。

スティールも、後に続く。

アクトルは、猿のように登って行く二人に。

「流石だな」

と、洩らした。

ウィリアムとスティールは、登って行くと。　真っ黒い暗黒の世界に入った。

「お～い、ウィリアム。　真っ暗だな」

スティールが言うと。

「ですね～。　でも、俺は、今・・・顔が抜けました」

「マジ？」

「ええ、上も下と雰囲気は変わらないですね。　ただ・・・坂道とか有るみたいですが」

スティールは、勢い良く登りだして。

「直ぐ行く」

と。

少し登れば・・・。

「おっ・・・」

いきなり視界が明るくなった。

「スティールさん、さ、早く」

ウィリアムの声。

上を見れば、ウィリアムが手を伸ばしていた。

「おう、悪い」

ウィリアムに手を貸してもらいながら。

「あんまり高い訳でも無いな。　三階に上がるくらい」

と、スティール。

スティールを引き上げるウィリアムは、

「よっと。　ですね・・・。　さ、皆を引き上げないと」

と、用意していた結び瘤の作られたロープを手繰る。　数十センチ毎に結び目があるので、縄の簡易的な梯子であった。　かなり長いロープである。

「ロープ行きますよぉ～、ロイムとクローリアさんが先に。　アクトルさんは、最後でお願いしますっ！！！」

すると、下から。

「解ったぁ～」

と、アクトルの声が。

ウィリアムは、辺りに縛る場所が無いので。　鉄の棒に縛ってスティールと支えた。

最初に上がって来たのはロイム。

「あふ・・・真っ暗になるからコワいね」

スティールは、意地悪く笑って。

「洩らすなよぉ～。　下に人が居るんだからなぁ～、え？　オイ、コラ」

ロイムは、スティールに非難がましい顔で。

「ウルサイっ！！」

と、ウィリアムに助けられて上に上がった。

「うわっ、坂とか空中回廊があるね。　面倒臭そう・・」

確認するロイムも、困った顔で新たな階を見る。

ウィリアムも。

「うん、少し用心して行きたいね」

その時、後から来たクローリアに手を伸ばすスティール。

「すみません」

と、上に上がったクローリアの手をスティールは持ったままに両手でスリスリ。

ウィリアムが。

「スティールさん、アクトルさんを上げましょう」

と、言うのに。

「クローリア、まだ登ってきた緊張が解けないみたいだな。少し、摩ってあげよう」

キザに言うスティール。

「あ・・・はあ・・・」

困り笑いのクローリア。

ウィリアムは、呆れた顔で。

「あの～・・・スティールさん」

スティールは、聞いていなのか。

「こんな場所に女の子一人は寂しいよな。　大丈夫、俺が居る」

と、クローリアを見つめる。

ロイムが、ノコノコとウィリアムの横に来て。　穴に向かっていきなり・・・。

「アクトルさーーーーーーーーんっ！！！　スティーールさんがぁ～～～～、クローリアさんが心配でアクトルさん処じゃないってーーーーーーーっ！！！」

ウィリアムは、横向いてニヤリと笑う。

スティールは、クローリアから離れてロイムに驚き振り向いて。

「わわああっ、バカっ！！！　おま・・」

と、云う時。　そのスティールの声を遮って、穴の下から。

「スティィィィィーーーーーーーールゥゥゥっ！！！！！！！　てめえええええっ！！！！　上がったらぶっ飛ばすからなあああああっ！！！！！！」

爆音を上げるようなアクトルの大声が噴出して来た。

スティールは、しどろもどろの大慌てで穴に向かって。

「アーックッ！！！　大丈夫だってっ！！！　絶対に縄は放さないっ！！！！　命に掛けるってええっ！！！」

ロイムは、シレ～っと穴から離れる。

スティールは、ロイムを睨みながら縄を持ってアクトルを引き上げ。

登って来たアクトルに怒られてまた土下座であった。

さて、ウィリアムは縄を仕舞いながら。

「では、この階の・・・・」

と、皆を見たとき、スティールが居ないので。

「あの・・・スティールさんは？」

と、不安モード全開で聞いた。

「あ？　今まで此処に・・・」

と、自分の前の床を見たアクトル。

其処に・・・。

「お～い、早く行こうぜっ。　風が吹いてねぇ～んだからちゃっちゃと行くぞ」

と、スティールの声がする。

ウィリアムは、異常な不安に駆られながらスティールの声を追った。

鉄の棒を登った場所は、踊り場の様に広い円形の間だが。　右と正面に上り坂。　左に回廊が伸びて、後ろには下り坂が。　正面の上り坂には階段があるが。　右と後ろには無い。　スティールは、右の上り坂にもう侵入していた。

ウィリアムは、石版の文章の下りに有った、“坂を汚しては～”を思い出し。

「スティールさんっ！！！！　お願いですから戻って下さいっ！！！！」

と、懇願めいた言い方で大声を上げたが・・・遅かった。

その時、スティールは、坂道の途中まで来て、ウィリアムに振り返る。

「んあ？　なんで？　風は吹いて・・」

と、言うその時。“ドンっ！！！！！”と、凄く重い物が落ちた音が坂の上からした。

「“ドン”って、はぁ？」

スティールが坂の上を見た瞬間、アクトルの倍以上の高さ、幅の丸い大岩が転がりだしていた。

「あああ・・・あああああっ！！！！　岩だあああああーーーーーっ！！！！！」

それは、ウィリアム達も確認出来る。

アクトルが、左の通路に向きを変えながら。

「お前はどうしてそうバカなんだあああああああああああああッ！！！！！　逃げろおおおおおおおっ！！！！！！！」

と、叫ぶ。

「きゃあああッ！！！！」

と、クローリアが走り出し。

「アノ人なんか死んじゃえええええええええっ！！！！！！　うわあああああああ～んっ！！！！！！！」

と、ロイムが走り出す。

ウィリアムも、流石に泣きそうな顔で。

「どうしてそんなにバカ出来るんですかっ！！！！！！」

と、走り出す。

スティールは、鼻水を流しそうな顔のままに猛ダッシュで坂を駆け下りながら。

「ウィリアムっ！！！！！！　助けてくれえええええっ！！！！！！」

と。

ウィリアムからするなら、自分でなんとかして欲しい処だが。

（もうッ！！！　対処も出来ないクセにっ！！！）

と、思いながら後ろに顔だけ向いてアクトルの行くのを見ながら。

「スティールさあああんっ！！！！！　下から登って来た棒に捕まってっ！！！！！　穴にはっ、岩は入れないっ！！！！！」

スティールの背後に迫った岩の転がる音が、不気味におぞましい“ゴロゴロ”と云う音を響かせる。

「うおおおおおおっ！！！！！　その手があったあああああっ！！！！」

スティールは、穴に向かってピョンと飛び込んだ。

転がる大岩は、轟音を上げてスティールの頭上を転がるが、天井まで伸びた鉄の棒をスルリと抜ける。

ウィリアムは、それを見て。

（ぐっ、やっぱり産物同士は干渉し合わないんだっ）

と、舌打ちした。

一方、先頭で走るクローリアやロイムはゼーゼーと息を荒くしている。

（神よっ！！！）

内心で祈ったクローリア。

この時、ウィリアムは、大岩が転がる様を見て、直ぐに別の逃げる方法を思いついた。

「全員左右に寄ってええっ！！！！　岩の左右の隅は避難できる隙間があるっ！！！！！」

ロイムは、もう涙ボロボロの顔で。

「うわあああーーーーーーーーんっ！！！！！　そんなのコワくて出来ないよおおおおっ！！！！！」

ウィリアムは、もう本気で。

「死ぬなら俺が先だっ！！！！　皆が隠れないのに自分だけ隠れられないよおおっ！！！！！！」

と、怒声を上げた。

クローリアは、もう涙溢れる顔を真っ赤にしながら。

「神よっ！！！　皆を助けたまえっ！！」

と、右に寄って壁の隅っこの場所にうつ伏せに寝た。

「うわあああああああっっ、しっ・死んだらあぁぁっ、スティールさ

んなんか絶対に恨んでやるううううっ！！！！！」

と、ロイムは左の隅に寄って寝転んだ。

アクトルは、自分の背丈で心配だったが、

「スティールのバッキャロオオオオオオっ！！！！！！」

と、右に飛び退けて上向きに寝転んだ。

ウィリアムも、それを見届けてから間近に迫った大岩を避けるべく左端に・・・。

大岩は、球体で。　廊下は四角。　四隅に隙間が出来る訳だが。
岩自体が少し歪（イビツ）な球体なので、隙間が大きいのだった・・・。

アクトルは、武器も有るから仰向けに寝て、鼻や体スレスレで大岩をやり過ごす。

「ウヒイイイイっ！！！！」

アクトルの奇声も、矢鱈滅多に聞ける物でも無いだろう。

他の皆は、余裕を持って大岩をやり過ごした・・・。

大岩は、クローリアをやり過ごすとスゥ～っと消えてしまった。

ウィリアムは、そのまま寝転がりながら、消える大岩を見て。

「はあああああ・・・助かったあああああ～」

と、大安堵で脱力する。

クローリアも、うつ伏せになりながら岩が消えて助かり。

「うっ・・ううっ・・・神よお・・・・命を助けてくれまして・・・感謝しますぅ・・・ううっ・・」

と、泣き出した。

その時だ。

「うおおおおっ、み～んな助かったかよお～っ！！！」

と、スティールの声が。

アクトルが、もう人の顔では無い鬼の顔で立ち上がり。　ロイムも杖を握り締めて、涙と鼻水で汚れた顔を怒らせてスクッと立ち上がった。

「うわあああああああああ！！！！！！」

「うおおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

ロイムとアクトルの怒りの声が、廊下に木霊した・・・・。

ーーー

ーーーーーーーーーーーー

「っあああああああああっ！！！！！！！　殴り足りねぇぇぇっ！！！！！！！！」

雄たけびを上げたアクトル。

「生きて還って来るなあああああっ！！！！！」

泣き顔を怒らせたロイムが杖を握り締めて言う。

「・・・・・・・」

頭に無数のタンコブを生み出し、大の字でうつ伏せになったまま・・・・起き上がらないスティール・・・。

ウィリアムは、斜め足元に死体みたいなスティールを見下ろしながら。

（当然の報いだけど・・・生きてるかな？）

クローリアは、スティールの背中に。

「回復・・・必要・・・です？」

と、声を掛ければ。

「・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・あい・・・・・・・・・」

もう、まともに口も利けないスティールであった。

少しして、スティールは頭を抑えて復活したが。　顔は殴られた痣だらけだった。

「い・・・痛い・・・ッス」

スティールが言う。

だが、ロイムは涙ながらに。

「煩いっ！！！！！　我慢してたの洩らしちゃったよおおおおっ！！！」

ズボンの前に、染みを作っているロイム。

スティールは、笑う元気も出ずに。

「ごめんね・・・」

アクトルは、スティールを見て。

「もう先走るなよっ！！！！！　次は、一人で死ねっ！！！」

「はう・・・アーク・・・皆・・・ゴメン・・・」

ウィリアム、人をこうまで怒らせるスティールに神懸り的なトラブル運が有るような気がしている。　短時間に、何度土下座するかの

記録保持者に成れそうな気がする中で。

「石版に、“坂を汚すのは～”と有りますので、坂道は避けましょう・・・。　遅いですが・・・」

スティールが、一人で。

「ふい・・・了解」

と、頷くだけだった。

さて、この階層は風が無い代わりに、坂がある。　そして、階段の有るものが基本的にトラップが無い通路なのだが・・・。

一度階段を降りて元の場所に戻ると、別の坂道が階段に変わっていたり。　時間で点滅する様に階段と坂が交互に出来たりする迷宮だった。

降っている途中で階段が消えて、岩が転がってきたり。　岩を避けて逃げ込んだ回廊が途中で行き止まりだったり。

難易度は、確実に増していた。

何とか一番上のフロアへ上る時には、皆がいい汗を掻いていた。

だが、また上に伸びる鉄の棒が有り。　ウィリアムとスティールが更に上の階層に行くと・・・。

「げっ・・・ウィリアム・・・風の音が・・・」

ウィリアムは、複雑に変化した新たなる階層にうんざり気味で。

「今度は、今までの応用ですねぇ・・・。　更に意地悪い感じがしますよ・・」

と、全員を引き上げた。

その予感は的中だ。

下り階段を降りて道なりに曲がった回廊が向かい風だったり。　階段を上がっている途中で、階段が消えた上に、戻れば向かい風。絶体絶命に近い修羅場を幾度も潜り抜ける必要があった。

一体どの位彷徨って、走って、登って、降ったか・・・。　この迷路の空間に、幾度皆の逃げ回る大声が上がったか・・・。

ウィリアムが、或る回廊を曲がって直ぐに行き止まりの右壁に窪みを見つけて。　隠し通路を発見出来なかったら・・・。　死ぬまで彷徨うハメになっていただろう。

ウィリアムやスティールですらヘトヘトに成るのだから、もうロイムなどは。

「ハァ・ハァ・ハァ・・・死ぬ・・・も・・もう・・・歩けない・・・」

登りの鉄の棒を見つけた処で、疲労困憊によって気絶しそうなロイム。

「ロイム、この上で休むよ。　ゆっくり寝ていいから、もう少し頑

張ってね」

ウィリアムは、そう言い残してスティールと鉄の棒を登った。

すると・・・。

「あ・・・変わった・・・」

ウィリアムが上に登れば。　其処は、青い色を基調とした部屋だった。　ソファーが三つあり。　大きなテーブルと、座り心地の良さそうな椅子。　床には、カーベットが敷かれている。　まあまあの広さが有る部屋だった。

「おっ・・おおおおおおっ!!!!!　ダンジョンは終わりかっ?!!!」

上がってきたスティールが、部屋の中を見て喜ぶ。

しかし、ウィリアムは辺りを見て。

「それはどうでしょうか。　先ず、部屋を見回して見るに、扉が在りません。　上に行く鉄の棒も在りませんし、石版の文字が消えました」

スティールは、難しい顔で。

「じゃ〜・・・ど〜するんだ?」

ウィリアムは、疲労の滲む顔でロープを出しながら。

「とにかく、此処で一休みしましょう。　皆さん、もう限界でしょうから」

「お・・おう・・・」

スティールとウィリアムは、下ろしたロープを支えた。

もう、クローリアも登る力が無いので。　二人でロープ事引き上げて上に。

問題は・・・。

「うおおおおっ、ロイムっ！！！　気絶するなあああああっ！！！　お前お漏らししたまんまだろうがあああああっ！！！！！」

ロイムを背負って、上に登るアクトルは地獄であった・・・。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　深層のラビリンスへ（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

只今、アクセス数が解らずに少し困惑してますが＾＾；　話は、ドンドン更新して行きます＾＾

いやいや、雨がよ～降りますな＾＾；　今朝まで、食中毒でお腹がブレイカーしてました＾＾；

皆様、お気を付けを～＾＾」～～

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　新たなる迷宮の奥へ

5、深まる迷宮

蒼い部屋の中で、ウィリアム一行は休んだ・・・。

ソファーには、ロイム、クローリア、スティールが休み。　ウィリアムとアクトルは床で寝ていた。　完全に、部屋の様相をした室内、何時しか登ってきた鉄の棒も消え。　密室に成っているのだ。

全員が疲労してしまった。　誰も休み始めたら直ぐには起きなかった。　特にロイムとクローリアはもう限界を超えていたのだろう。

安らかな寝息を立てて深い眠りに落ちている・・。

騒動の中心に居たスティールなどは、大鼾なのがすこ～しウィリアムとアクトルには引っかかるが・・・。

さて、皆が休んでいる頃だ。

外では小雨が降り頻る中、Ｋがまだ戦っていた。　嫌、全てのモンスターが現れ切るまで戦っていたのだ。

「・・・終わったか？」

真夜中、雨の中でＫは、ガーディアンを産む靄が消えるまで戦い続

けてしまった訳だが。　もう、雨に濡れる草花のみが当たりに見えていて。　ガーディアンモンスター・・・ゴーレムの姿は一体も無い。

「流石は、魔法学院長やってた歴代の大魔法遣い・・・ってか」

魔力が無くなるまでに、ゴーレムを産む数が比例して多いほど優れた魔法遣いであるが。　Kが倒した数は千単位である。　そんな大量の相手を出来る方も、出来る方だ。　魔法を掛けたオルロックも、戦ったKも尋常なレベルでは無いと云う事だろう。

さて。　Kは、家を囲む半透明のドーム型のエネルギーに近づいた。

「・・・結界・・・か」

顔の包帯も、髪の毛も、もうグッショリ濡れているK。　手にしている刃の長いダガーをゆっくりとそのエネルギーに向かって、横から垂直に密着させる。

一瞬だけ、Kの手が微かに押される様子が在ったが・・・。

「・・・・」

Kの覇気を纏ったダガーは、スルリと結界の中まで刺さった。　そのまま、Kは結界を静かに切り裂く。　両手で、切れた結界の裂け目を広げたK。　庭の中に身を入れた・・。

「ふう。　久しぶりの荒事だな。　しかし・・・。　ウィリアム達以外の気配がしてら～な。　誰だろうか・・・」

Kは、まず墓石に向かった。　不思議な事に、結界の中は雨が降っていなかった。　さて、墓石に刻まれた名前・・。

（クラウディア・・・・。　オルロック氏の奥さんかな？　いやぁ・・・彼が死ぬ前の最後の建造物で見た記憶にはそんな相手は居なかったような・・・。　弟子？）

Kは、この女性の名前が非常に気に成った。　何か、奇妙な因果がオルロック氏と在るのではないかと感じる。　オルロックと云う人物は、八十前後まで生きたが。　その容姿は極めて悪く、一見すると悪人に間違われそうな感じなのだ。　なのに、家に女性の墓・・・。

不思議だった。

雨の中、オルロック氏の家は静かに五百年以上を経て今尚も朽ち果てる事も無く佇んでいる。　結界が、時空を遮断しているのだろうか。　雨は結界の中には入らない。　木造の、白い染料で染めたテラスの柱、外壁、屋根・・・。　威厳を他に示すために豪勢な館を好む傾向の強い魔術師にしては、珍しく質素な家と云えるであるだろう。

さて、Kが家の中に入ろうとしている頃。

「ふぁ～・・・。　カラダ・・・痛い・・」

ロイムが起きた。　時間にすれば、そろそろ朝方に成る頃だ。

「おはよう、良く眠れた？」

ウィリアムが、テーブルを前にした椅子に腰掛けている。

「うん・・・」

目を擦ってノロノロと起きて来たロイムは、先ず皆が寝ている内にと下着を着替えた。

「ハウぅぅ〜。　コワ過ぎた・・・下の迷路」

涙目のロイム。

呆れ笑いで横を向いたウィリアム。

さて。　ロイムは着替えを終えて、ウィリアムの前に在る椅子に座った。

「よいしょ・・筋肉痛でボロボロ・・・お腹も減ったァ・・」

ウィリアムは、腰のサイドポケットから薬の三角の包み紙を出して。

「効くよ」

「あ、ありがとう。　食べたら飲む」

ロイムは、そう言って背負い袋から色々出し始めた。　中でも目を引くのが、赤い水筒。　水袋でも、普通の竹や木の水筒じゃない。

「ロイム、赤い水筒だなんて珍しいね」

すると、ロイムは笑って。

「えへへ、これ“魔法筒”なんだ。　魔法が掛かってて、水を入れとくとお湯になるの」

ウィリアムは、目を丸くして。

「初めて見た・・・ロイム、随分と高価な物を持ってるじゃない。もしかして、お金持ちかい？」

ロイムは、固形のスープの素を木の御椀に置いて、お湯を水筒から注ぐ。　湯気が上がり、鶏がらスープのいい匂いが上がった。

「僕ン家は、凄い貧乏だよ。　兄妹多いし、家も古い襤褸家。　でも、お祖父ちゃんの弟さんが、チョット偉い人なんだ。　僕が魔法学院に入れたのも、その人の御蔭。　お金無い家を知ってるから、少し面倒見て貰ったの。　この魔法筒は、卒業の贈り物かな。　あと、十年も効力年数が無いんだって」

“効力年数”とは、魔法の効果が持続する年数の事だ。　特殊な物を抜いて、全ての魔法の製品は、効力年数がある。

ウィリアムは、ロイムの食事を見つめながら思い出す。

「ふ～ん。　そう言えば、カクトノーズって入学は無料だけど、生活は全て自分持ちだものね」

「うん。　入学から十年で卒業しなきゃいけないし。　生活は自己負担だからね。　僕、授業以外の晴れの日は、毎日国営の畑に仕事手伝いに行ってたよ。　働くと、タダで御飯が食べれるから」

「苦労してるね」

「親の方が苦労してるから・・・。　僕は、帰れないし・・・」

ウィリアムの目の中で、乾燥パンにチーズや干し肉を挟んで食べるロイムに淋しい影が見えた。

「何で帰れないの？」

「う～ん・・・兄妹多いし。　僕は、見ての通りドン臭いから・・・。　帰ってもロクな仕事に就けないよ。　せめて、食い扶持は減らさないと・・・。　だから、冒険者に成ったんだ」

ウィリアムは、笑って。

「大丈夫だよ。　その内、一年もすればお金稼いで帰れるって。ロイムは、ドンドン勇気が付いて来てる」

するとロイムは、大鼾を掻いている借金王を細目で見て。

「アレが居るのに？」

ウィリアムも、目を細めて。

「ネック・・・だな・・・・。　今のウチに、一思いにヤっちゃうか？」

ロイムは、ウィリアムを見て。

「今後のためかもね」

二人して、笑う。

ーーー

「では、皆さん。　次の迷宮を行きますか」

と、ウィリアムが。

スティールは、登ってきた鉄の棒も消えてこの今居る部屋のみしか見えないのだから。

「お前な、迷宮って・・・何処だ？」

ウィリアムは、床を指して。

「此処です」

「はあ？」

ウィリアムは、石版を片手に。

「また、石版が変化しました。　内容は、こうです」

“途切れる事無き理の部屋が群れる。　蒼き風の部屋の入り口は目に見えず。　魔力に因りて見え隠れ。　朧気、虚ろの知を借りて、先に進む道が開く。　五の部屋にて、台座に座り変わるのを石版は待つだろう”

「だそうです」

スティールの頭に、何か植物が生えそうな・・・。　ポカ～ンとして、固まるスティール。

クローリアが、ソファーから。

「つまり、この場の部屋の様な一室が一杯ある迷宮なんですのね？
そして、どうにかして、扉を捜さないといけない・・・」

アクトルが、ウィリアムに。

「そうなのか？」

ウィリアムは、頷く。

「そうです。　さて、この捜すヒント、“虚ろ・朧気”ですが。
多分、鏡の事ではないかと思います。　人の目で見えないので、代わる何かで映して視るのではないかと・・・」

ロイムは、驚きの顔で。

「ナルホド～。　そうか、それ当たりかも」

スティールは、前髪を掻き上げて。

「フッ、悪いね。　見る間でもない絶世の美男子の俺には、鏡など不用品だ。　持ってない」

全員が、シラけて黙る。

「・・・突っ込みも・・・・無し？」

スティールは、悲しくなった。

クローリア、取り繕う形で苦笑いしながら。

「あ・・・うふふ・・・私も、持ってきてませんよ」

ウィリアムは、呆れ笑い顔で。

「鏡の代わりは幾らでも在りますよ。　スティールさんや、アクトルさんは武器で見れば宜しいと思います。　自分は、一応鏡を持ってきています。　鏡でなくても、映る物であれば何でもいいと思いますが・・・」

武器を見る二人。

「オシっ、じゃ～やってみようぜ」

と、スティールが立った。

ロイムは、ウィリアムからダガーを借りて、クローリアはウィリアムから鏡を借りて、ウィリアムは部屋に在った大きい壁掛け鏡を使って。　全員で、探し始めた。

さて、少し捜していて・・・。

「在ったか～？」

と、スティールが声を上げる時。　アクトルが、

「おい、此処に・・・ドアノブが映ってるぞ」

と、皆の方に振り返った。

ウィリアムが、アクトルの横に来て。

「あ～らら。　ホントですね。　コレ・・・かな？」

と、アクトルの戦斧に映る蒼いドアノブを触る。

「感触ありますね。　では・・・」

ウィリアムは、寄って来た皆の前でドアノブを捻ると・・・。　壁と皿などを仕舞う戸棚をそのままに、扉の枠で内側に引けた。　まるで、切った様に・・・。

「うほほぉ～、すげ～なこりゃ」

感嘆するスティール。

アクトルは、開かれた扉の先を見て。

「同じ部屋が・・・またあるな。　つまり、こうしてドアを探せと？」

言いながらウィリアムを見る。

「ええ、多分」

「厄介なダンジョンだぜ・・・。　これはよお」

と、アクトルは、厳つい顔を歪めた。

さて、次の部屋では、ロイムが。　その次の部屋では、スティール

が扉を見つける。

しかし、その時に、スティールと同時にアクトルがドアノブを見つけていた。

「おいおい、ウィリアム教授。　ドアノブが二つあるんだけど～」

と、スティール。

ウィリアムは、真っ直ぐ、真っ直ぐと見つかるロイムと今回のアクトルのドアノブを踏まえて。

「もしかしたら・・・この階は縦横にチェス盤のように区画された構造をしているかもしれません。　とにかく、真っ直ぐ行けるまでいってみましょう。　ドアは開けっ放し出来ますから。　通ったドアは全開に、行ってないドアは、半開きにしましょう。　目印に、休む前に使ってた紙吹雪を置いてください」

全員、了解してドア探しに回った。

さて、真っ直ぐにドアを探して行くと、行き当たるまでに最初の部屋から九つの部屋を行く。

「縦、九ですね。　では、今度は横をいってみましょう」

ウィリアムの提案をままに行くと。　左の壁にドアノブは無く。どうやら今来ている部屋は、最も端の部屋だと推察が出来た。

「よし、横は七」

ウィリアムは、紙にメモする。

スティールは、ウィリアムに。

「なあ、これで何が解るんだ？」

「え？　ああ。　ホラ、石版に“五の部屋”と記述が在りましたでしょ？」

「うむ、あった」

「もし、“五の部屋”とは、この長方形に区画された何処か五列目と考えるなら。　縦と横が解れば、どちらかの五列目の列にの目的の部屋が・・・逆に考えれば。　縦が九で横が七ですから。　縦の四番目か、横の二番目の列の部屋に在ります」

スティールは、じ～っとウィリアムを見る。

ウィリアムは、見られて気持ち悪く。

「どうしました？」

スティールは、ウィリアムの肩にポンと手を置いて。

「サッパリ解らない」

ロイム・クローリア・アクトルがげんなりした。

アクトルは、義兄弟ながら。

「スティール、俺でも解るどぉ」

スティールは、首を傾げて。

「何が、何を、何で？」

ロイムは、壁に擦り寄って。

「バカだ・・・芸術レベルのバカだ・・・」

スティールは、ロイムを睨み見て。

「お前っ！！！　バカバカうるせえっ！！！」

と、怒るが。

アクトルは、

「いいや、お前はバカだよ。　今までの全ての行動が物語ってる」

スティールは、ガクリと肩を落とした。

ウィリアムは、呆れた笑い顔でスティールを見ながら。

「ま・・まあ・・・。　まずは、二つ部屋を戻って上向きで見つけたドアに行ってみましょうか・・・・ね。　とにかく、今はまだ推論ですから・・・あははは・・・」

部屋を二つ戻り。　横の右から五列目の部屋で見つけておいたドアに入り、部屋の中を捜しながら北向きにドアを捜すウィリアム達。

やはり、目的の部屋はその列の下から六番目の場所に在った。　横の列の五列目の並びに、確かに在った。

ドアノブを見つけて開くと、青い宝石の様な両開きの扉が在る。

「なんだ・・・明らかに違う感じが・・・」

ドアを見つけて開いたスティールは、美しい扉に驚いている。

ウィリアムは、扉に寄って来ながら。

「変化が有った方が解り易くていいですよ。　では、開けましょうか」

と、扉の前に来ると両手で扉を押し開いた。

皆が見る中で、扉は音も無く開かれる。

「うは～、凄いね」

と、スティールが声を出し。

「綺麗ですわ・・」

と、クローリアが見惚れた。

開かれた部屋の中を見て、誰もが感嘆した。　美しい宝石そのもので造られた部屋は、壁も天井もキラキラと青く光っていた。　クローリアも、スティールも目を奪われる。

ウィリアムは、部屋の中央にポツンと有る石版を填めてあった台座と同じものを見つけて。

「アレですね。　では、石版を填めて見る事にしましょうか」

と、中に入った。

スティールは、部屋の中に入ろうとしているロイムに。

「なあ・・・ロイム先生よ」

「ハイ？　どうしました？」

ロイムは、部屋を見回すスティールの顔を向ける。

「いや・・・この部屋自体も・・その・魔法の産物なんだよな？」

「ええ、そうですよ」

「そ・そっか・・・、この部屋の壁とか削って剥ぎ取れたら、借金も瞬殺なのにな～・・・ってな」

ロイムは、呆れて目を細め。

「そんな簡単な事なら苦労しませんよ。　ま、大昔の錬金術師には、石を宝石に変える人も居たらしいですけどね。　そんなの、異常でしょ」

と、ロイムは中に入って行く。

スティールは、自分が浅ましく思えて。

「そ・・そっすね・・・」

と、恥ずかしがって中に。

さて、ウィリアムは、自分の腰の辺りまで有る台座の窪みに、石版を填めて見た。

すると・・・、石版を眩いばかりの赤い光が包み。　燃え上がるように煌々と光りだす。

アクトルは、中腰で覗き込み。

「凝ってるなぁ～。　一々驚くが、なんか凄い」

見ている中で、石版に刻まれた青い文字は溶け込むように消えて。

代わりに、五行程の炎の線が浮ぶ。

「わっ、何か出たっ」

ロイムは、アクトルの背中に隠れる。

石版に浮ぶ炎の線は、小刻みに形を変えて文章に変わって行く。

ウィリアムは、光が収束して行く中で。

「え～っと」

“炎に彩られし部屋の迷宮は、三の場所に石版を望む”

「だそうで・・・どうやら、あと九つも迷宮が続くみたいですね～。長いなあ」

と、困り顔のウィリアム。

スティールは腕組みしながら石版を見た後に、

「何で、“後九つ”なんだよ？」

そこに、ロイムが。

「だって、この階が“風”で、次が“火”でしょ？　世界の月を現す十の属性と一緒じゃないですか。　色だって有ってるし」

アクトルが、ロイムを見て。

「“色”？　色って、どうゆう事だ？」

クローリアもコレに加わり。

「世界の一年を示す月日の月は、世界を構成する十のエネルギーで示されています。　その一つ一つは、春夏秋冬の季節に合わせて、司る色、季語、草花、などが定められています。　風は、青。　炎は、赤。　土は、土色やこげ茶色と云った具合です。　もう少し進んでみれば解ると思いますが。　多分、ウィリアムさんの仮定は正しいと思います」

スティールは、ウィリアムを見て。

「なあ、マジで後九つも同じ作業して行くの？」

ウィリアムは、石版を手に取り入り口に向きを変えながら。

「脱出するには、それしかないかと」

アクトルは。

「だけど、そんな階に行く階段在ったか？」

ウィリアムは首を左右に。

「捜すしか・・・あ・・」

と、歩き始めて直ぐに声を出して立ち止まる。

「ん？」

スティールは、ウィリアムの背後から、ウィリアムの視線を確かめて前を見ると・・・。

「うおおおっ！！！」

と、驚く。

皆、入り口に集まれば、扉の外が赤い部屋に変わっていた・・。

ーーー

スティールは、ウィリアムに。

「おいおいリーダー、お手てがフリーダムしてないかい？　探せ～」

と、非難がましい顔を向ける。

だが、ウィリアムはその体勢のままに動かない。　何やら、色々と考えているのは明らかだ。

ロイムが、心配して近くに寄って。

「ウィリアム？　どうしたの？」

「うん・・・。　もしかすると、今の部屋から横に行くのを探すより、もう一つ前に進んでから横に行ったほうがいいと思う」

「えっ？　あっ・あ・・・何で？」

ロイムは、訳が解らずに聞き返すと。

「多分、予想が正しければ・・・この階は菱形の形してる。　今居るのは、一番横が長かった部屋の列から降りてきて五列目。　もう一つ先が、六列目。　横の部屋数も、下がる毎に一つづつ減ってるから・・。　多分、一番長い列は、縦も横も九。　理論上から行けば、次が三列目だよ」

クローリアが、

「此処に、もう一つ先のドアノブ有りますけど・・・行きます？」

と、自分が見つけておいたドアノブを教える。

ウィリアムは、ドアに向かって。

「とにかく、行こう」

スティールとアクトルは、半信半疑の顔で見合って。

「だとさ」

「ですってっ」

スティールは、女の子みたいな言い方で探す手を止めた。

ウィリアムの予感は、的中していた。　もう一つ先に進んでから、横にドアを探せば。　一階の青い扉と同じ、色違いの赤い扉が・・。

「有ったし・・・マジで・・」

スティールは、ウィリアムを見て目を細め。

「お前ってもしかして・・・天才?」

ウィリアム、ほくそ笑んで。

「スティールさんより、すこ〜しだけ頭の回転が速いだけですよ。すこ〜しだけ」

アクトル、全然違う方向を向いて。

（その“すこ～し”の差は、永遠に縮まらない差だよ・・・）

ロイムは、扉を開く。

「ウィリアムっ、次の階に行こうよ」

と、中に入る。

スティールは、ロイムやクローリアが楽しそうなのを見て。

「ウィリアム教授、二人・・・楽しそうッスね」

ウィリアムは、やや声を年寄りめいた物にして。

「ええ～ええ～、多分は知的好奇心を満たされて、嬉しいんじゃ～ないですかねぇ～」

「そんなモンですかい？」

「スティールさんは、ベットの上での好奇心を満たされて嬉しいでしょ？　一緒ですがな」

と、ウィリアムは部屋の中に入って行く。

スティール、パッとキザに横を向いて。

「フッ、当たり前だ・・・。　男と女が居ればオーケーのお手軽な楽しみよ・・・。　こう・・・・触るときにさ・・・あ～だ・・・こ～だ・・・」

アクトルは、一人で語りだすスティールを見て悲しく成る。

（猿回しの猿じゃんかよ・・・お前・・・・・）

さて、石版を変化させると・・。

“魔の力に支配されし迷宮は、右の六の場所に石版を望む”

と、灰色の文字の記述が現れた。

ロイムは、難しい顔をそのままウィリアムに向けて。

「今度は、数字と方向が出てきたよお・・・」

ウィリアムは、台座から石版を取り上げて。

「だね。　多分、構造が複雑化するのかも」

そこに、スティールとアクトルが入ってきて。

「おいおい、ど～した？」

ロイムに説明されて、二人はドッと疲労感が湧いとようだった。

ウィリアムは、部屋の外に戻りながら。

「疲れたら言って下さい。　頃合いを見て、休憩しますよ」

と、言い置いた。

さて、次の灰色に染まった部屋の迷宮は、ドアのある方向がどちらか一つかか二つのみ。　今までのように、壁際でないなら、四方向にドアが有る訳では無くなった上に、ウィリアムが不自然な続き部屋を行き。　構造を予測した。

この階は、三つの三角が隣り合う迷宮で、形も構造も大きく変化が出てきた。

さて。

「おいおいおい、コイツは一体ど～なってるんだよ・・・」

かなりの時間を掛けて、次の扉を発見したスティールは、キラキラと金色に輝く扉に驚いた。

ウィリアムは、少し目元を右手で揉みながら。

「眩しいッスね～。　金色・・・“功”かな・・・」

グッタリ顔のロイムは、ギョットして。

「嫌だぁぁっ！！　次は、部屋中がキンピカだよ・・・。　目が・・・死ぬ」

武器や鏡などを手に、睨めっこしながらの作業は単調で、しかも目を凝らし続けるから疲労感はジワジワと蓄積されてゆく。　時間の感覚も麻痺し、一体どの位動いているのかも解らなく成って来る。

集中力にも、限界が来るのは当たり前だ。

しかも・・・。

“功の力に支配されし迷宮は、七の場所に石版を望む”

と・・。

スティールは、金色に光る文字お見て。

「おぉ～、数字だけになったぁっ」

と、喜ぶも。　他の全員はグッタリだ。

「ん？　アーク、ウィリアムも。　なんで疲れてるんだ？」

ウィリアムは、石版を取り。　アクトルに任せるとジェスチャー。

アクトルは、げんなり顔で。

「スティール・・・複雑化し始めた迷路だぞ・・。　数字が一つになったって事は、部屋数は青い階の倍か、それ以上かもしれないぞ」

スティールの元気に成った顔が、ピクリと止まった。

ーーー

「うはぁ～・・・キっツい・・・・・」

スティールは、目を何度揉んだだろうか。　いや、部屋の壁に隠れるドアノブを探す全員に云える。

“功”とは、人や自然の動植物に流れる生命力の現れを指す。　その宿された色は、黄金に輝く光。　遠めから見るならいいが、近場で目を凝らして見ると成れば大変だ。　眩しいし、見え難いし、疲労感は倍増である。

しかも。　部屋数は、最初の蒼の階の三倍以上で、誰もが疲れて言葉も出なくなっている。　何せ、もう複雑化は難易度を上げていた。　一々隣の部屋に行くのに、一部屋二部屋迂回しなければならないなど、ざらに成っているし。　行き止まりの部屋に入ってしまえば、また二部屋三部屋と戻って探さなければ成らない訳だ。

アクトルが、気を紛らわせようと。

「ウィリアム、パターンは解ったか？」

ボンヤリ顔のウィリアムは、面倒とも見える鈍い言い方で。

「そぉッスねぇ～・・・もう少し行けば、横が解ります・・。　それからッスねぇ～」

ロイムは、もう少しで横列が十五に成る。　だから。

「そう言えばさぁ～、まだ真四角・・・正方形無いよね～」

ウィリアムは、

「“功”は生なる力だから、文掛け（あやかけ）で正方形だと思う。だから、横を確かめたら、予想して行こうと思ってる・・・」

スティールは、二人の話にガバッと身を返して。

「お前達っ！！！　解ってるなら最短経路行けよっ！！！！！」

すると、ウィリアムとロイムは、ジトっとした目をスティールに向ける。

「う〝っ、な・・なんだよ・・」

スティールは、二人の目に怖くなる。

ロイムが、のろ～んとした言い方で。

「へぇ～、もし当てが外れたらぁ～？　予想がぁ～間違っていたらぁ～？」

「いっ・いや・・・その時は・・・その時で・・・さぁ」

ウィリアムは、スティールを細目で見て。

「“命掛ける”って言いましたよね？　借金作った人が、我々に口答えなんてします？」

スティールは、その場でまた土下座した。

「スミマセンっ！！　スミマセンっ！！　遣ります、口答え致しません」

アクトルは、呆れて。

（御馬鹿・・・・）

クローリアは、もう疲れて笑う気力が乏しいようで、顔が引き攣っていた。

さて、やはりこの階は正方形だったらしく。　ウィリアムが予想して行った列にドアが有った。　探した部屋数は、五十前後だが。これは全体の四分の一以下だから、早い切り抜けだっただろう。

スティールは、ウィリアムの予想が正しかっただけに。　ウィリアムをジト～っと見る。

（当たってたじゃんかーーーっ！！！！）

ウィリアムも、ジト～っとスティールを見返してやった。

（じゃ自分で予想してくださいよ）

念を飛ばし合う二人を、もはや誰も気にしなかった。

さて、台座の上。　次は・・・。

“闇の力に支配されし・・・・”

と、出て。

ロイムは、安堵した。

「良かったぁーっ！！！！　次は真っ暗だあ～っ！！！」

ウィリアムは、ため息一つ。

「ふぅ～、灯りが必要ですね。　ま、一休み致しましょうか。　暗い部屋なら、良く寝れそうですしね」

アクトルは、腕組みし。

「ほう・・・暗いのか。　見えないな」

ウィリアムは、変化した石版を取らず。　ランタンの小型の物を取り出した。

ロイムは、固形の油を取り出し。

「休むなら、燃料のスペア要るでしょ？」

「アリガト」

返すウィリアムに、クローリアやアクトルも持っていた燃料の塊を出した。　掌に収まる円形の白い固形燃料である。

ランタンに火が入り、扉の外に出ると・・・。

「うは・・真っ暗」

スティールの言葉が、そのまま。

部屋の様相は変わらず、真っ黒く黒光りする壁、天井、インテリア、どれも黒い宝石の黒曜石のようだ。　漆黒と云うよりは、黒光りが当て嵌まる。

ウィリアムは先ず、部屋の中を捜索してドアノブを探して、ドアを開放した。　そして、何が有っても直ぐに行動が出来るように、ソファーを寄せて休む。

さて・・。

固形燃料が一つ終わる頃。　ウィリアムは起きて、新たな燃料に交換した。

「ウィリアム、いいか」

夜の闇様な中で、アクトルの声がした。

「アクトルさん、起こしましたか？」

ウィリアムとアクトルは、壁側に凭れていたので近い。　横を向けば、薄暗い灯りで顔が見える。

「いや、寝た。　今、ふと目が覚めたらお前が燃料交換してるのが見えたんだ」

ウィリアムは、アクトルを見て。

「もう寝ないなら、いいですよ。　何か、相談でも？」

アクトルは、スティールが“ガーガー”寝ているソファーを見て。

「いやな、俺やスティールは、頭の方は大して使えない。　だが、解らない事をそのままにも出来ない」

アクトルは、暗い部屋を見回して。

「この迷路が、世界の月日の十の月と関係してるのは解った。　だが、どうしてそもそも十の月日に固定されたんだ？」

ウィリアムは、アクトルを笑みで見て。

「向上心ですね。　いい事です。　クリスフィは、そうゆうの大好きですよ」

アクトルは、“クリスフィ”の名前と“好きです”に顔を赤くして。

「バっ、馬鹿・・・からかうなよ・・・」

ウィリアムは、今度こそ破顔させて。

「冗談じゃ～ないですよ」

と、言ってから天井を見る。　ランタンの僅かな光に照らされながら。

「この世界には、今の文明期とは別に、三つの古い文明期が在ったと言われています。　一つは、三百年近く前に崩壊した超魔法時代。最も古い一つは、古の創世記（いにしえ）」

アクトルは、ウィリアムを見ながら食べ物を取り出し。

「かなり古い話なんだろ？」

「ええ・・・神と魔王の戦の事ですね。“始まりの歩み”と呼ばれるタイトルの分厚い本で、読むのに二日掛かりました」

「え？　二日・・・・頭が死ぬ・・・」

アクトルは、蒼褪める。　本を読むのが苦手であったからだ。

ウィリアムは、笑いながら。

「内容は、歴史の始めからなので、物語みたいで読みやすいです。　さて、その中に、月日の確定が書いてあるんですよ。　人は、最初は神から作られて生きる裸の生物でした。　しかし、やがて服を着て世界に散らばるようになり、繁栄し出します。　人が言語を話して、互いにいがみ合う集団に分かれ始めた頃・・。　魔界の魔王達が、神の作った世界を壊そうと、人のいがみ合いを加速させ。遂に戦をし始めた人々に協力する形で、魔界のモンスターを世界に放ちます。　そして、魔王達の侵略が始まるのです」

アクトルは、前を向いて目を丸くする。

「すげ～壮大なドラマだな」

「ええ、凄いですよ。　さて、モンスターと魔王達に襲われた人々は、まだ魔法も知らない頃でしたから戦う術も無く殺されて行きます。　最後には追い詰められて、今のクルスラーゲと呼ばれる国に

残る極一部と成りました。　そして、神に懇願するのです。　“助けて下さい”と・・。　懇願する人々の中には、傷つき死ぬ者、家族の為にと生き仏になるまで願う人々が・・・。　その時、人を哀れんだ神々二十神が、大地に降臨します。　そして、人に製鉄の術と、魔法の術を教えるのです」

「おお・・・戦えるのか？」

パンを齧りながらアクトルは聞き返す。

「はい。　人は、自身で生み出した武器と魔法で、今のフラストマド大王国の場所を奪還し、神々を見方に長い戦争時代に突入します。　その後、二百年の後に。　冒険者の始めと云われる十八士の男女が誕生します。　彼らは、神々の力を借りた武器を用い、各地で続くモンスターとの争いに手分けして転戦し、この世界の土地を少しづつ開放して行きます。　そして・・・。　死んだ士の穴埋めに新たな士が加わり・・・戦う歴史は三百年を超えた時、最強の剣士イクスマ、魔術師ロブエム、神官メローラ、弓勇士オバッサム、戦士イグザーナの登場で、魔王達は次々と封印され。　世界の一部に影響を残すのみとなり、人は自由を取り戻します」

アクトルは、手に力を込めてパンの残りを握りつぶす。

「おおお・・・何か凄い・・・」

「でしょ？　読んだ俺も十歳の頃でしたが、甚く感動した記憶が在りますよ」

「んで？」

「ええ、人は神、が降臨した日を年の初めとして。　全ての始まりを神から授かった超魔術の魔力に感謝をして。　最初の月が、“魔”から始まるんです」

アクトルは、ナルホドと思い。

「で、他は？」

「ええ、次に、人は魔物を追い払った後。　魔物の残した瘴気や毒に犯された土地が痩せて苦難の時代を送ります。　しかし、草も生えない大地のど真ん中に、この地に残った神々に従い植樹を続けた子供の植えた苗木が一本だけ生き始めたんです。　大地の汚染が、植え続けた木や草で浄化された訳です。　作物が出来る第一歩を期して、二月期は“土”。　人が増え、国が定まり始めて、生きる事を祝して三月期は、“功”。　大地震で、地面が隆起し、あちこちで雨が降るように成るのを祝して、四月期は、“水”。　そして、自然の回復で人に豊作を齎し始める切っ掛けの風が吹くのを祝して、五月期は“風”。　台風が起こり始め、海が大きく攪拌されて海に魚が豊富に栄えるのを祝して、六月期は台風や自然の流れを意味する“流”（りゅう）。　その頃になると、何処の国にも家が立ち並び、人が火の力で夜を謳歌出来る様に成り。　太陽の恵みで豊作を得られるようになったのを祝して、七月期は、“火”。　役目を終えて、神々が姿を天に還したのを祝して、八月期は“光”。　人々が学を高めて、自分達の心に潜む闇の胸の内を正そうとした事から、世界で意見を話し合う国放会話と云う文化文明を祝して、そして夜に育つ命を含めて九月期は“闇”。　最後、今、この空に浮ぶ星達によって暦を作れた事に感謝して、十月期は、“星”と成るわけです」

アクトルは、長い話にもめげず。

「なるほど・・・昔の先祖様ってのは苦労した訳だ。　その歴史の一つ一つの転換期に属性を擬えて、十の月に分けたって事か」

ウィリアムも食べ物を出しながら。

「ま、ざっくばらんに説明したので、説明の不備がありましょうが。　基本的に、こうして十の月が決まりました。　一月（ひとつき）の日にちは、五十五日。　年間で、五百五十日。　三年に一度、魔と星の月が一日多い年が来ますが。　一年は長いですよね」

アクトルは、スティールの寝るソファーを見ながら。

「でも、今までを振り返ると、あっと云う間だぜ。　多分、振り返るって一番コワい瞬間だ。　全て、過去で終わった後だからな～」

ウィリアムは、薄く笑うだけだった。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　新たなる迷宮の奥へ（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

いや～体調が整えられない上に、太って来たので断食してみました＾＾；

三日食べないって、キツイけどキチンとやると精神が研ぎ澄まされる想いがします＾＾

ウィリアム編は、エピソード３まで続け。　その後に、ポリア特別編を入れたいと思います。　内容は明かしませんが、ポリアの剣士としての成長に繋がる一話に成る様な気がします＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　更に広がる迷宮

6、深く・・。

それは、ウィリアムの・・・、見も蓋も無い一言が全てだった。

「う～ん、一々見なくてもいいかもなぁ。　ドアノブのある高さって、さっきからず～っと一定してるよね。　触る感触だけでも解るかも」

皆が、ピタリと止まった。

“今頃言うのかよっ！！！！！！！！！！！！！！”

そう、起きた全員が、張り切って隣の部屋に入ってドアノブを探そうとした瞬間に、ウィリアムが言うのだから。　誰もが、ウィリアムを細めた目で見ている。

だが。　問題はこんな事では済まされなくなった。

十部屋ほど行き。　どうやら三角形の階層だと理解できた頃。　有る部屋に入ると・・・。

「ウィリアム教授・・・・アレ・・・なんスかね・・・」

ウィリアムは、スティールを脇目に見て。

「さぁ～」

ロイムは、部屋の中に入って。　正面の壁に白く光る八角形の星が円の中に画かれた紋章を見て。

「ウィリアム、この紋章は移動陣の紋章だよ。　この紋章があるなら、どこかに移動するためのスイッチかレバーが有ると思う」

ウィリアムは、ロイムの後ろに来て。

「これが、移動陣の紋章・・・・」

アクトルは、ウィリアムに。

「もしかして、鏡で映さないと見えないんじゃ～ないか？」

ウィリアム、紋章を見ながら。

「恐らく」

その時、クローリアが。

「みなさん、此処に・・・死体が・・・」

全員が、クローリアの声に振り返る。

ウィリアムがランタンを持って近づけば・・。

「本当だ・・・しかも、複数人いますね」

部屋の片隅の壁際に、凭れている白骨化した人骨が一つ。　折り重なるように倒れている人骨が二つ。

ウィリアムは、随分古い劣化した装備品を見て。

「ん～、白骨化した遺体と・・・この朽ち始めた装備品を見るに死後三年は確実ですね。　腐敗した血肉が完全に腐りきっている」

スティールは、白骨死体など見たくないと思いながら。

「なんで解るんだよ」

ウィリアムは、遺体の装備品を確かめたりしながら。

「コンコース島に居た頃は、検死もやっていたんです。　殺された直後の遺体を見るのは三割。　大抵は死後数日から半年以内。　稀に、恐ろしく古い白骨死体も見ました」

アクトルは、感心と呆れの混じる顔で。

「お前の様に冷静に見れるなんざ～そんな居ないぜ」

ロイムは、口元をワナワナさせて。

「う〝っウィリアム・・・モンスターでも・・居るのかな？」

ウィリアムは、ロイムに向いて。

「いや、怪我した様子は余り無いね。　多分、何年も前に迷い込ん

だ冒険者だと思う。　迷宮を切り抜けられずに、力尽きて餓死したんじゃないかな。　荷物の中に、食べ物の包み紙みたいな物が殆ど無い。　水も食料も底付いたんだよ」

アクトルは、確実な用意をウィリアムに促されて来た。　未だ、あと一日は余裕をもって食べられる物がある。　幸い、暑くないので水も多く飲む必要は無いし。　まだまだ行ける。

（う～ん・・・。　俺とスティールだけだったら・・・。　ウィリアムが居なかったら、此処までスムーズじゃないよな）

アクトルは、ウィリアムに感謝したくなった。　この、遺体を前にしているだけに・・・。

明日の自分の姿とも思える白骨死体。　皆、少し気が引き締まった。

さて、黒い部屋の中を探し回ったが。　ロイムの言うスイッチやボタンは見当たらない。

「おいお～い、ロイムセンセーよぉ～。　ま～ったく無いでやんすよ～」

スティールが、高さも変えて壁を調べているも全く誰も見つからない。

「う～ん・・・おかしいなぁ～」

ロイムも、自分でも探していて見つからないのだから困った。

しかし、ウィリアムは。

「皆さん、探して無い場所一杯ですよ」

と。

全員ウィリアムを見れば。

「床、天井、自由に動かせるインテリア。　これも全て産物である以上は、探索の対象です」

スティールは、自分の足を退けて。

「ゆかぁ～？」

クローリアは、目をパチパチさせて。

「インテリア・・・もですか？」

ウィリアムは、全員に。

「俺とロイムは床。　クローリアさんは、インテリア。　アクトルさんとスティールさんは、天井。　アクトルさんが、スティールさんを肩車すれば十分届きますから」

「解った～」

ロイムは、死体の傍から離れた床を探し出す。　ロイムは、魔法の光も発動させた。　集中していれば、消えない。

クローリアも、テーブルや椅子に向かう。

スティールとアクトルは、近づいて面と向かい合い。

スティールが、

「ガキの頃以来だな・・・。　アークに肩車されるの」

と、言えば。　アクトルは、真顔で。

「大きくなったし、スティールも大人だ。　俺を肩車してみるか？」

スティールハギョっとして。

「出来るかぁーーーっ！！！」

と、怒った。

さて、ウィリアムの予感はまた的中。　天井に、拳大で出っ張った窪みを発見。　推してみると、部屋から死体が消えて、ドアの開かれていない紋章のある部屋に来た。

天井は、アクトルがスティールを肩車して丁度見えて探せるくらい。

あの死体になった者達は、ロイムより少し高い背丈でしかなかったから発見できなかったと想像できる。

（おいおい、もう部屋の全てを疑って行かないといけないのか・・・。　ウィリアムの奴、鼻っから視野に入ってたな・・・）

アクトルは、ウィリアムが壁を探して見つからなくても動じずに、直ぐに別に視野を向けた言動を言うのがリーダーらしいと感心すら

した。

しかも、ウィリアム。

「皆さん、気合入れてくださいね。　恐らく、この階層の構造は紋章と同じかもしてません。　三角の状に集まった数十の場所が幾つも有るって事です」

スティールは、ゲッソリして。

「あの灰色の階のレベルアップかい・・・面倒だ・・・」

ロイムとウィリアムは、黙ってスティールを細めたジト目で見る。

スティール、二人に気付いて。

「解ってるっ！！　全てはっ、俺の借金の為です・・・。　へへ～」

クローリアはクスクス笑い。　アクトルは、知らん顔で壁の方に向かった。

ーーー

に成らないレベルの部屋数である。　八×八＝六十四の三角の構造をしたフロアが、六つもあった。

「うはぁ～・・・、やっと・・・見つけたよぉぉ・・・」

ロイムが泣きそうである。

ウィリアムは、無駄口無しで扉を開いて中に入った。

皆も、あまり言葉無く疲れて中に入って座ったり、壁に凭れたり。

「フム。　石版の文句が大きく変わりましたね」

「え？」

全員が、ウィリアムの脇に集まって石版を見た。　黄土色と云うか、土色の茶色の光る文字が。

“土の理に支配されし迷宮は、同じ部屋が数え連なる決闘の迷宮。
大地の中の戯れ事の連鎖は、大いなる理成り。　理に逆らわぬよう進むが良い　理は、全て暴かれて受諾と成すだろう”

皆、ウィリアムを見る。

「さあ、次に行く前から解りませんよ。　それより、これからは更に複雑に成るでしょう。　疲れたら、遠慮はしないで下さい。　何時か、止まれなく成るかもしれませんから」

そして、ウィリアムが新たなる部屋に出た。　石版の文字と同じ色の部屋である。　色的に地味だが、今までが少し奇抜過ぎたから落

ち着きが出た。

先ず、入った部屋を見てスティールが。

「部屋自体はな～んも変わんね～のな」

と、云うと・・・。

ウィリアムが、真剣な顔で。

「いえ、凄い変化が有りますよ。　まずいな・・・・」

と、強張った顔で返す。

ロイムが。

「何処に変化が有るの？」

と、不安げに辺りを見回すと・・・。

ウィリアムは、天井の一角を指差し。

「ホラ、あそこに数字が画かれてる」

皆が見上げると、天井の右隅に“６”と数字が。

アクトルは、それを見て。

「あの数字・・・何がヤバイんだ？」

ウィリアムは、数字の右上に縦で棒線二本が小さく引かれているのを指差し。

「あのマーク。　古代のトランプカードの競技“運命の大小”の文字ですよ」

スティールは、カードゲームが好きなだけに。

「それって、古代の命懸けのカード競技だろ？　ルールは知らないけど」

「ええ。　四つのマークの付いた十三までの五十二枚のカードと、ジョーカー三枚を加えた五十五枚のカード。　それと、“大きい”・“小さい”・“同じ”の印の付いたサイコロを交互に振って、カードを出し合うゲームです」

クローリアは、天井の数字を見てからウィリアムを見て。

「随分と中途半端な数字から始まるんですのね」

「ええ。　六から始めるのがルールです。“小さい”の意味も含んでいる訳ですから」

ロイムは、蒼褪めた顔で。

「でででも・・あのゲームって・・・確か決闘の・・」

「そう。　昔の魔法文明期は、異常に魔法が発達していた・・・。　魔法遣い同士が喧嘩したら町一つ滅ぼしかねないから。　命を懸けた決闘の競技だった」

スティールは、物騒な話に。

「此処も・・・同じか？」

と、顔が引き締まる。

ウィリアムは、横目にスティールを見て。

「恐らく」

ウィリアムは、部屋を見回し。

「まず、ドアノブを見つけましょう。　見つけても、開かないで下さい」

全員、了承して探しに回った。

直ぐに、ウィリアムは右の壁に一つ見つける。

「皆さん、今回はドアノブどころか、ドアがそのままですね。　隠れているのは」

そこに、

「ウィリアム、此処にも有るぜ」

と、左側からスティール。

アクトルも、正面の壁で。

「こっちにも、しかもドアに数字の“５”が書かれてる」

ウィリアムも、自分の見つけたドアを見て。

「のようですね。　こっちは、“７”ですよ」

ロイムは、スティールに。

「スティールさんは、幾つなんです？」

すると・・・スティールは何時に無く真剣な顔で。

「こっちは、ジョーカーだ」

ロイムは、その響きだけでビビッて自分の前を押さえた。

ウィリアムは、天井の文字を指差して。

「とにかく、天井は“６”より以下を示しています。　アクトルさんの見つけたドアに入りましょう」

と、アクトルにドアを開けるジェスチャーを見せた・・・。

次の部屋では、“４”しか見つけれなかったが。　“３”の部屋まで行った時。　“２”と、“４”の扉を見つける。

スティールは、自分の見つけた別の“４”のドアに。

「何で、“４”が・・」

ウィリアムは、“2”を指差し。

「とにかく、こっちに。　少し、思い当たります」

と。

全員、ウィリアムの一言に怪訝な顔をした。

更に進んで、“1”の部屋にて、ドアの代わりに三つのシンボルを刻んだレバーを正面壁に見つけたウィリアムは。

「やっぱり・・・」

スティールは、三つのレバーと対峙するウィリアムを見て。

「なにが、“ヤッパリ”なのさ」

「このダンジョン。　トランプのカードと同じ数の部屋が連なっています。　それが所々で交錯してに入り組んでいます。　もう、このままでは“2”の部屋には戻れません。　天井のシンボルは“小さい”を示していますから。　“1”以下のカードは無く、以上に進む事を許されていない。　このままでは動けない。　だから、このレバーで捜査してシンボルを“小さい”から、“大きい”に変えて進まないといけません」

スティールは、小難しい顔に成って。

「ムズイな～・・・」

ウィリアムは、しかも。

「それだけではありませんよ」

アクトルは、直ぐに。

「なんか・・・リスクでも？」

「いえ。　リスクと云うより。　石版を変化させて出てきた部屋には、“７”が。　先ほどの“３”の部屋には別の“４”が。　幾重にも分かれているなら、手分けしないといけません」

ロイムは、不安な顔でスティールを指差して。

「え”ーっ！！！　このスーパー御馬鹿でヘンタイのスティールさんと組むなんてっ！！！」

スティール、スス・・・っとロイムの背後に近寄って。

「ほほう・・・。　ロイムセンセーは俺と組みたいらしいねぇ～」

ロイムは、アクトルの方に走って逃げた。

ウィリアムは、スティールに向いて。

「最悪、危ない橋は俺とスティールさんで行きます。　安全な方は、記憶の石を持ってるロイム他で」

アクトルは、先走りだと思い。

「おいおい、いきなり二手にか？」

ウィリアムは、ドアを開けっ放しに出来るのを見据えて。

「ええ、余計な疲労は少なくするに限ります。　ドアは全て開けっ放しにして。　元の部屋部屋に誰か戻して。　“３”の部屋に誰か待機して。　別の“４”の方に誰か行く・・。　人海戦術に成りますが。　こうゆう場合は、効果ありますよ」

クローリアは、いきなりの展開に少し戸惑いながら。

「あの・・・ウィリアムさん。　この、“同じ”ってどうゆう意味なんですか？」

ウィリアムは、ゆっくりと一つため息をすると。

「少し、休憩しましょうか。　皆さん、座ってください」

皆、床に座った。

ウィリアムは、“運命の大小”について語る。

この競技は、文字通りの運命の選択を迫られながらカードを切って行き。　手持ちのカードが無くなったら勝ちと云うゲームだ。　競技をする前に、お互いでお互いに呪いを掛け合い。　勝負に負けた瞬間に死ぬと魔法を掛ける。

次に、シャッフルしたカードを半分に折半して配る。　ジョーカーも含めた二十七：二十八で持ち。　交互に二人で配りあって始める。

まず、一枚多い方が“６”のカードを探す。　無ければ、サイコ

ロを振って、上下を決めて、上なら“７”を。　下なら“５”を場に出す。

こうして、先ず一枚が出るまでやり。　最初の一枚が出たら、競技は開始となる。　下で出したなら、“１”に辿り着くまで。　上なら、“１３”まで出し合う。　もし、出せない場合は。　場に出たカードを全て貰う。　若しくは、所持しているなら“ジョーカー”を代理のカードとして出す。

さて、ジョーカーは非常手段だ。　ジョーカーを出して逃れた場合。
　相手は、上か下か、出せるところまでカードを出せる。　相手が、上に出してゆく場合の“８”でジョーカーを使った場合。　“コチラは、“８”から“１３”まで一気に六枚もカードが出せる。　もし、手持ちが残り三枚でも。　それで出し切ったら勝ちである。

ルールとして。

○最後にジョーカーを出してはいけない。

○“１”か“１３”に行き着いたら。　行き着いたカードを出した人がサイコロを振り。　次ぎ出す人が、“６”ないし、サイコロに従ったカードを出す。

○競技は、必ず見届け人を用意し。　決着が着くまで席は離れない。

○呪いを不完全に掛けた場合、見届け人が敗者を殺す事

などだとか。

聞いていたアクトルやスティールなどは、今までに修羅場も潜った

から、その内容に一種の嫌悪感と恐怖を覚えた。

さて、ウィリアムは。

「おそらく、レバーの“同じ”（イーブン）は、ジョーカーのドアを開けるレバーでしょう。　もう、ジョーカーの扉も出てきていますし。　問題は手分けをしておかないと、纏まって行った先で戻れない事にでも成ったら、死ぬのは全員ですよ。　ルールは簡単ですし。　連絡が繋げるならバラけても問題無いですよ」

と、皆に言った。

スティールは、安易に。

「でも、ルールを無視してど～なるのかね。　部屋じゃ～風も石も意味無いと思うが」

ウィリアムは、呆れた顔で。

「云いましたでしょう？　このゲームは決闘ゲームだと」

「ああ、人対人の場合だろ？」

そこに、ロイムが真顔で怒って。

「呪いの魔術なんて昔も今もカンケー無いってっ！！。　多分、ルールを無視したら、その無視した人の居る部屋か、この全体の階層で呪いの魔術が発動して全員心臓が止まっちゃうっ！！！」

「はあ？　なぁ・・ななな・・・なにいいいいっ？！！！」

スティールは、いきなりの事に今度は本気で驚いた。

ウィリアムは、スティールに説明する。

「いいですか。　こうゆう迷路の場合、迷路に入った時点で、あらゆる魔法に掛けられたと同じ状態に成るんです。　此処に侵入することが、迷宮に課せられた条件や魔法や呪いを受諾する行為なんですよ」

スティールもアクトルも、こうゆう迷宮などの捜索はチーム名の広がりに有利だと聞いて今まで不思議だった。　確かに頭を使うが、危険度は低いと思っていた。　モンスターと派手やかに戦う方が命を張ると思っていた。　だが、今にしてこの状況を思うと、それがとんでもない誤認だと気付く。

スティールは、ウィリアムを少し白くなった真顔で。

「じゃ・・・ルールを無視したら。　最悪、全員に死が・・・？」

「ええ。　見た処、人の死体など無いですから。　此処まで来たのは、我々が最初かもしれませんがね」

スティールは、蹲る様に立膝で座り顔を埋めると。

「ハァ、・・・これで報酬が五千とはな・・・。　試されたとは云え、ハンパね～ぜ」

アクトルも。

「ウィリアム、お前が居なかったら命幾つ有っても足らんな・・・」

ウィリアムは、もう真剣だ。　両手で、大きく音を出す様に“パン・パン”と手を打つと。

「もう、引き返せません。　進むしかないんです。　出来る限り無駄を少なくして、切り抜けましょう」

休憩は終わりだった。　“３”の部屋まで戻って。　ウィリアムとスティールだけで“４”の別部屋に入った。

この迷宮では、“１”ないし“１３”までの部屋に行くと上・下・同じのシンボルレバーがあると思われる。

途中で、部屋を探しつつスティールは。

「なあ、ウィリアム。　聞いていいか？」

ウィリアムも、青い部屋から持ってきた鏡を今だ遣って鏡を探しながら。

「はい？　何です？」

「いや・・・、そのな。　ジョーカーの部屋に、先に行っても良かったんじゃ～ないか？　石版を置く部屋を探せばいいんだから・・・」

ウィリアムは、探しながら。

「そうも行きませんよ。　恐らくは」

「何で？」

「石版の文字に、“全て～”と行が有りましたでしょ？　この今の状態を見るに、我々は全てのカードを持っている状態と同じです。　全ての数、つまりは五十五部屋あるなら全て行かないと無理な気がします」

「おっ・・・なるほど」

「それに、ジョーカーの部屋・・・。　少し引っかかります。　何か、ある種のトラップが有るかも」

「ふ～ん。　お前、凄いね。　流石は、俺よりすこ～し賢いだけある」

スティールは、うんうんと頷いて探していた。

さて、二人は初めての“１３”までの部屋に行く。　しかし、その部屋にはジョーカーの扉も在った。

ウィリアムは、構造上から。　今居る部屋は、最初に居た“６”の間に近いと思う。

（行って見るか）

ウィリアムは、まず“小さい”にレバーを変えて戻り。　中継に残っていた途中のクローリアに、ロイム達の所まで戻る様に言い。　スティールに頼んで“大きい”に変えさせた。　そして、クローリアが戻った後。　また、スティールの元に戻り。　今度は“同じ”

のレバーを引いて、ジョーカーの扉を潜る。　すると・・・。　二人が潜って直ぐに、扉は勝手に閉まってしまった。

「うごっ。　勝手に閉まりやがったっ！！」

ビックリのスティール。

ウィリアムは、鏡でドアを見て。

「どうやら、各ジョーカーの扉を開けるのは一回限り・・・のようですね。　ドアに画かれたジョーカーの道化師の絵が消えました」

スティールも剣で見て。

「ありゃりゃ～・・・マジだこりゃ・・・」

と、顎をなが～くして言って見る。

「・・・・」

ウィリアムは、無言で別の“１３”の部屋にあるレバーに向かって“小さい”に変えた。

だが。　部屋は、数字を下に降れど最初のロイムの待つ最初の“６”の部屋には向かわず。　別の“１”の部屋まで行った。

スティールは、その途中の“６”の部屋でジョーカーを見つけている。

そして、今回の部屋で、“１”の部屋でもジョーカーのドアが。

「ウィリアム教授、二つ在りますな・・・ジョーカー」

ウィリアムは、あっさりと。

「では、此処で二手に分かれますか。　スティールさん、“６”の部屋からジョーカーの部屋に入って下さい。　俺は、“１”に」

「本気・・・か？」

「ええ。　ロイム達に動いて貰わないといけないんですが。　此処か、隣の“１”の部屋に誰か残して、レバーを“大きい”にしないと動けなく成るかもしれません。　俺が、“大きい”に変えますから。　“６”に戻って合図して下さい。　どっちにしろ、最後にジョーカーの扉は開けれません。　それなら、同時に遣ってしまいましょう。　もう、空けて無い扉は、ジョーカー二つに、数字のカードの枚数にして二十三枚。　ロイム達の待つ“６”の部屋から“１３”まで行けばカードにして七枚に、我々のジョーカー二枚で、九枚潰せます」

「ああ・・・ぁ？　でも、残り全部で今、ジョーカーと数字のカード合わせて、二十五枚有るわけだろ？　九枚使ったんじゃ～・・・残り“１３”に成らないぜ？」

スティールは、ロイム達と最後の“１３”の部屋を見つけても。下がってきてまだ、余ると想像が出来た。

「大丈夫です。　最初で、“３”の部屋から別に進みました。　どこかに、“３”からの別の行くドアが有るはず。　とにかく、“６”の部屋からロイムと合流して。　天井のシンボルが“大きい”に

変わったら進んで下さい」

「ああ・・・・。　でも・・」

ウィリアムは、スティールを見ると。

「もう、四の五の云う時じゃ有りませんよ。　それから、向こうでもし“7”の部屋以降に一つ下がる部屋が有るのなら。　手分けする方法を考えてくださいね」

スティールは、ウィリアムがまだ冒険者として一月も経たないのに。
丸で、外に残ったKの様に肝が据わっていると感じる。

「・・・解った。　お互い、生きて逢おう」

ウィリアムは、呆れ笑いで。

「そんな短時間に死ぬ造りしてませんよ。　この迷宮。　理はもう解っているのですから。“１３”か、“１”の部屋に行けたら、レバーを変えて構いませんよ。　行ける部屋、全て行って下さい。
もし、合図するなら。　レバーを何度も入れ替えして下さい。
こっちも、レバーで応えます」

「解った」

スティールは、ウィリアムが“大きい”にレバーを入れると、“６”の部屋まで戻った。

「いいぞ～」

スティールが、ジョーカーの絵が描かれた扉に手を掛けて云う。

「行きます」

ウィリアムが、レバーを入れ替えた。　音も無く、天井の隅に書かれた数字の真上に横の二本線が現れる。

「大丈夫です。　では、行きますよ」

と、ウィリアムの声がした。

スティールは、グッとドアノブを握り締めて捻った。

“ガチャ”

待っていた最初の部屋に残っていたロイム・アクトル・クローリアは、突然に開いたドアからスティールが出てきたのに。

「お、帰って来たか」

「どうでしたか？」

「少し、時間掛かりましたね」

と、三様に云う。

スティールは、ドアを閉めて聞かれる前にウィリアムの話を伝えた。

アクトルは、頷いて天井を見上げる。

「もう、“大きい”のサインが出てる。　なら、ウィリアムの言う通り先に進もうじゃないか」

ロイムは、不安そうな顔で。

「うん・・・」

ウィリアムを抜いた四人で、まだ開けていない“7”の部屋に向かった。　そして、部屋を探すと、一方には“8”。　別に、“6”へ行く扉が。

アクトルは、両方を見て。

「また“6”に下がるのかよ。　後回しだな」

スティールは、ウィリアムの勘が当たっていたと思った。

（凄え・・・マジ有った）

スティールは、皆に。

「ウィリアムは、こっちの部屋から分かれ道が有るなら手分けしないと行けないと言ってたぞ」

アクトルは、ロイムやクローリアと見合ってから。

「“手分け”って・・・お前・・・。　此処で、誰か残すのか？」

「いや、多分。　このゲームは、全部の部屋をルールに従ったままに行かないといけないみたいだってウィリアムが言ってた。　それ

にこのまま“１３”まで行けば、進む方向を変える、“大きい”と、“小さい”のレバーが有るはずだ。　ウィリアムが言うに。　もうジョーカーは使ったから、残り、二十三枚分の数字の部屋が有るらしい。　この“７”の部屋から、“１３”まで行って七。　引くと・・・・十六か」

スティールは、指を使って数えながら言う。

すると、ロイムが。

「あ・・・解った・・・。　このまま行ったら、“１３”の部屋でレバーを変えても、行けるのは“小さい”のみ。　新しい“６”の部屋から、もし別に“７”の部屋には戻れないんだ。　だけど、まだ部屋数は二十三も残ってる。　一度、“１３”まで行っても、残り十六もある。　もう一通り“１”から“１３”は有るから。　誰かが、レバーを操作出来る部屋に残って。　もう一人、此処で残って連絡をし合う人が必要なんだ。　最低でも、二人は残す必要があるね」

スティールは、何となく伝わったと思い。

「そうだ。　そうそう、レバーを操作する誰かは必ず残らないといけないみたいだ」

アクトルは、ややこしい話に。

「お前、良くウィリアムと二人でこっちまで来たな」

スティールは、言われても詰まらなそうに。

「いや、此処までは殆ど一方通行みたいなモンさ。　こっちの方が、ややこしい」

アクトルは、ロイムを見て。

「ま、とにかくロイムが理解出来てるならならいいか。　じゃ～、部屋を進みながら誰が残るか決めよう」

スティールは、先ほどのウィリアムの姿に、何か対抗意識に近いものが出て。

「俺が残る。　ウィリアムと一緒に行って、レバー操作は解る」

「・・・お前が？」

アクトルは、何時も我先男で残るのを嫌うスティールが、いきなりこう言い出したのには目を丸くして見返した・・・。

ーーー

スティールに、再び“大きい”にレバーを戻して貰い。　クローリアをそのままスティールへの連絡係として“6”に残す。

二人で、先に行くロイムとアクトル。　“9”の部屋で先に行く扉を探しながらの事だ。

「アイツ・・・な～んか有ったかね」

と、アクトル。

「えっ?!」

いきなりの事で、声が上ずったロイム。

アクトルは探しながら。

「いや、スティール」

ロイムは、何のことか解らずに。

「スティールさん・・・ヘンですか?」

アクトルは、頷き。

「ああ・・・。　アイツ、一人で待つの嫌いなんだよ・・・。　特に、こうゆう閉鎖空間ではな」

ロイムは、手を動かし始めながら。

「どう・・・ヘンなんですか？」

アクトルは、斧で壁を見ながら。　時折ロイムに顔を向けながら。

「いや、な。　アイツの父親・・・俺の親父と一緒に子供の頃に死んでるんだ。　坑道の崩落事故でな・・。　スティールの親父さんは、俺の親父を待って、二人して怪我した仲間を助けて・・・死んだ。　だから、閉鎖的な空間で一人にされるのは、昔の心の傷が蘇るみたいで嫌なんだろう・・・。　なのに・・・、なのに、今は残ってる。　黙って、文句言わずに。　自発的に自分から残るだって？　ま～ったく・・・何か有ったみたいだよ・・」

ロイムは、悲しい話に俯いた。　でも・・・。

「ウィリアムじゃない？」

「ん～？」

ロイムは、笑って。

「ウィリアムも別で残ってるし。　ウィリアムに、対抗意識有ってやってるのかも・・・」

アクトルは、ロイムをマジマジと見て。

「鋭いな。　それ、当たりかも」

と、笑った。

さて。　二人で最後の“１３”の部屋に向かい。　クローリアに合

図して貰い。“小さい”にレバーを動かしてスティールと“6”の部屋で合流した。

アクトルは、戻ったスティールを見て。

「寂しかったか？」

スティールは、素っ気無く。

「アホか」

何時ものスティールなら、もう少し生っぽく返すのだろうが。やはり、少し冷めていた。

さて、“3”の部屋に入ると・・・。

「あ・・・、ドアが・・・開いてる」

皆の視界の中。入って向かう正面の壁と、左手の壁にもう開かれたドアが。慌てて部屋の中央にてドアの先を見れば、左のドアの先にウィリアムが立っている。

「ウィリアムっ、大丈夫かっ？！！」

アクトルが声を掛ければ。

「皆さん、もう来ましたか。こっちです。此処に最後の部屋のドアが有ります」

スティールは、ズケズケと先にウィリアムに向かいながら。

「お～お～、仕事速いぉ。　無駄が無ぇ～」

ウィリアムは、笑って。

「そっちも、以外に早かったですね」

皆で、ウィリアムの探しておいた最後の“1”の部屋に入った。

すると、琥珀色の扉が、正面に見えていた。

扉を開くウィリアムに、スティールは。

「もう、こんなの勘弁。　単純なのがいい」

と。

すると・・・石版を台座に填め込めば・・・。

“光に支配されし迷宮は。　三者択一の部屋となる。　一つは進み一つは止まり　一つは戻る　二つ進んで一つ移り。　三つ進んで二つ移る。　理を解すれば、自ずと道は近けりし。　解せねば、永遠永劫と彷徨うだろう・・・”

ロイムは、ゲッソリとした憔悴顔で。

「最悪だあああ・・・。　“光”の迷宮だよおお・・・。　白い光る部屋だ・・」

スティール・アクトルは、急激に目元が凝る思いがした。

しかし、ウィリアムは。

「ん～。　今回は、早く切り抜けられるかもなぁ～。　まず、最初の部屋で、次に行くドアが解れば、楽だね」

スティールは、ウィリアムを横目に。

「なんで？　お前・・・行っても無いのに解るの？」

石版を外すウィリアム。

「ええ、石版に今回はヒントがしっかり書いて有ります。　これは、面白い」

と、顔は笑みすら浮んでいる。

アクトルが、不思議そうに。

「何で・・・解るんだ？」

ウィリアムは踵を返し。　変化した部屋の方に出た。

「うおっ！！　まぁ～たこの手の光・・・・キツ・・・」

呻くスティールは、ウィリアムの後ろから出て、眩い白い光に包まれた。　部屋は透明な白い光で出来た部屋である。　なのに、次の部屋が見えてはいない。

「いいですか？」

ウィリアムは、背後の全員を脇目に見る。

「部屋の正面。　左右に扉が隠されているはずです。　見つけ次第、中に入って下さい」

スティールは、いきなりの言葉に。

「そんなイケイケでいいのかよ」

ウィリアムは、あっさりと頷く。

「はい」

「んじゃ・・・探すかぁ～」

右にスティール。　正面にロイムとクローリア。　左にアクトルが。

ウィリアムは、探さずに考えていた・・・。

最初に見つけたのは、スティール。

「お、此処にドアノブがある」

と、ドアノブを捻ってドアを開く。

「・・・・」

スティールは、ウィリアムを見る。

「どうぞ、入って下さい」

ウィリアムは、薦めるジェスチャーをするだけ。

「俺・・・だけ？」

頷くウィリアム。

（どーなってるんだよ）

スティールは、困って次の部屋の中に足を踏み込んだ。

「あ・・・・」

スティールは、瞬間的に視界が消えたと思った直後。　目の前にウィリアムの顔が間近に見えた。

「えええええええっ？！！！！」

ロイムは、部屋に入るスティールを見送った直後にドアが消えたのに驚き。

「あ？　ななっ・何だ？　す・・・スティールが・・・・いきなり現れた・・・」

アクトルは、見送ったスティールが、自分の見る目の前に現れたので驚いた。

ウィリアムは、右を見て。

「右はハズレだ」

クローリアは、もう何がなんだか解らない。

「ああ・・・あの・・・ウィリアムさん・・・？」

ウィリアムは、静かに。

「とにかく、正面と、左のドアを見つけて。　直に解ります」

と、言うだけだった。

スティールは、ヘナヘナとその場に座り。

「何だったんだ？　・・・・今の？」

と、放心した。

正面にドアノブを見つけたロイムが開くと、壁で行き止まりだった。

「ウィリアムぅ・・・・？」

ロイムがウィリアムを見れば、本人は確信染みた頷きを・・・。

「行き止まり。　よし、答えは左ですね」

アクトルは、屈んでウィリアムを見ると。

「此処に・・・ドアノブあるけど・・・よ」

ウィリアムは、アクトルの方に近づきながら。

「昔の絵本に出てくる謎掛けです。　古い古い謎掛け・・・。　ある女の子が、魔女の森に迷い込み。　魔女に見つかり捕まってから逃げ出します。　外に出た女の子の前に待ち受けるのは、複雑に道が入り組んだ迷いの森・・・。　常に道はカラスの足跡の様に三股の分かれ道。　脱出のヒントは、魔女が捕らえて籠に入れいた鸚鵡の言葉・・・」

スティールは、訳が解らずに。

「俺、そんなの知らねぇ～よ・・・」

ウィリアムは、アクトルの脇に来て振り返ると笑い。

「ええ、昔に流行ったお話だそうです。　魔術師達の間で、このお話を元に様々な謎掛けが生み出されたそうで・・」

ロイムは、気付いた顔で。

「聞いた事あるっ。　“ジェニファーと魔法使い”・・・」

スティールは、ポカ～ンとした顔で。

「なんだそのっ・・飲み屋の女の子みたいな名前・・・」

ロイムは、困った呆れ顔でスティールを見る。

「そんなんじゃ～ありませんよ・・。　昔、お金の無い家の女の子は、幼くして奉公に出されていたそうです。　その時、業者から必ず三択の質問を出されるんです。　内容は、一見関係の無い内容のように見えますが。　内容の答えは、逃げ出す気持ちが有るか無い

かのテスト。　“逃げる”に関わるキーワードの答えを選んだ女の子は、遠方の逃げれない場所に奉公先を決められると・・・。　そこから生まれた昔話が、ウィリアムの言った物語です」

スティールは、話がコワいだけに・・・。

「いや～ね～・・・サイテー」

ウィリアムは、笑ってドアノブを触り確かめると捻って開いた。

「こっちが、正解。　さ、もう三方に別れてドアを探す必要はありません。　一気に、切り抜けましょう」

皆、ウィリアムに続いた。　ウィリアムは、それから先に進むドアのある壁を次々と言い当てる。

スティールには、神業としか思えない。　探す中で、

「なあ・・・何で解るの？」

探すウィリアムは、ドアノブを手触りで探し当てながら。

「先ほどの続きですが・・。　魔女から逃げる少女は、鸚鵡のヒントに悩みます」

“道は三股の分かれ道。　一つは元に戻る。　一つは行き止まり。　一つは正解。　道は、二つ進んで、一つ横に。　三つ進んで、二つ脇。　迷えばやがて、魔女の家”

「こんなヒントですからね」

「ん？　それって・・・・最初の俺達じゃ～ないか」

スティールは、驚いた顔。

「ええ、正に。　でも、一つ答えが解れば、もう大丈夫です。　森から出ようと迷う少女は、道を二つ進んでから、一つ右に正解の道がずれて行くのに気付き。　その後に、三つ正解の道を行くと、左に二つずれる事を解り。　命からがら魔女の森を脱出するんです。　いやぁ～・・・読んでて役に立つなんて」

ウィリアムは、渋い笑顔。

結局、ウィリアムの示すままに正解のドアは続き。　次の石版を填める台座のある部屋まで辿り着いた。

アクトルは、扉を開いて台座を拝むと。

「目にはキタが・・。　短時間で楽だったな」

スティールは、投げ遣りで。

「ほ～んと、ウィリアム教授様様だ～ね」

と。

ロイムやクローリアには、何か嫌味に聞こえた。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　更に広がる迷宮（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

最近、別に書く方で原稿と向かっているのでペースが落ちてスミマセンです；＞；

今回からは、難しい迷宮の内容になるので伝わるかどうか不安ですが＾＾；

解りにくかったらスミマセン。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 最後の階へ

7、最後の階へ。

“流の力に支配されし迷宮は、大気の自然が作り出す。　虹に光る迷宮は、四季を巡る旅人を迎え入れる。　移ろい、変わる自然の果ては、何処に還るか訪ねるか。　答えは、原点に還るだろう”

虹色の光で出来た石版の文字。

「うむむ・・・、またも謎掛けかよ」

スティールは、小難しい顔に腕組みで台座の上の石版を見る。

ロイムは、虹色に光る部屋に外が変わったのを見て。

「はあ～・・・。　もう、八階まで来たってのに、今度こそ全く訳が解らないよぉ・・・」

アクトルは、戦斧を持って歩き出し。

「ま、とにかく外に出て、ドアを探しながら考えようぜ」

と、皆を誘導した一瞬だ。

ウィリアムは、鋭く。

「待ってください」

皆、歩みを止めた。

変わった部屋に出掛けたアクトルは、

「どうした・・・、もう此処に用は無いだろう？」

ウィリアムは、石版を持ち上げて。　台座と石版交互に見て。

「この石版の問い掛け・・・。　答えは“原点”に有ると云ってます」

スティールは、良く理解出来ぬままに。

「ああ、まぁ～そうだろうな」

ウィリアムは、台座を見下ろしたままに。

「各階の原点は、この部屋でしょ？　此処に、もう一度石版を填めればいいのではないかと思いますが？」

「はぁ？」

話に呆れるスティールは、腕組みを解いてウィリアムに歩み寄り。

「お前、もう石版を変えたろ？　この台座の有る部屋だって、まだ白い光のまんまじゃ～ないかよ。　もう一回填める意味有るのか？」

ウィリアムは、石版を再度見て。

「二度、填めてイケないとは有りません。　探す部屋の手掛かりの数字も無い。　有るのは、言葉だけです。　自然は、季節を繰り返します。　原点は、魔の月の一日。　風も、動植物も巡る。　還るのは始め・・・。　なら、石版を填める原点ですから、答えは此処でしょう」

ウィリアムは、石版をまた台座に戻した。

アクトルやクローリアも、戻って来た。

そして・・・。

「ひ・・・・光ったっ！！」

ロイムも見る前で、石版が光りだした。

だが、今回は石版が異様な変化を魅せる。　石版が、灰色の石色から、黒く変色したのだ。　真っ黒の漆黒の闇の様に成る。

「お・・おい・・・文字も消えたし・・・色が・・・」

スティールは、今までに無い変化に驚いた。

だが、石版の周りからは、水色と云うべきか、薄緑色と水色の間に光るクリアーな色の光が発せられる。　光は黒く変色した石版の上にまた列を生み、文字が浮びだす。

“素晴らしき侵入者よ。　深い知恵、座った度胸を称えよう。　水

に支配されし迷宮は、一本道の螺旋の理。　巡って回って中央に、石版を求めるだろう。　だが、決して道を反れては成らぬ。　決して、振り返っては成らぬ。　我との知恵比べ、僅かに残るのみ。最上階まで登るなら、生死を掛けた問いを用意しよう”

ウィリアムは、ハッキリと“中央”と出たのが安心だった。

「見てください。　今回は、“中央”と出ましたよ。　これは、いい手掛かりですね」

しかし、皆はそれより、真っ先に石版を再度填めようと考えたウィリアムに目が離せない。

スティールは、只・・・。

「お前・・・確証有った？」

ウィリアムは、素直に。

「まあまあ、一応は」

と、石版を取った。

アクトルは、石版の文字と同じ薄水色の色に変わった部屋の方を向いて。

「探しに出ていたら・・・彷徨っただろうな・・。　盲点つ～か、この部屋ですら迷宮なんだと実感したな」

ロイムは、石版をウィリアムの手に見て。

「でも、あと二階だけですよ。　切り抜けられるかも」

クローリアも頷いた。

さて、部屋に出たウィリアムは石版を見て。

「石版を見るに、今回の迷宮の規模がどれくらいかは別にして。恐らくは、部屋の広がる中の中心に向かって行く形で、螺旋に渦巻いて行くのでしょう。　横に反れたり、戻るのが違反になるようですから。　真っ直ぐにドアノブが無くなるまで突き進みましょう」

「だな」

アクトルは、直ぐに動き出した。

代わって、一番動きの鈍いのはスティールだった・・。　やはり、何処か蟠りが有るのか。　妙にぶっきら棒な様子で動くのである。

ーーー

たが。　内側の列に入ると真っ直ぐだけでは無く。　行過ぎた部屋の方向にドアノブが現れた。

スティールは、気楽に確かめようと、壁側のドアを開けようとする。

ロイム・クローリアが止める声も聞かず。　笑って、前も見ないで開けて進んだスティールの前は、青紫の底無し空間だった。

ロイム・アクトル・クローリアが叫び上げてスティールの名前を呼ぶ時。　スティールは無用心に踏み込んだ足の置き場が無く。　そのまま、頭から落ちた。

が。

声よりも動いたのはウィリアムである。　疾風の如く走り込みスティールの右足を掴んで、両足を開脚したままにドアの有った内側に身体を引っ掛ける形でスティールを助けたのだ。

そして、スティールは助け上げられた・・・。

「このバッキャロおおおおっ！！！！！　そんなに死にてええええかあああああっ！！！！！」

アクトルが、遂に本気で怒って砕けた様に座るスティールの胸倉を掴んで怒鳴る。

スティールは、落ちた一瞬で死を覚悟しただけに半放心状態で・・・。

「あ・・ああ・・・す・・・スマン・・・・あ・・く・・・・」

アクトルは、スティールを床に捨てて。

「うるせえっ！！！　謝るのは俺じゃ無いっ！！！！」

ウィリアムは、瞬間的に身体を使った後で。　離れた場所でグッタリ横に成っている。　珍しく、ソファーにだ。

ロイムとクローリアは、複雑な顔で別のソファーに座ってアクトルとスティールを見たりしていた。

スティールは、冷えた汗を流す顔をウィリアムにぎこちない動きで向けて。

「うう・・ウィリアム・・・スマン・・・助かった・・・」

ウィリアムは、右手を上げてヒラヒラと応えて。

「こっちも、全く根拠無くて動きませんよ・・。　言った事ぐらいは、聞いて下さい」

「ああ・・・」

スティールは、幽かに頷いた。

・・・・・・・。

その頃。

Kは、雨の上がった昼過ぎの日差しの差し込む食堂で座っていた。

窓ガラスの向こうには、テラスが透けて見えている。　今居る食堂も、まあまあ広かった。　十人は向かい合って座れる長テーブルには、背凭れの長い広い椅子が八席、十分な余裕を開けて置かれている。

「・・・・・」

Kは、上座の正面席の右回りの窓前に椅子を借りて座る。　窓にはカーテンが中途半端に掛かり。　陽の光は広げた手の幅程の隙間から差している。

Kが何故に此処に座るか・・・。　彼の正面のテーブルを挟んでの向かう壁には、小型の額縁に描かれたシルエット画が・・。

「持ち帰るだろうか・・・」

シルエットが、くぐもった濁声で喋る。

「さぁ～な。　俺は、ウィリアムと云うリーダーを買ってる。　奴なら、持ち帰る可能性はあるな・・・。　ま、生きて帰ってナンボの話だがな」

Kは、静かにそう言って動かない。

シルエットの影絵は、横向きで。

「今・・・彼らは九階まで来た。　ルールは理解しているようだ。　直に、十階に辿り着くだろう・・」

Kは、長い背凭れに頭も身体も預けて。

「そうか・・・。　なら、祈って待ってくれ・・。　俺も信じて、もう一眠りする・・」

「・・・・」

影絵は、正面を向いて黙った。

この影絵・・・なんだろうか。

・・・・・。

Kが、静かに眠り。　時は流れて、夜に成る頃だ。

「ふぁ～・・・・」

ウィリアムが、ソファーから起きた。　あれから、疲れが酷くて休憩したのだ。

「・・・・」

見回せば、誰もが寝ていた。　ロイムとクローリアは別々のソファーで寝ている。　アクトルもスティールも、壁に凭れて寝ていた。

それから・・・。

「・・・・寝ちまったか・・・」

アクトルやスティールが起きた。　二人、首を動かしてお互いを見てからウィリアムを見れば、静かにソファーに座って何かを考えて

いる。　足を手前の肘掛に、頭を奥の肘掛に凭れさせて。　天井に顔を向けながら・・。

「ウィリアム・・・スマン・・・」

スティールは、近寄って謝った。

すると・・・。

「ねぇ、スティールさん。　俺・・・不思議に思うんですよ」

パッと聞かれたスティールは、小さく驚く様に。

「えっ？　ああ・・・何が？」

「ハイ。　マジックモニュメントって、本来は、神殿や個人・団体の財産や秘密を守るものだと聞きました。　しかし・・・今回は、こんな大掛かりな迷宮を個人の家に用いています。　個人の家に用いる場合、マジックモニュメントは、出かける時や重要人物のセキュリティーに考案された魔法なんだとか・・・。　なのに・・・何でオルロック氏は、マジックモニュメントの魔法を発動させたままに亡くなったのでしょうか・・・」

スティールは、急に聞かれて困り。

「あ？　ああ・・・そりゃ～なんだ。　家を守る為だろう？　誰かに家を荒らして欲しくないからじゃ～ないか？」

ウィリアムは、身を起こしてスティールを見る。

「スティールさんがオルロック氏だとして・・。　こんな迷宮にしますか？　侵入者を排除するセキュリティーで？」

スティールは、素直に。

「いやぁ・・・しないな。　そ・即効で追い出すか・・・最悪・・・殺すか」

ウィリアムは、スティールに指を向ける。

「です。　そうですよね。　普通は、そうなんですよ。　俺が本で読んだマジックモニュメントって、そうゆう物だったんです・・。　なのに、此処は何か品定めをしている様な気がしませんか？　変に迷宮染みてますが、ルールを守れば排除されない。　切り抜けられる・・・どうしてでしょうか・・」

「さっ・・さぁ～・・・。　俺は、良く解らない・・馬鹿だからよ・・」

ウィリアムは、スティールを見て。

「もしかして・・・十階に何か有るんではないかと思ってます・・・その答え。　オルロック氏の試練を越える者を・・・待ってる気がします。　とにかく、後少し。　頑張りましょう」

「あ・・・ああ・・」

スティールは、ウィリアムが自分に怒っていない事が不思議だった・・。

ーーー

スティールは、部屋に入り。

「だがよ、ウィリアム。　お前の推理が正しいとして、だ。　この迷宮を造ったオッサンは、俺達に何をさせたいんだ？　そうだろう？　迷宮を切り抜ければ、オッサンの家の内部に入る訳だ。　家の侵入を許していい訳？」

ウィリアムは、部屋に入ってスティールと肩を並べて直進の壁を探しつつ。

「そこですよ。　Kさんのヒントに、“相手は男”と。　ここはあくまでも“理を持った幻覚”だとか有りました。　それが正しいなら、この“箱庭”のようなこの迷宮には、何かありますよ。　とにかく、仕事を終わるまでに持ち帰れる物は全て拾いましょう。　俺は、この仕事に俄然と興味が沸いてきています」

「お宝とかも有るのかね」

「さ～。　借金を考えると・・・若干でも欲しいですね」

「出来れば、鱈腹・・・欲しい・・・」

「スティールさん、借金以上に報酬有ったら・・・どうします？。
あ、ドアノブ有った」

ウィリアムは、手探りで正面壁の左端にドアノブを見つける。

スティールは、ウィリアムに歩いて近づきつつ。

「う～ん・・・、“スティール様の愛の館”って云うハーレム作るか・・・。　お前も、ど～よ」

ウィリアムは、ドアを開いて。

「好きですね・・・此処まで来てそれか～」

と、次の部屋に入る。

「決まってるじゃ～ないか。　男と女しか世界に居てまてん」

二人は、安穏とした様子で部屋を移る。　見ているアクトル達は、さっきのスティールのミス、スティールがウィリアムに不満を見せていた影が消えているのがどう理解して良いか解らない。　剣悪なムードが無いのは良い事だが、不思議なのだ。

そして、グルグルと中心に向かう事どのくらいか・・・遂に中心の三部屋の列に入った。

「ふ～、長え～。　残り三部屋か」

スティールが、入って右の壁に向かった。

この部屋の扉の先は、このフロアの中心の部屋に成る。　探して見れば只のドアでは無く。　美しい石版を填める台座の有る部屋へ行く扉であった

見つけたアクトルが、扉を両方押し開けば。　九つ目の台座が有った。

「・・・・」

ウィリアムは、黙って石版を填める。

すると・・・。

“ゴゴゴ・・・・・”

岩などが動くような音がして、入って来た扉の反対側に通路が現れた。　丸で、夜空の天を床にしたような廊下の先には、白い大きな階段が上に伸びる。

「凄い・・・・、きっ綺麗・・・だぁ～」

ロイムは、目を奪われて現れた通路と階段を見る。

ウィリアムは、様々な光を放って変化する石版の文字を見ていた。
そして、黒い夜の天の様な色に、星の輝きの様な点と、光が伸びて点を繋いで文字を見せる石版を手に取ると。

「行きましょうか。　最後の階です。　切り抜けて、帰りましょう」

四人は、ウィリアムを見た。

“星を司る迷宮は、四つの門を守る迷宮なり。　二つは仕舞われし我が遺品を守る番人。　他の二つは、出口を塞き止める鍵なり。
迷宮に入りしより、時を告げる鐘が鳴ろう。　百の鐘が成る前に、全ての門を開いて来れるなら。　外に通じる窓が開く”

ーーー

く磨かれた表面は、真珠の様である。

さて、何百段目か・・・。　更に階段を上がった頃。

「あ・・・・扉・・・ですね」

緩やかに蛇行して登る階段の先に、黒い扉が見えた。

「うひー。　やっとかいっ」

スティールの無駄口が、一段落した瞬間だった。

だが、扉の前に来ると・・・。

「・・・な～んだこの扉・・・ガーデンに行く“門”（ゲート）みたいじゃないか」

アクトルが拍子抜けしたように。

そう。　扉は、上を半円を画く様に見せたアーチゲートの様で。

“扉”とは、黒く漆黒の闇が扉の型に遮られてそう見えるだけなのだ。

ウィリアムは、石版の文字を見て。

「さて、この先は十階の迷宮です。　行きますよ」

仲間を見る。

ロイムもクローリアも、疲労の滲む顔でウィリアムを見て頷いた。

スティールは、ウィリアムに右手を差し出し。

「じゃ、いきま～。　リーダー、ゴー」

ウィリアムは、柔らかく笑って黒いベールの様なゲートの中に入った。

黒い闇は霧のようで、その掛かる幅は手を伸ばせば終わるほどしかない。　闇の暖簾を抜ければ、そこには夕暮れから夜に切り替わったばかりの様な暗がりが広がる。　天井を見上げると、夜空の様な美しい光の点が集まり渦を作っていたり、年に一・二度見れる天の川の様な星空が見えたり、不吉とも英雄の現れるの兆しとも例えられる流星が見えていたり・・・。

しかも、目を平行に移せば、ラベンダーが一面に咲き誇る幻想的な草原の様な庭が見える。

「な・なんなんだ・・・此処は？」

スティールは、奇妙過ぎるアンバランスな風景に顔が固まる。

だが、ウィリアムは天井を見上げて感嘆していた。

「凄い。　超魔法時代・・・魔術師の一部は、望遠鏡を改良してこの世界の外の星を見ていたって本にあったけど・・・。　スターライン（星の川・天の川）やスタースォーム（流れ星・流星）があんなにも鮮やかに・・・間近に見える様に・・・。　こんな・・・歴史の記憶を垣間見るなんて・・・。　感無量ですね・・・」

確かに、天井の光の点は動いている。　ガス状の美しい光や、爆発する光、黒い渦を巻く漆黒の光・・・。　どれもが独立した動きで。
　天を彩る。

アクトルは、ラベンダーの草原の先に有る柵を見て。

「でも・・・柵が有るぜ。　ホラ・・・柵の右側と、左側に扉も見える」

ウィリアムは、前を見ると。　草原の中央を奥へと伸びる石畳の道を歩み出し。

「その柵の手前に立て札らしきものが・・・。　行って読んで見ましょうか」

皆、ウィリアムの後に続く。　天井の空は夜の様なのに。　何故か周りのラベンダーはハッキリ見える。　立て札に近づけば・・・。

「あ・・・ああ・・・」

アクトルは、一瞬言葉を失った。

離れた場所から柵を見ると。　広がる野原の中に柵が有るように見えた。　だが、間近に迫って見れば、柵までしか野原は無かった。
　柵の所は、壁なのだ。　なのに・・・壁の中にはラベンダーが生え、緩やかに風に靡く様に揺れいでいる。

スティールは、野原の様に見えた錯覚だった壁を見る。

「なんか・・・最後なのか・・・スゲ〜な・・・」

其処に、ウィリアムが。

「ですね～。　この立て札の内容も微妙です」

皆、立て札を見る。

“右と左のドアは、一度しか開かないわ。　同時に開いて、同時に閉まる一度だけ。　右のドアは動いて解ける問題ばかり。　左のドアは、考えて解ける問題ばかり。　どっちに進むかは自由・・。でも、どちらにも人を送らないと終わらない。　右？　左？”

「おいおい、二手に分かれろってかぁ～？」

スティールは、立て札を見つめて顎を触る。

アクトルは、ウィリアムを見て。

「ど～するんだ？」

「そ～ですね・・・」

ウィリアムは、皆を見回してから。

「考える事は一人でも出来ますが・・・。　動く方は人手が多い方がいいかもしれません。　俺が一人で左に行きます。　皆さんは、右に」

クローリアは、心配な顔でウィリアムを見て。

「ウィリアムさんっ！！　お・御一人で大丈夫ですかっ？」

皆、ウィリアムを見た。

ウィリアムは、逆に皆を見て。

「皆さんだけで大丈夫ですか？　右側？」

スティールとロイムが、パッと見合う。

ウィリアムは、微笑んで左のドアに向かう。

スティールは、ロイムの首根っこを掴むと。

「大丈夫に決まってるっ。　先に出て待ってるぜっ！！」

と、右側のドアに向かう。

ウィリアムは、静かに微笑んでいるだけだった・・・。

アクトルもクローリアもどうしようか迷うのだが・・・。　ウィリアムがさっさとドアを開くのと、スティールが急かすにの仕方なく分かれてしまった。

同時に開いたドアの中で、ラベンダーは揺れている。

ウィリアムと、皆は別れた・・・。

“ゴ～ン”

一つ目の鐘が鳴る。　どうやら、止まれなくなった。

ウィリアムと別れた四人は、中に入ると神殿の内部の様な場所に出た。　巨大な支柱が何本も並び、広がる先の空間は広く広く開けて行く・・・。

「な～んだ・・・此処？」

スティールとロイムを先頭に、舞踏会でも出来そうな広間に差し掛かった処で。

“ようこそ、最終階へ”

と、老人の声がした。

スティールが。

「誰だっ？！！」

声は高い天井に広がった。

だが、老人の声は続く。

“これから、君達には課題が出される。　見事に切り抜けられるなら、私の私室の鍵を与えよう”

スティールは笑って。

「へっ、バッチリ頂きますぜ」

“では、これから課題が出される。　君達の腕に期待しよう”

と、声と共に、スティール達の前に、黒い肌の醜悪な顔と鋭い鉤爪を持った悪魔の様なモンスターが現れる。

“サイモンセッズ。　倒せ”

その声に、スティールは素早く反応してモンスターに飛び込んだ。

「あ・・・」

クローリア・ロイムが同時に小声で驚いた瞬間、スティールの腰から抜かれた剣が白刃閃いてモンスターを斬り倒したのである。

斬られたモンスターは、瞬間的に消える。

アクトルは、戦斧を構えて。

「どうやら、俺等の得意分野だな」

スティールは、振り返って。

「だな」

すると、ロイムがスティールの左に指を向けて。

「まっまた出たっ！！」

今度は、黒いモンスターが二匹。　白いモンスターが一匹現れる。

“サイモンセッズ、白いガーゴイルのみ倒せ”

スティールの動き出そうとした身体が止まる。

「何だってぇ？」

アクトルは、動き出すモンスターを見て。

「どうやら、只の戦いじゃ～なさそうだ」

と、前に進み出て。

「スティールっ、白いのヤレっ。　黒は、俺が引き付ける」

スティール達への第一の課題は、提示される内容に則りモンスターを倒す事だった。

スティールが、白いモンスターを斬って倒せば。　次は、四匹の黒いモンスターが現れて。

“サイモンセッズ、一度に同時に倒せ”

と、声が・・・。

スティールは、直ぐに動いて。

「なんだそりゃあああっ！！」

と、二体のモンスターを手早く掬いに斬って、返す剣で振り向き様に斬り倒す。

だが・・・。

“同時に倒せ”

と、声がして。　いきなり倒した倍のモンスターが現れる。

「お・・おいっ！！」

スティールは、アクトルを見る。

「マズイ、言う通りじゃないと倍に増えるぞ」

其処に、ロイムが。

「二人下がってっ！！」

と、声を出す。

アクトル・スティールはロイムの脇に引くと。

「ど～するんだ？」

と、スティールが問うのも同時に・・・。

「魔想の力よっ、無数の剣を生み出して我が敵を倒せっ！！」

ロイムは、モンスター達の頭上に何十もの剣を具現化させて、一気に落とした。

「ヒュ〜、やるね」

スティールの視界に、モンスターは居ない。

すると、モンスターが出ないままに。

“サイモンセッズ、出現する順番に倒せ”

スティールは、アクトルに向かって。

「面倒臭え〜」

アクトルは、現れたモンスターに視線を動かしながら。

「口より手・・だ」

と、斬り掛かった。

その頃。　ウィリアムは・・・。

「・・・・」

青いフェルト布を張った表面が上品に見えるやや広めの大きな外見をした、ギャンブルの時に用いられるカードテーブルを前にして、背凭れの高い椅子に座っている。　ウィリアムの前・・・テーブルを挟んだ向かいには、黒い顔の無い礼服に身を包んだ何者かが座っている。

ウィリアムは、青いフェルト布の敷かれたカードテーブルの上で、静かにサイコロを転がした。

「“下”。　一枚多いのは、そちらですね」

冷静な声で、手の内のカードを見る。　暗い部屋だ。　光が燈されている一点は、頭上よりウィリアムと相手と卓上のみ。

“ゴ～ン”

三回目の鐘が鳴る。

黒い影だけの人物が、赤いマークの“7”のカードを卓上中央に出した。

そう、此方の課題は、“運命の選択”で影の紳士に勝つ事であった。
　このゲームは、決闘のゲームである。　“負け”は、“＝”で、“死”。

ウィリアムは、カードを見ていた。　考えるのはどれだけでも自由・・・。

“ゴ～ン”

四つ目の鐘が部屋に鳴り響く。　窓も無く。　薔薇の模様の床は、何処か色褪せている様に思える。　ウィリアムは、影の相手を見て、静かにジョーカーのカードを出した。　手の内に、“6”のカードは三枚もあるのに・・・。

相手は、“6”から“1”までのカードを纏めて一気に出した・・・。

ウィリアムは、相手サイコロを振るのを見て。　カードを切った・・。

鐘が十一回目に鳴る時。　ウィリアムは、手持ちのカードをテーブルに投げて席を立つ。

「・・・・」

相手の黒い影の紳士は動かない。　手持ちには、ジョーカーのカードが一枚握られていた。

ウィリアムは、奥に開かれた扉に向かって消えて行く・・。

ーーー

た。

髪を汗で濡らしたロイムが、それを拾う。

「“鍵”だ・・・」

“ゴ～ン”

十回目の鐘が鳴る。

アクトルは、広間の先に何時の間にか現れている回廊を見て。

「行こうか。　まだ、何か有りそうだ」

スティールも、剣を仕舞って歩き出す。

四人が先に進めば、暗い夜の草原に囲まれている風景が望める窓が左右に見えた。　窓に挟まれて、真っ直ぐに続く回廊が伸びている。
だが、回廊の左右の窓の外に見れる草原は、窓の外に見えているのか・・・。　はてまた、窓に映る幻想なのか解らない。

月明かりも無いのに、夜なのに何故か草原は明るく見え。　不思議な感覚だった。

さて、そのまま奥に抜けると。　またもや広間に出た。　今度は、広間が横に長く。　広間の中央、横の長い方に面して壁画の様な壁が左右に長く延びる。　高さは、アクトルの目線位。　やや古した石壁の様だが・・・。　その壁画には、十本程の黒い線が引かれて描かれてある。　線と線の幅は、スティールの開いた手の長さ程の感覚を開けて石壁に引かれている。

ロイムは、線を左の方から右に見て。

「壁に・・・向こうからあっちにまで引かれてますね・・・。　変な絵も有るし・・・」

壁画を見るに、各線上には、まるで用意されているかのように簡易的な絵が描かれている。　悪魔の顔や炎を噴出す壺と云うか釜と云うべきか。　他には、雷を現していたり、落とし穴の行き止まりでも現しているのか、線がその場で一端途切れて、間を開けてまた先に伸びる。

クローリアは、横に引かれた線の上下を繋ぐかの様に描かれた簡易的な絵の段落ちする鍵線を触り。

「これ・・・階段ですね・・・」

と。

すると、十三回目の鐘が鳴り終える間も無く。

“もう一つの課題だ。　壁の奥。　壁に向かって左に向かうが良い”

スティールは、命令されて気に食わない。

「な～んか偉そう・・・」

「とにかく行くぞ。　ほら」

アクトルが、スティールの背中を言葉で押した。

左まで、歩いて二十歩は有るだろうか。　行ってみれば、壁の横に引かれた線の一番上の段の左端に、極簡単な“○”で示された頭に棒線の身体・手足を持った人の絵が有る。

スティールは、見て鼻で笑って。

「なぁ～んだ、コレ・・・人か？。　ガキでも、もっちっと上手い絵描くぜ」

広間は、炎の明かりで照らされた様に明るく。　その簡単に描かれた絵が良く見える。

其処に、また声が。

“良いか、壁画に変化を起こすぞ”

と、言った瞬間に、ロイムが。

「あっ・・・亀裂が・・・」

いきなり、壁画の表面に亀裂が入る。　そして、タイル張りの壁のように、線を基準にして裂け、縦も等間隔で裂ける。　丸で、ロイムの掌に納まるぐらいのタイルを張り詰めた壁に変わってしまった。

驚いて声も無い四人の頭上に、声が響く。

“これから、その絵の左の“人”が動き出すだろう。　家に帰るためじゃ。　家は、壁の最も右の一番下の線先に有る。　人が立つ線の真下の列は空いているから、タイルと化した壁を動かして人を家

に導け。　炎の釜に当たっても、悪魔に当たっても、落とし穴に落ちても遣り直しじゃ。　時間までに、人が家に戻れるかな・・・”

ロイムは、左上の線で、屈伸運動をする人の絵を見て。

「マジ？」

スティールは、意味が解らずにロイムに。

「センセー、どうゆうこと？」

ロイムは、左端の所で。　タイルを触って人の絵の下の列がタイルの無い空間に成っているので、タイルの一部を動かして。

「ほら、こうしてタイルが縦横に動きますから。　タイルを動かして、これから動き出すあの・・・」

と、指を向けて人の絵を指せば・・・。　もう、居なかった。

「あっ！！！！」

驚くロイム。

「うごっ！！！　あんな所に動いてるぞっ！！！」

と、スティール。

もう、人の絵は、タイル二つ先までトテトテと歩き出していた。

アクトルは、真っ直ぐ先には、悪魔の絵が有るのを見て。

「おいおいおいおいっ、マズイんじゃないかっ？！！」

と、慌てて向かう。

ロイムは、一気にパニックに成りながら。

「うわあっ。　動かせる余裕まだ無いってええええ！！！！！」

と、慌ててタイルを動かし始めた。

タイルを動かす余裕を作る為には、人の居た下の列九個所の隙間に余分なタイルを動かして隙間を作るしかなかった。

「とにかくタイルを動かしてっ！！！　悪魔の絵っ、炎の釜の絵も要らないっ！！！！」

ロイムが、タイルを動かすスティールやクローリアに叫ぶ時。

「あ〝っ」

アクトルの視界の中で、人が悪魔の絵にぶつかって落ち込む。　涙のような雫を壁画の中で流して消えた。　元の場所に戻った訳だ。

さて、この壁画の知恵比べは、とんでもない代物だった。

「うわあああああーーーー走るぅぅぅっ！！！！！」

ロイムが慌ててタイルを動かして、アクトルやスティールに指示する。

人の絵は、タイル二枚以上歩くと走り出す。

「いやっ、ちょ・チョット考えないで下さいなっ！！！」

階段前に来ると、下や上の段に行こうか一々悩む仕草をする。　何せ、悪魔の絵は人が通り過ぎると幽霊の絵に変わって追いかけてくる。　タイルを移動させて、進める道の先が行き止まりか、炎の釜の絵が描かれた物で通せんぼしておけば、幽霊に成って追いかけて来る心配は無いのだが。

ロイムが、上を指差して。

「アクトルさんっ、幽霊の絵を動かしてっ！！！　スティールさんっ、行き止まりの絵を上にっ！！！！」

「上上下下ってかっ？！！！」

「ヤベっ、遅かった！！！！」

行き止まりを前にすれば、人は引き返す。　落とし穴に落ちても、遣り直し。　幽霊に変わった絵は、遣り直しでも悪魔の絵に戻らず人に向かって移動するし。　階段の絵は数が非常に少なくて、使い回さなければ成らないのが最大のネックだ。

だから・・・。

「うおおおっ！！！！！　ダッシュすんなあああ！！！！」

「バカっ、バカバカバカっ！！！！　戻るんじゃねーーーーっ！

！！！！」

「あああああ・・・幽霊の絵が迫ってますわっ！！！！！　考えないでっ、下にっ！！！！！」

「階段の絵は何処っ？！！！！」

「ウルセエっ！！！！　釜の絵は何処だよっ！！！！！」

「アホーーーーっ！！！！！！　今道を動かしただろうがあああっ！！！！！　戻ってどーすんだっ！！！！！」

「きゃーーーー幽霊の絵に走りますぅぅ！！！！！　絵を、絵を浄化させてくださいなっ」

もう、広間は怒声と叫び声が乱舞して賑やかだ。　大の大人が四人が壁にへばり付いて、簡易的な絵の人に文句を大声で吐くのも矢鱈滅多に見れる物でも無かった。

その内、何度もやり直すのにロイムが激怒して。

「あったま来たあああああーーーーーーーっ！！！！！」

と、絵の中の人を行き止まりの中に閉じ込めて、行ったり来たりさせる。

「ヨシ、今のウチにゴールがら組み立てちゃおう・・・」

二十六回目の鐘が鳴る中で、スティールは疲れてグッタリしながら床に崩れる。

「ロイムせんせー・・・・最初から・・・そうして欲しかった・・・・」

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　最後の階へ（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

少し更新遅れてすみません＾＾；

最近、遠出する機会があり、脳ミソの気分転換しようとしたら。
新たな小説の題材を見つけて試行錯誤している毎日です。

さて、ポリア編の肉付きが最近出来上がったので、秋には掲載しようと思ってます＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　迷宮からの脱出

8、迷宮との別れ・・・残された物・・・。

“良く出来た。　もう一つの鍵を与えよう”

ロイムが、壁の右側から人を導く様にタイルをクローリア・アクトル・スティールと協力して入れ替えて人を家の絵に導いた。　すると、こう上から声が降りてきて。　壁画の中央当りに光が眩く光って、また鍵を落とす。

「おっ・・鍵だ」

スティールが、床に落ちた鍵の音に反応する。

その時だ。

“ガラガラガラ・・・”

いきなり、壁画に填まっていたタイルが数枚あちこちで剥がれ落ちる。

「え？」

ロイムが、クローリアと見合ってまた落ちたタイルを見ると・・・。

“グシャンっ！！！！！”

轟音を上げて、一挙に壁が崩壊してしまう。

「うわああっ」

「きゃあっ」

「ちょっとまてえっ？！！」

「なっ・なんだあっ？！！」

驚く四人だが・・。崩落した壁の残骸は落ちる間も無く半透明に成り。転がる前に消え失せて行く。

“ゴ～ン”

四十三回目の鐘の音が響く中で、通せん坊していた壁は消えた。先には、回廊が伸びている様な様子の廊下への入り口が見える。

「壊れちゃった・・・」

ロイムが呟くと。

スティールは鍵を拾いに歩き出しながら。

「さっさ行こうぜ」

と。

鍵を拾い、モンスターが現れた広間から此処に来る間を繋ぐ回廊と同じ回廊がまた、先に伸びていた。　行き止まりに、黒いドアが。
　開いて出れば、また巨大な石柱に挟まれて赤い絨毯が伸びる通路が・・・。

「また・・・こんな場所かよ」

スティールが周りを見て呟くと。

「遅いですよ」

石柱の柱並木が始まる所に、ウィリアムが立って凭れて居る。

「ウィリアムっ」

ロイムが喜ぶ。

スティールは、完全に賭けに負けた気がした。

「チェ、早いな・・・お前」

ウィリアムは、笑って。

「こっちは問題が一つでしたからね」

スティールは、遣る瀬無く首を左右に。

「クソ、行く方間違えた」

ウィリアムは、先に伸びる通路を見ながら。

「いえ、手分けの人選は間違っていませんでしたよ」

「ん？」

アクトルが反応する中で、ウィリアムは先に歩きだしながら。

「自分が行った方は、“運命の選択”を実戦で戦う問題でした。負けたら、即死です」

スティールは、ピタリと動きを止め。　顔をウィリアムに固定し。

「お前・・・勝った・・・のか？」

ウィリアムは、脇に来たロイムを見ながら。

「負けてたら此処に居ませんよ。　ズルも効く相手ではありませんしね～」

アクトルは、軽々しい言い方のウィリアムを見て。

「ウチのリーダーも十分度胸が座ってらぁ～」

スティールも。

「完敗だな・・」

と、ウィリアムの後に続いた。

さて。　高い天井、白い壁、石柱が並ぶ神殿内部のような通路を歩

いて行くと・・・。　玉座の広間に出た。　金色に輝く玉座を階段上に拝する場所である。　玉座には誰も居ないが・・・。

“良くぞ此処まで。　最後の問題に付き合ってもらおうか”

玉座の手前で立ち止まったウィリアム達に、声が降り注いだ。

「上等だ」

スティールは、ウィリアムの肩に手を置いて云う。

すると・・・。

「うわっ」

五人の前に、いきなり床から黒い何かがスルスルと出てきて、ロイムがビビる。

「・・・」

皆の前に現れたのは、高さがクローリアと同じ位の黒いモノリス状の四角柱だ。　幅も、クローリアやロイムの体格と同じである。

“これから、そのモノリスが問題を述べる。　このコインを遣わそう”

いきなり、ウィリアム達の周りに小さな光が現れて、何かが落ちる。

“チャリン・・・チャリン・・・”

音を立てて床に転がるのは、古い金貨や銀貨など五枚。　ロイムが、足元に転がって来た金貨を屈んで拾う時。　天の声はまた続けて。

”見事、問題を答えて見よ。　但し、そのモノリスは悪魔に魅入られている。　反対の事を・・・嘘を言うかもしれない。　質問も構わぬが、答えてくれるとは限らない。　十分に気を付けるが良いぞ。　それから、重要な事を告げておく。　質問は自由だが、答えられるのは一回のみ。　問いに答えると発言して答えるが良い。　間違えたならば、この迷宮から出る手立ては消えるだろう”

と、天の声は止んだ。

クローリア・アクトルが落ちた残り四枚のコインを拾う。

その時、ウィリアムはモノリスに踏み寄り。

「問題を頂けませんか」

すると、モノリスに何かが浮かび上がって来た・・・。

ーーー

濁声が、二重にダブる様な響きで不気味な印象を与える。　喋っているのは、モノリスの表面に現れた悪魔の顔である。　青紫色の肌、鋭い二本の牙、人の顔に輪郭は似ているが動物の顔つきにも似た細面。　頭には、三本の角を生やしている。

スティールは、腕組みして。

「戯言が問題か？　時間の引き延ばししてんじゃ～ないだろうな？」

スティールの鋭い言葉が、四十八回目の鐘の音の直後に口から滑る。

悪魔の顔は、スティールを見て。

「随分と態度のデカイ奴だ・・・。　まあ、いい。　我が出す問題だ、その硬貨の中に含まれたニセモノと本物が混ざってる。　ニセモノがどれか答えてもらおう」

聞いていたロイムが、漠然とした問題に怒る。

「そんな問題無いよっ！！！　問題に成ってないじゃないかっ！！！」

スティールも、悪魔の顔に寄り。

「そうだっ！！！　お前何様だっ！！！　問題も出せないバカかっ？！！！」

悪魔の顔は、キョトンとして・・・汗を流しながら。

「あ・・・あのね。　・・・まだ、問題には・・・続きが・・・」

スティールは、ギロリと悪魔の顔を睨んで。

「早くしろよ、早くっ」

「あ・・・ハイ」

悪魔の顔は、ビックリして頷くと。

「オホン・・・では、出すぞ。　五枚の硬貨の中で、金貨三枚はニセモノでは無い。　銅貨もニセモノでは無い。　ニセモノはどれか一つ。　ニセモノは、どれだ?」

モノリスの中の悪魔の顔は、問題を出した。

ロイムとスティールは顔を合わせる。

クローリアとアクトルは手の中のコインを見る。

四人は、真剣に考え出す。　問題を反芻して。　アレコレと言い出すのだが・・・。

ウィリアムは、コインも見ないで。

「質問します。　いいですか?」

と、悪魔の顔を見る。　その顔は、微笑の浮ぶ顔だ。

「フン。　何だ?」

ウィリアムは、仲間の方を指差して。

「あのコインの中に、本物は在るんですね？」

悪魔の顔は、勝ち誇った様に。

「在る」

ウィリアムは、透かさずに続けて。

「あのコインの中の本物を、貴方は知ってるんですね？」

「知っている」

顔は、答えた。

ウィリアムは、ニヤリと笑った。

「解りました。　では、答えます」

スティールも、ロイムもビックリする。

「おっ・おいっ」

スティールが声掛けると。　悪魔の顔も。

「もう答えるのか？　チャンスは一度きりだぞ」

ウィリアムは、頷いて。

「全て、“ニセモノ”ですね？　あの硬貨の中に、本物は無い・・・。　コレが、貴方の言葉の答えです」

スティールもロイムも・・・皆・・・身体が止まった。

「・・・・」

悪魔の顔も、無言でウィリアムを見る。

“ゴ～ン”

五十一回目の鐘の音が響く。

ウィリアムは、笑って。

「間違ってますか？」

悪魔の顔は、沈む顔つきで。

「いや、正解だ。　お前の答えが、正解だ・・・・」

と、モノリスの中に消えていった。

すると、クローリアがふと見た手の中の硬貨が・・。

「まあ・・・硬貨が・・・只の石に・・」

ロイムもスティールも、アクトルとクローリアの持っていたコインが只の石に変わっている事に気付いた。

ウィリアムの目の前では、階段の先の高みに設けられた玉座がユラユラと薄れて消えて行くのが見える。

そして、また天から声が・・。

“良くぞ答え切った。　消えた玉座の先に隠し部屋や、出口に向かう大階段へ通じる回廊が伸びるだろう。　鐘の音が百を打つ前に戻るが良い”

スティールは、ロイムやアクトルを見て。

「やった・・・やったぜっ」

と、喜ぶ。

アクトルは、手の中の石を捨てて。

「ふぅ〜・・・終わったか」

ウィリアムは、黒い闇のドアの様な通路の入り口を消えた玉座の裏に見て。

「さ、帰るまでまだ気は抜けませんよ」

と、歩き出す。

スティールは、ウィリアムの背中に。

「おい、ウィリアム」

と、声を投げる。

「ハイ？」

と、立ち止まって振り返ったウィリアムに、鍵を二つ投げた。

受け取るウィリアム。

「宝の鍵だ。　借金が返せるといいな」

ウィリアムは、軽く鍵を持ち上げて。

「ええ」

と、笑う。

黒い闇の仕切りの先に行けば、白い石の廊下が伸びた黒い空間に出た。　白い廊下の左右には、黒い空間だけが広がる。　壁もない、天井も見えない。　アクトルとスティールが並べば、廊下は狭く感じる。

「な・・なんだ・・・この場所」

怖がるスティールに、ロイムが辺りを見回して。

「多分、マジックモニュメントと現実の狭間の世界ですよ。　魔法で、細かく世界観が指定されていないから。　こんな風になっているんじゃ～ないかな」

歩く先頭のウィリアムは、

「先に扉と行き止まりが在りますよ」

皆、前を見る。

「ホントだ」

伸びた白い廊下の先に、短い十字路が有る。　近づけば近づくほどに鮮明に解る。　正面には、白い廊下の先に降る様な道の切れ目が見え。　その手前には、左右に数メートルの廊下が伸びて。　ポツンと存在する白いドアの前にて止まっている。

スティールは、ドアがドアでしかなく。　ドアの後ろの黒い空間が見えているのが気に成る。

「なぁ～。　ドアしかないじゃんか・・・部屋に続いて無い感じだぜ」

ロイムが、呆れた顔で。

「現実とは違うんです。　大丈夫、部屋に行きますよ。　今まで、ドアやドアの形の“ゲート”は必ず別の場所に出る出入り口だったでしょ？」

スティールは、見えないのが不安なのか。

「マジッスかぁ～？　ロイムせんせいよぉぉ」

ロイムは、脇目にジト目でスティールを見上げて。

「落ちそうになったクセに・・・」

スティールは、ゾクリと寒気を覚える。　あの、開けた先が部屋で無かった時は、絶対に死んだと確信したからだ。

「思い出させるなよっ。　あ〜・・・またビビッてしまった」

スティールは脅える。

「自業自得だ。　お前は、一度死んだ方がいいかもな」

アクトルは、すんなり言う。

スティールは、ギロっとアクトルを睨んで。

「一回死んだら終わりだってっ!!　二度と落ちるか・・・ちきしょうめっ」

ウィリアムは、久しぶりに苦笑いした思いがする。

（やっと、普段通りですね・・・さて）

十字路までやって来た。　直進の先で行き止まった様に見えた先は、降りの階段で在った。

ーーー

ーーーーーーーーーーーー

「ちぇっ、在ったのはローブ三着と杖五・六本じゃないか」

スティールは、十字路の右の部屋から出て手にしている黒いローブを見る。　薄い衣で、一見にして普通の着物である。

ロイムは、呆れた顔でスティールを見る。

「知らないですよ・・・そんな言い方して・・・」

スティールは、口先を尖らせて。

「何がっ」

ロイムは、杖を別に一本多く両手に持って。

「高名な魔道士の持っていた身の回りのものは、収集家や学者や研究家の魔法遣いなんかに高額で売れるんです。　小部屋に在った杖やローブからは魔法の力が感じられます。　もしかしたら、スティールさんが手にしてるローブ一着で、ン千シフォンもしたりするかも・・・」

スティールは、どう見ても普通のローブに見えない着物を見て。

「ふぅ〜ん・・・コイツがねぇ？」

ウィリアムは、もう一つの鍵を使って左側の通路に行って。　ドアを開いた。

「あら・・・」

ウィリアムが、不思議な声を上げたのだ。

全員がその声に気付いて、ウィリアムの背後から部屋を覗くと・・・。

「まぁ・・・」

クローリアも驚いた声を。　部屋の中は、窓が無いがアトリエの様な間である。　白い花柄のデザインが刺繍される絨毯、絵を立てる衝立、入り口以外の壁周りには三段に分かれた木の棚が白い皿や紙などを乗せて、今直ぐにでも絵が描ける準備を見せていた。

ウィリアムは、部屋を覗きながら直ぐに。

「スティールさん、アクトルさん、ロイムとクローリアさんの荷物を・・・受け取って下さい。　クローリアさんとロイムは、俺と部屋の中に。　まだ、鐘の音は六十一回目です。　少し、中を調べて見て下さい」

スティールが、自分に荷物持ちを遣らせるウィリアムに細い目で。

「なんで・・・俺等に・・・」

だが、アクトルは意味を理解していた。

「スティール、ウィリアムは魔法遣いとしての二人に調べさせたいんだ。　ホラ、さっさ荷物持て」

「へイへイ・・・ホ～」

ロイムとクローリアは、それぞれ荷物を渡して部屋に入る。　部屋の広さは、宿屋のゆったりした五人部屋に等しい。

ウィリアムは、スティールを部屋の入り口で見て。

「スティールさん、この部屋・・・なんかヘンじゃないですかね」

と、真顔で。

スティールは、部屋の中を見回して。

「確かに・・・女・・・女の匂いがする」

と、真顔でウィリアムを見返す。

アクトルは、二人の会話が理解出来ない。

「おいおい、“女”って・・・」

だが、スティールはアクトルを見ると。

「アーク、部屋の左奥。　帽子やコートを掛ける金属の支柱見てみ。あの黒い帽子、貴婦人や令嬢が好むミンク仕立てだ。　男は、鼬とか使うから皮や毛が違う」

アクトルは、金色の支柱から枝分かれしている引っ掛ける部分に掛かった黒いシルクハットの様な帽子を見ながら。

「あれか・・・ふ～ん」

やはり、服やアクセを見る目に関しては、スティールは鋭い。

ウィリアムが。

「それから・・・」

と言えば。

スティールが顔をウィリアムに向けて見合い。

「香水」

二人で言い合った。

そう、開けた部屋からは、野いちごの香りを漂わせる香水の甘い香りがする。

スティールは、部屋の中を見回して。

「色んな匂いしてるが、この苺の甘い匂いは香水だろう。　しかも、コレって結構高いンだぜ」

ウィリアムは、部屋に身を入れながら。

「でしょうね。　高級香水の“クィーン・アダマン”ですよ。　小

瓶一つで一・二万シフォンは飛びますね」

「いっ・・・一万・・・」

アクトルが目を丸くする。

さて、部屋の右側を見ているクローリアは、壁際の棚の下に何枚も立て掛けられた布絵を貼り付けた木枠の画板を動かしながら。

「ウィリアムさん・・・ちょっと・・・ヘンですわ」

ウィリアムは、部屋を見回して机の上に置き残された筆などを見ながら、クローリアに近づく。

クローリアは、白いローブのフードから零れる髪を掻き上げながら。

「絵の殆どは、風景画なんですの。　ホラ・・コレ。　丸で、この迷宮に入る前の森の風景なんです。　こっちは、長閑な村の風景・・・。　なのに、何枚か人物画が在るんですけど。　どれも、男性の・・・同じ人を題材にしているみたいです」

ウィリアムは、絵を何枚も見るに。　確かに同じ人物の絵だ。　題材は老人の様で、森の中で鳥に囲まれている穏やかな絵や。　研究室で実験をしている風景が描かれている。

クローリアは、その絵を見て。

「ウィリアムさん・・・これは私の想像でしか無いんですが・・・」

と、控えめに言うと。

「言いたい事は、解りますよ。　どの絵も、人物画には筆遣いの細やかな配慮が一段と彩り鮮やか・・・。　感情が篭ってますね・・・明らかに」

ウィリアムは、本を読んでいる老人の魔法遣いの絵や、昼寝をする老人の顔がとても穏やかに描かれているのが気に成った。　クローリアも、同意の頷きを返す。

さて、そこにロイムが。

「ウィリアムっ、こ・・この絵・・・魔法が掛かってるよ」

と、部屋の奥。　帽子と女性用の白いガウンの掛かる金属の支柱近くで、木枠に布を貼り付けた絵を描く為の画板を持ち出す。

スティールは、何も描かれていない白い画板を見て。

「ロイム先生、何にも・・・描かれちゃいね～がよ」

すると、ロイムは顔を困らせて。

「うん・・。　だけど、コレは多分は“スケッチ・メモリー”だよ。　描いた人の記憶が込められているハズなんだけど・・・・。　どうやったら描かれた記憶が見れるか、僕じゃ解らない・・・」

“ゴ～ン”

七十四回目の鐘の音が響く。

ウィリアムは、頷いて。

「解った。　それ、持って行こう」

ロイムも。

「うん・・・ゴメン・・・解らなくて・・」

ウィリアムは、笑って。

「いいよ。　俺も解らないから」

ウィリアムは、部屋を見回して持っていく物を見定める中で。

「・・・（おかしいな）」

三本ある絵の衝立の中で、一本だけ画板を置く面が木枠に成っている衝立が・・。　他の衝立は、金属の枠組みだけの物。　クローリアが絵三枚と女性用の残された帽子を持ち出す中で。　ウィリアムは、その衝立の裏側に回って斜めに成る裏側に屈んで調べると。

（へぇ～・・・こんなの初めて見た）

厚みの在る木枠の裏側に、小さな引き出しが見つかる。　丁度衝立の裏側の真ん中で。　縦も横もウィリアムの小指の幅に近い。　摘める金具の摘みを引いて見れば、小さい引き出しだ。　小砂利の石ころを片手に握って入れたとしても半分も入らない容量だろう。　指を入れてみれば何かが入っていた。

「・・・指輪・・・」

純金の指輪が二つ。　知恵の輪の様に繋がっている。　指に填めて上になる部分は厚みのある太さで、飴玉位の宝石でも備え付けられそうだが。　指の平の方に隠れる下側は細い作りで、輪の端が重なる作りで、繋がっていないのだ。

（外せる・・・この指輪・・・何だろう・・・）

ウィリアムは、指輪の輪の裏面の内側に目をやる。　すると、文字が・・・。

（この名前は・・・・）

それも持っていく事にした。

ーーー

アクトルが、部屋から出てきて大した荷物も持たずに考えて黙るウィリアムに声を掛ける。

「・・・・」

ウィリアムは、黙ったままである。

階段は、九階から十階に上がって来た時の様な幅の広い蛇行した階段だった。

“ゴ～ン”

鐘の音が、八十四回目の音色を響かせる。

鐘の音が四つも鳴らない内に、ウィリアム達は階段の下まで行き着いた。　壁も天井も漆黒の闇に染まったロビー。　正面の行く手にはドアが有り。　そのドアの手前の左右には、レリーフの施された台座が有る。　目を凝らせば、ポツンと何かが乗っているらしい。

ロイムが、台座の左を見て。

「わわわ・・凄い魔力だあああ・・・・。　アレ・・・Kさんの言ってた“魔力球”かも・・・」

全員が見る視界の中、赤と黒のエネルギーで光る球体が台座の上に。

アクトルは、思い出しながら。

「確か、あの球体を破壊してもこの迷宮魔術は解けるンだったよな・・・」

スティールは、右の台座の上に置かれている巻物（スクロール）を指差し。

「なら、あっちは設計図か？　破けば同じ事だったよな」

しかし、ウィリアムは、スタスタとドアに一直線に歩き出しながら。

「無理しないで出れるなら、解く必要は無いでしょう。　この迷宮は、人に害を及ぼす為じゃ無く。　余計な侵入者を嫌う為の物です。　外に出ましょう」

淡白なウィリアムの態度に、四人は言葉を引っ込める。

ウィリアムは、台座の上の物には目もくれず。　ドアの前に行ってドアノブを捻り押し開いたのだ。

「外だ」

夕方に鳴く蝉の声がする。　紅い夕日が差し込む窓。　白いシーツの引かれたベットは、窓から差し込む夕日に染まり。　ベッドの足元から間を開けて壁際に置かれた本棚は、小奇麗に並べられている。

「おいおい・・・此処は？　一体・・・何処だ？」

スティールは、部屋の中に出て驚いた。

「まあ・・・また部屋ですの？」

驚くクローリアの後から出たアクトルは。

「空気が・・・新鮮な気がするな」

出てきてドアを閉めたロイムは。

「此処が本当のオルロック様の家の中なんだよ。　はぁぁぁ～・・・・・終わったぁ・・・・」

閉めたドアに凭れて屈むロイム。

その時だ。　いきなり皆の左手にあるドアが開いた。

「まだ終わってないぞ」

全員、ハッとして声の方に振り返った。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　迷宮からの脱出（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

更新頻度が落ちてスミマセン‥＞‥

何とか、中三日から五日辺りでがんばります＾＾；

今月もアクセス数が１０万越えてアリガタヤ～＾＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

second episode2 導かれし魂

9、家に残されたもの・・・残った者

「ケイさんっ！！！」

「あっ・・・アンタ・・」

ロイム・スティールは、本棚の横にあるドアを開いた包帯男を見て驚きの声を上げる。

黒ずくめで、深紅の生地に龍の刺繍の入った長いスカーフをネクタイ代わりにする包帯男は、ウィリアムを見て。

「ウィリアム、帰還早々に悪いが・・・指輪を見なかったか？　金の指輪だ」

ウィリアムは、迷宮の中に入った訳でもないKが、何故にあの指輪の事を知っているのかに驚く。

「えっ？　な・・なんで、指輪の事を・・」

Kは、ウィリアムの顔で指輪を見たのは間違いないと判断した。

「指輪が二つ有ったか？」

と、部屋の中に入る。

ウィリアムは、ズボンのポケットからあの繋がった指輪を取り出し。

「コレですか？　サイズの大きい指輪には、オルロック氏の名前が・・・彫られていましたが」

Kは、ウィリアムを見て頷く。　口元が微笑んでいた。

「流石、良く持ち帰った。　上出来だぜ」

アクトルは、全く話が見えないので困惑する。

「なぁぁ・・・一体何の事だ・・。　此処は、本当に現実か？」

Kは、包帯の隙間から見える瞳をアクトルに向けて。

「ああ。　もう、マジックモニュメントは切り抜けてきたよ。　この屋敷は、オルロック氏の本当の家だ」

スティール・ロイム・クローリアは、生きて出られた事に喜ぶ顔でお互いを見る。

ウィリアムは、Kの会話が何か意味を含んでいると直感した。

「ケイさん、侵入者排除を目的とした迷路の中に、生活反応が見られるアトリエが有りました」

それに、スティールも同調。

「そうだ。　女の匂いがする部屋だったぜ。　ホラ、ロイムが服を

持ってる」

Kは、ロイムを見て。

「それが、何か解った？」

と、真っ白な画板（キャンバス）を指す。

ロイムは、頷く。

「ハイ・・・多分、イメージした記憶を閉じ込める“スケッチ・メモリー”だと思います。　でも・・・どうやったら見れるか・・・」

と、手の白い画板を見る。

Kは、頷く。

「いいだろう。　見せてやる。　君も、覚えれば簡単な事だ。　覚えておくがいい」

ウィリアムは、Kが何かもう知っていると思う。

「ケイさん、一体何が・・・」

Kは、自分の入って来たドアを指差し。

「下に、オルロック氏が居るんだ・・。　正確には、魂だけだがな」

スティールは、五百年以上前の偉人の事だけに。

「そうか・・・そら～古い昔だから死んでるわな・・・」

Kは、短く。

「違う」

「へ？　な・・何が」

スティールが、驚きを込めてKを見て問い返す。

Kは、一同を見回すと。

「オルロック氏はな。　ある心残りから、自分を責めて暗黒の魔法を自分に施した。“ソウル・リミレスト”。　別の一般名は、“レイス・フォーム”・・・だったな」

その事実に、

「えっ」

「まあっ！！」

「そんなっ！！」

ウィリアム・クローリア・ロイムが驚いた反応を見せる。

スティールは、ロイムに緊張した顔で。

「お・・おい・・一体・な・何なんだ？　その・・ソル・・なんたらってのは？」

ロイムの顔が、少し血の気を失い白く成る。

「あ・・あああ・・・あわわわ・・・」

ウィリアムが、飲み込めてないアクトルやスティールに。

「“ソウル・リミレスト”は、魂を肉体から開放して永久に存続し続ける暗黒魔法ですよ」

と、静かに語れば、クローリアが少し昂ぶる声で。

「遣っては成らない下法ですっ!!　肉体を離れた魂は、何かに憑依して存続させないと徐々に自我を失いモンスターと化します。もう、一度遣ったら・・・魂は天に召される事は無く。　永久に・・・誰も居ない闇の中で苦しみ・苛(さいな)やみ・救いの無い無限地獄へ・・・・堕ちます」

スティールは、ブルっと背筋を震わせて、Kに。

「まさか・・・モンスター化・・・してるとか?」

「いや。　まだ、正常だ。　だが、彼の気を晴らしてやらないと。仕事の次いでだ、付き合ってけ」

Kは、ウィリアムを見る。

ウィリアムは、寧ろ。

「魂を救えるんですかっ?　レイス（生霊）に成った人の・・・魂

を？」

Kは、首を左右に振った。

「オルロック氏、自身の救済は無理だろうな。　だが、無念は・・・終わる」

アクトルは、もう訳が解らず。

「一体何の話だっ？！」

Kは、暮れる夕日が沈む森を窓に見て。

「もう、あれから四日目だ。　全ては、宿に帰ってから話す。　とにかく、その指輪を埋葬してやろう。　オルロック氏と共にな」

ウィリアムは、Kに任せる事にした。

「皆、ケイさんに任せよう」

と、Kに近寄り。　持っていた指輪を渡す。

Kは、一回り小さい指輪の裏を見て。

「“オルロックを永遠に愛す、クラウディア”か・・・。　運命とは、こんなに皮肉かよ」

と、呟いた。

そして、一同を見て。

「下だ。　食堂に行こう」

と、踵を返す。

皆は、Kが凛と気を引き締めたのが解った・・・。

ーーー

と、話す。

食堂の北側の壁一面には、様々な大きさの絵が掛かっている。　自然の風景画や、子供とお年寄りが農地の真ん中で戯れる絵・・。　ウィリアムは、直ぐにその絵を見て。

「この絵・・・迷宮の中に有ったアトリエの中の絵と同じタッチだ・・・」

クローリアも。

「確かに・・・」

Kは、小型の額縁に描かれたシルエット画の前で。

「そうか。　この絵を描いたのは、“クラウディア”。　オルロック氏が、最後に抱えていた弟子の一人だ」

「ふ～ん」

スティールは、シルエット画を見て。

「コレだけ、人物画だな」

と、言うと・・・。

「如何にも。　お初にお目に掛かかる」

いきなり、シルエット画が喋り始めた。　老人の姿の様な印象のシルエット画が、老いた男性の声で語り掛けて来たのである。

「うわああっ」

「うおおおっ」

ロイムとスティールが驚く。

横向きのシルエット画は、続けて。

「私は、オルロック・コルロスロワージュ。　この家の主であった。
今はこの姿、茶も出せずに済まない」

皆、驚き黙るが。　ウィリアムだけは、前に寄って。

「冒険者のウィリアムと云います。　チームのリーダーとして、仕事の調査として館を土足で汚してすみません」

すると、シルエット画の老人は絵の中ながらに首を左右に。

「いやいや、我が家を危険な迷宮に変えて済まない。　どうしても、人に取られたくない物が有ってな・・・。　申し訳無い」

本来なら、勝手に侵入したのだから、罵られてもおかしくない。
いや、魔術師は何時の時代も気位が高く、昔の魔術師はもっと酷いと云われる今で、この腰の低さは・・・とウィリアムは思う。

「あの・・・迷宮の中にアトリエが・・・」

「・・・・うむ」

シルエット画は、黙った。

其処に、Kが。

「オルロックさんよ。　このウィリアム達が、あの迷宮から彼女の意思を持ち帰った。　一緒に墓に入る前に見てやりな。　アンタが喉から手が出るほどに欲しがった指輪も、彼らが持って来た。　これから永遠に続く苦悩の罰にも、指輪が有れば少しは和らぐ事だろう」

シルエット画は、ウィリアム達にお辞儀をする。

「ありがとう・・・ウィリアムさんとやら、済まない・・・。　感謝する」

ウィリアム達は、その物静かな様子のシルエット画の老人に、侘しい影を見る。

Kは、暗くなる食堂の中、ロイムから渡された画板（キャンバス）をテーブルの上に置いた。　そして、何も描かれていない画板の左右の縁を触れて行き・・・。

「有った。　スケッチ・メモリーは。　魔力で描く記憶の絵だ。　縁のどこかに、出っ張ったスイッチが有る。　そのスイッチを押して・・・・」

≪我が魔力を鍵として・・・封印されし魔法の鍵を開けよ・・・≫

ロイムとウィリアムとクローリアには、原始の古代言語（エンシェント・ルーン）を唱えたKの声がハッキリと聞こえた。

シルエット画の老人は。

「器用だな。　基本魔法も遣えて、戦う方は最強レベル・・。　素晴らしい御仁だ」

Kは、明るく光り出す画板をシルエット画に対峙させて。

「お褒めは要らないね。　この記憶を見て、自分の罪深さを後悔するがいい」

淡く光る画板の中に、映像が浮びだす。　薄水色のローブを纏う女性である。

「わ～お・・・美人でやんの」

スティールが、言う。

ロイムやアクトルは、詰まらなそうにスティールを睨む。

その時だ。

「クラウディア・・・」

シルエット画の老人が、その名前を呟く。

（この人が・・・）

ウィリアムは思った。　確かに、その名前の女性に興味が沸いていたのは確かだったからだ。

映像の中では、農村の畑の中に埋まっていた岩が邪魔なのだろう。
魔法で巨石を持ち上げる黒いローブの老人が居て。　その老人を見る女性の横顔が見える。　黒い髪は、水色のフードから零れて緩やかにウィーブを作って胸元に垂れる。　澄み切った黒い瞳は柔らかげに光り。　細面の顔は思慮深く感じる。

岩を取り除くと、農民らしい何人かが老人に頭を下げる。　老人は、農民に挨拶を返して去る。

シルエット画の老人は、寂しそうに。

「優しい娘じゃった・・・今に思えば・・ワシは、何で生き残ったのか・・・」

画板（キャンパス）の場面は、また変わる。

森の中。　農地を見下ろせる丘の上で。　若い、利発そうな男性魔法遣いが、女性に・・・クラウディアに云う。

「クラウディア。　どうして私と一緒になってくれないんだ？　こんな田舎の魔法遣いのジジイに師事して、その才能や美貌も無駄にする気なのかい？」

すると、クラウディアは物和らげな言い方で。

「私は、町には行きません。　それに、私にも好きな人が居ます。
貴方には、ごめんなさいとしか・・・言えないわ。　でも、此処の生活は決して無駄では無いわ。　人の役に立てる魔法の遣い方がある・・・。　私利私欲の為・・・立身出世の為だけじゃない・・・

本当の魔法の意味が此処に在るわ」

シルエット画の老人は、その映像を見て嘆きだす。

「ワシが・・・ワシが悪かった。　師弟として受け入れるべきでは無かった・・。　彼女の命の為にも。　ああっ。　何故・・・何故にワシだった・・・クラウディア・・・」

と、見る皆の後ろから呟く。

そして、また場面が変わる。

夜らしい。　老人が揺り篭の様に揺れる椅子に座り。　ランプの乏しい明かりの中で沈んでいる。　膝には、手編みの肩掛けを広げて寒さ凌ぎに掛けているのだろうか。　静かに、本や魔術に遣う材料の溢れる部屋の中で、下を向いている。

部屋の扉は開いていたのだ。　クラウディアと云う女性が、紅茶の湯気が上がるカップを木のトレイに乗せて、部屋の入り口に立っていたらしい。

「師さま、紅茶を入れて来ました」

クラウディアの優しい声である。

「うむ・・・」

老人は、返すだけ。

クラウディアは、老人の前に行き。　老人の右脇に在る机の上に紅

茶のカップを乗せる。

「此処に置きますね」

白いブラウス、紅い婦人用のネクタイ、白いスカートは足元まで伸びる。　ナイトガウンの黒い肩掛けを纏ったクラウディアは、大人びても居て・・・魅力的な女性に見えた。

その時だ。　老人がクラウディアに。

「クラウディア・・・冷えるな。　風邪・・・引かぬようにな」

すると、クラウディアは老人の前に屈み。　老人の手を触る。

「師さまも。　お手が・・・冷たいです。　もう、お休みに成られませんと・・・」

俯く老人は、

「うむ・・・」

と、言ってから少しして。

「クラウディア・・・。　ワシは・・・ワシは、間違って居るのかの。　こんな山奥の農村に住んで。　毎日・・・農民の相談を聞いたり・・・協力をしたり・・・。　デムズは、昨日出て行く時に言うたわ」

≪師よ。　魔術は人の多くの目に入って称えられる。　埋もれて喜ぶ魔術など、ゴミ同然ですっ！！≫

「と・・・。　ワシは、この魔力を・・・困る人々に使うのが間違っておるのだろうか・・・」

するとクラウディアは、老人を見て首を左右に振る。

「師さま。　それは、間違っていないと思います。　私は、御師さまの行動が間違っているとは思えません。　御師さまに、農民の皆さんは感謝しています。　金でしか動かない魔法遣い・・・・、名声が関わらない事には無関心な魔術・・・。　困っている弱き人々を助けられない魔法など・・・必要無いと思います。　私は、御師さまの為す事に理解が行きます。　ですから、このままで良いと思います」

「済まぬ・・・情け無い事を言うたな・・・」

謝る老人にクラウディアは微笑み。

「早くお休みに成ってくださいませ。　お風邪を引いたら、看病は致しませんよ」

老人も笑い。

「おお、怖い。　風邪も引けぬわ。　あはは・・・」

五百年以上前の超魔法時代、魔法遣いは貴族と同じ扱いで。　しかも知識と富を独占して強力な魔法を操り、世界の政権を握っていたらしい。　偉ぶり、自己中心的で、虚栄心や独占欲が強く、魔法の遣えない人々は貴族以外はゴミに近い扱いだったとか。

皆、そんな言い伝えばかりが耳に入っていたので。　この老人とクラウディアのやり取りは、正直意外な思いがしていた。

また、場面が変わる。　今度は、凄い様子だ。

「きゃーーーーーっ！！！！！」

「向こうも火の海だあああああっ！！！！！　谷へ逃げろっ！！！！」

何処かの町中だ。　火の海と化した町の中を、人々が無力に逃げ回っている。　服の背中に炎を背負った男性が、ヨロヨロと建物から出て来て入り口で倒れる。

シルエット画の老人が。

「コレは・・・なんだ？」

すると、顔に軽い火傷を負った十歳にも満たない少女が、白い下着のスリーブ姿で泣いている。　右手には、兄妹なのか、更に幼い男の子の手を引いて火の海の阿鼻叫喚となった町中を歩いているのだ。

近くでは、必死に川の水を汲んで建物に被せる男は、必死に女性の名前を叫んでいる。

その中で、馬車で逃げようとしている人が、宿屋らしき建物から出て馬車乗り込もうとしている。

「魔術師様っ！！！！！　お助けをっ！！！！！」

馬車の前に立ち塞がり、必死の様子で助けを求める煤だらけの人々が居る。

「ウルサイっ！！！！　構わぬっ、轢き殺せっ！！！！！」

馬車に乗り込み、車体の脇の窓から顔を出した中年男が御者に叫ぶ。

「退けっ！！！！　退かねば殺すっ！！！！！！」

馬車は、強引にも発進して女性一人を弾き飛ばして水路の上の橋を走り去る。

男の子を引き連れた女の子は、泣きながらその様子を見ていると・・・。

「気を付けろっ！！！！！　建物が倒壊するぞおおおおおっ！！！！！」

と、後ろから大声が。

ハッと少女が振り返ると。　土と石で造られた十階を越える建物が、木造の建物の倒壊を左右に受けて土台の一階部分を破壊されていたのだ。　火を各階から噴出しながら、グラグラと崩れる正にその時であった。

「おっおいっ！！！！！」

スティールが、思わず声を出した。

映像の中では、男の子を連れた少女に向かって燃え盛る建物が倒れ

込んで来る様子が見えた。

だが。

“ドガアーーーンっ！！！！！！！”

凄い衝突音が起こる。

「あっ」

スティールも手に汗して見る映像の中で。　少女と男の子に倒れ掛かってきた建物が、瞬間的に木っ端微塵に砕け散ったではないか。

しかも、少女と男の子の前には、黒いローブを着て杖を持つ魔法遣いが立っている。

シルエット画の老人は、それを見て。

「コレはっ・・・ワシじゃ！！！　まだ、魔法学院の学長をしていた頃のワシじゃっ！！！」

皆、パッとシルエット画の老人を見る。　Kだけは見ないで、納得の頷きを・・。

映像の中で、黒いローブの魔法遣いは、粉微塵に成って地面に落ちた建物を見終えてから少女に向く。

「大丈夫かな？」

少女は、上を恐る恐る向く。　すると・・・辺りの火の灯りで見えたのは・・・大きな鷲鼻、鋭い目、厚い唇、痘痕の多い醜い男性の

顔である。

「あ・・・はっ・・はい・・・」

衝撃と驚きで、少女と男の子は泣く事を忘れてしまったのである。

人相の悪い男は、初老とも思える顔ながら。

「危ないから、向こうにお逃げ。　魔法学院の救助隊が来ている」

と、言う。

「・・・うん・・・」

頷く少女に、男は背を向けると。

「むんっ・・・・魔想の力よっ!!!　烈風の間欠泉を生み出せっ」

と、左右に杖を振る。　途端、凄まじい風が弾丸のように川に飛び込んだ。　そして、流れる川の水がブワアアアーーーーっと噴出すように何十メートルも上に吹き上がる。

「うわあ・・・・」

驚く少女の目の中で、持ち上がった川の水が雨のように町の中に降り注いで行くのだ。

「それっ」

魔法遣いの男性は、更に杖を振るって、風の魔法に水路の水を巻き

込んで持ち上げた。　そして、空中に雨を降らせる水の塊を携えて、まだまだ火の勢い激しい町中に入って行く・・。

見送る少女の視界の中で、

「オルロック様っ！！！！！　お一人では危険ですっ！！！！」

「学院長っ！！！！！　お待ちをっ！！！！！」

追う、魔術師の姿が見える。

「オル・・・ロック・・・・・」

少女が呟いた。

オルロックの姿が見えなくなるまで見ていた少女と男の子。　白いローブ姿の僧侶に保護された時に、名前を聞かれて。

「クラウディア・・・」

と、短く答える。

シルエット画の老人は、驚きが隠せなかった。

「そうか・・・そうか・・・・それで・・それで・・私を・・・・慕ったのか・・・・」

ウィリアム達は、言葉が無かった。

また、場面が変わった。

十六歳の年頃に成り、美しく清らかに成長したクラウディアは、魔術学院に居る。　昼食時、友達の女性や男性魔術師の卵達と広い食堂で話しながら食べる。

ロイムは。

「うわわ～。　今も食堂は変わんないよ・・・」

と、呟く中で。

少し生意気な感じのする金髪の若い女性が。

「ねえねえ、皆は卒業したらど～するの？　私、アルフレイト様の所に、書生として行く事に決まってるの」

男性の魔術師が驚く。

「うわぁ～、スゲ。　あの攻撃魔法の天才魔術師じゃんかっ、どんなコネだよ・・・」

金髪女性は、勝ち誇った様に済ます。

別の、のんびりした風貌の太った男性魔術師は。

「俺は、冒険者に成る。　兄妹の為にも、金を稼ぐのさ」

金髪女性が、呆れた口調で。

「兄妹十六人なんて信じられないわ」

と、蔑む様な顔をして言葉を飛ばす。

すると、碧い目のショートカットの女性が。

「クラウディアはどうするの？　一番早く卒業出来そうな感じでしょ？」

すると・・・、クラウディアは、穏やかに笑い。

「うん。　師事したい人が居るの。　オルロック様」

太った男性が、顔を歪ませる。

「えぇ～。　確か、前の学院長でしょ？」

「うん。　そう」

金髪の女性は、嫌気を全身から出して。

「うわ～趣味悪い。　顔はモンスターみたいに醜いし、有名に成るのを辞めて農村に住んでるって聞いたわ。　毎日、農民の話を聞いたり、作る作物の相談を受けて他国に旅するって聞いたわ。　世捨て人じゃない・・・綺麗な貴女の行く所じゃ無いわ」

酷い言われ様だ。

だが、クラウディアは、静かにただ笑って。

「私の理想は、魔術は人の手助けに遣う事だと思ってる。　私も・・

・嘗ては助けられたしね。　オルロック様の師事は、魔法遣いに成る時から決めてた事だから・・・気に成らないわ」

語る彼女の言葉には、もうオルロック氏に対する信頼が漂う。

別の男性の魔術師が、

「クラウディア、止めとけよ。　確かに凄い偉大な人だけど・・。あの爺さんは、もう六十半ばは超えてる。　師事しているうちに、死に目まで看取るかも知れないぜ」

と言うのだが・・・。　クラウディアは、微笑んで頷くままに。

「本望よ。　オルロック様を一人で死なせるなんて出来ないもの。師事するなら、最後まで居るわ」

スティールは、その言った事を実現していると見て。

「凄いな。　なんか・・・愛情を感じるゼ」

と、後頭部をポリポリと。

すると、シルエット画の老人は。

「何てことだ・・・・。　そんな・・・コレが・・・運命か」

と、嘆く。

Kは、シルエット画の老人を見て。

「運命は・・中々変わらないよな。　変えたくても・・・皮肉なまでに残酷だ。　操っている奴が居るなら・・・・斬り殺してやるのによ・・・・」

皆、ハッとKを見る。　腕組みして、映像に顔を向けた包帯顔の瞳は・・・、何故か少し殺気に満ちていた。　この男、一体どんな過去を背負っているのだろうか・・。

ーーー

病床のクラウディアの手を握り、必死に訴える老いた顔のオルロックが其処に居る。

これは、一体どうゆう事か・・・。

クラウディアがオルロックに師事して、十年が過ぎた頃。　世界中で風邪の症状が長期に続く伝染病が蔓延したのだ。　オルロックは、クラウディアに感染させまいと一人で町や村に出張していた。　オルロックは、薬学も精通し、治療する人々を素早く移動させる為の魔方陣を作る作業などから、薬の調合まで幅広くを行っていた。

だが・・・。　遂に老体に鞭打っていたオルロックが流行り病に倒れる。

その知らせを受けたクラウディアが・・・、オルロックの元に来てしまったのである。

オルロックの変わりに、様々な事を時には不眠不休で行うクラウディア。　それに、オルロックの看病だ・・・。　弱った身体に、病気を跳ね除ける力は無く。　彼女も病気に成る。

所がだ。　運命は皮肉である。

病床で苦しむオルロックは、危険な所を彷徨うも、後に助かるのである。

しかし、クラウディアは・・・オルロックより六十近くも下の彼女は、二十九の若さでこの世を去ることに成った。

しかも、その別れの時だ。

朦朧とした意識の中で、クラウディアは。

「お・・御師・・・さま・・。　ごめんなさい・・・私が・・・御師さまを・・・看て・・」

「ばか者・・・そんな事を気にする奴がある者かっ・・・・」

オルロックは、もうクラウディアに対して施せる手立てが無くて毎日苦悩していた。

なのに・・・クラウディアは死ぬ間際に笑顔であった。

「今生で・・・添い遂げ・・られなくても・・・御師さまが・・・私の・・・愛おしい・・・ひ・・・」

言葉は告げられなくとも、想いは伝わる。　命途切れたクラウディアと共に、映像は途切れた。

皮肉過ぎた・・・。　見送られると思っていた老人が、若き恋人を見送る立場になったのだ。

「・・・」

暗くなった中で、黙る皆。

だが、ウィリアムは、暮れた外が夜の闇を連れてきた中で、シルエット画の老人に問う。

「なんで・・・なんでレイスなんかになったのですか？　これじゃ・

・・クラウディアさんに、あの世でも逢えないでしょう？」

スティールも、涙を我慢しながら。

「そうだぜ・・・せめて、魂だけでも彼女に答えたれよっ！！！」

シルエット画の老人・・・・オルロックは謝る。

「済まぬ・・・。　後になって、死んだクラウディアの残した手紙に・・・私の作ったマジックモニュメントに細工をして、自分のアトリエを設けていることを知った。　其処には、彼女が私と一緒に住むことが決まった喜びの証として・・、結婚指輪を買って隠していると・・・。　マジックモニュメントの制約に、術者本人は入れない制約がある。　しかも・・・魔法を解除すれば・・・アトリエの全てが・・・消え失せる」

スティールは、苛立たしげに。

「誰かに頼めなかったのかよっ！！！」

「一応・・・金を出して頼んだのだが・・。　誰も命の危険を冒してまで中に入ってくれる人が居なかった。　私も、彼女の死から・・・半年かそこらしか生きられないと知って・・・怖くなったんだ・・。　何も受け入れず・・・師としてだけ接してきた事が・・・。　だから、レイスになった。　誰か、この・・・・罪深い老人の願いを叶えて、指輪をクラウディアの墓に入れてくれる・・・誰かを・・待っているために」

ウィリアムは、その現実は憎たらしいと思う。

「何人もの人を救ったのに・・・沢山の人を助けたのに・・・。
愛してくれる人を救えなくてレイスに成るなんて・・・。　それで、
これから一人で苛やみ続けて行くんですか？　永劫に渡って・・・
滅ぶ事も許されずに？」

オルロックは、絵の中で頷く。

「仕方無い・・・。　残り少ない命に嘆き、指輪を求めて欲に駆られた結果だよ。　覚悟は、もう出来てる。　出来るなら、私は彼女と同じ墓には埋めないで欲しい。　彼女の遺体に悪い作用をさせるかも知れないからな。　私の絵は、裏手の井戸にでも捨ててくれないか。　枯れてしまった井戸だ、誰も使わない」

無惨なまでに悲しい話である。　誰も居ない場所で、孤独に、責められて、悩みながら苦しむなど・・・。　地獄と云うべきか・・・
それ以上であろう。

Kは、短く。

「本気か？」

シルエットのオルロックは、頷く。

「私が全て悪いのだ。　この一つの我儘を叶えて頂けるなら。　他に何も要らない。　苦しむのも、私一人で十分だよ」

泣いているロイム。　悲しむクローリア。　本来、“ソウル・リミレスト”を使うのは、悪しき欲望に駆られた悪い魔法遣いだ。　死にそうな自分の魂を離脱させ。　他の生き物や人の身体、像などに乗り移り。　悪い事の為に永遠に生き延びようとするのだ。　まさ

か、こんな悲しい話の果てで利用する人が居ようとは思わない。

Kは、オルロック氏に。

「しかし・・。　何故、彼女はマジックモニュメントの中にアトリエを持てたのだろう・・」

シルエットのオルロックは、声を沈ませて。

「可能だよ。　彼女は・・・私の迷宮作成に手助けで携わっていた。術者・・・以外なら、協力者でも中の侵入は可能。　多分、他に入り口を・・・」

「そうか・・・。　では、埋葬しよう」

Kは、呟く様に言う。

「頼む・・・」

シルエットのオルロック氏も、答えた。

月明かり。　外に出れば、満月に近い月が出ていた。

Kは、彼女の墓の前に指輪と白紙の画板を持って行く。

ウィリアム達は、Kの後に続く。　オルロックの魂を宿したシルエット画は、ロイムが遺影の様に持っていた。

Kの行動は、人間離れしているだけあって静かに凄い。

「僧侶のお嬢さん、悪いがレクイエムを頼む」

と、クローリアに頼むなり。　クローリアが謳い始める時に、Kは墓の墓石を剣を振るった剣圧でスパッと切り取る様に飛ばして横に移動させる。　そして・・。

「あの・・・シャベルとか・・・」

と、アクトルが声を出す中で。

「一々掘ってたら、夜中に成る」

と、Kはセリフを置いて。　一番刃渡りの長い短剣で、地面に四角く切れ込みの枠を入れて・・・。　スッと目を細めた。

誰もKの振った剣の動きは見えないが。　振り上げたKの姿が、月明かりの中で静止したのを確認したのと同時に。“ブワアアアっ”と空気を瞬時に持ち上げる音が・・。

「のあああああっ」

「うわあああっ」

声を上げたロイム・スティール、黙ってしまったウィリアム・アクトル。　目の前で、深さ五〇センチ、二メートル四方の地面が四角の型枠の様に空中に持ち上がってしまったのだ。

「なんと・・・」

オルロック氏も、その見えぬ早業の剣技に驚いてしまう。

土の塊が、家と墓場の間の地面に“ドスン”と落ちる中で。　Kは、土を被りつつも現れた棺の一部を見据えて。

「結界の中は、俺のように抵抗呪詛を知らない者が長居していい場所じゃない。　ましてや、皆も疲れてるからな」

そう言って、棺の脇の余白の地面に降りる。　屈んで、棺に手を掛けた。　開けようとした瞬間、Kの身体に何かが走る。

「っ！！！」

Kの手が、身体の動きが止まる。

開けないKに、ウィリアムが、

「ケイ・・・さん？」

Kは、緩やかに上の覗きに近づいた皆を見返した。

「どうした？」

アクトルが訪ねると・・・・。

「ヘンだ。　前に感じた感じと同じ・・・魂の気配を感じる。　女性の・・・魂だ」

と、言うK。

その時に、ウィリアムは何かとても強い光をKのズボンに見る。

「ケイさん・・・ポケット・・・指輪の入っている方・・・・」

Kも、パッと見た。

スティールは、淡い蛍の光が見える様に、Kのズボンが光るのを見て。

「ひ・・光って・・る」

Kは、それに理解がいった。

「そうか・・・そうゆう事か。　こいつは・・・参ったな」

と、寧ろ微笑み出したのだ。

クローリアは、歌を止め。

「皆さん、クラウディアさんが・・・居ます。　棺の中に・・・」

と、言って。　また優しい声で歌いだす。

スティールは、信じられない顔でクローリアを見てから棺を見て。

「ンな訳ないだろうが・・・有り得ない・・・」

すると。

「いいや。　迎えに来てる。　オルロックの魂をな」

Kが確信した様子で言うのだ。

ウィリアムが。

「どうして・・・」

Kは、指輪を取り出した。

「ああ・・・ひひひ・・ひっ・光ってる」

ロイムの声。　絡み合う二つのリングが、淡い金色の光を放っていた。

Kは、呟く様に。

「奇跡だ。　ティエスゲートが開いたんだ・・・」

スティールは、何が何だか解らずに、問いかけようとした時。

Kは、棺に手を掛け、

「見ていろ。　クラウディアが願いを託した愛情の絆が、指輪を通じて届いたんだっ」

と、重たい黒の棺の蓋を持ち上げた。

クローリアの歌うレクイエムが響く中。　開かれた棺の中で、生きているように枯れない白き百合の花に囲まれて眠るクラウディアが其処に居た。

だが・・・。

「ひ・・・・光ってるぞ」

アクトルは、死体のクラウディアが淡く光っているのが驚きだ。

白いドレス姿で、丸で眠る姫の様なクラウディア・・。

Kは、ロイムに右手を伸ばして。

「オルロックの絵を」

ロイムは、慌てて屈みこんで、Kに絵を差し出す。

「はいっ」

Kは、クラウディアを見下ろして。

「良かったな、爺さん。　神も理も許さなくても、たった一人、アンタを許すとさ」

Kは、屈んでシルエット画をクラウディアの重ねられた腕の胸の前に置いた。

刹那。

「御師さま・・・」

遺体とシルエット画を見下ろしていた全員の頭上から声が響いた。

皆、驚いて上を見上げると・・・。

「あっ・・・あああっ！！！」

月明かりの注がれる空中に、微笑むクラウディアが半透明の金色の光に包まれて立っていた。

「ク・・クラウ・・・ディア・・・・・」

呟くシルエット画のオルロック。

Kは、頷く。

「破れる・・・・呪いの掟が。　魔術の定めた制約が・・・負けるんだ」

そして、奇跡は起こった。　オルロックの魂が封じられたシルエット画の絵が、ガラスに罅が入る様に裂ける。　そして。

「えええっ？！！！！」

クラウディアの脇に、なんとオルロックの姿が現れたではないか。

ウィリアムですら、口を開けて驚いていた。

Kは、クラウディアと見詰め合うオルロックを見て。

「世話が焼けるジジイだな。　クラウディアに精精あやして貰え」

と、微笑む。

オルロックは、Kやウィリアム達を見て。

「済まない・・・ありがとう・・・」

クラウディアは、Kに向いて。

「死ぬ時に願った願い・・・叶ったわ・・・。　貴方に、皆さんに感謝いたします」

言う声は、消え薄れ行く中でか細くなる。

だが、皆にその声はしっかりと届いていた。

「す・・・凄え・・き・・奇跡・・・かよ・・」

スティールは、光る魂が消えた後も、夜空に浮かぶ月を見上げながら呟いた。

ーーー

ウィリアムやスティールも、疲労困憊の窮みにに達した様子で倒れそうな様子である。

「なぁ・・なな・なんで・・・こんな・・・」

「つ・・・辛い・・・」

Kは、先頭をゆっくり歩きつつ。

「当たり前だぁ～。　時間の流れの止まった中に居たんだ。　外に出れば、時間の経過が襲ってきて、肉体にダメージと云う疲労を与える。　十日も入ってたら、運が良くて気絶。　悪ければ死ぬね」

アクトルは、背中の戦斧とロイムは非常に重く感じる中で。

「し・・・知ってたの・・・か？」

Kは、あっけらかんと。

「ああ。　前に何度か経験して、死に掛けたからな～」

スティールは、落人のようにヨロヨロと進みながら。

「あ・・・アンタ・・・スゲ～・・・・・」

Kは、脇目にウィリアム達を見て。

「駆け出し含んでのこの結果なら、上出来さ」

と、笑う。

皆、この包帯男に親近感を覚えた。　墓を元に戻した後で、Kは、墓石にオルロックの名前を新たに刻んでやり。　あえて、何一つの見返りも求めない。　ただ。

“いい経験した。　男と女の愛情も、筋金が入ると凄いね。　奇跡も可能にしやがる”

と、笑うのみ。

さて、町に近づく頃。

「な・・なあ・・・」

スティールが、砕け散りそうな腰の動きで歩きながら、Kに声を出すと。

Kは、呆れた笑みを口元に浮かべて。

「町を出れるように成るまでは、一緒に居てやる。　疑問や質問は、身体を休めてから言え。　そんな死にそうな姿で言うなよ。　面白過ぎる・・ぷっ・あはははは・・・」

スティールは、顔を必死の形相で歪めて。

「う・・うるへえっ!!!　こ・・こっちは・・・ギリギリ・・超えてるんだ・・・おおおおお・・・腰がああああ・・・」

クローリアも、月明かりの影に自分を見て。

（や・・やだあ・・・おばあさん・・・みたい・・・）

と、恥ずかしがる。

結局、深夜近くに全員で宿に戻った。

フロントの受付の男性がK以外の一同を見て。

「おっ・おい・・・アンタ等・・・一体どうし・・たの？」

ウィリアムは、言い訳もまともに出来ない口調だ。

Kが。

「皆、命懸けで仕事してきた訳さ。　後、二日・・三日は厄介になるよ」

と。

スティールやクローリアは、階段などは手と膝で這うように上った。

後姿を見るKは、声を押し殺して笑っていた。

こうして、なんとか仕事を片付けた一行である。

さて・・・。　ウィリアム達五人は、それから丸一日近くは死んだように寝ていた。　トイレに起きたり、水を飲んだりと行動し始めたのは戻ってから二日目に成ってからだろう。

結局、Kに全員で揃って質問が出来るように成ったのは、三日目の

昼も遅い頃である。　クローリア・ロイム・スティールの疲労度が、かなりの酷さだったのだ。

ま。　ウィリアムやアクトルなどからは、スティールの疲労度は、自分達も味わった無駄な疲労度の裏返しだと思っていたが。

全身筋肉痛が残る皆だが、結果報告もあるので、翌日の朝には旅立とうと思い。　Kに、その旨を告げる。

食欲の無いスティールは、痩せてげんなりしている。

「気晴らしに、外で食うか？」

Kが、曇り空の下で全員を誘って食べに出た。　行った先は、大衆的な食堂だが。　スティール好みのウエイトレスが一杯居る。　短いタイトなスカートに、白いYシャツやらブラウスを着た若い女性中心である。

「う～む。　長居しよう」

突然に元気に成るスティール。

（アンタ・・・昨日まで、死にそうって管巻いてたでしょうが・・・）

ウィリアムは、ゲンキン過ぎる生態を見せる男に呆れしか出なかった。

だが、Kも、自分達の案内に来るウエイトレスの若い女性に向かって。

「すまないが・・・女の子が可愛いから長居したい。　窓側の席で、五人座れるテーブルは空いているかな。　奥で構わない」

と。

「まぁ・・・」

クローリアが、ダイレクトに言うので驚いた。

「はい、畏まりました。　此方へどうぞ」

流石に、女性のウェイトレスも慣れた受け答えで笑って案内してくれる。

「アンタ・・・やるねえ」

スティールがそう言うと、Kは口元を微笑ませて。

「代弁したまでよ」

と、ウェイトレスの後を着いていく。

六人が案内されたのは、大きな六角形の黒いテーブル。　窓側で、一番奥の仕切りの中に囲まれた席だった。

（うおおおおおおーーーーーーいっ！！！！！　女の子が見えねーーーーーっ！！！！）

スティールは、怒りを目に表すも。

「ど～やら、敬遠されたようだな」

Kは、包帯顔の自分が嫌われたと確信した。　だが、口調はあっけらかんとした物である。

ブツブツ文句を言うスティールに対して、アクトルは。

「ま、話は色々在る。　周りを気にしなくていいからいいんじゃ～ないか」

と、席に着いた。

さて、注文を終えて。

スティールは、大きなガラス窓のお陰で、裏通りの別の飲食店が道を越えた向かいに見えているのを眺めながら。

「とにかく、一体どうなってんだ？　一体・・・何が起こったんだ？」

Kは、水をコップで飲みながら。　窓越しに歩く若い冒険者風体の女性の集まりを眺めて。

「何が？」

スティールは、ムキになり。

「あの爺さんの事だ。　魂は永遠に消滅しないで苦悩するはずだったんだろうがっ。　・・・しかも・・・美人の五百年以上前に死ん

だ女が迎えにくるし・・・。　サッパリ解らない」

クローリアも。

「お迎えに来たのは確かですわ・・。　でも、何故にクラウディアさんが・・・現れたのか。　有り得ません。　神のお導きでも有ったのとしか思われません」

中でウィリアムは、思い出して。

「確か、ケイさんは言ってましたね。“ティエスゲート”と・・・」

包帯男は、水のお替りを自分で注ぎながら。

「ああ、そうだ。　だが、奇跡を起こしたのは君達だ。　オルロックでも、クラウディアでも無い。　まして、暗黒魔法を嫌う神が・・・オルロックの魂を導く訳が無いね。　何せ・・・オルロック氏は人殺しだもの。　俺も同様だが・・・天に召されるなんて・・有り得ないな」

ウィリアム達は、その話に動揺した。　クラウディアの記憶の映像では、オルロックはそんな野蛮な人物には見えなったからだ。

スティールは、一気に冷めていく自分の気持ちを感じながら。

「ど・どうゆうこと?」

Kは、窓に眼を向けながら。

「オルロック氏は・・・自分の父親を殺してる。　自分自身でな」

皆、お互いで見合った。　あの謙虚なシルエット画のオルロック氏が、殺人だなんて有り得ない。

「嘘でしょ？」

ロイムは、縋る様に聞き返した。

Kは、眼の前のアクトルを見ないで、ガラス越しの通りを行き交う人々を見ながら、遠い誰かに語る様に話を続けた。

「オルロック氏・・・いや、もう呼び捨てでいいか。　彼は、東に在る大陸の、最も南に位置する国の辺境で生まれた。　家は貧しく、オルロックの母親は病弱で・・・父親は酒ばかり呑む乱暴者だったそうだ。　毎日酒を飲み、騒ぎ暴れる父親と、オルロックを必死で守る母親・オルロックの父方の祖母を・・・彼は見ながら育ったとさ。　小さい畑・・・僅かな家畜・・・。　収入も僅かなのに家の食事の金すらも手を付けて呑み、暴れる父親にオルロックは何度も暴行を受けて来た」

スティールは、呑んだくれの父親だったが。　優しくはあった自分の父を思うと、信じられないと感じ。

「・・・酷ぇ～話だな」

「だな。　だが、問題は・・・、オルロックに魔法の才が有ると解った事だ。　当時、魔法の力を持てる者は権威を示せる。　父親は、魔法学院に入学する事が決まったオルロックの十一歳の時。　後で息子が返すと・・・方々から借金をし始めた。　自分の酒・・・遊

び・・女の為にな。　遂に父親と、残りの家族との間で諍いが起こり。　病弱の母親を殴る父親に我慢出来ずに・・・、オルロックは農作業に使うフォークで・・・・殺した」

クローリアは、自分の父親の事が有るだけに何も言えなくなった。

ウィリアムは、なんとなくオルロックと云う人物があの当時で目立たなく生きてきた理由が解りだした。

「そうか・・・。　幾ら人相が悪いと言っても、何か凄く暗い影を感じましたが・・・それか・・・」

Kは、紅茶や料理が運ばれて来ると、ウェイトレスが去るまで黙り。

居なくなると話を続けた。

「オルロックと云う人物は、見てのあの通り人相が悪い。　父親の影響から、周りの人には“悪人が生まれた”と言われていたからしいからな。　しかも、オルロックの殺人を母親が庇い・・・命を絶っている」

スティール、目の前に運ばれたチーズドリアの匂いが美味しそうに感じられなくなった。

「救いもヘッタクレも無い運命だわな～・・・。　切ない・・・」

「そうだ。　だから、必死で努力した。　自分の才能を極限まで高め、罪無き人を救う事に人生を奉げ出した・・・。　自らの罪を、償う形でな。　十八歳で学院を卒業。　二十二歳まで冒険者をして一流の魔法使いに成った。　二十五歳で、学院の講師に乞われて働き出した。　だが、世界の各地で災害が出れば、自から無償の奉仕

活動に行き。　当時の戦争が有った際に出た難民を救うべく、過疎化した町や村に移住を勧める活動もやっていたらしい」

アクトルは、感心した。

「聖人・・偉人じゃないか・・・」

「うん。　だが、当時の魔法遣い達には売名行為とか言われて、名声の広がりを阻害されている。　三十五で、副学長に就任。　マジックモニュメントの基礎魔術の構築、幻惑魔術の医療への利用の模索、人里に進出してきたモンスターの大討伐など・・・功績は輝かしいが。　手柄は、周りの人々が奪っていった。　ま、マジックモニュメントの魔術だけは、彼の頭脳があっての事。　魔力の質の才能からして彼を超えられる何者も居なかったから、誰も技術を完璧に奪えなかった。　だから、彼が第一人者として認められただけだ。　彼自身、自分の生み出した技術で生んだ財で人助けしかして来なかったから・・・。　恐らくは、富も名声もどうでも良かったのだろうな・・」

ウィリアムは、寂しすぎる話に。

「生まれながらの隠者・・・ですね」

「正しく、その通り。　んで、オルロックは、自分の過去があるから女性は欲しなかった。　人相からも、生き方からも女性を寄せ付ける生き方じゃ～ないから・・・相手にされなかった。　しかし、だ。　五十八歳の時、学長に就任して十年目の頃だ。　火山活動で噴火した山の麓に有った町が燃え尽きた災害があったらしい」

ロイムが、ハッとして。

「あの・・・画板（キャンバス）に有った記憶だ・・」

「ああ・・。　まさか、俺もあの場でクラウディアに逢って居るとは思わなかったがな。　オルロックの記憶では、其処で出た大量の難民を、魔法学院自治領カクトノーズの土地の一部に入植させ。他に受け入れた難民などと合わせて町を作ったそうだ。　その町では、今でも農業・畜産・希少金属の発掘で栄えてる」

ロイムは、学院に食料を卸す町が在るのを思い出した。

「あ・・・クアドルの町の事だ・・・」

クローリアも、学院に居ただけに知っていたから頷く。

スティールは、俯いて。

「もう・・・いいだろう・・・償いも。　可愛そうになってきた・・・」

Kは、カップを手に取ると。

「だが、その直後。　初めて、彼は恋をする。　同じ学院の講師に成った三十前の女性だ」

スティールは、ガバッと座りなおし。

「マジ・・・？」

「ああ。　向こうも、オルロックの事を慕って居たからな。　まん

ざらでも無かった・・・。　だが、な。　オルロックは、貧しい平民。　相手のお嬢さんは、貴族の出身だ。　しかも、オルロックとは別に、その女性に好意を抱いていたのが副学長の息子で、学院運営職員に成ったエリート魔術師。　約束された幸せの出来る向こうと。　学院長でありながら殆どの財力全ても貧しい人に分けて、みすぼらしいローブで居るオルロック。　彼は、人生の天秤に双方を掛けて考えた・・・彼女の幸せを思うからこそ、結局は彼女を抱きしめられなかった」

スティールは、難しい顔で。

「まさか・・・逃げたのか？」

「似たような所さ。　恋した彼女の家は、斜陽の貴族家。　彼女が誰と結婚すれば、一族が幸せになるか・・・オルロックは解っていた。　だから・・・彼が、恋した女性に好意を告げられると、説得した。　彼女に好意を寄せるエリート魔術師を勧めたんだ。　俺が見るに、あのオルロックは・・・自分の過去の罪を再認識していた。　そして、恋した女性の一生を・・・ただただ・・・考えてた。　だから・・・その一年後、副学長に後を譲って、まだ勤められたのに学長を退いた。　好きに成った女性の傍に居れば、相手も踏ん切りが付かないだろうから。　副学長を学院長にしてしまえば、息子はトントン拍子でエリートコースを歩き出す。　そうすれば・・・彼女も自然と向こうを選ぶと・・・解っていたのさ」

スティールは、酒が欲しくなった。

「かぁ～・・・、惚れた女の幸せの為に全て投げ捨てるかよ・・・。　男だね・・・不器用な男だぁぁ～」

ウィリアムは、クラウディアとオルロックの魂が出逢った事を思い出し。

「最後の最後で、救われた訳ですね」

と、冷めたピラフをスプーンで掬ってみた。

クローリアは、あのクラウディアの現れた光景が瞼に焼き付いている。　目を瞑れば思い出せる。

「オルロック様は・・・御自分の罪を知り抜いて御心を凍らせましたのに・・・。　クラウディアさんは、その凍て付いた御心を溶かしたんですわ・・。　隠遁生活に入り、閉ざしたはずの御心が、開かれたんですね」

Kは、静かになった皆を見て。

「君達は、クラウディアの心が宿った物を持ち帰った。　衣服・・・スケッチ・メモリー・そして・・指輪。　クラウディアの遺体は、オルロックが埋葬の時に、後悔と愛情の念から結界の中に埋めてしまったから・・・時間が止まっていたんだ。　魂が引き止められていた所に、思いを宿した物が集まり。　死ぬ間際に繋ぎ合った絆が目覚めたんだよ。　クラウディアも、オルロックの事を残して死ぬ事が不安で堪らなかったんだろう。　更に、留まった彼女の魂が、自身の愛情で守られてモンスター化しなかった」

ウィリアムは、Kに訪ねる。

「では、想いが集まり魂を具現化させたのですね？」

「そうだ。　普通は、あの姿は亡霊が本当の心を取り戻した時だけ見られる現象なんだが。　霊魂がモンスター化もしないで具現化するなんて、そうそう有り得る事じゃ無い。　いい仕事したな、最高の出来だと思うぜ。　俺は、な」

ウィリアムは、不安な顔でKを見ると。

「しかし・・・マジックモニュメントをそのままに・・・しました。　誰にも、触れられないように。　間違っていますか・・・俺は？」

包帯男Kは、ウィリアムを脇目に見る。

ウィリアムは、Kを見つめた。

Kは、僅かに笑って。

「いや。　多分、あれでいい。　二人の思い出の場所だ。　結界の魔法が消えて、全てが朽ちて消えるまでそのままにしとけって事よ。　人の幸せを邪魔する奴は、馬に蹴られて死んじまえってか。　あははは」

Kの言葉は、不安も安心も与える。　ウィリアムは、目の前で笑いながら食べ始めるKに、何かとても安心を覚えた。

夕方の暗くなった横道を眺めながら、一行は冷たくなった食事をワイワイガヤガヤと食べ始める。

皆、何かスッキリした思いがしていた・・・。

ーーー

この男は、魔法学院の理事の一人である。　名前は、イクテラ。

若い魔術師の一人が、場を和ませようと。

「イクテラ様、昔の学長であったオルロック様のお屋敷をどうする気なのですか？」

すると、家柄と魔術の使えるのを鼻に掛けているイクラテは、ニヤニヤして。

「あの大魔法遣いの家がどんなか・・・見てみたい。　何か、残した物でもあるのなら貰って行く。　調査の名目を頂いたからな、見つけたものは私のものだ。　あははは・・・・」

下世話な笑い方である。

若い魔術師達は、閉口してしまった。

だが・・・。　イクラテの姿は、此処で消息を絶つ。

下見の調査で行かせた魔術師達は、イクラテ以外は崖の外に投げ出されて大怪我して戻って来たのだが・・・。　イクラテ本人だけは、戻らなかった。

誰も知らない事だが。　マジックモニュメントは、生きている。

悪意に満ちた者が侵入したら・・・、本人の感情を読み取るのだそうな。　そう・・・侵入者対策の魔法なのである。　最もの基本は、侵入者に悪意があるかどうか・・・。　悪意のある者に答えを用意するほど・・・マジックモニュメントは甘くないのであった。

だが・・・。　一方で。

薬草採りに孫を連れて入った狩人は、孫が途中から変な事を言うのが気に成ったと云う。

「おじ～ちゃん。　森のかみさまって二人居るんだね。　キレイなおね～ちゃんと、笑ってるおじ～ちゃん。　おともだちになれるかなぁ～」

（はて・・・そんな話在ったかな？）

狩人は、意味が解らなかった。

second episode2 導かれし魂（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

一気に、夜中から書き上げて眠いです＾＾；

今回の内容は、殆どブラッシュアップせずに、ン年前。物語を書き出した頃のままに、原稿通り載せてしまいました＾＾

ま、長たらしい話ですが、読んで頂けたら嬉しいです＾＾

次号からは、ウィリアム編の継続で、スティールの恋物語です＾＾

（有り得ないかな＾＾；）

ご愛読、ありがとうございました＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　人の出会いは糾える縄のように・・・

１０、別れと出会い。

朝、曇り空。　朝露に濡れたワダルの町。

宿を出たウィリアム一行と、Ｋが人気のまだ少ない石畳の路上にて向かい合っている。

「ケイさん、ありがとうございました」

頭を下げるウィリアムやロイム。　Ｋは、首都のアクストムへと向かうらしい。　だから、此処でお別れである。

包帯男は、やや斜め立ちでウィリアム達を見ながら。

「ああ。　チームの名前が売れるのは早そうだ。　ま、ガンバレ」

スティールは、約束を思い出し。

「本当に行っちまうの？　呑みに一緒に行くって約束したろ？」

Ｋは、口元にニヒルな笑みを作り。

「次に逢う時、思い出したら奢って貰おうか」

と、踵を返して背を向けてくる。

「さようならっ」

ロイムとクローリアが手を振る。

ウィリアムは、一言だけ。

「また、何時かっ」

Kは、サラリと左手を上げるだけだった。

アクトルは、その強さながらに無名のままで居る事を貫くKの去ってゆく姿に。

「不思議な人も居るものだ・・・。　あんなに強いのになぁ～」

スティールは、白けた頷きと一緒に。

「もう、上は十分見たからじゃ～ないか？　あのレベルなんて、今の有名なチームを引っ掻き集めても一人として居ね～べさ」

「だな」

五人は、痛む身体をKの行った方向とは逆に向けた。　報告が待っている。

ワダルからアハメイルまで、ウィリアムは四日を掛けて戻る。　初夏の陽気ながら、多雨な季節でもあり。　曇り空と晴れ間の交互を

繰り返すのだが・・・。

「あ～あ、こりゃ～明日は雨だな」

スティールは、アハメイルへの城塞門（北門）を潜る時、何台もの馬車が行き交うのを横にしながら言う。　曇り空の色が芳しくないからだろう。

夕方、四日掛けて着いた交易大都市アハメイルの空模様は、どんよりとした曇天。　何時、雨が降ってもおかしくない天候である。

「帰って来たな～」

アクトルは、賑やかな都市のざわめきを聞いて懐かしい感覚だった。

五人は、丁度都市の城塞門から入って、最初の大道路まで来る。　幅、十五メートルの直線の石畳のこの通りが。　東西の長さ二十三キロに及ぶ巨大都市を右から左にまで貫く道路で。　通称が“中心道路”とか、“大道”と云われる。

曇りの夕方ながら、往来している人・馬車は多く引っ切り無し。　この通りだけは、日中のみに限って国営の駅馬車が往来している。　無賃馬車で、従来の乗り込む馬車を乗り込むだけの長い物に改良した特殊馬車である。

さて、ウィリアム達は、戻った足で斡旋所に直行した。

暮れなずむ夕方の通りは、この仕事を請けに来た時と同じである。　歓楽街の一角に、バニースーツを来た女性が御持て成ししてくれる飲み屋の地下に協力会は在るのだ。　“ダンス・カエサール”と

云う名の横に長い看板には、キワドイ衣装の踊り子の絵が描かれ、ウィンクして来る客を見下ろす。

「う～ん・・・何度見ても・・ただのパブだね」

ウィリアムは、冷静な言い方・姿で店構えを見る。

スティールは、建物を見るに。

「ううう・・・借金返すまでお預けだぜハニー・・・・・」

と、泣いていた。

「あほ～」

と、アクトル。

「どあほ～」

と、ロイム。

何も言えない顔を赤らめるクローリア。　話では、一年以上もこう云った店で働いていた経歴のクローリアだが。　実際の言動は若々しい厳粛な女性そのものである。

ウィリアムは、階段を上がって入り口のガラス戸に向かった。　八枚並んだガラス戸。　中央付近から入れば、パブに向かう直線廊下が伸びる。　左右の端から入れば、目の前に地下へ下りる階段が“あんぐり”と口を開けている訳だ。

「この階段って、暗いですよねぇ」

ウィリアムは、降りてゆく。

「ああ・・・たま～にカツアゲしてるアホが居る」

と、スティールは呆れた口調で。

アクトルも。

「あん時、俺見てビビって逃げたな、あいつ等」

ロイムは、何度か遭って居るだけに。

「犯罪はんた～い・・・弱いもの虐めはんた～い」

クローリアは、うんうん頷いている。

降りた踊り場の天井には、薄暗いガラスランプが灯っている。　目の前には、重厚なマットを表に貼り付けたような扉が合わせ扉で見えている。

ウィリアムが扉を開けば・・・。　一気に活気が溢れる雑踏のざわめきが出迎える。

「外とギャップ有り過ぎですね」

かなり広いダンスホールの様だ。　天井には、煌びやかなシャンデリアが幾つも輝きを落とす。　床には赤い絨毯が敷かれて、緩やかに入り口から斜めに下った所から、少し間を置いてまばらに座って

語れるテーブルがあちこちに。　椅子は、白いクラシカルな木製の品だ。　使われていない椅子やテーブルは左の奥に纏められている。

「ほ～・・今日は何時もより多いな」

「だな」

スティールが、立ち話や座って話している冒険者達の数をパッと見ても、多いと感じられるのは一目瞭然だった。　アクトルも、確かにと同意。

ウィリアムは、冒険者達の成りを見て。

「どうやら、仕事から帰って来たばかりの方々が多い様ですね・・。向こうの方、怪我してますし・・」

スティールは、右の二つテーブルを行った所で、前に絡んできたアジェンテと云う名前の女性冒険者を見つける。　鞭を腰に備えた色気の多いチームリーダーだ。　学者であり、鞭使い。　ウィリアム程ではないが、知識はまあまあ広い。

「アーク、アジェンテが居るぜ。　なんか、随分と沈んでる」

「ン？　ああ・・マジだな・・。　どうした、あの自信家さんがよぉ」

「行ってみるか」

スティールは、歩いて行く。　後から、ウィリアムも続いた。

（あら・・・）

近づくと。　スティールは、チームのメンバーが足りないのに気付く。

アジェンテの座る手前のテーブルを越えた所で。

「おい、アジェンテ」

スティールが声を出す。

「え？　あっ」

アジェンテは、スティールを見て驚いた顔をする。

「なんだよ。　俺なんか見てそんな衝撃を受けるのかよ」

スティールは、アジェンテ達が座るテーブルの前に来て、生気の無いメンバーを見回した。　戦士でハンマー使いの男は、顔に真新しい斬り傷を作っている。　魔術師の中年男は、杖を本当に杖代わりにしている様子。　女性の剣士は、長い髪だったのが短くなっている。　五人居たチームの一人で、スティールも良く知る僧侶の年配者が居ない。

「アレ、グリッドは？　腰痛とか？」

スティールは、冗談交じりで見回すも。

アジェンテは、暗い顔で俯く。

「死んだわ・・・グリッド・・・」

スティールは、パッと真顔に成ってアジェンテの脇に屈んだ。

「しっ・死んだって・・・どうした?」

アジェンテは、唇を噛む。

戦士のモヒカン頭で小太り男が、スティールに。

「仕事を請けたんだが・・・相手に返り討ちに遭ってな。　俺達を逃がして、グリッドは死んだ・・・」

アクトルは、嘗ては一・二度組んだ事があるグリッドなだけに。

「誰に殺られた?」

女性剣士は、涙ぐんで。

「最近・・・この辺の町や村を荒らしまわってる強盗団だよ。　話には四・五人の盗賊だって言ってたのに・・・。　相手は冒険者崩れだよ。　魔法遣いも・・戦士も居た。　それに、手下仲間も十人以上居た・・・。　ああっ・・・アタイがヘマしなかったら・・・グリッドは死ななかったっ」

アジェンテは、苦し紛れの様に。

「アイル・・・自分を責めないで。　ヘマしたのは、皆同じさ・・」

ウィリアムは、アジェンテに思ったままに。

「良く、皆さんは助かりましたね。　誰か、助けが来たんですか？」

魔術師の中年男性が頷き。

「ああ・・・。　遠近で暴れる強盗団を討伐して回っていたリオン王子が、軍隊の一団と共に助けに来てくれた・・・。　寺院にグリッドを運んで貰ったんだが・・・。　手遅れだったよ」

クローリアは、戦士の男性に歩み寄り。

「恐れながら、お怪我を治してもいいですか？」

「あ・・・すっすまない」

クローリアの影差した微笑は、なんとも不思議な色気が漂う。　戦士の男性は、胸元の張りが豊かなクローリアに緊張した。

魔術師の男性も、足を酷く怪我していた。　クローリアは、彼も治す。

アジェンテは、クローリアに礼を言ってから、スティールを見上げて。

「強盗団の下っ端は、リオン王子達が殲滅した。　でもっ、肝心なグリッドを刺したリーダー格の男は、仲間と逃げたっ・・・。　何時か敵を取るっ！」

と、憎しみの篭った怒りの目を見せる。

スティールは、頷くと。

「先ずは、休め。　どうせ、直ぐに同じ仕事を請けれる訳は無い。　下っ端の殲滅だけでもいい成果になるさ。　もう少し、実力付けろよ」

と、立ち上がった。

アジェンテは、つい先日まで下に見ていたスティールに言われて複雑な気持ちである。

「・・・そっちは？」

スティールは、急に言われて。

「ア？」

アジェンテは、呆れの溜息をして。

「上級の仕事を請けたんでしょ？」

「あああ・・・こっちの事か。　ま～・・・成功かな」

アクトルは、ウィリアムに催促を見せてから。

「成功かどうか、これから判断して貰う所さ。　今日、今さっきに戻って来たんだ」

頷くアジェンテは、スティールに。

「成功だといいわね」

と、言ってからクローリアに。

「傷の手当、本当にありがとう」

クローリアは、頷き返して。

「いえ、御気に為さらずに。　お亡くなりに為った同胞に、お悔やみを送ります」

ウィリアムは、無言で奥のカウンターに向かった。

何チームか、半円のカジノのディーラー席の様なカウンター前に集まっている。　次々と、仕事を請けている冒険者達。　この斡旋所では、カウンター脇に備わっているファイリングされた戸棚の回覧板で今在る仕事を確かめて、その回覧板を持って行く形だ。

さて、ウィリアム達の番になり、カウンターのベストにYシャツを着たダンディーな受付の男性と顔を合わせると・・。

「ン？　お前達は、地下だろう。　こっちで一々アポしなくてもいいぞ。　いきな」

ウィリアムは、一礼するのみ。

スティールは、アクトルを見て。

「やっぱ・・・俺達ってランク上なんだな・・・。　未だに信じら

れねえ～よ、アーク」

「確かにな」

五人で、右脇の白い扉に向かうウィリアム達。

「おいおい・・・アイツ等・・」

「マジかよ・・下に行く奴初めて見た」

「おい、アレって・・アクトルとスティールじゃないか？　あの二人に、下に行く頭があったっけ？」

「いや、あのリーダーだよ。　コンコース島で、凄い活躍だったらしいぜ。　難しい薬草採取も一日でやったらしいし。　突発で起こった殺人事件を解決して、その上に盗品の密売組織を摘発だとさ」

「へぇ～、あの若さでか？　丸で、“ホールグラス”のリーダーのポリアみたいじゃないか」

「おいおい、“蒼風のポリア”だけじゃない。　わが国には、リファランスが居るだろう？　チーム“スターダスト”のリーダーだ」

遠目で見る冒険者達が、ウィリアム達を肴に話を盛り上げる。　賑やかさが一気に増した広間をウィリアム達は去った。

ーーー

「ふむ・・・協力者が居られましたか・・・」

地下二階、ムード感漂うクラッシクな高級バーラウンジと勘違いしそうな様相の間。　赤いソファーに腰掛けるウィリアム達。　皆を前にして、一人用のチェアーに腰掛ける斡旋所の主である初老の紳士は、細いチェーンの付いた片目のアクセサリー眼鏡モノクルを着けている。

ロイムの差し出した記憶の石を回想して見ているのだ。

ウィリアムは。

「包帯を顔に巻いた男性で、ケイさんと云う方ですが。　マジックモニュメントの情報を頂きました」

初老の紳士は、目を瞑ったままに頷き。

「そのようですね。　しかし、君は大したものですね。　マジックモニュメントを、略、自力で脱出して来た・・・。　しかも、“運命の選択”をこんな遣り方で切り抜けた冒険者は初めて見ましたよ・・・。　ほう・・・あのオルロック氏の過去が・・・このような・・・」

ウィリアム以外の面々は、黙って紳士の様子を見ていた。

そして、記憶を見終わった紳士は、穏やかに目を開いてウィリアム

を見ると。

「素晴らしい・・・実に素晴らしい・・・。　私の目に狂いは無かった。　この内容なら、基本報酬は満額。　追加報酬も満額出しましょう」

スティールは、ロイムやアクトルと見合って。

「やったっ」

と、小さくガッツポーズを。

ウィリアムは、持ち帰った杖とローブの鑑定、そしてクローリアのメンバー加入を頼んだ。

初老の紳士は、頷く。

「了解致しました。　報酬は今払いますが。　鑑定は三日程のお時間を頂きますよ。　もし、通常ルートで売却するなら、十日後のオークションに出展しては如何かな？」

ウィリアムは、笑って頷く。

そう、これが望ましい売り方だ。

老紳士は、スティールを意味深に見て。

「仲介料も取られるが、オークションでも五万シフォン以上は貰えるはずだ。　一気に、大きく返済出来そうですな」

スティールは、“五万シフォン”と聞いて顎が外れそうに為った。

「ごっ・・ごごご・・ごま・・・ごご・・・ごま・・」

ロイムも驚いて。

「凄い・・・一気に五万・・・。　借金無かったら、一人一万・・・・あわあわあわあわあわああ」

一万シフォンなど、一家五人家族が数年は裕福に暮らせる額である。

クローリアも、目を白黒させて驚いていた。

さて、報酬を支払った老紳士は、アクトルを見て。

「そう言えば、アクトル殿」

「え？　ああ・・なんだ？」

老紳士は、微笑んで。

「貴方にお客が在りましたぞ。　コンコースの方からいらっしゃったオロス様と云う大商人です。　何か、重要なお話が在るとかで、此方の宿にお越しくださいとの事です。　来たのは、昨日・・・でしたかな？」

と、メモされた紙を渡す。

ウィリアムは、バッと壁にへばり付いて。　恐怖に慄く顔で震える。

「ク・・・クリスフィだ・・、絶対にクリスフィが居るっ。　自分は遠慮します。　あ・ああアクトルさんだけで行ってください。見送る時だけで、おっおお俺達は十分なハズですよ・・」

スティールは細めた目で、アクトルを見ると。

「ほぇ～。　彼女が追っかけかぁ～・・・。　いいなぁ～」

アクトルは、顔を真っ赤にして。

「まっまだわかんねえだろうがっ。　勝手に決めるなっ！！」

だが、メモには“アクトル殿だけでも結構”と書かれている。

こうして、アクトルとウィリアム一行は別れる事に。　スティール行き付けの宿に泊まると言うので、合流に困る事は無くなった。

地下一階の冒険者達が集合している広間に戻る一行。

アクトルは、先に出て行く。

冒険者達が、あちこちで集まる中に紛れて見ているスティールは、

「お～お～、いそいそと出かけて行きやがったよぉ」

と、からかい目でアクトルを見送る。

其処へ。

「あら？　クローリア・・・？」

と、女性の声が。

「むっ？」

色っぽい声に、スティールは、クローリア以上に早く反応する。

「あ・・・シュレーラさん。　その節は、ありがとうございます」

クローリアは、振り返った目の前に立っている魔法遣いの女性を見て頭を下げる。

顔に赤・青・緑の化粧でラインを引いた女性だ。　青紫のローブに身を包むのだが。　ローブは胸開き、股の前も全開でスリットが入るエロッチックな物だ。　一応、ローブの下には、上着のややだらしなさそうに見せて着るピンクのブラウス、下には極ミニの黒いスカートを穿いているが。　生足は見え見えである。　右手に杖を持っていた。

スティールは、キザに前髪を掻きあげて。

「これは美しいお嬢さんだ。　シュレーラ・・・運命を感じる名前だね」

ウィリアム・ロイムは目が点になってポカ～ンとした。

クローリアも、苦笑と冷や汗で苦笑いしながらに。

「な・・仲間のスティールさんです」

シュレーラと云う女性魔術師は、弛んだ目でスティールを見て。

「あら、お上手なお兄さんだ事。　私、クローリアの知人でシュレーラ・エスマティア。　精霊魔術師よぉ・・・ヨ・ロ・シ・ク」

と、態と前屈みの挨拶で胸元を丸見えに。

スティールは、微笑むままに。

「シュレーラさんは、何処かのチームに？　もし、お暇なら、一緒に宿で仲間と飲みませんか」

ロイムは、目が点のままに。

「あ～あ・・・口説きモードに入っちゃった・・・」

ウィリアムも、目が点のままに。

「借金返済まで、禁酒・禁女・・・しないのかな・・・・」

ロイムは、呆れるままに。

「さあ・・・無理じゃない？　あの人には・・・」

「かもねぇ・・・」

そんな二人の目の前で、

「まさか・・・呑み代は奢って下さるとか？」

と、シュレーラが下手に聞けば。

「フッ、男が出すのは当然、自然の摂理ですよ」

と、スティールが言う。

ウィリアムは、もう呆れて顔に右手をやり。

「あちゃ～・・・マジかぁ～。　摂理なのは呑んだ後の事じゃんか～」

ロイムは、顔を真っ赤にして。

「あああああ・・・後って・・・・・寝室行為・・・」

ウィリアムは、ロイムをパッと見て。

「うわ～ぉ、ダイレクトだね・・・ロイム」

ロイムは、近くの二・三人の冒険者に見られてハッと顔を赤らめる。

「あんぐぐ・・・」

自分で自分の口を塞いだ。

ーーー

さて。　シュレーラは、チームのリーダーである。　魔術師四人と、剣士、学者を加えた六人のチーム“ムーンライト”。　東の大陸から、クローリアと一緒に北の大陸である此処に渡って来たらしい。

クローリアと話が合ったのも確かだが。　クローリアに付き纏っていたあの冒険者達を一喝して黙らせたのもシュレーラだとか。

お互いに、この都市で一仕事を終えて来たらしい。　夜の雑踏が蠢く歓楽街から、冒険談を交しながら宿に向かう皆。　総勢十人と成ったからには、それぞれ話が弾む。

だが・・・大問題が。

夜の飲食店街にまで来た頃。　スティールの脇にはウィリアムしか居ない。

「うぬぬぬ・・・なじぇ・・・なじぇだあぁぁ～・・・」

卑屈な瞳のスティール。

呆れた顔のウィリアムは、横を見ながら。

「運命的だったんでしょうなぁ～」

スティールは、クワっとウィリアムを睨む。

ウィリアムは、シレ～っと横向く。

クローリアは、シュレーラの仲間の男性剣士と女性の僧侶・魔想魔術師・学者の四人と楽しそうに話している。

その後ろには・・・・。

「へぇ～、ロイムちゃんって、凄い御仕事をして来たんだぁ～」

「うわぁ～。　ロイムちゃんってすっご～い」

シュレーラと、もう一人の女性で、自然魔法遣いの若い女性に、なんとロイムがモテて絡まれている。

「いいいいいえぇ・・・いえ・・・ぼぼぼっ僕は・・・」

顔を真っ赤に、もう略間違いなく気絶寸前であるロイム。　可愛い自然魔法遣いの女性と、エロチックなシュレーラに左右から両腕を組まれて、連れ攫われている様子と変わりない。

ウィリアムは、ロイムを薄笑い顔で見て。

「確かにロイムって、年下の可愛い男の子を好む女性にはウケる顔だもんな～。　ありゃ～二・三日はあんな感じだね」

すると・・・。　いきなり、ウィリアムの右腕に何かが絡む。

「はあ？」

見れば、スティールが腕を組んできた。

「何・・・してますの？」

ウィリアムが、逃げ腰で聞けば。　スティールは、頷いて。

「ウィリアムちゃんと明日デートしようかと思ってっ」

呆れたウィリアムは顔を左右に振って。

「お金貰っても勘弁です」

スティールは、ウィリアムに顔を寄せる。

「チョっチョット！！！！」

脅えるウィリアムに、スティールはロイムの方を見る成りに。

「負けられない戦いが此処にあるっ！！！」

「無いってっ！！！」

慌てるウィリアムに、スティールは睨む。

「あのロイムのジョノカのどっちか連れて来てっ！！！」

ウィリアムは、うんざりした顔でげんなり。

「相手に聞いてよぉ～・・・。　俺の所為じゃ無いってさぁぁ」

スティールは、下らない絡みを見せて、一行を宿屋街の一角にある

八階建ての宿に来た。　一階部分が、随分と横に広い宿屋であった。

「まあ・・・高そうな・・・」

夜の外から中に入ったシュレーラが呟く。　フロントの在るロビーに入れば、観葉植物などが壁の四隅に配され。　壁も殺風景では無いように絵が掛かっていたり、最近のニュースを紙に書いた瓦版などが張られていたりする。

スティールは、フロントに向かいながら。

「レストラン・バーラウンジ・風呂・茶店が揃ってる宿だ。　全て別料金だけど、風呂は泊まればタダ。　一泊、ノーマルなら六十五シフォン。　ハイクラス百十シフォン。　ロイヤルが二百と以外に安い」

ウィリアムは、感心。

「明日から、断続的に雨ですしね。　宿から出ないなら、最高の宿ですね」

「うんだ」

スティールは、受付に声を掛けた・・・。

その頃だ。　アクトルは、超高級宿の最上階に案内されてしまった。
　メモの名前の宿は、この都市で一番高い高層宿で、三十階にも成る。　白塗りの外見から、“ホワイトマウンテン”の愛称で呼ばれる最高級宿。

（お・・・俺が・・この宿に・・・有り得ん・・・）

精精、一泊三十から七・八十シフォンの宿に泊まっているアクトルが。　一泊五百シフォンからの宿に泊まるなど・・・。　しかも、高が宿のクセに、上下の昇降は階段以外で魔方陣床が使われている。　この宿は老舗宿でもあり、オーナーが魔法遣い一家らしいのだ。

生まれて初めて魔方陣床に乗ったアクトルは、ベルボーイに案内されて、最上階のロヤイルスィートに案内されてしまった訳だ。

大理石の乳白色の廊下を案内するベルボーイは、冒険者風情のアクトルを案内する顔を何処か怪訝な様子にしているのだが・・。　最上階は、一階層丸まるで一部屋扱いなのだろう。　廊下の突き当たりで、一つしか見えない白いドアをノックした。

「オロス様、使用人の者ですが。　案内を頼まれたアクトル様をお連れ致しましたが」

すると、

「ハイ、ありがとうございます。　中へお通し下さい」

と、クリスフィの声がする。

アクトルは、島で味わったクリスフィを思い出してしまった。

「失礼します」

アクトルが、声を出してからドアノブを押し開けば・・・、装飾麗しいティーテーブルの前に、青いドレスのクリスフィが立って居た。

「クリスフィさん・・こんばんわ・・」

アクトルが入って、ベルボーイがドアを閉めると。

「アクトル様・・・会えて嬉しいです」

クリスフィの笑顔が見れた。

（やっべえ・・・麻薬みたいだ・・・あの笑顔）

アクトルは、頭がフラフラしそうである。　辛うじて、声を絞り。

「あ・・・オロス・・さんは？」

緊張して聞けば。

「今日は、知り合いの商人の方の所にパーティーで出かけています。
多分、泊まってくると思いますわ。　さ、こちらへ。　私の寝室です」

アクトルは、もはやあがらう事など出来ないままに誘(いざな)われた・・・。

ーーー

「ばぁ～ろぉ～・・・ロイムに負けるのかおおお・・」

「はいはい・・・惜しかったですね・・」

深夜、酔いどれて居るスティールは、白くなった顔で呑む勢いが増している。

もう、全員で楽しい呑めや食べれの交わりは終わってしまった。バーラウンジでは、薄暗い店内に青い証明を入れた暈しガラスの光が良いムードを作っているのだが。　クローリアとシュレーラのチームの僧侶は、疲れとこうゆう場所を好まずに食べるだけで退散した。

ロイムは、シュレーラ達に鱈腹飲まされた挙句に寝室に連れて行かれてもう居ない。　店内に残るのは、ウィリアムとスティールのカップル。　そして、シュレーラのチームの男性剣士と、女性の学者・魔想魔術師の女性のみである。

ウィリアムは、スティールの愚痴に酔えず。　チビチビとワインを舐めている。

「カリア・・・最近、キレイになったな～」

ほろ酔いの男性剣士が、ウィリアムとスティールがストゥールで並んで呑む後ろの五人掛けのソファーシートで話掛けて居る。

「ジュナイト、お世辞で口説くならもっと強くなってから言って」

女性学者カリアは、黒いスリットが腰まで片方だけ入る長いスカートに、アクセ感覚で腰に巻く幅のある黒いベルト。　身体にピッタリフィットしている長袖のシャツと、上に羽織るカジュアルYネックの黄色い半袖シャツと云った井出達のセクシー感のある女性。長い金髪が、そそられる。

「カリア、あんまり虐めたら可哀想よ」

女性魔想魔術師のイリアは、地味な青のローブを纏う年増の女性である。　垂れ目で、やや骨張った顔の女性だ。　五人いるシュレーラのチームで、一番年齢が上だろう。　見た目でも、一番地味な女性でもありそうだ。

スティールは、シュレーラともう一人の自然魔法遣いのチェルシーが口説けなかった事で挫折していた。

さて、男性剣士ジュナイトは、カリアが退散すると云うので追い駆ける様に行く。

スティールとウィリアムは、“お休み”の挨拶を二人に交すのだが・・・。

スティールは、直ぐに呑み足りない感じで、一人にされたイリアを見ると。

「姉さん、こっちでもう少しどうだい？」

と、笑う。

イリアは、苦労の色を滲ませる皺を目じりに作って笑い。

「オバチャンの相手、してくれる訳？」

スティールは、微笑んで。

「まだそんな年でもないだろう？」

イリアは、ウィリアムとスティールの間に遣って来た。

ウィリアムは、スティールを見ないで。

（確かに、女性に優しい事・・・。　顔だけで判断してない）

と。

少し、警戒して来たイリアだが。　スティールの下らない話や。

ウィリアムが話す惚け話に笑って何時しかホンネ大会へ。

「チームの皆が若いから・・・付いて行けない時もあるのよ・・」

すると、スティールは笑い。

「ま、年齢層がバランス取れるとチームとしては有り難い限りだよな。　偏ると話合わないし」

と、同調した言い方。

ウィリアムは、横向いてボソっと。

「スティールさんは、何時も“ゴーイングマイウェイ”・・・」

イリアが、頷いて。

「そうそう、ま～頼りにもされるんだけどね。　シュレーラの派手さには、少し参っちゃう」

スティールも、考える顔して。

「確かに、あの格好はエロい・・・。　人目に付くな」

ウィリアムは、また横を向いたままでボソっと。

「スティールさんは、何時でも人目を惹きます。　船・・・爆破して沈没船にするし・・」

イリアは、スティールに顔を合わせて。

「でしょ？　化粧にお金使うから。　高額の仕事しても長く持たないわ・・・。　美容に気を使うなら、化粧が濃すぎるって～の」

スティールは、キザに考える顔をして。

「何事も、程ほどが一番だね」

ウィリアムは、ボソっと。

「借金二十万の男が何を言うの・・・」

スティールは、クワっとウィリアムを睨んで。

「お前さっきからウルセエなあっ。　何をブツブツ俺の事言ってるんだ」

ウィリアムは、横を向いて。

「さあ・・・何の話か」

イリアは、そんな二人に笑った。

「ウフフフ・・・仲がイイのね。　お二人さん」

ウィリアムは、静かに。

「腐れ縁です」

スティールは、ムキな顔で。

「お前っ、出逢ってチーム組んで一ヶ月してないぞっ。　そんなに早く腐るのかよっ」

イリアは、益々可笑しくて笑っていた。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　人の出会いは糾える縄のように・・・（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

悪天候で、異常気象が続き。　災害や農作物の影響は環境を無視した仕返しでしょうかね；＞；

買い物行っても野菜が・・・高い；＞；

貧乏人を直撃するのは勘弁して；＞；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 出会い

11、その出会いは・・・永遠の一瞬

朝まで飲んでいたウィリアムとスティール。二人、ボンヤリしながら勘定を払う。

「悪く無いッスね」

と、ウィリアム。

「ああ・・それが人生」

二人、唇にピンクのルージュを付けている。少し前に寝室に向かったイリアが、二人にキスした跡だ。笑わせて、吐き出す愚痴の相手して、イリア嬢も随分と気持ちが和らいだらしい。酔いも入ってか、優しくしてくれた。

「口説けば良かったな・・・」

スティールの戯言。

「スゲ〜。ロイムとダブルブッキング・・・。一つのチームで・・・」

ウィリアムの愚痴。

バーラウンジの出口で、二人見合う。

スティールは、少し笑った顔で。

「ウィリアム、昼過ぎから付き合えよ。　少し、散歩しようぜ」

「雨の中ですか？」

「傘を借りようぜ。　お前、まだこの大都市の散策した事にゃ～だろ？」

「確かに、にゃ～ですわ。　誰かさんが、初っ端で借金王になるんだモン」

「お前、それは直ぐ言うたらアカンて。　のんびり、男同士のおデ～トしよう」

「はいはい・・」

二人、こうして休んだ。　ロイム・ウィリアム・スティールは、一応は三人部屋で泊まる。　だが、部屋にロイムは居ない。　スティールの細めた目を見て、ウィリアムはロイムの暗い未来に哀悼の祈りを奉げた。

その頃だ。

ロイムは、・・・・・いや、辞めておこう。

（18禁じゃないから・・・・）

そして、アクトルはと云うと・・・。　いや、こっちも書けない・・。

（18禁じゃないっすよ・・・）

寝室行為もほどほどに・・・。

さて、時間は過ぎて・・・お昼頃だ。

「ふえぁ～・・・」

ふざけた欠伸のスティールと、やや眠そうな顔のウィリアムが下に降りてきた。　何も仕事をしないので。　二人、プロテクターも鎧も外している。　スティールは、Ｙネックの黒い長袖シャツ・黒い皮ズボンの姿に、剣だけ腰に下げている。　一方、ウィリアムは風呂に行って着替えたらしく。　明るい水色の長ズボンに、白いＹネックシャツを着て、何時もよりラフで若々しい。

スティールは、雨の音がする外をフロントのロビーから見て。

「お～お～、小雨ながら降ってるね」

ウィリアムは、ロイムの置手紙を見て。

「スティールさん・・・ウィリアム・・・シュレーラさんと・・」

読み上げるのだが、途中でスティールがギリっとウィリアムを睨んで。

「止め止め止めえええええっ・・・ふしだらな魔法遣いなど放って

おけっ！！！！」

ウィリアムは、メモの字を見て。

「でも、ホラ。　かなり・・・字が歪んでますゼ。　アニキ、こりゃ～事件かも」

スティールは、メモをウィリアムの手から毟り取って。

「あんなエロ魔法遣いクンなど、雨に濡れて風邪を引いてしまえばいいんだっ！！！！！」

ウィリアムは、横目でスティールを見るに。

（風邪・・・ね。　辛辣ではありませんねぇ～・・・）

ロイムとクローリアを含んだ皆は、午前中に暇潰しと勉強を兼ねて都市にある図書館に出かけたらしい。　この都市の図書館は蔵書数が世界一なのだ。　普通の図書館とは訳が違う。　行く価値は十分に有ると言えよう。

スティールは、眠そうな顔ながら宿の傘を借りて、外に出る。

ウィリアムも、後に続いた。

小雨の振る中で。　木の骨組みに皮を貼り付けた傘を差したウィリアムは、初夏の蒸し暑さを感じながら。

「スティールさん、何処に行くんです？」

スティールは、行き過ぎる客を避けて。

「そうだな、先ずは少し食べようか・・。　腹減った」

「はい。　でも、重たいのはイヤですよ。　軽めな店探しましょうよ」

「お～け～」

スティールは、港に近い宿屋街から西に向かう。　宿屋街は、なるべく道が斜めに成らない様に作られている。　四角四面に成るように区画整理がされているわけだ。

商業区の商店街・飲食店街に近づくと、雨の中ながら人の往来が激しくなった。　広い通りでは、荷馬車や馬車も頻繁に見かける。

「う～ん・・・港からの荷物は少ないみたいですね。　荷物運びがまばらです」

ウィリアムは、興味に素直で辺りを見回しながらスティールに着いて行く。

スティールとウィリアムは、宿屋街と商店街を隔てている太い通りを北に向かい。　飲食店街に向かう脇道に入った。　其処は、裏道で。　魔術に使う小鳥や不気味なアイテムを扱う暗い店が有ったり。　家庭用品の鍋や食器を扱う店が有ったり。　並ぶ店構えが小さく、傘を差して見回るに今一 の通りだ。

その道を太い通りにぶつかって、道を渡って大きい横道に向かえば。　景色は一変。　どっしりとした大きな店構えの武器防具を扱う店

が有ったり。　旅の道具を揃える店が有ったり。　様々な道具を扱う多種多様な店が溢れ出す。　人の活気と、店構えが変わって華やかさが見える。

「う～ん・・・。　こうゆう所は、コンコース島とは訳が違いますねぇ。　店の数も、規模も凄くデカイ・・・」

スティールも、女性を目で追い駆けながら。

「だろうな。　悪いが、オロスさんの店もここじゃ～中級だろう」

ウィリアムは、ズバリ。

「値段は？」

「さあ・・・店に依る」

「明日は、見るだけショッピングしてみようかな・・」

ウィリアムが店に釣られて言えば。

「フム、俺も武器を見たいね」

と、スティールが。

二人は、その道を奥まで進み、Ｙの字に分かれた道を左へ。　直ぐに、揚げ物の良い匂いが漂って来て。　飲食店街に入ったようである。

ウィリアムは、ズンズン進むスティールを脇に。

「スティールさん、帰り道は解るんですか？」

スティールは、平然と。

「いいや。　お前が迷う性質じゃ～ないし。　方角でごり押し向かえばなんとか成る」

“確かに”と、ウィリアムが思った時だ。

「あ～・・・なんか可愛い店を発見」

スティールがいきなり言うので。

「はあ？」

と、ウィリアムが返せば。

「ホラ」

道の右斜めに、宝石屋の大きな店構えの隣。　モスグリーン色の庇、白い外壁の小ぢんまりとした飲食店が有った。　入り口の周りに、花の咲いた植物を植えた鉢や長い鉢が置かれている。

「確かに・・・可愛いですね・・」

スティールは、赤い絵の具で窓のガラスに書かれた文字を読み。

「ホレ、“自然のお野菜を中心に、ヘルシーな軽食は如何？”だってよ」

ウィリアムも、お勧めの掛かれた軒下の看板を見て。

「ん～・・・トマトの絞り汁ってイイっすね」

「おし、決まりだな」

スティールは、往来の人を避けながら店に向かう。　ウィリアムも、後を追った。

木のドアが、白い壁の大窓ガラスの左に填まっているように窪んだ形で有る。　スティールが、引き戸のドアを開くと、涼やかな“リンリ～ン”と云う呼び鈴が鳴った。

「いらっしゃいませ～」

明るい弾んだ声が出迎える。

「おろ」

店に入ったスティールの前に、ウェイトレス姿の若く可愛らしさと綺麗さが折衷する女性が遣ってくる。

ウィリアムは、狭い店の出入り口でスティールが止まっているで。

「スティールさん、進んで」

と、言うのだが・・・。

「いらっしゃいませ～、何名様ですか？」

ウェイトレスの女性のハッキリとした耳に心地よい声だ。

「フッ」

スティールは、前髪を掻きあげて。

「二人だ」

キザったらしい格好で言う。

ウィリアムは、それを後ろから見ていて。

（始まったよ・・・女の子が可愛いのね・・）

と、早速無視の領域である。

しかし、女性は二十そこそこだろうが、営業スマイルでスティールに笑って。

「畏まりました～。　此方へどうぞ」

と、二人を案内する。　店の中央で、一番お客に囲まれる席だった。
店の中でも一番サイズの小さいテーブルで、二人が向かい合って座る席。

「メニューは此処に置きます。　決まったら呼んで下さいね」

スティールは、頷いて。

「ありがとう」

と、微笑んで返す。

ウィリアムは、クルリと辺りを見回して。

「随分と女性の多い店ですね。　カップルか、女性同士ばっかり」

スティールは、聞いていないのか。　チラリとコッチを見た若いお客の娘さんに、キザでニヒルな笑いを見せた。

「キャ・・・笑われちゃった・・・」

斜め先の二人席で、友達と来たらしい若い女性が照れて顔を逸らす。

すると、別の席の女性の集まりが、ウィリアムとスティールを見て。

「ねえ・・・あの席の二人って格好良くない？」

「え？　あ～・・・でも、冒険者みたいじゃん」

「う～ん、私は灰色の髪の方がいいかな～・・」

ヒソヒソと、アレコレ話に花を咲かせる。

スティールは、少し前に寄り。

「ウィリアム、お前も少しは女の子に笑え。　いっつも済ましてちゃ勿体無い。　向こうにその気があるならチャンスだぞ」

ウィリアムは、全くその気も無いと顔に出して。

「恋愛伝道師のスティール様の様には出来ましぇん。　俺は、待ちで行きますわ」

「かあぁ～・・・ンな甘ったれた事でど～するよ」

ウィリアムは、薄い木の板に書かれた“本日のお勧めメニュー”と、店内の壁に貼られた通常メニューを見て。

「さて、どうします？」

スティールには、頻繁に自分よりウィリアムを見ている若い女性が居るのを確認するに。

「あのな～、ウィリアムちゃん。　お前、案外イイのよ～。　格好イイっ、どぉ？　俺に弟子入りしない？　口説き方のアレコレ伝授するよ。　もち、ロハロハで」

ウィリアムは、もう注文を決めて。

「け～っこうです。　さ、俺は決まりましたよ」

すると、スティールは片手を上げて、“パチン”と指を鳴らして合図する。

三人くらいは働くウェイトレスが居る中で、自分達を案内したあの若い女性がやってきた。

「お決まりですか？」

ウィリアムは、早々に注文。　すると、スティールは、いきなり今日の人気のある注文を逆に聞く。　軽い冗談交じりで聞けば、相手のウェイトレスも笑って返す。　ミックスする果汁や野菜の絞り汁のお勧めを聞いて、スティールは楽しく注文を決めた。

ウェイトレスが行って、スティールはウィリアムに笑いながら。

「手は握れそうだよね」

呆れるウィリアムは横向いて。

「さぁ～。　火傷は一人でお願いしますよ」

「お前、そりゃ～つれない話だよ。　いいじゃ～ないの。　一発や二発の火傷くらいは」

のんびり話していれば、先にウィリアムの頼んだ野菜の絞り汁と、スティールの頼んだサラダが来て。　食べていれば、次々と。　軽く頼んだ物を食べ終わるのに、小一時。

スマートで、何処か凛としたウィリアムの整った顔は、スティールから見ても悪く無い。　その証拠に、新しくチームに加わったクローリアは、ウィリアムには感情が豊かだ。　そして、この店の中でも、冒険者の洋装を解いたウィリアムをチラ見する若い女性はチラホラ。

「ふう。　結構、量が有ったな」

食べ疲れた様子のスティール。

「ですね。　食べ甲斐は有りましたね」

二人、水を飲んで勘定を払うべく店の出入り口に向かう。

「ありがとうございました～。　またいらっしゃいませ～」

同じ女性の声を背中に、二人して外に出た。

「あら・・雨が」

スティールは、外に出ると雨が止んでいるのに気付く。

ウィリアムは、生暖かい風を感じて空を見上げ。

「まだ降りますよ。　明日の日中は晴れ間も有りましょうが・・・、夜はまた雨ですね」

スティールは、毎日の天気を予測するウィリアムを細めた目で見て。

「アンタ・・・何モンじゃ」

ウィリアムは、あえて返答に触れず。　さらに、飲食店街の奥へ歩き出した。　曇り空の日の光を見ても、まだ夕方には時間が有ると思った。

ーーー

広大な敷地には様々な植物が植えられる図書館。　図書館の建物は、前面の壁がガラス張り、の建物だ。　中に入れば、吹き抜けた一部の天井から、二階の本棚、三階の広間が見えている。

一階で、背の高い本棚を見上げるクローリアとイリアは。　新たな読む本を探しながら、ウィリアムとスティールについて話し合っている。

三階の本をじっくり読んだり寛げるスペースでは、ロイムがシュレーラやチェルシーに囲まれていて。　本を読んでいるのか、イチャイチャしているのか解らない状態だった。

（ウィリアム・・・スティールさん・・・だすげて・・・・）

顔が少し憔悴し、げっそりしたロイムは、左右の女性に話しかけられて右往左往している。

一方、真面目に本を読むカリアと、カリアにちょっかいを挟む男性剣士は雰囲気が宜しくないようだ。

黙々と一人で本を読んでいるシュレーラのチーム僧侶は、窓の外の空模様に顔を動かして。

「はあ・・・・」

と、溜息を吐いた。　少し暗くなり始めの空、夕方が近いのだろう。

断続的に降り続く雨の陽気も、色気ばかり持て余すチームにも、

僧侶の心は憂鬱なのだった。

さて、その頃。

「一昨日来な」

スティールが剣を鞘に仕舞って言う。

ウィリアムは、両手を叩いて。

「一昨日に来れたら凄いです」

と、笑う。

「うぐぐぐ・・・・・」

二人の後ろには、K．Oされて伸びる悪辣な顔の冒険者風体の男達が六人。　誰もが、もう反撃出来る様子では無い。

商業区の最も中心から西側の一角は、ダークタウン（暗黒街）と化していた。　ウィリアムは、試しにと来てしまったのである。

スティールは、ウィリアムとまた歩き出しながら。

「しっかしよお、こんなに物騒だと女と来れやしね～だろ」

と。　あの先ほどまでの活気溢れる人の気配が消えている。　店の表は汚れて、破られた張り紙、壊されたままの入り口、廃墟と化している店の中が覗けるのも有る。

ウィリアムは、所々で営業してるのかどうか良く解らない店の意味深な張り紙を見るに。

“あの有名な○○薬が、たったの五千シフォン”

等と云う文句に。

「コレ、有り得ない。　ガセ物掴まされるのが落ちだな」

と、かなり呆れた様子で呟く。

人気の無い通りは、物が散乱していたり、通りに血の跡や骨らしき物まで転がっている。　嘔吐の痕跡など、壁の四隅にチラホラ、雰囲気も空気も淀んでいる。

暗黒街の一部を、二人で南に通り抜けた。

海岸線が見える港や海を前にした“海の道”と云う海岸通りに出たのだ。　この道は、海や港を前に、商業区から、ロイム達の居る文化区、スティールが船を爆破して連れて行かれた行政区などに跨る海沿いを貫いた十五キロのロングストリートなのだ。　港前なら、船の運航に合わせて人が乗り降りする本当の玄関になる。　だから、様々な店が軒を連ね。　無いのは金物（金属製品一般）だけなのだ。　特に、飲食店は非常に多い。　そして、潮風に強い木々を植えた公園が所々に存在する為に、休憩する市民も良く見られる。

スティールは、海岸通りをウィリアムと並んで歩き。

「あ～あ、晴れてたら凄い活気あって、露店が出てるのにな～。雨だから人気が少ねえ」

ウィリアムは、殆ど人とすれ違わないので。

「本当ですね。　もう、夕方前で暗くなり始めですが、明かりの入った店の店内も人の姿は疎らですね」

その内、やや暗くなり始めた空模様の中、また雨が落ちてくる。

「降って来なすったぜ」

と、スティールは、公園前に海が目の前まで迫る波打ち際になっている所の木の下で、落下防止用の手摺りに右足を掛けると・・・。

「フッ、海か・・・。　どんな男も優しく切なく包む風・・・波・・・女の様だな・・・海ってさぁ」

と、遠い目をする。

（はあ・・・・？）

ウィリアムは、いきなり人も居ないのにキメるスティールに呆れて。

小声ながら聴こえる様に。

「そして、誰かさんが二十万の借金を作っちゃった場所ですよ」

と、そよ～っと言う。

バッと、傘を差すスティールは、ムードを潰されてムカムカした顔をしてウィリアムに向き直り。

「お前なぁ、男だろうっ？　ムードを大切に生きろよっ！！！」

ウィリアムは、シレ～っと。

「ムードより、現実ですがな」

と、傘を横に外してお金のサインを指で出し。　直ぐに開いた傘を持って通りに目を向けた。

「カァ～っ、お前って奴は・・」

と、スティールが悪態を着く中で。

（アレ？）

ウィリアムの顔が、スッと真顔に変わった。　海にまた顔を向けたスティールに、ウィリアムは通りに顔を向けたままで。

「スティールさん、チョット」

「ンっ？」

ぶっきら棒に返してくるスティールだが。

「今・・・あの通りに女性が入って行きましたよ」

スティールは、ウィリアムに顔を向けて。

「お前、女が歩いてたらオカシイと云うんか？　一人や二人・・・」

と、言うスティールに。　ウィリアムは顔を向けて。

「でも、雨に傘も差さず、服を濡らして片足を引きずってましたが？」

スティールは、パッと顔色を変えて。

「バカっ、それを早く言えっ」

と、ウィリアムの見ている方に走り出す。

「何処だっ？」

ウィリアムも、スティールに合わせて走り出して。

「一つ先の曲がった通りです」

「解った！！」

二人して海岸沿い通りの店の前を走って、ウィリアムが女性らしき姿が曲がるのを見た商業区に入る道の一つへと身体を走らせた。

すると、十歩も走った所には、白いブラウスと朱色の長いスカートを穿いた女性らしき姿の人物が路面に倒れ込んで居た。　起き上がろうとする様子がもどかし気で、何かおかしい。

「大丈夫かいっ？！！」

駆けつけたスティールが、傘を手放して女性を抱き起こす。

「あっ・・・す・・すみません」

艶やかな黒髪を濡らした女性は、スティールに顔をキチンと向けずに探るように見た。

ウィリアムは、その仕草にパッと。

（この人・・・片目が・・・）

スティールは、捲くれた女性の膝が擦り剥いて血を流しているのを見るに。

「いけない、怪我してる」

と、女性の顔を覗く。

「あ・・足が不自由なので・・・転んだだけです」

女性は、心配無さそうな様子を声に見せるのだが。

「あっ・・・・」

女性の身体が持ち上がった。　スティールが、抱き抱えたのだ。

「手や足に怪我してる。　とにかく家まで送るよ。　近いのかい？」

小雨が降る中で、スティールはそう女性に言う。

ウィリアムは、傘をスティールと女性に差し掛けた。

「・・・あ・・・す・・直ぐ・・・近くです・・」

スティールは、笑って。

「それは良かった。　俺の名前はスティール。　こっちは、ウィリアム。　とにかく、傷の手当をしようか。　ウィリアムは、薬師でそうゆうのが上手いから」

「い・・いえっ・・・そんな・・・すみません・・。　私、ジェリーと・・云います」

女性は、弱弱しく言うのだが。

「ジェリーさんか・・・」

女性を抱き慣れたスティールは、微笑んだ顔で思う。

（なんて軽い身体だ・・・。　病気か？）

見た目、女性は二十は超えた若い娘に見える。　だが、その軽さは十二・三歳の少女に近い。

ウィリアムは、内心に感心した。

（やっぱり、“女性”が好きなんですねぇ・・・“美人好き”では無いんだ）

と。

そう、スティールの抱き抱える若い女性は、お世辞にも綺麗とか可

愛いとか言えない顔だ。　丸く大き目の顔。　見開いて居るのかと思う細い眼は、開きが左右でアンバランスだ。　鼻は小さく低いので、とても美的な要素を見つけるのは難しい。　だが、肌は白く、髪は艶やかだ。　普通なら、好意を持つのには首を傾げる相手と言っても良かった。

だが、スティールの優しさに、差別は無い。　直ぐ近くの彼女が示す建物と建物の間の小道に入る。　女性を抱えたスティールが、やや横向きになって行ける細い路地だ。

「スミマセン・・・家は店の裏手になるので・・・」

力なく言う女性。

スティールは、二階建ての小さい日当たりの良くない家を見て。

「小さくて可愛い家じゃない」

と、玄関の前に向かった。

「失礼」

スティールがジェリーを連れて中に入った。　続くウィリアムは、家の中を玄関口から見て。

（小さい家だ。　でも、なんで商業区に住んでるんだろう・・・何か、営んでるのかな？）

と、疑問を持って中に上がった。

スティールは、丸い小型のテーブル前にある椅子に、女性・・・ジェリーを座らせた。

「ありがとう・・ございます」

青白い顔で、血色の良くないジェリー。

ウィリアムは、

「スティールさん、お湯を沸かしてください。　何か飲んだ方がいい」

と、スティールに言ってから。　ジェリーに。

「薬箱は？」

ジェリーは、部屋に一つだけ見える食器棚の下の戸棚を指差して。

「あそこに・・」

スティールは、奥の竈に向かって、灰の中を弄ってまだ赤い燃え途中の炭を見つけると、脇の細い木を放り込んで火を起こしに掛かった。

ウィリアムは、水を汲んで桶に入れ。　ランプをつけて明かりを居間に入れた。

ウィリアムは、ジェリーの前に屈んで、

「じゃ、失礼します。　スカート、膝まで撒くって下さい」

「あ・・・ハ・・ハイ・・」

もどかしいジェリーの手つきに、スティールは見ていて。

「ソイツは、医者と同じだから。　心配しなくていいよ」

と、声を出す。

だが・・・ウィリアムは、スカートを鈍い手つきで覗かせたジェリーの足の細さに。

（これは・・・まさか・・・）

病気の影を見ていた。

「傷口を消毒しますから、少し沁みますよ」

傷口を洗い流し、ウィリアムは膝・踵・手首の傷の手当を素早く行った。

お湯を沸かしたスティールは、紅茶を入れて勝手にカップに注いで持ってきた。

礼を述べるジェリーに対して、手当てを終えたウィリアムは少し探り気味に。

「あの・・・ご病気・・・ですか？」

「えっ？！！」

ジェリーの顔が、瞬時に一瞬だけ強張り。　それから直ぐに、寂しい笑みに変えて見せて来る。

「お解かりになるんですね・・・、はい・・・そうです」

ウィリアムは、薬箱を片付けながら。

「あ・・・お薬は、飲んでますか？」

ジェリーは、首を左右に。

「高くて、とても手に入らないので・・・。　発作の時のお薬だけ頂いています」

スティールは、心配を顔に出して。

「こんな雨の日に、何処に？　益々、身体に悪い」

ジェリーは、恐縮した面持ちで。

「すみません・・。　実は・・・交渉に・・」

ジェリーの話は、こうだ。　彼女には、二つ下の妹が居る。　ジェリー自身は二十二歳に為る。　さて、ジェリーの父親は、この場所から近い港前にレストランを出していたとか。　その父親は、もう数年前に他界。　母親は、ジェリーが十三歳の頃に他界していると言う。　問題なのは、その父親の店だ。　立地条件が良くて、去年に借金の形に取られてしまった。　相手は、貿易会社の社長で、名前を“ホロー”。

さて、この国では、飲食店を閉める時は、“閉店の会”と云う特別に一日だけ運営し、格安の値段で常連さんやお客を持て成すという事をするそうな。　ジェリーの父親は、急死に近い形で死んでしまった。　だから、“閉店の会”は出来なかった。　ジェリーは、父親と共に八歳頃から厨房で働いていた。　才能が在るのか、料理の技術を吸収する事は早かったらしい。　父親の死ぬ半年前に今の病気を発症。　ジェリーは、病気でもう身体が云う事を利かなくなる前に、父親の代わりで“閉店の会”をしようと、土地と営業の権利書を強引に奪ったホロー氏に掛け合っているらしい。

話を聞いたスティールは、奪った相手に憤りを感じながら

「ふ～ん、結構繁盛してたの？」

ジェリーは、淋しい笑みで。

「はい、父の腕が良かったので・・」

スティールは、笑って。

「じゃ～、ジェリーも料理を作っていたんだ。　コックの格好で？」

すると、ジェリーは、はにかんだ顔を左右に振り。

「いえ、料理には厳しい父でした。　作らせて貰ったのは、私自身が病気を発症する前後からです。　多分父は・・・自分の病気で身体が思うように動かなくなったからでしょう・・・」

「もしかして、おっかないお父さんだったとか？」

スティールは、冗談交じりで怖がる。

ジェリーは、本当に笑い。

「いえ、料理には厳しい父でしたが。　私生活には激甘の父です。
良く私は我儘を言ってましたから・・・」

スティールは、笑って感心する。

その会話を聞くウィリアムは、冷めた静かな顔だった。

だが・・。

「あぐぅ・・・・・ううう・・・」

いきなり、ジェリーが胸を抑えて前のめりに。

「おっ・おいっ!!!」

驚いたスティール。

ウィリアムは、素早く駆け寄って。

「発作だっ、お薬はっ?!!」

と、鋭く言う。

苦しむジェリーの顔には、冷や汗が滲む。

「に・・にかい・・・」

絞る様な声でジェリー。

ウィリアムは、スティールに。

「早く二階へっ！！！」

と、竈のある台所に向かう。

「おっ、おうっ！！！！」

慌てたスティールは、ジェリーを抱きかかえて台所前の壁の中に伸びる二階への階段に駆け込んだ。

ウィリアムは、素早く竈の前に向かい、ぬるま湯をコップに作って、スティールの後を追った。

スティールは、二階の部屋のドアを開いてジェリーをベットに寝かせる。

「薬はっ？！！」

ジェリーは、ベットの脇の壁に備え付けられた様な机に手を伸ばす。

スティールは、すぐさまに机に飛びついて。

「此処かっ」

机の真下の引き出しを引けば、白い薬を包んだ三角の包むみ紙が。

「コレだなっ？！」

聞き返すと、必死で頷くジェリー。

其処にウィリアムが来て、

「どうですっ？　白湯ですっ」

スティールは、薬の包み紙をジェリーに開いて渡してから。

「サンキューっ！！！」

と、ウィリアムから白湯を受け取る。

ジェリーは、なんとか薬を押し込む様に飲んだ。

ジェリーが発作に苦しんで、膝上までスカートが捲くれたのをスティールが直すのを見て、ウィリアムは下に降りる。

スティールは、看病している様にジェリーの脇に椅子を持って座り。

行く末を見守った。

次第に、ジェリーは安静に。

「効いて来たか・・・」

呟くスティールに、ジェリーは震える手を隠して。

「こ・・・怖いんです・・。　死ぬ事より・・・何も・させてもらえないのが・・。　妹さえ・・私を見捨てる・・・」

「えっ？！」

スティールは、その心の叫びに耳を傾けた。

ジェリーは、瞑目して涙を流し。

「父から・・・唯一の・包丁を託され・・ました・・。　せめて・・せめて、死ぬ前に・へ・・閉店の・・会を・・・。　・・お・おとう・・さん・・・ごめん・ごめん・・なさい」

その姿に、スティールは有る光景がフラッシュバックした。　まだ、スティール自身が十三歳の頃の思い出だ。　瞬時にグッと拳を握り、ジェリーを強く見た。　もう、夕方が暗い夜を連れて来ていた。薄暗くなった部屋を、スティールは静かに退室した。　何時の間にか、ジェリーは薬の影響で眠りに着いていた・・。

ーーー

通りに戻った。　背が低く海風に強い木々が囲いを作る公園の所で、スティールは傘を手に、ウィリアムと向き合う。

「ウィリアム・・・彼女の病気って・・・なんだ？」

冷静な顔のウィリアムは、首を左右に。

「それって、どうゆう事だ？」

「一般に、“衰弱病”と呼ばれる病気です。　原因不明の難病でしてね。　幼く発症すれば、二十代で死に至ります。　大人に近づいて発症するなら・・・四・五十歳まで生きるかも・・・。　ですが、ジェリーさんの進行状態は極めて異例なレベル。　今のままなら、多分は・・・三十前には死にますね」

スティールは、真剣な顔で。

「マジかよ・・。　一体、どんな病気なんだっ？」

ウィリアムは、鋭い目をスティールに向けると。

「体中の筋力が、所々で徐々に低下していきます。　進行すると、身体の免疫と云う抵抗能力をも奪い、風邪を引いただけで死線を彷徨う様になります。　薬は、特効薬は無く。　進行を遅らせる物しかありません。　ですが・・・その薬は非常に高価で、作られる数以上に注文が殺到するんです。　予約販売の所で売り切れるんですよ」

スティールは、渋い顔で。

「一般の店には並ばないって訳か・・・。　作ることは？」

ウィリアムは、首を左右に振り。

「無理ですね。　唯一の原料に欠かせない草は、自然の物は取り尽くされてしまっていますし。　栽培してるのは東の大陸の貴族。非常に独占欲の激しい一族で、人殺ししようが草は分けない主義だそうで」

「なんだそりゃっ！！！　金で全部占めてンのかよっ！！！」

スティールは、いきなり苛立つ。

ウィリアムは、スティールを見て。

「それよりも、聞きました？　ジェリーさんの店を取り上げた人・・・」

「あっ？　ホローとか云う商人だろ？」

ウィリアムは、スティールが気付いてないと思ってか。

「ホローってのは、我々が借金してるあの男です」

スティールの顔が、見る見る蒼褪める。

「あ・・・アイツかよ・・。　選りによって・・・野郎かよ」

「ええ。　恐らく、どんな交渉も無理でしょうね。　まして、取り返すのにお金が一万八千シフォンだなんで・・・。　彼女に手立て

は何も残されていませんよ。　それに、なによりの最大のネックは身内・・・」

スティールは、ウィリアムに詰め寄って。

「お前・・それはどうゆう事だ？」

ウィリアムは、暗い夜目前の空を見上げて。

「いいですか。　この病気は、非常に進行性の強い病気です。　動けば動くほどに進行が早まります。　彼女の様子からも、妹さんの協力が得られてない。　恐らく妹さんは、お姉さんの病気の進行を遅らせるために協力しないんですよ」

「ま・マジか？」

「この病気の最大の難問は、本人と家族の気持ちの食い違いで起こるジレンマ・・・。　長生きして欲しい家族と、死ぬまでに生きて動いて自分の生きた証を残そうとする患者。　その両者の間で亀裂ガ生じやすいと云う難点があります。　彼女は、自分の身体の事を理解している。　だから、自由の利く内に“閉店の会”とやらをやりたいんですよ。　もしかしたら、最悪、始末の悪い結果が待ちますよ」

スティールは、ウィリアムはこうゆう事に詳しいだけに。　縋る様にウィリアムの胸倉を掴み。

「なんだ・・・何が？」

ウィリアムは、スティールを冷めた目で見返し。

「ジェリーさんが動けなくなった時、彼女が諦められないなら・・・自らの命を後悔によって絶つ可能性も・・・。　お父さんの包丁とやらは、台所にも戸棚にもありませんでした。　恐らく彼女が持っています。　その意味は、決意の誓いを立てた証に変わっているのかも」

ウィリアムは、あの弱弱しい身体で、ホローの様な極悪人に交渉する勇気を振り絞るには、それなりの覚悟が有ると踏んだ。　先ほど治療したジェリーの怪我の中でも、踵の怪我は、腕や膝の怪我より少し悪化したもの。　恐らくは、ホローの元に交渉に行き、邪険にあしらわれて来た証ではないかと推察した。　怪我した踵の足の靴を、ジェリーは履いて居なかった。

スティールは、思い詰めた顔で一人歩き出す。

ウィリアムは、直ぐに。

「どうする気ですか？」

スティールは、立ち止まって。

「俺が、交渉して来る・・・。　奴の要求を何かしら聞けば・・」

と、呟くスティールに、ウィリアムは話を遮り。

「無理ですよ、そんな事をしたって。　奴のいい様に扱われて、悪事の片棒を担ぐだけで終わりますよ」

スティールは、ウィリアムに勢い良く振り返り。　真顔で怒りすら

浮かべた口調で。

「じゃどうするんだよっ！！！！」

「スティールさん」

「なんだっ？！！」

「彼女とは初対面ですよ。　そんなに何かしてあげる必要有りますか？」

ウィリアムは、スティールの腹を完全に読んだ。

スティールは、遣り切れない顔で黙る。

「どうやら、過去に似たような事があったんじゃないですか？　今、彼女にその償いでもしようとか？　スティールさんの女性に対する態度・・・人に依って違いますよね。　顔で差別しませんが、窮地に居る女性見ると、自制が無くなる・・」

スティールは、ウィリアムに顔だけ向けて。

「頼むっ。　・・皆には内緒で、勝手にさせてくれ・・・」

ウィリアムは、透かさず。

「アクトルさんになんて言うんです？　スティールさんを除名すれば、事が解決するとでも？　何かあれば、アクトルさんが暴れます」

スティールは、返す言葉が無く。　思い余ってその場に土下座した。

「ウィリアムっ、助けてくれ。　確かに、出会ってばかりの女だが、出会って話せば縁だ。　俺は、年数絶てば縁になるなんて信じないっ！！！　出逢った一瞬からでも、縁は有ると思う。　俺は頭が悪いから何していいか解らないが。　助けてやりたい・・・。　頼むっ、知恵だけでも貸してくれっ」

雨が降る中、スティールは土下座する。

ウィリアムは、スティールがよほどに過去で傷付いていたらしいと看破した。

（最悪・・・ホローの悪事でも暴いて借金をチャラにしてみようと思ってたけど。　手段として行使しなければいけませんね・・。全く、熱い人だ）

スティールは、そんなウィリアムに。

「ウィリアム、お前だって島の人に優しくしたろ？　見返りが有ったからか？　何十年の縁があるからじゃないと駄目かっ？」

と、・・・土下座の格好の姿から。

ウィリアムは、鈍く痛い点を突かれたと思いながら。

「・・・確率、低いですよ。　方法は有りますが・・ね」

スティールは、パッと顔を上げて藁にも縋る想いで。

「何でもやるっ、可能性あるなら！！」

ウィリアムは、云う自分に呆れた。　スティールにも、自分にも。

（ちぇ、常識ハズレは俺だけじゃ無いじゃん・・・。　面白そうだけど・・）

ウィリアムは、この状態をひっくり返す事を本気で考え始めた。

一体、どうするつもりなのだろうか・・・。

スティールは、顔や頭を雨で濡らし始めながらウィリアムを見た。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　出会い（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ホラーのお話を書こうと思っているのですが・・・中々難しいと思い知らせれている毎日です＾＾

熱中症になりやすい時期ですが、お互いに乗り切りましょうね＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 忙しき珍事

12、秘密の二人

「ねえ、二人は一日何処行ってたの？」

宿に戻ったウィリアムとスティールは、丁度夕食をワイワイやっていたロイムやシュレーラ達とレストランで鉢合わせした。

ジュエリーの事があるだけに、スティールは憂鬱であまり話したがらない。

逆にウィリアムは、シレ～っとしてのらりくらりと話をはぐらかしたり、合わせたり。　ロイムが、コンコース島での活躍まで話して居たらしく。　シュレーラやチェルシーの感心はウィリアムに伸びつつある。

スティールは、ウィリアムが自分を気遣ってくれているのを感じていた。

ロイム達は、シュレーラ達と植物館や動物館のある大公園に明日行くらしい。

「ロイム、ガンバレ～。　俺は、スティールさんと明日も女の子探しに行ってくる。　たまには、色気も面白い」

ウィリアムの口から出た言葉。

「うぞおっ！！」

思わず驚くロイムのビックリ顔は、酒も入って泣き顔に近い。

「まあ・・・ウィリアムさんまで」

瞠目するクローリアの顔には、僅かな非難が含まれていた。

スティールは、ウィリアムに。

「弟子、では早く寝るか。　女の子観察がてら、市内観光の続きもしようぞ」

ウィリアムも、ノリに合わせて。

「へへ～、師匠」

ポカ～ンとする皆を他所に、ウィリアムとスティールは寝室に戻った。

三人部屋。　ウィリアムが暗い部屋の中で、早々に横に成ると。

「スティールさん、明日は長い一日ですよ」

ウィリアムに全てを任せ切ったスティールは、落ち着き払っていて。

「ああ、どんな事でもやるさ」

と、ベットに入る。

二人、静かに眠りに入った。

その頃。　アクトルは、クリスフィとオロス氏を交えて食事をしていた。　オロス氏の部屋に食事を運んで貰ってだ。

丸いテーブルに、普通の宿ではどう転んでも食べられないような食事が並んでいる。

「あ～、アクトル君。　明日、我々に付き合って商談に望んでくれないか？」

アクトルは、驚く。

「俺が・・・ですか？」

「うん。　ウィリアムと一緒なら、色々な事に足を突っ込む事に成る。　戦いばかりの冒険とは行かなくなるだろう。　いい経験になると思うよ。　それに、こっちの商人は女性に汚い輩が多い。　クリスフィも、いい思いはしない事が多いし。　君が傍に居てくれると、詰まらん脅しも見ないで済むかもしれない」

アクトルは、クリスフィに顔を向けると、確かにいい顔はしていない。

（商談とは、そんなに汚い事も言う場所なのか？）

冒険者一筋で生きてきたアクトルは、どうも理解が行かず。

「解りました。　是非」

オロス氏の顔は、嬉しそうだった。

オロスの話だ。

「商談とは、利益を取り合う交渉の斬り合いだ。　お互いの欲も出れば、相手の弱みにも付け込む必要も出てくる。　その点、ウィリアムは非常に優秀だった・・・。　夜の仕事で飲み屋に行くと、商人の噂などを手に入れて。　商談の時に、手玉に取るほどに生かす。　相手の言葉の言い回しの揚げ足を撥ねて、動揺させて怒らせて沈黙させて、妥協点に持ち込む。　だが、我々はこの商売で生きている身だ。　ウィリアム程にキツクやっては、後々の付き合いが上手く行かない。　アクトル君も、ウィリアムから学ぶ事も多いだろうが。　明日は、一つ我々の仕事振りを見学して欲しい」

アクトルは、呆れた顔で。

「ウィリアムは・・・そんなに凄いんですか？」

オロス氏と、クリスフィはお互いに見合って苦笑する。

「ああ。　相手が悪意や我儘を見せた時のウィリアムは、正しく悪魔だよ。　正直、殺さない程度なら手段を選ばない時が在るからね。　多分、スラムで生きていたタフさが出るんだよ」

「・・・アイツらしい・・・」

アクトルは、オロス氏に酒の肴にと、ワダルの町での仕事について

話し出した・・。　やはり、興味をそそる内容だったのか、クリスフィもオロス氏も真剣に聞いていた。

・・・それぞれの夜は、こうして更けた・・・。

ーーー

ウィリアムは、出店や屋台を回って朝食を買いまわる。

スティールは、後を着いてきながらに黙っている。　恐らくは、ジェリーの心配と先行きの不安を見せないようにして自然と黙っているのだろう。

ウィリアムは、屋台の脇の木箱に座り、買い回った物をスティールと食べた。　屋台の切れ間に見れる日常の光景だ。

スティールは、揚げたジャガイモを齧りながら。

「何をするんだ?、手始めに」

ウィリアムは、氷を砕いたのとミルクと練乳の入った甘い飲み物を口にしながら。

「先ずは、斡旋所に。　鑑定の依頼をしていた全部を引き取ります」

スティールは、ハッとして。

「そうか、アレを持ってホローの野郎と交渉するんだな?　五万には成るんだ・・上手く行けば店は取り返せる」

しかし、ウィリアムは首を左右に振り。

「いえいえ、それではイニシアティブは相手に取られます。　価値が現実として解らない商品を、こっちから売り込んだら買い叩かれますよ。　それでは、ホローの思う壺です」

スティールは、困惑して。

「じゃ～・・・一体・・・どうすんだよ・・」

ウィリアムは、パンにチーズと野菜を挟んだ物を齧ってから。

「いいですか・・・。　もし、・・あれが本当にに価値が在るとするなら。　オルロック氏の収集家を見つけて高値で取引して十万・・・十五万の金を持っていったとしたら・・・。　そして、杖を一本残して行ったとしたら・・・。　ホローはどう思うと？」

「そりゃ～・・欲しがるだろうよ。　金の成る道具だもの・・」

「そこです。　そこで交渉です。　残りの杖を交換条件に、ジェリーさんの店の抵当権と商業権の交換交渉をするんです。　店の値段なんて、一万五千ぐらいです。　商業権も込みで、精精二万シフォンが妥当な線でしょう。　我々はあくまでも素人として、多額の金を稼いだ事をアピールして、ホローの商才を褒めて煽れば・・・話に食い付いて来る可能性が在ります」

スティールは、ウィリアムが可能性の低い仕方だが、成功すれば確実と云った意味が解り出す。

（そうか・・・。　ホローは、ウィリアムがどんな奴か全く知らない・・。　絶対に俺達を舐めて掛かる・・。　この俺達が、一気に借金の大半を返済する額の金を手にしたら・・・杖の価値をニセモノでも信用するだろうな。　そうなれば・・・そうかっ！！　もしホローの奴が話に乗って来ても、こっちは大金を作ることに成功している訳だから、杖が売れなかったとしてもそりゃ～ホローの商才が無いと言ってるのも同じか・・・。　事を荒立てれば、自分の商才の無さを世間にアピールしちまうから、表立っては文句も言えな

いだろう。　そうか・・・そうゆう事か・・・）

スティールは、ウィリアムの思慮が何処までも深く、自分以上にまだまだ何か考えているのだと思うと頼もしくも恐ろしくも成る。

（コイツ・・・凄いアクマじゃないか・・・。　絶対に敵にしたくねぇ・・・）

スティールは、ウィリアムがたった1日でこんな計画を立てる事に脱帽したくなる。　自分では、何日も考えるか、ホローにアイテムを持っていって泣かされるのが関の山だと感じた。

「じゃ、先ずは預けた杖やローブの受け取りからだな。　直ぐ済みそうだ。　そろそろ斡旋所も空くだろうし、さっさ食べて行こうか」

ウィリアムは、理解して貰えたと笑いながら。

「いえ、受け取りは少し時間要りますよ。　どうしても欲しいモノ・・・作って貰わないと困りますからね」

「はぁ？」

スティールは、サッパリ解らない。

ウィリアムは、食事を終えると。

「本来なら、ロイムやアクトルさんにも承諾を得てやりたい所ですが。　スティールさんの我儘に付き合うように説得している間に、店が売り渡される可能性が強いですからね。　ま、俺もアホですよ」

そう、ジェリー自身が“閉店の会”を急いでいるのは、自分の身体の事だけが理由では無い。　ホローの話の一部をジェリーから聞くに、もう売る相手の目星が付いているので、ジェリーにとやかく言われるのがうっとおしいのであろうと思われる。

ウィリアムは、コンコース島であらゆる仕事に齧り。　相手の性格や行動を先読みして生きてきた。　そのウィリアムが、頭をフル回転させて判断している訳だ。

食事が終わり。　二人は斡旋所に向かった。　働く人たちが仕事場に向かう時間の最中ながら、もう斡旋所は開いていた。　ウィリアムとスティールは、パブから出てくる酔いどれと肩をすれ違わせて、中に入っていった。

地下に降りて、一般斡旋所の広い間に入れば、シャンデリアに火が入れられたばかりである。

「あれ、スティールじゃん・・」

若い女性の冒険者の一人が、仲間の中でスティールに気付く。

「ほっとけ。　あんな女垂らし」

別の若い男性剣士が、バンダナを巻いた頭を掻きながらスティールを冷たく見た。　あちこちで女性に声を掛けるスティールは、良く思われない事も多い。

しかし、二人が真っ直ぐに地下二階のドアに向かうのを見て、五人くらい居るこのチームはざわめいた。

さて。　ウィリアムは地下二階に降りて、丁度冒険者達を迎える準備を整える初老の主と出会った。

「おお・・これはこれは、お二人とも。　如何致しましたかな？」

ウィリアムは、直ぐに言葉を返し。

「はい、急用が出来まして。　鑑定の依頼していたアイテムを全てお返し願いたいんです。　それと、全てのアイテムに鑑定書を添えてです」

初老の主は、少し顔を曇らせた。

「それは・・」

だが、ウィリアムは、持ち金の二千シフォンの入った金袋をテーブルの上に置いて。

「此処に二千シフォン在ります。　これで、頼みます」

スティールは、急に顔を曇らせた主の事も。　何時もより、強引な運びのウィリアムにも疑問が走る。

「ああ・・いいですかな？・・」

主が口を濁しながら言い掛けた時、ウィリアムは言葉を遮り。

「無駄な問答は結構です。　俺は、コンコース島で冒険者斡旋所にも手伝いに行ってましてね。　内情は、良く知ってます。　一般的に、鑑定を依頼された場合には、全て斡旋所の主導で鑑定に一日。

後は、鑑定書を発行して、オークションに掛ける為の準備に数日要します。　つまり、夜に開かれる斡旋所のオークションは、何が出品されるかは予めに決められた仕様です。　ですから、勝手に引き取られては困ると云う訳ですよね？　ですが、こちらも事情が在りましてね。　ですから、こうして鑑定証明書の発行を有料で頼んでいるんですよ。　本来なら、オークションに出されてから買い手が付いた時に、暗黙の了解で引かれる歩合手数料分をね」

初老の主は、首を左右に振って苦笑する。

「ああ・・・なんてお人だ。　此方の内情を全て知って居られるとは・・・。　解りました。　私の一存ですが、発行しましょう。　今、係りの者が出勤してきましたので。　少々、お時間を下さい」

ウィリアムは、頷いて黙った。

スティールは、モダンでクラッシクな内装のバーラウンジの様なカウンターの前にて。

「なぁ・・・どうゆう事よ？」

と、小声で聞いてみた。

ウィリアムの話では、こうゆう事である。

冒険で手に入れた魔法のかかったアイテムを、斡旋所を通さずに誰かに売り込む場合。　民間の骨董品屋や、学者の魔法使いなどに鑑定を依頼する必要が在る。　誰か第三者が鑑定をしてくれないと、売る時に信用に為らないからだ。　だが、民間の鑑定は有料で、しかも鑑定をしてくれる人物の知名度に取引の値段が左右される。

魔法の掛かった物と成れば、一般の学者では鑑定も出来ないから足元を見られる。　その鑑定料は、意外に法外な値段なのだとか。

しかし、冒険者協力会＝斡旋所に全てを任せて依頼した場合は。基本的に、斡旋所主催のオークションに出品するのを前提で、鑑定料やオークションへの出品手数料は無しに成る。　だが、その出品されたアイテムが落札された場合、売れた額の一定割合は差し引きされて、大体八割が出品者の手取りになる。　引かれた二割は、協力会の運営費に回される訳だ。

そして、このオークションに出品されるアイテム全ては、事前に有資産者に教えられるのだ。　質の良いアイテムが出品される事は、オークションを盛り上げて協力会に収入を齎す。　何せ、オークションに参加すりだけでも、お金を取れるからだ。　売り出すアイテムの落札価格から二割を獲った上で、参加費用も取れる。　斡旋所にしてみれば、オークションほど儲けられる時は無いのだとか。

ウィリアムは、下手すると今度のオークションでも目玉出品に成りかねないアイテムを、いきなりオークションに出さないと言っているのも同じ。　それなのに、態々斡旋所の方で鑑定書を書いてやる必要が在るかと云う話にもなる。

スティールは、その意味が解ると。

「じゃ・・・何で書いてもらうんだ？」

ウィリアムは、少し呆れて。

「じゃ、誰が、俺達の拾ってきたアイテムを確かな物と鑑定してくれるんです？　骨董品店や学者様の鑑定料ってハンパ無く高いです

よ。　それに、もう斡旋所では鑑定は終わってますしね」

「ああ・・・・そう・・なの？」

スティールは、ウィリアムに対して済まなく成る思い一入である。

少し、二人は黙って待った。

初老の主は、引っ込んだ奥から魔法使い風の女性と共に出てきた。

「さ、ご所望の鑑定書とアイテムです」

ウィリアムは、五本の杖はしっかりと木箱にそれぞれ入れられており。　ローブも汚れが着かない様にと、紙で包んで在るのを全て開いて確かめてから。

「ありがとうございます。　これで、何とか動けます」

と、主に笑う。

主は、呆れた笑い顔で。

「随分と急な用ですな。　いやはや、面食らいますよ」

ウィリアムは、返さずに笑うだけである。

さて、外に出た二人。

ウィリアムは、スティールに真剣な顔で。

「スティールさん、これからが正念場ですよ。　頑張りましょう」

「ああ・・・お前には悪いと思ってる・・。　スマン・・」

すると、ウィリアムはにこやかに。

「いえ。　スティールさんが、只の軽薄な人間じゃ無いと解って、寧ろ面白いですよ。　こんなマヌケな行動も、人助けなら珍事ぐらいにはなりそうですしね」

「お前・・口が悪いなぁ・・あはは・・」

スティールは、皮肉の利いた言い回しに笑いが出た。

ーーー

る訳だ。　音楽・絵画・演劇・曲芸などから、古代の遺産や古き有名な文化人の遺品を扱う博物館が何百と犇く博覧区域で、学者の卵達や冒険者が多くを目に出来る。

二人は、そうゆう館を回り、杖とローブを売り込もうと思った。

だが・・・。

「フンっ、あのオルロック氏の遺産が出たなんて出鱈目だ。　少しは歴史を勉強してから詐欺はやるんだなっ！！」

と、追い出されたり。

「あ～、そんなモノ在りはしないよ。　要らない、出て行け」

と、あしらわれる。

中には、売り込みと解った途端に水を掛けられたり。　罵倒されたり。

午前中で二十軒以上回って、全く話に成らなかった。

モダンな館風の博物館と博物館の境で、話しながら歩いている家族連れや冒険者達を見ながら、スティールはイライラしていた。

「ちきしょうめ・・・何で・・・誰も物すら見ようとしないんだっ！！！　どいつもこいつも・・・上から見下ろしたウルセエ言い方で対応しやがって・・・」

ウィリアムは、スティールの言いたい事は十二分に解る。

「スティールさん、だから言いましたでしょ？　“大変だ”と・・・」

スティールは、ウィリアムにぶっきら棒な口調で。

「何か特別な理由があるのかよ・・」

「ええ。　実は通常、博物館に飾られる物品の九割は、館長か創設者などの懐金から買われたオークションの品なんですよ。　何時の時代も、ニセモノを売り込む詐欺が横行しています。　ですから、安全な鑑定書が着く公営・私営などのオークション以外を、殆どの人が信用しない訳です。　ですが、斡旋所のオークションは、ハナっから参加する人が入札するアイテムと額を斡旋所側に教えて。落札ラインを頭打ちに決めたやり方なので、高額な儲けが期待できないんです。　そこそこの儲けは在りますが、一般レートに従ったデキレースみたいなんですよ」

スティールは、もっと自由な競争の競りだと思っていたから驚いた。

「マジでか？」

「ハイ。　無理してまで誰も金を出したくないので、相場に近い所までしか値が釣り上がりません。　ま、逆に言えば、安定した額は手に入りますがね」

「なんてこった・・・。　じゃ～、そっちに出されない品は、殆どまがい物みたいな物か？」

「そう。　ですから、本当にこの品を求める人を、価値を解る人が

必要なんです」

スティールは、午前中の経験で、そんな相手を探すのは無理なような気さえする。　だが、直ぐに思い直して。

（ジェリー・・・なんとか見つけてやる・・・待ってろよ）

何時もより我慢強いスティールの内心には、この一念が有るからだろう。

ウィリアムは、考えている内に・・・ハッとして。

「スティールさん。　狙う相手を変えますか・・」

「ん？　誰に？」

「はい・・・学者さんですよ」

「が・・学者・・・ね」

「ええ。　魔法遣いの学者さんには、こうゆう博物館を運営している事業主が多いと聞きます。　冒険者の学者と、文化経済で生きる学者とは全く生き方が違うと聞きますから。　そっちに狙いを変えてみましょうか」

スティールは、偉そうな館長や司書にはうんざりしたので。

「ああ・・・面構えが変わるだけでもいいかもね・・」

ウィリアムは、苦笑いで微笑む。

文化区の北東側には、有識者・知識人・芸術家・貴族・有力者・権力者などが住む区域が、文化区・行政区の両方に跨って広がる。“ブルジョアン”（力を持つもの）と云う区域だ。館・古城・屋敷と云った建物が広がるハイソサエティーな空気溢れる場だ。広い庭に咲き乱れる草花、エクステリアを兼ねる塀や壁の格子、独創的を追及した建物の数々は、一般の来る場では無いと思える。

「う～ん・・・スゲ～なぁ～」

スティールは、世界の格差をまじまじと知る。

笑い合いながら、綺麗なドレスに可愛い日傘を差す女性達が歩いていたり。　一般の馬車のデザインとは明らかに違う個人の馬車が常にあちらこちらに移動している。　此処で歩く人々には、一般区の人々の貧しさが漂う様子が全く重ならない。　優雅に、綺麗に、豪華に・・・。　丸で、別世界に来たようである。

ウィリアムは、キチンと歩道と車道の区別がある道に感心し。　街灯の形がどれも花をイメージさせる形で、商業区などとも違うのに呆れた。

「金と権力の持つ人に対して此処までするかぁ・・・アホみたいだな・・・」

確かに、造る側からするならば、センスを問われる問題なのだが。
公共物なのだから、区域で差別しなくてもいいような気もする。

さて、二人は、博覧区域で聞き込みした情報を元に、屋敷を一軒一軒訪ねまわる事にする。

最初の手始めに、王国の学術司書をしている図書館勤務の貴族の男性を訪ねた。　国の仕事をしているから一応は期待したが・・・。
だが、出てきたのは、ハゲ・チビ・デブの三拍子揃ったオッサンである。　確かに、貴族らしい服を着ているのだが、デブ過ぎて横に広がり貫禄にすら成らない。

「ふん、この私の目を節穴だと思っているのか？　お前達の様な輩は悪徳商売人に決まっているさっ！！！」

ウィリアムも、スティールも、醜い迫力満載の彼に。

（明らかにコイツの目はフシアナだよな・・・）

と、思いながらやる気を殺がれて退散。

次の家は、王国立大学の秘書官だとか。　庭は、広く青々とした芝生、丸みのある館の脇には、ガラス仕立ての小型植物園が在った。
ドアをノックすれば、大男の執事が現れて対応してくれた。

だが・・・綺麗なインテリアの散らばる居間に現れたのは、派手な衣装を着た痩せこけたババアが、異常に濃すぎるメイクをしてと云う不気味な生き物。　明らかに、スッパイ顔のオババである。

（ウィリアム・・・あれは・・・モンスターか？）

（いえ・・・辛うじて・・・人間かと・・・）

ショックを受ける二人を他所に、スッパイ顔したおばあさんは、“ウチのステファニーちゃん”と言う小型犬を腕に抱いて、オルロッ

クの歴史を語る。

話を総合するに、今まで通り買う気は無いと云う内容だ。

「スミマセン・・・・」

「失礼・・・・」

二人は、語る演説がエルカレートして感情移入し、もはやオババの独り舞台と化す居間を後にした。

外に出るスティールは、ウィリアムに詰め寄って。

「お前大丈夫かよっ、相手が変質者化してきてるぞっ！！！！」

「あははは・・・はぁ～・・・」

ウィリアムは、ゲンナリ。

だが、その流れは、神の思し召しの様な運命だ。

次の館は、かなりデカイ。　庭の敷地もかなり広く。　大金持ちを連想させた。

だが、玄関先で現れたのは、アクトルと似た身の丈の如何にも訝しげな人相の悪い男性だ。

（おい・・ビビるなよ・・・）

（そっちこそ・・・）

と、言い合って気合を入れて話し合ったのも・・・つかの間。

「うわあああああ～～～～～～ん」

いきなり、居間で大男が泣き出した。

ウィリアム・スティールはポカ～ンと口を開けて見ていると・・・。

「あららぁ～、バブちゃん。　一体どぉ～したの」

と、黄色いドレスを着たかなり綺麗な中年女性が現れる。

大男は、ソファーの上でジタハタ駄々を捏ねて。

「この人達がっ、嘘言ってヘンな物を売り付けにきたのおおぉ～」

すると、中年女性は非難がましい目をウィリアムとスティールに向けながら、大男に抱き寄る。

「あら～、悪いひとでちゅね～。　バブちゃん、おっぱいちゅーちゅーする？」

と、女性は母性本能たっぷりに大男を見る。

「うんうん、怖い人みたからちゅーちゅーする～」

ウィリアムもスティールも呆れ果ててソファーから転げ落ちた。

「見た目とギャップ有りすぎだ・・・」

「あの歳で・・・ちゅーちゅー・・・か」

二人。　中年女性に言われる前にと、毛虫のように動いて退散する。

路上に戻って、涙目で発狂しそうなスティールが。

「ウィリアムせんせーっ！！！！　ヘンな人要らないよーっ！！！」

「すみません・・・リサーチ不足でした」

ウィリアムは、路上で土下座した。

次の家は、かなりモダンな屋敷で、赤いレンガと黒い石のバランスが絶妙に利いた建物。

「出来るな・・・この建てた職人は・・」

と、ウィリアム。

「職人良くても、住む奴が“バカでは無い”、とは言い切れん」

と、仏頂面のスティール。

思い切って訪ねれば、若い女性のメイドが現れて。　主の事を聞くと、首を傾げて・・・。

「ごっしゅじんさまは～、いまは～でかけてて～。　おもどりになるのは～・・・たしかあ～～～～昨日？　ううん・・・え～っと、来月？　アレ～っ、わすれちゃったぁ～」

と、“テヘヘ”も付いた笑い顔。

スティールは、思慮深く悩む顔で。

「ウィリアム・・・コレは～・・・新手の厄介払いの方法か？」

「はあああ・・・・・凄いの出たぁ～」

メイドは、一人であ～だこ～だ言い出すが。　ウィリアムは、付ける薬は無いと退散した。

路上に戻る二人。

「ウィリアムちゃんっ！！！！　此処は“変人区”でっかっ？！！！　珍獣ばかりじゃないかっ！！！！」

「スミマセン・・・お兄さま」

道行く若い女性達が、陽気の所為で頭のネジが緩んだ人を見るような顔つきで、説教するスティールとされるウィリアムを見て通り過ぎてゆく。

さて、お次は真っ黒い鉄格子の塀、真っ黒い墨の様な色の、角ばった真四角の屋敷。

「黒いなぁ～・・・嫌な感じしないか？」

と、構えるスティール。

「色は関係ないでしょう～」

と、言い繕う苦笑いのウィリアム。

玄関先で、対応に出てきた老婆のメイドが。

「まあ・・・それで我がお屋敷をお尋ねに？　ご主人様もさぞお喜びに成られると思いますわ」

と、対応の丁寧な事。

「遂に・・・来たか？」

と、目配せするスティール。

親指を立てて、

「なんでも、私立教育学校を経営する女性の校長だとか・・・」

スティールは、前髪を掻きあげて。

「フッ、やっと人に出会えた」

二人、赤い絨毯の敷かれたモダンなセンス映える客間に通される。

メイドの老婆に紅茶を出されて。

「しばし、お待ちを・・」

と、二人にされた。

だが・・ウィリアムは、直ぐに紅茶から眠り薬の匂いを嗅いで、

「スティールさん、どうやら・・・。　今回も、一人《・≫じゃ～無い見たイッス」

と、冷や汗を顔に見せる。

「はぁ？」

と、スティールが聞き返したときだ。

“ドドドドドドドっ”っと、閉められたドアの向こうから不気味な足音がしてくる。

そして・・。

「うおおおおおおおーーーっ、久しぶりの男よおおおおおおおーーっ！！！！！！！」

と、野太い男の声で響いてくる。

「やべえ、人じゃねえっ！！！　女の声じゃねええぞっ！！」

「ハイ、レベルEですね（イレギュラー）・・・」

ウィリアムとスティールは見合って、すぐさま窓からの脱出を計る。

“バガンっ！！！！！”

扉を蹴破る勢いで現れたのは、無駄毛の見事さ極まりない筋骨隆々

とした人物だ。　脛毛がはみ出ているのに網タイツを穿き。　金色のバニースーツは特注だろうか。　頭の金髪は無意味なほどに長く、股間の前には“第三の足”の形がクッキリ浮き上がっている。　そして普通の人の三倍近い大きさのゴツイ顔、剃っているのに青々している髭周り。

・・・確かに、ヘンだ。　情報の・・・“女性の校長”では在り得ない。

「あらぁ～ん、私の王子様はどこぉ～」

一心不乱に部屋を荒探しする異形のカイブツ・・・。

もう、ウィリアムもスティールも脱出していた。

路上に戻って。

土下座するスティールは、必死で。

「ウィリアム様っ、どーか！！　どーかこの通りですからフツーの人をっ！！！！」

ウィリアムも土下座して。

「誠に申し訳ございません・・・」

と、お互いに土下座した。

さて、次の家に向かうと・・。　塔の様な建物が広い庭のど真ん中に在る。　庭に入る門の前で二人の男性が出てきた所だった。

ウィリアムが、小太りでちょび髭の背の低い男性に声を掛けると。

「むっ、君達は何者かね。　このエロキュ～ル・ア・ハローに何用ですか？」

と、偉そうに言い返される。

ウィリアムが、用件を告げると。

「フンっ、そんな与太話に騙される私ではありませんよ～。　それに、私は忙しいのですプッシュ～っ。　オルロックの収集家なら、この先のステュアート氏の屋敷をお尋ねなさい。　話くらいは聞いてもらえるでしょう。　ではプッシュ～っ」

貴族の小太り男はそう言うと、自分の後ろの背の高い痩せた男性に。

「ヘイ・スティンガー中尉、行きますよっ」

と、杖を着いて行ってしまう。

「・・・この先の・・・ステュアート・・・」

ウィリアムは、メモした紙を見る。

スティールは、訝しげに。

「本当かね～、その相手」

だが、ウィリアムは真顔で、歩いて行った男性の後ろを見送りなが

ら。

「でも、リストに無いです。　態度は別にして、嘘や出任せを言った様子ではありません。　行って見ますか」

スティールも、確かに今の二人はまともな人だっただけに。

「ま・・・いいっか」

と。

二人、夕方の近づく雲が増えた空模様の下で、予定外の情報を得て。

その人物を尋ねて見る事にした。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　忙しき珍事（後書き）

次話、予告

ウィリアムとスティールは、ようやく買い手を見つけれた。　ホローに会いに行く二人だが・・・。　運命は“珍事”を“椿事”に変えてしまう。

次話、【椿事は突然に】

よろしく、どうぞ＾＾

どうも、騎龍です＾＾

これからは、あとがきに次号予告を入れようかと試してみました＾＾；

実は、ホラー作品の登校に数日を費やしていました＾＾；　良ければ、読んで見てください＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 椿事は突然に

13、思いも由らない事件

ウィリアムとスティールは、今までに無い広い庭を有する人物の玄関先にまで来ていた。

「凄い・・な・・。　通りから入ってきて、敷地歩いているうちに夕日になっちまったよ」

スティールは、どこまでも広がる芝生と大きい木が所々に存在を見せる庭を歩いて、庭の広さに驚いたのだ。

ウィリアムは、城にしては少し小さいながら。　白い壁、青い三角屋根を所々に見せる城を見上げて。

「う～ん。　庭先で追い返されそうな気がしてきましたよ」

スティールも、城を見上げて。

「だな・・・」

すると、立派な木製の入り口に向かって右手の二階の窓から。

「君達、此処は私有地だぞ。　迷ってしまったのかね」

と、男性の声が降りてくる。

ウィリアム・スティールは、声の来た方に顔を上げて見上げてみれば、白い礼服に赤いスカーフネクタイをした男性が顔を出している。

ウィリアムは、その男性の真下に歩いて行って。

「スミマセン。　急にお訪ねいたしまして。　我々は、冒険者の者ですが。　此処のご主人が、オルロック氏の遺品にご興味が在ると聞いてやって来ました」

男性は、中年の中々見栄え良い紳士で。

「・・・それは、私だ。　アルバート・ステュアート・イングレムだ。　して、要件は？」

ウィリアムは、スティールと一回見合ってから。

「はい。　我々は、斡旋所からの仕事で、偶然にもオルロック氏の隠した隠棲の館に侵入しました。　そこで、幾つかの遺品と思われる物を持ち帰ったのですが。　是非、お確かめの上、確かな品物ならば買い取って頂こうかと思いまして・・・」

すると、ステュアート氏は、大きく身を乗り出して。

「君達、本当にオルロック様の隠棲していた場所を知っているのかねっ？！」

急に、興奮した口調で聞き返してくるステュアート氏。

ウィリアムは、ゆっくりと頷いて。

「はい、館の中はマジックモニュメントに成っていましたから。その中で、弟子の女性が残したスケッチ・メモリーの記憶も見ました」

すると、いよいよステュアート氏の顔が驚愕のものとなり。

「きっ、君っ。　そっ・その女性の名前はっ?!」

「はい。　クラウディアさんと云いました。　オルロック氏が学院長時代の頃、町で起こった山火事で町が火の海に変わった時。　助けに行ったオルロック氏に助けられた女性です」

ウィリアムがそう言うと・・・、興奮したステュアート氏は、もう窓から落ちそうなぐらいに身を乗り出して。

「はっはは、入ってくれたまえっ。　今、執事とメイドに言うからッ!!!　帰るなっ、帰らないでくれよっ」

と、身を引っ込めた。

スティールは、意味が解らずに困惑。

「なんか・・・すげ〜慌ててたな・・」

だが、ウィリアムはなんとなく解る。

「いえいえ、研究している対象の人物の歴史が解るのは、学者にしてみたら最高の出来事ですよ。　とにかく、芽はありそうですね」

「ああ・・・。　金持ってるといいな」

そう話していると、剛健な昔風の木の扉が鈍い音を上げて開いた。
そして、白髪で青い目をした長身の男性が、黒いタキシードに身包んで現れた。　その脇には、ガッシリした腕力はかなり有りそうな猫背の小男も一緒に。

青い目の初老の男性は、前に手を組み。

「ようこそいらっしゃいました。　旦那様がお待ちです」

と、頭を下げてくる。

ウィリアムが、

「ご丁寧に、すみません」

と、頭を下げて。

スティールも。

「不躾にすいません」

と、頭を下げる。　スティールにしては、かなり珍しい事だ。

「私は、このお屋敷で長年に渡り執事として働くマシューと言います。　礼儀を弁えておられる様で、安心しました」

ウィリアムは、確かな人物とマシュー氏を見定め。

「はい、誠に不躾な訪問をお許しください。　武器は、この友人のスティールさんの持っている剣だけです。　ご心配とあらば、お預けいたします」

マシュー氏は、頷くままに。

「其方からのご提示は嬉しいです。　では、大切に保管いたしますので、お預け願います」

こうして、スティールが剣を小男に預けてから中に入った。　マシュー氏の案内で、ロビーから入って夕日の入るサンルームの様な客間に通される。

「へえ・・・」

ウィリアムは、目を見張った。　紫色のシートが鮮やかな長椅子は、確かな年代物でありながら、肘掛に施された細工の綺麗な物で。価値や技術を考えるに中々の家具と見える。　天井のシャンデリアに使われているのは、全てクリスタル。　暖炉の上の大きい名画は、一昔前の名の在る実力派の物だ。

「出来る・・」

骨董品にも目敏いウィリアムは、確かな財力を見た。

直ぐにメイドが来た。　手押しの台車に紅茶とケーキを乗せて。ゴタゴタした今日は、殆ど朝以外は口にしていないので、二人にとってはケーキは有り難い。

ウィリアムも、匂いを嗅いでも何も怪しい匂いはしないので。　二人、八人は座れそうな長椅子に腰掛けて、紅茶とケーキを頂いた。

夕日が、暮れ始める頃に。　ステュアート氏は、二人の待つ部屋にやって来た。

「やあ、遅れて済まない。　今夜ある知り合いのパーティーをキャンセルするのに少し時間を貰った」

ウィリアムは立ち上がって、一人用の立派な椅子に腰掛けるステュアート氏に謝る。

「すみません・・・急に訪れまして」

すると、はにかむステュアート氏は。

「いやいや、付き合いのダンスパーティーだの晩餐会などに毎夜付き合わされて困る。　ま、まだ結婚のしていない身だ。　嫁にと紹介される口実に呼ばれるのは仕方無いがな・・。　で、何か証明書でもあるかい？」

「あ、はい」

ウィリアムは、斡旋所の出した証明書を出した。

「お～・・フムフム・・・」

ステュアート氏は、一通り目を通した。　そして、ウィリアムを見る。

「了解だ。　では、物を見せて欲しい」

二人は、、脇に置いておいた木箱と背負い袋に入れたローブを、ケーキを乗せていた皿を下ろしたテーブルに置いた。

ステュアート氏は、箱の蓋を一つ一つ開けて見る。

「おお・・・杖が五本と、ローブが三着。　うん・・・確かに魔法が掛かっているようだね。　どれ、調べてみよう」

スティールは、少し難しい顔で。

「やっぱり、斡旋所の証明書では信じられないんだなぁ・・」

すると、ステュアート氏は、優しく笑って。

「あ～、いやね。　斡旋所が一般の冒険者に発行する証明書は、云えば“盗品・違反品”では無いと云うお墨付きにしか過ぎないのだよ。　オークションになら、我々買い手に落札した時にしっかりした証明書はよこすがね。　コイツは、簡易的な鑑定書でしかない」

ウィリアムは、其処までは知らなかったと。

「あ～あ、やっぱり急いでいたから詰めが甘かったなぁ～」

すると、ステュアートは杖の一本を取り出して。

「いやいや、あの斡旋所のシブチンオヤジに、この証明書を発行させるだけでも大したモノさ。　なにせ、相手は発行する義務も義理も無いはずだからね」

と、目を瞑る。

ウィリアムもスティールも黙った。　このステュアートと云う人物は、世間の事情をよくよく知っている。　無駄話は必要無いと察した。

ステュアート氏が、何やら短く呪文を唱えると・・・。　いきなり蒼い炎の様な力が、握られた杖から溢れ出す。

「うおっ！！」

驚くスティール。

ステュアート氏は、緩やかに目を開けながら、杖を持つ手も、身体すら微かに震わせて。

「すっ・これは・すす・凄い。　これは、確かに・・・オルロック様の力・・・。　なんて、新鮮な魔力だ・・。　唯一、魔法の時間の歯止めの影響を受けない古の大魔法まで・・・掛けられてるなんて・・・。　この手で感じるのは、初めてだよ・・あぁ～、これは凄い」

見ているスティールも、何故だか自然と涙が溢れる。

「ああ・・・なんだこの・・・優しい波動は。　すげえ・・落ち着く。　丸で、幼い頃にじいちゃんに抱きしめられた様な温かさがありやがるよ」

杖から溢れた魔力は、消える事もなく滔滔と溢れては対流して杖に

吸い込まれる。　蒼く、優しく、たおやかな波動に、ウィリアムも目頭を押さえた。

ステュアート氏は、涙を浮かべて。

「はは・・・マシューに抱っこされてた時を思い出した・・。　よし・・」

ステュアート氏は、杖の魔力を封印した。

「うん。　この杖には、術者の緊張を和らげて集中力を高める効果があるね。　この杖を持っているなら、駆け出しの僧侶でも、結構強力なアンデットモンスターと渡り合える。　素晴らしい・・・素晴らしいの一言だ」

ステュアートは、執事のマシューがシャンデリアの全てのロウソクに火を入れに来ても、杖やローブの調査を止めなかった。　杖五本、ローブ三着の魔法の調査が終わるのは。　夕日が落ち切る頃。　黒い雲が、空を覆い尽くし始めた夜の入りである。

「ふぅ～」

ステュアート氏は、満足げな顔で何度も頷き。

「この杖には、それぞれ違った魔法が込められているね。　“灯りの魔法を封じた杖”・“物隠し（インブジブル）の掛かった杖”・“ソード・エクスプロージョン（ロイム達が良く使う剣の姿をした攻撃魔法）を封じた杖”・“魔力の低さを補う魔法の杖”・“集中力を高める魔法の掛かった杖”が、それぞれに掛かっている」

スティールは、ローブの方を差して。

「こ・・こっちは？」

「うん。　こっちも凄いぞ。“魔法・物理を問わずに受ける衝撃を和らげる魔法の掛かった物”・“魔法が解かれない限り、燃やしても切っても元に戻る魔法の掛かった物”・“魔力を補う魔法の掛かった物”だね。　同じ効果の杖と組み合わせれば、魔力をかなり強力に補助してくれそうだ」

ウィリアムは、ステュアート氏にやんわりと交渉に持ち込む。

「すみません、訳有って。　杖の一本だけはお売りできませんが。　コレ、最初に調べた杖以外を全部纏めて買って頂けるとしたら・・・どれくらいで買って頂けますか？」

すると、ステュアート氏は。

「いやぁ～、事情がそうなら一本は仕方無いにしろ。　是非、残りの全部は売って欲しい。　今、手元には二十万シフォンしかない。　それでなんとかなるなら、今、買わせて貰う。　駄目なら、数日くれないか？　なんとか、五十万は用意するっ」

ウィリアムもスティールも、借金を一撃で返済出切る額が出た事に気を失い掛けた。

「・・・」

ステュアート氏は、真剣な顔で土下座する勢いで。

「頼むっ、この通りだっ。　なんとか、五十万までで、手を打って欲しい」

スティールとウィリアム顔を合わせる。

（ごっ・ごご・・五十万なんて・・・いらねえ～よ・・・な）

と、スティールが小声で言えば・・。

（えええ・・えええええ・・・・多分・・二十万で十分過ぎますよ・・・。　ホローに無理な交渉挑む必要なんていらねぇ～し）

と、ウィリアムも流石に破格の値段に呆れさえ出た。

「あの・・・今の御手持ちの二十万で十分です。　そんな、無理されても困りますし・・はい」

ステュアート氏は、パッと顔を喜ばせて。

「ほっ、本当かいっ?!!　それなら、今直ぐに用意するよっ!!!」

と、立ち上がる。

「よろしくお願いします」

「します～」

ウィリアムと、スティールが驚いたままに頭を下げる。

この部屋を出る時に、ステュアート氏は。

「あ～、今は、手元に纏まったのはゴールダー金貨でしかないから。ゴールダーで勘弁してね。　嵩張らないからいいでしょ？」

ウィリアムとスティールは、その話に閉口してしまう。　ゴールダー金貨とは、シフォンの上の硬貨だ。　各国が純金のみで作り、各国の特別な印章を施して作る。　この国のゴールダーは、一枚で五百シフォンの価値があり。　普通に、一般人持っているのは金持ちの貴族と銀行だけ。　一般の人が、ゴールダー金貨などは殆ど手に出来ない。

スティールは、金の価値感が崩壊しそうで。

「うぃりあむちぇんちぇ～・・・此処は・・・銀行か？」

「さ・・さぁ～・・、有る所には・・・有るんですねぇ～・・・」

ウィリアムも、完全に脱帽だった。

ーーー

って来た。　ホローとの交渉がまだ残っている。

（ウィリアム・・・俺、正直の所さ。　こっ・・腰がフラついてるよ）

スティールが小声で言うのは、当然だろう。　売れた金の額が多額過ぎて、生まれて初めて持つ大金に驚く所為だ。　腰に下げる小袋一つで五万シフォン、スティールとウィリアムは十万づつ持っている。

（俺も同じですよ。　重圧ですねぇ・・この重みは）

夜、雨が降り出しそうな空は、星も月も見えない。　生暖かい風が海から吹いている。

二人が、街灯の灯りの下で、黒く犇く建物が目立つ道を歩く。　此処は、日中なら商店街の人通りが多い場所。　飲食店街の外回りに広がる専門商店街通りだ。　武器防具や骨董品など専門店が多い場所で、この時間帯になれば閉店した店も多く。　活気は下火だった。

たった今、店を閉めて。　下働きの部下を引き連れては、飲食店街に向かう商人達もチラホラ。　店の明かりが所々に落ちて、侘しい通りだ。

ウィリアムは、街灯の灯りの下。　ホローの輸入卸店の看板を見つけて。

「アレですね・・。　まだ、灯りが点いてますよ」

スティールも、見て。

「ああ、奴が居ればいいがな」

と、返す。

二人。　確かに歩き通しの上に、緊張を重ねた一日で疲労も感じていた。　だからこそ、秘かに最後の引き締めを心に促している。

“カランカラ～ン”

ホローの店の表向きは、骨董品店で。　卸の注文を受ける出張先でもある。

「は～い、いらっしゃ～い」

少し爛れた感じのする女性の声。　二人は、壷だの皿だのと商品の陳列されている棚を左右から越えてカウンターに向かえば。　金髪の魅惑的な印章を強く受ける黒いドレスの女性を見た。

「お客さん、何か用？　もう、閉める手前なんだけど・・・」

流し目で、何か誘いを掛けて来ている雰囲気が薫る言い回し。

ウィリアムは、直ぐに。

「いえ、ホローさんに借金を返しに来ました。　此処にいらっしゃいますか？」

すると、女性は肘をカウンターに付けて、ワザとらしい仕草で大き

く柔らかそうな胸元を二人に見せながら。

「社長なら、昼には自宅に戻ったわ～。　明日の夜に、御偉い様を招いてパーティーをする為の準備があるんですって・・・。　だから、そうゆう話なら自宅に行ってもらわないとねぇ・・・」

「教えてくだいませんか？」

「いいわよぉ・・」

女性は、特にウィリアムを見つめながら艶かしい目つきで紙とペンを手繰り寄せる。

しかし、ウィリアムは冷静そのもので、寧ろ女性を軽蔑する目つきである。

簡単な地図と、番地番号を書いた女性は、ウィリアムに差し出して。

「はぁい、コレ」

「ありがとうございます」

女性は、紙を受け取ったウィリアムを見て。

「お金返し終わったら・・また来て。　今夜、一緒に付き合ってよ・・・ね？　身体でいいなら、好きにさせてあげるわよ」

男を誑かす毒婦と云う感じが似合う言い回し。

だが、スティールは。

（ウィリアムをシラネェもんな～。　これじゃ～・・）

と、内心に呆れる。

ウィリアムは、斬る様な目つきで女性を見て。

「生憎、人のお下がりは嫌いなんですよ。　ホロー氏の汚した身体を味わう気にも成りません。　一度、全身を消毒なさったら如何ですか？」

と、踵を返す。

「っ！！！！」

女性は驚いて、顔を険悪な真顔に変えた。

スティールは、ヤレヤレとばかりに。

「じゃ、ね。　教えてくれてサンキュー」

と、ウィリアムの後に店を出た。

外に出た二人。

スティールは、空を見上げるウィリアムに。

「お前、皮肉もキッツイね～。　あそこまで云うかいよ～」

と、苦笑い顔。

ウィリアムは、冷静な顔で。

「別に。　生きるのに必死な女性と、金に汚い汚れた心の女性は区別します」

「お前らしい～やね」

二人、肩を並べて歩き出した。

だが。　ウィリアムは、紙に書かれた番地を見るに。

「しっかし、ホローって人はどれだけ金を儲けてるんですかねぇ・・・。　ホラ、この書かれてる番地は、商業区の中でも最も立地条件の良い大通りの裏手に伸びる広い通りですよ。　こんな場所に家を構えるなんて・・・信じられない」

スティールは、ウィリアムが番地で場所が解った事に疑問を感じ。

「お前・・・番地で解るのかよ」

ウィリアムは、平然と。

「ええ・・。　昨日も今日も、歩き回って店や建物に書かれた番地見てますから。　もう、大体の地理は解りますよ」

「はぁ・・・・あっそ・・・」

流石だと呆れでコレしか言えなかったスティール。

さて。　世界共通で、商業区の土地の税金は他の区域とは別格だ。
　しかも、目的不一致での使用となれば、取られる税金はまた値上がりする。　だから、商業区に家を持つ場合は、通り前を店にして税金対策をするんだそうな。

スティールは、ウィリアムを細めた目で見て。

「お前、そうゆうの詳しいねぇ～。　俺、全く知らないぜ」

二人がホローの家に近づけば、飲食店街の脇道を通り過ぎる為に、雑踏とざわめきが聴こえてくる様になった。

「上手く行ったら、ロイムやアークにも謝らないとな・・・」

スティールは、確かに仲間には済まないと思う。

ウィリアムは、静かに。

「後にしましょう。　まだ、どうなるか解ってませんから」

「ああ・・・」

スティールが、短く返した。

しかし・・。　二人、賑わいの声を少し遠くにした、アハメイルを左右に貫く大通りの手前の広い裏道にやって来て見ると・・。

先ず、ウィリアムが異変に気付いた。

「アレ・・・あそこが・・・騒がしいですよ・・」

スティールは、ふざけ半分で。

「アソコが忙しいのはベットの上だろうが・・・って。　アラ、なんでかね・・。　人だかりが出来てるよ」

通りの向かって右側の大きい建物の前に、見物客の様な人が集まっていた。

ウィリアムは、凄い胸騒ぎを覚える。

「スティールさん・・・どうやら・・ホローの家の前ですよ。　あそこ・・」

スティールも、流石に驚いて。

「うおおっ、なんじゃそりゃ！！」

ウィリアムは、金の小袋をスティールに差し出して。

「スティールさん、チョット此処でっ。　俺、話を聞いてきますっ！！」

「おう、解ったっ」

スティールは、自分のと合わせて計二十万の金貨を持つ事に。

ウィリアムは、走っていって人の中に消えていった。

それから少しして、ウィリアムが人だかりを抜け出して来るのに大

した時間は必要無かった。

だが・・。

「スっ・・スティールさんっ!!!!!　大変ですッ!!」

珍しく本気で慌てているウィリアムを見たスティールは。

「おっ・・おう・・どうした?」

「と・とにかくっ、此処を離れましょうっ。　大通りを東に行きましょう。　文化区なら、人も少ないっ」

スティール、ウィリアムが此処まで来て何を言い出しているのかサッパリ解らない。

「お前、ホローと交渉するんだろ?」

すると、ウィリアムは潜める声で。

「その全てに関係ある重大事件ですっ。　とにかく、歩きながら・・。　警察役人が動き回っていますから・・」

スティールは、ただならぬウィリアムの様子に。

「何だよ・・・此処まで来て・・」

と、渋々従った。

さて、ホローの屋敷から離れて、二人は文化区の入り口の公園広場

までやって来た。　今、丁度雨が落ちてきている。

ウィリアムは、広場の敷地に植わった大きな木陰に来ると、スティールに向き直り。　かなり緊迫のした様子で、

「スティールさん。　動揺しても、大声を上げないで下さいね」

訳の解らないスティールは、只。

「おっ、おう」

と、頷く。

ウィリアムは、真剣な目をスティールに向けて。

「ホローが殺されました」

「なっ・・・なんだってっ?!」

スティールも、驚いて金の入った袋を落としそうになる。

ウィリアムは、少し顔に苦味を加えて。

「犯人は、ジェリーさんだと・・・。　今さっきつか・・」

ウィリアムの声をスティールは遮り。

「嘘だっ!!!!　あんな身体でっ!!!!」

「スティールさんっ、静かにっ!!!!　まだ、共犯者の存在も含め

て捜査が続いていますっ」

ウィリアムは、ジェリーを知る自分達が騒いだら、役人に怪しまれるのは明白だと解っていた。　だから、此処まで黙って来たのである。

「どうすんだッ?!!　どうするんだよっ、ウィリアムッ!!」

スティールは、金の入った袋を石で整備された路面に落として、ウィリアムの胸倉に掴みかかった。

無力感に横を向くウィリアムは、弱弱しい声で。

「今、この状態でどうしようも・・・・解りません。　なんとか事件現場を見ることが出来れば・・・」

スティールは、ウィリアム知力を知っているだけに顔を強張った様に笑わせて。

「そうだッ!!　お前が、真犯人を見つけ出せばいいんだっ!!!」

ウィリアムは、苦々しい顔で。

「どうやって現場に?　俺達を役人が入れますかっ?!!　此処は・・・コンコース島では・・・ないんですよ・・」

「あ〝っ・・・・・」

スティールは、また絶望の淵に突き落とされる。　警察活動の部署に配属される役人は、最も騒ぎを起こす冒険者達を毛嫌いする傾向

にある。　他の役人とは違い、冒険者と見ただけで態度に棘が表れる時が有るのだ。

「何で・・なんで・・ジェリー・・。　今日・・・行ったんだ・・」

スティールは、予想もしない事態に力が一気に抜けて、膝を濡れ始めの路面に付ける。

ウィリアムも、髪の毛を濡らし始めながら困惑と苦しい顔。

「マズイ・・内情がサッパリ解らないです・・・」

スティールは、金の入った小袋を掴んで。

「クソッたれっ！！！　せっかく・・・せっかくの大金を手に出来たってのによぉっ！！！！」

と、公園の奥に投げつけようとした。

「待って・・」

振り上げたスティールの手首を、ウィリアムが掴んだ。

顔を上げたスティールは、怒り任せに何かを言おうとウィリアムを暗い中で睨みつけた。

すると、・・・。

「方法が・・・一つだけ。　今、コレ見て浮びました」

金袋を見るウィリアムの口から、突然言葉が零れ出る。

スティールの顔が、俄に変わり始めて。

「なんか・・出来るのか？　ジェリーを・・た・・・助けれるのかっ？」

ウィリアムは、金の入った小袋を見ながら。

「解りませんが・・・我々が唯一顔を知っている人を頼りましょう。其処に行くのに、コイツが必要になるかも知れません」

と、ウィリアムは金の入った袋をスティールの手ごと揺らした。

「ウィリアム・・・頼む・・・助けてくれ・・・」

スティールは、ウィリアムに雨の中で懇願した。

「解ってますよ・・。　此処まで来たんですから・・。　何とか、やってみますよ」

と、ウィリアムは、スティールを立たせた・・・。

その頃、宿屋では・・。

「ほ～。　あの二人がねェ・・。　ワダルの町では、スティールが対抗意識張ってたが、何かあったのかな？」

アクトルが戻っていた。　後、二日ばかりクリスフィと居る事告げに来たのだが。　肝心要のウィリアムが居ないのである。　一応は

と、仲間と一緒に食事だけ付き合うべく。　ロイム達の泊まる宿屋のレストランに同席していた。

広い店内は木造のクラシカルな内装。　壁と天井にランプを燈している。　客席は百近く。　一般の宿泊客から、冒険者まで五十以上の席が埋まって賑やかだ。

シュレーラは、少し詰まらなそうな顔に口先を尖らせて。

「なんか市内観光も飽きて来たわ・・。　明日には、仕事を探しに行くわ」

チェルシーは、ロイムにべったりして。

「一緒に冒険も出来たらいいのにねぇ～。　ロイムく～ん」

ロイムは、顔を真っ赤にして。

「あわわわ・・」

クローリアは、雨の降り出した窓の外を見て。

「しかし、ウィリアムさん達は遅いですわ・・。　もう、雨が降り出していますのに・・・」

ーーー

「・・・・」

ウィリアムとスティール達が昨日歩いていた暗黒街の通りを、フードを被ったマント姿の人物が歩いている。

暗黒街の街の中でもある狭い一角に、下手な悪ですら近寄らない通りが有る。　殺人鬼や麻薬の中毒者が隠れる最も危険な区域。　短い通り二本の中には、隠れ家と化している石造りの襤褸屋が並んでいた。　笑い声が漏れる建物もあれば、中から外を窺う不気味な気配のする真っ暗な建物も。

その中でも、通りから階段で少し下がって建物の入り口が有る窓ガラスの割れた家に、歩いていた黒いマントを着た何者かが入っていく。　雨が降り。　人の近づかない通り。　気配はしても、往来する人の姿など見当たらない。

だが、マントにフードを被った人物は、一度入る前に辺りを見回してから中に入る。

ドアを開けると、強烈なタバコの煙と、アルコールの匂いが薫ってくる。

外から中にマントの人物が踏み込んだ。　其処は、幾らも広さの無いバーだった。　赤いグラスランプが店内を染める。　カウンターの向かいには、持て成す人物は誰も居ない。　カウンター席には、腰に長剣を下げた男性がグラスで酒を傾ける。　顔は、鋭い危険な目つきで、三十半ばくらいのニヒルな男だ。　着ているものは、冒

険者風である。

入って右側と左側には、テーブルを囲むように二人用のソファーが配される。　右のソファー三つに、バンダナを頭に巻いた小太りの小男。　長身のタンクトップ姿に雑草みたいな頭をした不気味な男。　禿た頭のガッチリとした男が、態度を悪くして酒を飲んでいる。　いずれも、旅人の様な、冒険者の様な井出達。

中に入ったマントの人物は、フードを取った。　額に傷のある中肉中背の髪の長い四十絡みの男性で、腰には、細剣（レイピア）を佩いている。

ソファーに座る長身の男が。

「おう、どうだった？」

フードを下ろした男は、左のソファーにどっかり座り。

「どうやら、“奴”の殺しは上手く行ったみたいだぜ。　犯人も、奴の元を訪れた女に成ってる。　多分、成功だろうな・・。　だが、肝心の野郎が居ねぇ・・。　しかも、役人がバタバタ動き回って、中々探りが掛けられねえよ・・」

バンダナを巻いた小太り男は、金切り声の様な耳障りな声で。

「お前、悟られちゃ～いないんだろうな・・。　ウルムルの町でしくじってお尋ね者の俺達だぞ。　下手すれば、役人の手がこっちに回る」

フードを外した男は、苛立たしげに。

「気付かれちゃいねえ～よっ。　とにかく、野郎が指定の場所に来ねぇんだ・・どうしようも無ェ～だろ・・。　それこそ、動き回れないんだ。　派手に動けない・・チキショウめッ！！」

と、テーブルの上に置かれた口の開いたワインをボトル毎一気飲みする。

そこへ、カウンターで飲んでいた男が、無精髭の生える口元を不気味に微笑ませて。

「だが、繋ぎは付く様に手配せてあんだろ？」

フードを外した男は、サッと振り返り。

「アニキ、それの抜かりは無いですぜ」

カウンターの男は、殺気を目に宿して。

「ならいい。　今夜、朝方前に、野郎の家に行こうや。　確か、若いかみさんとガキが居る。　押し込んで、ちょいと世話してもらおうや」

長身のタンクトップ男は、身体を起こして。

「アニキ・・・嫁は楽しむんですかい？」

ウイスキーボトルから、グラスに酒を移すカウンターの男はニヤニヤして。

「当たり前だろう・・。　窮屈な暮らしで、女を味わうのは押し込

みの時だけだった。　どうせ、逃げなきゃならねえ～し。　憂さ晴らしに、裸にして食い尽くしてやるさ。　あははは、見た野郎の顔が見物だね・・」

下衆な事を平気で口にするこの男は、確かに危険極まりない人物の様だ。　他の男達も一筋縄の悪党では無いが。　このカウンター席の男の危険な気配は、丸でとぐろを巻く蛇の様で。　怖い気配が、身体を取り巻いているかの如くに見える。

この不気味な男達は、一体何者なのか。　一体、誰の家を襲おうとしているのあろうか・・・。

話に喜んでいるのは、長身のタンクトップ姿の男とバンダナを巻いた小男。　欲望に染まった目をギラギラさせて下世話な話をし出す。

逆に、フードを外した男と、ガッチリした禿頭の中年男は、酒が不味そうな顔をしながら黙って呑み始めていた・・。

ーーー

海沿いからこの施設に入ると、住民権の取得から、税金の相談、商業関係の役所、海運・運輸省の出先機関などが集まった要塞役所がある。　文字通り、鉄と石の剛健な造りの巨大な施設だ。　黒いその見た目から、“黒い中枢”だの、“役所城”などと云われる。

だが、アハメイルを貫く大通りから来ると、広大な軍事訓練広場を眺める事の出来る軍用広場に来れる。　日中は、駐屯する兵士数万人が毎日訓練をしていて。　子供を連れて訓練を見ている市民も居るのだ。　こっちから見える黒い要塞から北東向きに突き出た建物に、スティールの爆破騒ぎで連れて来られていたのである。

だが、この軍用広場を覗けるのは、広場を隠すように取り囲む高い塀の切れ間に存在する門三箇所だけで。　夕方の訓練終了合図の後直ぐに門は鉄格子で閉鎖され。　昼夜問わず兵士の管理下にある。

ウィリアムは、広場外の通りに面した各行政施設の建物が犇く物陰で、スティールと並んで閉まった鉄格子の門を見る。

（スティールさん、こうなったら借りられる手はリオン王子のみ。とにかく、掛け合ってみましょう）

（おお・・でも、門の前に二人兵士居るぜ。　どうするんだ？）

（交渉して駄目なら、例の強行作戦です）

スティールは、グッと顔を引き締めて。

（解った。　合図は任せるぜ）

ウィリアムは、その言葉を聞いて。　雨の中、街灯の灯りの下に出て行った。

門の前に立つ兵士二人は、黒い上下の服に長槍を持って、ウィリアムが急に物陰から出て来たのに警戒を見せる。

「お前っ、此処は一般人の来るところじゃ無いぞっ」

ウィリアムは、少しヘラヘラした口調で。

「すいませんねぇ。　自分は、この前に港で爆破騒ぎを起こした冒険者なんですが。　リオン王子に、爆発の弁償金を持ってくると秘かに約束したんですよ・・・。　なんとか、逢えませんかね？」

と、云うと。　スティールの隠れてる所に向かって。

「おいっ、お前が原因だろうがっ。　さっさ出てきて言い訳しろよっ」

スティールは、それに内心驚いたが。　ウィリアムがしている意味は直ぐに理解して。

「あ〜、解ったよ・・・」

と、ぶっきら棒に姿を見せる。

兵士二人は、スティールがブラブラと出てくるのに更に警戒色を強めた。

「あ〜、ホラ。　港で爆発騒ぎ起こしたんですよ。　んで、金が二

十万ほど用意出来たんで、持って来た訳です。　スイマセン、お目通り願います」

と、頭を下げる。

ウィリアムとスティールは、上手く行かなかったらこの二十万の金を広場に撒いて大騒動を起こそうと画策していた。　ドサクサに紛れて、建物内に強行突破する気だったのである。

少しでも兵士が渋るなら、騒ぎを起こす気だった。

所が、だ。

「全体っ、進行っ！！！」

と、声がする。

「えっ？！！」

ウィリアムが驚いた。　こんな時間に兵士が動くだなんて・・・。

兵士の一人が、ウィリアムとスティールに。

「悪いが、後日にして貰おう。　これから、リオン王子と兵士の一師団は、最近横行している強盗団の捜索に向かわれるのだ。　まだ、首領格の奴等どもが周辺の町に潜伏している可能性がある。　七日ばかり、遠出をなさる。　さ、道を開けよ」

と。

そして、もう一人の兵士が、最も幅広いこの正面門を開きに掛かった。　もう、整列した兵士数百名ほどが、門の内側に行進してきていた。

ウィリアムは、パッとスティールを見て。

「スティールさんっ、やりましょうっ！！！！！」

スティールも、応えた。

「おうっ、解ってらいっ！！！！！」

兵士は、その二人に驚いて。

「コラっ、変な真似はああ・・」

と、言う時。　ウィリアムとスティールは、五万シフォンに相当するゴールダー金貨の入っていた袋を、一気に掴み取って鉄格子の門の上の宙に高らかと放り上げた。

「貴様っ！！！！！」

と、兵士の一人が槍を構え、門を開放しようとした兵士も、槍を構えた兵士に驚いて。

「何事だっ！！」

と、言った瞬間である。　街灯のロウソクの灯りに袋から飛び散る金貨が鈍く雨の闇に光りながら落ち始めた。　鉄格子の門の内側に止まった兵士達の頭に、金貨がぶつかって濡れた地面に落ちる。

「うわっ、金貨だっ！！！！」

「何だとっ？！！！」

「ゴールダー金貨が上から降って来たぞっ！！！！！！」

「わあああっ！！！！」

金が空から降ってくるなど、絵本の昔話である。　それが、今、現実に成った。　夜の街道警備で賊の残党を探す筈の兵士達が、金貨に目が眩んで必死で拾い始める。

「スティールさんっ」

「オーケーっ！！！　行くぜっ！！！！」

ウィリアムとスティールの二人は頷き合って、混乱に慌てる兵士を無視して走り出した。　塀の高さは十メートル以上なのに、鉄格子の門は、三メートルが良いところ。　更に格子なので、普通によじ登れる。　二人、一気に格子に飛びついて乗り越えながら、ウィリアムは先にもう一つの金袋を宙に投げれば。

「また落ちて来たぞっ！！！」

「何処だっ？！！　何処だ何処だっ！！！！！」

と、広場内を巡回中の兵士まで走ってくる始末。

二人は、もう騒ぎの中で問われる間も無く。　広場の濡れた地べた

に這い蹲って金貨を漁る兵士達をやり過ごした。

スティールは、少し離れてから。

「そ～らよっとッ！！！　もう一個くれてやらああっ！！！！」

と、金袋の最後の一つをブン投げたのである。

異常な空気に包まれる雨の正面門の大騒動。　兵士達の一部では、奪い合いまで起こっている。

ウィリアムは、その光景に。

「我ながら最悪だっ、人の争いの種を利用するなんてっ」

と、他に手立てが無かったかと後悔して軍事司令部の建物に向かう。

髪の毛をすっかり濡らしたスティールは。

「お前の所為じゃない。　俺が頼んだからだ」

と、言う。

街灯と同じランプが施設内にも儲けられていて、二人はその灯りが照らす軍事司令部の裏手の正面入り口に来た。

「其処のお二人、待たれよっ」

老練の落ち着き払った鋭い声が闇の中から飛んでくる。

「ハッ」

「んっ」

入り口の右側の物陰から、馬に乗る何者かと。　その脇に控える黒服の剣士が目に入った。

「やっぱり」

ウィリアムが短く冷静に。

スティールも、

「逢えたな」

と、短く呟いた。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　椿事は突然に（後書き）

次号予告

ウィリアムとスティールは、遂にリオン王子と会えた。　だが、果たして彼を説得できるのだろうか。
そして、ジェリーはどうなるのだろうか。

次号、【背水の二人】＾＾

どうも、騎龍です＾＾

夏の暑さに潰れそうですが。　皆様も、お体を大切に＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　背水の二人

１４、ホローを取り巻く不運。

柔らかい金髪を震わせ、まだスティールと年の変わりない感じの気品漂う男性がデスクを叩く。

「一体何をしてるんだっ！！！」

若い男性の声が部屋に響く。　ウィリアム・スティールをソファーに座らせた王国近衛師団長・第二王子リオンは、白銀の上半身鎧を着けたままに怒った。　これで、二人がリオンに怒られるのは二度目である。

「すみません。　俺が・・・ウィリアムに頼んだんです」

スティールは、頭が前のテーブルに着く位に下げて謝った。

スティールとウィリアム。　二人は、目的のリオンに逢えたのだ。
だが、二人の行為に激怒したリオンは、カンカンで話の切り出しの切っ掛けがスティールには見出せない。

リオン王子は、旅立つ井出達のままに、自分のデスクの前の椅子に腰を掛けてその様子を見る。

しかし、肝心のウィリアムは、静かに黙ったまま喋らなかった。

リオンの後ろに控える黒い軍服に黒い鉄製の胸当てをした初老の髪の長い剣士が。

「君は、リーダーであろう。　何か、言うべき事が有るのではないかね？」

と、ウィリアムに促しを掛けた。

ウィリアムは、瞑目して。

「はっきり言いますが。　今夜のこの警備活動は不発に終わりますよ。　さっき、兵隊達が出て行く理由を聞いて、やっと少し飲み込めて来た・・・」

リオンは、もう怪我人や騒動の騒ぎで秘かな盗賊捜索を中止せざる得ない状態に追い込まれただけに。　苛立ちを見せて。

「いい加減な事は言うべきでは無いな。　それは、君達が中止に追い込んだと云うだけの事だ」

すると、ウィリアムは薄く瞑目したままに。

「フッ・・・」

と、笑ったのである。

黒い身なりの剣士が、少し鋭い口調で。

「そなた、我々をバカにしておるのか？」

リオンは、直ぐに。

「テトロザ、訳を聞く前に怒るな」

と、顔は怒っていながらに制した。

スティールは、ウィリアムとテトロザを交互に見てギョっとした顔をした。

「いっ！！　王国最強の剣術指南役の騎士・・・テトロザ・・・だ」

フラストマド大王国の剣術指南役にして、近衛副師団長テトロザ。
元は冒険者であり、二十半ばで剣士として有名に成った。　その腕を乞われて剣術指南役に召抱えられた有名な男だ。　このリオン王子を始め、王国の騎士で有名な者は全てテトロザの教え子であると噂に・・・。

そして、冒険者に身を扮するリオン王子に付き添う、フェザーハットの剣士“フォルロア”に扮しているのが、実はこのテトロザである。

この事を知るのは、リオン王子の冒険者チームの仲間内と、極々一部の人のみの話であるのだが・・・。

さて、ウィリアムは目を開けると。　ランプが四カ所にしか無く、薄暗いリオン王子の私室にて。　視界に入る窓の外を眺めつつ。

「我々は、さっきばら撒いたお金を稼ぐために、仕事を請けてワダルの町に行きました。　そこで、ある大魔道士の隠棲していた館に

入ることに・・。　しかし、その前の日。　自分一人でその館を下調べに行ったんですよ・・・。　そうしたら、ホローに雇われた殺し屋達に教われました」

リオン・テトロザは目を細めてウィリアムを見測る。

だが、スティールは知らなかった事だけに驚きだ。

「なっ、何だってっ?!!!　お前・・・俺達に・・・隠してたのか?」

「ええ、ケイさんが。　三人とも始末してしまいましたからね」

ウィリアムは、リオンとテトロザに包帯の覆面男Kの事を語り。

「実は、仕事を終えたあと。　別れる前の晩に、自分はケイさんと話をしていました」

さて、Kの話である。

このアハメイルに、代々侯爵として海運省に勤める高官のアウトザッハークと云う名門家がある。　この家に仕え、当主のブレンザ氏に仕えるミケルソンと云う老人は、元は冒険者で。　ブレンザ氏の腹心であり、良き話相手、チェス相手だったと云う。

だが、ウィリアム達がまだコンコース島を離れて、海の上を航海している頃。　この国の首都アクストムから、仕事帰りに馬車で街道を走るブレンザ氏が何者かの集団に襲われた。　例の賊の一味の様であるが、殺しを行ったのはKの始末した殺し屋達だ。　その時、辛うじてブレンザ氏は助かった。　だが、ブレンザ氏を守り抜いた

ミケルソンは、御者の若い男と共に死んだのである。

スティールは、知らなかった事に唖然として。

「じゃ・・・あのケイって人は・・・古い友人の敵討ちに・・・その暗殺者達を？」

ウィリアムは、目を瞑り。

「そう見たいです」

リオン王子は、冷静なままに。

「確かに・・・。　未だに、ブレンザ殿は瀕死の重傷で安静中の身だ」

ウィリアムは続けて。

「ケイさんは、俺に言ったんだ。　ホローって男は、金で何でもやる。　裏側の顔は、暗殺請負人みたいな事もしてるって。　だからブレンザ氏が、首都に何様（なによう）で行ったのか。　それを調べれば、もしかするとホローに暗殺の依頼が有った可能性も解るかも知れないって・・・ね」

スティールは、Kが首都の方に自分達と別れて行ったのを思い出し。

「じゃ・・あの人は、ホローの事も含めて俺等と別れたのか？」

ウィリアムは、スティールの言葉の後にリオン王子を見る。

「今日の夕方、ホローが殺されました」

リオンとテトロザは、少し顔色を変えてお互いに見合う。　そして、リオンはウィリアムに。

「それがどうした？　あのような悪徳商人だ、誰に恨みを買われているか解らないぞ」

すると、スティールは、心に溜めていた事を一気に吐き出す。

「王子っ、でも殺したって云うのは、凄い危ない病気を患ってるジェリーと云う女性なんですよっ。　毎日薬飲んでないと発作を起こすような彼女に、あのホローを殺せる訳が無いっ！！！　なんとか、ウィリアムを事件の現場に連れて行けませんか？」

リオンは、流石に困った顔で。

「おいおい、何を言い出すと思えば・・。　それは、刑事部の役人の仕事だ。　我々が、何でそれを・・・」

ウィリアムは、意味深に。

「そうですか・・。　では、いずれ賊の残りも逃げますね。　いや、もう無理だな。　討伐隊が、今更に街道に捜索に行くようじゃ・・・。　賊の足取りを全く追えてない」

テトロザは、ウィリアムに向かって斬りつけるような目を向けて。

「何が仰りたいのかな？」

ウィリアムは、Kから様々な事を聞いていた。　だから、解ったの

だ。

「ケイさんがこのアハメイルの都市で、不思議なものを目撃したそうです。　街道で襲われたブレンザ氏の剣を、なんと盗賊らしき男性が帯びていたと」

リオン・テトロザの目が光る。

ウィリアムは続けて。

「ケイさんが、暗殺者の手下に吐かせた話ですと。　暗殺者達は、何者かの盗賊の手引きで待ち伏せしたそうですよ」

リオンは、低い声で。

「偽りを言ってないだろうな・・」

すると、ウィリアムはあざ笑う。

「下らないな・・あははは・・・」

スティールは、ウィリアムが王子の前で笑い出したのに気絶しそうになった。

「うっうう・ウィリアムっ!!!!　おまっ・・おおままおおおお前っ」

だが、ウィリアムは笑って。

「だってそうでしょ?　スティールさん。　最近の横行している盗

賊団は、金だけじゃ無くて宝石や美術品まで奪い漁っているとか。
　盗品なんて、国外に売り払う密売ルートでも無い限りはそうそうに売れませんよ。　お金にしたって、急に金遣い荒い人を探れば直ぐ足が着きます。　後ろ盾なり、表向きの商売か何かで資金洗浄（マネー・ロンダリング）して、奪った金・換金した金の出所の洗浄が必要になりますよ。　噂に依れば、奪われたお金も物品もかなりの物とか。　そんな物を易々扱えるのは、輸出入で物を動かせる商人。　そして、その商人の中でも真っ黒黒のホローが殺されたんですよ？。　これは裏が在りますよ。　大体、冒険者のアジェンテさん達と、リオン王子は一緒だったとか。　何時頃です？」

リオンは、アジェンテの名前を覚えていただけに。

「ざっと七日前か・・・」

ウィリアムは、呆れた顔で。

「普通、盗賊で冒険者崩れの輩が逃げるのに、何時までも近場に潜伏しませんよ。　手っ取り早く逃げるなら、国境の街に。　でも、多分は、国境の兵士や役人には盗賊団の事は話しに出てますからね。　リオン王子とて、逃がした残党の事は国境の街などには通達済みでしょう？」

「まあ、な」

リオンの返答を聞くウィリアムは、雨の降る夜の外を見ながら。

「恐らく、残党は逃げるために此処に来ている可能性が高い。　もし、そうじゃ無いなら。　北側に逃げて、港町からこっそり冒険者のフリして逃げるかの何れかですよ。　国境は役人が、街道は兵隊

が警備して。　全く掴らないのは、隠れ家にでも逃げ込んでいるからじゃ～ないですか？　ホローは、表向き骨董品屋なのに、仕事は主に輸入の卸業。　ですが、何十隻も船を持って商売している訳でも無いのに。　商業区の一等地に豪邸構えて住んでいる。　そんな大金を稼ぐ金の出所・・・何処ですかね。　大体、殺されるなら、もうとっくに殺されて然るべきな人なのに。　今まで大丈夫で、今日に限って大丈夫じゃ無いなんて・・・どうゆう事ですかね。　しかも、犯人が聞き足を病気で悪くして、筋肉が徐々に弱って死んでゆく難病の女性？　話を少し聞いた所に依れば、重い石造で殴られたとか・・・。　こんな不審な死亡事件が足元で起こっているのに、居るか居ないか解らない街道を捜索しようと考える方が、俺には理解出来ません」

リオンは、随分と偉そうなウィリアムに、冷静な声で。

「随分と、言ってくれるね」

スティールは、ウィリアムにもうおかしくなりそうな思いがする。

バッと立ち上がり。

「王子っ。　コイツは、コンコース島で警察の役人と一緒に殺人事件を解決し捲くった奴なんですっ。　その御蔭で、結成半月もしないで、斡旋所で高度の依頼を請けれたんですよっ！！　だって、ワダルの町の依頼は、本当ならばチーム“スター・ダスト”か、“スカイスクレイバー”に頼もうとしていた依頼なんですよっ！！！」

一気に、喋り捲る。

リオンとテトロザは、自分達のチーム“スター・ダスト”に来る依頼をウィリアムが請けたと云うのに驚きを隠せなかった。　顔は平

静を装いながら、お互いに見合ってアイコンタクトをする。
その時だ。　ウィリアムが立ち上がり、リオンを見る。

「リオン王子」

「あっ・・何かね」

「実は、犯人と疑われて連れて行かれた女性は、昨日我々と会っています」

「知り合い・・・か？」

「ええ。　ですが、それよりも。　彼女の病気は、治す薬が無い上に緊張・疲労・興奮などで一気に進行が加速します。　しかも、彼女が発症からまだ数年しか経過していないのに、もう呼吸に異常が診られ、発作の症状が出ています。　なんでも彼女を疑った役人は、一方的に彼女を犯人と決めつけ、彼女は発作を起こして倒れたとか。　今、その身が安静状態に在るのかだけでもお気遣い願えませんか？　それと、今夜だけ、我々を事件現場に連れて行って貰えないでしょうか・・」

リオンは、ウィリアムの目を見据えながら。

「君は、医者か？」

「薬師の元で、十年近く手伝いを。　病気の診断から調合まで、総てにおいて手伝いをしてましたから」

リオン王子は、テトロザに。

「テトロザ、手配を頼む。　盗賊の影にホローの噂がある故に、この私リオンが直々に調べたいとな。　その調べが終わるまで、容疑者の女性は軍医の元に預けるとしておけ」

黒い軍服の騎士テトロザは、一礼して。

「では、警察部総長の方に早馬を回します。　それから、ホローの家に向かう馬車もご用意致します」

「うむ。　冤罪を出されても困るしな。　一つ、この二人を信じてみよう。　もし、本当にホローの裏に盗賊団が居たら、一大事だ」

ーーー

ワダルの町で、ウィリアム達とKが別れる前夜の事だ。　食事から帰って来た一行は、ノンビリと疲れを癒しながら。　オルロックの話で浸った余韻に会話も少なく休み始めた。

そんな中。

ウィリアムは、まだ寝れそうも無いので、宿の一階にあるティーラウンジに下りていった。　時は既に遅い。　急ぎで遅くまで掛かってでも町に入って来たと云う者でも居ない限りは、旅人や冒険者でも客として現れそうに無い時間帯だ。　町中でも、飲食店街の明かりが随分と落ちた頃の夜更けである。

（あ・・・）

ウィリアムが、もう人気の無いラウンジに足を踏み入れると。　窓側の席にKが座っている。

「ケイさん・・・眠れないんですか？」

ウィリアムは、歩み寄った。

Kは、熱過ぎる煎れ立ての紅茶を前にして。

「紅茶の入れ方知らなぇ～んだよ、宿の店員。　・・・熱くて飲めねぇ・・」

呆れ笑いをしたウィリアム。

だが、Kは、包帯顔をウィリアムに向けるに。

「ウィリアム、明日でお別れだ」

ウィリアムは、Kの前の席に座りながら。

「アハメイルに帰らないんですか？」

頷くK。

「ああ。　ちょいとな、調べたい事があってな。　アクストム・・・首都の方に行って見る」

ウィリアムは、直ぐにピンと来て。

「あっ、もしかして・・・あの殺し屋達の？」

Kは、一々細かい説明の要らない成年に口元を微笑ませて。

「敏いね。　その通りだ」

「ケイさん・・・一体・・・どうゆう事が？」

Kは、スプーンで紅茶を緩やかに掻き回しながら。

「根っこは、お互いに同じホローって云う商人繋がりだ。　君にも教えておこう」

と、Kは、友人のミケルソンの死。　そして、ブレンザ氏の関係を語る。

「久しぶりに顔を見に来たら、ミケルソンが死んでるなんてな・・。
驚いた。　気に成ってたんだ・・。　最近、アハメイル周辺の町や村の金持ちが襲われたり、街道を行く骨董品の輸送などが襲われる事件・・。　だが、ブレンザって貴族は、宝物の類や美術品の類は持っていなかった」

ウィリアムは、不思議に思う。

「ヘンですね。　ターゲットが違う・・」

「ああ。　しかも、だ。　夜間の荷馬車などが襲われる時は、決まって美術品や骨董品などの価値の有る一部の品のみで。　暗殺者らしき者の係わりなど報告されてないとさ・・。　なのに、生き残ったブレンザって人の話からするに、明らかに盗賊を装った襲撃で。
しかも、この前に森で始末した殺し屋は、ミケルソンを殺してる」

ウィリアムは、疑問が湧いた。

「ケイさん、どうしてあの俺を襲った殺し屋に辿り着いたんですか？」

「ん。　俺がアハメイルに来て、ミケルソンが死んだ事を知って、ブレンザって云う貴族に面会を求めた。　だが、ブレンザと云う貴族は面会謝絶で。　しかも、護衛に騎士が付いていたんだ。　不審に思って、知り合いの役人に聞いたら、ブレンザと云う貴族は殺し屋に狙われたらしいとな・・。　そこで、ブレンザの屋敷を張ってた。　そしたら、毎夜に人気の無い時間帯を選んで、屋敷に探りを入れている者を見つけた。　そっと尾行すれば、ソイツはホローって商人の屋敷に入っていった訳だ。　しかも、その探りを入れている盗賊か暗殺者崩れの人物は、似つかわしくないブレンザの家の家

紋入りの剣を帯刀してやがったしな」

「えっ？！　それじゃ・・・その人物は、襲撃に関与している可能性が・・・」

Kは、湯気を見ながら。

「俺は、関与所か。　ブレンザを見張って、襲撃の手引きをした奴等の一人と睨んだ」

「じゃ、その人物も捕まえたんですね」

「ま、な。　ホロー の屋敷を朝方に出てきたんでね。　捕まえて、締め上げた」

ウィリアムは、こうなると芋づる式で解りだす。

「友人を殺した奴等・・・俺を襲ったあの殺し屋に辿り着いた訳ですね？」

Kは、推理力の高いウィリアムに微笑んで頷き返す。

「ご名答。　そいつは、ブレンザの周辺を嗅ぎまわっていたホローの手下で。　例の盗賊団の下っ端さ。　根っこはホローで繋がってやがる」

Kの話では、こうだ。

ホローは、誰かしらからブレンザ氏の暗殺依頼を請けて、実行に移した。　しかし、元は冒険者だったブレンザの腹心でKの友人ミケ

ルソンが、その凶行阻止したのである。　茂みの崖の下に逃れたブレンザ氏。　殺し屋の男達は邪魔したミケルソンを、生かしたままに狼などの野犬達の餌にすべく。　殺さないように手足をバラバラに切り刻んだのだ。

次の日の朝、ブレンザ氏は街道警備隊に助けられて。　アハメイルに戻ったのである。

さて、ブレンザ氏を再び殺そうと思った殺し屋達だが、身辺敬語に騎士が付き。　殺すのに手間が掛かると踏んだホローは、一端暗殺を中止したらしい。

そして、Kの捕まえた盗賊の下っ端に、ブレンザ氏の剣を与えて偵察活動を命令し。　殺し屋達には、不意打ちで損害を与えて来たウィリアム達の見張りを命じた。

ウィリアムは、それで納得が行く。

「そうか、金を返せるかどうかを見極めろと・・。　でも、クローリアさんの加入で、金の取る所を手っ取り早く女性のクローリアさんに求めたアイツ等は、早まって俺の前に現れた訳か・・・」

Kは、漸く飲めそうになった紅茶のカップを持ちながら。

「そうらしいな。　君の後を奴等が下手糞な暗殺流の尾行してるから、見つけた時は笑えたがね。　前日から、奴等に気付いた君の方が上手も上手だ」

ウィリアムは、少し呆れた笑いで。

「驚きましたがね。　クローリアさんを連れて宿に帰るとき、一つ奥の通りを暗殺者らしい気配を放つ人が尾行して来るんですから・・。　ま、手分けして様子を見ようと思ったら。　俺に着いて来るんで、これは好都合とおもってたら・・・ケイさんが、ね」

Kは、紅茶を啜って。

「・・。　俺は、アハメイルに赴任しているブレンザって貴族が、何で首都に戻ったか・・・。　それが気に成る。　だから、首都のアクストムに行って、調べて来るつもりだ。　ウィリアム、アハメイルに戻るなら気を付けろよ」

「えっ・・・ああ。　新手の見張り役が付きますね」

すると、Kは鋭い目つきで。

「違う」

ウィリアムは、Kの目に非常事態の匂いを嗅いだ。

「何か・・・起るとか？」

「いいか？　暗殺者達は、自分達が表に出る事を異常なまでに嫌う。人に見られてはいけない世界の住人だからだ」

ウィリアムは、それは十分に承知している。

「はあ・・。　確かに、闇の住人と呼ばれるくらいですからね・・」

Kは、また紅茶を啜ってから。

「そうだ。　なのに、今回の暗殺者達はその道から外れた“崩れ者”。　俺がちょいと調べただけで、下っ端に辿り着くようなら。ホローの裏の顔に繋がる悪事の糸に綻びが有ると言っていい。　悪事の世界は、用の有る糸とない糸の切り合いの世界・・・。　もし、ホローを快く思っていない存在があるなら、何かしらの形でホローとイザコザが起る。　借金なんていう形で表向きに快く思っていない君達は、そうゆう奴等からすれば利用対象だ。　ホローは、影で強盗団を組織している可能性は濃厚。　しかも、今回は、ブレンザの暗殺に失敗しているしな・・。　大体、荒らしまわっている強盗団が、何処で奪ったものを売り払っているのかも気に成る・・・。　ホローが関係しているなら、いずれ何かしら起るぜ」

と、何かを含ませる口調で言い切る。

ウィリアムは、それに非常な不安を覚えた。

「ケイさん・・・もし考えつくなら・・・何が起こりますか?」

紅茶のカップに口を付けるKは、意味深にウィリアムを見ている。

そして、カップを下ろすと・・・。

「幾つか考えられる。　一つは、ブレンザの死亡・・。　つまりは、暗殺の成功」

「それは・・・ありますね。　依頼されていたのなら、必ず成し遂げなければ成らないから・・・」

「だな。　でもそれは、ホローにとって見れば・・・テメェの面子の維持だ」

ウィリアムは、頷いて理解しながら。

「他には？」

K、少し沈黙してから。

「・・・ホローの死・・・。　若しくは、盗賊団の壊滅・・・。他には、ホローの悪事の露呈が怖いな」

ウィリアムには、ホロー の死などとは考えもつかない。

「ホ・・ホローが・・・死ぬんですか？」

K、紅茶を口元に近づけて。

「可能性の一つさ。　下手すれば、連動するやもしれんしな」

ウィリアムは、仲間の事もあるだけに、この話には嫌な気配を感じざる得ない。

「ケイさん・・・そんなこと・・・有り得ますか？」

カップを下ろしたK。　淡々と。

「いや、起る可能性を考えるに、だよ。　だが、強盗団が捕まるような事が起るなら、ホローは実に危ないぞ。　半年近くも暴れ回っているのは、警察役人か、警備軍の中に情報を漏洩している奴が居るに決まってる。　そうじゃ無いなら、優秀な軍を持つアハメイルの司令部が、高々盗賊団をこうも野放しに遣られるかよ。　しかも、

普通。　盗賊・強盗団の類ってのは、短期間で荒稼ぎして国外に逃亡を図るのが普通だ。　盗んだ物を盗んだ国で捌くなんて、リスクがデカイからな。　しかも、国内で売ったんじゃ～金の流れでいずれ解る。　それを防ぐには、商売の売買に金を流して利益を得る資金洗浄（マネーロンダリング）が不可欠だ。　其処を考えると。　ホローって商人が強盗団の頭ってのも頷けるし。　金で役人の中にまで触手を伸ばしていると噂のホローだ。　役人の裏を掻いてノウノウと悪事をさせ続けられる」

ウィリアムは、漠然と理解して。

「では、もし強盗団が壊滅させられる事態が起ると云う事は・・・。　ホローの悪事の糸が切れた証拠・・・ですか？」

「多分な・・。　逆に、ホローが、自分の身の回りの整理に、態と強盗団を売る可能性もある。　だがどっちにしろ、ホローの身の周りに捜査か何かしらの陰謀の手が回り始めているから、そうゆう事が起る訳よ。　起ったら・・・の話だが。　俺には、その可能性・・・有るような気がしてる。　捕まえた下っ端の奴が言ってた。　ホローは、事を荒立ててるのを脅えるくらいに嫌っていると・・。　前なら、金でごり押しで掻き消す男が、何事かに脅えてるってな」

ウィリアムは、Ｋに探る様な感じで。

「ケイさん・・・その捕まえた下っ端は？」

「ああ・・・死んだ。　役人に引き渡そうかと思ったら、舌を噛まれた。　役人の内部にも、ホローの賄賂に尻尾を振る奴が居るようだ。　“殺されるぐらいなら、死んだ方がマシだぜっ！！！”って・・・。　ホローって奴は、相当の悪党だぞ。　だから、奴の膝元に帰

るんなら、覚悟しとけよ。　何が起るか・・・解らん」

・・・・・時を、ウィリアム・スティール・リオンの三人に戻す。

これが、ウィリアムとKの別れの前日の会話である。

スティールは、Kが何もかも予想していたのに驚いた。

「すげえ・・・強盗団も壊滅したし、ホローも死んだ・・・。　予測通り・・・だぜ」

だが、リオンは渋い顔だ。

「何と云う事だ。　もう、そこまで読み知る人物が居たとは・・・。　ウィリアム、何で戻って来た日にその事を教えに来てくれなかった？」

ウィリアムは、俯き。

「いえ・・・俺も半信半疑だったんですよ・・・。　それに強盗団が捕まれば、いずれホローの悪事は露呈するんじゃないかって・・・。　今、ケイさんが言わんとした意味が解って来ましたよ。　ホローを貶(おとし)める何者かが居たとするなら。　そいつは自らの手を汚さない為に、無関係なホローと係わり合う誰かを陥れる可能性が在ると・・・。　そうゆう意味も含んでいると・・・気付くのが遅すぎた・・・」

リオンは、ウィリアムの姿に。

「とにかく、その話が聞けた以上。　ホローの殺害のタイミングも上手すぎる。　あの太って身体のガッチリしたホローを、その疑わ

れている女性の力で殺せるとは思えない。　裏がありそうな匂いがしてきた。　いや、ウィリアムには感謝すべきに成るやもしれないな。　もし、ホローの殺害に裏が在ったら・・。　今夜の隠密行動は中止されて然るべし・・。　全く、今夜は寝れそうに無いな」

リオンも、ホローの死の裏側に何か、陰謀めいた影を感じて来たのである。

ーーー

「なっ・・」

驚くリオンより先に、スティールがガバッと立ち上がって。

「ふざけてるのかっ?!!!!!　死んじまうよっ!!!!!　ジェリーはっ?!!　ジェリーは無事なのかっ?!!!!!」

勢い余り、テトロザに食って掛かる勢いのスティール。

ウィリアムは、顔を両手で覆い。

「最悪だ。　マズイ・・・病気の進行が加速したんだ・・・。　心不全で死ぬ可能性も有る」

スティールは、もう気が狂いそうで。　ウィリアムに縋りつき。

「ウィリアムっ、お前が診てくれよっ。　なっ?!　なあッ?!!」

だが、ウィリアムは、顔を覆ったままに左右に振った。

「いえ、もう誰が診ても同じですよ・・・。　絶対安静で、気が付くのを待つしかない。　弱った身体には、薬すら毒でしか・・・」

「あ・・ああ・・そっ・・そんな事ってあるかぁっ!!!!!」

スティールは、リオンのデスクの前に膝を崩す。

テトロザは、言うのも苦しい顔で。

「王子、それから・・。　今回の事件の担当した刑事役人は、なん

でもホローと面識があるようでした。　頭ごなしに女性を犯人と決め付ける姿に、下級の警察役人の中には異議を唱える者も居たとか・・・。　それで、丁度残っておられた刑事管理官のロレンツ殿に、現場案内と事件の再検証を頼みました」

リオンも、ジェリーの容態が気に掛かる。　顔は曇って、苦々しい。

「そうか・・。　ロレンツなら、平民出の公平実直な捜査員だ。だが・・確か、彼はコンコース島の警察部の役人と合同で、密売組織のルート解明の任に着いていたのでは？」

「はい。　なんでも、中年の女性に毒殺された富豪が主犯だったようですな。　その事件とホローの商売が絡んでいそうなので。　是非にロレンツ殿も捜査したいとか・・・」

その時だ。

“ドンっ！！！”

スティールが、リオンの前のデスクに拳を叩き付けたのである。

テトロザも、リオンも驚くと・・・。

「その事件だ・・・コンコース島で、ウィリアムが最後に解決した事件っ。　何てこった・・向こうの事件の尻尾は・・・此処かよっ」

と、スティールは、怒りに身を震わせる。

テトロザが、本当に驚いた顔で。

「本当かね？」

ウィリアム、苦々しい顔で。

「でも、関わった商人の名前に・・・ホローの名前は・・・無かった。　しかし、大量の盗品や禁制品を持ち込んで来ていたポール達・・・。　やはり、根っこは繋がっていたのかもしれません・・・。　まさか・・・こんな・・・」

ウィリアムとスティール。　二人して意外だった・・。　まさか・・まさか、こんな形で別れて来たコンコース島のあのチェルナー殺人事件の後始末に関わるとは・・。

スティールは、ウィリアムに掴み掛かる。

「ウィリアムっ、何がなんでも・・・何が何でもこの事件を暴けっ！！！　もううんざりだっ！！！　無関係の人間がっ、あの悪魔達でおかしくなるのはっ！！！！」

ウィリアムも、少し身が震えていた。

「解ってます・・・。　俺があの事件を解いた御蔭で、何かしらの綻びが生まれていたんですよ・・。　最後まで、決着つけましょう。　ジェリーさんを助ける意味でも、俺の後始末の意味でも・・・必要な事ですからね」

テトロザは、二人に向かって。

「馬車が用意してあります。　とにかく、早速向かうとしましょう

か」

ウィリアムは、無言で立ち上がる。　決意が顔に出ていた。

スティールも立ち上がると、

「テトロザさんに、王子。　迷惑掛けてすまない・・。　もし、事件に裏があるなら、ウィリアムが必ず暴きますから。　その代わり、ジェリーの事はお願いしますよ。　まだ、遣り残した事が有るんですから・・・彼女にはね」

リオンは、頷く。

「ああ、テトロザに彼女の安全を預けて行く。　それに、お手並み拝見だ」

と、立ち上がった。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　背水の二人（後書き）

次号、予告

ホローの豪邸にリオンと共に行くウィリアムと、スティール。　豪邸では、コンコース島の刑事役人モルビットの古き知人が居た。事件の捜査の検証を始める中で、ウィリアムはジェリー以外の怪しい人物の特定をすることに・・。

次号、【事件現場にて】

お楽しみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾

お盆も終わり。　昨日、再度お墓に行ってきました＾人＾

しかし、最近の夕方から夜は過ごし易くて嬉しいですね＾＾

インフルエンザの流行と、甲子園を気にしながらの毎日です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 事件現場にて

15、事件へ望む若き魂

ウィリアム・スティール・リオンを乗せた馬車が、雨のアハメイルの市内に走り出した。　街灯の灯りは、大きい通りのみに点いている。　行政区は昼間のみ人が集まるためか。　今は、大通り意外は暗い闇の中で、もう人が殆ど残らない。

アハメイルの東側は、行政区であり。　核所（コア）と云う異名が有る。

ウィリアムは、馬車の窓から走る外を見る。　流石は王子リオンの馬車である。　窓も大きく、車体も大きく、車内の広さはロイヤルクラスの宿の個室部屋のようだ。

リオンは、スティールとジェリーとの出会いを聞いて。

「ほお、出逢ったばかりの女性一人にそんなに肩入れするとはな・・・」

スティールは、俯いて黙る。

ウィリアムは、澄ました顔で。

「趣味は人それぞれ。　でも、見捨てるしかしない人間よりは、生暖かい人ですよ・・・スティールさんはね」

と、フォローしてから。

「俺が島で事件を解決した時。　ポールと云う元冒険者が盗品・禁制品の運び屋の頭をしてました。　ポールは、様々な商人から、夜に密会所で逢って盗品や禁制品を別の国に売買する仲介人です。そして、そのポールを指揮して、買い手を探し回っていたコンコース島の主犯がチェルナー・・・。　ポールと同じく、冒険者を遣っていた男ですよ」

リオンは、ウィリアムとスティールが並んで座るソファーの前に、一人で五人掛けソファーを独占して真ん中に座り。　腕・足を組んでいる。

「ふむ・・・島で殺された男が・・・そのチェルナーか？」

「ええ・・。　長年自分の支配下に置いておいた女性をポールに売り渡そうとしましてね。　逆に、毒で殺されました」

「なるほどね」

ウィリアム、窓の外を見ながら。

「チェルナーは、島で様々な悪事を商売にしていました。　密売、禁制品の仕入れ、盗品などの洗浄、そして・・・人身売買・・・。　もし、その悪事の北の中継地が、ホローの元なら。　俺は、命懸けでもホローの悪事を解明しなければなりません。　島から連れ攫われた人の捜索も、俺の冒険の目的の一つですからね」

リオンは、瞳を細めて。

「ほお・・・誰かね？」

ウィリアムは、あえて。

「友人の娘さんです。　今から二十年近く前に、チェルナーに売り飛ばされたんですよ」

スティールは、ハッと気付いた。

（あっ・・・あの・・・役人のおっさんと、アリネットさんの・・・）

スティールは、ウィリアムがチェルナーの事件と関連が有るかもしれないと解った時から。　妙に真剣な様子に変わったと思った。

何か、隠している事が在るのかと思ったが・・。

リオン、ウィリアムを見つめて。

「随分と複雑な様子だな。　しかし、もし本当に繋がっていたのなら・・・運命だな。　君は、この事件に呼ばれたのかも」

「・・・」

ウィリアムは、それについては反応しなかった。

今は、夜も更け始め。　歓楽街の盛り上がりは最高潮である。　後は、徐々に・・・緩やかに、盛り上がりが冷めてゆくのを待つばか

りであろうか。

ウィリアムとスティールが、こんな大事件に巻き込まれていると、ロイムやクローリアも気付かないだろう。

宿屋街の超一流宿に戻る為に、雨の中歩いていたアクトルは。　都市の中心を走る大通りから曲がって、クリスフィが待つ宿に向かって歩いていた時だ。　背後の離れた大通りを、急ぐ馬車が走り抜けた音を聞き。

（今頃に忙しい人も居るものだ。　・・・しっかし、ウィリアムもスティールも何をやってるのか・・・。　別に泊まるなら、そう言いに来てもいいだろうに・・・）

やはり、仲間であり。　トラブルメーカーのスティールが一緒なだけに心配だった・・。

だが、その今正に背後を駆け抜けた馬車に、心配するウィリアムとスティールは乗っていたのである。

濡れた石の路面の雨水を車輪が巻き上げ、三人を乗せた馬車は宿屋街を過ぎて行く。　商店街に差し掛かる頃。

「もう直ぐですね」

と、ウィリアムが。

リオンは、冷静な顔で。

「しかし、金を持ってる人間が商店街に住居を建てて住むとはな・・

。　今だに信じられない」

ウィリアム、言葉静かに。

「理由・・・在るのかも知れませんよ」

「理由・・か」

上半身の鎧を脱いで、白い貴族風のナイトバロン風の服を着ているリオンは、暗い馬車の中で呟いた。

その時、リオンの背後から。

「着きます」

と、御者の声がした。　馬車のスピードが明らかに緩まった。

ウィリアムは、スティールに。

「もしかしたら、緊急の事も考えられます。　スティールさん、剣は何時でも使える気構えをお願いします」

スティールは、眉間にグッと皺を寄せて。

「解った。　相手が居るなら、俺がヤル」

と、気炎を吐いた。

冒険者としても、剣士としても一流のリオン。　スティールを見るに、腕には確かな心得が在ると思えた。　だが、ウィリアムが測れ

ない。　気配りといい、気配の少なさといい。　武術の心得が在る様に思えるのだが、剣や武器の類を装備している雰囲気が無い。しかも、格闘武術ならば、服装も違っていいのだが。　見るからに冒険者で言うなれば、戦わない学者。　若しくは、冒険者風の旅人と云った感じである。

（この者に荒事を頼む所を見ると・・・さほどでも無いのか？）

ウィリアムの今は、若者の姿その物である。　リオンは、ウィリアムには知識のみ・・・と踏んだ。

都市を貫く大通りから、裏手の広い道に入って少し行った場所の街灯前に止まった馬車。

ウィリアムは、雨の路上に最初に降りた。　そして、振り返れば・・・。

「・・・」

黒い屋敷の影が結構な高さで見えている。

「おいおい・・・こんな・・」

リオンが馬車から降りて、ホローの屋敷の前の入り口で警備している下級役人に敬礼を貰いながらに驚く。

ウィリアム・スティールが脇に来ると。

「確かに・・・理由はありそうだ。　この一等地で・・コレだけの建物・・・どれくらいの税金を納めているんだ？　なんだか・・・

始めから怪しくなってきたな」

リオンも実物を見て思う。　ホローの屋敷は、大通りとこの裏道の広い通りの間に建つが。　横幅は凡そ百メートル。　縦幅も大体は五十メートル・・。　商業区でなら、この土地は“広大”と言っても差し支えない。　広さの意味より、税金と云う金銭的な価値から出てくる事だが。

リオンは、ウィリアムの前に先だって、ホローの屋敷内に進みながら。

「後で税務省の役人に問い合わせるか・・・。　こんな建物して・・・税金など払える額では無い筈だ」

リオンの口から出るこの言葉に、スティールはウィリアムに近寄って。

「そんなに取られるのか？　税金・・・」

と、耳打ちすると。

「当たり前ですよ。　この土地で、商業意外目的なら、年間にざっと五十万シフォンとか取られるんじゃないですか？」

「ぶっ！！」

スティールは、リオンやウィリアムが不審に思う理由が解った。

敷地を取り囲む黒い外壁の一部に設けられた外の門を潜り。　半周も無い数段の螺旋状に成る階段を上がって、屋敷正面に向かう庭に

入った。　暗がりの雨の中、背の低い庭木の間を抜けて行くと。
左手に金ぴかの枠にガラスを填めた玄関が見える。　ガラスからは、屋敷内に燈されたランプの灯りが漏れ出している。

「悪趣味な入り口だぜ・・」

スティールは、見たことも無い様な扉に、芸術的なセンスは感じられない。

「成金・・だな・・」

リオンは、そう感想を洩らして扉を開いた。

黒い漆黒の石が床を作り、玄関に合わせた形のアーチ状のままに、高い天井が広がる。　ベージュの壁石はタイル張り。　伸びる廊下の先に、壁が見えて。　左右に別れる形を見せていた。

玄関の内側に立っていた若い役人が、青い上下の制服に身を包み。
頭には青いベレー帽をして此方を向いたのである。

「失礼ですが・・リオン様でしょうか・・・」

リオンは、服に付いた雨水を払い除けながら。

「ああ、テトロザの方から連絡が行っていたかな？　私がリオンだ。
それから、此方の二人は、私の知り合いである。　君は？」

若い制服の細身の男性は、敬礼をして。

「ハッ、私はトレンダース刑事官の副官をしております。　フラッ

クターと言います。　ロレンツ刑事官から、応援要請を受けまして。
本日、事件の現場に居て捜査に従事していましたので、お役に立てるかと思います。　失礼ながら、捜査の経過の説明を致す様に言いつけられています」

緊張した顔で、シッカリと云うフラックター刑事。

リオンは、先ず。

「そうか、ご苦労様」

と、言ってから。

「しかし、今回の捜査の遣り方は賛成出来ないな。　病気の容疑者を、容態が落ち着かないうちから尋問に引き出すとは・・・。　もしも、万が一が在ったらどうする？」

と、鋭い口調で言う。

スティールは、ギラギラした目でフラックターを睨んだ。

すると、フラックターは困惑の様子を見せ始める。

「はい・・、すみません。　主任のトレンダース様は、なんでか彼女を犯人と決めつけ。　何時もでは考えられないぐらいに厳しく疑いを・・・。　私共は、倒れた女性の事ですから。　容態が回復してから・・せめて明日にと言ったんですが・・・。　全く・・」

「ふむ・・・」

リオンも、様子がおかしいので返す言葉が無い。　間近に居る副官の彼が、訳も解らずに困惑している次第なのだから・・。

其処へ、死角の左手の廊下の先から別の人物が現れた。　穏やかな顔、高い背の男性だ。

フラックターが、その人物を見る成りに敬礼して。

「ロレンツ様、リオン王子が御出でになられました」

すると、リオンは薄く笑って。

「久しいな、ロレンツ」

四十までどうかと云う感じの紳士風な男性、ロレンツは。　少し惚けた様子で笑い。

「さあ・・お久しぶりでしたかな・・・。　随分、近い前にお会いしたような・・・」

リオン、呆れも滲ませる顔で。

「虐めないでくれ」

と、言ってから。　真顔に戻して。

「ロレンツ、聞きたい事がある」

青い軍服の様な正装姿で、帽子は被っていないブラウンカラーの髪をオールバックにしたロレンツは、スッと手を後ろに組んだままに

姿勢を正した。

「王子、何ですかな？」

リオンは、態とウィリアムの前に立つ形でロレンツに近づけば。

「実はな、コンコース島の役人と合同の捜査を展開しているようだが・・・。　向こうの島の役人に、モルビットと云う人物は居るのかな？」

すると、“モルビット”の名前にロレンツの顔が綻んだ。

「ええ。　優秀な役人ですよ。　私とは違って、由緒あるお家柄の人物ながら、男らしさ・・・人間味・・・寛容さ・・・どれにおいても確かな御仁です。　今回、大掛かりな事件の事で、私と合同の捜査主任に成りましてな。　七日ほど前に、捜査資料の写しとお手紙を頂いたばかりです」

「ほう・・親しいのか？」

「ええ。　何度も今の携わる事件の末端の事で、合同捜査した仲ですし。　お互いに気が合いますのか・・・同じ部屋で泊まり明かした事もありますぞ」

と、嬉しそうに言う。

ウィリアムは、何も云わずに黙っていた。　しかし、リオンの腹は読めていた。

だが、リオンは、あえて聞く。

「ロレンツ、でな。　その・・モルビット氏と縁の深い青年に、ウィリアムと云う名の青年が居るそうだが・・・」

ロレンツの顔が、パッと引き締まった。

「おお・・王子の耳まで届いておいでとは・・。　モルビットは、捜査で逢う度に話してくれますぞ。　若き天才の事を」

リオンの顔が、スッと真顔に成る。

「“天才”・・・とは、恐ろしいな」

ロレンツは、瞑目して首を左右に。

「いやいや、モルビットの話では、幼き頃より苦労した御仁と聞いております。　ですが、犯罪を見抜く様子を聞く限り、私どもの様な凡人とは、ちと違っておりますよ。　モルビットの手紙では、なんでもそのウィリアムと云う青年は冒険者になったとか。　しかし、島を去る前に、モルビットの最愛の女性を救い出し。　更に、刑死するのを食い止めてしまったと・・」

「ふむ・・・確かに面白い話だが・・・。　ロレンツ」

「はい？」

ロレンツは、リオンに顔を向けたときだ。

リオンは、ウィリアムを半身になって見せて。

「この若者が、そのウィリアムだ」

と・・・。

ウィリアムとロレンツの顔が噛み合った。

ロレンツは、直ぐに驚いた顔をリオンに見せて。

「王子・・・彼を・・知って呼んだのですか？」

「いいや・・・。　今回のホロー殺害の容疑を掛けられてる女性は、彼らの知り合いだそうな。　で、彼女にホローを殺せる訳が無いと・・・私に相談をしてきた訳だ」

ロレンツは、後ろに組んでいた手を放し。　ウィリアムの前にやって来た。

そして・・・。

「君が、ウィリアム君か。　活躍の話は、モルビットから聞いている。　君が、犯人は彼女では無いと云うのなら・・・確たる根拠が在るのかね？」

静かに・・・鋭く・・・試した口調。

スティールは、直ぐに。

「当たり前だっ。　ジェリーは病気だぞっ！！！。　あんな細腕で、凶器の石造とやら、持てる訳無い無いっ」

と、ムキになって返す。

ロレンツは、フラックターに。

「そうなのか？」

雰囲気の変動に困惑の彼は、弱弱しく。

「トレンダース様は、凶器で殴ったと・・・。　でも、まだ現場に残して在りますが。　重そうな石の像ですので。　私は無理があるかと・・・」

「フム」

ロレンツが頷くと、ウィリアムは口を開いた。

「根拠の一つは、それ以前の問題ですよ・・。　なんで、ジェリーさんが殺害現場に来れたか・・・。　それ自体が、おかしいですからね」

皆、パッとウィリアムを見る。

リオンが、直ぐに反応し。

「だが、君達も言っていたではないか。　彼女は、ホローの元に頻繁に出向いていたと・・。　何か、交渉をしていたようだと・・・」

フラックターが、直ぐに手元の資料を見て。

「はい・・・確かに。　その事実は～・・・本人と・・この屋敷の

メイド達からの証言も取れてます。　訪れる様に成ったのは・・、今年から・・ですかね。　毎度、門前払いで執事に追い返されていたみたいですが・・・」

ウィリアムを、ロレンツが見る。

「確かに・・・・」

呟くロレンツ。

フラックターが。

「は？　何か？」

ロレンツは、フラックターにグイっと詰め寄って。

「君、何で通されたんだ？　彼女は・・毎度門前払いだったのだろう？　なんで、この日だけ通されたのだ？　ホローが、何か彼女に特別な話でも在ると執事に言ったのかね？」

「あ゛っ」

意味を理解して驚き焦り出すフラックターは、あたふたと資料を見る。

「いいい・・いえ・・。　そこの所が良く解りません・・。　執事の証言もありますが・・、その事に関しては・・・」

“いえ、訪れるのは毎度の事でしたから。　どうせ、直ぐに追い返されるだろうと思ってました・・・”

「と・・・。　アレ？」

フラックターは、資料を何度も見る。

ウィリアムは、ロレンツを見て。

「主人に余計な手間を掛けさせないのが執事の役目。　毎度追い返されるジェリーさんは、門前払いだった。　なのに、何で今日は通されたのか。　ジェリーさんは、何か有力な交渉条件でも今日は在ったとか？」

と、流す目つきでフラックターを見る。

「いえいい・・アレ？　そんな証言無いな・・・。　あ・・・彼女も取調べで言ってますね」

“何時も会えないので、駄目元だったのですが・・。　何時もなら、門の前で追い返す執事さんが、何故か入れてくれたんです。　ですから・・・中に入りました”

「だそうです・・」

リオンは、早速ボロが見えて。　杜撰な調べ方に憤りを覚えた。

「なんだ、その話は。　それで彼女を一方的に犯人に決め付けるだと？　おかしいにも程があるなっ。　ロレンツ、後でトレンダースに明日一番での出頭命令を出せ。　事となら、私が取り調べても良い。　ホローと顔見知りな上に、こんな強引な捜査を国は許してないぞっ」

ロレンツは、リオンに頭を下げて。

「はっ。　とにかく、今は証言を元に調べましょう。　見つけた捜査の綻びをしっかり確認いたしませんと」

と、下手に出て言い聞かせてから。　ウィリアムに向き直ると。

「ウィリアム君、では先に進もうか。　君なら、もしかすると犯人の目星がつくかもしれない」

ウィリアムは、黙ったままに頷く。　だが、ウィリアムは、もう犯人の目星など付いてた。　殺害の手口の立証だけが課題だったのである。

ーーー

有り。　ホローの書斎に向かう行き方は知っていたとか。

“勝手に会いたまえ・・。　私は忙しいのだ”

執事の男性は、そう言って玄関ホールからT字路に向かって歩き出し。　ジェリーを置いてさっさと廊下を左に曲がった。

ウィリアムは、此処で。

「左の廊下に行ってもいいですか？　どうなっているか見たいです」

と、スタスタと左に曲がる。

「ああっ、ジェリーと云う女性は右に・・・」

フラックターがウィリアムを制止しようとするが・・。

「いい。　行かせてあげろ」

ロレンツは、許したのである。

ウィリアムが左の廊下に入ると、耳に雨音が聞こえてくる。　外の雨音が、壁の幕を通して聴こえて来る様な音の響きではない。　明らかに、外に降り落ちる雨音であり。　シャラシャラと水の音も・・。

「・・・中庭。　なるほど」

玄関先に居て、何処からか水の匂いが風と伴って来る感覚を覚えていたウィリアム。　仕切りすら無い廊下の終わりの先には、屋敷の

中に作られた中庭が見えたのである。

ホローの屋敷は、二つの館が向かい合い。　その狭間に広い長方形の池を有した中庭が有ったのだ。

「おわぁ、豪勢な中庭だな～」

ウィリアムの後から、スティールとリオンと肩を並べてやってきた。

ウィリアムは、最後にやって来たフラックターに振り返り。

「執事さんは、向こうの館に行った訳ですか？」

と、壁の無い。　支柱と屋根だけの伸びる外廊下の先に指を向ける。

「えっ？！！　あっ、ハイ・・・。　執事は、向こうの館で、ホローに言いつけられていた雑務をこなしていた様で。　容疑者と別れてから、また直ぐ向こうの別館に戻ったと言います」

ウィリアムは、頷いて。

「では、今、我々が居たのが本館で。　向こうが別館ですか・・」

と、納得。

本館は、四角い形の白い外壁。　雨の中の向こうに見える別館は、丸みを帯びた美術館の様な趣が覗ける。

（さて・・・）

ウィリアム、直ぐに庭の池を見る。　本館と別館を繋ぐ様な池。
長い縦幅は、見てはざっと三十メートル以上。　池の向こう側にも、本館と別館を繋ぐ外廊下が有るようだ。　ウィリアムの居る側から、向こうの池の反対側まで十メートル以上はある。

その庭の中でも、ウィリアムは本館側の池の隅を覗き出す。　外廊下の上の石造りの屋根から顔を出して・・。

ロレンツは、直ぐにウィリアムに近づいて。

「何か有ったかね？」

すると、ウィリアムは感情の少ない声で。

「いえ・・・この池は、捜索したんですか？」

と。

フラックターは、困惑し通しの面持ちで。

「いえ・・・まだですが。　多分、何も無いかと・・・」

ウィリアムは、顔を引っ込めてフラックターを見る。

「それは、杜撰です。　是非、浚ってみる事をお勧めします。　何か、出てきますよ。　事件に関わる何か・・・が」

ロレンツは、直ぐに。

「そうだな。　此処は、確かに怪しい・・・。　どれ、建物内を巡

回している皆を集めて、作業をさせるか」

と、別館から向かってくる下級役人に歩いて行く。　ロレンツは、今、屋敷内と外を巡回・見張りする役人を集めて。　半分を池の捜索に。　二人を、応援要請に。　残りは、誰も建物の中に入れないように、規定の場所を警備するように指示する。

応援要請に行かせる二人に。

「いいか、池に入る者のための着替えと、暖を取れる用意の忘れるな」

と、忠告する。

リオンは、ロレンツが何故にこうも早く動くか解らない。　だが、このロレンツも刑事官としては一流の人物と知っている。　だから・・。

「ロレンツ、その二人を私の馬車で行かせろ。　代わりに、テトロザに伝言を頼む」

リオンは、冒険者として、剣士として培った勘が、ウィリアムとロレンツの動きに乗ってみようとと思えたのである。　そして、万が一に備えて。　ウィリアムとスティールが金をばら撒いて足止めした兵隊を、応援に使おうと考えたのだ。

この直感が、果たしてどう出るか。

だが、ロレンツはまだ一度は書類に目を通していない。　だからこそ、ウィリアムが気に成る場所は、ロレンツも気に成っていた場所

なのだ。

ウィリアムは、ロレンツとリオンが動くのに口を挟まない。　寧ろ、フラックターに。

「所で。　向こうの別館に行く通路は、こっちと池の向こうの通路のみですか？」

フラックターは、リオンの知人と云うウィリアムなだけに、少し戸惑いながらも。

「あ、ハイ。　でも、道と云うなれば、別にもあります」

「何処です？」

「向こうの外廊下の先は、裏口で。　使用人や配達の店の者などが出入りする場所があり。　其方の方から、敷地を囲う壁と別館まで伸びる庭木の間の細い狭間を行くことも出来ますね。　ただ、大人ではちょっと。　容疑者がギリギリの幅の体格でしょうかね」

ウィリアムは、納得の顔で・・更に。

「所で、執事は、一体別館で何を？」

「あ、それは・・ダンスパーティーの支度だそうです」

スティールが、雨の降る中庭を見て。

「へえ。　知り合い沢山居るんだ・・。　商人の付き合いだな」

と、呆れ顔。

すると。　フラックターは資料を見ながら。

「いえ・・それが不思議なんです。　ホロー自身に知人など少ないらしいんですよ」

スティールは、耳を疑い。

「はあ？　じゃ・・・人も来ないダンスパーティーか？」

と、聞き返す。

この時、ウィリアムの目がスッと細まった。

フラックターは、そんなウィリアムに気付かず。

「いえ・・、私用人の話ですと・・。　ホロー自身としての友人的な知り合いが少ないんですが、近年ほどから、こうして時々ダンスパーティーを開く様になったそうです。　来るお客は、何時も満員に近い数が・・。　ですが、毎回パーティー毎に来るお客の顔はかなり変わるそうです。　固定のお客など、夫婦三組か四組ほど。あと、三十から四十組以上来るお客は、それぞれ・・。　時々、豪く人相の悪い大男や、嫌な目つきの男も居たとか・・」

スティールは、上流界の話にしては物騒だと思い。

「本人が悪党だから、寄って来るのも悪党ってか。　“類友”～じゃないか」

と、呆れた感じに言い捨てる。

そこに、ウィリアムが。　スティールの肩に手を置いて。

「スティールさん、ナイス」

と、本館に戻り出す。

「おっ？　何が・・・って、おいっ」

ウィリアムは、それだけ云うと振り返り。

「では、本題に入りましょうか」

と、また歩き出した。

ロレンツは、ウィリアムを離れて見ていて、目を離さない。

リオンは、何がどうなのか今一解っていない。

玄関ホールに戻り、T字路の廊下を右に。　歩いて五・六歩先で左に折れて、また五・六歩先で右に。　突き当りまで左右は壁で。また突き当たりを左に曲がれば、真っ直ぐの廊下が伸びる。　左右の壁には、扉が計・・・六・七ほど。

フラックターが、廊下を歩き出しながら。

「この廊下の左側の扉は、使用人の休憩や食事をする部屋です。ホローは、とても女性が・・え～っと、特に二十半ばから四十前後の大人びた女性が好みらしく。　メイドには、そうゆう女性が五人

居ます」

リオンが、下らない話だと思い。

「それが？」

「あっ・・・スミマセン・・。　資料をそのままに読み過ぎました・・・」

フラックターが、縮こまる。

しかし、ウィリアムは左側の部屋の一つを開いて中を見ると。

「王子・・・そんな話でも、こうゆう時は必要なんですよ」

と、言ってから。　部屋のドアを開けたままに。

「この中、今は暗いですが・・・。　タンスもベッドもありますね。その五人の女性は、生活していた？」

フラックターは、急に質問されてオドオドしながら。

「はっ・・ハイっ。　ホローと云う人物はソッチの方は上手な人の様で。　強引にするのではなく。　お金と、女性の家族に月極めを約束してから・・・関係を持つんだとか」

ウィリアムは、除いた部屋のドアを閉めて。

「文句の無い形を取る訳ですね？」

「ハイ・・・。　なんでも、ホローの役人嫌いは筋金入りだったようで。　とにかく、訴えられる真似は中々しないそうです。　どんなに厳しい支配下に人を置くにしても、制約や規約で縛り付けて、役人には訴えられない様にしていたとか・・・。　愛人関係の女性には、随分と甘い様でしたが。　支配の厳しい立場の人には・・・悪魔の様な男だと・・」

「でしょうね。　人に暗殺者を嗾けるぐらいですからね・・・」

と、納得のウィリアム。

「何っ?!　あ・・・暗殺者だと?」

ロレンツは、驚いた。　刑事活動に携わる役人と、暗殺者は身近な敵同士だ。　殺害事件を起こす側と、調べる側。　人を殺めて、直ぐに姿を眩ませる暗殺者は、刑事役人の難敵である。

しかし、ウィリアムは、そんな事などもう気に留めていない様子で。　反対側の壁の扉を開いている。

「こっちは厨房ですね・・・。　あのホローの体つきからして、良いモン食べてそうですものね・・・。　竈が四つ・・五つあるし」

フラックターは、資料を見ながら。　ウィリアムに同調し。

「ハイ、その様です。　ホローは、朝は食べず。　昼と夜に食べるらしいのですが。　どっちも外から月極めで雇われているコックが来るそうですね。　そのコックも、現在契約を交わしている四名は、どれも店をホローの力で出させて貰っているとかで。　半分は、使用人扱いの様だったとの事です」

ウィリアムは、扉を閉めて。

「恨まれている数は、相当な数ですね・・。　その分だと」

「はい・・。　愛人関係を強要されていた女性のメイドの一人は、契約を辞めさせられたコックの・・・奥さんだそうです・・・。店の権利と・・・引き換えに・・・」

この話に、リオンの顔が明らかに不機嫌に成っている。

一方のスティールは、雨に湿った髪を掻きあげて。

「愛情を思えないなら、どんな美人にも手を出す権利は無い。　愛情があるなら、何人の女性でも幸せに出来る」

と。

リオンは、下らない言葉だと思うが。

ウィリアムは、笑って。

「スティールさんが言うと、様になりますね。　彼女の為にも、頑張りますか」

スティールは、真剣な顔で。

「当たり前だろう・・。　決定事項だぜ」

ーーー

「あ・・・はあ・・・」

フラックターは、更に困った顔で俯く。

其処に、ロレンツよりも先に、スティールが。

「王子さん、この人は下級役人だろ？　上官に逆らうのは難しいんじゃ～ないのか？」

ウィリアム・ロレンツが同時に頷く。

リオンは、テトロザを始め下位の者にでも気が付いた発言はさせるし。　注意・助言の事には耳を傾ける。　悪い事を、悪いと言えない事が嫌いなリオン。　だが、彼には、一般の上下関係の厳しさが判る部分と判らない部分があるようだ。　やはり、生まれの関係しているのであろう。

ウィリアムは、話を進ませようと。

「もう一人の容疑者とは？」

「あ・・はっ・はい・・」

フラックターは、資料を見て。

「え～、最近、港で爆破された船の船長ですね」

ウィリアム・スティールはハッと見合い。

リオンは、二人を見る。

スティールは、あの豪快な気風のいい船長を知っているだけに。

「おい、間違いじゃないのか？」

「いえ、間違いありません。　なんでも、船の乗組員の手当てを更に下げられて、直談判に来たそうです。　元に戻さないと、海運省に直訴すると交渉に来たそうで」

ウィリアムは、顔を右手で押さえ。

「ああ・・・最後の掛けに出たんだ・・・。　多分、あのホローが要求を呑む気無いだろうし。　決裂したのかも・・・」

と、嘆く。

スティールは、その様子に。

「ウィリアム。　何で、“最後の手段”なんだ？　当然の権利じゃないのか？」

フラックターは、驚きの顔でウィリアムを見て。

「よ・・・良く解りましたね。　その通りです。　船長さんは交渉が決裂して、ホローに散々に脅されて部屋を後にしたようです。そして、この階段前に下りて来た時、廊下の曲がり角から容疑者の女性が出て来たのを見たそうです」

今一意味が飲み込めないスティールは、ウィリアムに。

「なぁ、何でホローはそんなに強気に出れるんだ?」

ウィリアムは、苦渋に満ちた顔で。

「船乗りには、幾つか種類が在るんです。　船と船員を持ってる船長。　船だけを所持する人。　船員だけ抱えている船長。　そして、一人。　船を持っている場合は、船ごと雇い主は借り上げなければならないので、権限はだいたい雇い主と同等なんですが。　船員だけとか、一人の船長は、船が無い分だけ扱いは不平等です。　何せ、船が無ければ船員を働かせられないし、物も人も運べない。　船員だけを抱えてる船長や、一人の船長なんて一杯います。　ま、人それぞれとして腕には違いが大きく出ますけどね」

「おう、それが?」

「ええ。　船長が海運省に直訴するのは、権利として認められています。　何故なら、船長と雇い主が交わした契約は、雇い主側に破棄権が在りますが。　船長側には無いんです。　もし、航海を拒否すれば、雇い主側が海運省に訴えられるんです」

スティールは、金の在る側に配慮された規則に顔が歪んだ。

「なんだそりゃ・・・ふざけてるだろう?」

「いえいえ、昔は、船と船長はワンセットで、海運送業は船長が仕切っていたんです。　二百年ぐらい前から、商人が船ごと船長や船員を雇って商売を始めてから今の形に・・・。　ですから、そろそろ法の改正が必要かもしれません」

スティールは、ムキになり。

「必要だぜっ。　大体、それなら尚更に船長側が訴えて当たり前じゃないか」

「スティールさん、世の中はそんなに甘くないんですよ」

「はあっ？」

「実は、不当な扱いに船長たちが訴えて契約を切らせたとします。ですが、次の雇い主を探すのが非常に困難に成ります」

「だからっ、何でっ？！」

「実は、商人達の間では、直訴するような船長は雇い主に楯突くとレッテルを貼られます。　そうすると、都合のいい契約を結びたがる商人は、訴えた船長や船員を嫌います。　ですから、訴えれば訴えるほどに、船長さんも、船員さんも、生活が逼迫するんですよ」

スティールは、この話にこの世の地獄を見るようだ。

「んな・・アホな・・。　泣き寝入りしか無いじゃんか・・」

自分の不祥事で引き金を引いている。　だから、スティールは責任を感じて苦しくなる。

ウィリアムは、フラックターに顔を向け。

「所で、この階段から左に向かった少し奥。　向こうにも廊下が？壁に切れ間が見えますが？」

フレックターは、何でも知っていて良く気が付く人物だとウィリアムに脱帽しながら。

「向こうも、階段です。　この目の前の階段と、中二階の踊り場で繋がっています」

ウィリアムの顔が、パッと変わった。　瞳が細まり、何かを発見した様な面持ちに為ったのである。

「あ・・・な・・何か？」

フラックターは、ウィリアムに驚く。

リオン・ロレンツは、ウィリアムが何か閃いたと思った。

ウィリアム、顔を真剣にして。

「とにかく、上に。　俺は、向こうの階段で上に行きます。　皆さんは、この階段を使って下さい」

スティールも、ウィリアムの声に張りが生まれたので。

（何か気付いたな・・・。　やっぱり、あいつなら・・ジェリーを救える・・・）

そう思えた。

現に。

「・・・」

ウィリアムは、奥の階段から踊り場で合流し。　踊り場から二階へ上がる階段が、また二手に別れているのを見て。

「フラックターさん。　この階段は二階へ繋がっていますね。　出るところは、離れているのですか？」

フラックターは、何かウィリアムに緊張を感じながら。

「あ～。　ウィリアムさんが見ている上は、広い踊り場で殺害現場に近い方です。　我々の登って来た階段のに近い方の登り階段は、中庭を見下ろせるテラスと繋がる書庫やホローの寝室に向かいます」

ウィリアムは、階段の手摺りの壁を触り。

「かなり高いですね・・・。　人も腰を屈めれば容易に隠れられる」

ロレンツは、ウィリアムの言葉にハッとしてから・・。

「いや・・・だが・・・どうやって逃げた？」

と、呟く。

スティールもリオンも、ウィリアムとロレンツが別次元の所に居るような存在に見えた。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　事件現場にて（後書き）

次号、予告。

殺害現場に入ったウィリアムは、事件の経緯の説明と。　証言を聞いてジェリーの無実を悟った。　遂に、ウィリアムの頭脳が、ホローの悪事の全てを暴き、事件の裏側に隠された真実を曝し出す

次号、【暴かれ始めた全て】

お楽しみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾

今、原稿用紙とコッチのダブルヘッダーで脳ミソが文字だらけで生きております＾＾；

陸上・甲子園・ゴチ・ヘキサゴン・・・テレビ見たひ；＞；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　暴かれ始めた全て

１６、事件の経緯と、ウィリアムの推理

二階に上がった踊り場を右に曲がって廊下を行けば、左手に木目綺麗な漆塗りの頑丈な扉が見えた。

「この中です」

下級警察役人フラックターは、ドアを右側だけ開いて中に全員を招き入れた。

「う〝っ、血の匂いが酷いな」

スティールは、血の鉄分が酸化してきている匂いが部屋に篭って鼻につくのを嫌う。

ウィリアムは、入って右手の窓の前に大きく重厚なデスクが在るのを見つけて。

「入り口は開けっ放しでいいですよ。　もしかしたら、新しい情報が飛び込んで来るかもしれませんからね。　処でホローは、あそこに居た訳ですね？」

フラックターは、最後に現場に入ってデスクに歩み寄りながら。

「はい」

部屋は広い。　青いコバルトブルーの床は石のタイル張り。　壁は白い石で砂粒の結晶が見える。　窓は、入った扉の正面から、右手奥のデスクの真後ろに当る壁中央に一つと、部屋の左手に向かって奥。　中庭を斜めから眺められる様に設けてある。　どちらも観葉植物の鉢植えを左右に配し、明るい黄色のカーテンが端に纏められていた。

ウィリアムは、デスクに近寄る。　デスクと対峙して、向かって左側の床に大量の血が広がって黒ずんでいる。

リオンが。

「では、説明を」

「あっ、はは・・ハイ」

フラックターは、リオンに言われて緊張の面持ちで資料を見る。

「え～。　・・・」

フラックターの持つ資料で、トレンダース刑事管理官はこう説明している。

ジェリーは、父親の店を取り戻したくて日頃からホローを恨んでいた。　この日、ジェリーは、ホローを殺害しても取り戻す気で訪ね。執事に脅迫紛いの言葉で中に入った。　廊下を歩き、二階に上が

った彼女は、ホローをまともに相手しては殺せないので。　予め秘かに用意した激臭薬“ホルロアム”を用意して部屋に入り。　ホローに言葉巧みに近寄って背後に回り、ホルロアムを染み込ませた布で口を塞いで気絶、昏倒させて。　直後、石像で殴り死に至らしめたものである。

と・・。

ウィリアムは、聞いて頷く。

「なるほど、略でっち上げですな。　矛盾点を指摘する気も無くなる説明ですねぇ」

スティールは、良く解らないが。

「うん、確かに」

リオンは、確かに説明は信じがたい内容だが。　現実的な矛盾がどれくらい有るのかが知りたくて。

「ウィリアム、済まないがな。　それでは他に判断が出来ない。どれだけの矛盾があるのか、説明を願おうか？」

ウィリアムは、血の跡を見下ろしながら。

「言うなれば、全てが矛盾です。　そのトレンダースと云う方、今直ぐ身柄を押さえたほうがいいかもですね。　多分、逃げるかも・・・」

ロレンツが、少し驚き。

「それは、一体どうゆうことかね？」

ウィリアムは、フラックターに振り返り。

「所で、ジェリーさんの証言も含めて、館関係者の証言を教えていただけませんか？」

「はい・・・」

ジェリーの証言は、こうだ。　屋敷の入り口で、追い返されるのを覚悟で執事に会ったら、すんなに悪態だけで通された。　なんとか、足を引きずりながら廊下をゆっくり歩いていって、途中で見られたお手伝いさんに挨拶したりしながら二階へ向かう階段前にやって来た。　この時、無精髭を生やした中年の日焼けした男性と顔を合わせて会釈している。

フラックターは、此処で。

「此処までの証言は、屋敷に居るメイドやホローを尋ねた船長の証言と一致しています」

と、言った。　続けて。

ジェリーは、階段を一歩一歩慎重に登り、ホローの部屋までやって来た。　最初、ノックをしてホローに面会を求めたのだが、全く返事が無い。　しかも、僅かにドアは右側が開いていたので、留守なのかと思いながらも確かめる為に、扉を更に開いた。　中を覗いてもホローが居ないなら、ドアを閉めようと思った。　だが、中に顔を入れると、急に血の匂いが漂って来た。　そして、何か微かな物

音が左手から聞こえたと言う。“バタン”と、云う音である。

ウィリアムは、此処で少し目を細めて部屋のデスクの反対側の奥を睨んだ。

さて、続きだ。

ジェリーは、恐る恐る中に入ってホローの名前を呼んだ。返事が無いのだが、血の臭いが強烈に漂う中。ジェリーは、足を引きずってデスクに近づいた。デスクに向かって左側のタイルの色が黒く変わっているので。ジェリーは、デスクの左側に回り込もうとした瞬間、何かに足と杖を滑らせて前のめりで床に崩れた。両手を床に着いて、手が濡れて顔に何か飛沫が飛んだ感触を感じた時、視界の比較的良い右目で死んだホローの顔を確認する。驚いたジェリーは、自分の手にまで伸びた血の海に心底慄き、両手の血を見て絶叫を上げた。

フラックターは、此処で。

「この絶叫は、屋敷の略全員が確認しています。そして、一番近場に居て気付いたのが、同じく交渉に来ていた船長です」

船長は、海運省に行くかどうかで悩み。歩く足取りが進まずに、裏門の手前に向かう裏庭に出たばかりで、ジェリーの絶叫を聞く。

ジェリーを廊下で見掛けた私用人の女性も、中庭に玄関口の方から出掛けた所で絶叫を聞いて、何事かと驚いて舞い戻ったとか。

別館に居た使用人達も、ジェリーがデスクを頼りに起き上がりながら、

「誰か来てッ！！！　誰かっ！！」

と、上げる声に驚いて、大慌てで現場に向かったそうな。

ウィリアムは、此処で。

「ま、多分は、立ち上がって人を呼ぼうと場を離れようとした時に、船長さんが来たんでしょうね。　それで、執事さんも大慌てで来た訳ですか？」

リオンは、直ぐに。

「何で船長と解る？」

それには、ロレンツが。

「王子。　先ほど、一階階段で容疑者のもう一人が彼と説明を・・。　トレンダース刑事は、ジェリーと云う彼女を容疑者に決め付けたので、彼を第一発見者と見做したのではありませんか？　当時、ホローに最後に会ったのはジェリーさんか、船長だと思われたからですよ。　それよりも、執事はどうした？」

フラックターは、大急ぎで資料を見て。

「ええ・・・執事はですね。　現場に来たのは最後でした。　それも、もうメイドと使用人達が狼狽して、医者と役人を呼びに走った後に来ました」

ウィリアムは、澄ました顔で。

「随分遅いご到着で。　丸で、何が有ったか解ってるみたいですね」

ロレンツが、直ぐに切り返して。

「君っ、執事は何で遅れたのだ？　使用人やメイド共に容疑者の叫び声を聞いたのだろうっ？」

言われたフラックターは、怒られている様で更に慌てた。

「えっ？　ああっ・・・」

執事の証言である。

最初、ジェリーの声を聞いて。　ダンスホールの別室に一人で居た執事は思ったとか。

（また、旦那様は女性に手を出したか・・。　あんな顔の悪い女性でも、好みに入るのか・・・馬鹿馬鹿しい）

と。

使用人が驚いて向かったので、大丈夫と思ったら、別の男性の驚きの声が響いて。　その後に、使用人の女性の声が叫び声で、更にメイドなどが大騒ぎををして居るので、手を休めて様子を見に行ったら、旦那様が死んでいたので驚いたと。

リオンは、憤りを見せて。

「ふざけているのかっ。　無闇に女性に手を出す主人などを止める

のが、それこそ執事の仕事ではないかっ！！」

すると、ウィリアムは、急に掛け離れた質問に転じる。

「それより、その執事さんと云う方。　仕事の出来は如何ですか？　そんなマヌケな証言をすると云うなら、使えない方だったとか？」

すると、フラックターは資料を見て。

「いいえっ、私が事情聴取をして回った限り、使用人の皆さんが云うに、有能な人物みたいですよ。　ホローの命令で、メイドの皆さんに月極めを渡したり、ホローの我儘を処理する手際は随分と良かったそうで。　ですから、執事でも法外な月極めを貰っていたそうです。　彼の自宅は、住宅街の一戸建てが広がる一番良い庭付き・畑付きの二階建てですから」

スティールは、何がなんだか良く解らなくなり。

「その執事って、何だ？　優秀なんだか、鈍感なんだか解らないな・・・」

ウィリアムは、薄く笑って。

「もう、答えは出てますがね。　で？　他には、何か証言は有りますか？」

すると、フラックターは、資料を激しく見回って。

「あ～、後はお知らせした経緯の複数回答ですね・・。　二つ、変な証言が有りましたが・・・。　これはどうでもいいと思います」

ウィリアムは、フラックターを見据えて。

「その、どうでも良い証言は、何ですか？　全て教えてください」

フラックターは、ロレンツを困った顔で見る。

ロレンツは、寧ろ真面目な顔で。

「君の独断の判断を必要としていない。　証言の提示を必要としているのだ。　言って見なさい」

フラックターは、困った顔で資料を見て。

「一つは、船長の証言です。　何でも、容疑者の女性と擦れ違ってから、廊下を悩む重い足取りで歩いて、下の階の中庭手前の廊下を曲がって外に向かう間。　右手の壁・・つまりは、ホローの殺害された現場の真下の壁の中から、物音を聞いたそうです。　何やら、“ガサガサ”っと。　鼠でも居るのかと思ったそうですが。　ホローの殺害された部屋の真下は部屋など無い壁です。　石を砕いて、鼠が巣を作るなんて聞いてませんよ・・・」

ウィリアムは、更に。

「もう一つは？」

と、促す。

「あ・・はい。　容疑者が声を上げた後で、直ぐにですが。　中庭の池の中に“ドボン”と云う音を聞いたそうです。　窓を開けて、

執事の言う通りにカーテンをしていた使用人達やメイドは、何が音を出したのかは見ては居ないのですが・・・。　複数人が聞いています」

ウィリアムは、頷いて。　外で雨の中、池を捜索してる役人達が声を出してるのを聞きながら。

「完璧ですね・・・。　後は、物証が出れば、裏付けも取れます」

と、全員を見返した。

ーーー

「気が付いた？　此処は、軍医医務室よ。　安心して眠りなさい。
もう、取調べはしないから・・・」

ジェリーは、眼もまともに開けない中で、弱弱しく頷く。　容態は、かなり危険な状態であった・・・。

彼女の居る軍医施設の入り口には、兵士が配されている。　そして、ジェリーの寝かせられている部屋の外には、国の紋章入りの上半身鎧を着て、マントを着流す騎士が二人見張っている。　テトロザは、何も起こさせない為に、万全の準備をしておいた。

その光景を、外の物陰の闇から見ている人物が居る。

「なんと・・・どうして・・・うむむ・・」

やや老いた感じの男性だ。　鼻の下にちょび髭を生やし、天然パーマの髪は、黒白の白髪混じり。　背はやや高めで、雰囲気は気位の高そうでインテリの様な印章。　だが、顔はもう焦りで汗を顔中に流し。　ジェリーの収容された軍医施設を、木の陰から憎らしげに眺めている。

この男性が、トレンダース刑事だ。　何故に・・・もう帰宅した筈の彼がこんな場所に居るのだろうか。

軍医施設の辺りを、兵士に見つからないように徘徊している彼だが。
外の裏などにも兵士の見張りが居て、施設内に侵入できない様子で困っていたのだ。

其処に、闇夜の背後から。

「そこもと、何方かな？」

テトロザの声が、響いた・・・。

ーーー

「と、言っていますがね。　先ず、ジェリーさんは、“父親の店を取り戻したくて”、では無く。“閉店の会”を遣りたかっただけなんですよ。　殺しで捕まったら、そんなの無理でしょう？　捕まらない方法を考えますよ。　普通」

リオンは、冷静に。

「の、筈が。　失敗したと云う可能性もある」

「いえいえ、それはありませんね」

ウィリアムは、バッサリ斬る。

「何故だ？」

「ええ、ハッキリ云います。　ホローを昏倒させた“ホルロアム”は、劇薬で、口と鼻を染み込ませた布で覆うと気絶します。　しかも、薬の成分で付着した所の皮膚が赤く爛れるんですがね。　この薬、メチャクチャ高いんですよ。　作るのも、修行を積んだ薬師でないと無理なんです。　そうですね・・・、小指くらいのホルロアムを作るのに一ヶ月掛かります。　原料代だけで、ざっと八千シフォンは掛かりますね」

スティールは、法外な値段に驚いた。

「うげぇっ、マジかよ・・」

「ええ。　今回使用されたと思われる同じ量を買うのに、安く見積もっても一万五千近くはしますよ。　そんなお金あるなら、“閉店

の会”を遣る時だけ借りるとか、買い戻す頭金にだって成りますよ。
ジェリーさんの生活で、それが出来るなら素晴らしいですがね。
まず、無理でしょう。　自分の病気の薬を買うのにも困窮してるんですしね」

リオンは、金銭感覚が少しズレているのか。

「そんなものか？　ロレンツ？」

ロレンツは、リオンを見返して。

「王子・・・王子の金銭感覚では解りますまいが・・。　恐らく、完全に無理ですね」

ウィリアムは、更に。

「いいですか？　“美人好き”で、問題を起こさない形を好むホローが、強引にジェリーさんを襲いますか？　逆に、ジェリーさんがどんなに言葉巧みに言っても、疑い深いホローが彼女を背後に回らせる訳が無いですし。　ジェリーさんの力で、ホローを薬の染みた布で気絶させるのも無理です。　確かに、ホルロアムは、人を昏倒させますが。　鼻と口を布で覆って最低でも三・四回は呼吸させないと無理ですよ。　ジェリーさんの身体がそんなに健康なら、今頃働いて、店を買い戻す資金稼ぎでもしてますよ」

リオンは、ウィリアムの話をマジマジと聞いていた。

ウィリアムは、リオンに。

「王子、疑いになるのなら。　其処にホラ。　殺害に使った石像が

在ります。　殴ったのは、底の角なんで。　血の付かない所でも持って持ち上げてみたら如何です？」

デスク近くに、本棚が有り。　その前に、五・六歳児の大きさに匹敵する石像が在る。　腕から先の無い胸から上の女性の抽象的な石像で。　何とも味気の無い石像である。

「・・・」

リオンは、石像に近づく。

フラックターは、驚いて。

「おっ、王子っ。　御手が汚れますっ」

と、言うのだが。　冒険者も隠れてやっているリオンに、手が汚れるなどとは逆に失礼だ。

リオン、パッと顔を持って持ち上げた時。

「これは・・・女性では腰砕けに成るな・・・。　重いぞ」

ウィリアムは、頷いてから。

「ええ。　病気のジェリーさんには、どうやっても無理です。　それに、使うならホラ。　本棚の隅に、片手で掴める軽い置物だってありますよ。　何も、それを使う必要は無いです。　何より、このデスク周りを見て。　ジェリーさんの証言を聞くに、彼女の証言に間違いは有りません」

ロレンツは、少し難しそうな顔で。

「そうとまで、果たして言い切れるのかね？」

リオンも、

「私もだ。　彼女の衣服に血が着いていたのは確かなのだろう？」

と、フラックターを見返す。

「はい」

と、フラックターは頷くのだが・・。

ウィリアムは、デスクの右側に離してある椅子を、自分の持つ白い手ぬぐいを取り出して、椅子の背凭れを掴んで元の位置に戻しながら言う。

「いえいえ、血が着いていたなどと云うのは、現場に居た確たる証拠であって。　殺害の証拠には成りません。　問題は、衣服に付着した血の付き方が問題なんです」

と、フラックターに眼を向けて注視し。

「で？　現実に彼女の衣服を見たフラックターさんは、どう見えましたか？」

フラックターは、資料にでは無く記憶を聞かれてパッと考え込む。

「え～っと・・・確か、膝下まで伸びたスカートには、前面の膝に

当る付近まで血が広く付着していました。　・・・それから・・・腹から・・胸の下の掛けてこ～なんと云いましょうか。　擦った様に血が付着していて・・・。　後は、顔や髪の毛に、水滴を一・二滴零した感じで、それと両手にベッタリですね」

ウィリアムは、予めから解って居た様に。

「証言のままです」

皆を見る。

リオンは、良く解らずに。

「そうなのか？」

「はい、彼女の証言を思い出して下さい。　目の悪い彼女は、杖を付いて部屋に入り、異変を薄々に感じてデスクに近づき、流れて来ていた血に杖と足を滑らせて前のめりに崩れる。　当然、膝を床に付いたんですから。　スカートの膝を中心に床に付着した部分に血が染み込んで着きます」

リオンも、想像しながら。

「なるほど」

「次に、両手を床に付いた訳ですから。　両手と、勢い良く付いた手の衝撃で跳ね返った血が、顔や髪に。　力が弱かった彼女ですから、恐らくはグッと腕が曲がって床に顔が近づいたと思われます」

ロレンツも、

「確かに、云える」

「そして、上半身の血の付着は、ホラ。　デスクの皆さんから見て左の上。　デスクの上にまで血が広がったんです。　彼女が其処に手を付いて、身を起こそうとしたんですが。　力の弱い彼女は、動転と恐怖で縋り付いて立つ場を選ぶ余裕が無かった。　なんとか立つために、寄り掛かるようにして必死に立ち上がる。　ですから、身体が持ち上がるに当って、杖代わりにしたデスクに服を擦ったんです。　ですから、擦って付着した血の跡が」

皆、反論の何も言い出せない。

ウィリアムは、戻した椅子を前にして。

「いいですか。　人の脳・・つまり頭は、とても出血の多い場所の一つです。　俺が立っている周りの壁、窓を見てください。　飛沫(ひまつ)血痕が逆っています」

全員、ウィリアムに誘われるようにデスクの間近に集まる。　良く見れば、飛沫(しぶき)を上げて飛び散った血の細かな点が、壁の左右大人の両手を広げた幅二つ分くらいは広がっている。

ウィリアムは続けて。

「ですが、俺の真後ろを見てください。　椅子の背凭れ以上に、窓に血の飛沫(ひまつ)が見られますか?」

血を避けて、リオンとロレンツは窓を間近に見たが。　ウィリアムの立っている位置の真後ろに血飛沫が見えない。

リオンが、窓を見回しながら。

「何故だ、何故此処だけ？　周りには、微量だが私の目線まで飛沫(しぶき)が飛んでいるのに・・」

ロレンツは、ウィリアムを見て。

「説明願えるか？　生憎、遺体は無いが・・・」

ウィリアムは、簡単だとばかりに頷く。

「遺体など必要ありません。　フラックターさんが、見ているのですから。　彼の証言が有れば十分です」

と、フラックターに左手を出す。

「はっ」

フラックターは、上官でもないウィリアムに敬礼する。

ウィリアムは、椅子を見下ろして。

「この椅子、背凭れが少し高いです。　コレに、あの太ったホローが座ったとして。　然程に背の高く無い彼ですから、彼の頭は、今椅子の後ろに立つ俺の胸元より少し下に在ると思います。　さて、犯人はホローを薬で眠らせる事が出来た・・・つまりは、後ろに回っても違和感が無い人物。　若しくは、ホローが立っていて背後に回られて薬を嗅がせられる程に気を許せる相手・・・」

スティールが、ウィリアムに何か言おうとすると、ウィリアムは片手で制し。

「そして、リオン王子の目線・・若しくはそれ以上の背丈の人物です。　血の飛沫(ひまつ)を、背の高さで受け止めてしまったんですよ。　ジェリーさんは、俺の首の辺りか、胸元の上の背丈しかありません。　その彼女が、仮に石像を持ち上げたとして、血飛沫を見るに・・・ホローの後頭部の最も上を殴ったならば。　コレだけの血の飛沫血痕が残るならば、ホローの頭は頭蓋骨損傷して、傷口は深く抉れたのです。　ですから、瞬間的に噴出した血で、辺りが染まった・・。　もし、ジェリーさんが犯人なら、顔から衣服の前を酷い血で染めていなければ説明が付きません。　もし、証言のでっち上げをしたのなら、着替えの衣服や、血を被った髪の毛を洗う必要があります。　そんな形跡、ありましたか？」

ウィリアムはフラックターを見る。　皆、フラックターを見る。

フラックターは見られた。

「いっ・・いえ・・・容疑者にそんな形跡は・・・ありません・・・。　屋敷の中に居た人物ならともかく・・」

ウィリアムは、それを聞いてから。

「それから、彼女が殴ったなら。　彼女の頭上にも血は飛び散って、窓に付きますよ。　真後ろにね」

窓の飛沫痕を見れば、それは確かである。

ロレンツは、ウィリアムに突っ込んだ。

「君は、大体犯人が解っているのだろう？　その手掛かりが、此処に有るかな？」

ウィリアムは、薄く笑って。

「ええ・・・大体、全部」

ロレンツもリオンも、耳を疑った。

「本当か？」

スティールは、確信した。

（コイツ、犯人を解ってるっ！！！　殺した様子も、その後も・・・）

ーーー

ロレンツは、デスクの有る部屋の右側では無く。　部屋の左側を見た。　部屋の左側には、奥の壁を手前に少し離して、左右対称に距離を開けて置かれた石の台座があり。　二つの台座を見て、右側台座近くには窓が在って、中庭を見ることが出来る。　そして、台座に向かって見て、左の奥の角には、カーテンが天井に設けられ、二・三の木箱やら椅子やらと物置みたく成っているスペースがある。

ウィリアムは、凶器の石像から対照的に立っている二つの石の台座を見て。

「見れば、左の台座にはコレと同じ物が填まっていますね。　使われた凶器、右の台座の物でしょう」

リオンやロレンツから見ても、左に同じものが填まっていて。　右には填まっていないのだから、それはウィリアムの言う通りと思った。

スティールは、ウィリアムに歩み寄り。

「この石像が、どうヘンなんだ？」

「スティールさん、これは美術品に関わる者なら常識なんですがね。　一般的に、台座と分離させる美術品は、移動して展示の為にこうするんです。　逆に、その場に据え付ける動かさない石像ってのは、台座とくっ付けてあるんです。　芸術家にとって台座とは、その美術品を最も美しい角度・高さで見せる為に存在します。　普通、屋内に設置する石像で台座を持つものは、大抵が据え置きのくっ付いた物。　ですが、この凶器に使われた石像は、外せる。　しかも、この石像。　台座に填める下の土台部分が、何故かかなり磨耗して

いて四隅が削れています」

スティールは、屈んで石像の下の四角い土台を見れば、四角い筈の四隅が歪に欠けて磨り減り始めていた。

「あ、マジだ」

フラックターも、スティールの脇で屈んで見て。

「本当ですね」

ウィリアムは、凶器と思われる外された石像があった台座に歩いて向かって行きながら。

「確かに、台座と石像を別にする芸術家も居ますがね。　この石像は、芸術品としての価値が無い駄作レベル。　なのに、ホローは此処に置いておいた・・。　見る目が無いのか・・・とも思いますが。　見方を変えれば、コレは・・・蓋、とも」

リオン・ロレンツがハッとして台座を見る。

「ウィリアムっ」

リオンが呼ぶに、ウィリアムは頷く。

「ええ・・。　もしかしたら、凶器に石像を選んだ犯人には、何らかの意図があって選んだ可能性もあります。　とにかく、調べて無駄は無いと思います。　無ければ、意図は無し。　有れば、犯人のメッセージ」

ウィリアムが台座に歩み寄り。　リオンやロレンツなども寄って来た。

四角い台座の上には、更に窪んで四角い枠の底が有る。　ウィリアムが胸の高さの台座に両手を入れて、調べると。

「あ・・・底が回りますね」

一部に力を少し掛けて押せば、石像の填まる枠の下に当る底が反転するように回る。　ウィリアムは、手を入れて何かを掴み取った。

「入ってるのはコレだけですね～」

取り出したのは、厚紙で作られた菓子等を入れる小箱である。　両手で持てるし、上の穴枠に指を入れれば片手で持てる。

「何が入っているンだ？」

スティールは、脇で見て不審に思う。

ウィリアムは、箱の上の蓋を開いて。　中に入っている物を取り出すと・・・。

「粉末の薬を、一定量毎に分けて包む薬屋の仕分け包み紙ですね」

三角の底を持った、円錐形の白い包み紙だ。　コップ一杯の水くらいなら、注いでも溢れる事は無い容積を持っている。

リオンは、開かれた口の広い紙の中を見下ろし。

「なんだか、紫色の粉末が入っているな。　色が気味悪い」

だが、ウィリアムは見るなりに声を上げる。

「あっ、コレ・・・まさかっ！！」

と、指を袋に入れて粉末を微量に付着させる。　そして、唾液を付けて捏ね回し始めた。

「何かの薬かね？」

ロレンツが聞けば、ウィリアムは臭いを嗅いで。

「“何か”所じゃありませんよっ！！。　やっぱりだ、コレは“ジエラシィー”・・・。　合成麻薬の新しい品ですねっ」

と、ロレンツを鋭く見返す。

「なんじゃとっ？！！！」

ウィリアムは、スティールを見て。

「コレ、コンコース島のチェルナーが隠していた蜜売品の中にも有りました。　間違いない、チェルナーとホローには繋がりの有る可能性は濃厚ですっ」

スティールは、真剣な顔で。

「徹底的に壊滅させたろうぜ。　ンなモンばっかり売り捌く奴なんざ」

リオンは、薬を見て麻薬だと知りイライラ。

「全くっ、わが国にこんな物を持ち込みやがって・・・。　で？」

ウィリアム。　この薬は、一体どんな効果が？」

ウィリアムは、箱をロレンツに渡して。

「この麻薬は、元々に有った“デストロイ”と云う発狂するほどに気分を高揚させる麻薬の派生品です。　服用すれば、男性も女性も肉体の感覚が非常に敏感に成り。　男女の交わりが疲れ果てるまで止められなくなります」

スティールは、自分の第三の足を指差して。

「男はギンギン、女はヌレヌレ？」

リオンは、発言が卑猥だと顔を顰めるが。

ウィリアムは、真顔で。

「ええ。　確かに、この薬の成分は発汗作用によっての分解も早いので、一見すると安易に服用出来る代物と思われますが。　非常に快楽的に成れるので、異常レベルで常習率が高まります。　一度でも服用したらが、最後。　十人中十人が医師の助けが無いと、まず立ち直れません。　更に、肉体を蝕む速度も最速で。　少なく服用して、半年。　大量に摂取すれば、中毒症状で一発即死もありますよ」

リオンは、顔を顰めながら歪めて。

「酷い薬だな・・。　そんな物を、多額の金を出して買うのか？」

「ま、好きな人は。　ですが、この薬の元は気分の高揚を爆発させる薬なので、中毒の末期症状になると脳が薬で冒されて、もう思考能力は虫レベルですからね。　平気で錯乱して人を殺めたり、異常な猛食をして発狂死したりもします。　とにかく、この薬は麻薬と云う名の猛毒ですよ」

ロレンツは、手元に有るだけの量でもゾッとする。

「それが、こんなにか？」

「ま、末端価格で見積もれば、その箱の量で数十万シフォンから、百万に届きます。　ホローは、小口のバイヤーの元締めだったのか。　もしくは、秘密裏に輸入する仲買人・卸か。　何れにしろ、もう一つ石像が残ってます。　そちらも、調べましょうか」

リオン、もう一つの石像を見て。

「よし、私が石像を降ろす」

ロレンツが、驚き。

「王子・・」

リオンは、真剣な顔だ。

「これは我が国の一大事だぞ。　指揮官の私も、率先して参加する義務が有る。　こんな大きな事件に、王子も誰もあるかっ」

リオンの根っからの正義感に火が付いた様である。

ウィリアムは、スティールに。

「いい王子さんですねぇ」

スティールも頷いて。

「全くだ、各国、み～んなこうだといいね」

さて、やはり左の台座にも薬らしき物が、同じ包み紙の同じ小箱に入れられている。　ウィリアムは、箱を開けて薫って来た臭いを嗅いだ瞬間。

「なんて事だ・・・」

と、顔を蒼褪めさせる。

真っ白い粉末の中に、所々黒い粒粒の粉末が混入された薬。

「何だ？　麻薬か？」

リオンが、ウィリアムの脇に来る。

「“闇死香炉”（あんしこうろ）・・・」

リオン・ロレンツ・フラックターが愕然とした顔に変わった。

リオンは、顔に怒りすら見せて。

「本当にか・・・」

ウィリアムは、ロレンツに箱を渡して。

「間違いありません。　俺が、コンコース島に居た時、チェルナーが自分の身代わりに斬る“蜥蜴の尻尾”を殺すのに良く使った毒ですから・・」

今、世界の暗殺業で持て囃される使用率一位の毒だ。　非常に致死性が高く。　しかも、無味無臭で扱い易い。　高価だが、裏で取引させる猛毒の帝王であった。

ホローとチェルナーは、やはり商売で繋がっていたようである。

この事件、ウィリアムにとって宿命の事件であるようだ。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　暴かれ始めた全て（後書き）

次号、予告

ホローの裏の顔が暴かれる中で、遂にウィリアムは盗賊団との繋がりも発見する。　一気に進む事件解明。
殺害の手口も判る中で、池から発見された物は、リオンにとっては驚くべき物だった・・。

次号、【真実の吐瀉】　お楽しみに。

どうも、騎龍です＾＾

書き溜めたのを、連続で放出して行きます＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 真実の吐瀉（としゃ）

17、犯人の姿

ホローの書斎で見つかった麻薬や毒薬。　リオンもロレンツも只ならぬホローの裏の顔に気構えが大きく変わっていた。

リオンは、ウィリアムに詰め寄る。

「ウィリアム、もう解っているなら犯人を教えてくれ。　時間を此処で費やすのはもう無駄だろう」

しかし、ウィリアムは落ち着いた様子で。

「いえいえ、これからが最も大事な事ですよ」

リオンは、何が有るのか解らずに。

「まだ、何か有るのか？」

「はい」

ロレンツは、応援の役人や兵士が到着したらしい声を窓の外に聞いた。

「王子、応援が来たようですね」

リオンもロレンツも、ウィリアムとの捜査があるだけに此処を離れられない。　そうなると、向くのは・・・。

「あ〝っ、私が・・・何か・・・」

フラックターだ。　リオンとロレンツに見られて、ドキドキものである。

二人は、フラックターに言いつけをする。

フラックターは、もう必死で資料の四隅に言いつけを書き込みして部屋をダッシュで出てゆく。

すると、ウィリアムは、部屋に残る三人を見た。

「いいですか。　ジェリーさんが犯人では無いとして。　では、犯人はどうやってホローの居た部屋に来れたんでしょうか・・。　もし、船長さんが犯人なら、少しでも早く此処から逃げたいでしょうから。　ジェリーさんの声に戻ってくる必要がありません。　いや、船長さんが犯人なら、返り血の始末はどうしたでしょうか。　ホローを昏倒させた薬の出所は？」

リオンは、遠まわしな言い方に。

「言いたい意味が解らないぞ」

だが、ロレンツは、はなっから考えていた疑問だけに。

「確かに。　犯人は、どうやって此処に来て。　どうやって此処から逃げたのか・・」

ウィリアムは、笑ってロレンツに手を差し向ける。

「そう。　其処が解れば、犯人は解ります。　さて、問題なのは、一つは中庭の池でした」

ロレンツも、同意し。

「ああ。　夕方から雨が降り出している今で、池の水が全く溢れる素振りが無かった。　池は、流れない水だ。　庭池の水は、ある程度の水は張って、生き物を放し、水に草を生やして緑を楽しみ、涼しさを楽しむもの。　なのに、今頃で水位は普通だ。　なら、誰かが抜いたか、水位が低かったか・・・。　だが、客を招く商人が、その管理を怠るとは思えない。　嗜みであり、金持ちの見得の気配りの一つ。　ホローの中庭の池も、雨水を集めて池に流し込む水路が屋根から繋がっていた。　本当なら、今頃は水が下水路に溢れていておかしくないんだが・・・」

ウィリアムは、ロレンツがよくよく人の生活に通じていると思い。

「その通り。　ですから、こう考えました・・。　今日、ホローが殺されるのは決定事項だったのでは？　・・・とね」

スティール、リオンは驚いた。

ロレンツは、感心したように。

「では、今さっきのフラックターに質問したのは、その裏づけか？」

「はい・・」

ウィリアムは、薬が発見されてから。　直ぐに、フラックターに尋ねている。

「フラックターさん。　今日に船長さんが来るのは、予定外でしたか？」

「いえ、直談判の事前申告が船長さんから有りまして。　ホローが日にちを指定して本日に成ったと云う事です。　船長さんは雇われなので、裏口から入るようとまで指定を受けています」

次に、ウィリアムは。

「では、別館の部屋で雑務に追われていた使用人さん達ですが。　カーテンをしていたとか。　変わってますよね？　その辺の事は聞いてますか？」

「あ～。　此方からは聞いては居ませんが。　証言は有りますね。　ホローは、掃除などと云う行為を見るのが好きでは無く。　そうゆう雑務をする時には、突然の客が来ても見えないようにカーテンをして、窓を開けろと命令していたそうですよ。　ホローって商人は、人に見られる事を非常に意識するらしいんですよ。　前に、窓を開いて埃を外に掃き出してた使用人が、即刻クビになった事が有ったと・・」

「では、外の廊下を通らない限り。　池を見れる事は無い訳ですね？」

「そうですね。　本日は、急に決まったパーティーの準備に大忙しで。　使用人もメイドも余計な事を構っていられる状態では無かったそうですからね」

これが、ウィリアムの質問とフラックターの受け答え。

ウィリアムは、首をかしげながら左の台座前に立ち。

「多分、これは推測段階ですが。　執事さんと、その刑事管理官のトレンダースさんは、結託していたのではと思うんです。　船長さんが来た日にホローを殺して・・、その罪を船長さんに擦り付けようと考えていた」

スティールは、呆れた苦々しい顔で。

「其処に偶然ジェリーが来たって訳か」

「はい・・。　執事さんは、咄嗟に思ったのかもしれません。　船長さんに罪を擦り付けて、自分が発見。　または、使用人に発見させるより。　この、突然の訪問者に発見させれば、ホローの女癖や色々な事を理由にできるのではと。　仮に、船長さんが海運省に行ってしまったら、果たして犯行が可能か解りません。　ですが、女性であるジェリーさんになら、ホローの悪癖が理由に使える上に。　獄中で取調べ中に、殺してもいい・・・」

最後の話に、リオン・ロレンツ・スティールは、ウィリアムを見て閉口。　悪魔の様な策略の推理をするウィリアムが怖く見える。

だがウィリアムは、考えながら。

「ま、これは俺の推理に過ぎません。　ですが、現実的に推理を外して。　残る証言は、音に関係が有ります。　船長さんの聞いた壁の中の音・・・。　ジェリーさんが、部屋に入る前の左側から聞こえてきた“ゴトッ”っと云う音・・・。　そして、池の何かが投げ込まれた、若しくは何かが飛び込んだ音」

リオンは、どれも不確かな事だと思い。

「それは、聞き違いでは？」

ウィリアムは、ゆっくりと左の台座の後ろ。　物置のような一角に来ると。

「さっき、チラっと見たんですがねぇ・・・」

木箱の前に立ち。

「この木箱の裏の床が、一部だけ光沢が無い安っぽい色してるんですよ・・。　よっと」

ウィリアム、木箱を重ねて一気に横に動かした。

三人、ウィリアムの所に寄り。　スティールがカーテンを完全に退ける。

リオンは、床の色が天井のシャンデリアの明かりで、確かに隅の一角だけ色が違うのが解る。

「なるほど・・」

ウィリアムは、立て掛けてあるモップの柄のような棒を持ち。その場で、床を打つ。“カンカン”と、甲高い音。だが、色の違う場所を打つと・・・。“コンコン”と、軽い音がする。

スティールは、聞いた事のある音に。

「おい、コレって木の音だろう。ノックした音とか、ホレ。その木箱なんか空っぽだとこんな音がしないか？」

ウィリアムは、三人を見て。

「割りますよ」

と、言った瞬間、鋭く素早く木の棒を斜めに床に突き刺した。

“バリッ！！！”

「・・・なんと、階段が・・・」

ロレンツは、驚いた。床と思えたのが木の板で、ウィリアムの刺した木の棒で真っ二つに割れて落ちた。そして、その後には、下に降る石の階段が見えている。

リオンも、それに驚いた・・・。だが、もっと驚いたのはウィリアムである。普通、木の板に鋭く木の棒など差し込めば、力が強ければ割れるより、刺さる。だが、ウィリアムは叩きつける角度と突き刺す角度を読み切って木の棒をぶつけたのである。当った衝撃で、木の板が割れたのであり。言い方を変えれば、衝撃で割り斬ったのだ。

（出来るな・・・）

リオンやスティールなら、訳も無い作業だが。　腕自慢の剣士ぐらいで出来る作業でも無い。　見切る力、力の掛け方、角度の見極め、様々にそれなりの腕が無いと出来ない技だ。

（そういえば・・・この若者は。　殺し屋が自分に来て好都合と・・・。　まさか・・・暗殺業にも詳しい様だし・・・その筋の者か？）

リオンは、不思議な青年ウィリアムに興味が湧いた。　一人の冒険者なら、自分のチームに誘いたい所である。

ロレンツは、そんなリオンの内心など知る事も無く。　ウィリアム・スティールと共に協力して、ランプ代わりにシャンデリアのロウソクを使おうとシャンデリアを降ろし始めていた。

「よし、シャンデリアのロウソクか。　身近にいい物があった」

ウィリアムも。

「ですね。　鎖、緩めますよ」

スティールが、シャンデリアの下の場所を確かめて。

「オ～ケ～、何にも無い。　降ろしていいぞ」

さて・・・、シャンデリアが降ろされて。

「あちちち・・・あっつっ！！」

スティールが、垂れてきたロウソクの蝋に煩い。

ウィリアムは、針金の先を物置の辺りで見つけて、自分だけロウソクの下から刺している。

「ウィリアムっ、ズッケーぞっ。　俺のはっ?!!」

「自分で探してくださいよ」

「るっせ〜っ、蝋でポタポタと喜ぶ趣味ネェ〜ぞっ!!!」

賑やかに、先頭をウィリアムで階段を折り始める。　床に空いた階段の下は、真っ暗である。

ロレンツは、リオンを心配し。

「ウィリアム君、ロウソクの火が消えるなら戻ろう」

だが、ウィリアムには、空気の心配どころでは無い。

「いえいえ、空気の心配は要りませんよ。　奥から、風が微かに来てます」

リオンは、一番後ろから。

「抜け道かっ?」

ウィリアムは、階段の両側の壁を見て。　汚れなどが少なく、壁に設けられたオイルランプに火を入れながら降りる。　階段は、螺旋。使われている石は、硬い日持ちのする自然岩の一枚を削った物。

後からこっそりと作られた物では無さそうと判断する。
そして、下まで五十近い段数を降りた所で、広間に出た・・。
「これは・・・・」
其処には、美術品が宝物庫を開いたように犇いている。　絵画・陶磁器・楽器・ワイン・宝石の入った箱・壷・刀剣の類など。
「うほぉ～，こりゃスゲ～な。　金の臭いがプンプンしてるぅぅ」
スティールが降りてきて、目の中に入って来た光景に躍り上がりそうな声を出す。
「これは・・・なんと凄い・・・」
「何だ此処は?!　宝物庫か?」
ロレンツもリオンも降りてきて、美術品の山に驚きを見せる。
ウィリアムは、重ねられた絵画や美術品の間を抜ける途中で。
「スティールさんっ、此処に在りましたよッ!!!　犯人の衣服っ!!」
「何いいいっ?!」
スティールも、直ぐに身体を横にして美術品の間を抜けてやってきた。　パッと見えたのは、大量の血に染まった男性用の礼服である。
黒い生地の上着から、黒いズボンにも黒ずんだ血が着き。　脱ぎ

捨てられたYシャツなどは血で染まっている。

「うおおおーいっ。　コレって、執事とかの着る礼服だろうがっ！！」

「ええ、ホローを殺して、その場で脱いで持ってきたんですよ。そして、此処で着替えた。　ホラ、こっちの床には、血を洗った後と水の入った瓶、それに拭った手拭までありますよ」

「やっぱり、執事かよっ・・。　用意周到な処見ると、完全に計画犯罪じゃないかっ」

ウィリアムは、美術品の山の先に人が二人ぐらい並んで通れる通路も見つけて。

「向こうに行けば何処に出るか・・・。　見ものですね」

「うおっし、行こうぜ。　俺が、この証拠は離さなねえっ」

細い美術品の間からその様子を見るリオンは、呆れた笑い顔で。

「気合十分だな」

ロレンツは、微笑み。

「頼もしいですな」

そして、地下通路のような道を、ウィリアムを先頭に行けば。　右に曲がり、左に斜めに反れて、登り階段を数段登れば木枠の掛かった行き止まりに出る。

「・・・」

拳で一撃、木の枠を倒してウィリアムはどこかに出た。　真っ暗だ。

「此処は・・・」

スティールも出てきて。

「ん？　此処は？」

右側からは、人の声がする。

ロレンツが出てきて。

「此処は何処か？」

と、言う時。　ウィリアムは、右側から聞こえてくるのが池を浚う役人達だと解り。　開かれっ放しでカーテンの引かれた窓の外から、雨音と共にヒュ～っと風が吹き込むので、此処が何処か解った。

「別館っ！！！　ダンスホールだっ！！！！」

ーーー

ウィリアムの思った通り。　出た場所はダンスホールの有る別館。
　広いダンスホールの奥に有る、円形の別ホールに出た。

今、リオンは、兵士の分隊長と話をしている。

ウィリアムは、ロレンツと池の前で並んでいた。

「やはり、ホローは、自ら強盗団を指揮していたようですね」

と、ウィリアムが言えば。

「うん。　協力に来てくれた別の刑事部の管理官が、丁度盗賊担当に最近新しく成った人でな。　見て貰ったら、盗品がごっそりと混じっていたと。　お手柄だ、ウィリアム君」

しかし、ウィリアムは悩む。

「ですが・・・何故？　ダンスパーティーと称して、ホローの裏商売は繁盛していましたし。　急に殺される理由は、只の恨みとは思い難いですよね？　別の悪党と、諍いでも有ったんでしょうか？」

「さぁ～。　私にも、其処までは解らないね。　でも、何か裏は有りそうだ」

その時、深夜に差し掛かる小雨の闇の中。　篝火の近く、本館に近い池の中で。

「なんか有るぞっ」

「ほんとだっ。　長い木の板だっ！！！」

「おいっ、コッチには短いのも有るぞっ！！！」

スティールは、何かの大発見と思い。

「おいっ、ウィリアムっ？！！」

だが、ウィリアムは頷くのも何時も通り。

「はい。　多分、そうだと思いました」

その中で、池に入っている役人の一人が。

「おいっ、コレで池を渡ったんじゃないかっ？！！　昼間の真犯人はっ？！！」

だが、長い板を持っている役人は、左右の池の縁に板を合わせるも。

「でも、届かないですよ～。　どっちの端にも、少し届かないです」

其処に、ウィリアムが。

「短い二枚を使うんです。　本館側の池の角の右隅と左隅に斜めに掛けるんですよ。　長い板は、池の縁にピッタリでは無く、少し引いて、池の中にある石の杭の上に掛かるように渡せばいいんです」

役人達は、急に言われてポカ～ンとウィリアムを見返す。

スティールは、池を見て。

「石の杭って・・・なんだよ」

ウィリアムは、ポカ～ンとしている役人の元に向かいながら。

「中庭の池は、雨の増水で全面から溢れないように、そして地下の水路に水を落とせる様に微妙に斜めに出来てるんですよ。　それで、水を落とす側には、水草や池に放した魚などが逃げれない様に、菱形や四角の石の杭が設けて在るんです」

スティールは、丸で最初から解っているように言うウィリアムがおかしく見える。

「お前・・・最初ッカラ解ってたの？」

「執事が怪しいので、中庭の池に見に来た時に。　本館寄りの池の水が少ないので、もしかしたら～とは」

役人の人たちが、ウィリアムの言う通りに橋を作ると。　ウィリアムはその上に乗って、悠々とジェリーが上がっていった階段のある方の外廊下に歩き出す。

「恐らく、ホローが屋敷内の失礼を見せないように、別館で作業している人達にカーテンを閉めさせるので考え付いたんじゃ～ないですか？　よっと」

渡りきったウィリアムは、直ぐに渡りきった側の短い木の板を池に沈めて。　長い板で向こう側の木の板を池の隅に落とした。　そして、長い木の板を沈める。

「一枚の長い木の板では、池の縁に合わせて素早く沈められませんからね」

スティールは、池と外廊下の本館側の壁の間に落ちた木の板を見て。

「おいおい、こっちは？」

「そんなの後回しですよ。　ジェリーさんの悲鳴で、やってくる時にこっそり沈めるんです」

スティールは、杜撰な計画と思い。

「バレないのか？」

「誰が忙しく動き回っている時に、一々池の四隅にまで来て見るんですか？　池の管理を執事さんが遣ると言えば、誰も見ないのでは？　大体、執事さんは今日明日の時間が稼げればいいんですよ。こんな大それた事する上に、トレンダースって云う刑事役人とつるんでいる以上、逃げる時間を稼げればいいのだと」

スティールは、ギョッとして。

「おいおいっ、じゃっ、執事をっ？！！」

ウィリアムは、池の向こうからロレンツを指差し。

「もう手配したそうです」

スティール、ロレンツを見て頷きを貰ってから。

「でも、上手く行くのか？　この犯行は？」

ウィリアムは、自分の立っている場を眺めて。

「此処、本館側からは思いっきり死角ですよ。　大体、ジェリーさんが足と目を悪くして、コッチの階段に辿り着くまでがそこそこ時間かかっていた筈です。　階段前を窺って、船長さんが降りてこないなら。　俺がさっき使った奥の階段から上に。　恐らく、船長さんと入れ違いで階段に隠れてホローに会いに行ったんですよ。　計画は杜撰かもしれませんが、それこそ追い込まれていたら必死でやったのでは？」

スティールは、ウィリアムが何を根拠にと思う。

「お前っ、何でそう思うんだっ？」

ウィリアムは、役人と協力して再度木の板を引き上げながら。

「ケイさんの言葉、思い出して下さい。　もし、本当にホローを快く思わない人が居て。　脅すなり、買収するとしたら、誰を？　最も近く、気を許しているのは、メイドか執事では？」

「あっ・・・・」

ウィリアムとKの別れる前夜の会話。　Kの予想が、ウィリアムの推理と結びつき始める。

「じゃ・・・もしかして、誰かホローを殺すために執事を？」

「ええ。　だって、今までを考えるに。　ホローの身の回りで、街道の警備兵士長の入れ替え、強盗団の捜査する刑事役人の入れ替え、偶然にしては続き過ぎでしょう。　誰か、ホローを陥れようとしていたんですよ。　恐らく、かなり権力の有る人では？　役人の入れ替えに影響出来るなんて、結構なお力と思いますが」

「じゃっ、お前っ？！！」

ウィリアムは、スティールの脇に近づいているリオンを指差し。

「王子が、もう手配を回し始めましたよ」

スティールは、パッとやって来たリオンを見返した。

リオンは、スティールの脇でウィリアムを見て。

「軍医施設で、トレンダースがウロウロしてたのをテトロザが捕まえたそうだ。　牢屋に入れてあるそうだが、口を割らないらしい。　もう少ししたら、一端コア（核所）に戻ろうか」

ウィリアムは、何か引っかかっているような気の無い返事で。

「そ～ですねぇ」

ロレンツは、リオンに近づき。

「噂以上の人物ですな。　あの若者は」

リオンは、感心しきり。

「今の彼は、我々の想像以上の先の推理をしてる。　本当に、ホローの関わる悪事を軒並み暴きそうだ・・・」

スティールにしてみれば、もう一安心だ。

（やっぱり・・ジェリーは犯人じゃ～ない）

その時である。

「あっ、何か有りましたっ！！！！」

ウィリアムの間近で、池の縁付近を捜索していた役人が、泥だらけの何かを掴みあげた。

「貰っていいですか？」

ウィリアムが言えば、リオンもロレンツも頼るウィリアムに、役人は誇らしげに。

「ハイっ」

ウィリアムは、それを受け取って。　池の縁に屈んで洗うと・・・。

顔を上げて、ロレンツを見る。

「ロレンツさ～ん、もう捜索は必要ないですよ～。　皆さんに、着替えと何か暖かい食べ物でもっ！」

ロレンツは、同意した。

「皆の物っ！！！　ご苦労だっ。　屋敷の風呂場を開放しておくか

ら、上がって体を洗い衣服を改めてくれ。　食事の用意もあるから、しっかり休んでいいぞっ。　体調が悪い者は、医務員に申し出ろっ！！！」

スティールは、コッソリとロレンツの脇に近づいて。

「風呂場なんてあったか？」

「ん？　ああ、別館だよ。　あのホローって男、大浴場に何時もメイドと入っていたらしい」

スティールは、羨ましいやら・・憎たらしいやら。

「スケベ野郎が・・。　なんて羨ましい事を・・・」

どっちなんだか解らないセリフに、リオンも、ロレンツも、閉口して呆れながら首を傾げていた・・。

ーーー

せんかね？」

と、差し出したのは黄色いゴワゴワの繊維がむき出す変わった袋である。

リオンは、それを見て。

「ほお、これは珍しいね。　モンスターの浮き袋で作った小袋じゃないか」

「ええ、水を通さないんで。　水袋の内側に使われる素材です。かなり、口を硬く閉じてますね」

ウィリアムは、紐で何重縛りもしている上に、別の紐で余分な部分をグルグル巻きにして縛ってあるのが不気味に思えた。

リオンは、腰からナイフを取り出して。

「開いて見たまえ。　どうせ、殺害に使った何かや金でも入ってるのだろう」

ウィリアムは、ナイフを受け取って屈む中で。

「それぐらいなら、池に放り込んだりしませんよ。　嫌な予感しますね・・・後で危険を冒してでも誰かが取りに来るから・・・池に投げ入れた可能性が強い」

リオンは、もう事件の全容が凡そ解ったと思っていたから。

「だったら、怖いな」

と、やって来た別の兵士長と話を・・。

ウィリアムが、外廊下の石通路の上で黄色い袋の表面に軽く軽く切れ込みを入れて袋を開いた。　先ず、見えたのはコルク栓された、香水などを入れる小瓶である。　白く、白濁とする手前の乳白色の液体が。

「おっと、何か出ましたぜ」

スティールが、中腰でそれを見る。

「“ホルロアム”です。　これでも、一万シフォン以上します。はい、落とさないように持って下さい」

渡されたスティールは、小瓶をつまみ上げて。

「う～ん。　コレで、五日はオネ～チャンの居るお店でバカ騒ぎができるのか・・・。　ゼニで欲しかねぇ～」

だが、ウィリアムは至って真面目に。

「原液に近いので気を付けて下さい。　皮膚に着いたら爛れますよ・・・」

と、まだ何か入っている物を取り出して。

「何だ・・・コレ。　初めて見るなぁ～」

スティールが、下級役人の若いのに、“爛れるってさ”、“ホラホ

ラ”と向けたりしている中で。

「どれ、なにかね？」

と、ロレンツがウィリアムの脇に。

「コレ、何でしょ～ね～」

と、篝火に翳して見る。

「ウィリアム君、これは明らかにメダリオンだね・・・。　純金かな？」

そう、ロレンツに言う通り。　黄金色をした円形のメダリオンである。　大きさは、ウィリアムの片手の掌の大きさに匹敵する。

「あ～・・・ですね。　完全な純金です。　周りの淵に、古代文字が彫られていますね。　片方は・・・髭を生やしてローブを纏った王冠を被った老人が・・・杖・・・杖を持って掲げていますよ。ホラ」

「ウム。　反対側は？」

「はい、こっちは、ホラ。　女性の羽を持った女神像の様な・・・」

ウィリアムが此処まで言った時である。

「それを見せてくれっ！！！！！」

リオンの非常に差し迫った声が、ウィリアムとロレンツの背中に。

辺りに居た兵士や役人達も、リオンの声に空気が静まる様に黙った。

「あ・・・・はい」

「どうしました？　王子？」

だが、リオンの心はそれ処では無いらしい。　ウィリアムから奪う様にメダリオンを受け取るなり、表裏を見て確かめてから・・全身を震わせて。

「何でだ・・・・何でコレが・・・コレが此処にあるんだっ！！！！！」

斬り合いをする時のリオンの気合が、そのままに吐き出された。

「うわっ」

「ひぃ」

兵士や役人が、いきなりの怒声に怖がった驚いている。

ロレンツが立ち上がり、リオンに驚きながら。

「お・王子・・・如何致しました？」

すると、リオンは兵士に向かって、苛立った声で。

「今直ぐ執事を探せっ！！！！！　トレンダースと落ち合う為に市内の何所かに潜伏している筈だっ！！！！！　生きているなら、多

少の傷も構わないっ！！　探せっ、今直ぐ探せっ！！！！！」

と、命令を下した。

「はっ！！！！」

役人や兵士達が緊迫して、直ちにと合わせて大声の返事が返る。

ロレンツとウィリアムは、見合ってリオンを見る。　スティールは、怖くて外廊下を支える壁に隠れた。

リオンのメダルを見る顔が余りにも怖い。

だが・・・、此処で。　裏口から入って来た兵士が、池の対岸で臣下の礼をリオンに見せ。

「リオン様っ」

リオンは、斬り合う相手を見るように。

「何事だ？」

「はっ。　只今、外を巡回中に、この館の執事と云う男性を取り抑えました。　何か、現場の指揮官にお話が在るとの事です」

リオンは、外に走り出した兵士の最後尾に。

「執事が見つかったっ！！！！！　全軍っ、役人は待機を取れっ！！！」

と、命を飛ばし。　それから、報告に来た兵士に。

「ご苦労っ、執事は此方で預かるっ。　ダンスホールに連行するのだっ！！！」

池の対岸で、兵士は頭を下げて。

「はっ、了解」

リオンは、それを見届けてから。　ウィリアムやロレンツに対峙して。

「済まぬが、一緒に来てくれ。　話は、此処では出来ん」

斬るような物言いに、ウィリアムもロレンツも肩透かしである。

リオンを先頭に、ダンスホールの奥の別ホールに移動する事にした。

ーーー

ウィリアム・ロレンツのみが入室し。　他の人は入れられていない。
　リオンがそうしたのだ。

“コンコン”、

ノックが。

リオンが入り口に近づき。

「誰だ？」

扉の向こうから。

「はっ、上級刑事管理官のメルドでございます。　執事を連れて来ました」

「解った」

リオンが扉を開ける。

「・・・・・」

背の高い三十半ば・・・四十までどうかと思われる男性が、礼服姿で腰に縄を掛けられて立っている。　脇には、胸にアクセサリーの勲章を幾つも付けた偉ぶっていそうな男性が、ロレンツと同じ服装で立っていた。

「ご苦労、此方に預かる」

リオンは、執事の腕を掴んで中に招き入れた。

すると、メルドも中に入ろうとするのだが・・。

「済まないが。　入らないでくれ」

リオンは、自分の背後に執事を回して、メルドを留める。

メルドは、民間出のロレンツや冒険者風のウィリアムなどが居るのに。　自分が入れないのが解らず。

「リっリオン様っ、私は侯爵家縁の者でございます。　あの・・」

と、メルドは云うのだが。

リオンは、目つきを険しい物にして。

「やかましいっ！！！！　お前の家柄など関係ないっ！！！　誰が必要で必要でないかは私が判断するっ！！！！！」

「あっ、ははははいっ！！！！」

メルドからすれば、リオンに協力して家名に箔を付けたい処だったが。　リオンにバッサリ斬られたのである。

リオン、ドアを力強く閉めると。　斬り掛かりそうな勢いで執事を見返し。

「貴様っ、そこに座れっ！！！！　俺の質問に全て答えてもらうぞっ」

だが、執事はもう魂の抜け殻のように蒼褪めた幽霊の様な姿。　顔もかなり憔悴して、死人の様である。

リオンは、椅子に座らずに。　執事が座るなりに、池に沈められた袋の中のメダルを取り出して。

「お前、何でコレがここにあるっ?!!!!　盗んだのかっ?!!　答えろっ?!!」

と、脅しに掛かったのである。

「あわあああわ・・・たっ・・助けてください・・」

執事は、もう今にも倒れそうな顔色の悪さで、リオンの怒りに脅えた。

「やかましいぃっ!!!!!」

リオンが、強烈な怒鳴り声を上げて執事を震え上がらせた。　そして執事の胸倉を掴もうと手を伸ばしたのを、掴む手が有る。

「むっ」

見れば、ウィリアムだった。

リオンは、怒鳴り散らす寸前の顔で。

「離せ」

と、低く言う。

ウィリアムは、リオンの目を見抜く様に穏やかに見つめて。

「いえ、それは出来ません。　王子、気違いの様ですよ。　取調べとは、そうゆう遣り方でやるものではありません。　それでは、ジェリーさんを追い込んだ刑事と同じです。　どんな理由があろうとも、一国の王子として居て下さい」

言い聞かせる様に、あやす様に、静かな語りで言う。

リオンは、ハッとした顔をして腕から力が抜けて行った。

ウィリアムは、リオンから手を離して執事に向かう。　そして、執事の前に屈んだ。

「貴方・・・ホローを殺しましたね」

と、言いながら顔を見上げると。　脅えていた執事は、ジワッと涙を浮かべて。

「助けて下さい・・・た・・助けて・・・か・家族を・・助けて下さい」

と、ウィリアムに懇願し出した。

スティールもロレンツも。　執事に何か理由があると思えた。

執事の名前は、“ハウリント”と云うらしい。　ホローに雇われて十年になる四十三歳だ。

さて、ハウリントの供述で、全てが明るみに出る事になった。

今から、六年前。　コンコース島からやって来た商人のチェルナーが、安定した密売貿易の相手を探してホローと出逢った。　元々、ホローは禁製薬や盗品のブローカーであった。　二人が出逢って、ホローはコンコース島や東の大陸まで盗品を捌くルートを確保する事になる。　ホローは、“センチェネル・ウォー商会”と云う偽名の商人団体を装って、コンコース島のチェルナーと癒着したのである。

処がだ。

盗品を売りに来る盗賊が捕まったり、逃げたりして品薄になって商売が行き詰る。　そこで、三年くらい前から、人殺しで逃げ回っていた冒険者のアクティと云う男を匿うのである。　ホローは、金と女には不自由させない代わりに、アクティに強盗団を結成させた。　そして、近隣の町や村で、大金持ちまで行かぬ小金持ちや旧家や名家を襲わせたのである。

最初は、月に数回の強盗だったが。　アクティが、大きい商家や貴族を襲う事を計画し始めて。　手下を増やして、回数が徐々に増え始める。

だが、このホローと云う男、何処までも抜かりの無い男だ。　役人の使い込みなどの汚職の情報をネタに、軍部・警察部の役人から情報提示を受けて。　強盗団を切り回す一方で、アクティには一切直接会わずに。　執事のハウリントを介して命令と脅しを掛けていた。

“お前達は、私の情報操作で強盗が上手く成功している。　だから、逆らうのなら役人に引き渡してやる”

と、ハウリントに言わせている。

アクティにしてみれば、顔付きで指名手配の出回る自分だ。　ホローの御蔭で安全な隠れ家と、金・酒・女に不自由していないのだから。　確かに、文句も言えないのである。　だが、元々は自由に動いていたアクティだ。　思うように動けないのには、フラストレーションがジワジワ溜まりだすのは当然である。

そして、二年半前の事であった。　或る公爵家の人物が、ホローに近づいてきたのだが。　これが、今回の全ての引き金に成っていた。　その人物とは、“オグリ公爵”である。　公爵家の序列で三番目に名を連ねる。　つまりは、王家に世継ぎが居ない場合、三番目に王位継承権のある家柄と言っていいのだ。

処が。　現公爵・オグリ五十一世はとても政務の務まりが出来る人物ではなかった。　オグリ家の流れの中で、初めて何のお役目にも即けないと云う事態を招いたの男。　小太りで、礼儀も知らない因業公爵とまで言われている始末。　代々、大臣や宰相などをも輩出した事の有る名門なのに。

さて、オグリ公爵は、持て余す暇を下らない遊興で潰していた。　だが、渡来の特殊な麻薬などを扱うホローの噂を耳にして。　顧客になりにやって来た訳である。

ホローは、、ウィリアムが執事のハウリントを取調べしている別ホールにて、盗品や禁制品を並べてオークションをしていた。　その顧客集めに成っていたのが、ホロー主催のダンスパーティーなのである。

そんなホローの下で働くハウリントは、ホローの悪事を知ったが最後。　脅しと高額の月極めで動けなくされていた。　もし、執事を辞めるときは、自分と家族が死ぬ日でもあったのだ。

さて、オグリ公爵一族は。　代々に渡って大臣や宰相の他に、学識派の文化人を多数輩出した家柄で、財産の一部を毎年恵まれない子供たちに寄付したりしていた偉人一族であったのに。　現・オグリ公爵の代で、その全ての慈善行為は消えた。　何故なら、オグリ五十一世は、金遣いの荒い美人貴族を妻に向かえ、遊興の日々に堕ちたからだ。

その偉業などにおいて経営する美術館や学校で生み出される財産は、湯水の如く酒・女・麻薬・賭け事に消えてゆく。　それでいて、金に困ると平気で方々に金をせびる。　家名に勝手な箔を付けて、“寄付するなら名誉だ”などと強請り紛いに。

このオグリ公爵、ホローから薬や美術品を買っては、盗品と解っていて転売する性格は極悪人と同じで。　その売り方に隠す素振りも無いからたちまち足が着く。　役人に事情を聞かれても、“拾った”などと平気で言い張る愚か者。

そして、元々から寄付を人助けをと重んじる家系だから、金品の類の所蔵も決して多くなかった訳で。　遂に、ホローに支払う金が滞る。　ホローは、相手の家柄で借金を有耶無耶にするような男でもないから。　遂に、借金の取立てに乗り出る。

これが、約一年近く前。

オグリ公爵は、学校も美術館も手放しても、尚も飽くなき遊興費欲しさと借金に苦しんだので、ホローにある申し出をした。　なんと、

ある品を一時的に貸すから、もっと借金をしたいと云うのである。
流石のホローも、オグリ公爵の事を、執事のハウリントにこう言っている。

“ありゃ、バカだ。筋金なんて処の話じゃない。生まれつきの、ゴミだな”

だが、その形に差し出したのが、あのリオンの回収したメダリオンである。

この品物の説明は後々するが。だが、国家を揺るがすレベルの品で。ホローにしてみれば、一々強盗団などを組織する必要が無くなるぐらいの代物であった。

さて、ホローから百万シフォンばかり借り受けたオグリ公爵。増やすつもりだったが、親の金を自分の物の様に使う息子二人と、贅沢好きの奥方、そして金銭感覚の崩壊している自分の一族であるから、その凄い大金を半年で無くしてしまう。

処が。あのホローが全く催促をして来ない。自分の執事の老人に言われて、オグリ公爵も不審に思い。ある日、ハウリントをこっそり呼び出して、脅した。

するとホローは、あのメダリオンで今までに無い利益を得ようと画策していると云うのである。

オグリ公爵は、何れは戻ってくると信じて疑わないオグリ家の家宝のメダリオンが悪用される事を知って激怒した。直ぐにホローに返すように催促したが、借金の返済が済むまで返さないと言われる。
罵れば、逆に今までの汚職染みた生活を政府にばらすと脅し返さ

れたのである。

オグリ公爵は、己の面子を保ち。　メダリオンを取り戻すべく、刑事管理官のトレンダースに相談を持ちかけた。　元々から、ダンスパーティーなどで顔を見知っていたのだ。

さて、トレンダース自身も、ホローに汚職の弱みを握られて傀儡にされていた政府関係者の一人。　願ったりの申し出に飛びついた。

そして、なんとオグリ公爵に、ハウリントを通じてホローの養っている強盗団の頭のアクティを紹介させるのである。

アクティから、ホローの裏側の一部始終を聞いたオグリ公爵は、なんとかホローを殺害出来ないものかとトレンダース・アクティに相談を持ちかける。

アクティも、ホローの支配から自由に成りたがっていたので、これに同調した。

トレンダースは、先ずはホローの情報網の絶ち切りをオグリ公爵に進言。　オグリ公爵は、別の伝(つて)で、先ず強盗団の捜査担当と、街道警備の警備隊長を挿げ替えさせた。　二人は、ホローの呪縛から逃れられたので寧ろ喜んだであろう。

処が。此処で問題が起こる。　オグリ公爵のバカ息子が、アウトザッハーク家の襲われたブレンザの末息子と友人で。　悪友がてらの他愛ない雑談で衝撃の事実を知る。

侯爵家序列第二のアウトザッハーク家の当主ブレンザは、文化財産管理部の一員として、各爵位家の秘蔵品の検査を行おうとしていた。

ブレンザは、最近の爵位の在る家からも、凶悪犯罪の末に強奪さ

れた盗品が押収されたり。　時には、こっそりと秘蔵品が売られていたりする事実に歯止めを掛けようとして、強行的な査察を行うのだと云うのだ。

コレには、オグリ公爵は困る。　もし、あのメダリオンが無い事が発覚すれば、直ちに一家存亡の危機に直面するからである。

だが、それをトレンダースは逆手に取ろうと進言。　ホローにこの事を相談するフリで、ホローにブレンザを暗殺させ。　そして、その事実を暴露させて、元締めのホローを追い詰めようと。

それに同時付随して、執事のハウリントにホローを殺害させて口封じをしてしまおうと画策。　その第一が、アクティのによるハウリントへの脅しだ。

ハウリントは、アクティを介してオグリ公爵からホローを殺すように命令された。　殺した後は、トレンダースが別の犯人のでっちあげをするので、その間に家族と逃げろと云う内容。

計画の第二は、強盗団の半壊である。　ホローの資金源で、悪党とのネットワークの繋がりの基礎は、麻薬と盗品。　その基礎を揺らがせてしまえば、ホロー自身が裏の世界で面目を潰れて焦りだす。

　つまりは、ハウリントを殺して、ホローの悪事を暴いてしまえば、誰がホローを殺害したのかも有耶無耶に出来ると画策したのである。

ホローは、オグリ公爵からアウトザッハーク家のブレンザの所業を聞いて、自分の裏の営業に邪魔なので暗殺を引き受ける。　国王と政府に、調査の許可を貰いに行ったブレンザの帰りを狙った襲撃は、ミケルソンと云うブレンザに仕えていた元冒険者により失敗。　そして、盗賊団がリオンの率いる兵士に襲われて半壊滅に追い込まれ

る。

更に、その数日前には。　有ろう事か、コンコース島でチェルナーが死んだ噂を耳にしていた・・。

ホローは自分を陥れようとする存在が有ると感じ。　ハウリントに、秘かにアクティの殺害を命じて、ホルロアムを渡す。　まさか、自分がこの薬品で昏倒させられて死ぬなどと思って居なかった。

そして、事件当日の次の日。　ホローは、ダンスパーティーを臨時に開き。　盗品の残りを売り捌いて金を作り。　ハウリントのアクティ殺害を待って、アクティの死後にハウリントを殺して、家財を纏めて国外に逃亡しようと図っていた。　メイドの中のお気に入りの一人を連れて・・・。

入浴中に、ホローが自分からそのメイドを離さない様にする為に、こっそりと浴室で話していたのをハウリントに聞かれたのだ。　オグリ公爵とホローに板挟みに遭い。　ハウリントは、もう気が狂いそうであった。

リオンは、その計画の全てを聞いて愕然とした。

「なんと云う・・・事だ。　我が国で、こ・・こんなにも恐ろしい悪事が・・・」

フラストマド大王国は、世界で一番平和な国と噂されるのにである。

ハウリントは、リオンに涙ながらに。

「お願いしますっ。　今夜が期限なんですっ！！！　妻と・・子供

が・・・アクティに殺されるかもしれないっ!!!　私は死刑でも・・でも・・・でも妻と子供だけは・・・」

と、床に伏せて拝む。

ウィリアムは、ハウリントの前に屈み。

「今夜が、ホローを殺害する期限だったのですか?」

「はいっ!!　今日殺すと約束したんですっ!!　市内で、トレンダース・アクティに会う予定だったのですがぁっ。　あぁ・・・あいつ等が我々家族を逃すのか信じられなくて・・・。　あのメダリオンを引き換えに安全を・・・」

そう、ハウリントは迷って市中を彷徨っていた。　本当に大丈夫なのか、家族は守られるのか・・・。　生じ目の前で、ホローやアクティの悪事を目の当たりにしているだけに。　同類のオグリ公爵も信じられなかったのである。　そして、ホローの館にこっそり戻ろうとしたら捕まった訳である。

ウィリアムは、リオンを見上げる。

「王子っ、一大事ですっ!!!　下手すれば、そのアクティとか云う悪党、ハウリントさんを誘き出すために家族を襲う可能性もっ?!!」

リオンの顔に、正義の気合が満ちる。

「解ったっ。　今直ぐ、馬車で向かおう」

其処でウィリアムは、リオンに立ちあがって相談をした・・。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　真実の吐瀉（としゃ）（後書き）

次号、予告。

小雨の降る中、非道な悪人のアクティが動き出す。　ウィリアム達は、助けに間に合うのだろうか。　そして、ジェリーの容態は・・・。

次号、【決着は事件だけ】、お楽しみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾

陽気が秋で、８月なのかと疑いたくなる千葉県南部＾＾　凄い過ごし易く、ビンボー人にはクーラーの必要性が要らないのは嬉しい限り＾＾；

今月中に、次号までは繋げたいと思います＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

2023

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　決着は事件だけに・・・

１８、ウィリアム捕り物帳二幕と、事件の後始末

小雨の音が、サラサラと静かに響き渡る暗黒街。

「それじゃ、行くか。　嫌がる女の顔が目に浮ぶな」

カウンターで飲んでいた無精髭の男が席を立った。　長剣を腰に差し、黒いシャツに皮の黒いズボン。　マントを羽織って、他の者達を見る。　この男が、アクティである。　鋭い目つきの高い鼻。見てくれは悪い男では無いのだが。　悪意が目や身体から出ている様で危険極まりない人物と見て取れる。

額に傷の有る四十絡みの男性は、呆れたと云う雰囲気を言葉ににせず。

「アニキ、女をどうこうするのは構わ無いがよ。　手短にしてくれよ。　何時までもガキの死体とボロボロの女の所に居たらそれこそアブねえ」

アクティ、額に傷のある男を見返し。

「あ？　お前はビビってんのか？」

と、せせら笑う。

「ああ、ビビってるぜ。　まだこの街には、リオンとテトロザが居る。　幾ら俺等でも、あいつ等の率いる軍隊来られたらお仕舞いだ。　さっさと逃げてぇのが本音だよ」

すると、アクティはニヤニヤして。

「その辺は大丈夫さ。　あの公爵が、俺等を逃すために偽の情報をばら撒いてる。　向こうの筋の話なら、今夜にはリオン達は俺等を探すためにこっそりと街を抜け出して、街道の虱潰し作戦に出るらしい」

小太りのバンダナを巻いた小男は、下世話な笑みを浮かべて。

「アニキ、マジかよ?」

アクティは頷いて。

「ああ、もう深夜だから奴等は街の外に出てる。　俺等は、メダルを渡せば船に乗って他国におさらば。　もう、リオンなんかにオドオドして生きる必要は無え。　別の国で荒稼ぎしながら、悠々自適の毎日さ。　あはははは」

纏まった髪が、ボウボウに生える雑草の様に乱れ、長身でタンクトップを着た顔の歪んだ不気味な男は。

「アニキっ、じゃ～早く行こうぜっ。　俺、もう女が欲しくて堪らねぇんださ」

と、皮の上着と長剣を取って立つ。

禿頭のガッチリとした訝しげな大男は、グラスの中のブランデーを一気に呷り。

「とにかく、執事を探そう。　メダルの確保が最優先だ」

と、立ち上がってから。　ソファー脇に立て掛けた片手様の斧を手に取りながら。

「で？　お頭。　執事は殺すとして。　トレンダースとか云う役人は？　港で船の手配は、そいつがしてるんでしょ？」

アクティ、その話が出ると詰まらなそうに首を振り。

「役人だ。　無闇に殺すと騒ぎに成る。　ま、あの公爵ジジイが殺せと言ったら・・・消すさ」

彼の言動は、何処までも危険だ。

額に傷の有る男は、細剣を腰に装着し直しながら。

（頃合いを見て、こいつらとも別れるかな。　もう、潮時だ）

と、思う。

アクティと、バンダナの小男、雑草頭のノッポ男の三人は、強盗段結成の最初からのメンバーで。　元々その前から面識有ったらしく仲がいい。　だが、額に傷の有る男と、ガッチリした禿頭の男は、この暗黒街に紛れ込んだ所で誘われた口だ。

全員が、雨の中に出るのでマントを羽織り。　フードを被って、外に出る。

「あ～、楽しみだぜっ」

薄汚い喜びを見せる雑草頭のノッポ男。

だが、額に傷の有る男と。　禿た頭のガッチリした中年男は、静かに雨の外に出る。

額に傷の有る男は、お尋ね者に成った自分が恨めしい。　彼の名前は、ユエニフ。

ユエニフは、根っから悪人では無かった。　五年ほど前の事である。　今夜の様に雨の降る夜だった。　行きずりのバラバラな冒険者四人でチームを結成した。　仕事は、然程に難しくないモンスターの討伐であった。

だが、リーダーを遣りたがった若い剣士と、彼に意気投合した様に冒険中も仲良かった魔法使いが。　実は共謀していて、報酬の持ち逃げを計った。　ユニエフは、もう一人の僧侶と一緒に持ち逃げした二人の後を追って街の外で追い付いた。　すると、逃げた二人は、此方の二人に襲い掛かって来たのである。　汚い言葉で罵り合いながらの応戦。　魔法遣いの若者に、僧侶の男性は殺された。　ユニエフは死に物狂いで、額に魔法を掠めた傷を作りながら二人を斬って倒したのである。

だが、死闘の終わった朝方に、その様子を運悪く別の冒険者に見られた。　ユニエフは、報酬を死体から奪って逃亡したのだ。　もう、普通の冒険者に戻れ無くなった。　国から国を渡り歩き、顔を隠し

て流れ狼と成り。　時には汚い盗みの手伝いもした。　生きる為に。

だが、ユニエフにも人としてのプライドがある。　アクティ達元々の三人は、押し込み強盗をやった店先で女性を攫い、証拠を消すためなら平気で人を縛り付けて火を放つ。　年寄りも子供も容赦無く。

悪道非道の限りを行う。　ユニエフは、それは出来なかった。

そして、もう一人の禿頭のガッチリした体格の大男は、ベルフォン。

父親が盗賊で、掠め攫った女性に産ませられた。　暗黒の裏側しか歩かされて来られず、父親の盗賊団を役人に売って逃げてきたのだ。　アクティに顔を知られていて、止む無く仲間に。　だが、彼も寡黙ながら人殺しなどはしない。

ユニエフとベルフォンの二人は、表立っては話したりしない。　アクティに目を付けられるからだ。　だが、目を時折交す時、語らぬ会話をする間柄であった。

闇夜に溶けるアクティ達の影。　思う心内は、人それぞれだ。

ーーー

た広大な住宅街の一角にやって来た。　大きな二階建ての家などが広さ様々な土地付きで広がる。　ここら辺一体は、住宅街でも整備の整った金の有る者が住まう富裕層の住宅区域だ。　下水も整備され、公用通路は全て石畳で整備。　水路も、何時でも水が汲めるように整い。　各一軒一軒に井戸がある。

アクティは、何度もハウリントの家に来ていた。　金の受け渡しや、狙うホローの依頼をハウリントを通じて受ける。　ハウリントは、家では無く。　暗黒街の外側で落ち合うと言っているのだが。　急にアクティが来るのだ。

アクティにしてみれば、一種の嫌がらせでもある。　だが、暗黒街の片隅に悪党共とすし詰めにされて居る訳だ。　酒も女も金も苦労はしないが。　時々、世間が見たくなる。　特に、ハウリントの奥さんが、アクティの好みに合って居るので。　獲物を見に来ているのも変わらない。

水路に架かった橋を越えて、この街並み美しい住宅街の中心地に来ると。　噴水公園を囲む家々の中に、二階建てで丸いドーム型の屋根を見せる家が在る。　庭も、子供が大勢で走り回れそうな広さがある。

（いい所に住んでるじゃね～か、アニキ）

雑草みたいな頭をした気味の悪い長身の男がアクティに言う。

アクティは、小太りのバンダナを巻いた小男に。

（犬なんかは居ねぇ。　裏口には、私用人のババアが寝てやがるから。　正面の玄関開けろ）

と、耳打ちをする。

（了解）

マントを着ているが、バンダナを巻いた小男は、元々から盗賊として生きてきた男で。　鍵開けの技能などに長けている。　殆どの鍵の施錠を外すので、アクティには一番大切にされていた。

アクティは、ユニエフとベルフォンを見て。

（お前達は、俺等のお楽しみの間は裏と玄関を見張ってろさ。　俺は、私用人のババアを殺してからガキを殺して、その後で嫁で遊ぶからよ。　茶でもしばけや）

と、からかう様に言葉を小声で投げ捨てた。

ユニエフもベルフォンも、これがどっちも最後の仕事だと踏んだ。　アクティに着いていては、その内に役人か冒険者に襲われて死ぬと思ったのだ。　だが、この国を出るまでは、従うしかない。

ずぶ濡れのマント姿五人の盗賊達が、ハウリントの家に忍び寄る。　庭を横断し、金属製の玄関前にやって来た。

小男が静かにドアの鍵穴の前に屈む。　闇夜だというのに、指で鍵穴を触っただけで頷き。　腰の後ろに手を回して、素早く鉤型に曲がった細い鉄の棒芯を取り出した。　そっと耳を鍵穴に近づけて欹てながら、細長い棒の鉤の部分を鍵穴に入れて行く。

マント姿の他の男達は、辺りを窺っていた。

直ぐに、小男がアクティのズボンを軽く引っ張る。　鍵を外したのだ。

アクティは、小男に指で“開けろ”とジェスチャーする。

小男は、開ける音も静かにドアを開いた。

アクティは、小男と雑草の様な頭の長身の男に肩を叩いて入って右を示す。　ユニエフとベルフォンには、入ってドアを閉めろと指示。
　自分は直進の奥の方に歩いて行く。

静まり、何の代わりの無い空気。　アクティ達は、此処まで何の気を配る必要も無かった。　そう、此処まで、何一つ・・。

小男と雑草頭の長身男が向かった廊下の途中、二階に上がる階段前に来た時。　二人の居る廊下の先、ドアの無い部屋の入り口。　そして、二人が目指しているハウリントの奥さんと子供が寝る二階への階段の上から、急にランプの灯りが灯った。

（一気に押し込もう）

（ああ）

二人、武器を抜いた。　小男は、短剣（ダガー）を。　雑草頭の長身男は、刃渡り九十前後の長剣を。

「おいおい、こんな狭い場所で戦うのか？」

若い男の声だった。

二人、ハウリントだと思ったのだが。　二階の階段の上に姿を現したのは・・・。

「あ〝っ！！」

「げぇっ！！！」

二人、驚いて廊下に押し戻った。

「私を知っているか？　いや、顔はお互いに忘れないよな。　つい七日程前か。　私と戦っているんだからな」

後退りながら小男は、恐れ慄いた形相に変わり。

「アニキっ！！！！　リオンだぁぁっーーーー！！」

と、振り返って外に向かう。

「おやおや、大声とは慎みの無い」

廊下先の切れ間の部屋の入り口からは、やや老いた声のテトロザがランプを持って現れる。

だが、異変はこれだけでは無い。　時を同じくして、叫び声が上がる前。　ユニエフ・ベルフォンは扉を閉めようと仕掛かった時。
ユラリと玄関前に現れた黒いシルエットに驚いた。

「お前達、バックレんなんてふざけ過ぎだ」

中々通りの良い男の声。　少し低い、魅力を感じるヴォイス。
驚いたユニエフが、さっと細剣を引き抜いてドアを押し開き。
「何者だっ！！！」
と、誰何（すいか）すれば、黒いシルエットの男は。
「俺に名前を聞くなんて笑わせる。　お前達こそ、人様の家に何用だ？」
ベルフォンは、斧を右手に押し殺した枯れ声で。
「あんた、ハウリントか？」
この時に、小男が“リオン”の名前を出して叫び上げた。　ハッとして、声の方を向くユニエフとベルフォン。　何が起っているのか解っていないままの二人の元に、大声を上げて“リオン”の名前を叫んで玄関先に走り出てきた小男は、ベルフォンもユニエフの事も見えていない様な素振りで、外に二人を押し退けて飛び出そうとする。　その小男の顎を、シルエット男は剣の柄で殴りつけて。　素早い鞘の付いたままの剣撃を振舞った。
「ぐばはぁっ！！！！！」
小男は、雨の外で玄関の外で、シルエットの男の左に吹き飛ばされた。
「外に出ろ。　家ン中で遣り合うなんて無粋だ」

シルエットの男は、中庭に背を返す。

ユニエフとベルフォンは、一瞬見合った。　相手が誰だか解らない上に、しかも強い。　小男が叫んだ“リオン”の名前も心配だ。

だが。

「リオンっ、死ねえええっ！！！！」

雑草頭の長身の男の悲鳴染みた大声が、二人の横から飛び出す。

「・・・」

「・・・」

雑草頭の男がリオンの名を口にした声を聴き、ユニエフもベルフォンも待ち伏せされているのを悟る。　剣士として名の轟くリオンと戦うなら、シルエット男の方が分が有りそうに二人は見えた。　ベルフォンとユニエフはお互いで見合って覚悟を決め、雨の中庭にシルエット男を追った。

この時、あのアクティは誰の助けにも行けなかった。　何時もなら、ハウリントの家に住み込みで働く老婆の居る台所の裏部屋から、今宵はランプを持った若い灰色の髪をしている市民風の若者を見ているからである。

「てめえ、何者だぁっ！！！！」

ドスの利いたアクティの誰何。　下手な一般人なら、脅えてしまうだろう。

ウィリアムは、笑った顔で肩を竦め。

「あ～怖い怖い。　何者も何もないですよ。　それより、もうこの家は、役人と兵士の二重の包囲網で逃げれませんよ」

アクティは、ギラギラした殺気を吹き出ている目でウィリアムを睨む。

しかし、この時。

「うぎゃあああああっ！！！！」

建物内で、雑草頭をした長身男の悲鳴が上がる。

パッと声の方を見たアクティに、ウィリアムが。

「リオン王子とテトロザ様に、お仲間の誰かやられましたね」

アクティは、、“リオン”と“テトロザ”の名前に驚愕の顔をして、口にしたウィリアムに振り返る。

「何だとっ？！！　今っ・・・なんて・・・」

流石のアクティでも、リオンとテトロザの名前には驚きだろう。

二人は、悪党の間では“鬼神”だの“化け物”だのと恐れられている。

すると、正面の外から。

「うわああっ！！！！」

「大丈夫かあっ？！！　ユニエフっ！！！！」

と、二色の声が迸る。

ベルフォンとユニエフが戦っているのを察したアクティは、ウィリアムを怒り狂った目で睨みつけ。

「おのれぇっ！！！！　俺達をハメやがったなあああああっ！！！！」

と、殺意の爆発を言葉に込める。

ウィリアムは、ランプを顔の横に持ち上げて、意味有り気に微笑みながら。

「人を散々にハメたのは、そちらでしょ？　そろそろ、潮時ですよ。ふぅ・・・」

パッと、ランプの灯りが消えた。

「てめえええええええっ！！！！！！」

裂帛した気合を吐き出して、アクティはウィリアムに闇の中で斬り掛かった。

だが、ウィリアムの影は一瞬で消え、独りでに裏口のドアが開かれた様にアクティには見えた。

さて、その頃。　正面の庭の上では、ベルフォンがシルエット男・・・スティールに蹴り倒されて顔の前に剣を突きつけられた。

「大人しく捕まれ。　さもないと、痛い目を見る。　せめて、最後くらいはスッキリしろ」

もう、腕を切られてもんどりうったユニエフは、庭に雪崩れ込んできた兵士に取り押さえられている。

「うぅ・・・強いな・・・アンタ」

ベルフォンは、スティールを見上げる。

闇の中で、スティールは。

「冒険者をマジにやってれば、何年かすれば此処まで来れる。　アンタ等、普通の人等を襲って強いと過信してただけさ」

ベルフォンはそのままに、ガクリと項垂れた。　役人と兵士が、ベルフォンを取り押さえに掛かる。

「ウィリアムっ」

スティールは、取って返す刀の様に、直ぐに家の中に駆け込んだ。

「お、終わったかな？」

テトロザが、リオンと共に雑草頭の男を縛って居た。

すると、裏庭の方から。

「てめぇっ！！！！　ぶっ殺してやるぞおおっ！！！！」

アクティの獣染みた咆哮が上がる。

リオンは、サッとそっちを見て。

「いけないっ、奴はかなり遣えるっ！！！！」

と、焦る。

だが、スティールは。

「本領発揮か。　相手が相手だもんな」

と。

「？」

テトロザは、どっちの事を言っているのか解らない。

リオン・スティールが先に裏庭に走り。　テトロザも、スティールの後から入って来た兵士に取り抑えた男を引き渡し。　悪党共の身柄確保と警戒を頼んで、指示を与えてから向かおうと思う。

雨の中の裏庭。　井戸も見えるし、鳥小屋や納屋が石垣の垣根の端に見える。　兵士も役人も、アクティの異常な殺気に気圧されてか石垣を越えていない。

「うらあッ！！」

アクティが素早く斬り掛かり、二の太刀を振り込んだ時。　屈んだウィリアムは、大きく飛び退いた。

此処に、リオンとスティールが来る。

「よし」

リオンが剣を抜こうとした時、スティールが止めた。

「必要無いッスよ。　アイツ、俺より強いから」

リオンは、素手の丸腰であるウィリアムだ。　アクティの剣筋も中々鋭いから、

「だがっ」

と、声を出せば。

「見ててください」

と、スティール。　スティールは、コンコース島で、悪党団の頭であるポールを捕まえたウィリアムを見ているだけに、そう言えた。

リオンは、剣の留め金だけそそままに、渋々剣を戻した。

「・・・・」

沈黙のウィリアムは、辺りの雨の音に混じりながら、ユラリユラリと左手を上に構える。　右手は、ダラリと下げたまま。　少し腰を

落として、アクティを見る。

夜明けが始まった。　やや、白み始めたどんより雨雲の空の中で。

「お前ぇ・・・何モンだ？　マジでよぉ・・・」

アクティの動きが、剣を下段に構えて止まったのである。

「・・・」

ウィリアムは、喋らない。

ギリギリと獣の眼光でウィリアムを睨む、ずぶ濡れのアクティ。・・・怖かった。　ウィリアムが、怖い。

（何でだ・・・何でコイツ・・・気配がしねえんだ？）

疑問が湧く。　そして、刹那して。

「あっ！！！　てめえっ！！！！」

アクティが気付くと、ウィリアムは自分の右側に移動していた。

サッと距離を取ったアクティ。　剣を構えるのを止めて。

「貴様あああっ！！！！！　何で暗殺者の使う術を知ってやがるっ！！！！」

ウィリアムは、ニヤっと口元を曲げて。

（ケイさんにはとても敵わないけどね。　おたくには、負けないですよ）

と、思うままに。

「行きますよ」

ウィリアムが、消えた。

「あっ」

「すげっ」

リオン・スティールが声を出す。

「うわっ、来るなあっ」

アクティが、慌てて引き下がって剣を構えた。

リオンは、ウィリアムの動きに驚いた。　気付けば、アクティの左側に回り込もうとしている。

（これが・・・暗殺闘武・・・。　噂に聞く気配を極限まで消し。　素早い動きで錯覚を起こさせて奇襲する暗殺武術・・・。　見るのは初めてだ・・・）

過去にリオン達が幼い頃、暗殺者が数回襲ってきた事が有った。　全て、テトロザ率いる近衛兵が暗殺を未然に防いだが。　テトロザは、隠せないほどの怪我を何度も負った。　リオンがテトロザを最近傍に置くのは、老い始めたテトロザの身体を思ってだ。　恐らく、

もうリオンの方がテトロザより強いからだ。

今、世界の中で闇に閉ざされている暗殺の技が、目の前に有る。

必死のアクティも、流石は剣術の遣い手だ。　ウィリアムに襲われる前に気付いて、正面に据え様と間合いを取る。

すると、ウィリアムは。　なんと自分からアクティの剣撃の届く範囲に踏み込んでゆく。

リオンもスティールも、ギュッと目を細めて見守る。

「死ねえっ！！！！」

ウィリアムに、アクティは突きで剣を素早く押し出した。

だが、ウィリアムはクルリと脇に回りながら間合いを詰めて。　右手でアクティの剣を持つ手を鷲掴みに掛かる。

「うわあっ」

アクティは、思わず捕まりそうになって手を引いて後ろに下がる。

「くそおっ」

剣の切っ先をウィリアムの顔に向けて、やや正眼の構えで警戒したアクティ。

すると、ウィリアムが。

「・・」

何かを呟いた。

リオン・スティールは、微かにウィリアムの口が動いただけの様に見えたのだが・・・。

「ひいいっ！！！！　煩い煩い煩いいいいいいっ！！！！！」

アクティは、いきなり脅えるように狼狽し始める。

その時だ、またウィリアムがアクティに走り込むのだ。

「うわああっ！！！！　来るなあっ！！！！」

アクティが、大きくウィリアムの頭の辺りを引き下がりながら斬り払った。　しかし、ウィリアムはその動きを読んで、一瞬早く屈み込みながら旋回するブーメランの様にアクティに踏み込んでゆくではないか。

「・・」

「あ・・・」

スティールは、絶句。　リオンは、驚きに小声を上げる。

アクティは、右手の払った剣をウィリアムの頭に目掛けて叩き込もうとするのだが。　ウィリアムはその動きに合わせるかの様にアクティの左に踏み込んでゆく。

そしてそれは、一瞬の出来事だ。

ウィリアムは、自分の左手でアクティの左手首を掴み。　そのままアクティの背後に、ウィリアムもアクティと背中を合わせるように回り込む。　アクティが、ウィリアムの行動に大きく身体の体勢を引っ張られて崩す時。　ウィリアムの右手がアクティの喉輪に回った。

リオン・スティールには、アクティが伸び上がるように後ろに背中を反って、その背後に消えたウィリアムが見えない。

そしてそのまま、アクティの身体がバク転する様に空中に飛び上がった。　アクティの身体が半回転し、雨の落ちる宙で逆さに変わった時、ウィリアムの無機質な目が・・・二人には見えた。

“ボギボギィィィ・・・”

空中で、アクティの身体がうつ伏せして泥の地面に落ちる前に、アクティの身体から骨の砕ける音がする。　アクティは、そのまま地面に落下そて泥を跳ね上げる。　ウィリアムは、屈む体制でアクティの脇に舞い降りるのである。

「うぬぬぬぬ・・・正しく、暗殺闘武ではないか・・・」

リオンとスティールの後ろに現れたテトロザは、最後を目にして呻く様な声を出す。

リオンもスティールも、絶句して立ち尽くす。

その中で、ウィリアムがアクティを覗き込んで。

「あっ、しまったっ！！！！」

何事かと、リオンが鋭く。

「どうしたっ？！！」

雨の中、屈むウィリアムはリオンを見て。

「舌を噛まれました・・・。　自決してしまいました」

「ふう～・・・」

リオンは、安堵の息を吐く。

「良い、どうせ死刑だ。　自決など、まっとうな人間の遣る事を・・・下衆めが」

と、リオンは凄い戦いの前で動けなかった兵士達に。

「こら、何をしているっ。　遺体を回収し、コア（核所）に撤収するぞ」

と、命を下す。

リオンを見たスティールは、寒気のする思いを払拭する様に肩を上げて。

「ね？　俺より強い」

リオンは、スティールに笑えない顔で。

「確かに、駆け出しの冒険者には強すぎる存在だな。　だが、彼の言う通りに間違いは無かった。　何とか、執事の家族は守れたよ」

「俺等のリーダーには、間違いはございません。　う～ん、新しい商売でも始めるか」

リオン、コレには思わず笑いが出た。

実はウィリアムは、リオンに執事家族を守るべく手を打つ事を進言した。　執事の家族をこっそり水路で移動し。　役人や兵士は下水道を遣って解らないように移動させる。　近隣の住民の避難と、犬などの動物の移動をして。　周りを完全なる廃墟にしていたのだ。　人がもしアクティ達を見つければ、彼らはどんな凶行に出るか解ったものでは無い。　こんな住宅街で火事でも出されたら、それこそ大事である。

さて、ウィリアムは、別の場所にも手を回させた。　トレンダースとハウリントの落合い場所である。　人気の少ない飲み屋街の一角に在るバーに、役人を踏み込ませた。　此処では、リオン達の襲撃を免れた盗賊数名と、アクティの仲間の魔法使いと学者・薬師崩れの男が屯してハウリントの出現を見張っていたのである。

トレンダースの腕の骨を犠牲にその話を聞き出したテトロザが、リオンの元に来るとその兵士と合流して酒場の客に紛れた二人と手下を捕まえる。

もう、アクティ一味の包囲網は、アクティ達が暗黒街を抜けてこっそりと海沿いの海岸通りを歩いている時点で出来上がっていた。

執事のハウリントの家に来た時点で、アクティ達はもう袋の鼠だったのである。

ーーー

（ははははは・・・ざっと見積もっても一千万シフォンはあるよ・・・。　金銭感覚の欠落ってより、元から無いな・・。　この人には・・）

呆れ笑いしか浮ばないウィリアムは、共謀罪で連行された執事に同情した。

しかも、ホローとの契約書には、“我が家の秘宝を身代に”と書き込んでいる。　バカ正直に書いて、万が一公に成ったら。　その時点で何を質にしたか解りそうな物だ。　確かに、ホローも驚く御馬鹿である。

ウィリアムは、朝の出勤ラッシュが街で始まる頃まで捜索を手伝った。

リオンもテトロザもロレンツも、一睡もしないで関係各所に連絡を入れて大忙し。　ウィリアムとスティールも、刑事部の事務所に赴いて、ロレンツと事件経緯の纏めに加わっていた。　役人の詰める場所とは、何処も似るものか。　モルビット達の居た事務所と、部屋の内装は変われど雰囲気は似たような物である。

午前一杯で、逮捕者は六十人に登る。　何せ、ホローのダンスパーティーの過去の参加者名簿を、執事ハリウントの証言で照らし合わせて、怪しい人物は軒並み引っ張ると云う異例の逮捕劇を敢行したからである。　刑事部の手の開いている刑事管理官達が、刑事部総務長の命令で加わる。　前代未聞の芋づる式逮捕劇に、刑事部はもう猫どころかゴキブリの手でも借りたいくらいに慌しくなった訳だ。

港にも、ホローと癒着のある商業船の運行停止措置が敷かれて、大

騒ぎに成っていた場所も在ったらしい。　雨の中、逃げ出す船と、追い掛ける海運省の船舶警察のシップチェイスが有ったらしく。港はその話で大盛り上がりしたらしい。

午後の雨の上がった曇りの中、昼下がりだ。　疲れ切った役人のうろつく刑事部の建物から、ウィリアムとスティールは、リオンに呼ばれて軍部に戻ろうとする時。　あの、スティールが爆破した船の船長と廊下で会う。

「あ、アンタ等」

船長が眠たそうな目を腫らして、黒い半袖の上着に布製のズボン姿で二人を見つけた。

ウィリアムもスティールも、ホローとの事を知っているだけに。笑うに笑えず。

「どうも、お疲れ様です」

と、ウィリアム。

「事情聴取ッスか？　ども」

と、スティール。

だが、船長は笑顔で。

「いや～。　本当の犯人を捕まえたそうじゃないか。　感心した～、いや、実に感心した。　俺は、あの連れて行かれた女の子は犯人じゃないって言ったんだ。　なのに、あの時の役人が決め付けてな。

どうなるかと思ったが・・・。　いや、大活躍だな」

船乗りとしての大声口調で、何処と無く訛りの混じる燻し銀と云う感じの船長は、何処までも男らしい感じがしていた。

ウィリアムも、笑って。

「その格好、寝てたんですか？」

船長としての格好では無く。　普段着なのが、面白い。

「おうよ。　いきなり、朝方に役人に叩き起こされて、着の身着のままに馬車に乗っけられて、今まで事情を散々に聞かれた」

ウィリアム、実はある閃きが在った。　だから。

「あの～、丁度良かったんですが・・・、この後少しお付き合い願えませんか？」

スティールは、何事かと思う。

船長も、何事かと思い。

「あ？　俺にか？」

「ええ。　ホローが死んで、船長の契約は解消ですよね？」

すると、船長は少し声のトーンを落として。

「ああ・・。　野郎から離れるつもりだったが・・・。　これで、

仕事無しの船乗りよ」

ウィリアム、其処に間髪入れず。

「実は、もしかしたら船乗りを捜しているかもしれない商人を一人知っています。　俺と、その人に会って見ませんか？」

船長は、ウィリアムの顔をジッと見る。

スティールは、驚いて。

「お前、そんな知り合い居るのか？」

ウィリアムは、スティールに。

「オロスさんですよ」

「んあ？」

「確か、オロスさん自身が、新しい船で東の大陸から北の大陸まで幅広く薬の流通を始めるらしいんですよ。　なんでも、東の大陸の水の国ウオッシュ・レールに、新たに支店を出すと云う構想が在るそうなんです」

「マジかよ」

ウィリアム、船長を見て。

「私の知り合いですが、確かな商人さんです。　是非、会って見てくれませんか？」

船長は、急に云われて驚いた。　寝耳に水とは、正にこの事。

「あ・・・あああ・・・。　アンタ等の知り合いか。　よし、会ってみよう」

船長は、少し戸惑いながらも。　二つ返事で受け入れてくれた。

「なら、善は急げですね。　少しですが、軍事部に付き合ってください」

ウィリアムは、眠気を飛ばして気合を入れた。

スティールには、もはやどうにも言えない事である。

さて、船長を加えた三人は、軍事部のリオンの私室に通された。

「あ・・・リっ・リオン様っ」

船長は、入った部屋にもうリオンが居るのに驚いた。　デスクを前にして、疲れた顔で紅茶を飲んで居たらしい。

リオンとテトロザも、ウィリアムとスティールに船長が加わっているのが驚きだ。　お互いで、一度見合う。

ウィリアムは、ソファーに向かいながら。

「失礼します。　呼ばれたので来ました」

リオンは、船長も同席とは面白い取り合わせだと疲れた顔を綻ばせ

る。

「ああ、お疲れ。　船長殿も一緒とは驚きだね。　ま、掛けてくれ。君たちには、礼の一言も言いたいし、返すものも在るしな」

ウィリアムとスティール、お互いで見合って首を傾げる。

「返すもの？　ジェリーはまだ面会謝絶だし・・・。　ウィリアム、何かあったか？」

「いえ・・・さあ」

すると、テトロザは大呆れ顔でウィリアムとスティールを見る。

リオンは、寧ろ笑い出す。

ソファーに座った船長を含め三人に向かって、テトロザは来ると。
ウィリアムとスティールを見て。

「昨晩、お二方が広場に撒いた金貨を引き取って下さいませ」

ウィリアムとスティールは、ギョッとした顔で見合い。

「あ・・」

「やべえ・・・忘れてた」

リオンは、あれほどの大金を忘れるウィリアムとスティールが余程に可笑しいのか。

「あはははは・・・二十万シフォンもの大金を忘れるか・・・。　くっくっく、いやいや。　確かに、それだけの衝撃も忙しさも在る事態だが・・。　くっくっく、忘れるかよ・・・」

と、一人で大笑い。

船長は、二十万と云う金額に驚いた。

ドン・ドン・・・と、テーブルの上に、ゴールダー金貨の入った金袋が置かれた。

船長は、飛び出そうなくらいの眼で、金貨の入った袋とウィリアム達を見交わして。

「凄いなあ・・・もう・・・借金を返す金・・・出来てたのかよ」

デスクを前にして座っているリオンは、右手を差し出し。

「色々有ったが、本当に助かった。　王子として、役人の一人として、感謝の意を示す。　助かった、ありがとう」

座っていながら頭を下げたリオンと、横で立ちながら礼をするテトロザ。

スティールは、恐縮である。

船長も、ホトホト感心した様子でウィリアムを見る。

すると、ウィリアムは五万の入った金袋を取り上げて立ち上がり、リオンのデスクの前に来ると袋を置いた。

「・・・」

リオンも、ウィリアムを見上げる。

ウィリアム、リオンに一礼し。　そのままの体勢で。

「不届きな行為で港を騒がせ、人助けとは言え夜間に騒動を起こして申し訳有りません。　ホローにお金を払わなくていい分。　迷惑は、謝罪し。　余計な出費はこのお金で、お返ししたいと思います。　我儘を聞いて下さって、ありがとうございます」

スティールも立ち上がり、頭を下げて。

「迷惑掛けました。　ホント、王子とテトロザさんには感謝します」

リオンは、テトロザを見上げると。　テトロザは、目配せする。

「よし、解った。　港の修繕工事費用と、怪我した兵士の医療費、そして迷惑料として納めさせて貰う。　これで、一応は今回の一連の事件の騒動はお構いなし・・・。　で、いいな」

ウィリアムは、再度頭を上げて。

「ありがとうございます」

リオンは、笑って。

「うむ。　また、今回の様に事件などで手を借りたいなら。　ロレンツか私を頼れ。　代わりに、此方も頼る」

テトロザは、肩を竦める。　リオンの豪儀な性格が出た。　一体、何人の知人を作ればいいものか。

ウィリアムとスティールは、呆ける船長を尻目に。　何度もリオンに頭を下げて軍事部を後にした。

ーーー

スティール、“シケ”と“湿気”の絡みに、今、指摘で気付いて。

「おっ、我ながら上手いギャグ」

船長は呆れ笑い。

ウィリアムは、詰まらないとばかりに首を振る。

さて、こんな高級宿に冒険者風体のウィリアム達が直行しても、入り口で追い返されるのが常識。　宿の入り口には、無粋な客を留めて、本当に入れていいかどうかを調べるガードマン染みた正装の大男が居る。

船長は、ウィリアムに。

「中に入れるのか？」

「いえ、呼び出しますよ」

と、金貨を一枚取り出す。　そして、一人で何の気なくと云った感じで宿屋の敷地に入って行く。

宿は高さも街一番なら、普通の宿屋の二十軒分位の広い土地を有するリゾート感覚の溢れる宿屋である。　美しい公園風の庭園の中を伸びる石畳の敷地内通りを歩いて行けば、大きく広い玄関前が見える。　玄関前には、石の屋根と大理石の立派な支柱が伸びる。　透明なガラスの合せ戸は、湿気を帯びて曇り気味。　ウィリアムより一足先に、黒い正装をした恰幅の良い老人と、白いカーディガンを羽織ったワンピースの礼服を着た中年の女性が連れ立って中に入っていった。

ウィリアムは、真っ直ぐガタイのいい正装の職員に近づく。

「すみません。　お客さんに知人が居るので、お取次ぎ願いたいのですが」

「ん？」

モミアゲの立派な、角刈りの男性はギロリとウィリアムを見下ろす。

背丈なら、アクトルに似ている。

ウィリアムは、臆する様子も無く。

「これで、取り計らって下さい」

と、金貨を掴ませる。

「なっ・・・」

大男は、ゴールダー金貨に驚いた。　ウィリアムに目線を移して。

「何方だ？」

「はい、オロスさんと云う商人さんです。　多分、私の友人のアクトルさんと云う大きな身体の人も一緒かと。　用向きは、オロスさんなので、オロスさんのみでも」

大男は、少し驚いた顔で。

「暫し、待たれよ。　オロス様は、我が宿の大切なお客様、その知

人からコレは受け取れない。　して、貴殿のお名前は？」

「あ、これは失礼を。　ウィリアムと言います」

と、ウィリアムが一礼すると・・・。

「なぬ」

大男の顔が、かなり驚いた顔に成った。

ウィリアム、これには全く理解が行かず。

「あの・・・何か？」

すると、大男の職員。　ウィリアムの前に正しく立ち。

「もしかして、貴殿は・・・。　先夜、悪徳商人を殺害した犯人を捕まえた若者かね？」

「えっ？！　も・・・もう・・・噂に成っているのですか？」

ウィリアムは、自分の名前が噂に為っているのに驚いた。

すると、大男は喜んで。

「いや～いやいや、一目見て只者の若者ではないと思った。　いや何、先ほどに刑事管理官のお方が容疑者の捜索に此処に来たのだ。　お客を呼び出している最中に、そなたの事を聞いた。　なんでも、神業の様な推理で冤罪を防いだとか。　ささ、中に入られよ。　オロス様にお取次ぎする間、ロビーの待合室で休まれるがよろしい」

（マジ・・・かよ・・・）

ウィリアムは、何かとんでもない噂が広がりつつあると脅える心境である。　大男に中に案内され、広々とした大ロビーの窓側に設置されたソファーや、椅子とテーブルの組み合わせが広がる待合場に案内されてしまった。

「此処で、暫し待たれよ。　係りの者が、水を運んで来る故にな」

「えっ・・・あっ・・・お・・お構いなく・・・」

こうゆう宿では、大活躍する冒険者や著名な芸術家を中に招くとは聞いた事が有った。　だが、本当にこうなるとは・・・。

ウィリアムは、噂の恐ろしさを目の当たりにする。

大男がフロントに向かって。

（凄いなぁ～。　天井のシャンデリア・・・グラス部分がダイヤモンドだし、オマケにデカイし・・・。　床は大理石だし・・・有名建築画家の絵が描いてあるし・・・）

見回すウィリアムは、一人用の椅子にぎこちなく座って宿のロビーを見回す。　広く高い天井、天空に光るシャンデリアは、幅だけで十メートル・・・いや、もっと大きい。　縦の高さもかなりありそうだ。　床に目を下ろせば、優美な神々が楽園で夜の音楽祭を楽しむ絵が石の中に掘り込まれている。

（ヤバイ・・・なぁ）

待たせている外のスティールと船長に悪い気がする。

座る椅子とて、その辺の安物ではない。　肘掛の木の細工は、ブドウと蔓を見せるし。　足の部分も猫の手の様に。　これは、高級家具職人が最近好む流行の形らしい。

其処に。

「お待たせ致しました。　冷水ですが、どうぞ」

青い上下の制服に身を包む礼儀正しい美女が、トレイに水の入ったグラスを持ってきた。

「あっ・・・どうも」

ウィリアム、本当に自分なんかに水が出てきて、かなり恐縮である。

「ホラ・・・」

「まあ・・・凄い・・・」

何故か、離れた待合場に座るお客達が、振り返ったりしてウィリアムを見る。

（俺は見世物じゃ無いってっ！！）

コップを持って、観葉植物の間の席に座り直すウィリアム。

何となく、憂鬱な気分に成った時だ。　自分の左に、少し影が差し

た気がする。　何の気なしに見上げると。

「わぁっ」

スティールが、曇り湿る窓ガラスに顔をベタ～っと貼り付けて此方を睨んでいるではないか。

（ア・・・アホ・・・が）

窓の向こうで、明らかに講義し出すスティール。

ウィリアムも、ジェスチャーで応戦。

“お前っ、なんで中に入って美人に水なんか貰ってんだっ！！！！”

“知らないッスヨ！！！　なんでか、俺達の事が噂に成ってます”

“事件を解いたお前だけだろうがっ！！！！！！”

“多分・・・・”

“テメエっ、出て来る時に美人も連れて来いっ！！！”

“あ～っ、ジェリーさんに言いつける”

“お前っ、何だその恋人の女友達みたいなセリフはっ！！！！”

外で見ている船長は、スティールが訳の解らない動きをしているので。

（寝不足でトチ狂ったかな？）

と、思っていた。

さて、ウィリアムが左手でスティールを追い払う処に。

「おお、ウィリアムじゃないか」

と、聞きなれた声。

「オロ・・・」

振り向くと、青い礼服のオロスの後ろに、黒い礼服を着て蝶ネクタイをした見覚えの有る大男が・・・。　ウィリアムは、その見てくれのインパクトに気圧されて、言葉を途中で止める。

アクトルは、ワナワナした顔でウィリアムを見て。

「お前・・・今、“似合わない”と思ったろ？　顔に出てるぞ」

ウィリアム、オロスに苦笑いで。

「あははは・・・お話が・・・・ありまして・・・あははは・・・」

オロス、ウィリアムの前の席に座り。

「なんでも、早速大活躍らしいね。　君らしい・・・」

と、思わせぶりに見てくる。

ウィリアムは、スティールの船の爆破から、事件の解決までを手短に話して。

「オロスさん、実は会わせたい人が」

「私にか？」

「はい。　オロスさん、船乗りと船長を御捜しでは？」

すると、オロス。　目を丸くして。

「ああ・・・一ヶ月少し後から、東の大陸から、このアハメイルまでの交易船をやるつもりだ。　このアハメイルとウォッシュ・レールの都市に支店を出すからね。　あ、君にも話したな」

「はい。　それで、船長さんを紹介したいんです。　スティールさんが爆破した船の船長さんなんですが。　意地汚いホローの下で限界まで耐え抜いて航海してきた方なので、人間の強さは素晴らしいと思います。　是非、一度会って見ませんか？」

アクトルとオロスは、お互いに見合う。

アクトルが、先に。

「あの船長か。　度量といい、男らしさといい、確かに信用には値有る人だな」

オロス、アクトルに向いて。

「アクトルくんも知っているのか・・・。　ふむ、丁度いい船長が居なくて、捜していた最中だったんだ・・。　話を聞くに、その死んだ悪人が船長殿を出る所まで手放さない理由は、船長として遣えるからだろう。　面白いね、是非、会って見よう」

ウィリアムは、外を指差し。

「もう、其処まで来ています。　何処か、食事にでも出ませんか？」

すると、アクトルが。

「なら、この奥でいいんじゃ～ないか。　食事処のレストランがあるぜ」

ウィリアムは、苦笑い顔で。

「いえ・・・船長さんも、俺やスティールさんも普段着ですよ・・。　格式ばった場所には、ねぇ・・・」

すると、オロスはにこやかに。

「いやいや、込み入った話になるやもしれない。　個室を頼むよ。　入ってもらってくれ」

ウィリアム、背筋が凍る思いが。

（マジかよ・・・）

やはり、船長は格式高い宿に入るのを遠慮し、いざ入店する時には操り人形のようにぎこちない動きでやって来た。　宿のロビーを歩

くスティールやウィリアムを、お客の一部は“何者か？”と怪訝な顔で見ていた・・・。　場違い過ぎる。

さて、立派な黒と白の石で彩られた個室の会食場。　オロスに会った船長は、恐縮しっ放しで声が震えていた。　何度も頭を下げて、今まで見れない上流界の雰囲気に気絶しそうな思いだったろう。

だが、食事をする中でオロスが、航海における決まり事や、危険海域などの話に成れば。　船長の態度はガラリと変わった。　この船長、元は世界を渡る国営の長期航海士の息子で、危険な海の事は全て網羅していた。　そして、中継地のコンコース島においての停泊期間や、必要な事項を話す船長の顔は、正に“ザ・船長”で、見ているスティールは。

「紹介だけで良かったな。　やっぱり、大した船乗りだぜ。　あのオッサン」

と、称した。

さて、オロスと船長が真面目に話し込めば。　長いテーブルを二人に少し離した所で。　ウィリアム達はチームメンバーとしての話になる。

アクトル、苦い顔で。

「お前等、ロイム達がいじけてたぞ。　早く、宿に帰ったれ」

スティールは、グッタリ頷き。

「ああ、これから帰る。　正直、ヘトヘトだ」

ウィリアム・スティールは、アクトルにもジェリーの事は語らず。
二人して、ホローに偶然会って、バカにされたので借金を一発返済してやろうと結託したと云う事にした。ウィリアムとスティールが金を返しに行けば、ホローが殺されているし。無実の女性が捕まったらしいと聞いて、二人で奮闘したと。

アクトルは、ウィリアムを細めた目で見て。

「マジかよ・・・。またリオン王子に迷惑かけやかって・・・。よりよってお前・・・意外にハートが灼熱なくらいに燃えてる方か？」

ウィリアム、恐縮そうに。

「スティールさんの口車に乗せられまして・・・」

「お前が？　はっ～・・・お前がねぇ」

訝しげな顔のアクトル。意外なウィリアムを見るようで、本当に驚いているらしい。

スティールは、キザに前髪を掻き上げて。

「アーク、俺の話術の恐ろしさは、こんなモンよ」

アクトルは、疑りの目でスティールを脇目にした。

ウィリアム・スティールには、これで全て終わりでは無い。ジェリーの事が気がかりだった。今だ、昏々と眠る彼女の容態が、何

よりの心配なのだ。

ウィリアムは、アクトルや話し込む船長・オロスと別れて、スティールとまた雨が降り出した外に出た。　夕方も暮れ、夜の帳が厚い雲に二重のカーテンを掛ける。　ロイム達の待つ宿に戻る中で。辺りも雨に傘を差し始める人も多い中。

「スティールさん、はい。　濡れる前に、懐に入れてください」

と、厚紙の招待状などを送る封筒を差し出した。

スティール、封筒を受け取り。

「中身は？」

ウィリアム、真面目な顔で。

「ジェリーさんのお父さんのお店の権利書と、営業権利書です」

「い〝っ」

スティール、驚いて封筒を見る。

ウィリアムは、道ですれ違う傘を差した人の零す雨水を嫌って半身になってから、身を戻して。

「名義、もうジェリーさんの物だったんですね。　売らずに、名義を変更してる・・・。　彼女のお父さんも、出来るなら・・・・と、娘に〝閉店の会〟を託したかも知れないですね」

そのまま放置すれば、罪人の財産は国の没収に成るのをウィリアムが知っていて、秘かにホローのデスクから取り出したとスティールは解った。

「悪い、助かる」

スティールは、その封筒を服の中に仕舞った。

濡れるウィリアムは、夜の暗い宿屋街に街灯の灯りや店内の明かりが外に漏れて、仄かに暗明が街の中に訪れるのを見ながら。

「ジェリーさん、身体・・・持つかな・・・」

と、呟いた。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　決着は事件だけに・・・（後書き）

次号、予告。

ウィリアム・スティールはジェリーの為に閉店の会を行う為に協力する事に。　料理人として、生きる人間として、明日に向かって生きるジェリーの閉店の会はどうなるのか・・・。

次号、【ジェリーの為に】お楽しみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾

毎月、読者様のアクセス数が１万前後づつ増えるので、まず感謝＾人＾

ウィリアム編は、この章を持って今年は掲載はしません。　ポリア・Ｋの特別編と、新しいキャラクターの登場の話に終わると思いますので＾＾；

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

second episode2 ジェリーの為に

19、ジェリーの目覚め

宿に帰ったスティールとウィリアム。　もう、夜だったので、ロイムとクローリアも食事でもしてると思いきや。　急にフロントで言われたのは・・。

「お客様、一日空けるなら言って下さい。　それと、お連れのお客様は、今夜は皆で岩風呂の有るスパ（温泉銭湯）に行くと言うって居られましたよ」

やや色黒のベルボーイが、濡れているウィリアムとスティールに訝しげに見て言伝を伝えてくる。

ウィリアム、頷いて。

「了解しました。　すみませんね。　事件に巻き込まれてしまって」

すると、ベルボーイの顔が変わり。

「え、お客さん・・・まさか・・・今騒がれてる事件で何か?」

ウィリアム、疲れての失言だと思い。

「いえいえ、たまたま事件現場を通りかかって、刑事役人の方に事情を聞かれていただけですよ。　とんだ災難でした」

スティールは、ウィリアムを横目に。

「ま、疑いも晴れてジャバジャバに出て来れたって訳よ」

ベルボーイは、頷き了解したようだ。

「でしたか。　ま、これからは御気を付けて・・」

と、別の客に向かう。

ウィリアム、階段の前までスティールと来てから。

「危なかった、また面倒になるかと思った」

と、ゲンナリ。

スティールは、疲れて隈の浮ぶ目元でウィリアムを見て。

「お前、疲れちゃね？　早く寝ようぜ。　明日は、ジェリーに面会に行ってみよう」

ウィリアム、スティールに向いて。

「ええ、風呂に入って寝てしまいましょう」

階段を上がり始めて、スティール。

「で、金は等分だな？」

「いえ、ジェリーさんの閉店の会が出来るかどうかわかりませんからね。　さっき、船長さんとオロスさんに、当面の船員さんの生活費と船の調達の一部金で三万置いてきましたから」

「ああ～、船長さん、喜んでたな・・・。　ふぅ・・・肩の荷、下りたよ」

「ええ。　んで、それもあって今は十二万シフォン。　二万は割いて、隠しましょう。　十万を皆で分けても、一人二万です。　十分な金額ですよ」

スティール、それはそうだと思いながら。　右脇に抱える売り残した杖の木箱を見て。

「ウィリアム、コイツはどうするよ？」

ウィリアムは、薄く笑って。

「ロイムに。　持つ資格の問題より、ロイムの心に余裕が出れば良いと思います」

スティールも、薄く笑って。

「資格もバッチリさ。　あのワダルの迷路屋敷を逃げないでいて、今や女二人を両手に侍らせる大先生だぜ？」

ウィリアムも、笑った。

恐らく、ロイムが聞いたら怒るか、泣くか。　ジタバタするのは想像出来る。

二人、風呂に入って汗と汚れを洗い流し。　サッパリして、そのまま眠りに落ちた。

・・・・・・。

その頃だ。

軍医施設のジェリーの寝ている部屋だ。

「・・・」

ジェリーが、目を醒ました。　完全に目は開かないが、薄く目を開ければ熊の様に大きな女医が、椅子を潰すくらいにギシギシ軋ませながらケーキを頬張っている最中。

「あ・・」

ジェリーが、か細い声を出せば。

「あ～・・・あら？」

ケーキをまた一塊口に運ぼうとしていた女医が、ジェリーに気付く。

「ハッキリ気が付いたのね？　大丈夫？　アタシ、解る？」

女医さんは、皿とフォークをテーブルに置いてジェリーに向かう。

「あ・の・・わ・・わたし・・・」

女医さんは、デっカいヒキガエルの様な顔を微笑ませて。

「間一髪だったわね。　偉い軍人さんが、アナタの疑いは変だって言って。　刑事部の牢獄から連れ出したのよ」

ジェリーは、その事をよく覚えて無いらしい。　鈍く、一度頷く。

女医さんは、更に微笑み続けて。

「スティールって男性と、ウィリアムって男性は知ってる？」

ジェリーは、助けられたのは覚えていた。

「は・・い」

「うん。　その二人がね、貴女の犯行じゃないって、軍人のお偉いさんに掛け合ったみたいよ」

「え・・・」

ジェリーには、驚きだ。　牢獄に入れられた時もう、誰にも無罪を信じて貰えず犯人として死んでしまうのかと思えたからだ。　何故か、目に涙が溢れる。

「いいお友達持ったみたいね。　もう、大丈夫よ。　その掛け合った二人と、役人さん達で真犯人見つけたみたい。　貴女の疑いは晴れたし、とんでもない大きい犯罪組織も摘発できそうで、もう役人さんは大忙し。　街は、その噂で持ちきりよ」

「あ・・りが・・う・・スティール・・さん・・・・ウィリ・アム・・さん」

ジェリー、涙もまだ拭えないままにお礼を口にする。

女医さんは、ジェリーが持ち直したと思って。

「さ、後は元気に成る事よ～。　ホラホラ、アタシみたいにね」

女医さん、自分の腹をバシバシ叩いて言う。

ジェリーには、女医さんが天使に見えた。

なんとか、ジェリーは気を取り戻したのである。

さて、別の場所では。

リオンの私室で、今回の雑務に追われるリオン。　関係各所に、行動連携の指示書と。　最近見るに耐えない汚職の洗い出しの指示を文章に書いている。　デスクの上には、書いた指示書の入った封筒さ三ヵ所に積み重なっていて、左の端には冷え切っている紅茶と差し入れられた食べかけのティラミスが有る。

“コンコン”

ノックがして。

「王子、私です。　お話が」

テトロザの声。

リオン、ペンを置いて。

「テトロザ、どうした？　ま、入ってくれ」

「はっ」

テトロザが、ドアを開いて入って来る。　リオンの脇に来ると。

「実は、リオンさま。　少し、不可解な事が」

「ん？」

「実はですな。　侯爵家、伯爵家の方から、オグリ公爵の情状酌量の声が届いております」

「リオン、瞳を細めて」

「ほう・・・。　ま、私は緘口令を敷いて、あのメダルの事を伏せている。　恐らく、王家の公爵筋を擁護して、別の公爵家の好感を買いたいのだろう。　王家と公爵家に溝が深まれば、次の王位継承問題で派閥を作って、自分達に有利な王家を誕生させようと狙っているって処か」

テトロザは、少し不可解な顔のままに。

「しかし、王子。　王子のお兄さまのシャイン様の王位継承は確実ではありませんか？」

リオンは、呆れた笑い顔で。

「ああ、兄はな。　だが、その後は不透明だ。　今回の事で情状酌量ならば、オグリの公爵位は剥奪、もしくは下位下落の処置。　空いた公爵家に入るのは、誰かと云う話になれば？」

「なるほど・・・。　其処に可能性のある侯爵家。　並びに、その血筋に縁の有る爵位家には、飛んで舞い込む上位爵位への昇格。影響力を示せる家と、誇示したい訳ですか・・」

リオン、フッと微笑み思い。

「テトロザ、明日から隠密部隊を組織しろ」

「はぁ？」

いきなりの指示である。　テトロザも、ホローの一軒にまだまだ時間は必要だと理解しているから。　此処で、別に隠密部隊とは・・。

「オグリ公爵と縁の強い爵位家、交際の深い爵位家の内情を洗え。　それから、オグリのバカ息子を締め上げろ。　もしかすると、一緒に禁制品に甘んじていたりする家もあるやもしれんからな。　こうなったら、一斉の大掃除だ。　腐った貴族も、王家も洗い流してやる。　兄は温和な性格で、王として立つ前に辺りに遺恨を残す真似をさせると危険だ。　だから、俺が鉈を振るう」

テトロザは、自己犠牲を厭わないこのリオンが心配に成る。

「まさか・・・お一人で？」

「大丈夫だ、テトロザ。　これから早馬で、全ての事情の書いた手紙を王都に送る。　父上と兄と、他の四公爵に。　正しい対処が見込まれないなら、俺が裁量でオグリを処するとな。　一般人で、これだけ被害が出ているんだ。　関係の無い様に思われる貴族や商人の問題では無いとは言い切れん。　汚い事に手を染めた商人と、それを利用した貴族。　そして、関係の無い他の双方にも、今回の一件をもって自粛を促す。　その第一歩だ。　国を動かす。　その為に、俺が引けない処まで斬り込む。　それだけだ」

テトロザは、リオンのこうゆう思いや思考は幼くしてより見ているので、良く良く解る。　そして、そんな豪儀で真っ直ぐなリオンを支える為に、副近衛騎士団長の身ながら、リオンの傍にいるのである。　これは、現王、リオンの父親の秘かなテトロザへの願いでもあった。

テトロザ、姿勢を正し。

「了解致しました。　王子、では各爵諸侯様には、それとなくぼやかして誤魔化しておきます」

「ああ、テトロザ。　迷惑を掛ける」

すると、テトロザは軽く笑い。

「いえいえ。　今回は、危うく冤罪者と出しそうになった上に、容疑者とされた女性を獄中で殺されそうになりましたからな。　しかも、ホローの欲望に貴族の方々が加担したのは明らか。　禁制品や盗品を理解して購入するなど言語道断。　ま、少々は荒療治ですが・・・久々に面白いかと」

リオンも、新たに手紙用の紙を引き出しから出しながら。

「全くだ」

やはり、剣の師弟の二人だ。　こうゆう時になると意見が合う。

ーーー

ロイムとクローリアが、昨日、朝起きて。　シュレーラ達と斡旋所に行く途中で、もうアハメイルの街中は少し異常な空気だった。ひっきりなしに役人が走り間わっていたり。　近くで、捕り物があったり。　ゆったり走っているのが当たり前の馬車が、時折猛スピードで走ったりして、街中の市民が不安がっていた。

だが、斡旋所に行くと、仕事を請けるカウンターではなく。　冒険者のチームの一団に、何やら他の多数の冒険者達が群がる光景が。

斡旋所地下一階で見受けられた。

シュレーラ達と一緒になって聞いていると・・・。　どうやら、冒険者の二人が、殺人事件の真犯人を特定し、見事に役人や兵士と協力して逮捕したと云う。

この時点でロイムは、まさかウィリアムとスティールと思わないので。　クローリアに笑って。

「ウィリアムみたいな人が他に居るんだね」

と、笑う。

すると、語っていた冒険者が。

「ソイツっ、ソイツがそうだよ。　刑事役人のおっさんが、その名前の若い男だって言ってたぞ」

ロイム・クローリアは、全くの知らない事に絶句。　今度は、二人が他の冒険者に絡まれる事に・・・。

結局、ウィリアムとスティールを見たいと言う冒険者チーム二組も加えて、また夜遅くまで市内をシュレーラ達主導で歩き回り。　そして、戻って居た訳だ。

ロイム、大金の二万シフォンをベットで見て気絶しかけた。

クローリアが、少し遠慮がちに。

「あの、・・・ウィリアムさん？」

ウィリアム、のそっと顔を上げて。

「はい？」

「あの・・・今日は？」

ウィリアム、窓の外の曇の多い晴れ間の見える外を向いて。

「まだ、スティールさんと事件の事後処理が残ってますんでねぇ・・。　三日・・・五日は滞在します。　その後は、処理が住み次第に、仕事を請けるか・・・。　他国に行って見ようかと」

クローリアも、金は此処に来る前に受け取っている。

「そう・・ですか・・」

ウィリアムは、ボ～っとロイムを見て。

「ロイム、あの残りの杖だけど君にあげる。　とても頼りに成る杖だから、ロイムに似合うよ」

「え〝っ?!　ぼっ・・ぼぼぼぼ僕が・・・オルロック様の杖を・・・持つの?」

ロイムは、先ほどは金で驚き。　今は卒倒しそうに。

スティール、笑って。

「ロイム先生、大魔法遣いロイムの第一歩だで?」

「あうあうあうあうあうあ・・・・・・」

ロイム、手がブルブル震えてスープを零している。

ウィリアムは、今度はクローリアに。

「クローリアさん、ロイムと一緒に武器や道具や調達してみたら如何です?　知識は、現実に見て触れて扱って磨かれるものです。知っているだけでは、いけませんよ」

スティールは、カリカリのパンを齧って。

「ガーリックバターって、美味いねぇ〜」

ロイムの気絶しかけた物を他所に、シュレーラが脇のテーブルから。

「ねぇ。　私達も一緒に同行させてよ。　事件のじ・ご・しょ・り」

と、色めかしく言う。

すると、スティールは真顔で。

「部外者は入れられない。　これ以上、役人のおっさんやリオン王子に迷惑を掛けたくないね」

ウィリアムも、頷いて。

「ど～かん。　第一、事件の被害者の人や、ホロー達の被害者の内情を噂話の種にする気は在りませんよ」

シュレーラは、少しムキに成る口調で。

「ケチっ」

と、剥れる。

すると、シュレーラの仲間のイリアが、シュレーラに。

「シュレーラ、子供みたいな事言わないの。　もし、貴女が事件の被害者で、その自分の身の上を知らない誰かに知られてベラベラ喋られたい？」

シュレーラ、イリアにムスっとしていながらも、何処かしょ気た面持ちで。

「解ったわよ・・・」

スティールは、シュレーラに。

「絡む相手もお偉方。　多分、もっと事件の余波は広がるかもって

ウィリアムは予測してるしな。　役人意外がゾロゾロ首を突っ込むのもマズイ。　ま、残念って事で」

他の冒険者達も、コレで色々聞く気が失われた。　確かに、今の噂の時点で逮捕者が二百人に届こうかと云う勢いらしい。　だから、まだ事件は終わってはいないのである。　ウィリアムは勿論、スティールも其処は理解していた。　この後、どんな広がりを見せて、どんな結果が待っているのか・・・全く解らない。

それ以上に。　第一、ウィリアムは暗殺者に狙われた。　執事のハウリントが、ホローの暗部を何処まで把握しているかまだ解らない中で、事件に直接関わったウィリアムもスティールも、危険がまだ去ったとは言い切れない。

そして、何よりもジェリーの容態が気がかりだ。　ジェリーを、これ以上知らない他人の目に晒す気もウィリアムとスティールには無い。　最後まで、二人でやると決めたのだ。

食事が済んだウィリアムとスティール。　一行に別れを告げて、部屋で仕度して外に出る。

ウィリアムは、白いYネックのシャツに何時ものズボン。　スティールは、黒い長袖のシャツに、何時ものズボン。　剣だけ、腰に下げている。

二人は、大通りを行き来している公用の乗り合い馬車に乗るべく歩く。　丁度、仕事に向かう市民が大移動している時間だ。　脇道の細い路地ですら人がまばらに通る。　二人、大通りに出れば、行き交う馬車の往来も激しく。　通りの端を歩く人も列の様に。

「なあ、ウィリアム」

「はい？」

二人が左右を見ながら、大通りを横断する手前で、

「いや、ジェリーの閉店の会さ。　無理・・だよな」

ウィリアムは、スティールと共に道を横断し始めながら。

「さぁ・・、肉体次第ですね。　健康に近づけるなら大丈夫でしょうが。　そうでない場合、最悪はどちらかを決断しないと」

スティール、渡りきった人の列の手前で。

「それは、どうゆう事だ？」

ウィリアム、乗り合い馬車を遠くに見て確認しながら。

「もし、ジェリーさんの健康がこれより悪化の一途を辿るとしたら、彼女の最も健康なのは元気を取り戻した今。　それなら、後はジェリーさんの気持ち次第・・・でしょう？」

理解したスティールは、難しい顔で。

「そうか・・・。　でも、ジェリーの妹さん、それを納得するかな・・・」

馬車の御者に手を振るウィリアムは。

「さ、乗りますよ」

「おう」

二人して、雨よけの庇のやや長い、窓の無い柵状の横に長い馬車に乗り込んで、手摺り代わりの外側の柵に捕まる。　かなりの人を乗せた馬車は、馬三頭が引く大型の馬車だ。

雲に隠れる太陽の鈍い光を空に切れ間に見ながら、走り出す馬車の中で。　景色が流れるままに、ウィリアムはスティールに。

「難しいでしょうね・・」

と。

スティールも、ジェリーの為に内心で祈った。

スティールとウィリアムは、昨日ぶりにコア（核所）の施設に来た。　外見は、海側から見れば巨大な城の様にも見え、軍事施設から見れば要塞の様にも見える。

（おい・・・アイツ等だっ。　一昨日の晩、大量の金貨投げた冒険者だよっ）

（ああっ、隠密行動する予定の部隊を引き止めたって話だろ？　俺、非番だったぁ～）

演習に使われる広い土向き出しの広場。　そこに入る手前の施設を囲う高い壁の切れ間にある正門を警備する兵士達が、ウィリアムとスティールを見てヒソヒソ話。

ウィリアムもスティールも、ヒソヒソ話を無視して門を潜る。　何せ、リオンの知り合いと噂になっているので、引き止められる事も無かった。

他に、ウィリアム達と一緒の馬車に乗っていた刑事管理官らしき人物数人や、役人の服装の人も十人近く降りた。　馬車は、此処で馬車の運営所に戻り。　馬を交代して、御者の休憩後に折り返す。

さて、軍医施設を一緒に乗り合わせた役人に尋ね。　ウィリアムとスティールは向かった。　五階立ての木造寄宿舎のような建物で、外見の壁は黒。　腐食や虫食いを防ぐ塗料の色だが、なかなか緑の多い周りの風景に溶け込んでいる。　背の高い木々と、低い花を咲かせる木々に囲まれた場所だ。

“軍医施設、乙女のは～と”

と、書かれた看板の下、入り口を潜るスティール。

「なんか・・・ドキドキしてきた・・・」

何の気持ちの動揺も無いウィリアムは、横目に。

「どうしてですか？」

スティール、胸を抑えて。

「なんか・・・弱った儚げなジェリーを見れる感動と、乙女な女医さんとの出会いが、男心を刺激するぅぅ・・・」

呆れたウィリアムは、入った廊下の真っ直ぐに老いた老婆の看護介助の人を見て。

「ホラ、乙女」

スティールは、ウィリアムの方に目くじらを立てて向き。

「夢をぶっ潰すなよっ！！！」

こうゆう施設では、看護介助の姿は一目瞭然だ。　汚れても着替えやすい、繋ぎの様な白い服を着ている。　有料の大きい病院だと、男はズボンで、女性はスカートである所もある。

その、“乙女”な老婆が二人の方に遣って来て。

「何様だね？　煩くしないでおくれ」

と、厳格に言ってくる。

ウィリアム、苦笑いで。

「スミマセン。　あの、ジェリーさんの知人なのですが、面会出来ますでしょうか？」

すると、老婆は少し腰の曲がった細く小さい身体を右に向け。

「先生に聞いて見なされ。　今、ジェリーさんは妹さんと話しておる」

ウィリアムとスティール、見合った。

老婆、右の開けっ放しの引き戸を潜り。

「先生、お客さんだよ。　一昨日担ぎ込まれた娘さんに逢いたいってさ」

すると・・・。

「あら～、あの娘もモテるわねぇ～。　コレで本日三回目よぉ～」

聞こえてきた声を聴いたウィリアムは、女性の声に色っぽさと大人びた物を感じる。

「聞こえ、大人な乙女ですかね」

とスティールに。　スティールは、もう別の意味で戦闘モードに突入して、期待を膨らませた真剣な顔で。

「股の間の第三の足が伸びそうだ」

どうもアホな言い回しだけ上手い。　ウィリアムは、顔を抑えて。

「すんなよ・・・」

だが・・。　木造の木の床の上。　背凭れの無い回転する椅子を乗り潰しそうな姿の女医を、部屋に入って見た二人は凝固。

ウィリアムは、なんとか小声で。

（伸びました？）

聴かれたスティールは、白い顔で首を傾げ。

（いや・・・茂みの中にバック・ツゥ・ミニマムだ・・・）

ウィリアムは、内心に。

（なんじゃそりゃ？）

女医さんは、優雅に・・・。　いや、本人の感覚的にそうだろうと思うのだが。　ゆったりと椅子から悲鳴を上げさせながら反転させて、立ち竦む二人の方に向き。

「あら～。　若いイイ男二人して、何かしら？」

（ウィリアム・・・熊だ・・・。　熊が居る・・・）

（ですねぇ・・・しかも、女の熊にしてもモンスターレベルですねぇ・・・・）

二人は、女医さんに言ったら殺されそうな感想を交しながら。　ウィリアムが。

「自分は、ウィリアムと云います。　こちら、スティールさん。　ジェリーさんの知り合いなんですが・・・。　面会出来ますか？」

すると、女医さんの目が横に細まって、ヒキガエルの様に成る。

（カエル・・・カエルだっ。　ウィリアムっ）

（変態動物ですかねぇ・・・）

背中に冷や汗を覚えている二人を見る女医さんは、微笑む。

「貴方達ね～、彼女を助けたのは・・・。　中々勇気があるじゃない。　お姉さん、そうゆう男好きよ」

固まったウィリアムは、女医さんから目を逸らし。

（自分で“お姉さん”って・・・人みたいですねぇ・・・）

（ウィリアム・・・お前・・・意外に酷いぞ）

女医さんは、二人に奥に手を差し向けて。

「逢って良いわよ。　貴方達なら、彼女も安心するでしょう。　ま、先に妹さんが来て取り込んでるみたいさけどね」

と、やや静かに言う。

その時だ。

「解らないっ！！！！！　姉さんの言ってる意味が全然解らないわよっ！！！！！」

大声が、廊下の奥から響く。

スティールは、そっちを向いて。

「なっ、何だ？」

ウィリアムは、理解していたように。

「最後の抵抗・・・攻防でしょうかね。　どうやらジェリーさんは、本格的に腹を決めて何かを決断したようです」

女医さん、ウィリアムを見据えて薄く笑いながら。

「あら、お見通しみたいね」

ウィリアムは、女医さんを見て。

「まあ、薬師として医者の真似事や手伝いを十数年もやってますから・・・凡そは想像出来ますよ」

すると、女医さんは・・ズバリ。

「は～ん。　君ね、彼女の足の手当てしたの・・」

「ええ・・・」

頷くウィリアム。

スティールは、やや驚いて。

「解るんですか？」

女医さんは、窓側のデスクに向き直りながら。

「ええ、市販では売られてない薬草で傷を塞いで在ったし・・・。

傷口の上にだけ綺麗に薬の色が残ってたわ。　随分と上手な作業だわ～って思ってたのよ」

スティールは、医者に言わせるウィリアムの技量を知る。

「お前、流石だわ。　で、どうしようか・・・」

ウィリアムは、声の響いてきた方に向き直り。

「行き着く所まで。　ジェリーさんの気持ちが決まっているなら、妹さんに残されたのは“拒否”か“傍観”か“許容”のいずれか。　その選択は、妹さんの判断です」

「マジかよ・・・」

スティールは、冷たいセリフと思う。

だが、医師の書く診断書に目を落とす女医さんは、薄く微笑んだ。

ーーー

」

若い・・・、肩にまで伸びた髪が、淡い赤の光沢を黒い地の色に重ねる。　程よい高い鼻と薄く引き締まった唇は均衡のとれた美しさがあり、スッキリとした小顔は姉とは大きく違う。　大きく可愛らしげな目、白い素肌・・・愛らしさと綺麗さが折衷する面持ちは、男性の目を惹きそうである。　ベットの上に、椅子から身を乗り出して泣きながら訴えている妹のセーラ。

ジェリーが、時折窓から差し込む陽の明かりの注ぐ白いベットの上に居た。　身を起こしている。　優しげな細い目が、妹のセーラを見下ろしている。

「ゴメンね、セーラ。　お姉ちゃん、もう決めたの。　さっき、ロレンツさんて云う役人の方が来てね。　お父さんの店の権利書も営業権も見当たらないから、私達に一時的に返還されるかもって・・・。　私、どうしても閉店の会・・遣りたいの。　だから、それが終わるまでは、ゴメンね。　セーラ」

妹のセーラは、青い花柄のカジュアルチュニックに、白い女性用のデニム姿。　今時の女性らしいスタイル。　若さゆえに、身嗜みにも気が行き届いていた。　街中の洗練の中に身を置いている。　泣き顔を上げたセーラは、ジェリーを見てから顔を両手で覆う。

「解らない・・・解らないわっ。　そんな事したら・・・命が・・命が縮んじゃうのに。　死んじゃうのに・・・、私には解らないわ・・」

ジェリーは、只・・。

「ゴメンね」

と。

妹のセーラは、ムキに成って感情のままに。

「どうしてよっ！！！！　父さんも母さんも姉さんもっ！！！！　みんな私を置いて行くっ！！！！　どうしてっ？！　どうしてよっ？！！」

ヒステリックな感情の爆発する声が部屋に響く。

ジェリーは、答えなかった。　悲しい笑みを顔に湛え、黙って白いベットを見下ろす。

其処に。

「遣りたいんだろ？」

男の声が響く。

ジェリー・セーラは、部屋の入り口に顔を向けた。

「あ・・・」

「え？」

ジェリーは、スティールに気付く。

セーラは、見覚えのある顔に驚いた。

スティールは、開かれたドアの枠に背凭れしながら立っていて。

「偶然って凄いね。　俺達、あの日に姉妹二人と出会ってた訳だ」

スティールは、部屋の中に入って行く。

ウィリアムも、後から姿を見せて。

「神様でも、こんな偶然無理っぽいですよ」

と、部屋に入る。

セーラが、何かしら言おうとする前に。　姉のジェリーが嬉しそうに笑って。

「スティールさん、ウィリアムさん・・。　ありがとう・・・、他に言葉が見つからない・・。　どうお礼言ったら、この感謝が現せるか解りませんが・・。　ありがとうございます。　御蔭で、助かりました」

セーラは、ジェリーを雨の中で助け、疑いを晴らして、再度姉を助けた二人を見て驚く。

そう、セーラは、ジェリーと出会う前に、ウィリアムとスティールが何の気なしにお勧めを見て入った自然野菜を中心に扱った料理店のウェイトレスであった。　あの日、昼過ぎに妹のセーラに。　夕方に姉のジェリーに出会っていたのである。

スティールは、驚きで嘆きを止めた妹のセーラを見てから、ジェリ

ーの窓側から近寄って笑い掛ける。

「元気に成ってきたみたいだね。　いや～、たまたまあのホローに借金があってさ。　返しに行ったら、君が疑われて、発作で倒れたのに連れて行かれたって聞いたから驚いたぁ～。　ま、俺のダチのウィリアム大先生が、真犯人を暴き出したからな。　もう、大丈夫だ」

ウィリアムも、部屋の脇の花瓶前に来て。

「すいませんね、花も持たずに。　跳んだ災難でしたね。　一応、お見舞いです」

宿のレストランでゴールダー金貨を見せて、ゴリ押しで買った果物のメロンを置く。

ジェリーは、もう涙を潤ませて。

「いえ、前日にお二人に助けられたのに・・、どうしても我慢出来なくて。　無理してホローさんの屋敷に向かったら、こんな事に巻き込まれるなんて・・・。　二度も助けて頂いて、感謝ばかりです・・」

と、ベットの上で頭を下げる。

スティールは、ウィリアムと打ち合わせ通りに、話を切り出した。

「ジェリー、礼は其処まで。　今日は、本題に入りに来たんだ」

「え？」

ジェリーは、顔を上げてスティールを見る。

セーラも、何事かと思った。

先ずスティールは、ウィリアムが持ち出した権利書の二つの入った封筒を差し出し。

「コレな。　ウィリアムが、没収される前にホローの家から引き抜いた。　どうするかは、君が決めてくれ」

受け取ったジェリーは、怪訝な顔で中身を見て驚く。

「こっ・・これは、父の店の権利書・・・。　営業権も・・・・」

スティールは、見上げてくるジェリーを見下ろし。

「権利書が向こうに渡れば、国に没収だ。　ホローの権利書の剥奪が違法行為でも、没収は逃れられない。　直ぐに競売に掛けられるから、コレが無いんじゃ～閉店の会も何もない。　だから、ま～・・・ついでだ」

感激の余りに声を震わせるジェリー。　ウィリアムを見て。

「ありがとうございます・・」

ウィリアム、軽く笑って。

「いえ、スティールさんに頼まれたのでね。　ま、大っぴらに言うとマズイんで、適当に誤魔化して下さい。　後で、此方からお偉方

に言って置きますから」

ジェリーは、権利書を胸に抱いて。

「良かった・・・良かった・・・これで、閉店の会が出来る・・・」

スティールは、腰から金袋を取り外して。

「それと、ジェリー。　これも、渡しておく。　お裾分けだ」

「はい？　なんですか・・・？」

と、布の袋を開いて中を見たジェリーは、ゴールダー金貨を取り出して・・。

「コレ・・・な・・何です？」

「ゴールダー金貨さ」

「え？」

ウィリアム、横から顔を覗かせて。

「事件解決の手柄を、役人さんと大人の事情で折半しましてね～。　代わりに、多大な報酬で貰ったんですが・・・。　冒険者なんてお金持ちすぎると遊んでばかりなんですよ。　ですから、ジェリーさんの閉店の会の協力に寄付します。　それだけ有れば、お釣りで後々に薬も買えるかと」

ジェリーは、目の前の凄い多額のお金に驚いて。

「でっでも、こここんなに・・・」

スティールは、まだ渡してないアクトルの分も含めたお金の入った自分の分を見せて。

「いやいや、ホレ。　俺達も十分に貰った。　全ては、ジェリー発の事だ。　出会いも、事件も、解決もな。　だから、ジェリー。俺と約束しろ」

ジェリーは、突然に“約束”などと言われれば、何事かと思う。

「えっ？　や・・約束・・・ですか？」

スティールは、何時に無い真剣な顔で。

「お父さんから、包丁とレシピを貰って託されたのは解る。　だから、閉店の会が終わったら、妹さんの為に生きろ。　姉妹で、何時までも強情張り合ってても、親父さんも心配で浮ばれない。　自分を大切にするんだ。　この権利書と金は、その為の贈り物と受け取って欲しいね。　どうせ、君のことだ。　動けるようになったら、その身体を引きずり回して、彼方此方に閉店の会の為に動き回って頭でも下げ回る気なんだろう？」

ジェリーは、スティールに言われ、セーラを見てからスッと俯く。

セーラは、姉の事が解るだけに。　スティールの言うのは最もだと思う。　出来るなら、閉店の会もやって欲しくない。

スティールも、ウィリアムにジェリーの行動の予測を教えられた。

ジェリーの態度を見れば、その予測が的中していると解る。　だがら、スティールはけじめを決めさせるつもりで。

「ジェリー。　確かに、君にとってはその思いや行動は信念かもしれない。　だけれど周りには、それは迷惑になるかもしれないだろう？　だから、俺とウィリアムも数日街に居るから、手伝う。　閉店の会、やろう。　代わりに、終わったら妹さんに迷惑と心配を掛けない。　どうだ、約束出来るか？」

「スティールさん・・・どうして・・・」

ジェリーは、どうして此処までしてくれるのか解らない。　だから、スティールを不思議に思う目で見上げる。

スティールは、ウィリアムを指で指してから。

「君の症状、アイツが女医さんから聞いた。　もうこのまま回復に向かう事は無いってよ。　問題は、進行を何処まで遅く出来るか・・・。　もし、無理に動き回れば、今日の今から一日も安心出来る日は無いらしい。　今日の今から、何時でも死んでしまう可能性が在るって事だよ。　解るか？」

セーラは、隠しておこうと決めた事を喋られて驚く。

ジェリーも、驚きだ。

スティールは、ジェリーの前で屈み。

「妹さんが、怒るのも無理も無い。　だが、君には心残りが在る。　君の人生は、女医さんに言わせるなら牢獄で終わってておかしく

なかったってさ。　だから、今からはもう先の見えない本当の余生になる。　だから、心残りはもう閉店の会をやって終りにしよう。
解るな、ジェリー」

「う・・ううう・・・」

セーラが、嘆き蹲る。　女医さんに、明日にでも死ぬ可能性があり。その寿命は、保って一年弱と宣告されたのだ。

ジェリーは、嘆くセーラを見て。

「そうなのね、セーラ」

「うぐ・・うん・・」

ジェリーは、セーラの頷く姿を見て静かに目を閉じる。

（お父さん・・・コレ・・・夢かしら。　死ぬ筈だったのに、私に時間をくれるなんて。　運命に、私は今なら素直に感謝出来るわ）

心に一念を決めたジェリーは、ゆっくりと目を開くと。　瞳の中には、日差しを背負うスティールを見る。

「スティールさん、解りました。　約束します、閉店の会をやらせて頂けるなら。　もう、望む物はありません」

スティールは、微笑んでいるジェリーを見て。

「ああ、それでいい。　最初で最後のチャンスだぞ。　次は無い。もし、体調が急変したら、即刻中止。　一発勝負、それでいいか

？　俺は、君の死に顔なんて見たくないからな」

ジェリーも、穏やかな顔で頷いて。

「はい」

スティールは、その顔が不思議に思える。　自分の死について話しているのに、顔は非常に穏やかで陰りが無い。　ジェリーと初めて出逢ったあの夕方に見た彼女は、陰の住人の様な印章が在ったが。　今、こうして見ると、朗らかで優しい愛らしさを感じる。

ウィリアムは、その顔を見る顔つきが涼やかだった。

ジェリーは、もう立てると立ち上がり。　何故か、今日帰ると決めた。

スティールやセーラは、明日でもいいと押し留めるが。　ジェリーは、家でレシピを見ながら休養した方が楽だと言う。　ウィリアムの提案で、明日一杯休んで様子を見る事で同意する。

ウィリアムは、スティールとセーラにジェリーを返す事を頼み。　自分一人で、リオン王子に会いに向かった。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　ジェリーの為に（後書き）

次号、予告。

ジェリーの心残りを無くす為、遂に閉店の会を決意するセーラ。
ウィリアムも、スティールも協力を惜しまない。　そして、ジェリーは父親の果たせなかった閉店の会を開くのだが・・・。

次号、【閉店の会に向けて】お楽しみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾

いやいや、原稿用紙８００枚に及ぶ内容を５００枚以内に凝縮する予定が、足がでてますな＾＾；

気候が秋に向かっているのか、何となく涼しいですね＾＾　太る季節だ＾＾；

さて、【真夜中の幻想物語】と云う作品の中で、ホラー作品の【呪い】の続編を期間限定で掲載して行きます＾＾

宜しかったら、読んでみてください＾人＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

second episode2 閉店の会に向けて

20、閉店の会に向けて

ウィリアムは、リオンの元に居た。　どちらも何時もの柔らかい顔では無く。　ウィリアムは冷めた感情の無い顔、リオンは苦渋に満ちた面持ちだ。

「他に、何か出来るか？」

「いえ。　閉店の会が終わるまで、ジェリーさんの店の事は不問にして下さい。　恐らく、ジェリーさんは、全てが終わったら権利書を返すでしょう。　未練も無いですし、料理人として切り盛りする体力も難しいですからね」

リオンは、力無く頷き。　そして、深く息を吸ってから、心の本音を吐き出す様に事を切り出す。

「今回は、責めの一端は国にある。　ホローの持つ土地の移譲を秘かに調べて。　違法な取り上げならば、持ち主にそっと返還しようとテトロザと相談していた所だ。　彼女には、その最初だな」

テトロザが、程なく薬を持ってきた。

ウィリアムは、本当に少しだけ貰い。

「ありがとうございます。　では、これで失礼します王子。　御仕事、相当に大変でしょうが、気抜かり無くお願いします。　国を離れる前に、酒でも持ってまた来ます」

「ああ、肴は任せてくれ」

リオンは、そう返した。

帰る前、ウィリアムは、リオンに廊下で呼び止められ二人で別室に移った。　そこで、あのホローが、オグリ公爵がら担保に取っていたメダルの意味を知る。

「なるほど、それは・・・リオン様も怒るわけですね」

と、初めて苦笑し。　リオンと共に何時もの顔に戻った。

ウィリアムは、昼過ぎの強い日差しと晴れ空が広がり出す空の下、定期運行の公用馬車に乗り込んで商店街まで戻ろうと思っている。

馬車の中で、白髪の可愛らしいおばあさんと語り合う。　その話に、この馬車の歴史が語られ。　もう、百五十年以上も運行されているんだそうな。

ウィリアムは、住宅区まで行くおばあさんにお別れを告げて、商業区の商店街の中心地で降りた。

ウィリアムは、市内を回って値切って薬の原料を買った。　後から、セーラやジェリーが似た薬を手に入れられるように、安い店なども調べながら。

夕日に変わりつつある日差しが、浜辺や海岸線に反射する黄昏色の海岸通りを歩いてウィリアム。　のんびりジェリーの家に行けば、スティールが下で紅茶を入れようとしている。

「おう、お帰り」

ウィリアムは、笑って。

「この小さい家に、四人は多いですかね」

「全くだ」

と、スティールは笑う。

「二人、上で？」

「おう。　ジェリーが、オヤジさんから貰った包丁とレシピを妹に見せてる。　もう、ジェリーはどんな障害が有ってもやる気だ。お前の言う通り、道を決めたみたいだ」

ウィリアムは、静かに頷く。

スティール、白い花柄のティーポットを用意して。

「なあ、ウィリアム」

ウィリアムは、棚の出っ張った短いスペースに薬の入った紙袋を置いて。

「はい？　なんです？」

「いやな。　お前みたいに紅茶を煎れたいんだが・・。　どうするりゃいい？　さっきから、熱湯入れてるんだが、何か違う」

ウィリアムは、笑って。

「紅茶を始めに、お茶の煎れ方は温度と茶葉に因ります。　香りを出して煎れるなら、普通通りに熱湯でティーポットに茶葉と注いで、苦味やエグみが出る前にカップに注ぐか、茶葉を取り出すんですがね」

「だろう？　だけど、お前の煎れた風味が無いぞ」

ウィリアムは、スティールの脇に来て。　テーブルの上の茶葉を見ると。

「一般の紅茶でも、お茶でも、半醗酵（はっこう）のお茶でも、共通はお湯の温度が高ければ、素早く。　低くすれば、揺るやかに煮出すのが基本に成ります。　俺の煎れ方は少しだけ、温度を下げてゆっくりと煮出すんです。　すると、香りが紅茶に深く緩やかに入ります。　甘めで、味わいが深く成りますが。　ま、代わりに、普通に香る臭いは抑えられますがね。　タバコの煙がくゆれて緩やかに煙の臭いが香るのと一緒かな？」

スティールの目の前で、ウィリアムが茶葉をティーポットに入れず。　お湯をチョット入れては止め、チョット入れては止め、温度を少し逃がしてから茶葉を入れるのに目を向ける。

「お前、色々知ってるなぁ～」

「いえいえ、薬師は非常に鼻が利きます。　逆に言うなれば、他の人がいい匂いと思う香りが、鼻に強く感じるんです。　こうして煎れれば、香る時は口の中ですからね。　落ち着いた香りを楽しめるんですよ。　ま、職業病かもしれませんね」

「な～る」

お湯を入れ終えて蓋をしたウィリアムは、二階の階段を窺って。セーラの降りてくる気配を探ってから。　小声で。

「スティールさん、あのホローの屋敷で中庭の池で見つかったメダルは覚えてます？」

スティール、パッと思い出し。

「ああ、純金のメダルだろ？」

「えぇ・・・。　実は、アレ。　代々のこの国の王位継承の儀式で使う大切なメダルだったそうですよ」

「い〝い”～っ、・・・マジ？」

ウィリアムも、更に小声で。

「えぇ。　なんでも、王位継承の前には、王家以外の王位継承権を有する五つの公爵家が話し合い。　次期王候補の王子を査定する儀式が有るとか。　そこで、全員一致で了承されれば。　各公爵家が有する、メダル・杖・ローブ・王冠・鍵を受け取り。　王子が宝物庫の鍵を開けて、王の印の宝剣を持って来て。　民衆の前で、王位

継承を宣言するんだそうで」

「じゃ～あのメダルは・・・正当な公爵家の証であり。　王位に付く王の身に付ける証明品みたいな物ってか？」

「うぃ～」

ウィリアムは、少しティーポットを開いて湯気の出方を見ながら返す。

スティールも、良くもそんな大切なものを金の借りる形代にしたものだと呆れ果てる。

「やっぱ、薬云々じゃ～なくて。　基本的なオミソが腐ってるわ～、あのオグリっち」

ウィリアムも苦笑で。

「いやいや、リオン王子が激怒する訳ですよねぇ」

しかも、この話には続きがある。　ホローも、最初はメダルの意味に驚いて持て余していたのだが。　その内に直ぐ、このメダルの複製品を作って御土産物にして売り捌こうと思った。　流石は因業な悪徳商売人だが、更にその上。　なんと他国にこのメダルを莫大な値段で売りつけようと画策したらしいとか・・。

スティールは、とてつもない話が見えずに。

「売れるのかよ？　結局は、純金のメダルってだけだろう？」

だが、事情を理解するウィリアムは、細めた眼で首を左右にブルンブルン振るって。

「いやぁもう～それは高価に売れまっせぇ～。　何せ、あのメダルに彫られた古代文字ってのは、王国の王のみが使うことを許される“国印”と呼ばれる国の契約書などに押す印字のコピーなんです。　知っているのは公爵家のみ。　ですから、悪用出来るのは公爵のみと思われている処に、外部から悪用されたと伝わったら王国内は大パニックですよ。　しかも、王国に自国優位の条約や誼(よしみ)を結ばせる脅しの道具にも使えまっせぇ～。　悪用の限りを尽くすなら、戦争問題に発展します」

スティールは、もう想像の外側の事態に顔を歪めて。

「え〝っ・・・俺達ってもしかして・・・国難を救っちゃった訳？」

ウィリアムは、苦笑いで紅茶をカップに注ぎ。

「見たいですねぇ～。　リオン王子は、チーム名の広がりの依頼を斡旋所に頼むそうですよ。　一応、遠慮したんですがね・・・。う～ん、面倒に成らないといいんですが・・・」

スティールは、目が点になりポカ～ンとして。

「ウィリアムせんせ、俺・・・あの包帯男のケイみたく強くなイッスよ・・。　ど～しゅるのよ・・・、なんかスンゴイ事件とか、仕事を回されたら・・・」

「ど～しまちょ・・・スティールししょ～」

二人、解決に導いた事件の重みをヒシヒシと感じ始めた。

ーーー

「・・・」

セーラは、動く時に腰に手を当てる姉を見て何も言えない。

（痛いんだわ・・・。　無理よ・・・閉店の会なんて・・・）

セーラは、まだ態度を決めていない。　手伝うのも姉を見殺しにする様で、無視するのも同様の様な気がして複雑に思い悩む。

何よりの問題は、助けてくれたウィリアムとスティールの心理的な理由だ。　何故、こうまでしてくれるのか。　何か、企みでもあるのではないかと疑る。

セーラは、生まれつきの顔の良さで、姉との間に他人が向ける情に差が生まれているのを目の当たりにしてきた。　特に、男に対しては一種の潔癖症に似た感情が渦巻いている。　だから、仕事の時には真逆で冷静に対処出来る。　しかし、内心では男を見る冷ややかさは並なら無い。

「セーラ、明日はお店のお掃除するね。　お父さんと、お母さんの店開くの久しぶり・・」

ジェリーは、顔は穏やかに言う。

「・・・」

セーラは、“手伝う”・“手伝わない”も言えない。　十歳過ぎの生意気盛りで母親を亡くし。　姉のジェリーが母親と姉の両方を兼任している様な生活に成ったセーラには、もう今は父まで亡くして家族は姉のみ。　姉の無理を見るのは耐えられない。

「セーラ？」

見られて、聞かれたセーラはしどろもどろに。

「アタシ、午前中は仕事抜けれない。　午後、手が空いたら様子見に行くわ」

するとジェリーは、ニッコリ笑い。

「ありがとう。　器、取ってくれる？」

セーラは、姉が不審に思ったのが、自分の閉店の会に対する協力の是非ではなく。　スープを入れる器だったのに驚き。　そして、更に恥ずかしがった。

「あっ・・・うっ・うん」

ジェリーは、決してセーラに一言も“手伝って”とは言ってない。　ただ、“許して”と言っている。　意味は、微妙に違う様で、果てしなく食い違う。

ウィリアムが、薬と一緒に焼きたてのパンを買ってくれていた。　ジェリーは、野菜のバター炒め和えを作り。　パンの上に乗せて、スープと共に妹と夕食を迎える。

良い油では無いオイルランプのくぐもった灯りの下。　静かにスープを啜るジェリー。　セーラは、店に来たウィリアムとスティールの様子を語る。

ジェリーは、話を聴いて穏やかに笑って。

「スティールさんらしい。　カッコいいしね」

あの事件前まで陰りの有ったジェリーの顔は、今は全く曇らない。

セーラにしてみれば、少しはスティールやウィリアムに姉が疑念を抱いて欲しいと思うのだが。　その様子は見られない。

不思議だ。　事件前に自分が毎日会いに行っても顔色が優れずに居た姉。　しかしもう変わった。　助け出されて昨日の朝まで死に掛けていた人間が、今では全く人として濁りが無くなっている。

セーラは、姉の生活を支えようとしていたのに、全く姉の顔は優れずに居た。

それがどうだろうか。　スティールとウィリアムは、姉の一瞬を助けただけだ。　なのに、姉の信頼は二人に向き。　二人は姉の不安まで取り除いた。　自分が、嘗て事件に巻き込まれる前まで必死にやろうとしていた事を。　スティールとウィリアムは、瞬時にしてのけたのである。

セーラの心に渦巻く想いが、疑問にばかり変わり思わず。

「姉さん・・・料理、そんなに好き?　死んじゃうとしても?」

だが、ジェリーの顔は変わらずに。

「うん。　私・・・不器用だから・・・。　あれこれ遣るの苦手だし。　料理は、父さんの残してくれた宝物。　あの店は、母さんと

父さんの思い出の場所だもの。　命の長さは変えられない。　でも、自分の信じた・・・生き方ぐらいは、死ぬまで歩くつもりよ。　この小さい店なら、一人でゆっくりやっていけそうだしね。　セーラには、幸せに成って欲しいから、迷惑は掛けないつもりよ。　ウィリアムさんから頂いたお金あれば、自分の後始末ぐらいは大丈夫」

と、ジェリーは顔を上げ。　困惑で不安な顔のセーラを見ると。

「セーラ、私の事は片隅に置いて。　貴女は健康だし、容姿もいいし、容量も上手。　絶対に幸せな結婚が出来るわ。　私には・・無理だけど。　貴女だけには、幸せに成って欲しい。　人は、今日から明日に生きてゆくの。　過去や、消え行く人に拘って自分を見失っちゃだめ。　一人になっても、貴女なら家族を築ける。　母さんの過去を忘れていないでしょ？」

セーラの身体が、ブルっと震えた。　姉を見返せなくなり、自然と俯く。

「姉さん・・・」

ジェリーは、微笑みながらも。　もう全てを理解しているようだった。

「セーラ、家族は愛情が有れば作って、築ける。　私が死ぬ時、セーラの赤ちゃん見ながら死にたいな」

セーラは、驚いて顔を上げた。

「姉さんっ！！！」

大声を上げて、テーブルの上に手を置いて身を乗り出し掛けたセーラ。　だが、ジェリーは、セーラのテーブルに置いた手に片手を重ねて。

「落ち着いて、セーラ。　命は、繋げられる。　何が何でも、長く保たせるだけが命じゃないわ」

ジェリーの言葉に、セーラの目には涙が・・・。　姉が、こんなにも自分を深く考えているとは思わなかった。　閉店の会と両親の事ばかり考えていると思っていたのに。

ジェリーは、置いた手を離し、冷めかけたスープを掻き混ぜながら。

「さ、食べよ。　冷めたら美味しくない」

と、パンを取る。

「うん・・・」

セーラは、もう何も言えなかった。　姉の語った覚悟と自分に対する未来への託す思いに、心が打ち震えて。　これ以上何か言われたら・・・姉への拘りが砕け散りそうだった。

姉妹の夜は、長くなりそうだった。

一方で、ウィリアムとスティールが、紫色に染まる雲を海面上の遠くに見ながら。　薄暗い海岸通りを宿屋街に向かって歩いている。　港近くの埋め立て倉庫群を見ながら、スティールは。

「ウィリアム・・・ジェリーさ」

話し掛けられたウィリアムは、爽やかな初夏の夜風に吹かれながら。

「はい？」

「もう、自分の命の長さ・・・理解してるよな～」

「ええ」

この返事にスティールは、ウィリアムとの会話が繋げられなくなった。

ウィリアムは、其処に。

「揺れて返す波・・・その前の波には戻れませんよ」

スティールは、急に声のトーンを落としたウィリアムを見る。

「おい、それはどうゆう事だ？」

ウィリアムは、軍医施設で女医さんが語ったジェリーの残りの余命の意味を語る。　その内容は、スティールには、絶望的な内容だった。

「おいっ、それじゃ・・・閉店の会をやる意味なんてないじゃないかっ」

ウィリアムは、灯りの入った海岸通りのレストランなどを見ながら。

「ええ・・・。　ですから、“賭け”ですよ」

「かっ“賭け”って・・・」

スティールも重大な事だけに様子がソワつく。

ウィリアムは、スティールに或る事例を語った。　数少ない、事例。

可能性として例えるなら、この海岸に見える大海の海水をコップ一杯ほどだけ掬った量かもしれない。　だが、ジェリーと。　そして、母親・姉離れ出来ていない妹のセーラの為に、ウィリアムは動く事で得られる可能性に賭けていると云う。

「お・・・お前・・・そこまで・・・」

スティールは、ウィリアムが自分の頼み一つで、出来うる全てを模索して行動していると解ると。　この若きリーダーに出会えた自分の運命が、不思議に思えた。

「俺に出来るのは、これくらいですから」

ウィリアムは、冷静にそう言う。

スティールは、深く深く項垂れて。

「すまん。　色々、迷惑掛けて・・・」

するとウィリアムは、スティールに向いて。

「お礼は、ジェリーさんが助かってからに。　今は、要らないです」

「ああ」

スティールは、ウィリアムの底知れぬ熱い情を感じて仕方なかった。
涼やかな夕暮れだが、胸の中の熱で身体は少し熱かった。

ーーー

側に回れば、そこがジェリーの住まい。　声を掛ければ、ジェリーはもう起きて着替えていた。

「おはようございます」

笑顔は、誰でも出来る美の基本。　確かに、黄色いカジュアルシャツに白いスカートを穿いていたジェリーの今には、女性としての輝きを感じる。

中に入ったスティールは、直ぐに上の服を見るに。

「お、明るい柄だね。　それいいわ」

「あ・ありがとうございます」

ジェリーは、顔を赤らめる。

ウィリアムから見ても、ジェリーはスティールに恋をしている。いや、だからそれが希望にも繋がる。

「さて、では掃除に行きますか。　ジェリーさんの薬も調合しませんとね」

ウィリアムは、ジェリーの家に置きっぱなしの薬を持ってまた外に。

スティールは、ジェリーに鍵を借りようと言いかけて。　ジェリーが一緒に来るのだと感じる。

「ジェリー、動いて大丈夫か?」

靴を用意しているジェリーは、利かない足を不器用に曲げながら。

「あ、はい。　少しは動かないと。　明後日には、開きたいんです」

「そんなに早く？　ホラ、手を貸すよ」

ジェリーは、ビックリしてスティールの手を見る。　おずおずとスティールの手を借りながら。

「す・すいません・・。　あ・明後日は、父と母の結婚記念日なんです。　本当なら、何時開けるか解らなかったんですが。　スティールさんとウィリアムさんの御蔭で、この日に出来そうなんで・・・」

スティールは、ジェリーの使っている杖も取って渡す。

「杖。　そうか、なら無理しないようにしないとな」

「はい」

三人で、港沿いの海岸通りをジェリーの父親の店に向かえば。　屈強な筋肉を黒いタンクトップの隙間から見せる、中年の船乗りが日焼けした姿で近づいて来る。

「おいおい、ジェリーちゃんじゃないか。　どうしたい、事件で大変だって聞いたよ」

ジェリーもその声掛けて来た男性に挨拶して、今までの軽く経緯を語ってから。

「明後日、もし開けたら“閉店の会”をやります。よければ、私の料理ですが食べに来て下さいな」

すると、中年の男性は目を潤ませる。

「そうか・・。オヤジさんの出来なかった事を・・。解った、昼過ぎにでも、仲間連れて行くよ。オヤジさんの店の常連は多かったから、忙しいぜ。頑張れ、ジェリーちゃん」

と、男性は笑顔を残して港に向かって行く。

スティールは、男性を見送りながら。

「お客さんだった人か」

ジェリーは、微笑んで頷き。

「はい。いつもウチでお昼を食べに来てました。父の魚介スープが一番のお気に入りです」

スティールは、納得の笑み。

ウィリアムは、行き去る男性を見送りながら。

「ジェリーさんは、お客さんの好みは覚えているんですか？」

「あ、はい。常連さんの大半は」

この返事に、深く頷き。

「仕事人ですね～」

ジェリーは、照れ笑いである。

さて、店であるが。　木の戸が表に填まっている意外は白い壁。通りに面した木戸の填まった上には、緑の布と金具の枠組みで出来上がった軒先が張り出す。　店の前に三人で並んだ。

「リストランティ（レストランテ）・・“セリーナ”・・・か」

スティールが、緑の軒の前面を使って書かれた店の名前を読んだ。

店の前は海岸通りを挟んで海だ。　ビーチとは少し離れた此処は、埋め立ての海上倉庫群の間近で、通りの外側は地面を深く切り込んで海水が来ていた。　通りには、間隔を狭めて塩風に強い常緑樹が植えてあり。　海に面している通りには、落下防止の石の手摺りが、花の形にデザインされて高さ五十センチほどの姿を見せる。

「雰囲気いいですね～」

ウィリアムは、落下防止の手摺りに寄りかかり。　倉庫郡や海の景色を見回して、雰囲気と景観の落ち着きに好感を抱いたので口にした。　海に面した側の通りの直ぐ先には、グィっと海側に出っ張った公園も見える。

ジェリーは、木の日陰で店を見て。

「店の名前は、母の名前です」

スティールが、ナルホドと頷く。　確かに、女性の名前にある店名

だった。

「母は、貴族の生まれで末娘でした。　幼い頃から家の為にと、別の位の高い貴族との婚姻を結ばされれて居たのですが。　実家の屋敷に雇われていた料理人の息子で奉公人の父を好いていて。　若き父を、屋敷から追い出した親に反発して家を捨てたんです」

ウィリアムは、笑って。

「本に出来そうなラブストーリーですねぇ～。　それで、結婚ですもんね」

ジェリーからすれば、少し気恥ずかしそうに笑って。　通りの直ぐ近くに見える海側に出っ張った小さい公園を指差して。

「其処で、父を捜していた母と、この近くで料理人として働いていた父が偶然再会したとか」

スティールは、ジェリーの指差す公園を見てから。

「お母さんの家って、何処？」

「首都のアクストムです」

「運命だの～。　やっぱり、愛は永遠だぜ」

ウィリアムは、スティールの語りにクスクス笑う。

ジェリーも懐かししむ顔つきで、思い出を過ぎらせているのだろう。

「この店、母の服とアクセサリーを売って買い取ったんだそうです。何も無くして、代わりに手に入れたお店に、二人で一つの寝袋敷いて寝ていたんだとか・・。　両親が、“若いって凄いわ”って・・・笑って言ってました」

スティールは、直ぐに前髪を掻き上げて。

「フッ。　ジェリーとセーラも其処のヘンで出来たな」

ジェリー、急に言われて顔を赤くする。

ウィリアムは、呆れ笑いで。

「言うか、フツ～」

「ヨシ。　キレイキレイしようか～。　掃除は、徹底的にやるに限る」

スティールは、外の木戸を外しに掛かった。

ウィリアムは、ジェリーに近寄って。

「気をつけて下さいね。　スティールさんと一緒に寝たら、デキちゃいますよ」

お前もか・・・。

顔を真っ赤にして上げられなくなったジェリーを置いて、ウィリアムもスティールの手伝いに入る。

さて、木戸を外せば。　前面ガラス張りの白を基調にした奥に広いレストランが姿を見せた。

「おいおい、ガラス張りのスッケスケじゃんか。　此処まで、前面ガラスって凄いな」

と、スティール。

ウィリアムは。

「しかし、奥行きありますね。　カウンター席・・八・・十か。テーブルの大小席を合わせると五十席はありそうです。　開店するなら結構忙しいな～、一日でも」

ジェリーが二人の後ろに来て。

「席は五十三です。　この内装も外装も、母の好みです。　父は、母の好みの物しか置かない人でしたから。　鍵、今開けますね」

中に三人で入り。　早速、掃除を始める。　椅子とテーブルを全て外に出して、虫干し。　今までの締め切った中で吸い込んだ湿気は抜かないと臭いが残る。　ジェリーは、スティールに手伝われて、厨房の点検を。　竈三つ、水瓶や残しっぱなしの食器を洗う。

すると。

「すみませんが・・・」

と、若い女性の声が。

カウンターから、ジェリーとスティールが見る中、ウィリアムが若く碧い眼をした短いボーイッシュな髪型の女性に応対する。

「はい、何か？」

女性は、怪訝な顔で。

「此処・・・買い取った人ですか？」

ウィリアムは、店内のジェリーを見る。

ジェリーは、女性に見られてにこやかに。

「アンリ、お久しぶり」

女性は、ジェリーを見て笑顔になり。

「ジェリーっ！！　どうしたのぉっ？！！」

彼女は、“アンリ”。　元、ジェリーの父親の元に修行に来ていた料理人の中の一人の娘。　ジェリーとは同い年で、幼馴染みだという。　理由を聞くなりに、腕まくりして。

「いや～ん、それなら教えてよっ。　手伝うっ、オヤジに楯突いても手伝うっ」

と、元気に厨房に回ってくる。

カウンター越しに、間近なウィリアムをスティールが見て。

「“オヤジ”？　“楯突く”？」

と、スティールが不思議な顔をすれば。

「気風いいですねぇ～」

と、半笑いのウィリアム。

掃除をしながら、笑顔で二人の若い女性が昔話に花を咲かせれば。

店の中が、自然と華やかに。

ウィリアムが見る中で、ジェリーの行動が少しづつ柔らかくなるのを見て。

（少しづつ、元の動きに・・・。　身体が若い証拠だ・・・。　あとは、薬で進行を遅くしないと・・・。　奇跡・・・起きるかも）

一緒に笑ってるスティールに、最悪だけは味合わせたくなかった。

さて、掃除を続ければ。

「おろ？　店が開いてる」

と、常連が顔を見せる。

ジェリーは、覗いて来る人達に閉店の会を話して来店を促した。

何人もの船乗りや、労働者などが顔を見せては店に入って、ジェリーを見てジェリーの父親を懐かしみ軽い雑談をしてゆく。

ウィリアムは、その様子を聞くに。　ジェリーの父親と云う人物は、随分とお客に慕われていると感心した。　中には、目頭を熱くしている人まで・・・。

お昼過ぎ。　ジェリーがレシピを元に軽い料理を振舞う。

「うは～・・・お父さんの・・親方の味がまんま出てる」

と、アンリは嬉しそうに。

ウィリアムも、宿で食べる味に引けを取らないのに驚いた。

「美味しいですねぇ・・。　なんだろう・・・なんか、懐かしい感じするなぁ～」

スティールも。

「うんだ。　なんと云うのか・・・お袋の料理を店で食べる様な感じするがな」

「あ、それピッタシ」

「だろ？」

ジェリーは、昔を思い出す様に。

「父は、何故か私に母が死んでからは料理を・・・。　家庭で、母の死後は私が作ってました。　味付けとか、料理の基本で怒られる事は有りましたが。　不思議と全部食べるんです」

ウィリアムは、その話しに薄く笑って目を瞑る。

「何？」

アンリが問う。

「いえ。　多分、無くなった奥さんの味付けをジェリーさんに見出したんですよ。　愛おしい妻の姿が、ジェリーさんの料理にダブったんですね。　そうか、なんでか落ち着く味だと思った。　一途で不器用な男性だったんですね・・・ジェリーさんのお父さんは」

ジェリーは、ウィリアムの表現に微笑んで。

「はい。　母と料理以外には、かなり不器用でしたね。　でも、慕われる父でした」

アンリも、笑顔で。

「よ～くこの店でオッチョコチョイして怒られたわ。　アタシ」

眼を細めたスティールは、アンリを指差し。

「そのまんまじゃんか」

「あ～ん？」

アンリが、鋭い目をスティールに向ける。

「こえ～よっ」

ウィリアムは、店内を見回して。

「思い出・・・そのままなんですね」

ジェリーは、店内を見回して頷き。

「はい。　私には、閉店の会をやった後は、もう広すぎる店ですから。　誰か、料理人として店をやってくれる人に買ってもらえるなら嬉しいですね。　此処で、誰かが食事が出来るなら、料理を作っているなら・・・。　父も母も、そして私も幸せです」

その話しを聴くウィリアムは、ジェリーの覚悟を聞いた気がする。

（捨て身・・・ですね・・）

さて、午後の掃除が始まると。　ウィリアムは、ジェリーに。

「ジェリーさん、少し厨房の台の上。　借りてもいいですか?」

「え?　あ、はい」

ウィリアムは、薬の原料を台の上に並べる。

「腰の疲れを和らげる薬と、滋養強壮剤を作ります。　結構、元気に成れますよ」

客のフロアに入れ替わったスティールは、股間の前に腕を持っていって。

「ウィリアム、それ飲んだら精力付く?　アレがギンギン?」

「アンタ、要らんでしょ？」

ウィリアムが呆れれば、ジェリーは顔を赤らめる。

「アンタって、変態？」

アンリが、モップを片手にスティールににじり寄る。

「おいおいっ！！　暴力はっ？！！」

「ヤラシイっ駄目人間めっ！！　成敗っ！！」

アンリに怒られるスティール。

ジェリーが、仕方無さそうに笑ってる。

だがウィリアムは、そっとその雰囲気に溶けた。

（波の音がするね。　この雰囲気、人の話し合う声・・・）

聴こえて来る全ての音に、ウィリアムは心を偲ばせる。

ジェリーは、ウィリアムを見て驚いた。　ウィリアムが、目を瞑っているように作業をする。　店内に入り込む風を感じたり、騒ぐスティール達を煩く思う顔でもない。　此処の雰囲気に溶け込む様な・・・そんな雰囲気。　だが、手は動く。

ウィリアムが、薬師の師匠に“天才”と云われた所以がこの作業の仕方だ。　その作る薬を飲む人の生活に溶け込み、丸でその人の為

に薬を作る影の様になる。　僅かな量の狂いも無く。　そして、その人に合った完璧な配合量で調整するのだ。　それこそ、粒子の粒単位で。　ウィリアムの人を推し量る気持ちの優れた部分が、丸で完全なる計量の天秤皿の様になるのだ。

静かに、気配も無く。　その場の雰囲気の全てが、薬を作るレシピの様な旋律の調べに成るのだとウィリアムは師に言った。

ジェリーは、薬の原料を砕き、擦る音すら殆ど無い静かな作業に見入った。

（なんて静かな作業なんでしょう。　薬が・・独りでに出来上がっていくみたい）

と、感心した。

さて。　ウィリアムが、出来上がった薬を白い包み紙に包んで。

「毎回、食後に。　まず、今日から初めて下さい」

渡されて、ジェリーはビックリ顔のままに。

「はい・・」

と、受け取った薬を見つめた。

ーーー

さて、夕方に為った。　ランプの灯りを店内に入れたウィリアム。
曇りガラスの加工品のカバーが掛かり、仄かに明るい間接的な明かりが店内に広がる。

「雰囲気いいですね。　少し、ワインの下調べもしないとな～」

ウィリアムも、かなり本気で成功に導く事を意識している。

昼食後も、この店とジェリーの両親を偲ぶ人が来ては思い出話をして。　明後日に来ると言い残していた。　ジェリーも、どれだけの人が来るか解らないが。　出来る限りの持て成しはしたいと云う思いは本気だ。

ウィリアムは、店の裏手に放置された木材を組み立て、厨房の中でジェリーの動くスペースに腰や身体を預ける枠を作る。　それは、竈と流し場の少しの幅だ。

「ウィリアムさん、コレは邪魔です」

難色の顔でジェリーが云えば。

「いえいえ、ハッキリ言いますが。　当日、ジェリーさんが昼から夜中まで動ける範囲はこれが限界ですよ。　ジェリーさん、痛みが腰に来てますでしょ？　無理したら、昼過ぎで倒れますね。　後は、スティールさんに任せて下さい」

と、ウィリアム。

ジェリーは、自分の不安な腰を抑えながらスティールを見る。　見られたスティールは、自分を指差し。

「俺ぇ～？」

「ええ。　当日、スティールさんは厨房に。　ジェリーさんが何をして欲しいか、何を取って欲しいか聞いて素早く行動してあげて下さい。　ジェリーさんに、無駄な体力を使わせない様に」

ジェリーに向かって、カウンター席からウィリアムが更に説明を入れる。

「いいですか？　腰に疲れが来たら、手摺りに身を預けて。　足を下に作った足場の台に乗せて同じ体勢を続けないように。　血流が悪いと、直ぐに疲れが溜まります。　やるからには、時間も身体も無理・無駄をしない形を作りませんとね」

アンリが仁王立ちして、拳をバキバキ鳴らしながらニヤニヤ笑い。

「アタシが、ミッチリ教えて進ぜようか？」

怯えたスティールは、サッとジェリーの背中に隠れ。

「優しい人が好みですがな」

ジェリーは、ニコニコ笑っている。　疲れは、流石に隠せない。汗も額に滲んでいるし、少し顔に見えている。　でも、笑えるだけの充実感が在るのだろう。

ウィリアムは、ボソっと。

「ヘンタイさんが・・・優しい人好きですか」

と、カウンター席から横目にスティールを見る。

スティールも、その視線を察知し。

「其処っ！！　何をボヤいてるっ！！」

と、睨みつける。

その時であった。

「失礼」

低いドスの効いた男の声がする。

一同、声に向いた。

「オヤジ・・・」

アンリが、男性を見て言う。

ウィリアムは、白いコックの服装でスキンヘッドのガッチリした小太りの男性を見て。

「アンリさんの・・・お父さん・・・ですか・・・」

似てなかった。　アンリは、明らかに美人に入る。　だが、父親は

冒険者でも遣っていそうな、または港で働く色黒の労働者の様な雰囲気の男性だった。

アンリの父親は、真っ直ぐカウンターの前に来て。　ジェリーを見る。

「お嬢さん、お話を聞きました。　お嬢さん、スミマセンが止めてください。　病気で倒れた身体で料理なんぞ作ったら、せっかくの閉店の会でお父さんの味を穢す事に成ります。　此処は、お嬢さんには思い出でしょうが。　我々料理人には、修行の聖域です。　店の名前を貶める閉店の会など、親方は望んでないと思います」

と、頭を下げて来る。

言い返そうとするスティールを、ウィリアムが視線で制した。

その時だ。　突然に。

「オヤジっ！！！　生意気言うなっ！！！！」

アンリが大声で怒鳴った。

父親が、娘に顔を起こして、俄に怒らせて怒鳴る。

「お前は黙ってろっ！！！」

だが、アンリも引かない。　厨房から出てきて。

「ジェリーは、お父さんから・・・親方からレシピを託されてるんだよっ！！！」

「なんだって?」

父親は、突然に驚いた顔に成る。

アンリは、父親の前で面と向かって。

「オヤジも、コクーのおじさんも、誰も託してくれなかったレシピだ。　今じゃ、この街でも五本の指に入る料理人のマリシュのおじさんだって、レシピを託されなかった。　先代のレシピは、女性でも男性も作れる家庭料理と洗練された料理の融合だってオヤジ言ったよな?」

アンリの父親は、ジェリーを見返す。

「本当・・・なんですか?」

ジェリーは、持ってきた包丁のセットと・・・レシピの書かれたメモの束をそっとカウンターに差し出す。

「お・・親方の・・包丁とレシピ・・」

アンリの父親は、立ち尽くす。

“料理は、それぞれ人が出る。　人の真似して出来上がるのは形だけだ。　お前達には、お前達の味がある。　俺の味は、俺の認めた相手にしか出来ない。　居ないなら、店を畳んでレシピは燃やすさ”

何時かは独立する弟子達である料理人の一同が、ジェリーの父親にレシピの写しをさせてくれとと拝みに来た時。　こう言って、誰に

もレシピを見せなかったジェリーの父親。　仲間内では、レシピの継承者は居ないと言い合ってジェリーの父親の死を惜しんでいる。
　だが、何十人と弟子を育てた男の継承者は、二十過ぎの弱弱しい娘だった。

アンリの父親は、愕然と床に崩れた。

「親方は・・・結局はハンパな娘に味を教えた訳か・・・。　十年以上も修行した俺達だけでなく・・・」

すると、娘のアンリは本気で怒った顔で。

「オヤジのバカタレっ！！！！」

と、スキンヘッドの頭を小気味良い音を上げて叩いた。

アンリの父親は、涙の滲む目を上げて。

「親に何するんだっ！！！！！」

すると、アンリも悔しいような情けないような苦悶の顔で父親を見下ろし。

「ジェリーのお父さんは、目を狂わせちゃいなかったよっ！！！！！
　オヤジみたいなボンクラに、レシピなんか見せれるかっ！！！！
ジェリーを疑うんなら、そこの冷蔵庫にジェリーの作ったテリーヌが入ってるっ！！！！　お前自身で食ってみろっ！！！！！」

と、腰に手を当てて自分の父親に怒鳴った。

大抵どこの料理屋にでも、石で出来た魔法の掛かった冷蔵庫が有る。
恐らく、店の内装で一番高い物だろう。大きさに比例して、値段が千差万別だ。

アンリは、ジェリーに向いて。

「ジェリー、勿体無いけど食わせてやって。この阿呆には、気付け薬が必要みたい」

「え・・・うん・・。でも、誰でも作れるテリーヌよ・・・」

アンリにせがまれたジェリーは、石で出来た高さ一メートル前後の宝箱の様な箱を開き。中に冷気保存して置いた豚肉と鶏肉の合い挽き肉のテリーヌを四角い器ごと取り出し。スプーンで少し掬ってアンリに渡す。

アンリは、そのスプーンを父親に差出し。

「喰ってみろオヤジ。オヤジの味でも、コクーさんやマリシュさんの味でも無い。アタシ、昼にコレ食べて確信した。親方・・・ジェリーのお父さんは、間違った事はしてない」

アンリの父親は、アンリの真剣な顔を見てから、スプーンを受け取って口に運んだ。

そして・・・。

「美味い・・・」

アンリは、自分の父親に。

「親方が何時か言ってたろ?。　男は、自分の味を作る事しか出来ないって。　多分、レシピの大半は、ジェリーのお母さんと一緒に作ったんだよ。　だからこのレシピは、ジェリーのなんだ。　親方、アタイが店に手伝いに来てる時にレシピ見てた事殆ど無いもん。ジェリーは、三歳から料理をしている厨房に入れた。　アタイは、十七まで一度も料理中は入れなかった。　それは、親子の関係だけじゃ無かったんだよ親父。　ジェリーは、セリーナのおばさんと同じ料理が作れる存在なんだ。　親方の、本当の後継者なんだよ」

アンリの父親は、ガクンと項垂れた。

「そうか・・・そうだったのか・・・。　親方・・何も言ってくれないから」

アンリ、父親に悲しい目を向けて。

「違うっ。　親方は、オヤジ達弟子にどう言っても伝わらない事を知ってた。　みんな、レシピの事や店を継がせて貰えない事ばっかり考えてた。　聞く耳、誰も無かったじゃんかっ!!」

「・・・・」

アンリの父親は、返す言葉が無かった。

夜の闇が、海を紺色に染める。

ジェリーが、アンリの父親にカウンターの内側から。

「もう、立って下さい。　クベラさん。　私・・・未来があんまり

長く無いんです。　出来るの、今しか無いんです」

アンリの父親は、驚いてジェリーを見上げる。　見るジェリーは、優しく微笑み。　そんな素振りは見えない。

アンリも、苦渋に満ちた顔で横を向く。　スティールですら。

だが、ジェリーはそのままに。

「たった一日ですが、全てを込めて作ります。　ですから、店を開くことを許して下さい」

と、頭を下げる。

アンリの父親、クベラには。　そのジェリーの笑顔が、亡くなる寸前まで働いていたジェリーの母親のセリーナにダブった。　ジェリーの母親は、セーラが良く似る美人。　ジェリーとは似ていない。

だが、大らかな優しい面持ちは、何故か重なった。

（親方・・・俺に・・俺に、今一度修行のチャンスをくれますか？）

クベラは、そのままに土下座する。

「いえ、滅相もないっ。　ジェリーさん、いや。　新代（新しく代を世襲する人の呼び名）、俺も手伝わせて下さいっ！！！！　親方に背いた仇を、恩返しさせて下さい。　娘と一緒に、閉店の会・・・手伝わせて下さいっ！！！！」

ジェリーは、クベラの土下座に驚いた。　慌てて、動こうとすると。

「ジェリー、決めてやりな。　今、君はこの店の主だ」

スティールが、そっと言う。

アンリも、

「ジェリー、お願い。　ウチのバカオヤジに、もう一度手伝う機会を・・・。　実は、オヤジ達古株の弟子達は、親方に反発してさ。　店を困らせようとして、一斉に独立しやがったんだよ。　みんな、勝手に一流気取って・・・。　でも、オヤジはそれが間違いだって解った。　毎日、酒飲んでは謝ってた。　このバカに、もう一度此処で料理作らせてやって。　アタシも、明後日はウェイトレスするから・・。　親方に、このままじゃ・・申し訳ない」

と、頭を下げる。

ジェリーは、断る理由も無かった。　自分の店でも有るが、お客と、厨房働いた皆の店でもある。　ジェリーには、父親がそうしろと言っている気すらした。

「はい。　私一人では、とても難しいので。　是非、皆さんのお力を貸してください」

その声を聞いたウィリアムとスティールは、見合って笑い合った。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　閉店の会に向けて（後書き）

次号、予告

閉店の会は、新たなる協力者の参加でジェリーに追い風が吹き始める。　だが、ジェリーの父親に育てられた料理人は多く。　殆どは反発したままだった。
そして、セーラも姿を見せず。　姉妹は理解し合えないままに閉店の会の当日を迎えるのだろうか・・。

次号、【始まる会】お楽しみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾。

腰痛の痛みが取れない中で、何故かポリア編よりＫ編のほうが進みのいい感じです＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

second episode2 始まる会・・・

21、閉店の会の準備は整い、いざ・・・。

ウィリアムは、夜中近くにワインセラーに入った。　なるべく、日中の暑い空気を入れたくなかったからだ。

流石は、色々なお客を相手にして来たジェリーの父親は、ワインにも幅広い種類を揃えて対応していた。　料理に使うワインには、かなり拘っていたらしい。　だが、飲み手に薦めるのは上手では無かったとか。

ウィリアムは、セラーの中にストックされたボトルを眺め、コクの深いワインが中心で。　若いワインが少ないのに唸る。

（う〜ん・・・少し買うか。　高級ワインも有るから、種類は要らないけど。　舌の肥えた人には、ワインは誤魔化し効かないからなぁ〜。　かと言って、呑みやすいワインも少ない・・ワインに弱い人には対応しきれない）

ウィリアムを地下倉庫の入り口から見るスティールは、独特の暗さと秋の終りの様な肌寒さに白っぽい息を吐き。

「さみい・・・マジで、此処は冬だ・・」

降る階段は急で、深い底に降りる様な印象を受ける。　壁全体が黒い石で囲まれ、何故かカビの匂いがする。

「お～い、ウィリアム。　ジェリーは送って来たぞ」

ウィリアムは、ワインを見ながら。

「良く手を出さずに送って来ましたね。　エライエライ」

スティールは、返って来た言葉にムスっとして。

「うるへえっ!!　出せる相手じゃ無いだろうがっ!!!!　キスでもしたらアンリに殴られるぅ」

「アンリさんも？」

「おうよ。　明日の朝、ジェリーを連れてくるってさ」

ウィリアムは、暗い中でワインを見つめていた視線をフッと上げ。

「そう言えば、今日はセーラさんは来ませんでしたね」

スティールは、真顔に変わって声を低くして。

「ジェリーの予想じゃ、来ないってさ・・。　今日、店は休みなのに、“忙しい”って・・」

ウィリアムは、また静かに別のワインを棚から取り出して。

「ジェリーさんは、手伝って欲しい訳ではありません。　ただ、許

して欲しいだけです。　セーラさんが来ないなら、それは仕方ありませんね」

「ウィリアム、それはそうかもしれないが・・。　来ないが、許した事に成るのか？」

ウィリアムは、その呼びかけに答えなかった。　内心に。

（やっぱりか。　この短期間で、セーラさんの決心は変わるかどうか解らないよな・・・）

スティールは、返答の無いウィリアムに力が抜けて、店の方に戻った。

すると・・・。

「あ・・・」

閉まった大窓の外に、黒く汚れたシミを付けた皮製の前掛けを胸辺りから足元まで垂らした中年の男性が立っている。　スティールは、歩みを速めてドアの前に歩いて行く。　男性は、店内を窺っていた。

「あの、ジェリーのお知り合いですか？」

ガラス戸を押し開いてスティールが声を掛けると、潮風に乗って、微かに血の匂いがする。

中年の男性は、何処か暗い言い方でスティールを見て。

「あの・・・お嬢さんは？」

スティール、剣は外しているが少し警戒の気持ちを引き締めて。

「もう、帰ったよ。　明日も、朝から準備する為に来ると思うけど」

良く見れば、男性は色黒で疲れ切った様な印象で、彫りの深い男性だ。　何処か、陰の有る感じがする。

「あの、私はセテルと云います。　もし、親方の閉店の会やるなら、肉は俺が用意したいとお嬢さんに伝えて下さい。　この先六つ目の道を曲がって、真っ直ぐ行った所の肉屋で働いています」

スティールは、“親方”と聞いて。

「アンタ、元・・この店で働いていたのか？」

“セテル”と名乗った男性は、静かに頷いて。

「もし、宜しければで・・・いいですから」

「解った。　伝えておくよ」

「すいません・・・」

男性は、そのまま波の音がする夜の闇に消えて行く。

（随分、弟子が居るなぁ）

スティールは、何か陰気なセテルと云う人物に曰くが有りそうな気がした。

「どうしました？　スティールさん、話し声がしてましたが？」

地下から上がって来たウィリアムが、入り口に佇むスティールに声を掛ける。

「あ・・ああ・・ウィリアム、上がって来たのか？」

スティールは、今居たセテルの話を。

「なるほど、明日にでもジェリーさんに聞いて見ましょうか」

「うんだな～」

二人、厨房の奥にある狭い住み込みスペースに寝泊りした。

次の日。

「曇りか・・・ふあぁ～・・・」

スティールが、店の入り口を開いて微妙に雲が多い朝の空に向かって大欠伸。

ウィリアムは、早くも掃除をしている。

「おいおい、もうか」

呆れるスティールは、腹の辺りをボリボリ。

「店の掃除は、この業界では朝の挨拶ほどに重要ですよ。　お客は、

他人の家に来る様なもので、店内の清潔感を気にします。　ジェリーさんに聞けば、お父さんも毎日やっていたとか。　当然ですがね」

「さ～すがは彼方此方で働いてただけありますな～」

少しして、アンリに連れられてジェリーが来た。　スティールが驚いたのは、杖を着いた姿がシャンとしていた事だ。

「ジェリー、腰が・・・伸びたな」

笑うジェリーがウィリアムを見て。

「薬が効いているみたいです。　寝つきも目覚めも良くて、疲れが残ってません」

掃除をしていたウィリアムは、モップの柄に顎を乗せながら。

「ジェリーさん、まだ若いですからね。　肉体の活性化能力が柔軟なんですよ。　でも、昨日で結構動いてますから。　筋肉痛はありますね」

「あ・・・確かに」

ジェリーは、痛む足を見た。

アンリは、ジェリーごと店に入って。

「今日は、どうするの？」

ウィリアムは、直ぐに反応。

「とにかく、食材の調達が先でしょうね。　俺は、ワインを買ってきます。　少し、若いワインが欲しいんで」

スティールは、ジェリーをカウンター席の一つに座らせ。　ジェリーを見つめて。

「じゃ、俺達はジェリーに聞いて食材集めか」

アンリは、直ぐに拳を鳴らして。

「仲良く行こうよ。　ヘンタイおに～さん」

「おいおい・・・仲良く行けるか？　その音・・・」

すると、ジェリーは、離れた海上倉庫から聴こえてくる人の声を遠くに見て。

「父の仕入れ先から当りましょう」

その時だ。　パッとスティールが昨夜の来客を思い出して。

「ジェリー、昨日の夜に知り合い来てたぜ」

「え？　誰ですか？」

「ああ・・“セテル”って言う肉屋みたいな男だ」

名前を出すと、ジェリーとアンリが驚いて見合う。

ウィリアムは、二人を見て何やら有りそうな予感がする。

「知ってるみたいですね」

ジェリーは、少し俯いて。

「セーラに・・・恋した人です」

納得のスティール。　セーラは、確かに美人だから在りそうな事と思うのだが・・・。

アンリが、俄にイライラした顔に変わり。

「クズ男だよ・・・アイツ」

ウィリアムとスティールは、何やら随分な言われ様だろうと目を交す。

ジェリーの話では、セテルの家は街でも有数の卸し肉屋で。　今は、グルメブームで相当な羽振りだそうだ。　今から五年前。　まだ、ジェリーの父親が生きていた頃。　セテルは料理人修行に来ていた弟子の一人だったらしい。　だが、セーラに恋したセテルは、性格も控えめで物をハッキリ言わない反面、何かと父親を頼って事を成そうとする傾向にあった。

ある日、ジェリーの父親が倒れた後だ。　セテルの父親が何時もの卸しを断ってきた。　料理人として、腕の信用の無いジェリーや他の料理人に肉は卸せないと。　卸す条件は、セーラとセテルの結婚、そしてセテルが店の後継者に成る事だ。

呆れ顔のウィリアムは、スティールを見ながら。

「完全な脅しですね」

「んだな」

当時を知るアンリが、ワナワナした顔で。

「あんのヘンタイ男め・・。　ま～た何か条件付けるに決まってるっ。　未だに、セーラの事狙って、セーラの働く店の近くをウロウロしてるの見た事あるし」

ウィリアムは、俯くジェリーに。

「どうやら、そのお店の肉は必要な物らしいですね」

アンリとスティール、ジェリーに目を移した。

「そうなのか？」

「はい・・。　実は、母から教わった伝統料理の中で、あるお肉が必要なんです。　首都の方で飼われている古い種類の牛です。　脂が非常に少ないのに、とても柔らかいんです。　ですが、最近は脂のさしの多いものが持て囃されます。　ですから、扱う店がセテルさんの店だけなんです」

スティールは、昨日の弱弱しいセテルを見ているだけに。

「駄目元で行って見たらどうだい。　なんか、随分と控えめに言ってきたぜ。　使って欲しいみたく」

「はい・・」

ジェリーは、浮かない顔だった。

ーーー

が内在しているのだろう。

スパイスを買いに行っても、同様だ。　キツイ味のスパイスでジェリーを誤魔化そうとした商売人だが。　全く惑わされない。　柔らかく、広がる匂いを頼りに、ジェリーはスパイスを選ぶ。

野菜を買いに行けば、ゴリラに似た小太りの店主が、カバの様な奥さんを呼びつけて、ジェリーが父親の猿真似しに来たと馬鹿にする。　だが、怒るアンリを他所に。　ジェリーは、匂いと見た目を頼りに味を確かめて食材を買い付ける。

特に、店主夫婦が驚いたのが。

「ジェリーちゃん、これがお父さんの使ってた茸だ」

と、高級茸を出すと・・。

「いえ、コレは要りません。　其方の小さい種類を」

奥さんが、茸を見て。

「コッチは、安いよ」

「はい。　これでいいんです。　高い茸の種類は、旬が冬から春ですよね？　今は、火に通すと匂いが消えちゃいます。　此方の茸は、初夏が旬で香りが素晴らしいです。　値段では無く、食材の旬を弁えれば、安い食材でもいい味は出ます。　それから・・・」

その姿を見ていたスティールとアンリは、ジェリーが持てる能力を開花している気がする。

店主の男も、ジェリーが父親に負けない嗅覚を持っているのに顔付きが変わった。

「ジェリーちゃんが其処までの目利きに育ってるとは思わなかった。どれ、おじさんも全力でいい品を明日に仕入れるよ。　明日の閉店の会、絶対に遣りきっておくれ」

と、値段を値引きしてくれた。

スティールは、買い終わってジェリーを見て。

「かっこいいねぇ～」

アンリも。

「マジ、格好良かったぁ～」

褒められるジェリーは、二人に照れる。

魚の買い付けは、幾分楽だった。　ジェリーの顔を見て、店主が話を聞けば、気風のいい返事で了承してくれたからだ。

さて、問題は肉だ。　ジェリーの父親は、鳥・猪・牛・蛙・熊・蛇の肉を使っていた。　それぞれに味の拘りがあり。　全ての肉が集うのがセテルの店だという。　ジェリーの顔にも、幾分疲れが見えていた。

アンリは、“午後にしたら?”と言ったが。　ジェリーは、“行く”と言う。

ジェリーは、スティールに背負(おぶ)られるのも嫌がった。　どうやら、身体の動きが良くなって気持ちが出てきたようだが。　蒸し暑い中を歩くのも結構大変だ。　しかも、今日は今の所は風が強かったり弱かったりしている。　風が弱いと、何とも蒸し暑く感じる。

さて、最も人通りの激しい交差点の一つにやって来た。　人の往来も激しいなら、荷物を運ぶ労働者も引っ切り無しに見かける。

「ん・・・生物(ナマモノ)の匂いがしないな・・・」

スティールは、目的の大きな肉屋に来て思った。　街角に有り、通りに面した曲がり角がそのまま店の一階だ。　窓の枠も壁も無く、店と通りと吹き抜けた店の内側に、丈の低い食器の棚の様なショウケースのガラス箱に肉の名前を書いて入れてある。　その前に、下働きの男達が威勢の良い声を上げて客目を惹いていた。

ジェリーは、引っ切り無しで入れ替わる客の量が、少しももショウケースから少なくなる事の無い店舗前を見て。

「セテルさんのお店は、二年前に画期的な方法でお店を始めたんです」

「画期・・的？」

「はい。　冷凍の魔法が掛かった冷凍箱を、ガラスのケースに入れて肉を新鮮に保って販売する事です。　父が、セテルさんに進言したんですよ・・。　先代のセテルさんのお父さんは、金が掛かるから反対したらしいんですが・・。　肉も野菜も捌いてから、ドンドン鮮度は落ちます。　特に肉や魚は、塩や香辛料に漬けて醗酵させ

たり、塩分で腐敗の進行を遅くしたりして長持ちさせますが。　それでは、元来の味を楽しめません。　ですから、この方法は画期的なんですよ。　多分、今では料理業界に肉を卸す最大手でしょう」

「へえぇ～・・・。　腐る手前なら、焼けばなんとかなるって時代はもう遅れか・・。　田舎じゃ有り得ない」

ジェリーは、スティールの話に笑って。

「そうですね。　ウチのお父さんの店にある魔法の箱で十・・・何万もするんですから。　あの、セテルさんの店にある魔法の箱は、全部合わせると桁外れですね」

アンリは、流石に驚き。

「ひえぇ～。　凄いっ」

だが、スティールは、それを聞くと。

「哀れみか、それとも恩返しか、確かに手伝うと言われても・・チョット不気味だの」

アンリも、細めた目で思い切り。

「スンゴイ不気味」

三人は、店を訪ねた。　客を捌く下働きの若く威勢の良い男性が。

「あぁ～・・若旦那か。　奥で、肉を捌いてると思います。　呼んで来ますよ」

ジェリーは、それを聞いて感心した。

「セテルさん、変わりましたね。　前なら、臭い肉を捌くの嫌がってたのに・・・」

若い働き手は、笑って。

「ええ、先代が亡くなって、半年は毎日飲み歩いていたからど～なるかと思いましたが。　色々あって、今じゃ誰よりも仕事しますよ」

と、店の奥に歩いて行く。

中年の奥様達が、ワイワイガヤガヤと肉を見てアレコレ話し合っている。　物珍しいと云うような会話ではなく、新鮮な肉の料理の立ち話だ。

スティールは、少しだけ実家が恋しくなった。

さて、若い下働きの男性と一緒に、昨日の夜遅くに店に来たセテルと名乗った中年男性が現れた。　血に染まった皮の前掛け姿のセテルだが、ジェリーを見て静かに頭を下げた。

「これは、お嬢さん。　ご足労、ありがとうございます」

「いえ、すみません。　営業中に・・」

「いいですよ。　さ、奥にどうぞ」

セテルは、ジェリーを進めてから、アンリを見て。

「アンリお嬢さん、その節は迷惑お掛けしました」

アンリは、予想外の対応に目が点になり。

「あ・・・いえ・・・」

スティールを見るセテルは、薄く笑って。

「ありがとう。　連れて来てくれて」

スティールは、何か一皮向けて働く人間に成っているセテルが職人に見えて安心した。

三人が通されたのは、労働者達の休憩場の様な土間の上にテーブルと椅子を置いた簡素な場所だった。

「どうぞ、汚い所ですが座ってください」

セテルは、肉を加工している方に消えてゆく。

「どう・・なってるのよ」

アンリが驚くと、スティールがしみじみと。

「皆、それぞれに時間が流れたんだ。　色々あって、変わらざる得ない事態があったんだろうよ。　いい顔してる、職人の顔だ」

スティールも、坑道で働く父親や抗夫を見てきている。　何より、アクトルがそうだった。

別棟の肉を加工する現場から、セテルが前掛けを外した厚手のズボンに汚れたシャツ姿で紅茶を低いカップに入れて持ってきた。

「矢継ぎ早で、これしかありませんが。　砂糖だけは有りますんで、飲んでください」

疲れたジェリーには、何よりも有り難い紅茶だった。

お礼を述べる三人。

紅茶を配って、肉の匂いが漂う場所ながら、風が出てきたのか気に成らない中で。

「お嬢さん、閉店の会の事は聞きました。　是非、ウチの肉を使ってください。　御代は、要りません。　代わりに、先代の親方の無念を是非やり抜いてください」

ジェリーは驚いた。　ちゃんと御代は払う気だった。

だが、静かに語るセテルの話は、流石に数年の時の流れの押し寄せた苦労の話だった。

ジェリーの父親が死ぬ時、店を辞めて父親の跡継ぎとして戻ったセテルの毎日は堕落に染まった日々だったらしい。　だが、ジェリーの父親の死後半年で、暴飲暴食の限りでセテルの父親も死んだ。

急に新しい店の主に成ったセテルは、経営の責任に押しつぶされて、神経質に成って不眠症を患い、呑んだ暮れの毎日だった。　慣れない付き合いや、取引先との付き合いだ。　だが、元々身体の強くな

いセテルは、数ヶ月で身体を壊して大病を患った。　医者には、もう飲酒は駄目だと言い渡されたらしい。　何も出来ないまま、安穏とセテルが病気の快方に向かう中で見たのは、自分の店を潰さないようにと踏ん張る働き手達だったらしい。

“みんな、俺の飲み代を稼ぐ為に働いてる訳じゃ無い・・。　生きるのに必死なんだな・・。　親方も・・・奥さんも・・最後まで店に立ってたな・・・”

ある日情けない気持ちで、今ジェリー達が座っている場所に腰を降ろしたセテル。　だが、店で忙しく動く働き手達は、情けない自分に気を向けてくれる。　初めて、まだ自分が必要とされているのをセテルは実感したらしい。　やり手で、強引な遣り方のセテルの父親でも、仕事人としては認められていた。　セテルは、死ぬ前の親方（ジェリーの父）に勧められた販売法を思い出した。

“売り手が、新鮮な肉を卸してくれりゃ。　料理人も幅の広い料理を提供出来る。　遣って見る価値は在ると思うぞ”

身体の良くなったセテルは、直ぐに肉の解体を覚えた。　そして、気持ちが一丸と成った働き手達を集めて、新しい商売法を相談した。　恐らく、店の残っている現金資産は全て使い果たし。　借金も出来る覚悟でだ。

誠心誠意を持って、働き手達を前にして説明したセテルの姿が職人達を黙らせたのだ。　無論、皆が若き社長の気持ちに賛同し、異論は無かった。

こうして、冷凍魔法の掛かった箱を利用して、新鮮な半氷の肉を売れる様に・・・。　料理屋との取引が爆発的に伸び。　買い物客も

前の倍に増えた。　もう、借金は返したらしい。

セテルは、ジェリーを見て。

「この繁盛も、親方の御蔭です。　それに、お嬢さん・・・俺もそんなには長生き出来ない身体に成りました。　後、十年・・二十年生きたら御の字でしょう。　心残りは、親方の出来なかった“閉店の会”だ。　親方が、俺にお嬢さんの手助けを頼んだのに・・・俺は前に逃げ出した。　無謀にも、セーラお嬢さんの気持ちも考えずに・・・。　だから、今回は罪滅ぼしと恩返しです。　どうか、お手伝いさせてください」

声を乱さず、淡々と話す中に隠した贖罪の念が見える。

ジェリーは、自分の身体の事を語り。

「ありがとうございます。　父のお弟子さんだった皆さんが力を貸してくれるので。　なんとか出来そうな気がしてます」

ジェリーは、食材に使う肉の種類をセテル伝えると。

「全て、揃います。　夕方、一番新しい肉を凍らせて少量納めます。試作して、味を確かめて下さい」

ジェリーは、了解して店に戻った。

ーーー

ーーーーーーーーーーーー

ウィリアムは、ボトルワインを二十本ほど買ってきた。

アンリの父親が昼前から来て、皿の手入れや、竈にくべる薪の用意をしている中で。　ワインセラーの地下室から出てきたウィリアムに。

「お前さん、ワインの味なんか解るのか？」

ウィリアムは、薄く微笑み。

「まぁ、そこそこ」

「そうか。　ま、魚に白、肉に赤、食前酒に発砲ワインを勧めれば殆ど問題は無いな。　後は、銘柄を覚えれば大丈夫だ」

「そうですね」

クベラ、この言い方を後で何度悔やんだ事か解らない。　ウィリアムは、三大陸から集まるワインを知り尽くしたワインテーラーなのだから。

すると、突然。

「失礼」

低い通りの良い男の声がする。

「ん？」

クベラとウィリアムが見ると、黒い貴族風の礼服にシルクの赤いネクタイスカーフをした長身のハンサムな中年男性が立っている。

クベラは、顔を驚かせて。

「マリシュ・・・どうして・・・」

オールバックの髪型に似合う高い鼻、鋭い目つきは確かに風格ある男性だ。

ウィリアムは、出た名前で直ぐに思い出す。

（この人か・・ジェリーさんのお父さんの最高の弟子って人は・・・）

「久しいな、クベラ。　ジェリーさんが閉店の会を遣ると聞いたのでな。　お祝いにワインを持ってきた」

ウィリアムは、マリシュに進み出て。

「ジェリーさん達は、まだ買い付けに出ています。　ワインは、私がお預かりいたします。　地下のワインセラーに保管します」

マリシュと云う男は、頷いてウィリアムにワインを渡した。

ウィリアムは、紙のラベルがもう色褪せてインクが滲んで文字が判らないと思われるのに。

「凄い・・・アンチグーロック・・ヴィンテージ四十年物だ・・・」

クベラ・マリシュは、ハッとウィリアムを見る。

ウィリアムを見つめるマリシュは、少し驚いて。

「判るのか？」

ウィリアムは、黒いボトルの注ぎ口近くの表面を撫でて。

「逆さブドウの模様が入ったこのボトルです・・。　水の国ウオッシュレールで、最高に格式高いシャトーの最高級銘柄・・・。　ある昔、味は素晴らしいが病気に弱いと云う理由で他の畑で捨てられた古種のブドウを、この生産者の先祖が長年に掛けて品種改良して作り上げた赤ワインです。　ラベルに薄っすらと見えるブドウの蔓の絵の重なりが、樽で寝かせた年月。　実を付けた蔦が三本で、三十年。　付けてない蔦が、五年を差します。　しかも、このラベルの色褪せの仕方は、湿度の高い低温の蔵でしょうか・・・。　何年も置かないと、こうは成りません。　薄く付着する湿気が、少しずつ色褪せさせる。　しかも、このワインは、寝かせた年月の下一桁が０か五の時に開けるのが縁起がいいとされますからね。　想像で、四十年と・・・」

マリシュは、毒気を抜かれた驚きの顔でウィリアムを見る。

「君の言う通りだ・・。　君は？」

「あ・・・あぁ・・。　俺は冒険者で、ジェリーさんと事件絡みで知り合いましたウィリアムと申します」

マリシュは、マジマジとウィリアムを見つめ。

「何処でワインの勉強を？」

「コンコース島ですよ。　あそこには、世界のワインが流れてきますからね」

「ワインテーラーか？」

「資格は持ってませんが、勉強はしました。　市民権が無いと、資格は取れないんですよ。　スラムの出身なんで、無理でした」

「そうか・・・。　いい目利きだ」

マリシュは、そう褒める。

「いえいえ、カウンターに座ってください。　紅茶を煎れますから」

「では、席を失礼するよ」

マリシュは、ウィリアムに何か惹かれながら席に着いた。

ウィリアムは、熾きの出来てる竈に向かって。

「クベラさん、お湯を沸かしてください」

「ああ、直ぐ沸くよ」

水を少なくヤカン入れて沸かせば直ぐである。

ウィリアムは、ワインセラーに降りていった。

クベラは小声で。

「アイツの言った事は当ってたのか？」

マリシュは、ウィリアムの降りていったワインセラーのドアを見ながら。

「ああ・・・親方の欲しがったワインだったから・・・。　だが、試飲もしないで持って当てるとは・・・驚いた」

マリシュは、それからクベラを見て。

「お前、手伝う気なのか？」

クベラは、少し顔色を悪くして。

「お前には悪い・・。　だが、ジェリーさんは、親方と奥さんの両方を受け継いでいる。　俺等と一緒に幼い頃から修行した感覚は、病気を患った今でも薄れちゃいない。　寧ろ、ジェリーさんだけの新しい味が出来上がってる。　冷めたテリーヌ食べて、親方と奥さんを思い出しちまった・・。　もう、悔いだけは残したくないんだ」

マリシュも俯いて。

「そうか・・・。　じゃ、親方のレシピも？」

「ああ、包丁もだ。　スィーツナイフが・・・無いがな」

マリシュが、ピクリと反応した。

「そうか・・・。　レシピも・・包丁も・・・」

クベラは、カウンターの内側の厨房内で、ヤカンの湯気を見ながら。

「皮肉だよな。　親方は、俺達に自分の料理では無く。　料理の基本と感覚を教えてくれてたんだ。　親方の料理を教えてくれてた訳じゃないんだ。　なのに、俺達は親方の後を継ぐ事ばかり考えて、親方の言葉に耳を傾けなかった・・・。　目の前に居た、最も優秀な後継者が目に入って居なかった」

マリシュは、フッと笑ってクベラの背中に顔を向けて。

「クベラ・・・お前、本気で言ってるのか？」

マリシュに振り返ったクベラは、悪党の様なゴツイ顔をしんみりさせて。

「当たり前だ。　お前も俺も、自分の味は作れた。　でも・・・親方の・・・奥さんの・・・この店の味では無い。　ジェリーさんの料理は、確かにこの店の味なんだ・・。　それなのに、親方には無い何か、奥さんにも無かった何かが有る。　あの柔らかく大まかでは決して無い味の緩やかな広がりは、俺もお前も作れない。　だから、俺は手伝う。　少しでも、今一度学びたい。　今度は、ジェリーさんからな」

鋭い目のマリシュだが、今は目が陰りを見せて緩んでいる。

「お湯、沸きました？　紅茶煎れますね」

ウィリアムが、ワインセラーから戻って来た。

マリシュ・クベラの見ている前で、ウィリアムはティーポットを出して、缶に入っている紅茶を取り出すと・・。

「あ・・・」

クベラが小さく声を出す。

茶葉を入れる前に、なんと少量の水を入れたのだ。　其処に、茶葉を入れて水に浸し。　その上から、熱湯のヤカンを傾ける。　しかも、一気に入れるのでは無く。　段階的に、少しずつお湯を足して温度を上げる。

マリシュは、淡々と。

「変わった煎れ方だね」

ウィリアムは、穏やかに笑って。

「茶葉が、北の凍土近くで生産される高い茶葉なんですよ。　乾燥させるのに冷たい凍える空気を使ってるんで、煮出すときに熱湯を入れるとエグ味まで直ぐ出てしまいます。　ですが、茶葉の一番硬い芯に香りが残っているので。　こうして煎れるんです」

「・・・・」

ウィリアムは、熱湯まで温度が上がりきったかどうか程度の湯気で

ヤカンを置き。　優雅な手つきで高い位置から静かに紅茶をカップに注ぐ。

「どうぞ」

出されたカップを見つめるマリシュとクベラ。

「いい匂いだ・・。　丸でイチゴの様な匂いがする」

一口飲んだマリシュの感想。　仄かに濃く香る甘い爽やかな匂いに、自然と目を瞑った。

ウィリアムは、カップに口を着けてから。

「このお茶の葉って、摘み立てがとても硬いんです。　ですから、柔らかく茹でる為に北の固有種の野苺の茎を一緒に入れるんだそうで。　その匂いが、この甘い香りですよ」

マリシュもクベラも、初めて味わう茶葉の味わいに沈黙を漂わせた。　外の海の音、紅茶の香りと味わい。　言葉の要らない贅沢な時間だった。

ウィリアム、紅茶を飲み終える頃に。

「帰ってきましたね」

マリシュ・クベラが、透明なガラス越しにジェリー・アンリ・スティールを見る。

マリシュを見たジェリーは、驚きの顔である。

「まぁ・・・マリシュさん・・・」

マリシュは、席から立ち上がり。

「お久しぶりです、お嬢さん。　閉店の会のお話を聞いて、ささやかながらお祝いを持ってきました」

「え・・・あっ」

戸惑うジェリーに、ウィリアムが。

「とても高い高級ヴィンテージワインです」

「あ・ありがとうございます」

ジェリーは、頭を下げる。

マリシュも、頭を下げる。

「お嬢さん、私にも手伝わせて下さいませんか」

空気が、止まった。

「マ・・・マリシュさん」

ジェリーには、信じられない光景だ。　自分の父を罵り、もう父を超えたと宣言した男が頭を下げているのだから。

「お嬢さん、これを・・・返しに来ました」

マリシュは、上着の懐から何かを取り出した。

ジェリーは、その差し出された赤い柄の短いナイフを見て・・・身体が震えた。

「こっ・・コレは・・・母の・・フルーツナイフ・・・」

紙に包まれた刃から先に見えている柄に、“セリーナ”の名前が彫られていた。

アンリは、マリシュに踏み込んだ。

「アンタが・・・アンタが盗んだのか？」

マリシュは、アンリに言われて昔を思い出す。　そう・・思い上がった。　貴族の金持ち達に踊らされ、店を勝手にオープンして独立した。　当時、他に三人いたジェリーの父親の弟子を引き抜いて・・・。　美しい創作料理を並べ、新進気鋭の若きシェフとして有名に成り上がった。　マリシュは、何時かこのフルーツナイフを遣える時が来ると疑わなかった。　自分が、ジェリーの父親の後を継ぐと確信していたから盗んだのである。

ジェリーは、マリシュを見て。

「何故、どうして今に成って返すんですか？　父は、“このナイフは無くなった”と・・・。　新しいナイフをくれました。　どうして・・どうして今頃・・」

マリシュは、顔を苦渋に染めて。

「親方は・・・私が盗んだのを知っていました。　何時か取り返しに来る・・・何時か店に来ると思い上がっていました。　ですが、一度として・・・来てはくれませんでした」

アンリは、ムカっと来た顔をそのままに。

「当たり前だっ！！！　そんな卑怯な奴に・・・なんで態々出向かなくちゃいけないんだっ！！！」

マリシュの顔が、更にギュっと歪んだ。

「・・・その・・通りだ。　親方は、ジェリーさんに包丁も・・レシピも託した。　なのに、このナイフの事を語らなかったのは・・。　私の事を軽蔑したからだろう・・・コレを持つ資格は私に無かった・・・だから返しに来ました」

ジェリー、頭を下げ続けるマリシュを見て。

「マリシュさん・・・父が死んで・・・悩んだんですね。　返す相手が消えて・・・目標が消えて・・・謝る相手が消えて・・・許される相手が・・・」

マリシュの身体の震えが、固まった様に止まる。

ジェリーは、ナイフを見て笑った。

「そのナイフは、マリシュさんに差し上げます。　私には、父のナイフが有りますから」

マリシュは、恐る恐るの面持ちでジェリーを見ると、笑顔にぶつかる。

「お嬢さん・・・しかし・・・」

「形見分けです。　閉店の会が終わったら、包丁はクベラさんとセテルさんに分けようと思ってましたから。　私には、父と母の残したレシピが在りますし。　十六の時に、父に送られた私の包丁もあります。　良い道具は、使い続けられていればいいんですよ。　錆らせるくらいなら、その方が・・・」

「お嬢さん・・・」

マリシュは、自分が張ってきた意地が全て崩れる気がした。　囚われて、悩んでいた全てが、自由になる気がする。

ジェリーは、少し困った顔で。

「ですが、手伝うと言われても・・・私の補助になりますよ。　もう、押しも押されもしない一流シェフのマリシュさんが、此処で働けばお名前に傷が・・・」

そう言われても、マリシュの顔は普段の平静に戻る。

「そんな事はありません。　親方の跡継ぎである新代のジェリーさんに従うなら。　一番弟子のクベラも、二番弟子の私も文句は有りません。　それに・・」

マリシュはウィリアムを見て。

「一人、此処に集まる料理人に負けない舌と嗅覚を持った人物も居る。　皆でやれば、明日の閉店の会は成功します。　いや・・・させます。　今一度、私も原点に帰って、親方に罪滅ぼしを・・・したいです」

ウィリアムは、秘かに買ってきた白いYシャツとズボンを見返し。

「あらま～。　スペアで買った制服のが・・・丁度ピッタリになりましたね。　もう一揃い買ってこないと」

スティールは、笑って。

「お前、用意がいいねぇ～」

ジェリーは、それに笑って。

「明日は、朝から早いですよ」

と、マリシュを見る。

マリシュの恐縮した一礼が交された。

ーーー

ウェイター役のウィリアムが。

「いらっしゃいませ」

夕方、店の中で練習が始まっていた。

「お一人様ですか、お席はカウンターと二人席からに成りますが」

「カウンターで」

クベラが客役だ。

「畏まりました。　では、空いているお好きな席にどうぞ」

笑顔・言葉・立ち回り・礼儀・・ウィリアムは、流石に彼方此方で働いて居ただけあった。　クベラもマリシュも文句が無い。　寧ろ、アンリはマリシュには無愛想、クベラには親子丸出し。

「お前なあ、ちゃんとヤレっ！！」

「フン、客の顔が悪い」

スティールとジェリーは苦笑である。　この二人も、練習に忙しい。

「スティールさん、赤い岩塩を砕いて下さい」

「了解」

「終わったら、白い丸皿を用意して下さいね」

「はいよ」

スティールは、何もかもが初めての作業で忙しい。

だが、マリシュもクベラも、見ていてスティールの要領の良さは頷ける。　言われる回数の多い物を近くにしたり。　クベラが洗い磨いた皿の動きも見ている。　直ぐ買ってきた食材と、今しがた、セテルの遣いが持ち込んだ肉と骨で料理を作るジェリーは、短時間で大粒の汗を流していた。

客の役を入れ替わりでやる中で、気付いた事は話し合う。　丸で、新しい店のオープンの前夜のようである。

ジェリーの代わりに、野菜や付け合せの下処理をするマリシュの手並みも確かだった。　動きも早く、無駄が無い。　下処理やデザートは、ジェリーはマリシュに任せる事にした。

少しでも成功に導く練習は夜まで続き。　終わって、ジェリーの疲れた身体をスティールとアンリが送る頃はもう夜。　飲食店街の酒場では、どこも客が入り最も最高潮に近づく時間だった。

厨房を掃除するマリシュとクベラ。　客席を掃除するウィリアムが手を止めて、

「そろそろ出てきたらどうですか。　さっきから、ず～っと其処に居て。　蚊に刺されてますでしょ？」

マリシュもクベラも何事かと思うと・・・。

「あ・・・」

「セーラお嬢さん・・・」

二人の料理人が、驚いて固まった。　店の入り口にセーラが立っていた。　セーラの気の強さは、幼い頃からの物だったからだ。

「どうして・・この二人が居るのよ」

セーラは、マリシュとクベラを睨む。

ウィリアムは、穏やかに。

「ジェリーさんが許したからですよ。　それ以外に、無いでしょう？」

セーラは、店の入り口でウィリアムに向かって。

「何でそこまで協力するのよ・・。　姉を・・どうする気？」

ウィリアムは、呆れた笑いを見せて。

「どうもこうも無いですよ。　セーラさんも、いい加減に決めたほうがいいですよ。　明日以降は、俺もスティールさんも居ないです。　お姉さんの事を、どうするか」

セーラは、グッと目を細めて。

「どうゆう意味よ・・・それ」

ウィリアムは、掃除の手を止めてテーブルに腰を預けて。

「いいですか。　軍医の女医さんが言った告知の意味は、あの日以降・・・昨日も今日も、ジェリーさんの身体に何時異変が起きて、事態が急変してもおかしくないと言っているんです。　つまり、何時死んでもおかしくない。　余命の宣告も出来ない程だとね・・・。　半年と云う余命宣告は、哀れみ・・・いやとても短いと云う意味を柔らかく云っただけです」

マリシュ・クベラ・セーラはギョっとした。

セーラは、店内に踏み込みウィリアムの前に来て。

「貴方っ!!　知ってて姉を動かしている訳っ?!!!　殺そうとしてるのっ?!!」

ウィリアムは、ただただ穏やかな顔で。

「いいえ、この全てをやりたいと言っているのは他ならぬジェリーさんです。　止めても、後悔と苦悩で彼女は苦しみますよ。　俺がしてるのは、薬師として。　後悔だけは、心だけは救ってやりたいのと・・・。　僅かな望みに賭けているからです」

「の・・望み?　姉が助かるとでも言うのっ?!!」

「さあ、それは解りません」

セーラは、その掴み所の無い言い方にイライラを爆発させた。

「意味が解んないのよっ！！！！！　ちゃんと説明してよっ！！！！」

涙を浮かべた赤い目を、ウィリアムに鋭く向けるセーラ。

「今まで、ほんの一握りの助かった事例があります。　感染症・・・からね」

セーラは、聞いた事も無い傷病名だ。

「なにその・・・感染症って・・・」

「ジェリーさんの腰の痛み、片目の失明、傷の直りの遅速・・。体力と免疫が著しく弱まり、この空気中にいる微弱な細菌にすら抵抗力を発揮できなくなった証です。　もう、身体中に菌の繁殖が始まっています。　身体の部分部分に、その兆候が見受けられます」

セーラは、不治の病が原因では無くなっていたのに驚いた。

「多分、事件の中で、自分に向けられた疑惑・言い訳すら聞いて貰えない中での極限の緊張・不安・絶望が引き金ですね。　しかも、汚い牢屋に放り込まれていたのですから・・。　病院でも、手術や投薬の跡に起る怖い病気です。　ジェリーさんの場合は、一時期としても持ち直しましたが・・・普通なら死んでいました。　神が与えたのか、ジェリーさんの意思がそうさせたのか解りませんが。持ち直すだけで奇跡ですよ」

セーラは、ウィリアムににじり寄って。

「助かる方法は？　・・どっ・・どうすればいいのよ・・・」

「今は、薬で免疫作用の活性化を促す物と、滋養強壮効果の薬を混ぜて飲ませてます。　後は、奇跡しかない」

マリシュは、ジェリーの命の事なだけに、直ぐに声を荒げて。

「解る様に言えっ！！！！」

ウィリアムは、店の中の全員を見回してから。

「本当に稀ですが・・・、生きる気力が、時としてその病気の進行を止める時があります。　癌に然り、死病に然り、時として神が奇跡を与えた様に・・・数年だけ進行が止まるんです。　医者の中では、“気力の奇跡”と言われています。　死ぬ前に、どうしてもと絵を描き始めたある男性は、不思議と五年も生きました。　別の女性は、服を・・・機織を孫に教えようとして三年以上生きました。　何れも、余命数ヶ月の人だった・・。　今のジェリーさんは、生きようとする気持ちに溢れている。　料理を続けようとする意志が、奇跡を起こす可能性があります。　ですから、それに賭けています」

クベラは、調理台の白い石に手を付いて。

「そんな・・・お嬢さんはそんなに・・・悪かったのか・・・。何で・・何でもっと早く理解してやれなかったんだろう・・・。ああ・・・親方・・・済まない・・・」

セーラは、裏切った二人に向かって涙を流した目で睨み。

「都合のいい言い訳しないでよっ！！！」

だが、ウィリアムは寧ろセーラに言う。

「二人を責めても、もう解決しませんよ。　ジェリーさんは、その先に向かってる。　セーラさんも、自分の中で答えは決めておくべきですね」

「どうゆう事よっ?!!　一々解らない事ばかりっ!!!!」

だが、ウィリアムの静かな言い方は変わらずに。

「閉店の会をしようが、しまいが、ジェリーさんの命は奇跡でも起きない限りは短い。　多分、一度でも急激な胸の発作が起ったら・・・死にます。　それは、今夜かもしれな。　明日かも、それともももっと以降かもしれない。　でも、遠からずやって来るべき事に、妹として向き合うのか。　拒否するのか」

「・・・・」

セーラは、蒼褪めた顔で俯き黙る。　一番避けていた事である。

ウィリアムは、引導を渡す気で。

「大丈夫、明日が成功すればジェリーさんに心残りは無くなります。　貴女が無視しても何も言わないでしょう。　ただ、それでいいのか・・。　それで心残りが貴女に残らないかは別な話です」

セーラは、泣き出してその場に崩れる。

「うぅ・・・どうして・・・どうしてアタシだけ残されるのよ・・・」

ウィリアムには、それは呆れた言葉だろう。

「逆に言うなら、残れて良かったですね」

クベラもマリシュも、その冷たい言葉に驚いた。

「おっ・・おいっ」

マリシュの声もウィリアムは無視し。

「まだ健康で、まだ生きれて、顔も容姿も悪くなくて、自由に行動出来るのに。　そしてしてるのに、勝手に一人ぼっちですか。　ジェリーさんは、まだ生きてますよ。　貴女を残して逝かなければならないお姉さんは、どれだけ悩んでるか・・。　それを知ってて、貴女は同じ時間を過ごそうとしない。　その痛みを引きずるジェリーさんを放置してる。　もし、俺やスティールさんが居なかったら？　マリシュさんやアンリさんやクベラさんが居なかったら？　お姉さんは今頃どうなっていたか。　いい加減、目を醒まして下さいよ。　お父さんとお母さんのこのお店との告別でもある閉店の会を・・・ジェリーさんが貴女を除いてやっても、本当の成功とは言えないでしょう？」

セーラは、大声を上げて泣き喚く。

見下ろすウィリアムは、虚しい顔で。

「泣きたいなら、お姉さんの前で泣けば良かったのに。　歪んだ甘えじゃなくて、本当に甘えればいいのに・・。　コレを渡しておきます」

ウィリアムは、着替えた何時ものズボンのポケットから、一折の薬を閉じた包み紙をセーラに差し出す。

目を涙でグシャグシャにするセーラは、ぐずり呻きながらその包み紙を見る。

「あああ・・な・・なに・・よおおお・・・」

「麻薬と神経鎮痛剤を合せた痛み止めですよ」

「へ・・え・・？」

セーラは、薬の成分を聞いて涙顔のままに固まる。

マリシュやクベラですら、顔が蒼褪めた。

「国のお役人から貰って作りました。　ジェリーさんの最後は、全身から破裂するような激痛が襲います。　せめて、その時は楽にしてあげないと。　苦しみ歪むお姉さんの顔を見てられますか？　これほどの薬でないと・・・抑えられない痛みなんですよ・・。　薬は、コレ一つだけです」

「あっ・ああっ・・・そんな・・・そんあに・・・姉さん・・・姉さんっ・・わあああああっ！！！！」

セーラは、完全に床に泣き崩れ伏した。

マリシュもクベラも、何も言葉が出なかった。

泣き抜いたセーラは、ぼんやり薬を受け取る。

ウィリアムは、奥のスティールと寝ている住み込みの入り口を指差し。

「ジェリーさんの希望で、貴女の分の服も買って置きました。　開店は正午。　もし、気持ちが決まったら、手伝うなら来て下さい。　俺が出来るのは此処まで・・。　後は、運命しかありません」

セーラは、生気が抜けたように頷く。　出てゆく彼女を、マリシュが送った。

クベラは、ウィリアムを見て。

「キツイ言い方するな・・」

ウィリアムは、薄く弱弱しく笑って。

「是非・・・セーラさんにも参加して欲しいんで。　ジェリーさんを助ける上でも・・駄目だったとしても・・その方がいい」

「・・・そうか・・あえて、悪者か・・」

「憎たらしく思われるのも慣れてますから・・」

クベラは、このウィリアムと云う青年が、若さに似合わない苦労をしていると解った

ーーー

店内の掃除と、下準備をする二人。　直ぐに、注文した魚屋が鮮魚を持って来たりと、早朝から忙しい。

陽が上がり働く人々が、仕事場に向かうために商業区市内に出て来ると。

「おう、朝早くからご苦労さん」

と、船員らしい男が顔を出す。

「どうも～」

スティールが言えば。

「おう、昼に顔出すから。　何か美味いもん頼むぜ」

ウィリアムは微笑み。

「是非、味は保障しますよ」

今日の“閉店の会”の噂は広まっていた。　何せ、あの事件の被害者で、助け出されたヒロインのジェリーに注目が集まっていただけに。　口コミの噂が広まっているようなのだ。

何人かの挨拶を受けている内に、ジェリーとアンリがやって来た。

「おっ、働いているなぁー。　よろしい～」

偉そうなアンリ。

「手伝え」

スティールがボヤク。

陽が高くなれば、マリシュもクベラも来た。

食材のチェックをして、ウィリアムとアンリは接客の練習をする。

セテルが時間を考えて。　肉の状態の良い物を運んでくる。

「おいおい、ひ弱の坊ちゃんがご登場じゃ～ないか」

笑うクベラ。

苦笑いのセテル。

其処に。

「クベラ、それはもう通用しないぞ。　今や、この都市一番の精肉店の主だ。　新しい保存法で、新鮮な肉を提供する異端児だぞ」

と、贔屓にするマリシュが煽てる。

「全く、修行時代のままに褒められてるみたいでなんか変だよ・・」

セテルは、兄弟子に困った笑い顔。

見ているジェリーが懐かしむ目を潤ませていた。

さて、野菜などの下準備を終えるマリシュ。　お湯を沸かして、出

汁やスープのベースの準備を終えるクベラ。　スティールと最終の打ち合わせをするジェリーは、何か安心し切った感じの顔だ。

其処に、彼女が訪れた。

「姉さん・・・」

妹の声に、カウンターの窓から見るジェリーは驚いた。　目を赤く腫らせて、少しやつれたセーラだった。

「セーラっ、どうしたのっ？」

アンリもマリシュもクベラも、セーラの登場に笑みが消える。

セーラは、ノソノソとカウンター前に来ると。

「姉さん・・・あっ・・アダシも・・手伝う・・。　ずっと・・なぁなやんでだけど・・・見えない所で姉さんが倒れるのイヤだから・・・手伝う・・・」

セーラは、ウィリアムが渡した薬が無いままで、もし姉に発作が起ったらと思うと。　手伝わずには居られなかった。

「セーラったら・・そんなに泣いて・・・。　何でお姉ちゃんの所に来ないの・・。　一人で泣いても、悲しいだけでしょ？」

優しいジェリーの言葉に、グズってセーラは頷くだけだった。

「コレで、面子が揃いましたね」

ウィリアム、スティールに小声で言う。

「お前の読み通りだな」

スティールは、呆れた。

アンリとジェリーがセーラを連れて住み込みの奥間に入って行く。

ウィリアムはスティールと一緒に、店先に立てる小さい黒板にお勧めメニューを書いて出した。

セーラが、アンリと短い丈のタイトな黒スカート、フリルの襟の白い半袖シャツを着て現れた。　覗ける生足の伸び麗しく、若々しい女性二人は容姿がいいだけに人目も動く。

「う～ん・・・見た目は中々・・・中身が気に成りますなぁ～」

と、スティール。　二人、容姿が良い分だけ本当に良く似合う。

ウィリアム、横目に。

「従業員に手を付けたら罰金でっせ」

アンリが、ギラギラと睨み。

「そこっ、何を喋っとるかっ！！！！」

スティールは、小声で。

「服の中身意外は期待出来んな・・・」

「聴こえてるんだよーーーーーーっ！！！！」

アンリが叫えた。

昼に成った。　青い快晴の空の下。　船乗り三人、労働者五人が尋ねてくる。

「もうやってるかい？」

「入っていいかい？」

ジェリーが笑顔で、

「どうぞ、いらっしゃいませっ」

と、厨房に入る。

「どうぞ、窓側の席と、奥の席がございますが・・・」

ウィリアムが、三人に近づき。

「五名様はこちらにどうぞ～」

アンリがもう一方のお客に対応した。

遂に、止まれない閉店の会が始まった・・・。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　始まる会・・・（後書き）

次号、予告。

遂に始まった“閉店の会”成功は出来るのか。　そして、ジェリーの運命は？

次号、【運命は赴くままに】おたのしみに＾＾

どうも、騎龍です＾＾

本日は、２話続けての掲載と致します＾＾。　長いので、お時間のある時にどうぞ＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

22、ジェリーの想い

「いらっしゃいませ、冷たい紅茶と熱い紅茶がサービスに成りますが？」

ウィリアムは、三人の船乗りに早速メニューを配って言う。

「三人とも冷たいの」

「はい、承りました」

すると、別の一人客がまた入り口に立っていて。

「いいですか？」

旅人風の年配男性だ。

「いらっしゃいませ～。　カウンター席と二人席とどちらに致しますか？」

セーラが、瞬時に対応する。

アンリ・ジェリー・マリシュなどが目を配る。　だが、セーラもこの道の仕事が長いのか、もう笑顔である。

客足は、一気に増した。　開店始めのお客が食べ終える間も無く、店内の九割が埋まった。　ジェリーは、ランチ用に用意した魚介スープの注文が多いのに。

「クベラさん、スープは足りますか？」

大汗のクベラは、時間差で造り置いたスープの出し汁を用意しながら。

「大丈夫ですよ。　夕方前までは持ちます」

ジェリーは、マリシュに冷たいデザートに気を配って欲しいと言う。

「あ、はい・・」

目をカウンター窓から客に向けるマリシュは、外が意外に熱いと判断した。

「スティールさん・・」

頼もうとすると、言おうとした塩と香辛料が出てくる。

「少し、勉強したぜ」

と、スティールが笑う。

「ありがとうございます」

直ぐ傍に、スティールの顔が有るのに、ジェリーはテレながら料理

に移る。

忙しい合間に姉を見るセーラは、スティールの安心を姉が受け止めているのを見た。

（やっぱり、姉さん・・・好きなんだ・・）

少し寂しくて、少し妬ける。

ウィリアムの作戦が、ジェリーの負担を軽減するの誰の目から見ても明らかだった。　身体が決して本調子では無いジェリーには、料理人として一日一人で動き回る力は無い。　だが、スティールが直ぐ横に居て、振り返って何かを取ったり、捜したりする手間を少しでも省けば。　ジェリーにはその分の余裕と時間が出来る。　腰を休める事も出来るし、忙しくパニックに成る事も少なくなるだろう。

そして、なにより。　ジェリーは、確実にスティールを好いている。　その想いや安心感は、ジェリーの支えになる筈だ。　誰よりもこの補助役はスティールでなければ成らず、スティール以外に適任者は居ない。

さて、最初のお客が。

「いや～、オヤジさんより美味しいかったぜ。　今日一日ってのが惜しいよ・・。　頑張ってな」

お金を払った後に、出て行く時に声を厨房に掛ける。

シュフ三人が見合い、微笑んだ。　嘘かもしれないが、三人にとっては何よりの言葉だ。

昼時を過ぎると、訪れる客の雰囲気が変わり家族連れが増えた。

こうなると、ウィリアムが本領の一部を発揮する。

「あ～、ネコとイヌとどっち好き？」

暇を持て余す子供が、彼方此方を見てると声掛ける。

「ネコ・・・」

「よし」

料理を運んだり、注文の前後の間に子供に安い置物を渡して話したり。　ジェリーの父親の思い出話をお客から聞いたり。　料理の由来や、様々な薀蓄を披露してお客に待ちの苦を考えさせない。

忙しさで顔の赤いセーラ、汗を流すアンリに寄って。

「なんか、彼って凄い悠々と遣ってるわよね？」

「こんな忙しいのに、信じらんないわよ～」

子供には、甘い果汁をサービスしたり。　若い女性には、笑顔と共に様々な種類の紅茶の好みを聞き出して差し出したり。　フロアに笑いが絶えず、お年寄りには逆に昔話を引き出して、お客に聞かせる話し相手にしてしまう。

セーラとアンリは、フロアの席が常に七割は埋まっている状態で、来客の緩やかな入れ替わりが途切れる事が無いのに驚いている。

父親がやっていた時は、昼下がりから酒の出る夕暮れまでは客足がグッと鈍って暇だったが。　今日は事情が違っていた。

しかも、元常連や店を知っていた人が客の半数は居て。　厨房のジェリー達や、接客をするセーラとアンリに見覚えがあり話しかけて来る。　対応と思い出話とで、頭がこんがらがりそうである。

さて、夕方を前にした頃。　うら若い女性客が三人で来て、相手をしたウィリアムに散々我儘な注文をしたりして。　ウィリアムへ帰り際に、

「おに～さんって、何処かで働いてないんですか～？」

「うんうん、また会いたい～」

「デートしてもいいよ～」

などと言われる始末。

スティールは、ワナワナして。

「あんにゃろうめ～・・・一人で目立ちよってからにぃぃぃ・・・」

ジェリー・セーラ・アンリ、苦笑いしか出やしない。

だが、ジェリーには顔色とは別に、変調が見られた。　腰を抑える仕草が・・・。

さて、夕日が落ちた。　野菜・肉・魚の追加納入が届き。　店のメニューもディナーに変わる。　お酒を出す時間に成れば。

「あ～・・済まないが」

穏やかな顔の紳士的な老夫婦がやって来る。

「はい、いらっしゃいませ」

ウィリアムが対応。

「済まないが、ワインはあるかね？」

「はい、赤・白・リキュールなどもご用意出来てます」

夫婦は微笑み合い。

「では、コースで頼みたい」

「では、お席にどうぞ」

ウィリアム、席に案内して。

「肉と魚のコースがございますが。　どちらでよろしいでしょうか？」

夫婦、旦那が肉で奥さんが魚だった。

「承知致しました。　では、食前酒からお持ちいたします」

と、言うとカウンターに向かって、ジェリーに。

「コース、肉と魚で。　量は、前菜以外はメインに向けて少量づつ抑えて下さい」

ジェリーは、ウィリアムが直ぐにワインセラーに向かって行くのを見送りながら。

「凄いですね、お客さまの姿で料理の量を指示してくるなんて・・」

もうジェリーは、腰を手摺りに預け気味。　額には汗が溢れている。

スティールは、昼からウィリアムには驚いている。　何せ子供の料理にでもこうして量を言うのだから・・。　大体、食べきる量にする作戦だった。　残せば、洗うのに大変だ。　その、指示の出し方がまた上手い。

ウィリアムは、やや高い目のワインで喉に優しい甘いワインを出して振舞う。　老夫婦の様に、小柄なお客にはグラスに少量でゆっくりと。　大人のお客には、イケる口かどうかさり気無く聞いて、呑めそうだと判断すると安めのワインを多めに注ぐ。

料理も、セーラやアンリと連携し。　前菜から残さないお客には似合った量をジェリーに伝える。

しかも・・。　ワインの味や風味に重点を置いて。　色には拘らない。　肉に白が出て驚くお客も居たが、呑んで全く美味しいのだから文句も無い。　なにより、普通ならばボトルを口を開けてしまえば、ワインは劣化が始まる。　だから、長くは保管が出来難くなる。

　ウィリアムは、その無駄を省く為に、普通ならば好きな銘柄だけを飲ませる傾向のある一般の店とは異なる遣り方で、前菜やオードブルやメインなどに合せて一・二杯を差し出す。

そして、軽く一言。

「一期一会の今日、閉店の会にご来店ありがとうございます。　ゆっくりと味わって、亡き主の味をご堪能下さい」

と。

客からは、思い出話が出たり、祈りを奉げる人が居たり、味をゆっくり味わう人が出る。　席の入れ替えが少し遅くなるが。　ジェリーにドッと注文が押し寄せない。

更に、ウィリアムは、聞いて余りアルコールが得意では無い人には、果汁と混ぜたカクテルワインを出したり、甘いリキュールの入った紅茶を振舞ったり。

その臨機応変は、ただ働いてきた者では無い。　セーラもアンリも、如何にウィリアムに無駄な手間をかけない様に動くかに徹し始めた。

さて、陽が落ち切って夜風が涼しく感じられる頃。　貴族風の胸空き・背中空きの綺麗なドレスを着て、若い気取った女性四人が入店し、ウィリアムに甘い流し目で。

「こんな場所で、中々格好イイお兄さんに出会うなんて悪く無いわね」

「ねぇ〜、仕事終わったらアタシ達と何処か行きませんこと?」

と、誘いを受ける。

ワナワナするスティールを他所に、ウィリアムは微笑み。

「すみません。　今日は、深夜まで営業致しますので、どうかこの場でお相手致します事でお付き合いと受け取って頂けると嬉しいのですが」

と、キザに返す。

「うぬぬぬ・・・」

スティールは、嫉妬の熱に顔を赤らめるが・・・。

「え～、つま～んな～い。　じゃ～、美味しいワイン頂戴よ」

「そうね、ベッタリ・・・お相手して欲しいわ」

「美味しくなかったら・・・御代は払わないわよ・・ウフフフ・・・」

と、四人は悪戯っぽくウィリアムを見上げる。

「畏まりました。　当店の最高級ワインをお持ちいたします」

と、下がって行くウィリアムは、料理をトレイに載せるセーラやアンリの居る横まで来ると・・。　不敵な笑みを見せて。

「フッ、お金が有りそうですねぇ～。　少し、ふんだくりますかぁ～。　フフッ・・フッ、フッ、フッ」

と、ワインセラーから中級の年代物で、少し高いワインを態と薀蓄

ほざいてボトルキープさせて、四人の女性に飲ませる。　更に、ワインの由来をさも歴史観溢れる様に語って、味の悪く無い二級ワインを振舞って、高級食材のフルコースを注文させていた。

マリシュが忙しい中で、

「おいおい・・・飲ませ過ぎだろう・・」

と、呆れる。

その女性四人は、然程の時間を要せずして酔い潰れ、高いお金をベロンベロンの状態で払わされてしまう。　千鳥足で待たせた馬車に連れられたその姿を見送るウィリアムは、微笑む顔を悪魔に変えて。

「フッフッフッ、イイ～カモですなぁ～」

と、両手をメキメキ動かして言う。

セーラとアンリは、胡散臭い悪魔を見てる様で呆れてしまった。

スティールは、ジェリーの手伝いをしながらにその光景を見て。

「アイツめ・・どんだけだよ・・」

と、言ってから、ジェリーを気遣う。　夕方から、腰を摩る回数が多くなる。　今では、一料理事に足の行き場を変え、腰を摩っているからだ。

「ジェリー、無理するな。　立てないなら、俺が支えてやるから。キツイなら言え」

「はい・・大丈夫です・・」

明らかに、疲労で動きが鈍って来ていた。

だが、ウィリアムがお客に色々話しかけて、待ち時間の経過を考えさせない様に動いていた。　マリシュも、カウンター越しに元の常連と話してジェリーを庇う。

さて、歓楽街の酒場では、お客が最も入る頃合に入る。

店に、一人の身なりの良くない初老の男性が、ヨレヨレのアーメットハットを被って入店してきた。　ウィリアムが、見て行こうとすると、ジェリーがウィリアムを見て。　セーラも近寄り、言う。

「常連さんよ・・・お金・・・持ってない人だわ・・」

と。　ジェリー達の父親は、こうゆう人にでも暖かく料理を振舞ったそうな。

「解りました」

ウィリアムは、微笑んで対応に向かった。

「お客様、お一人でございますか？」

すると、男は済まなそうにしながら、表面の破けた上着のポケットから埃の付いた小銭を皺枯れた手で取り出す。

「あああ・・こっ・コレしかない・・・。　す・・少しでいいから、

何か食べさせてくれませんか・・。　ダンナの・・・知り合いなんです・・」

ウィリアムは、優しくお金を仕舞わせて。

「はい、故人のお知り合いですね。　では、あちらにご案内いたします」

店の奥の、人目に付かない壁際に案内して。

「コースで宜しいですか？」

男性は、自分の見てくれを恐縮してか。

「あ・・・高いのは・・・」

「いえいえ、ちゃんと見合う物はお出し致します。　今日は、特別な日。　偲ぶお心が、何よりのお礼です」

男性は、ウィリアムの心遣いに目頭が熱く成るのを覚え。

「スイマセン・・・お任せします」

「畏まりました」

ウィリアムは、ジェリーに先ほどの高級フルコースを頼ませた女性達へ出した前菜の食材の残りや、肉の切り分けた残りを合せてコースにしようとジェリーに提案。　ワインも、ボトルキープで飲み切らずに放置の物を選んで、前菜やメインに合せる。

これは本来、お客に対してコース料理の過程で、好き嫌いで食べられない料理への挿げ替えの遣り方だ。　だが、その挿げ替えの品を纏めてコースにしてしまったのだ。　最後、マリシュの持ってきた高級ヴィンテージワインを少量差し出した。

「これは、サービスです。　故人の欲しがっていたワインだとか・・・。　皆さんで、飲んで偲んでください」

男性は、こんなまともな料理とワインを味わえるとは思っても居なかった。　一人、静かに咽び泣いて、ウィリアムにお礼と身銭全てを置いて行った。

見ていたアンリは、ウィリアムが外で見送る時に顔を出して。

「やるわね・・・アンタ」

ウィリアムは、笑っていた。

ジェリーは、その様子に満足だった。

「ありがとう・・・ウィリアムさん・・・」

料理をしながら、そう呟く。

スティールは、笑顔で。

「俺の弟子だからな。　さ、もう一踏ん張りだぞ」

ジェリーは、疲労の色濃い顔を微笑ませた。

ーーー

だが、ウィリアムは臆する様子も無く相手をし。　窓側の二人席に案内した。

「コースで宜しいですか？　本日は、お肉の料理がお勧めですが・・・」

「おお、腹が空いていたので、それを頼もうか」

「はい、ワインはボトルキープで？　それとも、セレクトコールで？」

すると、紳士はウィリアムを見て。

「此方で決める指示もいいが・・。　今夜は閉店の会・・・料理に合うワインをお任せいたします」

その申し出に、ウィリアムは、ゆっくりと微笑み。

「畏まりました」

そして、ジェリーにコースの料理の注文を細かく言ったウィリアムは、無名の等級外れのワインを持ち出して振舞った。

「・・・美味しい・・・コレは・・・随分甘いワインだな・・」

見上げてくる紳士に、ウィリアムは。

「はい、スタムスト自治国の北で取れるアイスワインです。　格付けされないワインですが、とても甘くてリキュールのようです。

長く御仕事をした後の疲れた身体には、宜しい一杯かと・・・」

紳士は、少し驚いた顔でウィリアムを見上げて。

「良く仕事をして来たと解るな」

「いえいえ、このお時間に一人で来る貴族の方は少し珍しいですし・・・。　ブラウスの袖にインクが・・・。　襟の縁が薄っすらと色づいてますし、スカーフネクタイが、二・三度締め直された様な・・・。　かなり、長くその格好で居たのではと思いまして」

紳士は、ウィリアムを見上げて笑う。

「いやいや、朝から仕事に追われてなぁ～。　心配り、ありがとう」

「いえ、そろそろ前菜からお出し致しますね」

「うん」

海老と茹でた野菜にワイン酢のソースをあしらった前菜に、ウィリアムは爽やかな白を選び、次々と料理とワインを紳士を含めて振舞う。

セーラとアンリが交代で休憩する中でも、ウィリアムは動く。

紳士が驚いたのは、肉の塩味の強い料理に、白ワインが出てきた事だ。　だが、長い樽の熟成と、皮を特別な方法で醗酵させて漬け込むワインは、赤ワインに負けないコクがあり。　肉の脂を払拭する力を持っていた。

最後、リキュールのアイスティー割りと、フルーツの三段ムースを食べる紳士は満足していた。

「いや～いやいや、今日一日だけとは・・・惜しい、実に惜しい。是非、マリシュ殿の店でも働きに来て欲しい。　君なら、一生付き合えるワインテーラーだ」

紳士は、ウィリアムと握手してそう云うと。　ジェリーに向いて。

「お父さんの頃は、料理だけは一級品だと思って寄っていたが。今日は全てにおいて最高だよ。　もし、別に店を構えるなら教えて下さいな。　立ち寄らせて貰いますよ」

ジェリーは一礼しながら、どこかで父が見ていてくれると思うと泣きそうに成る。

（お父さん、なんとか頑張れそうよ・・・私・・）

そして・・・閉店が近づいた頃である。

店内のお客が、七人ほどに成った頃だ。

「いらっしゃいませ」

ウィリアムが、二人客を見て一礼する。

だが・・・スティールは、汗を滲ませる中で客を見てギョットした。

「いっ!!　まっ・マジ・・・かよ」

ジェリーは、少しハア・ハア・・・と息を荒くし始めながら、入って来たお客二人を見ると。

「常連さん・・ですよ」

と、スティールを見る。

「はぁ～、あっ・そう・・・」

なんと、訪れたのはテトロザとリオン王子だ。　二人、格好が礼服で軍服では無いが。　ウィリアムとスティールが見間違える訳も無い。

ウィリアムは、二人をやや広めのテーブル席に案内して。

「メニューです」

と、笑う。

リオンは、差し出されたメニューを開きながら。

「様に成ってるなぁ。　こんな事も得意か？」

テトロザは、料理はリオンと同じものを。　ワインは、ウィリアムに任せる。

リオンは、コースで選び。　テトロザにメインを魚で、自分はメインを肉でのコース料理を注文する。

「では、食前酒からお持ちいたします」

リオンとテトロザは、働くスティールを見て微笑んだり。　顔を赤らめて働くジェリーを見守っていたり。

「では、食前酒でございます」

丸で、白いブドウの絞り汁の様なワインだった。

「ふむ・・」

「ほう・・・」

見たことの無いワインだ。　しかし、一口含めば・・。

「美味いな・・・」

リオンが驚き。

テトロザは、ウィリアムに。

「コレは・・・何処の銘柄だ?」

「宗教国クルスラーゲの若いワインです。　醸造に使うブドウがとても甘いので、フルーツワインと云われる程に果実そのままの甘味が楽しめるワインです。　飲み易いですしね、地下で冷えてますから、丁度宜しいかと」

リオンは、ウィリアムを苦笑混じりで見上げ、

「何でも出来るなぁぁ。　君は」

「お褒め、ありがとうございます。　では、前菜から・・」

ウィリアムは、テトロザの料理は焼き目や火の通りはしっかりと注文しておいた。　リオンのは、ジェリーの思うままに工夫して欲しいと頼んだ。

テトロザ、食を進める過程で。

「うん・・・よろしいな。　シッカリ火が通っている・・・」

リオンが、笑って。

「最近、テトロザは生に近いのは嫌うな～」

「はい、昔からきっちり火が通ってる物が普通でしたから。　最近の創作料理は、ちと生っぽくて・・」

コレは、ウィリアムが前にテトロザと事件の翌朝に食事していた時にも出た話で覚えていた。

そして、リオンに思うままに創作させたのは、ジェリーの女性らしさの篭った料理を出したかった。　何故なら・・・。

「美味しいな・・宮廷の料理やシェフの作る料理に無い・・。　なんと言うか、家庭的な味だ・・・」

リオンが、しみじみと云う。　彼は母親の料理を食べた事が無い。　生まれが生まれなだけに、料理人が作るのが家庭料理だ。　兵士が時々話す家庭の味と云う表現が、実は全く解らないリオン。　だ

から、お嫁さんは料理の出来る女性がいいらしい・・。

ウィリアム、これも雑談で聞いて覚えていた。

だが・・・この時。　ジェリーの腰の痛みが強さを増していた。

（痛い・・・も・・もう少し・・・もう少しなのに・・・）

弊店間際の今。　作業の残りは、メインを作り切るのみ・・・。

なのに、身体の下半身の神経が感覚を失い始め、腰には痛みが走っていた。

「姉さん?」

セーラが、リオンとテトロザ以外で残る最後のお客から勘定を貰って送り出した時。　店内に戻って姉を見て異変に気付いた。

肉と魚の二種類のメインがそれぞれ焼き・蒸しで出来上がる時。

ジェリーの身体が床に崩れた。

「!!!」

マリシュ・セーラ・ウィリアムがギョットして走り寄ろうとする。

ジェリーも、最後の最後で駄目になる・・・と思ったのだが・・・。

マリシュ・ウィリアム、そして一歩踏み出したセーラは、ジェリーの身体が元の高さに戻るのを見た。

「駄目なら支えてやるって言っただろ？　さ、最後の仕上げだ」

ジェリーの耳元で、スティールの優しい声が響いた。

「・・・」

マリシュも、セーラも、スティールがジェリーの腰を抱えて抱き上げたのを見た。

「？」

何か在ったのかと、見るテトロザとリオンの視界を塞いだウィリアムは、笑って。

「そろそろ、メインですね。　ワインは、高いのお出し致しますよ」

セーラも、カウンター前に走り寄って、客の二人から姉を見えなくして。

「姉さんっ、あと少しよっ。　お父さんもお母さんも・・・見てるから」

マリシュが、皿を並べる。

スティールに手伝われ、ジェリーは最後のメインを作り終えた。

リオンに作ったのは、母親の作っていた郷土料理で、家庭での肉料理をアレンジしたもの。

セーラが皿をカウンターで受け取り、二人に運ぶ中で。　ジェリーは、蒼褪めた震える唇でマリシュに。

「で・でざ・・と・・お願い・・し・します・・・」

マリシュが、気負う顔で頷き、支度に掛かる。

スティールは、ジェリーをゆっくりと床に下ろす。

「で・・できた・・・すっ・・スティール・・・さん・・わわ・・・わたし・・・」

スティールは、客席に自分が背を向けて隠しながら、ジェリーを抱きしめた。

「よくやった・・・よくやったジェリー。　後は・・・明日からゆっくり生きよう。　セーラと・・・二人でな」

「は・・はい・・・」

客が居るので声を張れないが、二人抱き合って声を押し殺して言う。

ジェリーの目は涙で溢れ、頬を煌く糸が線に成る。　スティールに爪が食い込むかと思うぐらいに抱きついたジェリーは、少しづつ震えが止まって行った・・・。

ウィリアムは、リオンに出された肉料理を見て。

「リオン様、こちらの肉料理は、首都の方で家庭の料理として出される物のアレンジです。　肉も、向こうから取り寄せました。　ごゆるりと、ご堪能下さい」

と、二人に高い赤ワインを出した。

「ほう・・・」

リオンは、肉に集中。

テトロザは、魚なのに赤と驚く。

しかし・・。

「ふむ・・。　コクが少なく、飲みやすい。　味わいは、しっかりしているのに・・・。　魚に合う・・・」

テトロザ、ワインの味わいの広さに感心した。

リオンは、簡単なステーキなのだが、確かに料理店の味には無い何かを感じる。　何処か、家の中で味わう美味しい料理の様な感じがした。　冒険者として、偶に田舎で出会える味だ。

リオンとテトロザは食事を終えて、勘定を払って店を出ると。

「ウィリアム、ワインまで精通してるとはな。　驚いた」

と、言うリオンに、テトロザも同調して。

「全く持って、呆れた人物ですわい」

見送りに出たウィリアムは、脇目で姉に走り寄って行くセーラを店内に見ながら。

「ま・・・経験ですかね～」

リオンは、店を見て。

「ウィリアム。　シュフの彼女は・・・健康に成ったら俺の専属シェフにでも出来ないか？　毎日じゃなくていいが・・・あの味は忘れられなくなりそうだ」

ウィリアムは、少し淋しく笑い。

「健康になったら・・・ご相談されてみては？」

リオンは、強引な事だと頷き。

「ああ・・・また来て見よう・・・。　お見舞いでな・・」

テトロザも、頷く。

「はい・・王子」

二人、夜の街灯の光から遠ざかって消えてゆく。

開店中の看板札を外して戻ったウィリアムは、スティールに抱き抱えられたジェリーを見て。

「おめでとうございます。　終わりましたよ」

息が荒いジェリーは、苦しさで歪む笑みで頷く。

ウィリアムは、皆がジェリーを心配するを見て。

「終りの宴は後日にしましょう。　とにかく、今はジェリーさんを休ませないと」

スティールは、ジェリーを住み込みの奥間に運びながら。

「セーラ・アンリ、手伝ってくれ」

見送るマリシュとクベラに、ウィリアムは近寄り。

「彼女の今日の姿、良く目に焼き付けて下さいね。　お二人は、最高の師匠を二回も持てた。　幸せな話ですよ」

「ああ・・・ホントだぜ・・」

クベラは、もう成功の喜びとジェリーの心配で涙目だ。

マリシュは、ジェリーの行った先を見ながらウィリアムに。

「まだ・・大丈夫だよな・・。　発作が来た訳では無いだろう?」

確かめる様に聞く。

「今の所は・・。　ですが、今日から数日は絶対安静です・・・」

ウィリアムは、真剣な顔をしてジェリーを見ないで言った・・・。

ーーー

「涙の告別・・・確かにそうかもな・・・」

と、マリシュもワインの別名を呟いて受け取った。

このワインは、優秀な生産者が全滅した畑のブドウを惜しんで自殺した。　その子供が、長く苦難の末に栽培した新品種のワインに付けた名前なのである。　ワインが瓶詰めされる日に父親が死んで、その悲しみと命日を刻む意味で付けたとか・・。

料理人二人は、離れてスティールに合流するウィリアムを見送る。

「終わったな・・・・マリシュ」

クベラが感慨深く言えば。

「いや、始まりだ。　俺も、お前も・・・ジェリーさんやセーラさんも・・・新しい生き方をしないとな・・」

「全くだ・・・どうだ。　明日も休むなら、一緒に飲むか？」

クベラが、ボトルを持ち上げてマリシュを見る。

「フッ、兄弟子の作る肴に駄目出ししてさしあげようか」

「口が悪いね、お前は・・」

「昔から変わらないさ」

二人は、近くのクベラの店に向かう。

さて。　背負われているジェリーは、スティールの背中に凭れていた・・。　自分に、こんなに優しい男性は、父親以外ではスティールが初めてである。

（温かい・・・一生に・・一度だけね・・・）

ジェリーは、スティールとの恋は叶わぬ恋と思っていた。　冒険者のスティールが、自分の為に冒険者を辞める訳も無い。　でも、死ぬまでに何度か、時より立ち寄ってくれるなら・・。　いや、それも贅沢だ。　誰か一人を愛して、一緒に居られるのは贅沢だ。　心に残れるだけで、忘れられない女に成れるだけで・・。　ジェリーには、幸せだったのかもしれない。

横では、セーラとアンリが嬉しそうに今日を振り返ってる。　父親の死に合わせて、セーラとアンリは険悪に成った。　クベラが独立した事も理由だし、やや自己中心的なセーラとアンリは、過去に凄い喧嘩したのだから・・。

それが、今は笑って話し合っている。

マリシュとクベラも、そして自分と・・・父親の死でバラけた人々の絆が、今は一つに纏まっている。　思い描いた夢が・・・現実に成っていた。　全て、もう駄目だと思っていた事が・・・。

スティールが、ウィリアムと話しながら自分に何か語り掛けてくる全てが、今のジェリーには幸せに思える。

（神様・・・私の寿命を延ばしたのは・・・これを見せる為でしょうか。　だとしたら・・・嬉し過ぎです・・・。　ありがとう・・

ご・・）

もう少しで、家に着く瞬間だった。　ジェリーの心臓が不気味な違和感を覚える。　全身に、ゾワゾワとした虫が這い回る様な痺れを覚えた。

「う〝ぐぅ・・・・」

ギュっとスティールの服の肩辺りを握ったジェリー。

「ん？　ジェリーっ？！」

スティールが声を上げ、セーラとウィリアムがジェリーに寄った。

「姉さんっ？！！」

ウィリアムは、ジェリーの鼻から血が出たのを見て顔を顰めた。

「不味いっ、発作だっ！！！」

スティールは一気に走り出す。　ウィリアムは先んじて走り、ジェリーの家のドアを蹴り破った。

「早く中へっ！！！」

スティールは、暗い中で走りこみ、テーブルを押し退けて二階へ急ぐ。

「い〝ぐぅぅぅ・・・」

必死に堪えるジェリーは、スティールに二階の寝室に連れ込まれた。

ウィリアムは、熾きの炭から藁に火をつけて、アンリにランプを点ける様に言って渡してから、スティールの後を追うセーラに。

「あの薬っ！！！！」

と、声を飛ばしてから水を汲む。

「い〝い〝・・あ”ぐぐぐぐぅ・・・」

暗い部屋のベットに寝かせたジェリーは、突如胸を掻き毟るように苦しむ。　そして、何かに必死で堪える様に、息も絶え絶えにもがく。

「あああ・・・ねえさ・ん・・」

薬の紙包みを握るセーラは、姉の苦しむ声や姿に動揺してしまう。

ウィリアムが、アンリから渡されたランプを持って二階にやって来た。　明るくなった二階のベットの上で、壮絶に苦しむジェリーが居る。　ウィリアムはセーラから薬を毟り取るとスティールに。

「薬です、飲ませてっ！！」

スティールは、自分に渡す意味を知り。

「何てこったよっ！！！！！　ちきしょうめっ！！！！」

と、薬を口に水と含んでジェリーに口移しで強引に飲ませた。

アンリが、二階の入り口で。

「医者をっ」

ウィリアムは、絶望の顔色で。

「無理だっ」

セーラ・アンリは、これ以上無いぐらいに目を開いた。

スティールが強引に飲ませた薬が、徐々に効き始めたのか。　胸を押さえて苦しんでいたジェリーは、徐々に気を失って眠る。

「ウィリアム・・・」

スティールが、若き薬師を振り返って見ると。

「・・・次の発作が・・・最後の合図です。　今夜が、峠ですよ・・・。　あの薬ですら、効くのに時間が掛かってる・・。　他の薬が効きません」

悔しい顔で言うウィリアム。

「うそっ・・」

セーラが、口を手で押さえて泣き崩れた。

アンリは、セーラに寄って背中を抱き。　ウィリアムを見上げて。

「そんなに悪かったの？　他に・・・」

ウィリアムは首を左右に振って、下に降りた。　一階に降りたウィリアムは、何時に無い力の抜けた様子で机を元に戻し、椅子に座った。

「・・・・」

両手で、顔を覆う。

程なくして、スティールも下りて来た。

「ウィリアム・・・」

名を呼ばれて手を下ろしたウィリアムは、赤い目をスティールに向けて。

「口を良く洗って下さい。　あの薬は、健康な人には必要の無い物ですから」

「おう。　解った」

スティールは、ウィリアムが此処まで思い詰めているのに、言葉も無い。　口を洗って来たスティールに、ウィリアムは。

「すいません・・・やはり、無理でした・・」

と。

「バカ言うな・・。　お前が居なければ、ジェリーは事件の犯人で

死んでた。　お前が居なければ、ジェリーが閉店の会を出来たか？
お前が居ないなら、俺はジェリーにも逢ってなかったかもしれない・・。　お前が悔やむな・・悪いのは頼んだ俺だ」

「すいません・・」

「あやまんな・・」

スティールは、繰り返した。

ウィリアムも話さなく為った。

スティールは、ウィリアムが前に言っていた意味が漸く腑に落ちた。

（寄せて消えた波は、前の波には戻れない・・・か。　ジェリーの運命は、事件の時に決まってたのかよ・・・。　運命って奴は、どんだけだよっ！！）

二人、どのくらい黙っていたか解らない。　だた、遠くで聴こえていた酒場の喧騒が、もう気付けば静かになっていた。

だが、突然二階が騒がしくなり。

「スティールさんっ！！！」

動揺したセーラの声がする。

「来た、二回目っ」

ウィリアムが言うと。

「クソッ！！」

スティールが上に走った。

「あああああ・・うぐぐう・・・す・・す・・て・・・」

苦しむジェリーが、二階の入り口にスティールの姿を見て弱弱しい手を伸ばす。

「ジェリーっ、大丈夫かっ?!!」

スティールは、ジェリーに走り寄ってその手を握る。　見つめる目は瞳孔が開き掛かり、死人の目のようで・・輝きは失われていた。

「ああ・・さっさ・・き・・・き・・す・・」

スティールが必死になって聞き取ろうとしている様子を見たセーラは、其処に居た溜まれずに下に降りた。

「・・・」

ウィリアムが、座って俯いてる。

セーラは、ボロボロを涙を流して、押し殺した声で。

「貴方・・こうなるって・・予測してたでしょ?」

ウィリアムは、静かな言葉で。

「・・・はい、一つの・・可能性としては・・」

セーラは、泣き顔を歪めて、押し殺した声のままに。

「私は・・わたしは・・・こんな・・未来は欲しくなかった・・・。
阻止出来たなら・・なんでしてくれないのよっ・・・。　貴方なら・・出来たかも知れないじゃない・・」

セーラは、スティールと姉の会話を邪魔したくなかった。　だが、心の奥底から湧き上がる怒りと憎悪は、到底我慢できない。

「すみません・・」

ウィリアムが、謝るその姿にセーラは。

「出て行って・・・貴方の顔は二度と見たくないっ・・・死神っ」

と、吐き捨てる。

ウィリアムは、その場を立ち上がり。

「はい。　でも、それより上に・・。　もう、その時です」

と、外に向けて歩き出す。

ウィリアムが、玄関のドアを開くとき。

「セーラっ、来てくれっ!!」

スティールの声がする。

ウィリアムは、外に出てドアを閉める時、階段を駆け上がるセーラの足音を聞いた。　そして、涼やかな風の吹く深夜の街に消えようと海岸通りに出た時だ。　街灯も消えた闇の中に、急激な広がりで現れる殺気を感じる。　それも、一人二人の者では無かった。

「誰ですか？　無粋な殺気ですね」

東に向かう道に、人影が数人。　気配を感じるに、人数は多い。

「ヘッヘッヘッ・・・見つかっちまったかぁ～」

「お前、女連れてたってなぁ～」

その声に、ウィリアムは聞き覚えが有った。

「ああ・・・何時だか俺とスティールさんに絡んできた方達ですか・・」

そう、初めてジェリーに出会う前に、暗黒街で絡まれたガラの悪い連中の様だ。

すると、聞き慣れぬ声で。

「おめえ、俺達のアニキを役人に突き出した冒険者だな・・」

「アニキの仇討ちだ・・。　ついでに、一緒だった女は貰うぜ。ぁ？」

ウィリアムは、消えかかる街灯の下で、赤く腫らせた目を冷めた目

に変えながら。

「丁度いい・・・死神が疼いていたんですよ。　お相手しましょうか、ホローの手先だったと知っては・・放って置けませんからね」

その時、

「姉さんッ！！　いやあああああーーーーっ！！！」

セーラの喚き声が篭った感じで聴こえてくる。

「なんだあ？」

悪党の一人がそう言う時、ウィリアムの鋭い眼光の残光だけが点滅する様に残り。　姿は消えたのである・・・。

ーーーー

スティールは、ウィリアムを捜していた。

さっき、クベラとマリシュがウィリアムの計らいでジェリーの家に来た。　だが、そのウィリアムの様子が明らかに変だったと云うので心配だった。　しかも、海岸通りに出てみれば、路上に血の跡が無数に散乱していて、心配が増す。

間隔を開けて、路上に残る血の跡を頼りに、閉店の会を行った店の前に来てみれば・・・。

「あっ・・ウィリアムっ！！！！」

ジェリーの両親が奇跡的に出逢った公園の所に、ウィリアムの座っている背中が見える。　走り寄って、正面から見ると・・・。

「おい・・・お前・・血が着いてるじゃないか・・・どうした？」

ウィリアムの顔には、飛沫した血の小さな点が付着し、拳には血糊が着いている。

「・・・スティールさん・・」

弱弱しく見上げるウィリアムは、説明する。

どうやら、昨夜の帰り際。　ジェリーを負ぶっているみんなをあの悪党の一人が見つけたらしい。　しかもその見た悪党は、ゴロツキでも有りながらホローの養っていた強盗団の下っ端でもあった。　仲間に伝えて、強盗団の逃げ回っている残りの連中にも集めて、十三人ばかりの人手を掻き集めた。

「じゃ～、お前は・・セーラに言われて出た所で、襲いに来た奴等と鉢合わせしたって訳か？」

「ええ・・・一応・・役人に引き渡しましたよ」

たった一人で、十三人を相手である。　ウィリアムも、恐らくは手加減はしていないだろう。　スティールは、ウィリアムの安全が解ってホッとした。　ウィリアムの脇のベンチに座る。

ウィリアムは、スティールに呟く様に幽かな声で。

「ジェリーさん・・・」

と、聞けば。

スティールは頷いて。

「ああ・・あの後。　お前が奴等と遣り合ってる頃に・・・。　薬の御蔭で、痛みは少なかったようだ・・・。　嬉しかったってさ、店の事でバラバラに為った皆の心が、最後に纏まって。　オヤジさんに、最高の土産話出来たようだ・・・」

「すみません・・・、奇跡は・・起きませんでした」

と、ウィリアムは前のめりに。

スティールは、ウィリアムの背中に手を置いて。

「バカ、奇跡は起ってたんだ・・。　二度もな」

「・・・」

ウィリアム、下から見上げる様にスティールを見る。

スティールも、ウィリアムに視線を合わせて。

「お前が、事件から救った瞬間・・死ぬはずだったジェリーは助かって一時の猶予を得た。　そして、命尽きる前に閉店の会を開けて・・・仲違いしたはずの絆を取り戻した。　二回、二回だぞ？　三回も望むのは・・・少し欲張り過ぎさ」

「・・・・」

ウィリアムは、無言で顔を下に向ける。

スティールは、涙の枯れた顔を前向きにして。

「ジェリーの死に顔見てみろ、天使の様に笑ってる・・。　あの苦しみの中で、幸せでなくて誰が笑えるよ。　お前に、ジェリーは感謝以外の何も思っちゃいないさ・・。　俺が、保障してやるよ」

ウィリアムは、静かに。

「ありがとうございます」

スティール、ウィリアムの姿を見て。

「お前も、人だな・・。　化け物じゃなくて安心したぜ」

二人・・・そのまま黙った。

陽が上がる。　早朝に変わり、朝の屋台を出店するために商業区に出て行く人々が見える。

更に陽が上がり、労働者や商店の下働きの人達が出勤して行く頃。

「そう言えば・・スティールさん」

「ん？」

ウィリアムは、何時の間にか身体を起こしていて。

「ジェリーさんのお葬式・・・」

「ああ・・。　アンリが、今頃知り合いの葬儀屋を当ってる頃だろうな・・。　俺も、一応は顔出すって・・・言って置いた」

「じゃあ・・・それなりの格好しないと・・・」

「お前は？」

ウィリアムは、首を左右に。

「セーラさんが納得しませんよ。　待ってます」

「そうか・・・」

スティールは、どうしていいか解らず。　ウィリアムに任せる。

ウィリアムは、顔と手を洗って血を流すと。　開店を待って近くの

服屋に入る。　事情を話せば、老いた店主は昨日に店に来た人だったので、服を貸してくれると云うのだ。

ウィリアムは、スティールが着替える間に花屋に赴き、一輪の花を買ってきた。　赤い小さな花の一輪である。

黒い礼服に着替えたスティールは、元がいいだけに貴族の様に見える。

「似合ってますね」

笑うウィリアム。

「何を着ても似合うさ。　俺様だぞ」

スティールも笑う。

「はい、お花」

スティール、受け取って。

「お前に抜かりは無いからな。　一々、花の詮索なんかしないぜ」

「・・・はい」

ウィリアムの返事を聞いて、スティールは離れた。

・・・。

昼前、閉店の会を行った店の前で、ジェリーの葬式が行われた。

雇われた僧侶が、鎮魂歌を厳かに歌う中、親族や知人が集まってジェリーの棺お悔やみを言う・・・。　昨日、お客で来てくれた人も何人も参列したし。　話に驚いて、セテルや商店の店主も参列した。

よく晴れた、北風の涼しい初夏の昼だった。

“スティールさん・・・死ぬ前に、キスまで出来ました。　ありがとう、忘れないで下さい”

死ぬ間際に言われたジェリーの言葉に、スティールは最後にもう一度口付けを交した。

涙を流して逝くジェリーの死に顔が、今も棺に眠っている。　穏やかで、信じられないほどに髪の毛が艶やかだった。

ーーー

「何でも、隣の東国へ移動したそうだ」

「ほう、マーケットハーナスに・・。　ま、実力のあるウィリアム殿ですからな。　恐らくは、向こうでも活躍為さるでしょうな」

「そうだな・・・」

リオンには、ジェリーの死が結構応えている。　ジェリーの父親は、王子と知っていても差別しない男性だった。　ジェリーの料理は、初めて料理店で女性の母性に近い温もりを味わう料理だった。

テトロザは、沈んだリオンに。

「所で、王子」

「ん？」

「ウィリアム殿、何やらロレンツ殿にお願いしたとか・・」

「ああ。　ホローの一件及び、島の方での合同捜査で人身売買のルートが解ったら教えて欲しいと。　何でも、知人の子供が二十年以上前に攫われて売られたままらしい。　だが、その組織ルートは数年前に影と消えたとか・・。　ロレンツも、探す気満々だった・・。　自分の知り合いまで、そのルートで売られたらしいからな・・。　我が国は、犯罪の宝庫だよ・・」

「いえ、何処も似たようなものです。　裏側に回れば、人の多い都市は・・・」

「欲望も多い・・・か」

「はい」

「善良な、毎日をコツコツ生きる人にはいい迷惑だな、テトロザ」

「ですな」

だが、テトロザは言わなかった事が一つ有る。　ウィリアムが、ジェリーの死んだ夜に連行して来た悪党の半分が、なんと精神異常を起こして発狂していたのだ。　内二人は、完全に呆けて精神が死滅していた。　涎を垂れ流す肉人形だった・・・。

ｓｅｃｏｎｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ２　最終話、運命は赴くままに・・・（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアムのセカンドも終わりました＾＾；　長かった＾＾；

さて、先週ですが・・・ポリア編のＰＣの原稿データを消しました：＞：　手違いで、廃棄までして気付いて死にました：＞＋

いま、Ｋ編が途中まで進んでいるので、どちらが先に掲載に成るか解りません＾＾；

すみません；人；

なお、ポリア編とＫ特別編をお送りした後は、新キャラでもあり、一昔前の有名二剣士の片方、エルオレウの孫の登場と成り、初めてしっかりと表現される精霊遣いも出ます＾＾

一番賑やかなチームに成りますので、お楽しみに＾＾

では、次の作品は掲載を持ってお送りします＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編　セカンド　1

ポリア特別編：その時は此処から始まる

1：着いて来たアホンダラ～

「ふぁ～」

大きな欠伸している女性が居る。　朝靄の中、街道沿いに設けられた共同夜営所。　レンガ造りの壁が街道に背を向けて在るだけだ。　屋根の部分は、枯れ草を細木の草葺き屋根。　部屋の様だが、四方の北側の壁は、壁が無い。

ポリアは、一番先に起きて朝の光を浴びている。

（今日には着くかな）

今、チーム揃ってスタムスト自治国に向かうべく旅している。　仕事を探してだが、渡り歩いて経験を積みたい為でもある。

白銀の髪を束ねていないポリア。　足の膝まで伸びる髪は、緩やかな風に揺れて太陽の光を浴びていた。　美しい容姿だ。　肉体の引き締まり方も美の象徴たるラインが流れる。

ポリアが髪を束ね、鎧などを纏う頃。　仲間の皆は起きていた。

大柄な体格で大剣を扱う屈強な戦士ゲイラー。　その横に居る白いローブを纏う少女の様な女性は、システィアナ。　慈愛の女神“フィリアーナ”の刺繍を背中に背負う。

「ゲイラ～さん。　顔にムシムシが付いてますよ。　取ってあげますね～」

愛らしきシスティアナに目の前を塞がれて顔と顔が間近に。

「・・・・」

筋骨隆々の悪党でもビビりそうな容姿のゲイラーだが・・・。　顔を赤くして鼻の下を伸ばして情けない姿である。

「あ～あ・・・ヘンタイ顔だよ」

呆れてる剣士ダグラスと、口の利けない格闘家のヘルダーは、情けない顔のゲイラーを見て苦笑し合う。　ダグラスは、ポリアよりも剣の腕はやや上と云った処の遣い手であり。　ヘルダーは、素早い身のこなしと、見た目以上に殺傷能力の高い戦扇子（バトルファン）で、接近戦を得意とする。　ポリアも、ヘルダーの武術には一目・二目も置いている。

さて、一番奥のスペースで寝ていた美女も起きている。　黒い髪は緩やかなウェーブを画いて身体に纏わる。　黒の肩空きのドレスの様な服にして、突き出た胸。　スリットから覗ける艶やかな肢体。

顔も、色香溢れる美女だ。　ポリアが“美人・麗人”であるなら、この女性には“美女・艶やか・魅惑”と云う言葉が似合う。　白い

ステッキを脇に置く美女の名前はマルヴェリータ。

「ふあぁぁ～・・・・」

マルヴェリータの隣で、男が人一倍の大欠伸を。

「良く寝てましたね」

マルヴェリータが笑うと。

「ああ・・・なんか良く眠れるんだ・・」

と、前髪の長い男性は、優しそうな男前である。

ポリアは、そんな男とマルヴェリータの背を向けて拳をプルプルと振るわせる。

（なんで・・・なんでアンタまで来てンのよぉーーっ！）

マルヴェリーラの横で起きた男の名前は、ジョイス。　ホーチト王国の宮廷魔術師総師団長と云う肩書きを持った男だ。　魔想魔術の遣い手で、幻惑魔術に掛けては世界一とも呼び声高き魔術師なのだが・・・。

「あ～、腹減った」

マルヴェリータ・システィアナなどチームの面子に混じって、チームの一員に成ってないのにデカイ顔で仲間の様に付いて来たのだ。

正直、本人はスタムスト自治国に用が在るらしいのだが。　傍目から見るに、暇で付いて来たとしか思えない姿である。　とにかく、

マルヴェリータも同じ魔想魔術師なだけに、気が合うらしく。　カップルの様な感じである。

ポリアは、どっかり座って黙って食べていると。

マルヴェリータが、ジョイスに。

「ジョイス様、今日にはスタムスト自治国の首都に着くと思いますが。　一体、どうされるおつもりですか？」

ジョイスは、暇そうな顔で。

「そうだね～。　まずは、向こうの国兵魔術師軍団の総軍団長エクレアに挨拶するよ。　それから、テレイズ外相とも謁見しないとね」

「お忙しく成られますのね」

マルヴェリータの少しトーンの落ちた声に、ジョイスは顔を上げて。

「二日・三日は忙しいな。　でも、居なくなったりはしないよ。後で、また合流するさ」

二人だけなら、恋人同士のよう。

ポリアは、不機嫌を全開にしてパンを齧りながら。

（おめぇは・・・何でず～っと一緒なんじゃーーーーっ！！！！！　仕事行ったままけえってくんなっ！！！！）

最近、ジョイスの存在に辟易しているポリアは、この偉大なる魔術

師が要らない存在に思えて成らない。　確かに、ジョイスの同行は知識的にはいい相談相手になりそうだが。　ジョイスとポリア達ではレベルが違う。　しっかり地面に足をつけて行こうと思っていたポリアには、ジョイスは有り難い迷惑な人物でしかない。

さて、ジョイスを連れて、一行は一路北へ伸びる街道を歩き出した。
もう、国の領域はスタムスト自治国内である。

周りの景観も、ホーチト王国とは違い。　森は見当たらず、草原ばかりが広がる。

スタムスト自治国。　今からたった百五十年かそこら前まで激しい内戦状態に在った国。　国土面積はホーチト王国の一・四倍に当たり。　内戦状態の頃は八つの州に分かれて、貴族・盗賊・軍人が絡み合い。　血みどろの戦争状態であったとか・・・。

だが、今の国の南東に当たる州から出た賢者スタムストが、国の統合を呼びかけた。　国民は戦いに疲れ果てていたので、スタムストに自然と人気・注目が集まる。　それを良しとしない他の州が戦力を結集して、一番面積の大きいスタムストの率いる州を攻めた。
州連合軍である。

だが、国を統一したいと願うスタムストの州が率いる軍は、少数ながら精鋭揃いであり。　一進一退の戦いが多勢と無勢ながら間で起こった。

そして、山賊や盗賊を抱えた州連合軍が、隣国のフラストマド大王国の国境を侵した際に、フラストマドの副総司令レインナークレスフォルと云う男が討伐作戦と称して軍を動かす。　その当時の、世界最強軍師と謳われたレインナーだが。　実は、スタムストの居る

州から生まれた人物であり、スタムストの嘗ての弟子の子供にあたる。

精鋭のスタムスト軍と、天才軍師レインナーの軍は連携結集して、僅か2年全ての州軍を撃破してしまった。

この時、元より各州軍の圧政に苦しめられていた国民達は喜んだ。
だが、レインナーの妻で、“黒いベールのセレナ”と呼ばれる女性は、敵味方関係なく怪我人を救って聖母とか聖女と呼ばれた。
自身の強欲に溺れる者以外、助けられた敵の軍人達がレイスナーに多く投降したのだ。

そして、各州で民を苦しめた者達の処罰・国の法律、国土整備が終わると。　全権の統治権はスタムストに委ねられた。　国の名前を投票で選ぶ時、もう没したスタムストの偉大なる博愛精神を崇拝して、あえてスタムスト自治国とした。　国民の為に国を統一したスタムストに対しての敬意からである。

今、スタムスト自治国は唯一の国民主権の国である。　王制でない国は他にもあるが、国民の投票のみで統治首領が選ばれる唯一の国であった。　世界で、貴族の居ない唯一の国なのだ。

2：スタムスト自治国の首都にと～ちゃくン（ジョイスの語り）

昼過ぎ、スタムスト自治国の南の玄関口で首都のウォルムにやって来た。

「うひゃ～、何この壁・・・」

ポリアが見上げて驚くのは、都市に入る時に潜る城塞壁だ。　見上げる様に高く詰まれた巨大レンガに、今やびっしりと蔦が絡んで緑の壁に成っている。　周りは全て草原で、木が見えない。

街道が都市内に引き込まれる城門前。　立ち止まったチーム一向の脇を馬車が通ったり、別の冒険者が行過ぎる。

ジョイスも、壁を見上げて。

「内戦時の壁らしいね。　今や平和になったけど、１５０年前までは内戦状態だったんだもの。　これくらいの城壁も仕方ないさ」

マルヴェリータは、説明してくれるジョイスを見て。

「魔法とかの防御壁ですか？」

「いやぁ、投石器からだよ。　戦争技術の進歩で、火薬を封じた石を投げる戦術が生まれた頃さ。　家一軒を軽く粉微塵にする岩の中に、火薬と油を色々と詰めて投石する。　硬い所に落ちたら、ドカ～ン。　落ちた衝撃で火薬が発火し、岩が割れると詰められた油が燃えて辺りに火の膜が飛び散る」

酷い兵器の話に、システィアナは顔を歪めて。

「熱い熱いのキライです～。　人と人が戦っても良い事なんかな～にもありません」

横のゲイラーも、真顔で。

「その通り、人は皆お友達」

と、胸を張れば。

「おともだち～」

と、システィアナも大の字で胸を張る。

ポリアは、最近益々システィアナの色に染まりつつあるゲイラーをポカ～ンと見て。

（言ってる事は・・・正しいんだけどさぁ～・・。　こう・・大人らしい・・・ねぇ）

ジョイスは、城壁の一部の割れた大レンガを指差して。

「みんな、支配者階級の誰かがこの国全部を統一して、我が物にしようとして。　ホラ、アレだけの破壊力を生む兵器を生み出したのさ。　ま、支配者は更に力を、統治の為に望む。　恐らく、これからも兵器の革命は続いてゆくだろうね」

ダグラスは、細めた眼でのっぺりとその場所を見上げて。

「普通の暮らししてる人や俺等は、そんなモン求めちゃいないがね。
魔法や腰の武器だって扱うのに本気を要求されるのに。　兵器なんて持ったら、どうなるんだよ」

さて。　歩いて城壁を潜った頃にポリアは、街に入って直ぐに斡旋所に直行しようと言い出す。

「え？　もう請けるの？」

ジョイスが、驚く。

ポリアは、目を細めて。　漆喰の様な泥土壁の民家が点在する長閑な風景の城塞内で。

「あのねぇぇ・・、遊びや観光で来てるんじゃないのっ。　アタシがリーダーなんだから、文句あるの？」

「いえええええ・・・」

急に小さくなるジョイス。　最近は、完全にポリアに負けている。
もうポリアは・・・壁を破っていた。　ジョイスの頭を叩く事に全く抵抗は無い。　時折見せるポリアのスブリ（素振り）は、ジョイスを恐怖のどん底に叩き落す。

辺りを見回すゲイラーは、長閑な風景で井戸で人が水を汲んでいたり。　犬と子供の兄妹が走り回ってる様子を見て。

「とにかく、行って仕事を見てみようぜ。　いい加減、リーダーと行った後の時間が空き過ぎてるし、なんにもしてないと身体が鈍る」

ダグラス・ゲイラー・ヘルダーは、Kをリーダーと云う。　だが、ポリアはそれを嫌と思わない。　普通なら、リーダーが二人居る様で嫌だろうが。　ポリア自身、Kが未だにリーダーの様な気がしている。

さて。　首都ウォルム・フォートレットは、二重の城壁を持つ事で有名だ。　この、潜って来た大レンガの巨大な城壁が“外の壁”と呼ばれ、賢者スタムストの伯父が作り上げた物。　首都近郊に住む全ての民を守る為に設けた言われる城塞で。　首都の中心部から十数キロ離れた此処まで離して作ったのは、民家一つも燃やしたくないと云う願いから。

昼前に首都の“外の壁”に入ったポリア達は、歩いて中心部まで向かう。　もっとも一日が長い夏至が間近で、夕日までがゆっくりと流れる。

スタムスト自治国は、鉄鋼業も農業も盛んで。　理由には、広大な自然や草原が多く、山の恵みのお陰で川も多いし。　山の岩場には、鉱山が開かれ豊富な鉱物資源が採掘されるからだ。

そして、広大な平原も有するこの“外の壁”の内側は、農家・酪農家・畜産・果樹農家などを営み広く斜めに広がって行く。　変わって、首都近くにやって来ると、製鉄工場や鉄鋼技術の職人の家が多い。　土壁の高く大きい工場からは、毎日煙が上がっている。　職人の家も、大小数千棟は存在しているだろう。

正しく、スタムスと自治国の内情をそのまま写し見る事が出来るのだ。

「遠くに大きい工場あるわ。　ホラ、あの丘の上」

周りを見回すポリアが、珍しげに指を指す。

「あ～、なんか懐かしいな・・・」

応えるジョイスは、遠くを見て呟いた。

「はぁ？」

ポリアは、勝手に懐かしむジョイスを見る。

「な～つかし～」

システィアナが、ジョイスの横で胸を張り続く。

マルヴェリータが、面倒なのでシスティアナの口を塞ぐ。

（きゃわいい～・・・）

赤い顔のゲイラー。　モガモガもがくシスティアナすら可愛く見えるらしい。　・・・ビョ～キだ。

ポリアを見たジョイスは、工場を広がる民家の職人工房の先に顔の向きを変えながら。

「僕の母親は、此処の出身だ。　ホーチト国の父と商業の流通で知り合ったらしい」

「へぇ～」

ポリアは、鉄の匂い・煙の匂いが漂う周りを見ながら。

「本当に、この辺ですか？」

「え？」

ジョイスがポリアに振り返ると。

「あ～・・・この辺って、此処」

と、職人の家と工房が合わさった家々を指す。

「ああ・・・そうゆう事か。　うん、勘当されたみたいだけど、この辺だね」

ダグラスが脇に来て。

「何か、あったんスか？」

ジョイスは、思いを巡らす様に微笑み。

「ま～柵（しがらみ）かな～。　あははは」

横に、システィアナが来て。

「あはははは～」

ポリアは、はぐらしたジョイスにそれ以上は聞かず。

「もう夕方だし、斡旋所行くの明日にしよっか。　城壁から首都心部って、以外に遠い～」

ヘルダーも、同意の頷きを見せる。

ポリアは、ヘルダーに今度は向くと。

「確か、ヘルダーも此処の国の出身だっけ？」

頷くヘルダー、身振り手振りで現す。

ジョイスは、それを見て。

「此処から、北東に数日行った農業の町だってさ」

ポリアは、故郷を思い笑って。

「そのうち、行ってみる？」

するとヘルダーは、腰のお金の入った袋を見せてから合掌する。

「そっか、お金を置いてきたいんだね。　じゃ、もう一稼ぎ二稼ぎガンバロ」

理解を得てヘルダーは、ポリアに何度も頷いて合掌。

ポリアは、Ｋの代わりに受け取ったお金の一部を、あの時のメンバー皆に分配してある。　恐らく、ヘルダーとて困らぬお金は有る。

だが、やはり地元なら仕事の一つ二つこなして、チームの名前を挙げて家族に会いたい心情は誰にでも有るもの。　ヘルダーは、優れた格闘家。　箔を付けて家族に会わせたい。

寡黙で無表情なヘルダーが、ポリアを一緒になってから大分に表情が豊かに成った。

旅を共にしているジョイスは、ポリアのコミニュケーション能力の進歩を見てる。

（リーダーの言う通りだ。　ポリアさんは人を差別しない・・・、貴族なのにねぇ～珍しい）

一時は、冒険者として名を馳せたジョイス。　冒険の中、今までどれだけの貴族の横暴を見て来たか・・・。　ポリアは、理想に近い貴族だろう。　ただ・・・、一点の難点は。

（オバカチャンだけど・・・）

途端ポリアは、ピクっとジョイスを見る。

「何？」

「うぃ～うぃ～・・」

何故か気付かれたジョイスは、額に冷や汗を流して首を左右に。

前を向いて歩き出すポリアは、目を細めて首筋を摩りながら。

「な～んか今・・・嫌な気配したわ」

ポリアから離れたいジョイスは、ススススっとマルヴェリータを見て。

（す・・・鋭いッスよっ！　リーダに似てきたぁ～～～～）

さて。　ヘルダーと肩を並べて歩き出すポリア。　彼に、故郷のことを色々と尋ねる。　ヘルダーの家は、広い果樹園を営んでるらしい。　だが、去年は酷い凶作で、スタムスト自治国とその周りの国でも、冷害の被害が多かったとか。　生活には困らないが、両親に薬代を置いていきたいと。　ヘルダーは、実は長男だが、口が利けずに周りに迷惑を掛けると若くしてこの都心に出てきては、冒険者をして武術を覚えたらしい。

「偉い・・・凄い尊敬」

ポリアは、目を潤ませて聞いていた。

いや、世間では、手足が不自由だの口や目が不自由だと差別もするし、家に居るのも大変な事だ。

現に。　ホーチト王国にて、ジョイスと居た時に魔術師団の新参の魔法遣いが、ヘルダーが口が利けないと聞いて。　せせら笑い顔で蔑む言い方をした。

直後に、ポリアとジョイスにコテンパテンに言われて泣かされていたのは、当然の報い。

しかしヘルダー自身、こんなに居やすいチームも初めてらしい。　若い頃は、差別と偏見に晒されて何度もチームから捨てられたり、報酬の分け前を誤魔化されたりした様だ。　だが、それでもヘルダーは性根を曲げては居ない。　ポリアには、其処が一番の感心だった。

さて、工房区を過ぎると、黒い石の七・八メートルほどの高さをし

た城壁が見える。　道の先、城門前には、黒い胸当てに槍を持つ兵が左右に控え。　馬車や通行する人を監視している。

ゲイラーは、道なりに先を見て。

「あの門の先が首都心部か・・・」

ヘルダーが頷く。

門を潜れば・・・。　ポリアは見たことの無い景色に。

「ひえええええ～～～～・・・」

水車が動く水路と、乱立した屋敷など建物ばかりが広がっている。
　路面はレンガ、緑は屋敷の敷地内以外には見えず、大小のレンガ屋敷・石造り屋敷が立ち並ぶ。　各屋敷に配分される水路は、区画正しく。　水車の軸には、鉄が使われいたり、屋根が鉄鋼の波打つ物だったり・・。　色も様々で、今までに見る街並みとは、何かが明らかに違う。

街並みを見るジョイスは、屋敷が立ち並ぶ道を歩きながら。

「いや～・・・何時来ても硬い街だな～」

ポリアは、かなり変わった大きな屋敷を見て。

「貴族の屋敷みたい・・・。　この国に貴族は居ないって聞いたけど・・・はぁ？」

すると、ジョイスが

「ポリア、この家々は違う。　此処は、政府の建てた宿舎。　要職に就いた官僚や大臣達に宛がわれる家。　個人所有の財産じゃ～ないよ」

「へぇ～」

話しに加わるダグラスが、ジェイスが良く知ってると思い。

「流石、あのリーダーと一緒に冒険した人ッスね」

Kの名前が出るとジョイスは、俄に顎に指を添えて瞑目し。

「まあ、ね。　フッ・・・」

と、カッコ付けた所で、緩やかに曲がる道の先に有った橋の欄干に激突。

「うごおぉぉ・・・」

顔と股間を抑えて、悶える。

救い様の無い呆れにポリアは、道行く行商人や、冒険者などに見られつつ恥ずかしそうに。

「アンタさ、ケイみたくカッコ付かないんだから。　もう少し、ガンバんなよ・・・」

「あい・・・」

マルヴェリータに助けられるジョイスは、本気で同意した様子である。

無視したダグラスは、何処の屋敷にも水路が引かれている方が気に為り。

「この水路の水って、飲み水なんすかね。　なんか、汚ね～ケド」

ジョイスは、顔半分を抑えて、涙目見せながら。

「ふがうよ（ちがうよ）」

「え？」

「各屋敷にふ（ひ）かれてる水は、中の動力になってふ（る）」

（聞き取りにくい・・・）

振り向いたダグラスは、その説明される意味も解らず聞き取り難く、ジョイスを見て顔を引き攣らせる。

ジョイスは、顔を摩って調子を戻すと。

「あのね。　屋敷の中には石臼の自動でつく機械や、自動で動くセンプウキなる風を送る機械などがあるんだ。　その動力だよ」

ヘルダー以外、全員が意味不明。

するとヘルダーが、幅広い人口河川が流れる縁（へり）に建つ館を見て、ポリアの肩を叩く。

「ん？　何、ヘルダー」

ヘルダーは、館に指を指す。　橋の上から屋敷の離れの石造倉庫が開き放しで覗ける。　床に大きな石の皿の様な受け場が設けられて、天井から伸びた太い木の棒が石の受け場に落ちたり、上に持ち上がったり。

ヘルダーは、ポリアが屋敷を見るのに合わせて、左右の拳と掌を何度も打ち合わせる。

ポリアも、コレで解った。

「ああ、小麦とかを粉にするのに人手じゃなくて、水路で動く水車の力で杵を動かして自動で遣ってるのね？」

ヘルダーは、ガクガク頷く。　更に、何やらジェスチャーを。

ポリアは、ヘルダーの様子を見て。

「え？　大きな・・羽を・・回して。　うんうん、風・・・。　ああ、送風する機械があるのね。　この水車の力で動く」

ヘルダー更に、頷く。

ジョイスより解り易いヘルダーの説明を見ていたゲイラーは、顔を半分抑えているジョイスを横目に。

「負けてるな・・・偉大な魔術師様・・・」

「シクシク・・・・」

敗北感に打ちのめされるジョイスは、マルヴェリータに背中を抱かれて泣いている。

ダグラスは、屋敷を見て。

「なんだ、設備が充実してんな～。　結局、貴族と変わらない感じだが」

すると、ジョイスは身を起こして。

「いや、市民権は住人全てにあり。　統括大統領の選出の元、大臣や官僚には全ての誰もが成れると法に規定がある。　貴族で無ければ成らないなどの規制は無い・・・大体、貴族居ねぇ～し」

「ほおぉ～」

半分以上解ってないダグラスは、解ったフリの頷き。

理解するまで納得しない性格のポリアは、橋を越えて市内に歩き出し。

「統括大統領とは、何ですか？」

ジョイスは、一緒に歩き出しながら。

「スタムスト自治国は、８つの州と、この南方都市部周辺の行政府から成る９の区分けした地方の集合体でしてね～。　農業・商業・州の自治は、基本個別の州を治める地方長官が行い。　工業・警備・

法律などは、中央政府が統治する分割制度なんだ。　地方の運営は、統括大統領が地方で候補を立てた中から選任した人が州長官と成り、首都で任命式を受けてから赴き自治する。　しかし、犯罪や法律の取り決め、警察・防衛などの軍、鉄鋼業・鉱石発掘などは、国民の投票で選ばれた統括大統領と呼ばれる責任者が運営をするって訳だよ～ん」

「ひぇ～、普通の人でも成れるんですか？」

「うんだ～。　今、統括大統領を遣っているイクラホマ氏は、地方部族の長から勉強して州長官に成って、一昨年に大統領に成った一般じ～ん」

急に元気に為るジョイスに、ゲイラーは顔を顰めて。

「悪い奴が成ったらど～するんだ？」

ジョイスは、道を歩く巡回兵の美人女性や、華やかなドレスを着こなす綺麗なお嬢さんを見送りながら。

「ありえませ～ん」

イルガは、不思議で。

「何故ですか？」

マルヴェリータにわき腹を突かれながら、仰け反るジョイスは。

「それが～あああ、変えられない・・あへ～。　法律に、兵と大統領や長官は罪人以外の国民並びに一般人など、旅人も～おおお含め

て傷つけられないと・・・あるのです。　しかも、国民の総意四割の人が、その大統領の政治が気に食わなければ、選挙と云う投票のやり直しが出来るのですたいぃ・・・」

と、マルヴェリータに何度も頭を下げるジョイス。

目を細めたマルヴェリータは、腰に手を当て頷く。

ゲイラーは、アホを見る目で。

「なるほど、駄目な奴は辞めさせられるし。　兵隊は外敵、役人は罪人以外には手を挙げられないのか」

「その通り。　各村や町には、暴動を起こさずに取り纏めを行う為に配置された相談役が、なんとま～大統領の権力外。　つまりは、地元住民で選ばれた人が成る。　その相談役は、住民の総意８割の署名が無いと辞めさせられない。　行政や法律はキチンとした集約型だけど、弾劾は何時でも出来る整備も整っておると云う訳ですよ。　その為に、何処の家でも親から子供に選挙の仕組みや、人を選び見守る心構えを伝えられて習慣化しているわけですな」

ジョイスは、痛む両脇腹を擦りながら説明した。

ポリアは、その徹底された規約が凄いと思う。

「大したものね～。　王様なんて要らないじゃん」

公爵家の父親に言ったら、どんな顔されるか。

さて、ポリア一行は、夕暮れに成って都心部の中央大噴水公園にや

って来た。　星型を象った巨大な噴水公園は、大きな花形のオイルランプに囲まれてライトアップされている。　公園を囲む円形の隔たりの石壁の外には、石材建築のモダンな数階建ての建物が、公園を囲むように建てられ。　公園を中心に８方にレンガ畳の道が伸びる。

「うわぁ・・・綺麗ね」

ポリアは、ライトアップされた幾重にも噴出す噴水公園を見回して言う。

マルヴェリータも、うっとりとして。

「デートの最後にはいい場所ね・・・語り合うには持って来いだわ・・・」

その横で・・・。

「お水さんが、噴出してますぅ～。　ぶしゅ～ぶしゅ～、お～もしろ～い」

ポリアとマルヴェリータは、雰囲気ぶち壊しモードのシスティアナに、コメカミがピクピク動く。

ジョイスは、人通りの在る公園内の１０個ある花型のランプを見ながら。

「明日は、此処にモグリッパだなぁ～」

それを聞いたダグラスは、遂にジョイスが狂ったかと思いながら。

イルガに、ボソッと。

「明日・・・潜るらしいぞ」

イルガも、怪訝な顔で。

「服でも洗うんじゃろうか・・・」

地獄耳とは良く言ったものだが。　やはり、自分の悪口は何故か聞こえるもので。　ジョイスは、その二人をキィっと見て。

「其処っ、変な事言わないでよっ!!!　大統領官邸及び、大臣・軍部機関はこの真下の地下にあるんだからさっ!!!」

ダグラスは、ポカ～ンとして。

「あ・そう」

イルガは、別に横を向いて。

「そう説明すれば良かろうに・・・」

ジョイスは、もうチーム内で権威失墜してるのにまた涙。

（シクシク・・・チームなのに・・・これでも仕事してる王国魔術師師団の総長なのに・・・シクシク・・・）

お前・・・何時、ポリアのチームに入ったさ?

さて、街中でも、都心から北西方面に移動するポリア。　不思議な

のが、“コクーン”と呼ばれる集合住宅群。　賃貸で住める個室・ルームのアパートの建物は、纏まって整然と並ばず、皆ズレズレで、小道の先が行き止まりの様に見える。

「なぁ～んか、不気味」

帰宅している若いカップルや、中年の剣を腰に佩びた役人風の男性などが通りを歩いている。　一応、道が続いているのか、行き止まりの様に見える道の先には街灯の明かりが見えた。

一行は、宿屋街のある北西に向かいながら。　道案内をするジョイスが。

「スタムスト自治国は、冬から春先に掛けて、北部は豪雪地帯、南部は強風地帯に分けられて寒いんだ。　リーダーに教わった話だと。　この地域は広大な盆地で、悪魔の山も含めて３０００から１００００メートル級の山々が囲んでるらしい。　冬になると、山を駆け抜ける乾燥した風が、この盆地中心の場所まで強く吹き付けるらしいからね。　母さんも、昔はよく言ってた。　此処は、寒いって」

マルヴェリータは、ジョイスを見て。

「それが・・・この建物の造りと関係が？」

「ああ・・うん。　整然と作ると、建物の間の道が風の通り道になって、強風を更に強い強風へとしまうんだそうな。　だから、火事と強風を嫌って、都心部は全て石造りで、ずらして建物を建てて、風を分散させる仕組みだってさ」

理解したポリアは、腕組みしてしみじみと。

「流石、ケイ。　良く知ってるわ」

ゲイラーも、頷く。

システィアナも、頷き。

「ケイさんすご～い」

ジョイスは、もはや流す涙も枯れ果てドヨドヨし始める。

「い～んだ・・・ど～せ僕なんか・・・ゴミ屋敷の主だし～。　見合い破談数がもう少しで３００超えるしィ～」

苦笑のマルヴェリータは、もはやフォローのしようが見えなくなる。

だが、其処も過ぎて宿屋街に出れば、何処の街でも見かける宿屋街。

乱立する大小の宿屋からは、明かりが篭れて酒気が漂う。　ジョイスの話では、半数以上の宿屋で食事と入浴が可能だとか。

広い敷地面積の宿ほど、温泉を引き込んでいる可能性が強いと聞いて。　ポリアは、行き交う冒険者や旅人などの様子を見ながら、建物内に入ってゆく客を見回す。　丁度、客が動き回る夜の入り。

少し宿屋街の外れで赤い色をした5階建ての建物に入った。　1階部分が外見からしてやけに広い。

「いらっしゃいませ」

中年女性が、黒い上下の制服を着て挨拶をしてくれる。

「すいません、食事とお風呂はありますか?」

恭しい礼をして、中年女性は笑顔で応対してくれる。

「はい、温泉でございます。　今からですと、お食事も間に合いますよ」

ポリア、8人分を申し出た。　男が2人部屋と3人部屋。　女性は、そのまま3人部屋となる。

ジョイスとダグラスが2人部屋に、残りは3人部屋に向かった。

1階の奥に風呂が、手前の左がレストラン。　バイキングレストランで、定額料金で食べ放題。

「いや～お腹減った」

皆に混じって我先にとレストランルームに入ったジョイスは、Kとは違って人一倍食べていた。

3：別の地での仕事探し

朝、宿を出て外に出た一行。　曇り空で、蒸し暑い朝だった。

「あ～、昨日の夜は夜中に風が強かった割りに、今日は暑いな～」

起き抜けに外に連れ出された様なジョイスは、ネグセ全開で何処かの派手な芸術家の様だ。

チームに溶け込んでるつもりのジョイスに、ポリアは眼を細めてニタニタ笑いながら。

「会談するって事は、公務だわね。　部外者は立ち入らないから、頑張ってね～」

ジョイスは、ジト目で男に捨てられた女性の様な仕草に変わり。

「冷たいっ。　・・・もう・・・只の仲じゃ無いのにさ」

ボキボキ・・ボキボキ・・。　ポリアは、突如として拳を鳴らす。

「やっほ～コウムーコウムーっ！！」

ポリアが拳を鳴らしたので、ジョイスは必死に張り切って中央公園にスキップして行く。

「あの無駄飯喰らいが・・・」

ポリアは、目を細めて去って行くジョイスを見送り。　一同を促して、外回りの通りを通って、商業の中心となる北区に向かった。

高級官僚などが住む昨日の街並みとは違って、緑の公園が有って。

子供が遊んでいたりしている。　朝の遅い時間帯だから、もう屋台などが引き上げる準備をしていた。

ゲイラーとシスティアナを横にしてポリア。　公園の先を抜けた所に、馬車などが行き交うアーチ状の橋の下、何やら冒険者が話し合って降る坂が見えた。　橋の下に潜ってゆく形だ。

ゲイラーは、眼についた光景を指差し。

「ポリア、アレ。　屋台を引く人や、冒険者とか・・若い住人とか向かって行くぜ。　何があるんだろう」

「あ、ホントだ。　行って見ようか」

人が消えて行く先を知りたくて、公園を抜け、グッと急な斜面の所までやって来る。　石で出来た斜面が、斜めに左右に壁の様に伸びている。　何故か風が少し壁に沿って吹いているのを感じる。　斜面の所々にある１０段も無い階段を上がれば・・・。

「あら、市内を流れる川だわ・・・」

川の脇に沿って伸びる幅広い歩道に出る。　馬車が通り擦れ違える幅、人の通る幅も十分に確保した河川敷通りである。

さて、人が降りていたのはこの上では無く。　土手の一部に開いた地下通路だ。　川の下を潜るように、向こうの対岸へ抜ける地下通路が有った。

「どうせ向こうに行くから、下を通って行って見ようっか」

ポリア達が地下通路を行くと、途中で露天商などが店を開く自由市が開かれている。　トンネル内に入れられたランプが等間隔で掛け

られてる。　鈍く黄色い明かりの下、アクセサリーや民芸品を売っていたり、スカーフや小物を売っていたり。　流石に食べ物は無いが。　安い剣や短剣（ダガー）を売っていたり。

ダグラスは、薄暗い中で見てるからか。　なんと言うか、買う気がしない。

「普通、自由市ってさ。　公園とか、もっと明るい場所でやるだろ？　なんか辛気臭いな」

マルヴェリータもそう思う。

すると、ポリアが。

「多分、土地代じゃない？」

イルガも、頷く。

「恐らく」

システィアナは、トコトコとポリアを前に覗いて。

「ポリちゃんしってるの～？」

「ま～ね。　商業区で商売する為には、大抵何処でも年に一回、国に税金として地代と営業権の継続の為にお金を払う必要が有るの。　露天商でも、自由市場を使うのにお金必要だしね。　“自由”なんて、半分嘘っぱちよ・・。　ささやかに商売してるんだから、金なんか一々取るなっつ～の。　売り上げなんて、そんなに無いんだから。　只でさえ、住んでるだけでさ～永住権とか、市民権とか、

所有権だとか名前の異なる税金取ってるんだからさ」

ヘルダーは、ポリアにしては随分と詳しく話すのに首を傾げ。

ゲイラーが、ヘルダーと同意の疑問を投げる。

「ポリア、随分と詳しいな」

「い〝っ、あ・・・まああ・・まぁ～ね」

ポリアは、問われてドキっとした。　実家の家は、財務大臣を多く排出した家柄で、今の父の従兄妹が財務・商業大臣をやっている。
　まだ若い子供の頃の書生・学生時代に少し聞いて教わっていたのだ。

（墓穴じゃぁ・・・）

イルガは、黙った。

さて。　地下通路を抜けて、外に出れば活気溢れる商業区だ。　鉄鋼業が世界屈指のスタムスト自治国だ。　馬車に鎧などが詰まれていたり、武器や防具の店を多く見かける。

その商業区のど真ん中、中央噴水公園並みの大きさで、透明な深い池がある。　石の棒が池全体から水面に無数突き出し、苔むしてる。
　その池の中心に、円形で、窓を沢山持った数階の塔が有った。

「ほ～、あれか」

ヘルダーが指差すので、イルガが頷く。

だが、誰の目にも映る塔は、細長いタイプではなく。　土手の広い円形の建物の様なのだ。　外から見て、下手な大型飲食店より大きいかもしれない。

周囲3箇所から架かる橋で、其処まで行く。

「すげ、魚がフツ～に飛び上がってるし」

ダグラスは、塔を囲む池の水面を飛び跳ねる鯉を見て言えば。　ヘルダーが、来た道の方を指差しジェスチャー。

ポリアは、そのジェスチャーを読み取り。

「向こうの川と、地下で繋がってるって」

頷くヘルダー。

四方に架かる橋を渡る冒険者の数はまばらだった。

建物の東側に、大きなガラス窓の填まった木のドアが両開きの組み合わせで3つ並ぶ。　開いて中に入れば・・・。

「まぁ・・広い」

マルヴェリータは、システィアナと見合って微笑む。

広い円形のフロアが広がる。　乳白色の床、窓側にはテーブルと椅子が何組も並び。　中央には、丸い円形カウンターが。　マルタンの街でハゲ頭の主人が居たカウンターは、2人3人入れば窮屈そう

に見えたが。　此処のカウンターは、２０人は入れそうな広い円形カウンターだ。

カウンター内には、女性と見受けれる黒いドレスの金髪女性が、立ち振る舞いを優雅に別の冒険者の話を聞いている。

「見ろよ・・、カウンターの上。　丸い掲示板に、指名手配が出てるぜ」

ダグラスが、女性の上の掲示板に貼られた張り紙を指差す。

ゲイラーは、店内を見回し。

「なんか、マルタンより規模がデカイな」

ポリアも同意の頷きで。

「そうね。　でも、フラストマドよりマシだわ」

ダグラスは、ポリアの言葉に呆れを感じて。　横目に。

「何故に？」

ポリアは、呆れた顔を見せ。

「だって、キャバレーパブの地下１階よ。　向こう」

皆、ポカ～ンと。

先頭に為ってポリアは、主の居るカウンターに移動した。　近づけ

ば、カウンターに居るのは中年で少し垂れ目がちの優しそうな女性だ。

「あら、新入りさん？」

ポリアは、後ろの仲間を見てから。

「マルタンから移動してきました。　初めて来たので、新入りと同じですね」

カウンターに前のめりで凭れて居た女性が、前のめりの身体を起こして。

「チームのお名前は？」

「ホール・グラスです。　駆け出しの仕事とか、何処で見れば？」

女性は、腕組みしてポリアを凝視する。

ポリアの脇に立ったマルヴェリータは、ピンクのマニュキュアを塗った女性主人に。

「何か？」

女性は、首を左右に。

「いえ、話に聞いてたホール・グラスって、最近登り調子のチームって聞いたけど・・。　駆け出しだったのね」

ポリアは、マルヴェリータと笑った。

「なんか、凄い噂の広がね。　ポリア」

「ケイ居ないし、困っちゃうわ」

女性、チームの男の方も見ながら後ろに指差し。

「カウンター裏の掲示板を見て。　今、冒険者不足で仕事がゴロゴロしてるわ」

ポリアは、女性主に一礼してから仲間を見て。

「だって、いこ」

ゲイラーを見たダグラスは、間の抜けた言い方で。

「掛け出しから遣るってさ～」

ゲイラーは、別に気にする顔でもなく。

「何だっていいさ。　システィと居れれば・・・」

と、システィアナとヘルダーを伴い、ポリアの後に。

イルガは、ダグラスを見て。

「盲目は、話し相手に成らんの～」

「マジっすわ」

さて。　カウンターの裏側に回れば、若い女の子がお客相手の様に冒険者へ水を配っている。　青い服のスカートの女の子が、やや年上１４・５歳に見え。　白いオーバーオールの半ズボンを穿いた女の子は、１２・３歳の少女と思える。

冒険者の数は、サッと見積もって４０人どうか。　チームにしたら１０チーム居るかどうかも解らない。

奥に大きな掲示板が、３つ。　三面鏡の様に成っている。

ヘルダーは、ポリアの袖を引いて。

「ん？」

右の掲示板を指差し、遠くを見たり下を見たりして何かを探す仕草を。

「物探し？」

頷くヘルダーは、次に真ん中を指差して、拳を構える。

「戦う？」

最後に、左の掲示板を見て、掃除のジェスチャーを。

「ああ、雑用ね」

ポリアは、ヘルダーを見て笑う。

「説明上手」

ヘルダーは、新しく移った土地ではまず主人に面通しするのは当たり前だから、その挨拶が済むまで黙っていたのである。

さて。　チームリーダーらしき何人かの冒険者が、掲示板を見ている。　もっぱら、見ているのは戦う方。　だが、ポリアは戦う方に行かずに、他の掲示板へ。　Kと冒険して、戦うだけが冒険じゃないとも解ったし。　こうゆう別の仕事にも危険はおおいに潜んでいると解ったのである。

「・・・う～ん」

人捜しに、失くし物探し、薬草採取に、研究の為の生物捕獲依頼など、様々な捜索依頼が来ている。

（うぅ・・・ケイじゃ無いからなぁ～。　薬草採取とかは難しそうだわね・・・）

でも、幾つか在る依頼内容を良く読むと・・・、その一つに。

“北の山間部に、一緒に薬草採取に行って下さい。　早く採取して薬を作らないと、納期に間に合いません。　モンスターが出なければ、こんな依頼はしないのですが・・・”

「コレ・・・コレ請けたい」

ポリアは、近くに居た若い青の服を着た女の子に話し掛ける。　トレイを持った女の子は、ポリアの見ている依頼の張り紙を見て。

「依頼の紙の左隅に番号が見えませんか？　その番号を、カウンタ

ーで言ってください。　紙は、剥がしていいですよ」

ゲイラーに水を配る若い女の子は、背中まで流れる黒髪の地味な娘だ。

ポリアは、早速紙を剥がすと。　皆の座るテーブルに持ってくる。

「人助け、モンスター退治、両方入ってる。　報酬は安いけど、コレにしよう」

4：仕事色々、てなてなもんや～てなもんや～（ジョイスの語り）

ウォルムの郊外に住む狩人の妻、コロニーさんが依頼者だ。　初老のオバサンだが、身体は小柄ながらにしっかりしていた。　ポリアは、依頼を請けたその日のうちにと訪ねれば、森でモンスター相手に怪我をした旦那を前にして、奥さんのコロニーさんがポリア達に仕事の内容を話す。

「薬草のある場所や、草は見れば解る。　私を護衛して欲しいのさ」

二つ返事で、ポリア達は同意。　早速、昼過ぎに旅立った。

ウォルムから一日掛けて北に向かう山は、鬱蒼とした森林が広がっていた。　欲しい草は、８種。　量も欲しいらしい。　昼前に山の森に分け入ったが。　曇りが続く森の中で、カラスが不気味に鳴く。

依頼主の奥さんが採取中は、システィアナが、ゲジゲジを見て遊んでいたり。

男が揃って巨木を囲んで立ちションしていたり。

だが、森の少し奥で、６種目の薬草を採取する夕方・・・。

“キィー・キィー”

不気味な鳴き声が木霊し・・・・。

「きゃーーーっ」

マルヴェリータが、木の枝にぶら下がる不気味な目の光を湛えた生物を見て驚く。

「出たかっ！！！」

ポリア・イルガなど武器を装備する誰もが抜いて構えた。

コロニーは、マルヴェリータが見て驚いた生物を見るなり。

「なんだ、コンバットじゃないか」

ポリアは、頭に“？”が浮んで・・・。

「コンバット？」

「そうさ、紺色の蝙蝠で、仇名が“コンバット”」

どうやら、只の野生生物ならしい。

だが、直後にその蝙蝠が激しく喚いて飛び立とうとすると。

“シャーーーーーっ！！！！！！”

不気味な威嚇音がして、コンバットに何かが襲い掛かった。

「えっ？！！」

コンバットの鳴き声に驚いて、立ち去ろうとしたポリア達が目にしたのは・・・。

「デカイっ！！」

巨木に近い高さで、食い付いたコンバットの羽を撒き散らす大蛇だった。

「あぁ・・・でっでででで・・でたぁぁぁーーーーっ！！　“イビリックバイバー”じゃ～っ！！！！」

コロニーさんが、恐怖に慄いて腰を抜かす。

コロニーを一飲みせんと飛び掛る大蛇。　だが、ゲイラーの大剣で、

食らいついた口に伸びる牙を受け止められて阻止され。　其処に、マルヴェリータの大鎌を象る魔法で胴体を真っ二つにされる。　止めに、ポリア・ダグラス・イルガの剣や槍の突きを頭部に喰らって絶命する。

ヘルダーは、ゲイラーが牙を受け止めた際に。　飛び上がって、戦扇子で太い牙を切断していたので大蛇にもう牙は無かった。

さて、危機は去り。　薬草を採取するだけなのだが。　コロニーさんが、斬り飛ばしたイビリックバイバーの牙を見て。

「これ、持ち帰りなよ。　イビリックバイバーの牙に含まれる毒は、薬に成るらしいし。　牙も、武器や装飾品や薬の原料になる。　売れば、お金に成るよ」

と、教えてくれる。

喜んだポリア達は、イビリックバイバーの毒腺などからも毒を採取して、牙と共に持ち帰った。

さて、コロニーさんの持ち帰った薬草を旦那が薬にする時、コロニーさんと斡旋所に向かって仕事の報告をする。

斡旋所、【深水鏡（しすいきょう）の楼閣】と呼ばれる塔の主であるあの中年の女性は、報告を聞いて目をパチパチ。

「あら・・・。　その毒蛇の毒と牙の採取の仕事も有ったわ・・。
引き渡してくれるなら、同時成功にしていいわよ」

と。

たった3・4日で、2つの仕事を成功に導いた訳である。　報酬は、合わせて5000だが。

「一日休んで、またきま～す」

と、主の女性に言うと、微笑み返されて。

「優秀なチームって、最近少なかったから・・。　ずっと居てぇ」

と、投げキッスを貰う。

「・・・・・」

ダグラスと・・・無口男が鼻の下を伸ばしていた・・・。

だがポリアは、そのまま宿に戻らなかった。　近くに有る都市の図書館に向かい。　イビリックバイバーや、山などについて調べて見る。

「ぐがぁ～ぐがぁ～」

ダグラスが、席に座って本を逆さに寝ていたり。

システィアナと一緒に本を読んでニヤケている大男が居たり。

マルヴェリータやヘルダーは真面目だった。

さて。　ポリアが、モンスターや凶暴な獣の本を熱心に読んでいると・・。

「なぁ、アンタ」

と、男の声で声掛けられる。

「え？」

本が並ぶ棚と棚の間、座って本を読める3人掛けのソファーとテーブルの場所で、ポリアはその男を見た。　洗い古した黒いバンダナを頭に巻いて、髪の毛を出さない様にしている。　低い背、シミの多い顔。　顔がやや横に大きく、歯を見ると2本ばかり抜けている。　格好は、迷彩の繋ぎに、皮の胸当てとショートソードを腰に。

（誰？）

ポリアの知らない男だ。　見た目は中年・・・どうだろうもう少し年上かもしれない。

「何？　何か、用？」

すると男は、ニヤニヤ笑って。

「俺は、ベロッカ。　アンタ、さっきは斡旋所で活躍だったな」

ポリアは、“ベロッカ”と名乗る男に気味の悪い感じを覚えて。

（・・・少し、ラキームに似た感じするわ・・・コイツ）

と、警戒した。　だが、顔は普通に、本に目を移し。

「まあ、たまたまよ」

ベロッカは、ポリアの美しい顔をニヤニヤ見て。

「なあ、いい儲け話有るんだよ・・。　一発、俺と噛まないか？」

だがポリア。　Kからガロンの手口を聞いていて、汚い冒険者の凡そは理解している。

“斡旋所無しで儲け話持ってくる輩のは、9割が騙しだ。　目的を達成して、用が無くなれば切り捨てるか。　雲隠れする冒険者のクズだな”

と、言っていたのが蘇った。

だから、ポリアは、鋭くベロッカを見て。

「前に、貴方みたいな奴に出会って、偉い迷惑したわ。　他所に行って・・・」

いきなり言われて、ベロッカは低い姿勢で取り繕う様に笑って、ポリアを宥める仕草を見せながら。

「おいおい、俺は見た目が悪いんであって、そんな誤魔化しはしないさ」

するとポリアは、引き締めた毅然と顔を凛々しくして。

「とにかく、出所も確かじゃない斡旋所以外の仕事を易々請ける気は無いわ。　本当にちゃんとしてる仕事なら、斡旋所に申し立てて

“サーチクライアント”して貰ったら？　他の冒険者に、斡旋所の紹介で共同調査出来る様に計らって貰えるハズでしょ？」

ポリアの言う“サーチクライアント”は、冒険者の合同チームの別ヴァージョンである。　例えば、冒険者自身が突発の依頼を頼まれて、手が足りなかったり戦力的に困難だったりした場合。　別の冒険者に助けを求める事が出来る。　裏づけされる仕事でも、出所不詳の仕事は危険がが伴うために用意された方法だ。

「・・・・ケッ」

言われたベロッカは、急に態度を変えて汚い目の濁りを見せて。

「只の腰抜けが」

と、踵を返す。

ポリアは、その背中に。

「全うな手段を利用しない方は、下衆だわね。　人を腰抜け呼ばわり出来る身分じゃ無いわよ」

言い返されたベロッカは、立ち止まってポリアを横目に一瞥して図書館から姿を消した・・・。

ポリアの見たベロッカの最後の横目は、邪な光を湛える濁った眼だった。　ラキームやガロンと同類の物で、すぐさまにでも忘れたい眼だった。

ポリア特別編　セカンド　1（後書き）

次号、予告

ポリア、合流したジョイスとヘルダーの故郷に。　つかの間の団欒を楽しみ、また仕事を請けようとした時、驚くべき事態に・・。

次号、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です・・・＾＾；

消した・・・。　勢いで、徹夜で仕上げたりしてますが・・・。一部思い出せ・・・ない＾＾；

勢いしかねえ・・・（。。；）

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編　セカンド　2

ポリア特別編：その時は其処から始まる

5：人捜し

一日して、斡旋所に向かうと、主の女性が青いワンピの長袖を着ていた。　花柄の鮮やかな服装だった。

「今日は、綺麗ですね・・。　服が」

ダグラスが、ポリア達が仕事を探しに掲示板に行く中で、態々カウンターに寄って主に声掛ける。

「“今日は”・・・？」

女性、少し小悪魔的に目を流す。

「あ・・いやいや、そうゆう意味じゃないく。　この前より服装が

明るく見えて、尚更」

女性、歩いて行くポリア達を見つめて。

「綺麗なお仲間さん居るのに、別の・・しかも斡旋所の年増のオバサンに声掛けるなんて・・摘み食い？」

ダグラス、少しタジタジした苦笑顔。

「いやぁ、ウチの面々はもう相手決まってる様なモンですがな」

「あ～らら、悪く無いのにねぇ・・・」

女性の主は、ダグラスを見て笑う。

さて、そのダグラスの身体が、急に引っ張られた。

「うおっ」

ダグラス、女性の主が見れば、ヘルダーがダグラスの長剣の一部を持って引っ張っている。

「あら・・・」

「うおおおあ～へっ・ヘルダ～あああ・・・・」

ヘルダーの静かな嫉妬であった。

自分に一礼して行く赤い顔のヘルダーを見て、女性はキョトンとしながらも・・直ぐに破顔して。

「カワイイ～男も多いわねぇ～・・・ウフフフ」

と、意味深にヘルダーとダグラスを見る。

さて、ポリアが次に引き受けたのは・・・。

“ウチの兄を捜して下さい。　もう、5日も帰ってきてません。酒好きの兄なので、何か怖い事に巻き込まれていなければいいんですが・・・。　妹と2人、困っています”

と、云う内容。　恐らく、依頼の紙が貼られて数日は経過していそうだった。

「うぬぬぬ・・・行方不明ですな」

イルガ、クォシカの一件以来の人捜しに、何やら燃えるモノが・・・。

さて、依頼を請けて、あの数日前に夕方通ったコクーンと呼ばれる集合住宅街にやって来た。

が・・・。

全員、似たような建物が乱立するコクーン内の公園にて。

「何処よ・・・家」

と、ポリア。

マルヴェリータも、渡された地図を見て・・・。

「解りません・・・の一言ね」

ポリアなど、もう宿屋街に帰る道順すら解らない。

その中で。

「お前なっ、でしゃばんなよっ」

「・・・・」

ヘルダーとダグラスが必死こいて斡旋所の女性主を巡って論争している。　・・・いや、ヘルダーはジェスチャー論か・・・。　大きく身振り手振りで、”情無い”・”恥を知れ”と、説教している。

確かに、ヘルダーの方が年上の様だし・・、説教も頷ける。

昼前から、先ず依頼主の捜索が始まる。　子供に聞いたり、井戸端会議で井戸に集まる女性達に聞いたり。

そのウチに、昼真っから酒を飲んで帰宅する男性を発見し、話し掛けて見る事に。

「あ？」

話しかけて居ると、男性は顔をだんだん真顔にして。

「それ・・・女の名前は？」

姉妹の名前を出せば、何と男性の妹の名前だとか。

「ありゃ？」

ポリア以下全員の脳裏に“？”が点灯。

その男性と探し回った挙げ句、遂に夕方には依頼主の２人を発見。

再開した３人兄妹は抱き合い喜ぶのだが・・・。

「兄さん、何処に行ってたのっ？！！」

「何処にって・・・それはコッチのセリフだよっ！！　もう、１０日もお前達の帰りを待ってたんだぞっ！！！」

兄妹で、言い合いが始まり、狭い部屋の中でポリア達一行は兄妹ゲンカの仲裁に回った。

話の整理の末、兄の男性がアパートを間違えて住んでいたと判明。

「あ～・・・それで、部屋に女物の衣服しか無かったのか・・。妹のとばかり思ってたが。　道理で・・・」

引っ越してきたばかりで、初日から呑んだ暮れたこのどうしようもない兄貴。　だが、そうなると、１０日間も帰って来ない、その兄の泊まっていた部屋の主である女性と思われる人は、一体どうしたのだろうか。

ポリアは妹さんの一人と兄貴を連れて、次の日に管理している国の建設庁を訪ねて説明をした。

調べてくれた年配の女性役人は、ポリア達に。

「事件の可能性もありますので・・・」

と、兄貴の身柄確保に。

「えええええ・・・・ア～チョット？」

変な話に成った。

どうやら、2日後。　やはり女性は行方不明と成っていた。

後の捜査で、兄の容疑は晴れたが。　元々から部屋に住んでいた女性は、物騒な話だが殺害されていたらしい。

ポリア、斡旋所で別の一仕事を終えた後、斡旋所の主の女性から話を聞いてワナワナする。

「ぬうわあ～にい、別れ話を断られて連れ去ったあああ～？」

斡旋所の女主人、困った顔でスリットの深い白のドレスワンピの腰をくねらせ。

「怖いわねぇ～。　彼女に嫌がられて連れ去ったものの。　彼女の始末に困って殺しちゃったみたいよぉ～」

ダグラス・ヘルダー、話より女性のスリットから覗ける生足が気に成る。

ポリア、イライラしたままに仕事を請ける気に成れずに外に出た。

「あああ～ムカツクっ！！！！　だから男って嫌いよっ！！！！」

苛立つポリアに、男一同は意気消沈。

（ケイ・・・戻ってきてくれんかのお～）

イルガのぼやきだ。

さて、池の上の石のアーチ状の橋を渡って賑やかな商店前に出た時だ。

「ん？」

「おい・・アレ・・」

ゲイラーとダグラス、ジョイスが人ごみの中でキョロキョロしているのを見つけた。

マルヴェリータ、手を挙げようとしたが・・・。

「あら・・・」

ジョイス、皆を見つけてニコヤカに、赤い髪の女性と共に向かってくる。

ヘルダー、マルヴェリータの背後で、凄まじい殺気を感じて飛び退いた。

「う”・・・」

「な・・なんじゃ」

ダグラスとイルガも、殺気に感じて驚く。

ポリア、目を細めて。

「血祭り・・・かな？」

システィアナ、急に元気に動いて。

「おまつりだあああああ。　ち～まつ～り～ち～まつ～り～」

ゲイラー、システィアナがとっても可愛いのだが・・・心を鬼にして。

「システィ～、いいお祭りじゃ～ないんだぞ～。　危険なお祭りなんだぞ～」

と、説教。

・・・危険と云うレベルではなかろうが・・・。

ジョイス、皆の前に来て。

「お久しぶり～。　いや～探してたんだよ～」

マルヴェリータ、冷ややかに微笑み。

「あら、どうしましたか？」

「ほら、この人っ！！！　コッチの自治国の国兵魔法軍団の総軍団長で、エクレアさんだ。　皆に是非会いたいってから連れて来たんだよ～」

赤い髪を、黒いベールを被って後ろで纏める黒いローブの綺麗な女性だ。　ただ、幾分ふっくらとして、老けて見える。

「みなさん、ご紹介に預かりました“エクレア・メルヴァドール”と申します。　ジョーとは、冒険者時代もライバルで、今も似たような地位でライバルですわ。　よろしく、お見知りおきを」

この名前、魔法遣いなら誰でも知っている。“黒い炎のフレア”の異名を持つ自然魔法遣いのエクレアは。　絶えず、肌身離さず持ち歩く赤き魔法の杖“真紅の太陽”と云うマジックアイテムの御蔭で、極寒の冬山でも炎の魔法が遣えるのだ。

ジョイスが魔想魔術のスペシャリストなら、このエクレアは自然魔法のスペシャリストである。　彼女の生み出す火炎魔法は、巨大な大岩ですら燃やし尽くすと云われている。

ポリア、また偉い人に会ったと思いながら。

「お初にお目に架かります。　ポリアンヌスリファールです。　ポリアと呼んで下さい」

リーダーとして挨拶する。

「聞いてるわ、よろしくね」

エクレア、艶やかな高温の美声で挨拶する。

マルヴェリータが、挨拶すると。

「・・・」

エクレア、少しマルヴェリータを見て。

「ジョーも、面食いだわね～・・・。　結婚して子供生んだ私のお見舞いに来るだけなのに、こんな美人ばっかりのチームとイチャイチャして・・」

ジョイス、後ろを向いて。

「いやあ～それほどでも～・・」

ニヤニヤしている。

システィナア、ジョイスの横で。

「いや～いや～」

と、真似をしている。

マルヴェリータ、微笑んで。

「おめでとうございます」

エクレアも微笑み。

「ありがとう。　私の夫が政務官で、忙しくなければウチに招待したいんだけど。　毎日忙しくて・・・ジョーが掃除でもしてくれると助かるんだけどねぇ～」

ジョイスを横目に見る。

だがポリア達一行、“ゴミ屋敷の主に掃除なんて出来るかっ！！！”と内心に叫ぶ。

「あは・・あはははは・・・僕って、知人に逢うと雑用係だし・・・あはははは・・・」

どうやら、親しい知人と云うか、腐れ縁の様なジョイスとエクレアである。

ポリア、ジョイスの事をエクレアに聞くと・・・。

「それがね、ほんっとにバカなの・・・」

と、バラシ話が始まる。　マルヴェリータが嫉妬する様な関係では無い様だが・・・。　ジョイスの情けない話は、本当に情けない。

イルガ、過去をばらされて、ナメクジに塩を掛けた様に縮み込むジョイスを見て。

（・・・同情したくなってきたわい）

もう、子供は乳離れをして、メイドと乳母に預けたので安心なエクレアは、久しぶりに女同士の会話が出来ると喜んで、近くの品格有るレストランに全員で入ろうと言う。　ポリアの見た事件や、その

他の事で大いに盛り上がる。

さて、ジョイスには男達が囲み。　冒険談義に花が咲いた。

楽しい、一時だった。

だが、この時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

別の場所では、ポリア達とは別の選択をした冒険者達が居た。　運命を分けたのは、何だったのだろうか・・・。

鬱蒼とした森林地帯の奥深く・・・。　広葉樹林が犇く森の中で、長い柄をした大斧を両手に構える中年の貴族っぽい紳士が、血みどろで荒い呼吸をしている。

「はぁ・はぁ・はぁ・・・ちくしょうめっ！！！！」

飛び掛ってきたモンスターを斧の刃で弾き飛ばす。　男の周りには、無数の蠢くデカイミミズの様なモンスターが取り囲んでいた。

「いぎゃあああああっ！！！」

若い女性の絶命染みた絶叫が離れた奥で上がる。

「コロンっ！！！　コローーーンっ！！！！！　返事をっ！！！」

気持ちが反れた、長さ1メートル半は超えて、目や鼻などは見当たらないが。　胴体の太さも丸太の様なワームの口には、ギザギザした牙がノコギリの様に並び、ヌメヌメした唾液がダラダラと地面に落ちる。　男の気が反れたのを見て、一気に四方八方からワームの

モンスターが襲い掛かった。

「うぎゃあああああーーーっ！！！！！　ぐぶぅ・・・・」

必死に大斧を振り回して応戦した男だが、腕や太股に噛み付かれて・・・その内に後から飛び掛ったワームに鎖鎧を咬み破られて、内臓にまで喰らい付かれて男は死ぬ。

ヌチャヌチャ・・・バキバキ・・・グチュグチュ・・・不気味な音が森に響く・・・。

森の中に、無数の骨の欠片や、血の着いた鎧が放置されていた。

地面に刺さった木目の杖に、細い指の手首だけが掴んだままに残っている。　ワームのモンスターの一匹が、その匂いを嗅ぎ分けて飛び掛った。

杖を半壊して・・・手首は食べられた・・・。

6：その依頼は・・・受けるべき?。

ポリアは、ヘルダーの故郷に移動した。　長閑な田舎町で、広大な果樹園が何処までも続く。　育てているのは、リンゴなど。　糖分

の非常に高い品種と食用の普通の品種があり。　蒼く糖分の高いリンゴは、果糖を搾取する為の物なんだとか。

ヘルダーの父親は、ヘルダーに似た寡黙な人物だった。　背が高く、真一文字に結んだ口はちょっとやそっとでは開かなそうな人物。母親は、丸く太った大らかな人だ。　どちらも陽に焼けて、黒い。

ヘルダーは、四人兄妹。　妹２人は、結婚して作物農家を営みながら、大規模経営の父親を助ける様な生活をしていた。　弟が結婚し、跡を継いでいる。　ヘルダーとは違って、少々呑気な釣り好きである。

ヘルダーの祖父と祖母はまだ健在だ。　８０を超えた身体で、一部の農園の管理をしている。　生活の為の農作物を作っているのだ。

数日、ポリア達は泊まった。　ジョイスをコキ遣いながら、作業を手伝う。　やはり、ゲイラーやダグラス・ヘルダー・システィアナは農家の家で生まれたので、何の作業をするにしても少ない説明でやる。　ジョイスも農家の出、内容は知ってるが・・・ヘッピリだった。

夜は天然の温泉の風呂に入り、自然の野菜を食べて会話をする。楽しい一時で、四日はあっと言う間だった・・。

旅立つ前の日、夕方の庭先にポリアはヘルダーの父親に呼ばれて二人で会話すると。

「息子を・・よろしくお願いします・・。　もしもの時は、骨だけ・・お願いします」

父親として、冒険者が危険な職業とは聞いている。　恐らく、町から若い者が飛び出して行き、何人死体や行方不明に成っているか知れない。　だから、覚悟は出来ているのだろう。

ポリア、笑って。

「大丈夫です。　ヘルダーは私より強いです」

何より、頷く父親には虐めや偏見の中で生きた息子の内面が心配だったようだ。　しかし、ヘルダーの顔に、その歪みは見えない。

ヘルダーは、片足の悪い祖母や、去年に怪我した妹の旦那の為にと殆どの身銭を置いていく。

こうして、ヘルダーも故郷に帰れ孝行が出来た。

さて・・・。

ウォルムに帰ったポリア。　ジョイスは、そろそろ本国に帰るので挨拶回りにと、首都心部で離れた。

そして、ポリア達は新たなる仕事を請けようと、池の上に建つ斡旋所に向かった。

「あら・・・あら～探してたのよっ！」

主の女性が、ドアを開いて入って来たポリア達を見て声を上げた。

ポリア一行、仲間内で見合って、何か有ったのかと心配して主の前に向う。　赤いドレス、黒いマニュキュアの女性の主だが。　顔色

が、少し悪い。

「どうしたんですか？」

困った仕草の主は、落ち着かない様子で。

「それがねぇ、最近になって冒険者が消えてるみたいなのよぉ～」

ゲイラー、少し間の抜けた話だと。

「移動したんじゃ無いのか？　仕事は、別の国でも有るし。　大きい都市なら、首都でなくとも請けれるからな」

すると、女性主は声を乱して。

「そんなのだったら心配しないわよぉっ。　仕事を請けるはずだった予定をすっぽかしたり、仲間の数人を置いて消えたりする訳無いでしょっ？！！」

ダグラス、ヘルダーと見合って。

「確かに」

「・・・」

ヘルダーも頷く。

ポリア、返答に少し困って。

「それで、私達にどうしろと？」

「ああ・・・今ね。　別の冒険者のチーム二つと連絡取ってるんだけど・・・。　どうやら、片方のチームは、居なくなったのはリーダーを含めて４人らしく、置き去りにされた仲間２人。　もう片方のチームは、リーダーに断り無しで仲間２人が消えたチームで、今残ってるのが４人よ。　もし、良ければなんだけ、その残った全員と合同で捜索して欲しいのよ」

「え”っ」

ポリアはまた“合同チーム”と聞いて驚いた。　先月の月の終りにKをリーダーにして、合同チームを結成してあの仕事を遣りきった。　なのにまた月が変わって半月足らずでまたとはどうも・・・。普通では有り得ない。

「なっなんで・・・私？」

「だってぇ・・・他にリーダー遣れるだけの実力持ってる人居ないし・・・。　聞けば、貴方達って前にも合同チーム作った事在るんでしょ？　私、今まで一度も無いのよねぇ・・・他にどう対処していいか・・・」

女主人は、もう困惑の様子で泣きそうだ。

ポリア、仲間と見合う。

ゲイラーは、笑って。

「ポリアの宿命じゃないか。　とにかく、その他の冒険者を集めて話を聞いたらどうだ？　それからでも、判断はいいだろう」

ダグラス、困ってる主の女性を助けたいのだろう。　ポリアに迫り。

「ポリア、人助けだっ。　今こそ、リーダーの様に人助けだっ！！」

ヘルダーも、ウンウン顔をポリアに近づけて頷く。

ポリア、2人の迫力に気圧された。

（な・・何なのよ・・この2人。　仲が悪かったり・・・良かったり・・・）

ポリアは、仕方なくその主の話に。

「それは解るわ。　でも、・・・丸で深みに填まる気分だわよ。2月の間で2回だなんて・・・。　ケイだったらいいけどさ～」

マルヴェリータ、ポリアに寄って。

「ケイともう一度冒険したいなら・・・。　これぐらいやらないとね～」

ポリア、チームの面々がやる気があると見た。　確かに、気には成る。

「マスター、じゃ～とにかく話を聞かせてよ。　先が見えないのに、合同チームだなんて、全くもって無茶でしょ？」

女性主は応える。

「そうね・・・解ったわ。　全員を2階に集めるわ。　実は、バラけたチームは彼方達と似て、ドンドン仕事する方だから。　もう他にドンドン請けるチーム少ないから私も暇なのよ」

と、女性主は動いた。

主の彼女の名前は、サリータリス。　知り合いの間では、“サリー”とも“タリス”とも云われている。　元々、斡旋所の主に成ったのが、従兄妹の女性なのだが。　最近は身体を壊して、一人で運営していたらしい。　学者で、自然魔法の使い手だったとか・・。

紅茶を振舞われ、人気の少ない斡旋所で待つ事に。

ポリア、不思議だ。　1階の、カウンター脇のテーブルに皆で座りながら。　主の女性に聞く。

「サリーさん、不思議なんですけど・・」

カウンター内で、何やら書いているサリーはポリアを見る。

「なあに?」

「はい、此処って依頼の件数が多いです。　なのに、圧倒的に冒険者が足りない様に思えますが・・・。　何で、こんなに?　仕事の少ないマルタンの方が人多いかも・・・」

サリー、顔を暗くして首を傾げて。

「う~ん・・・それがね。　先々月、ウチの歳の離れた従兄妹が病気になったの。　その時に、冒険者達を騙す詐欺が横行してね。

この辺の斡旋所は、危ないって噂が出ちゃったのよ。　勝手に誰かが別のチームに夜の街とかで声掛けて、“斡旋所で請けてきた仕事なんだが、手が足りないから手伝ってくれ”みたいな形で持ちかけて。　モンスターと戦わせたりして、チームを捨てて要求を満たしたりしてたみたい」

「何それっ、冒険者協力会の規定違反じゃないの・・・」

と、マルヴェリータ。

イルガ、ヘルダーに向いて。

「酷いのお」

頷くヘルダーは、怒っているのかムスっとしていた。

ポリア、更に。

「じゃ・・もしかして・・・勝手に斡旋所の名前を騙って一般人の人から仕事を請けまわってたんじゃない？　だって、そうそうに知らない人に仕事を依頼しないでしょ？」

サリー、ポリアを見てもう慌てて応えてくる。

「そうなのよぉ・・。　もう、勝手に遣られて困るわ。　然るべき手を打ったら、収まったけど・・。　犯人は複数犯らしくてね。　6人は捕まって、冒険者協力会（ギルド）で処分したみたい。　でも、主要メンバーの一人は、変装したり、偽名を使って動き回っていたから、足が着かなかったみたい・・・」

この時、ポリアの脳裏に図書館で声を掛けてきたベロッカの姿が浮んでいた・・・。

（まさか・・・ね）

ゲイラー、急に曇りだす窓の外の雲を見上げながら。

「しかし、居なくなった冒険者達は何処に行ったんだろうな」

サリーも困り顔で。

「そこよね・・・」

もう、行方不明になって、１０日近いらしい。

さて、夕方前に成り。　男女６人の冒険者が集まってきた。

「サリーさん、呼ばれたから来たわ」

「なんだい、こっちは忙しいぜ」

２階に集められた冒険者達、１階を一回り小さくした場に、北側の所に平たい横のカウンターを持ち。　他は、床に設置された石の腰掛と、丸や歪んだ楕円のテーブルが隙間を繋ぐ。

サリー、集まった皆を見回す。

「・・・、集まってくれてありがとう。　西側に座ってる冒険者のチームは、マルタンの方から来たチームで“ホール・グラス”の皆さんよ」

すると、老いた片目の眼帯男が、腰掛けたままに背の高い身体をポリアに向けて。

「あ・・あのグランディス・レイブンを助けたチームかよ・・」

サリー、白髪の乱れた髪を後ろに流すその男性を見て。

「そうよ。　今回、彼らにも協力を依頼したいと思ってね。　今までの経緯、情報が欲しいって・・・。　もし、助けに行かなければ成らないならば・・・彼らと合同チームを作ろうと思うの・・・」

すると、別の席に座っていた若い元気な黒髪を短くしている青年が。

「“合同チーム”だってっ?!!!　知らない奴とチームなんか組むんかよっ」

ポリア、ゲイラーやダグラスと首を竦めた。

すると、その若者の脇に座る紫のドレス風のチュニックワンピースに、大きなコートに近いカーディガンを羽織り。　頭に装飾品のサレットを巻いた大人びた女性が。

「イクイナ、煩いわ。　黙りなさい」

と、鋭い目を向ける。

若者、女性を見て。

「オーリナスっ、こんないい加減な話あるかよっ」

“オーリナス”と呼ばれた女性は、若い男を無視して、ポリアに一礼した。

「ごめんなさい、この子は成り立てなの。　意気込みはいいけど、経験なんて全く無い子供同然だわ・・・気にしないで」

と。

ポリア、オーリナスに。

「居なくなった人達の行き先は？」

困惑した顔に変貌するオーリナス、細い身体つきを前のめりにして黙る。

其処に、あの老いた眼帯男の後ろへ座っていた赤い僧侶の神官服を着た男性が、ゲイラーを超える巨漢の高い背を持ち上げて。

「南西の森だ。“マニュエルの森”の一部と繋がる紅葉樹林の“ミストレスの森”らしい」

ポリア、マニュエルの森へ行った時、ケイと狩人のレックが途中で歩きながらこの森の話をしていたのを思い出した。

「あっ・・・レックさんとケイが話してた森の事だわ・・・」

レックは、とても紳士的な狩人だった。　生まれは、この国。　この首都から、北西に向かうこと２０日の所にある山間部町の森に住んでいた。　その森は、遠くはマニュエルの森に繋がり、西側には

悪魔の大地ダロダトにも繋がっている。　モンスターの脅威があるが、とても自然に恵まれていた場所だ。　K・レックの話では、ミストレスの森は、標高の低い山々の連なる場所で、固有の生物やモンスターなどが生息していると。　山の奥には、狩人でも行かないと語り合っていた。

ダグラス、その大柄な神官に。

「行った目的は？」

大きなハンマーを片手に立った男性は、サリーを見てから顔を戻し。

「今から、１０日・・もう少し前か。　街中の飲み屋で夜、ベロッカと云う冒険者に声を掛けられた。　なんでも、儲け話があるとか・・・」

すると、オーリナスも。

「こっちも同じだわ。　別の席で飲んでいた私達にも声掛けてきたのよ。　私、リーダーだけど、凄く胡散臭い背の低い男で・・・。　嫌だったから、断ったの・・」

オーリナス、今でもその男の鈍い目の光に心理的な恐怖を覚える。

話を続けて。

「でもその時、向こうのチームのリーダーと数人が話しに乗ってね、私のチームも新しく結成したばかりのチームだから・・・。　断った後も、その場のチーム内部で意見が分かれたわ。　でも危険だし、見合う報酬の約束も、仕事の裏づけも無いから断ったの。　そしたら、一緒に飲み合った夜の間に、二つのチームの中で勝手な話し合

いが有ったみたいね。　朝には、居なかったわ・・・」

眼帯をした老練の冒険者も。

「オーリナスの言った通りだ。　ウチのリーダーは、何でも来月に結婚して引退するとかで金に強い執着が有った。　居なくなったのは、リーダーを含めて４人。　残ったのは、俺と後ろの男だけさ」

オーリナスは、残る自分の仲間を見返って。

「こっちは、３人・・。　残ったのは、みんな成り立ての若いコばっかり・・」

すると、イクイナと云う勝気な剣をぶら下げた若い男性が、オーリナスに鋭い反抗的な目を向けて。

「アンタが行くなって言ったから行かなかっただけだ。　金に成って、名声上がるなら行ってたさっ」

ポリア、目上に対しての態度も、言葉遣いも成ってないイクイナに急に鋭い声で。

「黙れっ、座ってろっ！！！」

と、叱咤。

サリーを含めて、皆が黙る。

「・・・」

イクイナ、気迫に驚いて声が出せなかった。

ポリア、イクイナを睨んでから、オーリナスに。

「我儘を抱えると大変ね。　でも、行かなくて正解よ・・。　マニュエルの森に続いてるなら、特別な準備や、知識を必要とするもの。　その森と続く森でも同様だわ」

老練の冒険者の眼帯男はポリアに。

「俺は、リキッド・ヘクスター。　リキッドと呼んでくれ」

「私、ポリアよ」

「ああ、実は・・・行った中に俺の・・従兄妹が居る。　助けてやりたい・・・生きてると思うか？　アンタ・・」

ポリア、リキッドに向かい。

「森までは此処からの移動で、どれくらい？」

「ん・・・3日あれば」

「目的は、何だったの？」

「森の山一つ先の中腹に、“シリスカアンズ”って云うアプリコットが群生してるらしい。　非常に希少な果実で、1つで数千もするんだ。　実りが初夏で、採りに行ったらしい」

此処で、マルヴェリータ。

「なんか・・・変じゃない？　そもそもそんな依頼・・・在った訳？」

サリーは、首を左右に。

オーリナスは、思い出すように。

「確かに、ベロッカって男は依頼でって・・・」

ポリア、マルヴェリータと見合って。

「マルタ・・・まさか・・」

「そうよ・・2ヶ月前の・・・」

リキッド、ポリアに。

「どうした？」

「あ～、2ヶ月くらいまえ、この辺で斡旋所の依頼を騙って冒険者達を騙してた奴等が居たって・・・」

「ああ・・・。　俺の知り合いも、騙されたな・・」

と、リキッドは顔をサリーに移動して見て。

「捕まったはずだろう？」

サリー、顔色を悪くして。

「主犯格の一人が・・・まだ・・」

リキッドの後ろの、大きい身体の神官が。

「まさか、ソイツでは？　ベロッカと云う男は、ソイツではなかろうかっ？」

ポリア、自分も声を掛けられているだけに。

「多分、そうだと思うわ。　私も、声掛けられたし・・・」

仲間全員、他のチームの面々もポリアを見る。

オーリナス、驚いて。

「貴女も？」

マルヴェリータ。

「何処で？」

「薬草採りから帰って来た日。　図書館で・・・、あぁ・・サリーさんに云えれば良かった」

オーリナス、ポリアに。

「ねぇ・・・行ったみんな・・生きてるかしら？」

ポリア、Kではないから判断が出来にくい。

「解らないわ・・。　別の人に相談してもいいかな?」

リキッド。

「“別の人”?」

「ええ、この国の魔術師軍団の総師団長のエクレア様と、ホーチト王国の総師団長のジョイス様。　丁度、首都の此処に揃ってるわ・・。　面識あるから、協力は頼めないけど・・・聞いてみる?」

リキッド、顔を驚かせて。

「おぉ・・・“黒い炎フレア”と、“幻惑貴公子”のジョイス殿を知っているのか・・・」

「ええ・・チョットよ」

リキッド、ポリアに頭を下げて。

「すまん、どうか頼む。　生死の事だけでも・・」

オーリナスも頼んでくる。

ポリア、サリーを見て。

「じゃ、これから聞きに行くわ。　サリーさん、出来たらその持ちかけられた依頼の出所を探ってみて。　もしかしたら、何か引っかかるかも」

ポリア、Kと行動した御蔭か。　少し、動き方が解ってきていた。

「解ったわ。　調べて見る」

ポリア、オーリナスやリキッドを見て。

「正直、私達では森に行くだけでギリギリよ。　グランディス・レイブンを助けたのは、一時的に加わっていた化け物みたいな仲間の実力で、私達の力では無いわ・・。　もし、行くのなら慎重に考えないといけない。　だから、明日もう一度集まりましょう。　それで、話し合いましょう」

リキッド、他人の生死に関わるだけに。

「うむ、解った。　お主の言う事も十分に解る。　森のその場所までの道は、俺が知っている。　昔、一度だけ行ったからな。　だから、恐ろしくて行けなかった・・・」

ポリア、アンダルラルクル山でのモンスターを思い出し、リキッドの気持ちが解った。

「解るわ・・・恐ろしい目には、二度は遭いたく無いもの・・・」

「ああ・・・」

リキッド、黒いダボついたシャツの上から左肩を擦った・・・。

ポリア特別編　セカンド　２（後書き）

次号、予告

ポリア達は、森に行くメリットが在るのかを知りたくてエクレアに相談する。　だが・・帰って来た答えは冷たいものだった。　そんな中、事態は更に悪い方向に・・。

次号は、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

ポリア編、なんとか思い出して途中まで完成＋＞＋

でも、まだ最後が・・・フニャフニャ；＞；

ポリアの活躍、見守ってくらはい＾＾；

ご愛読ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編　セカンド　3

ポリア特別編：その時其処から始まる

7：絶望的な展開

ポリア達は、夕暮れ前の道を中央に向かって歩いた。　会話の大半は、Kとの思い出だ。　仲間の皆、その思い出が強すぎて・・。Kにメモらされた紙は今でも持っている。

ダグラス、呆れ笑いで街灯を燈す職員を見ながら。

「しっかし、この短時間で2回か・・。　凄いな・・ポリアの運命違うか？」

「んな運命なんて要らないわよっ！！　Kの影響が強すぎンのよっ」

皆、それには納得。

さて、中央の星型噴水公園の彼方此方にある地下へ降りる幅広い階段を降りて。　各行政課の受付が並ぶ窓口で、まだ残っている役人にジョイスやエクレアの事を聞いて怪しまれる。　困ったポリアだが、運良くエクレアに地下の馬車駐車場で面会出来た。

「あら・・みなさん」

今日は明るい白の背空きローブドレスの彼女は、派手で見つけやすかった。

エクレアを通じてジョイスに逢おうと思ったが。　相次いで謁見周りをしてた上に、夜はパーティーに出席しているとの事。

ジョイスは独身だから、ジョイスに娘を引き合わせたいと願う官僚や大臣が誘ったらしい。　明日以降も、大統領主催で新しい高位の官僚の任命式典パーティーやら、大臣達の会談があるらしい。　だから、2・3日は会うのは無理らしかった・・。

ポリア、帰るエクレアに事を話すと・・・。

「あら・・それはマズイわね。　あの果実って、普通はもう少し前に採りに行く物よ。　もう、梅雨を過ぎちゃったから、肉食のモンスターで、ワームのデカイのがウジャウジャ居るわ。　多分、全滅してる可能性高いわよ。　一応、楠の木の匂いが嫌いで、楠に空いた虚でもあれば・・・、まぁ～助かるでしょうけどね。　日数的に、食料もそろそろ尽きるかも。　良く、そんな話に乗って行ったわねぇ。　下調べもしないで、相手を鵜呑みにしてるなんて、冒険者的に失格だわ」

地下通路を歩いて、馬車の駐輪場に向かうエクレアが話してくれた。

彼女の到着に合わせて連れてこられた馬車に乗り込むエクレアに、ポリア一同は一礼した。

ドアを閉める手前でエクレア、ポリアを見て。

「過信したら駄目よ。　彼方達では、３日と持たないで全滅するわ。この次期は他のモンスターも多いから。　救出も諦めさせなさい。じゃね」

エクレア、ドアを閉めて馬車を発進させる。

暗がりの地下。　カンテラの様な明かりの下でポリア、エクレアが少し冷めた人だと思う。

「な～んか、有り難い指摘だけど・・冷たいわね・・」

マルヴェリータ、同意して腕組み。

「そうね・・正しいのだろうけど。　ケイとは違うわね」

システィアナ、行った馬車を見て。

「く～るびゅ～てぃ～もうばばあ～です～。　優しくな～い人は～嫌いですぅ」

ダグラス・マルヴェリータは大笑い。　ヘルダー・イルガも、肩を揺すって笑う。

ポリア、顔を引き攣らせて。

「システィ・・・ケイの御蔭？　口・・・悪くなってきたわよ・・。
フッ・・フフッ・・当ってるけどさ～」

ゲイラー、うんうん頷き。

「美貌にも陰りが見えた。　優しくないオバサンだな」

いいのだろうか・・・・こんなんで・・・。

ポリア、そのまま宿屋街に向かって一泊した。

次の日、朝は少し早く起きて。　眠いが図書館に直行した。　ミストレスの森について調べて見たのだ。

調べて直ぐに解った事は。　エクレアの言っていたモンスターは、“腐肉喰らい”と云うミミズの化け物らしい。　一年周期のモンスターで。　秋に、地面に卵を産み。　梅雨明けすると孵化する。　楠や木蓮などの木の樹液の匂いが嫌い。　生態は動物だが、暗黒の魔界の力に汚染されたモンスターであると。

他に、前の仕事でも遭った、デカイ蛇のイビリックバイバーや、二首のドラゴンの弱種で、グリーンドラウネスと云うのが居るらしい。
そして、猛毒の毒蜘蛛モンスターなども。

病気は、吸血昆虫が媒介しているが。　どれも、Kの教えてくれたお茶や薬で対処出来た。

ゲイラー、自ら調べて見て。

（やっぱり、コレ全部覚えてるリーダーは鬼だ・・・）

思わず本から顔を上げ、鼻水が垂れた。　何かに書かないと、頭がこんがらがって来る。

“グガ～・・グガ～・・・”

寝ているダグラスの煩さに、ゲイラーが情けなく脇を見ると・・・。
　同じくダグラスをソファー上で挟んで、システィアナも呆れた顔で見ていた。

「システィ・・・」

ゲイラー、炒り豆を取り出す。　おやつ感覚で食べる乾燥の炒った豆だ。　それを、ダグラスの鼻に入れる仕草を見せると。

「・・・」

システィアナが、音も無く拍手をする。

ゲイラーに躊躇は無かった。　女神が賛同してくれるなら・・・。

「んんぅ・・」

鼻に入れられた豆に、ダグラス少し唸って苦しみ・・。　鼻声で・・・悶絶したように・・。

「あぁ・・・さぁりぃ～さん・・・そんな・・せっきょくてぇきぃ～に・・・せま・・・んがああっ！！！」

苦しく成って生きる為に起きた・・・。

システィアナとゲイラーは、もうソファーから消えている。

「なんだっ、なんだあああ?」

鼻を塞ぐ豆を取るダグラス。

ポリア、棚の向こうから顔を覗かせて。

「うるさい、其処」

「えっ?!　んああ・・・クソ・・・ゲイラーか」

左を見れば、ゲイラーがシスティアナと真面目に勉強している。
前に顔を向けながら。　せっかくいい気分で寝て、サリーとオーリナスの出現する艶かしい夢を見ていたのに・・・。

（邪魔しやがって・・・）

と思いながら前に向き直る。　思わず、悪態もつきたくなって。

「いいところで・・あのバカップルが・・・デッカとチッサイのの・・どんな・・・」

背後に凄まじい殺気を覚えて、ダグラスは口をピタリと止めて蒼褪める。　引き攣る口で、必死に。

「・・・す・・ステキな・・背の差カップルだよね・・。　うん・・・夢がある・・・夢が～」

背後から消える殺気。

「・・・」

再度、ゆっくり左を見れば・・・スキップするデカイ奴が・・・。

おめでたい人である・・・。

さて、ポリア達は昼前に図書館を出た。　斡旋所に向かう為に。

ちゃんと説明し、救出は断念しようと説得する気だった。　ダグラスなどは少し不本意らしいが。　危険は、回避して然るべしだ。

だが、ポリア達が約束の昼間に斡旋所に向かうと・・・。

「ああ・・ああ・来てくれたのねっ！！」

狼狽の極みに達するサリーが居た。

「どうしたの？」

カウンターに走り寄れば、もうウロウロと焦るサリーが。

「どうしよう・・どうしようっ。　オーリナスのチームの若い子達が、勝手にミストレスの森に行っちゃったって・・・。　オーリナスも上で泣きそう・・・」

「何時っ？！！」

鋭く問うポリア。

オーリナスが語った話では、昨日の夜に様子が変だったらしい。
夜中前に、勝手に宿を抜けてしまっていたとか。

「オカシイって思ったのっ。　皆と解散した後、斡旋所の対応やポリアさん達の事を“腰抜けっ”とか罵ってたから・・・」

と、早朝にサリーの元に泣き着いて話したとか。

ポリア、直ぐにゲイラーとダグラスに自分のシフォンの入った袋を渡して。

「お願いっ、全員分の薬や薬湯の元を・・・。　１３人分っよ！！」

ゲイラー・ダグラス、ポリアが助けに行く気と悟った。

「解ったっ」

「此処に居てくれっ」

マルヴェリータ、忙しいジョイスではなく“エクレアに頼ってみたら”と云うも。

「多分、無理よ。　昨日のあの性格や言い草だもん・・・。　“放っておけ”って言うわ」

ポリア、斡旋所経由で、一応役所とエクレアに力添えを頼む様に申し入れて見ては?。　と進言。　そして、大急ぎで2階に控えるオーリナス・リキッド、そしてアテネセリティウスを信仰する神官戦士のタウローに会った。

「来たか・・」

眉間に皺を寄せたリキッド。　使い古した鋼の鎧を着て、もう旅支度。　タウローやオーリナスも旅立てる姿だ。　武装した軽鎧を神官服の上から着たタウローは、ゲイラーに劣らぬ圧力が有る。

ポリア、サリーにエクレアへ遣いを出させた事を皆に知らせて。
森へ入る必要な薬なども買いに行かせた事も語った。

「リキッド、森までの道は一つ？」

「いや。　森の入り口は一つだが、途中までは3本に分かれてる。　街道の整備された道以外は、どっちの道も蛇行した、山道や谷沿いを行く道か、森の中を通る道だ。　三方から探さないとどれかは・・・」

イルガ。

「じゃが、若い奴等は道を知っとるのか？」

オーリナスが、気落ちして俯いた顔を少し上げて。

「知ってるわ。　彼ら、森に近い北西の辺の出身だもの・・・。　なんて・・バカ、名声を上げるだなんて・・・無謀に」

ポリア、タウローとオーリナスに森の説明をして。

「今、必要な薬や物を買いに行かせてるわ。　早ければ、夕方前に街を出れる。　助けに行きましょう。　サリーさんに言って、合同チームの編成と、仕事の依頼を作成して貰うわ」

リキッド、それを聞いて。

「おうっ、何処までもリーダーとして従うぞ。　頼む」

タウロー、機転の早いポリアに。

「流石に経験者だな・・。　俺も、全力を尽くす」

ゲイラーとダグラス、半刻（1時間前後）で戻って来た。

「買ってきたぞ。　ポリア」

「ありがとう」

ポリア、薬や薬湯の効能を書いた紙をオーリナスなどに見せる。

3人とも、急いで書き写し始めた。

その時下から、サリーが上がって来た。

「どう?」

自分を見て聞くポリアに、蒼褪めるサリーは首を左右に。

「市民でも無い冒険者の愚行に、付き合う役人は居ない・・・ですって」

「ヤッパリね」

ポリア、エクレアにはKの口調には無い非常さを察していた。

「サリーさん、合同チームの編成と仕事の作成は？」

「もっ・・もう・・大丈夫・・・しておいたわ」

ポリア、仲間を見て。

「一時だけど、合同チームの編成よっ。　内容は、向かった若い冒険者達を呼び戻す事。　森に入ったなら・・・」

一同が、ポリアを見る。

ポリア、Kを思って。

「生死が解るまでか、救出が困難と判断するまで捜索。　以上よ。これから、食料などの調達して、直ぐに発つわ」

皆、了解だった。

（ポリア・・・貴女・・・やっぱりケイに似てきたわ・・・）

マルヴェリータ、澱み無く真剣に言い切る親友の成長を見た。

いや、誰もがポリアにリーダーとしての風格を見る。　包帯男を知る面々には、尚更だった。

８：森に分け入るのは・・・無謀なのに・・・。　そして、森へ

ポリア達１０人で南西に向かう街道で、夕方の中。

ポリアは、皆に。

「とにかく、少しでも前に進みたいけど。　無理したら、木乃伊取りが木乃伊よ。　手分けして、運良く見つけても説得出来なければ意味は無いわ。　森まで行けば、自然と手掛かりも見つかるでしょう」

自然魔法遣いのオーリナス。

「ポリアさん、明日は雨。　確かに無理しないほうがいいわ」

ブーメラン・片手斧・長剣を扱えるリキッドも。

「俺も、ポリアに賛成する。　あの森まで手分けして行っても、半日以上先に出た若いあいつ等に追いつけるとは思えない。　しっかり、確実に森まで行った方がいい。　バラけて途中で何か有っても、連絡を着ける手段も無いからな」

その夜、結構遅くまで歩いた。　雨は、朝方から昼過ぎとオーリナスが予測したので、夜はかなり遅くまで歩いた。　冒険者は、時に

は深夜でも夜間行軍する事もある。　イザと成れば、徹夜で行くことも。

結局雨の降り出す前の夜中遅く、一行は街道に用意された夜営宿場に着いた。　商人の男性2人と、女性3人の冒険者が先に休んでいた。

近くには、街道警備の兵士が宿している小屋もあり、挨拶だけして休む事に。

だが、商人の男性に然り、兵士に然り、絶世の美しさを魅せるポリアやマルヴェリータが居るに、妙な視線を向けてくる。　普段なら慣れているが、夜間だと嫌な目だった・・。

「雨で足止めされるといいのに・・・」

オーリナスが、心配そうに寝る前に洩らしていた。

嫌な心配は時に的中する。　朝の陽が登る頃、雨が降り始めた。生暖かい風の中、シトシトと降る雨だ。　皆、休みながら、先に行った3人が無理して先へ先へと歩いていないか心配する。

その頃。　もう先に行った若い冒険者3人は、ミストレスの森にかなり近づいていた・・・。

ポリア達は、一番近道の街道を行く。　だが、3人は森を抜ける経路を歩いていた。　人目に見つかりにくい様にだ。　しかも、一昨日夜中に旅立ってから。　急ぐ足で明けた昨日は無理して歩き。半分の道のりを越えてしまっていた。　昨日の夜は、森の中の大きな木の根元に出来た虚でゆっくりと寝た3人。

「イクイナ、本当に大丈夫か？　俺達で？」

あの、生意気な駆け出し剣士イクイナ、黒髪を短くして、帯状のバンダナを巻いている。　白い、鱗状のスケイルメイルと呼ばれる上半身鎧に、腰に皮の腰当を巻く。

「大丈夫さ。　どうせ、半日だけ森に入ればいい。　サガントとクリントンとかは行く道すら知らなかったんだぜ？　俺等は、森の中だけ知らないだけさ。　秘密兵器も有るし、大丈夫」

黒い雨よけのコートをローブの上から羽織っている、３人の中で一番背の低い青年がイクイナの後ろで動き難そうにして歩く。　魔想魔術師で。　吹き出物の多い細目で小太りの若者ラッチは、降る雨の空模様を森の中で見上げて。

「秘密兵器・・・あの買った樹液の防虫剤か？　メチャクチャ重いよぉ～」

「そうさ、森の中に居るワームってのは、この匂いが駄目ならしい。　一人２０瓶。　合せて６０瓶だぞ。　十分に足りるはずさ。　な、クァーブ」

ノッポで、何処か頼りない感じを漂わせる、体つきは逞しい垂れ目鷲鼻の青年クァーブは、背中の槍が少し重いと感じつつ。　水を弾くコートに着いた雨水を払いながら。

「ま、危なかったら逃げるが１番。　生きてなきゃ、名声も何も無いさ」

この3人、同郷の育ち。　格好付けて、3人で義兄弟なんて杯を交して、今年の春先に冒険者に成って田舎から出てきた。　田舎に近い北東にある大きな都市で揃って、一度チームを作ったのだが。リーダーをしたイクイナの性格が災いした。　依頼主と喧嘩したり、思い込みで仕事をドジったり。　地方の斡旋所で評判が悪くなり、首都に出てきた訳だ。

首都に出てきた時に丁度、チームの事情で解散してしまったオーリナスと知り合い、チームを結成。　だが、最初は寄せ集め状態のチームは、何かと分裂の危機が多いと言われるが。　正しく、その穴に填まったチームのメンバーと云う訳だった。

クァーブ、心配を隠しながら森の中を警戒し。

「これだったら、最初からクリントンに着いていけば良かったな」

クリントンは、オーリナスのチームに入った、20代半ばの調子のいい剣士。

イクイナ、クァーブの言う事が今にして心残りだ。

「うっさいな。　だから、こうして助けに行ってるんじゃないか」

ラッチ、イクイナが助けに行くと言った意味が未だに解らない。

「なあ～イクイナ。　処で、どうして助けに行くのがそんなに凄いんだ？」

「お前、あのリキッドの態度見なかったのか？　斡旋所のマスターだって、あのポリアとか言う顔だけいい女を頼ってたじゃないか」

「うん・・・まあ・・そう見えたけど・・」

「確か、あの“ホール・グラス”ってチーム。　何でもホーチト王国の方で、凄ぇ有名な冒険者チームを助けて有名に成り始めたらしいのは確かなんだ。　一昨日の晩に、他の冒険者から聞いたのさ」

「ふ～ん。　だから？」

ラッチはまだ解らない。

「だから俺達が、森に行った面子を一人でも助けて見ろよ？　もう、オーリナスみたいなババアのチームに入る必要無いんだぜ？　俺達だけでチームを再結成して、あのポリアとか言うような美人をチーム入れればいいのさ」

ラッチ、その話に顔を困惑させる。

「イクイナ～、それはあのチームの皆が実力有ったからじゃ～ないの？」

クァーブも同意見。　斡旋所にて、イクイナにあの叱咤したポリアの声に肝を冷やした。　それだけに、口先ばかり豪快なイクイナが心配に思える。

「本当に大丈夫だろうな・・。　危ないなら、俺は逃げるよぉ。祖父ちゃんに、あの森はオッカナイから行くなって言われてたんだからな・・」

イクイナ、今一乗り気の無い二人に、流石に気分を害した。

「フン、勝手しろい。　もし、2人が逃げて。　俺が成功させても、もう2人をチームなんか誘わないからな～」

ラッチ、濡れるフードを払って水気を弾きながら。

「意地悪いなぁ」

「言ってろ、冒険には危険が伴うんだっ」

イクイナは、やはり“無謀”と“挑戦”の意味を履き違えていた。　実力も経験も知識も伴わない挑戦は、如何に危険か全く解っていない。　正直な話、オーリナスはこのメンバーも加えたチームで2・3度依頼を請けているが。　イクイナの我儘といい加減な強引さに手を焼いていた。　イクイナは、思い込みが激し過ぎる。

さて・・・・。

オーリナスのチームから抜けた二人は、剣士クリントンと、魔法遣いのサガント。　一方、リキッドとタウローを置いていったチームは、リーダーの戦士モウダー。　知識の神に仕える女性僧侶コロン。　剣士の中年女性ニーシャ。　エンチャンターで、ナイフ投げの学者エルフ族の男性ホクヒ。

変わって、雨の中ポリア一行。

全員がマントを羽織ってフードをしている。　遅く昼過ぎに旅立ったポリア達。　小雨に変わって、漸く雨の降り止む気配が雲の切れ間に見える中。　草原に囲まれた街道の上。

ポリア、リキッドと並んで会話しながら。

「でも、そのリーダーも酷いわね。　簡単に仲間を捨てていくなんて」

リキッド、フードの下で苦く笑って。

「あぁ、我がな・・・強すぎるのさ」

「でも、従兄妹の人も一緒に捨てて行くなんて・・・チョットな～」

「俺とタウローをチームに誘ったニーシャは、俺の一番歳の離れた従兄妹でな。　俺が今年始めにリーダーを引退して、チームの解散をしたことを知ってさ。　一緒に入れて貰えそうなチームを探していたタウローと一緒に誘ってきたのさ」

ゲイラー、後ろから。

「それなのに、アンタを置いていくのも不思議な話だな」

リキッド、少し俯き。

「あの森の事は、チームで一緒に成る前から教えておいた。　数年に1・2度は顔を合わせてたからな・・。　時には、口すっぱいぐらいに“入るな”と教えてた。　多分、行くと言ったらモウダー含めて止め様と俺が止めると思ったんだろうさ。　だから・・・黙って・・」

マルヴェリータ、少しフードを上げて。

「従兄妹でも、結構仲良かったのね」

「ああ。　ニーシャは、俺を慕って冒険者に成っちまった跳ねッ返り。　多分、いい加減なリーダーのモウダーを見限って自分のチームを持ちたかったんだろうさ。　俺に、何れはチームリーダーに成りたいって言ってたしな」

イルガ、横のタウローにフードを捲くって見上げると。

「大変じゃな、リーダーのいい加減なのも」

タウロー、前を見ながら。

「悪い人間ではない。　ただ、差別が激しい。　モウダーは、そうゆう男なんだ」

ゲイラー、ヘルダーと見合いながら。

「人の好き嫌いか・・。　そりゃ～どうしようもな～」

ヘルダー、頷く。

システィアナ、ポリアの後ろから。

「ポリちゃんは差別しないもんね。　区別してるだけ～」

ポリア、グッと何か引っかかり。

「システィ・・アタシが・・・何を区別してるって？」

「ケイしゃんと、他たすう～」

ダグラス、腕組みで頷き。

「当ってる。　うん、さ・・あ、いや。　区別してる、区別」

ポリア、鬼の形相でダグラスを睨み。

「ソコっ、うっさい。　区別でも差別でもないっ！！！　頭が上がらないだけよっ！！！」

マルヴェリータ、細めた目で。

「あ～ら、そう・・。　憧れてるクセに」

「ガルルルル～・・・」

ポリア、唸った・・。　反撃が出来ない。

オーリナス、ポリアを見て。

「羨ましいわ・・・理想の仲間って感じで・・・はぁ」

と、溜息。　かなり元気が無い。

ダグラス、雨の中で艶やかに見えるオーリナスに。

「何で？」

オーリナス、落ち込んだ様子で。

「・・・、アタシ。　前のチームに彼が居たの・・。　でも、他の若い女に加入されて、直ぐに取られたわ・・。　チームで修羅場やっちゃって・・・。　結局、私だけ除名」

ポリア、ギリっと目を細め、両手をワキワキさせて。

「おのれぇ・・・クズ男めぇ・・・」

すると、オーリナスはもう疎らにしか降らない空を見上げて弱く笑い。

「ま、去った男はね・・・しょうがないけど。　チームの面々にまで恵まれないのは参っちゃうわ。　雨、もう止むわね」

ポリア、更にワナワナして。

「それも悪いのはベロッカってアイツ・・・。　見た時、どうもガロンやラキームみたいな印象しやがったのよ・・・。　あ～、腹立つっ！！！」

オーリナス・リキッド・タウロー。　ポリアの性格が解り、チームに纏まりが在るのが何となく頷けた。　確かに、こんなリーダーなら一緒に居ても面白そうだ。

9：蠢く森

ポリア達が、森に向かって3日目を迎える頃だ。

「なぁんだ。　怖い森って言うからビビッたけど。　見れば只の森じゃんか」

イクイナ・ラッチ・クァーブの若者3人は、山道前の森に来ていた。
獣道が伸びる緑豊かな森である。　オドロオドロしい雰囲気は無い。　小さい頃から、田舎の森で遊んでいたこの3人だ。　森の中を行くのは慣れていた。

「よし、行くぞ」

イクイナを先頭に、ラッチ、クァーブと続く。　今は、朝も陽が大分に上に上がった頃だ。　見上げる目線に在ると云う事は、昼も間近い。

「ヤバかったら、直ぐに逃げるからな」

クァーブ、怯えた声を出してイクイナに言うも。　イクイナが無視である。

立ち入った獣道は、丈の低い草が生える木々に囲まれた場所。　必死に枝木を掻き分ける必要が在る訳でもなく。　蔦を避けたり。

蜘蛛の巣に顔を着けたりするくらい。

暫く進んでイクイナ、森の木々の間に人が分け入った跡を見つける。
なだらかに薄暗い森を分け入り斜面に向かう様だ。

「おい、こっち」

獣道から外れ、落葉広葉樹の生い茂る暗がりの方に向かって進路を変えた。

さて、イクイナ達が森に入ったのは朝も陽の上がった頃。　それから、幾らか過ぎて、昼過ぎにポリア達が細い山道を歩いてやって来た。

リキッドとオーリナスは、イクイナ達が入った場所で屈んで。

「おい・・リーダー。　コレ」

と、リキッドは折れた草を見る。

オーリナスも、まだ折れて間も無く。　染み出した水分を滲ませる茎を持って、ポリアを見る。

「折れて然程経ってないわ・・。　イクイナ達、もう森に入ってるっ」

ポリア、苦渋の顔で。

「間に合わなかったわね・・」

ポリア、昨日の夕方。　途中で行き過ぎようとした農家の荷馬車に声を掛けて、事情を話して乗せてもらった。　初老の夫婦で、気さくに乗せてくれた。　ポリア、朝早くに起きて荷馬車を出してくれたので、お礼に少しのお金を置いた。

だが、ポリアの機転は確かにイクイナとの距離を大きく縮めた。若く麗しいポリアは、貴族生まれの故に気品が有り。　いざと成ると人に対する対応は丁寧だ。　だから、怪しまれずに乗せて貰えたのかもしれない。　以外に、街道では盗賊なども出るから、用心を叫ばれる。

ポリア、さっと一同を見回して。

「先頭は、私とリキッドで。　魔法を遣う皆は中心で、戦士や剣士で囲もう。　いきなり襲われたら、魔法は咄嗟に弱いものね」

Kは一緒の旅の中で、ポリアに所々で肝心な事を語ったし。　一緒に動いて見た経験に、ポリアは基づいた。

マルヴェリータも、オーリナスも異論は無い。

タウロー、大きな刺す片側と、平たく殴るトンカチの様なハンマーを抱えて。

「俺は、左を」

ゲイラーは。

「システィの横を・・・」

ダグラス、呆れて。

「右って言え」

と、イルガと背後に。

ヘルダーは、ポリアの横に。

ポリア、ヘルダーを見て。

「行くわよ」

と、仲間に声を掛けた。

ポリアが見るに、一番強いのはヘルダーとゲイラー。　あと、身のこなしに隙の見えないリキッドだ。

ポリア・イルガ・ダグラス・タウローは、戦力的に判断すれば同じ位だろう。

ポリアの判断で、ヘルダーはタウロー側に。　リキッドは真ん中に、ポリアがゲイラーの方に寄る形。

獣道を見ながら、リキッドは。

「しかし、リーダー。　御宅、金持ちだな」

ポリア、周りに気を配りながら。

「ま～ね。　前の一件で、結構貰えたわ」

リキッド、歩みを止めずにポリアを見て。

「その時買ったのか？　鎧と剣・・。　少なくとも、剣は違うだろう？」

ポリアの剣と鎧は白銀製。　耐久性も高く素晴らしいが、値段は通常の５倍か、それ以上。

「良く解るわね、買ったばかりじゃ無いって」

ポリア、不思議と自分の鎧や剣を見る。　使い古した様子は無いが。

リキッド、自分の遣い古した細かい傷の多い鋼製の上半身鎧を擦ってポリアの剣を見る。

「この剣は、柄が普通の職人の作りでは無い。　握る時に、汗や手油滑らない様に加工されている。　しかも、その鞘。　古い装飾で、一昔前・・ざっと１００年は昔の王族などが愛用した柄だ。　そんな鞘を付ける武器屋が、その辺に転がってないさ」

ポリア・イルガはリキッドを注視した。

前を見て笑うリキッド。

「いい剣だ。　使い込まれて、磨かれ、使う君に似合っている。　持って、恐らくは何とも考えないハズだ。　まさしく、君の剣だ。　他の誰の手にも合わない」

ポリア、剣を習って少しして秘かに使っていた剣だ。　父親の物だ

が、父が何時もお飾りにしていて。　ポリアが、外にこっそり出るときに壁から取り外して使っていた。　剣術を教える訓練所に、ポリアは身分を偽り良く通ったのである。

「そうね、確かに・・・思い出も有るから二つと無い剣だわ」

「なるほど、そんな一品に早くも出会ってる君は、中々凄いぞ。さ、此処から森に分け入ろう」

ゲイラー、緩やかな斜面の獣道はまだ続くのに、脇に反れると聞いて。

「近道か？」

リキッド、足元の草を指差し。

「この先に行って無い。　こっち、少し木々の枝が分かれてる。こっちに行ったらしい」

すると、マルヴェリータ。　森の奥に何か沢山の蠢く気配を感じ。

「ねっ・・ねぇ・・・。　何なの・・この山・・。　奥の方に、凄い気配を感じるわよ・・。　丸で、森の木々が蠢くモンスターみたい・・」

リキッド、額に汗を薄っすらと滲ませ。

「ワームだ・・。　餌が来たから、色めき立ってるんだろう」

ポリア、そこで。

「ねえ、コレ」

と、重そうな荷物を背中から降ろす。　どうにも、ポリアの荷物が重そうなのだ。　実は、街を出るときに、ポリアが店に立ち寄って、何かを買っていた。

「なんだ？」

リキッドの言う前に、ポリアは菱形の細い小瓶を取り出し。

「楠の木の樹液で作った防虫剤よ。　ワームのキライな匂いみたい・・。　みんな、服とかに着けて」

リキッド、驚き。

「何処でソレを？」

「図書館よ・・。　森について調べるついでに、モンスターの事も少し」

「急いでいて忘れておったが・・・。　ワシの助かったアレが、また有るとは・・・」

ポリア、全員に小瓶を配りながら。

「前も襲われたのね？」

「ああ・・・。　たまたま、傷ついて逃げ込んだのが楠の木の上でな。　ワームが登って来ないモノだから、枝を折って折って落とし

て。　奴等が逃げるのを見て嫌いと解った・・。　二度と来ないと夜に森から逃げ出した時に心に誓ったんだがな・・・。　また、来るとはな」

オーリナス、服に掛けながら化粧品にも入る香りだからか。

「いい匂い・・」

システィアナは、鼻を摘んで。

「くっさ～。　においが～きちゅい～です」

と、ローブのフードを被って服に掛ける。　システィアナは、嗅覚が鋭い方ならしい。

タウローとゲイラーは、似た体格でお互いに協力して背中まで掛け合う。

リキッド、ポリアに。

「原液で掛けとるが。　匂いの効果など夜には無いに等しい。　若い奴だけ連れ戻そう、ニーシャは・・・諦める」

ポリア、真剣な顔のリキッドに。

「リキッド・・・もしも見つけたら・・・全員助けるわよ」

リキッド、強く頷いた。

その頃。

「うわっ・・わわわわっ！！！」

驚くイクイナを先頭に、若者3人が掌に入る程の瓶を片手に回りに撒き散らして逃げている。

木々の間隔が少し広く、枯葉・枯れ枝が地面に敷き詰まった薄暗い森の中だ。　倒木などは少なく、緩やかな登り斜面の中で、青々とした上の陽の当る所ばかりに枝葉が生い茂り。　地上3メートルほどは殆ど枝も無い木ばかり。

その木々の間をイクイナ達を追い掛ける生き物が居る。　白っぽい肌色の長く太い管の様な生き物が、ズルズルウネウネと枯葉・枯れ枝の上を伸縮して這いずって進む。

「イクイナっ、逃げ道と逆だよっ！！！」

泣き叫ぶラッチ、小太りの体格故に遅れ気味だ。

「あんな大量のワームだなんて聞いてないっ！！！　逃げ道も何も追いつかれるぞっ！！！」

と、先頭のイクイナ。

クァーブ、ラッチを気遣って。

「早くっ、もっと早く走れっ、ラッチっ！！！」

そう、3人を追い掛けるワームの数は、１０や２０では無い。　後ろに広がる地面一面にワームが広がる。　3人が逃げながら地面に巻く楠の木の匂いがする薬液だが。　落ちた場所で躊躇するワーム

を後から来たワームが轢き倒して進むのだ。　中には、零した場所を回避して、木の幹に巻き着いて横移動して避ける。

その騒がしい雰囲気に誘われ・・・。

“シュルルル・・・シュルルル・・・・”

舌を激しく出し入れする、伸び上がった高さが3メートルは楽に超える大蛇のイビリックバイバーも忍び寄っていた。

その頃、首都ウォルムでは・・・。

「エクレアっ、本当かっ?!!」

ジョイス、エクレアの公務としての優雅な私室にて、ポリア達がミストレスの森に向かった事を知った。　外務大臣の男性とはジョイスは旧知の間で、数日公私に渡って共にし、大統領にも謁見したりしてポリアの事を知らなかった。

驚くジョイスの顔が、見る見る蒼白に。　バルコニーに出る窓が開かれていて、白いベールの様な内側のカーテンがヒラヒラと風に揺れる。　同じ様にジョイスのローブの足元が、風に靡いていた。

金の掛かっていそうな高級感漂う備品の備わった私室の窓前。　デスクの上の羽ペンが、風にたゆたいインク瓶に凭れる中。　ゆったりとした背凭れの揺れる椅子に座ったエクレアは、冷めた目をジョイスに向けて。

「あらジョー、そんなにショックだったの?　でも、本人達で決めた事じゃない。　死のうがいき・・」

と、言い放つ途中で、

「君に、ソレを言う資格は無い」

ジョイスが、声を挟んだ。

エクレア、高価な本が並ぶ本棚を背に、ジョイスに細めた目を向け。

「そう」

ジョイス、真面目な顔で。

「君は、昔から手が足りないと周りの冒険者を頼るクセに、人の助けには応じなかった。　その魔法の杖、誰が発見したっけ？」

すると、黒いドレスのエクレアがバッと立ち。

「何が言いたいのっ？！！！　説教っ？！！」

ジョイス、エクレアを真面目な顔で見て。

「君では話に成らないな。　テレイズ氏と会ってくる。　もう、二度と顔は見に来ない。　君とは、これからは立場上の付き合いだ。　御免」

と、背中を向ける。

エクレア、ポリアやマルヴェリータを思い出し。

「ジョー、貴方・・・好きな女が居るのねっ？！！！　そんなの許さないっ！！！！！　３年前も今回もっ！！！！　私をコケにしてっ！！！」

ジョイス、風が舞い込む広いエクレアの私室で立ち止まり。

「当て付けで結婚して、一々顔見に来させる女性は好みでは無い」

エクレア、ギョっとした顔に変わる。

ジョイス、颯爽と部屋を出て行った。

ジョイスは直ぐに、別室で白髪の老人と会談し馬車を１台借りた。
それを、ミストレスの森の入り口付近で待機させて欲しいと。

その話が終わると・・・。　一瞬にして、テレイズ氏の私室のバルコニーから姿を消した。

所変わって、斡旋所【深水鏡の楼閣】。

１階のカウンターで椅子に座り悩むサリーが居た。　従兄妹が居なくなって、何か忙しく文句などの苦情ばかり処理して居る毎日で。
更にこんな事件だ。　下手すれば、冒険者協力会から叱責を受けるかもしれない。

「わあっ」

「きゃっ」

従兄妹の娘２人、お手伝いに来ている二人がカウンター内から入り

口の方を向いて嬌声を上げる。

「え?」

サリーが、左右の2人を見ると・・。

「さ・・サリーお姉ちゃん・・・人が・・・」

「い・・・いきなり・・・現れた・・・」

「二人とも・・・・何を」

サリー、前を見ると。　白い龍の刺繍の入ったローブに、ステッキを持った男性が立っているのを見る。

「あ・・・・な・・何か・・・」

ジョイス、サリーに歩み寄る。

「貴女が、主ですかな?」

サリー、柔らかい笑みの優しそうなジョイスに見惚れ。

「はい・・預かっているサリータリスですが・・・」

ジョイス、手を前に恭しく一礼し。

「私、チーム“ホール・グラス”の皆と友人のジョイスと申します」

「えっ・・・」

サリー、相手が誰か解った。

「あっ・・これは・しっ失礼を・・」

と、立ち上がる。

ジョイス、彼女に笑い。

「いえいえ、不躾に来たのは私ですから・・・。　スミマセンが、ポリア達は何時、此処を?」

「あ”っ」

サリーは、もう相手が有名なジョイスと知って大慌て。　どもりながら、受け答えを・・。

「なんと・・・合同チームを・・・。　ああ、若い冒険者に焦って、急いだか」

ジョイス、グッと歯を噛み締める。

「す・・すみません・・。　もう、どうして良いか・・・初めての事で・・・」

狼狽するサリーに、ジョイスは真剣な顔を向け。

「それは、致し方の無い事。　それより、これから私も向かいます。方角は、どちらですか?」

「えっ？　あああ・・・」

サリーから聞いたジョイス、その方角を見て。

「大体、辿り着くのに掛かるのはどの位ですか？」

「2日半です・・・」

ジョイス、気を引き締め。

「2度、休まなければ駄目か・・・」

「え？」

サリーが言った瞬間・・・ジョイスの姿がフワリと残像に変わって消えた。

「まあっ！！！」

“記憶飛翔転移”（イメージア・テレポート）。　行った事の有る場所や、知り合いの居る場所に瞬間移動する魔想魔術の奥義中の中の秘儀。　1回で移動出来る距離は、魔力や集中力に左右され、短いと数十メートル。　長い移動でも５０キロぐらい。

だが非常に魔力を消費する魔法で、知らない土地でイメージを頼りに飛ぶのは非常に危険である。　下手すると、違う場所に行ったりするし。　魔力の途切れが消えている間に起れば、最悪自分が消えたままになって消滅してしまう可能性もある。　何より、移動距離は知っている道の１０分の１程に落ちる。

「くっ」

ジョイス、ウォルムの郊外、“外の門”近くに出た。　顔は少し険しく、額に汗が・・。

（やはり、行った事の無い場所は必要以上に魔力を使うな・・・。
だが、リーダーが認めた彼女やマルヴェリータ達を死なせる訳には行かない。　待ってろ、死ぬなっ）

ジョイス、また杖を構えて集中し消えた・・・。

ポリア特別編　セカンド　3（後書き）

次号、予告

遂にワームなどモンスターと戦うポリア達。　果たして、イクイナ達を救えるのだろうか。そして、ポリア達を追うジョイスは、ポリア達と逢えるのだろうか。

次号、数日後掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

ポリア編のセカンドもなんとか此処までアップしましたが。　連休中に仕上げれたらいいな～と思っております＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編　セカンド　４

ポリア特別編：その時は其処から始まる

１０：這い寄るモンスター

ポリア一行、リキッドの案内で歩みを速めてなだらかな木々の中を抜けて進むと・・。

「居たッ！！！」

仲間に轢かれて、動けるまで休んでいる傷ついたワームに追いついた。

“ギッ・ギッギッ”

乾いた軋む様な声を、半開きの丸い頭部に開いた口から響かせる。

瞬時、リキッドが片手斧を右手に飛び掛かって、口しか無い様な頭を唐竹割りに切り裂いた。

只見送る面々の中で、ポリアは。

「やっぱり、鳴き声で仲間を呼ぶのね？」

リキッド、薄暗い森の中で頷き。

「今のは、威嚇だ。　あれが長く鳴くと、呼び声になる。　弱点は頭だ。　腹を斬っても、頭の近くでないと喰い付いて来るぞ」

ダグラス、まだ先の起伏している森の先に、ワームの姿を数体見て。

「どんどん進もうやっ、モタモタしてたら陽が暮れるっ！！！」

歩き出すポリア。

「でも、夜の方がワームを考えるなら好都合よ」

ゲイラー、モンスターは夜に活発化する傾向が強いから。

「何故だ？」

「ワームは、自分で体温を調節出来ないみたい。　山にいるから、夜の気温が熱帯夜にでもならない限りは、巣穴に帰るか動かなくなるって書物に・・」

リキッド、ハッとして。

「そうか・・・それで俺は逃げれたのか・・・道理であの時、夕方から雨が降り出して奴等の動きが急に鈍った・・・」

ポリア、ギリっと真剣に前を見て。

「とにかく、無理はしちゃだめよっ」

と、自ら迫るワームに一気に走り込んで、蠢く丸い頭を刎ね飛ばす。

ワームの体長は、意外に長い。首を高く擡げられたら、飛び込まないと斬れないだろう。

ヘルダー、二匹遅れてやって来たワームに走りこみ、競りあがって間を走りぬけ様に戦扇子を振り舞った。

「・・・」

ワーム二匹が、首と胴の間で3つに分かれる。

見ていたオーリナス、見事な速さに驚いて。

「凄い・・・」

リキッド、笑みを洩らして。

「こりゃ～頼もしい」

さて・・・。

追い掛けられてるイクイナ達。

「うわわわっ!!!　イっ・・イクイナっ!!　も・もう・・辛いよおっ!!!」

走ってるラッチ、顔中に汗を流して限界の様だ。

イクイナ、木々の間に岩がボコボコ出だしたのを確認して。

「岩に瓶を投げろっ！！！　正面の岩の上に登って逃げるんだっ！！！」

クァーブ、瓶を岩に叩きつけて割りながら。

「何処かに逃げ込もうっ！！！　夜に成れば逃げれるんだろっ？！！！」

イクイナ、やはり助ける処では無かったと思う。

（クッソぉっ！・・・オーリナスのババアでも助けに来いよっ！！！！）

田舎の町でも、地主の息子で我儘に育てられたイクイナは、どうにも性格が悪い。　自分勝手で手に負えなくなると他力本願に変わる。

これで、助けても礼すらもきちんと言えないのだから始末に悪い。

3人、岩壁の様に登る岩に瓶をぶつけ、岩や枯葉に薬液が飛び散り匂いが立ちこめる。

”ギィギィ・・・ギギィ・・ギィ・・・”

押し寄せるワームの群れが、鼻に染みる様な強い匂いに立ち往生し始めた。　何百に近い数のワーム。　匂いに逃げるもの、イクイナ達を追う為に左右の方から回り込もうと岩場を横に移動するもの。

中には、仲間に臭うのが嫌なのに退路を絶たれて、苛立っている

のか仲間に噛み付くワームまで現れた。
ワームの動きに鈍りが見えたイクイナ、岩の上から笑って。
「へへっ、仲間同士で争ってるぜ。　今の内だ、もっと先に進んじまおう。　逃げ切った方が、囲まれるよりいい」
ラッチは、もうゼーハーゼーハー息を上げて。
「休みたい・・よおお・・・」
イクイナ、岩を登りだしながら。
「うるせえっ、モンスターも間近で休めるかよっ！！！」
と、怒鳴った。
クァーブ、ラッチの腕を掴んで、汗だくの顔で。
「ホラ、ワームの中にも岩を乗り越えようとしてるヤツ居るぞ。食われたく無いだろう」
「はあ・・はあ・・・ありがとう・・はあ・・はあ・・・」
ラッチ、クァーブの手を掴んで岩場を上がる。
斜面の少し急になった岩山は、見下ろせる形でワームも登れ無い高さで終り。　続く林に逃げ込めば、また枯葉の黒ずんだ物が地面を覆う森になる。　３人は、森の奥に闇雲に走り抜けた。

だが、イクイナの向かっている方は果実の有る方角では無かった。

所々、雲の掛かる晴れ空の下、木々が疎らに成って、イクイナ達は丸で雑木林に近い雰囲気のなだらかな斜面に出た。

栗の木や、椚・楓など紅葉する木々が生える中、何故か倒木が増えて木の根元から引っ繰り返っている。

「はあ・・はあ・・・はあ・・・此処・・・何処？」

ラッチ、涼しげな風を受けて膝に手を付けて身体で呼吸する。

イクイナ、後ろを振り返り。

「なんか・・・ワームが追って来なくないか？」

汗を顔中に流すクァーブも、何か不気味な気がする。

「そうだね・・。　追って来たくない理由・・在るのかな？」

イクイナ、笑みを見せて。

「バ～カ、俺達が撒いたのさ。　匂いで足止めしたからな」

と、歩き出す。

「そう・・・かなぁ・・」

クァーブ、ラッチの背中を叩いて歩き出す。

3人、イクイナを先頭に林の中を歩き出した。　倒木を越えて・・・。

一番後ろから行くラッチ、風でざわめく木々の枝の音に気が向いた。

「あれ・・」

踏み越えた倒木が動いていた様に思えた。

「ラッチ、置いてくぞっ」

イクイナが、2つ先の木での横で呼ぶ。

「あっ、うん」

ラッチが、イクイナの方に向いて歩き出した時だ。

イクイナ・クァーブは、ラッチが背後にした倒木がヌヌヌヌ・・・・と音も無く。　ただ枝と枯れてない木の葉を揺らして起き上がるのを見て唖然とした。

クァーブ、不気味な木の表面に見えた目と口の様な虚が赤く光ったので危険を感じて。

「ラぁーーーッチっ!!!!!　後ろにモンスターだああっ!!!!」

「え?」

ラッチ、いきなりの事に2人を見るだけ・・。　すると、急に自分の周りだけ影が差して暗がりになった。

「・・・・・」

ラッチが振り向こうとする時、イクイナは大声で。

「逃げろラーーーーッチっ！！！！」

だが、全ては遅すぎた・・。

「あっ、わあああああああーーーーッ！！！！」

目の前に、倒れていた倒木がまた倒れて来ていた。　振り向いて驚きの大声を上げるラッチは逃げる事も儘成らないままに・・・。

“ドスーーーーン！！！！”

倒木に押し倒されてしまった。

「ラッチっ！！！」

「大丈夫かっ、ラッチ！！」

走り寄ろうとする二人。　だが・・。

“シュルルル・・・シュルルルル・・・・・”

乾いた音が、聴こえて左を見ると・・・。

「うわあああああっ！！！！！」

驚き腰を抜かすクァーブ。

「でで出たあああっ、デカイヘビだあああっ！！！」

イクイナも逃げ腰に。

獲物の匂いを嗅ぎつけ、イビリックバイバーが寄って来たのである。

「にっ・逃げるぞクァーブっ！！！」

「でっ・・でも・・ラッチがああっ！！」

「バカっ、助かるかっ！！！！」

イクイナ、更に奥に走り出す。

「うわああ・・・ラッチごめんっ！！　ごめんよおおおっ！！！！！」

クァーブもイクイナの後を這い蹲る様にして追う。

「あ・・・あ・・・・・」

倒木の下敷きになり、虫の息で外に見えている手を血だらけにしながらラッチ・・・微かに動かした。

其処に、血の匂いを嗅いでイビリックバイバーが寄って来る。　大きな頭を左右に動かし、ラッチを倒木から奪おうとするのだが、右腕意外は見えない。

“シャアアア”

イビリックバイバーは、一気にラッチの右腕に噛み付いた。激しく揺らして振り回すように振動を起こして・・・。“バリィッ！！！！！”と、凄い音を上げて、ラッチの右手を腕の付け根からもぎ取った。“ビシュ！！”っと、鮮血が倒木と地面の隙間から、脇の枯葉に噴出して赤く染める。

だが、倒木に付着して、幹を垂れる血が、流れながらスぅ～っと吸い込まれる様に染み消える。

この倒木は只の倒木では無い。“ブラドゥカロカ”と呼ばれる悪魔の木だ。倒木と見せかけて、獲物を待つ。獲物が来たら、ゆっくり起き上がり。背後から獲物に倒れ掛かって押し潰して圧死させ。血と、肉を幹で養分として吸収するモンスターだ。

ブラドゥカロカの横に、イビリックバイバーが近づいて頭を付けて揺すったり、退かそうとする。退かして、ラッチを一人占めしたいらしい。

一方の逃げるイクイナは、もう自分の事しか頭に無かった。ドンドン先に進む。

「お～いっ、イクイナっ！！」

クァーブが叫ぶが、イクイナは振り返らずにまた薄暗くなる鬱蒼とした森の中に走って行く。

「クソっ・・やぱっり・・」

恐怖で、腰が覚束無いクァーブは、途中で止まってイクイナを見送

った。

「イクイナのバカヤローーーっ！！！！」

親友のラッチを失って、クァーブは嘆きと途方に暮れた。

その頃。

ポリア達はリキッドが異変を感じていた。　ワームに追われない分、ポリア達は冷静に進める。　だからリキッドは、獣道から反れて直ぐに。　何者かが迷うのを恐れてか、木の幹に目印のキズを付けて。　其処に、安物の細く短いナイフを刺して行ったと思われる物を発見していた。

だが・・・ワームを倒して行くうちに・・・。

「リーダーっ、おかしいぞ」

「え？」

ポリア達が更に奥へ行こうとして居たが。　リキッドの声に全員が立ち止まった。

大量のワームが通った後は、湿って地面に敷き詰められた枯葉がグシャグシャになる。　だから、地面を見ればワームの移動した先は一目瞭然。

リキッド、ワームの向かった方を見て。

「目印のナイフは真っ直ぐに山の間に向かって行ってる・・・ホラ。

なのに、ワームは左の山間部に向かってる・・・。　もしかして、先に入った若者達はワームに追われて“マニュエルの森”の方面に向かってしまったのでは無いか？」

「まあ・・・」

マルヴェリータ、驚いて黒い薄い生地の手袋をした右手を口に当て、ポリアを見る。

ポリア、全員を見る。

ゲイラー、ポリアを見て。

「どうする？」

ポリア、目を鋭くして。

「助け出せる可能性の高い順を考えれば、イクイナ達よ。　行きましょう」

１１、遂に、激突。

クァーブ、鬱蒼とした森に入ったイクイナの後を追わず。　右へ右へと林と森の境を走り出す。

（ラッチ・・ごめんよお・・・ラッチ・・・）

小さい頃から、一緒の親友だった。　もう、イクイナは信じられない。　涙がボロボロ出る。　頬が涙で濡れていた。

「はぁ・・はぁ・・・」

ワームを足止めした岩場近くを、そろそろと歩いて行く。　木々がうねって起伏する急な斜面だ。　下手に足を滑らせたら、岩の下に落ちてワームの群れに襲われるだろう。

その時だ。

「ああっ・・・」

クァーブのズボンを、何かが掴んだ。

「・・・・」

恐る恐る振り返ると・・・・。

「あ・・・アンタ・・・」

頭に姉さん被りでバンダナを撒いて、土で汚れた丸めで顔は大きい。　迷彩の上下の服に、皮の胸当てを付けた人相の悪い男・・・。

“ベロッカ”と、ポリアに名乗ったアノ男だった・・。

「お・・おいっ・・・くっ・・食い物・・・」

斜面に生えた木の根っこが半分剥き出しに成っている所の、根っこの間に隠れて居た様だ。　顔が土でかなり汚れている。

クァール、諸悪の根源であるこの男に、救済の手を伸ばす気持ちは更々無い。

「離せっ!!　全部アンタが悪いんだっ!!!　騙しやがってっ、殺してやるっ!!!」

背中の槍を手に取った。

ベロッカ、必死にクァーブのズボンを掴み。

「うるせえっ!!!　騙される方が悪いんだよおおおっ!!!」

クァーブ、ベロッカを離した。　ベロッカ、左肩と右足に怪我をしていて動けない様だった・・。

クァーブ、イクイナは別にして死んだラッチが悔しい。　憎悪に染まった顔で、ベロッカを見下ろす。

「そうか・・騙される方が悪いか・・」

地面に這い蹲ったベロッカ、疲労の色濃い顔でニヤけて。

「そうさ・・。　騙される方が悪い・・へへへ・・」

「じゃあ・・・アンタも騙されて見ろよ」

クァーブの憎しみめいた顔に、ベロッカは何か嫌な予感がした・・。

クァーブ、ベロッカの右手に槍の刃先を付けて。

「聞きたい、他のみんなはどうなった?」

ベロッカはクァーブが自分を脅してると察して。　悪意向き出しの目で睨み。

「てめえ・・・俺を脅してるのかよ・・・ああ?」

クァーブ、何故か槍を引いた。　自分の後ろの地面に槍を刺し。

「話せ。　そしたら・・・食い物ぐらいは分けてやる」

ベロッカ、傷の着いた瞼の上が瘡蓋に成ってる右目を上げて。

「ほ～お、話が早いな・・・」

手短に語るベロッカ。

ベロッカの案内で森に分け入ったモウダー達。　やはりワームに襲われたが、イクイナと同じ様にワームの嫌う匂いの化粧品や、防虫剤の原液を持って来ていて。　ワームの群れをやり過ごして、山奥の果実を取る事に成功したらしい。　だが、帰りで山の気象が激変。　短時間の集中的な豪雨で、匂いが消されてしまったらしい。　更

に、彼方此方からモンスターが集まって、帰りはもう手に負えない程のモンスターを相手にして皆死んだらしい。

ベロッカ、自分の入っている穴に顔を動かしてから。

「あ・・アンちゃんよ・・。　あの穴には・・まだ色づき始める前の果実が残ってるっ。　どっ・どうだい、俺を助けなよ。　雇い主から貰える報酬を、たんまり2人で分けないか？」

クァーブ、それを聞いてグッと顔を険しくして・・右手を背中に回した。　そして、ベロッカに屈んで近づくと・・・。

「とにかく、アンタが動けないと話に成らないな。　コレ・・・食えよっ！！！！」

と、護身用のナイフを抜いていきなりベロッカの右手に刺し込んだ。

「う”ぎゃあああああああーーーーっ」

ベロッカの絶叫が森に上がる。

ワームの群れに近づいていたポリア達は、ソレが森の奥から響く形で聴こえたのだ。

「あっ」

ポリア、声の方を見る。

リキッド、目を険しくして。

「男だ・・・少し低い声だな」

オーリナス、顔を蒼褪めて。

「もしかして・・・クァーブかも・・・」

「急ぎましょうっ」

ポリア、急いで走り出した。

さて、イクイナ達が撒いた防虫剤の匂いを嫌がったワームの一部は、後戻りをし始めていた。
ワサワサと森を戻るワームとポリア一行は、遂に鉢合わせする。

２０匹近い群れを見て、マルヴェリータ。

「先制よっ、行くわっ！！！　魔想の力よ・・我の敵を討つ月の輪を呼んでっ。　”月光輪”（ルーナチャクラム）！！！」

マルヴェリータ、スッと杖を上に掲げて唱えると。　幅１０メートルほどの間に、黄色い光の輪が直径１メートルで、幾らかの間隔を開けて無数に出来る。

「行ってっ！！！」

杖を大きく振り込めば、その光の輪が素早くワームに飛んでゆく。
途中にある木もスパッと斬って薙ぎ倒し。　ワームの身体に当っては斬り飛ばす。

「おおっ、凄い！！」

リキッド、始めて見る魔法に驚いた。

ポリア、１０前後の木が倒れてワームを潰し。　ワームに当った黄色い輪が弾けたのを見ると・・・。　マルヴェリータを見て。

「飛ばし過ぎないでね。　ワームを倒しきる前にへばるわよ」

マルヴェリータ、杖を構えて。

「解ってるわ」

ポリア、打ち洩らしたワームに向かって、

「行くわっ」

イルガ、槍を構えて。

「参る」

マルヴェリータの魔法を喰らって、奇襲を受けたワームはバラバラに誰かに向かってゆく。　だが、明らかにポリア達はKと行った前の仕事で何かを掴んで居た。

「えいっ！」

剣を振るうポリアに迷いは無く。

「うおおおりゃーーーっ！！！！」

掬いにワームの一匹を斜めに切り裂いたゲイラーの大剣が、唸りを上げて別のワームを斬り潰す。

マルヴェリータが木を切って、視界が良くなった中でタウローがハンマー一閃。　ワームを打ち飛ばして木にぶつけて潰し倒す。

「ご～か～い」

ダグラス、笑ってオーリナスとシスティアナを守っている。

だが、ワームの中を突き進むのは、ワームの群れの本体に向かう事。
　どんどん相手にする数は増える。

オーリナス、木々の間が広がって来たので。　木を仲間に倒す心配の無いのを悟って前線に出た。　杖を構えて、集中し・・・。　今吹いている少し強い風を感じる事に集中する事、刹那・・。　心の中に、何か風の吹く流れを感じた・・。　風を感じる感覚が、集中して張り詰める魔力とリンクした時。　パッと目が開く。

「自然の力は大いなる力、その力よっ！！！　風の欠片を我が魔力の呼び声に応呼せよっ。　トルネードダンスっ！！！」

と、杖をクルクル回すと・・。

「おわっ、風が・・・・」

オーリナスの身の回りに、つむじ風を超える強風の渦が出来上がる。
　幅は５メートル近い。

「行けっ！！」

杖を振り込めば、地面を風の渦が走って正面直ぐ近くに迫ったワーム数匹を巻き込んで弾き飛ばす。　しかも、鎌居達の効果か、ズタズタに切り裂いて。

「凄えっ」

驚くダグラス。

だが、それで終りでは無い。　オーリナスが右に杖を動かせば、竜巻も動いて右のワームどもを薙ぎ倒し。　左に動かせば、また数匹のワームを薙ぎ倒す。　最後は、向かう先から次から次と、限（きり）の無いワームの群れが向かってくる正面に向けて、オーリナスは大きく踏み込んで、一回転回って杖を振り込み。

「破砕っ！！！」

竜巻に近い風の渦は、オーリナスの支配を離れて、ワームの群れに向かって一直線にスピードを上げて突進する。　次々と向かってくるワームを飲み込んでズタズタにしながら回転する力に引き込んで・・・。　３０匹近く引き込んで、竜巻の風の色が黒く変色した時、一気に風は空気中に掻き消えた。　その場に、ズタズタに切り裂いたワームの残骸を一まとめにして。

「は～～～・・・・」

大きく息を吐いたオーリナス。

ゲイラー、竜巻の通った回りの木々が、殆ど裸木に成って枝も折られた幹だけ残ったのを見ると・・・。

「魔法はすげ～や」

と、肩を竦める。

オーリナス、ポリアに向いて真剣な顔で。

「少しは楽に成ったでしょ？」

「ええ、マルタに負けないわ。　オーリナスさんって」

マルヴェリータも、納得の威力だった。

森を突き進むポリア達、ワームの群れはまだまだやって来る。　ポリア一行とワームの戦う騒ぎに、躊躇し屯していた群れの後方がポリア達に向かい始めたのだ。　そして、イビリックバイバーや大きな毒蜘蛛までも寄ってくる。

ポリア、木の上をガサガサ移動する蜘蛛を見て。

「新手が上に居るわっ。　気を付けてっ！！！　左から大蛇よっ！！！」

マルヴェリータ、ダグラスとタウローで見合い。

「大蛇を片付けるっ！！」

頷く二人は、大蛇に向きを変えた。

リキッド、剣を仕舞って鋭い刃先のブーメランを持ち。

「蜘蛛は俺がっ」

オーリナス、ゲイラーの脇に来て。

「ワームを足止めするっ、踏み込み過ぎないでっ」

「オーケーっ、期待するぜっ！！！」

ゲイラー・ヘルダー・イルガ・ポリアは、横に並んでワームを撃退する。

システィアナ、杖を構えてニッコリ。

「フィリアーナ様、悪い魔物を眩しくしてくださいましっ。“聖なる太陽”（ホーリーサンシャイン）ですよ～」

と、杖を掲げると、モンスターの間に瞬間、天から光る光の雫がキラキラと。ワームや、毒蜘蛛の動きに合わせて唱えたので、弾けて瞬間的に光輝く光をモンスター達はモロに食らう事に。

「わおっ」

ポリア、一瞬たじろぐも。直ぐに収まる光の後を見れば、大蛇は目をやられて前が見えなく焦り出し。毒蜘蛛も目をやられて、地面に引っ繰り返って落ちてきた。

ワームの動きが、鈍って右往左往するのを見るゲイラー。

「光は感じてるのか・・。清らかな光に恐れたな」

リキッド、目を細めて。

「くたばれっ！！！」

離れて落ちた蜘蛛だ、体液を誰かに掛ける事も無い。　ブーメランを投げる。

マルヴェリータ、その場で暴れるヘビに飛礫の魔法を唱えて打ちのめす。

オーリナス、地面から大地の力を借りて、数枚の岩の壁でワームを遮断し。

「倒圧（つぶせ）っ！！」

杖を振り込めば、高さ5メートル近い岩の壁が、ワームに向かって倒れて行った・・・。

流石、実力を付け出した冒険者達の集まりだ。　思慮深いオーリナス、老練の経験者リキッド、破壊力を備えたタウロー。　精鋭の素質十分なポリア達に、この面々が加われば下手なモンスターなどザコになる。

岩の下敷きになったワーム達。　後から来たワームもシスティアナの光に驚き萎縮している所に、仲間を潰した大岩の倒れた風圧が襲ってパニックに。　其処に、並んで雪崩れ込んでくるポリアやヘルダーやゲイラーは、ワームには恐るべき相手だ。

毒蜘蛛は、リキッドのブーメランで頭を切り裂かれ、腹部を切り離

されてそのまま動かなくなる。

イビリックバイバーも、魔法の飛礫に打ちのめされて地面に倒れた所へ、走り込んで来たタウローのハンマーを頭部に受けて脳震盪を起こし。　ダグラスに眉間を剣で突かれて絶命した。

どんどん、ポリア達は奥に踏み込む。　イクイナ達を助ける為に。
　無数のワームの群れを、押し返し始めた。

その頃、ベロッカとクァーブの居る岩場では・・・。

「なっ・何するんだっ！！！！　止めろっ！！　たっ・頼むからッ止めてくれぇぇっ！！！」

泣き叫ぶベロッカが、地面向き出しの岩場ギリギリの場所に居る。
　右手の肘と肩から血を流して居た。　何故か、血の付いた辺りの衣服が裂けて切り取られている。

見下ろすクァーブは、憎しみを込めた怒りの目でベロッカを見下ろしている。

「騙される方が・・悪いんだったよな。　俺を信じたアンタが悪い・・・。　チームのバラバラも、ラッチが死んだのもっ。　アンタが居るからだっ！！！　死ねっ、ワームに食われて死んじまえぇぇっ！！！！！！！」

「止めろっ・ややっ・・止めっ・・」

クァーブに蹴られて、ベロッカの体が岩場から落ちた。

「うわあああああーーーーーっ！！！！」

ベロッカの体が１０メートル近く上から、岩場真下に押し寄せているワームの中に落ちて行く。　クァーブ、血の付いたベロッカの服を切り裂いて、下に落とし。　ワームを誘き寄せておいたのだ。

逆さに落ちたベロッカは、鈍い“ドサッ”と云う音を上げただけだ。
　無数のワームの囲まれて、どうなったのか解らない。

ただ・・・急に暴れるように色めき立つワームの動きを見る限り。
　もう生きては居ないだろう。

クァーブは、ベロッカの居た木の根っこの下から、背負い袋を取り出した。　中を見れば、まだ匂いを微かに放つ杏の大きい実が、リンゴの様に大きい。

「こんな物で・・・こんな物でっ！！！」

自分の親友の値段が、この果実より下かと思うと怒りが込み上げて来る。　一瞬、これも下に投げてしまおうかと思った時だ・・。

「な・・・なに・・・この・・・む・群れ・・・・・」

ベロッカを落とした方から、女性の声がする。

「はっ？！！」

クァーブ、崖に凭れる木の枝の先に、傷ついて弱った女性を見た。
　黒い襟の高い上着に長い黒の皮スカートを泥などで汚し。　後頭部で纏めた黒髪が乱れている。　前髪が長く、土で汚れているが。

綺麗な大人の女性である。

「生きてた・・・生きてたっ」

クァーブ、声を出す。

「え・・だれ・・？」

女性は、右腕を抑えながらクァーブを見た。

クァーブ、女性に走り寄った。

12：発見

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ジョイスは、もうポリア達が初日の夜に泊まった夜営場所を過ぎていた。　大粒の汗を流し、肩で呼吸している。

（マズイ・・・アノ森は最近・・・劇的な変化で生まれたモンスタ

ーが出ると・・・。　ああっ、なんで言わなかったんだっ！！　私は・・・リーダーに近づけないのが此処だっ！！！　頼む、生きてくれよっ！！！）

ジョイスは精神力を振り絞り。　また、瞬間移動の魔法を遣う。

もう、夕方が間近。　まだ噂にすらなっていないモンスターの活動は夜だった。

情報をくれたのは、この国の外務大臣テレイズである。　白髪の老人ながら、若い頃に冒険者だった経歴から、時折変装して飲み屋に出かけたり、旧友の引退した冒険者仲間と呑みに行く。　人柄も砕けて、話し易い中々の人物だ。

さて、その大臣の話では。　近くの田舎町で、狩人をしている数人が、夜に蠢く大型の影を目撃し。　もう、数人の被害が出ている。
近々、大臣自ら依頼人と成って、モンスターの調査と討伐を依頼しようかと思っていたらしい。

ジョイス、そのモンスターが未知なだけに心配だった。

さて、森に話を戻そう。

「生きてたんですねっ？！！！」

女性に走り寄ったクァーブ。

顔に擦り傷、腕にワームに噛まれた噛み傷を負った女性は、衰弱した顔でクァーブを見て。

「あ・貴方は？」

「オーリナスさんのチームに居た者です」

「あ・・・向こう・・の？　じゃ・・助け・・来るの？」

クァーブ、一人になった自分だ、“ハイ”とは言えない。

「いえ・・解りません。　とにかく、隠れるとこ・・」

言い掛けた時だ。

ワームの群れが、突如として騒ぎ。　森の方に動き出す。

「な・・なに・・？」

驚く傷ついた女性。

「何かな・・？」

クァーブもその方を見た。

すると・・・。

森の方から、地面が１メートル近い針の様に次々と隆起して、移動するワームを瞬く間に蹴散らした。

「あっ！！」

２人、声を上げる。

更に、木が疎らで開けている岩場近くに、人が現れる。
女性は驚く。
「冒険者っ」
クァーブ、自然魔法を目で見て。
「オーリナスさんだ・・・助けが来たんだっ！！！！」
森から出たマルヴェリータ、ここぞとばかりに杖を構え。
「魔想の力よっ、我が敵を貫く剣となれっ！！！！」
マルヴェリータの周りに、数十は数える魔法の剣が現れる。　前のKとの冒険の時より、明らかに数が多い。
「行ってっ！！」
一気に、岩場の壁際にワームを追い込むべく、最もワームが多い辺りに全てを飛ばした。　マルヴェリータの顔に、薄らと血管が浮ぶ。
自然・魔想魔法は、生み出した後も集中が要る。　魔力と集中が噛み合わされば、長く生み出した魔法が存在するからだ。
飛ばされた剣は、次々とワームを串刺しに切り裂いて、何十匹と云うワームを岩場の所まで押し返した。
「弾けてっ！！！！」

裂帛したマルヴェリータの声、杖を大きく振り上げた。

刹那・・・。

魔想魔術特有の衝撃破裂音が幾重にも鳴り響き、周りに居た２０匹以上のワームを巻き込んで千切り倒す。

「は・・・はあああ・・・・・」

集中を続け、強力に威力を上げて唱えたのだ。　終えた後は精神力を消耗し、疲労感が襲う。

その時、ワームの１匹がマルヴェリータに脇から飛び掛ろうとしていた。

（あ・・・まず・・）

驚いたマルヴェリータ。

だが、瞬時にワームの尾っぽの方を捕まえたタウロー。

“ギィーっ!!!”

襲い掛かったワームは、後一伸びが足らずにマルヴェリータの前に落ちる。

「むんっ」

タウロー、思い切り引っ張って、ワームを木に叩きつけて失神させ。

ハンマーで止めを刺す。

「あ・・・ありがとう・・・」

礼を言うマルヴェリータに、タウローが振り返って頷き。

「魔法は強いが、接近は弱い。　少し疲れてるな。　無理はするな」

と、周りを見て呟く。

直ぐに、別のワームがタウローに飛び掛る。

「あっ」

防いだタウローの左腕に、ワームは噛み付いた。

「いけないっ」

マルヴェリータは驚くが・・・。

「ふん、これしきっ」

タウロー、腕には鉄の手っ甲を装備している。　噛んだワームごと腕を木の幹に打ちつけ、そのままワームを押しつぶす。

「まあ・・・」

タウロー、システィアナ・マルヴェリータ・オーリナスを守り。
戦況を見据える。

ゲイラー・ヘルダー・ポリアの3人は、特に動く。

タウロー、３人を見て。

「そなた等のリーダー、言うよりやるな。　ワームを斬るのに躊躇が見えん。　随分回りを見て把握してるのに、大したものだ」

流々汗離（りゅうりゅうかんり）、汗を飛ばしながらワームの間を駆け巡るポリアは、もう一角の剣士だ。

マルヴェリータ、Ｋに近づきたいポリアが見て取れる。

（凄い成長してるじゃない・・・）

マルヴェリータ、見てるとダグラスの方が少し動きに間が多く見える。

其処にだ。

「おおおおおーーーーーーいっ！！！！！！！！　此処だっ！！！！！！　助けてくれぇっ！！！！！」

岩場の辺りに、男の声が響く。

ワームを斬って倒し、汗だくのポリアは周りを見る。　腕や足には、ワームの牙によって出来た切り傷が血の線鮮やかに見えていた。

ゲイラーも、１匹のワームを足蹴に首元を踏み押さえ、別のワームを一刀で２匹同時に斬り倒す荒業で沈めてから、周りを見ながら足元のワームに止めを食らわす。　腕の皮のガード横に、薄っすらとワームに噛まれた傷痕が血を滲ませている。

オーリナス、岩場の上から声を上げるクァーブを見つけ。

「岩場の上っ！！！　クァーブが居るわっ！！！」

ポリア、多数のワームと戦っているイルガ・ヘルダーに向いて。

「見つかったわっ！！！　後一息よっ！！！！」

ゲイラー、それを聞いて。

「おうっ、一気に行くぜっ！！！！」

と、ダグラス・リキッドを取り囲もうとするワームの残りに向かった。

夕日が、一足早く山に夕暮れを齎す頃。　ポリア達は、ワームを倒しきった。

荷物を集め、ポリア達は岩場の下でクァーブを再開した。

「クァーブ、生きてたのねっ？！」

喜ぶオーリナスに、クァーブは誤り。

「イクイナがどうしても行くから・・・ごめんなさい・・・オーリナスさん・・」

ポリア、汗を拭って。　それよりも、と。

「他には、誰も居ないの？」

クァーブ、ラッチがモンスターに殺された事。　ベロッカをラッチの死に怒ってワームに食わせた事を告げた。　だが・・どうしても許せないイクイナの事には・・。

「イクイナは・・・死んだ。　モンスターに食われた・・。　蛇の大きい奴に・・」

と、助けを向かわせるのを絶たせた。　それから、岩場の上を指して。

「上に、ニーシャさんと云う方が生きてます」

リキッド、驚き迫る。

「生きてるのかっ？！！」

「はい。　後、奥の洞窟にもう一人瀕死の方が居るそうです」

ポリア、岩場の上を見上げて。

「助けましょうっ。　早く、森を抜けてしまわないと・・。　夜に大蛇や別のモンスターに襲われたら、怪我人を抱えるだけに危ない・・」

全員、ポリアに従う。

クァーブ、ポリアに寄って。

「あの、コレ・・・」

と、ベロッカの持っていた背負い袋を渡す。

「これは？」

クァーブ、俯いて。

「ベロッカって奴が採取した果物です・・。　価値が在るなら、助けに来てくれた皆さんで使ってください。　僕に・は・・・持てない・・。　ラッチを奪った物だから・・ううっ」

ポリア、クァーブはイクイナとは違うと判断し。

「解ったわ。　預かる。　さ、案内して」

「はい・・・」

クァーブ、涙を拭って岩場の上、木に凭れた息の荒いニーシャをポリアに見せる。

「ニーシャっ、大丈夫かっ？！！」

声を掛けるリキッド。

薄く目を開いて、少し荒い呼吸のニーシャは笑った。

「リキッドさん・・・ご・・ごめんな・・さい・・。　新しく・・チッ・・チーム作るのに・・・箔が・・欲しくて・・・」

リキッド、青白く汗ばむニーシャを見て。

「バカたれがっ、この時季のこの森は恐ろしいとあれほど・・・」

システィアナ、リキッドの腕をそっと触って。

「傷がかの～して病気に罹ってま～す。　こ～うふんさせちゃ～だ～め」

リキッド、純真無垢なシスティアナの笑顔に。　怒った自分が恥ずかしくなる。

「ああ・・・そうか・・。　す・すまない・・」

ゲイラー顔を赤く染めて、ウンウン頷いている。

もう・・・誰も彼を見ない。

システィアナを見たニーシャは。

「お・・奥の仲間も・・・。　しっ・・死んだ女性に・・僧侶が・・。　命懸けで・・どっ・洞窟にけっ結界を・・・」

システィアナ、意味が解った。

僧侶の中でも、経験を積んだ僧侶は格上の魔法を遣えるようになる。

先ほど、システィアナが唱えた“聖なる太陽”が、その入り口の中級魔法。　だが、その更に上には、部屋や洞窟の入り口などに結界を張れる魔法も存在する。　アンダルラルクル山に有った祠の様に長期・長年は無理だが。　数日はモンスターを防ぐ結界を張れる。

誰か、その結界を張った者が居るのだろう。　予想するに、リキッド達のリーダーの恋人で、僧侶の女性と思われる。

システィアナ、ニーシャの傷を魔法で癒し。　解毒効果のある薬草の煮汁を乾燥させた丸薬を飲ませた。

そして、ポリアに向き直ると。

「ポリア～」

「ん？　なあに？」

「ニーシャさんも～、もう一人のひとも～、今日はうごかせないよ～。　無理したら、びょ～きさんの方がかっちゃう～」

「システィ・・・」

システィアナ、タウローを見て。

「い～ことおもいつ～いた。　たうろ～さんと～、私がきょ～りょくすれば、結界のちからさんをげ～んきにできますぅ～。　今夜、そこでおやすみ～ナです！」

タウロー、ハッとして。

「そうか・・結界は出来ているのだ。　あの魔法は全ての神聖魔法遣いの遣える魔法。　掛け直すのでは無く、強化するのなら出来る」

そう、アンダルラルクルの山に結界で護られし洞窟は、数十年に一度は誰かが結界の強度を上げなければならない。　その作業を、僧

侶二人掛りでやろうと云うのである。

ポリア、暮れなずむ西の空を見て。

「仕方ないわね。　無理して、死なれたら意味が無いわ・・。　容態の判断に、システィの間違いは無いし・・。　今夜は、森で過ごすしかないわね」

ポリア特別編　セカンド　４（後書き）

次号、予告

何とか行方不明と成った冒険者二人と、クァーブを助けて洞窟に合流して避難したポリア達。　だが、其処に不気味なモンスターが現れる。　更に、森を逃げ回っていたイクイナも来て、事態は風雲急を告げる

次号、近日掲載予定＾＾

どうも、騎龍です＾＾

此処までは出来てましたが・・・。　この後がち～っと抜けて困ってます＾＾；

連休中に出来上がらなかった～＞＜；

なんとか、頑張って半分出来上がってるＫ編に繋げます＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編　セカンド　5

ポリア特別編：その時は其処から始まる

13不気味な危険

ポリア達一行は、森の木々の間を抜けて。　岩壁が森の脇を沿って続く場所にやって来た。　絶壁と森の間には風の通り道の様な草むらの間があり、進行の手間も視界の悪さも無い。

ニーシャが案内役だが、ワームの騒ぎを見に来た時に無理をしたのだろう。　立ち上がる力も無く。　タウローが背負っている。

紅い夕日も差し込む絶壁沿い。　もう、夕日は暮れる手前で、森の中は暗がりにしか見えない程だ。　幾分強かった風は緩やかに成ったが・・・。

「凄い冷えるわ・・」

マルヴェリータ、木の陰に入ると風が冷たくて。　長袖のローブを着ているのに、どうも肌寒い。

リキッド、辺りを警戒しながら。

「スタムスト自治国は、北の大陸でも北方の国。　盆地の首都は夏場ならそれほどでもないが。　山に入ると全然違う。　このミストレスの森に来るまでに、一度低い山に匹敵する丘を登っているからな。　思った以上に此処は標高が高いから、夜に成ると急激に温度は下がる」

ゲイラー、暮れ始めた山の気配が静かに成った気がする。

「なんか、落ち着いた感はあるな。　ワーム共も、もう居ないだろうな」

其処に心配顔のオーリナスが、今まで黙っていたのに口を開いた。

「でも、明日は私達も動けないかもよ・・。　風の流れや、空の雲を見てると・・明日に雨が降りそう。　もしかしたら、強く長く振る可能性あるわ」

ポリア、その時はその時と思っている。

「それなら、それでもいいわ。　怪我人も含めて、生存者を先ず救えたなら。　後は、ワームに見つからない様に山を降りることを最優先に・・・」

と、言って居ると。　先の左手の絶壁に洞穴が口を開けていた。

システィアナ、穴を見て指差し。

「アレで～す。　聖なるおちからをかんじま～す」

ポリア、システィアナに笑う。

その時だ。

マルヴェリータ・オーリナスなど魔法遣い、無論システィアナなども含めて。　カーブする岩場の先に何かが向かってくる気配を感じた。　何とも不気味な気配だ。

「ポリアっ、な・・何か居るわっ！」

と、マルヴェリータが鋭く低い声で言う。

オーリナスも杖をギュッと握って。

「あの穴の向こうっ！！　何か・・モンスターみたい・・」

ポリア、もう穴が直ぐ其処だと解っているので。

「穴に急いでっ！！　排除は見てからでも決めていいわ」

この判断、Kが居たら褒めただろう。

急いで全員が穴に急いだ。

穴は、歪んだ入り口の自然洞窟。　縦に5メートルぐらい高く。横幅は3メートルぐらい。　左に曲がって、上に尖る形であった。

暗い洞窟に入った一同。　システィアナとタウローが、洞窟の入り口で二人並んで何やら神に祈りを奉げ始める。

その時だ。

ーワサワサワサワサ・・・・ー

不気味な音が、外から洞窟の中に向かって左側より聴こえて来る。

（変な音ね）

小声のマルヴェリータ。

（とんでもない奴かも・・）

ポリア、顔はかなり緊張している。

システィアナとタウローが、大きく腕を回して詠唱をすると。一瞬洞窟の入り口が白く光り輝き。そして、光は消える。

「おわた～おわた～」

システィアナ。

「始めてだ・・」

タウロー、こんな作業は初めてで。経験として感慨深い。

しかしだ。洞窟の入り口前、視界の中に見えてきたのは・・・。

「くっ・・・草？」

ダグラス、ニョキニョキ・ニョロニョロと蔦の様な緑の細い物が、葉っぱらしきモノを生やして地面を蠢いているのが見えてきた。
その内、何本もの蔦がうねりながら地面を這う。　伸びるに遵って、蔦が少しづつ太くなってゆく。

ダグラス、剣を抜いて。

「やってしまうか？」

と、ポリアを見る。

ポリア、もうマルヴェリータやオーリナスも疲れているし。　生き残っていた魔法遣いのサガントを助けなければならない。　此処で戦って重傷者を出せば・・・。　自分達は、Kでは無いのだ。

「ダグラス、魔法遣いの皆も疲れてるし。　イルガやリキッドに無理させたくないわ。　無理に戦うのは、駄目」

そして、モンスターの全体が・・・。

「あ”・・・」

驚く皆。　深い緑の植物は、ゲイラーよりもタウローよりも太い茎を持っている。　根っこで有る筈の場所から、何本もの蔦が根っこの様に生え、足代わりに蛇の様な動きで本体を全身させる。

だが、何より驚くのは。　茎の真ん中を守るように包む様に伸びる葉っぱの中に、ニタニタ笑う人の様な花が見える。　確かに、葉っぱの中でも外側は薔薇の様な青白いの花びらが見えるのに。　中心に向かうほどに上に伸びて纏まり。　人の腰周りや胴体を形成して

いる。　そして、明らかに目で確認する人の顔が在る。　ただ、色は仄かに光る青い色で、唇は異常に真紅なルージュの様である。

「大きいな・・・」

リキッドは、その人型の顔の目が怖くて呟く。　畏怖を込めて、大きさに合わせた発言だ。

ポリアもそれは同じ事。

「人型の花だけでもマルタと同じだわ・・。　花まで高さ3メートル以上有りそうだし。　全体的に体の幅だけで１０メートルは在るんじゃ無い？」

イルガ、2箇所ほどワームに噛まれ、出血が多かっただけに脱力感を全身に感じながら。

「そうですな・・。　お嬢様、あのモンスターの情報は御座いましたかな？」

「無いわ・・。　見れるだけ文献は見たけど・・。　あんなモンスターは・・」

ダグラス、洞窟内の仲間を見た。

寝かされているニーシャは薬が効き始めて眠る寸前。　サガントは、もう呼吸をしているのみで瀕死だ。　オーリナスとシスティアナが看病に回っている。

ゲイラーがポリアの脇に来て、洞窟の奥を指差して。

「ポリア、システィが奥に遺体が有ると・・・」

「解ったわ」

ポリア、全員を見て。

「明日まで戦うのは無しよ。　マルタやオーリナスさんも全力で魔法遣ったし。　みんな身体に軽症負ってる。　無理に戦って重傷者を出したら、それこそ此処から動けなくなるし。　システィやタウローさんに負担掛けるわ。　Kが教えてくれた通り、無駄な無理や無茶はしない。　それで行きましょう。　生きて、意味が在る話だわ」

ダグラス、剣を仕舞った。

「そうだな・・・」

と、言った時。

マルヴェリータは驚いた顔で入り口の右を向く。

「え？」

「マルタ、どうしたの？」

ポリア、遺体を確かめようと洞窟の奥へと動いた時、マルヴェリータの顔が見えたのだ。　いきなり顔が驚きに変わったので思わず声を・・・。

マルヴェリータ、植物のモンスターが目の前から消えた先を指差し。

「まだ・・誰か居る・・。　いけないっ、こっちに歩いて来るわっ」

ポリア、鋭く。

「確かっ？！！」

マルヴェリータ、杖を持って頷く。

ポリア、顔を起こした皆に。

「オーリナスさんと、システィ・タウローさんは中でサガントさんの手当てをっ。　イルガ、入り口を守って。　残り全員で、モンスターを倒すわっ」

システィアナ・タウローが皆を見る中、ゲイラーもダグラスも皆武器を。

ポリア、クァーブに。

「貴方も此処に残って」

ポリア、ヘルダーやゲイラーと見合って外に。

クァーブ、動きの早いポリアを見て咄嗟に言えない。

（まさか・・・イクイナが・・・）

クァーブ、向かってきたのが人ならばイクイナと気付いた。　ラッ

チの事を思うと、まだ生きていた事に怒りが湧いて拳を握る。

イルガ、出てゆくポリアとは別に。　洞窟内で佇み俯くクァーブが気に成った。

（はて・・・何か不満か？）

一方、夜の帳が空を覆い出す時。　ポリア達は一斉に外に飛び出した。

其処に。

「うぎゃあああああっ！！！！」

滾る様な男の絶叫が湧き上がった。

ポリア、顔を引き締めて。

「いけないっ！！！」

モンスターに駆け寄る。

「んあっ？！！　血か？！」

ダグラス、風に乗って強い咽返る血の匂いを感じた。

直後。

「あ””！！！！！！！！！！」

モンスターを僅かな夕日で確認した時。　夕日のシルエットに成って、首の無い人の体を蔦に絡ませながら花に持ち上げているモンスターが・・・。　首の無い場所から黒く溢れ出す血のラインが、一筋の太い線に変わって花の人型の口元に伸びていた。

ゲイラー、モンスターを睨んで憤慨した顔だ。

「チッ、遅かったかっ」

植物のモンスターは、蔦で一気に遺体を捻り。“バキバキィ”と云う怪音を出して遺体を雑巾の様に絞って血を絞り出すではないか・・・。

全員、背筋に恐怖を覚えたのは当然だろう。

其処に。

―ガルルルル・・・・・―

背後から唸り声が・・。

「ん？」

リキッドが振り返ると、ウネウネ動くのに歩行している様な影が・・。

マルヴェリータ、あのKが前に買い込んでいて使った光の魔法を閉じ込めた小粒の水晶を取り出し。　素早く念じた。　こんな事も在ろうかと、ポリアに相談して幾らか買っておいたのだ。

「ポリアっ、リキッド」

二人に渡す。

「ああっ！！、アレはっ」

ポリア、背後に現れたモンスターを見て。　緑と黄色の鮮やかな鱗を持った双頭の蛇の様なその姿が文献に在ったと思い出す。

「“グリーンドラウネス”かっ？！！」

リキッドが先に言葉で確かめる。

ポリアは頷いて。

「間違いないわ」

ゲイラーの太い腕と変わらない太さの首長龍の頭が、２メートル近い長さで二つ。　首の付け根からは、首の倍の太さの胴体と成り。　尻尾まで首の長さと同等の長い胴体が伸びてゆく。　緑と黄色に煌く鱗、１メートル近い長い髭、鷲や鷹の様な鉤爪を持った短い手足が４本。　コレが、グリーンドラウネス・・・弱種のドラゴンだ。

ゲイラーが、植物のモンスターを見たままで。

「向こうの奴さんも気付いたぜ。　このままじゃ～挟み撃ちだ」

植物のモンスターが、話し声に気付いたのか此方を向いた。　血を絞った後の遺体を、無造作に草むらに放り投げて。

ポリアは植物のモンスターに向かい見て。

「二手に。　倒した方は、残る方に援護っ」

光の魔法を発動した小石を、マルヴェリータに戻す。

「マルタ、もう疲れてるでしょ？　持ってて」

「あっ、ポリアっ！！」

ポリアは、剣を右手（めて）に植物に向かった。

「ワシは、向こうをっ！！」

リキッドが、グリーンドラウネスに。

「・・」

ヘルダーも、リキッドに同調する。

ダグラス、ゲイラーを見て。

「あの花ヤロ～をやっちまうべっ！！」

「ＯＫっ！！！　殺された誰かの仇討ちだぜぇっ！！！」

疲労がピークに向かう中で、またモンスターとの戦いが始まった。

１４強敵との激戦

「せりゃっ！！！！」

ダグラス、大輪の花と女性の裸体の部分を持った青白いモンスターの根っこと言うべき蔦に斬り掛かる。　だが、伸縮する上に、素早く強力な威力で動く蔦に剣を弾かれて。　逆に反撃されてしまう。

戦闘体制に入った植物のモンスターの蔦は、一回り膨れて強力な鞭の様だった。

「コイツっ、強ええぇっ！！！」

ゲイラー、大剣で鞭の様に薙ぎ払われる蔦を払い除けながら悔しい顔で。

「凄い力だっ、近づけないっ！！！」

植物のモンスターの蔦は、只の撓(しな)る鞭とは訳が違う。　突き刺す事も、絡め取る事も、素早く往復で叩く事も出来る。　剣で凌ぐのも油断が成らない相手だった。

マルヴェリータ、重く圧し掛かる疲労感と脱力感の中。　リキッドの方とポリアの方に小石を向けてハラハラ見ている。

其処に、

「あの・・僕が持ちましょうか・・」

と、背後に声が。

「え”？」

振り返れば、クァーブが背後に。

幾分、ドレスローブを汚したマルヴェリータは危険だと驚き。

「どうして出てきたのっ?!!」

だが、クァーブは真剣な顔でマルヴェリータから、モンスターの投げ捨てた遺体の方を見る。

「スイマセン・・イクイナはモンスターになんか襲われていませんでした・・・」

「え?　じゃ・・・あれは・・・イクイナ?」

「アイツ、俺達を置いて逃げたから・・・“モンスターに食われちまえ”って思って・・・。　まさか・・こっちに来るなんて・・。　戦うハメに成った以上、俺も手伝います。　悪いのは・・俺達とあの死んだベロッカって奴だ・・」

「・・・」

マルヴェリータ、その懺悔を聞く時に。

「きゃあッ！！！」

ポリアが蔦に打たれて、防いだ剣ごと弾き飛ばされたのである。

「ポリアっ！！！」

ダグラスと振り返りながらのマルヴェリータの声が飛ぶのが一緒だった。

「ぐっ」

地面を転がったポリア、首を切られた遺体の横に片膝を着いた。

「あ”っ！！！」

あの、斡旋所でオーリナスやリキッドと顔を合わせた初めの時、合同チームに異議を唱えたイクイナの着ていた物を血で汚し、無惨な姿の身体が有った。　剣の柄・・壊れたスケイルメイル・・転がっている千切られた顔・・・イクイナであった。

「イっ、イクイナっ？！！！」

マルヴェリータは直ぐに光の小石をクァーブに渡す。

「持って下がってッ！！　両方を照らしててっ！！！」

クァーブ、直ぐに小石を受け取り。

「はいっ」

と、両方を照らしながら少し引いた。

マルヴェリータ、ポリアの方にモンスターの動向を見ながら動く。

「うおりゃっ！！！」

「せいっ、たあああああっ！！！」

ゲイラーとダグラスが、息を合わせて幅１０メートル近くに広がった植物のモンスターの蔦に斬り掛かる。　根っこの様な蔦は、見える数だけでも１０本以上。　だが、意外に表皮が固く、剣で斬っても弾き飛ばしてもささくれ状の傷が着く程度だ。

この間。　リキッドとヘルダーは二手に分かれてグリーンドラウネスを挟み撃ちにしていたが。　炎を吐くドラウネスに少し梃子摺っていた。

「うぬっ！！」

ブーメランで、顔の片方の髭を斬って片目を潰したリキッドだが、２メートルは吐き出される火炎に驚いて逃げる。

ヘルダー、鞭の様に撓る髭はそれ程でもないが。　自分の方に来るしなやかで長い尻尾が邪魔臭い。　更に、近づき過ぎると爪が襲ってくる。

「・・・」

髭を斬り払い、踏み込んで鼻先を斬り追撃をしようとすれば尻尾が振り込まれて。　更に火炎が火の玉で吐かれる。　このグリーンドラウネスは、２種類の火炎を吐ける様だった。

洞窟内から見ていたイルガの後ろに、巨漢のタウローが来て。

「うぬぬぬ・・少し苦戦しているな・・」

イルガ、ポリアが飛ばされたのを遠目に見ているだけに。

「ああ、手数がな。　だが、マルヴェリータが自由に成ったから。　少しは変わるじゃろう。　問題は、あの双頭の蛇じゃ。　意外に手強い」

タウロー、イルガが顎でしゃくって見せた双頭のドラウネスを睨む。　だが、ポリアが自分を残した意味を理解するだけに。

「加勢したいが・・・」

瀕死のサガントが気に成った。

其処に、オーリナスが杖を片手に来た。

「タウローさん、システィアナさんが呼んでるわ。　私、少しなら魔法唱えられるから加勢する。　貴方、サガントをお願い」

「ああ・・解った。　無理するな」

もう、ワームを蹴散らした様な強力な魔法は唱えられないと思うオーリナスだが。　まだ、少しは魔法を唱えられると踏んだのだ。
最悪、自分が負傷してもと・・・心に決めて。

さて、ポリアに寄ったマルヴェリータはイクイナの遺体を確認して。

「大丈夫？」

と、ポリアを気遣う。

「な・なんとか・・ね。　それより・・・イクイナが・って危ないっ！！」

ポリア、自分に伸びる蔦を払い除けて、斬り込みまた下がる。

マルヴェリータも、大きく後ろに下がった。

「後でクァーブに聞いてっ、理由は彼よっ。　それより、一気に行くわっ！！！」

魔術師二人が、出張る事に。

洞窟から出てきて自分の背後に来たオーリナスを脇目に見たリキッドは、

「おいっ、大丈夫なのかっ？！！」

と、火炎を避けて転がってから言う。

「まだ・・少しはやれるっ！！」

リキッド、何故か少し動きが鈍りだすグリーンドラウネスを見て。
焦げて黒ずんだ鎧の右肩の衣服を剥ぎ取ると。
「ならっ、向こうの植物に行けっ！！」
ヘルダーが、一人で双頭を相手する中だ。
「でもっ！！」
オーリナスが言い掛けて。　リキッド、斧を片手に構えると。
「見ろ。　ヘルダーが一人でも相手出来るまで動きが鈍ったっ！！
さっき、毒蜘蛛を殺ったブーメランは拭いを掛けたのは手元のみ。
モンスターにモンスターの毒が回り出したのさ」
オーリナス、その意味を理解した時だ。
「うおおおっ！！！」
「うわああっ！！」
「きゃあああっ！！！」
ダグラス・ゲイラー・ポリアの悲鳴が上がる。
リキッドもオーリナスも見た。　視界に飛び込んできたのは、見上げるようなモンスターの姿だった。
「なッ！！」

「ええっ？！！！」

なんと、あの植物が蔦を使って立ち上がったのだ。　そして、大きく剣戟の届かない上から、蔦を踏み鳴らす足の様に振り下ろして暴れ始める。　ポリア・ゲイラー・ダグラスは、コレでは斬り込む処の話では無い。

リキッド、オーリナスに。

「行けっ！！！　俺達も蛇を倒して加勢するっ！！！　一人も死なせたらイカンぞっ！！！　そりゃあああああっ！！！！！」

リキッド、グリーンドラウネスに走り出した。

オーリナスは、怯える余りに腕が震えている近場のクァーブに。

「しっかり照らしてなさいっ！！！」

と、瞳をギュッと凝らして杖を構える。

一方、ポリアの背後で魔法を唱えようとしていたマルヴェリータは、薙ぎ振られた蔦を交してイクイナの遺体の更に後方へ逃げていた。
　だが、思わぬ奇襲で、足を少し捻った。

「なんてヤツよッ！！！　コノっ！！！！　あっ痛っ！！！」

立ち上がろうとしたら、右足に痛みが走る。

（いけない・・・この植物強い・・・）

洞窟に逃げ込める間合いも無い。　走れないだろう・・・マルヴェリータ、こうなったらと一撃必殺を考える。

だが、本気で暴れだした植物のモンスターは脅威だった。

「きゃああっ、チョットっ！！！！」

前に戦ったオウガ以上の高さに花を持ち上げた植物。　蔦の長さを生かして数本で身体を支えて。　残る数本を攻撃に使ってくる。ポリアなど、もう赤子の様に蔦の間合いから逃げ出す。

そして、遂にポリアが懸念していた事態が。

「う”あああああっ！！！！」

無理して斬り込んだダグラス、振り下ろされた蔦を上から刺そうとしたが。　先に跳ね上げられた蔦に弾き飛ばされた。　更に、浮き上がった所に、別の蔦が激しく襲い掛かってダグラスをぶっ飛ばす。

「ダグラスっ！！！」

「ダグラ・・・」

叫ぶポリア。　だが、空中で血を吐いて飛ばされたダグラスを見たゲイラーは、非常な様子に身体ごと止まった。

クァーブの横に転がったダグラス、胸を抑えてもがき苦しむ。　口の周りは血だらけだ。

「イルガっ」

リキッドが、ドラウネスの片方の首に斧を振り下ろしてから呼ぶ。

「わかっとるっ！！！！」

イルガ、ダグラスを連れるべく出てきていた。

ーシャーーーっ！！！　シギャアアアーーーー！！！！！”

暴れるドラウネスの頭を抑えたリキッドに合わせて、ヘルダーが飛び込んで扇子を振るった。　尻尾の先を斬り飛ばして、怯んだもう片方の頭を両手の扇子で切り裂く。

「死ねえええええっ！！！」

リキッド、渾身の力で斧を頭に振り下ろす。

勝負が在った。

「うおおおっ！！！」

暴れるドラウネスの尻尾に弾き飛ばされたリキッドと、　その尻尾を斬ったヘルダーが同時で。　リキッドは強襲されずに済んだ。

「あああああっ・・・」

転がったリキッドは、なんとか身を草むらに横たえた。　それでも、モンスターの尻尾が当ったのに変わりは無い。　疲労と軽症と衝撃が重なり、直ぐに起きれなかった。

ヘルダー、絶命の暴れをするドラウネスを無視し。　衣服の彼方此方に切り裂かれた所に血の滲む怪我を負いながらも植物に向かった。
　顔には、火傷の痕もある。　だが、ポリア達を護らずには居れなかったのだ。

この争いの中で、集中するのは二人。　魔法遣いマルヴェリータと、オーリナス。

マルヴェリータ、人差し指と薬指を立てて腕を交差し。　魔力を限界まで高める為に瞑目している。

一方、オーリナスも目を瞑りながら、胸の前に杖を構えて集中していた。

ポリアが蔦に鋭く突かれて、剣で必死に弾き返して防いでいれば、別の蔦に襲われて前に回ってかわす。　だが更に襲ってくる二つの蔦に、頭上から串刺しにされそうになってまた後ろに飛ぶと、薙ぎ払ってきた蔦を剣で防げども弾き飛ばされる。

ゲイラーは、大剣で防いで居るが。　鋭い突きで繰り出される蔦に足や肩、わき腹などに掠った傷を作って傷だらけに成り掛けていた。

其処に、ヘルダーが走って来てゲイラーを襲う蔦を弾き払う。

「サンキューっ、助かったっ！！！」

ゲイラー、ヘルダーと一緒に後ろに引いた。

「はあ・・・はあ・・・強ええな・・・」

ゲイラーは大汗を流して、血が彼方此方の鎧から食み出る衣服を赤く染めている。

ヘルダー、ゲイラーを見て心配そうな顔であった。

息荒いゲイラー、自分を見るヘルダーに。

「大丈夫、ダグラスの仇を取るまではな」

と、鈍く笑った。

見ているクァーブ、ポリア達を追い込むこの植物のモンスターを見て震えが湧いた。　そして、なにより軽はずみで助けに来た自分達を悔やんだ。

「くるんじゃ・・無かった・・・こんなモンスターが居るだなんて・・。　ああ・・・イクイナを止めるべきだった・・・」

悔し涙が出るクァーブ。

其処に、集中していたオーリナスが、カァっと目を開く。

「クァーブっ!!!　今頃後悔なんか要らないわよっ!!!!　冒険者ってのは・・・戦い出したら勝たなきゃ死ぬのよっ!!!!」

言うオーリナスの目に、淡い緑のオーラが灯る。　魔力の色は人それぞれ、ジョイスやシスティアナなどは白だが、マルヴェリータは赤紫、オーリナスは自然の緑だった。

（始めてよ・・・こんなに人を護りたいって思ったの・・・。　チーム・・・この思いが・・・本当のチーム・・・）

オーリナスの心に、自分達を助ける為にいざと成ったら躊躇しなかったポリア達をどうしても助けたいと思う気持ちが溢れた。　前の、彼が居たチームでも此処まで思う事は無かった。

Kは言った。　信じる力は、絶望よりも強いと・・・。　その意味が、此処にまた・・・。

「はあああああ・・・・大自然の力よっ！！！　大いなる慈悲、大いなる猛々しさ、大いなる優しさに全てを包む揺り篭よっ！！！！　今こそその力の片鱗を見せよッ！！　我が魔力に応呼せよっ！！！！　大地の力を突き上げてっ、クラッシュスティンガーっ！！！！！！」

オーリナス、唱えるのと同時に暴れまわる植物の真下に杖を向け、渾身の力で上に振り上げようとする。　だが、それは容易では無かった。

「んんんんん・・・・」

力むオーリナス、顔に汗が流れる。　強い集中と魔力を必要とする強力な魔法を唱えて、大地の力を引き出すだけの集中と魔力がギリギリだったのだ。　丸で、大岩の様な重みが腕に圧し掛かる。

（し・・死ねない・・・死なせたくない・・・生きて・・・生きてかえるのよおおおおおっ）

オーリナスの中で、何か今まで真剣になれなかった何かがキレ飛ん

だ。

「あああああ・・・・・・あっがれえええええっ！！！！！」

グッとオーリナスの杖が少し上に上がると、植物の真下の地面がグイっと少し隆起した。

クァーブ、オーリナスの葛藤に気付いて。　自分の迷いを払う様に信じて・・・

「頑張ってオーリナスさんっ！！！　出来るっ、絶対出来るよっ！！！」

オーリナスの目の緑のオーラが、ボワッと炎の様に燃え上がる。

「わかってるわよおおおおおっ！！！！！！！！」

オーリナスの杖が真上まで一気に振り上がった。

途端。

急激にムクムクと隆起し始めた地面が岩盤の様に成って、大木が地面から急激に突き抜けて出るかのように、鋭く尖った岩盤が植物の本体に向かって瞬時に伸び上がった。　そして、根っこの様な蔦が生えるモサモサした細かく細い蔦で護られる茎の底辺りにぶち当たる。

―ギャアアアアーーーっ―

丸で女性の声と変わらない奇声そのままに絶叫が辺りに木霊した。

魔法の岩の剣に突かれて、一瞬ボンと上に持ち上がった花が、力なく地面に崩れ落ちてきた。

「うおおおぉぉっ！！！」

魔法で千切られた蔦3本がゲイラーとヘルダーの方に倒れてくる。

二人は驚いて更に大きく退いた。

“バタンっ！！！　バタバタバタっ！！”　と、落ちた蔦が蛇の様にもがいて暴れる。

「すげえっ！！！」

ゲイラーが驚く時。

杖を振り上げたオーリナス、ユラユラと身体を揺らして瞑りそうな目でモンスターを見ながら。

「あ・・・後は・・・頼むわ・・・」

と、後ろに崩れる。

「あっ、オーリナスさんっ！！！！」

驚くクァールより先に、オーリナスの後ろにリキッドが入る。　オーリナスの身体を受け止めて。

「無茶しやがるぜ・・このお姉さんはよ」

イルガが、洞窟から声を上げてまた走ってくる。

リキッド、オーリナスを地面に優しく降ろしてから。　ヨロめく足取りながら植物のモンスターを見て立ち上がり。

「負けられっかあああっ！！！！」

と、気炎の篭った声を吐き出す。

顔や肩に傷を見せるポリア、最後の気力を振り絞って紅い剣の柄を握り締め。

「当ったり前よっ！！！！！　たあああーーーーっ」

モンスターに走りこむ。

「行くぞっ！！！」

リキッドに合わせて。

「ＯＫっ！！！」

返すゲイラーと頷くヘルダーが、まだ本体にくっ付いて動く蔦に向かった。

ポリア、振り降ろされる蔦をかわし、薙ぎ払われた蔦を飛び越えて。　千切れて薄い繊維で繋がる蔦に近づいて剣を振るった。

「鋭っ！！」

ザックリと斬り込まれ、蔦がまた斬られた。　薄い青緑の水の様な

液体が、飛沫を上げて飛ぶ。　斬られて、本体の裸の青白い女性の様な姿の花が、苦痛に顔を歪める。

―ウキャアアアアーーーっ！！！！！―

痛みに怒り、遂に花が狂気に染まった悪魔の様な顔に変わって金切り声の様な怒声を発する。　動かせる蔦を振り回して狂った様に暴れ始めたのだ。

激しく蔦に斬り込んで、その部分部分を切断し始めたポリア達だが、大きさがとんでもないモンスターに暴れられては踏み込んでばかりも居られずに退くしかない。

その時だ。　遂にマルヴェリータが目を開く。　オーリナス同様に、赤紫のオーラを目に燃やし。　キリリと睨まれた目は、モンスターの花の部分に一点に注がれていた。

「創造の力は想像にあり、想いの強さは意志にあり。　今こそっ！！　その力を示さんっ！！　魔法の剣よッ！！　本来の在るべき姿を示せっ！！！　只一振りの剣よっ！！！！」

白いステッキを持った手を頭上に、左手はモンスターに差し向けて半身に成ったマルヴェリータの上に、今までに無い大きな剣が現れた。

見てるリキッド、見たことの無い大きさの剣に慌てた様子で。

「おいおい、魔力を無駄にしてるのかっ？」

しかし。　見ているポリア、Kとの事があるだけに。

「そ・・そんな筈は無いわ。　マルタの顔、凄い集中してる・・・。
あんなに白く強い顔・・・クォシカの時以来だわ・・・」

現れた剣は、ゲイラーの大剣の長さを倍に、太さを3倍にしたような大きな物だった。

マルヴェリータ、大きく後ろに杖を振り反らすと・・・。

「勝負っ」

と、掛け声に合わせて杖を振り込んだ。

「あっ」

ポリア、魔法の剣が回転しながら、一気にモンスターに向かって飛び込んだ速さに驚いた。

だが。

「な”っ何いっ?!!!!」

「嘘っ!!!」

何と、魔法の剣が間近に迫った時、瞬時に動いたモンスターの蔦５・６本が剣の魔法に絡みついたでは無いか。　そして、更に別の蔦が絡み付いて突き込んで来る勢いを一気に殺し、花の手前3メートル程で食い止めた。

「うぐ・・・うぐうううう・・・・」

マルヴェリータ、一気に押し込もうとするが、　杖に押す手が前に進まない。　寧ろ、グイグイ押し返されてしまいそうに。　集中が、押し返される力の圧力で途切れそうになり。　蔦に絡まった魔法の剣が、鈍く光る。　此処で衝撃波に変えては、蔦は道連れに出来るかどうかすら解らない。　集中が途切れれば、衝撃派の威力も激減するからだ。　堪える身体を支える右足に、ジンジンと痛みが走る。

「マルタっ！！！！！」

ポリア、一気に自分達に向かう蔦が減ったのに応じて、本体に斬り掛かるべく走り出す。

「生意気なモンスター野郎がああっ！！！！」

ゲイラーが怒り。

ヘルダーも顔を怒らせてモンスターに向かう。

リキッド、しぶといモンスターに、血の滲む皺を寄せて睨み。

「しつこい女は嫌われるぜっ！！」

と、斧を握り締めた。

ポリア・ヘルダー・ゲイラーが、２本の蔦を相手に斬り込んで傷を付けると。　２本では３人を防げないと感じたのだろうか。　マルヴェリータの魔法を受け止めた蔦の内、３本がポリア達に向かうべく剣から解けた。

（あっ）

少し、押し込まそうに成ったマルヴェリータだが。　ポリア達の攻撃で解けた蔦の所為か、モンスターの魔法を押し留める力が弱まったのが解った。

“魔法も、遣い方で臨機応変に対応出来る”

Kもジョイスも言っていた。　マルヴェリータは、必死に考えて思い出すとき。　閃きが見えた。

（もしかして・・・）

マルヴェリータ、この魔法が幾つもの姿で別の武器に変えられるのを思い出す。　パッと杖を胸元に引く様にして。

「剣よっ、貫く槍に変われっ！！！！　突き抜けてぇっ！！！！」

と、声を出して想像した。

やはり、予想通りだ。　瞬時に魔法の剣は先が細長いスピアの姿に変わり。　ズイっと突き込んだマルヴェリータの杖の動きに合わせて、ギュンと伸びて植物のモンスターの花、人型の下腹部辺りに突き刺さって衝撃波を巻き起こす。

―イギャアアアアアーーーーっ！！！！！！！！―

貫かれた花の人型の部分から薄い青緑の水の様な液体が噴出すように飛び散った。　更に、巻き起こる衝撃波によって、近くの花びらも千切れて飛び散った。　パッと退いたポリア達が見ても、モンス

ターの暴れる動きが弱まった。

マルヴェリータは、杖を構えた体勢でヘナヘナとその場に砕けて潰れてしまった。

「はあ・・はあ・・・はあああああ・・・」

だが、この魔法の一撃は、戦う皆には最大のチャンスを与えた。

ゲイラーが全力で大剣を突きかまして蔦を斬り飛ばし。　ヘルダーが鋭く踏み込んで別の蔦をズタズタに斬り裂いた。

「コノ野郎がああああっ！！！！！」

リキッドも、魔法の衝撃波で斬り裂かれた花を護る長く堅い葉っぱを斬り付けて捲り倒す。

ポリア、脇からモンスターの人型の部分が丸見えと成った今こそだと走り出し。

「リキッドっ、御免っ！！！！！」

跳躍すると、リキッドの背中を蹴って高く高く飛び上がった。

「くたばれっ・・モンスタあああああああああああっ！！！！！」

ポリアの裏返る程の大声と共に、真下に構えた剣が星空輝く中で花の人型の脳天に“ズブリ”と音を立てて深深と貫いた。

刹那・・・辺りに凄まじい爆発する様な絶叫が上がる。

「きゃああっ！！」

暴れるモンスターに振り飛ばされ、ポリアは気絶寸前のマルヴェリータの脇に落ちる。　強く身体を地面に打ち付けて転がるポリア。

「リーダーっ！！！！」

「ポリアっ！！！」

叫ぶリキッドとゲイラー。　だが、絶命の中で激しく暴れるモンスターの蔦に危険を感じて、ヘルダーと共に離れる方が先だ。

モンスターは、弱点がやはり花だった。　暴れている蔦を他所に、中央の本体の花は萎れて枯れる様に色褪せて地面に抜け落ちていった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

片腕だけで身を少し起こしたポリア、視界でモンスターが死んで行くのを見ながらに。

「た・・倒した・・・」

地面に伏せる。　大きく肩で息をして、もう立ち上がれそうに無い。

マルヴェリータも、何か呟いて横に崩れた。

クァーブ、もう泣き顔で二人に駆け寄ると無事を確かめた。

リキッドは、ゲイラーを見て半笑いの疲労困憊な姿でポリアをまた

見て。

「俺は踏み台ってか・・・大した御嬢だことよ」

ゲイラーはポリアの剣を拾いに行きながら。

「ヘッ、ウチのリーダーは女王様ってか・・。　ああ・・・身体いてえ・・・ダグラスは大丈夫か？」

ヘルダー、全身で限界を感じながらも。　どこか嬉しそうだった・・・。

ポリア特別編　セカンド　5（後書き）

次号、予告

なんとか洞窟に戻ったポリア達だが、重体のダグラス。　重症のポリア達は洞窟に留まるしかなかった。　一夜が明ければ天候も悪くなり、怪我に因って感染した病気に苦しむ。　ジョイスは、ポリア達を助けだせるのか・・・。

次号、数日中に掲載予定＾＾

どうも、騎龍です＾＾

この先をどうするか、やっと思い出して製作に掛かってます。

オリジナルの本編を載せているのは此処ですが、完全に書き直した物は、β版に載せる予定です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ポリア特別編　セカンド　6

ポリア特別編：その時は其処から始まる

15斜陽の運命

真夜中、ポリアはふと目覚めた。　寒さで目が覚めたのだ。

「・・・」

荷物の中に入れてある薄い敷き布の上に寝かされている。　隣には、ピクリとも動かないマルヴェリータがスースーと寝息を・・。　重くだるい首を動かして、暗い洞窟内を見れば、壁に凭れて眠る男達・・。　寝かされているダグラスとサガントが、近くで自分とは逆向きに寝かされている。

（システィ・・・）

右にシスティ、左にマルヴェリータ・・その隣にもう一人居るのはオーリナスだろうか。

（酷い・・・此処は・・・私達の来るにはまだ・・・無理だったわ）

ポリアは、急いだ自分を責めた。　やはり、迷惑を承知でジョイス

に強力を頼むべきだったのだろう。

あの、植物のモンスターを倒して終りでは無かった。　引き上げようと、自分とマルヴェリータをクァーブやゲイラーなどが手分けして運ぼうとした時。　イクイナの遺体の血の匂いを嗅ぎつけて別の毒蜘蛛のモンスターやイビリックバイバーが現れた。

もう、戦える状態ではない。　生きていた面々が洞窟に逃げ込むのが精一杯。　イクイナの遺体は、モンスター達の恰好の餌食として身代わりに成った。

洞窟に戻っても、安心では無い。

先ず、ダグラスの怪我が重体で。　システィアナとタウローが必死で砕けた骨を魔法で繋げて傷を癒したが。　少し肺などの内臓が傷ついていたらしく。　容態はまだどう転ぶか解らない状態。

ヘルダー・ゲイラーがイルガと共に、一番動けるクァーブを助けてシスティアナやタウローの手助けをしていたが・・。　全身に負った怪我は、誰もが掠り傷とはいかない。

夜更けに全員、薬湯は飲んだが。　これだけ疲労困憊の皆では、明日に動くのは無理だろう。

ポリア、数日は此処に居る事を考えた・・・。　だが、山の夜は以外に冷える。　薪が少なく。　火を熾し続けるのは出来ない。　誰もが、荷物から薄い布を出して包ったりしていた。

さて、その頃・・・。

ジョイスは、街道の横に反れた森の中で眠っていた。

普通の魔術師では、到底移動できない距離を移動したジョイスだが、夜に成る頃には限界で眠りに着いた。

（マルヴェリータ・・・死ぬなよ。　ポリア達・・・頼むから無事で居てくれ・・）

Kがジョイスに皆を任せたのを、ジョイスは理解していた。

ジョイスとKが、クォシカの事件を紐解いて。　ポリア達を有名にする道順に案内してしまったのは確かだ。　更に、魔の森や呪われた山に合同チームで向かったのもKには責任がある。　これからはレベルの違い過ぎる仕事を回される可能性が高く。　そうゆう仕事に限って突発的だったり、良く事情が解らない霧の中に迷う様な依頼だ。

ジョイスは、自分から半分は受けた様な物だ。　マルヴェリータに好意を持ったのも、Kには見抜かれていた。　渡された記憶の石には、その辺も触れていたK。

ジョイスは、何時もKと自分を比較して劣等意識を持っていた。

あの美しい魔術師エクレアとは、ジョイスが２０歳の頃に既に出会っている。　そして、ジョイスはエクレアに好意を持たれたが・・・。　ジョイスは、ず～っとそれを拒否し続けた。

理由、それは・・。　同じ仲間に居た女性に恋して居たからだ。

だが・・・その女性はKとジョイスが同じチームに居た頃からチー

ムメイトとして居た女性であり。　その女性は、在ろう事か・・・Kを愛していた。　同じチームに居た時から、Kは名前を語らずに、“リーダー”と呼ばせ、後にはコードネーム“パーフェクト”＝P”で呼ばれた男を。

恋敵のKであり、決して越えられぬ壁・・。　ジョイスにとって、Kは最高の友人であり、最悪の障壁なのだ。

ジョイスの愛した女性は、今では別の国で結婚して家庭に入っている。　彼女は、貴族の娘。　嫁ぎ先は、彼女の家より上の爵位家へ。　つまりは政略結婚。　だがその女性は結局はKに受け入れられず、ジョイスの心に気付かないままに家庭の事情から結婚を承諾してチームを離れたのだ。

ジョイスとの仲も悪く無かった。　傷ついた彼女をジョイスは慰めたから、告白すれば一緒に成れただろう。　でも、ジョイスは出来なかった。　彼女のKへの愛情を知るが故に、家族の事情を知るが故に、結婚を望んだ相手がしっかりした人物で彼女を幸せに出来ると・・・確信した故に。　何より、貧乏な自分の身分を弁えてしまったが・・故に。

一人に成る前のジョイスのチームが最後の請けた仕事は・・・。皮肉にも愛した女性の結婚相手を護って、国を転覆させようとした秘密裏な政治事件を解決する事。　其処には、嘗ての“パーフェクト”とコードネームで名乗っていたKも居た。

ジョイスはその事件以降は自暴自棄に成り。　チームも解散。　一人に成って、放浪の末にホーチト王国に拾われた身と成った。

マルヴェリータは、そのジョイスの愛した女性に似ている。　全く

では無い。　マルヴェリータの方が美人だ。　だが、内に秘めた女性の精神が似ていた。　Kもそれを感じていたから、ジョイスにポリア達を託したのだ。　いや、自分と一緒に居て、危険な仕事にポリアのチームが加速度的に引き摺られるのを懸念したのだろう。

ジョイスは、Kが態と離れた事も解っていた。

だから、死なせたくなかった。　失いたくたくなかった。　もう・・・後ろ指を向けられるのも、失恋も怖すぎる・・。

ジョイスは、今が一番全力だろう。

そして、ジョイスが起きた朝方。　どんどん空に広がった鉛色の重い雲が雨を降らる。　時折雷を伴う激しい雨だった。

ポリア達一行が閉じ込められた山の森の中にも、大粒の雨が降り始める。　雨のカーテンに包まれた山の中にワームの姿は見当たらない。

ビシャビシャビシャ・・・・。

酷い雨音がしている。　洞窟がやや降りで斜めに傾いているので、ポリア達の寝ていた洞窟の隅っこは水の通り道に変わっていた。

洞窟の奥が行き止まりで、水が溜まる事は無いが。　行き止まりの先は、暗黒の断崖絶壁が広がっていて、しかも真っ暗な穴が地下に落ちていた。　明かりの魔法で照らしても、底が見えない程の深さ。

洞窟の奥に逃げ道は無かった。

洞窟の中でも、広く抉れた少し高い左側に移動した一同。

「ケホケホ・・・ゴホゴホっ・・」

ポリアが、朝方から咳をしている。　少し顔も赤い。　熱が出ているのだろう。　傷の影響、病気の影響、疲労の影響、色々併発する要因は溢れていた。

「大丈・ぶっ・・ゴホゴホっ・・」

マルヴェリータも咳を。

ポリア、雨水を沸かして作った薬湯を飲んでいたが。　仲間の中で昨日最後まで戦った仲間が全員咳をしているのを見て。

「昨日・・・戦ったワームの牙に・・びっ・・ゲホっ・・病気が・・在ったのよ・・。　何を食べてるかわか・・ゴホゴホっ・・・解らないから・・。　薬湯を飲んでるなら・・症状は軽いわ」

頷くマルヴェリータやヘルダー。

病気に成ってないのは、タウロー・システィアナ・クァーブのみ。
　比較的軽い症状は、ゲイラーのみ。

ダグラスも、微かな会話が出来るまで回復したが、病気も併発して動ける状態では無かった。

更に、瀕死で見つかったサガントの容態が思わしく無い。　水分以外は、飲み込めないのだ。　下手に飲ませると気管に詰まる。

オーリナスは、死んでいたクリントンの遺体を見て、ポリアに咳き

込みながら途切れ途切れに言う。

「ポリアさん・・・此処に放置したら・・・クリントンもモンスターに成るわ・・。　埋めていいかしら？」

ポリア、国は何処かと訪ねれば。　クリントンは北の大陸の遠い所とか。　仕方なかった。

オーリナス、魔法で岩の中に死体を沈める。　外では、今も屯して洞窟の周りに居座るモンスター達に食べられる恐れが在った。　だから、仕方無いと許可したのだ。

昨日までの記憶は、マルヴェリータがKから貰った記憶の石で記憶させていた。　斡旋所の主であるサリーは魔法遣いだから記憶は見れる。

昨日の戦いの疲労感は、到底一夜では回復出来ないと誰もが口にしている。　しかも、朝から雨で気温が上がらないから、どうにも寒い。

そんな中、今は昼頃か。　ポリアがある程度は話せると見たクァーブが近寄ってきた。

「どうしたの？」

座っている自分の前に来たクァーブを、ポリアは力無げに見上げた。

「失礼します」

クァーブはポリアの前に座った。　一礼して、ポリアを見ながらイ

クイナの事を語った。

ポリアは怒る訳でもない。　ただ、黙って聴いていた。

「すいませんでした」

と、頭を床の岩場に着けて謝るクァーブ。

ポリアは、それがなんとなく違うと思う。

「謝らなくていいわよ。　ま、お礼位は言って貰わないと困るけどね。　私に謝っても、何にも解決しないわ。　それより、これからどうするかが大切。　イクイナを留める気は在ったんでしょ？」

「は・・はい・・・」

クァーブも死んだラッチも、イクイナの経営する農家で働く小姓の息子だ。　イクイナに決裂的な否定を言える立場で育っていない訳だし。　旅立って間もない彼にとって、イクイナの命令は半分は決定事項と変わらないのだ。

ポリア自身も、その事を言うなればイルガの事もあるし、強く言えた義理ではない。　長年一家に使役してきた信頼厚いイルガを連れ出して、今頃父親も怒り狂っていると思っていた。

だが、叱られる訳でもなく。　納得の答えを言う訳でもないポリアに、クァーブは複雑な顔をする。　無心に、何かを示して貰いたかったのかも知れない。

（なんか・・・Kが答えをくれなかった意味が解ってきた・・・）

ポリア、包帯男の事を胸に留めながら、クァーブに言った。

「クァーブ、貴方はこの山から生きて出れたとして。　その後はどうするの？　イクイナとラッチの死は伝えるの？　冒険者は続けるの？　生きれば、問題は山積みよ。　嘘を言えばいいけど、本当の事を言ったら・・。　貴方はおろか貴方の家族は田舎に居れる？　その整理は、出来てるの？」

クァーブは、俯いて顔を左右に動かした。

ポリア、咳をしてから水の入った金（かね）の器を持って。

「その事を考えなさい。　もう、お礼も謝りも要らないわ。　それから、都市に帰るまではこのチームに加わって貰うからね。　病気してないから、皆の手助けをお願い」

クァーブは、謝る前よりも複雑に悩む顔で頷いて下がった。

外を見ているゲイラーは、時折ダグラスの様子を見たり。　システィアナを手伝ったりしている。

（システィ・・・大丈夫かな・・・）

システィアナは、この華奢な身体で良く動く。　額に汗して、定期的に魔法をタウローと一緒に怪我した場所に掛ける。　いくら傷を魔法で塞いでも、病気や運動でまた裂ける事もある。　何より、モンスターに負わされた怪我は、傷口の中に黴菌やモンスターの唾液などが入ると傷の塞がりが悪く。　半日とか、もっと短い時間でまた傷口が広がる事が良くあるのだ。

タウローもシスティアナも、それがあるから何度も開いた傷口を消毒して塞ぐ。

重体のダグラスは、朝方に一度軽く血を吐いた。　病気で咳き込み、体内の傷がまた広がったのだろう。　今は、絶対安静だ。

サガントに至っては、定期的に様子を見ないといけなかった。　全身が傷ついて、放って置くと、何時の間にか何処かの傷が開いて居るのである。　血の匂いが湧くから、直ぐに解るが。　中々塞がり切らない傷の多さに、システィアナもタウローも余計に気を使う。

休む暇の無いシスティアナを気遣うゲイラーは、システィアナを休ませて自分が二人を見る事に。

システィアナも、のほほ～んと了解して休んだが。　直ぐに寝息を立てて眠りに落ちたのは疲労が溜まっている証拠だ。

ゲイラーの傍、タウローはシスティアナを見て。

「大した女子だの。　魔力も優秀で、献身的だ。　クルスラーゲに行けば、士官も簡単だろうに・・」

ゲイラー、タウローを見ずに。

「確かに、そうかもしれないな。　ま、それはシスティが決める事だ。　それより、この魔法の結界とやらは何時まで持つんだ？」

タウロー、何も見えていない洞窟の入り口見て。

「明日の夜には力を注がねば消えるな。　注ぎ続ければ、１０日は持つ」

ゲイラー、外の雨が土砂降りの中で。　人の匂いで誘き寄せられたモンスターを見る。

「脱出時は、お客さんを切り抜けないと無理だな・・。　しかし、昨日より増えてら」

森の中には、グリーンドラウネスや毒蜘蛛などが無数に集まって休んでいる。　時々、洞窟の入り口にイビリックバイバーや大型の狼のモンスターが来て、結界に弾き飛ばされて逃げてゆくのが目の前で起こる。

まだ、これからどうなるか全く予想がつかなかった。

１６偉大なる魔術師と・・・山の悪魔

降り続いた雨が、夕方に止んだ。

マルヴェリータがポリアの横で蹲り、気持ちの悪さを静かに通り過

ぎるのを待っていた。

システィアナが、起きてタウローを休ませて動き始めている。

誰もがあまり食べる気力が無く。　モンスターが時折いがみ合う唸り声や争う声を聴いているのが耳に煩い。

誰もが、黙って話しすらしない重苦しい空気の中で。

マルヴェリータが、突然ハッとして顔を上げた。

脇に居たポリアは、前を見るマルヴェリータが急だったので。

「マルタ？　どうしたの？」

マルヴェリータ、ヨロめく足取りで腰を上げると・・。

「嘘・・・この気配・・・まさか・・・」

システィアナも、モンスターしか見えない洞窟の外を見ていた。

リキッド、入り口で入って来るダニなどを潰していたのに、マルヴェリータの言葉で後ろを見て。

「どうした？」

マルヴェリータ、遠くの場所から近づく強い魔力波動を感じた。

「居る・・・居るわ・・・信じられない・・・ジョ・・・ジョイス様が居るわっ！！！」

ポリア、驚いて膝立ち。

「嘘っ？！！！」

すると、オーリナスも。

「何この気配・・・遠くで・・・モンスターを誰かが倒してるっ！！」

システィアナ、微笑んで。

「マルタしゃんの白馬のお～じさまです～」

誰もが、雨の上がった洞窟の入り口から、外を見つめる。

その時・・・、山の岩場。

山の中、ポリア達とクァーブが出逢った岩場の近く。　森の木々の間隔が開けた場所に、青白い稲妻がサークルを画いてワームの夥しい群れを蹴散らしていた。

「全滅するまでやられたいかあっ！！！！！！」

ずぶ濡れのローブそのままに、ジョイスは大きく杖を旋回させる。

ジョイスに群がろうとしたワームが彼方此方から集まってきたが。

絶えず・・消えずして、ジョイスを囲う蒼白き稲妻のサークルの膨張で、一気に数十匹のワームが蹴散らされて死んでゆく。

「・・・」

白に、少し黄色が混じるジョイスのオーラは、全身から湯気の様に立ち込め。　目には煌々と燃えるオーラが溢れていた。

“ジョイス。　お前は、もう十分世界最強の魔法遣いさ。　ただ、お前は護るべきモノを持っていない。　信じれる人を信じていない。　魔法も力も、独り善がりでは限界が見える。　お前が、身を捨ててもいいほどに人を思って気付いた時。　お前の魔力は真の力を、心から発揮出来るだろう。　お前には、その資格がある。　誰かを目標にするな。　限界を、勝手に決めるなよ・・”

Kの言葉だ。　水晶に込められていた最後の言葉。

ジョイスも、それに気付き始めたのだ。

ジョイス、マルヴェリータの気配を北東側に感じて。　乱れた髪をそのままに、顔を向ける。

「向こうかっ」

先ほどまで雨の中を魔法移動して来て。　山に一人で入ってからはワームやイビリックバイバーを蹴散らしている。　然程に魔力も温存していないが、合流出来ればそれでいいと全力を吐き出していたのだ。

杖が持ち上がり、サークルの稲妻が俄に放電して大量のワームに襲い掛かり、ぶつかるなり衝撃波を起こしてワームの絶対数を劇的に削った。

「・・・」

ジョイスが消えた。

一方、洞窟の入り口で森を見るマルヴェリータとポリアを中心としたメンバー達。

「おいおい・・・あの貴公子が来るのかよ・・」

驚いたリキッドは、俄には信じられない。

だが、マルヴェリータは心配そうな顔だ。

「凄い魔力を出して魔法を遣ってる・・・。　今、飛んだっ!!!
瞬間移動の魔法で移動して来たんだわ・・・。　ああっ・・・・もうジョイス様も限界よっ！　もう、かなり疲労してるっ」

ポリア、ジョイスが数日掛かる距離を短時間で移動して来たと思い。

「みんな、身体動く？　もし、近場に来たら・・・モンスターを少し排除してでも合流するわよ。　助けないと・・」

ゲイラーもヘルダーも頷いた。

その時、オーリナスとマルヴェリータが同時に。

「来たっ!!!」

立っている全員が見た。　モンスターがウロウロする洞窟前の草むらに、いきなり人が姿を現した。

マルヴェリータ、気配で相手が誰だか解っている。　見えた瞬間に、

「ジョイス様っ！！！！」

ジョイスは、辺りを見回して。

「皆・・無事か・・・？」

モンスター共がジョイスに気付いてワラワラと集まり出す。　木から下りてくる毒蜘蛛や、木陰でとぐろを巻いて休んでいたグリーンドラウネス、草むらを徘徊していたイビリックバイバー・・。

ジョイス、凝らした真剣な目で頷くマルヴェリータを見ながら杖を構える。

「剣よっ！！　我が敵を貫く雨と成れっ！！！」

瞬時に、ジョイスを中心に高さ5メートルぐらいの所に無数の魔法の剣が現れる。　しかし、その剣はどんどん増えてモンスターの頭上中に剣が・・・。

「落ちろ」

ジョイスが、地面に杖を着いた。　一気に森の中、草むらや森にモンスターが見える範囲に剣が雨の様に降り注いぐ。

流石に圧巻だった。　モンスターに攻撃する余裕などない。　地面に刺さった剣は、瞬時に衝撃波に変わり。　モンスターを薙ぎ倒した。

ジョイス、モンスターの気配を感じて居なくなったのを確認すると。

「なんとか・・・な・・」

と、目を閉じる。

「ジョイス様っ！！！！」

ジョイスの限界の力を使い切ったのだ。　マルヴェリータが、傾き出すジョイスに駆け寄るべく悲鳴染みた呼び声を上げて洞窟の外に飛び出した。

その日の夜。

「本当に深い知人じゃないか・・・」

リキッドは、偉大なる大魔法遣いを膝枕しているマルヴェリータを見て呟く。　洞窟の入り口でイルガと二人、晴れ渡った星空を見上げたりしている。　年配同士、リキッドの方が上だが、話はし易い。

近場のイルガは、静かな声で。

「少々あってな。　仲良くなった・・。　我々より、ジョイス様の方が親身に思ってくれているのかも知れん」

モンスターをジョイスが排除してくれた御蔭で、手の空いた皆で森に薪を取りに行った。　濡れているが、細かく割いて油に浸して強引に燃やす。　熾(お)きが出来てしまえば、多少濡れていても燃やせる。

ポリアは火を囲む面々の中に居た。　ゲイラー・ヘルダー・オーリ

ナス・ニーシャと。

火を見つめるオーリナスが、放心した顔でポツリと。

「私達・・・助かるかしら」

ポリアは、動ける様に成らないと解らない。

「ジョイス様が居るし・・。　何とか成るかもね」

ゲイラー、死んだように動かないジョイスを脇目に。

「相当無理して来たな・・。　あまり、頼り過ぎるのは良くない・・。　明日は、ジョイス様も少し病気に成るかもしれないしな」

「そうね・・・。　私達は、随分良くなったから。　全力で逃げ切れれば・・なんとか成るかも」

ニーシャ、枯れ木を火にくべて。

「最悪だわ・・。　こんなに迷惑掛けるだなんて。　モウダーが、この仕事成功させて、引退するだなんて言うから・・・。　その気に成ったのが間違いだったわ。　リキッドさんが言った通り、この山は最悪の山だわ・・・はあ」

ポリア・ヘルダー・ゲイラーは、Kとあのアンダルラルクルの山に入って史上最悪のモンスターの群れを見ている。　確かに自分達には最悪の程度ではあるが・・。　どこかマシと思えるのは感覚の麻痺だろうか。

だが、誰もそれを口にしない。　去った仲間、抜けた仲間の話だ。

ぼんやりしながら、短い会話で時間が過ぎる。

誰もが、少しづつ眠く成った頃だ。

ダグラスとサガントを看ていたシスティアナが、トコトコとポリアの脇に来た。

「ポリア～」

「ん？　何？」

システィアナ、暗い面持ちで。

「まじゅつしのサガントさんが～、亡くなったよ・・・」

火を囲む一同、ジョイスを看ていたマルヴェリータ、入り口の二人。

皆、タウローとクァーブの見下ろすサガントを見た。

「はあ・・・これで私もチームのメンバー・・・二人に成ったわ・・」

タウローがオーリナスを見て。

「オーリナス殿、遺体はクリントン殿と同じにするのがいいと思う。持って帰るには、あまりに危険だ。　死臭はモンスターを強く誘き寄せるからな」

オーリナスは、身体を震わせて火の方に向くと。

「明日でいい？」

と。

タウローやシスティアナなどの僧侶からするなら、遺体を悪戯に放置するのは好ましく思えない。　だが、土に埋めることが容易なのはオーリナスのみ。

「任せる」

タウローは、オーリナスを気遣った。

しかし、システィアナは違った。　オーリナスの前にうさぎ跳びで近寄ると、じ～っと見る。

オーリナスは、その素直なシスティアナの目に目が合う。　何か、自分が間違っているのだろうか・・。　不思議と、声が出た。

「な・・・何？」

「死んだ人は悲しくな～いです。　ただ・・腐るだけですぅ。　モンスタ～さんにやられたら、モンスタ～さんになっちゃう可能性が高い高いです。　泣くのは～何時でもできますぅ。　死んだ人は・・・じぶんで土にもぐれません」

オーリナスはシスティアナの言わんとしている意味が解った。　浮んだ涙を拭い。

「そうね。　放置する理由には成らないわね。　ごめんなさい・・」

ダグラスを看ていたゲイラーが、

「俺が奥に運ぼう」

こうして、サガントの遺体も、洞窟の奥に持っていって、システィアナがレクイエムを歌う中で土に返された。

終わった後、オーリナスは火の傍で黙っていた。

システィアナは、ダグラスを看ている。

ポリアやヘルダーなどは、何時の間にか、うつら・・・うつら・・・と眠りに落ちた。

洞窟内の全員が、旅立つかもしれない明日に向けて休んでいた・・。

だが、深夜も過ぎた頃だ。

星空の下、暗いながらも星明りの夜の森の中が、突如して暗黒の世界の様に闇が垂れ込める。　そして、その闇はどんどんポリア達の隠れる洞窟の周りを覆った。

何かが、闇夜の中。　洞窟に近づいてきた・・。　1つ・・3つ・・6つ・・。　近づく影は、どんどん増えてゆく。　丸で、其処に獲物が居るのが解っているかのようにだ。　森の中から、絶壁の左右から・・。

真っ先に気配に気付いたのは・・。

「はっ！！！！　デーモンだっ！！！！！」

大声を上げて起きたのはジョイスだった。

「えっ？！」

「なんだっ？！」

ポリアやリキッドも起きた。

なにより、マルヴェリータの膝から跳び起きたジョイスが、洞窟の入り口にヨロめきながら駆け寄る。

「なっ・・・なんと云うことだっ！！！！　この山に・・・悪魔が・・デーモンが居るっ！！！」

全員、その言葉に騒然と成った。

ポリア、起きてジョイスの横に急ぐと・・・。

「あああっ！！！」

暗い夜の影ながら、何か黒い影らしきものが無数に洞窟の周りに集まっている。

「何アレっ！！！　何で影に赤い目が在るのよっ！！！！」

マルヴェリータ、明かりの魔法を杖に宿し。　ポリアの脇に出てきて叫んだ。

洞窟の前に集まっていたのは、ぼんやり佇む様な影だ。　影なのだが、しっかりと立ち上がるように物体として存在していた。　形は、やや人型に近く、顔の部分に人の拳程の赤い目がある。　眼球が在るのではなく。　赤い目の枠が在ると言って良いか。

リキッド、始めて出会う悪魔に身震いを覚えて。

「コイツが・・悪魔か・。　始めて見るぜ」

ゲイラーも、同様だ。

「なんか・・死霊みたいだな・・・」

ジョイス、唸るような顔でその悪魔を見ながら。

「コイツ等は、地獄に住む最弱の悪魔で。　悪魔に成り切れない姿の“ゴーストファントム”だよ。　だが、コイツ等は自力で人間界は出られないハズ・・。　恐らく、手下として召喚した奴が居るはずだ・・。　下級のレッサーデーモンや、小悪魔の“インクスブット”などが呼ぶ霊体の悪魔・・・そうか・・こいつ等が未確認のモンスターだったか・・」

ポリアは、ジョイスに相手の力量が解らないので。

「戦って倒せる？」

聞かれたジョイス、難しい顔でポリアを見返して。

「戦えるのは、僧侶と君だけだ。　あのデーモンの仲間は魔法が効き難い。　精霊魔法の光の精霊術か、自然魔法の太陽術なら効果が

期待できるが。　魔想魔術では、この数を排除するのは難しい。
しかも、召喚したボスを見つけないと数日で復活する。　はっきり言って・・・無理だ」

イルガは、悪魔に対する知識を掘り起こし。

「だが、ジョイス様。　奴等は、此方に入って来れますまい。　洞窟の入り口には、先ほどにシスティとタウロー殿が結界の力をまた強めて在りますゆえに・・」

「甘いっ！！！」

ジョイスは唸って声を出す。

皆、驚いた。

ジョイスは、しきりにモンスター達を見回しながら。

「リーダーがやっていたでしょ？　自分のオーラで死霊や悪霊のモンスターを倒すのをっ？！！」

ポリア、あの凄い戦いの時と思い出して。

「ええ、“体気仙”とか言う技でしょ？」

「そうだよ。　問題は、その原理っ」

「原理？」

「うん。　強いどちらかのエネルギーは、弱いエネルギーを滅ぼす

っ！！　それは、生と負のエネルギーの相互に言えるんだ・・。
コイツ等を呼び出した悪魔が、この洞窟に張った結界の力より強い力の持ち主なら・・・」

オーリナスは、ウロウロする悪魔達を見ては蒼褪めて。

「この結界は・・・破られる・・・」

タウロー、意味を理解して苦渋の顔のままに。

「では、皆の武器に“聖なる宿り”を掛けて戦うのなら大丈夫ではありませんか？」

タウローが言うのは、Kが以前に武器に聖水を掛けて聖なる力を武器に宿した様に。　魔法で宿す方法だ。

ジョイスは、難しい顔を変えずに。

「アイツ等にも急所となる核が在る。　しかし、絶えずそれがゆっくり影の体の中を動いていると云う事だ。　斬った裂いたで倒せる相手じゃないのさ・・。　ああっ、身体が万全ならばっ・・・。全力で蹴散らすのだが・・・」

更にジョイスが言うには、悪魔に傷を付けられると、非常に治り難いのも特徴だとか。　此処に来て、一気に状況が変わった。

そして、急にうろついていた悪魔達が止まった。

ジョイスは、正面の森の奥を睨み付けながらに指を向けて。

「来たぞっ、親玉だっ」

17絶体絶命の中で・・・Kの恩恵は何処までも

「マズイっ・・・アレは・・ディアーブロだっ。　な・・なんで・・・此処に」

ジョイスが、新たに現れたモンスターを見て絶望的な顔をする。

ポリア、その悪魔を遠くの黒い姿に見て身体が怯えて竦み上がる思いだ。

「なっ・何なの・・・この恐怖・・・あああああ・・こっ・・・怖いっ・・」

ポリアの横で、システィアナは床にへたり込む。

「こ・・こわいです・・・ああ・・・身体・・うっ・・うごきませ・・ん・・」

神聖魔法遣いの僧侶は、悪霊や死霊に加えて悪魔の力をも強く感受する。

「あああ・・・・ぐぐぅ・・・」

立ち堪えるタウローですら全身が震えていた・・。　膝が笑って、もう今にも巨体が崩れそうである。

ゲイラー、背中に強烈な畏怖を覚えて汗を流す。

「こ・・これが・・・悪魔の・・“フィアー・コート”か・・・。なっ・・・なんて恐怖だっ・・クソ・・・」

オーリナスもニーシャも怖くて此方に進んでくる悪魔を見れない。洞窟の奥の方に顔を背けて、ワナワナと怯えて逃げ腰だった。

マルヴェリータの杖の明かりが消えた。

「ああ・・・だめ・・・集中できないっ」

モンスターの中でも、特定の種類と中クラス以上の悪魔には、生き物に強烈な恐怖を与えるオーラ、“フィアーコート”と呼ばれるオーラを纏う。　恐怖を跳ね除けるだけの覇気を持たない者は。　その見る者を竦み上がらせる恐怖のオーラに立ってすら居れなくなる。何も心得の無い人ならば、恐怖に気が狂うかもしれないのだ。

―ニンゲンカ・・・ヒサビサノエモノダナ・・・―

近づいてくる中で、キイキイと喋る悪魔の言葉は、古い古代の失われた用語だ。　ジョイスだけは、理解出来る。

間近に近づいた悪魔は、毛むくじゃらの人間と同じ歩き方をする羊の化け物だった。　両手には鋭い鉤爪を持った黒い手をしているのに。　足元は蹄なのだ。　しかも、顔は胸板の上の所に、逆さに付いている。　角が下に成り、顎が上・・。　赤いドロドロしい色の眼、黒いカラスの様な翼を背中に有し。　背丈もゲイラーよりも高い。

「なんてことだ・・・あああ・・・魔界の中級デーモンが・・存在してるとは・・」

ジョイスが先頭で、皆を護りながら立つ。　自分の魔力をオーラに変えて、皆を護る様にしてフィアーコートの力を緩和しようとするのだが・・。　夕方にまで力を限界まで吐き出した影響が大きい。　ジョイスも、フィアーコートに耐えるのが精一杯だった。

ニーシャやオーリナスは、その身に襲う恐怖に慄(おのの)いて。　涙を流して這い蹲って洞窟の奥に逃げようとしている。　もう、気が狂いそうなのだ。

ジョイス、足元で怯え下がるポリアに。

「洞窟の奥はどうなっているんですかっ?!!」

「あああ・・・いっ・・行き止まりっ!!!」

（クっ・・・こうなったら・・・最後の手段しか・・・）

ジョイスは、捨て身で戦う事を決めた。

その時だ。　洞窟の奥へと下がる皆に、後ろから掠れた声で。

「に・・逃げろよ・・全員で・・撃って・・でりゃああ・・・」

ダグラスの声に、一同がハッと後ろを向けば・・。　ダグラスが気付いて、身体を半分起こしていた。

システィアナが涙目で竦む身体を向けた。

「おきちゃだめぇぇ～」

だが、ダグラスはポリアを見て。　まだ骨がくっ付ききっていない中で顔を険しくしながら。

「ポ・・ポリア・・誰かでも・・・生き延びろ・・。　一人でも・・生き延びたら・・いや・・俺が・・しんがり・・になる・・。　足手纏いは・・おっ・・・俺・・だからな・・」

ゲイラーはその言葉に怯えと焦りで怒った様に。

「なに言ってやがるバカ野郎っ！！！　立てもしないクセしくさってからにっ！！」

ディアーブロと云う悪魔は、洞窟の入り口に立って。　結界の張られている入り口の周りを見回した。

―ホウ・・ナマイキニ・・ケッカイカ・・・。　ドレ、ブチヤブッテオンナノイキチカライタダコウカ・・・―

と、いきなり拳で洞窟の入り口を殴る。

“ガキンっ！！！！”

硬い金属と金属がぶつかる様な音鳴り響く。

「きゃああっ！！！」

マルヴェリータが怯んで後ろに倒れる。

「大丈夫かっ？！！！」

ジョイスが声を出す時、見たタウローは顔中に汗を流して。

「まずいっ！！　破られるっ！！！」

と、ダグラスをゲイラーと持つ方に急いだ。

「なってこったっ！！！！　こんなバケモノかよっ！！！！！」

怒鳴るリキッドは、腰の竦んだイルガを支えて後退する。　顔は汗で塗れて、悪魔をまともに見られない。

ヘルダーも、流石に怖くて壁伝いに立って後退するのみ・・・。

ポリアは、今度こそ駄目だと思った。　涙目で自分の人生も此処までと思い・・・。

（ケイっ　お父様ッ！！　ゴっ・・・ゴメンなさいっ！！！！！！）

包帯男と、父親に謝った。　また、結界を壊そうと殴る悪魔の音に、

怯えて泣くシスティアナを抱きしめた。

ジョイス、捨て身の大魔法を唱えようと集中する。

全てが、絶対絶命だった・・・・。　ジョイス以外の誰も・・・まともに悪魔を見る事も出来ない。　戦える状況ではなかった。　このままでは、結界に触れてもなんとも無いディアーブロと云う悪魔に、結界は破られて皆殺されるだろう。

ジョイスも、ポリアも、Kを知る皆の心の中にあの最強無比の男の姿が浮んだ・・・。

その時だ。　ポリアの耳に・・・何かが聞こえた。

「・・・」

ポリア、ピタリと止まって目を開く。

「・・・」

耳を澄ます・・・。　泣き叫ぶ仲間や、ダグラスを運ぼうと声を荒げる男達の中・・・。　何処だろうか。　確かに、何かが聴こえる。　聞き覚えの在る様な、何度も聞いた事のある様な・・・“ゴーっ・・ゴーっ”と云う音だ。

皆、真剣に悪魔から距離を取ろうとしている中で、ポリアは・・・一人幻を見るような雰囲気で呟く。

「なに・・・この音・・・」

泣きじゃくりだしたシスティアナは、涙で顔を濡らして。

「なにもきこえんでずうう～」

マルヴェリータは、ポリアが狂ったのではと思った。

「ポリアあああっ！！！！！　気をしっかり持ってぇよっ！！！！！」

上ずった嬌声を上げる。

だが・・、ポリアには聴こえるのだ・・。　何か・・・こう・・・嵐の様な風の音が・・・。

ポリア、自分の腰から音が聴こえるのが解った。　腰には、Kから貰ったあのドラゴンの鱗が袋に入れられていたのである。

「コレ・・コレだわっ」

ポリアは、布袋を開いてKから貰ったあの蒼い鱗を取り出すと・・・。

「あ・・・ひっひひ・・・ひかって・・・る・・・光ってるっ！！！！」

皆、ポリアの手に在る青い鱗が、煌びやかに青く光っているのを見た。

瞬間、ポリアはその鱗の中に何が居るのを見た。　美しい・・・蒼い何がが光っている。　夜空を飛び・・・。　何かを見下ろす場所

に・・・。　それがポリア、ゴーストファントムの群れだと解った瞬間に真上を見て。

「来たっ！！！　真上っ！！！！」

全員、何事かと思った時であった。

“ドガンっ！！　ドガン！！！　ドガンっ！！！！”

突然、凄まじい大音量の爆音が外に幾つも轟いた。

「きゃあっ、何よっ！！！！」

「うおおっ！！！」

「グアっ、なっなんだあああっ？！！」

皆驚く中で、ジョイスは上を見上げて。

「凄いエネルギーだ・・・リーダーみたいな強烈なエネルギーの塊が上に居る」

と・・・呟いた。

「えええっ？！！！」

驚いたマルヴェリータ。

だが、それ以上に驚いたのはディアーブロだ。

突如、辺りに徘徊していた手下のファントム達が、上空から襲ってきた衝撃波で地面を大きく抉られて森の木々や土の飛び散る中で消滅する。　何事かと見上げると・・・。

―ナ・・ナンダトッ？！！！！！―

夜空の明け方の空。　洞窟の上空で、山を覆うばかりに巨大な何かが浮んでいた。　ワサっ、ワサっと羽ばたく羽根は、２対の４枚。
　薄く明け出す光に見える巨体はキラキラと光る。　その羽ばたきで巻き起こる風は、森の木々を左右に大きく揺らすほど。

―ナゼッ・・ナゼニアレガココニッ？！！！―

完全にその生物に気が向いていた。　悪魔の集中が途切れたのだろうか。　森や洞窟の周りに垂れ込めた暗黒の霧の様なものが瞬時に消える。

上空の巨大なその生物は、大きく首を擡げて口を開いた。　勢い良く前に首を押し出すのと同時に、逃げ回るファントム共に目掛けてまた衝撃波を何度も吐く。　流星が落ちるようなスピードで、衝撃波はディアーブロの周囲に落ちて凄まじい力を発揮した。

―ウグッ！！！！―

周りで起こる爆裂音と衝撃風圧にディアーブロは溜まらずに手で防いだ。　衝撃波は高さ１０数メートルの木々も砕き散らし。　地面に当れば数十本の木々を根っこから持ち上げて、大量の土と共に高々と舞い上がらせる威力は、小規模の火山の噴火の様だ。　マルヴェリータやオーリナスの魔法など比べ物に成らない威力である。

「はあああああああ・・・滅せよっ！！！！！　悪魔っ！！！！」

ディアーブロの背後から、声が。

―ナニッ？！！！―

振り向いたディアーブロ。　ポリアが肉薄して走り抜き様に、抜き打ちで剣を振るって来たのが見えただけだった。

―ギャアアアアアアアーーーーッ！！！！！！！！―

ディアーブロの、羊の顔が真っ二つに斬り裂かれた。　ドバッと、黒い血が中に飛沫(しぶ)く。　白銀の剣は、悪魔にも有効らしい。

洞窟の外には、システィアナも出ていて。　大きく杖を振り上げて、“裁きの鉄槌”の魔法を唱え終えていたのである。　悪魔の頭上に、眩く光る鉄槌が召喚されていた。

「わる～いアクマさんはっ、だあああーいキライですっ！！！！」

涙で濡れた顔のままに杖を大きく振り下ろすシスティアナ。　駆け抜けたポリアの後ろで、光の鉄槌を受けて瞬時に灰に変わるディアーブロが居た。　光の力に触れた悪魔は、ゾンビやゴースト同様に灰に変わる。

（か・・・勝った・・・）

ポリア、剣を右手に絶壁の上を見上げると・・・。　その巨大な生物の姿にギョッとした。

「うわわわあああああああっ・・・お・・・おっきい・・・・・」

皆も出てきた。

見上げるジョイスは、その生物が何か解った。　在り得ない事だ、その生物は人を嫌うと云われていたのに・・・。

「そんな・・・ブっ・・ブルーレイドーナ・・・神竜だっ！！！！」

チームの一同、幻のドラゴンを見上げた。

タウロー、助けてくれた竜に祈りを奉げる。

オーリナスは、身体にビリビリと風のエネルギーを感じて畏怖と敬意を抱いた。

「凄いわ・・・風の力そのもの・・・。　神だわ・・・」

と、祈る畏敬と崇拝の念に混じり、恐怖から開放された感謝も含む。

リキッド、伝説のドラゴンの1匹を見て身体が震える想いだ。　イルガを脇にして。

「一生拝めるモンじゃねえ～って・・思ってたのによお・・・こ・・こんなの・・在りか？」

イルガ、脇で薄く笑い。

「見てるんじゃから・・・在りだろう・・・」

ダグラス、ゲイラーに抱えられて。　何とも云えない激痛の中で、笑みに成らない笑みを浮かべて。

「ま・・まったく・・ポリ・・アと・・居ると・・退屈・・し・しねえ・・な」

「ああ・・全くだ・・・。　でも・・・すげえ・・・・・」

皆、驚く中。

鱗を持つポリアの心に声が響く。　気高き、女性の声と思える音の様な声だ。

―人間ヨ・・・ドウシテソノ鱗ヲ持ッテイル？　我ガ、逆鱗ノ鱗ハ・・アノ男ニ渡シタハズダ―

ポリア、何処から話していいか解らずに。

「ブルーレイドーナ様、ケイを知っているんですね？　私、彼からこの鱗を貰いました」

ニーシャ・システィアナと並ぶマルヴェリータは、頭を左右に振って。

「どうしてよ・・・こ・交信してるわ・・」

「鱗じゃない？」

ニーシャ、光る鱗を見て言う。

「凄い機能だわ・・・竜語は、今まで知ってる人なんて伝説に４・５人よ・・」

マルヴェリータ、目の前の光景すら信じられない。

ブルーレイドーナは、明けて来る朝日に照らされて、蒼く美しい姿を魅せる。

―ソウカ・・アノ者ガ・・・ソナタニ・・・。　我ハ、アノ男ニ息子ヲ助ケラレタ。　魔王ヲ倒シテ・・怪物ヲモ倒スアノ男ダガ。我ガ子ハ守リ、助ケタ・・。　ダカラ、礼ニソノ逆鱗ノ鱗ヲ授ケタノダ。　逆鱗ノ鱗ハ、我ラ神竜族トモ交信ガ出キル。　重宝スルゾ、麗人ナ娘ヨ―

ポリアには、Ｋの事を話す神竜が、何処か嬉しそうな感じをしていると思える。

「お助け頂きありがとうございます。　私、いつかこの鱗をケイに返します。　大切な、絆の鱗でしょうから」

すると、神々しいまでの古竜であるブルーレイドーナは首を左右に。

―娘ヨ。　アノ男ガ無意味ニソナタニアゲタリハセヌダロウ。　今カラ、ソノ鱗ハソナタノ物ヨ。　ソノ鱗ニ宿リシ我ガ風ノ力、ソノ剣ニ宿シテ使ウガ良イ。　剣ノ鍔元ニ近イ場所当テテミルト良イ―

ポリア、自分の剣を見てから見上げて。

「いいのですか？　私は、ケイの足元にも及ばない者ですよ・・」

―実力ノドウコウッデハ無イ。　運命ダ。　私モ、ソナタノ剣ヲ通ジテ、世界ヲ見ルトシヨウ。　サ、ツケテミヨ―

ポリア、言われるがままに右手の剣を見てから、左手の鱗を見る。
蒼い鱗が、鈍く激しく点滅を繰り返していた。

（ケイ・・・これも、予想の想定内だったの？）

ポリア、剣の付け根の白い刀身の真ん中に鱗を合わせた・・・。
鱗が蒼い光を放って点滅している。

皆、その光景に固唾を飲んで見守る。

それは、一瞬の点滅後だ。　ポリアの剣も、鱗に合わせて共鳴するように光り出す。　鱗は光る点滅の速度を速め。　剣もその点滅に合わせて強く共鳴して光る。

そして・・・鱗は溶ける様に消えて行く。　だが・・・。

「ひ・・光って・・る」

剣は、蒼い光を帯びたまま。

ブルーレイドーナは、それを見届けると。　大きく羽根を動かし始めた。

「うおおお～っ」

ダグラスは強い風にヨロけてゲイラーにしがみ付き。

「あああっ、わっ」

「大丈夫ですか？」

ジョイスも弱った身体が風に当って仰け反る所を、マルヴェリータに支えられる。

空高く昇って行くブルーレイドーナの声が、ポリアの心に響く。

―心ノ中デ風ヲ感ジルノダ。　サスレバ、ソノ剣カラ我ガ力（ちから）ノ欠片ヲ使エヨウ。　アノ男ガ鱗ヲ託シタソナタダ。　ソノ剣ガ有レバ、世界ニ聞エタ者ニ成ロウ。　イズレ、マタ逢エル。　アノ男ニナ―

ポリア、心を見透かされていると解って苦笑する。

（隠し事出来ないじゃない）

高く高く舞い上がったブルーレイドーナは、マニュエルの森の方角に一気に飛んで消えて行く。

ポリア、瞳を閉じた。

皆は、まだ誇り高き神々しい神竜の去った空を見届けている。

「・・・・」

ポリア、静かに感じれば・・・剣の中に吹き荒ぶ風の音を心に聴こえる。

（コレね・・・）

パっと目を開いて、構えた剣を掬いに降り上げた。　振り切る剣から、半月型で半透明の風の渦が飛び出した。　一陣の疾風の如く草むらの草を掻き分けて疾走し、倒れた木の下敷きから脱出して来たグリーンドラウネスの双頭の顔にぶつかる。

「あっ！！」

丁度振り返って見たクァーブは、その光景に思わず驚きの声を上げる。

―シギャアアアーーーッ！！！！―

グリーンドラウネスの双頭の頭がズタズタに切り裂かれ、その風圧は瞬時に尻尾までに及ぶ。

モンスターの絶命が叫び声に驚いた一同が、唖然としてその光景を見た。　誰もが、瞬時の事で声すら上げられない。

ポリア剣を見て、遣る瀬無い笑みが零れる。

「なんか・・・ケイみたい・・・アタシ。　凄いの貰っちゃった・・」

この剣があれば、朝には森を抜けれるとポリアは思う。　視界の先の朝日が夜の帳を締める中で。

「朝に出発するわ。　少し遅く出るからみんな、それまで休もう」

１８その時は其処から始まる・・・、風のポリア、誕生

「立ちはだかると全滅させるわよっ！！！！」

ベロッカがワームに喰われた岩場を徘徊しているワーム達を。　ポリアの剣から放たれた疾風の風圧が土と落ち葉の混ざる地面を削って一気に蹴散らし。

「風よっ！！！　我にその力の片鱗を貸し与えたまえっ！！！！」

オーリナス、中級の風の魔法であるトルネードダンスをいとも容易く唱える。　ポリアの握る剣に、強烈な風の力が宿っている為に、魔法を唱え易いのだ。

ダグラスを背負うゲイラーと、脇のシスティアナ。

やはり病気に罹ったジョイスを護るマルヴェリータ。

代わって前線に出たクァーブ。　ポリアの討ち洩らしたワームに槍で止めを刺す。

イルガ・リキッド・タウロー・ニーシャが動きの遅い者を護ってワームやモンスターを寄せ付けず。　時折、クァーブと交替して休ませたり、クァーブの安全を見守る。

昼前に洞窟を出て、一行は夕方を待たずして山を抜けた。

山を抜けて、街道に向かって歩けば。　ジョイスの手配して貰った馬車が2台、皆を待っていた。

こうして、一行は夥しいモンスターの住む山から帰還することに成功したのだ。

ガタガタ揺れる馬車の中ですら、安心の出来る揺り篭の様で。　殆ど皆、戻る馬車の中で寝っ放しだった。

5日後。

ポリア達、チーム“ホール・グラス”の面々の姿を、斡旋所【深水鏡の楼閣】の中に見出せる。　昼前の有閑たる時間帯だ。

二階の広間に、ポリア達だけが集まっていた。

ポリア、カウンターの向こうに居て、色々と作業しているサリーに。

「リキッドとかは来ないのかしら？」

サリー、顔を上げないままに。

「来るわよ。　ただ、皆一緒みたい」

マルヴェリータ、まだあの緊張感の後に襲ってきた気だるい疲れが抜け切らない。　だから、少しぶっきら棒な言い方で。

「みんなって・・・オーリナスやクァーブの事？」

「ええ。　あの5人、集まってチーム作るみたいよ。　今日、その結成に来るはずだわ」

動きのぎこちないダグラス、紅茶の入ったグラスを片手に皆を見ながら。

「ほ～、面白そうだ。　みんな、力量は確かだし・・あっ・・イタタタ・・・」

ゲイラー、未だに体の痛いダグラスを横目に。

「確かに、どこぞの剣士様よりはイイ感じだな」

ダグラス、ムキに成ってゲイラーを睨み。

「うるへえっ！！！」

するとゲイラー、ニヤニヤした顔でダグラスを見ては両手を鳴らし。

「ほう、両脇を擽（くすぐ）ってやろうか。　んん？」

不毛な二人に。

「やめいっ」

ポリア、物思いの邪魔に煩い二人を叱って窓の外を見ながら紅茶のグラスを口に傾ける。

ポリアの剣に宿った力は、素晴らしいものだ。　念じて振るえば、疾風の刃が飛ぶ。　だが、風の力を遣う時になると剣は急に重くなる。　ポリアの剣士としての力量が、その力を使いこなすに至っていない証だろう。　Kのレベルなら、難なく振るうハズだ。

（何時か遣いこなす・・・そうすれば、逢える。　うん）

そう心に誓う。

ゆっくり待っていれば、オーリナスを先頭に、リキッド・ニーシャ・クァーブ・タウローの5人が上がって来た。　下の1階には、久しぶりに復帰したサリーの従兄妹の女性が、自分の子供達と共に下を切り盛りしている。

「マスター、集まったぜ」

リキッド達は、ポリア達に挨拶したり笑ったりしながら横のテーブルの並びに腰を降ろす。

全員が揃って、サリーは報告を始めた。

先ず、ベロッカのあの果実を取る依頼は、やはり国の副大臣ポストに就く女性が。　斡旋所よりも安い依頼料で引き受けると触れ回っていたベロッカに依頼した物だった。　この世界にも、それなり掟

があり。　勝手な依頼を冒険者協力会以外を通して行う場合、その責任は全て依頼主が負う掟がある。　各国の法律にも、明記があるはずだ。　だから、今回はその副大臣に責めが及ぶと云う。

ポリア、此処で解せない話に。

「でも、大々的にベロッカだって触れ回っていた訳じゃないでしょ？　冒険者を嘘で巻き込んでるんだから、バレたら協力会に殺し屋を差し向けられるの当然じゃない。　その辺のからくりは、解ったの？」

サリー、其処に成ると少し険しい表情で俯きながら話し始める。

「ええ・・。　調べで解ってるのは、あのベロッカは実働役ってトコね。　その裏に暗躍してたのは、商人みたい。　東国のマーケット・ハーナスや、フラストマドに居るらしいって。　かなり悪どい相手みたいで、調べは止まってるわ・・・。　秘かにこの国で、その商人の手先として方々に仕事の誘いを掛けていた人物は、１０日ほど前に遺体に成ってたみたい・・。　口封じかもね」

ポリア、漠然とした嫌な話に憤慨して黙る。　真相は判らないままと云う事に成る。

サリー、カウンターの裏の棚から金の入った布袋らしきものをカウンターに置く。

「それでね。　ジョイス様の証言と、途切れ途切れだけど記憶の水晶に残ってた映像から、みんなが山に巣食ったあの悪魔を倒したのが解ったからね。　外務大臣のテレイズ様から褒美が出たわ。　誰か、討伐や調査に向かわせようと思ってたらしいから・・その分の

８０００シフォン。　それから、彼方達が持って帰ったあの果実が高値で売れてね。　その分が１６０００シフォン。　合わせて２４０００シフォンよ。　分けるのは、みんなで決めて。　合同チームの取り分だから、よろしく」

と、ポリアにウィンクする。　頷くポリアは、ソレには早々と。

「此処に居る全員で等分、一人２０００で分けるわ。　リーダー命令、御託は聞かない」

ニーシャやクァーブは助けられた身。　異議を唱えようと思うが、ポリアに先手を打たれた。

リキッド、二人の受け取る身分では無いと自覚している顔の複雑な表情を見て。

「いいか、その恥を受け止めろ。　その証だ」

二人は俯いて黙った。

さて、ポリア達は報告を聞いてから、リキッド達を見て。

「お別れに、どっかで飲む？　パ～っと」

リキッド、ニヒルに。

「奢りか？　高い酒しか飲まないぞ」

「いいわよ」

ポリアは、笑う。

タウロー、ゲイラーなどと見合って。

「明日からは別々のチームで、競う事も有ろうが。　別れの酒ではなく、親交の酒として参加させて頂こう」

と、拳をつき合わせたりして笑い合う。

オーリナスもそれを望んでいたし、ニーシャやクァーブも断る理由が無かった。

すると、其処に指を加えたサリーが、ジト目で。

「いいな～・・・アタシも行きた～い・・」

ポリア、“駄々っ子か”と思いながら了承しようとすると・・・。

いきなりガバッと立ち上がるヘルダーが、礼儀正しくサリーに頭を下げる。

「はあ・・」

目が点のポリア、ヘルダーがこんなに自己主張しているのは珍しい。

「いいの？　ガンガン飲んじゃうわよ」

嬉しそうに笑うサリーを見て。　其処にダグラスも剣を杖に立ち。

「是非来てよ。　苦楽を共にした仲間だしさ」

と、いい感じに笑う。

微笑むサリーは、了解するのだが・・・。

「んあっ？　おいっ、どけっ」

ダグラス、急に視界を遮る様に移動したヘルダーに怒る。

「・・・」

ヘルダー、“俺の方が先だ”とジェスチャー。

また、下らない戦いが始まる。　ヘルダー、山に行った時はオーリナスに優しく。　戻ればサリーも含めて優しいダグラスが気に入らないらしい。

“どっちかにしろよ”

と、猛講義。

ダグラスも、堅物のヘルダーが真面目すぎるのが気に入らない。

「調子こいてんじゃね～ぞこの口ナシがっ！！！」

ヘルダーも、公然とジェスチャーで応戦する。　云われて凹むヘルダーでも無い。

リキッドは、イルガとゲイラーを交えて酒の話をし出すし。　マルヴェリータは、オーリナスやニーシャと話す。　タウロー、クァーブを前に挨拶してる。

ポリア、ニコニコしてるシスティアナに向かって頬杖付いて苦笑い。

「ウチのチームって、賑やかなの好きよね～」

「すきぃ～、だあ～いすき～」

システィアナも、ニコニコで頷く。

さて。

オーリナス達は、５人でチーム“ドラグゥーズ・ヴェレアー”（竜王の溜息）を結成した。

夕方、ポリア達だけでジョイスを誘いに行くと・・・。　前にエクレアと出逢った地下の馬車の駐車場で、白髪で少し厳つい顔の紳士であるテレイズ外務大臣と会えた。

大らかで、温厚な話し方をする灰色の貴族の好む礼服を着た初老のテレイズだが、飲みに行くと聞くとガラリと様子が変わり。　どうしても一緒に飲むと着いて来た。　どうやら、噂以上にに冒険談義の大好きなテレイズ。

大きな会食場のあるレストランをテレイズ氏に案内して貰って。

其処で飲む事に成った。

サリーの従兄妹家族も含めて、総勢１８名で飲み明かすポリア。

彼女は、後に異名を持つ。

“風のポリア”“蒼風のポリア”・・と。

それは、更に後で活躍するポリア達のお話。今回は、此処まで。

一月と半の時を経過した或る夜。

「ヘックションっ！！！！」

夜の山の中で、包帯男がクシャミをする。

（あ～、ポリア達かな・・）

呟くKに。セシルが、月明かりの下で歩きながらステュアートに近寄り。

「風邪？　唾汚いから向こう向いてよ」

オーファー、微笑んで。

「ケイさんは、知人が多いですからね。　誰か、噂話でもしてるんでしょう」

Kは、鼻を啜って。

「これからお仕事なのに、いやだねえ～」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーK編に続くーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ポリア特別編　セカンド　６（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ポリア編も、年内はコレで終りの予定です。　残りは、K編か、他の主人公のお話に成ると思います＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　セカンド　1

K特別編：理由

1：序話

夜、月の明かりが森の中を走る山道に木漏れ日の様に注ぐ。　満天の月明かりの下で、ギラリと白刃が閃く。

「どおりゃああーーっ！！！！」

「うわあっ！！」

咆哮を上げた大男の振るった大剣を、青い鎧を着た女性剣士が自身の長剣で防いだのだが。　大男の筋肉からも想像出来るその強い怪力で振り込まれた大剣の重みに弾き飛ばされる。　力を逃がす為に、女性剣士は態と横に転んだ。

「エルレーンっ、無理するなっ！！！」

大男の横に立っている若い男の声が飛び。

「そりゃっ！！！！！」

鎖鎌を手にする若き褐色の肌をした男性が、右手に持っていた分銅の方を大男の足元に投げつける。

「ぬぅ！」

身の丈2メートルは楽に超えるであろう体躯の大男。違和感に左足の足首を見れば分銅を付けた鎖が絡まる。自分の足に冷たい金属の感触を覚えた大男は、足元へと鎖を投げた若い男性を睨んで叫ぶ。

「このおおおっ！！！」

若い男性は、鎖を引っ張ってビンと弛みを無くすと。グイッっと大男の後ろに走り込む。

大男は、足を絡め取る気だと悟って。

「させるかあっ！！！」

左足を思い切り前に蹴り上げて若い男性を引き止めようとするのだが。

「待ってましたぁっ！！！！」

若い男性はそのタイミングで右手の鎖を離す。ジャラっと音を上げて、鎖は引っ張られるが、それは2メートル程か。鎖はまだもう少し長い。若い男性は、そのまま走って鎖を引きながら張りを戻し。大男の一本になった右足を脹脛辺りから掬い引く。

「おわあああわわおおおっ」

ドス～ン！！！　大男は、後ろにバランスを大きく崩して倒れた。

「一気に行くよ！」

若い男は、そのまま大男の足を封じてしまおうとする。

しかし、大きい体躯の巌（いわお）の様な大男も黙ってはいない。

「このやろおおおっがあっ！！」

鎖を絞られる前に大剣を鎖の隙間に入れて隙を作り。　鎖の絡まって無い右足を何とか引き抜いて体勢を立てようとする。

「このっ、往生際が悪いんだよっ！！」

大男の正面から、“エルレーン”と呼ばれた女性が長剣を構えて走り込み。　大男の肩口に切り込む。

「うるせえっ！！！」

大男は、長くて大きい大剣を片手で振り上げて長剣を弾いた。　そして、エルレーンがバランスを崩して後ろに退いた瞬間に、鎖をグイグイ引いている若者を睨み。

「舐めやがってっ！！　オラあっ！！！」

鎖を左手で握りって引き回す。

「うあわあああっ！！！」

強い力で鎖ごと引きずられて、若い男性は地面に倒されて引きずられた。

「ステュアートっ！！！！　大丈夫？！！！」

エルレーンが大声で叫んだ。

大男は大剣を杖代わりにして、緩んだ左足首の鎖を外しながら立ち上がる。　月明かりに照らされた大男の顔には、無精髭の辺りに幾つも斬り傷がある。　悪党ヅラだが、確かに強い。

大男は、顔を抑えながら立つステュアートと云う若者や、エルレーンと云う中々綺麗な女剣士を交互に見て。

「ガキの冒険者のくせにはまあまあだ。　だがなあっ！！　この盗賊の“破壊王ウオーレン”様を捕らえようなんざ千年早い。　女は捕まえてたっぷり痛振って遊んでやろう。　若い男は真っ二つにしてやるっ！！！」

残忍な殺気が大男ウオーレンから溢れる様に声で伝わってくる。

其処に。　ウオーレンの正面先、山道上に何者かが姿を見せる。

「ん？」

夜なので、色が良く解らないが。　黒っぽいコートローブを着ている。　背丈は、ウォーレンまで行かないが、かなり高い。　右手に、木の杖を持っていた。

ウォーレンは訝しげに片目を上げて現れた男を睨み見て。

「なんだテメエは、こいつらの仲間か？」

エルレーンが肩の痛みを堪える必死の顔で振り返り。

「オーファーっ！！！　砦はっ？！！」

瞑っているような目、団子鼻が印象的なオーファーは笑って。

「もう、制圧した。　３００人、盗賊は捕縛したぞ」

「マジっ？！」

驚くエルレーンに、オーファーは微笑み返して。

「ああ、ケイ殿が見張り倉の見張りを潰してくれたのでな。　セシルが空を舞う警戒用の鮫鷲を倒せた。　騎士様と兵士達が一気に雪崩れ込んだ。　寝込みを襲ったのだ。　もう、刃向かう暇すら無かったよ」

その会話に、ウオーレンはギロリと目を見開き。

「貴様あああっ！！　国の奴等と釣るんでやがったなあああっ？！！！」

スッと杖を構えるオーファーは、不敵に口元を微笑ませて。

「悪足掻きもここまでだ。　そこもとは、私が捕らえよう」

ウオーレンもガシっと大剣を構えて、そのオーファーの言葉に応える様に動き出す。

「遣れるもんなら遣ってみろおおっ、うおおおおーーーっ！！！」

と、走り出すのだが。

「大地の力を我に、“地割れの息吹”（クラックブレス）」

オーファーが静かに瞑想して杖を上げると・・・。

走り込んで来たウオーレンがもう3歩踏み込めば、オーファーに斬り掛かれる所で。突如、グワァ～っと自分が宙に持ち上がったのが解った。

「うおおおあああっ！！！　なっなんだあああっ？！！！」

驚いて慌てふためくウオーレン、エルレーンやオーファーを森の木々の上から見下ろす様になったのだ。

「うはっ、スゴ」

見上げるエルレーンは、魔法の力に驚いた。地面の一部がグイっと隆起している。ウォーレンは、その隆起した頂点に立っているのだ。

「なっななななにしやがんだあああっ？！！！！！」

驚くウォーレン、下手に動いたら落下するのに慌ててバランスを取りフラフラ踊る様に成る。

それを微笑み見上げる自然魔法遣いオーファーは、微笑みを浮べ。

「降ろして進ぜようか？」

「当たり前だあああああっ！！！」

大声でウォーレンが怒鳴った瞬間、オーファーは杖を振る。　すると、ス～っと隆起した地面が元の高さに戻るではないか。

「うあわわわあああまてえあああああああ・・・」

凄い地響きを立てて、ウオーレンは地面に叩きつけられる。　さっきの後ろに倒れた比では無い衝撃を全身に受けて、ウォーレンは泡を吹いて気絶した。　恐らく、全身の骨があちこち折れて、熾烈な痛みに耐えられなかったのだろう。

顔を地面に引きずった傷を抑えつつ、ステュアートが仲間の元に寄った。

「凄い怪力だった・・・。　ケイさんの言う通り、オーファーが来るまで待てば良かったぁ」

エルレーン、少しずれかけた肩の骨に違和感と痛みを覚える。　全身に掻いた汗が、冷え始めた空気で尚更冷たくなる感覚を覚える中で。

「マジ、やばかった・・・・」

深夜の満月の月明かりが木漏れて来る中で、オーファーは仲間の二人を見て。

「だが、善戦していて良かった。　捕まっていたら、私も難しかったぞ」

エルレーンもステュアートも苦笑いである。

2：クリアフロレンス（クリアーフローレンス）

宗教大国クルスラーゲ。　フィリアンタ教を国教とする宗教統治国家であり。　世界で最も信者の多い宗教の総本山になる。　首都、クルスラーゲは人口５００万を軽く超え、その都市内は非常に教会が多い。

この都市を含めてクルスラーゲに住むのに信仰の制限や別段の税金の納税は必要なく。　無宗教・他宗教でも住める。　だから、都市内の教会を巡れば、多種多様な神の神殿がある。

この地は、伝説に由来した人々を悪魔より救済に降り立った神々の場所なのだとか。　だから、全ての神々を祭る神殿が集まっている。

人の住まいもまた、そんな古き教会や神殿の周りに同化して溶け込む様に建てられ、総本山の象徴たる神殿を囲む城壁の外側には。海から顔を半分出した日輪の様に波状して建物群が数キロに渡って伸び。　その先また数キロは広大な農地等が広がる。

今、朝の日差しが眩しい早朝の終り。　白き白銀の甲冑に身を包み、馬に跨りフィリアーナの刺繍が金糸で画かれる白いマントをはためかす女性騎士が見目麗しく僧兵軍を率いて凱旋した。　左隣のバクチで国政を成り立たせる国、王国グットラックとの国境に巣食った悪党団を壊滅させて凱旋したのである。　略全員の盗賊を捕縛し、向こうの死者3名、こちら0という素晴らしい内容であった。

暦では夏の終りである今、朝晩の空気がヒンヤリし始めている。市内と農村の別れ道、女性騎士を含めて僧兵達は悪党団の一味を引き連れて裏道から入城するらしい。　朝は、働く人々が市内で動き回るので邪魔になるし、何か起きても困る。　第一、捕縛した盗賊の数が多いから、人が多い市内を通りたくない。

「おい、騎士さんよ」

女性騎士の後ろを歩いている包帯を顔に巻いた、襟の高い黒コートを纏う男が呼び止める。

「ん？」

馬の歩みを止めて振り返る女性騎士、左目の下に宝石を填めた様な涙黒子を小さく一つ。　黒髪のウェーブが艶やかな美女である。

包帯男は市内に行く道に身体を向けて。

「俺達は此処で。　市内回ってから、報酬受け取って寝るわ。　斡旋所に通達ヨロシクな～。　後は、よろしくやってくれや」

と、いい加減な口調で左手をヒラヒラ。　一緒に居るのは、あの大男と戦ったステュアート達を含めて5人。

向きを半身に変えたKを見下ろす馬上の女性騎士は、少し名残惜しむ目を細めて。

「そうですか、解かりました。　協力、感謝します。　後で、お礼に出向くやもしれませぬが、出会えた事に感謝致します。　彼方方に、神のご加護があらんことを」

胸の前に手を添え、馬上から一礼する女性騎士。

包帯男は仲間と道に反れながら、

「心解の礼節をする相手では無いだろう？　ただの冒険者だ」

と、言葉だけ残す。　馬上の女性騎士の行為は、親愛なる人物などに行う馬上礼儀だ。　冒険者の身分に交す挨拶では無かった。

包帯男の後ろで、白いローブに金髪のグラマラスな美女が、馬上の女性騎士に恭しい挨拶をして仲間の後を追う。　馬上の女騎士のマントと同じ女神の刺繍をローブの背中に入れている。　二人、同じ宗派の信者ならしい。

「・・・」

冒険者一行を見送る女性騎士は、明らかに包帯男に何か惹かれる物を感じている。

「フッ・・・・行くぞ」

僧兵に進行の合図を送った。　少し笑ったその顔には、女が見え隠れしていた。

さて。　耕していない黄土色の硬い地面を剥き出しにした通りを行くステュアートは、包帯男に向かって。

「ケイさん、何か食べて行きますか？　住宅の多いこの辺過ぎれば、飲食店街ですよ」

包帯男は両手を上に上げて、なっさけない大欠伸しながら。

「ふあぁぁ～そうな～・・・なんか、ガッツリ行きたいね」

すると、背の高い可愛らしさと綺麗さが調和する少女の様な顔立ちをする女性が手を挙げて。

「はいは～い、エリアリブ食べた～い」

と、明るく言い放つ。　その女性、顔はまだ１４・５の少女の様な面持ちなのだが。　背はＫに近い高さが有り。　黒いミニの皮スカートに、膝まで伸びる美しいストレートの髪をした体格は、大人びた女性と云うアンバランスさを見せる。

聞いてるＫ、呆れて少女の様な仲間を見返し。

「セシル、お前昨日・・リブを何束食ったよ？」

Kの言葉に反応したステュアート、思い出しながら両手の指で数えながら。

「一人で7ぐらい食べましたよ。　あ・・・8かな？」

住宅の中から、店や工場に働きに出る住人達が通りに出てきている中。　Kは回りも気にしていない様子で。　後ろでクスクス笑ってる金髪美女のアンジェラの声を受けながら。

「お前だけで１０人前とかか？　最近の女は食い過ぎだ。　大体、エルファレイムやエルフって小食だろ？」

と、呆れ倒す。

だが挙手したセシルは、ムスっと剥れて。

「何時までも同じな訳ないでしょっ！！　進化すんのっ、進化っ！！！　アンジェラっ、笑い過ぎぃっ！！！　アンタだって2人前は食べたわよっ！！！」

「進化じゃね～よ、膨張だよ。　背丈に取られてるんじゃ～あるまいな」

自分と同じ背丈の、ある意味大女になるセシルを見てKは呆れ眼。

「るっさい！」

叫ぶセシルの後ろで、月夜で凶悪な大男を難なく捕らえた禿げ頭の

オーファー、静かに瞑目して。

「背丈と後ろの見てくれは大人、痩せた体型と顔の見た目が少女・・・・異常だ・・・・・」

クワっとセシルはオーファーを睨んで。

「うっさいわねっ！！　もう身体も心も大人よっ！！！　２１よっ、２０過ぎてんよっ！！」

尖った耳、黄緑色の瞳、血の様に赤い唇、セシルは確かに人間とは食い違う。　彼女は、“エルファレイム”と呼ばれる亜種人の者だ。　人よりも魔力に優れ、精霊や様々なエネルギーの感知能力も高い“エルフ”と呼ばれる種族の血を引いている。　人などの他種と交わった種族をエルファレイム。　そうでない純粋種を“エルフ”と呼ぶ。

一方、笑っているエルレーンも一般の人間とは少し違う。　尖った鼻、ロウソクの蝋の様に白い肌、体型は、セシルより大人の女性らしいが。　彼女は“エンゼルシュア”。　天使の末裔と謳われる“エンゼリア”の混血種。　歌声の美しさ、魔力の高さ、そして背中に羽が生える特別な種族。

背中の羽根は、普段は見えないらしい。　何より、青い金属の鎧、白鋼の具足などを着けるエルレーンは、着ている重量が重くて飛べないらしいとか。

冒険者のチームは色々あるが、この亜種２種の混じったチームも珍しい。

朝っぱらから賑やかに市民の注目を集めながら、このパーティーは朝食の臭いが漂う街中の飲食店街に入った。　街角に出店が並び、鉄板の上で様々な物が焼かれている。

「あっ、リブだ。　リブ～」

匂いで目的の物を見つけたセシルが屋台に向く。　牛肉と豚肉のばら肉を帯状に串に巻いて、スパイシーな味付けで釜に入れて焼く焼肉を買いに行く。

「あ～、店事買うな・・。　無くなる前に俺も一つ買うか・・」

と、K呆れ調子。

「お腹空きましたね。　私も、一つ買います」

と、金髪美女アンジェラ。　フィリアンタ教の僧侶である。

「匂いが良すぎるのだ・・・。　私も買うか」

オーファーも釣られた。

瞑っていそうな眠たい目、人より大きい団子鼻、ニキビの痕がブツブツしている長身の自然魔法遣いオーファー。　緑のコート風のローブに、青いズボンを穿いた青年だ。　見た目は老けて見えるが、中年の手前だとか。

結局、屋台先に出来上がっている串全部が無くなった。

「・・・おめえぇ・・よ」

Kが呆れて横目に入れる亜種人の美少女?・・・は、両手の指の間に拳大の固まり肉の串を4本づつ入れて食べている。

瞑目するオーファー、静かに。

「目覚めたな・・・これも、一つの開眼か・・・」

するとエルレーンが、リブを持ったステュアートを横目に見て。

「ま、悪いのはステュアートよね~」

「えっ、僕ぅ?」

リブを持ちながら次の屋台を捜すステュアートは、困った顔でエルレーンを見返す。確かに、思い当たる事はある。

焼きたてのパンの匂いを早くも嗅いだK、出している店に一同で動きながら。

「全ては、ボドルフィンの町で始まったな・・・。確かに、コイツに責任の一端はあるがな」

と、ステュアートの頭を左手でクシャクシャにする。

「あぐ・・・あの時・・・止めとけば良かった・・・」

と、ステュアートは嘆いた。

今から十日前、バベッタの街から四日掛けて中継の町ボドルフィン

に立ち寄った。　丁度、豊作の願いを込めた祭りが行われていて。
様々な催し物が町に出ていた。　セシルとステュアートは二人で食べ歩きをしていたのだが。　大食いの客が居ないと捜していた主催者に目を付けられ、引き込まれたのがステュアートとセシル。だが、そのカップル・夫婦の参加する大会。　負けて最下位になったら、費用を負担しなければならない決まりが・・・。

「あの時、人助けの言葉に乗らなきゃ～・・・」

思い出して唸るステュアート。

ステュアートのお人良しに漬け込まれたのである。　さて、元々食の太くないステュアートなど大して食べれる訳が無い。　一応、様々な郷土料理が出るので飽きはしないが、量が3人前基準で出てくるので半端な量ではなかった。　しかし、此処で意地を見せたのがセシル。　払えない費用では無かったが。　払う事に不満を爆発させた彼女が開眼したのである。

Kは、げんなりしているステュアートを横目にジト見して。

「あん時、何位だったっけ?」

聞かれたステュアートは、立ち寄る屋台先で野菜を摩り下ろしたジュースを器に貰いながらKに少し振り返って。

「3位でしたね。　60組中で、3位・・・。　凄い」

今、こうして思い出してもセシルの勇姿は凄かった。

Kは事実に鼻先で笑い。

「フッ・・お前、別れるまで尻に敷かれるぜ」

「あぶ・・・やっぱりか」

ゲンナリするステュアート。　セシルとステュアートは、どうも相性がいいらしいので、仲が良い。　ステュアート自身、強気だがエネルギッシュなセシルを嫌いでは無い。

さて。

買った物は、近くの公園や噴水前などにあるベンチで食べる。　店に入って食べるより、量が多くて料金が同じくらいだから、朝の人々は市内に出て食べる人が多い。

K達は、子供達が追いかけっこして走り回る林の中の噴水公園に入った。　様々な信仰の対象と成っている神々の像が、広い公園内に樹木の植わる空間を開けて、グルッと囲むベンチに中心に立てられる憩いの広場だ。　色づく紅葉の先走りが木々の葉っぱに見受けられる木陰の下。　ベンチに座る一同。

「もう、朝晩の空気が秋に近づいてますわ・・」

と、アンジェラがKを脇に黄昏て言えば。

「右端で、秋を待たずして食べ捲くってる人居るぜ～だこりゃ」

と、半呆れ半笑いのK。

「はい・・・紅茶・・・」

直ぐ其処の公園の入り口で買った、陶器のコップに注がれた紅茶をセシルに差し出したステュアート。

「サンキュー」

セシルはコップを受け取り、買い込んだ大量の朝食を食べている。

オーファーは、セシルの隣に居るリーダーのステュアートを見て。

「大きいヤマを一つ遣ってしまいましたね。　報酬金額も高いし、市内観光でも2・3日しますか？　それとも、仕事で？」

チーム“コスモラファイア”（たゆたう炎）のリーダーであるステュアートは、そう聞かれて。

「うん、少し街を見て回りたい。　歴史ある街だし、教会図書館にも行きたいし」

セシルとエルレーンが、同時に。

「さーんせー」

と、声を上げる。

オーファーも短く。

「同意」

するとアンジェラが。

「私が案内しましょうか。　私も、実家にお金を置いていきたいので、丁度いいです」

思い出したとKは優しげな美女アンジェラを見て。

「あ、此処の出身って言ってたな」

「はぁい。　農村の方です」

「そうか。　総本山周りは貴族や役所のお偉方しか住んでないしな～。　農村の方の出身だと、魔法学院時代のカクトノーズではどうしてた？　仕送りか？」

アンジェラはその当時を思い出して、皆で分けて食べる大きい塊のパンを千切っては懐かしい目を緑に向ける。

「僅かながら・・・。　足りない分は、学食で働いてました」

Kは朴念仁の様に食べている隣のオーファーを見て。

「学食のマドンナだったな、間違いない」

「惜しい・・・見れなかった」

モソモソ食べるオーファーは、アンジェラの働き出した頃には卒業していたとか。

アンジェラは、Kとオーファーの会話に顔を赤くして。

「そんな感じでは在りませんよぉ。　作る方に入ってましたから・・売る方では有りません」

すると、Kとオーファーは同時の動きでアンジェラの突き出た爆乳をローブの上から見ては意味深に。

「だって・・・なあ・・」

「ええ・・・正に・・・女神」

二人の微妙な視線にアンジェラは胸を両手で隠して顔を赤らめる。

「そっそんな目で見ないで下さいましっ」

と、恥ずかしがって横に身体を反らした。

エルレーンが其処に突っ込んだ。

「セクハラっ、其処っ。　ミイラと潰れ目っ」

「チョエ～ス」

と、顔を前にK。

「いや・・・かって手に目が向いた」

と、頭を掻くオーファー。

エルレーンは、スパイシーな塊肉のリブに齧り付きながら。

「んぐんぐ・・・これだから・・んぐ・・・男は・・・もぐもぐ・・・しょうがない」

と、呆れている。

其処には逆に全員一致で。

（喰ってから喋れ）

で、ある。

話は纏まったと思うステュアートはKに確かめるように。

「では、全員で観光ですね」

すると、Kは首を左右に。

「俺は一人で行く。　知り合いに彼方此方会って来るよ。　この街には、いい加減な知り合い多いからな～。　ま、明日一日で事足りたなら、合流するよ」

「じゃ～宿は同じで？」

「ああ。　もうそろそろ秋だ。　後、一月半でカジナ・イルアレイナーのお祭りだぜ。　バクチの祭典。　もう一稼ぎ二稼ぎして行きたいし。　顔見せはさっさと終わらすに限る。　ん～・・・風がいい風になった」

と、涼しく心地よい風に背伸びするK。

誰も、Kに深くは問わない。　この男、稀代の冒険者でも比類ない凄腕の冒険者だ。　ステュアートなどには、一緒にチームを組ませて貰えるだけでも光栄に値する。　だが、偉ぶった素振りも無いし、何処かいい加減で、何処か優しい、不思議な人物である。

前回、突発的な事件で助け出された僧侶のアンジェラは、Kに対しての思いが強すぎてこのチームに入って来たし。　なんとなく、誰もが頼りにしてしまう男だった。

さて、食事も終り。　器も返したりして一行は街中に戻った。　何処の国に行っても似たような物だが。　人の多い賑う場所に斡旋所は在る。

クリアフロレンスの斡旋所は、最も物流が多く、人の流れが日中は途切れる事を知らない商業区の中心にある。　地上５階建ての大型の石で出来た建造物、“アダマンティアラン”。　意味は“万能なる王冠”。　上の屋根が半円の巨大なドーム型で。　下は、丸で大型の神殿の様だ。　長い横幅が、凡そ９８０メートル、縦幅が４６０メートルの巨大建造物だ。

「くはあ～、いっつ見てもおっきいわね～」

エルレーンが腰に右手を当てて見上げる。

「中は、通り抜けられる商店街みたいなものですからな。　見て、入って、恐れ入る」

オーファーが静かに呟く。

この建造物の外見は、巨大な大聖堂の様なレリーフや装飾を細部に

まで施された外観を魅せるのだが。　中は、北東から西南西に緩やかにカーブして通り抜けられる商店の集合体なのだ。　北東側から入れば、食料店や飲食店が多く。　西南西から入れば、武器防具などの冒険者の装備から、本・楽器・食器や生活用品が売られる。

中でも世界的に有名なのが2階・3階部。　東西に隔てられてはいない広い窓なしフロアが広がっていて。　毎朝になると先ずは生鮮品の競り市が開かれ。　昼前から夕方までは市民も参加できる“ノミの市”（フリーマーケット）が開かれている。　非常に自由に物の流れが動くので、訪れた誰もが2日は潰せると噂が広がっていた。

４階は舞台や演劇や歌などを旅芸人が披露していたり、緑豊かな展覧公園だ。　５階には病院と役所の出向所と警察活動をする警官僧兵が詰めている警備僧兵詰め所が揃う。

クリアフロレンスの生活の基盤が、この“アダマンティアラン”と言って過言では無い。

“アダマンティアラン”の周囲をぐるっと囲む幅の広い川が流れていて。　周囲８箇所に儲けられた出入り口には、それぞれ橋を渡らなければならない。

その一つを渡りながら、セシルは深く急な流れの幅広い川を見ながら。

「しっかし、良くもこんなの作ったわね・・」

走って行過ぎる子供達や家族連れなどを見ながらK。　のんびりな声で。

「今よりもずっと昔は、この辺は溝帯内部の砂漠の様に暑かったらしい。　今の気候に成ったのは、東の大溝帯が出来上がってからみたいだ」

好きな歴史の話だけにオーファーも乗って来た。

「ほう、なるほど」

セシルはKの話に今一理解が行かずに目を細めて。

「関係アンの？」

「ああ。　当時、日中の強烈な日差しと灼熱の熱風で、日射病・熱射病・熱中症の被害者が多くてな。　死体を媒介に伝染病の病気も多かったとか。　そこで、大型の病院を作った。　それが、この建物」

セシルはエルレーンと一緒に建物を見上げて。

「えええっ？！！　これが・・・病院？」

「元、な」

オーファーは、事情を知るに今の施設の構造を思い出して納得だ。

「なるほど、それで施設を冷やす為に、この建物の彼方此方に地下の風を取り込む坑道の様な穴が開いている訳ですか？」

「その通り。　この街の地下は、非常に硬い岩盤で、水が染み込まない部分がある。　底まで穴を掘り、川を周囲に張り巡らして地下

を冷やしてその空気を建物内部の冷却に使ったのさ。　運良く、地下の亀裂を吹き抜ける風穴も見つかって、建物内はかなり冷やされた。　だから、病気の人で無くとも集まる様になり。　建物の上に増改築工事が繰り返されて今の姿に成ったとよ。　ま、今の気候は、当時とは大きく違って来たからな。　冷たい風は夏しか取り込まれないが。　昔は真冬でもアケッパだったらしいぜ」

話を聞くステュアートも、直ぐに思いつく関心で話を繋ぎ。

「では、今の様に商店の塊みたいになったのは、つい最近のことなんですか？」

「ん～、気候が落ち着き始めたのが文献だと８００・・・９００年前。　その頃から、人が集まるから内部でキャラバンの様な物流販売が有ったらしい。　高温が収まれば人も活動し易いし、病気も少なくなる。　必要性が、病院から商業に転化したんだろう。　ま、未だにその名残で、４階の展覧公園の西側は湯治場が公共温泉に成ってるし。　５階と、１階には病院もある」

地元でこの都市出身のアンジェラは、自分以上に知っているＫに驚きだ。

「本当に、良く知っておいでですね」

と、笑うと。

Ｋはゲンナリした様子で。

「昔、此処で呑んだ暮れの学者に絡まれて、半日その話を聞かされたぜ。　耳から離れない」

ワインやリキュールの特産国の一つが、アンジェラの生まれこの故郷なだけに苦笑い。

「大変でしたね」

セシル後ろ向きで歩きながら、エルレーンとアンジェラに笑いかけて。

「ね、直ぐ寝ると変な時間に起きるから、温泉入って行こうよ」

「いいわよ。　汗、流したいし」

「はい、ご一緒いたしますよ」

ステュアートも、Kとオーファーに。

「自分たちも入りますか？」

頷いて晴れた空を見上げたK。

「ああ、宿のお湯より熱いが、サッパリするな。　ついでに、自然公園で動物でも見ていくか？　世界の動物がわんさか居るで」

動物と聞いては男心擽られるステュアート、目をキラキラさせて童子の様に変わり。

「みたぁ～い」

セシル、半笑いで。

「おこちゃまか」

だが・・・某口数少ない大男も、キラキラさせて。

「是非～」

だが・・・。

「いこいこ、温泉が待っている～」

エルレーンが無視した。

「キモイって～の」

セシルは、あっさりと切り捨てる。

「・・・・」

後ろを向いて背を丸めるオーファーに、Kとステュアートが肩と背中を軽く叩いて。

「気にするな」

「オーファー、うんうん」

ささやかな男の友情だった・・・。

3：報告と報酬と休息

陽の光がステンドグラスから降り注ぐ。　女神フィリアーナ像が巨大な石像姿で、慈愛に満ちた微笑みの顔を広い講堂内に向ける大聖堂の壇上前に、中年の男性司祭と共に教皇王が姿を現した。　赤い刺繍の入ったカーディガンを肩に掛け、白い白銀の煌きを魅せる法衣に身を包み。　右手には黄金のフィリアーナを象った杖を持ち。　頭には法王として、教皇王としての証である白銀の冠をしている。　背が高く、蓄える髭も優美で威厳と風格が満ち溢れ。　歳は見た目からして５０代・・・６０前後だろうか。　髭や、髪に白い物が多く混じっていた。

「聖騎士ジュリア、ご苦労だった」

教皇王が、穏やかな声音で労いを掛ければ、ずっと膝間付いて胸に右手を当てて臣下の態度をしている女性騎士が。

「は、陛下の為、この国の為ならば」

と、深く礼をする。

すると、教皇王の脇に控える高位の司祭と思われた中年の男性が、法衣を礼服に作り変えた様な服装で女性騎士の前に進み出て。

「ジュリア殿、面を上げよ」

「はっ」

顔を上げれば、K達と共に凱旋した女性騎士であった。

教皇王は、自分を見上げるジュリアに目を合わせてから一歩前に進み出て。

「兵士に怪我人無く、賊を討伐した功績。　私は忘れぬ。　手際が良かったな」

女性騎士ジュリアは、教皇王を見上げたままに首を左右に一度振り。

「いえ、今回は共に働いた冒険者の手柄です」

「ほう・・・、冒険者が」

「はっ、包帯を顔に巻いた一見は怪しき人物ですが。　その手練、頭脳は類稀でございました。　奴等のアジトに潜入し、見張りを瞬時に制圧。　仲間の冒険者達が首領格の一人を誘き出して、分断。　別の場所から我々が寝込みを襲って手下共は一斉に制圧。　首領格の大男も、冒険者達が捕らえてにございます」

教皇王は静かに鋭く。

「別の首領格は？」

報告の中でジュリアが、首領を一人に限定していなので。　複数の首領格が居ると読んだのだ。

「は。　暗殺者の身を崩した男は、包帯男に剣撃ただの一撃で破れ・・自決致しました。　ですが、もう一人・・・我々を苦しめた・・・」

と、其処で教皇王が厳しい目をする。

「死霊遣い（ネクロマンシャー）だな？」

「は。　その男が、己の全魔力と引き換えに、死霊騎士のデュラハーンを・・・召喚しました」

教皇王も脇に控えていた高位の司祭も顔色がガラリと変わって、緊迫しそうな真剣な面持ちに。　デュラハーンと云えば、死霊の中でも高位のモンスターだ。　普通ならば、今回の手勢で怪我人が出ないとは不思議な事である。

「して、デュラハーンは？」

教皇王が尋ねると、ジュリアは顔を俯けて。

「はい。　話に出しました包帯男が、一瞬で消滅させました。　我々にはとても見えない速さで後ろに回りこみ。　蹴った・・・と思うのですが。　良くは・・・」

教皇王は、暗殺者崩れを剣で倒したと云うのに、今度は“蹴った”と云うのに唖然とした顔で。

「“蹴る”・・・その男は、格闘術の使える僧侶か？」

「いえ、あの光は神聖魔法では有りませぬ。　黄金の光がデュラハーンを貫き、一気に灰に化しました。　死霊遣いは、もう全力を出し切っていたので、易々と捕らえる事が・・」

教皇王は理解したのか、深く頷き微笑む顔に戻った。　感心の頷きながらに。

「そうか。　それは、恐らくは気孔術の一種じゃな。　体内の生命エネルギーを魔法の様に遣う武術じゃ。　死霊や悪霊は負のエネルギー。　反するのは、生きている生のエネルギー。　強き一方のエネルギーは、相反するエネルギーを消し去る。　そうか、凄まじい手練の冒険者も居たものだ」

其処にジュリアは、教皇王にグッと前に進み出て。

「陛下、もし宜しければ・・・」

教皇王はジュリアの言いかけた事を心得ていると頷き。

「解っておる。　それほどに世話に成ったなら、チーム名の広がりを依頼しても良いだろう。　悪党の処罰が決まり次第、ジュリア。　斡旋所に私の遣いで赴いておくれ。　また、そなたも顔ぐらいは見てくるも良かろうて」

「あ・・・はっ」

言われたジュリアは顔を赤くした。　内心、Kに興味を覚えたのを

教皇王に見抜かれたのである。

下がって行く教皇王の後を続く高位の年配司祭らしき男性が、一度立ち止まり。

「ジュリア殿も、年頃か。　いやいや、凍眼のジュリア殿にも春が来たかな」

その言葉に、ジュリアは恥ずかしさで顔が上げられなくなった。

その頃。

「へ～クシュンっ！！！　あぁ・・・風邪か？」

大浴場の深い湯船に浸かるKが、包帯を巻いた顔で鼻を擦る。　タイル張りの浴場施設内。　白いタイルの大きい浴槽の中に、Kもオーファーもステュアートも入っていた。

オーファーは湯船に顔半分だけ出し。　赤く色づいたタコの様な姿で。

「いいですね・・・噂されて」

先ほどの無視を引きずっているらしい。

汗だくのステュアートも、頭に手拭いを畳んで乗せながら。

「ですよね。　ケイさんに風邪なんて怖くて取り憑けない。　アンジェラさんか、ババッタのミラさん辺りでも噂してるんですよ」

痩せて引き締まる身体のK、気持ち悪い目で見てくるオーファーに。

「アンタ、逆上せるぞ。　茹でタコみたいだし・・・」

離す今にも、オーファーの鼻から鼻毛の代わりに足がニュルニュルと出てきそうな瞬間。

「うはっ、アンジェラの胸大きい。　メロンだ、メロン～」

セシルの声がする。

「・・・・」

オーファー・K・ステュアート、無言で黙る。　他に入浴している一般人男性達も同様だ。　男の本能だろうか・・自然と耳が女湯の方に・・・。

「あっ・・セシルさん、揉んだらぁこまりますぅ」

艶っぽいアンジェラの声が、男湯の一同には耳に甘い。

すると、直ぐにエルレーンがバカにした笑い声で。

「アハハ～セシル、アンタ5・6歳の子供みたいじゃない。　下着要らないんじゃない？」

「ぬわにをぉぉぉっ！！！！」

怒るセシルの声。

オーファー・Kは“うんうん”頷き。　ステュアートは、顔が真っ赤に染まる。

すると、今度はアンジェラの声で。

「エルレーンさんは、凄く張りが有りますね。　弾力で弾けそうな・・」

「フッ、いい男を垂らしこむわ。　女王様に成るんだからっ！！」

エルレーンのセリフにK、無言で顔に手をやる。

ステュアートはここぞとばかりに小声で。

「あの時だ～、ケイさんが言ったんだっ。　その気に成った～。ケイさんの所為だぁ～」

と、囁す。　Kを囁せるのも中々無い機会だ。

茹で上がったタコの様に赤く火照ったオーファー、突如顔を湯船の上に出し切って。　右手の指を一本づつ立てながら・・・。

「1、爆乳っ。　2、張りが最高の丁度いいサイズっ。　3、膨らみの無い少女タイプっ。　貴方なら、ハウマッチっ！！」

「・・・」

周りの知らない男性達を含めて男湯に居る7・8人の男達が、各自指で1・2・3のどれかを上げて居るのが見えて・・・Kは溜息を吐いてげんなり。

3を上げるステュアートと、1を上げるオーファー、ジリジリとKににじり寄って。

「どっちじゃ～」

「そうだあ～」

「どれじゃ～」

「こたえろ～」

Kは半目で呆れ笑いしながら、迫り来る不気味な二人に堪らず指を出した・・・。

さて、昼を前にした4階屋外の展覧公園で。

「ふう～、いぃ～お風呂だった～」

と、湯上りのセシルは果物を食べている。

「ですわ。　家族で昔は良く来てましたね」

と、アンジェラはストレートティーを冷やした物を。

「くふぁ～、茹で上がった後の冷たいミルクティーがサイコ～っ！！」

と、噴水前の石のベンチでエルレーンが咆える。

その頃。　女性3人のベンチ横、植物の植え込み一つ隔てたベンチには。

「あづ～・・・あづい・・・」

「はあ、はあ、はあ・・・」

逆上せ上がるステュアートとオーファーがKを挟んで潰れていた。

真ん中で、勝ち割り氷の入ったアイスティーを啜るスマートな姿勢で足組みのK。

セシルが、Kに意味が解んないと云った表情で。

「その二人どうしたの？」

と、ステュアートとオーファーを指差せば。

一人涼やかなKは、爽やかに吹いてくる風に前髪を靡かせて、ニヒルに。

「聞くな、男には時には譲れないものが有るって事さ・・」

何がよ・・・一体。

聞いていたセシルも、何か非常に重たい話に目を細め。

「アンタ、また昔話を語ってたんじゃ～ないでしょうね？」

「違う。　もっと根源的な問題だ。　男の・・な」

どうでもいい事も、哲学的に言えば様に成るようだ。

さて、まだ眠くも無い一同。　下の1階、建物内のど真ん中に一番大きいスペースを陣取っているモダンなチェックの壁紙に包まれ。

壁沿いを囲む様に設置された長椅子とテーブルを配して、窓側の縁などに骨董品を並べる何屋だか解らない雰囲気の斡旋所に向かった。

「はい～、いらはいな～」

グルグル眼鏡をして、散りじりパーマの白髪を茸の傘の様に頭に乗せた皺皺の顔、ずんぐりむっくりの小柄な老人が入って来たステュアート達を見る。

「おお帰って来なすったか～。　いひっひっひ」

も～んの凄く乱雑に紙の束が高い木の戸棚に詰め込まれた様子を背にして、白衣を着た怪しい斡旋所の主はカウンターで言って来る。

Kが腕組みして、リーダーのステュアートに。

「報告～」

「はい」

すると、主はニヤリと笑って、皺皺の顔をステュアートに向けて。

「要らんがな～。　教皇庁から連絡来てる。　満額出すぞい」

其処にK、腕組みして半身の横目で。

「最初の説明に有った危険手当は？」

「ぁ？」

斡旋所の主、途端に耳の遠い仕草をメンバーに見せる。

店内に居た別の冒険者達が苦笑いで、“また惚けるぞ”とか噂話すると・・・。

Kがいきなりカウンターを“バン”と叩いて。

「デュラハーンでたんだぞっ！！！　ええっ？！！　ホラ見ろっ、肘擦り剥いたしっ！！！！」

と、服を巻くって肘を見せて、赤い線の見える僅かな所を指差す。

さっき、湯船で付けた跡だと思う様な赤い線だ。

続けてエルレーンが、怒った顔で青い鎧の肩に触って、

「相手にした相手のデカさ知ってる訳ぇっ？！！！　脱臼し掛けたんだからっ！！！！」

オーファーは小声で頭を差して。

「髪、無いし」

ステュアートも怒った真剣な顔を指差して。

「僕なんか顔擦り剥いたし！！　オマケに死に損なったしっ！！！」

オーファーの身体をを退けて、セシルはギラギラした目で怒声を張り上げて。

「元暗殺者だったのも居たんだぞっーーーー！！！！！　死に掛けたんだしぃっ！！！！！」

Kの脇で、祈るアンジェラ瞑目して。

「神が、危険手当を欲しています」

と、真顔で頷く。

オーファーがセシルの脇で鼻水垂らして。

「危うく、茹でタコに成り掛けました」

再度、右手小指を立てて。

「私はコレで、湯船で死に掛けました」

Kは畳み掛けるが如く服の斬れた部分を差して、

「そら見ろっ、刺されたんだぞっ！！！　えっ、見えるかっ！！！」

もう、やんややんやカウンターで言われて、主はビックリした。

「あああーーーもう解った！！！　解ったっ！！　危険手当も満額出すっ！！！！」

すると全員ピタリと静まり。　うんうん頷く。

この店主の金にガメツイのは周知もいい所、Ｋの作戦に全会一致で乗った結果である。

ドンと、カウンターに麻の金袋が出て。

「満額の８０００だっ、持ってけっ！！」

素直に金が出てきて、Ｋは何かを察する。

「ほ～。　どうやら、教皇庁からの報告がすこぶる良かったか」

もう迷惑がる顔で主は、内情を読む包帯男を睨み。

「そんだ。　ま、今回は斡旋所の手回しが良かったとお褒めを貰ったでな。　満額払ってやるだよ」

エルレーンはステュアート向かい合ってハイタッチ。

「苦労の甲斐あった～」

「あの大きい盗賊の人、本当に怖かった～」

セシルは腕組みの仁王立ちで。

「見張りに呼び出された鮫鷹（サメタカ）をぜ～んぶ撃ち落してやったんだかん

ね。　これぐら貰ってと～ぜんだって～の」

金を受け取り、外に出る一行。

昨日の夕方前、一行はこのクリアフロレンスに来て。　いきなり突発的に今回の仕事を請け負った。　報酬の内容で、乗ったのだ。

ステュアート達が喜ぶ中で、一人で向かいの店に顔を向けるKを、斡旋所の主は見て首を傾げる。

「・・・あの包帯男・・・・何処かで・・・」

主はKを以前に見た事が有る様な気がして成らなかった。　この主は、この職業が好きなようで、全ての依頼の管理をしている。　だから、此処には上級の受付が無い。

「う～ん・・・」

去ってゆく一行を見て、主は思い出に耽った。

都市の北東側から外に出て、そのまま大通りを抜ければ広大な公園に辿り着く。　世界中の国から親善目的で贈られた動物や植物が公園内の土地に離されていたり、育てられていたり。

水の無い庭の場所で黒々としたペンギンが砂浴びをしているのにステュアートは驚く。

「うわわ、ペンギンが砂浴びしてる」

「砂漠に住む固有種だ。　ああして身体に砂を塗して、水分の蒸発

を抑える」

と、説明を入れるK。

今度はプールに入る身の丈２０メートルと云う巨大なナメクジを見てオーファーは目を丸くして。

「モ・モンスター・・・」

「違う違う。　あれは“プトレオオウミウシ”。　海に住む海神の遣いとも言われる動物だ。　青紫の肌、巨大な触覚からモンスターに間違われるが、列記とした動物。　アレの小型な奴が魔法学院カクトノーズの海岸にも春先から夏に来るはずだが」

アンジェラは見上げるウミウシに唖然としてガクガク頷き。

「ええ・・・た・・確かに、浜に打ち上げられる屍骸を食べて、土壌を肥沃にするフンを落としますが・・。　これほど大きいのは・・・」

Kは指差しで檻の中のウミウシを見るに。

「フツ～は、海底で荒波に揉まれてるのっさ。　此処では３食昼寝付きだもの、大きくなるがな。　でも、コイツはメスだな～」

確信して言うKに、ステュアートは驚いて振り返り。

「解るんですかっ？！！」

「ああ、オスは頭の先から、尾っぽにまで白い筋が入るんだが。

コイツは、首周りからコシと云うのか、ケツと云うのか。　その辺までしかない、メスの模様の入り方だ」

更に奥へと移動すれば、檻の中に猛獣も。

「うは～サーベルレオだ」

「うむ、山岳に住む４本牙のライオンだな～」

ステュアートとオーファーは子供の様に喜んでいる。

Kも穏やかな目を包帯から覗かせて、動物を見ていた。

セシル動物を見飽きて、隣に隣接された遊園地を見つけて。

「あああああああっ、此処って遊園地が在るっ！！！！　乗ろうっ、遊ぼうよっ」

と、言って走ってゆく。

腕組みのK、呆れてセシルを見送る。

「聞いておいて、返事を待たないのかよ。　やっぱり、顔とオミソは５歳児」

オーファーはススッとステュアートに近寄り。

「そこもと、アレでいいのか？」

「いや・・・多分・・・進化すると・・・。　自分で言ってるし・・

」

苦し紛れの言い訳に近いステュアートだが。

エルレーンも遊園地は面白そうと思って居るのだろうか。　セシルの後を追いながら。

「ま、お金無い時なんか首都に居ても屯するだけだもんね～。　観光する気分になりゃしない。　はしゃげるだけ、幸せよ～」

冒険者は、常に金欠との戦いだ。　安い仕事では、安めの宿屋に十日も泊まれば稼いだ金は消えてしまう。　況してや、身の回りの物を新調したり、武器や防具を買えば大金が吹き飛ぶ。　金が無い駆け出しの冒険者など、毎日安い居酒屋や斡旋所に屯して、簡単に稼げそうな依頼を待つしかない日々なのである。

さて、遊園地と云うテーマパークは遊び場に最適だ。　何せ、ゲートに有る制限高さ以下の子供は無料だし。　家族連れも料金は格段に安くなる。　だから、子供連れや家族には憩いの広場なのだ。

「ぬわにいい、入場料が２００もすんの？」

園内の入り口で、料金表に文句言うセシル。　冒険者や一般男性は高い。

専用のゲート小屋に入っている店員はシレ～と横を向く。

K達が追いついて、渋々金を払って中に入ったセシルだが・・・。

「やっほ～っ」

二人一組で、トロッコに乗り。　手漕ぎハンドルを二人で交互に押してトロッコを押す遊びで大はしゃぎ。　無論、相手はステュアート。

ハンマーでバネ測りを殴って金属の玉を押し上げてベルを鳴らす遊びでは、エルレーンとアンジェラとオーファーが四苦八苦。

一人・・・。

「フッ」

Kは、輪投げ・ダーツ・鶏掴みの種目で目隠ししてパーフェクトを出し、景品をゲット。　二つは、アンジェラに“家族にやれ”とくれてやり。　自分で、一つはで持った。

セシルは頑張った割りに景品を全く取れず。

「いいな～景品」

と、物欲しそうにKを見る。

「おこちゃまが・・・、友人にあげるんだ」

「くっそうぅ・・・今度もう一回来て、景品根こそぎ奪ったる」

オーファーセシルに別の方を向いて、ボソッと。

「追い剥ぎだ・・・」

楽しく一遊びすればもうそろそろ皆眠くなる。　何せ、昨日の夕方前に此処に到着して、突発の依頼だった盗賊退治なのである。

クリアフロレンスの街は、飲食店街と宿屋は同じ区域に乱立している。　その為、一部の区域を除いて、街灯ランプが落ちてから騒ぐ事は禁止されているのだ。

昨夜捕らえた盗賊の一味は、前々から夜中の旅人を襲ったりして金品を奪い。　度々クリアフロレンスで飲み明かして大騒ぎを繰り返す。　しかも通報を受けた警察僧兵を怪我させて、更に命も奪っていた。

街中で、5度もモンスターを召喚されて、僧兵の手に負えなくなった。　遂に騎士と兵隊のお出ましとなった訳だ。　相手に死霊遣いが居るので、万が一にもの為にと雇われたのがステュアートのチーム。　流石の盗賊達も、Kが居たのでは“税金の納め時”である。

てな訳で、人通りの多い交差点を見下ろせるレンガ造りの宿に泊まってゆっくりした一行。　決して高い宿では無いが。　ゆっくりベットの上で寝れるなら何処でもと泊まった。

次の日、朝。

「ベットが硬い・・・」

宿を出たセシルが、ポツリとぼやく。

食事も出ない安宿だった。

なれど、Kは快適だったと云わんばかりの爽快な目覚めだったらし

く。

「いいんでない？　寝返り打つのが楽だったし」

宿の出口でオーファーは振り返り宿を見上げ。

「雑魚寝よりはマシだろう」

朝の混雑は始まっていた。　店を開ける支度をする人在らば。　騒音防止の為に、地下に設けられた飲食店街で働いていたキワドイ衣装を纏った年齢様々の女性が帰宅しているのも見受けられる。

店を開く場所に屋台を引く者も目立つ。　湯気の上がる屋台、炒め物を鉄板の上で作る屋台は、人目を引く。

ステュアートは、毎日の営みの如く賑やかに人が集まりだす生きている市内を歩いて見ながら。

「こうして見ると、クリアフロレンスって独特ですね。　建物もレンガ造り多くて、道路もレンガ敷き。　あちらこちらに、下に道路をかわす為の橋が架けられて。　街並みが二重三重に重なってるみたいです」

「起伏の激しい丘に創ったからな～。　ま、大聖堂のある所には、神々が降臨したって云われの石場があるしな。　此処は、街を作るに適してなかった場所だから、こうなったんだろう」

受け答えしながら、Kは何を食べようか屋台を物色。

セシルは、エルレーンを連れてもう何かを買っている。

K・オーファー・ステュアート、セシルが買っているのがリブと解った途端に見て見ぬフリを。　遠くで、“また来たのか”と笑うオバチャンの声がしている。

別の屋台を見て居ながらにKは呆れ口調で呟く。

「此処に腰を据えたら、あれは名物になるな・・・」

アンジェラも、オーファーとステュアートに混じって頷いた。

さて、Kはアレコレ仲間と朝食の相談しているステュアートに。

「夕方に成ったら、アダマンティアランの展覧公園か、一階の茶屋に居る。　見えやすい所にいるからな」

と、離れて行った。

「はい、解りました」

ステュアートの返事に、Kは手を振るだけだった。

K特別編　セカンド　1（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

９月３０日にアップ予定でしたが、サイトのリニューアルで混乱やアクシュデントも予想されるので、今のウチにK編の冒頭話だけ掲載しておきます＾＾

次話は、１０月に入り、回線トラブル等無いと見てから掲載しますね＾＾

尚、今回はあえて次話の予告は無しで＾×＾‥

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　セカンド　2

K特別編：理由

４：故郷に帰る人・・と、故郷の人に戻った心

アンジェラの家は、丘をず～っと下った所の農家の一軒家だ。　住宅区を更に南下して、青々とした農地が見えて広がると。　林や農地の一部に隣接する様に農家が家を建てていた。　どの庭先にも、秋物の野菜が色々育っている。

土の通りの曲がり角、低い石塀を越えた庭の中を鶏が雛を連れ立って歩く。　石垣の柵で出来た小屋には、牛が数頭、ヤギも何頭か居るか鳴き声がする。　アンジェラの家は、地べたの上に半円のドーム型の石をボコンと置いた感じで。　ドーム型の石は大小４つが隣り合う様にくっついている。

石のドームの一番大きい手前の見えやすい所に、石壁に埋まる様に取り付けられた木のドアをアンジェラが開いて。

「ただいま」

と、声を出して中に入っていった。

セシルが中を覗けば、石階段が中に5段ほど降っている。　見下ろす床もレンガで出来ていた。　どうやら、床を掘り下げられて広さと高さを確保している建て方である。

「ン？　誰だ～い」

右のドアの無い部屋を繋ぐ仕切り枠から、ヒョイと年配の女性が顔を見せる。

「お母さん、ただいま」

笑顔のアンジェラを見るなり、女性は驚いた顔で。

「おぉ・・・アン・・アンかい」

「うん、クリアフロレンスに仲間と戻って来たの。　顔見せに来ました」

農家の人が良く着る厚手の布着に、白いエプロンをした５０代を超えたと思われる年配女性がアンジェラの元に。　二人、抱き合って無事を確かめ合った。

母親は、アンジェラを涙目で見上げて。

「3年ぶりかい・・・また綺麗になったね～」

「ありがとう、お母さん。　今回、少しお金持って来たの。　ケーマやヨシュアの生活費になればって思って・・」

「ああ・・」

頷く母親は、セシル達に気付いて。

「あら」

「あ、紹介するわ。　今、仲間を組んでいるセシルさん、ステュアートさん、オーファーさんに、エルレーンさん。　凄く腕のいい人達よ」

中に入る順に紹介され。　母親に挨拶する一同。

母親は、女性が多くて賑やかそうなチーム仲間にホッとした顔で。

「ま～ま、皆さん。　こんなむさ苦しい所へ・・。　とにかく奥に、バター茶を煎れますから」

セシル、アンジェラのお母さんの顔に長い苦労を見た気がする。

もう、肌が黒く日焼けして皺が多い。　手も、大人の男の手よりもゴツゴツしている。

（結構貧しいんだね。　アタシの我儘母上よりずっと落ち着いてる）

通された部屋の床には、赤い民族模様の入った絨毯が敷かれ。　上にどっしりとした大型のテーブルが置かれていた。　椅子が足らないので、物置に成っていた古いソファーも引きずり出す。

「お父さんは、まだ畑？」

「うん、御義父さんと野菜の収穫に行ってるよ。　昼頃には帰って

来ると思うけど」

家の周りの畑とは別に、離れた広大な農地で小麦の畑も持っているそうな。　アンジェラは、Ｋから貰った大きなチーズの塊と、少し値の張る短剣、そして僅かに身銭を残して３０００シフォンをテーブルに置いた。

「御土産、少ないけど・・・」

「何言ってるんだい・・・。　ありがとう、アン。　今、ケーマが卒業間近で大変だったんだ。　これで、二人の事は心配要らないよ」

セシルは隣の席のアンジュラに寄り小声で。

「兄妹？」

「はい、弟です。　二人とも、フラストマド王国の上級学校に入学してるの。　上のケーマは、大学学術院に行ってるわ」

「ひえ～」

セシルが本気で驚いた顔に変わる。

ステュアートとエルレーンは意味が解らない。

オーファーがこっそりと二人に。

「教育を学ぶための学校です。　一般の教育学校とは違いましてね。　８歳から入学出来る段階別のエリート育成学術学校ですよ。　大學・上級・下級と有りまして。　上級高等科を卒業するなら、何処

の国の役所にでも務められます。　大學科は、より専門的な経済や法律を学べる所で、成績優秀なら行く末は大臣にも成れる可能性が・・・。　大學学術施設は、世界でもフラストマド王国にしか無いんですよ」

二人、なんか凄い事なんだと解って本気で驚き。

「うおおおおおーーっ」

「凄い～、エリートじゃん」

貴族でも無い者が、上級高等科の教育を受けれるのは稀である。
ましてや、大學科など夢の様な話だ。
オーファーも父親が魔法学院カクトノーズの大臣職であり、幼い頃から下級・上級の学校には行かされていた。　オーファーは、その卒業が１９砕まで掛かってしまい。　１７歳で魔術の修行は終えていたが、冒険者に成ったのは２０歳前と云う。　かなり専門的な知識も学ぶ為に、魔術の勉強と両立するのは相当の苦労が必要だ。
つまり、オーファーも在る意味エリートなのである。

オーファーも子供の頃を思い出すに、入学試験が非常に難しいのを覚えている。　この貧しい家を見るだけに。

「弟さん達は、随分と賢いようだ・・」

褒めて貰ってアンジェラは、オーファーに笑って少し嬉しげに。

「そうね。　私の子供の頃に受けていた此処の国の下級学科の勉強が、二人には絵本代わりだったから。　全部、ソコームの叔父さんの影響ね」

其処に母親が、アツアツのバター茶を運んで来て。

「ソコームは、私の実の弟で。　貴族のお嬢さんと結婚したの。元、冒険者で学者だったわ。　ウチに居候してた時に、息子達にアンの教科書を読んで聞かせてたの」

と、笑顔でバター茶を配りながら教えてくれる。

セシルはその現実的成果に目をパチパチさせて。

「英才教育だわ～。　アタシも、親に強引に行かせられて教わったモン」

エルレーン・ステュアート・オーファー、バター茶を飲みながら。

（強引か・・・。　だから、学が染み付いていない訳だ・・・）

急に黙る3人をセシルは見て。　何やら非常に静かな刺を感じ。

「何？　なんか文句有る訳？」

目を細めたセシルの凶暴な視線に3人、顔をブルンブルンと激しく振った。

「フン、これでも入学の試験はパーフェクトだったんだぞ～」

仲間一同、セシルを怒らせない様に拍手する。　問題は、今現在である。

アンジェラのお母さんが、採り立ての野菜と干し肉などで料理を振舞うと言い。　皆は只では悪いと、家畜の世話や掃除をすることに。

その頃Kは、市内の西南西部の入り口から西側一体に広がる下町来（スラム・ダウンタウン）ていた。

スラム地区は、昔ながら特有の赤茶けたレンガとの土壁で。　木の骨組みにレンガと赤い泥土を塗り固めて壁を作る昔様式の建物が多く。　商業区などでは別名で“レッドチーパス”と呼ぶ。　訳すと“赤い安物”と言うらしい。

だが、離れて見るスラム地区は、夕日や朝日などで以外に美しく見えるし。　住み心地が悪い訳では決してない。

スラム近くに来ると、広大な斜面に赤いレンガ造りの家が犇く様に丘の上に向かって伸びてゆく光景が見える。　どの国にスラム街は在ると言ってもいいだろうが。　貧困層が集まるこのクリアフロレンスのスラム地区は、窮屈に建てられた建物の間を縫う細いレンガ道が網の目の様で。　時間の止まった哀愁の古都の様な味わいがある。

地区の中に入って家々を見ると、明確に隣との境を壁や垣根などで区切られた家はどれも小さく、大抵は何世帯も住める長屋風である。

洗濯物を干す紐が、途切れ途切れの裏通りに伸びていて。　表の細い小道は迷路の様に入り組み、走り回る子供達が時折急に現れたりするのだった。　どの家も長屋も、所々に点在する井戸を中心に作られている。　家の向きで、井戸の在る方角が解る。

この地区は、昼間は明るいので長閑だが。　夜に成ると少し物騒に成る一角だった。　時折、物取りや危ない人物がうろついている。　夜に成ると、住んでる人が多いのに以外なまでにひっそりとする所と有名だ。

その貧困街の丘の中腹に当る一番の建物の密集地で、殆どが長屋の集まりみたいな建物ばかりが乱立する中で、井戸の傍にある一軒家の前に来た。

色の剥げ掛かったオレンジ色で、斜面の形をした三角屋根を持った小さいながらに部屋割りも出来ている家だ。

（此処か。　居るといいんだが・・・）

汚れた白い壁に貼り付けたような枠の狭いドアをノックする。　壁に色を塗っているなど珍しい家だ。

「済まない、誰か居るか？」

もう一度、ノックした。

その時だ。　気配がしていた家の裏手から、何者かがやってくる。

「どなたですか・・・」

皺枯れた声で、家の外の脇から腰の曲がった老女が現れた。　少ない髪を束ねて後ろに流し、杖をついている。　黒い上下の動きやすい服を着ていた。

「失礼。　俺は冒険者で、名前はケイだ。　貴女は、ジョージの母

親殿か？」

その言葉に、老女は子供の様な背丈の身体を出来うる限り起こして。

「はい・・そうですが・・・」

「ジョージがら言伝を受けて来た。　だが、話していいと言われたのは貴女だけ。　もし、人気が無いなら屋内で話が出来ないか？」

老女は、静かに身体を元に戻し。

「はい、そこからどうぞ」

「失礼する」

と、Kは我から玄関のドアを開けて中に入った。

「・・・」

入って、もう居間らしき広間になる。　広間と云っても、屋敷からするなら小部屋に毛が生えた程度だ。　入って右手の暖炉の上には、フィリアーナの絵が飾ってある。

後から入って来る老女を迎え入れる形でドアを閉めた。　直ぐに窓とカーテンも閉めて、開いているドアの無い事を確かめる。　普通、他人がこんな事をしたら怪しむ物だが。　覚悟が有るのか、老女は静かに暖炉前の椅子に座った。

Kは外の人の気配を探ってから、老女の前に膝を曲げた。　どうも、この家に来てから急に人の監視の気配を感じたのだ。

「俺は、旅先でジョージに会った。　これから云う事は、どうかお母上のお気持ちに仕舞って欲しい」

そう言って密やかにKは老婆に話始めた。

Kが全てを語り終えたのは、然程の時間も取らなかっただろう。

だが、杖を付いて俯く老女の瞑れそうな目頭には、光るものが浮んでいた。

「ケイさんと申される方、母親として之ほどに有り難い使者は有りますまい。　息子の事、ありがとうございました」

老女は、座ったままながら深く全身を曲げられるだけ曲げてお礼を述べる。

「いや、これも冒険者同士の嗜みだ。　礼には及ばない。　だが、ご子息の意思は、確かに俺にも思うに当る。　どうか、このままに。悟られないようにお願いしたい」

「はい・・・はい・・・解ってございます」

Kは老女の涙の渇きを待って、窓を開いた。

「いい風だ。　空も青い」

Kが言えば。

「此処は、住みやすさでは何処にも負けませんよ」

老女が笑顔で答えた。

“住めば都”

Kは過去の言葉を穏やかに頷く。

「確かに」

5動く者。

Kはスラム地区の細い道を抜けて、商業区に戻ろうとしていた。バラックの様な長屋の間の通りを抜け、赤い壁を何も塗らないままに剥き出しにしている住宅の間を抜けた。

「・・・」

あの老婆の家から程に離れていない長屋の入り口の前を通った時、燕帽子を被るボロ着姿の長身の男に見られた。　Kは何も気付かないフリをしたが。　明らかに相手の男の目には注視の眼光が宿った

のを見逃すKでは無い。　日に焼けた肌、濃い無精髭、鋭い細目、太く鉤鼻だ。

（見たな・・）

黒いコートの裾を靡かせて行くK。　細い通りは風を集めやすく、緩い風も幾分強くなる。

（着けて来てる・・・）

真後ろでは無い。　洗濯物などが干されている裏通りを、あの自分を見た男が歩いている。　自分を見失わないように、長屋の切れ間や、窓越し、家の壁の隙間などを利用して、明らかに尾行してきている。　土地勘はかなり有るとの自信の表れだ。

Kにとってこの男を撒こうと思えば撒ける相手だ。　だが、何用かは気に成る所。　もし、何か危険な事なら、ステュアートを巻き添いにする可能性もある。　全然知らない土地ならいいが、アンジェラの家族はこの地。　下手な事になれば類が及ぶ。

（行きは居なかった。　帰りでか・・。　ジョージ絡みだな・・。　ならば、相手を確かめた方が得策か）

Kはそのまま賑やかな商業区に戻り。　“アダマンティアラン”に足を運んだ。　西南西の入り口から中に入り。　ゆっくりと歩いて二階のバザー市場へ。　東西の階段の有る外れの一角以外に、仕切りも無い吹き抜けの長く広いフロアが伸びる。　太い巨石の支柱が支えるフロアでは、あらゆる物が様々な形で売られている。

今朝取立てのトマトが、無造作に床に敷いた布の上に山積みにされ

ていたり。　蒸かした芋にバターや野菜のジャムを付けて売っていたり。　切った肉、生きた子豚や雛なども籠で。

他に目をやれば、壊れた剣や杖を直して安く売っている。　Kの手に乗れば、こんな粗悪品でも使えた武器に変わるだろう。　美しく磨かれた装飾品を売る人も。　Kが見るに、使う鉱石が本物なのは3割程度。　だが、逆に本物と偽って高い値段を吹っ掛けている店も少ない。

変わったのでは。　薬師が、様々なポーションを売っていたり、異国の珍しい動物を籠で売っていたり。　宝石の原石や、火薬、薬の原料・生活用品・紙や筆なども・・。

人を避け、物を見ながら、走り回る子供達を叱っている母親に睨まれたりしながら、Kは男が何処までも尾行して来ているのを気配で確認し。　東西に長い2階を端から端まで歩いて、3階に向かう階段へと駆け上がった。

ボロを纏った燕帽の男も、Kの後を急いで追いかけた。

「？」

Kを尾行するボロを纏った中年男が、“く”の字階段を中2階踊り場経由で駆け上がると、そこは3階の踊り場。　左に3階フロアへ行く大きな出入り口。　右には、4階へ上がる階段。　正面は、トイレの男女に分かれた入り口の空いた壁。

（何処だっ？）

ボロを纏った男は、突然にKを見失い驚いた。

「おい」

ボロを纏った男の背後、階段下から男の声が掛けられた。

「あ〃」

他の客が子供連れやカップルなどで階段を上っていたり、降りたりしている中で。　自分の追い掛けていた男が、後ろから来るとは・・・。

唖然としているボロ着男にKは階段を上がって近寄ると、周りで行き交う人の眼を気にしながらそっと近づいて耳打ちした。

（お前、何者だ?）

ボロを纏った男は、素知らぬ素振りで目を凝らすと・・。　知らないフリで立ち去ろうとする。

だが、Kはその男の腕を掴み。

（今度は、俺が尾行してやろう。　好きな所に行くがいい）

「!!」

ボロを纏った男は、驚いた様子でKを見る。

Kは男の腕から手を離して、3階に上がって左の広い吹き抜けのフロアに消えた。

「・・・・・グっ」

ボロを着た男は、何を思ったか走り出す。　2階へ・・。　そのまま1階まで走り降りて、北東の出入り口から市内に飛び出した。擦れ違う人は、何も驚く事は無いのに必死に走る男を避けたり、道を譲ったりして見返し。　また、目的に動き始めた。

ボロを着た男は、顔色をかなり慌てさせて動物園に逃げ込んだ。家族連れや子供達の中に紛れて、様子を窺うべく木陰のベンチに座る。

「・・・・」

警戒しながら・・・辺りの人を凝視しながら深く燕帽を被った。が。

「何処に目が付いてるんだろうなぁ～」

いきなり、ベンチの横から声が。

「はっ・・げえっ?!!!」

隣の横に、Kがどっかりとベンチに座って左腕を背凭れに掛けて沿わせていた。

「うわわわっ!!!!　どっどどどっ・・」

驚きで全身から慌てたボロを纏う男。　まともに声も発せられず、どもって喋りきれない。

「おいおい、周りが変なオッサン見るみたいで見とるど。　落ち着けよ」

包帯から覗ける口をKは動かして、せせら笑いすら浮かべて言う。

「ぎゃあああああっ！！！！」

いきなり湧き上がる男の悲鳴に、動物を見ている大勢の客が逆に驚いて顔を向ける。

「退けっ！！！！　退けえええええッ！！！！」

客の人ごみにボロを纏った男は慌てふためいて飛び込む。　子供を押し退け、年寄りを倒しそうになったりして、大迷惑だ。

Kにしてみれば見ていて詰まらない。　凡そ、逃げるのに人目を引いて態と注目させる手口だ。　人目に付けば、相手が凶行に及び難いからだろう。

「迷惑極まりない輩だな。　ありゃ～飼い主もバカそうだ」

と、ベンチをゆっくり立った・・・消えた。

以前。　ガロンやゼクと言った冒険者や殺し屋を追い詰めるやり方だ。　不意討ちもいい所。　本人は、それなりに尾行や逃げる手段を持って自分に自信が有る。　その心を粉々にされるのだから堪ったものではない。

「ひぃっ！！！　ひぃっ！！！」

全力で遊園地の脇の外回り道路をひた走る男は、燕帽を右手に鼻水まで流している。

（そんなバカなっ！！！　そんなバカなああっ！！！！）

恐らくこれまでに、こう云った尾行を繰り返してきて。　彼もそれなりの行動には自身が有ったのだろう。　逃げる事に関しては、地理的にも詳しいのだからそう簡単には追い着かれない自負が有ったかもしれない。

だが、Kに尾行を見破られて、更には退路に先回りされていては堪らない。　その上、止めにベンチの隣に座っていたのさえ解らなかったのだ。　もう、全力で逃げ切るしかないと必死だった。　騒いだのも、咄嗟に何かされたらと思ってだ。

さて、Kも尾行を続けていた。　軽やかな足取りで、気配を消して人前なのに人に見られないままに男の気配を追って先回りしていた。

ボロを着た男は、そのまま後ろを気にしながら回り道したり、何処かに一度身を隠して様子を探ったりしながら北東の市街地の外側。　岩場が剥き出しで、広大な敷地の窪地で大勢の人が作業している所にやってきた。　辺りは、少し荒涼とした雰囲気の場所で。　風で土埃が舞い上がる。

此処は、宝石から貴金属の原石が豊富な発掘現場だ。　国営の発掘現場で、毎日数万の人々が働いている。　下働きで働く人は、皆が日雇い。　一日幾らで、来ても来なくてもいい。　発掘現場を見下ろす高台周りには、幾つもの櫓（やぐら）が有って、役人の監視員が常駐。

しかも、岩場の所々に、警備兵隊が馬に跨る隊長を主軸に監視していた。　この地は、大きく有刺鉄線の壁に囲まれている。

ボロを纏った男は、鉱石発掘現場に正規のゲート柵が設けられた入り口から入った。　この場で働く者なのか、もう昼はとうに過ぎて夕方前に近づく今頃に来ても、顔パスだった。

「ハア・・ハア・・ハ・・・・・」

大汗を流し、土埃を上げて岩盤や固い黄土色の土を蹴って発掘作業現場に入って行った。　地下２００メートル程まで深い所は掘られている現場は、所々に岩場を削った階段が設けてあるのだ。

ボロを纏った男は、作業している人の間を抜けたりして、監視をしている馬上の兵士に向かっていった。

「ハア・・ハア・・ゴ・・ゴルドフ・・様・・」

兵士3人を率いた黒い全身鎧を纏い、長さ2メートル以上の黒いランスを持った偉丈夫が馬上のその男。　歳は中年か、日に焼けている顔ながら、威厳と云うべきか、武人と云った雰囲気漂う男である。　頭の短めの髪に、幾分白い物が混じる処を見ると、４０代だろうか。

「・・・サンチョス、どうした。　そんなに慌てて」

太い声の“ゴルドフ”と呼ばれた隊長兵士は、目の前に来て土上にへたり込んだボロを纏った男・・サンチョスを見下ろした。

もう息も絶え絶えにに近いサンチョスが、呼吸を貪りながら。

「あ・・はい・・・す・すみません・・。　あの・・ババアの家を・・見張って・・まして。　んく・・男が・・来ました・・」

ゴルドフは馬上より顔を動かして辺りを見回して。

「どうやら、少し何か有ったか。　どれ、話を聞こう。　こっちに来い」

と、馬の首を返す。

「は・・はい・・・」

サンチョスは、ゴルドフの後を追う為にヘナヘナ腰で立ち上がる。

それを見る作業者は、誰もが侮蔑を込めた目をしていた。

その様子を見るKは・・・。

（はあっ～、お役人繋がりかよ・・。　こりゃ～ちょいと・・な～）

高い櫓の真下、太い木枠の陰に隠れてそれを見ていた。　飼い主が役人となると、やはり事は一筋縄とは行かない様相を見せる。　夕日に成り掛けた太陽を見て、Kはスルリと消えた。

採掘現場の四方に置かれた林の中のログハウス小屋。　役人達の休憩場だろうか、外には石のイスと丸太を半分にして造ったテーブルがあり。　3人の役人がそれぞれに紅茶や水を飲んでいる。　基本装備武器のジャベリンを壁に立て掛けて。

ランスと呼ばれる部類の長い槍では無いジャベリンやスピアーは、持って戦え、イザと成れば投擲も容易に可能な武器だ。　各国の兵士の基本装備に採用する国が多いのも特徴の武器と云えよう。

さて、ログハウスの中では奥まった隊長控え室にて、サンチョスが木のテーブル前に立ち。　彼と対峙する形でイスに座るゴルドフが居る。

「・・・・と、云う訳なんです・・。　必死に逃げて来ました。アレは、元は殺し屋ですよ」

必死に語るサンチョス。　Kの気配を消す技を知っている様な口ぶりだ。

聞くゴルドフは、腕組みでやや横柄に。

「ナルホドな。　とにかく、あのスラムのアノ家に来客が有ったのは確かか・・」

「はい」

ゴルドフ不可解なKの言動・存在に深く頷き考え込む。

「ゴルドフ様、いってえ何をお考えですか？　あのスラムの家には、もう腰の曲がったババア一人ですぜ」

腕組みのゴルドフは、サンチョスを徐ろに見上げて。

「黒いコートで、包帯顔か・・・。　ジョージでは無い・・・そう

だな？」

「はい。　包帯男は、ババアにジョージって男の伝言がどうのこうのと・・・」

ゴルドフその言葉にギラリと目を細めた。

「そうか・・・。　解った・・、サンチョス」

いきなり名前を言われて。

「ああっ・・はっはい・・何でス？」

鋭い眼差しでゴルドフはサンチョスを見返すと。

「お前・・少し悪い奴に知り合いが居ると言ってたな。　冒険者か？」

「へい。　前に一緒に酒を飲んだ人で、旨い話なら少し危なくても乗るとか言ってやした人なら・・。　今も、何時もの飲み屋に顔を出すと思いやすよ。　時々、見かけますから」

「そうか、俺も会いたいんだがな・・・」

サンチョス少し驚いて、困る口調で探る様に。

「あ・・じゃ～・・・店に行きやすか？」

頭の回らないサンチョスに、ゴルドフは渋い表情をする。

「お前、私の家柄を知ってるだろう？　コレでも、序列最下位だが、侯爵を賜っておる。　表だってその様な輩とは会えぬわ・・。　何処か、人気の無い場所がいいのだが・・」

サンチョスはそれならと手を打って。

「ならば、呼び出しましょう。　俺、スラム近くで人気の無い地下のバーを知ってますぜ。　旦那が、覆面すりゃ～まずは解らないかと・・。　ソレと解る御貴族様の服装や、役人風の服装でないなら大丈夫かと思いやす。　はい」

ゴルドフは少し笑って。

「ほう、それは妙案だな。　では、前金で２０００渡しておく」

「い〝いっ！！！　にっ・・２０００もですか？」

日々、１数シフォンとかしか稼いでいないサンチョスだ。　５０シフォン見るのも大金なのに・・・２０００シフォンとは腰が抜ける。

「驚くな。　冒険者相手なら、それなりに金の在るところも見せねば成るまい。　金の世の中だからな。　ま、金蔓も在るし、コレ位は安いものだ」

「はあ～・・旦那って・・・すげえ～ですね」

ゴルドフは、サンチョスの感歎に不敵に鼻で笑って金の入った袋机の上に出すと。

「中の２００は、お前の小遣いだ。　残り１８００は、お近づきの

金と渡せ。　会うのは、夜更けでいいな。　明日と明後日、休みを取ると教皇庁に申し出てくる。　別の隊長に頼んでくるから。　ゆっくり飲ませて安心させろ」

「へっ・・へい・・解りやしたあああ～・・・すげ～・・２００も・・・恩に着ます・・」

サンチョスは何時でも手に出来ない大金に、抱え込む様にして両手に収まる位の金袋を抱いた。

（ほお～、キャネヅルが在りますかい。　でも、少しヤバイねえ～）

その話を窓の横に潜んで聞いているＫ。　ゴルドフと云う男、太っ腹の様に見せているが性格は激しそうだとＫは読んだ。　何か、企んでいるのは間違いない。

６運命のうねり

「よう、お帰り」

パンやケーキを専門にした店先で、Ｋはステュアート達に見つけられて手を挙げた。

声に気付いて見たセシル、Kが紅茶だけ頼んで開放的なテーブルの前で飲んでいる姿が優雅に見え。

「アンタって、こんな建物中でも栄えるわね」

そう、此処はアダマンティアランの中にあるカフェバーだ。斡旋所の2軒東側にあるフロア状で敷居も壁も無い開放ガーデン。冒険者達や、若い女性連れがお腹を満たしている。赤と白のチェックに床、赤い落ち着いた色合いの天井。カウンターの有る奥では、油や紅茶の香りがしている。

Kの飲んでいる紅茶の香りに触発されて、オーファーも何か飲もうとカウンターへ。セシルやアンジェラ等も向かう中で、Kはステュアートを指で呼ぶ。

「？」

ステュアートが仲間を見てから自分の横に来るとKは。

「俺、2・3日抜けるわ」

「え？」

「知り合いが体調悪くてな。元気付けてくる。代わりに、俺抜きで何か仕事を請けていいぞ」

話の内容にステュアートは笑顔で頷き。

「はい。丁度、アンジェラさんの家とか数件がお金を出し合って、

農作業の手伝いを募集したそうですから。　それ、残ってたら請けようかな～って」

Kはステュアートの笑顔に目と口元を穏やかにして。

「いい事だ。　働いて来い」

「はい。　あっ・・宿は？」

「ああ、向こうに泊まる。　また、用が済んだら此処の辺に居る。言伝あるなら、斡旋所のオヤジにでも金払って言ってくれ」

「あいあいさ～」

ステュアート敬礼してオーファー達の元に行く。

「フッ・・・素直でいい冒険者なるがな、アイツ」

Kはそう小声で微笑み洩らし。　カップを空にして立ち上がり、人の往来がある館内横断通路に。

近づいて来るステュアートに気付くアンジェラが、振り返ってKを見たとき。

「まあ・・」

家族連れがKの歩く後ろを通り過ぎた瞬間、Kの姿が消えていたのである。

選ぶのに忙しいエルレーンは、甘いケーキを幾つ頼もうかと悩んで

アンジェラに。

「アンジェラ、食べる？」

アンジェラも言われてハッと驚き。

「あっ？！　えっ？　なんです？」

と、慌てた様子を見せた。

「どうしたの？」

「いえ・・ケイさんが・・居なくなりまして・・」

「ハイ？」

見るエルレーンは、Kが席に居らず。

「あれま、マジだわ」

その二人に合流したステュアートは、事情を説明した。

事情を説明されてエルレーンとアンジェラは見合ってから。

「それなら仕方無いわね」

「ですね」

と、ケーキに向いた。

さて、夕暮れも暗くなる頃。　都市北西部、中央大聖堂の壁の外。
洗練されたチェック柄の建物や、教会風の家が庭園を持って幅広く集まる一角が在った。　此処が、族に言う貴族地区。　由緒正しき教皇王や大臣の子孫が住み暮らす場所。

クリアフロレンスでは、爵位の意味が他国と少し異なる。　公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵と云う並びは変わらないが。　公爵とは、王位と云う意味合いでは無く。　法王・教皇王を輩出した家に送られる称号だ。　教皇庁のトップ職や大臣などは、侯爵。　聖騎士、教皇庁重要職が伯爵、偉大な功績の僧侶や特別な任務に置ける成功者を子爵・男爵の称号となる。

そして、向こう１５０年で爵位整理が行われる。　全く落ちぶれた一族や、その称号に価しない家は称号を剥奪されて下級に落とされる。　特に、住民からの苦情の多い役人や、仕事にいい加減だったり。　跡継ぎが居ないなどがその対象者と成る。　国に貢献する一族が高い爵位を得て、仕事を円滑にするシステムとか。　その地位に、何時までも胡坐を掻いて居られない。　居たいなら国と民に尽くせと云う意味らしい。

そうゆう訳で。　爵位整理の近い頃に成ると、無名の僧侶や職員でも、将来が有望な人物は彼方此方から結婚の依頼が殺到する。　酷い場合は、公爵でも爵位剥奪まであるから、かなり露骨な権力闘争が起こるのだとか。

そうゆう意味では、歴代の法王・教皇王を幾人も輩出し。　間短くして大臣のどれかには必ず席を置いていた公爵家、“ブルーローズ”（蒼きバラ）の家柄は、クリアフロレンスでも最古の一族の一つだろう。

貴族地区のど真ん中、広い庭を囲う格子壁は鉄細工の薔薇が模様。
しかも、庭の内側周りは白・黄色・桃色・赤い薔薇の咲く垣根がグルリと囲む。　敷地の西北部に在る大きい鉄格子正門には、薔薇の大輪が施錠の形で画かれる。

その正門から伸びる敷地内の砂利通りの先には、手入れの行き届いた庭木と美しい芝生に囲まれた青い壁細工の教会風な館が2棟並ぶ。
公爵家筆頭、ブルーローズ家の館だった。

今、その敷地に馬車を引き込む為に正門が開かれた。

黒い礼服に身を包む腕に覚え有りそうな中年男性と、若い男が門を開いて馬車を出迎える。　白い馬3頭に引かせる馬車が、これまた真っ青の薔薇の模様入り。　パッカパッカと蹄鉄を付けた馬の足音が、硬く硬く固められた砂利通路を通って、右側の一回り大きい館の前に入り口に横付けした。

「当主、ジュリア様のお帰り～」

使用人の老人が声を出し、馬車を入り口を後から追ってきた門を開いた若い礼服姿の男が開いた。

「御帰りなさいませ」

馬車の扉を開いてから、その場に屈んで言う礼服の男。

「うむ、ご苦労」

白い礼服コートに、身に纏わり付く様な青いドレス姿のジュリアは、騎士の姿よりはずっと女らしく見える。　そう、Kと一緒に野党を

退治した聖騎士ジュリアは、この公爵家の当主だった。

青い壁の一部に填まる合わせ扉が開き、その入り口に向かう階段を馬車から降りて上がろうとするジュリアを迎え入れる用意を使用人達が出迎える形で整えた。

雲が広がり、西の空に赤紫の夕暮れが見えた時だ。

「ほ～、流石は筆頭公爵家の家だな。　古いジュピター様式の館じゃないか」

と、突然に男の声が。

「えっ？！」

聞いたジュリア、その声に聞き覚えが有った。

「何者だっ！！！」

「此処をブルーローズ公爵家の私有地と知っての狼藉かっ！！！」

門を開けた礼服の男性二人の緊迫した誰何が飛ぶ。

パッと振り返ったジュリアの瞳に、庭や屋敷を見ながら馬車を仕舞う格納庫の方から歩いて来る包帯男・・・Kが見えた。

ジュリアを護るべく、馬車の前方に立った男二人に、ジュリアは。

「待て、私の知人だ。　無作法は辞めよ」

歩いて来ながらKは白い馬を見て、ジュリアを見ないままに。

「無作法は俺だろ？　てか、その恰好の方が女らしいな。　聖騎士様とは思えないゼ」

ジュリア、幾分顔を微笑ませながら、呆れた口調で。

「聖騎士と思えなければ困るな。　身体は女だが、心は騎士のつもりで居る」

夕日で少し赤味掛かる黒いウェーブの絡まる髪は肩に掛かる程か。　白き肌、強い眼差し、薄い唇、アクセントとして完璧すぎる涙黒子、鎧を脱げば女性の魅力溢れる肉体のライン。　ジュリアは、この貴族地区でも指折りの美女だった。

Kは、自分を警戒を続ける礼服の男性の間を抜け。　白い馬に近寄って顔を可愛がる。

「しかし、ジュピター様式の古式建築なんざ～私有地では此処ぐらいだろう？　独特の瓦屋根、宝石の一種を砕いて水に溶かして塗りこむ壁・・・良くもまぁ今まで残したなぁ～。　毎回の修繕費用どんだけだよ」

と、ジュリアの入ろうとした建物を見る。

ジュリアは、包帯男の伝法ながら砕けた薀蓄が好きに成り始めていた。

「５年に壁は一度、屋根瓦は５０年に一度だ。　費用は、まちまちだが・・・５万シフォン以下は無いな」

Kは手馴れる馬を見ながら軽く笑って。

「価値は在るが、職人不足だと大変だ」

「確かに・・。　処で、お一人でか？」

「ああ、チョット話が合って来た」

「お話・・・。　夜のお誘い？」

ジュリア、片足を階段に乗せたままに腕組みを。　突き出た形良い胸が良く解る。　足元まで伸びるドレスのスリットから、白い引き締まった生足が覗けていた。

ジュリアらしから言葉にKは薄く笑って。

「夜這いに来た訳じゃ無いぜ」

いきなりこの場で“夜這い”とは・・ジュリアは思わず笑う。　Kの両脇後ろに立つ礼服の男性二人は、ギョッとそた顔で見合った。　普段なら、ジュリアの最も嫌う会話である。　なのに、ジュリアが笑っているのだから・・。

「クスクス・・確かに、そなたに迫られたら勝てぬ」

それにKは軽く笑う。　だが、“中へ”と仕草を見せるジュリアに今度は口元目元を済まし。

「いや、それには及ばない。　これから、少し用が在る。　それよ

り、一つ頼みが在るんだ」

階段を上がり掛けたジュリアは、顔をKに戻して。

「何？」

「実は、もしかしたら・・・人一人を助ける事態に成るかもしれない」

「“なるかも”？　まだ、決まっていないの？」

「ああ。　だが、その事態まで及ぶと、相手が厄介な地位に居るからな。　その辺の何処かに隠すのも難しい」

ジュリアにはKの云わんとしている意味が解り。

「ならば、此処に。　私が預かろう」

話の早い美女にKは口元を微笑ませて。

「助かるよ。　その手柄、君に上げるからな。　多分、昇進の足がかりには持って来いだ。　早く聖騎士団長に成って、家名に箔付けるのがいい」

突然の話の内容にジュリア、即座に反応して顔を真顔にする。

「我が家の内情を・・・」

馬を可愛がりながら、Kは頷いて自分を挟んで見ている礼服の男に目を向けたりしながら。

「確か、君の父親は枢機卿総括・教皇庁副総括だった・・。　だが、二十年前に、書官の女性が謎の死を遂げて。　その女性に表立って結婚の申し入れを再三に渡って言っていた君の兄が疑われて、連行されたのを受けて総括の椅子から失脚・・。　君のお兄さんは、責任を取って自ら獄中で生涯を終えた」

ブルーローズ家始まって依頼の辛い過去なだけに、ジュリアはギュっと唇を噛んで俯く。

使用人達も言葉を失った。　この家の、最大の禁句（タブー）だった。

しかし、Kは口に戸も立てないで続ける。

「だがな、ジュリア。　君のお兄さんは、自分が彼女を追い込んだと思って自殺したが、アレは少し違う方向性を持っていてな」

Kの続ける話の内容が、奇妙に周知の事実と異なり始めたのにジュリアは包帯男をパッと見る。

「なっ・何だとっ?!!」

驚く顔のジュリアを見て、Kは只一つ頷き。

「ま、事がどう動くかに因っては、其処も蒸し返した話に変わる。誰にも言うな。　腹に仕舞っとけ。　いずれ、動いたら知らせる。君に、直々に手を下してもらおう」

「本当かっ?　その言葉に嘘偽り無いな?」

急激に動揺し、顔色が曇るジュリア。

Kはジュリアを乗せた馬車の潜った正門の方に歩き出して。

「ああ。　ただ、どう転ぶかは未だ解らない。　その一番隅っこが動き出したから。　今のウチから、一枚噛むのに協力してって話さ」

ジュリアはKに只只驚くままに。

「どうしてっ、私の家の事情を知ってるのっ?!」

「ジョージ・・・」

歩みを止めないKは、ポツリとそう言って姿を消した。　木の陰に入った様に一瞬見えただけで・・・もう姿は庭先には無かった。

「ジョ・・ジョージ・・。　騎士学校の先輩の・・ジョージ?」

その“ジョージ”と云う名前にジュリア、まだ幼き子供の頃の自分を思い出した・・・。

K特別編　セカンド　2（後書き）

次話、は数日後掲載予定です＾＾

どうも、騎龍です＾＾

新しいリニューアルのサイトで始めての投稿に成りますが＾＾；

なんだか、ちと扱いにくい＾＾；

皆さんから評価を頂き、アクセス数も高くてありがたい限りです＾人＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

K特別編　セカンド　3

K特別編：理由

7交錯する人生の記憶

赤いワインの注がれたグラスがテーブルに置かれる手前、持つ者の躊躇で止まる。　ジュリアは一人私室でテーブルを前にし、溜息と共に白いテーブルクロスの上にグラスを置いた。

（なんで、あの男はジョージ殿の事を・・）

今は夜更け。　赤いカーテンが引かれた窓際。　青いシルクの寝具が奥に見える。　円型テーブルの脇に置かれたグラスランプに灯された明かりが、ジュリア周りを狭く照らしていた。

ジュリアは、この今まで全てが解せ無かった。　Kが態々夕方に来て言った意味すらも解らなかった。

今から２０年近く前の事だ。　ジュリアがまだ幼く、騎士養成所に入った年の暮れ。

アダマンティアランの川に水を引く大きい水路で女性の水死体が上がった。　女性の名前は、エリザベート。　教皇庁の書簡士として勤める女性僧侶で、歳の離れたジュリアの兄・ハインリッヒに思い

を寄せられて何度も求婚の受諾を迫られていた。

当時、ジュリアはまだ8歳だ。　兄のハインリッヒは、２０歳。
相手のエリザベートは、２３歳。

しかし、ジュリアもその事は知っていたが。　兄の求婚は情熱的では在ったが、強引とか偏執的とかでは無かった。　エリザベートは物静かな女性で口数も少なく。　何故か、微笑みながら兄の求婚をかわしていたと云う印象で。　兄も了承を貰うか、断る理由を聞くまでは只直向に求婚すると言っていた。

問題だったのはエリザベートの家柄と美貌。

当時の教皇庁に勤める女性の中でも彼女の美貌は際立ち。　兄以外に求婚していた男性は何人も居た。　そしてエリザベートの家は、どうやらスラム地区で爵位などとは程遠い。　自分の父親ですら、エリザベートの身分の低さを理由にハインリッヒに身を引けと言っていた。

エリザベートの遺体は、自殺とも他殺とも思われる姿だったと云う。
　下着姿で舌を噛んでいたらしい。　だが身体には擦り傷などが見つかり、事件に巻き込まれて自殺を強要されたか。　そう見せ掛けられたのではないかと云う疑いの線が在った・・。

当然、兄のハインリッヒも父のスタウナーは疑われた。　いや、他にも疑われた人物は何人も居たらしい。　だが、丁度友人の式典に出席していた兄と、一人で何か調べ物が在ると残っていた父。　其処に居たと云う証明が無かった。

式典パーティーに出席したハインリッヒだが、どうやら同じパーテ

ィーに出席する予定だったエリザベートを探して、パーティー会場の席を外しがちだったらしい。　父親もまた何かの理由が有ってか人目を避けて居た上に、なんと教皇庁の自分の私室には居なかったと証言が出た。

結局法廷論議をする事態に成り、兄は無実を訴えたが聞き入れられずに連行された。　その羞恥に身を恥じ、獄中で潔白の遺書を残して自殺した。

父親のステンダーも、当時の教皇女王と執行部から事件の道義的・総括としての責任を追及されて失脚した。

ジュリアの苦難は此処から始まった。　周りからの白い目や、虐めが始まる。　ジュリアが今の地位に来るのに、なんと8年近い年月が掛かっていた。　“凍眼のジュリア”と云われるまでに冷静で冷めた目をし、命を張ってモンスターや悪党と戦う彼女は下級兵士からの這い上がりで此処まで来たのである。

普通の公爵家の血筋ならば、入隊した時にもう兵士副隊長から始まるのが。　ジュリアの場合は一般兵からだ。　他の高爵位の者に比べると、聖騎士に成るまでの期間としては1．5倍の時間を費やしている。　だが、一般兵から聖騎士に成れる者自体が数百人に一人居るかどうか。　しかも、ジュリアと同じ速さで昇進した者は過去に数例だ。　つまり、ジュリアの働きがどれだけ素晴らしいか。　もう、兵士・僧兵・兵士隊長・聖騎士でジュリアにケチを付ける者は極小数に限られるまでに成った。

「・・・」

ジッとワインを見つめるジュリア。　自分に剣術の手ほどきをして

くれたのが。　当時の騎士見習いで、少年・少女部の剣の師範代に来ていたジョージと云う兵士副隊長の大男だ。　２メートル近い体格の大らかな青年で。　剣の腕はもう聖騎士に近づいていたと云われる１９歳。　ジュリアが始めて男性を意識した相手であり、死んだエリザベートの４つ下の弟でもあった。

（どうして・・どうしてジョージ殿は国を出奔したのだろう・・・。
あの包帯男は、そこまで知っているのだろうか・・・）

そう、エリザベートが遺体で見つかった直後、ジョージは公職を辞めて国を抜け出したらしい。　今に当時の事を思い返すジュリアは、聖騎士の地位に成ってから秘かにその当時の情報を集め出したのだが。　何分にも２０年も前。　しかも、この事件には何かと裏が在るのか誰も口を開かない。

“あれは、あれで良かったのさ・・・”

“変えられない運命だってあるさ・・・”

“そっとしておけよ・・。　今更・・・”

聞く人達の目・・。　ジュリアは忘れられない。　誰もが何かに怯えて、事件の事を蒸し返す事に嫌悪を持っているようだった。

ジュリアとしては、どうしても全ての理由が知りたかった。　騎士として独り身を生きる自分には、もう跡を任せられるのは妹しか居ない。　この家の家督は、妹に然るべき誰かを貰わせて継がせ。自分は独り身を通して騎士として、家名に塗られた汚名を拭う事に全てを掛けると誓った。

今、妹はその意味を胸にして、教皇庁の教皇王の身の回りの世話をする係りに入っている。

ジュリアの家は、位の最高である公爵。　しかも、今の所は筆頭公爵だ。　だから下級の爵位家の成り上がりを狙う者が、ジュリアやジュリアの妹に求婚を囁いてくる。　このブルーローズ家を食い、上位の爵位に成り上がろうと利用する為にだ。　だからジュリアは男に冷たい。　今まで、あの時から男に心を許す事は一度も無かった。

「何者・・・なにかしら・・・」

一番の疑問。　それは、あの包帯男(ケイ)自体だった・・。

冒険者として山賊退治に向かう時の夜に出会った時はそれ程何も感じなかったのに・・。　暗殺者崩れの男と戦う時も、デュラハーンと戦う時も、自分を女として手を引かせた。　そして、全てを圧倒するあの力・・・。　それなのに・・・何処か冷めていて・・・何処か優しくて・・・何処か寂しそうな・・。　ジュリア自身、これほどに男を意識したのはジョージから剣術の手解きを受けた時以来・・いや、あの時以上に気に掛かる。

酒に強くないジュリアなのに、何故か心が熱くて酒に酔えない。　また・・小さく溜息を吐いた。

ジュリアが、静かに酒に身を任せて居る頃。

商業区とスラム地区の狭間。　街灯の明かりが最も早く落ちる商業区の外れに。　石階段で建物の下を潜るトンネル街路がある。　長いトンネルの中左右の壁には、飲み屋が有ったりする。　少々騒い

でも、周りに迷惑が掛かりにくいので朝まで営業しているのだ。

そのもう暗くなった一角にに、黒いローブをすっぽり被った長身の人物が、Kを尾行して逆に尾行されたボロ着男のサンチョスの案内でやって来た。　明かりの落ちた安い宿の真下に下りる様な石階段を降り。　トンネル街路に向かう。

住民すらも知らないような人気の少ないこんな場所に、飲み屋がチラホラとランプの明かりを店頭に灯して営業しているのだ。　しかも、この辺をうろつく人々は、誰もが一筋縄では行きそうにない闇を隠し持った雰囲気をしている。　冒険者でも気安く来れると云う雰囲気の場所ではない。

「ダンナ、此処ですぜ」

サンチョスは、昼間と同じ恰好で、黒いローブ姿の人物を案内した。　一枚の木のドアが、汚れた店の表に引っかかっているだけの様なオンボロ染みた店の佇まい。　地下通路の壁の中に、すっぽり店が填め込まれている様に思えた。　表だけにガラス窓が見えるが、隅が割れて木の樹脂粘着剤でくっ付けてあるが。　その部分に汚れが混じり黒ずんだ線に成って見える。

「サンチョス、もう酔っているか？」

顔の赤いサンチョスだが、もう酔いは醒め気味だ。　頭もハッキリしているし、覚束無い処は何処にも無い。

「あ？　ダンナ、あっしは大丈夫ですが？」

黒いローブを被った人物・・・。　いや、ゴルドフは頷くと。

「入るぞ」

と、自らドアを開いた。

ギギギギ・・・と。　建て付けがもう幾分悪いのだろう。　鈍い軋みの音が響く。

「・・・」

太った４０過ぎの鋭い目をした主人が、カウンターの向こうからサンチョスとゴルドフを見た。　こんな夜の怪しげな店だ。“いらっしゃい”の一言も無い。

酒瓶の銘柄も書かれていない瓶が背後の棚を賑わす前で、店の主は見覚えのあるサンチョスに訝しげな目を向けて。

「何にするんだ？」

と、ブランデーグラスを磨き出しながら云う。

カウンター席１０席と、その後ろのテーブル席５組しかない狭い店内で、一番奥のテーブル席に座る二人の男にサンチョスは手を挙げてから。

「ダンナ、何か呑みますか？　密造酒ばかりですが、味はいいですぜ」

ゴルドフは、少しローブに隠れた顔をカウンターに向け。

「一番いいブランデーを貰おうか。　こっちにもな」

と、サンチョスを指す。

太った主人は手馴れた手つきで、カウンターにグラス二つを置いてから。　後ろの棚に振り返って、瓶に最も厚みのある丸型の酒瓶を取り出すと。

「こんな店でも、高い酒なら1杯４０はするぜ。　アルコール度が強いから気をつけろよ」

ゴルドフが、ローブの隙間から手を伸ばして１００シフォン金貨を出して。

「度の強いのは呑み慣れてる。　釣りは要らない」

と、カウンターに金貨を置いて、グラスを二つサンチョスに取らせた。

酒を出した主人、金貨を手にとって見てから頷いた。

サンチョスは、グラスを手に取ると、そのまま奥に持って歩く。

ニカニカした顔になり、鋼色の金属製胸当てを纏う無精髭ボウボウの男と。　鋭い目つきをしてガリガリに痩せた黒コートに皮の上半身鎧を来た、髪の長い男が向かい合って酒を呑んでいるテーブル席に。

「テイラーさん、金の話持って来ましたぜ」

黒いコートを着た男が鋭い目つきで顔を斜めに上げて、サンチョス

では無くゴルドフを見た。

「御宅かい。　俺達を雇いたいってのは」

睨まれたゴルドフ。　そのテイラーと云う男の痩せた身体も然る事ながら。　４０前後の顔が四角い角ばった感じで、痘痕の多い歪んだものだったのを見て指差し。

「“ビーンズバーニング”か・・」

ゴルドフの応えに、テイラーは、高熱と豆状発疹を伴う流行り病の痕が残る顔を触った。

「ああ、ガキの頃にな」

「そうか。　実は、厄介な事情から身を明かせないが。　お二人に金で頼み事をしたい」

すると、テイラーは、俄にフッと笑い。

「姿を明かせ無いのは、見られたくない身分だからだろう？　解り易過ぎるぜ」

ゴルドフも、鼻で笑う。

「フン。　それはこの恰好なら誰でも同じ事だ。　成功報酬は、１万。　やるか、やらないかだけ聞かせて貰おう」

テイラーは前に座る男を見た。　鼻が大きく、垢染みた肌の髪も髭もボウボウの強い目の中年男である。

その男、ゴルドフを見返りもせず小声で。

「人の始末か？」

ゴルドフは、その問いに黙って居る。

その男、自分の左手のウイスキーを軽く呷って。

「逃げる手段はどうする？　厄介なのは、後の事だ」

サンチョスは、“人の始末”＝“人殺し”と聞いてグラスを持ったままにワナワナして奥の外れに逃げた。　カウンターの主人は心得ているのか、最初から離れてコップを磨いて黙って居る。

ゴルドフは、逃げたサンチョスを見てから。　テーブルに近づいてカウンターのイスを一つテーブルに寄せて座ると、小声で。

「この男が標的の居場所を知っている。　そして、逃げる道もな」

話を聞いたサンチョスは、自分の事と解って驚いてゴルドフを見た。

「ダンナ・・・オラぁ・・・」

しかし、ゴルドフは怯えるサンチョスを見向きもしないで二人に続ける。

「フ。　相手はスラムのど真ん中に住んでいるババアだ。　始末する音さえ静かなら、然程の物音も出すまいて。　発見にも朝に成るまでは掛かる。　いや、ドアを閉めておけば日中まで、下手すれば

数日以上は誰も訪ねて来ないさ。　逃げる時間は、幾らでも有る。
　1万の金が有れば、逃亡に他国に渡っても余裕は十分な筈だ。
それから、発見をなるべく遅らせる様に手筈もする」

テイラーが、急に声のトーンを落としてやや前のめりに。

「俺達は・・それこそ色々やってるから構わねぇ。　簡単にしてのけるれるなら請けてもいい。　で、何時殺ればいいんだ？」

こんな夜中の悪巧み。　誰も察する訳も無い。　事件が起こってから、事後処理の如く調べが行われて迷宮入りする。　暗黒街やこうゆう廃れた場所の飲み屋の主人は、イザコザに巻き込まれる気は毛頭も無いから通報もしない。　だから、こうゆう場所は一般の人も来たがらない訳だ。　思わぬ悪事に巻き込まれるからである。

8引き金を引いたジュリア

「あ～熱っついね～」

大きな緑の葉っぱがニョキニョキ生えている畑の中から顔を上げたステュアート。　汗だくで、顔が赤い。

「ムッチャ広いよおお～。　あはあ・・・」

セシルも、今日は短いズボンを穿いて畑に来ていた。

見渡す限り、周りは緑と土色の畑一面の世界。

オーファーは、“ハア・ハア”云いながら、禿げ頭に汗を光らせて根っこの芋を掘っている。

アンジェラは、朝に実家にて旅立つ前の私服のズボンや上着を着て見たのだが。　どうも胸だけ窮屈だった。　シャツのボタンが弾け飛びそうで。　見ている男達の熱気まで上げる。

鎧を脱いでいるエルレーンは、メンバーの中で一番作業の早いアンジェラを見て。

「腰イタ～・・。　アンジェラ、流石だわ～」

アンジェラは、慣れた手つきでせっせと芋を掘り出しながら。

「この芋が、冬の家族全員の主食です。　蒸かすと美味しいですよ。バターやチーズに良く合いますから」

その話にオーファーはパッと顔を上げて、アンジェラの巨乳をマジマジと見て。

（だから成長してるのか・・・乳製品を・・）

と、思った途中で、硬い物が頭を直撃した。

「うごおおっ！！！」

激痛に頭を抑えるままに屈むと。　黒い土塗れの芋が落ちていた。

「い・・イモ・・があ・・・」

唸るオーファーに、セシルが鬼の形相で睨みつけ。

「このスケベムッツリがっ！！！　何処見てるのさっ！！！！」

顔を上げた涙目のオーファーは、静かに横を向いてボソっと。

「アル所を見ているだけ・・アダっ！！！！」

言い終える前に、セシルのイモランチャー2号が飛んできた。

「おんどれがっ！！！　魔法遣いじゃなくイモ遣いにしちゃるわああああっ！！！！」

流石のオーファーも、2発目は違法だと訴えてムッとした顔で芋を投げ返す。

エルレーンとアンジェラが、半笑い半汗で見る中、“雪合戦”為らぬ“芋合戦”が・・。

ステュアートは、黙々と作業に没頭していると、芋が目の前を飛んで行くのを見て顔を上げた。　なんと、食料の芋を遊びにしている二人が・・。　コレも仕事で請けてきた作業なだけに真面目に怒り出す。

「止めてよおおっ！！！！　お金貰ってる仕事なんだからねっ！！！！　後で、ケイさんに言い付けるよっ！！！　もうっ！！！」

“K”の名前に二人、ピタリと振り被った所で止まった。

昼前の晴れ空の下で、エルレーンは作業に戻りながら微笑み。

「オーファーが怒られるのも見ものかもね・・フフフ・・・」

アンジェラは、最近なんでか面白いオーファーを見てクスクス笑うのだった。

Kは居ない。　ステュアート達は、Kがどうしているかなんて気にもしていなかっただろう。　知人を見舞って、・・・。

だが。　Kよりも今、一番忙しく動いているのはジュリアだ。　眠れぬままに朝を迎えて、教皇庁に赴いて任をこなす。　顔には、Kの言った事等微塵にも出さずに。　この日も、“凍眼のジュリア”は健在だった。

巨大な城が、幾つもの細い塔を重ねて集まった様な様相を見せる中央大聖堂の東側。　“聖騎士の角”と呼ばれる青い塔の5階廊下で、ジュリアは思いにも寄らない人物と逢った。　赤い絨毯が石廊下の真ん中に引かれた廊下上で、自分の私室に向かう途中でだ。

「おお、ジュリア殿」

俯いて考え事をしながら歩くジュリアに、聞き覚えの有る声が前から。　顔を上げれば、身体ヒョロ細く黄色い礼服の様な神官服を着る中年・・いや初老の男性が此方を見て手を挙げていた。

（マルフェイス総括殿か・・・）

ギョロっとした目に、皺の多いガリガリのチビ男だ。　嘗て、２０年前にジュリアの父親を告発した男爵で、今や乗っ取りの如く教皇庁総括に１０年前に就任した。　幾度と彼の息子とジュリアの結婚話を持ち込んできた策士でもある。

マルフェイス総括長官は、お供の屈強な僧兵二人を従えながら、偉ぶった足取りで背中に手を回し向かってきた。

「いやいや～、そなたに話が有っての～。　お邪魔したら居なかったが、丁度良い」

ジュリアは、その冷めた目で、自分の腹当りにしか頭の届かない小男を見下ろして。

「何用ですか？　総括直々に御出でとは？」

すると、マルフェイスはニヤニヤしながら。

「いやいや、数年後に来る爵位整理で、ジュリア殿の家柄の下爵が決定した。　伯爵に堕ちるのだよ。　２０年前の一族の失態からするなら剥奪モノだがな。　現・教皇王エロールロバンナ様他、多数の恩赦要求と、お主の働きで下爵で済んだ訳だ。　ありがたろうな～」

下方からの目線で、大きく目を開いたマルフェイスは、ニヤニヤと厭味ったらしい言い方でジュリアを挑発さえしている様な素振りに見える。

だが、ジュリアは怒る気にも成らなかった。　こんな話を廊下上でベラベラ話す人物の人格など高が知れている。　この言い草、自分

を怒らせて何かやらかしたいか。　また、結婚話でも持ち出す気なのだろうと思う。

「そうですか。　それはそれは・・・、寛大なご容赦を承った様ですね。　明日にでも教皇王様にお会いする時にお礼を言わなければなりませんね。　それから、態々此処までご足労願った総括長官にも」

と、深深と頭を下げる。

見ているマルフェイスは、ジュリアの態度が余りにも落ち着いているのにニヤケた顔を平静に戻す。

「ほう、流石は公爵家の御令嬢。　下級の爵位の者にでも正しい礼儀を知って為さる」

面を上げたジュリアは、社交辞令的な微笑みもせずに。

「我々は教皇王様を始めに、国民に使える組織。　上官に対する礼節は何よりも重んじなければ成りません」

と、云って壁際に退いて道を譲る仕草を示し。

「お伝えすべき事がそれだけならば、お先に。　私も、私室にて仕事を残します故に、これにて」

マルフェイスは、その涼やかなジュリアの顔が今は憎しみの対象だ。

「ほう・・御仕事が。　これは忙しき聖騎士様のお邪魔をした様だ。だがな、ジュリア殿・・・これだけはハッキリ言いますぞ。　そ

なたが、我等上爵に上がる何者かと婚約しない限り。　もはやブルーローズの家は没落する。　・・いや、私がさせるっ。　そなたか、妹君。　どちらか力付くでも貰いますぞ」

睨む目で云うマルフェイス。　とんでもない事を云い終えて、お供の二人を率いて廊下を去る。

（今に思えば・・・何でこの男・・・）

ジュリアには不思議だった。　このマルフェイスは、他の侯爵家や伯爵家の娘では無く。　あくまでも自分の家に婚約筋を求めている。　１５年前からしつこい位にだ。　マルフェイスが、総括長官である以上、もう侯爵の位は固い。　地位が地位、大臣と同じ位置に居る以上は伯爵家辺りと結婚して爵位統合をすれば公爵も狙える。

なのに、何故か自分の家に固執する理由・・・。　全く解らなかった

ジュリアは、マルフェイスを見送ってから廊下を行き自室に入る。　定時に運ばれてきた昼の食事もしないでジュリアは、物思いに耽る。

（ケイと云うあの男・・・、一体何を知っているのだろう・・。　“助ける”と云った人物は、一体誰なのだろうか・・。　・・・・解せぬ・・・今にして何もかも解せぬ・・。　ああ・・兄上、父上、何故に死なれた。　父上、何も話されず・・どうして・・・）

ジュリアの父親は、確かに何かを知っていた様だ。　何を聞いても、失意のままに語らぬ男に変わった。　特に、時々酒を浴びる様に呑んでは、死んだ息子に謝るのだ。　何が有ったのか・・・。　ジュリアは１０年以上前。　自分が騎士学校を卒業する半年前に病死し

た父を思う。

午後。

ジュリアは、部屋を出て下級兵士の剣の稽古に向かうべく、地下の練習場に向かおうと廊下を行く。　自分もそうして鍛えられた。部下思いのジュリアは、毎日の訓練稽古は欠かさない。

古い建造物のこの大聖堂“ヴェルハラントモリナリス”には、各塔の中に魔法で動く移動床“魔法陣床”が在る。　その入り口は、各階の共同トイレの前に有った。

「・・・」

ジュリアは、廊下の行き止まりを左に曲がって前に伸びる廊下に顔を向けると。　魔法陣床の入り口付近に立っている、貴族風の豪勢な刺繍入りの上着を着た背の高い男を瞳に映した。　トイレ前の、少し開けた踊り場の様な広い間。　その男は、隅の壁に背凭れして暇を潰すしているかの様だったが。

向こうも、ジュリアに気付く。　ジュリアが近づくのに合わせて、壁に凭れるのを止めて向かってきた。

「ジュリア～、久しぶりだな～。　逢いたかったよ・・」

金髪の優男で、確かに顔は整っていて女性受けしそうだ。　目が少し鋭く、鼻が高く、色白。　名前は、“マリック”。　マルフェイスの息子だ。　ジュリアは、無視して床の在る場所に向かう。

髪の毛の後ろを長くしているマリックは、ジュリアの髪の匂いを嗅

ぐかの如く近寄ってきた。

「寄るな。　また、何時ぞやの様に斬られたいか？」

ジュリアはこのマリックに一度襲われて斬り付けている。　まだ１９歳のジュリアだったが、別の兵士が現場を見ていなかったら・・・マリックとの間に入って居なかったら斬り殺していたかもしれない。　そうゆう襲われ方をしたのだ。　妹に言い寄っていたのを見掛けた時も、剣を向けた。

「怖い顔するなよ、俺の未来の妻よ」

１５年前から、ず～っとこんな調子の男なのだ。　顔は優しげに見えるが、腹の中は真っ黒い。　しかも、遊びで何人もの女性と付き合っている。

その時ジュリアは咄嗟だった。　本当に、咄嗟だった。　マルフェイスにあんな事を言われた後なだけに、ギリリとマリックを見上げて思わず。

「お生憎だったな、マリック殿。　妾にも、漸く好きな男が出来た」

「なっ！！」

驚くマリックは、ポカ～ンと口を空ける。

ジュリアの思う心にはＫの姿が浮んでいた。　魔法陣床の間の入り口の扉に、ジュリアは顔を向けて。

「当然、そなたでは無い。　そして、この世で一番強い男かも知れ

ぬ。　何れ折を見て、此方から正式に告白して結婚を申し込みたいと・」

そこで、いきなりマリックが形相を変えてジュリアに襲い掛かった。
今まで、恋愛など微塵も無いと見せていたジュリアだから、不意の衝撃告白だったのかもしれない。

「うわあああああっーーーー！！！　ふざけるなあああーーーーっ！！！！」

いきなり掴みかかられて、ジュリアは苦しくて顔を強張らせる。

「何を・・するっ！！！！！　この下郎っ！！！！！」

マリックに首を絞められる形で、鎧の隙間の首筋を掴まれてもがいたジュリアを、遠くで別の聖騎士が見つけた。

「おいっ！！！　何をしているんだっ！！！！！」

「はぁっ」

マリックは、突然に聴こえた男の声に気を取られた。

「はっ・・離せっ！！！！」

「うおあッ！！」

マリックの気が反れたのを隙と見て、ジュリアが思いっきり身を捩ってマリックを左に振り。　開放を得て怒り任せに剣を引き抜いた。

「あ・・」

マリックの目に前に、ジュリアの長剣の切っ先が向かっていた。

「ジュリア殿っ！！！」

駆けつけた年配の聖騎士が驚く時、ジュリアはマリックに憎しみめいた目を向けて。

「はあ・・はっ・・マリックっ、お主の父親は私の家の下爵を決めた。　もう、妾に構う必要は無かろうっ。　に・二度とその顔を見せるなっ！！！！」

マリックは、剣で戦えばジュリアに勝てる力量は全く無い。　剣を突き付けられた今ですら、もう恐怖で膝が笑っている。

「ああ・・わ・・わかった・・・ジュリア・・・」

その返答にジュリアは手荒く剣を仕舞い、駈け付けてくれた聖騎士に向かい。

「済まない、少し興奮しただけだ」

と、魔法陣へ向かうドアに凭れる様に触れる。　石の薄い扉が左右に分かれて、魔法陣の画かれた丸い石が見える間が見えた。

ジュリアは、中に入って聖騎士の年配者に。

「其方は？」

年配の聖騎士は、立ち竦むマリックを見てからジュリアを見た。
見張ってくれるらしい。

「解った、失礼する」

一礼したジュリアは、右足を魔法陣床の出っ張った一部に足を掛ける。　マリックを睨むジュリアを乗せた魔法陣床は、下に降りていった・・・。

９姉妹の憂鬱と深夜の凶行・・・。

夜、ジュリアの屋敷であるブルーローズ家。　繁栄していた頃に家族が多いときは、５０人は列席して晩餐などを楽しんだ食堂で、使用人数人の支給でジュリアとまだ若い２０歳どうかと思われる女性が晩餐を迎えていた。

青いステンドグラスに女神フィリアーナの姿が宿り、高みから食堂を見下ろす。　白い特注のテーブルクロスが、“Ｕ”の字型のテーブルを二つ組み合わせた楕円形のテーブルを白く彩り。　ステンドグラス付近で二人だけが晩餐を食している中でも、テーブルには等間隔で瓶刺しの花が飾られていた。

薄黄色のクリームカラーのドレスを着るジュリアは、当主の席で真ん中を坐し。　その一つ下の席に白いドレス姿の若い可愛らしい女性が美味しそうにスープを啜る。　やや灰色の髪は艶やかで、三つ

編に束ねて胸元から下に左右で垂れる。　黒い瞳は愛くるしく、少しニキビの痕が赤く顎に残るが、肌色の肌は若さ余って肌理細やかだ。

ジュリアは、スプーン休めにその若い女性を見て微笑み。

「レイチェル、教皇様の身の回りのお勤めは如何だ？」

ジュリアの妹で、異母姉妹のレイチェルは顔を上げて。

「あっ・・んん・・だ・大丈夫ですわ。　ちゃんと、教皇王様に御仕えしています」

いきなり問われて、レイチェルは驚きの顔でスープを詰まりそうに成りながらも受け答えをする。

「そうか。　この前に教皇王様にお会いした時に、レイチェルの物覚えの良さを褒めておられた。　頑張って居るのだと安心している」

レイチェルは微笑み、姉の顔を見返して黙った。

レイチェルは、ジュリアやジュリアの兄とは血が半分だけしか繋がっていない。　レイチェルは、今で１９歳。　２０年前に生まれていなかった。　失脚直後のジュリアの父親は酒に溺れ、毎晩何か苦しみを忘れる為にか女性に狂った。　メイドの若い娘に手を付けて、毎晩欲望の捌け口にしていたのだ。

ジュリアの母親と云うのは、流行り病でジュリアが５歳の頃に亡くなっている。　父親も、独り身が寂しく、非常な人生の仕打ちに耐えるのに必死だったのだろう。

そして、ジュリアが9歳に成る手前で、遂にメイドが子供を宿してしまった訳だ。　当然の事ながら使用人達は困り果てた。

何せジュリアの父親ステンダーは、その頃からジュリアが当主と決め付けて。　なんとメイドの身体に宿った子供を堕胎させようとしたのだ。　しかしジュリアが剣を手に父親に刃向かって、自分の兄妹を殺すなと父親を叱り付けて、レイチェルの誕生に至る。

レイチェルの母親であるメイドの女性は、自分を邪険にしないばかりか、自分とレイチェルを家族と受け入れたジュリアに深く心酔して、3年前に病気で他界するまで使用人で有り続けた。

レイチェルは、母親を通じてその全てを知っている。　だから、彼女もまた。　当主のジュリアに心酔して、ジュリアの言う通りに生きてきた。　いや、ジュリアが自分を妹として、しっかり支えてくれたのに心底から姉妹の愛情を持っている。　もし・・ジュリアの身に危険が襲い、自分の犠牲でどうにか成るなるなら。　レイチェルは、自分の命を惜しまないだろう。

さて、レイチェルは、顔色を曇らせて食べるのを止めて俯く。　使用人の手前で戸惑ったが・・・、姉に伝えるべきと顔を上げた。

「御姉様、今日・・・、マルフェイス様がお見えに成られました」

パンを千切ったジュリアの手が、ピタリと止まった。　だが、慌てた様子も無いジュリアは。

「何か言っていたであろう」

レイチェルは、グッと俯いて、声を微かに震わせながら。

「はい・・・。　我が家の下爵の事を・・・・。　私が犠牲になるこ・・・」

言いかけるレイチェルに、ジュリアが向いて。

「レイチェル」

「あ・・・はい・・・・」

レイチェルは、自分が犠牲に成りたかった。　だが、マルフェイスは、レイチェルでもジュリアでもない。　ブルーローズの名前を欲している。　レイチェルが、マリックに嫁ぐのではそれを満たせない。　だから、レイチェルは悔しい。

レイチェルを見るジュリアは、何かを必死に堪えている俯いた妹に。

「気にするなレイチェル。　寧ろ、いい朗報だ」

「え？」

驚いて顔を上げたレイチェルは、微笑む姉を見るのだった。

ジュリアの顔に、曇りは無い。

「良いか。　下爵とならば、行く行くは上爵も可能だ。　我等姉妹の働きで、どうにでも行く末が変われるかも知れぬ。　御取り潰しでは無いのだ。　もうマリックに言い寄られても堪える必要は無い。　我々が、無理に誰かの婚約を受けて、権力維持の為に何処かに輿

入れする必要も無いのだ」

レイチェルの目に映る姉は、何時もより穏やかに見える。

ジュリアは、パンをスープに浸しながら。

「下爵とは恐れ入った。　マルフェイスめ、私達が下爵を免れるために慌てるのだと決め付けておる。　だが、それならば甘んじて受けてやろうではないか・・、レイチェル」

前を見て笑うジュリアを見るレイチェルは、涙目を笑みに変えて。

「はい。　明後日から、またお勤めを頑張ります」

「うむ。　お互いにな」

ジュリアは、パンを口に運んだ。

レイチェルの仕事である教皇王の傍仕えは、５日交代で休みが回ってくる泊り込みの仕事だ。　若く、少しドタバタするレイチェルだが。　人の好みを把握したり、人に優しく穏やかにさせる雰囲気は人並み外れている。　だから生まれにも関わらず、教皇王を先頭に周りの女性の世話係や大臣達にも嫌われるのが少ない。　教皇王エロールロバンナのお気に入りに早くも成りつつあり。　教皇王が直々に嫁ぎ先を探そうかと言い出した事もあったらしい。

没落し掛けたブルーローズ家は、この麗しき聖騎士の姉と、誰にでも差別をしない優しい妹の細腕でなんとか支えられて持ち堪えていたのである。

ジュリアは、自分達が食事を終えると、後は二人で大丈夫と使用人達を休ませる。　歴代の当主でも、ジュリアほどに使用人を愛するのも珍しかった。　だが、苦難を共にしてきた使用人達、メイド達であり。　また、当主として必死にブルーローズの家を守るジュリアには、家臣一同何処までも着いて行くと皆が決めていた。　この絆は、非常に強い。

ジュリアは、私室に戻る前に、剣を腰にしている黒の礼服に身を包んだ家臣二人の男に。

“もし、夜中でも包帯男が来たら私を起こせ”

と、命じておいた。

そして、夜も更けた真夜中だ。

スラム地区、ジョージの母親の家で。

実はK。　ジョージの母親を見張るサンチョスの目を盗んで、秘かに夕方にはジョージの母親に家の中で面会した。　悪党が襲う可能性を示唆して、隠れさせて貰う約束をした。

老母は、ジョージとエリザベートの仇が討てるなら、死んでも構わないとKに云う。

Kは、その捨て身を一蹴した。　今死んでも、只の犬死に近かったからだ。　それより、更に仇を討つやり方が在ると密談した。

Kの読み通り、この日の深夜に近づく頃。　外に殺気を持った何者かが集まりだす。

それは月下の中の闇の中で起こった。

家の明かりを老母が落とし。　少しして、僅かな音を放ってKが最初に入った正面入り口と、裏の入り口の鍵が壊された。　夜目に慣れた曲者共が、5・6人この小さい小屋の様な家に押し込んできたのである。

「ババアは何処だっ？」

居間から隣の寝室に踏み込んだ黒尽くめの男が声を上げる。　これは、あの飲み屋で“テイラー”と呼ばれた男だ。

「居ないのか？」

後からテイラーの声を聞いて、小声で寝室に踏み込んで来た男は、飲み屋に居た片割れの男。

その時、居間の方で。　手下で雇われたゴロツキが突然に、“う〝っ”・“うがあっ”などと声を上げてバタバタと倒れたのに、テイラーともう一人の男、ダイソンは驚いた。

「いけねえッ！！！　手が回ってらぁっ！！！」

驚くテイラー。

「誰がっ？！！！　裏切りかっ？！！」

と、慌てた声のダイソン。

闇の中、倒れたゴロツキの所に立つK。

「どうやら、コイツ等はお前達に雇われただけか。　身なりが違うな・・・冒険者じゃない」

気配が全く無い闇の中、カーテンに注ぐ月明かりの明かりが、微かにKの足元の靴に触っている。

テイラーは、ダイソンと居間に出て。

「なっ・・何者だっ」

このテイラーの言葉に、Kは、ゴルドフの至らなさを垣間見た。自分を尾行して逆に尾行され返したサンチョスとその飼い主ゴルドフが、この二人に自分の存在を語っていない現実に、かなりの手際の悪さ。　用心の計らいが足りぬと呆れる。

「おいおい、聞いてないのかよ・・。　あの時撒いたと思って安心してたのか・・」

ダイソンは、剣の柄に手を掛けて殺気を孕んだ声で。

「何の話だっ?!!」

Kは、左手親指で外を指差し。

「アイツに聞けば解ったろうに。　アンタ等も、雇い主がバカで可哀想だな。　だが、やってる事はえげつないぜ」

テイラーは、サッと丸い円形の刀、サークルショテールを腰から引

き抜き。

「ダイソンっ、殺して逃げようッ！！！　仕方ねぇっ、見張りのアイツにも死んで貰って逃げるしかないっ」

「クッ」

闇の中で、ダイソンも剣を引き抜いた。　剣先が細く刀身がやや太い剣、エストックサーベルである。

Kは、慌てる様子も無く外を向いて。

「残念だ。　外のアホウはもう俺がフン捕まえた。　お前達も、諦めろ」

「うるせえええっ！！！」

夜の闇が、動いた・・・。

K特別編　セカンド　3（後書き）

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　セカンド　4

K特別編：理由

１０、真夜中の訪問者

深夜、もう商業区ですら地下の飲み屋以外は明かりを落とし。　街を安全に照らす街灯すらも油が切れて火が落ちた。

月が“下弦”を更に過ぎた弓形の姿を見せる夜空の下。　汚れた幌を揺らす馬車が一台。　貴族地区に入って、馬蹄の音を響かせてレンガ道路を行く。　随分とゆっくりと・・。

馬車は、見回りの僧兵が居ない頃合いを見計らって、地区の中心部にある邸宅の一つ。　ブルーローズの屋敷に到着した。

御者の隣に座る者が、薔薇の大輪を象った正門に向かって、４メートル近い門をフワリと飛び越えた。

ジュリアが起こされたのは、その直ぐ後だ。

「ジュリア様、ジュリア様っ」

ジュリアの私室の外で、入り口から老人の声が。

青いシルクの掛け布一枚に身を包んでいたジュリア、ハッとして飛び起きた。

「爺っ、彼が来たのか？」

扉の外から老人の声は返して。

「はい、それが・・・幾分、お客が多い様ですぞ」

何事かと驚いて、ジュリアは起きた。　透ける青い下着一枚だったジュリアだ。　赤いガウンローブを羽織り。　剣だけを腰に据えて部屋を出た。

夜も遅くの深夜、一部の廊下にランプが急に灯され。　ジュリアとKが昨日逢った本館の入り口は、礼服の男性二人と庭師の男性がランプを掲げる中で明るく成った。

ジュリアは、生まれる前から仕える執事の老人を携えて扉を潜って外の玄関前に出ると。　階段下に立っている包帯男・Kを見る。

「おぉ、来たか」

幌馬車の横に立つKの足元には、もがく男が3人。　馬車の馬の方に、御者なのか背の低い身体のローブ姿の何者かと、そのローブの人物よりも背の低い皺枯れた黒い服の老婆の姿が。

もがく男達をジュリアは見下ろして。

「襲った犯人も捕まえたのか？　どれ、僧兵役人を呼ぼうか」

言ったジュリアを、Kは階段下から見上げて。

「待った。　それは、まだだ」

ジュリアの両脇に控える、ランプを掲げる黒い礼服の男性の若い方が、Kに。

「何か、不味い事でも?」

ゴルドフの飼い犬であるサンチョスを、Kは見下ろして。

「コイツの雇い主は、侯爵のゴルドフだ」

「なっ、なんだとっ?!!　あの・・ゴルドフ・・・バレンシェタイン卿が・・」

剣の腕ではそれと云われる侯爵のゴルドフは、ジュリアも顔を含めて知っている。

Kは、サンチョスの脇に屈み。

「問題なのは、あのゴルドフは兵士のトップなんだろう?。　下手に役人に引き渡して、取調べしている間に口封じされたら困る」

Kの話を聞くに、ジュリアも在り得ない話では無いと解る。

「では、どうする?」

Kは、ジュリアを見上げて。

「ああ、明日さ。　俺が一緒に行って、昼過ぎに教皇庁の知り合いに掛け合う。　その後、直接引き渡したい」

教皇庁に知り合いが居ると聞いては、聖騎士ジュリアも驚きだ。

「お主・・・誰と知り合いなのだ？」

「あ？　ハルフロンだ」

簡単に言ったK。

絶句したのは、ジュリア以下その場の全員だろう。“ハルフロン”と云う名前は教皇庁に勤める大勢の職員の中でも一人しか居ない。　大司祭にして法務大臣ハルフロンその人。　ハルフロン大司祭が、法務大臣のトップと云う意味は、聖騎士、僧兵、兵士長、兵士のトップであると云う事でも有る。　K達と、ジュリア達兵士が協力して退治した山賊。　その報告をジュリアが教皇王にした時に、その脇居たあの男性なのだ。　教皇王の右腕であり、厳格にして情け深い男性だ。

「おっ・・お主っ、ハルフロン大司祭様に・・顔が・・・？」

ジュリアの驚きを見るKは、頷き。

「ああ、今の教皇王とハルフロンには、４・５年近く前にな。　ま～、一介の冒険者だから、ノコノコ会いに行くのもどうかと思ってたが。　今回は、非常時だ」

ジュリアは、話が大きくなったので直ぐに若い礼服の男に向いて。

「今直ぐ、地下牢に奴等を入れて閉じ込めろ」

「ハッ」

礼服姿の男が二人で動き出す。　Kの元にまで降りて、縛られているサンチョス達を地下牢に連行する為に、3人の身を起こした。

Kは、ジュリアの言葉に捕らえたサンチョスや冒険者から離れ。老いた老婆を案内して階段を上がり、ジュリアの前に連れてくる。

「ジュリア、この方がジョージの母親だ。　20年前に死んだ、エリザベートの母親でもある」

ジュリアには、それは衝撃的過ぎる。　グッと老婆を見て、

「な・・何だと？　では・・・ゴルドフは・・このお母上を狙ったと申すのか？」

Kの脇で、ジョージの母親は頭を下げる。

ジュリアは驚き、片膝を地に着いた。

「頭を上げられよ・・。　私の兄は・・・20年前に、貴女の娘様であられるエリザベート様に言い寄ったのだ」

ジュリアは、一旦Kを見てから、また老婆を見て。

「ああ、これもフィリアーナ様の思し召しか。　あの時の罪を、罪滅ぼし出きる機会が来るとは・・」

その時、地下牢に連れて行かれる男達を廊下で見るレイチェルが、何が何だか解らない顔をして本館の面玄関にやって来た。　白い就寝用の女性ローブ姿である。

「お・・御姉様、これは一体・・・」

来たレイチェルに、ジュリアは向いて。

「レイチェル、爺とこの女性を客室にお連れして欲しい。　もう遅い故に、休んで頂くのだ」

「ああ・・・」

済まなさからか、老婆はジュリアを見下げて遠慮の声を洩らして手を振って見せる。

だが、ジュリアはその老婆を見返し。

「只でさえ悪党に狙われて在す御老母を、このまま助けねば家名に恥じます・・・。　いえ、まして・・まして・・ジュージ殿とエリザベート様の御母上と聞いた上は。　このブルーローズ家の聖騎士ジュリア、命に代えてお護りせねば一生に悔やみまする・・・」

ジュリアの瞳に、真摯な涙が溢れた。　この偶然は・・・丸で天命如き偶然であった。

ジュリアは、事件直後にこのジョージとエリザベートの母親に会いたかった。　だが、スラムの内部は知る者でないと誰が誰だか解らない。　しかも、ジョージも行方不明に成って、ジュリアの兄が半ば強引に犯人に決め付けられて。　その事件の記録は、誰も閲覧出

来ない封印文書にされた。　だからジュリアは、この母親を含めたジョージとエリザベートの家族がどうなっていたのかサッパリ解らなかった。

だが、今。　その運命の糸が・・・、Kによって手繰り寄せられた。

ジュリアを見下ろすKは、爵位を持つ一族の高潔な誇りを垣間見た気がする。

（ま～ったく、イイ女でやんの。　早く、ダンナ見つけて幸せ掴めよ）

ジュリアの言葉で、少し事情が飲み込めたレイチェルが、執事の老人とジョージの母親に寄って、手を取り案内に回る。

ジュリアに一礼し、その身を任せる老婆。

老母の連れられて行く姿を立ち上がって見送るジュリアは、Kの手前で涙を拭いた。

「済まない、取り乱した」

「いいんでないか？　事情がジジョ～だし。　但し、あの老婆を君に任せたのには、それなりに訳があるがな」

今まで解らなかった事が少し理解出来て、ジュリアは頷く。

「少し解ってきた。　２０年前、ゴルドフの弟が謎の出奔をした・・。　あの事件の直後に。　そして、ジョージ殿もまた・・・。　そ

の辺に関係が在るのだろう？」

Kは、カクカク頷いて。

「ビミョーに近い事線ですなぁ」

ジュリアは、その言い方が奇妙な言い回しだと思いながら、Kを見回して怪我も無いのを見て確かめてから。

「しかし、そなたも流石だの」

「ん？」

「あの鎧だの纏っていた男二人、かなり剣を遣う相手だ。　無傷で捕らえるとはな」

ジュリアも、伊達に聖騎士などやってはいない。　テイラーとダイソンの力量を姿見て看破し。　Kの強さを思い計ったのだ。

しかし、Kはのろ～んとした受け答えで。

「さあ～な、一人（ソロ）で戦えば、君でも十分に勝てる相手だ」

その言い方。“１対１ならば”と云うKの推察は、誠に双方の力量を見抜いているとジュリアは感心した。

「確かに・・・」

プライドで怒る訳でもなく頷いているジュリアの横顔を見て、Kは続ける。

「ジュリア、実はな・・」

「ん？」

声に横を振り返ったジュリア、包帯の隙間に見えるKの目に視線が吸い込まれた。　自分の全てを見抜かれてしまいそうな程に、穏やかで澄んだ眼だったからだ。

「ジョージとエリザベートの母親であるあの老母、ただのお人じゃないんだ」

今日の昼過ぎにマリックへあの啖呵を切ったジュリアには、Kへの心持ちが在っての事。　思わず見惚れた自分に、秘かに話し掛けたKの言葉が耳を掠めてハッとする。

「あっ・・ああ・・。　ん、どうゆう意味？」

少し緊張と興奮からか、気が緩んで言葉尻が女に変わる。

Kは、レイチェルが行った先を向いて。

「こう云えば、誰か解るだろうな。　“ロザリア”」

名前を聞いてジュリアは、記憶を手繰り始めながら。

「ロ・・ザリ・ア？」

「ああ、“シスター・ロザリア”。　有名な言い方をするなら、“マ・ドンナ・リュ・ロザリア”」

ジュリアの切れ長の眼が、その名称にギョッと全開に見開いた。

「ま・・まさか・・・。　あっ、あああの？　“ロ・・ザリア”様なの？」

ジュリアを見つめて、Kは大きく頷く。

「そうだ。　もし、殺されたとしたら・・・教皇王の悲しみは、如何程か・・」

ジュリアを見て、Kは少し声を正し続けて。

「だから、全ての意味を踏まえて。　君が護れ。　事実が解れば、世の誤解も解ける。　君も、あの妹さんも十分に苦しんだ・・・。　そろそろ、日の目見てもいいだろう」

と、Kは云い終えぬ内に階段を降り始める。

この事実は、ジュリアには衝撃的過ぎる。　そして、今までに居なかった男Kの存在。　ジュリアは、もう思わず縋る様に。

「ケイっ」

階段を降り掛かったK、呼ばれて立ち止まり。

「んあ？　何だ？」

ジュリアは、この心の言葉は自分の今までに無いモノだと感じながらも・・。

「何処に行くの？」

「あ～、ゴルドフを見張る。　野郎、事が上手く行ったのか、行かないのか解らずに慌てるだろう。　動向を探って、野郎を引きずり出すやり方を模索しまんがな。　ま、後は昼前にまた顔を出す。それまで、あの悪党共を預かってくれ」

ジュリアは・・、言うKの言葉を遮り。

“今夜は・・・此処に”

と、言いたかった。　だが、軽く手を挙げて背を見せる包帯男を止めて、我儘を言う自分を悪く思われたらと躊躇いが同時に湧いてしまった。

「・・・」

女らしい事も、何も言えず。　ジュリアは、包帯男を見送った。

11、近づく、その理由

一夜が明けて、朝が来た。　昨日までの快晴が嘘の様に雲が空を覆い出していた。　少し風も強く、肌寒い。

ジュリアは、この日は休みであり。　レイチェルに服でも買おうかと思っていたが。　包帯男・Kの訪れで、全てが一変した。

遅めに朝食を迎えた、ジュリア、レイチェル、そして・・・ロザリアと云う名前の老婆。

メイドの支給で、食事を始めてジュリアは思う。

（この方・・・やはり、只のスラム生まれでは無い・・・）

老婆は、ゆっくりの動きながら、テーブルマナーから食事の仕方まで心得ていた。　ワインを断るマナーも、支給するメイドに対する仕草も。

ジュリアの記憶に、人伝で聞いた偉人の話が思い出された。

“グランドマザー・ロザリア”・“マ・ドンナ・リュ・ロザリア”と異名を取ったのは、今の教皇王の実の姉であり。　慈悲の奉仕に生きたシスターだ。

公爵家・フューリナム”。　公爵の最下位に序列しているものの、慈善活動に生きる人が多い一族だ。　その、８０年以上前の当主が長女に生まれたロザリアは、魔力が非常に強く、また優愛・博愛の精神に溢れた小柄な女性だったとか。

ロザリアは、魔法学院・カクトノーズで１５歳の若さで魔法習得を終えて。　またこの生まれ故郷に帰った。

だが。

当時、この国では伝染病が流行って、スラムで大量の死者を出したらしい。　その救済に、教皇庁ですら手を差し伸べるのを戸惑った程に酷い状況だったらしい。　スラム全域は、魔法で作られた壁に隔離され、行き来には厳しい調べを受ける状況だった。

しかし、ロザリアは有ろう事か。　なんと、その身を冒険者に落としたのだ。　そして、疫病が蔓延するスラムに薬を届け。　冒険者として稼いでは、それを繰り返した。　一族からも、爵位の有る各枢機卿達からも敬遠された。

しかし、その献身的な姿勢を見た市民が、教皇庁を次第に責め始め。　ロザリアに寄付を申し出て行く。　商人・文化人・知識人の応援の元、遂に１０年で病気は沈静化。　スラムの住人の全滅を待たずして、スラム地区を封鎖していた壁が取り払われた。

そしてロザリアは、動物園などが近い場所に孤児院を設けて。　スラムの身寄りの無い子供達を引き取り、教育して世に送り出す礎を築いた。　その施設は、“大いなる母の腕（グランドマザー）”として今でも存在し。　寄付と、子供達が作る作物の収益で運営されている。　今では公爵を始めに、爵位の有る者で心有る者は寄付をしている。　無論、ジュリアも。

しかしロザリアは、突如として姿を消した。　置手紙を残して・・。

憶測が飛び交ったらしい。　攫われたとか、死んだなどと。　だが、こんな足元に居たなんて、ジュリアには信じられない。

現・教皇王エロールロバンナは、ロザリアの実の弟であり。　偉人としての姉、ロザリアを深く深く敬愛している。　その思いの強さから、常日頃ロザリアの消息を知りたいと願っている。

しかしジュリアは、手柄云々でこの老婆を教皇王に差し出すつもりは毛頭も無い。

ただ、理由は知りたかった。

一同食事を終えて、老婆の手を取り二階の客間に戻したジュリア。

広い客間である。　この一間で、スラムに在った老婆の小さい家と一緒の大きさだ。　有名画が壁に掛けられ、大きな暖炉や、ゆったり座れる椅子やソファーが配置されている。　床は、白い絨毯が真綿の様に。

ジュリアは、老婆を連れると使用人を人払いし、レイチェルと二人残る。　曇りのカーテンで、外から薄暗く日の光が滲む室内の窓辺にて。　静かに切り出した。

「御母上、御一つだけ、お尋ねしても宜しいですか？」

椅子に座った老母は、静かに頷く。

ジュリアは、妹をやや後ろに下がらせて。　自分は、老母の傍らに片膝を付いて、

「ケイから窺いましたが・・・、貴女様が、シスター・ロザリアなのですか？」

その問いに、老母の身体が微かに震えた。　そして、少しの沈黙を置いて・・。

「はい・・・」

後ろに控えたレイチェルですら、その名前は知っている。　良く、教皇王エロールロバンナが逢いたいと願う姉の名前だからだ。

ジュリアは、俄に驚きうろたえる妹に目で、

“落ち着きなさい”

と、目配せしてから。

「やはり・・・。　どうして・・・どうして行方を？　何か、理由でも有りましたか？」

老母は、行方を消して５０年以上の時が過ぎたのを思い。　話す気に成った。　恐らく、ジュリアを信頼出来ると思ったのだろう。

シスター・ロザリアは、“マ・ドンナ”＝“聖女”の称号まで受けた女性だ。　だが、あろう事か、スラムに住まう男と愛し合ってしまった。　これだけでも、貴族や聖職社会に置いては大変な出来事だ。　ロザリアと愛し合った男性には、様々な方面から攻撃が来るだろう。　身分の違いも然る事ながら、聖女に手を出すなど有っては成らない話だ。

しかし、二人は秘かに、秘かに、関係を続けた。

そして、ロザリアは身篭った。

だが、問題なのは、その時期に合わせて一人の野心旺盛な伯爵貴族がロザリアに求婚を迫ってきた事だ。　何度断っても、しつこく食

い下がる伯爵。　そして伯爵は、遂に、ロザリアの妊娠と男の存在に気付く。

伯爵は、有ろう事か。　その事をネタにしてロザリアに結婚を迫った。　お腹の子供を捨てる事も迫る。　この事実が巷に知れれば、ロザリアに集まった信頼が落ちて、孤児院もどうなるか解らない。　更に、ロザリアの実家である公爵家にも迷惑が掛かるだろう。

そして、事件は起った。　或る夜、言い争いからの揉み合いの末に、男が伯爵を殺害してしまったことなのだ。

この事実は、ロザリアには胸を裂く様な葛藤を呼んだ。　しかも、伯爵が引き金に成り。　他の爵位ある野心家も、家柄良く愛らしいロザリアならばと求婚に動く気配を見せていた。　ロザリアは、有名に成り過ぎたのだ。　そして、欲望の道具に見られた結果の出来事。

遂に、ある日の夜更け。　ロザリアは孤児院の運営を腹心の女性に託し、男と姿を消した。　役人すら来ないスラムに消えたのである。

「ああ・・なんと御労しや・・。　爵位整理に、結婚が悪用されるのが慣例化したばかりに・・・。　何時も、何時の時代も・・・」

ジュリアにも、その苦労は良く解る。　今、自分達が直面する問題だからだ。

「すみません・・・」

頭を下げたロザリアに、涙が出そうなジュリアは首を振った。

「ロザリア様、面をお上げ下さい。　それは、人としての運命の流れ・・、誰にも制する事など出来ますまい。　理解しました。　それを聞く聞かないで、私はロザリア様を何処へ差し出すとも致しません。　ただ、事が落ち着くまでは、此処に」

ロザリアは、ジュリアの言葉に頷いて・・頷いて。

「ありがとう御座います・・ありがとうございます・・」

と、繰り返すのだった。

さて、ジュリアの屋敷より南に下がった場所に。　黒い大きな館を庭の木々に囲まれた狭い庭しか持たない邸宅が有る。

その玄関ロビー、大理石の床が数メートル広がる薄暗い間にて。

「なんだとっ?!!」

膝間付く兵士を前にして声を上げたのはゴルドフだ。　私服のガウンローブを纏ったままの井出達で、剣だけ持つゴルドフは、やって来た自分の配下の兵士の話に愕然としたのだ。

ロザリアの家に朝方通報が有ったと役人を手配し。　全ての罪を冒険者二人に擦り付けて、自分の裁量で抹殺する気だった。　しかし、役人が行けば家の中は蛻の殻。　血の跡も居間に僅か、遺体すらも無い。　更に、これを機に口封じに始末しようと思っていたサンチョスまで居ないと言う。

「ゴルドフ様、如何いたしましょうか」

兵士の言葉だが、ゴルドフには聞こえない。　何がどうなっているのか、さっぱり解らずに目の前が真っ暗に成った。

ゴルドフは、もう思うに当る人物はサンチョスと・・・あのサンチョスの話に在った包帯男だ。

「・・・・探せ、探せッ!!!　サンチョスと包帯男だっ!!顔に包帯を巻いた男だっ!!!」

すると、兵士は膝間付く体勢で。

「ゴルドフ様」

言われたゴルドフは、怒りに狂う顔で兵士を睨み。

「何だッ!!!　早く探せっ!!!」

「はっ、ですが。　その包帯男は、ジュリア様に聞いた方が早いかと・・・」

ゴルドフは、いきなりの事に顔が歪む程に困惑して。

「なっ・なんだとっ?!!　あの男・・ブルーローズ様の当主に縁が有るのかっ?!!!」

「はっ、この前、ジュリア様が御討伐された山賊の一件に加わった冒険者に・・・その様な者が居たとか」

「ほっ、本当かっ?!!!」

「はっ。　素晴らしい活躍で、ジュリア様の申し出で、近くチーム名の広報の礼を行うとか。　ジュリア様が、直々に出向くそうなので、ジュリア様にきい・・」

兵士が其処まで言い掛けた時、ゴルドフはもう怒り狂った顔で兵士に迫りながら。

「えええいっ！！！　喧しいっ！！！！　あの凍眼のジュリアに悟られるわっ！！！！　とにかく探せっ！！！！！」

迫られた兵士は、ゴルドフに気圧されて、悲鳴染みた声を上げて探しに出て行った。

その兵士の去った後、ゴルドフは薄暗いロビーで立ち尽くしたままに。

（あああっ！！！　なんと云う事だっ！！　あの・・・凍眼のジュリアの知り合いだとっ！！！　現・教皇王様の一番のお気に入りである聖騎士ジュリアの知人だとっ！！！！　何がなんでも抹殺せねばっ！！！！）

開かれっ放しの玄関を睨み、ゴルドフは崖っぷちに立たされた思いである。

ゴルドフは、昨日から妻と子供を使用人総出のお供でカジノ旅行に出していた。　１０日ほど一人に成って、様々な問題を解決してしまおうと目論んでいだ。

今、屋敷にはゴルドフ以外には居らぬ。　なのに・・・。

「ほ～、いい造りの家だなぁ～」

突然、ゴルドフの後ろから声が・・。

「ぬっ！！」

振り返ったゴルドフは、ロビーから伸びた廊下が、階段で二階に行くのと、階段脇を通る廊下とに分かれる分岐点で。　階段へ向かう場の手摺りに、廊下側から寄り掛かる黒ずくめの包帯男を見た。

「き・・貴様・・・包帯を・・・貴様か・・・貴様がぁっ！！！！」

屋敷内を見回していたKは、ゴルドフに軽い動きで首を向けて。

「ゴルドフ、やり方きったねぇ～な。　昔の精算に人殺しか？　しかも、雇った冒険者や、頭の悪いが忠実な飼い犬まで・・。　お腹の中、まあっ～くろさんだね」

戦慄くゴルドフは、手に持ったサーベルを引き抜き。

「喧しいわぁっ！！！！！　ノコノコと出て来たのを後悔させてやるっ！！！」

と、いきなりKに斬り掛かった。

だが、斬られる前にKは、右手一本で手摺りを側転に飛び越えて階段に立つ。

「ぐっ」

空振りに終わったゴルドフは、Kの動きの早さに躊躇いが生まれて睨み上げる。

余裕のKは、ゴルドフを見下ろして。

「アンタ、何でそんなに事を揉み消したがる？　もう、事件は闇に葬り掛かってるのに・・・。　ん？」

ゴルドフは、体中に湧き上がる怒りに身を包んで。

「煩いわあああああっ！！！！」

階段に踏み込んで、Kにサーベルを突き込み、避けられても何度も斬りかかり。　どんどん階段を上がる」

Kは、その怒り狂うゴルドフを見据えて、剣を避ける。　そして、ゴルドフがまた突き込みに転じた時だ。　一瞬早く飛び上がり、なんとゴルドフの突いた剣の上に乗った。

「う〝ぐっ」

ゴルドフの突いた剣は、階段の最上段の上で、Kの足と階段との挟みに合って動かなくなった。　押せども引けども、剣は少しも動かない。

汗を額に浮かべて躍起になるゴルドフを、涼やかな眼のKは見下ろして。

「ゴルドフ、あんたの弟がやったのは解ってる。　だが、何でアンタは弟の逃走を助け続けた？　もう、２０年。　しかもあれは、ア

ンタとは無関係だろうに」

ゴルドフは、その云われる事すら嫌で仕方無い。

「うっ煩いっ！！！　黙れっ！！！」

だが、Kは構わずに続けて。

「おかしいだろう？　ちゃんと話せば、アンタの家は下爵で取り潰しには成らない。　何せアンタの馬鹿弟は、爵位序列から排除された廃爵の男だ・・。　なのに、何で隠す」

Kの言葉は、丸で闇に隠れた真相の糸を手繰る様な響きだ。

ゴルドフにすれば、それは我慢の出来ない事なのだろう。　もう堪らずに、切羽詰まってKに掴み掛かろうと剣から手を離した。

瞬間。

Kの身体がフワリと舞った。

「うおわあああああーーーーっ」

グルドフが掴み掛かったのに。　Kは掴る処か、その場で軽く宙返りしながらゴルドフの顎を右足の爪先で引っ掛けて諸共空中を一回転し。　ゴルドフを二階廊下に叩きつけて、自分は同じ場所に着地したのである。

「ぶぐっ！！！　うごおお・・・」

強かに背中を強打したゴルドフは、呼吸もまともに出来ずして呻き苦しむ。　この時、ゴルドフの剣が支えを失って階段を滑り落ちる音が響く。

咳き込むゴルドフのそれを、脇目にKは見ていたが・・・。

「おの・・れぇ・・・」

と、ゴルドフが自分を見上げた時だ。

「ゴルドフ・・・お前まさか・・・」

Kが、何かを察したようにゴルドフに向きを変えたのだ。

「！！！」

そのKの口調に、ゴルドフはハッとして・・首を左右に振り。

「おっ・・俺は何もっ！！！」

と、俄に慌てだした。

その、ゴルドフの慌て方。　Kには、納得が行った。

「お前ぇ・・そうか。　それじゃあ・・・裁かれて当然だなぁ・・・」

Kは、そのまま階段に向き直って降りる。

「あっ、まっ待てっ」

ゴルドフは、背中の痛みを動き出そうとして再認識して、立つに立てず。　這い蹲って、Kの後を追おうとする。

Kは、降ってロビーに近付きながら。

「ゴルドフ、本当に潔白と云うなら昼間に教皇庁に来い。　教皇王との謁見出来る、“聖謁の間”。　其処で、決着付けてやる。　ただ、覚悟だけ持って来い」

「まっ・・・ま・てえいいっ」

階段を転げそうに這いずるゴルドフの視界の中、Kはロビーに降り立って開きっ放しの玄関から外に。

Kは、何故にゴルドフを捕まえなかったのだろうか。

12、真相と過去が向き合い始めて。

その日の昼前、ジュリアの屋敷にKが戻って来た。　Kは、ジュリアに逢うと静かな口調のままに。

「行こうか。　教皇庁に」

と、告げて。　悪党達二人にサンチョスを加えた3人をジュリアの

家の荷馬車に乗せて。　あの礼服姿の二人に護衛で行かせた。　ジュリアの馬車には、ロザリアも、レイチェルも乗せた。　レイチェルは、ロザリアを心配して姉の制止も聞かずに着いて来たのだ。

さて、昼過ぎ。

中央大聖堂“ヴェルハラントモリナリス”の北側に位置する聖堂に、K以下全員が入った。　この聖堂は、許可無く入る事は禁じられている。　ジュリア姉妹と縛られた冒険者達を見た兵士が、驚くままに通し。　Kが、兵士にハルフロン大司祭の知人だと言って、事態は加速度的に進行し始めた。

ジュリアが前に、教皇王に報告の謁見をした時の壇上前の場所から、大きく後方に下がった所に。　呻く冒険者二人にサンチョスを床に放置し。　Kは、それを間近で見張る。

ロザリアに添うレイチェルとジュリアは、白い長椅子の連なる前方に座った。

そして、外の雲が厚みを増して、雨でも降りそうな昼下がり。　聖堂の壇上に右から灰色と蒼の色を基調とした神官礼服に身を包んだハルフロン大司祭が出て来た。　後ろからは、聖騎士の男が一人、兵士が5・6人続く。

「何事ですか。　この大聖堂は、許可無く立ち入られる所ではありませんぞ」

と、厳格な口調で言う。

やや皺が目じりに滲む、知的で人格が確かな面持ちのナイスミドル

な紳士であるハルフロンは、立ち上がり臣下の礼をするレイチェルとジュリアを見た。

「ジュリア殿、これは一体・・」

訳が解らず、少し緊張しているハルフロン大司祭に、奥に立っていたKが。

「おい、ハルフロンさんよ。　事情も無くこんな来方しないぜ。それより、アンタの出番だ」

ハルフロンは、その声に聞き覚えが有った。

「え？　この声は・・・」

声の響きを頼りに見る先には、包帯をした男が立っている。

Kは、ハルフロン大司祭が気付いたのに合わせて。

「4・5年振りか。　お互いに、大事件の度に厄介になるな」

Kの語りに、ハルフロンは驚きの顔で。

「ま・・まさか・・・あっ、あの時の冒険者殿か？」

「ああ、ケイって呼んでくれ」

「おお・・・おおおおお・・・な・なんと云う恩人の訪問か・・・」

喜ぶハルフロンは、そこまで言ってから。　Kの言った事に気付き。

「ケイ殿、またも“大事件”とは・・・。　今は、我が国は平穏ですぞ」

と。　ハルフロンは、後から着いて来た兵士や、聖騎士を見ずして壇上からジュリアなどが座る長椅子が列を作る床に降りた。

ジュリアは、ハルフロン大司祭の様子から、Kとハルフロンの関係が浅いものでは無いと見た。　ハルフロンなどの大司祭・大臣が、態々あの壇上から下に降りるなど滅多に無いことなのだ。

降りてくるハルフロン大司祭に向かい。　Kは、少々声を伝法にして。

「阿呆。　そんな上に居るから、末端の事件が見えないんだ。　今回、俺やジュリアが居なかったら、アンタ辞職物だぞ」

ハルフロン大司祭は、そこでピタリと足を止めて。

「ジュリア殿・・・レイチェルも・・・。　その、脇に居る老婆殿が・・何か？」

その時だ。　外から、兵士の喚き声がして。

「此処は大聖堂ですぞっ！！　侵入罪にッ！！！」

「うるさいっ！！！！　黙れっ！！！！！」

俄に、緊迫した言い争う声が上がった。

パッと、ジュリアやハルフロン大司祭を含めてそっちを見る。
Kは、ただ不敵に笑って。
「犯人の御登場だな」
「え？」
ハルフロン大司祭がKの言葉に反応した瞬間。　開きっ放しのKの脇の入り口から、走る様子で何者かが飛び込んできた。
「ハア、ハア、ハア・・・」
その姿を見て。
「ゴルドフ殿・・」
と、ジュリアが呟く。
黒い鎧に身を包み。　血の付いた剣を片手にゴルドフが乱入してきたのだ。
ハルフロン大司祭は、その悪鬼の様な姿のゴルドフに驚き。
「ゴルドフ殿っ、此処は神聖なる大聖堂ですぞっ！！！！」
と、一喝する。
ゴルドフは、人の声に耳も貸さずに真っ先にKを見て。　足元ににサンチョスや冒険者二人が縛られているのを確認すると。

「いえ、曲者を退治に参った次第です」

と、Kに向かって剣を構える。

ジュリアは、その雰囲気に驚いて。

「戯言をっ！！！　ゴルドフ殿っ、そなた・・罪も無い老母を殺そうとしたではないかっ！！！」

と、反論。

ゴルドフは驚き、ジュリア姉妹と一緒に、ジョージの母親らしき老母を見て。

「グッ、い・・生きていたのか・・」

と、汗に塗れた顔を険しくさせた。

聖騎士と兵士はハルフロンを囲み、

「大司祭様っ、どうかお下がりをっ！！！」

と、混乱するハルフロンを下げようとするのだが・・・。

Kは、その場で。

「ハルフロンも関係者だっ！！！！！　下がらせるなっ、馬鹿共がっ！！！！！」

と、大喝をした。

「うあぁっ」

「きゃあぁっ」

「ぬうっ」

その場の誰もが、Kの裂帛した気合の一喝に驚きたじろいでしまう。
余程の鍛え方でもしていなければ、到底出せる一喝では無い。

ゆっくりとした動きでKは、ゴルドフに向いて対峙すると。

「ゴルドフ、俺の手に在るのは、オールドアイテムの“記憶の水晶”だ」

と、ズボンのポケットから、6面体の立体水晶を取り出して見せる。

ゴルドフがやや慌て、そのKの手の水晶を見ると。

「だ・・だからどうしたっ!!!!」

Kは、その水晶を見て。

「この水晶には、ジョージの最後の記憶が入ってる。お前の弟チャグリンと会い、決闘の末に知った事実と一緒にな」

ゴルドフ以下、全員が驚きの顔に成った。

Kは、その水晶を握り。

「ゴルドフ。　お前の弟は、ジョージに斬られる前に、お前に金の催促の便りを出してるな。　お前、今までず～っと弟に逃走資金を絞られて来た。　しかも、ジョージに語ったチャグリンの話からすると、お前に直々に会おうと旅立つ矢先でジョージに出会った。だから、お前はチャグリンの死亡は知らない。　だからだろう。お前は未だに、ジョージの母親の周りをコイツに探らせて、ジョージの消息を知ろうとしていたな？」

と、足元のサンチョスを軽く見る。

ゴルドフの顔色が、見る見る蒼褪めて行くのを全員が見た。

「し・・死んでいた。。チャグリンが・・・まっまさか・・・」

剣を構えていたゴルドフの手が降りた。

ハルフロンは、Kに思わず。

「ジョージ殿はっ？！」

その声に、Kは少しハルフロンの方に顔を動かし。

「死んだよ」

その一言に母親であるロザリアは、静かに俯いた。

ジョージを知っているジュリアは、あの大柄で豪腕の剣の腕からしてそうに簡単に死ぬ訳無いと。

「理由はっ?!!　何故に・・ジョージ殿は・・?」

Kは、眼を細めてジュリアを見る。

「いいか。　ジョージは、２０年前の姉を死に追いやった犯人は、チャグリンと解っていた。　嫌、確信が無いだけだが、直ぐに逃亡しているし。　何度もエリザベートに言い寄り、薄汚い真似を仕出かそうとした下衆だ。　何か理由を知っていると、一人で仇討ちに出た。　だがな、仇討ちって言ったって。　流れの冒険者に落ちるんだ、そんな甘い生活など無い。　・・・死病だった、俺が看取ったよ」

「そ・・・そんな・・」

「ジュリア、冒険者の流れなんて甘くないぜ。　金が無ければ平気で野宿しなければ成らないし。　絶えず相手を探して過酷な孤独旅をするんだ。　身も心も、次第に疲れ果てる。　疲れや悩みを酒で麻痺させ、不確かでもチャグリンの情報を知れば、悪天候でも旅立った事は一度や二度では無かったろう。　２０年近くもそんな旅を続ければ、健康な人間でも身体を壊す」

Kは、愕然とするジュリアから目を外して。　弟の死に呆然としているゴルドフを見ると。

「ゴルドフ。　お前の弟は、顔のいい女性になら直ぐに不埒な言動をして、犯罪紛いの行いも平気だった。　だから、２０年前の事件より前に爵位から除名される処置を受けていたハズだ。　なのに、何故に今まで助けた?　チャグリンが、この水晶の中で言っていた事を思い返すと。　他に共犯が居たな。　だが、其処にお前の名前は無い。　寧ろ、訴え出て真相を明らかにした方が楽だろう。　な

のに、お前は助け続けた・・・」

ハルフロンも、ジュリア等も見ている中で、ゴルドフの身体が次第に震えて行くのが見える。　虚空を見つめ、ワナワナと何かに怯えてさえ居るようだ。

Kは、そんなゴルドフに、ずばり。

「お前・・・エリザベートがチャグリンに拉致された後、一緒にチャグリンとエリザベート玩(もてあそ)んだのか？」

「ハッ・・」

ゴルドフの顔が、バッとKに向き上がった。　そして、俄に首を左右に振り。

「ちっ・・違う・・違う違うっ！！！！」

Kは、怯えるゴルドフに更に詰め寄るように会話を繋ぎ。

「エリザベートは、確かに自分で舌を噛んだ・・・。　だが、それは結果論だ。　事実を言え、エリザベートの腹に居た子供の父親の前で。　全てを話せ、ゴルドフ」

ゴルドフは、Kの言葉にギョッとした。

「なっ・・と・・・な・・なんだ・・と？」

Kは、透かさずハルフロンを見る。

「美貌溢れるエリザベートが、静かに独り身を通していたのはな。愛する人が居て。　その男が、一番昇進する大事な時だったからだ。　な?、ハルフロン」

聖騎士も含めた兵士、ジュリア達、縛られた冒険者達、そして・・・ゴルドフまでもが、俯いたハルフロンを見た。

其処には、俯いて瞑目している大司祭にして法務大臣ハルフロンが居た・・・。

K特別編　セカンド　４（後書き）

次話、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

K編のセカンドもそろそろ終りです＾＾

今回は、ジュリアのKへの反応にどうしようか少し迷って苦労しましが＾＾；

ま、こんな感じにしました＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　セカンド　5

K特別編：理由

13、事件の全容

その事実は、ジュリアも含めた全員の驚愕の事実に。

「ま・・真か？　ケっ・・ケイ・・・」

と、ジュリアは包帯男を見たり、ハルフロンを見たり。

「ああ、記憶の石の中でチャグリンが言っていた。　エリザベートを呼び出すのに、ハルフロンの名前を使ったとな。　“お腹の子供の名前を決めた”と云ったらノコノコ出て来た・・・とかなんとか」

頷くハルフロン。　重い声で。

「私とエリザベートは、結婚を誓い合った仲だ・・」

それを知らずにジュリアの兄は・・・。　ジュリアの心の中に、知らずに必死に求婚し続けた兄の姿が浮んだ。　死ぬ間際に書いた遺書を見た記憶が蘇り、ジュリアは思わずに。

「なんで言わなかったのですかっ！！！！　あ・・兄は、それさえ・

・その事実さえ聞いていればっ！！！」

「すまない・・・」

苦しむ顔でハルフロンが、頭を下げる時。

それを見ていたKが。

「ジュリア、言うのは無理だったみたいだ。　当時のエリザベートとハルフロンには、言えない事情が在ったんだ・・」

ジュリアにはサッパリ解らない。　子供まで出来て結婚をしないなど・・・。

「解せぬっ！！　どんな理由が在るのだっ！！！」

ジュリアの心に蟠る不信と怒りが言葉にて迸る。　Kは、口を噤みかけた苦渋のハルフロンを見て。

「ハルフロンは、当時はフラストマド王国で大學を修めた官僚期待者だった。　今の教皇王・エロールロバンナのお傍周りとして、法学職員に着いていた。　エロールロバンナは、当時は法務の管理長官。　つまりは、大臣と副大臣の下で、法務部のトップ」

「それは問題では無いだろうっ！！！！」

怒声のジュリアだが。

「いいや、それが・・・ある」

Kは、顔を覆うハルフロンを見て、続ける。

「当時の教皇王は、女性の教皇女王メリッサ。　彼女は、非常に美貌を好む人物らしかった。　男でも女でも、美しい者を傍に侍らせていたらしい。　エリザベートは、そのメリッサの一番のお気に入り。　だがこの女王メリッサは、自分の周りに侍らせた者の結婚は許さない悋気(りんき)激しい性格だった・・・。　もし、あの当時で、ハルフロンとエリザベートとの結婚は、ハルフロンもエリザベートも国外追放級の怒りを買ったろう。　しかも、ハルフロンは孤立厳しい当時のエロールロバンナを支える歳の近いの唯一の男・・・。　エロールロバンナ以外の教皇王候補は、皆が地位意識過剰で独占的な者ばかり。　国民が、エロールロバンナの教皇王就任を期待している中で、エリザベートは自分の我儘を通す事を出来る人物ではない」

ハルフロンが、此処で呻く様に・・。

「ああ・・・何度・・・何度結婚しようと思ったか・・・。　エリザベートは・・私が、法務副大臣になって、エロールロバンナ様の・・教皇王に成られた時に・・結婚しようと・・。　まさか・・まさか・・身篭って・・・・ああああ・・・」

堪えきれずにその場に崩れた。　床に頭部を擦りつけ、激しく慟哭して震える。

ジュリアは、自分の怒りと兄や父親の無念。　そして、二人で必死に堪えていたハルフロンの心に板挟みの念が生まれて言葉を失う。

Kは、ジロリとゴルドフを見る。

「しかし、お前の弟は全てを金で売った。　当時、メリッサの傍に

居た美人達は、メリッサからの寵愛を失う事に怯えてチャグリンを飼い馴らした。　そして、エリザベートをチャグリンに調べさせて、ハルフロンとの関係を知る。　それだけじゃ無いな。　メリッサに、エリザベートの男の存在を囁き不審を買わせた。　エリザベートは、身と宿した子供を守る為に職を辞めようとしたそうだが。　その前に、メリッサからエリザベートを捕まえて詮議すると影の命令が出た。　秘かにエリザベートは、あの事件の日に掴っていたんだ。　メリッサは、チャグリンが連れてきたエリザベートが身篭っているのを知り、激高した。　そしてその身柄を有ろう事か・・、拉致したチャグリンに・・・くれてしまったのさ。　だろう？　ゴルドフ？」

力の抜けたゴルドフは、覇気を失った顔でガクリと項垂れ。

「あのバカな弟は・・爵位を剥奪されても教皇庁の偉い奴等に取り入って居た・・。　あの日、仕事から戻ると驚く事に・・地下牢にチャグリンが居て・・。　俺に」

“アニキ、何時も迷惑掛けて来たから礼をするぜ。　すげえ～いい女が手に入ったんだ。　始末する前に楽しもうぜ”

「と。　何事かと思えば・・エリザベートだった。　だが、事を為す前にあのバカ、彼女の声を聞きたいと・・轡を外したんだっ！！！　俺が・・・止めろ・・叫んだ時は・・お・・遅かった。　エリザベートは・・自決したんだ・・。　あああ・・・、あの時に、“何事か”と一時の興味に負けずに弟を斬るべきだったっ！！！！！」

長年に渡って苛(さいな)み続けたゴルドフは、床に蹲る様に前のめりに崩れる。　ゴルドフは、その後に弟から後ろ盾のメリッサの存在を知ら

され、役人としての正しい行動すら取れず。　言いなりに成って金を送金し続けていたと云うのだ。

漸く事情が把握出来たKは、それを見下ろして。

「そうか。　それで、チャグリンは強引にアンタを共犯にした訳だ。その上で、逃亡を図って遠くから金をせびり続けたのか・・・」

ゴルドフの頭が、床荷に伏したままに大きく縦に振れた。

「おおお・・・こ・・こんな・・こんな事が・・・」

事実を聞いたロザリアは、余りの事実と嘆きに皺枯れた顔を両手で覆う。　権力と狂気的な欲望によって、自分の二人の子供は死んでしまったのだ。

その時だ。　其処に。

「みな、全て私の責任だ」

と、別の声が聖堂に響いた。　威厳を含む、男の大らかな声だ。

一同が声に見返す中で、Kは相手を見ずしてゴルドフを見下ろしながら。

「遅い、今頃。　エロールロバンナ」

ジュリアが、壇上に現れている教皇王・エロールロバンナを見るなりその場に平伏した。

他の皆も、その場に膝を着く。

教皇王エロールロバンナは、皆の目が集まったのに頷き。

「皆、身を戻すが良い。　今は、臣下の礼処ではない」

と、壇上から床に降り立った。

「陛下・・」

レイチェルが、思わず声を出す。

エロールロバンナは、ジュリアと一緒のレイチェルを見て。

「良い。　今日は、井出達が女の子らしくて良いな」

と、微笑んでから、Kに顔を動かして歩く。　長椅子の間を、ハルフロンの方に。

Kは、脇目にエロールロバンナを見て。

「今の言葉、自分に責任が在るって事は。　アンタ、あの時のなんか知ってるな？」

教皇王を前にしても、Kは姿勢を崩さない。

聖騎士が、Kに。

「貴様っ、陛下に対しその口の聞き方は何だっ！！」

と、声を出すのだが・・。

「良い、その者は我が命、この国の恩人なのだ」

と、聖騎士を窘めてから、ハルフロンの前まで来ると。

「ハルフロン、御主ににも謝らねばな」

臣下の態度のハルフロンは、涙を抜いてない蒼褪めた顔をエロールロバンナに向けて。

「な・何事で・・御座いましょうか・・」

エロールロバンナは、先ずハルフロンの眼を見据えてから、Kに目を動かして。

「そうだ。　私が、あの事件の数日前にエリザベートに言ったのだ」

“今暫くは、ハルフロンとの事は黙ってくれ。　メリッサ様が、せめて教皇王の位から退くまで、後2年は・・・”

「とな」

話を聞いたKは、エロールロバンナに目を向けて。

「ほお～、内部権力闘争の犠牲に成る可能性高いのに？　良く言えたモンだ」

エロールロバンナは、グッと目を閉じる。

「孕んで居るとは・・しらなんだ・・・」

ハルフロンは、その事実に打ちのめされるが如く俯いた。

其処に、遂に堪え切れなくなったロザリアが声を出した。

「おお・・・なんと云う事・・。　エロール・・・エロール・・・そなた、教皇王に即位する風当たりを避けるのに・・・我が子を・・・あああ・・」

泣き出したロザリアの声は、か細く老いて居ながらにして深い悲しみに打ちひしがれる母親の声だ。

エロールロバンナは、幼き頃からの愛称名で呼ばれた事に驚き顔をロザリアに。

ジュリアとレイチェルに支えられて、長椅子に座るロザリアは嘆く。

「あの御仁は？」

思わず問うエロールロバンナ。　何か懐かしい響きを含む声に心が震える思いが身体を貫いたのだ。

Kが、短く。

「知りたいか？　多分、後悔するぜ」

ハルフロンが、涙を堪える詰まる声で。

「お・恐らく・・エリザベートと・・ジョージ殿の・・御母上かと・

・」

「なんと・・・」

驚く顔のエロールロバンアだが。

Kは、ロザリアが声を上げたのに黙る必要も無いと思ったのだ。

「そうだ。　あの姉弟の母親にして、５０年近く前に行方知れずになったシスター・ロザリア・・・。　アンタの姉、その人さ」

「なっ」

「えっ」

「まさかっ！！！」

エロールロバンナ・ハルフロン、そしてゴルドフ。　名前を聞いて、驚き出す。

「５０年前、スラムの男と愛し合い。　子を宿したロザリアは、スラムに消えて居たのさ。　自分の弟に、子供の未来を滅茶苦茶にされるとはな。　因果にも酷い事実も在ったモンだ」

吐き捨てる様に言い放つK。

エロールロバンナは、信じがたい事実に首を振り、震え出す声を絞り。

「う・・嘘・・では？」

ロザリアを見るKは、特徴的な指輪をしているのを顎で勺って。

「偉人・ロザリアは杖を持たず。　一族伝来の魔法の発動体を埋めた指輪をしていた。　あの指に填まる白銀製のエメラルドが填まった指輪・・。　御宅も一族なら聞いた事在るだろう？　かなり有名な話じゃないか」

エロールロバンナが杖を持つ手を震わせて、恐る恐るの歩みでジュリア達の居る席の列に来ると・・。

ジュリアは、老母の右手薬指に填まった指輪を見る姿勢で、やって来たエロールロバンナに。

「陛下・・事実です。　百合の王冠を抱く宝石の装飾は・・・フューリナム家の・・家紋で御座います。　へ・陛下の・・」

「あ・・・あああ・・・わ・・私は・・・」

指輪を見たエロールロバンナが、俄に放心する様にして事実に衝撃を受けて虚空を見つめるままに、その場に砕けて行く。

「陛下っ」

「陛下っ！！」

聖騎士と、兵士がエロールロバンナに走り寄る。

ゴルドフは、自分が殺そうとした人物が誰か確信し。　Kを見上げた。

「お・・俺は・・危うく・・へ・・陛下の姉君を・・」

Kも、済ました眼差しでゴルドフを見返し。

「良かったな・・殺さないでよ。　一つ、罪は未然で終えた」

ゴルドフは、頷くようにその場に泣き出して平伏した。

ハルフロンも、教皇王エロールロバンナも、その場から動けなくなった。　拗れて捻れて絡まった糸を解いた真実は、永遠に苦しむ因果の巡り合せだった。

Kは、停滞する時を見て。

「ジュリア、動け」

と、静かなる激を飛ばす。

様々な事実に衝撃を受けたジュリアだが、Kの言葉に意志を貫かれた様にハッとした。　そして・・。

「レイチェル、ロザリア様を頼む。　私は、兵を連れてくる。　近衛聖騎士殿達にも動いて貰わねば成らないから、この場に居なさい」

と、ロザリアから離れた。　エロールロバンナを心配する聖騎士の脇に出て、

「陛下を見守ってくれ。　秘かに、手配をしてくる。　事が一気に知れては、混乱し兼ねない」

男性の聖騎士は、ジュリアを見返し。

「頼む。　陛下の身が気に成る故に、此処にて待つ」

頷き返すジュリアは、手早く動いた。　自分の悲しみを振り払う様に・・・。

全ては、緘口令が敷かれて。　聖騎士の直轄指揮の下。　法務副大臣と、長官が、ジュリアの説明を受けて、ゴルドフとその他の縛られた者達の身柄を引き受けて詮議に掛かった。

ハルフロンは、自身知れなかった真実をKの持つ“真実の水晶”から知り。　深い衝撃を受けて部屋から出て来れなくなった。

記憶の水晶に拠る事実。

さて、２０年もの長き間。　ずっと停滞した時間が動き出したのは、少し季節を遡る春先だ。

ジョージとチャグリンは、北の大陸に在るスタムスト自治国で遂に再会する事に成る。　森の中で再会し、ジョージはチャグリンに決闘を挑んだ。　労咳《肺結核》を拗らせていたジョージだが、その剣の腕は逆に長年の冒険者生活で磨かれたのか鈍っては居なかったようで。　決着は直ぐに着いた。

チャグリンを捕らえて本国に帰ろうと、ジョージは思い描いていた。　全ての調査を改めてしてもらおうと決めていたのだ。　だから、母より譲り受けていた記憶の石に、チャグリンが語ったその事実を見聞きして封じた。　チャグリンは、他にもメリッサが遣わした密

書まで持っていたのである。　ボロボロに成っては居たが、密命文書としてエリザベートに不審容疑を掛ける為の文章だ。　万が一、誘き出すのに失敗した時に、権力を行使する事も厭わない証であった。

だが、マニュエルの森付近での事、咳き込み血を洩らすジョージの臭いを嗅ぎ付けたモンスターに襲われて、逃走を図ったチャグリンは食い殺されたのである。　密書も、その戦いの中で失ってしまった。

ジョージが、モンスターと苦戦の戦いをしている所に通り掛かったのがK。　難なくジョージを助けたのだが。　診て見たジョージの身体は、もう生きる力を失っていた。　街に連れ帰ったKは、血を吐いて咳き込むジョージの看病をしたが、もう体内が病気で滅茶苦茶に成っているジョージを救う手立てが無かった。　身体が、薬の力を吸い込む力すら失っていたのだ。

死を覚悟したジョージは、雨の日の午後。　Kを枕元に呼んで。

「す・・済まない・・。　たっ・・頼みが・・ある・・」

と、チャグリンの告白を綴じた“記憶の水晶”を渡し。　母親の事も何もかも語った。　その思いは、当時の闇に封印された姉の事件を正して欲しいと云うものだった。

１４、追い込まれる者

Kは、夕方に成ってハルフロン大司祭の私室を訪れて、失意の彼を叱り付けた。

「ばかやろうっ！！！！　ジョージの思いを知って何してやがるっ！！！　大臣集めて評議会する準備でもしやがれっ！！！！」

封印文書は、大臣の評議会と総括評議会に於いて承認されれば、その中身を再度調べられる掟が在るんだそうな。　ジョージは、それを願っていた。　幾度かジョージは祖国に帰り。　ジュリアの一族の仕打ちや、教皇女王メリッサの権力関係者周りが、何事も無かったかの用に権力の椅子に座っている事に強い憤りを覚えていたのだ。

Kに叱られ、ハルフロンは嘆きの腰を上げた。　Kが思うとおり。　これは、残された者が責任を持って対処すべきであり。　ダラダラとやっている問題では無かった。

表の教皇庁は、何やら一部の聖騎士や大臣達が慌てていると思われるぐらいだったが。　裏側では、もうゴルドフと昔の事件に付随した騒ぎで、別の何かが出やしないかと大臣クラスの面々は躍起に成って動き出す。

その日は、大臣達は教皇庁に泊り掛けに成った。　無論、Kを含めた全員がである。

ジュリアは、聖騎士として動く傍ら、Kと一緒に事情聴取に向かったり、ハルフロンの元に赴いて、他の大臣との連絡の繋げ役をしたりと休む間が無かった。

緊急時に措いて、要人達が集まる特別な塔。　教皇庁の北東に位置する“危亡の塔”に、夕方から全ての大臣・長官・などが集まり、大臣達が聖騎士などを通達係りに遣って、慌しく相談や密談を行う。

　無論、ハルフロンやジュリアも。

レイチェルは、エロールロバンナとロザリアの双方の間に入って宥めていた。　ロザリアは、もうエロールとは姉弟とは接することを望まず。　エロールロバンナは、逆に姉に戻って欲しいと願う。

子を失った母親の悲しみは深く。　知らずとは云え、利用した相手が実の姉の子で、事件に巻き添えにさせた事実は拭えない。

開けては成らない蓋を開けたような・・・そんな様相に変わり出す。

　だが、Kは開いた。　いや、暗躍した者がのうのうと蔓延り、傷ついた者達が放置され、そして全てを有耶無耶にするのが気に入らなかったのかもしれない。

深夜。

大臣達は全員一致で大臣評議会を開くことを了承した。　何より、シスター・ロザリアの子供であるエリザベートが、実はゴルドフの弟に拉致されて自決した事実と。　ジュリアの父や兄が犯人と決め付けて、ハイリッヒの死と父親の解職処分として終わった判決文は、変えなければ成らないと云うのは全員が同意した所だ。

しかし。

難色を示すのは、旧教皇女王・メリッサの息の掛かった者が多く残る総括部。　中でも、総括評議会は絶対に開かせないと言い張り。

　封印文書の開示は認められないと言い張るのが、大臣などの間に

入り、税金の運営や議会を取り仕切る総括府の長、マルフェイスである。

ゴルドフの逮捕で、昔のあの事件が浮き彫りに成ると悟った彼は、もう気が狂ったかの如く怒り。　教皇庁評議会の開催にケチを付けて来た。

青い礼服に身を包むジュリアは、聖騎士二人にKを伴って真夜中も過ぎた遅くにマルフェイスに掛け合った。

嘗ては、ジュリアの父親が勤めていた総括私室と呼ばれる広々とした部屋。　階段状の高みに設置された総括の座る半円円卓デスクから、ジュリア達は8段の階段下に見下ろされる形で交渉する。

だが、あの干からびそうなマルフェイスが、烈火の如く怒り。　掟に背いて封印文章を軽々しく開示するなど容認出来ないと言い放つのである。　ジュリア達は、事のあらましを説明し、総括評議会を開く様に説得を試みていたが。　全くの平行線状態だ。

そこに、黙って聞いていたKが口を開いた。

「おかしい話だ。　コイツは、脳ミソが腐ってるのか？」

と、声を・・。

「何者だっ！！！　私に口答えする気かぁっ！！！！」

マルフェイルスは、法衣を纏っている姿で席を立ち。　Kに激しい言葉を投げつけた。　何時もなら、立っても風采の上がらないマルフェイスだが、今は悪魔の如き顔で恐ろしい雰囲気さえ漂う。

ジュリア達も、マルフェイスにこんな怖い様子が隠れているとは想いにも寄らなかった。

しかし、Kは階段前に歩み出て。

「封印文書は、その内容が世間に知られると国の信用に関わるから隠す仕様だ。　その意味は、国家を脅かす真実について。　だが、アンタは真実が明らかに成ったのに、それを書き換える事をさせない。　その答えは・・、御宅も昔に一枚噛んでる・・・って事か？」

と、マルフェイスを揺さ振ったのである。

「うぬぬぬぬ・・・何様だキサマっ！！！！　この私を誰だと思っているんだっ！！！！」

マルフェイスの様子が更に険しく成った。

しかしジュリアにして見れば、昔に父の事を告発したマルフェイスが未だに疑わしかった。

「マルフェイス殿っ！！！　元は、私の父を財務違反・資金流用罪で告訴したのはキサマだったなっ！！　まさか、御主もあの時の一味なのかっ？！！！」

「なっ、何を申すかぁっ！！！！！　ジュリアっ！！！　お前の父親が多額の不正資金の流用をしたのは確かだっ！！！　今更っ、私に責任転嫁する気かあっ？！！！！」

見てる聖騎士の二人が、どうしていいか解らなく成った。

Kは、マルフェイスに背を向けると。

「ジュリア、もういい」

「なにっ？！！」

急に背を向けてKが去る素振りを見せたのに、ジュリアは驚いた。

Kは、半身でマルフェイスを見上げて。

「オッサン、悪いがな。　何時までも其処に座れないぞ。　多分、2・3日の運命だ」

と、言い放つ。

マルフェイスは、その言葉に過剰な反応で。

「何を抜かすかっ！！！！　根拠が何処に在るっ！！！！」

するとKは、口元に笑みを浮かべた。

（な・・なんだ・・この余裕は・・・）

ジュリアは、Kにはもう全て解っていると云った余裕が見えたのに理解が出来なかった。

Kは、睨むマルフェイスの目を見返し。

「お前、現・教皇王エロールロバンナの姉の実子が事件の被害者だ

って知らないのか？」

マルフェイスは、その言葉にギョっとする。

「なんだとっ？！！」

聖騎士二人の手前で、ジュリアはKに寄って。

「それはまだ・・一部しか知らないぞ」

Kは、ジュリアの近くに目線を動かして頷き。　それから、またマルフェイスを見ると。

「マルフェイス。　恐らくお前が渋っても、気を取り戻した教皇王はこの件を再検討捜査にするだろう。　内容が内容だからな。　お前に疑惑も在るし、事件の真実が解っても渋る以上。　お前に何らかの関わりが在るつ考えるのの妥当だと思うが？」

マルフェイスの顔が、見る見る苦渋の満ち始める歪んだ表情に変わり出す。

Kは、それを見上げて確認し。　口元にまた笑みを浮かべて・・・。

「お前にまで影が在る以上、大臣達では荷が重いか？　なら、面白い人物を出してもいいぞ。　お前が絶対に逆らえない、二人の人物の片割れだ」

ジュリアを含めた聖騎士3人が、その話にKを見る。　総括が逆らえないのは、後にも先にも教皇王のみと思っていたからだ。

だが。

「ふざけるなっ！！！　二人も居るはず・・・・・」

と、言いかけたマルフェイスの脳裏に、ある役職が浮んだ。

（あ〝・・・）

弾効統務長官。　教皇王の次の力を持つ隠れた役職である。　しかし、誰がそうなのか。　本当に実在しているのか・・。　マルフェイスは見たことが無かった。

Kは、声が止まったマルフェイスに一瞥すると、背を向けて。

「教皇王が事実の衝撃で動けない今、代わりが必要だろう？　お前の首も、それまでだ」

マルフェイスは、怯える中で苦し紛れで思いついたままに、

「お前の様な輩があの人物を知っている訳が無いっ！！！！　恐喝もいい加減にしろっ！！！！」

と、張り裂けんばかりの奇声染みた声で怒鳴る。

しかしKは、ジュリア達に撤収を促しながら。

「アホ～。　その事実は、本来は教皇王とアンタしか知らない筈だし。　その事柄に着いては、一般的に口にしては成らない緘口の法律が定められているだろうに。　その、“俺の様なヤカラ”が知ってる訳無い。　普通なら・・・な」

マルフェイスに向けたKの口元が、不気味に微笑んだ。

マルフェイスの眼が、眼球が零れ落ちそうに成る程に開いたのは、Kの云う意味を理解したからである。　今、教皇王は部屋から出て来れない様子だ。　しかも、議会や評議会も影ながら混乱している。

其処に、総括の自分が混乱を収拾する処か、拍車を掛ける行動をしている。　もし、包帯男が、本当にアノ人物を知っているとして相談したならば、動き出す可能性は確実的だ。

「まッ待てぇっ！！！！！」

階段を降りて追い駆けようとしたマルフェイスの視界の中、Kとジュリア達は廊下に消えた。

「あああ・・・・うぬぬ・・・」

歯軋りをして切羽詰った顔のマルフェイスは、その場に崩れた。

さて、夜中の人気の無い暗い回廊を歩むKと、聖騎士3人。

ジュリアは、意味がまだ理解出来ず。　先頭を歩くKに歩み寄って。

「お主、一体何者なのだ？　教皇王様とハルフロン大司祭様以外で、他に誰と知り合いなのだ」

赤い絨毯が真ん中に敷かれた回廊は、高層の塔と塔を結ぶ為の物だ。

今は、雨が降り出して、窓から聴こえる雨音がする。

歩くKは、どうせ解る事と思いながら。

「これは、御宅達の国の法律で禁じられている。　だから、表立って喋れば、俺達冒険者ですら罰せられる以上。　アンタ等教皇庁内部の人間なら、その課せられる罰は非常に重い」

と、魔法陣床の前に辿り着き、Kは扉を開いてジュリア達を見た。

「中で。　ただ、簡単に他に口外すれば、自分達の地位を無にするのだけ覚悟しろ」

と、魔法陣の上に向かう。

「さ、口外しない自信の在る者だけ入れ。　そうでないなら、此処で一先ずお別れだ」

鎧を纏わないままに、青い聖騎士の紋章を背に入れた、ピアリッジコートと呼ばれる礼服を纏うジュリア。　ドレスとコートを上品に合わせた貴族服姿のジュリアは、躊躇無く迷わず中に踏み込んだ。
　スリットの入る膝から下の足が、歩む度に宵闇からでも覗ける。

しかし他の二人の騎士は、まだ成り立ての若者と、苦労人の年配者。

年配者の方が、鎧の音を鳴らさずのままにジュリアへ。

「ジュリア殿、我々は其処まで知っても立ち振る舞いが出来ぬ。　公爵家のそなた以外、聞かぬ方が良いと思う。　我々は、権力に勝てる器では無い」

ジュリアは、その判断に何も違和感は無かった。　爵位の低い者や民間出の聖騎士は、只でさえ大変な格差社会の中を渡り行かなけれ

ば成らない。　政治の闇を知って絶望したり、危険に落ちる事もままある。　知らないままに居た方がいい時も存在するのだ。

「解った。　では、引き続きハルフロン大司祭様に付いて、命を受けてくれ」

ジュリアが二人に云えば。

「ああ、ジュリア殿も気を付けてな」

「すみません」

返す二人に一瞥したKが、ジュリアのみが入ったドアを閉めた。

・・・・・。

さて、真っ暗に成った中で二人きりに替わり。　Kは、ハルフロン大司祭と教皇王エロールロバンナに出会う経緯を語る。

Kがまだ、闇の冒険者をやっていた頃だ。　ある仕事で、護衛に付いて他国へと行く爵位のある人物を護送する仕事を請けた。　任務は成功したが、その後にその護送した人物は殺された。　更に問題は、K自身が命を狙われた事に端を発する。　その内、貴族社会内部にある怪しい動きが、教皇王の暗殺と、国家の要人の総入れ替えを目論んだ陰謀で在る事実にKは辿り着く。　手始めに、無実の市民やスラムの人々を攫って資金源を作っていた、暗躍する悪徳商人を叩き潰した。　そして、教皇王暗殺を請けた暗殺者達を全滅させて。　その全てを秘かに知り合ったハルフロン大司祭を通じて、教皇王と、この首都に居る弾劾総務長官に伝えたのだ。

ジュリアも、朧気に聞いた事のある弾劾総務長官の役職に驚いた。

「お主・・そんな事に・・・」

Kは、魔法陣を動かさずに止めて、壁際に腕組みして寄り掛かり。

「あの時、教皇王暗殺の首謀者は、メリッサの妹・・、セルフォワージュが画策していた」

「なっ・・なんだと・・・、あの“鉄女帝”と囁かれた傑女様ではないか・・」

「はっ、“悪魔女帝”だぜ。　姉譲りの美男好きでさ。　人買いに手を貸して、気に入った若いのを痛振り・嘗め尽くして、飽きたらバッサリ殺してた。　ありゃ～モンスターだったね。　人間の・・」

Kは、記憶を思い出しても身震えが来ると見せる。

暗闇に眼が慣れて来たジュリアは、何かを感じて。

「お・・お主・・まさか、斬ったのか?」

Kは、平然と。

「ああ。　鞭を使えば君より強かった。　だが、エロールロバンナには、あの悪魔を殺せない。　あの男は、優しすぎる。　だから、ハルフロンの命で、俺が斬った。　生かしても、のうのうと生きて犠牲を増やすだけだ」

そう語るKの瞳を見るジュリアは、女としてKが可愛そうに思える。

（この男、人の為に一体どれだけの業を肩代わりしてやって来たのだろう。　貴族の罪や汚れの掃除は、貴族と国が成さねば成らぬのに・・・。　哀れ・・哀れ過ぎる）

恐らく、Kの歩んだ道でこんな業は一度や二度では無い筈だ。　人の汚れを掃除して、手を罪に染める。　自分の為など、殆ど無い筈だ。

「済まない・・我が国の恥の尻拭いをさせたのだな・・」

謝られたKは、寧ろあっけらかんとして。

「ま、金はたんまり貰ったし。　他の仕事で、時には迷惑を掛けてやろうかと何時も考えてるからいいがな。　でも、ジュリアの様な美人に謝られるのは、悪い気持ちしないね」

と、最後の言葉尻で、悪戯っ子の様に口元を微笑ませるKが、ジュリアには可愛く思える。

「そうか。　私も、お主の様に出来た男に頭を下げるなら・・文句も無いわ。　マルフェイスの様な輩には、疲れるがな・・。　で？　その、弾劾総務長官にお会いに成るのか？」

Kは、真っ暗に近い中で、虚空を見つめると。

「なあ・・ジュリア・・」

「ん？」

「いや・・な。　二十年前、あの事件の発端がメリッサに在るとすると、だ。　君の父親を失脚に追い込んだあのマルフェイスとか言う男・・一枚噛んでる気がする」

ジュリアも腕組みし。　Kと同じく壁に凭れて。

「うむ。　私も、そう思う」

Kは、ジュリアを横目に見て。

「君の父親が黙っていた理由・・・知って大丈夫か？」

そのKの言葉に、ジュリアは何か不思議な思いがしてKの視線に自分の視線を合わせる。

「どうゆう・・・意味？」

「いやな。　君の父親が、どうしても君に話せなかった・・。　マルフェイスを捕らえると成ると、その理由まで掘り下げるだろう・・このまま行けば。　だが、君の家はもう名誉は回復する。　その、言えなかった理由・・・知ってどうこう成る問題じゃないし。　此処までで、いいんじゃ～ないかなと・・。　後は、俺とハルフロンや教皇王などと秘密裏にやって然るべきと思う」

「・・・わ・妾に、此処で身を引けと？」

普段使わない位の高い女言葉に変わるジュリア。　少し、冷静で居られなくなっている様にKには見える。　何処までも突っ走ってしまいそうな雰囲気が見え隠れしたのを、Kは感じ取って居た。

「いや、表向きの仕事を片付ければいいと思うが。　踏み込み過ぎると、いい物見ないぜ・・。　経験上だがな」

ジュリアは、Kの言わんとしている意味が、今、解る。

「お主、もしや・・・父上の晩年の葛藤に妾が・・・関係あると？　兄の事や、濡れ衣だけでなく？」

Kは、ゆっくりと頷く。

「普通、さ。　自分の家の没落の原因は、当主に教えるだろう？　因縁だし、根源だしな。　何より、理由だ。　だが、君の父親は頑なにそれを秘密にし続けたのだろう？」

「・・・あ・うむ・・・」

ジュリアの思う最大の謎は、父親が疑いを掛けられて以後。　無実は主張したが、徹底的に争わなかった事だ。　何か、教皇女王メリッサに弱みが在ったのか、それとも重大な過失が在ったのか。

Kは、ジュリアを見据えて。

「汚れるのも、暗部を知るのも一部でいい。　本人が知らなくてもいい事だってあるさ。　俺は、これから一人で動く。　ジュリアは、教皇王とハルフロンを助けて、家名に付いた泥を拭え」

ジュリアにすると、Kの言い方には何か自分に対して情が滲むと感じた。　だからか。

「考えておく・・・。　だが、どうしても知らずに居れない時は・・

教えて欲しい。　父と兄の苦悩は、妾の苦悩だ。　私は、当主を継いでしまった・・。　だから」

凭れるのを止めてKは、魔法陣の中央に移動して。

「聞いて後悔するくらいなら、聞くな。　泣かれても困るんだ。あの、エロールロバンナみたくな」

と、ぶっきら棒に言う。

弱く笑うジュリアは、頷き。　壁から離れて。

「了解しておる。　伝説の勇者殿」

「はっ、勇者ぁ？」

Kは、ジュリアの褒めに呆れて下に動かす為に出っ張りを踏んだ。

下がる魔法陣。

しかし。　雨が降り頻る外へ、教皇庁より急いで走り出す馬車が見える。　黒い鉄色の強固な印象の馬車の車体側面には、杖を逆さに、した紋章が掘られている。　マルフェイスの家紋だった。

K特別編　セカンド　5（後書き）

次話、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

最近、台風で天井が壊れたり、風を引いてインルフと疑って見たり＾＾；

何もかもが怖い＾＾；

さて、次でK編は終わると思っています。（内容が濃すぎるので、エラく長い話に成る可能性が・・・）　＊＞＊

更新が数日遅れるかもしれませんが、完結話に致します＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　セカンド　6

K特別編：理由

15過去の誼と、裏側の混乱

霧雨の降る朝方、クリアフロレンスの商店街。

まだ仕事に行く人も起きてこない頃。　アダマンティアランの施設内に於いて、唯一朝まで営業している飲み屋がある。　【井戸の踊り子】と云うカフェだ。　毎日、吟遊詩人や見世物小屋、曲芸などを広々としたステージで披露し。　お客は円形ホールを囲む席で、思い思いの飲み物を左右の壁際のカウンターで買い込んで楽しむ。　朝までオールナイトで、様々なアーティストや曲芸師が集う夜の芸術座でもあった。

夕方に店が開く頃は、何時も道化師やコメディアンが舞台に上がるのだが。　決まって最後のトリを勤めるのは歌姫だった。　色は毎日違うが、彩取り取りのドレスを纏い。　背中空き、胸元際どい派手な衣装に身を包む中年の美人女性である。

「いいよなぁ・・・スカーレットって・・」

「ああ・・・一晩だけでも・・・寝れないかなぁ・・」

「お前見たいのが、無理無理～」

労働者二人が、疎らに埋まる席の一部で、これから歌うスカーレットを見た。　少し垂れた黒い瞳には色香が漂い、真紅の唇は心地良さそうな肉感がある。　白い肌、緩いカールが解けそうな金髪は長くて、やや崩れそうに右脇に結って垂らしてある。　張りのある胸元はドレスから溢れ、ドレスを少し下げれば全て見えてしまいそうな感じだ。　今から、１４年ほど前にこのステージに上がる様になってから、略毎日この時間帯に歌を一曲だけ歌うスカーレット。

男性ばかりの客が、ウットリとしてスカーレットの歌を耳に抱いた。　ピアノとヴァイオリンのみの演奏で、恋する少女の歌を歌い終えるスカーレット。　彼女の歌が終わると、この劇場カフェは閉まるのだ。

客が、歌い終えたスカーレットの周りに御ひねりの小銭を投げる。　演奏者二人が、それを拾い集め、スカーレットはお客に手を振り笑みをあげたり、投げキッスや、ウィンクを飛ばす。

だが・・・。

「えっ？」

スカーレットは、放物線を画いて自分の胸元に飛び込んだ物が突然見えて笑みを消した。

立ち上がる客、帰る客、自分に熱烈なラブ・コールを送る客の中で、スカーレットは自分の胸の谷間を見ると・・・。

（まあ・・・金貨）

と、確認してから背後のカウンターを振り返ると・・・。

「あら・・・」

一人の包帯を顔に巻いた痩せ型の男が、バーカウンターに凭れてスカーレットに脇姿を見せている。

「お兄さん、楽屋に入らして。　御持て成しするわ」

「・・・・」

濡れた髪、包帯、服をそのままにKは黙って頷いた。

「なっ・・アイツなんだよっ」

スカーレットが楽屋に客を呼ぶのは今までに無い。　女性歌手が楽屋にお客を呼ぶのは、アバンチュールを過ごす男を呼ぶか、恋人と相場が決まっていた。

Kは、黙って客が去る方向とは別の右端にある芸人出入り口に向かう。

歌手スカーレットは、ドレスの裾を持ち上げて、胸揺らせながらKの行った楽屋方面に向かって行く。　丸で、恋人に会う女性の様に・・。

汚れた仕事着の技師や、労働者の数人が、訝しげな顔や憎たらしい顔をして。　目の前から去って行くスカーレットの先に消えた、K

の見えない姿を睨んでいた。

朝が明けた。

各大臣達。　その下で調整を行う長官達。　そして、マルフェイスの支配する総括部の幹部達が、個別や少数の纏まりで会談を重ねて、マルフェイスの許可を持ってして両方の評議会を開く事を決めるまでに至ったのだ。

しかし、肝心のマルフェイスが体調不良で夜中に消えた。

もう、ゴルドフが拘束され、事情聴取が終わった。　更に、エロールロバンナの一族の面通しで、ロザリアが本物である事が判明していた。　Kの齎した記憶の石の内容が、明らかにゴルドフの弟とジョージのやり取りの一部始終を記憶し。　ゴルドフがその内容の中で、己の知りえる範囲で全面自供して、供述の一致も略全て同じだ。

もう、間違った判決で記録された封印文書を書き換える事に異論は少ない。

だから、マルフェイスの承認が必要に。

「・・・」

食事もしないで動き回ったハルフロンが、憔悴した顔を死人の様にして自室に戻っていた。　今日は、副大臣と交互に休んで政務をする事に成りそうだった。　雨が降り続く朝、そろそろ下級の僧侶や役人達が出勤して来る時間だろう。

「ハルフロン様、少しは何かを口にしたほうがいいぞ」

初老の副大臣が、休憩から起きてハルフロンと政務を交代すると言って出てゆく。

膨大な事件判例や、供述調書が収められた１０メートル近い本棚が幾重にも並んで、ハルフロンの座るデスクを囲むように波状型で広がっている。　法務大臣室は、膨大な資料室でもあるのだ。

ハルフロンと入れ替わりで、副大臣が出て行った直後だ。　部屋の扉がノックされた。

「すみません」

女性の声だったが。　ハルフロンは、声を聴いて誰と判断出来る感覚が今は無かった。

「はい・・どうぞ・・」

ハッキリ声に成らないままに、声を発したハルフロン。

扉が開き、ヒョッコリと顔を出したのは、幾分血色が薄いレイチェルであった。

「ハルフロン様、宜しいでしょうか?」

優しい声が、ハルフロンの耳に届く。

「ああ・・何事かな・・」

普段着のドレスの上に、夜の制服であるガウンを羽織ったレイチェルが中に入って来た。　静々と、弁えた女性の歩き方でハルフロン

の前に来たレイチェルは笑顔を消さず。

「お疲れ様で御座います」

と、腰を落として女性の挨拶を見せる。

「ああ・・・少し・・疲れたよ・・。　で、どうした？　教皇王様は・・・如何であるか？」

「はい・・」

少し顔を曇らせたレイチェルの語りでは、エロールロバンナも、ロザリアも別々に泣き疲れて眠ったらしい。　ただ、エロールロバンナは、ロザリアを養いたいと云うのに対し、ロザリアはもう自分の生家とは無縁で居たいと完全に意見の決裂が起こっていると云う。

「そっ・・そうか・・。　ロザリア様のお気持ちからするならば・・・それも当然かもしれんな・・」

ハルフロンは、死んだエリザベートを思いガクリと項垂れた。

見るレイチェルの眼の中で、愛する者を一筋に結婚もしなかったハルフロンが、絶望を再び味わって立ち直れるかどうか解らないと思える。

「ハルフロン様・・・、事実を・・何も知らなかった・・のですか？」

すると、ハルフロンは自分の顔を両手で覆い、思い返される思い出に堪えられない涙が、また。

「ああ・・・う〝っ・・と・突然だった・・・。　変わり果てた姿で・・エリザベートが・・突然に・・・」

ハルフロンの当時の嘆きは如何程だろうか。　しかも、事件に関与する事を危ぶんだエロールロバンナの側近達は、遺体を引き取りたいと願うハルフロンに自重を求めた。　事件に、微塵も関与する事を厳しく叱った。　エロールロバンナも、腹を割って話せるハルフロンを失いたく無かったのだろう。　苦渋の顔で、それを黙認したのである。

「御可哀想に・・・」

ハルフロンの悲しみを見受けるレイチェルは、デスクを回ってハルフロンの前に来た。　呻いて泣き出すハルフロンは、２０年間もこの涙を飲み込み続けて、吐き出せなかったのだろう。　Ｋに怒られはしたが、それで全てを振り切れる訳でもない。

レイチェルには、マルフェイスに会う前に教皇王の様子を訪ねに来たジュリアの脇に、静かにそっぽを向いていたＫが、去る時に突然に耳打ちした言葉を思い出した。

“ハルフロンにも、後で声を掛けてやってくれ。　誰か、優しい人の声が必要に成るだろう”

（あのお方・・・何処までもご理解されていらっしゃいますのね・・・）

レイチェルが、優しくハルフロンの背中に手を置き。　慰める言葉を述べて擦る。　ハルフロンには、その温もりを拒絶する心が・・・

残っては居なかっただろう。　レイチェルに縋り付き、声を押し殺した慟哭を吐き出すのが・・・精一杯だった。

「・・・大丈夫・・大丈夫ですわ・・。　ハルフロン様が耐えた全て、フィリアーナ様も、エリザベート様も、ご理解下さいますわ・・」

優しく包み、頭を撫でられるハルフロンの顔に浮んだ青白い死相の様な憔悴の顔が、少しづつ・・少しづつ赤みが差して呻き声が落ち着いて行く・・。

その様子を、廊下でドア越しに聞いていた者が居る。

「・・・・」

食事を届けようと部屋に入ろうとした副大臣は、表の表示を・・・“不在”に変えた。　トレイに乗せた紅茶とパンを、静かに持ったままで消えて行く・・・。

さて。　事は起った。　そして、事実がこうして明るみに成った。

その日、ジュリアの忙しさは多忙を極める。

出勤してきた上官の聖騎士達と、聖騎士団長の秘密会議に列席して部分部分を隠しながら詳細を説明し。　今後の対応も含めて話し合う。

一番難しい内容は、事件を蒸し返して旧教皇女王・メッリサの息の掛かっている保守派に飛び火した場合の行動態度や、別の事件に飛び火した場合の方針についてだ。

マルフェイスは下位爵位の人物だが、今は総括のトップ。　他にも、教皇王のお傍周りに残る古きメイド長や、副大臣数人などメッリサの頃から残る要人も多い。　そして、この要人達が、マルフェイスと親しいのだからやり難い。

聖騎士達の中にはその爵位の血筋や、親密な一族も居るだろうし。　聖騎士達の間でも、副団長・団長・総師団長・副総師団長などによって派閥に似た勢力関係が潜む故に、この問題は非常に難しい話し合いに成ったのである。

昼過ぎまでの大論戦が繰り広げられた会議の中、ジュリアは力関係に怯える聖騎士団長達と、それを纏められない総師団長の頼り無さに呆れるばかりだった。　もう、メリッサは死んでいるし、マルフェイスとて、このまま居れるかどうか解らないのにだ。

16、現れた権威、示された悪意

夕方。　何故か各大臣・副大臣達・総括部各役職・聖騎士団長達が、“危亡の塔”の地下大会議場に集められた。　そして何故か、ジュリアも呼ばれた。　青い半円に並べられた重厚な椅子の群れの中央には、本来ならば教皇王が立つ高みの壇上がある。

「どうしたと云うのだ・・」

「此処は、確か国家存亡の危機の時にしか使われない場であろう？」

集まった一堂は、段々に列を作る椅子に腰掛け、前後左右の誰かと不安げに会話している。　大臣達は皆泊まり込みで、疲れた顔をしていた。

ハルフロン大司祭と列席したジュリアは、隣のハルフロンに。

「陛下のご容態は・・？」

隈を目じりに見せるハルフロンは、少し声のトーンを落とし。

「未だ、静養中だ。　ロザリア様のご息女を犠牲にしてしまったショックが大きいようだ」

「そうですか・・・」

ジュリアにしてみれば、エロールロバンナの身体は心配だが。　どこか自業自得と思えるからそれ以上の言葉が続かない。

少し声の枯れたハルフロンは、更に続けて。

「ジュリア殿。　恐らくは、レイチェル殿から後で聞くと思うのだが・・」

「はっ・・何でしょう？」

「うむ。　ロザリア様の身柄、少々其方で預かって頂きたい」

ジュリアは、その内容に驚き。

「わっ・・私の元で・・でしょうか？」

「うん。　ロザリア様の様子も芳しく無い。　レイチェル殿とそなたに、ロザリア様は甚く信頼を寄せているとか・・。　今更スラムに戻して、何か有っては困る。　生活のご用立ては此方から用意する故に。　身を、落ち着ける場所を・・」

ジュリアには、教皇王よりロザリアの事が心配だったのは事実。同じ女として。　更に、病気で自分を置き去りにするのを悔やんだ母や、嘆き死んだ父親を見ているからだろう。

「解りました・・。　お預かりする事には、異論は御座いません」

ジュリアは、きっぱりとハルフロンに伝える。

その直後。

急に、会場がざわめいた。　見た事の無い黒い礼服には、フィリアーナが悪魔を踏み抑える刺繍を胸と背に見せた中年の背の高い男性が、なんと壇上の脇に立ったからだ。　腰には、黒い柄の軍剣（サベール）が見えている。

整えられた髭、鋭い眼をしたその男性は会場を一瞥見渡して。

「ご一同、静粛にっ！！！！　これより、弾劾総務長官、ヴァイオレット・ヨファーソン様が御出でに在らされる」

その職業名に、会場がどよめいた。

ジュリアは、Kが動かしたのだと直感して。

（ほっ・・本当に・・動かしたっ！！！）

壇上のデスクの脇に立った男が、静粛を呼びかけて声が治まる中。

壇上の後ろで、教皇王のみが通れる筈の白い扉が開かれて、黒い礼服のドレスを纏う仮面の女性らしき人物が進み出て来たではないか。

ジュリアの眼の中、眼の周りを隠す金色の仮面を被った白肌の女性らしき人物は、壇上から見下ろす形で自分達を見回す。　ウェーブやカールの掛かる金髪の髪は長く、腰辺りまで優雅に下がっていた。

そして・・・、確かに一度。　その女性らしき人物は、自分を見て止まったのをジュリアは確認する。

壇上脇に立つ男が、一同を再度見渡してから。

「今、教皇王様が体調を崩し、そして国政の中に於いて不穏な闇が蠢いている。　教皇王様の杖をお借りしたヴァイオレット様が、一時断罪の任の為に皆の上に立つ。　全員、これから始まる査察調査には全面協力をするように。　もし、隠し事をして発覚する時には、永久投獄、爵位取り潰し、死罪等の極刑罪が適用と成るので注意するように」

皆、女性の右手に持たれた黄金の杖を見て言葉が出ない。

壇上の脇に立った男の話が終わると、女性が壇上デスクの前に進み出て。

「これから、任務を言い渡す」

と、喋った。

（女性だ・・）

透き通る歌声の様な言い方で、場が静まり返った。

「先ず・・ハルフロン大司祭殿、立たれよ」

一同の目が、ハルフロンに集まる中。

「ハッ」

枯れ声のハルフロンはその場に立った。

弾劾総務長官ヴァイオレットは、仮面の間に覗ける眼を立ったハルフロンに向けて。

「明日より、２０年前のエリザベートの事件の封印を解く。　捕まえたゴルドフ殿の証言、提出されし弟チャグリンの証言と照らし合わせて、その真相を明らかにして新たな裁判を開きなさい」

「ははっ」

ハルフロンが、臣下の礼節を見せると。

「良いか、その過程で別の事件が明らかに成った場合は、全て詮索の対象とせよ。　違反・不正・犯罪の全てだ。　例え、前・現の教

皇王様が介入為さっていたとしても、正しく暴け。　手を緩めた場合は、そなたに責任を問う」

ハルフロンが、深く一礼した。　相手が誰であろうと、これで調べる事に躊躇が出来ない。　また、誰も権力を使ってそれを隠蔽出来なくなった。

ヴァイオレットは、次に財務大臣を立たせて。

「そなたは、ハルフロン法務大臣と協力しながら、向こう５０年の財務出資の全てを調べ直せ。　疑わしい場合は、全て黒として捜査しなさい。　無論、その対象が自分で在れ、教皇王様で在れ、手を緩める事は罪に当ると心得よ。　特に、総括部の全ては末端まで調べ尽くせ」

「は・・・ははっ」

財務大臣の中年男性は、血色の悪い顔を蒼褪めさせていた。　見るからに、自分自身にも疚しい部分を持っているのでは無いかと思える。

次々と大臣を立たせて、命を言い渡すヴァイオレット。

しかし、最後に呼ばれたのは、なんとジュリアであった。

「ブルーローズ卿・・ジュリア・ブルーローズ殿」

「は・ハッ！！」

呼ばれた事に驚いたジュリアは、緊張を一気に高めて声を出した。

立ったジュリアにヴァイオレットは顔を向けて、一歩前に出た。

「今から、聖騎士の全員と、我が手の者数人。　そして、法務・財務の政務官何人か使わす部隊の長に就任を命ず」

俄にざわめく広間。

「は・・・」

礼するジュリアに、ヴァイオレットは続け。

「聖騎士団長全員と総師団長に癒着の疑い有りて、そなたが暫定の長に成れ。　全ての各大臣の見張りと協力をし。　此処最近の不正事件の疑いのある疑惑から全て監督して調査せよ。　ハルフロン殿は、調査の報告を受け、事件の立件、裁判に従事する故。　そなたは捜査・査察指揮権を得て、各役職達の監視監督、そして現実的な捜査はそなた以下、組織された部署で行う様に。　不穏な動き在らば時は、直接この妾に申し出て構わぬ」

「ハッ」

これは、今この場に居る皆には由々しき事態だ。　ジュリアは、あの２０年前の事件以降で、全ての名家・爵位家との信頼・親交は断絶状態したままの権威失墜の後を歩んで来た。　何処かの家と深く親交はしていない。　逆に言うならば、追求の手を緩める必要も、気持ちも起こらない。　ジュリアの高潔さは、周知の通り。　賄賂も通じない。

ジュリアが座り、場がシーンと静まった。

ヴァイオレットは、最後に。

「これから、猶予期間を設ける。　４日以内に、ジュリア殿に預けた機関、若しくはハルフロン殿に自ら不正を申し出た場合。　余罪等無ければ、悪質な罪の物では無い場合に限って罪の軽減を考慮する。　但し、それ以上を過ぎて発覚・申し出は厳しい刑罰に成ると心得よ。　それから、今から今夜この“ヴェルハラントモリナリス”は、封鎖する。　一同、自宅に戻って明日より各自の仕事に向かう事。　本日、怪しき動きをこの場でする事は許さぬ」

こうして、この会議は終りを迎える。

ヴァイオレットが立ち去って、ハルフロンは溜息を着いた。　周りでは、怯える大臣達や、何かを追及する役員や副大臣の声も響く中でだ。

ジュリアも、呆然とその場に座り。

「あの男・・本当に動かした・・。　まさか・・弾効総務長官が・・女性とはな・・・」

と、呟く。

ハルフロンは、ジュリアの呟きを聞いて。

「では、覚悟するんだな、ジュリア殿」

「え？」

「あの女性は、断罪者・・。　緩い言い訳や報告は蹴られるぞ。4・5年前、私もこの様な大っぴらでは無い中で任命された事が有るが・・。　情状を聞いても、呵責の緩めはしない人だった」

ジュリアの脳裏に、あのKの話が浮び。

（ああ・・・やはり、その前の事件でも暗躍していたのか・・。大事（おおごと）にしなかっただけで・・）

Kの連絡を受けて、こうして皆の前に現れた弾劾総務長官。　もしかしたら、この一連の事件や調査が思わぬ広い発展を見せるのではないかとジュリアは怯えた。

そしてその始まりは、劇的に直ぐ様起ったのである。

「御姉様、今夜はゆっくり為さいませぬと」

「うむ、話し合いが終われば、もう休む」

馬車の中。　夕暮れがどんよりと曇った空の下で見えない。　レイチェルとロザリアを連れて、ジュリアは教皇庁を馬車で出た。　先に、残っていた礼服二人の使用人を荷馬車で帰し。　ジュリア達は、他の聖騎士3人と自宅に戻る事にしたのだ。

他の聖騎士達3人は、己の馬車や馬でジュリアの馬車の後に従う。

この3人は、ジュリアが指名した部隊の纏め役候補の内の3人。

まだ若い伯爵家の若者一人。　民間出身で、苦労人の初老男性一人。　そして、ジュリアと歳の近い女性で、大柄な怪力自慢の男爵家の者。　この3人は、ジュリアと同じく権力に縁とは離れた無骨な者達だ。

3人も、こうなっては誰かがやらねばと気持ちを持ってくれたようで、今夜は少し話し合いをしようと一緒にジュリアの屋敷に向かって着いて来た。

だが。

馬車がブルーローズ家の正門に近付いた時だ。

「ジュリア様っ!!!!!!　入っては成りませぬっ!!!!!」

礼服姿の使用人の内、年配者の男性の声が飛んできた。　しかも、かなり切羽詰まった叫び声である。

「むっ、何事だっ?!!!!」

と、剣を腰にしたピアリッジコートのままにジュリアは席を立ち、耳に剣の噛み合う音を聞いた。

「止めろっ!!!」

ジュリアは御者に命令を飛ばしてから、ロザリアを脇にしたレイチェルに向かって。

「車の鍵を閉めよっ、私の合図無しに外に出ては成らぬっ!!　ロザリア様を」

と、言い置いて、正門前の路上にドアを開けて飛び出した。

「なっ・・・」

飛び出したジュリアは、庭先を見て目の前の光景に驚いた。　遠くに見える館の間近の入り口近くで、何者かが１０人以上の覆面の武装した曲者に囲まれている。　正門前から広い庭に入った芝生の上では、二人の礼服姿の使用人の男性が、５・６人ほどの曲者と死闘中である。

「うおおりゃっ」

長い槍を使い。　金属鎧を上半身に纏った大柄の曲者が、ジュリアの家に仕える二人の使用人を圧倒せんばかりに攻め立てている。

この異変に、後から来た聖騎士達も気付いて剣を手に馬車から飛び出したり、馬から降りたりして助けに来る。

「何をしておるかっ！！！」

ジュリアは右手に剣を抜いて、背を向けていた槍遣いに斬り掛かった。

「うぬっ」

向こうも気付いて、ジュリアの方に槍の柄を旋回させて牽制して来る。

「ジュリア殿っ、助太刀いたすっ！！」

「同じっ！！」

「我は向こうをっ！！！」

一人の聖騎士は、大勢に斬り付けられて血だらけの礼服の使用人に向かった。

「どりゃっ！！！」

対峙したジュリアに、激しく突きを見舞う槍遣いの覆面の大男。
ジュリアも、槍を剣で払い除けるが、その突き込みの鋭さに驚いて、間合いを取りながら気を引き締め直した程だ。

他の軽鎧を着た曲者達と聖騎士二人が応戦状態に突入する。

これは、一体どうゆうことなのか。

「・・・何者だ、キサマ」

剣を構えてジュリアは、低い探る声で相手に誰何する。

だが、槍を構えて大男は口元をニヤつかせると。

「いい女だな・・。　安心しろ、お前と妹は殺さねえ・・。　へッへッ・・」

と、覆面から覗ける口元に醜い笑みを見せた。

グッと眼を凝らしたジュリアに視界に、あのKがゴルドフの雇った冒険者を連れて来た時に、御者をしていたらしいマント姿の小男が居て。　それを、曲者が大勢で囲んでいる様子が見えた。

（あの者・・・確か、ケイの・・。　我が家を見守らせて置いたの

か？）

槍遣いと睨み合うジュリアの視界の中で、その小男は細剣（レイピア）を片手に、大勢の男と素早く動いて戦っている。　だが、数的に多勢に無勢。　護っているのが精一杯の様だ。

「キサマっ、あのような大勢で一人を囲み卑怯なっ！！！　其処を退けいっ！！！」

すると、槍を上段に構えた覆面男は、ジュリアに余裕の笑みを見せて。

「はっん、面倒な手下を残しやがって。　御蔭で、お前が戻って来るまでメイドでも遊んでやろうと思っていたのに。　あの野郎が全員を地下牢に逃げ込ませて扉を閉めやがった」

「なっ！！！　おのれ・・下衆めっ！！！！」

「ほほう、下衆ねぇ。　今に後ろの奴を殺して、俺の手下がメイドやクソジジイを人質に連れてくるわっ！！！！　それまで、鍵を取り返すまで遊んでやる。　さっ、来いっ！！！」

濁声に近いこの槍を使う男、確かに強かった。　ジュリアとは、力量で互角。

他に、礼服の使用人の二人を怪我させた覆面の男達も、それなりの使い手だ。　聖騎士４人に対して、相手は槍遣いの大男を含めて６人。　互角の熱戦が繰り広げられて、ジリジリと時が過ぎて夜が来る。

これだけの争いが起っているのに、私有地の中の事とは言え役人が来ないのが不思議である。

だが・・・、街中では、昼過ぎから放火らしき不審火が相次いで、てんやわんやの大騒ぎが起っていた。　野次馬と僧兵役人がごった返し、見回りに回せる役人が居なかったのである。

その火を付け回っていたと思われる魔法遣い風の男を含めた怪しい者達は、通りすがりで放火する所を目撃した冒険者の一団に取り押さえられた。　夕暮れになってからの事だ。

さて、夜の闇が訪れて。　まだ、雨を降らせた雲が厚く空に残って、夜の闇を強くする中で。

「うわっ！！！」

「ぎゃっ！！！」

「なっ・・なん・・ぐおっ！！」

突然、ジュリアの屋敷の本館脇より、あの小男を取り囲んでいたと思われる複数の曲者の男達が次々に悲鳴を上げた。

「ん？」

ジュリアの腕に軽い切り傷を負わせていた槍遣いの大男は、背後で立て続けに湧き上がった男の叫び声に注意が削がれた。

その隙を見逃さずにジュリアは、大男の間合いに飛び込んで。

「鋭っ！！」

「おあっ」

突然のジュリアの突撃に、驚き間合いを見失った大男。　なんとか槍を側めて、ジュリアの突きを槍の柄で防いだが。　完全に防ぎ切れずして顔の覆面を斬り裂かれる。　スパッと頬が斬れて、少量の血が暗闇に飛んだ。

更にジュリアは、大男にグッと肉薄する様子を見せる。　大男は夜の中で間合いを見極めきれず、槍の柄を苦し紛れに振り上げた。がら空きの左脇にジュリアは走り抜け様。　腰を落とした体勢から男の右足を斬り払った。

「ぎゃっ！！！！」

滾る様な大男の声が出た。　大男は、そのまま芝生の庭に仰向けで倒れて行く。

倒れた男の放した槍を蹴飛ばしたジュリアは、直ぐに仲間の聖騎士に声を掛けた。

「大丈夫かっ？！！　皆の者っ」

其処で視界に見えたのは、ジュリアの乗ってきた馬車の御者の男がランプを灯して、馬車に掛けた火の明かりの中。　最も若き聖騎士の若者が、曲者と剣を交えた直後。　体を外されてバランスを崩し、其処に蹴りを見舞われて後ろに倒れた様子である。

「危ないっ！！！」

慌てて走るジュリア。

他の曲者達と剣を打ち合わせながら、倒された聖騎士を見る仲間。

だが、若き聖騎士を蹴り倒した覆面の曲者が動き素早く。

「死ねっ」

と、倒れて眩暈を起こした聖騎士の青年の脇に走り寄った。　顔に目掛けて剣を突き立て様と、素早く剣を下に向けて構える時。　闇の中をジュリアよりも早く何かが飛んできて、その男の頭を撃った。

「ぬおおっ！！！」

そのぶつかった衝撃がかなりの物だったのだろう。　倒れた若き聖騎士の頭の上の方に、覆面の曲者がヨロけて前のめりに屈む。　其処に走り込んで来たジュリアは、覆面男の右腕を掬いに斬った。

「たぁっ！！」

「う〝ぎゃああっ！！！！！」

絶命染みた叫び声が夜空に響き。　切断された曲者の右腕が放物線を画いて薔薇の垣根に飛び込む。

「見事っ！！」

「うらああっ！！！！！」

残りの聖騎士二人が、狼狽し始めた覆面剣士達を気力で圧倒し始め。
ジュリアは、倒れた若き聖騎士を守りながら、覆面剣士を脇から牽制して注意を削いだ。直ぐに、曲者の一人が大女の聖騎士の体当たりを食らって倒れた所に、ジュリアが走り込んでサーベルの柄で起き上がりを奇襲して気絶させる。

「ジュリアっ、思う存分やれッ！！！」

あの、小男を囲んでいた方から、Kの声がする。

（やはり・・・）

槍遣いの男を斬った後も、向こうから男達の呻き声や叫び声が上がり。館の方で何者かを囲む人影が見えなくなった。闇に慣れて来た夜目には、地面に転げまわる曲者共らしき姿が見えていたので。
もしや、と思っていたのだ。

完全に形成逆転したジュリア達は、残る曲者共も叩き伏せてしまった。

「ケイっ！！！」

戦いが終わって、闇の中を館に走るジュリア。

曲者共を縛り終えたKが、本館の正面脇から声を飛ばす。

「大丈夫、使用人の皆は無事だっ」

夜の闇の中で、Kの前に来たジュリアは、包帯男の周りに縛られて呻いて転がる曲者達を見て。

「何者なのだっ?!!」

「良く解らん。　最大の問題は、マルフェイスと息子が消えた」

それにはジュリアも驚いて。

「な・・・何だと?」

Kは、転がる曲者を見ながら。

「朝方、ヴァイオレットに話を付けて。　昼前には奴の屋敷に探りを掛けたんだがな。　教皇庁から、何度も迎えの役人が来たが。使用人達がオロオロするだけで、マルフェイス親子が見当たらないと大騒ぎだった」

「にっ・・逃げた?」

「さ~。　だが、夕方まで街中も大変だったしな。　逃げたかもしれないな」

「何故だ?」

「コイツ等の仲間か、放火を彼方此方でしやがって。　僧兵役人ははそっちに掛かりっきりで治安維持も儘成らない感じだ。　さっき、漸く犯人が冒険者達に捕まって、応援の兵士が着たからな。　君に、動いて貰おうと思って来たらこのザマさ。　知り合いのウィズリーを見張りに残しておいて正解だった」

ジュリアは、メイドや執事達を解放してきたマントにフードを被っ

た人物が屋敷から出て来たのを見て。

「済まない・・助かった」

すると、そのウィズリーと云う姿を見せない人物は頷き。

「ケイの旦那は、俺の昔の恩人であり、リーダーさ。　この人には、家族を助けられた事もあるからな。　どんな命令でも聞くさ」

と。　やや老いの滲む男性の声だった。

Kは、ジュリアにこの曲者を地下牢に運ぶと告げた。

17、悪魔と呼ばれた男の横顔

「おいっ、お前っ!!!!　何故に放火したっ!!!」

アダマンティアランの5階。　僧兵役人の詰める役所内の取調室。

無精髭に垢染みた顔の小汚い風体をした魔法遣いの男は、白い繋ぎの服装をした僧兵役人に取調べを受けていた。

「・・・」

怒鳴られようが、罵られようが、叩かれようが、放火をしていたこ

の男は何も口を利かなかった。　クルスラーゲは、宗教国家。　世界でもいち早く拷問をしなくなった国だ。　ふてぶてしく、黙って座る魔術師の目は、完全に僧兵を舐めて据わっていた。

「なんて奴だ・・」

取調室を見ていた４０絡みの僧兵が、その冷め切った眼に一種の畏怖を感じた程だ。　恐らく、拷問しても事情を吐く事はしないだろう。

その状況と同じ事が、ジュリアの屋敷の地下牢にて起っている。

「お前の主は、何者だっ？」

鉄格子と、石に囲まれた小部屋の中。　あの槍を遣っていた大男が、覆面も取られて縛られたままに転がっている。　灰色の石壁、床の上で、汗に塗れた伸び放題の髪を乱し。　何ヶ月も身体を洗っていない汚れた顔は、丸く、鬼の様な睨みを見せていた。

取り囲む聖騎士達。　若い聖騎士の者は、強かに頭を打って居たので家に帰した。　一応、伯爵家の跡取りだから、ジュリアも配慮したのである。

Kは、鉄格子の所に凭れてランプの明かりを見ていた。

執事の老人は、この大男に打たれて大怪我を負っていった。　だから、ジュリアの怒りはもう頂点に達している。

「言えっ、言わないと斬るぞっ！！！」

剣の柄に手を掛けて凄むジュリアだが、右足を略切断された男は、脂汗の滲む顔を醜く悪意の笑みに変えて。

「斬れよ・・。　斬れるモンなら、斬って見ろ。　手か？　足かっ？！！　それとも眼を潰すかあっ？！！！　ア～ハハハハっ！！！！」

突然に笑い出した頭目らしきこの男。

「きっ貴様っ！！！！」

怒りを堪えきれずに剣を抜き掛けたジュリア。

其処に、Kが。

「ジュリア～。　そいつは、いっくら痛め付けても無駄だぞ～。　そうやって、お前達がムキに成れば成るほどに喜ぶからな～」

この2日間の事態で疲労を抱えたジュリアは、やや血色の鈍った白い肌に感情的な色を覗わせ。　薄暗い牢屋の中で、掴み掛かる勢いでKに向き。

「何故だっ？！！」

問われたKは、ゆっくりと腕組みを解いて転がる男を見下ろす。

「コイツ等は、元が冒険者とかでな。　世界を渡り歩いてテロ的な活動で金を設ける組織の傭兵部隊達だ。　一時期に比べたら、数は激減して。　今は、幾つかの組織を残すだけと成ったが・・。　未だに、政治の暗部に取り入って動く奴等さ。　コイツ等は、それな

りに訓練も受けていてな。　拷問には、非常にしぶとい忍耐力を持つ」

大女の聖騎士が、驚いた顔で曲者を一瞥してからKに向き。

「そんな・・者が、我が都市に居たのか？」

Kは、薄気味悪くニヤける曲者の大男を冷たい眼差しで見据えて。

「コイツ等は、自分を捕まえた相手が中々殺さずに、拷問するか。殺すかの二択しか無いと教え込まれてる。　怒り、拷問するのは、知りたい事を知れずに躍起になると見て。　肉体的に追い込まれた中でも、上からの目線で相手を見る。　拷問する相手に喋らない事によって、逆にする側は焦り、される側は焦る相手を見て追い込んでいると立場の逆転を想像して悦に入る。　そうして、喋らない事に、一種の快楽を覚えているのさ」

「な・・なんと・・」

ジュリアは、その異常とも云える心持に畏怖を覚える。　身体を斬ろうが、死ぬまで責めあぐねる此方を見て、優位に立っている様に思わせるとは・・。

すると、説明をしたKに、横に寝ていた曲者の男がニヤけた顔で。

「よお～く知ってるじゃないか・・・。　無駄って事がなあ～・・。
あはははは」

と、高笑いするのだが。

その男の笑い顔を見てからからKは、困惑するジュリアに向いて。

「俺に、任せて見るか？」

この2日の疲労と新しい責任で疲れていたジュリアは、自分とは明らかに生き方の違うKならと思う。

「・・お主なら、出来そうかもな」

すると、Kは口元を微笑ませて。

「俺の昔を見せてやろう。　驚くなよ」

と、聖騎士3人と入れ替わって、男の前に歩み出た。

「誰がやっても、変わらないね。　にひゃはあっ」

笑う曲者の大男。

「そうか」

Kは、直ぐに1枚の布を大男の口に当てて猿轡をしてしまう。

「んふがふん・・・」

“こんな事をしても無駄だ”

と、言わんばかりばかりの顔だが・・。

Kは、相手を喋れなくすると・・・。

「舌を噛まれても困るからな。　大丈夫、時期に口は開放してやるさ」

と、腰のサイドバックに手を伸ばした。

（どう・・するのだろうか・・）

（さあ・・。　見てみよう）

聖騎士達二人とジュリアは、鉄格子にまで下がってKのする事を見守る事に。

さて、余裕の冷たい笑みを浮かべるKは、汗まみれの男を見下ろしながら。

「お前達は、“二択”しか無いと教えられているがな。　正式には、三択在る。“吐かせられる”と云うのを、教えられていない」

大男の目は、ギラギラと殺気立ち。　そのKの言葉を否定している。

痩せて華奢にさえ見えるKを下から見上げて、縄を解こう物なら食い掛かりそうな様子を見せていた。

が。　Kは、その凶暴な炯炯と光る曲者の大男の目を詰まらぬ素振りと見返し。　更に乾燥した言葉使いで一蹴する。

「アホウ。　肉体の苦痛で喋らないなら・・精神的な苦痛で喋らせてやるさ」

と、ガラス小瓶を取り出した。

ランプの真下。　ドロリと黒い液体の入る小瓶を大男に見せると。
　Kは眼を鈍く鋭いものに変えながら、やや声を凄みの効いた低い声で。

「これが何か、お前に解るまい。　コイツは、地獄の悪魔ですら、原液で飲めば恐怖に怯えて心に余裕を持てなくなる麻薬さ」

「え〝っ」

思わず大女の聖騎士が、ギョっとして声を出した。

寝転がる曲者の大男も、スッと顔の笑みを消し始めた。

Kの口元が、余裕とサディスティックを混ざる笑みを浮かべる。

「この薬を飲めば、動く物が全て幻覚で化物に見えて恐怖の虜に堕ちる。　更に、聞かれた事を答えないと、秘密を持っていては気が狂う程に精神的に追い詰められて恐怖のどん底を見るのさ。　自我なんて維持出来ないぜ。　俺等を見て、意味も無く助けを懇願し。　飛んでるハエすら、自分を食べるバケモノに見える」

Kの説明を受ける大男の顔から、完全に余裕が消えた。　Kの手に在る小瓶を見て、俄に怯え出す。　首を左右に振り、明らかに恐怖による震えが現れ出した。

「怖いか？　だから、自殺されないように口を塞いだまでよ。　さて、鼻から飲ませてやろう。　苦痛でっ、恐怖でっ！！　俺の問答に耐える事の出来ぬ永遠の苦悶地獄に堕ちるがいいっ！！！」

Kの瞳がギラリと光り、男の顔を髪の毛を掴んで持ち上げると、グィっと上向きにして口に小瓶の蓋を咥える。

「ンンンンッ！！！　ングッ！！！！！　ウグングンンっ！！！！！！」

完全に大男は怯えて、Kに向かって首を左右に激しく振る。　痛みより、恐怖が先行しているのだろう。　kに髪の毛を鷲掴みにされているのに、激しく顔を振って拒否を示す大男の髪のプツプツと千切れる音がする。

ジュリアも、他の聖騎士も、そのKの姿に悪魔を見た。

「嫌かっ？！！　自分で死ねないのは嫌かぁっ？！！」

必死で頷く大男は、涙目を浮かべて恐怖に心を喰らわれた者の様に毒気が抜けていた。

Kは、ジュリアに紙と筆を用意させ。　男の右腕だけ自由にさせると、次々と質問し。　聞きたい事を全て書かせた。　男の鼻の中に、小瓶の蓋を開けて突っ込み。　少しでも妙な真似や躊躇をしようモノなら、即座に頭を後ろに反らせる体勢で在った。

口を塞がれながらも必死で泣き叫び、呻き咽び、Kの拷問染みた質問に全て答えて鼻から小瓶を抜かれた大男は、グッタリと縛られたままに横たわって震えてしまい。　もう、ジュリア達に見せた余裕は微塵も残っていなかった。

絶句した聖騎士達と共に、地下牢から上がって来たKは。

「はっ、やっぱりマルフェイスが雇ったのか。　随分と怖い所に知

り合いを持った役人だこと」

（アンタの方が・・・怖い・・・）

ジュリアも含めた3人の聖騎士の意見だ。

大女の聖騎士が、距離を置くような言葉遣いでKに。

「お主・・何時もあんな危険な薬を持ち歩いているのか？」

「あ？　んな訳無いだろう」

「は？」

ジュリアを含めた聖騎士3人は、声を揃えて呆気に取られる。

「アレは、只の咳止めの原液。　ドロっとしてて、臭くて、グロいからな。　脅しに使えると思ってやったまでよ」

ジュリアを含めた3人、ポッカ～ンとあの恐ろしい名演技をした包帯男に気を抜かれた。

（あ・・・在り得ない・・・本当に悪魔に見えた・・。　嘘・・だったのか・・）

頬に薄い掠り傷と、腕に刺し傷を持ったジュリアは。　直ぐに気を取り戻し。

「ケイ、これからどうするの？　マルフェイスの居る所は、旧美術館の廃神殿が在る場所の地下よ。　此処は、街中に近い市内地だわ・

・」

Kは、書かせた紙を見ながら。

「明日、朝一で行こう。　ジュリア達も疲れているし。　あの悪党共を教皇庁に送らなければ成らないし。　マルフェイス親子も、おいそれと隠れ家から出て来れないからな。　無理する必要無いさ。　居場所が解れば、今夜は十分」

「だが・・」

言い掛けたジュリアの前に、Kは人差し指を立てた左指を出して床を指し示し。

「未だ、この屋敷はさっきの襲撃で怯えている。　君は当主。　使用人達を落ち着かせるのが、先ずの勤めだろう？」

「・・・」

ジュリアは、それが当然の事だから返す言葉は無い。　さっきの襲撃で、怪我人の手当てをしてくれたのはロザリアだ。　２０年前の事件からの尾を引いて、今に至るのを嘆いていた。　メイド達も怯えて、礼服の剣士達も大怪我をしている。

そこに、大女の聖騎士が。

「ジュリア殿、このお方の云う事にも一理ある。　もしや、また襲撃が無いとも言えまい。　私は、今夜は泊めさせて貰う。　公爵家筆頭のブルーローズ様のお屋敷を堪能させて貰おうかな」

老練の聖騎士も。

「ウム、私も心配だから泊まる。　この上、ジュリア様を失っては面目が立たぬ。　皆、一日休めば落ち着くだろう」

ジュリアは、二人の心使いが嬉しかった。

Kは、ジュリアに曲者の書いた告白書を渡し。

「明日に動け。　俺は、仲間に会って来る。　いい加減、放ったらかしも悪い。　チームの面々に、顔ぐらいは見せないとな～」

と、玄関口に片手をヒラヒラさせて行くK。

ジュリアは、仲間二人を泊めて、尚もKに居て欲しいとは恥ずかしくて言えぬと思い。　切ない顔をして包帯男を見送った。

K特別編　セカンド　6（後書き）

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

すみません・・・；＞；

ラストが、製作して行くと恐ろしい文字数で、本文を全文載せられないので、２・３回に分けます　；人；

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　セカンド　7

K特別編：理由

18深夜の奇襲

Kは、最初から予定していた通りに動いた。　ジュリアの館で思わぬ襲撃が起こり。　少し遠回りでは有ったが、マルフェイスの居所を突き止めた。

そして、もう・・・酒場に客がが疎らにしか居なくなる深夜の入り。　商業区東側の文化建造物が密集する建物群の一つで。　老朽化が激しい石造建築の旧神殿博物館を、ヴァイオレット率いる手勢５０人が包囲した。　マルフェイスを捕らえる為に、押し入る事にしたのである。

事前に。

教皇庁で、“開かずの間”と常々囁かれる部屋で、Kとヴァイオレットが相談していた。

紫色のピアリッジコートに着替えて、鞭を片手に出発の準備を整えたヴァイオレットが。　貴賓室の様な内装素晴らしい部屋の壁際、リンドウの花を象ったグラスランプの間近に佇むKを見て。

「良いのか？　妾には、ジュリアに事を任せろと言うていたのに・・」

窓を見るKは、剪定された植木を見ながら。

「予定は、変更される。　嫌、あの危ない武装集団が相手と成れば、聖騎士では部が悪い。　今更、怪我人や死人を出した処で何にも成らないさ。　下手に、暗殺者のトップでも居て見ろ。　全員殺される」

ヴァイオレットには、どうも4・5年前のKと、今のKは違って見える。　今の方が、随分と甘く見える。　前は、もっともっと怖かった。

（確かに、前も居たな。　暗殺者のトップである“デス・ストイケル”・・・）

暗殺業界には、他の危険な集団や悪の冒険者集団とは全く違う組織形態を持つらしい。　そして、その暗殺成功率や、仕事の成果で極めて実力主義的な称号社会を築いているのだとか。　その、最高に君臨する称号が、“デス・ストイケル”。　意味は、古代に現れた死神王の名前だそうな。

ヴァイオレットも、4・5年前のエロールロバンナ暗殺計画の阻止に関わっている。　その時は、Kとヴァイオレットの二人に、Kに従っていた冒険者4名が一緒にアジトを奇襲したのだが。　その死神王の称号を持った暗殺者が一人含まれ。　ヴァイオレットが殺されかけた。

あの当時のKと、その相手の暗殺者の実力は互角に近かったが。

一瞬の早業で、Kが相手を斬った。　この時にKは暗殺闘武の真髄を会得し。　今に扱う技のアレンジを考えた。　正直、ヴァイオレットが見るに今のKの実力は、あの昔の比では無いと感じている。

（変わる物だな・・・人は・・・）

4・5年前のKなら、ジュリア達に手柄を譲る事もしなかったし。　ジュリアなどが殺されても仕方なしと思って居ただろうと思う。　人の命を考えるKが、ヴァイオレットには新鮮と云うか・・、不思議だった。

さて。

まだ、風に水気（みずけ）が纏わり。　北風が冷たい。　恐らく、陽が昇り出す早朝には、また雨が降るかもしれない中。　Kは、ヴァイオレットに神殿の包囲を任せて、一人で神殿に踏み込んだ。

ヴァイオレットも待っている性分では無いので。　何時もは自分と一緒に、人ごみの社会に隠れて生きる部下の中でも、相当な遣い手5人の内、3人は包囲に残して。　2人を連れて、Kの踏み込んだ後を追った。

この神殿の地下には、広い地下美術館が有った。　今は、もう伽藍洞だろうが、潜伏するには持って来いの場所である。

人が見上げる程の大きな正面入り口はもう閉ざされている。　侵入するのは裏口から。

「・・・」

広々とした何も無い、埃だけが溢れる神殿内部に足を踏み入れたヴァイオレットは、暗い前方からバタバタ・・っと何かが倒れる音を耳にし。

「何者だっ?!!」

と、誰何する男の声が直ぐに、“うぐっ”っと呻き声に変わるのが解った。

「ヴァイオレット、入って来るなら雑魚を縛ってしまえ」

Kの声が、暗闇の中前方から聞こえた。

ヴァイオレットは、直ぐに胸元に輝くピンクサファイアのペンダントに手を翳して、魔法の詠唱を行うと・・・。急激に、光を放って明るく見せる“明かり魔法”が・・。魔法を宝石に封じたマジックアイテムだ。基本魔法は、心得を会得するなら誰でも使える。ヴァイオレットは、魔想魔術も初歩なら扱える万能な鞭遣いなのだ。

「う゛う゛ぅ・・・」

「あぐ・・あああああ・・」

何も無い石の床に、埃塗れで転がる黒い服の男達が数名見えた。

そして、右側から闇の中で殺気が湧き上がるのを感じて。

「まだ残っているぞっ!!!　油断せずに倒せっ!!」

と、脇に従える男二人に言った。

さて。　Kはもう地下に踏み込んでいた。　ヴァイオレットの実力は知っている。　下手な遣い手など、子供の様にあしらうだろう。

だから、雑魚はあえて残した。

幅の広く、手摺りの石には美しいレリーフが彫られた降り階段を行き。　降りた場所を折れ曲がると、篝火が灯る広く奥まで吹き抜ける大広間に出た。　天井までの高さだけで、５メートル以上。　見渡す向こうの奥までは、巨木を横に寝かせられる程は有るだろうか。

明るい場所に出たKを、待ち兼ねたかの如く黒い覆面をした武装集団が取り囲む。　その数、３０人は居るだろう。　それぞれに至近戦用の短剣や長剣を持っている。

「ほう、ジュリアでは無く貴様か・・・」

Kの右手奥から、マルフェイスの声がする。

武装集団に包囲される中で、Kはその声の方を見ると・・・。

「ほほ～。　アホウが、作り物の玉座に座ってるのか」

古代の出土品で王族が使用していたと思われる王冠と杖を展示するのに使われた、イミテーションの金鍍金の玉座が、この広い間の中央に備わっていた。　其処に、マルフェイスが王様気取りで、杯片手に座っていた。　隣の王妃の玉座には、マリックがぞんざいに座っている。

マルフェイスは、ギラギラした眼をKに向け。

「喧しいわっ！！！！　このゴミクズがっ！！！！」

Kは、苦笑して。

「フッ、そりゃ～お前だろう。　駄目人間」

マルフェイスは、Kの口答えにイラっとしたのか。　憎しみ染みた目を向けて。

「オランドっ！！！！　ズタズタにしてしまえっ！！！！　逃げる時に、ジュリアにお前の屍を見せてやるっ！！！！　殺せっ、殺せぇぇっ！！！！」

マルフェイスの言葉に合わせて、マルフェイスの居る方から武装集団の間を抜けて一人の男が姿を見せた。

その男の右手にある黄色い刀身の剣を見て、Kは軽く頷き。

「ほ～。　“フランヴェルジェ”ね。　中々いい～剣じゃないか」

覆面をせず。　訝しげな引き締まる面構え、鋭い眼光を湛える瞳、褐色の肌。　特徴的に面長な顔は、一度見たら中々忘れない顔である。　黒いスカーフを首に巻き、黒いYネックのシャツ、黒のズボン。　身体には、軽くて耐久性に優れたベルト型の交差する金属軽鎧を着ていた。　オールバックの髪は、クセで後ろの彼方此方に纏まって伸びている。

「お前、何者だ」

低い枯れた声でオランドと呼ばれた中年の剣士は、この状況で余裕過ぎるKに問う。

半身でオランドを見るKは、薄く笑った。

「お前の仲間・・、あ～槍を遣ってた大きいの。　簡単に此処の事をゲロしたぜ」

すると、オランドの顔が険しく成った。

「何をした・・貴様」

拷問でも耐える訓練を受けた者達の口を割らせるなど、中々誰でも出来る物では無い。

「さ～な。　俺に勝てるなら、教えてやってもいいぜ」

「・・・」

オランドが黙って剣を構えた。“フランヴェルジェ”は、別名を“火炎剣”とも言う。　炎の如く刀身が波打って、大剣の部類に入る重量級の剣だ。

だが、Kは構える事もせず。

「全く、暗殺者紛いのゴミ共が。“キル・リーパー”の力も持たない奴等が、挙って屯ってプロ気取りとは。　見てて泣ける。　それで、俺に勝てるのか？」

と、眼を細める。

「っ！！！！」

オランドの顔が、一瞬にして驚きに変わった。

「なっ・・なんだっ？」

「うっ・・後ろ？」

「いやっ、横だっ！！」

武装集団達が俄にザワつき。　Kの居る方では無い方向を見たりするのだ。

急に乱れ出す武装集団に、不安を覚えたマルフェイスはうろたえて。

「なっ・何をしておるのだっ！！！　早く斬らぬかっ！！」

しかし、Kを前にしたオランドの額には、早くも脂汗が滲み出す。
恐怖を纏うこの威圧感、闇夜に紛れて音も立てない足音、本人から全く気配が感じられない。

（こっこの男・・・本物の・・・暗殺者っ？！！！）

鍛錬を積み、戦う事を繰り返す中で気配を感じられる様になると達人だ。　だが、Kの気配が辺りの何処からでも感じられる。　目の前に一人しか居ない筈の気配を、自分達の背後や横から感じるなど有り得ない話・・・。　だが、Kの気配は、恐ろしい存在で四方八方から届いて来る。　生じに強い者ほど、その存在を感じれる。
オランドは、Kが何故にジュリアの家に差し向けた手勢の半数の刺

客達を潜り抜けて来たか。　漸く理解した。

（ま・・・負ける・・・）

動けぬオランドは、絶望的に確信した。

Kが地下へ降りてから、少しの時間を置いて。　ヴァイオレットが、5・6人の武装集団を倒して部下二人に捕らえさせている間に地下へと降りてくると・・。

「まあ・・・」

四方の壁に、跳ね飛ばされたのか、動けずに蹲る武装集団の者共が呻いている。　そして・・・。

「ハア・ハア・・ハア・・・はあ・・・はああ・・・」

両腕を斬り落とされて逃げようと床を這いずる褐色の肌をした男を見つける。　オランドである。

（彼はっ?!!）

眼を移して見れば、金鍍金の王座の前でKはマルフェイスの服の首根っこを掴み。　マリックを地べたに這わせて踏み抑えているではないか・・。

Kは、持ち上げたマルフェイスの顔を睨み。

「お前等、舐めたマネして騒がせやがって・・。　刑でも喰らってあの世に落ちろ」

逆に、マルフェイスが持たれて必死の動きで暴れながら。

「うるさいっ！！　下郎っ！！！　この私を簡単に刑死させる事が出来ようものかっ！！！　後で、吼え面かかせてやるっ！！！！」

辺りを見回しながらヴァイオレットが、Kに寄ろうとした時。

「お前・・・まさか・・・」

マルフェイスの迸った言葉に、パッとKが反応した。　何時ものいい加減な口調とぞんざいな態度をガラリと変えて、マルフェイスの顔を覗き見る様子が真剣に成る。　何故か、マルフェイスの横顔を一点に見つめていた。

ヴァイオレットは、それを見て思わずグッと踏み留まる。

（はっ・・・この様子・・・、前にも・・在った様な・・・）

ヴァイオレットが歩みを止めたのは、昔の思い出がフラッシュバックしたからだった・・・。　Kと、セルフォワージュの戦いは、逃げるセルフォワージュを追って北の石窟寺院の廃墟に追い込んでの壮絶なモノだった。　その時、セルフォワージュとKのやり取りで、ヴァイオレットは似た会話を耳にした記憶が在り。　Kは、その時に何かを悟ったハズだ。

（・・・何だ・・この・・胸騒ぎ・・）

ヴァイオレットは、何かまだ何か明かされていない事実が、不穏な調べを奏でて何処かで笑っている様な気配を覚えて気持ちが悪く成

った・・・。

１９権化の血統

まだ、深夜も深まり明け方までは１刻（略２時間）は残す頃。　早くも、冷えた気温で冷たい雨がまた降り出した。

シャラシャラとメロディーを奏でる雨音が幽かに響く教皇庁内を、ヴァイオレットが忙しく歩く。　手には、“封印文書”の文字が書かれた封筒を含む書類と、別に何かブ厚い辞書の様な物を持っていた。

「・・・」

ヴァイオレットの表情は、かなり真剣だ。　今日の夕方に、大臣達やジュリアの前に姿を見せた時よりも険しい顔付きである。

早足で教皇庁北西の別塔にある地下隔離牢屋に向かうべく足を急がせていた。

実は。　マルフェイス一味を捕らえて戻る馬車の中でKは、ヴァイオレットにある相談をした。

「ヴァイオレット、頼みが在る」

「ん？　添い寝か？」

誘惑の眼差しを向けて戯言を漂わすヴァイオレットを、Kは無視して。

「俺に、マルフェイスを取り調べさせてくれ。　もしかすると、とんでもない事態に及ぶかもしれないからな・・」

真面目な言い草で腕組みしたままのKは、馬車から覗ける小窓を見つめている。　走る馬車の速度が意外に早く、窓に付いた雨が直ぐに糸の様に伸びた。

「・・・」

普通なら、こんな願いは通る事では無い。　しかしヴァイオレットは、数年前にKの捜査能力も、把握・理解・推理能力を恐ろしい程に見せつけられた。　この、今のKの言葉に、さっき旧美術館で感じた不安が、不協和音を鳴り響かせ始める。

（何か在る。　まだ・・、前の様に何か在る）

ヴァイオレットの脳裏にこの言葉が繰り返された。　だから、馬車が教皇庁に到着するなり、捕らえた一味やマリックと、マルフェイスは別にした。　普段は決して使われない別塔にある隔離地下牢に移したのである。

自分の腹心護衛の男すら脇に歩かせずにヴァイオレットが、急ぎの歩きで地下に向かう。　螺旋階段を降りて暗い小さな篝火のみが照らす地下廊下を歩いて行く。　離れの別塔にある地下牢は、外からの入り口が無い。　この地下通路を行く以外に行く手段は無いのだ。

昔から、封印文書に成る様な政治的な大事件などの時のみ使われて来た経緯を持つ塔である。

そして、Kとマルフェイスはその塔の地下牢が広がる地下一階、埃と蜘蛛の巣が蔓延る牢屋が並ぶ中でも、一番奥に在る鉄の扉が分厚い禁固牢屋に入っていた。

「・・・・」

部屋の中、入り口の反対の壁際に置かれた古い机。　その机を前にして黙って座るK。

「このワシを、一体どうする気だっ！！！　薄汚いミイラ男めっ！！！」

小さく痩せた身体に似使わない太い怒声を度々上げるマルフェイスは、蓑虫の様にグルグル巻きに縛られて、冷たい床に横たわっている。

Kは、ヴァイオレットの足音を遠くに聞いて。

「どうもこうも無い。　お前の全てを暴くだけだ。　全く、ふざけているのは現実のみだ」

マルフェイスが、睨み目でKを下から見上げる時・・。

急に重たい鉄の扉が押し開かれ、ヴァイオレットが紫のピアリッジコートをはためかせて中に入って来た。

「持ってきたぞ。　頼まれた物だ」

Kは、ヴァイオレットからその物を受け取ると。

「君以外は人払いしろ。　聞かれては不味いかもしれないからな」

Kは、ロウソクの入った様な作りのカンテラに灯る明かりの下で、その手渡された書類を開きだした。

「・・・」

ヴァイオレットは、重い鉄の扉の外に居る僧侶衛兵を回廊の方に行かせてから、また中に戻る。

それから、僅かに沈黙の時が流れた・・・。

夜の氷雨は心地の良い子守唄だ。

アンジェラの家では、畑仕事手伝う依頼を請けて来ているステュアート達が、一同横に並んで布団と枕を並べながら床で寝転がっているし。

襲撃を掻い潜ったジュリア達も、気を落ち着かせる為に少し酒を含んで長い2日間の疲れを眠りで癒す。

誰も、Kがヴァイオレットと極秘の調査をしているとは思わない。

冷たい雨が降り注ぐ空の彼方に、秋の訪れと共に遅くなり始めた夜明けがもう少しと云う頃。　Kは、読んでいたブ厚い本を閉じた。

「ナルホドね。　マルフェイス・・、てめえ・・どうしてもジュリ

アの家柄と縁結びしたかったらしいが・・。　理由は・・、お前の生まれだろう?」

マルフェイスに背を向けたまま、Kは静かに言う。

「・・・、何がだ」

低い声を出したマルフェイスは、急に警戒した顔付きでKの背中を睨んだ。

マルフェイスを見下ろす形で、壁に腕組みで背凭れていたヴァイオレットは、横顔のKに。

「何が解ったの?」

すると・・・。　Kはゆっくりと立ち上がり、椅子をマルフェイスの方に向けて座り直した。　足を組み、ゆったりと据わると。　顎で、マルフェイスをしゃくり。

「コイツ。　マルフェイスは、恐らくメリッサの実の子供だ」

「えっ?　・・・・・」

ヴァイオレットは、サラリと言われた言葉の意味に理解が着いて行かなかった。

二人が見下ろすマルフェイスは、Kの言葉で俄に横を向いて狼狽した様子が顔に見える。

マルフェイスを見て、Kは淡々と語る。

「お前の男爵家は、今に存在し無い消えた一家だ。　１５０年前に子孫が絶えた家に、何で今更跡取りが出来るンだ？」

「・・・」

黙るマルフェイスは、聞きたくないのかソッポを向く。

「まっ・・真か？」

驚き問うヴァイオレットに、Kはブ厚い辞書の様な物を後ろに見て。

「爵位名鑑に載ってる。　恐らく、メリッサの指示で誰も注意しない様に同じ名前の家が二つに枝分かれして存続していた様に見せかけたんだろう。　何せメリッサは、“ヴァージン・エンプレス”と異名を受けた潔癖の女傑のハズだからな。　子供が、しかも隠し子が居たと成っては、折角の清楚さが消えてしまう。　メリッサは、気位もプライドも異常に高い人だったらしいと云うじゃないか」

「しっ・・しかし・・それだけで・・メリッサ様の御子とは言えないハズ・・・」

ヴァイオレットもうろたえる。　メリッサの子供と成れば、その処断は教皇王の采配に委ねられる。　罪に問うことは可能だが、皇族の死罪の命令は教皇王にしか権限が無いのだ。

Kは、マルフェイスの首筋に顔を向けて。

「確証は、奴の首筋だ。　酒でも飲ませてみな・・。　いや・・あ～、興奮させるだけでもいい。　赤い、二重螺旋の痣が浮き出る」

急にマルフェイスはもがき暴れて、Kの話に動揺の様子を強めながら。

「なっ・・何を言い掛かりをっ！！！」

慌てるマルフェイスを見たKはカンテラを持って、給油ランプの明かりをマルフェイスの近づけて。

「ホラ、見てみろ。　急に本人が慌てた御蔭で、とぐろを巻いた蛇がぶら下って下に伸びる様な痣が見える」

ヴァイオレットは、マルフェイスの脇に屈んで、もがくマルフェイスの襟元を引き出した。

「なっ・・・・ほ・・本当に・・・」

「みっ・見るなっ！！！！！　この薄汚い下郎共めっ！！！！！」

喚くマルフェイス。

マルフェイスの襟を戻して離れたヴァイオレットに、Kは椅子に座り直してカンテラを机に戻し。

「この痣が浮ぶのは、メリッサの兄妹・姉妹の中でも、メリッサと末の妹のセルフォワージュだけだ。　俺が、数年前に斬ったセルフォワージュの首筋にも、この痣が在った」

「！！！！！」

サラッと語ったKの話に、マルフェイスは慄くばかりの驚愕の顔を見せて。

「お・・・お前・・・今・・・なんて言ったあああああーーーーっ！！！！！！！」

マルフェイスの怒声が、部屋に響いて共鳴し続ける。

彼を見下ろすKは、冷めた目を向けて。

「数年前、教皇王の暗殺を企てていたセルフォワージュを斬ったのは俺だ」

マルフェイスの顔が、急激な興奮と憤怒によって噴出した汗に塗れ。
ブルブルと震え出す。

その様子を見たKは、自分の斬ったセルフォワージュとマルフェイスの間に、何らかの親交が在ったのかも知れぬと思いながら、ヴァイオレットに向かって。

「覚えてるか？　死に際に、セルフォワージュが言ったセリフ・・」

“姉上の子に教皇王を継がせて・・・我が・・・一族で支配を・・出来たものを・・・”

ヴァイオレットは、Kが断崖の岩場で斬られたセルフォワージュの断末魔の声が蘇る想いがする。

「そ・・そんな・・まさかっ・・。　あ・・あの事件から、繋がっていたのか・・」

足持ち上げ膝を両手で抱える様に仕草を変えて、Kは頷き。

「あの暗殺未遂の時。　俺は、エロールロバンナに教皇女王から失脚させられたメリッサの情報を集める過程で、ある老婆と会った。

　メリッサの元お傍周りで、失脚の少し前に突然の解雇を言い渡されて国外退去に成った人さ。　ほとぼりが冷めて、スラムに隠れて住んでいた。　その老婆の話だと、メリッサはかなり若くして教皇女王にさせられた。　見目が綺麗で、礼儀正しく真面目な性格だから、“処女の聖女”と言われたとか。　だが、就任してから2・3年後、晩餐会に招かれた折にあるペテン師で吟遊詩人を偽る美男にメリッサは一目惚れしたらしい。　そして、あろう事か。　夜な夜な教皇庁の奥で、“逢引”ならぬ“交わり引き”をしてたらしい」

知られざる教皇女王の秘め事に踏み込んだ話にヴァイオレットは、マルフェイスを見下ろして。

「それが・・・」

「ああ。　そのペテン師男。　凄く顔立ちが綺麗で、女性の扱いは凄かったとさ。　まだ若いメリッサを虜にし。　メリッサを誘惑しては金品をせしめ、メリッサが老いた傍周りを首にして、若く美しい女性を傍周り選ぶと、その傍周りをも誘惑してたとか」

「な・・・なんと云う・・・堕落だ・・」

唸るヴェイオレットは、マルフェイスの顔をマジマジと見た。　マルフェイスは、メリッサにも父親にも似ていない気がする。

続けるKは、マルフェイスの眼を指差し。

「コイツも、メリッサと同じ緋色の入った目だ」

見られるのを嫌がって顔を背けるマルフェイス。

マルフェイスの顔よりも、ヴァイオレットには気に成る事は話の続きだ。　Kに寄り。

「で、どうなったのだ・・・その後は・・」

「コイツが存在する通り。　メリッサは身篭ってしまったとさ。その年は、メリッサは体調不良で公務もしないで、只管に大きくなったお腹の自分を隠した。　だが、メリッサの懐妊を知っていたメリッサの一族は、これ以上のスキャンダルを恐れてそのインチキ吟遊詩人を殺してしまった。　激しい思い入れで愛していたメリッサの嘆きは非常な物で。　出産間近で食事を取らなくなったりして大変だったらしいぜ」

ヴァイオレットは、公に出来ない生まれのマルフェイスだったと理解した。

更に、Kの話では。　出産後、直ぐにマルフェイスは別の子供の居ない元学者の家に里子に出されてしまい。　母親に成ったはずのメリッサは、わが子を抱けなかった。　母性の向ける矛先を失い、愛情を向ける矛先を失ったメリッサは、美しい男女を侍らせて異常な性愛を交えた寵愛をする様になったらしい。

Kは、歴代の爵位名鑑を脇に取り。

「歴代の名鑑に、マルフェイスの名前の血筋の系統図は途絶えて今

に続かないのに。　教皇庁の登用記録には、しっかりと男爵の爵位で登用している。　この頃はメリッサが、４０半ば・・か。　恐らく、コイツがこっそり名乗り出たか。　メリッサが、秘かに探したのだろう。　普通なら爵位が有っても、伯爵以上か、大學を修めてないと登用時にいきなり各省の直属配属は有り得ない。　なのにマルフェイスは、２０歳前後の若さでありながら、最初っから財務省の下級に登用されてる。　親の七光り様様だろう」

ここまで話したKの話は、略事実なのだろう。　だから、マルフェイスは居直ったのか。

「ベラベラと喧しいっ！！！！！　親の威光で、そうなったのさっ！！！！！　何が悪いっ！！！！　えっ？！！！」

その時だ。　Kは、スッと眼を細めて前屈みに成り。　マルフェイスの眼を射る様な視線で睨みつけ。

「じゃ～聞くが。　２０年前、お前はジュリアの父親を告発したな。　総括運営資金の流用だとか」

「ああっ！！！　したともっ、正義の告発さっ！！！！！　何ぞ文句でも有るかっ？！！！！」

と、内心にKの鋭い眼光に怯えながら、マルフェイスが強気に見せかけて言い放った直後。　響いた声が静まる時に、Kが問いを返した・・・。

「ぐぅっ・・・・」

マルフェイスは、瞳をガバッと開いてギョッとした眼をKに向ける。

ヴァイオレットも、Kとマルフェイスを黙って交互に見た。

マルフェイスの顔が、明らかに血色を失い始めて震えている。

ヴァイオレットは、今まで隠され続けてきた陰謀の本当の尻尾を見た気がした。

Kは、立て続けにマルフェイスを問い質す。　恐らく、こうではないかと推理した事を全てマルフェイスに問うた。

すると・・・。

「は・・・ははははは・・・まっ・まさか、其処まで悟られるとはな・・・」

マルフェイスは、グッと顔をヴァイオレットとKに向けて。　遂にメリッサ・セルフォワ＝ジュと血縁が在るのを感じさせる言葉遣いで、悪魔の権化の様な事をさも正当な理由が在ろうかとばかりに言い出した。

聴いているヴァイオレットは、マルフェイスも含めてやはりこの一族は頭が狂っていると認識した。　狂気をさも自分の権限の如く言うマルフェイスに、気分を悪くする思いが湧いたのである。

そして、マルフェイスが全てを言い終えて。　高笑いをして転がりながら権威失墜したジュリアの家の事を嘲笑う。

だが、その部屋に鳴り響く笑いは、突然として途絶えた。

そう・・・、終わったのである。

２０、その後・・。

さて、特別な任務の遂行を行う為に、あの悪党達から襲撃された翌日。　ジュリアは気合を胸に秘めて、レイチェルや聖騎士二人と一緒に登庁した朝。　牢屋を見守る役人達に、捕らえて連行して来た悪党共を引き渡す過程で知った事実は。　昨夜に、マルフェイスが破壊活動容疑で旧美術館にて斬られて死んだと云う話だ。

Kの情報で、逃がさぬ為にヴァイオレットが差し向けた密偵が気付かれ。　マルフェイスが、逃亡を画策し。　駆けつけたKと、ヴァイオレットの率いる鎮圧部隊との間で、激しい戦闘に成り。　爆薬を使おうとしたマルフェイスをヴァイオレットが斬ったと云うのである。

マリックも捕まって居たので、ジュリアは牢屋に様子を見に行くと。　精神が変調を来たして異常に成っていた。　涎をながして、ず～っとヘラヘラ笑って居ながら天井を見ている。

（余程に凄い戦いだったか・・・、こう見ると哀れな・・・）

さて、朝からジュリアを長として緊急編成させた特別部隊の詰め所となる総括執務室には、こっそりと不正を告発・告白する者が休み

無く訪れ。　古い不正の話では、３０年近く前の物まで出て来た。

いざ仕事を始めて見れば、告発や告白された不正の事情聴取や、調査記録を作り。　聞き込みや、裏づけ捜査に至るまで考えると。２０００人を超す捜査員が、総動員で動かなければならない程の大忙し。

不正が事実上で発覚してしまえば、緘口令を如いても通常業務に支障が出る為に。　教皇庁全体は、平穏な何時もの様子とは違ってしまった。

ヴァイオレットは、自分のその存在を表に出さない。

また、ジュリア達、上級役人の部類に入る者は、弾劾総務長官の事を表に出せない訳で。　外に語られる名前は、ハルフロン以下大臣だったり、ジュリアなどの聖騎士だったり・・。

何より、聖騎士団長８名並びに、総師団長・副総師団長が賄賂と証拠隠滅の犯罪に手を染めて居たのだから、呆れるしかない。　この１０名をこっそりと告発に来た兵士・騎士の数だけで２０を超え。　罪の擦り付け合いを画策した団長達が来て、総師団長を悪く言いに来たり。　その逆も在り。　ジュリアは両方を厳しく裁くことを念頭に、捜査員を任命した。

こうなると全ては役人の出番と成る訳だ。　功労者のＫは、全ての事が手を離れたのでのんびりしようと思ってジュリアの元を去ろうとしたのだが・・・。

「こらっ、手伝って」

と、ジュリアに留められる。

「はあ～。　冒険者を“ロハ”で働かせるのかよ・・」

ぞんざいな口調で、疲れを見せるK。　思いつきの一撃でジュリアは、預けられた捜査費用の一部を出す条件で、不正に関わった末端の悪党などの確保や、情報収集を依頼にすると。

夕方前には、正式な依頼に変わり。　農家の手伝いを終えて戻って来たステュアート達と、放火をしていた魔術師を捕らえた冒険者チーム、他に別のチームも加えた3チームが採用されて。　次の日から聖騎士や、役人達と交わって捕り物をしたり。　事情聴取に、街中を歩き回ったり。

遂にまた一緒のチームに成って、のほほ～んと動くK。　セシルは、ワナワナする訝しげな横目にてKを見て。

「アンタさっ！！！　お見舞いに行くっていって何やってたのさっ！！！　役人が、アンタに敬礼してんじゃんっ！！！！」

「知らん知らん・・・見ない事にしよう」

Kは、なるべく関わらない様にする。

しかし、ジュリア宅の襲撃事件や、ゴルドフの連行、２０年前のエリザベートの事件に、マルフェイスの元へジュリアが会いに行った時などで、Kは聖騎士に見られている上に。　その手腕を見せている。　仕事の手解き上、礼儀や節度を重んじる騎士や役人は、Kがジュリアだのハルフロンだのエロールロバンナと対等に向かい合う様を見て来ているだけに。　自然とその態度は敬意が現れる方向に

行く訳で・・・。

「ご苦労さまですっ」

教皇庁に戻って来る度に、Kが敬礼を受けるのが、合流したステュアート達には異常に見える。

（あ～・・・今回は、派手にやっちまったな～・・・）

Kは、仕方無さそうにヘラヘラと笑うしかなかった。

そう。　Kは、ヴァイオレットに事実の隠蔽を指示したのだ。　ジュリアがこれ以上傷付く必要は無い。　諸悪の根源であるマルフェイスを、Kはあの牢獄の中で斬った。　煙るが如く血の臭いが充満し出すあの牢屋で、唖然としたヴァイオレットにKは。

“さ、早くマルフェイスの遺体を片付けてしまえ”

“なっ・・何だと?”

“ヴァイオレット、この事実にジュリアが耐えられるか?　エロールロバンナが、簡単にマルフェイスの処断を決められる冷たい男か?　終身刑に処するのが関の山だろう。　マルフェイスは要らない一族だが。　生きて居れば、悪用する輩が現れるやもしれない。　こんな事実は、闇に葬るのが一番だ。　事実を知らないマリックなら、普通に刑に問えるはずだ。　マルフェイスも、この事実は誰にも言えなかったハズだ。　迂闊に洩らせば、エロールロバンナを護ろうとする回りが動くからな”

ヴァイオレットは、政治を考えて眼を閉じて従った。　エロールロ

バンナの教皇王就任で、不正も爵位政治も落ち着いて、国民主体に政治を考える時代へと流れを変えつつ在る。　これ以上の負荷をエロールロバンナに掛けて、尚且つメリッサの隠し子と云う混乱の原因を世に知らせる必要は、何処にも無いと考えた。

この日は、K達が遅くまで捜査や捕り物に動き。　ジュリアもまた、日が暮れても少し残って整理と報告書の製作に働いていた。

それから、3日後。　夕方。

ジュリアが指揮する部隊の詰め所は、マルフェイスやジュリアの父親が総括長官を勤めて居た場所に置かれた。　ヴァイオレットの指示である。

しかしジュリアは、マルフェイスが座って居た高みの壇上デスクには座らず。　使われていない円卓デスクを持ち込んで、あの大女の聖騎士と、襲撃の際に脳震盪を起こした若い聖騎士、そして別の中年の聖騎士の3人に。　書類作成の手助けや、財務管理書類の説明をしてくれる政務官など10名で、色々と話し合いを込めて仕事をしている。

「ジュリア様、今日はどうしますか？」

老いた政務官の一人が、暗くなった外を細長い窓から見て言う。

「ああ、もう暗くなったな。　今日は、此処までにしよう。　夜の整理も、毎日では疲れる」

皆、その声に片付けの支度にかかる。

久々にピアリッジコートの井出達のままにジュリアの仕事は続く。

「こう書き物ばかりでは、鎧が重く成りはしないか心配だ」

と、苦笑するジュリアは、出来上がった報告書を携えて。　皆を帰してから壁のランプの火を落として、一人でヴァイオレットの詰める“危亡の塔”に向かった。

これが、毎日の日課に成りつつあるジュリアであった。

毎日、徹底的に調べ上げた物のみジュリアは書類にし、ヴァイオレットに差し出す。　ヴァイオレットがそれを見て、頷くならハルフロンの元に出して裁判への立件と成る。

ヴァイオレットとジュリアとハルフロンは息が合うのか。　言い争いは無かった。　父親と兄の汚名を雪げるとジュリアは勇み。　その仕事振りは、“凍眼のジュリア”に相応しいものだったのだ。

さて、更に数日が過ぎた。

K達冒険者は、１０日間の契約でその調査・捜査に加わった。　チームとして請けた以後。　Kは差し出がましい行動は一切しなかった。

各大臣達、ジュリアの纏める捜査・調査部隊の仕事振りにより。古い不正を中心に、かなりの事件が炙り出ると予想され。　自己申告猶予期間だけで告白・告発された事件が１５０件を超える。

全て、順調に思えた。　そう、誰の眼から見ても。

そして。　ステュアート達とKが仕事を終える日。　様々な出来事が、津波の様に押し寄せた。

その、1つが。

「ケイ殿、迷惑をお掛けした。　真に・・真に、申し訳ない」

チーム“コスモラファイア”として、教皇王の身体を休める自室に呼ばれた。　ステュアート達の目の前で、教皇王エロールロバンナがKに頭を下げている光景。　皆、度肝を抜かれる思いだ。

（あああ・・・頭下げられてるぅぅ・・・）

蒼褪めた顔のセシルは、ステュアートの首を掴んでガクンガクン振っている。

（うぐぐぅぅ・・・じ・・じぬぅ・・・）

ステュアートは、教皇王への謁見とKの存在の偉大さに驚き。　更に、セシルに首を染められて死に掛かっていた。

オーファー・エルレーン・アンジェラは、もはや動ける状態では無く。　カチンコチンに固まって直立不動のままに。

麗らかに晴れた秋空が、開かれた窓の空に雲一つ無く広がっている。
　長閑な昼下がりだ。

レイチェルに世話されながら、椅子に腰掛けてKを見上げる教皇王エロールロバンナは、随分とやつれた様子であるが。　立ち上がれるまでに回復しただけでも、幾分かは回復に向かっていると感じて

良い様だった。

Kは、礼儀も何も無い立ち方でポケットに両手を入れながら。

「アホ。　俺に礼を言うなら。　先ずは、ハルフロンやジュリア達、そして、身を削って働く役人達にしっかりと姿を見せれる様にしてから言え。　ンなフラフラで、レイチェルに傅かれて。　お前は引退後の老人か。　国民思想の政治を、ハルフロンと一緒に目指したアンタが、後任も儘成らないままで何してる」

アンジェラは、“アホ”と教皇王に向かって言ったKに卒倒しそうに成って。

（アホってッ！！！　アホって言いましたわっ！！！）

と、オーファーの首を掴んでガクンガクン。

（ぬ〝ぐぉっ・・・・せ・・せめて・・・胸に抱いて殺してくだされぇ・・・）

喘ぐハゲ頭。

エルレーンは、死にそうな顔のオーファーを見て。

（あははは・・・青ダコだわ・・・）

と、半笑いしか出なかった。

教皇王は、献身的なレイチェルを脇に見て。

「うむ・・。　その通りだ。　何時までも、嘆いては居れぬ・・」

穏やかな笑顔でエロールロバンナを気遣っているレイチェル。

Kは、その様子を見ながら。

「エロールロバンナ、ロザリアの身柄はジュリアに任せろ。　一人で置いとくのも心配だろう。　誇り高きジュリアと、この優しいレイチェルの傍なら安心だろ？　お前に今必要なのは、ロザリアでは無く。　お前が成すべき事は、ロザリアの心配では無いハズだ」

エロールロバンナの表情が、グッと険しく成って俯いた。

「た・・確かに・・・」

「未だに、教皇庁や貴族の中では、貴族政治や権威政治に立ち返る事を望む者も居る。　アンタが、それを変えた本人だ。　悪い方に逆戻りさせない為にも、一刻も早い公務の復帰が求められる。　何時までも、ハルフロンやジュリア達に肩代わりさせるなよ。　俺が、今回此処まで動いたのは、その根を断ち切る意味も在ってだ。　死んだジョージも、エリザベートも、格差の少ない政治を期待してた。　だから、アンタの言葉をエリザベートも２０年前に心に仕舞ったんだからな・・・。　忘れるな、この悲しみと罪を」

Kは、そう言って踵を返す。

「かえる・・・・はあ？」

Kが、何時もの彼らしくキザに去ろうとしたが・・・。　泡を吹いて死にそうなステュアートとオーファーが眼に入り。

（お・・お前等・・・此処まで来て・・・するか・・・）

と、ゲンナリして呆れてしまった。

さて、更にこの日、ゴルドフの裁判も開かれた。

「判決を言い渡す。　ゴルドフ・バレンシュタイン卿、前に」

黒い壇上に伸びるデスク。　黒い黒衣の裁判官。　半円の劇場の様な裁判場にて、縄を掛けられたゴルドフは、前に進み出た。　頭の髪の毛が8割白く染まり。　観念しきった顔は、１０歳は老けて見える。

被疑者が立つ専用の小さいデスクの前にゴルドフは立つ。　もう、身に纏っているのは灰色の囚人服だった。

ゴルドフと対峙した、壇上の裁判官は。　まだ若さも残る中年の冷静な様子を見せる男性だ。

「バレンシュタイン卿、判決を下します。　そなたには、労働刑３０年に処す。　本来なら、教皇王様の姉君になるロザリア様を暗殺せしめんとした罪は死罪相当だが。　エロールロバンナ様より極刑は控えよとのお達しがあり。　下爵処分として男爵に落とし。　労働刑３０年で、意見が纏まった。　年に一度だけ、家族の下に数日帰る事を許す。　また、一からやり直す気持ちで刑に服せ。　以上」

家族も居る侯爵を賜るゴルドフだ。　全てが粉々に成ると覚悟していたゴルドフにとっては、この刑は寧ろ恩赦に近い。　ゴルドフの目頭に、熱い物が溢れた。　深深と頭を下げて。

「ははっ・・・。　謹んで、お受け致します」

実はゴルドフの嘆願で、サンチョスは無罪になって釈放されている。

他の冒険者は、執拗な質問攻めに屈して余罪を吐いてしまい。　未だに別件で取調べ中とか。

実はゴルドフは、弟を斬る気だったらしい。　もう、何時までも金を搾り取る悪い虫を生かせないと踏んでいたのだ。　しかし、弟は一行に戻らず。　Kが、ロザリアの元を訪れた。

だが、実は全ては終わっていた。

Kが、ロザリアに言ったのは。　ジョージの死もチャグリンの死も他言無用にして。　事件に関与した奴等を永久に罪から逃れられぬ様に黙って怯えさせようと云う内容だった。　そう、サンチョスがKを尾行しなければ、そこで全ては有耶無耶に終わった筈なのだ。

記憶の石をKは、誰にも知られずに秘かにハルフロンにでも渡し。　ジュリアの家の誤解だけを、ジュリアの後の手柄に加味して下爵を免れさせればいいと・・・。　生きている全員が、もう困らなければいいと思っていたのに・・・。

ゴルドフが、動いてしまった。　そして、真実へ向かう道にKを誘き寄せたのである。

未だに、２０年前事件に関連して人が動いてるとKは知り。　この事件が、まだ終わっていないのではないかと悟った。　その御蔭で、此処まで突っ走ってしまったのである。

つまりゴルドフは、知らずに墓穴を掘ったのだった。

さて。　エロールロバンナ皇と対面を終えたKは、ステュアート達を外に返し。　ヴァイオレットの詰める関係者以外は立ち入れぬ奥の塔に向かって、面会した。

「いらっしゃい」

教皇王と、弾劾総務長官のみが滞在出来るシークレットルームは、“開かずの間”とも言われている。　だが、招き入れられたKが、再び改めてその部屋を見回す限り。

（何処が隠し部屋だよ。　リッチな貴族の私室みたいじゃないか・・・）

と、呆れる。　赤い絨毯は、美しく汚れなど見えないし。　ティーテーブルは、古めの高級品。　インテリアは、全てクラシカルアンティークの寄せ集めの様だ。

「・・・、随分といい所に住んでるな」

少しだけ開かれた窓から入る風に戦ぐ白いカーテンと、花瓶。　花の香りが、Kの立つ所まで届いた。　広い部屋の奥、仕切りの先にはベットまで見えていた。

微笑むヴァイオレットは仮面を外して居る。　その顔、正しくアダマンティアランで“朝方の歌姫”と言われているスカーレットその人である。　Kを前に、マーガレットの香りのする砂糖で紅茶を煎れるヴァイオレットは、かなり女らしい素振りだ。

Kは、ヴァイオレットが二つ目のカップに紅茶を注ぐのを予測し。

「要らんぞ。　ただ、別れの挨拶に来ただけだ。　仲間も待たせているしな」

ティーポットを傾けて止めるヴァイオレットは、その言葉にカップを一つずらして。　自分の分だけミルクを入れた紅茶を作りながら。

「もう少し、ゆっくりしたら？　昔話・・・聞きたいわ・・」

ヴァイオレットの声が、何処か誘う響きに聴こえる。

窓の外に差す昼下がりの太陽の光を見るKは、過去を思い出して少し詰まらなそうに。

「俺も、あの頃に比べると変わったらしい・・」

「そうね。　凄く・・変わったわ」

「そうか・・。　だが、変わってない所も在る」

ヴァイオレットはティーテーブルに優雅に凭れ座り、紫のドレスのスリットから態と膝まで覗けるように足組みして座る。　年齢を重ねた大人の色香が溢れているヴァイオレット。　Kを妖艶な目つきで見て、緩やかに。

「へえ・・・どんな風に変わってないの？」

すると、Kは踵を返した。

「女とは1回しか寝ない・・・かな？　いや、愛した女以外はもう寝ない・・か。　じゃあ、な。　余程の事が無い限り逢う事も無いだろう」

と、退室の様子を見せる。

「えっ？　チョットまっ・・」

呼び止めようとするヴァイオレットに、Kは横顔を向けて。

「もう、“1回”も済んでるだろ？」

その言葉に、ヴァイオレットは踏み出した掛けた足が止まる。　自分の肉体に焼きついた、冷たい男との思い出が蘇った。

紅茶の香りが漂う部屋からKが消えた。

（・・・あの時は・・あんなに冷たい男だったのに・・。　変わらない・・・ずっと変わらないと思ってたのに・・・。　今度は、温かくなって・・無視？　ヒドイ・・・ヒドイ男・・）

ヴァイオレットは、フラれた思いでKの閉めたドアを見つめた。

そして、悔やんだ・・。　何で・・昔に求めてしまったのか。　今のKが、味わいたかった・・・。

K特別編　セカンド　7（後書き）

本日は、W掲載となります＾＾

K特別編：理由
エピローグ
理由と真実

Kとステュアート達は、仕事の終了を祝って市内の安い居酒屋風の飲食店に夕方から入り。　テーブル席を借りて打ち上げをしていた。

「ん～。　なんかー、なんかーね。　久々にまともに飯を食う気分だぜ・・・」

Kが、いい加減な言い方で、ジャガイモの刻み揚げをポリポリ食べながらしみじみ言う。

セシルは、ビールジョッキ片手に。

「アンタ、一体何をしてたの？　あの聖騎士様の・・え～、ジュリア様とかさ～。　凄く親しそうだったじゃない・・・」

と、言って。“ウンウン”頷いている復活した男二人を他所に、急に眼を細めて。

「まさか・・・アンタ・・、あの美人を・・何かしちゃったんじゃ～ないでしょうね？」

エルレーンとオーファーが、飲み掛けたビールグラスを止め。

ステュアートとアンジェラは、顔を真っ赤に染めた。

Kは、軽く前髪を弄り。

「ま、深い事情はご想像にお任せ～・・・」

と、言って。その場の全員を蒼褪めさせた後で。

「って、するか。高嶺のオハナ～だろうが。公爵家当主だぞ、ジュリアは」

と、塩茹でされたタコの足を千切り、ワインから出来た酢のドレッシングを着けて口に運んだ。

「ハフ～、ハフ～・・・、冗談を言わないでよっ！！！」

セシルは、一気に上昇したエロスのボルテージを怒り変えて吐き出す。

ステュアートは、まだ分けていない金袋を脇に見て。

「でも・・・、何で僕達のチームだけ報酬が・・・3倍なんでしょうね・・」

Kは、サラリと果汁の入ったグラスを片手に。

「俺が、ボディ～で稼いだ分も入ってるからな～」

また、全員がエロスの妄想に突っ走る。

漸く、一同が揃い。　世間話や、思い出話に現を抜かし。　夕日は落ちて、夜に変わった。

店の中は、集まった住人や冒険者などの活気に溢れ。　腹も満たされて、ステュアートが勘定を全て払う頃には、星空が美しかった。

「フウ～、食ったぁ～」

背伸びするセシル。

Kは、デカイ銃を背負うセシルを見て。

「お前・・・また悪化したな・・・大食い病・・」

セシルは、キィッっと睨み返し。

「パワーアップって言って欲しいわっ！！！」

オーファーとKは、並んで静かに手を左右に振っていた。

所が。

ブラブラと夜の繁華街である通りを南下して、宿を探していると。
前から、フィリアーナの刺繍を胸に見せる僧兵役人が、数人の塊で橋の下のトンネル街路を走っている。

エルレーンは、それを見て。

「や～ね～、まだ何か騒動在るのかしら・・」

Kも、力の抜ける眼で。

「まぁ～、ジュリア達のやってる一件は、年内は忙しく掛かると思うぜ。　何せ、３０年前に在った不正とか、今更に調べてるからなぁ～」

オーファーは、生じ自分の父親が大臣なだけに。

「全く、偉くなっても悪い事してはな。　ウチの父上も大丈夫かどうか・・」

と、呟く時。

僧兵役人が、ステュアート達を見て。

「あっ、居たぞっ！！！！」

と、指を指す。

Kは、眼を細め。

「いや～ん・・・な、感じ？」

先頭に立つステュアートは、理解に達せず。

「アレ、僕達の後ろ？」

と、マヌケに振り向いた。

僧兵役人は、急ぎ足でステュアート達を囲む様に向かってきた。

そして、ステュアート達と対面するや。

「包帯の男、我々と一緒に来て貰おうか」

Kは、ポカ～ンと。

「ワラス・・・ですか？」

と、方言の様な言い方で自分を指差す。

ステュアート達が、驚いてKを見る時。　息切れしそうな呼吸をした僧兵役人の一人が頷き。

「ブルーローズ様が・・おっ・・お呼びだ・・。　御主に、即刻のはっ・話が在ると・・」

Kは、ジュリアが緊急の用も無く職権乱用する女とは思って居ない。

突発的に、何かが起こったと考えるのが自然と。

「解った。　俺が、直に行くっ」

緊張した顔のステュアート達を見るKは、

「明日、斡旋所にでも居てくれ。　今夜は、ちと戻らないかもしれない」

ステュアートは、直ぐに頷いて。

「手伝う事が在るなら、幾らでも手伝います」

「ああ、解った」

Kは、直ぐにジュリアの屋敷に向かった。　一々僧兵役人と行ってられないので、単身で向かう。

夜も更け始めた頃。　Kは、ブルーローズ家の庭先の正門前でオロオロしている執事を闇夜の中で見つけた。

（あらら・・どうしたよ）

これは、徒事ではないとKは老人に駆け寄った。

「おい、どうした?」

Kに声を掛けられて、老執事はハッとして歩み寄って来たKを見て。

「あ・・あああ、たっ大変なんだっ!!!　ジュ・・ジュリア様がっ!!!」

この執事の案内で、教会風の屋敷の本館に近付いたKの耳には、何

者かの叫び声が何処からか聞こえて来た。

「なんだ、誰か叫んでいるのか？」

逸早く気付いたKに、執事の老人は歩みを止めて向き。

「ジュリア様です・・。　夕方、レイチェル様とお戻りに成られるや否や、私共の古い使用人に狂わんばかりに同じお尋ねを為さるのですっ」

「・・・何を？」

Kの見る執事はかなり狼狽している、非常に困らせた嘆きの滲む顔色。

「先代様の・・・事を」

（まさか・・）

その話に、Kはピンと来た。　いや、ジュリアがそんなに狂乱する事と云うなら、一つしか無かった。

（チィ・・・ヴァイオレットめ。　・・・嫉妬・・・か）

流石のKも、人の心は自由に出来ない。

「爺さん、ジュリアの居る場所に案内してくれ。　それから、俺とジュリアの話し合いが終わるまで、誰も部屋に近づけるな」

こうして、案内されたのは、ジュリアの両親が住んでいた二階の一

室だ。　廊下を行けば、ロザリアや泣いてジュリアを心配するレイチェルが、礼服の使用人やメイド達と共に部屋のドアを叩いてジュリアの心配を訴えていた。

ジュリアは、

「父上っ！！！　私が何を・・何をしたのですっ！！！！！　ああああ・・・兄と父上が・・私の何の犠牲に成ったのですかっ？！！！！！　どうして・・・どうして・・・私の何がああああ・・・・・」

と、狂気して泣き叫び。　すすり泣いては、もうおかしく成り掛けた声を発していた。

「おおお・・・ケイ殿・・」

ロザリアが気付いた。

頷きながら廊下を歩んで、Kはレイチェルやメイド達を見る。　部屋の前に来たKは、執事に頷きを見せて。

「ジュリアっ、俺だ。　どうした？　みんな心配してるぞ」

と、声を。

すると、部屋の中を何かが転げ回る音がして。

「ケイっ・・本当にケイ・・お主かっ？！！！」

ややハスキーな大人の声をしたジュリアの美声が、叫び過ぎて枯れ声の様に・・。

Kは、レイチェルやロザリアに。

「後は、俺が引き受けた。　皆、少し外してくれ・・。　ジュリアの為に・・」

レイチェルは、そんな事は聞き入れられないと言った顔だが。　執事の老人に抱えられ、メイド達と共に下に連れて行かれる。

Kは、皆が居なくなるのを見ながら。

「人を遠ざけて、中に入る。　鍵を、開けてくれ」

ペタペタと床を何かが這う音がして・・・鍵が・・・開いた。

（ヴァイオレットのバカが。　だが、ジュリアは其処まで弱くは無い・・）

と、想いながら、人気の消えた廊下上で、扉を開いて中に入った。

「・・・ケ・・ケイ・・」

部屋に入った目の前の床に、上着などを緩めて無防備な美女が涙で濡れた顔を呆けさせて居る。　上から見下ろすK。　ジュリアはもう何かに狂ってしまったかのように暴れたと推察出来た。　白いシルクのYシャツのボタンが千切れ飛び、ジュリアの胸が露になっていたのである。

ドアを閉め、鍵を掛け、Kはゆっくりとした足取りでジュリアの脇に屈み。

「風邪引くぞ・・」

と、肌蹴たシャツを直して胸を隠した。　着痩せするジュリアの身体は、意外なまでに括れと出っ張りのバランスが際立つ素晴らしいものだった。

（ナルホド・・・マリックとか言うマルフェイスの息子も狂うわな・・）

納得しながら、床に放置出来ないと思ってジュリアを抱き抱えたK。

「ケイ・・・ケイっ！！！！」

座らせようと抱えたジュリアが、Kの腕の中にしがみ付く。

「ふう・・・。　ヴァイオレットに何か言われたか・・」

「あう・・あああ・・・わ・・わ・妾が・・父と・あ・兄を・・・殺したと・・。　わ・妾が犠牲に成れば・・・父は・・父は失脚しなかったと・・」

ジュリアを抱き抱えたまま、Kは赤いシルクの上掛けの掛かるダブルベットに腰を降ろした。　恐らく、ジュリアの両親が使っていた物だろう。　屋根も付いた、帳の掛けられるベットだ。

泣き啜るジュリアを抱えて、Kは首元にジュリアの頭を寄せて身体を擦ると。

「これから言う事は、・・・君の心に仕舞っておきな。　誰も聞い

たって、辛いだけで・・聞く価値も無い事実だ」

ギュッとケイにしがみ付くジュリアは、震えながら頷く。　あの高潔さも、鋭い気迫も削げたジュリアは、気品溢れる只の美女だ。恐らく、こんなジュリアを眼にしたのはKや両親ぐらいな者だけだろう・・・。

全ては、あのマルフェイスがKに斬られる直前だ。

マルフェイスが、Kを睨んで鬼気迫る顔で叫んだ。

「ああっ！！！　したともっ、正義の告発さっ！！！！！　何ぞ文句でも有るかっ？！！！！」

Kは、ジュリアの父親が総括を勤めていた頃の会計帳簿が挟まった封印文書を指差し。

「マルフェイス、証拠は此処にあるぞ。　お前、自分の罪を擦り付けたな」

ヴァイオレットが、Kを見て。

マルフェイスが、ギョッとした眼をした。

Kは、またマルフェイスに身を前のめりに近づけて、眼を睨みながら。

「きったないね。　この、証拠に提出された会計帳簿。　見れば、総括長官の印が入ってるが、紙の上の帳簿名が、“財務部”に成ってやがる・・。　裁判官でも抱き込んで、ゴリ押しで総務部の会計帳簿にしやがったろ？　あぁ？　マルフェイスさんよ」

ヴァイオレットは、驚いて封印文書に齧り付いた。　確かに青い文字で、一番上の左端に“財務部”の文字が入っている。

「こ・・・これは・・」

驚いてマルフェイスに向くヴァイオレット。

Kは、ヴァイオレットの持つ文書を受け取り。

「いっか、この裁判書類の書かれた紙の上には、裁判を開いた法務部の文字と部課を現す紋章が入ってる。　どの国でも、膨大な書類が整理出来る様に。　必ず、こうゆう風に識別出来る形が取られてる。　なのに、この書類の中に残る証拠提出品の記録紙は、不正をした筈の総括部ではなく。　何故かマルフェイスの居た財務部の紙が使われている」

穴を突かれたマルフェイスは、慌てて躍起に変わり。

「そっ、それがどうしたっ！！！　書く紙を間違えただけでは無いかっ！！！」

しかしKは、言い掛かり染みたマルフェイスを見下ろして笑いが出る。

「フッ、阿呆。　此処に、お前が発見に至る経緯が書かれてるじゃ

ないか。　お前は、スタウナー氏が不正に資金を流用しているのを内部告発で知り。　役人数名と共に総括長官執務室に入った。　そして、長官の机の引き出しを見たときに、表に“総括部隠封”と書かれた総括部の帳簿用紙の一冊を見つけたと・・・」

「あ・・・」

マルフェイスは、ハッと顔が青く成る。

Kは、書かれた調書書類の文章を見て。

「お気づきでか？　総括部に配布された専用の帳簿用紙の一枚を切って、それが財務の帳簿の一枚だなんて在り得ない。　魔法による自動書記の文字が間違うなんて、在り得ない。　だって、別々の人物が、別々の場所で、これを作るんだろう？　複製を禁じる為に？　もし、魔法で掛ける文字を間違えたのなら、同じ帳簿の中に在った仮初の会計を記した帳簿用紙も、“財務”と成っていなければ成らないのに。　こっちは、ハッキリと“総括”と書かれてる。　こんなの、しっかり見てれば子供でも解る。　裁判官や捜査する役人が何人も居て判らないなんて、不正があったとしか思えない」

と、書類の表面を指で弾いた。

マルフェイスの焦った顔が、Kとは逆の方向に向いた。　母親のメリッサと一緒に、権力で秘密裏に関係者を脅迫して抱き込んだのだ。

Kは、封印文書を机に戻し。

「お前、執拗にジュリアと自分の息子の結婚を押し通そうとしてた

らしいな。　狙いは、お前の息子を行く行くは教皇王にして、お前が後ろで糸を引いてマリオネットにしたかったとかか？　公爵家筆頭のジュリアの家だ。　下爵前に結婚出来れば、爵位統合で公爵にお前が・・・いや、マリックが成れる可能性が出てくる。　更に、おまえさんが総括をしているんだものな。　エロールロバンナを失脚させれば、夢物語とも言えない現実味を佩びた事だ。　ま～ったく、お腹が黒いよ。　お前」

「うぐ・・・な・・何で・・・・」

マルフェイスは、腹の中を全て読まれている様でKが怖くなった。

「お前の性格だもの。　母親は、教皇女王で公爵家なのに。　お前は、偽りの男爵家だ。　何時までもそのままでは居られない。　爵位整理でも起きれば、偽りがバレる事もある。　そうなる前に、何処かと縁を結ぶ必要性が出るだろう。　だが、お前もジュリアの父親のスタウナー氏を失脚させて迫るとは、随分と悪知恵が働くな」

其処で、途端にマルフェイスは狂った様に、湧き上がる様に笑い出す。　マルフェイスの心の箍が外れたのだ。

当時、政治の舞台での総括長官であるジュリアの父親の信頼は、微妙な均衡状態に在った。　現教皇女王メッリサでは無く、まだ若きエロールロバンナや他の公爵と縁が深かったからだ。

だが、メッリサは事も在ろうか・・。　幼い頃から美しさの覗けるジュリアを欲していた。　そう、行く行くは自分の傍に侍らせる為に・・。　父親のスタウナーは、まだ４・５歳の我が娘を守る為にメリッサとは距離を置いていた。

実際、その餌食に見初められた貴族の若き娘や美男はジュリアだけでは無い。　中には、爵位を上げる為の奉げ者として、メリッサの元に献上された者も居たのである。

だが。　マルフェイスが国に仕官し、息子を思うメリッサは、なんとまだ年端も行かぬジュリアをマルフェイスの嫁に迎えたいとスタウナーに迫った。　公爵家筆頭の家柄と、ジュリアを両方手に入れようと画策したのである。

そして、其処に起こるのがエリザベートの事件だ。

メリッサとマルフェイスは、スタウナーの息子のハインリッヒの命を助けて、容疑を消すためにジュリアを要求。　その事を、スタウナーは相談する相手が居らずに、獄中の息子に教えてしまった。

そう・・。　ジュリアの兄のハインリッヒの自殺は、身の潔白を証明するに合わせて、ジュリアを護る為のものだったらしい。

ハインリッヒの自殺を受けて、メリッサとマルフェイスは脅しの相手が居なくなったのを怒り。　今度は、母子で秘かに帳簿を誤魔化して遊興費を捻出していたのを、スタウナーにおっ被せると云う計画に向かった。

それでも、父親のスタウナーにしてみれば、自分が殺した様な息子の死を無駄にしてジュリアを差し出す訳に行かない。　公爵家の意地を腹に、あえてその罪を被ったのである。　スタウナーは、メリッサの子供がマルフェイスと知らされて、メリッサの権力を知るが故に、濡れ衣を払拭する事など出来ないと悟った。

だが、総括の解任を言われる為に、メリッサとマルフェイスの並ぶ

場に呼び出されて。　ジュリアの人質を悔やんで居らぬかと、質問された時だ。　ジュリアの父親は、敢然と胸を張り、こう言ったらしい。

「メッリサ様、そして、マルフェイス殿よ。　この長きに渡る権威政治は、我が国の政治を腐らせて来た。　だが、その政治も、何れは破綻しよう。　お前達にジュリアや、高貴な我が家の名前を差し出すなど言語道断。　ジュリアは、新しい政治の動きに働く者と成ろう。　その夢の為にも、今の我が家の最後の宝をくれてやる訳には絶対にゆかんっ！！」

これに、メリッサが憎らしき相手を見る顔で。

「フンっ、ならばその宝ごと貶めてやるまでよ。　次の爵位整理で、ブルーローズの家は只の平民に堕ちようぞっ！！！！」

「それがどうした事か。　ブルーローズ家の家紋は、現世に在らざる、神秘の青い薔薇。　その意味は、愛と正義を抱く者の心にだけ咲くと謳われた青い薔薇だ。　例え爵位を失うとも、ジュリアに学ばせた剣は正義の剣っ！！！　ジュリアの心は、決して曇りはしないだろうっ！！！　いつか・・いつかは、新しき政治の助けをするっ！！！！　その寝首、何時かはジュリアの血筋が断ち切ってくれるわっ！！！」

マルフェイスの目の前で、メリッサとスタウナーは決裂の別れを見せた。

マルフェイスの無念は、ジュリアを手に入れられず。　そして、ブルーローズの名前を手に入れられなかった事。　本来なら、マルフェイスがブルーローズの名前を告ぎ、マルフェイスがメリッサの跡を継

ぐことを望んだメリッサとマルフェイスだった。

マルフェイスは、未だにジュリアに対して偏執的な愛着を隠し持っていた。　その異常な愛情が捻じ曲がり。　今尚も、ジュリアの家を滅ぼそうと執念深く画策を続けて来たのだ。

あの牢屋の中で、Kとヴァイオレットに向かって。　ジュリアを、ブルーローズの家を手に入れたいと願う欲望を大声で喚き。　死んだジュリアの兄と父親を、異常な高笑いで罵り、罵倒するマルフェイスの顔は、正しく悪魔だった。

憎しみの権化と化したマルフェイスは、Kやヴァイオレットを見て叫んだ。

「俺は・・俺は公爵家の縁の者だっ！！！！！　この様な無様な姿にさせよってからにっ。　ええい・・縄を解けぇぇっ！！！！！」

その時。　Kが、座っていた椅子から姿を消す。

ヴァイオレットは、突然にマルフェイスの頭の向こう側にKが見えて驚いた。

そして、マルフェイスは首を斬り飛ばされて死んでしまったのだ・・・。

あの時、全てにKが幕を下ろしたのである

全てを聞いて、ジュリアには涙しかなかった。　父親と兄が、事件

の裏側で政略結婚を拒んで居たとは思っても見なかった。

「あああ・・・兄上・・・父上・・・どうして・・どうして・・わ・妾を・・・」

泣き叫ぶジュリアを抱きしめるKは。

「君の父も、兄も、全てを知ってしまった。　あの時に君を犠牲にしようとも、後に訪れるのはブルーローズの家がマルフェイスのモノに成り。　この家は汚されて、破滅させられる現実。　君の父親は、それを深く理解していた。　だから、爵位すらも投げ出す気になったのさ。　そして、君をマルフェイスとメリッサの破滅の欲望から遠ざける為に、全てを胸に仕舞ったのさ」

「うう・・・父うえ・・・・・」

ジュリアの爪が、ギュッとKの服に食い込む。　悔しくて、可哀想で、堪え切れない想いが心に噴出した。　もう、余りの衝撃で、心が粉々に砕け散りそうだった・・・。

だが・・・。

「ジュリア・・家は、人が居てこそ家だ。　君を失って、家を守っても。　根絶やしに成るだけだ。　だが、君を護れば、君が子供を生めば、人は続く。　人が続く場所が、家に成る。　君は、知らずと父親の望みを叶えてた。　君の生き方に、何一つの間違いも無い。　君の生き方は、父親と自決した兄の心を汲んでいたのさ・・」

「ケイ・・・」

ジュリアは、自分の壊れそうな心を繋ぎ止める言葉をくれる男を見上げた。　包帯の隙間から覗ける瞳は、何処までも聡明な強き優しさを湛える。

「ああ・・・何で・・・何で貴方が・・・運命なの・・・」

この出会いは、ジュリアには到底理解の出来ないものだ。

Kは、薄く微笑み。

「お疲れさん・・・・、そしてこれかも、生きろ。　君の生きた道が、この家の未来への道だ」

ジュリアは、Kにしがみ付いた。

「お願い・・・お願いだから・・・今夜だけは・・消えないで・・・」

ジュリアの心に湧いた、全身全霊の願いの迸り・・。

Kは、静かに。

「解った・・」

そして、2日後

ジュリアは、レイチェルを伴い登庁した。　同じ仲間の聖騎士や、

役人に挨拶をされても顔に陰りは微塵も無かった。

そして、その日の夕方。

ジュリアが、書類を届けにヴァイオレットの元へ。

（あら・・・。　変わり無いわね）

ヴァイオレットが見るジュリアは、２日前と変わりが無かった。

書類に目を通し終えたヴァイオレットは、ＯＫを出してから。

「ジュリア殿、随分と迷われたであろうな」

嫌味を、遠まわしに言ったのだが・・。

書類を受け取り、踵を返したジュリアは歩いてドア前にて。　柔らかく微笑む横顔をヴァイオレットに見せ。

「いえ。　妾にも、慰めてくれる男が居ます故に」

「？！！！」

ヴァイオレットは、ギョッとするしかなかった・・。

・・・。

その頃、Ｋが戻ってまた飲食店で飲み食いするステュアート一同。

セシルは、何も起こった事を話してくれないＫを睨み。

「ずるい～、ズルスケ包帯ヤロ～っ」

皆、興味津々なのだが。　Kは、何も話さない。

「いいんだよ。　関係無い事なんだからな～」

と、枝豆を齧るKは、内心に。

（ヴァイオレットの奴、今頃キレてるだろうな・・。　全く、女はどれも怖い怖いだねぇ・・・）

Fin

K特別編　セカンド　8（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

誰の主人公と決まっていなかったストーリーソースを、強引にK編に製作した今回ですが。　ま～、ギリギリ話になってるかな～と思っております＾＾；

次回からは、新キャラクターでのお話に成ります＾＾

世界観として、引き出しから出しているのは都市部中心で、いずれは地方都市のお話なども出して、広い世界を隅々までお伝え出来たら嬉しいかな～っと思っております＾＾

では、次話まで数日頂きます～＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

プロローグ

広い街道を、冬の木枯らしが吹いている。

常緑樹の森に左右を囲まれた街道は、風の通り道。　風に吹かれて寒そうに見える牛や馬に引かせた荷馬車や荷車を導く商人が、街道に長蛇の列を作り。　街道の先に聳える黒き山の様な城塞都市に向けて進んでいた。

この城塞都市に続く街道は、固めた土剥き出しの整備された道が、都市の約一キロ手前からレンガ敷きに変わり。　都市まで伸びる。

上空からもし人がこの街を見下ろしたらなら、夜まで途絶える事の無い人・荷馬車などの列に驚く事だろう。

世界で最も商業の栄える国、マーケットハーナス。

商人達に治められ、自由で激しい商業の生存競争によって育てられた国は、国土も他の国に比べて狭いながら。　驚くべき利益を上げて今に生き残る。

しかしながら、そんな利益追求の街も、冬のこの季節は一年の商売繁盛に対する感謝祭が開かれて賑やかで穏やかなムードに包まれる。

都市上空に幾千もの花火が上がり、所々でビールやワインが振舞われ。建物ばかりが犇く市内地では、パレードや都市内のあちらこちらの広場で演じられるオペラ・サーカス・マジックなどを、飲食店から見て楽しむ人々の姿で溢れ返るのだ。テラス・オープンカフェなどが、大人気に成る。

9日間と云う長丁場のお祭りが、最も隆盛際立つ4日目の夜。

見物客や、酔っ払いが大通りを練り歩く。人の列のうねりの喧騒が響く裏通り。二つの黒いマントを羽織って、顔を隠す様にフードを深く被った人影が走っていた。

先を行く、頭半分・・いや、然程背に差の無い二人だが。気持ち低い背の者が、建物の裏に無造作に置かれた桶樽が積まれた物影に隠れながら。後ろを着いて来るマントの人物に振り向いた。

「セイル、こっちは広場だよ」

若い。少女の様な声だ。声に張りが在り、小声でも少しキーの高いしっかりとした声である。

後ろのマント姿の、“セイル”と呼ばれた人物は、暗がりの中で頷いて。

「だいじょ～ぶ、この先は、サーカスを見る見物客が大勢居るもの。その後ろを通って、向こうの通りから裏通り行けば、地下水路の入り口に出れるよ～」

こちらも、声が若い。　だが、明らかに男の子と思える声。　穏やかで、ほんわかした声の響きだ。

「ＯＫっ。　一気に外に出るよっ」

と、前を行く元気な少女の声に。

「ほわぁ～い」

と、後から行く若者の緩い声。

少女の声をしたマントの者は、腰に手を当てて。

「ちゃんと返事しなさいっ」

と、鋭く言えば。

「ほわいっ」

と、若者の声をした人物はその場で敬礼をする。

「出来るなら最初からやんなさいっ」

「ユリアちゃんこわ～い」

「喧しいっ」

少女の声をした人物は、そう怒ってから裏道を行く。　ドラムやアコーディオンの音が響き。　客の歓声や悲鳴が起こる。　煌々と篝

火が掲げられ、広い広場を照らす中で、猛獣遣いの曲芸がヒートアップしていたのだ。

二人のマント姿の人物は、何者かに追われているのだろうか・・・。

子供を肩車したりしている親子の観客や、抱き合っているカップルなどの人垣の外側をコソコソと動いて先の通りに抜け。　脇道を暗がりの裏道にまた入り。　地下の水路に下りる石の階段を、二人は辺りに気を配ったり追っ手を確認してから降りて行った。

そして、少しの時が流れ。

祭りの催し物などを止めるように知らせる“打ち止めの合図”の花火が、盛大に夜空へと打ち上げらた。　マーケットハーナスの首都、“ヘキサフォン・アーシュエル”の空を派手やかな色の火花で照らす花火。

その光景を、西の城外の街道上から、先ほどのマント姿の二人が見上げている。

少し、背の低い少女の声が。

「これからは、戻れないね・・セイル」

横の若者の声が、のほほ～んと。

「だね～。　あはは～」

「後悔しない？　セイルは？」

「いやぁ、どうせ言い訳あるし～。　ユリアちゃんに首根っこ捕まれて連れ去られました～」

すると、少女の声をしたマントの人物が、素早く若者の頭部を叩く。

「あ痛っ！！！」

「男だろっ、セコイ言い方しないのっ」

「ふえ～い」

若者の声は、ショボくれた声に変わって頭を擦っていた。

1、セイルとユリア

北の大陸にも、本格的な冬の訪れを告げる雪がチラつく。

青い屋根を高みに見せる巨大でフォーマルな王城から、都市の入り口までは幅一キロ、長さ数キロの凱旋通りが一直線に伸びて行く。

通りの左右には、巨木の楓の並木が見えて、枯葉舞う哀愁のビクトリーロードが象徴的である。　夕方が近付く今は、その気配が一層強まって、詩の一つでも出来そうな印象だった。

此処は、世界でも一番大きい国土を持つフラストマド大王国の首都で、名前をアクストムと云うのである。　人口だけで、１０００万近く、毎日集まってくる人の数が７００万人以上。　入れ替わりで、人の出入りも激しい王都であった。

この、大通りの右側に広がる街並みは、いわゆる商業地区で。　飲食店街や宿屋に始まり、様々な武器・防具・旅用品・薬などが売られている“ナロータウン”と呼ばれる繁華街を中心とした華やかで賑やかな場所である。　大通りの左側は、食料品店や文化施設、学校・住居等、生活に付随する施設が多数を占める。　通称“ナエブロック”。

王城の背後には、世界屈指の巨大な湖が広がっており。　“ラ・プランティア・プラーダ”（銀と月の湖）と呼ばれている。　海へ繋がる大河の途中にある湖で、綺麗な湧き水と森の豊かさを利用して鱒や岩魚が養殖されていたり。　釣りを楽しむ人や、カップルや家族連れがボートに乗って楽しんでいたりする観光スポットでもある。

湖岸から向こうの湖岸を見ることは出来ない事から、昔から海を知らない内陸人にはこの湖が海と思っていた人も多い程。　この湖の北側には、王都の外側ながら飛び地の感覚で、農地と農家三万世帯以上が生活するファームタウンが形成され。　“奥地”だの、“農業地区”だのと言われている。

“ラ・プランティア・プラーダ”の上流と下流は、合わせて５００キロに及ぶ大河“クジュラドラウネス”が流れ。　上は山岳都市を４つ。　下は、王都アクストムを通じて都市２つ、町１つを経由して、南の世界最大の交易都市アハメイルに通じている。　その先は、海へ注ぐ。

大河クジュラドラウネスの上流の都市には、隣国のスタムスト自治国と距離が非常に短いので。　向こうの国からも、商人が荷物を運ぶ目的で運河運航船を利用する為に、大変に重要な要所の河なのである。

さて、そんな河の水が引き込まれる巨大湖の水面に、大小様々な船が浮んでいる。　灰色の鉛色をした暗い空から、白い粉雪が舞い降りる中。　白色で綺麗な木造遊覧船の様な船が、湖に設けられた港に着いた。　この船は、大河を定期運航で登り降りする旅客船だ。　河の山岳地帯や草原を船で通れば、美しい風景の名所も多いので、金持ちや旅人などが利用するし。　冒険者なども、フラストマド大王国の国土内を南北に移動する場合、金は掛かるが船の方が早い。　噂によればこの船の乗船率が、５割を下回るのは上流の最初の都市位なものだとか。

「寒いィ～。　ねえ、なんか食べようよ」

「雪舞ってるし」

「賛成～。　飲んだら、明日船酔いするかな～」

「ゲロするなら、外でしてくれよ」

各都市に、船は一泊づつする。　賑やかな話し合いを響かせて、冒険者の一行が歩いて行ったり。　家族連れの夫婦が、手荷物をネタに降りた港で喧嘩してたり。　いい雰囲気の恋人達が、船の先端や後尾に回って湖の風景を堪能していたりしていた。

さて、船から下りる客の中に、貴族が好む厚手のバロンズコートと

呼ばれる黒い服を着ている背の高い男性が見えた。　襟首が厚手のカラーの如くしっかりとしていて、コートの様に足元まで伸びている上質の上着である。　飛龍のエンブレムの刺繍が背中に入る素晴らしい服であった。

「・・・」

その男性の厳しい顔は、中年の燻し銀と云った感じの渋みを見せ。　立派な顎・口髭、鋭い眼光、雄々しき体格、如何にも武人と云った雰囲気である。　しかも、背中に背負われた槍。　男の背丈より長いランスである。　丸い鍔元は、手首を護る為の工夫だ。　まるで長く大きな針の様である。　だが、この男性は槍遣いに多い盾を持たない。　どうやら、槍の脇に備わる1メートル程のスピアを持って二刀流の様だ。　肉体から見ても、かなりの筋力を持っているのだろうと推察出来た。

髪は、クセのある7：3分け。　色は、黒みのある灰色。　目は、黒々していて、鼻は高めだ。　口元は、真一文字に結ばれた大口である。

その男性。　アクストム市内に向かいながら、粉雪舞う港を歩きながら人の声に誘われて顔を動かした。

「お〜い、右メインストリートの、ウォルム街３００番地だ」

「はいよ〜」

「そっちは、ジュリアス通りのメンフィッター店だ」

「解りました〜」

「荷物に掛かった雪は、店の前で少し払えよ～」

貨物船から降ろされる荷物を仕分けして運ばせる船長や商人達の声が、別の船着場から聞こえて来る。

「・・・」

この歴戦の兵(つわもの)の様な男性は、懐かしむ目を浮かべて歩きながらその光景を見ていた。

さて、グッと夕日が堕ちて、風が更に冷たく感じる。　薄暗く成った市内に灯る街灯の明かりに、チラつく小雪が風に舞う影が路上に映る。

この都市の斡旋所、【古の戦場】はナロータウンのメインストリートに当る“シャインブライズ通り”に在る。　1階は、広い大きな酒場風の斡旋所で。　2階から5階までは、寝泊りの出来る宿屋。　地下では、毎夜カジノやらオークションが開かれる場所で。　以外に商人や貴族も訪れる賑わいの絶えない円形の大型な館だ。

「・・・」

あの、屈強な兵の様な男性が、その大きな館の前に雪を頭に乗せて立っている。

北口↓宿へ【二階へ】

南口↓カジノ・オークション【地下へ】

東口↓斡旋所【古の戦場】

と、書かれた古い看板を見て。　東口に移動して行く男性だった。

東側に向かえば、粉雪が石の路面上で水になっている通りに突き出た庇が建物に通じ。　その先には古びた木の重厚な扉が。　男性は、その扉を前にして。

「久しいな、何年振りだろう・・・」

と、懐かしむ目で入り口を見回してから中に扉を開いて入った。

押し戸を押して店内に入った途端、賑やかな雑踏が聞こえて来る。

「・・・」

黒い木目の床、店内に吊るされたカンテラが、花や蝶をモチーフに作られた綺麗な姿で灯された火の明かりを放つ。　何十と無造作に配されたテーブルと椅子。　様々な姿の冒険者達が、それぞれのチームや、知り合いと固まって居たり。　左奥の北側に横たわるカウンターに詰めていたり。　男から見る真正面の奥に広がる一般公開の仕事が張り紙された掲示板の列に、仲間と集まって募集を見ている大勢の冒険者達も居た。

男は、ゆっくりとカウンターに向いて、歩き出した。　仕事の受付をしている冒険者達も居れば、主らしき老人に掛け合っている冒険者も居た。

この男が、白髪で鼻眼鏡をした天辺禿げの主の下に向かうと・・・。

「なんでいけないのよっ!!!!　本人の承諾得てるって言ってるじゃないっ!!!!」

少女の怒鳴り声がする。

主の老人は、訝しげる顔で。

「“承諾”って、誰からだ?」

と、少女に問うた。

「だ〜か〜らっ!!　エルオレウ・オートネイルよっ!!!!　決まってるでしょっ!!!!　呆けて耳が遠いんじゃないのっ?!!!　おじ〜さんっ」

男は、その名前に目を見開かせた。

（ほぉ・・・あの剣神皇と呼ばれたエルオレウ殿の承諾とな・・・）

だが、主の老人は、少女を横目に見て。

「そんな嘘が通るか。　あのチーム名は、それなりの有名人でもなければ付けるのはイカン。　チームの名前を辱める」

「う〝ーーーーーーーーっ、ムッカツクっ!!!!!　チームの名前は自由ってエルオレウ様が言ってたのにっ!!!!!!　何で駄目なのよっ!!!!!」

少女は、かなり苛立ち始めた。

「・・・」

男が後ろから見る少女は、１５歳を超えているかどうかの若い印象だ。　栗色の髪は黒のバランスと栗色のバランスが絶妙な色合いだ。　白い肌、青い瞳、化粧をしていない肌色の強い唇、少し勝気な印象を受ける綺麗な顔立ちと、愛らしい幼さを併せ持つ少女である。　マントをしていて、左手に緑色のクリアーなステッキを持つ。　魔法を扱うらしい。

その少女の横に、ニコニコしている少年が居る。　背丈は、自分の胸元ほどか。　少女より指３つ高い背丈ぐらいで、少女と同じ年齢くらいと思える少年である。　穏やかな瞳は、大きく淡いピンクの光る特異の色だ。　白い肌、スマートな高めの鼻、赤みの佩びた唇に、柔らかくクセの入った金髪。　丸で、何処かの美男子な王子様と言っても過言では無い。

（なかなか・・・どおして）

男は、少年を見て思う。　穏やかに笑っているのに、その気配を探る気の向きは、真後ろ・・・。　見下ろす自分に向かっている。　マントを着ていて、武器が見えないが。　剣術や武術などの術に通じている素振りが見受けられる。

さて、その見ている少女が、遂に本気で怒り出し。

「嘘なんか言ってないっ！！！　アタシはっ、マーケットハーナスでエルオレウ様の運営する孤児院に居たんだもんっ！！！　嘘だって言うならっ、エルオレウ様から貰ったナイフを見せてあげるわよっ！！！！」

と、懐に手を入れ、古びた鞘に入れられた荘厳な装飾の掘られた金のナイフを“ドンっ”とカウンターに置いた。

「・・・・・」

背後から見る男は、そのナイフに目が釘付けに成った。

（炎を纏う大鷹が・・・柄に画かれている・・・。　エルオレウ様の家の紋章だ・・・）

見た主も、眼鏡を凝らして見て・・。

「こりゃ～・・・本物だあ・・・。　オートネイル家の・・家紋が・・・」

少女は、胸を張って。

「ちっちゃい頃から承諾貰ってるんだからねっ!!!!　駆け出しでもこのチーム名に決めてるんだもんっ!!!!!　此処で出来なくても、絶対に付けるんだからっ!!!!」

「・・・・・」

斡旋所の主は、困った顔で少年と少女を見る。

その時だ。　この様子を、二人の少年少女の後ろから見ていたこの男が。

「失礼、主殿。　この二人だけで力量に不安なら、この私がこのチームに加わろうか？」

「んあ？」

老いた主が、野太い男の声に驚いて顔を上げる。

少女も、後ろに振り返った。

仕事を請けようとしている冒険者達も、何事かと見ている前でだ・・。

「あ・ああ・・・アンタぁ・・・」

男の顔を見上げた主の声が、俄に上ずって居た。　明らかに、男性を知っている様であり。　また、驚きを含む顔である。

黒い貴族風のコートを着た偉丈夫は、老人のを見て。

「覚えていてくれたか。　久しいな」

と、微笑んだ。

「あ・・・え？　あれ？」

急に、少女は意味が解らなくなった。　中年の偉丈夫を見上げて、困惑する。

主は、その場で勢い良く席を立ち上がり。

「く・・クラーク・・。“エンジェル・スターズ”の・・クラークが・・此処に来たのか？」

主の声を聴いて、

「え〝っ」

「マジかよっ」

「あのクラークか？」

俄に周りの冒険者達がざわめきだした。

その中で、偉丈夫は少女に顔を下ろし。

「若いお嬢さん、良ければ私も加えてくれないか？　丁度、何処かのチームに長居させて貰いたかったのだよ。　この通り、少しばかり槍を扱える。　足手纏いには、成らんよ」

「えっ・あああ・・」

驚く少女。

其処に、斡旋所の主がもっと驚いて。

「クッ・クラークっ！！！！　こんな駆け出しの嘘吐きのチームに加わるのかっ？！！！！　なんなら、もっと実力の在るチームを紹介するよっ！！！　そ・そんな惨めなマネは止めてくれっ！！！！」

と、怒声に近い声を出した。

この広い斡旋所に屯する冒険者達の８割が、カウンターに目を運ぶ。

“嘘吐き”呼ばわりされた少女は、怒らせた顔を主に向けて。

「嘘なんか言ってないっ！！！！」

と、怒鳴った。

其処に。

「クラークさんっ、是非ウチのチームに入って下さいよっ！！！リーダーを代わってもいいですっ！！」

と、後ろの席でテーブルを囲む数人の冒険者チームの一人は立ち上がる。

すると、別のチームが。

「いやっ、ウチのチームにっ！！！　これでも、そこそこチーム名は売れてるんだっ！！！　あの有名なクラークさんが入ってくれるなら、世界にだって羽ばたけるっ！！！」

次々と、勧誘の声が沸きあがる。　斡旋所の中が、急に騒ぐ様相を呈し。　別々の勧誘するチームの間で、言い争いが起こったりし出した。

そんな中で、振り向かなかった少年が、クラークの方に振り返った。

「・・・」

「・・・」

クラークと云う中年の偉丈夫と、若き少年の目が向き合った。

（おお・・・正しく・・・・。　エルオレウ殿と同じ“桃光眼”・・・。　フッ・・運命かな）

周りの勧誘の声や言い争う声が、少年の瞳で心躍りだすクラークには聞こえなかった。

しかし、この少年は、ただ微笑み。

「ほんと～に、入りますかぁ～？」

と、緩んだ伸び声で問い掛けて来た。

クラークは、少年の目に釘付けと成って大きく頷いた。

「ああ、チーム名も、そなた達二人も素晴らしい・・。　是非、このオジサンを加えて欲しい」

少女は、クラークと少年を見比べて。

「セイル、どーすんのよっ」

ニコニコした少年セイルは、いい加減な言い方で。

「いいじゃん、加えちゃおうよ～。　ユリアちゃん、チームつくちゃおうよ、あはははは～」

ユリアと呼ばれた少女は、呆れた顔をして。

「加えて大丈夫なの？　おっかない人だったら嫌だよっ。　もう」

セイルは、老いた斡旋所の主に向かい。

「は～い、チ～ム結成しま～す。　チームの名前は～、“ブレイヴウィング”【勇躍の翼】で～すっ」

優しい声音のゆる～い言い方で、そう言ったセイル。

所が・・・。

「なっ・なんだってぇーーーーーっ？！！！！」

「ブッ・ブレイヴウィングだってっ？！！！！」

セイルの声に、周りの冒険者達が一気に騒ぎ出した。　歳の少し食った年季を顔に見える男が、席をガバっと立ち上がり。

「ふざけるなっ！！！！！　あのチーム名を勝手に付けさせるのかよっ！！！！」

と、言えば。　別の若い冒険者がカウンターに寄って、憤怒を見せる顔で少年と少女を睨みながら。

「マスターっ！！！！！　承認するなっ！！！！！」

「そうだそうだっ！！！！！」

急激に、あっちこっちから罵声が湧き上がった。

「う〝わっ」

ユリアは、斡旋所内に俄に湧き上がる罵声驚く。

“ブレイヴウィング”【勇躍の翼】は、世界で名を馳せた二剣士エルオレウ・オートネイルと、ハレイシュ・テルガ・ウィンドウの二人が数ヶ月だけ一緒に居た頃のチーム名だ。　今では、全ての冒険者達の憧れるチーム名であり。　簡単にこの名前を付けよう物なら、罵声が飛び交う。　二人の駆け抜けた一瞬は、憧れる冒険者達にとっては永遠の夢なのだ。

所が。

「フフフ・・・」

見ているクラークは、この罵声の中でニコニコ微笑んでいるセイルを見て笑えた。

そして、瞬時にコートの裾を閃かせて、振り向いた。

「者共、騒々しいぞっ！！！！」

気合一閃の如く、裂帛の声を発したクラーク。

「・・・・」

その声、その動きに、騒ぎ出した冒険者達が黙りこくる。

クラークは、鋭い目を皆に向けて。

「元、エンジェルスターズのリーダーであるこの私を誘うなら、この少年の如き大胆なチーム名なり、超える実力を示せ。　私が、このチームに加わりたいのは、私の意志。　戯言でも、一時の戯れでも無いっ。　我がこれから加わるチームの名前に、何か異存が有ると言うのなら。　この私を１対１の勝負で破って貰おうかっ！！」

クラークの声が、斡旋所内に轟いた。　急に黙りこくった２００人以上の冒険者達が、その話に躊躇いを見せて囁きしか生まれない。

「さぁっ、“瞬貫豪突・猛進のクラーク”を倒せる者は此処に居るかっ？！！！」

と、吼えるクラーク。

「えっ？　えっ？」

驚いているユリアに、セイルが近寄って。

「あの人、チョー有名人だよ～」

ユリアは、驚き返して。

「マジっ？！！」

「うん。　世界を渡りテクテクしてたチームのリーダーだったのにね～。　ど～して、チームを解散しちゃったんだろ～」

ユリアは、パッとクラークを見て。

「か・・解散？」

すると、クラークは静まる中でユリアとセイルに振り返り。　また、微笑む。

「いや、解散はしておらぬ。　私が、チームに嫌気を差してな。残りの皆にチームをくれてやって、一人で離脱した訳だ。　あははは・・」

ぽっか～んとクラークを見るユリアは、

「意味解んない・・・。　そsんなに凄いのに・・・、私達のチームに入るの？」

「ああ、楽しそうなチームがいい」

クラークが言うと、ユリアはセイルに向かってガシっと胸倉を掴み掛かり。

「セイルっ、このオッサン凄く意味解んないよっ！！！！」

と、ガクンガクン振り揺らす。

「あはははははは～、僕も解んな～い」

すると、クラークも笑い出す。

「ガハハハハハハ～。　ワシも、自分で自分が良く解らんわい、ガハハハハ～」

見ている冒険者達は、この3人が理解出来なかった。

セイルは、揺らされながら。

「あ～る～じさーん、リ～ダ～はぁ～僕デ～ス。　セイルで～す」

ユリアは、それにムカっとして。

「ユルユルすんなーっ！！！！」

と、セイルに怒鳴ってから、主の方を向いて。

「アタシはっ、ユリア・メイガースっ！！！！　精霊遣いよっ」

と、告げてから。　またセイルに向かって。

「やる気在るのかーっ！！！」

と、更に揺らかしていた。

クラークは、二人を見て楽しそうな笑みを浮かべてから。

「主殿、クラーク・ジャルディン・エスタークだ。　槍遣いの戦士」

と、告げる。

鼻眼鏡を戻した斡旋所の主は、歪む顔つきでセイルに。

「リーダーのお主の職業は？」

「剣も持たないけ～んし～で～す。　あはははは～・・世界が二つに見えてきた～」

この日の夕方。　斡旋所に、理解不能の嵐が巻き起こった事だけは事実であった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告

チームを結成したセイルとユリア。　面白い中年戦士クラークと共に挑む事件は、“行方不明の子供達捜し”。　さて、雪の降り出した世界最古の王都で、どんな冒険が待つのかな？

次話、数日後に掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

ちと、流行にあやかって流行り病にぶちのめされていました＾＾；

熱とか、関節痛って以外にキビシ＾＾；

新たなるキャラクターのセイルとユリアは、ワイガヤなストーリーをキホンに、スリルとアドベンチャーを織り交ぜて綴りたいと思っております＾＾

尚、色々とシナリオソースを作る過程で。　今までの本編に若干の修正をする場合も御座いますので。　変更等在った場合はスミマセン＞人＜

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪3人のそれぞれ≫

「ほほう、お孫殿であったか」

安い大衆レストランに入った3人は、賑う店内の窓側の席に座り。
丸いテーブルを囲みながら事実を打ち明け合った。

実はこのセイルと云う若者は、剣神皇と呼ばれたエルオレウ・オートネイルの孫である。　但し、正当な後継者の順位としては、末っ子で3人兄妹だから、第3後継者となるか。

現・オートネイル家の当主が、セイルの父親のサムソン・オートネイルだが。　エルオレウ・オートネイルは未だ健在で。　オートネイルの家には隠然たる影響力を持っている。　エルオレウ氏は、60過ぎで隠居に入り。　一族の運営する孤児院や病院や武道施設の管理者として悠々自適な生活をしているとか。

ユリアは、見たとおりの活発な少女で。　年齢も16歳と、セイルと同い年。　産まれて直ぐに棄てられた孤児らしい。　だが、クラークの目にも、彼女のあっけらかんとしている様子は良く見える。

生まれに全く捻くれていないのは、ユリアの魅力に繋がっていた。

「ま～、セイルのおじ～ちゃんの運営する孤児院に拾われたのが運命だったみたいね～」

ステーキを切りながらユリアは、ワインを飲むクラークに言った。

「ふむ、苦労しているな・・。　その点で言うなら、わしは一応貴族の生まれでな」

“貴族”と聞いてユリアは、直ぐに話しに飛びつき。

「すっごいお城みたいな家とか？」

クラークは、そう言われて苦笑する。

「ああ、凄い広い庭と小さいながら湖を所持する公爵の家だ」

「わぁ～お」

瞳を輝かせて驚くユリアに。

「モグモグ・・・すごいね～」

と、ニコニコで食事するセイル。

クラークは、グラスに注いだワインを口に含んでから。

「いやいや、ワシも二男の産まれでな～。　適当に政務に付いて、土地の一部を分割して貰えると云われたんだが・・。　ど～も、武

術を習った手前に冒険者に憧れてな。　１８で、飛び出したままだ」

セイルは、マナーの行き届いた作法でライスを口に運んでから。

「クラ～クさんは、お幾つになるんですか～？」

「お、ワシか。　今年の暮れで、４２歳だな」

ユリアは、凄い年上に驚いた顔をして。

「うわっ、すっごいオッサンだ～」

クラークは、微笑んで。

「うむ、飲み屋で綺麗なオネ～サンにもそう云われる。　あははは」

ユリアとセイルの瞳に映るクラークは、不思議な印象の中年だ。

貴族のクセして、偉ぶった印象が見えない。　冒険者として相当有名なのに。　駆け出しのユリアやセイルと同じ目線で物事を話す。

確かに、しっかりした人物らしい。

ユリアは、ニンジンのグラッセを食べながら。

「モグモグ・・・でも・・モグ・・クラークさんも・・不思議よね。な～んで、チーム棄てちゃったの？　リーダーなのに・・・」

セイルも、横で頷いてから。

「でも、僕達助かったけどね～。　あははは」

すると、クラークはワイングラスを片手に、テーブルに肘を付いて。

「いや～な。　それが、大変だったんだ。　チームに加えた若い女を巡って、元々チームに居た二人の魔法遣いと学者が喧嘩するし。　神官のお年を召された年増の女性が嫉妬してワシに毎日文句を言う。　他にも色々とチーム事情が交錯してな。　頭に来て、解散しようと思ったんだが・・。　どいつもこいつも有名に成ったチームは棄てたくないと我儘をな～。　だから、面倒に成って、チームから抜けたのだよ」

「マジ？　毎日が修羅場じゃん」

ユリアの言葉に、困った皺を眉間に寄せてクラークは真剣に頷き。

「うむ、修羅場だ、正しく修羅場。　ま、その仲間の一人がどうしてもリーダーをやりたいと言うしな。　ワシが抜ける事に異論は出たが、人間は去る者は直ぐに飽きるモノだ。　2日で、抜ける事が決まったよ」

セイルも、話が話なだけに。

「スゴ～。　初めて聞きました～」

と、半笑い顔。

考えるユリアは、困惑の顔で。

「でも、クラークさん」

「ン？」

「そうゆう事情なら、尚更早く色々と仕事を請けられる様に、もっと有名なチームに加わった方が良かったんじゃないの？　やっぱり、アタシ達は・・・エルオレウ様に縁有るってだけで、駆け出しだし・・・」

クラークは、ユリアが気の強いと同じ位に人を思う思慮が在ると思いながら。

「いやいや。　実はこの世界もそうは簡単では無いのだよ。　特にこの道はな・・」

「そうなの？」

ユリアは、セイルと見合ってからクラークを二人で見た。

クラークは、しみじみと壁の洒落たグラスランプを見ながら。

「生じ、中途半端なチームに入ると、似合わぬ無理をチームがしたり、ワシの実力を自分達の実力と勘違いする輩も出る。　何より、チームのリーダーがコロコロと後から入れた者に変わっては、意見も信頼も揺らいでしまい、つまりは仕事に命を張れない。　それなら、チーム名が凄くて、あのエルオレウ殿のお孫殿のリーダーの下に入った方が、お気楽極楽じゃわい。　ガハハハハ」

と、一転して陽気に笑う。

「ナルホド・・・」

と、ユリアは納得してから、クラークに小声で。

「あ、一応・・・セイルの生まれはナイショだよ・・。　世界一位の金持ち財閥の孫だなんて、マジでお金が歩いてるのと一緒だから・・」

クラークも、生じ爵位のある家柄の産まれで理解している。

「ウム、他言無用だな。　誘拐されても、不思議じゃない」

その、本人は。

「あはははは～、イエ～イ」

と、？サインを出す。

グッと拳を構えて青筋を浮かべたユリアは、その頭を“スパコーン!!”と小気味良く叩いた。

「フザケんなっ・・・」

涙目のセイルは、笑顔のままに。

「ス・・スミマセン・・・」

クラークは、ユリアの叩きが異常に素早くて。

（は・・早い・・・デキるな・・・）

と、感心である。

さて、チームを結成してその日。　３人は、早々と明日にでも仕事を請けようと斡旋所の宿に泊まる事にした。

雪が粉雪から、積もる雪に変わりそうな夜。

宿に泊まる手配をする中でクラークの見るセイルとユリアは、旅が初めてとは思えない程に落ち着いている。

（ふむ、行く行くは羽ばたくかもな・・。　面白い二人だ）

と、数年後を予想しながら、斡旋所を見下ろせる内廊下を歩いて個別の部屋に入った。

クラークの出現は、セイルとユリアにとっては大いなるプラスだったのかもしれない。　また、セイルとユリアにとっても、クラークの存在は嬉しい存在だった。

≪クラークさんとカミーラさん≫

このフラストマド大王国の首都から上は、これからの時期に２・３ヶ月ほど極夜の状態に近付いてゆく。　つまり、日中の太陽が出る時間がどんどん少なくなり、１５０日程続く極夜のピーク時は、２５日前後が丸々夜の様に暗くなるのだ。

フラストマド大王国は、周りの国々よりも国土が大きいだけでは無く。　上の北側に大陸が突き出す特殊な地形に国があり。　内陸は海抜がやや高くて、冬は極寒になる地域が多いのも特徴であった。

さて、次の日の朝。

「ふあ～・・・」

良く寝た感じのユリアだが、淡い紫の下着姿で毛布に包りながら窓の外を見れば、暗い曇り空が暗雲立ち込めた様に見える。　まだ、雪がチラついていて、寒空が怖いくらいであった。

「うはあ～・・。　コレが極夜かぁ・・。　丸で夜みたい。　でも、今頃だとまだお昼前には朝が来るって聞いた様な・・」

セイルの話であった。　ユリアとセイルは、昨日は南の陸路から馬車に乗せて貰ってアクストムに入ったが。　入ったのは夕方頃で、極夜の本当の体験は今日が始めてである。

さて。　もう、朝方の仕事に向かう人々は起き出して、街中を歩いている。

着替えて起き出したユリアは、木造の宿屋内の内廊下を歩き、シャンデリアが灯る明かりで吹き抜けの下に見える斡旋所を見下ろしていた。

「アレ、もうセイルもクラークさんも起きてる・・」

見下ろす1階のロビー兼斡旋所は、何か慌しい。　空中にピンと張

られた鉄線が何本も張り巡らされ。　その鉄線から、斡旋所を照らすランプが何十と空中に吊り下げられている。　そのランプに、こんなに早い時間から灯りが入り。　その灯りの下で、早々と何十人もの冒険者達が起きて集まっては。　騒々しく話し合っている。

（あらら？）

ユリアは、何か胸騒ぎが起こって、緑のステッキを片手に荷物を背負い直して下に急いだ。

一般公開の仕事の張り紙がしてある掲示板が並ぶ列の脇に、セイルとクラークが立ってカウンターを見ている。

其処に。

「どうしたの、なんか騒がしいけど」

と、ユリアが合流した。

セイルは、微笑む顔は何時もながら。　言葉遣いを幾分しっかりさせて。

「ン～。　なんでも、子供達が居なくなったんだって～」

と、カウンターを指差す。

「え゛っ」

驚き、カウンターを見るユリアに、頭上からクラークが。

「消えた子供達の中に、どうやら斡旋所の主の孫も含まれてるらしくてな。　昨日の夜に、泊り掛けで遊びに来ていた農村地区の子供と、主の孫を含む町の子供たちが、コッソリと肝試しに行くと消えたらしい」

ユリアは、街中には怖いスラムなども在るのを良く知っている。

「あちゃ～、事件に巻き込まれてないといいけど・・・」

と、心配してから。　辺りの慌しい雰囲気に。

「でも・・・何で斡旋所が・・騒々しいの？」

セイルが、ユリアに向いて顔を寄せると。

「その捜索を、請けたいチームに依頼するんだって～。　一刻も早く見つけて欲しいから、公募依頼にするらしいよ～」

ユリアは、聞いた事の無い話に。

「こ・“公募・・依頼”？」

クラークは、慌しく受付を行っているカウンターを見ながら。

「請けたいチーム全てに依頼を請けさせて、一番早く依頼を達成したチームに報酬を払う依頼の請けさせ方だ。　確かな情報だけでも、少しの報酬が出るし、云わばレース型の仕事だな」

「はあ～・・・、初めて聞いた・・」

驚くユリアに、セイルは二カッと笑って。

「もう、僕がと～ろくしちゃったモンね～。　一発目のお仕事は、これで決まり」

頷いたユリアは、真面目なしっかりした顔で。

「そうね。　お金云々より、人助けだわ。　子供達、心配だわね」

セイルとユリアは、マーケット・ハーナスでは孤児院の年長組みだ。
　年下の子供達を面倒見たり、世話したり、読み書きを教えたりしていた。　そうゆう意味では、セイルは非常に優秀であったとか。

さて、後少しで受付が終わると云う報告が斡旋所に通達された。
チームの中には、昨日の今日で。　セイル達に・・・特にクラークに対抗意識を見せる様に意識して此方を見てくる冒険者達が居る。

ユリアからするなら。

“くっだらない。　人の命が懸かってるのに・・・アホ丸出しじゃない・・”

クラークも、同感過ぎて相手を見る気に成らなかった。

そんな中で、３人の前に赤髪が短めのボーイッシュな雰囲気の女性らしき人物が寄って来た。

「そなた等か？、有名なクラーク殿と使えぬ子供二人のオンボロチームとは」

ユリア、いきなりの毒舌にムッとした。　白い、貴族特有のエレガンスな作りのピアリッジコートに身を包み、前は止めずにベルト以外は開けっ放し。　腰には、細身の細剣（レイピア）が佩かれ。　皮のブーツ、短いスカートから覗ける足には、太股と膝に黒い皮のプロテクターが。　上半身には、右肩を基点に、身体を巻き包む様な金属のベルトの様な鎧を着ている。

「初対面のクセに、礼儀知らないのね。　大人でも、バカが居るってマジだわ」

怒った顔のユリアが、赤髪の女性を見てそう言った。

赤い髪の女性は、ユリアをギラリと睨む。

其処に、クラークが口を挟み。

「その赤髪、“ダークチェイサー”のカミーラ殿か？」

ボーイッシュな女性は、鋭い目線をクラークに戻し。

「ほう、妾を知っておったか」

と、背の高いクラークを上目遣いに見上げるカミーラと云う女性。

すると、クラークは真面目な顔をして。

「まあな、容姿からして。　問題を起こす面倒なチームと噂で聞いたが・・・。　噂に違わぬな」

その話に、セイルは感心の頷き。

ユリアも、納得の頷きである。

「フッ、子供の世話係に堕ちた過去の有名人に言われるとはな・・」

カミーラと云う女性は、せせら笑いに似た笑みで、クラークに返す。

だが、クラークには怒る気も起きず。　また、これだけはハッキリ言えると確信が有った。

「何を云うのも勝手だが、私から見て一つ言える事がある」

カミーラは、鋭い視線でクラークを見上げ。

「なんだ？　世迷言か？」

「いや、お主が冒険者に成った時。　今から、１０年程前だったな。依頼主に反発し、仕事を棄てた。　それから、此処まで１０年か。悪いが、お主の知名度位なら、今の我々３人でなら１年で抜ける。それだけは、断言出来る」

クラークの言葉に、カミーラの目が冷たく感情を無くす。

「ほほう・・・随分と強く出たものだな」

「違う。　１０年有れば、一角の冒険者チームならば世界に出れる。その事を一番認識しているのはお主自身な筈だ。　１０年前の一件で、お主はレッテルを貼られたが。　今まで世界に出れないのは、それが理由では無い。　お主の言動や仕事に対する姿勢であり、１

0年前の失敗を教訓に出来ずに逆恨みしてるからだ。　その辺の事は、冒険談義でも噂に成るほどに有名な事だ。　今更の事では無い」

クラークの言葉に、カミーラの顔が歪む程に怒りに染まった。

其処に。

「受付を終了する。　では、説明をするから、カウンターの前に集まってくれ」

老いた主の、少し疲れた声が響いた。

「おのれ・・勝負だクラーク殿。　我々が先にガキを見つけるか・・。　それとも、其方が先に見つけるか・・」

すると、ユリアは悲しい顔で。

「貴女・・・バカだわ・・・。　詰まらない女ね」

と、カウンターに歩く。

カミーラは、ユリアに殺気立った目を向けるのだが、完全に無視である。

ユリアのその後ろを、ニコニコとセイルが続く。

最後にクラークが続き。

「人の命が、子供達7名の命が危ぶまれる時に、その命を賭け事の様にしか考えられんお主の言動。　確かに、詰まらんな～」

「・・・・」

カミーラの顔が、憎しみめいた色に変わり。　クラークとユリアを異常な目つきで追っていた。

≪子供達を捜そう≫

説明がされて、一同解散と成り。　手柄を急ぐチームは、もう雪の積もる外に出て行った。

「凄い勢いですね～。　でも、参加されたチームが２７チームでしたか・・。　人数も、１００人を軽く超えていましたね」

感心するセイルは、腕組みしてカウンター前に立ち。　一気に人が消えた斡旋所内を見渡して言う。

「だな。　あれだけ急ぐのは情報収集だろうな」

と、クラークも自身生涯２回目の公募依頼に少し驚いていた。

ユリアは首を傾げながら。

「う～ん。　7人の子供たちが、肝試しに夜に出かけて居なくなった・・。　見つければいいのは解ったけど・・・。　何処を探せばいいやらね」

クラークは、頷いて考えながら。

「時間が過ぎてるから、雪に残る足跡も判らぬ。　皆と同じく、街中で情報収集するしか無いの」

すると、セイルはユリアに。

「でも～、ユリアちゃん」

「ん？　何？」

「うん。　これが、孤児院の子供達だったら・・・どうする？」

云われて、ユリアは考えるに。

「う～ん・・。　まあ～、先ずは残った子供達に話を聞くわよ。大抵、同じ子供達の事は、子供が知ってるもの・・・」

セイルは変わらず微笑みながら頷いて。

「じゃ～、何で、依頼の失踪した子供たちが、“肝試し”に行ったって解るんだろう？」

クラークは、腕組みして。

「ン？　それは、話を聞いていたからだろう・・。　誰か、解らないが・・」

ユリアも、クラークの言葉にウンウン頷く。

セイルは、ニッコリ微笑み。

「子供が、大人に知られたら怒られる様な事を大人に言いますか？」

クラークとユリアは、そのセイルの言葉にハッとしてお互いに見合う。

ユリアは、クラークに指差して。

「言わない・・よね？」

「うむ・。　ワシも、言った事が無い」

セイルは、カウンターに向いて。

「じょーほーしゅーしゅー、ご～」

クラークは、流石に孤児院にて、子供と遊んでいたセイルだけ在ると思い。

「ナルホド、よし」

と、カウンターに向かった。

「主殿、もう少し話をいいか？」

孫を心配して、グッタリしている老いた主は、重く首をクラークに向けた。

「ン？　なんだい？」

クラークは、セイルを見てから。

「いやな。　子供たちが“肝試し”に出かけたって云う情報は・・何処から聞いたんだ？」

「ああ・・・。　昨日、泊まりに来ていた子供達は、１０人近く居たんだ・・。　ウチの悪ガキと農村区の仲の良い悪ガキが二人で言い出したらしいな。　起きていたのに、孫達に着いて行かなかった子供達２人から聞いたんだ。　今でも、裏に居るよ・・。　ぐずって泣いてるが・・。　言わなかったか？」

ユリアは、脇からカウンターに顔を出して。

「ねっ、もう一度だけ、私達も話聞いていい？」

困る顔の主は、訝しげにユリアを見て。

「もう・・ワシ達が早朝に聞いたぞ・・。　新しい情報など、子供から出はせんと思うがの～」

クラークは、一つ頷いてから。

「とにかく、一番子供達に近い情報源だ。　無駄なら無駄でもいい」

「・・・解った・・」

こうして、まだまだ暗い朝。　3人は、子供達の中でも怖くて行かなかった子供達二人に接触した。　冒険者達が一気に全員去ってしまった、ガラ～ンとした斡旋所の中の大きなテーブルに、気弱そうな可愛い7歳ぐらいの男の子と、まだ5歳くらいの女の子が呼ばれた。

セイルとユリアは、子供達にホットミルクを飲ませて雑談をし始めた。

“昨日の夜は、誰の意見でお泊りする事にしたの？”

と、聞けば、女の子が。

「ジ～ン・・。　あっせんぞ・・おにいちゃん・・」

斡旋所の孫の名前は、ジーンと云うのだ。

“いつも、何処で遊んでるの？”

と、聞けば。　農村地区の子供は、学校が湖を渡らないといけない程遠いので、都市内の学校に隣接する宿舎に泊まり。　5日泊まって学校に通い、家に3・4日帰るのだそうな。　昨日は、学校が今日からお休みになるので、一日遊びで泊まる為に、皆がジーンの誘いで斡旋所の祖父の所に来たんだそうな。

クラークは、話がズレているような気がしたが、セイルとユリア二人の話を聞く事にしていると。

セイルが、落ち着き始めた気弱な男の子に向かって穏やかに。

「でも、こんな大きい都市で“肝試し”って出来るの～？　何処かに、怖い所とか有るんだ？」

すると、男の子は頷いて。

「うん。　ジーンは、武器屋のジュンガが教えてくれたって言ってた。　人の居ない所が有るって・・」

女の子も、ミルクの入ったコップを手に。

「いてた・・、こわ～いおうち～って」

ユリアは、後を汲んで。

「ねね、そのジュンガ君は、一緒に行っちゃったの？」

すると、気弱そうな男の子が、大きく首を左右に振った。

クラークは、

（ほう・・繋がった）

セイルは、小声で。

「ビンゴ～」

斡旋所の主達が知ったのが、朝方だ。　しかも、この二人はジーン達が何時までも戻って来ないままに眠くてグズリながら寝ていた所

を起こされた。　焦る主が訪ねる詮索も急で、勢いに怖かったのかもしれぬ。　どうやら全てを言い切って居なかった訳だ。

武器屋の子供の居場所を教えて貰って、３人は子供達を休める為に主に終りを告げた。

≪情報の糸を手繰ろうよ≫

落胆の色を顔に浮かべて、斡旋所の主が３人を見送る中。　１００人以上居た冒険者達の中でも一番遅く外に出た３人。

ユリアは、もう雪が粉雪からフワフワした雪に変わっているのを見て。

「さむ～い・・。　都市が一面白銀の世界じゃない・・」

と、皮の手袋を急いで取り出した。

周りの繁華街の屋根が、一面真っ白の雪化粧である。　空の東側が、錆行く鉛色の様な夜明けを滲ませる中。　本降りの雪は、深々と降り続きそうであった。

斡旋所の南側の入り口の前は、広い通りだ。　仕入れから戻って来たらしき手押し車を引いて木箱を運ぶ人が居たり。　厚手のコート

やマントを羽織った人々が往来している。

そんな中で。　美しい顔立ちと、優しげな印象のセイルは、コートを着て道行くウラ若い女性に間近で見惚れられて。　逆に微笑み返す。

「まぁ・・」

初な女性なのか、セイルが綺麗過ぎるのか・・。　顔を赤らめて王城方面にコートを腕で抱くように側めて去って行く女性。

「おいっ」

バシっと、ユリアがセイルの頭を叩く音がして。

「あ痛っ・・」

と、セイルが前につんのめる。

ユリアは、腰に手をやり。

「サービスすんなっ!!!　さっさと行くよ」

「は〜い」

涙目のセイルは、苦笑の顔で後頭部を擦る。

クラークは、去った女性が清楚な雰囲気のタイプだっただけに。

セイルに近付き。

「お主・・中々やるの～」

「あはははは～」

セイルはヤケクソ笑いでいた。

斡旋所から程近い、大型の４階建てをした円筒形の商店に入った。

１階は、旅に関する用品の専門販売店であり。２階が薬やスキル専門用品。３・４階が武器や防具を扱っている複合店。

「うはぁ～・・・狭いぃ・・・」

１階の旅に関する店は、もう店内がアイテムだらけで、通れる隙間はユリアがどうか。クラークでは、絶対に物を落とす。

「おう、欲しい物を言ってくれ。昨日、大量入荷してこのザマよ。母ちゃんが、発注の量間違えちまって、夏物まで仕入れしちまったんだ」

店の脇に居た店主が、ユリアに声を掛けてくる。

ユリアは、愛想笑いをして。

「あの～・・。この店って、武器屋も防具屋も、オジサンの物？」

雪を避ける庇の前で、陳列した商品に雪が掛からない様に配置換えしている店主は、ユリアを見て。

「おう、上の店は俺の親父と弟家族がやってるぜ」

クラークも、雪を避けて庇に入り。

「では・・・武器屋の息子の“ジュンガ”とは。　お主の弟さんの子供か？」

店主は、急に家族の話をされて訝しげな顔に成り。　防寒具のコートに、毛皮の帽子を被った姿を仁王立ちにして。

「ああ、そうだが・・。　何だ、アンタ等？」

ユリアは、店主に近寄って。

「あのね、斡旋所の主の孫が、昨日お友達を泊まらせたらしいんだけど。　真夜中に“肝試し”に行くって言って子供達連れて何処かに行っちゃったらしいの」

「ほ～、あの悪ガキ達のしそうなこったな。　甥のジュンガも、悪戯好きで困っちゃいるが・・。　今回は関係無いだろう？　今朝も、俺達と一緒にテーブル囲んでたしな」

クラークが、頷きながら近付いて。

「うむ。　だが、行き先は知ってる可能性が在る」

「何だって？」

「どうやら、その“肝試しをし”に行った場所を教えたのが、お主の甥子さんらしいんだ。　だから、出来れば話を聞かせて貰えればと思う。　消えた子供達が怪我などしていたり、事件に巻き込まれていたら大変だ」

店の店主も、7人の子供が居なくなっているのには流石に驚いたようだ。

「いいぜ、俺が此処に連れてくる。　弟は、夏から身体を壊し休み休みだからな。　俺が、半分ジュンガの父親代わりみたいなモンだし。　待っててくれ・・」

と。　建物の裏側に消えて行った。

「なんとか、話聞けそうね」

と、ユリアはクラークを見る。

「うむ」

「セイル。　セイル？」

ユリアが振り向くと・・・。　店の前にセイルは居なかった。

「アレ？　セイル～」

クラークも、周りを見てセイルが居ないのを知り。　雪の降る通りに出て左右を見渡すと。

「ん？」

通りを、来た道を戻る形で少し行った路上に、セイルが雪の降る中で通りの西側を見ている。　微笑んでいるままだが、一点を見つめていた。

クラークは、セイルに寄って行き。

「どうした、何か在ったか？　雪を被ってしまうぞ」

セイルは、ボンヤリと一点を見つめながら。

「はい・・。　そうですね。　行きましょうか」

と、クラークに振り向いた。

≪“肝試し”が出来る場所？≫

3人は、店の前で待たされていた。

「う〜、さぶいっ」

ユリアが、店先で足踏みしている。

「だろうねぇ〜。　この時期は、特に寒いから」

店の主人の代わりに店先に出て来た奥さんは、小太りな年配者だ。
頭も白い物が混じり、皺も主より多い。　だが、苦労している雰囲気の滲む男っぽい見た目通りに、ヴァイタリティーは有りそうな

オバチャンであった。

話せば気風のいい奥さんで、ユリアなどはこの来たばかりの国について色々教えて貰ったり。　美味しい食事の出来る場所を教えて貰ったリ。

さて、東の空が少し白み。　夕暮れの様な暗さが少し明るく成った気がする中。

雪の降る様子を、軒下から不思議なまでに穏やかな目で見ているセイル。

並んで立つクラークは、吐く息白く。

「フム。　誰か尾行しているかな？」

「ハイ。　カミーラさんでしたか。　あの方みたいですね」

クラークも、黙って立って居ると。　何となく、視線を感じる。

「フム。　逆恨みかのぉ・・・」

と、挑発してしまった申し訳なさを目じりに滲ませてセイルを見れば。　セイルも、ニコニコした顔でクラークをみて、幾分静かに。

「かも～ですね～」

そんな中で、暇なので通りを行く人を見ていると・・・通行人の中に、切羽詰った様な会話を交わしながらに歩く冒険者の一団が見えた。

「ん・・、焦って居るな」

クラークは、その一団が自分達と同じ依頼を請けた別のチームと理解した。

セイルも。

「焦ってます～」

通行人の中に、毛皮のコートなどを着て優雅に歩く女性が出て来たり。　雪に喜ぶ子供達の一団や、買い物に来たのか親子連れが見える。

直後。　この店に、旅人がカップルで買い物に来て。　セイルとクラークの後ろで賑やかな会話が飛び交ったりする。

通勤が収束し。　朝も遅い時間帯に成った頃だ。

「おーい、遅くなった。　ジュンガを連れて来たぞ」

と、消えた店主の少し息の荒い声がした。

ユリアが、オバチャンとの笑顔の会話を終えて。

「セイル、クラークさん、店の脇に回って行くみたいよ」

と、先に行く。

「ウム、行こうか」

「は～いは～い」

ユリアは、主の後を行けば、店の裏に有る押し上げる形の倉庫の扉が開いているのが見えた。

ユリアが入り、暗がりの中で涙目の少年を見る。

（ありゃりゃ、もう怒られてるみたね・・・）

「ホラっ、お前が教えたんだろっ?!!　シッカリ話せ」

店の主人に連れて来られた男の子は、１０歳までどうかと云う生意気盛りの顔を訝しげにして。　倉庫の入り口に揃った3人の前に押し出された。

ジュンガと云う少年は、降り被った雪が解けて湯気の上がる坊主頭で、黒い瞳は大きく。　悪戯しそうな雰囲気を見せる少年だった。

ユリアは、ジュンガの前に屈んだ。

「ねえ、ジーンに教えた場所って何処?　昨日の夜から、みんな帰って来てないよ」

「・・・・」

ジュンガは、下目遣いにユリアを見て黙って居る。

其処に、セイルが。

「怒られるのは、仕方無いよ。　でも、皆無事の方がいいでしょ？」

すると、ジュンガはセイルを文句の有りそうな目で見上げて。

「危険な場所じゃない」

「ど～して解るの？」

問われて俯くジュンガは、ぶっきら棒に。

「だって・・・いっつも役人が立って見張ってる・・・」

ユリアは、セイルを見上げて。

「役人が・・・見張ってる？」

セイルは、ユリアを見返して。

「王城とか～、貴族の住んでる地区とか～、湖の港とかね～」

其処に、ジュンガの伯父さんが加わって。

「ジュンガっ、お前って奴はぁ～。　あれ程に貴族様の地区や北の封鎖区域には行っちゃならんと言っただろうがっ！！！」

と、ジュンガの襟首を掴んだ。

「だっ、だってッ！！！　前に伯父さんがっ、剣を届けに行ったじゃないかっ！！！！」

そのジュンガの言葉に、店の主人は驚いた顔で。

「おっお前・・封鎖地区に着いて来たのか？」

ジュンガの顔が、泣きそうな顔で俯いた。

クラークは、店の主に。

「その“封鎖地区”って、あの親善大使館のある場所の事かい？」

店の主は、苦労の滲む色黒の顔を上げて。

「ああ、各国から親善が来て住んでいる場所さ。　だが、あの場所の一部で、広大な森が封鎖されたままにもう２００年に成るって話だ。　その森では、昔はモンスターが出たって噂だよ」

ジュンガは、その話に驚いた眼差しで顔を上げた。

セイルもユリアも、その顔を見れば一目瞭然。　ユリアは、セイルと見合ってからジュンガに。

「ジーン達は、其処に行ったの？」

俄に震え出したジュンガは、頷く。

「だ・・だって・・・モンスターなんて・・聞いた事ないよ・・。森に・・霧の出る森に探険に行っただけだよ・・・」

ジュンガの話に、伯父の店の主は顔を真っ赤にして怒り出した。

「このバッカ野郎っ！！！！！　駄目だってのはっ、本当に危険だから言ってるんだっ！！！！！」

ユリアは、いきなり叩かれて怒られるジュンガと店の主の間に入ろうと。

「うわわわっ、ちょちょっと待ってっ！！！！　いきなり怒っても事態は変わらないってぇっ」

怒る主人は躍起になって。

「だがっ・・」

セイルも、穏やかな声で。

「モンスタ～の事を知らないなら～面白そうだから行っちゃうよ。子供だもん。　とにかく、これから探しにいきま～。　あまり怒らないであげてね」

と。

3人は、仕方なく一度斡旋所に戻る事にした。　役人が居るとなると、勝手に突入出来るとは思えなかったのだ。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告。

主に事を話し、その封鎖された森に行く3人。　だが、霧に閉ざされた森の奥には、不穏な影が蠢いていた。　セイルとユリアとクラークの3人だけで、子供達を発見出来るのだろうか・・。

次話、数日後掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

インフルエンザの威力は凄まじいですね＾＾；

未だに喉が痛くて、微熱が続くし＾＾；

皆様、流行り病にご用心＾＾‥

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪意外にヤバイ？≫

真っ先に有力な情報を掴んだセイル達。　だが、クラークもセイルも、役人が見張る場所と云うのではズカズカ入って行く訳にも行かぬと思う。　だから、斡旋所の主に相談する事にした。

東の空が白み、漸くどんより曇り空の朝と行った雰囲気の空模様。
　屋内では、ランプでも点けないと暗くて人の顔が解らない。

雪を払い、斡旋所に戻った3人が見たのは、もうお手上げの様な雰囲気で黙る冒険者チーム数組が、斡旋所内のテーブルに暗く座っている光景だった。

ユリアは、仕事の形式が競い合いなので。　報告はセイルに任せた。

3人がカウンターに向かうと、俯いて憔悴し始めた老人の主が、紅茶の冷めたカップを手にボンヤリしている。

クラークが、先に。

「主殿、主殿！」

と、声を掛けると。

「あっ、ななんっ・・おっ・・・く・クラークか・・」

驚いた顔をして、クラークを見た主の気落ちする様子が良く解る。

「ああ、主殿。　子供達の行った先が解りましたぞ」

俯き掛けた主の顔が、ピタリと止まった。

周りの冒険者達も、テーブルの場所からカウンターを向く。

「ほ・・ホントかっ？！！！！」

クラークは、全てを話してから。

「その行った場所が問題だ。　許可無くして、我々がズケズケ入っては不味い場所かも知れぬと思うたまでに。　近くが、親善大使達が住み暮らす屋敷が有ると聞いたが・・・。　捜索に行って大丈夫だろうか？　周囲への迷惑は、なるべく最小にしたい」

言葉も発せられなかった主は、此処まで言われてから。

「あああっ！！。　あの森に行ったとな・・。　何て・・何て事だっ！！！」

と、勢い良く椅子を後ろに倒して腰を上げた。

主と同じくカウンター内の左奥で書類の整理をしていた手伝いの中年男性も、その音に驚いてクラークと主を見た程に、椅子を倒した音は斡旋所に響いた。

テーブルに着いていた冒険者達は、居場所を知ったからにはと我先に行く態度を見せながら。

「マスターっ、ど～するんだっ？！！！」

「そうだっ、モンスターが出るなら時間を置けないだろっ？！！」

などと、騒ぎ出す。

斡旋所の主は、一同を見て。

「国には・・・これから私が話す・・。　皆・・、先に救出に向かってくれ・・」

「よしっ！！！」

「了解っ！！！」

「手柄は俺達のモノだっ！！！」

２０人近い冒険者達が立ち上がった。

ユリアは、情報は自分達なのに。　この変わり様は何だと思う。

しかし、其処に。

「だがっ！！！！！」

斡旋所の主の鋭い声が上がる。

飛び出そうとした一同が、各々動きを止めて主に向いた。

「・・・・」

青い顔の主は、物凄い真剣な顔をして一同を見回すと。

「よいか・・。　あの森は、曰く憑きの危険な場所だ。　今までに、何度もモンスター排除で秘かに討伐仕事を出している。　・・・噂通り、２００年近く前からな。　結界が、森を包んでおるが。　この時期は、湖の水温と寒さの狭間で霧が立ち込める上に、陽が出ないからモンスターも凶暴だ。　亡霊・不死のアンデットが出る・・。　行くなら、気を付けてくれ・・・」

数チームの冒険者達２０名程は、その話に理解を示して斡旋所を出て行った。

カウンター前のクラークは、幽かに震えながら外に出る支度をし始めた主に。

「そんなに危険な所だったのか・・」

「ああ・・・昔・・・少し有ったらしい・・。　では、至急に王宮に出向いて、許可を聞いてくる。　孫の命・・子供達の命が掛かってる。　クラーク・・お主も無理しない処までは行って欲しい」

「無論だ。　主殿のそんな顔を見るのは今日だけにしたい。　だが、

そうなるなら救出の手は多い方がいい。　後から来る皆にも、知らせてやってくれ」

斡旋所の主は、カウンター内に居る中年の皮のジャンパーを着た目つきの鋭い男に目配せを送った。

「心得ております」

男は、頭を下げた。

セイルは、のほほ～んとした口調で。

「では～、行きますか～」

ユリアは、たった3人で大丈夫かどうか心配に成った・・。

セイルを先頭に、雪の舞う外にまた出た3人。

クラークは、白銀製の自分の槍を後ろに見て。

「さて、行くか」

だが、ユリアはセイルに。

「処で、アンタ。　剣も持ってないのに、ど～するのよ」

「あ～。　そう言えば」

今にして、クラークもそれに気付いた。

二人に挟まれて見られるセイルは、笑って。

「あははは、その辺で安いの買う～。　あははは」

あまりののんびりさに溜息を吐いて、通りに出たユリアとクラーク。

其処に。

「どうしたんだい。　もうお手上げか？」

聞き覚えのある女性の声がする。

3人が声の方に顔を動かせば。　青いマントのフードを浅く被ったカミーラが、マントにフードを被る曰く有り気怪しげな男3人を連れた姿で立っていた。

「はあ～・・・また変なの出た」

ユリアは、もう絡む気にも成らないらしい。

カミーラが、ムッとユリアを睨む時。　どうやら尾行され続けていたと思ったクラークは、これ以上は構いたく無いと思って。

「中に入って話を聞いたらどうだ？　進展があったみたいだぞ」

「な・何っ？！」

カミーラは、斡旋所の入り口を見て。　またクラークとユリアを睨んでから。

「行くぞ」

と、後に続く男達を連れて斡旋所の中に入って行った。

さて、カミーラに絡まれる前に雪の降る中歩き出した3人。

クラークは、何よりも不思議に思えたので。

「処で、セイル殿。　お主、何で剣を持たないのだ?」

セイルは、半笑いして繕う。　何やら、訳でも有りそうな顔である。

深々と降る雪を見ながら、呆れた顔のユリアが。

「“ソードクラッシャー”だから・・みたい」

クラークは、“ソードブレイカー”と呼ばれる特殊な武器を思い出し。

「?　剣が買えないのか?」

と。

だが、それを否定するユリアは、首を左右に。

「セイルは、使う剣を軒並み壊しちゃうの」

ユリアの話にその横で、ガックシとショげるセイルは。

「すみま～せんで～す」

これでクラークは、尚更訳が解らなく成った。　困惑した目を前に向け、道行く人などを見ながら。

「“壊す”・・・。　意味が解らないの～」

説明したユリアですら、呆れた顔でセイルを見て。

「アタシも、良く解らないわ。　ただ、セイルの家から近い所に、エルオレウ様は武術道場を作って有ってね。　冒険者とか、剣の腕を鍛えて旅する武芸者の人が、立ち寄って稽古出来る場所が在るの」

「おお、それなら知っておる。　ワシも、行った事があるな。　２０・・そこそこの頃だ」

クラークの２０歳そこそこと聞いてユリアは、セイルにニッと笑って。

「私達生まれてる？」

セイルは、首を傾げて。

「ギリ・・・手前？」

ユリアは笑って頷きながら。

「其処に来てた冒険者の人と、セイルは時折試合してたんだけど～」

クラークは、昔に見た広い土間の道場を思い出しながら。

「ほ～」

「でもね。　そこに在った練習用の剣を、全部壊しちゃったんだよ」

「それは・・・なんとも」

以外に不器用なのかとクラークは思い、笑いながらショげるセイルを見る。“エルオレウの孫”と云う期待感が壊れる想いだ。

ユリアは、セイルを悪戯っぽく見て。

「何でも、すっごく達人の人が言うには～。　セイルは素早い動きと身体のバネ。　そして、エルオレウ様直伝の剣術の為か、才能かは解らないんだけど。　太刀筋の角度の鋭さや強さが先行し過ぎてるンだって。　まだ、その太刀筋を支える腕力や身体が出来てないし、その動きとバネから生まれる衝撃を剣に全て乗せちゃうから、剣自体が耐え切れなくて壊れちゃうんだって～」

「ふむう・・・」

クラークは自分の経験を踏まえて、なんだか凄そうなセイルを見て。

「詰り、未完の大器と云う処かな？」

クラークの大そうな言い方にニヤついた顔で細めた目のユリアは、セイルを肘でゲシゲシ突き。

「おい、そんなに凄いの？」

セイルは、恥ずかしがって俯いたままだった。

途中の店にて、大量生産で作られる安物の長剣を二振り買ったセイル。　２本で、７００シフォン。

やはり、流れ作業で大量に作られる剣と、一本一本手作りで名匠が作る剣は耐久度も、切れ味も違う。　だが、名匠などが作る個人生産の武器は、世界に出回らない。　しかも、値段が高い。　良い物を手に入れられるのは、限られた者か。　金が必要なのだ。

意外に、武芸に秀でぬ貴族や官僚が驚くべき名品を見得で持っているが。　やはり、全ては金の力である。　一般の冒険者に、そんな名品を最初から持てる者など１割と居ないだろう。

クラークは今の話で、セイルとユリアが隠れて冒険者に成ったと云うのが、現実だったと理解した。　あのエルオレウの孫であるセイルだ。　名品を買う金など有り余る家に縋れば、稀代の名剣ぐらいは持てそうに思える。

さて、雪化粧した白い王城を左に望み。　３人は、王城の裏手、北東の封鎖区域にやって来た。　随分暗さが取れて、感覚としてはどんよりとした曇天の遅い朝ぐらいだろうか。　もう、近寄らなくても人の顔が確認出来る明るさである。

王城の裏側に回れば、其処は整備された林の中。　雪も薄っすらと地面を隠す程の中を行くと・・。　高さ１．５メートル程の石の壁に、頑丈な鉄の有刺格子柵が高き壁の如く伸びている。　入り口のアーチ状のゲートを、役人が立正警備し。　人の賑わいも無いので、雰囲気がガラリと変わった場所だ。

格子柵の向こうには、鬱蒼とした森が雪化粧して見えている。

ゲートに近付けば、鉄の兜に、帯剣し。　頑丈なスケイルメイル（鱗状の金属鎧）を着た装備のしっかり整えた役人が警戒に当っているのが見える。　頭の兜には、雪が引っかかって居る様に着いていた。

クラークは、セイルとユリアでは舐められると思って先頭に立って話し掛ける。

「お勤めご苦労さん」

声を掛けると、背の高い役人がクラークとセイル・ユリアを見てから。

「冒険者か？」

「ああ」

「もしや、昨夜の侵入者の一件か？」

クラークは、セイルを見て頷いてから。　話が早く進みそうだと思いながら。

「その侵入者とは、封鎖されている森に入った者達の事だな？」

「うむ。　人が入ったらしいと報告を受けている」

「そうか。　実はな・・・」

理由を説明したクラーク。

「なるほど。　それなら、此処から左に真っ直ぐ行った所に、閉じられた鉄門から在るから。　其処から入られると良い。　我々の護るのは、親善大使区域に行く門だ」

そこに、ユリアがクラークの脇から顔を出して。

「ねえ。　何で、森は封印されたの？　モンスターが出るって聞いたけど・・・。　“ヘイトスポット”（自縛念温床）や、“カオスゲート”（悪魔の門）とか出来たの？」

役人は、少し不安げな顔で。

「嫌、レベルの高い機密情報で、我々にも知らされていないのだ」

ユリアは、役人に同情する。

「うはっ、モンスターの出る理由も解らないで警護しなきゃ成らないの大変だわ・・。　子供達の事は冒険者達が何とかすると思うけど・・。　警備頑張ってね・・」

黙っていたもう一人の年配の役人が、此処で口を開き。

「仕事だからな。　それより、子供が忍び込んだと成るなら事態は深刻だ。　その方達だけで大丈夫か？」

クラークは、公募依頼で１００人以上の冒険者達がそれぞれのチームで参加している事を告げてから。

「一応、斡旋所の主殿が国の役人に交渉に行ったが、そなたらも警

戒はしておいていいと思う。　お互い、助け合えるならその方が良いしな。　ま、では行かせて貰う。　後から冒険者達が来るやも知れん。　手数だが、同じく教えてやってくれ」

背の高い役人も、年配の役人も、クラークやセイルには気品を感じ。
ユリアには、何かこう親しみを含んだ優しさを感じたのだ。

背の高い役人は、３人を見て。

「解った」

クラークも、向きを変えて。

「もし、怪我無く救い出せたなら。　情報が伝わり易い様に門の見張りの役人には報告する故な」

「済まぬ」

と、云った年配の役人は、内心に。

（随分と人の出来た冒険者だな・・。　さぞ、名の売れた者なのかも知れぬ・・・）

と、クラークに感心してしまった。

≪霙の森で≫

3人は、封鎖された森を前にする門の前に来た。

「ウヒャ～～、霧が掛かってモヤモヤしてる～」

ユリアは、外見からして、霧に森が包まれて居る様な森に驚いた。
不思議と霧の所為か、雪が霙の様な状態で降っている。門を潜った先から、霧で見え隠れする森までの間は、伸び放題の芝(グラス)が赤い実の様な物を付けて、霙の中で濡れている。

寒そうに白い息を吐いて門を護る役人は、門を片方だけ開いて護っていた。

「済まぬが・・・」

クラークが事を話せば、もう数組のチームが森に入って行ったらしい。どうやら、森の中に入る許可は下りている様だった。

浅くマントのフードを被ったユリアは、森に歩きながら。

「ヤッバイな～。凄い闇の力が強いよ・・。これじゃ～光の精霊を呼ぶのは無理。霧と自然のバランスから見ても、火の精霊も辛いカモ・・」

3人で、門を潜って霧の立ち込める森に近付きながら。クラークは、ユリアの話に疑問を抱いた。

「ユリア殿」

「ん？　なあに？」

「ワシは、今まで精霊遣いには出会った事が無いのだが。　精霊遣いとは、好きな精霊を自由に呼び出せる者では無いのかね？」

聞くと・・。　ユリアは黙った。

「？」

何も返事が返って来ない事で、クラークは、自分が何か悪い事でも言ったかと思うので、ユリアを見ると・・・。　俯いている。

フードを被るセイルが、クラークに説明をし始めた。

“精霊遣い”とは、世界を構成する始祖元素とか大元素と呼ばれる１０の属性。　地・水・火・風・光・闇・流・功・星・魔の内、自然の属性の地・水・火・風・光・闇の６属性に宿る“精霊”と云うエネルギーの妖精とも云える者を召喚して魔法を遣う特殊な魔法遣いなのである。

さて、この“精霊遣い”。　ほぼ、９９％の精霊遣いとは、精霊を古き言葉の詠唱で強引に契約を結ばせて呼び出す使役型と括られる呼び出し方なのだとか。

クラークは、“使役”とは穏やかでは無いと思いながら。

「随分と強引なんじゃの～」

「はい・・」

精霊は、火と水、地と風、光と闇と云う反属性の法則が在り。　それぞれに自然条件や、地場の影響に因っては、精霊の力を十分に発揮出来ない関係に置かれる。　そんな中で、強引に精霊を呼び出して魔法を遣うと、精霊の体力や意思を無視して使う為に、精霊は死んでしまったりする。　実は、大抵の精霊遣いにとっては、呼び出す精霊とは道具に過ぎないのだ。

精霊は、各自然属性の強い影響下で、まだどの属性にも染まらない生命エネルギーと結び付いて新たに生まれる。　つまり、殆どの精霊遣いにとって、精霊は資源の様な物である。

だが、ユリアや“エルフ”と呼ばれる妖精族の亜種人の中には、この精霊の存在を感じられるだけでは無く。　交信や意思疎通が出来る者が居る。　実にユリアは、特に稀な力の持ち主で、精霊と産まれた時からの友情を育んで来た。　今でも、呼べば精霊がヒョッコリ顔を見せる。

“自然の誠意”と呼ばれるこの才能は、人やエルフ族でも極めて稀な才能である。

だが、その親密な親交故に、ユリアは精霊を使役する詠唱言語は遣わない。　使えないのでは無い。　絶対に遣わないのである。　自分の応呼に精霊が答えるか否かは、任せている。

一般に、精霊遣いでこんな者は居ないに等しいのだ。　だから、同じ精霊遣いすらユリアは嫌う。　精霊達をユリアは信頼している。
精霊達も、ユリアを愛している。　ユリアの、心の誓いであった。

「フム・・。　なるほど」

人間味の深いクラークは、返ってユリアの意思を知る。　同じ友人を、使役したいとは思わない。

さて。　話ながら踏み込んだ森の中は、非常に濃い霧の影響で視界が悪い。　密集した森と云うよりは、整えられていた森の様であり。　木々の間隔は保たれた感じが見受けられる。　寒い霙が降り、森の中では葉っぱが凍って。　霙の水分を雨の如く地面に落としていた。

「あ・・・」

突如ユリアは、ハッと顔を上げた。

セイルも、目を細めた。　にこやかな顔は残すが、やや丹精な顔に変わった。

「何か居るか？」

髪の毛が濡れて、体温との差でモヤを上げるクラークは、前の先から人の声らしきものを聞いた様な感じがしたのだ。

ユリアは、顔を険しくして。

「この気配が・・モンスター？　凄い、禍々しい不気味な魔の力と、死の雰囲気を宿した闇のエネルギーが固まってるよ・・・」

セイルは、後ろを振り向いて。

「どうやら、あの森の手前に結界が張ってあるみたいですね。　霧に紛れた闇や魔の波動を封鎖区域内に封じる役目をしているようです。　だから、壁際にモンスターが来ないだけなんだ・・。　森の全体には、モンスターを生み出す力が堆積して蟠っています」

そこまで感じられないクラークは、肌に不穏な気配を感じるくらいだ。　魔法遣いでも無いのに、結界の波動を感じられるなど凄い事なのだ。

「セイル殿、お主・・・」

セイルは、自分に驚きの目を向けているクラークに笑って。

「僕は、魔法剣士なんです」

クラークは、一瞬固まった。

「な・・何と」

セイルは、前を向いて。

「エンチャンターであり、剣士ですから。　魔法自体は扱えません。ですが、剣に魔法を宿す事が出来ます」

エンチャンターが剣士をするのは異例だとクラークは思う。

「本当か？　き・・聞いた事が・・・無い」

魔力を飛び道具に宿すエンチャンターだが。　至近武器で使用する者など聞いた事が無かった。

セイルは、前に歩み出して。

「誰か戦っています。　助けが必要なら、加勢しましょう」

「おっ・・おおお・・」

クラークは、セイルに驚きながら返す。

ユリアも、杖を構えて。

「行こうっ」

と、走り出した。

（エンチャンターでも、魔法を武器に纏わせるのには集中が必要だ・・。　その集中を欠かさずして、魔法を剣に宿すなど・・。　出来るのか？）

クラークは、今までの自分の培った知識と情報が、一気に新しく塗り替えられるべく崩壊する様な衝撃を受けたのである。

ユリアも不思議な者なら、セイルも不思議な者だった。

≪モリノナカハ・・・・・≫

3人が霧の中を走って行けば。　霧の篭る森の先から戦いの気合の声を発すのが聴こえてきたり、仲間の名前らしきを叫ぶ声がしたりして来た。

「逃げろっ！！　リーダーっ、コレは不味いぜっ！！！！」

「ヤバイっ、囲まれたっ！！！！　モンスターが多いぞっ！！！！！！」

男二人の声が、霧の立ち込める前方から次々上がり、

「落ち着いてっ！！　傷は治しますっ！！！」

と、大人びた女性の声が。

ユリアは、セイルの右側から声に近付いたと思った時。

「あ〝っ」

白い霧の中から、突然に数体の骸骨の顔が見えて驚きながら止まった。

クラークは、背中のランスに右手を回して、

「助太刀するぞっ！！　どりゃああーーーーっ！！！！！」

掛け声を吼えて、走る勢いのままに槍を取り構えて肋骨だけ見えたモンスターの方に槍先を突き出した。

“カシャーーンっ！！！！”

小気味良い乾いた破壊音が霧の中に響く。

「誰か解らないが助かるっ！！！！！」

霧の中で、少ししゃがれた声をした男性の声が返って来た。

セイルも、ユリアが立ち止まったので霧の正面に剣を抜いて飛び込んだ。

「いきなり～？」

困惑のユリアの肩、腰、足元の左右に小型の浮遊する何かが姿を現した。

「ユ～リ～ア～、や～っちゃえ～」

「ユ～ちゃん、ゴ～ゴ～」

「ユリアは、私が護る」

「フン、ザコだな～」

子供の様な、老人の様な・・・それぞれの声を出すその何か・・・。

ユリアは、その現れた者達を見回した。

「うん、みんなっ。　いっくよ～！！」

笑顔で云うユリアは、杖を構えた。

「水の精霊・“サハギニー”君っ！！！」

と、ユリアが呼べば、

「おいさ～」

ユリアの右足の脇に出た、体長１０センチくらいの魚が、二股の槍を構える。　背中は綺麗な緑色の鱗、お腹周りは白い鱗の魚なのだが・・。　鰓と尾びれの近くに蜥蜴の様な手足が生えて居て。　二足歩行で立ち、何と槍を構える見た目愛らしいモンスターの様な生物である。　しかも、顔は何処か鯰っぽい雰囲気で、声がオッサン染みた男の声だった。

ユリアは、杖を構えて天を指し。

「“ウォーターシュート”いっちゃうよっ」

右足の横に出た小型のモンスターも、ユリアに応呼して槍を構えては。

「任せとけっ」

と。

その瞬間、ユリアの頭上にいきなり渦を巻く水が拳大で現れた。

「いっけーっ！！！！」

ユリアと魚のモンスターが、同時に骸骨に向かって杖を振り込んだ。
すると。　人骨の頭部に、短い一本角を持った骸骨のモンスター目掛けて、ユリアの頭上に現れた水の渦から、鏃の様な水の短剣が５・６本飛び出した。　凄いスピードで骸骨のモンスターに向かった水の短剣は、ぶつかる一撃で頭部の骸骨を破壊した。　肋骨、大腿骨、背骨、左足、骨盤を破壊し。　粉々に骸骨のモンスターを粉砕してしまったのである。

すると今度は、ユリアの右直ぐ近くで。

「キャアーっ！！！！」

絹を裂くような女性の悲鳴が上がる。

ユリアが見れば、霧の中に顔や手の肉が腐って爛れているおぞましい顔の男が。　開きっ放しの口からドロドロした蛆の蠢く唾液の様な黒ずんだものを垂れ流しながら、霧で見え難い白い法衣の様なローブを纏う女性にノソノソと襲い掛かって居た。

「テング君っ！！！」

鋭くユリアが、名前を呼べば。

「お呼びか」

老人の声をした小型の生物が、ユリアの腰の横に出た。

「“ウィンドプリズナー”お願いねっ」

「ウム、承知っ」

ユリアの声に応呼する腰の横に浮いた生物もまた、奇怪だが愛らしいモンスターの様である。　小さい真っ黒な烏の顔が、赤子より小さな身体に乗っている。　右手には、５枚に枝分かれした葉っぱの団扇、左手は素手らしき鋭い爪を鳥の様な手に生やす。　背中には、黒い２対で４枚の羽根が羽ばたき、胴には古代語らしきルーンが刻まれた修行僧侶の様な衣服まで纏う。

しかし、その“テング”と呼ばれたモンスターが団扇を構えると、ユリアの周りにヒュ～っと音がして風のサークルが出来上がった。

ユリアに気付かず、ゾンビから逃げる女性。　グッショリ濡れたローブの背中には、穏やかに微笑む女神が刺繍されている。

「ああっ」

ゾンビに襲われて、必死で逃げる女性僧侶は、霧に見えずにいきなり視界に現れた木に驚き。　左に避けたが土から出ていた木の根に蹴躓いて地面に倒れた。　その時、手に持っていた杖を衝撃で手放してしまう。

「い・・いけないっ」

杖を放して攻撃の手段を失った女性の僧侶は、恐怖に引き攣った顔を倒れ込んだ姿勢から後ろに向けると・・。

“あ〝あ〝あ〝・・・”

不気味な間延びした声を吐いて、死人の目を光らせたゾンビが木の間近に迫っていた。

「あああ・・い・嫌っ・・こっ来ないでっ！！」

魔物にまだ慣れていないのだろうか・・。　女性の僧侶は、腰を抜かした様に地面を這って逃げ出した。

その時だ。

“ヒュ～”っと、女性の顔を撫でて風が走る。

「？！！」

女性僧侶は、目に見える風に驚き。　ハッと後ろのゾンビに振り返る。

「あ・・」

自分の背後に迫ろうとしていたゾンビが、動きを止めて足をもたつかせていた。　その原因は・・・、ゾンビの足元に包み込むような円を画いて疾走する風である。

「あ・・ああ・・かっ・風がっ」

驚く女性。

その女性にも見える位置に、霧の中を歩いてきたユリアが、杖を構えて。

「もう大丈夫よっ」

と、杖を振り上げる。

ゾンビの足元を取り巻いていた風の円が、カーテンの様に包みながら上に伸び上がる。　女性は、その様子に驚くばかりだ。

ユリアの腰の脇に浮く、“テング”と呼ばれた団扇を持つモンスターの様な生物が、ユリアの左足元に控える人形の様に小さな白馬に云う。

「“ウィニーコーン”、手を貸してくれるか？」

青い宝石の様な瞳、純白の翼と身体。　水晶の様な鬣をして、まるで普通の子馬が親馬に思える様な小さき白馬が、純白の翼を動かし頷く様に前に出る。

ユリアは、テングを一度見て頷くと。

「よ～し、一気にモンスターをやっちゃうぞっ」

その声に応呼して、小さき天馬の目が光り。　テングが葉っぱの団扇をゾンビに振り向ける。

刹那。

“あ〝・・・う〝・・・”

風に包まれて動けないゾンビの周りを動いていた風のカーテンが、ピタリと時間が止まるが如く回転を止めた。

瞬間。

霧の中で、淡く黄色に光る風の所々から、いきなり対角線を引くように突き出す薄い風の膜がゾンビを貫いてしまう。　外から見れば、風の透明な筒に、直線の罅か亀裂が何十と走った様な印象だろうか。

　または、この風の筒を剣で何十回と切り刻んだ様でもある。

そして、一気に風は淡く光出しながら回転し始めてゾンビをバラバラにして灰に還してしまった。　対角線状に伸びた風の膜のいずれかが、ゾンビの弱点を貫いていたのだろう。

「・・・・・」

腰を地に着けた女性僧侶は、風が消えて行きながら。　灰と変わるゾンビの残骸をその場に纏めるのを見つめていた。　それは丸で、地面に落ちた枯葉を風が集める様であった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告

森の中で、助けたチームのリーダーである男と共に森の中を捜索する3人。　後から来たチームには、カミーラも居れば、試練を乗り越えてきた冒険者達も居た。　霧と寒さが、凍える恐怖を胎動させる。　子供達は？　セイル達は、無事に仕事を達成出来るだろうか・・・。

次話、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

次回は、ちまっと何処に出ていたキャラを登場させる予定です＾＾

お楽しみ下さいね＾＾

感想・ご意見・レビューなど、ありがとうございます＾人＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪ヘルフォレストは、セメテリー（墓場）？≫

森の木々から、雫の冷たい雨が降る。　一本突き抜けた感じの、太い幹周りをした巨木の下に、助けた側と助けられた側が集まった。

「済まない。　助かったよ」

少し老いた感じのする、眼帯をした片目の剣士マガルが頭を下げた。

「ありがとう・・」

「クラークさんの居るチームだけある、流石だ。　恩に着るよ」

と、６人の男女が、助けたセイルやユリアやクラークに頭を下げる。

クラークは、その礼を受けてから、セイルに向いて。

「しかし、ゾンビやスケルトンが１０体以上も・・。　此処は、一体何だろうか？」

ニコニコが消え、微笑みに変わるセイル。　クラークの話に頷き。

「ユリアちゃんが見たゾンビの姿が～、冒険者に近い服装だとか。　王城の背後で、北側に在る森を考えるに～。　此処は昔の墓地だったのかも～ですね」

その答えに、マガルのチームの大人びた女性僧侶がおかしいと思い。

「でも・・・、墓石も何も無いわよ・・・」

辺りを見回しながら自分の肩を両手で擦る彼女は、もう寒さに凍えているのだろう。　雨に近い霙が、段々と氷の粒の様な形状に変わり。　また、北風の影響か寒さが堪える。

ユリアも、霧に包まれた森を見回して。

「確かに・・雰囲気は“墓地”っぽいけど・・・。　墓石は見当たらないわ・・」

セイルは、正確に向かう北側を向いて。

「その昔、戦争時に出た無縁の遺体は、墓石を置けないので苗木を植えたと云いますよ～。　森の奥に行くに遵って、木々が～ドンドンお～きく成って行きます」

クラークとユリアは、周りを見て。

「確かに・・・、入り口の見えた木よりはデカイな」

「そうね。　それに、木の根元に何かが抜け出した様な穴が見えるわ・・。　ホラ、この木の根元にも・・」

と。

皆、ユリアの声に気付いて木の根元の古びた穴を見た。

片目の剣士マガルは、深い頷きと共に。

「元々、無縁の者を弔う墓地だった・・。　２００年前、何かが起こってこの様なモンスターを生み出す切欠を作った。　そして、その力に支配された骸が、モンスターとなって上に這い出て来た・・。　なるほど、定期的に討伐が必要に成ったのも頷ける」

すると、腰に鞭を装備する若い男性がマガルに寄る。　かなり、不安な顔で。

「リーダーっ、どーする？　この先、こんなバケモノばっかりじゃ死んじゃうぜ・・」

「そうだ・・。　流石に、腕に適わないぞ」

弓を背にする若く背の高い男も云う。

マガルは、自分以外の若い仲間を見た。　接近戦の鞭遣いの若者や剣士の子供の様に若い女性は、腕や足に怪我をしている。　僧侶の大人びた女性も、最近冒険者に成ったばかりの新人だ。　魔想魔法を扱う女性は、戦意喪失して俯いているし。　弓を使う若者では、

この不死者の蠢く森は苦手だろう。

「・・・」

マガルは、大金を出して買った自身の白銀の剣を見てから。

「よし、俺以外は全員斡旋所に戻れ」

その言葉に、仲間の一同もクラークやユリアも驚いた。

「おっ、りっ・リーダーっ！！！」

鞭遣いの若者が、声を上げるが・・。

マガルは、真剣な顔を仲間に返して。

「俺は、あの斡旋所の主には“借り”が在る。　子供達を助けてもやりたい。　だが、新米の皆には、このモンスターは危険だ。　だから、モンスターが多い事を斡旋所に伝えに戻れ」

「で・でも・・・一人って」

魔想魔術師の少女の様に小柄な女性は、ズブ濡れの紫色したとんがり帽子を上げてマガルを心配した。

「大丈夫だ。　俺は、このクラーク殿の居るチームに着いて行く。　助けられた借りを還すのと、協力を考えてだ。　とにかく、先に進まなければ成らない中で、怪我人や戦意喪失した者を抱えては足手纏い。　ミイラ取りが、ミイラに成る。　別に、チームをバラす気は無いさ」

若いチームの一同は、マガルの話に黙る。

ユリアの両肩に、あの現れた精霊達が乗って居て。　その様子を見ながら雑談していた。

結局、怯えてしまった若き皆は、森を引き返す事に成った。

霧に中、仲間を見送ったマガルは、セイルに向いて。

「さて、先を急ごうか。　モタモタしては、森の中で夕方・・夜に成る」

セイルは、ユリアに向いて。

「ユリアちゃん、人の生命波動には気を配ってね」

精霊を肩に笑うユリアは。

「解ってるよ」

クラークは、セイルが歩き出した後。　ユリアの脇に寄って、マジマジと精霊達を見る。

「むむむ・・・、精霊を初めて見た・・・」

すると、赤子の掌程の大きさで丸いトゲトゲの黒い球体が体内の中に、黒い顔をだけを見せる闇の精霊である“闇玉”（ヤミダマ）が。

「オッサン、精霊も見たこと無いのかよ。　おっくれってる～。

ま、ユリアと一緒に居れば、空気みたいに当たり前に成るゼ」

と、生意気な子供の声で言って来る。

「ほほう・・」

感心するクラーク。

目上のクラークに悪いとユリアは、困った顔をその精霊に向けて。

「口が悪いな～。　ヤミちゃんは」

ユリアの言葉に、“闇玉”の隣に居るテングが腕組みで頷き。

「最近生まれた精霊の割りに、口の利き方を知らん愚か者よ」

ユリアの左肩に浮く白い天馬は、おっとりとした女性の声で。

「反抗期かしらね」

その隣の、魚の姿をしたサハギニーは槍を持って。

「クラークとオイラは同じ“槍の仲”だな。　さっき、スケルトンを突き壊したのカッケーゼ」

クラークは、精霊に“カッケー”と褒められたのは嬉しい。

「うむ。　槍なら負けぬぞ」

と、笑うが。　ユリアが精霊達を使役したくない理由が、なんとな

くだが深く理解出来た。　精霊達にも、心が在ると解ったからだ。

さて。

セイルやユリア達が森を進み。　寒さが厳しく成って、風が北風の強い吹き方に変わる頃。

封鎖区域の入り口では、後から事情を知って入って来た冒険者のチーム達と。　怪我人や戦意喪失をして戻ったチームの出入りが見えた。

「おいおい、そんなにモンスターが居るのかよ」

「気を付けろ。　不死系や亡霊系のモンスターばかりだ。　対処の出来ないチームは、命取りだぞ」

「なあ、こっちは戦力が足りない・・。　一緒に行かないか？　分け前は、半分でいいよ」

入り口で、５０人以上の各チームが情報交換をしている。

中には都市の斡旋所に戻って行く者在り。

中には入り口で、会話する者あり。

中にはチームで、先にと森に分け入る一団在り。

誰もが死にたくないし、仕事は成功させて金を貰いたい。

何より、此処まで来ると。　名声に大きく関わる事に繋がるだけに、

それぞれ冒険者同士で色々な思惑と欲望が交錯していた・・。

≪あの時の・・・冒険者達≫

「フン。　ドイツもコイツも腑抜けだな・・」

森に入るチームの中で、セイル達よりもかなり遅れて昼過ぎに向かうチームの中にカミーラ達も居た。　赤い髪を濡らせて、幾分色っぽいカミーラ。　霧の中、森の前で躊躇して仲間を増やそうと画策するチームに侮蔑の視線を送って森に向かった。

さて、その後だ。

男女６人の冒険者達が、交渉したりしている冒険者達の後ろを越えて。　森に続く芝の草原の上を行く。

「流石に、凄い事に成りましたね。　イクシオさん」

落ち着いた声がまだ若い張りを思わせる青いローブを着た青年は杖を右手に、自分の横を歩くテンガロンハットを被る牛飼いの様な皮ジャンの中年に声を掛けた。

「ああ。　とにかく寒い・・、早く終わりてぇ～のがホンネ」

鞭を腰に、皮ジャンパーの下には皮製の胸当てを着込む中年男性は、霙が凍り背中に入るのを嫌って首元のボタンを填めた。

「ボンドス殿、エルキュール殿、不死者が出る時は魔法を掛けましょう」

野太い声を出すのは、緑の神官服を着て、更にその上から鎧を着たスキンヘッドの巨漢である。　その大柄の背中には、鋼鉄製で大振りの鉄槌を装備している。

巨漢にボンドスと呼ばれた初老の天辺禿げた頭にマントのフードを被した男性は、巨漢を見上げて。　自分の両脇の腰に下がった1対二振りの片手斧を指差しながら。

「直ぐに頼むぜ。　セレイド」

一緒に歩く、黒髪を背中で束ねた若い剣を佩びた女性は、巨漢のセレイドを見上げて。

「普通の剣でも、魔法でゾンビやゴーストを斬れるだなんて便利ね。是非、お願いするわ」

切れ長い瞳から向く視線、口紅の塗られた赤い血の様な唇。　エルキュールと呼ばれた女性は、中々の美女である。　声も大人びていて、悪く無い。

青いローブを着た魔法遣いらしき若者の横に、小型のハープを脇に下げた目の細い穏やかな女性が寄る。　薄い赤のローブに、右手に

は杖を持っている。

「キーラ。　霧からも、森の中からも凄い闇の力を感じるわ。　気を引き締めて行った方が良いわよ」

魔法遣いの青年キーラは、森を見ながら頷く。

「エルザさん、承知しました」

この冒険者達。　中々の一団と視て取れる。

魔法遣いキーラは、嘗ては“風のポリア”率いるチームの面々などと一緒に、包帯で顔を覆面する男の組織した合同チームで“魔の森マニュエル”や“悪魔の蔓延る山アンダルラルクル”へ赴いた一人である。　今、同じチームに居るボンドス・セレイド・イクシオはその時に一緒だった仲間だ。

実は、その嘗ての合同チームに加わった一人で、弓遣いレックを含めて別の大陸に移動した後に。　キーラには色々有った。

去年だ。　キーラをリーダーとしたチームで、レックとキーラは有る大変な仕事を請けた。　二人と一緒に居たチーム仲間と最善を尽くし仕事を達成したが。　強力なモンスターとの戦いで、レックが片足・片腕・片目を失い、数日後に死亡した。　キーラやレックが劣っていたのでは無い。　相手にしたモンスターが凶悪過ぎたのだ。

レックの死で、キーラはチームを解散した。　失意の底に堕ちたキーラだが、今年の初めにイクシオ・セレイド・ボンドスが改めて作ったチームに拾われる形で、今に至る。

美女剣士エルキュールは、２３歳の美女。　別のチーム内のセクハラに怒り、飛び出した先でイクシオに拾われた。

僧侶で、自然の神を信仰するエルザは、吟遊詩人として気ままな旅していたが。　冒険の一大叙事詩的な歌を作ろうと冒険者に成った矢先。　入ったチームのリーダーのいい加減さで、チームメンバーの大半を死亡して失うハメに陥る。　解散と同時に、そのリーダーだった男に“使えない”とレッテルを貼られてしまって孤立していた所を、イクシオに拾われた３０歳。

このチームのリーダーは、少しやさぐれた感じのする学者イクシオで。　チーム名は“成れの果て”の意味を持つ“イムハリスサンサーラ”。

森に入って、先に入った別の冒険者チームを助けながらのイクシオのチームだが。　森の中でスケルトンやゴースト数体に襲われても。　返り討ちの瞬殺である。

更に、その先で。　死者の死肉が怨念で集まった、身の丈３メートル近いゾンビですら。　キーラの魔法で、直ぐに灰と変わる。

各々が、修羅場を潜り。　一角の冒険者に成っていた。　一人一人は曰く有りだが、信頼の結束が強い実力揃いのチームである。

キーラが首からぶら下げるのは、レックの形見の短剣であり。　背中の背負い袋には、レックの使っていた弓矢の矢が入っている。　モンスターに襲われた農民の子供を守る為に死んだレックを思うキーラは。　戦いの後は必ずレックに感謝を持って、短剣を握って黙祷するのが習慣になったのだ。

「凄いわね。　キーラ」

黙祷を終えた時に、濡れた髪のエルキュールに褒められたキラーだが、微笑む顔で。

「ありがとう」

と、云うが。　再度瞑目してレックの短剣を握る。

（必ず、子供達は助けますよ）

キーラは、あの頃から変わらず・・・変わっていた。

≪森の奥での死闘≫

霧に包まれたままに、セイルとマガルが並び木々の間を行く。

（持っているのは、安物ではないか・・・）

マガルは、セイルの腰と背中に有る剣が不思議で仕方無い。　先程の戦いの中で、確かにスケルトン2体とゾンビをセイルは相手にした。　スケルトンは、五体を壊せば倒せるが。　ゾンビはそうも行

かない。　死体を動かす暗黒のエネルギー核を壊さないと駄目だ。

だが、暗黒のエネルギー核は普通の剣で斬っても壊れない。　剣で倒すなら、細切れに成るまで斬らないと倒すのは難しいだろう。細切れにしても、黒い暗黒の核が残るなら、何れは亡者系のモンスターに変わる。　動かなくなるのは、一時の事だけなのだ。

だが、霧の中マガルの見たセイルは、其処までゾンビに時間を掛けて居ない。　一体、どう倒したのだろうか・・・。　ゾンビの遺体は、確かに灰に変わっていたのである。

明るかった空が、また暗く成り出し掛ける。　寒く吐く息白い中でセイルは前を見ながら。

「雪だ～。　森が終わって、雪が降り出してますよ～」

ユリアも、クラークも、ハッとして雪に気付いた。　静けさが広がり、森も無く。　地面は、何時の間にか雪化粧し始めている。

クラークは、森が消えたのに違和感を覚え。

「ふむう・・。　太い巨木がいきなり途絶えた・・・。　もしや、封鎖区域の一番奥へ来てしまったかな？」

セイルは、頷いて。

「みたいですね～。　ホラ、壁が見えました」

セイルの指差す先には、この区域に入る時に潜った門の左右に伸びていた石壁と鉄柵の仕切り壁と同じ物が見えた。

ユリアは、壁際には霧が及んでないと思いきや。　思いっきり壁間際やその向こうに闇と魔の力を含む霧が広がるのを感じ見て。

「でも、結界は張ってないみたい・・。　ううん。　壁の向こうも、結界の中みたいだわ・・。　どうしてだろう？」

そこでセイルは、ユリアに確かめるべくこう聞いた。

「ねえ、ユリアちゃん」

「ん？」

「水の力は、もう間近に近い？　この北の先には、湖まで繋がっているハズなんだけど」

クラークの聞くセイルの声が、間延びしなくなっていた。

ユリアは、壁の向こう側を見て。

「霧の力で、水の精霊力は何処までも続いてるよ。　ただ・・・、湖とか川って云うのは独特の精霊の力の蟠りや、流れを感じるんだけど。　その感覚は無いなぁ～」

セイルは、ユリアの見る北側を見て。

「多分、まだ続きが有りそうだね。　もし子供達が、そっちに行ってたら大変だ」

クラークは、マガルと見合ってから。

「では、壁伝いに西に行ってみようか？」

セイルは、頷く。

ユリアの顔は、不安を匂わす顔に成った。

さて、其処から森を左に、壁を右にして。　雑草じみた芝（グラス）の上を歩いて少し行った所で異変は始まった。　壁沿いに歩けば、人の呻き声が・・・。　声を辿って森に近付けば、冒険者の男性が血を流して倒れていた。

「おいっ！！！　しっかりしろっ！！！！」

驚いたクラークが、その男性に走り寄って抱き起こせば・・全身血だらけの瀕死であった。

「あ・・こっ・・此処は・・やば・・い・・・」

男性冒険者は、深い噛み傷を全身に負っていて。　声を出してから直ぐに死亡してしまったのである。

遺体と成った男性を診るセイルは、全身の傷口が異常に脹れ上がって衣服と肉の一部を引き千切られている上に。　患部が青紫色に変色している所から、ゾンビに噛まれたのだと推察した。　遺体が蘇ってモンスターに成るゾンビは、その腐乱の進行度によって爪や歯に独特の雑菌や黴菌を持っている。　噛まれたりしたら、素早い処置が求められる。　さもないと、モンスターから逃げれたとしても、傷が化膿して病気を引き起こして命取りになるのだ。

案の定。　その男性の周囲を探してみれば、冒険者風の姿をした3人の男女の遺体が放置されていた。

マガルは、剣で切り刻まれた女性魔法遣いの遺体や、内蔵が溢れ出る程に噛み千切られた弓遣いの腹を目にし。

「なんて事だ・・。　若い奴等が・・・経験の無い奴等が犠牲に成ってる」

と、自分のチームの仲間を戻した事が良かったと思えた。

「セイル殿、遺体を燃やそうか？　放置すれば、夜にはモンスターに変わるやも知れんぞ」

クラークは、経験上から提案する。

ユリアは、壮絶な遺体を目の前にしてもう失神しそうな思いだ。

「うっ嘘・・も・・燃やすの？」

急に“燃やす”と聞いて、驚きである。

だが、悲しい顔をしているセイルは、冷静にクラークに頷いた。

「ですね。　この状況では、時間を置かずしてアンデットモンスターに成り変わる可能性は非常に強いです」

「うむ。　被害者がモンスターに変わって被害者を増やす・・。闇と魔の混じる力は、非常に恐ろしい」

マガルは、遺体を引っ張って来た。

「燃やすなら、早くしよう。　ランタン用の固形燃料ならある」

ユリアは、それが当たり前の様にするマガルやクラークを見て。

（コレが・・・普通なんだ・・）

冒険者としての経験を見せ付けられた気がした。

クラークは、遺品の武器や金品を纏めて誰かの背負い袋に押し込んで縛った。　燃やすのに邪魔な上に、他に逃げ帰った仲間が居れば、その者がどうにかするだろう。　冒険者の遺体からは、金品を始めに武器や防具など金目の物が出るので。　遺体荒しや金の無い冒険者の荒しに遭う事も珍しく無い。

犯罪や性根を曲げる原因に成るので、心有る者は遺品を斡旋所に送り届ける。　斡旋所は、然るべき手順でそれを始末し。　余ったお金は運営に回される。　運営資金が豊かなら、斡旋所の主の判断で仕事の危険手当なども付けられる訳だ。

さて、火を熾したクラークとマガルだが。　雪と変わる前に降っていた霙と、木から降り注ぐ冷たい雫に濡れた遺体を焼くのは苦労が要る。

ユリアは、中々火の付かない素振りで困るマガルに近付くと。

「ねえ、その火・・・貸して」

湿った木の棒に、燃える固形の油を付けて熾した松明の様な火。

ユリアは、現れていた精霊を一度隠れさせて。　フードを被った顔をマガルに俯かせた。

「・・・」

マガルは、黙ってユリアに松明を渡す。

ユリアは、遺体を前に松明を見つめる。　そして・・・。

「火に宿る精霊・・“ 火喰い鳥”・・力を貸して頂戴」

セイルを始めに、３人がユリアを見ていた。

ユリアが、松明にお願いをして、俯き目を閉じていると・・。　急にユリアの目が開いて顔を前にし。

「聴こえたっ、来るよっ」

と、松明を見る。

全員の目が、松明に注がれた時。　瞬間的に松明の火が異常に燃え上がった。　ユリアの頭上のず～っと上の木々の葉っぱが、その松明から燃え上がる火の熱風で揺らめいた程だ。

そして、全員の目の中に。　赤々と燃え上がる鳥が姿を現した。赤い鶏冠、孔雀の様な燃える紅蓮の翼、鶴の様な嘴をしていながら、身体の大きさは鶏ほどだろうか。

「ユリア、私を呼んだか?」

老人の声をした火喰い鳥は、ユリアを見て云う。

「うん。　モンスターに殺されちゃった人を燃やしたいの。　水の力が強い中で、居心地悪いかも知れないけど。　少し、力を貸して」

木々の葉から堕ちる雫が、火喰い鳥の間近に落ちると瞬時に蒸発する。

「いいだろう。　モンスターに変わっては、無駄に心配を増やすだけだ。　火の力は、破壊ではなく浄化が本位。　ユリア、我を使え」

「うん。　ありがとう・・・」

セイルが、クラークとマガルを少し後ろに下げさせた。

ユリアと火喰い鳥は、炎の魔法で４体の遺体を土に還した。

燃やし終わって、火喰い鳥を帰したユリアは少し疲れた顔をして雪を見る。

「も～嫌だな～」

頷くクラークも、霧に包まれて雪化粧し出す森を見ながら。

「無理をこれ以上は見たく無いの」

と、燃えた遺体に向いた。

その時、セイルが森と壁際の狭間の先を鋭く見た。

「向こうで戦闘が始まりました。　魔法の波動が・・」

気付いたユリアも、セイルの見ている霧の彼方を見て。

「す・・凄い闇と魔の力が蠢き出してる・・・。　これ・・全部モンスター？」

クラークもマガルも、セイルの見ている方向に急いで顔を向けた。

その頃、霽から変わって雪が舞い出した森と壁の狭間では。　あのカミーラとその仲間３人が、２０体を超えるゾンビやスケルトンに囲まれていた。

「なんて数だよっ！！」

焦る声のカミーラは、鞭を振り回して取り囲まれたスケルトンの群れの中で奮闘している。　カミーラを包む様に撓う鞭が、７体ほどのスケルトンの顔や肋骨に当って骨を削り砕く。　だが、スケルトンに痛みなどと云う生命感覚は無い。　手足などを壊して動きを封じるかバラバラにでもしない限りは、その手に持つ骨の剣を武器に動いて人を襲うのだ。

「カミーラっ！！！　モルカだけじゃゾンビを倒し切れないぞっ！！！！　一旦逃げようっ！！！！」

カミーラからスケルトンの囲みをを隔てた外側で、マントを着て剣を構える男が言う。　無精髭に、褐色の肌をした３０代と思える顔だが。　歪んだ左目、額の凄い傷を見る限り。　少し間を置きたい雰囲気を持っている男性だ。

カミーラは、蛇の様に鞭を降るってスケルトンの1匹の両足を打ち砕いた。

「ジャガンっ、逃げ切れるのかいっ？！！！」

剣士ジャガンは、スケルトンの頭蓋骨を切り砕き。　霧の中に見え隠れしているゾンビが、魔想魔術の飛礫の魔法で地に滅ぶのを見届けながら。

「とにかく森に退いて体勢を整えないとマズイぞっ！！！　ダッガが大きく見えない所に引き離されてるっ！！！！」

森の途中途中で遭遇したモンスターを振りきって進んできたカミーラ達だが、数体の群れに当って、戦う事を余儀なくされている内に、後ろからモンスターの群れが追い付いて挟み撃ちを喰らう事に成ったのである。

歯軋りするカミーラは、足を砕いたスケルトンの肋骨に鞭を絡ませ、回りのモンスターにぶち当てる為に大きく振り回した。

スケルトン同士がぶつかって、倒れたり、身体の一部を砕いたり。

「クソっ！！！　此処まで来てっ！！！」

スケルトンから鞭を解いて、霧に薄っすらと見える巨木の幹に飛ばしながらカミーラはモンスターを睨む。　幹に打ち付けられて、砕ける骨の乾いた音が聞こえた。

カミーラから西に少し離れた場所で。

「飛礫よっ、我が敵を撃ち倒せっ！！！」

黒いローブを着た男の声が、雪の舞う霧の中で響き。　男の周りに現れた小石程の飛礫が、魔法遣いの男を取り囲むゾンビ3体程に飛び掛る。　ゾンビの身体に魔法の飛礫が当る度に、小さな衝撃波を起こして炸裂し。　ゾンビの肉体を削り飛ばす。

だが、何分にも数が多過ぎる。　霧に隠れて、思うように弱点を狙えない魔法遣いの男は、カミーラから離れて行く形で追い詰められて巨木の幹に後退した。

魔想魔術師モルカは、汗をフードの中の額に流しながら。　全ての方向に気を配って気配を感じた。

（な・・なんて数だ。　俺を取り巻いてるゾンビの数だけで、１５・・１７体。　カミーラやダッカの相手にしているモンスターを含めたら、５０近いぞ・・。　このままじゃぁ・・全滅する・・・）

危ない橋をカミーラと一緒に渡って来たモルカだが。　流石にこんなに多いモンスターと渡り合うのは初めてだ。　脳裏に、“全滅”の二文字が浮んだ。

戦うカミーラの耳に、遠くから戦士ダッカの声が聞こえたのは、この時だ。

「カミーラっ、俺に構わず逃げろっ！！！！　相手は俺がするっ！！！！」

聴こえたモルカは、この瘴気を含む霧で間近の仲間の気配すら感じ難い中で。

（とにかく・・・カミーラだけは逃がさないと・・・）

杖を構えて、威力の高い剣の魔法を唱えようと考えた。

一方。　カミーラは、どんどん狭められるスケルトンの包囲網の中で焦りながら。

「お前達を見捨てれるかっ！！！！！　最後ならっ、全員一緒だっ！！！」

セイル達に心無い無礼な態度を見せたカミーラだが、仲間との信頼関係は確かな様だった。

「カミっ・・う〝っ・退けっ！！！！」

剣士ジャガンは、カミーラに助太刀しようとして、スケルトンとゾンビに阻まれてしまい。　焦って形振り構わず斬り掛かる。

戦うしか無いカミーラ達に、侵入者達を探してうろつき回っていたモンスター達がどんどん集まって来るのだった。　森で死んだ冒険者達と同じ道に、彼女のチームも迷い込んだのである。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告。

カミーラ達を救うセイル達。　命に危険が及ぶ仲間を連れて、森を戻るカミーラの目の前には、子供達の痕跡を見つけて先に進む事を決めるセイル達が居た。　森に踏み込んだ冒険者チームは、森にうろつくモンスターで実力の淘汰を受ける。

次号、数日後に掲載予定＾＾

どうも、騎龍です＾＾

セイル編の後のお話は、ウィリアム編へ続きますが。　その後は、少しスペシャルなお話をして、ポリア編に繋げて行こうかと計画しています＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪流星の卵≫

カミーラ達が追い込まれた時、我先にカミーラを助けたのはマガルとクラーク。　全力で走ってきたセイル達４人が、カミーラ達４人に合流出来たのは奇跡に近いタイミングであった。

スケルトン１０体以上に、交刃（こうじん）の間合いまで迫られたカミーラは絶望していただろう。

「退けいっ！！！！」

霧の壁を破り。　突如と槍を構えて突撃したクラークが、横から二体同時にスケルトンを串刺しして振り上げた。　乾いた破壊音を上げて、スケルトン2体は、肋骨を砕かれてクラークに持ち上げられてしまったのだ。

その隙間に剣を抜いてマガルが飛び込み、カミーラの脇に入りながらスケルトンを2体を続けて斬り飛ばした。

「クラークっ！！！　な・・なんでっ！！！」

マントを切り裂かれて脱いだ頬や胸元等に薄い斬り傷を作っていたカミーラは、クラークの出現に驚いた。

クラークは、刺したスケルトンを地面に頭から叩きつけて半壊させてから。　カミーラを見ずして、スケルトンを見据え。

「余計な話は後じゃっ！！！　目の前の敵を粉砕するぞっ！！！」

生き返った心地を味わったカミーラは、姿が見えずに生きているのか解らない仲間に向けて。　気力を確かに大声で叫び上げる。

「助けが来たっ！！！！　死ぬなっ！！！」

と。

カミーラの近場に居た剣士ジャガンは、ゾンビに梃子摺り苦戦している中で。　この朗報に気力を取り戻した

「解ったっ！！！！」

更に離れた場所に居た戦士ダッカは、追い詰められて死ぬと思い掛けた中でセイルとユリアの助けが来たので。

「コッチにも助けが来たぞっ！！！！」

と、大声を上げる。

斡旋所でその姿が解らなかったダッカと云う人物は。　背中のマン

トに斬り傷を受けて、滲む血をマントに滲ませる。　マントの下は、皮の胸当てを着け。　両手には長い金属の柄の上端と下端に鋭く長い大鎌を備えた武器を構える。　ダッカと云う冒険者は、実に２メートル以上の背丈をした細身の戦士だった。

「サハギニー君っ、“アイスクラスター”行くよっ！！！」

ユリアの声に応じ、魚の姿をした水の精霊サハギニーは槍を両手に構える。

「ぬぬぬぬぬ・・・うおおおおおおおっ！！！！」

小さい声ながら、サハギニーが気合の篭る声を上げれば、空気中の霧や水滴がモンスターの居る範囲の一部で瞬間凍結し、周囲が一気に少しだけ視界が晴れた。

「な・・なんと・・」

ダッカは、時間が凍えて止まったかの様な辺りに驚いた。

「フリーズっ！！！」

ユリアが、杖を大きく翳して額に汗を浮かべながら白い息と言葉を吐いた。　集中の必要な強力魔法らしい事を、力むサハギニーとユリアを見れば解る。

直後、空気中に凍りついた水の水滴が、瞬時に近場のモンスターへ集まって凍らせたのだ。　氷柱の中に閉じ込められたモンスターのその数、１０体近い。

セイルは、それを見て。

「砕き壊してっ！！！」

ダッカに言いながら飛び出す。

「おっ・・おうっ！！！」

形成が一気に逆転である。　凍ったゾンビやスケルトンが、セイルの剣やダッカの大鎌に斬り壊されて氷柱ごと粉砕された。

ユリアから離れたセイルは、自分の真っ直ぐ先に弱った生命波動を察知して。

「ユリアちゃんっ、僕はこのままもう一人を助ける。　此処をお願いっ」

鋭く云いながら、セイルはユリアに微笑む。

「任せなさいっ」

ユリアが頷く時、二人の間に新たなる霧が舞い降りて視界を塞いだ。

さて、カミーラのチームの中で。　一番西側の場所でゾンビばかりを相手にしていた魔術師モルカは、肩を抑えて木の幹に凭れている。

右肩と右腕に、ローブを裂く程の噛まれ傷があった。　フードが肌蹴て覗く顔には、ねっとりとした脂汗が雨水に混じって浮ぶ。

黒いローブで分かり難いが。　抑える指が赤黒く血に染まり。　更に、霧と雪の水分で湿るローブの右袖からは、真っ赤に染まった水滴が滴り落ちていた。

「か・・カミーラ・・助かれ・・・」

自分を追い、ゾンビの集団はカミーラの方から遠ざかる。　カミーラを生かそうと、噛まれた時にも声を上げなかった。　このモルカと云う人物。　素顔は以外に知的感の漂う優しげな色男っぽい中年男性だった。　少し長めの髪が、中々艶っぽい。

“う゛う゛う・・・”

”あ～・・あああ・・・”

不気味な唸り声を上げて、ゾンビがノソノソとモルカに寄って来た。　ゾンビは、暗黒のエネルギーの産物だが、死体に闇と魔の力が入り込んで蘇るパターンのゾンビは、新鮮な人肉などを食す。　生命エネルギーを発するモノを食い殺す意思だけを持つのだ。

ズタボロの衣服に、腐った肉が混ざり溶けかかったままにゾンビに成ったおぞましい姿の腐乱死体が、モルカを食い殺そうと近寄って来る。

（ああ・・・出血が酷ぇ・・・。　目が・・霞む・・・）

意識が薄らぎ、モルカは木に凭れて座り込んだ。　霞む視界に、揺らめく動きでゾンビらしき影ががやって来ている。

（だ・・だめだ・・・）

死ぬと思った。　そんなモルカは、目が霞んでぼやけながら気絶する手前で光を見た。　斜めにゾンビの身体から発せられた様な、淡

く青白い線の様な光だ。　何処か見覚えの在る光だった。

「・・・」

気を失ったモルカ。

その前で、首筋から腰に渡って真っ二つに斬られたゾンビが、炸裂するエネルギー波動で左右に飛び散って霧の中に姿を消す。

ゾンビが消えた後から、霧の中よりセイルが買った安物の長剣を片手に姿を現す。　顔は、モルカに向くが。　直ぐにまた寄ってくる別のゾンビを感じた方に向けられる。

（・・4・・5・・7・・9体・・）

間近のゾンビ2体に向かって、素早くセイルは霧の中へ消える。

この時、漸くスケルトンを蹴散らしてカミーラと剣士ジャガンがクラークとマガルを共にして落ち合った。

「ジャガンっ、大丈夫か?!」

頬と腕等に傷を負うジャガンは、薄い傷を負っているカミーラを見て。

「ああ、こっちは大丈夫だ・・カミーラ、ダッカは返事が在ったが。　モルカに応答無い。　どっちに行ったか解らぬ」

悲壮感を顔に漂わしたカミーラは、霧の中を振り返り。　朝のカミーラとは明らかに違う慌てた様子を見せる。

「モルカっ！！！！！！　返事をしろっ！！！！！　モルカーーーーっ！！！」

すると、森の西の方から。

「魔法遣いさんなら此処に居るっ！！！！！」

セイルの鋭い声がした。

クラークは、セイルが以外に西の方から霧の中で声を出したので。

「ユリア殿ッ！！　大丈夫かっ！！！！！」

森の南側から、直ぐにユリアの声で。

「大丈夫っ！！！　後、３体だけっ！！！！！」

カミーラは、形振り構わずセイルの声のした方に走り出す。

「カッ、カミーラっ！！！」

「おいっ！！！」

ジャガンとマガルが、走り出すカミーラに着いて行く。

クラークは、ユリアに加勢しに行った。

モルカの居る木の近くに向かったカミーラは、霧の中で突如に青白い光が炸裂したのを見て。

「モっ、モルカっ！！！」

と、走り寄る。　青白い炸裂の光は、魔想魔術の特有の光だ。　想像の力は、青白い光を見せるからだ。

しかし、パッと霧を掻き分けて居たのは、金髪の美少年セイルだ。

「あ・・・、お前・・」

カミーラが驚けば、セイルは近くの霧の中を指差し。

「向こう。　傷が深いよ。　止血と消毒を急がないと」

カミーラは、その方に頷いて走る。

カミーラの後からセイルに出くわすマガルとジャガン。

「モルカッ！！　大丈夫かっ、モルカっ！！！」

カミーラの声がする、二人はセイルを見てからジャガンはカミーラの声の方に。　マガルは、その場に残った。

「セイル、まだ残るか？」

真剣な目をしたセイルは、聞いて来たマガルに頷いて。

「残り、３体。　此処から、僕の正面に近い所に１体。　その右直ぐに、もう１体。　僕の右の先少し離れてに、大きいのが１体居ます」

マガルは、新手の出現かと思い。

「“新手”か？」

「はい、ギガースゾンビです。　ゾンビの身の崩れ切った肉の塊で、凄いパワーが在りますよ」

マガルは、丸で見た様に云うセイルに。

「見た事が・・・」

訪ねようとしたのだが、セイルは目の前に迫るゾンビに警戒し。

「来ましたっ！！！」

マガルも、不気味な唸り声を聞いてハッと剣を構えた。

霧の中から、ゾンビが両手を伸ばして向かってくる。

「・・・」

「たあーーっ！！！」

無言のセイルの脇から、裂帛の気合を込めてマガルがゾンビに斬り掛かる。　鋭く鉤爪の様に伸びた爪を見せるゾンビの右腕を、マガルは素早く走り抜け様に斬り飛ばしてゾンビの右に出る。

「むっ」

正眼に剣を付けて向き直るマガルの目に、両手に握った剣を身体に近く構えたままにゾンビを飛び越すセイルが見えた。

「あ〝っ」

セイルは、楽々とゾンビを飛び越してゾンビの背後に着地する。

「・・・」

その時、紫に光ったセイルの目が、元に戻る。　そして・・。

“シュパーーン”

魔想魔術の特有の炸裂音と淡い青白い光が、ゾンビを右腰から左肩に掛けて切断するかの様に逆って線を引いたではないか。

「な・・・何だと?」

マガルは、目の前でその光景を見て。　初めてセイルがエンチャンターであり、剣士でも在ると理解した。

だが、悠長に詮索はしてられない。　もう一匹のゾンビが、マガルとセイルの脇から姿を現した。

「ぬっ、どりゃーーーっ」

マガルは、直ぐにゾンビに走り寄り。　右から掬いにゾンビの左足大腿部を斬り上げて。　そのまま右に抜けて振り向き様に、腐った肉の塊の様なゾンビの後頭部から首筋に掛けて斬り払った。

“ブシュ”

後ろの首筋に、ゾンビを動かす暗黒のエネルギーの源が在った様だ。
霧の中にブシュっと飛び出て、ゾンビの動きが止まった。切断された左大腿部が先に雪の上に落ち。後からバランスを崩したゾンビが黒ずんで灰に変わりながら雪の上に倒れて行く。

「お見事～」

セイルが、その様子を見て笑った。

マガルは、ゾンビが倒れたのを見てから。真剣な眼差しをセイルに向けた。

「そなた、剣士でエンチャンターなどをするのか・・・。初めて見たぞ」

微笑むセイルは、頷きながら。

「御祖父ちゃんも、そうでした」

マガルは、その答えに灰に変わるゾンビを見た。

≪巨大なゾンビ≫

寒さの所為か、少し霧が薄まった中で・・・。

「なっ、なんだこの大きいゾンビは・・・」

中年の終り際を迎えた眼帯剣士マガルは、血の様に赤い身体をモゾモゾと動かすゾンビを見て驚いた。

霧に見え隠れする中で、見上げる程の爛れた肉の塊が蠢いている。

高さも3メートル近ければ、横幅もそれ以上で。ギョロリとした大きい目は、もはや人の眼では在り得ない異常な凶暴さを湛えている。大の大人を一飲みに出来そうな口が、ブルブルと震える肉の一部を裂いて薄く開いていた。牙や歯などの代わりに、細かく折れた骨が並んで突き出し。もしも噛まれたら一溜りも無いだろう。

セイルは、鈍い動きで此方に近付いてくるギガースゾンビを見ながら。

「自分が、相手します」

マガルは、グッとセイルを見て。

「本気か？」

「はい。マガルさんは、まだ此方に近付きつつあるゾンビやゴーストに向かって下さい」

「なにっ？　まだいるのか？」

「はい、南東に数体。　ユリアちゃんとクラークさんの方にも、少しの感じが在ります。　それ以上は解りませんが、早く戦闘を終わらせて子供達を捜さないと、夜に成る」

マガルは、暮れ出した空模様を見上げる顔を難しい顔付きにして、

「確かに、此処では休めない」

と、呟く。

セイルは、右手の剣を見て。

「ふう・・。　もう、潮時ですね。　コイツも、そろそろ壊れちゃう・・」

マガルは、セイルの剣を見て。　少し刀身が歪み始めているのを確かめた。

「フム。　お主の素早い動きから繰り出される剣撃では、並の剣では持たないだろう。　先ほどの死んだ冒険者の剣を使ったらどうだ？　悪く無い剣だったぞ」

セイルは、波打つゾンビの肉体が迫ったので。

「アイツを倒したら、検討しますよ」

と、ギガースゾンビに走り出した。

この時、マガルも早くも襲ってきたゴーストが、霧に消え隠れしながら自分を確認したのに気付いた。

（フッ、俺もまだ負けられぬ）

ギリっと片目を凝らし、ゴーストを見定めて剣を握り直したマガルだった。

マガルが、ゴーストを白銀の剣を一振りの元に斬り倒して消滅させる時。

セイルは、ギガースゾンビの向きを正反対の西側に向けるべく素早く動いた。　セイルは、どうゆう訳か、知っていた。　ギガースゾンビは、見た目は動く肉塊で、波打ちプルプルしているドーム状の様な半円型のスライムに似ている。　しかし、隠れている肉の身体の真下には、ドロドロしい手足を持ち。　獲物を見定めると、跳び付ける範囲内に近寄ってカエルの様に飛び掛るのだ。

「・・・」

セイルは、間近に居たカミーラ達から離れる為に、ギガースゾンビを逆向きにしようと動いた。

“う〜あああああああ〜〜〜〜〜〜っ”

ギョロつく目をセイルに着けたギガースゾンビは、身体の向きをモゾモゾと北向き・・西向きと変えて。　セイルが射程距離に入ったと確認した瞬間、突如として不気味な雄叫びを上げて、ギガースゾンビがセイルに飛び掛る。　巨大なカエルが動く様な俊敏な飛びつきで動くギガースゾンビだが。　波打って勢いに伸びるドロドロの

身体は、引き千切れる事も無い。

襲われるセイルだが、見す見す殺られる訳には行かない。　サッと大きくバックステップしてから、高く飛び上がってバク転して着地。
　雪の上を軽やかに滑りながら、ギガースゾンビを鮮やかにかわしてしまった。

「・・・」

セイルが、ギュッと目を凝らしてギガースゾンビを見る時、その目には紫の綺麗なオーラが湧き上がっていた。

一方で。

マガルが、略当時に近寄ってきたゾンビとスケルトンを迎え撃ち。
　先に倒し易いと踏んだスケルトンを蹴り飛ばして。　直ぐ様動いてはゾンビの脇を走り抜けて、倒れたスケルトンに走り寄って頭部の頭蓋骨を斬り割る。

「むっ」

最後のゾンビにマガルが振り向くと、いきなり脇から飛び込んできた風の壁がゾンビを叩き潰した。

「マガルっ、無事かっ?!!」

クラークの声がする。

「おうっ、西に大きなゾンビがっ!!!　セイルが一人で戦っているっ!!!」

マガルは、ユリアの精霊魔法がゾンビを倒したと認識し。　直ぐに叫んだ。

クラークが、それに応じ様とした時。

“シュパーンっ！！！　シュパーンっ！！！！！”

その周りに居る人の耳に劈く程の炸裂音が響いた。　霧の中だが、明らかに大きな青白い光の炸裂が見て取れる程の・・。

「セイルっ！！！」

「セイル殿っ！！！！」

ユリアとクラークの声が響いた。

（戦い始めたかっ？）

マガルも、セイルの居ると思われる光の炸裂の起こった方に走り出した。

だが、集まった3人が見たのは。

「こっ・これは・・」

「うはっ、スゴイっ」

「・・・・」

言葉の出ないマガルは、口を開けて驚いた。

更に歪んだ剣を持つセイルの脇には、皿に盛ったプリンを十字に等分した様な姿に変わり果てたギガースゾンビが、ドロドロと肉体を溶かして灰に変わり始める姿ではないか。

セイルは、溶け出すギガーズゾンビを見て。

「臭いですね。　早く消えて欲しい～」

と、右手で鼻を摘み。　曲がった剣を左手に引っ下げたままにユリアとクラークの元に歩き出すのだ。

（切断したのか？　魔法を剣に宿して・・・あの大きなゾンビを？）

マガルは、セイルの遣った事はギガースゾンビの姿から推察は出来た。　問題は、その技量が在るか、否か。　だが、ギガースゾンビは倒された。　セイルには、それだけの技量が在るのだ。

セイルは、ユリア・クラークに会って笑い合い。　そのお互いの無事を確かめて、マガルを見る。

「大丈夫だ。　あれしきの戦いでヘバる程に衰えてはいない」

マガルが云えば、微笑み頷くセイル。　お互いに何処にも怪我は見えない。

其処に。

「モルカっ！！　モルカっ！！！！」

切羽詰ったカミーラの声がする。

≪子供達の痕跡≫

霧と雪と云う中。　大樹の根元で、手当てをした魔法遣いモルカをカミーラが背負って運ぼうとしている。

セイル達は、まだ息の在るモルカを負うカミーラを見て内心に感心した。　どうやら、仲間まで虫けらの様に思う女性では無かったらしい。

「助かった・・・。　借りておく」

セイルを横目に、カミーラは真剣な様子で云う。

セイルは頷くと、微笑むままに。

「今から急げば、その人は助かりますよ」

「・・・」

黙るカミーラに代わり、ジャガンはセイルを見返し。

「お前達は、まだ残るのか？」

もう、辺りが薄暗い。　このままでは、夜に成る。

セイルは、ギガースゾンビの死んだ方を指差し。

「向こうに、子供の靴が落ちてました。　手掛かりが在る以上、此処で止める訳には行きません。　もし、斡旋所に行けるなら。　主さんに合同チームの編成を申し出た方がいいかも知れませんね。此処は、冒険者チーム１つ・２つでは手に余る」

クラークは、ダッカに剣を抜いた冒険者の遺品の詰まる背負い袋を渡した。

「これは、死んだ者の遺品だ。　斡旋所に届けて欲しい」

カミーラ達は、こんなにも冒険らしいチームは久々に見た気がする。　普通、誰も死んだ冒険者の遺品に構ったり、全体を見て行動をする者は少なく。　自分勝手が、自由と罷り通るご時勢。

「・・・解った。　死ぬなよ」

カミーラが、セイルやユリアなどを見て云う。

ダッカは、血の着いた背負い袋を持ち。

「借りを返す意味で、必ず届ける」

と、クラークに。

カミーラは、仲間二人に先行して森を逆戻りするために霧の中に向かう。　ジャガンとダッカも、怪我で鈍った身体を引き摺る様にカミーラの後を追って、霧に中に消えて行った。

カミーラを見送りながらセイルに近寄るユリアは。

「セイルっ、マジ？　子供達の靴って・・・」

頷くセイルは、マガルやクラークを見て。

「向こうの壁に鉄の門があります。　その鉄門の前に、脱げた靴が在りました。　子供達は、奥に行ったと思います。　モンスターから逃れる為に」

クラークは、まだ先が在るのかと驚いた。

「なんと・・・。　まだ、霧の中に先が在るのか？」

４人は、セイルを先頭に灰に変わり切ったギガースゾンビの間近で小さな皮の靴を発見した。

「在った・・」

マガルは、靴を手に取り備（つぶさ）に観察して。

「確かに使い古しているが、放置された時間は少なそうだ。　靴に、“ユーカ”と名前が書かれて在るな」

セイルは、その近くの壁に閉まる高い鉄門へと近寄って。

「見て下さい。　この門の先・・・。　薄暗いですが、森の様ですよ」

クラークが、格子の鉄門の鍵を壊した。　格子の幅は広く、ユリアやセイルなら横に成って通れる程。　クラークやマガルには、ちと厳しい。　鍵の錠前は、錆びて腐ってたから壊すのに時間は要らなかった。

クラークとマガルは、長年冒険者をやってるだけ在って用意は確かだ。　折り畳みの小型ランタンを取り出し。　火を付けた。

が。

感心するユリアの横で。　セイルは太い枯れ木に拾って置いたボロ布を強く巻いて。　其処に固形オイルを塗っては簡易的な松明を作る。　セイルは、オイルに浸した布の束を乾燥させて納めた物まで持っていた。　何処で覚えたのか、以外に用意のいい少年である。

（全く、エルオレウ様の孫じゃわい。　用意のいい事・・）

クラークは、応用も効くセイルが若さに似合わないと思った。　あの油の染み付いた布を定期的に巻いて、燃える松明を持続させるのだ。

ユリアは、精霊達を肩に浮かせながら。

「セイル、アンタね～。　そうゆうのは、アタシにも教えなさいよ」

「あはははは～。　杖を持つのに邪魔かな～・・・なんて・・」

「余計な心配じゃい」

ユリアに怒られたセイルだが、二人は踏み込んだ先が結界の中だと直感した。“封鎖区域”を形成する結界とは、別のである。

門を潜り、雪に強い3メートルくらいの樅の木が整然と並ぶ回廊の様な通路が、真っ直ぐに延びていたのだ。

ランタンの灯りを頼りに、クラークはその道の両脇に生える木を見て。

「むむ・・、コレは。２００年以上も誰の手入れを受けずして、木の枝が伸び放題に成っておらぬ。結界の中なのだな・・・時間が止まっている」

するとセイルが。

「少し違いますよ」

と、言い。

ユリアが繋いで。

「此処は・・・魔法の幻術の中みたい。こうゆう風に、魔法で見える・・・ううん。形作られたイリュージョンの中なんだわ・・」

魔法の中とは・・・。クラークは、最も厄介だと思う。

「では、道を逸れる訳にもイカンの～」

雪が振り、夕暮れの様な曇り空が広がる下。　歩きながらマガルは、クラークに尋ねた。

「クラーク殿」

「ん？　何かな？」

「イリュージョンは、幻覚なのだろう？　どうして、道を外れるのはいけないのだ？」

この問いにクラークは、マガルがこうゆう場所が始めてなのだと理解した。

「マガル殿。　イリュージョンは、物を幻覚に見せるだけでは無く。罠や周りの地形を見えなくする効果も在る」

「ふむ・・確かに」

「では、反れて踏み出した先が、断崖絶壁で在ったら・・・如何かな？」

この話にマガルはビクっとして、改めて驚く顔でクラークを見た。

マガルに見られて頷くクラーク。

「そうだ。　この地面を見る限り、雪を退けた地面に変化は無い。恐らく、この幻覚は迷わせる為の迷路を生み出す幻覚魔法だ。前にも、経験した事が有る。　この回廊の様な先には、呪術者の居場所が在るハズだ。　この手のラビリンスの魔法には、制約に出口

を入り口に繋げなければ成らない決まり事が在る。　冷静に切り抜ければ、必ず出口に行き着く」

ユリアは、クラークを後ろの脇から見て。

「さっすが～」

だがクラークは、気を引き締めた顔で前を向き。

「だが、油断は禁物だ。　話には、この魔法にも色々とバリエーションがあるらしい。　気を付けるに越した事は無い」

経験の豊かなクラークは、ユリアやマガルには嬉しい用心棒と云うか。　アドバイザーである。

先頭を歩きながらセイルが。

「結界の中には、スンゴイ怖いのも在るらしいですね。　例えば、こうして逸れ様とすると・・」

と、あの壊れた剣を鞘ごと腰から外して、何の気なしにとばかりに樅の木の並木に差し込んだ。

その瞬間。

“バキーーーーーーーンっ！！！！！！”

凄い衝撃音が鳴り響く。

「きゃああーーっ！！！」

「ぬうッ！！！」

「ぬおっ！！！！！」

残りの３人は驚き立ち止まる。

「・・・・」

差し込んだセイルですら、カチンコチンに立ち尽くして剣から伝わった衝撃に痺れた。

３人は、驚いた顔でセイルを見つめる。

少し黙って、セイルがそ～っと剣を抜くと・・・。

「わっ！！」

ユリアが、更に驚いた。　セイルの差し込んだ剣が、黒い煙を上げて切断されていたのだ。　切断面は、黒く溶ける様に・・・。

「ひえええええ～」

見たセイルも驚いている。

冷や汗を顔に流し、頭に雪を被ったマガルはクラークと見合い。

「正に・・・危険な」

「ウム。　触れても危険だ」

道の幅は、この４人が横に並んで食み出るくらい。　ゆとりは在った。

さて。

「アホっ！！！！！　キケンな真似すんなーーーっ！！！！」

怒るユリアが、セイルの頭を叩く音が雪空に響いた。

そして・・。

「イタイ・・・時には実験も必要なのに・・。　ううううう・・・」

頭を抑えるセイル。

「ルっさいっ。　大怪我したらどーするのよっ！！！　さっさと歩けっ、バカセイルっ」

後ろからセイルを杖で突っついて先に進ませるユリア。

（エ・・エルオレウ殿の・・・世界最高の貿易商の子供を・・・杖で突いとる・・・）

クラークの垂らし加減の鼻水は、消して寒くて垂らしている訳ではなさそうな・・・。

高さ3メートル程の樅の木の並木で作られた迷路の様な通路は、所で十字に別れ。　一度新たなる進路に進めば、来た道が消えて他の道には行けなくなる。

道が消えた時は、一同本気で焦った。

雪の降る夕暮れは見る見る暗くなり、彷徨う内に何時しか空は夜に変わった。

「おい、ユリア」

並木の道をアチコチとうろついて迷っていると、ユリアの肩に出てきていた“闇玉”が話し掛けて来るのだった。

「あ～さぶい。　なぁに、ヤミちゃん？」

「おう。　多分、おらっちは道が解るぜ」

「え？」

「道の分岐点に、どれか一方だけに闇の力に混じって、別の何かが見える。　コレ、多分は本当の道なんじゃないか？」

「マジ？」

驚くユリア。

セイルを含めた全員が、ユリアに向いて歩みを止める。

闇玉は、ユリアの頭の上に浮いて。

「どれ、ユリアにも見える様にしたるぜ」

と、何やらブツブツと唱え出す。

すると・・。

「あっ・・・、ホントだっ」

ユリアの目に、黒い蛇の様に蛇行して動く様に伸びる黒い線が、地面の雪の上に浮き上がる。

闇玉は、ユリアの頭上に浮きながら。

「この森の中心らしい場所に、闇と魔の力の溢れる場所が在る。その場所と同じ力をこの道の黒い線から感じるゼ。　さ、さっさと切り抜けよう。　オイラは大丈夫だが、このままじゃ～ユリアも、セイルやオッサン達も寒さで体力が奪われる。　命に関わる前に抜けようや」

「ありがとう、ヤミちゃん」

「フン。　ユリアの泣く顔は、赤ちゃんの時だけで十分ダゼ」

マガルもクラークも、闇の精霊の闇玉にお礼を言うセイルや笑うユリアを見て不思議な感じがしてならない。

（ふむう・・。　こうも愛されるものか・・）

クラークは、今までに不思議な体験は色々して来たが。　この精霊の姿も、とても不思議な感じのする出来事であった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告。

子供達を捜索するセイル達、各チームの冒険者達。　斡旋所では、森に怯えた冒険者達ばかりで、合同チームの結成は難航しそうな様子であった。　さて、魔法で出来た迷路の先には、一体何が・・・。

次号、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

セイル編も、中盤に差し掛かりました＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪古き場所≫

真っ暗な道を行くセイル達。　降る雪が大きく成り、依然として冷たい北風は吹く。　精霊の示す黒い線を頼りに、行ける所まで進んだ。

闇の精霊が教えてくれた道を抜けて、迷路の様な樅の木の並木通路を抜けて行けば。　行き着いた先に見えるのは、城にも似た大邸宅であった。

その不思議な場所に、雪を払わずして呆然と立ち竦む４人。　まず、この場所は雪が降っていなかったのだ。

空は暗闇の夜。　辺りすら暗闇に包まれた中で。　何故か、枯れた噴水を中心に十字に広がる薔薇に囲まれた道が伸びるのが見えて。

長方形の形をしたどデカイ館の正面も、何故かハッキリ見えている。　白い外壁で、祭壇をイメージさせるレリーフを建物全体で表現する様な印象を持つ。　窓は、１階から４階まで同じ場所に列を

見せて並んでいた。

「な・・・何なんだ・・。　此処は・・」

唖然としたマガルが、思わず呟いた。

セイルは、目を細めて緊張する面持ちで。

「この建物・・・正面玄関の上に何処の国の紋章でも無いエンブレムを持ってる・・・。　一体、誰が住んでたんだろう」

ユリアもクラークもそのセイルの話に、赤い大きな石碑が菱形に在り。　何かを画いている建物中央に目を凝らした。　石の柱に支えられた庇が噴水から伸びる道に出っ張る。　その庇の上に立体的に赤い菱形のエンブレムが見えた。

セイルは、前に歩き出した。　丸い噴水を周りながら、雪の積もらない黒い石の通路を踏みしめる。

「白い獅子の両脇に、赤い剣と黒い杖？　こんなエンブレムは見た事無い・・。　何処の・・、ううん。　誰のエンブレムだろう」

セイルの独り言。

クラークも、生じ爵位のある家柄の産まれなだけに。

「確かに、見た事無い紋章だ・・。　白い獅子の紋章は、内戦状態の西の国に在ったと思ったが・・・。　それと、この国の屋敷がどう関係するのかも良く解らない・・・」

マガルは、クラークに館を指差して問う。

「クラーク殿。　あの紋章は、西の大陸の国の紋章なのか？」

クラークは、頭を左右に振るい。

「いや・・白い獅子だけに限って言ったまで。　あの様な紋章では無かったと思った・・。　白い獅子は、山岳に住んでいた山の民の信仰対象で、何処の国でも勝手に使えない。　白き獅子は、女神フィリアーナの遣いとも云われるからな」

「そ・そうなのか・・・」

始めて知る事の多いマガルは、何もかもが衝撃だった。

一方で、ユリアは辺りを見ながら。

「でも、此処って雪が降ってないね。　敷地の外側には、吹雪みたいな雪が降ってるのに・・・。　それに、建物全体に丸でモンスターみたいな気配が立ち込めてるよ・・。　魔と闇の力が、渦巻いてるし・・。　此処って・・一体何なんだろう？」

噴水を背にする様に立った４人。

セイルは、エンブレムを斜め上に見上げて。

「何はどうあれ・・、此処は凄く強力な結界の中だよ。　ああ・・、やっぱり」

その話尻に、クラークはセイルを覗き込み。

「何だ？」

セイルは、エンブレムを指差す。

「あの赤い石・・、宝石ですよ・・。　赤い瑪瑙のスカーレットアーシュ（大地の緋色）。　今では、もう極少量しか取れない貴重な宝石です。　あれだけの量が有るなら、金があの１００倍は買えますよぉ」

「な・・なぬっ？！！！」

「えええっ？！！！」

クラークとユリアが大声を上げてエンブレムを再度見上げる。　金は、一番価格が安定して高価な鉱物である。　それが、１００倍買えるなどとは・・驚きだ。

マガルは、マジマジとエンブレムを見上げては。

「なるほど・・・、今では取れない物を持てる程の権力を有した何者かの屋敷・・と云う事か・・」

その時、セイルとユリアはビクンと後ろを振り返った・・・。

此処は外の結界の中に封印され、中では人を退ける幻惑の結界が施された場所に立つ怪しげな大邸宅。　此処は何なのか、子供達は此処に居るのだろうか。

セイル達一同が封印されし館に着いた頃は、実に夜も深まり出した

頃だった・・・。

≪救援は・・・≫

さて、斡旋所に助けられた子供が二人が運び込まれて居た。　斡旋所の主の孫と同じ年の女の子と、５歳過ぎの男の子だ。　木の上に逃げたり、木の虚に隠れたりして森を彷徨いながら逃げ回っていたのだが。　モルカを運ぶカミーラ達を見つけて、声を出したので発見された。

カミーラは、寺院にモルカを運び込み。　金を置いて、斡旋所に急行した。

主は、先ずカミーラの話を聞いた。　その間に僧侶を呼んで怪我だらけの子供達の手当てをし終えてから、代わって子供達の話を聞いた。　やはり、主の孫を含めた５人の子供達は、あの奥の鉄格子を越えたのである。　この二人は、モンスターが間近に近寄ってきた為に。　鉄格子の門を潜れずに、森に戻って逃げ回ったらしい。

「あああ・・・なんと云う事だ・・。　最悪の方向だ・・」

斡旋所の主は、何かを知っている素振りだ。

「マスターっ！！！　クラークや若いセイルとか言うのもそっちに行ったぞっ！！！　合同チームの編成はしないのかいっ？！！！」

カミーラは、疲労も有るのに真剣に主を問い詰める。

「駄目だ・・。　帰って来た冒険者達は、皆が恐怖で棄権した・・。助けに行かせるだけの実力を兼ね備えるチームが居ない」

カウンター前でカミーラは、仲間のジャガン・ダッカと向き合う。

傷を治して貰ったジャガンは、フードも外して難しい顔をした。

「カミーラ、これは不味いな」

だが、カミーラは諦めた顔はしていない。

「とにかく、今日は休もう。　あのクラークと若い二人はちょっとやそっとでは死なないさ。　明日に成って街を訪れる新手の冒険者や、仕事を終えて戻って来たチームも含めば、合同チームも出来るだろう・・。　合同チームなんてやった事無いが、助けられた恩は返さないと恥になる」

ダッカは、気性が激しく思い込んだら突っ走るリーダーのカミーラの事は理解していた。　下手に反対の意見を言えば、一人でも行きかねない。　今は、まだ冷静な判断をしている様だ。　だから、黙って頷く。

しかしながら、あれだけ子供を救う仕事にやる気を出した各チームの冒険者達だったが。　いざ、モンスターの情報が流れて、森に入ったチームは半分以下。　なんかかんかと理由を付けて辞めたチー

ムが半数以上。　束に成って協力すれば、十分対抗出来そうな人の数だが、死人が2チーム出てビビッたのである。

合同チームは、それ自体が稀な事だが。　それ以上に、統率力を持ったリーダーが必要だ。　でなければ、直ぐにバラけるだろう。恐らく、クラークがリーダーなら、今日にも結成は可能だったかも知れない。

絶望の顔色をカウンター内で俯かせる主。

2階以上に用意された宿にカミーラ達は向かって行った。

その他、冒険者達らしき者は斡旋所に居ない。　何時もなら、斡旋所は解放されているので、2・3チームが屯して飲んでいる事が多いのに。　今夜は誰もが森のモンスターに怯えて。　尻尾を巻いて逃げたのだ。

セイル達の運命は、どうなるのだろうか・・。

そして、この時。

「クッ、クッ、クッ・・・」

暗い場所の中で、不気味にダブる声が闇の中で上がった。

此処は何処だろう・・。　黴臭く、空気の流れが停滞しているような息苦しさが寒さに解けている。　湿ったボロ煉瓦の敷かれた通路は、黒ずんでネズミが歩いていた。

暗い此処には、錆びた格子の牢屋が幾つも並んでいる。

「ガキが5人か・・・。　丁度いいや・・・、明日の夜には蘇るかな？　ヤツの餌に丁度いい・・・。　ケケケケ・・・人間達よ・・・今に見ておれ・・・」

光の届かないこの場所で、牢屋の中に入れられた子供達が気を失って入れられていた。

その子供達を見るのは、真っ黒い何かだ。　真下をネズミが歩いて行く・・・。

此処は？　子供達をどうする気なのだろうか・・・。

≪闇と魔の支配する館に有る肖像画≫

あの、結界の奥に封印されていた館の庇の下で。　セイル達と対面する形で別のチームが立っている。

「俺は、リーダーのイクシオだ。　よろしくな」

テンガロンハットを被った鞭遣いの学者イクシオは、セイルに右手

を差し伸べた。

「“ブレイヴウィング”のリーダーで、セイルです～」

ニコっと笑うセイルは、イクシオの大きな手を握った。

先ほど人の気配を感じたセイルとユリアだったが。　イクシオのチームが後ろから来たのだった。

イクシオのチーム全員が、セイルの云ったそのチーム名にも、歴戦の冒険者クラークにも驚いた。

エルキュールが、セイルの前に来て。

「凄いチームの名前ね・・・。　しかも、あのクラークさんが居るだなんて」

セイルは、美人のエルキュールを少し見上げて。

（着痩せするタイプだな～・・。　胸・・大きい・・）

と、思いつつ。

「ハイ、チーム名の許可は有りますっ！！！」

と、元気に云う。

ユリアも、イクシオ達一同を見回して。

「マジだかんね。　エルオレウ様の許可は有るんだからねっ」

と。　やはり、斡旋所で結成時に文句を言われたのには抵抗が残ったからだろう。

キーラは、腕組みして頷いているクラークを見てから。

「凄いですね。　その歳で、此処まで来れるだなんて。　十分にそのチーム名で行く資格が有りますよ」

イクシオは、未だに腐らず残る木の重厚な玄関を見て。

「さて、此処はなんだろうな～。　魔法の結界に封じられて、自らを迷路の結界で護る館なんて聞いた事ね～ぜ」

魔術師キーラは、鋭い目を館に向けて。

「禍々しい気配が立ち込めています・・・。　古めかしい館ながら、朽ちた様相は見えません。　何らかの魔法で存続しているのでしょうが・・。　何かが住んでいる様な・・・」

マガルは、中堅の実力派チームと聞いていたイクシオのチームの面々を視て。

（これは心強いチームが来たな。　なんとか、帰るまでやり切れるかもしれん）

と、思う。　正直、自分が疲れていたから不安が内心に広がっていたのである。

セイルは、玄関に寄って松明を下に向けた。

エルキュールとエルザが、セイルの両脇からセイルを見る。

セイルは、足の爪先でその場に集まった埃や土を触る。

「ドロが少し乾いて凍った物が有りますね。　それに、埃が手前に集まってる箇所が・・」

エルキュールは、セイルを見て。

「誰かが入った？　ドアを開けて？」

エルザは、補足する様に会話を繋げて。

「しかも、極最近に・・でしょ？」

ニッコリのセイルは、扉の先を見て。

「です」

クラークは、セイルの後ろに来て。

「子供達かっ？！！」

セイルは、頷く。

「可能性は強いかと。　でも、暗黒の瘴気が強くて、生命反応は感じられませんね」

と、扉に手を掛ける。

キーラ・セレイド・エルザは、セイルを見て。

「君にも解るのか？」

「そなた、杖も発動体も持ってないと見たが・・・魔法を操れるのか？」

「剣士でしょ？」

セイルは、微笑み。

「いずれ種は解りますよ。　それより、早く探しましょう。　瘴気の強い場所で子供が長居すると、精神に異常を来たす事も有りますから」

と、扉を開くのだが。　途端に、セイルは真剣な顔で黙り。　魔法を扱える者は動揺を見せる。

「・・」

「う・・」

「な・なんだ・・」

魔法を扱える者には、開かれた扉から垂れ込めて来るどす黒い冷気が重々しく感じられた。　クラークやマガルですら、殺気に似た気配を感じたほどだ。　特に、僧侶のセレイドとエルザは一瞬眩暈に似た感覚を覚える。

「大丈夫か？」

老人の様な戦士ボンドスが、二人を見て気遣う。

二人は、その暗黒の瘴気の力に触れて、抵抗をする為に少し頭を抑えていたが・・。

「ああ・・大丈夫だ・・」

「もう、大丈夫よ。　チョット、暗黒の力が強いわあ～」

と、皆を見た。　此処で抵抗出来ないと、僧侶は動けなく成ったり。恐怖に感情が激動することも有る。

イクシオは、セイルに頷く。

「では、入ります」

セイルを先頭に、全員が中に入った。

中に侵入した一行。　暗い館内で、玄関大ロビーの中心に来ると。　正面には、壁に埋まる様な階段が左右対称で斜めに2階へ伸びるのが見える中。　壁に成る部分に額縁に入れられた大きな肖像画が見えた。

「おう、美人だな」

近付いたイクシオは、無精髭が少し伸びた男らしい顔を肖像画に向けて言う。

腕組みしたエルキュールは、少し不機嫌に。

「フン。　男は顔しか見ないのか？」

苦笑のセレイドやキーラ。

だが、セイルは松明を掲げて絵に近付く。

「そ・・・そんな・・。　こ・こんなの有り得ないよ・・・」

１０人と成った二チーム全員が、セイルに向いた。

ユリアは、セイルの隣に来て。　セイルと肖像画の交互を見ながら。

「どうしたの？　この綺麗な人、知ってるの？」

と、肖像画を見上げた。

金髪の髪を頭の上部に結い上げたその女性は、穏やかな微笑みを湛えている。　白いシルクのドレスの襟元から肩まで、画かれるドレスが王妃でも着ていそうな純白の羽根突きドレスだ。　しかも、頭には宝石の鏤められたティアラを被っている。　優しそうな、美人だ。

セイルは、そのティアラを指差して。

「アレ・・・アレって、この国の王妃だけが被るのを許される“クィーンレジェンド”だよっ」

ユリアは、ギョッとして驚いた。

「ええっ?!!!　じゃっ・じゃあ・・・こっ・・この人・・・王妃様?」

クラークも、慌てて見えやすい位置に来て、顔を更に驚かせた。

「おお・・・あのティアラの中央に配された紫のアメジスト9つに囲まれた大きなダイヤは・・ま・まさしく・・クィーン・レ・レジェンドだっ!!!」

全員の顔が、引き締まった。

ボンドスは、雪で濡れたマントのフードを完全に下ろして。

「ナルホド・・。　普段は許可無く厳重に護られてる門の中だけあるわ。　こんな肖像画があるなんて、どう見ても隠したい事でも在ったらしいな」

イクシオは、ふと思い出す。

「ん?　そういや〜・・・」

エルキュールが、イクシオを横目に。

「どうした、リーダー?」

「ああ・・。　確か、あの王妃の冠には、何か曰くが有った気がしたんだよな・・。　随分前に、聞いた様な・・・」

そこへ、クラークが。

「“憎悪のロンド”か・・・」

イクシオは、クラークの言葉がヒントに成り思い出す。

「あ、ソイツだ。　たしか・・・古く昔に有った愛憎劇だったな・・」

ユリアは、知って居そうなクラークに寄った。

「ねえ、何が有ったの？」

クラークは、肖像画を見上げて。

「この女性かどうかは解らないが。　あの王妃の被る冠が出来るまでに色々有ったのだ。　あの宝石を持ち込んだのは、古き昔の貴族でな。　昔の王族の末娘に恋をして、宝石をネックレスにして送ったのだ。　婚約の思いを認めた手紙と一緒に・・。　だが、その宝石を見た娘の母親である王妃の妹が、その宝石を秘かに盗み。　そして、ティアラを作った」

「酷い・・人の思いの篭った物を・・」

「送った貴族は、その王妃の妹に激昂してな。　人目を偲んで、その女性に会って問い質したとか。　すると、その王妃の妹は貴族の男を蔑む様に高笑いして盗んだ理由を話したとか・・。　実はもう、その恋した王族の末娘には許婚の申し出が殺到していたらしい。　中でもこの国の隣のホーチト王国の王子との婚約が進んでいた。　あの有名な無血革命の王の子供か・・孫だとか。　どう見ても、その貴族には婚約の可能性は無いと思われたから、宝石を貰ったと言

ったらしい」

ユリアは、怒った顔で。

「でも、それは宝石を取る理由に成らないわっ」

クラークは、ユリアを見返し。

「だが、悲劇は起こった」

「えっ?!!!」

「その貴族の男は、内密に進んでいた婚約の話に激怒してな。　その王妃の妹を・・殺した」

「う・・嘘ぉ・・」

「本当だ。　しかも、その女性の作った冠を奪い。　次の日、何食わぬ顔で冠を王妃の末娘に婚約記念にと送ったのだ。　王妃の妹から聞いたと謁見を求めてな」

イクシオは、肖像画を見てからクラークを見て。

「凄ぇ～な。　まだ、秘密だったのだろう?」

クラークは、大きく頷いて。

「ウム。　だが、問題は此処からよ。　その貴族の男は、冠を末娘が被って見せてから“似合う”と褒め称え。　王妃や王も居る謁見の中で、自分の送った宝石を王妃の妹が盗み。　そして、その女性

を殺した事も叫び上げた。　いきなりの事態と貴族の豹変に、その場が修羅場に変わったらしい」

ボンドスは、強烈な話だと頭部の天辺を掻き。

「衝撃的だな・・。　そりゃ～・・」

クラークは、ボンドスを見て。　そして、肖像画を見上げた。

「その貴族の男は、死刑に成った」

「・・・」

黙るユリア。

「だが。　その末娘は、心根の優しい女性でな。　決まった婚約に嫁ぐ時、その冠を付けて王妃の冠としたのだ。　向こうの王子の作ろうとした冠を辞して、あえてその男の心を汲んでその王妃の冠を寝る時以外は外さなかったらしい。　王の傍で、５０年・・。　そのホーチト王国王妃と成った末娘が死ぬ時、その冠は祖国のこの国に還された。　代々、その後にこの冠を王妃が永遠の愛を王に・・・いや、注ぐと決めた男性にに誓う意味で王妃の正式な冠と成ったのだ」

エルキュールは、肖像画を見て。

「不器用ね、男って・・。　女が居ないと、何にも出来ないのかしら・・」

エルザは、クラークに向いて。

「じゃ～、この館はその貴族さんの屋敷かしら？」

すると、クラークは首を傾げて。

「どうだろう。　話に由れば、その貴族は男爵か伯爵・・。　こんな大きな屋敷など持てないと思う」

「あら。　じゃ～、関係無いとか」

「かも、しれん」

其処に、セイルが肖像画の真下に寄っていて。

「ホラ、胸のブローチに文字が有りますよ。　え～・・・マ・・マリ・・マリアンヌですね」

クラークは、その名前に。

「“マリアンヌ”？　・・・聞いた事が有るような・・・うぬ・・」

人の愛憎劇に興味は無いと思うエルキュールは、もうこれ以上の論議は意味が無いと思ったのだろう。

「もういい。　子供達を捜そう」

イクシオも、同意した。

「だな。　俺等は、屋敷の右を1階から見回る。　クラークさん達は、左から頼むよ」

ハッとしたクラークは、

「あっ・・ああ。　解った」

と、返す。

「・・・」

セイルは、肖像画を見上げて黙っていた。

≪不気味な館の怪≫

「う～ん・・。　マリアンヌ・・・マリアンヌ・・・」

セイルとクラークは、さっきからず～っとその名前に考えながら歩いている。

青い石の廊下は下から底冷えがして。　カツカツと歩く皆の具足の足音が響いた。　冷たい凍った世界の中の様な館の内部は、静まり返る空気まで寒く感じる。

寒がるユリアは、各部屋の入り口を開けて、マガルと中に入っては調べる。　セイルもクラークも入って調べるのだが。　出ると直ぐに“マリアンヌ”に戻る。

ユリアは、子供を探しに来たのだと思って少し苛立ち。

「ん～もうっ。　二人ともっ！！　そんな事より子供達の方が先よっ！！」

しかしセイルとクラークは、ユリアを見てからまた前を見て考え込む。

「む～っ、何よっ」

無視されたみたいでムクれたユリアだが・・。

「ユリア～、満更無駄でもないよ～」

いきなり、ユリアの肩に黒き翼を持った漆黒の天使の様な小型の何者かが現れる。

「あらら・・シェイドさん。　来てたの？」

「おうよ。　闇玉が疲れて寝ちまった。　だが、凄い闇の力を感じてさ、さっきから近くに居たぜ」

漆黒の2対4枚の羽根を持ち、布を身体に巻いた様な服装で。　美声も含めて男だか女だか解らない肩までのウェーブの掛かった黒髪、瞳も真っ黒の小人である“シェイド”。

精霊には、３つの階級が有り。“下位”・“上位”・“精霊神”と有る。

精霊神は、もはや神と似た力を持っていて、どんな凄い精霊遣いでも召喚など出来ないと云われる存在だ。　上位の精霊も、契約を交せるだけの魔力を持たないと呼ぶ事は出来ないだろう。　今まで、上位精霊を呼べる精霊遣いは“天才”と呼ばれるくらいなのだ。

さて、この“シェイド”は、闇の下位精霊のトップに居る者だ。精霊の下位でも、各属性のトップが必ず居る。　ユリアの若さで召喚出来るとしたら、普通ならもう大魔法遣いの卵とかだろう。　だが、ユリアはその下位精霊の皆々とは、幼き頃から友達で居るのが当たり前なのだ。

さて、ユリアは不思議な面持ちで。

「シェイドさん、なんで？」

聞いているマガルは、長い廊下を見る。　丸で、月明かりが差し込んでいる様に、暗い廊下は視界がハッキリしていた。

ユリアの肩に現れたシェイドは、高い天井に施された装飾の絵や彫刻を見ながら。

「ユリア、もし子供達を助けたとして、どうやって帰るんだ？」

ユリアは、急に聞かれてポカ～ンと目を点にして。

「え・・・？　ふ・・普通ですけど？」

シェイドは、悪戯っぽくユリアを見返すと。

「多分、もう帰れないぞ」

聞いていた脇のマガルは、その話に驚き。

「どうゆう事だ？」

と、ユリアの肩に屈んだ。

シェイドは、廊下を指差し。

「普通なら、夜の闇で見えないハズの場所がこんなに見えるか～。
此処は、もう結界を張った奴の手の中だ。　結界を解かないと、館からも、この敷地からも出れないって。　何の為に結界張るんだよ～。　逃がさない為、餌食にする為さ～。　この見えている景観全て、昔の景観のニセモノ」

ユリアは、パッ・パッと前後の廊下上を見て。

「え・・・マジ？」

シェイドは、クラークとセイルを見て。

「あの肖像画、本人を綺麗に書いて居るし。　少し斜めに、女の色っぽさを魅せる絵だった。　この館と何の関係が在るかは解らないケド。　あの肖像画と同じ絵が、さっきの部屋にも在ったろ？」

「うん・・。　確かに、椅子とテーブルの在る部屋には・・・在っ

たね」

ユリアはマガルを見て頷き。　マガルもまた頷いた。

シェイドは、ユリアの肩で考えるポーズを決めて。

「普通、そんなに同じ絵を飾らないよ。　よっぽど自分大好き人間か、思い入れの強い相手だから飾るのさ。　もし、昔に何か有るなら、この屋敷の持ち主を知る手掛かりに成る。　屋敷の持ち主が解れば、結界を張ったのが誰かも解るかもしれないぞ」

ユリアは、難しい困った顔をセイルに向けて。

「だって・・・２００以上前の話だよぉ～。　解らないって～」

シェイドは両手を挙げて。

「ユリアに推理なんて無駄か～」

「う〝っ・・すんごいトゲ・・・」

悪戯っぽく膝に肘を置いて頬杖を見せるシェイドは、セイルとクラークを見る。

「あの二人、いい～コンビだな。　ユリアのお供には、正に打って付け」

「あ・・・あのね。　アタしゃ主従持ちじゃ～ないよ」

クスクス笑ってシェイドは、次のドアを指差した。

さて、１０人の2チームは隈なく建物全てを見回った。　部屋数は、延べ２００近く。　館を探し終えると、裏口から出て中庭を探し。　裏の離れまで探したが、何も無かった。

それ処か。　気付けば、この館と敷地を囲む周りが真っ黒に成り。　霧も何もかも無くなった代わりに、出口が無くなった。　一同が揃って、館の3階中央に椅子やソファーの在る待合場で休むしかなくなった。　流石に、子供達が見つからない上に、一日捜索と戦いばかりで全員が疲れてしまったのである。

暖炉が踊り場の様な広間の中央に配されて、3階の廊下の中間点の様に待合場が設けてある。　昔の大きな屋敷では、こうした待合場が各階に設けられてあったらしい。　公爵などで、重要な事に付いては重臣や大臣がやって来たり、客が多ければ個別に会うのに待たせる場が必要だ。　また、パーティーなどを開けば休憩に使える。

カーペットの引かれた待合場に、ソファーに座ったり寝そべったりすると全員が揃っている中でシェイド教えてやった。

“外の森から結界の中に踏み込んだ者が此処まで全員到着したのか、死んだかさ。　だから出口が消えたのだ”

と。

まず帰る為には、一つは別の何者かが新たに結界の中に入る必要が在るが。　侵入者が在れば、樅の木の迷路へ出れるとの事。　ただ、逆戻りを許してくれるかは、結界を作った術士次第である。

確実なのは、この結界を破るのみ。　この館の何処かに、術者の作

った結界を保つ魔法陣が有るならそれを壊す。　若しくは、結界を張った術者を倒すしかないとの話だった。

エルキュールは、モンスターの様な精霊を信じる気には成れない様で。

「でも、何も無いじゃない。　魔法陣も、術者も・・」

しかしクラークは、直ぐ様に反論する様に。

「焦り過ぎだ。　まだ、見えているのは術の表面だけと言っていい。　この館には、どうにも色々と怪しい物が多い。　数多くある“マリアンヌ”と云う女性の肖像画が先ずそうだ。　それから、書斎も見えない。　客用の寝室が有って、当主の寝室らしき物が見えないのもおかしい。　幻術なら、何か見せたくない物は隠すだろう。　君のそんな風になんでも見えないから、“無い”と決め付けるのは直情過ぎる判断だな」

聞いていたキーラは、深く頷く。

「確かにそうですね。　もしかしたら、違う探し方が必要なのかもしれない。　出れない以上、出れる方法を探さなければ・・」

「ふあ～あああ・・。　とにかく寝ようよ・・早く休んで、早く起きて子供達を捜さないと・・」

ユリアが、大きく欠伸をする。　魔法遣いは、疲労した精神を回復させるためには、どうしても深い睡眠が必要に成る。

どの部屋からも何も移動出来ないと思ったのだが。　ソファーなど

は持ち出せた。　部屋の入り口が小さいので、ベットは止めた。
全員でソファーの上に寝る事に。

マガルは、セイルとユリアに。

「私が先に見張る。　二人は、精神と魔力の回復の為にも寝るといい。　まだまだ長丁場になるやもしれないしな」

クラークも笑い。

「そうだな。　ユリア殿を寝かせないと、精霊殿に怒られるわい」

シェイドは、クラークの前に飛び。

「オジサン、良く解ってる～」

ユリアは、クラークに対して精霊が皆砕け過ぎた口調をするので驚き困って。

「わわわっ、シェイドさんっ！！！　“オジサン”呼ばわりしちゃ駄目ってっ」

しかし、シェイドは当たり前の様に胸を張り。

「大丈夫、このオジサンは度量が広いから。　それに、マジでオジサンだし」

クラークは、その話に本気で笑い。

「あははは。　いやいや、ホントにオジサンに成ったよ。　若い頃

は、コレでもモテたんだがな～」

するとシェイドも笑って、クラークを良く見ると。

「フフフ、確かに今でも渋いものね～。　ホントに、若かったらセイルに負けずにモテそうだよね～」

セイルは、一人で向こうを向いて。

「えへへへ～、それほどでも～」

と、照れる始末。

笑顔のクラークも、流石にセイルを見て同じには恐縮である。

「いや～、セイル殿には～負けるよ。　あははは」

ユリアは、セイルを持ち上げるクラークに直ぐムキに成って。

「ちょちょ・ちょっとっ、その気にさせないでよっ」

と、言ってから怒った顔をセイルに向けて。

「ウガーっ！！！　お前もマジで嬉しそうじゃないかっ！！！　チョーシ乗るなよっ！！！」

見ているイクシオやボンドスはゲラゲラ笑うし。　キーラやセレイドなども苦笑している。　エルザは、ハープを穏やかに奏でて微笑んでいた。

唯一、エルキュールは済ましている。

（フン。　精霊遣いがなにさ。　モンスターを操ってるだけじゃないか）

クラークが何故に、ユリアやセイルに対等に接しているかが解らなかった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告

休んだ一行は、朝に成って肖像画の女性が何者か？　この館の持ち主が何者か？　と云う事に答えを得る。　その頃、斡旋所では合同チームの結成が難航していた。　再度、館を探し回るセイル達は、惑わせる謎を解けるのだろうか・・。

次話、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

寒いですね＾＾；　遂に、冬が近付いて来たみたいです＾＾；

皆様、風邪やインフルエンザにはご用心を＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪マリアンヌと云う女性≫

朝方。　いや、結界の中に居るセイル達に正確な頃合いなど解らないが。　起きたセイルが、ボンヤリとバルコニーに出て火を熾した。
　少しの木を持っていたので、ユリアと二人で中庭を見下せるバルコニーに出て、熾した火にお湯を沸かしながら暖まっている。　近くには、お湯の沸くのを待つエルキュールが居る。
今は、先に寝た者と入れ替わってクラークやマガルなどが寝ている。

「セイル・・・。　思い出した～？」

広いバルコニーの窓枠の貼った様なドア近く、白く可愛らしい椅子に腰を降ろして鼻水を啜るユリアは、セイルに聞いた。

「ほえ？　何を～？」

ボンヤリ顔のセイル。　ソファーの上で寝た寝癖の髪は柔らかく緩み。　目元や鼻に掛かり美しさに可愛らしさが覗ける。　ユリアと向かい合う様に、屈んで焚き火に当る王子様の様だ。

あれほど“マリアンヌ”と云う女性に拘っていたセイルとクラークに、ユリアはヤキモキしていただけにグッと拳を握り。

「おまぇ・・・昨日はあれほどに拘ってたろうが・・・」

惚けて居るのか、はてまた寝ぼけて居るのかと云う雰囲気のセイルにユリアは唸る。

近場でお湯の沸くのを待っていたエルキュールは、中庭を見下せる手摺りに寄り掛かり。　こんなやり取りの二人を見て呆れるばかりだ。

（フン。　只のガキだ）

と、内心に見下した。

だが、緩やかにセイルは微笑み。

「うん・・。　マリアンヌって女性は誰か思い出した～。　もしかしたら、子供達が何処に居るか手掛かりが解るかもね」

火に掛けた小型の薬缶の注ぎ口から湯気が出るのを見て、セイルは紅茶の用意をする。

急に言われたユリアは、キョトンとし。　エルキュールは、腕組みを解いてセイルを見る。

ユリアの肩に腰を降ろしている闇の精霊シェイドは、セイルの顔を見て頷く。　彼に、どうやら確信が有るのだと思った。

さて、クラーク・マガル・イクシオが見張りを終えて仮眠を取った後だ。　一同起きた中で、セイルは待合場に全員を集めてクラークと並んだ。

ソファーに座るイクシオは、眠い目を擦りながら。

「んじゃ～、教えてくれないか？　一体、子供達は何処に居る？」

セイルは、カーペットの敷かれた真下を指差した。

「多分、地下ですよ」

全員が黙った。　古い屋敷や館は、古来から戦や役人活動の一環で地下牢や地下部屋を持つ。　火事などで、外に逃げられない場合の為に、地下道や水路を地下に整備する事も良くある事なのだ。

貴族の生まれのクラークも腕組みし。

「そう言えば・・・この館に地下は無いな・・。　昔の屋敷や館で地下が無いのは珍しい話だ」

エルキュールは、足を組んで暖炉前の椅子に座り。

「何故、そう言い切れる？」

「此処まで来る中で、人の生命波動は何処からも感じられません。

死んで居るなら・・・もうモンスターに変わってますよ。　生命の力を感じさせない場所を考えると。　瘴気の集まる地下としか考えられません」

（なるほど・・・読みは鋭いな）

イクシオは、感心した。

エルキュールは、更に。

「有るとするなら、地下に行く方法は？」

セイルは、微笑みながら。

「それは解りません。　ですが、“マリアンヌ”と云う肖像画の女性がヒントになるかも～」

薄い毛布を肩に掛けたユリアは、ソファーにシェイドと並んで座り。

「解ったんでしょ？」

「うん」

マガルは、この待合場の暖炉の上にも在るマリアンヌと云う女性の肖像画を指差し。

「何者なのだ？」

セイルは、皆の前を歩いて肖像画に寄った。

「この人は、この国の王族の歴史の中で何処の王族とも血の繋がりの無い女性です～。　決して表に出なかった短命の王妃様・・」

セイルのその話に、クラークもやっと思い出した。

「あっ、薔薇の王妃・・・暗殺されたマリアンヌ様かっ?!!」

セイルは、少し半身にクラークを見て。

「多分・・」

イクシオは、そんな女性の王妃は聞いた事が無かった。　このフラストマド大王国は、世界でも一番長らくの安定した平和王国であるからだ。

「聞いた事が無いゼ?　どんな人物なんだ?」

セイルは、肖像画に向いて。

「２００年以上前、当時の王妃が子供を産めないので、自分の兄妹の子供を数人養子に貰いました。　その時、その教育係の貴族の元に居た少女が・・マリアンヌ様です。　その教育係の男性もまた、身体が弱く結婚出来なかったので。　家の跡取りにと御兄弟の子供二人を養子にしていました。　当時、王妃に養子にされた子供達とマリアンヌ様は、お互いに養子にされた身の上から話も合い。　王室にて王妃様の許可元で一緒に遊び、一緒に学んでいました。　しかし、次第に美しくなるマリアンヌ様に、王位を継ぐ予定の王子様が恋をしたんです」

良く有りそうな恋愛話にイクシオは、物憂げな様子も漂う美女の肖

像画を見て。

「確かにイイ女だもんな、俺でも恋しそうだな～」

と、笑う。　だが、まんざら冗談でも無い。　肖像画のマリアンヌと云う女性は、その美しさ以上に何か惹かれるモノを持っている。

クラークが、其処に繋いで。

「だが、恋したのは長男だけじゃない。　次男と、末の養子もマリアンヌを愛した」

エルザは、マリアンヌの肖像画を見て、ハープを弾き。

「モテモテね～」

クラークは、頷くも続け。

「だがな。　王位継承に当って長男は、周囲の意見も聞かずに強引にマリアンヌを妃にしようとしたが。　周りが・・・な。　何処の国の皇族の血筋でも無い彼女を王妃には相応しく無いと・・・。　で、別の姫君を西の大陸の王族から貰う事で決まったのだが。　彼の長男は、王に成ってもマリアンヌを諦め切れずに、王妃にしか被らせてはいけないこのティアラを・・マリアンヌに送って第二妃にしようとした」

女のエルキュールには、男の専横社会だと気に入らない話である。

「全くっ、一人で我慢出来ない訳？　王妃に成る女性はどう成るのよっ。　我儘で両手に花を持った訳ね？」

此処で、セイルとクラークは見合って黙った。

ユリアは、二人の様子を見て。

「まさか・・・それで・・暗殺？」

先に、重々しくクラークが、鈍い頷きを見せた。

「うむ・・。　3人の王子達は公爵家縁の王族から貰った養子達だ。重臣や大臣達は、王子達の我儘を許すと、自分達の思う様に行かぬと・・・強行をとった。　マリアンヌを、秘かに何処かへ連れ去ろうとな。　だが、新たな王妃が来る前に、その連れ去る策の最初は失敗した。　若き王と王子達は、マリアンヌを守ろうと必死に成って協力し合ったらしい。　だが・・・結局は、連れ攫われて殺された」

「うわっ」

悲惨な結果だ。　ユリアは、口を両手で覆う。

ボンドスは、肖像画の慎ましやかな笑顔の女性を見て。

「殺すのかよ・・」

と、寂しそうに云う。　殺すなんて勿体無い気がした。　何も、殺さなくてもいいと・・。

同じ気持ちを持ったクラークは、残念そうに俯き。

「うむ。　実は、強引に王と成った長男が、この彼女と簡易的な結婚をしてしまった。　もう、妻と成ったマリアンヌは諍いの種に成ると・・・大臣や重臣達が秘密裏に・・・な」

マガルは、此処まで聞いて。

「でも、秘密裏なら・・どうして人に知られたのですか？」

「妻を殺された若き王にしろ、第二・第三の王子だって殺した重臣や大臣を憎んだ。　だから、もう世間体も無く復讐の粛清に入った訳だよ」

マガルは、想像が出来た。　愛する女性を殺されて怒り狂う若き王と王子が、何をしたか・・。

「では、重臣や大臣達は・・・」

「うむ。　専横罪と、殺人・国家転覆など色々罪を問われて刑死したらしい。　一族には、罪は無しと不問にしたのは、若き王が理性を失っていなかったのか・・周りが憎悪の連鎖を亡くす為にそうしたのかは解らない。　だが、その直後に若き王と新たな姫の結婚は執り行われた」

エルキュールにすれば、信じられない事だ。

「良く結婚したわね。　そのお姫様も・・。　有り得ないわ」

だがクラークは、生じ爵位のある世界の政略結婚は当たり前と知っている。

「向こうの姫だって、政略結婚で来たのは承知済みさ。　問題は、その後どうするか・・だろうな。　姫などと云う方々は、一見の生活は派手やかだが。　一般の皆の様な自由など無いからの～」

かなり自由に生きるエルキュールには、貴族や王族の行き方は別世界の話だと思う。

さて。　セイルは、肖像画を見上げて。

「確か、その後。　第二王子の男性は酒に溺れながら芸術家として短命な人生を歩んだとか・・。　でも、彼は結構強力な魔力を持った魔法遣いだったと云います」

クラークを抜いた全員が、“魔法遣い”と聞いてハッとした。

ユリアは、思わず立ち上がり。

「セイル・・まさか・・その人が・・？」

この館に巣食うモンスター主とユリアは想像したのだ。

セイルは、首を左右に振り。

「ど～だろう。　その人は、とっても優しくて寂しい人だったみたいだよ。　結婚もしないで独り身を通して、この絵を描き続けて居たんだから・・」

「はあ？」

全員が、セイルに声を出したり驚いたり。　では、一体何がモンス

ターを産んでいる元凶なのだろうか。　サッパリ解らない話である。

肖像画の右隅にセイルは右指を向けて。

「此処に王子様の名前が小さく描いてあります。　ロビーの絵は大きくて、額に隠れてたりしてたけど。　この絵は、隠れてないから読める」

クラークは、瞑目し。

「そうか・・そうだな」

“君の喜ぶ顔が在る薔薇の園が目に浮ぶ　全てに彩り光る園を君に送ろう　朝明けて君の居る事を思う　夜共にワインを傾ける時を思う　君の好きな薔薇を集めて　君に園を送ろう”

クラークは、と或る詩を思い浮かべた。

聞いた学者のイクシオは、キザな詩だと思い。

「歯が浮くよ」

と、苦笑。

しかしクラークは悲しい目を開き、セイルを見ながら。

「セイル殿、此処は・・」

セイルも、優しい笑顔に一抹の哀愁を浮かべて。

「はい、当時の第二王子アンソニー様の館ですよ」

やはりとクラークは俯く。

「そうか・・此処が・・・」

≪捜索の行方と館の謎≫

朝、極夜で明けない中で、斡旋所にランプが灯っている。

“合同チーム結成に参加する者を至急集う”

主が、張り紙を書いて掲示板や店内に貼った。

しかし、アンデットモンスターが１００匹以上も出たと聞いて、危険を冒そうと立ち上がる者は殆ど居なかった。昨日、棄権するまで子供達の捜索に参加していたチーム達は、動ける者はシレ～っと掲示板の別の仕事に目を向けて無視している。

「・・・」

斡旋所の中で、黙って行方を見守るカミーラ。白いピアリッジコートの開かれた胸元には、傷痕真新しい切り傷が見えている。

カミーラは、自分の噂を自覚している。　自分が大っぴらに勧誘しても、誰も来ないだろう。　だから、誰かが来てくれるのを待つ事に。　だが、自分達をチラ見して掲示板に行くチームや、別のテーブルに座って何事も無かった様に話すチームを見ると苛立ちが募る。

「全く・・ドイチもコイツも・・。　金の額を聞いて、モンスターが出るまでは血眼にやる気を出してた奴等が白々しく別の話してやがる・・」

カウンターに一番近いテーブルに陣取るカミーラ・ダッカ・ジャガンの3人。　カミーラの内心は、無理が出来るなら1チームでも加わった直後にクラークやセイルを助けに行く気である。

だが・・・。　まともにチームは誰も来なかった。

斡旋所の年老いた主も、丸1日ろくに食事をせず。　孫が助かるのかどうかの瀬戸際だと覚悟している様子だ。

時折、斡旋所の裏から泣き叫ぶ声がして、誰かに助けを叫ぶ男女の慟哭がする。　消えた子供達の親が、事態に気付いて斡旋所に押しかけたからだ。

昨日の昼間や、先ほども親が斡旋所のこの間に出て来て。　仕事を探しに入って来る冒険者チームに縋り付いては助けに行って欲しいと懇願したのだが。　だが、誰もがモンスターを恐れて拒絶した。

唯一、僧侶の何人かは、加わっても構わない素振りを見せていたが。　駆け出しの僧侶や、実力差のある者を強引に加えて結成してもしょうがない事は主が理解していた。

「此処、宜しいか？」

態々チームを離れて、加わってくれた僧侶二人が、カミーラの横に座る。

“このまま行こうか？”

カミーラの目が、主に向く。

主は、やつれた顔を左右に振ってカミーラを押し留めた。

何時助けに行けるのか、目処が立たないままに時は過ぎて行く。

その頃。

セイルが、肖像画の前で。

「クラークさんが読んだ先ほどの詩は、この肖像画を描いた第二王子アンソニー様がまだ死ぬ前のマリアンヌ様に読んだ詩です。結婚してくれたら、そうすると読んだんですよ」

何よりエルキュールは、不思議に思う。セイルをマジマジと見て。

「キミ、若いワリに良く知ってるじゃない」

セイルは、焦り笑いで。

「あははは～、僕の家は学者の家系なので～。色々と本が有りましてね～。あはははは・・・」

苦しい言い訳だとクラークとユリアは瞑目して。

（ほ～・・ガクシャねぇ～・・・アンタのじっさまは、つよ～いガクシャ様だことさ～）

貴族や王族の逸話や伝説などを集めた本は、非常に高価で図書館に置かれる所も限られる。　クラークもセイルも、家に本が有ったのだ。

そろそろ子供達を捜したいと思うイクシオが、キーラと頷き合ってからセイルに向かって立ち上がり。

「んで？　肖像画や詩がどうした？　子供達を捜す手掛かりってのは？」

クラークが、セイルに変わって。

「確か、肖像画の中に薔薇の画かれた物が無かったか？　薔薇をこよなく愛したマリアンヌ様だとか。　だが、普通に見て薔薇を一緒に描いた絵は見当たらない。　アンソニー様は、それを良く知っていたのに・・」

漸く理解出来たとエルキュールも立ち上がり。

「なるほど、ではその絵を探せばいいんだな？」

クラークは、大きく頷き。

「其処を踏まえて、もう一度しっかりと探そう」

イクシオは、自分のチームの仲間全員を見て。

「よ～し。　行くぞ」

大男神官戦士セレイドと僧侶エルザは頷き合う。　二人、暗黒の力の強いこの場所で、あまり深くは寝れなかった様だ。　目の下に、薄っすらと隈を浮ばせて。

「早く見つけたいな・・。　モンスターは見えないが」

「そろそろ1日以上になっちゃうものね。　親も心配してるわ」

ボンドスは、イクシオと並んで待合場から右へと廊下に。　近場の部屋に向かった。

セイルは、クラークに笑って。

「では、僕達も捜しましょ～」

セイルに頷いたクラークは、ユリアを脇に迎えて。

「ユリア殿、どうですかな？　何か、違った気配は？」

シェイドを肩にユリアは首を左右に振って。

「全然。　強いて云うなら、昨日よりも真下から闇と魔の混じる力を強く感じるくらいかな。　嫌な波動と・・・凄く純粋な力の波動を感じるの。　昨日より、それだけは鮮明に解るわ」

「なるほど」

頷くクラーク。

其処にシェイドがユリアの肩から離れて、４人の真ん中の宙に飛んで浮くと。

「ねえ、皆。　此処だけの話いいかな？」

一同、“何事だろう”とシェイドを囲んだ。　セイルとユリアが並び、マガルとクラークが中腰に屈む。

シェイドは、こっそりと伝えてきた。

「この魔の力と闇の力の混ざり具合は変わってる。　もしかしたら・・凄い魔物が居るかも。　断定出来ないから、みんなにだけ。　向こうのチームの人は、私の話なんか信じなそうだから」

と、部屋に入るエルキュールなどを指差した。

クラークは、マガルと見合い頷き合った。　今までのユリアと精霊を見て来ている。　それも考えられる事だと思えた。

≪謎は解かれる≫

さて、それぞれ捜索に入った一同。　各部屋に掛けられた肖像画を見て回る。　３階。　待合場の左右の廊下を、昨日とは逆の形でチームで入れ替わり探し回る事に。

セイルを先頭に最初の部屋に入った一同。　客間の様な間取りの広い部屋である。

「う～ん・・。　絵に薔薇は描かれて無いよ～」

ユリアは、絵を見て薔薇の有無を確かめる。

セイルは、部屋をグルっと見回して。　天井・壁・机などもしっかり見始めた。

思わず窓から外を見るマガルは、今が昨日なのか何時なのか解らないが。　入って来た時と変わらない暗闇の広がる世界を見て。

（戻れるのだろうか・・・）

不安に成った。　残したチームの面々が心配に成る。　勝手に解散し、チームを作るならいいが。　まさか無理でもされたらと考えた。

だが、窓には真剣に何かを探す若きセイルやユリアが映る。

（いや、皆が同じだ・・。　俺としたことが・・）

直ぐに捜索に加わる。　死ぬ気は毛頭も無い。　それに、４０に入って新たにこんな経験が出来るとは不思議な事だと思える。　初心

に返った様な、不安と好奇心が混ざる思いがした。

各部屋を回りながら、あ～でもないこ～でもないと言い合ってセイル達は下へ下へと捜索をする。

肖像画をいくら見回れど。　薔薇の描かれた絵処か、薔薇が部屋に無い。　床や壁もしっかり捜したが、全くコレと云った手掛かりらしき物など何処にも見当たらなかった。

「あ～、スンゴイ疲れるぅ～」

ユリアが、廊下を歩きながらウダウダし始めた。

シェイドは、ユリアの肩に座りながらユリアを見て。

「全く、集中力が無いユリアだね～」

セイルもクラークも、もう1階まで降りて来ているので。　流石に探し疲れるだろうと思ってはいた。

さて、４人が歩くのは1階の裏廊下だ。　最初に肖像画を見た玄関前ロビーの前と似た作りで。　向こうの廊下と間に部屋などを挟み、平行して此方にも廊下が伸びている。　この廊下には、中央左手に中庭へ出れる出入り口が有るだけで。　部屋の入り口は正面廊下に比べると格段に少ない。

月明かりの様な仄明るい廊下の上で。　豪華でシッカリとした装飾の行き届いた壁や天井を見回すマガルは感心した様子であった。

「しかし、この1階の壁や天井は素晴らしいですな。　天井には花

柄の模様が画かれ、床にはそれを映す鏡の様な床が広がる。　壁には、変わった模様が画かれているし・・・、陽の光が入れば美しく見えるのでしょうな～。　一体、どれだけの資財だ注ぎ込まれたのだろうか・・」

クラークは、自分の家を思い出して。

「何処も貴族の家とは金が掛かってますよ。　全く、体裁など棄てて普通の家に住めないものか・・」

と、年寄り染みた言い方をする。　体裁を気にする貴族の暮らしに嫌気の差したクラークらしい言い方でもある。

この時だ。　セイルは、丁度廊下の中央で、中庭に出る扉の前に来て。

「あ・・・れ・・・？」

何かが気に成って立ち止まる。

セイルを置いてユリアは、セイルの一族の住む豪邸を遠回しにマガルやクラークに語って一緒に呆れた様子を見せていた。　館の様な建物が幾重にも有り、全体的には要塞の様な城の雰囲気も漂う大邸宅なのだ。　見回るだけで、２日以上は必要だろう。

「ありえな～い位のお屋敷よ」

「やはりな。　流石は、剣神皇と呼ばれた方の家だ」

マガルは、世界一の商人であり、世界最強の剣士の一人であるエル

オレウ氏の事なだけにしみじみと納得の頷き。　やはり、剣士として生きる上では、“剣神皇”とまで呼ばれた男への意識は有る。

と、そこで。

「ユリアっ、セイルが居ないよぉ」

セイルが居ないのに気付いて声を出したのは、シェイドである。

「へっ？　えっ？　アラッ？　セイル～？」

横に居ないセイルにユリアは見回して、クラークやマガルも捜して見回り、置いて来たのを振り返って知った。

「・・・」

遮る仕切りや壁の無いガラス窓の中に、中庭へ出る扉が填まって居る様な所のまん前。　セイルはしきりに上を見たり。　その中庭に出る扉と対象的な廊下側の壁に、少し高く掛けられたマリアンヌの肖像画を見たりしている。

「お・・」

ユリアがセイルに声を掛けようとした時。　３人が話しながら向かっていた廊下の正面側から。

「お～～いっ、何か有ったか～ッ？」

と。

ハッとして声に振り向いた3人。　廊下の向こう側に、イクシオ達が下りて来た所だ。

思わずセイルより正面に振り戻った3人だったが・・・。

今度は、後ろからセイルの声で。

「キ～～ラさ～～～～～んっ！！！！　此処に来てくださ～～～～～～～いっ！！！！！」

微妙に間延びしながらの大声で、ユリアやクラークなどには何だが力の抜ける声である。

「へえ？」

「うぬ？」

「・・なんだ？」

ユリア・クラーク・マガルは、声に反応してまたセイルに振り向く。

セイルの元に、全員が集まった。　裏出口のロビーだ。　薄暗い月明かりの様な明るさが、左右の廊下を奥まで見せる。　外は夜の暗闇の様なのに、裏の大窓からは中庭が見渡せる。　丸で、青白い満月の月明かりの下の様だ。　中庭には、色が白・黒・青白い色と云ったコントラストの変わった薔薇が広がって見える。

セイルは、マリアンヌの肖像画の前に広がる裏口ロビーの真上を指差した。

「上を見てくださ～い。　アレは、陽の光などを間接的に取り込んで明るく見せる“隠れ岩鏡”です」

イクシオは、帽子を上向きに上を見た。　天井の一部が、人工的な曲線を画いて傾いて見える。

「薄暗くて良く見えないが・・・確かにそうだな～」

クラークは、自分の家にも在るのを思い出し。

「少し斜めに天井の形に合わせて作られているな・・。　薄暗くて解らなかった」

セイルは、次に床を指差して。

「下。　床も此処だけ鏡石に成ってますよ～。　もし、此処で光を出したら何が映るんでしょうか？」

ユリアの肩のシェイドが。

「そうか。　床には壁の絵が浮んで。　上の鏡石には、中庭の薔薇が映る。　少し高い位置に絵が有るから、もしかすると床と天井に映る薔薇と絵が重なるかもっ」

と、はしゃいで言う。

ユリアは、そうは上手く行くかと困惑して。

「え～・・・そんなのアリ～？」

腕組みで立つエルキュールは、冷めた目で。

「やって見たらいいじゃないか。　ねえ、キーラ？」

すると、キーラはセイルの脇に来て微笑んだ。

「良く気付いたね。　多分、光を当てる位置が重要だと思う。　前に、こんなからくり魔法屋敷を見た事が有るよ。　よし、やってみよう」

キーラは、杖に光の魔法を宿す。　眩い光が杖から放たれ、急激に場を明るくした。

「おいおい、本当に鏡が上に填まってるゼ・・。　こりゃ～たまげた」

ボンドスは、杖に宿した光の輝きで、天井の緩やかに斜めに成っている場所に自分が映ったので驚いたのである。

キーラは天井を見て。　外の薔薇が、原色の黄色・赤・白を取り戻して天井に映ったのを見た。

「今はまだ、外の中庭の薔薇しか映ってないね」

セイルは、キーラに下がるジェスチャーをして。

「中庭に出る扉の方に近付いてくださ～い」

「うん、そうだね」

キーラが移動し、光を反射する角度を変えた。

セイルの目の中で、床に伸びて映る絵のマリアンヌと映り込んだ薔薇が合わさった。

「そこですっ」

一同が、固唾を飲んで黙る時。　床の一部に、鮮明な姿で目を瞑り祈るマリアンヌが映る。　そして、天井の鏡との映り合う事で、薔薇に包まれた様に幾重にもマリアンヌと薔薇が天井と床に映る。丸で、花園に包まれたマリアンヌの絵の様だった。

「うわ～・・・キレ～」

驚くユリア。

が。　突如とマリアンヌの絵の掛かっていた真下の壁が動いた。

「うわわわっ。　何っ、何々っ?!」

一番壁の近くに居たユリアは、音に驚いてセイルに走り寄る。

「おおお・・・動いた」

壁が動いて階段が現れるのを見たイクシオは、ニヒルな目つきを見開いて驚く。

エルザは、セイルを見て。

「やるぅ～」

セレイドが、ウンウン頷いていた。

「・・・・」

エルキュールは、腕組みを解きながらポカ～ンと口を明けっ放し。
本当に何か有るとは思って居なかったから尚更だろう。

扉の前から歩いてきたキーラは、セイルを見て。

「大当たりですね」

クラークも、流石だと苦笑した。

だが。

現れた暗い地下へ続く降り階段を見て、エルザとセレイドの顔は見る見る曇る。

額に汗を浮かべて、細い目を困らせるエルザが先に。

「うは～、すご～い瘴気・・。　何が居るのよ・・この下」

セレイドも、大きな身体に似合わず首筋を触りながら。

「背筋がゾクゾクします。　暗黒の力を備えたモンスターが居るかも知れない」

マガルは、白銀の自分の剣を触り。

「もしかしたら、子供達も此処に居るのではないか？　早く探しに入ろう」

頷くクラークとセイルが先頭に、黒い岩の階段に入ろうとする。

「あ、ユリアちゃん」

気付いた様に入り掛けた途中でセイルはユリアを呼ぶ。

「ン？」

セイルは、目の前に来たユリアに、真上を指差して。

「真上のマリアンヌ様の絵、持って来て。　シェイドさんなら外せるでしょ？」

「はあ？」

聞いたユリアは、セイルが言った意味が解らなかった。

「アンタ・・絵はもう・・・」

だが、セイルは少し真面目な顔で。

「もしかしたら、必要に成るかもしれないから。　お願い」

セイルに頼まれては、ユリアも弱い。

「ふぬ～、いいけどさ～」

エルキュールは、早く中に入りたいと。

「絵なんか放って置いてイイんじゃ～ないの？　早く中に入ろう」

セイルは、ユリアとシェイドに微笑んで。

「お願い～」

と、先に踏み込んで待っていたクラークに頷いた。

クラークとセイルの後ろから、杖を持ったキーラが入り。　イクシオやボンドスが続いた。

ユリアは、肩にシェイドを乗せてセレイドより高い場所に在る絵を見上げる。

「おっきくて重そう・・」

肩に座るシェイドは、足をバタバタさせながら。

「額から外しちゃえば～」

「あ、そっか」

何故、セイルがマリアンヌの絵を欲したのか・・。　ユリアには全く解らなかった・・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告

セイル達は、遂に子供達の居場所を突き止めた。　だが、其処には恐ろしい魔物が居た。　囚われの子供達を早く助けなければ・・焦るセイル達。　一方で、救出の合同チームの結成も危ぶまれていた。　夕方まで後少し、カミーラ達は子供達とセイル達への応援に向かえるのだろうか・・。

次話、数日後掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

そろそろ、年末が近付きますね＾＾。　何か、サプライズなネタでも出来ないかな～と模索中です＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪焦りを包む風≫

「ドイツもコイツもっ！！！！　モンスターに子供達が殺されるかも知れないって時に無関係決め込みやがってっ！！！！」

カミーラの大声が斡旋所に響いた。

子供達の親達が、昼を過ぎてもう居ても立っても居られなくなり。助けに行くと飛び出そうとして主に留められたり、大声で泣き喚いたりと騒々しく。　その内母親の一人が斡旋所に出て来た。

「お願いしますっ！！！　どうか・・どうか子供を助けて下さいっ！！」

と、懇願して縋る農家の中年女性を振り払った冒険者に、冒頭の言葉でカミーラが切れたのである。

斡旋所内に屯する４・５０人の冒険者達が、カミーラに向かってそれぞれの居場所から視線を向けた。

「だったらお前が行けよっ！！！！」

若い生意気な顔をした剣士が、母親を振り払って押し倒した者だ。

この者も、昨日は子供達を助ける依頼を請けていた一人だ。

カミーラは、睨む目に殺気すら浮かべて。

「行くさっ！！！　手数が足らないから協力してくれって頼んでるんじゃないかっ！！！　腰に無駄な得物をぶら下げてる輩が偉そうに云うなっ！！！」

カミーラが、怒声を上げた。

ヒソヒソと話合う冒険者の数人が、居心地の悪さに外に出て行く。

今日は、雪が一休みと止んだ曇り空。　漸く陽が明けて、外の通りからの往来の雑踏が聞こえる中である。

今は昼を過ぎて少し。　早くしなければ、今の時期では夕暮れは早い。　夜には、モンスターも活性化する。　今まで焦らされたカミーラだけに、本気で冷静さを失い掛けていた。

「カミーラ、もういい」

カウンターの中から、主が言って来た。

振り返るカミーラは、ムキに成って。

「なら行かせてくれっ！！　僧侶二人が居ればっ、十分切り抜けられるっ！！！」

疲労と心労で虚ろな主の目が、鈍く鋭くカミーラを見据えた。

「カミーラ、無理だ」

「何故っ？！！」

「良く考えろ。　行ったメンバーには、クラーク殿も、マガルも。・・。　そして、イクシオのチームのサンサーラも行ってる」

「だからどうしたっ？！！！」

怒るカミーラに、目を瞑る主は。

「此処に居る全員を束にしても、あの８人とは互角に思えない」

カミーラは、実力差を云われてグッと手を握る。

「・・・」

主は、斡旋所を見回し、動きを止めている皆に言った。

「済まないが、今日は仕事を受け付けぬ。　此処を少し閉める。全員、出て行ってくれ」

すると、母親を突き飛ばした若い冒険者が仲間を見てから主に怒りの矛先を向けて。

「おいおいっ、勝手に閉めるなよっ！！！！　そっちの勝手を、こっちに押し付けるなっ！！！」

その時だ。　主の眼光がギラリと光る。

「う〝・・・」

若い冒険者はたじろいだ。

怒りを孕んだ老いた主の目が、カミーラより恐ろしく見える。

「聞いた風な口を利くんじゃねえ。　此処に居るどいつも、ろくに仕事出来ねえで屯してる半端モンだろうが。　森に行って、ゾンビやスケルトンの一匹も相手に出来ねえ腑抜けに、一体どんな仕事を回せって云うんだ。　あ？　云ってみろっ！！！！！！」

主の声に、若い男の冒険者はビビって言葉が無い。

直ぐに、別の冒険者チームが出入り口に向かって行く。　空けるドアの呼び鈴を鳴らすのさえ躊躇う様な仕草で、コソコソと外に消えていった。

「あ・・主さん・・・」

子供の母親が、倒れた場所から主に向かって這い寄る。

主は、母親から目を逸らし。

「仕方無い。　これから、王城に出向く。　騎士のお力を借りよう」

「おおお・・・」

何も出来ぬままに、このままどうなるのか解らずに母親はその場に泣き崩れた。　国の対応とは、急でも遅い。　何せ、モンスター相手などと聞けば、貴族は直ぐには動かない。

力を無くして黙るカミーラ。

母親の泣き声が、斡旋所に響く。

もう、子供達の母親でも、他の者は気が狂いそうに嘆き悲しみ続ける者も居るし。　絶望に生きる気力が無くなって放心している者も居るのだ。　午前には、斡旋所にあの雑貨や武器を売る店の主と、甥っ子のジュンガが来て。　それぞれの親達に必死の顔で土下座していたのは、主には心痛い光景だった。

（もう・・・駄目かもしれんな・・）

全てを知ってる主は、最後の決断をした。　国に頼むのは一大事だ。　しかも、あの森の奥は秘密事項である。　真実を知るのは、この主と王とその側近の数人。　事を公にする責任は、主が負う必要が出てくる。

泣き崩れる母親をあしらった冒険者は、不満の漂う顔で仲間の元に行く。

険悪なムードに、泣き喚く母親の声。　この場に居る全員が、斡旋所に居る事をいたたまれない雰囲気に包まれて、ヒソヒソと話し合う。

そんな時である。

この場の雰囲気を破る様に、突然と云った感覚で出入り口が開いた。

勢い良く呼び鈴が鳴り、外の冷たい風が中に吹き込んで来る。

主も、カミーラも、冒険者達も、入って来た白い厚手のマントにフードを被った何者かと。　後から続く一団6人を見た。

赤い金属の具足を白いマントの足元に覗かせるその者は、先頭で入って来た人物。　フードで良くは見えない顔を、呻き泣く母親に動かして。

「・・・あら？」

呻き泣く母親に気付いたその白いマントを着た先頭の者は、母親の前まで歩いて来て、雪の欠片を落としながらそのフードを取って顔を現した。

「あ・・・」

主が驚く様に小声を上げた中で、白銀の髪を後ろに纏めて結い上げた白肌の絶世の麗人は。

「どうされた？　こんな場所で泣くなど、徒事では無いでしょう？」

マントを開き、母親の脇に屈む若き麗人。　綺麗と云う言葉をそのままにした顔を母親に向けて、そっと母親の肩に手を回し、その身を起こさせて事情を聞こうとする様子が見えた。

その後ろで、次々とフードを取る背丈様々な冒険者の一団を皆は見

た。

カミーラは、若さと美しさの迸る麗人を見る。　身のこなしからして、只者では無い。

（百合の紋章が入った白銀の上半身鎧・・赤い剣の柄・・・この美貌・・・まっ・まさかっ？！！！）

噂に聞いた事のある容姿だった。

誰よりも先に、主がカウンターに飛び付き。

「“風のポリア”殿かっ？！！！」

その場に残る全員が、現れた冒険者チームに釘付けと成った。

≪地下の縄張り≫

暗い地下に降りたセイル達は、湿気の高い地下迷宮の様な通路を歩いていた。　水滴が天井や、太く丸い石柱などに付着して通路の脇

流れる水路を形成する。　所々に水路へは橋が架けられて、入り組んだ地下通路を右へ左へと渡れる。

「なんか・・此処ってさぁ～、少し温かい」

そう言うユリアは、シェイドに加えて水の精霊であるサハギニーを両肩に乗せて、セイルの後ろにへばり付く。　怖いらしい。

地下通路は、横に5・6人は余裕に成れる広さを持っている。　水の温度の御蔭だろうか、館の中よりもここの方がずっと暖かい。

先頭を行くマガルとクラークにボンドスは、真後ろに光を宿すのを止めたキーラを控えさせながら。　各々がカンテラを持って歩く。

「凄いな・・。　この屋敷は・・地下も迷宮みたいだぜ」

キーラとセイルの間に居るイクシオは、随分と古そうな地下迷宮に興味をそそられていた。

エルキュールは、サラサラと流れる水の音を心地よく聞いて。

「でも、なんで地下に水路が？」

横のエルザは、直ぐに。

「エルキュ～ル、人の話はよ～く聞いて置くものよ」

「え？」

「さっき、クラークさんが言ってたでしょ？　今は平和だけど、昔

は何が起こるか解らない争いや諍いが絶えなかった時代が有ったのよ。　火事に成ったり、館に立て篭もったりするのに水は生命線よ。　こんな迷路みたいな造りも、逃げるのに追っ手を撹乱させる為じゃない」

「あ・・そっか」

イクシオが、顔だけ脇目に動かして。

「貴族支配の時は、貴族が各領地を治めてた。　領民を匿ったり、逃がしたりするのにも地下は使われた。　それに、地下水は中々枯れないからな。　干ばつや水不足を補う上で、水を確保するのは貴族の権威保持に役立っていたらしいゼ」

ユリアは、小声で精霊に向かって。

（セイルの家には、地下に川が有ったわよ。　川って・・アリ？）

（あははは～、ご～かぁ～い）

小声で笑うシェイド。

（う・・羨ましか～）

サハギニーは水の溢れる川を想像してワクワクする。　精霊は、精霊力の溢れる場所には喜ぶ傾向が有る様だった。

さて、セイルは顔を真面目にしている。

「なんでしょうか・・。　この、凄い魔力の力は・・。　まるで、

魔法の力を集めた何かでも有るような気配がします」

キーラも、同様だ。　全身に、ビリビリと魔力の波動を感じる。
魔や闇の波動とは別に、強力な魔想魔法が発動された直後の様である。

「ですね。　この先に、一体何が在るのでしょうか？」

緑のローブに身を包むキーラ。　此処まで来ても2年半以上前、Kの合同チームに参加した頃の弱弱しい彼は見えない。　落ち着いていて、何処となしか間抜けた印象だった顔が精悍に見える。

さて、昼前後にセイル達はこの場所を発見した。“く”の字に折れ曲がって降る階段を随分と深く降りて、この地下通路に下りた印象で。　もう、随分と時を過ごした気がする。

そんな一同の視界が、僅かに明るく見えて来た。

「何やら、前が明るく見えて来た様な・・」

不思議にとクラークが言えば、マガルも。

「確かに。　緑色の光が見えますな」

向かえば向かう程に、通路の行く先が明るく見えた。

その光に近付くに連れて、地下通路に平行して流れる地下水路が左右の奥へと離れて行く。

ユリアにしろ、キーラにしろ、光に近付くに従いどんどん不気味な

力へと近付いて行くのが解る。　自然に無口に成り、緊張に心が支配されて行く。

そして・・・、遂にその場は姿を現した。

「なっ・何だ此処は？」

クラークは、その場に度肝を抜かれる思いがして思わず口にした。
もう、カンテラも要らないその場は、誰も見た事の無い場所だった。

急に開けた視界の先には、宙に浮ぶ円形の石造の間が広がっている。
深いとても大きな穴が、まん丸のままに２０メートル以上は下に刳り貫かれた中。　太い石の柱５本に支えられた円形の間が、空中に存在しているのだ。

ユリアは、その間に向かう石橋の上で。　縁の手摺りから下の空間を覗いては。

「ず～っと下の其処には水が溜まってる。　凄く深い水だって、サハギニー君が言ってるよ」

だが、一同はそれより不思議なのはこの丸い円形の間が浮ぶ円錐形穴の壁が、一面に緑色に光るのが何故か・・。　それが気に成って仕方が無い。

キーラは、キラキラと光って空中の間や穴の空間を照らす壁面し見ながら。

「イクシオさん・・これは・・まさか昔のヒカリゴケを水晶に閉じ

込めるあの技術でしょうか？」

目を凝らすイクシオは、壁に時折走る緑の光の線を見るに。

「いや・・アレとは違う感じだぞ・・。　何だ、あの壁の側面を時々走る緑の光は・・・」

誰もが、この場の何もかもが解らなかった。

そして、空中に浮ぶ間の入り口に差し掛かる。

「うわあ・・怖い・・」

ユリアが怯えてセイルの後ろに回る。

円形の空中に浮く間は、渡る石橋が来た通路側と。　その反対側に、橋渡しするかの様に２つ在る。　円形の間と橋との繋ぎ目以外の縁は、石で造られた手摺りの壁で仕切られているのだが。　その手摺りには等間隔で四角の支柱が填まり。　支柱の上には、翼を持った悪魔の姿をした化け物の石造が在ったり。　ガイコツの姿に剣を持った像まで１０数体が置かれているのだ。　見たユリアが怯えるのも解る気がする程に、精巧な容姿をした石造である。　今にも動き出しそうな気配すら感じられた。

「気味が悪いな・・」

石造を見ながら呟く様にボンドスが云うと。

いきなり。

「ウルセエよ」

と、奇怪な声が。

「ん？　誰だ？」

マガルが、奇妙にダブる男のモノとも女のモノとも解らない声に反応し。　全員が橋から円形の間に踏み込んだ場所で警戒して立ち止まった。

「けけけ・・・カギだけじゃなくて。　俺のエサまで迷い込んで来たぜ・・。　若い人間の血肉は美味いからなぁ～。　嬲り殺してから、生で食ってやろう」

その不気味な声は、皆の左側の手摺りの外から沸き上がって来た。

「何者だっ、姿を見せろっ！！！」

クラークが、鋭く声を出すと・・。

「ウルセエな～、何様だ？」

不気味な声は、手摺りの外直ぐ其処まで来て聞こえ。　その主がヌッと顔を見せた。

「うわああっ！！」

ユリアは、見えた顔に怯えて顔を逸らす。

「うぐ・・あ・・悪魔だ・・」

セレイドがたじろいで、顔を険しくする。

「ほう～、俺が悪魔だって解るのか・・・。　僧侶が混じってるな」

人・・・顔は死んだゾンビの顔だ。　だが、真っ黒く腐り爛れている。　手摺りに掛かった手は、鋭く伸びた爪が蜥蜴の様であり。背中には、蝙蝠の様な羽が伸びる。　顔は人並に大きいのに、羽や手は赤子に比べるしか無い大きさだ。　小さな身体は黒いブヨブヨの肉の塊としか見えない。

「こ・・コレが悪魔・・・なっ・なんと異形なっ」

初めて悪魔を見たマガルは、その気味の悪い容姿に衝撃を受けた。

≪救援のチーム≫

昼過ぎ遅く。

斡旋所に現れたチームはポリアをリーダーとした“ホール・グラス”の面々だ。　Kとの出会いより3年近く。　大人の女性の雰囲気を纏ったポリアは、聡明な目をカミーラや主に向けていた。　体つきはあの頃と変わらない様に見えるが。　2年半以上の経過は確か

だ。　雰囲気・態度、どれも落ち着いていて、一角の人物そうな感じがする。

「マスター、子供達やイクシオを助けに行くのは構わないわ」

そう言うポリアを見たカミーラは、美貌が先行するポリアの噂に、見るまでは噂が膨れただけで大仰な噂だと思っていた。　しかし、こうして目の前にすると、身動きに無駄や隙が無く。　冷静に物事に対処するポリアが噂に見合った人物だと解る。

だから・・。

「頼む。　我々も連れて行って欲しい。　森の奥に行った奴等には借りが有る。　どうしても、助けに行きたいんだっ」

カミーラは、集まった仲間や僧侶の男女二人を先頭に頭を下げた。

頭を下げられたポリア自身、このカミーラの噂は聞いていた。　だが、Kとの経験上。　依頼主に逆らう云々で、その人の全てを評価出来るとは思って居なかった。　必死に合同チームを作ろうとしていたカミーラの姿もまた、この女性の真の姿なのだろうと思う。

「いいわ。　此処に居る5人と、私達6人。　11人で行きましょう。　ただ、先に一つだけ言うわ」

最後を少し鋭く言ったポリアに、ダッカやジェガンが、ポリアに目を奪われた。

「何でも」

カミーラが応えると。

「もし、危ないと判断したら。　怪我人や子供達だけ、もしかしたら貴方達だけでも戻すかも知れない。　死なせる気は無いから、それだけは先に言うわよ」

カミーラから見ても、自分とポリアの戦士としての腕には開きが有ると感じられる。　それは、仕方の無い事だと思う。

「解った。　全て任せる・・。　リーダーは、アンタ以外に居ないと思うよ」

ポリアは、頷くと主を見て。

「マスター。　手続きをお願い」

先程と一気に光景が逆転した様だった。

カミーラ達だけの時は、他の冒険者達が態と無視して構う気も無い素振りだったのに。　今、この瞬間。　斡旋所内の冒険者達は一心にポリアを見ている。　有名でもありながら、その言動に風格すら漂うポリア達。

先程、ポリアがリーダーで合同チームを結成すると云う話が出た時。　いきなりそのチームに入りたいと申し出が殺到した。

“有名なポリアさんと一緒にチームを組めるなら何でもしますっ！！！”

“いやっ、私達を一緒にっ”

あの母親をあしらった冒険者の若い男ですらそう言ったのである。

その、さっきまでとは全く違う態度にカミーラは怒り。　ポリアに余計な迷惑は掛けられないと、主がその全てを拒否したのは言うまでも無い。

だから今は、斡旋所内の至る所からカミーラ達に羨望の眼差しが向けられている。

ポリアは、殺到した冒険者達に何も言わなかった。　必要も無かったし、本当に無かったのかも知れない。

ただ、美女マルヴェリータやシスティアナの顔ぶれは変わらないが。　剣士ダグラスの姿は見えなかった。　彼は、１年前に別のチームに移動したのである。

カミーラ達を無視した冒険者達に見られながら、カミーラはポリアをリーダーとする合同チームに加わった。　総勢１１名。　ポリアは、今までに５回以上も合同チームを組んで何れも仕事を成功させている。　その噂も高い評価を得ていて、合同チームを結成したがる風潮まで巻き起こしていた。

さて、直ぐにポリアは仲間を連れ立って外に出た。

「あ、雪」

カミーラが、また振り出した空を見上げて白い花の様な雪を手に受け止めた。

ポリアは、仲間を見て。

「寒いわよ。　食料や持ち物はしっかりね」

システィアナは、ニコニコ微笑。

「助ける皆さんの分もひつよ～です～」

少女の様なシスティアナの姿は変わらない。　しかし、あどけなさが先行していた顔が、優しさや微笑が印象に残る様に変わっている。

ゲイラーも、大きな身体は変わらないが。　背負ってる剣が様変わりしている。　黒い柄に、何やら紋章の入る物々しそうな剣だ。

イクシオのチームに居るボンドス・キーラ・セレイドは、元はゲイラーがリーダーだった頃のチームの面々でもある。　合同チームの結成まで行く事態。　嘗ての仲間が心配である彼。

「ポリア、イクシオ達は昨日に森に入ったんだろう？」

「そうみたいね」

「行った場所は、国の中で丸一日って事は・・・何か有ったと考えていいよな？」

「多分」

降り積もり出した雪の上を、通りに沿って歩く一同。　其処で、青いベールを被るマルヴェリータが天候を見て。

「もしかしたら、子供達が見つからないんじゃない？　昨日の今日

だから、寒くて暖を取れない状態で外に居たら凍死するわ。　捜してるなら、夜までには合流して捜したいたいわね」

ダッカやジェガンの目に映るマルヴェリータは、幻想的な女王様の様だ。　美しさも此処まで来ると、神秘的な香りを漂わせる。

このマルヴェリータは、ホーチト王国の宮廷魔術師総師団長の長であるジョイスと恋仲だったのはもう周知の事実。　数ヶ月に一度は必ずポリア達はホーチト王国を訪問する理由の一つにも成っているとか。

必要な買い物を終えたポリアは、直ぐに森へ向かう事に。

道を行きながら、カミーラがポリアに。

「森まで案内するよ」

すると、ポリアは微笑んで。

「大丈夫。　門までの場所は解るわ」

「あ・・」

返答に困ったカミーラに、ポリアは笑って見せて。

「私は、この国の出身よ。　産まれは、此処」

横に控えるイルガは、幾分皺の多く成った顔を頷かせて。

「その通りですな。　我がお嬢様のご生誕の地・・・」

「あ・・・そ・・そう・・」

“ご生誕”など、王族に対しての言葉である。　イルガの言葉に二句の繋げないカミーラへ、ジェガンとダッカが小声で噂を教えた。

ポリアはこの国の出身であり、1年前には自分の実家のあるアハメイルの街で、父親と決闘した話は巷を賑せた。

ポリアの話だが。　彼女の母親の生家がこの首都に在る。　仕事で王城に出仕する時、ポリアの一族は、母親の生家を利用するそうな。

　ポリアの母親の実家も、爵位のある名門。　だが、跡取りが病気で早世していて。　その跡をポリアの上の4人居る兄の一人が継ぐと決まって居た。　だから、もう略実家と変わらないのである。　実際、その母親の生家を継いでいる伯父夫婦は、ポリアを養女に欲しかったらしく。　今でも、殆ど子供の様に接してくれているらしい。

彼女は、この首都の街並みや、南の貿易都市アハメイルの事は深く知っている。　入り口の門の有る場所は、先刻承知であり。　若い頃は、どうやって忍び込もうか悩んだ場所でも在ったらしい。

話を聞くカミーラ達は、不思議な気分だった。　冒険者として生きるポリア達の会話は、なんとなく落ち着ける暖かさが篭る。　口の利けないヘルダーとのやり取りも自然で、チームの中心にポリアが支柱の様に備わっている様なのだ。

（コレが・・本当のリーダーか）

過去を引き摺り、強引にチームを引っ張る自分を詰まらなく思えた

カミーラだった。

≪悪魔の計画≫

封印された森の先に隠された様に佇む館の地下に巣食って居たのは、下級悪魔であった。

クラークは、背中の槍に手を掛け。

「あれはレッサーイビル（下級悪鬼）のギャリスパだっ。　地獄の奥に住む悪魔が、こんな所に巣食っていたとはっ！！！」

悪魔には、その種類に由ってカテゴリーが異なると云われる。　最も地獄と呼ばれる魔界で力の強い種族は大悪魔（デーモン）。　その下が、強い怪力や魔力などの特徴的な小悪魔や悪鬼（イビル）や下級悪魔や淫魔などの亡霊や不死者に近い魔物（デビル）である。　だが、どの悪魔達も高い知能と魔法を操り、他のモンスターとは一閃を画す異形の化け物である。　しかも、存在が最も古いモンスターで、世界に生息するモンスター達の生みの親と言ってもいい存在なのだ。　そんな悪魔が、この平和なフラストマド大王国の首都内に巣食っていようとは驚きだろう。

腐って浮腫み、腫れ上がる顔の醜悪なギャリスパは四足をカエルの様にして手摺りの上に掴ると。

「フン、人間風情に俺を知ってるヤツが居るとはな～」

と、見下し嘲笑うかの様な感情を目や口元に浮かべた。

イクシオは、ジッと悪魔を観察して。

「喋れるのか・・・普通のモンスターとは訳が違うゼ・・」

ギャリスパは、首を軽く竦めさせて。

「“喋れる”だあ？　フン、人間は何処までも自分達が一番凄いと思ってやがるよ」

と、悪態をついてセイル達を見ると。

「元々から言語を持ってたのは俺達悪魔の方が先なんだよ。　キサマ等神の生み出した人間に、絵を描いたり、歌い方を教えたり、言葉を教えたのは俺等悪魔さ。　神は、狡賢い人間に知能や言葉を与えたら世界が支配されるのを解ってたからな。　だから、教えなかった。　そのお前達に、発展の足掛かりをくれてやった俺達悪魔を下に見るとは、人間も神以上に仕えないゴミだね～。　ま、俺も人間の世界に長居し過ぎてか、こんなにも人間の言葉が上手くなっちまったがね。　うけけけけ」

「なっ、何だとっ？！！！　嘘を申すなっ！！　この薄汚い悪魔めっ！！！！」

セレイドが、信仰故に憎む悪魔へ怒りを露にした。

だが、セイルはそれよりも気に成っている事を言う。

「でも、何でアナタは此処に居るのですか？　さっき、“ガキ”がどうこう言いましたが。　子供達を知っているんですね？」

ギャリスパは、顔を９０度右に傾けて。

「ほう、冷静に俺の独り言を聞いてたか。　ああ、奥の牢屋にブッ込んであるぜ。　これから、生贄にするために生かしてあるさ～けけけ・・」

ギョロギョロと目を動かし、気違いの様な様子を見せる悪魔ギャリスパ。　その場から、ポ～ンと飛んで、円形の間の奥へ向かう石橋の前に着地する。

「それはさせない」

ギャリスパの行方を見たマガルが、自慢の白銀の剣を抜いた。

だが、セイルは火蓋を切ろうとするマガルの前に立つ。

「？」

マガルは、何事かと思うのだが・・。

「悪魔さん。“生贄”って、他に悪魔が居るのですか？　アナタは、此処に居るのには理由が在るのでしょう？」

セイルの問い。　一同も、ギャリスパも止まった。

そして、ニタニタと笑い出すギャリスパは。

「うけけけ・・・嬉しいねえ～。　俺の口から企みを聞き出そうとする人間が来るとはな～・・。　ああ、その通りさ」

ユリアはセイルの背中から。

「子供達をどうする気よっ！！！　還しなさいよっ！！！」

ギャリスパは、ユリアの声が負け犬の遠吠えに聴こえて。

「ケっ、だれが還すか。　やっと、やっと長年待った暗黒の街を築く時が訪れたってのによお～」

クラークは、このギャリスパなどは下級の悪魔の下っ端だと知っている。

「フン、お前にそんな力は無かろう。　大悪魔でも無いお前に、そんな事が出来る物かっ」

と、槍で突き込もうと構えた。

その時だ。

「はあ～・・・・・・・・」

溜息の様な、吐息の様な声が、地の底から吐き出されたかの様に聞こえる。　瘴気とは違う、もっと根源的な力の気配の塊が、溜息の

様な声によってこの場に溢れ出た様な感じだった。

「あああ・・・」

「うごお」

エルザとセレイドが、突然に身を崩して四つん這いに成った。　魔と闇の力が湧き上がり、魔法を喰らったかの様な衝撃を受けて膝が笑ったからだ。

いや、立っている皆ですら、心の中を恐怖の手で撫でられる様な思いをその声に覚えて立ち竦む。　構えたクラークが、ゾクリと感じた恐怖に足が進まなかった程なのだ。

セイルが、真下を見て。

「居る・・・あああっ、地下に何かが居ますっ！！！」

その波動に気付いたキーラやユリアは下を見ていたし。　イクシオやボンドスなども、セイルの言葉に思わず下を見た。

ギャリスパは、ニタニタした顔をニンマリとして。

「うひゃひゃ、そ～ら。　此処の主のお目覚めが近いぜぇ～」

セイルは、直ぐに驚きの目でギャリスパを見て。

「ま・・・まさか・・・“ノーライフロード”（不死に目覚めた皇王）・・・」

「あはははははは～～～～っ！！！！　そうさっ！！　２０年前に死んだ王子さまってヤツは、愛した女を忘れらずに未練を不死に託したっ。　そのバカがっ、今日にも復活するんだよっ！！！！　捕まえたガキの血を飲ませれば、一気に力を取り戻して最強の不死モンスターの皇帝として世に蘇るっ！！！！　日没までは此処で遊んで貰うぜっ！！！！」

ギャリスパは、勝ち誇った様に高笑いすると。　ギョロギョロした瞳に黒い光を湧き上がらせた。

余りの衝撃に、言葉を失って立ち尽くすセイル。

ユリアは、震える身体を堪えてセイルの肩に手を置いて。

「セっセイルぅ～、ノーライフなんとかって何よお～」

同じく呆然とするイクシオが、呟く様に。

「“完全なる不死の神”・・。　ゾンビやゴースト等の最強の統率者だ」

ボンドスはいきなりの事に焦り。

「そんな化け物を蘇らせる訳には行くまいっ！！　なんとかせねばっ？！！！」

エルキュールは、剣を抜いて額に溢れ出た汗を拭い。

「アイツを倒せばどうにか成るさっ！！！」

クラークも、それには同意見だ。

「うむっ、阻止せねばっ」

だが、ギャリスパはその場にウサギが立ち座りをする様にして、蜥蜴の様な両手に黒々としたエネルギーを湧かせて居た。

「“俺を倒す”？　出来るか？　そんな子供みたいな人間連れたお前達がよっ！！！　出来るなら、コイツ等から倒してみなっ」

と、手摺りの石造の内、黒い翼を畳んで座る異形の悪魔の様な像に飛ばした。

「あっ！！！」

セイルが、グッとギャリスパに踏み込んだ。

驚くユリアは、シェイドやサハギニーとワナワナしながら。

「今度は何よっ？！！！！」

セイルは、ギャリスパの飛ばした黒いエネルギーを吸収する二体の石造を警戒しながら。

「ゴーレムイミテーターですよっ！！　ガープが生まれますっ！！！」

「なぬっ？！！」

「ちぃっ！！！」

石像を見て、左右に身構えたクラークとマガル。

二体の黒いエネルギーを受けた石造が、急に動き出して翼を大きく広げる。

―グガガガ・・・―

鳥の鳴き声の様な奇声を上げて、二体の石造は円形の間に降り立った。

セイルは、自分の剣を抜いて。

「石像から生み出される人工生物(ゴーレム)ですっ！！！　非常に硬いので、急所の顔か首を切り落として下さいっ」

やっと子供達の居場所が解りかけて、生存している事を知れたセイル達だが。　事態は、風雲急と告げていた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告。

遂に悪魔との決戦に入るセイル達。　次々と襲うアンデットモンスターを切り抜けるポリア達は、セイル達の元へ辿り着けるのだろうか。

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

セイル編も、そろそろ佳境ですね＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪ゴーレムモンスター≫

「たあっ！！！」

エルキュールが、石像より生み出された怪物のガープに斬り掛かる。
しかし、“ガギン！！”と石でも斬ったかの様な音がして、エルキュールの手にはその手応えと共に痺れが来た。

「あぐぅ・・」

思わず剣を手放しそうになって、2・3歩退いたエルキュール。

イクシオは、横からエルキュールに襲い掛かろうとしたガープの首に、鉄の棘が茨の様な鞭を撓らせて巻きつける。

「む・・・」

力を込めてモンスターを行かせなかったイクシオの脇で。

「エルキュールっ！！！　今さっきの若いコの話を聞いてなかったのっ？！」

意識が薄らぎながらも見ているエルザが、珍しく焦り声を。

其処に、風の如くセイルが走り寄って来てガープの右脇に駆け抜けた。

「うおっ」

イクシオの鞭が引っかかりを失い、いきなり解けてしまったではないか。

「セイルっ、イイゾっ！！！」

シェイドが応援を言う。

そう、ガープの首が、セイルの剣で斬り落とされたのである。

「フっ、はっ」

「セイっ、だあああああっ！！！」

同時に、もう一体のガープをクラークとマガルが挟み撃ちにして顔をクラークの槍が貫いて破壊した。

「やったっ！！！」

ユリアは、はしゃいでサハギニーと頷き合う。

だが・・。

「ガープなんざ～小手調べよっ！！！　次はコイツだあああああーーーっ！！！」

悪魔ギャリスパは、もう手に発生させた黒いエネルギーを４つも飛ばした。　ガイコツの姿をした石造の内、赤い色の石像にギャリスパの放ったエネルギーは吸い込まれる。

エルキュールは、自分の刃毀れした剣を手に。

「まだ出てくるのっ！！！」

自分のハンマーで、杖代わり身体を支えるセレイドが。

「は・・始まったばかり・・だぞ・・」

と、呼吸を整えようと必死な顔をして言う。

先程の不気味な溜め息の影響で、エルザとセレイドは力が抜けてしまって戦力に成らない。　キーラも、悪魔を狙って魔法を唱えようとするが、向こうもそれを察知してキーラやユリアから目を離さない。　一撃必殺の強い魔術を扱えば、この空中に浮ぶ広間が下手したらどうなるか解らなかった。

ユリアも、魔法を扱おうとするが、仲間の乱戦状態で踏み切れなかった。

そこに、汚れた血の様に赤いスケルトンが４体飛び降りてきた。

ボンドスは、そのモンスターに見覚えが有る。

「おいおい、あの大蛇の牙から出来る“ブラッディロア”が４体もかよ・・」

モンスターの牙より生み出されて来るガイコツ戦士は、“テュース・ウォーリア”（牙の戦士）と呼ばれる。　元に使用するモンスターの牙と、生み出す暗黒魔法との相性でモンスターの強さが千変万化するゴーレムマッジク（人工生物魔法）。　邪悪な力の支配を強く受けて、凶暴なモンスターなほど強いガイコツ戦士を生み出せるらしい。

古代の超魔法時代は、このゴーレムが護衛代わりで大変重宝されたらしく。　未だに発掘されていない遺跡には、この手のモンスターが数多く残るとか。

「エルキュールっ、下がれっ！！！」

イクシオが前に出て来た。

ボンドスも寄り。

「イクシオ、二人で一気にやってしまおう」

「おう、ド頭カチ割ってやれさっ！！！」

セイルも、一体に標準を合わせて。

「マガルさんっ、クラークさんっ！！！　神聖魔法以外の魔法は効力薄いので、1対1で後ろに行かせない様にして下さいっ」

「解ったっ！！！」

「おうっ！！」

二人は応えて、赤い血肉の色をしたスケルトンに向かった。

ブラッディロアの背丈はクラークに匹敵している。　頭上から斬り掛けられたセイルは、直ぐに剣で防いで受け流し。　返す一閃で足の骨を斬り飛ばした。　バランスを失って倒れるかに見えたブラッディロアだが、ヨロめくだけで片足一本で立つ。

「うわっ、ホントに強い」

ユリアは、セイルの剣の鋭さに驚く。　さっきは霧の中で戦う姿を見えなかった。

エルキュールも、自分よりも剣の扱いが上手いと驚いた。

「うおおおおおーーーーっ！！！！」

クラークが、突進でブラッディロアの胸元に槍を突き込めば、鋭い一撃で飛ばされる。　床を擦って悪魔ギャリスパの近くまで飛ばされた。

一方、マガルは互角の打ち合いになる。　右、左と打ち合って、掬いに斬り付けたマガルと斬り込んだブラッディロアの剣が火花を散らして噛み合う。

「ぬうっ」

剣を噛み合いから外したマガルが間合いを取って睨み合う両者。
骸の骨である顔に、眼球らしき物は無く。　マガルの視線が赤い骨の空洞な目の骨組みの中へ吸い込まれる。

―カタカタカタカタ・・・―

俄にブラッディロアが、ガイコツの口のボロボロの歯を噛み鳴らす。

「生意気なっ」

笑われたと思って剣を右手に握り直し、マガルはまた斬り掛かった。

「今行くぞっ！！！　悪魔よっ！！！」

クラークが視線上にて、倒れたブラッディロアよりもギャリスパを睨んで右手に長い槍を、左手に短いスピアーを持って突撃体制を取った。

だが、ギャリスパもまだ余裕を持っている。

「アホウ。　マダマダ居るんだよっ！！！」

と、手に暗黒のエネルギーを光らせた。

「そらそらっ、ほらよっとっ！！」

激しく鞭でブラッディロアを打ち付けて動きを制し、大きく振り込

んだ鞭の先で足を絡め取ったイクシオ。　その隙に、ボンドスが両手の斧を構えて突進した。

イクシオに引き摺り倒されそうで動けぬブラッディロアだが、振り込まれたボンドスの斧を左手で防ぎ。　反撃まで仕返す。

真っ先に斬り倒したのはセイル。　ブラッディロアの残った足まで斬り飛ばし、魔法の力を宿した剣先で頭蓋骨を斬り割った。　小さく魔想魔術特有の炸裂が起こる。

「あ・・・」

見ていたキーラは、小さく声を上げる。　セイルが、エンチャンターだと気付いた一瞬だった。

エルキュールは、何が起こったのか解らずに呆然としてしまう。

この時、ユリアはシェイドを見て。

「シェイドさん、私の力じゃど～にも成らないかな？」

「ん？」

「何か、有効な魔法を遣いたいんだけど、水の魔法は威力大きいし。　闇の魔法は意味が無い。　空気は有るけど、風が流れて無いから風の精霊さんも来たく無いでしょ？」

「ふ～ん・・・」

右肩で考え込むシェイド。

横で、サハギニーも頭をポリポリして。

「オイラの魔法は範囲が広めだからな～。　ユリアが集中すれば・・・魔法を小さく出来るが・・」

「あふ、アタシってそんなに雑念多いのね」

何か出来る事を考えるユリア。

しかし、一方で。　エルキュールはマガルに加勢しに走る。

「ふぬっ！！！」

打ち合いの末に、ボロボロの骨で出来た剣を弾き飛ばしたマガル。

其処に、エルキュールが走って来て。

「えいっ！！！」

マガルに掴み掛かろうと手を伸ばし掛けたブラッディロアの腹部に見える腰骨を、横から斬り込んでヨロめかせた。

マガルは、この隙が十分な斬り込みの体勢を整える余裕に繋がった。

「そりゃっ！！！」

脳天唐竹割りに、ブラッディロアの頭蓋骨へと剣を振り込んだ。

神聖な力の宿る白銀の力も加味されてか、乾いた音を上げてブラッディロアの頭蓋骨は打ち砕かれる。

直後。　自分の相手にしていたブラッディロアを槍で刺してうつ伏せにし、スピアーで頭部を破壊したクラークもいる。

倒されたブラッディロアは、ハラハラと黒い塵に変わって行った。

しかし、既にギャリスパは次なるガイコツの石像４体に暗黒のエネルギーを飛ばしていた。

ギャリスパに近付こうとしていたセイルの横に、ドス黒い色で２メートル以上の背丈のスケルトンが降りた。

「ハッ？！！！」

セイルは、他にも緑色のスケルトンが３体降りたのを見て。

「皆さん気を付けてっ！！！！　“リザードバイター”は猛毒のトカゲの牙から生み出された緑色のゴーレムで、その剣には麻痺する毒が含まれますっ！！！」

背後に降りられたクラークは、マントを靡かせて振り返る。　敵に斬り込まれた時に、マントで視界を防ぐのだ。

「全くっ、次々とっ！！！」

唸るエルキュール。

マガルも、左斜めに降り立った緑色をした角の生えたスケルトンを睨み。

「両手に剣を持っているな・・。　侮れぬ」

右の横では、頚椎を切断してブラッディロアをやっと倒したイクシオとボンドス。　魔法の力も無い武器では、魔術で生み出された硬いゴーレムの身体を壊すのは難しいのだ。

転がったブラッディロアの顔を、降りた緑のリザードバイターが空洞の目の中に不気味な赤い光を宿して踏み壊す。　瞬間、ボンドスとイクシオの間近に倒れたブラッディロアの骨の体が、パッと塵に成った。

「うお、な・・なんてヤツだよ・・」

イクシオは、同じ仲間の顔を平気で踏んだゴーレムに、畏怖すら覚えた。

そして、悪魔ギャリスパは、ニタリ顔で。

「うひひひ、中々強いな～お前等。　残りの3体のゴーレムも甦らせてやる。　チョット時間が掛かるが・・・。　それまでにコイツ等全部倒せるか？」

ユリアは、セイルの前に下りた黒い骨のゴーレムを見て。　何か凄く強そうな印象を受ける。

「セイルの前に居るの・・なんか強そう・・・」

手に握る杖が、微かに震えていた。

ポリアの剣が、雪の降る霧を一瞬裂いた。　乾いた破壊音がして、スケルトンの頭部を砕く。

ゲイラーは豪快だ。　薙ぎ払う剣でスケルトンを木っ端微塵にし、ゴーストも一撃で二匹同時に刺した。

システィアナから神聖の加護を掛けて、ヘルダーの戦扇子は淡く光る。　ヘルダーの走り抜ける間に居たスケルトンは五体バラバラに解体され、ゴーストは姿を現す一瞬を狙われる。

何より、カミーラ達が驚いたのは・・・。

ゾンビの群れを前にして、ポリアがマルヴェリータに顔だけ横に向けて。

「マルタっ、サポートをお願いっ」

すると、マルヴェリータがポリアの後ろに来て。

「行くわよ・・・」

と、雪と霧の中に見え隠れするゾンビを見た瞬間。

「右、首筋。　左二体は前から腹後ろが頭」

この時、ポリアはマルヴェリータが言う前から走り始め。　声に合わせるかのように右に向かう為に進行方向を変え、見えたゾンビに肉薄して伸ばす腕を斬り上げるままに首まで切断した。

マルヴェリータが言って直ぐに、霧の中でポリアが。

「左奥っ！！！」

マルヴェリータは、自分が感じたゾンビの弱点を突いてポリアが倒したのを波動で察知。

「次っ、ポリアから右に胸っ、更に数歩右に喉っ」

その時マルヴェリータの左脇に、霧の中から姿を現すヘルダー。

マルヴェリータは、ヘルダーを見ずして。

「ヘルダー、正面の左先に3体。　右から腹、真ん中背中、左は右脇腹よ」

年齢を重ねて渋みが出て来た潰れ目のヘルダーは、音も微かに霧の中に走って行く。

見ているカミーラ達は、自分達など無用な戦いに脱帽だ。

「す・・凄い。　これが、チームの戦い方・・・」

この深い霧の立ち込めるて雪が舞う封鎖地区に入った合同チーム。
　前日からこの霧の森の中で冒険者達が暴れた御蔭で、森の奥に潜んでいたモンスター達が色めき立ってしまったのか。　夥しい数のモンスターが奥の門に向かう辺りを徘徊していた。

実は死んでしまった遺体などから生まれたゾンビに、古い人の容姿を留めない様なゾンビ達が加わって死者の森に成ってしまっていたのである。　新たな死人の無念が霧の瘴気に力を与え、地下にモンスターに変わらずして残った遺体までもモンスターに成ってしまったのだろう。

更に、真新しい遺体のゾンビが歩く事で、腐り切らない身体から溢れる死臭と血肉の香りに。　モンスターが一部分に集まる要因を生み出したのである。

システィアナは、歩く範囲内でイルガやカミーラ達に護衛をして貰い。　出来上がったヘイトスポット（自縛念温床）を聖水で清めていた。

だが、やはり戦わずして見守る皆の目の向かうのは、絶妙に息の合った戦いを見せるポリア達だ。

人の死肉を食い漁り、魔の力に魅入られてモンスター化した鳥の鮫（サメ）鷹（タカ）や、水気の多い場所で死肉を漁る“ヴーズ”と呼ばれるスライムモンスターまでもが現れた。　どうやら、今まで森の奥の湖の方で秘かに繁殖していた様だ。

マルヴェリータは、丸で放電するような雷をイメージした魔法で空中に潜む鮫鷹の群れを打ち落とし。　剣を具現化した魔法でヴーズ

を次々と倒す。　一度に生み出した無数の剣を、一本一本動かして狙うのは余程の熟練者であり。　たった1本で、確実に人並の背丈の有るヴーズを倒せるのも魔力が強力な証。　マルヴェリータは、また驚く成長を遂げていた。

切り抜ける先で、セイルが相手をしたギガースゾンビも現れたが。
　システィアナの唱えた神聖魔法“浄化の囁き”と云う聖なる光に焼かれて消え失せた。

森へ入って戦い通し、太く大きく成る木々の合間を抜けて行くポリア達。　しかし、森の中を行くままに道のり半分と云うぐらいで、戦いが小休止したかの様にモンスターがぷっつりと出なくなった。

ポリアは、急激に静か過ぎる森に警戒し。

「マルタ、システィ、周りの気配を探ってね」

「今のところ～、モンスタ～さん達はと～くです」

にこやかシスティアナ。　この瘴気の立ち込める森でも平然としている。

マルヴェリータは、真っ直ぐ向かう奥を指差し。

「真っ直ぐの向こうの固まって居るわ。　少しは、安全に行けそう」

「解ったわ」

ポリアは、全員に警戒だけを言い渡した。

歩くだけと成った一行の中で。　カミーラは、ポリアの脇に着けて。

「子供達も、クラークや他の皆も大丈夫かな？」

白い息を吐くポリアは、雪を髪に纏わせながら周囲を窺う。

「大人は、日数的には大丈夫・・かな。　でも、門の奥がどうなって居るのかが解らないから・・・。　あとは、この寒さね。　子供達がこの寒さの中で下手に寝たら、もう危ない。　何処か、暖かい場所とか火の熾せる物とか持ってるといいけど・・・」

こんな会話、斡旋所の主を含めたら何回目だろうか・・。　カミーラも不安なのか。

「あ・・・話・・変わるけどさ」

「ん？」

「その・・合同チームって・・・そんなに簡単なのか？」

ポリアは、意外な質問だとカミーラを見返す。

「え？　どうゆう事？」

あの強気なカミーラが、言葉を選んで迷う。

「その・・強くなるのに」

思っても見ない問いに、ポリアはヘルダーを見たりしてから前を向いて。

「合同チームって、正直良い迷惑な決まり事よ」

「あ・・え？」

今度は、カミーラが驚き戸惑う。

ポリアの目に、あの包帯男が浮ぶ。

「凄く強いチームに、弱いチームが加われば足手纏い。　似通った戦力のチームで組んでも、我儘言われたら直ぐに結束が破綻するし。　弱いチーム同士なんかで組んだら、最悪。　行く場所によっては、死体にする人間を増やすだけ・・」

其処に、マルヴェリータも加わって。

「数で当っても出来る仕事とそうでは無い仕事が有る・・って所かしらね。　私達が、あっちこっちで合同チームで緊急の仕事を請けて成功したからって、何でもそれで解決出来るみたいな空気が出来始めてるわ。　良く先々で、ポリアを見ただけで何でも合同チームで仕事しようと持ちかけて来るチームも居る。　でも、ポリアは用心棒でも利用の道具でも無いの」

カミーラは、自分が悪い事を聞いたと思い俯く。

ポリアは、マルヴェリータに笑ってから。

「私達も、最初は凄い人に助けて貰った」

「え？」

顔を上げるカミーラの目の中で、ポリアは少し遠い目を霧に向けている。　雪が舞う中で、雪の様に白い姿のポリアは白銀の姫君の様である。

ポリアは続けた。

「助けられたケド・・。　その後は止まれなく成ったわ。　何処に行っても、有名に成れば成るほどにに難しい仕事しか回して貰えない。　小さな仕事にも、時として凄い大事が隠れているかも知れないのに・・・。　派手やかな仕事ばっかり紹介されると、時々駆け出しの仕事を選ぶ時が在るの。　困ってる人や、冒険者として感性を磨くのに上の仕事や、こんな合同チームみたいな仕事でなければ成らないなんて思わない。　1回1回の仕事の中にも、学ぶべき事は一杯あるの」

カミーラは、無言で頷く。　なんとなく、窘められた・・そんな気がする。

しかし、ポリアは、少し微笑んで。

「最速で有名に成る方法が、1つだけ在るのよ。　合同チームなんてしなくてもね」

カミーラは、顔を上げた。　ポリアの目と、自分の目が合わさった。

「強くなる事・・か?」

ポリアは首を左右に。

「人に最善を尽くす事」

「あ・・・え？」

カミーラには、意味が解らなかった。　仕事に“最善を尽くす”ならまだ解るが。　“人に・・”とは。

「どんな仕事でも、一番最良の終わらせ方をすることよ。　今回で言うなら、子供達も冒険者も助けて、このモンスターを産む元凶を断つ事・・」

カミーラには、そんな事など出来るのか考えもしなかった。

「出来るのか？」

「違う。　尋ねるんじゃなくて、考えるの。　この先で見える事実を理解して、する方法を模索するの。　行動と、人間性。　出来る範囲内でも、し始めるなら・・。　それは人に評価される。　お金や名声に目が行ったら、出来ないわ」

「・・・・」

俯くカミーラ。

その時。　システィアナが、ポリアの腕を引っ張る。

「ん？　何？」

「ポリちゃん、ケイしゃんみたい」

ポリアは、頷く。

ニコっとしたシスティアナは、大きく息を吸って。

「ポリちゃんも、もう“お～ばぁ・・・”もぐ・・もごもご・・・」

システィアナが言おうとしたのを、ポリアは口を塞いで止める。

「もう言うな・・・もう言わないでっ」

必死なポリア。　いい加減、他人の前で言われたく無い言葉・・・。

誰しもある。

マルヴェリータは、ほくそ笑んでポリアを見ると。

「ポリア、アレも一つの伝説的な通過点でしょ？　チーム名アレに変えたら？　ケイが探し易いかもよ」

言われたポリアは、ムキに成って。

「ウガーッ！！　死んでも御免だわっ！！！　そのうちケイから」

“仲間にして下さい。　ポリア様”

「って言わせちゃるっ！！」

せせら笑いのゲイラーは、イルガと見合って。

「イルガさんよ、その頃は冒険者してないな」

システィアナやカミーラ達を守るイルガは、呆れて首を左右に振る。

「お嬢様を虐めるな」

毎度のバカ騒ぎに、イルガも本気に成る気は毛頭も無い。

カミーラは、こんなモンスターの巣窟の中でも余裕のポリア達が信じられなかった。しかし一方で、こんなに暗くならずに楽しめるチームが羨ましかった。

（ケイって・・・誰だろう？　もしかして、ポリアさんの恋人？）

本人に聞いたら、なんて言うだろうか・・・。

直後、マルヴェリータがモンスターの近付きを示唆して雑談は終わった。

≪ゴーレムとの決戦≫

「キ・キーラ、ユリアさん」

いきなり、戦況を見つめる二人にセレイドが。

「え？」

二人同時に見れば、覚束無い動きだが歩ける様に成っていた。

「セレイドさん、まだ動かない方が」

心配するキーラに、顔中汗塗れで蒼褪めた血色のセレイドは大きく首を振り。

「いや、そ・・それよりも。　イクシオ達を・・私の元に」

ユリアは、顔色が悪いセレイドが心配に成った。

「どうして？」

「ぶ・・武器に・・まほ・・うを」

ユリアは、セレイドが言いたい事が理解出来る。

「足止めすればいいのね？」

「は・・はい・・」

緑のスケルトンであるリザードバイターと戦い始めたイクシオやマガル達は苦戦していた。　クラークは互角に戦っていたが、マガルやエルキュールは終始押されっ放し。　イクシオとボンドスは、斬り込まれて逃げ回る場面も。

マガルの剣が白銀では無いなら、此方の二人も同様だろう。

セイルは、一人で黒いスケルトンと一騎打ちをしているが、相手は中々隙を突けない強いモンスターである。

ユリアは、イクシオとボンドスの相手しているリザードバイターの先にはセイルが居るので心配だった。

（セイルなら、私と一緒に戦える）

魔法を扱うユリアに取って、一緒に戦える相性は重要だ。魔法の全てを発動させる事は容易くても。それを維持するのは難しい。

先にあの緑のゴーレムを自分で足止めをして、セレイドから武器に魔法を掛けて貰って。またイクシオ達が来たらセイルの方に行こうと思ったユリア。

「キーラさん。私、イクシオさんとボンドスさんの方に行きます。エルキュールさんの方には、キーラさんが行って下さい」

「大丈夫ですか？　お一人で？」

ユリアは頷き。

「セイルも一人だから」

キーラは、両刀遣いのリザードバイターに追い込まれているマガルとエルキュールを見た。

さて、４方の戦いは加熱の一歩を辿る。

リザードバイターが振るった左右からの剣撃を、同じく左右の槍と

スピアーで受け止めたクラークは。　グッと大きく左右へ槍とスピアーを押し開いて相手と自分の距離を縮め、ガラ空きの肋骨に足蹴りを見舞う。　後ろに飛ばされたリザードバイターは、縁の手摺りに背中を強打したが。　直ぐに身を立たせて剣を構える。

（突くのは難しい相手だ。　色が違うだけで強さも違うとは聞いていたが・・）

リザードバイターは、ブラッディロアとは少し違っている。　ブラッディロアは、顔が赤い骨なのに。　このリザードバイターは目の骨の中、口の骨の中が黒いエネルギーで満たされている。　しかも、眼球らしき赤い光も見えた。　見た目からも、特徴的な違いが見られる身体。　ブラッディロアは、只の赤いスケルトンなのに対して。　このリザードバイターは、頭部・足腰・肩の骨などが変形して短くとも鋭く尖る。

（うぬ。　恐らくは、あの体の棘にも毒が・・・）

クラークが、心配している一つがコレだった。

別に目を向ければ。

「う〝ごごおお・・・」

クロスに剣を振り込んで来たリザードバイターの腕を、交わして上から剣で押さえ込んで捻じ伏せようとするマガルだが。　抵抗の力は強く、目の前でリザードバイターにカタカタと笑われる。

「たあああっ！！！」

マガルの御蔭で脇がガラ空きだと思ったエルキュールが斬り込んだのだが・・。

「うわあっ」

マガルを押し込むように体を逃がしたリザードバイターの御蔭で空振りに終わった。

マガルも動かされて力の抜けた剣を跳ね上げられてバランスを崩す。

そこに。

「魔想の力よ。　無数の飛礫で我が敵を撃て」

キーラが、小石の様な魔法の飛礫を唱えて作出し。　マガルに踏み込んだリザードバイターの体面にぶつけた。　石や煉瓦の壁に小石を強く打ちつける様な音がして、当った飛礫は一瞬の炸裂を起こす。

リザードバイターは魔法につつかれる様に後ろに押し戻された。

最後の飛礫をぶつけたキーラは、

「エルキュールっ、セレイドさんに剣に魔法を掛けてもらいなさいっ！！！　一時、私が引き受けた」

最後の魔法の飛礫の襲撃に、リザードバイターはグッと膝を屈めた。

「解ったわっ！！！」

抜け出る隙を見たエルキュール。

マガルは入れ替えにと、リザードバイターに斬り掛かるべく走った。
別に顔を移すせば。
「硬ってえっ！！！　イクシオっ、コイツは大変だっ！！！」
ボンドスが、斧をリザードバイターに当てると。　まるで鉄を殴っている様な感触がして、ビクともしてない素振りのモンスターに慌てた。
鞭を振るうイクシオも、撓う鞭すら斬られそうで。
「ボンドスっ、こりゃ～キーラの助け借りようっ！！！」
二人が、大きく間合いを取った時。
いきなり、リザードバイターの足元に水が湧き出した。
ボンドスが、驚いて。
「床が割れたかっ？！」
イクシオは、此処は空中だと思い。
「ン訳有るかっ！！」
急激に溢れ出た水は渦を巻いてリザードバイターの頭を超えた所まで渦潮の様に伸びた。　カタカタと体の骨を軋ませて、リザードバイターは身動きが取れなく成る。

唖然としてしまった二人に、

「オジサン二人っ！！！　ユリアが魔法で食い止めるから後ろにっ」

ハッと振り返れば、近くに闇の精霊シェイドが飛んでいる。　その後ろには、杖を構えて目を閉じて集中しているユリアの姿が。

「おおっ、助かった」

云うボンドスに。　シェイドは武器を指差して。

「でっかい僧侶さんが魔法を掛けてくれるってっ！！！　ユリアが足止めしている間に、早くっ！！」

イクシオは、ユリアを見た。　集中しているが顔は強張り。　微かに杖を構えた腕は震えている。

（モンスターの力が強すぎるのか・・。　必死に魔法を持続させて居るのが精一杯ってトコか）

イクシオは、ユリアを弱視していない。　戦って解る。　この緑のスケルトンは、強い。　その動きを封じれるだけ、ユリアが凄いと思えた。

「ボンドスっ、行けっ！！！　鞭に魔法は効果が薄いっ！！！　俺も足止めに加わるからっ」

「おうっ、直ぐに戻るっ！！」

イクシオは、渦巻きの外に出ているリザードバイターの剣を持つ手

に鞭を飛ばした。　ユリアが魔法を途切れさせても、少しでも時間を稼ぐ為に自由を封じ様と思ったからだった。

さて、４方の戦いの中でも、一番派手に動いているのはセイルだ。

「・・・」

右手に剣を下げたままに、一気に黒い異様なスケルトンに走り込む。
　リーザードバイター同様に、両手に剣を持つこの頭二つ半以上も大きな背丈のゴーレムは、剣の腕もかなりの兵（つわもの）だった。

走り込んだセイルに、モンスターは右の剣を素早く振り込む。　セイルは、半身の側転でモンスターの右側に逃げる。　しかし、かわされた右手の剣の刃を返し、横に振り引く形で薙ぎ付けて来るモンスター。　セイルは、屈んで剣を避けて、一気にモンスターの顔を斬り落とそうと飛び上がって剣を下から振り上げる。　だが、首の骨を後ろに異常に反らせてモンスターはセイルの攻撃をかわし、左の剣をセイルに目掛けて振り上げた。

「うわっ」

驚いたセイルは、空中で一回転して浮力を生かしてなんとか剣をかわす。　モンスターの振り上げた左の黒い剣先の平に足場求めて、大きく後ろに跳ねた。

リザードバイターを優勢に押してその姿を見るクラークは、

（なんという身体能力だ。　丸で、“剣神皇”の卵）

セイルの剣術は、クラークが見るに荒削りだ。　しかし、斬り込む

角度や、その剣筋は天才的である。　このまま行けば、祖父を超えるかもしれないと思わせた。

（ふふふ・・・嬉しいなあ・・・。　これぞ生きている甲斐が有ると云うものよっ。　何処まで行けるか、共に行って見せるっ！！！）

天才的な逸材に出会えた事でクラークの心が勇躍した。　闘争心が、冷静ながらにして体中に漲る。

「うおおおおおおおーーーーっ！！！！」

クラークの怒涛咆哮を絡めた突撃から繰り出される槍で、リザードバイターを激しく突き立て肋骨や鎖骨を突き壊す。　流石に魔法で構成された骨組みの体のモンスターは、数本の骨を折られたぐらいでも躊躇は無いが。　明らかな動きの鈍りは見えた。

リザードバイターの右、左からの斬り払いを槍で受け切ったクラークは、左手のスピアーで大きく薙ぎ付ける。　モンスターの両手ごとスピアーは打ち付けて、縁の手摺りにリザードバイターの両手をスピアーで押し込めた。

「フンっ！！！」

互いに近距離の肉薄した中で、モンスターの頭蓋骨に脇に側めた槍を下段から突き込んだクラーク。　リザードバイターも首を捩ってなんとか攻撃をかわしたのだったが。　クラークは其処から槍をモンスターの肩に押し付け、スピアーを器用に下から掬う様に押し込んで行き。

「そりゃあああっ！！！」

なんと、リザードバイターを槍とスピアーで挟んで勢い良く大きく持ち上げて、気合の力任せに石の間に叩き付けた。“グシャンっ！！！”と凄い音がして、頭から石の床に叩き付けられたリザードバイターは、火花を散らして石の間に転がり滑る。

全体で見れば互角の戦いが続く。　未だ見えぬ子供達は無事なのか、この地下に潜むモンスターとはなんなのか。　その不安は、戦うセイル達の心に深く垂れ込めていた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次号、予告。

戦うセイル達の目の前に、驚異的なゴーレムモンスターが現れる。
悪魔ギャリスパの召喚した魔物はこれで全てだが。刻々と迫る夕暮れ。“ノーライフロード”と言われたモンスターは、復活してしてしまうのか。

次話、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

今、モバゲーの中で本編のアップを始め、その手直し等で更新が遅れ気味なので申し訳有りません＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

≪四方決着≫

「うぐぅ・・・・・・」

必死で堪えるユリアが、気張る声を漏らす。　ユリアの足元には、息も絶え絶えになって“まな板の上の鯉”状態に、口をパクパクさせているサハギニーいる。

「サハギニーっ、しっかりしろっ！！！」

リザードバイターを足止めしていた水の渦の回転が弱まり出したのを見兼ねて、シェイドがサハギニーに応援を送った。

「わ・・わかっとる・・・がな・・」

フラフラのサハギニー。　理由は、魔法を維持するユリアの集中力が、もう限界に来ている証でもある。　モンスターを封じるなど、様々な魔法でも中級レベルの技術を要するのに。　ユリアは、全力

で無理を犯したのである。

イクシオは、リザードバイターの身体に鞭を巻こうとすると。　水流に巻き込まれて引っ張られる感触を覚える。

（このまま手を離したら・・・ヤツに巻きつくか？）

イクシオの脳裏に、フッと浮んだ作戦。　両腕の動きが取れなければ、リザードバイターに攻撃の手段は限りなく制限されるだろう。

イクシオは、躊躇い無く手を離して鞭を自由にさせた。

“ヒュルヒュルっ！！”

風を切る音がして、鞭はリザードバイターに巻き付き出した。

「おしっ」

イクシオは、堪えるユリアに。

「御嬢ちゃんっ！！！　もう少し踏ん張れっ！！！　鞭が絡み付けば、魔法を解いても構わないゾっ！！！」

その声に事態を察したシェイドが、絡まり出す鞭の様子を見てユリアに。

「ユリアっ！！！。　もうチョッとだよっ！！！」

「う・・・うん」

ギュッと目を瞑って集中するユリアが、微かに頷いた。

この時、セレイドの周りにエルキュールとボンドスがやって来た。
息の荒いセレイドを見て、二人は心配で。　エルキュールが、顔を覗きながら。

「大丈夫なの？」

「あ・・あああ。　それ・よりも・・武器を・・出してくれ」

ボンドスとエルキュールは、お互いに見合ってから武器を差し出した。　セレイドは、目を閉じて武器に両手を翳す。　セレイドの指には安物の様な鈍い光のリングが何個も填められている。　コレが、杖代わり魔法の発動体と成るのだ。

「戦の女神・アテネセリティウス様・・・聖なる力を我の仲間に与え給え・・。　闇を振り払う力を、この武器に宿し給え・・」

セレイドの両手が、ボワ～っと白く光り出す。

「・・・」

見ているボンドスとエルキュールの視界の中で、セレイドの手の光に自分達の武器が共鳴する様に光りだしたのを見た。

「むん」

セレイドが、カッと目を見開いて力を込めると。　武器に宿り出した光が淡く光ったままに成ったではないか。

「よし、これで戦える」

ボンドスは、何時もの倍の時間を使ったセレイドが、かなりの追い込まれた精神状態で居ると理解した。

「セレイド、休め」

ボンドスは、そう言って近くの立てないエルザを見る。　武器を扱わない分、やはり肉体的な影響も受けやすいのか。　グッタリしている。

エルキュールも、あんなエルザは初めて見る。

「セレイド、エルザを頼むわ。　ボンドス、行きましょ」

早く戦いを終わらせて、子供達を捜して帰ろうとエルキュールは思った。　此処に居ては、セレイドやエルザはおかしくなってしまうと恐怖したのである。

四方の戦いの中で、逸早くゴーレムを倒したのはクラーク。　床に叩き付けてからのリザードバイターの動きは著しく鈍く。　クラークが激しく突き立てる槍を防ぎ切れずその守る腕を砕かれ。　防ぐ手段を失ったモンスターは、捨て身の突進でクラークを狙うが。　リーチの長い槍に頭部を砕かれて塵に変わった。

「よしっ！！」

クラークは、悪魔ギャリスパを倒してこれ以上のゴーレムの起動を阻止せんと目論んだが・・。

「あ・・・何処だっ？！！」

間近の奥に渡る石橋の上に居た筈のギャリスパが見えない。　クラークは、戦う皆の戦況も含めてこの場を見回した。

その時、セイルの声が。

「上デスっ！！！　飛んでますっ！！！」

「はっ？！」

上を見上げれば、醜悪な身体をプルプルと震わせながらギャリスパは宙に浮いていた。　槍でも届きそうも無い高さ。

「うけけけけ、もうチョットだぜ・・。　もうチョットで力が溜まる・・。　それまで・・ま・待ってろや・・。　ザコでも相手にしてよおおっ」

ギャリスパの腐った顔が、力みに歪んで居る。　先程までは、あんなに簡単にモンスターを召喚していたのに。　今度は、其処までエネルギーを使う相手なのかとクラークは心配に成った。

（残る3体のゴーレムとは・・何なのだ？）

しかし、この状況はそんなに悠長でもない。　クラークは、ハッと周りを見回して。

（ユリア殿にっ）

魔法でギャリスパを倒して貰おうとクラークは、急いでユリアを見

ると・・。

「ぬっ」

床にヘタり込んでいる。　良く見れば、近場に鞭を身体に絡めて上半身の自由が利かずしてイクシオに襲い掛かっているリザードバイターが居た。

（足止めに魔力を使われたか・・・。　とにかくっ）

クラークは、素早い動きの突撃態勢から、鞭の絡まったリザードバイターへの攻撃を開始した。　潰せる所から早々と潰し。　戦力を集約する事を考えたのである。　この場で、子供達を助けに行っている間に、新たなゴーレムは生まれる。　戦力を、今に削ぐのは宜しくないとクラークは判断したのである。

そして、何故向こうのリザードバイターに狙いを定めたか。　それには、何故なら・・・。

「フっ、ハッ、セイッ！！！！」

セイルが、黒いゴーレムの右腕を魔法の宿した剣で斬り落として、その時の炸裂する衝撃波で黒いゴーレムがヨロける。　セイルの攻撃は、更に加速して。　左手一つに成った黒いゴーレムを圧倒し出したからだ。　クラークが見ても、此処に助太刀するのは返って邪魔に成ると判断したのである。　何よりも、怪我人を少なくする事を考えた結果の行動だ。　流石に、クラークは長く冒険者をやっているだけ在って、こうゆう判断は素早い。

一気に、残る3方も決着が着き出した。

クラークの加勢で、同じく加勢に来たボンドスとクラークの挟み撃ちでリザードバイターは頭部を砕かれて。　その頭部の中に詰まった暗黒のエネルギーを消滅させながら塵に消える。

一方、魔想魔術の効力が有効では無いのか。　炸裂する衝撃波の威力にのみ動きを乱していたリザードバイターと戦うキーラとマガルの元にも、神聖の力を宿したエルキュールが加勢する事で形成は一気に傾く。

「魔想の力よ・・幻惑の紐と成れっ」

キーラは、エルキュールの到着でサポートに切り替えた。　余り幻惑呪術の適応が無いキーラなのに、相手に絡みつく魔法の紐を召喚する中級魔法に挑戦。　緑色の光る紐をリザードバイターに飛ばし。

立て続けに避けられても斬り込むマガルやエルキュールの間を縫って、魔法の紐でリザードバイターの片腕と片足を絡め取って背中で結んでしまう。　身動き取れないリザードバイターは、エルキュールの剣によって頭を砕かれ、同時に斬り込んだマガルに腰部を切断されて塵に消える。

2体のリザードバイターが消滅するのが略同時。

手の空いた皆が、セイルを見る時。

黒いゴーレムが左の剣で斬り込んだ一振りを素早く避けて、セイルが相手の懐に飛び込んだ。　半身で、剣を肩に側めて下向きに構えたセイルの紫のオーラを湛える目と、青白く光る剣が共鳴する様に光った一瞬。

「おおおっ」

驚くボンドス。

セイルは、瞬く動きで跳躍しながら回転し、黒いゴーレムの骨盤のド真ん中から、上に背骨のラインに沿ってガイコツの頭部までを切断する青白い光のラインを引いた。　クラークの居た、向こう側に渡る石橋近くに着地するセイル。　同時に、斬った部分で魔法が炸裂して、真っ二つに分かれた黒いゴーレムは飛び別れながら塵に消えた。

「凄い・・・一人で・・・倒した・・」

エルキュールは、リザードバイターに最後以外はかわされっ放しだっただけに、セイルの力量に驚くばかり。

マガルも、内心に。

（強い・・・あの若さで・・・。　一体、何者なのだろうか・・・）

恐らく、この場で見た知らぬ一同も、セイルの祖父の名前を聞けばすんなり強さに納得するやも知れない。

「セイル～、ナイス～」

へたり込んだユリアが、鈍い笑みでセイルに親指を立てて見せる。

「イエ～イ」

セイルも笑う。

其処に。

「ぐはははははは、お前等強いなっ！！！」

ギャリスパの声が、この場に木霊したのである。

≪暗黒に魅入られた森≫

「うひゃ～、マッジ～？！！」

呆れたポリアの声。　霧の中で、奥の門の間近に現れたモンスターの中に、青い肌をした“レヴナント”と呼ばれるゾンビのモンスターが居たり。　“死人漁り”の異名を持つオオトカゲのモンスターで、“デットイーパー”と云うのまで現れた。

暮れ始めた暗がりの中で。　マルヴェリータは、奥の門の向こうから更に強い暗黒の波動を感じ。

「ポリアっ、門の奥はもっと暗黒の気配が強いわっ。　このモンスターは、その影響よっ！！！」

レヴナントを一撃で斬り倒したゲイラーは、カミーラ達の周りにモンスターの有無を確かめながら。

「なんか厄介なモンスター(ヤロウ)が居るんじゃないかっ?!!　一筋縄で終わんないぜっ」

ポリアは、長引く戦いをしたくは無かった。

「仕方無い」

呟いては、白銀製の美しい刀身の剣を構えて、瞑目するポリア。

ヘルダー・ゲイラー・イルガは、それを見て。

（遣う）

と、思い。　ポリアの前以上に進まなくした。

ポリアは、心を済ませて一心に風を感じた。　脳裏に、何処か遠くで吹く様な風の音がする。　だんだんと風の音は強くなり、何時しか風の音はポリアの全身を包むような感じで聴こえていた・・・。

（遣うわよ・・・ブルーレイドーナ様）

（フッ、オモウゾンブンニツカウガヨイ）

心の中に、サファイヤ色に光る神竜が見える。

カァッっとポリアの目が蒼く光って見開かれた瞬間、ポリアの剣も

蒼き波動に包まれて風を纏う。

「なっ、なんだっ?!!」

驚いたカミーラ達。

「地に還れっ!!!　亡者共っ!!!!」

ポリアが大きく剣を上段に構え、声と共に斜めに振り下ろす。　すると、一陣の豪風が巨木の幹周りにすらに匹敵する大きさで現れ、疾風の渦を伴ってモンスターの群れの中に駆け抜けて行く。

見ているゲイラーも、片目を吊り上げて豪快だとばかりにシスティアナと見合う。

駆け抜ける風は、一瞬だけ霧や雪すらも巻き込んで、触れるゾンビやスケルトンを蹴散らして灰にする。　モゾモゾと地面を這いずるヴーズをバラバラにして、大きさ5メートル以上のデットイーターをも飲み込んだ。　最後に、ゾンビやスケルトンの束にぶつかり、その全てを蹴散らすと同時に風は消えて行く。

「・・・・」

霧が、雪の降る中でカミーラ達の視界をまた塞いで行く。　風の通った道の芝は禿げ上がり、モンスターの動きは見えなくなっていた。

「か・・・“風のポリア”・・・」

呟く様に、カミーラはポリアの異名を思い出す。

ポリアは、直ぐに。

「システィ、マルタ、モンスターの数は？」

マルヴェリータが、不敵に笑って。

「８割は消えたわ。　流石ね」

システィアナは、ポリアの左を指差して。

「むこ～に、ちょびっとで～す」

ポリアは、ゲイラーやヘルダーを見ずして。

「イルガっ、皆の安全をっ。　残りのモンスターを掃討するわっ。
行くわよっ」

と、霧に走って消えて行く。

ゲイラーもマルヴェリータもヘルダーも先刻承知とばかりにポリアに続いて消えた。

システィアナは、周りをキョロキョロと見ているだけ。

イルガは、霧の中を注視している。

カミーラは、その圧倒的な光景に、自分達のこの１０年が如何に無駄だったのかと思い知らされた気がする。

「凄いな・・・世界は」

呟くカミーラの声には、何処か寂しさも混じる。

「フッ」

薄く笑ったイルガ。

「ポリちゃんよりも～、も～っと凄い人いますよ～」

と、にこやか言うシスティアナ。

「な・・なんだと？」

ビックリした戦士ダッカは、ポリアの行った後を見て。

「あんな冒険者よりも、もっと強い者が居るのか・・」

イルガは、瞑目する。　一人、あの男以上に強い冒険者など居ないと確信出来た。

さて、程なくして。

モンスターを倒し終わった一同は、門の前に集まった。　マルヴェリータは、光の魔法を封じた小石程の水晶を取り出し。　暗くなり始めた中で、光を起こした。　３粒をカミーラと、ポリアと自分で持ち。　門の前を明るく照らした。

「デケエ～門だな～」

ゲイラーは、中々の門の構えに見上げて感心。

だが、門や辺りを見ているポリアは、不思議に。

「でも、おかしいわね。　私の小さい頃、この森には幽霊が出るって噂で人が寄り付かなかったのは事実だけど。　此処は、王国直轄の土地よ。　何で、こんなに遺体が・・・」

マルヴェリータが、自分の王国の事を思い出し。

「ポリア、此処は元は古い無縁墓地だったんじゃない？　ホラ、来るまでの森の木々に段々的な大きさのばらつき見えてたし。　前に、ジョイス様がホーチト王国の王城の裏手に広がる森の話してくれたわ」

「無縁の・・・墓地ね。　そ～なると・・・この門の先は何だろう？」

マルヴェリータは、鍵が壊されているのを見て。

「入るしか無いわね」

ポリアは、夥しいモンスターの出現で、子供達やイクシオ達の事が心配に成る。

「もう直ぐ、夜だわ。　とにかく、行ける所まで行くわよ」

と、中に入った。

セイル達、イクシオ達の通った迷いの迷路に足を踏み入れたのである。

入って直ぐにマルヴェリータが、幻惑魔術で“あやかしの迷宮”と云う魔法が掛けられている事を知り。　この魔法の特徴を逆手に取る事をポリアに教える。　迷路は、確かに入り組んでは居るが。その所々の分岐点では、本当の道にだけはミラージュの効果が無いので魔法の感じる感覚が違うのだとか。　だから、自分がそれを教えると云う。

感心するばかりのカミーラは、マルヴェリータを見て。

「流石はあの有名なジョイス様の恋人だけ在るな」

これは、周知の事実だった。　と・・・思ったが。

マルヴェリータは、薄く笑うと。

「ジョイス様の恋人じゃないわ」

「えっ？！」

カミーラは、近々ジョイスが結婚すると聞いている。　このマルヴェリータがそうだと思っていたのに・・・違うとは。

マルヴェリータは、カミーラを見て。

「私は、ジョイス様の弟子みたいなものよ。　本当の関係は・・・・・そ～ね。　師弟の親友って所かしら・・」

と、悪戯っぽく笑って見せる。

しかし、それを見るポリア達チームのメンバーの反応は明るい物は無い。

ポリアは、樅の木が左右に並木を作る回廊を見据えて。

「なんか、霧が薄まったわね。　行きましょうか」

と、先頭に成って雪の降り積もり出した通り歩き始めた。

「・・・」

何がどうなっているのか、カミーラには雰囲気が変わったポリア達が少し淋しく見える。　何故か、マルヴェリータの手を、システィアナが握って手を繋いでいるのが解らなかった。

≪危険な危険なゴーレム≫

「ぎゃはははは、ちっと遅かったなっ！！！！」

やっと皆がゴーレム達を倒した時、またもやギャリスパは手に溜めたエネルギーを残る3体の石像に飛ばした。

「あっ、またっ！！！」

ユリアが、座ったままの態勢から、その飛ばされる光景を見て指差す。

一つの石像の近くに居たセイルが、飛んだエネルギーより先に石像に飛び寄って剣を閃かせた。

空間に、剣が壊れる甲高い音が響く。　石像は斜めに真っ二つに斬れた。　が、セイルの持っていた剣も同時に壊れた。　斬れた石像の半分が先に縁の外に崩れて落ち。　悲鳴を上げて壊れた剣も、柄の根元辺りから折れて宙に飛び。　落ちた石像の後を追って消えた。

「あ〝っ！！！　チキショ〜っ！！！」

ギャリスパは、予想外の行動で石像が一つ消えて。　黒い暗黒のエネルギーが、本来なら有った石像の頭に部分を素通りし。　奥の緑色の光が走る壁に当ったのを見て悔しがる。

だが、残り二つは命中していた。　俄に石像が色を佩びて、仄暗い藍色のスケルトンと、黒いスケルトンが縁で立ち上がって、空中の間に下りて来た。

「クソっ、後2体っ！！！」

エルキュールが、2体のスケルトンを見て剣を構えた。

が。

「皆さ～～んっ、下がってっ！！！　黒い藍のゴーレムは凄まじく強いヤツですっ！！！！」

セイルが、縁の傍からユリアに駆け寄りながら大声を出す。

ボンドスは、この期に及んで“下がれ”と云われても困る。

「おいおい、そんなこと云ったってよっ！！！」

セイルは、ユリアを立たせると。

「石橋まで下がってっ、そうすればゴーレムは手出ししませんっ！！！　このままでは、僧侶のお二人も被害に遭われますよっ！！！」

と、ユリアの肩を担いで下がり出したではないか。

イクシオが、困惑して。

「ンなこと云ったってよっ！！！」

だが、クラークは、セイルがこの場所の意味を知っている様な気がして。

「とにかく、下がろうっ！！　あの黒い藍のゴーレムは、只ならぬ気配に満ち溢れておるわっ！！！」

と、槍とスピアーを持つ両手を広げて、皆の前に立って後退し始める。

マガルも、セイルの様子とクラークの様子からして、従った方が良

いと思う。　やはり、あの初めて見る黒い藍色のスケルトンは、何か異様に畏怖を感じる相手だった。

カシャンカシャンと音を立てて、2体のスケルトンは辺りを見回し。
セイルやクラーク達を見つけると、ゆっくりと向きを変えて向かって来る。

キーラは、エルザに手を貸し。　セレイドにはボンドスが手を貸した。

そして、館の地上部に向かう。　自分達の渡って来た石橋に全員が戻って出ると。　スケルトンの2体はピタリと動きを止めたのであった。

さて、ギャリスパが高笑いして、フヨフヨと向こう側の石橋の上で罵詈雑言を並べだす。

「お～い、ど～した～。　人間のゴミ共っ！！！　怖くて逃げるかっ！！！　ぎゃはははは～っ！！」

その時、クラークが。

「本当に止まりおった・・・。　セイル殿、此処は一体？」

セイルは、ユリアを気遣いながら。

「昔の“サマナーズコロセウス”だと思います」

と、最後の死んだ冒険者から貰った剣を抜いて刀身を確かめる。

イクシオが、ハッとして。

「なんだとっ?!!　じゃ～、此処が、昔に魔法遣い同士が賭け事や決闘をする時に、自分の駒（ボーン）としてゴーレムを戦わせていたってゆう闘技場か?」

セイルは、流石は博識だとイクシオに。

「知ってましたか。　学者さんだけありますね」

と、鈍く笑った。

エルキュールは、それよりも戦わない事に不満が有る。　セイルに、キツイ目を向けて。

「それよりっ、これからどうするんだっ?!!　あの悪魔の思い通りにさせんのかっ?!!」

すると、弱ったエルザが。

「エルキュール・・・少しは冷静に・・なんなさい。　アンタ・・この中でも・・一番弱いんだからね」

と、エルキュールを窘めた。

「・・・」

黙るエルキュール。

セイルは、皆を見て。　2体のスケルトンの姿をしたゴーレムを指

差し。

「黒いゴーレムは、ヘルバウンドと云う黒い魔界に住まう火を吐く犬のモンスターの牙から出来た“ヘルズファイター”だと。　問題は、あの黒い藍のスケルトン・・」

怖い存在だとマガルは、真剣に。

「解るか？」

セイルは、ユリアを見ると。

「ユリアちゃん。　あのゴーレムを見て、感じる精霊力は？」

力抜けしてへ垂れたユリアは、セイルに言われて。

「へェ？」

と、黒く藍色をしたスケルトンを見る。

「う〜。　魔の力・・・土・火・・闇かな〜」

頷くセイル。

「多分・・・アレはヘルバウンドの上のモンスターで、エクリサー（万能妙薬）を作る為に必要な素材の牙から出来たゴーレム。　“ケルベロスストライカー”。　ゴーレムの中でも、二番目・三番目に強い最強の剣士ゴーレムですよ・・・」

全員の目が、セイルとそのゴーレムとを行ったり来たり・・・。

ボンドスは、真っ黒い方を見て。

「んじゃ～、その下が、あっちか？」

セイルは、ボンドスを見て首を左右に。

「ヘルズファイターは、中級ゴーレムです。　ケルベロスストライカーは、上級ですよ」

イクシオは、こういったゴーレムに冒険者チームが全滅させられた話も多数在るのを思い出し。

「おいおい、勝てるか？」

セイルの目は、僧侶2人とユリアに向いて。

「神聖魔法と、光の精霊を召喚出来るなら有る程度は・・。　でも、それ以外だと、最も強いカードを選んで当ててどうか・・。　エルキュールさんや、イクシオさんでは殺されます。　僕も、一人では到底無理です」

と、その問題のスケルトンを真っ直ぐに見るセイル。

エルキュールは、セイルに寄って。

「じゃ、ど～するのさ。　このままじゃ・・・地下のおっかないヤツも復活する・・・」

頷いてセイルは、セレイドに剣を差し出し。

「スミマセン。　僕の剣にも、神聖なる力を付加して頂けませんか」

息の少し荒いセレイドは、真剣な眼差しを返して。

「それは・・構わぬが・・」

セレイドが剣を受け取って。　セイルは、再度2体のゴーレムを見据えると。

「僕とクラークさんの2人で、ケルベロスストライカーに当って、足止めを。　残りの動ける皆さんは、ヘルズファイターに向かって下さい。　そして、倒せたなら、え～・・」

と、ボンドスを見る。

「ボンドスだ。　禿げのボンドス」

ボンドスは、頭を指差し。　冗談っぽくそう言った。

「はい。　ボンドスさんと、マガルさんは戦える様なら此方に加勢に来て下さい。　四人で、なんとか」

エルキュールは、プライドを滲ませる顔を険しくして。

「アタシは、足手纏いかい」

すると、セイルはエルキュールの肩を指差す。

「ん？」

エルキュールは、さっきのリザードバイターとの戦いで、掠り傷を負って服の切れた血の滲む部分を見る。

セイルは、傷を見て。

「傷は大した事有りませんが、リザードバイターの身体の棘にも、麻痺の毒が。　動き回る内に、回ってきて少し朦朧としますよ。ヘルズファイターに短期で、決着を付けに向かって下さい」

「・・・」

黙るエルキュールには、その言われた事が理解でき始めて居た。もうジンジンと少し腕の感覚が鈍っているのだ。

「エルキュール、危ないなら止めろ」

イクシオが、リーダーとして言う。

だが、エルキュールの性格からして、引き下がる性質(たち)でも無い。

「大丈夫さっ。　アイツを倒すぐらいは、絶対に動けるっ！！」

気丈に言い放つエルキュール。

キーラは、セイルに。

「私も、加勢はいけないのかい？」

「ヘルズファイターは、炎と闇の性質が強いので、幾分魔想魔術も

通用しますが。　ケルベロスストライカーは、“魔”の力が突出した魔法に強い耐性を持っているとか。　本で読みましたが、魔想魔術は無効化されます。　ですから、ヘルズファイターを倒した後は、悪魔の動向を窺って下さい。　もし、切り抜けられるなら子供達だけでも救い出さないと」

クラークは、セイルの目論見を読んだ。

セイルは、隙有らば悪魔ギャリスパを倒す気なのだ。　ケルベロスストライカーを倒せなくても。　悪魔ギャリスパは倒せる可能性が在る。　子供達を取り返せば、地下の恐るべき存在の復活も防げる。ギャリスパは、ゴーレムを召喚するのに使った魔力の消耗が激しいのだろうか。　宙に飛ばず、向こうの石橋の上で罵声を飛ばしている。

（なるほど、捨て身じゃな。　だが、一番効率の良い考え方か・・。　ワシとセイル殿で足止めが出来るなら。　ボンドス殿やマガル殿を子供達の救援に向かわせられるやもしれん）

イクシオも、セイルに。

「俺も、子供の救出に向かっていいんだよな？」

「はい、そう願っています。　多分、誰かが死ねば、全員の死に繋がります。　それくらいに、力の均衡は微妙だと思います」

セイルのこの言葉に合わせる様に、セレイドは魔法を掛けた剣をセイルに差し出した。

「さ・・遣ってくれい・・」

セイルは、剣を受け取り。

「ありがと～ございます。　あ～あ、助け来ないかな～」

と、苦笑いでスケルトンに向く。

エルキュールは、顔を歪めて。

「一番強そうなのに何を言ってんだっ！！！」

セイルの逃げ腰発言に、薄く笑った冒険者達。　しかし、脱力したユリアは、へたり込んだ場からセイルを見上げては。

「セイル・・頑張ってね・・。　少し休んだら、手伝いに行く・・」

すると、微笑むセイルは、ユリアの頬に指先を付けて。

「風・水の魔法は、焼け石に水ぐらいにしか利かないよ。　闇や土や火は無効化されちゃうし・・・、さっきは無理したでしょ？　休んでて・・・」

と。　指を離して2体のゴーレムに向いた。

クラークがセイルの脇に来て。

「勝てると思うか？」

「思ってないと、戦えませ～ン。　・・・嘘でも」

「フッ」

クラークは、口元に微笑みを浮かべた。

セイルは、剣を右手に握って。

「ではっ、一かバチか。　行きますよ～っ」

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、予告。

雪の舞う中。　救出に急ぐポリア達。　そして、凄まじい剣の技量を備えたゴーレムと戦うセイル達。　完全な日没後には、あの地下の存在が・・・。　子供達を助ける事を第一に考えたエルキュールやイクシオ達は、向かえるのだろうか。

次話、数日後掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

本当なら、昨日に掲載予定でしたが。　色々と立て込んで今日になっちゃいました＾＾；　さて、活動報告にも掲載しましたが、近日中にモバゲーの中で番外編の掲載を致します＾＾。

モバゲー内では、２０話までの掲載後は、番外編の掲載をして。数日後に、このセイル編の掲載をしようと考えてます＾＾

一番早い掲載のこの場では、番外編は編集とオマケ＋で、年末年始辺りに掲載出来ればしようかなとおもっております＾＾

では、ご愛読ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪強き二人≫

仄暗く藍色のゴーレム、“ケルベロスストライカー”と対峙したセイルとクラーク。　2対4本の腕には、鈍く錆た剣が握られていた。
　骨の剣では無い。　金属の剣だ。　顔は暗い藍色の骸骨だが、頭には二本の太めな角が生えていて、オールバックの髪の様に後ろへと伸びている。　恐らく、頭部を守る為の物か。　空洞の瞳の中は、暗黒のエネルギーで満たされ。　眼球の様な赤い光が浮んでいる。
　骨の身体の高さは、クラークと余り変わらないが。　肋骨に絡まる様にして、黒く細いチェーンの様な物がこのモンスターの上半身をびっしり覆って。　見た目には、鎧を着ている様な印象を受けた。

「行くぞっ！！！」

「おうっ！！！」

対峙する2人の斜め脇では、掛け声を上げたマガルと。　それに応じたボンドスを中心に、ヘルズファイターとの戦いが既に始まり出した。　早くも、囲んだイクシオ・マガル・ボンドス・エルキュールの面々の中で、動きの鈍いエルキュールがヘルズファイターに標的にされかかって。　ボンドスやマガルが焦っている。

（強いな・・。　何処までも静かだ・・・）

背中に冷や汗を流すクラークは、戦う声が湧き上がる横を見れない。　目の前のゴーレムが、シッカリと此方を見ている。　何か、小石ほどの物音でもゴーレムと自分達の間に落ちたなら。　この緊張の幕が破られて戦いが始まるだろう。　2人並ぶセイルとクラークとゴーレムとの間には、他を寄せ付けぬ緊張が走っていた。

エルキュールに斬り掛かったヘルズファイター。　その攻撃を受け止めたエルキュールは、黒きゴーレムの剣捌きが早い事に驚きながら。　受け止めた剣を押されまいと必死に支えた。　背の高いヘルズファイターに対しては、セレイド以外では誰もが見上げる形で戦う事を求められる。　至近戦で戦うと成ると。　その上から振り下ろされる剣の重みは相当だ。

「こらあっ！！！」

ボンドスが、黒いヘルズファイターの頭を一撃せんと脇から斬り掛かるも。　ヘルズファイターはエルキュールに向けた剣でエルキュールをいなして突き飛ばし、ボンドス攻撃を左右の手の剣で受け返して斬り込んで来る。

マガルが加勢にとばかりに斬り込むが、剣で受け止められて弾き返

される。

「そらっ、そらっ、そらっ！！！」

イクシオが、鞭で骨の身体を打ち付けても、全くダメージを受けた様子は無く。　足に鞭を絡ませても、ヘルズファイターはイクシオなど物ともせずして逆に引き摺ろうとする始末。

「うおおっいっ」

イクシオは、倒れそうに成って鞭を緩めて解く。

「魔想の力よ、我が敵を緊縛する蔦となれ」

キーラが、皆の離れた隙を見つけて補助の魔法を遣って動きを止めようとした。　だが、ヘルズファイターに絡まった魔法の紐だが。　縛る様に動かせられない。　幻惑呪術の適正が薄いキーラでは、自由に紐を動かす為には、相手が弱ければ弱いほど抵抗も少なくすんなり縛れるのだろうが。　このヘルズファイターは、そんな一筋縄で行く相手でもなかった。

「このっ！！！」

エルキュールが右から。

「おらあっ！！！」

ボンドスが左から。

「うぬっ！！！」

マガルが正面から。

三方から斬り込んだ。

だが、ヘルズファイターは、左右の剣でエルキュールとボンドスを受け止めて。　正面から来るマガルには蹴りを繰り出して動きを制してしまう。　マガルの動きが止まると、受け止めた左右の２人の武器を押し返す。　そして、狂人的に勝ち名乗りの様な仕草を見せて身体を背伸びさせて、キーラの絡めた魔法の紐すらも打ち消した。

「ああっ」

魔法に抵抗されて、維持していたキーラの集中が切れてしまい。全身から脱力する感覚を覚えてキーラはヨロめいた。

「キーラッ！！！！　大丈夫っ？！！！」

剣を弾き返されて後退したエルキュールが、パッと振り返ってキーラを見る。

「チッ！！　なんてヤツだっ！！！　魔法を抵抗して掻き消しやがったゼッ」

こんなに強く魔法を掻き消すのを始めて見たイクシオは、魔法生物が魔法に対して高い抵抗能力を持っているのだと初めて認識した。

ボンドスは。　途中までは互角に戦っていたとは云え、こんなに強いゴーレムを一人で倒したセイルに脱帽したくなる。

「良くあの若いのは一人で戦えたモンだぜッ！！！　こっちは5人がかりだってのによっ！！！」

息の上がるエルキュールは、痛む肩を庇う様に見てから。

「やっぱり、クラークさんがリーダーと認めるだけ有るわ・・。今更ながら、偉そうにした自分がなっさけない・・」

離れた場所にて、なんとか立てる様に成ったエルザが。　真っ青の顔で、繭を顰めて。

「遅い・・っての・・・・」

だが、見ているユリアは、杖を本当に杖代わりにして。

「でも・・セイル達は・動かないね」

エルザも、対峙しているだけと思うから。

「ほ・・ホント・・ね」

しかし、見ているセレイドは、やはり戦士として見れるのだろう。

「違う。　もう、戦っているぞ」

ユリアもエルザも、顔に緊張の汗を流すセレイドを見る。

セレイドは、セイル・クラークとケルベロスストライカーを見て。

「斬りあう間合いの手前で・・両者が・・実力を秘めて睨み合って

いるのだ・・。　あああ・・・あの2人も強いが・・。　ケルベロスストライカーと云うモンスターもなんと強い・・・。　丸で、剣の匠の様な気配がする。　モンスターなのに・・信じられない」

ユリアとエルザは、派手に動かない二人とゴーレムが、静かに戦っていると聞いて驚きだ。

（セイル・・・）

強引に冒険に連れ出した自分だが。　まさか、セイルがこんなにも強いとは知らなかった。

そして、セイルとクラークが各々武器を構えた。

セレイドは、目を細めて。

「動く・・・」

エルザとユリアは、息を飲んで2人を見守った。

いきなりケルベロスストライカーが2人に斬り掛かった。　一気に肉薄し、左右の2本づつの剣を同時に振り込んだ。

「ぬぅっ！！！」

セイルは、左側の斬り込みの下を受け払ってから、上の剣をギリギリで受け止める。　背丈が無い分だけ二振りの剣同時を受け止められなかったのだろう。

「うぐぅ」

クラークは、右の斬り込まれた剣二振りを槍で下段を、スピアーで上段を受け止めた。　凄い剣筋の鋭さを見せるケルベロスストライカー。

セイルは、打ち払った左下段の剣がまた動いたのを見て、受け止めていた剣を受け流しに噛み合いを外し。　下段の薙ぎ払いを打ち返す。　ケルベロスストライカーは、右の両腕で、グイグイ力を込めてクラークと押し合いをしながら、左の腕ではセイルを狙う。

セイルが、もしその身を引いたなら、４本の腕の剣がクラークを襲うだろう。　この戦いは、コンビネーションも要求される様だ。

クラークとの押し合いに見切りを付けたケルベロスストライカー（以下ストライカーと省略）は、クラークの飛び退きに合わせて右脇に退いたセイルを確認。

“来い”

とばかりに、歯を噛み鳴らして剣を構えた。

「・・・」

「・・・」

お互いに見合ったセイルとクラーク。　先にセイルが頷くと、クラークは大きく頷き返した。

先に動いたのはセイル。　ストライカーに俊足で走り込み、一気に頭を斬ろうと掬いに斬り上げるも。　剣を受け止められて、残る３

本の剣で斬り返されて、屈み・掻い潜って横に逃げる。　其処に、クラークが突進して、隙を突こうと顔を狙うのだが・・。　素早い連続の突きも受け返される。

（今だっ）

セイルは、脇からストライカーに高々と飛び込んで、頭蓋骨を砕こうと剣を振り下ろす。　しかし、これもストライカーの右上手の剣に受け止められた。

「うおっ」

クラークが、ストライカーの下からのカチ上げを喰らって槍ごと後退した時。　ストライカーはセイルを殺すべく回し斬りに転じて背後に右下腕の剣と左上腕の剣を水平に振り回す。

「セイル殿っ！！！」

クラークが声を上げる時、同時にセイルの。

「うりゃっ！！！！！」

と、云う掛け声が。　見れば、空中で身を丸めたセイルは、左上腕の剣をかわし。　次に迫り来る右下腕の剣の斬り付けの自身の剣を防ぎに当てながら、その剣の刀身を足場に後方へと逃れる。

「す・・・すご・・・」

驚きの声を出すシェイド。　アヘアへと床にヘバったサハギニーも、

「や・・やるねえ～・・」

セイルは、床に背中から着地して2回転。　手も付かずして立ち上がる。

「・・・・」

セイルの目と、ストライカーの目がガッチリ噛み合った。

≪時間との戦い≫

外は、もう夕暮れだった。　子供達の帰りを必死で祈る母親達が、寺院に集まっていたり。

斡旋所は、この日はもう閉鎖されて。　中では、主と父親達が会話も無い暗がりの裏部屋で冷めた紅茶をテーブルに残している。

封鎖区画の奥の門を潜ったポリア達は、モンスターとの戦いを逃れて、それぞれのチームの生き残った者達の寄せ集めに出会う。　瀕死の者が数人居て、手当てに負われてしまった。

その関係者達の中で、事態に直面し事実を知るセイル達は、何時復活するとも解らない“ノーライフロード”と呼ばれた怪物に怯えつ

つ戦いを繰り広げていた。

ヘルズファイターと戦う5人は、連戦の疲れが出始めて大苦戦している。　もう、単騎で十数合斬り合ったマガルは肩で息をし。　死に物狂いの斬り込みで、ヘルズファイターの肋骨を5・6本斬ったエルキュールは、剣で突き飛ばされた上に広間の縁に背中を打ち付けて気絶してしまった。　セレイドが、エルザの元までエルキュールを引っ張って行く。

「どあああっ!!」

エルキュールを庇って近付いていたイクシオがもんどりうった。
イクシオとヘルズファイターの間に透かさず入ったボンドスは、額・頬・腕に薄い切傷を見せて血を流している。

「大丈夫かっ?!!　リーダーっ?!!」

マガルと同時に斬り込んだボンドスが、声だけ飛ばす。

イクシオは、身体半身だけ持ち上げて。

「ああ・・・でも・・鞭がもう使えない」

幾度とファイターの動きを抑止するのに絡ませた鞭が、随分と短くなるまで斬られてしまった。

この時、渾身の斬り返しで。

「そりゃあああっ!!!」

ヘルズファイターの左手首を斬り落としたマガル。

ボンドスは、両手の斧で受け止めるヘルズファイターの右腕の剣を全力で押し返し。

「上等だっ！！！　後は、俺等で倒すっ！！！！！　うおおおおおおーーーーっ！！！！！」

勝機を見出したとばかりに、黒いゴーレムであるヘルズファイターに襲い掛かった。

だが。

キーラは、ハッと何かに気付いてイクシオに駆け寄った。

「イクシオさんっ、あ・・悪魔が居ませんっ」

「なにぃ～っ」

キーラと2人で、奥の石橋や空中を見回すのだが・・・。　何処にもギャリスパが見当たらない。

其処に、精霊達の加護を受けてなんとか動ける様になったユリアが来る。

「ねえっ、悪魔が今・・・奥に消えたよっ」

キーラとイクシオは、互いに見合って奥の石橋に向かって急ぎ始める。

「セイルっ！！！　ギャリスパが奥に消えたぜっ！！！」

イクシオは、走り出しながらセイルに言った。

その時、セイルが逆に。

「危ないっ、イクシオさんっ！！！！」

イクシオは、ハッとした。　視界の中で、ストライカーが跳躍し。

自分の行く手を塞ぐ様に立ちはだかったのだから。

「うおあああああっ」

立ち止まるイクシオに目掛けて、ストライカーが剣を振り向ける。

「うがあああっ！！！！！」

右肩をザックリと斬られたイクシオ。

「あっ！！！！」

見ているセレイドやエルザ達は勿論、ユリアやキーラも声を出した。

其処に、セイルとクラークが突撃してきて、クラークがストライカーの左側から槍とスピアーで串刺し突きと打ち払いを見舞ってイクシオへの追撃を阻み。　セイルが高く跳躍して隙の見えた右上腕の腕に斬り込んだ。

「イクシオさんっ！！！」

キーラが、後から来たユリアと一緒に出血夥しいイクシオを引っ張り離す。

セレイドは、遂にヘルズファイターの頭蓋骨をボンドスが打ち壊したのを見て。　斬られたイクシオを救うべく広間にヨロめきながらも走り出した。

「イクシオさんっ、気をしっかりっ！！！」

キーラが、引き摺りながら声を掛ける。

「うあ・・・あああ・・・」

イクシオは、意識は有る。　右肩を抑えながら、テンガロンハットを落としたオールバックの髪を乱して頷き返した。

「イクシオっ、大丈夫かッ！！！」

野太いセレイドの声がイクシオに届いた。

「終りだあああああああっ！！！！！！！！！！」

マガルが、半壊して尚も動こうとするヘルズファイターの顔半分を、大きく振り被った剣を叩き降ろしながら吼えた。　唸りを聞かせた剣が、半壊の頭蓋骨を粉々に砕く。　ボンドスは、終わったと思ってその場に崩れた。

セイルは、この時にストライカーの右上腕の剣を魔法を込めて斬り落としていた。　小規模の炸裂が巻き起こり、斬られた剣を持つ腕は炸裂の衝撃で広間の縁を越えて消える。

クラークも、左腕の剣撃を打ちかわして、セイルの後退に合わせて間合いを作った。

ストライカーは、一度斬られた右腕を見て。　それから2人を見て構え直す。

セイルが、先に。

「悪魔が・・居なくなりましたね」

クラークも、短く。

「うむ」

2人は、身体の彼方此方に衣服を切り裂かれて血を滲ませていた。
極度の緊張の中で、紙一重の攻防を繰り広げている。　研ぎ澄まされた感性は、余計な物事に気を向ける事は無い。

クラークが、

「下を受け止める」

と、言えば。

セイルも、

「了解、狙います」

と、返すだけ。

先に、セイルはストライカーに走り込む。　ストライカーと、一騎で打ち合い始めた。　右下腕の斬り払いを受け流し、左上腕の斬り込みを半身でかわす。　左下腕の斬り上げを受け止めた時、背後からクラークの咆哮が湧き上がる。

ストライカーと見詰め合ったセイルの顔に、不敵な笑みが零れた。
　セイルは、後ろに高く跳躍した。
　ストライカーの視界に、突如として突撃して来るクラークが見えた。

「うおおおおーーーーっ！！！！」

突撃したクラークの槍を、ストライカーは左下腕で右に受け流す形で受け止める。　擦れる古びた剣と槍の勢いで、ストライカーはズズッと後ろに引き摺られた。

更に、クラークがスピアーでストライカーの顔を目掛けて串刺しに。
　ストライカーは、右下腕で左へ逸らす様にその攻撃を受け止めて、両者の武器が折り重なる様にお互いの肉薄した間に集まった。　当然、がら空きのクラークの身体へ、ストライカーの左上腕の剣が振り込まれる筈・・・。

いや、其処にはまたクラークの背後から飛び込んで来たセイルが居る。　ガキンと鈍い音を響かせて、クラークの頭上でセイルの剣とストライカーの剣が噛み合った。

完全に、ストライカーの視線がセイルに移った一瞬に、クラークは一気にストライカーを押し込みに掛かり。　負けじと押し止ろうとしたストライカーに先んじて、両手の武器を返して槍とスピアーを

捻り込む様にストライカーの肋骨へと差し込んだ。

其処へ、ストライカーの脇に着地したセイルが、目に紫のオーラを浮かべてストライカーの左上腕・下腕の付け根に当る脇に狙いを定めて飛び込む。

「唸れっ！！！！　魔法の波動よおっ！！！！！！」

セイルの掛け声が、波動の様に当たりに響き渡る時。　セイルの剣に纏わり付いた青白い光が燃え上がる炎の様に湧き上がった。

もう限界のクラークは、ここぞとばかりに力を込めて槍とスピアーの揺さぶりからの突き上げる。　グイグイと捻り込まれる槍とスピアーで、ストライカーの一番下の肋骨が罅割れ、鎖の様な黒い糸が千切れ弾けた。　ストライカーは、とにかく煩いクラークを殺そうと、グッと一歩下がって槍とスピアーを払い除け、残る3本の剣を振り上げた。

セイルの声に、気絶しているエルキュールと怪我の治療に専念していたセレイド以外が戦いを見ていた。　飛び掛って振り上げるセイルの剣が、燃え上がる様な魔法のオーラを倍以上に伸ばして槍の様で在った。　クラークに剣が振り下ろされる前に、ストライカーを脇から唐竹割に斬ったセイルの剣。

「殺ったか・・・」

クラークは、身を離してピタリと止まったストライカーを見る。

セイルは、

「はあ・はあ・はあ・は・・・」

剣に纏わせた魔法のオーラを消した瞬間に、凄い荒い息を全身でし出して。　ヨロめいて後退しながら床に崩れる。

「セイルっ！！！！」

ユリアが、ビックリして走り出す。

固まったストライカーの様子を、塵に変わったヘルズファイターの間近で膝を折って動けなくなっているマガルも見ていた。

先に、斬り裂かれたストライカーの後ろが床に崩れる。　そして、その上に、倒れる様にしてストライカーの正面側が倒れ込んだ。甲高い音を上げて、３本の古びた剣が床に散らばり。　ケルベロスストライカーは、ゆっくりと塵に変わって行く。

「た・・たお・・たおせ・・た・・・」

ユリアに看られながら、セイルは呟く。

クラークは、セイルが全力を出し切ったのを見届けた。　手から離れたセイルの使った剣・・・、ケルベロスストライカーを斬った逆方向に刀身が歪んでいる。　剣は、耐え切れなかったのだ。　セイルの魔法のオーラが、剣の変わりに成り。　セイルの集中力が、それを成した。　全身から、疲労の脱力感を覚えて、フラ付きそうなクラークは・・。

（凄い逸材だ・・。　何が何でも、生き抜かなければ・・・先を見る）

と、決意を新たにする。

その時、ユリアやセイルは勿論。　キーラや、エルザまでもがビクンとしてそれぞれに虚空を見た。

急に回復の手を止めたセレイドに、這って近付いて来たボンドスが。

「おっ、おいっ」

しかし、急激に汗を顔中に溢れさすセレイドは、身震いする手を見つめて。

「ダメだ・・・。　目覚めた・・・」

と、呟いた。

≪復活の不死王≫

「ポリアっ！！！！」

「ひぃぃ～っ」

突然、マルヴェリータとシスティアナが声を上げる。

「わっ」

暗闇の中、光を放つ水晶のみの灯りだけと成った雪降る迷路の中で、ポリアは2人の声に驚いた。

「なっ、何よっ」

と、振り返って言うポリアに、カミーラが。

「リーダーっ、大変だっ」

と、叫ぶ。

ポリアが、辺りを見れば。　助けた冒険者達の幾人かと。　合同チームで連れてきた僧侶2人が異常に怯えた反応を見せている。

「何・・・何か居るの？」

ポリアは、進もうとする先の道の闇に顔を向けた。

マルヴェリータが、ポリアの脇に来て肩を掴む。

「ポ・・ポリア・・・。　モ・・モンスター・・・モンスターよ・・」

ポリアは、システィアナがゲイラーに抱き付いて離れなくなっているのを見て。

「そんなに凄いモンスター？　“ジェノサイスホロウ”や“デュラハーン・ロード”みたいな？」

と、マルヴェリータに問い返す。

急に強張った顔で、蒼褪めるマルヴェリータは首を左右に振って。

「も・・もっと上・・・昔に戦った・・・悪魔みたいな・・」

ポリアは、Kと別れてから初めて自分がリーダーで受けた合同チームの仕事を思い出す。

（まさか・・・また強力な悪魔？）

Kが教えてくれたレクイエムの合唱でバリアーを張る事を思い出したポリア。　システィアナを中心に僧侶を集めて、レクイエムの歌を歌って貰う事に。

計４人の僧侶で謡うレクイエム（鎮魂歌）。　そのバリアーに包まれたのを見て、マルヴェリータは背中の震えを払うかのように。

「ケイとの実践経験って、改めて凄いわね・・。知らなかったら、この雪の中で立ち往生よ」

しかし、ポリアはこのまま進んでいい物か困った。　怪我人や実力の低い者を連れて行っていい物か。

「・・・」

だが、この時にもう危機は現れていた。

セイル達の前に、眠らされた子供達がギャリスパの魔力で操られて現れた。　空中に浮ぶ様な広間の奥に向かう石橋の上。　ゆら～り、ゆら～りと揺らめく様に歩いて立ち並ぶ５人の子供達。

「みんなっ！！！！！　目を醒ましてっ！！！！！」

大声で叫ぶユリアだが。

「げひゃひゃひゃひゃ～っ。　ム～ダ・・ムダなんだよっ！！！！　俺様の魔力で操り人形に成ってるんだ。　お前等の声は耳に入らないのさ」

黒光りする小型ナイフを片手に、ギャリスパが一人の赤い厚手の服を着た女の子にナイフを向けて近付いていた。

立ち上がれないセイルは、クラークに抱えられてその様子を見る。

「や・・やっぱり・・ぜんろく・・つかったの・・し・ぱいだったかな・・」

苦渋の顔のクラークは、セイルに。

「いや、あの時を置いて倒せる時は無かったさ。　ワシも、もうフラフラだもの」

ギャリスパは、顔に勝ち誇った笑みを浮かべて。　その醜い腐乱し

た顔を喜びに崩した。

「さ～、もう解ってるだろ？　ヤツは蘇った・・。　そう、蘇ったのさっ」

ギャリスパは、自分の後ろを小さい手で指差した。

全員の目が、ギャリスパの後ろに向かう。　黒い闇の口を開いた石橋と繋がる開かれし扉の出入り口から、何者かがヌッと姿を現した。

「う〝あああ・・・・」

嗚咽の様な奇声を上げて顔を逸らしたのは、僧侶のエルザ。

「むぐぅ・・」

何かを堪える様に蹲ったのは、セレイドだった。

「あ・・アイツが・・・」

イクシオは、声を絞り出す。　恐らく、この男が昔にこの館の主として生きていた男だと思った。

その男性は。　赤と黒のチェックのナイトローブに身を包み。　艶やかなシルクの黒いマントを流す長身の男性が其処に居る。　真っ白に色褪せた髪は、長く毛先が首元に纏わり付く様に伸び。　血色の無い顔は、死人の様に脂漏化した白過ぎる肌である。　赤々と燃え滾る瞳・・・、だが。　その見てくれの雰囲気には、何処か神々しい様な威厳も見て取れた。

ギャリスパは、背中の羽根をパタパタと忙しく動かして浮き上がる。
片手に、目を瞑ったままの少女の胸倉を掴んで。

「・・・・」

虚空を見つめて立ち尽くすその貴族風の男に、ギャリスパは少女を見せた。

「おい。　お前は、“不死皇王”として蘇ったのだ。　この俺が、お前に長年に渡って魔力を送り込んでやった御蔭だ。　さぁ、このガキの生き血を吸え。　肉を喰らえっ。　魔力を取り戻し、俺と一緒に現世へ出るんだ。　暗黒の世界を創ろうぞっ！！」

この時、セイルはユリアに。

「ユリア・・ちゃん・・え・・・」

ユリアは、パッと振り向いた。

「え？」

セイルは、疲労に気を失いそうな所を堪えながら。

「持って・き・・た・・。　絵・・・、な・・投げて・・。　アン・・ソ・・ニー・・・・さまに・・」

「あっ」

ユリアは、エルザの所に置きっ放しの自分の背負い袋を見た。　ユリアの意志は、ある程度は精霊達とはシンクロして解るのだろう。
シェイドが引っ張り出している最中だ。

「絵を、渡せばいいのね？」

「う・・うん・・。　こっ・心が・・残ってれば・・・・わ・・判る・・ハズ」

ユリアは、そっと動き出した。　クラークの後ろ側にソロソロと回り出す。

この時、シェイドが丸めた絵をなんとか引っ張り出した。

「さあっ、自分で殺せっ！！！」

ギャリスパは、貴族姿の男に少女を渡した。

「・・・」

フリルの付いた手首・襟首のシャツが、少しも色褪せていない。美しい顔は、確かにセイルと通じて貴公子の様だ。　スカーフの様な白い布をネクタイの様に巻く首元には、この国の紋章である絵が埋め込まれたルビーのネックレスが掛かっている。　男は、渡された少女を見つめて動かない。

「どうしたっ？！」

ギャリスパは、クラーク達をチラリと見て警戒しながら焦って居る様な声を出す。　不死の皇王として蘇った男が、少女を見つめて全く動かない所為だろう。

中腰で戻るユリアの元に、シェイドが絵を重そうに持って飛んで来

た。

「ん～ん～、ユ～リ～ア～・・・絵～」

丸めた絵をシェイドから受け取ったユリア。

「ありがとう・・」

小声で言って、シェイドと共にクラークの真後ろに戻る。

橋の上では、ギャリスパが苛立ちを強めて。

「おいっ！！！　なんとか反応しろよっ！！！！！　さっきから何をボ～っとガキなんか見てんだぁっ？！！！」

と、ナイフを強く握り締めて怒鳴り出した。

ユリアは、完全にギャリスパが向こうに気を取られた一瞬を見計らって。　クラークの後ろから前に飛び出した。

走るユリアの足音に、ギャリスパも気付いて。

「このクゾ共っ！！！！！！！　大人しく立ってろよぉっ！！！！！」

と、ユリアの方に向いた。

ユリアも、丸まった絵を貴族風の男に高々と投げ付ける。

振り向くギャリスパと投げるユリアが同時で、ギャリスパが大声で怒鳴っている瞬間に絵はギャリスパの頭上を越えて行く。　絵は、

貴族風の男の目の前を掠める様に放物線を画いて落下。　男の胸元に当たり、その絵を男は右手に取った。

「あ、何だぁっ？！」

投げられた絵を見て、ギャリスパは只の紙切れだと思い。　ユリア達に睨み付けて。

「テメラ等っ！！！！　忙しい所で甘く見てやればうざったく動きやがってっ！！！　ガキを1匹血みどろにしねえと解んねぇかっ！！！！　ああっ？！！　魔法でド頭をぶっ飛ばすぞコラぁぁっ！！！！！！！！」

だが、ギャリスパの後ろでは、男が少女を抱える手の指に紙の先を挟み。　その丸まった絵を伸ばして見てしまった。

ユリアもセイルもクラークも、男の顔に表情が現れたのを見た。
他の皆も、離れて居ながらに顔付きが少し動いたのは確認出来る。

「マリアンヌ・・・・」

絵を見つめる男の目が、途端に輝きを取り戻し。　そして、涙を浮かべる。　男の全身から、青い魔力その物のオーラが揺らめいで溢れ出す。　魔力は、人それぞれに色が在り。　強く使い込まれた魔力などは肉体の外に滲み出る事がある。

ギャリスパが、そのオーラの波動に気付いて振り向いた。

「な・なんだあ～？」

だが、見たユリアは。

「すっごい優しい波動・・・魔力・・・魔力その物だわ・・・。死人なのに・・・闇のオーラが・・薄らいで魔力に変換されてる・・・」

その意味は、エルザとセレイドを見れば解る。　強い暗黒の波動に苦しんで動けなかった二人が。　突然の様に顔を上げて立ち上がったのだから。

「何故？　何で・・・いきなり魔力に変わるの？」

エルザは、急に開放されて目を見張る。

セレイドは、動く自分の手を見て。

「おお・・・コレは」

暗黒の瘴気に中てられて、鈍って居たの身体の気怠さまで消える。　直ぐにまた屈み、イクシオの塞ぎきっていない傷を塞ぐために魔法を唱え始める。

この場で誰よりも最も驚くのはギャリスパだ。　魔物の瘴気を発していた男が、いきなり人としてのオーラを発する様になったのだから。　腐った顔を慌てさせ、だ～していいのか解らなくなってしまった。

「お・・おいおい・・、お前何を人間染みたエネルギー出してるんだよ・・。　おいっ！！！！」

だが、この時。

「う・・う～ん・・」

男の腕の中に居る少女が目を醒ましたのだ。　そして、目の中にマリアンヌの絵を入れた。

「キレイ・・・」

マジマジと見て、その目を擦り絵を見ながら呟く。

すると。　絵を見ていた男が。　いや、正気を取り戻したアンソニーが少女を見て。

「綺麗だろ？　私の唯一愛した女性だ」

と、微笑むのである。

アンソニーを見つめ出す少女。

これには、ギャリスパが猛烈に怒り出した。

「こぉんのボケナス野郎がああああっ！！！！！！！！！！　早くガキの血を啜れって言ってんだよおおおっ！！！！！！！！！」

と、少女に近寄ってその短い手のナイフを少女の喉下に薙ぎ付けたのだった。　ギャリスパに気付いた少女は、驚きと恐怖の虜に成って動ける訳も無い。

“あっ”

と、見ていたユリア達が声を出す間は無く。　少女の喉に届く前に、ナイフの起動からアンソニーが身を引いて少女を動かしたのである。

その場の空気が、張り詰めて硬直したのは一瞬だけ。

「済まないが、コレを持っていて欲しい」

アンソニーは、少女に曲が付いた絵を預ける。

恐怖に硬直する中で、“コクン”と頷くだけの少女。

絵を渡し終えたアンソニーは、徐ろにギャリスパを鋭く見た。　赤い光を宿す目には、人としての感情が宿っており。　明らかに、不愉快を顔に浮ばせている。

「キサマ、我が屋敷に私が掛けた迷路の魔術を利用して巣窟としたのか・・・」

ギャリスパは、魔物に変えた筈の男が、はっきりと意志を持っているのに驚いた。

「あ・・あぎゃ？　な・・何で意志を・・」

すると、アンソニーは魔力の蟠る右手をギャリスパに向けた。

「あっがあ・・・」

宙でギャリスパが固まった。　その手からナイフを落とし、石橋の上にナイフが落下して小気味良い音を辺りに響かせる。

「なあ〝・・・なんでぇぇ・・・」

動けず苦しむギャリスパだが・・。

アンスニーは、ギャリスパを見つめると。

「悪魔よ、しくじったな。　お主がしようとした“不死皇王降臨”の邪法は、憎しみや悪しき心に取り付かれて不死の呪いを活性化する邪術よ。　我は、己に憎しみも悪しき心も持ってこの不死を望んだのでは無いっ。　ただ、愛するマリアンヌをこの世で忘れ去られるのを嫌がってした事。　我が心に彼女が居る限り、私は不死皇王になど成れぬ。　人の心を理解出来なかったとお見受けする」

「そっ・・そげなああ・・・・」

アンソニーは、その突き出した右手を右側に移動すると。　ギャリスパも一緒に動いて、橋の縁の外に。

「悪魔殿。　失礼だが、我が国には平穏が在れば良い。　御主の様な者は要らぬ。　サラバだ」

アンソニーは、少女を軽く包む様にして抱き。　その視界を塞ぐと、右手を握り締める。

ギャリスパは、全身を何か重たい物で押し潰される感覚に襲われる。

「う〝ぎゃあああああっ！！！！！」

ユリアは、ギャリスパの顔がヘシャげた所で目を逸らした。　直後、

ギャリスパの断末魔の叫び声が上がって・・・。　全ては、終わった。

≪還そう・・戻ろう≫

ギャリスパが死に、子供達の魔力は解けて気を取り戻した。　丸坊主で、悪戯っ子の印象強い斡旋所の主の孫であるジーンは、ヨロヨロのセイルとボロボロのクラークに謝っていた。

「ゴメンなさい・・。　助けてくれてありがとう・・」

「帰ったら、思いっきり叱られてねぇ～。　あはははは・・・・身体イタイっす・・」

クラークに背負われるセイルは、子供達を叱るきなどま～ったく無い様子だ。

さて、アンソニーの元には、あの抱き抱えられた少女が居る。　絵を持って。

「たすけてくえてありがとう・・。　あの・・・これ・・・」

ギャリスパの事も在ってか、恐怖も残る心に残っているのが回らない呂律に見える。　だが、少女は見上げる様な長身のアンソニーに、しっかりと絵を差し出した。

死人の顔ながら、麗しき中年のアンソニーは微笑みを湛え。

「その絵は、君にあげよう。　悪戯の証だ」

少女は、ゆっくりと絵を腕に抱いて。

「・・いいの・・？」

「ああ。　これで、マリアンヌは私だけでは無く。　目にする人の心に宿る。　是非、貰って欲しい」

すると、少女はニッコリと笑って。

「ありがと」

まだ、幼き5歳の少女だが。　アンソニーはレディとして扱う様に恭しい一礼をして。

「いえいえ」

セイルを背負ったクラークが、ユリアを脇に携えてアンソニーの元に来る。

「あの～」

ユリアとセイルの声が被った。

「ん？」

アンソニーが、３人を見る。

ユリアが、先に。

「子供達は連れて帰るわ。　でも・・・アナタはどうするの？」

クラークは、モンスターには変わりの無いアンソニーを見て。

「また、此処で・・眠りに？」

アンソニーは、少し曇った顔行きで。

「外は・・・どうなっていますか？」

クラークは、森が亡者の巣窟に成っているのを語る。

少女も、怯える様に。

「モンスタ～がいっぱい」

アンソニーは、少女を見下して頷くと。　クラークに向いて。

「このまま私が留まっては、この場はモンスターを生む巨大なヘイトスポットに成ってしまう。　私も、一緒に外に出よう。　今、この国を治める王に、我が屋敷を明け渡すつもりだ」

ユリアは、屋敷中のマリアンヌの絵を思い出し。

「もう・・・あの時から２００年以上経ってるわ・・・。　外は、全然変わってるかもよ」

アンソニーは、頷く。　深く、重く。

「ああ・・。　まさか、永久に眠る魔術を自分に施してしまって。悪魔に悪用されるとは失態だ。　謝らねばな・・」

ユリアには、解らない。

「ねえ、そんなにマリアンヌ様の愛してたのに・・・何で駆け落ちとかしなかったの？　いっそう、連れて何処かに行っちゃえば良かったのに・・」

アンソニーは、脇に顔を逸らし。　寂しく首を左右に振った。

「彼女は、義兄を・・・。　フランソワを支える事に命を掛けていた。　義兄は、王の器には自分でも認める程に器量の無い人だった。武人として生きる事を望んで居たのに・・・。　義弟のアルツフォンが王に相応しいと思っていたのに・・・。　義母様も、重臣達も納得しなかった。　一本気で、不器用な義兄を、マリアンヌは・・・愛してしまった・・。　私が、そのマリアンヌの心を引き裂いてまで駆け落ちなど・・・出来なかった。　全ては、我等３兄弟の不徳の致す所だ」

ユリアは、深い深い因果が在るのだと思い。　それ以上は話せなかった。

其処に、離れた場所からイクシオが。

「王子さんよ。　地下に、あんな凄いゴーレムなんか安置して・・随分だぞ・・・アンタ」

と、憎まれ愚痴を。

アンソニーは、ハッと気付いて。

「そう言えば・・・我が先祖が作ったゴーレムの像が・・・1体も無いな」

ユリアが、ギャりスパが目覚めさせたのを語るや。

「ほう・・・あのゴーレム達を倒せるとは・・・。　皆様は、素晴らしい冒険者達なのですね」

アンソニーは、セイルや傷付いたイクシオ達を感心の眼差しで見る。
やはり、ゴーレムはその辺のモンスターとは格が違う様だ。

セイルは、ヘラヘラした言い方で。

「死に掛けました～。　ケルベロスストライカーは、要らなかったなあ～あ～」

こうして、セイル達はアンソニーを連れて帰る事に成った。

真冬の大雪が舞降りる外に出れば、もう陽も落ちた真っ暗闇。　アンソニーは、魔想魔術と秘術の一部をマスターした魔法遣いらしく。
その右手の指に填めた水晶の指輪に灯りの魔法を宿す。

屋敷を出て噴水の所に来ると。　その敷地に掛かっていた“幻影迷走術”と、館に掛けられた魔術をを解いたアンソニー。

一同は、一面に蔦で覆われて、ボロッボロに朽ち果てた屋敷を見る。
　壁は老朽化して崩れ、紋章の宝石をを使った大きなエンブレム以外が、全て朽ち果てた館と成ったのを見て。

「これが・・・本来の館の姿だったのか・・」

セレイドに担がれるイクシオは、あの素晴らしい内装の屋敷を忘れぬ様にと心に留めた。　見ている全員が、廃墟と成った館に侘しさを覚えたのは事実だった。　あの、様々な表情のマリアンヌの絵は、どうなっているのか。

さて、屋敷の外の敷地は荒れ放題の原野の様に成っていた。　そして、遂にポリア達と再会を果たす事に。　魔法の灯りに気付いた双方のチーム。　夜の大雪の中で合流した一行は街に戻るべく引き返す。

帰り道、イクシオ達と再会の喜びを迎えて、話し合うポリア達。

「はぁ〜っ、凄い事に成っちゃったのね」

マントを着ながら話し合うポリアは、大方の子供達の手を繋いでセレイドと共に歩きながら話を聞いて感心とばかりに驚いてみせる。

キーラは、マルヴェリータやシスティアナに一部始終を語り。　ヘルダーとゲイラーには、ボンドスが語る。

先頭のユリア達には、アンソニーが光で前を照らしながら。　ユリアやセイルに。

「しかし、最近の冒険者達は女性が多いですね。　しかも、美しい女性が目立つ・・・。　私の頃は、男性が大半以上でした」

ユリアは、“風のポリア”と異名を取る彼女が、噂以上に美人で驚いていた。

「ホント・・。　腕が凄くて、オマケに美人って。　天は二物でも三物でも与えるのね」

クラークの背中で鼻水を啜るセイルは。

「ユリアちゃんだって、綺麗だよ～。　・・・多分」

ユリアは、フードを被る顔の中で目を吊り上げて。

「最後が余計だコラぁ・・・」

と、杖を握り締めた。

しかし、だ。　何よりも皆が驚いたのは、森に戻って見るとモンスターが動かずに居る事だった。

アンソニーは、その状態を見て。

「急に暗黒の力が弱まって動けなくなっているだけさ。　また、数日もすれば、死体やモンスター自身の持つ力が緩やかに蠢って動き出すよ。　早くに、森の浄化が必要に成るね」

マルヴェリータやシスティアナからすれば、動く死人のアンソニーに言われるのは微妙な雰囲気だ。

カミーラなどは、アンソニーを敵視する様に睨み見る。

しかし、ポリアやセイル達はアンソニーを訝しむ所が無かった。

アンソニーに助けられて、この大雪の夜の中でもアンソニーの服の裾を持って歩く少女が居る。　それだけで十分だった。

遂に、生存者は全員で外に出れた。

アンソニーは、此処で皆と別れて王城に向かうと言い出した。

ポリアやセイルは、任せるとだけ言って子供達を連れて斡旋所に行く事に。

「バイバイ、お兄ちゃん」

離れて行くアンソニーに、子供達は素直に手を振れる。　アンソニーもまた、子供達に手を振り返したのを見て。　ユリアは切なくなる。

「貴族も商人も偉い人って偉ぶってるの多いけど。　あ～んな純粋な人もいるんだね～」

しみじみと言い。　ユリアは顔を何の気なしにセイルに向けると・・・。

「・・・」

目をウルウルさせながらアンソニーに手を振るセイルの姿が。

（コイツもか・・・）

ユリアは、此処までには成れないと思った。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

次話、セイルとユリア編、一部最終話

仕事を終えた一行は。　親達に感謝されて眠りに就く。　しかし、次の日の昼前に、一同揃って、王城に呼び出された。　王と謁見する冒険者達。　アンソニーはどうなるのだろう・・。　そして、セイルとユリアの向かう道は・・。

次話、数日後掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

さて、今回は難しい戦闘内容で一部見難い部分や。　読み取れ難い部分が多いかもしれません＾＾；

何れ、少し後で表現を変える努力をいたします＾＾；

セイルとユリア編の後は、ウィリアム編をお送りします＾＾。　その後は、年末年始に掛けて、ポリア特別編と、座談会総集編に雪崩れ込んで行こうかと模索中です＾＾；

では、寒いですが皆さんお体を大切に＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～

セイルとユリアの大冒険　1

≪帰還≫

斡旋所に、夜遅く戻った一行。　子供達を抱きしめて・・・怒って・・・。　親達は、その喜びを全身で現した。　夜も更け出した頃。　斡旋所の主の手配で、子供達の家族全員と、冒険者一行の宿が無償で宛がわれた。

さて、いくらズタボロでも。　話が出来るならば報告は必要だ。　ポリア達合同チームと、セイル達の子供達の捜索を請け負ったチームに別れて。　ランプの明かりの灯された斡旋所の広間のテーブルに就いては、報告を行った。

成功の報告を受けた主は、先ずカミーラ達や救出された冒険者などを休ませると言って人払いをする。　そして、セイルのチーム・イクシオのチーム・ポリアのチームを残して。　仕事の深い報告を受けた。　中でも、悪魔の事よりもアンソニーの事を告げると、主は

深く頷く。

「そうか・・・。　これで、やっと終わるか・・」

ポリアは、主がその事を知っていたのではないかと思い。

「ねぇ、マスターって・・、その事を知ってたんでしょ？」

疲労の色が見える８０過ぎた老人の様に見える主は、カウンター内の椅子に座り込んで。

「全て知っていた訳では無い・・。　前の斡旋所の主からの言伝で、あの封鎖された森の奥には、王族縁の場所が在り。　その場所を魔に魅入られた森が覆う。　だから、定期的にモンスターの排除をしてくれと。　王族縁の事だから、他言無用で・・・。　と、言われて居た。　なるほど、聞けば・・ナルホドだ」

出血が酷くてもう気絶し掛けたイクシオは、もう上で寝ている。

その代わりとばかりに、エルキュールが。

「じゃ、悪魔が居たのは知らなかった訳ね」

エルザは、呑気な話の様で呆れた。

「当たり前でしょ。　知ってたら、それなりの対処するわよ」

「まあ・・そうね」

すると、主は。

「実は、前に秘かに大量のモンスターをチーム“スター・ダスト”の面々に退治して貰った事が在ってな。　その時に、スター・ダストのリーダーであるリファランス・ハピルマッハ殿から苦言を貰った。

“主殿、これは何か在る。　一度、秘かに奥まで調査為さった方が良いと思う”

「とな。　でも、王に今更奥を調べさせて欲しいと言い難くてな。　今度、リファランス殿が口添えをして仕事にしようと相談しておった所なんじゃよ」

主の話に出たチーム“スター・ダスト”は、世界に有名なチーム３傑に入る。　１０傑までにしたら、ポリア達も入るだろう。　仮面の天才剣士リファランスは、実はこの国の現王の第二子、王子リオンその人である。　ま、その事を知っているのはかなり少ない極一部の者のみであるが。

主の話では、リファランスがリオン王子と知人なので。　一緒に調査を進言してくれると言う事だったらしい。　ただ、リオンは世界最大の貿易都市にして、この王国最大の都市であるアハメイルの統治者だ。　忙しい身なので、手の空く年明けにしようと話をしていた・・と言う。

ユリアは、ヘバってテーブルに半死しているセイルを突っついて寝かせずしながら。

「面倒な話。　王様に直で言えばいいのに・・」

「うむ・・、面目ない」

と、主が言う。

しかし、ポリアが呆れた嫌々な言い方で。

「ど～せ、内政大臣辺りが進言にごねるからよ。　仕事の依頼にしたら、お金は掛かるし華やかな所は冒険者に持って行かれるから。　それが癪で、取り次ぐのを嫌がるわ・・、きっと」

主は、もう父親との大喧嘩を機に、皆にポリアが筆頭公爵家の娘だと知られているのを弁え。

「流石は、ポリア殿。　よ～くお城の内情をご承知ですな」

と、苦笑い。

頷くポリア。

「だって、あの内政大臣って元冒険者に成ろうとしたのよ。　しかも、金ずくで有名に成ろうとして失敗したから、冒険者を忌み嫌ってるド阿呆。　器がチッサイのよ。　アホらしくて笑いにも成らないわよ」

一同、どうして主が第二王子の口添えを待ったか、ポリアの話で理解した。

クラークも、生じ貴族の一族で。　その辺の面倒は身に染みて知っている。

「管理職も、色々ですな」

主は頷くと、テーブルの上に金の入った麻袋を幾つか出した。

「ま、仕事は全員で成功と見做すよ。　セイルのチームと、イクシオのチームには、少ないが危険手当や特別報酬を加味して全額の半分づつで、５０００シフォンづつを。　マガルには、２０００。ポリア殿には、６０００を。　これしかもう無いが、スマン」

ポリアは、この主が救出の為に方々へ金を使って根回しもしていたのだろうと想い。

「途中でみんな帰って来たしね。　６０００在れば十分よ。　イクシオ達も、子供達も無事だったし。　不死皇王なんてスゴイモンスターが復活されなかったのが一番の朗報だわ。　場所が場所だもの、あんな所で」

主も、深々と頷いて。

「ホントじゃ」

ポリアは、セイル達を見て。

「本来なら、ミンナは王にでもお礼言われて当然だもん」

エルキュール達も、ユリアもこれは言い過ぎと思う。　エルキュールは、エルザに向かって。

「そ～んなに・・・凄い？」

「ま～・・不死皇王の復活阻止って所？」

ユリアも、ポカ～ンと。

「王様にお礼ねえ～。　アンソニー様の事かな～」

すると、クラークが。

「確かに、我々は世界の戦争に及ぶかも知れない火種を消したんだ。
そう成っても、おかしくは無いな」

「はあ？」

「へえ？」

エルキュールとユリアが、クラークを同時に見る。

其処に、マルヴェリータが。

「良く考えて。　あの封鎖地区の横には、森を隔てて各国の大使館が存在してるのよ。　もし、いきなりモンスターが現れて他国の大使が殺されたりしたら・・。　皆、親善大使として、各国との橋渡しに来てる外国の重要人物なのよ」

キーラやマガルは、此処まで聞けば直ぐに解る。　キーラが、ポリアを見て。

「もし、秘かにモンスターの温床となる場所を王族が代々残していたとしたら・・。　もし、モンスターの事で大使に死人が出たら諍いに成りますね」

ポリアは、重大な事だと重く頷く。

「下手したら、戦争よ。　この世界で一番平和な我が国は、世界の国々の平和の象徴をも担ってる。　其処で大使が殺されでもしたら・・・、一大事よ」

ユリアは、口に手をやって驚いてから、ワナワナしてセイルに掴み掛かって。

「すっ・・凄い事しちゃったね」

揺さぶられるセイルは、右手を上げるのみ。　テーブルにつっぷして死んでいる。

主は、一同を見て。

「皆さん、今回はありがとう。　家族一同を代表して、もう一度頭を下げさせて貰うよ。　孫を・・子供達を助けてくれて感謝する」

ポリアは、それに返す様に。

「もう、とにかく休みましょ。　み～んな、疲れてるし。　今回の事は、どうせあんまり噂として知名度を広げる働き掛けは出来ない事になりそうだし。　明日にしよ」

ポリアは、事の内容が内容だけに。　この仕事の成否でチーム名の広がりを大っぴらに出来ないのは解っていた。　だから、サラリとして貰う物を貰って終りにするのが一番いいと思う。

クラークも。

「ふむ。　確かに王族の事が絡んでいる以上は、全て公にするのは些か面倒になろうな。　ま、いい経験が出来たとしておくのが一番だろう」

セイルも、うつ伏せながらに。

「さ～んせ～」

と、右手を上げて呟く。　かなり、声に元気が無い。

ユリアは、自分も疲労感で横に成りたい処なのにと、セイルの頭をテーブルにグリグリ押し付けて。

「おめぇーっ、も～ちっとシャッキリしろぉ～っ」

セイルは、ジタバタと苦しんで。

「あひぇ～・・・いだだだ・・・」

カウンター前の広間に居る一同がドッと笑う。

こうして、解散と成った。

・・・・・。

深夜。　カウンター内で、一人ポツンと浮かない顔をしているのは斡旋所の主。　右手に持つウイスキーグラスの中は、手も付けて居ないままの量が残り。　ボンヤリと明かりの消えた店内を見つめて白い息を吐いている。　溜め息の音が、孤独な店内に無限回帰の如

く一定の間を置いて吐かれる。

その主の頭上にだけ灯ったランプの明かりを頼りに、トイレに起きたポリアが態々1階まで下りて来た。

白いマントを羽織って鎧も着けて居ないポリアは、髪もそのままに年頃の色気も手伝ってか。　何時もとは違う気品と艶やかさが見える。

「マスター・・・、ど～したの？」

主は、急に人の声がしたので驚いた。

「あっ・・・おお、ポリアさんか・・・」

何時もは荒くれ冒険者ですら一喝する主が、ポリアに“さん”だのを付ける。　ポリアは、不意の無防備に声を掛けたのだと悟りながらも。

「こんな寒い中で、何時まで起きてるの？　この2日は寝てないんでしょ？」

「あ・・、ああ・・・」

虚ろな返事の主は、生気が感じられなかった。

カウンターの前に立ったポリアは、斡旋所の主としての何か憂いでも在るのかと慮ったが。

「明日からは、店を開けないといけないでしょ？　そんな顔してた

ら、冒険者達に舐められるわよ」

すると、主は力無く俯き。

「かもしれんな・・。　今回の仕事で出た犠牲は１３人に及ぶ。主として、失格かもしれん」

ポリアは、主が何故にこうなったのか・・、意味を理解した。　だが、ポリアからしてこれは筋違いと思い。

「マスター・・・自惚れてる？」

「なっ？！」

いきなりの応えに、主の老人はポリアを見る。　ギョロっとした目で、驚きしか其処には無い。

ポリアは、真面目な顔で。

「仕事を請けて、続けるか否かの判断は全て冒険者側に在るのよ。主のマスターは、仕事に見合う力量を見量って、仕事を割り振るだけ。　死んだ冒険者が、逃げるかどうかの判断なんてマスターに任されていないわ。　冒険者は、何時も死を背負って生きてる。だから、状況判断が求められる。　その仕事に応じた状況判断が出来るかどうか・・・。　マスターは、もう理解してるはずよ」

主は、グッと下に俯いた。　今回の仕事は、最初から力量関係の無い公募にしたのは、確かにその事が有るからだ。　居なくなった時点で、モンスターの有無は解らなかったし。　冒険者達の命に関わるとは、解ってない。　だから、情報だけでも、少しの報酬を出せ

る公募依頼にしたのである。

ポリアは続ける。

「お孫さんが絡んだからって、自分で全部背負うなんておこがましいと思う。　マスターは、神じゃない。　私だって、合同チームを人以上にやって来ちゃったけど。　我儘で自分勝手な冒険者をあやし切れる実力なんて無いのよ。　死なせた事だって・・・在るわ。　今回だって、森が危険な場所は最初から言って在って。　奥の門の先の事をマスターの一存で言えなかったのは仕方の無い事だわ。　生きた冒険者・・・、死んだ冒険者・・、皆・・自分で歩いた自分の道なのよ・・」

目を瞑った主。　嘗ては、この主も冒険者だ。　しかも、それと知れた剣神皇エルオレウや、斬鬼帝ハレイシュとも冒険を共にした事の有る強者であった。　仕事のアレコレや、冒険者の心構えなど、ポリアに言われるまでも無い処のハズが・・。

「フッ・・・、ワシも弱ったかの。　ポリア殿の様な若者に叱られるとは・・・」

ポリアは、主に背を向けると。

「疲れてるからじゃない？　まさか、もう呆けたとか言わないでね？」

ポリアは、嘗てはこの主に喰って掛かった事も有る。　まだ、マルヴェリータ達と会う前の事だ。　初めて家出して、冒険者に成ろうと一人でこの斡旋所に来て、後から追って来たイルガと2人でチームを組もうとした時、この主と大喧嘩した。

（変わらぬな・・・。　いや、随分と成長しても、変わらぬ部分が有ると云う事か・・・）

主は、自分を恐れずして喰って掛かったポリアを思い出し。　その目を開いた。

「ポリア様」

ポリアは、今度は“様”が付いたのにムスっと振り返る。

すると、主は深々と頭を下げて。

「流石は公爵家のご令嬢。　あの頃と変わらぬ物言いで、ご教授在り難き事で」

その主の顔に生きた表情を見たポリアは、フッと笑みを見せると。

「や～っと何時ものマスターみたいな嫌味が戻ったわね」

主は、グラスのウイスキーを一気に呷り。

「久々に時化たよ・・。　全く、冒険者の世界は未だに恐ろしい世界だわ」

ポリアは、頷くだけしてトイレに消えた。

直に、主も休みに消えて。　斡旋所の長きに渡る2日の慌しさは終わった。

≪レッツ・オ～ジョ～（王城）へ≫

次の日。

「うう・・・寒い・・。　あ゛～、身体イテエ・・・」

まだ早朝の明け方前の様な、朝も遅く成った頃。　何時もより遅くランプの明かりが灯った斡旋所の1階に、イクシオ達のチームが屯している。　リーダーのイクシオは寒がりらしく。　昨日の怪我の後遺症からの気怠さと厳しい雪空の寒さに。　朝からホットワインを飲んで、斡旋所の何時もの賑わいの中でダラ～ンとしている。

イクシオは、この場に居ないエルキュールとボンドスを思い。

「2人はどうした？」

エルキュールも、リザードバイターの毒の影響で起きて来ないらしい。　エルザは、寝ている4階を見上げる様にして。

「そ～と～傷が痒くて寝れなかったみたいね。　神経の軽い麻痺と、鎮痒剤の効き目で鼾掻いてるわ」

一緒の部屋だったキーラは、ボンドスの今の様子を思い。　微笑を少し呆れさせて。

「今日は、な～んにもしたくないそうです。　どうせ、斡旋所の宿なので。　夜まで寝て、起きたら地下で賭け事するって言ってましたよ」

セレイドは、雪で霜焼け仕掛かった頭を撫でながら。

「ん？　この下は、オークションの場では無かったのか？」

イクシオは、だらしなく笑い。

「セレイド。　甘い。　ケ～キの如く甘いよ、お前。　オークションの場で、裏のカジノは当然の暗黙了解でんがな」

セレイドは、ポカンと呆けて。

「そ・・そうなのか・・」

年の功で、その辺の事情には慣れているエルザは。

「カジノも悪く無いわね。　明日は、王立図書館にでも行きたいけど。　今夜ぐらいは、カジノで頑張ろうかしら」

セレイドは、神官なのにこの柔軟さは何だとエルザを見る目が細める。

さて、もう起きているポリア達は、お金を行った全員で等分し。

他の冒険者からの羨望の眼差しを避けて、イクシオ達の近くでカミーラ達と雑談をする。　その内、アンソニーの居た館での出来事を知りたくなったポリア達と、イクシオ達が一緒になって大きな丸テーブルを2個独占し。　昔話や、思い出話や経験談を語り合う。

斡旋所は、昼頃に２００名を越す冒険者達が集まる賑やかな何時もの場に戻っていた。　流石に、昨日の今日で、話題の中心はセイル達の行った仕事の事。　助かった冒険者達と、戦力の足りないチームや、新たにチームを結成しようとしている新顔などを含めて喧騒の絶えない処に、セイルとユリアとクラークが下りて来た。

「ふぁ～～～～～～～～～～～～～～～い」

見ているだけで力が抜け切ってしまいそうなセイルの大欠伸。

ユリアは、それでも王子様の様なセイルが腹立たしく思える。

「だらしなくてもカッコいいって、ある意味罪だわ」

クラークは、羨ましそうに。

「いいのお～。　得だ」

さあ。　セイル達が3人しか居ないのは、この2日間で知れ渡った事実。　あの有名なチーム名にして、今回の大仕事をこなした訳だ。　冒険者達の中でも、チームを乗り換えたいと思っている者や、新たに加えて貰おうと言い出して来る者が１０数人は現れた。

「なあ、俺もチームに加えろよ。　手が足りないのは事実だろ？」

「それより、俺はどうだ？　この道もう１０年に成る。　加えて損は無いと思うが？」

コレにはセイルはもう呆れるばかりで、苦笑い顔を浮かべているだけ。　色仕掛けで、セイルを見てくる女魔法遣いも居たし。“ヴレイブ・ウィング”のチーム名に対する熱意を此処で熱弁する者も・・・。

（最初に言えよ・・・）

半笑いのクラークを始め、聞いてるポリアやイクシオ達も呆れていた。

セイルの代わりに怒ったのは、ユリアだ。　チーム結成時の最初は、皆にあんなに文句を言われたのに。　今に成ってチヤホヤされても、ち～っとも嬉しく無い。　言い寄ってきた冒険者達を、全て一蹴してしまった。

そして、ユリアとその言い寄った冒険者の数名が本気で言い争う手前で、遂に主がカウンターの内側から声を出す。

「喧しいぞッ！！！　止めないかっ、バカ者等がっ！！！！」

騒がしかった広間が、シ～ンと静まり返る。

暖炉の手前で、カウンターにも近い場に座ったマガル達は、その一部始終を静観している。

主は、しつこく言い寄る冒険者達を睨み付けて。

「昨日の仕事で誰がセイル達のチームに相応しいか、相応しく無いかは解ったハズだ。　仕事に対して、いい加減な気持ちしか持たねぇ～ゴロツキ共が、何を偉そうに押し付けがましい言い合いしてやがるっ！！！！　お前等のチームの加盟なんざ、先ずは俺が認め無えっ！！！　孫を助けたチームのツラを汚せるかっ！！！！」

その歯に衣着せぬ物言いの気持ちの良い事。　ユリアを年下だと舐めて掛かった冒険者達を、黙らせた主。

静まった一同の中で、主は。

「おうい、クラーク殿。　それから、若い2人」

3人は、今の迫力のある主の直後だから返事が出来ずに、顔を向けるだけで応える。

「すまんが、これから王城に行ってくれ。　王と、あの一緒に帰還した男が会いたいそうだ。　イクシオ達も、行けるなら行って欲しい。　今、迎えの馬車が裏に来たそうだ」

「えええええええええっ？！！！！！！！！！」

広間中から冒険者達の驚きの声が湧き上がった。

実は、アンソニーの事はセイル達とイクシオ達はポリア達にしか教えていない。　こうゆう事を全て語ると、恐喝紛いの輩が現れたり、噂が恐ろしい程に尾鰭を付けて広まるのは当然の事。　冒険者達は、その喋る限度を弁えてナンボの所が在るのは皆が承知。　マガルも、チームの仲間には全て教えていないし。　カミーラ以外の助け出された冒険者達ですら、戻る時に先頭に居たアンソニーが何者なのか

は深くは知っていない。　助け出された死人で、魔の力を持った者と認識している程度だ。

子供達が事実を知らないのだから、冒険者達がベラベラ喋らない限りは森の中の出来事は関係者達のみの知る処と成るはずである。

イクシオは、ポリアを見て。

「行った方がいいかな？　俺、王城に入るなんて初めてなんだけど・・」

頷いて見せるポリアは、微笑んでイクシオ達を見回し。

「ご褒美貰えるかもよ。　一応、行った方がいいわ。　今の王様って、気取らない気さくな人だし。　逢って害の在る王様じゃないわよ」

エルザは、一大叙事詩の詩を作るのには最高の経験と思って。

「行こ、行きたい～」

セレイドは、緊張の色を顔に見せて。

「失礼の無い様に、会って置くのがいいと思う」

クラークは、ボロく成った自分の服を見て。

「昨日の今日で、この服装だが。　ま、行かなければ成るまいな。あの御仁も逢いたいと言って居るのだから・・」

セイルは、鈍い明るさの空が見える窓を見て。

「あはははは・・・いきなり謁見ッスか～・・・」

一体ど～なるやら・・。

まだ、雪は降り続く。　豪雪地帯の入り口に在ると云っても良い世界最古の王国の王都は、本格的な雪の世界と成った。

セイル達3人と、イクシオ達4人が雪の外にマントを羽織って出た。　店の裏側に停められた馬車は、赤い色をした美しい造りの大型馬車。　引く馬も4頭である。

セイルを先頭に馬車に近付けば、固太りの白い軍服の様な正装をした男性が馬車の中から顔を覗かせた。　少し偉ぶる雰囲気の漂う中年男性で、イクシオは好かない相手だ。

「失礼しますが。　本当に王様が僕達を?」

セイルが、その男性に聞けば。

「ええ。　何でも、昨日尋ねて来られた方お2人で、皆様とお会いしたいとか。　しかも、あの因縁深い封鎖地区の元凶を絶って頂いたとか。　此方と致しましても、それはとても嬉しい事です。　はい」

言い方のアクセントが貴族臭い男性だったが。　口調からするに、アンソニー様の事を知らないのだろうか。

その貴族の誘われるままに、セイル達は馬車に乗り込んだ。　雪の

降るレンガ敷きの通りに轍を残しながら、その青い屋根と白い壁のコントラストが美しい王城へ向かう事に。

王城へと伸びる楓並木の凱旋通りへ出てから王城への正門を潜り、低い庭の木々が雪化粧している大庭園の間を抜ける形で緩やかに曲がりくねった道を進む馬車は、王城の正面入り口では無く。　壁側の裏出入り口に停まった。

貴族の臭さが漂う小太りの男は、馬車の扉を開けて。

「実は、王様が直に私室でお会いに為られたいとの事で。　裏からこそりとお願いします。　冒険者の方々を毛嫌いする貴族も多い上に。　何か大切なお話が在ると云うので・・」

車内でイクシオ達とセイル達は顔を合わせた。　何やら、少し深刻な臭いもする。

裏口も何処かの高級宿の正面玄関の様に金属のレリーフが施された重厚な木製の合わせ扉で。　取っての形が鷲か鷹の様な装飾がしてあって、流石に王城だと思わせる。　入った場所は、二階へ上がる階段の二つに挟まれた廊下が伸びている場所。　エプロンに青い制服のドレスを着たメイド達が忙しく行き来したり。　軍服の様な制服を纏い、胸に勲章を幾つも付けた偉そうな人物が歩いて居たり。

「此方へ」

小太りの男性の後に従って、二階へ上がり。　大きい廊下では無く。　裏手の様な細い廊下を進んだ。

「凄いね」

ユリアが、小声で言う。

「うむ、確かに」

と、クラークが返す。

細い廊下ですら、等間隔において花瓶を置いた高い値段のしそうな台が在り。　赤い絨毯の敷かれた廊下、白く美しい壁、芸術的な装飾際立つ天井・・。　城その物が一つの莫大なお宝の様な印象である。　途中で、裏庭か中庭か解らぬ森を見渡せる吹き抜けの回廊に差し掛かると、冬の風に雪が舞う幻想的な景観を見れた。

寒さに逃げ腰のイクシオも、流石に興味を覚えて擦れ違う美人メイドや、城のインテリアをまじまじと見渡していた。

セレイドは、緊張してか喋らず。

エルザに色々と相槌をせがまれるキーラは、圧倒的な城の雰囲気に飲み込まれて生返事ばかりだった。

「此処でお待ち下さい」

長い廊下を直進し、突き当たった左右のT字路を右に曲がった先の直ぐ右手のドアの部屋に通された。　開いたドアの中、部屋の中はもう煎れ立ての紅茶の香りが漂い。　甘いメープルシロップの香りがお供を為す。

「直ぐに、王様が起こしに為られます。　ゆっくり、御寛ぎ下さい」

と、云う小太りの男。

中に入ったセイル達へ。

「どうぞ、皆様。　お好きなソファーにお掛け下さい」

紅茶の湯気を上げるポットの横に、赤いドレスを着た中年の金髪女性が微笑んで招き誘って来る。　メイドとは明らかに違う印象で、微笑には気品が漂い。　煌びやかは抑えたドレスは、造りの確かな刺繍が目に付く。

だが、なによりもセイルは、その女性を見て顔を俄に驚かせると。

「ク・・・クィーン・レジェンド・・・」

と、呟く。

クラーク・イクシオ・エルザ・キーラは、その女性の頭に輝く宝石の鏤められたティアラを見た。

中年女性は、にこやかに微笑み。

「まぁ、流石にアンソニー様をお連れしてくれた冒険者の方々ですわ。　この王妃冠を知っていたのですね」

と、女性は頭上のティアラに少し上目を向けてから。　また一同を見る。

セイルは、中に進んで皆を代表する様に真摯の礼を呼ばれる作法を用いて一礼をした。　左足を引いて一礼しながら右手を前に流す仕

草が、何故か様に成っている。

「今回は御招きありがとうございます。　冒険者の井出達のままにお会いする無礼をお許し下さい」

ユリアとクラーク以外の皆は、セイルが社交の礼儀を弁えているのに驚いた。

クラークも、女性の前に進んで。　セイルとは別の騎士の一礼の行為を見せて王妃に挨拶をする。　直立から、腰を屈めて臣下の態度を示す。

「水の国ウオッシュレールの公爵家、エステムルスの現当主の弟にしてクラークと申します。　御招き在り難く。　冒険者の身ゆえ、武器を佩いての謁見の無礼をお許し下さい」

王妃の顔が、少し驚いた。

「まあ、あのエステムルス様の御縁の方とは・・」

セイルは、内心に。

（あははは・・・過去に王様も輩出してる有名貴族じゃん・・・）

クラークの家柄が、東の大陸では最上級の名家であると今知って笑える。

丸く繊細な造りのティーテーブルを囲む3つのソファーに、カチンカチンに緊張し出した皆と。　王妃との雑談を交わし始めるセイル・クラークの両名。　はて、一体どうしたことか・・・。

≪決意を汲んで≫

皆に紅茶が行き渡り。　王妃はそのフリル付きのドレス姿を一同の前に立たせてお礼を述べた。

「皆様、今回は真にありがとう御座います。　我が王族縁のアンソニー様を救って下さって・・・」

セイルは、直ぐに。

「救ったかどうかは・・・。　成り行きで、助けただけです。　でも、何でこんな場所で？」

王妃は、メイドを下がらせてから。

「長年に渡って、王家にはアンソニー様の御意志を汲んで、あの敷地をあのままにしようと言う意見の一方。　大臣や重臣には、粛清を行ったアンソニー様達の遺物を残すのを嫌がる者多く。　王家と家臣との間の諍いの元だったの。　アンソニー様が、あの土地を王家に戻すとしたので、その諍いが無くなる・・。　肩の荷が一つ降

りましたので・・、お礼を言いたくて御招きいたしましたの」

しかしユリアは、あのセイルの話を聞いていただけに。

「粛清って・・、愛する人を殺されて興らない相手がどうかしてるわ。　やり過ぎよ・・・あっ、す・・スイマセン」

勢いに任せて言ってから、相手が王妃だと思って謝るユリア。

だが、少し顔を悲しませる王妃もまた、頷く。

「貴女の言う通りです。　貴族の重臣は、王と対等の意識を持ち過ぎる・・。　アンソニー様の愛したマリアンヌ様は、確かに王家縁では無いけれど。　その気品の漂う美しさや慈愛精神の強い所は、当時の王家が誰もが御認めに成られていたの。　何も・・・殺める必要は無かった・・」

イクシオは、漸く少し緊張が解れて。

「あ～・・・、で。　今回は・・、我々に何か用あが・・・その・・在りまして・・呼んだ訳ですか？」

どう言って良いか解らずに、変な言葉遣いに為ったイクシオ。

王妃は、頷く。

「ええ」

そして、セイルを見ると。

「貴方がセイル様ね」

同じ金髪の頭の後頭部をガジガジと掻くセイルは、王妃に“様”を付けられて恐縮の限りである。

「は・・はい～・・」

横では、ユリアが腕をグリグリ押し込んで来て。

（様か・・、お前が“様”か・・）

王妃は、セイルの前に来ると。

「実は、アンソニー様が自殺を図ろうと致しました」

その場の全員が、驚いたり、紅茶の飲む手を止めたり、ポカンとしたり。

セイルも、目を真っ直ぐにして王妃を見る。

「本当ですか？」

「ええ・・。　もう、半分・・・いえ、肉体がモンスターに成ってしまい。　昨夜遅くに、死して自分を消そうと、我が王の持つ聖なる力の宿る宝剣にて。　間一髪、その場に居合わせた私の息子のリオンが、その剣を弾いて助けはいたしました・・」

一同、何故かホッとするのは。　あのアンソニーと言う人物が人の心を持っている所為だろう。　マリアンヌの事も在るから尚更か。

セイルは席を立ち。　王妃の前に屈んで、王妃を見上げては真顔にして。

「僕に、アンソニー様を助けろと云うのですか？」

敏いセイルは、先を聞かずして何かを悟ったのだろう。　王妃は、セイルを縋る様な眼差しで見下し。

「昨晩を掛けて、我が王がアンソニー様を説得為さいました。　そして、アンソニー様に冒険者に成ってはどうかと・・・お勧めしたのです」

皆、王妃に目を奪われた。

ユリアは、ギョッとして。

「うは～・・大胆な・・」

しかし微動もしないセイルは、黙って王妃を見る。

王妃も、セイルを見た。

クラークは、筋書きは読めた。　セイルのチームにアンソニー様を同行させて欲しいと云うのだろう。　その過去を知っている者のチームで在るなら、アンソニー様に無用な軋轢を生ませずして旅人に為れると思ったに違いない。

セイルは、強く思いを湛える王妃の瞳を見て。

「どうせ死ぬなら・・、生き抜いて死ねと言うのですね？　ですが、

それは意志を存続する故に、生きる苦しみを招く事には・・・為りませんか？」

王妃は、顔に陰りを見せて俯く。　生きて死ねる身では無くなったアンソニーだ。　何れは・・・、滅ぶか人目を避けて生きる形を選ばなければ成らない。　そこまで生き続けるのは、過酷な人生になるだろう。

その時だ、ユリアはセイルに。

「セイル、アンタはどう思ってるの？　アンソニー様を冒険者として加える事」

皆の視線が、ユリアに動く。　王妃も、ユリアに顔を向けてから、セイルに降ろす。

セイルは、ユリアを見ずに。

「僕は、構わないよ。　でも、押し付けは嫌だ。　アンソニー様の意志が、欲しい」

王妃の目が、緩やかに為る。

ユリアは、紅茶にメープルシロップの瓶からスプーンでシロップを移し入れながら。

「アタシも、セイルと一緒」

と、短く空気を繋いだ。

クラークも、また。　目を瞑り頷く。

「私も、異論は無い。　リーダーであるセイル殿の意志に同じ」

少しの沈黙が、その場に漂い始めた。　イクシオ達が口を挟める空気は無く。　セイルと王妃は見つめ合って止まり。　ユリアは静かに紅茶を飲む。　クラークは、不動のままに目を閉じて居た。

だが、不意にその空気は破られる。　セイルと、ふと目を開いたクラークは、目線を王妃の後ろの先に見える入って来たドアに移す。

セレイドとエルザも、ハッとして辺りを見回した。

そして、ドアが開かれた・・・・。

冒険者の生き方は、それぞれに・・・。　セイルとユリアの新たなる旅立ちは、此処から生まれる。　クラークと云う猛者を仲間に、セイルとユリアは何を求め、何を目指し、何処に辿り着くのか。悠久の冒険の大地に、新たなチームが生まれた始まりの話である。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回で、セイルとユリアの旅立ちのお話は終りですが。　この物語は、世界と冒険者の流れの一緒を画ければな～と思って書いていますので。　中途半端に成った最後は、第２部の冒頭に移る形に成ります＾＾

次話ですが、ウィリアム編に入ります＾＾

次は、完全なる推理話ですが、よろしくお付き合い下さいませ＾＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

third episode

冒険者探偵ウィリアム　3部

初夏の日差しが、燦燦と街道を照り付ける。　疎らに木々が広がる草原の中に、大きな蛇が畝食った様な街道が延々と延びていた。

「ふはぁ～・・・、あちぃ～」

青いローブを纏った魔法遣いの青年ロイムは、左手に杖を持ち。右手の甲で汗の噴出す額を拭う。　もう２０歳を過ぎるロイムだが。　その童顔は１６・７くらいにしか見えない。　可愛らしい綺麗な顔立ちの青年である。

ロイムの横には、黒い上着に黒い皮のズボンをスタイリッシュに着こなす男性が歩く。　伸びた長い髪に、ニヒルな印象の漂う渋みが浮んだ顔は、夜の女性に好かれそうな感じだ。　腰に巻いた青い布はマントだろうか。　軽そうな黒い金属の上半身鎧を着て、左の腰には長剣の柄が見えている。　剣士スティールは、軽やかに汗ばむ前髪を掻き上げた。

「フッ、・・・鎧が太陽で燃えてるよ・・・」

と、言った次の瞬間に顔をアホの様にバカらしく崩して。

「うおおおおおおーーーっ！！！！！　あっつーーーーーいっ！！！！！」

スティールの後ろを歩く白いローブを纏った女性は、自身も額に汗を浮べながら苦笑し。

「鎧が黒いですからね。　尚更、熱くなりますわ」

赤髪の僧侶クローリアは、大人びた美しい顔を微笑ませている。まだ２０過ぎなのに、その色香は熟れ始めた女性の物で。　丸みの有るスレンダーな肉体は、肉感の良さを窺わせる。　一人で歩いていると、遊びで男性に声を掛けられる事も多く。　飲み屋などには一人で入りたがらない淑女である。　ただ、過去に傷を持ち何処とない陰りも併せ持った女性だった。

そのクローリアの脇で。　身の丈2メートルは余裕で超えそうな大男が、顔面を汗まみれにして色黒い顔を顰めて居る。

「おい・・、ウィリアム。　俺の後ろに居るのは、日差し除けか？」

唸る様に言った大男の背中に背負う戦斧は、美しい金属の光沢を湛える大きな大戦斧だ。　対象に円を画く様な刃が付いていて。　何かで毎日磨いているのかピカピカしている。　彼は、戦士アクトル。　勇猛にして、大戦斧を扱わせたらかなりの腕だ。　スティールとは同郷の幼馴染である。　天涯孤独に成ったので、スティールと二人で冒険者に成ったが・・・。　ウィリアムと出合って、様々な出来事に関わり冒険を謳歌している。

その、アクトルの後ろには、やや白い灰色の髪がクセを持って飛ん

でいる若者がニコニコしている。　知的で利発そうな印象を受ける青年は、皮の上半身鎧に、腰周りにはサイドポケットをベルトで固定していた。　武器の類は、右脇の腰に備わった万能短剣。　コイツは、肉を切ったり何かを裂いたりする日用品で。　戦闘用では決して無い。

ウィリアム。　それが彼の名前だ。

「いやいや～。　アクトルさんを利用している訳ではありませんよ～。　ラビンさんとお話しているだけです」

ウィリアムは、旅人風の姿をした初老の男性と並んで歩いている。　白い薄いマントに、麦藁帽子を被った初老の男性は。　日焼けした黒い顔を前のアクトルに向けて。

「いや～スミマセンな～。　年寄りには、日差しは堪えるモノですんで」

のんびりと一人旅をしているこのラビンと言う男性。　2日前の夜に、街道の仮眠場にて毒蛇の群れに出くわした夜に知り合った。　皺の入る顔は痩せこけていて、白髪の多い髪は短くキツイ天然パーマが入る。　何処か飄々とした人物であり。　ウィリアムとの相性がいいのか急に仲良く成った。　何でも、ラビン氏もマーケット・ハーナスの首都に向うらしく。　それならと、一緒に旅をしている。

さて、先頭を行く二人は・・。

気の抜けた顔を、照り付ける太陽に向けたスティールは。

「ロイム先生、水くれ」

チビチビと飲んでいたロイムは、まだ昼下がりで水場までは長いのにと思い。

「嫌です。　スティールさんだって朝にたっぷりと汲んだじゃ有りませんか」

両サイドの腰にぶら下った水袋を萎ませているスティールは、ギリリとロイムを細めで睨み。

「鎧がアチ～から、直ぐに喉が乾くんだよっ！！！　腑抜けの魔法遣い様にはわかるめぇ～に」

ロイムは、最近色々と修羅場に行き当たり。　少しづつ強く成り始めて居るのか、プイっと横を向いて。

「ど～せ“腑抜け”ですよぉ～だっ！！！　腑抜けは、お水がいっぱい必要なんです～。　絶対に上げませんよ～だっ！！」

スティールは、クワっと目くじらを立てて怒り出し。

「おんどれコノ野郎ぉ～、アハメイルじゃ～女3人相手に遊び回ってた絶倫エロガキがっ！！！」

言われたロイムも、怒った顔でスティールを見て。

「好きで成った訳じゃナイよおおっ！！！！　最初は、自分がその気だったクセにっ！！！！　ウィリアムと二人で、助けた女性の所にバックレてた変態に言われたく無いよっ！！！！」

スティールは、歯軋りをして。

「なにおおお～、この生意気なガキンちょがあああっ！！！」

その二人の喧嘩を、止める素振りも見せないクローリアは、引き攣った笑顔で。

「また・・・ですか・・。　今日で・・何日目？」

横で、必要な事以外にエネルギーを使いたくないアクトルは、完全に二人を見ずに。

「４日目だな」

ジュリーの事件を終えたウィリアムは、休む間も無くして旅立った。
アハメイルに居たくなかった。

アクトルは何も言わないが。　クローリアやロイムが旅出てから良く口にするのは。

“ウィリアムとスティールさんって、仲が良くなったね”

である。　何気にウィリアムにライバル意識を見せたスティールだが。　あのジェリーの一件以来はいい仲間に成った。　スティールは、人には見せぬが。　心ではウィリアムに感謝しているのであろう。　ジェリーは死んだ。　だが、安らかに・・心残しを減らして死んだジェリーの最後の笑顔を、スティールは忘れていない。

激しく掴み合ってお互いの顔を引っ張り合う二人を見たウィリアムは、ラビン氏と二人で大笑いし。　擦れ違う馬車の御者に見られて

もお構いなしだった。

さて、世界で最も大きく、人口の多いフラストマド大王国の交易大都市アハメイル。　そして、商業で成り立つ商業国家マーケット・ハーナスの首都へキサフォン・アーシュエルは、幅広い整備の行き届いた街道で繋がっている。　この馬車で４日。　徒歩で８日から１０日の間の道のりは、お互いの両国の兵隊や傭兵が巡回する警備区域。　目立った強盗事件や盗賊の被害は少なく。　安全な道だ。

しかも、途中にブルジョミンと言う国境交易都市も有り。　旅人には旅のし易い道の一つだった。　ただ、夏場に入ると毒虫や毒蛇の被害は多く。　寝る時に虫除け・蛇避けの香を焚くのは必要らしい。

少し乾燥する草原に、疎らに広がる木々が街道の周辺の様子だが。　時折腹を空かせた黒ライオンや疣ハイエナがうろつく事も有るらしく。　身を守る物や、数人で固まって旅する様にと呼び掛けられるのもこの時期らしい。

これから夏本番と云う季節の中で、喧嘩するロイムとスティールを持つウィリアムのチームは益々と暑苦しい限りだ。

この日の夜は、国境交易都市のブルジョミンに到着した一行。　スティールは、宿の手配も中途半端に、パブに飲みに消え。　残りの５人で東屋と成っている木造レストランにて楽しく食事した。　夏でも、魔法を使用する特別なアイテムの御蔭で、冷たく食物を保存できるこの最近。　レストランでは、随分と季節の物を長く客に提供出来る様に成ったらしい。　一昔は、痛んだ物でも、火を通して客に出していたが。　最近ではそんな店も少なくなって来て、味がいい。

だが、次の日。　旅立ってから夕方。　雨が訪れてからは、首都へキサフォン・アーシュエルまでの間は断続的な雨と曇りの連続で。
　スッキリしない旅は、丸々5日を掛けたノンビリ旅に成ってしまった。

ーーー

から国土中央までに、首都を中心として扇状に点在している。　北側は森と沼地と草原が入り乱れて広がる大自然地帯なのだ。　大体、近隣の村や町は、首都から離れても3日程ぐらいまでの場所に在る。　だから、他国から来る荷馬車と、毎日出荷される荷馬車がこうして渋滞するのだそうな。

アクトルは、過去に数度この光景を見ている。

「何時見ても動かない行列だな～。　酷い時は、コレが深夜近くまで続くらしいゼ？」

スティールは、前髪を掻き上げて。

「確か、年の暮れ間際に行われる祭りの時は。　祭りが始まる3日前から、人や荷馬車の行列が絶える事は無くなるそうだ」

ウィリアムとロイムは一緒の口調で、スティールのその薀蓄の後に続けて。

『ベットで、女が教えてくれたよ』

スティールは、格好付けてそのセリフを云う筈だったのに先を越されてしまい。　シメを言えないままに硬直した。

「クックック・・・」

苦笑いで笑いを堪えるクローリア。

「アホウ。　底が浅い」

と、冷めたアクトル。

「あはははは、キメ台詞を奪われましたなぁ」

他人のラビンにまで笑われたスティールは、額に青筋を浮べ。

「お前等・・・俺のキメを取るなよ・・・」

ウィリアムは、前を向いて並ぶ荷馬車の脇を通りつつ。　石を刳り貫いたトンネルが等間隔に隙間を見せて繋がる道を歩きながら。

「だって、もう聞き飽きました」

ロイムは、杖を地面に付けて。

「底があっさ～い」

スティールは、怒りを含めたニヤケ顔でロイムを見ると。

「おめえ・・、若い女みたいな言い方するんじゃねえよぉぉ・・」

生じ可愛いロイムは、時々女の子の様に見れる。　それがまた可愛いから、スティールは癪に障る。

「フン」

そっぽを向いたロイムを見下すアクトルは、クローリアに寄って。

「なあ、アイツさ。　最近、なんつか～・・。　物怖じしなくなって来たな」

だが、毒虫を見ては大声を上げてアクトルに飛び付き。　毒蛇の群れを見てはお漏らししたロイムを見ているクローリアは、その見解にはイマイチである。

「そ・・そうでしょうか・・。　スティールさんに、慣れて来ただけかと・・・」

二人の目の前で、飛び掛ろうとするスティールを、杖で牽制するロイムが真剣に睨み合って歩いていた。

首都のヘキサフォン・アーシュエルは、【六角の理想郷】と云う意味があるらしい。　国的は新しい国だが、世界に置ける経済的な影響力は強い。

ウィリアムに窘められて、大人しく成った二人だが。　荷馬車の列を追い越してゆく冒険者や旅人は目立つ。　中には、家族連れも見えるし。　随分と大所帯の冒険者達の一団も見かけた。　荷馬車に紛れて、渋滞に巻き込まれた乗用の馬車から人が出て来ている光景も。

「・・・」

「あ・・」

お人形の様な可愛らしい女の子が、ピンクのドレスを纏っていた。

碧い目の女の子が、ロイムと目が合ってニッコリと笑う。　ロイムも、顔を赤らめてお辞儀を仕返す。

その女の子の乗った馬車を通り過ぎてから。

「ロイムく～ん」

スティールは、ロイムに絡む為に顔を見せる。

「知らないっ」

ロイムは、パッと顔を逸らす。　何故か、顔が真っ赤かである。

ウィリアムは、歩く中で荷馬車から離れて先に首都に向う冒険者達がチラホラ見えるのが気に成っていた。　だがら、ロイムに絡み出すスティールの腕を触り。

「スティールさん、聞いていいですか？」

ロイムから離れたスティール。　顔を平静に戻し。

「ん？」

「荷馬車の御者からお金を貰って離れる冒険者みたいな人が居ますが・・・。　護衛ですか？」

「ああ。　馬を扱える冒険者は、以外に好まれる。　もし、御者が病気や異変に見舞われても、雇った冒険者に任せられるべ？」

「ああ・・。　毒虫とか夏風邪とか、色々有りますモンね」

「おう。　流行り病なんかが流行してる時は、馬の技術に足して薬師の技術も荷馬車の護衛に好まれるぞ。　あ～、何ならブルジョミンで請けて見れば良かったな」

頷くウィリアム。

「ですね。　また陸路でフラストマド王国に戻る時は請けましょう。経験して損は無いです」

スティールは、アクトルと見合ってから。

「俺やアークはどっちの経験も薄いからな～。　ウィリアムを考えると、仕事の幅は広いぜ」

アクトルも、今まで護衛の仕事は傍目から見ているだけの立場だった。　だから、

「確かにな～。　最近、地道な仕事してないしな～」

と、金を受け取る護衛をして来た冒険者を見た。

他愛無い雑談交わし、一行は首都の入り口である門前に来た。　大きく壁に画かれた船の模型の様な石像が壁に立て向きで、門を入る者に後尾を向けている。　その船に丸で乗り込む様にして門が開かれ、トンネルが続く。

ウィリアムは、その面白い門を見て微笑んだ。

「“渡る先に世界が有る。　未知を求めて船旅は始まった”。　オルボレンノの詩の一説の様ですね」

ウィリアムが何を言い出したのか解らずに、ポカ～ンとするチームの皆。　なのに、ラビン氏だけはウィリアムの脇に来て。　先に門

に入る人々を見ながら。

「教養があるの～。　マーケット・ハーナスの国を作るべくして船旅に望んだ商人オルボレンノの詩を知っとるとは」

ウィリアムは、門の船の石像を見上げて。

「確か、オルボレンノと云う人は、自由な商売が出来ずに貴族が利権を独占する社会を嫌い。　誰の土地でもない未開の土地を目指して旅に出たんですよね。　そして、西の大陸や東の大陸を歩いて、遂にこの地に辿り着いた」

ラビン氏は、何時ものさばけた雰囲気では無く。　幾分気持ちを込めた瞳で門を見上げ。

「そうじゃ。　貴族の支配の無い。　新たな国を作ると此処に船を停めて。　まだ未開の森林を切り開いて村を作った。　彼は、村を作って死んだが。　その子供達に意志は託されて、貴族の専横から逃れて来た商人の拠り所と成ったその村は、何時しか町と成り。　そして、都市と成り。　フラストマド大王国の聡明王ブリュナーに認められて国として独立した」

感慨深く語り合う二人の世界に、ロイムは呆れて。

「後でいいじゃん・・・」

アクトルは、腕を組んで。

「男のロマンだな～」

スティールは、横を向いてボソッと。

「女だらけのハーレムが作りてえ～」

クローリアは、微笑ましく思える。

「男性って、何時も夢を見ている子供の様な所がありますね」

スティールは、クローリアにいきなり近づいた。　エロい手つきで肩を掴み、流し目で・・・。

「クローリア、俺の夢をベットで聞いてくれるか？」

呆れ笑いのクローリアは、本気で杖を握り締めた。

“ゴキンっ！！！！！”

何か硬い物を殴る音が響き。　門に向って来た人々は、デカイ瘤を作って倒れている男を目撃する。

「おおお・・・ホ・・ホンキかあ・・・」

スティールが、呻くのを見ないロイムは無視して。

「ヘンタイ」

アクトルも、見る気も起きずに。

「進歩なね～な～」

ウィリアムとラビン氏は、全く眼中に入れてない様子で。　マーケット・ハーナスの歴史を感慨深く話し合う。

「なにあれ・・」

「さ～、おかしい人らしいゼ」

「陽気かしら・・・」

「まだシーズンじゃないさ」

「先駆け？」

「かも・・」

・・・・。　スティールの行く所、人目を忍ぶのは無理な様だ。

さて、そんな入り口から入ってトンネルを抜けると・・・。　外観の様相が派手に見える建物の街並みがいきなり目に飛び込んで来る。　屋敷なのに、森ををイメージした緑の塔を束ねた様な建物や。大きな大樹をイメージした館などが見える。

「うはあ・・・、スンゴイ景観だあ」

ロイムは、魔法遣いや芸術家が多く住む場所には、派手に変わった屋敷が立ち並ぶと聞いていただけに嬉しい。

レンガ敷きの大通りには、左右の端に仕切りの為の細い槍形が柵状になって大通り並びに面し。　出店が、その柵を背にして道脇のベンチの横に店を広げている。　更に、二重の柵の向こう側には、カ

ラフルで形様々な屋敷が左右に広い庭を持って存在する。
ウィリアムも、変わった建物ばかりに目を奪われ。
「芸術区から入ったみたいですね」
ラビン氏も頷き。
「この街並みを見ると、“訪れたな”と思うよ」
このヘキサフォン・アーシュエルには、六角の各方面に出入り口の門が存在し。　この西側下の海に近い門は、最も華やかな街並みの芸術区に入る。　建築家とデザイナーが美しさと奇抜を競い。　博物館や金持ちの自宅、学校や孤児院などを作るときにその腕を振るってこう成ったとか。　このマーケット・ハーナスでは、ストリートチルドレンが居ない唯一の国だ。　孤児は、商人達の出す助成金で育てられ。　きちんと教育も受けれる。　中には、親が育児を放棄する例も在るそうだが。　それでも分隔てなく皆一緒に育つらしい。
孤児を放置すれば、犯罪の温床と成るのを理解する商人ならではらしい。　寧ろ、その孤児から偉大なる魔法遣いも生まれているし、有名な商人も。
“希望を消す事は罪である”
初代、マーケット・ハーナスの商人王と成った者の言葉だそうな。
そうゆう精神が、この街を強力に支える力と成っている。　アクトルもクローリアもロイムも、街並みに目を奪われていた。

その時だ。　ウィリアムが、そっとクローリアの横に移動する。

「・・・」

スティールも、クローリアの後ろに移動し、横目に後ろを見た。

「あっ・・・」

みすぼらしい雰囲気の中年冒険者と見受けれる男が、クローリアに近付くのを阻まれて驚き道の向こう側へ。

「フン。　セコイ」

と、スティールがクローリアの背後からアクトルの横に移動し。

ウィリアムも、頷く。

冒険者の中には、性格が捻れてスリを覚える者や。　力ずくで女性の身体を触る輩が居る。　ウィリアムもスティールも、恐らくはそんな冒険者を多く目にしているのであろう。　急激にクローリアに近付く男の気配を感じたのだ。

本人は、全く気付かずに街並みを見ている。

さて、そんな華やかな通りを行くと。　花柄のレリーフが美しいアーチゲートを潜る。　行き止まりは、巨大な船を噴水の上に置いたモニュメントの六角形をした大公園。　草花に囲まれた公園には、幼い子供が母親と散歩に来ていたり、老いた老人達が杖を手にベンチで座って話していたり。　噴水の日陰には、相手を待つのか若者がソワソワした素振りで周りを見ていたり。

道なりに入って来て、此処に来る冒険者達は街の地図に向う者在り。
目的が在るのか、南側のゲートに向う一団や。　荷馬車に連れ添って、北東方面のゲートに向かう者達も居る。　行き止まりであるが、各方面に向かうゲートはある。　6方に分岐する交差点が、広い公園に成っているのだ。

此処で、ラビン氏がウィリアムの前に出た。

「ウィリアムさん、此処でお別れ致しましょうか。　行く所も在りますから」

「あ、はい。　此処までご一緒出来て嬉しかったです」

ウィリアムは、素直な笑顔を見せる。

ラビン氏も微笑み、皺の多い色黒の顔をスティールやアクトルにも向けて頭を下げ。

「皆さん、どうもありがとう」

アクトルは、背筋のしっかりしているラビンを見て。

「じゃあ、達者で」

スティールは、腕組みすると。

「残念だ。　最後に一緒に飲みたかった」

慇懃に挨拶をするクローリアやロイムと握手して、ラビンと云う老

人は北東側に消えて行く。

此処で、初めてウィリアムはラビン氏の行く背中を見つめて。

「随分と不思議な人ですね。　背中に目が在る様だ・・。　誰かに狙われて居るのかな？」

ウィリアムの顔を、全員が見た。

スティールは、踏み込んで。

「どうゆう事だ？」

アクトルは、去って行くラビン氏の背中を細めた目で見て。

「犯罪者か・・？」

すると、ウィリアムは目を瞑って首を左右に。

「いえいえ。　色々ですよ。　仇持ちかも知れませんし・・、誰かに追われているのかも。　暗殺者は、その家業から足を洗ったら同じ街に長居しないと云います。　たしか、薄汚い殺し屋などの犯罪組織から逃げた人は、何時も命を狙われるとか・・。　あのラビンと云う方は、何か理由が在るんでしょうが・・・、凄く辺りの気配を察している」

言葉の最後で、ウィリアムは人ごみに消えたラビン氏の影を追った。

スティールは、消えたラビン氏の行った方を見て。　荷馬車が行き交う光景を瞳に映しながら。

「そんなモンかね」

ーーー

さて、そんな緩やかな昼前。

「な～、ウィリアム」

アクトルが、コソコソ歩くボロ姿の冒険者などに目を移しながら声を掛けた。

「ハイ？」

「あ～、さっきのラビンってオッサンの事だが」

「はい」

「お前、何で何かから逃げると思うんだ？」

アクトルは、ウィリアムが暗殺闘技を使うのは、どうしてか・・・。

其処が気に成ったのである。

潮風が路地に吹き込み、何処かの店から出されたいい匂いを連れて来た。

ウィリアムは、路地の十字路で左右を見たりして飲食店か宿を探しながら。

「俺がまだ１２・３歳の頃です。　良く手伝いに行っていた酒場に、新しい働き手が来ました。　たった４ヶ月だけ・・、店で働いて消えた男性です。　歳は５０近い感じで・・・凄く暗い印象でした。

でも、その人の作るカクテールは・・哀愁の味わいがするホンモノでした」

仲間の皆は、ウィリアムが語り出した話に耳を奪われた。

その男性の名前は・・・仮にジョーとしておこう。　その中年の盛りも終りに近いジョーは、サッパリとした顔付きが本当に暗い男性だった。　無口で、必要な事以外は気に留めない。　だが、その作る酒の美味さに客が集まった。　身のこなしもスマートで、働く女性からも受けが良かったが。　まったく浮いた素振りは見せない男性だった。

ウィリアムは、我先から人の過去を聞かない若者で。　相手を見て付き合い方を決める。　要領がいいから、そのジョーが次に何をして欲しいか解る。　語らない分、動きを見ているだけでパターンで覚えた。　手伝うのに、会話を必要としないウィリアムとジョーは、ジョーが消える一月前には仕事では絶妙なパートナーに成っていた。

さて、ウィリアムは毎日では無いが。　酒場に顔を出した時には、必ず店先でジョーを見送ってから帰る。　どんな日でも、異常なまでに辺りに警戒をして行くジョーが、不思議に思えたのだ。

そして、あの日・・・。　そう、ジョーが姿を消す前の日の夜である。

その兆候は、その日に在った。

ウィリアムは、夕方に酒場に出向くと。　何時もは静かに澄ましているジョーが、妙に客へと目を配るではないか。　しかも、時折。　冒険者風の客や、少し生活の荒んだ様子の見える客、気配が不気味で何の仕事をしているのか良く解らない様な怪しい客には、失礼

に囚われてもしょうがない様な視線をチラリと見せる時が・・・。

“何か在る・・・”

ウィリアムは、そう直感した。　この時、もうウィリアムはスカウトとしての暗殺技術を見に付けて居たのだろう。　初めて、ジョーに興味をそそられて真夜中のジョーを尾行したのだ。　いや、様子の違うジョーを心配して、そうしたい衝動に襲われたと云っていいかも知れない。

その日は、曇り空で月明かりも星明りも無い蒸し暑い夜中だった。

酒場を後にしたジョー。

それを尾行するウィリアム。

ジョーが何処に住んでいるのか・・・。　ウィリアムは、何も知らない。　尾行するジョーは、先ずは港方面に向かい。　細い路地を縫う様に中央公園へと戻る。　ウィリアムは、後ろから尾行していて。　ジョーの背中に目が二つ付いているのではないかと思うほどに背後へ集中しているのを感じた。

“ホンキでも、悟られるかも・・・”

ウィリアムは、汗などあまり掻かない方なのに。　その時は、ねっとりとした油汗を額に浮かべた。　尾行に遣う神経の張り詰めた様子が、其処に出ていたのかも知れない。

さて、尾行は続き。　ジョーがスラムの入り口に差し掛かった時だ。　俄に建物の間から膨れ上がる様な殺気がジョーを取り囲む。　ウ

ィリアムが、ハッとした瞬間。　黒尽くめの武器を手にした曲者の集まりが、四方八方からジョーに襲い掛かったのだった。

秘かに忍ばせていた短めのショートソードを、杖に仕込んでいたジョー。　闇の中で、決闘が始まった。

ジョーを襲う相手は、誰もが覆面をしている。

ウィリアムは、この相手方も殺しのプロで、腕には覚えの有りそうな一団と看破。　直ぐに、スラムの路地に落ちるゴミを拾って、隠れながらにジョーの手助けをするべく曲者達に投げ付けた。

ジョーが斬った相手は、８名に及び。　斬られて手負いに成った４名は逃げた。　その間に、２人・３人の気配は戦わずして消えている。

そして、戦いを終えた後・・・、ジョーは何者かが助太刀したのを感じていて。

“何者だ・・。　俺を助けるのは・・”

と、小声を。

ウィリアムも、尾行処では無くなったので姿を現した。

ウィリアムの姿にジョーは驚いた。　まだ、当時のウィリアムは１２・３歳の少年なのだ。　だが、ジョーはもうその時点でコンコース島から離れる決意をしていたのだろう。　ウィリアムに、礼とばかりに昔話をしてくれたとか。

ウィリアムは、此処まで語った処で。

「いい感じの宿が在りますね。　風呂と食事・・出来るみたいです」

と、低い建物の集まる変則な十字路の角に伸びた、８階建ての黒いレンガの外装をした宿屋を指差した。

凄まじくいい所で話を中断され、スティールはウィリアムににじり寄って。

「宿なんかいいからつ・づ・きっ！！！！」

ウィリアムは、ぶりっ子のように。

「お腹減ったぁ～」

スティールは、両手をワナワナさせて。

「んな言い方すんなっ！！　お前は美人局して夜のベットインを伸ばす飲み屋の女かっ！！！」

アクトル・クローリア・ロイムは、スティールの引き合いが笑えない。

「・・・・」

思わず、ドヨ～ンと半笑い。

仕方なく。　いや、宿を探していたのだたからと、その宿に入って値段を聞いた。　一泊、風呂に入る自由の値段で３５シフォン。

食事は、レストランにての別途料金だとか。　ウィリアムは、女性のクローリアを個室にして、残りは一部屋に。

話の続きは、食事の間でと云う事に成った。

ｔｈｉｒｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ（後書き）

次話、予告。

宿に落ち着いたウィリアム一行は、ウィリアムの語る話の後に昼下がりの午後へ。　仕事を捜してみようと向うウィリアムとクローリアは、斡旋所で変わった人物と出会う。

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

いやはや、なんやかんやと更新が遅れて、ウィリアム編が１２月に食い込んでビビっています＾＾；

年末年始は、ショットガンの様に毎日更新しようかと考えてたのに・・・、大丈夫か？　と、自分に言い聞かせて、ウィリアム編をぶっ飛ばして掲載して行きます＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

third episode

まだ少年のウィリアムは、暗い真夜中で物陰からその人物ジョーに姿を見せた。

相手は、ウィリアムの現れに驚き。　そして、納得した様でも在った。　この場は危険で、長居は出来ない。　ジョーは、ウィリアムを連れて自分の隠れ家に向ったのである。

スラムの地区でも、最も寂れ。　家と云うより、壊れた佇まいが密集する無法地帯の一角。　壁が半壊した家の脇の地下。　其処がジョーの仮住まいだった。　空のワイン樽を退けて、薄い板を退かせば現れる石の降り階段を降りた。

ジョーは、ウィリアムに木のコップで水を出し。　一部屋しか無い間取りの中央にある足の壊れたテーブル前に座る。

渡された水。　ウィリアムは、その中に睡眠の薬が混入されているのを嗅ぎ取って、ジョーが姿を消すのだと悟った。　もう、薬師や医師の元に手伝いに行っていたウィリアムの鼻は、薬には鋭く研ぎ澄まされいた。

その夜のジョーは、今までに見た事の無い程に饒舌だったとウィリ

アムは記憶している。　丸で、別人の様だった。　そして、彼は追われる理由を何故か教えてくれた。　その真意は、未だにハッキリしない。

ジョーは、何処かの国の貴族の家に生まれたらしい。　名門で、家柄は古く。　その国の重臣に列席するほどだから、大した家なのだろう。　大人数の兄弟が居て、彼はその末っ子だったらしい。　やんちゃで、楽しく過ごした青年期までは何処かの貴族の娘を貰って、貴族の分家として生きる方向だったとか・・。

だが、その転機は運命的に訪れた。　彼は、ある公爵家の令嬢と恋仲に成ってしまった。　何事にも恐れを知らなかった若きジョーは、その娘を口説き。　出逢ったその夜に体の契りを結んでしまったのである。

所が、その令嬢にはすでに婚約の相手が居た。　別の国の公爵家の男性だ。

そして、最悪の事に。　その愛した令嬢は身篭った。

婚約をしていた相手の男は、見ず知らずの男に肌身を許して懐妊したその令嬢に激怒し。　結婚をするならば子供を殺せと・・・。迫られた令嬢は、涙ながらに母親に成る事を強く望んだ。　そして、なんと婚約の破棄を申し出たとか。

だが、こうなると面目を潰されたその婚約相手の男は腹の虫が収まらなかったらしい。　その令嬢をかどわかし、幽閉して我が物にしようと企んだのだ。　破棄を認めず、書面で持って令嬢の周りの知人の爵位を賜る家に嘯いた手紙を送り。　令嬢が自分を騙したと追い詰めようとする。

ウィリアムは、その話に。

“何故、そんなに婚約相手の男性と距離が近いのでしょうか？　話からして・・、どうも同じ国内に居るような気がしますが・・”

と、聞くと。

その、令嬢と政略結婚の婚姻を結んだ相手は、親善大使として他国からその国に来ていた公爵家の一人息子だったらしい。　ジョーは、その男の顔を知っていた。　何故なら、その男の配下として働く者に、自分の兄が居たからだ。

ウィリアムは、其処まで聞いて。　令嬢とジョーの出会いの連想が出来た。

さて、ジワジワと令嬢家を追い詰めて、その女性を我が物にしようとするその男を。　ジョーは、闇討ちにして斬った。　幼い頃から、元冒険者の開いた武道場で剣術を磨いたジョーは、仕官の道を自らの武術と教養で勝ち取れる才能が在った。　女性にもモテた方だし、その令嬢との恋も一瞬の迸りだけだったのかも知れない。

だが、困って自分に泣き付いた令嬢のお腹には、自分の子供を宿している。　ジョーは、男気と若き覇気に任せて殺してしまったのだ。

そして、ジョーは行方を眩ませた。

夜の犯行で、直接的に犯行を知る人は居ない。　ジョーの子供を令嬢が宿した事を知るのは、お互いの過程の極々身内のみ。　殺した男は、近々令嬢の懐妊を姦通罪として言い触らすと脅しに掛かって

いた。　まだ、方々にもそこまで言っていなかったのだろう。　証拠もすくないく、横柄な態度で敵も多い婚約者の殺人事件は、迷宮入りになり。　解決出来ない事件と成って埃を被った。

だが、その殺された男の母親は、諦めなかった。　ジョーの殺した男の父親は、婿養子の弱弱しい男なのだが。　その奥さんは、貴族の偉ぶった気質丸出しの気の強い女性で。　娘は何人も居たが、息子はその一人だけだったものだから。　殺されたと聞いての怒りは天地を揺るがす程だったらしい。

ジョーが逃げてから3年後。　最初の刺客が現れた。

もう、自分の故郷の在る大陸から離れたジョーに取って、3年もしてから刺客に襲われるのは驚きだった。　冒険者として、チームに溶け込んで居たジョーだったが。　仲間の皆に迷惑を掛けれないと、姿を消した。

そして、ジョーの逃亡生活が本格的に成った。

在る時は、寝込みを襲われて酷い怪我を負った事も一度や二度では無い。　転がり込んだ街で、隠れ蓑として働く飲み屋で女性と恋に落ちて悩んだ事も在ったとか。　結局、その恋も刺客に狙われて断念したらしい。

しみじみ語るジョー。

親善大使として来ていた男を殺すのにも、相当な葛藤は在ったであろう。

自分の兄の役目を潰し、罪人に成って家に恥を塗りつける結果に成

るし。　かと云って、親善大使の男の下に令嬢を嫌々行かせたとするならば、行かされたら最後子供は殺されるだろう。　何より、令嬢の家を潰して面目だけを保とうと考えた相手の男に、同じ貴族として憤った自分・・・。　全ての葛藤の中で、思い詰めた果てにして退けた殺人は、自分に全ての矛先を向ける代わりに。　令嬢を守る事を最優先にした意志だった。

ジョーは、最近。　コンコース島へ来る前に、自分の子供を見に行ったらしい。　母親に似た美女で、今やその国の第三王子の妃に成っているとか。

ウィリアムは、幾つか質問したが。　ジョーは、全てに答えてくれた。　殻を脱いだジョーは、確かに魅力の在る男らしい男性で。５０に届いた年齢と苦労が滲む顔は、大人の渋みが溢れていた。

危険の迫った中で、時間も経つのを忘れた二人。　だが、時間は朝まで待ってはくれなかった。

そう・・・、スラムの隠れ家も刺客に襲われたのだ。

ウィリアムは、不思議とジョーを助けたく成った。　刺客に襲われ、剣をかわすウィリアムは、ジョーを連れてスラムの一番危険なマフィアの敷地に逃げ込んだ。　当然、なんの許可も無く踏み込んで来た刺客達とスラムのマフィアの小競り合いが起こって居る間に、ウィリアムはジョーを逃がした。

それっきり、ジョーは姿を消す。

ウィリアムとジョーの事を知らないままに、刺客と小競り合ったマフィアは。　刺客達を裏の伝で指名手配した様で、ウィリアムの家

にその刺客等が来る事は無かった。　ただ、店からの帰りに、命を狙われた事は二度ほど在る。

コレは、仲間にも云えない話だが。　その二度ともウィリアムは相手を返り討ちにしていた。　殺してはいないが、もう反撃も出来ない身体に成っているだろう。

ウィリアムが、ジョーとの思い出を語った場所は、宿の地下でランプの明かりが栄える食堂。　ウィリアムと仲間の皆は、食事をしながらその話を聞いていた。　彼方此方から、冒険者達や旅人達などの話し声・・笑い声が聞こえる中。　静かにウィリアムは全てを語り終えた。

シメの紅茶を飲むウィリアム。　もう、前に出されたコース料理は食べ終わっている。

ウィリアムがサバサバしている語りで全てを語った後に。　スティールが、思ったままに。

「でも、結局は終りじゃ～ないんだろ？　その、いたちごっこはよ」

と、果汁の入ったグラスを持って聞けば。

「ですね。　依頼主の親善大使の母親が生きている限りは・・」

アクトルは、ウィリアムの今の年齢を考えるからに。

「だが、も～そのバ～サンも死んでるだろうさ。　下手したら、ジョーって男もな」

ウィリアムは、素直に頷いてそれを肯定する素振りを見せた。

しかし、ロイムは・・。

「ウィリアム・・、何で・・助けたの？　その人、人を殺したんでしょ？」

上目遣いにウィリアムを見る目が、少しだけ非難を含んでいた。

果汁を手にするスティールは、古い話にケチを付けても仕方無いと思う。

「おうおうセンセ～よ。　別に悪いヤツを殺った訳じゃ～無いし。古いお話だぜ？　それは、硬すぎる質問だ」

「・・・・」

クローリアは、微妙な思い出言葉が出なかった。

ウィリアムは、笑ってロイムを見る。

「もし、起きた国に居て出遭ったら・・・通報したかもね。　我儘で殺人を犯したんだから、罪は償うべきかも知れない。　でも、あの時の其処にそれは無意味だった。　逃げるあの人の苦労も考えると・・・、逃げ続ける生き方も罪の償いなのかも知れないと今は思う」

「う～ん。　そうかな～」

素直なロイムにしてみれば、まだ解らない所なのかも知れない。

だが、アクトルもスティールも、冒険者の生活が長い分だけ、その辛さを慮れた。

スティールは、グラスを置いて。

「安住の地は無いしよ。　まぁ～、自由も無いゼ。　派手に大手振って生きれない。　人目を忍んで、コソコソの生活だ。　死刑に成らないのなら、労働刑の方が楽だろ？」

アクトルは、苦笑いし。

「それは云い過ぎだろう。　だが、一応は罪を償ったと云う刑での贖罪を経て生活を許されるからな。　周りの目や陰口は有るが、罪を償えば赦される・・。　だが、追っ手が居る逃亡は大変だ。　逃げる方は“殺されるか”・・“逃げるか”・・しか無いからな」

ロイムは、真っ直ぐな目でアクトルを見る。

「自首すればいいと思う」

すると、アクトルは薄く苦笑った。

「出来ない時も有るんだ・・ロイム」

「う～ん・・・」

ロイムは、難しい顔に成った。

ウィリアムは、キリを良くしようと。

「ま、これは過去のお話ですよ。　さて、俺は斡旋所に出向いて見ます。　いい仕事有るか、見てきますよ」

アクトルは、懐の心配は今の所は薄いので。

「おう、俺は少し寝るわ。　昨日、スティールの鼾が煩くて寝れなかったからよ」

ロイムも、横目にスティールを見て。

「“ガオ～”って鼾してたよね・・。　モンスターじゃないの？」

スティールは、両手をニギニギさせて。

「だ・れ・がっ？！！」

ウィリアムは、テーブルにお金を置くと。

「では、行って来ます」

と、見たロイムとスティールは、言い合い合戦を始めて聞いていない。

「だってさっ！！！！」

「お前はよおおおっ！！！！」

辺りに居る客が何事かと見たり、ボーイが注意しようかと云う素振りを見せる中。　二人は顔を近づけて言い合う。

「仲がいいなあ～」

ウィリアムは、苦笑いで歩いて行く。

其処に、クローリアが。

「あっ、私も行きますっ」

と、急いでお金を出そうとする。

アクトルは、ウィリアムを気にしているクローリアはそうすると踏んでいた。

「おう、一緒に行って来な。　此処は、色んな店ばかりで楽しいぞ」

お金をテーブルに出したクローリアは、アクトルに頷いてウィリアムの後を追って行った。

杖を手に小走りで走って行くクローリアを見送るアクトルだが。

喧しく口喧嘩し出したロイムとスティールを見て頬杖を付いて。

「はぁ・・・。　何処までも飽きない奴等だ・・」

と、目を細めた。

ーーー

雲が幾分晴れた外は、人が多く賑わい出していた。　裏路地の様な宿から出たウィリアムは、クローリアを伴って大通りに出る。

「まあ・・・こんなに海が・・・」

強い風にフードを捲くられそうに成ったクローリアは、大通りに出て初めて凄く海が近いのを知った。

ヘキサフォン・アーシュエルは、大きく三日月形に凹んだ湾曲の丘に創られた街である。　ウィリアムとクローリアの二人が大通りに出れば、東西に伸びる大通りの南側一面に湾としての海が見えていた。　南側のレンガで出来た手摺りに寄れば、段々畑の様に街並みが港に向って降っているのが解る。

ウィリアムも、クローリアと並んで海と街を見た。　数多くの船が停泊する広大な港が小さく見えている。　湾を行き来している船は、目に余る。

「この通りは随分と上ですね。　まだ、港まで６・・７段は街並みを抜けないと行け無いようです。　凄いなぁ」

クローリアは、ふとウィリアムの横顔を見る。

（二人きりって始めてかも・・）

ウィリアムは、直ぐに大通りの店に顔を向けて。

「売ってる物でも見ていきましょうか。　他の都市と見比べてみた

い」

クローリアは、大きく頷いて。

「はい、リーダー」

と、突き出た胸の前に拳を固めて置いた。　良く、スティールやロイムがウィリアムにする軍人の敬礼ポーズである。

ウィリアムは、クローリアに苦笑いし。

「クローリアさんまでやるの・・。　ロイムかスティールさんに何か言われました？」

「いえ。　リーダーには、素直に従うのが基本です～」

クローリアが、こんな冗談を言うのは初めてだ。

ウィリアムは、仲間に対して気持ちが解れて来たのだろうと思った。

さて。　ウィリアムは、クローリアが自分に肩を並べる時。　槍を片手に、走る黒い服装の男性二人を見掛ける。

（ん？　役人さんかな？）

制服染みた服装だったから、そう思ったが。　東の方に走って行くのが見えた。

「人が多いだけありますね」

「え？」

クローリアが聞き返せば。

「ホラ、役人らしき人が走ってます」

「あら・・まぁ」

「事件の様ですね。　あの忙しい走り方は」

呆れるウィリアムに、クローリアは笑って。

「ウィリアムさんの出番ですね」

ウィリアムは、苦笑して。

「からかわないで下さいよ」

クローリアは、くっくっと笑った。

歩き出して、大通りに並ぶ店を見て回る二人。　果物などが木箱に入れられて売られている値段を見ても、然程に安い値では無い。だが、飲食店の数は非常に多い。　ただ、店がどれも色鮮やかに派手な表向きをしているのは確かだった。

商業国家のマーケット・ハーナスは、娯楽の場が異常に多いのが特徴だ。　舞台や音楽などの芸能は、大掛かりな舞台装置や魔法などでかなり派手やからしいし。　動物園・植物園に加えて、遊園地なる大人も子供も遊べる場所が有る。　世界でも、有数の観光地であり。　この国だけの特有な商品も多く。　特に、香水や鬘などのを

始めに、金持ちや商人などが沢山押し寄せる。

更に、季節により様々な催し物が開かれ。“世界歌詩祭”・“世界園芸祭”・“世界奇術師祭”などなどの催し物が開かれるし。４年に一度、“世界武術祭”と云う武道と魔法の闘技が行われ、世界中から魔法使いや剣士・戦士などが集まる時もある。

そして、その様々な催し物に合わせて、そう云った芸術などの腕を磨く場も数多く有る。武術の訓練の出来る武芸場・武道場や、詩小屋・見世物小屋・奇術小屋なども有る。様々な夢を追い求めて集まって来る人と、商人達の集まりがこの都市を生み出しているのだ。

「あら・・、歌を唄ってますわ」

クローリアは、歌声に顔を向ける。この大通りから、下の段の大通りへと行き来出来る階段が在り。その階段の脇に、ヴァイオリンを弾きながら慣れた唄い声を響かせる老人が居る。

ウィリアムは、老人の横に足の悪い娘さんが花を売って居るのも見つけ。

「横の娘さんの為にしているのでは？　唄っている方の顔を気にせず、花を売っている彼女の笑う姿を見る限り、お知り合いだと思いますよ」

「ああ・・・、ナルホド」

その歌い手は、御ひねり等を求めている様子は無く。人目を惹く為に演奏していると見て取れた。

更に歩けば、海側の低い壁沿いでは、所々で奇術師や吟遊詩人などが芸を披露している。

マーケット・ハーナスは、暗黒街などを持たない都市である。　暗い暗部も街には在るのだが、スラムの様な場所を作らせない工夫をしている。　しかも、芸術には税金を掛けないので、こうした光景を至る所で見られるのだ。

これが他の国の都市ならば、指定された場所でしか行えず。　また、場所の利用料を求められたり。　スラムや暗黒街では、悪い奴等が上前を撥ねる。

ウィリアムとしては、コンコース島で半殺しに遭った芸人などは数多く見ているだけに、非常に感心して。

「凄いですね。　本当に自由なんだ。　だから、誰もが人の迷惑に成らない場所を選んでやってる。　自由と規制のバランスがいいんですね」

街行く人々が、耳に目に芸を留めて。　気に入れば小銭を置く。その光景のなんと自然な事だろうか。

クローリアは、先程の老人の横で売っていた花を持ち。　ウィリアムと肩を並べて街並みを見て歩いた。

以外に広い街並みを、少しの時間で全て見るなど無理だ。　ウィリアムは、１刻ほど散策した所で露店の店主に斡旋所の在る場所を聞いて。　仕事を探す為に斡旋所に向かった。

大通りの途中から東部に向う道を選ぶ。　東部に向えば向うほどに、段々と落ち着いた石造りの店構えに移行する街を見た。　武器や防具などから、文房具・生活必需品・楽器屋・薬屋などなどの専門店が目立ち、飲食店や生物を扱う店は見えなく成った。　だが、宿屋や医者、小さい寺院などは混じっている。

ウィリアムは、太い通りから、脇道にに入る上に掛けられた通りの名前の書かれた看板を見ながら斡旋所へ向う道を探した。

ーーー

ウィリアムは、出入り口の上に彫られた文字を見て。

「ホラ、あそこに“協力会”との文字が。　此処ですね」

「あ・・・、です・・ね」

クローリアは、白っぽい色の壁に浮き彫りに彫られた文字が、少し朽ちて来ていたので見えなかった。

ウィリアムは、今し方建物から出てきて。　何やら話す直ぐ傍の冒険者の一団の話し声に耳を澄ませながら出入り口に向かった。

「ま～ったく、喰えねえ～オヤジだよな～」

「ホント。　たった今入って来た仕事の話でも教えてくれないってあるぅ？」

「でも、本当に役人が仕事を持って来るんだな～。　刑事活動や治安活動に冒険者を使って依頼にするって聞いてたが・・・、見るまでは半信半疑だったゼ」

「でっもさぁ～、殺人事件なんか冒険者に任せてど～するのって話っしょ？」

ウィリアムの脳裏に、先程役人らしき姿で二人組みが走って行ったのが連想された。

（まさか・・・、ありうるかな）

そう思いながら中に。

建物の中は、ロビーの様な場所であり。　左右に廊下が伸びて、その先には木の扉が見える。　殺風景なロビーだったが、右の“入り口”と書かれた扉から中に入ると・・・。

「あら・・・まあ・・・」

クローリアは、広々とした店内が、賑やかに彩られたパーティー会場の様で驚いた。　赤い絨毯の敷かれた店内は、中央に向かって緩やかにスロープと段で降りている。　中央には、円形のカウンターが有り。　細い身体の何者か解らない人物が、カウンター内真ん中の王座の様な椅子に座っている。　カウンターに集まった冒険者の相手を直接しているのは、若い手下の様な無表情の者達二人だ。

ウィリアムは、建物の四隅に置かれたドリンクバーや、軽い食事のできる物を売ってる場所と。　テーブルや椅子に観葉植物の置かれた公園の様な様相を見て呆れた。

「屯（たむろ）する場所を許容してるんですかね」

若い冒険者二人が、デートしてるみたいに向かい合って木の器に注がれた何かを回し飲みしている。　他の国の斡旋所は、冒険者が仕事を求めてごった返す活気が溢れるが。　この斡旋所は、中央のカウンター周り以外は、室内公園の様な雰囲気がして、何処と無く冒険者の集まる寡（やもめ）た感じが無い。

クローリアとしては、明るい雰囲気で楽師の奏でる音楽まで流れるのには好印象である。

「雰囲気はいいです。　入り易いと思いますよ」

ウィリアムは、殺伐とした中でも生きて来た生い立ちからか、何となくそれが逆に味気ないと思いながらも。

「ま、女性や少人数のチームでも居た堪れ無いって事は無さそうな場所ですかね」

と、カウンターに向って歩き出した。

観葉植物の鉢植えを避けて、ガヤガヤと人が行き交い話し声が立ち上る中央円形広場。　なだらかな降りスロープの床を数歩降りれば、踊り場の様な幅の広い段差が2段。　そして、まだスロープの床を数歩で、今度は段差が3段で底に下りる。

さて、金属の手摺りから手を離して降りたクローリアが辺りを見て、ガヤガヤと会話する冒険者達を見回しながらウィリアムと並んで歩き出した次の瞬間。

「あっ」

小声を上げたのは、誰かの背中にぶつかったからだ。

「ごっ、ごめんな・・・」

見上げた背は、ウィリアムの背中だった。

「あ・・え?」

驚き戸惑うクローリアを他所に、ウィリアムは凄い至近距離で何者かと対峙していた。

「・・・、これは、失礼・・。　君、チョットやるね」

ウィリアムと対峙する男性が声を出す。

「？」

クローリアは、何事かとウィリアムの脇から前に顔を見せると・・。
　ウィリアムより少し背の高い男性が立っていた。　純白のスーツ姿だが。　スーツの上着がコートの様に成っている。　胸元には赤いバラの花とハンカチが添えられていて。　白い上着やズボンには豪勢なドラゴンの刺繍が金銀派手やかに。

その男性は、クローリアに笑顔を見せて。

「ご機嫌宜しいですかな？　麗しき僧侶様」

と、恭しい礼をした。

クローリアも、ウィリアムの後ろに少し隠れる形で頭を下げて。

「これはご丁寧に」

と、頭を下げる。

白く並んだ歯並び、化粧をしている様な白目の肌艶、少し鋭い瞳に高い鼻。　何処かの貴公子ではないかと思われる見目麗しい若者がその男性だった。

ウィリアムは、目礼だけして。

「何か御用ですか？」

と、その男性に尋ねた。　その男性は、右手にステッキを持っている。　本物のクリアレベルの高い水晶の大玉が、杖先に付いている。　魔法遣いの様だ。

美しき顔の男性は、ウィリアムに大きく礼を見せて。

「これはこれは、ご紹介が遅れまして。　私は、冒険者で、チーム“エンゼルフェザー”のリーダーのヒュリア・グラスナータ。　麗しき僧侶様と御近づきに成りたいと思いましてね。　失礼を致しました」

ウィリアムは、素直に。

「不躾に唇を奪うのは本当に失礼ですね。　貴方ほどの容姿と教養が在るなら、正しい態度で臨めば必要の無い無礼だと思いますが？　紹介をされた以上、此方も。　俺は、チーム“セフティ・ファースト”のリーダーで、ウィリアムと云います。　此方は、仲間のクローリアさんです」

ウィリアムは、態々“教養”の行を言ったのは。　“出る処出てるんだからしっかりしろよ”と云う皮肉を込めたのである。

一方。　紹介されたクローリアは、頭を下げながらヒュリアから目を離せなかった。　目を奪われたのでは無い。　ウィリアムの話で、警戒したのだ。

一瞬キョトンとしてから、フッと破顔させたヒュリア。　ウィリア

ムに、非礼を詫びる様な一礼をしてから。

「これは恐れ入った。　私のしようとしていた事がバレていたとは・・」

と、クローリアに優しそうな柔らかい笑みを向けると。

「クローリアさん。　お見受けするに・・・田舎チームの一員でいらっしゃる様だ・・・。　貴女の様な美しい方が・・・、こんな田舎臭い方々とチームを組んでいるのは、どうみても些か陳腐の様な気が致します。　是非、私らのチーム御出で頂けませんか？　ご安心を、ちゃんと仲間には女性も居ますし。　世界に羽ばたくのも約束致しますよ。　楽しい冒険の毎日を、私と愛を育みながら共に生きてみませんか？」

歯の浮きそうな・・・、いや抜けそうなセリフを聞いたウィリアムは、横を向いて。

（なぁ～んだ・・、勧誘か・・・。　それなら、俺が細かく言える立場では無いかな）

と、黙る。

クローリアは、いきなりの話に困った。

「あ・・あの・・ウィリアムさん・・」

助けを求める様にウィリアムを見た。

ウィリアムは、クローリアを見て。

「思うままに返事をされたら如何かと。　ヒュリアさんも、クローリアさんの本心をお聞きしたいでしょうから。　素直に云っていいですよ。　俺のチームみたいに、一瞬で巨額の借金を作るなんて事は無いと思いますし」

つい２０日ほど前までは、大型船2隻を沈めて巨額の借金を抱えたウィリアム達である。　今思い出しても、シャレに成らない苦笑話だ。

さて、チームとは、結束の集まりであって。　縛り付ける集まりでは無い。　チームに入るのも出るのも、基本は個人の自由だ。　ウィリアムは、無礼を赦すのはしないが、個人の自由を奪う気も無い。

こうゆう話は、誘われた個人の問題になる。

クローリアは、邪気の無い様なヒュリアの顔を見て、ハッキリと云う。

「真に申し訳御座いませんが。　お申し出はお断り致します」

ヒュリアは、口元を綻ばせ。

「柵（しがらみ）ですか？　チームとか、恋人とか？」

すると、クローリアの顔が少し沈んだ。

「いえ。　貴方の様な方は、信用できません。　平気で、他のチームから人を引き抜く様な方は、嫌いです。　しかも、顔でどうこう云われるのは、正直もっと嫌いです。　私は、自由の意志でこのウィリアムさんのチーム入りました。　ですから、抜けるつもりは有

りません。　ごめんなさい」

ウィリアムは、クローリアの横顔に陰りを見た。　何か、生理的に拒絶する様子を窺えたのである。

其処へ、か細い女声の様な響きで。

「ヒュリア、いい加減にしないかい。　お前の腕で、世界に羽ばたけると本気で思ってるのかい？」

ウィリアムは、その声を出したのが、あのカウンターの中央の玉座に坐る主らしき人物だと見て。

（女性？　さっき、外では冒険者の人たちが“オヤジ”とかなんとか云ってなかった・・・？）

理解に苦しんだ。

円形カウンターの中央に置かれた玉座の様な紫色のソファー。　其処に座るのは、真っ白い燕帽子を被った細身の色男風の人物だ。　白粉でも塗っているかのような肌に、目元鼻元は燕帽で隠しているが。　右目だけは見えている。　刈り上げた項が少し見えて、髪もブラウンカラーながらに長くは無い。　男だと思っていたのに、声の響きは明らかに女声である。

ヒュリアは、カウンターに振り向いて。

「マスターさんは、人の素行にまで口出すんだね。　そんなの、規定に無いでしょうに」

すると、ウィリアムはヒュリアの脇を通り過ぎながら。

「斡旋所の主は、冒険者達の規律を乱れを窘める許しを受けているハズですよ。　横暴な行動や、チームを無闇に壊す様な言動に注意するのは極自然な事です。　それも解らないのに、冒険者遣ってるんですか・・・。　懐が見えますよ」

クローリアも、態々ヒュリアの反対側にウィリアムを迂回して周りカウンターに向った。

「おいおい、ヒュリアがバカにされてるゼ」

「ほお～、そいつはおもしれえ～」

周りの冒険者達も、ザワザワとヒュリアとウィリアムの様子に注目し出した。

奇抜なシースルーの黒いベール服に身を包み。　玉座の上に女坐りした主は、興味をそそられた瞳でウィリアムを見て。

「随分と詳しいね」

ウィリアムは、笑う素振りも無く。

「元、少しお手伝いしてましたので」

頷く主は、長い煙管を取り出してタバコの用意をしながらに。

「チーム名は、“セフティ・ファースト”って云ったね？」

カウンター前で、主らしき人物と対峙する形を取ったウィリアムは。

「はい、リーダーのウィリアムと云います」

男だか女だか解らないその人物は、シャレたピンク色のガラス瓶に似せたグラスランプの火で、優雅に気だるい手つきでタバコに火を付けてから。

「まだ、結成して一月程しか経ってないチームだね」

ウィリアムは、頷き。

「ですかね。　月跨ぎなんですが、日にち的日数では、一月も無いかもしれません」

この世界は、一月が５５日で、年間が５５０日。　確かに、ウィリアム達はまだ、チーム結成から一月を経過して居なかった。

主らしき人物は、鋭い右目の視線でウィリアムを見て。　一服含んでから。

「アタシは、噂はあまり信じない。　此処では、あのスター・ダストの連中でも、スカイスクレイバーの連中でも駆け出しの仕事から遣らせた」

口から白い紫煙を出しながら云うその人物を見るウィリアムは、当然の事だと思うから黙ったままに頷く。

しかし、聞いていたヒュリアは。　小バカにする様な素振りで。

「マスター、その言い方ってどうゆう事？　まるで、この田舎チームが凄いみたいじゃないか」

すると、マスター＝主であるその人物はヒュリアにジロリと目を向けて。

「当たり前だろう？　お前よりは、腕は確かだ。　結成時のコンコース島で、殺人事件を解決して巨悪の密輸ルートを壊滅させ。　フラストマド大王国では、古の大魔法遣いが作ったマジックモニュメントの中を切り抜けた。　しかも、アハメイルで起こった殺人事件で冤罪になり掛けた女性を救い、その殺された男の絡む強盗グループの摘発もしてる。　1月経たずしてこの結果は、今までに他のチームでもそうそう見た事が無い。　丸で、チーム“ホール・グラス”のポリア達が一気に駆け上がったのと似てるよ」

ヒュリアは、ギョッと驚いてウィリアムを見る。

「こっ・・コイツがか？」

周りに居た冒険者達も、一気にざわめき出した。

ウィリアムには、これは嬉しくない様子である。

「ま、別にそれとこれは別です。　では、駆け出しの仕事をお願いします。　何か、ご紹介頂けませんか？　自分はチャレンジャーなので、何でも請けます」

主は、鋭い視線をウィリアムに向けた。　ロイムでは、怯えてしまう様なキツイ視線だ。

「・・・・」

「・・・・」

見つめ合う二人。

周りでは、ウィリアムのチームの事を知っていた他の冒険者チームに、知らないチームが情報を得ようと聞き出したりたりして。　ちょっとした騒ぎが出来上がりつつある。

クローリアは、周りから注目され出したのが少し怖く。　ウィリアムに寄り添いながら辺りを見回す。

そんな中。

「・・・よし。　なら、一つお手並み拝見と行こうか」

と、主は目元を緩くして瞑目した。　そして、

「仕事は、今決めた。　請ける前に、何か質問在るかい？」

と、主が目を開いた時である。

ウィリアムは、腕組みしてからクローリアを見る。

「？」

不安げなクローリアは、首を傾げる。

そして、ウィリアムは主を見ると、真剣な顔で。

「では、１つ」

キセルを口から離して、紫煙を吐く主は。

「何だい？　泣き言は嫌だよ」

ウィリアムは、ズイッと前に進んでカウンターに手を付き。

「あの～・・・、マスターさんって。　男ですか？　女ですか？」

「・・・・」

周りの空気が、一瞬で凍り付いたのは確かだった。

third episode（後書き）

次話、予告。

仕事を請けたウィリアムに、後から来たスティールが合流した。
仕事は、急ぎと云うより、今から始めないと面倒な仕事であった。
その、仕事は・・・。

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編、スーパー早く終わらせて行きますっ！！！　・・・・・
多分＾＾；

年末には、モバゲー内で期間限定掲載の座談会と、ポリア特別編を頑張ってみますね～。

では、寒くなってお鍋が美味しい時期ですが。　太りたくない作者でした＾＾；

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

主の吸っていた煙管が、微妙な間合いで止まっている。

「・・・、どうゆう意味だい？」

何かを押し殺した様な言い方の主だ。

周りの冒険者達は、そのウィリアムの質問が出たと同時にピタリと息を殺して押し黙る。　あのナンパを平気でしてのけるヒュリアまでもが、云っては成らない様な質問なのか、ブルブルと震え出していた。

それを見たクローリアは、ウィリアムを注意しようかと思った手を引っ込める。　急激に冷え始めたこの場の空気に、それすらも出来ない。

だが、ウィリアムは物怖じせずに。

「いえね。　外に居た冒険者の方々が、主さんの事を“オヤジ”と・・・。　ですが、今お見受けするに女性の様な・・・。　とても気に成ったので、聞いてみようかと」

すると、主はその場で玉座の手摺りに“カッ！！”と煙管を叩きつけて火の灯るタバコの残りを棄てながら。

「何だってぇっ？！　さっきの余所者達かっ！！！」

と、立膝に成って身を乗り出す主は、真っ白い素足をシースルーの衣服の足元から覗かせて。　ウィリアムに睨み掛かると、こう言い放つ。

「いいかいっ！！　アタシは女だっ！！　おっ・んっ・なっ！！！。元は世界に名を馳せたチーム“フレア・ウォール”の参謀で、精霊遣いのブレンザってのはアタシの事だっ！！！！」

と、主が言えば。

（おいおい・・・、女だってぞ）

（いえっ？！　あの顔でか？）

（だって、女ってよりオカマじゃんか・・）

（シーっ、聴こえるって！！！）

（新種の亜種族かと思ってた・・・）

周りで、一気にガヤガヤと巻き起こるヒソヒソ話。

この斡旋所の主であるブレンザは、玉座から辺りを睨み付ける。

しかし、其処にウィリアムが。

「でも、仕事の斡旋でで“お手並み拝見”ですか・・・。聞くのも野暮なのかも知れませんが。その仕事って云うのは、先程起こったらしい事件の事ですか？」

と、冷静に聴く。

すると、ブレンザの目がキラリと光った。煙管を手下に向けながら立てた膝を元に戻して、辺りのガヤガヤ云う冒険者達を睨みながら。

「ほう、流石に察しがいいね。実は、頼み込んで来た役人の主任をやって居るのが知り合いでね。直ぐに誰かを回して遣りたかったが・・。この通り、この場に居る冒険者の輩は馬鹿ばっかりだ。腕っ節の達ヤツは幾らでも居るが、小難しい事件と成ると話は別。アンタ、丁度いい所に来た訳よ。まぁ、報酬も悪く無い。一つ、遣って見ておくれ」

ウィリアムの前のカウンターには、手下の若い男性が機械的な動きで資料の紙を出した。ウィリアムは、紙を見てからクローリアを見て。また主を見ると。

「事件とは、何ですか？」

ウィリアムは、ガヤ付く周りも気にせずに真面目な顔を主のブレンザに向ける。

ブレンザは、正しく身を玉座に戻して女坐りしながら。

「何でも、不審死だとさ。　ただ、口の中に黒い粒の黒子みたいな物が出来てると」

すると、ウィリアムはグッと目を凝らした。

「それは、薬物による死が強いですね」

と、一言。

周りの冒険者達は、それに黙った。　まだ、死体すら見てないのに・・・。

ブレンザは、ウィリアムに鋭い目を向けて。

「確信は？」

ウィリアムは、下らない質問だと思う。

「病気なら、前々からその症状が出るはずですよ。　それに、その死体の方が何者か存じませんが。　普通の一般の方なら、死ぬ前に一度は病院に行くと思います。　我慢の出来る傷みを伴う病気では有りませんからね。　もしかしたら、死んだ方は一人暮らしとか？」

ウィリアムは、ブレンダにそう尋ね返す。

「・・・」

ブレンダは、其処までの情報など何も無い。

ウィリアムは、ブレンダの様子を見て依頼の情報が極限に薄い事が

解った。

「どうやら、本当に依頼だけなんですね」

ブレンダは、ウィリアムの言い草に棘を感じたのか。

「当たり前だろう。　一々詳細などよこさないさ」

「なるほど。　では、今まで仕事の成功率は低いでしょうね？」

「・・・」

ブレンダは、次の言葉が繋げない。　依頼に対して、この様な場合でも数多く対応した斡旋所だが。　確かに、事件の解決に結び付いた事例は少ない。　捕り物や、証拠探しの下働きや力仕事などが主な助力の内容に成り下がっている。

カウンターの上の紙に手を伸ばしたウィリアムは、クローリアを見て。

「行きましょうか。　役人の方の急いでいたさっきの様子からですと。　恐らくは、事件が起こったのは昼過ぎぐらい。　大体の初動捜査も終わって、する事は見張りぐらいでしょう」

と、踵を返す。

「あ・・、はっはい・・」

クローリアは、ブレンダに一礼してウィリアムの後ろに着いた。

去って行くウィリアムを見送るブレンダにの前のカウンターにヒュリアが寄った。

「なんか、ムカツク奴だね」

すると、ブレンダはヒュリアを見下し。

「だが、切れるよ。　お前、威張ってられなくなるかもねぇ」

「うぐ・・」

ヒュリアは、喉を詰まらせて次に言おうとした言葉を飲み込み。

（面白い・・・、鋭い視点はアルベルト以上だね・・。　最近、いきなり世界に駆け上がりそうなチームが増えた。　これは、世界が動くよ・・、ウィリアムか・・・。　食べてみたいね・・・ぜ～んぶ）

血の様な赤い舌で舌なめずりをしたブレンダの視線は、得物を狙う蛇の様な目つきに変わっていた。

ーーー

「うおっ」

「あ」

斡旋所を出た所で、スティールと遭遇したウィリアムとクローリア。

ウィリアムの手に持たれた紙を見るスティールは。

「何だ？　その紙」

「ああ、仕事の現場ですね」

「あ～？」

スティールは、ウィリアムの横に来て紙を覗く。

「何々・・・、グォート街シャンティ通りにて起こった不審死・・・」

途中まで読んだスティールは、口を空けたままにウィリアムに顔を上げて。

「ま～さ～か～・・・」

と、舌を遣わない言い方で呆れて見せる。

頷いたウィリアムは、困った笑い顔で。

「“お手並み拝見”だそうですよ。　チャレンジャーって、思ってたより危険は少ないですね」

スティールは、斡旋所の前の所から中を見る様な視線を向けて。

「あんのオカマ野郎ぉ・・・」

その言い方に薄笑いするウィリアムは、スティールに笑顔で。

「女性だそうですよ。　キチンと聴きましたら、女性だそうです」

スティールは、アクトルと二人でマーケット・ハーナスは何度も訪れていた。　だから、斡旋所の主の顔も知って居る。

「何だってぇっ?!!　あんな白い中年男顔で女ぁっ?!!」

クローリアは、聞かれているのではないかと冷や汗しか出ない苦笑い。

ウィリアムも、悪く言う気は無いだけに他の言葉が出なかった。

スティールは、苦虫を噛み潰す様な感じで紙をまた見て。

「さっさ行こうぜ。　どうせ、現場に行かなきゃ成らないんだろ?俺、この通り知ってるから、案内するぜ」

ウィリアムとクローリアは、揃って。

（女性絡みだぁ・・・）

案の定。　スティールは、ニヒルに笑って。

「前の女が居た場所だからな」

と、歩き出す。

ウィリアムは感心する素振り。

「すっげえ・・・」

だがクローリアは、イマイチ好感は持てなかった。

さて、西側の海に赤く成り始めた太陽が向う頃。　スティールに連れられたウィリアムとクローリアは、斡旋所に向かう道の逆方向の通りを歩く。　随分と人の往来が増えて、冒険者や旅人の姿が多い。

ウィリアムは、歩きながら。

「スティールさん、どうして来たんです？」

「あ？　いや、ロイムと顔を突っつき合ってたらアークがキレてよ。一眠りしようかとも考えたんだが、クローリアとお前のデ～トも気になってさ～」

「はぁ・・・」

意味が解らないとの返事のウィリアムに対し、顔を真っ赤にしたクローリアは大慌てに成って。

「そっそんなでは有りませんっ！！！　違いますっ・違いますっ！

！」

と、杖の先でスティールの背中を殴打。

「イデデデっ！！　おいっ、クロッ」

赤くなって慌て出したクローリアは必死に殴打・・・。

「イデデデっ、なっ・なぐるっ・・ぐぼはっ！！！！」

振り向いたスティールの顎に、クローリアの振り上げた一撃が挿入・・・。　いや、クリーンヒットし、スティールは上を向いて目の前が白く成った。

人だかりが出来て・・・、少しして・・・。

「あご～・・・あご～・・・」

涙を浮かべた顔で、顎を庇う男と。　赤面して俯き歩く僧侶と。ヤケッパチの笑いを浮かべる若者が、人の視線を集めながら商店の並ぶ路地通りを歩いている。

小売店や中古屋などの様々な店が犇く通りで。　楽器を値踏みする者や、絵の道具を買い込んだ者も歩いているから。　様々な物が揃うのだろうと思えた。　そんな通りを行くと、店先にナマモノを扱う店が見え出し、一般の人も多く姿を見せる少し太い通りにぶつかった。

スティールは、ぶつかった太い通りの右、北側を指差し。

「あつ～・・・向こうが・・その通りだ・・いてて・・・・」

流石にウィリアムが、

「大丈夫ですか？」

と、含み笑いを浮かべて聞けば。

「ガツっって・・ガツっていったゼ・・、歯がよお」

と、噛み合わせをを強調するスティール。

「・・・・」

クローリアは、赤い顔で無視して横を向いている。

半笑いで十字路を太い通りの北側へと曲がったウィリアム。　その紙に示された現場の場所とは、その通りの曲がり角に有る雑貨屋だ。　立派な石造りの店構えで、店の幅も他の店の倍有りそうな様子である

「此処・・ですね」

ウィリアムは、そう云うと。

「ああ・・・、店先に役人が立ってるし・・」

と、顎を押さえてるスティール。

クローリアも、商売をする店先に売り手として立つ人も居ないのに

店が開かれて、役人が3人立つ幅広い店に違和感が湧いた。
ウィリアムを先頭に、役人に近付いた3人。
「何者だ」
いきなり、真ん中の店前に立つ役人に近付くと。　お座成りな台詞を吐かれる。
「済みません。　斡旋所から応援の依頼を請けて来た者ですが・・・」
ウィリアムの言葉を聞いた役人は、３０半ばを過ぎた感じの皮と骨の様な色黒の男性である。　背丈はクローリアより少し高い程度で、黒い上下の繋がった制服に身を包み。　右手に長槍を持って居た。
「お前達がか・・。　随分早かったな・・、依頼を請けた証は在るか？」
スティールは、詮索厳しいと思って。
「紙切れ一枚だぜ？」
と、ウィリアムの持つ紙を指差す。
「ん」
その紙を見た役人の男性は、大きく頷く。
「確かに、私が届けた紙だな。　ヨシ、じゃ～現場の警備に加わっ

て貰おう。　事件か事故か、まだ解っていないし。　検死をしてくれる医者が忙しくて見つからないのだ。　最近、食中毒の時期で何処も医者は忙しいからな」

すると、スティールは軽い口調で。

「なら、コイツを遣えよ。　ウチのリーダーは、薬師の知識と医者の見識も在るぜ」

と、ウィリアムの肩を掴むスティール。

ウィリアムは、のんびり仕事をしようかと思ってたのに。　いきなりこう言われてしまって、色々詮索されても面倒である。

（スティールさん・・・、面倒事に首を突っ込む気ですか？）

小声で言うウィリアムは、コンコース島とは違うのは自覚している。　いきなり、ズケズケと捜査の真っ只中に入るなど無謀な事だ。必要な事だけをこなして、その過程で気付いた事を進言すればいいと思っていたのに・・。

しかし、スティールは笑って。

「お前の感性や技術は群を抜いてる。　チャッチャといこ～ぜ」

と、お気楽モードだ。

「本当か？」

役人は、ウィリアムに問うて来る。

「・・・、ええ。　まあ、薬の調合の技術がてらに、診察も少し・・」

すると、役人は大きく頷き。

「薬の知識が有るとは心強い。　ちょっと遺体を診て欲しい。　不審な点だらけなんだ。　今、主任に連絡するから。　槍、頼む」

「あっ」

ウィリアムが声を出すも、役人はウィリアムに槍を託して店の奥に向ってしまう。

スティールは、ウィリアムの肩をニギニギして。

「さぁ～、頑張っていきましょっい」

クローリアは、ウィリアムがイマイチヤル気が無いと見て取れた。

だが、ウィリアムがスティールに向けるのを嫌ってか、店先の木の台に並んだ品物を見る内に。

「・・・」

槍をその場に置いて、店の中に入って陳列された品物を見回りだした。　筆を手に取り眺めたり。　固形ランプの燃料や、旅に携帯する塩なども・・。

預けられた槍をその場に置いたウィリアム驚くクローリア。　代わ

りに槍を重そうに持ち上げ様としたクローリアをスティールが助けて槍を預かってくれた。　いきなり人が変わった様に品物を見定めるウィリアムに、クローリアは目を見張った。

「ウィリアムさん・・、どうかしました?」

ウィリアムは、クローリアに顔を向けると。

「いえ」

と、微笑むだけ。

クローリアは、その微笑が何かを見つけた時のウィリアムだと思い。

（なんで・・、こんな所からそんな?）

ウィリアムの微笑みが、何時もの笑みでは無い鋭い微笑に・・・。

クローリアは、何か恐怖にも似た感覚を誘発されたのである。

こう・・、ドス黒い闇の中に何かを求めて潜り込む様な・・。

「おい、待たせた。　3人とも、こっちに来てくれ」

と、奥に向った役人の男性が戻って来た。

ウィリアムは、直ぐに。

「あの、随分とこのお店は手広い商売を為さっているんですね」

と。

役人の男性は、いきなりの話の振りに驚いた様子で。

「あ？　あ・・・ああ。　コンランさんの店は、この通りじゃかなり有名な店だ。　色々と、必要な物が揃うとも噂がな」

ウィリアムは、陳列されている日用雑貨を始めに、生活必需品・乾物・旅の必需品などに合わせて、筆や紙や色々揃う品揃えを見回し。

「ですね。　でも、中には少々値の張る物・・・」

すると、見張りをして立っている小太りの役人が、右手より。

「だろう？　少し高いんだよ・・。　でも、他の店より室はいいからな」

ウィリアムは、納得の頷きを見せて。

「確かに」

そこで、奥に行って来た役人が。

「とにかく、奥に来てくれ。　主任が、遺体を診て欲しいとさ。もう、死後少し経ってる。　早く、地下安置所に移したいらしい」

スティールは、ウィリアムを見て。

「行こう。　天才探偵～」

僻む様な目つきをしてウィリアムは、スティールに噛み付く様子を見せて。

「バカ」

と・・・。

クローリアにとっては、自分よりスティールに素の顔を見せるウィリアムが少し妬けた。

さて、槍を店の中に隠して、3人を案内をする役人の男性の後ろを着いて行けば。　店と家の境をしている壁の一角に設けられた階段を上り。　中1階とでも云う高さまで上がって伸びる廊下を歩く。

全面石造りで、タイル張りの壁。　廊下は青い色のタイルが壁で。

天井にはモザイク画の装飾が施され。　床には、花と蔦の模様の画かれた白い石だ。

「此処が、ロビーだ」

その開けた間には、右手の壁に漆黒の木製靴箱が置かれる。　靴箱の横少し放して、帽子やコートを掛ける金属フックが優雅に葡萄の姿を見せて2メートルの高さに在る。　ロビーの床には、雄々しき戦いの絵が画かれ、ロビーの左手は客用の中履きのスリッパが見える。　壁や天井にはグラスランプが小さな妖精の姿を象る。

「お金・・有りますねぇ。　コレ、純金ですよ・・・」

ウィリアムは、グラスランプは特注品で技術の必要な物だと看破し。

コートや帽子を掛けるフックハンガーは、何気に純金である。

「うはっ、純金・・」

スティールは、丸々“金”だと聞いて、そのハンガーが輝いて見えた。

役人は、ロビーを右に曲がって奥まで案内する。　人が死んだのは、浴室であると。

スティールは、クローリアにそっと寄り添い。

「ヌレヌレしちゃうな」

身の危険を感じたクローリアは、グッと杖を握って非難の目を向ける。

「ウィリアムちゃん、怖いわ」

スティールがウィリアムの背中に甘えれば、本人は素直に。

「クローリアさんが殴りやすい様に抑えます」

スティールは愕然としてウィリアムを見る。

「お前ぇ・・・俺を売るのかぁ・・・アハメイルで濃密な数日を過ごした愛人の俺を・・・」

ウィリアムは、無視して棄てた。

役人の後を行けば、暗い明かりの点いていない廊下を行く。　左手に夕陽の光が入る薄暗い部屋を3つ過ぎた右手に、タイル張りのトイレに入る入り口が有り。　その先直ぐに風呂場に入る入り口が開いていた。　浴室の入り口は、籐家具の仕切りを戸代わりにしてい

る戸の無い入り口だ。

「こっちへ」

と、中へ案内する役人に。

「あら～ん、もう来たの～？」

と、大人びた女性の声が。

スティールは、ハッとして反応。

（えっ？）

ウィリアムも、スティールが居るだけにハッと反応した。

「スッ・・」

勝手な真似をしないでとばかりに、振り返ってスティールの腕を掴もうとしたウィリアムだが・・。　女性に対するスーパーハイスピーディーな行動を見せる彼は・・・、もう其処には居なかった。

「・・・・」

「・・・・」

振り向いたウィリアムと、見合ったクローリアが見つめ合う。

そのウィリアムの背中に。

「フッ、こんな無粋な場所でこんな美しい女性を見れるとはな・・・」

スティールのキザなセリフが。

「あふ・・・」

頭を抱えたウィリアム。

クスクスと笑うクローリアは、ウィリアムの傍に来て。

「心中お察し致します」

頷いて前に向き直ったウィリアムの耳に。

「貴方が検死出来るの？」

「嫌、俺の連れがそうだ」

「ふ～ん。　なら、余計は引っ込んでてくれるかしら。　邪魔なのよ」

「・・・・」

浴室に入るウィリアムの元に、何か非常に不満を噛み締めるスティールが、両手をニギニギさせながら遣って来る。

ウィリアムは、呆れて。

「面倒は止めてくださいよぉ」

すると、スティールは浴室の内部を指差し。

「やっちゃって、やっちゃって、も～検死をスパッと。　見せ付けてやって」

と、丸で賭け事にでも負けた様な顔で云うスティール。

ウィリアムは、全く仕方無いと思いながら。

「お二人は、入り口で待っていて下さい。　一応、事件なら現場は荒らさないのが鉄則ですから」

スティールもクローリアも頷いた。

ウィリアムは、黒い制服の役人が2・3人立っている浴室内を見回した。　宿屋でコノ位の部屋なら、4・5人の相部屋と同じは在る。　室内の3箇所に設置された竜胆の形を大きく象ったグラスランプには、この浴室を明るくする為に火が灯されていた。　流石に浴室だ、初夏の暑さに余計な湿気を与える。

「君が検死出来るの？」

ウィリアムに、そう言った女性が居る。　ウェーブの掛かった金髪が腰まで届く。　黒いシルクのスタイリッシュなズボンに、黒いジャケットの様な上着はハーフコート以上に伸びてタイトな物だ。　胸元から、お腹に掛けて？字に見えるフリル付きの淡い蒼色のブラウスは、薔薇か・・牡丹かの花の模様が見え隠れし。　袖口に出たフリルを見る限り、貴族の様な印象を受ける女性である。　見てく

れに気品が香り、切れた長い眼が強い印象を与える顔は美女だった。

（なぁ～るほど、これはスティールさんもフラれたら悔しいですね）

自分とはしては何も感じない所だが、スティールなどにはこの手の美人は好きそうなタイプだ。　年頃も、中年に差し掛かったばかりと云った印象で、女らしさが迸っている。

スッきりとしたボディラインが良く解る立ち方で、右手を腰に当ててウィリアムを見てくる女性役人に近寄って対峙したウィリアムは。

「斡旋所で依頼を請けて来ました。　チーム“セフティ・ファースト”のリーダーでウィリアムと云います。　少しばかり知識が有るので、出来る所まで診させて貰います」

若いウィリアムを見る女性役人は、軽くコクコクと頷き。

「助かるわぁ。　このまま置いといたら、ねぇ～」

と、浴室奥の床に寝かせられた人に視線を・・・。

ウィリアムは、頷くと遺体に向かいながら。

「斡旋所の主から、口の中に黒い小さな点が在ると聞きましたが・・。　この方は、病気だったのですか？　そうなら、心臓発作とも云えますが」

と。

ウィリアムに遺体への道を開いた美人役人は、初動捜査で事情聴取

した配下の中年男性の役人を見る。

「ビョーキだったの？」

「いえ。　少し高齢ですが。　健康面では、右足が少し悪いだけで、病気は全く」

女性役人は、目の前に来たウィリアムを見て。

「ですって。　私は、この一件の捜査主任のミレーヌ。　事件か、事故か、解らなくて困ってるのよぉ」

すると、ウィリアムは顔を引き締めて。

「では、捜査して下さい。　病気でないなら、毒殺ですよ・・。いや、自殺の線も有りますがね。　何れにしろ、少し大変です」

と、遺体に屈んだ。　死んだのは、老人だ。　少し肥満体型で、背丈はスティールより少し低い程度。　髪はもう白く、全体的に薄い。

「マジ・・・？」

ミレーヌと云う女性は、少し眼を光らせて屈んだウィリアムを見下す。

遺体を診るウィリアムは、体を触って。

「死後硬直が始まってますね。　死んだのは・・・お昼過ぎですか・・。　しかし、この口の中の黒い粒の点は解せませんね」

ミレーヌの横に控える役人は。

「どうして、毒と解るんだ？」

ウィリアムは、少し呆れ口調で。

「口内・・に黒い点、それから・・喉に少し炎症の痕が診られます。後は・・・、指先が壊死するように変色してます。　同じ様に足の指も。　眼の血管が、異常に膨らんで凝固してますし・・。　考えられるに、呼吸器に被害を及ぼす毒ですね。　細い血管の中で先に薬の成分で血が固まったのでしょう。　しかし・・・、その症状が全身にも見られます・・。　コレは、凄い遺体ですね」

死んだ老人は、ギョッとした眼で死んでいる。　最後の死に至る時が激痛だったのか、何か衝撃的だったのか。　全く眼を閉じない。

ミレーヌは、ウィリアムの脇に屈んだ。

「ね。　毒は特定出来る？」

締りの出た声に気高い気質が見え始めるミレーヌに、ウィリアムは真剣な顔で向くと。

「やってみましょう・・。　少し、汚い実験しますが、いいですか？」

ウィリアムの鋭い視線に気圧される思いがしたミレーヌは眼を見張り。

「“汚い”？」

ウィリアムは立ち上がると、腰のサイドポケットの中から白い紙を取り出し。　万能ナイフを抜いて短冊に切り分けながら。

「この手の症状の出る毒は、世界に幾つか有ります。　だが、今の時期や世界情勢や歴史などを踏まえても、絞れるのは3種類。　内、2種類は作るのは深い知識と経験が必要ですが、比較的材料は手に入れられる物です。　ですが、残りの一つはその他2つとは、入手の面で対照的な立場にあります。　その、1つと2つの毒を見分ける簡単な方法は、人のオシッコで解るんです」

同じく立ち上がったミレーヌは、納得の頷きで。

「ナルホド・・・ね」

ウィリアムは、ミレーヌを見ると。

「すみませんが。　死んだ状況を教えて頂けませんか？」

「ええ、いいわよ」

さて、この老人の名前は、“ダレイ・コンラン”氏。　年齢は72歳。　マーケット・ハーナスでも、それなりの威勢を持った商人で、独り身だとか。　死んだ時は、浴槽の中に浸かっていたらしい。　発見された時は、非常に変わっていた様子だったらしいと。　と云うのも、顔に黄色いタオルをキチンと4つ折に畳んで乗せて有った。　浴槽の縁に頭を上向きに預けて、タオルをを被っていた訳だ。

ウィリアムは、正に死体の浸かっていた浴槽を見た。　金属製の横長い器の様な形で。　貴族の女性が好む様式の物だ。

「水をはって、下から薪で暖める物ですね。　お湯は・・・、抜いたのですか？」

ミレーヌは、呆れて頷く。

「発見した後に、来たこのお爺さんの家族が抜いちゃったって」

「ナルホド」

そのウィリアムの元に、桶に入れられたタオルが寄越された。

「コレだ」

中年の男性役人は、桶を差し出す。

ウィリアムは、そのタオル・浴槽・床・壁に切った短冊の紙を貼り付けて濡らすと。

「誰かトイレに行きたい方居ますか？　少量でもいいのですが、反応を見るなら長く我慢している方がいいのですが・・」

すると、ウィリアム達を案内して来た細身の役人が。

「俺でいいかな・・。　我慢してたんだ・・」

ウィリアムは、その役人に歩み寄って。

「お願いします。　濡れた部分に、しっかり掛けて下さいね」

「ああ、解った・・」

役人は、小走りで隣のトイレに向かって行く。　やはり、我慢していた様子が窺えた。

ウィリアムは、浴室の中央に立って考え始める。

「・・・」

その姿を見るミレーヌの目つきが、明らかに変わったのはクローリアやスティールも解った。

「ねぇ・・・、君の名前・・・。　ウィリアムよね？」

突然に、そう話しかけるミレーヌ。

「ええ、そうですが」

考えながら応えるウィリアム。

「もしかして・・・、君ってコンコース島に居なかった？」

ミレーヌがこう言ったのに、ウィリアムとスティールが反応するのは同時である。　先に、スティールが。

「良く解ったな。　もしかして、天才？」

だが、ウィリアムは違う。

「噂ですか？」

ミレーヌは、少し顔を明るくさせて。

「はは～ん。　モルビットさんの云ってたウィリアムって、君の事かぁ・・・」

「モルビットさんを、知ってるんですかっ？！！」

「ええ。　何度か、島経由の船の密輸事件とかの捜査でね。　君の事、一杯聞いちゃった」

と、笑うミレーヌ。

ウィリアムは、モルビットがどれだけ自分に期待を寄せていたか。
思い知らされる。

（此処まで来て、モルビットさんが絡むのか～。　世界って狭いなあ・・・）

と、呆れてしまった。

其処に。

「ミッ・ミレーヌ様っ！！！　大変ですっ！！！」

トイレに向った役人の声がする。　ハッと声の方を向いた一同の中で、出入り口に立っていたクローリアとスティールは、雫を垂らしている紙が先に見えて。　急いで走って来る役人が、自分達を見ていないのに驚いた。

「いやだっ」

「おいお～いっ！！」

左右に別れて役人を通した二人。

だが、その役人は興奮のままにミレーヌの前に走り込み。

「ミレーヌ様ッ！！！　へっ・変色しましたっ！！！！」

と、ミレーヌの目の前に、雫の垂れる紙を突き出したのである。

「・・・・」

黙るミレーヌ。

「お・・・おい・・・」

引き攣る他の役人二人。

ウィリアムは、黄緑色に変色した紙を見て愕然とした様子に成った。

「まさか・・・、信じられない」

ウィリアムが、一人で皆に背を向けて考え込みだす中で。

「お前はぁっ！！！！　そんなバッチイ物を何で私の目の前に突き出すのよぉぉっ！！！！！！！！！！」

ミレーヌのブチキレた怒声が浴室に木霊した。

third episode（後書き）

次話、予告。

毒を特定したウィリアムだったが。　事件か、事故かは曖昧だった。
事情聴取に望む事に成ったウィリアムとチームの面々は、長年に渡ってダレイと云う悪徳商人に苦しめられた家族を見る事と成る。

次話、数日後掲載予定。

どうも、騎龍です＾＾

ハイスピードでお送りする今、毎日がパソンと原稿用紙の睨めっこです＾＾；

K編の編集は、とても出来ないと。　来年の春先にまで持ち越す事で匙を投げました＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ウィリアムの切った短冊状の紙は、見事なまでに黄緑色に変色した。
薄い色では無い。　緑色に近い黄緑で、確かに反応したと思える色合いだ。

下級の警備役人を叱り付けたミレーヌだが。　直ぐにその変色した色合いには注目する。

「ねえ。　何が含まれてるの？　なんか、木の葉っぱみたいに緑色じゃない」

と、ウィリアムに話を振る。

それまで考え込んでいたウィリアムは、ミレーヌを斬るぐらいの鋭い視線で見つめると。

「医療用の麻酔に使われる猛毒です」

「はあっ？！！」

驚くミレーヌ。

雫の垂れる紙を持ったままの中年役人は、ウィリアムに驚きの顔で。

「ど・・毒なのに・・医療に使うのか？」

頷くウィリアム。

「ええ、毒を活用する事はありますよ。　麻薬や毒の特性を、痛み止めや抵抗力促進に逆利用するんです。　ただ、使用する量は、本当に微量ですがね」

ミレーヌは、驚くままに変色した紙を見る。

さて、異常事態となりそうな雰囲気の中で、クローリアと見つめ合ったスティールは緊張を持って。

「ウィリアム。　お前の結論からして、事件か？　事故か？」

一番の問題点を、ズイっと突いた。

「・・・」

黙るウィリアム。

ウィリアムに、捜査する皆の目が集まった。

見られたウィリアムは、自分から動く立場では無い事を弁えているだけにミレーヌと目を合わせ。

「自分が判断していい立場では有りませんね」

だが、ミレーヌは以外にも柔軟に。

「そうかしら。　毒の意味合いが解る君なら、それも可と思うけど。
役人の意地だの詰まらない事よ。　問題は、正確で正しい結論」

と、軽く云って退けた。

捜査をする主任のミレーヌの言葉で、ウィリアムは一つ頷くと。

「この毒は、“コンゴウオウユリ”と云う名前の百合の一部から採れる特殊な毒です」

ミレーヌは、その名前を知っていた。

「コンゴウオウユリって・・・、あの大きい花の咲く百合の事？
私の胸元ぐらいにまで届きそうな背の高い百合よね？」

「はい。　コンゴウオウユリは、このマーケット・ハーナスとフラストマド王国の山間部や森林地帯にだけ生える百合です。　何年も掛けて成長し、約１６年から２０年程で花を付け。　受粉すると球根を残す珍しい百合・・。　純白で、大人の手程に大きく咲く百合の花は、昔から商人や王侯貴族の間で好まれた歴史が有ります。
ですから、今では森の奥に行かないと見つけられない希少種に近い位置です」

スティールは、腕組みをして。

「ナルホド・・。　じゃ、買うのも高価な値段がするな」

しかし、其処にウィリアムは“待った”を掛ける様に。

「いえいえ、実情はそんな甘いモノでは有りませんよ」

「ホへ？」

「買う事など出来ないと云う事です」

「だって・・お前・・・」

スティールは、チンプンカンプンに成り。

代わってミレーヌが、キリリと引き締まる捜査モードの顔で。

「詳しく説明してくれる？」

ウィリアムは、桶に入ったタオルを指差した。

「基本、コンゴウオウユリは毒は持ちません。　凄く茎や葉が硬く。　一般の動物も食べるのに適さない為です。　ですが、芋の様に１株から多数の球根を残すコンゴウオウユリですが、発芽してからの２ヶ月の間だけ。　柔らかい葉を食べられない様にと毒を持ちます」

ミレーヌも、タオルを指差し。

「その・・毒？」

「はい。　ですが、もう自然のなかですら見つけ難いコンゴウオウユリの毒は、採れる量も非常に少ないので店頭に並ぶまで数が出来

ないんです。　ですから、医師が薬の分配の基本優先権を握っていますから。　予約の時点で売り手が決まります。　薬師の元から、決まった医師の元に直接ですからね。　しかも、猛毒なので。　一般の何者かが買うのには、薬師か医師の仲介が必要です。　そんな毒で、自殺しますかね？　安価に手に入る毒は幾らでも有りますよ」

ミレーヌは、顔をウィリアムに向けて固まった。

「・・・じゃ・・殺し？」

「可能性は強いと思います。　家族や、事件当時に居た中で、薬師や医師は？」

ミレーヌは、直ぐに事情聴取をした役人を見て。

「全員調べた？」

云われた男性役人は、直ぐに調書の内容を読み返す。

「え～っと・・確か・・、毒物かもしれないと云った時にですね・・。　誰か・・、有った。　我々が、毒物かも知れないと云った時にですね。　簡単な疲労回復の薬などなら、死んだダレイ氏の孫娘の“エレン”と老僕の“ポルス”と云う二人なら調合出来ると聞き込んでいます。　云ったのは、メイドで調理場に居る中年女性です」

ミレーヌは、ウィリアムを見て。

「どう？　怪しい？」

すると、ウィリアムは大きく一息を吐いて。

「何とも。　あの毒を生成するには、非常に深い知識と卓越した作業が必要です。　段階を経る作業の中で、少しのミスや放置が劣化に成りますから。　軽い調合が出来る程度の素人で作れるかどうかは微妙です」

ミレーヌは、更に話を進める様に。

「買う事は？」

「云った通り、薬師か医師の仲介が必要です。　数が少ないので、一般の何処かから手に入れたなら足は追い易いと思いますよ。　草を探せるのは狩人などで、地方から持ち込まれるでしょうし。　生成を出来るだけの薬師の数も少ないハズです。　遺体の反応にして、尿でこの反応するは1種類だけですから、聞き込んで見ては如何です？」

ミレーヌは、直ぐに事情聴取をした男性役人を残して、二人の役人に指示を出す。

「いい、事務所に残る隊を二手に分けて、半分の隊で直ぐに聞き回って。　残りの隊は、こっちに2・3台の馬車と一緒によこして。　明日に一斉の事情聴取をするから、事務所に全員を移動するわ。　店の見張りは、そのままで。　明日までは現場保存したいし。　これから、応援が来たら家宅捜索する」

「ハッ、了解いたしました」

と、ウィリアム達を案内して来た役人と、もう一人の若い背の大きな役人が外に出て行く。

ウィリアムは、二人が出て行ったのを見てから。

「“明日に一斉”ですか？」

ミレーヌは、困った顔をして。

「それがね。　ダレイ氏の死を見た奥さんが。　動転してアレコレやらかした上に貧血で倒れたの。　しかも、第一発見者の孫娘も、動揺して放心してるし。　あと、ダレイ氏は港に近い商業地で別の店も出してるわ。　其処にも、数日休業を告げに老僕のお爺ちゃんが行ったらしいのよ」

ウィリアムは、ポカンとして。

「行かせたんですか？」

ミレーヌも、少し情けない顔を見せて。

「そ～、行かせたの～。　一応、一人役人は付けたらしいんだけどぉ～。　事故か事件か判断出来ない時だったからぁ～」

スティールは、其処に加わり。

「“全員移す”ってのは・・・、連行？」

頷くミレーヌは、

「此処はこのままにしたいし。　役人の監視の中で此処に居させるより、今日中に連れて行って置いた方が証拠隠滅も少ないでしょ？

この国では、疑わしい場合はこうするのよ」

スティールは前髪を掻き上げて、キザに恰好をキメると。

「フッ。　じゃ、ミレーヌお姉さんとも一晩一緒に居れる訳か・・・。　俺も今夜は其処に泊まろうかな」

すると、ミレーヌはニコッとして。

「地下の独房にご案内して差し上げるわぁっ。　ゴキブリとかぁ～、ムカデとか。　淋しくないわよ～」

スティールは、前髪を掻き上げたままに固まってしまう。

ウィリアムは、此処まで来てこうも面白いスティールが凄く思えて来た。　一応、仕方なくと助け舟を出すべくして。

「一緒に行きます？　容疑者の皆さんと・・？」

「え・・、遠慮・・しちゃおうかな・・・」

スティールは、悲しく呟いた。

ウィリアムは、ミレーヌに顔を移すと。

「所で、発見当時はどんな感じだったんです？」

ミレーヌも、ウィリアムの知的な鋭さに何かを感じたのだろう。

直ぐに残した役人の男性に。

「状況を、彼にも教えてあげて」

「は」

役人の男性は、調書の紙を捲り。　読み上げながら説明をし始めた。

ウィリアムは、所々で質問を重ねるし。　役人の男性も出来うる限り丁寧に答えてくれた。

その内容は、こうだ。

ーーー

此処で、スティールは桶の中のタオルを再度見て。

「あ？　でも・・このタオルは黄色いゼ」

ミレーヌは、少し小難しい顔をして。

「そう・・。　だから、いきなり私達が呼ばれたのよ・・。　本当なら、白いタオルが有るのに、黄色いタオルが残されてたから・・」

と、タオルの入っていた桶を指差す。

ウィリアムは、冷静な口調で。

「つまり。　部外者が入って、ダレイ氏を殺したのではないか・・・と？」

頷くミレーヌと役人。

ウィリアムは、死んだ老人を見て。

「そんなに恨まれてる人なんですか？」

これには、ミレーヌが答え。

「まぁ、商人なんて他人の店を潰して伸し上がるから恨みは有るわよ。　ただ、この人は特別多いわ。　気まぐれで店に勤めてた女性を襲ったり、気に入らない使用人は無一文で追い出したり・・。　探せば探した分だけ恨みが出て来そうなタイプ？　そんな感じ」

スティールは、軽く口笛を吹き。

「ヒュ〜、敵だらけなオジイサンって訳か・・・」

「そ。　だから、必ず外に出る時は用心棒の男を連れて居たそうよ。１５年位前に、命を狙われた事が有ってからず〜っと」

ウィリアムは、タオルの入った桶を持ち上げて。

「“新しく買った”と言ってましたね。　このタオルも、綿の具合を見る限り使い古した物では有りませんが。　どうして、“新しく買った”と？」

役人の男性は、調書を見ながら。

「ん〜と。　ダレイ氏は、使い古した物は嫌いな性分なんだそうな。　今日の午前中に、ダレイ氏の孫娘に成るエレンと云う人物と、老僕のポルスが二人してダレイ氏の身の回りで使う下着ヤタオルを買いに行ったらしい。　ダレイ氏は、月交換で身の回りの下着やタオルは買わせて居たそうです。　根っからの浪費家で、子供の頃からそうやって育てられたそうで」

スティールは、桶を置くウィリアムに小声で。

「“無駄な人”まんまだな」

ウィリアムは、頷いて見せてから。

「では、続きをお願いします」

「はい。　ダレイ氏が風呂に入って少ししてです。　大量のお湯を

使って身体を洗うダレイ氏は、長湯の時には大抵お湯の継ぎ足しを頼むそうで。　その伺いに孫娘のエレンが聞きに来たのですが・・全く返事が無く。　様子を窺う為に浴室に入って死亡に気付いたそうです。　エレンは、大慌てで部屋に戻って助けを呼ばせようとしました。　その時、エレンさんの慌て様を見掛けた奥様のルイスさんも、浴室で倒れたダレイ氏を見つけて大慌てに錯乱し。　お湯を抜いたり、換気をしようと上の窓を開けたりとしたそうです」

ウィリアムもスティールもクローリアも、この話で浴室の北側の壁のかなり高い所に二つ有る換気窓と。　天井に設けられたステンドグラスの窓を見上げる。

ミレーヌは、壁側の換気窓の一つは、ダレイ氏が死んだ時に頭を預けていた浴槽の縁の真上だと云う意味で。

「家族の証言では、あそこから色の違うタオルを降ろしたのではないかって云ってるわ。　ダレイってお爺ちゃんは、遺体の姿で顔にタオルを置いて寝る癖が有ったらしいの」

ウィリアムは、とても難しい顔をして。

「つまり。　ダレイ氏が浴槽で横に成って寝ている時に、あの小窓から何かをして毒を染み込ませたタオルでも降ろしたと？　そして、元々有った白いタオルも回収したと？」

「そう。　死体の変化に驚いた家族は、み～んな毒殺だって疑ってないわ。　だから、医者じゃなくて私達が先に呼ばれたって訳」

腕組みをしたウィリアムは、肘を杖の様にして口に左手を当てると。

「ですが・・。　あの壁の窓は子供でも通れるかどうかって云う小さい四角窓ですよね。　それに、この屋敷には、階段を上がって高く成っている所に出来てる。　外からあの高さの窓に届くには、３メートル以上の背丈が必要と成りませんか？」

ミレーヌは、同じく腕組みして窓を見上げる。

「でしょう？　外を見ても、別に窓の外は高くも成ってないし。足場に成る様な物も無いの。　聞き込みでも、スッゴク背の高い人物なんて見掛けられて無いし・・・。　正直、殺人なら家族全員がグルで嘘を言ってるとしか考えられないのよ」

ウィリアムは、ミレーヌの心を読んで。

「では、ミレーヌさんは、一家が嘘を云ってると？」

「君が毒を見つけてくれた中で、壁や床以外でタオルにも毒が出たでしょ？　最初から、タオルに毒を仕込めば、ダレイってお爺ちゃんは癖で死ぬ訳じゃない」

スティールは、ナルホドと思い。

「あ～、流石は美人の役人様。　頭イイな～」

と、褒める。

「何にも出ないわよ」

と、ミレーヌは得意顔。

だが、ウィリアムは腕組みのままに考えて。

（本当にそうか？　体の彼方此方に壊死が見られる以上は、全身に毒を被った筈だ。　タオルだけでこう成るのかな？）

しかし、ミレーヌは、こうも続ける。

「でも、タオルは黄色よね。　タオルは、摺り返られたのかしら・・・、何時・・何処で？」

この疑問には、ウィリアムが代わって説明する。

「いえ、多分は・・、このタオルが新しく買って来たタオルですよ」

スティールは、桶ににじり寄って真っ黄色のタオルに顔を見下し。

「コイツがあ？」

「はい」

ミレーヌは、確実に確かめる様に。

「確か？　間違いは出来ないわよ」

ウィリアムは、タオルの入った桶をミレーヌに見せる様に右足のつま先で持ち上げると。

「使用されたと思われる毒は、温度に弱い性質が有りましてね。夏の高温の温度に晒すと、この色の様に黄色く変色するんです。さっき、尿で変化した緑が反応が毒の色で。　黄色味がかった色は、

尿の温度による劣化です。　本来の色は、白い石鹸の様な固形の滑り気が在る状態のハズですから」

ミレーヌは、確かな確信を持って。

「じゃ、やっぱりタオルに塗りつけたのね？」

「さあ・・、それはどうか・・・」

と、ウィリアムが水を差す。

スティールは、ウィリアムににじり寄って。

「なんの不満があるとか？　うぃ？」

蘭を顰めるミレーヌ。

ウィリアムは、明くまでも冷静な口調で。

「いいですか？　新しい物を好む被害者に。　あの毒を塗った刳ったタオルを渡したら手触りでバレる可能性強いですよ？　確かに、この浴室はピンクのタイルで黄色は直ぐには判別し難い色ですが。　タオルをお湯に浸してる瞬間から急激な劣化が毒に始まります。　入って直ぐに濡らして顔に被せたとしても、心臓や内臓器官に持病でも持ってないなら、苦しんで叫ぶ位は出来ますよ。　遺体を診てみると、全身に壊死の後が・・・。　石鹸に摩り替えて有るとか、冷たい水に溶かした毒を浴びでもしないとこうは成らないと思います。　そして、こんな希少な毒を何処から手に入れられたのか・・。　毒の発見を急いだ方がいいと思いますよ。　でないと、長引くかも知れません。　この事件は・・・」

と、遺体を見つめる。

「・・・」

考え込むミレーヌは、直後に応援で来た数人の役人。　そして、戻って来たポルスと云う老僕が揃うと。　二階の居間に詰め込んだ家族全員を馬車に乗せて警備役所の方に移動させる形を取り。　家宅捜査を家に残す役人に命じた。

基本捜査は役人でいいと云うミレーヌは、ウィリアム達は明日から捜査に本格的に加わって欲しいと言ってくれた。

ただ・・。

夕方。　容疑者として一家を馬車で送り出した後だ。　家宅捜査の為にランプやシャンデリアに明かりが灯された家の中。　家宅捜査が始まっている中で腕組みするミレーヌはウィリアムと別れ際にロビーで。

「私の名前はミレーヌ・ロワールフ。　住居区中央のロワールフ邸って言えば、何処か直ぐ解るわ。　もし、夜でも用が有るなら来てもいいわよ。　どうせ独り身だしぃ～、怖い物無いし。　夜は一人だと寂しいしねぇ」

と、流し目をよこす。

スティールは、もう顔をワナワナさせて。　言われているウィリアムを睨んで襲い掛かる素振りを見せた。

クローリアも、露骨に誘うミレーヌに驚き戸惑うばかり。
当の本人は、ポカ～ンと目が点に成って立ち尽くしていた。

ーーー

アクトルが先に。

「しっかし、お前の知性は凄いな。　お前、スティールよりも世界中で女作れるんじゃ～ないか？」

スティールは、それは癪な意見だがライバル視する故か。

「可能性は十分だぜっ。　全くっ、コンコース島でも、年上のキャリーさんや街の姉さんに好かれたしなぁ～。　どんだけだっ！！　お前って奴ぁっ！！！　そのポジションは俺だっつ～のっ！！！！！」

ロイムは、マジマジとウィリアムを見て。

「ヤッパリ・・アレかな～。　ウィリアムのスティールさんとは違う近寄り難い雰囲気に燃え残る女心を刺激されるのかなぁ～？！！！」

スティールは、ロイムにナイフを向けて。

「おっ、それいい意見っ！！」

困った顔のクローリアは、

（どんなイイ所が有りますの？）

と、不満顔。

さて、アクトルはあ～だこ～だとウィリアムに絡むスティールに。

「おい、お前少し黙れ」

スティールは、自分にとってはどっちがモテるかは由々しき事だと強調する様に。

「これが黙れっかっ！！！」

しかし、アクトルは拳を握り。

「クローリアは顎を殴っただけだが。　俺は叩き割ってやろうか？　人前なんだよ・・・あ？」

と、凄む。

「うぐぐぅ・・・、アークぅ・・」

「ウルセエ。　お前のゴミのプライドは要らん」

「ゲフっ」

撃沈したスティールは、椅子の後ろに反り返った。

さて、アクトルはウィリアムを見て、右手にビールの入ったグラスを持ちながら。

「ウィリアム。　その毒は、そんなに作るのが大変なのか？」

ウィリアムは、顔を少し沈む俯き加減にして。

「ですね。　温度に弱いので、井戸水などの冷水の中で草を切り刻

み。　半日置いておくと、白い毒の成分が染み出て沈みます。　ですが、絶えず水の上澄みを汲み取り。　冷たい水に入れ替えてやらないと毒が劣化してダメに成りますよ。　しかも、瓶詰めするにも岩塩を刳り抜いて、その中に毒を固形化させて入れないと・・・」

「凄い面倒な作業だな・・。　しかも、採れる草の量が少ない訳だろ？　色々と面倒な毒だな」

頷くウィリアム。　実は、既にある食い違う二つの現実に悩んでいた。　一応、仲間なのでと思い。

「実は、事件で在る歪みと云いますか。　交わらない事実が見えています」

スティールは、“交わる”に反応して身を戻し。

「そりゃあ～お前、女とベットで・・・」

左から、ロイムが杖でスティールの横顔を。

「・・・・」

止まったスティールを見たアクトルは。

「チン（顎）に入ったな・・。　少しは静かになるか」

スティールは、死人の様な顔を横向きに倒れる。

ロイムとクローリアが、同時に合掌。

ウィリアムは、溜め息を吐いてから。

「いいですか。　毒は非常に高価で、おいそれと誰でも手に入れられない物です。　しかも、医師や薬師の仲介が無ければ手に入らない物。　死んだダレイ氏の店は、雑貨を中心に旅や生活の日用品を中心とした店で。　薬の類は、何処でも手に入る常備薬ぐらい物だけ。　更に、以前に薬関係でその手の筋とイザコザを起こしていて、殆どの仕入れルートを絶たれていると聞き込みました。　もし、家族が犯人だったとしたら、毒との接点が見えません。　逆に、部外者だとしたら、目撃もされずにダレイ氏を殺したのか。　手口が皆目見等も付きません。　自殺だとしたら、薬の入手先から動機まで全く解りません。　捜査が始まり、明日の一斉事情聴取で何が見えるのか解りませんが。　下手すると迷宮入りしますよ」

アクトルは、語るウィリアムが本当に何も見えていないと見えて。

「おいおい、お前が心配するとは怖いな～」

ロイムは、大きいハムをフォークで刺しながら。

「ホントだね。　ウィリアムがそんなに悩むなんて、初めて見た」

しかし、ウィリアムは食事の手が進まないままに。

「本当に・・・今回は怖いかも知れません」

アクトルは、口に運んだビールを飲むのを少なくて止めると。

「何だ？　何か悪い要因でも在るのか？」

ウィリアムは、俯く儘に。

「・・・、あの浴室・・・壁に亀裂が・・・」

聞いている3人は、意味が理解出来ず。

クローリアが、簡単そうに。

「古い家ならば、亀裂も在るかと思いますが・・・」

ロイムも、ハムを口に運んで。

「モグモグ・・そうらよ。　古い家・・なんらよ・・」

と、食べながらクローリアに同意をする。

だが、ウィリアムは。

「違う・・」

アクトルは、ウィリアムが偉く何かを気にしてると思い。

「何が違うんだ?」

すると、何時に無い真剣な目でウィリアムは皆を見て。

「ロビーも、廊下も、全て石を表に出す一般石材建築です。　浴室の天井は、瑪瑙の混じる石を切り取った物なのに、壁は安物のタイルでした。　しかも、普通なら石の上にタイルを張るなら、地震などでも壊れない様に枠組みにしてタイルを噛み合わせる・・・。

なのに・・あの浴槽は、やっつけ作業の様に粘着の粘土で貼り付けただけの安物仕上げ。　家の内装のどれにも金を掛けているのに・・あの場所だけそれが無い。　最初、浴室に入って違和感を覚えたんですよ。　ステンドグラスに合わない壁に・・」

アクトルは、ウィリアムが何を気にしてるのか心配に成り。

「お前・・・、何が言いたいんだ?」

「はい・・。　よくよく考えるとですね。　何で浴槽なのかなと思えるんです」

ロイムは、ポカ～ンと。

「そ・・そんなにの拘るの?」

考えるウィリアムは、検死したダレイ氏の死に方に一種の恐怖を覚えた。　一見只の毒死だが、何か今までに見ない死に方なだけに、殺しだとすると犯人の憎悪を感じる。

「考え過ぎかも知れない。　でも、態々・・浴槽で窒息させる遣り方・・・。　苦しんで、下手すれば湯船に沈み苦しみます。　丸で、あの場所が棺の様な殺し方に見えたんです。　犯人は、どんな恨みが有ってやったのか・・。　正直、少し怖いです」

ウィリアムがこう言うのは、アクトルやロイムなどにはとても怖く見える。

アクトルは、ビールを飲む手を完全に止めて。

「お前がそう言うと、間違いでもそう思えてくるゼ。　おぉっ、背筋にブルっと来た」

「スミマセン・・」

「ま、今日起こったばかりだ。　明日からしっかりやろうゼ」

ウィリアムは、頷くだけだった。

スティールを引きずり、宿に戻るとウィリアムは一人に成りたいのか。　ロビーの待合場のソファーに腰掛けて黙って居た。

気遣う仲間は、皆部屋に戻る。

その夜更けだ。　宿の４人部屋で横に成る男達４人。

「う～ん・・・お花・・ばたけがあああ・・・みえちゃうん」

と、スティールが寝返りを打つ。

一番右の壁に近いベットだ。

一方、一番左のベットでは、ロイムが頭に手を擦りやりながら。

「ステ・・ル・・・・さん・・ぶつ・・・・いたひぃ～・・・・」

真ん中のベットに寝る右がアクトル。　左がウィリアム。

「・・・・」

窓の前で曇り空の闇空を見るウィリアムは、まだ寝ていなかった。

（なんとなく・・・犯人は解る気がする。　だけど、意味が解らない・・。　理由以前に、どうしてあの毒を使った？　何処から手に入れた？　どうして・・・、浴室でないとダメなんだ？　食事に混ぜてもいいし・・・。　アレ？　何で、お湯に浸かってたタオルに毒の成分が残ってたんだろう？　結構色濃く反応が出たな・・。普通なら劣化が酷いのに・・。　タオルは、変色してたのに・・・。　あぁ・・、ダメだ。　サッパリ解らない）

ウィリアムは、一人で悩んだ。

実は、アクトルも起きている。

（溜め息が・・・止まねえ～な・・。　ウィリアムの奴・・何を・・・）

アクトルは、それを考えると。　フッと思う。

「ウィリアム・・・・まさか・・・・・」

ウィリアムは、アクトルが起きていたのに気付いて。

「起きてたんですか？」

だが、アクトルはその返事を口にせず。　別の問いを口にした。

「お前、まだ人が死ぬと思ってるのか？」

アクトルは、肘枕で身を横にして下着姿の筋肉の身体をウィリアム

に向けた。
窓の外を見るウィリアムは。
「解りません。　何も・・・」
アクトルは、それはそれでいいとしながらも。
「ウィリアム、お前は凄く犯人に近い考え方が出来るんだなぁ。俺には、何も意味が解らない。　お前みたく、事件の深い処を考えるなんてな」
ウィリアムは、苦く笑って。
「別に、犯人に近いかどうかは・・・」
「だが、お前の考えは当ってるかも知れねぇ～ゼ」
ウィリアムは、アクトルを顔だけ横にして見て。
「え？」
「だってよ。　俺が人をもし殺すなら、毒なんざ～使わずに戦斧で一気に・・な。　でも、犯人はそうじゃない。　お前が怯える様な毒を持ち出す以上、計画性も有るし。　多分、用意周到にやってるんだろう。　すると、事件を終わらせないままにするか？　お前と一緒に居て、其処は解る。　事件を短絡的に起こして殺す奴は、大抵が勢い任せだ。　だが、計画性を持つと・・その～・・・なんつ～かな。　ケリまでやるだろう？」

「まぁ・・・大抵は。　犯人は、自分が犯人では無いとして幕を下ろさせようとしますね」

アクトルは、冒険者としてのカンが働いた。　だから・・。

「多分。　お前が関わる以上、事件を解こうとする動きは加速する。お前は、蟻の巣穴の手掛かりで、洞窟を作るタイプだ。　明日からは、下手すれば止まれないぞ。　ま、今日は寝とけ。　明日までは、自由だからな」

と、アクトルは笑う。

ウィリアムは、アクトルの気遣いに薄く笑って。

「ええ・・」

と、天井を見て目を瞑る。　だが、ウィリアムの心の中で不協和音は成り響いていた。　時間の長短では無く。　何か、凄く因縁の香りの残り香を事件の現場に嗅いだ感覚が抜けなかった・・・。

ーーー

朝、深い霧の中で宿の前に馬車が来た。　ウィリアム達が食事をしようとしている朝も少し早い頃。

役人の馬車が来た事で、地下の食堂で声を掛けられたウィリアム達は店員から白い目を向けられるのだが・・・。

「やっほ～、おはよ～ん」

ミレーヌが、ウィリアム達が着こうしている席に階段を降りてやって来た。　姿は変わらずで、目の周りが少し疲れて見える。

ウィリアムは、もう迷惑を掛けられるのは某一名の御蔭で慣れて来た。　周りの視線を気にする仲間を他所に。

「おはようございます。　眼の下に疲労が見えますが」

ミレーヌは、目元を指で擦り。

「半分徹夜だったのぉ～。　３０過ぎた乙女に美容を維持する時間ぐらいは与えて欲しいわ。　あ、一緒に御飯食べる」

姐御肌の一面と、若い女性の一面を併せ持つミレーヌの姿に、スティールはムラムラ来る物を感じ。

「何処までも一緒していいぜ。　でも、３０過ぎてるとは見えないなぁ」

アクトルが、別の席から椅子を一つ借りる中。　さっさと坐るウィリアムの横にミレーヌは陣取って。

「そお？　これでも３４歳。　列記とした大人よん」

ウィリアムは、相応の歳だと思える雰囲気に。

「若く見えるとは思いませんが、年齢に似合った成熟は見られますね」

と。　冷静かつ、素直に返す。

スティールは、褒めに為ってないと思うが。

ミレーヌは、ウィリアムに顔を寄せて。

「ンフ。　悪くは無いでしょ？」

頷くウィリアムも。

「一般的見方としては、十分に綺麗かと」

微笑むミレーヌは、ウエイターに運ばれた水を飲みながら。

「ンフフ・・。　そうゆう硬い言い方も様になるのねぇ。　カワイイ・・・」

アクトルとクローリアの間に坐るスティールは、嫉妬で気が狂いそうな程に喉を掻き毟り。

「ンガーーっ！！！！」

アレルギー反応でも起こしているかの様だ。

アクトルは、義弟ながらに一人でアホに成るスティールを見るに疲れて。

「お前よ。　少し死ね」

クローリアは、横を向いてポツリ。

「モンスター・・・」

ロイムは、早くも波乱が見えるテーブル上で、チビチビと水を飲んでいた。

さて、注文をして料理を待つ事に為ると。　周りにチラチラ見られるのも気にせずウィリアムは、直ぐに話題を切り出す。

「何か進展有りました？」

と、ミレーヌに。

「いえ。　色々聞き込んできたらしいけど。　全ての情報に眼を通してないから何とも」

「ですか・・」

さて、来た料理に向うウィリアムは、何かを考えて黙って居た。

絡むスティールを邪険にあしらい食事を共にするミレーヌは、やはり人生経験から解るのか。　黙るウィリアムにちょっかいを出さず

に軽い話掛けに留める。

そして、食事が終わる頃。　ウィリアムは、紅茶を飲む手を止めてミレーヌに。

「聞いていいですか？」

微笑むミレーヌは、

「何でも。　下着の色でも良いわよ」

「なぬっ」

反応するスティールに、アクトルが小声で。

「海に沈めっぞ」

「はぐぅ・・・」

ウィリアムは、真剣な顔でミレーヌに向き。

「我々の事を連れて行った家族に言いましたか？」

ミレーヌは、一瞬キョトンとしてから、首を左右に振り。

「事情聴取の時でいいと思って・・、不味かった？」

「いえ、好都合です」

と、ウィリアムはミレーヌに言い置いて。　次に仲間を見ると。

「皆さん。　事情聴取には、俺一人で行きます」

と。

スティールやアクトルを始めに、５人全員がウィリアムに注目する。

アクトルは、少し力を無くして。

「行っても意味が無いからか？」

ウィリアムは、紅茶のカップを置いて。

「いえ。　皆さんは、事件の現場を少し離れた場所から見張って欲しいんですよ。　舞台に全員上がれば、此方の顔が相手に全てバレます。　もしも、何が有ってもいい様に。　隠しておける駒は、隠したいんです。　外部犯なら、尚更店の事は気にしますし。　もしも、あの一家が全て狙われている対象だと考えて、見守って欲しいんです」

アクトルは、黙る仲間を見回してから。

「ウィリアム、お前が心配するのは・・、毒の事と。　次の殺人か？」

“殺人”と言葉が出て、ハッとしてミレーヌもウィリアムを見た。

ウィリアムは、ゆっくりと首を縦に。

「毒と犯人の接点が見えない。　犯人が絞れない以上、ある程度の

予防線は張りましょう。　役人は、見える予防線。　皆さんは、影の予防線です」

スティールは、ウィリアムの腹を知り。　ニヤリと笑うと。

「表舞台にお前も上がるなら、お前も気を付けないと。　ま、お前に抜かりは無いがな」

ウィリアムは、スティールに視線を返し。

「もし、怪しい人が居たならスティールさんとロイムかクローリアさんとで尾行を。　アクトルさんは、体が大きいので目立ちますから」

すると、スティールは口元を微笑ませ。

「任せろ。　フン、お前の舞台を見物させて貰うゼ。　しっかりやれよ」

クローリアもロイムも、何も言えずに頷くだけだ。　何も言う事が無かったのだ。　スティールの納得が、寧ろ一番の疑問であった。

さて、ミレーヌと二人で先に外に出たウィリアムは、霧の立ち込める中で馬車へ。　黒光りのする褐色の馬車で、御者は役人だった。

「御者の方も連れてくれれば良かったでしょうに」

ウィリアムが言えば。

ミレーヌは御者の無口男を見て。

「誘ったんだけど・・・、スッゴイ頑固さんなのよ・・。　驕るって言ったのにぃ」

と、口を尖らせる。

御者の男性は、席に座ったままに微動だにしない人物だった。　深く黒い帽子を被った中年を過ぎた頑固者の顔である。

さて車内に乗り込んで、走り始めた馬車の中。　ウィリアムとミレーヌは向かい合いながらに坐る。

ミレーヌは、直ぐに。

「君に言われて、医師や薬師を当らせたわ。　でも、この数年分のあの毒は、特定の薬師で作られて。　特定の薬師や医師に渡ってる。　紛失や盗難は無いそうよ」

「ですか・・。　ま、大方そんな所だと思ってましたが」

「あら・・・、予定通りなの？」

「いえ・・。　毒を造るのも玄人なら、取り扱う方も玄人でないと。　仮に、実行犯が毒の玄人では無くとも、確かな知識と手解きを与えられる誰かが必要です。　色々と甘い毒では有りませんからね」

すると、ミレーヌも深く背凭れに坐って腕組みし。

「みたいね。　聞き込みに行った捜査員の方が、薬師や医師に尋ね返されたそうよ」

“誰があんな毒を使った?!!!!”

“あの毒を誰でも盗れる場所なんかに置いたバカが居るのかっ?!!!”

「ってね。　どの医師や薬師も、厳重に施錠出来る棚に仕舞ってあったって言ってたわ」

頷くウィリアムは、当然と言える頷きを見せた。　そして、こう口ずさむ様に言う。

「毒とは、使われて危険を知らしめる物・・。　それが劇毒で、効能が恐ろしければ厳重に扱われる。　扱う側が毒を深く認知し、正しく扱うなら当然の反応です。　逆に言えるのは、それだけ人を殺してきた毒だ・・・と云う事ですよ」

ミレーヌは、ウィリアムの呟きの独り言の様な話を心に留めて。しばし黙った。

だが。　馬車が、霧の中で都市の北側に在る役所区に近付いた中で。

ウィリアムは、家宅捜索の事を聞いた。

ミレーヌは、“サ～ッパリ”と言いたげに両手を上げて見せて。

「毒物らしき物は殺虫剤と洗剤ぐらいよ。　ぜ～んぶ探したんだけど・・、な～んにも」

すると、ウィリアムはミレーヌに近寄る様に前屈みに成って。

「実は、お聞きしたいのは・・・その押収物なのですが」

「？　ん？」

ミレーヌも、ウィリアムに顔を近づける様に前屈みに。

ウィリアムは、金髪美女と拳一つも無い間合いまで顔を近寄らせて。

「押収した物には、恐らく店の仕入れや輸入品のリスト等の書類も有ると思いますが・・・」

ミレーヌは、少し眼を逸らして思い出してから、また目線を合し。

「ええ。　もしかしたら、こっそりと輸入したとも考えられるし・・・。　押収してあるわよ」

「見せて頂けませんか？　ソレ」

ミレーヌは、ウィリアムを見つめる。“どうして・・・”は、言わずに。

ウィリアムは、視線を外さずに。

「念の為に、ですよ」

ウィリアムの今の時点で、その店の事情を知る必要は無いハズだ。

事件との関連性は、非常に薄い。　だが、ミレーヌは何かを感じて身を戻すと。

「いいわよ、見せても」

ウィリアムも、身を戻し。

「ありがとうございます」

「うん。　でも・・・、見張りは付けるわよ」

「構いません」

「じゃ、事情聴取の前に見ちゃって。　まだ、これからあの一家には朝食取らせないと」

ウィリアムは、早くも目を瞑って考え出した。

（なんか・・、凄いコに逢っちゃったわねぇ～）

瞑目するウィリアムを見つめるミレーヌは、ウィリアムの全てに惹き付けられそうだった。

third episode（後書き）

次話予告

事情聴取に望むウィリアムは、死んだダレイ氏の一家や使用人に影を見た。　結局、何とも得る物の少ない事情聴取は終わるが・・・。
　ウィリアムは、もう別の綻びを見つけていた。

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

やっと物語の入りも終わりました＾＾。

モバゲー内での閲覧数やファンの方も少しづつ増えて来て嬉しく思っています＾＾

物語は、コチラのサイトが優先で。　座談会はモバゲー内が優先と云う形でのらくらやって行こうと思ってます＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

third episode

冒険者探偵ウィリアム　3部

馬車が向ったのは、ヘキサフォン・アーシュエルの北部の一角に佇む3つのペンタグラフを画いた建物の右側の一つ。

マーケット・ハーナスは、商業国家であり。　行政の主権は、10人の商皇王と云う地位に居る商人達だ。　商売の規模や、街で催す様々な行事に安定した出資の出来る商人達の中で、数年に一度の選挙が行われて決められる。

深い話は省くが、その末端のから上までの選考基準に立ち会うのは市民であり。　ただ売り上げや財力が在るならいいと云う訳にも行かないのだ。　そして、この行政のトップの椅子に長年君臨する一族が、前の話で出て来たセイルの家、“オートネイル”家。　現当主でセイルの父親は、ひ弱なお坊ちゃんであるが。　セイルの祖父は、嘗て剣神皇とまで云われた男であり。　その引退しても悠然と有する発言権は、恐ろしいモノが在ると云われた。

さて、余談を挟んだが。　その商人達が運営する都市国家政府の中枢が、広大な土地に作られた3つの省庁である。　法治国家でもあるマーケット・ハーナスは、非常に悪事には厳しい。　賄賂が横行する一方で、一度罪に問われれば死罪は軽い物である。

更に、その政府の省庁内に於いても、法治政府省と云う役所は非常に大きく力が強い。　この部署に直轄で加わるのは海運・運輸・公正取引分野であり。　ミレーヌ達が所属する警備警察管理部門は、その法治政府省のエリートが出向してくる一部分に過ぎないのだ。

しかしながら、その与えられた権限は、犯罪に対してだけは絶大な権限を持つとか。　特に、ミレーヌ居る上級警察室長は、一個師団レベルの役人の数が与えられて。　２０の室長がそれぞれ独自の捜査権を持って事件に当る。　役人をも、室長自ら雇い入れる権限を持ち。　国から降りてくる配分資金の範囲内で自由に雇えるのだ。

つまり、役人は国に雇われて居るのではなく。　室長に雇われて居ると言って良い。

これは、ウィリアムが後々に知り事だが。　ミレーヌは、女性ながらにこの室長を勤めるエリートであり。　彼女自身が文武両道の指揮官で在るのが一つの理由なのだ。　だから、ミレーヌ配下の役人でミレーヌを悪く言う者は居ないだろう。

実際、ミレーヌの父親も同じ室長であり。　父親の頃から引き継いだ役人の中には、ミレーヌの為なら命も惜しまない者も多い。　その意味は、ミレーヌの父親の度量の広さと、ミレーヌの指揮官としての配慮の広さがそうさせるらしい。　他の室長の役人の中には、私服を肥やす違反者も出たらしいが、ミレーヌの配下ではいままで一人も出していない。　父親の頃から数えるなら、４０年以上は無傷とか言われる誇れる役人達の一団らしい。

さて、霧が少し薄らぎ始めた頃。　警備警察部署のある大きな建物の前にミレーヌとウィリアムを乗せた馬車が着いた。

「着いたわ」

ウィリアムが、ドアに手を伸ばそうとすると、ミレーヌが先を奪い。

「お客様だから、エスコートしてあげるわ」

ウィリアムは、この色気は在るが嫌気を見せずにそれを堂々とやる美女に呆れつつも感心し。

「重役待遇ですね」

ミレーヌは、微笑んで。

「そ～よん」

と、ドアを開ける。

降りた先は、直ぐ入り口の玄関。　黒いクラシカルな両開きの扉は趣きがある。　建物自体は、石の建築物と見て取れた。　ただ、霧に隠れてその全貌が見えないのが残念か・・、だがかなり大きい建物と見て取れた。

ミレーヌは、施設を見上げているウィリアムに。

「押収物は、３階に並べて在るわ。　まだ、コンラン一家は食事もしてないだろうから、食べさせて来る。　案内するから、来て」

ミレーヌの元に向うウィリアム。

開かれたドアから中に入れば、床が木製で。　歩くと特有のギシギシと成る。　建て付けが悪いのでは無く。　木自体の収縮で出来た

隙間の所為だろう。　さて、廊下を歩いて右奥に。　途中、施設内に詰めていた役人が帰宅する所と擦れ違った。

「お疲れ様～、娘さんにヨロシクね～」

ミレーヌが、中年の男に言えば。

「ありがとうございます。　最近、帰りがまちまちなんで、顔が見れないってボヤかれましたよ」

「休みはしっかりね。　緊急時以外で無理しないでね」

「どうも」

ミレーヌと一般役人の距離が、非常に近いのをウィリアムは見た。

（人格は、確か・・・みたいですね）

ミレーヌは、誰とでも声を交わし、疲れを見せずに笑う。　ウィリアムは、確かな人物を見た気がした。

（モルビットさんが女性になったみたいだ）

脳裏に、今頃はどうしているか解らぬ男の顔が浮んだ。

南側の階段で3階に上がる二人。　ウィリアムは、階段から廊下に出た右奥正面の金属製の扉に案内された。

「此処。　中には見張りの役人が居るけど。　気にせずに見ていって」

と、ミレーヌはギィィ～と音を上げて重そうな扉を押し開いた。

ウィリアムを連れて中に入ったミレーヌに、

「ご苦労様です」

敬礼をして出迎える役人の男性。　昨日、事件の有った店でウィリアム達を店の奥の家まで案内した男性だった。

「おはよ、ごくろ～さま」

労うミレーヌの後ろから入ったウィリアムは、見覚え在る顔の男性役人に気付き。

「おはよう御座います。　失礼します」

と、挨拶を。

ウィリアムを見て頷く役人は、ミレーヌに向いて。

「何か御用でしょうか？」

「うん。　このコがね、押収物を見たいって言うから連れて来た訳。ま、盗みはしないでしょうから、好きに見せてあげて」

「は・・はあ・・・」

ウィリアムは、入って正面と右手の壁に窓が広がり、外を一望出来る簡素な部屋の中へとミレーヌを越えて進んだ。　広さだけは有る

部屋には、幅広いドッシリとした長い木の机が何列か見える。　その上には、押収された物や、証拠物件らしい物が置かれていた。

ウィリアムの目は、もう役人もミレーヌも見えていない。　直ぐにテーブルの上の押収物に向って行く。

「・・・」

そんなウィリアムが、何処か学者の様な一本気を思わせ、ミレーヌにはなんとなく可愛く見える。　役人の男性に、小声で。

「事件に関係するかも知れないから。　あのコを邪魔しないでね。　じゃ、一家の様子を見て来るわ」

「は」

ミレーヌは、静かに退室して行った。

さて、押収物を見ているウィリアムは、一家の私物すら少ない押収で、手掛かりは無い収穫だったと見て取れる。　その中で、机の上に何百枚と云う高さで積まれた紙の束が、同じ高さで１０近く並べられる机に移動した。

少し離れた窓側の椅子に向った役人の男性は、ウィリアムの様子が気に成った。

（おいおい、アレは店の輸入記録や経常利益の収支報告だぞ・・・。　事件とは関係無いハズだろう）

押収された書類に目を通し始めたウィリアム。　その一枚の白い上

質紙にビッシリ書かれた内容を読むスピードの早いこと・・・。
後ろで見ている役人の男性は、一枚を手にとって見始めてから次の紙に移動するまでの時間が歩く歩調と同じなのに驚いた。

「・・・、マジかよ・・。　読んでるのか?」

掠れる様な小声で呟いたつもりだが・・。

「ええ、読んでますよ」

と、ウィリアムが紙を読みながら言い返して来たので。

「あっ」

と、声を出してその場に直立してしまった。

ウィリアムは、ドンドンと読み進めて行く中で、有る資料で手を止めた。

「・・・」

急激に動きを止めて、じっくりと何度も紙の内容を読み返す素振りに成ったウィリアム。

（ど・・どうしたんだ?）

後ろから見ていた役人は、ウィリアムの動きが止まったのに怖い物見たさに似た興味が湧いた。

ウィリアムは、数枚の紙に注目しながら。

「この資料を見ると・・」

「えっ?!!」

急に喋ったウィリアムに驚く男性。

振り返りもしないウィリアムは、紙をヒラヒラさせて続ける。

「この輸入資料を見ると、ダレイ氏の店は他にも有りますね?」

「あ・・、ああ。　ホラ、昨日言っただろう?　ポルスとか言う老僕が行ったって言う別の店舗だよ」

頷くウィリアムは、男性に背を向けたままに。

「はい。　ですが、輸入記録にはその他も有りますね」

「えっ?!」

「この資料に載る商品記載仕入れ数を見る限り。　何処か、宿かレストランに野菜や塩などを卸している気配が・・・。　ダレイ氏の商業関係の繋がりで、提携などの繋がりは?」

「あ・・い・いや・・、解らない・・」

「そうですか・・。　店先に出す品数と、記載の品数に食い違いが有りますし。　収支の記載にもバラつきが見えます。　もしかすると、抜け商業でもやってたとか?」

男性は、ハッとして驚きの顔で口を大きく開けた。

「あ・・あああ～っ!!!　商業法の違反じゃないかぁっ?!!」

ウィリアムは、資料を見ながら。

「ダレイ氏は、ご自分で2隻の運航船を運営しています。　他に、輸出・輸入に3社の運送業者と提携してますが。　どれも北の大陸の運航ルートの物ばかり。　なのに、並ぶワインの銘柄などが曖昧記載で、東の大陸のワインなどが混じっていると見受けられます。　コレは、何処かに金を掴ませて報告をボヤかしてる可能性も」

役人の男性は、ウィリアムの脇に走って来た。

「ホントかッ?!!!」

ウィリアムは、資料を見せて。

「解りますか?」

「あ・・・、いや・・・俺はそうゆうのは、明るくない・・」

ウィリアムは、脇目で男性を見て。

「こうゆう事の解る方は、此処には?」

「あああああ・・じ・・事務方をやってる奴なら・・。　まだ、出勤してないかも知れない」

「なら、後でこれを持って、商業の監督基準部から手を裏回しして

調べ為さった方が良いですよ。　事件のドサクサに紛れるのはいい遣り方ではありませんが。　暴けるなら、そうした方が」

「あ・・あああああっ。　わっ、解った」

ウィリアムは、この男性役人が随分と慌て性だと思う。　実は、この役人は入って日の浅いお坊ちゃんであった。

ーーー

さて、そのソファーに座る人々と対峙をする形で立ったウィリアムとミレーヌ。　ウィリアムが、３階の押収物で注意した事は、ミレーヌは事件の裏側で内々に調べると言った。

ミレーヌは、少し憔悴した人物も居る中で皆を見回しながら。

「皆さん、警察部上級警察室長のミレーヌです。　今回は、非常に珍しい毒が使用された変死事件ですので、昨夜から今日までお泊り頂きました。　事情聴取が終了し、後に必要事項を告知後。　皆さんの身柄は戻します。　但し、殺人の可能性も色濃い中で、勝手な行動は差し控えて頂きます。　絶えず見張りが着くのは、皆さんの潔白にも繋がりますので。　数日の間は、我慢を」

皆、黙って居る。　ただ、目つきはそれぞれだ。　少し虚ろな目をする者も居るなら、緊張と警戒に染めた目つきをミレーヌに向ける者も居る。

ミレーヌは、ウィリアムをあえて紹介もせず。

「では、これから事情聴取を始めます」

すると、身の丈が高く。　ガッシリした筋骨隆々の少し尖った目つきをする３０位の男が。

「役人さんよ。　その横の男は何なんだ？」

ミレーヌは、早くも来た質問にすこ～し詰まらなく思えるのだが。

「彼は、冒険者でウィリアムと云う者よ」

すると、その男は少し威圧する目つきでミレーヌを見て。

「おいおいっ、冒険者なんざ～何で此処に？」

待っていたかの様に、ミレーヌは目つきを鋭く変えて。

「何か不満？」

女だと甘く見たガタイの良い男だったが。　ミレーヌの斬り付ける様な視線に声が出ない。

「・・・」

ミレーヌは、この一撃で場の7名に先制の威圧を示したのだ。　ウィリアムに違和感を思わせ、質問させて返す。　7名の中に、緊張の空気が強まった。

「先に言って置くわ。　私は、事件の担当であり、一つの部署を任された役人よ。　誰を雇おうが、私の一存。　彼方達に、その選択の余地は無いの。　私でも、横の彼でも質問された事には答える様に。　私は、無駄で無用な人間を取り調べに呼ぶ気は一切無いわ」

役人は、普段は市民に権限行使は認められない。　だが、容疑や事件に関われば別の話。　ミレーヌは、其処をピシャリと示したのである。

すると。　ウィリアムはミレーヌの前に出た。

「皆さん、私は冒険者でウィリアムと云います。　今回、斡旋所か

らの回しで今回の事件解明に参加しました。　ですが、皆さんに先ずお聞きしたい。　ダレイ氏の命を奪った毒の事を、誰かご存知ですか？」

「・・・」

7名は、黙る。

ウィリアムは、ミレーヌを見ずに。

「今回使用された毒は、非常に高価で、希少で、作るのが難しい毒です。　この中で、薬の調合や生成に精通した方は？」

すると、頭に白髪の混じる４０代半ばから５０前後と見て取れる男性が、ウィリアムが見て左のソファーから。

「この中に、其処までの技術を持った人は居ませんよ。　エレンお嬢さんとポルスさんが、軽い調合を出来るだけだ」

ミレーヌは、ウィリアムに耳打ちで。

「彼は、あの店の仮店主で、住み込みで働くジョーンズさん。　年齢は５２歳。　隣のふくよかで５０前後に見えるメイドのテーラーさんとは夫婦」

頷いて了承したウィリアムは、ジョーンズを見て。

「では、事件の時の事を詳しく教えて下さい。　ジョーンズさんでしたか。　貴方から」

日焼けした顔で、角ばった細い顔が印象的な男性ジョーンズは、奥さんでメイドのテーラーを見てから。

「ああ。　俺は、基本は一日店番だ。　朝から、下働きで俺の右に居るタンデと二人で客相手さ」

ジョーンズの右脇に居る赤髪がクセ毛に伸びる真面目そうな若者が気弱そうに頷き。

「間違い無いです」

ジョーンズは、直ぐに言葉を繋いで。

「あの時は、昼頃で客足が多かった。　俺が勘定を受けて、コイツが品物を紙袋に入れてた時に、“キャアーーっ”って云うお嬢さんの悲鳴を聞いたんだ。　だから、店をコイツに任せて、俺は奥の家に戻った。　そしてら、お嬢さんが奥の居間で倒れてて、旦那様（ダレイ）が死んでるって。　毒で死んでるって云うもんだから、驚いて店を仮閉めしちまおうと・・・。　確かに、浴槽も除いたら死んでたからな・・、目ぇ開けたままで・・・」

と、俯く。

ウィリアムは、ジョーンズの奥さんで、メイドとして厨房を預かるテーラーと云う婦人に顔を向けて。

「では、テーラーさんでしたね。　当時の事を教えて下さい」

ウィリアムに言われるまで、俯いて皺の多い悲しげな顔をしていたテーラーは。　こう言われてビクンとした。　握っていた安物のス

カートの膝辺りを、パッと放してである。

夫のジョーンズは、年下であるウィリアムにグッと目を向けて。

「コイツはっ・・」

と、言う。

だが、ウィリアムは。

「貴方に聞いては居ません。　どうぞ、お静かに」

言われ方が冷めた物だから、ギュっと拳を握るジョーンズ。　その手を擦るテーラーは、

「アナタ・・、此処は取り調べよ・・」

と、言ってから。　不安を顔に満ち溢れさせて。

「あ・・あの。　私は、お嬢様の悲鳴が聞こえるまでは、厨房に居ました。　最初に、旦那様が外からお戻りに成られて食事をするご用意をし。　旦那様がお風呂に入られてからは、付き人のサレトンさんの食事をご用意していました」

其処に、最初威勢の良い言い方をミレーヌにしたガタイの良い男が。

「確かだ。　俺は、厨房でメシを待ってたゼ。　目の前に、テーラーが居た」

ウィリアムは、記憶を手繰りながら。

「確か・・・、お風呂の準備は、貴女と・・・奥さんのルイスさんと云う方が一緒に為さったと聞きましたが・・。　その辺は？」

俯くテーラーは、なんとかしっかりと伝えようとする素振りで。

「旦那様は、い・何時も外回りが終りお戻りに成られると・・お風呂に入られます。　特に・・、夏場や冬場は毎日・・。　ですから、奥様がお水を張り。　私が、外から火を熾して沸かしました。　旦那様が、先にお食事をされると言ったのは・・何時もの流れです。　ですから、食事の下準備の合間に、湯加減を奥様が見て居られました。　途中までは、交替するように見ていましたが・・、沸く直前はお食事の支度に忙しく。　奥様が見ると仰ったので・・・私は食事の準備の方に。　後は、旦那様と食事をご一緒したエレンお嬢様と二人で、洗物や旦那様にお出しした皿などを引っ込めたりして・・。　エレンお嬢様が、ご自分のお仕事に向かわれてからは、サレトンさんのお食事のご用意と・・・忙しかったです」

ウィリアムは、頷きを返して。

「悲鳴を聞いた時は？」

「は・はい。　旦那様がお風呂に入られて・・、その後に店先に何かを言いに行ったお嬢様が中にお戻りに・・。　奥様は、旦那様が入浴されている前から頭痛がすると三階のご自分の部屋にお戻りに為られていました。　旦那様へ、奥様がご用意したお着替えとお湯の足しを窺いにお嬢様が行かれたのをサレトンさんと二人で見送った矢先に・・・悲鳴が・・」

ウィリアムは、其処で。

「解りました。　では、サレトンさんでしたか」

と、右手のソファーに座るガタイの良い男に向う。

「おう」

サレトンと云う男は、黒いシャツ一枚に草色の迷彩の厚手のズボンを穿いている如何にも用心棒の様な男性だった。　筋肉からしても、腕っ節には自信が在るのだろう。　だが、同じソファーに座る物静かで細身の黄色いドレスを着た女性とは距離を置き。　少し遠慮をして居る。　恐らく、この女性が未亡人のルイスなのだろうと解った。

サレトンは、角刈りの頭を揺らしたりしながらに。

「旦那は、毎日の日課をしてた。　朝、港に出向いて、その日に来る船の運航を聞くんだ」

頷くウィリアムは、心得て居る様に。

「船が入港する前日から、伝書鳩で港に連絡が入りますからね」

「おう、良く知ってるな。　ま～、その報告を聞いてからは、港に近い段の街中に有る別店に行くんだ。　品物の痛みとかのチェックじゃね～。　売り上げの金を巻き上げる為よ。　そんで、昼前まで女の所に時化込んで。　昼頃帰って、メシ喰って・・風呂入って、昼寝して。　夕方には、母屋の店の売り上げを巻き上げて、一人自室に篭って銭勘定って訳。　昨日も、死ぬ前まで～ったく同じ様子。　変わりは、何も無い」

ウィリアムは、少しも声のトーンを変えずに。

「詳しく言ってくださいと・・皆さんにも言いましたが・・」

サレトンは、微笑するウィリアムを一瞥してから身を少し正し。

「あ・・ああ。　見回りから帰って、メシを喰う旦那には必ず付き合う。　帰った時、店先にはジョーンズのオヤジとタンデが働いてて。　お嬢さんが品揃えや整理をして、ポルスのじ～さんが仮棚に置いてある在庫の調べ入れてた。　だが、旦那が帰ったから、お嬢さんが下着を買って来た事を告げながら一緒に家ン中に戻った。　風呂に入る旦那のタオルとかは、奥さんが用意して食堂の隅にある棚の出っ張りに置いたよ。　旦那が、お嬢さんを一緒にメシに誘って喰ってて。　奥さんは～、頭痛がするからメシは後にするって言って奥に行っちまった。」

此処で、サレトンは紅茶に手を伸ばす。

ミレーヌは、ウィリアムに耳打ちで。

（一応、証言は一致してる。　昨日と、略同じよ）

頷くウィリアム。

サレトンは、紅茶を一飲みしてからカップを置かずに。

「正直、お嬢さんは使用人達の休憩を埋める為に後でメシ喰うんだが。　時々、旦那が我儘言って一緒に食事する。　旦那は、お嬢さんを何でも金を稼ぐ商人に嫁がせたくてな。　最近は、その事を言

い含める為に昼に呼び付けるのさ。　その愚痴ったらしい文句を言った旦那は、タオルを持って先に風呂に。　着替えの下着は、いっつもお嬢さんか奥さんが後から届けてる。　昨日もそうだった。お嬢さんが、テーラーの手伝いして後片付けして。　店先に顔を出してから、戻って来た。　多分、旦那の世話が一段落したから、店先で働く二人にメシを交替で取らせる為だろう。　でも、奥さんの用意にバスローブが無くてさ。　旦那の衣服を上の二階に取りに行ったお嬢さんが、上から戻って来て。　旦那が二階で残した洗物をテーラーに届けた時。　こう言ったんだ」

“今日の御祖父ちゃん・・、具合悪いのかしら？　お湯を使う音が聞こえないわ”

「ってな。　そう、何時もなら俺がメシとか食うあの時間。　旦那はアホみたいにお湯を使って身体を洗う。　外まで聴こえないだろうからって、ヘッタクソな歌を唄ったりさ・・。　でも、あの時は最初だけ・・、最初だけお湯を使う音がしてただけ。　少しして、直ぐに静かに為った。　だから、お嬢さんがそう言った時。　俺も、不思議に思ったさ。　そして、お嬢さんがテーラーと会話を交わしてから、手に持った旦那の下着を届けに行って・・。　直ぐに悲鳴が」

サレトンは、ウィリアムを見上げる。　ウィリアムも、サレトンを見下して。

「死んだ訳ですか」

「ああ・・、正直言って旦那の死体見てぶったまげたゼ・・。　お嬢さんが、口の中に黒い点が有るって云う通り。　旦那の口の中にゴマみたいな黒い粒が浮き上がって来てよぉ。　お嬢さんが、“毒

殺だ”って云うから・・思わず役人に届けに走った・・」

ウィリアムは、確かにと頷く。　そして、首を僅かに動かしてルイスと云う女性を見た。

「・・・」

俯いている姿は、亡き夫の父親の死を悲しんでいる様に見えるが。
　黄色い所々に透ける刺繍の花が画かれたドレスは、急いで着たのか。　ほっそりとした体つきながら、妙に胸や太股に付いた肉感は女らしさを強調する。　ミレーヌやクローリアの様なパッと見て解る美人では無いが。　白い肌に可愛らしさが残る顔は魅力を湛える。
　しかも、静かに俯いて坐っている姿が慎ましやかで、男の同情を誘いそうな色気が有った。

（・・・・）

しかし、ウィリアムは鋭い程の視線でルイスを見ている。

（どうしたのかしら・・・）

ミレーヌは、静かに成ったウィリアムが気に為った。

ほんの少しの沈黙が流れてから、ウィリアムは突然の様に。

「ルイスさんは、貴女ですね？」

と、本人を見て問う。

「あ・・、は・・はい・・・」

か細い声で、少し上目遣いに為りウィリアムを見返すルイス。　潤いを光らせる目は、しおらしく。　４０前後と云う年齢を忘れさせる。

しかし、ウィリアムは夜の飲み屋で子供の頃から働いて生きて来た。　欲望や衝動に対する自制心や冷静さは人一倍であり、女性に対する免疫は最早枯れ木の如く。　周りで黙って見守る役人の目線も、ルイスには一瞬の迷いが起こるのに。　ウィリアムは、鋭い視線を崩す事も無い。

「先程、テーラーさんが貴女の行動も説明していましたが。　補足等合わせて、事件当時の説明をお願い出来ますか？」

「はい・。　私は、午前中から編み物をしながら、テーラーを手伝ったり・・御義父様の身の回りの事をするのが日課ですので。　あの時も・・そうでした。　大体、お昼前にお戻り為られる御義父様が、この時期はお風呂に入られるのは日課です。　ですから、その頃合いに合わせるまでは自室で編み物をし・・。　昼前に・・、そう。　エレンがポルスと戻った声を聞いて、そろそろお湯を沸かそうと思いまして。　下に降りて・・準備を」

ウィリアムは、間を置かずに。

「エレンさんが帰って来た声・・・ですか。　下着を買いに行ったエレンさんは・・・貴女ですね？」

ウィリアムの真正面。　ソファーに座るうら若い２０歳までどうかという女性が、７０近い様子の男性と二人並んで坐っている。

「はい。　私がエレンです」

少しハスキーながら、弾む声は若い。　掠れた声と云うより、低めのシッカリとした良い声だ。　大きく見開かれた目は、少し黄色味が光に反射する瞳で。　化粧ッ気の無い肌は肌理細やかで、肌色が綺麗だ。　薄い桃色と紅色の間の唇をし、黒髪は無造作に束ねて背中に流している。　スッきりとした顔立ちの美人は、ウィリアムを見返す目に宿る光の強さは目力とでも云うのか。　真っ直ぐな視線を返すのは、気持ちが坐っている証だ。

だが、今度はウィリアムは少し意外な顔をエレンと云う娘を見つめ出す。　マジマジと、よ～く顔を見回す様にだ。

ジロジロと見られたエレンは、ウィリアムに。

「何か？」

すると、ウィリアムは・・。

「貴女のお父さんと云う方は、印象深い人では在りませんでしたか？」

すると、エレンの顔が少し沈んだ。

「・・・解りません。　私の父は、私が幼い頃に港で原因不明の水死をしているので・・・。　父の顔の面影も解りません・・」

しかし、この質問に驚いた人物が居る。　ルイスと・・エレンの隣に座るポルスと云う老人だ。　皮のチョッキに草臥れた青い襟の有るシャツを着て、下には厚手のズボンと云う働き手特有の恰好だ。

いきなり、バッとその場に立ち上がったポルスと云う老人は、元は仕事で鍛えぬいた幅広い肩を精一杯に張って、右目が潰れ加減ながらに怒りを湛えて怒鳴りだした。

「うぉまえは何様だぁっ?!!　ウチのお嬢さんに因縁を付ける気かぁっ?!!!!!!」

興奮した老人に向かい、役人達が向かう素振りを見せる。　ミレーヌも、何かを云おうとした・・。

ポルスの横に坐るエレンが、ポルスの急激に変わった言動に驚いて落ち着きを促す。

「ポルスっ、怒らないでっ」

だが、役人やミレーヌを差し置いて、誰よりも先に行動したのはウィリアムだ。　少しポルスと云う老人に身を前に出す様にして顔を向け。

「おや。　私は“印象深い”と云っただけ・・。　なるほど、貴方はエレンさんのお父さんをご存知ならしい。　では、此処でハッキリと聞きましょうか?」

「あ〃・・・」

ウィリアムの嘲笑とも取れる微笑を浮かべた顔で言い放たれた言葉。

ミレーヌや、言い合う二人を見るサレトンやジョーンズとテーラーの夫妻ですら何が何だか解らない。　だが、急激に血の気を顔から失わせたルイスと、大きく口を開いて驚きの顔のままに固まったポルスと云う老人は、明らかに様子が違っていた。

その二人を見るウィリアムも、済ました顔では無く。　こう、何かを見つけた目で、感情が顔に見えていた。

ミレーヌは、何かが起こった劇場の様なこの場に唖然とすらして。

（何・・何よ・・）

と、驚く事しか出来なかった。

ーーー

かと思ったとか。

ミレーヌは、エレンに毒だとどうして解ったのかを少し突っ込んで質問した。　だが、エレンからのそれ以上の回答は引き出せず。家族全員の話の流れが纏まって見えた。

ミレーヌは、休憩を言い渡し。　部屋にウィリアムと二人きりに為る。

「・・・」

考え込んでいるウィリアムに、ミレーヌは直ぐに聞いた。

「ねぇ、ポルスってオジイチャンとのやり取りは、一体何な訳？」

ウィリアムは、ミレーヌをを見て。

「確実な事はハッキリ言えません。　まだ、推理段階ですから。云える事なら・・・“顔”、ですかね」

ミレーヌは、呆気に取られる顔つきに変わり。

「顔・・・顔？」

と、自分の顔を指す。

ウィリアムは、頷いた。

「・・・意味が解らないわよ。　そんなの・・・。　で、何か解った？」

ミレーヌは、少しもったいぶるウィリアムにムカついたかの様に剥れて見せる。

しかし、ウィリアムは冷静なままに。

「第一発見者のエレンさんは、犯人で有る可能性は非常に低いですね」

「そうかしら、彼女の衣服や手足・・髪の毛にも毒の反応が在ったのよ。　あの毒、数年前に殺しで使われて判別する医者が専門に居たの。　昨夜、お願いして全員の身体を調べたら、エレンって娘と、ルイスって奥さんの身体や衣服には毒の反応が凄かったらしいわ」

ウィリアムは、軽く頷いて理解を示す。

「なるほど、お湯の在った状態の浴槽と云う条件で入った二人に反応が強いと？　では、遺体はそのままにミレーヌさん達が呼ばれた訳ですから。　同然の事ですね。　多分、浴室に入った全員の衣服からは毒の反応が出て。　遺体・・、いや。　浴槽に近付いた人ほど反応が強いでしょう？」

ミレーヌは、確かにダレイ氏を直接見に浴室に入ったサレトン・ポルス・ジョーンズの衣服から反応が出た事を思い出す。

「まぁ・・、そうだけど・・・」

「多分、あの毒・・。　お湯の中に混入されていたんでは？」

「え？　タオル・・・じゃなくて？」

「ええ。　湯船の底・・・もしくは、何らかの方法で塊のままに沈められていた・・。　其処に、ダレイ氏が入ってしまう・・・。全身に壊死の反応が見られたのは、毒に浸かったからだと考えています」

「まぁ・・、昨日の医者と同じ意見だわ・・・」

驚くミレーヌ。

しかし、そんなことよりウィリアムが引っ掛かるのは、やはり浴室自体だ。

「俺は、それよりも浴室自体が引っ掛かりますね」

「え？　現場の事？」

「ええ。　何で、あそこを現場に選んだのか・・・。　犯人は、事件の現場に何かの思い入れが在って選んだ・・。　そう思えるんです。　特別な毒を使い、特別な場所で殺す・・・。　多分、これは殺人です。　それも、相当にの憎しみを持った人物に因る・・ね」

ミレーヌを見るウィリアムは、何か確信めいた雰囲気を持ってそう言う。

「・・・」

何も言えないミレーヌ。　研ぎ澄まされた感性と知性が、推理をするウィリアムには光を放つ様に逆って見える様な時が在る。　何時ものノンビリとして済ますウィリアムでは無くなっていた。　ミレ

ーヌには、この知的な男の雰囲気が香るのが堪らず。　背筋にゾクゾクする様な法悦というか、陶酔を感じた・・。

ウィリアムは、更にミレーヌに。

「あの。　エレンさんが、“お父さんが変死した”と言ってましたよね？」

「ええ。　ウチの父が最後の頃に担当した不審死検案よ。　でも、殺しとも何とも・・。　父は、殺しと思っていたみたい。　私に、事件の引継ぎを頼んだもの・・」

ウィリアムの目が、キュっと細まった。

「済みません。　その、捜査資料を見せて頂けませんか？　それと、押収した輸出・輸入のリストも写しを貰いたいんですが・・」

ミレーヌは、何かが大きく進展する気配を感じた。　迷宮入りしそうな事件が、何か小さな切っ掛けで急に進展する時の感覚と同じ物だ。　腕組みで微笑むミレーヌは、少し間を置いてから。

「いいわよ。　今回は、徹底的に協力してあげるわ」

すると、ウィリアムは口元を微笑ませて。

「ありがとうございます。　御姉様」

と。

思わぬ一言で、ミレーヌの背中はまたゾクゾクした。

（何か・・凄く手玉に取られちゃいそう・・・）

ミレーヌは、普段は逆の立場だけに。　どうも、新鮮な感覚であった。

・・・・・・・。

さて。　時は進んで夕方だ。

「なあ。　役人が見張ってるゼ。　今日は、もういいんじゃねぇ？」

スティールが、仲間を見て言う。

「僕も、そう思う。　長く・・・居過ぎだしぃ」

と、紅茶を飲み干したロイム。

４人が居るのは、殺されたダレイ氏の店先が良く見える斜め向かいの喫茶店だ。　昼前から入店し、窓の前に陣取って見張りを続けていた。　昼を大きく回った頃。　役人が家族を連れて戻って来た。

通りを往来する客が多い時間帯に、周りからジロジロと陰口を囁かれる様子が、アクトル達４人にも見えていた。　その馬車が去ってから、だいぶ経ってからもう一台の馬車が店先に停まった。　何事かと思ったのだが、やはり役人と家族の残りを連れて来た馬車であり。　その他に変わった事は起きないままである。

さて。　アクトルも、流石に長時間居座る事で店員などに何度も何度も見られている手前。

「そうだな・・、今日は一端帰るか」

テーブルの上には、食べきったケーキ2ホール分の皿と、１０回以上は入れ替えてもらった少し容量の大きいティーポットが置いてある。

そんな雰囲気が漂う中で、クローリアは店の中からウィリアムが出てくるのを見つけて。

「まぁ・・・、ウィリアムさん・・」

ウィリアムの名前に、一同は揃って窓の外を見ると・・・。

ミレーヌと店先で話しているウィリアムが居る。

「なんだよ・・全く・・」

スティールが席を立とうとするのを、

「待てぃ」

と、アクトルが肩を掴んで留める。

「ちょっ・なっなになに・・」

坐ったスティールは、アクトルに。

「何すんだよ」

アクトルは、当初の目的を完全に忘れているスティールに。

「朝の会話を思い出せ、アホウ」

「おあっ・・、そっそうだった・・」

店の中に戻る素振りのミレーヌと、別れて道へ向おうとするウィリアムが見えて。　別れた直後に、ウィリアムはアクトル達の見ている窓に４つ指を立てた手を見せて、囲む様な素振りから宿の在る方角へと手を振り上げる。　そして、自分の服を軽く払った。

アクトルは、冒険者などが秘密で使う合図信号だと解った。　時折、手分け捜査で役人なども遣う仕草なのだ。

「よし。　お帰りだ。　ただ、ウィリアムには宿まで会わず、別の道から迂回するぞ」

ロイムは、いきなり立ち上がって言うアクトルに。

「えっ？　えっ？！」

クローリアも、ポカンとアクトルを見る。

スティールは、個人個人でクセのある“レクチャー・サイン”を使うウィリアムを見ていただけに。

「抜かりねぇ～。　アイツって・・・」

と、勘定の用意を懐に求めた。

その日の夜だ。

余りやってはイケない事なのだが。　出店や屋台で出来合い物を大量に買い込んだウィリアムは、仲間の全員を男達の寝る４人部屋に集めて。　中で食事をしていた。　基本、寝室の床を食べかすで汚すのはマナーとして嫌われる。

ウィリアムとアクトルの寝るベットに向かい合って坐るロイムとクローリア。　部屋に備わっている椅子に坐って、丸いテーブルを囲むウィリアム・スティール・アクトルの３人。

「・・・つまり、話の流れからして怪しいと決め付ける事が出来る者はエレンとか言う孫娘だけって云うんだな？」

分厚いベーコンを野菜とマヨネーズを一緒に挟んだパンを食べるスティールが、酒の無い事を悲しむ手つきで言った。

ウィリアムは、チーズを挟んだりしてパンを食べながら。

「表向きは、・・ですが。　家の細かな間取りを見ると、実際は色々と怪しい人は出てきますよ」

アクトルは、白いブドウを口に放り込んでから。

「例えば？」

「先ず、キッチンとダレイ氏が食事した食堂は壁が無く丸見えでしたが。　其処に居たのはテーラーと云う年配のメイドと、ダレイ氏の用心棒をしているサレトンと云う男のみ。　その時、浴室前の廊下の奥に当る行き止まりの裏勝手口は開けっ放しでした。　全く他人が出入り出来なかったと云う話ではありません」

スティールは、パンを軽く持ち上げて。

「嫌な現実だ」

ウィリアムは、その話には頷くだけに留めて。

「2階、3階へ続く階段は、食堂と居間の間を抜けている廊下の先で。　しかも、その階段へ向う廊下とは、食堂の出入り口より浴室に近いんです。　浴室に近い食堂のドアは、エレンさんが閉めたと言いますから、こっそり行けばルイスと云う未亡人の奥さんにも犯行は可能です」

アクトルは、頭痛で引っ込んでいたと云うルイスが元々からの酷い偏頭痛持ちだったと云う付け加えを聞いて。

「でも、マジなら動けないかも・・。　俺のお袋も偏頭痛持ちだったからな～。　酷い時は、ベットから起き上がれなかった・・」

その姿を知るスティールも、何かを懐かしむ様に頷いた。

そんな二人を見るウィリアムは、ゆっくりと間を開けて続ける。

「後。　老僕のポルスと云う人物・・。　棚の在庫を調べて居たそうですが、簡単な調合で作られた薬や一部の商品の保管庫は、家の中の左倉庫に在って。　事件の起こった頃、数度に渡って家の中と倉庫を行き来していたと云う話も有ります」

聞いていたロイムは、口の周りにチキンサンドのタレである照り焼きソースをベタベタ着けながら困惑の顔で。

「じゃ～、もしもそのキッチンに居た用心棒とメイドさんが嘘を言っていたとしたら。　客前に出ずっぱりだった二人の男性以外はみ～んな怪しいじゃん・・」

クローリアは、手拭の手拭いをロイムに差し出して。

「ロイムさん、お口周りが・・・」

と、言った後にウィリアムを見て。

「毒は特定出来ましたが。　肝心な処は何も解らず仕舞いですね・・。　私には、サッパリ解りませんです」

すると、ウィリアムはアンチョビを瓶から手に取り出し、パンを片手にアンチョビを見つめると。

「毒と云うのは、致死量であるならば飲ませるのが一番なんですよ・・・」

仲間の全員が、ウィリアムを見る。

ウィリアムは、更に続けて。

「確かに、皮膚も息をしているので。　気体で殺す事も可能ですが・・・。　一番は、食わせるに限るんです。　吐いても、量を超えれば死にますから」

スティールは、ウィリアムが冷静に言うので怖くなり。

「お・・お前が言うと・・コアイ・・な」

ロイムも、ギュッと股を窄めて。

「う・・うん・・」

だが、クローリアは。

「やはり、では今回の殺害の仕方は・・何か意図が在ると思っていらっしゃるんですね？　ウィリアムさんは・・」

頷くウィリアムは、アンチョビを食べて噛み砕いた後で。

「先ず、事件に関係在るか・・・無いか・・、それは別にして。二つの事実が解りました」

アクトルは、ヌ～っと顔をウィリアムに寄せて。

「何だ？」

「ええ。　一つ目は。　あの店に、在っては為らないモノが並べられています」

スティールは、ロイムと見合ってから・・。

「まさか・・・、裸体のガールズとか？」

窓の外に、“バキィ！！！”と云う音が響く。

「はぐぅ・・・はぐうぅぅ・・・」

陥没したスティールの顔と、仕置き終了を継げるアクトルの頷き。

ウィリアムは、スティールを見捨てて。

「あの店に並べられている品物の中に、もう滅多に出回らない西の大陸の物産が置かれています。　赤い塩、灰色のランプ専用の固形燃料、赤い色をした宝石で“コーラル”と“カーネリアン”を使った伝統民芸彫りの筆・・・」

アクトルは、嫌な気配を覚えて。

「おいおい・・、ま～た密輸とかか？」

「はい。　ダレイ氏が利用してる船に、西の大陸の荷物を運ぶ船は無く。　今、あの塩や宝石の民族民芸品を作る国は、凄い内戦状態で他国と国交を断絶しています。　ちょっとやそっとでは仕入れるのすら無理・・。　しかも、その他に幾つかの品も含め、輸入リストに記載が無ければ、売り上げ・決算の内容に購入費用が無い商品がチラホラ。　多分、役人に金を掴ませて、“雑出費用品”と云うあやふやな品名で、雑費扱いにしてますよ」

スティールは、スッと顔を元に戻し。

「何だ？　そりゃ？」

ウィリアム以外の全員は、

（一瞬で元に戻った・・・）

クローリアは、更に。

（か・・回復要らない体質ですわね・・）

と、呆れる。

ウィリアムは、自分の手に在るパンを見せて。

「船の乗組員が、行った先の国や都市で食費などに使うお金ですよ。経費には、船員の生活は面倒見る傾向が在りますので。他に、船で云うなら緊急の補修費用や、旅人を貨物船に乗せると“雑入費”と、貰った運賃のお金を云う言い方に変わります」

スティールは、真面目な顔で。

「ウィリアム先生、仕入れ先で・・・その・・・おでいと等をした費用も・・・ですか？」

「はい。　懐ゼニを出さずに経費で出せば・・」

「うぬぬぬ・・・、素晴らしいシステムだぁ・・・。　船乗り・・・、サイコー」

馬鹿馬鹿しいスティールの安易な想像に呆れる皆。

しかし、ウィリアムは違って。

「ですが、お金を預けられる船長は、その使用道の権限が有る訳では在りませんよ。　戻ったら、船主に使った費用の使い道は聞かれますから」

「あら・・・、不都合な・・・・」

力を抜かすスティールに、アクトルやロイムが声を出さずに“バカ”と云う。

ウィリアムは、写させて貰った書類を思い出しては、スティールに続けて。

「しかし、異常です。　一般の雑費経費には在り得ない金額が記載されてますし。　逆に、あの店で扱われている記録に無い高価な品を買うには不足です。　完全に、誤魔化しですよ」

スティールは、思い出した様に。

「んだば～、そうそう。　もう一つは？　解った事が二つ在ったって言ってたよな？」

ウィリアムは、水をコップで飲んでから。

「ええ・・、こっちは奇妙な話でしてね。　なんと、あの家では２０年近く前に別の変死者が出てました」

４人揃って、ウィリアムに驚きの顔を向ける。

アクトルが、思わずの様に。

「誰だ？」

「はい。　ルイスと云う奥さんの旦那さんです。　今回死んだダレ

イ氏の息子・・、孫娘エレンさんのお父さんですね」

クローリアとスティールは、そんな話を役人から昨日聞いたのを思い出した。

「あ」

「まぁ」

お互いで見合って、ウィリアムに向いた。

third episode（後書き）

次話予告。

ウィリアムは、ミレーヌとは別行動で事件を調べ始めた。　先ず、孫娘のエレンから詳しい話を聞こうと外に連れ出した。　二人きりで話をしようとエレンに言って訪れたのは。　エレンの父親の親友が運営する高級レストランだった。

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

どんどん、書き上げて掲載して行きます＾＾

クリスマスぐらいまでにウィリアム編が終わるなら、なんとか特別編に移行出来そうな＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

third episode

朝。　海面温度と、冷たい風で毎朝霧が発生するマーケット・ハーナスの首都フェキサフォン・アーシュエル。　他の地域に比べて、霧の為に全体的に仕事に向かう労働者達の行動は遅めに為る。　朝の早い田舎などに比べたら、随分と違うだろう。

ウィリアムとスティールが、二人して先に宿を出る。　アクトルやロイム達は、昨日と同じ行動だ。

「ふぁ～・・・」

大欠伸をするスティールは、ウィリアムを宿前の路上で見返し。

「んで？　俺を連れて行く所なんざ～何処だい？　女か？」

冗談で言ったつもりなのだが・・。

「ええ。　そうです」

と、ウィリアム。

スティールは、キョトンとして。

「え？　マジ？」

ウィリアムは、霧の中に歩き出して。

「ダレイ氏の愛人とやらに逢いに行くんですよ」

一緒に歩き出したスティールは、納得してから。

「でも、ミレーヌの姉さんはいいのか？」

ウィリアムは、至って冷静に。

「ええ。　昨日一日掛けて。　その女性の住まいと行き着けの店などを押さえたそうです。　ですから、今日の午後には捕まるでしょう。　参考人としてね」

「ウィリアムちゃん、捕まる人間に・・・捕まる前に話を聞きに行くの？」

「一々捕まるのを待ってるなんて・・。　それに、まだミレーヌさんにも耳に入れたくない事を聞きたい物でね。　少し、逃げ回って貰いたい所ですから」

スティールは、ウィリアムが態とダレイ氏の愛人を逃がすと解った。

（おいおい・・、コイツ・・。　事件を解決する為なら、どんな手でも使う気かよ・・・。　負けた）

ウィリアムは、サレトンから聞き出した愛人の朝の居所を聞いていた。　ダレイは、愛人を何人か囲っていたらしいが。　中でも中年の金髪女性をお気に入りにしていたとか。　昨日の時点で、2人は身柄を確保されたとミレーヌが言っていた。　だが、その金髪女性は、完全に夜を生活圏にしている女で。　中々逃げるのが上手く、夜の街中で逃げられたとか。

大通りから、階段を降りて。　段々に広がる街を降りて行くウィリアムとスティール。

スティールは、少しづつ霧が晴れる中で。　街に働きに向う人々と擦れ違ったりする階段の上で。　ウィリアムに思ったままに聞いた。

「お前、潜伏先なんか解るのか？」

「と云うか。　港に行き、それから自分の店に向って前日の売り上げを取り。　そして、直ぐに女性と会える・・。　こんな朝っぱらから客を泊める宿は中々・・。　ですが、朝まで空けている店なら、今頃閉めますよね～」

スティールは、直ぐに気付いて。

「飲み屋か・・」

「多分。　もう一つ階段を降りた段の街中には、商店街と飲み屋街が混同しているそうです。　それから、ダレイ氏が肝いりで酒を卸す個人名義に、“マドラーズ・ステゥール”と云う名が在りました。　ポルスさんなどに聞きましたが、ダレイ氏が直接酒を卸している個人は居ないそうです」

「でも・・・“マドラーズ”って、カクテールなんかに付く混ぜ棒だろ？“ステゥール”って、ストゥールの訛りだろうが・・・。
あ、・・・店の名前か？」

ウィリアムは、流石にこうゆう事は理解の早いスティールに微笑み返し。

「多分。　女性を秘密裏に囲う為に、個人名義に偽った深夜専用の飲み屋をやらせているのでは？」

スティールは、直ぐに納得。

「お前、紙切れ一枚で其処まで読むか・・・。　それ、可能性高いぜ」

今日は、随分と空に雲が多い。　街が、霧と曇りで少し暗かった。
港まで残り２つの段の街を残す手前の段で、ウィリアムはスティールを伴って西側に向かう。

街中を歩き始めた最初は、個人経営の大型市場や、専門商売のお店が開店準備を始めていて、働き手が掃除をしたり、品物を並べたりと店頭は何処も忙しい雰囲気に包まれている。

だが、次第に通りに並ぶ店の様相が飲食店や飲み屋などに変わると、雰囲気がガラリと変わってきた。　人気が無いのが先ず。　その内、黒い建物の飲み屋が密集する外れに来ると、荷車が無造作に置かれていたり木箱が店前に積まれていたり。　明かりを落として無人となった店ばかりが道の左右に並ぶ。

「寂れた飲み屋街まんま・・だな」

と、辺りを見回しながらスティール。

解り切っているウィリアムは、サラリと。

「夜に成れば、息を吹き返す仮死状態って所ですよ」

「んだ」

その店の並びの中で、一回り小さい古めかしい飲み屋の看板が、“マドラーズ・ステゥール”だった。　ウィリアムは、静かに入り口のガラスドアを触って鍵が掛かっているのを確かめると、スティールと共に裏口に回る。　飲み屋のこうゆう場所は、裏口はゴミゴミしている物だが。　この店はしっかりと掃除されていた。

ウィリアムは、裏側のドアを軽く触れて回す。　確かに、鍵が掛かっているのだが・・・。

「んあ・・・」

スティールは、ウィリアムがドアに張り付いて何かしたらドアが開いたのに驚いて口を開ける。

苦笑いのウィリアムは、

「このドア、鍵がいい加減なんです。　古い鍵だがら、ドアの端を持ち上げてずらすと外れるんですよ。　今時、この扉の鍵は田舎の家ぐらいですから」

「な・・・何で・・知ってんだよ・・」

「色々ですよ」

小声のやり取りも此処まで。　ウィリアムは、ドアを開いてそっと中に入る。　中は、飲み屋のカウンター内の奥の炊事場だ。　水瓶が有ったり、ワインボトルやウィスキーの銘柄が木箱やセラーに納められている。

「・・・」

そっと中に入って行くと・・・、カウンターの内側に出た。

スティールは、カウンターの外側真ん中で、ストゥールに坐って寝ている中年女性を見た。　ウィスキーグラスをカウンターに倒れさせ、寝息を立てる女性は化粧の派手な顔だ。　確かに、妖艶な色艶が有り、出っ張った胸は視線を誘う。　黒いタイトなワンピースは丈が短く、膝など殆ど丸見えであった。

「・・・」

鼻で溜め息を出すスティールに代わって、ウィリアムは倒れたウィスキーの入っていたグラスを起こし取ると。　炊事場に戻って水を汲む。　そして、戻って来るといきなり女性の前にドンと置いた。

「あああっ」

何事かと驚き、飛び起きる様に眼を覚ました女性。

スティールは、その遣り方が強引なので、呆れた顔をウィリアムに

向ける。

「ウィリアムちゃん、レディには優しく」

「忘れてましたよ。　師匠」

と、素っ気の無いウィリアム。

金髪の中年女性は、知らない二人組みの男の出現に恐れて震え出す。

「なっ、何よっ。　アンタ達はッ？！！」

こうゆう時、ウィリアムは容赦無い。

「失礼。　実は、ダレイ氏が殺されましてね」

いきなり、単刀直入に事をぶつける。

「あっ・・えっ？　な・・どうゆう事？」

女性は、パニックに陥った。　金で繋がる愛人でも、“死んだ”と聞いて動揺する所は当然だろう。

スティールは、水の入ったグラスを女性に差し出す。

「水。　先ず、落ち着いてくれ。　俺達は、話に来ただけだ。　別に役人に突き出す気は無い」

厚ぼったい唇をして、白い化粧の女性は・・少しアイシャドゥを崩しながら水の入ったコップを受け取った。

ーーー

だが、ウィリアムは澄ます。

「ですが。　情報はそれなりに良い物が・・」

スティールは、周りが人ごみの手前。　大声で言わないが。

「そうなのか？　あのオネ～サンが何時頃からジサマの女に成ったの。　昔の女の話だの、俺には全く情報と思えなかったがねぇ～」

ウィリアムは黙り、スティールの問いかけに曖昧な返事のみを返し。
うろつく様にのらくらと歩き、二人は殺人の起こった店に向う道の前に来た。

ウィリアムは、通りの前の角で立ち止まると。

「スティールさん。　では、此処で別れましょうか」

スティールは、ウィリアムと一緒に行くのは不味いと解っているだけに。

「ああ。　全く、事件の手伝いってのは、面倒が多くてウザ～いね。ま、仕方無いが・・。　処で、ウィリアム」

「はい？」

スティールは、少し真顔で。

「ジサマの愛人の話、少しロイム達には黙って於こうか？　いずれは、解る話だろうがよ」

すると、ウィリアムはスティールを真っ直ぐに見返した。　周りで歩く人も居る手前、声のトーンを下げて。

「こっちに、来て下さい」

と、言って。　ウィリアムは、店に向う道では無く。　飲食店の角に向う。

「・・・」

スティールも、その後ろに従った。

ウィリアムは、スティールと肩を並べ。　霧がだいぶ晴れた中で、港の湾を腕組みで見つめる。

「スティールさんは、口が硬いので言いますが・・・。　ダレイ氏は、あの愛人達を作り出したのは、大体5年前と言ってましたよね？」

スティールも、壁に肩を預けて小声話をする為にウィリアムに身を近づけ。　先程のダレイ氏の愛人の話を思い出す。

「ああ・・、確か・・・」

“その前は、ダレイの旦那は間近に女が居たそうよ。　だから、夜は不自由しなかったって・・。　でも、色々事情が変わって・・。　その相手が触れなくなって・・、仕方無いからアタシとかを囲い始めたみたいよ”

「って、言ってたなぁ」

「はい。　近い所・・・夜に不自由しない・・・。　ダレイ氏の間近には、確かに一人居ますよ。　ダレイ氏の好きそうな女性が・・」

誰かハッと気付いたスティールは、一気に険しい面持ちでウィリアムを見て。

「お・・お前、それって・・・・」

驚くスティールに、感情を消した表情で頷くウィリアムは。

「ジョーンズさんとテーラーさん夫妻が雇われたのも、大体5年前だそうです。　ダレイ氏が、その以前に日雇いで来ていた夫婦を気に入らずに追い出した事が原因でして。　元々ジョーンズさんとテーラーさん夫妻は、ダレイ氏に店を乗っ取られて土地を転売されたんですよ。　行く所が無いので、お慰みの様に雇われたんだそうで」

話の内容に、スティールは沸々と顔に怒りを表し。

「クズ野郎がぁ・・・。　死んで当然だな」

と、吐き捨てる様に言った直後。　ウィリアムに驚きを含む顔で迫り。

「ウィリアム・・・、まさかよ。　その・・、エレンとか云う孫娘って、“孫”じゃないんじゃないか？」

すると、ウィリアムは瞑目して俯く。

「話の総合としては、悪く無い推測です。　スティールさんは、見

ていないので・・・彼女を。　ですが、エレンさんは明らかにそれでは生まれませんね」

スティールは、ウィリアムの言う意味が解らず。

「どうゆう事だ？」

目を開いたウィリアムは、上目遣いにスティールを見て間を空けた後に。

「独特の瞳、特有の唇、顔の雰囲気・・・。　エッセンスが食い違っています。　俺が今言えるの、此処までですね」

スティールの前をゆっくりと歩き出すウィリアム。

（エッセンスが食い違う？　生まれない？　んじゃ・・・？　意味が解ンねぇよっ！！！）

唸るスティールは、ウィリアムが離れて消えるまで、曇り空の低い所を流れる千切れ雲を見上げて考えた。

ーーー

スティールは、もうそろそろ昼に近いと云う時にアクトル達が事件の有った店を見張る為に潜伏している喫茶店に入った。

「ああ～。　美味そうなオネ～サンを喰い損なったよ」

ぶっきら棒に云うスティールは、2日目で店員にジロジロ見られる事も気にしてない様子で、ドッカリと黒い背凭れの高い椅子に座った。

観葉植物の仕切りと、客の通り道の通路の御蔭で周りとは少し離れる窓側の席だ。　スティールは声こそ大きくしないが。　何処か虫の居所が悪そうな雰囲気で在る。

アクトルが、大した事も無いんだろうと何食わぬ顔で。

「どうした？　ウィリアムに何か云われたのか？」

「バッカ、そんなんで怒るか」

ロイムは、口を尖らせて。

「でも、怒ってるぅ」

すると、スティールはロイムに襲い掛かり。　ロイムの頭をくしゃくしゃに。

「うわわわっ」

慌てるロイムに、スティールはニヤニヤして。

「クソジジイが金で女とイイ事出来てるのがムカついてんだよっ！！　ロイムっ、仕事終わったらキャバレー行くからなぁーーっ！！！」

「いやややあああ・・」

クローリアとアクトルは、様子がおかしいスティールに困惑であった。

さて、その頃にウィリアムはと云うと。　店の中に入り、エレンと居間で会っていた。

クリーム色のカーテンが、少し開かれた窓から入る海風に靡いている。　広い間取りの居間には、細く波打ったデザインのランプスタンドが3本配置され。　中央には柔らかそうなソファーベッドが対象にテーブルを挟んで置かれていた。

「やはり、今日は店は開けられませんね」

ウィリアムが、ソファーの右に座る。

「はい・・。　母も気分を悪くして床に伏せて居ますし。　まだ・・、祖父の葬儀も出来ませんから・・」

対応するのは、エレンだ。　白いブラウスに、黒いスカートを穿いている。　ウィリアムと対象の左のソファーに、ポルスを共に座る。
　部屋の隅には、紅茶などのもてなしの用意を集めた手押しの台車が有り。　脇には、テーラーが控えていた。

ウィリアムは、見回してサレトンやジョーンズなどの姿見えない事に気付いた様に。

「他の方々は？」

エレンは、ウィリアムが役人の手先だと思ってか、丁寧な言い方で。

「サレトンさんは、地下の部屋でお休みです。　祖父が死んで、遣る事も無いと・・。　ジョーンズとタンデは、もう一方の店に手伝いに・・・」

語るエレンの顔は、暗く沈みきっている。

脇で黙るポルスは、ウィリアムに警戒心を剥き出している顔で睨み付けている。

紅茶を一口付けたウィリアムに、エレンが。

「あの・・、まだ何か御用でしょうか？」

問うエレン。

ウィリアムは、その彼女の顔を見ると。

「今日一日。　私に付き合って下さい」

いきなり過ぎる申し出だった。

「えっ？！」

驚くエレンとポルス。　離れた所では、テーラーも驚いている。

ウィリアムは、紅茶のカップを置き。

「事件の他に、別の店の事や船の事について現場で色々とお尋ねしたいんです。　ミレーヌさんの許可も取って有ります。　貴女は、もう店の主だ。　ダレイ氏が死んだ今、貴女に同行して貰いたいんですよ」

顔の皺を歪ませてウィリアムを睨むポルス。

エレンは、少し間を置いてから。

「解りました。　ご一緒致します」

ポルスは、慌てて自分も行くと言い出すが。　ウィリアムが役人の付き添い無しで連れ出せるのは一人までだと云うと。　エレンは、ポルスを押し留めて一人でウィリアムに着いて行くと言った。

ウィリアムとエレンが、二人揃って店の前に出た。

「あ、ウィリアムだ」

ロイムが、窓縁に隠れて言う。

「ん？」

見たアクトルは、赤いゆったりとしたベールを幾重にも巻いた様な上着に、白い半袖のブラウスの襟元を首周りに見せる印象的な美人女性と連れ立って居るウィリアムを見て。

「オ～ンナかよ」

ロイムの頭を押し退けてエレンを見るスティールは、

「アレが、孫娘のエレンだろ？　くはぁ～、美人じゃね～か。　ちっと彫が深くて、鼻が高い・・。　うぬぬぬぬ・・・ウィリアムめぇ・・・」

と、悔しがる顔を。

クローリアは、呆れ果てた顔で。

「あの・・、目的は違いますと・・」

だが、スティールは内心に。

（なんか・・、目つきも唇も死んだジサマに全く似てねぇ～・・。
エッセンス・・・そうゆう事か）

ウィリアムの言いたかった意味が、少しづつ理解出来始めたのである。

「歩いて行くぞ」

アクトルが、海側の方に向ってエレンと歩いて行くウィリアムを見送る。

クローリアが、往来の人を見て。

「何処かに怪しい人は居るのでしょうか・・・」

と、真剣な眼差しを向けた。

皆に見送られるウィリアムは、エレンを連れて歩き出すと直ぐに。

（殺気混じりの尾行が付きましたね。　やっぱり、誰かに見張られているのは間違い無い・・・。　事件絡みか知りませんが、影が居るんですね。　誰だか・・・）

と、思いながら道なりに歩いて行く。

店の周りでは、未だに往来の人の中で立ち話をして閉まっている店を指差す人々が居る。　その顔は、死者を悼み偲ぶ色は微塵も無い。　寧ろ、いい気味だと嘲笑っている様な人すら居たほどだ。

エレンを見送る往来の人の顔も、千差万別だった。

さて。　エレンと肩を並べて歩くウィリアムは、大通りまで出ると。

「何処か・・」

いきなり喋ったウィリアムに、驚いたエレンはハッと彼を見て。

「え？　何ですか？！」

ウィリアムは、通りの左右を見て。

「いえね。　何処か、二人きりで静かに話せる場所は無いかと・・・」

此処でウィリアムはエレンを見て。

「知りませんか？　何処か？　正直、初めて来た日が、ダレイ氏の死んだ頃でして。　まだ、この街の事良く解らないんですよ」

エレンは、何がなんだかと云う雰囲気の顔で。

「私と二人きりに為って、一体どうしようと・・・」

「それは、為ってから・・。　ま、見て貰いたい物も有れば、お聞きしたい事も幾つか」

エレンは、ウィリアムの心を推し量ろうとしても無理な事だった。
咄嗟に考えた事は、自分の身の安全を守れる場所に行こうと・・。

「あの・・、私の父の友人が・・・レストランを経営してまして・・」

ウィリアムは、エレンを見て。

「其処なら、静かに話せると？」

「はい・・、個室も有りますし・・」

「ま、人払いが出来る場所ならば、何処でもいいですがね。　では、お任せします」

ウィリアムは、以外に素直に従う。

（一体・・・どうゆう意味かしら・・）

エレンは、冒険者と云う流れ者のウィリアムが何を考え、どうして自分に接近して来たのか理解に苦しんだ。

ウィリアムはエレンに付き添われる様な感じで、また段々の街並みを降る為に階段を降りた。

港まで広がる段の街並みを見下し。　ウィリアムは、

「随分と段々に成ってますよね。　荷物を運ぶのに苦労しそうな・・・」

「あ・・。　いえ、港から地下水路の運搬通路が有りますわ。　その段に合わせた高さに水車で上げ下げしているリフトが有ります」

「あ～、なるほど。　見てからに多い段数ですからね。　労力は少なくする方がコストも掛からない」

エレンは、ウィリアムが商人の様な言い方をするのが気に為り。

「まぁ、損益に敏い言い方ですね」

と、作り笑いで話を繋いでみた。

ウィリアムは、当たり前の事だと思いながらも、エレンの機嫌を損ねる気も無いだけに。

「まぁ、小さな頃から街で働いてましたから・・・」

エレンは、ウィリアムと云う人物を知ろうと思い。　直ぐに、

「此処では有りませんでしょう？」

「ええ。　コンコース島です」

「まぁ、そんな遠い所から・・・」

「冒険者に成りましたからね。　仕事を求めて移動してれば・・、こんな物かも知れません」

事も無げに言うウィリアムは、街並みを見回しながら風に吹かれて心地よいと感じていた。

そんなウィリアムに、エレンは興味を覚えた。

さて。　ダレイ氏の愛人の店が在った段まで降りず。　港まで６・７段の街並みを残してエレンは東側の道に入る。　飲食店が数多く立ち並ぶ街並みで。　白い白亜の城の様な店や、モダンな木造の館を思わせる店。　丸で、結婚式を挙げるチャペルの様な店など、外観に拘った店が多い。

ウィリアムには、店の佇まいで値段が推し量れるだけに。

「高級レストランばかりですね・・。　何処も高そうだ・・」

頷くエレンは、往来の日傘を差して紳士淑女が歩くのを見て。

「此処は、諸外国から来る貴族やお金持ち、他は商人や文化人などが外食をする店が多い場所ですね。　所々には、内装に似合った宿

も有ります。　この段の上下に広がる店は、ブランド物の小物や衣服、宝石、香水、家具などを揃えた店が多く並びます」

「なるほど・・」

ウィリアムは、自分とエレンが場違いな客に見える周りに納得であった。　エレンは、金持ちの娘だが、その姿は“街娘”的で。　飾りッ気の無い姿は、有る意味真にシンプルである。　睫が長く、印象的な顔と独特の光の反射を魅せる瞳には、寧ろこのシンプルさが似合っている。

「此処です」

エレンは、ウィリアムを連れて白いモダンな館の前に立ち止まった。

「ほう。　綺麗な店構えですね」

通りとの境に作られた鉄格子の柵と門。　その先には、歩いて渡る石の通りが、芝生の絨毯を縫う様に延びていて。　街を仕切る段を背に建てられた5階建ての白い館は、窓に藤や小さい水仙を飾る。　大きな店構えの屋敷を、直射日光から守る木々は、楠の木だった。

敷地に入るエレンは、着いて来るウィリアムに。

「私は、祖父の小間使いの様な者ですが。　父の親友で、この店のオーナーであるケウトさんは、私を良くこの店に招待して下さいます。　“本物の味を知る事も、商人には大切な教養だ”と・・」

「確かに、味や風味を知らない者が料理を作れないと一緒ですね。　お客に薦める商品の良し悪しを知る事も、確かに必要な事ですよ」

エレンは、そう返してくれたウィリアムを半身になって見て。

「思ったよりは、ご理解の有る方ですね」

と、微笑む。

ウィリアムは、スマートに澄まし。

「事実や現実を否定する程特別な力は在りませんから」

急に冷めたウィリアムに、エレンは肩を竦めて苦笑する。

大きな教会風の合わせ扉の前に立つエレンは、直ぐに扉を引き開いて中に顔を覗かせる。

「済みません。　誰かいらっしゃいますか？」

宿の受付カウンターの様な一角が在り、その奥の戸の無い入り口から白い礼服に身を包んだ４０前後の男性が現れる。　ウィリアムより頭一つは背が高く、オールバックに整えられた髪や口髭を見る限り。　礼儀や行動を弁えた紳士と見て取れた。

「はい。　まだ開店では・・・。　おや、エレン様ではございませんか・・、今はダレイ様がお亡くなりに成られた大事な時期と思いますが・・・。　如何為されましたか？」

エレンの前までやって来る男性は、思慮深い顔を物静かに言う。

その男性から目を逸らし、この受付に掛けられた絵や花を生ける花

瓶を見るウィリアムは。

（確かな目利きですね。　これは、精通したコーディネートだ・・・）

薄緑色の壁の色に、絵や花や花瓶は邪魔に成っていない。

確かな目利きと、センスが問われるのが内装だ。　ただ高い品を買い揃えて置けばいいと云う物でも無い。　調和と云うバランスを取る必要が在り、その個性が出る感覚には独特の奥深さが有る。

エレンは、半身に成って紳士を見上げ、ウィリアムに右手を差し向けると。

「此方は、祖父の事件の事で役人の方にご協力しています冒険者のウィリアムさんです」

ウィリアムは、軽く一礼して。　相手も、エレンの知人なだけに深く一礼して来た。　冒険者のウィリアムに礼儀の垣間見える礼を見せる所が、エレンがこの店では大切な客だと思わせた。

エレンは、更に。

「此方のウィリアムさんが、私に込み入ったお話が有ると言うので。　何処か、個室を一つお借り出来ればと思って来ました。　ご迷惑でしょうが、少しの合間でいいのでお部屋を御貸し頂けませんか？」

すると、紳士はウィリアムを見てから、エレンを見て。

「それはそれは、では此方へ。　只今、掃除の終えた一室にご案内

致します。　もう直ぐご昼食のお時間でしょうし、何かお出ししますよ」

エレンは、両手をお腹の前に組んだ淑女の礼儀を示して深く一礼をする。

「すみません。　ご迷惑をお掛け致します」

すると、紳士は微笑み。

「なんの、ケウト様がお喜びに成られます。　主人は、エレン様をご息女の様に思われて居ますから」

紳士に連れられ、鍵状に為る廊下を奥に進んで螺旋階段を上る。

２階は、大部屋の個室が広がり。　３階は家族などの３～５人様の個室。　４階に上がれば、二人専用の個室が曇りガラスと防音効果の高い土壁の仕切りで並んであった。　各個室の前を通る廊下を行き、一番奥の部屋に二人を通す紳士。

「此方へ。　直ぐに、紅茶などをお持ちします」

エレンは、また頭を下げて。

「済みません」

と、部屋に入った。　一番奥の部屋だが、エレンは、ウィリアムが変な気が無い様な感じがして無用な素振りはしなかった。

四角いテーブルが、楠の木を見れる小窓の前に置かれ。　向かい合う様に置かれた椅子。　テーブルの上は、純白のテーブルクロスが

敷かれ、中央に薔薇の一輪挿しが置かれていた。　スプーンやナイフなどが備えられ、ナプキンなども揃っている。

開店間際だと解った。

ウィリアムは、エレンに椅子を引いて席を勧め。　坐ったエレンの前に座ると、深く溜め息一つを吐き。　ナイフや短剣も仕舞える長いポケットを持つズボンの脇ポケットから、折り畳んだ紙を取り出した。

ｔｈｉｒｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ（後書き）

次話予告

ウィリアムは、エレンにダレイの行っていたと思われる不正の容疑をぶつけた。　知らなかったエレンは、驚きを隠せずに泣いた・・。
そして、ウィリアムは遂に事件の核心に近づく事に成る。

次号、数日後に掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

此処まで来て、ウィリアムの掲載割合が３割弱・・・。　大丈夫か、年末年始の特別編＾＾；

書いてないし＾＾；

クリスマスまでに終えた場合は、先ずは・・・座談会をぶっこもう・・・。　Ｋの部分も書いた座談会で時間を稼ぐ・・・。

Ｋ様頼りの作者です＾＾；

ご愛読ありがとうございます＾人＾

席に座ったウィリアムは、素早かった。　手早く店に置かれた西の輸入品の事を語り。　密輸の疑いが持てる商品が店の店頭に在るのを知っているエレンに写しの書類を見せた。

「あ・・・あああ・・・そっ・そんな・・」

流石に、いきなり密輸の事を知ったエレンは激しく動揺した。　震える手を伸ばして奪い取る様な勢いで持って紙を受け取り見る。何度も見返す写しの書類に、愕然として空を見つめるエレン。

ウィリアムは、ゆっくりとした声で。

「恐らく、船で持ち込んでいるのでしょうが。　ダレイ氏以前から、エレンさんの家では交易の船を?」

すると、涙を浮かべて蒼褪めた顔のエレンは震える様に顔を左右に。

「い・・いえ・・違うっ。　交易の船は・・・私の父がやろうとしていた事なの・・。　ああ・・あああ・・・、なんてバカな御祖父ちゃん・・。　これが公に為ってしまったら・・営業権は剥奪だわっ」

と、嘆き出す。　恐らく、何人も人を抱えて遣っている商人だけに。
　営業権を剥奪されたら、使用人も一家も路頭に迷うだろう。　エレンは、全く商業に触ってない母親のルイスしか居ない家族の中では、跡を継ぐ主。　まだ、２０前後の歳で、その襲い来る絶望の海を泳がなければ為らないのだ。

ウィリアムは、紅茶を運んで来た若いウェイターに。

「すいませんが。　何か甘い物を・・・」

と。

だが、涙を滲ませるエレンは、ウィリアムに。

「ウィリアムさん・・。　是非・・是非に、ケウトさんに会って頂けませんかっ？　ケウトさんは・・、ち・父の事を・・知っています・・」

と、縋り付く様に言うのだ。

「エレンさんの、お父さんですか・・。　確か、海で溺死したとか・・・」

「はい・・。　でも・・父の死は只の事故では無いとケウトさんは言ってました。　こう成った以上、私も今の内に知りえる事は知って於きたいと思います・・・。　ウィリアムさん、逢って頂けますか？」

ウィリアムは、冷静な瞳でエレンの目を射抜く様に見据えた。

（急展開・・・か。　まだ、何か飛び出しますかね）

「・・・、解りました。　実は、店から我々に尾行が着いている様ですし。　そのケウト氏に逢って、色々とお聞かせ願いましょうか」

エレンは、“尾行”と聞いて。

「そんな・・、あっ!!」

と、驚きを見せる。

ウィリアムは、エレンの顔を見るに。　彼女は、“尾行”をする人物に心当たりが在ると思えた。

「どうやら、お知り合いですかね？」

エレンは、短い時間にどれだけの衝撃と困惑を覚えただろう。

震える肩を、ウィリアムに向けたエレンは・・・。

「わ・私の・・・こ・婚約・・者の・・」

「ほう。　そう言えば、そんな事をサレトンと云う方がが証言していましたね」

「ああ・・、私はまだ婚約だなんて・・」

顔を手で覆うエレンは、写しの書類を膝に落とした。　一部が、床に落ちて。　個室の入り口でエレンの嘆きに驚き戸惑い動けなくな

ったウェイターが立って居た・・・。

ウィリアムの想像以上に、エレンと云う女性は強い人間だった。嘆く事も短く、書類を拾うとウィリアムに返し。　ウェイターの男性を伴って店のオーナーであるケウトと云う人物に面会を求めに行った。

ウィリアムは、一人個室に残って時を待った。

店が、開店したのであろう。　静まるウィリアムの耳に客の話し声が響き、近くの個室に入った。　男女のカップルであると思われる声。　楽しそうに何かの話題を共有し、和気藹々と笑い合って居る。

さて、エレンがウェイターと迎えに来るのに時間は然程必要としなかった。　ケウトと云う人物は、自分からウィリアムにも逢い。エレンに全てを話したいと言って来たとか。

エレンと二人で個室を後にしたウィリアムは、店の最上階である５階に通された。　ケウト氏の事務所で在り、出勤してきた店の一部の従業員の詰め所でも有る階。　５階に上がると、屋根裏が吹き抜けで高い空間を見せ。　Ｙシャツに蝶ネクタイを着けた従業員が歩いていたりする廊下が伸びる。

階段から左に廊下を曲がって、正面の奥に赤い扉が見えた。　マーケット・ハーナス生まれの模様で、糾える縄が入り組む幾何学模様が表面に画かれる。　“ディアマスク”と云うこの模様は、織物やインテリアのデザインとしてブランドに為っていた。

「ケウト様、エレン様をお連れ致しました」

ノックをして、ウェイターがドアに声を掛けると。

「おお、早く中にお通ししなさい」

柔らかい声をした年配の男性が返して来た。　声の響きは、中年を越えた渋みが在ったからだ。

「失礼致します」

ウェイターがドアを開き、エレンを先頭に中に進むウィリアム。進んで入った部屋の中は、落ち着いた雰囲気の漂う洒落た空間だった。

「ケウト小父様・・」

「エレン、連れて来たね」

エレンを迎える形で、窓辺の机に備わる白い椅子から立ち上がった男性。　白い肌には、所々皺が見える。　口周りに髭を生やし、碧い目で白髪混じりのブラウンヘアーを真ん中分にしているスッキりとした紳士だ。　黒い上質のスーツが、懐の力を見せている。　赤いネクタイには、獅子のデザインが刺繍された一品だった。

エレンは、その男性の前まで歩き、ウィリアムに向いて。

「ケウトさん、この方がウィリアムさんです」

ウィリアムは、一応の礼を見せて。

「お初にお目に掛かります」

ケウトと云う人物は、ウィリアムを見て頷き。

「中々賢そうな若者だな。　初めて、私がケウトだ。　私は、このエレンの父親・・・、そう“シェルハ”とは幼き頃からの親友だった。　今の私が在るのも、シェルハの御蔭だ。　だから、エレンは私の娘と云ってもいいと私は思っている」

ケウト氏は、ウィリアムに情け深い目を向けて。

「どうか、このエレンの窮地を救ってやって欲しい」

身を正したウィリアムは、少し暗い声で。

「理解は・・。　ですが、不正を働いた事実は消えませんよ」

すると、ケウト氏はウィリアムの前まで歩いてきて。

「君は、何処の出身かね？」

いきなり、生まれを聞かれるとはウィリアムも思っては居なかった。

ウィリアムより先に、エレンが。

「小父様、その方はコンコース島のご出身です・・、それが？」

ケウト氏は、一端エレンを見て頷くと。　ウィリアムに向き直し、こう続けた。

「では、君は知らないだろうが・・・、このマーケット・ハーナスは商人の国だ。　そして、商業には厳しい掟と云える法が有る。

だが、厳しい掟だが、優遇策も在るのだよ。　役人が、その不正を追求する時に、その不正に率先して協力をして不正を自ら正す者は、恩赦を受ける資格在り・・とな」

理解の早いウィリアムだ。　ケウトを見返して。

「つまり。　エレンさんに協力をして、エレンさん自身に不正を告発させ、問われる罪を和らげろ・・・。　そうゆう事ですか？」

飲み込みの早いウィリアムの返す言葉に、ケウトと云う人物は何かを感じたのか微笑み頷くと。

「うん。　流石に、理解が早いね。　依頼と云う訳では無い・・、だが、エレンとあの家の者はみんなダレイと云う悪魔に怯えて暮らして来た。　いや、彼らだけでは無い。　街の人々の中で、あの薄汚い老人に関わっていい事など何一つ無い・・。　金の亡者だけが、腐臭を撒き散らしてあの悪魔の様な老人とつるむだけだった。　エレンも、そして・・、死んだ・・。　いや、殺されたかも知れないシェルハだって、不幸にしか成らなかった・・。　選りによって、エレンを業つくな商人のローウェルなんぞに嫁へ差し出そうと・・・。　そして私も・・、我慢をした・・」

ウィリアムは、顔に苦渋と憎しみを仄かに匂わせるケウトを見て。

（相当な方だったんですね・・、あの死んだ老人は）

と、思う。　ケウトは、人目で解る列記とした紳士であり。　人前で早々に感情を崩して見せる事などしそうに無い人物に見える。その男が、顔を歪ませて言うのには言い尽くせぬ過去が在るのだろうとウィリアムは感じた。

だから・・・、ウィリアムは単刀直入に事を確かめる事にした。

ーーー

スティールは、紅茶の注がれたカップを持ち上げ。

「ん。　店の周りを睨んでる。　どれ、ちっとカマ賭けてみようか」

アクトルは、残る優先順位トップの自分なだけに。

「誰と行く？」

スティールは、ニヤニヤとロイムを見て。

「決まってんじゃん・・・、お漏らし小僧にビビって貰おうか」

ロイムは、ギョッとした顔でスティールを見て。

「ま・・マジ？」

「おう。　根性を鍛えよう。　な、ロイムセンセー」

「アヒィ・・・・」

ロイムは、魔法の掛かった杖を握り締めた。　もう、口がガチガチと恐怖で噛み合さって音を出し。　顔は、蒼褪めている。

アクトルは、目の前なだけに。

（不安丸出しじゃないか・・・、バレない方が奇跡だ・・・）

と、もう先が思いやられる。

だが、スティールはアクトルに。

「アーク、アークも一枚噛めよ」

アクトルは、自分も来いと云っているのかと思い。

「ん？　クローリアを一人で残すのか？」

クローリアは、急な話に不安げな顔をスティールとアクトルに向ける。

だが、スティールはニヤリと笑うと。

「ちげ～よ・・・」

・・・・・。

雲が晴れない昼間。　事件の起こった店の前の雑踏を行く男が居た。

「・・・」

鋭い目を上目遣いにして、俯く顔は色黒い。　赤い皮のジャケットに、黒い厚手のズボンを穿いて。　腰には長剣を佩いている。　ボタンの外れたジャケットの下には、小さなリング状のチェーンを編んだ鎧を纏っている様だ。　外見は、冒険者かも知れない。　だが、一人でうろついている所を見ると、そうとも言えない。

しかしながら、冒険者から身を崩す者も多く。　殺し屋に成ったり、盗賊に身を落としたり、ちょっとの迷いや苦痛から犯罪者に成ったり、果てまたは用心棒やゴロツキに成ったり・・・。　この男も、その類かと思われる。

「・・・」

目つきが鋭く、人ごみに紛れて事件の有った店を監視するかの様に見ている男。　店とは逆側の右通りを建物沿いを歩いては、役人が立っている店の前をジロジロ見て。　また、行き過ぎては裏道に入り。　店の周りを周回しては、また店の表を見張る・・・。　そんな行動を繰り返していた。

何度目だろうか・・。　この男が、店の前を北側に抜け、店の横を通る斜めの路地に入った時だ。

「おっと・・」

俯いて道を曲がったジャケットの男は、出会い頭に何か固い物とぶつかった。　金属が目に入ったジャケットの男は、ぶつかったのが鎧か何かと認識したので、相手の顔を確かめようと顔を上げて。

「何処に・・」

怒鳴ろうとしたジャケットの男。　だが、目の前には見上げる様な大男が立って居た。

「何だ？　オメエ？」

言ったのは、アクトルである。

「んっ・・」

ジャケットの男は、一般的に言うなれば背は高い男だ。　だが、相

手がアクトルであるなら、殆どの男は小さく見えてしまうだろう。
　怒鳴り掛けたジャケットの男は、アクトルの背の高さと隆々とした全身で解る筋肉に言葉を呑んだ。

だが、アクトルは目を更に凝らして凄み。

「なんだぁ、オメ～。　人にぶつかって置いて、謝罪もしねえで何を睨んでやがる。　あぁ？」

威圧して、喧嘩を売る仕草に出たアクトル。

「チィ」

舌打ちしたジェケットの男が苦渋の顔に成るのはアクトルの所為だけでは無い。　往来の多い通りを歩く人たちの中に、アクトルとジャケットの男の険悪なムードを感じた人が居て。　連れだって歩く人に声を掛けたり、注目をしたりして来る。

居た堪れなく為って苦虫を噛み潰す顔に成ったジャケットの男は、往来の立ち止まる人々に睨みを見せてから、アクトルに一瞥し。

「邪魔なんだよ。　デケ～図体し腐ってっ」

と、往来の中に人を跳ね除ける素振りで足早に消えて行く。

往来に足を踏み出したアクトルは、ジャケット男を尾行し出したスティールとロイムに目を合わせるだけにする。

「・・・」

目で頷くスティールは、ロイムを小突き回す様にしてジャケット男の後を尾行し始めたのだった。

（上手くやれよ・・・）

アクトルは、心でそうエールを送り。　ジャケット男が見えなくなると、クローリアの居る店の中に戻って行くのだった。

その頃、ウィリアムは・・・。

エレンを自分の坐っていた席に坐らせたケウトは、腕組みのままにウィリアムの前を行ったり来たりして話しを始めて居た。　その顔は、エレンの居る手前か少し辛そうな顔である。

何故なら、ウィリアムはこう質問したのである。

“エレンさんのお父さんは、ダレイ氏の本当の子供ですか？　そしてエレンさんは、ルイスさんの子供では無いのでは有りませんか？”

と・・。

聞いたエレンは意味が解らずに言葉を失い。

問われたケウトは、驚きの目をウィリアムに向けた。

そして、ケウトは全てをウィリアムに話す気に成ったのだ。

「君は・・・、人の顔を観察するのが得意ならしいね」

と、ケウト。

ウィリアムは、エレンを見てから。

「エレンさんの顔の特徴は、東の大陸の南部に位置する3分国家“レセアン”・“ウセアン”・“セルアン”の三国と、国交を断絶する西の大陸に住む吟遊詩人部族の特有の物。　彼らは、同部族の結婚を古き古より続けた民族で、他の人種と交わると特徴は顕著に薄まると聞きます。　なのに、エレンさんは、その特徴が非常に色濃い。　エレンさんの父親が、北の大陸に多い人ダレイ氏の子供と云うのが、信じられなかったんです。　彼女を一目見たときから」

エレンは、ハッとしてケウトを見つめた。

「小父様・・・」

ケウトは、ウィリアムに悲しい目を向けて。

「君は、非常に素晴らしい読みをしている。　何も知らずに、エレンと家族を見て其処まで見抜けるのは、見解としては完璧だろう・・。　だが、実情は少し違うのだよ」

ウィリアムは、自分の存在が急にあやふやに成って不安に震え出しているエレンを見て。

「“少し”？　つまり・・・、父親の方では無く、母親・・・ですか？」

ケウトは、ウィリアムに指を差し向けてまた腕組み状態に戻すと。

「そう。　その通りだ。　エレンの父親のシェルハは、ダレイが昔

に金ずくでモノにした歌手との間に生まれた子供だ。　その歌手と云うのが、東国の部族出身で駆け落ちをしてマーケット・ハーナスに移り住んだ一家の娘でね。　歌が上手く、印象の強い美人だった。　恐らく、エレンの綺麗さもその辺から発してるのかも知れない」

「なるほど・・。　では、エレンさんとダレイ氏は、完全な孫と祖父では在るんですね」

「ああ。　只・・・、エレンの手前で言い難いが・・、ルイスとは血が繋がっていないんだ」

エレンは、パッと両手を口に運ぶ。　驚く声を、塞ぐ様に・・。

頷くウィリアムは、急速に大体が見えた。

ケウトは続け。

「エレンの母親と云う人物は、名を“ソレア”と云う。　東の大陸で、流れの薬師を営んでいた一家らしいが。　ソレアの父親は一箇所に身を落ち着けたいとこの街に・・。　そして、シェルハと知り合ったのさ・・。　エレンの様に、見て綺麗と云う女性では無かったが。　こう・・何と云うのか。　慈悲深さと云うべきかな。　情け深さは感じる穏やかで優しい女性だった。　幼い頃から、ダレイの奴隷の様に育ったシェルハには、彼女の母性と云うか・・・慈しみの精神は何より感じたかった物だったのかも知れない。　何せ、シェルハは・・、母親を実の父親に踏み躙られていたからな」

「お・・お母さんが・・」

エレンは、直ぐに椅子から立ち上がり。

「小父様っ！！！　私の本当の母は・・・？　ど・何処に？」

ケウトは、俯いて首を左右に。

「解らない」

「どっ・どうしてっ？！！」

胸が詰まりそうなエレンは、全てが知りたくて声が大きく成る。

ウィリアムは、空気が変わる部屋の中でも冷静に。

「先程、シェルハさんにお母さんも“踏み躙られた”・・・と。同じですか？」

ウィリアムに問われたケウトは、エレンを見た。　窓の前で、両手を組んで自分を見つめるエレンの悲痛な瞳・・。　エレンが子供だからか、それと何か理由が有ってだろうか・・。

だが、ケウトは思い切って話し始めた。

「これは、エレンの身の上でもあるが・・、女のエレンを前にすると語るのを憚りたくなる事だ。　だが、真実は消えない。　そして、エレンの今の状況を考えると・・・語らずには居れない。　エレン・・、そしてウィリアムさん。　どうか、心して聞いて欲しい・・」

先ず、シェルハの母親と云う女性は、もう生きては居ないそうだ。

　金の力で陥れられてダレイの愛人に成った母親だが、シェルハを産んでから数年後。　ダレイは、事も有ろうか商談の餌に母親を使

った。　そして、今の母屋と店の融合している一等地の店を手に入れたらしい。　代わって、子供と引き離されて他所の男の下に送られた母親は、ズタボロの様な生活の中で身を壊して棄てられた。
シェルハは、１５歳の時に友人の伝から母親が寺院に拾われたのを知り。　横暴で暴力的なダレイから知力と行動でもって金をだまくらかして母親を面倒見た。　だが、その一緒の期間は3月と無かったらしい。

流石のウィリアムも、内心に。

（スティールさんの言う通りですね。　目の前に居たら、俺も我慢出来るかな？）

と、思う。

衝撃を受けたのは、エレンも同じ事だ。

だが、ケウトの話はまだまだ続き。

「エレン・・、君のお母さんの事だが・・・」

エレンの父親であるシェルハと、母親のソレアの出逢いは運命と言って良かったらしい。

先ず、シェルハと云う人物は、横暴な父親の下でこき使われたが。
　学校に行く時は、もうその日その日の全てを吸収して行く様な勉学の才が有ったらしい。　発想は自由で、行動力も強く。　友人達と遊ぶ時間は限られた物だが、全身全霊で生きた。　母親の死後、何時かは独立しようと夢見たシェルハは、頑固な料理人の息子のケウト、船乗りの船長の息子のコッテの二人とは兄弟の様に遊んで、

夢を語り合った。

懐かしむ顔に変わるケウトは、窓の外に広がる曇天の空を見つめ。

「シェルハの人生は、この晴れぬ曇天の空の様に光が見えない人生だった。　だが、アイツ自身が光だった。　今、死んだダレイが行っていた交易船のアイディアも・・、小さな商店街の店を一箇所に集めて、活気溢れる何でも揃う集合店の構想も、全てシェルハが考えた物だ。　ダレイは、・・・シェルハからその考えを盗み。　いやいやっ、奪い取って自分の物にしただけだっ！！　・・・、アイツは、アイツは・・・あんなクズの下で生きる人間じゃ無かった・・・」

ケウトは、こう言ってウィリアムを見て話を続けた。

シェルハは、新しく交易船を自分で運航し。　幾つもの小さな個人商店の仕入れを一括して纏めて、仕入れの効率化とコストを抑える代わりに。　一箇所に様々な商店を集めて、彼方此方に行かなくてもその場で全てが揃う商店の集合体を作り出し。　他店よりも安く品物を提供し、そして売り上げを出す構想を持っていた。　その運航船の権利を取得する段階で、ダレイから金を受け取っていた役人辺りが密告したのだろう。　シェルハは、今の別店の小さな店舗を任されていたのだが、ダレイは怒って母屋の店に引き戻し。　シェルハの自由を奪い。　シェルハの構想を横取りしたのである。

憎らしく語るケウトは、吐き捨てる様に。

「あのダレイはクズだっ。　アイツは、シェルハが自分の子供なのに、自由で新しい先を切り開く能力を持つ事に嫉妬していた。　アイツの自由を奪う為に、半ば強引に潰したライバル商人の娘である

ルイスと結婚させたんだっ。　ルイスは、シェルハと同い年で、学校の頃からシェルハに好意を持っていたし、ソレアの事は皆隠して黙って居たから・・知らなかったんだろう。　結婚してから、シェルハに愛する人が居ると・・・知ったハズだ」

さて、肝心なシェルハとソレアは、お互いが１８歳の時に出逢った。
　ソレアの一家は、有能なる薬師の技術を持っていた。　特に、父親とソレアは、その才能が際立って居たらしい。　しかし、人との交流の上手では無いソレアの父親は、細々と薬屋を営むままだった。
　だが、様々な地方から人が押し寄せる街は、時として流行病の爆発的な発生源にも成る。　悪質な熱病がヘキサフォン・アーシュエルに流行った頃、シェルハは薬の原料を求めて原料を売る店の前で懇願して蹴られるソレアを見つけた。　そして、助けたシェルハは、ソレアと彼女の父親の薬師としての腕を見て、薬を何時でも安価で安定供給する店を出したいと願った。　根暗な父親とは別に、差別無く薬を処方したいと願うソレアとシェルハは、恋に落ちるのに時間は要らなかった。

だが、２０歳を過ぎた頃のシェルハは、新しい商売の構想を父親に奪われ、ルイスと結婚させられて半ば軟禁状態に。　それでも、ソレアとシェルハの愛の絆は深く。　遂に、エレンが出来た。　二人の密会に手を貸していたのが、親友のコッテと今のエレンの守役であるポルスだった。

エレンは、幼い頃から壁の様に自分を守って来てくれたポルスの事を思い。

「あぁ・・ポルスは・・全てを知っていたのね・・。　お父さん・・・お母さん・・・どうして・・」

嘆くエレンを見たケウトだが、此処まで来たからにはと思ったのだろう。　涙を浮かべる目をウィリアムに向けると。

「ウィリアムさん・・」

「はい」

「私は・・・シェルハと・・ソレアの駆け落ちに・・手っ・・手を貸しました。　エレンが産まれて、１年は隠し通せましたが・・。　誰かが密告したのでしょう。　ダレイは、エレンの存在を知ってしまったっ。　・・・この国ではねウィリアムさん、生まれた子供は・・父親が責任を持って育てるなんて・・古い掟が有るんですよ。　ダレイは、その・・掟を傘にしてエレンを・・。　ルイスにエレンを渡して、シェルハの自由を完全に奪おうとしました・・。　家庭に入った商人は、家庭と商業にのみ生きるのがこの・・この国の伝統みたいなモノでしてね・・。　だが、私やコッテも、ポルスだってシェルハとソレアの愛を見ていた・・。　だから・・だから・・・あの夜に・・逃がそうと・・」

ウィリアムは、それにピンと来た。

「もしかして、シェルハさんが港で死んだ夜ですか?」

涙を流したケウトは、震える顔で。

「ふ・・２日前の夜さ。　だが、いっ・いくら待ってもシェルハはエレンを連れては来ず。　私は、待つソレアと二人で・・・深夜の街中に停めた馬車で潜んで居たよ。　次の日の昼、隠れて店に向うと・・、店先には顔や体中に痣や暴行を受けた姿でボロボロに成って働くポルスを見た。　血の滲む包帯を片目に巻いたポルスを見た

時悟ったよ。　逃げるのに・・・失敗したのだと・・。　それから、一日が開けて、朝。　か・・・変わり果てたシェルハが・・み・港の・・・岸で・・・・」

聞くに堪えないエレンが、声を抑え切れずに泣き出した。

悔し顔で、涙を隠さないケウト。

二人を冷静に見据えるウィリアムは、何かを悟る。

（もしかして・・・、ソレなら辻褄が合う。　全部。　後は、発起人が誰か・・と、犯人の繋がり）

ウィリアムは、筋書きが読めて来た。　だが、まだ全てを整然と並べて繋ぐ連結部分がモヤのままである。　嘆く二人を見つめるウィリアムは、この先どう動こうか思案を巡らせた。

ーーー

「う・・うん・」

スティールは、冒険者の経験が長い御蔭も有って。　こうした尾行には、少し知識が有った。　ロイムと雑談を交わしながら、視界の中に赤いジャケットの男の後姿を入れている。

ロイムは、もうオドオドしていてぎこちない様子だが。　背が小さく、日中の慌しい人の往来に紛れる事が出来ていた。

赤いジャケットの冒険者風の男は、港の見える大通りに出て。　一路東へと歩き出す。　時折、チラチラと後ろを振り返るのだが。　スティールやロイムを見る気配は無い。　大通りに出れは、ジャケットの男も一般の通行人である。　冒険者も居れば、みすぼらしい姿の芸人も楽器を抱えて歩いているし。　老若男女の通行人が居のだ。　どちらも、周囲に紛れる。

さて、ジャケットの男は。　途中で北東方面に向かう太い通りに曲がり。　斡旋所が有ったり、鍛冶屋や専門小売店が犇く大通りに入る。　歩く人の姿が、冒険者やら、馬車やら、労働者など偏りが見え始め。　メインの大通りよりは、活気が薄まった。

スティールは、ロイムと並んで話す素振りを見せながら。

「いいか、ロイム。　此処からが大変だ。　アイツ、直接こっちに事件の現場の店から来なかったのは、尾行を警戒してる証だ。　恐らく、少しずつ人の往来が減る道を選んで尾行を見極めるつもりだろう。」

「ああ・・・う・うん・・・」

スティールは、にやけた顔を見せて。

「お前なら脇道に入っても集中してれば、人の気配を感じて行ける。あの男の気配を覚えられるか？」

ロイムは、目を瞬きさせて。

「む・・難しいぃよぉ・・・。　モンスターの居る所や、森の中とか違うエネルギーの中に居る人を感じるなら出来るけどぉ・・。こんな人ごみの中で人のエネルギーなんて溢れ過ぎて無理・・」

スティールは、解っていたとばかりに。

「フッ、ロイムせんせ～にはまだ無理か」

「当たり前じゃんっ。　そんなのスンゴイ高位の魔術師が出来る事だよっ」

スティールは、ロイムが本気を見せて言い返したのを見て。　少し、緊張が解れたと思って本題に入る事にした。

「ロイム。　こうゆう大通りってのはな、人は多いが、目的の為に出来てるんだそうだ」

「目的？」

「おう。　ウィリアムが言うには、細かい道を繋ぐ太い通りは、その目的の場に近道する意味が在るってよ。　だから、あのジャケット男は、目的が違ってるから大回りする行き方をしてるが。　本来

は、この辺の彼方此方に行く為に、逆に細い通りを迷わず回れる為に大通りが在るって訳だ」

ロイムは、微妙に言いたい意味が解る。

「それって、僕達は通行人に扮してる訳だから。　このままあの怪しい人を尾行出来ないって事でしょ？」

「おお～、流石はウィリアムの弟子」

「ぶっ。　僕・・・ウィリアムの弟子なのぉ？」

「何だよ。　不満か？」

ロイムは、少し剥れて。

「だってぇ～、ウィリアムの師匠がスティールさん何でしょ？　僕、一番下っ端じゃん・・」

スティールは、細めた目でロイムを見て。

「おめぇ・・・、俺に勝った気で居やがるのかよぉ・・・」

ロイムは、プイッと他所を向く。

その時、若く綺麗な女だけの冒険者のチームらしき集まりが、弾ける笑らい声を発してこの通りに脇道から姿を見せた。　ロイムとスティールは、自然の法則に遵ってそっちに向く。

スティールは、脇目に男を捕捉していながら。

「ロイム先生。　どれが好みで？」

顔を赤らめたロイムは、背が少し高く。　金髪でハツラツとした僧侶の女性を見て。

「髪の毛金色で、スラッとした僧侶・・・」

スティールも、目をギラギラさせて。

「イイトコ突くねぇ～。　俺は、その右脇のお尻ブリンブリンの剣士風の娘がエエわ」

ロイムは、短い太股丸見えのダメージズボンを穿く髪の短めなボーイッシュな女剣士を見てから。

「凄いスキモノじゃないですか・・・」

と、スティールをヘンタイの目で見返す。

スティールは、胸を張り。

「んだ」

ロイムは、呆れてソッポを向く。

すると、スティールは顔を真顔に変えて。

「ロイム。　じゃ、真面目な話に戻るぞ」

ロイムも、パッと顔を真顔にして。

「え？」

スティールは、脇道などを気にして歩くジャケット男を見て。

「この大通りは、この先の住居区まで続いてる。冒険者の俺達が、そこまで堂々と尾行してたらバレる可能性が強い」

ロイムも頷き。

「普通・・用が無いもんね」

スティールは、左側の脇道を指差し。

「前に、この街で仕事した時に知ったんだが。　この太い通りは新しく出来たんだと。　左に一つ戻った出店の犇く通りが、旧本通りだったらしい。　そんでもって、その通りも住居区まで繋がってる。　そっちに入って、二手に別れようか」

ロイムは、尾行もした事が無い。　一気に焦り出し。

「ぼっ僕は・・」

スティールは、呆れた笑いで。

「トーシローに尾行をしろなんて言わね～。　お前が、俺の前を先んじて歩いて。　脇道の都度で野郎が来るのを待て。　お前が見たら直ぐ先に歩け。　俺は、お前が歩くのに合わせて。　脇道とこの大通りを交互に見張って尾行する。　曲がり角からこっそり見ろ。

相手も監視を気にしてるから、気を付けろよな」

ロイムは、顔を強張らせてスティールを見返す。

スティールは、もう本気だ。

「そんな顔で俺を見るな。　場に合わない表情は、相手に悟られる」

「あ・・ゴメンナサイっ」

ロイムは、慌てて前を向いた。

スティールとロイムの尾行が山場を迎え始めた頃だ。

ウィリアムは、涙を拭き始めたエレンを見据えながら。　ケウトに問う。

「お聞きしたい事があります」

「ん？　何かね？」

涙の跡を拭いたケウトは、ウィリアムに向いた。

「先ず、・・エレンさんの母親であるソレアさんはどうなったのですか？」

ケウトは、難しい顔に成って先ずエレンを見た。

エレンもまた、実の母親なだけに行方を知りたくてケウトを見返す。

ウィリアムは、そのケウトの素振りから。

「何か・・、在りましたか？」

「あぁ・・・。　シェルハが死んでから数日後。　ダレイは・・、ソレアを訴えた。　妻の在る身のシェルハをソレアが誘惑し、その罪の意識でシェルは・・・自殺したとな」

エレンの顔が、驚きのままに固まった。

だが、頷くウィリアムは。

「なるほど・・・、シェルハさんの死んだ時の事件調書の内容と一致しますね。　確か、死んだシェルハさんは、海に浮んで首には絞殺・・若しくは縊死の痕が有ったと在りました。　港で縊死・・・、中々在り得ない。　だが、ダレイ氏は、港の碇を繋ぐ石杭に紐を縛ってシェルハさんは自殺したと主張した」

ケウトは、驚きの顔でウィリアムを見つめて。

「あ・・・どうして・・」

「今回のダレイ氏の事件を担当する役人のミレーヌさんと云う方は。　代々役人職を遣られて居るそうで。　そのミレーヌさんのお父さんが引退前に手がけた事件の一つがシェルハさんの変死事件です。　昨日、その調書や捜査報告書を読ませて頂きました。　ミレーヌのお父上様は、縊死と云う異常な死に方を海で遂げたシェルハさんの死に疑問を持ってました。　ですから、その辺をなるべく伏せる為に、水死として於いたとの記述も在りました」

ケウトは、驚きを持続させてエレンを見てから。

「知ってたのか・・、ソレアの事は？」

「それが、訴えられた女性が居るとは書かれて在りましたが。　事件に関与しているとは認められず、また事件か自殺かの判断が出来ないと云う判断から捜査続行のみの終わり方でしてね。　俺も、その女性の事が気に成っていたんですよ」

ケウトは、ウィリアムの話に深い納得の頷きをして。

「ああ・・その通り・・。　ダレイは、役人が事故か自殺か判断できないなら・・・自分から仇を取ると息巻いて。　彼女（ソレア）の家に圧力を掛けた・・・。　ソレアは、家族を守る為に、自ら追放の様に街を出て行ったよ・・」

知らなかった事実は、予想も出来ない程の悲劇。　エレンは、絶望の追い討ちに全身の力が抜ける思いがしてその場に崩れた。

「あ・・あぁ・・どうして・・どうしてそうまで・・・」

我慢していたダレイと云う祖父への怒りが込み上げる。　ダレイと云う悪魔が、この街には居て。　金の力と欲望の悪知恵の限りを尽くしてのさばっていたのである。　自分も僅かでもその汚らわしい血を引いていると感じるエレンには、これ以上の無い仕打ちであった。

過去を知るケウトは、エレンを見てからウィリアムに。

「ダレイは、噂では何度も事件の匂いを漂わせた経歴が在るとシェ

ルハが云っていた。　もし・・、君が役人と親しいなら。　その辺も調べて貰えないか？　我々では、手が届かない」

と、願う様に云う。

ウィリアムは、泣いているエレンを見て。

（スティールさんなら・・・なんて言うかな。　俺は、俺でしかないし・・、仕事をするだけだけど。　あの人なら・・迷わず云うなぁ）

“ウィリアムっ、助けようぜっ！！！”

ウィリアムは、事件で冷めきってきた自分の心に火を燈す様な仲間を想う。　もっと冷めて、ただ事件を機械的に解決していた島の頃とは・・、自分の中の何かが違って居た。　島に住んでいた頃は、知人や人の心を汲みはしたが。　自分から率先して御節介を焼く事も少ない日々。　助けを求められて、ただ心の隙間を埋めるように機械的に推理や事件解決をしていた様な頃を思い出す。

（俺も、所詮はバカなんですかね・・・）

と。　ウィリアムは、カァッと目をエレンに向けた。

「・・・」

急に目つきが変わったウィリアムに、見つめていたケウトが驚いて身震えした程だ。

ウィリアムは、曇りの日差しが暗く差し込む窓の前に歩み。　放心

して涙を流す人形の様に為ったエレンと目を合わせる位置まで来た。

「・・・」

薄く口を開いて、目に力が無くなっていたエレン。

しかし、ウィリアムはエレンを殺すかの如く強い睨みで見つめる。

そして、口を開いた。

「貴女に与えられた選択は、２つ。　一つは、泣き寝入りして堕ちる所まで嘆き堕ちる。　二つ目は、俺と一緒に来て、事件を解決して死んだダレイと云う悪魔の罪に光を当てる。　今、此処で決めなさい。　時間の猶予は有りませんよ」

エレンは、怖い目に変わったウィリアムに驚き、自分の目の焦点を急速にウィリアムの瞳にに合わせた。

ケウトは、今の絶望の淵でそんなに直ぐ事は無いと思い。

「ウィリアム君っ、そんなに急がなくても・・・」

だが、ウィリアムは窓に近寄り。　縁から外を見る。

「店の外。　前の店の物影に一人。　それから、斜め右の木の陰に一人。　俺達を追って来た何者かが居ます。目つきがキツク、役人の類では有りませんね。　薄汚い殺気も持った奴等です」

「なっ、何だって？」

驚くケウトは、エレンを見る。

「恐らく、ダレイ氏を殺害した犯人に近い者の手下では？　ダラダラしていたら、証拠隠滅の為にまた殺人が起こるかも知れない。死んだダレイ氏が隠していた不味い事実の一番は密輸などの不正・・。　その根幹に関わる事なら、先んじて暴ける事を暴いて隠し切れない様にしてしまうのが一番」

此処で、ウィリアムはエレンをまた見る。　強い意志を秘めたウィリアムの視線は、エレンの目を貫いた。　いや、心まで伸びたかもしれない。

「あ・・あ・わ・・私・・・」

混乱するエレンに、ウィリアムは。

「今から、ダレイ氏の運行していた船へ。　今日の昼過ぎに、港に着くと聞きました。　恐らく、ミレーヌさんが動くのは、明日か明後日の手続きを踏んでの事。　その前に、証拠を掴んで役人に突き出す。　貴女の自らの手で」

と、透き通る程に聴こえの良いシャープな言い方で澱み無く言う。

エレンは、窓の縁に立つウィリアムを見上げて、光を見た様な気がした。

（まだ・・、私に出来る事が有る・・・）

長年、口を利かない影の様な母親のルイスと共に、横暴で我儘な祖父の暴挙に絶えて来たエレン。　今、その地獄から抜け出せる時であり。　見えない闇に光を当てる時だと悟ったのだ。

「い・行きます」

エレンの目が、グッと引き締まり力を湛えた。

ウィリアムは頷くと、直ぐに窓の外に目を向けたのである。

third episode（後書き）

次話予告

ケウトの協力を得て、港に向うウィリアムとエレン。　丁度港に到着した船で、密輸の証拠探しが始まった。　一方で、ロイムとスティールは尾行をして男の行方を掴む。　事件は、どんな様相を見せるのか・・・、ウィリアムが動いて光を当てる。

次話、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

先ず、お知らせから＾＾；　モバゲー内で作ったエターナルが、小説祭の関係で来月まで変更が出来ないと云う事に気が付かない僕＾＾；　仕方ないので、２部と作り。　其方で随時掲載致します＾＾

気が付かないお馬鹿な作者を赦してください＾＾；

次に、ズレなどは有りますが。　次は、ポリア特別編を予定通り送ります＾＾　ちょっと長い話なので、息切れするとは思いますが。

途中途中に短編集や、座談会などを交えてお送りしようかと思います＾＾

最後に、ＦＦ買って・・・更新が遅れたらごめんなさい＾人＾

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

third episode

冒険者探偵ウィリアム　3部

昼を迎える頃。　役人の詰める施設のミレーヌの私室に於いて。
2日泊り込んだミレーヌが眠たい顔でデスクを前にしている。

紫の蝶と葡萄畑の絵が描かれた壁に囲まれるミレーヌの私室は、大部屋と言っていい広さが有り。　黒い高さの有るソファーの様なチェアーに座るミレーヌは、書類の山積したデスクを前にして。

「読むのメンドー、口答で説明して～」

と。

デスクの前に、報告の為に来た初老の役人がミレーヌを察し。

「いいですよ。　では、報告を纏めて言います」

「ん～」

紅茶の湯気が、詰まれた書類の間から立ち上っていた。

報告とは、今朝までに深く調べた関係者の過去である。

先ず、ジョーンズとテーラーの夫婦。　代々小さな青果店を営んできた家で。　5年ほど前にジョーンズの店をダレイが金銭で取得。
　家ごと追われた二人は、ダレイに拾われる形で住み込む事に。
だが、ダレイはジョーンズの土地の権利を買収するに当って、長年ジョーンズの店に野菜を卸していた所に圧力を掛けたらしい。　ダレイに弱みを握られていたのか、結局は野菜の卸値を上げて借金を作らせてダレイは店を奪った。

ミレーヌは、其処までで。

「ヒドイわね・・。　お金の汚い使い道だけはよ～く知ってることで・・・」

次に、サレトンである。　元々冒険者のサレトンだが。　身を崩してバクチと酒で荒くれ者に落ちる。　サレトンが、ある時飲み屋で働く女を巡って別の商人の男と喧嘩をし。　相手を半殺しにして罪に問われたとか。　実は、そこを救ったのがダレイであり。　サレトンの好きだった飲み屋の女とは、今や5年近く前からダレイの愛人に成っている。

ミレーヌは、ポカ～ンとして。

「ハァ？　昨日の取り調べの供述と違うじゃない・・・」

初老の役人は、手に持つ書類を見て。

「嘘では無い様です。　ダレイ氏は、その強引で汚い遣り方から方々で恨みを買い。　命を狙われた事も何度か・・。　恐らく、その辺を摩り替えて供述した様ですな」

ミレーヌは、眉間に皺を寄せて。

「取調べで嘘は嘘、供述と事実が食い違うなんて怪しい限りね。事件の供述も怪しく思えるわ」

「確かに」

初老の役人は、先に移った。

次は、ポルスと云う老僕と下働きの若者。　下働きの若者は、流浪の孤児だったらしく、流れ着いたこの街でダレイに拾われて殆ど無償に近い状態で働かされていたとか。　ポルスは、ダレイの父親の頃に仕え始めた男だ。　店の主がダレイに代わると、本人の尻拭いの為に軽犯罪の罪で投獄された事も有れば、機嫌の悪いダレイに酷く殴られた事も屡(しばしば)だったらしい。　片目と片足を悪くしている原因が、ダレイの暴力だった。

ミレーヌは、遣る瀬無い話に。

「涙がでそうな話の集まるお店みたいね。　でも、ポルスってオジイチャンは、何で其処まで被害者(ダレイ)みたいな男に仕えたのかしら・・」

「はい。　何でも、ダレイ氏の父親は心の広い人だったらしく。ポルスがまだ若かれし頃に、母一人子一人の家庭で母親が病に倒れて日々の生活も立ち行かなく為ったらしいのですが。　そのポルスを見て雇ったのが、ダレイ氏の父親だと云います」

ミレーヌは、恩返しもし過ぎだと思い。

「はあ〜、その事を恩に着て、命懸けじゃない？」

「ですな。　ですが、ポルスの忠義はそれだけではありません」

「へ～」

「ポルスも、ダレイ氏の下を逃げ出しそうな事が度々有ったそうで。
ですが、ダレイ氏が金ずくで愛人にした酒場の歌姫が、今の孫娘
エレンの父親に当るシェルハを宿したのが最大の忠義の大本らしい
ですね」

ミレーヌは、カクンと頷いて。

「はぁ・・・、何で？」

「はい。　このシェルハと云う人物の母親は、歌も美貌も際立って
居ましてな。　子守をする母親の子守唄を庭先で聴くポルスが目撃
されていました」

「あ～、秘かに慕ってたのねぇ～」

ミレーヌも、女としてこうゆう話は嫌いでは無い。

初老の役人も頷き。

「らしいです。　して、その歌姫は後に金で別の商人に売られたそ
うです」

人身売買を商業の取引にしたという話に、女のミレーヌは目つきを
鋭くして。

「強引に愛人にしたのに、金で売った訳？」

同じ女。　男の横暴には、人一倍正義感を燃やすミレーヌは、聞き捨てなら無い話だ。

「はい。　ですが、その時。　どうやらポルスはシェルハの行く末を母親から託された様です。　そして、このシェルハと云う人物は、父親のダレイとは違って若い頃から才気に溢れて商才も有ったとか。　思うに、今までポルスが孫娘エレンに仕えているのも、その時の事と。　ダレイ氏も何れは死ぬ訳ですから、跡を継ぐシェルハやエレンに期待を掛けて居たのでは？」

ミレーヌも、その意見には同意出来た。

「５０年以上もねぇ・・・。　受けた恩と・・知った慕情と・・・・微かな希望・・・。　あの酷い環境の中で、必死だったのね・・」

ミレーヌは、感傷的に為りながらも。　疑いも持った。　そうなら、尚更殺しの動機も強まる。

初老の男は、ミレーヌに一歩近付き。

「ミレーヌ様」

「ん？」

顔を向けたミレーヌは、初老の役人の顔色が優れないのに気付いた。

「どうしたの？」

「ええ・・・、実はですね・・・」

最後の報告は、ミレーヌにも一番衝撃的だった。

ーーー

ケウトは、それを快く承知する。

ウィリアムは、“エレンの店に行けば、役人が居るから直ぐだ”と付け加えて、馬車の荷台に隠れて行った。

木箱に囲まれた荷馬車の荷台の奥で、ウィリアムとエレンは並んで筵を被り隠れている。

「ま～るで逃亡者ですね～」

と、言うウィリアムを見たエレンは、まだ涙の潤いを残した目を向けて。

「はい・・・、少し緊張でドキドキしています・・・」

ウィリアムは、思い出した様に。

「あ・・、そう言えば・・・」

見られたエレンは、何か在るのかと思い。

「はい？」

「いえ。　その・・、エレンさんの婚約者とは何方ですか？　ダレイ氏とは、親しい方の様ですが」

すると、エレンの顔は急激に曇る。　どうやら、望んでの婚約では無いのが浮き彫りに為ったと云う顔つきだ。

「・・ローウェルさんと云う方です・・。　貴族のご出身で、ホー

チト王国から移住して来たとか・・。　祖父は、羽振りの良いローウェルさんを気に入り、私と結婚させようと・・」

「と、云う事は・・、そのローウェル氏が婿に成ると云うんですか？」

エレンは、首を左右に振り。

「私がローウェルさんの妻に入り。　祖父は、利権を合併して自分が支配すると・・・言ってました。　ローウェルさんの店は、借り店舗で。　再来年には、その期限が切れるらしいんです。　ですから、私はローウェルに嫁ぎ・・、子供を多く産めと・・」

「なるほど。　貴族の名前を手に入れる道具に為って、子供を産んでダレイ氏の跡取りを作れと云う訳ですか・・。　悪どい遣り方のダレイ氏では、幾ら商業で設けても国の政治には入れない。　エレンさんを貴族に嫁がせる事で名前を手に入れ、箔を付けようとでもしてたんでしょうね」

エレンは、揺れる馬車の中で俯き。

「祖父は、政治に加わりもっとお金を儲けたいと言っていました・・・。　所詮、祖父には全てが道具でしか無いんです」

つまりは。　貴族の名前など、この国では名誉でしかない。　だが、ダレイは、商業の力を持っている。　エレンをローウェルと云う貴族に嫁がせ、その名前を継がせる。　その子供は、貴族の名前で在り。　ダレイ氏の傀儡の道具になる訳だ。　エレンでも、ローウェルでも無く。　その子供をダレイ氏が養子にして、店などを継がせ。　ローウェルと云う貴族の名前をフル活用して方々に養子を売り込

んで権力の中枢である政治の一員に加わろうと画策している事に成る。

ウィリアムは、呆れた顔ながら。

（聞く話にあるダレイ氏の知恵にしては出来過ぎですね。　恐らく、誰か入れ知恵してる者が居る様な気がして来ましたなぁ～）

ウィリアムは、そんな事を考えながら。

「エレンさん。　失礼ですが、そのローウェルさんと云う方はどんな性格なんですかね？」

聞かれると尚更嫌な事でも思い出すのか、エレンの顔行きは曇る一方で。

「あまり・・・、いい方とは言えません。　女性に意地汚く、お金に媚を・・・。　去年、婚約の話を持ちかけられて、祖父と色々話し合っていたみたいで・・・。　時々、私や母をも家に招待しようとします。　社交辞令といいますか、母は祖父の命令が在るのかローウェルさんのお屋敷に何度か行ってますよ。　でも、私は行く気に成らなくて・・・」

ウィリアムは、エレンの母親ルイスが行っていると聞いて少し不思議に成った。

「ほう。　今まで、ルイスさんはそうゆう意味で出かける事は在ったんですか？」

エレンは、否定の素振りを見せて。

「いいえ・・」

エレンが言うに。　ルイスと云う母親は掴み処が解らない母親だと云うのだ。　祖父の命令は良く聞くが、仕事は全く出来ず。　エレンが小さい頃。　夜中にトイレに起きたら祖父と一緒に居るのを何度も見かけたらしい。　何故か、汗を掻いていたり。　時には、不自然に夜食の用意をしていたり。

ウィリアムは、それには黙った。　もう、見えていた事実だ。

（やっぱりか・・）

だが、ウィリアムはもう一つ疑問が有り。　それをエレンにぶつけると・・・、エレンもその質問に対しては、ウィリアム同様に不思議に思っていたらしい。

ウィリアムの脳裏に、ある一つの仮想が浮んだ・・。

昼下がりの午後。　二人を乗せた馬車は、港近くの倉庫に向った。　ケウトの指示で、船の到着の有無を確かめてから船に二人を近づけようと云う計らいだった。

海岸部の東側、海水をそのまま巨大な建物の中にまで引き込んだドック施設が立ち並ぶ裏手は、石で出来た四角く高い倉庫が密集する。　その一つで、ケウトの借り受ける倉庫に着いた馬車から、ウィリアムとエレンが筵を退けて入った。

倉庫の中は、チーズ貯蔵庫とワイン貯蔵庫が主で。　二人が建物の中に入ると、乳製品の香りが海の香りを纏って立ち込めていた。

ウィリアムは、見上げる棚に大量に置かれたチーズを見て。

「ほう。　この国特産のシリーチーズですね。　ワインに良く合う」

と、眼を煌かせた。

エレンは、悲しみを心に隠す様に笑い。

「良くご存知ですね」

冷たい海風が特徴のこの国では、塩分を吸い込んだ風を纏うチーズが有名である。　朝晩の湿気と、日中の潮風が、冬から初夏までに格別なチーズを作る。　部屋の温度を上げない様に、吹き込む風を細い穴の窓を通して強くさせ。　チーズの隙間に通す事で、腐らせずして醗酵させるのだとか。

馬車を退かした御者と付き添いの男二人が、ウィリアムとエレンの居るチーズ貯蔵庫に入って来た。

「どうも」

「よろしくお願いします」

一人は、ノッポで気さくな笑顔の４０前後と見受けれた男性。　もう一人は、口の周りに髭を生やしたガッシリとした体格の中年男性。

先に、背が高くて色白の気さくな男性が。

「私の名前は、チャンド。　ケウト様に仕える者です。　そして、

こっちはコルレオ。　二人、お二人に遵ってエレン様をお守りしろとご命令を貰いました。　是非、この身を使って下さい」

ウィリアムは、二人の体つきを見て。

「ありがとうございます。　お二人は・・・、武術の心得がお在りですか？」

すると、日焼けした渋い細面をするコルレオが、少し驚いてチャンドを見る。

一方のチャンドは、コルレオを見てから笑い。

「流石に、ケウト様のお目に適う方ですな。　観察が鋭い。　はい、我々はお互い別ですが。　若い頃は冒険者でした」

ウィリアムは、其処で質問を止めた。

コルレオが残ると。　チャンドは、港に向った。　そして、少しして船が入港しているのを確かめて来た。

ウィリアムとエレンは、港に二人の男を連れて向った。　ドックに入るのは、定期検査や超大型の貨物船や旅客船のみ。　中型の船などは、その周りに広がる船着場へ。　入港する船は何番港の何処何処と決まっている。　場所の権利を国から金で借り受けるのだ。　エレンは、祖父が死んだので権利を示すプレートアンカーを持っている。　その証明を見せて、やっと港に入れるのだ。

船着場に入る石の道に設けられたゲートを潜った後。　ウィリアムは役人が居たので、念のためにとミレーヌの名前を出した。　管理

管轄は違うが、ダレイの事件はもう街中に広がっていた。　そして、ウィリアムは不正の事も匂わせて、連絡を頼んだのである。

何故、ウィリアムがケウトに頼んでこうしたのかは解らないが。
この判断は正しかった。

エレンの案内で、彼女の家が所有する中型貨物船の船着場に向うと。
　何がどうしてか、全く荷馬車が来ないで積荷をどうしようか迷っている船員の集まりをを見つけた。　船員達は、船が港に着くと何をすべきか知っている。　荷の周りに固まっているなど、普通では珍しい光景なのだ。

石で出来た幅広い船着場にズラズラと並んだ船たちの中で、荷物を積み上げて周りを見ている船員の集まる場所にエレンとウィリアムが近付けば。　集まりの中から黒い生地に人魚の刺繍をし、服の所々に少し痛みの見える上着を着た屈強そうな風貌の男がエレンに向って来た。

「エレンお嬢様、此処に来たんですか？」

「ヴィオレさん、実は・・・」

エレンは、その男にダレイ氏が殺された事を告げた。

航海士にして、船長として雇われたヴィオレは。　４０歳過ぎた筋骨隆々とした海賊の長の様な威厳を持つ男だった。　モミアゲから顎に線を引いたような短い髭、両腕に彫られた“海の女妖精”（セイレーン）の刺青。　腰には、曲刀シャムシールを装備した強面である。

だが、ダレイが死んだと聴いて、ヴィオレはその場に膝間付いた。

「お嬢さん、ダンナが死んだ以上。　俺はシェルハさんの意思を受けて貴女に従う。　この身、使って下さい」

ウィリアムは、エレンの父親である“シェルハ”と云う人物の人間性を垣間見た。　ヴィオレの様な船長は、金だけでは動かない頑固者が多いのだが。　エレンに見せる姿は、敬愛の念が見え隠れしている。

エレンは、泣き捲くった赤い目を真摯な物にして向け。

「ヴィオレさん。　祖父が、不正を・・・密輸をしていたのは知ってますか？」

聞き捨てなら無い話に、ヴィオレが勢い良くエレンに顔を上げた。

「え？」

驚くヴィオレに、エレンはウィリアムから受け渡された紙を見せる。

「家の店に置いてある品物や、別店に並べられている品に、輸入の記載も売買の事実も無い物が在ります。　その品物を運んでいるのは、御祖父ちゃんが取引に使っていた船か・・。　所有してるこの二隻の船・・どちらかだと思います」

品物の記録に眼を通すヴィオレは、

「おかしい・・・、この商品は全て船に乗せた記憶が在るものばかりだ・・」

其処に、ウィリアムが。

「仕入れを現場で担当しているのは貴方ですか？」

ヴィオレは、エレンの脇から腕組姿でそう言って来る若いウィリアムに顔を向ける。　何者か解らないヴィオレは、目つきを鋭くするも。　エレンが、直ぐに。

「役人の依頼で、御祖父ちゃんの事件を調べてくれてるウィリアムさんよ。　この人が、不正の事とか教えてくれたの。　この人の質問は、私の質問と想って応えて下さい」

頷くヴィオレは、ウィリアムを見て立ち上がり。

「いや。　現場で買うのは“ラザロ”って云う旦那の腹心さ。　今さっき、迎えの荷馬車が来てないからエレンお嬢さんの御宅に向った。　荷物を運び出すのも、主の許可が必要だからな」

ウィリアムは、俯き何かを素早く考えると。　また、ヴィオレに向いて。

「では、積荷の運搬に皆さんは関わっていない？」

ヴィオレは、後ろで船員が積み出した荷物を親指で指差し。

「今降ろしたのは、俺達がやったんだが。　あれは、俺達が運搬する。　だが、一部の荷物はラザロと旦那が連れてくる別の荷馬車が持って行くよ。　その荷物に関しては、質問も赦されない」

エレンとウィリアムの目が噛み合った。

エレンは、直ぐにヴィオレに向って。

「祖父が居ない今、私が跡継ぎです。　ヴィオレさん、その荷物を降ろして下さい。　後から、役人の方が来ます。　それまでは、誰にも見せてはいけませんよ。　もし、ラザロと云う人が来たら、私が言ったと伝えてください」

エレンは、強い眼でヴィオレに言う。

ヴィオレとて、商業の掟は幾らか知っている。　心配な顔で、エレンを見て。

「お嬢さん、それでいいのですか？」

エレンは、迷いは無かった。

「ヴィオレさん。　もう、役人の方々が内密に捜査し始めています。隠して、罪に問われたら全てを失います。　もし、少しでも何かを残せる可能性が在るなら、今はその道を進むべきだと思います」

言い切ったエレンを見るヴィオレの顔が、曇り空の下で晴れ渡るのが見えた。

「解りました。　このヴィオレ、お嬢さんに最後まで付き合います。例え船を失っても、またやり直せばよろしいんですから」

ヴィオレは、振り返ると手下の船員に。

「おうっ、野郎共っ！！！　積荷を全て降ろせっ！！！　ダレイの旦那は死んだっ。　今は、このエレンお嬢様が主だっ！！！　もう、横暴に耐える必要無ぇぞっ！！！」

こうして、ケウトの遣わしたチャンドとコルレオも手伝い。　滑車と紐で荷物を降ろす作業が始まった。　ヴィオレも心得た物で、船の横っ腹の出し入れする格納扉を開き。　今まで手の付けられなかった荷物を優先して降ろし始めたのである。

一方、ウィリアムはヴィオレから教えて貰ったラザロと云う男の私室を調べるべく、鍵の掛かった黒いドアを壊し。　この船にしては珍しい個室の客室と思える部屋を探し回った。　雑魚寝の船員、船長室で狭い床に入るヴィオレとは明らかに違う待遇である。

部屋を見回したウィリアムは、木のコップに飲み残された紅茶を嗅いで。

「フラストマド王国の一級茶葉ですね・・。　ワインに、飴・・・随分と羽振りいい感じで」

木の机の上に残された飴やチョコレートは、お菓子の類でも値の張る物。　それを、堂々と食べているラザロと云う男は何者だろうか。

ウィリアムは、ベットの脇にある引き出しの棚を全て抉じ開け。中に入っていた売買証書と取引契約書を取り出してエレンに持たせた。

ーーー

れた感じの中年男性で、閉まっている店の表で。　見張りの役人と何やら話し合って、力を落として港方面に引き返してゆく。

アクトルは、外に出るのを考えた程で。

「立ち聞きすれば良かったかな・・・」

クローリアは、初めての見張りで良く解らず。

「さぁ・・・」

夕方に向けて傾く太陽が、建物に日差しを遮られ始める。　陽の光が、色を佩び始めた頃。　今度は、役人が走って来た。

「何か・・・血相変えてるな・・」

アクトルは、外に出ようかウズウズし始める。

「何か有ったみたいですね・・。　まさか、ウィリアムさんとエレンさんと云う方に何か・・・」

クローリアも心配に為った。

店の前には、ミレーヌまで出て来て役人達と合流し。　ミレーヌを乗せて来た馬車にミレーヌと血相を変えて来た役人。　そして、応援に店を見張る役人二人の内、一人がミレーヌと共に馬車で消えたのである。

これで終りかと思いきや。　今度は、ミレーヌの去った直後に青い車体の馬車が店の前に乗り付ける。

「また、馬車かよ」

アクトルは、何が何だかと思って見ていると。　閉まっている店の前に、白と黒いストライプのスーツを纏った身形のかなり良い男性が現れた。　整髪油で、綺麗に頭髪をオールバックにして、黄金の掴みを見せる黒いステッキを手にして居た。

アクトルは、細面ながらに鋭い眼光を見せるその中年紳士を見て。

（何モンだ？　眼の鋭さは徒者じゃないぞ・・・）

クローリアも、顔は悪く無い強気な中年男性紳士を見て。

「何か、怖そうな雰囲気のする人ですね」

と、いい人物を見る目では無かった。

馬車から降りたその紳士は、見張りの為に立っている役人に向って強気な口調で怒鳴り出す。　その声は、窓越しに声が聞こえて来る。

「おいっ！！！　エレンは何処に行ったんだっ？！！！　私の妻と成る身だぞっ？！！！　昨日戻ったと聞いたのに、何で外に出さないんだっ？！！！　そんな権限が在るのかぁっ？！！！！　責任者を出せっ！！！！！！！」

クローリアは、エレンに婚約者が居た事を思い出す。

「ウィリアムさんが言っていた・・・婚約者の方では有りませんか？」

アクトルも、そんな話をウィリアムが言っていたと思い出し。

「ああ、そ～いやぁ」

二人は、押し問答と云うより。　一方的に怒鳴り散らして、エレンの居ない事を知ったのか。　直ぐに馬車に乗って消えて行く男を見送った。

third episode（後書き）

次話、予告

事件は、一気に急展開を見せる。　港に集まるミレーヌと、ウィリアム・エレンと、ラザロ・・・。　不正の事件が暴かれる事になり。
ダレイの殺人事件は存在を薄くさせるのだが・・・。

次号、数日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

年末の忙しさが大変ですね＾＾；　なんか、書くのが疎かに為りそうなカンジです＾＾；　寒いし＾＾；　今、ストーブも暖房も無い部屋で布団に包り作成していますが。　せめて、年越し蕎麦ぐらいは食べたいと願う今日この頃です＾＾；

では、次回もお楽しみに＾＾

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

超不定期特別で奇跡な座談会？（ウソです）（前書き）

何時もご愛読して下さる皆様に、クリスマス企画でお送りする特別編です。　内容は、半分造りで半分本当です。　箸休めの様な気楽な気持ちで御覧下さい＾＾‥

超不定期特別で奇跡な座談会？（ウソです）

≪伝説の座談会≫

本編は、第２０話の直後。　第９話辺りまでを振り返る筆者とキャラクターの皆様が妄想の世界でお話した事の記録として、議事録の様なものだとご理解下さい。　事実と異なる発言等々有りますが、何分皆様も疲れています上に。　色々と言いたい事も有るかと思います。　文体等などは、筆者もハイテンションとローテンションの狭間の中で作成したので、いい加減でありますが長い目で、見て下さい。　また、聞いてやって下さい。

場所、渋谷の奥座敷（妄想です）

登場人物、Ｋ意外の総勢＋筆者。　（完全版ですので、Ｋ氏の登場も有ります）

（この本編中には、まだ全員の登場は見込まれておりません）

Ｋ様は、ご都合上。　別場で、筆者のみとのお話し合いを希望致し

ましたので。　その様に計らいました。　悪しからずに。

登場人物称

ポ＝ポリア　マルタ＝マルヴェリータ　シス＝システィアナ
イル＝イルガ

ガ＝ガロン　ラキ＝ラキーム　アデ＝アデオロシュ

店の女性店員＝レイチェル　ジョ＝ジョイス　筆者＝ボンクラ
筆遣い　K＝K

他、適当に。

≪座談会？　与太話？≫

とある有名店の名前をパクった店名の居酒屋の中。　足を下ろせる奥座敷の宴会場に着いたポリア達チームの一行。　デブでチビでアレの小さい筆者が、腰低くして座敷に案内した。

【皆様、鎧や武器を脱いでおります。】

（銃刀法に引っかかりたく無いから外させました・・・ｂｙ筆者）

イル：「あ～、終わった～終わった～。　姉ちゃん、ビール。　プリン体抜きで」

ポ：「あらイルガさん、健康的な趣向に変わったの？」

イル：「あ～。　実は、最近痛風が酷くてな～。　飲み過ぎらしい。　でも、一番○りと焼き鳥の食い合わせが好きなんだよな～」

ポ：「歳取ると大変ね～。　でも、焼き鳥にはのノ○越しかク○アア○ヒじゃない？」

右奥には、店の裏カウンターに直結する窓口が有り。　厨房で働く三○亭楽○郎師匠の様な板長が。

板長：「お～い、ビールを奥座敷に～。　プリン体抜いた奴無いから、プリンをメニューから抜いとけ～」

やる気の無い店員の声がして。

店員：「ふぇ～い」

板長；「あの声は川田か？」

川田：「座布団燃やしてます」

板長：「辞めろっ！！！　今直ぐクビだっ！！」

イルガは、そのやり取りを聞いて。

イル：「なんだ・・。　プリン体抜き無いのか・・・」

ポ：「ちょっとっ！！！！！　プリンは好きだから抜かないでよっ！！！」

板長：「チィ、聞いてやがッたか・・・」

ポ：「ここまで聴こえてンだよ」

筆者と共にメニューを見るマルヴェリータは、胸元スンゴイ露出の布みたいな服で、筆者がうろたえている。

マルタ：「ポリア、口の聞き方考えなさいよ。　一応は、貴女も社会人なのよ。　ねぇ～、筆者さん」

ポリアは、シレ～っと他所を向く。

其処に、お手洗いから帰って来たシスティアナがドタドタと廊下を走って戻って来て、障子を開けて中に入って来た。

シス：「アブネ～。　間違って男子トイレ入っちゃった」

ポ：「システィ、立ちション出来るの？」

筆者：「チョット・・・そんな発言は止めて・・・」

イル：（内容が違うべさ）

システィアナの後ろから若い女性店員も入って来て。

女員「お待たせ致しました。　プリン体抜きのビール、お持ち致しました」

イル：「アラ、有ったの？　板さんが“無い”って言ってたけど・・

・」

女員：「いえ、御座いますよ。　もう今日は閉店した裏の酒屋さんを、脅しの電話入れてからシャッター叩いて起こして有りますから。　どんどん注文して下さいね」

蒼褪める一同。

筆者、なんとか普通に行こうとメニューを開いて。

筆者：「あ～っと、一番○り２０本。　それから、オレンジジュースに・・・ウーロン茶を３人分づつ。　料理からキンキの煮付けと・・鳥とカエルの唐揚げ１０人前。　野菜サラダ各種類５人前づつ。　それから、・・・この“人体盛り”って・・・何ですか？」

聞かれた女性店員は、ニコニコの営業スマイルで。

女員：「ハイ。　当店の、板長が考案致しました特別料理で御座います。　白いお餅でお作り致しました原寸１／２サイズの精巧なボンテージ姿などなど数体の女性の姿に、お刺身を盛り付け致しました男性必見の一品で御座います」

筆者：（いいのか・・・そんなの・・・。　公序陵辱罪だろうが・・・）

筆者：「あの・・・お値段が１０万とかしてますが・・・」

女員：「見れるだけでも有りがたいと思えっ！！！！　・・・と云う安心価格設定ですが。　何か？」

筆者：（ナイと思います）

筆者：「あ～・・・では別の刺身の盛り合わせを１０人前」

女員：（チィ・・・頼まねぇ～）

女員：「畏まりました」

去ってゆく店員を見た後、背筋に汗を流した筆者。

筆者：（一瞬睨まれたのは何でだ？）

飲み食いしながら、他の皆を待つ事に。

≪悪者達の素顔≫

その頃。　店の近くの裏路地。

ビール箱やゴミ箱が散かる飲み屋街の裏道で、各店の飲み残しを集めた瓶を持ち寄ったボロ服を纏ったラキーム・ガロン・アデオロシュの３人。

ビール箱を椅子代わりにし。　ダンボールの大きい物を台代わりにする。

アデ：「かなしいですね・・・私も此処ですか？」

凄い貧弱そうな弱弱しく見えるラキームは、ゴミ捨て場から持って来た様な罅入りのコップを台替わりのダンボール箱の上に置いて。

ラキ；「悪役だから・・・じゃないでしょうか？」

と、控え目に言いながら３人のコップに集めたビールの飲み残しを注ぐ。

首をグラグラさせた死相の漂うガロンは、

ガ；「ラキームはん、御宅ってそんなに弱弱しい人でしたん？　良くもま～あないな役柄遣りましたな～。　メッチャ悪役ってカンジ

でしたどす。　最優秀ダメ人間賞にノミネートされまっしゃろ？
コレはどうも～。　では、おビールを頂きますわ」

と、ラキームに顔を傾けてお辞儀をした瞬間に、首がポロっと落ちてコロコロと。

ラキ：「うわあああ～っ！！！！」

アデ：「ああら～ま、取れましたな」

其処に、店の中側から戸を叩く音がして。　店の店主らしき男性の声が。

主：「おいっ、開店中は黙れ。　警察呼ばれたいか」

アデ：「・・・・・」

ラキ：「すっ・スミマセンっ」

一方、繁華街の通りの方に首を転がしたガロンは、コップをダンボール上に置いて。

ガ：「コラコラ、首。　何処行きはった～？」

アデ：「左の方です」

ラキ：「凄い・・・ノベルの成せる業だ・・・。　首取れても生きてるし・・」

呆れ顔のアデオロシュは、ラキームを見て。

アデ：「ラキームさん、あれでも生きてるって言えますの？」

ラキ：「ノベルの神秘ですよおお～」

アデ：「マンガやライトノベルの見すぎクンですね」

転がった首を追って、店とブロック塀の間の細いゴミゴミした道を行くガロンは、あっちぶつかりこっちヨロけてダンボールの元に転がった首に辿り着く。

ガ：「おお～、足元が見えハル～」

首を拾い上げたガロン。

だが・・・突如としてガロンの立っていた横の店の勝手口が開いた。

ガ：「あ・・・」

現れたのは、長身でチョット強面の黒尽くめな中年紳士である。

ガ：「お騒がせしてすんませんな～」

ガロンは、首を脇に抱えて身体だけで、愛想のお辞儀を・・・。

アデ：「スミマセン」

ラキ：「お騒がせしました」

すると・・・、中年紳士は内ポケットに手を入れて。

紳士：「あの、私こうゆうモノですが」

と、名刺を差し出してくる。

ガ：「はあ・・・」

ガロンは、受け取って左脇に抱えた顔に、名刺を見せた。

―【全国デュラハーン協会副理事。　九尾（くび）　獲侘（とれた）―

ガロンは、思わずその場に固まった。

ガ‥「えへぇ？」

紳士は、ガロンの顔に中腰で近寄り。

紳士‥「我々は、最近倒されて数の減ったデュラハーンを保護している者でございます。　是非、私と一緒に来て頂けませんか？」

ガロンは、ポッカ～ンと口を開けて名刺と男を交互に見た。

ガ‥「はあ・・・デュラハーンじゃあ・・ナイんですけども」

紳士は、身体を戻し。　胸を張って、咳払いを一つしてから半身でガロンを見据え。

紳士‥「いえ、これから成る方も含まれます。　もし来て頂けるなら、月極めで３０万。　それから、美人デュラハーンとのお見合いも行います」

ガロンは、首を即座に紳士に差し出して。

ガ‥「行きます」

アデ&ａｍｐ;ラキ「うごーーーーっ！！」

こうして、ガロンは連れ攫われました。

残された二人。　チビチビと気の抜けたビールを飲みつつ。

アデ：「しかしながら、この小説では悪役は後まで惨めですね」

ラキ：「ですね・・。　でも、いい配役頂いたので、ま～食い扶持には成りますよ」

アデ：「でも、毎回お話を通じて美女が多いのはイイですな～」

ラキ：「クォシカさんってメチャメチャ美人で、ヌードも惜しげもなく出してましたね～。　イイ女優さんになりそうな」

アデ：「メアド交換出来なかったデス」

ラキ：「僕は交換しましたよ」

アデ：「本当ですかっ？！」

ラキ：「ハイ、ええ～っと・・・・・・」

古い携帯を取り出し、メアドを見せるラキーム。

それを見たアデオロシュは、何も言えずに黙った。

アデ：（ｓｉｔａｇｏｋｏｒｏｍｉｅｍｉｅ@・・・・。“下心見え見え”・・・。　ラキームさん・・・偽のメアドを渡されたのね）

寂しい木枯しが裏道に吹いた。

≪グダグダな飲み会≫

所を戻して、居酒屋。

さて、ポリア達と筆者の下にジョイスが来て。

ジョ：「いや～待たせて悪いね」

黒いスーツに黒眼鏡のジョイスは、どこから見ても旧世代のヤーンであった。

詰まらない目のマルヴェリータは、筆者に擦り寄り。

「ね～、なんで私の相手ってアイツなの～？　私、ブス専だって知ってるでしょ～？」

筆者：「はあ・・・。　スミマセン」

マルタ：「可哀想だから筆者さんでもイイわよ」

筆者：（天使か・・・この人？）

其処に、グランディスレイブンのご一行様他、登場人物の皆様が到着。　宴会の中で、筆者の周りにポリア・イルガ・システィアナ・マリヴェリータが向かい合って座談会が始まる。

ポ：「は～、疲れた。　でも、何でケイは来ないのか？」

マルタ：「ポリアが嫌われた所為じゃない？」

ポ：「アタシ、そんな悪い事してな～いモン」

筆者：（嘘だ・・・。　しつこくメアド聞いて、夜の食事に自分から誘ってたクセに・・）

イル：「ま～、次もグランディスの奴等を助けに行くので会えるだろう。　あんな凄い男とは、たま～に会うぐらいで十分だ」

ポ：「そう言えば、筆者さん」

筆者：「ハイ？　何ですか？」

筆者、マルヴェリータにウーロン茶を注いで頂いて恐縮する中で。

ポ：「アタシ達のチームの話って、シリーズなんでしょ？」

筆者：「あ～、“準シリーズ”・・ですかね。　Kさんと、ウィリアムさんと、セイル&ユリアさんの話は完全シリーズです」

マルタ：「あら・・・そうなの？」

ポ：「“準”って、安っぽくない？　レギュラ～にしてよ」

筆者：「はあ～」

マルタ：「ねぇ～、筆者さん」

グッと寄られて、スンゴイ胸元に鼻血を出す手前の真っ赤な筆者。

筆者：「は・・・はう」

マルタ：「私達の出番増やしてほ・し・い」

頬をつつかれて、略撃沈の筆者は、胸元に釘付けで涎を・・・。

イル：「と云う事は、ワシ等のお話はあんまり無いって事か？」

シス：「つまんね～」

先付けの枝豆を食べ捲くるシスティアナ。

ポ：「システィアナ、アンタもガラ悪いよ」

シス：「だってさ～。　２０にも成って“ポリア～”だの、“そ～でしゅ～”なんてネタ以外に有り得なくない？」

ポ：「た・・確かに・・」

筆者：「スミマセン」

平謝りする筆者。

マルタ：「仕方無いじゃない。　そうゆう設定なんだから・・・。　アタシだって、ジョイスとは正直イヤよ。　あんな女好きのド助平」

遠くのテーブルの端で、クォシカやシェラハなどにクールな印象で口説きに掛かっているジョイスを一同が見た。

ポ：「旧世代のモテ男ね」

シス：「ゲイラーより顔がイイ時点で上」

イル：「また、不祥事起こしそうな雰囲気がするな～。　過去に何回だっけか？　女性と修羅場やったの？」

ポ：「８回。　内、３回は、婚約破棄されてる」

ジョイスを見る気も無いマルヴェリータは、筆者に抱き付いて。

マルタ：「ねぇ～、筆者サン。　出番は増えない？」

意識が遠退きそうな筆者は、虚ろに。

筆者：「は・・う・・。　じ・実は・・ポリアさん達のチームの話は・・・Kさんの・・登場話としての一話限り・・だったんです・・・ハイ」

４人：「え゛っ？！」

筆者：「でも、ウケ良さそうだし、ポリアさんやマルヴェリータさんやシスティアナさんを一話限りにするには・・・勿体無いな～っと・・・」

シス：「当然じゃんっ！！　“美少女冒険者”ってサークル作ったのに～」

ポ：「アタシも強引に加入させられた・・・」

マルタ：「アタシはナイ・・」

シス：「だって、マルタさんはもう美女じゃん。“美少女”で通用する女(ひと)が対象」

マルタ：（なんか・・・トゲ有るわ・・・・）

イル：「筆者さんよ。　では、我々の話は続くのか？」

筆者：「スンゴイ勢いで１０話程作りました」

イル：「アンタはエライ。　これで、家に帰っても子供に自慢出来る」

マルタ：「イルガさんって、本編じゃ～独身よね」

イル：「うん」

ポ：「奥さんって、幾つ？」

イル：「２１」

女性３人：「ありえな～いっ！！」

イル：「いいじゃないか・・・男が羨む“幼な妻”だぞ」

筆者：（俺は年上でも下でもイイ・・・）

シス：「あ～驚いた。　でも、ま～話が続くならいいや」

イル：「うむ。　食い扶持が繋げる」

ポ：「これからのＫとの絡みは？　もう、ナイの？」

筆者：「ネタバレに成るから避けます」

ポ：「ケチ」

マルタ：「いいじゃない。　先々の旅先で出会えたら、サプライズでしょ？」

ポ：「ま～ね～。　でも、バカにされてばっかりの内容には物申す。　ワタシをもっとステキに書け」

ポリアから凄まれた筆者は、静かに顔を背ける。

筆者：（イジメか・・・）

マルタ：「でも、ポリアのそのバカっぽい所を抜くと、もうお話としては詰まらないわよ。　バランス取れてるからイイんじゃない？」

ポ：「んじゃ～マルタは、あんな感じで良い訳？」

マルタ：「全然」

ポ：「嘘だ～」

マルタ：「ホント。　だって、現実で私は家派だし。　ネコ・イヌ好きだし～。　男は一生にず～っと居れる誰か一人でイイし。　顔は不細工でもイイし、あんまり体臭とか、キレイ好きとか好み無い

し～」

ポ：「なにそれ」

マルタ：「顔だの金だの、優れた男って面倒よ。　浮気するし、上から物見るし、飽きる。　それで金に執着する様に自分が成ったらお粗末だわ。　毎日、慎ましやかに普通に居れれば、それでいいわ。　別に、顔や金で恋や愛に優劣が出来るなんて妄想神話だし」

筆者：「この人ええ～人だ～」

涙ながらにマルヴェリータに土下座するアホうな男。

マルタ：「男の苦労は、ウンザリ。　一緒に居て、安心出来る人がイイ」

ポ：「その顔で有り得ないわ～・・・。　そのセリフ」

シス：「もう、内面が枯れてるとか」

イル：「真理かもな・・・。　帰って嫁に話そう・・・マジ、感動した」

イルガは、お手拭で目頭を拭った。

マルタ：「話逸れたわね。　で？　筆者サンの中では、Ｋの過去とか主人公としてのシリーズはどうするの？　冒険者としてのＫには、興味深々」

ポ：「アタシも～」

シス：「同じく～」

筆者、刺身を食べてから。　山葵が効き過ぎて涙を流して悶絶・・。

数分後。

筆者：「そ～ですね～。　Ｋのシリーズは、全てのキャラクターのシリーズが終えた最後に成りますかね。　ただ・・・」

マルタ：「“タダ”？　なぁに？」

筆者：「Ｋさんの過去は、半ば“ゴル〇１３”みたいな話で。　チョット・・・今の小説設定では書けないかもしれませんね。　何せ、今ですら首切ったり、人間の汚い部分を出していて。　全年齢の適応がギリギリですんで・・・」

ポ：「それは詰まらないわね～。　って言うか。　昔の小説なんかは描写的にどうか別にして、可哀想な話とか、残酷な描写だってあるじゃない。　最近の規制って、物事を教えられない皺寄せみたいでイヤだわ～。　ま、中にはグロ過ぎる映画や小説あるけどね」

筆者：「ま～、時代の流れですかね。　とにかく、最後でK編のスタートです。　それは、決定事項ですよ」

イル：「で？　予定としては、何時頃？　内容は？」

筆者：「さ～。　皆さんを含めた主な主要キャラクターのお話が終わった後ですからね・・。　何年先になるやら・・・。　今の所、その目処が立っていません」

シス：「長っ！！！　“美少女”じゃ居られなくなるじゃんっ！！」

ポ：「４０過ぎて“美少女”云うならネタか、悲しい女(ひと)ね」

一同：「・・・・」

自分の発言で、自分までダメージを負ってげんなりのポリア。

ポ：「ま・・・いいわ。　その話は・・・」

シス：「でも、そ～なるとポリアって最終的にど～なるの？　一生、冒険者？　アタシ、あのデカ男とラブシーンとかやるの？」

筆者：「最終処か。　途中までしか考えていないですね。　ただ、結婚させてもいいかな～と」

シス：「お～」

ポ：「うは。　ウエディングドレス着るのかな？」

シス：「いいな～。　アタシも白いローブばっかじゃなくて、オシャレした～い」

イル：「普段しろよ。　話の中でするなや」

シス：「イルガって、辛いよね」

イル：「年上だ。　甘い話には辛く行く」

ポ：「じゃ～。　マルタは、ジョイスと結婚？」

マルタ：「ラブシーンとかは止めて」

筆者：「いえ。　ジョイスさんは、別の女性と結婚させるか・・・殺そうかな～」

ポ＆amp;マルタ：「うそ～ん」

システィアナは、口説いているジョイスに向かい。　両手を合わせて、瞑目し。

シス：「死んで頂きます」

もう、女性二人に飲ませてかなりイイカンジに成っているジョイスを睨むイルガは、声のト～ンを落として。

イル：「派手に殺っちまうか？」

ポ：「イルガさん、怖い」

マルタ：「別の女性とゴ～ルインさせたら？」

筆者：「では、皆さんでそれを助ける話でもやります？」

全員：「さんせ～」

ポ：「Kに逢いたい・・・」

シス：「逢えるの？」

筆者：「ネタバレしませ～ん」

イル：「今夜は飲もうか」

筆者：「板さ～ん、唐揚げ5人前と、タラコパスタ追加～」

板長：「腹黒唐揚げ5と、タラスパ追加～。　無限の間の団体さん～」

一同：（腹黒・・・食っちゃった・・・・）

≪やっぱり・・・この人は外せない≫

東京駅、京葉線乗り場の一角に在る飲食店。　その間近に伸びる太い石柱に寄り掛かる男が一人。

ＪＫ：「ねえ・・・、あの人顔に包帯巻いてる・・。　怖くない？」

ＪＫ「うわぁ、マジだ。　でも、なんかスラッとしててカッコ良くない？」

舞浜に在る某テーマパーク帰りの数人の女子高生が、包帯を顔に巻いた男を見てコソコソと話している。　いや、京葉線と東京駅の各方面を繋ぐ連絡通路だ。　引っ切り無しに往来する人々が、包帯を顔に巻いた男を見ては通り過ぎる。　中には、子供が指を指して、親が注意する場面も・・。

だが、そんな事も気にしていない素振りの包帯男は、黒いロングコートに襟を伸ばした黒いＹシャツ姿で。　下は黒いジーンズの黒尽くめ。　腕に光るカル〇ィ〇のシルバー製腕時計を見て。

K：（おっせ～なあ～。　昨日はポリア達と飲んでたのは解るが・・。　もう昼過ぎだぞ）

包帯男の間近の頭上には、京葉線他の列車の時刻を告げる電光掲示板が点滅している。

K：（今日は何処まで行くかな～。　旅ガラスの人生も悪く無いな～。　大原・・・いや、鴨川まで一気に行くかなぁ～）

包帯男・・・いや、Kが電光掲示板を見てそう思った。

其処に。

筆：「お・・お待たせ・・い・致しました・・」

情け無い男の声がする。

K：「お、遅い・・・はぁ？」

Kが前を見ると、デブでチビで・・・イカ略の筆者が、頬だけゲッソリとさせた青い顔して、足元フラフラの状態で立っている。　Kは、引き攣った顔で。

K：「アンタ・・・どうした？」

筆：「はぁ・・・マルヴェリータさん達に捕まりまして・・・朝まで付き合わされました」

K：（あ～あ、生気を抜かれてらぁ・・・。　お気の毒に・・）

起こった事を把握したKは、特急のチケットを特急券付きで渡し。

K：「ん。　とにかく、下に降りて待とう。　話は、立ち話でいいだろうさ」

筆：「ハヒ・・・」

地下へ降りるエスカレーターに向うKは、筆者に。

K：「皆、元気そうだったかい？」

筆：「ハヒ・・、マルヴェリータさんは・・凄く。　あと、ポリアさんが・・・逢いたがって・・ますた～・・・」

Kは、難しい笑みを浮かべて。

K：「酒癖悪い女は苦手だ」

筆：「ハヒ・・・朝まで・・・思い知らされました・・・オプッ・・」

ゲップを出す筆者に、Kは冷や汗をを覚え。

K：「おいおい、此処ではレッドカードだぜっ。　下のトイレに行けよ」

筆：「・・・・・」

口を膨らませて頷く筆者。

トイレに行って・・・、出て来た筆者にグリーンガ○とビタミンレ○ンのペットボトルを渡すK。

K：「頼むから、匂いは消せ。　でないと、お前を消すからな」

筆：「うい・・・、ありがとうございます・・・」

口を洗浄する筆者を仕方無さそうに見るKは。

K：「他の皆も元気だったか？」

筆：「ええ・・・まあ。　でも、ジョイスさんが・・・また・・」

Kは、皆まで聞かなくても解ると。

K：「女か？」

と、左手小指を立てて、クイックイッと動かす。

筆：「あい。　クォシカさんと、シェラハさんを同時に口説こうとして修羅場に・・・。　止めに入ったサーウェルスさんが、両頬をビンタで真っ赤に・・・」

Kは、プッと吹いて。

K：「災難だな」

筆：「後・・・」

K：「ん？」

筆者は、太った腹で短くなったトレーナーの下辺りで、腹をチラ見させる醜い様子で。

筆：「ガロンさんが、【全国デュラハーン保存協会】とかなんとか云う団体に連れて行かれたそうです。　ラキームさんからメール来ました」

Kは、ポッカ～ンとした眼をして。

K：「なぁ～んだ・・そりゃ？」

筆：「理解不能です」

K：「政治も社会も傷んでるねぇ～」

筆：「チィ～ス」

Kは、筆者を隣にホームに向うべく階段を降りる。

K：「そう言えば、俺の話は休業かい？　別に、半年ぐらい無くてもいいけど」

筆：「ケイさんの話を半年も休業したら、私の首がチョップで落ちますよ」

K：「おいおい、そいつは某ゲームの忍者のみだろう」

筆：「いえ。　ケイさんのファンは多いッス。　何せ・・・ポリアさんやジュリアさんが黙っていないイッス」

K：「脅されてんの？」

筆：「ハヒ・・・、時々、脅迫電話がぁ・・・」

涙ながらに云う筆者。

Kは、流石に同情し。

K：「後で、俺がメール入れとくよ。“生みの親を虐めるな”ってな」

筆：「たずかりまず・・・。　マジで、時々コワイッスよ・・」

南房総に向う特急【〇潮】に乗り込んだ二人は、年末の混雑の中で指定席に坐った。　帰省ラッシュの最中だ。　様々な客が乗り込んで満席の中で並ぶ二人。

ウーロン茶のペットボトルを片手に、Kが。

K：「そういえば、何だが映画幾つか観て思いついた大作が在るとか云ってなかったか？」

吐いた直後に駅弁2個を買い込んだアホ・・・いや、筆者は。

筆：「モグモグ・・・はい・・。　年末年始と、掲載1周年記念で2部構成でやろうかと・・。　予定では、あくまでも予定ですが。企画しています」

K：「ほ～。　なんか、デッカイ事件に成りそうだな。　ま、今までも十分にデカイが・・・」

と、口で言いつつも。

K：（おいおい、今さっき吐いて、もう喰うのかい？　どんな胃袋してんだよ・・・）

筆：「Kさんのお話は・・モグモグ・・、もう一杯出来てます・・モグモグ。　ただ、幾つか資料を作って、有る程度は話として完成度を上げてからの掲載に成るので。　間は、ポリアさんやウィリアムさん達のお話になるかと」

K：「あんまり忙しくしなくていいぞ。　アンタ、まだまだ売れな

い素浪人なんだ。　ゆっくりやってくれ」

筆：「あい」

さて、○原駅までの1時間前後。　筆者とKは他愛ない話をする。
筆者が降りる○原駅にて、何故かKも降りた。

筆：「アレ、ケイさんも降りるんですか?」

K：「おう。　少し本屋に行きたくて」

筆：「案内しますよ。　バスまで時間有るし」

K：「助かる。　じゃ～、その前に銀行行ってカネ降ろすか」

筆者は、ギョッとした眼でKを振り返って見て。

筆：「あ・・・、ぎ・銀行・・・行くんですか?　コ・・ココ・・
コンビニでも・・・」

Kは、何の気も無い素振りで発車する特急を見送りながら。

K：「いや。　昨日作ったカードの事で、少し話も有るんだ。　だから、銀行に行く」

筆者は、震える。　包帯を巻いたKが、銀行に入ったら・・・何と勘違いされるだろうか・・。

筆：「あああ・・・案内し・しします・・。　そっ、外で・・まっ待ってます・・」

Kは、筆者の単細胞な脳ミソを察すると。　ニヤリと笑って、筆者の肩に腕を回す。

K：「おいおい、連れないお話じゃ～ないか。　俺が強盗に見間違われるかどうか、オーディエンスが必要だろ?」

筆：「ヒィっ!!!!　今まで世間にご迷惑を掛けたのは、この存在だけですぅっ。　どうか・・どうか・・警察沙汰だけはご勘弁をぉぉ・・・」

Kにズルズルと引き摺られる筆者は、銀行の中で人生の終焉を垣間見た気がした・・・。

超不定期特別で奇跡な座談会？（ウソです）（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

　このお話に続きがあるかどうかは、筆者の気分とノリのみが左右していますので。　適当に書き進んだら、考えます＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

third episode

冒険者探偵ウィリアム　3部

（スっ・スティールさぁ～ん）

ロイムは、住宅街の中に囲まれた林の公園の木の陰に隠れて居た。
視界の中では、スティールが大きな屋敷の周囲を一回りしようと歩いている。

ロイムがスティールと尾行した男は、大きな屋敷が高い塀に囲まれて犇く屋敷群の中の一角に在る邸宅に消えて行った。

今、夕日に変わる日差しがロイムの頭上に木漏れ日の様に暗く差し込んでいる。　屋敷群を区画に切る道は、馬車ばかりの往来で人の歩く姿は中々見掛けない。　時々、買い物帰りのメイドや、散歩をする身形の良い紳士が従者と通るが。　明らかにスティールはその者達とは異質な存在だ。

だが、スティールはのんびりとした雰囲気で屋敷の周りを回って、ロイムの居る公園を大回りしてこっそりと公園の敷地内に戻って来た。

スティールは、真顔でロイムの脇に来ると。

「ロイム。　お前、一人で戻れるか？」

「え〝っ？！」

「アークやウィリアムに知らせないといけね～べさ。　俺は、此処で動きを見張る。　お前は、戻ってアークに知らせろ。　夜にはウィリアムも戻るだろうから、それまで見張ってる」

ロイムは、スティールが何時ものふざけた様子では無いのに頷くしか無かった。

「う・うん・・・」

スティールは、木の陰から屋敷を見て。

「あの屋敷、外から見ても高い木に囲まれて中が解らねぇ。　ちぃ～っと気味悪いぜ」

怯える様子のロイムは、杖を握って。

「気を・・・付けてよぉ・・・」

スティールは、横目に心配するロイムを見ると。

「女以外に言われたたか無いセリフだな」

と、薄く笑った。

・・・・。

この頃、港では荷物を抑えたウィリアムとエレンが、ヴィオレ等船員が見守る中で木箱を開けて見た。　エレンは、店に並ぶのに輸入のリストに名前の記載が全く無いワインが木屑を乾燥させた中に埋められているのを見て密輸の実態を確信した。　木箱に詰められたワインはどれも高級な銘柄で在るにも関わらず、輸入記載の無い物ばかりだ。

夕日に染まるウィリアムは、その一本を手に取り。

「コレはまさか・・・、出荷前のワインですか？」

と、ワインの瓶を睨む。

ヴィオレは、ウィリアムに近寄り。

「どうゆう意味だ？」

ウィリアムは、ワインボトルを備に観察しながら。

「ワインとは、そのワイン工房で作られるプライドその物なんです。　出荷する時は、生産者が自分の顔とも云うべき焼印を押したラベルを貼ったり、自分の家の紋章をラベルに書き込みます。　ですが、このワインにはその“顔”が無い・・・。　生産者の手の内の誰かが秘密裏に横流しした物か・・・。　あるいは、盗品の可能性が有りますね」

仕入れ方も違法なら、仕入れた物も正規の商品では無いと云う。

エレンもヴィオレも、顔が強張ってそれ以上の声が出なかった。

ウィリアムは、次々と木箱を開いて中を検める。　内戦で全ての国と国交を保てず断絶状態の国から、赤い岩塩やら民芸工芸品が横流しで渡って来たと思われる品ばかり。　そして、中には輸入には特別な許可の必要な魔法道具なども・・・。

「取引先が解らない品ばかりですね・・・。　この店にも陳列されない品々は、何処に行くはずだったのか・・・、大掛かりな捜査が必要ですよ。　この品々の嫁ぎ先を探すのにはね」

其処に。

「おいコラっ！！！」

いきなり、細い声で男の奇声の様な声が上がる。　一同、声の方に振り返ると、ガリガリに痩せたタレ眼で背の低い初老染みた男が、黒いマントに身を包む何者か二人を引き連れて向って来ていた。

ヴィオレが、その男に向って。

「ラザロ。　何しに戻って来た？」

エレンは、初めて見る“ラザロ”と云う男に驚いた。　本当に、見た事も無い不気味な背むし男だ。

ラザロと云う男は、ウィリアムの前で開かれた木箱を見るなり。血相を変えて。

「ヴィオレっ！！！　貴様ぁっ！！　旦那が言った掟を忘れたかっ？！！！」

すると、ヴィオレはエレンの前に立ち。

「生憎だな。　ダレイの旦那は死んだ。　今は、このエレンお嬢様が全ての相続人だ」

と、言う。

エレンも、ヴィオレに。

「彼方が・・、ラザロさんですか？」

と、背の曲がった小男を見る。

ラザロは、ヴィオレとエレンを睨み見て。

「フザケルなっ。　旦那が死んでも使命は変わらない。　さあっ、其処を退いて木箱を渡せっ！！！」

エレンは、グッと拳を握り。

「密輸をしていたのは知ってるんですかっ？！！　もう直ぐ、役人さんがいらっしゃいます。　それまで、この荷物は渡しませんよ」

エレンの話に、ラザロはギロギロと動く眼をエレンに向けて。

「フンっ。　密輸？　何の事だ？　私は、ダレイの旦那と契約して仕事を一緒にしていただけだ。　密輸など事実は何処にも無いっ。　ゴミの娘が、ダレイの旦那が死んだからって粋がるなっ！！！！！　さあ、積荷を渡して貰うぞっ」

小男の後ろに居る二人の男が、マントの前面を開いた。　片方は皮の鎧に、長剣を差していて。　もう一方の人物は、片手の手斧と鉈を改良したマチェットアクスと云う武器を左右の腰にぶら下げている。

武器を見た船員やエレンに緊張の同様が広がる中で、ヴィオレは堂々として腕組みし。

「ラザロ、力ずくでも持って行くのには意味があるのか？　もう、役人には手配済みだ。　問題を起こせば、お前はお尋ねだぞ」

すると、ラザロと云う小男はニヤニヤ笑い。

「俺の荷物を取り返すだけだっ、何のいわれが有ろう事かよ。　高々下級の使いッ走りの役人にビビる俺じゃねぇ」

エレンも、ヴィオレも、船員達も、一気に膨張する緊張で無言に。

其処に、ウィリアムが音も無くエレンの前に進み出た。

「“高々下級・・・”ですか。　一度でも外に出たら、誰であろうと許可証明の証が無いと商業用港には入れないハズ。　なのに、彼方方は入って来た・・・、入り口の役人さんとは随分と仲が宜しいようですね」

ラザロは、穏やかに言うウィリアムを睨み。

「テメエ、何だ？」

だが、ウィリアムはラザロの後ろ少し離れた先に馬車が停まってい

るのを見て。

（積み込んで逃げる気ですか。　そう上手く行きますかね）

と、周囲を把握しながら。　ラザロに視線を動かして、

「残念ながら、もう密輸の事実は押収された輸入品のリストや決算の報告書などで役人も知り。　内々に捜査して動いています。　今日来るのは下級でも、明日や明後日以降はもっと上の役人が調べます。　その人達を納得させるだけの権力を御持ちとか？」

すると、ラザロはウィリアムを睨む眼を鋭くして。

「おまえぇ・・・、無駄話をして時間を稼ぐ気かぁっ？！！」

ウィリアムは、ヴィオレの前に出ると涼しい顔をして。

「いえ。　此処に入るのに役人さんの免除が効くなら、何処でも効くのかと興味が湧いただけですよ。　それに、積荷が疚しくない物なら、役人の取調べを受けて晴れてご自分の物に為さった方が懸命だと思いますが・・・、如何です？」

ラザロは、ウィリアムが役人が来るまで時間稼ぎをする事に徹しているのに業を煮やした。

「こぉのクソ野郎がぁぁっ！！！！！　構わなねぇっ！！！　殺してでも奪えっ！！！！！」

声が湧き上がった。

ーーー

「ええっ、密輸品が２０箱もをぉ？」

量と品を見たミレーヌは、困った顔で。

「あの店と別店に置いてある疑わしい品って、ほんの一握りじゃない。　残りの流された店を探すの大変だわ～」

ミレーヌが港に来たのを聞いて、港を巡回警備する別の役人組織の巡回班も来た。　捜査は、基本は管轄外でも管轄を跨ぐ場合でも事件の出元を捜査する役人に一括捜査権が与えられている。　ミレーヌは、手際よく来た役人達に指揮を出し。　ウィリアム・エレン・ヴィオレを事情聴取で連れて行く事にし。　船と現場保存を巡回役人に任せ。　ラザロが積荷を持ち去るのに使う予定だった荷馬車に疑わしい積荷を載せて一緒に押収するとした。

さて、ケウトに命令を預かった二人のコルレオとチャンドも一緒に連れて行くとエレンはミレーヌに言って。　連行されるラザロと雇われた冒険者の二人は荷馬車で運ばれる事に。

港を離れた馬車が、斜めの坂道をゆっくりと走っている。

ミレーヌの馬車は、座席が車内で前の向かい合う二席と。　大人数乗せられるシートの席と分かれていた。　その個別の向かい合う席とシートも壁で隔てられる。　後ろの黒いシートに坐るのはエレン他、皆。　だが、ミレーヌとウィリアムは個別の向かい合ったシートに座っている。　覗き小窓は付いているから、エレンや皆はウィリアムとミレーヌを見る事は出来る。　だが、走る馬車の音と、二人が声のトーンを落として話するので、何を会話しているのかは聞き取りずらく。　見ているのみしか出来なかった。

馬車専用の通りが、折り重なる生地の様になってなだらかな坂道を作る。　荷馬車は水路を使うが、人用の馬車は、東側の迂回の道に回るかしかない。　必要最低限の窓しか付けない馬車の中は薄暗く。

ミレーヌは、ウィリアムの顔が影差している様に見えている。

「ふうん。　エレンって娘を助ける気なのね。　その、ケウトって云う人のお願い聞いた訳だぁ」

ミレーヌは、少し釈然としていない言い方でウィリアムを見る。

ウィリアムが、エレンを少しでも救済しようとしているのが、腑に落ちないらしい。　ケウトの昔話を聞いて、ミレーヌとてエレンをどん底まで落す気には成らないが。　ウィリアムがそんなに生っぽい人間に見えなかったのだ。

床を見下すウィリアムは、足を組んで揺れる馬車に揺らされながら。

「俺は、必要な罪と罰は分けたいだけです。　全ての大元の元凶であるダレイ氏は死んだんです。　裁かれるべき人が裁かれ、苦しんだ人には最低限の救済は有って然るべきかと・・・」

ミレーヌは、薄く微笑んで。

「いっが～い」

「何とでも・・・。　ですが、問題はこれからですよ。　一気に、犯人の可能性である人が増えた」

ウィリアムも、ミレーヌから調査の報告を聞いて、一応は家族を含めた全員を疑う事にするミレーヌには賛同する表現をとった。

「ホ～ント、大変だわ。　・・あ、それから。　あのダレイってオジイチャン、生まれっからの悪人かもよ」

ウィリアムは、ケウトもダレイの過去に暗い部分が在ると云っていただけに。

「ほう、生まれながらの悪人ですか」

ミレーヌは、調査で聞けた話に随分と古い話が幾つか有った。　話してくれたのは、ダレイの元々家が有った旧商店街の年寄りだそうな。

ダレイの親であるサムハイトと云う人物は、素晴らしく人間の錬れた人物だったらしい。　生涯妻は一人だったし、恵まれない孤児を養う事もしていたそうだ。　だが、一つ問題が有ったのが。　子供が出来なかった事だ。　其処で、自分の弟で大きな商人の執事として働く男性の子供を引き取った。　それが、ダレイなのだ。

「良くある話ですね」

ウィリアムは、素っ気の無い返事一つを返す。

だが、本題は此処からだ。

さて、このダレイをサムハイトは溺愛した。　２・３歳で連れて来られたから、可愛い盛りで当然かもしれない。　しかし。　この直後に何とサムハイトの奥さんが身篭る。　結婚から１８年も経った頃だとか。　だが、サムハイトは、家を継ぐのはどっちでも無く。　相応しい方だと子供を差別はしなかった。　そして、生まれたのは女の子。　成長と共に、同じ教育を施しても差は歴然と見え始め

る。　我儘で、我欲の強いダレイは迷惑ばかり掛け。　しかも、親には甘えるばかり。　ダレイが２０歳を迎える頃、サムハイトと奥さんは実の娘に家督を継がそうと相談し合っていた。

ウィリアムは、此処で。

「なのに、ダレイ氏が跡を・・・。　そう言えば、その従兄妹でもある兄妹の方のお話は聞きませんね。　もう、他界されてるとか？」

ウィリアムが素直に聞けば、ミレーヌは嬉しそうに笑って。

「せぇ～かぁ～い」

ウィリアムは、此処で顔を引き締めて。

「話の流れから云って・・・不自然ですね。　何か有りましたか？」

ミレーヌは、少し間を置くようにして身を正す。

ウィリアムは、ミレーヌの話を待つ間も無く。

「なるほど。　その娘さんの死についても、疑問が生じていた訳ですか・・・」

「解る？」

「まあ、流れと雰囲気で・・・」

「でも、死んだのは娘さんだけじゃ無いのよ。　サムハイト一家丸ごと」

ウィリアムの視線と、ミレーヌの視線が抱き合った。

サムハイト一家は、ダレイ抜きで友人の晩餐会に呼ばれていた。
馬車で参加した帰り、急に馬が暴れて車体が横転。　馬と繋がれた馬車の留め金が外れて、馬車の車体は運悪く段々の街並みを一つ丸々転げ落ちた。　夜も晩い時間帯だったが、通行人を2人巻き添えにして、飲食店の入り口に突っ込んで壊した。

ウィリアムは、もう何度か段々の街並みを上り下りしている。　一つの段の差だけで、階段にして7・80段は有る。　それを勢い良く転げ回って建物にぶつかったら・・・。　先ず、運が無ければ即死だろう。

「ミレーヌさん。　その当時は事件としての調べはしたんですか？」

「それが。　当時、ダレイのオジイチャンが証言してたの。　事故を起こした馬車は老朽化が激しくて、近々修理に出すって・・・。
当時の捜査は、自己過失の事故で処理。　事件に成ってないわ。
只、壊れた馬車の生産者は、もう修理したって主張してたみたいね。　なのに、突然一家でこの街を離れてる。　忽然と消えたって感じだったみたいよ」

ウィリアムは、何度も頷いて

「臭いますね」

と、呟く。

ミレーヌは、鼻を摘んで態と鼻声で。

「クサイクサイよ～」

ウィリアムは、一つ間を空け。　ミレーヌと見つめ合って。

「・・、ねえミレーヌさん。　女性として、意見をお聞かせ願えませんか？」

「え？　じょ・・・女性って・・・」

ミレーヌは、在らぬ期待を急激に膨らませて流し目を向ける。

だが、ウィリアムは少し思惑ぶりな視線を向けながら。

「ミレーヌさん。　もし、恋をしたとして、一番普段で変わるとしたらどの変ですか？」

「え？　恋？」

「ええ・・」

「それは・・・、まぁ～服とか髪型と・・・じゃない？　少しでも綺麗に見られたいって思いは働くと思うケド・・。　ねぇ、それって・・・誘ってる？」

ミレーヌは、艶やかな眼をウィリアムに向ける。

だが、ウィリアムは黙って何かを考えるのみ。

（ガク・・・）

ミレーヌは、何かを期待した自分が情けなく思えた。

ーーー

物も残してるし、今夜一杯宿を開けるのも悪い。　ロイムとクローリアは、宿に戻ってウィリアムを待っててていい。　俺はスティールに会って、どうするか聞いて来る」

こうして二手に別れる事に。

日が暮れて、夜が訪れた頃。　アクトルはスティールが潜む公園の森に着いた。　街の道には街灯が整備されている同様、住宅街でも金持ちが多そうな邸宅が並ぶ辺りも、曲がり角にキチンとした街灯が整備されている。

アクトルは心得たもので、公園に回り込む様にして侵入した。　ロイムから聞いた館の外観を確かめてから、周りを確かめて。

林に入ると、闇の中から。

「誰だ？」

と、スティールの低い声。

「俺だ」

「何だ、アークか」

スティールは、ベンチや草花が花壇を広げる近くの太い木の陰から姿を見せる。

アクトルは、スティールに寄って。

「どうだ？」

スティールも、木の隙間から見える屋敷を見て。

「変わり無い。　白い外観の、５階建てした塀や庭木の高い館・・・、そんだけ。　尾行した男も出て来やしねえ」

アクトルは、明かりが点いた部屋も有るその屋敷をを見て。

「なるほど・・。　お前、どうする？　このまま見張るのか？」

スティールは、アクトルに視線を投げると。

「野郎が只の雇われか、それとも主従持ちなのか。　少し見張ってもいいと思うぜ。　もし、明日もあの店に出掛けたら、それこそ何かあるしな」

アクトルも、屋敷を見て。

「まぁ・・・、かもな」

「あ、そういやぁ・・」

屋敷を囲む塀に、切り抜かれた空いた口の様な鉄格子の門が填まる入り口をスティールは見て。

「さっき、馬車が入って行った・・・。　外見から解るぐれぇに金の掛かってそうな馬車だったぜ」

アクトルも、現場の店の前に停まったあのストライプ模様のスーツを着た男が乗っていた馬車を思い出して。

「あぁ、俺もだ。　現場の店の前に、エレンって言ったか？　死んだ爺さんの孫の娘。　あの婚約者らしき男が乗って来た馬車が、ちょいと変わった馬車だった」

「ふ～ん」

何の気なしにスティールは受ける返事をする。

アクトルが、変わった馬車の色を云えば、

「へ～」

アクトルが、馬車の色や馬の見事さを云えば。

「ほぉん」

と、スティールは見張りながらの生返事をした後で・・・。

（ん？）

アクトルの云う馬車と、自分の見た馬車が同じ様な気がしたスティールは、ハッと気付く。

「あ・・・、同じだ」

アクトルが。

「ん？　どうした？」

と、聞くと。

「アーク、俺が見た馬車とアークの見た馬車は同じ気がするぞ」

「あ゛？　何だと？」

声を押し殺して驚くアクトル。

だがスティールは、確信めいた頷きで。

「馬も、馬車の感じも一緒だゼ。　しかも、俺が尾行してきた野郎が中に入ったこの屋敷だ。　もしかすると、あのジサマの死んだ一件と関係有るんじゃないか？」

アクトルは、いきなりの話の展開に。

「いや、それは解らないだろう？」

スティールは、顔を本気にして。

「とにかく、ウィリアムだ。　アイツが居れば、何とか成る。　アーク、宿で待ってウィリアムが帰ったら此処を教えろよ。　アイツが来れば、何かが解る。　きっと、何かが解る」

アクトルは、スティールがいきなり本気に為ったのを見て。

「お前・・・凄いヤル気有るな」

スティールは、俄然ヤル気を見せて館を見張りながら。

「アイツは、事件を解決できる。　見たいんだ、アイツが活躍するのを・・・。　俺等には無い、何かをアイツは持ってる」

アクトルは、スティールが此処まで本気に為るのを始めて見た。

「お前・・・」

スティールは、見張りをしながら。　周りにも気を遣って小声ながら。

「田舎を出て、俺達何年だよ。　アークも俺も、騙されたり、爪弾きにされたり、有名な奴等がデケぇ顔してさ。　俺達下の冒険者なんざ羽ばたき方すら知らねぇ・・・。　毎日、適当に仕事探して、命張って・・・夜の酒代に預かる・・・。　モンスターと戦ったって、人を助けたって、仕事と割り切られる」

「スティール・・・」

アクトルは、ウィリアムに出会う前までの自分達を思い出した。

二人して腕っ節は有るが、チームに恵まれた訳じゃない。　時には、アクトルの斧を奪われそうに成った事も在るし。　時には、報酬を巡って諍いを起こした事も一度や二度では無い。　報酬を持ち逃げされた事だってある。　金が無く、街で野宿した事など数え切れない。

スティールは、真剣な顔だった。

「だが、アイツは仕事を仕事で終わらせない。　俺達が出来ない事まで踏み込める。　俺達が頭数揃えて仕事やっても踏み込めない所に、アイツは踏み込める。　俺達が、本気で思いっきり仕事しただ

け、アイツは評価を付けれる。　良くも悪くもな。　アイツの活躍を支えられるなら、俺は命賭けれるさ。　今までと違うんだ。　アイツと会う前の、斡旋所で只屯する頃とは違うんだ」

アクトルは、スティールが驚く程に変わったと思う。　自分以上に冷めて、適当に為って居ると思ってたのに。　スティールが女以外で熱くなるのを、何年振りかで見た様な気がする。　いや、本来のスティールは、若い青年の頃のスティールは今の様に熱い男だった。

（本気か・・・。　ウィリアムと二人で、アハメイルの街で何が有ったかは知らないが・・・、昔のコイツが戻った訳だ。　・・・、久しぶりだな、こんなコイツは）

アクトルは、そう思って。

「だな。　んじゃ～ウィリアムを待つわ」

「おう」

スティールが、言う。

その時、馬車の音が響いて来た。

「・・・」

二人息を殺して茂みに屈む。　だが、アクトルは街灯で馬車の側面を見ると、見た事の有る紋章が見えた。

「おいおい・・・、この馬車は・・・」

驚くアクトル。

スティールは、角を曲がって見張っている館の前の道に入る馬車とアクトルを交互に見ながら。

「どした？　アーク？」

「いや・・、ホラ・・。　ミレーヌって云う女役人が乗ってた馬車とそっくりだ」

「あ゛？　マジで？」

二人が見ている中で、馬車は見張る屋敷の前を通過し。　隣の屋敷に入って行った。　低いレンガ塀で囲まれた、黒い外観の落ち着いた屋敷だ。

「アーク、行ってみんべ」

「行くのか？」

アクトルは、もし違ってたらと思って困る。

だが、スティールは立ち上がって馬車の方に木を盾にしながら向かい始めたのである。

（おいおい、ウィリアム無しでど～するんだよ）

困る顔のアクトルは、馬車がもしミレーヌの物だったとしても、面倒な事になりそうだと思って動きが鈍る思いに駆られた。

third episode（後書き）

次話予告

アクトルの云う通り。　馬車はミレーヌ物であり。　馬車には、ウィリアムとエレン達が乗っていた。　スティールとアクトルの報告を受けたウィリアムは、ミレーヌに隣の家の人物を尋ねる。

次号終日後掲載予定

どうも、騎龍です＾＾

本日は、特別編とあわせて2本立てで掲載いたします＾＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

アクトルとスティールは、夜の入りの闇に紛れつつも馬車の後を追って屋敷の建つ敷地へと踏み込んだ。　レンガの塀の内側には、剪定された木々が等間隔に植わっていた。　馬車を追うと、館の脇に隣接された馬小屋と納屋に馬車が停められ、御者の男が明かりの漏れる窓の前で何者かと話して居る。

「明日は、何時もの時間より少し遅くで宜しいですか？」

すると、張りのある大人びた女性の声で。

「ええ、お願い。　今日はお客も多いから、そうして」

スティールは、馬車の裏手に来て。

（間違い無い。　ミレーヌの声だ）

と、確信した。　だから、自分から声を出す。

「チョットいいか？」

突然の声に、御者と話していたミレーヌは驚いて。

「誰っ？！」

と。

だが、直ぐに。

「スティールさん・・・、ですか？」

と、ウィリアムの声が。

アクトルは、それに驚いて。

「あ？　ウィリアム、お前も居るのか？」

警戒する素振りの御者の前に出たアクトルとスティールの目の前に、ウィリアムとミレーヌが進み出た。

スティールが、ウィリアムを指差し。

「オマっ・・何で居るんだよ」

と、驚けば。

ミレーヌは、スティールに腕組みして。

「彼方こそ何で私の屋敷に居る訳？」

と、少し警戒を覗かせる。

だが、ウィリアムはミレーヌの前に出て。

「お二人が居る・・・、何か有りましたか？」

スティールは、ハッと事実を思い出し。

「おう。　大有りだ」

ウィリアムは、ミレーヌに向くと。

「一緒に中で話しましょう。　とにかく、外は」

ミレーヌは、邪魔が来たと思いながら。

「いいわよぉ～。　２人も４人も変わらないし～」

その後ろから、エレンが。

「あの・・・、どうかしましたか？」

と、姿を見せる。

アクトルは、役者が揃い出したのを見て。

（あ～あ、ロイムとクローリアも連れて来れば良かったか・・・）

と、後悔をした。

ミレーヌの屋敷は、中がベージュの壁をした明るい中だった。　扉

を潜って中に入れば、広いロビーを照らすシャンデリアの明かりが降り注ぎ。　二階へ上がる階段が腕を抱くように包むロビーの待合場には、初夏で使われずに休められた暖炉とソファーが見える。部屋の四隅を見せない心遣いの鉢植えは、花の咲く品種改良された低い木々だった。

「只今、戻ったわ」

ミレーヌが、出迎える初老の男性に一言。

白髪の頭、柔らかいカーブの眼鏡、織り目正しい黒の礼服、赤い蝶ネクタイ。　ミレーヌの家の執事は、見て解る物腰柔らかそうな男性だった。

「御帰りなさいませ、ミレーヌ様。　おやおや、今日はお客様がお在りで？」

ウィリアム・アクトル・スティール・エレン、そしてチャンドとコルレオを含めた6人の客を招き入れたミレーヌは、

「爺、今日は多めに食事を頼むわ。　少し込み入った話もしたくて、連れて来たの」

執事の男性は、微笑を返して。

「それはそれは、畏まりました」

と、頭を下げる。

ウィリアムが、

「不躾に訪問して済みません。　用が済み次第に我々は帰りますので、どうかお気遣いは」

すると、執事の男性はウィリアムを見て。

「これは、ご丁寧に。　主が持て成せと云う皆様です。　直ぐにお帰りとは御寂しい。　今宵は、此処にお泊り下さいませ。　直ぐに、メイドにご用意をさせます」

ウィリアムは、執事の男性が出来た人物だと思ったので、それ以上の言葉を出さなかった。

準備には、時間が掛かる。

ミレーヌは、先に話が在るならとロビーのソファーに皆を座らせた。

腕組みで、一人用のソファーに座ったミレーヌ。　チャンドとコルレオを共にソファーに腰掛けたエレン。　その皆の前で、立ちながら近寄ったウィリアム達が、報告をし合う。

スティールは、違法な積荷を抑えたと聞いて。

「仕事速いなぁ～。　もうかよ」

ウィリアムは、エレンを見てから。

「悲しむ間を与えないようにしたまでです。　ま、持ち出される前に荷物を抑えるのは、密輸捜査の基本ですし」

アクトルは、スティールが全て語ると思ったのか。　何も云わなかった。

さて、スティールが話しを切り出す。

聞いていたミレーヌが、エレンを見て。

「え〝っ?!!　貴女の婚約者って、隣のローウェルなの?　あら〜・・・ま〜・・・悪趣味・・・」

と、呆れた顔をする。

エレンは、恋愛の要素は微塵も無いとばかりに。

「祖父が決めた事です・・」

と、俯く。

ウィリアムは、ミレーヌがローウェルと云う人物に面識が有りそうな感じを受けて。

「ミレーヌさん、ローウェルと云う人物は・・お知り合いで?」

すると、ミレーヌは口を尖らせて。

「知りたくも無い知り合いよっ。　数年前に引っ越してきて、いきなり私に求婚してきた変態だわ。　お金に意地汚く、権力を傘に着るし、自分以外で美人の女以外はゴミみたいに思ってるサイテーよ」

頷くウィリアムは、直ぐに。

「ミレーヌさん、エレンさんの家を見張って居た男がそのローウェルと云う人の家に行ったのは、偶然では無いかもしれませんよ」

ミレーヌは、何処か嫌々とした雰囲気で。

「多分、お金に見えてるエレンが目当てじゃないの？　事件の裁判前にローウェルがエレンと結婚すれば、家財から全てローウェルの物に成るわ。　見す見す没収される商業力と財産を放って置く様な男じゃ無いわ」

と、同情の念を込めてエレンを見る。

「・・・」

エレンも俯いて黙る。　ミレーヌの話が、正しいと思えた。

だが、ウィリアムは。

「でしたら、エレンさんや家族や誰よりもダレイ氏が死んで利益を得る人は、ローウェルと云う人じゃ有りませんか。　一番疑わしい人物ですよ」

エレンとミレーヌは、ハッとしてお互いで見合った。

ウィリアムは、エレンからダレイ氏がローウェルを利用しようと画策しているのを聞いて、その逆手を取った行動も有りうると指摘。

その上で。

「ミレーヌさん、幾つかお願いが有ります。　犯人を動かしましょ

う。　動けば、影も見えますし、ボロも出ます」

ミレーヌは、エレンやチャンドなどと共にウィリアムを見ながら。

「どうやって？　誰が犯人かも解らないのに・・」

すると、ウィリアムはソファーに座ってミレーヌに。

「先ず、ローウェルと云う人の屋敷を見張りましょう。　そして、エレンさんを偽って逮捕して下さい」

ミレーヌも、エレンとその脇のチャンドとコルレオも、ウィリアムに驚いた顔を向ける。　ミレーヌは、話が今一解らない。

「な・・何で？」

ウィリアムは、エレンを見ながら。

「今、時間が必要です。　不正な積荷と、あのラザロと云う人物の洗い出し。　そして、毒の出所の捜索や、犯人の捜索・・・。　ダレイ氏が何時殺されてもおかしくなかったのに、今に成って殺されたのには、最近でダレイ氏を殺さなければ成らない事情が出来た誰か・・・。　全てを踏まえると、一番身の危険な人はエレンさん」

一同の視線が、エレンに動く。

「あ・・・わっ・私・・・」

どうしていいか解らないエレンは、ウィリアムを見つめ返して混乱して居る様子。

ウィリアムは、そのままに続け。

「エレンさんを含め、今は疑わしき者ばかりが多くて、犯人を割り出せない。　なら、一番犯人に近い浴槽に入ったエレンさんを逮捕して、周りの反応を見てみるのが一番ですよ。　恐らく、ローウェルと云う人物がエレンさんの家に見張りを送り、自身でも行ってるのはエレンさんの身柄の確保・・・、もしくは、結婚の早期決着。　ダレイ氏の密輸の不正が何れはバレても、結婚してエレンさんの家の財産と商業力だけは早期に吸収したいハズ。　家にエレンさんを置いておくのは、マズイです」

スティールが、ウィリアムの背後に寄って。

「意味が解らないぞ。　どうゆう事だ？」

ウィリアムは、馬車の中でミレーヌに商業法の穴を聞いて有る一つの仮定した筋書きが出来たので、それを話した。

婚約までしているローウェルが、このまま居れば結婚前に不正の事が公になればエレンの財産から商業の全てが国に押さえられる。　しかし、有耶無耶の内に結婚して吸収してしまえば、不正に関わったのはダレイやあのラザロと云う男だが。　結婚して財産の名義が変わってしまい、人以外は罪に問えなく為る。　つまり、エレンと結婚して不正に関わる品を全て国に提出してしまえば、残った財産や店や商業力は全てエレンの夫に成るローウェルの物と為る。

ミレーヌは、それは大いに可能性は在ると。

「確かに、上手く行けば・・・そうなるかもね」

スティールは、ミレーヌに膝を寄って。

「でもよ。　エレンと結婚する以上、エレンが犯人だったり、不正に関わってたら意味無いぜ？」

ミレーヌは、ウィリアムの筋書きを読み切った。　気付いたのだ。

スティールを無視して、ミレーヌはウィリアムに。

「まさか・・、最終的には彼女を殺す気？」

と、エレンを見る。

ウィリアムは、エレンを見据えて。

「エレンさんの価値は、結婚して財産を自分の元に運ぶ処まで。誰にせよ、もしダレイ氏の財産の全てを欲したとしての殺人なら、一番必要なのがエレンさんか、ルイスさん。　用が済んだら、一番必要の無いのもこの二人・・。　目下、その事実が現実として迫るのはエレンさんです。　ローウェルと云う人物が一癖も二癖もある人物なら、尚更警戒しないと。　見す見すエレンさんを持って行かれては、困ります」

コレルオが、ウィリアムに困惑した顔で。

「飛躍のし過ぎではないか？」

チャンドも、今一理解出来ないと。

「そうだ。　第一、エレンさんをどうやって説得する？　結婚は、

正式に挙げなければ為らない。　人前で挙げるなら、エレンさんを同意させる必要が有るぞ？」

ウィリアムは、薄く笑って。

「そんな事・・、簡単ですよ」

スティールは、ウィリアムの横に座って。

「どうする？」

ウィリアムは、エレンを見据えて呆れた微笑を浮かべて。

「エレンさんは、ダレイ氏とは正反対ですからね。　例えば・・・」

“俺は不正を知っている。　もし、不正をバラせば、雇われた人は全て路頭に迷うし。　君の家に暮らす家族の様な皆全てが一文無しで棄てられる。　俺と結婚すれば、店は今まで通り。　君の家に居る全員も、私が面倒見よう・・”

「・・・、なんて如何です？」

その場の全員が、ヒシャリと黙った。

ウィリアムは、一人納得の頷きを見せる。

「多分、エレンさんが捕まったとしたら、犯人は直ぐに焦り出しますよ」

アクトルは、立ち尽くしたままに。

「何で、そう言い切れる？」

ウィリアムは、今にして思い。

「これは、自分の想像ですがね。　もし、犯人がダレイ氏の財産が目当てだとしたら。　エレンさんにも、港にも、彼方此方に見張りを着けるでしょう。　もし、積荷が抑えられたと知ったら、何よりもエレンさんを欲しがります。　全てを受け継いでいるエレンさんですからね。　早くエレンさんを確保して、不正が表立つ前に相続をしたいと思うハズ。　ですが、今エレンさんは此処に居て、表向きは役人と一緒に施設に居ると思われている。　エレンさんが開放されないなら、されないだけ犯人は焦ります。　なにより、エレンさんは様々な許可の証の書類を持って来て居ますから。　エレンさん抜きでは、どうしようもありませんよ」

ウィリアムは、確信が有った様だ。　丸で、それが当たり前の様に言う。

ミレーヌは、まだ決め付けるのは早過ぎると思って。

「財産目当てとは限らないわ。　純粋に、オジイチャンを殺したかったのかも知れない」

だが、ウィリアムは。

「あんな希少な毒を使う以上、それなら犯人は事件との関わりを抹消するか。　逃げるか。　誰かに濡れ衣を着せるかのいずれかを取ります。　ですが、この街の薬を作れる人で事件に関わってる人は誰も居ない。　一人を除いてね」

スティールは、ウィリアムに詰め寄る。

「誰だ？」

ウィリアムは、エレンを見た。

「わ・・私・・ですか？」

見られて声を震わせたエレン。

ウィリアムは、足組みして上を向き。

「とにかく、ミレーヌさん。　ローウェル邸を見張る為に一室お貸し願えませんか？　エレンさんも暇でしょうから、一緒にローウェル氏の館を見張って貰いましょう。　仮定捜査で役人を堂々と動かすのも下手な策ですし、内々に出来る我々だけで見張りを。　その間に、ミレーヌさんは密輸の実態と、被害者の身辺の徹底捜査をして、時間を稼ぎましょう」

ミレーヌは、ウィリアムに何故この根拠が在るような言い方が出来るのか理解出来なかった。　確かに、ウィリアム自身がミレーヌに語らぬ部分も多く。　エレンの父親の死の前日の行動や、風呂場に感じてる違和感などを伏せているのも在るのだろうが。

しかし、ミレーヌと云う人物は女性でも肝が据わっている人物らしく。　細かく詮索せず、逆に微笑む。　そして、ウィリアムを見つめると。

「まぁ、信用は出来そうだし。　君と一つ屋根の下で過ごせるのも

悪く無いか・・・」

ウィリアムは、済ました顔を横に向けて。

「同じ部屋なんて泊まりませんよ。　見張る部屋で、十分ですからね」

ミレーヌは、ムウ～っとぶう垂れた顔に変わり。

「いい～じゃない。　捜査で協力し合ってるんだから～」

ウィリアムは、良くもま～こうもボジティブに誘えるものだと呆れ果て。

「冗談辞めて下さいよ。　仕事にミレーヌさんとのお遊びは含まれてませんよ」

「“お遊び”？　・・・酷い・・・乙女心を玩んで・・・踏み躙るのね」

ウィリアムをジト眼で見て、急に潮らしくなるミレーヌはハンカチを噛み始める。

「・・・」

流石のウィリアムも、“それはね～だろ?”と云う顔で首を左右に振る事しか出来ない。

其処に、スティールが止せばいいのに・・・。　ミレーヌにキザな顔で流し目を向け。

「姉さん、俺なら何時でも添い寝するゼ。　明日までででも、永遠に居ても構わない」

アクトルもウィリアムも、

（いい加減にしろよ・・・）

と、ソッポを向く。

直後。

“バキィィィっ！！！！”

骨に軋む様な音が響き。

「・・・あの・・・」

驚いてエレンがスティールに声を掛けたのは、スティールの顔にめり込んだミレーヌの拳が強烈過ぎた為だろう。

アクトルは、ウィリアムに寄って。

「俺達はど～する？」

「こっちに来て下さい。　明日からは、隣の屋敷を見張りましょう。他は、事件に直接関係有りますから。　ミレーヌさんに任せればいいと思います」

「ん。　じゃ～、呼んで来るよ」

アクトルは、ウィリアムの隣の義兄弟を見て。

「アホウ」

と、屋敷を出て行った。

ーーー

深い霧が立ち込める。

「エレン、少し安め。　長丁場なら、身体持たないぞ。　俺とアークで外から見張るから。　昼過ぎまでは休みな」

女に軽いスティールが、何時に無い真面目な顔で一睡もしなかったエレンに声を掛けて外に出て行く。

エレンは、深い霧で館の見張りが出来なくなったので。　仕方無いと、別室に用意された簡易ベットに入った。　チャンドとコルレオは、ソファーに寝る。

代わって、ロイムとクローリアが、執事の老人が差し入れた食事をしてから見張りに。

だが、ウィリアムは今日も別に行動する。　ミレーヌと共に役人の働く施設に移動すると、その行動は早かった。

先ず、事情聴取の為に一晩此処に泊まっていた船長のヴィオレに面会し。　手短に説明をしてエレンが捕まった事に腹を立てて居て欲しいと頼む。　そして、船員には、事が済むまでエレンとの様子を話す事を控えて欲しいとも。　船長のヴィオレが言うのが、船員の口を封じるのには一番イイ。

更に、ラザロの取り調べにミレーヌと向う。

灰色の石で囲まれた狭い部屋の中で、少し強引な取調べに対しても屈しないラザロは。　憔悴し始めた顔を悪魔の様に強情な表情に変えて、役人やミレーヌやウィリアムを睨む。

腕組みのミレーヌは、立っているウィリアムに近寄り。

（拷問でも吐きそうに無い顔をしてるわね）

頷くウィリアム。

（あのラザロって男、巷の裏では札付きの悪よ。　強盗、強請り、暴力事件、禁止品使用違法・・・、捕まった数だけでも両手の指以上・・・）

役人が丸一昼夜取り調べて手を焼くラザロは、勝ち誇る様に集まるミレーヌやウィリアムを見て。

「ヘンっ、次は拷問か？　苦痛でも何でもヤレっ！！！」

と、ニヤニヤとした顔で言い放つ。

「静かにしろっ！！！！」

一日取り調べて疲れた役人が、堪らずにラザロを殴りつけた。

ミレーヌは、配下の皆が疲れて居ると見て。

「ホラ、感情的に手を出しちゃだめよ」

と、皆を休ませて。　朝出て来た新しい役人と交替をさせる。

その中で。

「・・・」

にこやかに微笑むウィリアムが、ラザロの前に座った。　恐らく、スティールやアクトルなら、このウィリアムを見た時点で背筋に恐怖を覚えただろう。　無用に微笑する者では無いからだ。

役人が、半日責めて吐かせられなかったラザロ。　だが、ウィリアムは物の少しで吐かせる。　一応の見張りとして見ていたミレーヌが、その手口に驚き蒼褪めたほどだ。　殴る蹴るなどの暴力を振るう事もしないし、弱みや何かで脅す訳でもない。

ウィリアムに問い詰められて、ラザロは全てを喋った。

ラザロと死んだダレイの関係は、何と死んだエレンの父親のシェルハが海に浮んだ日に始まっていた。　ラザロは、その日の前日、人気の少ない酒場で飲み明かしていると。

“仕事をしないか？”

と、声を掛けられた。　声を掛けたのはダレイと屈強そうな大男。　この時はまだサレトンが雇われる前だから、恐らくは別の何者かだろう。

「何だ？　アンタ」

そう警戒したラザロのカウンター前に、ドンと金の入った袋が置かれた。　即金で５００シフォンの入った袋だった。　ダレイは、金はくれてやると言い。　更に、別途金で仕事を手伝うなら更に５００シフォン払うと。　ラザロは、いい金が出ると聞いて。

「いいゼ。　貰える物出るなら」

そのダレイの申し出を了承した。　そして、手伝わされたのは死体のシェルハを海に自殺の様に見せ掛ける事。　ラザロは、その仕事を請けた後。　死体を理由にダレイを強請る事も考えたが、ダレイは真逆にラザロを脅したのである。

「あのダンナは、俺が云うのも何だが頭おかしいゼ。　そんなに頭イイ訳じゃないがよ。　人を陥れたり、脅したり、悪い事だけは異常に賢い。　遣り方は汚い、弱みには相手が滅ぶまでつけこむ。金に異常な執着が有るのに、悪い事だけには金は惜しまない。　天才だ、ダレイのダンナってのは、悪魔の子供だよ」

と、ラザロ。

冷めた目のウィリアムは、ラザロに役人に全て話せといい置いてミレーヌと代わった。

ラザロの供述に由ると、ダレイは裏取引の顧客は自分で探したらしくラザロは詳しい経緯を知らないらしい。　だが、金を渡して現地でラザロに積荷を渡す商人達は、必ず用心棒の様な殺し屋風の男を一人二人連れて来るとの事で。　普通の商人を相手にした裏取引では無さそうな様子だ。　持ち込んだ商品は、定期的にダレイが開く裏取引の場で取引される事もあるのだが。　今の所は売り手が決まっていて、運んだ荷物はラザロが人気の無い倉庫で仕分けして届けているとの事。

「そう。　じゃ～、そのリストを作って貰うわよ」

ミレーヌが云えば、ぶっきら棒なラザロは。

「俺のヤサをガサればリストは出て来る。　どうせ、その日暮の生

活で、小屋みたいな場所だ」

ミレーヌは、直ちにラザロを連れてラザロの家のガサ入れに向う事にするのだが。

ラザロも喋ると為ったら道連れが欲しいのか。　ダレイが袖の下を回して買収した役人の事はペラペラと喋る。　出て来た名前は、ミレーヌとは別の警察役人の配下の者数名、商業の監督を行う庁の位も高い役人数名。　更に、不正に輸入を誤魔化したいが為に、嘘の申請でダレイに加担した商人など名前がボロボロと。　しかも、月一程度に面会する時、あの用心棒のサレトンなども同席していたと言う。

ミレーヌは、配下の役人を事務方まで動員して方々に手配を回した。　だが、いざ行こうとしたミレーヌに、話に上がった役人の身柄取り調べに対する不満が言伝で返って来た。

ウィリアムは、ラザロの住処のガサ入れは、自分が行くと申し出る。

ミレーヌは、自分が動かないと国の内部機関の捜査は出来ないと判断し。　ウィリアムに数名の役人を着けて行かせる事にして。　他の役人を細かく手分けさせてサレトンの身柄確保や、ラザロの話の裏取りなどに回す事にしたのである。

ーーー

ウィリアムとミレーヌは忙しく動き。　アクトルやスティール達はエレンと共にローウェル邸を見張る。　正直、ウィリアム以外の誰もが、ダレイの事件と不正の関連が何処まで有るのか解っていない。
　しかし、その一見バラバラのパーツの様な事件は、一つに纏まり出す。

その最初は、エレンに容疑が掛かったと伝えて、サレトンを確保した処から始まった。

エレンが身柄を押さえられたと聞いて、ルイスは気を失いそうに為り。

「お嬢様はなんにも関係無がっ！！！　アンタ等は何を証拠にっ！！！」

と、怒鳴るポルス。

だが、役人達はミレーヌに言われた通りにし、機械的に動いた。

ミレーヌは、ウィリアムとの話し合いで、エレンの家の船も抑える命令を出していた。　これで、エレンの身柄確保は一気に街中に広がる事に成る。　ダレイはともかく、真面目で人を大切にしてダレイの横暴からか弱い女身で使用人を守っていたエレンの確保は、近所の人々には激震に近い話だった。

エレン確保のその余波は、昼には別の所に伝わった。　ミレーヌの

留守の間に、ケウトが役人施設に馬車を飛ばして掛け付ける。

「私はエレンの親しい親類の様な者だっ。　逢わせてくれっ、話ぐらいはいいだろう？」

と、留守を預かるミレーヌの腹心である初老の役人男性に詰め寄る事で悶着が起こり。

更に、ポルス以下、店を休んだ使用人達やルイスがエレンにしつこい面会を求めたりする。

そして、シェルハの親しい友人だった商人達が訪れ、エレンの身の上の詳細を尋ねに来たり。　エレンの罪の詳細を役人に縋り付く様に尋ねていた。

そして・・・。　ローウェル邸に大急ぎの馬車が駆け込んだ。

「おい、アレ」

スティールは、赤いカーテンが半分閉められた窓の所から、外を見て起きていた仲間に声を掛ける。

「どうしたんですか？」

ロイムやクローリアも、アクトルの後ろから着いて来て窓にそっと近寄る。　二階の窓から見えるローウェル邸の玄関先に、慌てた様子の何者かが出て来た。　何か鋭い声を従者に飛ばし、

「馬車だっ！！！　馬車を引けっ！！！！」

と、怒鳴り散らしている。

アクトルは、杖を振り回している男の声に。

「馬車を呼んでるな。　何処かに行く気か？」

スティールは、斜めに見下す視界の中に馬車が映るのを確認し。

「だべな～。　ホラ、お馬さんが来た」

「アレじゃ～尾行出来ないね」

と、ロイムが爪先立ちで窓に張り付いた。

アクトルは、昨日のウィリアムの話を思い出し。

「コレが、予定通りの行動ってヤツか？」

スティールは、イマイチと云う顔で。

「一応は、婚約者だし。　最高の金蔓のエレンが捕まったと成るなら動くのは当然だろうな。　だが、ウィリアムは俺等とは別の所まで読んでるみたいだし・・・。　任せるしかないだろう」

スティールの見る仲間3人は、事件が解決出来るのですら疑わしいと言う顔つきで困惑している。

だが、スティールは確信していた。

（大丈夫。　アイツを出し抜けるヤツが相手なら、証拠も残さない

さ）

ｔｈｉｒｄ　ｅｐｉｓｏｄｅ（後書き）

明けましておめでとうございます＾＾

新春一発目の更新です＾＾

　更新が遅れまして済みません。　年末年始を甘く見ていた自分の情けなさを痛感している所です；＞；

ご愛読ありがとうございます＾人＾

third episode

ウィリアムは、役人の若き副隊長と一般役人数名に混じってラザロの住処に向った。　木枠の荷馬車に乗り込んだウィリアムに、ブラウンゴールドの髪を逆立てる服隊長の若者が近寄って。

「君は、僕と似た年頃だろう？　良く、ミレーヌ様に気に入られたな」

と、不思議がった顔をする。

ウィリアムには、女性も何も無い。　ただ、事件を片付けて、仕事を終わらせたいだけだと言う。

「ふ～ん」

一緒に乗り込んだ年上の役人達と若い副隊長は見合って不思議がった。

ミレーヌと云う人物は、見た目や金や家柄に拘らない実力主義の傾向がある。　副隊長に任命されているのは、剣術などが卓越した捕

り物役で。　隊長に任命するのは、思慮や人生経験の深い人物ばかり。　冤罪を許さず、証拠や物証・証言の収集には徹底した捜査をする人物を隊長に任命している。　ミレーヌが、他の事件を各隊長に任せて今回の事件に向うのは、やはり事件が複雑怪奇だからだろう。

港の手前の街には、貸し倉庫や船員達が使う船員部落がある。　住処の無い船員達が集団で生活していて。　雰囲気が暗く通りが散かった狭い区域に、数階建ての木造倉庫の様な建物が乱立する場所だ。
　この奥の廃棄小屋にラザロは隠れ住んでいた。

木樽や木箱が道端に溢れ帰り、馬車も通れない狭さで伸びる。　副隊長の若い役人を先頭に、ウィリアムは影が差す街の下町に踏み込んだ。

「・・・」

服を干す屈強な体格の男が役人を睨む。　建物前で竈の様に石を並べて火を熾し。　魚を炙る老いた男性がこちらを見て来た。

「何時来ても、いい視線の無い場所だ」

と、副隊長の男は訝しげる。

だが、ウィリアムにするなら、この場所こそ街の闇であり。　街の真逆を表す場所だと理解していた。

建物が並び、道を日陰にする。

疲れた雰囲気の中年女性が、子供を連れて擦れ違った。

「此処だ」

副隊長の若者は、二階部分から上の家屋が半壊している建物の前に着いた。

一人の中年役人が、そのオンボロを見上げて。

「不正で結構金が手に入ってたのになぁ。　何でまた、こんな所に・・」

すると、ウィリアムが入り口に向かいながら。

「あのラザロって方は世間も知ってます。　不正の手先で目立つ生活してたら、いざって時に見つかり易い。　住処なんて、寝る場所有れば十分なんですよ。　金はあるから、遊んだり飲んだり外ですればいい。　此処は、塒です」

と、中に。

役人達は、暗部の人の心を理解しているウィリアムの物言いに、ポカンとして動けなかった。

さて、薄暗い中に踏み込んだウィリアム。　もう、天井の梁が崩れ、壁の一部も崩壊している。　床も腐って、踏み抜きそうだ。

（此処じゃない。　生活反応が見れない）

足の踏み場を選びながら、暗い中を見回す。

「お～い、暗いだろう？」

副隊長の若者が入って来て言う。

「それより、二階より上処か。　此処も人の住める場所では有りませんよ」

「えっ？！　騙されたのか？」

ウィリアムは、サラッと。

「どうでしょうか」

「でっでもっ・うわあっ！！！」

驚いて踏み込んだから、副隊長の若者は床を踏み抜いたのである。

「大丈夫ですかっ？！！」

声掛けた役人達。

ウィリアムは、微かに香る腐臭を嗅ぐ。

（干した魚の腐った匂い・・・。　何処かに、地下へ行く所がないかな？）

下から吹いてくる匂いに、ウィリアムは地下を捜した。　奥の二階へ上がる階段の裏側に、石で出来た地下へ向う階段が有ったのである。

「奥です。　地下に降りる階段が有りますよ」

と、声を出してから、その地下へ向う階段を降りるウィリアム。暗殺闘武の基礎には、暗視も含まれる。　闇夜に慣れ、月明かりや星明りにも頼らずして物を見る。　幸い、此処は木の壁の隙間から陽の光が差し込んで来るから、見易い方だ。

「えっ?!　あっ、わわわ解ったっ!!!」

副隊長の声を聞いたウィリアムは、一人先に地下へと足を踏み入れた。　ワインや、乾物などを貯蔵する石で出来た地下倉庫である。　床には埃が溜まり、外気の暖かさとは明らかに違ったひんやりとした冷たい空気が垂れ込めていた。

ウィリアムは、腰のサイドポケットから火付けの時に使う綿を取り出し。　石の壁に寄って、鉄の具足で蹴り火花を出した。　飛び上がる火花を一つまみの綿で受け止め、すぐさまに吹きながら間の中央にぶら下がったランプへ。　流石に慣れた動きで、明かりを点けた。

ランプの油は切れておらず、熾きたランプの火は明るい。　劣化してない証であり、生活反応が見える。

「さて」

部屋を見回したウィリアム。　奥には、古いソファーが汚く土間の床に置いてあり。　上には、汚れた薄い毛布一枚が。　階段近くの水瓶には、まだ飲める新しい水が残り。　その脇には、空き瓶のワイン瓶やウイスキーの瓶が転がっていた。　部屋の北西方面には、汚い机が置かれ、上には紙や喰い散らかした物が掃除もされずに残

される。　蠅が、煩く飛んでいた。

「おおっ、ランプが点いてる」

松明を手にした副隊長の若者が、地下に怯えた足取りで降りて来た。
　踏み抜いたのが怖かったのだろう。

ウィリアムは、机の引き出しを開けていて。

「此処に、色々と書類が突っ込んでありますよ。　コレ、届け先のリストと、受け取る金額の帳簿です。　ラザロは、届けるのみと言ってましたが。　もしかすると、納期に遅れた商人へ取り立ての集金をする方もやっていたのかも知れませんよ」

副隊長の若者は、部屋を見回して。

「此処が、住処・・・」

と、疑りを見せる。

ウィリアムは、半身で副隊長の若者を見ると。

「気に入りませんか？」

副隊長の若者は、憮然として汚い地下を見回して。

「人の生活する場では無い」

お坊ちゃんを相手にしていると思うウィリアムは、次々と指を指しながら。

「劣化の少ない油の入ったランプ、腐ってない水瓶の水、腐り掛けの食べ残し、酒の匂いの残る酒瓶、どれも生活していた証ですよ」

副隊長の若者は、蠅が飛ぶテーブルを見て。

「良くこんな場所に住めるモンだ。　腹の腐ったヤツってのは、生活も腐るのかね」

ウィリアムは、それ以上返す言葉も無いので書類に目を落した。紙には、各品を納める店の名前と納品のリストなのだが。　中には本人の名前の様な店名が書き記され。　偽名かもしれないと思う。

そして、更に・・・。

（ん？）

ウィリアムは、店の名前も何も書かれていない欄が在るのに気付く。

（納められているのは・・・、西の赤い岩塩と・・果実酒。　そして、果実酒から作る数種のビネガス（酢）か・・・。　他は、・・・）

その納品先のみ、他に名前や店名の記載の無い欄は無い。　納品されている品物を見るウィリアムは、ハッとある事に気付き。

「や・・・やっぱり」

と、呟いた。

「ん？　何が、“やっぱり”なんだ？」

副隊長の若者が、ウィリアムの持つ紙を除いて聞いてくる。

ウィリアムは、その紙を渡し。

「いえ。　それより、早く詰め所に戻りましょう。　ラザロに、もう一度取り調べをして、店名のハッキリしない店を割り出し。　この納品先の事情聴取をしないと」

「あっ、あああ。　そっ・そうか。　随分と多いなぁ～、これは大変だ」

リストを見る副隊長の若者は、そのビッシリと書き込まれた店のリストにボヤく。

だが、ウィリアムは何か考えに耽った。

ーーー

ラザロの取調べは手短で、ラザロは観念しているので素直だった。
あの、名前が記載されていない店は知らないらしいが。　他の店は全て知っていた。　そして、サレトンも逮捕され、不正の事について厳しい取調べを受けていたと云う。

スティールは、ローウェルが慌しく馬車で出て行った事を言う。

ウィリアムは、苦笑して。

「凄い剣幕で役所に怒鳴り込んで来たそうですよ」

“エレンは何処だっ?!!!　私の妻と成るエレンだぞっ!!!!!
嘘っぱちの嫌疑など掛けて、後で恥を知る事に成るぞっ!!!!!”

「と、怒鳴り散らして、帰って行ったそうです」

もう、起きているエレンは、それを聞いて俯く。

「どうして・・・嘘と言えるのでしょうか・・・。　私が一番怪しいのに・・・」

エレンに、皆が振り向いた。

エレンと云う人物は、祖父の横暴の御蔭か気持ちの強さと冷静さが鍛えられた女性だった。　ローウェルが怒鳴り込んだ事に有り難さを覚えず、冷静にこうゆう判断が出来るのは女性ながら素晴らしい。

ウィリアムは、エレンと云う人物を認めて。

「エレンさん、見張りを続けて下さい。　ローウェルが戻って無い以上、何処かに行った可能性が有ります。　お店には役人が張り付いて居ますが、他に行ったのでは調べ様が有りませんが。　逆に、あの屋敷に誰かが来る可能性も有ります。　ですから、尚更見張りが必要です」

ケウトの指示でエレンを守るチャンドとコルレオに挟まれたエレンは、頷いてソファーから立ち上がる。　エレンは、何か覚悟がもう出来ている様子だった。　優雅なフックハンガーにミレーヌから借り受けたベールを掛け、物陰を作りローウェルの屋敷を見張るエレンは、必死さと悲壮感が混同している。　スティールなどが見ても、彼女は全身全霊で本気だった。

休憩すべくウィリアムは、仲間を連れて同じ階の近くの部屋に移動した。　クローリアとロイムは、エレンに付き合うと部屋に残った。　皆が寝たり休むのに遣う簡易ベットやソファーが配される部屋で、ウィリアムは少し休むとソファーに横に成った。

スティールやアクトルも休憩とベットやソファーに寝転がる。

ランプも点けない部屋だ、暗い。　その中で、スティールが唐突の様に。

「ウィリアム・・・、何処まで解った？」

すると、ウィリアムは瞑目したままに。

「８割・・・程ですかね」

アクトルは、殆ど解っているんだと思って目を開く。

だが、スティールは目を瞑ったままに。

「あのエレンって娘・・・最悪まで堕ちるのか？」

「さぁ・・・。　ミレーヌさんの判断や、この先の事件の経過によって千差万別ですかね」

スティールは、薄目を開いた。

「お前は、どうしたい？」

すると、ウィリアムは少しの沈黙を溜めてから。

「最悪は見たく無いですね」

スティールは、それを聞いて目を瞑り薄く笑った。　・・・、それだけだった。

ウィリアムが戻ってから、更に夜も暮れてからミレーヌが戻った。
もう、外は雨と成り。　土砂降りの雨音が屋敷を濡らす。

「あ～ん、もう。　ビショビショよぉ～」

ミレーヌは、ウィリアム達がまだ食事をしていないと聞いて、一緒にしようと呼んだ。　見張りにアクトルとロイムが残り。　皆はミレーヌの屋敷の食堂に呼ばれた。

長いテーブルには、テーブルクロスが敷かれて。　貴族の様な食事の風景を思わせる場所である。　髪の毛を濡らしたミレーヌが、タ

オルで拭きながら着替えて来た。　ピンクのナイトドレスを着たミレーヌは女らしい。

スティールが、ミレーヌに寄り。

「美しい・・・、世界に二つと無い美しさだ」

ミレーヌも、にこやかに笑い。

「アホは嫌い」

スティールは、げんなりしてウィリアムの元に戻って来た。

ささやかな食事が始まり、蝋燭の明かりが灯る食台の上で会話が始まる。　ミレーヌは、一日不正の操作に奔走した。　ダレイの手下でラザロの証言が在る事を理由に、疑わしい役人達の事情聴取をしようとするも。　汚職をした部下が居たと云う事に抵抗を持つ役職持ちの偉いさんが引渡しを渋る。　ミレーヌは、過去の貸し借りや徹底捜査で追及の斬り込みを他に広げるとまで脅しを掛けて頷かせたのである。

ウィリアムは、ミレーヌが見た目以上に強い役人だと思って笑みを零す。

さて、サレトンも捕まって直ぐに厳しい取調べで口を割り出した。

「あのサレトンって男、思った以上にワルだわ～。　ダレイのオジイチャンの威光を笠に着て、強請りの類もやってたみたい。　密輸品の取引を決める密会には必ず同席してて、契約を交した相手の顔は全て知ってたわ。　明日から、密会に利用した店の聞き込みで、

不正に加担した役人の割り出しだわね。　すっ～ごく忙しく成るわ。
あ～、またお肌が荒れるぅ～」

スティールは、エレンの事を犯人にした効き目が凄いと話を振ると。
ミレーヌも、エレンを見て気の毒な顔をして。

「ホ～ント、凄いわ。　ローウェル以外に、彼女のお父さんの知り合いが一杯来たらしいわ。　ダレイのオジイチャンの商人仲間ってのも来たわ～。　アレは、殆ど不正商売の相手みたいね。　ウィリアム君の言う通り、エレンの逮捕で事件が動き出したわよぉぉ」

ウィリアムは、肉をナイフで刺し。

「これから、一気に動きますよ。　犯人は、エレンさんが逮捕される決定打が無いと思っていたのに、逮捕されて慌てるハズ。　これから数日のゴタゴタに紛れて次の手を打ちます。　その時が、全ての決着の好機。　ミレーヌさん」

「ん？　なぁ～に？」

「もしかしたら、の為に。　役人さんを手配出来ますか？」

ミレーヌの顔が、スぅ～っと真顔に変わる。　その様子に、支給をする執事やメイドが動きを止める。　スティールやクローリアもウィリアムに釘付けに成った。

「何か、起るの？」

ミレーヌが、しっかりした声で聞き返すと。　ウィリアムは、肉を口に入れて頷き。　噛んで飲み込んだ後に。

「ローウェルさんの帰りが遅い。　エレンさんの事で、動いている可能性が。　俺の考えが正しいなら、犯人が次に打つ手は一つ」

エレンが、ウィリアムを見て。

「何ですかっ？」

と、答えを急ぐと。　ウィリアムは、急激に緊張の増すこの場の一同を見てから、エレンを見て。

「エレンさんの早期解放を狙いますよ。　その為に、誰か身代わりを用意しますね。　生きた身代わりか・・・、死んだ身代わりかは、・・・解りませんがね」

皆の間を沈黙が支配する。

ミレーヌは、話が話しなだけに執事の老人以外を退室させた。

場に、関係者のみが残ると。　ミレーヌは、ウィリアムに。

「身代わりの心当たりは？　解るなら、その人をマークするわ」

しかし、ウィリアムは皿の料理を空にして、口をナプキンで拭きながら。

「いえいえ、恐らくは役人の目に届く所には居ない人物ですよ」

スティールは、意味が解らず。

「そんなヤツ居るのか？」

「はい。　誰とは解りませんが・・・一人」

皆が解らない顔をする中、ミレーヌだけは意味が解り出す。

「ウィリアム君・・・、まさか・・・まさかっ？！」

ミレーヌが気付いたと知ったウィリアムは、紅茶のカップを手にして。

「はい。　まだ、表に出て来ていない人物・・・、それは。　恐らく、毒を造った方」

全員の顔が、“あっ”と驚いた顔に成った。　そう、エレン以外で確実に犯人と思われる者は、毒を作った本人か、毒をを使用した者のどちらか。　ウィリアムは、誰が毒を使用したか解っていると言い。　その人物は、エレン一家の中に居ると言っていた。　つまり、実行犯は泳がされて居るが、表舞台にもう立っているのだ。　その外でまだ解らないのは、毒を作った人物。

ミレーヌは、料理の残る皿を空ける作業に向かいながら。

「解ったわ。　ウィリアム君を今回は信じる。　私が直々に此処に残って、役人を手配するわ」

紅茶を飲むウィリアムは、ミレーヌを見ずに。

「いいんですか？　不正の捜査もお忙しいでしょうに」

ミレーヌは、ニッコリ笑い。

「いちお～、ゆ～しゅうな部下が居ますから～ん。　ウィリアム君の推理の勇姿を見逃せないわん」

スティールは、ウィリアムがその人物にも心当たりがあるかもしれないと思う。　だが、下手に言うのはウィリアムに迷惑だと思い。

態と・・・。

「おめ～、行く先々でファンを作る気か？　ああ？　羨ましいんだコラ～っ！！」

と、絡み掛かる。

紅茶を啜るウィリアムは、澄ました様子で。

「俺は、ファンだの頼んだ覚えは有りません。　なんなら、スティールさんにあげますよ」

「うおおおっ、マジ？！」

クローリアは、急激に雰囲気が変わるのに着いて行けず。　困り果てた顔付きで。

（どして・・・、そうなりますの？）

だが、ミレーヌも其処に加わって。

「チョットっ、アホのファンに成れる訳無いじゃないっ！！」

スティールは、涙目でミレーヌを見て。

「アホにも愛の手をぉぉ・・・」

ウィリアムは、カップをテーブルに置き。

「認めたし・・・」

スティールは、ウィリアムに鬼の形相を見せて。

「この際何でもイイんだよっ！！　アホでもバカでもっ」

「ほう～。　大丈夫だと思いますよ。　どっちも当て嵌まりそうですしね」

ミレーヌは、大いに頷いて。

「納得」

スティールは、両手をワキワキさせて。

「お～にょ～れぇぇぇ・・・・」

執事の老人が、ミレーヌを窘めて其処を纏める。

エレンは、チャンドやコルレオと見合って驚いていたが。　ウィリアム・ミレーヌ・スティールは、内心にこれ以上此処で話すのは良くないと思っていた。　その事に気付ける者は、執事の老人のみだった。

ーーー

「スティールさんにしては、ハッキリしない聞き方ですね」

スティールは、苦い微笑みを見せて。

「お前相手だぞ、ストレートに聞けないわよ～ん。　・・・ミレーヌの姉さん」

ウィリアムは、下らなく笑う。

スティールは、その雰囲気に任せて。

「毒を使って人殺しをしたとしてだ。　殺した相手は、極悪人だろ？　社会の悪魔を殺して死刑なんて、法は其処まで酷に作ったらイケンと思う訳ですよ」

頷くウィリアムは、一瞬俯き。　直ぐに顔を窓の外に向けると。

「多分・・・、ミレーヌさんの判断が優しいなら・・・死なないと思いますよ。　エレンさんのお父さんの知人は、皆いい商売や役職持ちの役人だそうですからね。　死刑は、国に遺恨を残す形に成ります」

「ふ～ん。　お前、全部解ってるんと違うか～？」

ウィリアムは、口元に微笑を浮かべて。

「確証の無い部分が半分ですからね。　無闇に“解った”とは・・・言いたく無いですよ」

「そうか・・・」

スティールは、脳裏に浮ぶエレンが前の事件のジェリーに重なり。
出来る事はしてやりたい気持ちに成っていたのだ。

それから、小雨に変わった深夜は更に深けて。

「・・・」

ロイムが、椅子に座ってコクリコクリと眠たそうにしている。

徐に、ウィリアムは静寂を破り。

「スティールさん、この街に来た昼のお話を覚えてますか？」

スティールは、唐突に聞かれた事に驚いたが。　声を出す訳でも無く。　程なくの間合いで。

「仇持ちのお話か？」

瞑目して頷くウィリアムは、街灯に照らされるローウェル邸の正面門をまた眼を開いて監視しながら。

「実は・・・、俺の逃がした男性のイザコザは、チョットした事情を持っていたんです」

「仇討ちの事だろ？」

すると、ウィリアムは首を左右に・・・。

スティールは、サッパリに為って。

「全く解らなくなったぜ」

「でしょうね。　俺だって、飲み屋に勤めてなければ知り得ない話でしたから・・・」

ウィリアムは、あのジョーが来る二月前の事を口にするのだった・・・。

数年前の若いウィリアムが、あのアクトル・スティール・ロイムの３人を交えて一緒に飲んだ酒場に働きに来ていたある日だ。　見張りをしている今夜の様な小雨が降り続く夜に、変わった男二人に声を掛けられた。　空のワイン樽を外に出していると。

「おい、若い兄さん」

と、乾いた感じの男の声が。

ウィリアムは、気配で感じていたが。　声を掛けられたので雨が落ちる裏の軒下で。

「ハイ？」

振り向くと、黒い礼服を草臥れさせた初老のガリガリに痩せた男性と。　剣を腰にぶら下げた冒険者風体の中年男性が裏口に回って来ていた。

灰色のローブに身を包む冒険者風体の中年男の左腰に、剣の柄が突き出ているのをウィリアムは認識しながら、

「何か？」

目つきの鋭い冒険者風体の中年男は、ウィリアムに一歩深く歩み寄ると。

「実はな・・・とある男を探している」

と、ジョーの見た姿そのままの男性の事を聞いて来たのである。

この時、ウィリアムがジョーを知る訳も無く。　知らないで終わったのだ。

が。

ウィリアムは、ジョーを訪ねた人物の言葉に東方の大陸の訛りを感じ。　興味をそそられて時々お客にその話を隠しながら尋ねて見たのだ。　東方から来る客の中で、そのジョーがどうか知らないが、有名な仇持ちに成った男の話が聞けた。

此処まで聞いたスティールは、呆れてしまい。

「お前・・・、知ってたのか？」

ウィリアムは、窓を見ながら。

「朧気に聞いただけなんですが・・・、其処に彼を逃がした俺の理由が在ります」

「？」

スティールは、静かに黙った。

ウィリアムは、深いため息を一つして。

「あの、仮の名をジョーとした人物の仇と思われていた大使の両親は、十年しなくして死んでいました。　ですから、追っ手を差し向けているのは・・・違います」

スティールは、唖然としてしまい。

「おま・・、あ？　じゃっ・じゃあ～・・・一体誰が？」

「あのジョーと恋人の間に出来た子が嫁いだのは話しましたよね？」

「おお、確か・・・第なんちゃら王子の奥様だろう？」

「ええ。　・・・、ジョーと・・・、いえ。　カーネリアスさんの娘が、国の王族に嫁ぐに当たって、一つの条件が出ていました。それは・・・、父親の存在の抹消・・・」

「っ？！！！」

話の内容にギョっとしたスティール。

「んじゃっ・・・刺客を差し向けたのは・・・まさか」

ウィリアムは、静かに頷く。

「カーネリアスさんのご両親と、彼の愛したご令嬢です・・・」

スティールの頭の中から、一瞬にして見張りの事が消し飛んだ。

「・・・、こっ・恋人も・・・か？」

「交換条件だったみたいですよ。　噂では、他国の公爵家の子息を殺したカーネリアスさんの娘を堂々と国の王子の妃に出来ない・・・。　ですから、回りくどい遣り方で王子の妃に成ったお嬢さんは、別の家の養女に入り、其処から嫁いだとか。　過去の帳消しと、孫・子の罪を帳消しにする代償が、カーネリアスさんの暗殺・・・。最初の刺客は、確かに殺した相手の一族が放った刺客だったかもしれない。　ですが、途中から根元が摩り替わっていたんです」

スティールは、本気で話にのめり込み。

「何で其処まで解るんだよ・・・」

「聞いた話の総合ですが。　一人、旅人で元は政務官助手をしていたご老人に色々聞けたのが大体でしたかね。　コンコース島に住み着いて、学者として毎日飲み歩きながら本を読むのが日課の人でしたが。　酒が入ると深酒ばかりで、良く俺が家まで送っていたんです。　ある夜、俺が前にその事を何となく尋ねていたのを急に思い出して・・・。　色々教えてくれました」

苦虫を噛み潰すスティールは、難しい顔をして。

「幾らなんでも、親兄弟や恋人に命を狙われるなんざ～・・・遣り切れね～べよ」

と、ロイムの手前で声を押し殺す。

ウィリアムは、窓を見つめながら。

「話の一部は俺の推測です。　・・・、そして、これも推測なんですがね。　恐らく、大使の母国から、カーネリアスさんの母国に内々に依頼が有ったのではないかと思うんですよ・・・。　お互いの国の為、亀裂を生じさせない為に・・・彼を始末して欲しいと・・・」

聞いたスティールは、ウィリアムの言うカーネリアスと云う名前のジョーと仮名した男性に同情をした。　だが、ウィリアムに、その顔を向けると。

「お前・・・、態と逃がしたのか？　その逃げてる男を？」

「ええ。　彼は事実を知らなかった・・。　聞いて驚いたのは、彼が誰に命を狙われ続けているのか理解していない処にでした。　ですから・・・、彼を・・・カーネリアスさんを逃がしたんです。　もし・・・もし彼が本当の事を知ったら、ご自分で命を絶つ気がしました。　彼は、未だに心の何処かに愛を残し、令嬢への愛を残していた。　だから、罪から逃げれる。　理由の本質と現実を知らないままに殺されたなら、彼は幸せかもしれない。　ですが、それは罪を償う事には成らない気がしました。　ですから、真実を知るまで・・・まぼろしの愛が壊れるまで逃げて居させようと思ったんです。　俺は・・・」

スティールは、真実がこんなにも過酷かと思い。

「ウィリアム・・・、お前ってヤツは・・・」

瞳を細めるウィリアムは、見張りを続けながら。

「真実の愛が貫けているなら・・・、俺も其処までは思いません。
ですが、カーネリアスさんがご令嬢を思い出して語る姿が美し過ぎました・・・。　事実は、もっと厳しいのに・・・。　現実は、其処まで甘く麗しく無いのに。　彼が、人を殺した罪より、その達成感に自惚れて居続けてる事に・・・キレたのかもしれません」

スティールは、語るウィリアムの今の心が透明に思える程に良く解った。

「お前・・・」

（憎しみの怪物に変わった大使の親や、先の未来の為に愛情をすてた皆が獣に成った中で・・・唯一変わらないその男が哀れ過ぎたのかよ・・・）

思うスティールの心の中で、ウィリアムがコンコース島で言った言葉を思い出す。

“綺麗な幕引きなんて嫌いなんで”

この若さで、どうしてそれができるのか。　判断出来るのか。　ウィリアムの脳裏には、何かが浮んでいて。　ウィリアムの心には、何かが居座っている。　スティールは、そんな気がして為らなかった。

そして。

（コイツ・・・、なんでこんな話を？　まさか・・・、犯人か誰かが同じなのか？　幻の愛に囚われているとか・・・。　・・・ああ

あああっ、一体何がど～成ってるっ？！！！）

頭が、混乱してきたスティール。

結局、朝まで。　エレンと交替するまで何も起らなかった。

third episode（後書き）

騎龍です＾＾。

私的なシステム上のトラブルで、更新が遅れていましたが。　これから少しずつ再開します＾＾。　真に申し訳御座いません＾人＾

ちと、精神的に体長不良なので、更新がゆっくりに成りますが。
更新は続けますので、ご愛読、よろしくお願い致します＾人＾

third episode

ウィリアムがミレーヌの屋敷から離れなくなり。　見張りにウィリアムとミレーヌが加わる事に成った。　捜査員としては優秀なミレーヌだが、屋敷に居ると気が緩むのか有閑マダムの様で、ウィリアムに甘いちょっかいを出していたり、スティールをコキ降ろしていたり。

だが、ミレーヌの屋敷の裏庭に役人専用の黒い馬車が入り、１０人程の役人が交替で待機する。　何か有れば、直ぐに詰め所に向う手筈と、応援の準備は出来た。

小雨が降り続く。　エレンが確保されて、逮捕に向う取調べ中と為ってから、３日目の夜。　事態は、ウィリアムの予想通りに動いた。

その予兆は、その日の夕方に有った・・・。

ゆっくりと昼寝したウィリアムが、夕方に起きて見張りの交替をした。　寝ているのは、スティールとロイムとミレーヌ。　エレン達やアクトルとクローリアは起きて交替の間間を繋いでいた。

曇り空が続く薄暗くなった外。　窓から裏庭を見ていたウィリアムが。

「誰か来ましたよ。　ローブを被って面体は解りませんが・・・。
普通の人では有りませんね」

エレン達もアクトルやクローリアも裏庭の見える窓に来る。　窓から見える広いローウェル邸の裏庭を、小雨が降り頻る中に何者かが二人歩いていた。　噴水の出る池の脇を通る二人は、茶色と黒のローブをそれぞれが纏い。　出迎えたと思われる屋敷勤めの傘を差すメイドの後を歩いているが。

「いい雰囲気じゃね～な」

と、アクトルが。

メイドの後ろを歩く二人の人物は、ローブに隠れているが男の様な思いがする。　歩き方が横柄で、遠目ながらメイドの後ろを窺って居る様な素振りをしている。　離れて見ているために、そう思えるだけなのかも知れないが・・・。

ウィリアムは、街灯がローウェル邸の前後に灯る事から。

「今夜から、裏庭は俺が見張ります。　あの二人が何処かに出るなら、俺が尾行しますよ」

と、言った。

エレンは、ウィリアムが格闘の達人で有る事は港で見ている。　だが、一人で大丈夫かと思って。

「お一人で？」

「ええ。　他の人では、邪魔に成ります。　一緒に行けるのは、良く見てスティールさんぐらいですよ」

エレンは、自分に優しいニヒルで男前のスティールを思う。

「そう…ですか」

しかし、ウィリアムはエレンの内心を察して。

「あの二人がすんなり真相に行く人とは限りませんよ。　表に来た誰かの方が、真相に近いかも」

「見張り・・・続けます」

エレンは、正面の窓に戻る。

ウィリアムは、アクトルとクローリアにエレンの方を眼で示した。

（解った）

アクトルは、頷く。

エレンの内心は、もう事件の真相が見えずに困惑と心配で壊れそうだった。　何か有れば、突っ走ってしまう様な感じがある。　アクトルやクローリアなどが見守る必要が在ると思っていた。　現に、エレンを真っ暗にさせなかったのはスティールだ。　下らない事や、思い出話を聞いたり話し掛けたりして、エレンの気の重荷を軽くし

ていたのである。　もし、そうゆう心遣いの出来る誰かが居なければ、エレンは参って倒れているかもしれない。

ウィリアムは、そうゆう意味ではスティールを信用している。

アクトルも、スティールとウィリアムの間には、自分には無い時間云々の経過で出来る信頼を超えた別の関係が出来ていると思う。スティールが、ウィリアムに対抗意識を棄てて認めているのがいい例だ。　だからこそ、アクトルも更にウィリアムを信用出来る。

スティールとアクトルは、ウィリアムと深い会話も無く、眼の動きで何を言ってるか解るのだ。

ウィリアムの判断は、今回に限っては的を射抜ききっていた。

その深夜、見張りを続けるウィリアム達。　夕方に現れたローブの人物二人の御蔭で、深夜に為っても誰も休まないままに、全員で暗い部屋に篭っていた。

夏に入る前の長雨が、本降りに為る頃。

「出た」

ウィリアムが、戸棚の沿う壁と窓の境で低く声を出した。

ミレーヌが直ぐにソファーから立ち上がり。

「ローウェル？」

ウィリアムは、廊下に出るままに。

「夕方のローブの人物二人です。　尾行します」

ドアを開いたウィリアムに、クローリアが。

「ウィリアムさん、一人で？」

すると、ウィリアムは一同を見回し。

「ローウェル邸の明かりの点き具合がおかしいです。　この時間で、誰も出払って無いのにロビーや馬車小屋までに明かりが・・・。もしかすると、この後誰か来るかも知れません。　あの動くローブの二人の動きと関係在るなら、今夜が動くその時でしょう。　見張りを」

と、ウィリアムはドアを閉めてしまう。

「本当か？」

チャンドが、横のコルレオに聞かれる。

「さっ・・さあ・・・」

だが、スティールは。　窓からローウェル邸を見ていて。

「この数日、決まって遅くまで明かりが点くのは2階の一部だけだった。　だが、今夜はこんな遅くに、屋敷全体が明るい。　休まない以上、理由が有るんだろう。　大丈夫、ウィリアムはヘマはしないし、今の奴の勘は鋭いぜ」

と、自信有りげに言うのだ。

さて、ミレーヌの屋敷の裏口から雨の中に出たウィリアムは、ローブすら纏わない。　皮の胸当てすら纏わない黒い上着に黒いズボンの彼だ。　街灯の明かりの中に入らなければ、闇に紛れて何処に居るのか解らなくなる。　ローブを纏った二人に追いつくのは、直ぐだった。

（なるほど・・・）

ウィリアムは、二人の後ろに着いて解った事は、この二人が“殺し屋”の類だと云う事だ。　暗殺者と殺し屋の決定的な違いは幾つか有るが、その線引きの一つは気の扱い方。　ローブを纏った二人は、汚らしい殺気を何降り構わず出している。　暗殺者は、気配を悟られない様に、殺気など最小限にして消す。

人を殺すと云う行為に対して、人は一つの壁を心に持たせている。　同じ種のお互いを殺さない様にする為だろう。　だが、その壁を破るとは、人として大きな何かを失う事に成る。　人を殺す事に躊躇いを持たない者程、人間では居れなくなる。　獣が心に住み着き、何か有ると殺せばいいと思う様に為る傾向が強い。

そのコントロールに生死を掛けて訓練するのが暗殺者だ。　暗殺者は、決して依頼の標的以外の人を殺す事を許されず。　その存在を知られては為らず。　そして、確実に目標を殺せなければならない。　殺し屋などが増えても、暗殺者が増えないのは、厳しい戒律と絶対的な上下精度が有るからだ。

ウィリアムは、少しの距離を置いて着いていくローブ二人の殺気が禍々しく。　今までに何人も手に掛けて来た事を感じるに。

（手加減は要らないかな？）

と。

さて、雨脚が強まる中。　整備された住宅街の道をローブの二人は一路商業区に向う。　ウィリアムに尾行されているとも気付かないままに。　商業区に入ると、大通りは人気が無くともまだ街灯も消えない頃だ。　人目を避けて、裏道を行くローブの二人。　街灯の無い脇道から大通りに出て、港に向って階段を降りる。

「・・・・」

無言で雨音に足音を掻き消しさせて、ウィリアムは、闇に紛れて雨に濡れながら後を追った。

ローブの二人が遣って来たのは、高級飲食店やブランド店の並ぶ場所。　前に、エレンとケウト氏の店に来た、まさにその並びだ。　もう街灯の明かりも落ちる頃。　殆ど全ての店の明かりが消えた闇の中を歩く二人のローブ姿の人物。

「おい、この辺か？」

と、右のローブの人物が声を出す。　ガラガラ声の男だ。

「ああ。　その先の店だ」

応える声も男で、幾分若い感じの低い声。

「うえは？」

「今回は、俺達だけさ」

「薬師のババア一人殺せばいいんだろ？　楽な仕事だな。　殺る前に、味見するか？　一応、女なんだろ？」

「さっさと殺す。　先方は、それを待ってるんだ。　お前、歳の行った薬臭いババアなんかに食指伸ばすな」

「へっ、喰える者のババアもガキも無ぇ～だろ？」

「フン、時間の無駄だ」

押さえた小声ながら、ウィリアムにその薄汚い会話が聞こえる。

（やっぱり・・・、見つかってたんだ）

ウィリアムは、殺される相手を確信した。

ローブを纏う二人は、スリムな影の姿を見せる塔型の離れを左右に持つ立派な建物の敷地に踏み込む。　低い木の柵を乗り越えて、芝生と花壇が織り成す庭園の中を潜り抜け。　４階建ての立派な館の裏手に抜けて行った。

飲食店と思われる館と一つ上の段の街へ切り立つ土壁とに挟まれた裏路地は、真っ暗であった。

ガラガラ声の男が、ずぶ濡れのローブを重そうに。

「裏の小屋だったよな」

「ああ、食材の閉まってある大きい小屋の横に、薪なんかを仕舞ってある納屋が在る。　其処だ」

「死体はどうする？」

「海に棄てて欲しいとさ」

「海まで運ぶのか？」

「ああ、海岸のドックの在る近くの波止場辺りに棄てて欲しいとさ」

雨の中。　この会話を聞いたウィリアムは、完全に一つに事実が繋がったと思った。

「あ、アレだ」

左のローブの男が、大きな館の裏手半分の処で先に指を向ける。

暗くて見難いが、木造の小屋が一つと。　横に、一回り小さい壁の一面が無い納屋が。

此処で、ウィリアムは走った。

「あ、アレか・・うわっ」

左の男の言葉に応えた右のローブの男に迫り、後ろから首筋に正拳突きを見舞ったのである。

「・・・」

瞬間的な激痛で、気絶したその男は砂利道の水溜りの中に崩れた。

「誰だっ？！」

残ったローブ姿の男が、奇襲に慌ててローブを幕って剣を抜こうとする。　だが、極至近距離で、格闘術と剣術のどちらに分が有るかは、一目瞭然の結果だ。

「・・・」

ウィリアムは、男が抜こうとした剣の柄に回し蹴りを喰らわせて剣を鞘に押し込める。

「う〝ぐっ！」

強烈な蹴りの圧力で後ろにヨロけた男に肉薄したウィリアムは、低い体制からの素早い拳の３連打を鳩尾に打ち込んで、前のめりに成った男の首の前部を掴むように握って気絶させる。　血管を指で閉めて、窒息させたのだ。

“バシャ”

もう一人の男も、雨の降る裏路地に沈んだ。

ウィリアムは、納屋に急いだ。　物を運ぶ馬や、残飯を食べさせて、肉を得る鶏やブタが囲われる納屋の奥。　薪の積まれた土間の奥まった処に、細い吐息の人物が寝かされていた。

「・・・」

夜目に慣れきったウィリアムには、その人物がガリガリに痩せた白髪の混じる老女の様な女性であると見れた。　身体の自由を奪う為に、紐が身体に巻かれている。

「大丈夫ですか？　意識は有りますかっ？！」

声を掛けて顔を覗くウィリアム。

「あ・・・だ・誰？」

か細い声で、返事をする女性。

ウィリアムは、もう全ての決着が目の前に迫った事を理解し。

「助けに来ました。　今、紐を解きます。　貴女が“ソレア”さんですね？」

雨音の響く納屋の暗闇の中で、弱った女性は目を見開く。

「だ・・れ・・？」

「エレンさんの知人で、役人の方に力添えをする冒険者です」

ウィリアムがそう云うと、老女は急に震え出し。

「だめ・・・だめっ、エレンは・・・」

と、女性が口をモゴモゴさせようとする時、ウィリアムはサッと女性の顎を触れて。

「駄目なのは、貴女の自殺です。　ソレアさん、もう手遅れですよ。　エレンさんも、全ての事態を知る事に為ります」

ウィリアムの触れた女性の顔が、急激に震え出し。　嗚咽の様な呻きが零れだす。　弱弱しくも、必死に顔を左右に振る女性。　どうやら、“死なせて”と訴えて居る素振りだ。

だが、ウィリアムは聞き易い冷静な声を傾けて。

「ソレアさん。　貴女は、毒をダレイに盛った犯人をご存知の筈では？　二人で協力して、エレンさんを助けようとしたのでしょうが、事態は甘くはありませんよ。　其処を、あの二人に利用されたんです。　貴女が死んで、実行犯が捕まった時、エレンさんは一人になって殺されますよ」

「？！！」

ウィリアムの言葉に反応した老女の素早い驚きの動き。　この弱りきった身体の何処にそんな力が在るのか・・・。　それは、親心が成せる気持ちの力か。

「あぁ。　エレン・・エレン・・・うぅ」

泣き出した老女の・・・、いや。　母親のソレア。　彼女の顎から手を離したウィリアムは、ソレアの耳元に口を近づけて。

「いいですか、俺達が出来るのはエレンさんを犯罪の折から救い出す事。　でも、その後の心の支えは・・・、シェルハさんを知る・・・父親の面影を知る貴方達だけだ。　生きて、その余命の許す限りエレンさんに寄り添ってあげて下さい。　貴女の命の存在の意味は、

エレンさんに希望の光を与える。　さ、エレンさんの下に向いましょう」

ソレアの身体から縄を解いたウィリアムは、その身体を持ち上げた。

「はぁっ・・・・」

思わず息を飲んだウィリアム。　・・・軽かった。　背丈も然程に低い訳では無いソレアだが。　その身体は重みの感じられない人形の様。　この細身で、どれだけの苦労をしてきたのだろうか。

ウィリアムの脳裏に、病気の母親と自分を養う祖母の事が浮ぶ。

（役人の依頼で無いなら・・・殺してやるのに・・・）

犯人へ、ウィリアムの怒りが静かに燃え上がる。

水を弾く厚手の布袋にソレアを包み、ウィリアムは馬を引いた。

「・・・」

あの二人の男は、紐で縛って小屋の軒下に蹴転がしておく。　だが、最後にウィリアムは馬に乗ってからもう一度納屋を見た。　その眼は、何かを射る様に鋭い瞳だった。

ーーー

アクトルとミレーヌがドアを開いたエレンに駆け寄った。　先に、
アクトルがエレンの肩を掴んで。

「待てっ、落ち着け。　何がどうなってる？」

ミレーヌも、

「貴女の今は逮捕されてる身なのよっ？　どうしたの？」

すると、エレンは悲痛な怒りすら滲む顔を向けて。

「あの馬車はっ、・・・父の親友のケウトさんの馬車ですっ！！
うそよ・・・有り得ないっ！！」

ミレーヌは、ケウトと云う人物が高級料理店を営んでいる事は知っ
ている。　だから。

「落ち着いて、ローウェルも仮店舗のオーナーよ。　親交が有った
としても不思議じゃ無いわ」

だが、エレンは激しく振り頭、

「だってっ、ケウトさんは御祖父ちゃんと付き合うローウェルさん
を“付き合う気にならない相手だ”ってっ・・・面識も持たない様
にしてるって・・・。　もしかしたら、ローウェルさんに呼び出さ
れたのかもっ！！　ケウトさんが、命を狙われてるかもっ！！」

と。

急激な事態の動きにミレーヌとアクトルも言葉を失う。

そこに、チャンドも加わり。

「お嬢さんの云う通りだ。　ケウトさまは、エレンさんの親しい知人で、古い過去を知る人物。　もしや、ローウェルと云うその男に嵌められて、この場に呼び出されたのでは無いでしょうか？　ケウトさまは、ローウェルと云う人物や、エレンさまの死んだご祖父を毛嫌いしておいででしたし・・・」

スティールは、直ぐに剣を手にして。

「姐さん、手配してくれ。　俺達が、勝手に押し込んで確かめる。何かの間違いとしても、俺達を逮捕すればいい話だ。　もし、ローウェルって野郎がそのエレンの知人をどうにかしようとしているなら、大変な事に成るぜ」

ミレーヌは、ウィリアムの言葉も有るので。

「解ったわ」

と。

エレンは、スティールの腕にしがみ付いて。

「私も行きますっ。　絶対に行きますっ！！」

クローリアは、危険だと思って。

「エレンさん、此処は私達に」

しかし、スティールはエレンの顔を見て。

「もし、ウィリアムの予想が当たっているなら、エレンを見たローウェルって奴はエレンを奪おうとするはずだ。　エレン、覚悟は有るか？　失敗したら、死ぬぞ」

すると、エレンは重く頷く。

「不正が知れた時点で、我が家は死んだも同然です。　今、何か出来るのは私だけ、・・・ローウェルのいい様になんて絶対に嫌っ」

スティールは、アクトルを見た。

「アーク、ウィリアムは戻る。　それまでに、何も起させない様にしようぜ。　アイツは、これを予期してたから俺達を残したんだ」

アクトルも、それには同感だった。

「ま～た危険な端を渡るのか。　さすが、ウチのチームらしい」

スティールは、ミレーヌに。

「手配を頼む。　俺達は、先に行く」

紫色のシルク製の寝巻きのパンツとゆったりした上着だけのミレーヌは、黒いガウンを羽織って立て掛けられたサーベルを片手にして。

呆れた顔をして廊下に出る。

「私も行くわよ。　貴方達に、勝手にされちゃ困るわ」

ロイムは、いきなりの修羅場にと震えて。

「うわわわ～、ど～なっちゃうの？」

クローリアも、真偽の何もかも見えていない中で、

「ああ・・神よ。　間違いが無き事を・・・」

先ず、ミレーヌは足早に表玄関から出て、馬車で待機している役人の下に向う。

一方、後から出たスティールとアクトルは、エレンとロイム・クローリアが続けて出る後のチャンドやコルレオの足音を聞いて。　先に、スティールが赤い絨毯が真ん中にラインを引く、廊下を歩きながら。

「最後の二人も覚悟しろよ。　ケウトって人が被害者ならいいが。
最悪、違う場合もある」

アクトルも、前を見て廊下を歩きながら。

「そうだ。　どんな真実も現実だ。　見たく無い現実で敵同士に成る事だってある」

万が一、エレンの身を守る為に武器を持ったチャンドとコルレオ。
伸び縮みの効く金属の棒を持つコルレオが。

「我が主人にそんな疚しい処は無い。　私は、エレンさまを守るご命令を守るだけだ」

と、険しい顔をし。

長剣を装備したチャンドも、冷静な顔をして。

「私も同じだ。　主人を信じている。　恐らく、ローウェルと云う輩に呼び出されたのだ。　主の危機を助けるのみ」

スティールもアクトルも、それ以上は何も云わなかった。

雨の外に出たスティールは、行動が素早かった。　アクトルにエレンを任せて先に飛び出すと。　雨音に足音を紛らわせてローウェル邸の門に近付いた。　ケウトの訪問は、予定外のものだったのか。　門は開かれっ放しで、馬車が入った所で乗り捨てられているかのように停まっていた。

「・・・」

スティールは、御者などはもしもの為にと気絶でもさせてしまおうと思っていた。　が、馬車周りに人気は無い。

門の開かれた入り口で、エレンを背に覗くアクトル。

（来い）

合図をするスティールは、先行する形で庭木も塀周りにしか見えない開けた敷地内を行く。

石造りの玄関先が立派な軒下で、鳥の嘴の様に伸びる。　長方形の佇まいで、ドンと大きいローウェル邸は、各窓の前だけに剪定された庭木が並ぶだけ。　窓の下まで行ってしまえば、外から覗かれて

も見つかり難いと思える。

（低く、低く・・・）

スティールは、アクトルにジェスチャーしながら、腰を屈めて閉められた玄関前の脇に着いた。　アクトルの後ろに、エレンがロイムと一緒に続き。　その後ろには、クローリアが。　チャンドとコルレオの前には、ミレーヌが居た。

降り続く雨で、スティールも皆も濡れる。　だが、何より何が話されているのかが気になる皆には、濡れる事も気に成らなかった。

スティールは、話の聞き易い場所を探して、窓の下に張り付いて右に移動する。　来客が有ったのは確かな様だった。　少し腰を上げて木陰から覗く玄関先のロビーが、シャンデリアの明かりで煌々と明るく。　窓の前に庭木が無かったら、こんな雨の暗闇の庭もかなり明るく見渡せるだろう。

覗きながら移動するスティールは、広々とした玄関ロビーの右の先に、応接場が吹き抜けで設けて在るのを見つける。

（居た）

数人の何者かが、その応接場のソファーに座ったり立ったりしているのが見える。　中には、メイドの様な若い女性も居た。

（おい、どうだ）

アクトルが、押し殺した声でスティールの背中を突いた。

（向こうだ）

スティールは、更に木と壁の間の隙間を右に指差す。

アクトルは、戦斧を背負うだけに動くには慎重を極める必要があるが。　窓の下には、引っ込みが有り。　庭側に壁の無いトンネルを形成しているので、這って行けばなんとか成った。

さて、ローウェル邸の右一番端に辿り着けば、折れ曲がって東屋風のテラスが木の椅子やテーブルを見せる。　屋根は、屋敷の一部と繋がっていて。　その先は、ベランダとガラス大窓を通じて、カーテンの引かれた見えない応接場に向う。　ベランダと屋敷の狭間に有るガラスの扉から覗けば、応接場と、ガラス扉の中の部屋を仕切るカーテンに、動く人影が映っていたのである。

スティールは、そのテラスを分け入ってベランダに向かい、テラスとの仕切りに成るガラスの大窓をそっと押してみた。

（開く・・・）

運のいい事に、ガラス窓は開いた。　ロビーの方から、男の大声が聞こえる。

「ローウェルはまだかっ?!!　緊急事態だっ、早くしろと言えっ!!!!」

中年の男の声だ。

「畏まりました。　少々お待ちください、主は入浴中だったものですから」

感情の少ない女性の声だ。　声は若そうだが、張りの無い寂しい声である。

「旦那様、落ち着いて下さい」

別の男性の声がすると、

「うるさいっ！！！！！　落ち着ける事態では無いんだっ！！！！！」

スティールが、その時エレンを迎え入れた時だった。

「ケ・・・」

声を上げそうに成ったエレンの口を、スティールの濡れた手が塞いだ。

「・・・」

スティールは、カーテンが動くかどうかを確かめる。　どうやら、聴こえなかった様だ。　雨音と、男の怒声で聴こえなかったと確かめるや、エレンに。

（声を出すな。　折角ここまで来たんだ、しっかりしろ）

と、鋭い眼を向ける。

「・・・」

頷くエレンの髪や額を流れる雨水が、顎を抜けて首筋を伝った。

潜伏中に、ミレーヌのお古の服を着替えに借りていたエレン。　黒い長袖のブラウスが、濡れてピッタリとして身体のラインを窺わせる。

スティールは、手を離すと。

（君で見つかったら、身体触っちゃうぞ）

と、微笑んでから明かりの無い部屋をカーテンの方に進んだ。

「・・・」

驚きの中に、少しの恥らう様子を窺わせたエレンは、スティールの後を行く。

さて、ローウェルと云う男は芸術を嗜むのか。　カーテンに遮られた暗いその場は、壁伝いに机が置かれ。　楽器の様な何かが並んでいる。　此処は、アトリエの様な物なのか。　床は、丁寧に絨毯がしかれ、カーテンから零れる明かりの届かなくなる奥には、ソファーも見えた。

チャンドやコルレオまでも中に入った。　最後に、チャンドが静かにガラス戸を閉めた時だ。

「おいおい、ケウト。　事が済むまでお互いに直な対面はしないと決めただろう。　何故、此処に来たんだ？」

と、威厳の漂う男の声が。　しっかりとした声の使い方は、地位の確かな者のソレである。

アクトルとクローリアは、エレンの店を張っていた時に印象的な馬車で来た貴族風の男だと感じ。　ミレーヌも、顔を顰めて、

（ローウェル・・・）

エレンも、ローウェルの声で有るとスティールに耳打ちした。

カーテンの陰で、誰かがソファーから立った。

「ローウェルっ、事態が変わったんだっ！！！」

この声に、エレンの顔付きが変わる。

動こうとしたチャンドとコルレオに、ミレーヌが無言の睨みを利かせる。　シルク製の紫色をしたパンツと上着の寝巻きを着たミレーヌは、サーベルを片手に黒いガウンを羽織っているだけ。　雨に濡れた服は身体に張り付き、胸元は少し肌蹴ていた。　しかし、魅惑的で女らしい姿ながら、その眼光は鋭く。　動こうとした二人を留まらせるに十分だ。　ミレーヌも、かなり剣術で鍛えていると見受けれた。

エレンが、小声で。

（ケウトさんです）

スティールとアクトルが頷く。

濡れたロイムは、意味が解り出して驚き口を自分で押さえた。

カーテン越しで、立った人物の前に何者かが来た。　そして、坐り

ながら。

「ケウト、落ち着いて坐れ。　明日に成れば、もう全ては終わる」

ローウェルと云う人物の声の主が坐り、前に立ったケウトと云う人物も坐る。

「明日に終わる？　お前、今日がどれだけ逮捕者が出たか知ってるのかっ？！！　街中の噂で持ちきりだっ、ダレイの不正で芋づる式に不正が暴かれてるとな。　俺の知り合い3人も捕まった。　役人が、内部捜査と街中の聞き込みでフル回転してる。　このままじゃ、俺もお前も捕まるぞっ！！」

この言葉に、エレンも従者の二人も驚いた。

だが、ローウェルと云う男は動じる気配も無い言葉遣いで。

「その時は、二人で逃げればいい話さ。　ま、さっきその事態を遅らせて、エレンを開放させる策を講じた。　それが上手く運べば、エレンが釈放されて我が物に出来る」

「ほっ・ホントか？」

「ああ。　お前が連れて来た、ホラ、例の薬師のババア。　アレを、死体で海に投げる」

皆、出て行ったウィリアムの事を思う。　もし、その工作にあのローブ姿の二人が向ったとしたら、殺される人物を助けられるのはウィリアムのみである。

ケウトの影が前のめりに成り。

「ほ・・・ホンキでか？」

「ああ、もうあのババアの利用出来る価値は、それくらいだろう？　生かして置いて、何か都合のいい事でも有るのか？」

「いや、それは・・・」

ケウトの影が腰を戻し、少し躊躇いの様子を見せた。

「ケウト、お前があの女を捜して利用を俺に持ち掛けたんだろう？　二人で、あのダレイのクソ爺を殺して、エレンを遣って財産を掌握しようと計画したんだ。　余計な関係者を残しては、俺達の首を絞めるだけだぞ」

「確かに・・・」

「お前は、手を汚さず不正の積荷を横流しして貰っていた事実を消せればいい訳だろう？　汚い指図を俺に一任したんだ、遣り方は任せろ」

ローウェルの影は、此処で運ばれた飲み物に手を伸ばす。

ケウトの影は、ローウェルに向いて。

「だが、本当にエレンは捕まったのだろうか。　未だに信じられない・・・」

「どうして？」

「俺は、もしもの為の見張りに二人の従者を付けた。　エレンが捕まったなら、その二人は戻って来るハズなのだが・・・」

チャンドとコルレオは、身じろぐ。　その様子を、皆が見た。

しかし、ローウェルの影は、漂う香りから紅茶と思える物を一啜りしてから。

「おいおい、ケウト。　お前・・・まさかその方から足が付くんじゃ～ないだろうな？」

「いっいいやッ！！　俺とお前の関係を知らない二人だ。　元が冒険者だから、エレンを守るのに丁度いいと思ってな。　もしもの時は、俺の元にエレンを連れて来るように言い含めておいてある」

「その二人、信用は？」

「出来る、そうゆう風に手懐けてある。　どっちも俺に恩義が有って、忠実だ。　ただ、不正の事や俺がダレイの手先に成っていた事は知らないからな。　バレたら、恩を盾に服従させるさ」

チャンドとコルレオの二人の顔が、見る見る険しく成った。

（まだ、声を出しちゃ駄目よ）

ミレーヌが、二人に声を押し殺して言う。

ローウェルの影は、カップをテーブルに戻し。

「そうか、なら・・・バレた時はなんとか言い包めて、後で始末も視野に入れた方がいいな。　金に懐くならいいが、そうでないなら面倒だ」

ケウトの影は、また膝を前に進め。

「なぁ、エレンも殺すのか？」

「当たり前だ。　俺がエレンと結婚しても、エレンが相続人だから、名義はエレン。　殺して、初めて俺に財産が移譲される。　幸い、ルイスのバカが俺に惚れているからな。　後少し身体を味わって、飽きたら一緒に死体になって貰うさ。　親子で、憎み合って刺し違えた・・・なんてどうだ？」

スティールの目が厳しく細まる。

エレンは、母親がローウェルに肌身を許したと思って震え出した。

「ローウェル、お前の女好きはもはや病気だぞ」

と、呆れたケウトの声。

「いやいや、ダレイの爺に昔喰われた年増の身体だが、まだまだ使えるよ。　確かに、あの身体は癖になる。　俺が、優しい言葉で慰めてやれば、直ぐに寝た。　ダレイのクソ爺に玩ばれていたからな～、優しさに餓えていたんだろう。　全く、女って奴は軽い軽い。　エレンの身体はどんなものかね、出来るなら、殺す前に母親と二人で地下牢にでも閉じ込めて味比べしてやろうかな。　あはははは」

下衆な話の内容に、クローリアは顔を背けて唇を噛み。　ミレーヌ

は、サーベルの持つ手を振るわせる。　エレンは、悔しさを滲ませた顔に、肩を震わせて俯く。　直ぐに、雨の雫に交えて涙が流れ落ちる。　一方、男のアクトルやロイムも悔しさの滲む顔を見せた。

「・・・」

スティールの目が、ギラリと光った。　女は好きだが、手篭めにするのは大嫌いなスティール。　ミレーヌが居なければ殺す事も考えた。

ローウェルは、ケウトに嘲笑う続きの口調で。

「ケウト、お前も同罪だろう？　大体、お前が全ての元凶だ。　エレンも、お前が居なければ最悪の事態は免れたかもしれない。　いい加減、偽善者ぶるのは止めろ」

「おっ俺は、あのダレイの爺が怖かっただけさ。　あの悪辣なダレイに掛かって、いい人生は無い。　俺に高級料理屋を遣らせて、ウチの店を不正の話し合いの会合場に使ったり。　何度・・・何度殺してやろうと思ったか・・・」

「だが、美味い所有ったんだろう？　お前の今の妻は、ダレイの力で手に入れた美人じゃないか。　店も随分儲かっているし、不正に手を貸して代償を金と異国の珍しい珍品で受け取っている。　同じ穴のなんとやら、言い訳は難しいさ」

「フン、ま～ライバルの店は幾つか潰したがね。　ダレイが投げ捨てた小娘を飼育してたら、俺に好意を持ちやがったから結婚しただけさ。　あの女は、顔を鑑賞に楽しむ子供を産ませる道具って所か。　本当は、俺がルイスと結婚するハズだったのに・・・、ダレイの

御蔭で若い頃から計画は狂いっ放しさ」

「ほ～、まだ未練が有るのか？　何なら、俺がエレンと結婚した後に抱くか？」

「もう、未練は無い。　お前とダレイの唾液の付いたルイスなど何の価値も無い。　俺は、商業に精を出したいね。　シェルハと語り合っていた頃の夢さ。　全てが片付いたら、店を一気に広げる」

影のローウェルは頷き。

「なら、計画が上手く行く事に期待してくれ。　あの、エレンの本当の母親だかのソレアか。　アレを殺して、毒を作った事とダレイの殺害を自供した手紙を添えて海に浮かべれば、役人もエレンを解放せざる得ないだろう。　その時、エレンを掻っ攫って結婚するチャンスさ。　其処まで運べば、後々バレても家財を売り棄てて逃げれる算段も立て易い。　だろう？」

「為るほど、それはいい計画だ。　流石に、悪知恵の回るローウェル閣下だ」

「フッ、褒め言葉と取っておくぞ」

スティールは、俯いて必死に堪えるエレンの肩に手を置いた。

「・・・」

涙を流すエレンが顔を上げると、スティールはエレンの顔に自分の顔を近づける。

「？！」

何事かと思う皆だが、スティールはニヒルな笑みをエレンに。

（もういい。　我慢しなくていい、あの薄汚い計画をぶっ壊すぞ。
さっ、名乗りを上げるぜ）

拳を握るエレンの眼が、キラリと光って力を佩びた。

third episode（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編３部も残す所３・４話に成ります＾＾　よろしくお付き合い下さいね＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

third episode

「ケウトさん・・・、貴方って人は・・・」

下世話な話から、意気投合の笑いを上げたローウェルとケウトの耳に、逮捕されて外に居るはずの無いエレンの声が聞こえたのは、驚愕の一撃だっただろう。

ソファーに腰掛けたローウェルとケウトは、カーテンの方に身体を向けて立ち上がり。

「誰だっ?!」

「誰か居るのかっ?!!」

と、声を揃えた。

カーテンを捲り、エレンとミレーヌが姿を見せる。

「あ〝っ・・・エ・エレンっ?!!」

驚くケウトの衝撃的な顔は、今までに見ない彼の姿だ。

凶暴な睨み目を見せるローウェルは、ミレーヌが一緒に居るのを見て。

「エレン・・・、それにミレーヌ」

ミレーヌは、サーベルを引き抜き。

「エレンに疑いが掛かる事件だったけど、何か裏が有りそうだったから少しデマを流したのよ。　今までの話、前部聞かせて貰ったわ」

と、勝ち誇る笑みを見せる。　もう、施設に応援を呼びに行かせたし、残る配下の数人がローウェル邸の前後の門を封鎖している頃だろう。

ローウェルは、ワナワナと口元を震わせて。

「謀ったかっ、メスネコがっ！！！」

ローウェルの前にミレーヌ、ケウトの前にエレンが対峙する形で。
先にエレンが、ケウトを悔しい涙目で見つめて。

「信じてたのに・・・お父さんの事も貴方の事も前部・・・信じてたのに・・・」

すると、ケウトは感情を爆発させた。

「うぅぅ・・煩いっ、煩いんだよっ！！！！！！　お前の父親もっ！！！！　ダレイのクソ爺もっ！！！！　俺の夢を滅茶苦茶にしやがってっ！！　俺は・・・ダレイの下でどれだけ虐げられたかっ、

２０年前のあの時だってっ、今までだってそうさっ！！！！　もう嫌だっ、俺は自由に成るっ！！！　自由になって、生きたい様に生きるんだっ！！！！！」

だが、エレンはケウトに怯まなかった。

「そんなの勝手だわっ。　御祖父ちゃんに弱みを握られても・・・公にして軽い罪を受ければこんな事までしなくて良かったのに・・・」

ケウトが、唇を噛む時。　エレンの後ろにチャンドとコルレオが険しい顔を見せてスティール達と共に現れた。

「あ〝っ、・・・おっお前達っ！！」

チャンドとコルレオは、エレンの後ろに控える形で進んだ。

ローウェルは、ケウトに。

「コイツ等かっ？！　お前の僕は？」

慌てふためき始めたケウトは、上ずった声で。

「おっおいお前達っ、エレンを人質にしろっ！！　こっちに連れて来るんだっ！！！」

だが、二人は動かなかった。

ローウェルの脇にて身構える大男は、甲冑のオブジェが持つ鉞を手にした。　モンスターの中に居る、オークと云う怪物に似た顔の男

だ。

どうやらケウトは、御者の老人と二人で来たらしい。　老人は、ケウトの後ろで震え縮んでいる。

痺れ焦れたケウトは、動かない二人を見て。

「チャンドっ！！　放蕩の果てに母親が大病を患うまで冒険者で遊んでたのはお前だろうっ？！！　そのお前を雇い、いい給料を出してやった恩を思い出せっ！！！　コルレオっ、罪人の娘を妻にしてこの地に流れて来たのを俺が拾った恩は忘れたかっ？！！」

二人は、グぐっと唇を噛んで俯く。

スティールは、エレンの脇に出て。

「オッサン、どっちに付く？　アンタ等の筋を通せばいい。　悔いの無い方を選びなよ」

アクトルは、ローウェルの脇に居る大男から視線を外さない。

先に、チャンドが苦しい口調で。

「俺は・・・、俺はケウト様に恩が有る・・・」

ケウトが、その言葉に焦りの笑いを浮かべて。

「そっそうだろう・・そうだろうとも・・・。　さ、エレンを連れて・・・」

と、言う言葉をチャンドは遮り。

「ウルサイっ！！！」

「なっ」

驚くケウト。

チャンドは、ケウトを見据えて。

「ケウト様は、このローウェルなどと云う男などとは付き合わない。俺が受けた命令は、最後までエレン様を守る事だ。　俺の恩人のケウト様は死んだ・・・、お前は、ケウト様に良く似た悪党だっ！！！」

ギョッとしたケウト。

コルレオも、その後にケウトへ顔を上げて。

「俺も、チャンドに同じ。　ケウト様は、この様な悪党では無い。エレン様は、ケウト様の大切なご友人、最後まで守るのが俺の受けた命だ」

スティールは、この数日チャンドとコルレオがエレンと生活を共にし。　そのエレンの情け深く人思いの性格に身を触れていたのが、この行動に繋がったと思う。　エレンは、自分の傍に従い添うチャンドとコルレオの身体を幾度も心配していた。

「ぐぬぬぬぬぅ・・。　おのれっ、恩知らずめがぁぁ・・・」

唸るケウトは、何か悔しそうにエレンを睨む。

スティールは、腰の長剣を引き抜き。

「アンタ、エレンの父親を大した人物だって絶賛してたってなぁ～。
その血、エレンにも流れてるんだよ。　見方に引き入れる相手をエレンにしとけば良かったのになぁ～。　選りによって、横のそんな下衆を見込むのが見込み違いなんだよ。　アンタ、人を見る目無いゼ。　エレンの父親と、エレンを長年見て来たのにさ」

ケウトは、数歩後ろに下がる。

「ローウェルっ、どうするっ?!」

筋骨逞しい礼服の大男の後ろに着いたローウェルは、

「ダガンっ、ダガンは居るかっ?!!」

と、大声を上げる。

すると、ロビー中央の階段の側面に有るドアが開き、変わった姿の男が手勢の様な数人の男達を連れて姿を見せる。

「何だ?　ババアの殺し以外に仕事をよこす気か?」

スカート状の蒼く汚れの見える服装に、皮の胸当てを装備したダガンと云う男が声を上げる。

ローウェルは、鉞を持った下僕の大男と共に下がり。

「そうだ。　コイツ等を始末して、俺と一緒に海外に逃げてくれるか？　金は出す」

面長で、浅黒い肌の長身男ダガンは、ギラギラした目を引っ下げてローウェルの脇に来た。

「逃がさないわよっ！！！」

追う形で前に出るミレーヌ。　その脇にはアクトルが居る。

鋭く細い眼が炯炯と光り、にやけた顔に残虐性が宿るダガンは、声を発したミレーヌを見る。

「ほお～、いい女だな～」

と、ミレーヌをマジマジと上から下まで舐め回す様に眺めたダガン。

胸元の見えるミレーヌは、その鋭い眼光にも身じろぎせず。

「悪党に褒められても嬉しくは無いわね。　その内、１００名以上の役人が雪崩れ込んで来るわ。　それまで、大人しく縛に着いて頂戴」

ダガンは、ローウェルを見て。

「だとよ」

ローウェルは、ミレーヌを睨み。

「女は殺さず捕まえてくれ。　男は、全員殺していい。　女を人質

に、港まで逃げる」

ミレーヌ・エレン・クローリアを獲物の様な眼で見るダガンは、スッとうら若いメイドも見て。

「メイドまでくれるなら、５万シフォンで手を打つが？」

ローウェルとダガンに見られた若いメイドは、怯えた顔を強張らせて震え出す。　明らかに、何か有ったのか拒絶が滲んでいた。

その時だ。　スティールが前に出て。

「フッ、笑わせるなよ。　俺等をそう簡単に倒せるなんて思ってんの？　屋敷の前も後ろも役人が門を占めて守ってる。　逃げるなんて、ムリじゃね？」

ダガンは、スティールを見て。

「なぁんだ？　お前は、冒険者か」

スティールは、なるべく横柄に構えて。

「ああ、そうさ。　役人の依頼で、今回の事件の捜査を任された冒険者だよ」

「ほう～、冒険者なんざ～ヘナチョコが多いが。　・・・、お前は中々の腕してそうだな。　どうだ、俺達の仲間に成らないか？　金も酒も女も自由だぜ？」

すると、スティールは大声で笑い出す。

「ブッ・・、ぶはははははははっ、おいおい・・・じょ～だんは顔だけにしろよッ・・・。　うはははははっ、腹痛いだろうが・・・」

ダガンは、グッと顔色を怖くして。

「貴様っ、何が可笑しい？」

スティールは、鋭い目に笑みでダガンを見ると。

「力ずくで女や金を手に入れても、凄くも何とも無い。　金は身体で動いて稼ぐ、女は心で口説く、酒は人生の憂いを暈す香水みたいなモンだ。　フッ、お前みたいな輩にこの三つを語られるなんざ～冗談にしか聴こえないね」

アクトルは、横を向いて。

「キザだな～、奥歯が痒いぞ」

その時、バンダナを巻いたダガンの手下の男が、脇に身を引いたメイドの女性を捕まえようとにじり寄った。

其処に、スティールは剣を左手に持ち替えて、右手で短剣を引き抜き様に投げ打つ。

「うわぁっ！！」

「きゃっ」

火の無いレンガ造りの暖炉の前で、メイドの腕を掴み掛かった手下

の腕に短剣が刺さった。　男はその場にもんどりうって転び。　メイドの女性も、壁に沿わせた客用の椅子によろける。

スティールは、動こうとしたダガンを睨みながら。

「メイドちゃん、カーテンの方に下がってな。　もう、ローウェルじゃ飯食えないぜ」

この時、初めてメイドの女性が感情の篭る顔をスティールに向けた。

スティールは、チラリと見て。

「可愛いねぇ～、自由にしてやるから。　下がって」

と、ケウトの前に出たダガンに剣を向ける。

「アーク、ウチの大将が来る前に片付けるぜ」

アクトルも、戦斧を構えてミレーヌの前に出る。

「真打を待たないのか？」

「美味しい所、ぜ～んぶ持って行かれちまうぞ」

「それは、ちと困るな」

アクトルも、不敵に微笑む。

良い様に言われ続けたローウェルは、メイドがカーテンの方に逃げたのが気に入らなかった。　怒りに顔を歪めて、

「殺せっ、全員殺せぇぇっ！！！！！！」

ダガンが、短めのショートソードを引き抜いてスティールに襲い掛かった。　剣と剣が噛み合う音が響き渡り。　戦いの火蓋が落される。

「やっちまえっ！！！！！」

アクトルに一気に襲い掛かるダガンの手下7人だが、その豪腕から振り回される戦斧の一振りで動きを止められる。　其処に、ミレーヌとチャンド・コルレオの3人が加勢して、エレンの身をメイドの下まで引き下げたクローリアがロイムと守る。

戦いの中で、ミレーヌやコルレオ・チャンドの加勢で一気に押し返されるダガンに手下達。

「イーハン、お前も加勢しろ。　俺はケウトを連れて裏庭に行ってる。　頃合いを見て、戻って来い」

大男で、鉞を持ったモミアゲのもしゃもしゃした厳ついイーハンと云う下僕は、ローウェルの命令に勇ましく頷いてミレーヌに斬り掛かった。

スティールと斬り合うダガンは、流石に剣を遣う。　スティールの鋭い斬り込みを素早く避けて、蹴りや撲りを交えて暴力的な攻撃を繰り出す。

だが、スティールは粗方の攻撃を見切っていた。

この二人、戦い慣れているから互角に見えるが、剣術の力量はスティールの方が上である。

一方、いきなり鉞を持ったイーハンと云う大男に斬り込まれたミレーヌは、一気に後退して暖炉前に来た。　腕は互角に見えるが、その強烈な力で繰り出される鉞の重みに、ミレーヌの手が痺れたのである。

「大丈夫かっ？」

久しい戦いで、二人ずつを相手するチャンドとコルレオは余裕が無く。　アクトルも、３人をあしらいながらミレーヌを気にした。

「大丈夫よっ」

鉞を受け流して、イーハンの腰に蹴りを見舞うミレーヌはそう言うが。　蹴ってもビクともしないイーハンには梃子摺り気味だった。

その中で、エレンが自分を守るロイムとクローリアに。

「二人が逃げるわっ。　ホラっ、階段っ！！！」

ローウェルとケウトが、ケウトの連れた御者の老人と共にロビー中央の大階段を上がって行くのが見える。

魔法を人に使用したくなくて戦況を見守っていたロイムが、これに怒った。

「酷い事ばっかりしてたのに逃げないでよっ！！！　あったまキターーーーっ！！！」

杖を構えると、一歩前に出て。

「魔想の力よ、根源たるその制約の開放を求む。　イメージの契約を緩めてっ、“限界突破”（オーバーフォース）」

ロイムの眼に青いオーラの力が宿り、杖からも光が溢れた。

「魔想の力は、創造と想像の力。　その力を具現化せよっ、ランス・エクスプロージョンっ！！！」

ロイムの大声が上がり、ロイムの頭上に今までに無い大きさで、青白く光る槍が現れた。　長さだけでこのロビーの天井に届くかと思われ、その太さもロイムの身体の倍以上。

クローリアは、感情の制御が出来ずに魔法が暴走してしまう事が在るのを知っているから。

「ロイムさんっ、大き過ぎっ」

だが、ロイムの眼は一点を見つめている。

「逃げるなっ！！！」

と、2階の廊下の奥に行く天井目掛け、その大きな槍を飛ばすのである。

「のあああっ？！！！」

「なんだっ？！！」

ローウェルとケウトの頭上を通り越し、2階の天井に瞬く流星の如く飛んで突き刺さった魔法の槍。

ロイムは、グッと杖を構えて集中し。

「爆発(エクスプロージョン)っ！！！！」

念じた瞬間、魔法の蒼く光る槍はその形を瞬時に崩壊させ始め。

“バシューーーーーーンっ！！！！！”

この場の空気を揺るがす大爆音を轟かせる。

スティールは、ダガンを鋭く斬り込んで蹴飛ばしてから。轟く崩壊の音を上げて天井を壊し、ローウェルとケウトの逃げ道を塞ぐロイムの魔法を見た。

「おおっ、センセ～ど派手だねぇ～。　俺好みだぜ、エレンを頼む」

と、態勢を立て直したダガンに斬り込む。

ダガンの手下二人を戦斧の柄で叩き伏せたアクトルは、腕に切傷を作ったチャンドを見かねて。

「オラオラオラっ！！！！」

と、振り込む斧の威圧で奥に押し込んだ。

「済まん。　久々で」

激しく動き回った息の荒いチャンド。

「いいさ。　それよか、向こうを助けて、エレンを守れ」

アクトルは、コルレオの方に顎を向けた。

「解った」

棍棒を使うコルレオは、流石に腕が鈍れど実力派。　手下一人を突き崩し、態勢優位で戦って居た。

「はぁ～、魔法膨張術って初歩なのに・・・シンド～イ」

肩で息するロイムは、二重に魔法を遣ったのである。　一気に襲ってくる精神疲労に腰を屈めて。

「疲れたぁ～、ウィリアムまだ～？」

呆れるクローリアはエレンと共に、２階へ行くことが出来ずに階段の広い踊り場で此方を睨んでくるローウェルとケウトと見合った。

この時だ、エレンは。

「え？　風？」

背中に触れてくるカーテンの動きで、後ろの閉めたはずのガラス扉が開かれているのを感じたのである。

「どうしました？」

聞くクローリアに、

「風が・・・、誰か回りこんで居ませんかっ？」

「ええっ？」

クローリアは、屋敷の中は敵陣なだけに一気に緊張の度合いを高めて。

「誰ですか？　誰か居ますの？」

と、カーテンを開いた。

ロビーのシャンデリアからの明かりが差し込む。　雨音が鮮明に聴こえて、確かに窓扉が開いていた。

「あ・・・、あそこに」

エレンは、その開かれた窓扉の所の壁際に影を見た。　丸で坐って、壁に沿う人の様な影だ。

「人・・・でしょうか？」

と、クローリアが。

「・・・」

エレンは、一つ唾を飲んで。　そろりそろりとその影に近付いた。

「どうしたの？」

ロイムが尋ねる。

「誰か・・・」

クローリアが指を指した影に、エレンが近付いた。

「あ」

細かく厳しく編み込まれた麻の繊維の袋に包まれ、床に坐る老女の顔だけが見えた。　ガリガリに痩せ扱けた顔、白髪の混じる髪は艶を失ってガサガサしている。　額や髪に幾らか雨粒を着けているが。　濡れている訳では無い。

エレンは、その老女に近寄り。　長く伸びた髪を後ろにしたボロ布の服を纏う様子を首周りに眼にしながら。

「あの・・・、大丈夫・・・ですか？」

と、声を掛けた。

「あ・・あぁぁ・・・」

弱弱しい声を出し、その弱りきった女性は声の方に顔を少し動かす。

其処に、雨の外。　テラスの所から馬の“ブルルン”と云う嘶きが・・・。

「え？　馬？」

クローリアは、エレンの声に反応して。

「エレンさん、どうしましたか？」

エレンが、外に馬が居ると言おうとした時だ。　突然、老女が震える様に動いて。

「エ・・エレン・あああ・・・エレン・エレンは・・・何処？」

と、エレンの方に弱弱しい腕を伸ばす。

この仕草に、エレンも何かを感じた。

「私の名前を・・・、もっもしかして・・・お母さん？」

エレンが、老女・・・ソレアに寄った。

「エレン・・・エレンかい？」

エレンの身体に腕が触れるソレアは、２０年近く触れられなかったわが子に遂に触れたのだ。

「お母さん・・・本当にお母さんッ？！！」

エレンが、ソレアに抱き寄った。

その様子に、クローリアは驚いて。

「まぁっ、エレンさんのお母様がっ」

ロイムは、それで気付いた。

「来たっ、ウィリアムが此処に来たっ！！！」

エレンが、２０年ぶりに母親との再会をした。　そんな事など知らないで、戦う皆。

戦う者が動くロビーを、階段の踊り場から見回すケウトは、蒼褪めた顔で。

「あああああ、遣られてる・・・向こうも。　こっちも。　お仕舞いだ・・・前部お仕舞いだっ！」

と、木製の格子の手摺りに寄りかかって膝を崩す。

「諦めるなっ、ダガンの様子を見計らって厨房に逃げるぞ。　運良く、イーハンが押している。　あの戦斧を遣ってるデカイ奴がそっちに加勢した時が狙い目だ」

ローウェルは、些か冷静に状況を分析していた。

だが、其処に。

「残念でしたね。　その前に、俺を相手しなければ成りません」

と、ローウェル・ケウトの背後から若い男の声がした。

「なにっ？」

驚くローウェルの声と共に、ケウトも後ろに振り向いた。

「あっ、おっ・・お前はっ?!!」

驚く声を上げたケウトは、ずぶ濡れのままに髪から雫を落すウィリアムを見た。

「知ったヤツか?」

問う、ローウェルは、装飾美しい宝剣に手を掛ける。

「ああっ、エレンと一緒に居た若造だっ。　冒険者達のリーダーだよ」

上ずった声で言うケウト。

ウィリアムは、ローウェルに近づく。　もう、御者の老人は気絶させられていた。

「おまっ、お前っ・・・」

ローウェルは、冒険者なだけに金ずくで解決しようと誘惑を掛けようとした。　だが、ウィリアムはその言葉が出る前にローウェルの下腹部を拳で突いた。

「おぶぅっ!!」

痛みに言葉を呑んだローウェル。

ウィリアムは、感情の欠片も無い冷めた目をローウェルの眼に合わ

せ。

「薄汚い言葉を、俺の耳に入れるな」

その言葉を言ってから、素早い動きで回し蹴りをローウェルに食らわす。

「ぎゃっ！！！」

ウィリアムの蹴りを顔面に食らったローウェルの身体が、その場で回転して踊り場の床に叩き付けられる恰好で落ち。　そのまま動かなくなった。

震えるケウトは、腰を抜かして踊り場の縁を沿う様に後退りしながら。

「おま・・お前・・・俺も疑ってたのか？」

ウィリアムは、顔を少し動かして横顔をケウトに向けると。

「最初、会った時からね」

「う・・嘘だろう？」

ケウトは、最初にエレンと来たウィリアムに、何の隙も見せていないつもりだった。

「ワイン、それと塩」

「はぁッ？」

「店のワインのメニューに、不正で仕入れてたワインが明記して有りました。　それから、魚介のスープで赤い色を出す塩の料理が。　アレは、不正で輸入されていた塩でしか作られないコンコース島発祥のスープ料理」

「あっ・・出身は・・・コンコースっ！！！！」

「塩やワインは独特の物。　輸入の段階で誤魔化せても、店のメニューで誤魔化しは利かない。　何時までも客が知らない人ばっかりだと思ってタカ括ってるからですよ」

「ああ・・・」

沈んだケウトをウィリアムは捨て置き。　階段の踊り場から、分の悪いミレーヌの加勢にと飛び降りた。

「ぬぅ」

モンスターに居る醜悪で豚の顔をしたオークの様な人相のイーハンは、背後に佇むウィリアムを見つけてミレーヌから視線を外す。

「ウィリアムっ、戻ったか？」

気付いたアクトルの言葉に、ウィリアムは軽く片手を上げるだけ。

「フン」

気合の一撃、最後の手下を戦斧の柄で気絶させたアクトルは、視線の鋭いウィリアムの横顔を見て。

（アイツ・・・マジじゃないか）

アクトルは、その物静かな気配のウィリアムが怒って本気に成っているのを知る。

「ウィリアム君・・・」

立て続けに斬り込みを防いで、痺れと痛みで動きの鈍ったミレーヌが心配する。　イーハンの怪力を知るだけに、自分も加勢しようと身構えた。

「待ったっ、任せろ」

と、アクトルの声がミレーヌに飛ぶ。

ミレーヌが、アクトルを見た時だ。

「うおおおおおーーーっ!!」

咆哮を上げて歩いて間を詰めながら、ウィリアムに鉞を振り上げたイーハン。　その鉞ごと大男イーハンを見上げるウィリアム。　鉞が振り下ろされるのに合わせて、高い真上にウィリアムは回し蹴りを。

「ぐぬっ」

イーハンの鉞を持つ両腕の手首に、ウィリアムの右足がつっかえ棒の様にかみ合って二人の動きが止まった。　イーハンが、ウィリアムを押し潰そうと力を込めても、ウィリアムはビクともしない。

斜めに、横顔を見せる様なウィリアムは。

「力自慢で武器を振るってるんですか？　あっさいですねぇ～・・・。　力の掛かる場所を把握すれば、貴方の力ぐらい子供と同然に出来ますよ」

「この野郎おおおおっ！！！！」

唯一の自慢を貶されたイーハンは、鉞を引いて暴れるように振り回しながらウィリアムに襲い掛かった。

ウィリアムは、・・・早かった。　走り込んでイーハンの懐に潜ると、捻りの利いた拳の突き上げをイーハンの胸にカチ上げた。

「っ！！！」

筋肉を鎧の様に鍛えたイーハンだったが、内部に突き抜けるような痛みを覚えて後ろにヨロめく。　そのイーハンの右に飛び出したウィリアムは、イーハンの腕を掴んで、彼の背中に飛び上がる。

「嘘ぉっ？」

思わず声を上げたミレーヌの目の前で、イーハンの腕を背中に捩じ上げたウィリアムが中腰に立っていて。　驚いた顔でウィリアムの居る背中を見ようとしたイーハンの身体が、グラリと傾きフワリとウィリアムの立つ方に浮き上がった。　クルンと宙で一回転し、うつ伏せに床へ叩き付けられるイーハンは、骨の折れる音を響かせて気絶するのだった。

暗殺闘武の真髄は、無手で相手を殺す術。　身体の全ての骨を、如何なる態勢からでも狙って砕く。

ウィリアムが、決着を着ける時。

「フンっ、はっ、仕舞いだっ！！！」

ダガンの剣を弾いて、その腹部に剣の柄で突きを入れたスティールが、ウィリアムに向く。

「華麗なる登場だこりゃ～」

ウィリアムは、気絶したイーハンの傍らに降りて。

「死人ナシ。　バッチリですね」

と、スティールに食えない笑みを向ける。

スティールも、剣を仕舞ってウィリアムを指差し。

「お前もなっ」

ミレーヌが、気絶したイーハンを見下す時。

「ミレーヌ様は中だーーーっ。　突入しろーーーっ」

役人隊の到着だった。

残る仕事は、事件の真相をミレーヌに伝えて、犯人を捕まえる事だけだ。

雨の音が響く中、すすり泣いて再開を喜ぶ親子の姿を、ウィリアムもスティールも暫しそのままにしておいた・・・。

third episode（後書き）

どうも騎龍です＾＾

2日続けての更新に為ります＾＾。　ま～、もう大体は筋書きが読めてはいますでしょうが　次話が解決編になります＾＾；　長い文章に成る場合は、2話に分けますので、すみません＾人＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

third episode

冒険者探偵ウィリアム　3部

一つの事件が、幕を下ろす時が来た。　ケウトとローウェルが逮捕されて陽の明けた早朝。　霧雨が降る靄混じりの街中を、ミレーヌとウィリアム一行を乗せた馬車と、役人を乗せた馬車二台がエレンの店に向っていた。

全員、何処か疲れた印象が強い。　澄ましているウィリアムはそれほどでも無いが。　皆、一昼夜以上は寝ていない状態だ。

車内で、向かい合う個別席に座ったウィリアムとミレーヌが喋っている。

「ウィリアム君、何で・・・貴方はケウトが怪しいって思ったの？」

ウィリアムは、塩とワインの事を語り。

「エレンさんと個室の部屋に店で案内されて、メニューを見て気付いたんです。　ですが、あの時点でそれを追求しては、ケウト氏に共犯が居た場合には彼がトカゲの尻尾の様に切られる懸念が有りましたから。　それから、エレンさんに昔話をしていた内容にも疑問がありましたし」

仕切り壁の向こうから、穴の開いた壁に中腰で近寄るエレンは。

「まさか・・、あのお話に？」

ウィリアムは、ミレーヌの馬車の中が特殊で仕切られているのを見て。

「変わった馬車ですね・・・、前も見ましたが」

ミレーヌは、少し言い訳染みた様子で。

「ま～、それなりに利点もあるのよ」

ウィリアムは、丸い小窓に付く雨の水滴を見た。

「ケウト氏は、昔の話でシェルハさんとソレアさんが、エレンさんを連れて夜逃げを計画したお話をしました。　それから、シェルハさんが計画していた新しいやり口の商売。　頭の良いシェルハさんです。　ダレイと云う悪魔の耳にその話が入らないようには注意していたはずなんです。　だれもがその才を褒めるシェルハさんと云う人物が、無能と呼ばれるダレイに出し抜かれる。　その裏には、密告者が居たハズです。　それも、極親しい話し合える誰かの中に・・・」

エレンは、その話に耳を傾け。　じっとウィリアムを細かく空いた仕切り壁の穴からモザイク画の様に見ていた。

ウィリアムは、更に続けて。

「考えられるのは・・・、シェルハさんを引き止めたかったルイスさん、シェルハさんに出て行って欲しくない下僕のポルス。　そして、買収か弱みを握られてか知りませんが、シェルハさんと親密に相談し合える親友・・・。　その中で、ケウトさんの話は何処か正確過ぎるんです。　言葉の彩にすら成らないかも知れませんがね。　どうして、ソレアさんと二人で待っていただけなのに憶測と言ってもあそこまで語れたのか・・・、俺は引っ掛かりました。　輸入するだけでも難しいワインや塩と共に考えるに、彼がその密告者ではないかと思いましてね。　エレンさんを彼の元にも安易に行かせられないと踏みまして・・・」

ミレーヌが、自分を指差して。

「私の所？」

「はい。　安全で、且つローウェル邸を見張れる位置に有りましたから」

ミレーヌは、更に。

「で？　犯人を逮捕する前に、事件の現場を如何して・・・壊したいの？」

ウィリアムは、もう隠す気も無い。

「多分、ケウト氏の話や、あの浴室の壁の不自然さなど考えるに・・・、シェルハさんが殺されたのは浴室です」

ミレーヌが、眼を見張って息を飲み。

エレンが、口を抑えて後退りして席に戻る。

ミレーヌは、エレンを心配しながら・・・。

「まさか・・・」

ウィリアムは、もう全てが見えている。

「いえ、ダレイをあの浴槽で殺すのは、犯人の望みだったんです。
最愛の夫の命の奪われた浴槽で、その命を奪った相手を殺す・・・。
完璧な復讐ですよ」

その後、馬車はエレンの店に到着した。

降りた後ろの馬車の役人数名が中に入り、関係者を起す。

ウィリアム一行とミレーヌはすぐさまに浴室に向った。事件の時から、そのままにされている。ウィリアムは、入るなり。

「天井には、ステンドグラスで周りの壁は、一級石材。なのに、横の壁は安い素材・・・。何故、粘着塗料が剥がれて１０数年に一度はタイルの張替えをしなければ成らない今の形に成ったのか・・・。理由は、其処に隠さなければ成らない何かが有るから・・・」

鉄筋ハンマーを二つ持ったアクトルから、ウィリアムは一つを受け取る。そして、緩やかにタイルの壁を打って壁を壊し始めた。

「なっ!!　なんの音だっ?!!」

奥の居間から人の声がする。

「止めてっ！！！！！　壁は壊さないでっ！！！！！」

ルイスの悲痛な叫び声が・・・。

だが、西側の壁を壊したウィリアムは、タイルの崩れた下から壁に現れた黒ずんだシミと白い線状の傷が無数に付くのを見て。

「ああ・・・、酷い。　コレは・・・、酷い」

と、首を左右に振って項垂れる。

仲間の誰も、その後が意味する物が何か解らない。　だが、ミレーヌは長年の経験から、黒ずんだシミを見て。

「コレ・・・、血？」

と、壁に歩み寄る。

ウィリアムは、脇目にエレンを見た後で。

「そうですよ。　その、白い線状の無数の傷は・・・爪で引っ掻いた傷だと思います」

エレンが、ウィリアムに寄る。

「“爪”？　指の・・・爪？」

役人の制止を振り切って、

「駄目っ、止めてっ！！！」

と、悲鳴を上げて浴室の入り口に姿を見せたルイスと、その後ろに来たポルスをウィリアムは振り返って見た。

「あ・・・あああああ・・・」

壊した壁に見えるシミと引っ掻き傷の痕を見たルイスは、その場に力無く崩れた。

ウィリアムは、ルイスにゆっくりと歩み寄った。

「貴女ですね？　被害者を殺害した犯人は？」

慌しく纏めた髪が崩れかかるルイスは、呆然とするようにウィリアムを見上げた。

ウィリアムは、壁の方に指を向けて。

「あれは、シェルハさんが残した物ですね？　この浴室は、２０年近く前にシェルハさんが殺された場所なんですね？」

震え出すルイスは、顔を両手で押える。

老僕のポルスが、悔しそうな顔でウィリアムを見て。

「何で・・・何で暴くんじゃ・・。　誰も幸せに為らんのに・・・」

まだ、この老人は全てを知らないらしい。

エレンが、涙を浮かべる顔で悲しみを堪えながらに。

「ポルス、控えて。　ウィリアムさんが事件を解決しなかったら・・・、昨日で母が殺されてたわ。　私も、いずれ殺されてた」

と。

「なっ・・何ですと？」

驚くポルスに、エレンは俯きながら。

「ローウェルさんとケウトさんが結託してたの・・。　ウチの財産と店を狙って・・・。　昨日の夜、二人の計画の会話を聞いたから本当よ」

ポルスは、ルイスは此処で安全にしているから意味が解らず。

「お嬢様、ルイス様は安全ですぞ」

エレンは、否定をする。

「ウチのお母さんじゃない・・・、私の・・本当のお母さんよ」

「げぇっ、ソ・ソレア・・・さんですか？」

驚くポルスはエレンを凝視し。“ソレア”の名前が出た事で、ルイスも顔から手を離して虚空を見つめるような素振りに為った。

「昨日、う・ウィリアムさんが助けてくれたわ」

ポルスとルイスの目が、ウィリアムに移動する。　ルイスは、ガックリと項垂れてしまった。　何か、心の支えが壊れてしまった様な・・・そんな印象を皆は受けた。

全ての時間が停止した様に為った浴室から、全員が居間に移った。

ーーー

手中に収める事が出来ると喜んだ。　そして、毒殺を実行するのにルイスを選んだ。

エレンと結婚するローウェルの持て成しに何度か代理で出向いたルイス。　ローウェルは、言葉巧みにルイスを慰めて、彼女とベットを共にする間柄にしてしまった。　そして、毒殺を持ちかけて、毒を渡したのである。

ルイスも、ローウェルとは最初は半ば強引でも有ったが。　ひっそりと家に押し込められた時間が長く、２０年ぶりに女として見られた事にルイスは心を動かされてしまったのである。　ソレアの存在の事は、ルイスは知らなかった。　だが、エレンを生き人形にしているダレイにルイスも危機感を持っていた。　ローウェルが協力者に見えて、彼に心を許してしまったのだ。

居間のソファーに座るルイスは、死人の様な顔を俯けて。　壁の周りに立つ使用人夫妻や役人の目が在る中、向かい合うソファーに座ったウィリアム・ミレーヌ・エレンの３人を相手に話し始めた。

「一ヶ月前でした。　いきなり、ローウェルさんから毒を渡されたんです。　エレンを・・ダレイが殺そうとしていると・・聞かされました。　ダレイと云う人物は、自分の子供のシェルハを忌み嫌っていました。　利発で・・商才が有ると皆に褒められ事に対しての嫉妬です・・。　ですから、エレンに対しても小間使い同然でした・・。　でも、この家を継ぐのはエレンである事から、生活や服装にはそれなりに見栄でお金を・・・。　ですが、愛情など微塵も無い生活でした」

エレンや使用人の皆が俯く。　その話の内容を裏付ける様に。

ルイスは、鼻を啜り。

「私も、最初は殺害だなんて・・・。　でも、あの浴室で死んだ・・・いいえっ、殺されたシェルハの姿を思い出す度に湧き上がった憎悪が・・・憎しみが私を突き動かしたんです。　ローウェルの話では、ダレイはエレンを嫌うので早く子供を産ませろと命じていたと・・・。　二人も生めば、用は無いから始末すると・・・。　ダレイにとって、自分の血とローウェルの家柄の跡取りが欲しいのであって、その他のなにも求めていないのだと・・・思いました。　なにより・・・、シェルハが死んでから、毎晩の様に私を襲っていたあの獣っ。　私は、長年溜まりに溜まった憎しみが・・・毒を手にしてから蘇る気がしてっ！！」

ウィリアムは、同じ女の身で言葉が出なくなったミレーヌなどの代わりに。

「あの浴槽の底に、少量ですがドロっとした糖分が付着してました。　お風呂を沸かして、貴女は氷砂糖かザラメの中に毒を入れて浴槽に沈めましたね？　しかも、最後に少し浴槽の中で温度差が出来るように最後の掻き混ぜをしなかった。　中に入ったダレイ氏が、浴槽で死ぬようにする為に。　ダレイ氏は、中に入って温い下と熱い上を良く掻き混ぜた。　底に流れ出て溜まったあの毒がお湯の中に広がる。　ダレイ氏は、癖でもあるタオルを顔に乗せる行為をしてしまい、タオルや湯船から立ち上る湯気に含まれた毒の中毒で死亡した」

涙目のルイスは、苦笑して。

「丸で見たかのように言うのね・・・、っても・・正解だわ」

ウィリアムは、エレンを見て。

「ルイスさん、貴女はエレンさんが第一発見者に為ったの知って慌てた。　毒の湯気が充満する浴室です。　一応、天窓も少しずらしたかも知れませんし、小窓も開けておいた。　だが、それでも毒にやられては誰が殺害したか解ってしまう。　だから、浴槽のお湯を素早く抜く為に態と狂乱をしたように振舞った」

ソレアは、全てを見透かされたのか、急に肩を揺らす。

「うふふふ・・・っふふふ・・・。　当たり前じゃない、エレンはこの家の相続者よ。　私は、シェルハが死んだ時点で内縁の妻にされたわ。　相続権は一番最下位・・・、エレンに毒で死なれたらバレて私のこれからが台無しじゃない。　何の為に、この２０年我慢してきたと思ってるのよ・・・、自分の子供でも無いエレンを押し付けられて・・・、毎日襲われて・・・。　貴方には解らないでしょ？　この苦しみ？」

ウィリアムは、頷く。

エレンが、顔を抑えた。　今まで、母親として思っていたルイスの本心が滲み出たからだ。

（やっぱり・・、お義母さんは私の事を愛してなかった・・・）

漠然と蟠っていた思いだ。　母親としてルイスはエレンに目立つ接し方をして来た事は一度も無かったのである。

「おぉ・・奥様・・・」

ポルスが、ルイスの嘆きとエレンの嘆きを同時に知って呻く。

ミレーヌも、此処に来てこんな家族の愛憎を見るとは思ってもいなかった。

すると、ウィリアムは立ち上がる。　そして、ルイスの前に来て屈んだ。

「貴女が、取調べの時に来ていた服、随分と明るい色でしたね。黄色い色の表記には、喜びや自由の意味が含まれる。　貴女は、あの時に自由になれる事を喜んで明るい服装を選んでしまった。　ですが、ローウェルもケウトも貴女とエレンさんを生かしておく気は更々無かった様です。　特に、ローウェルはね」

ルイスの顔が、グッと強張った。　ウィリアムから顔を背ける。

ミレーヌが、後は施設で聞こうと立ち上がった。

「ウィリアム君、もう犯人と決まったから連行するわ」

泣き出したエレンに配慮したかったのだ。

ルイスは、鋭い目をエレンに向けて。

「もう、本当のお母さんが見つかったのね。　私は牢獄・・、貴女はどうなるのか知らないけど、精精元気にやりなさいよ」

と。

壁に向いたロイムは、最悪の家族の形で終わるのだと・・・確信し

た。

アクトルやスティールも嘆くエレンが可哀想である。

クローリアは、廊下に出て居た。　自分の父親も横暴で酷い親なだったただけに、エレンのこれからが悲しくなる。

役人も、移動の用意に動き出した。

その時、ウィリアムは脇に来たミレーヌを腕で阻止し。

「俺は、貴女に同情しますよ。　可哀想に」

と、済ました顔を向ける。

鋭い眼をしたルイスは、女王様にでも成ったかのように眼つきを緩めてウィリアムに顔を近づけて。

「そう、それは嬉しいわね。　なんなら・・・罪でも軽くしてくれる？」

だが、ウィリアムは視線を外さず、また声も変えず。

「元々の実家をダレイに奪われ、恋人も殺された。　ローウェルに誘われて、久々に女に成れて嬉しかったでしょう？」

慰みの言葉に毒が含まれ、ルイスの顔が俄に険しく成った。

「何が言いたいのよ・・、説教なんて嫌よっ！！」

「・・・、貴女が密告したんですか？　シェルハさんの夜逃げを？」

その言葉に、ルイスは息を飲んで眼をグッと開く。　衝撃を受けた顔だった。

「そ・・・それは・・」

口ごもるルイスに、ウィリアムは今までに無いくらいに声を大きくし。

「別の女の下に行く恋人が憎かったっ？！！！！」

ルイスは、驚いて首を左右に振って。

「ちっ・・ちがっ」

だが、ウィリアムは更に詰め寄って。

「唯一の財産の相続が出来るシェルハさんとエレンさんが出て行く事が嫌だったっ？！！！！！」

この声に、仲間一同全員が驚いた。　ミレームも、エレンも、ポルスなど使用人も。

「ちょっ、ウィリアム君っ」

止めさせようとしたミレーヌの手が肩に乗ったのを弾き、ウィリアムはルイスに詰め寄った。

「どうして逃げなかったッ？！！！　襲われる日々からっ、閉じ込

められた日々から今までどうして逃げなかったっ？！！！！！」

「そっ、それはッ！！」

責められて、ルイスは怯える。

だが、ウィリアムは更に。

「アンタが逃げれたってエレンがどうなろうと知ったこっちゃ無いだろうっ？！！！　シェルハさんの事を密告して殺させたのはアンタだろう？！！！」

「違うッ！！　私じゃ無いッ！！！　違うッ！！！」

一気に攻められてルイルスはもう如何して良いか解らなくなって感情的に否定をする様に成った。

「嘘をつけっ！！！！　なら襲われてまでエレンを育てる必要があるかっ！！！！　アンタの家は、古い商人の家。　親戚も多数居て、何処も裕福じゃないかっ！！！！」

ルイスの否定する顔が悲しみに歪み、涙を流してウィリアムの言葉を必死に否定する。

ウィリアムは、暗殺闘武を遣う時ですらしないような怒りの眼をルイスに向けて。

「じゃ何で逃げなかったああっ？！！！！　騙して死んだシェルハに対する償いかあっ？！！！！」

その言葉に、ルイスの感情が爆発した。

「違うわよおおッ！！！！！　エレンがぁ・・・エレンが可愛かったからよぉぉぉ・・・・。　最初は憎かったのに・・・あのダレイに暴力を振るわれて子供の産めないアタシにはぁ・ああああ・・・エレンだけが・・・エレンだげが本当の子供だからよおおおおっ！！！！！！」

押さえ付けて、隠そうとした心の蓋が飛び外れた。　大声を上げて喚き、ソファーに泣き崩れるルイスを、ウィリアムは平静の顔に戻って見下した。

「最後に自分だけ棄てる必要なんて無いでしょ。　殺人を犯した自分がエレンさんの傍に居てはいけないとでも思ったんですか？　あの女に汚いと有名なダレイが、貴女に食指を伸ばしてエレンさんに伸ばさない訳は無いと思える。　それに、貴女がエレンさんと仲良くしては、ダレイは家族の絆を怖く見て何をしでかすか解らない。　ずっと、その細身でエレンさんを守って来たんだ。　最後まで居てあげるんですね。　ま、長く牢屋の生活は強いられるでしょうが」

丸で、冷静なのに吐き棄てる様に言うウィリアム。

ルイスは、涙で濡れる顔をウィリアムに上げた。

すると、ルイスを見たウィリアムは、何処か悲しそうに為った。

「自分を犠牲にするもこれで最後にしましょう。　助かったソレアさんは、もう半年と生きれるかどうかの身体。　この先、エレンさんを一人にしないほうがいい。　彼女の強さなら、貴女が傍に戻っても大丈夫。　逆に・・励みになる」

「うっ・・・うううう・・・」

泣き崩れるルイスに、涙で顔を濡らしたエレンが近寄って。

「お義母さん・・・、私にはどっちもお母さんよ。　お願い、私を一人にしないでっ」

と、その肩を抱くと、ルイスがエレンにしがみ付く。

「エレンっ・・・貴女だけ・・貴女だけは幸せにっ・・・うううう・・・」

親子の姿に泣くロイムは、

「うぅ・ウィリアムってスゲ～」

母親を最後に亡くしたアクトルは、涙をダラダラ流して。

「うんうん・・・親子だ」

もらい泣きしそうなスティールは、横を向いて黙っている。

エレンは、捕まって留置所に入れられるまでルイスに連れ添う為に一緒に馬車にまた乗り込んだ。

犯人として、馬車に連れられたルイス。　ポルスも、当時を知る人物として参考人の扱いで一緒に連れて行かれる事になる。

ウィリアム達も、馬車に乗り込んだ

ーーー

0年、ダレイ氏の下に居続けたルイスさんを支えた物は何だったか・・・。　ローウェルから渡された毒を使ってまで守りたかったのは何か。　風呂場で誰が死のうと知ったこっちゃないと思わず、エレンさんが居ると聞いて狂った様に換気をしたその真意が、何か・・・。　考えれば解りますよ。　毒素が充満してる部屋に踏み込んだら、自分も危ういのにね」

「な・・ナルホド・・・勉強になります～」

頷くミレーヌ。

ウィリアムは、美しい女捜査官に横目を向け。

「ぶっちゃけて、誰か犠牲者を出した方が良かったんですよ」

「はぁ？」

ミレーヌは、眼を点に。　被害者が二人に為るではないかと思ったが・・・。

「だって、その死んだ人に罪を擦り付けられるでしょ？　毒の出所さえバレなきゃなんとでも言える」

「あっ・・・、そうね」

ウィリアムの云う意味は理解できる。　“死人にくちなし”で、死んだ人間に全てをおっ被せればいい話だ。　そうゆう意味で云うなら、エレンは過去から今に記憶の生き証拠だから、真っ先に死んで欲しい人物でもある。

「最初から、ルイスさんは捨て身だったのかも知れない。　エレンさんの行く末を見守りきるまでの・・・。　母親は、子供を守る時には鬼にでも悪魔にでも為る時が有りますからね」

と、ウィリアムは言い切った。

聞くミレーヌは、俯いて遠い記憶を思い出す。

「私の母も、病弱だが強かった。　父の仕事上、時には危ない輩に怒鳴り込まれる事も有ったが・・・。　凛として引かなかった。私が居たから、尚更父の留守を預かる気持ちは強かったと思う。父の後を継ごうと決めた私を、あの世で嘆いておられるかもしれないな。“レディには・・相応しく無い”が、母の口癖だった」

ウィリアムは、横目のままにミレーヌを見て。

「ま、いいんじゃ～ないですか？　お父さんの方は、喜んでそうですし」

ウィリアムを見上げるミレーヌは、少し笑って。

「かも。　ま～後はイイ結婚相手のみが私の願いよ」

ウィリアムは、スぅ～っと横に顔を外す。

ミレーヌは、ムっとした顔に成り。

「何で視線外すのよ」

「他意は・・・」

その二人のやり取りを壁越しに見ていたスティールが、

「おい。　俺も混ぜろ」

ミレーヌが、キッとスティールを睨むと。

「あ・・いえ。　ご存分にどうぞ・・・」

スゴスゴと身を引いたスティール。

施設に戻り、ウィリアムも入れた取調室に入ったルイスとミレーヌの事情聴取は手短に終わった。　ルイスは実行犯で、計画犯では無い。　自供が取れたので、直ぐに拘置牢に移された。

エレンには、証拠隠滅の恐れが無いので牢越しながら謁見を許す。
　ミレーヌ出来る少ない心遣いだった。

さて、ケウトの本格的な取調べをしたミレーヌは、ケウトと云う人物が凡そ紳士とは言えない人物であると解った。

「話すっ、何でも話すから死刑だけは勘弁してくれっ！！！」

取調室に入った者達の中でも、ケウトは一番煩かったし。　一番醜く、何より罪の重さを理解していないと思わせた。

ケウトは、料理人の息子ながら料理には感心が無かった。　厳しい父親から逃げて遊ぶ中、シェルハ達と付き合う一方で。　良からぬゴロツキとも付き合いが有った。　ある時、そのゴロツキの諍いが酒場で起り。　ケウトは人を刺す。　逃げたケウトの姿を見ていた

のが、何とダレイの知り合いだった。　ダレイの知り合いは、面白半分のお話でダレイに話すが。　ダレイはケウトの事を知っていて、その事を確かめてからケウトに脅しを掛けて来た。

「俺は、脅されたんだっ。　誰が、あんなダレイに懐くかよっ！！　シェルハと皆で商売したかったっ！！」

まだ雨の水気を含んだ礼服を着る髪の乱れたケウトの顔を見つめるミレーヌは。

（同じ穴の・・・。　同じね、死んだオジイチャンと、コイツは）

と、冷めた目で話を聞いていた。

ダレイの手先に為ったケウトは、シェルハの行動のあれこれを全て語った。　口の堅いシェルハだが、ケウトが尋ねてくれれば追い返すことも無い。　ソレアとの恋愛、新しい商売の事、そして・・・ソレアと逃亡する事。

ああの夜、エレンを連れてソレアと逃げる事を知ったダレイの怒りは頂点に達した。　そして、エレンをルイスに預けて部屋に閉じ込めたダレイは、その時雇っていた悪漢二人と共にシェルハを風呂場に閉じ込めて口を塞ぎ折檻を・・・。　ポルスが、一緒に捕まって折檻を受けたが。　シェルハに対するのは拷問だった。　首に縄を掛けて絞め。　窒息のギリギリ手前で緩めて暴力を振るう。　その行為が死ぬまで繰り返されたのである。

ケウトは、秘かにソレアと別れてからダレイに会い。　死んだシェルハを見てゾッとした。

そして、２０年近くの年月を経て。　まさか、地方都市の片隅で、薬を地べたで並べ売るソレアを見つけようとは・・・。

ケウトは、最初ソレアに何か見つかり難い毒を作ってもらって、それをルイスに渡す事を計画した。　自分の店で毒殺事件を起こすことは出来なかったし。　自分の手を汚すのもイヤだった。　しかし、ルイスに渡すのにはどうしても自分が手渡しする必要が在ると悩んだケウトは。　利用されているローウェルに接近を試みた。

だが、見かけ以上に悪だったローウェルは。　ソレアを誘拐し、毒薬を作らせてルイスに飲まさせてダレイを殺害し。　エレンを娶って財産を独り占めすると云う大胆な計画を考えた。　ケウトは、それによって自由を勝ち取れると乗ったのである。

手を縄で縛られ、足にも枷を嵌めるケウトは、狭い取調べ室でミレーヌに懇願する。

だが、ミレーヌは、彼を情状酌量する心を持ち合わせなかった。

さて、この事件が思いも由らない方向に動くのは数ヵ月後。

ウィリアム達が、このマーケット・ハーナスの国から居なくなった後の事だ。

ローウェルは、フラストマド大王国の辺境都市で爵位を賜っていた男とされていたのだが。　それが大きく変わった。　ローウェルは、その爵位の有る家の娘を誑かせて結婚し、爵位の地位を奪い取った男であった。　その結婚した娘と娘の父親が殺害されていて。　ローウェルには懸賞金が掛けられていたのである。

ミレーヌは、ダレイの殺人事件の解決だけではなく。　ダレイの不正の捜査で功績を挙げる。　だが、その姿をウィリアム達が見ることは無い。

ーーー

ウィリアムは、シレ～っと横を向くと。

「さて、では街中に戻りますか。　今日は、ゆっくりと宿に泊まって休みましょう」

と、仲間に言う。

「う～」

泣き顔のミレーヌは、去るウィリアムを見送って手まで振る始末。

陽も暮れかかった頃、繁華街に戻った一行の中で、スティールはメイドの女の子と共に別れていく。

「今夜は帰れない。　可哀想な子猫ちゃんをイイコイイコしてあげないとな」

呆れたロイムやアクトルは、何時口説いたのかも解らず感心すらした。

クローリアは、無言で無視。

ウィリアムは、ただ何時ものままに。

「明日は戻ります？」

人通りの多い道で、近い飲み屋を探す素振りのスティールは、

「う～ん。　解らない」

ウィリアムは、頷き。

「では、斡旋所でお金を受け取ったらこの前の宿屋に移動してますよ。　2・3日休んだら、何か仕事請けますから」

スティールは、微笑んで。

「おう。　今度は、事件はイヤだな・・・。　ま、人助けならいいがな」

と、スティールに縋る様な目つきをしているメイドの女の子の顎を擦る。

スティールは、そのままメイドの女の子と消えて行った。

ウィリアム達は、宿を探して泊まった。　風呂の有る宿に泊まって、汗を流してから繁華街の飲食店に出かける。

夜に成れば、何処の店も人入りが多い。　そんな中でも、焼肉を謳う店に入ったウィリアム一行。　肉が焦げる匂いが香ばしく、塊の肉を好みに切って墨で焼く。

ビール片手に野菜を串焼きするアクトルは、テーブルの間を抜けて歩くウエイターを見ながら。

「事件は無事解決・・・だが。　一個だけ謎が残っちまったな」

ロイムは、薄く切った肉を串で刺して炙りながら。

「何が？」

と、あどけない子供の様な素振りを見せる。

野菜ばかり食べるクローリアが。

「ウィリアムさんが捕まえて置いた悪漢の事です。　ローウェルの営んでいた店の裏手に捕らえられていたソレアさんを救い出したウィリアムの話を聞いて、役人の方々が店の納屋に行ったら捕らえられていたハズの男達二人が死んでいたと云う事です」

ロイムは、食べている最中に人殺しの話なんか聞きたくない。　顔を顰めて、

「止めてよ、そんな話」

だが、アクトルも気には為る。

「おかしい話だ。　二人とも剣で殺されていたいらしいからな」

ウィリアムは剣など持たないし、殺す理由も無い。　何よりの大問題は、あのローウェルの館で捕まえた悪党一味ダガン達は、海賊・盗賊・殺し屋を生業とする悪党集団だが、何者かに雇われてローウェルの悪事を手伝う事に為ったらしい。　ソレアを殺そうとした二人は、ローウェルが金で何でも斡旋する男が紹介した殺し屋集団の仲間二人であって、ダガン達と深い関係は無い。　誰かが斡旋したらしいのは確かだ。　だが、その事を話すダガンも、何処か口篭りハッキリと何かを言える素振りでは無く。　深い事は知って居ない素振りだった。

（刑死するのは確実でも、口にする事を危ぶむ誰かが居る・・・、事件の陰に暗躍の人影有り・・・って所ですかね）

ウィリアムは、口にせず。　疲れた皆は大いに食べて飲んで夜更けには宿に戻った。

深夜、雨雲が過ぎ去った星空の広がるヘキサフォン・アーシュエルの街中。　西側の、岸壁沿いの通りを歩くウィリアムの姿が有る。　荷物を背負っている素振りも無く。　街灯ランプの明かりも消えた暗闇を歩く。　海に近い街中は、大きな文化施設や公園が広がり。　太い通りが沿岸の岸壁沿いに延びていた

俯き加減で歩いていたウィリアムの顔が、低い落下防止の石の手摺りの向こうへ。　絶壁の先の海には、明かりを使って魚を捕る船の明かりが見える。　海に浮ぶボンワリとした小さな明かりが、彼方此方に浮んで綺麗と思える。

「大海に浮ぶ小さな炎・・・人の命みたいだ」

ウィリアムは、ポツリと呟いた。　手摺りの向こうから、岸壁にぶち当たる波の音がしている。

その時、ウィリアムの行く先。　折れ曲がるカーブの手摺りに何者かが現れた。

「やっと出て来てくれましたか。　探すの面倒なんで、早々とお願いしたかったのですが」

ウィリアムは、歩みを止めて暗闇の前を見た。

闇の中をゆっくりと歩く何者かは、ウィリアムと15歩の間合いの所まで歩いてきた。

「ほ～お、流石に俺の気配は察知してたか。暗殺者の技を遣うだけはあるな」

少し篭った野太い男の声。　ウィリアムの前まで歩いて来た男は、長身で黒っぽいマントを羽織る何者かだ。

ウィリアムは、その男から強い殺気を感じるのに微動だにせず。

「ええ、ソレアさんを助けた時、アナタは小屋の屋根に居た。　俺は、アナタに気付いていましたが、アナタの視線はソレアさんに有った。　だから、捨て置いたんですよ。　それが、仲間を殺して消えるなんて随分だと思いました」

ソレアを助けたウィリアムが、馬上から一瞬何かを見て居たのはこの男の影だったのだ。

相手の黒ずくめの男も。

「フフフ・・・、無能は要らん。　ゴミを排除したまでさ」

「へぇ、で？　今度は、俺ですか？」

ウィリアムの声のトーンが、少し低くなる。

闇の中の男は、覆面をした顔のままに。

「そうだ。　お前の協力した女捜査官も、あの店で生き残ったエレ

ンとか言う女も、お前の仲間達も殺す。　だが、一番厄介なのはお前だ。　だから、お前から」

首を傾げるウィリアム。

「ヘンですね。　一々関係者全員を殺す・・・。　仕事は破綻しましたでしょ？　其処まで仕事に含まれているんですか」

すると、男の声が少し荒っぽくなり。

「やかましい、仕事じゃない。　お前の御蔭で働きが出来なくなった。　俺達の組織は、働きの出来なかった者は始末される。　お前達を殺して穴埋めし、仕事に見合う貢献を示さねば為らない」

大声を出さないが、声には明らかなる殺気と苛立ちが込められていた。

すると、ウィリアムは俯いた。　肩を揺らして・・・、

「クッ・・クックックッ・・・、下らないですね。　破綻した仕事の手柄の代わりに、無用に人殺しですか」

長身の男は、ズルリと剣を抜いた。

「それが掟だ。　云って置くが、俺は鎧も装備して居るし。　お前の戦いぶりは見抜いたぞ」

と、勝ち誇ったかの様に言ってのける。

すると、ウィリアムは身を起こして上を向いて大笑いをし出した。
顔に右手を当て、丸で馬鹿笑いの様に。

「アハハハハハハっ！！　これは可笑しい、可笑しくて死にそうです」

長身の男が、剣を正眼に構えた。

「何が可笑しいいいい、たあーーーーっ！！！！」

長身の男が、一気にウィリアムに走り込んだ。　ウィリアムの首を狙った突き・・・剣筋の速さはスティール以上である。

だが。

「あっ」

長身の男が、小さく声を上げた。　ウィリアムは、深く腰を落して後ろに仰け反った。　突きを意図も簡単にかわして、左の足を右足一本の軸で蹴り上げてくる。

（う〝ぐぅ！！）

引こうとした右腕の肘を蹴られる長身の男。　金属のプロテクターを着けているのに、蹴られた痛みが骨に突き刺さってきたのである。

パッと数歩飛び退いた男は、力の入り切らない腕を見た。　そして、直ぐにウィリアムを見ると、其処には居なかった。

「あっ」

思わず右に視線を向けて探そうとした瞬間、左の脇にウィリアムが闇を破って現れた。　右を向いた男の左肩を突き押して、背後を見せた男の股の間に右膝を差し込むと、男の足を左右に蹴って崩しバランスを崩す。

「ぬおわっ」

後ろに倒れそうになった男の身体が、フワリと持ち上がったと思った次の瞬間。　レンガ敷きの通りに突き落とされる。　凄まじい骨の砕かれる音が幾重にも響き、長身の男はそのまま動かなくなった。
　黒い血が倒れた男の口の中からタレ流れ出す中で、ウィリアムは男の頭の横にフラリと立って見下している。

「暗殺者の技を見切っただんて、相手を殺してから云うセリフですよ」

ウィリアムは、男の遺体を崖の下に棄てた。　恐らく、身元の解らない人物である事は理解出来ていた。

そして、宿に戻る前に直ぐ脇のガラス窓が多い大型施設を見た。
3階の窓を・・・。　そして、ゆっくりと商業区の方に消えて行く。

ウィリアムの見た建物の3階で、影の様な人物が暗い部屋の中で立って居た。　美術館なのか、壁には色々と絵が掛けられている。

「アレは・・暗殺者の技か？　一瞬見えなかったが」

何処か偉ぶった口調をする男の声がする。　中年ぐらいと推察出来るハスキーな声だ。

すると、後ろから歩いて来る何者かが。

「如何にも。　本来、暗殺者は一族で営んでいると聞きますが・・・。　あの者は違う様です。“ハナレ”かも知れません」

後ろの暗闇から出て来た男性は、少し老けた声である。　もし、ウィリアムがこの声を聞いたらどんな顔をするだろうか・・・。

偉ぶった声の男が、顔を少し脇に向けて。

「“ハナレ”？」

「はい。　暗殺者の一族に属さない一人法師の様な者と云えばいいでしょうか。　暗殺者の一族の中には、殺した相手から恨まれて滅ぼされる事もあるとか。　そうゆう者の生き残りを、“ハナレ”と云います」

「ふむぅ・・・、我が仲間に加える事が出来ないだろうか・・・。　あの腕は、実に欲しい」

すると、後ろに一歩控えて立ち止まった男は。

「ムリですね。　どんな手段で仲間に加えようとしても。　逆に主の足元を脅かす存在に為りましょう。　まだ、あの若者は我等が仲間内の輪を知りません。　どうか、放って置く事をお考え下さい。　下手に手を出しても、前に現れても、主とは合い寄れぬ人間でしょう」

「・・・、そうか」

third episode（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編も此処で終り、次はポリア編を連載しつつ、小話でも入れようかと思っております＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

記憶の片隅に宿る思い～K～（前書き）

Kの旅の中では語られず過ぎ去る一場面だが。　彼を知る者がフッと呼び起こした記憶の断片。　物語の間を繋ぐ、物語。

記憶の片隅に宿る思い～K～

K編セカンド：エピローグ

「・・・・・」

曇り空の中に、途切れ途切れで陽が差し込む隙間を見せる空模様の中。　高みの窓越しにジュリアが立っている。　窓に身体を預けて、鎧を纏っていない碧き薔薇の画かれたピアリッジコートを羽織る姿は、何処かの美男剣士の様な所も含む。

（妾に・・・無理難題ばかり置いて行きおって・・・）

ジュリアの眼から、涙が流れた。

“凍眼のジュリア”

そう異名を取った冷静沈着な彼女が、涙脆く為ったのは或る男の所為だろう。　そして、その男は、今日に隣の国に旅立って行った。

もう、大手を振ってこの国に戻って来る事は無いだろう。　自分の本気の愛は、注がれる場の無いままに心の奥底に隠して行かなければならない。

ヴェルハラントモリナリスの中でも、西側の塔。　聖騎士達が詰める塔の一部屋を割り当てられていたジュリアだが、今は元自分の父

親が詰めていた場所が新しい部屋に為った。　しかも、今日はこの聖騎士から別の役職に正式任命を受けて変わる日。　だから、この今居る聖騎士の頃の部屋を片付けて出て行く必要が在り。　掃除をして荷物を移動に出した。

自分と妹の命を助け、悪しき陰謀を潰した包帯男のKは・・・。
自分の任命を受けた晴れ姿見る事も無く消えて行った。

★

あの大事件の後・・数日後。

少しずつ秋めいたクリアフロレンスの街を歩くステュアート達。
腹を押さえたKが、歩きながら唸っている。

「あぁ・・・、何で俺まで」

腹をポンポン叩くセシルは、ニコニコして。

「い～じゃない。　団体の方が賞金高いンだからさ」

細身の長身女で、エルフと人間の混血種のセシルは満足げである。

「うぷっ・・・、ケッ・・ケイさん・・・、宿まで持ちますか？」

チームのリーダーで。　小柄な好青年のハズのステュアートは、口に手を当てて青い顔をしている。

「わ・・わからねぇ・・・」

包帯を顔に巻いたKは、必死で前に進んでいる。

起伏の有るレンガ敷きの大通りの中を、ヨロヨロと歩くこの一団を見る通行人の目は様々だ。

剥げ頭の僧侶の様な長身の男性は、自然魔法遣いのオーファー。その横に苦笑顔で歩くのは、僧侶でグラマラスな美女のアンジェラ。

「だっらしないなぁ～。　男でしょ？」

セシルの脇で、吐きそうなステュアートとKを見ている少し変わった顔の美人が剣士エルレーンである。

Kは、呻く様にエルレーンを見上げて。

「うっ・・・うるへぇ・・。　お前達の方が・・どうにか成っちゃってるんだ・・。　あ・・アホだ」

と、顔を左右に振るう。

これは、一体どうした事か・・・。

朝、いつもの様に屋台巡りをして朝食を取ろうとしている時。　市内の目立つ場に立て掛けられる掲示板に、“大食い者求むっ！！！！”の張り紙が・・・。　読めば、新しく開くパスタや小料理を出す店が、広告の一環として大食い大会をやると云うのだ。　しかも、一番食べた者には賞金も出る。

「コレはちゃーーーんすっ！！！！」

元気に乗り気なセシルの様子に、同調するエルレーンが居て。　Kとステュアートは苦笑いで、傍観するつもりだったのだが・・・。
　行って見れば、個人と団体があり。　参加人数がチームの面子とピッタリ。　首根っこをセシルとエルレーンに捕まれたKとステュアートは泣く泣く参戦させられて。　死にそうな程に食べさせられた。

オーファーは、最強無比な実力を持つKが、弱弱しくなる一面にほくそ笑みながら。

「まぁまぁ、優勝して賞金１０００を貰ったのですから。　お二人の頑張り有ってですぞ」

笑っている彼を細めた目で見返すKは。

「うっ・・・うるせ・・・。　少食の俺が・・・なっ何故に・・・３人前も・・」

５０人前ほど出た中の3人前である。　オーファーや細身のエルレーンの方がもっと食べた。　アンジェラですら、見かけに由らず５・６人前は食べている。　ま、一人で３０人分ほど食べたモンスターも1名居るが・・・。

「勝った・・・唯一ケイに勝てるモノがあるっ」

嬉しそうなセシル。

ステュアートは、セシルに涙目で。

「僕を巻き込むのヤ・メ・テ～」

「フン」

セシルは、そっぽを向いて無視。　何時も仲が良さそうなKとステュアートに対する嫉妬が見え隠れしている。

しかし、ステュアートは、解ってて着いて来たKに親近感を抱いた。

この凄腕の男は、どうも何処か憎めない。

「お・・おい、何処かで・や・・休もうぜ・・・」

Kが、吐き気を覚えて言う。

セシルは、前をズンズン歩いて。

「宿までもう少し。　あるけ～歩け」

（おのれぇ・・・ツンツルお胸のツンデレがぁ・・・・）

唸る小声のKに、ステュアートが。

（そんな事言うと、お腹押されますよ）

（やったら顔に吐いてやるっ）

レンガと石の古都をなんとか歩き、宿に辿り着いた一行。

だが、夜に成ったらジュリアが迎えに来た。　宿の共同休憩所で死んでるKと集まった皆に、会えて嬉しそうな顔を見せて来たジュリアと妹のレイチェル。

“妹と久しぶりの休日を頂いたが、ロザリア様も含んで3人での休みは寂しい。　是非、お時間を貸して頂けぬか？”

夕食を共にと来たジュリアに、セシルは大喜び。

だが、まだ食べると聞いてソファーの上からKはセシルに。

「お前はバカか？　あれだけ喰ってまだ喰うのか？　喰いすぎて死んでしまえっ！　オプッ・・・大声出しすぎた・・・」

セシルは、腰に両手を当てて。

「別にケイは食べなくていいわよ。　アタシが食べる。　話し相手でもしてあげたら～」

と、言ってからステュアートに向いて。

「行こ行こっ、折角の御招きだもん～」

Kは、ホンキで頭を抱え。

「負けた・・・アレは倒せない・・・」

こうして、ステュアート一行はジュリアの屋敷に世話になり。　ジュリアとレイチェルの休日を共に過ごした。　事件の解決によって、明るみに成った真実。　子供を二人も失ったロザリアの気の落ちようは確かに心配だが、レイチェルが毎日帰る特別勤務で面倒を看ている御蔭で良くなっていた。

ジュリアは、仮の代行で嘗ての父親の職に就いたが、そのまま居る気は無かった。　また、聖騎士に戻る気で居たのだから、休暇はしっかりと取った。　寧ろ、そうゆう仕事に就きたいと意思を見せる者にどんどん仕事を回して・・・。

休日。　ジュリアはK達の下に来て、冒険者の真似事にまで参加した。　目的にKの存在が有ったのは確かだが、剣の腕を磨いてもっと俗世に眼を向けようと云う気持ちも働いたみたいだ。

モンスター退治や、掘削の崩落で現れた地下寺院の調査などをするジュリアは、仕事の疲れも見せず歓び行動を共にしていたその姿・・・。　見ているステュアート達にも、こう見ていて日々に成長していると思える程だった。

しかし・・。　一月が経ち。　ステュアートはこの国を離れる決意をした。　そろそろ、バクチで成り立つ国でカジノの祭典が行われるのだ。　間に合う様に旅立たねば為らない。

その旅立ちの日は、ジュリアを、父親の嘗ての職に正式就任させる日だった。　ジュリアは、その申し出を断ろうと思っていて、Kに相談したくステュアート達を屋敷に招いたのだ。　丁度、旅立つ２日前の夕方にだ。

夜、ジュリアはKを寝室に招いた。　何もしなくても、この男と共に寝れる安らぎは何物にも変えられない。

「ケイ・・、私は明後日の任命を断ろうと思っている。　私は、聖騎士で居ようと思う」

蒼い下着の様なナイトドレスに身を包むジュリアが、部屋に備わっ

たテーブルに就くKに向って言った。

すると、Kは。

「君の本意はそれでもいいが・・・、それではいずれこの国は混乱する。　その時、君は混乱を収拾する立場に為って苦渋を舐めるだろうよ」

その苦言の様な言葉に、ジュリアは困惑して。　Kの前に坐り。

「どうゆう意味だ？」

Kは、白い花柄の赤いティーカップを手にしながら。

「エロールロバンナの遣りたかった事は、あくまで民衆の望んでいた事だ。　この国で代々生きて来た柵の強い貴族達が望んでいた事じゃない。　君が任命されるのを蹴って、その代わりにその職に就くのはエロールロバンナの事を理解した人物か？　エロールロバンナが仮に亡くなった時、他に彼の意思を継げる貴族は？」

「そ・・それは・・・」

ジュリアは、眼を瞑った。

Kは、静かに。

「君が成ればいい」

ジュリアが、ハッと顔を上げる。

「わっ・・私に野心を持てと云うのか？」

「違う。　エロールロバンナの跡を受けて、民衆に政治を開く橋渡しをしろと云っているんだ。　君の継承を否定する者は少なく、後の混乱も少ない。　君が降りれば、後の混乱は多く、都度都度に渡って諍いが絶えない。　公爵筆頭のブルーローズが民衆に開かれた法王をする事は、他の公爵家への新たな道標を指し示す。　ジュリア、大儀を欲や偽善と履き違えるな。　大義名分を振り飾る愚か者と、遣い処を弁えた者の差は天地の差だぞ」

「ケ・・・ケイ・・・妾に、そっそんな事を言わないで・・・」

ジュリアの眼が・・・姿が・・女に変わる。

だが、Kは涼やかに。

「ジュリア、君は確かに綺麗だ。　・・・容姿云々では無く、心が。幼き頃に起った試練を必死で歩いて来た君は、汚れず・・堕ちず・・・此処まで来た。　それに引き換え、俺は真逆だよ。　逃げて・・失って・・堕落して・・・、何人の人をこの手に掛けたか・・・。フッ・・フフフ・・・死神・・・そう呼ばれる時に落ち着くのは・・自分の罪や汚れた身体に似合っているからだろうさ」

「ケイ・・・」

ジュリアは、初めて弱弱しい自虐的なKを見た。　包帯に隠したのは顔なのか・・、それとも心なのか。

Kは、鋭い眼をジュリアに向ける。

「ジュリア、俺は悪魔と変わりは無い。　何時までも綺麗な人では居られない。　俺に心を許すな、俺に現を抜かすな。　君の向う道の上に、俺の向う道は重ならない。　力は貸せる・・・道を交差出来ても・・・重なりはしない」

ジュリアは、この一ヶ月に冒険者の仕事を手伝ってKに近付きたかった。　少しでも理解し、傍に居れるならと。

「ケイっ、妾は・・・」

ジュリアの言葉を、Kは短く遮った。

「俺の背中には死霊が居る。　ジュリア・・・君でそれを拭う気は無いぞ。　君には、君の仕事が有る。　俺は、その仕事を放棄して闇に堕ちたんだ。　俺は、何れは消える人間だ、道連れは必要ない」

ジュリアは、Kがもう何者も受け入れないと決めているのを感じた。　この男にそうさせたのは誰だろう、この男の心に居るのは誰なのか・・・、先に逢えなかった自分が悔しく思える。

「・・・解った。　なら・・・今夜だけは一緒に居てくれないか・・・ケイ・・・」

涙が浮ぶ瞳を、ジュリアはKに隠さなかった。

「“最後の晩餐”だぞ？」

Kの瞳は、何時もの涼やかな物に戻っていた。

「構わぬ・・・」

そして、Kは次の日には居なくなった。

放心状態のジュリアは、ロザリアと二人で気も漫ろに昔話をし始めた。　お互いに在った事や、苦労を語る内に・・・涙が流れて来る。

だが、ロザリアも弟のエロールロバンアを拒絶しながらも、今の行いは賛成していた。　ジュリアには、その意思を継げる資格が在ると認めてくれた。　ジュリアは、意思を変える事にしたのは・・・、何時かまた会える時を願って。　彼が懸念する不安を取り除き、この国を平和に営む日々を維持できたなら。　そう・・・して行こうとするのなら、彼は何時でも自分の前に姿を見せてくれそうな・・。

　そんな気がしたからだ。　何より、エロールロバンナの身の回りに幾度も欲望で渦巻く闇が暴れて、今回は自分もその闇に飲まれそうに成った。　自分が少しでもその闇を小さく出来るなら・・・、ジュリアは法王でも何でも成ろうと決意したのである。

★

ピアリッジコート姿の涙を拭いたジュリアが、聖騎士の部屋から総括長官の命を受けて就任と成った。　ハルフロンや財務大臣の詮議が終り。　早く政治の安定を望むエロールロバンナの意思が、若いジュリアへ異例の任命として現実に成ったのである。

後に、３９の年齢でジュリアは法王に成る。　“清廉法王ジュリア”は、民衆に愛されて、民衆の中から夫を選んだ初めての法皇と成る。　長く即位し、貴族支配の緩和を進めて新しき国の理を押した法王として、数少ない“聖王列席”を崩御後に受けるのであった。

ーーー

を求め。　その暗号が記された手掛かりの紙切れ一枚を手に世界を放浪する・・・。

１４歳で天涯孤独と成ったオリヴェッティは、住んでいた仮住まいも追い出されてしまった。　冒険者として、１２歳で魔法の修行を終えた逸材なれど、宝の事を無念に思う一族の鎖を棄てる処か掴み取った彼女。

「お～い、ネエチャン。　波が強くなって外は危険だ。　夜に為るし、部屋に戻りなよ」

甲板を見回る老水夫が言って来る。

「済みません」

オリヴェッティは、雪が降りそうな空を見てから、踵を返して船室に戻って行ったのである。

２０歳に成ったオリヴェッティは、見た目はもう3歳は上に見てもいい容姿だ。　その所為で、今まで色々な目に遭って来た。　いい意味のモノよりは、悪い意味の方が多い。　孤独な一人旅が長い所為か、冒険者としてチームに加えて貰おうとすると、良く“一人狼”に間違われた。

さて、彼女の乗る大型旅客船は、全7階の６００室と云う客室に広がる一番大きい形の船である。　白い船体に羽ばたく鳥と舞い散る花が画かれ、木と金属の両方を遣った船体だ。

この船は、北の大陸と東の大陸を周航する航路で、全日程１５０日程を見込んで航海する。　基点は、フラストマド大王国の大都市で

湾岸都市でもあるアハメイル。　アハメイルを出港してからは、進路を西にして北の各都市の湾岸都市を巡って客を運び。　北の大陸の最西端でギャンブルの国の湾岸都市を離れると、東の大陸の最も北に位置する魔法学院自治領・カクトノーズの湾岸都市に向う。

「・・・・」

地下2階まで降りたオリヴェッティは、薄暗いランプの掛かる廊下を歩く。　地下4階から2階までは最も料金の安い相部屋の段々ベットが隣り合う仕切りも無い広間が在るだけの場所。　男の汗臭い匂いがしたり、酒の匂いが漂ったり。　時折、火事の原因に為る為に禁止されているタバコの臭いもする。　女一人で泊まる場では無い。　冒険者でも女性ばかりのチームは、少し高い金を払ってでも上の大部屋個室に泊まる。　身の危険を回避したり、無用な問答を避ける為に。

（おい、女だ）

（へえ、いい身体してるな）

小声で話し合う男の声が聞こえて来る。

オリヴェッティも金が有れば上に泊まる。　無いから、下に。　ギャンブルの国から船に乗り込み、もう3日。　擦れ違う男の異様な視線を受ける時もあるし、寝る時は態と音の出る小瓶をベットの前に置いたりしていた。　別に、同じ女性の姿を探せど、こんな危ない雑多部屋に泊まるのは限られる。　老婆や、怪しい雰囲気の女性、片足を引き摺る強面の年増など。

ただ・・・。

（誰・・かしら）

彼女の最大の不安は、自分の寝ているベットの前隣の客である。この3日、一度も顔を見ていない。　夜中にトイレに起きたり、少し何かするだけで寝たままの様だ。　自分は、寝る時以外は上のラウンジや食堂、何処の図書館にでも置いてある様な本の集まった図書室と、音楽や劇団の催す演劇が演じられる大ホールなどで暇を潰す。　人の多い時間は、安全なそっちに移動しているのだ。

船の2階の一部には、夜遅くまで運営されるバーやカジノハウスも有る。　残念な事に、そんなカジノなどに費やす金は無いが・・・。

廊下を一番奥の角まで行った彼女。　そこに在る2段ベットの下がオリヴェッティの寝床。　隣は、足を向ける方と、壁に面した前隣。　足を向ける方のベット一つに客はおらず。　自分の寝る上も居ない。　唯一隣接しているのが、前隣のベットの下なのだ。

（寝るまでは、上に居よう・・・）

肩に羽織るマフラーを取りに来ただけのオリヴェッティだったが・・。

「んぐぅっ・・・・」

それは、一瞬だった。　自分のベットの前に立ち。　ベットに掛かるカーテンを開こうとした時、いきなり口に何者かの手が掛かり。　そして身体を抱きすくめられた。　心が凍り付く瞬間、耳元に人の息が掛かり・・・。

「・・・・」

小声で声が・・・、眼を見開いたオリヴェッティは、そのまま前隣のベットの下の段に吸い込まれる様に消えて行った。　薄暗く、等間隔で吊り下げられたランプは、油が悪い物なので炎が弱い。　薄暗い明かりの中で、誰もその様子に気付く者は居なかった・・・。

それから少しして。

「おい、マジで女かよ？」

「おおっ、この下に若い女が泊まるなんてそうそう無い。　もしかしたら、夜の女かもしれないぜ」

「じゃ～、遊べるか？」

「かも」

小汚い恰好をした冒険者風の男３人が、ニヤニヤと顔を笑わせて遣って来た。　冒険者の類には、何でも強引に押し通そうとする輩も居る。　暴力的な者も居る。　そんな輩が、オリヴェッティの寝るベットの前にやって来た。

「此処か？」

「ああ、寝てるみたいだ」

「好都合じゃね～か。　殺さなきゃいいだろう」

“身を何時洗ったのが最後か”

と、問うなら。　呆れる様な答えが返って来ると思える男達。　その中でも、垢染みた顔に毛虱の動く髪を振り乱した男がベットを隠すカーテンを引いた。

「あ・・・・？」

3人は、目の前の様子にボー然とする。　そこには、顔に包帯を巻いた痩せ型の男が寝ていたのだ。　その男は、包帯の間から覗ける瞳を開き。

「何だ？　ふあああ・・・、人の眠りを妨げて、何か用か？」

3人の中で一番背の高い男が、イラつき始める眼をギラッと光らせ。

「おい、此処に女が寝てたろう？」

すると、包帯を顔に巻いた男は片目を上げて。

「お前等に何の関係が在る？　こんな所で問題を起せば、船の上から棄てられても文句は言えないゼ？　この船の船長は、泣く子も黙るって異名をとるクラウザー・ウィンチ。　女子供に手を出して、黙ってるひ弱者じゃない。　アンタ等、黙って回れ後ろした方が身の為だぞ」

3人の小汚い冒険者達は、その船長の名前を聞いて目を見張る。　元は大船団を率いて船長をしていた荒くれ者の頂点に立った男であり。　年老いて旅客船の船長と為っても気炎を吐き続ける“海の兵”とも呼ばれる男だ。

「おっ、おいっ。　クラウザーはやべえって」

「あ・・・、知れたら海に棄てられるぅ。　俺、前に聞いた事在るっ」

「やっ・・やめるか・・・」

「ああ、そうしようぜ」

男達3人が、訝しげに包帯を顔に巻いた男を返り見ながら暗がりの中を去った。

「もう、出て来ていいぞ」

包帯を顔に巻いた黒ずくめの男が、足を下ろして前隣のベットに声掛けると・・・。

「あっ・ありがとう・・・」

オリヴェッティがカーテンを開いて顔を覗かせた。

包帯を顔に巻いた男は、指でジェスチャーしながら。

「交替しよう」

ベットを移り変わったオリヴェッティは、包帯男に震えた声で。

「何で、助けてくれたの？」

包帯男は、ベットに横に成る途中で動きを止めて。

「助けない方が良かったか?」

「あっ・・いえ・・そうじゃなくて・・・」

俯くオリヴェッティに、包帯男は気の無い声で。

「女の一人旅は危険だ。　理由が何にせよ、冒険者としてチームでも組んで移動しろよ。　斡旋所で相談すれば、主が口利きしてくれる」

すると、オリヴェッティは力の抜ける腰をベットに落としながら。

「口利きのお金無くて・・、何チームか相談したんだけど、変な条件ばかり言われて駄目だった・・」

寝る態勢に入った包帯男は、ぞんざいな言い方で。

「見た目が生じイイからな。　だからだ。　ま、駆け出しの冒険者でも集めてチームでも作れ。　もし、変な男に絡まれる様なら船長室に駆け込めよ。　クラウザーは、見てくれは海賊みたいなジジイだが、中身は紳士だ」

オリヴェッティは、その包帯男が不思議な男だと思った。　何処か捌けて居ながらに、何処か優しい雰囲気を持っている。

「あのっ・・・あの、貴方は・・・冒険者?」

「まあ、学者だな。　薬師の知識も有るが」

（“学者”・・・）

オリヴェッティは、魔法の修行を終えて学者の知識も積みたかった。
だが、嘗ての自分の屋敷に有った膨大な書物は、借金の形に全て取られてしまった。　無一文に近い生活と成った彼女が読める本は、街の図書館の本のみ。　自分の知識では、ヒントの紙に書かれた文字の意味を読み解けないと思っている。　今まで何度、学者と云う冒険者へ紙に書かれた文書を見せて来たことか・・・。　その先々で騙されて襲われたり、冷たくあしらわれたり・・。

「・・・」

躊躇うのは、今までの無駄な過去がぶり返すからだろう。

だが・・・、

「ねぇ・・、ロヴハーツ家って知ってる？」

オリヴェッティに背を向けて寝た包帯男が、闇の中で少し頭を上げた。

「ん？　あの、没落した学者一族か？　伝説の秘宝を追い求めて、道半ばに消えたって言う・・・」

（知ってるっ！！　この人、知ってるっ！！！！！）

没落した事を知ってる者は多い。　だが、失われた秘宝の事まで知ってる学者に今まで会った事が無かった。　オリヴェッティは、心の魂が震えた。

「ねぇっ、これから上でお話しない？　私、その一族なの・・・」

包帯男は、グルンとオリヴェッティに身体を向けた。

「探してるのか？　秘宝を・・一人で？」

オリヴェッティは、包帯の間に覗ける瞳を見て頷いた・・・。

記憶の片隅に宿る思い～K～（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K編は、この先は少し間を置く事に為ります。　登場しない訳では在りませんが、視点としてK本人の視点ではない物語と成りますので。　此処で、ステュアートのチームから、次の新たなKのお話に繋ぐ物語をショートで掲載しておきます。

ご愛読ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・上編（前書き）

Kが、ジュリアと別れて、ステュアート達とギャンブルの国に渡ってから、一年後。　一人で彷徨っていたKが、オリヴェッティと出会う。　だが、その間に様々な事が起っていた。　特に、ポリアにとってこの一年は個人として、チームとして羽ばたくと共に激動の一年と為る。　その入り口が、此処に綴られる。

ポリア特別編サード・上編

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）

ポリア編プロローグ

ポリア達が名を馳せる中で、幾つかの大きな事件を経験する。　Kと会った事件もそうなれば、他にも幾つもの・・・。　その中でも、この事件は公に為っている部分と為っていない部分に大きなアンバランスが生じ。　ポリア達だけの手柄と為っている事件だが、その裏で交錯した人々の記憶には、何チームもの冒険者達が居合わせた事を刻み付けているに違いない。　そして、口には語れぬ事も多い。

★

スタムスト自治国に半年近くも居たポリア達は、すっかり有名人に為っていた。　2度目の合同チームを経験した首都を始めに、スタムスト自治国の大きな都市は全て巡って幾つか仕事をこなして回る。

チーム“ホール・グラス”が有名に成り、別の有名チームの挨拶を

受けるように為った。

世界を放浪するチーム“デラシネアス”（根無し草）。　リオン王子がリーダーのチーム“スターダスト”　通称モンスターキラーと異名を取るチーム“バヴロッディ”　更には、後に非業の死を遂げるチームにも出逢った。

中でも一番驚いたのは、“スカイスクレイバー”（摩天楼）。　世界最高のチームとも出逢ったのだ。　だが、意外に驚いたのは、挨拶を受けた最初だけ。　やはり包帯男Kほどのインパクトは、世界最高峰のチームにも無かった。　何よりポリアが、シェラハの事件で出遭ったガロンの殺された死体を発見したのがこのチームだと聞いていただけに、その姿をスカイスクレイバーのリーダーであるアルベルトに聞いた時の事。　世界最高の天才剣士と言われた男が、ポリア達が居るその場で敗北宣言をしたのだ。

“あんな芸等は私でも出来ない。　神の領域だ”

そう語るアルベルトは、絶望的な顔色だった。　世界に負けない自信を持っていた彼だけに、到底到達出来ない技量を風来坊の様な者に遣られては・・・。

だが。　スタムスト自治国で冒険を続けるポリア達のチーム内にも変化が起こり始めた。　ある時期からだが、他の冒険者達持て囃されるポリアの名前にダグラスが嫌悪を示し始めた事である。　時々、チームとして“いい迷惑”と言いながら。　ポリアを持て囃す者達に鋭い視線を投げる事が多く為った。

新たな出会いと、幾多の仕事を切り抜けて。　ポリア達は、7人のチームとして最初の冬を迎えた。

「寒過ぎるぅぅぅ～～～～～っ！！！！！！！！！」

★

薄暗い夜明け頃の様な空模様が天に広がる雪原の真っ只中で大声を上げたのは、ダグラスだ。

年末、“星の月”に入ったスタムストは、もう雪が毎日の様に降る。

今。　チームは、ハラハラと雪が舞い散る雪原が彼方まで広がる高地を歩いていた。

「スッゴイ雪だわ～、一面銀世界」

白いマントを羽織り、顔までスッポリとフードで覆ったポリアは、疎らに木々が点在するだけの雪原を見て感歎を込めて言う。

ガチガチと歯を噛み合わせるダグラスは、ポリアが意外に寒さに強くて驚いている。　マルヴェリータやシスティアナは、余りの寒さに言葉が出ないのに。　ポリア・ヘルダーは至って元気である。

ポリアもヘルダーも寒い冬を毎年経験して生きていたのが如実に現れている様だった。

黒いマントのゲイラーは、大きな体のクセにか細い声でポリアに。

「ポ・・ポリア。　古都シュテルハインダーまでは後どれくらいなんだろうか・・・。　凍死しそうだゼ」

先頭にて、膝まで積もった雪を掻き分けて進むポリアは、手付かずの広大な雪原と山を遠くに見ながら。

「えっ？　あ～・・・多分、あの山越えればじゃない？」

ゲイラーは、この広い丘の先に見えている山を見て、ポリアが嫌がったのに行きたいと言った自分達に怒鳴りたかった。

（俺達のバカ野郎・・・）

2日前。　スタムストの北東。

州の集まるスタムスト国内でも一番大きい州の都市に居た一行は、仕事が減ってきたので移動しようと云う相談をした。　ポリアは、色んな国に行って見たいからとホーチト王国に戻って、船で西側に移動しようと提案。　Kの消えた方だと思われる神聖王国クルスラーゲに行きたいと・・・控えめに言う。

しかし、スタムスト自治国と右隣のフラストマド大王国の境に有る山岳地帯のド真ん中には、国境都市シュテルハインダーが有る。この都市は、世界でも異色な経歴を持つ都市として有名だった。古い石造建築と宝石の文化を色濃く残した所で、世界の極選名所にも選ばれる有名な所なのだ。　雪の降る時期は止めようと云うポリア・イルガ・ヘルダーに対し。　風情が有る今の時期に行きたいと言い張った残りの4人だった。

そして、事態はポリアの懸念した通り大変な旅である。　ヘルダーが毎日夕方に為ると、男手と共に雪倉と云う雪で作る小屋の寝床を作ってくれる。　野晒しで寝る事の無い状況を作ってくれているからまだいいが。　大雪で、街道の夜営所も見えないし、森も半分雪

に埋まっている様な感じだ。　他の旅人も難儀して戻る人が多いと云うのに、大した用も無いのに雪の中を旅をしているのがアホらしく思える。

吐く息が長く白く、困難な旅を希望した４人は口数が異常に少なく為った。

「システィ、大丈夫か？」

ゲイラーは、無言のシスティアナを気遣う。

「だいろ～ぶデス～」

特に元気の無いシスティアナ。　それもそうだろう・・・。　旅の初日に大はしゃぎしたシスティアナは、雪を丸めてゲイラーやダグラスとぶつけ合って遊んでいた。　雪の中で遊ぶのは、意外に全身の筋肉を遣う。　普段大して動かないシスティアナは無論、使ってない筋肉を使うから３人は筋肉痛に成り。　システィアナは、それが一番酷い。

ポリアは、そんなシスティアナを気にしてはいるが。　自業自得とも言える。

そんなこんなの雪の中の山越えは７日に及び、高い山脈地帯で雪の中に埋まった様な古代高地都市シュテルハインダーに到着した頃。
　チームの男達は髭が伸びて、更に雪を付けた雪男みたいになっていた。

「・・・風呂・・・入りたいな・・・」

と、呟く生気も失せ掛けたダグラスは、山道の斜面で2回も滑って崖から落ちそうに為り。

「ああ・・、美味い酒があれば生き返る・・・」

と、ボ～っとしたゲイラーは、2日前に雪の中で熊のモンスターに襲われた。　だが、粉雪の塊を被ったゲイラーと白い熊のモンスターの区別が皆付かず。　殆ど一人で戦ったのである。

「ああ・・、フラストマドの領地に踏み込みましたな」

感慨深いイルガは、何度雪に没して這い出れなくなったか・・。彼が生じ背が低いだけに、一度埋まったら大声で叫ばないと埋まっている事に気付かない皆。　一度、見棄てられそうになったイルガは、生まれて初めて泣きそうに為って助けを叫んだのである。

山は、例年以上に大雪が降った様だ。

この広い世界の都市の中でも、この街ほど水に恩恵を与えられているのも珍しい。　古い巨大な岩盤を刳り抜いて作られた都市は、雪の都市。　雪原から都市に入って、石造建築の街並みを歩くヘルダーは、直ぐにポリアの肩を叩いた。

「ン？」

湯気の上がる底の浅い水路を左右にした広い大通りを歩く中で、ポリアはヘルダーに向く。

「・・・」

ヘルダーは、水路が湯気を上げる様に見える所や、大通りに雪が殆ど無いのを不思議がって見せる。

「うん。　此処シュテルハインダーは、物凄く温泉が有名でね。夏は、都市に張り巡らされた低い水路に雪解け水を流して都市を冷やし。　冬は、温泉を流して都市を雪に埋まらない様な工夫がされてるの」

マルヴェリータが、遠くの樅の木越しに雪下ろしをしている家々を見て。

「み～んな雪下ろししてるわ。　直ぐ溶けるの？」

ポリアは、フードを取って雪の様に白い肌を見せた。

「ええ。　各家の脇には必ず水路が有って、そこに落すの。　雪の解けた水は、下流域の川を凍結させない為に川に流し込んで川の水量を保たせるの・・・。　懐かしい、御祖父ちゃんに色々教わったぁ～」

ゲイラーは、ポリアがもっと南の首都の出身と聞いていたので。

「ポリアの家の縁は、此処か？」

「・・・・」

答えないポリアは、この仲間とは行き着く先までチームを組みそうだから、そろそろ本当の事を話してもいい様な気がしている。

また、知らないながらに、ゲイラー・ダグラス・ヘルダーもポリア

には高貴な貴族の香りを感じ始めていた。　どんなに森の奥に行って汚れても、天候の悪い日が続く旅の中でも、戦い続けて傷だらけになっても、ポリアには消え失せない気品と美しさが有ると思える時が何回も有った。

“自分達とは何か違う”

そう思えた。

ま、イルガと云う従者が居る上に、“お嬢様”と呼ばれていて。更にそこいらではお目に掛かれない名剣まで持っているのだから、解らない方が鈍感だろうが。

雪に強い木々が植えられた並木は、通りに沿って雪化粧している。
　一行は、ポリアが街の地理に明るいので任せ。　中心地の繁華街に向った。

≪日々、精進≫

古都シュテルハインダーの朝は、非常に遅い。　極夜が続く冬は、曇りの日も多く。　一月（ひとつき）が５５日と云う暦の中、厳しい厳冬の中で３ヶ月以上にも及ぶ極夜の時期が続く中、陽の見える晴れ間が見ら

れるのは２０日と無いだろう。　深々と降り続く雪の中、ポリアとその仲間は都市中央の寺院脇に建てられた黒い館に居た。

【古代都市の囁き】

そう名付けられた斡旋所。　だが、真冬に為ると仕事を斡旋する場と云うより、仕事に焙れた冒険者達が金が無い為に行く場無く屯する集会所の様な所に変わる。　一階は広く大きな酒場で、格安の料金で様々な物が食べられる。　地下１階と２階は、雑魚寝の寝床だ。　石の床なれど、温水の通る床は常時暖かで、寝るだけなら真冬の冷たいベットよりイイと云う冒険者も居る程だ。

さて、斡旋所の本来の仕事をしているのは、３階と４階。　３階は一般依頼で、４階は特別依頼。　３階は、円形のだだっ広いフロアで、受付が奥にポツンと有る以外は、張り紙がピッシリ張られた掲示板が犇く。

「さてと、次は何しよっかな～」

ポリアが仲間とガラガラに空く３階フロアで、掲示板と睨めっこして仕事の品定めをしていた。

奥の受付カウンターから、初老の太った女性がポリアに。

「し～っかし、アンタ等も元気だね。　この真冬に、駆け出しの仕事を幾つもこなすなんてさぁ～。　“ホール・グラス”って言ったら、最近一番有名に成ったチームだよ？　上の特別依頼の所にでも行って、高額の仕事でもすればいいのにさ」

声も呆れ調子ながら、その顔も呆れている。　テーブルの上に肘を

付いて、ノンビリとポリアや数人の別チームを見ている初老の女性。

ポリアは、微笑み。

「だって、仕事こんなに有るのに、誰もやらないなんて詰まんないじゃない。　凄い冒険って、仕事の大きさや金額だけじゃ無いわ」

「・・・」

女性の主は、ポリアに目を向けっ放しに為った。

ゲイラーやダグラスも、ポリアと組んでからこの意味を理解した。

依頼の内容がどうこうより、その依頼をどうゆう形で成功に導くか・・・。　その内容がチームの名前に箔を付け、徐々に広がって行く。　駆け出しの様な仕事でも、一般依頼の中には突発的だったり、波状的に思いがけない進展を見せて難解且つ難易度の高い仕事に成る事も有る。　そうゆう依頼に対応出来る程に、特殊な依頼や仕事に対応出来る行動が身に着く。

ダグラスが、ボケ～っと張り紙を見ながら。

「つ～か、一般の依頼ってさ。　要領を覚えると、デカイ仕事より稼ぎ易いよな。　一日で片の着く仕事が多いし。　回転的に幾つか受ければ、元手要らない仕事多いから報酬の殆どが懐行き。　数回こなせば、一人１０００以上は楽勝でやんの」

近くで、マルヴェリータが腕組みしながら。

「“効率良くやれば”でしょ？　回転的って、回し飲みじゃないんだから」

「どっちでもイイ～」

最近のダグラスは、もっぱら飲み代を稼ぐ事しか頭に無かった。
この所、どうもポリアやマルヴェリータに素っ気の無いダグラスである。

ポリア達がこのシュテルハインダーの街に逗留して、もう２０日近くが経っていた。　行方不明者捜索や、学者・魔法遣いの依頼で図書館に篭ったり。　小金を稼ぐ仕事は幾つも有った。　焙れている冒険者達は、デカイ仕事を夢見ているのかモンスター退治や遺跡調査の仕事ばかりを待って何もしない。

２０日間でポリア達がこなした仕事は、全部で１３。　もうチーム“ホール・グラス”は、この斡旋所でも名前が売れた。

このシュテルハインダーの街でポリア達が仕事を請け始めた頃だ。
一階の酒場で、ポリア達を見かけた冒険者の一人が鼻で笑い。

「はんっ、名前の売れたチームって言っても、駆け出しとかばっかりやってるチームかよ。　ただ成功率を良くする為に、楽な仕事を選んでるだけじゃないか？　あんなの、実力の有るチームじゃないな」

と、言った。　スタムスト自治国に居た別の冒険者が、ポリア達を見て周りに言った聞えのイイ噂が立った為に、この冒険者は僻んで言ったのだ。　昼間から酔った冒険者の中には、その言葉に同調する者も居た。

だが。　実際にポリア達のこなした仕事は、そんなに甘い仕事ばか

りでは無い。　日に日に、その仕事の噂が舞い込んで来る様に為る。

ある依頼で、行方不明者を探す中。　嗅ぎ付かれる前にと襲って来た殺し屋と冒険者の集団を返り討ちにして、誘拐された人を助けた事や。　毒を作る方法を探していた魔術師の殺人計画を阻止したり。　夜な夜な現れる亡霊を鎮める傍ら、その亡霊を産む切っ掛けに成った悲恋を解決したり。

その噂が２０日も経つと、冒険者達の間ではポリア達を褒める内容しか噂が出なくなってしまった。　話題に毎日上がるポリア達に、諂って媚を売る者も出始めたが。　肝心のポリアは相手にしなかった。

さて。　そんな、ある雪の舞う夕方だった。

「フウ～、終わった～終わった」

勢い良くドアを開いたダグラスが、大きな斡旋所の館の中に足を入れた。　頭の雪は払い落としたものの、髪の毛が濡れて湯気が立つ。　入って直ぐに、一階酒場の彼方此方に火が灯る暖炉に向かった。　知れた顔に為った屯組の冒険者の男が、ダグラスに向って。

「ま～た仕事して来たのか？　成功か？」

震えるダグラスは、暖炉に当たりながら。

「ああ。　ど～やら地下水路の奥底に湧いたモンスターが湯詰まりの原因だった。　退治したから、春までは大丈夫だろう。　事件絡みか、大きい水路に人の死体が在ったみたいでな、それを狙ってモ

ンスターが入り込んだ様だ」

コップに残る様な少量のビールをチマチマと舐める屯組の冒険者は。

「お仲間は？」

「ポリアと数人は、先走って怪我した役人を病院に運んでる。　俺と他二人は、役所に報告をして戻って来た。　戻った他の二人は、外で斡旋所の主と立ち話してるゼ」

この斡旋所は、夫婦で営んでいる。　奥さんが一般依頼の仕事を切り盛りし、旦那は特別依頼と厨房を管理していた。　薪を取りに外に出ていた主人と出くわしたゲイラーとイルガが話している。

その後にポリア達も戻って、揃って報告したのは真っ暗になった夜だ。　極夜なので、夕方には真っ暗に成ってしまう。

さて。　一般依頼の受付カウンターで報酬を受け取った後だ。　少しやる気の無い顔を何時もしている主の女性が、報酬を分け合うポリアを見て。

「処で、アンタ達。　一つ変わった仕事（ヤマ）をヤル気ないかい？」

ポリア達は、これから外の飲み屋にでも行こうと話し出した所でこう言われて、全員が黙った。　リーダーのポリアは、主である女性の前に進み出て。

「“変わった”・・って、どんな仕事？」

「明日、上の特別依頼の方に行って欲しいのサ。　依頼の内容は良

く解らないけど、遺跡探索の護衛をして欲しいンだとさ。　先方サンのお話だと、よこす冒険者に条件つけててさぁ～。　信用出来て、腕の立つ冒険者が欲しいらしい。　今、この下で屯してるのは、見かけの威勢はいいがね。　イザと成ったら依頼主ですら見捨てそうな奴等さ。　おいそれ、誰にでもイイって仕事じゃないみたいだし・・・、どうだい？」

ポリアは、頷きを見せながら。

「解ったわ。　明日、話を聞いてみる。　出来そうも無い仕事を請けてもしょうがないけど、一応は聞くだけでもね」

ポリアは、Kと云う偉大過ぎる冒険者を見ている。　彼に近付く事は出来ても、同じには成れないと解っていた。　出来ない事を、さも出来る様に振舞って遣る事はイヤだった。　だから、謙虚にこう言って置いたのだ。

その夜、ポリア達は少し良い宿に泊まって寝ていた。　毎日、頭をフルに使って時には危険に対処する。　この雪に閉ざされた街の中でも、ポリア達は充実の日々を送っていた。

そして、次の日。

朝、まだ暗いがもう商売をする人々は起きて仕事に向かう頃。

「ふああ～・・、こうも暗いともっと寝たいのは俺だけか？」

眠そうなダグラスが、気温差で水煙が煙る公園の池の縁に坐った。

噴水も持つ池だが、今の時期は停まっている。

ポリア達は、古い石で出来た公園広場の彼方此方に停められた屋台を巡って朝食を買い込む。

「ポリア～、きょう～のお仕事ってなぁ～にぃ～？」

隣を歩くシスティアナが、ポリアの腕の袖を掴みながら聞いて来た。

「なぁ～んだろうね～。　遺跡調査の護衛とか言ってたけど」

噴水の縁に腰を降ろしたポリアが、ダグラスにパンとハムを包み紙ごと渡す。

「悪い・・、でも護衛か・・。　もしかして、まぁ～た雪の中を何処かに行かなきゃならないのかね～。　クソ寒いのに、街の外には出たくないな」

ゲイラーは、鼻水を啜りながら。

「でも、こ～んな時期に調査ってなぁ～」

イルガは、ヘルダーと買ったパンの具を分け合いながら。

「もしかしたら、今でなければ為らぬ事かも知れぬぞ」

マルヴェリータは、朝に弱い。　生気も失せた肖像の様な顔で。

「気温・・雪・・・水・・・う～ん。　冬に、何か関係するのって・・・何かしラ～」

と、ボ～っとしながら陶器の器に入ったミルクティーを飲む。

寒い朝、まだ夜明け前の様な暗さながらも公園を行き交う人は多く。
残飯を貰いに鳩や野犬・野良猫がうろついている。　考えて解る事は無く。　7人は直ぐに斡旋所に向かった。

斡旋所に行くと、旦那である主に迎えられた。

「いや、本当に助かる」

夫婦の旦那の主は、ノッポで色黒。　剥げ頭にニットの帽子を被り、厚手の重そうなコートを羽織って外で薪を割っていた最中だった。
館の裏庭で、雪が残る芝生の上でポリア達7名は話を聞いた。

「実は、この街の古い歴史研究をしている学者で、市街統括も歴任した事の有るオッペンハイマー様と云う侯爵さんが居る。　その人が、友人の学者さんと二人で市街地の向こうに在る遺跡に行きたいらしい。　その護衛を兼ねて、遺跡調査に同行して欲しいんだ」

説明を受けて、皆はリーダーのポリアを見た。

するとポリアは、意外なまでに即答に近い様子で。

「請けるわ。　直ぐにオッペンハイマーさんに面会するから、仕事の受付をして」

あまりの速さに、皆はポカ～ンとしてしまった。

だが、イルガだけは俯いている。

（ああ・・・、ワシは・・・・）

≪特別な仕事は、チョー特別≫

胸元から引き裂かれたドレスの様な形をしているシュテルハインダーの街。　街を斜めに切り裂いた様に切れ目を入れて流れる川が、世界一の大河に繋がってゆく。

さて、例えるならドレスの右の胸部分に当たる場所に斡旋所やら宿などが犇く商業区が広がるのに対して、左の胸の辺りに広がるのが住宅区。　貴族の住む場所も一般人の住む場所も混同する為に、石造建築の家が犇く傍らに、広大な土地を有する屋敷が有ったりする。

ダグラスは、身形の良い貴族が歩いて出勤し。　しかも、一般人と普通に挨拶をしているのには驚いた。

「なんだ此処・・・、貴族が歩いてるし」

先頭を行くポリアは、雪の踏み固まった上を気を付けながら。

「雪が多すぎて馬車の通れる道が少ないのよ。　それに、貴族だっ

て歩いて普通。　バカじゃないなら挨拶ぐらいはするわ」

この二人の意見の違いは、それぞれの生き方の場が違っていて、偏見や見て来た世界の違いである。

ポリアは、地図も貰わず場所の説明も受けずにオッペンハイマー氏の屋敷に来た。　まだ、昼にも為らない頃に。

赤いレンガ造りの大きな屋敷。　雪が雪原の如く広い庭に降り積もって純白の風景美を魅せる。　洗練された青い蔦をイメージに作られた格子の壁に囲まれた広大な敷地が、そのオッペンハイマー氏の物だった。

ポリアは、門の前に立つと。　敷地内の通行路の雪掻きをしているズングリムックリの中年男に声を掛ける。

「フロマーっ、フロマーーーッ！！」

ゲイラーは、いくら使用人相手でも何で名前を知ってるのかと思うからビックリ。

「あ゛？　名前を知ってるのか？」

イルガは、もうヤケに為った笑い顔で。

「ああ、知っとるともよ」

幅の広い燕帽が少し綻びを見せるその使用人らしき男が。

「ぁ？　誰さだ？　オラの名前を呼ぶのは・・・」

と、門の前に箒を片手にやって来た。

ポリアは、その男に笑顔を見せて。

「フロマー、お久しぶり。　叔父さん居る？」

ブラウンヘアーを帽子から零し額に掛けるその使用人は、ポリアをマジマジと見てから“アッ”ッと驚く顔に変わった。

「あんれま～っ、ポリアンヌ様でね～かよっ！！！」

ポリアも気付いたと解り、顔色を微笑ませて。

「久しぶりね。　前に来たのは・・・、４年前かしら」

フロマーと云う使用人は、急に顔を喜ばせては急いで門を開く。

「はあ～、キレ～に成ったですね～・・・ポリアンヌ様。　おろ？　イルガさんも一緒じゃね～べか？」

イルガは、ポリアの脇にて。

「久しいの」

と、頭を下げる。

「ささ、我が主もポリアンヌ様の顔を見たら歓ぶさ～。　どんぞ、どんぞ入ってお屋敷に」

ポリアは、フロマーの横に着いて敷地内に踏み込んだ。
代わって、イルガの脇や頭上には仲間達が顔を寄せて。
“ど～ゆう事？”
と、言わんばかりの表情を向ける。
イルガは、黙って前に進むのも気が引けて。
「ポリアンヌとは、お嬢様の正式名の一部だ。　それから、オッペンハイマー様は、ポリアお嬢様の母方の叔父に成る。　お嬢様の御母上様から見て、弟に為る方だ」
「ああ・・、そうなのね」
歩き出すイルガと敷地に入るマルヴェリータ。
「おじおじさ～ん」
システィアナも、ポリアの家柄を知っているので共に行く。
理解しながら取り残されたのは、後から加わった3人。
腕組みのダグラスは、ゲイラーに顔を寄せて。
「解った？」
「ああ・・・」

「つまりさ」

「んん」

「ポリアって・・・貴族のスンゴイおじょ～さま・・・って事だよな？」

「多分・・・」

3人は、ポリアの身分の凄さに気付き始めて来た。

大きな屋敷の扉を開くと、赤を基調にした内装で、床にはレリーフ画の画かれた広いロビーの広がる間が在った。

雪の長い国ほど家具を愛するとは言ったもので。　通された客間は、木目の綺麗な家具が配された所だった。　丁寧な造り、実用性と耐久性を重視したデザイン。　しかし、磨きの掛かる表面を見ても、椅子・机・台、どれも職人の技光る一級品である。

暖炉に火が燈されて、ポリア達は応接室に残された。

ダグラスは、まだ聞いてなかった事なだけに。

「ポリア、君は貴族だったのか？」

坐り慣れた様子で揺れる大きな椅子に座ったポリアは頷く。

「ええ。　冒険者に身分はカンケ～無いでしょ？」

ゲイラーは、大きく頷く。

「確かに。　誰でも成れる」

だが、ダグラスには違和感が残った。　自分自身がもし貴族なら、決してその日暮しの冒険者になんか成らない。　彼は生きる手段で成ったまで。　ポリアの様な貴族が冒険者に成るのが、丸でお遊びの様に思えてしまう。　イルガと云う従者を連れて、楽に生活出来るのに冒険者などと云う不安定な生き方をする事が・・・。

（何でだ？　何で、貴族が・・・）

ポリアの冒険者としての姿勢に間違いは無い。　だが、理解の出来ない事だった。

しかし、ヘルダーがポリアに聞く。

（何で、冒険者に？）

身振り手振りで、素直に。

「う～ん・・・。　実はね、強引に結婚させられそうに成ったの。　結婚する相手は自分で決めたかったし、剣の腕を磨きたかったしね。　それに、イルガに小さい頃から冒険者の事を聞いてて、憧れてた部分の有ったからかな～。　貴族なんて、意外に自由無いしね。　特に女と、跡取りは」

笑って言うポリア。　ヘルダーも、ポリアの性格を理解してか、笑って納得。　ゲイラーなど、システィアナと笑い合って。

「ポリアの性格まんまだな」

「まんま～、まんま～」

苦笑いしているイルガも居る。　ポリアの口からハッキリと、

“憧れていた”

と、出ては・・・尚更の責任を感じる。

仏頂面をしているのは、ダグラスだけだった。

（貴族・・・約束された生活・・・名剣・・・リーダーとしての資質・・・凄い飛躍・・・何でポリアがそうなんだ？　選ばれるのは、俺でも誰でも良かったじゃないか？　どうして・・・不公平だろう？）

どうしてダグラスの心にこんな事が思われたのか・・・、彼自身も解らないだろう。　だが、ダグラスは、昔から自分の生まれに不満が在った。　だから、こんな事を思ってしまうのだろう。

其処に、ドアを開いてポリアを見た男性が。

「おおっ、本当にポリアンヌじゃないか・・・。　あああ・・・姉さんに何て言ったら・・・」

と、黒い礼服を着て現れた。

全員の顔が、そちらに向く。　ポリアは、椅子から立ち上がった。

「叔父様、お久しぶりです。　ご迷惑ながら、仕事の為に来ました」

灰色の髪を綺麗に分けた長身の紳士の前まで行き、リーダーとして頭を下げるポリア。

「ん？　仕事？　じゃっ・じゃあ・・・護衛の仕事を請けてきたのは・・・ポリアンヌか？！」

驚く中年・・いや、初老の紳士に。

「はい、叔父様。　ごめんなさい」

と、ポリアは、少し悲しみを滲ませる微笑を持って頭を下げる。

「おおお・・・、あの下らない婚約は私も大反対だった・・。　だがっ、それで家を飛び出して冒険者に・・。　ポリアンヌよ、君の家はフラストマド大王国公爵家筆頭だよっ。　最も王位に近い公爵家だ。　その身に何か遭ったら・・・、あああああ・・・気がおかしく成りそうだ」

泣き言の様に言うオッペンハイマー氏。

ポリアの身分を知って、度肝を抜かれたゲイラーとヘルダー。　ダグラスは、驚きながらも何か気に障ったのか窓の外を見る。

だが。

「アナタ、大声で何を言ってるの？」

と、女性の声が一足先に響いてくる。

何も言えない一同の視界に、派手な赤いドレスを着た化粧の濃い婦人が現れる。　金髪で、少し目元が垂れる気の強そうな奥様婦人であった。

「叔母様、お久しぶりで御座います」

ポリアが、言うと・・・。

「えっ？　あっあら・・・んまぁ～ポリアンヌ？　ポリアンヌだわ～」

皺の見える初老の厚化粧をした女性が大喜びでポリアに抱き着いて来た。　しかも、護衛の話を聞くや。　夫であるオッペンハイマー氏に向って。

「アナタ。　アナタの身の上を態々心配して、隠れて旅をしていたポリアンヌが協力してくれるって言ってるのよっ。　な～にが不満なの。　さっさと遺跡に行ってきなさいっ。　ポリアンヌと買い物に行けないじゃないのっ。　さっ、早くっ」

と、青筋すら浮かべて言うのだ。

「はぁ？」

ポッカ～ンとするゲイラーやマルヴェリータ。

イルガは、皆に。

「ポリアお嬢様は、この繋がる血筋の中でも数少ない女性で、しかも美人じゃ。　親族の皆々様が、お嬢様を自分の娘に引き取りたい

と申し出た事かあるくらいなんじゃ」

と、説明を入れる。

ゲイラーは、美貌と飛び出す行動力を備えたポリアだからと納得。

「な～る」

ヘルダーも、納得して頷いた。

奥さんに叱られて、落ち着いた・・・と云うべきか。　しょ気たオッペンハイマー氏は、ポリア達に仕事の説明をする。

このシュテルハインダーの街は、新市街、旧市街、荒廃市街の３つに分かれている。　その中、“荒廃市街”とは、超魔法時代の崩壊の頃に、魔法遣い達が多く住んでいた昔の繁華街と住宅区らしい。　だが、その市街地は復元不可能な程に破壊されてしまった。　力の暴走なのか、神の怒りなのか、その原因の事は良く解っていないが。　局地的な大地震が来た様に、その地域の建物は軒並み崩されてしまったのである。

ポリアは、叔父の坐る席の脇に腰を屈めて。

「行くって“崩壊市街”なの？　叔父様？」

「ああ。　友人のアランが地下寺院を見つけた。　考古学者のアランは、私の古い友人でこの街一番の歴史学者だよ。　彼が私に、一緒の同行を申し出て来たんだ。　崩壊市街地は、私も行ってみたい場所だったからね、ど～しても同行したいんだ。　だから、斡旋所に護衛の仕事を頼んだのだよ」

ポリアの叔父オッペンハイマーは、若い頃から魔法の修行を終えると学者としてこの地に移り住んだ。　其処で知り合ったのが侯爵家の娘で、今の奥さんなのである。　恋愛結婚だが、全て奥さん主導で運んだらしい。　研究しか取り得の無い様に見える彼だが、経済の知識も明るく。　２度、この都市を運営する統括に選ばれた。

まだ疑問が晴れないゲイラーが、オッペンハイマーとポリアを見て。

「市内なのに、何で護衛が必要なんだ？」

ポリアが、それに答える。

「崩壊市街は、悪党とかの隠れ家だったりする事あるのよ。　未だに盗掘とかあるし、良くゴロツキ同士殺人事件が起って、死霊や亡霊なんかのモンスターが現れた事もあるわ。　荒廃市街地の地下には、封鎖された水路なんかが有って、スライム系や肉食モンスターの類が隠れ住んでる事も在るみたいね」

マルヴェリータは、街中だと云う事で。

「ぶっそう～ねぇ」

と、頬に手を当てて困って見せる。

その脇では、

「ブッソ～、怒ったマルタしゃんみたい」

真似をしたシスティアナが居て。　その姿を見たヘルダーが、ゲイ

ラーが、イルガが、何故か横を向いて肩を揺する。
眼を細めたマルヴェリータは、静かに拳を握る。
ポリアは、意外に。
「マルタ、許可は出すわよ」
笑った男は、ギョっとした顔をポリアとマルヴェリータに向けた。
少し経過。
「・・・、はっ・・ははは。女性は、何処でも強いね」
苦笑いのオッペンハイマー氏。頭を抱える二人と、手の甲に青い痣を作ったデカイのが嘆いていた。
ポリアは、制裁が終わったので。
「叔父様、出発は何時です？　我々は、何時でも構いませんが」
すると、オッペンハイマー氏は頷きを返し。
「ああ。アランは、明日には行きたいと言っていた。此方から彼に連絡を入れればいいとして・・、ポリアンヌは、明日でもいいのかい？」
「はい。依頼者の都合が最優先ですから」
控えるポリアの姿に、オッペンハイマー氏は逆に恐縮している様子

だ。

（なぁ）

抓られた手の甲を擦るゲイラーが、殴られた頭を擦るイルガの袖を引く。

（ん？　何じゃ？）

（あの依頼者さん、何でポリアに恐縮してるんだ？）

イルガは、もうバレたのでいいと思ったのか。

（我がお嬢様の御家は王家の血筋で、王子を除くと最も王位に近い御家だ。　オッペンハイマー様は、確かに侯爵家だが。　ポリアお嬢様のお母上の弟で在るも、その元々の地位は下がる。　お嬢様は、現・国王陛下も養女に欲しいと言われたお方。　そのお嬢様に仕事の依頼など、事実国に解ったら大事だ。　お嬢様もその辺は理解しているが、叔父のオッペンハイマー様の身の危険を捨て置けずに請けたのだ）

ゲイラーの身が、カチンコチンに固まった。

（ポ・・ポリアって、凄いじゃないか・・・）

話し合いの結果、そのアランと云う学者に明日行くと連絡を入れる事に為った。

ポリアは、聞けばその学者の家が近いと云うので、自分が行くと言う。　何より、守る上でもいきなり明日会うよりは、今日のうちに

顔見せはしてもイイと思ったのである。

だが、この仕事がポリア達の運命を大きく変える仕事に成るとは・・・。　誰も予想など出来なかった。

ポリア特別編サード・上編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

何だかんだで、やっと全主要キャラのプロローグ的なお話が粗方終り。　本筋に入ってきます。　ポリア編は、急遽強引に作った話ばかりなので、少し修正などで話にズレなどが出たら済みません＾人＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ポリア特別編サード・上編

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）

≪記憶を持つ人≫

寒い明け方の様な昼前。　オッペンハイマー氏の屋敷を後にしたポリア達。　今夜は、オッペンハイマー氏の家に泊まる事に成ったので、誰もが荷は軽い。

庭を歩く一同の前。　案内を買って出たフロマーが、何処か嬉しそうに。

「いやいや～おったまげたね～。　ポリアンヌお嬢様が冒険者・・、しかもチームが有名に成り出してるだなんてまぁ～」

４０半ばを過ぎるフロマーだが、気性は温厚で子供の様なあどけなさが残る。　ポリアの話し掛ける態度が優しげで、返すフロマーは慕い従う様子だ。　古い付き合いが有ると見て取れた。

さて、オッペンハイマー氏の屋敷をグルリと道なりに半周して、裏手に伸びる太めの通りを少し行くと、開けた場所で子供達がワイワ

イしながら雪の人形を作ったり、積もった雪で迷路を作ったりして遊んでいる。

「ん？」

雪が足元に積もる。　雪が溶けていないのに、ゲイラーは気付いた。

「あ、此処は雪が溶けて無いな」

と、言った先で。

「わわわ～、スベッスベ～」

システィアナが、踏み固められた雪の上を滑って遊び出す。

フロマーが、笑いながら。

「滑って転んだら危ないよ」

と、言う中。　ポリアが、ゲイラーに。

「此処って雪が無くなると解るけど、芝生の公園なの。　この真下には水路は通って無いから、溶けないわ」

「ナルホドなあ」

雪で人型を作った子供達は、絵の具なども持ち出して雪に色づけして遊んでいる。　遠くから見るゲイラーやイルガなどは懐かしいと思えた。

その公園を抜けて、また石で出来た家が犇く細い通りを抜けて行くと。　丸い屋根をした塔型の家が、周りよりポンと上に突き抜けているのが見える。

フロマーは、その家を指差して。

「アレだがや」

ポリアは、吐く息白くマントのフードを少し上げて建物を見る。

「あらら～、学者のアランってキノコ先生の事なのね・・・」

イルガは、ポリアの後ろから。

「お知り合いですか？」

「ううん。　でも、凄い有名な人よ。　物知りで、住んでる家がキノコみたいだから“キノコ先生”って言われてる人。　ガッコの先生もしてるみたいで、周りの家の人が良く噂話してたなぁ～」

フロマーは、ウンウン頷き。

「そんだ～、お亡くなりに為ったヨーゼフ様も、よ～く勉強を請うた先生様だぁ」

白い厚手のロングコートを纏い、白い毛の付いた丸型の帽子を被るマルヴェリータが、ポリアに寄って。

「“ヨーゼフ”って・・お祖父様？」

「そ。　叔父さんが結婚して此処に完全移住で移って。　後から遊びに来て此処を気に入った御祖父ちゃんが、勝手に叔父さんの家の隣に住み出しちゃったの。　大きなお屋敷も構えず、叔父さんの屋敷の裏手に小さい家作ってね。　毎年、冬か夏には、私がその屋敷に遊びに行ってた・・・。　剣が得意で、ウチの父にも引けを取らなかったわ」

フロマーは、ニコニコ笑いながら。

「ポリアンヌお嬢様は、よぉ～んぐヨーゼフ様に剣術の稽古付けられてはぁ、お屋敷の庭で掛け声お出しに為られてますたなぁ～。　汗一杯掻いて、お食事も男の子並みに食べてました」

「ウフフ、叔父さんの家の調理長さんの御飯って、スッゴク美味しいモンね。　動いてお腹空いたら、尚更美味しいわよ」

誰の目から見ても、ポリアの記憶の中に、この古都は大切な一部分を刻んでいる様だ。

マルヴェリータは、ポリアが少し成長したのだと知る。　Kと会う以前のポリアなら、貴族に関わる全てを毛嫌いして、尚且つ自分の素性に関わる全てを隠そうとしていた。　今のポリアは、何かを吹っ切ったのだろうと思えた。

さて、間近で見るその建物は、本当に少し胴体の曲がったキノコの様で。

「ニョッキニョキ～家が生えたぁ～」

と、システィアナがはしゃぐほどに形が似ていた。

皆と笑い合うフロマーが、その家の木の扉をドンドン叩き。

「センセ～、フロマーです。　お話が在りまして、中に入っていいですか？」

ゲイラーは、家の周りに雪が一段二段を高く積もっているのを見て。

（一応は雪下ろししてんのか・・・、ど～やってやってるんだろう？）

湯気の出ている水路は、敷地から外に出た所。　そこまで雪を運ぶのが億劫で放置しているのだろうが。　周りに積もった雪の高さは、自分より倍近くに高く壁の様に成っていて、隣の家や仕切りの石垣など見えない。　あんなキノコの傘みたいな屋根を、一体どうやって・・・。　大きな疑問だった、

フロマーが戸を叩いて声を掛けてから直ぐ。

「ちょいと待ってくれ」

皺枯れた感じのする老人の声が帰って来た。　ガタゴトと音がして、木の扉が開くと・・。

「おお、フロマー。　元気そうだな、オッペンハイマーの用事か・・・ん？」

フロマーに親しげに語り出すのは、黒いローブを纏った老人だった。

剥げ頭に皺が見える結構な年齢の老人が、直ぐにポリアを見た。

フロマーは、穏やかな口調で。

「センセ～もお変わり無く。　主とセンセ～の護衛をしてくれる冒険者の人達連れて来たンす」

すると、老人の顔が鋭い視線を持つ表情に変わり。

「ほう・・・」

と、ポリア達を見た。　そして、全員を見回してから、フロマーに。

「若い者が多いな、最近の若い冒険者は欲が多くてイカン。　直ぐにお宝がどうの、金がどうの言う。　こいつ等は信用出来るのか？　私もオッペンハイマーも、大して大金を出す提示はしてないハズだがな？」

フロマーは、笑って。

「センセ～、この方達は大丈夫だよ～」

「フム、どうしてそう言い切れる？」

そこに、ポリアが。

「私が、オッペンハイマー叔父さんの姪だからです」

と。

老人は、ポリアを見て。

「・・・、君が？」

「はい。　昔、貴方に歴史学の教えを請うたヨーゼフは、我が祖父。そして、オッペンハイマーは、叔父。　私は、ポリアと申します。正式には、ポリアンヌリュファールですが、長いのでポリアと呼んで下さい」

「なぁっ・・・ま・まさか・・・」

老人は、目を見張ってポリアに驚く。

フロマーも。

「センセ～、嘘じゃ無いがよ。　このお人は、本当にポリアンヌ様だよ」

老人は、ポリア達を中に招き入れた。　家の中は、膨大な本と物品の巣窟で。　窓の前以外の壁全て、上の最上階まで全て本棚。　しかも、びっしりと様々な本が仕舞われている。

「ひや～、凄い本の量・・・」

驚くポリアやマルヴェリータ。

本を読む習慣がまだ根付かないゲイラーは、気を無くして。

「読むのに一生掛かりそうな量だな」

イルガとヘルダーは、その全てに感心している。

ダグラスが、腕組みして黙ってポリアと老人の様子を見ていた。

アランと云う学者は、幾段か降るだけの階段で中央に陥没する様なリビングに降り。　椅子やらソファーに皆を坐らせ、紅茶の用意をしながらに。

「で？　どうして、今日に私の所に来たのだ？　明日に行くと言うなら、フロマーだけでも良かっただろうに」

ポリアは、直ぐに切り返し。

「何度も現場に行って知っているのなら、明日行く場所の雰囲気やモンスターの事を教えて下さい。　もし、用意が不足なら今日中に用意します」

ポリアを見たアランは、ガラスの丸いティーポットに網の目の丸い金属に入った茶葉を沈めて。

「フム。　良い心掛けだ。　なるほど、お宝目当ての冒険者だったとしても、利口な部類だな。　しかし、オッペンハイマーに聞かず、私に聞くとは面白い」

「叔父様は、机上の学者。　でも、貴方は違う。　昔に祖父が、貴方の冒険談を私にしてくれてたわ。　一人でも山奥に分け入り、猛獣やモンスターを切り抜けて身体に記憶を刻んでるって・・・。生きた情報ほど確かな物は無いし、その方が情報として意味が在ると思うの。　だから、此処に」

アランは、暖炉の上に掛けられた薬缶を持ち、ティーポットにお湯を注ぎながら不敵に笑う。

ダグラスは、それが気に入らず。

「何か、ヘンか？」

「いや、若いのに似合わない成熟さだと・・・な。　昔・・・そうさな～、５年近く前か。　私が在る遺跡を調査するに当たって雇った冒険者の男とそっくりな言い回しだから・・・、ちと、な」

直ぐに何かにピンと来たゲイラーが、同じ感じを覚えるポリアと見合ってから。

「一人か？」

紅茶の茶葉が入った丸い網の目の鉄球を動かすアランは、大きく一つ頷き。

「ああ、名前が無く。　“Ｐ”（パーフェクト）と云うコードネームで呼ばれた男よ。　強く、悪魔の化身の様な男だった」

ポリア達は、ギョっと眼を見開いた。

「ケッ・・ケイだわ」

アランに、Ｋの事をモーレツに語ったポリア。　もっとＫの昔が知りたかったから、更にポリアは当時の事をアランに尋ねる。

紅茶を運んだアランは、ポリアに。

「なるほど。　でも、これ以上は聞かぬ方がいい。　彼の生き様は・

・・、あの頃の彼の生き様は手本に為らぬ。　それに、お主とあの男の間には仕切りが在る。　何処かで、生きる人生の道行く中で出会えども、一緒に添う道には為らぬよ」

ポリアは、身体を駆け巡る熱い思いを手に握り締める。

マルヴェリータは、ポリアの背に手を置いてから。

「では、明日に行く場所は、どんな所なのですか？」

一人掛けの揺れる椅子に座ったアランは、紅茶の中にハチミツの砂糖漬けを入れながら。

「ウム。　明日に行くのは、崩壊市街地の南側。　居住区の所だ」

ダグラスは、呆れた様子を見せて。

「おいおい、人の住んでた所に重要な物が在るのか？」

と、尋ねる。

「フン、かもしれんじゃろ？」

と、鼻で笑い返すアラン。

ポリアは、Ｋの事が頭から抜け切らないままのモヤモヤしたまま。

「ダグラス、私達は雇い主に指図する権限無いのよ。　第一、住居の中にも古い神殿や寺院が在る場所なんて一杯在るわ」

アランは、皺の多い顔を不敵に綻ばせ。

「その通り。　君達のリーダーは、学ぶ事に敏い。　いい、リーダーだ」

と、言って紅茶を飲む。

詰まらない限りだとダグラスは横を向く。

ゲイラーは、最近口数が少なくなり。　どうもチームから外れるダグラスが気に為った。

（コイツ・・最近どうした？）

さて。　アランは、ポリアに顔を向けて話を続ける。

「私の長年の研究で、やっと昔の崩壊市街地の全体像が判って来た。　明日に行くのは、居住区にある神殿だ。　超魔法の時代、神殿や宗教の寺院は居住区や市街地の郊外に創られていた。　どうやら、魔法の力が強大に成るに遵って、信仰心や信心深さが失われて行った結果だと思う」

ポリアは、深く頷いて。

「そこを調べるんですね？」

「うむ。　だが、今回は、初めて私が自分で居住区に赴いて見つけた神殿でね。　地上部の崩壊が相当に激しい。　地下に入る道すらまだ判ってないから、入り込む場が見つからずに終わる可能性もある。　それに、冒険者の中や街のゴロツキの中には盗掘団と関係の

深い者も居る。　初めての発見と成る遺跡ほど宝物なども在る可能性が高いから、襲われる危険も・・・高い」

この事は、ポリア達には前にも在った。　盗賊は、古代の宝物を探してハイエナの様に嗅ぎつけてくる。　戦う事に関しては、時として金銭をチラつかせて冒険者を雇う者も居れば。　冒険者を仲間に引き込んで、盗賊団に加え込んでしまう事もあるのだ。

過去に遺跡発掘の旅で、強盗団に襲われた上に。　帰りに、別の調査隊の一団が襲われる場に出くわした事か在った。　宝が有ると噂に上る場所ほど、襲われる危険性も増すのである。

アランは、更に。

「今回の発掘には、文献以外の宝物を求む博物館の研究者が同行する。　そっちは、役人の護衛付きだが、オッペンハイマーは私の事を案じて来てくれる。　私はもう老いて思い残しは少ないが、オッペンハイマーには死んで欲しく無い。　だから、信用の出来る冒険者を雇ってみたらと勧めたのだ。　ま、こんな綺麗な姪御が一緒なら、オッペンハイマーも云う事無いだろうがな」

立っているフロマーが、苦笑いを浮かべて。

「それが文句ばっかりですよぉ～。　心配で仕方無いみたいですから」

するとアランは、無関心そうな顔をして鼻先で笑い。

「フン。　一番心配なのは、何の心得も無いオッペンハイマーだわい。　魔法は使えても、発動させたのは何十年前だか・・・。　駆

け出しの冒険者以下だよ」

ゲイラーは、魔法遣いと聞いていたオッペンハイマーがそんなのだとは思わなかったので。

「は？　マジですか？」

全く情けない限りだと云わんばかりに頷いたアランは、ポリアに。

「さて。　明日行く場所は、崩壊市街地でも一番近い場所。　その場で寝泊りするとしたら、地下に入る場所を見つけて何らかの宝物でも出たら・・の話だ。　行くのは、明日と明後日の2日。　必要な物は、旅の道具よりも遺跡に踏み込んだ時の用意と、盗賊や悪党に襲われた時の備えだろうな。　正直、明日から護衛に来る役人の長は、元兵隊の役職をしていた腕に覚え有る人物だし、然程の苦労は無いと思っている」

ポリアやマルヴェリータは、それを聞いて一応の安心を得た。

だが、アランはポリアをマジマジと見て。

「“華麗なる皇女”様、だが油断はしないでくれ給え」

ポリアは、元からそのつもり。

「ええ、解ってるわ。　気は抜かない、役人ほど賄賂に近い仕事も無いしね」

「うん。　だが、その外にも気を許すな」

「え？」

ポリア達全員が、怪訝な眼差しでアランを見る。

アランは、紅茶を一度口に含んでから。

「・・・良いか。　人の心には“欲”がある。　その欲は、意欲でもあり強欲でもある。　気持ちを何処に注ぐかに由って、欲の形が変わる。　今、此処で聞く我々、明日に同行する皆、誰かが欲の注ぐ先を間違えるとも限らない。　いざ宝を目の前にして、驚くほどに豹変した者も見た事がある」

ポリアは、仲間を信じていた。　だから・・・。

「はい。　でも、私は仲間を信じます。　今まで、幾度も生死を共にした仲間ですから」

一同、ポリアを見て頷く。　だが、ダグラスだけが何故か直ぐに俯いた。

≪封印される記憶≫

ポリアは、学者のアランにKの事を尋ねた。　アランは、何度断っても食い下がるしつこいポリアに呆れた。　だが、Kのその真の強さを目の当たりにしたポリアは、どうしても知りたくてか剣まで見せた。

「ふむぅ・・・俄に信じられない話だな。　ブルーレイドーナは、人を忌み嫌う。　人に手を貸すなどあるものか？」

すると、ダグラスが少し顔を歪めながら。

「爺さん、それが有るんだよ。　あのK（リーダー）が、山に巣食った魔王を倒したらしい。　だが、母親が留守中に迷子に為ってモンスターに襲われていたブルーレイドーナの子供を、K（リーダー）は助けた。　その時に、親愛の証として逆鱗を貰ったんだとよ。　そして、K（リーダー）は、その逆鱗をポリアにくれてやったって訳」

ポリアは、スタムスト自治国で悪魔に襲われた時、ブルーレイドーナに助けられた事まで語る。

仲間の皆は、ポリアのKに対する敬意・敬愛の念が強すぎるのを理解していた。　その時折見せる執念染みた姿は、仲間でも呆れる程である。

「どれ、剣を貸して見なさい」

アランは、ポリアに言う。　顔が半信半疑から変わっていなかった。
だが・・・ポリアの外した剣をアランが受け取ろうとした瞬間だ。
急に剣が鞘ごと青白く光り、手に取ろうとしたアランを拒絶する

かの如く2度光った。

「うわっ」

「何っ?!」

驚く皆。　その中、黒いローブのフードをずらして剥げ頭を晒しその眼を見張ったアランは。

「まさか・・・、こっコレは・・“インテリジェンス・ウェポン”ではないか・・・」

同時に、ポリアの脳裏にブルーレイドーナの声が響く。

ー無駄ヨ。　ソノ剣ハ、モハヤ御主以外ヲ受ケ付ケヌー

「え?　ブルーレイドーナ様・・・、この剣は私にしか持てないのですか?」

剣を見て会話するポリア。

驚くのはアランだ。　剣を納めし麗しの鞘に映るドラゴンの顔と、ポリアが見合って会話している事だ。

「あっ・・・あああああ・・・ドッドラゴン・ルーンっ（竜語）じゃあああっ!!!!!!!」

アランが大声を上げて椅子から立ち上がった。　・・・場が落ち着くのに、少し時間が必要だった。　息を荒げたアランが、温くなった紅茶を啜って高鳴る心臓の鼓動を落ち着くのを待ったのだから・・

・。

剣に映るブルーレイドーナが、ポリアに語った事。

この白銀の剣は、遣われている白銀自体が強い霊力を秘めた特別なエクサシスタ（悪魔・悪霊祓い）の力を秘めている。　時代に名前を残さない名匠が、その全身全霊を懸けて一世一代の剣を打った。

それが、この剣なのだとか。　そして、ブルーレイドーナの力の欠片を宿し、使いこなすポリアの気合が馴染み切って“霊身”を宿したと云う。

アランは、ポリアの説明を聞いて驚き呆れた顔を剣に向けて。

「全く、あの男は何処までも奇跡を起すのぉ・・・」

ポリアは、光らなくなった自分の剣を見ながら。

「アラン先生、“霊身”とは・・・何でしょうか？」

「ほほっ、“霊身”も知らんで天下の名剣の持ち主かい。　ま、いいわい。　こんな凄い事を立て続けに見せられて、只で捨て置く訳にも行かぬ。　霊身とは、別名に“威霊”とも、“心霊”とも云われる憑き物の一種じゃ」

イルガは、霊に獲り憑かれる現象と一緒の事だと思ってポリアが心配に為った。　魔の力を宿した武具に命を奪われた逸話も残る。

もし、ポリアの身の上に危険があっては困る。

ポリアは、アランに顔を上げて。

「ゴースト・・なのですか？」

「いや、そうでは無い。　この世界に云う精霊の部類に入る。　憑き物は憑き物でも、邪悪な霊では無く、意思を持ち始めた精霊が宿ると解釈する方が自然じゃな。　持ち主の気合いやその剣に宿る力が、永きに渡る時間の中で融合し、精霊の魂を息吹にして精神を得る。　お前さんの場合、ブルーレイドーナの力が軸になり、御主の気と剣に宿る力が一気に集まって融合したんじゃろう。　もうその剣は、御主以外には持てん。　御主が死んだとしても、新たな持ち主を認識するかどうか判らん」

マルヴェリータは、伝説に出て来るインテリジェンス・ウェポンを目の前にして。

「やっぱり・・・この引き金を用意出来るケイって・・凄過ぎるわ」

大分に落ち着いたアラン老人は、ポリアをマジマジと見て。

「ポリアさんと云ったか」

「はい」

「実はな・・、あの男との一件は・・・その・・・色々と難しい事を含む。　お前さんを信用出来ないのでは無く、口外を禁じたのだ。　あの男も、ワシもな。　人に知られて欲しくない・・正直な所、そうゆう話も含まれる。　御主がこの先旅の中で知恵を貸して欲しいなら、幾らでもワシは手伝おう。　じゃから、あの男との話は勘弁願えんか」

「・・・」

ポリアの脳裏に、Kの過去の欠片が回想された。　ジョイスの話では、Kは恐ろしい社会の闇にも関与していたとか。　自分がその扉に触れる事は、知られたくない人の過去にも触れる事だと痛感した。

「・・・解りました。　すみません・・ご迷惑をお掛けして・・」

ポリアは、深々とソファーの上で謝った。

一人席に足を組んで座るダグラスは、冷めた横目で。

「そうだ。　人には、立ち入って欲しくない領域が有る。　Kの過去が正にソレ、ポリアもいい加減眼を覚ませ。　必要以上に恩恵を受けているんだからな」

ポリアは、剣を見る目を細めた。

そんな様子を見たアランは、落ち込んだポリアに。

「の、ポリアさん」

「あ、はい？」

顔を上げたポリアに、アランは笑って。

「もし、貴女がもう一度あの男に会う事が有ったら、聞いてみるといい。　もし、あの男がイイと云うなら、貴女にだけは教えてもいい」

「えっ・・本当ですか？」

「うん。　だが、これだけは覚えて欲しい。　あの男の過去に然り、これからの御主の道に然りじゃ。　全ては運命・・・過去に囚われない生き方をして欲しい。　未来とは、古い事に拘ると霞んでしまう。　今、今が何より大事。　明日は、ワシの命も預ける。　ま、眼を曇らせんでくれ」

こう言ったアランだが、ポリアに信頼と興味を持ったのも確かだった。　ポリアに、竜語の貴重さを語ったり、夕方まで過去の自分の冒険談を語り出す。　アランと云う人物は、世界を股に掛けて考古学の調査をしていただけあり、その過去の話は面白かった。　誰もがまだ知らない事ばかり。　聞く事が多すぎて、語る事も多すぎて、話が話に繋がってあっと云う間に時間が過ぎ去って行く。

曇り出した夕方、外はもう真っ暗な中。　ポリア達がアランの家を後にする際に、アランは言う。

「オッペンハイマーに言ってくれ」

“お前要らないから。　君達は、ワシの護衛をして貰う”

「・・となな」

ポリアは、家の中学者の叔父を思い。

「はい、準備はしっかりさせますよ」

と、笑えば。

「ああ、多分異常な準備をしそうじゃな。　全く咄嗟の馴れ合いで

誘う言い方をしたワシもワシじゃが、ワシの心配を増やしてくれたよ。　ま、こんな美人で世界に二つと無い伝説を持ってきてくれた麗人に会えたのは、もぉんの凄い大きな収穫じゃがな。　かっかっかっ」

アランと云う人物は、真に楽しく賢い人物だった。

≪迷いと云う名の誘惑≫

オッペンハイマー宅に戻った一同は、ロビーに何人分かの旅の用意が半月分ほど用意された凄い荷物の山を見る。

「な・・・なんじゃあ?」

眼を丸くするイルガ。

其処に、オッペンハイマー氏が脇の応接室の方から出て来て。

「おお、皆さんお帰り」

と、云ってからポリアを見て。

「ポリアンヌ、一応旅の用意をしたんだが。　これ以上に足らない物があるかな～？　食料は、１０日ほど用意したんだが、まだ足らない気がするんだ」

（あああぁぁ・・・、アラン先生の気持ちが解るぅぅ・・・）

ポリアは、言葉も出せない程にゲンナリ。

マルヴェリータは、顔を引き攣らせて微笑み。

「ちょ・チョット・・・多いわよね。　お・オホホホ・・・・」

システァナは、小声で。

（お腹い～っぱい食べれそうですぅ～）

と、ニコニコして嬉しがる。

ポリアは、額に青筋を浮かべてシスティアナに向き直り。

（うがあーっ！！！　喰い切れるかあああああっ！！！！！！！　２日だぞっ、たった２日ぁっ！！！）

皆が見るに、オッペンハイマーは旅の何も知らない様である。

ダグラスは、呆れて頭に両手を当てて。

「アホ臭い。　軽く飲んで来るわ、俺」

と、外に出て行く。

「晩くなるなよ、明日は仕事だ」

と、ダグラスに言ったゲイラーは、ポリアの肩に手をやり。

「選別しよう。　このままじゃ、明日は馬が何頭も必要に為る」

「ううぅ、解ったぁ・・・」

落ち込みながら言うポリア。　我先にと、槍を壁に立て掛けて荷物に向って行くイルガが、オッペンハイマーに何やら言葉を掛けた。

ヘルダーは、ダグラスを見送ってからロビーに入り、腕の裾を幕って選別の手伝いに加わる。　フロマーは、全員分の食事の用意をする料理長の手伝いに回った。

さて。　降り始めた粉雪が、強くなり始めた風に舞う外に出たダグラスは、ゲイラーの言葉に対しての右手を振るだけで返す返事も無かった。　オッペンハイマー宅の敷地を抜けて、正門を潜って外に出た。　踏み固められた小道の雪が、既に氷と為っている。　青いマント状で厚手のコートを羽織っているダグラスは、少し伸びた髪を顔に掛けて俯いて歩く。

（何でだ？　何で皆は気付かない？　俺達の行動は、ポリアを中心に回っている。　ポリアの旅に付き合ってる訳じゃ無いハズだ・・・）

最近、無性にこう思うダグラス。　認められるポリア、偉人と思われるK。　その行動に一々付き合っている自分が、時間の無駄をし

ている様な気がする。　チームとして認められる事に違和感は無いが、ポリアだけが褒められるのが気に入らない。　その場に一緒に居る事も嫌に為って来ている。

（ポリア・・・何であのK（リーダー）を見つめるんだ。　K（リーダー）は、絶対に君の男には成らない相手だ。　どうしてそれが解らない？　どうして別を見ない？　バカみたいにK（リーダー）の事を追いかけてるその姿が、醜く見えてしょうがないゼ・・・）

ダグラスの心の中にポリアは居る。　だが、その姿は徐々に歪んでいた・・・。　綺麗で、何処に行っても恥ずかしくないリーダー。　剣の腕も上がり始め、今ではダグラスも負ける。　時折、暇を見つけると、ポリアはゲイラーやヘルダーを相手にイルガと稽古をしている。　ダグラスはしなくなったが、ポリアは未だに真摯な部分を持ち続けている。

ダグラスは、心の中では解っていた。　ポリアの気持ちも、世間の目も。　だが、理解は出来ても、納得が出来ない。　ポリアを好きな反面、その思いを伝える事も出来ないし。　また、そのポリア自身がK以外を好意を持てる異性として見ない。　仲間としか映っていない自分、ポリアを守る処か彼女に追い抜かれた自分。　ダグラスの心は、様々な劣等感に支配されつつあった。

（下らない・・・）

大きな通りに出たダグラスは、繁華街に向って歩き出した。　少し行くと、住宅区の一角にトンネル型の小道が有り。　人が次々と路地に入って行く。　近付いてみれば、そこから酒の匂いがしてくるのに気が付いた。　家が犇く住宅街でも、その隙間の路地には屋台当の店が出る場所が有る。　此処では雪を避けて、トンネル状の

路地の先に簡易的な店も出来ていた。

「・・・」

ダグラスは、酒気に誘われる様に路地に入ると、暗がりが昼間の様に明るく成っていた。　着色の入ったグラスランプの明かりを店や石の柱に掛け、様々な店が軒を連ねている。　屋台が並んでいる処も有れば、客5・6人も入れば満員の様な狭い店も有る。　どうやらこの路地の中の奥まった行き止まりは、少し広い広場の様だ。其処に、店を出して営業しているのだろう。　喉の渇きを癒すためか、腹を満たすためか、家族連れやカップルや冒険者や労働者の仲間連れなどなど人が集まって賑わっている。　路地内に踏み込めば、店先で黄色い声を上げる若い売り子や、威勢のいい声を出す店主の誘(いざな)いが聞え。　客達が思い思いに吐く騒がしい喧騒に身を包まれた。

（俺なんか・・・）

最近は金が入るとこうして一人で飲むダグラス。　スリットの深いスカートを穿いて、艶かしく腰を動かしながら客に支給をする売り子が見える、入り口に戸の無い小屋の様な店に吸い寄せられた。

雪の降る量が時間を経過するごとに心なしか増え、この路地に集まる客が数多くなる頃。　時間的には、夜の入り頃だろうか。　オッペンハイマーの家で、ダグラスを抜いた皆が食事を共にする頃でもある。

突然だった・・・。

「ねぇ、お兄さん。　冒険者?」

椅子に坐りテーブルを前にして一人呑んでいるダグラスの横に、白っぽい胸元空きのドレスを着た女性が現れた。　右手の脇に、フサフサした毛のコートの様な物を抱えている。　顔を見るに、２０半ばは過ぎた大人びた女性である。

「・・、まぁな」

グラスのワインを口にしながらチラッと再度女性を見たダグラスは、腕に金銀の腕輪を幾つも着けたこの女性が夜の女っぽい雰囲気だと思う。　少し面長の顔はどこか爛れた過去を匂わせる印象で、軽く引っ掛けられそうな手軽さも感じられた。　黒髪が長く少しタレ眼がちで、鼻筋の通りの良い“イイ女”的な感じの美女だった。

色っぽい女性は、寒さを凌ぐコートをテーブル脇に下ろす。　ドーム型の広場は、集まる人と様々な活気で出る熱が篭って少し暖かいから脱げたのだろう。　女性は、ダグラスに下着も着けて無い柔らかそうな胸元を見せながら、少し白い息混じりで。

「お隣、イイ？」

「ああ、構わない」

酒場に頻繁に出入りするように為ったダグラスは、最近はこの手の女性を拒まない。　単純的に、ポリアより楽に付き合えるから歓迎だ。　女性が身に付けるドレスのスカート左側は、深いスリットが膝近くまで入って眼にイイ。　スカートが切れて覗ける生足しも、豊満と云える胸も・・・。

「何か飲むかい？」

すると、女性はカクテールバーの主に。

「シルバールミス頂戴」

礼服では無いが。　黒いベストの下にセーターを着て、黒い皮のズボンを穿くちょび髭を生やした掘っ立て小屋の主は、小さく頷いてグラスを取り出した。

カウンター前3席、テーブルを囲む席7席の狭い店。　グラスランプの明かりがオレンジ色で幻想的ながら、古い黒ずんだ木目丸出しの壁や天井の店の中。　ダグラスに話しかけたこんな女性でも居ないと雰囲気が出ない。　酒を配る女性は、ピンクのツーピースだが色っぽさは後姿だけの年増だった。

カウンターで飲んでいる男性客3人は、奥のテーブル席に座るダグラスの脇に坐った女性をチラチラ見て来た。　確かに、美人の女性であるからだ。　こんな所にポリアやマルヴェリータを連れて来れば、一昼夜は注目の的だろう。

軽くワインを呷ったダグラス。　自分を見つめて来る女性に顔を向けて。

「俺に何か用か？」

すると、女性は色気の篭る目を向けて。

「実はね、私も冒険者なの。　杖は宿に置いて来たケド・・ね」

「へえ～、見えないな」

「かも。　昔、若い頃に夜の街で働いてたから。　魔法学院出るのに、少しお金借りちゃって・・・、冒険者で稼ごうと思ったら逆にヘマして借金。　返すのに手っ取り早い方法をしてたのよ」

ダグラスは、気に成らない身の上話を聞き流し。　ワインをグラスに注ぎながら。

「今は、何処かのチームに？」

運ばれてきたカクテールグラスを持った女性は、首を左右に振って。

「先日までチームだったけど、今は一人。　色々有って・・、バラけちゃった」

「ふ～ん。　そりゃ～大変だな」

生返事のダグラス。

だが、女性はダグラスを見て。

「でも、アナタは凄いわよね。　あの、“ホール・グラス”のメンバーなんでしょ？」

そう言われたダグラスは、自分を思って鼻先で笑う。

「フン。　凄いのか解らないが、一応そうだよ。　ま、チームの中ではお荷物の方かも知れないがな」

グラスに向き直った女性だが、その話にパッとダグラスをまた見て。

「あ、私は“クリスティー”。　お荷物？　アナタが？」

矢継ぎ早の様に質問されてダグラスは、女性を見返して。

「“クリスティー”・・、中々綺麗な名前だな」

と、言って褒めてからワインを一口して。

「知ってるかもしれないが、俺はダグラス。　・・・そう、お荷物。今じゃ、チームの中で一番弱くなった。　嘘じゃ無いぜ」

すると、クリスティーと名乗った女性も前を向いて、自分のグラスを見つめる。

「私と一緒ね。　チームに不釣合い・・・」

ダグラスは、少しおどけと嘲笑を混じえた顔をクリスティーに向けて。

「君が？　俺と同じお荷物？　何かやらかしたとかかい？」

そのダグラスの言葉には、明らかに感情が篭っていた。　クリスティーに興味を惹かれて、思わず話に踏み込んだ。

クリスティーもまた、破顔してはにかみながらダグラスを見返す。

「そ。　ヘマはしないけど、思いっきり有名に成る道をグイグイ行こうとするチームに着いて行けなくて・・・」

何故か、直ぐに見つめ合った視線をぎこちなく外したクリスティー

は、グラスを口に傾けてから少し声を平静に戻すと。　またグラスを見つめて、間をまどろむ様に空けながら話を繋ぎ出した。

「・・・、私・・死ぬのが怖いの。　だから、キツくて危ない仕事を率先して遣りたい方でも無いのよ。　ま、それなりに稼いで、こうして御酒飲めれば・・。　・・正直言うと玉の輿とか・・、少し憧れちゃうかな。　無難でもいいから、女として愛されて家庭に入るなら・・・それでもいいのよ」

彼女の身の上話をダグラスは聞いていた。　今のチームじゃ、こんな弱音など吐けない。　クリスティーの姿が等身大のありのままに見えて、なんとなく聞いてて頷けた。　だからか・・。

「なら、少し有名に成る方向でチームを組んだらどうだ？　実力が付いてくれば、金持ちとか貴族とかからの仕事を請け易く成る。そうすれば、お目当てのお金持ちに行き当たるかも知れないゼ。冒険者なんて、下っ端の駆け出しの仕事で生きるなら毎日遣ってないと大変だ。　宿代やら、武器・防具の手入れに金掛かる。　女だと、キレイキレイなカッコなんて冒険者やってる内は微妙だしな～。　ま、先に少し苦労して、念願成就したら安穏な生活に我慢すれば幸せに平凡に生きられる」

「・・・」

言ったダグラスと無言のクリスティーの目が、過ぎ去った会話の後も静かに噛み合った。　少し見つめ合った二人・・。　俯き加減で瞳を逸らし前に向いたクリスティーは、グラスを見つめながら。

「ねぇ、今のチームにお荷物に成るんなら、いずれはでいいから私とチーム組まない？　別に、明日とかじゃなくていいから・・・」

ダグラスは、飲み掛けたワインのグラスを止めた。　そして、脇目にクリスティーを見る。

「本気で言ってるのか？」

クリスティーは、緩やかに頷き。

「いずれ・・でいいのよ。　どうせ私は、この街か周りの周辺都市ぐらいにしか行けない駆け出しのまんまのオ・ン・ナだから・・。　何時か戻って来てくれれば、遠い先じゃないなら焙れて斡旋所に坐ってると思うし」

と、グラスを空ける。

同じくグラスを空けたダグラスは、丁度小瓶でボトルを頼んだワインが空に為ったので。

「そうか、考えておこう。　此処は、俺が奢るよ」

と、勘定を多めに置いて席を立つ。

クリスティーは、自分が気分を害させたと思ったのだ。　だがら、その場を立ち上がり、

「あっ、じゃ私も宿に戻る」

と、慌てた素振りでコートを手にする。

ダグラスとクリスティーは、その飲食店が集まる路地を抜けて大通

りへ。

「あ、ごめんなさい。　悪い事言ったわよね・・、謝るわ」

フワフワの毛皮が襟首に付くホワイトグレーの毛皮のロングコートを着たクリスティーは、人目の薄くなった大通り上でダグラスに謝る。　馬車が道脇を走るのを見たダグラスは、粉からやや大きく為って降る雪を見上げると。

「勘違いしないでくれ。　明日、仕事なんだよ。　君に気分を害す訳無い」

と、少し優しくクリスティーを見て言う。

見つめ返すクリスティーは、頭から肩に掛けてフードの様に使うマフラーの様な布を巻くと。

「あ、ホントごめんなさい。　もし良かったら、朝まで一緒したくて声掛けたから・・・。　まだ晩く成らないのに飲むの辞めちゃうから、私は怒ったのかと思ったわ」

控えめに、女らしく見えるクリスティーにダグラスは男心誘われた。

「済まない」

ダグラスの声に、首を振るクリスティー。

「いいの。　今、斡旋所に居るフリーの冒険者ってみんながっついてて・・・少し怖いから。　アナタなら、紳士に見えて無理言っち

やったわ」

肩を並べて歩き出すダグラスは、苦笑混じりに。

「俺は紳士じゃ無いゼ。　夜の女相手だって一度二度じゃ無いしな・・・。　本当に朝まで良かったのかい？」

クリスティーは、はにかみ頷く、

「無理言ってるの解ってるし。　今、アナタにお願い聞いて貰えるだけの持ち合わせなんて、私には心と体しか無いもの・・・。　チョット汚れてるケド、私の相手でいいならって・・・」

ダグラスは、気恥ずかしさを見せて俯くクリスティーが可愛く見えた。　男として、心の中の何かが首を擡げる思いに抵抗する気には成れなかった。

人間は、目の前に餌がぶら下ると寄り道をする事が多い。　禁欲とて、実現可能な目標が有って出来る。　精神的に満たされてもいないなら、時として誘惑に負けてもイイと思える。

ダグラスの脳裏に、ポリアは高嶺の花と思っていた気持ちが溢れて、目の前の手に入れ易い物が素晴らしく見えた。　だがら、口が正直な言葉を滑らせる。

「よし、じゃ～今夜は一緒に居よう」

「えっ？！」

驚く目でクリスティーはダグラスを見上げ。　そんな彼女を見返す

ダグラスは、

「別に仕事を放棄する訳じゃ無い。　朝まで、仲間とは別に居ればいいだけさ。　言ったろ？　俺は、“お荷物”だって」

ダグラスは、オッペンハイマーの屋敷に戻り、玄関先で不評を覚悟でゲイラーに会う。　朝には街の大きな噴水公園に居ると告げて、呼び止めるゲイラーの声も無視してクリスティーと夜の街に消えた。

ポリア特別編サード・上編（後書き）

どうも、騎龍です～＾＾

ポリア編は、かなり長いので。　上・中・下に分けて行こうと思います。　間には、色々別キャラの話を加えて行きますね～＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

再開のご報告（前書き）

＊小説家になろうのサーバーに負荷を掛けない為に、この章を残して掲載を続けます。　後から御覧に成る皆様、次に掲載されているお話へと移動して下さい。

再開のご報告

【小説家になろう】のエターナルを、3月から再開致します。

読み難い部分等の修正は、定期的に続けますので。　話と話の掲載期間が延び、掲載遅滞するとは思いますが。　これからもエターナルのご愛読宜しくお願い致します。

尚、更新を続けておりますモバゲーの方にご登録頂いて読んで下さってる皆様には、筆者も助けられて有難く思っています。

こちらと、モバゲー内に於いて。　応援のメッセージをして下さった皆様にもお礼と謝罪を此処で残させて頂きます。

“突然の中断、済みませんでした”

さて、これからのエターナルですが、ポリア編の間に。　出来るなら、K編とセイル編とウィリアム編を挟んで綴ります。　ポリア編が、？～？・？程に為りますので。　その間に、煮詰まって話を早く書き上げられそうな物を先行して掲載とさせて頂きます。

3月1日か、2日に掲載を開始致します。　読み難い点や、誤字脱字等在りますが。　これからも宜しくお願い致します。

ポリア特別編サード・上編

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）

≪崩壊市街地へ赴く朝≫

早朝。　ポリア達は、寝泊りしていた別棟の屋敷から母屋の屋敷に移動する為に起きた。

ポリアの祖父が住んでいた別棟は、手入れをして空き家の様に成っていた。　オッペンハイマーは、自分の父親に可愛がられたポリアに、是非に都市の滞在中はこの空き家を使って欲しいと懇願したのである。

部屋数も多く、幼少の一部を過ごした離れの居心地が良かったポリアは、母屋の屋敷に移動する庭の中で昼頃まで明けない夜空の様な空を見上げて。

「あ～、都市に居るうちは此処に住もうかな～。　宿代浮くし、住み心地イイわ～」

雪が冷たく、剥げ頭に乗るのがイヤなイルガはフードを被りながら。

「私は住んだ事が有りませんでしたが、お嬢様にとっては御懐かしい御屋敷ですな。　確かに部屋数も多いので、宿代わりに最適です」

客間だと云う処の上質なベットに寝たゲイラーとヘルダーは、寝心地の良い中を起きる為にベットから離れなければならなかった事に少し躊躇っていた起床時を思い出す。　ゲイラーは、苦笑して。

「街を離れて安い宿に泊まったら、硬いベットに寝れなくなるかもな」

と、ヘルダーに言えば、ヘルダーも頷いて微笑む。

マルヴェリータと一緒にポリアの嘗て寝ていたベットに寝たシスティアナは、雪の中でピョンピョン跳ねながら。

「ポリちゃんのベットって〜、フッカフカ〜。　マルタしゃん涎流してたぁ〜」

「う〝、こっコラ、システィったら」

小雪が舞う暗がりの中、顔を赤らめたマルヴェリータだが。　ポリアを見ると、

「凄い貴族風のベットよね。　あんなに寝心地の良いの初めてだったわ」

祖父の嘗ては使っていたベットに寝たポリアは、薄く微笑んで。

「ベットの周り・・・御祖父ちゃんの生きてた頃の雰囲気有ったな〜」

と、呟いてから、ポリアはマルヴェリータを見返し。

「私が遊びに来るの楽しみにして、私のベットって御祖父ちゃんが特注で作らせたみたいよ。　私も、何度も涎流して枕にシミ作ったわ」

ダグラスを抜いた一同は、明かりの点いたオッペンハイマーの待つ母屋の屋敷に着いた。

ゲイラーは、寒がって屋敷に入る皆を他所に空を見上げる。　ふと思うのは、この場に居ないダグラスの事だ。　ゲイラーは、前日の夜にダグラスの事をポリアに直ぐ言って謝った。　同じ同郷のダグラスだからこそ、自分が代わりにと・・。　だが、ポリアは気にする気配も無く。

“ダグラスだってイイ大人だわ。　仕事以外は自由にするのが悪い事じゃないし、明日合流するって言うんだから任せましょ”

と。

新たに7人のチームに成ってから、ポリアはリーダーとして相応の度量を身に付け始めている。　余り小さい事に拘らず、クセの感情的な状態からも冷静に戻るのが早くなっていた。　ゲイラーは、成長するポリアを見る度に思う。

（やはり、俺はリーダーの器じゃ無いな。　ポリアには、感謝のし

通しだ）

ゲイラーは、ポリアとならシスティアナも居るから地獄の果てまでも行けそうな気がする。　そこまで信頼が出来る気がしていた。
一方、自分勝手な行動が目立ち始めるダグラスには、愛想を尽かし始めていた。

さて、オッペンハイマー氏を迎えて食事を終え。　アラン老人をポリア達が迎えに行く。　フロマーも着いて来ようとしたが、ポリアがお屋敷の御仕事に従事していいと押し留め。　皆だけで迎えに。
キノコの様なアランの家に向かえば、もう起きていたアランが出迎える。

「おお、早いの」

ローブ姿では無くなっているアラン老人は、魔法を扱う冒険者でもあった。　ただ、魔法を具現化出来ないエンチャンターであり。
その得物は、投擲主体のダガー。　投げナイフのトレジャーハンターと云う処か。　着替えた恰好も動き易く、鎧は皮製。　具足は鋼の補強を施す皮製だった。　腰周りにも薄めで軽量の皮製プロテクターを着け、ピック状の先を持つステッキを手に井出達が整った。

「アラン様、そうゆう恰好ですと雰囲気有りますわ」

と、微笑むマルヴェリータが言えば。

「ウム。　若き昔は、冒険の疲れを御主の様な美女で癒したモンじゃ～」

と、腕組みして思い出に浸り出すアラン。

「・・・」

ポリア達、返す言葉が無くて苦笑いのままに立ち尽くす。

アランは、全員が黙ったのに違和感を覚えて。

「ぬっ、信じて居らぬなっ。　その眼・・眼が云うて居るっ!!
よしっ、昔貰った恋人からの手紙を見せて進ぜよう。　たしか～・・・」

と、螺旋階段を上がろうと向うアランに、ポリアは驚いて。

「先生っ、遺跡の捜索が先ですっ!!」

アランは、ピタリと足を止めて。

「あ、そうじゃった。　うぬぬ・・・、捜索が終わったら探す。
お主等、見るまでは街を去るなよ」

と、眼を細めたアランは、何も言い返せぬ一同に振り返って云うのだ。

イルガは、ポリアの隣から小声で。

（お嬢様・・、少々気性に難の有る御仁ですな）

（うぅぅ。　言葉に気を付けようね、イルガ）

ポリアは、叔父だけでは無く。　無駄に元気な人物を発見した気がして先が思いやられる。

だが。

オッペンハイマーの屋敷に戻ったアランとポリア達は、フロマーの支えでヨチヨチ歩く鋼鉄の甲冑を見る。

アランは、黒い帽子の雪を落しつつ。　オッペンハイマー氏宅のロビーで、甲冑を見ると。

「まさか、中に入ってるのはオッペンハイマー君か？」

重くて、フロマーの助けなくして動けない甲冑からは。

「はい。　わっ私も・・なんとか自分の身は・ああああ・・自分でまっ・守ろうとおおぉ・・・」

その声は、正しくポリアの叔父の声。

顔を抑えて言葉の無いポリアに、踵を返したアランは呆れ果てて。

「重い荷物じゃ、置いて行った方がエエかのぉ～」

無言で頷いた者が5名。　一人は、無邪気に甲冑をに近付いて触り出す。

「うわ～いうわ～い、動くカッチュウーさんだぁ～。　叩いてもヘイキ～？」

システィアナが、杖で甲冑を外から小突く。

「うおおおわぁっ！！！！」

バランスを崩し、カシャンカシャンと可笑しく動き回る甲冑・・・。

後に倒れたのは、言うまでも無い。

甲冑を剥がしたオッペンハイマーの着替えが済むと、一同はマントを羽織って暗い外に出た。　アラン老人の話では、博物館の館長をしているスコット氏とは、崩壊市街の入り口で待ち合わせとの事。

「じゃ、其処に向かいながらダグラスと合流しましょ」

黒いマントを着たヘルダーは、腕組みで済ます。　嘗てはスタムスト自治国の首都で、小奇麗な斡旋所の女性主の事でいがみ合ったダグラスであり。　しかも、幾度と無く別の都市に行っても節操の無いダグラスを注意するヘルダー。　ダグラスとヘルダーは、性格の食い違いから仲が宜しくない。　年上で、技量的にも上回るヘルダーに、ダグラスも多くは言えないのを自覚していた。　だから、眼の上のタンコブみたいなヘルダーに、ダグラスが警戒する。

二人の仲裁もポリアかマルヴェリータが。　ヘルダーは、以外にフェミニストで女性には勝とうとしないからだ。

さて、荷物を各々が背負って雪の舞う外に出た。

「ああ・・アラン。　こんなに少ない荷物で大丈夫かな?」

腰がよろける程の荷物を背負う袋にパンパンと詰めたオッペンハイマーが、心配そうに聞くのだが・・。

「大丈夫、御主一人居なくても問題無いわい」

と、呆れるアランの背負い袋は、オッペンハイマーに比べて半分以下の萎み様だった。

その頃。

仕事に出向く人も多く移動している広い広い噴水公園。　石畳で作られた広場、周囲は石材建築の古い神々を祭った神殿や博物館などでで囲まれる。　風が吹いて小雪を舞い散らす中で、アートモニュメントの石柱の裏で重なり合う影の様にキスをしてる男女が居る。

「・・・ねぇ、今夜もイイ？」

唇を離して縋る様に云うのは、昨夜にクリスティーと名乗った女性。

「ああ、今夜も一緒に居たいね」

と、ダグラスがクリスティーを見つめて云う。　クリスティーの胸を、コートの上から右手の甲でなぞり上げ、代わって左手で彼女の頬を触る。

「もう一度、キスいい？」

艶かしく強請る彼女をダグラスは抱き寄せ、無言で唇を重ねて吸った。　クリスティーも、ダグラスの首に腕を回して体を密着させるのだった。

（迷いは・・無いな）

ダグラスは、身銭の少ないクリスティーに金を渡して宿に返した。

一夜は、儚くも長い。　毎日遣って来る夜だが、誰もが誰かと過ごす夜は特別だ。　まして、床を共にする男女が本気で語り合う一夜がどれだけ長いか・・。　一瞬が、時には永遠に思える。

ポリア達が暗い広場の噴水前でダグラスと会う時には、クリスティーの姿は無い。

「おはよ。　飲み明かしたの？」

噴水前で落ち合ったポリアが尋ねれば。

「あ～、古い冒険者の旧友と会ってさ。　冒険者を引退してたが、色々積もる話有ってな」

久しく明るい声のダグラスが返す。

だが、ポリアも、マルヴェリータも、そしてヘルダーも気付いた。

ダグラスの体から、男では決して遣わない甘い香水の匂いがして来た事を・・・。　しかしポリアは深くは尋ねず。

「じゃ、仕事行くわよ」

ダグラスは、何時に無い柔らかな笑みを見せて。

「おう。　土産代多く遣ったから、是非に成功させたいね」

笑い返すポリアは、頷いて返し。　アランを先頭にこの広場を突っ切った。

≪崩壊を向かえた場所≫

崩壊市街地と人の住み暮らす街の間には、仕切る壁などは無かった。
　だが、崩壊した都市に踏み込むまでは、人も住んでいない広大な石畳の地面に無数の瓦礫が転がる中を越えて行く事に為る。

遮る物が無い瓦礫の転がる荒野の様な崩壊都市部は、非常に風が強い。　ポリア達は、目元のみを残して鼻や口を布で覆い隠し、フードを深く被る。　オッペンハイマーも、姪のポリアに教えられて寒さ対策にしている。

さて。　その荒野と云うか、虚無の世界とでも言った方がいい様な景色の中を歩いて行くと。　無惨に崩れて下の一部だけ残る石壁の近くに人が数人居た。　その一団が、アランに願い出て遺跡の調査に同行する博物館館長のスコットと、彼の護衛を勤める役人達だとアランが教えてくれた。

その一団と合流し、アランがポリア達の軽い紹介をした直後だ。
スコットと云う人物が、偉そうに咳払いをして。

「私は、今回の調査に同行する博物館館長で、都市の文化長も勤めるスコットと云う。　君達が雇われた冒険者か、くれぐれも邪魔はせぬように」

背が高く、角張った感じの威厳を張る中年男が言う。　スコットの脇には、この国の正式な装備に身を包むマント姿の兵士5人と。赤いマントに剣を佩く目つき鋭い戦士が控える。

スコットが、横の戦士に眼をやってから。

「この者は、我が都市の兵士長であるショーターだ。　彼が守るのは、我とオッペンハイマー殿やアラン殿のみ。　君達には気を向けないからそのつもりで居てくれ」

なんとも尊大と云うか、横柄と云うか。　その態度を見て、ポリアはアランに小声で。

（兵士や役職に就くってそんなに偉いんでしょうかね）

アランは、公爵家筆頭の家柄のポリアに言われて苦笑し。

（皆、それぞれに自負を持ちたいものさ。　御主の素性を知らずに・・・、クックク・・・偉ぶっておるわえ。　クッ・クククク・・・面白いのぉ～。　お前さん等が居なくなった後に、素性をバラしてやろうかな）

ポリアは、アランが意地悪したくてしょうがないと見れて、自分も苦笑してしまった。

顔や首周りを見るに、少し細身ながらショーターと云う兵士長は中々の腕前と思えた。　スコット自身もそれなりに剣を遣うと見れ、身体つきに無駄は見えなかった。

「・・・」

ショーターは、ポリアの目元を見据えて前に進み出ると。

「貴殿は女か？　・・・女の割に遣うな。　チーム名は？」

ポリアは、素直に。

「ホール・グラス。　私は、リーダーのポリア」

すると、ショーターと云う兵士長の顔が一瞬だけ曇った。　歪んだとも云えるが、明らかに何か変わった。　しかし、直ぐに顔を平静にしたショーターは、ポリアの仲間を見回し。

「スコット様、この者達に無用な気遣いは要りません。　腕も確かな最近この辺で一番上り調子のチームです。　下手な夜盗の群れなら、我々とこのチームだけで難無くかわせると思います」

雪の降る暗がりの中で、スコットと云う男は拍手をし。

「そうか、そうか。　オッペンハイマー殿も、お金を出したと見える。　なら、大手を振って現場に行くとしようか」

偉そうに云うスコット氏。

「う・うぬぬぬ・・・」

堪えているのは、オッペンハイマーだ。　ポリアは、“皇族”の公爵。　しかも、筆頭である。　その家の娘を、たかだか成り上がりの地方博物館館長風情にバカにされたのでは、自分が罵られているのと一緒だ。　だが、ポリアとアランに事実を口外しないようにと云われて、必死で我慢しているのだ。

さて、アランとオッペンハイマーが、ポリア達を伴って先に歩く。

瓦礫が散らばる間を通る幅広い石畳の道を進む。　雪が細かくなって瓦礫を覆うサラサラした雪を、時折に強く吹く風が吹き飛ばす。　だからか、瓦礫は雪まみれて居ながらも、所々薄らと見えているのだ。

ポリア達の中で、最後尾を歩くのはダグラス。　マントにフードを深く被り辺りに注意していた。　その横に、何故かショーターが肩を並べる。

「・・・、何か？」

違和感だけを声に、ダグラスが彼を見ずして言うと。

「いや、御主のリーダーは、名剣を持ってるそうだな」

「・・・、まぁな」

「視た所、剣の腕も立つがまだ若い。　そんな名剣を持つには早すぎる気がするがな」

ダグラスは、ショーターを脇目に見る。　鋭い眼には、明らかに何

かを欲する欲望の色が見えた。　しかし、ダグラスは無用な欲は仕事の邪魔だと思い。

「かもしれない。　だが、ポリアはいずれその剣に相応しい剣士に為るさ」

「そうかな？」

「ああ、少なくともアンタよりは強くなるね。　それに、誰もポリアの剣は握れない。　彼女だけに資格が有る」

「フン。　剣は強きものが持つ資格を有する。　違うか？」

「違うね」

ダグラスは、ハッキリ言えた。

「本気か？」

ショーターは、ダグラスに問う。

ダグラスは、呆れも込めた眼をショーターに向け。

「ポリアの剣は、ブルーレイドーナの力を秘めた風の秘剣だ。　だが、彼女がブルーレイドーナに許されて力を貰った。　その秘剣は、今や“インテリジェンス・ウェポン”となり、持ち主のポリア以外を受け入れない。　もし、ポリアを殺して剣を手に入れようものなら、神竜の怒りを買うだろう。　この世で、あの人を忌み嫌う神竜と対話出来るポリアだ。　欲望の代償は、命だけじゃ～済まないゼ」

驚くべき事実に、聞いたショーターは唖然とした。

「う・・嘘だろ？」

ダグラスは、歩くポリアを見る。

「アンタから見てもまだ未熟と思えるポリアが、何で稀代の名剣を持てる？　そう成るに至る経緯と、許された加護が有るからさ。しかも、彼女が剣士として強く成り出したのはこの半年ちょっと。まだまだ天井知らずだ。　こんな田舎都市で剣士気取ってるアンタ等なんか、直ぐに追い抜くよ」

ダグラスは、自分自身も仕事の中で磨かれてるのを感じている。ポリアの成長する速さは、それ以上だ。　こんな所で、兵士長辺りに馬鹿にされるのも心外である。

ショーターは、自分に手に出来ない剣を思って目を細めた。　明らかに、何か悔しさを滲ませる顔である。　大体、他人の持つ武器をどう取り上げる気だったのか・・・。

「そうか・・、上り調子なだけはあるな」

ダグラスは、離れたショーターを見ずに。

（もし持てるとして、どうする気だったんだ？　気に入らないヤツだな）

と、内心に思う。

向う一行に雪を吹き付ける風の中、次第に瓦礫が積みあがって高さ

を見せる様になって来た。　瓦礫が道端や土地に転がってる様な感じから、崩壊した建物の残骸が塁を築いた様な様子に変わり。　そこに雪がへばり付いて氷に為っているから、小高い丘の様にも見える。　そして、積みあがった所々には、瓦礫の隙間が黒い目の様に見えていて。　想像を絶する大惨事が有ったのは一目瞭然であった。

白み始めた東の空。　それを見上げたポリアは、隣を歩くアランに。

「凄い有様ですね。　一体、何が・・・こうさせたのでしょうか」

アランも同意の様で、頷きが鈍く少し声のトーンが落として。

「ウム。　何が有ったのか、未だに掴めていない。　この崩壊市街は、あの滅びた超魔法時代に新生都市として栄えた場所じゃ。　魔法の力が隆盛を極め、昔からの今に至る都市部に陰りが見えていた。　おそらく、魔道士達が挙って此処に移り住み暮らしたのだと推察される。　崩壊直前まで、商業の中心が嘗ては此処に集まり出し、都市の中でも一大生活圏を産んだのだと考えられているのだよ。　ただ、この様に崩壊した経緯が判らない・・・。　何が有ったのか、天変地異なのか、モンスターなのか、神の怒りなのか、諸説は色々だが明確な答えは導き出されていないのだよ」

ポリアの横に居るマルヴェリータは、直ぐに疑問を感じて口にする。

「あの、アラン様。　一つ疑問が在るのですが・・」

「ん？」

「この崩壊した都市は、何故に再建をされないのですか？　奢った魔法遣いに対する反感からでしょうか？」

確かにマルヴェリータの云う事も最もだ。　問われたアランは、崩壊した瓦礫が雪化粧するのを見つめながら歩き。

「ソレよりも、先ず此処に来て感じる事は無いか？」

そう云われるなら、マルヴェリータやシスティアナやオッペンハイマーは歩くのが少し辛そうである。　明らかに、足取りが重々しい。

システィアナは、フードに隠れた顔を頷かせて。

「荷物が重重でしゅ～。　上から押さえられてるみたひでしゅ～・・・」

アランは、そのシスティアナの言葉を聞いて微笑み。

「“オー・ソシアス”（その通り）」

と。

ポリアやゲイラーなどは聞いても解らない言葉だったが。　マルヴェリータは、解った。

「“その通り”・・、アラン様。　この重苦しい状態と、崩壊後の復興が成されなかったに訳が？」

マルヴェリータは、Kと一時を過ごしてから物事に対する洞察力が格段に増した。　ポリアの良き相談相手であり、ブレーンの役割を担いだしたのである。

アランは、魔法に遣われる古代語の一種で。

「“オファ・ソシア”（そうだともよ）」

と云う。　そして、言語を元に戻すと。

「上に石を投げて見ると解るが、落ちる速度が速い。　どうやら、崩壊時に異常な力場が発生してしまったみたいだ。　一般的に強力な魔法でも時折一時だけ発生をする力場が、３００年以上を経て消えない様な現象が起こったのだよ。　物が全て重く為り、風が一定の方向にのみ強く吹く。　更に、重き力場の影響でか、水などの流れを思う様に操作出来ず、都市の復興は断念された訳じゃ」

ポリアやマルヴェリータ達は、この広大な都市の空にそんな異常な力場を造る災害・異常事態とは何なのか・・・。　想像も出来なかった。

アランが語るに、オッペンハイマーは神の怒りで滅んだと考えている様で。　アラン自身は、超魔法の大暴走が、魔法を扱う者に共通する何かに作用して大消滅を招いたと説明する。

此処で、ゲイラーは。

「未だに良く解らんが。　そもそも超魔法の大崩壊って何なんだ？　何がそんなに凄いんだ？」

アランは、ゲイラーに。

「仕事が終わった後、“ロハ”で講義しちゃる。　御主達は冒険者として実力有るんじゃ、色々覚えて損は無い。　ワシの自慢話込み

で、なが～く教えて進ぜよう」

ヘルダーは、フードの隙間から目を細めてアランを見る。

（そんな事言って・・・、恋文も自慢げに見せる気だ）

声は出せぬが、その辺の慮る洞察力は鋭い。　コレは、他の皆も推察出来た。

さて、生き物の気配すらしない崩壊市街は、虚無と瓦礫が支配するだけの場所。　マルヴェリータは、辺りの気配を探っても生命の波動が感じられないのには、寒さ以上の震えを覚えた。

「此処、寒い以上に怖いわね。　何か、世界の果てって感じで・・・」

呟くマルヴェリータにポリアは、森も林も雑草すらも見えない雪を纏う瓦礫群を見渡し。

「そうね・・、生きてる必要性を拒絶する様な静寂だわ。　吹き荒ぶ風の声が、凄く悲しく聴こえる」

“ヒュ～”っと地面の石畳を走る風が、粉の様な雪を吹き飛ばしてゆく。　極夜も手伝う薄暗い世界では、ポリアの言う様な思いを持っても不思議では無かった。

凍て付く荒涼とした廃墟の市街地を抜けてゆくと、崩壊した残骸が高さそれぞれに広範囲に渡って南側に伸びる場所にやってきた。

アランは、短く。

「此処じゃ」

アランの説明に由ると、このシュテルハインダーの街は特別なのだとか。　超魔法時代の崩壊時、いずれの国でも崩壊が起こったのは超魔法の施された建造物や魔術師に関係する場所。　しかも、魔術師と云っても、魔法の言語となる古代語を読み解き新たな詠唱語を生み出し、魔法の力の限界を破った魔想魔術師と自然魔術師のみの９割９部が死に絶えた。

そして、その崩壊による大惨事の被害が最も酷いと云われる場所が、フラストマド大王国と商業大国マーケット・ハーナスと東方皇帝国家ウセアンである。

この国の名前の中に、魔法学院自治国カクトノーズが入らないのは、魔法学院では基本的な魔術の扱い方のみを教えているからだ。　魔術の研究は個人管理で、卒業後に各自勝手にやるからである。　さらに、カクトノーズの建物には、超魔法とは別で強力な古代魔法の防御陣が施されており。　それが、人以外の建物の崩壊を最小限に食い止めたらしい。

被害が大きかったのは、著名な魔術師達が住み暮らし、その魔術師達を歓迎し受け入れ魔術を国創りの礎にした国が被害を多く被った。

さて、その被害の中でも何故に先ほど挙げた3ヶ国が酷かったかと云うと。　魔法を国の発展の礎にし、新たな超魔法で都市を築き上げたからだ。　魔法の力で天災の脅威を緩和する術を施し、魔法で便利に物事を運ばせる試みを施し、超魔術の研究に費用を莫大に費やした国々がこの3ヶ国。

中でも、最も被害の大きいこの都市は、幾ばかりか残る文献に由ると、巨大な魔法陣を都市に施して近未来と云うべき国の姿を形成しつつ在ったらしいのだ。　つまりは、超魔術の粋を結集し、想像も出来ない様な都市を建設していたらしい。

アランや数々の研究者の見解で略と云っていいほどに一致するのは、この都市が魔術師のみならず一般市民の住み暮らす場までもが崩壊している以上。　この新しい市街地に住み暮らす誰もが、当時は超魔法の恩恵に与っていた・・・、と云う事だ。　そうゆう意味でこのシュテルハインダーの都市は、歴史ミステリーが溢れて、その研究者を吸い寄せる街でもあると云う訳だ。

さて。

「あぶなっ」

「ポリア、そこ大丈夫?」

「アラン殿、踏んで大丈夫か?」

様々な声が交錯する。　アランを先頭に、目的の場所に向って瓦礫群を横断し始めたのだ。

「うおあっ、クソっ！！」

体が重く、武器や装備も重いゲイラーには、脆い足場は脅威だ。片足を踏み抜き、余った足に力を込めるのも危うい。　アラン・ポリア・マルヴェリータ・システィアナ・ヘルダーが先頭に並び、足元を確かめながら先導しても、兵士やゲイラーが危なく。　歩みの横柄なスコットは、何度も瓦礫を崩して転びそうに為っていた。

半氷の雪が固まり付く瓦礫を越えて行くと、奇妙なまでに円形に形作る大きな瓦礫の山にぶつかった。

「此処が神殿跡と推察する場所じゃ」

瓦礫の上から見下ろして、アランが言う。

ポリアは、アランに。

「先生。　此処に地下が？」

「うむ。　市街地に地下が在るのは、地下倉庫のためじゃが。　崩壊の時に略埋まっている。　しかし、この神殿跡のみは、深い地下が在る様じゃ。　神殿に地下を造るのは多い事じゃが。　この広い敷地の真下が全て地下にもなっている様で、彼方此方にその崩落現場が見て取れる。　さて、行くぞい」

その神殿の在ったと思われる場所に下りた一同。　石畳の地面が何か強烈な力で地割れを起し、円形と思われる地上部の神殿は真下に

潰される様に崩壊していた。　白濁とした神殿を形成していた石材が無惨にも砕かれて、雪を上に乗せている。

ポリアは、自分の１０倍近い大きさの地面の石畳が地割れして、斜めに地下に沈むのを見て。

「わ～お、壮絶ね。　でも、此処から地下に降りられそう」

脇に立つマルヴェリータは、直ぐに。

「明かりの小石あげましょうか？」

「うん。　マルタ、お願い」

チームとしてポリアの周りに集まった一同。　ポリアは、直ぐにゲイラーとイルガを次々に見て。　眼を合わせて。

「二人で支えて、私が降りて地下を確かめる。　ダグラス、縄を固定の場所を見つけて」

少し離れて立つダグラスは、もう辺りを見回し始めながら。

「オーケー」

システィアナもヘルダーも、ポリアが手を見せて何かを手繰る様子を見せれば云われる間も無く縄を取り出す。　ヘルダーが教えた“ジェスチャー・サイン”（手話）をアレンジし、チームのみの合図を造っていた。

アランは、言われるまで動く事もしないスコットや兵士達をチラ見

してから。

（チームの信頼厚い皆じゃわい。　こりゃ～今のチーム評価も通過点に過ぎんの～。　まだまだ伸びるぞ、このお嬢さんのチームは）

マルヴェリータが光の魔法を閉じ込めた小石を取り出し、魔法を掛けて発動させる頃。　ポリア・ヘルダー・システィアナの持っていた縄が結ばれて長くなり。　その縄をゲイラーとイルガが持って支える支度を始めた。

ポリアは、システィアナを見てから来た方に目配せを。　次にヘルダーを見て頷く。

システィアナは、危険の無い場所にトコトコと離れ。　ヘルダーは、ポリアの次に穴に入るべく縄を崩落の穴に垂らして頷き返す。

チームの息が有っていた。　流石に、普通のチームがこなす数の倍は様々な仕事をして場数を経験して来ているチームだ。　ポリアは、少し忙しくとも矢継ぎ早に仕事を請ける。　経験を積み、あらゆる仕事に対応しようとチームで決めての行動だった。　Ｋに出会う前まで、一年で請ける仕事など５・６件だったのに。　出会ってから今日までで、１００近い仕事こなして来た。　仲間達の意思の疎通も確かなら、都度都度で何をするか基本的には皆が把握して来ている。

ポリアは、ダグラスを探すと。　ダグラスが、

「ポリア。　神殿の一部を形成してた柱がある。　だが、少しロープの長さが足りないぞ」

ポリアは、叔父のオッペンハイマーに。

「オッペンハイマー様、用意していたロープを。　アラン先生、下の安全を確保したら言います。　ヘルダーの後に降りてください。　二人先に降りれば、大丈夫かと思いますので」

アランは、自分の荷のロープをダグラスの元に投げてから。

「ふぉふぉふぉ、良く出来たお嬢さんだわい。　ワシが若ければ、仕事のパートナーにしとるぞ」

ポリアは、フードから見える目元で笑い、マルヴェリータから小石を受け取ると胸元に掛けられたリングペンダントに付け。　ロープを持った。

ダグラスは、オッペンハイマーの出したロープとアランのロープを解きながら。

「地上の見張りは、役人の誰かがやるのか？」

と、ショーターに声掛ける。

ショーターが、スコットに伺いを立てて向く中。　ポリアは、斜めに地下に壊れた石畳の床をロープのみで滑り降りてゆく。

「あわわわ・・アッ・アランっ・・・大丈夫だろうかあああ・・」

オッペンハイマーは、姪の心配をしてアランに聞く。

呆れ顔のアランは。

「御主じゃあるまいし、心配要らん。　あのお嬢さんは、相当場数踏んどる。　するなら、な～んも経験の無い自分の心配せい」

と、オッペンハイマーを残して降りるポリアの様子を見に行った。

スコットは、アランに。

「アラン殿、冒険者を先に降ろして大丈夫だろうか？」

アランは、宝物に眼の行くスコットを細めた目で見つめ。

「なら、危険を冒して御主が先に行くか？」

「あ・・、いや」

たじろぐスコットに、アランは背を向けて。

「彼等とは、事前の打ち合わせで宝物は全て私に差し出すと合意してある。　契約を破るなら、斡旋所を経由して物を差し出させるまでじゃろうが。　ま、御主よりは信用は出来そうじゃがな」

と、アランはポリアの降りた穴の方に行く。

ポリアを盗人の様に疑われるオッペンハイマーは、拳を握り打ち震え。

（ポリアンヌは、貴様の様な強欲人間では無いわっ！！！！）

オッペンハイマーの心が、何時まで我慢出来るやら・・・であった。

ポリア特別編サード・上編（後書き）

どうも、騎龍です。

再び、掲載を開始致します。

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

ポリア特別編サード・上編

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）

≪地下に広がる巨大神殿≫

倒壊した神殿が残る敷地内で、レンガ敷きの通りを崩落の衝撃で切り裂いたと思われる割れ目から、視界の悪い暗闇の地下に降りたポリア。　暗いながら広い空間が四方に広がっているのを、小石から放たれる光が闇に吸い込まれる感じでなんとなく解った。

ただ、やはり歴史的な悲劇が在った場所だ。　降りた瞬間、暗く闇が広がる間の空気が何処と無く異質だと感じられる。

（不気味だわ。　丸で、滞った空気の流れと一緒に、時間の流れまで止まっていた様な雰囲気・・・。　人も生き物も棲めない場所って、こんなカンジなのかしら？）

シ～ンと静まり返る闇。　極夜が手伝う薄暗い暗闇の中に入る感覚が、こんなにも異質とはポリアも驚きだった。

「・・・」

辺りを見回すポリアの背後にヘルダーも降りてきた。

ポリアは、辺りを見ながら。

「ヘルダー、降りる人の安全を。　私は、辺りを警戒するわ」

ヘルダーは、静かに頷き。　ロープの伸びる上を見て合図を送った。

アランが調査隊としては先陣を切って降りる。

その時、ショーターが見張りに残す役人二人にロープの安全と維持を命じている。

さて、アラン・マルヴェリータ・スコット・システィアナ・ゲイラーと降りる始める中。　ポリアは、床に描かれた絵を見て怪訝な様子を見せる。

（何これ、悪魔みたいな絵が・・・）

光で照らしながら床を見ると、そこには強力な魔法を唱える怪物の絵が・・・。　人に対して唱えている訳では無さそうだが。　一際高く築かれた祭壇の上で、赤黒い夕闇の中、地割れや突風を伴う大魔法を唱える怪物が居るのだ。　高く掲げた杖に宿る魔法と、術者の怪物を中心に迸る青白きオーラが雷（いかずち）の如く。　魔法で起きる強風に揺さぶられる大木が、今にも折れそうな様子である。

「ふ～。　流石に寒いのお～」

アランが降りて言葉と共に白い息を長く吐き。　ポリアの光を頼りに向かって来る。

ポリアは、アランを見ずに。

「アラン先生・・、この床の絵は・・・悪魔ですか？」

「ん？」

ポリアの傍に来たアランは、怪物の絵を見て。

「おおっ、これはアスタロッテの絵じゃな」

「“アスタロッテ”？」

言葉を反芻したポリアの前に出たアランは、床に少し屈んで絵を観察しながら。

「超魔法時代は、神々より究極の魔道師が絶大なる栄光を得た。その時代の魔術師の一人で、悪魔の力を吸収し、怪物と変わり果てたのがアスタロッテじゃ。　元々が大魔法遣いなのに、さらに上級の悪魔の力を手に入れた為に怪物の姿に成ってしまったらしいのぉ。　だが、正気は失って居らず、そのまま２００年以上は最強の魔術師として君臨し続けたとか」

聴くポリアは、もはや姿はモンスターだと思いながら、一抹の嫌悪感を覚える。

「そこまでして・・・力を？」

「うむ。　このアスタロッテと云う人物は、何でも不遇の幼少を送り。　更には、貴族に対して異常な偏見と嫌悪を持って居たとか。　その筋の学者に由ると、恋人を奪われたと云う推測が在るそうじゃ。　だから、あの昔でも権力を牛耳る貴族社会を嫌って隠遁生活をしていたらしい。　そして、数々の研究の末に様々な大魔法を生み出したと云われる。　ま、文献が少なく、それ以上は解らないがの」

ポリアは、自力で高みを目指す以外に気持ちは動かない。

「何だか、可哀想な人ですね」

「かもな」

その時。

「おいっ、物品などには手を触れるなよ」

と、スコットの声がする。

降りていきなりの言い草に、アランはほとほと呆れてスコットを見る。　そして、ポリアに顔を向けずして。

「アヤツなら、同じ事をしそうじゃ。　ま、下級の悪魔の力を受け入れる器すらも無い奴じゃろうが」

小声のボヤキを聴いたポリアは、苦笑を返すだけだった。

さて。　ポリアは、ゲイラーが降りた所で穴の上を見上げた。

「イルガ」

「は、何でしょう」

降りる様子を見せていたイルガを上に見上げて呼んだポリアは。

「そのまま。　ロープの守りに加わって。　それから、ダグラスを呼んで」

「は、解りました」

スコットや降りたショーターなども見ている中で。

「ポリア、呼んだか？」

穴の入り口に姿を見せたダグラス。

ポリアは、ダグラスを確認後。

「ダグラス、イルガと上に残って」

と、云った後。　右手の二指で目を示し、左手でクルクルと円を描く。

見たダグラスは、頷きを見せて。

「そうゆう事か。　了解。　何か在ったら、叫ぶ」

「お願い。　もし、危ない場合は、役人の人やイルガと一緒に中に降りて」

「おう」

意味の解らない行動を嫌うショーターは、ポリアに寄り。

「何の真似だ？」

ポリアは、アランの横に移動しながら。

「見張りよ」

ショーターは、役人二人も上に残したのだ。

「我々の手勢が残った」

ポリアは、仲間の隊列確認をしながら。

「私のチームでは、私とダグラスとヘルダーがスカウト能力を見に付けてるの。　感知と捜索の技能なら、ダグラスは鋭い。　ここは、野党や危ない連中の隠れ家も在るんでしょ？　ダグラスなら、盗賊が来ても見抜ける可能性が高いわ。　物音を立てない盗賊なんかを相手にする訓練をしてるの？」

こう言われたショーターは、返す言葉が無い。

盗賊などを相手にする時、一番危ないのはこうした遺跡を調査してる時。　盗賊は、先に入った者を見つけると包囲して待ち伏せする。

探してる時が、相手に有利な時間を与える。

ポリアは、今まで何度も襲われてそれを知った。　ヘルダーがスカ

ウトの技能を持っていて、その知識をポリアとダグラスが学んだのだ。　元々から感性の鋭いダグラスは、スカウトの技能を理解するのが早く、耳や目などもいいから上達も早かった。

ポリアは、状況で仲間の力を上手く使う。　イルガを残したのは、役人を守る意味も在る。　そして、イルガと云う人物は、ポリアの意思をよく理解した行動を選択する。

ポリアは、アランの後ろにオッペンハイマーを置き。　自分がアランと平行し。　オッペンハイマーの後ろと横にマルヴェリータとシスティアナを来させて、ヘルダーとゲイラーに左右を守らせた。

「アラン先生、どちらから？」

余計な指示の要らないポリアに喜ぶアランは。

「先ずは、奥。　此処が何か、それから調べる」

「解りました」

一方、ショーターは、残る役人でスコットを囲んだ。　そして、自分が先頭に成り、ポリア達の後を着いてゆく。

だが、ポリア達は辺りに気を配りながらも、前を見ながら落ち着いているのに対し。　ショーター以外の役人達は、何処と無く怯えている素振りで挙動がおかしい。　果たして、有事が起こったら使い物に為るのか疑問である。

さて。　光の小石を持つポリアを先頭に、アランと歩いて行くと。
どうやら、此処は本当に寺院か神殿の様な場所で在ると判り出し

た。　床に描かれた絵もそうだが、行き止まりまで行けば、壁には神々の姿が描かれていたりする。　只、ポリアやマルヴェリータは、アランと一緒に壁が直線状の広がりでは無く曲がっているのを見て。
　此処は円形の場所ではないかと推察。　壁の延びるままに歩けば、天井が崩れて落下物が体積する部分も在るが。　楕円形の間だと解った。

そして、この広間の北側と東側には、女神“アテネ＝セリティウス”の像と、海神“ヨルビジョニス”の像が在り。　西側には、闇の神“ニュルハグルス”。　南には、美の女神“アフロディスディー”と云うエロチックな像が石造で安置されていた。

アランは、神々を祭る神殿だと解ると。

「ふむ、不思議だな。　最近では、信仰の薄い神々ばかりだ。　アフロディスティーが唯一か。　フィリアーナや、自然神はどうしたのだろう・・」

ポリアは、南の石造の脇に回廊を見つけ。

「奥では在りませんか？　此処は、倒壊している階段を見ても幅広い用意が在ります。　誰でも踏み込める場所だったとして、昔の記憶を留める何かが在るとするなら、奥かも」

「うむ。　かも知れん。　だが、この様な多神神殿は初めて見る。　もしかしたら、一つの神に対しての神殿を築く事を控えていたのかも知れん。　昔の情勢を考えるなら、神々への信仰が薄らいでいただろうから。　この新興都市には、信仰は余計なモノだったのかも知れないな。　何せ、神殿の床には、あの“アスタロッテ”の絵が在るんじゃからの」

オッペンハイマーは、興奮気味で紙の束に何かを書いている。　学者らしい行動だ。

だが、代わって博物館館長のスコットは、これらの石像を見ても詰まらなそうな顔をし。

「おいおい、石像などどうでもいい。　宝物は何処だ？」

と、アランとポリアに言うのだ。

アランとポリアが、その業つくな言い草に呆れ、彼を一瞥する時。

マルヴェリータは、冷ややかな目を布の隙間から覗かせて。

「あら。　博物館の責任者なら、この様な石仏や壁の絵にこの床の絵など最高の宝物では？　お金に成るか成らないかだけを考えて来てるの？」

するとスコットは、目元のみを現すマルヴェリータにギラリとした目を返し。　目と目を合わせると。

「実情も知らぬ阿呆が、この俺に口答えか？　博物館の目玉に、こんな石造が役立つかっ！。　金目に成る物が、誰もが見たいものだ。　冒険者風情がっ、偉そうに何を云うっ！！」

ポリアは、直ぐに。

「マルタ、余計な御喋りは後よ」

マルヴェリータは、相手が議論をするに値しない人物と理解し。

「ごめん」

と、ポリアに返す。

だが、ポリア達に対するスコットの暴言に、オッペンハイマーは興奮気味と変わり。

「スコットっ。　きっ君には、この石造や床の絵の意味が解らないのかっ?!　誰もが推論以上の枠を超えて説明出来なかった歴史を現すかも知れないんだぞっ。　研究者たる学者の末席に席を置く君や僕が、金銭に重きを置くなど研究と云う行為に不純を齎すっ!!　その為に来たと云うなら、先に勝手に行って探したらいいっ!!　だが、フロイム統治には、君の事を抗議しておくよっ!!」

生粋のお坊ちゃん育ちのオッペンハイマーながら、その怒りの様子は本気と思える。

するとスコットは、憤然としながらも黙った。　顔には、何か逆らい切れぬ事情が伺えるもどかしい様子に似た苦渋が滲む。

（あら、黙ったわ）

と、小声でマルヴェリータ。

アランが、小声で。

（あれでもオッペンハイマーは、この街の最高位の侯爵じゃ。　しかも、学問の最高顧問や都市の統治も歴任した序列高き位じゃから

の。　役職上で男爵を貰ったスコットとは、家柄が格段に違う。現統治者のフロイムは、オッペンハイマーの親友で、正義感の強い男。　スコットも、邪な心で調査に来たと云われたら睨まれる）

ポリアは、弱弱しいが一本気な所を持つ叔父を見て微笑んだ。　人として純粋な叔父が、可愛くも頼もしきにも思えたのだ。

★

さて。　ポリア達が捜索する最中。　地上部も方に目を向けると・・・。

イルガは、ロープを縛った太い石柱の元を微動だにせず。　見張りに残った役人二人は、寒くて足踏みしながら辺りを見回していた。

ダグラスは、崩壊した神殿の周りを歩いていた。　瓦礫と雪ばかりと思うが。

（誰か前に来たな・・・。　アランの爺さんの足にしちゃデカい）

別の崩壊した建物の裏手の物陰。　風で集められた雪が踏まれて固まっていた。　鉄の具足に多い足跡が、踏み固められた雪にクッキリと残っていた。　枠が出来上がっているので、見つけて枠の上に吹き付けられた雪を払えば足跡が見える。

更に。　瓦礫の隙間に、人が通れそうな隙間を幾つか見つけたダグラス。　そこを調べれば、引っ掛けて切り裂けた衣服の布が残っている。　手にとって見れば、雪も着いていなければ、凍ってしまいそうな湿り気も無い。　古びた布では有るが、朽ち果てているとも思いずらい。　手に残る埃には、人の臭いが・・・。

（ヘルダーが言ってたな。　時間の経過した物には、埃の臭いしかしないと・・。　んん、ワイン・・いや、ビアかな。　微かだが酒の臭いが残ってるし、汗染みた埃の臭いもするな。　盗賊だろうか・・・）

ポリア達が地下に降りている。　もし盗賊とするなら、この自分達の居る場所に近づく最大のチャンスでもある。　忍び寄る事を得意とする盗賊が居るなら、その痕跡を見つける事がダグラスの出来る事。

だが、捜索を続けるダグラスの脳裏に、フッとクリスティーの香りが思い返され。　昨夜の熱い夜が思い返される。　集中が途切れ・・・。

（・・・、俺にも・・リーダーが出来るだろうか。　もし、クリスティーと組んだとして、俺にポリアの様なリーダーが・・・。　いや、いやいや・・違う。　クリスティーの望んでるのは、あんなに出来るリーダーじゃない。　ま、駆け出しの仕事なら俺でも・・・ポリア達の時と同じにやればいい。　先を考えると金が要るな。　クリスティーを少しの間、俺が養う事に為るしな）

ダグラスは、柄にも無く女に真剣に為っていた。　クリスティーとチームを組む事を想像する。　昨夜、ベットの中で約束したのだ。　久しぶりに共に過ごす女の言葉に、ダグラスは心揺らいでいた。

高みに向かう道のチームと、なりに生活の為の仕事をするチーム。
ダグラスは、疲れていたのかも知れない。　だから、クリスティーとのらりくらりチームをやって行くのが楽にイイと思えたのだ。

気持ちを仕事に立ち返ったダグラスは、神殿を周り。　崩壊した壁や建物が瓦礫の迷路を築く中を歩いて回る。　確かに、人の生活反応が至る所に残されていた。

アランの話では、春先の雪解けから秋の雪が降り出す季節までの半年近く。　この崩壊市街地は、暗黒街に近い様相を強めるらしい。
放浪者や浮浪者の一部が入り込んだり、事件を犯して犯人が逃げ込む事も多いとか。　だが、冬に成るとこの通り。　冬の厳しさが猛威を振るい、毛布や焚き火程度の防寒対策では、二・三日で凍死する程の冷え込みだとか。　冬に成ると、人気も消える場所だと言っていた。

（見て残る物は、酒瓶や焚き火の跡ばかりだな。　これは、放置されている雰囲気だから・・・秋前の物だな。　さっきの足跡や布の持ち主とは違う・・・か）

洞穴の様に為っている物陰や、倒壊後も口を開けて残る地下階段の隅などに、そんな生活の痕跡が残っていた。

だが、神殿周りを一周し。　ダグラスは、イルガの元に戻ろうとする時、瓦礫の物陰に人の気配を感じる。

（ん？　今・・・呼吸する音がしたな）

凍て付く風に雪を吹き付けられて、氷の壁と為る瓦礫の隙間から、ダグラスを伺う視線の気配もした。

「誰だっ?!!!　居るのは解ってる・・・」

すると・・・。　瓦礫の物陰から、黒い影がヌッと現れた。

★

ダグラスが何者かの接近に気づく頃。　地下のポリア達は、地下奥の神殿内に踏み込んで居た。

「ああ～、フィリア～ナ様・・・」

悲しげな顔のシスティアナが、所々に壊れ掛けたフィリアーナ像に祈りを捧げる。

進入した神殿の広間より二周りは狭い広間には、自愛神・自然神・暗黒神・光輝神などが安置されている。

マルヴェリータとゲイラーが、祈るシスティアナと調べるオッペンハイマーを見守っていた。

一方。

ポリアは、アランとヘルダーを一緒に、更に奥の間に向かっていた。

後ろには、宝を探すギロギロした目のスコットと、その護衛のショーター達が居る。

そして、奥の間に踏み込んだポリアは、堂々と一際大きく立派な石像で知識神が安置され。　その左右に、魔法遣いらしきローブ姿の何者かが安置される場所に辿り着く。　間の広さこそ、先ほどのフィリアーナ像が在った広間と同じだが。　部屋を支える石柱や壁に彫り込まれた文字（ルーン）、そして知識神の立派さを見るに、別格の扱いだったと推察出来た。

石像を見上げるポリアは。

「ハァ、やっぱり・・・知識の神だけは、昔では別格なのね」

横のアランも、少し寂しい頷きを見せて。

「うむ。　超魔法時代は、魔力と知識の高さが人の優劣を分けた時代じゃ。　これもまた、歴史の現れなのかも知れんの」

すると、後から来たスコットが、知識神の額に赤い宝石の様な石が光っているのを見るなり。

「おいっ、そこを退けっ！！」

と、ヘルダーとポリアの間を押し抜けるかの様に前に出て来た。

アランは、本当に無粋な男だとばかりに顔を顰める。

ポリアとヘルダーの目の前で、知識神の足元から石像に上ろうとするスコット。　その欲望剥き出しの様子を見るポリアは、来た通路

の方に顔を向けたショーターに。

「見張らなくていいの？」

ショーターは、出入り口となる通路の所で立っている。　役人達は、通路に見張りの様に立った。

「見張りの必要が在るのはこっちだ」

すると、ポリアは目を細めて。

「アラ。　本物の宝石を見す見す盗られる様にしておくかしら。此処なら、盗賊でも簡単に来れるわ。　それなのに、未だに在るなんておかしいと思わないの？」

ショーターは、顔を俄かに変える。

アランも、横を向いて。

「ガメツイ館長も安直なら、護衛も頭が足らんな」

と。

ショーターは、役人を率いて前に出てくる。

代わりに、ポリアとヘルダーが下がった。

其処に、後から来たマルヴェリータ達と合流する事に為る。

ショーターは、石像の腕によじ登り知識神の額に向かうスコットに、

「館長、罠も視野に入れて慎重にしてくれ」

すると、上る事にしか目の行っていないスコットは。

「フンっ、罠がっ、怖くて・・・トレジャーハンターが・・出来るかっ！！」

元々から財宝を狙うトレジャーハンターとして、冒険者もしていた事が在るらしいスコット。　アランには遠く及ばないが、それでも財宝の一つや二つは見つけた自慢を周りにしている。　確かに、こんな石像一つの罠で怯える彼でも無かった。

だが、皆の見ている中で、スコットが知識神の額の赤く透明な石に手を伸ばした時。　知識神の目を伸ばした腕で塞ぐと・・・。

マルヴェリータが、逸早く異変に気づく。

「アラン様っ、石柱の古代魔法語の文字（ルーン）がっ！！」

「ムっ？！」

アランの唸り声に合わせて、ポリア達も石柱を見る。

すると・・・。

「あっ」

「光ってるぜっ」

驚くポリアに、口走るゲイラー。

マルヴェリータは、その魔法に使う文字が七色に光り点滅する石柱から、魔法を発動するオーラを感知する。　思わず、アランより先に。

「館長さんっ!!　罠が在るわっ!!!」

その後を追う様に、アランもスコットに向かって。

「スコットっ!!　直ぐに降りるんじゃ!!!」

と、鋭く言う。

だが、赤い宝石まであと一伸びで届くと云うスコットは、腕を伸ばしつつ。

「うっ・ウルサイっ!!　こんな時の為の・・冒険者であろう・・がああっ」

届きそうで届かないギリギリの所で、スコットは目の前の宝石にしか目が向いて居なかった。

「何を考えているんじゃっ?!!!」

怒ったアランの声が間に木霊する中で、ポリア達は周囲を警戒してチームで纏まる。　驚いて立ち竦むオッペンハイマーの腕を引っ張ったゲイラーが、ポリアとヘルダーと自分の囲む中に、システィアナとマルヴェリータと共にオッペンハイマーを居させ。

「動くなよ、教授」

と。

「あっ、ああ・・・」

オッペンハイマーの様な者は、先生でも在り学者を兼ねる。　そうゆう者を敬って“御教授”から取った教授と云ったゲイラーの背中で、オッペンハイマーは、ガタガタと震える体を警戒させていた。

だが、皆が辺りを警戒する中で、なんと異変が起こった場所は、知識神の石像の目だった。

手を伸ばしていたスコットは、自分の視界の知識神の顔が変化しているのに気づく。

「んっ？！！　なァッ、何だあああっ？！！！」

優しき顔のジョイスに似た面持ちの青年が知識の神。　時としては、博識の老人と成り。　時としては、利発そうな男子として姿を変えると云う神だが。　今、その顔は、肉食獣の如き牙を生やし。　牛か羊の様な角を生やし。　不気味に笑う狡猾そうで悪意に満ちた若い男の様な顔に変わり出す。

マルヴェリータは、こんな石像の事をジョイスから聞いた事が在った。

「いけないっ！！　ミミックイミテーターだわっ！！！！」

その名前に、アランもスコットを見て大慌てで叫ぶ。

「スコットっ！！！！　その宝石は罠じゃっ！！！！　早く離れろっ！！！！」

だが、その時に。

「取れたっ！！！！」

スコットが、宝石の様な石を手に掴んだ。　心の中で、

（やったぞっ！！！！　俺のモンだっ！！！！）

と。

だが、スコットは、自分の伸ばした手の甲を見て全てを疑う。

「お・・おい、こっ・ここ・・こりゃ何だ・・・。　俺のっ、俺の手が腐ってるぞっ！！　わあああっ、止めろっ！！」

皮膚が見る見る爛れ、ドロドロと爛れ腐る。　皮膚や肉を食い破った蛆が、大量にニュルニュルと湧き出し始め。　手首の骨が見えた。

「えっ？！！　館長さんっ、落ち着いてっ」

ポリアは、高所でうろたえ出すスコットを宥め様と声を飛ばす。

だがスコットは、知識神の肩で恐怖に慄き出し。　宝石を落として手を掻き毟る様に暴れ出す。

「うわっ、うわああっ！！！！　俺の手がァっ！！　俺の手が腐る

っ！！！！！！！」

しかし、見ている誰もがスコットの手が腐っている様には見えなかった。

ショーターは、今にも上から落ちそうなスコットを心配し、知識神の前に出て。

「館長落ち着けっ！　良く見ろっ、何とも無いぞっ！！！」

だが。　マルヴェリータは、暴れるスコットが落ちるのはもう仕方ないと思う。

「退いてっ、石像を壊すわっ！！！」

と、ポリアの前に出て、石像に近付いているショーターに云う。

ショーターは、スコットを殺す気かと思って、マルヴェリータに向く。

「正気かっ?!!　落ちたら只では済まないぞっ?!!!」

目を細め、紫のオーラを宿すマルヴェリータは、

「このままでは、館長さんは気が狂ってしまうわよ。　今なら、まだシスティが治せるわ。　怪我で済むか、気が狂って死ぬか。　どっちがいいのよ?」

「だっだがっ?!」

焦るショーターに、アランが一喝。

「論議する暇は無いっ！！！　早く石像を壊すんじゃ！！！！」

その声に、マルヴェリータは杖を振り上げる。　そして、炎を具現化する魔想魔術を唱え、大人を一飲みしそうな炎の火球を召喚し。

悪魔の如き顔に変わった石像に飛ばした。　炎がぶつかる瞬間に、マルヴェリータは。

「飛ばすわよっ」

と、云ってから。　杖を側めて。

「散ってっ！！」

と。

“ドカン！！”と云う爆発音が起こり、爆風がポリア達に飛ぶ。

「のおおおっ！！！！」

近付き過ぎていたショーターが、爆風に驚き顔を腕で庇う。

マルヴェリータの魔法を腹部に受けた石像は、当たった場所から上半身が壊れて前に折れた。　そこに、爆発のエネルギーが突き上げる形と為り。　狂っていたスコットを、砕け散った石像の破片諸共に天井付近に舞い上げる。

「・・・」

この時、ヘルダーが走り出し。　片方の魔術師の石像前に落下するスコットに向かった。

★

地上では、ダグラスは覆面をした男らしき人物3人を前にしていた。
内二人は、ダグラスを囲もうと動こうとしたので。

「問答無用で斬る」

と、ダグラスが剣に手を掛けた所で。

「待て」

動かない一人が、ダグラスと仲間の両方を見る形で言った。

ダグラスの右の瓦礫の上には、早くも声を聞き付けたイルガが槍を手に立っていた。

黒い布で目以外を覆う形で被る曲者達。

一方、鼻から下を隠す様に布を巻くダグラスが対峙する。

先ず、覆面の動かない男が。

「お前達は、何者だ？　冒険者か？」

ダグラスは、無言で黙る。

（無駄に何か言うのは、情報を与えるだけだな・・・。　ポリアを手本に、一つやって見るか）

ポリアは、何度もリーダーとして駆け引きをして来た。　その姿を見て来たダグラスも、試してみたくなった。　自分をリーダーとして考えて・・・。

ダグラスの背後に回り込もうとした一人が、

「おいっ、聞えているのかっ？」

と。

ダグラスは、あくまでも動かない男の見える鋭い目を見据えて。

「我々が何者か、お宅達が何者か。　この場所では関係の無い事だ。邪魔すれば、斬る」

ポリアよりも強気に出たダグラス。

動かない男もまた、殺気を帯びるダグラスに嘘の無い事は悟った様だ。　だから、か。

「いいか。　此処ら辺は、我々の縄張りだ。　勝手な散策は止めて貰おう」

と。

だが、ダグラスは。

「権利を誰が証明した？　縄張り？　ほう、国の許可でも貰ってるのか？」

動いた何者かの一人が、一歩前に出て。

「許可だあっ？！」

その時、ダグラスは、剣を引き抜く素振りに入り。

「どうやら夜盗の類と見た。　死体でも斡旋所に突き出せば、金に為る。　今まで、此処に来た無益な学者や冒険者を襲っていた輩だろう。　論議する必要も無いな」

ダグラスの話し合う余地の無い言い方に、先に動いた2人は身構える。

だが、動かない男は、目を細めて舌打ちする。　ダグラスの剣の力量を見切ったのだろう。　恐らく、この場に居る3人で束に為っても、ダグラスには敵わないだろう。　しかも、更にその後ろには、イルガも居る。

ダグラスは、黙る男に。

「悪いがな、今回は役人も一緒だ。　もし何か在れば、都市の役人も動かざる得ない状況に為るぞ。　お宅達、兵隊を出す騒ぎまで発展させたいか？」

すると、動いた男の一人がせせら笑う声をして。

「へっ、笑わせるな。　軍が動くかよ」

だが、ダグラスには無駄口だ。

「なら、試してみようか。　何でも、都市を運営する統括のご友人の依頼で来てるんだ。　動くか動かないか、お前達の目で確かめろ」

と、剣を抜き払った。

すると、動かなかった男は、一歩退いた。

「お前達、俺達の仕事を忘れたか？　戦う事は、仕事に含まれていない。　それに、この剣士に我々で太刀打ち出来るか？　力量も見量れん様では、命が幾つ在っても足らんぞ」

と、威勢ばかりいい仲間の二人に云う。

ダグラスは、その言い草が微妙に気に為った。

（“仕事”？、“戦いが含まれない”？　どうゆう事だ？）

ダグラスと対峙した覆面男は。

「長居しない方がお互いの為だぞ。　アンタが幾ら腕が達ても、こっちには大勢の仲間が居る。　その気に成れば、汚い事もして退ける。　さっさと帰るんだな」

覆面男は、そう言うと仲間を見て。

「おいっ、ずらかるぞ」

ダグラスは、此処で迷う。

（捕まえるべきか・・・。　一人捕まえれば、話は吐かせさせられそうだが・・・、敵に回すな）

その時だ。　異変を見守っていたイルガとは別に、見張りの兵士二人が退こうとしている覆面男の脇に飛び出す。

「曲者めっ、捕まえてやるっ！！」

この動きに驚いたのは、ダグラスも覆面男達も同じ。

「なっ？！！　くっ、役人かっ？！！」

「おいっ」

声を掛けたダグラスの脇に回り込んだ曲者二人が、役人の様相をした者が出て来たものだから慌てて。

「うわっ、ホントに役人が居るっ！！　殺しちまおうっ」

と、ダガーを引き抜いた。

これでは、完全に戦闘に成る。

ダグラスは、仕方ないと思い。

「悪いが、役人が捕まえると云う以上は手加減出来ないぞ」

と、ダガーを引き抜いた二人に剣を正眼に構える。

「くそっ、何でこう成るっ！！」

ダグラスと対峙した覆面男は、役人二人が目の前で近過ぎるとショートソードを抜いた。

イルガも瓦礫の上から滑り降りてくる。

「わあっ」

「こん野郎っ」

ダグラスにダガーを突き掛けて来た二人は、ダグラスに一人はかわされ、一人はダガーを持つ手を剣の柄で打たれて。　直ぐに腹部と首筋にそれぞれが柄の強襲を浴びて気絶と成る。

一方、ショートソードを引き抜いた覆面男は、幾分戦い慣れている。

だから、訓練ばかりの役人二人とは優位に戦う。　だが、其処に走って来たイルガの槍の柄を鋭く突き込まれ。　剣を弾き飛ばされた上に、突き飛ばされる。

「うわあっ！！！！」

転倒した曲者の男の声が上がった。

「よしっ、捕まえろっ！！」

囲むだけした出来なかった役人は、氷の敷かれる瓦礫の道上に転がった覆面男を取り押さえに動く。

槍を構えてその様子を見るイルガは、ダグラスに向いて。

「捕まえて良かったのか？」

だが、ダグラスは首を竦めて。

「さあ。　役人が早まったんだ」

と。

役人二人は、三人の覆面男を捕まえた。　気を失った三人の面体を検める為に覆面を剥げば、何処にでも転がる小悪党面の男二人と、スッキリとした顔の中年男が一名。

ダグラスは、取調べもしないのにこの寒い中で顔を晒させるのは酷だと思う。　だから、三人に剥いだ覆面を口元が隠れる程度に巻いて戻した。

さて。　その頃。

「おちついてく～ださいな。　フィリアーナ様、この方のお心を鎮めて下さいませ」

システィアナが、助けられたスコットに掛けられた“狂気の幻覚”と云われる魔想魔術の幻覚呪術を解いた。

「あっ・・・」

ギョっと目を見開いたままに固まったスコットは、焦点が狂っていた目を少しずつ元に戻す。

床に座ったままのスコットを見て囲むショーターと役人。

其処から少し離れた壁際で、戻って来たシスティアナを含めて遠目に見守るポリア達。　ポリアは、スコットの落とした赤々と光る宝石の様な石を持っていて。

「これ、罠に誘き寄せるエサみたいな物かしら・・・。　見た感じ、水晶の様だけど」

マルヴェリータは、アランと共に石を覗き。

「罠に使われる魔法の魔力を閉じ込めた水晶よ。　これに手を伸ばして何者かが盗ろうすると、さっきの魔法が発動するんだわ。　多分、あの石柱が発動体ね。　今では誰も出来ないマジックモニュメント秘術の入り口の技術だわ」

アランも同意の頷きで、迷惑極まりないと云った素振りでスコットに首を回し。

「じゃな。　欲に身を染めるからじゃ」

だが、ポリアは、その手にする石を持ってショーターに。

「ショーターさん。　コレ」

自分を見たショーターに、ポリアは落ちた赤い石を投げる。

「んっ？！」

と、驚くのは、石を受け取ったショーター。

ポリアは、直ぐに。

「その石、水晶みたい。　まだ魔法を発動させる魔力を残してるみたいだし、鑑定して貰えば結構な値段するかも。　私達は、宝物に手を着ける気は無いから持ってて」

石を見て緊張するショーターは。

「大丈夫なのか？　この・・赤い石は？」

マルヴェリータが手短にと。

「発動体と離れたから、もう魔法は放たないわ。　石像も壊れたし、魔法の文字を刻んだ石柱も半壊したしね」

ショーターは、もう魔法を発動しないと聞いて安心し。

「そっそうか・・・、ならば預かろう」

しかし、ポリアとアランは直ぐに別の方向に顔を向ける。　それは、マルヴェリータの壊した石像だ。

早くも地上部と地下の潜入隊で危険が起こった。　丁度、昼時。極夜の空は、白々と寒い空を白ませて、短い一時の早朝の様な空模様をみせていた。

ポリア特別編サード・上編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾　ご愛読ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・上編

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）

≪隠されし扉≫

ポリアは、アランに囁いた。

（先生・・・あの石像には、何か仕掛けが在るのではありませんか？）

アランは、そう云われてポリアを見る。

「“仕掛け”・・・のお。　どうして、そう思うんじゃ？」

アランが小声ながらに聞き返して来る。　ポリアは、アランの脇で石像を見上げて。

「いえ。　今の罠なんですが、この場所には不釣合いです。　只の神殿で、石像を盗むのは考えられ難い事。　その石像に、態々宝石の様な魔力の篭った水晶を埋め込んで罠を仕掛けるだなんて・・・。

何か秘密が在って、その秘密を探る者に罠の恐怖を与える仕掛けなのではと思って・・・」

「ふむぅ」

アランは、ポリアの言葉に可能性は在ると考えた。　こんな石像など骨董としての価値を見出せるのは、年数的からしても今頃に為っての事。　罠が仕掛けられたのは何時頃か解らないが、仕掛けたのが超魔法時代だとするなら、ポリアの言う通りに些か不自然と云える。

ポリアの言葉を逸早く信じたオッペンハイマーは、ポリアとアランの間を抜けて石像に近付き出しながら。

「調べてみましょう」

こうして、罠を発動させた石像を調べる事に。

一方、地上部では・・・。

「後で都市部に連行して、ショーター様から直々に取り調べて貰う。お前達、盗賊だったら縛り首だぞっ！」

3人の曲者を捕まえた役人二人は、ポリア達が降りた亀裂近くの所に3人の曲者を縛り付けて座らせて言う。　ダグラスとイルガの御蔭だが、明らかに曲者達を見下ろす役人達は、さも自分達が掴まえたかの様な素振りだ。

ダグラスは、覆面を剥がされた男達を腕組みで見ている。　ロープの縛られた石柱の近くで、イルガと並んで遠目に。

（オッサン、あの捕まった3人・・・どう思う?）

イルガは、少し警戒を強めて辺りの気配を伺いながら。

（ウム。　お主にヤられたあの二人は、人相も態度も悪いし何処かのゴロツキか、盗賊かも知れん。　だが、わしに気絶させられた男は、身じろぎもしないで黙っとる。　度胸も据わっとるしの、見た所・・・冒険者か・・・主従持ちの用人の様な印象じゃな）

ダグラスは、そのイルガの言葉を聴いて。

（そうか・・・。　確かに、あの俺と話した時のあの男・・・、冒険者の剣士にしてはど～にも腕が無さ過ぎると思えた。　だが、動きに無駄が在る訳では無いし、話してて一角の人物とも見れたんだよな～。　そうか、貴族や商人の用人か）

（いや、まだそうと決まった訳ではあるまい。　わしは、見て思ったままを申したまでだ。　とにかく、掴まえた以上は役人に任せよう）

（ああ」

冷たい路面に座らされた捕まった曲者3人。　ブルブルと震えて、役人に許しを請う二人の手下の様な曲者に対し。　ダグラスと対峙して話し合ったあの男は、ピクリと身動ぎもしないで座っている。

ダグラスは、遠目から瞑目して動かないその男を見つめた。　男は、後ろに撫で付けた髪型で、細面の中年。　垢染みた様子も無く、身を崩して人の道を踏み外したという雰囲気が感じられない男性だっ

た。　ダグラスには、この人物が盗賊とは思えなかった。　確かに、イルガの言う通り。　貴族や商人の執事でもやっていそうな用人の様な雰囲気が在る。　知性の漂うインテリ肌の人物に見えるのだ。

（もし、イルガのオッサンの言う通りだとしたら・・・、雇い主は誰だろう。　いや、そもそもゴロツキみたいなのを雇って、何でこんな所に出て来たんだ？　見た所、此処で住んでいる様な印象も無いし・・・。　気に為るな・・・）

ダグラスは、その場違いな場所に場違いな人物が居る事に直感的な違和感を覚えた。　だが、今回はアランとオッペンハイマーと云う主導人物が居る上に、面倒なスコットとショーターと云う役人まで居る。　下手に動く事は出来ないし、捕まった者達の事に首を突っ込める筋合いでも無い。

だが、ダグラスは気に為った。　不自然・・・それだけでは言い表せぬ不協和音の様な胸騒ぎがしたのである。

★

「ほぉ～、流石に冒険者として名が売れ出したチームだけあるわいさ」

喜んで言うアラン。　備に調べたオッペンハイマーが石像の裏に隠されたレバーを見つけ。　そのレバーを押し込む事で、対と成って

いた魔法使い風の石像が動いて地下道が現れたのに驚いて見せたのだ。

ポリアは、喜ぶよりも寧ろ不気味と思えて。

「先生、こんな所に隠し通路とは・・・不思議な感じがしますが。此処は、只の寺院ではないのですか？」

「ふむ・・・。　寺院とは表の顔で、裏では人身売買や盗品の取引が行われるのは今でも在る事。　此処は、只の寺院では無さそうだの～。　じゃが、全ては実証たる発見から推察するのが基本。　とにかく、中に行ってみよう」

「解りました」

見ていたショーターは、気の付いたスコットを支えながら。

（冒険者風情と言えど、今回は侮れん・・・。　まさか、本当に見つけるとはな・・・）

ショーターの目は、ポリアに向いていた。

ポリアは、仲間と話し合いながら、同じ隊列の並びで先行することを決めた。

現れた通路は、幅が狭い。　アランとポリア二人が並んでギリギリだろう。　魔法に掛かったスコットがフラフラしていて、ショーターか役人の支え無しでは歩行が遅い。

ポリアは、ショーターに。

「館長さんを連れて行くかどうかは貴方が決めて。　狭い通路で、足手纏いが道を塞ぐ可能性も有るから、慎重に話し合ってね」

と、言っておいてから。　アランに。

「先生、では、行きます」

「うむ」

アランも、スコットとショーターを見て。

「世話の焼ける御仁じゃ。　だが、自分の判断はしっかりせいよ」

と、ポリアの後ろに続く。

見ているショーターは、周りに立つ役人二人に。

「館長を頼む。　俺は、先を見てくる。　自分で歩ける様に・・・」

と、ショーターが言っている時に、スコットは青白い顔をショーターに向けて。

「ええぃ、ウルサイっ。　早く行けっ・・・。　わ・・私は、少し休んでから行く」

と。

ショーターは、この期に及んで良くも空意地が出るものだと呆れながら。

「解りました。　では、先に行きます。　くれぐれも、足手纏いに為らぬ様に休んでください。　見つけた物は、持ち帰ります故に」

冷や汗を掻いて床に座ったスコットは、ショーターを見上げて。

「しっかり見張れよ。　あの冒険者達をなっ」

ショーターは、頷くだけだった。

結局、スコットは一人で残ると言うので、連れて来た兵士を一人残し。　ショーターは、残りの二人の兵士を連れてポリアの後を追い始めた。

さて。　大きな石のブロックを積み上げて作られた通路の壁は、黒く鈍い光を湛える。　踏み込んだポリア達の足音だけが、暗い闇に木霊し。　光の小石から放たれる光が、鈍く先を数歩ぶんだけ照らしている。

ポリアは、歩調をゆっくりにして、上下左右に気を配りながら歩いて行くと・・・。

「開けてる・・・」

一段低い間に踏み込むと同時に、左右の壁が見えなく為って閉鎖感が無くなった。　ポリアの後から踏み込んだアランは、足の下に積もった埃の絨毯が有ると感じながら。

「フム。　此処は、何じゃろうか。　埃が体積している以上、外部からの進入が他にも可能なのかも知れない。　此処まで来る時の回

廊には、埃は少なかった。　どれ、調べよう」

と、言う。

ポリアは、足元に光を向ける。　確かに、埃が堆積していた。　床一面を覆うくらいである。

其処へ、次々とオッペンハイマーや他の皆が踏み込み。　そして、ゲイラーが一番最後に入って来て。

「何だか、空気が淀んでる感じするゼ」

マルヴェリータとシスティアナは、オッペンハイマーに着いて動く。

埃を確認したポリアへ、アランが辺りを調べながらにこう言った。

「埃とは、意外に情報を齎す物なんじゃよ。　普通、埃は何処にでも貯まる。　それは、空気に埃が含まれていて、風で運ばれるからじゃ。　ワシは、数多くの遺跡や洞窟を見回ってきた。　この埃は、様々な物を訴え掛けてくる物なんじゃよ」

ポリアやヘルダーは、埃を見る。

アランは、壁際に光を向けて。

「例えば、先ず埃を生むのが蜘蛛の巣じゃ。　空気に含まれる埃を受け止めて、時期に重さで落ちる。　じゃが、蜘蛛とて生き物。食べ物の無い所には入って来ん。　蜘蛛の巣が有る様ならば、ワシ等が進んだ道以外に道が有る可能性が有る。　例えば、壁の損傷、隠し通路、窓、空気穴などな。　蜘蛛が侵入出来て、尚に餌も侵入

するから蜘蛛も居付く」

ポリアやヘルダーが、後ろから来たゲイラーと共に上を軽く見回すが、蜘蛛の巣などは見当たらなかった。

「無いぜ。　センセーよ」

と、ゲイラーが言えば。

アランは、床の埃を屈んでは掴み。

「次に。　埃自体を見るのも重要じゃ。　蜘蛛の巣に付着して落ちた埃は、色が変色して纏まりが見れる。　逆に白っぽい埃は、もう分解されきった物。　例えば、木や紙なども朽ち切って分解されると白っぽくなる事がある。　埃は、風の無い場所では、人なり生き物が動かないと広がらないのも特徴じゃ」

ポリアは、埃を足で触る内に埃の高さが違う事に気づく。　微々たる違いだが、光を当てると確かに積もり方に小さな高低差が。　直ぐに、アランに向いて。

「先生、埃の積もり方に高低差が在るのは？」

「フム。　弱い風が吹いていたのか。　水が流れていたとか。　他には、蛇の通り道も高低差が出来る事が有る。　洞窟などに住む蛇の種類には、団体で生息し。　仲間の通った道を後から辿る習性を持つのも居るからの」

だが、ポリアはその埃の堆積の仕方が気に為った。　場所場所で、小さな山を作る様に積もっている。

（上？）

ポリアは、光を上に向けて天井に抜ける闇の空間をマジマジと見た。

すると・・・。

「あっ」

小さく声を上げて身動ぎをしたポリアに、ゲイラーが近寄り。

「どうした？　何か在ったか？」

その様子に、アランやマルヴェリータ等もポリアに向く。

ポリアは、暗闇の宙に走る黒い帯を指差して。

「あ・アレっ」

皆、光が僅かに照らし出す物体を見て、言葉を無くした。

其処に、遅れてやって来たショーターと兵士二人が到着して。

「お、此処は開けてるな。　おい、何か在ったか？」

ポリアは、ショーターに向いて。

「此処・・・拷問部屋みたいよ」

ポリアの方に近寄ったショーターは、その足をピタリと止めた。

≪神殿の暗部は、異質な暗闇に包まれる≫

外でロープを見張るダグラスとイルガは、兵士達のイジメを止めて疲れていた。

ロープを見張る兵士二人は、縛られて動けない曲者3人に優越感を覚え。　尋問紛いに槍で突いたり、頭を叩くなどする。　フラストマド大王国は、行き過ぎた取調べはご法度に為っている。　以前に、ポリアがその現場を見て押さえきれず、イルガと二人で偉い何者かを頼って役人を裁いた事もある。

ダグラスは、曲者3人を雪の吹き付けない場所へと移動させた。
崩壊の在った建物の中でも、形の残る軒下に3人を移動させてから、イルガの元に戻り。

「役人とか兵士ってのは、何ともいけ好かないな。　全く、大人のする事か？」

と、イルガにムカついた心情を小声で言う。

対するイルガは、ダグラスに怒られてフテ腐れた態度を仕草で表現

している兵士二人を見つめて。

「一方的な状況では、本人の持つ様々な顔が現れるものだ。　特に、権力の中に身を置く者ほどその傾向は千差万別。　止めた御主もその本質を現し、向こうも同じ事よ。　ま、御主のした事に間違いは無い。　お嬢様が残っていても、同じ事を言われて止めるだろう。　人を思った行動に対し、相手がどう応えるかはそれぞれだが。道を外した応えは自分を滅ぼすのみ。　とにかく今は、お嬢様達が戻るのを待つのが仕事よ」

その話を聞くダグラスは、イルガのポリアに対する忠誠心が並大抵では無いと思える。

「オッサンのポリアに対する姿勢も随分だと思うゼ。　良く疲れないな？」

するとイルガは、フッと顔を綻ばせる。

「最初は、お嬢様を何時説得して戻って貰うか考えて居った。　だがな・・・。　ケイに出会い、羽ばたき始めたお嬢様は、どんどん強くなる。　そして、ワシも若かれし頃に抱いた冒険者としての夢を、今に為って満たされるとは思わなんだよ」

「オッサン・・・アンタ」

ダグラスは、イルガが前にも駆け出しの冒険者として生きていた事は知っていた。　一度諦めてしまった夢を、今に他人で掴んだのだ。　イルガは、ポリアを命懸けで守る気構えは誰にも負けない。　ポリアもまた、丸で絶対的な信頼で結ばれた家来と云うか、お供としてイルガを大切にして頼る。　チームの皆でも、この間に踏み込め

るのはシスティアナとマルヴェリータぐらいだ。

ダグラスは、チームに入って半年以上もこの関係を見続けてきた。
ゲイラーは、簡単に出来る事では無いと関心していたし。　ヘルダーは、見習うぐらいの気合でポリアに心酔している。　ダグラスからすれば、その仲間の様子が馬鹿らしいと思える処が在る。　だが、しかし。　ゲイラーにしろ、ヘルダーにしろ、その真っ直ぐな所が逆に戦う戦士としての技量を伸ばす切っ掛けに為っている。
ダグラスは、置いて行かれた形だった。

（俺は、何処か間違っているのか？　俺は、ゲイラーやヘルダーの様には成れない。　ポリアは、其処も理解してる。　俺は、・・・・許容されてこのチームに居るだけに過ぎないんだ）

ダグラスは、表情を寂しくさせて、捕らわれた曲者を見る。

★

さて、暗闇の迷宮の様な神殿内部に踏み込んだポリア達。　ショーターは、天井の上に這わされた鎖を見て驚いた。

「なんだっ、あの錆びた鎖は・・・？」

ポリアは、自分の視界の先にぶら下がっている手枷の付いた鎖を光で照らし。

「見て、拘束具。　吊り上げる鎖も向こうに見えるわ」

ショーターは、アランに踏み寄り。

「此処は、一体・・・？」

アランは、その黒く錆びた鎖を見上げながら。

「さあ。　人を捕らえておく所・・・には間違い無いの。　今、光の動きでチラリと見れたが、向こうに人を拷問する器具が見えた」

ゲイラーやヘルダーが、その異常な道具の存在に警戒し。　ポリアは、光を廻らせてその器具を探す。

其処へ、オッペンハイマーが興奮の声で。

「アラン殿っ、まっ・・・まさか、此処はあの・・秘密組織の塒ではっ？！」

“秘密組織”。　オッペンハイマーの口から飛び出した言葉は、皆を引き寄せるに十分だ。

だが、アランは。

「あの憶測に存在する集団か？　確認されているのは、奇妙なマークだけだ。　確証など、何処にもないのだぞ」

しかし、オッペンハイマーは、寧ろ発見したとでも言いたそうな素振りで。

「此処っ、此処で見つかるかもっ。　調べましょうっ、その為に来たのです」

だが、アランは渋い顔で頭を振り。

「いや、先ずはこの神殿の構造を少し見回ろう。　本格的な調査は、軍に此処を守って貰える様に手配してからで十分じゃ。　何日も此処に居続ける用意はしとらんし。　今回の目的は、此処が大まかな調査対象と成り得るかどうかの斥候作業じゃよ」

オッペンハイマーは、身悶えするような素振りで渋々黙る。

だが、ショーターは、アランに顔を近づけて。

「アラン殿。　その“秘密結社”とは何なのだ？　私は、軍を動かすにしても詳細な報告を求められる。　説明はして欲しいのだが」

アランは、何か非難すら滲む目でショーターを見てから、視線を外してオッペンハイマーに向けると。

「彼に説明して貰いなさい。　私は、未だに信じていないのだから」

全員の目が、オッペンハイマーに向かう。

「・・・。　ポリア、向こうに光を向けて貰っていいかな？」

オッペンハイマーは、アランが拷問器具を見つけた方向に指を向け

る。

「はい」

ポリアは、光をそっちに。　アランも向け、マルヴェリータも向けた。　ショーターは、スコットの為に光の小石を置いて来たので、ポリアの横まで・・見える所まで歩く。

オッペンハイマーは、ポリアの光を向けた先に歩き出す。　そして、壁際に向かうと、埃を被った黒い何かを見て。

「ああ・・・あああああ・・・こっ・コレは・・・」

と、慌てた様子でその黒い埃を被った物に飛び付き。　大慌てで埃を払い始める。

見ていた一同は、ポリアとアランが近付くのに合わせてオッペンハイマーの近くに歩み寄った。

「ポリア、アレ・・・何？」

マルヴェリータが、耳打ちする様にポリアに言った。

ポリアは、解らずに首を振る。

オッペンハイマーが埃を払うのは、鋼鉄の箱型をした物だ。　赤茶けた錆びを表面に葺くその物体の大きさは、ポリアの背丈よりも高く。　埃が払われるに遵って解るのは、棺の様に大まかな人型の形をしていると云う事だ。

システィアナは、何か怖い感覚を覚えたのか、怯え出してゲイラーの背後に隠れる。

アランは、その鋼鉄の箱型をした物の正面の腹辺りに両開き出来る取っ手が在り。　上部の頭型をした丸い箱の所に、星型のマークをしたエンブレムを見つけると。

「あぁ・・・。　これでまた、確証が持てるのか」

と、感嘆たる言葉を吐いた。　項垂れて、何か拒む様子が滲む。

ポリアは、アランが何故に嘆いたのかを疑問に思いながら。

「オッペンハイマー様、コレは一体・・・」

埃を払い落としたオッペンハイマーは、ポリアを見て。

「聞く前に、コレを見なさい」

と、その重そうな鋼鉄の取っ手を握り、扉を開こうとする。　だが、扉を開けずに重さに唸るオッペンハイマーで。　それを見たゲイラーが、非力なオッペンハイマーを見兼ねて。

「教授、俺が開こう」

と。　だが、ゲイラーの服をギュッと握ったシスティアナが居て。

「システィ？　どうした？」

と、ゲイラーが止まる。

ヘルダーが人型の箱に近寄り、オッペンハイマーに力を貸した。

ーギギギィ・・・・ー

錆びた鉄の擦れる音が軋み、開かれた中を見た一同は・・・。

「コ・・・コレはっ？」

「何よっ！！　コッ・・・コレ？」

皆が驚く中。　システィアナは、ギュッと眼を瞑ってゲイラーの後ろに隠れる。

システィアナの様子と箱の中の異常さに、ゲイラーは言葉を失った。

オッペンハイマーは、箱の前に屈む。

「この器具は、“鉄の脅迫者”・・もしくは、“鉄の尋問官”と記述が残る。　過去、人と人が激しく争った戦争時代、捕虜を尋問するのに考案された拷問器具だよ」

ポリアは、そう説明されても異常だと身の毛がよだった。　その鉄の箱の中は、鋭い鉄の棘が無数に作られていて。　頭部の正面には、閉めると顔に向けて落下する棘の落し蓋までもが・・・。　こんな物の中に入れられて扉を閉められたら、体中が穴だらけに為る。

ショーターも、口に手を当てて気分を悪くしながら。

「コ・こんな物で尋問だと？　秘密吐く前に死ぬぞ・・・」

オッペンハイマーは、皆に在る推論上の昔話をし始める。

今から、凡そ３００年以上前。　この大陸に、超魔法時代と云う魔法の隆盛期を迎えた時代が在った。　その時代で、何か異常な現象が起こり、時代の時間が乱れて長い天変地異が続く時代が在ったと云われる。　魔法遣い達が激減し、古代魔法を超えた超魔法の技術は殆どが消し飛んだ。　技術は、その異変を掻い潜る防御魔法の施された遺跡などのみに残り。　技術の解析は、事実上で不可能と成った。

大異変の影響か・・・。　時間が止まった不遇の時代とされる間の事は、記録的な物は何一つ残ってはいない。　その間、人がどう暮らしていたのか・・。　誰にも解らない。　ただ、今に時間が経過して、季節が巡る世界が戻った以上。　その不遇の時期は、過ぎ去ったと云う事だろう。　この時期の事は、前にＫが一瞬だけアデオロシュの城へ行く途中で触れていたのと同じ事である。

さて。

超魔法時代の頃を探る研究が始まったのは、ほんの１００年ほど前からだ。　依然として、魔法学院自治州カクトノーズは、その研究に介入せず。　民間の学者や魔法使いが調べるのみの状態だ。　各国も、恐ろしき破滅の力を秘めた超魔法に介入するのを誰も推奨しない。　滅びたくないと云う暗黙の了解で、誰も推進しないのだと思われる。

所が、近年。　その調査に進展が見え出した。　アランの様な、優秀で冒険者としても調査する学者達が登場し。　国の一部で、その恐ろしさと復活の断固たる反対の為に、当時の遺物を発掘しようと

動く事になった。

その発掘の現場にて、時折隠された部屋で発見されるのがこの拷問具。　人と人が戦争をしていたのは、超魔法時代の更に前。　その後にまで戦争を続けていたのは、一部の僅かな国のみと成っていた。

超魔法時代には、魔法で拷問をせずとも口を割らせる方法が考案されており。　拷問器具を使ったと思われる形跡が無い。　なのに、何故かこの様な拷問器具が存在するのだ。　研究者達の間で憶測や推論が幾度と無く交わされて、秘密組織の存在と否定に対する不確証の論争が続いた。

だが、在る学者が、拷問器具に彫り込まれた星型のエンブレムに注目し、一つの見解を出した。　それは、超魔法時代に魔法の隆盛と逆行する何かの一派が居たのではないか。　そして、その一派は、迫害をされて凶暴な異端集団を形成したのではないか。　恨みを持つ魔法遣いに対して、現実的な痛みを与える拷問を推奨したのではないか・・・と云う仮説である。

根拠の一つは、拷問器具と云う古風で誰にでも取り扱える器具や用具を用いてる点。　そして、必ず使う器具に掘り込まれる星型。更に、何か異様な研究を行っていた形跡を残す事などを上げた。

オッペンハイマーは、その見解に賛同している。　何故なら、魔法は先天的な素質要素が全てであり、後天的な要素は努力と云うより魔法の研究にある。　つまり、入り口として魔力と云う先天的な素質を有さなければならない訳だ。　だが、誰にでも扱える用具や用いる事の出来る器具は、先天的な適正よりも、寧ろ後天的な努力や理解力や勤勉さが求められる。　つまり、努力と理解力を高めて知識を得れば、誰にでも仕える訳だ。

次に、オッペンハイマーが見るのは、紋章・・エンブレムだ。　超魔法時代の魔法使い達は、挙って自分オンリーの独自なエンブレムに拘り。　自分の名声と共に平民から出世すると、個人個人で独創的なエンブレムを創り家紋として誇張した風潮がある様だ。　それに対して、この拷問器具を用いる何者か達は、星型のエンブレムを唯一とし。　他に象る紋章は見られない。　つまり、思想なり信念なりに統一性が見られる。　個人主義の魔法遣い達とは、明らかに違う。

最後に、オッペンハイマーが見るのは、その秘密性だ。　魔法遣い達は、自宅や別荘に個人の研究室を持ち。　他人とは協力して研究をしない傾向がある。　若しくは、弟子を取って師弟間のみの集団を形成して研究する。　だが、この謎の秘密組織は、必ず公共の施設や地下水路などに秘密の会合場所と研究室を設けている。　幾つか発見されるその場所は、何処も似た様な場所で、煌びやかな魔法遣いの研究生活、個人主義的な研究生活とは食い違い。　何人かで纏まった組織的な研究でもしていたのではないか・・・と考えられるのだ。

オッペンハイマーは、黙るアランを見てからポリアを見る。　その顔は真剣な顔であるが。　何処か狂信的なまでに何かを信じる偏執的な強さを滲ませるもので。　ポリアは、叔父がその研究へ密かにのめり込んでいる感じを受ける。

オッペンハイマーは、黙る皆を見回して。

「また、こうして器具が見つかった。　これは、秘密裏に存在した組織を窺わせる。　神殿と云う場所は、超魔法時代には民間人か僧侶しか来なかった場所だろう。　だから、この秘密組織は、此処を隠れ蓑にしていたんだと思う」

ゲイラーは、システィアナが拷問器具を異常に恐れているのを見て。

「教授。　そのおっかない器具は、実際に使われていたのか？」

オッペンハイマーは、グッと立ち上がった。

「当たり前だ。　現に、この器具に付けられた棘は、先端の腐食が激しいし。　中の隅っこに、蝿の幼生が干からびてミイラ化した物まで残ってる。　恐らく、何らかの目的で使われてた可能性は高い。　拷問か、殺害かは解らないが」

ゲイラーは、それで納得した。

ポリアは、ヘルダーに。

「その扉閉めて。　システィが怖がってる」

ヘルダーは、頷き扉を閉めた。

終始黙るアラン。

ポリアは、アランを視界に入れた。

（先生は、どうしたのかしら。　いきなり黙って・・・）

それがポリアにとっては、一番の不可解である。

一方、オッペンハイマーは、棺の様な鋼鉄の拷問器具に彫り込まれた星型のエンブレムを見て。

「ああああ・・・現実にこの目で見る日が来るとは・・・・。　間違い無い・・間違い無い・・・・」

皆が、この異質な空気に言葉を繋げられなかった。

ポリア特別編サード・上編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾。　更新が大幅に遅れて申し訳ありません＾人＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・上編　最終話

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）

≪引き上げて・・・様々な中で別れは突然に≫

ポリア達は、夕方に差し掛かる頃に外に出て来た。　隠し通路は、アノ不気味な拷問器具の有った更に奥深くまで伸びていたが。　構造自体は簡単な一本道であった為に、見回るのには難しくなかった。

さて。　地上に上がったポリア達一同は、曲者を捕らえた事をダグラスとイルガから報告された。　兵士達は、スコットとショーターにその同じ事を報告している。

「曲者ねぇ・・・。　何者かしら」

「さぁ・・、盗賊かも」

目元のみを噛み合わせるポリアとマルヴェリータに、ダグラスは、戻ってきたチームの仲間を前に距離を近くして、小声で。

「それが、どうも一人盗賊とか無頼の何者でも無い感じの人物が紛れてるんだ。　雇われた目的は、この辺見回りであって争いは含まれてないとか言うし。　他の二人はゴロツキと思えるんだが、ど～

も一人だけその男は礼儀もそれなりに弁えた人物に見える。　良くは解らないんだが・・・、何と無く薄気味悪い」

ポリアは、ダグラスの報告を受けて。

「確かにそうね。　何処に居るの？」

「ホラ、あそこに座らせてある。　捕まえた後に、兵士達がチョ～シこいて暴力振るうから。　こっちに引き離した」

すると、顔を覆う布から見えているポリアの目が、柔らかく微笑む。

「ダグラス、イルガ、ありがとう」

イルガは、直ぐに目礼をして。

「は」

ダグラスは、急にポリアが優しく為るので。

「おっ、おお」

驚くダグラスとイルガの間を分け行く様に歩き出したポリア。　その後を着いて行くゲイラー達を見送るダグラスは、ポリアの反応に時を止めてしまった。

それに気付いたイルガは、ダグラスを見上げ。

「お嬢様は、御主が兵士の暴力を止めさせた事に喜んだまでよ」

と、説明してやる。

「・・・・そうか」

イルガの説明を聞いたダグラスは、解った様な・・・解らない様な心持ちで頷いた。

ポリアが貴族と知ってからダグラスの心はポリアから更に離れた。
だが、ポリアが貴族として、この国の一員として、役人と云うべき兵士の横暴を止めて貰えた事に感謝した訳だと解ると。確かにポリアの貴族としての振る舞いが理解も出来る。複雑な心境だ。

さて。

ポリアは、もう陽の暮れ掛かった夜の様な中、崩壊市街地の瓦礫前に歩み寄った。太い円形の石柱の脇に、石の路面に座らされている3人の曲者を見に来たのだ。ポリアが近付いたのを気付く3人の内、ガタガタと震えながら恨めしい目を向けたゴロツキ風体の男が。

「何だおめえ等っ、見せモンじゃねえーぞっ！！！」

震えて呂律が微妙な罵声であったが、まだキレる元気は有るらしい。
唇が青く、かなり寒いのだろう。だが。ポリアは、済まして前を向き座っている中年男を見て目を見張った。

（あっ・・・ロバート・・嘘っ！！！）

ギョッと見開いた目に映るその人物は、幼きポリアの脳裏に記憶が焼き付いて居る。少し年齢を重ねているが、見間違いの無い顔だ

った。

そこに、ショーターが、

「よしっ、都市に戻るぞっ。　お前達は捕らえた3人を引っ立てろ。万が一の事が在っても、守りは俺と冒険者で事足りる」

「ハッ」

兵士達が、ショーターの命に敬礼をする。

ポリアは、叔父を探した。

「いや、アラン殿。　それは・・・」

オッペンハイマーは、アランに何やら頼んでいる様子だ。　アランは、あの拷問器具を見つけてから喋らなく為った。　オッペンハイマーは、逆に興奮を交えて饒舌に・・。

「お・・」

思わず、オッペンハイマーに“叔父”と言い掛けたポリアの前で。

「よ～し、引き上げだっ」

と、元気を取り戻したスコットが言う。　自分だけ罠に掛かり、間抜けな所を見せて少し苛立ち気味である。

「ポリア・・どうしたの？」

マルヴェリータが、急に様子の変わったポリアに声を掛ける。

「えっ？」

ポリアは、自分を見る仲間を見た。　ゲイラーとシスティアナの並ぶ隙間から、こっちにやって来るイルガとダグラスが見える。

ポリアは、此処で何かを言うのはマズいと思った。　だから、直ぐに歩き出したショーターを見て。

「ううん。　出発を言おうと思っただけ。　さ、戻るだけよ。　最後だから、気を引き締めて行きましょう」

「？」

仲間一同、ポリアの態度に疑問を浮かべる。　何か言い掛けるのを止めるポリアが珍しいし。　濁した様子が丸解りだった。　だが、役人達の居る手前でそれを問い質す皆でもない。　普段どおりの様子で歩き出す。

そして、夜も深ける前に都市部に戻った一同。　スコットとショーターは、兵士達と共に噴水広場で別れて市政の中心に戻って行く。

一方、アランを今夜は招きたがったオッペンハイマーの御蔭で、ポリア達はアランを送らずにオッペンハイマーの屋敷に直行する。
ただ、ダグラスは噴水公園で。

「んじゃ、俺は今夜も飲みに行ってくらぁ～。　明日、オッペンハイマーさんのお屋敷に戻るよ」

と、別れる。

ゲイラーは、ムッとしたヘルダーの脇にて。

「おい、ダグラスっ。　おい、おいって！！」

だが、ポリアは呆れた顔ながら笑みも浮かべていて。

「ゲイラー、いいわ」

と、去って行くダグラスを夜の闇の中で見送る。　冷たい風が吹きつけ、また雪が降る公園内だった。

★

「まあ～、ポリアっ！！　お帰りなさいっ、寒かったでしょ？　夕食の準備は出来てるわよ～」

オッペンハイマーの奥さんである夫人が、屋敷に戻り次第にポリアに飛びついた。

雪を払い落とすゲイラーは、ポリアがこの国の公爵家筆頭の家柄と

知ってこの光景を見ると、何とも言えぬ思いがする。　平民出の自分達が一生肩を並べられないと想像する階級の皇女が、今やリーダーとして共に同じ目線の場に居るのだ。　ポリアは、自分の素性を隠していた。　だが、偉ぶった事も無かったし、仲間達と自分に変な階級の敷居や礼儀も持ち込まない。　丸で、平民出のお嬢様と云う存在でしか無かった。　だが、時折見せる気高さやその気品は、“公爵”と聞いて頷けるし。　また、自然と礼節を守りたくなる雰囲気を醸し出す。　そして、ポリアと居ると、貴族も色々で自分の抱えた偏見が壊れて行く思いがする。　貴族もまた同じ人であり、その地位に居る事を保ち、示し、予想を遥かに超えた苦労や気遣いをして生きているのだと解った。

（確かに、俺達がいざ貴族になっても、こんな暮らしは出来ない。　垣間見れるこの人たちもまた、色んな物を背負って生きてるんだな・・・）

オッペンハイマーが、立ち尽くすゲイラーに、

「寒いだろう？　ささ、中に。　疲れて腹も空いたし、夕食を共にしよう」

と、語り掛けて来る。

「あ、お気遣いどうも・・・」

咄嗟に返したゲイラーだが。

「な～に、ポリアンヌの友人だ。　今日の仕事の礼も含むし、気にして下さるな」

と、オッペンハイマーは気さくに返してくれる。

（俺達は、視野が狭すぎる。　結局、誰も誰かの一面しか見てないで物事を語ってるんだな～）

ポリアと共にオッペンハイマーの奥さんと話しているマルヴェリータやシスティアナは、何処にも遜った素振りは無く。　婦人もまた、蔑む素振りは無い。　ゲイラーは、また何かを納得した。

さて。　大きな暖炉が部屋の左右に備わる食堂にて。　白いテーブルクロスが掛かる長いテーブルを挟んで、向かい合って食卓に就く一同。　食事が始まり、メイドさんなどに支給されながら会話は仕事へ自然に。

ポリアが、執事の男性にワインを注がれる中で。

「アラン先生、明日はどうしますか？」

ステーキを切っていたアランは。

「うむ。　明日の捜索は取り止める。　今日で粗方神殿の構造は解ったし。　一度市政を預かる統括部に報告をして、規模を大きくした調査隊を組もうと思うて居る」

イルガが、横から。

「では、護衛は今日で終わりですか？」

アランは、フォークで肉を刺すと。

「いや、ちと違う」

マルヴェリータも、システィアナも、チームの一同がアランを見る。

アランは肉を食べてから。

「今回の仕事を終わりにして、もう一度皆に護衛と調査協力の仕事を頼みたい。　半月ばかり、共に神殿調査に加わって欲しい」

ポリアは、長期依頼だと目を瞬きさせる。

マルヴェリータも、少し驚いて。

「わ・私達に・・あの遺跡の調査のお手伝いを？」

アランは、テーブル向かい側のオッペンハイマーを見て。

「うむ。　オッペンハイマー君とワシが共に信頼出来て、しかも実力に富んだ冒険者は御主達以外に居るまい。　これから少し長期に調べるにしても、兵士達は慣れぬ仕事故に微妙に頼りに為らず。スコットやショーターは欲が多くてイカん。　ポリアさん達とて、雪が終わる頃まではこの都市を強引に出て行く事は難しいだろうし。

その・・好都合だと思うてな」

ポリアは、依頼主としてアランを見て。

「先生がそう思って下さるなら、喜んで仕事を請けさせて頂きます」

と、姿勢を正して頭を下げる。

すると、アランは笑い。

「フフッ。　快諾ありがとう。　コレで、孫と祖父の二代で関るわえ。　うははは」

ポリアは、ハッとして顔を上げた。

「え？　お祖父ちゃんですか？」

「おお、そうだよ。　ヨーゼフ殿は、私の遺跡探検に何度か一緒に来た事が在る。　ワシとヨーゼフ殿は、言ってみればパートナーに近い」

コレには、オッペンハイマーも含めた皆が驚いた。

「お祖父ちゃんは、先生と冒険を・・・」

ポリアの驚いている顔を見るアランは、煌びやかなシャンデリアを見上げ。

「ヨーゼフ殿の剣技は、聴くにポリア殿のお父上の剣の師と同じと聴いた。　確かに剣筋鋭く、ワシなど足元に及ばない技量だった。　まさか、孫の御主と冒険出来るとはな・・・。　ヨーゼフ殿のお導きかの」

ポリアの脳裏に、大らかな指導で剣を握る初歩から教えてくれた祖父の事を思い出す。　早々と宮廷勤めに入り、自分の父親と周囲の忠告を振り切る様に結婚をしてしまった母。　祖父のヨーゼフも、可愛がった娘が別の男に奪われた様で、ポリアの父親とは顔を合わせるのを嫌ったらしい。　だが、唯一孫の中でも女の子のポリアを取り分け可愛がったヨーゼフ。　ポリアが剣の教えを乞うと、喜ん

で教えてくれた。
（お祖父ちゃん・・・また、一緒だね。　見てる？　アラン先生と、一緒だよ）
俯いたポリアの心が、感慨深さで染まった。
しかし、マルヴェリータは冷静に。
「しかし、アラン様。　兵士の方々が多数同行する中で、私達が必要なのですか？　優遇ならば、それで嬉しいのですが。　危険が在るなら、教えて下さい」
アランは、鋭い読みを見せたマルヴェリータにワイングラスを手向けて。
「ああ。　確かに、危険も在るよ」
ポリアが、スッとまた顔を上げた。
「実は・・な。　あの神殿の調査に託けて、もう一箇所調査したい場所が在る。　住居区の先で、大型の施設が崩壊している場所が在る。　其処はモンスターも出るし、兵士では手に負えぬ。　ついでと云えば軽々しいが・・・其処も、一緒に調査したい。　ポリア殿のチームの面々には魔法遣いも居るし、僧侶様も居るしの～。　ポリア殿本人の剣は、退魔の力を兼ね備えた物じゃし、丁度イイと思うての」
目を輝かせるポリアは、薄く微笑み。
「アラン先生。　懐が御寂しいのでは？　お金を掛けて優秀な冒険

者を雇う事が面倒なので、私達に手伝わせる気ですね？」

「うふぁふぁふぁ、バレたか」

すると、オッペンハイマーは驚いて。

「あっ・アランっ。　ポリアンヌを危険な場所に連れて行く気か？」

「は～。　過保護な叔父だのぉ～」

詰まらなそうな顔をしたアランは、横を向いて大きく溜め息を吐く。

ポリアは、マルヴェリータと見合って苦笑した。

★

ダグラスは、クリスティーと雪のちらつく夜の街中で落ち合った。

シュテルハインダーの都市を囲む山岳地帯は、世界でも指折りの活火山地帯であり。　その火山活動が豪雪の中でも川を凍結させず。　温泉を山々のあちこちに沸き立たせる。　地熱の強さで、一部の山は雪を真冬でも溶かすのだ。　その蒸気が風で集められ、高い山々のコートを羽織る様な都市部の上空で毎日雪雲を生み出す。

繁華街に出たダグラスは、クリスティーと共に明かりが灯る飲食店

街を歩く。　雪の中でも人通りは多く、一杯引っ掛けに来ている冒険者や役人などが多く目立つ。　雪を乗せた馬車が、居住区の方に何台も走って行くのを見たダグラスは、フッと空を見上げて。

「良く降る雪だな」

白いロングコートを着たクリスティーを連れて歩くダグラスは、本格的に振り出した雪を落とす空を見上げて溜め息を吐く様に呟いた。

雪が積もる石畳の大通りを共に歩くクリスティーは、滑らない様に足先を選びながらダグラスの腕に腕を組み付かせて。

「此処じゃ、毎日よ。　水の月が近付く頃までは、雪が当たり前。ウフフ、嫌い？」

赤いルージュを付けた彼女は、前日よりも色香に溢れる。　甘えてくる彼女の顔を見るダグラスは、何処と無く短絡的に満たされていて。

「いいや。　長くベットに入って繋がってられるから、嫌じゃないさ」

「淫らな言い方・・・。　でも、嫌いじゃないわ」

クリスティーとダグラスは、笑い合って恋人の様に絡む。

だが、ダグラスには、この日は運命の日だった。

その訪れは、宿の密集する地区へと繋がる路地に曲がった直後に起

こった。

「ん？」

ダグラスは、街灯の無い大通りと大通りを繋ぐ路地に踏み込んだ背後から、殺気を含む気配を感じる。　確かに、少し離れた後方から鉄の具足をした足音が微かに・・・。

「どうしたの？」

緩い微笑みを浮かべたクリスティーが尋ねると、ダグラスは小声で。

（振り向くなよ。　誰か、俺達を尾行けて来てる）

すると、クリスティーは顔色を変えた。

ダグラスは、その顔色に。

（心当たり在るのか？）

クリスティーは、ダグラスの腕をギュッと掴んで。

（ままっ・前のチームのリーダーかも・・。　わっ・わ私・・彼の女みたいに為るの嫌がってチームを離れたから・・・）

ダグラスは、背後から尾行して来る一人。　そして、見る先の大通りに出る所に立ち塞がる様に立つ何者かの影を見て、その腹を決めた。

ダグラスはクリスティーと二人でで立ち止まり、暗い中で背後に振

り返って誰何したのである。

クリスティーの予想は正しかった。　追い掛けて来ていたのは、彼女の元のチームに居た学者の小男で、盗賊のスキルを身に付けた怪しい中年男だったのだ。

「クリスティーっ！！　カオフから新しい男に乗り換えたって訳かっ！！」

いきなり怒声で返された声が、クリスティーには脅しに聴こえる。
　暗い建物の狭間を抜ける路地上で、ダグラスはナイフを抜く小男を迎え撃ち、一撃の柄突きで昏倒させる。

だが。

「おいっ、その女をこっちに渡せっ！！」

宿屋街の方に道を塞ぐ形で立っていた男が、ダグラスに走り寄って来て言う。

「カオフっ！！」

自分を要求する男の名前を言うクリスティーは、ダグラスの背後に逃げた。

「・・・」

ダグラスは、気を引き締めた。　それ程に、クリスティーを取り返しに来た男の気配は強そうに見えたのだ。

殺気立ったカオフと云う大柄の剣士は、ダグラスに斬り掛かって来る。　一撃を受け返すダグラスは、その剣筋の鋭さに。

（チィっ、手加減の出来る相手では無いな。　何とか、手負いにするか隙を突くしかない）

夜も深ける路地で、本気の斬り合いが始まってしまった。

オロオロと怯えてしまうクリスティーは、建物の石柱の影に隠れて二人を止める。　だが、もう気が狂ってしまう程に激怒したカオフと云う男の気は静まる訳も無く。　次第に、剣を打ち合うダグラスも本気に為ってしまい。

クリスティーが驚く中で、ダグラスはカオフと云う相手を斬ってしまったのだ。

その瞬間は、斬り込んだ双方が鎬を削り合う睨み合いの直後だ。
打ち合わせた剣を競上げ、噛み合いを外すのと同時に右に払い抜けるダグラス。　見事なまでに斜めに斬り払った剣は、カオフの纏う鎖鎧（チェーンメイル）の一部を切断した。

「う〝ぐっ、このおおおっ」

脇に走った火傷の様な痛みに、カオフは振り返ってダグラスに反撃を喰らわそうとした。　だが、振り返る速さはダグラスの方が早く。
剣を弾き返す為に振り上げたダグラスの剣先は、逸早くカオフと云う男の喉笛を裂いたのだった。

「あっ」

血飛沫を見たダグラスも、ギョっと目を見開き驚く。　見切って殺さずの間合いだと思ったのだが、カオフが強引に斬り掛かろうとして足を雪に滑らせたのだろうか、先に体が前に出てしまったらしいのだ。

「ぐぶぶぶ・・・」

黒いシルエットの血を撒き散らして雪の積もる路上に倒れたカオフ。

ダグラスは、自分が殺人を犯した罪人に成った事を瞬時に悟る。

「ああっ、ダグラスっ！！」

押し殺した声と共に、クリスティーが驚いて物陰から飛び出して来た。

ダグラスは、絶命したカオフの黒い遺体を見下ろし。

「殺した・・・。　俺は・・終わりだ」

と、悔やむ言葉を。

だが、恐怖に慄き。　事実から逃避したいクリスティーは、ダグラスにしがみ付いて。

「逃げてっ、わっ私と逃げてっ！！！　お願いっ、一人にしないでっ！！」

「だが・・・」

罪の意識から苦渋の顔をして戸惑うダグラスに、クリスティーは抱きついてキスをする。　そして・・。

「私が悪いのっ、貴方を・・巻き込んだ・・・。　お願い・・お願いっ、遠くに・・遠くに一緒に逃げて・・・」

クリスティーの声が、ダグラスの心を惑わせる。

「・・・逃げるなら、少しの間は俺達だとバレない方法を取るしかないぞ」

ダグラスは、一つの決意を固めた。

≪終わりは静かに告げる　始まりの鐘の音を・・・≫

次の日の朝。

「ポリアっ、たたっ大変だっ！！！」

二日酔いで遅くまで寝ていたポリアの部屋に、ゲイラーが大慌てで

駆け込んで来たのだ。　何事かと思ったポリアは、突き出される様に受け取ったダグラスの置手紙を見る。

ー　ポリアへ

ポリア、悪いが今日でお別れだ。

・・・、好きな女が出来たんだ。　その相手も冒険者で、二人でチームを組む事にした。

勝手な事をして済まないと思っている。

だが、ポリアのチームに俺は不要だ。　俺は、ゲイラーやヘルダーの様には成れないし・・・ポリアをリーダーとして心酔も出来ない。

俺は、自分の道を彼女と探してみようと思う。

別れを面と向かって言うのも苦手だし、気恥ずかしくも思えた。

それに、彼女がこの都市を一刻も早く離れたいと云うから、黙って出て行く。

君やチームの皆と過ごしたこの半年以上は、俺の最高の経験に成るだろう。　これから、のんびり冒険者をやるにしても、今までの経験は役に立つ。　ありがとう、ポリア。

ゲイラー。　我儘で済まないな・・。　ずっと一緒で・・天辺まで行きたいと思ってたが・・さ。　少し疲れたよ。

じゃ、何処かで逢ったら　　ー

手紙は、それで終わっていた。

「・・・」

最後まで読み終えたポリアは、不思議と悲しくなかった。　最近のダグラスの様子からして、遠くない何時かに別れる時が来ると思っていた。　ま、こんな形は、意外だったが・・・。

ダグラスの急なチーム脱退に、ゲイラーは必死で謝る。　だが、ポリアもマルヴェリータも、驚きだったが気は悪く思えない。　寧ろ、あの不満面だったダグラスが、新たな道を見つけた事を喜ぼうと言い返す。

しかし。

仕事の成功と、違う新しい依頼の為に。　ポリア達は、アランとオッペンハイマーを加えて斡旋所に向かう昼間。　街中が、妙に慌しい事に気付く。

薄暗い曇りの空模様の下、古い石造建築物の建物が立ち並ぶ大通りを歩く一行。

アランが、勢い良く走る馬車を見送り。

「フム。　アレは、刑事部の役人が使う馬車じゃの。　通りの角や、店先に刑事役人の姿も見える。　なんか在ったかの～・・・」

斡旋所に行く途中で、その意味が解った。　今朝、繁華街の中でも

宿屋の密集する通りに抜ける細い路地にて、殺人が在ったらしい。
　殺されていたのは、冒険者らしき男二人。　一人は、大柄で天然パーマをした剣士。　もう一人は、人相の宜しくない中年の学者だとか。

「物騒ね、ケンカかしら」

と、マルヴェリータ。

だが、ポリアは、急激に胸騒ぎを覚えた。

（・・・ダグラス。　まさか、急に旅立つ訳って・・・コレじゃ無いよね？）

黙り、顔行きが曇るポリア。

ゲイラーも同様だった。

だが、斡旋所に着くと、別にもう一つ殺人が起こっていたと云う事が解った。　同じく今朝だ。　都市から出て行く南門の近くで、奇妙な遺体が発見された。　斬られたのは間違い無いのだが、身なりが冒険者とに近いのに、旅の用意も見られない男性であったと云う。

街中で起こった冒険者二人の遺体も、南門で見つかった遺体も凍っていたが。　昨夜に殺されたらしい遺体だと解った。

アランとオッペンハイマーが斡旋所の夫婦に仕事の終了を報告し。
　近々、再度調査に対する仕事を依頼する旨を伝える。

オッペンハイマーの用意した報酬が、ポリア達に渡された。

さて、一通りの用事が終わった。　昼間からまた雪がチラつき始めた街中。　外に出たポリアは、鈍く白む雪雲を見上げる。　辺りは人が往来する雑踏が聞こえ、こんな極夜の地にも活気が在る事を教えている。

ポリアの様子を気にし始めていたオッペンハイマーが、黒いコートの襟を絞めながら。

「ポリアンヌ、さっきからどうした？　別れた仲間が心配かい？」

問われたポリアは、胸騒ぎを仕舞い込む様に微笑んで振り返る。

「いえ、叔父様。　それよりも、一つ気に成る事が・・・。　お屋敷に戻って、聴いて頂けませんか？　アラン先生にも、是非」

アランとオッペンハイマーは、互いに見合った。

マルヴェリータは、ポリアに何か言い出せない事が在るのだと悟る。

ゲイラーは、消えたダグラスが何か事件に巻き込まれたのではないかと思えて表情が険しくなったままに。　昨日から気に為っていた事を尋ねて見る。

「ポリア、それは昨日の事か？」

ポリアは、イルガを脇にして。

「ええ。　此処じゃ言えない・・・」

皆、ポリアの話が気に為った。　特にアランは、ポリアの様子がへンなので尚更だ。

「ふむぅ。　ポリア殿がそう云われるなら、家に帰る前に聞いて行かねば為るまい」

こうして、昨夜の夕食時にチームの皆で観光でもしようかと言い合っていた事等もう消え失せた。　屋敷に戻る間、ポリアとゲイラーは酷く無口に変わり。　会話をしようとも、直ぐに途切れてしまうほかの面々。　ヘルダーは、喋れない自分がこんな時は恨めしく思えた。

さて。　屋敷に戻ったオッペンハイマーは、直ぐに応接室に皆を通し。　執事の老人に、誰も話が済むまでは入れないで欲しいと言い付ける。

さて、応接室では急いだ用意が出された。　極寒のこの地は、紅茶の飲み方も多彩だ。　アルコール度の低く抑えられたリキュールに、砂糖漬けしたドライフルーツを入れ。　それを紅茶に入れたりして香りと甘みを楽しむ。　ポリアの心を案じたオッペンハイマーは、一番イイ紅茶を出して皆に振舞わせた。

メロンのリキュール漬けを落とした紅茶をティーテーブルに残し。　揺り篭の様に揺れ動く椅子に座ったポリアは、鮮やかな赤い鳥の絵が描かれる天井を見上げると、直ぐに本題に入った。

「叔父様、それにアラン先生。　私・・昨日あの崩壊市街地で捕まった曲者達の一人を知ってます」

イルガを抜いた仲間の面々は・・。

（やっぱり）

ソファーに並んで、少し間を空けて座るアランとオッペンハイマーには驚きだ。　先に、アランが。

「本当にか？」

続いてオッペンハイマーが信じられないと云った顔で。

「ポリアンヌが・・あんなゴロツキを？」

昼下がりの夕方前。　もう真冬の夕闇の様に暗くなり始める外。火の入れられた天井のシャンデリアを見たポリアは、椅子を揺らし始めて。

「他二人は知りません。　ですが、イルガの捕らえたあの人だけは・・知っています。　あの頃に比べて、随分とおじさんになっちゃったけど・・・」

イルガは、あの三人の中でも度胸の座っていたあの男性だと思い出し。

「お嬢様、あの捕まってもジタバタしなかった人物ですか？」

「うん。　あの人の名前は、ロバート。　正式には、アルロバート・モルツァ・デヘアナー・・・」

その名前に、アランとオッペンハイマーはギョっとした。

「なっ・・なんじゃとっ？」

驚きの余りに、声を出したアラン。

「ま・・まさかっ」

誰か思い当たって、それ以上言葉が出無かったオッペンハイマー。

チームの面々は、名前を聞けばアランもオッペンハイマーも解る人物に興味を覚えた。

ゲイラーが、システィアナの座る椅子の後ろから窓に寄り掛かる立ったままの姿で。

「誰なんだ？」

ポリアは、瞑目して椅子に揺られながら。

「私のお祖父ちゃんに仕えていた執事さんの息子さん。　お祖父ちゃんに・・・剣の手解きを受けた一人よ」

説明されて、皆も驚いた。

アランは、苦い顔をして。

「なんと云うことじゃ。　よりによって・・ロバートじゃと？　ワシがあやつに会ったのは、まだ子供の頃だ。　全く解らなんだ・・・ああ、解らなんだ」

ソファーから立ち掛けるぐらいに身を乗り出すオッペンハイマーは、

ポリアに。

「ポリア・・ほっ・本当にあのロバートかい？　父の執事をしてくれたクシュリアントは、まだ生きてるのだよ？」

だが、ポリアは。

「お祖父ちゃんが死ぬまで、毎年此処に来て剣を交えた人を忘れる訳無い・・・。　冒険者に成るって・・・言ってたのに・・。　まさか、あんな所で・・・」

其処にイルガが。

「お嬢様、ですが・・・。　ダグラスと話したその御仁は、妙な事を言っていた様です。　なんでも〝戦うのは契約に無い〟ですとか・・。　恐らくですが、あの者には主従関係を持つ誰かが居ると思われますが・・・」

ポリアの目が、パッと開いた。　だが、何も言わなかったポリア。

もうロバートの身柄は兵士の下に在る。　オッペンハイマーでも働き掛けて兵士に事情を聞かない限りは、どんな事を詮索されているのかは解らないだろう。

渋い顔をしたアランは、オッペンハイマーに。

「のう。　明日にでも、ショーターに聞いてみてはどうだ？」

「はっ、はい。　是非に・・・」

二人の話の間に、ポリアは昔の事を思い出す。　祖父の元に行くと、何時もロバートと云う青年が居た。　ニヒルな若者で、汗を流すのが好きでは無いのに、何故か剣術を習うのだ。　少ない素振り、少ない打ち合いで、如何に多くを学ぶか考えていたロバート。

“天稟（てんぴん）としては、ロバートはポリアンヌに負けぬ。　じゃが、アレは大成しないじゃろう。　無駄を知らぬから”

まだ１２歳を過ぎたばかりのポリアと二人の時、祖父のヨーゼフはポリアに言った。　その時は、何の意味か解らなかったが。　今に思えば、意味が解る気がする。　ポリアの知るロバートと云う人物は、何処か異常染みた出世思考の強い若者だと感じれた人物だった。

寡黙ながら、時折壊れたかの様に練習をしたり。　ポツリポツリと、ポリアに夢を語ったり・・。

ポリアの心に深く刻まれた思い出の中でも、祖父ヨーゼフと執事クシュリアントの会話は忘れられない。　それは、まだ少女のポリアが或る夜にトイレに起きた時だ。　明かりの灯るリビングにて、祖父のヨーゼフが執事であるクシュリアントを対等の如く椅子に座らせて話をしていた。

「・・・のお、クシュリアント」

「は」

「アルロバートに剣を教えた事は、ワシの間違いだったのかも知れぬ。　先々、御主に迷惑が掛からねば良いが」

と、ワインを傾ける祖父。

長身で、細身の礼服姿である執事のクシュリアントは、もう白黒で斑の髪をしている初老の男性だ。　自分の主である祖父ヨーゼフに頭を下げ。

「いえ、ヨーゼフ様は、私の願いを聞き届けたまでで御座います。　悪い事が起こったならば、全ての責任は親の私めに・・・」

すると、ヨーゼフは赤いナイトガウンを着た身を椅子から立たせた。　そして、春先の星が輝く空を窓越しで見上げる。

「我が孫のポリアンヌは、素直で心が真っ直ぐじゃ。　だから、剣を危うい使い方で振るおうとは考えぬ。　だが、アルロバートは、出世や立身の為の道具としてしか考えておらぬ。　クシュリアント・・御主の父親であるイヌラマー殿が政治不正で捕まり。　デヘアナー家は、伯爵から男爵の地位に格下げを受けた。　実質、お役目を奪われたから没落と変わらない」

ヨーゼフの言葉に、クシュリアントは深く項垂れた。

「はい・・、如何にも」

「だが、御主はその責めを正しく受け止め。　今では、こうしてワシの執事じゃ。　じゃが・・アルロバートは、己が家の没落を恥じて野心が先に成ってしまった。　剣の修行でその心を正そうと試みたワシと御主だが・・・、事態は悪化しとる。　先日、アルロバートが無頼の冒険者に腕を貸していたと斡旋所の主から報告を受けた。　何か・・何かいい手立てを打たないと、アルロバートは人を殺める可能性が有る。　クシュリアント・・病気のグレイスの為にも、考えねばな・・」

「はい・・、我が妻も・・病床より案ずるのは一人息子ののロバートの事・・。　娘二人は、ヨーゼフ様の御蔭で嫁ぎ先が見つかり。心配は息子のみとなりまして御座います」

「うん。　ワシは、首都でまだ若かれし頃に、デヘアナー卿の先々代に世話に成った。　不正を起こした御主の父親とは同じ教育学校の先輩後輩で、面識も有った。　この街に来るに当たって、御主と出会えたのは運命と思ったよ。　幼いアルロバートのあの卑屈な目・・今でも忘れられぬ。　没落と云う運命に翻弄されたからこそ、人は己が感ずるままに何かの道筋を決めるのかも知れぬが・・。　御主とアルロバートの方向は正反対じゃ。　虚しいの・・クシュリアント」

「我が主のお心を悩ませる息子・・何とも遣る瀬無い思いで御座います。　ああ・・親で無ければ・・・一思いに斬り捨ててしまいたい・・」

何時もは温和で微笑を絶やさない執事のクシュリアントから、この言葉を聴いたポリアは愕然とした。

ポリアは、１６歳の頃まで祖父の元に来ていた。　最後に、亡くなる半年前に逢った頃の祖父はまだ元気で、剣の稽古もして貰えた。

だが、その頃にロバートは居なかった。　祖父ヨーゼフやクシュリアントに尋ねても、“冒険者に成ったのでないか”としか返って来なかった。　今にして思えば、何か在ったのかも知れない。

（お祖父ちゃん・・ロバートと何か在ったの？）

若いながらに、そう心に疑問を残したポリア。

それから、半年で祖父は急死した。　ポリアが学校も何もかも休ん

で、イルガと共に母親の乗る馬車に飛び乗ったのは、知らせを聞いた秋の夕暮れだった。

★

恐らく、ポリアが冒険者としての最大の過渡期は、この時が一番だったかも知れない。　Kと共にした冒険より、ポリアにとって此処から始まる一時の事件は人生最大の大事件だった。

何故ならば、この夜に何者かの襲撃を受けたのである。　そして、アランが瀕死の重傷を負うのだった・・・。

【次話は、ポリア特別編　中　に続く】

ポリア特別編サード・上編　最終話（後書き）

どうも、騎龍です。　ポリア編の上を、今回で終了致します。

次回からは、K編・セイルとユリア編・その他のどれかから一番早く行けそうな物を掲載して行きます＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

★番外編・特別話　壱★　（前書き）

この物語は、書かれる事の無い場面の影に光が差した回想録であり。
また、これから綴られる物語と物語の狭間の出来事。

★番外編・特別話　壱★

特別編

?.ダグラスの誤算

「ダグラスっ！！」

雪がチラつく中、山の岩陰で隠れていたクリスティーが、やっと現れたダグラスの様子に驚いて飛び付いた。

「あ・ああ・・・。　い、行こう・・・」

ダグラスの声が珍しくブレていた。　クリスティーが驚くのも無理は無い。　ダグラスは、左肩を負傷しながら現れたのだから。　ダグラスが掻き分けて来た雪の上に、赤い血の跡が点々と見えている。

「ああ・・どうしたの一体っ？！」

青い厚手のコートの肩口に傷を作り。　コートに血を滲ませるダグラスは、薄暗い昼間の雪空を見上げた。

（ポ・・ポリア、気を・・付けろよっ！！）

人を殺して逃げ出したダグラスには、今は祈る事しか出来なかった。

クリスティーを連れて、深夜にシュテルハインダーの街を抜け出す時。　自分達を尾行する何者かに気付いた。　クリスティーを先に逃がす形で、その男を南門で斬ったのはダグラスだった。　その何者かに尾行の理由を尋ねると、尾行して来た男はいきなり襲い掛かって来たからだ。

「ダグラス、こっち!!　怪我の手当てをしないとっ!!」

街から2里（5・6キロ）離れた山間の山道で、クリスティーはダグラスを自分の隠れてた岩陰に引き込んだ。

「クリスティー、こ・この洞穴・・奥は?」

ダグラスの腕を肩に回すクリスティーは、

「少し深いわ。　地熱の所為か、地面が剥き出しで暖かいの」

ダグラスは、連れられながらも辺りに警戒を配った。

（クソっ!!　最悪だぜっ!!　まさか、こんな事に為るなんて・・・、ああっ!!）

悔やむダグラスは、運命の歯車の乱れがポリア達に牙を向くのを感じる。　もう、自分がのうのうと街に引き返す訳にも行かない。　だが、ポリア達に危険が迫っているのも確かだ。　知らせに行けない自分の罪に、今生の歯痒さを覚えたダグラスは目を瞑った。

確かに、知り得た危機の予兆は仕事の中に見えていた。　そして、斬った不振な尾行者や、此処まで自分達を追って来た追跡者は、明らかに組織的な臭いを放つ殺し屋だった。　ダグラスは、追って来

た3人の追跡者を諸共斬った。　だが、相手も確かに強く。　肩に投げられたダガーを受けてしまった。　毒を塗ってあるかと思ったが、その痛みは無い。　だが、出血が酷く、これ以上の無理も難しかった。

（ポリアっ、気を付けろ・・気を付けろよっ！！！）

喘ぐ様に叫んだ心の声。　ダグラスは、うねる運命に己の無力さを痛感した。

？別れ

ピンクのドレスを着たお嬢様の様な長身の女性が、ギャラリーを掻き分けてカード勝負をしている包帯男ににじり寄った。

「ねっ、ケイっ。　もう一回っ」

指を立てて頭を下げる。

「やだよ。　何回目だつ～の。　お前、自分のはど～した？」

「う〝・・・スった」

「カレシにでも借りろ」

「むぅうっ」

ピンクのドレス姿の美女が、集まるギャラリーの中に戻って行く中で。　シャンデリアの明かりが広い広い室内を照らす。　足を組んでストゥールに座る包帯男のKは、自分の手の内のカードをテーブル上に投げた。

「・・・・、勝ちです。　どうぞ」

蝶ネクタイをするディーラーが、お手上げとばかりに賭け（ギャンブル）で遣う専用のメダルをKの前に押し出した。

「わ～お・・、スゴい」

大きな胸に引っかかる位にしかドレスを着せていない美女が、際どいスリットの入るスカートから生足を魅せながらKを見て驚いている。

いや、驚いているのは美女だけでは無い。　礼服を着る老若男女や冒険者達が、ギャラリーとなって銅色のコインをテーブルに溢れさせるKに感嘆していた。　勝負のプロであるディーラーが全く勝てないので、済ましてカードで遊ぶKは注目の的だった。

カジノで国益を賄うギャンブの国で、秋の今は博打の祭典が行われている。　各国から、貴族・商人などの金持ちや、旅人に旅行者や冒険者達が集まり。　盛大に開かれる各賭け事のトーナメント戦や、予選を戦っている。　クルスラーゲより、Kと共にこの国に渡って来たステュアート達。　冒頭でコインの借りをKに断られたのは、

セシルだった。　もう借りに来たのは４度目で、予選に出場する気も無いのにギャラリーを沸かせるＫとは対照的に、予選会で惨敗続きなのだ。

カードを楽しむテーブルが、１５０席集まる大会場。　白亜の石柱が二重螺旋を描いて中心の噴水から外に伸びる。　会場は、広大な楽園をモチーフに観葉植物と水路で区画され。　予選の行われるテーブルと、只のゲームのテーブルを分けていた。

「どうも、お久しぶりですな」

「いやいや、ご無沙汰ですね」

貴族や商人達が、知った顔の誰かと久しく顔を合わせて挨拶していたり。　ワイングラス片手に大剣を担ぐ剣士が闊歩していたり。　会場の所々には、音楽を奏でる楽士団や、踊りを披露する旅の一座が居て人目を楽しませているし。　無料でワインなどの飲食物を配る場所も有る。

数万人の来客がごった返す会場でセシルは、仲間のエルレーンと落ち合った。　青いドレス風のワンピースを着る踊り子の様なエルレーンは、言い寄って来た金持ちを追い払ってセシルに向かう。

「どうだった？」

と、エルレーンが尋ねれば。

「もう駄目だってぇぇ～。　“カレシに借りろ”って、ステュアート何処ぉぉ～？」

と、泣き声のセシル。

エルレーンは、人が溢れる会場を見回しながら。

「そ～れがね～、オーファーやアンジェラも含めて解らないのよ～。
ケイみたいに黙っててても目立つと楽なんだけどね」

セシルも会場を見回しながら、

「オーファーなんてツルっ禿げが解らないなんて～、どんだけ人が多いのよっ！！」

「外に出たらもっとよ。　明日からの冒険者の参加出来る賭けレースに向けて、チェックしてる人や出場する冒険者達で溢れ返ってるし。　商業区なんて、出店や催し物に集まる観光客で人の川みたい」

「う〝ーっ！！　お祭りに来たからには、ギャンブルがレースのどれかに出たーーーいっ！！！」

賭け事の予選に惨敗のセシルは、地団駄を踏んで唸り上げる。　貴族出身のセシルながら、お嬢様と云う素振りでも無い。

「あ～、君達」

ナイスミドル的な紳士が、また二人に声を掛けてくる。

「間に合ってるわ」

「うざいっ」

二人は、紳士が誘うデートの申し出を断った。

セシルもエルレーンも、人と亜種人の混血だ。　見ての愛らしさ・美しさも有るが。　何よりも独特で美しく少女の様な幼声に、男心と云うか情欲がそそられるらしい。　セシルも、エルレーンも、そんな男の下心など速攻で読み取る。　声を掛けられても、全く誘われてみたいとも思わない。

さて。　セシルとエルレーンの探す三人は、夕暮れ迫る外の受付会場に居た。

「凄い人ですね。　お城のお庭が、人でごった返していますよ」

と、ステュアート。　鎧や武器は宿屋に置いて来た。　褐色の肌をした好青年と云った風貌である。

「うむ。　どうやら、明日からのレースに参加する冒険者達と、その冒険者達を品定めする金持ち達で一杯の様だな」

と、脇のオーファー。　禿げた頭のデカい図体。　見た目に杖を持っていなければ、武器を置いて来た戦士と云った風貌である。　緑のローブに黒いズボンを穿き、手には杖を持っている。

「冒険者の参加するレースとは、そんなに面白い物なのでしょうか・・」

人の多さと、賭け事の話ばかりが盛り上がる夕方の大庭園に嫌気が差しているのは、僧侶のアンジェラである。　純白のローブに身を包み、杖を片手に辺りを見回す。　男性が目を奪われそうな豊満な胸を揺らして、大勢の客の中を二人に着いて歩いていた。

あちらこちらに点された魔法の光を放つ大きな水晶球。　金額にしたら一つで何万シフォンもする代物だが、大庭園を隅々まで照らす用意が為されている。　丈の低い石の台座の上で、光の魔法を閉じ込めた水晶体が照らすのは、芝生と手入れのされた庭木が並ぶ大庭園である。

屈強そうな冒険者達がチームで集まって気合いを入れているのを見て、ステュアートはオーファーに。

「オーファー、彼らはレースに出るのかな？」

「ん？　・・、多分。　リーダーらしき魔法使いがゼッケンを持っているから、恐らく出場するな」

アンジェラは、後ろからオーファーに。

「所で、レースとは何を競うんですの？　まさか、走ったり飛んだりしますの？　冒険者同士で戦うのなんて、見るのは嫌ですわ・・・」

オーファーは、Kと自分がこの首都に来るまでに何度か話していたレースに関しての話を、このアンジェラは興味無く聞いていなかったのだと理解し。　再度説明してやる。

このギャンブルの祭典“カジナ・イル・ア・レイナー”（賭博を愛す徒の雄たけび）では、大きく二つの賭け事が行われる。

一つ目は、カードなどの一般ギャンブルのトーナメント戦である。

二つ目は、冒険者が参加して行われるレースだ。　知恵部門と、バトル部門に分かれていて。　知恵部門では、用意されたヒントを謎解き、次々とヒントを探してゴールと云うべき隠された秘宝を探す。バトル部門では、モンスターの蔓延る五つの舞台を切り抜けて、山の中に安置された旗を取る争奪戦。　基本、冒険者同士の戦いは禁止で、旗を取ったチームが優勝者に為る。

カード戦に然り、レースに然り。　ギャラリーは、出場者に金を賭ける事が出来る。　大穴を当てれば大金持ちに為るチャンスが有る為に、一般客も旅行がてらに訪れる事も多いとか。

特に、レースやカードで優勝すれば、多額の賞金に加えて知名度も上がる。　未だ地方から抜け出せぬ冒険者のチームにとっては、燻る現状を打開する手段でも有るから、優勝を夢見るチームがわんさかと訪れる。　何せレースの優勝には、賞金以外に宝物が進呈される。　凄く高額な名匠の作った武器や、宝石。　時には、奇跡の妙薬と謳われるエリクサーの原料や、数百年に一度しか咲かない花など、毎回毎回賞品は豪華なのだ。

賭け事に加えて、テーマパークを運営して年間1億人以上の旅行者を呼び込むこの国だが。　その5分の1の来訪者は、たった10日間足らずの期間で開かれるこの祭典の時期に集まるのだ。

今日の昼前に首都へ着いたステュアート達。　前にも来た事の有るセシルが、エルレーンを誘ってドレスアップを貸衣装でして、宿だけ押さえてこの会場に来た訳だ。　大小の湖の中に残された孤島が珍しい名勝の一番大きな湖の中に立てられた巨城で、カードなどのギャンブが行われている。　その湖畔周辺に、商業区や居住区が延々と外側に広がり。　南東部は、港が大々的に整備された広範囲な都市。　それが、この首都だ。

さて。　チームの面々がそれぞれが楽しんでいる。

だが、Kは・・・、絡まれていた。

「ケ～イ　ゞィィ・・うぅぅ・・・たァ～すけてぇ～」

仲間が見つからずに、包帯男に再度頼るセシルと付き添いのエルレーンが居た。　セシルは、ギャラリーの目も気にせず、ストゥールに座るKに抱き付いて泣きじゃくる真似をするのだった。

「ハァ～、わ～ったわ～った。　この勝ったコインを二人で全部持ってけ。　もう、カードに飽きた」

ストゥールを立つKの姿に、見ていた数十人のギャラリーが沸く。

「えっ?!　全部貰っていいのおお～?」

少女チックに潤んだ眼をキラキラさせるセシル。

「うっ・うそぉっ?!!　あのコイン・・全部っ?!!」

と、テーブルの上に溢れそうなコインにビビるエルレーン。

Kは、コートの皺を叩き。

「カード予選は、決められたディーラーに勝って、今夜の締め切りまでに使うコインの量を各自で収める決まりがある。　予選を突破すれば、残りのコインを多く積んだ者ほどシード権を取れるから、コレで少しは頑張って見ろ」

「ホントっ?!」

現金にコインに飛び付くセシル。

見ていた客の一人が、ディーラー代わる代わるの相手を5人も無敗で勝つかノーゲームにしたKを惜しみ。

「包帯のお兄さん、アンタもカードの祭りに出なよ。　それなら必ず賭けるよ」

「そうよ。　こんな大勝ち見せ付けられたら堪らないわ」

と、Kを見続けていた巨乳の美女も甘い視線を投げて言う。

だが、Kはその気が全く無い。

「優勝も何も興味は無い。　クセや如何様を見破れるのに出ても詰まらないだろう。　アンタ等金持ちを儲けさす気は更々無いね」

と、テーブルの有る小高い場所からギャラリーの中に降りる。

「う〜ん・・、勿体無い・・」

唸る小太りの礼服男性に、Kは捨て台詞の様に。

「スリルを味わえ、それがギャンブの醍醐味だ。　勝ちと負けのギリギリが一番楽しいンだよ。　なんなら、この二人に賭けてみたらど〜だ?　感情的な女二人だが、勢いに乗れば大穴かもよ」

と、セシルとエルレーンを指差してから会場の外に向かって歩き出す。

ざわめくギャラリー達は、コインを借りた布袋に豪快な様子でブチ込むセシルに釘付けと為っていた。

しかし、Kの姿をセシル達が見たのは、この時が最後だった。　何故なら、Kは夜には姿を消したからである。　夜遅くにチーム一同で戻った宿には、Kからの言伝が預けられており。

“楽しかったゼ。　コレでお別れだ”

と、Kの手紙が残されていただけだった。

?ほくそ笑む老人

シャンデリアが、天井に等間隔の間を空けて五つも並ぶ。　幅が大人の両手を広げた程かのテーブルが、延々と横長い部屋の暖炉前から、奥の入り口の重厚な合わせ扉前まで伸びていた。　広い部屋だが、人の姿は見当たらない。　ただ、暖炉で燃える乾いた木の音が

する。

「父上っ！！！！　ちっ・ちちち・・父上っ、たたっ・たい・大変ですっ！！！！」

大慌ての男性が、合わせ扉の片側を開いて中に入って来た。　ブロンズカラーを基調とした刺繍素晴らしい絨毯の上を、大慌ての足取りで転げそうに歩く男性。　背凭れの長い木造りの椅子が整然と並ぶ長いテーブルの脇を、暖炉の方へと男性は小走りに為っていた。

「騒々しいぞ。　サムソン、少しは物静かな息子を見習え」

暖炉前のテーブルに備わった椅子が、斜めに為っていて。　火の入れられた暖炉のパチパチと云う音を音楽に本を読んでいた老人が、走って来た男性に言う。

大焦りの様子で顔に汗を浮かべた色男な中年男性は、老人の前に来ると膝を折った。

「父上っ、そっ・その子供・・。　セイルが居なくなりましたァっ！！！！！　ああ・・」

と、心配を丸出しに気が狂いそうな様子で呻く。

男性を見る老人は、そう聞いても平気そうに。

「そうか。　ユリアと冒険者にでも成ったのではないか？」

その言葉に、男性はビックリした顔をガバッと上げる。　驚愕と云う顔の男性は、差し詰め心臓でも止まってしまった病人の如く青褪

めた顔色だ。

「な・・あ・あああ・・・ぼぼ・ぼぼぼぼぼ・・冒険・・者ぁぁぁ・・・」

そんな男性を見る老人は、益々呆れを見せて。

「サムソン、ワシの息子よ。　セイルは、お前の3男じゃ。　順序から云っても、家督を継ぐ順序では最後だぞ？　ユリアと二人、自由に冒険でも何でもさせればイイ。　全く剣術の心得も学べない軟弱なお前より、孫の方がずぅ～っとマシじゃ」

「あ～・・あああ・・父上ぇぇ・・。　何故に・・何故にそんな事を・・」

老人は、膝の上に置いた本を閉じると、膝に掛けた寒さ凌ぎの薄い黒のタオルを取る。

「“何故”？　サムソン、お前は私の心が解らぬのか？」

「い・いいえ・・。　ですが・・、ですがっ！！　商才もっ、気持ちも度胸の据わったセイルは、長男のアルスよりも跡継ぎに相応しいハズっ！！！　もし・・ああ、もし冒険で命でも落としたらああああ・・」

すると、老人はその場で立ち上がり。　震え上がる息子を見下ろすと。

「サムソン、それならそれだけの男だったと云う事よ。　セイルは、確かに覇気も有り知恵の回る子。　だから、その身に宿る力に押さ

れて旅に出た。　その旅に耐えて戻れぬ様では、ワシの跡は継げないぞ。　お前が冒険の一つも出来ない惰弱な子故、今に為ってもワシが裏で方々に眼を向けねば成らん。　イイ年をしたお前も、その息子で孫のアルスも、二人揃ってこのオートネイル家を潰す気か？」

「そっそんなっ！！　滅相も無いっ！！」

大慌てで否定する中年男サムスンだが、その息子を哀れな感情の滲む眼で見下ろす老人・・エルオレウは、

「サムソン、良いか。　抱える物が大きい我が家じゃ。　才無き者が跡目を継げば、家は没落する。　我々一族が、長き昔からに渡って大勢の嫁や婿を抱える形を取って来たのは、方々に誼を結ぶ為だけでは無い。　優秀な跡継ぎを作る為だ」

サムソンは、ガクリと項垂れる。

「は・・・はあ・・」

エルオレルは、ギラリと鋭い眼をサムソンに光らせ。

「お前は、ワシの云う事を聞かずに妻を一人と決めた。　ワシは、己が強かったから一人としただけじゃ。　お前が跡を継いだのも、他に密かに作った子供が諸共使えないからじゃっ。　・・全く、なんとか出来た跡継ぎのセイルを、此処で一人前にせねば我が家は没落するっ！」

「は・・ハイ・・」

項垂れたサムソンと云う男は、父エルオレウの言い成りの如く頷く

ばかり。

「良いか、セイルが生きて戻れば、お前達の望み通りに当主として跡継ぎにさせる。　だがっ、セイルが死ぬことも考えるなら、アルスに教育を厳しくしろっ。　それが駄目なら、長女であるクリューヌに然るべき相手を見つけておけっ！！　高々息子一人が旅立って、成長を喜び望むより心配とは情けないっ！！！！　万一の為だっ、エリザベスにもう一人二人生ませろっ！！！」

厳しく云われ、サムソンは怯みっ放しで怯える様な顔を父に向ける。
冷や汗に塗れた顔は、涙も浮かべる情けないものだった。

「はいっ！！」

息子の顔を踏み付けるが如く睨み付けたエルオレウは、本を片手にナイトローブ姿をサムソンの入って来た扉の外に消すべく歩き出した。

父親の去る姿を見て涙目に変わるサムソンだが、内心では気が狂いそうだった。　セイルの母親でもある妻エリザベスは、美貌と才気の同居する没落した貴族生まれの女性だ。　半ば借金の形として、エルオレウが晩生（おくて）の息子に宛がった愛人の様な関係だったのを、サムソンが心底に愛して妻にしたのである。　だが、エリザベスは、利発だが身体は強く無い。　夫の為に、無理をして5回も出産をし、生まれた子供の内二人は死産だった。　そしてその時が超難産で、母も子共々に死に掛けたのである。　今やエリザベスは、床を離れられるのは2・3日に一度。　これ以上妊娠させたら・・命に関る。

（ああ・・セイル・・。　駄目な父を許しておくれ・・）

サムソンは、セイルの内心を理解していた。　祖父エルオレウが、セイルに態と辛く当たって冒険に遣らせ、剣士として成長させて跡継ぎにしようと画策しているのを逆手に取ったのを・・。　母親の事を十分に理解している子供達の中でも、セイルは母親の乳を一番吸えず。　物思いが着く頃には、床に伏せる母親しか知らない。　今、エリザベスが生きているのも、セイルの成長とアルスの家督相続を夢見る故の希望に縋っているからだ。

セイルは、歴代のオートネイル家の当主の中でも、辣腕を揮い裏で威勢を示す祖父・エルオレウを引き摺り下ろす為に冒険に出たと云っていい。　エルオレウの横暴ぶりは、表に出ないだけで酷い所が有るのだ。

サムソンなど、父親のエルオレウに良い様に操られる仮初めの当主に過ぎないのである。

サムソンは、何よりも一緒に旅立ったユリアを怖がる。　ユリアは、打算的にセイルの妻候補としてエルオレウが見初めた。　エルオレウの表向きの妻であるリリューナ、我が妻エリザベスにも愛され、セイルと同等の生活で居た。　ユリアが、もしセイルの本心に気づいた時、エルオレウの本章を知らずに心酔している一面があるだけに怖かった。　それ以上に、ユリアとセイルが結婚でもしようものなら・・、エルオレウはユリアに何を吹き込むか解らない。　生じ捨て子で、拾ったエルオレウを敬愛するユリアが、サムソンは怖かったのである。

その夜は、マーケット・ハーナスの首都で年末の祭りが終わる前日であり。　セイルとユリアが旅立ってから二日目の夜だった。　冬の訪れを告げる木枯らしが強く吹き、民家の暖炉では部屋が暖まりきらなくなる頃であった・・・。

?消えた理由・・終わらせる者

夜。

ギャンブルの国の港。　海沿いの高台に並ぶ木作りの倉庫群の中の一つで、影が蠢いていた。

「今夜、一気に殺す。　我々が手を組むなら、実力の有る冒険者であろうとも負けぬ。　我等が認めた頭達を聖騎士達に突き出し、生温い法王の行いを正そうとしたマルフェイス様を捕まえた冒険者達を、恨みを晴らすべく殺すっ！！」

「おうっ」

闇の中で、月明かりが格子戸の隙間から倉庫に差し込む。　その光の中には、２０人近い者共が立って喋る男を見上げている。　どの者も、腰にダガーやショートソードを装備し、井出達も軽装ながら冒険者と変わらぬ。　しかし、ギラギラと光る眼には、異常な殺気が宿る。

すると・・・。　突然にその倉庫の扉が開いた。

「むっ」

立っていた男を含めて、全員がその方に向く。　扉の開かれた所に、ユラユラと人影が・・。

「コンジか？」

立っていた男は、見張りに遣らせた男の名前を呼ぶ。

「あ・・・かっ・・・かし・ら・・・、バレ・・」

絞る様に声を出した男は、その場に倒れる。

「おいっ！！」

異常を感じ取った男達は、一気に立ち上がり警戒する。　そんな中・・・。　また人影が開かれた扉の中に浮かぶ。

男達の誰もが尋ねる前に、現れた影の男が。

「フン。　ゴミ共が集まって、俺達を殺す算段か？　盗賊の三下と殺し屋に雇われたゴロツキ共が寄って集って、暗殺組織の真似事なんざ～詰まらねぇ～ぞ」

その声は、K。

立っていた男は、聞き覚えの有る声に。

「お・お前っ！！　あの仲間の包帯男かっ？！！」

闇の中で、Kは薄く微笑んだ。

「クルスラーゲで、ず～っとテメエ等の尾行を感じてたよ。　集まった所を一網打尽にしてやろうかと思ったが・・・、一度散って民家に押し込み働いたんだってな～。　急に強盗が増えたってから、直ぐに解ったゼ」

「気付いてたのかっ?!!」

「フフ・・・、暗殺者も返り討ちにして来た俺に、テメエ等達みたいに下手なスカウトの真似事など通用するかよ」

「うぬぬぬぬ・・・、抜けっ!。　者共っ、コイツから血祭りだっ!!!」

立っていた男がダガーを引き抜いた。　他の者達も、一斉に武器に手を掛ける。

すると・・・、Kは中に入って扉を閉める。　真っ暗に成った中で、声だけのKが居た。

「役人に通報はしたぜ。　だが、生かすのは一番下っ端数人だけだぞ。　残りはどうせ死刑なんだから・・・、手間を省いてやる。ジュリアを何度も付狙いやがって、消える前の大掃除だな」

それから、斬り合う者達の怒声や悲鳴が倉庫で響いた。　武器を持たぬ一般人を平気で殺めた悪党達だが、頭数を集めても狙った相手が悪かった。

役人・・、この国では私兵警察であるが、倉庫に駆け付けた時に見

た中は地獄絵図であった。　恐怖に気を狂わせ、泣き叫ぶ悪党達が数名。　他は、一撃の下に殺されていた。　中でも、押し込み強盗を働き、人殺しを行った数名は・・・殺され方が尋常では無かった。　生き残りの民間人や、下見に来た男達の人相がもう役人達に知れていたので、直ぐに悪党達と解ったが。　血の海と化したこの倉庫の中で、悪党達を殺した相手は悪魔としか言い様が無い有様だった・・・。　血祭りを狙った側が、たった一人の男に血祭りにされたのである。

次の日。

ステュアート達は、私兵警察に連行された。　狙われる事情を聞かれて、仕事の話をしたら土下座に近い扱いで指揮官に開放を言い渡される。　ブルーロズ家当主であるジュリアの家柄は、私兵警察の指揮官も知っている。　その知人を不当に捕まえたと云う事のまま、悪党達の詮議を進めるのは宜しくない事態に為ると解ったからだろう。

カードの予選に惨敗したエルレーンとセシルは、見物と云う事でレースの行われる会場の方に向かう為。　人のごった返した大通り上で、消えたKを思い出していた。　先に、セシルが、

「あ～、もしかしたら・・、アタシが騒いでたので見つかったのかな。　ケイ、だから尾行者を追い掛ける為にコインくれたのかも・・」

エルレーンは、もう少し読んで。

「かも。　でも、そもそもあのケイが、あんなに目立ってカードしてたのが狙いだったんじゃない？」

人の流れに大きな身体を不自由に困らせるオーファーは。

「うむ。　可能性は高いな。　ケイ殿は、追跡者の気配を窺い、向こうから発見させる為に態と派手に勝っていたのかも知れぬ」

一番Kを慕っていたステュアートは、どうも昨夜から沈み気味で。

「・・・、ケイさん・・、僕達の最後の安全まで考えてから消えるなんて・・凄いなぁ・・。　どんなに頑張っても、僕はケイさんみたいには無理だよ・・。　ハア・・お礼も言えなかった」

アンジェラは、Kの心に踏み込めなかった自分に意気地が無いと思いながら。

「ステュアートさんは、ステュアートさん。　ケイさんは、ケイさん。　同じに成らなくてイイと思いますよ」

エルレーンは、そう言ったアンジェラに昨夜から思っていた事を聞きたくなった。

「アンジェラ、貴女はこれからど～するの？　ケイは居ないケド、チームに居る？」

アンジェラは、そう聞かれても笑顔を消さず。

「ええ、皆さんが良ければ、私はチームが在る限り居ようと思います」

そう聞いたオーファーは、何処か嬉しそうに微笑み。

「ふむ。　麗しい花は残ってくれるとは、嬉しい限りだ。　これもケイ殿の恩恵かな」

アンジェラを美化して形容した事にセシルは、オーファーを横目にジトっと睨んで。

「こぉんのスケベ禿げ。　一々、“花”に例えンの？　やらしい言い方」

非難を受けるオーファーは、口先をを尖らせ他所を向く。

「全く、全身胃袋のオバケ姫は煩いな」

その例えに、セシルの目がギラリと光る。

「うっ」

「うそっ」

「この人ごみでですかぁっ？」

ステュアート・エルレーン・アンジェラがセシルの青筋に怯えた直後。

「この禿げタコがあああああーーーーっ！！！！！　ケイが居ない以上アタシが仕切るっ！！！！！！」

通行人が、その怒声に注目した。

その頃。　Kは、船の中で寝ていた。　小型の旅客船で、向かうのはフラストマド大王国。　まさか、冬の真っ只中に北へ旅してみたKが、またまた運命的な大事件に巻き込まれるとは・・。

Kが引き寄せるのか・・。　Kが引き寄せられるのか。

だが、その事件はKを必要としていた。　いや、関る誰もがKを必要とするだろう。

運命の歯車には、Kすらも敵わない。　導かれるまま、進む先でKに触れる人々の運命は、Kと云う人物を通して人々に訴える。　人間の愚かさや、物悲しさ、そして・・・。

★番外編・特別話　壱★　（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪王と王子と冒険者≫

世界で最も平和を訴えるフラストマド大王国にて。　セイルとユリアは、クラークを加えて新チームを結成した。　そして、密かながらに、国の危急存亡の大事態の可能性を孕んだ、子供達の行方不明事件を解決した。

明くる日。　現・フラストマド国王に呼ばれて、城に赴いたセイルとユリア。　其処で、自分の身を恥じて、その及ぼした迷惑を死ぬことで消そうとした王子、アンソニーの事を王妃より聞かされる。　王妃は、国王の意思をセイルに伝えた。　アンソニーを冒険者として、セイルのチームに同行させて欲しいと・・。

セイル達は、アンソニーの過去を知り得ていて。　また、彼を否定しなかった。　だから、藁をも縋る思いだったのかもしれない。

セイルは、アンソニーの意思が重要だと言った時。　その場に、時の国王が入ってきた・・・。

平伏すクラークや頭を下げたイクシオ達。　だが、セイルとユリアは、驚いた顔でその国王である男性を見た。

ユリアが、先に国王を指差して。

「うっ・うそおおおっ?!!!!」

セイルも、目を見開いて。

「あ・・クランの小父さん?」

姿を見せた国王とは、６０を過ぎた感じの白髪男性だった。　温厚そうな長身の初老紳士で、微笑む顔は印象的な人物である。

クラークは、セイルが国王の顔を知っているらしい素振りに、正直度肝を抜かれた表情を見せて。

「お・お知り合いか?」

慌てる様子のセイルは、国王とクラークを見交わしながら。

「いえ・・あっ。　お祖父ちゃんの知り合いで、吟遊詩人だって・・・昔から何度も」

部屋の中に歩いて来た国王は、金の王冠を頭部に頂き、シルバーの錫杖を片手に白いマントを靡かせて来る。

イクシオ達は、何が何だか解らない顔で、セイルと国王を見ていると。

「ふふふ、御久しいな。　セイル殿に、ユリアちゃん」

と、国王は言って来るではないか。

王妃が、隣に来た王を見て。

「まぁ、アナタ。　本当にお知り合いだったの？」

「うん。　お忍びでエルオレウの所に行ってた時は、この二人に毎回世話に為ってたよ。　ウハハハ、セイル殿とユリアちゃんが、まさか冒険者として来るとは、私も思わなかったケドね」

語尾が砕ける国王の口から、あの有名な冒険者の剣神皇エルオレウの名前が出る。　イクシオ達は、驚きを見せた。

王妃は、呆れた顔をして。

「まぁ、アナタったら。　こんな子供にまで迷惑を掛けて・・」

「いやいや。　セイル殿は、実に優秀な剣士じゃよ。　私は、彼が１０歳ぐらいから手合わせしてるが、未だ負けっ放しじゃし。　エルオレウが剣の相手してくれないから、孫にお願いしてるまでじゃ。　ユリアちゃんには、馬鹿にされっ放しだったケド」

と、嬉しそうに微笑む国王。

セイル以外の全員が、恐れ多いユリアに向いた。

見られたユリアは、苦々しい笑みで。

「だ・だってさ・・、すっ・すす凄くドン臭いから・・。　あはは・・・」

国王は、ユリアを見て笑い。

「ドン臭いは無いでしょう～に。　セイル殿が強過ぎるんだよ～。　全く、流石はエルオレウの孫だよ、うんうん。　全く歯が立たないんだもの」

と、国王は、なんとも気さくな表情でセイルを見る。

まだセイルの素性を知らなかったイクシオ達は、その余りの衝撃に。

「うそおおおおおおおおおーーーーーーーーーーっ！！！！」

大声の所為か、お城の屋根に被った雪が落ちた・・・。

さて、国王を囲んで話が再開された。　其処には、王妃に促されてアンソニー王子も同席している。

国王・クランベルナードは、アンソニーの同行をセイルに頼んだ。　アンソニーもまた、冒険者としてこの世を流離う事をセイルに望む。

話が真面目な内容なだけに、セイルは、アンソニーに再度意思を確かめた。

「アンソニー様、一度冒険者と成られたら・・もう王子では居られませんよ」

死人の顔ながら、何処か悟りの境地に踏み込んでいる表情のアンソニーは、静かに頷く。

「ああ、それは構わないよ。　寧ろ、柵（しがらみ）から解き放たれるのだ。これ以上の望みは無い。　それに、我が国の危機を。　私の身に掛けられた暗黒呪術を断ち切って、あの悪魔の企みを阻止してくれた君達に、出来る力添えはしたい。　そして何より、２００年以上も過ぎた今の世界を・・見てみたくなった」

セイルは、アンソニーを見て微笑んだ。

「では行きましょうか。　王子様も、僕と同じ居場所の無い厄介者みたいですし、丁度イイですね。　悲しむ人が少ない・・・」

セイルの言葉に、その場の皆が黙った。　ユリアは横を向いて急に黙り。　クラークは、少し驚いた顔をする。

国王は、セイルを見つめて。

（やはり・・か。　エウオレウ、お前はハレシュには敵わないよ。人としてな・・・）

セイルは、直ぐに旅立つ事を申し出た。

アンソニーもまた、了承する。

国王クランベルナードは、セイルに膝を向けて。

「のお、セイル殿。　もし旅立つとして、やはり南へか？」

「はい。　世界最大の交易都市、アハメイルに立ち寄ってみたいので」

微笑む国王は、緩やかに頷くと。

「では、其処に行くのに、一つ仕事を頼まれてくれんかの～」

急な申し出だった。　キョトンとしたユリア。　国王を見返すセイルやクラーク達。

アンソニーは、国王に。

「陛下。　それは、昨夜の事ですか？」

「うむ。　輸送も危なっかしいから、丁度イイと思う」

セイルは、二人を交互に見交わして。

「“輸送”？　何かの護衛ですか？」

すると、アンソニーが先に。

「そうです。　私の眠っていた地下には、まだ手付かずの宝物が少し眠っています。　もし、他人の手に触れられてしまえば、その宝物はどうなるやら。　私が王子の頃に預けられていた印字や、マリアンヌと兄上から寄贈された品も在ります」

その後、国王が代わって。

「実は、その品を護って貰える様に。　アンソニー殿は、信頼置ける美術館に寄贈を希望したのだよ。　丁度アハメイルには、王国の歴史を研究する若い貴族が居ての。　ワシとその貴族とは血縁で、美術館も営んでいるから丁度良いと思うたのよ」

ユリアは、どうも訳の解らないので率直に。

「何で、私達に護衛させるの？」

国王は、幼い頃から知人として知り合ってたユリアには、対等の姿勢で。

「う～ん、それがさ～。　一々兵士や騎士を動かして品を取り寄せると、色々と回りにバレるでしょ～。　それに、国で動けばさぁ～、金を積んででも王族所縁の品を欲しがる意地汚ぁ～い貴族とか～。　かっぱらってでも、何処かに転売しようとかすると～ぞくとか出る訳なのさ。　だから、さっさとアンソニー殿に、宝物を検めて貰って。　その上で、信用の出来る美術館に一筆添えて、そのまま寄贈したほ～が早いかな～と思ったんですよ。　ユリアちゃん」

その砕け切った会話に、セイルは呆れて横を向き。

（あの～、僕と言葉遣い似てるんですけど～。　今、国王でしょ？　お忍び旅の時と同じに為るの、ヘンじゃ～ないっすか？）

しかし、ユリアも気性が気性なだけに、こうなると平然とタメ口に為り。

「なっさけないわねぇ～。　貴族ってのも、ダメ人間ばっかじゃん」

その口の利き方に、イクシオ達は卒倒しかけ。

クラークは、頭痛がして来る。

（おいおい、ユ・ユリア殿・・・相手は国王陛下だぞ）

だが、国王もとことん砕けた者で。

「そ～なんだよっ。　どいつもこいつも、金目の物に為ると、国の遺産でもへ～ぜんと欲しがりやがるのさ。　意地汚いって思うでしょ？」

「うんうん、クランのオッサンの言う通りだと思う。　・・あ、国王様の」

「いやいや、オッサンでいいって。　大体さ～、貴族がさあ～・・・」

そんなユリアを挟んで、長いソファーに座り直しているセイルとクラークは、背もたれの方に逃げる。

（セ・セイル殿っ！！　ユリア殿が・・国王陛下を・おおおおオッサンと・・・）

（お忍びで祖父の友人と思ってた頃は、平気で“オッサン”と・・・。　抜けませんね、ヤバイっす）

だが、この楽しい雰囲気に、王妃がジトっとした目に変わって。

「アナタ。　お忍びの旅は、各国の平和の情勢を伺うハードなスケ

ジュールだと聞いてましたが？　随分と楽しそうに、ご旅行してらっしゃったのね」

王妃の睨みに、国王はビクんと背伸びし。

「いっ・いやっ・・。　帰りに、ちと・・立ち寄ったまでだよ。あはは、ホラ、私も剣術で鍛えんと。　いざ有事の際には、格好付けてでも戦闘に行くしさ。　あはっ・あはははは・・・」

だが、そんな国王の態度を見たユリアは、疑る様に目を細め。

「ウッソだぁ～。　セイルに半ボッコにされて、泣きべそ掻いて飲み屋に行ってたじゃんっ。　売り子の若い女の子にさぁ・・・」

国王は、パッとユリアに向いて。

「わーっ、わああーーーっ。　ユリアちゃんっ、シーっ！！」

と、大慌てで止める。

すると、王妃の顔は鬼の如く激変し。

「ア・ナ・タっ！！！　まさかっ、他の下々の娘とおおおおお・・・」

王妃の怒った顔を見る国王は、真っ青な顔に為って。

「ちちち違うってっ！　たっ・偶々・・ののっ・飲み過ぎて・・、その・・かっ介抱されたアアアア・・・・」

ユリアは、必死に言い訳をする国王に向かって。

「嘘つきっ。　しみじみと奥さん死んで居ないって言って、売り子のオネ～サンの肩抱いてたじゃん」

国王は、止めを刺されたと思い。

「あ゛」

哀れな男の末路を予想したアンソニーは、目を瞑り。

「フッ、終わったな」

王妃は、国王の襟を掴むとスクッと立ち上がり。

「オホホホ、皆様。　少し、席を外させて頂きますわね」

と、国王を椅子から引き摺り下ろした。

誰も、何も言えない中で。

「うわあああっ、ごっ誤解だってっ！！　話せば解るぅっ、お前ええぇぇーーーっ！！！！！」

ズルズルと引き摺られて行く国王を見たセイルとクラークは、瞑目して合掌。

ユリアは、半笑いで。

「ジゴージトクじゃん。　あははは・・・」

隣の部屋に、国王と王妃は入ったらしい。　必死で誤る国王の泣き声と、ヒステリックに怒り散らす王妃の声が少々続いた。

イクシオは、独り身の自分に安堵するように。

「オンナはおっかねぇ～。　ふう～、相手居なくて良かったゼ」

そこに、腕組みのエルザが呆れた感じで。

「アラ、イクシオ。　お相手が居たら、疚しく思われる筋合いが在るの？」

いきなり言われてもどかしいイクシオは、セレイドやキーラを見て。

「そりゃ～なぁ～、男ならそうゆうのは一つ二つなぁ～」

だが、瞑目して余所見もしないセレイドは、

「さ～。　私は、女性には縁が無いので。　サッパリ解らないですな」

と、アッサリと否定。

キーラも、静かに瞑目して。

「僕も同じですね。　相手にされないので、良く言ってる意味が解りません」

セレイドが、墓穴を掘ったイクシオに。

「御主も、一度は誰かに怒られた方がイイのではないか？　そうすれば、少しは酒癖の悪さが収まるかも知れんぞ」

テンガロンハットを被り直すイクシオは、どうも居心地が悪くなった場を嫌って。

「ウルセっ、ハゲ坊主に言われたかないねっ！」

と、威勢を通した。

さて。

少しして、顔中に痣を作った国王と、荒事を済ました王妃が戻って来た。

ユリアは、セイルに。

（ソ～ゼツだね）

セイルは、可愛そうな顔をつきを国王に向けつつ。

（原因作ったの、ユリアちゃんでしょ）

（浮気が悪いっ！！！！）

（そーですか）

クラークは、全く威厳や尊厳の見えない国王に驚いた。　自分達の様な下々の者に、壁を作らずに在りのままを曝け出せる王族は、非

常に少ない。

（なるほど。　現フラストマドの国王は、各国の王達が相談を寄せる上。　信頼の置ける人物と兄上が言っておったが・・・。　小さき事に拘らぬ人物らしい。　我が国の国王とは、すこ～し違うの）

フルボッコされたままの姿で、国王はセイルに仕事の内容を打ち明ける。　アンソニーと共に、朽ち果てた邸宅に赴き。　宝物や王族所縁の品を探し出して、それを確保し。　南に在る世界最大の大交易都市アハメイルに、無事送り届けると云う内容だ。　その輸送に使う馬車等は、国王が自ら手配すると云う。

更に。　アンソニーは、セイルに。

「セイル君。　恐らく、私の屋敷の敷地内を徘徊する一部のモンスターは、奥の森から這い出て来ているに違いない。　国の為にも、なるべくモンスターを排除する方向で踏み込んで貰いたい。　明日から、冒険者達にも、再度国として応募を募り。　騎士と寺院の僧侶達の合同討伐隊を組織して、モンスター掃討行動を起こすそうだ。　その中に紛れ、遺体回収の名目で奥に踏み込むのがいいだろう。　掃討行動は、3日間で行われるそうだから。　初日の深夜に奥で物を回収し。　次の日は一日休んで、明々後日に旅立つのが、最も最善だと思う」

セイルは、ユリアとクラークを見て。

「請けますか？」

ユリアは、直ぐにセイルの背中を叩く。

「当ったり前じゃんっ！！」

「いったぁ～い、ユリアちゃ～ん手加減してよぉ～」

「うるさい、お前とゆ～ヤツはっ。　アンソニー様助けて仲間に入れたんだから、仕事は請けてト～ゼンでしょ？」

「うぃ～、解ってますけど～。　一応は、確認しないと～」

ユリアは、クラークを見て。

「請けないって話無くない？」

いきなり振られたクラークは、咳払いを一つして。

「オホン。　ま、請けてイイと思いますな。　ど～せ、他においそれと回せる仕事でも無いしの」

ユリアは、セイルを見て頷き。

「ホレ、許可取った」

セイルは、アンソニーに向いて。

「請けます。　では、これからアンソニー様をチームに加盟しに、斡旋所へ行きましょうか」

頷くアンソニー。

その様子を見たクラークは、国王に。

「陛下」

「ん？　何だろう」

「はい。　今回のお仕事は、国王様からの直々の仕事ですから。一々斡旋所を通さずとも、直接我々が請けた形として主に報告致しましょう。　成功の後に、報酬を遅れて斡旋所経由で受け取っても構わないと思います。　内々の仕事ですし、噂やチーム名の拡大援助は、今回に限っては要りますまい。　どうか、安全な方法を取って下さい」

国王は、クラークを見返して柔らかい微笑みを返し。

「はいはい、エステムルス家の御内縁クラーク殿。　流石に、有名な冒険者だけありますなぁ～。　御思慮深い・・」

「詰まらぬ噂をお耳に入れまして」

クラークは、確かに貴族のソレを身に付けていた。

セイル達は、アンソニーを伴って城を後にする。　イクシオ達と喋りながら、雪色一色に染まる街に出た。

≪剣士のアレコレ≫

マントのフードを深く被るユリアは、雪の舞う中に聳える王城を見返して。

「王様ってのも、色々面倒なモンね。　一番偉いのに、周りに翻弄されてるなんてさ～」

クラークも、王城を見上げて。

「仕方ないですな。　一人で、王の仕事は出来ない。　様々な配下の者を動かす立場であるからこそ、あの様に為られたのだ。　いや、確かな人物ですよ」

イクシオは、仲間の一同を見て。

「よし。　んじゃ、俺等は明日から始まる掃討活動の方に参加してみるか。　斡旋所に戻って、話し聴こう」

赤いマントをキッチリ閉めたエルザが、イクシオに。

「それより、鞭でも買い換えたら？　あんなに短いので戦う訳？」

「あ゛」

骸骨戦士に、鞭を短く斬られた事を思い出したイクシオ。

同時に、ユリアもセイルに横目を向けて。

「セ～イル、アンタも剣ぐらい買いなさいよ。　無駄の多い剣士サ

ン」

「あはは～、なるべくヤッすいの探したい」

エルザは、昨日のセイルの強さを思うとむず痒い。　もっと素晴らしい剣でも持っていて、当たり前と思えたからだ。

「ホント、その辺の鈍ら剣じゃお話に為らないわよ。　セイル君の家って、世界最高峰の大金持ちなんでしょ？　スッゴイ名剣でも、御祖父様に買って貰えば良かったのにさぁ～」

すうるとセイルは、大いに苦笑い。

「あはは・・・はぁ～。　旅して探そ」

街中に向けて歩き出した一同。

ユリアは、クラークと並んでアンソニーの横に付け。

「アンソニー様って、魔法使えるンだよね？」

死人の肌ながら、麗しく感情豊かな微笑みを見せる不死の王子は。

「そうだよ。　魔想魔術が遣えていたんだが、今では暗黒魔法も使えます。　ま、暗黒魔法の大半は、人に悪影響を及ぼすのでね。極力遣わない様にしますが」

話に乗るクラークは、ユリアの横から。

「剣は、如何ですか？」

「剣術は、カラキシですね。　運動は得意でしたが、魔法以外では体術を少し習っていました」

ユリアは、肩にヒョッコリ現れた水の精霊サハギニーや、闇の精霊シェイドと見合い。

「格闘技だって、セイルみたい」

アンソニーが闇の力を強力に有し。　極夜と云う環境が、昼間にシェイドが現れる事を許す。　アンソニーは、精霊と語るユリアを微笑ましく見ていて。

「素晴らしい・・・。　本当に、精霊に愛された加護を持っているのだね」

ユリアは、アンソニーを精霊達と見返して。

「そ、産まれ付き精霊達がアタシの家族。　以外は、セイルと孤児院のみんなかな」

アンソニーは、深く一つ頷いた。　細かく尋ねなくても、ユリアの苦労が解る様だった。

クラークは、ユリアを見てからアンソニーに顔を移し。

「ユリア殿の能力とは・・、そんなに凄いのですか？」

「ええ。　時代時代の世界に、一人二人居るか居ないかの異能者です。　先ず。　こうして精霊が、我々と意思の疎通が出来ている事

自体が、とても特別なのですよ」

ユリアは、サハギニーと頷き合い笑い合う。

「だって～」

「ユリアは、チョー特別だゼ」

クラークは、初めての精霊使いがユリアなだけに。

「ふむぅ・・・。　全く解らない」

アンソニーは、雪を見上げて。

「この目に見える雪も、風の精霊と水の精霊が交わる季節と云う中で、この様に生み出した現象です。　普通、精霊は人には見えず。　自然の所々に溶け込んで生きています。　精霊と意思の疎通をしようとしても、火が話す訳でも無く。　水が感情を持っている訳では無い。　精霊の力を感じる人は、確かに偶に生まれますが。　それは、居ると云うのを解るだけに過ぎないのです。　しかし、ユリアさんの加護は、特異の中でも特異。　精霊と会話が出来るし、こうして我々ですら意思の疎通を可能にする。　精霊がユリアさんの加護を通し、真に信頼をして人と同じ感情表現を得ている」

クラークは、ユリアをマジマジと見て。

「す・凄いですな～」

サハギニーは、魚の身を偉そうに踏ん反り返らせ。

「うむ。　ユリアはエロ・・いや、偉い」

ユリアとシェイドは、半目で。

「おいっ！！」

誤るサハギニーを見るアンソニーは、確かにと頷く。

「普通の精霊術師は、魔法の呪文に組み込まれた召喚法を遣っているに過ぎない。　意思の疎通も無いので、その辺に居る精霊を感じては、呪文にて強引に使役する遣り方なのです。　ですから、このユリアさんの元に居る精霊達の様に、感情も有りませんし。　また、使役する道具でしか無い様です。　その為に、精霊遣いの大半は、５０半ばで死んでしまいます。　過度に自然の力である精霊を使役して、強引に召喚する為に。　己が命も、微量づつ削って居ると云われますね」

ユリアは、それには初耳で。

「うはっ、ソレ知らない。　アタシ、元から精霊サンとは家族だから、呪術要らないし。　遣った事無いモン」

「でしょう。　ユリアさんには、呪文など必要の無い物です。　精霊は、元から神が遣わした四季と云う自然と、生きる全ての物が有する生命を支えるエネルギーが共に融合して、大いなる一年の流れを生み出した大地と空と水と火の営み。　その力を強引に引き出して遣う以上は、何らかの代償が必要なのだと思います」

クラークは、詳しく語られて大いに納得。

「なるほど・・なるほどに」

ユリアは、精霊達と見合って不満顔に。

「そんな強引に召喚するからイケないのよ。　精霊を呼ぶ魔力が有るなら、魔想魔術か自然魔法でも遣えばイイんだわ。　強引に自然の精霊を使役するなんて、サイテー」

サハギニーも、シェイドも、腕組みしてユリアに同意する。

アンソニーとクラークは、感情を見せる精霊を見ると、それが確かだと思えた。

さて、一方で。

セイルの周りに居るイクシオやエルザ。　イクシオは、セイルに。

「しかし、あのエルオレウ様の孫た～ねぇ・・・。　確かに、剣捌き凄かった訳だ」

エルザも半ば呆れた顔で、

「良く冒険者に成ったわねぇ～。　歩くお金持ちだよ～」

と、セイルを検めてマジマジと見る。

セイルは、ヤケクソ染みた笑いを見せた。

その話の中でセレイドは、ふと何かを思い出して。

「そういえば・・。　魔法学院の更に東方には、多くの島と大陸の極一部だけを有する小国が有ったが・・。　そこで作られる“カタナ”と呼ばれる剣は、数が非常に少ないながら。　切れ味恐るべき名剣とか。　セイル殿、旅の中で訪れて見ては如何かな？」

その話に、エルザはセレイドに。

「“カタナ”？　あの、細身の刀身で、値段のバカ高い装飾剣の事？」

「うむ。　何でも、我々が各地で目にする装飾派手やかな“カタナ”とは、その小国が生み出す剣のレプリカらしい」

セイルも、セレイドに向いて。

「レプリカ・・紛い物ですか」

話の連鎖で、学者としての知識を引き出したイクシオが云うには。

「確かに、東方の最果てで生み出される“カタナ”ってヤツは、造り手が一子相伝の隠遁生活を送ってる鍛冶屋だけが造るらしい。非常に質のイイ素材を使うから、年に何振りしか造られない業物だとか。　ただ、聴くに“カタナ”の製造者達は、何故か持ち手を選ぶらしい。　店に卸すのでは無く、何らかの形で自ら認めた相手だけに、自分の剣を売るそうだ」

エルザは、眉間にシワを寄せて。

「まどろっこしいやり方だねぇ～」

「聴いた話だがな」

そんな話をしている中で。　エルザが有名な過去の話を思い出す。

「そ～いえば・・、確かセイル君のお祖父さんと共に居た斬鬼帝ハレイシュ様って、黒い鞘のカタナを持ってたんじゃ無かった？　晩年は遣ってないみたいだったケド。　息子さんと一緒に冒険してた頃は、まだ遣ってたよ～な」

セイルは、その事は良く知っている。　斬鬼帝ハレイシュとは、過去に自分が幼いながらに2度会っていたからだ。

「黒霊刀“テラ・ナ・レイドルク”。　名前は、“天上の至宝”と云って、稀代の名剣ですよ。　確か、畏霊（いれい）シュツルムヘイドと云う神の魂が宿る、インテリジェンス・ソードだと思います」

ハッとしたイクシオ。

「あっ、そうそう」

などと言っては思い出した。　漆黒の鞘に、白銀色の柄をしたカタナ・・、ハレイシュの持つ名剣だ。

エルザは、瞑れた様な細い眼をニコニコさせて。

「ね～、セイル君。　君の御祖父さんが持ってた剣って、どんなのだったの？」

「あ～、お祖父ちゃんですか。　持ってた剣は、大剣と長剣の間ぐらいで、火炎剣と呼ばれる類の“フランベルジェ”ですね。　ただ、

刀身に遣われたのが特殊な鉱物で、持ち手の覇気を宿す力を持っているんです。　剣自体より、扱う側の技量を問われる至極の名剣です」

聞いたエルザは、ポカ～ンとしてしまう。

「何？」

咄嗟にイクシオに聞いて見る所が、実に仲間らしい。　イクシオは、テンガロンハットに積もる雪を払い落とし。　近くを走る馬車に顔を向けながら。

「俺は、イマイチ・・」

説明が足りなかったと思うセイルは、柔らかく笑う。

そこに、離れて聞いていたアンソニーが。

「その剣の違いは、話に出た二人の剣士の質の違いを表しているのだよ」

聞いたセイルは、静かに頷いた。

大柄な僧侶戦士セレイドは、不死者ながらに冒険者と成ったアンソニーへ、少し雲行きの悪い顔を向け。

「“剣士としての質の違い”・・、益々意味が解らぬ」

と、呟く。

アンソニーは、クラークに向いて。

「恐らく貴方なら、意味が解るだろう？」

クラークは、短く。

「凡そは」

と、言った後。　前を向いて、大通りの雪の世界を見つめて。

「セイル殿の祖父殿であるエルオレウ様は、剣技を得意とされた方だ。　闘志や覇気などを剣に纏わせ、鋭い剣圧で生み出す烈風の刃である“ソニックブレード”の使い手だったとか。　他にも、セイル殿と同じ魔法剣を扱えた。　しかし、一方ハレイシュ様は、剣術の技量そのものに優れた剣士。　技のエルオレウ、剣術のハレイシュと分けられた。　剣だけを扱わせるなら、ハレイシュ様に分が在り。　多彩な技として見るなら、エルオレウ様に優が上がる。　あのお二人は、そうゆう意味では永遠のライバルであるのだ」

エルザやイクシオは、セイルを見て。

「貴方って、御祖父さんの生き写しなのね」

「はぁーっ、血って争えないモンだわな～」

しかし、クラークは更に。

「いや、セイル殿はまた別だ」

聞いていたユリアは、興味津々っと云った顔で。

「どう違うの？」

「ウム。　エルオレウ様は、魔術の力は差ほども無く。　魔法剣は、魔力を宿して、不死などのモンスターにも致命傷を負わせる方便としていたに過ぎない。　そして、セイル殿の今の力量では、まだエルオレウ様程の覇気や気力を吐き出して、剣圧の烈風波などは生み出せない。　セイル殿が遣われる魔法は、本物の魔力を礎とした魔法その物で、それを剣に宿して戦うなど前代未聞の事だ。　大昔には、剣と魔法を両立した異才が居たと聞くが。　セイル殿の魔法剣は、まさにその入り口。　磨き切れば、エルオレウ様とも、ハレイシュ様とも違う剣士に行き着く。　私は、それを見届けてみたくてな。　こうして御一緒しているのだ」

クラークの説明に、満足のアンソニーは微笑んで。

「ま、まだまだ未熟な入り口ですけどね。　この若さで体得しているのですから、先は面白いでしょうね」

と、セイルに笑い掛ける。

「えへへ・・スゴイってさぁ～」

照れるセイルに、ユリアはススス・・っと近寄り。

「おい、チョーシこくなよ。　あと剣を幾つ無駄にすれば、その剣術ってヤツは完成するんだ？」

セイルは、途端に頭を抱え。

「ううう・・・無駄な出費がああああ・・・」

ユリアは、ローブの上に着込むコートの腰に手を当て。

「全く、無駄が多過ぎンのよ。　大成する前に、剣不足で足手纏いに成るんじゃないでしょう～ね？」

セイルは、ユリアに縋って。

「ユリアさまぁ～、奢って～」

「フン。　仕事での分け前、アタシに半分くれる？　アンタの半分よ」

「きっ・厳しーよおぉぉ～」

「当たり前じゃ」

セイルは、ユリアに頭が上がらずにゲンナリである。

笑う皆だが。　生まれの良いハズのセイルが、ユリアへ対等の扱いをしているのが驚きでもあった。　ま、一国の国王でも知人なら対等に接するユリアだから、有りでも在るが。

しかし、ユリアとセイルの二人が居る所に笑いは絶えず。　イクシオ達から見て、アンソニーの居場所として、コレほどに適したチームも無いと思えた。　恐らく、行く先々で色々と冒険に挑み。　燻る要素が見えない分だけ走って居られる。　立ち止まったり振り返る時は、自ずと遣って来る訳だ。　だから、意味深な過去を持つ者ほど、こうゆうチームは有り難いだろう。

アンソニーもまた、気楽に笑える自分の居場所を、若きセイルとユリアに見つけていた・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

セイル編の続きと成ります＾＾　内容が長いので、少し間隔を開けて一話一話を長文にするか。　細かく繋ぐかの繰り返しに為るとは思いますが、ごゆるりとお付き合い下さい。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪不死の魔術はアホらしい・・・≫（ユリア）

さて。　一同は、斡旋所に戻って来た。　宿とカジノ・オークションの場を併せ持つ斡旋所は、新たな仕事の依頼が舞い込んで色めき起っていた。　王国からの依頼で、モンスターの討伐を公募依頼の形で広く募集されたからだ。

「なぁ、俺達一緒に組まないか？」

「嫌だ。　誰がお前のチームなんかに入るか」

「おいおい、請けないのかよ」

「ね～、僧侶居なくて大丈夫？　一応、寺院のシスターさんに加わって貰おうよ」

「リーダーがお前だってっ？！！　そんなの聞いてないぞっ！！」

「あーっ！！！　私を外す気っ？！！」

扉を開いて斡旋所の中に踏み込んだセイル達は、広間にごった返す冒険者達に目を見張った。

中でもアンソニーは、所々で喧々諤々を言い合ったり。　挨拶を交わしていたりする冒険者の集団を見て、寧ろ感歎とした表情に変わり。

「随分と人が多いですね。　私の頃は、此処まで盛るギルドは見た事が無い。　なるほど、長く戦争も無い世界が続き、冒険者を選ぶ人が増えたのですね」

斡旋所に来る途中で、武器屋と服屋を梯子し。　御蔭で言うアンソニーの井出達が変わっていた。　赤いシルクYシャツに、灰色の皮ズボン。　青いマントが目新しく、ボロい今までの衣服を脱ぎ捨てたから、随分と若々しく見える。

ユリアは、服をコーディネートしてやった手前で。

「アンソニー様も、直ぐにこの生活に慣れるわよ」

セイルは、物珍しさに目を見張るアンソニーの前に出て。

「では、マスターの所に行きましょうか」

一同は、冒険者達の間を抜けてカウンターに向かい出す。

すると・・・。

（おいおい、ホラっ）

（おっ。　王城に行ったあのガキ共と、クラークさんが帰って来たぜ）

（うはぁ～、誰あの人・・・。　顔色悪いケド・・・カッコイイ～・・・）

（ホントっ!!　あぁ・・・お近づきに成りたいわ・・）

（王城に何しに行ったんだ?）

（さ～、王様に逢ったんじゃないか?）

（くゥ～。　あのガキ共、まだ駆け出しだろっ?!!）

（多分、クラークさんやポリアさんの御蔭だよ。　一緒に帰って来ただけでも、有名に成れる）

あちらこちらで、セイル達を見つけては噂話が始まった。

だが、僧侶ならアンソニーが不死者と一発で解る。

「なっ・・何故だ?　あの者・・・不死者だぞ・・」

「マジか?」

「だが、モンスターって雰囲気してないぜ?」

また、場がセイル達で騒がしく成る。　そんな中で、カウンター間近のテーブルに座っていたポリア達も、戻って来たセイル達を見つけた。

「あら、戻って来たの・・・って、え？」

ポリアは、アンソニーが一緒に居るのに驚いた。

システィアナも、眼をパチパチさせ。

「死んでるイケメンさんですぅ～」

マルヴェリータも同意して。

「ま～イケメンは・・イケメンねぇ・・・。　でも、イイ訳？　人目に触れて？」

テーブルの脇に近付いたセイルも、ポリア達に気付いて。

「ども。　今戻りました～」

と、セイルは笑う。

ポリアは、アンソニーとセイルを見比べて。

「へ？　何が有ったの？　まさか、明日からの討伐作戦に加わる為ぇ？」

すると、アンソニーが微笑み前に身を曲げて。

「麗しき同族よ。　私は、これから冒険者として生きる道を決めたのですよ。　セイル殿のご好意に甘えて、同じチームに加わります」

ポリア達は、ギョっとした顔を見せて仲間で見合い。

マルヴェリータが、周りに聴こえない小声で。

「ずっと・・ですの？」

アンソニーもまた、腰を屈めてマルヴェリータに近寄り。

「ハイ。　お城で生きていく訳には行きませんし。　私の居場所はもう無くなります。　なら、いっそう流離った方が・・・」

ポリア達が見るアンソニーは、何処と無く割り切った様子が見えていて。　自分での決断なら仕方ないとも思えた。

ユリアは、ポリアに近寄り。

「後で話してあげる」

「うん。　お願い」

「ポリアさん達は、明日からの作戦に参加するの？」

「一応。　此処で死人は出したく無いし、場所が場所だから用心も込めて参加するわ。　ま、率先して戦うのはしないかな」

イルガは、一番壁側の奥の椅子から、ポリアとユリアを見て。

「ま、我々は差し詰め救護担当ですな」

自分の心を代弁して貰ったポリアは、緩やかに微笑んだ。

セイルは、カウンターに向かうべく、一端の別れをテーブルに置いた。

イクシオ達は、そこでポリア達の前に残るので。　チーム“ヴレイブウィング”の面々のみが、忙しく冒険者達の詰め寄るカウンターに向かったのである。

セイルを見つけた老いたマスターは、受付を配下として働く二人に任せて。

「おいっ、お～い。　戻ったか」

と、カウンターの内側を横に移動して、セイルの前に来てくれた。　疲れが少し滲み、額に薄らと浮かぶ汗。　赤く為った顔色は、意外に元気な様で。　主人は、セイル達が行ってから忙しかったのだろう。　ポリアに見せた昨夜の主人は、もう何処にも無かった。

セイルは、仲間の皆を見てから、主人に身を乗り込ませる様に近づけて。

「あの、奥でお話出来ませんかぁ～。　色々と込み入った事に成りまして～」

喧騒脇立つ斡旋所の中。　主人は、アンソニーを見てからセイルを見て顔を近づけると。

「まさか・・・コチラさんは・・」

「はい、まさかデス」

「・・・なんと、こりゃ魂消た。　解った、カウンターの脇から奥に入ってくれ」

こうして、セイル達は斡旋所の奥に入る。　それを見ていたカウンター外の冒険者達は、何か有ったのだろうかと興味を惹かれた。だが、それは許された者だけが知れる事。　昨日まで、子供達を救う仕事を放棄した者達に、その許可は下りなかった。

一昨日までは、子供達の帰りを待つ親達が留まっていた部屋。　応接としての広間だが、主人や斡旋所で働く者達の居間でもある。生活の色が濃く覗ける場所であり、大仰な凝った王城の様な場所とは別世界だった。

「紅茶煎れるから、好きな席に座れ。　んで？　一体どうしてその人物を連れて来た？」

セイルは、クラークと共に背凭れも無い木の椅子に座り。　ボロけているががっしりとした木のテーブルを前にして、王城での出来事を語る。

主人は、セイルがエルオレウの孫で在る事以上に。　国王と面識が有った事に驚いて、竈の前で立ち竦む。

「お・おいおい・・、国王さまのお忍び旅で知り合いだったぁ～？　んな・・、確かにエルオレウ様と国王陛下は、歳も近くご友人だったとは聞いていたが・・。　世界は、広い様で狭いな」

ユリアは、細めた眼で頷くと。

「ホ～ントだわ。　あの陽気で弱っちいクランのオッサンが、今日に出会ったら国王様だなんて。　正直、驚き越して呆れたわよ」

クラークもセイルも、国王を“オッサン”呼ばわりするユリアと、そのユリアに驚く主人の顔を見ると、失笑と脱力感が襲って来る思いだ。

さて。　国王とアンソニーの依頼の話に入ると、主人は老いた顔を引き締めた。　紅茶を配る中で、

「そうか。　そうゆう事なら、マガルに話しておこう。　掃討作戦の中で、お前さん達や王子様に護衛は要らないが。　この依頼自体がバレると、かなり面倒だ。　密かに一緒に向かう様に行動して貰って、奥の屋敷の敷地内に入る時の見張りをして貰うといい」

ユリアは、何でそんな事をするのか解らず。

「何で見張りなんか必要な訳？」

老練な主人は、まだ若いユリアには、その心配する意味が解らないのは仕方ないと思う。　説明を入れる為に、テーブルの間近に有る椅子に座ると、ユリアを見て主人は云った。

「いいか。　事がそうゆう事なら、隠密行動と一緒だ。　冒険者なんてのは、長くやってると身を崩す輩も出てくるし。　悪い盗賊なんかと知り合う輩も居る。　チーム丸々が、深く気心知り合っている訳では無い場合も多い。　炙れた身の上が長い奴に、金にしか執着しない・・そうゆう奴が居るのさ」

「ふぅ～ん・・・で？」

ユリアは、まだ今一解らない。　肩に座るサハギニーと、土の精霊である土蜘蛛と云う紫色の小型の蜘蛛が居て。　ユリアと主人を見交わしていた。

「ん、んでな。　そうゆう奴は、宝物や金品の情報を金で盗賊に売ったりする。　下手すれば、襲う阿呆も居る。　何より、明日に一緒で指揮系統に回る騎士も、実は侮れん。　貴族や王国政府の重鎮達が幅利かせ、派閥の権力勢力図が世間のあちらこちらに加味してるからな。　王国の王家所縁の品物と聞けば、出世や名誉欲などに駆られて欲しがるのさ。　だから、お前さん達が、王子様の屋敷の敷地内に踏み込む所を、他人に見られるのは宜しくない。　例え、御偉い騎士様にでもな」

そうと聞いたユリアは、ムスっとした剥れ顔に変わり。

「全く、どいつもこいつも・・。　でも、国の騎士様までそんなのって、なんだか有り得な～い。　さ～いて～」

クラークと精霊は、大いに納得でウンウン頷くし。　セイルとアンソニーは、生まれが生まれなだけに苦笑い。

しかし、主人は真顔を崩さず。

「だが、王子として賜った王家所縁の品物の中には、一族の証を示す物も含まれるかも知れない。　手に入れて悪用すれば、それなりの収入を約束するだろうし。　また、売ってもかなりの金に換わる。　モンスターの存在で手出しの効かない今が、その宝物を持ち出す機会。　しっかり頑張れよ」

言われるユリアは、

「当ったり前よ。　アンソニー様加える以上、コレをしくじったらチームの恥だわ」

と、頷く。　その意気込み釣られたセイルとクラークに加え、アンソニーまで一緒に。

「お～」

と、拍手。

ユリアは、セイルにジロリと眼を向け。

「お前、気張れよ」

セイルは、その視線に殺気も感じる。

「ハイ・・・」

アンソニーを加える事と、隠密行動をする事を聞いた主は、一同をこの部屋に残し。　直ぐにカウンターに戻って、その加盟作業を行った。

セイル達は、その間に紅茶を頂きながら明日の事を話し合った。
馬車は、国王の腹心が騎士と共に連れて来る。　問題は、人目に付くのを少なくして、奥まで行く事だ。　朝は、一斉に墓地へと入るらしいから人目に付くし。　手柄を焦る冒険者達は、形振り構わず奥に突撃するだろう。

そう言えば。

受付カウンターの有る待合い広間には、やけに僧侶が多く。　集まった冒険者達の中に見えていた。　宿に寝泊りしていた僧侶が、此処に来て持て囃された為だろう。　流れてくる冒険者達の中でも、僧侶は二人三人と固まって流れて来る事が有り。　不死モンスターに対抗する手段としては、僧侶は定石の人材だ。　まだ何処のチームにも組み込まれて居なかった僧侶は、まさに今は引っ張りダコだったであろう。

セイル達は、その点では僧侶が居ないのに、良く大丈夫だと思う。　セイルの魔法剣に然り、ユリアの精霊魔法が万能な力を発揮するし。　クラークの武器が白銀製と云う事も、理由に在るからだろう。

「終わったぞ。　明日は、少し遅めに出て行きな」

老いた主人の皺枯れた声が聞こえて、セイル達は忙しい広間に戻り。　ポリア達やイクシオ達と軽く雑談を終えて。　夕方の暗い曇天を外に出て望んだ。

大きく白い息を吐いたクラークは、オークションにやって来たと思われる貴族風の男性を下ろした馬車を、右の先の路上に見つけながら。

「今夜は、しっかり食べたいですな。　何処か、いいレストランにでも入るとしようか。　セイル殿」

マントのフードを被ったセイルは、雪が踏み固められた路面に出るユリアを気にしながら。

「そうですねぇ。　筋肉痛いし～、あま～い物が一杯在るお店とかいいデスね」

「うむ。　ケーキなどデザートにいいの」

クラークは、見た目に似合わぬ大甘党で、酒の肴にケーキを食べれるらしい。

さて。　ユリアが今宵の最後に大激怒を見せたのは、夕食を終えて斡旋所の宿屋に戻った夜の深け始めた頃。　大いに食べて飲んで語らい、満足した４人が斡旋所の中に入ると・・。

「フム、主の姿が見えない」

と、クラークがほろ酔い顔をカウンターに向けて一言。

カウンターには、配下の中年男性が居るだけ。　討伐依頼に沸き立った広間には、僅か１組の冒険者チームと、手酌の一人酒をする数名が残るのみで。　あの騒がしかった昼過ぎは、既に此処に無く。

暖炉にくべられた木の乾き燃える音が、広間に響いていた。

広間の奥に在る、宿の各部屋に向かう階段へと向かう中で。

「ランプが、半分以上は落ちてますね」

見る物全てが真新しいと思えるアンソニーが、薄暗く為って静けさが立ち込める広間を見る時だ。

「？」

ユリアは、自分の前を人が通ったと見た。　同じくその気配に、セイルやクラークも壁に沿い上る階段前で立ち止まった。

「・・・」

アンソニーの前に、ユリアの前とセイルの後ろの間を抜けて来た女性が立つ。　立ち止まったアンソニーは、白いローブを纏った女性を見下ろして。

「何か御用ですか？」

と、微笑んだ。

緊張したのは、クラークとユリアだ。　そう、女性は僧侶だった。
背中には、自愛の女神の刺繍が入り、一点にアンソニーを見上げた様子は、魔法でも遣うかの様に凛と引き締まっている。　微笑むアンソニーと、少し凝らした女性僧侶の目が噛み合っていた。

女性僧侶は、アンソニーに敵意に近い印象を向け。

「貴方は、不死者ですね？　何故に、このチームに加わったのですか？」

理由を言おうとするユリアとクラークの顔から、楽しんだ緩みが消えた時。　アンソニーは、二人に視線を向けて喋るのを制した。
そして、女性僧侶に向かって・・。

「私は、不死ですが。　実は、モンスターにも成り切れない半端な存在なのです。　訳在りまして、このチームの方々に助けられました。　死ぬ決心が着きましたが、何せ２００年も過ぎた今に甦りま

したからには、この世界を今一度旅して見回ってみたいと思いつき。
　此方のセイル殿に頼んで、加えて頂きました」

すると、俄かには信じられないと云う感情を顔に出した女性僧侶。

「何とっ？　私には、貴方が信じられません。　普通、不死と為った者は全身が脂漏化し、骸の姿を留めるのみと為るはずなのに・・・。　貴方は・・、生前の姿を生き生きと残している。　仮初めの姿なのですか？　それとも奇跡なのですか？　有り得ない・・。　モンスターと化して尚も、人としての確固たる精神や感情を持つ貴方が・・・」

栗色の髪を、フードから胸元に下ろす女性僧侶。　不死者を祓う使命を授かる僧侶と云う職業ながらに、アンソニーと云う有り得ないと存在が目の前に居る現実に、酷く困惑しているのだ。

アンソニーは、寂しく笑い。

「恐らく・・心・・でしょうか」

「こっ・心？」

女性僧侶は、生きる生命のみが持つと云われる心を、アンソニーから聞いて唖然と返した。

対して、アンソニーは落ち着いていて。

「はい・・。　私は・・生涯に愛した女性が居ました。　貴女の様に美しく・・そして聡明な女性（ひと）でした。　その人が権力の犠牲で死に・・。　私は、その愛する女性を忘れて消し去る事を、情け無い

話でしょうが躊躇った。　・・・ですから、無謀と云うべきか・・。
　理、摂理を冒涜してしまった。　２００年も過ぎて、この身がモンスターに成り切らなかったのは、あの女性(ひと)を思う愛情と云う心の所為なのかもしれません。　その心が薄らがない限り、私は、この姿で人として在り続けるでしょう・・」

語るアンソニーの容姿は麗しく、言葉遣いにも気品が漂う。　そして、その身の上が、儚さと侘しさを纏わせるのだ。　悲劇の王子・・。　まさしく、異性が同情してしまいたくなる存在だ。

「まぁ・・なんとおいたわしや。　貴方がモンスターに成り切らぬ様・・私が出来る事は在りますか？」

女性僧侶は、アンソニー魅入ってしまった。

アンソニーは、女性僧侶に笑い掛け。

「貴女のお心、お手を煩わせる事など・・」

見ているユリアは、方向がヘンに為って来たのに訳が解らず。　少し離れて見ているセイルに、ススっと近寄った。

（ねぇ。　なんか・・物々しい雰囲気から、ヘンな雰囲気に為ってきたよ）

ユリアの耳にセイルは口を近づけながらも、視線はアンソニーに残したままに。

（多分、チャームミステリアの妖術だよ）

ユリアは、暗黒魔法の部類に入る“妖術”と聞いて、セイルに驚いた顔を向け。

（ちょっ・チョットっ！！　それってっ！！　まっ・まさかっ？！！）

ユリアは、アンソニーが女性僧侶に、何か危害を加えるのではないかと思ったのだが・・・。　セイルは、アンソニーを見ながら苦笑を見せて。

（多分、少しエネルギーを貰う為じゃないかな～）

ユリアは、ガバッとセイルの胸倉を掴み。

（どーゆう事よっ？！！）

（ぐっ・ぐるちい・・・・）

そこに、間近に居て聞いていたクラークも遣って来て。

（セっ・セイル殿っ！！　あの女性僧侶とアンソニー殿が、一緒に夜を過ごすとか言い出しましたぞっ！！！）

と、セイルの肩を掴んでグワングランと揺らかす。

（うげぇ～・・食べた直後にゆらすのおお～？）

そうこうしている内に。　顔を赤らめた女性僧侶の肩を抱いたアンソニーが、セイル達を上がり始めた階段の途中から見下ろして。

「皆さん、明日にまた。　私は、この女性に今晩を掛けて説明して参ります」

「え〝っ？！！！」

驚きギョっと目を見開いたユリア。

「なぬっ？！！！」

同じクラーク。

グッタリしたセイルは、弱弱しく手を振り。

「吸い過ぎては・・いっ・イケませんよおぉ・・・。　おえええ・・・」

アンソニーは、緩やかに微笑み頷くと・・・。　女性僧侶と共に、上に消えて行く。

さて、これはどうゆう事だろう。　青褪めて瀕死のセイルの説明に因ると・・・。

アンソニーは、もはやモンスターと変わりは無い。　ただ、心の強さの所為で、人とモンスターの狭間に立つ存在なのだ。　その存在は、人の世界に住む悪魔と変わりは無いらしい。　生きている死人は、もう人のように食べ物で肉体を維持出来ないのだ。

では、その肉体を維持している源はと云うと・・魔力と心である。

　アンソニーの場合は、あの自分をノーライフロードにしようとして、長きに亘って魔力を送り続けた悪魔の存在が在り。　維持を魔

力に委ねられた。　魔界で生きるなら問題無いが、人の世界で魔物が生きるにも、それなりのエネルギーは必要だ。　普通のモンスターなら、人や動物の血肉を喰らうのだが・・・。　高位の悪魔などは、人の生命エネルギーを吸い取る技能、“ライフスティール”・“エナジースポイル”と云う妖術を身に付けているらしい。

ユリアは、人気の殆ど無い広間の中で、セイルに鬼の形相で詰め寄り。

「おめぇ・・、それっじゃーモンスターと変わらないじゃんかっ！！！」

苦笑うセイルは、言い訳染みた説明を続ける。

普通の悪魔などは、人を狂わせて性的な狂行に及び。　その中で、エネルギーを根こそぎ吸い取るのだが。　人の中に溶けて生きる魔物と、人の間に生まれた魔人（まびと）と云う種族は、異性との性的な交わりの中で、人から命に支障の起こらない具合でエネルギーを得るのだと云う。　恐らく、アンソニーもそうして生きる以外に、もう肉体を維持出来ないのだろう。　容姿がイイだけに、異性を魅了する妖術も長けていると見える。　あの連れて行かれた女性僧侶と、今夜はお楽しみで。　少しエネルギーを貰うのだろうと説明した。

ユリアは、淫らな話にイライラを燃え滾らせ。

「愛するのは一人じゃねーのかよっ？！！！　えっ？！！！　オイコラぁぁぁっ！！！！！」

一方のクラークは、物欲しそうな顔でアンソニーと女性僧侶が消えた上を見上げ。

「う・羨ましい。　あの僧侶殿・・中々の美人であった・・・。御身体も・・なかなかの・・う～ん」

セイルも苦笑いを続けて。

「ですね～。　後々面倒に為らなきゃイイけど・・ですねぇ～」

マリアンヌへの、一途な愛情に感心していただけに。　ブチ切れたユリアは、呆れてるシェイドと炎の下位精霊で火蜥蜴である“サラマンドラ”を肩に乗せつつ。

「うおおおおおーーーっ!!!　ふしだらじゃあああああっ!!!!」

と、吼え上げた。　サラマンドラとは、炎を身に纏うサンショウウオの姿をした精霊で。　髭をを生やした老人の様でもある。

「ユリアちゃん、もう夜だし。　大声は不味いって・・・」

と、ユリアを宥めるセイルに対し。

「はぁ～。　ワシも、アバンチュールしたいのお～」

と、嘆くクラークが居る。

（なっ、何なんだ、アイツ等ってよ・・・。　顔色の悪いヤツ・・、上手くヤりやがったなぁ～。　うっ・羨まし・・）

こっそりと出来事の大半を見ていたのは、カウンターから喧しいユリアに驚いて覗き見ていた斡旋所の働き手だった。

次の日の朝。

「え゛？　・・・マジ？」

起きて来た冒険者がごった返す広間の隅で、丸で恋人の様に見つめ合っているアンソニーと女性僧侶を見つけたユリア。

初恋に恥ずかしがる少女の如く、頬を赤らかに染めた女性僧侶。
トロ～ンとしたうっとりした瞳で、アンソニーを見つめ上げ。

「ああ・・・、どうして同じチームでは無いのでしょう・・。　アンソニー様・・今宵も・・一緒に過ごしては頂けないのですか？」

その女性僧侶の顎を指先で触れ、擽る様に撫でるアンソニー。

「私は、半分魔物です。　長く一緒に居ては、貴女の健康を害する。
私は、ただ・・・。　無闇に矢鱈に危害を加える魔物に、私が成り下がって居ない事を理解して頂けたなら・・・。　それでいいのです」

「嗚呼、・・それは。　昨夜に寝具の中で、特と・・・解りましてよ」

その二人を見て。　恥ずかしさに顔を真っ赤にするユリアは、何故かイライラし。

「うがあーーーっ、変態王子めがあああああーーーーっ！！！！」

クラークは、指を咥えて。

「うらやま・・・」

と、云い掛けた所で、モンスターの様なユリアに睨まれるから。

「・・・しくは無い・・。　でも・・・イイなぁ～」

セイルは、ユリアに首を絞められたく無いので、マガルの元に逃げていた。

どうやら、アンソニーが加わっても、このチームの賑やかさが消える事は無い様である・・・。

・・・・、羨ましいなぁ・・・（作者）

≪地獄と化した古き墓場≫

「んじゃ、行こうか」

斡旋所の外で。　斡旋所から出て来たセイル達へ声を掛けたのは、

イクシオである。

「はい、よろしくお願いしま～す」

と、微笑むセイルの後ろには、アンソニーに訝しげな眼を向けるユリアが居て。　邪気一つ無い笑みのアンソニーと、ユリアに胸倉捕まれて、相当悲しんだクラークが居る。

理由を密かに知るイクシオ達に、事を知ったポリア達も強力してくれると云う事に為った。　マガルは、自分のチームを連れては、ポリア達と一足先に封鎖地区に向かっていた。

イクシオ達は、出遅れてセイル達と一緒に向かう気で、待って居てくれたのだ。

王家の一員としてアンソニーは、イクシオ達に頭を下げ。

「皆さん、先々までのご助力感謝いたします」

エルキュールもエルザも、女としてアンソニーに男性的な性的魅力を感じる。　死人で無いならと思うから、直ぐに苦笑いが漏れた二人だった。

「仕方ないわ、関っちゃったんだし。　偉そうな貴族に、あの王子様の記憶が残る館を好き勝手されるのも癪だしね」

と、エルキュールが云えば。

「そうね。　ま、僧侶の端くれとしても、死者の心残りを放っておくのも心痛いわ。　出来る事は、協力してバチは当たらないわよ」

と、エルザも続く。

イクシオは、キーラに小声で。

「女って、ど～して顔の良い男に弱いかね～」

だが、キーラは、緩く笑い。

「絶世の美女だったら、イクシオさんは本気で頑張るでしょ？」

「・・・、ちげぇねぇ」

納得せざる得ない言い返しに、イクシオはテンガロンハットを深く被る。

「不純だ・・」

大柄のセレイドの呟きが、イクシオの耳には痛かった。

さて。　早朝の終わり頃に出て行った討伐作戦参加の冒険者達から遅れて、少し。　暗い中を出勤する工夫や働き手が見える。　暗い朝で、街灯が朝まで点いている光景が当たり前のこの時期。　歩き出したセイルの横には、不機嫌なユリアが居た。

セイルの背中には、安物の剣が一振り。　腰に、もう一振り差してある。　一緒に並んだクラークとアンソニーは、セイルが何故に二振り買ったのか。　今に為って、気に為った。　モンスターの数は減っているし。　アンソニーの屋敷に、モンスターは居なかったハズだからだ。

一行は、封鎖区域の近くに来ると。　篝火の焚かれた木陰に、もう怪我して運び出された冒険者達が居るを見た。　大怪我の手前だが、鎧を引き裂かれて白い布を巻いている男性剣士。　横には、木に寄り掛かって、僧侶の手当てを受ける弓使いの男性も見える。

イクシオは、怪我人を見掛けるなりに。

「おーおー、早速かよ」

怪我していたのは、ポリアの合同チームに入りたがった生意気な冒険者達のチームだ。

開かれた格子門の前にセイル達が来ると・・。

「お待ちしてましたよ」

と、昨日の朝に、セイル達を斡旋所まで迎えに来た固太りの中年紳士が、スッと物陰から現れる。

セイルの横に居たユリアが、紳士の登場に唖然とした顔を見せて。

「えっ？　オジサン・・騎士なの？」

甲冑や鎧を纏い、剣や槍を扱う騎士のイメージからかけ離れた人物の登場に、そう思ってしまった。

紳士はニコッと笑い。

「いえいえ。　私は、取り計らう役目です。　御付の騎士は、もう

中に馬車と入って待機してますよ。　ポリアンヌ様とご一緒かと」

「ポリ・・アンヌ？　・・・誰？」

ユリアは、名前を聞いても誰か解らなかった。

セイルが脇から。

「ポリアさんの事だよ」

「あ～」

頷くユリアに、イクシオなど知り合いの面々は笑っていた。

その雰囲気を嫌ったのは、怪我をした冒険者の剣士。　苦しむ顔をセイルに向け。

「一回成功したからって、良いご身分だな。　・・・随分遅い到着じゃないかっ！」

その言い草に、ムッとした顔を見せたのは、ユリアとエルキュール。

呆れたのは、他の面々。　だが、肝心のセイルは、左の庭木が生い茂る物陰に顔を向けた。

怪我した剣士は、セイルが無視したのだと思って目つきを鋭くする。

だがセイルは、直ぐに顔を封鎖区域に向けると。

「早く行きましょ～」

と。

ユリアは、セイルが人を無視するのが珍しい事だと思って。

「セイル、どしたの？」

セイルは、何処か心配すら浮かべた顔で森の中を見つめて。

「う～ん。　森を覆っていた霧は晴れたのに・・。　どうして怪しい空気が消えてないのか、気に為るの。　モンスターって、そんなに強いの居たっけ？」

この言い草にムカついたのは、怪我した剣士だ。

「舐めてるンじゃねぇぞっ！！！　ギガースゾンビや、レブナントが居やがるんだっ！！！　強いモンスターがウヨウヨしてるぜっ！！！」

怒鳴られたユリアは、セイルとの話に邪魔な怪我した男が目障りに思え。

「ルッサイっ！！！　そんなのセイル一人で勝てるしっ、強いモンスターじゃ無いっ！！！」

「っ？！！！」

怒鳴って黙らせる。

“強いモンスターじゃない”と云ったユリアの一言に、顔を険しくさせていた別の冒険者も俯いた。

エルザは、アンソニーの脇にて。

「確かに・・瘴気の靄は消えたケド。　モンスターの気配は、全然弱っていないわねぇ」

モンスターでもあるアンソニーすらも、湖から流れて来る霧が煙る森を見つめて。

「不思議な感覚がする・・。　とにかく、中に入って行きましょう」

セイルを先頭に歩き出す皆。

セイルとユリアを見つめるままに、唖然とした怪我した剣士。　自分が怪我させられたモンスターを、キッパリ強くないと言われては・・。　返す言葉が無かったからだ。

クラークは、最後に剣士の前を通り。

「怪我して怒ると、出血が再発するぞ。　連れ出されたなら、大人しくしておれ」

と、言葉を残した。

敷地内に踏み込んだセイル達。　昨夜の寒さで枯れた芝生の葉を凍らせた霜が、具足で踏む時に囁く様にシャラシャラと奏でる。　肌を凍らせる様なキーンとした冷気が、封鎖区域を支配している様だった・・・。

さて。　森の中に差し掛かる所で、先に入ったポリア達と合流出来

た。　用意の良いポリア達は、光る魔法を発する小石を持っていて、見つけやすかった。

セイル達とイクシオ達を向かえたポリアは、森を険しい眼で見ていて。

「気をつけてね。　一昨日から、嫌な気配が消えてないみたいだから」

クラークは、怪我をした冒険者達の手前で心配が在り。

「マガル殿のチームが見当たらないが・・」

と、辺りを見回しながら聞く。

マルヴェリータが直ぐに反応してくれて。

「カミーラって女性のチームと一緒に、先立って奥に向かったわ。屋敷に向かう内門の所で、見張りをするって言ってたわよ」

出会った一同が、それぞれ誰かと話し出す中で。　セイルは、ポリアに近付き。

「あの・・・」

と、声を掛ける。

「ん？」

ユリアとアンソニーは、馬車を引く騎士の老人と兵士３人に挨拶し

た所で、ソレを見ていた。

セイルは、何時ものヘラヘラした顔を消し。　どこか緊張を含む済ました顔で、問う。

「ポリアさんは、このまま此処に？」

「どうゆう事？」

「はい・・。　僕達が向かう北側より、北西・・西側かな。　嫌なモンスターの気配の塊が、チラチラしてます。　そっちに冒険者の皆さんが行ったなら・・危ないと思うのですが・・」

「解るの？」

セイルは、ホロリと笑って。

「な～んとなくですが」

アンソニーは、少し離れた場所からそれを聞き。

「フム。　彼の感知能力は、凄い・・・」

「えっ？」

アンソニーを見上げたユリア。

アンソニーは、セイルから視線を外さずに。

「私が幾ら病み上がりの様な状態でも、此処からかなり深い西側に

向かった場所で、モンスターの波動を朧気に感じられるのだが。
モンスターの私と同じ感度を持っているとは・・・。　人ながらに凄い事だよ」

ユリアには、西側の全体が、ボンヤリ大きく不気味にしか感じられない。　精霊としての力の感じ方と、セイル達の感じる感じ方に、大きな違いが在るのかは、ユリアも解らないのだが・・。

その時、ポリアは。

「解ったわ。　私達が西の奥まで行くから、封鎖区域の事は任せて。
聖騎士と僧侶の合同部隊も、直に来るみたいだし。　此処は、大丈夫そうだから」

セイルは、ポリアに一つ頭を下げて。

「ありがとうございます」

「いいのよ」

セイルは、後ろのクラークと一緒に、ユリアとアンソニーの居る馬車に向かった。　木陰の下に停めてある馬車は、荷物を運ぶ箱型の馬車だ。　幌馬車よりランク上の様な、赤い車体の木製荷車である。
大きく丸い車輪は、軽い泥濘みぐらいではビクともしないだろう。

「ご苦労様です。　王より直々に命を受けました、ハレンツァと申します」

老いた騎士が、姿勢正しく礼をして来る。

「あ、どうも。　セイルと言います。　今日は、宜しくお願い致します」

何処かの商店街で、バッタリ会った知り合いにでも挨拶する様なセイルだが。　クラークは、老騎士に眼を見張った。

「あ・・、失礼ながら」

と、老いた騎士に近付き。

「御貴殿は、前々の近衛副騎士長ハレンツァ様ですか？」

すると老人は、微笑みクラークに頷いた。

「いや、私の昔を知っておいでの方が居ましたか。　如何にも、御恥ずかしながら、私がハレンツァです」

クラークは、身を正して一礼し。

「ご無礼を、私はクラークと申します」

「おお、冒険者にその名を轟かす“双槍のクラーク”殿かな？　背中の槍・・中々の一品ですな」

クラークは、恐縮した顔を恥ずかしくさせて。

「いや、貴方のお耳にまで、私の下らない噂を入れましたか。　今日は、不束ながら宜しくお願い致します」

「はいはい」

ユリアは、クラークが凄く嬉しそうなのに気が向き。　セイルに、耳打ちで。

「このおじいさん・・有名なの？」

「うん。　僕のお祖父ちゃんとも知り合いの騎士様だよ。　もう、７０歳を超えてると思うけど。　元は、スッコイ有名な騎士様なんだ」

「お・お前ぇぇ・・。　そんな有名人って知ってて、あの挨拶かぁ～？」

「あはははは～」

そんな二人を見るアンソニーは、挨拶以上に深く話しに加わらなかった。

馬車を伴い、霧が煙る暗い森の中を、奥へと向かって行く。　馬車を引く兵士が誰も新米の様で、挙動もぎこちなく寒さに震えている様子。　セイルとアンソニーは、馬車を前から挟む形に先行し。ユリアは、馬車の左。　クラークとハレンツァは、ユリアの後ろで馬車を護る構えだ。

だが、暗い夜明け前の様な視界の中では、確かに警戒が自然と滲み出る。　風に揺れた木の音や、枝に積もった雪が重みで落ちる音に、兵士達が敏感に反応していた。

死人であるアンソニーは、寒さも関係無いのでコートは着ていない。

兵士達は、アンソニーの様子も気に為る所だが。

「止まれ」

急に言ったアンソニー。　立ち止まった時に、髪の毛を濡らしていた滴が落ちた。

セイルは、剣を抜いて北側よりやや西の方向に向く。

クラークが、ユリアに。

「何事か？」

杖を握るユリアは、薄暗い森の奥を見て。

「モンスターが・・・、でもヘン」

「ぬぅ？　“ヘン”？」

ハレンツァが、ユリアとクラークの方に来て。

「何事かな？」

ユリアは、ハッと顔を険しくさせて。

「戦ってるっ！！　誰か二人・・・ううん。　地面にへばり付く人も入れて、３人っ！！」

セイルは、クラークに振り返り。

「ユリアちゃんとクラークさんは、此処にっ」

アンソニーも森の奥に蠢く幾つもの波動を感じ抜いて。

「スライムか何か、不死では無いモンスターだ。　私とセイル殿で、十分に対処が効く相手だ」

セイルは、アンソニーを見ずして。

「行きます」

「解った」

森の奥に走り出したセイルと、応えるのと同時に霧の様に消えたアンソニー。

「ひぃっ！！」

「消えたっ？！！」

馬車を率いていた兵士が、途端に情けない声を上げるが・・・。

もう、二人は居なかった。

ハレンツァは、クラークに寄り。

「あの二人は・・・何者ですか？　片方の御仁は、魔法遣いとお見受けしたが？」

これには、クラークとユリアは、逆に驚きだった。　クラークは、ハレンツァ程の人物なら、それは無いと思って思わず。

「あ・・ハレンツァ殿は、アンソニー様の事を、陛下より聞いていないのですか？」

「いや・・。　陛下からは、極秘の任務として、王家所縁の品を持ち帰る事を命じられました。　あの顔色の悪い御仁が、その所縁の品を全て知っているとは聞きましたが・・」

「そ・そう・・ですか・・・」

クラークの覚えが確かなら。　現・国王の父親の忠実なる剣と謳われたのが、このハレンツァである。　今、近衛騎士団総団長をしているのが、第二王子のリオンであり。　ハレンツァの跡を一人挟んで継いだのが、王国剣術指南役を続ける剣士テトロザだ。　その二人以外で、前王の心許した側近のハレンツァに事を伝えていないとは・・・。

（何か、深い理由でも在るのだろうか・・・）

ユリアの心配そうな顔は、助太刀に行ったセイルの身の上だけでは無いのを、見下ろしたクラークは見て取っていた。　自分の驚いた顔が、そうさせたのであろう。

さて。

助けに向かったセイルとアンソニーは、程なくして戻って来た。
一緒に居たのは、助けられた冒険者達３人。　一人は、右足を食い千切られていて。　止血だけされて、仲間に肩を貸して貰って立っている状態だ。

それを見たハレンツァは、

「コレは酷い。　御主達だけで戻れるのか？」

と、近寄って聞く。

兵士の一人で、入隊したばかりの新米兵士を、一人一緒に付けさせたハレンツァ。　クラークは、彼に確かな人間性を見つけた。　冒険者などの安否を気遣う貴族や政府重臣は、先ず少ないからだ。

セイルは、アンソニーに馬車前で。

「どうやら長年の間に、別のモンスターが住み着いているのでは在りませんか？　お屋敷側では無く、此方側に」

眉間を少し険しくさせたアンソニーは、深く俯き。

「の、様だ。　恐らく、支配者が消えたと思って、支配の触手を伸ばし始めたのだろう。　かなり離れた湖の近くに、強い死霊の気配を感じる・・。　先程のポリアさんの一団でないと、相手は難しいやも知れぬ」

セイルは、ユリアとクラークを一瞥してから。

「早めに回収を終えて、明日は我々も掃討作戦に参加しましょうか。　少しでも、我々で潰しましょう」

その言葉に、アンソニーは瞑目して頷く。

「嗚呼・・。　冒険者とは、仲間を思うと聞いていたが・・。　思われてその温もりを感じるよ」

ユリアとクラークが見るアンソニーは、明らかに罪の意識を蟠せる奥深い淵の底に居る。　セイルは、その罪の意識を少しでも拭おうと言ったのだろう。

クラークは、セイルに関心して。

「まだ・・若いのにの」

だが見つめているユリアも、細々とした声で。

「色々見て来てる・・。　お金が在る分だけ、汚い事も見てるモン」

これには、クラークも家柄で身に覚えが在り。

「人一倍在ると云うのも、面倒が多いな」

冒険者と兵士を見送り、直ぐに進み始めた。　マガルとカミーラが待つ屋敷の敷地入り口の門前まで、更に2回も冒険者を助ける戦いをした。

兵士の安全を考え。　モンスターの気配を感じると、直後に馬車を停めてセイルとアンソニーが向かう。　クラークとユリアを残すのは、万能に魔法を使えるユリアと戦い慣れたクラークを残す事で。

セイルとて、安心出来るからだろう。

馬車に迫った亡霊を、クラークと連携して倒したユリア。　モンスターに怯えて腰を抜かす兵士を、セイルが心配する気持ちが解った。

そして、どうしてこんな弱腰の兵士を国王が遣したのか・・。

疑問だった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ちょっと間隔空きましたが更新です＾＾＞

今回は、少し文面が荒いままですがそのまま入れました。　読み難かったらスイマセン＾人＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪敷地の中へ≫

「来たか」

森の中に広がる暗さが、少し弱まった中。　松明を片手にしたマガルは、カミーラのチームと一緒に居て。　霧の中で迫って来た馬車の足音を聞いて、声と共に其方を見た。

雪の重みで木の枝を揺らし、地面へと落ちる音が闇の中で聞こえた直後。　馬車を引き連れたセイル達が、待っていたマガルと再会した。

「どうも、ありがとう御座います」

セイルが、マガルとカミーラ達に言えば。

「なんの」

「チョット遅かったね」

と、二人から返って来る。

セイルは、マガルの仲間が一緒にいないのを見て。

「チームの皆さんは、別行動ですか？」

「いや、仲間は向こうで見張りをしている。　モンスターと一回戦っただけで、随分と怯えてな。　だから、モンスターの来ない方に隠れさせてると云った所さ」

「そうですか。　此処まで来るのに、３チーム程襲われていた方々の所に加勢しましたが。　なんだかモンスターの数が多いです。僕達が中に入ったら安全を考えて、もっと出入り口へ近い方に行ってもいいですよ。　どうせ我々は、夜中に成ってから抜けますから。　それまで、此処で待っているのも危険です」

マガルは、最初に助けられた時を思い出す。

自分は、セイル達と一緒に戦って、ギリギリの戦いの中で充実した手応えを得た。　だが、先に引き返した仲間は、恐怖が植わってしまった。　マガルとて、まだ若かった駆け出しの頃は、モンスターとの戦いで臆した経験を持つ。　だが、このままでは、チームとしてやって行けないのも事実だ。　だから、セイルに寧ろ強い目を向けて。

「いや、無理の無い程度には残る。　寧ろ、前に植わった恐怖を振り払うに、良い機会だ。　このままでは、仕事を請けるにしても、先に進めない。　チームとして、冒険者としてな。　それに、君にこのまま置いて行かれるのも、実に虚しいではないか」

このマガルの言葉に、冒険者としての意気地を感じざる得ないことに、セイルは微笑んだ。　一緒に一時を共に組んで戦った事が、大事な思いで出に変わると思える。

しかし。　そんなセイルに、マガルは辺りを見回してから近寄ると。

「所で、セイル殿。　一つ、御主の耳に入れて置きたい事が・・・」

「はい～、何でしょう？」

セイルがマガルより聞いたのは、目を見張らざる得ない話だった・・・。

さて、その頃。

アンソニーは、カミーラの後ろに居る二人のマント姿の人物を見てから。

「一昨日に、ポリアさんと一緒に来てくれた方ですね？」

カミーラは、死人の顔をしたアンソニーに警戒をした眼を返し。

「あぁ。　感情を持ったモンスターを見るのは、初めてだよ」

棘の在る言葉だったが、アンソニーは、緩く微笑む。

その様子を黙って見ていたユリア。　理解していない人には、アンソニーはモンスターでしか無いと云う事を再認識した。

が。　アンソニーは、カミーラに。

「モンスターでも、人でも成り切れてない。　それが私ですよ。所で、ポリアさんは、禍々しい気配を追って西へ。　西側には、かなり強いモンスターが出ます」

「えっ?!　西側に入ったのか?　それなら、掃討作戦だから加勢に向かうかな」

「いや、止めた方がいいです。　此処ですら、もう危険な区域だ。見た所、僧侶も魔法遣いも居ない様ですね。　十分に気をつけて下さい。　危険と在らば、直ぐに退く事をお勧めしますよ」

カミーラは、鋭い視線をアンソニーに送る。　だが、直ぐに視線を元に戻すと。

「解った。　だが、仲間に加わったからと云って、セイル達を軽んじるなよ。　置いて来る様なら、私が敵(カタキ)にお前を倒すからな」

アンソニーは、静かに頷いた。

マガルやカミーラが辺りを見張る中。　セイル達は、屋敷へ向かう敷地に踏み込んだ。　マガルやカミーラの事は、ポリアが了解している。　流石は、公爵筆頭の家柄であるポリアの一言には、騎士達も控えて聞く。　モンスターを掃討する仕事の中で、

“王家所縁の敷地に踏み込む者無き様に、見張りを立てる”

と、言ったら。　騎士達は反論もしなかった。

門の先に踏み込むセイル達。　幻惑魔力の解けたアンソニーの屋敷

へ向かう敷地内は、荒廃した荒地に、枯れ掛かった木が佇んでいると云った様な感じだ。　恐らく、魔力が解けて一気に時間の経過が襲って来た為だろうか。　脱出するときに見た光景よりも、更に寂れてしまっていた。

「あっ！！　モッモモモ・モンスターっ！！！！」

驚き馬車を停めた兵士が、枯れた木の下を指差す。

警戒した一同が見るのは、動かないままのゾンビや蟠っているだけのゴーストだ。

セイルは、前に出て来たハレンツァに。

「こっちのモンスターは、使役の為に生み出されたモンスターです。まだ数日は、自分からは動かないでしょう。　真っ直ぐに屋敷へ」

眉間に皺を寄せ、厳しい緊迫した表情を示すハレンツァは、動かないモンスターを見て。

「なるほど、解った」

と、兵士に進む合図を送る。

進みだす馬車と共に歩き出すアンソニーは、動かないモンスター達を哀れみの目で見つめ。

「私の魔力が完全なら、彼らを土に返して遣れるのだがな・・。こうゆう時は、何時も歯痒い思いだね」

霧が北西側の湖から流れ込んでくる中で、セイルは笑った。

「あはは、完全に取り戻したら、モンスターに傾きますよ～。　じっくり戻した方がイイっす」

「・・・、君は詳しいね」

「前に本で、似た様な人の話を読みました。　急激な力の追求は、欲望色を強めてモンスター化を促進させる様です。　魔族と人の間に生まれた亜種の方々や、アンソニー様の様な方は孤独なので。人一倍力を望む傾向に在ると・・。　心は、力では維持できません」

アンソニーは、初めてセイルの全てに疑問を抱き始めた。　疑念でも、疑心でも無い。　何故、強いのか。　何故、こうも成熟しているのか。　全く経験や苦労の無い人物の言葉とは、思えなかった。

さて。　霜が地中に立って、地表を浮き上がらせる。　屋敷まで一直線に伸びていた石畳の通りすら、時間の経過の影響を受けてデコボコし。　馬車を通せないから脇の地面を通らせるのだが。

ユリアは、右肩にシェイド、左肩に土蜘蛛とサハギニーを乗せながら。

「改めて感じると、此処って不思議ね。　こんなにも闇や魔の力が強いのに、土や風なんかの自然な精霊力が低いみたい。　精霊達が、居心地良くないって言ってるよ」

怯えて馬を引く為に、動きが遅い兵士達の前に出て。　セイルの近くに居たユリア。

アンソニーは、ユリアの肩の精霊達を見てから前を向き。

「済まない。　それは、私の所為だ。　この場所に長く留まり、悪魔を住まわせた。　悪魔は、精霊の力を魔の地場に変えるオーラを持っている。　ギャリスパは下級の悪魔だったが、長く留まっていたので、少しずつ力が変換されただろうね」

「ふ～ん。　でも、それじゃ～此処には、これから草木とか中々生え難い不毛の土地に為っちゃうね。　私も、精霊神とか呼び出せるなら、力を活性化出来るけど。　実力から云っても、そんな事出来ないし・・・。　長く時間を掛けて、自然の力が増えるのを待つしか無いね」

「その通りだ」

広大な敷地を行く中で、不安な顔を見せるのは、アンソニーやユリアだけでは無かった。　騎士として来ていたハレンツァも、この敷地を見回し。　同時にアンソニーの後姿を馬車後方から見ていると、表情が歪み出す。

それに気づいたクラークは、ハレンツァが体調を崩したのではと心配した。

「ハレンツァ殿、先程からお顔が優れぬ。　何処か、具合でも悪くされましたか？」

ハッとして、取り繕う笑顔を返したハレンツァは、

「あぁ、いやいや。　久しぶりにプレートメイルを着ては、この重

さを思い出しましたわい。　若い頃とはどうも違い、上手く慣れませんな。　全く、王も信用第一とは云え。　７０を過ぎた私をコキ使うのも、どうかと思いますわい」

「なるほど」

そう合わせたクラークだが。　マントを着ける肩や、頭に落ちた雪を残すハレンツァを心配する。

「鎧は冷えますからな。　確かにこんな日は、着たくも無いでしょう。　もし御身体の具合が悪いならば、馬車の荷台にお乗り下さい。　屋敷までは、戦闘も無いハズですから」

「うははは、私も年寄り扱いされますな。　全く、年齢とは厄介だ」

だが、クラークは笑うに笑えない。　ハレンツァが前を向けば自然と俯く。　明らかに、何か心配事でも在る様だった。

その答えは、屋敷に着いて解る事だった。

そして、屋敷へと到着した。

「ふぁ～、ホントにボッロボロ～。　２・３日前に泊まった場所とは、と～ても思えないわ」

空が白み始めた。　そろそろ昼も近く為って来た頃だろう。　ユリアは、アンソニーの屋敷と対面して溜め息を吐いた。

屋敷全体を見上げるアンソニーも、一人だけ白く無い溜め息を漏らし。

「ハァ・・・。　マリアンヌの為に作った庭園も、何もかもが朽ちた。　時間を止めた代償は、見るも無残に恐ろしい事なのだな。コレなら、私が死んで。　誰かに土地や屋敷を渡した方が、まだマシだった。　嗚呼、私は愚かだ」

その懺悔を間近で聞いたハレンツァ。

（マリアンヌだとっ？！！！！　アンソニー・・アンソニーっ？！まっ・まさかっこの方はっ？！！！）

ハレンツァは、アンソニーの独り言を聞いて、アンソニーの事に気づき始めた。

馬車を裏庭に回し、宝物の眠る地下に向かうべく中に踏み込んだ。　もはや、アンソニーが眠ってた時の面影は、屋敷に残って無かった。　埃の噴く廊下は黒ずみ、天井は施された装飾が霞んでしまっていた。　蜘蛛の巣が埃を纏って落ち、床の隅などに堆積している。　本当に此処で寝泊りしたのか・・。　ユリアは、信じられなかった。

一行は、魔法の光を指輪に宿したアンソニーを先頭に、地下の水路が横たわる回廊に降り。　そして、あのゴーレムと死闘を繰り広げた空中広間に来た。

「あれれ・・・、壁に走ってた緑っぽい光が弱まってる」

ユリアが指指せば、セイルも。

「だね～」

アンソニーが、二人の後ろに来て。

「壁に走っているのは、魔力を変換したエネルギーだよ。　この屋敷を中心に我が敷地を幻術に閉じ込める為に、設けた力場の中枢が此処なんだ。　私が母体と為って、魔力をこの地下に在る魔方陣に送り続けていたんだが。　もう、酷く弱まっている。　早く物を運び出そう。　宝物の場所には、時間の影響を受けない魔法が張られている。　解ける前に魔法を正しく解けば、中の物に時間の経過が襲う事は無いハズだ」

ユリアは、光りの走る壁を見ながら。

「じゃ、急いだ方がイイよね」

と、言った時だった。

「恐れ多きながらっ！！！」

突然だった。

ユリアやセイルは勿論、クラークや兵士も声に驚き。　アンソニーの後方を見ると・・。

「あっ・ハッ・ハレンツァ様っ！！」

兵士が驚き、土下座したハレンツァの脇に向かう。

「・・・」

後ろに振り返って見下ろすアンソニーの前で、何とハレンツァが土下座していたのだ。

≪西方の激戦区≫

大きく振り上げられたイクシオの鞭が、骸骨のモンスターの足へ振り込まれた。　更に撓った鞭が蛇の様に飛び。　骸骨のモンスターが振り上げた腕に巻き付いて、その動きを止める。

「たっ助かったァァっ！！！」

骸骨のモンスターであるスケルトンに、斬られそうに為っていた若い冒険者。　怪我して転んだ体勢から、助けてくれたイクシオに叫んだ。

「フンっ」

イクシオが鞭を引っ張れば、その勢いで回転を生む。　骨の腕を後ろにへしゃげ曲げたスケルトンは、腕と身体を鞭に巻かれてしまう。

「おいさっ！」

近くで別のスケルトンを壊したボンドスは、次に。　イクシオの鞭で動きを封じられたスケルトンの背後から迫って、頭蓋骨を片手斧でカチ割った。

そこから近い所で。　青い肌をした、ゾンビの上位モンスターであるレヴナントも混ざる群れが在った。　エルザ・キーラ・セレイドは、その亡者の群れを倒しきった処でイクシオに向き。

「向こうも終わったわね」

と、エルザが助けた冒険者の怪我を診に動き。

「もう居ない・・ですね」

キーラは、注意深く辺りを探る。

「エルキュールが、近くの聖騎士と僧侶の部隊を呼びに行った。早く怪我人の手当てを済ませて、ポリアさんと合流をした方がいいな」

厳しい顔のセレイドは、予想以上に多いモンスターの数に不安と緊張を隠さなかった。

広大な旧無縁墓地の敷地内を、湖に向かって西に移動したイクシオ達。　そこで見たのは、スライムや肉食大蜥蜴のモンスターなど、水辺や湿地の近くで生息するモンスターの存在だった。　隔絶された封印の中で、浄化されない暗黒の力がモンスターを生み出したり、誘き寄せていたのだろうか。　世界最大の湖の周辺は、人が足を踏み入れぬ場所も在り。　昔からモンスターが住み着いてはいたらしいが、この墓地と繋がる結界の綻びが在ったのか。　モンスターが

大量に侵入して、繁殖していた。

「封鎖された中に立ち込めた暗黒のエネルギーを吸って、死体がモンスター化するのは解るが・・。　此処まで多いとは、チョイと驚きだぜ」

イクシオは、鞭を腰に仕舞ってボンドスに言う。

「ホントだな。　このまま壁に沿う形で西に向かっても、モンスターは多そうだ。　直接北西に突っ切ったポリア達は、大丈夫かの」

ボンドスは、嘗てKと云う凄腕の冒険者の下、一緒のチームに為ったポリア達の事を心配した。　だが、お互いに二手に分かれて、生存者を助けながら行くと決めた以上は、そうして行くしかない。

その頃、ポリア達は・・。

「私達が本体に当たるわっ。　みんなは、倒せる相手に束で掛かって。　救援隊が来るまでの辛抱よっ」

２０人近い冒険者達を指揮するポリアは、墓地の敷地中央付近で、迫り来るモンスターの群れを迎え撃っていた。　モゾモゾと動き迫るスライム。　デカい巨体を見せるギガースゾンビ。　更に、人並みの大きさをしている蛭のモンスターや、全身が凍った長いワームまで現れた。

周りからは、スケルトンやゴーストが襲って来る中で、怪我人を一点の木の下に集めたポリア。　動ける冒険者達を集めて、聖騎士の討伐隊が来るまで戦い抜く為に、指揮し出したのである。

「ポリしゃんっ、次キタ～っ」

システィアナが、霧の煙る森の先を指差す。

「行くわよっ！！！」

頬を昂揚から紅くさせて、剣を構えたポリア。

「ビビるなっ！！！」

「ポリアさんに付いて行けっ」

冒険者達は、有名なポリアが指揮をしてくれるだけに、勝手な行動を起こさず難局を乗り切ろうと必死に声を出している。　まだ、死人だけは辛うじて見ていないポリア達。　此処でモンスターにヤられる訳に行かなかった。

（噂には危ないって聞いていたケド・・。　奥の敷地の魔術が解けたら、今度はモンスターがウジャウジャ這い出て来てるじゃないっ！！！。　我が国の王都で、こんな場所が在るなんて・・・）

改めてモンスターの多さに驚くポリア。

そこへ、少し離れた北側より。

「聖騎士様達の本体はっ、既にこの敷地内には到着してるハズだっ！！！　怯むなっ！！！　モンスターを押し戻して打ち倒せっ！！！」

悲鳴に近い怒声がする。　騎士数名が指揮している、兵士と宮廷魔

術師と寺院の僧侶で組織された小隊が居たのだ。　ポリアを護衛するつもりで来たのだが。　モンスターなどとの戦闘訓練の経験が無いのか、小隊の士気は低く。　騎士が率先して戦っているので、なんとか逃げ出さない程度だ。　当てに為らない所か、ポリアの心配を増やしてくれていた。

ポリアは、ヌウ～っと見えた前方の大きい陰を見つけて。

「イルガっ、ヘルダーと一緒に兵士達の方にっ！！　ゲイラーは、私と前線へっ！。　マルタ、援護期待してるわよっ！！」

目を強く凝らしたポリアの剣が、薄く青い光を放って風を呼んでいる。

「御意っ、お気をつけて」

ヘルダーと並んだイルガは、ポリアに気遣いを述べて騎士と兵士の小隊の応援に向かった。

「ポリア、準備はイイぜっ！！！！」

自分の体格と程近い大剣を構えたゲイラー。　黒い刀身の大剣は、脈打つ様に紅い波動を鍔元から切っ先に向けて走らせる。　炎の力を帯びる、魔法の加護を宿した大剣なのだ。　仕事の中で、死に行く冒険者から受け継いだ剣だった。

青い絹地で、厚手のマフラーの様なベールを頭から肩まで被りながら。　鋭い目を細めて、杖を構えるマルヴェリータが。

「ポリア。　貴女の正面から、大きいのと不死者が来るわ。　魔法

を打ち込むから、一気に畳み掛けて」

その時、霧を破って現れたのは、巨大な骸の骸骨モンスターだった。

「デっ・・デカいっ！！！」

後ろで見ていた冒険者達が、見上げる程の人骨モンスターに立ち竦む。

「あ〜、デイクドバイタ〜ですぅっ！！　真っ黒マホ〜さんのゴーレムモンスターです〜」

アワアワと慌てるシスティアナ。“真っ黒マホ〜”とは、暗黒魔法の事。

ゲイラーの3倍強は有る背丈をして、腐肉をこびり付かせる人骨が、赤子の如くヨチヨチと霧の中から這い出てきた。この巨体が歩くのに、振動すら起こらないとは・・・。

“カタカタカタカタ・・・・”

大きく黒ずんだ頭蓋骨が、人を一飲みしてしまいそうな口を噛み合せる。

マルヴェリータが魔法の詠唱を始めた時。

「群れが来たぞっ！！！」

離れた場所で、騎士の男性が吼える。

固まる冒険者の中に居る僧侶達が、また群れて来るスケルトンやゴーストの気配を間近にまで感じる時。　マルヴェリータが巨大な骸のモンスターに魔法を打ち放ち、ポリアが。

「負けないでっ！！！　生きて助かるのよっ！！！」

と、風を全身に纏わせながらモンスターに走り出した。

アンソニーの目覚め。　それは、魔物を閉じ込めていた結界中で、新たな勢力闘争を引き起こしたかの様なモンスターの動きを導いた。
　その渦の中に飛び込んだ冒険者達は、命懸けの掃討作戦をしなければ為らなかった。

≪王の計らい≫

（セ・・イル、ど～しちゃったの？　あのお爺さん）

ユリアは、目の前で土下座しているハレンツァに驚くばかり。　セイルに寄り、耳打ちする。

（見てれば解るよ）

セイルは、冷静に傍観する構えだ。

ハレンツァを見下ろすアンソニーは、小さく鼻で溜め息を付き。

「ご老殿、立たれよ。　無駄な時間を費やしてはならない」

だが。　土下座をして額を床に擦り付けたハレンツァは、左右から立たせようと来た兵士を退けた上で。　顔を低く見上げた。

「貴方様は、古きに粛清を行ったフランソワ王の弟君、アンソニー様ですなっ?!　わっ・私めはっ・・かっかかか・・」

恐縮と興奮を交えたハレンツァは、その老いた顔を更に老けさせて強張らせる。　言葉の所々が震え、どもって上ずるのはどうしてか。

アンソニーは、セイルを見る。

「・・・」

セイルは、静かに見つめるのみ。

セイルが成り行きを見届ける気構えと知るアンソニーは、目を瞑り上を見た。

（あぁ・・・。　あの王が、何故にこの老人を遣わしたか・・、今に解った気がする）

ハレンツァは、鼻水を垂れ流し出し。　丸で泣いて居る様に咽びながら。

「わ・わわ・・私わぁ・・私め・・わあああああ」

言い出しきれぬハレンツァのその後を。

「解っておる」

と、アンソニーは、繋いだ。

「あ〝っ！！！！」

その言葉に、あの好々爺と云った雰囲気のハレンツァが、急にギョッと目を見開き。　丸で絶命した死人の様な形相をした面を、アンソニーに上げる。

アンソニーは、ハレンツァの着る全身鎧の胸を指差し。

「その刻まれた紋章。　平和の証である鴛鴦と、ユズリハの葉を組み合わせたるは・・・アンチャールズ家の家紋だ。　余が、忘れる訳在るまい」

「あ・・・・」

ハレンツァは、アンソニーの言葉に稲妻に撃たれたかの如く硬直したと思いきや。　次第に力を抜かして、クタクタと前に平伏した。

「申し訳・・ありません・・。　王・・じ・・もうわけ・・・」

瞬時に慟哭を全身から吐き出すハレンツァは、腰から剣を抜く。

「っ？！」

驚くのは、クラーク。　これは何事か。　そのハレンツァの姿は、丸で自決する者の仕草だ。

ハレンツァは、剣をアンソニーの前に押し出し。

「どうか・・どうか私目を・・・」

アンソニーは、それを見て遠き日を思い出す。　笑顔を浮かべ、世間話にとこの屋敷を訪れたマリアンヌを・・・。

（戻らぬ・・戻らぬよな・・。　マリー、俺は・・・。　俺は、この時代で生きて見る。　だから憎しみは、此処に捨てて行くよ）

アンソニーは、瞬きをすると目を引き締めた。　そして・・。

「我が愛おしきマリアンヌの、暗殺を命じた一族の者よ。　王子として、最後の命令を御主に下すぞ。　アンチャールズ家の者よ・・」

ユリアもクラークも、アンソニーの一言に目を見張った。　兵士達は、何が起こっているのか解らずにうろたえ。　セイルは、静かに成り行きを見守っている中で。

「はっ！！　あ・有り難き仰せ付けに、感謝致します。　な・・な・何なりと・・ご命令をっ！」

ハレンツァが泣き声を張り上げて、再度土下座した。

其処に掛けられた言葉は、

“もう良い”

と。　アンソニーのただ一言だった。

アンソニーが口を開く瞬間。　ユリアやクラークなど、見守る皆には時が止まったかの様だった。　だが・・・。　ハレンツァがその顔を上げるのと同時に、時が動き始めたと皆が感じた。

「あ・・、お・王子・・」

ハレンツァの顔が、情けない泣き顔に変わる。

アンソニーは、ハレンツァの前に進んで身を屈めた。　老いた男の目を見つめるのは、まだ若さも残す男の目。

「ハレンツァ殿・・。　御主の一族は、打ち首と成った当時の当主殿以外、我が兄の手で他国に追放と成った。　その御身一族が何故に戻されたのかは、我にはもはや関係無く。　現・国王が信頼をして、御主を今日に遣わしたのだ。　古臭い事は、もう良い」

「あぁ・・でっ・ですがっ、王子っ？」

縋り付く様なハレンツァに、アンソニーはしっかりとした声で・・。

「良いか。　我は・・、余は、もう冒険者に成った。　２００年を経た今を、この目で見回ってみたいが為よ。　御主を憎しんだら、余はモンスターに変わる道へと踏み込んでしまう。　余をモンスターへと変貌させる気か？」

「そっそんな気は・・毛頭もっ！！」

「ん。　なら、もう剣を仕舞って立つが良い。　御主に与えられた仕事は、何だ？　この謝りは、私事なるぞ。　政務の中で、私事を遣って時間を無駄にさせる気か？」

「はっ・・・ははぁっ！！」

ハレンツァは、血相を変えて再度頭を下げる。

立ち上がったアンソニーは、セイルを見て。

「手間を取らせちゃったね。　さ、地下の宝物庫へ行こう」

その顔は、笑顔だった。

ユリアは、見ていてアンソニーとセイルには、似た雰囲気が在ると感じる。

（セイル、中々度量の広い王子様だね）

（うん。　マリアンヌ様の思い出を汚したく無かったんだよ）

（モンスターに成ったら・・忘れちゃうもんね）

（うん。　誰だって、好きな人を汚したくない。　もう、戻って来ないのをアンソニー様は知ってる）

立ち上がったハレンツァは、アンソニーに騎士の示す忠誠の一礼を示した。

アンソニーは、静かに頷いた。　その仕草は、主従関係のソレであり。　アンソニーは、王族の仕草を今も覚えていた。

何故、現・国王がハレンツァを遣わしたのか。　それは、２００年前の遺恨を背負った二人を、此処で会わす為でも有ったのだろう。

　ハレンツァが信用に於ける人物で在ったからこそ、国王も遣わしたのだ。　そして、アンソニーの心の中から、憎しみを取り去る狙いも在ったのかも知れない。　今のハレンツァを見て、アンソニーが手を下す事は無いと。　あの強かな国王は、理解していたのかも知れなかった。

≪懐かしき顔≫

「ポリアっ！！！！！　こっちは終わったぞっ！！！！！」

ゲイラーの大声が、霧の中から響く。

「たぁっ！！」

二体のレヴナントを、一太刀づつの一撃で斬り倒したポリア。　激しく動いて汗ばむ顔を、声のした方に向けて。

「こっちもっ！！」

近くでは、馬の嘶きが聞こえる。“聖騎士”と呼ばれる神の加護を得た神官騎士と、その率いる一団が到着していた。高位の魔術師団と僧侶が騎士達の中に組み込まれた、対モンスター精鋭部隊で。

魔法の加護が無き武器では、太刀打ち出来ないモンスターをも一気に蹴散らした。この隊に組まれる騎士の武器は、魔法の加護が施された特別品なのだ。

戦闘が終わり。ポリアは、聖騎士の小隊長で、面識も深いイデオローザと云う女性と対面する。

白いマントを靡かせ、白いプレートメイルと云う全身鎧を来た黒髪の騎士イデオローザは、ポリアの面前で平伏した。目つきの優しく、褐色の美少女と云う印象が持てる。

「これはポリアンヌ様。この様な所でお目に掛かるとは・・」

ポリアは、剣を仕舞って。

「ローザ、久しぶり。もう身を起こして、此処は戦場と変わり無いわ」

「は」

身を立たせたイデオローザへ、ポリアはイルガの向かった方に向き。

「ローザ。向こうに騎士と小隊が居るけど、もう引き返させた方がいいわよ。此処は、何故かモンスターが多過ぎる」

「は、受けた報告ですと、どうやらその様で」

「うん。　私は、仲間ともう少し奥まで踏み込むわ。　ローザ。私の事より、怪我をした兵士や冒険者に気を配りなさい」

「えっ？」

イデオローザの顔が、驚きに変わる。

「ポっ・ポリアンヌ様っ！！　これ以上は、もうお止め下さいっ」

ポリアは、嘗ての騎士養成所に居たイデオローザを見た気がする。
まだ冒険者として飛び出す前まで、彼女とは手合わせを幾度もした間柄だった。

「ローザ、私をまだ姫扱いする気か？　貴女にまだ負ける程、弱って無いわよ。　ウフフフ」

「ですがっ、此処はもう危険ですっ。　もし・・もし、ポリアンヌ様の身に何か遭ったらっ。　嗚呼、全軍統率をリオン王子よりお任せされる、貴女様のお父上様になんとお詫びをすれば良いか・・。
あぁ・・、想像しただけでも末恐ろしい」

イデオローザのその顔は、確かにポリアを心配する物だ。

そこで、ポリアの元に、イルガとヘルダーが遣って来る。

「お嬢様。　騎士様一団は、此方に来て控えておりますが・・如何致しますか？　深い傷を受けた者が、２名。　その他戦いで疲れて、戦意を失ってる方も見受けられますが・・」

「イルガ、それはローザに任せる。　これから、もう少し踏み込んでモンスターを倒しながら、冒険者や兵士の捜索を続ける」

「は。　どうやら、別の騎士隊から逃げて、奥に向かった者が居るとの情報も有ります」

「うん。　助けた冒険者達が見た別のチームも、逃げ惑いながら奥に踏み込んでいたって言ってたわね。　死人が出る前に助ける為にも、急がないと」

「は。　もう、システィが怪我の手当てなどを終えて動けます」

ポリアは、イデオローザに向き。

「ローザ、お先に行ってるわよ。　心配なら、着いて来なさい」

「ポリアンヌ様っ、そっ・そんなご無体なっ」

危険の中枢に飛び込むポリアに、聖騎士イデオローザは唖然としてしまった。

ポリアは、戻る冒険者達に頼める事を伝えに行く。

（ああっ、こんな所でっ）

イデオローザは、焦り出して部隊の召集を掛ける。　ポリアを先に行かせて、何か有ったら自分の失態と同じと思ってしまったのだ。

手早く命令を済ませ、ポリアの後を追う気だった。　イデオローザは、まだ今のポリアの実力を知らないのであった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

間隔が空きましてすみません。　もうそろそろゴールデンウィークですね。　5月5日までに、エターナルとインテリジェンスのお話を4・5話更新しようと少し更新を遅らせました＾＾

近未来サバイバル・ホラーと銘打ったインテリジェンス・クライシス。　もし、ご興味在れば読んで見て下さいね＾＾

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪回収作業≫

「オーロテム・・・グラトルナ・・」

暗い石壁に挟まれた石階段の踊り場。　黒い鉄の扉の前にて、アンソニーが魔法の詠唱を行っていた。

（セイル、此処って・・塔みたいだね）

（だね）

とぐろを巻く様に螺旋階段が取り巻く中。　上下各階に、部屋が有る。　アンソニーが眠っていたのは、最下層の地下８階。　この宝物庫は、その一つ上に当たり。　かなり深い地下であった。

アンソニーの魔法の詠唱が終わる時、アンソニーの目が黒い炎の様なオーラを光らせる。　見ていた兵士達が、異形の者を見たと怯えた。　魔法の詠唱が終わると、宝物庫を閉じていた鉄の扉が消えてゆく。　そして、部屋の中には、物が所狭しと置かれた黒いシルエットが見えた。　アンソニーは、指輪に宿した光を向けると・・。

「わっ」

兵士の一人が驚く。　黄金で作られた装飾宝剣の類の物を見つけて、その目が欲望の色に変わる。　金で作られた柄に、幾つも填め込まれた宝石の様な石。　鞘も、炎の鳳を描いた素晴らしい装飾が施されている。

ハレンツァは、中に一歩踏み込み。

「これは、流石に」

と、感嘆の一言。

扉の外から中を覗くユリアは、

「ふぅあ～、絵とか壷とか一杯あるぅ～」

と、宝を初めて見た感想を表現した。

アンソニーは、ユリアに微笑み向いて。

「これらは全て、古い古美術品だ。　金や宝石は少ないが、私が生きていた当時の物だから、価値はそれなりに有ると思う。　中には、王国から賜った軍服や宝剣も有るから、運び出すのも少し仕分けしないと」

セイルと並んで見るクラークは、売って見た事を妄想し。

「この狭い部屋一つの物でも、売れば一生楽に暮らせましょうな」

脇のセイルも。

「デスね」

と、同意。

２００年以上の時を経て、封じられていた扉が開かれた。　宝物庫の中に明かりが入れられ、アンソニーとユリアが一緒に仕分けをして。　セイルやクラークと兵士達が運ぶ。　ハレンツァは、宝物が納められた木箱を改めて、個数と中の物を品書きする。　紛失を恐れてだろう。

この屋敷内に隠された塔の部分の別の出入り口をアンソニーガ開いた事で、馬車への運び出しは夕方頃には終わった。　積み込みを終えて外に出ると、霧が晴れて、すっかり暗くなった空が見えていた。

「では、夜まで休もうか」

アンソニーは、ハレンツァに伝える。

「はっ」

兵士達は、アンソニーを“王子”だの云って、臣下の態度を示すハレンツァが良く解らなかった。　今の時代にアンソニーの事を理解出来るのは、一部の人間だけだろう。　訝しげな表情で、ハレンツァの指示を受ける兵士が火を熾し始める。

さて。　クラークとユリアが並んで、アンソニーと共に休む用意をするのに対して。　セイルは何故か、ハレンツァの元に。　そして、

彼の手を触る。

「？」

ハレンツァは、触られた事に気づいてセイルを見る。

「・・・」

セイルは、態との様に馬車の後方に向かう素振りでハレンツァを見た。

（何か？）

一目で何か用事が有るのだと解る。　頷いたハレンツァは、セイルの脇に着いた。

ユリアとクラークが相手で、アンソニーと腰を下ろして雑談をし始める。　その姿を馬車の後ろから見ているセイルは、小声でハレンツァに。

（昨日の夜からですが。　何者かが我々を尾行してます）

（なっ、本当か？）

（はい。　気配が凄く少ないので、もしかしたら玄人（本業者）かも・・・）

（何故に、尾行が・・・）

ハレンツァは、王の命で昨夜にこの命令を受けた。　今日に選んだ

兵士は、王の云い付け通りに、朝方に兵舎へ登庁してきた兵士を無作為に選んだのだ。　その事をセイルに告げると。

（ん～、王城を出た後に、気配を一度感じて・・・。　後は、外で夕食を頂いて戻った時に、また。　今日の朝は、斡旋所を出る時と、この封鎖区域に入る門の前です）

（それでは、君達の行動が筒抜けではないか）

（えぇ。　考えるに、誰かが手引きしているような・・・）

（うむ・・・）

考えてしまうハレンツァに、セイルは。

（とにかく、あの荷物をしっかり管理して下さい。　我々があの荷物を護衛するのは、明後日の朝。　それまで、誰にも触れさせない様にお願い致します）

セイルの心配は、アンソニーの持ち出した王家所縁の品だ。　王子の証の宝剣や、軍を動かせる指揮権の証まで有った。　これが紛失すれば、面倒な事になる。　偽物では無いから、本当に困るのだ。

ハレンツァも確かめたが。　今の軍を動かせる最高指揮権を持つリオン王子が持つ証と、全く同じ物。　もし、これが他国にでも渡れば、悪用も選べる。　売る方とて、相当な額の金を手に入れる事に成るだろう。

何故にセイルがこうも心配するのかは、後々で書くが。　王家の者が有する権力は強く、そして与えられた権限の代わりと成る証は、大昔から諍いの元にでも成るのだ。　アンソニーの持つ様々な証は、

今まではモンスターと封印によって護られて来たが。　モンスターが退治されれば、人の出入りが可能と成る。　そうなれば、土地の由来を知る少ない権力者は、利用を考える可能性も出て来る。

長く政務に携わって来たハレンツァとて、何度か語られぬ危機に直面した事も在るだろう。　だからか。

（セイル殿。　では、証などは・・直接王に変換しては如何か？）

（はい、その予定です。　ですが、直接王様に始末を・・願い出た方がイイと思います。　昨夜、アンソニー様も同じ事を仰ってましたし、秘密裏にやってしまって構わないかと）

（うむ。　だが、問題は持ち帰った時だな）

（どうしてですか？）

（あ、いやな。　私に持ち帰る品の目録を依頼したのは、王御付きの用人で、侯爵のヘンダーソン殿だ。　彼には、この馬車ごと全てを預けねばなるまい）

（預けるんですか？）

（うむ。　王から管理を仰せ付かったのは、彼だからな）

セイルは、王以外の誰かが間に入る事に胸騒ぎを覚えた。

一方のハレンツァも、こんな話が出て来た事で心配を募らせ始める。

（実は、セイル殿）

（えっ？　あ・・はい。　何でしょう）

（王の元に、早くも封鎖地区の奥に見回りを進言した者が居ると聞いた。　王がおいそれと名前を言わなかったのも、それなりの地位に居る誰かだと思う。　数年後には、王が王子に王位交代を言い渡すそうでな。　今や、王城の中で新たな勢力争いが始まっている。
　王子に親密な一派と、取り入ろうと動く一波の讒言が、水面下で国王と王子に向けて起こり始めて居るらしい。　何より第一王子様より、世間では剣に誉れる第二王子のリオン様が王に相応しいと・・王に進言する輩も居るとか）

（面倒なお話ですね～）

（うむ。　セイル殿の様なまだ若き者に愚痴るのも何だが、貴族の権力欲は恐ろしい。　私とて今の地位を維持するのに、情けない話だが付き合いは外せぬ。　今年の春先には、国を揺るがしかねない大事件も起こった。　波乱は避けねば・・・避けねばなるまい）

ハレンツァの言った大事件とは、ウィリアムがアハメイルで解決したダレイ殺人事件の事だ。　盗品を買い漁る商人や、爵位ある貴族の大失態に加え。　公爵の中でも、選ばれし５大公爵のある一家が刑死すると云う、前代未聞の大事に成った。　そして、近々その空いた選ばれし公爵家の穴埋めとして、新たな５大公爵が決まるらしい。　元の４家に加え、新たに１家が加わるのだとか。

（あらら。　この国にも、今は見えないゴタゴタ抱えているんですねぇ～）

（そうなのだ。　今、国は一番デリケートな時期なんじゃ。　そこ

に、アンソニー様の一件が降って湧いた。　しかも、封鎖区域にモンスターが出ると、誰かが王都で言い触らし始めたらしい。　昨夜から、封鎖区域の隣に住まう他国の大使から、心配の書状が届いたともな）

セイルは、事件に繋がりが在るように思えて。

（何かこう・・用意されてるみたいですね）

（うむ。　だから私は、その調べも王から秘密裏に仰せ付かった。　一番不可解なのは、教えられたとは云え、だ。　子供達が、封鎖区域のあんな奥まで入れた事自体が解せぬ。　見張りも立たせておいて在るのに・・・）

セイルは、益々裏が在りそうだと思う。

ハレンツァと云う人物は、国王からセイルの素性は聞いていた。だが、それにしても砕けたと云うか、柔軟な人物で。

（のう、セイル殿。　もし、所縁の品が危ないとしたら、私はどうすれば良いか。　内々に品物を抜き取り、目録を書き換える事は可能じゃ。　だが、此処までの一部始終は、一般の兵士に見られておる。　彼らに口止めをしても、別の権力から干渉が在れば、彼らとて喋らないとは言い切れんのだ。　何か妙案は・・、無いかの？）

と、セイルに聞いて来る。

セイルは、直ぐに。

（それなら、ハレンツァ様がこっそりとお渡しに成ればいいと思い

ます）

（ほほう。　して、どうやって？）

セイルは、ヒソヒソと考えを言ってみた。

（おお、成る程。　ならば、此処はこうしてみてはすんなり行かぬか？）

話を進める二人は、夜を待った。

≪激震の奥底・・・新たなる応援≫

夕方前、引き上げて来たポリア達。　その姿は、全身を汗で濡らし、泥の汚れを跳ね飛ばした飛沫の跡が鎧やマントに夥しい。　一目で相当に激しく動き回り、戦ったと見て取れた。

そんなポリア達と、門の外で待っていたイクシオ達が合流した。

ポリアへ近寄ったキーラが、開口一番に。

「ポリアさんっ、大丈夫ですかっ?!!」

キーラの声に顔を向けたポリア達一同は、腕に怪我をしているキーラや、片足を引き摺るエルキュールを見る事と成った。

（やっぱり）

墓地の中で合流して来なかったイクシオ達を、ポリア達は逆に心配していた。　案の定、イクシオ達もモンスターとの激しい戦いで、それぞれが怪我をしたのだろう。　イクシオやボンドスなどは、鎧や衣服を泥で相当に汚していて。　近付くのに合わせて、露出した肌には細かい傷跡が生々しく見えている。　アンソニーの事件で、イクシオ達は相当に無理をしていた、エルキュールやボンドスなどは、正に手負い状態で参戦したのだ。　途中で引き返しても、全くおかしく無かったハズなのだ。

ポリアは、キーラとイクシオを前にして。

「随分酷い様子ね。　やっぱり、壁沿いまでモンスターが来てたのね?」

キーラを一瞥したイクシオは、ほろ苦い笑顔で。

「あぁ。　それに、俺達だけならまだしもな。　足手纏いの怪我人とか抱えてちゃ～、合流は厳しいゼ。　途中で、聖騎士様率いる一団が来てくれたが、アンデットモンスター以外のモンスターが、何体も出てきてよ。　俺達と協力して、やっと全部排除した。　向こうにも怪我人出たみたいだ」

ポリアは、険しい眉間のままに、今出て来たイデオローザの隊を見

返し。

「こっちもよ。　アンデットモンスターに対しては、優秀でも。普通のモンスターと、私達みたく常時戦って無い彼らでは、通常モンスターの排除は大変みたいね。　やっぱり、経験が無いのが理由ね」

そこに、マルヴェリータも来て。

「イクシオ、それにキーラ」

二人が、絶世の美女を見る。　顔に疲れが見えるマルヴェリータは、何時もよりやや目つきがキツく。

「奥まで行ったら、溜池並みのヘイトスポットが出来上がってたわ。倒したモンスターの中には、生まれ立ての“カーズボルベリン”まで居た・・」

そのモンスターの名前に、イクシオはギョっとした。

「何だってっ?!!」

その声に、間近の木陰に蹲っていたエルキュールまでもが顔を上げる。

キーラは、サッと引いた血の気に震えを催しながら。

「長く存在して力を付ければ、相手を一撃で呪い殺す“コール・デス”の暗黒魔法を使えると云われるモンスターまでが・・・。　これは由々しき事態・・」

マルヴェリータは、二人に。

「明日は、来るのを止めてもいいわよ。　アレが主で、他が手軽いモンスターならいいけど。　他に元凶が居そうなの。　だから、深手を負ってるなら、無理しないでね。　一昨日の事件でも、結構ボロボロに為ったんでしょ？　僧侶の魔法で怪我は見えないけど、体の中まで完全に治ってる訳じゃ無いから」

イクシオは、直ぐに返事が出来ずに黙った。“カーズボルベリン”とは、全身の骨に腐った赤い血肉がこびり付いた骸骨モンスターだ。　だが、片言だが言語を話せ、暗黒魔法の一部を扱う中級モンスターの強者。　暗黒の力が染み渡った身体の骨は、非常に硬く。　例え武器が神聖な力を宿した武器で在ったとしても、その暗黒の力を断ち切る技量を持ち合わせなければ、太刀打ちは難しいのである。

「解った。　仲間の状態にも因るが、無理の無い救護専門に動く」

疲れが滲んだ顔のポリアは、泥を擦った跡をそのままに微笑み。

「無理はしないでね。　イクシオ達のゾンビなんて、私は斬りたくないわ」

イクシオも、このジョークには笑って。

「お互い様だぜ」

キーラは、まだマガルやカミーラが出てきていない事が心配だ。

「所で、セイルさん達は、確か・・夜中に出て来るんですよね？まだ、マガルさんのチームと、カミーラさんの一行が戻って無い様ですが・・」

ポリアは、出て来たイデオローザを見て。

「夜中にモンスターの拡散を防ぐ為に、森の木々を支点に結界を張ったわ。　北の壁沿いに討ち洩らしが無ければ、セイル君達に危険は少ないハズだけどね」

イクシオは、セイル達よりもマガルやカミーラが心配だ。

「ま、あのセイル達は、早々に死ぬ戦力じゃないが・・。　マガル達は、チョット危ないな。　マガルのチームは、古株のマガルに頼り切ったチームだし。　カミーラ達は、今だ魔法使いを欠いた肉弾戦のみの戦力。　まともにモンスターと連戦されたら、非常に危険だ。　早く出て来りゃいいものを・・」

もう、辺りに夕闇が更ける。　極夜の続く地で、少しでも雲が出る夕方は、星空が見える夜の入りと似たものだ。　少し待って、ポリア達も、イクシオ達も、見張り立つ騎士と兵士に、後から出て来るチームの事を頼み。　疲労困憊の身体を宿に戻した。

その頃。

セイル達を待つマガルのチームとカミーラ達の一団は、雑魚モンスターの襲撃を2度退けていた。

マガルもカミーラも、出来るならセイル達が出て来るのを待って護衛して戻りたかった。　だが、朝から墓地の中に入って、寒い中で

緊張しっ放しのマガルのチームの面々は、もう誰もが顔色が悪く。
戦いでモンスターには幾分慣れたが、これ以上の長居は出来ない状態に陥ってしまった。

「マガル。　モンスターの出もチョボチョボだし、対して強いのも居ない。　コレなら、セイル達は安全だ。　一度引き上げよう。他の討伐状況も気に成る」

カミーラは、唇を青くさせて震えているマガルの仲間を視野に入れながら、マガルに進言した。

「ああ、仕方無いな」

マガルも同意。　セイル達が焚き火に当たって暖を取っている頃に、墓地の外を目指した。

夜。　マガルとカミーラが斡旋所に戻ると。

「戻ったか」

と、声が。

「ん？」

カミーラが直に顔を向けるのは、その声が耳に慣れ親しんだ声だからだ。　見れば、イクシオの座るテーブルの所に、モルカが座っているではないか。

カミーラは、仲間と見合ってからテーブルに近付く。

「モルカっ、もう大丈夫なのっ?!」

カミーラの顔が、サッと女の色を見せる。

モルカは、カミーラを含めた仲間を見て。

「ああ、この通り。　明日は、俺も墓地に行くよ」

ダッカが、モルカの様を見ながら。

「もう大丈夫なのか?」

ジャガンも心配そうな顔で。

「あの深い傷が、もう癒えたのか?」

モルカは、ニヒルな笑みを見せ。

「あぁ。　仲間が金をたんまり置いていったからな。　色気の多い僧侶様が、全力尽くしてくれた御蔭よ。　横に成ってれば女性は見放題だし、メシは美味いし、治りたく無いのに早く完治しちまった訳さ」

軽愚痴が出るのがモルカの口癖。　どうやら、随分と寺院も手を尽くしてくれた様だと思う。

マガルは、仲間に自由を言って解散した後に、イクシオのテーブルに来た。

「イクシオ殿、討伐の状況はどうだ?」

エルキュールやボンドス・セレイド・キーラを先に休ませたイクシオは、エルザと共に晩酌をしていたらしい。　二人が語る内容は、実に厳しい状況だった。

今回のモンスター討伐作戦の公募依頼を請けたチームは、総勢９０を超える。　参加した冒険者は、実に４００人近くだ。　中には、この王都の住人で。　モンスターの脅威を排除しようと、態々助太刀として入った元冒険者も居たほどだ。

だが。　今日一日で、その参加した中から出た怪我人が、優に１００人を超えたらしい。　寺院に担ぎ込まれた者だけで、５０名以上。

当然、仕事の棄権を訴えるチームも出てきて、危険手当と討伐参加費用の一部を受け取って仕事を終えたチームは、４０チーム以上と云うのだ。

マガルやカミーラ達が此処まで聞いただけで。　明日に成れば、更に棄権するチームは増えると予想出来る。　参加チームの中でも、実力最高のチームはポリア達なだけに、その負担は益々増すだろうと思われた。

マガルは、もう寝たと聞くポリア達が疲労していると読み。

「そうか。　明日は、俺一人でもポリア殿のチームに加わるかな。出来る限り、今回の討伐には参加したい」

イクシオは、薄い傷跡生々しい頬を触れていながら。

「だが、朗報も在る」

カミーラは、鋭く。

「何だ？」

エルザは、グイっと杯を飲み干してから。

「今日、この王都に来たチームで、実力の在るチームが2チーム討伐作戦に加わったわ。　1チームは、“コスモラファイア”（たゆたう炎）ってチームで、バランスの取れたいいチームよ」

マガルは、聞いた事の無いチームなだけに。

「ふむ、知らないチームだな。　して、もう一つのチームとは？」

「“グランディス・レイヴン”」

マガルもカミーラも、そのチーム名に驚きを隠せなかった。　マガルは、ガラガラの斡旋所の中を見回してから。

「あの大剣士サーウェルス殿の率いる、グランディスか？」

頬の瘡蓋を弄るイクシオは、ニヤリとして。

「おうよ。　昼頃に来てな。　命の恩人である俺等やポリア達が参加してるって聞いて、問答無用で参加決定したと。　明日は、ポリア達と合流して、危険な奥に踏み込むだろうな」

マガルもカミーラも。　もう世界に飛び出して、数々の冒険をしている有名チームの参戦には、驚きだ。　明日の作戦に、これで人員的な支障が出る事は薄らいだと思える。

マガルは、安心した顔に為り。

「では、私はこれで失礼する」

と、何故かカウンターに向かった。

カミーラ達は、モルカの周りに椅子を持って来て、出前で運んで貰える軽食を頼む事にするのだった。

≪心配の種≫

マガルは、カウンターの内側に立つ主の手代に話をして、奥の広間に入った。　この広間では、昨日にセイルが、主へ王様から請けた仕事の話を継げた場所であり。　また、今は、クリームスープのいい匂いが漂い。　斡旋所を運営する者達の休憩所でも在った。

「お、マガル。　戻ったかよ」

斡旋所の老いた主が、アツアツのスープをパンと共に食べている最中だった。

「ああ、今戻った所だ。　それより、主よ」

「ん？」

「今回の王様の依頼とやら、もう危ない所に踏み込んでいるかも知れんぞ」

マガルのこの言葉に、主は救い上げたスプーンを止める。

「・・・、どうゆう事だ？」

マガルは、主の座るテーブルの前まで来ると、周りを一度見てから声のトーンを落とし。

「これは、セイル殿にだけ言うたが。　我々が脱出した後。　今日の作戦が始めるまでに、どうやら何者かが侵入した形跡が在る」

主は、目をギラリと光らせ。

「何だと？」

マガルは、今日の早朝に他の冒険者と共々墓地内に侵入し。　一直線に、警戒しながらアンソニーの住まいが在る門へと直進した。だが、この時マガルは、半分凍った人の死体を見つけている。　冒険者の者と云うよりは、無頼の冒険者崩れと云った人相の悪い男達2名。　それから、黒いローブを着ているが、かなり身形の良い初老の男性で、ローブの下には礼服を着ていた。

主は、直ぐに理解し。

「その様子からするに・・・。　その者達が侵入したのは、お前さ

ん達が子供達を連れて脱出してきた後。　半凍りって事は・・昨日の昼か夜だな」

「うむ。　しかも、一人二人では無い。　他にも、槍を持った兵士らしき遺体も在った」

「っ？！！！」

主は唖然として、ナプキンを首から引き抜く。

「まさか・・・、もうアンソニー様の屋敷に・・か？」

マガルは、主に見られて、重く頷いた。

「恐らく。　更にセイル殿が、昨日から薄々とだが、何者かの尾行の気配を感じたと。　今夜持ち出す積荷、もう危ないのではないか？　討伐作戦が開始されるまで、あの墓地の入り口は、兵士や騎士に依って厳重な警戒がされて当然。　東の侵入防止壁はかなり高く、大使館が犇く要所通路だから兵士の監視も在る筈。　それなのに中に侵入出来るとするなら、何ぞやかの権力が働いていると見るのが・・確かだと思う」

「うぬ。　・・・」

主は、事がそうであるなら、もうポリアに力添えを頼むしか無いと思える。

（セイル・・無事で帰って来い。　権力が絡んだら、ワシの力では何とも難しい）

マガルの顔も険しい。

彼が見つけた死体は、どれもモンスターに食い荒らされた物で。
まともな遺体は、何一つ無かった。　兵士らしき者の遺体などは、鎧も食い千切られ、槍を掴む手や具足を履き残す足だけ。　転がった正式支給品である鉄のハットは、へしゃげて紋章が確認出来ない状態だ。　無頼の二人も、首や上半身の一部を残すのみ。　一番まともなのは、腕を食い千切られて失血死したと思われる、身形の良いローブの男。　５０代と思われ、金髪の髪を油で後ろに流し。貴族や執事が好んで着ける様な、片目用のリーディンググラスを着用していた。

マガルと主の心配・・。　それはセイルにとって、もはや決定事項と同じ思いだった。

・・・。　その頃。

「う〜、さぶっ」

また流れて来た雪雲で、曇り渡る暗黒の夜空。　軽く上を見上げたユリアは、次に近くでうつらうつらと寝ている兵士達に、細めた目を向けて。

（良ぉ〜っくこんな状態で、そんな簡単に寝れるわね）

ユリアの肩には、闇の精霊のシェイドと闇玉が座って兵士を見ていた。　様子は、ユリアと似たり寄ったりの目つき。

さて、小用を足したクラークがユリアの脇に戻り。　屋敷内の見回りから戻ったアンソニーも、ユリアの元に戻った。

ハレンツァと細かい話し込みをしたセイルは、その仲間が集まり。
そして兵士の注意が削がれている今を、チャンスと見て。

（あの、ちょ～っといいですか～）

背後から仲間3人に声を掛けて、こっそりと馬車の裏側に移動する。
一方で、ハレンツァが代わって、兵士達の前に戻った。

影に隠れたセイルへ、ユリアは詰まらなそうな顔で。

「なぁ～にしてんのよ」

クラークは、平静のままに。

「セイル殿、どうしましたか？」

「はい。　兵士の皆さんに聞かれると不味いので、此処で。　実は、マガルさんが早朝に、不審な遺体を発見したそうです」

凡その説明は、マガルと同じ。　その話を聞くクラークやアンソニーも、マガルと斡旋所の主が話した事と同じ所に至る。

セイルは、更に。

「昨日の夜から、今朝に掛けて尾行らしき気配が在りました。　下手をすると、荷物の持ち運び途中で、誰かに闇討ちされるかも知れません」

アンソニーは、積荷の入った馬車を見て難しげに眉を顰め。

「全く、王家と離別する時まで厄介事とは・・・情けない。　権力に縋る馬鹿共の所為で、何処までも迷惑が掛かる」

セイルは、其処でハレンツァとの計画を打ち明けた。　ハレンツァは、もう王子の証と軍を動かせる紋章などを引き抜いた。　ハレンツァ自身が王に直に謁見して、引き抜いた物を渡す手筈にしてある。　問題は、それを自分達が知らん顔でこれから先も馬車を護衛して、アハメイルまで送り届ける事。

ユリアは、ニヤニヤして。

「フフフ・・・面白そう～じゃん」

闇玉も、ニヤニヤして。

「秘密サイコー、嘘つきバンザイ」

シェイドは、闇玉に苦笑い。

「まだまだ子供ねぇ～」

一方のクラークは、陰謀めいた気配に顔を厳しくする。

「私は、他国ながら貴族の家に生まれはした。　だが、こうゆう権力闘争の類は、いまだに大嫌いじゃ。　全く、誰が王に成ろうと、犠牲を払ってやるなどとは馬鹿馬鹿しい。　襲撃なら望む所。　逆に捕まえて、その不穏な芽を摘み取ってくれる」

アンソニーは、セイルを含めた皆を見て。

「皆さん、仲間ながら迷惑を掛けます。　まだ、私一人では事を収めるのは難しい様だ。　どうか、お力をお貸し願いたい」

ユリアは、無論そのつもり。

「当ったり前じゃんっ、阿呆の好き勝手なんてのが腹立つ。　阻止して潰そ」

セイルは、物騒な事を平気で言うユリアに呆れて。

「ユリアちゃん、僕達まだ１６歳だよ・・あははは・・」

アンソニーは、自分の仲間に入ったチームが心強かった。

さて。　随分と夜が更けて。

セイル達は、馬車を動かして敷地の外へと動き出した。　馬の引く荷車の屋根四隅にカンテラをぶら下げ、暗い庭を進み出す。

「ファ～・・・」

欠伸をして、涙を薄ら浮かべる若い兵士の暢気そうな事。

代わってハレンツァは、厳しい目つきを辺りに向ける。　流石は老いたとは云え、兵（つわもの）である。　鎧を着ている身体にブレは無く。　疲れる処か、気合いが顔に滲んで精悍な老練者と云った感じを受ける。

鼻息の水分が、髭を白くさせていた。

馬車を前に先行して引っ張るのは、ユリアとセイル。　クラークと

アンソニーは、馬車の荷台を左右から挟んでいた。

アンソニーの屋敷の敷地から、門を開いて墓地へ。　元々、アンソニーのこの屋敷に入る道とは、今の大使達の住まう特別区へ向かう道が花道だった。　だが、アンソニーの屋敷や庭諸共封印する為に、高い壁を造り。　そして、墓地の一部として隠されたらしい。

墓地とアンソニーの屋敷を隔てる門の外に馬車を出して、その門を硬く閉じて鎖を絞めたハレンツァ。

セイルは、辺りを見て。

「良かったですね～。　マガルさん達引き上げたみたいです」

兵士達は、何故にそれが良かったのか解らない。　こんな凍えて暗い夜だ。　もっと誰か居た方がいいに決まっていた。

極夜の夜は、この静けさが永久に続くと思えるほどに静まり返る。　凍える空気、雪と氷に閉ざされる大地、冷厳なるその白銀の世界には、不純なものは不要に思える。　だが、真夜中頃に墓地を抜け出そうと木々の茂る森を抜けた場所で、セイルが突然に。

「誰ですかっ？！！」

と、大声を上げる。

そう。　いきなり、太い大樹の裏側から影が現れた。

「むっ！」

警戒して辺りを見回すクラークは、他にも影が現れて囲まれていると察知。

「取り囲まれておりますぞっ」

一方。　急に怪しい人影が現れた事で、兵士二人は驚いて悲鳴を上げるだけ。

ユリアを庇う様に立ち、此方に近付いてくる影に対峙したセイルが。

「何用ですか？」

すると、セイルと間１０歩を空けたぐらいか。　カンテラの明かりが届き難い所で、足元のみを見せた影は止まり。

「用件は簡単だ。　馬車の荷物を渡して貰おう」

その声は、口元に布を宛がっている様な篭った男の声だ。

ユリアは、ムカっとした顔をそのままに。

「な～んで大切な物を、アンタ等にあげなくちゃいけないのよっ！　そっちこそ、顔も見せられない変態なら、回れー後ろして病院行ってよっ」

歯切れのいい罵声に、アンソニーは柔らかく笑った。

金属の具足を履いた何者かは、

「大人しく渡さねば、力ずくだぞ」

と、脅しめいた言い草をする。

怯えてその場に蹲る兵士達を他所に。　ハレンツァは、馬車後方から周りを取り囲んだ曲者を牽制しつつも。

「フン、この“王国の盾”と謳われた私を、卑怯者如きが倒せるか？　力ずくとは面白い、掛かって来いっ」

と、剣を引き抜く。

クラークも、背中の槍を二本構えて、

「“双槍のクラーク”、仁義により宝は護るっ」

と、マントを閃かせて一歩前に踏み込んだ。

アンソニーは、皮の手袋に金属の板を仕込み、拳の部分に丸みの有る小さい金属の瘤を持つ武具を嵌め。

「久しぶりの戦いだ。　冒険手始め、準備体操させて貰おうかな」

と、キザに構えを決める。

剣を構えるセイルに、ユリアは。

「サッサとやっちゃうわよっ、闇の精霊よっ」

と、杖を構えた。

これに驚いたのは、曲者達だ。

「おいっ、いきなりをそっちがかっ！！」

怒鳴ったのは、足元のみを見せる曲者。

セイルは、“お約束”を無視して先制を奪ったのが笑えながらも。

「問答無用ですん」

と、足元だけ見える相手に飛び込んだ。

「やれいっ！！」

焦って武器を構える曲者が吼えた。　一斉に、残りの曲者達が蠢き出す。

相手は、１５人程度。　セイルと足元だけ見せた曲者が打ち合った時、ユリアは早くも魔法を唱える。

「闇の力よっ、我が敵の目を奪えっ！！！　ブラインド・ダークネスっ！！！」

杖を振り上げると、ユリアの頭上にシェイドと闇玉が二匹並んで応呼して、闇のガスを作り出す。

「ソレっ！！」

「ソ～レ～っ」

闇の精霊二体は、セイルに飛び掛ろうと迫った曲者や。　横からユリアに迫ろうとした曲者に、ガスを千切る様に切り離して投げる。

「わっ」

顔にガスを受けた曲者は、一気に視界が無くなった事で驚き。　立ち止まる。

ユリアは、其処で驚いている兵士に。

「ホラっ、ササッと倒してっ」

だが、怖気づいた兵士は、腰を抜かしてしまって這う這うの始末。

「もうっ、訓練してないのっ?!!」

ユリアは、兵士の情けなさに呆れを通り越して憤る。

馬車の後ろで、3人を相手に互角のハレンツァ。　ボロ布で覆面をし、ショートソードやダガーを手にしている曲者共。　鎧は動きやすい皮製とか、厚手の布服を着るならず者の様な風体。　暗殺者や悪事を引き受けるのを生業にしているプロとは、違っていた。

だが、それは只一人を除いて、だ。

「どりゃあああっ」

クラークの掛け声が上がり。

「うわあっ」

「ぐぶっ」

クラークのなぎ払いを受けて、二人の曲者が払い飛ばされた。　一人は飛ばされて木にぶつかり、もう一人は地面を転がって闇の中へ戻された。

だが。　セイルと戦う曲者だけは、セイルの太刀筋を受け切っていた。

「くっ、やるなっ」

焦った声は、曲者だ。　セイルの剣術は、斬り込む角度が的確で、その速さは天才的。　自分の間合いで余裕を持てる防ぎならいいが、差し込まれた防ぎでは、打ち返すのも払い除けるもの後手に回る。

セイルは、一応この相手が出来ると見た。　更に、剣を打ち合った睨み合いで。

「アナタですね、昨日から僕達を尾行してたのは」

覆面の布の間で炯炯と光る目の曲者を、セイルは臆せず見つめている。

曲者は、目元を憎らしげに凝らし。

「お前ぇ、襲撃を察知してたって訳か」

「解り易い所に居ましたから、あははは」

このセイルの言い草は、曲者には屈辱だ。

「お前ぇぇぇ・・・。　俺の襲撃で済ませりゃ！！　その命は在ったものをっ！　コレで、もっとヤバイ奴等が狙うぞっ？！！」

しかしセイルは、曲者を見返しながら笑った。

「っ！！！」

気を削がれた曲者と噛み合せた剣を、ゆっくりと捻ったセイル。曲者の握る細剣は、ジリジリと流される様に右へ。　二人は、更に肉薄して顔を近づける。　セイルは、声を押し殺して。

「もう、全部王へ献上します。　それでも終わらないんですか？」

「なんだとっ」

セイルの剣を跳ね上げようと力む曲者と、それをさせじと押し込むセイル。

同じ時。　曲者４人を相手にしているアンソニーは、魔想魔術の瞬間移動の魔法を、なんと格闘に組み合わせていた。　遠くに飛ぶ事は出来ないが、瞬間的に１・２歩先へは、少ない魔力で飛べる。魔想魔術でも、攻撃魔法より幻惑魔法の才に突出したアンソニーならではの戦法だ。

「フン」

パッと一人の曲者の背後に回り込み、その首筋に手刀を打ち込む。

「あっ」

激痛で気を失う曲者を見た他の曲者達は、一瞬だけでも消えるアンソニーに驚く。

「バっバケモノかっ?!」

「消えたぞっ」

その曲者共の言い草に、アンソニーは呆れ。

「徒党を組んで国の宝を奪いに来るそなた達に、この期に及んで“バケモノ”呼ばわりされるのも虚しい話だ」

「ウルセぇっ!!」

薙ぎ込まれた小剣(ショートソード)を、着けた籠手で受け止めたアンソニー。更にその小剣を掴んで、曲者を手繰り寄せては鳩尾にまた一撃を突き込む。

「う゛ごほっ!!!!」

ボンっと持ち上がった曲者の身体は、そのまま表面の凍る地面に落ちた。

「ええ〜いっ!!」

杖を構えて、目を潰された曲者の頭に思いっきり一撃を打ち込むユリア。魔法を使っては、遣り過ぎる可能性が有るので。ユリアは、自分で殴り掛かったのだ。

形勢は、明らかに曲者共が不利で、セイルと打ち合う曲者は歯軋りをして。

「このっ！！」

剣を持つ手を片手にして、セイルに掴み掛かろうとする。

だが。　ケンカ戦法もセイルは得意。　身を後ろに反らす形で掴み掛かりを逃れながら、左足を跳ね上げて曲者の頭部に蹴りを見舞った。　その間合いは、絶妙なクロスカウンターであり。　前に踏み込んだ曲者の耳から即頭部に、セイルの蹴りが決まった。

「ぬわあっ」

反動で大きく蹴飛ばされた曲者だが、地面を転がって起きる時に短剣（ダガー）を引き抜き。

「くそっ」

と、ユリアに向けて投げ付けた。

これにはセイルもハッとして、空中を走るダガーの軌道に身体を向けて、剣で打ち落とすのが精々。　逃げ去る為に飛び退いた曲者の後を追うには、時が足らなかった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

この話の内容で、最初に名前の間違いなどを訂正しながら、更新と成りますので矛盾が出る所は追々訂正します＾＾‥　G．Wですね＾＾。　作者は作成作業オンリーですが、皆様は何処かお出かけに成りますでしょうか？　そんな皆様の暇潰しになれば幸いです＾＾。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪アンソニーの身体と雲行き怪しい依頼≫

予測した襲撃をかわして、セイル達は墓地の外に出た。　馬車の操作などは、セイルでもクラークでも出来る。　逃げ出した曲者達の数人は捨て置き。　手傷を負わせて動けなくした曲者6名を捕らえたハレンツァは、門の外で見張りをしていた騎士達を叱責していた。

「この大馬鹿者ッ!!!　この怪しい曲者共は、一体何だっ?!!!　曲者と冒険者の区別も付かぬかっ、馬鹿者めっ!!　そんな事で、平和の象徴たるこの宮殿をっ、我が王を護れるのかっ?!!!!」

ハレンツァに怒られ、土下座に近い様子で謝る騎士達と兵士。

セイル達が門の外に出た時、騎士と兵士達は眠り込んでいた。　飲み水か差し入れに、薬が仕込まれていたのかもしれない。　だが、コレは由々しき事態だった。

ハレンツァは、曲者共を騎士に引渡して投獄を命じ。　後で、自分が直々に取り調べると云い付けた。

馬車と共にその光景を見ていたアンソニーは、セイルに頭を下げる。

「危険に巻き込んだ、済まない」

だが、セイルは気にした様子は無く。

「ま～、何事も無く良かったです～」

しかし、ユリアは、アンソニーの手を見て。

「あっ、アンソニー様っ！　手っ」

「ん？」

クラークも、ユリアの声にアンソニーの手を見ると。　なんと、干からびて骨に皮が着きそうに為っている。

「これは・・、一体どうした事だ」

驚いたのは、アンソニーも同じで。　干からびた自身の手を見て、目を凝らして言った。

其処へ。　闇の精霊のシェイドが、ユリアの肩からアンソニーに言う。

「王子様。　貴方は、まだ完全なモンスターでもない。　でも、まだ少しだけ人でも在るの。　魔想魔術は、魔力と想像と云う人の生きてるエネルギーの領域を力にしてる。　暗黒魔法や死霊魔法は、魔力と闇や魔の力を母体にするけど。　魔想魔術は、根本的に違う

わ。　高等な魔法を、強い魔力と熟練した経験で省エネの使い方してもね。　生と死の狭間の肉体には、歪みが出てしまう。　強い魔想魔術を使えば、生きている貴方を生み出す生命的な気力が失われて、モンスターの姿に突き進んでしまうのよ。　使い処は、自分でよ～く考えてね」

アンソニーは、シェイドを見てからまた干からびた手を見る。

「なるほど、そうゆう事ですか・・」

シェイドは、ユリアの肩で足を組み替えて。

「貴方が人を食い殺すまで出来れば、幾らでも姿を留める事は出来る。　でも、性的交わりのエネルギーでは、存続に必要な微量のエネルギーしか吸わないの。　命を壊す時、強いエネルギーが爆発的に弾け飛んで命と意思は失われる。　その全てを吸収して、糧にして来たのがモンスター。　貴方は、そのモンスターのして来た事をしないで居る。　客観的に云って、性交搾取でのエナジードレインって、エネルギーを搾取する効率は一番悪い方法なのよ。　だからヴァンパイアは血を吸い、悪魔は死ぬまでエナジーを吸う」

ユリアには親しげで可愛い闇の精霊だが、アンソニーを見る目は、悪戯な眼差しの小悪魔的な様子。　明らかに、何処か楽しんでいる様な雰囲気が在る。

ユリアは、困った顔でシェイドを見て。

「シェイドちゃん、そんな悪戯っぽく言うの酷い」

するとシェイドは、ユリアにケタケタ笑う。

「だぁ～ってぇ～、こんな矛盾したモンスター見るの、初めてで面白～い。　何処まで人で居られるか、すご～く見物だも～ん」

闇の精霊は、何事でも他人事は椿事にする時が在る。　ユリアには、そこは困りの種だった。

だが、アンソニーは、自分の手を見ながら。

「これも一つの枷か。　私の罪の表れですね。　どこまでも人の・・、いや。　人で居られる様にしないと」

と、淡々と言う。

セイルは、クラークと見合って、アンソニーの干からびた手をまた見た。　真のノーライフ・ロードとは、完全に干からびた骨と皮だけのミイラだと云われる。　つまり、アンソニーの身体には、その原型が潜んでいるのだ。　二人は、その姿が見る時が来ない事を祈るのみだった。

さて。

ハレンツァの用事が終わり。　一同は、馬車を引き連れて王城まで護衛をした。　墓地は、王城の裏庭と程近い。　裏庭に入る為に、城を囲う裏の防御城砦壁を迂回し、裏門より敷地の中に入った。

冷え込みがキツく、寒さに兵士達が震えるが。　セイル達とハレンツァは、震えてなど居られない。　明日、明後日と成すべき事が山積し、緊張と遣り切ろうと思う意思が心身を高揚させたのかも知れない。

“襲撃”

この一つの事件で、行き先に暗雲が掛かっている事を薄らと感じたのだ。

王城の裏庭に在る厩舎へ行き、其処から城の内部と繋がる倉庫に入った。　普通の木戸の3倍は在りそうな立派な木戸を開いて入った場所は、大きな石を積み上げて作られた広い倉庫。　もう、迎えのヘンダーソン卿と騎士数人が居た。

（この人が、ヘンダーソン卿ですな）

セイルに耳打ちしたクラーク。

頷いたセイルは、長身で色白ながら強い視線を崩さない紳士を見上げた。　歳は４０から５０前後と云った感じだが、剣の心得など感じられないのに、何処か強権的圧力を纏っている強さが見える。

「ヘンダーソン卿、王から仰せ付かった荷物を届けます。　保管と引渡し、お願い致しますぞ」

ハレンツァは、黒いピアリッジコートを羽織るヘンダーソンに、密かに修正をした積荷一覧の目録を渡した。　馬車の荷台が横開きでき、積荷が示される。

「ハレンツァ殿、お寒い中ご苦労です。　何でも、襲撃が在ったと今聞きましたが・・」

目録を受け取ったヘンダーソンは、吐く息白くしながら襲撃の事を

口にする。　だが、視線は積荷にのみ向いていて、大して大事でも無さげに淡々と。

ハレンツァは、大いに頷き。

「おお、もうお耳に。　一足先に此方に参った騎士に、捕らえた曲者を連れさせたと思うが、その通り。　しかも、周到な計画性が見られる。　誰ぞやかの・・・、策謀かも知れませんの」

ヘンダーソン卿から下がった後ろには、あの太った貴族が控えている。　この寒い中で汗を休まず拭いていて、目つきが少し遊んで気が落ち着かない様子だった。

ヘンダーソン卿は、目録を見ながら。

「“策謀”とは、穏やかでは在りませんな」

その冷めた言い回しに、ユリアはセイルに顔を寄せて。

（な～んか落ち着き過ぎてるね、あのヘンダーソンって人。　名前通りに“ヘンな人”なんじゃないの？）

セイルは、苦笑いをするだけ。

クラークは、アンソニーに。

（昔からの旧家ですか？）

（えぇ。　我が兄の頃には、もう子爵から伯爵に格上げを受けた名家ですね。　政治に明るく、文官一家でした）

（なるほどに・・）

皆が報告の成り行きを見守る中で。　ハレンツァは、ヘンダーソンへ。

「封鎖区域を警備する騎士と兵士が、今夜に限って全員眠りこけると云うのも、警備上は異常ですな。　もし、何かそうなる要因が見つかれば、事は計画的と云わざる得ない。　彼らが口にした食事と水は、しかと保存を命じました。　これから、それを調べるつもりです」

すると、ヘンダーソン卿は目録より面を上げる。

「ハレンツァ殿、勝手な事をされては困りますな。　その様な国の内情にも関る事なら、王に許可を取らないと」

すると、ハレンツァは柔らかく笑い。

「ふはははは、これは可笑しな」

「“可笑しな”？　ハレンツァ殿、私を愚弄する気か？」

「いやいや、当たり前の事をとやかく言うので、此方もそう言ったまで。　警備に当たる兵士や騎士に、作為的な不審な落ち度が有るなら。　それを正しく調べるのは、騎士団総ご意見番としての私の責務。　王室事務官ヘンダーソン殿に、とやかく言われる筋合いがまず無い。　それに、ヘンダーソン殿は、まだ王よりお聞きに成られていないらしい」

ヘンダーソン卿は、ギラリとした目つきで。

「何が、ですかな？」

「私は、王から別の言い付けを仰せ付かった。　その領域には、この事態は含まれる。　御主は、王に代わって、明後日まで宝物を管理する事を言われたまで。　宝物の事以外に、余計な口出しをされるな。　それとも、調べられては疚しい所でも？」

「・・・」

ヘンダーソン卿は、ハレンツァに言われて言葉を見失った。

ハレンツァの話では、このヘンダーソンと云う男は、王妃の家系に近い。　王妃の身の回りを世話する者には、ヘンダーソン一族の者が多いとか。　クラン王が身の回りの用事を言い付けるお傍用人として、王室事務官と云う役目を与えてから、何かと政治以外でも権力を見せ付ける様になったとか。

ハレンツァは、馬車から馬を放して、厩舎に連れて行く世話係を一瞥してから。

「襲撃など、普通なら秘密裏に行われた計画には、似合わない事態です。　このハレンツァは、老いたとは言え“王国の盾”と呼ばれた精神は、失って居りませんぞ。　何処から秘密が漏れ、今夜の襲撃に成ったか・・。　私は、調べる必要は在ると考えますな」

すると、ヘンダーソンは目録を前に出し。

「ハレンツァ殿。　では、一つ窺いたい」

「む、何事ですかな？」

「この目録には、大切な物が記載されていないと思うが」

この言葉に、セイルとアンソニーとハレンツァは、まさに“来たっ”と思う。

ハレンツァは、平静の好々爺の顔に戻り。　惚けた言い回しで、

「ほう、大切な物・・。　はて、何でしょうかな」

「うむ。　王子のお屋敷に行ったと在らば、彼の身を証す何かが含まれる筈。　此処には、美術品や衣服のみだ。　御貴殿は、何か隠して居るのではないか？」

これに、ハレンツァは・・・。

「うふふ・・あはははは」

と、大きく笑ったのである。

ヘンダーソン卿を始め。　彼の後ろに居る騎士や、王の使いとして来たの太った男性貴族は、急な事で驚きを見せる。

「何が可笑しいっ、ハレンツァ殿っ！」

バカにされたと思ったのか、ヘンダーソンは、強い口調を始めて出す。　ハレンツァを見据える目は、鋭い睨み目だ。

逆に、目に涙を浮かべる程に笑ったハレンツァは、大きく被り。

「いやいや、ヘンダーソン殿とも在ろうお方が、余りにも間抜けな事を言うので思わず。　これは、失礼した」

「なぬっ、私が間抜けですとっ?!!　説明次第では、只では許しませんぞっ」

ユリアは、こんな夜中で修羅場が待っていようと思わない。　精霊達と目をパチパチさせて、固唾を呑む。

ハレンツァは、ヘンダーソン卿に手を向け。　“落ち着け”、とばかりに振り。

「まぁまぁ、ヘンダーソン殿、良く考えても見られよ。　王子の印字や権限を証す物などを、態々今までほったらかす王家が在りますか?　アンソニー様の屋敷が封じられたのは、王子が死んだ後。王家とて、その後に葬儀を挙げた事は、記録にも残りますぞ。　ちゃんと回収されたのですよ、ですから目録にも無い。　極自然な事では在りませんか。　それとも、そう云った国家に危うい品が在ると、王から云われましたか?」

ヘンダーソンと云う男は、ハレンツァに云われて、グッと何かを飲み込む顔つきに変わった。　クラークやユリアにも、その顔は憤りを滲ませるものと解る。　セイルやアンソニーにとっては、疑惑を持たざる得ない顔だった。

だが、ハレンツァは、ただただ微笑み。

「では、ヘンダーソン殿。　私は、老体に鞭打って取り調べを致し

ますわい」

頃合いを見計らったセイルは、少し離れた所から。

「では、我々もこれで失礼致します」

と、一礼をする。

クラークやアンソニーに釣られて、ユリアが一礼する時。

「待て」

ヘンダーソンが、棘の有る声を出す。

セイルは、何時ものニコニコ顔で。

「はい、なんでしょ～か」

すると、ヘンダーソンは険を露にした目つきで。

「キサマに用は無いっ！！！　そこもとだっ」

と、アンソニーを指差す。

苦笑いのセイルと、その言い方に気に食わないユリアが見合う。

クラークも、セイルに高圧的なヘンダーソンを嫌う顔で横を向いた。

アンソニーは、あえて貴族の嗜みを知る素振りで優雅に。

「私め、ですか？」

と、一礼を示す。

隠す必要が有るとは云え、アンソニーにこのような挨拶をさせる事に、ハレンツァは拳を握り締めた。　だが、顔や口には出さないが。

ヘンダーソンは、肩を唸らせてセイル達の方に一歩踏み出し。

「そうだっ！！　先日、何故に王へ目通りしたっ！！　何故に、封鎖区域の奥の屋敷を知っていたっ！！！」

と、怒鳴った。

アンソニーは、もはや王家や政治に興味も未練も無い。　穏やかに微笑み、

「ああ、その事でしたか。　私は、異国の貴族でして、クラン王とはパーティーなどで昵懇の間です。　偶々この王都に来た時に、この彼らと子供達の捜索に加わりまして。　墓地の奥で、王子様の屋敷を見て来ました。　魔法の心得も在り、宝物庫を見つけましてね。　このままでは・・と思い。　密かに回収を進言するため、クラン王に伺ったのですよ。　随分と古い美術品が在りましたから、文化的にも共有出来る財産と思いまして」

と。　そして、そのかわす言い訳に同調する様に、ハレンツァも。

「お、そう云えば。　ヘンダーソン殿、王はまだ御起床か？　出来るなら、報告もしたいのだが」

口裏を合わせられている様な運びに、ヘンダーソンは口元を震わせ。

「・・・王は、数日御用事にて御不在だっ。　公爵家、サージネル卿の先代が、御危篤で在らせられる為に・・・。　従兄弟故に、看病をしに行くと云う事だっ！」

ハレンツァは、５大公爵家の一家の事なだけに目を伏せ。

「そうか、あのサージネル卿のホファン様が・・・。　なら、出来る雑用は、我々で速やかに片付けねばの。　それからヘンダーソン殿、知らぬ様なので云って置くが。　このセイル殿達は、王の大切なご友人達だ。　無碍な言い掛かりは、控えた方が良いぞ」

「なぬっ、高々一度目通ったぐらいで“ご友人”だとっ？！！」

ヘンダーソンの高圧的な言い草に、困ったちゃんを見た気のするセイル達だが。　少し怒った顔のハレンツァは、セイル達の前に立ち。

「ヘンダーソン殿、いい加減に口も態度も慎まれよ。　此方のセイル殿は、隣国マーケット・ハーナスの大商人オートネイル家のご一族だ。　それにあちらのクラーク殿は、水の国ウォッシュレールの公爵家・エステムルスの御次男で“槍のクラーク”と異名を取る武人ですぞ。　下手な失礼は、御主の為に成らんと思うがの」

事実を知り、存在を理解した瞬間のヘンダーソンが見せたギョッとした顔。　見ていたセイル達には、そうそうに忘れられる物では無かった。　もし、アンソニーの事まで言ったなら、ヘンダーソンは気を失ったかもしれない。　セイルの祖父のエルオレウは、クランベルナード王の親友で、剣の師として敬愛している人物。　クラークの一族は、このフラストマド大王国に、過去には后を出した事もある名家。　セイルとクラークの事だけでも、ヘンダーソンの常識

が一瞬で破壊される程の衝撃だった。

ハレンツァに見送られ、馬車で宿まで送って貰えた一行。　馬車の中では、ヘンダーソンの顔が笑いのネタだった。

宿に戻った一行だが・・。　あの昨夜の女性僧侶が、アンソニーを待って起きていた。

「アンソニー様・・ご無事で」

待ちに待ち焦がれた恋人同士が、長き間を挟んで再会を果たす場面が繰り広げられて。　ユリアは、横を向いて誰かに。

「あ～あ～、今夜もかいっ」

だが、見詰め合う二人の世界は、別世界。

「遅くまで待って頂けましたか。　こんなに麗しい御手を、冷たくされて・・」

と、女性僧侶の手を摩るアンソニー。

女性僧侶も、骨と皮だけのアンソニーの手を摩り。

「まぁっ！　アンソニー様・・、御手が」

「はい。　今日、仕事の為にですが、まだ慣れないままに魔法を使いましてね」

「あぁ、おいたわしや。　お仲間が未熟な為に、アンソニー様がご

苦労を・・・」

悲しむ女性僧侶に、ユリアは目くじらを立てて。

「ンだとぉっ、このエロ似非（エセ）僧侶がああああっ」

セイルは、必死にクラークと一緒にユリアを止める。

「ユっユリアちゃんっ、もう真夜中だって～」

「そうですぞっ、ユリア殿。　此処は落ち着いて・・」

アンソニーと女性僧侶は、手と手を取り合ってまた上に消えて行く。

釈然としないユリアは、斡旋所西側の通りを挟んだ向かいの飲食店に、セイルとクラークの首根っこをフン捕まえて入った。　此処は、オークションに来た客などを相手にするので、朝まで開けている店だった。

［ま・・・、愚痴巻き散らかしたんでしょうね。　ウチのユリア番長は］（作者、苦笑）

≪封鎖された場所に舞い戻る冒険者達≫

赤い鎧を着た、端正な顔立ちの剣士が居る。　ゲイラーと似た大型の大剣を構えて、“屍竜”（ロトンドラゴン）と呼ばれるゾンビ姿の小型ドラゴンへと斬りかかった。　彼の背後では、大人びた麗しい女性僧侶が居て、神聖魔法を唱えている。

次の日の早朝に、また作戦は再開されていた。

世界を股に駆ける冒険者チーム“グランディス・レイヴン”の戦いぶりは、獅子奮迅とも言うべきだった。　同じく行動を共にするポリア達を庇い、戦っている位の勢いが在ったのだ。

「ポリアっ、霧に紛れたゴースト共は任せるっ！！　肉弾戦で相手に出来るのは、我々に任せろっ！！！」

まだ暗く霧の立ち込める中、剣士サーウェルスの声が飛ぶ。

墓地のあちらこちらに出来上がった、強く大きなヘイトスポット。　大小の溜池が広がる池群の様に、封鎖区域の北西側に広がっている。　そのヘイトスポットに近付くと、集まっていたゴーストやモンスターが襲って来るのだ。

「解ったわっ。　ヘルダーとイルガを応援に残すから、一気に蹴散らしてっ！！　オリビアとミュウは、こっちで借りるわよっ！！」

霧に隔たれた中。　サーウェルスは、肉食モンスターの大型カタツムリを斬り倒し。

「おうっ。　ヘイトスポットの浄化は任すっ。　手が足りないならっ、デルも応援に出すぞっ！！」

合流したこの二チームは、過去に何度か仕事を手伝い合う仲。　気心が知れたお互いだから、チームをこうゆう形で二分出来る。　ポリアは、魔法の掛かった剣を持つ自分とゲイラーに、マルヴェリータやシスティアナ。　そして、サーウェルスのチームの僧侶オリビアと、学者のミュウを従え。　ヘイトスポットに集まった死霊や亡霊などを祓いながら、浄化を試みる。

寺院から聖水を大量に持ち込んだイデオローザの隊と共に、墓地の更に奥へ奥へと浄化を行う討伐作戦。　怖気づく他の聖騎士や騎士の率いる隊を尻目に、ポリアとサーウェルスの組んだチームは、ドンドン霧の立ち込める森の奥へと進む。

さて。

ポリア達も驚きだったのは、ヘイトスポットが段階を経て成長すると云う事実だった。　通常のヘイトスポットは、目に見えない不気味な気配程度なのだ。　だが、暗黒の力が流れ込んで時間を経ると、黒い靄が見える形で蟠る様に成る。　その中に、常時ゴーストやモンスターが住み着く様に成って。　更に暗黒の地場が強まると、小さな溜池程度で血の池の様な、赤い光の蟠る物に変わる。

司祭の洗礼を受けたオリビアですら驚いたのは、黒々とした靄を渦の様に蟠らせて、随分と成長したヘイトスポットを見てだ。

「なんと・・。　紅き色に変わりつつあるなんてっ！」

システィアナも両手を頬に当てて驚き。

「ンまぁ～っ、ですぅ～。　これ以上成長すれば、地獄と通じて悪

魔を呼び出せる“ファンタム・ゲイト”（悪魔の門）を開く基点に出来ましゅうぅぅ」

その事実に青褪めるのは、ポリアだ。　最も平和と云われる自分の国。　しかも、王都でこんな現状を目の当たりにしようとは・・。

「誰がそんな事させるモンですかっ！！」

息巻くポリアは、黒いエネルギーの渦が木の下の暗闇の中で蠢り。
その渦の中から、次々と現れる亡霊（ゴースト）に斬りかかる。

加勢に剣を構えたゲイラーも、ワラワラと出て来る亡霊を見て。

「此処までデカく成るなんてな。　ど～考えても、なんか在っただろうがよっ」

と、マルヴェリータが照らす魔法の光の中で、間近に迫ったモンスターへと向かう。

極夜と云う環境が続くこの時期。　闇の力は活性化し、モンスターの動きを肉眼で確認するには、明かりが必要だ。　墓地に踏み込む冒険者達も、明かりを持ち込む量が増え。　下手すれば、森を焼く火災も懸念される。

墓地の中で、激戦が今日も繰り広げられた。

この日は、昼前からセイル達もモンスター討伐に加わる気でいた。

一方。　疲労で動きの鈍ったイクシオ達。　傷付いた者達を探す行動に、マガルとカミーラのチームを含んで墓地を回っている。

さて。　遅めに起きたセイル一行が、昨日に襲撃を受けた墓地に舞い戻った。　昼前で東の空が白み、朝焼けの曇り空の様な天気。

女性僧侶をベットに残したままに来たアンソニーの手は、もう干からびてはいなかった。　だが、アンソニーの顔色は優れない。　心にそうさせる靄が有るのだろう。

毎日元気なユリアは、霧も大分に晴れた墓地の中に踏み込みながら、マントの襟首を絞め直す。

「さ～て、頑張るぞ」

やや真顔のクラークは、人目も無くなった処で。

「誰も見えないので云うのだが。　昨夜の襲撃をした首謀者は、解ったかのぉ」

マントのフードを後ろに外したセイル。

「さぁ。　解ったら大変なんじゃないですか？　それこそ、お城の中で悶着起こりますね～」

と。

アンソニーは、浮かない顔のままに。

「解らなくてもいいさ。　あの重要な証などが、悪用の手を免れてくれれば、それでな」

だが。　セイルは、それには異論を問う。

「王位交代前で、王家と権力層の誰かとの遺恨を残すのは、いい事では有りませんよ。　放って於ける様な事ならいいですが、王子の証を手に入れようとするなんて、かなりの計画性有っての事でしょう。　第二王子のリオンなら、真っ直ぐの一本木だからいいですけどね～。　長男の人は、優し過ぎて流されるみたいですから。　遺恨を残して放ったらかしだと、後々が危ないですよ」

アンソニーは、セイルの言い方を聞くに。　どうやら第二王子のリオンと云う人物を、随分知っている様な素振りなので。

「セイル君は、あのリオンと云う御仁を知っているのかな？」

と、尋ねてみた。　自分の自殺を止めた男であり。　今は、この国の全軍を率いる近衛騎士団団長でもある。　剣の技量は、確かに凄い天賦の才に恵まれていると思えた。

さめざめしい森を北に向かう中。　珍しく精霊を肩に乗せていないユリアが、セイルに顔を向けてこう言った。

「お父さん同士の関係からね。　セイルとリオン王子は、かなり幼い頃からの付き合いよ。　リオン王子って、剣の師のテトロザってオジサンと、良くセイルの所に遊びに来てたわ。　王宮暮らしが好かないみたいで、剣術道場に朝から晩まで出ずっぱりだったりしてたよね」

セイルは、もう辺りの気配を感じる事で、ニコニコ顔では無く微笑み顔。

「だね。　リオンは、飛び出す性格だから、凄くやんちゃしてたましたよ。　何度か、ならずの冒険者と喧嘩したし。　一人でモンスターと戦おうとして、御付の人とか大騒ぎさせたしね。　勝手に冒険者のチームに加わって、モンスター退治して。　怪我した仲間を馬に乗せて、斡旋所に帰って来たって事も有ったです」

アンソニーは、自分の見たリオンはもっと大人びていたので。

「なるほど、随分と成長したのだな」

しかし、だ。　セイルはそれ以上は言わなかったが。　今回の一件は、穏便に済む事では無いと読んでいる。

何故なら・・・。

昨夜の夜中。　あのハレンツァに論破されたヘンダーソンが言っていた。　クランベルナード王は、親類の危篤に王城を空けていると・・。　つまり、今の王政府は、留守を預かる王子達が王の代わりで仕切っている。

ハレンツァは、王の帰還まで証を持ち隠す様な危険を冒さないだろうと思える。　最も安全な事を考えるなら、密かにリオンに証を委ねるのが当然だろう。　審議の沙汰は、有耶無耶にして。　もし証を持っているとしたら、自分達かハレンツァのいずれかと、昨夜にヘンダーソンなどに思わせたからだ。

実際。　ハレンツァは、確かにその通りにしたのだ。　曲者共を取り調べ。　セイルと戦った曲者以外は、金で雇われたゴロツキだと解ると、後の調べを騎士に任せ。　自身で何かの手配をする素振りで、休んでいるリオンの元を密かに訪れた。　そして、全ての事情

を話して、屋敷から持ち帰った重要物件を渡したのである。

リオンと云う人物は、真っ直ぐで正義感の強い男だ。　何より、王家を揺らがす様な事は毛嫌いする方で、“王に成るのは兄。　俺は、王家の盾に成る”と、ハレンツァと似た意思を持っている。　王家の証を悪用しようとする誰かが居れば、それを根絶しようと動く性格だ。

（多分、誰かが犠牲に成る）

もう昨日の一件は任せて安穏として前だけ見てるユリアの横で、セイルはそれを薄らと予期した。　だが、何が起きるかは解らない。

セイルは、何が起こっても不思議は無いと思った。

さて。

墓地の森の奥から北の塀に沿って、東に移動しようとするセイル達。

聖なる結界を張る聖騎士の一団に出会うぐらいで、モンスターに遭う事も無く。　北の壁沿いまで辿り着けた。　そこから、壁に沿って東に移動し始めると・・。　なんと北側の壁が、部分部分で崩壊していた。　湖の方角に向かう森と繋がっていたのである。

壁を越えて森に入ったユリアは、瞬時に身体へと伝わる感覚に驚いた。

「大変っ!!　この森・・魔の力で魔域に変わろうとしてる。　セイルっ、真東に凄いヘイトスポットの波動を感じるよ。　目茶苦茶デッカい・・・闇と魔の混じる蟠りが有るっ!!」

セイルやアンソニーは、ユリア以上に顔を青褪めさせる。

「セイル君っ。　この波動は、死霊か亡霊モンスターの強者の波動だ。　墓地のヘイトスポットや結界に隠れて、こっちの森の中からの波動が感じられなかったんだ」

苦い表情のセイルも。

「ホントですね。　しかし、なんて毒々しい瘴気を纏った波動だか・・」

焦るクラークは、セイルに寄り。

「セイル殿。　如何致すのだ？」

セイルは、森の前方を見渡し。

「とにかく、此処から近くを駈けずり回って、モンスターの討伐をしましょう。　ヘイトスポットの浄化は、僧侶さんが居ないと無理ですし。　我々が行った処で、ヘイトスポットが成長していたら、全く手出しが出来ません」

ユリアは、セイルに。

「んでっ？　なんでモンスターの討伐すんのよ。　聖騎士様でも呼びに行こうよっ！」

「ユリアちゃん。　多分、あの波動の中心にいるモンスターなら、即死の魔法とか楽勝だよ。　普通のモンスターに手間取る聖騎士様じゃ、死んじゃうよ」

「ならっ、ど～すんのよっ！！」

「落ち着いて。　ポリアさん達に、あの本体は任せよう。　それより、余計なモンスターを排除して、聖なる結界の領域で、あのヘイトスポットを包囲したほうが安全だよ」

クラークは、その意味が解る。

「おおっ、なるほど。　結界でヘイトスポットを囲んで、モンスターを孤立化させようと云う訳ですな」

「はい。　モンスターの絶対数が多い中で、迂闊に親玉を叩きに向かえば。　辺りから助けを呼ばれて挟み撃ちされるのは、目に見えてます。　我々は、明日にはこの王都を去らなければなりません。　最も短時間でお役に立てる事は、モンスターの絶対数を減らして、討伐作戦を推し進める事ですよ」

ユリアは、戦力として幅の狭いチーム事情を理解した。

「解ったわ。　でも、呼び出せる精霊は限られるよ」

頷くセイルは、アンソニーに。

「アンソニー様。　途中で逢った聖騎士様の一団を呼んで来て下さい。　アンソニー様が戻ったら、僕とクラークさんが、モンスターに積極的に向かいますから。　ユリアちゃんの守りを頼みます」

アンソニーは、モンスター故に対不死モンスターでは、最も不利な自分を考えてのセイルの指図だと理解している。

「解った。　ユリア殿の護りは、任せて貰おう」

その時。　ユリアは、背後の崩れた壁の向こうから、聖なる力を感じる。　神聖な力とは、精霊力云うなれば“光”と同じ性質なのだ。

「壁の向こうで、結界が張られたわ」

セイルとアンソニーが見合って頷き合った。　結界を張りながら移動する聖騎士の隊が、この間近に居る証だ。

踵を返すアンソニーを、見るセイル達。

其処でだ。　ユリアの肩に光が鈍く輝いた。

「え〝っ?!!」

俄かに驚いたのは、ユリアである。　パッと自分の右肩を見た。

「・・・」

光を感じて見たクラークは、ユリアの肩に現れた光る何かを見て言葉を失う。　純白の光を放つ百合の花の中に、小人の様な少女が佇んでいた。

セイルも、その現れた精霊に目をパチパチさせて。

「セーラ・シェリール・・・。　出て来ちゃった」

と、呟く。

ユリアは、丸でか弱い病人に話し掛ける様な様子で、光る少女に声を掛ける。

「セラちゃん、無理しなくていいよ。　・・・闇や魔の波動が強いんだから、出て来たら衰弱しちゃうよ。　ね？」

だが、おかっぱ頭で純白の光に包まれる少女は、ニコやかに微笑んで。

「ユリア、大丈夫よ。　近くで神聖魔法の波動がしてるもの。　此処なら手助けが出来るわ。　今まで出て来れなかったから、陽が落ちるまで頑張る」

「セラちゃん・・」

ユリアは、光の少女に労わりの視線を向ける。

クラークは、セイルに耳打ちで。

（セイル殿、あの少女も精霊ですな）

セイルは、周りにジリジリ忍び寄るモンスターの気配を感じ、真剣な顔に変わりつつ。

（はい。　あの精霊は、魔法の本に封印されていた古い古い下級精霊です。　恐らく、あの精霊を呼び出す呪言（スペル）は、今は無いかも知れません。　ユリアちゃんが子供の頃に、我が家の宝物庫に仕舞われていた魔道書より封印を解き。　共に生きるのを約束した、契約の友達精霊なんです）

（でで・・ではっ、あの精霊以外に同じ精霊は居ないと申すのですか？　ユリア殿のみが力を借りられる精霊・・・）

（ええ。　光の精霊は、確認されている種類が少なく。　あの精霊は、唯一無二の存在。　ユリアちゃんと生きれば、存在が知られて新たに生まれる可能性は有りますが・・・。　でも、あの精霊は非常に不安定ながら、他の下位精霊とは異なる強い力を持っています。　精霊の中では、精霊神にまで成長出来なかった古代精霊みたいなんで。　下手な下位精霊など、問題に成らない精霊力ですよ）

（ほほぉ・・。　なんか凄いですな）

（ですが、ネックも有りましてね。　闇の力との摩擦をモロに受ける様で、呼び出せる場所が限定されるんですよ）

クラークは、此処では危ないと理解出来る。

（此処では、存在するだけで大変そうな・・・）

セイルは、ユリアと精霊の絆の強さの現われだと語った。

セイル達が、森から現れるモンスターを迎え撃つ準備を始める頃。

ポリア達は、最も墓地の東側の壁に近付いていた。　変化したヘイトスポットを、一つ一つ浄化しながらの進行だが。　その間近には、別の寄せ集め合同チームが居る。

墓地全域の浄化は、昼過ぎで終わった。

だが、墓地の壁端まで来て、やっと最も大きなヘイトスポットの存

在を知る事に成る。　墓地を封印する結界に阻まれ、その気配を感じる事が出来なかったのだ。　セイル達同様、壁の崩壊した場所から湖へ伸びる森の中に踏み込む時、マルヴェリータやシスティアナなどがその存在を感じて、瞬時に悲鳴を上げた。

「ポっポリアぁぁっ！！！」

驚きヒステリックな悲鳴を上げるマルヴェリータに、サーウェルスのチームの面々ですら驚いた。　無論、サーウェルスのチームに居る司祭オリビアや、魔想魔法遣いデルも感じている。　墓地の浄化を終えたイデオローザ隊も森に出てきて、あまりの強い波動に愕然として、地面に屈み込んだ程の物だ。

ポリアは、セイルと同じ考えを持った。　モンスターがこっちの森にも蔓延っているのは、マルヴェリータやシスティアナが教えてくれる。　本体に突入する前に、ヘイトスポットからモンスターが出て行けない状態を作りたいと思ったのだ。

ポリアは、イデオローザへ、墓地の外の森まで討伐作戦の展開を打診して於き。　サーウェルスのチームや寄せ集めの合同チームと一緒に、こっちの森のモンスター掃討に動き出した。

無駄な論議をする余裕は無いと思ったイデオローザは、直ちに動いた。　聖騎士隊を各冒険者チームと組ませて、最大のヘイトスポットを結界で包んで、孤立化させようと作戦を立てた。　他の聖騎士達も、この状況で冒険者達と組む事が嫌だと云う無駄なプライドを主張するのは、得策では無いのは理解している。　誰も死にたくは無いので、その伝令には各隊が従った。

死霊や亡霊モンスターの数は、討伐作戦の経過で一気に減った。

だが、霜と雪で凍える森の中には、自然地下洞窟が彼方此方に風穴や氷穴を生み出していて。　其処が全身を凍らせた肉食の大型ワームを始めに、スライム系モンスターの棲家に成っていた様だ。　代わって、森に目を向けると。　昆虫系や怪鳥系などのモンスターが、今や森全体に巣食っていた。

“ギャーギャー”

けたたましい赤ん坊の様な怪音を上げる怪鳥ジャルダージュと云うハゲワシを、飛び上がって斬り倒したポリアは、木々の枝に逃げた他のジャルダージュを睨みながら。

「通りでっ！！　最近、湖を通る船が、突然モンスターに襲われる被害とか多発してるって・・。　これが原因ねっ？！！」

猟師・漁師が、森や湖で忽然と行方不明に成っただの。　霧の中で貨物船が夥しい血痕を残して、無人と成った事件など有ったが。その理由が解った。　これだけモンスターが繁殖していれば、被害が出て当然だった。

ゲイラーは、ヘルダーと二人で、長さ２０メートルを超える大蛇をぶつ切りにし終えて。

「王都でこのモンスターの量は、在り得ね～だろう？　良く王都の方に出て行かなかったモンだぜ」

「・・・」

頷くヘルダーも、顔中にモンスターの返り血を飛沫（しぶ）かせていた。
彼の得物である鉄の扇二振りが、刃毀れするほどモンスターと戦っ

ているのだ。

「むんっ、うぬぬぬ・・・」

この時イルガは、肉食の類人猿モンスター“イエローデビル”に突き込んだ槍を掴まれて、一進一退の押し合いをしている。

其処へ、サーウェルスのチームで、大戦斧遣いの戦士ダイクスが殴り込んで来た。

「うぉらあああああっ！！！！」

背後から、大きな斧の一撃を喰らった二足歩行の猿モンスター“イエローデビル”は、真っ二つと為って瞬時に絶命する。

「助かったっ」

云うイルガに対し。　ダイクスは大らかに笑い返して、次のモンスターに指を指す。

「うむ」

イルガは、森の枝の下に降りて来た怪鳥ジャルダージュへ、突撃の構えを取った。　長い柄の槍は、空を低空で飛空するモンスターを突くのに最適。　デルとマルヴェリータは、イルガの攻撃でよろめいたジャルダージュや鮫鷹と呼ばれるモンスターを、魔法で次々と打ち落とす。　ダイクスは、落ちたモンスターへ止めを刺して回った。

サーウェルスのチームに居る剣士オリバーと云う中年紳士は、整え

られた口髭にシルクハットを被る気取った男。　だが、オリビアとシスティアナを護りながら、モンスターへと変貌したモグラの“ショベルシーカー”を何体も倒している。　モグラ特有の土の盛り上がりが目立つ所に、狼の如く大きなモグラが死体を晒していた。

サーウェルスは、“ムーンスラッシャー”と云う変わったブーメランを扱う女学者ミュウと。　勝気な印象を受ける姐御肌っぽい美人のアリューファの三人で、森の中から出て来るモンスターを次々と死体に変貌させる。　イエローデビルを撫で斬りにして、ミュウの打ち落とした鮫鷹を真っ二つにし。　更には、細剣の使い手であるアリューファが手傷を負わせた肉食ワームへ飛び掛り、首の辺りから刎ね飛ばす。　サーウェルスの両親がこの国の出身なのだ。　親類も住む王都に、モンスターの脅威を残すなど在り得ない。

「ミュウっ、上に新手だっ!!　アリューファ、前の風穴から唸り声がする。　デルかマルヴェリータさんを呼んでくれ。　突入するぞっ!」

応援に来たのは、デルとマルヴェリータの二人。　ミュウの加勢にマルヴェリータが付き。　風穴への突入には、デルが従う。　2年前に助けられた時には、インテリ然としたお坊ちゃんみたいなデルモンド＝通称デルは、男らしさを顔に滲ませる30前後の人物へと成長していた。

一方。　ポリアへの応援に、イルガとダイクスが向かった。

ポリアは、イエローデビル3体と、吸血蟷螂（カマキリ）のブラッドトルーパー2体に囲まれていた。　人間の10歳ぐらいの子供と似た大きさを持つブラッドトルーパーは、蚊の口の様に管へと変化した部分で、狙った獲物の血を吸い尽くす昆虫モンスターだ。　鋭い鎌の両手は、

人の首など簡単に切断する。　しかも、面倒な事に数体で常に群れる。

「お嬢様っ、ご無事ですかっ？！！」

「ポリアっ、応援に来たぞっ！」

ポリアは、イルガとダイクスの声を聞き。

「ありがとう。　一気にカタ付けるわよっ」

と、自身の剣を地面に刺す。

イルガは、それを見て。

（お遣り為さる）

と、看破。　直ぐにダイクスへ。

「ダイクス殿、お嬢様が敵を蹴散らします故。　一気に止めを行きますぞ」

ダイクスは、ポリアが剣の柄を両手の掌で挟む様にしたのを見て、目を見張った。

ポリアに向かってモンスターが四方から襲い掛かる時、ポリアは蒼く輝くオーラを身に纏い。　目をカァっと開かせると。

「風よっ、吹き上げてっ！！」

その裂帛した声と共に、剣から強烈な突風が噴火する様に四方へ吹き上げた。

「うおっ」

ダイクスの目の前で、ポリアに襲い掛かったモンスターが風に押し飛ばされる。

イルガは、槍を構えて。

「今ですぞっ！！」

と、間近のイエローデビルに突撃した。

「おうっ、おおっ！！」

応えて、走り出すダイクス。

ポリアは、直ぐに剣を引き抜いては、樹木の幹に飛ばされてぶつかったブラッドトルーパーへ走り出す。

協力し合うポリア達は、モンスターにヤられる隙は無かった。

さて。　その同じ頃。　セイル達に襲い掛かろうと、森を移動するモンスター達。　これを駆逐して回っているチームが居た。　ステュアート達のチームだ。

Kが間借りするように数ヶ月一緒に居たチームなのは、前にも書いたが。　仕事をこなしながら、北の大陸を縦横に移動できる冒険者チームに成り上がったステュアート達。　鎖鎌を扱うリーダーのス

テュアート。　魔法の掛かった矢を、特殊銃で撃つエンチャンターのセシル。　青のエルレーンと異名を取る剣士エルレーン。　男性が一度見たら忘れない巨乳の美人僧侶アンジェラ。　そして、禿げ頭ながら、自然魔法を扱わせたら世界でも指折りと云われ始めたオーファー。

彼らは、ポリア達が戦う大きなヘイトスポットの区域より更に手前で、北にの森へ抜け出た。　水生モンスターやスライムなどの、倒すのに面倒なモンスターを重点的に引き受けたのだ。　初老の聖騎士が率いる隊と協力しつつ、この場から結界化を試みている。

「アタイの弾丸、受けてみなっ！！」

黒いラバースーツの上着が、背中だけコートの様に長く。　極短いスカートから伸びる肢体が細めに見える女性が吼えた。　両手で抱える様な銃を構えて、紅くゼリー状の体内に動物の骨を残すスライムに狙いを定める。　その女性の顔は、１４・５歳の少女の様な感じなのに、チョット長めに伸びた八重歯や鋭い目つきは、小悪魔的な性的魅惑を兼ね備える。　エンチャンターと云う、特殊な魔法遣いの部類に入る技術を扱うセシルだ。　銃のトリガーを引けば、青いオーラに包まれた鉄のニードルが飛んで行く。　紅いスライムの体内に浮かぶ核を、見事に打ち抜いて倒す。

「ナイス、セシル」

と、ステュアートが声掛ける。　Ｋと一緒の頃に比べると、随分青年らしく大人びたステュアート。　鎖鎌の鎖で、ブラッドトルーパーの足を絡め取っている。

「そりゃっ」

弛みを一瞬作り、直ぐに鎖を引き捻ってブラッドトルーパーのバランスを崩す。　其処へ、脇から走り込んで行ったエルレーンが、ブラッドトルーパーの首を刎ねた。

禿げ頭の自然魔法遣いオーファーは、アンジェラを護りながら森の木々の隙間から空を見上げる。　奇怪な声を上げ、怪鳥モンスターがこちらの隙を窺っていた。

「よし。　自然の大気よ、気候の恩恵を我に。　願わくば、我が敵の全てを凍る世界へ。“アイスシュリーマー”」

詠唱に集中したオーファーが、杖を天に向けると・・。　空を飛行してセシルやステュアートなどを狙う怪鳥達に、突如異変が起こる。　瞬時に、羽が凍結し出したのだ。

「まぁ」

見ていた美女アンジェラは、初めて見る魔法に驚く。

体中が凍ってしまった怪鳥モンスターは、翼を砕いて次々と落下。　硬い木々や地面からむき出す岩にぶつかると、木っ端微塵に砕け。　地面に落ちた物は、全身に皹の様な亀裂を生じさせながら突き刺さる。

エルレーンは、何十匹ものジャルダージュや鮫鷹を撃ち落したオーファーを絶賛。

「オーファーっ、今日は凄いじゃん。　エロ禿げだけが能じゃないね」

微妙に褒められたオーファーは、まんざらでも無い表情で。

「今の極寒地でしか出来ない魔法だ。　自然に畏敬の念を捧げなさい。　ついでに、奢れ」

と、杖を構えて次のモンスターに備える。

そして、最後にセイル達だ。

今日は、ユリアが燃えていた。　光の精霊“セーラ・シェリール”が、無理して出て来た事が元で、何時もに増してマジに成る。　風の精霊である“テング”を呼び出し、精霊遣いの異能を遣う気だった。

森の中より、セイル達を狙って這い出て来たナメクジや、カタツムリのモンスター。　それに加えて、森側に徘徊していたゴーストやスケルトンなども、一緒に現れる。

ユリアは、セイルに。

「セ～イル、明日はアタシを負ぶってね」

セイルは、ユリアが何をするのか解った。　だから、

「クラークさん、下がって」

クラークは、ユリアを前に押し出すセイルにビックリして。

「セっ・セイル殿っ」

下がるセイルは、剣を抜いて。

「ユリアちゃんの魔法の邪魔になります。　魔法が終わったら、一気に突撃しますよ」

クラークは、ハッとして下がる。

ユリアは、モンスターとの間に誰も居なくなると、サッと杖を構え。

「風の精霊テングさん、風の飛礫を生み出してっ」

ユリアの左肩に立つテングは、ヤツデの葉っぱを靡かせて。

「おいさ。　風の飛礫、御廉い御用」

ユリアの数歩前の宙に風が巻き上がり、小石程の風の集まりが無数に生まれる。　ユリアは、右肩の光の少女を見ると。

「セラちゃん、いっくよぉ～っ」

「はいな」

光の精霊は、ユリアの元気な声に微笑んで祈る。　すると・・・。

「うお・・、こっ・コレは？」

クラークは、目の前で起こった事に驚いた。　突然に、風の飛礫が淡く白い光を孕むのだ。　無数に出来上がった風の飛礫が、それぞれに光り出す。　ホタルが光を点灯させる様に、風の飛礫が淡く白

い光を点滅させる。　その光の届く所まで踏み込んできたスケルトンが、光の点滅を感じると・・進行を止めたではないか。

（戸惑って・・いるのか？）

ギザギザした歯を剥き出しにしているカタツムリが、光に反応してだろうか。　身の丈２メートルを超える身体を、巻貝の様な殻の中に戻そうとする。　モンスターは、明らかにユリアの魔法に怯えていた。

ユリアは、杖を大きく後ろに引くと・・・。

「今日はガンガン行くからねっ。　いっけえぇーーっ！！！」

と、杖を振り込んだ。

光を孕んだ風の飛礫は、瞬く間のスピードでモンスターに襲い掛かる。　最も先頭に居たスケルトンは、その飛礫が全身を貫く通過だけで瞬時に塵と崩れる。　その後ろに迫ったカタツムリやスライムなども、飛礫をモロに喰らう。　ぶつかる瞬間に光って弾ける飛礫は、モンスターを倒すのに威力十分だった。

クラークは、自分とセイルが突撃する間も無く、最初のモンスターが退治されたのをただ見ていた・・。

≪新たなる交わり≫

激戦の二日目が、夜に為った。　セイルの想像は、大まか当たっていた。　異常に成長している最もデカく強いヘイトスポットは、明日に浄化を試みる事になって。　その周囲の森のモンスター討伐と、聖なる結界化を施した一日だった。

斡旋所は、夕方前から次々と戻ってくるチーム達と。　その情報を聞きたがって待っていた、棄権組が話し合って煩い喧騒状態である。
　夕方、外が真っ暗に成る頃には、もうワイワイガヤガヤと煩く。
　カウンター前の広間が冒険者だらけとなり。　何時ものこの頃の斡旋所ではなかった。

噂のネタは、異常にモンスターを駆逐した5チームの事。　その情報を話題と為ったのは、イクシオとカミーラのチームの活躍だ。　怪我をしたエルキュールなどの代わりに気合いを吐いたのは、協力で加わったマガルやダッカ達。　怪我した冒険者達を助けながら、モンスターを掃討しているのが印象に残ったのだろう。

その次に話題に上がったのは、ステュアート達のチームだ。　異色な武器を扱うセシルを始めとして、モンスターの討伐を飛び入りで受けながら。　一線級で活躍したのが、随分と印象に残ったのだと思われる。

その次が、セイル達。　光の精霊の助力を得たユリアの魔法の強力さには、聖騎士なども唖然とさせる程。　後から追い付き加勢した冒険者達は、クラークを筆頭に、セイルとアンソニーの素早い戦いぶりに目を奪われた。　特に、セイルが少しだけ遣った魔法剣を見

た者は、驚愕の一言である。

そして、世界に名を馳せるチーム１５指に入るポリア達とサーウェルス達の二チームは、語り草に成りそうな褒め称え様で話題に上っている。　倒したモンスターだけでも、３００は超える上。　ヘイトスポットを１５箇所は浄化して回った。　その様子を所々で見られているから、騒がれるのも当然だった。

最初に斡旋所へ戻って来たのは、セイル達。　ユリアが陽が暮れる頃にはへバっていたし、アンソニーも無理して両手を干からびさせてしまった。　明日からは護衛も在る為、早めに戻ったのである。

　セイルに背負われて戻ったユリアは、直ぐに寝かされたベットで懇々と眠りに堕ちてしまった。

セイルは、クラークと二人で煩く絡まれるのを嫌がって、外に食事に出る。　ユリアに、何か持ち帰りの出来る物を買う気で在った。

アンソニーは、あの女性僧侶に捕まった。　これ以上生気を吸えば、女性僧侶とてまだ２０代の若さでも、疲労で１日・２日ぐらい起き上がれなくなる。　別のチームに属している彼女だ、心配するアンソニーだが。　今夜が別れと知っている愛に燃えた女が、命どうこうでビビるものでも無い。　結局、部屋に二人で消えた。

さて、真っ暗に成った頃に戻って来たのが、イクシオ達とマガルとカミーラ達の協力チーム。　流石にチーム内で怪我人も多く出た様だ。　マガルやカミーラなども軽傷を受け、セレイドは骨折もしたらしい。　仲間の為に限界まで魔法を使ったキーラは、エルザと怪我人のエルキュールに肩を借り。　モルカは、ダッカの背に背負われて戻った。

イクシオは、チームとして明日の最後の作戦に参加するのは、見送る事を決める。　行くと決めたカミーラに、まだ動けるイクシオとエルザとボンドスだけが協力すると決めた。

次に戻ったのは、ステュアート達。　怪我の目立つ者は居ないが。
　エルレーンやステュアートなどは顔・腕などに薄い傷を作っていた。

最後に戻ったのは、ポリアとサーウェルスのチーム。　ポリアが戻って来る途中で、なんと様子を見に来ていたリオンに噛み付いたので、此処まで遅くなった。

“話と全然違うじゃないっ!!!　こんな状況放って於くなんて、王家は一体何考えてた訳っ?!!　明日は、アタシ達の屍晒すのも視野に入れて於きなさい。　あんなに成長したヘイトスポット、初めて見たわっ”

若い頃から、時折一緒に剣の稽古をしていて。　しかも自分の父親が是非に養女にしたいと零していたポリアに怒られては、リオンも後味が悪い。

「だから俺も行きたいんだが・・、父が危篤の親類を看に行って戻らない。　とにかく、墓地の事を調べる。　明日の朝までに解るなら、手配する」

ポリアは、リオンが密かに冒険者をやっている事は、十分に知っているのに青筋を浮かべて睨み。

「これで報酬がチンケだったら、城に怒鳴り込むかんね。　アタシやサーウェルスの処だけ値上げなんて、情っけ無いケチしないでよ。

み～んな命張ってるんだからね」

後頭部を掻くリオンは、ポリアには弱い姿勢で。

「解った解った、財務大臣に掛け合うよ。　墓地の中が凄い事に為ってるのは、もう噂で広まってるしな」

天下に剣の腕で名前を轟かすリオンを、強気で怒るポリアの姿。

仲間やサーウェルスのチームでも、呆れ笑いを生む。　イルガは、疲れた上に王子に恥を掻かせたと思って、苦い顔しか出来なかった。

ポリア達までが斡旋所に戻った時点で、斡旋所の主は皆に伝えた。

「みんな、聞いてくれ。　明日は、かなり危険なモンスターが相手だ。　だから、今回の掃討作戦に明日まで参加するなら、十分に気をつけてくれ。　今日で駄目でも、報酬は満額払う。　良く話し合って、明日に望んで欲しい」

初日で半減した参加チーム。　今日で、初日の5分の1までに減った。　だが、墓地の浄化は終わり、最初の契約は達成されている。　だがら、今日まで参加したチームは、棄権扱いでは無く。　成功扱いと見做された。

さて、この夜。

疲れても、食事だけしに出ようとしていたポリア達。　サーウェルスとオリビアは、二人でまだ2歳の子供と食事に行くと言い。　皆とは別れる。　逆に、ダイクス達は、酒を理由にイクシオやエルザなどを誘って来た。　あのKと関った面々が集まって、飲み食いに出ようとした時。

「あの、ポリアさん」

斡旋所の出入り口で、声が掛かった。

「ん、誰？」

ポリアが応えて声の方を見ると。　其処には、バンダナを巻いた褐色の肌をした青年を始め、彼の仲間らしい冒険者達が居る。

ポリアは、名前だけ聞いているチームなだけに。

「あ、コスモラファイアの皆さんね。　今日は、お疲れ様」

そう、声を掛けたのはステュアート達だった。

セシルは、軽い目礼の後に。　グッとポリアににじり寄って、マジマジとポリアの顔を見る。

「えっ、あああ・・・・あの」

意味が解らずに、驚くポリア。　マルヴェリータなどは疲れも在るから、セシルの態度にいい思いはしない。

だが、セシルは、ステュアートの方に向き。

「やっぱり、ケイの言ってた通りの人だわ。　スンゴイ美人」

「っ？！！！！！！！」

驚いたのは、ポリア達。　“K”の名前を口走る事が、なによりの驚きだった。

ステュアートは、呆れた顔でセシルを見返し。

「セシル、失礼だよ。　ケイさんの事聞こうとしてるんだから」

Kを知らないエルザは、何の事かとキョトンとするし。　唖然としたイルガ達。　ポリアは、ステュアートとセシルを交互に見て。

「ケイを・・知ってるの？」

ステュアートは、頷いた。

雪がチラつき始めた街中。　ポリアは、知り合いの高級レストランに全員を誘った。　全員で１８人と為ったので、普通の店ではバラけるし迷惑に為ると考えたのだ。

落ち着いた感じの広い個室を借りたポリアは、ステュアート達を円卓の同じ席に迎えて話を聞いた。　ステュアート達も、別のKの話が聞きたかったらしい。　自己紹介などをしながら、チームが混ざって話をした。

ポリア達は、Kと別れた後にもう一度再開したものの。　ゆっくり世間話をする余裕も無く、また別れたのだ。　ステュアート達の話すKの事は、初耳だった。

逆に凄腕の冒険者と、Kの事を理解していたステュアート達だが。

ポリア達の話を聞いて、Kの凄さを再認識した。

特にポリアとしては、ジュリアとの一件で見せたKの姿は、確かに男としてのKが滲む。　ポリアは女として、そのジュリアと云う騎士が羨ましく思えた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

内容をどうするかで、3パターン程書いて迷って更新が・・・＾＾；；
遅れました；＞；；　今回のお話は、ちと長くなると思いますが、宜しくお付き合い下さい＾人＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪朝を迎えて≫

次の日の朝。　雪が降り続き冷え込みが厳しい。

暗い中で起きたユリアは、ギシギシと筋肉痛のする全身が鉛の様に重くて。

「う〜、イタイなぁ〜」

ベットの横でランプ台に座る闇玉は、灯りの消えたランプに寄り掛かりながら。

「そりゃ〜そ〜だろうさ。　ちょーしこいて、合成精霊秘術なんか使うンだもん。　魔力の消耗が激しくて、全身が筋肉痛みたいだろ〜。　まだまだユリアっちには、早過ぎる芸当だゼ」

ステッキを本当の杖代わりで起きたユリアは、不機嫌に下着とタオルの準備をしながら。

「う〜、うるさい。　セイルやクラークさんに、無理ばっかりさ

せられないでしょ」

「？　風呂でも入るのかぁ～？」

「あう。　2階から別館の浴場に行けるの」

「ふ～ん」

闇玉は、納得したが納得出来ない部分に突き込みたくなった。

「あの槍のオッサンやセイルが、そんな疲れてたのかぁ～？」

ユリアは、暗い部屋で溜め息を吐くと。

「クラークさんも、セイルも、アンソニー様の屋敷でガイコツと戦った時のキレ、昨日は無かったでしょ？　セイルは、魔法剣の時に魔力を使い過ぎた疲労。　クラークさんは、セイルと一緒に初めて戦うので、使った事無い神経使って全身に疲労してたのよ。　アンソニー様だって、手が干からびる危険を平気で冒そうとしてる・・。　自分の責任を感じて、自分の国を守る為。　口にしないけど、み～んな無理してるわ」

闇玉は、コロンコロン左右に転がりながら。

「あのイクシオとか云うオッサン達も、それなら無理してたしな。　誰も・・死なせたく無いからか？」

ユリアは、闇玉に向いて。

「アタシが死んでもイイ？」

「・・・」

闇玉は、黙る。

「ヤミちゃんだって、人と同じ思いを持ってる。　だから、黙るでしょ？　アタシや、セイルも同じ。　知り合った人・・、死んで欲しくない。　多分、セイルだけじゃない。　クラークさんもそうだけど、私と知り合った人の中には、精霊を無益に殺すトコ見たら・・・怒る人いるよ」

「・・・ユリア。　人と精霊って、仲良く成れるのか？」

ユリアは、着替えを抱えて。

「全ての人が、仲良く出来るなんて思わない。　でも、ほんの一握りだけの人だけが仲良く成れるとも、思わない。　仲良くしてくれる人から、仲良く成って行けばイイって思う」

闇玉は、転がるのを止めると。

「ユリアとセイルと・・・、あの槍のオッサンだけでもイイよ。友達・・・」

ユリアは、笑って。

「ヤミちゃん、一人増えたね」

「・・・」

闇玉は、ユリアに背を向けた。　精霊でも照れるらしい。

その頃。　朝に為っても雪が降る中だ。

ポリアは、今日まで墓地の奥の森へと行く冒険者達を一緒にして、封鎖区域の旧墓地前に集まっていた。　ポリアのチームとサーウェルスのチームは合同で、イデオローザの隊と共にあの恐ろしく成長したヘイトスポットの浄化に向かう事を確認する。

ステュアートのチーム、カミーラ・イクシオ・マガルを軸にした合同チーム、寄せ集めながら戦力の整った合同チームは、それぞれに聖騎士の隊と一緒になり。　ポリア達の向かうヘイトスポットから更に湖に近付いた所で、仕事として最後の掃討作戦を展開する事に為っていた。

さて。

フラストマド大王国宮廷魔術師の副総長である女性が来て。　ポリア達だけに、恐るべき事実を教えてくれた。

この墓地一帯は、かなり古い昔に無縁墓地と成ったのだが。　アンソニーが賜った屋敷や土地も含めて封鎖されたと記述されたのは、隠蔽の一環だったらしい。　超魔法時代に、この墓地で巨大なヘイトスポットを生み出し、悪魔を召喚しようとした暗黒魔術師が居たのだとか。　魔術師は、王家の王位継承に文句の在った公爵家の誰かで、魔術師自身は王国の騎士達に倒されたのだが。　その生み出されたヘイトスポットは、完全に浄化出来ないままに結界で封印したと云うのである。

事実を知ったポリアは、これには目くじらを立てて抗議。　ほった

らかしにして、墓地の中やその周辺がどうなっているのかも確かめないのは、怠慢だと・・・。

だが。　事態は何も解らないままに、浄化されていると思い込んでいた王国政府であり。　モンスターを定期的に駆逐しておけば、それで何とか成ると軽視していた王族。　何より、アンソニーの一件や、大使館を置く場所を安易に決めた過去の王国の歴史など様々な事が絡み合って。　“臭い物には蓋”で、此処まで通って来たらしい。　だから、墓地の中の調査は、何一つ遣っていないので、実情を把握出来ない王国なのだ。

実は・・・。　宮廷魔術師の副総長が直々に来たのは、リオン王子の指示だ。　嘗ては父親が娘にしたかったポリアの危険を回避するために、事情を話して。　この先は、近衛騎士と聖騎士との合同部隊に任せる様に説得する為だった。　が、ポリアの性格で引き下がる訳が無い。

王族の一員である自らが、その浄化をすると決めたポリアの意思決定に、王国に仕える聖騎士の一部は逆らえる訳も無く。　ポリアの行動に、一丸と成って突き進むチームの仲間達。　そして、相変わらずの行動力と威勢の良さに、意気を感じたグランディス・レイヴン以下冒険者の皆が、ポリアの元に一つに成ったのである。　恐らく、ポリアのリーダーの資質は、こうした人を動かす雰囲気や気持ちに在るのだろうが。　あの包帯男が見ていたら、何と云うだろうか。

ポリア達が徒手空拳ながらに作戦を立て。　聖騎士一同を含む兵士軍と連携して、最後の作戦を決行すると動き出した頃。　セイル達は、約束の場所で、王都の入り口でもあるヴィクトリーゲートに集まった。

「うはぁ～、寒いっ！」

足踏みをするユリアは、マントに手袋を着けて、耳まで隠せる毛の付いた耳宛帽子を被りながら呻く。

「ズズズ・・・、言っても言わなくても寒いね」

鼻水を啜るセイルが、寒さで肌を白くさせて言う。　疲れも有ってか、元気が鈍い。

薄いマントを羽織るだけのアンソニーは、キザったらしく前髪を避けて。

「死ぬって、恩恵も有るのだな」

クラークは、死んでまで寒さをやり過ごす気には為れず。

「アンソニー様、嫌味に・・・」

「思わず、ごめん」

苦笑いのアンソニーだった。

今。　アンソニーと3日も夜を共にした女性僧侶は、未だに一糸纏わぬ体をベットの上に横たわらせていた。　昨夜の激しい行為は、アンソニーに愛情と共に魔力をぶつける全力の思いだった筈だ。　アンソニーとて、彼女を抱く時は本気だったのだろう。　手も元に戻っていたが、何より顔つきが人だった。　物憂げな感じは消えていないが、死人の様な肌が心なしか若返って見える。

（ありがとう。　僕は、君を忘れないよ・・）

息も絶え絶えに、ベットで気絶し掛けた女性僧侶へ。　そっと抱き寄り声掛けたアンソニーは、今も此処で微笑んでいる。　彼女から受け取った愛情を、胸に抱いて・・・。

「おお、皆さん御揃いですな」

馬車を引き連れたのは、御者と兵士二人とハレンツァ。　そして、リオン王子である。

「あ〃」

セイルは、目を細めているリオンに驚く。

セイルと9歳違うリオンだが、セイルの前に来るなり。

「お～ま～え～、随分と楽しい事してるじゃ～ないか」

と、親しげに言う。

「あはははは・・、だってさぁ～。　ユリアちゃんが、冒険に出るって言うんだモン」

ユリアは、苦笑いでセイルのお尻をつねる。

（言うなバカっ！！）

リオンは、ユリアも含めて見て。

「まぁ、大体は・・そんな所だろ～とは思ってたがな」

と、言ってからセイルを再び見て。

「護衛頼む。　セイルもユリアも、クラーク殿などが一緒だから安心だが、襲撃されても遣り過ぎるなよ。　そのうち黒幕捕まえて、直ぐに黙らせるからさ」

セイルは、リオンの役職を知っている。　だから。

「リオン～。　アハメイルには来ないの？」

「そりゃ～そのうち帰る。　弟と父上に事を頼んで、腹心のアンサムス卿に任せる。　俺より事務処理や裏方の遣り方は、あの人の方が上手いからな。　黒幕は、父上からシメて貰えば大丈夫だろう。　あんまり、テトロザとみんなに留守を預けっ放しも悪いし」

セイルは、ニコやかに。

「解った。　んじゃ、向こうで仕事でも請けて待ってるよ。　何れは別の国に行きたいし、向こうでお別れに奢って貰う～」

「コイツめ、もう奢らせる計画付きかよ」

セイルとリオンは、気心知れている様に笑い合う。　一緒に笑ってるユリアを含め、確かに付き合いの長さと深さが窺えた。

アンソニーは、リオンに近付き。

「リオン様、助けてくれてありがとう。　我の後始末で、迷惑を掛けて済まない」

リオンは、アンソニーを鋭くも笑みをも残した瞳で見た。

「気にするな。　多分、俺が貴方で同じ事情なら、同じ事したかも知れない。　それに、王子の証を悪用しようとする輩が悪いのであって、死んだ後まで誰も責任なんて持てない。　後は、今の人に任せてくれ。　今更、貴方に出張って貰っても混乱を来たすだけだ」

「はい。　宜しくお願いします」

「もういいさ。　それより、セイルを頼む。　コイツ、見た目に反して俺以上にブッ飛んでる。　ユリアも同じ跳ねっ返りだから、デンジャーなのが二人居るんだ。　誰か一緒に居てやらないと、知り合いとしちゃ大変だぜ」

セイルとユリアは、お互いに見合って。

「ユリアちゃん、だって～」

「るっさい。　お前と一緒にすんな」

その通りだと思ったクラークは、しみじみとウンウン頷き。　ユリアに睨まれて、ハッと大焦りで横を向く。

苦笑のアンソニーは、リオンに頷きを見せて。

「楽しませて貰うよ。　難破船に乗るのも、一興です」

セイル達と共に、南の交易都市アハメイルまで、馬車の扱いと共に同行してくれる中年御者が馬車を引いて来た。　護衛をするセイルとクラークに挨拶をし。　ユリアには、馬車の前に座る事を薦めてくれる。

リオンは、カンテラをぶら下げた馬車の後部を見ながら。

「アンソニーさん、王家は貴方の家だ。　もし、眠る気なら戻ってくれていい。　死ぬとしても、王家は貴方の事を恥と思わない。俺は、貴方を信じる。　セイルとユリアを頼む」

アンソニーは、リオンが丸で兄弟の様にセイルを思っているのだと感じた。

「大丈夫、彼らは強い。　それに、助けられた恩がある。　私より先に、このチームの誰も死なせやしないさ。　それは、私をチームに受け入れてくれた彼らへの、私の誓いだよ」

筋肉痛を理由に、馬車に堂々と乗るユリアを笑うセイル。　セイルに合わせて笑っているクラーク。　そんな二人に怒るユリア。　三人をリオンと共に見つめるアンソニーは、リオンに静かな約束を置いて馬車に向かった。

アンソニーを見送ったリオンは、

「セイル、アハメイルでな～」

「うぃ～。　リオン、またね～」

クラークも、一礼し。

「忙しい中、見送りまでありがとう御座います」

リオンは、クラークに手を挙げ。

「向こうで一杯やりながら、共に話せる機会を楽しみにしますよ。“槍のクラーク”殿とは、ゆっくり話がしたいですからね」

「恐縮です」

ユリアは、動き出す馬車から顔を見せて。

「待ってる、リオン様」

微笑むリオン。

「精霊達に宜しく、向こうで会おう」

クラークとアンソニーが馬車の後を行き。　最後までリオンを見たセイルが、雪の降る暗い中で拳を握って笑った。

リオンは一つ頷くと、サッと踵を返す。

（アハメイルに行く前に、王都にモンスターを残せるか。　今日は、俺も出張る）

気持ちを決めて、城に戻る為に馬へと跨ったリオンだった。

≪最後の激戦の果てに≫

昼前。　ポリア達は、赤紫色に変色した巨大な溜池の様なヘイトスポットの浄化・封印を行う。

朝、成長したヘイトスポットを囲んだ結界の外側には、前日に倒したモンスターの死体に寄って来た新たなる群れが・・。　モンスターを食らうモンスターの群れが、一晩で溢れていた。　結界の弱い部分は綻び、モンスターの侵入を許している所もあり。　ポリアは、その討伐の進行具合と再結界作業の行方を見守っていたのである。

気を吐くステュアートのチームを始め。　国を守る気持ちと、モンスターに対する慣れも出始めた聖騎士達が、宮廷魔術師達と寺院の僧侶達を上手く指揮し始めて来た頃。　遂に、リオンが近衛騎士と聖騎士に加えて。　高い能力を買われて、国に仕えている魔術師兵団を合わせての一個師団を連れて来た。

助太刀がてら、森に散開して戦っていたポリア。　湖に向かう森の中で、小隊に分かれてモンスターを掃討するリオンが来ると、開口一番に。

「遅いっ！！」

リオンは、急襲して来たジャルダージュを、馬上にも関わらず斬り倒し。

「そう言うなよ。　ポリアンヌを助けに来たんだぜ」

ポリアは、リオンの一団で、集まって来たモンスターは大丈夫と思い。　近場で戦っていた仲間に、結界の内側へと引き上げを言い渡してから。

「これから、ヘイトスポットの浄化を試みるわ。　森のモンスターは、リオンに任せるわよ」

リオンは、ポリア達がこれから相手をするのは、赤紫色の光を黒い靄の中から発する。　それこそ異常に成長したヘイトスポットなだけに。

「ポリア、本気か？」

「ヘイトスポットを見張ってる、サーウェルス達と一緒にやるわ。　此処に居る僧侶で、システィとオリビア以上の司祭様は居ない。　対不死者、対モンスターでも私達が一番優れてる。　リオンは仲間連れて来て無いんだから、無理されても困るわ」

「おいおいっ、万一の事が・・」

と、馬上から降りようとするリオンに、ポリアは背を向け。

「大丈夫、考え有るから。　代わりにって云うと何だけど、僧兵と寺院の僧侶は借りるわよ」

と、言う。

ポリアは、自分を待つサーウェルス達と仲間の下に戻った。

ヘイトスポットは、大きく年季が入ると、邪悪な瘴気を常に吐き出す様に成り。　死体が在ればゾンビやゴーストを。　モンスターが居れ活性化、死ねば死霊モンスターを生む。　其処に力を蓄えて成長する中級モンスターが生まれれば、モンスターは更に増えるし、生み出す元凶が増える。

ポリアは、冒険者の自分達以外に。　イデオローザ以下聖騎士数名に、その各隊に配属されていた僧兵と。　更には、寺院から来てくれている僧侶達を集めて、浄化に同行させる。

「あああ・・あの・・・」

「怖い・・です・・」

怯える僧兵や僧侶。　オリビアやシスティアナも、じわりと冷や汗を顔に浮かべている。　ヘイトスポットの瘴気と、その中に居るモンスターの強烈なオーラに、戦う前から怯えてしまっているのだろう。

ポリアは、オリビアとシスティアナに。

「お願い。　ローザを主軸にして」

オリビアは、心得ていた。

「また、遣らせればいいのね？　あの時同様・・。　応用にこんな事するなんて、チョット驚きだけれども・・・」

オリビアは、ポリアの応用力に驚きだった。

先ず、ヘイトスポットをぐるりと取り囲む様な輪を、何重も作り立った僧侶と僧兵達。　別の聖騎士隊に所属していた僧侶や、参加を申し出てくれた冒険者の僧侶達も居る。　総勢、１００人以上。

そして。　馬数歩分の間を空けて、ヘイトスポットを取り囲む様に騎乗したイデオローザは、配置に着いた聖騎士達に向け、自らの剣を上げて合図を送る。　イデオローザを視界に入れ、ヘイトスポットを囲む別の聖騎士達が、彼女の合図を真似て剣を掲げ。　ヘイトスポットから二十歩以上も離れて取り囲む僧侶・僧兵達が、何と一斉にレクイエムを歌い出した。

湖の方に向かってモンスターを討伐しつつ、ポリアに気を揉んだリオンだったが・・。　そのレクイエムの合唱を聞いて、ハッとした。

（な・・、そうかっ！！　ヘイトスポットの浄化は、中に入らなければならない。　だが、外からレクイエムを歌う事で、ヘイトスポットの中のモンスターに“聖なるブレス”を与えられるっ！！　あのレクイエムが歌われる限り。　ヘイトスポットの中のモンスターも、魔法の詠唱等に負荷が掛かり、発動が上手く行かなくなるかっ！！　即死の魔法とて、失敗する可能性が増える筈・・・。　ははは・・、ポリアンヌ、流石だっ！！！）

リオンは、ポリアが奇知的なアイデアで、難敵のモンスターに対抗するのを知って勇躍した。

「戦う皆に告ぐっ！！　声を上げろっ、ヘイトスポットの浄化はもう直ぐだ！！！　モンスターを一気に壊滅せよっ！！　今日で・・全てに決着を着けるぞっ！！！」

剣の腕を誉れるリオンの存在は、兵士や騎士達にしてみれば、軍神のような信頼が有る。　その声が森に響き、各個撃破で小隊に分かれた聖騎士や近衛騎士達も勇む。

「皆の者っ、怖じ気ず戦えっ！！　モンスターはっ、激減してるぞっ！！！」

「おーっ！！！」

「リオン様が勝ちを確信したぞっ！！！　負けは許されんっ！！」

「はっ！！！」

兵士や騎士の活気は、一緒に戦う冒険者達にも伝わる。

「兵士や騎士が、一気に近付いてきてるよっ！！　ステュアート、森のモンスターは向こうに任せて。　アタシ達は、このまま風穴に乗り込もうっ」

銃に鉄の矢を込め直すセシルが、モンスターの逃げ込んだ大きな風穴を指差す。

ステュアートは、アンジェラを聖騎士に任せて。　また、前線に来ているオーファーに向いて。

「オーファーっ、僕とエルレーンを先頭に突っ込むよっ！！」

「うむ、セシルと共に後ろを行く。　今日の俺は一味違うから、安心して行け」

頷くステュアートは、エルレーンと共に風穴に向かった。

オーファーは、魔法を唱えて岩を地中から生み出し浮遊させる。守りにも、攻撃にも使える“ストーン・ヘリンジ”（岩の偶像）と云う魔法だ。　昨日の掃討作戦で、森の魔域化に歯止めが掛かり。失われてつつあった精霊の力に、息吹が戻り始めていた。　自然魔法に対する自然の応え方に、一定の力を感じたオーファーは、中級の魔術を惜し気もせず使っている。

さて。

ポリアは、遂にヘイトスポットに踏み込んだ。　ヘイトスポットの中心には、紅い血の色のスケルトンが、青黒いオーラを纏ってズタボロのマントを羽織っている。　上位モンスターが居座っていたのだ。　その上位の死霊モンスター“ハィエスタード”と云う死霊は、強力な暗黒魔法を使用する。　魔法で数種類のスケルトンを瞬時に生み出したり、即死の魔法をも使う強敵だ。

しかし。　神聖魔法には、その死の魔法を成立させない特殊な魔法が在る。　高位の司祭であり、グランディス・レイヴンのリーダー・サーウェルスの妻でもあるオリビアに、その魔法を掛けて貰うポリア達。　一撃の即死魔法を使う上位死霊モンスターと対峙するポリア達は、耳に響くレクイエムを胸に、モンスターを見る。

ヘイトスポットの中まで聴こえる、縦横無尽の大合唱と成ったレクイエム。　聖騎士を軸に、レクイエムの歌を合唱する僧侶や僧兵達。

このレクイエムの歌の使用用途には、幾つかヴァリエーションが在り。　その特異的なのが大合唱による祝福（ブレス）と云う効果だ。　歌の届

く範囲で聖なる地場を生み出し、暗黒魔法などの使用に強いプレッシャーを与える。　神聖魔法とその加護を授かる僧侶達には、暗黒の力が支配するヘイトスポットの間近では、その交わらぬ対象の属性から精神的な圧力を受けるのだが。　それを跳ね返し、逆転させる唯一の対抗策を、逆手に取ったポリアのアイデアなのだ。　レクイエムの歌で、周囲に張った結界の力を増幅して、僧侶達を護ると同時に。　レクイエムの別の歌を、ブレスとして歌う。　聖なる歌の乱れぬ合唱が相乗効果を生んで、強固な力を生み出し始めた。

レクイエムの御蔭で、精神的な恐怖を克服し、ハィエスタードに戦いを挑んだポリア。　だが、死霊モンスター・ハィエスタードとて滅ぼされまいと、ポリア達にモンスターを生み出して嗾ける。　直ぐに３０体程のスケルトンを生み出して於いて。　更にスケルトンの中でも剣術に優れた、セイバーズ・ボーンと云う二刀流の青紫スケルトンをも、１０体近く召喚して決戦が行われた。

システィアナとオリビアは、このヘイトスポットの中に入って、仲間の為に防御魔法を掛け浄化に備える。　神聖魔法の使い手で地場の浄化を行う以上、彼女らに無理はさせられない。　そうなると、魔想魔術の効かないモンスターが多い相手の中では、剣士や戦士達が、セイバーズ・ボーンと激しい斬り合いをするのは必死だ。

グランディス・レイヴンのサーウェルス達は、その生み出されるモンスターに合わせて、ハィエスタードが呼び寄せる他のモンスターをも相手に、死に物狂いの戦いをする。　強力な聖なる力を備えたポリアの剣は、ゴーストバスターとしては最強の剣だ。　ハィエスタードにポリアをぶつける為に、モンスターを左右に押し退けて道を切り開こうとする。

「往生際が悪いんだよおおおっ！！」

ゲイラーは、炎の力を含んだ大剣を構えて、戦士ダイクスと学者ミュウを取り囲もうとする無数のゴーストに向かう。　強力なヘイトスポットに成長する過程で集まったゴースト達は、何十と云う数だった。

「・・・」

「参るっ」

システィアナに聖なる加護を武器に授けてもらったヘルダーとイルガは、一人で深く斬り込んだアリューファに加勢しようと突撃した。

「退けっ！！　ザコは退けえええぃっ！！！」

怒声を上げて奮闘するサーウェルス。　魔想魔術師のデルとマルヴェリータの後ろ盾を貰い、サーウェルスと剣士オリバーが、襲い来るセイバー・ボーンを左右に押し退ける。

その時だ。

「コシャクナ人間メッ！！　死ネェェェェッ！！！！」

ハィエスタードが、骸の口を大きく開いて即死の魔法を・・・。

「今だっ」

ポリアは、即死の死神召喚術を唱え出したハィエスタードに走った。
　両手で暗黒魔法を発動させるハィエスタードだが。　ポリアは、風の力で飛んで来た暗黒魔法を蹴散らす。　ギラギラと光るヘイト

スポット。　その中心に居座ったハィエスタードを、生み出される一歩手前の死神ごと自身の剣で突き倒し。

「消えて居なく為れっ！！　バケモノめーーーっ！！！！！」

神竜ブルーレイドーナとポリアが、一瞬シンクロした。　その時、風の力が膨張するのに合わせ、剣に宿る聖なる力が加味されて。蒼く神々しい光の、爆発的なエネルギーが迸った。　剣に秘められた聖なる力と神竜の力を借りて、悪魔の様なハィエスタードを、灰に消し飛ばすポリアだった。

強力なモンスターが死ねば、辺りを覆う瘴気や暗黒の力は弱まる。　生み出した親が滅んで、動きを止めるスケルトン。　ポリア以下皆は、蠢くゴーストを始めにモンスターを駆逐する。　その合間を縫って、システィアナとオリビアは力を合わせて、このヘイトスポットの浄化を試みる。

其処で、更なる助力が訪れた。　居座ったボスが消え去って弱まったヘイトスポットを、何と外から歌うレクイエムが、包括的に押し込み始めたのだ。　急激に衰退し集束したヘイトスポットは、システィアナとオリビアによって浄化されてしまった。

モンスターを倒しきって、その状態を雪が舞う中で見届けたポリアは、一気に気が緩んだのかガクリと膝を着く。

「お嬢様っ」

「ポリアっ」

「ポリアンヌ様っ」

驚いたイルガ、サーウェルス、イデオローザだが。

ポリアは、即座に。

「すんごいビビッたあああああーーーっ！！！　即死魔法マジ怖いっ！！！」

と、大声を出した。

マルヴェリータとゲイラーやヘルダーは、互いに見合って笑う。

「確かに、ね」

「おう。　死神が見え出した時は、本当にな」

「・・・」

こうして、掃討作戦は夕方で終わった。　リオンが森の中を縦横無尽の如く馬で駆け回って、モンスターを次々と倒すし。　後からポリア達も応援で来た事で、討伐の勢いが加速度的に勢い付いたからだ。

死者は、2日目に兵士3人と冒険者5人。　3日目に、兵士1人と騎士2人に冒険者1人。　何れも初日に大怪我をした者が殆どだった。　その葬儀は、王国が取り仕切る事となる。

この3日後。　リオンの肝いりで、危険手当と成功報酬に対して追加報酬が出た。　ポリアやサーウェルス達は王城に呼ばれ、第一王子から勲章と高価なマントを全員が賜った。　一緒に呼ばれたイク

シオやカミーラ、そしてステュアート達も、火の鳥の刺繍されたマントに驚いていた。

≪水面下で蠢く欲望≫

ハレンツァは、この日も朝には登庁して仕事に就いた。　ポリア達がヘイトスポットを完全に浄化した・・次の日である。

「寒いですなぁ～」

「いや～、本当に」

老いた騎士や聖騎士が詰める執務室。　紅い絨毯を敷いた広い部屋では、暖炉が3つもある。　甲冑を首から下に着込むハレンツァ以外、周りはピアリッジコートやバロンズコートなどの貴族らしい者ばかり。　此処は、騎士や兵士を指揮・指導する、引退した騎士や聖騎士などが働く場。

太った老人が、ハレンツァなどに机上から話し掛ける。

「しかし、今回のモンスター騒ぎは、随分と大変でしたな」

「うむ。　だが、ポリアンヌ様を始めとする冒険者達の活躍で、３日でカタが着きましたよ。　冒険者も、流石に流石に・・・」

「いやー、ポリアンヌ様は美しいし、強い。　ウチのドラ息子の嫁にでも成って下さると、助かるんじゃが」

「なにを。　尻に敷かれて、逆に追い出されるんじゃ～ないですか？」

「うはは、違いない」

「そう云えば・・。　リオン王子が、今回の作戦に参加した冒険者への報酬を、更に上乗せしたいと話しているそうですよ」

「ほ～。　まぁ、気持ちとしては、上乗せしても構いませんな。だが、あの冒険者嫌いの財務大臣が、すんなり了承しますかね」

「私は、すべきかと思いますね。　今回は、ポリアンヌ様や・・あ～ホラ。　有名なグランディス・レイヴンの方々も参加しておる。見っとも無い報酬では、我が国の恥を晒す事に為りはしないか？王都の民も喜んでおるしの」

「出した方が賢明じゃな」

「うむ」

老人達の他愛ない雑談に、笑ったり相づちだけのハレンツァ。

（何事も無ければいいがの・・・）

昨夜から彼の胸中は、気味の悪い胸騒ぎに襲われている。

“ハレンツァ殿。　この一件、穏便に行くのは難しいぞ。　早めに策謀の芽を摘み取るのが、先決だと思う”

リオンは、王子の証を受け取った時に、暗い部屋の中でこう云った。

そして、ハレンツァが王から受けた命に協力すると約束し。　代わりに、事を荒立て無い為にも、暫く王子の証の事は、有耶無耶にしようと話し合った。

リオンは、数年後には王に成る兄を憂い。　そして、心配の種を摘み取って、他の取り入り争いに楔を打ち込む気でいた。　ハレンツァも、それは望む所。　だが、昨夜に不振な影を屋敷前の物陰に見たりして、護衛に行ったセイル達が心配に成った。

その予感・・、当たっていたのかも知れない。

その日の夕方。

冒険者達への報酬を増やす事を、財務大臣と関係者が白熱した議論で話し合い。　旧墓地の見回りや湖側の森への巡回、モンスター討伐などの継続作戦などの事で、王国政府の関係政務官並びに大臣などが、騎士などと慌しく“会議、会議”と忙しく動く。　のんびりした何時もの城には、似合わない慌しさに包まれた中だ。

「ハレンツァ殿」

騎士が慌しく走って行った廊下。　帰る前に用事を終わらせようとしたハレンツァが、廊下で呼び止められた。

「？」

振り返ると。　あの運び出した積荷の保管を仰せ付かったヘンダーソン卿と共に、背の高い威厳の有る３０代の男性が居た。　軍人の様な立派な風貌で、軍服に身を包み。　鋭い視線は、ハレンツァなど斬り倒す圧力がある。

「おお。　これはヘンダーソン卿に・・クシャナディース様。　何用ですかな」

ハレンツァは、ヒョイヒョイとした好々爺の面持ちで一礼した。

ヘンダーソンと一緒に居るのは、軍人系貴族で。　最近侯爵から、公爵へ格上げされたクシャナディース家の若き当主。　名前は、ヴォルグラス。　力自慢の軍人で、他国との戦争をする時に真っ先に切り込む役割の、“ファースト・ブレイダー”と云う一個師団を預かる将だ。　春先に大不祥事で刑死したオグリ公爵に代わっての格上げであり。　かなりの金を方々に回して、今回の格上げを決めたと噂される。　出身は国内西方の衛星都市であり。　港と交易中継の基点となる所なので、商人の顔も持っている男だと噂される。

ヘンダーソンは、クシャナディースの威を借りているのか、強気な姿勢でこう言った。

「ハレンツァ殿、実はな。　御主の連れて行った兵士に聞いた所に因ると、貴殿はアンソニーとか言う男を“王子”と云ったらしいな。　しかも、その男が宝物の選別をし。　運び出した物には、何やら王国の証を刻んだ勲章と、前掛けに酷似したした物も有ったと証言した。　だが、その様な物は、積荷には無かった・・・。　貴殿、不正を働いたのでは有るまいなっ？」

ハレンツァは、内心で不安を覚えた。　自分の命は別に、あの王子の証を巡って蠢く貴族が居る事に、不安を覚えるのだ。　何故、こうも欲するのか。

クシャナディースも、ズイっとハレンツァを押し潰さんばかりに踏み込んで。

「ハレンツァ卿、ヘンダーソン卿の話は本当か？」

脅迫紛いにドスの効いた低い声。　下手な兵士や騎士では、怯えてしまう圧力が有る。

「さて。　私には、荷物の誤魔化しなどする意味が無いと思うがの～。　王族所縁の品がもし有るなら、それこそヘンダーソン殿か・・王に渡さねば王政府国家に災いを招く。　そんな大事な物を隠し持つなど、あ～怖い怖い。　有るなら怖くて、捨ててしまいたい気持ちに駆られますわい」

惚けたジジイの様な素振りで言うハレンツァ。

クシャナディースは、眉間に皺を寄せて、厳つい日焼けした顔を怒らせると。

「貴殿っ、まさか・・勝手に始末したのでは有るまいなっ？！　重要な物は、王かそのご一族の許可を持って消去すべき物。　それを一存で勝手にと有らば・・・、罪にも問えるぞっ」

しかしハレンツァは、呆れた顔で。

「煩い事ばかり言うお方達じゃ～。　有ればの話で、無いのだからどうしようも出来ん。　何を根拠に、そのような・・・」

ヘンダーソンは、ハレンツァを酷く睨み付けて。

「王がお帰りに成り次第、この一件はご報告させて頂く。　ハレンツァ殿、肝に銘じられよ」

すると、ハレンツァは、瞬時に鋭い目を二人に返す。

「このハレンツァ、疚しい所は一つも無いっ。　その様な事なら、今すぐに王子にでも言えば宜しかろうに。　だが、ワシからするなら、御主等の方が解せぬわっ。　亡き王子の証を、其処まで有ると思うて働き掛けるのは、なんの思い有ってか？　数年後には、トリッシュ様が王に成られる。　それで平和な王国を維持しようと云う大事な時に、その様な不穏な事を方々で調べ回れば、どの様な噂が立つか・・」

もう壁掛けのランプに火が入れられ、仄暗い廊下を照らす。　ハレンツァに顔を寄せたクシャナディースは・・。

「王国の転覆まで危ぶまれる品が有るかも知れないから、こうして申しておるのだっ、ハレンツァ殿」

すると、ハレンツァは・・。

「うは・うははは・・、コレは可笑しい。　可笑しいわい」

と、笑うのだ。

グッと憤りを浮かべるヘンダーソンとクシャナディース。

ハレンツァは、二人を見ると。

「軍人と王の身の回りを仕事とする者が、そのような事を言う必要は無い」

「何っ？」

歯を噛み言うヘンダーソンに、ハレンツァは一瞥し。

「ワシは、王から直々に不穏な動きをする者の事を、細部に亘って調べる様に仰せ付かった。　何でも、旧墓地と奥の王子のお屋敷を、数日前に早々と警備したいと打診した誰かが居たとか・・」

クシャナディースの顔が、俄かに曇る。

ハレンツァは、話を続けて。

「まだ国王様ですら・・あの奥のお屋敷で何が有ったのかも解らぬ時に。　その言った御仁は、なんでそんな事が言えたのかの・・。　それから、昨日からの調べで、一つ妙な事が解った」

ハレンツァは、身を少し引いたクシャナディースと、斜めに向くヘンダーソンを交互に見つめ。

「そもそも封鎖区域に、子供達が行く要因を作ったのが・・なんだか不思議なローブ姿の男だと云う事だ。　武器屋の主人が大使館の区域へ、頼まれていた品物を届けに行った後を付けた子供だが。　その途中で、マントにローブ姿の男と出会ったらしい。　そして、

塀の向こうの封鎖区域の事を聞いたとな」

“面白い場所で、古いお屋敷が眠っている”

「と・・。　その男は口止めに、子供へこの事を云ったら呪われるぞ・・と、魔法を見せたらしい。　子供は、本当に怪しき男の事を他言したら、自分が呪われると思って云わなかった。　昨日、何故あの墓地の奥の事を知っているかを、兵士に問われるまでな」

「それとこれとは関係が・・」

と、云うクシャナディースに、ハレンツァは声を大きくして遮る様に。

「それとっ。　子供達が侵入する以前から、度々に渡って封鎖区域を護る兵士と騎士が、理由無く眠りこける事態が有り。　彼らの飲食した水などに、眠り薬が混入されているらしい事もな・・」

その話が出た所で、クシャナディースはピタリと黙り。　ヘンダーソンは、少し俯いた。　ハレンツァは、そんな二人を見て更に話を続け。

「良いか。　あの子供達が侵入する前日にも、怪しいローブとマントを羽織った男は、武器屋の子供の所へ現れたそうじゃ。　そして、武器屋の子供に、脅迫めいた言葉を残している。　友達を誘導し、あの封鎖区域に侵入させる様な仄めかしをしたそうじゃ。　それに、ワシが王の命で封鎖区域に踏み込んだ時も。　子供達が侵入した時も、兵士や騎士は、酷い眠気に襲われて眠りこけたとな」

二人は、何も喋らない。

ハレンツァは、踵を返すと。

「とにかく事実関係を調べ、解った事は全て、お帰りに為られた王にお知らせする。　忙しいわが身に、下らん世迷言の様な言い掛かりは、止めて貰おう」

と、歩き出した。

そう。　ハレンツァが事件を調べ出した昨日。　武器屋の甥で、セイル達に子供の居場所を教えたジュンガと云う子供が、遂に本当の事を喋った。　何故、彼が肝試しが出来る場所を知っていたか・・。　そして、どうして教えただけだったのか・・。　それは、脅されたのである。

“あの封鎖区域の先には、皆がウソで隠してるお屋敷が有るんだ。　森の奥にね・・・。　私は、其処から来た悪魔だ。　お前を連れて行こうとしたが、一人では足りない。　仲間を遊びに遣しなさい。　そうすれば・・・お前の命は助けよう・・・”

ジュンガは、伯父の後を尾行して行った。　だが、大使館の広がる地区の中で、ローブにマントを身に纏う男に捕まってこう云われたのだ。　一度は開放されて逃げ帰ったものの。　そのローブにマントを着た男は、再びジュンガの前に突然と現れ、また・・・。

“お前が約束を護らないなら・・父親も母親も伯父さんも殺してやろう・・。　命が欲しい・・命が欲しい・・・”

そして、霧の中に消えたその男。

相手を悪魔だと信じ込んでしまったジュンガは、それに怯えて友達に嗾けた。　肝試しを嗾けたのだ。

ハレンツァは、策謀の匂いを嗅いだ。　だが、それを証明する痕跡は無い。　武器屋の周りに、自身の配下の兵士を聞き込みに遣っているが、まだ目撃証言が無い。　極寒の極夜時期は、人々の姿勢は俯き加減で、ハッキリと人や物を見分けられるのは、一時明るくなる昼間だけ。　朝や夕方は、殆ど夜と変わらない。

しかも。　あの肝試しをした子供達の侵入の前後に渡り、何度も兵士や騎士が居眠りをして、内の一人は凍死している。　今まで無かった事だと思われたが、数年前にも、似た事が数日有ったらしいと云う所までは聞き取った。　だが、水や食事は当番制で。　係りの兵士が、入れ替わり立ち代りで運ぶと為っているだけ。　一般兵を何処まで疑えるかは微妙だ。

ハレンツァは、今回の仕事を、自分の死に場所の様な気持ちで当たっている。　何が出てくるか解らないからだった。

・・・。

しかし、その夜。

何処かの宮殿の様な佇まいを見せる屋敷の奥。　蝋燭の明かりがさめざめしく、ぼんやりと光る一室で、金色をした玉座に身を預ける何者かが居る。　黒いフードを被った何者かだ。　肘掛に這う手は老いた皺の見える手で、フードから覗ける口元や高い鼻は、高齢の為にシミも出来た老人の物だった。

「・・・と、云う訳で御座います」

その玉座に座る人物の前。　高さの無い階段を3つ下った先の床に、謁見の動作で居るのはヘンダーソンとクシャナディース。　しかし、それに加えて、なんとあのセイル達を襲撃して逃げた曲者の姿が見える。　報告をしたのは、ヘンダーソンだ。

玉座に座る人物は、右に身体を傾け頬杖をする。

「フム。　では、ハレンツァが持っている可能性が強いのだな？」

ヘンダーソンは、ハレンツァに見せた強気な態度を隠し、床に膝を着いて一礼して肯定する。

「は、恐らく。　ですが、一つ気に為る事は、あのアンソニーと云う人物です」

すると、クシャナディースがヘンダーソンに。

「しかし、もし王子だとして、生きていたら２００年以上も生きている事に為る。　過去の粛清を行った王の弟である王子と同名だからと云って、簡単に信じられない」

「ですが。　積荷を仕分け、屋敷の内部に精通しているのは、やはりおかしいと思います」

其処に、玉座へ座る人物が。

「それは確かめれば良い事だ。　それより、クシャナディース殿よ」

「は」

クシャナディースも、この何者か解らない人物に膝を折る。

「“粛清”とは、悪しき者を正す事だ。　昔の彼の王がしたのは只の横暴・・、間違えて貰っては困る」

「あ、これは済みません」

一個師団を預かる将が、老いた人物の言葉に驚き頭を下げる。　公爵に格上げされたクシャナディースが平伏すとは・・。　この老人と思える人物は、一体何者なのか。

そのフードを深く被った人物は、一つ頷き。

「とにかく、だ。　トリッシュが王に成った後は、私の一族の天下を作らなければ成らない。　過去の粛清などと云う悪行を正し、王に異常な権限を与えた今の王政府の間違いを正さなければ・・。クシャナディースよ」

「はっ」

「そなたを見込んで、まだ伯爵に過ぎなかったそなたを、数年がかりで公爵まで引き上げたのだ。　公爵は、王家の血筋を必要とし、彼の公爵家から娘を一人調達するのに、それこそ莫大な金を必要とした。　ま、その金は春先に死んでくれたホローや、他の商人で掻き集まったがの。　目障りなリオンの小倅の御蔭で、資金源が無くなったわい。　御主や、そして我が遠縁のヘンダーソンなどが協力をして貰わねば、我が願いは成し遂げられぬ。　公爵まで引き上げた恩、努々に忘れるでないぞ」

クシャナディースは、額を冷たい床に擦りつけんばかりに平伏して。

「ははぁっ。　その恩は、一族の一生の恩と理解して居ります。美しき姫君を妻に賜り、公爵の地位まで引き上げてくださった主への恩は、一生忘れぬ事で御座いましょう」

頷く人物は、覆面をするセイル達を襲撃した曲者に視線を合わせ。

「ラヴィン」

「はっ」

「“あの者達”との連絡は？」

「はっ。　つい先日連絡を取れました。　ただ、金が足りないと言っていたそうです」

頷く人物は、白い溜め息を吐き。

「ならば、襲った場所から全て奪えと掛け合え。　それ相応の物品が展示されている筈だし、足りないなら主の女も好きにしろと言え。　もう手持ちが少ない。　襲う相手で賄えるなら、どんな言い方をしても構わぬ」

「はっ、交渉を続けます」

「うむ。　しかし、護衛の相手が、あのエルオレウの孫で。　その保護者が、水の国のエムステルム家の武人とは、実に嘆かわしい。　エルオレウ殿とは、面識も有るが・・。　こうなっては、御孫殿一人は死んで貰わねば・・。　だが、ラヴィンを簡単に退ける剣の

腕は、惜しい・・。　実に惜しいのぉ～・・」

この人物、どうやらセイル達を殺す気らしい。

ヘンダーソンは、膝を進め。

「ですが、御老。　目下、一番面倒な動きをしているハレンツァは、如何致しますか？」

頬杖を解いた人物は、少し間を空けてから。

「・・・先ず、ハレンツァの始末と屋敷の捜索だ。　あのバカの元に無いのなら、何としても探し出す為にも、護衛の荷馬車が積む王子の遺品を奪う必要が出て来る。　様子を見て、ハレンツァには死んで貰う。　それまでは、御主達は大人しくしておれ。　王の命で動くハレンツァに、我が権力を用いても意味が薄いからな」

「ハッ」

「御意」

ヘンダーソンとクシャナディースは、夜も更けた中でこの人物の元を去った。

謁見の間の様な部屋には、ラヴィンと呼ばれた曲者と顔を隠した人物が残り。

「のぉ、ラヴィン」

「は」

「お前から見て、あの二人は使えると思うか？」

この人物の口調は、ヘンダーソンとクシャナディースを“物”の様に言う。

ラヴィンは、臣下の態度を崩さずして。

「どうでしょうか。　主の意向に沿う気持ちは十分に在りましょうが・・、実現まで導く手腕は微妙かと・・」

「フム。　お前もそう思うか・・。　しかし、未だに王家へ忠誠を誓う貴族は多く。　王子に取り繕う阿呆は出来ても、政治や国の理を変える気構えを理解する賢き者は少ない。　今一度、今一度に大臣や重臣達の働く政府へ、権限を戻し。　王家は、お飾りにせねば我が一族の恨みは消えぬ。　あのハレンツァが靡くのは、過去の粛清を正しき事と思うて居るからよ・・。　馬鹿馬鹿しいにも、程が有るわえ。　マリアンヌを殺したの、は王家の為、政治の混乱を無くす為ぞ。　それが理解出来ん輩は、誰でも全て阿呆よ」

「御意に」

「ラヴィン。　金を回す故に、アグジに暗殺を頼む。　数日の間に、我等が裏切り者同然の“老いぼれ盾”を殺せ。　これ以上嗅ぎ回られては、後々の面倒じゃ」

「は。　ですが、アグジは別件で働き、まだこの王都に戻って居りません。　戻るまで、暫しお待ちを」

「うむ。　細かい所は、お前に任す」

「はっ」

ラヴィンは、スッと立つのと同時に、背後の闇に溶けて行く。

誰も居なくなった間に残った人物は、両手を叩く。

「ユーシス、ユーシスよ」

すると、玉座の後ろから、金髪を長く伸ばした女性が現れる。　腰には短い短剣を差している。　顔を見ると中々の整いで、肉体的にも色めかしい上に、まだ若々しい肌艶だ。　白い服でスカートを引き摺る様に近付き、自分を呼び寄せた人物の脇に来ると。

「ご主人様、お呼びですか？」

「ああ、寝室に連れて行ってくれ。　今日はもう休む」

「畏まりました。　では、御手を」

ユーシスと云う女性の手を掴んで、身を立たせた人物。　ユーシスの身体に寄り添いながら、ヨチヨチと歩き出す。　そして、玉座の後ろに有るドアに近付いた時。　左手を、ユーシスの胸に置き撫で出した。

「ユーシス、お前に頼んだジャニスの事だがな。　どうだ？」

胸を触られても、全く顔色を変えぬユーシスは、怪しくも冷たく微笑み。

「流石に、ご主人様のお孫様ですわ。　覚えは早く、私を見るとベットに連れ込みます」

「おお、そうかそうか。　アレには、子供を儲けて貰わねば成らん。もう少しで、5大公爵家の一人の娘を、アレに嫁がせて貰える手筈が整う。　そうしたら、お前に教わった作法で、早々と孕ませて貰わんとな。　ま、子供が出来たら用無しだが」

この人物、自分の孫ですら物扱いの様だ。

だが。　ユーシスと云う女性も似たり寄ったりか。　その言葉を聴いても顔色を変えず、冷徹な笑みを浮かべて。

「まぁ、ご主人様は恐ろしい方ですね」

「ふふ、野望の為よ。　ユーシスよ、孫に子供が出来たら・・後の処理は頼む。　どうせ、魂まで腑抜けた孫だ。　お前の身体を定期的に預ければ、死ぬまで腑抜けになる。　殺すには気が引けるから、精精快楽と3食だけは与えてやるわい」

老人は、こうして女性と暗い廊下に消えて行くのだった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪護衛は無事に≫

「ぶぁっくしょんっ！！！！！」

セイルとユリアが、同時にくしゃみをした。

鼻髭を白くするクラークは、降り続く雪を見上げ。

「全く、出発してから5日・・。　良く降り続きますなぁ～」

クラークの間近に居るアンソニーは、事も無げに。

「今日の夕方には、ワダルの町に入れますよ。　極夜の続くこの国では、一月雪が降り続く事も在りますからね。　5日ぐらいでは、大雪とも思えませんよ」

サハギニーを肩に乗せるユリアは、セイルの脇を歩きつつ。　雪が一面に降り注ぐ街道と、雪の積もった壁を見渡す。

「しっかし、凄い雪の壁～。　道の両脇が山みたいに、雪・雪・雪

だよぉ～」

護衛する馬車を引く中年の御者は、アーメットハットに黒い厚手のコートを着ている。

「この雪の壁は、毎日“道守”（みちもり）って呼ばれる兵隊さんが、街道の雪掻きをしている所為なんだよ。　街道の所々に見える細っこい脇道は、雪を運び出す裏道さ」

「へえ～、兵隊さん大変だぁ～」

驚くユリアに、アンソニーが。

「王都には、昔から数百万以上の人が住んでいます。　その生活のためには、真冬でも商人の働きが不可欠なんだよ。　だから、荷馬車を雪で立ち往生させない様に。　５日交代の当番制で、兵隊が騎士の指揮下で道守をするんだ。　只の兵士として仕事する夏の手当てより、道守の手当ての方が高いらしいね」

「ふ～ん、稼ぎ時なんだぁ」

ユリアは、自分の数倍以上は積み上げられた雪の壁を左右に見て、感心した。

だが、ニコニコしているセイルは、あまり言葉を発しない。

（まだ、尾行けて来てる・・・）

そう。　後ろから、ピッタリと距離を置いて尾行する気配がする。

擦れ違う馬車や冒険者達に気を配りながらも、セイルが一番気に

成るのは、尾行の気配。　馬を休ませる意味での小休止がてらに、小用でも足しながら近付こうとすれば消え。　何時の間にか、また歩いていると気配がする。　セイルは、かなりのプロがやっていると緊張したのだ。

（このまま行けば、何処までも尾行される。　積荷を引き渡す相手の所まで、尾行されちゃうなぁ～）

一番の危惧だ。　自分達では無く、積荷を届けた相手が襲撃されては困る。

セイルは、正直困った。

夕方。

ユリアは、夕方で暗く為った空を見上げて。

「なぁ～んか、少しだけ夕方らしかったね」

アンソニーは、頭に溶けない雪を乗せていたのを払い落としてから。

「ワダルの町は、極夜圏の入り口だよ。　この町を過ぎると、昼間がもっと長くなる。　ワダルの町までは、少し標高が高いのさ」

夜。

ワダルの町に入ったセイル達。　馬車を止められる宿と為ると、探してみなければ為らない。　クラークは、長年旅慣れて居るから、宿屋などの密集地を知っている。　大き目で厩舎を持つ宿を探して回り、手頃な宿を見つけて泊まった。

さて。　地下にレストランを持つ宿だった。　セイル達は、御者の男性を含めて、軽く食事を楽しんだ。　金を払って頼む温かな食事は、旅の間の食事とは違って、心地よい満足感を味わえる。

入れ込みのテーブル席で食べ終わる頃。

「あの～、チョットいいですかぁ～？」

セイルは、皆に相談をする。　無論、尾行者の事。

「え〝っ、此処まで来てるの？」

驚くユリアや御者の男性を他所に、アンソニーやクラークは、薄らとそんな気配はした様な感覚を持っていたらしい。

ユリアは、フォークにジャガイモのバターグリルを刺しながら。

「セイル、ど～するのよ。　もぉ～し届けた先で何か在ったら・・・ヤバくない？」

セイルも困った顔で。

「ヤバいよぉ～。　まだリオンも来てないなら・・テトロザさんに頼むしか無いよ」

クラークやアンソニーとて、一度は襲撃されて居るだけに。　尾行されていると感じるだけでも、笑い事では済まされない。

御者の男性は、困った顔で酒を呷り。

「とにかく、届け先まで尾行されたら困りますよ。　どうにか出来ませんか？」

ユリアは、馬車の荷台を、ソックリ別物に変えて見たらいいと思う。
　そして、荷台に皆が隠れれば、ＯＫだと・・。

しかし、アンソニーやセイルは、尾行者の確保が最優先だと思う。

クラークは、それなら一芝居打てばいいのではと言い。　ランプの火に導かれて遣って来た火の下位精霊の、“火廻り”（ヒマワリ）と云う燃えた花の精霊と共に、コソコソ話をした。

次の日。

遅めな時間帯で、もう町に人が歩き回る頃だが。　起きたセイル達に朝が来た。　幾分太陽が遠めな感じだが、雪雲の切れ間に陽の光が弱く見えている。

「ご宿泊ありがとうございました」

馬車付きの宿泊だったから、馬を面倒見ていた厩舎の係りが、セイル達を見送ってくれる。　ま、夜通しでセイルやアンソニーが馬車の見張りをしていて。　厩舎の守番には、チョット不気味な一行だとは思われただろうが・・・。

さて。　宿屋が立ち並ぶ界隈の道を行き出す一行だが。

「クラークさん、ゆっくりして下さいね」

馬車を護衛する面子には、何故かセイルとユリアだけしかいない。
セイルは、馬車の荷台の扉を半開きにしてこう言った。

（居る・・）

セイルは、荷台の扉を開いて言葉を発しながらも。　近い何処かで、誰かが此方を窺う視線を感じるのだった。

アンソニーは、具合が悪いのか。　荷台前の運転席隣にてグッタリしている。

「悪いね。　陽の光が有る朝は、少し弱いよ」

と、横に居たユリアに言って、紳士帽子を深く顔に被った。

「アンソニー様、マジでモンスターみたい」

「うむぅ・・」

雪を掻いて運ぶ人々が働く光景などが見える宿屋街を抜け、ワダルの町を出て行くセイル達。　また、雪が道脇に高々と積まれた街道を行く。

それは、昼だった。

（やはり、アハメイルへ行く気だな・・）

白いローブに身を包む覆面の何者かは、遠くからセイル達の引く馬車を見つめている。　ラヴィンに雇われた手の者だ。　セイル達の動きに、追跡者として細心の注意を払い。　時として街道から外れ

て、積みあがった雪の山の上に上ったり。　先廻りする形で前に出たりして、尾行をハッキリさせない手段を取っていた。

ラヴィンから、馬車の行き先として、アハメイルに行くと言う情報を貰った。　アハメイルへ向かう街道は、大きく分けると一般的には、二つしかない。　尾行する側とするなら、見つからなければいい話の楽な部類だ。

確かに、セイルが尾行自体には気付いている事を、尾行する側も気付いた。　だが、雪が降り積もる旅路で、どれだけ急げど行き先は知れている。　尾行の経験が深いこの曲者にしてみれば、捕まらなければ馬車を追跡するなど容易い事なのだ。

（相手が気付こうが、俺が捕まらなければどうって事は無い。　寧ろ、俺を歯痒く思いながら、荷物引渡しの場所まで導くのが関の山だろう。　ガキがリーダーなチームだなんて、簡単なモンさ）

曲者は、慣れて卓越した技術を有するだけに、凡そ（おおよそ）の事態を想定して尾行をしていた。　何が起こっても驚かない自信が有ったのだ。

だが・・。

セイルが後ろを気にし始めた昼頃。　この曲者は、距離を離して街道脇の雪の上から、こっそり見ようと脇道に反れた。　そして、緩やかに蛇行しながらも一本道の続く街道を、上から見渡そうとした瞬間。

「あ」

思わず小さな声を出した。　凄い勢いで街道を走り始めた馬車が見える。　曲者は、呆れて苦笑いを目じりに見せる。

（おいおい、冬の街道を馬で走ったって、夕方前には馬がバテる。　そんな浅墓な事で、俺の目を眩ませると思えるのか？　あははは、全く子供の考える事だぜ）

曲者の男は、内心でセイルを蔑み笑った。　雇い主のラヴィンは、

“あの若いガキには気を付けろ。　生半可なヤツじゃない”

と、言っていた。　だが、尾行のプロであるこの曲者からするなら、剣の腕は確かでも、尾行される事は無いから、知識が浅墓なのだと思った。

（どれ。　少し楽させて貰うか）

丁度、勢い緩く走る荷馬車が、後方から見えて来た。　幌馬車だが、馬の足取りからして、積荷を運んだ帰りなのだろう。　走るスピードも速めだし、荷馬車の揺れる音が軽い。　曲者は、雪道の街道に飛び降り。　通り過ぎる時に、荷馬車の脇に飛び付いた。　幌を張る木枠に掴み掛かり、脚を荷台下に走る木に掛けたのだ。

荷馬車の荷台は、人も居ない。　いざと為れば、隠れられる訳だ。　曲者は、楽な尾行で高い報酬を得ようと思い、ほくそ笑んだ。

しかし。

然程も行かない所で、なんと走っていたセイルの護衛する馬車が、普通にノロノロと進んでいる。

曲者は、チョットだけ走って行って距離を稼いだのだと理解して、笑いそうに為った。

（おいおい、そんな少しで俺の目を眩ませると思ったのかよ・・。
あんな槍遣いの有名なオッサンも居るってのに、浅墓過ぎるだろ？）

そう、曲者はこう思って、声に出して笑いたい気持ちだった。　いや、実際に誰が見ても、そう思える。　重い荷物を運ぶ二頭立ての馬車では、これから先に４日程の旅路を想定しても。　この先、馬に無理はさせられない。　だから、少しだけ先に行きたかった。　恐らく、届け先を見届けられたくないとか、そんな理由だろう・・と。

幌馬車の荷台に急いで入った曲者は、行過ぎる過程で馬車の両脇に歩くユリアとセイルを確認。　馬を操る御者の横には、未だにグッタリと眠るアンソニーの姿を見た。　少し先に行った街道上に曲者は飛び降り。　後から来るセイル達を、積まれた雪の上からでも遣り過ごしながら見て居ようと思った。

街道脇に積み上げられた、雪の上。　セイル達の護衛する馬車を待った曲者は、また今まで通りの尾行が続くと思った。

曲者の思い通り、セイルとユリアの護衛する馬車が間近に迫る。

だが。　この数日間の中で、今までと違う局面に成っていた事を、曲者は気付いていなかった。

それは・・。

「・・・」

曲者は、今まで先回りしても、遠目にセイル達を確認して、馬車の間近には絶対に近付かなかった。　行く方面が一緒なのだから、少し離れても関係無い。　この街道を旅する冒険者や旅人も居る。自分を特定する事が出来ない以上、待ち伏せも難しい。　だが、この見ている場所は、最後の分岐点の分かれ道だ。　直進する街道と、迂回して辺境都市を通って西の街道を行く。　二つのルートの、最後の分岐点と言っても良かった。　此処を見届ければ・・・。

そう。　セイルは、此処に曲者を招待したのである。

気配を間近に感じたセイルは、グッタリしているアンソニーに近寄った。

この時。

曲者は、分岐する分かれ道手前で、雪の上からセイル達を見る。

瞬間。

「あ〝っ」

曲者は、自分の視界の中で、今までグッタリしていたアンソニーが急に身を起こして、紳士帽子を真上に・・。　つまりは、自分の視界の中で、自分の居る上に放ったのに驚いた。

この時をセイルは、見逃す訳が無い。　先立って荷台を軽く叩いて、クラークと連絡を取り合っていた。

「それっ」

セイルが声を出した。

「おおっ」

声を出したクラークが、馬車の荷台から飛び出す。

「ちっ！」

焦った曲者は、セイルとクラークが、自分を捕まえる為に動くと予想。　雪の積み上げられた急斜面を、林の点在する雪原へと逃げようと思った。　が・・・。

「ハッ」

曲者が息を呑む音を口に出した。　立ち上がった目の前に、アンソニーが立ち塞がっていたのだ。

「・・・」

目に、赤々とした炎の様なオーラを湛えたアンソニー。　マントにカジュアルな服装の軽装ながら、曲者を見る目は怒りに近い。

「あ・・ああ・・・」

驚くばかりの曲者に、アンソニーは・・。

「尾行する理由を、答えて貰おうか」

と、強い口調で問う。

だが、曲者の属する集団は、普通の集団では無かった。

（此処までかよっ）

曲者は、口を動かす。

「待てっ」

アンソニーが曲者の口に手を宛がおうとしたが・・・、遅かった。

「むぐぐぅ・・・」

曲者は、舌を噛んだのである。

雪の上を急ぐクラークとセイルへ、アンソニーは。

「済まない。　自決されてしまった・・」

途中で止まったクラークは、大いに驚き。

「なっ・何とっ?!」

だが、セイルは上まで遣って来た。

死んで口から鮮血を吐き、雪を赤く染める曲者を見ると。

「裏の集団に属するプロですね。　失敗して捕まる者は、集団の掟

で死が待つと言います」

セイルは、曲者が纏う白いローブの下を検め出した。　黒い布で覆う顔を晒し出すと、歳は中年ぐらいの色黒な男性だ。　死んだ顔にすら、何か不気味な印象を受ける。　そして、衣服を検め様とすると、首筋に蛇に絡まれた財宝の刺青が見つかる。

セイルは、それを見て。

「わぁ～お、これはヤバイ。　世界的に盗賊依頼や隠密依頼を引き受ける組織で、“オブシュマプ”（呪われた金貨）だ・・。　凄いのに狙われてるよぉぉぉ～」

アンソニーは、雪の上で佇みながらセイルに。

「そんな恐ろしい組織を知っているのか、君は？」

高々と積み上げられた雪の上から、セイルは馬車の横に居るユリアを見下ろす。

「むか～し、僕の誘拐をしようとした組織ですよ。　まだ孤児院へ来たばかりのユリアちゃんが、僕の代わりに誘拐され掛けて、祖父の組織する警護隊に阻止されました。　それから半年ばかり、影で遣り合ったらしいです。　祖父は、首謀者を見つけては、処分したと・・言ってましたが。　まさか、また遭うなんて、運命なんですかね。　笑える」

アンソニーの目に映るセイルは、笑ってなど居ない。　寧ろ、危惧すら滲ませる顔だ。

「セイル君・・」

セイルは、アンソニーに顔を向けて。

「アンソニー様。　その・・誘拐の事は、ユリアちゃんには内緒で」

「・・・、解った」

アンソニーは、何故ユリアに“内緒”なのか解らない。　だが、セイルの本気の目が鋭く、何か深い理由が有るとだけは読み取れた。

≪護衛終了。　でもでも≫

フラストマド大王国の王都アクストムから、世界最大の交易都市アハメイルへ、１０日以上も掛けて荷物を運んだセイル達。　雪が降る午前中に、様々な高さの建物だらけが見渡せるアハメイルに入った。

「うひゃ～、此処も人と馬車だらけ」

街中に入ったユリアは、雪の降る中でも太い通りを行き来する馬車や人の多さに驚いた。

セイルは、この都市には何度も来てるし。　マーケット・ハーナスの首都ヘキサフォン・アーシュエルでも似た光景は見れるからか。

「ユリアちゃん。　あんまり、ヘキサフォン・アーシュエルと変わらないと思うケド・・・」

途端ユリアは、セイルの胸倉を瞬時に掴み。

「何事もな、ムードが大切なんだよ。　ムードがぁ～」

「へっ・へイっしゅ」

クラークは、この活気溢れた街を久しぶりに見て嬉しそうだ。

「いやいや、やはり人の活気はイイですな」

アンソニーは、しみじみと。

「私の昔の頃より、活気有りますね。　雪が降っていても、溶かしてしまいそうだ」

セイルは、荷馬車の届け先の場所を聞きに、街を巡回する兵士を探した。　このアハメイルでも指折りの博物館を運営する貴族の、マーリ・チェキスト・ミカハリン。　爵位は古くからの侯爵で、クランベルナード王の母方と血筋関係に当たる人物ならしい。

博物館“マロードビションズ”（知識を飛ばす鳩）と云う名前は、この都市では有名だった。　場所を兵士に聞けば、其処まで案内してくれると云うので、誘われるままに文化区へ。　博物館や美術館

に演芸場など、犇く文化的娯楽施設と知識を深める場が融合した区域も人が多く。　傘を差して羽根の団扇を持つ貴婦人なども居れば、冒険者や旅人なども蠢いていた。

その様々な様相の建築物を見ていても、半日は潰せそうな程の多式多様な建物が並ぶ通りを行けば。　３つの塔型の建物が特徴的な、全体的に城を思わせる大型の建物を発見。　敷地を囲む朱色の外壁を雪の中で掃除するオジサンなどが、歩く路上から見える。

「アレがそうだよ」

と、兵士が教えてくれる。

セイルは、裏側の入り口まで教えて貰い。　その塔を見上げながら客に混ざって、外側の外壁を歩き沿うのだが。　五十歩百歩歩けど端が見えない。

途中で館内へ入館する事が出来る門を、ゾロゾロと潜る旅人や、アカデミアンローブ（通学ローブ）を着た学生などを見たユリアが。

「なんか、スッゴイ館だね。　お城違うの？」

門から中を覗いたセイルは、入館料を受け取る女性の働き手を見て。

「寒い中でも美人は美人～」

クラークも、庇の有る小屋の中で、カウンター側から入館料を受け取る中年の美女を見て。

「うむ～、良いですな～」

アンソニーは、瞑目して。

「フッ。　そろそろ愛の手が欲しい頃かな。　まだ、身体も完全では無い・・・」

アンソニーが言葉を途中で止めたのは、異常な魔力の上昇を背後に感じたからであり。

「うほっ、燃えているっ！」

ユリアが覇気を燃やして怒る姿に、御者の男性が驚いた。

馬車が再び歩き出す頃。

「うう・・イタイ」

頭を押さえて涙を浮かべたセイルと。

（うむむ、何でワシまでぇぇぇ？）

抓られた腕を摩るクラーク。

「遂に・・、私までか・・・」

向う脛をユリアに蹴られて、肉体的痛みが無い代わりに、精神的にダメージを負ったアンソニーが居て。　顔に手を当て、何かに悩んでいる。

「ガルルルル・・・男共ってムッカツクっ！！！」

怒ったユリアが、馬車の先頭をズンズン行く。

雪の積もった館沿いの道上。　珍しく降りて歩くサハギニーは、槍仲間のクラークを見上げて。

「正直・・・同情する」

「済まぬ・・」

サハギニーは、クラークの肩にフワリと現れて。

「男・・・だもんな」

「精霊と男同士を分かち合えるとは、嬉しい限りですな」

「槍のダチとしてな、ウンウン」

さて、距離的には、３００メートルを優に超えた長さを誇る館の外壁を、人の行列も在る中でやっと曲がり。　３つの塔の裏側に回り込む時には、昼頃だったのかも知れない。　文化区の中に設けられる、施設付随のレストランに入る人が目立っていた。

警備の兵士が護る戸の開けられたアーチゲート前で、リオン王子から預かった書状を見せて、敷地に入る一同。　細かい砂利を敷き詰め、人や馬車の通る黒い石畳の道を浮き立たせる手法の景観は、完璧な手入れが行き届いていた。　建物の裏手をハッキリ見せず、また殺風景にもさせない裏庭。　雪木蓮と云う冬に花を咲かせる樹木が、頭上を赤く小さな花びらを咲かせて彩る場を潜り抜けると。

其処には、裏手の入り口がひっそりと存在する。

アンソニーは、セイルの脇で。

「この手入れをする執事か庭師は、芸術的に感性が豊かだね」

セイルも、流石に育ちからかそれが解る。

「植物を良く知っている手際ですね。　木の剪定で生み出す枝と枝の間・・この空間の開け方が完璧です」

そう。　木の剪定とは、庭師の腕と感性が見える。　枝ぶりを強調するだけでは、ダメなのだ。　庭と木が一体に成る絶妙な隙間を枝に生む事で、木々の間から庭を窺わせる。　一つの風景美を、隠しながら芸術的に生み出すのだ。

クラークやユリアも、その意味はなんとなく解る。　雪が舞う中で、極夜では無くなった暗がりの昼間。　雪の中で咲く花や、常緑の木々と落葉した木々の枝の間から、裏庭の向こうを窺わせる雰囲気。　情緒・・・。　その繊細な感性を窺わせる仕事ぶりなのだ。

見惚れる一行の耳に。

「何方ですかな？　今日に、来客のお約束は御座いませんが・・」

と、少し老いた男性のハッキリとした、だが優しい声が響く。

「・・」

御者も含んだ5人の顔が、裏口の前に出て来た紳士に向かった。

・・・。

「そうで御座いましたか。　これは知らずとは、云え失礼を・・・」

荷馬車の荷物の中身を知った執事の老人は、セイル達を博物館内の応接の間に案内してくれた。　セイル達は、早く荷馬車の御者を王都に戻す為、帰り支度をさせてやりたいので。　宝物を安置する場所への運び込みにも、このまま付き合う事にしていた。

早速、積り積もる話をする為に、貴族の女性を描いた肖像画や、昔の著名な名画が壁や装飾台の上を飾る応接室にて、館長である貴族の女性を待つ事にした。

「紅茶でも御召し上がってお待ち下さい。　本日、主は、冒険のお仲間とお会いに成って居ましたので。　そろそろお戻りに為られると思います」

温かい紅茶が欲しいと見ていたユリアは、ポカ～ンとして。

「え？　ぼ・・・ぼ～けんしゃなの？」

白髪を短くし、背の高い身体を恐縮させる執事の紳士。　メイドが運ぶ紅茶に添える砂糖や、砂糖漬けしたドライフルーツの瓶をテーブルに並べながら。

「ええ。　何ともお恥ずかしいお話ですが。　お嬢様・・いえ。主は、美術品を捜索する考古学者でも有ります。　古代の墓などの捜索や、古い美術品を見つける旅に同行する事も御座いまして・・」

ユリアは、その行動的な姿勢に共感。

「カッコいい～」

苦笑いのセイルとクラークは、何故か誰も居ない横を向く。

さて。　執事も消えた応接室で少し待って居ると。

「今頃届いたの？　クラン小父様の使者って遅いわね」

出入りの扉の向こうから、張りの有る女性らしい声が聴こえて来た。

事態を知らないからこう云うのだろうが。　セイル達一同からすると、皆が苦笑いである。

「ご苦労様～」

元気な声を上げて応接室に入って来た女性。

（うわぁ）

ユリアは、その女性に目を見張る。

入って来た女性は、黒いズボンをタイトに穿きこなす。　スマートで大人びた女性だった。　鋭く上がった目じりは、気の強さを見せる。

赤いルージュの塗られた唇は、とても女性的なのに、白い肌は化粧を匂わせる白い肌。　色合いの薄い金髪の髪は、首に絡む様に切れ込みが入った緩いストレート。　首筋に揺らめく毛先が、躍動感を魅せる。　黒い上着のチョッキタイプのジャケットに、白いフリル袖のＹシャツ。　翡翠色の細いネクタイが、小振りにハッキリ膨らむ胸のラインへ沿う。

その女性は、セイル達の前に来て。

「同じ冒険者同士として、堅苦しいのは抜きね。　私は、この博物館の館長もしているマーリ。　今回は、護衛ご苦労様～」

そんな元気なテンションのマーリを見て、一同が思うのは・・。

（この人で、あの宝物を護れるのかな・・・）

だった。

さて。　一応は、持ってきた宝物の事を語らなければ成らない。

セイルは、気楽に構えるマーリを同席の元に置いて、宝物の危うさを語った。　やはり、金目の物と成る財宝の様な品も有る。　警備上、兵士とは別に、私兵で剣の腕が達つ者数名に、魔法の心得者も雇うマーリ。　そして、時折仕入れる情報で、探検に向かうチームを、何時も斡旋所で結成しているらしい。

だが、先ずマーリが疑ったのが、アンソニーの事だ。　宝物の重要性や、王に直に謁見してどうこうの話に成るのだから、仕方も無い。

セイルは、執事の人に人払いを頼み。　マーリと執事以外はチームの面々のみにして、時間を掛けて初めから全てを語る事にする。

マーリは、王が昔の王子の遺物を、心無い者に渡したくないから、自分を指名して引き渡したのだと思っていた。　だが、セイルの家の事実。　クラークの家の事実。　そして、アンソニーの秘密と、蠢く策謀の末端の臭いを知らされて行く内に、自然と顔が引き締まって行く・・・。

セイルは、リオンが戻り次第に、この博物館の警備を強める事を頼

むと言う。

少し声の高いマーリは、腕組むままに顔色を曇らせ。

「その尾行して来た怪しい奴は、結局自決したんでしょ？　此処に運ばれた事は知られて無い訳だし・・、そこまでする必要有るの？」

「死んだ人の首には、“オブシュマプ”の集団に属している刺青が有りました」

マーリは、口を開かせて驚き執事と見合う。

「チョット待ってよっ。　金で犯罪を手伝う大型組織じゃないっ！！」

「はい。　僕も昔に誘拐されかかった事が有るらしくて、その集団の事は祖父から聞かされました。　ですが、問題なのは、彼等は金で機械的に犯罪を成功に導く為に暗躍する組織。　つまりは、頼むクライアントが居ると云う点では、我々冒険者と同じ・・。　其処に有る事実は、依頼主が金を出して求める何かが有る限り。　彼等は、何処までも目的の物を求めて、これからも行動して来ると云う事です」

ユリアは、難しい顔に怒りを孕ませて。

「いい迷惑っ」

アンソニーは、本気で考え込むマーリに。

「とにかく、王都では、今回の黒幕をハレンツァ殿がリオン王子の

手の者と捜索して居ます。　主犯格の黒幕が判り、依頼が成立しなくなれば、自然と狙われる危険は去ると思います。　それまでは、暫く警戒をするか。　宝物を何処かに隠すなどの手段を講じて下さい。　本来なら、運び出すのを悟られる前に持ち出す気でしたが。　どうやら、全ての事に、陰謀めいた手が回っている気配が在ります」

クラークは、深々と頷き。

「ですな。　先ず、我々が完全な隠密行動をしているのに、丸で手の内を知られて居るように襲撃された。　そして、運ぶ間も尾行が付いていた・・・。　自決したあの曲者が、その様な組織に属するなら、他にも仲間も必ず居るはず。　果たして、此処までの運び込みが知られていないとも・・、云い難い」

するとマーリは、大きく一つ頷き。

「解ったわ。　今日から、この博物館の警備を増やすわ。　私の入るチームは、斡旋所に2・3つ居て。　今は仕事が少ない時期で、炙れてるチームも居るし。　その皆に声掛けて見る」

セイルは、頭を下げて。

「宜しくお願い致します」

マーリは、サッパリと笑い。

「重要な話だからいいわよ。　それより・・、一つお願い有るんだけど」

セイルは、仲間と見合ってから。

「はい、何でしょうか？」

「実は、私の博物館と美術館って、この横の通り沿いの下った所。ん～、宿屋街と商店街が合わさる商業区と隣接してるの。　んで、私の運営する館内でレストランを営むのは、従兄弟の伯爵家の一族でね。　商人として、隣に宿屋（ホテル）も経営してるのよ」

ユリアは、話が見えず。

「それで？」

マーリは、気の合いそうなユリアを見て。

「うん。　君たちはリオン王子とも仲イイし、冒険者としての腕も有るんでしょ？　このアハメイルに少し留まって、その宿で控えてくれないかな？　日中は人目も有るし、居なくてもいいの。　問題は、人気が一気に無くなる夜・・」

セイルは、それには直ぐ反応し。

「いいですよ。　どうせ我々も、リオン王子が戻るまでは、この街を離れる気は有りませんし。　チョット事態が不安なので、長逗留も悪くないと思いますから」

すると、マーリと云う女性は元気な笑顔を見せ。

「良かったぁ～。　なら、私が直に頼んで手配するわ。　結構部屋数多い大きな宿屋だから、個室で頼んであげる」

セイルは、先に宝物を運び込む事を聞く。　馬車を操る御者は王都の住人で、何時までも此処に残すのは可愛そうだ。

マーリは、地下金庫の所に運び込む事を決め、セイル達にも手伝って貰う事にした。　運び込みを指示して、マーリは直ぐに併設レストランへと向かって行く。　今なら、まだその宿を営む一族の誰かが居るからだった。

宝物を運び込むのは、深い地下へ掘られた大きな人工洞の地下保管庫。　ヒンヤリしているが、水分を余り感じない石窟洞窟で。　キチンと部屋割りに区画され、各部屋に向かう為には、頑丈な鉄格子の門を潜らねば成らない。

セイル達、他の屈強な男手の作業員へ宝物を運び込む指揮は、執事のヘレーニムがする。　静かな振る舞いながら、指示は手際良く。　能力の有る執事だと窺えた。

セイルやクラークは、運び込みをしながら御者の男性と話し合う。　この人物も情報源の一人。　一人で帰せば、途中が危ない。　セイルは、核所と呼ばれる、アハメイルの行政中心地に行く事を話し合った。
軍部の人に護衛して貰う為にである。

さて。

セイル達が運び込みをする間。　マーリは、レストランに来ていた宿屋を運営する貴族の若女将と、宿泊の話を付けて来たらしい。

「セイル君だっけ？　先に宿に行って見て。　一晩二晩なら、御者

の人の寝室も提供してくれるから」

一汗掻いたセイル達。

「はい。　では、そうさせて貰います」

応接室に戻ったセイルは、マーリから案内役の手代の男性を紹介して貰って。　馬車は、明日にでも引き取る事にして。　一旦マーリの元を後にする事にした。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

セイルとユリア編も、漸く前半の折り返しを過ぎます＾＾。　この後は、ポリア編の続編をお送りする予定ですが。　何分内容が濃い～ので、もしかすると別の話を挟む形に成ります（謝り）

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2

セイルとユリアの大冒険　2

≪基点の宿へＧＯ≫

セイル達は、マーリに紹介された宿屋に、このアハメイルを去るまで逗留する。　その期間は２０日も在るかどうかだが。　その間は、様々な不安と衝撃の連続だった。

さて。　セイル達は、手代の男性と共に外へ出た。　頭にバンダナを巻き、鼻の頭をしもやけで赤くさせた手代の男性。　目じりが飲酒の影響で垂れ下がったと思わせる、４・５０代の人の良さそうな人だった。

雪が止まない路地に出て、積もる路地の雪をユリアは見ながら、手代の男性に。

「この脇道って、雪が降っても道が狭いから、人が多いと危ないわね」

「えぇ。　あっし等は、朝に先ずは雪掻きしたり、路面の凍った氷割りをします」

「うはっ、毎朝大変だわ」

「なぁ～に。　マーリ様は、あっし等みたいな元は仕事に炙れた“塒無し”（ねぐらなし＝路上生活者）に、仕事と寝る場所をくれるンす。　冬は仕事が限られるから、あっし達みたいなその日暮しの者には、有り難い人ですよ」

「へぇ～、セイルのウチみたいな事してるのね」

見られたセイルは、苦笑い顔で。

「ウチは、地位を護る為の慈善活動だよ～。　こっちのマーリさんは、私財を使って自分の意思でやってるから、もっと偉いと思うよ」

手代の男性は、皺の滲む赤い顔を綻ばせ。

「マーリ様は、年末とか長休みに入る時に成ると、貧しいみんなへ臨時給金くれたり、貰い物をくれたりするんだ。　故郷に里帰り出来る様に、手土産くれるンす。　マーリ様みたいな貴族は、何時まで居て欲しいよ。　アレでまだ独身だなんて、世の男は何処を見てるンだか」

クラークは、軽く微笑み。

「少し気が強そうだが、気風が良さそうで悪い女性では無いな。綺麗な女性でも有るしの」

「んだんだ、マーリ様はベッピンださ」

雪の降る建物が立ち並ぶ通りを抜け、街灯や並木が雪化粧する人通りの多い道に踏み込んだ。　そして、道を曲がった所で。

「ホレ、此処だ」

その案内された建物を見て、セイル以下皆は固まる。

ユリアは、セイルに。

（セイル・・デカいよ・・）

（だね。　一瞬、大貴族の屋敷かと思った・・・）

雪の降る中で遠目に見上げる建物は、ドーナツの半分の形をした様な館だった。　ズデ～ンと見渡せる横にも長く、上にも高い屋敷で、敷地面積はかなりのものだと思える。　庭も雪色の森の様で、格式高い宿とは一目で解る。　正直、アクストムの斡旋所で利用していた二階から上の宿など、安いだけがウリの寝泊り宿だし。　ワダルの街でも、馬車さえ置ける宿であれば良かった様なもの。　こんな格式高い宿などに、お目に掛かるとは・・・。

心配に為った御者の男性は、セイルに弱弱しく。

「本当に私も泊まっていいんでしょうか・・・」

だが、マーリの紹介が有ると腹を括ったユリアは、勢いに任せて。

「当ったり前じゃん。　偶には、イイ部屋泊まっちゃおうっ！！！」

そして、夕方が近付き暗く成り始めた空模様の下。　様々な色をした個人持ちの馬車や、裕福な客を乗せる高級馬車屋が使う黒塗りの馬車が、大通りを来る。　そして、次々と大門の開かれた入り口を

潜り、宿へ向かう光景が目に映る。　一同は、やや大門手前に在る徒歩専用の入り口で、庭の森の中を抜ける石畳の道を見つけて敷地内へと。

手代の男性は、入り口前でマーリの元へ戻った。。

宿屋まで辿り着く頃には、皆が雪を被る。　大きく長いガラス戸の入り口前には、寒い中でも客を迎える礼服の男性達が常に居て。

「いらっしゃいませ、何名様でしょうか？」

と、馬車から降りるゴージャスな服を着た貴族の女性や、身形の良い商人などの相手をして。　宿の中へと案内をする。

入り口前の軒下を見たユリアは、何故かムカムカと来て。

「セイルっ、蔑まれたら名前出せっ！！　オートネイルの名前出しちゃえっ！！」

苦笑いのセイルは、最初の旅立ちの言い交わしを忘れていると思い。

「何で？　その名前は、基本出さないで旅するヨテ～でしょ？　あは・あはははは・・・」

ウンウン頷く鼻水姿のクラーク。

アンソニーは、顔に手をやり。

「ゴメンよ。　僕が名前を出せたら楽なのに・・・、隠密って大変だね」

［何処が？］（作者）

セイルは、天女などの装飾を表面に施された、太い石柱が支える立派な軒先に入り。　先ずは其処で雪を皆で落とし合ってから、礼服姿の宿屋従業員に声掛けた。

「あの～、博物館の館長をしている・・、マーリさんの紹介で来た冒険者なのですがぁ・・・」

客を見ていて、自分達以外で冒険者らしき者など、誰一人として見なかった一同。　生まれは、ユリア以外は人並みを遥かに超えた存在だが。　セイルは、控え目な姿勢で尋ねてみる。

「あぁっ、ミカハリン様の申された皆様ですね？」

「はぃ・・」

「お待ちして居りました。　皆様の事は、我が宿の運営をされて居ります主の、エメラルダ様から仰せ付かって居ります。　これから皆様の事は、別の従業員によって接待させて頂きますので。　ロビーの中にお入り、お待ち頂けますでしょうか。　早急に、係りの者を呼びますので」

セイルは、返事が首だけで。

（マジっすか？）

対応が、おかしいと思う。

さて。　入ったロビーは、凄かった。　絢爛豪華な大小のシャンデリアが、高き天井から昼間のように広々としたロビーを照らし。内装は、光と合わさって黄金の様な色をしている。　純度の高い大理石の床、高級な絵が壁を彩り。　曲がったり角と為るスペースに、四隅を見せぬ為に配された生け花の入れられた花瓶が、どれもデカい。

待たされる間に通されたのは、個室の応接室。　備わった菓子や紅茶は最高級品で、支給してくれる専属の可愛いメイド付き。

此処で、ユリアは、アンソニーがメイドに甘い囁きをすると思っていた。　メイドの若い女性は、絶世の美青年のセイルと、大人びた絶世の美男であるアンソニーには、可愛らしさと照れ染みた素振りを見せるからだ。　だが、クラークが羨む中で。　セイルもアンソニーも、何故かメイドの若い女性より、最近の時事による世間話に花を咲かせていた。

そして・・、此処に新たなる運命が・・。

「お待たせ致しました」

と、ドアが開く。　その現れた声の通りはとても聴こえの良い、トーンとしては低めでやや年配の大人びた女性を思わせた。

皆で声に向いて立ち上がると。　ドアの前には、黒服の男性従業員二人を従え、大きめと云って良いふくよかな女性が立っていた。黒いドレス風のロングスカートで、首や顔は化粧の少ない白い真珠の様な肌だ。　しなやかで艶やかな黒髪を後頭部に結い上げ、落ち着いた髪飾りで留めている。　指だけ出し、手の甲などを隠すレース風の薄い婦人用のレディラテックス（手袋）をする姿は、正しく

貴族の女性らしい。

先ず、その女性に対してセイルが、

「どうも、済みません。　マーリさんの紹介ながら、冒険者風情がこんな格式高い宿に来まして。　真に失礼いたします」

と、紳士の示す一礼をすれば。

「雪に汚れた姿での訪問、失礼致します」

と、アンソニーが流麗な挨拶をする。

クラークも、貴族の見せる礼儀の一礼を示し。　ユリアと御者は、慌てて頭を下げた。

少し低い声がとても魅力的な、このふくよかな姿の女性は、温かな母性の滲む優しい笑顔で皆を見ては・・。

「皆様は、身形は外して礼儀の確かな方々ですわ。　マーリ様は、私の姪でして、従兄弟のエメラルダとは、幼い頃からの親友ですのよ。　私は、シンシアと申します。　これから、皆様が居る限り、身の回りの事をお世話させて頂きますわ。　エメラルダは、外せない用事でお客様への挨拶回りをしているので、先にお宿へ案内させて頂きますわね。　お食事も支度が出来上がってますから、直ぐにでも大丈夫ですよ」

それに対するセイルは、

「行き届いた持て成しに、感謝致します。　所で、１・２日ですが、

御者の方の寝室もご用意出来ますでしょうか？」

シンシアと云う女性は、穏やかに微笑み。

「はい。　そちらも含めて、伺って居りますわ。　皆様には、他のお客様の目を気にしない様に、宿の方では無く。　別宅の離れへ、ご案内致します。　そちらは、部屋が全個室で６部屋御座いますので、皆様のお泊りが可能です」

ホッとした笑いで御者を見たユリアは、場違いな場所に来てガチンガチンに固まった御者の男性を見てしまった。

（あ～らら）

シンシアは、皆を離れの別宅へと案内する。　気取った貴族などが訪れ、受付をするロビーのカウンターを横切り。　一階に広がる豪華なレストランや、個室の飲食場が犇く廊下を行く。

「ロビーの奥の一階は、各地方の郷土の味を生かしたレストランが、幾つも入って居ますの。　もし、お好みのお店が在りましたら、私めに仰って下さいね。　お料理をお持ちいたします」

シンシアが、セイルやアンソニーに向けて言った。

しかし。

「まぁ、冒険者？」

「冒険者が入れるのか？」

「なんだ、アレ？」

「何か仕事でも依頼したのか？」

「だろうよ。　じゃなければ、この宿に入れる訳が無いさ」

貴族や商人は、ステイタスを格好に委ねる。　みてくれの服装が、明らかに冒険者と解るセイル達。　皆を見る客の視線は、確かにいい物では無い。　勝手に蔑み、下らない噂話をし出す者達が廊下に居る。

だが・・。

「まぁ・・、あのコ・・」

肩を丸出しにしたドレスの中年婦人が、擦れ違って見たセイルの美しい顔に、うっとりと魅入ってしまった。

「はぁ～素敵。　お母様・・見て」

まだ、大人の女性に踏み込む手前の少女が、溜め息をして母親の腕を引いた。　視線の先には、麗しく儚さ漂う美男のアンソニーへ向かっている。　無論、母親も見て、そのままに動かなくなる。

「ふむ、出来るな」

男として嗜みで、剣や武術を習う男性などは、堂々としてバロンズコートを閃かせるクラークに、腕の違いを感じたりする。　名前を聞けば、冒険者の噂に通じた者なら、このクラークを知っている筈だ。

恐らく、精霊を呼吸のように召喚し、誰も真似出来ない魔力の篭った精霊魔法を見せれば、ユリアとて瞬く間に一目を置かれるだろう。
現に・・。

（可愛いなぁ・・。　もっと綺麗な格好すればイイのに）

二十歳前後の貴族の青年が、初々しいユリアの愛らしさ漂う顔に、男心を惹かれる。　着飾った貴族や商人の娘などには少ない。　溌溂とした爽やかな可愛らしさが、ユリアには在る。

セイル達に身形を問うなど、懐の狭い事だ。　遠目で蔑んだ者も、いざ間近を通って行き去るセイル一行に、理解のし難いオーラの様な雰囲気を感じた事だろう。　セイル達チームの４人は、それぞれ生まれや育ちは違えど。　その堂々とした風貌には、自然と宿る雰囲気が在る者なのだ。

店舗ごとに違った趣向や内装の豪華レストランの間を抜けた先。奥まった所に扉が有り。　シンシアが開いて行くのは、赤い色のトンネルへ下る、大理石で出来た階段。　開いた瞬間に、外の様な冷たい空気が身体を包んだ。

赤いレンガ積みの壁や天井窺わせる廊下を歩むアンソニーが、シンシアへ。

「地下回廊ですか？」

問われたシンシアは、顔色はあまり良くないが、優しく微笑み語り掛けて来たアンソニーに、やや赤らめた顔をして。

「はい。　此処から先は、迎賓館でして。　王侯貴族の方々や、世界でも名の通った特別なお客様のみが泊まる、別館に向かいます」

ユリアは、外も見えない地下回廊を行きながら。

「でも、食事ってさっきの場所じゃないの？」

シンシアは、頷きを返し。

「えぇ。　あちらは、宿に泊まられる方々の所。　皆様には、専属で料理人をお付け致します。　館にお泊りに為られる方々には、そうしていますのよ」

ユリアは、影の差す唖然とした顔で。

（せっ・専属ぅ～？　す・凄過ぎるぅぅぅぅっ！！！）

地下回廊を抜けて上り階段を上がると、更に寒い風が吹き付けて来る。　裏庭なのか、中庭なのか解らないが、外と思われる場所に出た。

「向こうに建物が見えますな」

と、クラークが。

視界のまだ利く所に、３階から5階建ての凝った館が二つ見えた。

そこまで行くのも、窓は無いが、屋根の有る外の渡し廊下を通って行くのだ。　庭は雪化粧しているが、美女のオブジェを備えた噴水や、雄雄しき神を象った石像などが配置されているらしく。　恐らく、晴れた日にでも見れば、のんびりと暇潰しの散歩が出来そう

な広さが有る。　広い庭園の敷地内に、幾つもの屋敷が有るのだろう。

シンシアは、広い段々の階段を持つ、すり鉢状のホールを右回りで進み。　最初に見えた右側の外廊下へと踏み出し。

「皆様には、一番部屋の広い館を用意致しました。　白亜の外装をした“白鳥の館”です。　3階建ての一番小さい館ですが、各部屋は広いので、ごゆっくり出来るかと思います」

セイル一同。

（十分過ぎるってさ・・・）

と、思う。　思うだけだが・・。

夕闇の中、ランプの掛けられた外廊下を行き。　明りの灯った光が窓から漏れる館に着いた。

「此方で御座います。　さ、寒いので中へ」

重厚な白い木製のドアを潜れば、其処は暖炉の火が灯されて暖かい屋敷の中。

「うわ、暖かい」

驚くユリアは、喜んで中に入る。　丸で春の様に暖かい。

シンシアは、皆が入ったのを確認して扉を閉めると。

「エメラルダからお話を聞いて、部屋が決まり次第に暖めて置きました。　この国の冬は寒いので、ごゆっくりして下さい」

セイルは、御者の男性に向け。

「核所へは、明日にしましょうか。　今まで長旅だったので、今夜はゆっくりしましょう」

恐縮する御者の男性は、

「あ・・、俺も一緒にですか？」

と、遠慮気味に云う。

すると、アンソニーが、

「共に旅した仲ではないか。　ゆっくりしよう」

と、部屋を見に、団欒の出来るリビング先の中央階段へ向かう。

荷物を下ろすユリアやクラークも、

「そうそう。　一緒に仕事したんだからいいのよ～」

「うむ。　同じ身だ」

クラークの“同じ身”は、襲撃される可能性を含む。　近くに居た方が、彼の安全も保障出来る。　此処まで来て、彼にもし死なれたら悔やんでも悔やみ切れない。

さて、各部屋は、広い一室が二階と三階に3部屋づつ用意されていた。　クラシカルな家具に、大きめのベットが備わり。　本棚などにも、手軽に読める書物が１０冊ほど入っている。　間接照明のランプは、洒落たグラスランプで、手入れの行き届いた部屋に清清しさを感じた。

二階にクラークとユリアと御者の男性が入り。　三階には、一部屋空けてセイルとアンソニーが入る。　部屋の壁は厚みが有るのか、部屋に喜んで入ったユリアの声が聴こえなかった。

荷物を置いて一階に戻ると、料理をする音と匂いがする。　皆が集まれるリビングの右に食堂が在り。　専属の恰幅な中年シェフが、料理を作り出していた。　もう、下拵えは終わっていたのだろう。

リビングの左には、壁で仕切られた浴場が3つ程有り。　どれも地下から温泉を汲み上げて、湯船に湯気を見せている。　タオルなどの準備も万全で、直ぐにでも入浴できそうだ。

セイル達は、ステーキやら手の込んだスープやらと、豪華な食事に喜び。　風呂で身体を温める事にした。　食事中に、マーリの伝言を知らせる遣いが来て。　セイルは、衣服を改めてから向かうと言伝したのである。

≪その夜は、寒さに愛が萌ゆる≫

セイルは、身を綺麗にした後で。　マーリが使いを遣し、今後の打ち合わせをしたいと云って来たので、会いに行く事にした。　クラークは、襲撃を恐れて同行すると云い。　ユリアも、夜の博物館を見たいのから行くと云った。　御者の男性も、馬車を引いたのは自分の馬なだけに、様子を見に行きたいと云う。

セイルは、アンソニーを見ると。　紅茶の用意などをするシンシアが、キッチンに居る方を見てから。

「アンソニー様は、此処に居て下さい。　尾行が付いているかどうか、探ります」

アンソニーも、まだその不安が残るのは、十分に理解している。もし、此処を襲われたら・・と、危惧もした。

「ああ。　私も、少し外に出て探ってみる」

アンソニーが、その力を取り戻し始めて居るのを、セイルは理解している。　アンソニーは、早々に死ねる肉体では無いし。　本気を出したら、最も強いから残したのである。　正直な話、尾行のプロぐらいならいいが。　暗殺のプロが出て来られたら・・・。　セイルでも、自分と仲間の皆で護り切るのが、精一杯だと考えていた。

セイルは、シンシアの連れて来た男性の従業員と共に、宿の所有する馬車を動かして貰える手筈と為ったので。　居残るアンソニーに一声掛けて、一緒に外に出て行った。

「・・・」

アンソニーは、すっかり暗く為った雪の舞う外に出る。　マントも

外し、黒く膝に膨らみを見せるズボンに、上は、ユリアが選んだ襟の高いカジュアルな白いシャツ。　洗った髪は、まだ少し濡れている。　アンソニーは、死んだから風呂など無用だが、生前の風呂好きでだろう。　気分だけでも味わいたくて、人と同じ行動をしていた。　ま、行動の中には、人としての心を捨てたく無い心持ちも含まれるからだろう。

ヒュ～っと、冬特有の冷めた無情の風が吹く。　恐らく、雪が溶ければ、芝生が顔を覗かせる庭園なのだろうが。　今は、積もり出した雪の絨毯が、暗い中で宵闇の中へと続く光景のみ。

（気配は無いな・・。　人気がこっちの庭園には感じられないから、オーラを探るのは容易い・・）

玄関前の左右は、庇の下を潜ってバルコニーとテラスへ移動出来る。　自然が多い庭園なのか、小動物らしき気配がする奥。　アンソニーは、浴場のガラス窓前のバルコニーに立ったり。　食堂のガラス窓前から、庭先まで広がるテラスに出て気配を感じた。

（今までの尾行は、少なくても無いな。　自決したあの男が、一人だった為だ）

と、思った時だ。

「アンソニー様、お寒いでしょう？　紅茶の準備が出来ましたので、どうぞ中へ」

一人残ったシンシアの声がする。　シェフは、別の手伝いで、大きな城の様な宿屋の館へ戻り。　二人居た男性従業員や、若いメイドの女性も、他の仕事に向かう。　それだけ、自分達が突発的に予約

された訪来者と云う事なのだろう。

年末の前後を含めた一月は、地方に住む貴族や商人が、めかし込んで大都市に滞在する。　これが、今時代の流行りなのだとか。　クラークやセイルが旅の間に、アンソニーへ語った話であり。　宿へ押し寄せるこの客の多さを見ても、窺い知れる。　年末は、大都市で派手なパレードや催し物が多く開催され。　見世物や演劇・歌劇などが盛大に行われる。　商人や貴族は、それを楽しみに来るらしい。

玄関を潜ってリビングに戻ったアンソニーは、ふっくらと肥えた身体で支給をするシンシアに歩み寄り。

「急な訪問で済みませんでしたね。　冒険者なので、御構い無く。　ミセス・シンシア」

と。

すると、シンシアは口に手を当てて。

「あら、済みません。　私、まだ結婚はしてません」

と、困った顔で恥ずかしがる。

アンソニーの目に、そのシンシアの姿が初々しく見えた。　彼女は、どう見ても３０はとっくに過ぎているだろう。　太って顔が大きいが、痩せれば優しそうな美人に為るのは、確かだ。　男性に嫌われるタイプでも無さそうだし、貴族の女性で未亡人でも無く、この歳まで結婚していないとはめずらしい。

「これは失礼しました。　紅茶、頂きます」

優雅にソファーへ座り、レモンの香りが漂うミルクティーを啜るアンソニー。

そのアンソニーの傍らに立つシンシアは、

「いえ。　私、少女時分は鬱を煩って、屋敷の中に篭りきりでしたの。　それに、こんな姿でも在るので、男性とは縁が無くて・・・」

と、曇らせた顔を横に向ける。

アンソニーは、そんなシンシアの顔を下から見て。

（こんな女性が、憂いを・・）

深々と降る雪の無音が、静寂と云うカーテンを庭園に張る。

「あ」

シンシアは、冷たい感触に驚いて顔を向けると・・。　いつの間にか、アンソニーに手を触れられていた。　驚き、手を引こうと。

「あ・・アンソニー様・・、こんな私めの手など・・」

すると、アンソニーはそれを優しくさせず。

「僕には、良く解らないな。　貴女の様な慈しみ深い女性を、今まで捨て置く男性が・・・。　全く解らない」

シンシアは、恐らく生まれて初めて、男性にこんな事を言われたのかもしれない。　それも、アンソニーの様な美男にだ。　身体と心を貫く優しい言葉が、恋と云う病の様な思いを熱くさせる。　急激に壊れんばかりに高鳴る胸の鼓動に、気を乱したのか。　シンシアは、

「そっ・そんな・・」

と、アンソニーの手から逃れようと、更に手を引こうとする。

だが。　アンソニーは、その一瞬手前で、ススッとシンシアの腕まで手首から撫で上げると。　引く途中で、シンシアの手は止まってしまった。

「・・・」

恋した少女の様に恥らうシンシアの瞳と、緩やかに見上げたアンソニーの目が、しかと噛み合う。　アンソニーの瞳は、魔力を現した赤い眼に変わっていた。

「あ・・アン・・ソニー様」

ソファーを立つアンソニーは、シンシアと云う女性の半分しか無い自分の痩せた身を、彼女に寄せて手を回す。

「あぁ・・」

女性として羞恥を感じる部分に、アンソニーの抱き回す手が触れられた時。　シンシアは、完全に只の女性としての顔を、恥じらいの艶色（つやいろ）に染める。

アンソニーは、自分を見て動けなくなったシンシアを見つめ。

「口付けも知りませんか？」

と、優しく微笑む。

「はっ・はい・・」

アンソニーの瞳から、自分の目を逸らせなくなったシンシアは、問われるままに応えた。　後ろに回されたアンソニーの手が、女性として自分を求める手つきで触っている。　今まで感じた事の無い感触に、シンシアはアンソニーの手中へと・・堕ちた。

・・・。

生まれて初めて、母親以外からの口付けを感じ。　自分を軽々と抱き上げて、寝室に連れてゆく男を見つめたシンシア。　寝具へ寝かされ、服を脱がされる時ですら、幻想的な世界に踏み込んでしまった感覚で。　まるで、夢現のままに、一糸纏わぬ姿にされる。

（夢・・ですか？）

接客していても、アンソニー程の美男など何人居たか。　美人である姪のエメラルダに、色目を送る紳士は数多く居ても、自分には無いのが当然と、諦めて認めていたのに・・。

セイル達が戻るまでの一時は、シンシアには永遠に思えた。　生まれて初めて、女として乱れる悦びを知る時、彼女は、心の中の何かが溶かされる思いを知ったのだ。

・・・。

≪出来る事は・・・≫

さて。　セイル達は、馬車でマーリの元まで戻った。　博物館の応接室に、まだ残っていたマーリと執事。

ユリアは、小難しい話はセイルに任せると、まだ明りの落とされていない美術品の鑑賞に行くと言い。

「では、私も」

と、クラークが付き合う。

セイルは、マーリとの話し合いも短く終わったので。　ユリアとクラークを博物館に残し。　御者の男性と共に、核所へ行く事にした。

夜も深まる前で、仕事は終わっている役所の中枢だが。　気の抜けない状況のセイルにしてみれば、マーリの周りを早く警備して欲しいのは、本心だった。

雪の降る街中を、馬車に揺られて見るセイル。　御者の男性は、セイルの乗った馬車の後ろから、宝物の運び込みに使った馬車で着いて来ている。　文化区を抜けると、街灯の明りも少なくなる。

アハメイルの東に広がる要塞の様な巨大な施設と、広い演習場。
要塞の様な施設は、移住や様々な許可などを貰いに、住民や移民が手続きを行ったり。　各行政監督省が出先機関を作って、対応する施設であり。　半分は、軍部や警察活動を担う役人などが詰めたりする場所だ。　地面剥き出しの広い演習場では、毎日数千人の兵士が日々訓練をする。　都市の都政を司る中枢なのは、前にも書いたので此処までとして。

セイルは、この演習場側から閉められた門を開いて貰って、敷地に入った。　王国の紋章が裏側に入った荷馬車を見れば、何か重要な物を運んだのだと兵士は一目で解る。

「テトロザ様は、王子の部屋の隣で事務に就いています」

セイルと御者の案内をする軍部の下級兵士長は、その部屋の前までセイルを導く。

“コンコン”

兵士長が、テトロザの居る重々しいドアをノックすると。

「うむ。　何用か」

少し老いた男性の声が返ってくる。

「はっ。　王都より、荷物を運び込んだ冒険者と、御者が参っております。　何でも、リオン王子がまだ此方に来ていないので。　テトロザ様にお話が有るとの事で・・」

「解った。　とにかく入りなさい」

剣の腕を恐れられる近衛騎士団副団長のテトロザへは、兵士の誰もが畏敬の態度を祓うとか。

「はっ。　では、失礼致します」

扉が開かれ、兵士長を先頭に部屋へ入ったセイルと御者の二人。

幅広いデスクを前に、書類へ眼を通していた気持ち面長の初老男性が、鋭い視線をセイルに向けた。　一礼する兵士長とセイルと御者。

だが、セイルを確認するなり席を立ち上がるテトロザは、平静の顔では無い驚きの顔だ。

「あっ、もしや・・セイル様か？」

世界でも最強と謳われた二人の剣士の一人であるエルオレウは、テトロザの憧れた人物でも有る。　その孫で、リオンとも兄弟の様に仲の良かったセイルを、此処で見間違えるテトロザでは無い。

「えっ？」

「様っ？！」

テトロザに、“様”を付けられたセイルを見て、驚くのは御者と兵士長。

セイルは、ニコニコして前に出ると。　応接用の琥珀色をしたソファーの後ろを抜けて、デスクの前に行きながら。

「お久しぶりです。　リオンとクラン王様に言われて、荷物を運んで来ました」

驚くテトロザは、態々デスクを回って、黒い軍服の肩から背中に靡くマントを忙しく動かして、セイルの前に来る。

「どっ・どうしてセイル様が、お荷物を？」

「あはは、ユリアちゃんと一緒に、こっそりと冒険者に成りまして。仕事の色々で、込み入った事に成ったんです。　あははは・・・」

テトロザは、直ぐに普通では無い気配を感じ。　御者の男性には、隣の部屋で一服しながら待たせる事にして。　セイルと二人で話し合う事を決めた。

そして、少しして・・・。

「なるほど。　リオン様が中々お戻りに成られないのは、その様な事情からでしたか・・。　モンスターの事等は耳にしていましたが・・、過去の王家の事情が・・・」

テトロザは、リオンが何時も以上に時間を掛けて、嫌う王都に逗留している事が気に掛かった。　リオンは、次の王は兄と腹を決めているので、無用に王都へ居続ける事を嫌う。　自分が居る事で、勢力争いを好む貴族たちが、次の王に相応しいのは誰だ彼だと言い出すからだ。

セイルは、ソファーで向かい合うテトロザへ。

「宝物を運び込んだマリーさん博物館を含め、周りの巡視警戒をお

願い致します。　それから、明日か明後日頃には、御者の方を王都へ送り届けて欲しいんです。　我々への尾行は、ワダルの町まで続きました。　連絡を取り合う別の誰かが居たなら、情報を狙う意味で、御者の方の帰りは危険です」

心配を見せるセイルは、冷静な顔でヘラヘラしていない。　その様子を見たテトロザは、深々と頭を下げ。

「はい。　その事は十分に・・。　いや、我等の国の使用人に、その様な深い心配を頂き有難う御座います。　双方の件、このテトロザがしかと聞き届けました。　早速、今夜から交代で見張りの強化を行います」

「有難う御座います。　御者の方は、今夜は我々と一緒に宿の方に泊まらせて。　明日に、此方へ行かせますね」

と、笑うセイル。

「はい」

鋭い目つきのテトロザも、セイルには微笑む。

だが。　セイルは顔を困惑させ。

「しかし、リオンは黒幕捕まえるって言いましたが・・。　根っこが凄く深そうな感じします。　何でも、僕達がアンソニー様を連れ帰った夜に、王様へ旧墓地の見回りを進言した誰かが居るなんて・・。　驚きですよ」

テトロザも眼を凝らして、テーブルを見つめ。

「ですな・・。　ハレンツァ様やセイル様のお仕事に襲撃を掛けたのも、恐らくは事前に情報を知り得てでしょう。　用意が整い過ぎています。　それに、その情報は、極々一部の者のみが共有出来た事・・。　下手をすると、国王陛下かリオン様の周りの誰かが、密かに手引きした張本人かも知れません」

「はい、そう思います。　でもそうなると、かなりの大物ですよね？　黒幕って・・」

「ですな。　一筋縄で行く事では有りません。　うむむ、まさか・・。　春先の一大事と、繋がっていなければいいのですが」

「あ、５大公爵様の御一人が係わったって云う事件ですよね？」

「えぇ。　結果、罪の無い住民にまで、被害が拡大致しました。その事件の一部は、未だに根の見えない所も有りましてな。　刑事部の役人が、粘り強く調べております」

「リオンも大変ですね。　こりゃ～こっち来るの遅くなるかなぁ～」

「かも知れませんな」

「そう云えば、向こうでポリア様を見ました。　スッごく美人で、剣の腕も強いッスね～」

彼女を知るテトロザは、微笑み。

「それはそれは。　一昨日に来た手紙では、旧墓地のヘイトスポットの浄化は終わったそうです。　モンスター掃討作戦は成功だと・・

。　恐らく、ポリアンヌ様が活躍されたのでしょうな」

「ですね～、グランディス・レイヴンの方々も来てましたし～」

「ほほ～、有名所のチームが二つ一緒ですな。　ま、我が王子は、とんとポリアンヌ様には頭が上がらないので、会うのは偶にでいいそうですが。　ふふ」

「気が強そうですもんね」

「はい。　セイル様の所のユリア殿と一緒ですな。　あははは」

テトロザが大きく笑えば、セイルは苦笑い。

「ユリアちゃん強過ぎですよ、あははは・・。　もう、僕とクラークさんが犠牲に・・」

「ほほっ、あの“双槍のクラーク”殿も負けますか」

セイルは、あの王城での出来事を話して聞かせた。　ユリアが、クラン王とタメで話し合って、王妃に色々バラして修羅場を作ったのを語ると。

「は・・はは。　陛下も、色々と隅に置けませんなぁ～。　クランベルナード陛下にとって、セイル様とユリア殿はお気に入りですからな。　ユリア殿にバラされては、観念の潮時ですわい」

テトロザは、流石に王妃に怒られる国王を想像してか、呆れ笑いしか出なかった。

盛り場や飲み屋などが最も人が入って、賑わい盛り上がる頃。　セイルは、御者の男性と共に、ユリアとクラークの居るマーリの博物館へと引き返した。　積荷を運ぶ馬車をこっちに移せたのが、大きな安心だ。　この軍部に馬車が在れば、積荷を探し回っても、マーリの元へと辿り付くには時間を要す筈であるからだ。

広い博物館の中の展示品や美術品を見て、すっかり堪能したユリアとクラーク。　応接室に戻り、マーリと楽しく雑談していた。

そこへ戻ったセイルが、今夜から警戒の巡視が行われる事を言うと。

ユリアは、驚いた顔で。

「うはっ、仕事速いね」

クラークは、感心した顔で。

「もう話が通りましたか。　流石に、セイル殿」

マーリに至っては、執事と見合ってから。

「流石ね、テトロザ様ともマンツーマンで話し付けて来るなんて・・、助かるわぁ～」

セイルは、一つの安心を持って来た。　皆、今夜は良く寝れそうな気持ちに成る。

だが・・。　セイル達は、別の不安を覚える事と為る。

それは、宿に戻った直後だ。

「あっ、みっ・み皆様、お帰りなさいませ」

離れの屋敷に戻った時。　顔を赤らめたシンシアが、何と衣服を直しながらセイル達に頭を下げる。

ユリアは、唖然以上の衝撃的な顔をして。

（セ・・イル、まっ・まさか・・さぁ・・）

と、耳打ちするが。

セイルとクラークは、全身の力を抜かして項垂れつつ。

（喰った・・・。　アンソニー様、選りによって・・この人を喰った）

と、頭痛の種が身近に居る事を再認識した。

当の本人は、しれ～っと上着の首元を肌蹴さしたままに、優雅な姿で紅茶を飲んでいたのである。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2　前編最終話

セイルとユリアの大冒険　2

≪冒険者が、暇？　仕事しか無いでしょ？≫

セイル達は、数日の間は何事も無く過ごした。

先ず。　大雪の影響も有り、2泊して。　御者の男性が王都へ向かうべく、騎士と兵士の交代に合わせて一緒に王都へと戻って行った。

その見送りで、クラークとアンソニーは、テトロザと面会して雑談をした。　元王子に対してのテトロザの態度は、臣下の態度であり。　クラークに対しては、同じ武人として礼節の整った対応のテトロザである。　二人は、感心と信頼の一念を持ったのは当然の事だった。

その後。　連日暇な日中に、世界最大の大都市アハメイルを堪能しようと、彼方此方へ出かけて見る。　何より、冒険者としての衣服しか持ち合わせないセイルとユリアが服を買ったり。　歌や演芸好きなクラークの案内で、歌劇をハシゴしたり。　アンソニーの要望で、絵画や博物館巡りをしたり。

しかし、5日も経つと、ユリアは飽きて来て暇に為り。　朝、朝食後に軽く仕事を探してみようと言い出した。

アンソニーは、紅茶の用意をするシンシアに優しい礼を言ってから。

「夜は忙しいから、昼間でどうこう出来るのがいいね」

シンシアは、アンソニーの専属メイドの様な存在に為っていて。

（まぁ、アンソニー様ったら・・）

と、顔を何故か赤らめる。

このシンシアは、この数日で身体が痩せて来ている。　恐らく、アンソニーから、毎日エナジーを吸い取られているからなのだろうが。　アンソニーと交わる前は、二周り以上も体格の幅が有っただろう。　だが、今では、少し太めで優しそうなお姉さんとしか見えない。　しかも、健康に全くの支障を来す素振りすらも無い。　いや、アンソニーと共に居る時は、それは笑顔が美しく。　挨拶に来たエメラルダと云う姪御も、返って困惑していた程。

ユリアやクラークは、夕食後も馬車で劇場や博物館へ行くが。　アンソニーは、絶対に夜は出歩かない。　シンシアと、何に耽っているやら・・・。

アンソニーとシンシアの視線が絡む所を見るユリアは、鬼の様な表情で拳を握り。

（うむむ・・、このエロモンスター野郎がァァァァっ！！！！！）

もう悟っているセイルは、脱力した俯きで苦笑い。　クラークは、何故か羨ましそうにしている。

セイルは、とにかく一度斡旋所に行ってみようと云う事に。

朝もだいぶに遅く為ってから、セイル達一行は斡旋所に向かった。

商業区の中心から、少し飲み屋街に外れた場所に在る斡旋所。

だが、斡旋所を一目見てユリア。

「なぁ～にコレ？」

と。　ウサギさんの格好をしたセクシーな女性が、誰に向けているのかウィンクする看板が目立ったパブでしか無い外装。　何とも言葉が出ずに呆れ果てる。

北の大陸の粗方を知り尽くしたクラークが、ユリアへ。

「ユリア殿、この地下一階から下が斡旋所ですぞ。　地上は飲み屋ですが、地下が斡旋所なのです」

「ふぅ～ん。　貰った金を、さっさと上で使えって訳ねぇ～」

ユリアの感想を聞くアンソニーは、２００年以上昔と基本のスタイルを変えていない斡旋所に微笑む。

「昔は、それこそ冒険者などと云っても、僧侶や魔法使いなど以外は、殆どが男性だった。　男性の割合が多かったから、こんな風に成ったのかもね」

其処へ。　着替えて帰宅しようとしていた若く化粧っ気の濃い女性達が、セイル達が見ているガラスドアを開いて出て来る。

見ていたセイルは、

「働いている人が、まだ居たみたいですね。　朝まで働いてるんだ・・。　もう朝から働く人なんかの出勤は、とっくに終わってるのに」

と、云えば。　其処へクラークが、

「ですな。　朝まで飲み倒す者も少なく無いようです」

出て来た女性は、セイルとアンソニーを見て、酒で腫れた目を細めて色目を見せる。

「あら、カッコイイお兄さんとカッワイイお兄さん。　冒険者ぁ？」

アンソニーは、微笑んで肯定し。　セイルも頷いて肯定。

女性は、手と腰を甘やかに振り。

「夜に来てねぇ～。　う～んとサービスしちゃうから～」

此処まで来ると、ユリアは、最早怒る気力も消え失せる程に呆れ顔。

クラークは、しみじみと。

「顔がイイのは、産まれ付きの才能ですなぁ～」

そのパブのガラス戸へ逆に入り、廊下が伸びた先が女性達が働いている飲み屋の様だった。　さて、ガラス戸を入って左右に有る階段を下ると、斡旋所へ入る扉が有る。　重厚なマットが表面に施された防音効果の有る両開きの扉で、斡旋所へ行く雰囲気では無かったが。

「・・・」

階段を下る途中の踊り場に、目つきの良ろしくない中年の冒険者が2・3人で立っていたりして。　睨み合ったユリアは、気分が悪く思えた。

「今の何？」

と、不機嫌に扉前でクラークに聞けば。

「強請りや集りをする為のカモを探してる阿呆です。　最近では、この斡旋所の出入りを禁止されて、仕方なく立っているだけに近いみたいですな。　ただ、駆け出しで二人とか三人とかの人数の少ないチームへは、金を恐喝する為に絡む事もあるそうで」

ユリアは、大の大人がやっているので、なんだか情けない。

「冒険者って、悪党の一歩手前みたいな者なの？」

「気持ち次第ですな。　誰でも憧れて成りますが、やはり人としてちゃんとしないと、冒険者と云う仕事もちゃんとしないですな」

セイルは、クラークに。

「勉強に成ります。　深いッス」

アンソニーも頷き。

「人格は、自分で作る自分の証明書みたいな物だな」

と、呟いた。

さて。　扉を開くと、眩い昼間の様な光が溢れ。　ユリアは、目の前に広がる光景に。

「あ・え？　此処・・斡旋所？」

盛大に人を呼んで、ダンスパーティーなどでも出来そうな広いフロアが広がり。　白い壁に、デカい豪華なシャンデリアが天井に幾つもぶら下がる。　絨毯の敷かれた床を少し入った先から、大小のテーブルが散らばり。　其処に冒険者達が座って、ガヤガヤと雑談をしたりしている。　軽く見ても、１００人以上の冒険者達が居ると見て取れた。

クラークが先んじて中に入り、セイルに半身を向けて。

「一番奥のカウンターに、一般向けの仕事を斡旋してくれる係りが居ます。　手前側のフロアは、屯したり、仕事について話し合ったり。　ま、情報交換や・・チームの相手を探したりする、待合い・寄り合い場みたいな所ですな」

中を見回すユリアは、貴族の館の中みたいで、

「こんな豪勢な場が、必要な訳ぇ～？」

アンソニーも見るのが初めてで。

「いや、中々雰囲気はイイね」

セイルもまんざらでも無い顔でニコニコし。

「明るくてイイですねぇ～」

だが、奥へ行こうと冒険者達の中を行く。　すると・・。

（おい、あれって・・クラークじゃないか？）

（あっ、ホラッ！　私がこの前言ったじゃないっ。　クラークさんが、若い二人と組んだってっ）

（ええっ？！　あのクラークさんの隣に居る、若いコと後ろのカッコイイ人誰ぇ？？）

（御近付きに成りたいわね・・・、はぁ～）

（ケッ、槍のクラークも堕ちたねぇ～。　子守りに成るなんざぁ～幻滅だぜ）

（でも、何かあのチーム強いって聞いたぜ？）

（クラークさんの名前が先走りしてんだよ～）

（だろうな。　少なくても二人は、只のガキだしな）

クラークを知る冒険者達が、俄かにセイル達を見てコソコソと噂を始める。

ユリアは、痛い視線と陰口に、セイルとクラークの間で。

「ヤな感じぃ～」

クラークも、意外に不満げな顔で。

「ハッキリ物も申せぬ輩に、グダグダ言われるのは嫌ですな～」

まだ、午前と云う事も在り。　成功報告をしてのんびりしたり、仲間で請けれる仕事が無くて炙れて居た冒険者達ばかり。　チーム名が国を越えて知れ渡る者も居ないのか、名乗りあう事も無い無駄な陰口が花を咲かせて居た。

そのチームの中には、アジェンテも居る。　ウィリアムのチームに居る、スティールやアクトルと知り合いの女性である。

だが。　カジノなどでお目に掛かる半円のカウンターへ、セイル達が向かい。　ダンディーな鼻髭を整える中年男性に、仕事の斡旋を頼む。

しかし。　中年男性は、クラークを見て驚き。

「あ・・貴方はくっ・・クラークさんか？」

クラークは、男性に笑って。

「お久しぶりですな」

ダンディーな男性は、俄かには信じられないと云った顔でセイルを見て。

「君がリーダーか？」

ニコニコ顔のセイルは、テレ気味に。

「はいぃ～」

「チーム名は？」

それには、ユリアが強気に。

「ブレイヴ・ウィングよ」

その一言で、遠回りに聞いていた冒険者達が、更にザワついた囁き声を上げる。　中には、声を態と上げて、非難がましい陰口を言うのも居た。　偉大なる二大剣士が一緒に居た時のチーム名に、非難を言う者が出るのも仕方ない。

だが。　ダンディーな中年男性は、何か黒い皮の本の様な物を開いて見ながら。

「騒々しいっ！！」

と、一喝。　周りは、水を打った様に静まり返る。　その中で、男性はセイルに顔を上げて。

「君達は、王都の方で討伐作戦にも参加していた様だな。　荷を運

ぶ仕事の合間にも、モンスターを倒したと記録が来てる」

セイルは、控えめに笑って。

「少し、お手伝いを」

「そうか。　王都の方から王国名義で、君たちに報酬が支払われた。下のカウンターに行って、報酬を受け取ってくれ。　それから、君たちを見込んで回せる大きな仕事は、今はこっちに無い。　下の主に、仕事の有無を聞いてくれないか」

「下・・ですか？」

と、セイルが仲間と見合って尋ねれば。　クラークが。

「セイル殿、下の方へはあちらから行きます」

と、白いドアに、黒い取っ手が優雅に備わる両開きの扉を指差す。

セイルとて、依頼には一般向けと上級の特別依頼が有るのは、十分に知っている。　いきなり下に案内されるとは、正直思っても居なかった。

それを見たアジェンテは、悔しさを顔に湛えて目を凝らした。

（またか・・。　結成仕立てで、クラークが居るってだけだろうっ？！！！）

今年、地下二階の上級特別依頼の仕事を請けれるフロアに降りれたチームは、５チームしかいない。　世界最高峰のチームと謳われた

“スカイスクレイバー”。　続いて、ポリアのチームの“ホールグラス”。　そして、サーウェルスがリーダーの“グランディス・レイヴン”に。　連続して仕事を成功させ、突発的な仕事で下に呼ばれたステュアートのチーム“コスモラファイア”。　そしてウィリアムがリーダーの“セフティファースト”。

アジェンテのチームは、この5つのチームを抜いたら、このフロアでは知名度トップのチームだろう。　この大都市アハメイルでは、彼女のチーム知らない冒険者は居ない。　だが、今まで一度も、下に案内された事は無かった。

（どうして・・どうして先を越されるっ?!!）

クラークの案内で、地下二階へ行くセイル達を睨み見るアジェンテ。　カウンターには、ダンディーな男性に食って掛かって、この事態へ質問をする若い冒険者が居た。

「どうしてっ、結成仕立てのアイツ等が下に行けるんだっ?!!」

「そうだっ!!　不公平だっ!!」

「クラークが居るってだけで、そんなに評価が上がるのか?　大体、チームの二人はまだガキだぞっ?」

「一体、アイツ等が何したんだっ?!!」

その問い詰める冒険者達の姿は、怒りだけでなく。　自身への焦りや、セイル達への羨む嫉妬の念も含まれる気がする。

だが。　ダンディーな男性は、冷静な対応で。

「大っぴらに言えない話だが。　あのセイルって若い彼が率いるチームは、仕事でケルベロス・ストライカーとも戦ったツワモノ揃いだ。　仕事は3つ請けて、どれも成功に導き。　グランベルナード王陛下にも、イクシオ達と謁見してる。　結成したばかりってだけで、チーム名に見合う働きをしてるぞ」

そのゴーレムモンスターの名前に、この場が騒然と成った。　一人の中年剣士が、ワナワナと怯え出し。

「ケッケケケ・ケル・・ケルベロス・・ストライカーだってっ?!　ン年前に、あの“オウガ殺し”って異名を取ったボーガンズのチームが、皆殺しされたっていうゴーレムじゃないかっ!!」

別の冒険者は、流石に子供の様なセイルやユリアに、自分が負けると云う屈辱だけは味わいたく無いのか。　カウンターの男性に、

「クラークさんが戦ったンだろっ?!!　若い二人なんて、まだ年端もいかないガキじゃないかっ?!!!」

だが、ダンディーな男性は、疑う素振りも無い。　淡々と、

「さぁ。　あのセイルってリーダーは、エンチャンターで在りながら、剣士としての腕も達つようだ。　ユリアって娘は、呼吸のように精霊と会話して、自由に呼び出せる特異の力を備える。　こんな所で屯してるお前達とは、自力が違う。　何より、あのクラークが認めて加わってるのが、イイ証拠だと思うがな」

物言いをした冒険者達は、反論出来ずに黙る。　クラークと云う有名な人物に気を取られて、完全にセイル達をバカにしていたが。

だが、クラークが加わるだけのコネでも理由でも在ると云う事だけでも、自分たちとは違っていると理解したのだ。　そして、ハッタリだけであのチーム名をおいそれと付けれない事は、セイル達も結成時に知っているハズである。

ダンディーな男性は、横の回覧板にファイリングされた依頼を指差し。

「仕事は未だに余ってる。　他人にいちゃもん付ける暇が有ったら、仕事して実力を示せ。　地下に行きたいなら、それが手っ取り早いゼ」

誰も、返す言葉が出ないままに、カウンターの前から引き下がった。

見ていただけのアジェンテは、新しく加えた神官戦士の若者に。

「ハデなチームだね。　クラークさんの加わったチームって」

この神官戦士の若者は、実は王都から来たのだ。　セイル達が荷を届ける少し前に。

蒼い目をした長髪の神官戦士の若者は、赤いアテネ＝セリティウスの刺繍された前掛けを、金属鎧の上に着ている。　そして、アジェンテにこう云った。

「アジェンテさん。　多分、彼等の若い子供の様な二人は、あの二大剣士のどちらかと所縁が在るのかも知れません」

「？　それって・・子供か孫？」

「ハッキリとは言えませんが。　彼等がチームを結成する時、チーム名の御蔭で大騒ぎでした」

アジェンテの隣に居る魔想魔術師の中年男ミハエルは、想像が出来るだけに。

「そりゃ～そうだろうなぁ。　あのチーム名は、誰も付けちゃいけない雰囲気在るし」

「ええ。　ですが、若い娘の方が、“許可がある”と、古びたダガーを斡旋所の主に見せたんです。　近くに居た年配の冒険者が云うには、そのダガーに彫られた紋章は、あのエルオレウ様の家紋に似ていると・・」

アジェンテは、何と無く腑に落ちて来た。

「なるほど・・。　今、思い出した。　確か、エルオレウって人は、隣の国のマーケット・ハーナスで最高の位に就く商人なんだった。　彼の営む孤児院には、捨て子や親無しの子供が引き取られてるって話、聞いた事が有る」

若い神官戦士は、

「もしかして、彼等はエルオレウ様の孤児院で育った子供ですかね？」

「多分。　だから、そんな家紋入りのダガーを持ってたんだろう。　いや、勝手に持ち出したのかもね。　チーム名を付ける為にさ」

アジェンテのチームは、彼女の予想に納得した。　実際は少し違う

が。　彼等にしてみれば、それが一番腑に落ちる処なのかも知れない。

一方。　一階を賑わせたセイル達は、地下に向かう螺旋階段を下る。
　クラークは、セイルの後姿を見て。

（凄まじいのぉ・・、此処に結成して直後に来るとはな。　ワシが冒険者に成って、初めて上位依頼を請けれたのは、４年も経ってからだったか・・。　セイル殿も、ユリア殿も、光る何かを持っている運命なのかも知れないの）

クラークは、この濃密な半月ばかりを考えて、王都での数日が如何に濃く激しいモノだったを感じた。　正直、あのケルベロス・ストライカーと戦った時は、勝つまで勝てるとは思って居なかったし。
　アンソニーの一件でも、丸で運命の意図に操られる思いがした。
　今でも、不透明な不安が渦巻く中に浸っている。　だが、セイルと居ると退屈せずして、時の流れに飛び乗れる感じがするのだ。
どんな困難も、突き進んで悔いは無いと思える。

地下二階へと下りたユリアは、また冒険者とはカンケーのなさそうな場所に来たと思い。

「なぁ～に此処、どっかの高級飲み屋みたいじゃん！！」

アンソニーも、ストゥールの並んだカウンターや、数人で洒落たガラステーブルを囲んで座れるソファーを見て。

「フム。　上以上に場違いな・・」

だが、セイルは、カウンターの裏側の右奥に黙って立つ初老の紳士

を見て。

「どうも、ブレイヴウィングのリーダーで、セイルと云います」

すると、その初老の男性も微笑み。

「ほほう。　アクストムの方で、凄いチームが久々に出来たと聞きましたが・・。　こんなにお若い方がリーダーとは、驚きですね」

ユリアは、別に動じる気配も見せず。

「あの～、上で聞いたら、こっちに来る様に言われちゃったんですけど」

「ええ、王都の斡旋所から、彼方方に報酬を払う様に仰せ付かっております故。　それに、国王様から直に賜った報酬ですし。　仕事の内容が、他人に知られては面倒な・・・部分が有りますからね」

「ふ～ん。　見ても無いのに、良く知ってるわね」

「ま、企業秘密で、良いツールが在りますから」

「へぇ～」

ユリアは、今の所は宿代が浮いているだけに金には、困っていない。
身銭は、彼方此方行って買い物したりしたから寂しいのだが。
今は報酬より、運び出した宝物を狙って来た襲撃。　それを企んだ犯人の方が気に成った。　だがら、か。

「ねえ、向こうから襲撃の犯人の事は、何か伝わって無いの？　運

んだ積荷、もう無事なのか全く解らないンだけど～」

初老の男性は、カウンターの裏の下から金を包んだ白い布袋を取り出しながら。

「さ～、向こうからのお話は、彼方方が着いたらお金を渡す様にと・・。　封鎖区域と云う場所のモンスター退治は、ポリア様率いるチームとサーウェルス殿の率いるチームが、合同で終わらせたと云う事だけですね」

セイルは、ユリアのズケズケとした所に対して一つ謝りを入れた後、仕事の受付は上でした方がいいかどうかを尋ねる。

だが、主である初老の男性は、

“一つ変わった仕事が御座いまして・・・”

と、昨日に入って来たばかりの仕事を紹介してくれた。　内容は、“幽霊退治”と云った所の内容だった。

≪暗雲の中で殺意が牙を向く≫

その夜は、冷え込みが一段と厳しい夜だった。　雲が晴れた夜空には、弧月が美しく金色に輝いていて。　物音一つ立てる事すら、憚

られる様な静まり返った深夜だった。

王都アクストムの王城から、北西に向かった一角に、一部の貴族が構える住宅が密集する地域が広がる。　一般市民の住宅側と最も近い境に伸びる大通りを挟んだ所へ、森の庭を備えた４階建ての屋敷が有る。

“緑の騎士様の屋敷”

そう渾名されたのは、ハレンツァの屋敷だ。　ハレンツァは、サードネームが有名過ぎて、もう通り名にすら為ってしまったが。　正式には、バルロッハ・コンテリューヌ・ハレンツァが正式名であり。　正しくは、バルロッハが名前。　“ハレンツァ”とは、正しくはサードネームに成る。　だが、先代の王とは、兄弟の様に仲が良く。　王を護るために幾度と身体を張ったハレンツァは、“王国の盾”と自らを称して有名に成った。　それが、セイルと居たハレンツァなのだ。　現（いま）のハレンツァ家の当主は、息子のエリウェンが継ぐ。　上に６人の姉を持った長男であり、ハレンツァとは４０近い歳の離れた孫の様な息子だった。

「・・・」

自分の部屋で横に為ってたハレンツァは、虫の動く音より微かな物音に目を覚ました。　最近は、何時もベットの中に側める中剣を握り。

「何者だっ！！！！！」

と、身を起こして大窓の方を向いた。

瞬間。

「っ！！！！」

心臓に程近い胸元へ、焼け付く様な熾烈な痛みが走った。　ハレンツァは、目の前に立つ影を睨み見て。

「なぁ・・何も・・の？」

背が高い影は、ハレンツァを見下ろし。

「運び込んだ宝物の行き先は？」

と、甲高い男声で云う。

ベットの頭上側の壁に設けられた小窓から差し込む月明かりが、ハレンツァの胸に突き立てられた短剣（ダガー）の柄を照らしていた。

ハレンツァは、ニヤリと笑った。

「ふ・・ふふ・・・見つけた・・・見つけたぞっ！！！」

胸をダガーで刺されて尚も、全く闇の中を捜査していた最近のジレンマを払拭する様な笑みを見せて言う。

遠くの廊下で、

「何事だっ！！！　父上の部屋だっ、急げっ！！　急げぇぇぇっ！！！」

ハレンツァの息子であるエリウェンの怒声じみた声がする。

影の男は、

「言えっ、宝物は何処だっ?!」

と、突き刺したダガーをグリグリと動かしては、ハレンツァに凄む。

だが、ハレンツァは自分を睨み返しているだけだ。　影の男は、ダガーを一気に引き抜くと。

「チッ。　皆殺しにするか」

と、ドアに向いた。　だが、

（何っ?）

俄かに、ハレンツァが動く気配を見せたのに驚き。　影の男は、スッと2・3歩下がった。

「・・・」

灯りの無い部屋の中だが、鞘のままの剣を振り上げていたハレンツァ。　息荒く立ち上がると、ゆっくりとドアの前に行く道筋に立ち塞がった。　灰色のナイトガウンローブに滲んだ血が、腰帯の辺りまでを濡らす。　ハレンツァの口の中には、肺すら傷付いているからだろう。　血が噎せ返って広がる。

影の男は、７０半ばを過ぎた老人が、自分を“とうせんぼう”をしているのだと悟る。

「へぇ～。　胸を刺されても、息子を護るってか？　気構えは大したものだな。　だが、俺に勝てるのか？」

すると、闇の中で息を荒く立つハレンツァが。

「お・・お前は・・誰の差がね・・だ？」

影の男は、血に塗れたダガーをブラブラと揺らしながら。

「“裏切り者”呼ばわりのお前に、言う必要は無いってさ」

と。

この一言で、ハレンツァは黒幕に予想が知付いた。　ギラっと見開いた目は、影の男を見ていたが。　その脳裏には、首謀者の顔を見ていたのだろう。

「父上っ！！！！」

勢い良くドアが開き、片手にランプを持った若い青年が現れる。
精悍な顔つきで、ハレンツァと面影が似通っていた。　面長な所も、目つきの真っ直ぐな所も・・。

そして、ハレンツァは、息子の持ったランプの灯りで、黒い布の覆面をした影の男の姿を見て。

「エリウェンよっ、今すぐ城へ向かうのだぁっ！！！！！　リオン王子に会えっ！！！」

と、右手で剣を抜き、鞘を捨てた。

「ちっ・父上何をっ？！！！！」

エリウェンは、部屋に踏み込んで来た。

が、ハレンツァは。

「それ以上入るなぁぁぁっ！！！！！！！！」

と、吼える。　ハレンツァは、この自分を殺しに来た男が、殺し屋の類で相当に剣も遣う相手だと悟った。　夜の中で相手をすれば、剣の腕に一目置かれる息子のエリウェンでも、かなり危ないのは承知だ。　今は、何よりも息子の安全と、リオンへ襲撃を伝えなければ成らない。

「父上っ」

何が起こっているのか良く解らないエリウェンは、怒声を上げた父の声に立ち止まった。

覆面の男は、ギラギラした目をハレンツァに向け。

「胸を抉られて、良くそんな大声が出せたものだ。　もう直ぐ、死ぬなぁ」

エリウェンは、目をこれ以上はと云う所まで開いて、

「父上ぇぇっ！！」

と、声を迸る。

だが、ハレンツァは同時に。

「来るなぁぁっ、早くっ、早ぐ城へっ！！！　この一大事を伝えるのだっ！！！！　２００年前に一度追放された貴族の内情を調べろとっ、リオン王子に伝えろっ！！！！！！！　これはっ・・これは国家の存亡の危機ぞおおおっ！！！！！！」

ハレンツァは、影の男に踏み込んで叫ぶ。

その話を聞いたエリウェンは、愕然とした顔に変わるが・・。

一方で、覆面をした男も目に焦りが浮かぶ。

「何っ、ジジィっ！！！」

覆面の男は、自分を雇う主の手掛かりが、ハレンツァの口から出たのではと瞬時に焦った。　このままでは、ハレンツァを殺しても意味が無い。　部屋の入り口には、執事らしき男やメイドなども居る。

「事がバレたっ！！　表口や裏口に回って皆殺しにしろっ！！」

覆面の男は、開きっぱなしの大窓にそう怒鳴り、自身はハレンツァへ睨み。

「死ねぇぇぇぇっ！！！！！」

と、ハレンツァに飛び掛る。　だが、ハレンツァは、男のダガーの突き込みを弾いて、ヨロめくも踏み止まり。

「ソロントっ！！　メイドや使用人をっ、方々に逃がせぇぇっ！！！　エ・・エリウェン・・、父が・・父がこの者を防ぐ故に・・行けっ。　此処で・・皆殺しにされてはイカんっ！！！」

老人の動きとは思えない剣捌きで、曲者の男の進行を踏み止まらせたハレンツァだが、更に口から血を洩らす。　口から出た血が顎を伝って床に落ちたのを、息子エリウェンは見た。

「ちっ・父上・・・」

自分の親が目の前で殺され掛けるのを見て、子が気を動転させない訳が無い。　剣の師であり、人生の師である父親なのだ。　エリウェンは、父親の心情を理解出来て、返って足が踏み出せない自分が憎らしい。

ハレンツァは、急所を刺されて死期が目前なのかも知れないのに、鬼気迫る目つきを曲者の男に向けて。

「息子よっ、王国の盾として・・し・・死ねるワシは本望っ！！！父の最期のた・・頼みを聞けっ！！！　・・ゆ・・・行けぃっ！！！！」

涙を流すエリウェンは、中年の執事ソロントを横に見て。

「ソロントっ、皆を馬車に乗せて逃げろっ！！　妻と娘を頼むっ。皆の者っ！！！　襲撃だっ！！！　他の屋敷に逃げよっ！！！襲撃を知らせるのだぁぁっ！！！！」

と、廊下に戻るのだ。

この時、父と息子の心は一つだったであろう。

（父上っ！！！！　うわあああああああーーーーーっ！！！！）

（息子よっ、礼を言うぞっ！！！）

これで焦るのは、覆面をした曲者の男だ。

「ジジィ・・テメェェェっ」

だが、ハレンツァは、年期の入った男でもある。　ひょうひょうとした人生の玄人（くろうと）は、最後まで玄人だ。　ニヤッと老いた顔を笑わせると。

「お・・怒ったか？　おいぼれ一人も直ぐに・ご・・殺せぬ無能がよ」

覆面をした男の目が、ハレンツァに向かって殺気に狂った。　ハレンツァとて、この男が自分から宝物の在り処を聞き出す為に、自分を半殺しにしているのは明確だ。　だが、息子を殺しに外へと出られては、手負いのハレンツァも追えない。　何せ、男の背後には大窓が有る。　だが、この男が、少しでも自分に時間を掛ければ、それだけ息子夫婦を含めた皆の逃げる時間を稼げる。　この一番危険な男は、どうしても自分に釘付けしておく必要が有ると思うハレンツァは、態と相手を詰ったのだ。

「こぉの死に損ないがぁぁっ！！！　宝は何処だぁぁっ！！！！」

覆面の男が、ハレンツァに遂に剣を抜いて襲い掛かった。

しかし、この時。　玄関ロビーに下りたエリウェンも、別の覆面をした曲者達に襲われた。　ランプと剣を片手ずつに、白いバロンズコートのエリウェンが、３人の覆面の曲者に囲まれた。

「誰かっ、玄関に馬を回せっ！！！　曲者は私が倒すっ！！！　馬だっ！！　馬をっ！！」

その時だ。　シュッと何かが飛んで、空を切り裂く音が聞こえ。
曲者の一人が。

「ギャっ！！」

と、倒れる。

エリウェンの目に、男勝りで父親譲りの武芸にしか関心の無い５女の姉が、弓を片手に一階奥から現れたのを見つける。

「エリウェンっ！！　これは一体っ？！！」

母親似の赤髪を三つ編みにした髪を揺らし、姉は弓を持って別棟の離れから駆けつけたのである。

エリウェンは、これには勇気が溢れ。

「姉上っ、父上を狙った何者かの差がねですっ！！！　城へっ、リオン王子に会えと父上がっ！！！！」

事態を悟る姉は、

「して父上はっ？！！」

エリウェンは、曲者一人の膝に剣を突き立てて。

「構うなとっ！！！　国の存亡の危機とっ！！！」

此処で、裏庭からエリウェンの妻の悲鳴が上がる。

「ハッ！！　ロザンナっ？」

剣を抜いて驚くエリウェンに、姉は。

「エリウェンっ、私が行くっ！！　馬を回すからっ、お前は外に出なさいっ！！！！」

姉クーレスは、裏庭に走った。

「貴様等ぁぁぁっ！！！！！」

緊急の事態と襲撃へ怒るエリウェンは、怒声を吼え上げて立ち塞がる最後の曲者に斬り掛かった。

エリウェンが、逃げ出す使用人やメイドを外に逃げさせ、他に隠れていた曲者二人を倒した時。　馬を引き連れた御者が来る。

「おおっ、家族はっ？！　姉はっ？！」

執事が怪我をしたが、家族はクーレスが執事と一緒に裏口から連れ出したと聞けたエリウェンは、雪の積もった大通りへ馬に乗って飛び出した。

さて。

貴族と言っても、誰もが怠けでは無い。　寧ろ、お役目に就く下級・中級貴族は、真面目で忠義に厚い人物も多い。　ハレンツァの家から逃げてきた使用人やメイドを匿うばかりか、何人もの貴族が早馬を城へ飛ばし。　剣の腕が有るものは、使用人の武術に心得の有る者を従えて、ハレンツァの家に救援へ駆けつけた。

そして、其処で見つけたのは・・。　壮絶な相打ちで、曲者の男ごと自分に剣を突き立て死んでいるハレンツァの最後だ。　曲者の短剣と長剣が心臓と腹を抉っていたのに、曲者に抱きつき剣を後ろから自分ごと突き刺した姿。　執事とエリウェンの家族を知人の屋敷へ逃がし、直ぐに舞い戻ったクーレスと共に駆けつけた貴族は、ハレンツァの姿に涙を流して賞賛を送る。

生きて捕らえられた曲者が3人。　死人は、１２人を数える。

そしてリオンが、エリウェンと共に数人の騎士と駆けつけたのは、その後だ。

「ハ・・・ハレンツァ殿おぉぉぉっ！！！！　あああああ・・・この様な・・・」

あのリオンが、絶命したハレンツァを見て膝を崩したのを、騎士や貴族も見た。　リオンは、あまり涙を見せずに、周囲ともクールな付き合いしかしない王子なのだが。　声を押し殺してすすり泣くリオンの背を見た貴族は、リオンの別の一面を垣間見た気がしただろう。

だが、リオンは、駆けつけた貴族や使用人を匿った全ての貴族を、

ハレンツァの使用人や家族も含めて深夜に城へ連れて行った。　無論、ハレンツァの遺体や、曲者達の遺体も全ての証拠も。

そして、誰も盗み聞きの出来ない部屋に集めて、襲撃の事も含めた緘口令を言い渡した。　だが、ハレンツァ一家の身の安全を保障する為に、次の日の昼に家族の身柄は、なんとポリアの家に預けられる。　両親の旧家がこの地に有るのだ。　父方の別宅も有る。　リオンから事を聞いたポリアが、城に詰める兄に掛け合った結果だった。

リオンは、1日明けた後。　ハレンツァの国葬葬式の夜に、謁見を申し出て来たエリウェンと二人きりで城にて会う。

「エリウェン殿、ハレンツァ殿が調べていた事・・私とやるか？」

リオンは、父親の死に悔しさを滲ませるエリウェンを見て。　父親の仕事を継ぐのは、エリウェンを置いて他には居ないと思って聴いたのだ。

形を改めたエリウェンは、リオンに膝間付いて。

「ハレンツァ家は、父の通り“王国の盾”で御座います。　リオン様が“王家の盾”に成られると在らば、我は父同様にこの命を捧げます。　この様な謀略は、我が国家に在っては成らぬ事。　是非、お願い致します」

と。

リオンは、エリウェンに。

「王家の一人として、エリウェン殿のお気持ちに感謝を」

だが、エリウェンには心配が有る。

「あの、リオン様。　所で、陛下は大丈夫ですか？　父の葬儀を執り行い、椅子に座して居ましたが・・・お痩せした様な印象でしたが」

リオンは、苦く頷き。

「父は、ハレンツァ殿の死を知って気を落とされた。　母も心配しているが、食事を取ろうとしない。　今は、兄も父と同様だ・・」

「そうでしたか・・。　王子の御心、御察します。　恐らくトリッシュ様も、陛下も、剣の手解きの最初は父がしました。　そうゆう意味では、師でしたね」

「嗚呼・・。　そうだったですな」

リオンは、自室の窓を向いて目を閉じる。　王家とは、ある意味では隔絶された一族だ。　その生活の中で、勉強や剣の手解きで出会う師は、外の人間であり。　稽古や勉強と為る時間は、師事と云う特別な親交を持つ。　リオンにとっては、テトロザがそうだ。　その心の支えが、父クランベルナードも兄トリッシュも一つ亡くなったのだ。

（絶対に許さない・・。　どんな手を使っても暴き出してやる）

リオンは、心に誓った。　葬儀の後。　リオンは、密かにセイルへ早馬の知らせを飛ばす。　どんな危険が迫るか解らないから、宝物

を預けたマーリの身共々細心の注意を払う様にと。　そして、テトロザに、自分のチームの仲間に、セイル達とマーリの博物館の警護を頼む内容だった。

この日は、セイル達が斡旋所で仕事を請けた日、だった・・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～2　前編最終話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾。

長い内容に成りそうなので、此処で前編と後編に分けたいと思います＾＾　次回は、特別編を挟むか、ポリア編中篇を進行させます＾＾

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

★番外編・特別話　弐★　（前書き）

小話で草案だけ在った話を、K編で前後編。　ウィリアム編で一話作り【特別編】としてお送り致します。　尚、急激に練り上げた話なので、時期的にまだ本編では語られていない部分が小話程度に出て来る事も在りますが。　それは、後々に綴る事も在ると思うので、読み飛ばして下さい。

★番外編・特別話　弐★

特別番外編～K編

別話　記憶を運ぶ男　前編

それは、Kが一人で旅をしていた春先の事。

（ふぅ～・・。　ポリアの奴、ありゃどんどん有名になるなぁ～）

森の中で野宿をするKは、高い木の上に上がって枝に腰を下ろしては満天の星空を見上げていた。　雲一つ無い夜空には、様々な星が輝きを放っている。

（しかし・・空の外には、どんな世界が有るのだろうか・・。　地上に飽きたら、空の果てに行きたいね）

一般の人にこう言ったら・・、誰もが阿呆を見る目で呆れ笑いを返すだろう。　空の果てを考える者は、極々一部の学者のみだからだ。

木の枝の付け根に腰を落とし夜空を見上げる包帯男の手には、何故か片手で持てる大きさの壷を持っている。　何が入っているのだろ

うか・・。

★★★

それから、数日後。　良く晴れて麗かな春の陽気が広がる昼下がりである。　其処は、フラストマド大王国から、スタムスト自治国に入った街道だった。

突然、一斉に森の木々に羽根を休めて止まっていた鳥達が羽ばたいた。　普段なら荷馬車がのんびりと通るぐらいの音しかしない田舎街道で、一斉に湧き上がった男達の大声が原因だ。　声を上げた男達は、誰もがゴロツキ風で垢染みた顔に危険で凶暴な光を目に湛えている。　次々と叫び上げる声は、どうやら何者かを森の中から何処かへ追い込んでいるらしい。

「回り込めっ！！！」

「逃がすなっ！！」

森の中の街道から横に逸れた丘の上。　高い岩盤を背にして、遂に襲撃を仕掛けた悪党共に追い付かれた何者かが、向かい合う悪党一味と争っていた。

「ベンソンっ、囲まれたっ！」

「ああ、見りゃ解るさシーキング。　どうやら、簡単には見逃して

くれんらしい」

人一倍の長身で赤茶けた短髪の戦士と、スラリとした身体に長い黒髪をマントの背に流す剣士が言い合う。　彼等の背後には、この緊迫した様子の中でも朗らかに微笑む少年の様な杖を持つ若者が居た。

柔らかい金髪は緩やかなウェーブを描いて首筋や目元に垂れる。

やや青緑色の碧眼は、何処までも澄んでいて。　この剣を抜き合って争う場面に彼は似合わない。

三人を取り囲んだゴロツキの様な、一見すると冒険者崩れとも思える悪党共の中から、頬に深い傷跡を見せるモヒカン頭をした中年男が前に出て。

「やっと探し出したぜ。　さ、その若いガキを渡せ。　俺達は、ソイツを始末出来ればイイんだ」

赤茶けた短髪で背のかなり高いシーキングが、背中から大剣を勢い良く抜いて構え。

「我等が仲間を誰がお前たちに渡せるかっ！！」

と、鋭く言い放ち。　続いて、整った顔の美顔な剣士ベンソンは、ゆっくりと抜いた剣を八双に擡(もた)げ。

「その辺でゴロ付く輩が、我等二人に敵うか？　仲間を襲うと云うなら、自力で奪ってみろ」

と。　この二人、１０数人の悪党に囲まれては明らかなる多勢に無勢。　たった二人で若い青年を護ろうと云うのに、顔にも態度にも余裕が見える。

目立つ頭の男は、二人に易々と言い返されてしまい顔に怒りを浮かべ。

「コッチが死体一つで済まそうとしてりゃ勝手な事をっ！！　野郎共っ、構わねぇから三人纏めてブッ殺せっ！！！！」

「うおおおおおーーーーっ！！！」

殺気立った男達の声が森の中に開けた丘の中で湧き上がる。

先陣切って斬り掛かって来たゴロツキ共の男達3人の内、二人の細剣と小剣をシーキングは大剣で一気に受け止め。

「邪魔だぁぁっ！！！」

と、大声と共に腕力で振り払う。

「うわぁぁっ！！」

押し返されてよろめきもんどり打つゴロツキ二人。

一方でも、ダガーを投げてから小剣で斬りかかる戦法をとるゴロツキの男だが、ベンソンは難なくダガーを剣で弾いてから小剣の突き込みを同じく剣で受け返す。

「ふんっ」

「クソッ」

直ぐにまた振り込んだお互いの剣と小剣が噛み合うが。　相手の小剣をグィと押し込んでから左へいなすベンソンは、流れる様な動作で剣の柄を相手の鳩尾へと叩き込んだ。

「うぎゃっ！！」

痛みでゴロツキの男は悲鳴を上げながら後退し、野原の上に倒れ込んでなだらかな傾斜を森へと転げて行く。

リーダー格のモヒカン頭をした男は、自身も長剣を引き抜き。

「ビビるなぁっ！！！　３万シフォンの為だぁっ！！」

と、大声を上げて斬り掛かった。

多勢に無勢と云うハンディと、腕の差と云うハンディのどちらか優位か。

「セロっ、離れるなっ！！」

ベンソンは、４人目のゴロツキを斬り伏せて手負いにしてから、背後に居る守るべき相手へ言う。

コクンと頷き絶えぬ笑みを湛える若き青年は、ゴロツキ達と遭わない様にベンソンの背後に動く。

だが、別のゴロツキ３人を再起不能にしたシーキングが、一番厄介そうなリーダー格の男と大戦斧を持つ肥えた巨漢を引き受けている間に、少しずつベンソンとの距離が離れて間を生んだ。　其処に、すばしっこい動きが取り得の小男が二人、チャンスとばかりに入り

込んだ。

「よぉしっ！！！　一気に囲んで殺せっ！！」

肥えた巨漢の男の背後に下がったリーダー格の男が、ベンソンとシーキングの間を広げた事で優位を見て吼え上げた。　相手が二手に分けれた事に、残った１０人近いゴロツキ達が獣の様に殺気を強めた顔を見せる。

だが。

「なぁっ？！！！」

「んっ？！！！！！」

驚愕と云っていい声を出したのは、なんとシーキングとベンソンである。　向かい合うだけに、声を上げたリーダー格の男に起こった異常を真っ先に見た。　なんと、下がって声を上げたリーダー格の男が、首から上の顔を大声を上げたまま宙に残して。　身体を先にゆっくりと野原へと崩したではないか。

急に意味の解らない異常で驚いたベンソンとシーキング。　彼等の視線と、

「背後がガラ空きだ」

と、誰もが聞き慣れない声にゴロツキ共も異変を感じ始めた時。

“ドサっ”

草むらに何かが落ちた音が・・。

聞き慣れない誰かの声と草むらの地面ね何かが落ちた音に、リーダー格の男に最も近かったゴロツキの男は、シーキングとベンソンから視線を外し、耳慣れない男の声と異音のした背後を振り返った。

「あっ？！！」

向いた視界にリーダー格の男は居ない。　代わりに、包帯を顔に巻いて痩せ型で黒尽くめの姿をした男が居るのを見て驚いたのだ。
そして、直ぐにリーダー格の男を捜そうと視線をグルリと動かすと・・。　草むらの野原の上に、何かが置かれた様に有ったのが見えた。
それが、斬り落とされたリーダー格の男の首だと認識するのには、一瞬の時間が必要だったはずだ。

「うわっ・うわわ・・・うわあああああああっ！！！！！！」

思っても見ない光景に恐怖して大声を上げるゴロツキの男は後退り、大戦斧を持つ肥えた悪漢の背中にぶつかる。　このゴロツキの異様な言動に、他のゴロツキ達は一斉に後ろを振り返った。

包帯を顔に巻いた男は、死すら感じさせぬ間で絶命させたリーダー格の男の首を見下ろし。

「賞金首掛かるバッカ共が、大人しく街中で隠れてりゃいいものを」

と、吐き捨てた。

肥えたゴロツキの巨漢が仲間を殺されたと悟って、包帯を巻いた男にギロリと殺気の篭る目をを向け。

「貴様ぁぁっ、病み上がりがぁっ！！！」

と、大戦斧を持ち上げた瞬間だった。

「遅い」

そう発せられた包帯男の声は、なんと巨漢の男の横から聞えたのである。

・・・。　巨漢の男は、大戦斧を振り上げたままに止まり。　直後に、大戦斧の重みで落下する腕だけが先に背後へと落ち。　呆然と立ち尽くすゴロツキ達とシーキングやベンソンが見ている中で、首と身体がバラけて前に崩れて行く。　血は、ドッと溢れる様子も無く。　斬られた身体からタラタラと野原へと零れる様に流れ出た。

異次元の様な強さを見せる包帯男。　目に見える剣技では無い手前で、リーダー格二人の死で言葉無く気力を失ったゴロツキ達。

包帯男は、ゴロツキ達の前にゆっくりと歩み。

「三下共、その内来る街道巡察の騎士と兵士に捕まれ。　なら、命は助ける。　それとも、死んだ二人みたく成りたいか？」

予期せぬ事態でこう云われたゴロツキ達。　包帯男の近くで震え出したゴロツキの一人が。

「こっ・ここ・・この三人の・・一人に、さっ３万シフォンの・かっ・かっかか金出す人が・・」

すると、包帯男は、先にベンソンとシーキングを見て、最後にセロを見てから。

「高々一人に3万だぁ？　そんな大金積んで人殺しする奴は、ロクでも無い事考えるバカ野郎だ。　それをのうのうと請けるお前達もな。　大体、テメェ等みたいな輩に3万も払う奴が居るか？　罠だよ、いい様に遣われて、後で役人に売られるか始末されるのが落ちだ。　バッカな事しか出来ないから、そんな都合の良い話に騙されンだよ」

と、情けない者へ吐き捨てる様に云う。　ゴロツキ達は、皆が戦う事を諦めたかの様に仲間を見る。

包帯男は、武器を手放した者すら居るゴロツキ達へ、

「大金が掛かってる賞金首二人はどの道死刑だからいいが、お前等三下なら島流しか労働刑で済むだろう？　此処で死ぬか？　捕まって刑に服すか？　命懸けで考えろ」

この時、街道の方から馬の嘶きが聞えた。　街道を通る馬車や人から、この丘は森の木々の切れ間から覗ける。　荷馬車か巡視の騎士が馬を止めて見たのか、立ち止まった馬が何かを感じて啼いたのだ。

そして、包帯男は後ろを見ずに。

「役人だな」

と。

そして、街道の方の森の中から五人の兵士が現れた。

「そこのお前達っ、この場で何をしているっ！！」

そして。

兵士達にゴロツキ達は捕まった。　なにせ、リーダー格の男と肥えた巨漢は、数え上げたらキリの無い程に前科の有るお尋ね者。　捕まえたゴロツキ達の中にも、前科の有る手配された者が居る。　それこそ、この場に通り掛かった騎士と兵士にしてみれば、のんびり街道の巡察をしていて大手柄を楽に手に入れられる現場に出くわした様なものだった。

半月交代で森の街道を巡視・巡察して往復する騎士と兵士は、Kと襲われた三人を一緒に小さな砦へ引き返す事に成る。　捕まったゴロツキ達は神妙にしていて、騎士の女性が証拠にと刎ねられた首を麻袋に入れて馬にぶら下げた。

★★★

夕方、森に一足早い夕闇が訪れた頃。　街道の一番大きな分岐点に構えられた砦を、赤い夕日が差込み赤と黒のコントラストを見せる。
包帯男Kを始めに、争っていた全ての者が此処に連れ込まれた。

「では、身に覚えが無いと云うのか？」

「はい」

「その若い者に3万シフォンもの大金を賭けられ、彼を暗殺しようとあれだけの悪党が雇われたと云うのに？」

「無い物は無いとしか云えない」

大女の騎士シャンテ・ベルテモンドは、砦内の応接部屋にてシーキング、ベンソン、セロの三人を一緒にソファーへと座らせて事情を聞いていた。　だが、セロと云う青年は、少し知能遅れなのか微笑んで居ながら魔法の初歩術でイメージ手品をして遊んでいる。　受け答えするベンソンもシーキングも、襲撃される身に覚えは全く無いと主張したのである。

「ふむぅ・・」

柄に似合わない長い長い黒髪を後ろに流すシャンテは、筋骨隆々とした大女で、肌は白いが顔は厳つい田舎の中年男の様にも見える人物。　だが、兵士達はシャンテの次々と出す命に身を直ぐ動かす。　面倒見は良いのだろうか、意思の疎通は図られた出来る人物と見て取れる。

ベンソンは、部屋の隅で壁に凭れて此方を見ている包帯男のKを視野に入れながら。

「我々は、冒険者です。　もしかして奴等は、野党で身包みを剥ぐ目的を誤魔化す為にそう云っているかも知れない。　確かに、私とシーキングはとある国の元兵士だったが。　今は、この通り悠々自適な冒険者に落ち着いています。　これ以上の取調べをしても、何も云えませんよ」

シャンテは、腕組みして二人掛けソファーを独占しつつ。

「ふむ・・」

と、また頷くのみ。　どう考えて良いか判断し兼ねる処だ。

其処へ、立っていたKが。

「御宅等、チーム名は？」

と、横槍を入れて来た。

シャンテも、ベンソンとシーキングも、Kを見る。

「あ、・・・」

いきなりの事で言葉を出せないシーキングに、Kは再度。

「長く冒険者を遣ってるなら、チーム組んでるんだろ？」

その時ベンソンが、一瞬滞った時間を進める様に。

「“スウォウジーバシュラ”だ」

Kは、

「聞かないチーム名だな。　何処からか流れて来たのか？」

「あ、ああ。　仲間の幅が少なくて、田舎町のマリュンからこの先のオーマス州都のキーリへ行こうと思ったのさ」

頷くKは。

「そうか、そりゃ～難儀だったな。　ま、襲われた事に関しては悪党達の人違いも在るかも知れないが・・。　忠告するなら、キーリは炙れた冒険者の巣窟だ。　仕事をしたいなら、自治国の首都ウォルムへ行くか。　南東部のエルル・ルカ・ナンデ州の州都ルカ・ルナに行くのがベストだ。　ま、後二人は人員補強した方がいいがな」

と、廊下へ出る扉に向かう。

その姿に呆気したベンソンは、急に思い出した様に。

「あっ、待ってくれ」

ドアを開いたKは、

「ん？」

ベンソンは、その場で頭を下げて。

「仲間共々助かりました。　お礼を言わせてくれ」

ベンソンを一瞥するだけで、直ぐに廊下の方へ顔を向けたKは、

「ま、アンタ等二人でも十分に倒せた相手だ。　少々の怪我付きでだが・・、ま～通り掛かりの御節介だよ」

と、廊下に消えて行く。

何故か、その姿だけしっかり見ていたセロは。

「アノ人・・強い」

と、おどけた言い方で言った。

それは、ベンソンやシーキングのみならず、シャンテも理解していた。　斬られた二人の首などの切り口を見れば一目瞭然である。

シャンテは、捕まえた一味を連行する手筈を明日の交代に合わせて行うつもりで居た。　だから。

「とにかく、明日の警備交代に合わせて悪党達の身柄をキーリに移動する。　行く所が一緒なら、御主達もキーリまで一緒に同行して貰うぞ」

面倒だと思うベンソンとシーキングは、セロを挟むソファーで見合った。

さて。　その日の夜。

砦に詰める兵士１０人と一緒に食事をするシャンテ。　彼女の左には、ベンソンとシーキングに挟まれたセロが揃って長椅子に座って食事をしている。　彼等３人と向かい合って右側には、ゆっくりとした運びで食事をするＫが居た。　石で出来た広間の食堂だが。兵士達と一緒に世話をする下働きの青年や老爺なども居て、意外に賑やかな食事風景だ。

一緒のテーブルを薦めたシャンテは、Ｋに。

「御主は、一人で旅か？」

レンズ豆のスープをスプーンで掬ったKは、

「ああ、流れ狼をやってる。　チームでワイワイ遣るのは飽きたからな」

と、スプーンを口に運んだ。

ブ男顔のシャンテだが、年齢はまだ３０。　力有り余る筋肉を魅せる彼女は、興味の湧いたKへ更に。

「だが、御主程の剣の腕は、そこら辺の冒険者で比べても敵うまいよ。　本気になれば、世界へ羽ばたけるチームを作れるのではないか？」

しかしKは、自分の顔をスプーンで指し示し。

「ン年前にパタリ病をやってな、高熱の御蔭で顔が歪んで記憶も部分的に抜けちまった。　世界をのんびり旅して、記憶を取り戻したいのさ。　ま、正直な処は有名に成る意欲がスッカラカンだし、面倒だ」

シャンテは、Kが強過ぎるので逆になんとなく素直に納得した。

さて。　そんなシャンテ達を見ている兵士達の中で、一人老いているが身形が少し違う者が居る。　騎士でも兵士でも無い格好で、文官の様なローブに似た服装の人物だ。

スタムスト自治国では、街道巡察へ向かう騎士に必ずブレイン的な

意味合いで現役引退騎士か文官が付く。　何せ、政府の出先機関が遠い場所で、国交に係わる問題や事件が起こると面倒である。　基本的に州の経済は独立しているが警備や治安維持は国家運営なだけに、地元の者だけで編成されない兵士や騎士が地方で面倒を起こす事も考えられる。　この老人達の様に、秘密裏に不正無き様に見守りながら、騎士の相談役として判断や知性を補う人物が時として必要に成る場面が出て来る事も有る訳だ。　その役目担っているのが、この老人補佐官達なのである。

さて、この白髪老人で、目つきの大らかな人物はナスマー副補佐。
彼に、まだ若く入隊したばかりの様な兵士が、こう質問した。

「ナスマー補佐殿、一つ質問を宜しいですか？」

「ん？」

「シャンテ様が斬られた二人の切り口を見て、直ぐにあの包帯を顔に巻いた冒険者を“剣の神か？”と仰いました。　ですが、見た所に襲われて戦っていた二人の冒険者の方が強そうに見えます。　本当に、あの包帯を巻いた者は強いのですか？」

彫が深く小顔の老人ナスマーは、微笑みの顔で相手を見返し。

「なるほど。　では、こう説明しようかな。　仮の話だよ」

「は」

「もし、御主の言うあの悪党共の襲撃に反撃していた二人の冒険者が、仮に此処で叛乱を起こしたとしよう」

「はい」

質問した兵士が聞く態勢に入り、一緒に食事をする3名の兵士も同じく耳を傾ける。

ナスマーは、若い兵士からシャンテや周りの食事をする兵士達を見て。

「あの二人が叛乱したのなら、この場に居るそなた達兵士やシャンテの実力からして取り押さえる事は可能じゃ」

と、云う。　そして、今度はKを一点に見て。

「じゃが・・、あの包帯をした冒険者がもし叛乱したとするなら・・、誰も逃げれず殺されるな。　我々と一緒に、保護した冒険者の剣士二人が加勢してくれたとしても事態は寸部も変わらん」

兵士達は、一瞬言葉を失った。

食事に気持ちを戻し、パンを千切るナスマーは、

「あの包帯男に斬られた二人の切り口。　どちらも完全に水平で、しかも斬った断面に乱れが微塵も見えない。　後から溢れた血も、只流れ出ただけの様子だとか・・。　剣の振るう速さが尋常では無いから、早過ぎてそうなる。　昔、似た仕業(しわざ)をする剣士を一人だけ見たが、あの包帯男の手練はそれより上かも知れない」

別の兵士が、身を乗り出さんばかりに。

「他にもそんな凄い者が居たのですか？」

「うむ。　皆も名前は知っとるよ」

兵士達は、誰の事を言っているのか有名な剣士を次々と思い出しては食事をする事を忘れた・・。

さて。　包帯男Kは、木のテーブルの上をモジモジ歩く天道虫を見つけ。

「流石に春だな、もう虫が生きてる」

と、指に天道虫を乗せて開かれた窓の方に出した。　Kの指先をウロチョロした虫は、春の風が木々を揺らす夜の外に飛んで行く。

虫の行方を見てから目を食事に戻そうとしたシャンテは、ふとKの腰にぶら下った壷に目が行く。

「それは、壷か？　薬師の知識も在ると言っていたな。　何かの薬かな？」

Kは、パンを食べる事に気を戻しながら。

「食事中で悪いが、コイツは骨壷だ。　中には、粉にした骨が入ってる」

ベンソンとシーキングは、少し驚いて目を見張る。　シャンテも同様で。

「骨壷・・。　だが、小さいな。　子供か？」

「いや、大人だ。　厳密に言うなれば、身体の3分の1しか骨に出来なかった」

「・・、だろうな。　そんな小さな、片手でも掴める壷だもの」

「チョット前の話だが、行きずりで魔物が隠れ棲む国境の山を通った。　其処で、モンスター退治を請けて逆にモンスターに殺されかけたチームを見つけた」

Kは、此処でパンにバターを塗る。

シャンテは、話で完全に食事の手が止まっていた。

「ほう。　して？」

「・・、ん。　リーダーの剣士が、駆け出しの仲間達を庇ってモンスターに食い殺された」

「では、その壷の中はその者の・・？」

「ああ。　そのチームの仲間全員が駆け出しの若い奴等ばっかりでな。　しかも、チームを結成したのがフラストマド側ならしい。面々の出身地もバラバラで、死んだリーダーの男の出身地を知ってる者が一人も居ない。　だから、知ってる俺が死んだ男の遺言を聞いて散骨しに行く途中だったって訳さ」

ベンソンは、興味をそそられ。

「何処まで？」

「スタムスト自治国の南南東に在るマウワ村だ」

シャンテは、随分と南方のホーチト国とフラストマド大王国の国境の農村だと知り。

「そうか。　此処からでも街道を伝って・・・、徒歩なら早くて15日は掛かる場所だ。　ご苦労だな」

Kは、更に千切ったパンをスープを浸して。

「ま、暇だしな。　旅のついでさ」

シーキングも、やはりKへ興味を誘われたのか。

「所で、その死んだ御仁を襲ったモンスターは？」

「あ～、ゲルドレックスの成体だった。　ま、チームの事情も在るし、仕事を成功させないと後々のチームが大変だろうから俺が倒した。　その支払われた報酬の一部から、この依頼料が出たって訳さ」

Kの話すゲルドレックスとは、ドラゴンの下級種だ。　だが、硬く赤い鱗に覆われた身体も大きく4メートルを超え。　炎を吐くし、鋭く長い爪は薄い金属鎧を一瞬で切り裂く。　駆け出しの冒険者が何人束に成っても、簡単に勝てる相手では無い。　寧ろ、余程の腕に自信が無ければ、何より先に死人が出る事を心配する必要が在るモンスターだ。　それを簡単に“倒した”と言い切るKに、ベンソンもシーキングも敬服の心境であった。

「疑わしい所は無いが、本当に命を狙われたかも知れん。　気を付けて行かれよ」

スタムスト自治国北東の州都キーリで、警察・警備統括施設と云う大きな木造施設から出て来たベンソン、シーキング、セロの三人は、見送りに外まで出て来たシャンテにこう言われた。

ベンソンは、今朝まで5日間一緒だったKの姿が今に見えなかったので。　別れ際にシャンテへ尋ねてみた。

「所で、あのケイと云う包帯男はどうされたのか」

施設へと踵を返すシャンテは、

「朝に別れた。　今頃、宿を探すか目的の為に旅立っているかのどちらかだろう」

「了解した。　ご迷惑を掛けました」

シャンテは、背のマントを靡かせて施設へと帰って行く。

さて、やっと自由に成った気がするシーキングは、ベンソンに。

「これからどうする？　目的地のルカ・ルナまではまだ１０日以上は掛かる。　本当に仕事でも請けるのか？」

★★★

問われたベンソンは、杖を回して遊ぶセロを後ろに見て。

「あの包帯男でも仲間に加わってくれたらルカ・ルナにだって直行するさ。　だが、懐も寂しい上に俺達は二人。　警戒する相手の懐に堂々と飛び込める今じゃ無いぜ」

「・・・そうか。　じゃ、少し時間を潰すか？」

「ああ、出来れば秋ごろまでルカ・ルナには行きたく無いな」

ベンソンは、シーキングそう言ってから道に向いて。

「仕方ない、斡旋所に行ってみよう」

そのベンソンの言葉を聞くシーキングは、何処と無く困った顔つきをして。

「俺は、冒険者の真似事など嫌いだ。　また、ガラの悪い奴等を見るのか？」

セロを背後にして一緒に歩き出すベンソンは。

「田舎の斡旋所じゃ“地元組”しか居ないから嫌味やからかいも多い。　だが、此処は大きい都市だから、田舎に比べたら少ないよ」

「ホントか？」

「シーキング、お前がからかわれるのは自分の所為だぜ」

ムッとした顔に成って賑わう大通りに歩き出すシーキングは。

「どうゆう意味だ?」

ベンソンは、シーキングを脇目に見て。

「お前、前の職業が全身に出てる」

「なんだそりゃ?」

「俺は、元は一時期でも冒険者だった。　だが、お前は根っからの役所人間。　冒険者でも炙れてる奴等は、そうゆう人の匂いには鋭い。　お前って、ど~もカタいからな。　いきなり成るしかなくて成ったにしても、プンプン匂いするから嫌われるのさ」

シーキングは、顔をムズムズと歪め。

「お前なっ、俺は親も一族も軍人でっ、おまけに今年の頭まで軍人だった男だぞっ!。　お前みたいに、辞めたらサッサと冒険者に成れる様な崩れた生活はしていないっ」

ベンソンは、ニヒルに微笑み。

「それはそれは、お疲れ様」

「全くっ」

この二人、いやセロも含めて何者なのか。

春先の風が心地よく。　大通りに植えられた桜が開花している。

商店が広がる中に設けられた公園などの脇を通れば、子供達が都市

を貫く川辺で釣りをしていたり。　孫や子供を連れた大人が桜を見ていたりする。

スタムスト自治国の北東の州で最大の都市キーリは、林業や農業などを中心に紙等を生み出す職人の多い都市でもある。　都内を幾つも流れる小川は、清らかに澄んでいて。　水が美味しいとも評判だ。

しかし。　人の縁の巡り合わせとは不思議なものだ。　関係が無ければ只の他人事なのに、些細な関係が瞬時に大きく膨らむ事がある。

それは、ベンソンが二人を伴って斡旋所に入った所でだ。

「おに～さん、あのガモンドとホシキンスを挙げるなんて遣るじゃない」

「偶々だ。　旅人を街道の直ぐ脇で襲ってるんだから、見つかり易い奴等だと思うが？」

その男女の話し声に出て来た“ガモンド”と“ホシキンス”とは、ベンソン達を襲ってKに首を斬られたあの二人。

「ン？」

ベンソンは、パン屋のカウンターの様な受付で金を受け取っているKを発見した。

（偶然過ぎるだろ？）

考えれば、賞金首を挙げたKには金を貰う権利がある。　今日まで、街などに滞在出来る事は無かったので、此処に居て当たり前と云えば当たり前なのかも知れない。

近付いてみると、カウンターの内側には随分とグラマラスな年増の女性が胸元の見える長袖の白いワンピースドレスを着て、Kに金を出した後に色目を投げ掛けている。

四角いカウンターを囲む様に古びたテーブルが点在し、ガラス窓張りで中庭を見渡せる席には冒険者達がそれぞれチームでか固まって、Kを見てはヒソヒソと囁き会っている。　Kが受け取った金額が多額だった事もあるんだろうが。　張り紙で賞金首を賭けられた二人の名前が有名だった事もあるのだろうか。

金を受け取ったKに、近くの椅子に腰を掛ける毛むくじゃらの顔をした田舎者っぽい大男が声を掛ける。

「おい、随分なお手柄だったな。　今夜は、何処かで一杯やるのか？」

Kは、“地元組”の男とは受け答えをする気も無いのか、

「俺は流れだ、名前の掲示は要らない。　あの二人の死んだ事だけ書いとけ」

と、受付をする中年女性の主に言った。

「チィ」

小さく舌打ちした毛むくじゃらの顔をした大男。　何かに託けて、目の前で受け取る大金のお裾分けを奢りで預かろうとしたのだ。大して仕事が出来ない分、余計な知恵が付いている。

そんな冒険者を他所に、やや爛れた感が在るが美人でもある主の女性はカウンターに肘杖をして。

「あら、討伐者の名前を書き込まなくていいの？　せっかく何処かのチームに入れるチャンスじゃない。　極悪な悪党のハンティングは、紹介の時にいい口実に成るのよ」

「要らん」

Kは、見向きもしない様子を見せそう捨て置いて出口へ。

必然的に、立ち止まっていたベンソンやシーキング達とは顔を合わせる。

「・・何だ、来てたのか？」

Kは、ベンソンを見てそう一言。

「ああ、来て見た」

ベンソンの前で立ち止まったKは、虚空を見て微笑んでるセロを一瞥した後。

「役者としちゃ不足だな」

と、小さく一言。　そして、ベンソンを見て。

「苦労してるな。　ま・・精精頑張れ。　目的を果たすまで、な」

と、外に出てゆく為に出入り口に向かう。

シーキングは、何を言われているのか解らず。

「何をいきなり・・」

と、驚くが。

遊ぶのを止めたセロは、Kを直視して。

「バレてる」

と、小声で。

ベンソンも、顔色を急に焦らせたモノにして。

「何で我々の事を理解してるんだ・・・」

と。　ベンソンは、シーキングに。

「おいっ、ケイを追うぞ」

言われたシーキングは、ボンヤリとしてしまい。

「えっ・・あっ？　仕事するんじゃなかったのかよ」

だが、ベンソンは我先と追い掛け出した。　セロも、ベンソンの後を行く。　シーキングは、二人に引っ張られる形でまた外に出て行く。

Kが去り。　入って来た冒険者が直ぐに出て行く様子を見た主の女

性は。

「なぁ～んか詰まんない」

と、目を細める。　尖らせた唇には、厚めに塗ったルージュがヌラヌラと光っていた。

逆に、毛むくじゃらの男はKを睨んで居る。

（チキショウめ、同じ流れなのに気に入らねぇ～奴だぜっ！！）

この斡旋所では古株なのか、周りのテーブルに座る冒険者達もこの男とは距離を置いて座っている。　古株で流れの冒険者は、“地元組”と云う他の地に行く実力や行動力すら無い冒険者達の中でも鼻摘み者が多い。　欲ばかりが強くて、駆け出しの冒険者などに絡んで金をせびったり、美味い話を持ち掛けられるチームに手数が足りないと見ると偉そうに売り込むからだ。

他のテーブルでチームとして固まる冒険者達の間では、Kの事を何やらイイ意味で囁き合う声がしていた。　颯爽としていて、ドライでクールな処がまたイイ様に映ったのかも知れない。

さて、斡旋所の外に出てから直ぐに、人の賑わう繁華街の中を突っ切る川沿いの通りに入って行くKを追い掛けたベンソンは、直ぐに追いついたKの脇を歩いて。

「アンタ、俺達の素性を解るのか？」

「さぁな」

同じくKに追いついたシーキングは、遠くを歩くカップルや市民を見て。

「なんだ、なんなんだ？　えっ？　ベンソンよぉ」

その時、セロが。

「そんなに僕は役者下手ですか？」

と、後ろからKに。

シーキングとベンソンがセロを見て止まり。　Kも、呆れた様にセロを見て振り返る。

「成ってない。　何処の貴族か王族か知らんが、出来の悪い従者一人に中途半端な従者が一人。　そして、素性を明かす手掛かりをチーム名にした愚かな君。　冒険者が全員節穴の目を持つとでも思ってるのか？　理由は知らんが、殺される前に国へ帰れ」

Kは、セロに容赦無く言う。

ベンソンとシーキングは、いきなりの事で返す言葉も無く立ち竦んだ。　ある意味、当たっているからだった。

★★★

昼頃。　Kとセロ達3人の姿を大衆的なレストランの一角に見る事

が出来る。　合い席の出来る仕切りの無いフロアでは無く。　その奥で折りたたみの仕切りと観葉植物に囲まれた円卓にて。

席に座って手を拭くKは、チーム名の意味を知らなかったベンソンとシーキングに。

「“スウォウジーバシュラ”ってのは、“愚かに見えた王”と云う昔々の話を小説にした題名で。　童話に脚色した物語の題名はまた別だ。　今は、“ストゥルー・キング・ストーリア”（真実を見抜いた王の物語）と云う題目の演劇で知られるがな」

ベンソンは、耳にした事の有る題目で。

「聞いた事が有る・・」

Kは、更に続けて。

「もう原本となる本は数冊しか残ってない話だが・・、元の実話は確か、妻を亡くした王が息子に王位を譲って、美貌の冴えた後妻を貰い悠々自適に過ごし出す。　だが、その後妻は王と成った義理の息子を殺し、先々自分の生んだ子供を王にしようと画策するのさ。

　其処で、王と成った若者は愚かな王を演じ、毒を盛られた杯を摩り替えて後妻の女性を騙して逆に殺してしまう。　広く読まれた方の童話だと、後妻に子供が出来たが何度も王を殺そうとした事がバレて、前王の怒りを買い処刑されかかるが。　息子で在る王が、腹違いの弟を母無しに出来ないと継母を許し助ける。　後妻は、そんな優しい王に心を打たれて改心する・・だったな」

神妙にして席に座るセロは、俯いたままに。

「良く知ってますね。　古い本で、何処でも読める本では無いのに・・」

「学者だって言ったハズだぜ」

と、Kは、冷たい紅茶の入れられた大きい水差しから、全員分のコップに紅茶を注ぐ。

ベンソンは、周りを見てから。

「それだけで解ったのか？」

Kは、ベンソンの剣を見て。

「お宅の剣。　柄や鞘の紋章を削ってるが、騎士が賜る一品だ。柄の造りや鞘を見るに、物はフラストマド大王国」

「な・・」

驚くベンソンを他所にKは、次にシーキングを見て鼻で笑った。

「フン。　コイツは、大バカ。　かなりの重症者だ。　剣の鞘や柄の紋章は削らないで、布を巻いてあるだけだし。　着ている鎧はマントで隠れているが、地方軍部の騎士が着る特注品だろう？　ついでに言うなら、注意して向かわせる視線が警備警戒の遣り方そのまんま。　騎士や貴族が王国に忠義の証として腕輪かリングを賜るが、今だにその腕輪を逆さに着けてるしな。　隠す気が無いな、うん」

細めた目でセロとベンソンに見られたシーキングは、大きなガタイを円卓に沈ませる気で俯いている。

Kは、最後にセロへ向き。

「知的障害を装っているんだろうが、ただ意思の疎通が出来ないフリをしてるだけだ。　目の運び、気配、どこにも抜かりが無さ過ぎる。　玄人が見れば、直ぐに悟られるよ」

セロは、静かにまた俯いた。

ベンソンは、取り繕う様に。

「あ・・あぁ、ケイ。　最初から・・我々の素性を見抜いていたのか？」

「ああ。　襲われている所を観察してて、なんだか金も取れない芸人が襲われてると思った。　ま、大体の意味を把握したのは、チーム名を聞いた時だがな」

ベンソンは、こうも隅々まで看破されてはお手上げだった。

「済まないが、訳を聞いて貰えないか？　正直、このセロが命を狙われ出して我々も困っているんだ」

「ふ～ん。　ま、云ってみな」

ベンソンの語る話は簡単な物だ。　セロは、都市ルカ・ルナと云う所に住む無従貴族で商人の家の御落胤（おとしだね）である。　愛人の子供であるセロは、正妻の女性に男の子がまだ生まれていない状況なだけに父親に喜ばれ、逆に正妻には愛人である母親と共に憎まれた。　嫉妬に怒り狂った正妻が、気を乱して自分の生んだ子供まで育児放棄を

し掛け、悩んだ末にセロの父親が親戚の老人に二人を預けたのである。

呆れ笑いのKは、包帯の間から見える目でセロを見つめて、

「そりゃ～そうだろうな。　正妻にも女の意地が在るし・・、すんげ～修羅場だっただろうなぁ」

セロは、意外なまでに済まなそうに神妙な素振りである。

さて、ベンソンは、更に続きを話す。

今は、セロの実の父親は既に他界し、セロの実の母親も病気で死んでいる。　セロは、その預けられた老人の孫子（まごこ）として育てられていた。　だが、商人として結構な規模を誇る実の一家は、最後まで正妻に息子が生まれず。　生まれた娘は皆が嫁いで跡取りが居なくなってしまった訳だ。　正妻の老女は、セロを迎えて跡を継がせようと呼び寄せる手紙を遣したのだという。

Kは、先付けで出された茹で豆を齧りながら、セロに。

「よ～く行く気に成ったな。　ま、その誘い自体が罠じゃ無い様に見えるが・・、命狙われてるのに」

セロは、意外に冷静で。

「事実は簡単です。　正妻の方は、一時は僕と母を憎んでいましたが。　自分が母親で、男の子を産めない事で苦しんで居たようです。　僕の事を後々不憫に思ってくれたらしく、僕が魔法を学ぶ費用や幼い頃から勉学の本代を多額のお金で爺やに送ってくれていたそう

です。　その方が、自分の血筋の従兄弟の方に店の跡目を狙われていると云うのです。　自分が殺される前に、戻って跡を継いで欲しいと手紙をくれました」

「ふ～ん。　母性は、憎しみすら溶かすのか。　その正妻の女(ひと)、寂しい思いをしてるのかもな」

Kは、気の無い言い方でそう言う。　大体普通なら、正妻がもうセロを殺す理由など無いから、疑う必要も無い。　寧ろ、セロを育てた老人は、下級貴族でフラストマド大王国に住んでいた。　だから、憎むなら関り合わないはずである。　それなのに、まだ5歳くらいの頃からセロに毎年金を送り続けた正妻の行動は、確かにセロを夫の子供として認めていた証なのだと理解できる。　金の送り主が正妻なのは、セロを育てた老人やセロの実の母親も認めていた事だったらしい。

Kは、気の無い目をベンソンに向けて。

「で？　そのセロを育てた老人と親交の厚いアンタ等騎士様が、態々に暇(いとま)を国に提出してこのセロを護る為に旅人に成ったと？」

ベンソンは、沈んだ顔でKの入れた紅茶のグラスを取り。

「そうだ。　セロ殿の母上であるアイリス様は、それは美しく優しい方だった。　まだ３６と云う年齢で・・・心配しながらセロ殿を残して死んでしまったアイリス様だが。　それまでは、隠居なさったブラムトルーダ男爵殿の世話をしながら、都市の役所で我々騎士や兵士の食事係としても働いていた」

Kは、シーキングも含めて見て。

「二人して、こっちの若いのの母親に相当世話に為った訳だ」

「・・ああ。　田舎貴族の3男として生まれた俺は、正直兄貴が居たから親に目もあまり掛けられずいい加減に育ち。　一人息子でボンボンに育てられたこっちのシーキングなどは、今の通りに世間を知らなかった。　俺とコイツは同じ年に地元の兵隊に入隊し、兵士の頃などに一般民と貴族の差別を敵視する同僚と喧嘩も多く、同じく生まれに偏見を持つ上司からの嫌味で不貞腐れていた時期が有った。　だが、アイリス様は、そんな俺達を含めて誰一人差別せず励ましてくれた。　セロ殿を育てたブラムトルーダ男爵殿は、地元の子供に剣術の手解きを教える道場の師範でもあった。　俺にもシーキングにとっても、ブラムトルーダ殿は最初の剣の師でもある。　そんな御二人の世話を受けていた我々だ、セロ殿を送り届けて欲しいと頼まれたら断れん」

シーキングも、黙って肯定を見せる。

Kは、シーキングやベンソンにとって、セロの母親のアイリスと云う女性が初恋の相手の様な印象が在るのだと悟る。　まして、初めて剣の手解きを教わった師の育てているセロだ。　確かに義理立てする理由には十分過ぎる。

だが、セロの元に正妻の手紙が来てから少しして、行くか行かないか迷っていた時に命をゴロツキに狙われたのである。　その時は、従者の助けが有って逃れたセロだが。　黙っていては育ての祖父に迷惑がかかると思い立ったセロは、意を決して正妻に会う事にした。

そして、シーキングとベンソンは、男爵にセロの事を頼まれる。

身体を壊した師を良く見舞う二人を、ブラムトルーダと云う人物が見込んだのだろう。　ベンソンは、兵士をする前には冒険者だっ

た事も有り。　セロを連れて冒険者のフリをしようと考えたと云う訳だ。

Kは、何の気無しに。

「今まで何回狙われたんだ？」

と、聞くのに対し。　ベンソンが、指を折って。

「ザッと考えて5回程」

「ぶっ」

Kは、その回数の多さに噴出しそうに成って、口の中の物を飲み込むと。

「おいおい、そんなにか？　露骨過ぎるなぁ・・、その正妻の女（ひと）の身柄自体が危ういんじゃないか？」

云われたベンソンは、セロやシーキングとも見合って。

「どうゆう意味だ？」

Kは、会話を止め。　運ばれてきた料理を受けて、先付けで勘定に足りる金をウェイターに払ってしまってから。

「あのな、一応は商人としての家はその正妻が仕切ってるんだろ？」

「ああ、その様だ」

「なのに、その後釜を狙う従兄弟がもし殺し屋を差し向けているとして、そんなに大っぴらな行動に出てるとしたらそれなりに金も使うだろう。　その従兄弟が資金に苦労しないならいいが、もしそうでないならその正妻を抑えて商いの権利を一部持っているかのどっちかだろうよ。　下手したら、もうその正妻って殺されてる可能性も有るかも知れないぞ。　その正妻の女性は、今は一人なのか？家族の誰も周りに居ないのか？」

セロは、そのKの読みにベンソンと見合って顔色を急変させる。

「ベンソンさん、まっ・・まさか義母は・・」

「いや、それは行って見ないと・・」

と、セロを見て言ったベンソンは、焦りを見せながらKに。

「向こうの内情は・・正直な話に、我々も手紙の内容以外には良くは解りません」

Kは、純粋なセロにまだ先を読む力は無いと思い。

「こりゃ～面倒そうだな。　ま、先に喰え。　仕方ない、行く途中だから付いていってやるよ」

この一言に驚き合うセロとベンソンとシーキングは、料理を食べ出すKを見つめた。

★番外編・特別話　弐★　（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

★番外編・特別話　参★　（前書き）

普段からエターナルを読んで頂きありがとうございます。

さて、今回のお話ですが。　どうしても一度で終われない長さになってしまったので。　K編を3部に分けて掲載いたします。　内容が長くなり、数日色々変更してみましたが、元のままが一番解り易いと思い。　そのまま掲載いたします。

★番外編・特別話　参★

特別編：K編

別話　記憶を運ぶ者　中編

不安と心配で食欲を失ったセロ達三人に、Kは強引に食わせて昼を過ごした。

だが、事が緊急事態に為るかも知れないので、直ぐに旅立とうと考えるセロ達を他所に。　Kは、レストランを出ずにゆっくりと構えて。

「アホ。　何も手掛かり無くて突っ込むのか？　全く、本当に頭の回らない頭数だけが揃ってやがる」

と、Kは、セロにその実家の商店の名前を聞いた。“ウィンフィールズ家の雑貨屋：風来店”は、Kも名前の知るスタムスト国内に幾つもの大型店舗を持つ商家だ。

「おいおい、そんな大きな商店なら、情報を得るのは容易いだろうがよ」

レストランで紅茶をシメるKは、呆れた口調でセロ達を見回す。

セロは、Kが名うての冒険者だと思って。

「済みません。　正直、素人の僕には何をどうしていいか全く解りません。　Kさん、どうか力を貸して下さい」

「解ってるさ、そのつもりだよ。　先ず、真っ先に必要なのは現状の情報収集だ。　明日に着ける場所じゃないし、セロが命を狙われている事も考えなければならない」

シーキングは、全く回らない頭だから、Kの意図が全く解らない。

「どうすればいい？」

「この都市にも、系列の直営店が在るはずだ。　先ず、其処へ行こう」

「み・・店に行くのか？」

Kは、ギョッと目を開くシーキングが本当にバカに見えて。

「もう・・いいや。　とにかく、着いて来いよ」

と、席を立った。

正直、ベンソンやセロもKの言っている意味が解るが、どうしたらいいか解らない。　単刀直入に聞いても、答えてくれるか怪しい。

なにより先ず、自分たちが一番怪しいからだ。　大っぴらに向か

って、実はまだセロの事を誰も知らない状態なら、逆に他人を巻き込みかねない。　周りの誰も信じ切れないと云う恐怖や心配も在った。

だが、Kと云う人物は剣の腕だけではない。　あらゆる物事に対応する場数を経験している男だ。　繁華街の大通りの角という最高の立地条件の場所に、四階建てのがっしりとした石造建築の総合店を構える系列店舗“風来屋”へ入り。

「済まないが、この店の主は何方だろうか」

と、一階の開かれた雑貨屋で働く手代の者に問う。

日に焼けた肌をしたガッチリとした大男の手代が、

「何方様で？」

と、Kに聞き返せば。

「私は、フラストマドの貴族ブラムトルーダ様と所縁が在る者だ。　此方は、私の主である若旦那のトーマス様である。　後ろの二人は、旅の護衛に雇った冒険者二人だ」

と、Kは、セロを商人の若旦那としてしまい。　ベンソンとシーキングを護衛で雇った冒険者としてしまう。

「・・・」

Kの鮮やかな語りに、口も挟めない三人は呆けてしまう。

Kは、更に。

「実は、今度我が主が空き店舗としてウォルムとルカ・ルナに土地と家屋を手に入れる事と成りましてね。　此方の国に土地勘が無いので、何処か有名な商人の方にお貸ししようと云う事に成りましてな。　白羽の矢が立ったのが、御宅の系列なのですよ」

すると、手代の男性は自分の処理できる話では無いと思って。

「ああ、それなら奥にどうぞ。　この店の店主をしておりますエルス様を応接室にお呼びします」

「ああ、そうして頂けると助かります」

Kは、嘘を巧に話を纏めてしまった。　数階の階層に渡って店を広げる店舗の中では、一階に能力の在る従業員なり手代を置く。　店へ入る客の入り口であるから、怪しい者が来たなどのチェックから、各階層の商品を聞かれてもサッと答える応用力が必要だ。　Kは、その辺も良く知っている。

（凄い・・）

（ですな）

驚くばかりのセロとベンソン。　シーキングなどは、どうして嘘がバレないのか解らなかった。

さて。　店の奥の応接間に通されたKとセロ達。　Kが、待つ間にセロに聞いたのは、身分を示す何かを持っているかどうか。　セロは、義母からの手紙と、一族だけが持つ事を許される証のメダルペ

ンダントを持っていた。　しかも、護身用の短剣は、ブラムトルーダ家紋入りの王家賜り物なのである。

「よし。　身分を保証出来る品がそれだけあれば完璧だ。　あとは、これから会う人物に合わせて計画を考える。　信用が出来そうな相手なら話すし、出来そうも無い相手なら嘘で通す。　ま、俺に任せとけ」

Kは、何より先ずメイドの対応を見ていた。　出す紅茶の種類や、お茶請け。　そして、メイドがどうゆう形で自分達へ対応をするか・・。　薫り高い紅茶は湯気を上げて、その価値を教えてくれる。　嫌な客と歓迎する客では出す茶葉に差が在り、それはお茶請けに同様が云える。　次に、指図を受けて対応に来るメイドは、主に客の素振りや印象を伝える役目も在る。　年季の入ったメイドや支給係は、主の目を借りていると認識していい。

Kやセロへ支給をするメイドの作法は理に適い、そして何処までも対応しようと云う雰囲気が見えた。　Kは、怪しい見てくれながらにその作法や礼儀などの所作をセロ達以上に弁える。　語り掛ける言葉遣いも正しく崩さない。　ベンソンやセロは、Kが何処かの王侯貴族なのではないかと疑ってしまった程だった。

さて、昼下がり。

「どうも、お待たせいたしました」

昼の木漏れ日が差し込む落ち着いた応接室に、メイドと入れ替わりで穏やかな口調の女性が入って来た。

Kは、ソファーで立ち上がり。

「店主殿のエルス様ですかな？」

長いクリーム色の髪を後ろで髪留めを使って螺旋に纏めて胸元に右回りさせて流し。　前髪を左右に分けたエルスと云う女性は、知的な印象が漂う大人の女らしい人物だ。　Kの姿に驚く事も無く、微笑み返して近寄っては。

「はい、私が姉ケイトからこの店を預かります、店主のエルスです」

鮮やかな桃色と黄色のコントラストが美しい裾元をしたドレスを着た女性エルスに、シーキングはうっとりして固まり。　ベンソンは、男心を擽られた。

一瞬だけチラリとエルスの入って来た廊下と通じる扉を見たKは、挨拶だけ交わしてエルスを席に誘った。　そして、開口一番に。

「実はですね。　我々は、貸主への内情調査を致しまして、一つ心配が在るので事情を聞きまわっています。　此方の若旦那トーマス様は、土地などの貸し借りの仕事は初めてでして、私が仕切っています」

と。

「え？」

驚く顔で、意味を把握出来ないエルスへ。　Kは更に、

「実は・・・、ウィンフィールズ家の内々で、権力の争いが起きていると噂を耳に挟みましてね」

エルスは、スッと顔を引き締め。

「その様な事は御座いません。　我が姉が店もしっかりと仕切っています」

Kは、態と眉を片方上げて。

「ほほぅ・・。　ですが、そちらの系列を仕切るケイト様には男子が無く。　生まれた四人のお嬢様は、皆が何処かに嫁ぎ・・跡取りが不在とか」

「そっ・それはっ」

エルスは、急に慌てて感情を顔に出す。　痛い一族の内情を触られて、思わず焦ったのだろう。

Kは、更に。

「何でも、ケイト様の従兄弟の男性が、“ウィンフィールズの家を継ぐのは自分だ”と、方々に云い回っていると云う噂も聞きましたが？」

エルスは、ギョっとした目つきを見せ、Kに慌てる素振りを残したままに。

「そ・それは間違いですっ。　私達姉妹と従兄弟のヤイコフは、一部の商品取引を合同で行い、。　同じ血縁の誼で事業の一部を協力し合う関係なだけですっ。　それに、姉の無くなった夫には、別の女性との間に男子が在り。　彼を以って、跡取りと致します。　姉

は、それを強く望んでいます。　そして、私達姉妹や系列店の一同は、それを心より待っている最中です。　ヤイコフの下らない噂を盾に、貴方は何を言いに来たのですかっ?!　下らないお話なら、これでお帰り下さいっ」

と、Kに自分の入って来たドアを指差しエルスは怒鳴った。

ベンソンやシーキングは、これでは話に成らなく為ると思い。　セロは、Kに驚きの眼差しを向けている。

だが、Kは此処で。

「へぇ～、そうかい。　でも・・・」

と、意味有り気にエルスを見ては、

「悪りぃが、その夢は半ばで潰えるかもなぁ～」

と、鋭くもせせら笑う様な視線をエルスに向け、言葉遣いまで急に伝法となる。

セロが、Kに怒ろうと思った一瞬。　Kが、セロの膝を掴んで微かに揺すった。

（黙れ）

セロに、その意味が伝わった。　自分の代わりに動こうとしたベンソンとシーキングへ、ソファーに隠れた処で二人の手を片方ずつ握って引いた。　ベンソンやシーキングは、これにまた驚きKからセロに顔を向ける。

急変したKを見るエルスは、席から立ち上がり。

「それはどうゆう意味ですかっ!!　下手な強請りなら騎士様か警備役人を呼びますよっ!!　血縁にもその関わりが御座いますからねっ!!」

と、更に大声で怒鳴る。

しかし、Kは、此処で大して動揺する素振りも無く。

「ああ、そうかい。　呼ぶのは勝手だが・・確か、その腹違いの男の子・・、セロって云うんだろ?　俺は、よ～く知ってるぜ」

と、嘲笑を顔に浮かべる。　言葉の使い方もガラっと変わり悪人の様で、その余裕を持って空ける言葉の間合いは不気味なぐらいだ。

エルスは、“セロ”と名前が出た事で顔色を強張らせた。

「あっ・貴方・・セロの事を知ってるのっ?!!」

逆に問われても、自分の間合いで冷め始めた紅茶のカップを手にするKは。

「あぁ。　今なぁ、セロには・・・多額の賞金が掛けられてるのさ。何と、3万シフォンだぜ?」

「え〝っ?!!　さっ・・3万もっ?!」

驚き強張る顔のエルスを見上げるKは、ニヤリと口元を微笑ませ。

「誰が金を賭けたかよ～くは知らないが。　俺達ゴロツキや殺し屋の間ではよ、そのセロってガキの命を狙ってみぃ～んな殺気立ってる。　俺は、その居所を調べに来たのさ。　おいアンタ、手荒な事も出来るがぁ、命はアンタだって惜しいだろ？　教えろよ、セロは・・何処だ？」

此処までKがエルスを脅す時、初めてセロ達三人はKの行動に可笑しいと気付いた。　Kが、何かを考えてこう言っているのだと悟る。

「あぁぁ・・あああああ・・ヤイコフ、ヤイコフねっ！！！　な・なんて事をっ！！！！」

セロが命を狙われていると知ったエルスは、錯乱した感情のままに応接室の入り口に突然走り。　白い取っ手の赤いドアを引き開けた。

所が。　其処には、何故か下働きをしている格好の中年男が居て。

「あっ・奥様・・」

と、突然エルスが扉を開いた事に驚きの顔を見せる。　見ていたKやセロ達には、それが少しヘンに映った。　強いてハッキリ言うなら、“態とらしい”と云う感じだろうか。

逆に開いたエルスは、其処に居るはずの無い人物が居た事で更に動転を加速させ。

「何を・何をしてるのアレイブっ！！　あっ・・貴方っ、今日は川の船着場勤めでしょう？」

と、混乱した顔のままに呆気に取られた。

エルスにそう言われて、言葉を詰まらせ焦る素振りのアレイブと云う男は、

「あっ・いや・・奥様の大声に驚きまして・・」

すると、Kはニヤリと更に笑い。

「なぁ～んだ、セロの命を狙う輩は此処にも侵入してた訳か。　チィ、聞き耳立ててる様子を見ると・・セロは此処に来ちゃ居ないかぁ」

と、態と大声で言いながら。　半分飲んだ紅茶を置き、他の香り付けをするドライフルーツが入れられたガラス瓶へと手を伸ばす。

まるで、我が庭の様に横柄な振る舞いで。

その言葉を耳に入れたエルスは、Kを見た視線をアレイブと云う中年男に移し。　もう混乱を来たしては。

「えっ？　あ・アレイブぅっ、貴方は何者なのっ？！！」

と、髪の毛を振り乱してヒステリックに怒鳴り出した。

こうもエルスが感情的に乱れていては、聞き耳を立てていたアレイブと云う男も言い訳が効き難いと感じて本性を現した。

「クソっ、狙ってる野郎が他にも居たかッ！！」

自分を殺し屋呼ばわりしたKを睨むアレイブと云う男は、俄かに顔色を悪党の様な顔つきに変え店の裏口へと走り出す。　恐らく、Kの様子を見て同業者と感じてしまったのだろう。　蛇の道は蛇で、同じ穴の狢ほどお互いの事を察するものだから・・・。

だが、豹変した使用人がセロの命を狙う者だったと見たエルスの興奮と混乱は、一気に最高潮へと上り詰めてしまう。

「あっ・・あああっ!!　誰かぁぁっ、誰かぁぁっ!!!!」

と、もう気を乱して誰かを叫び上げた。　その声を聞いて直ぐに、手代の男が応接室の在る廊下に走って来て。

「奥様っ、如何なされましたッ?!!」

廊下と応接室の境の壁に凭れるエルスは、アレイブが血相を変えて走って行った方を指差し。

「アレイブが逃げたっ!!　セロがっ、セロが命を狙われているのおっ!!　あぁっ!!!!　あぁぁっ!!!!　どっ・どうしましょっ・・どうしましょっ!!!!!」

顔を紅潮させ、人目を憚る事も忘れて狼狽し泣き出すエルス。

手代の男は、泣き叫ぶエルスに寄り添いながらKを見る。

Kは、セロに。

「潜り込んでやがったな」

その一連の流れに呆然とするセロは、Kが全て悟ってやったのだと理解し。　驚きの眼差しで見て。

「態とやったのですね。　私の居所を隠す為に・・・」

頷いたKは、手代の男性に。

「アンタ、そのまま不審者を追う素振りで役所に走りな」

と、言い。　一緒に此方を呆然と見るエルスへ、

「騙して悪いな。　狙われてるセロは、此処に居るよ。　マジで刺客に狙われているから、一芝居打たせて貰った。　込み入った話に成るから、信用の出来る者以外はこの周りに残すな」

涙目をそのままに、急な展開で意味が飲み込めないエルスは、セロを見て手を伸ばしながら。

「う・・嘘・・・せ・ろ？　セロ？　あ・・貴方が・・セロ？」

エルスへ向かって立ち上がるセロは、深々とお辞儀をして。

「はい。　父の血縁で、ブラムトルーダ御爺様に育てられました。セロです。　セロ・キロマフィル・ウィンフィールズです」

「あ・・・」

エルスは、その名前に伸ばし掛けた手をクタクタと床に落とした。

★
★
★

Kと手代の男性が、応接室に篭って手早く話をし出した。　手代の男は、中々実直で出来る男だった。　直ぐに今日の営業をエルスの体調不良を理由に閉め、一部の階の業務のみにして従業員を帰し。

古くからエルスの元に勤める者を二人だけ残した。　メイドの女性は、エルスと関係が深い家の者なので、着替えさせて業務に当たらせる。

だが、これまでの事をセロがエルスに説明をする中で知るのは、なんとあの午前中で別れた騎士のシャンテは、このエルスの旦那とは従兄弟に成ると言う。

事実を知ったKは、何とも云えぬ半笑いで。

「せめぇ～世の中だ。　是非、その騎士様を呼んでくれ。　話が早いや」

と。

手代の中年男性が、アレイブを追う素振りで役所に行く者と、他にもセロを狙う者が居そうな川の荷揚げ場の港へ従者を手配する。

さて、セロがエルスに示した手紙や身を明かすメダルは、エルスが確認して本物だった。　エルスは、セロを見て心配と安心とで涙を流し、セロを抱きしめた。

「あぁ・・セロ・・。　命を狙われる事に成っているだなんて・・何も知らなかった・・。　あぁ・・、何も知らなかった」

「叔母様、ご心配と迷惑を御掛け致しまして済みません」

「いいの・・、いいのよ。　あぁ、こうして見ると、無くなった義兄のデーヴィス様に似てる気がするわ。　姉は、貴方を見て泣くわね・・。　デーヴィス様が亡くなった時、何日も泣き臥せったもの・・。　義理とは云え、息子の貴方がこんなにも立派に成って、姉には嬉しい限りよ」

廊下とのドア前に居たKは、そんなに簡単な話かと思いつつも黙って見ている。

だが、セロは、エルスを見上げると。

「叔母様、私は・・心配で此処に参りました。　私の命を狙う人が、もし義母(はは)様や叔母様の従兄弟だとしたら、義母様は大丈夫なのでしょうか・・」

エルスは、セロを抱きながらソファーで見つめ。

「先月、私は姉と一緒に御父様のお墓参りをして来ましたから、姉は元気で居ますよ」

気配を再度出入り口で調べてからドアを閉めて、身を返して窓際へ歩くKは、其処で二人の会話に口を挟み。

「だが、セロを殺す気に成ったなら、その仕切ってる義母のケイトと云う人物も邪魔に成るのではないか？　今の当主代行なのだろう

？」

そう言われると不安に思えるエルスは、少し顔色を強張らせるも。

「でも、ウィンフィールズの家を正統に継ぐには、姉と私と義兄一族の兄弟二人の了承全てを得ないと・・。　それに姉の側には、義兄デーヴィス様の頃からの従者で剣技に秀でたダジェドが居ります。もし姉に何か在るなら、直ぐに我々へ連絡が来るかと・・」

腕組みし、窓辺に腰を預けてたKは。

「でも、セロを殺る気に成ったなら・・・、正統な継承権や承認権を持つ者を軒並み殺す気も考えられる。　ま、利権や金絡みで先ずは懐柔を誘うだろうが・・な」

するとエルスは、眉間に皺を見せ。

「誰があんなヤイコフをっ、何度言われても絶対に私は認めないわっ」

Kは、空かさず。

「〝何度・・〟ね。　もう、一度は仄めかされた訳だ」

「あっ・・、何度もよ。　数年前からね」

「おいおい、そんなかよ」

Kは、もう進行形で画策してると読んだ。　だが、遣り方が露骨過ぎるのが気に成る。

エルスを案ずるセロが、エルスに声を掛ける。　セロに声を掛けられ、安心するエルスはセロをまた抱きしめた。　セロは、何処か女性らしいしなやかさを持つ青年で、女性には好かれるタイプだろう。

其処で、Kへ近寄ってきたベンソンは、セロを我が子の様に抱きしめて放さないエルスとの様子を見て、同じくそれを見ているKに。

「だが、正直安心したよ。　俺は、セロが一族に受け入れられるのか心配だったが・・、エルス殿が受け入れる姿を見れたのは安心だ」

「だな～。　しっかし、話し始めて直ぐに聞き耳立てる奴の気配したから、ちぃ～っと呆れたゼ」

同じく近寄ったシーキングは、それを感じてあんな芝居を打ったのかとKに驚き。

「アンタ、怖いよ」

逆にKは、それを感じる事も出来なかったシーキングに呆れて。

「アンタ等、それぐらい感じろよ。　マヌケな騎士様様だぁ～、修行一からやり直せ」

シーキングは、ガックリと首を垂れた。

★★★

あの大女騎士シャンテが、夕方には遣って来た。

「御主達・・」

エルスの店の応接室にて、Kとセロ達一行を見たシャンテは、随分と呆れた顔を窺わせる。　だが、エルスとは義理の姪に成るシャンテは、12人兄弟の9番目の娘なのだとか。　だから、エルスの夫と従姉弟とは云え、年齢差は親子か伯父伯母の様に成る訳だ。

シャンテは、ソファーの上のセロを見つめて。

「セロ・・、これがエルス殿の言っていた跡継ぎ・・。　話は薄らと聞いたが・・、命を狙われてるとは・・」

と、言ってからベンソンやシーキングを見て、少し不満を込めた表情をし。

「何であの時に言わなかった？　私は、しつこく聞いたであろうに・・」

ベンソンは、一礼した後に。

「私が誰にも言わないと決めたのだ」

すると、セロも二人を庇う様に。

「済みません。　フラストマドの街中では、金で動かされた役人ま

で手先でした。　所持品を検められたらバレるので偽名は使いませんでしたが・・、そうゆう経緯も在りまして・・。　僕は、障害が在る者をを演じていたんです」

「ふむぅ」

確かに納得も出来る話だと不満を飲み込むシャンテは、Kを見て。

「で？　これからどうするのだ？」

一人用の椅子にどっかり座ったKは、

「明日にはルカ・ルナに旅立つ。　殺し屋がこうもウロチョロしてるなら、元凶を絶つのが一番。　セロをケイトと云う人物に会わせて、その場に従兄弟の野郎を呼び出して問い質す」

シェンテは、大胆に行くと思い。

「大変だぞ？」

「いや、このエルスさんから荷馬車を一つ借りる事にした。　日数を縮める事も出来るし、身を隠す事も可能だ。　だが、その他の一番面倒な処の部分を、アンタになんとかして欲しい」

シャンテは、セロと同じソファーにどっかりと座り。　セロを見てから、またKを見て。

「どうしろと？」

Kは、紅茶を一口して。

「ルカ・ルナに、アンタが信用出来る役人の知り合い居ないか？
その人物へ、アンタからの事情を認めた一筆を貰いたい。　それから、出来れば軍用の馬も一頭貸してくれ。　いざと為ったら、セロと誰かを二人で生かす為にな」

シェンテにしてみれば、いざと為ってもKが居れば怖い者など無いと看破し。

「ふむ、それなら・・、私が一緒に行こうか？」

これには、Kも目を少し大きく開き。

「本気か？」

セロやベンソンも驚き、シーキングは人数が増えてどうなるか不安に為った。

気が強く男勝りな義理の姪なだけに、エルスは心配する。

「シャンテ、大丈夫なの？　夫はこの都市の運営をする長官、アナタが勝手な事をしたら・・」

だが、シャンテは豪快に笑い。

「あはははは、大丈夫です小母様。　私は、今回の盗賊討伐の功で、中央に行って報告をする事に成りましてな。　従兄弟で兄には幾らでも言い訳が効きます。　こんな一族の危機に対峙出来るとは、正しく楽しみ。　小母様の心配を払う意味でも、これは是非にご一緒したい」

と、Kを不適に見て。

「良いな」

Kは、紅茶のグラスを持ち上げ。

「面倒が剥げて気楽だ。　序(ついで)に、面倒な襲撃も在れば任せるか。俺が出張る相手など居ないとタカを括ってさぁ～」

シャンテは、その言い草に呆れた笑いを見せ。

ベンソンやシーキングは、いい加減な様子に困った顔をした。

・・・。

★★★

それから5日が経った。

エルル・ルカ・ナンデ州の州都で、スタムスト自治国の中でも3番目に大きい都市ルカ・ルナの商業区のど真ん中。　最も太い通りで、日中一番賑わう“剣の十字路”と呼ばれる交差点が在る。　山を越えて山岳街道を来ると、スタムスト自治国としてはこのルカ・ルナの都市に最初に入る。　それは、フラストマド側、ホーチト側どち

らも同じ。　どちらの街道も、ルカ・ルナのこの通りに通じる為か。
旅人には“基点街道通り”などとも呼ばれる。

さて、その馬車数台が横に成れる大通りの十字路。　角には、このスタムスト自治国を代表する商人が出す店が立ち並ぶ。　中でも、この街が拠点のウィンフィールズ家運営の風来屋は、武器・防具から薬なども扱う一番大きな城型店を構え。　白灰色の城の内部には、吹きぬけた各階の広いホールが専門店だったり、品数豊富な雑貨屋だったりする。　ドアとして廊下と店内を仕切りの戸も透明なガラスで、内装もスッキリした珍しい大型店だった。

その城型の商店の地下は、左右上下の他店に繋がる地下道に為っていて。　昼間から様々なオブジェに象られたグラスランプが、色彩豊かな光を放つ自由市場として開放されている。　店を持てない露天商に、少ない地代で貸し出されている有名な場所なのだ。

さて、その名物的な様相をした城型店舗から、店を挟むこと１０数西に離れた場所にある二階建ての店が、アンダクィル家が営む“名品館”である。　店主は、ヤイコフと云う４０そこそこの男で、口煩い男で有名な・・とはいかなかった。

店主のヤイコフの商才は中々で、２０半ばで主と成ってから更に２店舗を増やす繁盛ぶりだ。

その店の周囲で、今日の午前中に話を聞き回ったフードを被った何者かが居た。　その何者かが、ヤイコフの営業する店の事を、店の周囲に点在する別の店の店員などに尋ねると・・。

“ヤイコフさんは、姉の嫁いだウィンフィールズ様の事が絡む以外では素晴らしい人だよ”

“ヤイコフは、見ては大人しく無口だがね。　心の方は中々だよ”

“ヤイコフさんは、しっかりしてる。　先ず、金払いはキッチリ。　しかも、使用人を面倒見良く長く見る。　怪我や病気で永く休んでも絶対切らないし、家族が増えるとか、結婚するとか門出を迎える従業員には、働きに応じても在るけど手当てを必ず上げるのさ。　店の内部の上下関係には、躾け厳しい処も在るけどさ。　イジメや横暴は絶対に許さないんだよ”

“あのヤイコフって、何故か独り者なんだよなぁ～。　金も在るし、女の一人を囲ってたり、嫁さん居てもおかしく無いのに・・・。　何処か暗くてね、だけど他人の不幸話は嫌いみたいだね。　特に、男女の悲恋や別れには涙を見せる事も在ったらしいよ”

“ヤイコフって、女に優しいんだぜ。　何時だっけか、借金に塗れて自殺しかけた娘さんが居てね。　身体を兄弟の為に売ってたんだけど、好きな人が出来ちまって・・・。　でも、ヤイコフはその娘さんを助けたんだぜ？　借金まで肩代わりして、今では、その娘さんは好きに成った男と結婚して、ヤイコフの別の店で働いてる。　あの身売りしてた頃の暗い影さしてた頃とは別人だよ”

“ヤイコフは、過去に何か有ったんじゃないかね。　普段は物静かで、そりゃ～やり手の商人なのにさ。　時折、何かに我慢出来ないみたいにウィンフィールズの店や、主のケイト様の所に行っては横暴な事を云うらしい。　一度、夜中に酔っ払って、“ウィンフィールズの家を潰してやる”って息巻いてたのを聞いた誰か居たってさ”

聞き込んだのは、実はもう現地に踏み込んだKとセロ。

人通りの多い大通りを春の気持ち良い風に吹かれながら行くセロは、ローブとフードで顔を隠す隣のKに小声で。

（ヤイコフさんて、随分とイイ人ですね。　本当に、僕を狙ってる人なのか判らなく為りました）

（人は、色々な側面を持つ。　ま、それなりに理由を伴う側面も有れば、性根と云う性格から来る側面も有る。　確かに、ヤイコフとは悪人と思える人物では無いかも知れん。　だが、一部に狂った様な一面を覗かせる様だ・・。　その全てが理由有ってか、それとも性格からか・・。　其処を見極める必要が在るな）

Kの感想に、セロは確かに云う通りだと思った・・・。

さて、この二つの家の母屋はと云うと。　これまた商人や高給官僚などが住む、“特別住居区”と市民が言う小高い丘の一等地に在るのだが。　ウィンフィールズ家は、それこそ公園や森林園などとも程近く、井戸も倉庫も持った大きな家だ。　土地の面積だけでも凄いが、また所有する倉庫の数も半端では無かった。　一方、アンダクィル家の家は、その一等地の周辺に在る大きめな屋敷であるが・・。　倉庫を建てる場所も無ければ、井戸なども共同の物だ。

さて、この二つの家の関係は、それこそセロの父親が当主に為った頃に接近した。

元々、ケイトと云う正妻やエルスの姉妹と一家が住み暮らしていたのが、今のヤイコフが住む屋敷であり。　生計を立てて居たのが、同じく彼の持つ店。　ウィンフィールズ家にケイトが嫁ぎ、妹で歳の離れたエルスが、ウィンフィールズ家と近親のウォンバッハ家（エルスの夫の家）の長男と許嫁関係と為った事で、ケイトの一家は

ウィンフィールズの一族に加わる。

さて、そうなれば元のアンダクィル家は跡取りが居なくなる。　其処で、ケイトやエルスの父親は、自分の弟夫婦に店の営業を引き継がせ、自身は隠居してケイトの世話に入った。　だから普通から考えても、ヤイコフの一族がウィンフィールズの家を統合しようとなど狙うのは大それた事であり。　周りからすれば、“恩知らず”・“恥さらし”と噂される通りなのである。

だが、当のヤイコフは、周りの言う事など全く耳に入れず。　従姉弟であるケイトの娘と結婚しようとしたり、娘が全員有力者に嫁ぐと、今度はケイトに無断でウィンフィールズ家の商店に出向いて我儘を言うのだ。　それでいて、第三者に対するヤイコフの態度は礼儀を弁えた大人と変わる。　周りの人々が、ヤイコフを変人扱いするのがこのギャップである。　だから、ヤイコフはいままで独り者なのであろう。

今年で御年５４歳に成ったケイトは、ヤイコフの我儘に手を焼いていた。

大きな母屋と似た大きさの離れがモダンな様相で隣り合う薄桃色の館。　その離れ側の一階には、芝の広がる中庭を眺める事が出来るテラスを備えた一室が在った。　その部屋の窓辺には、白い鉢植えで花をつけた植物が植わっている。　その鉢に水を与えているのは、頭が真っ白の初老女性である。　少し目の釣りあがった目じりの両端だが、顔つきは美しかった若き頃を思わせる品質が残り。　黒いレースのドレスに纏われた身体つきは、未だに張りの在る女性らしいラインをしっかりと残す。

「お前達、しっかり水を御飲み。　もう直ぐ、セロが来ますからね。

萎れた姿など見せてはいけませんよ」

微笑む顔で草花に語り掛けるこの女性からは、母性が明らかに滲み。

皺の見える顔ながら、何処かに安心の出来る麗しさが漂った。

さて、其処へドアが開き。

「奥様、お客様が来ております」

と、少し低音ながら通りの良い男性の声がする。

水遣りの手だけを止めた女性は、顔を少しだけ声の方に動かし。

「またヤイコフかい？　ダジェド、お前・・」

そう言い掛けた女性・・、いや。　この屋敷の主でもあるケイトの声を遮る様に、腰に剣を佩く大柄で黒い厚手の衣服をしっかり着る男が室内へ入室し。

「いえ、奥様。　来たのは、エルス様御一族の従姉弟殿です。　名前は、シャンテ・ベルテモンド様と云うお方で・・」

その名前を聞いたケイトは、数年前にエルスの義理の父親が死んだ時に葬列へ出向いた事を思い出す。　その時、代々軍人や騎士を輩出するエルスの夫の従姉弟で、ベルテモンド家を紹介された。　老骨ながら逞しい父親と共に、雄雄しく武人然とした若き娘を見た記憶を思い出す。

「あぁ、正しくシャンテ殿・・。　ダジェド、直ぐに此処にお通しして」

「あ・・はぁ・・」

生返事で引き上げる彼は、ケイトとこの一家を護る為に仕える剣士ダジェド。　ケイトに仕える執事の女性と結婚してケイトの用人と成っていた。

ケイトは、人として本当にキリの良い金を払う。　多くも無く少なくも無く。　結婚や出産を重ねる家族には給金を厚くし、能力の在る者には金より仕事の充実を以って功と成す方向を見出していて。

その使用人達の忠義心は非常に厚い。　皆、ケイトの考えを理解し、ヤイコフを毛嫌いしていた。

だが、このダジェドだけは、ケイトの金払いに不満を持っている。

デーヴィスは、金持ちのボンボン丸出しな部分が有って、金にはざっくばらん過ぎる使い方をする傾向が有ったのだが。　ケイトに代わるとそれは無くなったのである。　つまりは、デーヴィスを持ち上げて金を貰っていたダジェドなどは、詰まらないと云う事になる。

（全く、近親者だからとホイホイ入れるのか？）

ダジェドは、玄関ロビーで待たせた大女のシャンテと、その従者であるローブにフードを深く被った４人を向かえ。

「奥様がお会いに為るそうです。　此方へ」

と、離れのリビングへ案内した。

大きな屋敷で、離れには一階と四階にあるどちらかの回廊を行く事

になる。

「・・・」

シャンテを先頭にロビーへ入ったセロ達。　Kの提案で、ケイトと話の出来る態勢が整うまでは顔を隠そうと云う打ち合わせだった。　エルスの所にまで殺し屋が潜り込んで居た訳だから、此処は尚更警戒しなければ為らないのは当然だろう。

ロビーに踏み込んだ正面奥には、二階へ向かう大階段が在り。　その階段越しで奥の壁には、中々渋みの効いた中年男性の肖像画が大きく飾ってある。　絵を見ても気品が有り、大商人の主らしい風格が見えた。　だが、肌の色は黒くも無く白くも無い。　髪の毛は黒で、目の色も黒。

Kは、肖像画を見て気に成った。　案内をするダジェドへ、

「ちょっと、失礼」

と、声を掛ける。

「え？　何でしょうか？」

立ち止まり振り返ったダジェドへ、Kは。

「この絵は、亡くなったデーヴィス殿ですか？」

ダジェドは、同じく絵を見上げて。

「あ、あはは、そうですよ。　先代のデーヴィス様です。　向こ

うの廊下を行く途中には、過去の代々当主の肖像画が小さくありますよ」

シャンテは、その会話に踏み込み。

「ケイト殿の肖像画は飾らなくて良いのか？」

「あ、それは、奥様が嫌がっています。“無駄に金を掛ける必要は無い。私は、夫の跡を継ぐ者へ橋渡しする役目だから、絵は要らない”だそうで」

廊下を案内される中でも、Kだけは何故か代々の当主の顔をしっかり見て来た。

さて。

離れのリビングに案内され、シャンテは室内に入ると。窓際に佇む女性を見ては、

「ご機嫌麗しゅうに」

と、ケイトへ一礼した。

ケイトもまた、数年振りで会う遠縁の者に微笑み返し。

「いらっしゃい、サクトルマ様のご葬儀以来ですね」

と。サクトルマ・ウォンバッハは、エルスの夫の父親である。

「ええ、エルス様に頼まれまして、ケイト様のお顔を窺う様に・・」

しかし。　此処でシャンテは、一緒に中に入ろうとするダジェドへ。

「済まぬ、御主は外して欲しい。　今から、ケイト殿と一族の大事な話が在る。　エルス様には、ケイト様のみにと言伝を預かっている。　貴殿は、外して欲しい」

と、少し鋭い口調で言った。

ケイト一家の身の回りを護るダジェドは、ムッとした顔に変わり。

「何だとっ?!　其方はこの様に不気味な面体も解らぬ者共を連れてるのにか?」

シャンテは、ローブにフードを被る誰か解らないセロ達四人を見て。

「この者は、私の配下の者で、本来は隠密の作業を頼む腹心中の腹心。　今は、御主の意見を聞く時では無い」

いきなりの事で、ケイトは怪訝な顔をシャンテに向けて。

「シャンテ殿、どうゆう事です?」

シャンテは、ケイトに一礼し。

「は。　エルス様から、此方に来る手筈に為っていた人物についての重要なお話が・・」

シャンテは、俄かに顔色を曇らせた。　丸で訃報を伝える様な素振りに成る。

一方のケイトも、“此処に来る手筈”の人物はセロ以外に居ないと直感して驚き。

「ダジェドっ、直ぐに下がりなさいっ！！　それから、この離れから人払いをして、シャンテ殿が来た事を夕方まで伏せなさい。　いいですねっ？！」

その焦る中でも鋭く指図を出す様は、流石に大きな商人の奥方だと感じるに十分だった。

「は・・はっ」

困惑するダジェドは、ケイトに云われては仕方なく一礼して退室する。

ダジェドが去ったのを確認するシャンテ。　そのシャンテにドレスを引いて近付くケイトは。

「あぁ・・、シャンテ殿・・まっ・まさか・・セロが・・セロがッ？！」

シャンテは、今にも泣きそうな目をするケイトを見下ろし。

「ケイト様、ご安心され。　セロ殿は、此処にお連れした」

「えっ」

驚くケイトへ、シャンテは半身と成り。　背後の一番背の低いローブの人物へ、ケイトへの道を譲った。

セロは、フードをゆっくりと取った。

「・・・・」

セロを見つめたケイトの顔が、セロを見た瞬間にこれ以上無い驚きの顔と変わり。　震える手を微かに伸ばしながら、戸惑う足取りでセロへ寄って行く。

この時、K以外のシーキングとベンソンもフードを取った。

「あ・・・あ・・あぁ・・鳴呼ぁ」

セロへ辿り着いたケイトは、セロの顔を見て小声を発し。　それが嗚咽と変わって泣き出したのだ。

「あぁっ!!　ああっ!!!」

大声で泣き出すケイトを、セロは心配する。

「義母様、セロです・・」

ケイトの手を支え、崩れるケイトの身体を抱き寄せて一緒に床へ座るセロ。　そんなセロへ、ケイトは。

「ごめんなさい・・ごめんなさいっ。　私が悪かったの・・全部私が悪かったのぉぉっ!!!」

押し殺そうとする嗚咽や泣き声は、溢れる思いの強さで止めが利かなかったのだろう。　ケイトは、セロに縋り付いて泣いた・・・。

少しして涙の勢いが落ち着き、ケイトはセロの顔を両手で触れ。

「何て・・なんてお母さんに・・そっくりな顔・・。　あの人が・・貴方を可愛がったのを解る・・。　あぁ・・、私はどうして・・あんなに・・」

セロは、母性と慈しみの涙で顔を綻ばせる義母が不思議に見えた。
この人物が、自分の母親を追い出したのかと思うと信じられなかった。

「義母様、僕は・・そんなに似て居ますか？」

「ええ・・ええ、目や鼻はあの人に薄らと・・、唇や輪郭は・・母親にそっくり。　あの人の若い頃に・・面影が・・・」

と、ケイトはセロに顔を近づけ、額をくつけては目を瞑り。

「アナタ・・セロが・・セロが来てくれたわぁ・・」

セロは、自分を途中から許し、生活の面倒を見てくれたケイトを抱きしめた。

「義母様・・正直会いたかったです・・」

「セロ・・」

見ているシャンテは、亡くなったケイトの夫デーヴィスが若返り、再度ケイトを抱きしめている様な錯覚を一瞬覚える。

（待っていたのか・・、記憶の中で二人がこうなる事を？　デーヴィス殿、見て居られるか？）

セロに抱かれるケイトの顔が見ているベンソンやシーキングには、ケイトの顔が心なしか若返った印象で見え。　丸で、夫婦の様な親子の様な雰囲気を見せたのである。

さて。

落ち着いたケイトは、皆を応接用のソファーに座らせた。　そして、紅茶の用意をさせ、シャンテに深々と礼を述べる。

シャンテは、ベンソンとシーキングを紹介し。

「彼等が、命懸けでセロを護ったのです。　何よりの礼は、この二人に」

ケイトは、態々立ち。　シーキングとベンソンの前に来て厚い礼を述べる。

ベンソンは、

（此処にもアイリス様の様な人物が居たか・・。　セロを護れて良かった）

と、思い。

シーキングは、ガチンガチンに固まって恐縮し。　何度頭を下げたか。

ケイトは、少し席を外し。　戻るとセロへ。

「これ、貴方に返さないとね」

と、金色の縁取りが輝きを色褪せるブローチをハンカチに乗せて差し出した。　深紅の薔薇を一輪草原に描いたデザインだった。

ブローチを受け取ったセロは、そのブローチを手にケイトを見て。

「義母様、これは？」

席に戻るケイトは、悲しみを滲ませる自虐的な微笑で俯き。

「それは、貴方のお母さんの物よ」

「え？」

ケイトは、セロに頭を下げ。

「ゴメンね、セロ。　私は、親の一存と夫の熱望で２０歳の時にデーヴィスへ嫁いだの。　１０年程して・・、女の子しか産めない私に不満を募らせて処で、あの人は貴方のお母さんに激しい恋を抱いたの・・。　彼女は、元々親無し子みたいで、育児施設に住んでいたらしくてね。　施設の運営者の口ぞえも有って、日雇いの仕事でウチの店に売り子として来ていたのだけれど・・。　アイリスを見初めたデーヴィスは、半ば強引の様に別の場所に住まわせ、そしてアイリスは貴方を身篭った。　若くて・・まだ世間を知らない私には夫が初めてで・・、人の心を知る事の出来ない愚か者だった・・。
だから、嫉妬して・・貴方が生まれてその性が男の子だと知った時・・負けたと思ったの・・。　私には・・女の子しか・・」

セロや皆は、エルスから大体を聴いていた。　アイリスに熱を上げるデーヴィスを見て、ケイトは捨てられるのではないかと不安に駆られ、裏切られた事に絶望したのだと。　だが、デーヴィスは、熱愛の証をブローチにしてアイリスに送り。　逆に、信頼と永遠の愛を象る花の絵を填め込んだ指輪をケイトに送った。

しかし、ケイトはそれすらも気に入らなかった。　自分と同じ対等の処にアイリスを置いた主人と、ブローチを送られたアイリスを・・。　アイリスの居る別宅に乗り込み、このブローチを奪ったのである。

セロは、ブローチを見つめて。

「お父さんは・・同時に二人を愛したのですね・・」

「ええ・・、そう・・」

俯くケイトは、本当に悲しそうだ。

ブローチを納めたセロは、ケイトへ。

「義母様、母は・・義母様を恨んで居ませんでした」

「えっ？」

驚くケイトへ、涙を浮かべるセロは。

「母は、僕を産む前から、良く自分を遠くへと父に頼んで居たそうです。　気を乱した義母様が、壊れて子供を殺めてしまうのではな

いかと危惧していました。　父は、初恋の義母様以外を家に入れる気は無かったらしく、苦心の末に僕と母を爺やの元に預ける事を決めたそうです。　当時、父の両親は、おかしく成ったケイト様を出そうと考えていたそうです。　ですが、父は、それだけは出来ないと母に告げたと・・」

「・・デーヴィス・・・アナタぁ・・」

男女の仲は、お互いが一番知っている。　ケイトは、まだデーヴィスとは顔を見知っているぐらいの間柄だった時に、突然のタイミングで初恋の相手だと云われた・・・。　大商人の家を捨てる覚悟もして求婚してきたデーヴィスの若き姿を思い出すケイト。　確かに、アイリスが出来る前も、後も、愛情に変わりは無かった。　両手で顔を押さえるケイトにとっては、だからこそ愛人を作った事に嫉妬と絶望を見たのである。

セロは、ケイトに。

「義母様、本当に僕でいいんですか？　このウィンフィールズの家を継ぐのは、僕でいいのですか？」

ケイトは、涙を拭きながら顔を上げると。

「ええ・・。　私を恨まず、こんなに立派に育った貴方しか居ないわ・・。　お願い、私の代わりに、この家を継いで頂戴・・セロ」

話が、一つの纏まりを見せた所で。

「所で、チョット聴きたいんだが」

それまで黙っていたKが、口を挟む。

ケイトは、未だにフードを取らないKを見る。

セロは、

「僕を此処まで導いてくれたケイさんです。　冒険者の方ですが、凄く強くて頭のイイ方です」

Kは、ケイトに。

「先ず、何でヤイコフって奴がこの家を欲しがる？　最初ッからそんな奴だと解って、ヤイコフの父親は店を継がせたのか？」

ケイトは、直ぐに否定し。

「いいえ。　元々ヤイコフは、とても真面目な子でした。　私やエルスが結婚する前、アンダクィルの店にはヤイコフの両親が手代として働いて居たの。　忙しいヤイコフの両親の代わりに、私達姉妹がヤイコフ達従姉弟兄弟を面倒見ていたわ。　ヤイコフは本当に優しい子で、人を殴ったり詰ったりするのは大嫌いだったのに・・」

この話に、K以外の皆は軽く驚く。　エルスの話でも、若い頃のヤイコフは真面目な子供だったと。

Kは、更に。

「思い出してみてくれ。　ヤイコフが狂い出したのは何時頃だ？」

と。

ケイトは、非常に難しい顔をして考え込む。

「私が記憶してるのは、夫がアイリスを愛した頃からだと思います。ヤイコフとアイリスは同じ歳で、私が夫の事で気を揉み始めた頃から屋敷に来ては、私を蔑ろにする気かと・・私以上に怒ってくれたのがヤイコフです。　ですが・・、アイリスがセロを連れて預けられる頃に成ると、ヤイコフは人が変わった様に今の様な事を言い出し始めたの。　夫が死んでからは、何かに狂った様にこの家を欲したり・・、店を統合して自分が引き継ぐだなんて言い出したり。　最近では、私の言う事も無視して店に来たり・・・」

この話を聞き、ベンソンは。

「では、最初はケイト殿の事を思って、デーヴィス殿が他に女性を持った事を怒っていたのが。　その内に次第にエスカレートして、最後には怒りの矛先を死なれて見失った・・と云う事ですか」

ケイトは、身内の恥を晒す上に、今だ続くヤイコフの暴走に苦痛の表情を見せる。

「はい・・、そうだと思います」

シャンテは、詰まらぬ事だと憤慨し。

「全く、もう過ぎ去った話ではないかっ。　ウジウジ引き摺る男は嫌いだ」

と、そっぽうを向いて言う。

だが、Kは腕組みをし。

「・・・」

何も言わなかったのである。

★番外編・特別話　参★　（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K編全文は出来上がっているので、土日連載で掲載予定です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

★番外編・特別話　四★　（前書き）

特別編、Ｋの下話です。

★番外編・特別話　四★

特別編：K編

別話　記憶を運ぶ者　後編

★★★

それは、ヤイコフの話を過ぎて。　ケイトに、セロが預けられた後の生い立ちを語り終えた頃だ。　夕方の日差しが、テラスを赤く染める頃。

遠くから廊下を慌しく駆ける音がして。　Kが、

「誰か廊下を走ってこっちに来てるな」

シーキングは、足音もまだ聞えないので。

「誰も・・」

と、言い掛けた処でバタバタと走る音を耳にする。　足音は、離れのこの部屋の前で止まり。

「奥様っ、奥様大変ですっ」

と、ドアが勢い良く開かれ、まだ若い少女の印象が見えるメイド姿の女性が飛び込んで来た。

ケイトは、客前だと思い。

「シーマ、何を騒々しい。　何が有ったのですか？」

すると、シーマと云うメイドの女性は、軽くKやセロにスカートを上げて挨拶するや否やケイトの脇に走り。

「大変です奥様っ、あっ・・あのヤイコフ様が・」

ケイトは、凝りもせず来たのかと思い。

「また来たのですか？」

「来ただけでは有りませんっ！　“セロを出せ！”と、武器を持った者と共に・・・」

これに驚くセロやベンソン。

だが、ケイトは、顔に怒りを上らせ。

「ヤイコフっ、今日と云う今日はっ」

と、立ち上がる。

ケイトを先頭に、セロやKも含めた一同は、ヤイコフが喚くロビーに向かった。　流石は大商人の家のロビーは広く。　一度通ったセロも舞踏会でも開けそうな広さのロビーには来る時に驚いた。　今、その白亜の床のロビーには、湯気の様に立ち昇りそうな様子で殺気立ったヤイコフとその連れた剣士2名が居た。

「セロを出せっ！！！！　この家を継ぐのはこの俺だっ！！！」

ギョロリとした目に細面で色白の長身男が、派手な刺繍を背や胸に入れたバロンズコートを纏う。　黒いベストに白いズボンと着ていて、剣を持った姿は中々見栄えの利いた格好だ。　キチンと左右に分けられた髪も金と銀の間の色で、パッと見れば中々しっかりした男の様である。　だが、怒りに狂った今の顔は、確かに近寄り難い雰囲気を纏う。

広いロビーの奥は、離れや食堂に行く廊下と、一階の彼方此方に行く廊下に挟まれ、二階へ向かう堂々とした大階段が在る。　その大階段の踊り場から奥の壁を見上げれば、Kがダジェドに聞いた通り、ケイトの夫のデーヴィスの肖像画を見る事が出来る。

その肖像画が見下ろすロビーで、オタオタと怯える使用人達が、各部屋の出入り口や階段、更には物陰から喚くヤイコフを見ている。

其処へ、皆を引き連れたケイトが遣って来た。

「ヤイコフっ！！！　何を叫んでるのっ！！」

ケイトを見たヤイコフは、怒りを更に燃やす目の色で。

「ケイトっ、セロを出せぇぇっ！！！！　あの男の子供など俺が殺

してやるっ！！！」

だが、ヤイコフと対峙するケイトも負けてはいない。

「喧しいっ！！　お前っ、何時から商人の掟も忘れて、格上の商家に怒鳴る権利を持ったのっ？！！　ヤイコフ、此処にはエルスの一族の方で、国の騎士様をされているシャンテ殿が来られてる。　騒ぎを起こすなら、役人に突き出すわよっ」

ケイトの一言を聞き、ヤイコフは後ろに立つベンソン・シーキング・シャンテを見て。

「そんな脅しが通じるかぁっ！！」

だが、これは尋常では無いと読み取ったシャンテが、直ぐにケイトの前に出て。

「貴様がヤイコフか？」

「うぬっ？」

ヤイコフは、自治国の紋章入りの鎧を着るシャンテを見て言葉を呑む。

シャンテは、剣を抜く事も辞さない構えで前に踏み込み。

「貴様、セロ殿に多額の金を賭けて、その命を悪党共に狙わせたな？　それだけでも十分な大罪だぞ、先ずは私と役所へ赴いて貰おうか？」

ヤイコフは、見てからに屈強な戦士の様なシャンテに言われて顔を赤くさせる。　怒りと躊躇が混同しているのだ。

其処へ。

「ヤイコフさん、僕が一体何をしたのですか？」

何と、シャンテの脇にセロが出た。

「セロっ」

「あ、セロっ、危ないよ」

ベンソンとケイトが言い。　ヤイコフは、念願のセロを見た。

「あ〝っ・・・」

誰もがヤイコフに驚いたのは、この時だ。　凄まじい剣幕で怒り狂っていたヤイコフだが、セロを見た瞬間に驚愕と云った驚き顔に変わったのである。

「僕の生まれが悪いのですか？」

と、踏み込むセロへ。

「あっ・・あわああ・」

ヤイコフは、たじろいで一歩引き下がったのだ。

「？」

そのヤイコフを見たKは、直感的に。

（どうしたよ・・・、まさかっ。　・・・あぁ、そうか、そうゆう事か・・）

まだ解らなかった部分に、推理ながら回答を見つけたのである。

ケイトは、殺気立って乗り込んで来たヤイコフが、一転して急に泣きそうな顔へと表情を変えて言葉を失うのを見て、セロとシャンテの前に再度進み出る。

「ヤイコフ、剣を収めて直ぐに帰りなさい。　そして、セロに賭けたバカな依頼を取り下げなさいっ。　・・私は、従姉弟のお前を役人に突き出したく無いわ。　さっ、早くっ」

ヤイコフが、引き抜き構えていた剣を持つ手をダラリと力無く下げた。

その時だ。

「奥様・・・」

ヤイコフの後ろから、先程の案内の時よりも低い声を出したダジェドが進み出て来る。

Kは、ヤイコフとダジェドの履く鉄の具足を見て。

「アイツ変だ」

と、短く呟く。

「あ？」

と、聞えたシーキングがＫへ呟き返す。

「ダジェド、お前今まで何処に・・」

と、ケイトがダジェドに歩み言った瞬間だ。

「ウルセェっ、クソババァ！！！！！！」

今度は、怒声と共にダジェドが剣を引き抜いた。

「あっ！」

「義母様っ！！！」

シャンテとセロが驚き声を上げる時、ケイトの首にダジェドの引き抜いた剣が突き付けられた。

「・・・」

黙るケイトに、剣士ダジェドは獣の様な目を向け。

「死にたく無ければ黙れ」

と、言い放ち。　ケイトに近付くと、その肩をを掴んで引き寄せる。

「あぁっ」

ダジェドに捕まるケイトを、誰もが見るしか術が無かった。　いや、Kならなんとでも出来たのだが、Kは、ダジェドがケイトを殺すに集中してない事を読みきった。　だから、成り行きをもう少し見据える処に落ち着いたのである。

（さぁ～て、これでど～なるか）

Kが、そう思う時。

「貴様っ！！」

「何の真似だぁっ！！」

ベンソンとシャンテが、剣の柄に手を掛けて踏み込もうとするのだが・・。

「動くなぁぁっ！！！！！」

ケイトを羽交い絞めにして、その白い肌をした喉元に剣を突きつけるダジェドである。

セロは、意味が解らずに混乱し。

「何をしているのですかっ？！！　貴方は、父の友人で雇われた用人でしょっ？！」

ダジェドは、さっきまでは見せなかった下衆な笑みを見せると。

「うるせぇンだっ、この捨て子っ！！！」

此処で、漸くKがセロの横に来た。

「セロ、コイツは、ヤイコフとグルだ」

セロは、気付かぬ間に脇に居たKを見て。

「え？」

フードを被ったままのKは、ダジェドを見て。

「おっかしいと思ったンだよなぁ～。　何でヤイコフが、此処にセロが居るのを判ったのか・・。　ホレ、コイツの具足。　ヤイコフのもそうだが、昨日の驟雨で抜かるんだ地面を一緒に通って来たんだ。　似た様な泥の着き方してる。　セロが来た事を確認して、さっき屋敷を抜け出してヤイコフに密告したんだ」

一同は、ヤイコフとダジェドの具足を見て泥を確認した。　確かに、飛沫した泥が膝辺りまで履く具足に飛び散っていて。　具足の地面との付着面辺りが泥で汚れていた。　それは、ヤイコフの両脇にに居る剣士二人も同様だった。

シャンテは、ギリリと鋭くダジェドを睨み。

「貴様ぁぁっ、グルだった訳かっ！！！　主従関係を隠れ蓑にてし主を騙し、最後には主へ刃を向けるとは何事だぁっ！！！」

ダジェドは、セロや使用人などを見回しながら。

「うるせぇって言ってンだろうがぁっ！！！！！　・・・デーヴ

ィスの旦那とは、幼馴染みの誼で仕えてやったのさぁっ。　しっかし、このババァは俺を顎で使いやがるっ。　他の女に、一度は旦那を寝取られた負け女なのによぉ」

ダジェドは、此処でセロに剣を向け。

「セロっ、お前が生まれる前後に、このババァが旦那とお前の母親に狂った姿を見せてやりたかったぜっ！！　デーヴィスの旦那の親は、このババァを締め出して、お前とお前の母親を後妻に迎えようとしてたのさぁっ。　なのに、あのデーヴィスの旦那がそれをさせなかった。　お前も、このババァが憎いだろ？　あっ？　憎いだろうがよっ？！！」

と、ダジェドは、ケイトの首元に剣を付き付ける。

セロは、豹変したダジェドを見て言葉が出ない。

ダジェドは、セロへニヤリと笑い。

「何なら、お前が俺達と釣るんでくれてもイイんだぜ？　ババァが受け取った多額の遺産金を、俺達で山分けしようぜっ？！　ン？」

この話で、Kは全てを読めた。

「ははぁ～ん。　お前か、お前が首謀者だな？」

セロやベンソンなどが、Kを見る。

Kは、フードを取り。

「今まで、ど～しても解らなかったのは。　一商人に過ぎないヤイコフが、いっくら多額の金を賭けたにしろ、どうして裏社会の方々に手を回せたか・・。　そうか、お前がヤイコフを唆して金を出させ、セロの暗殺を触れ回ったンだろう？」

と、口元を笑ませてダジェドを見据える。

Kを悪党面で見返すダジェドは。

「何だオメェ。　・・フン、まぁそうだ。　ヤイコフがデーヴィスの旦那を憎むのが面白く為ってな、コイツと共謀すればこの家の財産と店を手に入れられると思った訳さっ」

Kは、呆れた笑いを見せ。

「はは、悪知恵が回るねぇ。　だが、セロの存在は誤算だったか？」

ダジェドは、セロを睨み。

「おうよ、コイツの存在はムッかついたぁ。　このババァっ、自分が原因で二人を捨てるハメに為ったのによっ。　数年したら一人で子育てする愛人に同情し出しやがった。　病気を患って、３０半ばでガキが産めなく為ったのが拍車を掛けたよ。　唯一の男の子であるこのセロへ、旦那にも黙って密かに金を送り出すわ。　ガキを面倒見てたクソジジィの薬代、このガキの母親の薬代を態々肩代わりしクサって！！！　俺には、長年勤めてる褒美もありゃしねぇ、いい加減ウンザリなんだよっ！！　このクソババァにもっ、この家にもなぁっ！！！」

と、ケイトの首筋に当てた剣を食い込ませる。

それに、セロやシャンテは驚いた。

だが、此処でKまで驚かす行動に出たのは、なんとケイトである。

乱れ始めた髪を肩に落としたケイトは、

「あ・・こっ・殺しなさい」

と、俄かにこう言って、剣を当てられた首を動かそうとしたのだ。

「おぁっ」

パッと剣をケイトの首から離すダジェドは、激高するままに驚き。

「ババァっ、死にたいのかぁっ?!!」

と、怒鳴った。　自分から死のうとしたのだから、流石のダジェドも冷や汗が出ただろう。　ケイトが死ねば、まともに強そうなシャンテやベンソンと戦わなければならないのは必定だった。

見ていたセロも、義母の首元に血の筋が見えたので焦る。

「義母様っ、動かないでっ!!」

だが、ケイトはもう覚悟を腹に据えていた。

「ダジェド、お前は本当に大バカ。　お前が仕事を引退するのに合わせて、ウチの人は5万シフォンもの金を私に渡せと残したわ」

「な・何?」

初耳な事に驚くダジェドへ、ケイトは更に。

「お前が、ウチのメイドだった今の執事クァールに手を出して、子供を孕ませた。　私は、お前達二人を結婚させ、長く雇って働けなく前に二人分の引退費を用意してた。　この私を殺すですって？」

と、云ってからセロを見るケイトは、嬉しく微笑んでいた。

「私は、セロを見つけた、もう死も怖くないわっ。　セロを護って死ねるなら、あの世でアイリスに謝る口実が増えると云うもの。母親の意地を、女の意地を見たいと云うなら、幾らでも見せてくれようぞっ」

流石は、大商人の跡を継ぎ。　店を傾ける事もなく遣り繰りして来たケイトである。　プライドを秘めた人間の意地を、此処で、この状況で見せるとは・・。　見ていたKですら、少し驚き天晴れだと感じる。

其処へ。

「奥様っ」

叫んだのは、ダジェドの妻で執事をしているクァールと云う女性だ。　左の部屋とロビーの境のその場で、夫の凶行におかしくなりそうな思いで震えヘタり込む。

シャンテも。　ベンソンやシーキングも。　そして、セロも。　ケイトの気持ちを見て母親の芯の強さを見せつけられた。　夫を亡くしたケイトは、主の代行として強い心を養っていたのであると思い

知らされた。

「義母様・・・そこまで・・」

ケイトと目を噛み合わすセロは、この状態で微笑むケイトに母親であるアイリスと似た強さを見た。　思わずケイトを助けたい衝動に駆り立てられたセロは、

「Kさんっ、僕っ!!」

人に対して、初めて魔法を使う気持ちを抱いたセロ。

そのセロの肩に、

「気持ちだけでいい」

Kは、手を置いて云うと、ダジェドの前に進み出た。

「来るなっ」

叫ぶダジェドに合わせて、ヤイコフの左右に居た冒険者とも思える剣士二人が前に進み出た。

「旦那っ」

「金を奪って逃げやしょうっ」

と、云う二人の中年剣士。　一人は、ボサボサ頭で垂れ目に分厚い唇の小男。　もう一人は、ガッチリとした体系で、顎が長く顔の幅が広い強面。　視線を交わすだけでダジェドは何も云わない。　ダ

ジェドとこの二人の剣士は、付き合いが長そうな感じである。

Kは、ダジェドだけを見据えて。

「お前、その状態で勝った気に為ってるのか？　もしそうだとしたら・・、死ぬぞ」

ダジェドは、ケイトを盾に取る絶対強者側だ。　こんなに軽々しくも“死ぬぞ”と云われるのは心外だった。

「なぁにぉ？　この状態が解らねぇのかぁっ？！！！」

その時だ。　シャンテやシーキングにベンソンが、俄かに膨れ上がる強烈な殺気を感じて。

「あ〝っ！！！」

「うぉっ！！！」

「何だとぉっ？！！！」

と、驚く。

ニヤリと笑ったKの全身から、異常な殺気が放たれたのだ。　その殺気は、瞬時にこのロビー全体を包んだ。　ベンソンやシャンテも全身に鳥肌を立てて戦慄を覚える。　ウィンフィールズ家持ちの広大な庭の入り口で、屋敷ともかなり離れた外に在る桜に木。　其処に留まっていた鳥が一斉に逃げ出した。　大人の歩く足で数百歩も離れた場所の鳥が逃げると云う事は、人にそなわる危険感知能力で十分に解る。　剣の修行などすら必要無い程に解るのだ・・。

“Kは危険だ”

「あわわ・・こっ・ごわい・・」

「ひぃぃっ、おっ・・お助けをぉぉ・・・」

怯えて見ていた料理人が、ヘタヘタと妻か使用人かの女性を背にして一緒に床へ崩れる。

しかし、Kと対峙するダジェドを含めた剣士三人が大慌てで怯えるのは、その事の他にも理由が在る。

「あっ?!」

「こっちかぁっ?!!」

「なっ・何だこりゃっ?!!」

「前だっ!!　あ?」

放たれたKの殺気が、三人のあらゆる方向から感じられるのだ。
強烈な殺気を孕んだ気配が、突然に背後からしたと思えば、次は上。
右からしたと思えば、瞬時に正面から。ダジェドへ加勢をしに来た二人の剣士は、ダジェドの代わりに殺気を感じて前後左右をオロオロと・・。

ケイトを人質に取っているダジェドが顔面を蒼白しにて、パクパクと陸に上げられた魚の様に口を動かしKへ。

「あ・・お・オメェ・・いいい・・一体・・」

魂そのものを恐怖に掌握されてしまった様に、心へ恐怖が居座り全身を凍り付かせるダジェド。　頭に浮かんだのは、“暗殺者”と云う謎のベールに包まれた殺人集団である。

「あっ・・おま・・お前っ、金で動いた・・暗殺者・・？」

だが、Kは。

「アホウ、あんな古びた奴等と一緒にするな。　それより・・」

と、睨み付けたダジェドへ一歩踏み込み。

「お前を殺すなど簡単だ。　死にたく無いなら、その女(ひと)を放せ。嘘だと思うなら、それでもいいぞ」

Kの言葉に、心底怯えたダジェド。　包帯の隙間から見えるKの目が、スゥ～ッと細まった。　その仕草に音など無いが、細まる音を聞いた錯覚を覚えたのは、余程に怖くて集中して見つめていたからだろう。

Kが、微かにコートを揺らしたのと。

「殺さないでぇっ！！！」

と、叫んだケイトの声が同時だった・・・。

ケイトの叫び声で、Kを見たセロやベンソン達。　だが、其処にKは・・・、居なかった。

「・・・」

空を見て黙るケイトは、自分に刃を向けるダジェドが一度だけ小刻みにピクンと震えたのが解った。

「あがぁ・・」

一方、身体を震わせ呻いたダジェドも、そのまま一点を見つめて止まった。

「ケイさんっ」

セロが、Kを探した時。

「あっ」

ヤイコフは、見ていたダジェドの背後に黒尽くめで包帯を顔に巻く男が見えて、やや長い刃渡りの短剣を持ってユラ～リと立っているのを確認する。

ダジェドは、違和感を覚え出す右腕が思う様に動かせず。　何が起きたかを知る。

（す・・凄ぇ・・も・モンスター以上に・・・バケモンだぁぁ・・）

全身から力が抜け、剣を持つ重みで右腕がケイトの胸元から落ちて行くのが解った。　“ドサッ”と云う音がして、シャンテやセロが見ている目の前で、剣が床を甲高く跳ね落ちて転がる。

自由に成ったと、セロに向かってダジェドから離れたケイトは、直ぐにダジェドを見返した。　何故なら、自分と苦楽を共にして執事を務めるクァールのお腹には、三人目の子供が居たのだ。“死んだのか”、それが気懸かりだった。

だが・・。

「ア〝・・あぁ・・・」

口を押さえて驚くケイトの目には、右腕を無くして血を流し出すダジェドが映る。

ダジェドと背を合わせる様に立つKは。

「願い通り殺さない。　だが、悪事も出来なくするさ」

と、背を向いて言いながら、前を見るのに合わせてヤイコフへ向かう。

「旦那っ、くそっ!!」

「何だコイツはっ?!!」

と、ダジェドの左右に来た剣士二人がKに向かおうとすると。　だが、動き出す事で利き腕に瞬間的な違和感を覚える剣士二人。

「あっ、うぎゃっ!!」

「い〝・・ぎゃぁぁぁっ!!!」

既に、剣を持つ腕を真ん中から縦に斬り裂かれていたのだ。　動き出す事で斬られた肘辺りの骨肉が離れて、熾烈な痛みを湧き上がらせる。　剣を離し、血を腕からダラダラと零す二人は、痛みに絶叫しながらその場に崩れた。

シャンテは、人の所業では有り得ないKの手練に。

「な・何と凄まじい・・。　モンスターですら勝てる訳が無いだろうが」

と、その場を動けない。　全身に溢れる冷や汗は、恐ろしさで止まらないのだ。

ベンソンやシーキングも、怖くて動けなかった。　２０人近い悪党を相手に、たった二人で戦うこの二人ですら、Kの殺気には恐怖したのである。

だが、Kが目前に遣って来る事で戦意を完全に喪失したヤイコフは、その場に崩れて。

「あぁ・・・、こっ殺してくれ・・」

と、涙を浮かべる目で懇願してくる。

一方で、対するKの目や身体から殺気は消えていた。　何故なら、ヤイコフを見下ろすKは・・・。

「アンタ、今は何て哀れな目をしてるんだ？　もしかして、アンタはセロの・・」

Kがそう言うと、ヤイコフはKが自分の心を読んだと悟る。

「言うなぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！！！！」

ロビーに共鳴する程の大声だった。　その大声に、セロやケイトも斬られた剣士二人から、ヤイコフとKを見る。

Kは、開かれっ放しの玄関からヤイコフを赤く抱き染める夕日に侘しさを覚えた。　そして・・。

「死んでも、意味無いぞ。　あの世に気持ちを封印して持って行っても、アンタへ渦巻く皆の疑問が何時かは・・・真実を晒す」

ヤイコフは、そのKの言葉で叫び上げたままの口を開いた姿を小刻みに震わせる。

「あああ・・・、あ・・あああ・・」

ヤイコフの目から大粒の涙が溢れ、次第に慟哭へと変わるそのままに。　皆が見る中で、ヤイコフは影ごと身を床に伏せて泣き出した。

Kは、脇目にデーヴィスの肖像画が掛けられる奥の壁を見て。

「人のコト言えた義理じゃ無いか・・、クソ野郎だな」

と、憎しみめいた呟きを吐いた。

★★★

陽が落ちて、夜に為った。　騒ぎの有ったロビーには、シャンデリアの明りが煌々と灯り。　連行されるヤイコフ以下三人が居た。
シャンテが役人と連絡をつけ、こうなった。

近場から呼ばれた僧侶の老人は、Kの追わせた怪我を見て腰を抜かしたのが皆の記憶に焼き付く。

連行するヤイコフやダジェド達と共に、今夜は役所へ一緒に行くシャンテを見るKは。

「なぁ」

「ん？」

玄関口で、シャンテを呼び止めたKは、庭を見て。

「あのヤイコフの動機は、徹底的に調べるのか？」

シャンテは、Kらしからぬ問いだと思い。

「御主が同情か？　そんなのは当たり前だろう」

Kは、庭に停められた黒い幌馬車へ、役人と一緒に連行されたヤイコフの後を見続け。

「いや・・、多分。　その事は喋らないと思うぜ。　拷問しても・・な。　ヤツ、死ぬ覚悟出来てるしさ」

「何だ？　それは・・」

「いや。　ヤツは欲したんじゃない、ヤツは消したかったのさ。
それだけさ」

（・・・、どうゆう事だ？）

シャンテは、何が言いたいのかさっぱり解らなくなってしまった。

意味深な言葉を残すKは、セロに向いて。

「お～い、セロ」

大階段付近で義母のケイトと寄り添うセロは、Kに向く。

「何ですか？」

Kは、気の無い言い方で。

「もういいだろう？　俺は、此処で別れる。　全て、終わったからな」

そう言うKに、セロは。

「あ、はい・・。　ありが・・」

と、礼を言おうとする。

だが、首に包帯を巻くケイトは、

「待ちなさいっ」

と、Kを呼び止めたのだ。　鋭い声に、セロや、遠目に居たベンソンやシーキングですら、鋭く言い放ったケイトを瞠目した。

Kは、面倒臭そうな様子で。

「んぁ？」

ケイトは、Kに真剣な眼差しを向け。

「貴方、ヤイコフの何を知ったのっ？！！　最後のヤイコフは、元に戻った・・。　まだ若く子供の頃のヤイコフに戻ったっ、どっ・どおしてっ？」

と。　やはり、歳の違いからか、従姉弟と云うより弟の様な感情を持って、ケイトはヤイコフへ接していたのだろう。　姉と弟の絆は、時に夫婦ですら入り込む余地の無い程に強い場合が在る。

Kは、ケイトを見つめると。

「そんなに・・・、子供の頃のヤイコフは可愛かったか？　ヤイコフの今更をまだ救おうと、これからまた気持ちを掬う気か？」

ケイトは、Kに進み出て。　涙を浮かべるままに・・。

「ヤイコフは、気のおかしくなった私の・・・私の唯一の話し相手だった・・。　今からがセロなら、あの一番苦しい時はヤイコフだった・・。　どおして・・、どおしてヤイコフは・・・教えてっ！

！」

俯くKは、迷った。　だが、ヤイコフの刑は微罪だろう。　ダジェドがヤイコフの心の乱れに漬け込んで、ウィンフィールズ家の乗っ取りを画策したに違いない。　ヤイコフもまた、利用された者なのだ。

（仕方ない・・ヤイコフの心を汲み取れるのは、血の繋がったセロとこの従姉弟しか居ない）

そう心に思って目を開くKは、

「シャンテ、ベンソンやシーキングを連れて外に出ろ」

と、言ってから、使用人達を見回し。

「全員ロビーから離れろ。　少しの間、セロとケイトだけにしてくれ」

シャンテは、自分が役人なだけに。

「私もか？」

Kは、ギロリとシャンテを見ると。

「お前、あのヤイコフを助ける気が在ンのか？　役人だからって、何処でもズケズケ入るな」

Kに怖く睨まれ、そう問われたシャンテは二句を繋げられなかった。

“助けたい”などと、簡単に言える言葉では無かった。

ロビーに、Kとケイトとセロが残る。

Kは、ケイトの亡き夫のデーヴィスの肖像を見上げた。

「なぁ、ケイトさんよ」

髪を乱し、修羅場を終えた直後のケイトは、少し憔悴した顔をKに向ける。　実年齢以上に老けて見えたケイトには、此処までの今日一日が大変な出来事だっただろう。　だが、ヤイコフをまだ可愛いと思えるケイトは、Kに語り掛けにしっかりとした声で。

「何？」

「さっき、何でヤイコフがあれほど殺気だってたのに、直ぐ驚きへ変わったか・・解るか？」

セロは、直ぐに。

「僕を見て・・、ヤイコフさんは僕を見て驚きました」

ケイトは、

「そう云えば・・」

と、セロを見て頷く。

Kは、女性的な雰囲気を併せ持つセロへ振り返り。

「そうだ。　セロ、お前は相当母親に似てるだろ？」

セロは、そう言われても。

「え？　あ・・あぁ・・どうでしょうか。　周りの人からは、似ていると言われましたが」

今度は、ケイトが。

「似てるわ、肌から輪郭から・・、本当に男としてアイリスが甦ったみたいに・・」

Kは、二人を見て。

「恐らくヤイコフは、憎む全てを壊したかったはずだ。　この家、このデカい肖像画も、ウィンフィールズの全てを奪うのでは無く。　壊して消してしまいたかった・・・」

セロもケイトも、その意味が解らない。

セロは、Kへ近付き見上げて。

「ケイさん、それはどうゆう事ですか？」

ケイトも、

「ハッキリ言って」

Kは、二人を見て。

「ヤイコフが、どうしてもセロを殺したかったかは、セロが居ては

この家が存続するからだろう。　だが、長年に亘って憎み続けた怒りが、セロを見て消し飛んだのさ。　そう・・、出来なくなった」

ここまで来て、ケイトはハッとして。

「まっ・まさか・・」

と、夫の肖像画を見上げる。

Kも同じく肖像画を見て。

「そう。　ヤイコフもまた、アイリスと云う女性を愛した一人なんだろう。　いや、時期としてはヤイコフが先なんじゃ～ないかと俺は思う」

セロは、その言葉に雷に撃たれた様な衝撃を受けた。

ケイトは、一気に過去を思い出す。　そのKの一言が、深く深くケイトの心の片隅で、海の藻屑の様に成って沈んでいた記憶を呼び覚ましたのだ。

「あぁ・・、そう云えば・・アイリスと初めて会ったのは・・夫との関係じゃない・・。　そうだわっ、ヤイコフが幼い頃から遊んでた子供達の中に・・アイリスが居た・・」

それは、本当に些細な関係だった。　結婚する前のケイト達一家が営む店に、時折の日雇いとして来ていた男の娘が、ヤイコフと一緒に子供達と混じって遊んでいた事が有った。　その顔を思い出すケイトは、アイリスだったと・・確信した。

Kは、ケイトを見ると。

「アンタの旦那は、本気の心で愛情を燃やした初恋のアンタを、確かに本気で愛した。　だから、どんなにアンタが嫉妬で狂っても手放さなかった。　だが、ヤイコフは・・・その逆だぁ～。　本気で恋した・・、いや。　もしかしたら、求婚してたかも知れない。　その相手を、御宅の旦那に奪われたのさ。　下級市民は、こんな大きな商人を相手にどうこうなんて・・、権力や見えない階級の格差で出来る訳ねぇ。　まして、もしアイリスとヤイコフが恋愛関係に有ったとして。　ヤイコフの一家は、事実上ではウィンフィールズ家の付属系列だ。　彼女が、もしアンタの旦那に逆らってヤイコフと一緒になったとして・・、アンタの旦那は許したか？　アイリスを、諦めたか？」

「あぁ・・・、そんな・・こんな事ってっ」

全ての長年に亘る疑問が一つの答えとして繋がる。　ケイトは、夫の仕出かした事が、実は従姉弟のヤイコフの心を無残にも踏み躙った可能性が在ると解っただけでもおかしくなりそうだ。　湧き上がる悲しみで、力を失いその場に崩れるケイトを、セロは慌てて抱き留め。

「義母様っ、しっかりっ」

Kは、セロとケイトを見て。

「今の所は、俺の読みでしか無い。　だが、全てを考えると、ヤイコフの深く激しい憎悪の原因は、それしか考えられない。　・・・お互いで愛し合って、お互いの醜い部分を見て醒めるならいいが・・。　いきなり奪われたら、相手は遣り様が無ぇよ。　だから、ヤイ

コフはぁ・・狂った。　だが、ヤツも驚いただろうな。　アイリスの息子が、相当に母親と似ている事にさ」

床に座り込んだ二人へ、Kは更に続けて。

「奴の悲しみを掬ってやるか、見捨てるかは勝手だ。　だが、ヤイコフってヤツがセロを見て驚き、直後に壊れてしまいそうな程に哀れな目をした。　アイツは、“人でなし”なんかに成っては居ない。　怒りと悲しみと憎悪と・・愛情の吐き出し場所を失って、心に閉じ込められた愛情に因って溺れて壊れたのさ。　そんな男の目だった。　あのヤイコフの目は、そんな目だった・・・」

セロは、涙で滲む目でKを見た。　何故か、Kの目に光る筋が見えた気がした。　この目の前に立つ最強の男は、人の心の全てを映し出す鏡の様な気がするセロ。　ヤイコフを見て、怒る処かその心の中に渦巻く悲しみを見抜いたのだから・・・。

★
★
★

語り終えたKは、嘆き悲しむケイトと義母を支えるセロをロビーに残して外に出て来た。

庭に、石造のランプで、“明り塔”と呼ばれるオブジェ型をした照明搭が在る。　植物の“藤”をモチーフにした物で、木に絡む姿を優雅なランプ仕立てで現すのだが。　其処に立って待っていたベンソン・シーキング・シャンテ。

「あ、出て来た」

シーキングがKを見て云う。

シャンテは、睨まれては怖いと動かなかったが。　今度は、Kから近付いて来たではないか。

（おいおい、怒るのは止めてくれ）

と、シャンテは思ってしまった。

だが、Kは三人の前に来ると。

「ベンソン、シーキング。　セロとケイトは泣いてる・・、少し長そうだ。　使用人にでも言って、中で休ませて貰え」

二人は、そう云われてはズケズケとセロの元には戻れない。

「ああ・・」

「そうしようか」

と、屋敷に向かう。

Kは、二人を見送ると。　シャンテと擦れ違う形で肩を近づけ。

「シャンテ」

「ん？　怒るのはナシで頼む」

「違うさ・・。　恐らく、セロとケイトの二人は、刑に服したヤイコフを救おうとするだろう」

「かもな・・」

シャンテは、優しいセロと、ヤイコフを今だに可愛いく思えるケイトならそうすると思う。

そこへ、Kが。

「だから・・、ヤイコフの過去を調べろ。　根こそぎ、丸裸にしろ」

「えっ？　なんだと？」

シャンテは、その言葉に驚いてKを凝視すると・・、真剣な眼差しの彼が居て。

「シャンテ、セロの父親の家系を含めて言うが。　あのウィンフィールズ一家は、このスタムスト自治国に長く根付く一族だがな。非常に大陸北部の民族の血が薄い様だ。　歴代の当主が、他国の貴族や上流階級の者を娶ってるからだろう。　だが、セロは違うぞ。　あの抜ける様に白い肌、青緑の碧眼に金髪で、あの女性的な印象が絡むのは、大陸北部で女性血統が非常に強い一族の流れが見せる特徴なんだ」

シャンテは、一緒に見た廊下に飾られた代々の当主の肖像画を見ても、確かにセロの様な者は一人も居なかったと思う。

「なるほど・・。　だが・・それがヤイコフとどう関係するんだ？」

Kは、大きく一息付くと・・。

「ふぅ～、思い出せ。　ケイトは、何で旦那に浮気された？」

「それは、ケイト殿に男の子がぁ・・・あっ」

シャンテは、其処で気付いた事で言葉を止め、口を開いたままにKを見る。

頷くKは。

「もしかすると、セロは、ヤイコフとアイリスの子供かも知れない。
セロの雰囲気を皆がデーヴィスと重ねるのは、セロがこの先の当主で、アイリスとデーヴィスの子供だと思い込んでいるからだ。
だが、肖像画の男と、セロは似ていない。　似ているのは、アイリスと云う母親にだけ。　多分、アイリスとヤイコフは、もう結婚する予定だった可能性があるぞ」

推理上だが、事実ならとんでもない事に為ると思うシャンテは、Kに。

「ヤイコフに事実を聞くのは？」

「バカ、今のヤイコフが話すか。　ヤツこそ、セロを一目見てそう思ったのさ。　だから、本当の事を自分が云ったら、セロが家督を継げないと思って死ぬ気に成ったのさ。　完璧に調べて、セロとケイトに教えろ。　そうすれば、絶望に堕ちたヤイコフの心を、あの二人が心の手で掬えるさ。　何時までもこんな事で、下らなぇ遺恨を蟠らせるのも面倒だ」

「わっ・・解ったっ！！」

シャンテは、急いで待つ馬車に走って行った。

Kは、別の階に明りの灯り出した屋敷を見返し。

「本気で惚れた女を保険にして、他に女作って面倒だけ残すなんてバカ野郎が。　愛想尽かされろ」

と、侮蔑を吐き残して姿を消したのである。

さて、それから数日が過ぎた。

Kの読みが当たっている事を役人は調べ上げた。　何故なら、アイリスの父親が生きていたからである。　娘逢いたさに、この街へと密かに戻っていた父親は、小汚い浮浪者姿だった。　その彼が語るのは、Kの予想通り。　幼馴染みとして、恋愛関係まで共に成長したアイリスとヤイコフの二人。　ヤイコフと結婚する予定だったアイリスだが、父親が宿無しだっただけに、施設に預けられて育った。　だが、仮にもウィンフィールズと所縁の在るヤイコフの一家に、流民で宿無しのアイリスが嫁ぐのも変な噂が上る。　そこで、ウィンフィールズの店に働きに行って、彼女に社会的な意味で家と生活を与え。　その後に正式な手順を踏んで結婚しようと二人は考えていた。

しかし、其処でデーヴィスの目にアイリスが止まってしまう。　彼女に恋して、ヤイコフの恋人と知りながら強引にアイリスを愛人にするに当たって、デーヴィスは日雇いの下級市民であるアイリスの父親を追放した。　宿を持たない流民な上に、娘を連れて逃げようとしたのが理由だった。

アイリスの父親を追放するのに、デーヴィスはあろう事か、その我儘をヤイコフの父親に押し付けた。　ヤイコフにとっては、もうアイリスとの結婚の話を、

“何時に周囲へ云おうか”

と、考えてる時に起こった悲劇で。　デーヴィスに睨まれて仕方なく、アイリスの父親を隣国の地方へと追放する事を決めたヤイコフの父親。　その父親に激怒したヤイコフだが・・、金と地位で政治的な権力と繋がる大商人のデーヴィス一家に逆らうなど父親には出来ない。　姉の様なケイトは、デーヴィスへ妻と為って嫁いでいるし。　ケイトの妹のエルスはその血縁に嫁いだのから、実質、格上の身内に奪われた形である。

随分とデーヴィスに掛け合い、アイリスを身篭っていてもいいから、息子に戻して欲しいと嘆願したヤイコフの父親だったらしい。　息子の思いと、店の運営の権限を握るデーヴィスの狭間で苦悩した父親。　毎日、夜な夜な泣いていたヤイコフの父親・・。　そんなヤイコフの父親の心情を理解するアイリスの父親は、仕方なく追放を承知した。

ヤイコフは、アイリスの事で嫉妬の炎に身を焦がすケイトに、最後まで相談出来無かった。　事実を言って、従姉弟親子の生活を壊しかねない事に戸惑っていたからである。　そして、遂に追放されるアイリスの父親に、約束をしたらしい。

“アイリスを必ず取り戻します。　親子揃って暮らせる様にしますっ！！
”

だが、その後直ぐに身篭っている事が発覚するアイリス。　半年ほどして、アイリスが元気な男の子を出産し。　その事が原因で、最後には気のおかしく成ったケイトだった。　デーヴィスは、育児放棄し掛けたケイトを思って、アイリスをヤイコフも全く知らない処へと預けてしまった。

突然のアイリスの失踪に、ヤイコフは狂ってしまったのである。
後に、アイリスが病気で死んだと聞いて、ヤイコフのウィンフィールズへの憎悪は絶頂まで膨らんだのだ。

実は、アイリスの父親が全てを話した事で、内々に秘められたその事実を知る者が他にも居ると発覚した。　ウィンフィールズ家の元老僕として勤めていた男性の妹と。　ケイトの親の頃に下働きで、ヤイコフの父親がアンダクィルの店を継ぐ時に手代の長に成った老人そうである。　かなり高齢なその二人も、アイリスの一件を全て知っていて、真実を語ってくれたのだ。

その二人に因ると、デーヴィスの女遊びはアイリス一人では無かったらしい事も解った・・。　そして、アイリスの妊娠期間や、ヤイコフとアイリスの関係から云っても。　セロは、デーヴィスでは無く、ヤイコフの子供であると考えられる事も・・。

シャンテの相談を受けて、全てを調べきった役人の長は。　ケイトとセロの元を訪れ、全てを語った。　昼過ぎ。　ロビーで、帰る役人の長を見送った二人。

ヤイコフの悲しみを自分の事の様に感じて涙を流すケイトは、ギィっと目を見開いて夫の肖像画を見上げる。　その目は、純粋に怒ってる目で。

「なんて・・、なんて夫っ。　アナタっ、私は・・今日と云う今日はアナタに愛想を尽かしましたっ！！！　自分の夫ながら、情けない限りですっ」

横に居たセロは、強くなる女の声を聞く。　若き頃を経て、様々な経験を踏んで尚も強く生きる女の声を聞いた。

ケイトは、ロビーから階段に向かって左のドアを向き、控えている使用人を呼ぶ。

「テイラーっ！！　テイラーは居ますかっ？！！！」

セロの肩に手を回し、毅然と立つケイトの元へ。

「はっ、奥様っ。　お呼びで御座いますか？」

と、ドアを開いてロビーに入って来たのは、背むし男の初老使用人。ずんぐりむっくりの体系で、庭仕事や力仕事の雑用を長く経験するケイトの従者だ。

「テイラーっ、明日に夫の肖像画を外します。　手配しなさい」

「はぁ？　あ・・え？」

驚く使用人を見て、まだ心配で居残るベンソンは、シーキングを脇に苦い笑みを見せる。　二人、一族の肖像画が並ぶ廊下側の物陰に居た。

（あ～ぁ、遂に男が捨てられるぞ）

そう小声で呟いたベンソンに、横に居たシーキングは意味が解らず。

（どうゆう意味だ？）

と、聞き返す。　シーキングに、物事を想像するのは無理そうだ。

ベンソンは、ケイトを顎でしゃくり示し。

（見てろ）

二人とセロに見られるケイトは、使用人テイラーに向かいながら夫の肖像画を指差し。

「もうこの絵は不要ですっ！！　ウィンフィールズの家を傾ける愚か者の絵を、今更何時までも飾って置けますかっ！！　この家の当主は、このセロです。　セロの絵を飾りますから、絵師も呼びなさいっ！！」

愛しては居ても、過去に捕らわれて不幸を引き摺るのは賢く無い。　人生経験を踏んだケイトは、従姉弟の悲しみを知り決断したのである。　居ない者より、生きる者が優先だ。

さて、後にKは風の噂で知る。

数年の労働刑を経て戻ったヤイコフは、セロに乞われて再度商人としてケイトの元実家である店を営む事になる。　セロが、商才の在るヤイコフを信用して、立ち直らせたのが経緯であった。

ヤイコフもまた、アイリスとの愛の証であるセロに乞われては断れる訳も無い。　しっかりした奥方のケイトと、商才の在るヤイコフ

を右腕にして、セロの引き継いだウィンフィールズ家は、更なる発展を遂げると噂されたのである。

★★★

≪記憶の辿り着く場所≫

其処は、雲を眼下に見渡せる高原が広がる山地の中の鄙(ひな)びた農村だった。

「ほら、故郷の山だ」

Kは、骨の入った壷を手にして、目の前に広がる自然の雄大な美を見渡す。　春の高原には、まだ雪も多く残っていたが。　死んだ男が指定した場所は日当たりが良く、もう春の植物が青春を謳歌していた。　高原を好む黄色いランの花が咲き誇り。　砂利の向き出た場所の悪い所には、アザミの花が濃い紫色の花を見せる。

だが、山へ続く起伏のある草原は、何処までも草花の光景が続くが。
　少し平たい地形の村の近場には、十字の印を所々に突き刺した墓場らしき所も有った。

Kは、薄黒い骨壷の蓋を開き、白い粉末を風に乗せて撒いた。　崖の上から風に乗って舞い上がる骨は、雲の見える山に散っていく。

「いい所だな・・。　俺の落ち着いた農村とは違うが・・、此処もいい所だ」

朝に村へ入ったKは、昼前の今に麗かな陽の光を浴びて草原に腰を下ろした。　霧の様な雲が千切れては、別の雲に合流して。　谷を何処までも彼方へと流れていく。

Kは、そのまま草原に横に成って寝た。　草の匂い・・飛ぶ虫の羽音・・暖かい日差しの熱を和らげる冷たい風・・春を生きる全てが息吹き、心地良かった。

Kに散骨を頼んだ剣士ソトマイオニールは、死ぬ間際に森の中でKに言った。

“俺の・・生まれたマウワ村・・・世界で一番・・き・・綺麗な・・んだぁ・・。　死ぬ・・なら・・せっ・せめ・・て・・・かえり・た・・いよ・・・”

身体が半分以上食い千切られ、動く内臓が見えていた。　返り血で飛沫を被ったソトマイオニールの顔は、死を目の前にした恐怖で強張っていたが。　彼へ、Kが。

「俺が連れて行ってやるさ。　安心しろ」

と。

その言葉を聞けたのか、彼の顔が穏やかに為って死を迎えた。

山の夕暮れは早い。　Kが、人の気配を遠くに感じて目を覚ました頃は、もう赤く為り始めた陽が、西の山の陰に近付いている。

「・・・」

座ったままに立膝となり。　Kは、村を貫く山道を外れて草原の此方に向かってくる二人の人影を見ていた。

Kの前に来たのは、夫婦らしき男女。　年齢はまだ３０どうかと云う雰囲気で、男のほうは朴訥とした感じで筋肉質の大男。　女性の方は、山の農村には不釣合いな垢抜けした細身の小奇麗な容姿だ。

だが、ブラウスの上にゆったりとした服を着ていて、身体のラインがお腹だけ微かに膨らんでいる。

Kは、二人から視線を外し。

「俺に用か？」

すると、女性が少し気を昂ぶらせ気味の口調で。

「貴方、何で私達の両親の墓を聞いたの？」

男の方も。

「アンタ、冒険者・・・だろ？　兄貴に・・なんか云われたのか？」

「・・・」

黙るKは、赤く為り始めた陽の光を受ける雲の流れを見ている。

女性の方が、直ぐに焦れて。

「チョットっ、何か言ってよっ！！」

と、Kの脇に屈んだ。

Kは、この二人を朝の時点で見ている。　農作業へ行く夫と妻なのだが、どうも奥さんの方は不機嫌そうで。　彼等以外の者にこの草原の場所を聞いたのだが。　一緒にこの若い夫婦の事を聞くと、返って来る話では、奥さんが不機嫌なのは昨日今日の話では無く。村に二人で戻ってから、当たり前の様な感じだとか。

Kは、ソトマイオニールからこの二人には何も話さなくていいと云われた。　だが、仕事の成功の報告をしに街へ戻った時。　死んだソトマイオニールの親しい女性と話が出来、色々な話を聞けた。何も云わないつもりだった。　他人の事など・・、Kからすればそうなのだが。　この今苛立っている女性は、嘗てはソトマイオニールの事を好いていた。　今だ、その気持ちを残して消化して無いのだろう。　だから、流れで結婚した今に不満が在るのだ。

（一つ、御節介するよ）

Kは、心にそう云って、女性に。

「アンタ、アリサか？」

女性は、尖った目を向いて。

「そうよ」

「そうか・・、残念だったな。　ソトマイオニールはぁ、アンタを迎えに来ないゼ」

その言葉に、アリサと云う女性の目つきが更に鋭く為った。　明らかに怒ったのだ。　その場で立ち上がり。

「ホラっ、やっぱりね。　ニール（彼の愛称）は、あの時の娼婦と遊んでるんだわっ！！！　親も村もほったらかして、最低の男っ！！！」

と、吐き捨てる。

だが、大男の方は。

「アリサ、そんな事無い。　兄貴は、アリサを忘れたりするもんか」

と、ソトマイオニールを庇う。

アリサは、大男にキツイ視線を向け。

「ヨーベルっ、何で貴方は解らないのよっ！！　貴方は私の夫でしょ？！！！　どうして私の気持ちが解らないのよっ！！」

其処へ、Kが。

「喧嘩の最中に悪い。　ソトマイオニールは、村へは帰って来たさ。ただ、君を迎えに来れないだけだ。　其処だけは、勘違いするなよ」

「えっ？」

と、Kを見た二人。

Kは、山に囲まれた谷を見て。

「此処は・・、綺麗だな。　ソトマイオニールが、死ぬ前に言ったよ。　此処は、世界で一番綺麗な村だって・・な」

そのKの話に、二人はKを挟む様に屈んで。　先にアリサが。

「嘘っ！！　ニールが死ぬだなんて嘘でしょっ？！！」

大男の方も、信じられないと云う素振りで。

「兄貴・・本当に死んだ・・のか？」

と。

Kは、雲の彼方を指差し。

「奴の最後の願いは、骨を村のこの場所から撒いてくれ、とさ。アンタ等二人を、何時までも見守れる様にだと」

アリサは、震え出しながら泣き声に変わるままに。

「うぅ・・、そっ・・そんな勝手なっ」

弟のヨービルは、ガックリと草むらに項垂れ。

「兄貴・・あ・兄貴ぃぃ・・・」

嘆く二人を見ず。　Kは、雲を見ながらに。

「奴、相当賭け事が好きだったらしいなぁ。　冒険者として得た自分の金は、殆ど博打に使い。　それに応じて、大量の飲酒と葉巻・・、身体壊す訳だ」

Kに顔を向けた二人。　確かにその通りだった。

Kは、アリサに向き。

「二年前、アンタの母親。　そして、ソトマイオニールとこっちの弟二人の父親が、相次いで亡くなったらしいな。　残ったのは、お互いの身体が不自由な片親。　その知らせが来て、アンタは冒険者を辞める決意をした。　それなりに貴金属で金を持ってたし、引退しようと・・。　ソトマイオニールと結婚して、一緒に親の面倒を看ようと持ち掛けたんだろう?」

「あ、どっ・どうして・・その話を?　ニール・・から?」

「いや、ユミル・・解るか?」

すると、その名前にアリサは、泣き顔に憎しみを滲ませ。

「あの・・娼婦っ」

と、呻く。

「ああ、そうだ。　ソトマイオニールの芝居を手伝った女さ」

「芝居っ？！　私と村に帰るはずだったニールを誘惑した汚い娼婦よっ」

アリサの目には、ユミルと云う女性に対する激しい憎悪が見えていた。

Kは、

「フン。　アンタ、奴の打った芝居にまんまと騙されたんだな。今でも。　だから、この村に不満ながら留まってる」

ヨービルは、Kに寄って。

「どうゆう事ですか？」

「ソトマイオニールは、二年前のその時点で、内臓に“しこり”（癌手前の瘤）を持ってた。　恐らく、もう内臓に肥大し腐って腫瘍化した“しこり”を持っていて、人生長くなかったのを知ってたんだろうさ」

「え〝っ・・・・」

アリサは、心臓が止まるほどの衝撃を受ける。　徹夜して賭け事を続け、朝に仕事へ旅立つ事も珍しくなかったソトマイオニール。いい男で、インテリ然としたスマートな剣士だ。　何をするにも幼い頃から村一番で、村の若い女の子や冒険者の若い女性にも好かれる。　そんな人物だった。

Kは、弟に。

「奴は、自分と比較されて普段は無口のアンタを、本当に信用してたよ。　自分は、出来が良い様に見えるが落ち着けず。　チームの皆に失敗をすぐ問い詰める駄目な人間だが、弟のアンタは、人の気心を理解して、落ち込ん仲間を何処までも励ます。　自分に出来ない事を出来るのが弟だ、だからアリサも弟と結婚した方が正解だ・・とな」

「あ・あに・・あに・ぎぃぃ・・・」

何も語らずに死んだ兄だが。　ヨービルも出来の良い兄を慕っていた。　こんな事を、今に言われては遣る瀬無い。

Kは、黙ってしまったアリサへ。

「ソトマイオニールは、死病を患った事で村に戻るのを怖がった。　だから、アンタと弟の二人を帰す事を強引に決めた。　だが、アンタは、ソトマイオニールに別の女が居ると怒って取り合わなかった。　だから、ソトマイオニールは、ユミルと云う娼婦に金を渡して頼んだのさ。　自分の女として振舞って欲しいとな。　ま、アンタも驚いただろうよ。　いきなり奴が別の女と冒険者続けるって、夜の女とべったりで別れ切り出されたンだからな」

アリサは、信じたくないからだろう。　Kに向いては掴み掛かり。

「嘘言わないでよぉぉっ!!!　あの時・・ニールは、あ・あの女と宿に・・ずぅ〜と・・ずっと泊まってたのよぉ？」

掴まれたままに、Kは大きく頷き。

「ああ、其処で血を・・吐いたらしい」

「えっ？」

「奴、宿から君達を見ている最中でな、初めての吐血したんだよ」

「う・・嘘・・」

アリサの目に、気持ちが戻ったのを見るKは、全てを話した。

アリサへ強引に別れ話を切り出したソトマイオニールは、ユミルと云う娼婦を連れ立って宿に入った。　それを、このアリサと弟のヨービルに見せ付けて、愛想を尽かさせるのが彼の狙いだった。

しかし、中々アリサは宿を見張りながら夜に成っても諦めない。ソトマイオニールは、窓から二人を逆に見ている処で急に咳き込んで血を吐いた。　一緒に部屋で一晩過ごすだけで、５００シフォンの大金をくれると言う話に飛び付いたユミル。　長い黒髪へウェーブを掛け、メリハリの効いた身体に丈の短いワンピースを着る化粧の派手な美女ユミルは、冗談で快楽欲しさにソトマイオニールに抱き付いたりしたが、彼にその気は無かった。　詰まらなそうに思い、ベットで酒を飲もうとした矢先の出来事だったらしい。

「ちょっ・チョットっ。　大変っ・い・・医者」

と、ソトマイオニールに駆け寄ってから、医者を呼ぼうとしたユミルの腕を掴むソトマイオニール。

「呼ぶな・・どうせ・た・・助からない」

「えっ？　ちょ・・嘘でしょ？」

と、ソトマイオニールの腕を振り解こうとしたユミルだが。　彼はその病気の身体では信じられない気力でユミルを引き寄せ、そして抱きしめる。

「チョットっ」

驚くユミルだが、薄い黒のカーテンが引かれた窓の前。　絨毯の上に、ユミルを抱きしめたままに仰向けで倒れたソトマイオニールは、柔らかいユミルの髪の毛を触れながら。

「今、下で・・俺を見張ってるの・・弟と・・初恋の女・・なんだ・・よ」

「え・・じゃぁ・・」

キスする間合いで顔を近づけ合ったユミルは、その二人を呼ぼうと思うのだが・・。

「いいん・だぁ・・。　俺は、な・永く・・ない。　田舎にの・・残した親・・彼女の・お・・おやの面倒・・看れない。　あの二人・・あの・・・二人なら・・出来る。　憎まれてもいい・・俺への思いを・・すっ・捨て・・・させたいんだ・・」

死ぬ自分より、周りの幸せを願って、この男が自分を金で付き合わせた事を知るユミルは、急にソトマイオニールへ愛情が湧いた。

「お兄さん・・イイ男ね・・」

何故か、ユミルの目が潤むのを見たソトマイオニールも。

「君・・だって・・。　娼婦に・・しとくのが・もっ・・勿体無い・・ゼ」

まだ、死ぬまで少しの時間を残すソトマイオニールの発作は、ユミルが水を飲ませたりして次第に治まった。

気付けば、もう街の大部分が寝静まる深夜で、窓の外には雨が降り出している。　アリサとヨビールの姿も何時の間にか消えていた。

「ユミル、こっちに来てくれ」

ベットの上に寝かされたソトマイオニールは、自分の世話をするユミルを呼び。　身を起こして彼女を抱き寄せる。　そして、彼女にキスを軽く交わすと。

「女は・・不思議だ。　死の恐ろしさも和らげる・・」

と、ユミルの服をずらし、ソトマイオニールは露となった彼女の肉体を触り始める。

ユミルは、彼が本当は死ぬのが怖く。　何かに縋りたい気持ちを押し殺していると悟る。　そして、また・・。　この男も、初恋の彼女の事を忘れ去りたいと怯えている事を、何年も男へ肌身を許す事で培った経験と勘で知ったのだ。

「お金・・一杯くれるんだからね。　ちゃ～んと、元は身体で取ってよ。　うふ、今夜は・・・自由でいいよ」

ユミルは、ソトマイオニールに身体を明け渡し。　ソトマイオニールは、朝まで彼女の肉体を離さなかった。

だが、ユミルは、ソトマイオニールに惚れてしまい。　それからずぅ～っと一緒に居た。

実は、Kが残った彼のチームと共に、死体を街まで持ち帰った時。
　Kに近付いて来たのがユミルであり、ソトマイオニールから聞いた全てを話してくれたのだ。　死んだソトマイオニールは、アリサとヨービルには構うなとKに言ったが。　ユミルは、

「もし・・、アリサって女性がソトマイオニールを忘れていないなら・・彼は浮かばれない。　自分の幸せを・・思って欲しいよ。ニールは、それを願ってた・・」

と、Kに泣いて全てを語ったのである。

Kは、陽が山に隠れ、暗くなり掛けた中。

「アリサ、ユミルからの伝言だ。　ソトマイオニールは、恐怖と寂しさで時々自分を求めたが。　心では、アンタを求めてた・・とさ。
　自分は、死ぬまで彼に尽くしたが・・、一度として君に勝てた事は無かったと・・。　だから、自分をいくら恨んでもいいから、ソトマイオニールだけは恨まないで欲しいとよ・・」

「ニール・・ニールっ！！！」

泣くアリサから、Kは弟のヨービルに向くと。

「ソトマイオニールは、最後まで冒険者だった・・。　アンタ、奴に苦言を言った事有るんだって？　“仲間を護り切れないリーダーなんか、必要なリーダーじゃないよ”・・だか？」

「あぁ・・。　怪我した仲間を・・駆け出しの頃に兄貴が見捨てようとした・・事在って」

「ん。　ソトマイオニールは、アンタ等二人と別れてからそれを実践してた。　まだ駆け出しの奴等と組んで回って、身体を張って彼等と一緒に冒険をしてた。“俺の弟は、人生の師だ”が、奴の口癖だとさ。　アリサの事、最後まで護ってやってくれ。　死んだ奴の為にもな」

頷くヨービルは、ただただ泣いていた。

夕日が落ちて、完全に夜空が主役として空を彩る頃。　Kは、立ち上がり。

「さ、もう帰れ。　お腹の子供に、山の冷え込みは障る。　今夜は、ソトマイオニールへ一杯手向けてやってくれ」

と、村の方に歩き出す。

アリサは、Kへ。

「ど・何処へ？　今夜は・・」

と、言い掛けるのを、Kは遮る。

「いい。　夜空の星を眺めながら、ウォルムに行く。　じゃな、元

気な子供を産めよ」

Kは、村の方に消えて行く。

ヨービルは、アリサに寄り添って。

「さ、アリサ。　俺達も帰ろう」

「ええ、アナタ・・・」

初めて、アリサがヨービルをこう呼んだ。

★番外編・特別話　四★　（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

さて、続きましては、ウィリアム編短編か、ポリア編の続編をお送りします＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編（前書き）

ポリアが冒険者として、避けて通れない道にまた踏み込んだ。　この場に居合わせた事は運命なのか・・。　だが、それは悲劇でもあり、ポリア達の未来を切り開く扉の前に立ちはだかった試練の障壁でも有った・・・。

アランとオッペンハイマーを遺跡へ護衛したポリア達。　だが、其処で何故か現れたポリアの旧知の人物アルロバート。　その出来事を一つの軸にして、この古の古都を舞台にした事件に巻き込まれる事になる。

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編：悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆～

≪不可解な連鎖≫

アランとオッペンハイマーを伴った遺跡調査に行ってから2日目。

ポリアは、仲間と共に斡旋所に居た。　仕事を請ける気には成れなかったが、噂を聞きに来たのである。　殺されたカオフと云う冒険者は、喉を斬られ。　もう一人の学者と云う男メズロは、一撃を受けて昏倒した後に首を斬られて死んだらしい。

だが、門の出口付近で殺された男の素性が依然として掴めないらしい。　しかし、その男は、誰かを相手に激しく戦った可能性が在る事は解って来たとか。　死んだ男が使っていたらしい剣には、何度か剣を噛み合せた真新しい削り痕が何箇所も残り。　強く剣と剣を打ち合った際に剣の一部が欠け、死んだ男の間近に落ちていたからだ。

ダグラスの事よりカオフの事を聞きまわるポリアも、逆に屯してい

る冒険者達に聞かれる。　ダグラスの離脱や遺跡調査の話を。　或るゴロツキ風の冒険者へポリアがビア（ビールの地方呼び）を奢ると。

「なぁ、ダグラスの奴・・・殺しを遣ったんじゃないか？」

と、ポリアに小声で言う。

仲間の皆はムッとした顔に変わり、ゲイラーなどは、

「勝手な事を言うなぁっ！！」

と、怒る。　迫力或るゲイラーの怒声だ、別に屯する冒険者達に次々と見られる。

だが、ポリアはムカムカしながらも。

「どうしてそう思うの？」

垢染みた顔の冒険者は、ゲイラーに怯えて彼を見てから。

「実は・・、死んだカオフのチームには、数日前まで色っぽいネ～ちゃんが居たんだ。　名は、クリスティー。　そのネ～ちゃんの顔を、この数日全く見ない」

ポリアは、男の前に座り。

「コレ、何か判る？」

と、金色の硬貨を取り出した。

男は、城の模様が描かれた金貨を見てギョッとする。

「そっ・そそ・・ソイツは・・もしかして・・・ゴールダー金貨？」

シフォン銀貨は、各国同じデザインで作られるが。　ゴールダー金貨は、金の量に基準が有るだけで、デザインには基準が無い。　だから各国は、ゴールダー金貨へは５００シフォンと同じ価値を持たせるために独特なデザインを施すのだ。

古びた表面の剥げが目立つ頑丈さだけがウリの様な木のテーブルの上に、ポリアは金貨を立て指で支えて男に表を見せた。

「その女性の事を含めて、詳しい事全部教えて。　そしたら、コレあげてもいいわよ」

男の目が、グッと大きく為って。

「解った。　話す。　・・・場所を変えようか・・」

男は、店を選ぶと言う。

そして、雪の降り続く中、斡旋所から程近い屋台の集まる小さな公園に来た。　博物館や図書館などに囲まれた古びた公園で。　雪で遊ぶ子供達や、野良猫に餌をやる老人などが居る。

「店って此処か、あ？」

ゲイラーは、公園の一角に有るベンチを見て言う。　断続的に雪は降り続き、外は非常に寒さが厳しいのだ。

男は、暖かい紅茶を買って東屋の下のベンチに座った。

「此処が一番。　聞き耳を立ててる奴が居れば直ぐに解るからさ」

と、言うその男を取り囲む様に面々は立つ。　唯一、ポリアだけがベンチに座った。

男は、陶器の器に入った紅茶を啜りながら。

「ズズズ・・・、ふぅ～。　斡旋所には、他に意地汚い奴等が多いからな。　場所を変えさせて貰った。　だが、俺は、アンタ等だから嘘無く喋るが。　居なくなったダグラスがクリスティーと逢ってるのをこの目で見たんだ」

ポリアは、男の顔を覗いて。

「どうして知ってるの？」

「ヘッ、俺はチームから捨てられた口だぜ？　クリスティーみたいなイイ女がソロに成ったんだ。　二人でチームを組みたいって思うだろ？」

マルヴェリータは、男の下心を如実に見た気分でイイ気はしない。

だが、男は続け。

「クリスティーが泊まっているホテルに挨拶に行った時、クリスティーがどっかに行こうとして出て来た。　跡を尾行けて行ったら・・、住宅区の中に出来た夜の飲み場でダグラスとクリスティーが出会

うのを目撃しちまったって訳。　ボロい小屋みたいな所で飲んでたが、ダグラスとクリスティーの二人は意気投合したのか、最後は一緒にクリスティーの泊まったホテルに時化込んで一晩出て来ない・・。　デキちまったと確信したね」

ポリアは、ダグラスが叔父が依頼した仕事の前日の夜に、クリスティーと男女の関係を持った事を理解する。

「それで？」

「ああ。　だが、その同じ日の夜。　斡旋所にカオフが仲間のメズロを連れて来てたらしい。　カオフは、クリスティーをモノにしようとしてしつこく言い寄ってて、この街に着いた所で嫌われて逃げられたらしい。　だから、チームを抜けたクリスティーを憎むぐらいに探し始めたみたいだ」

執念深いだけの偏執症だとマルヴェリータは呆れて。

「男って、ホントに勝手ね」

喋る男は、絶世の美女のマルヴェリータに言われて首を竦めた。

「かもな。　だが、クリスティーは、斡旋所から逃げる様にホテルに引き込んだ。　カオフを恐れてだろう。　そのクリスティーが新しい男を作ったなんて聞いたら・・・、カオフが激怒しちまうよ。　何せ、アンタ等が遺跡に行く朝。　ダグラスとクリスティーが旧大公園広場で口付けし合ってたのを見たって云うチームが出て来たんだ。　殺された日の日中も、カオフは斡旋所にてクリスティーの事を嗅ぎ回ってたって云うからな。　多分、仕事を終えて戻るダグラスの後をメズロ辺りが尾行けてたんだろうさ」

ポリアは、更に踏み込んだ質問をする。

「所で、そのカオフって男のチームにクリスティーって女性が居たのは解ったわ。　ダグラスとも関係が有った事もね。　でも、死んだ二人とクリスティーって女性は3人でチームを組んでたの？」

すると、男は半分ビックリ半分呆れの顔で。

「まさかっ。　あんな凶暴なカオフと意地汚いメズロの中にクリスティーだけが居たら、毎晩何をされるか解らないゼ？　他に、戦女神を信仰する神官のネ～ちゃんと、自然魔法を使うチビ助が居たな。　恐らく、カオフの横暴さにその二人も愛想を尽かしたんじゃ～ないか？　この都市で、カオフのチームはバラけたのさ」

ポリアは、話を聞いて沈むゲイラーを一瞥して。

（ああ・・、やっぱりダグラスが殺人の犯人かも知れない・・。少なくても、カオフとメズロって二人の斬られ方は手練（てだれ）の誰か。ダグラスの可能性は強い。　ああ・・、もっとダグラスに突っ込んで聞くべきだったわ・・）

と、思った。　クリスティーと云う女性が居なくなっているとしたら、その可能性は益々高い。

「さて」

男は、顔をポリアに向ける。

「ええ、ありがとう」

ダグラスの犯行が濃厚な可能性に気を落としたポリアは、ゴールダー金貨を男に渡そうとする。

すると、男はポリアの手を陶器の器を持った手で押し返し。

「おいおい、ポリアさんよ」

いきない言われて、ポリアはハッとする。

「え？」

男は、お人よしを見る嘲笑を浮かべ。

「人が良すぎるぜ、アンタ。　そんな大金渡すなら、もう少し突っ込んで質問して全部聞き出し終えてから渡すモンだ」

男の言う事を理解し切っているゲイラーは、目をギラ付かせて。

「俺がやろうか？」

そのドスの効いた声に、男は首を竦めて。

「勘弁勘弁っ」

イルガは、男に。

「何かまだ有るのか？」

「ああ。　実は、此処からがアンタ等をこっちまで呼んだ本題さ」

ゲイラーは、ポリアと視線を交わしてから。

「何の話だ？」

男は、少し温く為り始めた紅茶をグッと呷ってから。

「ふう。　うん、実はよ。　あの死んだカオフとメズロ、なぁ～にか仕事を請けてたみたいだゼ」

ポリアは、素直に。

「仕事って、斡旋所から？」

「いんや。　クリスティーの事を嗅ぎ回りながら、“遺跡の調査を請けたチームが居るか？”とかなんとか聞き回ってた。　しかも、アンタ等があの仕事を引き請ける前日からな」

これには、チームの全員が驚いた。　ポリアは、グッと男に顔を近づけて。

「え？　それって・・、斡旋所に依頼された仕事の内容が外に漏れたって事？」

「そうとしか思えないな。　俺は、２ヶ月半前からこの都市に居る。　俺が居る間に来た名の売れたチームは、アンタ等とモンスターキラーの異名を持った“バブロッティ”の奴等のみだぜ。　だが、一月前にバブロッティのチームは南方に移動しちまった。　奴等は、モンスターを倒す仕事を粗方やって消えちまう奴等だからな。　遺跡調査の仕事は請けて無ぇ～はずだ。　だが、カオフとメズロは、

アンタ等が下水道に湧いたモンスターを倒した日から、何故かその事を聞き回っていた。　あのカオフが金に成らない事を本気でやるのは、女の事だけ。　・・・何でも、アンタ等遺跡で襲撃されたって？　な～んか臭うゼ」

ゲイラーは、直ぐに。

「何で俺たちに教える？」

「ふん。　大金くれるって云うしな。　それに・・カオフみたいな奴は死んで当然さ。　アイツは、今まで女をチームに引き込んでは暴力働くし。　俺達みたいな炙れた一人狼を捕まえてチームに入れる。　だが、仕事が失敗しそうなら見捨てて俺達に責任をおっ被せるし。　成功しそうでも見捨てて報酬をメズロと独り占めみたいにしやがる。　あんな悪党みたいな奴なんかに義理立てして秘密を黙る必要無い。　俺だって、２度も捨てられたしな」

マルヴェリータは、聞けば聞くほどに最低な男だと思い。

「まるでガロンみたいな奴ね」

ポリアは、鈍く頷く。

しかし、此処で男は、ガロンの名前に驚き。

「い〝っ！！　アンタ等・・あの極悪のガロンを知ってるのか？　野郎、まだ生きてやがるんだ」

ポリアは、流石に悪い意味で有名なガロンを思い出して気分が悪い。

「でも、もう死んだわ。　何でも、首を斬られてね」

「ほえ～、そうかい。　あのガロンも、遂に観念の時が来たって訳だ。　だが、野郎は相当に剣の腕も達はず・・。　斬った相手はもっとスゲぇ～な」

Kを脳裏に思い出すポリアは、金貨を男に渡し。

「ありがとう。　凄く参考に為ったわ」

「おおっ、こりゃ～有り難ぇ～」

男は、金貨をマントの下の懐に仕舞い込む。　そして、

「でも、アンタ等も気を付けな。　最近、このシュテルハインダーは奇妙な事ばっかり起きてる。　数日前もまた学者が殺されたし。　2・3年前からは、冒険者のチームが突然行方不明に成ったり、盗賊の大きな組織が動く噂も有る。　久しぶりに気の合いそうな有名チームのアンタ等だ、巻き込まれて死ぬなよ」

と、紅茶を最後まで呷る。

ポリアは、その殺人の方に気が引かれた。

「え？　学者が殺されてるの？」

最後の一滴まで飲んだ男は。

「おう。　最初は・・確か骨董品屋の主で、元が冒険者の学者をしてたって爺さんさ。　次は・・確か凄い博識で、国の若い学術役人

だったかな。　三人目は・・5日前か。　住宅区で、元博物館館長のご～つく爺さんが殺されたってよ」

マルヴェリータは、アランやオッペンハイマーも学者だから怖くなる。

「ねっ、その事も詳しく教えて」

★

一方で、ポリアの話が気に為ったオッペンハイマーは、それとなく市街統括長官のフロイムに会って、捕まった悪党達の事を尋ねていた。

白い雪が大窓の外に降る。　嘗ては、オッペンハイマーも座した重厚な机が窓前に置かれている。　恰幅で大らかな４０代の紳士、それがフロイムである。　豊かな鼻髭に、大きく真一文字に結ばれた口、やや下に垂れ下がった耳など印象に深い人物だ。

椅子に座ったフロイムは、オッペンハイマーに席を勧めて。

「聞きたいって・・、あの捕まえた3人の事かい？」

「うん。　あの中の一人が、昔に祖父の元に居た執事の息子さんと似ているんだ。　今になって、なんとなくそう思えてきてね」

「そうか・・。　だが、ショーターの朝の話だと、口の悪い二人はもう一人に金で雇われただけと一点張りで。　その雇ったと思われる男は、何を聞かれても全く口を開かないらしい。　手荒い事をしてでも吐かせていいかどうか聞かれたよ」

「えっ?!」

驚いたオッペンハイマー。

フロイムは、違法行為なだけに苦く笑って。

「許可は出してないさ」

「そっ・そうか・・」

「だが、オッペンハイマー殿。　最近、学者が何者かに次々殺される被害も有る。　私としても、同友の君やアラン先生の事を考えると心配なんだ。　もしものときは、少し強引でも調べるよ。　だから、その執事の名前と息子さんの事、もう少し詳しく教えてくれないか?」

「・・・」

オッペンハイマーは、どう応えていいか解らなかった。

そして。

「・・・」

冷たい暗闇の中、静かに黙る男が一人。

真っ暗に近い場所が在る。　石と鉄格子で出来た地下牢だ。　空気穴が地上に向けて拳大で開くのだが、極夜の昼過ぎでは日の光も鈍い。　日当たりの悪い場所に向かって開けられている空気穴からは、光と云えるモノは差し込んで来なかった。

「ふぅ・・・」

捕まった男達3人の中で、唯一口を開かないあの男が、その暗くさめざめしい牢屋の中で静かな呼吸をした。

この人物、捕まった日の深夜までと、昨日の昼前から深夜まで厳しく取り調べられた。　ショーターは、気性通りの男で。　警察役人を指揮して捜査する刑事部の役人を権力で押し退け、自分と一緒に連れて来た兵士の男達と共にこの人物を取り調べていた。　もう、男の首筋や腕には痣が見れる。　口元にも痣を作って傷が出来ていた。

与えられるのは水で、早く飲まないと凍ってしまう。　食事もパンと冷える直前のスープのみ。　しかも、一日に一度だ。　他の房に入れられた容疑者には、一日2度のマシな食事が出されているらしい。　多分、ショーターの指図だと思われた。

寒い牢獄の中。　ベットの上に座って黙っている男の耳に、鉄の具足を着けた兵士の足音がしてくる。

（またか・・・）

叩かれ、怒鳴られる時間が遣って来たのだと悟った。

「おい、取調べの時間だ」

優しい感情など微塵も無い役人の言葉が、格子戸の向こうの廊下から掛かった。

「・・」

足に鉄球、両手には鎖で繋がれた枷が付けられている男は、返事も無く立ち上がった。

だが・・。　男は、何故か足に科せられた鉄球を外されたのだ。

「？」

疑問に思う中で、何故か手械まで取られた。

「付いて来い」

役人に云われるままに、厚手の麻布で簡単に作られた囚人服を衣服の上に着た男は、そのまま二階まで歩いた。　何時もの窓すらない狭い取調べ室・・・では無く。　開放感の在る部屋に案内された。

雪が都市に降るのが見える窓、窓の棚には観葉植物が小さな鉢植えで置かれている。　暖炉には火が熾きて、温かな部屋だった。

「やあ、今日も取調べを始めようか」

簡素な向かい合う2人用のテーブルには、ショーターが座っていた。

（何だ・・何か在る）

男は、ショーターの姿に返って警戒をする。　その予感は、的中だった。

「・・・」

椅子に座った男を見たショーター。　鬼の様に怒って暴力を振るったりしてこの男を取り調べしていた昨日までの彼では無い。

「さて。　君。　今日は、全て喋ってくれるな?」

ショーターは、友人の様に親しげに話し掛ける。

だが、この男にはショーターと馴れ馴れしく話す筋合いが無い。

だから、

「・・・」

これまで通りの黙秘である。

しかし、ショーターは腰から紙を取り出して。

「一昨日、君が忠告した冒険者が護衛していたのは学者の先生で、侯爵様のオッペンハイマー様だ」

「え?」

捕まってから初めて男が声を出した。　ショーターは、何かの陰謀も在る可能性を考え、遺跡調査に関する個人情報は一切話さなかった。　あの場所で、何をしていたのかが聞きたかっただけだからだろう。　何より、一度は警告だけで引き下がろうとしたこの男と他

二人。　オッペンハイマーやアランを狙ったとも言い切れない。

だが。　今日は、ショーターは名前を出したのである。　顔色を変えた男を見て、ショーターは笑う。

「あはは、そうかそうか、驚きか？　だろうなぁ～・・、お前の父親が、嘗てはあの屋敷の離れに居た老人の執事をしていたのだろう？　お前の名前は、アルロバート。　アルロバート・モルツァ・デヘアナー・・、違うかな？」

ショーターの声に、男は顔色を変えた。　今まで、叩こうが怒鳴ろうが冷めた目を湛えて人形の様に黙秘して来た男が、狼狽える顔色をしたのである。

ショーターは、落とす気合いを込めて。

「おいっ！！」

と、テーブルを叩いて怒鳴る。

「違うっ、俺はそんな名前じゃないっ！！」

と、男が慌てて突っ撥ねる様に言う。　だが、どう見ても苦し紛れの様な素振りが見え隠れしていた。

「ほう、そうか。　なら、確認手段を取らせて貰う」

「何？」

男は、ショーターの言っている意味が解らなかった。

ショーターは、急激に顔を睨み付ける形相に変え。

「オッペンハイマー様の離れに居た執事の男は、今は身体を壊しているが存命だ。　お前が息子かどうか、引き摺り出してでも確かめさせるまで」

「なっ、何だとっ?!!!　そんな横暴なっ！」

ショーターは、この男の焦る様子に何かの手応えを見た。　直ぐに平静の顔に戻し。

「フン。　デヘアナーの家は、確か昔に政治汚職をして格下げされた家なのだろう?　そんな輩の一族で、しかも死に損ないの誰かが死んでも大した事じゃない。　問題なのは、この我々も居た調査隊に立ち退きを要求するお前達の企みだぁっ!!!。　崩壊市街地の捜索権は、全て国に既存する。　お前が誰の命で見張っていたのか、それが問題なのだっ！」

男は、拳を握り締めて悔しむ顔をショーターに向く。

だが、こうなるとショーターは優位を確信し。　逆に、男へニヤリとした笑みすら見せたショーター。　男に机上から前に身を乗り出す様に顔を近づけると。

「そんな目をしようと関係は無いぞ。　あの遺跡周辺一体には、どの貴族や学者からも調査保障を求める請求は出されていない。　つ・ま・りっ!!!　お前はっ、盗賊、若しくは宝を狙う何者かに雇われた三下だっ!!!!　その者の素性を知るのが我々の目的っ。　・・先ず、お前が何者かが問題だ。　ハッキリ名を言えないなら、情

報を頼りに捜査するまで。　不正で落ちぶれた貴族に一々気を遣うかぁっ！！！！！！！」

と、ショーターは激しく机を蹴り上げた。

「きっ貴様ぁ・・」

思わず言葉を吐いた男は、兵士長ショーターを強く睨んだ。

男の悔しがる表情にショーターは、完全に優位な立場を得たと更なる笑みさえ浮かべる。

「いい顔してるゼ、アルロバート殿。　その怒りに歪んだ感情的な顔・・あぁ～見たかったね。　今まで、俺等役人を冷笑する様な面してたアンタを、俺達が冷めて見れる」

男は、これまでと思って自分の舌を噛もうと思った。　今を耐え抜き、一時の休憩を見計らって自決を思う。

だが、盗賊などを取り調べる事に関しては、ショーターも上手だ。

「さて、ぜ～んぶ喋って貰うぞ。　お前がもし変な真似するなら・・、父親も獄中死させてやろう」

「何ぃっ？！　父には関係の無い話だぁっ！！！」

俄かに怒って、椅子を倒す程の勢いで立ち上がった男。

すると・・。

“パチパチ”

ショーターが拍手をし出す。

「クックックッ、偉い偉い。　ホレ、ちゃんと“父親”と認めた。
そうだ、それでいい。　成る程、お前はやはりアルロバートと云う名前か」

男・・いや。　アルロバートの全身から、一気に力が抜ける思いがしてその場に崩れた。

・・・。

★

その頃。　公園で男から不穏な話を聞いたポリア達は、心配に為ってアランの元に来ていた。

「ふむ、その話なら、ワシもフロマーや知人から聞いた」

キノコの家の中にポリア達を通したアランは、凹みの段差内に下がったリビングに皆を座らせ紅茶を振舞いながら云う。

ポリアは、その殺人事件に共通点が有ると聞いたので。

「先生、事件に共通点が有ると云うのは、不可解です。　もしかして、何か目的が有るとか考えられませんか？」

アランは、アルロバートの事から殺人事件にまで波紋を広げようとするポリアに。

「麗しの皇女様は、何が心配なんじゃ？」

ポリアは、アランにだけは全てを話す心を持った。　ダグラスが殺したかもしれないカオフと云う冒険者が、オッペンハイマーが依頼を出した遺跡調査の事を知ってたと云う事を・・。　斡旋所の主は、紹介はポリアが始めてだと云う。　もし、冒険者に遺跡調査の内情を調べさせる何者かが居たとするなら。　あの捕まったアルロバートと二人のゴロツキを雇う何者かが居る可能性が在る。

紅茶を手に揺り篭の様な椅子に座ったアランは、

「ふむぅ。　確かに・・、その話が本当なら可能性は有るのぉ。　だが、問題が有るぞ」

マルヴェリータが、

「問題・・ですか？　アラン様、それはどの様な？」

「うむ。　・・・今回の遺跡調査は、宝物や金品の捜索よりも学術的な調査が本意なんじゃ。　じゃから、スコットが発見された宝物を譲れと同行した。　じゃがの、初めて入る遺跡と云うだけで、あの辺は崩壊市街地の入り口じゃ。　もう盗掘などならとっくの昔にやられとるはず。　あの遺跡調査を人殺ししてまでどうこうする理

由が解らないの～」

ポリアは、それよりも殺人事件が気懸かりだ。

「先生、殺人事件の共通点と遺跡に何か関係は？」

「う～ん。　殺された者は何れも考古学の知識が深い者ばかりだ。　ワシは、殺害された3人とも面識が有る。　それから、発見した者に因ると・・何やら紙に書かれた文字とか・・紋章が残されていたとな。　実の所ワシは、遺跡に行く前の日の朝方まで郊外の友人の家に行っていて知らなかったが。　オッペンハイマーは、その紙に残された印だか何かの鑑定を依頼されたみたいじゃ」

「えっ？！　叔父様がですか？」

「ああ。　だが、オッペンハイマーはさっぱり解らないから依頼を断ったとな。　丸で子供の悪戯書きの様な物だったらしいとフロマーに言っていたとさ」

「子供の落書きの様な・・文字や印・・・」

呟くポリアに、アランは続け。

「後、どの遺体にも酷く折檻された形跡が在ると・・・。　何かを聞かれたのは間違い無いのかも知れん」

ゲイラーは、

「数年前から、盗賊が動いてるって噂あるみたいなんだが・・、そっちに何か知ってるか？　教授」

「おお、それも確かだ。　何でも、盗掘の手伝いを嘘の依頼で勝手に請けた冒険者のチームが、結局何も見つけられず皆殺しされたらしい。　去年の話じゃ。　それから・・・2・3年前じゃったか、この街から北東に行った山の中に古代都市がそのまま眠っていると噂が立ち。　盗賊や冒険者が良く話を聞きに来た。　ま、そんなもの無いがな。　何せ、古代都市とはこのシュテルハインダーがそうだからの。　有る訳が無い」

「だが、根も葉も無い所から噂が出るか？　何か有ったから、そんな噂が立ったんだろう？」

「さぁ・・・」

アランは、急に黙った。　突然に近い空気でだ。

ゲイラーは、俯き。

「やっぱり何か知ってるんだな？」

「・・。　事件に繋がるかどうかは解らんよ。　ただ、ワシと最初の被害者で骨董品屋の主モンテルローは、昔からの付き合いで色々有った訳さ。　君たちに語る事では無いよ」

その姿には、強い拒絶が見え隠れする。

ポリアは、アランに頭を下げ。

「先生、もしかしてロバートも、そして死んだ冒険者の二人も、遺跡や過去の何かを求める誰かに動かされているのではと思います。

私、ロバートのお父さんのクシュリアントさんに会って来ます。
もし、先生が私に話してもいいと思えたら、その昔の事を教えて下さい。　私、宝や学術的な事は欲しいとは思いません。　ただ・・、この街に起こってる事については、関連が有ると思います。　このままでは、ロバートもどうなるか解らないし。　殺人事件がもっと続くなら、叔父や先生の身も心配です。　祖父ヨーゼフとのこの地での想い出は、・・私にとっては掛け替えの無い物です。　この地で、祖父と深い所縁が有る人達の不幸など・・見たく無いです」

と、仲間に立ち去る事を告げる。

皆、立ち上がりながらアランへ一礼をする。

「突然押し掛け、済みませんでした」

と、謝るポリア。

「・・・、済まない。　考えてみよう」

何か憂鬱な面持ちと変わるアランは、そう呟く様に言った。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です。　ポリア編をお送り、間にウィリアム編の別話を入れます。　私生活の影響で更新が伸び伸びになります＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪再会した主従≫

ポリアは、仲間と共に意気を落として外に出た。

「ポリア、まだ落ち込む時じゃ無いわよ」

マルヴェリータは、ポリアがアランに拒絶された様な雰囲気を感じて元気が無くしたのだと感じる。　元は、ポリアの祖父を共にして冒険をしていたと云うアランだ。　ポリアが祖父を敬い、その共に過ごした時間が思い出深く綺麗で在れば在るほどに、何か有れば後から受ける深刻さも大きく成る事がポリアを見れば一目瞭然だった。

「マルタ、解ってる」

イルガは、ポリアの心情を慮（おもんぱか）れるだけに、

「お嬢様、これから・・デヘアナー様の下へ？　そろそろ夕方を迎えますし、お屋敷に戻られてお休みされた方が宜しいのでは？」

だが、ポリアは。

「ううん。　ロバートが捕まった以上、クシュリアントにも何か害が及ぶかも・・。　それが一番心配だわ」

ポリアにしてみれば、祖父の執事として自分を娘の様に面倒見てくれたクシュリアントの記憶も深く心に刻まれる。　ロバートに対しては、厳しいと云うより冷静に接する父親であったが、ポリアには本当に優しい小父さんの様な存在だった。

クシュリアントの家は、アランの家からそう遠くないスラムの入り口ならしい。　雪の積もった公園まで戻り。　住居区の奥に進んでいけば、隣の家と壁一枚しか隔たりの無い様な石造住宅の密集地にぶつかる。　アランの家の周りも然程に庭間が在る訳では無いが。　こちらは、もう道以外の家々の間に、人が通れる隙間さえ無い程に密集している様子なのだ。

薄暗い中。　ポリアは、叔父から聞いた情報を頼りにクシュリアントの家を探した。　帰宅途中の労働者に尋ねたりして、家を探し出した。

「此処か」

ゲイラーは、その外見からしてもかなり古びた民家を前にして言う。　その家は、間取りが二間しか無い小さな家だ。　厚い扉の木は、随分と上下の隅が腐食して表面が剥げて凍っている。

ポリアは、家の前で皆に声を少し抑えて。

「不正した御蔭で、こっちに一家揃っての夜逃げみたいなものだっ

たみたい・・。　お祖父ちゃんが雇わなかったら、没落してたって何度も呟いてたわ」

と、言ってから扉を叩いた。

「はい、何方ですか？」

ノックに返って来たのは、若い女性の声だ。

「ポリア・・・」

マルヴェリータは、家を間違えたのではと思ってしまった。

だが、ポリアが。

「済みません。　此処は、デヘアナー様の御宅でしょうか？」

と、尋ねれば。

「は、はい。　そうですが・・・」

と、扉が開いた。

夕方前でも、極夜の地方では暗い。　明りでも無いと人の顔などハッキリと確かめられない状態だ。　その応対に現れた女性は、剥げ掛かった緑色の屋根をしたランプを片手に現れた。　田舎の町娘風で、赤いスカートが足元まで延びる上にエプロンをしている。　頬に雀斑（そばかす）の目立つポリアよりも若い印象の女性だった。

「何方様でしょうか？」

小さく丸い目でポリアを見る女性はそう尋ねるが。　直後には、ポリアの背後に立つ壁の様なゲイラーや、厳しい顔のイルガに警戒心を窺わせる目の動きであった。

ポリアは、穏やかな声音で。

「私は、ポリアンヌと言います。　クシュリアント殿が昔仕えてくれましたのが、私の祖父です」

すると、その女性が“アッ”と云う顔をして。

「あ・・オッペンハイマー様の庭先に住んでらした・・・ヨーゼフ様の？」

ポリアは、ニコリと微笑み。

「はい。　孫のポリアンヌです」

その返事を聞いた若い女性は、大慌てで頭を下げ。

「あっ！　こっこれは失礼を・・。　大公爵様のセラフィミシュロード様の御一族様ですね・・ああっ、恐れ多い非礼をっ」

と、俄かに慌てて非礼を詫び出す。

しかし、ポリアは、それを悪いとも思っていない。

「いいのよ。　今は、冒険者で身分を隠してるから、只の人だから・・。　処で、クシュリアントは元気ですか？　顔を見に来たの」

「はいっ、今っ・・少しお休みに」

「あ、そうだったの・・」

そこへ、部屋の奥から。

「マシュリナ、何方かいらしたのか？」

と、かなり老いた男性の声が、ゆっくりと聴こえた。

“マシュリナ”と呼ばれた若い女性は、

「はいっ、クシュリアント様っ」

と、声を出してから、ポリアに。

「ささっ、中へ。　クシュリアント様も、お喜びになります」

と、中へ通してくれた。

マシュリナは、先に中へと走り。

「クシュリアント様っ、ヨーゼフ様のお孫様のポリアンヌ様がお見えに成られましたっ」

と。

ポリアは、その簡素で家具もろくに揃っていない家の中をを見て、クシュリアントの苦労を見て取った。　木の丸いテーブルは小さく、

色の変色した無地。　椅子は、造りも頑丈なだけの質素なものである。

「おおっ、ポリアンヌ様がっ？！」

老いた声の老人の物は、扉が無い枠だけの先の部屋で聴こえる。
ポリアは、仲間を連れて先の部屋に踏み込んだ。

狭い部屋。　宿で言うなら差し詰め二人部屋だろう。　その窓側に、子供用と思えるくらいのベットがある。　枠を取り払い、足元に附けたした台が歪な凹みを見せる。

「おお・・・、真にポリアンヌ様・・・」

皆は、痩せこけた老人を見た。　ベットの上で、身を座らせようと不器用にぎこちない動きをするのは、体が云う事を利かない所為だろう。

ポリアは、直ぐに。

「クシュリアント、そのままに」

身体の思うように動かない老人は、情けない自分を嘆く顔でポリアに頭を下げる。

「ポリアンヌ様、この様な醜態を晒してベットの上より済みません・・・。　御懐かしゅうに・・」

ポリアは、皆に顔を横に向けるだけで制し。　自分一人だけクシュリアントに近付いた。

「ホントに懐かしいわね。　クシュリアント、歳を取れば誰でも同じよ。　さ、ちゃんと布団を」

「あぁ・・、済みません」

身を起こした状態に戻るクシュリアントの膝へ、ポリアは近寄って布団を直す。　布団と云っても、敷布団の綻びを仮縫いしただけの粗末な物だ。

部屋中央にあるランプが薄暗いのは、オイルの消費をギリギリに設定してる上に安い油だからだろう。　ランプを見上げたゲイラーは、貧しかった自分の昔と似た生活の貴族が居るのかと驚いていた。どう見ても、目の前の老人はギリギリの貧困生活をしていると思える。　壁を飾る絵も無いなら、花瓶を置く台すら無い。　ベットの上で食事をする為に遣われる簡易的な木枠の台は、積荷を入れる木箱を解体して作った様な物である。

（これも・・貴族・・）

驚くゲイラーの目の前で、白い厚手の上着を着ただけのクシュリアントがポリアを見て微笑んでいた。

マルヴェリータは、吐く息が白く外と変わらないのに驚いていた。

（暖炉は？）

竈と一体と成る暖炉が手前の部屋に在るが、火が点いていない。傍らに置かれた薪が凄く少なく。　一日で使い切りそうな量だ。

（まさか・・、夜の食事とかに使う一時のみ？）

マルヴェリータは、爵位降格を受けた貴族のどん底を見る気分だった。

面長で髪が乱れて伸び放題ながら、老人でもまだ薄らと貴族らしい雰囲気を見せるクシュリアントの傍らに座ったポリアは。

「此処に来たから、立ち寄ったの。　クシュリアント、お祖父ちゃんが死んでから初めてね」

「はい・・、ポリアンヌ様。　この様なむさ苦しい処へ・・・、ご足労ありがとうございます」

「何言うの。　お母様が、貴方を自分の元に呼び寄せたいと言っていたのに・・。　こんな所で、こんな生活・・・」

ポリアは、人目でクシュリアントの生活を読み取ったのだろう。

声が、涙声になりそうだ。

だが、もうこの生活の中で死ぬ覚悟の出来たクシュリアントは、ポリアへは笑みしか無い。

「いえいえ、これ以上のご迷惑を掛けるのは、私には出来ません」

「強情ね」

と、笑ったポリアは、浮かんだ涙を拭かないままに。

「今、私は冒険者をしているの」

「えっ、ポッ・・ポリアンヌ様が・・冒険者・・・」

「うん。　色々有ってね、家を飛び出したまんま」

「おお、何と・・。　ヨーゼフ様とそっくりな・・」

「うん。　でね、一昨日、アラン先生とオッペンハイマー叔父さんの護衛をして、崩壊市街地に行ったの」

「ああ、またそんな危険な・・・」

困った顔をするクシュリアントだが、ポリアは。

「クシュリアント、そこでね」

「はい？」

「ロバートに会ったわ」

「えっ？！！」

クシュリアントの顔が、瞬時に強張った。

ポリアは、全ての経緯を話した。

「あぁ・・・、あのバカっ・・。　選りによって、アラン様やポリアンヌ様に刃を・・・おぉぉぉぉ」

クシュリアントは、死人の様な顔を両手で覆い、堪え切れずに呻き

出す。

だが、ポリアは、それで事態が終わっていない事を予感した。　だから・・・。

「クシュリアント、ロバートは・・役人に捕まったわ。　でも、ロバートがこの街に戻っていたのは知ってたの？」

ポリアに問われ、涙をそのままに打ちひしがれるクシュリアントは頷き。

「はい・・、3年前に突然戻り。　“俺が仕官して、家を再興させる”と・・。　迷惑を掛けるなと叱りましたが、この動けない身故に通じませなんだ・・。　まさか、ポリアンヌ様などに過大なる迷惑を御掛けしようとは・・。　このクシュリアント、先立ったヨーゼフ様に何とお詫びすれば良いか・・ううっ」

（“仕官”？　・・・）

ポリアは、意味が理解出来ない。　“仕官”とは、国に仕える事であり。　ロバートのしていた事は、略に真逆・・。

「クシュリアント。　ロバートは、仕官の口利きの伝でも在ったのかしら・・。　仕官は、毎年春の一時期に退役する人数の補充に伴って出来るけど、この都市を運営する統括長官に一任されているわ。　ロバートは、戻ってからその仕官を目指していたのなら、どうしてあんな悪党の手先みたいな真似を？」

「解りません・・・。　あぁ、私には・・・もうあの子が解らない・・・」

泣きながらそう言い、頭を振るクシュリアント。　見るポリアも、クシュリアントにそれ以上を聞いても得る物は無いと思える。

ポリアは、マシュリナと云う若い女性に向くと、

「貴女は、この周りの人？」

ポリアがクシュリアントの仕えていたヨーゼフと孫子の間柄と知ったマシュリナは、顔をかなり強張らせたままに。

「いっ、いえ・・。　私めは、クシュリアント様と共に住み暮らす者で御座います」

「では、彼の身の回りの全てを？」

「はっ・・はい」

涙に塗れた顔を上げたクシュリアントは、ポリアへ。

「ポリアンヌ様、この・・マシュリナが・・私めの命を繋ぐ手で御座います。　我が父の不正が暴かれる以前から仕えてくれた者の、・・孫でしてな。　一家でこの地に移ると成った時から、私の身の回りを世話してくれるこのマシュリナの祖父と共に来たのです。　ヨーゼフ様が死んでから少しして、連れ添った妻を私が看取って・・。　直後に大病を患いましてからは、このマシュリナが私めの面倒をみてくれています」

マシュリナは、涙を流すクシュリアントの身を案じながら。

「私の両親は、クシュリアント様の御一族が格下げを命じられてから別の貴族に仕えています。　ですが・・・。　祖父は、クシュリアント様と奥様を案じて、まだ幼子の私を連れて来ました。　今は、昼間に売り子として店に働きに出ながら、両親が仕送りしてくれる物と合わせてクシュリアント様を支える手助けを・・・」

ポリアは、思わずイルガを見た。　貴族に仕える者は、その恩義や忠義で時として金云々では無い強い絆を生む。　没落したデヘアナーの一族からして、使用人を抱える金など持ち合わせていないだろう・・。　マシュリナと云うこの女性は、両親が送る金と自分で働いた金を使ってクシュリアントの世話をしているのだ。　恐らく、祖父から受けた教育の所為も在るだろうが、誰でも出来る事では無い。　自分の我儘に付き合うイルガも、同じ精神を持ち合わせている。　ポリアには、マシュリナとクシュリアントが、家族と主従の合わさった強い絆を持っていると感じた。

（まだ、こんなに若いのに・・。　クシュリアントと一緒に痩せて・・・、お祖父ちゃん・・私は、この街に来れて良かったわ）

ポリアは、クシュリアントの身体を心配して、何か在ったら直ぐに叔父のオッペンハイマーを頼って欲しいと言い残す。　そして、雪がチラつき始めた外に仲間と出たポリアを見送りに出たマシュリナが。

「ありがとう御座います。　クシュリアント様をお訪ね頂き、私も嬉しい限りです」

丁寧に外まで出て、ポリア達に頭を下げるマシュリナ。　ポリアは、マシュリナに近付き。

「マシュリナさん、コレを」

と、金の入った白い小分け袋を渡す。

「あ、これ・・は」

持った感触や音で金銭の入っている事を感じるマシュリナが、驚きの眼でポリアを見返す。

暗い夕方。　もう重々しく垂れ込める雪雲で、夜の闇が支配する中。

ポリアは、僅かな明りが漏れるクシュリアントの家の窓を見てから。

「我が祖父に仕えてくれた礼です。　祖父の急死で、財を纏めて始末する暇（いとま）ないままだったでしょ？　クシュリアントの身体をお願い。もし、患っている病気が酷くなる様なら、叔父オッペンハイマーの下を尋ねて。　私が、貴女とクシュリアントの面倒を見れる分だけの用意を残しておくわ」

「ポ・・ポリアンヌ様・・」

金の入った袋を握り締め、また頭を下げるマシュリナ。

だが、ポリアからするなら当然だ。　いや、この巡り会わせは、祖父が望んだことだ・・引き合わせたのだと信じたい。

「マシュリナさん。　私の幼い頃から、クシュリアントは第二の執事だった。　お祖父ちゃんの処に来たら、クシュリアントに抱き付くのが当たり前だった・・。　そのクシュリアントの今を訪ねれたのは、お祖父ちゃんの導きに因る巡り会わせの御蔭。　クシュリア

ントには、ロバートの事も在るから大変だけど、まだ死んで欲しくないの。　貴女が居るなら、安心してクシュリアントを任せられる。
　それに、貴女自身の幸せも考えなければね」

「あぁ・・、ポリアンヌ様の様な方に心配して頂けるとは・・。
私は、光栄です」

と、頭をまた下げるマシュリナ。　クシュリアントが仕えていたポリアの祖父の事を知るマシュリナなら、ポリアの地位も知っていた。
　クシュリアントの性格からして、ポリアやオッペンハイマーに迷惑を掛けないように生きる事を常々マシュリナに語るのは当然。
だから、ポリアが今にしてクシュリアントとマシュリナの事を気に掛ける事が、マシュリナにしてみれば恐れ多い事なのだ。

「いいのよ。　抱える者を養い、面倒を見切れるまで勤めを果たすのが貴族の仕事。　祖父ヨーゼフに代わって、このポリアンヌが貴女とクシュリアントの面倒を見ます。　その分のお金は、叔父オッペンハイマーに預けますから。　貴女も、無理はダメよ」

「は、はい・・」

マシュリナは、膝を折って臣下の礼をポリアに見せる。　クシュリアントの語るヨーゼフとポリアは、真の貴族だった。　そして、今、マシュリナの見るポリアは、真の貴族に見えた。

培われたマシュリナの主従へ対する姿勢が本能的に現れたのを見る一同。

ゲイラーやマルヴェリータは、ポリアの貴族としての真の姿を見た気がする。　Kからポリアが譲り受けた金は、まだ数十万シフォン

の物が在った。　ガラッド硬貨を世界規模の私営銀行に預け。　時折、こうしてポリアは他人に使う。　チームの為にも使うが、本当に困っている人に使うその仕様を弁えるポリア・・。　ゲイラーや居ないダグラスなどの貧しい者にしてみれば、ポリアの様な裕福な貴族の者にこうゆう才が在るのは驚きだ。　だが、今まで二・三度在ったこうゆう場面で、ポリアが金の使い方を過った事も無い。やはり、生きる場が違っている故の経験なのだろうが。　ゲイラーには、またそれがとても凄いことだと感じられた。

≪突然の襲撃≫

真っ暗になった下町の住宅街は、街灯もない。　各家々の窓から木漏れる様な明りが、夜の中にか弱い明りを忍ばせる。　屋敷に戻るポリアの足取りは重く。　小雪が降る中で擦れ違う住民が、冒険者の一行であるポリア達を態々擦れ違ってからまた振り返る。　こんな場所にうろつく冒険者など珍しいからだろう。

フードを深く被って無口になったポリアの脇には、何故かシスティアナが居て。　ポリアの左手を握っていた。

アランの沈黙・・、クシュリアントの現在・・、ロバートの思惑・・、そしてロバートを雇っていた何者か・・。　疑問は山積し、これから何をすべきかすら、ポリア達には思い浮かばない。

仕事を終えて帰宅してきた住民と何度も擦れ違ったポリア達は、気が付けばオッペンハイマー邸の目の前まで来ていた。　貴族や商人や役人などが多く住み暮らす区域で、カンテラをぶら下げた馬車と擦れ違って気付いたのだ。

この辺に来れば、曲がり角などに街灯も在り。　行く馬車が、良く見える。　馬車を行かせて、通りを渡って裏の格子門を潜れば、ポリアの祖父が暮らしていた離れの裏手に出るのだ。

所が・・・。

（えっ？！）

ポリアは、走って行くカンテラをぶら下げた馬車が、オッペンハイマー邸の裏手の通りを行く中。　その明りの中に人影を見た。　庭の中に潜んで居ると、格子柵の内側の庭木の陰にチラついて見えた気がした。

ヘルダーがポリアの横に来たので、ポリアは思わず。

「ヘルダー、見えた？」

ヘルダーは、緊張した面持ちで頷く。

ポリアの様子がおかしいのに、ゲイラーもイルガも気付き。　イルガが。

「お嬢様、如何しましたか？」

ポリアは、剣の留め金を外し。

「叔父の敷地に曲者が居るっ」

ヘルダーも、鋼鉄扇子を取っていた。

ゲイラーが、確信めいた様に。

「やっぱりかっ、あの人も学者だからっ！」

と。

慌てたポリアが裏手の入り口に走り出そうとした時。　オッペンハイマーに仕える中年の剣士で、護衛や雑務をするガラガラ声の男の声が。

「何者だっ？！！」

と、遠目に上がった。

ポリアは、唇を噛みながら。

（叔父までもっ！！）

と、裏手の格子門に走り寄って押し開いた。

すると、祖父の離れの裏手に、布切れで覆面をしている曲者と鉢合

わせしたのである。

「うおっ、誰だコイツっ」

曲者が、覆面の所為で少し篭った声を出して慌てた。

が、叔父の窮地にポリアは、言葉より手が先に動く。　グっと曲者に踏み込み、

「せいっ！！」

と、剣を抜き打ちに斬り上げた。

「うわぁっ！！」

曲者の左腕を斬り飛ばし、一気に戦意を失わせる。

「クソっ」

曲者は、他にも潜んでいた。　ポリアに斬られた仲間の声に反応し、木の陰や離れの陰に隠れていた曲者が姿を見せる。

ポリアは、屋敷の裏手で喚き散らす様な大声が上がるのを耳にし。

「ヘルダーっ、ゲイラーっ、マルタっ、此処から表入り口に向かって曲者を倒してっ！！！　イルガっ、システィと一緒に裏手に回って皆を助けるっ！！！！！」

ゲイラーとヘルダーは、ポリアの言葉の前に他の曲者の影に向かっていた。

マルヴェリータは、杖に光の魔法を宿して。

「解ったわっ、行ってっ！！」

と、杖を頭上に掲げた。

「任せたわっ」

ポリアが、戟槍を構えたイルガと背中にシスティアナを庇いながらオッペンハイマー邸の脇に向かって行く。

小雪が舞う中、マルヴェリータが魔法を唱える。

「生み出されし魔法よ、我が意思に添い従い我が身を照らせ。　我が身を追随するモノとなれ」

杖に宿った魔法の光が、マルヴェリータの頭上に浮き上がる。“フォロー・ソーサリー”（追随の秘術）は、魔想魔術の一部の魔法を、宿る杖などの発動体から離して一定時存続させる魔法だ。　問題は、想像を絶やす事無くイメージし続ける必要がある。

マルヴェリータは、ゲイラーとヘルダーが三人の曲者を叩き伏せる中で。

「想像の力は創造の起源、魔力を我が身に敵を寄せぬ風の壁に・・・」

マルヴェリータの頭上に光の魔法が在り、視界が良くなったゲイラーとヘルダーは、マルヴェリータの成長を見る。　ジョイスには及

ばないが、薄い風の竜巻の様なカーテンが、マルヴェリータを包んで吹き上げていた。

魔力を宿したマルヴェリータの紫の目が、雪が舞う夜に光って怪しい。　マルヴェリータは、ゲイラーとヘルダーに。

「私が表の玄関前で蓋になるから、二人は庭の曲者を」

ゲイラーは、内心恐れを覚える。

（あ～ぁ、魔女を怒らせたな。　ポリアの血縁襲ったからブチキレたぞ～）

正しく、今宵のマルヴェリータは、“魔女”たる風格が在った。

仲間二人の先頭に出て、自分たちの寝泊りするポリアの祖父が住み暮らした離れの脇から、堂々とオッペンハイマーの屋敷の表玄関に歩き出す。

恐らく、度肝を抜かれたのは曲者達だろう。　小雪が風で舞う中。

赤紫の目を光らせた美女が、頭上に光を掲げ、身につむじ風を纏って現れたのだから。

どうやらポリア達は、襲撃の仕掛りに出くわしたらしい。　広大な庭を腰を屈めて忍び寄る曲者達を、広い馬車を出迎えられる表玄関前で迎え撃てたのだから。

「なっ、何だあの女っ？！！」

「まっ・まま・・魔女じゃないかっ？！！」

「バカヤロウっ！！　森の奥で住み暮らす魔女がこんな所に出るかっ？！！」

１０人近い覆面の曲者は、マリヴェリータの出現で一気に狼狽える。
其処に、名うての冒険者と成りつつあるゲイラーとヘルダーに襲われたのだから、曲者達は戦う所では無かった。

一方。　メイドやシェフなどの悲鳴と怒声が上がる厨房が在るオッペンハイマー邸の裏手に回ったポリア達は、６人もの曲者相手に一人で戦う従者を見た。

「リヒターっ！！」

「助太刀いたす」

ポリアとイルガが、暗がりの闇の様な屋敷脇から飛び出して来たのに曲者達が動揺する。　システィアナは、この間に騒ぐ厨房へと裏口から入った。

従者リヒターは、肩と右手の甲に浅い斬り傷を負っていたが、ポリアの登場に顔色が色めき。

「おぉっ、お嬢様っ！！　ご無事でしたかっ？！　曲者一人が中にっ」

頷くポリアだが、この人数を相手にイルガ一人に任せるなど出来なかった。　システィアナが厨房に入ったのは見えた。　曲者一人なら、システィアナなら魔法でなんとか成ると信じる。　それに、この曲者達をメイドなどが居る厨房に踏み入れる訳にも行かない。
先ず、この者共を撃退するのが先決と決めた。

ポリアとイルガの出現に動揺した曲者達。　だが、従者リヒターを襲う曲者達の後ろで、余裕を見せ下がって傍観していた者が動き出す。　背の大きい者と、頭二つ低いポリアと同等の背丈の者が前に出て来た。

「冒険者風情だ、臆するな。　女は生かせ、ジジィとこっちの使用人はブッ殺せ」

と、大男が命令して6人の曲者に加わって来る。

だが。　この突如の襲撃に、悶々とした悩みの感情が戦意へと変わったポリアは、剣を下段に構えながら大きく足を踏み込んだ。

「笑止っ。　夜襲などするしか能の無い曲者に負けるかっ！！」

ポリアの罵声の様な言葉に、曲者が一人飛び出してきて。

「女ぁぁっ！！」

従者リヒターを襲っていたボロ布を覆面にした曲者の一人だ。　ポリアにダガーを持って威嚇染みた攻撃をしたのだが。　その隙だらけのいい加減な攻撃は、ポリアには火に油である。　二度目の曲者が見せた威嚇の突き込みを、ポリアは払う形で剣を振り込み。

「わっとっ・・」

と、驚いてよろめく曲者を、ポリアは蹴倒した。

イルガが、其処にタイミングを合わせて踏み込み、もんどりうった

曲者の腹部に返した柄の突き込みを入れる。

「あぶぁっ！！」

座ったままに後ろへと突き飛ばされた曲者。　激痛で、曲者は目を回したのか動かなくなる。

ポリアとイルガの前に、後ろに下がって視ていた二人が進み出た。
背の大きい者は、繋ぎの様な服の上に皮のベルト型をした胸当てを付けている。

「美人の割りに中々遣るじゃないか」

と、大剣を抜いた。

ポリアと同じ背の者は、イルガの前に出て。

「長いのが有利なんて思うなよ」

と、腰から湾曲した“ショーテイル”と呼ばれる特殊な剣を引き抜く。

確かに、この二人は、見てからに他の曲者とは格が違った。　だが、モンスターと幾度と死闘を重ねたポリア達は、個々も成長しているが、仲間内の連携も磨かれていた。　人を襲う盗賊や強盗の格上など、歯牙に掛ける相手では無い。

「ウルサイっ！！　下郎おおおおっ！！！！！」

何時に無い低いトーンの怒声を吐いたポリアは、二人の曲者の間に

隙を見つけて踏み込む。　素早い斬り上げで、大剣を持った大男に防がせてその攻撃を封じる時、

「このっ、アマぁっ！！！」

と、慌てたもう一人が、ポリアへ鉤爪型に丸まった剣を薙ぎ付ける。

しかしポリアには、それを受け止める余裕が在る。　そこへ、イルガが猛烈な突進で踏み込んで来るのだ、ショーテイルを持った男には、不意の更に不意で退くしかない。

「くっくそうぅっ」

「フン、そりゃっ！」

鋭い突きからの払い上げて、槍の部分と戟の部分を巧に使うイルガの攻撃に、飛び退いた後もショーテイルを持った曲者は武器を撥ね飛ばされそうになって防戦に。

大剣を持った大男は、隙無く二人で並んでポリアとイルガを引き受けようとしたのに、瞬時に態勢を崩されて怒りが心頭した。　ポリアを舐めて掛かったからだろう。

「この女風情がぁぁぁっ！！！」

形振り構わない様子で、怒声を上げて大剣を振り上げた。

だが。　懐近くに飛び込まれているのに、大剣の様な大型武器を闇雲に怒り任せで振り上げるなど、ゲイラーに言わせたら“アホか天才”と云うだろう。

ポリアは、その隙だらけとなった大男の膝に、剣を“グサリ”と突き立てる。

「う〝ぎぃっ」

痛みと云うより、膝に炎が突き立った様な火傷に似た刺激が大男を固まらせた。

これが例の学者を殺してる犯人とするなら、オッペンハイマーも殺されると思われた。　その事件を知っていたポリアは、叔父を襲われた事に怒り狂いそうで、冷静では居られなかったのだろう。　剣を引き抜き、

「この外道っ！！」

と、大男の大剣を構える左腕の低い裏側に剣撃を見舞った。

「うぎゃっ！！！！！！！」

滾る様な大男の声が上がり。　ショーテイルを持った相手を突き飛ばして、他の曲者達に威嚇したイルガが。

「お嬢様っ！！！　殺しては成りませぬっ！！！！」

と、諫めの叱咤を言う。

足を刺されて腕を斬られた大男は、態勢を大きく崩して地面に尻餅を付いた。　大剣を持てずに雪の上へと落とし。　今にも追撃をしてきそうなポリアから、血の溢れ出る腕を押さえながら仰け反る様に逃げようとする。

「うぐぅぅ・・、たっ・たた助けて・・・」

その一言を聞いたポリアは、カァっと頭に血が上り。　にじり寄る様に大男に踏みより。

「逃げる気かっ?!　叔父を狙って来たのに、遣られたら逃げるのかぁっ!!!」

と、大男を自身の剣の柄で殴り付けた。

「あぎゃぁぁっ!!!」

最初の一撃が鼻に当たって、骨が折れ。　二撃目が大男のこめかみ近くに当たって気絶してしまう。

大男を意図も簡単に倒したポリアが、残る曲者に怒り向いたので、戦意を失った曲者達がたじろいだ。

「うわぁぁぁっ」

その時。

ーポリアよ。　怒りを鎮めなさいー

ポリアの剣が淡く蒼く光り、ポリアの心にブルーレイドーナの意思が流れた。　剣にブルーレイドーナの力を宿し、月日が経ち。　ポリアの心にブルーレイドーナの意思がしっかりと響き出している。　力を遣う事に慣れ始めた御蔭か、ブルーレイドーナとの交信もポリアは馴染み始めているのだろう。　初めてブルーレイドーナの声

を聞き出した頃は、少しぼやけた様な片言の様な物が。　今ではしっかりと声に聞こえているのだ。

「んっ！」

厳かながら、エネルギーの波動の様な意思を受け。　ポリアは、ハッと我に返った。

この時。　先に厨房へ一人で踏み込み、若いメイドを乱暴しようとした曲者が、システィアナとシェフや太った中年の使用人女性に殴られ気絶した所だった。

「うぅっ、うわぁぁっ」

服を引き千切られて下着を見せるメイドが、太った中年の使用人女性に抱き付いて助かった事に泣き伏せる。

システィアナが、厨房から。

「ポリアーっ、ア～ブない人やっつけたぁぁ～！！」

と、間延びした声で叫ぶ。

曲者達の残りが裏庭でポリア達と対峙しているのを見たシェフが、見習いの若い者二人に。

「あの野郎共にその辺に在る物投げ付けろっ！！　もう中に入れるんじゃねぇっ！！」

「解りましたっ！！」

「親方っ、がってんですっ」

若者二人が、バンと窓を開けてボウルや包丁を曲者に投げ出した。

ポリアは、その物音に厨房の方を見て。

（ごめんなさい・・・）

心でブルーレイドーナに謝る。　すると、剣が緩やかに共鳴して光り。

ーそなたの気持ちは解る。　だが、怒りに我を忘れては、剣の腕が達(たつ)だけに行き過ぎる。　強くなるなら、その強さを制する心も持たなければ成らぬー

ポリアは、ブルーレイドーナの声に、Kを思い出し。

（私・・、まだまだだわ・・・）

と、自分を心配するイルガとリヒターを見て。

「もう大丈夫」

と、言い置いてから、その顔を今度は逃げ出そうとし始めた曲者達に向け。

「逃げるなっ！！！」

と、裂帛の一喝を云う。

「あぁっ」

「うわはっ」

裏手の庭を植物の模られた鉄格子の壁に向かって走ろうとした曲者達の二人が、ポリアの声に驚き足を縺れさせる。　雪の所為で、“ドタァ”っと倒れ込んだ。

ポリアは、自ら動きながら。

「イルガっ、一人も逃がさないわよっ！」

「はっ」

逃げようとする曲者を捕まえようとするポリアとイルガだったが。

突然に。

「うぎゃっ！！！！」

「ぐぶっ」

と、声が上がる。

（えっ？）

ポリアは、慌てて立ち止まって見返ると。

「あぁっ」

自分が深手を負わした大剣を使う曲者が、喉笛に鋭利な針型のダガーを突き刺して絶命したのだ。

イルガも、自分が打ちのめしたショーテイル使いの曲者が、眉間に同じダガーを突き刺し黒い血飛沫を宙に撒いたのを見た。

「お嬢様っ、まだ曲者の仲間が居りますぞっ！！」

ポリアがイルガの声を聞いた時、自分では無く腕を押さえて立つリヒターに向けて何かが雪舞う闇を光り。

「はっ！」

剣で反射的な踏み込みで弾き落とすと・・・。　雪の上に落ちたのは、曲者二人を殺した針型のダガーである。

「リヒターっ、屋敷に戻って！！！！　イルガっ、気を付けてっ！！！」

ポリアは、逃げる曲者よりもリヒターを庇う様に動く。

イルガもまた、ポリアの脇に引いた。

この間に曲者共は、裏庭の中央にある井戸の横を走り、ポリアの声に驚いた仲間を助けて納屋として使われる石造りの二階建て倉庫の裏に逃げた。

ポリアは、闇の中を今度は自分とイルガに向けて投げられたダガーを剣で弾き落とす。　投げる相手は、庭を囲う外壁である格子壁の

外から投げていると解った。

（くっ。　この雪が降る夜の中でも、相手は正確に私やイルガの急所付近を狙えてる。　気配を感じるに一人だけど、さっきに投げられてたら大変だったわ）

相手の手練は確かだ。　夜の投擲など、狙いが随分外れる。　それが正確に出来るとなれば、腕に自信のある達人者だ。

しかし、ポリアが愕然とさせられるのはこれからだった。

（あっ、気配が移動したっ！！）

ダガーを投げていた気配が、格子壁沿いに曲者共が逃げた裏庭の倉庫裏に向かい始めたのだ。

「待てっ！！」

ポリアが気配の向かった方に行こうと走り。　厨房の裏口から数歩ほど行った庭にある井戸に差し掛かった時だ。

イルガが、リヒターが厨房に入ったのを再確認し、ポリアの後を追おうとした時と同時に。

「うぎゃぁぁっ！！！」

「ままま・待って、あぎゃっ！！」

「そんなぁぁっ！！！！！」

男の必死な声が響く。

ポリアは、その声に驚き。

（まさかっ？！！）

イルガと共に、倉庫の裏手に回って庭木の下を潜って格子壁にぶつかると・・・。　雪を吹き付ける風に乗って血の臭いが押し寄せた。

厨房の中に居るシェフが、曲者を追うポリアを心配して。

「ポリアンヌお嬢様っ！！　危険ですからお戻りをっ！！！」

その声が耳に入らないポリアが、裏道などの曲がり角に燈る街灯のか弱い明りを頼りに見たのは、裏路地に積もる粉雪を掻き雀りながら息絶える曲者達だった。

（失敗したから・・・口封じと制裁で殺したの？）

只の盗賊や強盗なら、仲間に対して此処までしない。　ポリアは、叔父の命を狙った一味に身震えを覚えた・・・。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です。

（あとがきの書き方忘れてるし）（－０－；）

長々とお待たせ致しました。　再開致します（謝り

間隔を空けてダラダラする内容では無いので、なるべく早く次話も仕上げて行こうと思ってます。　自分が欝でＰＣが壊れ掛かったのが原因ですが。　今は、どちらも状態がイイので、なんとかなると思います（謝り

皆様、ご愛読ありがとうございます。

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪犠牲は、付き物・・・なんて≫

ポリアは、目の前で生き証人の曲者達全てを殺されて、残る生き証人は厨房に居る者と思い直ぐに厨房に舞い戻った。　厨房には、リヒターの怪我を手当てするシスティアナが居て、泣いているメイドとそのメイドを抱きしめる中年の使用人が居て。　この場に居る者の安全を見たポリアは、急ぎ奥へと。

「叔父様っ！！！」

イルガをその場に残し、ポリアは屋敷内へ走った。

二階から玄関ロビーへと降りる流麗優美な蛇行階段の一番下にオッペンハイマーは居た。　ロビーへ飛び出してきたポリアを見たオッペンハイマーは、

「おおっ、ポリアンヌっ！！　無事かっ？！！」

「叔父様?!」

声に反応し、オッペンハイマーの居る方へ向いたポリアが見た者は。
顔に怪我をし、唇の端を切っていたオッペンハイマー本人と、髪を乱して疲れ果てた様子ながら夫を立たせたオッペンハイマー婦人。
そして、オッペンハイマーの脇に屈んで手当てをする傷だらけの執事だった。

婦人は、ポリアを見るなりに。

「あぁ、ポリアンヌっ！　この曲者はっ、一体何なのっ?!!」

この時、二階からヘルダーが降りてきて。　奥の応接室などからマルヴェリータとゲイラーが出てくる。

ポリアは、仲間を見て。

「みんな無事?」

だが、三人は厳しい顔で。　マルヴェリータが、

「ポリア、この曲者達って普通じゃないわ」

ゲイラーが続いて。

「俺達の気絶させた奴等、魔法で殺されたぞ」

ポリアは、ギョっとして。

「ホントなのっ?!!」

マルヴェリータは、庭の方を見て。

「遣っていたのは自然魔法だわ。　土の中から大きな石くれが出てきて、気絶した仲間も逃げる仲間も構わず殺した・・。　一回私達にも魔法が飛んで来たけど、私が身の回りの纏わせたミラージュ・ストームで弾き落としたら、直ぐに気配が消えたわ。　実力は良く解らないけど、冒険者が手伝ってる」

ゲイラーは、ポリアへ寄って。

「システィは大丈夫か？」

「えぇ、向こうで怪我したリヒターを治癒してる。　念の為に、イルガを残して来たわ」

マルヴェリータは、この非情な犯人が気懸かりで。

「ポリア、そっちはどう？」

ポリアは、怪我した執事と二人で婦人に助けられて此方を見ている叔父を見てから。

「こっちも、逃げ出した者や動けなくした者全て殺されたわ。　手負いにした二人は、ダガーで急所を刺されて死んだし。　垣根の壁を越えて逃げた曲者の仲間たちも、皆・・喉や心臓を遣られてダメ」

それを聞いていたヘルダーが、階段の途中で止まって俯く。

ゲイラーは、悔しがり。

「ちきしょうっ！！　生き証人は無いか・・」

ポリアは、役人への連絡を聞くと、オッペンハイマーが。

「あぁ・・。　それなら、フロマーを御者のイブハムの運転で行かせたよ」

それを聞いて一先ずは落ち着こうと思うポリアは、ゲイラーに。

「一人だけ居るわ。　メイドに悪戯しようと先走ったのが、シェフ達に返り討ちされて気絶してる」

ゲイラーは、ヘルダーを見上げて。

「よし、役人に引き渡すまで見張る」

ヘルダーも、階段を飛び越えてロビーに飛び降り。　ゲイラーに合流する。

ポリアは、叔父と叔母と執事の元に寄り。

「ご無事で・・」

オッペンハイマーは、返り血の飛沫を顔に少し付けたボリアを見回し。

「怪我は無いのか？　あぁ・・、危ない目に遭わせたな、ポリアンヌ」

オッペンハイマーと婦人の下にも、曲者が二人現れた。　だが、その場には、フロマーと執事が居た。　フロマーは、ああ見えて腕っ節があり、力は強い。　執事の初老男性も主の身を護る意味で、若い頃から武術に嗜みが在った。　短い細剣（レイピア）を使う曲者二人は、オッペンハイマーを誘拐しようとしたらしい。　逃げ腰で殴られたりしたオッペンハイマーに代わり、置物や花瓶を死に物狂いで投げ付けた婦人の御蔭で、曲者達に隙が生じた。　フロマーの捨て身の突進などで身を崩した曲者の所へ、執事が斬り掛かってなんとか撃退出来たと云う訳である。　だが、もう死に物狂いの取っ組み合いと云う乱戦だ。　相手に加減する余裕も無かった執事の一撃を受けた曲者二人は、手負いの身で無理やり窓から飛び降り打ち所が悪く死んでいた。

ポリアと叔父達が安否を確かめ合って居る間に、厨房ではイルガが曲者に鋭い尋問をしていた。

「イルガ、コイツか？」

ゲイラーとヘルダーが厨房に入って来て、イルガは。

「うむ。　皆に怪我は？」

ゲイラーは、システィアナの安全とイルガの無事を見て。

「俺達は大丈夫だ。　だが、オッペンハイマーさんとかは少し怪我してる。　二階からも賊は侵入してきたらしい。　撃退は出来たが、かなり激しく遣り合ったらしい」

イルガは、それに驚き。

「して、曲者は？」

「執事の人に斬られて、慌てて二階から飛び降りた。　だが、落ち方が悪くて首イってる。　もう、駄目だ」

「・・・、そうか。　しかし、コイツ等何者だ？」

システィアナを始めに、使用人達から頭を強か殴られた曲者だ。脳震盪もあるから意識が朦朧としている様子。　覆面を剥がれた顔は、殴られ痣が多数あるボコボコ顔であった。

この時。　ポリアは、襲撃での犠牲者が此方側に少ないのに安堵して。

マルヴェリータは、ポリアの代わりに窓から外を窺っていた。

ポリアは、叔父に。

「叔父様、この曲者は最近学者を襲う仲間ではないかと。　とにかく、無事で良かったですわ」

すると、オッペンハイマーは、急激に顔色を変えて唖然とし。

「あっ、そうか・・・」

そして、次の瞬間。

「ポリアンヌっ、アランは大丈夫だろうか？」

と、ポリアを見た。

これに、マルヴェリータがハッと虚空を見上げる。

ポリアは、叔父を見返し。

「アラン先生も危ない？」

血相を変えた様に焦りだすオッペンハイマーは、ポリアを見て。

「ポリアンヌ、私の元にあの学者を狙う賊が来たなら、アランも危ないっ」

マルヴェリータもポリアを見返し。

「ポリアっ、この前の仕事よっ！　あの仕事の成功で、古代に詳しい学者の噂が湧いたのよっ。　だから、オッペンハイマー様を狙いに・・・」

ポリアは、色々有った今日だっただけにそこまで頭が回らなかった。

アランにも誘拐の魔の手が伸びたら・・・。

「マルタっ、此処をお願いっ！！」

ポリアは、舞い戻る様にして厨房に駆け込んだ。　其処には、怪我を治して貰ったばかりのリヒターが、主であるオッペンハイマーの無事をゲイラーに聞いていた所で。　ヘルダーが曲者に猿轡して新たに縛り上げた所でもあった。

飛び込む様に踏み込んできたポリアを、厨房に居た皆が見る。　慌てた必死の顔であるポリアは、直ぐにイルガを見て。

「イルガっ、リヒターと一緒に役人が来るまで曲者を見張ってっ！！！！」

切羽詰った声に皆が驚く中、ポリアはゲイラーとヘルダーの間に走り寄り。

「ゲイラーっ、ヘルダーっ、私と来てっ。　システィっ、叔父の怪我を看てっ」

鋭く口走り、厨房裏口に走るポリアを見るゲイラーが。

「ポリア、どうした？」

ポリアは、裏口を開いて。

「アラン先生も危ないっ！！！！」

ゲイラーとヘルダーは、“あっ”と見合った。　その一言で事態を理解した。

ポリア達三人は、厨房に有ったランプから明りを貰い、アランの家へと急いだ。　雪舞う夜の裏庭を離れ裏に向かえば、ボリアが腕を斬った曲者すら殺されている。

「此処もかっ、皆殺しだ。　クソっ」

唸るゲイラー。　死体と変わり果てた曲者の首には、鋭い針型のダガーが刺さっている。

ヘルダーは、最も鋭いスカウト技能を、感知能力を持つ自ら道路に飛び出し、辺りを伺う。

ポリアは、ヘルダーの後ろから出て、アランの家の方に走り出した。

夜更けに向けて、風と雪は強さを増す雰囲気を見せていた。　降ったサラサラとした雪の舞う夜道。　アランの家へ急ぐ3人の脳裏には、混乱にもにた疑問が渦巻いた。　一体、何が起こっているのか。

学者を狙う一味は、何をしたいのか。　こんな大集団の徒党を組み、侯爵家のオッペンハイマーまで狙うなど常軌を逸脱しているとしか思えない。

だが、アランの家が黒い影ながら聳える様に見える場所まで来た3人は、

「誰かぁぁぁっ！！！！　誰か来てっ・あ・・ぐぶっ」

と、助けを求める尋常では無い叫び声が、途中で途切れる処まで聞こえた。

「ポリアっ！！」

「解ってるっ！」

ゲイラーの焦った声に対し、ポリアの返事は裏返りそうなヒステリックな声。

3人が急いでアランの家に向かうと、アランの家の入り口が開き、何者かが倒れて居るのが見える。　しかも、馬車一台通れるかどうかと云う道の先には、民家の前に挟まれた道の合流地点に馬車が停

められ、乗り込む人の影が見える。

「その馬車待てぇぇぇっ！！！！」

大声を上げてゲイラーが向かうと、道の上、ゲイラーの目の前に立ちはだかる黒い影が二つ。

一方、倒れている玄関前の人に走り寄ったポリアとヘルダーは、助け起して見ればふくよかで色黒の年配女性である。　見知らぬ人物で、口から血を流し、腹部に衣服を染める程の大量の出血が見られた。

「大丈夫っ？！！　しっかりしてっ！！！」

大声を上げるポリア。

「あ・・・アラ・ン・・・せん・せ・・・・」

女性は、最後の弱弱しい手つきで家の中を指し示す。

ポリアに見られたヘルダーは、頷きと共に立ち上がって入り口から中に踏み込んで行く。

その時、

「邪魔するなぁぁっ！！！！」

「死ねがっ！！！」

訛声の大男と低い通りの良い声をした男が、突然ゲイラーに攻撃し

てきた。

「うらあああああっ！！！！」

ゲイラーは、馬手（右手）に持った大剣を、闇の中で振り込まれた武器らしき物二つを弾き上げる様に振り上げた。“ガキンっ！！”と云う激しく噛み合った金属音がした。ゲイラーは、噛み合った瞬間の衝撃や感触から、大きい武器はハンマーらしき物と思う。

もう一つの細剣らしき物は、噛み合わせた勢いで押し返した様だった。

「うぬぬおぉぉっ！！」

大柄の影の男は、夜の影の中で激しく唸った。全力の力で押しても、ゲイラーの大剣を捻じ伏せる事が出来ないからである。寧ろ、逆に捩じ上げられる。

ゲイラーは、弾かれた勢いで態勢を大きく崩した背の低い影の男も含めて睨み見て。

「オメエ等ぁぁっ！！　一体何者だぁっ！！！！」

と、ハンマーらしき大男の武器を押し返した。

この時、離れた先の馬車より。

「早く乗れお〝っ！！　魔法で諸共ブっ殺すぞっ！！」

と、別の男の声が。

（魔法っ？！）

ゲイラーが緊張した時、馬車の荷台らしき場所で魔法の光が起こる。

「魔想魔術かっ？！」

狭い住宅地密集地のド真ん中である。　ハッと見たゲイラーは、

「何事だよ？　夜に大声なんか出しやがって」

と、通りで出て来ている人陰も見ているから、馬車へと逃げ出す男二人の影を追うにも躊躇が出た。

「家に入れっ！！！！　魔法がぶつかるぞぉぉぉっ！！！！」

ゲイラーは、逃げる男の影を追いながら、青白い剣を生み出す魔法を唱え終えた馬車の男を指差した。

「げぇっ！！」

「魔法だってぇぇっ？！！」

「喧嘩だぁぁっ！！！！！」

住民が大騒ぎする時、顔を隠したローブ男の口元がニヤリと笑ったとゲイラーは見えた。　青白い魔法の光で、逃げる男二人の後ろ姿と此方を振り返る顔が見える。　大男は、片目を歪めて開く日焼けした悪漢染みた男。　背の低いもう一人は、長い後ろの髪を束ねた鋭い視線の垂れ目である。

「モンマルトンっ、野郎強えぇぇっ！！」

大男が、馬車に乗り込みながら言った。

「しゃらくせぇっ！！！！！　俺の魔法でぶっ飛ばしたるガっ！！！」

杖を持つ手を上に掲げ、“モンマルトン”と呼ばれた魔法遣いが、１０数歩まで迫ったゲイラーに魔法を飛ばそうとした。

（やべぇかっ？！！）

逃げて民家に被害を与える事に戸惑うゲイラーの耳に、ポリアの声が飛び込む。

「ゲイラーっ！！！　避けてぇぇっ！！！！！！」

ゲイラーの脳裏に、自分の背後真っ直ぐの路上にポリアが居ると解った。

「死ねやがっ！！！」

地方の訛りが酷い魔法遣いの男が、ゲイラーに杖を向ける。　稲妻が走る様に、青いエネルギー体の剣の魔法が放たれた。

「うおっ！！」

民家に被害を出したく無いゲイラーは、剣の魔法を完全に自分へ飛んだ所まで見届けてから全力で民家の入り口に飛び退いた。　瞬く間の速さで走る剣の魔法が左腕を掠った。　肩の衣服が薄く切れて、

火傷する様に痛みが走る。

途中からゲイラーを追って道に出たポリアは、魔法が飛んで来るのに合わせて剣に風の力を集めた。　薄く青白く光るポリアの剣を収めた鞘。　相手が魔法にだけ狙いを定めたポリアは、限界まで感性を研ぎ澄まして目を凝らし・・・。　目の前に魔法の剣が迫るのに合わせて、居合い抜きの様に剣を振り上げた。

「鋭っ！！！！」

ゲイラーが腕の痛みも捨てて道路に走り出れば、ポリアが剣で魔法を弾き飛ばし雪の降る空へ跳ね上げるのが見えた。

「すげぇ。　剣に風の力を纏わせて、魔法を弾いたのか」

この時。

「馬車だせがっ！！！　早ぉ（早く）せいがっ！！！」

魔法を放った男の怒声が飛ぶ。

「あ〝っ、奴等っ！！！」

逃げ出す馬車を見たゲイラーがその後を追おうとするも、馬車に人が追い付ける訳も無い。

「うぎゃぁっ！！！」

「きゃあぁぁっ！！！」

逃げる馬車は、路上に出た人をも轢き倒して大通りの方に曲がる。

「クソっ！！！」

こうなると、ゲイラーは馬車処では無い。

「ゲイラーっ、無事っ？！！」

走って来るポリアの声がする。

「ああっ、俺は大丈夫だっ！！　それより奴等っ、人も構い無しに轢き倒したっ！！！！！　システィを呼ばないとっ」

轢かれた人に駆け寄る家族か誰かが叫び寄る声がする。

ポリアは、余りの事態に一気に焦った。　家の中に、血の跡だけ残してアランが消えている。　思わず焦って外に出れば、悪党を追うゲイラーと魔法を遣おうとしている馬車の上の男が見えた。

「誰かっ！！　この辺に医者か寺院を知りませんかっ？！！！　瀕死の人が居るのっ！！！！！　誰かっ！！！！」

ポリアの声が、雪の降り続く闇夜に響いた。

すると、各家々から漸く人が出てきた。

「もう喧嘩は終わったのかい？」

酷く迷惑そうな面持ちで玄関を開いて、ポリアに言って来る民家の住民が居て。

「喧嘩じゃないわっ！！！　学者を狙った悪党よっ！！」

ポリアが、アランの家から逃げた馬車に向かって４軒目の家先で、出てきた住民の男性に答える。

「あっ？　マッマジかっ？！！！」

ポリアは、焦るままに。

「アラン先生が居ないのっ！！！　住民の人も刺されたわっ！！！！　医者か寺院はこの辺りに・・・」

焦るポリアが住民の男性に問い返す途中で、

「あ・・・ポ・・・ポ・・ア・・・ど・・・・・」

微かな、微かな呻き声がする。

ポリアとその男性が、闇に染まる雪の集まった場所を見ると、緩く蠢く黒い何かが在った。

ポリアは、全身に戦慄が走った。

「あ・・アラン先生・・・？」

住民の男性が、ランプを片手に不審な面持ちで見ている玄関先の子供に。

「灯り貸せっ！！！」

と、怒鳴り。

「アラン先生っ？！」

と、その呻く何者かに寄ったポリアは、助け起す時にランプの明かりでアランの瀕死状態の姿を確認出来た。

「アランせんせぇぇっ？！！！　うそっ、そんなっ！！！　いやぁぁぁっ、誰かぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！」

今までのポリアに無かった声だ。　その声の湧き上りを聞くゲイラーと、アランを探し路上に出て来たヘルダーは、二人して最悪の事態を思った。

≪深い、深い闇に沈む真相≫

オッペンハイマーへが襲撃されたと通報を受けた警備・警察局は、兵士の居る軍部と一緒に来た。　軍部の兵士を纏めるのは、ショー

ターの腹心で、ミズリーと云う冷めた雰囲気の若い男であり。　警察の役人を纏めるのは、ハソロと云う中年の訝しげな小男であった。

オッペンハイマー宅に来た二人の内、ミズリーと云う若い副兵士長が犯人を受け取ると云うので、警察上級捜査官の幹部であるハソロが噛み付いていた。

だが、其処にポリアの使いで住民がアランの襲撃も伝えたのだから、更に事件は大きくなった。

アランを襲った曲者達は、どうやらアランの家の異変を物音で聞いて心配になり訪ねて行った向かいの家の奥さんを刺した様だ。　システィアナが雪の中、役人とイルガを共にポリアの元に来た事で、医者の手当てを待つ怪我人の治療は出来た。

だが、刺された向かいのふくよかな奥さんは死んだ。　馬車に轢かれた数人の内、若い女性が重症。　老人の男性が死亡。

ポリア達は、オッペンハイマーの計らいで、屋敷にて事情聴取をされた。

「では、相手は冒険者から身を崩した奴等ですか？」

小男のハソロは、赤いクラッシクなソファーに腰を下ろし、テーブルを対面に座ったポリア達から事情を聞く。

「はい、恐らくは。　魔法を扱う者、それぞれ武器の扱いに達した者が混じっていました」

マルヴェリータが、ポリアの代わりに答える。　放心したポリアは、

虚空を見つめて相手に成らないと判断した仲間だった。

アランは、実はまだ生きている。　システィアナが傷を塞ぐ時、アランの傷口は凍傷を起し始めていて。　それが血の流出を抑えていた様だ。　意識不明ながら、アランは命を繋いだのである。　警察は、入院の必要な被害者を寺院病院に送った。　僧侶と医者が同居する大型寺院病院らしい。

ポリアの今日一日の行動を聞くハソロは、

（オッペンハイマー様の姪だとな。　だから、アラン先生やあの捕まった男の父親にも逢ったか？）

ポリアの事をオッペンハイマーは遠縁の姪とだけ言って身柄に全責任を負うと主張し、警察も兵士も連行を見送った。　ハソロは、放心しているポリアの美しい顔を見て。

「ま、また事情を伺いに来ます。　事件の解明の為にも、この街から出ない様に」

と、言い置いて。　兵士や役人と共に部屋から出る。

「ポリア・・しっかり」

マルヴェリータがポリアを抱き寄せ、システィアナがポリアの手を握る。

「アラン先生が・・アラン・・・先生がぁ・・・」

泣き出すポリアには、アランの瀕死の姿が死んだと思えた。　その

衝撃が強かったのだろう。　ポリアの声に気づいて近づいたゲイラーとヘルダーは、余りの衝撃に錯乱して助けを叫ぶポリアに驚いた。
　祖父の死んだ時に2日も泣き通しだったと云うポリア。　ポリアにとって、このシュテルハインダーの思い出は唯一無二の大切な思い出の様だ。

「マルタ・・どうして・・どうして・・アタシ気付けなかったの。
　アラン先生・・・危ないかもって、今考えれば・・・」

「ポリア、考え過ぎ・・。　起こってからじゃないと、確証持てない事だって在るわ」

マルヴェリータは、Kをこうゆう時は嫌に思える。　あの完全な男なら、この状況を回避したかも知れない。　ポリアがKを目標にするばかりに、ポリアには重荷が増えた。　ポリアに、Kは重過ぎる。
　嫌、誰にでもKは重過ぎる。

さて、イルガは、ポリアを見て重苦しく俯く。　其処へ、ゲイラーが。

「なぁ、イルガ」

「ん？」

「アランの家の中見たか？」

「ああ、随分と荒らされた様じゃったの」

「ああ。　あいつ等、アランの教授に何しに来たんだろうか。　殺す目的なら、止めまで確実にする奴等だと思う。　しかも、あの家

の中の荒らし様は、なんだか妙だ」

「だな・・。　何かを探したのか、果てまた暴れたのか・・。　何でも、アラン様も折檻を受けた痕が在ったとか？」

ヘルダーが頷き。　ゲイラーが。

「おう。　顔に何回か打たれた痣が見えたな。　だが、学者を狙ってた奴等で犯人は間違い無さそうだ。　今回も、何だか悪戯書きの様な物が残されてた。　見たら、三角形の中に点が在った様なものだな」

イルガは、そんなのは誰でも書ける物だと思い。

「それだけか？」

「おう、それだけ。　紙の裏にもなんも無いし、他に変わった処も無かった」

「ふむ・・、暗号か何かなのか。　只の目晦ましか・・、理解できんの」

ゲイラーもヘルダーも、イルガと共に此処で話を終えた。　ポリアの嘆き様が心配に成った。　身内を襲われ、尊敬した師を殺され掛けた様で。　もし、アランが死ねばどうなるやら・・・。

次の日。　朝も早い頃。　オッペンハイマーと共に、大雪の中をアランなどの見舞いに向かったのだが。　アランは意識が戻らないままに昏睡状態へと陥っていた。

一方、重態となっていた若い女性は助かったが、走り去った馬車については何も知らないと云う。　他にも轢かれて担ぎ込まれた誰かが、死んだらしい。　あの馬車で逃げ去った曲者達は、大通りまでに他何人もの通行人を轢き、大通りに出てからも危険な馬車の操り方で被害者を増やしていた様だ。

一旦、オッペンハイマーの屋敷に戻った一同。　皆で応接室に入り休憩しようと云う中で、

「行かなきゃ・・」

ポリアは、憔悴したままに、午後には聞き込みに出ると皆を心配させる。　冒険者の集う酒場や斡旋所を回り、話を聞こうと。　アランや叔父を襲った何者かを、絶対に探し出すと・・、終いには食事の席を急に立ち上がって。

マルヴェリータが引き止める為に云っても聞かないポリアだったが。

「ポリア～のバ～カ。　な～んにも食べてないし、ぜ～んぜん寝てないし。　先にポリしゃんが倒れちゃうよぉぉ」

と、システィアナが泣き出した。

システィアナを宥めるゲイラーを見たポリアは、力無く席に墜ちる。

「だって・・このままじゃ・・・」

血の気が失せたポリアの顔は、もういつもの彼女では無い。　普段の美しさが棘の様に変わり、亡霊の様だった。

イルガは、システィアナを見てから。

「お嬢様、ケイの言葉を思い出して下さいませ。　目の前に切羽詰った何かが見えているなら別ですが、曲者共も目を晦ませて手掛かりが見えませぬ。　この様な折に、自分を痛めて無理してもそれは自滅。　曲者共を探すなら、先ずは御自分をしっかりと為すって下さい。　無駄な無理など、それこそ阿呆のする事で御座います」

ポリアの心に、見えぬ包帯男の思い出が湧き上る。　今、此処にKが居たら、自分は失笑を受けるだろう。　ダグラスの心配、ロバートやクシュリアントの心配、アランの心配に事件の心配で、完全に疲れ始めたとポリアは実感した。

オッペンハイマーは、アランの事を含んでポリアにこれ以上危険に足を突っ込んで欲しく無いと思いながら。　一方で、自分に出来る事は情報を集めることぐらいしかないと解っていた。

「ポリアンヌ、仲間の皆さんの言う通りだよ。　事件の事やアランの事は、直ぐに連絡が来る様に手配しておく。　なぁ～に、僕にもそれなりの人脈がある。　だから、せめて1日2日は離れでお休み。　またあの危険な曲者達が来ても、今の君では太刀打ち出来ない」

オッペンハイマーは、此処まで言うと。　ポリアの仲間一同を見回して、

「皆さん、ポリアンヌを頼みます。　皆さんの御蔭で、今回も被害が少なく済んだと私は思っています」

と、礼を述べる。

マルヴェリータは、ポリアの代わりに頷きを返した。　だが、脳裏では。

「終わらない・・。　この事件はこれだけじゃ無い。　また、オッペンハイマー様を含めて誰かが狙われるわ・・。　あいつ等の目的って一体何よ?)

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

間隔が開きましたが、更新です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪ブリザードの中で・前≫

ポリアは、皆に押し留められた格好で離れに戻った。

昼間まで弱く降り続いた雪だが。　昼下がりの暗い曇天の下、吹雪に変わりそうな様子を見せる。　まだ、今年最後の月も半ば。“冬の監獄地方”とも喩えられたこの豪雪地帯の冬は、これからが本番だろう。

さて、嘗ては祖父の寝室であった部屋に入ったポリアは、一気に噴出した疲れで眠りに落ちた。　夕方までポリアを心配し、マルヴェリータや離れに来たオッペンハイマーが何度も部屋を覗いたが。ポリアは、昏々と眠りに墜ちていた。

そして夜。　やはり外は、非常に強い猛吹雪となった。

ほんの数十歩外を歩いて軽い食事を運んでくれたフロマーは、雪の

人形の様に成って来た。　屋敷の食事の用意が終わった後に来たフロマーだから、ゲイラーなどの勧めで一緒に食事する事に成った。
　離れにの一階には、ポリアの祖父が使っていた食堂があり。　そこでテーブルを広げる事にした。

暖かいジャガイモのバター添え、凍らせた凍み野菜のスープ、鹿の干し肉のステーキに焼きたてのパンと云う内容の夕食。

皿によそわれたスープに手を付けたゲイラーは、この猛吹雪の中でも明かりの強い外を見て。

「今日は、向こうのお屋敷は随分と騒がしいな」

すると、フロマーが態々端に回って着席しながら。

「んだなぁ。　何でも、街を統括する御偉い様は、我が主様の昵懇のお人様だぁ～とか。　襲われた事を心配なすてぇ、兵士さん５名と、警察役人さん１０人だかがまぁ～いにち警護するんだとさぁ」

ド田舎出身のフロマーは、どうも田舎訛りが酷い。　だが、その人柄がいいからか、フロマーを知った皆は、聴いていても嫌だとは思えない。

イルガは、オッペンハイマーがポリアの実家とも浅からぬ縁の在る、この街筆頭の侯爵だと理解しているので。

「なるほどの。　それは、統括殿も必死だな」

ヘルダーやゲイラーは、意味が解らずイルガを見る。

システィアナに至っては、全く意味が解らないので。

「イルガしゃん一人でな～とくぅ。　ずるぅ～い」

ホロ苦く笑ったイルガは、

「ずるいとは酷いな」

と、言ってから。

「オッペンハイマー様は、この街で最も由緒ある貴族様だ。　公爵家の殆ど誰もが首都か、アハメイルの都市に住んでいる。　この街に住む最高位の爵位家は、侯爵家となる。　この都市の統括者として誉れ高い評価を受けたイオッペンハイマー様が襲撃されたと云う事実ですら、今の統括の任に付く者には落ち度が在ると云われても仕方ない。　他にも学者が殺され、まだその事件も解決しておらぬし、の」

マルヴェリータは、ジャガイモにバターを塗りながら。

「確かに、そうね」

「もし、この街一番の由緒を持つオッペンハイマー様が殺されたと成ったら。　事件を放置し。　襲撃後も対処しなかった・・と、統括殿は罪を問われかねない。　しかも、それが昵懇の間柄だと云う事なら、人としての品位と云うか、仁義と云うか、大切な人すらも守れない愚か者と、世間から後ろ指ものだ」

ゲイラーは、長いパンを毟って。

「なるほど。　自分の保身の為にも、一生の遺恨を残せないと云う訳か」

ヘルダーも意味が解った。

其処へ、フロマーも。

「さぁすがはイルガさんだぁ、んだんだ。　主に起こった事だけでも処罰ものなのに、ポリアンヌ様に何か在ったら自害ものだすぞ。　ま、我が主も自分の身より、ご家族とポリアンヌ様の事を案じて警備警護をお受けなさったらスい」

パンとジャガイモにバターを付けたゲイラーだが、アランの姿を発見した後のポリアの事を思い出すから手が止まる。

「でも・・、昨日のポリアの声にはおでれぇ～たな。　正直、聴いてる俺まで気がおかしくなりそうな位に慌てたぜ」

フロマーは、直ぐに。

「アラン様の事け？」

「あぁ。　助けを求めて形振り構わずって云う度合いじゃなかった。　もう、錯乱してた。　ヒステリックと云うより、完全に錯乱だ」

マルヴェリータは、システィアナが駆け付けた時のポリアが、気の狂った様にアランを抱き上げ雪の地面に座って泣き叫んでいたと云うから、その状態を想像出来た。

「多分、アラン様がポリアの御祖父様の記憶を持っていたし、一緒

に冒険した間って聞いて親近者に為ってたのね。　突然亡くなられた御祖父様の代わりが出来た様だったのかも知れないから、こんな事は受け入れられなかったのかも」

ヘルダーは、あまり食事の進みが良くなく。　俯いてスプーンを弄るばかり。

「食えよ」

と、云うゲイラーの声に。

「・・・」

頷くだけ。　やり取りを見るマリヴェリータに、逆にポリアの事を心配する様にサインする。

「大丈夫。　今はぐっすり寝てる」

システィアナも続き。

「ポリしゃんは～だいじょ～ぶ。　ぜぇ～ったいアランせんせーもだいじょうぶ」

と、ヘルダーに“食べろ”とジェスジャーした。

フロマーは、スープに入れたパスターをフォークで捏ね繰り回し。

「ポリアンヌ様は、祖父で在られたヨーゼフ様にぁ～そりゃ可愛がられたんだぁ。　我が主は、家出みたいに来るポリアンヌ様を、はんやぐ（早く）ご実家に戻してご家族を安心させようとしてたンだ

けンど。　ヨーゼフ様は、なるべく長く居させようと為さっててなぁ。　ポリアンヌ様に剣を教えたり、この街の事さぁ～熱心に教えたり。　ポリアンヌ様が男勝りな処さ、すん～ごく喜んでたんよ」

イルガもまた。

「お嬢様も気持ちは、正にヨーゼフ様と一緒じゃったの。　ご実家に戻れば、やれレディーの躾けだのと上流階級のお嬢様の仕草を教わるのが嫌だと。　思う存分に剣の稽古が出来るこの地が、ヨーゼフ様もおわすから好きだと云われとった。　でも、ポリア様のお父上様もお嬢様の気性を解ってか、ワシを守役にした・・・。　男なら良かったと、何度影で御呟きに為られたか・・・な」

ゲイラーは、まだ然程知らないイルガの事を聞きたくて。

「イルガは、ポリアが生まれる前から仕えてたのか？」

「あぁ。　ポリアンヌ様が生まれる1年以上前には、仕えておったよ」

「仕官みたいな成り行きか？」

「いや。　ワシは、冒険者をしてある仕事を受けての。　かの有名な二剣士が内のハレイシュ様とご一緒出来た」

「何っ？！　あ・あの斬鬼帝ハレイシュか？」

「そうじゃ」

「かぁ～、凄いな」

超が付く程の有名人である。　聴いたゲイラーは、ヘルダーを見合って驚いた。　この話は、まだ良く聴いて居なかった。

するとイルガは、その皺の見える深い顔を微笑みにして。

「じゃが。　今に思えば、ケイの方が強いかも知れん」

ゲイラーとヘルダーは、あの包帯男を思い出し。

「なぁ～とく」

と、云ったゲイラーであり。　言いたげなヘルダーである。

イルガは、その仕事で貴族の護衛をした。　闇に染まった商人の娘を遊びで抱いた男で、その身柄をバクチで成り立つ国から本国であるフラストマド大王国に運ぶと云う仕事だった。　イルガのチームは、頭数で４人居たが。　それでも手が足りないと入ったのが、有名なハレイシュ。

ワインを軽く飲んだイルガは、昔を思い出す様に遠い目をし。

「まぁ～ったく、船旅で２０日。　陸路で１０日だったが。　襲われた回数は、両手指に足の指を足しても足りん」

マルヴェリータは、抱いただけで逃げ出す男に興味は無かったが。

その冒険話には興味が湧き。

「そんなに襲われたの？」

「あぁ。　何せ、世界に闇商人として名を轟かす男の娘を傷物にしたんだ。　大変じゃったよ」

関心を顔に滲ませるフロマーは、

「んでも、なぁ～んでそれがお引き立ての要因になったべか？」

「ん。　実は、その貴族と云うのがだな、ポリアンヌ様から見て遠縁の血族にならられる方でな。　ワシは、何度かその御仁を身を呈して護った事が印象に残ったのじゃろ。　深い傷を負って、フラストマドにチームからはずされて取り残されたワシを、ポリアンヌ様の家にお引き立て頂く様に計らってくれたのだ」

ゲイラーは、ポリアの寝る二階を見上げ。

「それで、付き人か」

イルガは、何処か嬉しそうに。

「ポリアンヌ様がお生まれになって良く泣く赤子の頃に、我が主は新しきお役目に就く時期でな。　ご夫婦揃って忙しかった。　乳母は要らなかったが、世話係と護衛の誰かが必要での。　ワシがそのお役目に成った」

マルヴェリータは、事件の事で陰気だった気持ちが和らぐ話だと思い。

「イルガの顔で良く選ばれたわね」

フロマーは、大きく笑って。

「あはは、マルヴェリータ様も口が悪いぜお」

システィアナも、

「ぜおぜお～」

微笑み頷くイルガだ。

「ま、そう云われても仕方ないの。　ワシは、主の付き添いとして居てても、他の護衛の騎士様などから煙たがられた。　・・悪党面とな。　だが、忙しい最中でワシがポリアンヌ様を負ぶった時、ポリアンヌ様が泣き止んでのぉ～。　それからと云うもの、ワシが護衛に成った。　成長する中で、ポリアンヌ様にワシよりイイと取り入る護衛の使用人や騎士が居たらしいが。　都度都度ポリアンヌ様が、ワシ以外は好かぬと蹴ったらしい」

ゲイラーは、解る様な気がして呆れ笑いで。

「今の関係見れば解る。　ピッタリだ」

イルガは、一つ頷くと。

「ポリアンヌ様は・・、まだ幼い頃にワシの顔が好きだと云いなさった。　人を護れるいい顔だとな・・。　ワシが語る冒険者の頃のお話を、男のお兄様達より熱心に聴いていたものポリアンヌ様じゃ。　貴族の流れに逆らい、自分の運命は自分で決めると。　それでも、ワシは一生の只一人の従者と決めてくだすった。　ワシは、貧乏人の子でな。　奉公に出された店で、顔が強面だと働き人に合わんと出された身だ」

フロマーは、驚き。

「あんれ、イルガさんでそったら事言われるンけ？」

「あぁ。　ワシは、それで行く当て無く冒険者に成ったクチだ。自分の居場所も、自分の存在も無かったに等しい。　だが、ポリアンヌ様はそれをくれた方だ。　ワシは、ポリアンヌ様が御幸せに成るその時までご一緒する気持ちのみよ」

イルガがポリアの付き人として彼方此方に行く際、見目醜い従者だと馬鹿にされる事が多かった。　だが、物心付き。　活発な子供に成ったポリアは、それを許さなくなっていく。

“イルガは、このポリアンヌ第一の従者ぞっ！！！　イルガを馬鹿にする者は、このポリアンヌとイルガを選んだ我が父を愚弄すると心得よっ！！！”

まだ6歳のポリアが、イルガを馬鹿にした騎士に護身用の短剣を差し向けて言った言葉だ。　イルガは、ポリアを護りながらも、護られていると実感した。　その後も、イルガ以外の従者など要らぬと、剣術に打ち込むポリアには、イルガは従者で在ると同時に理解者になり。　結局、イルガ以外の従者を一人も受け入れなかった。　生じ美しいポリアだ、男の欲望の色目交わる視線も向かうし。　求婚も多かった。　潔癖染みた男嫌いの中でも、イルガだけは嫌わなかった。　ポリアの父親も、理解者で唯一の身近なイルガを居なくしては、ポリアの男嫌いに拍車が掛かると悟ったのだろうか。　イルガには、相応の手当てを出して居させたのである。

ゲイラーにしても、イルガとポリアの関係は他人の入り込む余地の

無い固い絆だと理解している。

「なぁ～るほど」

フロマーも。

「そぉかぁ、ワスがなぁんで二番目の従者なのか、それでよぉんぐ解った。　一番目は、イルガさんに決まってるって言われたスよ」

ヘルダーは、和やかになるテーブルを見て。

（ポリアは、皆の光だな。　俺も、今なら解る）

だが、それから誰もが言葉を少なくする。　猛吹雪の音が悲しい唸り声を上げるのかの様に聞こえて、事件に因って齎された陰痛な空気がぶり返してきたのである。　フロマーは、皆に。　夕方に在った警察役人と兵士達の縄張り意識の火花を散らせた一件を語る。滑稽な話だが笑い話にも成らず、皆は事件の闇に思いが流れた。

≪ブリザードの中で・後≫

次の日だ。

「おはよう」

イルガが寒い中で起きてきたら、ポリアが一階の食堂に居た。　もう二つ在る暖炉も灯っていて、ポリアはお湯を沸かして紅茶を飲んでいた。

「おはようございます、お嬢様。　眠れましたか？」

少し顔色が白いポリアだが、感情は戻っていた。

「ええ。　随分寝たわ。　気絶したみたいに寝てたから、お腹空いちゃった」

イルガは、食欲が出たポリアに安堵し。

「それはそれは、朝はしっかり食べて下さいませ」

「そうね」

ポリアは、そう返して厚いガラス窓の外を見る。

「吹雪き出したみたいね」

「あ、はい」

芝が所々に見え隠れしていた広大な庭一面が、真っ白に雪で覆われ

ている。　変わらずの吹雪は、強弱を付けながらも続いていた。

「お、下が暖かいぜ」

と、ヘルダーに言って一緒に降りてきたゲイラーは、ポリアを見て。

「起きたのか。　大丈夫か？」

ヘルダーも心配そうな顔つきだった。

ポリアは、二人に微笑み。

「昨日は迷惑掛けちゃったね。　ごめん」

ゲイラーは、あのアランを助けるべく狂った様なポリアを思い出しながら。

「仕方ないさ。　起こった事が事だ」

ゲイラーは、ヘルダーと見合ってからそう言う。

「うん。　・・・だね」

ポリアは、紅茶に目を落とした。

イルガは、外の猛吹雪を見ながら。

「しかし、部屋は暖かいですな。　下で寝れば良かったかな？」

ゲイラーがイルガに。

「歳で寒さが堪えるか？」

云われたイルガは、ゲイラーに脇目を振って。

「フン。　意気地なしの様に股引穿いてる御主に言われるかよ」

ゲイラーは、我先にと股引を穿いただけに。

「うぐ」

と、言葉を詰まらせた。

ポリアは、嘗ては生前の祖父ヨーゼフが使っていた一人用のモスグリーンのソファーから壁を見て。

「この内側のレンガ壁って、空洞を挟んでるのよ。　空気が暖炉の熱を孕んで、冷気が伝わるのを抑えるの。　地下の床には、温泉の通ってる水道があるわ。　床も壁も、冬の対策万全なのよ」

ゲイラーは、その場に屈んで絨毯を捲くり、黒い材質の床を触る。

「あ、マジで暖かい・・・」

ポリアは、懐かしむ様に。

「相当大きい地震が来ない限りは、壊れる心配無いみたい。　ただ、温泉を通す太い地下水道が根詰まりすると大変よ。　スンゴク寒くなる」

「勘弁ねがいてぇ・・・」

ゲイラーは、困った顔をした。　意外に寒がりな彼である。

システィアナが起きて、マルヴェリータを連れて来た。

「ポリしゃんお～きてるぅ」

「ポリア・・大丈夫？」

起き抜けの低血圧なマルヴェリータは、掠れる様な声で言った。

「マルタの方こそ大丈夫？」

「毎朝の事よ」

皆で紅茶を飲みながら、ソファーに各自が座って寛ぐ。

ポリアは、皆に。

「夕方以降何か在った？」

イルガは、警察役人と兵士がオッペンハイマー一家を警護する事に成ったと告げる。

「そっか・・・。　でも、少しは安心ね」

早速紅茶の御代わりを作るゲイラーは、

「だが。　俺達の相手した奴等じゃ、役人だの兵士で太刀打ち出来

る相手とはいかんぞ。　殺された下っ端辺りならまだしも、あの冒険者崩れみたいな奴等は、相当危険だ」

ポリアも、其処が一番の困り処である。

「確かに・・・」

ティーカップを両手に、飲み飲みしながらポリアの前に来たシスティアナは。

「ポリア～、これからどぉ～するの？」

あどけない仕草で言うシスティアナだが、目は真面目だ。

「・・・」

無言でカップをテーブルに置いたポリアは、間を置いてから。

「とにかく、犯人を捜さないと。　叔父さんやアラン先生がまた狙われても困る」

あまり賛成したくないイルガだが、狙われたのがオッペンハイマーである以上は、ポリアを止められないと解っている。

「ですがお嬢様。　一体、どうやって犯人を捜しますか？」

ゲイラーも、水分の凍ったミルクのシャーベットを紅茶に溶かしながら。

「問題は、先ず其処だ」

ポリアは、顔を上げると。

「残された紙に書かれた記号みたいな物が何なのか、それが解ればいいのだけれど・・・」

マルヴェリータは、緩い偏頭痛のする額に手を当てながら。

「じゃ、オッペンハイマー様にその形を聞いて、図書館で調べてみる？」

と、力無く言う。

だが、イルガは。

「オッペンハイマー様やアラン殿の友人ですら解らなかった物じゃぞ？　図書館で調べて解る物なら、もう役人でも調べが付くと思うのだがな」

ポリアは、アランがどうして刺されたのかが気に成っていたので。

「私・・気に成るのは先生だな」

ゲイラーも。

「そうだな。　意識不明のままだしな」

「それが一番だけど・・。　他にも在るわ」

「何が？」

「どうして、刺されただけなんだろう」

「ふむ」

ゲイラーは、砂糖を紅茶に入れて掻き回すヘルダーと見合う。

「・・・」

ヘルダーは、一つ頷いて腹を指し示した。

ゲイラーは、その場所を確かめて。

「確かに、な。　腹は内臓近くで、致命傷に成り易い場所だが。殺すなら、確実に即死を狙える場所は他に在るよな。　しかも、アラン教授の傷口は綺麗だった。　抉ったり捻ったりして、内臓をヤった痕は無い・・。　短絡的にただ刺したんだろうな」

ポリアも其処までは理解出来ていた。　だから、逆に理由が解らない。　アランの家の入り口に倒れていた年配女性は、心臓を刺されていた。　下から抉る様に・・。　普通なら即死だが、犯人が焦っていたのか。　ふくよかな女性の鳩尾辺りの少し上から斜めにナイフを刺した為、心臓を傷つけても即死にまで至らなかった様だ。だが、彼女も死んだ。

「私ね、良く解らないんだけど。　思うの。　アラン先生・・・犯人達を騙そうとしたんじゃないかって・・」

俯き加減だったマルヴェリータは、顔を前にして。

「“騙す”？」

「うん。　事件の起きた時間帯考えても、叔父の襲撃とアラン先生の襲撃って大きなズレは無い同じ頃だと思うの」

マルヴェリータは、自分達が戦っていたのは然程の長い時間では無いと思うから。

「そうね。　多分、似た頃だわ」

ポリアは、仲間の皆を見て。

「もし・・もしよ。　アラン先生が襲われたとして、叔父様も襲われた事を知ったら、私達がそのうち助けに来るかもしれないって思わない？」

皆は、否定も肯定も出来にくい話に黙る。

ポリアは、想像を仮定にして言っているの重々承知で。

「もし、アラン先生が時間稼ぎをしてたとしたら？。　犯人達と激しい口論を演じたから、隣人の人が様子を見に行ったんでしょ？　あの頭の良いアラン先生よ。　態々刺される様に犯人と接するとは思えない。　アラン先生が刺された事が咄嗟か、もしくは仕方無くなのは間違い無い様な気がするの。　犯人とアラン先生の間に何が在ったか解れば、グッと何か見えてくる気がするのよ」

ゲイラーは、甘いミルクティーを飲み干し。

「ま、ポリアの考えを頭から否定出来るとは思わない。　だが、俺

達も事件に巻き込まれた一部だ。　何をするにしても、慎重にいきたいな。　一昨日みたいに市街地で遣り合うのは、正直どうもな。　役人に協力して、じっくりやろう。　この吹雪だ。　流石に犯人達も動かないだろうし」

ポリアは、ゲイラーの意見も最もだと解っている。

「うん。　先走って何かするにも情報が無さ過ぎる。　アラン先生の回復を何よりも待つわ」

イルガは、吹雪く音が途切れる事の無い窓の外を見て。

「建てつけがしっかりしてますな。　この風の中でも窓があまり揺れていません。　北限に近い山の中とは、こうも吹雪くものなのですなぁ」

皆、ポリア以外は、こんな強烈な吹雪が初体験だ。　積もりながらも、強風が雪を削って舞い上げる。　白いベールが千切れて、舞い踊る様な強烈な吹雪であった。

≪雪に閉ざされた地で、更に暗躍する者達がいる≫

吹雪が去るまで動かないと決めたポリアだが、次の日には薄曇ながら吹雪は収まった。　寒さ厳しい北の地では、こんな日は続かない。
次の吹雪が来る前に、用事を済まそうと外には市民が出た。

早朝も遅くなった頃。　兵士と警察役人が朝に入れ替えの交代をしていて。　オッペンハイマーの庭先が久しく騒がしい。

「お～お～、新しい人との交代がよ」

オッペンハイマーの屋敷に、ポリア達が朝食を呼ばれ。　その支給に動くフロマーが、窓から交代作業をする兵士と役人達を見て言った。

「帰宅総員、回れー右っ！！」

兵士も役人も、オッペンハイマー宅の庭と云う事で元気に動いている。　今は貴族と云う人に見られる現場なだけに、格好良く見せているらしい。

叔父と叔母の前に座るポリアは、

「叔父様。　警察局の刑事部で拝見した記号の様な模様ですが、書いて下さいませんか？　斡旋所で、冒険者の誰か知らないか聞いてみます」

「えぇッ？！！　ポっ・ポリアンヌ、君が事件を調べるのかい？」

お坊ちゃん育ちの叔父である。　ポリアのする事為す事が心配になるらしい。

しかし、奥方は。

「まぁ～アナタ。　どうしてそんな顔を為さるの？　また、何時犯人が襲って来るかも知れないのですよ。　アラン先生も意識不明で、このまま警察や兵士に任せて黙って居る気ですの？」

「いや、お前・・。　相手は、凶暴な奴等なんだよ？　ポリアンヌに何か在ったら・・、嗚呼。　もしそうなったら、姉や向こうの方々に何て言えばいいか」

ポリアは、頭を抱えるオッペンハイマーへ。

「叔父様。　犯人を捕まえる事はしなくても、情報提供ぐらいは出来ると思います。　解った事は、叔父様と役人に報告しますから。　調べるだけでもさせて下さい」

ポリアの脇からイルガも口を挟み。

「失礼ですがオッペンハイマー様」

オッペンハイマーがイルガを見て。

「何かね？」

「はい。　犯人は、今までいずれも学者を殺害して参りました。恐らく、しくじったのは今回が初めてかと」

「・・、事件として解っているのだけを踏まえるなら、そうだね」

「はい。　もしそうなると、刺されたアラン殿は詳しく話を聞くまで何とも言えませぬが。　犯人に尋問されずに襲撃を逃れたのは、オッペンハイマー様のみ。　そうなると、犯人が学者を狙うとするなら、またの襲撃が起こってもおかしく在りません」

「・・・、なるほど。　目的を達成していないから、また来る可能性は否定できないね」

「そうです。　残念ながら、警備をする兵士や役人の方々の動きから力量を推し量るに。　我々が最初に撃退した手下の様な曲者共なら大丈夫でしょうが。　冒険者と同じ技能を有する方に出張られては、死人の塁を作りますぞ。　少しでも情報を集め、犯人と思われる曲者共を捕縛しませぬと、被害は更に増える可能性があります」

「そ・そうなのか？」

警備に不安を突き付けられ、不安丸出しの表情を見せるオッペンハイマー。

ゲイラーも。

「イルガの言う事もハッキリしてるぜ、教授。　何せ、魔法を民間人の居る街中で躊躇しねぇで遣う奴等だ。　その気になれば、この屋敷に魔法をブチ込んで来る可能性もある。　捜査をするのは役人任せでも構わないが。　事件解決に向けた協力は出来るだけした方がイイ。　正直、俺達でも遣り合って勝てるとは言い切れない。悪い奴等ほど、何でもして来やがるからな」

「あ・あぁ。　わわ・・解った」

オッペンハイマーも、漸く相手の危険性が認識でき始めた。

だが、この日も波乱に満ちた一日と成る。

その手始めは、ポリア達が食事を終えた朝であった。

「ん？」

紅茶で食堂にそのまま落ち着いていたポリア達の耳に、正門の方から喧しい声が聞こえて来た。

「えっ？！」

一緒に居たオッペンハイマー夫人が、何か襲撃でも来たのかと驚く。

正門を見れる窓に集まったポリア達は、遠くの正門前で兵士や役人達と言い争う様な人の姿を見た。　目の良いヘルダーが、凝視しながらジェスチャーをする。

ポリアは、ヘルダーを騒ぎと交互に見ながら。

「えっ？　あの騒いでるの斡旋所に居る人？」

ヘルダーは、どうやら冒険者数名が押し掛けて来ている様だと云う。

そして・・・。

「ホール・グラスの奴等に会わせろっ！！！」

「俺達は怪しい者じゃねぇっ！」

「頼むっ、話だけでもさせてくれっ」

と、叫ぶ声が響いて来た。

ポリアは、直ぐに。

「ヘルダー。　イルガ、システィと一緒に此処に居て。　叔母と叔父の安全をお願い。　マルタ、ゲイラーと一緒に来て」

話を聞きに出ると解った面々は、直ぐに武器を手にしたりして指示に従った。

鎧を纏わない格好でマントだけを羽織ったポリアは、蒼いマフラーを巻くマルヴェリータとマントを背に回したゲイラーを連れて外に出た。　前後に長い純白のスカートが冷たい風に靡き、防寒の為に穿く白のズボンにすら寒さが突き刺さる。

「はぁー、寒いっ」

毛糸でしっかり編まれた黒のドレスローブを、普段の長袖ドレスの上から重ね着するマルヴェリータだが。　外に出れば寒く、白い息が中々消えないのが珍しいと思えた。

さて、急いで正門に近づけば、門を閉じて冒険者風の者達を追い返そうと怒鳴る兵士が見え。　役人達は、庭を見回る者達が整列して様子を見守っている。

ポリアは、その門の前に集まる者達の様子が必死で、様子がおかしいと思い。

「待って、私が聞くわ。　ホール・グラスのリーダーで、ポリアよ」

と、役人達の脇に出る。

兵士を纏める連隊長が、ポリアを睨み。

「ふん、迷惑な奴等だ。　なんでオッペンハイマー様の屋敷内に、冒険者風情が居るんだ？」

その偉そうな口調をするのは、まだ若い剣士風の男。　鎧は正式な物だが、剣や衣服は気取った貴族風の物である。

若者の連隊長の口調にムッとするのは、ゲイラーとマルヴェリータ。

だが、ポリアは冷静に。

「私が、叔父の家に居て悪いの？」

そう云われて、若者は情報を思い出したらしい。　美しいポリアを見て、

「そうか、君が。　ま、それなら騒ぎを早々に鎮めてくれ」

と、仕方ない半分、ポリアの容姿に免じた様子を半分に見せて。

「おい、本人が話し合うそうだ。　門越しに話させる」

と、兵士に声掛ける。

ゲイラーは、その偉そうな若者だが、剣の腕の遣いはまぁまぁと判断。　ポリアや自分は負けないだろうが、イルガだと時間を必要としそうな相手だと推察する。

引いた兵士達の間を縫う様にして、雪の上を足早にポリアは門前に出た。

「ポリアさんか？」

「あぁ、この人だっ」

動物の毛皮丸出しと云った感じのフード付きのコートを羽織る者や、使い古した厚手の皮の厚着をした者達は、ポリアを見て確かめ合い。
門にへばり付いて。

「なぁっ、事件の経過を教えてくれよっ？！」

「犯人解ったのかっ？！」

「何か襲撃した奴等の情報ないか？」

と、総勢7人の冒険者達が口々に聞いてくる。

いきなりの事に、ポリアは唖然としてしまい。　成り行きを見守る気だった連隊長だったが、事件についての話だけに腕組みを解いた。

ポリアは、必死に聞いてくる皆を見回し。　ゲイラーやマルヴェリータを見てから。

「皆、急にどうしたの？」

すると、細い目つきで大人びた女性は、左手に杖を持ちながら。厚いドレスローブと皮コートの二重のフードから覗ける顔を昂揚させ。

「ウチのジーマンが居なくなったのっ。　学者なのよっ！！」

別の豊かな髭を蓄えた小柄の初老男性は、腰脇に片手用の鉄槌を揺らしながら。

「ワシのチームに居る若い学者のサモンが消えた。　冒険者に成り立ての青年だ」

背の高い厚手の服に皮の胸当てやプロテクターを纏う男性も。

「俺のチーム居る古株な学者のヨレイムが消えた。　昨日の朝からだ」

ポリアは、事件絡みだと直感し、役人と兵士の方を向くと。

「馬車をっ、事件は続いてるっ！！！」

と、叫んだ。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪事件は緩やかに悪化して≫

ポリアの一声に、警備する兵士達の連隊長のゾセアは目つきを鋭くして。

「冒険者が失踪したから、この俺達に出張れと云うのか？　そんなのは、警察局の上級管理官にでも言え。　警察局の副総長のハソロだか貴族が捜査指揮をしていた筈だ」

と、ポリアの言葉を蹴る。

ゲイラーは、その傲慢染みた態度にイラっとして。

「アンタ兵士だろ？　事件が続いてるかも知れないのに、動かないってか？」

しかしゾセアは、どうでもいい様な素振りで鳥の羽飾りが伸びる丸いミンク製のハットを撫で。

「冒険者に指図される筋合いは無い。　第一、我々の任務はオッペンハイマー様を護衛する事。　此処を無闇に離れるのは、命令違反だ。　能無しが、偉そうに言うな」

見ていたマルヴェリータがポリアに寄り。

「ポリア、オッペンハイマー様に馬車をお借りしましょ。　此処で議論する時間が勿体無いわ」

その通りだと思うポリアは、ゾセアでは無く役人を束ねる方の隊長らしき中年男性に向き。

「もう、ハソロさんは出勤してるかしら?」

黒いベレー帽に似た丸帽をフードの下に被る役人は、邪険な態度をしたゾセアに一瞥してから。

「はい、恐らくは。　ハソロ様は、貴女方に何か在っても連絡を遣す様にと云われておりました。　警察局に用が在るなら、一人付けますが?」

あのハソロと云う役人は、流石に歳相応の考えを持った人物の様だ。

ポリアは、行方不明者が出ている事態を考え。

「では、私達はこのまま斡旋所に行きます。　そのお一人を、警察局に向かわせてくれませんか?　冒険者の学者達が行方不明となっていて、もしかすると事件に巻き込まれた可能性があると。　至急、事情を聴いてくれる方を向かわせて欲しいって」

「ハッ。　貴女の言は、自分と同じだとオッペンハイマー様からお

言葉を受けております。　事件解決のため、一人馬で向かわせます」

敬礼して承諾してくれる役人を見て、ポリアは、叔父がささやかに手を回してくれていると理解した。　何か在った時、この場に自分が居なくても困らない様に、ポリアを優遇する言をハソロにでも言ったのだろう。

「ありがとう。　事件に繋がる証拠は、全て役人さんに渡します」

ゲイラーは、ゾセアと云う男を脇目に。

「偉い違いだな」

と、マルヴェリータに小声で言う。

「捜査と警護の任務の違いでしょ？　ま、アッチはエリートみたいだしね」

マルヴェリータも、偉そうな兵士達の連隊長ゾセアに嫌悪の目を向ける。

ポリアは、役人に冒険者達と一緒に斡旋所へ行くと告げ。　屋敷に戻り、叔父からあの図形の描かれた紙を受け取り出掛ける事を伝えた後。

「叔父様。　一時出ますが、夕方までには戻ります。　とにかく、気を付けて」

「あぁ、解った。　ポリアンヌ、とにかく危ない事は避けてくれよ」

オッペンハイマーは、そう言って幌付きの中型馬車をフロマーに用意させた。　大人数を乗せれるのは、荷馬車しかなかったからだ。

さて、馬車を外に出し。　押し掛けて来た冒険者7名とポリア達6名の13人を乗せた馬車は、大通りに出て斡旋所に向かう。

その中で。

大柄な大剣を扱うチームリーダーのブロッケンと云う男が、

「役人も出て行った様だが？」

ポリアは、向かい合う彼に対し。

「学者が狙われたなら、多分叔父やアラン先生を狙った相手と同じよ。　これは事件だわ。　私達だけで勝手な行動は控えるべきだし、記憶の中に事件の手掛かりがあるかも知れないでしょ？　だから、来てもらうの」

自然神を信仰する薄目の大人びた女性僧侶リリーシャは、ポリアに祈りを見せ。

「あぁ、感謝するわ。　どうしたらいいか、チームの皆が心配してるの。　役人に言いに後で皆で行こうって決めてたから、助かります」

落ち着かない冒険者達を見てイルガが。

「居なくなったと気づいたのは、今朝か？」

頷く皆の中、小柄な初老のハンマー遣いであるイブリフムが。

「そうだ。　昨日の吹雪で身動き取れない俺達は、斡旋所の地下や一階で屯してた。　こっちの2チームは、斡旋所付属店の大型施設に寝泊りしてたらしい。　朝に為って、向こうの魔法遣いが仲間が居なくなったって言い出してな。　一緒にチームを組む筈だった冒険者達も一緒に騒ぎ出して、俺達も仲間内で確認し合ったら一人居ないし。　その内あっちこっちで居ない奴が出てきてしまったのさ」

ゲイラーは一応の確認に。

「暇な時はバラけてたんだろう？　何処かに行ってるとかじゃ無いんだな？」

すると、若い魔法遣いで泣きそうだったチェインバースが、

「従兄弟のシビクとは、今日に他の3人と組んでチーム結成するハズだったんだっ！　冒険者として初めてチームを結成する時に、何処に行くのさっ。　あぁ、シビクが居ないなんて、信じられない・・・」

その学者であるシビクは、弓も使う若い青年だそうな。　女の子とも見間違える風貌で、年上のチェインバースとは兄弟の様な仲だとか。　初めて結成を決めた仲間内で、一番結成に意欲を見せていたシビクが突如として居なくなる訳が無いと云う。

すると座っていたリリーシャは、ポリアに膝を寄せて。

「私の仲間である学者のジーマンは、非常に真面目な方で夜遊びや飲み歩きもしない人です。　昨日も、日中にあの吹雪の中を図書館

に行き、仕事で請けようと話していた薬草採取の下調べに向かいました。　ですが、他の仲間に因るとそのまま帰って来てないと言うのです。　図書館に行っても居ません。　大型施設内や、斡旋所の中で遅くまで飲んでいた冒険者の方に聞いても、ジーマンらしい人物を見てないと・・・。　正直、懐が寂しい私達ですから、一人で宿に泊まったとかも在り得ません」

それぞれのチームリーダーが事情を語る中、ブロッケンは難しい顔で俯き。

「夏ならいいが、今は冬だ。　寒いから、皆がフードを被ったり厚着したりしてるし。　時々、斡旋所の地下の最下層を利用しに浮浪者も来る。　不審者なんて聞き回ったら、それこそ幾つ情報が聞けるか解らないし。　その何処までが正しいのかも解らない」

ポリアは、その話を聴くにまた目の前が暗くなる思いがして。

（これは大変だわ・・。　あ～、学者の人に話し聞きたかったのに、これじゃ意味無い）

と、オッペンハイマーが書き出してくれた記号の様な物が書かれた紙を見る。

揺られる馬車の荷台の中。　ポリアの両隣に座っているシスティアナとマルヴェリータが、広げられた紙を見てくる。

「コレ？」

と、マルヴェリータが言えば、システィアナも見て。

「お三角さんばぁ～かですぅ」

マルヴェリータは、アランの家に残された物も含めて４つの少し歪な三角形とその中心に記号の様な丸や点の集まりなどが描かれる物を見て。

「確かに、イタズラ書きみたい」

と、呟き困った。　ポリア同様に全く意味が解らなかったからだろう。

石の都市の隙間を走る冷たい風が馬車の荷台入り口の幌をバタつかせる音を聞くポリアは、事件現状に残されたモノを見下ろし。

「ケイが居たら、解るのかな。　こんなの見た事無いわよ」

と、溜め息を漏らした。

そして、馬車は街中の斡旋所に到着した。

馬車から降りたポリア達。　すると、斡旋所の入り口を開いて中に入るなり、いきなり“地元組”と呼ばれるこの場所に居座り続ける冒険者達が。

「おいおい、ホール・グラスの皆さんが来ましたで」

「ヒューっ！　あの学者を殺してる悪党達を撃退した凄腕かよ」

事件も解決しておらず、手掛かりも無いままに居るポリア達を持ち上げようとして来る。

（何コレ、最低っ）

空気を読めないバカ共の姿に、イライラを顔に浮かべるマルヴェリータやヘルダー。

ポリアは、こんな様子では事情聴取など無理と思い。　奥のカウンターに行って、主である夫婦の旦那に話をしに行く。

「おはよう・・、マスター」

動物の毛がそのまま残されたコート着ている偉丈夫な主人は。

「おう、来たのか。　ご活躍ならしいな」

怪訝な顔すらするポリアは、飲み屋としてのカウンター脇の奥。隣の大型施設から出前も受ける事も可能な事務所にマスターを招く様に首を動かし。

「話が在るの。　奥で、イイ？」

暖炉脇のカウンターからポリアの前に来る主人は、

「聞かれたく無い話なら、４階遣うか？　アンタ等なら、難易度の高い依頼も回せるから入れるゼ」

「なら、お願い」

レンガ造りの古い頑丈なだけと見える１階は、冒険者達が屯したり食事もする雑多な場所だ。　どうも雰囲気としては、難しい話をし

ずらい。

ポリアは、ゲイラーやイルガに。

「此処に居て。　役人の人来たら、直ぐ教えて」

事務所の様な小部屋と1階の間にある階段に向かう主を先に行かせ、マルヴェリータと共に上るポリアだった。

主は、ポリアが斡旋所に役人を呼んだ事を途中で聞くに。

「そうか、手配したのか。　なら、ウチの奴にも言って置こう」

と、3階で一般依頼を受け付けている主の奥さんに逢い。　役人が来たなら、3階に上げて留まらせろと言い置いた。

4階に上がると、其処は半円ドーム状のフロアで。　中々な職人が作ったと思わせるソファーとテーブルが備わる。　緑のタイル床は安物とはいかない絵の描き入れられた物、丸い円状の壁には外を見回せる窓がカウンターの後ろ以外をグルっと囲む様に作られている。　ガラスの幅は、ポリアの掌二つ縦にしたほどしか無いが、曇り出した外の雰囲気が、良く解る。

「全く、貴族のお屋敷に押し掛けたのか。　朝っぱらから仲間が居ないって騒いでた奴等が急に見えなくなったと思ったら、オッペンハイマー様の所に居る君を訪ねていたとはね」

カウンターへ向かう主は、不躾な行為に不満も匂わせる。

だが、ポリアからするなら、彼等の行為も人としてなら当然だ。

「仲間が居なくなったのよ？　心配するなら、心当たりの有る誰かを訪ねるのって当然だわ」

「普通は、な」

と、カウンターに回った主は続け。

「押し掛けて行った上に逮捕者が出たら、斡旋所としても聞こえが悪い」

その話を聞いたマルヴェリータは肩を竦めて見せ。　ポリアは、意外にクールな性格だと思う。　だが、事態はそれ処では無い。

「マスター、叔父の家とアラン先生の所に襲撃が来たのは知ってるわよね」

「おお。　警察局と軍部は緘口令を敷いて、襲撃の情報を広げない様にしようとしたがな。　民間人に犠牲出たし。　街一番太い大通りでも、逃げた犯人達が乗った馬車で酔っ払いの住民とかの轢き逃げが続出してな。　もう噂なんかに歯止めが利かなくなってしまったみたいだぞ。　実は、斡旋所にその話が広がったのは、昨日の昼過ぎみたいだな。　事件の事を隣の大型施設で聞いた奴等や、別の場所で聞いた奴等が金欲しさに此処でバラ撒いた。　何せ被害が大きく、犯人を撃退した者が居て。　それが侯爵家に寝泊りする特別な君達だと言うから、噂話は大盛況。　地元で屯してるバカ共、結構小銭を稼いだんじゃないか？　噂を聞きたいと冒険者達が集まってたしな」

ポリアは、仕方ない事だと呆れ。

「そう・・。　でも、居なくなった学者達は、進行してる緊急事態だわ」

すると主は、少し淋しそうに。

「だな・・」

と、呟く様に言うのだ。

前の会話とはガラリと変わる口調なだけに、マルヴェリータは短い一言で。

「随分と冷静だわね」

棘を含む言われ方だと感じた主は、ポリアとマルヴェリータを見て。

「悪いが、安否は絶望的だろうな。　相手が悪すぎる」

ポリアはその言葉に諦めを感じ、まだどうなったか解らない今で絶望視するのは気に食わないと感情を露にして。

「どうゆう意味？　まだ、見つかってないのにっ？！」

しかし。　言い返す処か溜め息を吐いた主は、暖炉に向いてポリア達に背を向けた。　そして、灰の燃え残りを火掻きする鉄の棒で弄りながら熾きを探しつつ。

「だって、犯人らしい奴等は民間人の居る住居区で魔法を平然と使用したんだろ？　もう、何人も街に住む学者が殺され、おまけの大

それた事にオッペンハイマー様やアラン殿を狙った。　その犯人とか云う奴等は、義理人情や普通一般の気持ちを理解する心を持ち合わせちゃいない」

ポリアは、憤り始めたままに主に近づき。

「だからっ?!　このまま見過ごすの?」

熾きの紅い炭に、小さい小枝を投げた主は。

「まだ若いな」

「えっ?!」

小枝が焦げるのを見た主は、上がる煙を確かめながら。

「最初の事件から考えても、奴等が学者を捕まえて数日して殺すとかならまだいい。　だが、殺られた様子を踏まえるに、押し込んだ後に然程の時間も置かず殺してる。　その答えは、犯人達の学者に対する用件は酷く簡単で。　相手が求める何かを持っていないなら、用は無いと殺すんだ。　折檻の痕も在ったらしいが、それでも一昼夜掛けてなんて長い時間じゃない。　居なくなった学者は、皆昨日には姿を消してる。　それから、もう夜が明けた今日だ。　生きてる奴が居ると考える方が不自然と思わんか?」

ポリアとマルヴェリータは、その話にビクリと体を硬直させた。

さて、ポリアとマルヴェリータが絶句した直後。　斡旋所に、役人を乗せた馬車が到着した。

黒塗りの乗用馬車の扉を開き右手に降りた男が。

「ふぅ～。　民間・役人・貴族と続いて、最後は冒険者の学者か」

雪に染まった斡旋所の表を見上げて云う人物は、警察局上級捜査官副総長のハソロである。　訝しげな小男の様に見える太ったイルガと似た背丈の彼だが、年齢は５０を過ぎ、実際の捜査に出れば仕事人の様な威厳を持つ。　黒く固いつばを持つ丸帽子に、緑のロングコートを羽織り、軍服の様な造りをした繋ぎの制服を着ていた。寒い中で外に下りても、情けなく震える様な仕草もしない。

「ハソロ様。　本当に宜しいのですか？　たかだか居なくなった冒険者風情の為に、この様な場所に入って直々に事情聴取など・・」

ハソロにこう言う後から降りた頼り無さそうな役人は、繋ぎの上等な正装姿であり。　馬車の外後部に捕まって来た３人の役人は、オッペンハイマーの屋敷に居た役人と同じ下級役人の服装である。ハソロは、その頼り無さそうな役人男性を片眉を上げて見上げた。　優男の様な細い身で、剣の心得も素人並みの３０代男。　少し知恵は回るが、思い込みの激しい所がある上に、侯爵家の次男で親戚の伯爵家へ養子に入ったこの男は、ハソロの悩みの種である。　この頼りなさ気な男性が、どうも今回の事件を軽視している様に思えるハソロは。

★★★

「イエナス君。　もう多数の死傷者を出した事件だ。　我々が出向かずにどうする」

“イエナス”と呼ばれた男性は、どうも冒険者の居る斡旋所を嫌々な目で見上げ。

「はっ。　では、早速者共をとっ捕まえて事情を・・」

その言い方にイラっとした顔をしたハソロ。　イエナスの服の袖を引き。

「犯人でもない冒険者をとっ捕まえてどうするんだっ。　全く、中央から来る貴族はコレだから困る。　犯罪を犯したもの以外、我々が手を下せる相手は居ない。　例え相手が冒険者であろうとも、権力を傘に着る様な行為はイカン」

「あ、は・・・はぁ」

同じ伯爵を頂くハソロは、イエナスを見ては頭を振るい。　呆れた様子で斡旋所の中へと入った。

イエナスは生まれが良い為に、下級役人を経ずして上級役人に成ったエリートである。　捜査官としての勉強の為にハソロに付き従う事が多く。　訝しげで在りながら犯人逮捕の際は厳格たる猛者に変わるハソロとは対照的だ。　第一印象で周りに良く見られがちのイエナスは、後々に為るにつれてひ弱な性格と思い込みの激しさが露呈して呆れられる。　捜査官としては、非常に不向きな人物だった。

さて。　斡旋所に入ったハソロ達役人を出迎えたのは、１００人以

上の冒険者達の視線。

「わっ。　徒党だ・・・」

と、呟くイエナスに対し、ハソロは。

「一連の学者殺害及び傷害の事件を担当するハソロだ。　事情聴取に参った」

すると、気付いたゲイラーが奥より。

「役人さんよ、上に上がってくれ」

「ん？」

ハソロは、老いも見える丸顔を声の方に向け。

（オッペンハイマー様の屋敷に居た・・・）

と、ゲイラーを思い出しながら。

「上に用が？」

「今、俺達のリーダーが主と話してるが、此処は聞く者の数が多い。上で関係者だけ集めて話を聞いたらどうか、と」

ハソロは、事件の内容を余り噂にされたくない心情から。

「それは有り難い。　あの美人の女性は一緒かな？　確か・・・ポリア殿とか」

「ああ。　上で、主と話してる」

だが、此処でイルガは。

（はて？　何故にこの御仁は、お嬢様に“殿”などと・・）

敬う言い方では無いが、相手を呼び捨てにしない作法の言い方を付ける役人を見て。　イルガは、ハソロと云う人物が気に成った。

ただ付ける者も居るのだが、オッペンハイマーの親戚と聞いた後のハソロは、ポリアに対して大声を出したり、鋭い口調や権力を滲ませる態度は出さなかったのが思い出される。

ハソロは、イエナスと役人3人を連れて階段の在る奥に向かう。

其処に、丁度降りてきたポリアとマルヴェリータ。

「あら、ハソロさん・・でしたか？」

ポリアは、ハソロを見て道を開ける。

ハソロは、気を無くしたポリアしか見て居なかったので。

「おぉ、少しは落ち着いた様だね。　丁度いい、この前の事情聴取をもう一度行いたい。　済まないが、居なくなった冒険者達が属したチームなどの関係者のみと、君達は上の階に同行して貰おうかな」

ポリアは、仲間達を見てから。

「いいわ。　事件解決に繋がるなら、喜んで協力します」

ポリアとマルヴェリータを見て目を奪われてしまったイエナスに、ハソロは向いて。

「イエナス君、階段の所に見張りを一人置くよ・・。　イエナス君、イエナス君っ聞いてるのかっ？！」

怒鳴られ加減の言葉にビクンと驚いたイエナス。

「はっ、ははは い？　身柄確保ですか？」

ハソロは、二人の美女に現を抜かしたイエナスにムカっと来て。

「このっバァッカモーーーーーーンっ！！！！！！！！」

と、凄まじい怒声を張り上げた。

そして・・・。　クスクスと笑うシスティアナ。　一番最後に見張りで立たされるイエナスと下級役人を見て、階段を上がる時まで笑っていた。

さて、４階に上がったハソロは早速とばかりに。　冒険者達それぞれから、居なくなった学者の足取りの出来る所まで解る範囲の事情を詳細に聞き抜く。　曖昧な部分には助けを出したり、思い出すまで少し待ったりと。　その事情の聞き方には、ポリアも驚く程の根気の入れ様であった。

（あの人、役人としては出来るわね）

マルヴェリータは、下がって待つ中でポリアに耳打ちする。

（うん。　話の聞き方が上手いわ。　驚いちゃった）

随分長い事情聴取だった。　昼も過ぎた頃である。　居なくなった学者８名の内、７名分の事情を聞き終えたハソロは。

「大体良く解りました。　ですが、不明な点がでたら、また事情をきかせて貰う事になりますよ」

ブロッケンを始めとしたリーダーが、ハソロの言葉に返事を返す。

ポリアは、其処で。

「後一人居ないのって、誰？」

すると、リリーシャが座ったままに振り返り。

「ソロの方みたいですわ。　魔想魔術を遣う３０そこそこの男性で、何か噂も宜しくない様で誰も関わり合いをしなかったとか・・」

すると、其処にブロッケンが口を挟み。

「恐らく、カフレヴンの奴だろう。　去年に流れてきた奴で、非常に金にウルサイ奴だ。　報酬の取り分を決める事に煩く細かい注文をつける上に、仕事を進行する中で自分の役割が多いと報酬を多く求める厄介な奴さ」

ハソロは、誰もその人物の事情を知る者が此処に居ない事を憂慮し。

「なるほど、それでチームに属して無い訳か」

メモを取るハソロに向いたブロッケンは。

「ああ。　それもあるが、今は雪に閉ざされて新米や内輪の少ないチームが来ない。　野郎も、口車に乗せる相手が居ないからソロなのさ。　ま、噂を飯の種にしたり、人を強請る事もしたカフレブンだ。　この時期は、冒険者ってより悪党に近い奴だろうな」

マルヴェリータは思わず。

「随分詳しいのね？」

すると、ブロッケンのチームの一人が。

「ウチのリーダーって、“根下ろし”だから、この街の事は詳しいよ」

ポリアとマルヴェリータは、見合って頷いた。

ブロッケンは、このシュテルハインダーの街を地元とした男で、雪の降る半年間だけ冒険者をする“根下ろし”している者だ。　結婚もしているし、子供や家族も一緒に居る。　出稼ぎの代わりに冒険者を時期だけする住人をこう言う。　“根下ろし”と。

ハソロは、事情を聞き終えた冒険者達を1階へ戻す傍ら、下級役人を一人遣わしてカフレブンと云う人物の事を深く知る誰か探して来る様にと伝える。

ブロッケンは、親しい相手はもう居ないと伝えた上で、自分も何か知ってる者が居ないか下で手伝うと進み出た。　“蛇の道は、蛇”。

役人が聞くより、同業者が聞いたほうがいいかも知れないと思うハソロは、それを許可した。

さて、行方不明者を出したチーム達と入れ替わりで、ハソロの前に座ったポリア達。

「さて、その後何か変わった事は？」

ハソロは、ポリアに聞く。

ゲイラーが。

「昨日のブリザードで外に出てない。　何も無いさ」

ハソロは、頷き一つを返し。

「では、何か思い出した事。　それから、気づいた事などは？」

マルヴェリータは、短く。

「無いわね」

すると、ハソロは腕組みをして。

「いいかね。　今回のオッペンハイマー様を狙い、アラン殿を刺した犯人達は今までに無い行動をした。　解るかね？」

ポリアは、仲間達と見合い。

「それは・・・人の居る所で魔法を遣った事ですか？」

「いやいや、それは君達に見つかった事による対処措置だ。　問題は、馬車なのだ」

ポリア達は、難しい顔をして理解出来ないと見せた。

ハソロは、もう冷めた紅茶を飲み。

「おう、いい茶葉だ」

と、言い置いてから。

「今まで、それまでの殺人3件は何れも人の住む中で被害者宅か、帰宅途中の夜分に襲われた。　だが、犯人が馬車で逃走するなど、一度も無かった事だ。　二件目の被害者で学術局資料部門の准責任者だった若者は、帰宅の途中で襲われた。　この時、仕事帰りの工房職人数名が叫び声を聞き付け、若者が殺された現場に踏み込んでいる。　だが、犯人は二人で走って逃げた。　更に3件目に殺された博物館館長の初老である人物は、かなり大きい豪邸に住んでいてね。　襲撃された時、館長に仕える従者で住み込みの者は手向かい惨殺され。　メイドや家族の女は酷い暴行の上に殺されておる。　この時も、泣き叫ぶ娘の声で通報が来てな。　逃げる犯人を追った役人と兵士二人が返り討ちに遭い、瀕死寸前の大怪我をした。　だが、犯人はこの時も走って逃げた」

ポリアは、事件の中身がこんなにも酷いのかと絶句してしまった。

代わりに、イルガが。

「それが？　逃げるのを迅速にするために馬車を用意しただけでは

？」

「いや。　犯人の奴等は、非常にこの街に詳しい様だ。　何れの犯行時も、逃げて行く道は入り組んだ小道やわき道だ。　入り組んだ道を使って行方を眩ませるやり方なのだよ。　逆に馬車の通れる道など、冬の今では数える程しかない。　都市の内部の道は石で出来た上に、急な直角の曲がり道が多いのでな。　逃げるに馬車を使うのは不便だと思う。　しかも、犯人が君達から馬車で逃げる際に人を態と轢いたのには、怪我人を増やして混乱させる為なのだと思う。　だからか、郊外に出たら馬車の目撃がぷっつりと途絶えてるのがその証拠だ」

死傷者が非常に多い事件を聞いて、消えた学者達を思うポリアは心配に成った。

（あぁ、無事で・・・）

ゲイラーは、ふと気づき。

「そう言うなら、今回は誘拐だな。　殺人じゃない」

ハソロは、ゲイラーに指を向け。

「そうだ。　今まではその場その場で殺して来た犯人の手口が、此処に来て変わったと言って良い。　いや、想像を働かせるなら、君達の関わった事件から・・と考える方がいいか」

ポリアは、ハソロが何か問い掛けをしている様で。

「私達に何を聞きたいのですか？」

しかし、ハソロは意外にもゆったり事を構える様に。

「急いではイカン。　それでは、推理や想像が未熟で事件を掴めない」

ポリアは、もう夕方に向かう薄暗い曇り空を窓から見て。

「ハソロさん。　では、これから私達の寝泊りする屋敷に来ませんか？」

驚いたハソロと仲間達。　ハソロは目を丸くし。

「オッペンハイマー様のお屋敷にかね？」

「はい。　私達は、離れに逗留させてもらって居ます。　もし、ハソロさんさえ宜しいのなら、私達の意見も聞いて貰いたいんです。　実は、まだ隠してる部分が在ります。　それは、叔父や私達の偽りでは在りませんが、叔父やアラン先生と私達が知り合う事の内容です」

ハソロは、目を丸くしたが。　直ぐに深い事情が有る事を知り、態度を平静に戻して。

「フム。　明日は私も休みだ。　構わないよ。　ただ、私も一人だけ腹心を連れて行くが・・良いかね？」

ポリアは、頷いた。　叔父が心配だったので、早く戻りたかったのが理由だった。

暗くなった夕方。　先に屋敷へ戻ったポリアは、叔父と逢って安全を確かめ合った後。

「叔父様・・。　これから屋敷にハソロさんが来ると思われます。　離れで会いますので、お構いなく」

正直、オッペンハイマーも貴族としての仕事が在る。　今夜は、騎士の率いる兵士小隊を二つ従えたまま、友人の開く晩餐会に行く予定だ。　日中では、オッペンハイマーも王立図書館学術顧問・都政運営顧問と云う肩書きの元、様々な客と逢ったり、時には都政を司る都庁府へ出向かなければならない時もある。　今夜の晩餐会も、襲われたオッペンハイマーの安否を確かめ、その事件の事に関して各方面の政府要人が集まる場を設ける意味で高官騎士の貴族が開いたもの。　出向かない訳にはいかないし、かなり極秘な晩餐会に成りそうだ。

「ポリアンヌが招いたなら、私は何も言わないよ」

晩餐会の事を此処で聞いたポリアは、護衛に自分を連れて行かないと言うオッペンハイマーを心配するも。

「大丈夫。　妻と二人に騎士３人と兵士４０人は付く。　極秘の晩餐会で、関係者以外知らない事だ。　寧ろ、中央の役人だった貴族も来るからね。　ポリアンヌの事を知ってる相手が居るかも知れない。　ポリアンヌが居ると、心配が増えそうだ。　だから、黙ってた」

こう言われては、ポリアも他に言葉を繋げない。

風が冷たく強い中。　二人乗りの馬車にめかし込んで乗る叔母と正装した叔父を、母屋の屋敷の窓から見送るポリアは・・・。

（叔父様、ご無事で）

出て行く馬車と付き添う騎士や兵士を見送ったポリア。　いくら身を隠したと言えど、位の高い貴族の集まりに出れば身元がバレる可能性がある。　ポリアは、この一件が終わったら国を離れようと心に決めた。

さて、ハソロが遣って来たのは、その直ぐ後である。　執事が出迎え、警備に当たる役人達がハソロの姿に驚いた。

ハソロは、事情聴取だと言って無用な気遣いはしなくていいと下級役人達を下がらせ、ポリアと共に従者一人を連れて離れに来た。

しかし此処で、ポリアが極自然な様子で離れに入るのを見たハソロは。

（うむぅ。　はやりこの方は・・・）

ポリアの実態に気づき始めていた。

ハソロを招き入れたポリアは、食堂としても応接の間としても使っていた場所にハソロを招く。　ハソロの後ろには、小柄ながらヘルダーの様な無口で生真面目そうと云うか、“頑固で寡黙”と云う言葉が似合いそうな中年の色白男が付き添う。　ポリアは、その隙の無い動作に、何か武術の心得が在ると看破した。

ハソロは、ポリアへ。

「この者は、ミハエル。　私の腹心で、時々役人達の運動不足を解消させる為に稽古相手をさせておる。　昔、冒険者もしていた男だが、口が堅いのは折り紙付きだ。　ま、同席を頼む」

「はい」

ポリアは、素直に応じた。

さて、ポリアの仲間と、ハソロ、ミハエルが揃い。　フロマーが持って来てくれた紅茶などで席に落ち着く。　ポリアとハソロは、ティーテーブルを向かい合う形で一人掛けのソファーに座り。　イルガとシスティアナ、ゲイラーとヘルダーがそれぞれのソファーに一緒に座る。　マルヴェリータの脇を進められたミハエルは真面目に固辞し。　システィアナがマルヴェリータの脇に行き、イルガの隣に座る事でミハエルも座った。

マルヴェリータが悪戯っぽく。

「私も嫌われるのね」

と、微笑んで言うと・　何故かミハエルは俯き横を向く。

「何じゃ、家庭持ちで娘3人も居るのにテレるのか？」

と、ハソロに突っ込まれて、ミハエルの顔がムズムズと歪んだのには、ポリアなども純な男なのだと思えた。

さて、ポリアはハソロに、アランとオッペンハイマーとの関係を軽く語った。

「オッペンハマー様は、我が叔父です。　その叔父がアラン先生と崩壊市街地に行く上で護衛の仕事依頼をし。　私達が請け、付き従いました」

ハソロは、白いフサフサした帽子も抜いで禿げ頭を晒し。

「なるほど。　しかし、ポリア殿は余程にオッペンハイマー様のお気に入りならしい。　この離れは、オッペンハイマー様のお父上が使っていた場所。　其処を、見ず知らずの冒険者と一緒の姪御を泊めるとは、余程に・・余程に・・・」

ポリアは、ハソロが元は中央に住んでいた貴族とオッペンハイマーから知らされていた。　だから・・。

「この場で、ハソロさんを信用して言いますが。　ヨーゼフは我が祖父です。　私は、幼い頃からこの屋敷に来て祖父と一時を毎年過ごしていました。　この離れは、私にしてみれば第二の実家みたい

な物ですね」

ハソロは、その話を聞いて。

（あぁっ！　やはり、か）

と、納得した。　実は、オッペンハイマーとアランが襲われた夜。
取調べにポリア達を連れて行こうとした際に、オッペンハイマーが大激怒をしたのだ。　ならず者と云う印象も拭えない冒険者だから、役人とするなら捕まえて取り調べる所。　だが、この街でも指折りの権力者でもあるオッペンハイマーがポリア達の潔白と身柄に責任を持つと断言したのには、ハソロ以下役人や兵士も困惑した程なのだ。　だが、ハソロはその意味が解った。

「ポリア殿の身の上、このハソロはしかとご理解しました」

ポリアは、神妙な面持ちで。

「はい・・」

仲間の見るポリアは何処と無く弱い彼女で、何時ものポリアでは無かった。　やはり、親しい誰か以外に知られるのは、まだ嫌なのだろう。

だが、ハソロは微笑んでポリアを見る。

「ははは、どうやらポリア殿。　あの強引な結婚が御嫌だったらしいですな」

その話にハッとしたのは、ポリアとイルガ。　ポリアは、驚いた様

子で。

「知ってるんですか？」

「うふぁふぁ、ええ・・。　貴女のお父上は、今から２０年ほど前でしたかな。　騎士や貴族の風紀の乱れを憂いで、３年ほど中央警察部の内部調査をする場所に席を置いていたのですよ。　私にするなら、嘗ての上役のご家族ですから、噂は自然と耳に留まりますわい」

ポリアは、知らなかった事に口に手を当て驚き。　イルガと共に見合ってまたハソロを見る。

紅茶を飲みながら思い出す素振りのハソロは、遠い目で小振りのシャンデリアを見上げて。

「私がこの地に赴任したのは・・１０年近く前でしたか。　ヨーゼフ様も居られまして、貴女の事を一・二度訪ねられた事がある。　縁とは、何処かに繋がっている物なのでしょうな。　まさか、事件でアノ方のご息女に出会うとは・・」

ポリアも不思議な感覚だった。　此処まで来ると、本当に祖父に呼ばれて来た様な思いに駆られる。

カップを台に戻したハソロは、顔を平静に戻すと。

「実は、ポリア殿。　貴女方の捕まえてくれた曲者ですが、どうもこの国の者では無い悪党組織の一味のようです」

ハソロの口調が、ポリアに向けて柔らかく成る。　やはり、嘗ての

上司の娘であり、この国の最高の貴族というのが理由であろうか。

ポリアは、その耳慣れない“悪党組織”と聞き、仲間の皆を見ながら。

「それは・・一体？」

「いえ、ね。　仲間に殺された曲者達も含めて、捕まえたあの者の服を脱がせましたら、首筋に異様な刺青が在りましてな。　模様とその在る位置でどの組織か特定出来るのですが。　この世界には、幾つかの悪事を請け負う組織が在るのですよ。　高額な金で依頼を請け、悪事をを成功に導く集団を貸し出すと言う悪い意味の人夫出しの様な形態を取っています」

イルガは、初めて聞いた事に。

「ハソロ殿。　それは・・・つまりは計画的な犯罪組織が絡むと言う事ですな？」

「そう言っていい。　問題なのはこの組織の内情で。　大抵の悪事に対しては、近場の街などに屯している組織所属の悪党集団に、指揮をする頭を派遣して遣らせるのだ。　だが、組織は非常に優秀で残忍な暗殺集団を抱え、常にしくじった集団などを暗殺する。　家族も仲間も諸共だ。　だから、捕まった者は直ぐに自殺を試みる傾向にある。　そして、今回も・・」

ポリアは、あの捕まえた曲者が死んだのではと思い。　身を少し前に出す様にして、

「もうっ、死んでしまったのですか？」

「いや、間一髪の所で阻止はしたそうです」

「“阻止した・・そうです？”」

ポリアは、その間接的なハソロの表現に首を捻る。

「実は、今回の事件は兵士と合同でしてな。　あの者の取調べですが、私は衣服を脱がして組織の者だと理解した所で終ったのですよ。　直ぐ後に、兵士の上役で兵士長のショーターが身柄を奪いましてな。　私の進言も無視して轡を外し自殺に・・・」

マルヴェリータは、何ともマヌケな事態だと呆れて。

「まぁ、救い様の無い・・・」

ハソロも、自分の力が及ばない領域に連れて行かれただけに悔しそうに。

「本当に、だ。　舌を噛んで傷つけてしまったらしく、医務担当の僧侶が魔法で治療したらしいのですが、どうも経過がよろしくない。　このままですと、様子を見た私からしますと命が危険です。　食事もさせられないし、詮議も無理。　ま、組織が関わっている事が解っただけでも収穫ですが。　それは、解決には繋がりません」

ゲイラーは、世界的な視野で悪事の集団組織が在る事を聞いて腕組みし。

「なぁ～んてこった。　あの冒険者崩れみたいな奴等も、その仲間ってか。　厄介過ぎるだろ」

と、唸る。　隣のソファーでは、システィアナも腕組みしてゲイラーの話にウンウンしている。

ポリアもまた、そんな大掛かりな相手が絡むと聞いて悩む格好で。

「依頼って誰が、どんな内容で出したのかしら。　目的が解れば、対処のしようも在るけど・・」

ハソロは、ポリアに指を向け。

「其処、其処なんですよ。　そして、私はその依頼の内容に関わるのは、あの紙に残された物だと思います」

ポリアは、まだ持っている叔父に書いて貰った物を取り出し。

「やっぱり、コレ・・・」

と、紙を見る。

「お持ちでしたか」

「はい、私も気に成って叔父に書いて貰いました」

「その記号とも暗号とも思える形の意味が解れば、事件は解決に近づくと思うのですよ」

ポリアは、４つの三角形のような物を見て。

「でも、犯人はどうしてこんな物を態々現場に残して行くのでしょ

うか？」

ハソロは、熱い紅茶の御代わりをしようとして、システィアナが代わりにしてくれるので御礼を述べた後に。

「恐らく、この意味を知る者を探す為だと思います」

ポリアは、自分と同じ考えをするハソロに。

「あ、やっぱり・・。　私もそう思います。　あの、ハソロさん？」

「なんでしょうか？」

ポリアは、自分の意見が間違いかどうか聞きたくて。

「ハソロさんから見て、アラン先生の襲撃はどうだと思いますか？」

紅茶を先に啜り、甘いケーキにフォークを伸ばしたハソロは。

「恐らく、連れ去る目的だったのでしょうな。　只、アラン殿が何かしたか。　或いは、嘘でも言ったか。　犯人達は、予定に無い殺しをしたのでしょう。　アラン殿の傷は綺麗過ぎるし、傷ついたアラン殿が裏手から逃げたのを放置してた。　いや、何か用事をした後で最後に止めを刺せばいいと思っていたのかもしれない。　とにかく、アラン殿の事は突発だったと思います」

マルヴェリータは、随分と言い切ると思い。

「確信有るみたいですわね」

ハソロは、麗しいマルヴェリータに肩を竦ませて見せ。

「ああ。　自信が有るよ」

システィアナは、座りながらピョンピョン跳び。

「すごぉ～いですぅ～。　ケイさんみたいでしゅ」

ケーキを食べる手を止めるハソロは、

「“ケイ”？」

ポリアは、話の続きが聞きたく。

「ケイは、私達が以前に出会った優秀な冒険者です。　それは、別にして。　その自信の根拠をお聞かせ願えませんか？」

「あぁ。　馬車の事は語ったからいいとして、先ずその紙ですよ。　3件目の事件まで、その記号の様な物が描かれた紙は、必ず死体の衣服に付けられていた。“コレを見ろっ”と言わんばかりにです。　しかし、アラン殿の襲われた時は、部屋の床に折った物を投げ捨ててあった」

ヘルダーが見たのが、まさにそれだった。　机の上に置かれたかもしれないが、自分が見た時は床の上に落ちていた。　頻りに頷くヘルダーを見たポリアは、

「では、他にも理由が？」

ハソロは、ケーキを残して皿を戻すと。　ポリアに向いて。

「有ります。　上げるなら、その残された紙が最初から続いた3件の事件とは異なった上質紙で、アラン殿部屋に有った物である事。　次に、部屋が異常に荒らされているのも今回だけの特徴。　もう一つ言えるのは、オッペンハイマー様の襲撃に大掛かりな人数で仕掛けた事や、手下と思われる者共を殺したのも初めてですよ」

聞けば聞くほどに良く解らず。　イルガは深読みし。

「丸で、最初からの3件起こった事件を誰かが真似たみたいにも思えるの。　だが、学者が今度は誘拐されるとなると、尚更解らん」

だが、ポリアはふと思い。

「あの、ハソロさん」

「ん？」

「殺害された3人と、アラン先生や叔父は面識が有る様でした。　特に、殺された3人とアラン先生は学者と云う意味でも面識が有ったとか」

「おお、そうだね。　確か、最初に殺された学者で骨董品屋を営んでいだモンテルローと云う老人は、アラン殿と似た年頃で、若かれし頃はモンテルロー氏がアラン殿をライバル視する関係でも在ったとか。　2件目の被害者である若者も、一時アラン殿を師事して勉学に励んでいた者の一人。　3件目の被害者である博物館館長などは、アラン殿やモンテルロー氏から研究を盗んで有名に成ったと噂される人物で、幾度か空き巣容疑で逮捕された経緯も有る人物です」

ポリアは、全ての被害者がアランと深い関わりを持つ者だと知って驚き。

「そ・そんなっ。　では、他に狙われるとしたらアラン先生と所縁の在る誰かって事では？」

しかし、腕を組んだハソロは深く溜め息を吐き。

「ふぅ～。　それが、ですな。　アラン先生の弟子で才能の有る他の者は、王都やアハメイルに行ってしまった。　他に古い付き合いや関わり合いを調べるなら、魔術師で学者だった男“メンファルース”と云う７０過ぎの人物が居たそうだが。　この男は、４年前に失踪してる」

「“失踪”・・。　事件ですか？」

ポリアの問う声に、仲間一同が神経を集めた。

ハソロは、腕組みを解き紅茶に手を伸ばしながら。

「それが、事件の被害者としてでは無く。　加害者として逃走したとも言える」

「逃げたんですか？」

ポリア達は、消えたダグラスを思い出して暗い思いを心に握る。

「はい。　どうやら、古代の暗黒秘術の研究に死体を用いていたらしい。　自分で手を下した訳では無いが、殺人を企む輩に手を貸し。

遺体の引き取り手に成っていた様ですな。　ゾンビの進化で、死んだ遺体を生きているかの様に復活させて使役する研究だったとか・・」

僧侶のシスティアナは、神をも冒涜する行いに怒り。

「そんな事はいけないんですっ。　ご遺体は、安らかにねむねむさせてあげなきゃいけないんですぅ！」

ゲイラーは、ウンウン頷き。

「システィの云う通りだ。　そんなのは、してはいけないのだ」

二人だけが胸を張り頷き合うのを無視したポリアは。

「その研究は、成功したのですか？」

「いや。　死霊ばかりを生み出していた様で。　御蔭で、踏み込んだ際にモンスターと戦闘になってしまい。　密告してくれた冒険者達が居なかったら、我々が危ない所でしたよ」

マルヴェリータは、魔術にのめり込み過ぎると研究に暴走する魔術師が多い事に憂い。

「研究魔術師の悪い癖だわ。　当たり前の事が解らなく為る」

イルガは、更にハソロへ。

「他には、居らぬのですか？」

「うむ。　ま、面識があるだの知人だのと云う間柄は居過ぎて調べが付かない。　学者が多いこの街だし、古代研究や歴史研究の中心都市だからな。　アラン殿を訪ねる者等、年にどれ程居るか見当も付かぬ。　他にアラン殿と親しいとするなら、彼の愛弟子の一人だっら学者のルフィムアイリーンと、中年の頃に彼へ師事を乞うた祭事・法事局の主任をしてるモハドゥニー氏ぐらいだと思う」

ポリアは、直ぐに返す剣の様に質問を返し。

「そのルフィムと云う方は？」

「それが、４年ほど前から行方が知れません。　モハドゥニー氏の話では、結婚したとか・・。　この街から出て行ったのかも知れませぬな」

ゲイラーは、

「しかし、ルフィム・・ん？　長い名前だな」

「あぁ。　彼女は、両親を天災で失った貴族の娘でな。　勝気な所も有るが、随分と綺麗な女性らしい。　今、年齢は２７・８とかで、アラン殿の弟子の中でも一番の才女だったとか」

ポリアは、非常にその女性が気に成った。

（あぁ、この街に居なければいいのだけれど・・・）

これ以上の被害者など、聞きたくはなかった。

だが。　この夜は、攫われた冒険者達にとっては、最後の夜であっ

た。

その末路をポリア達が知るには、少しの時間が必要だった・・・。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、あいがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪もがくままの一日≫

ポリア達とハソロが長く話し込む間に、遅くなって小雪がチラつく中でオッペンハイマー夫妻が戻って来た。　ハソロは、挨拶にポリアと共にオッペンハイマーに会い。　そのままオッペンハマイー宅に泊まった。

次の日。

屋敷の方で朝食を共にしたポリア達。　ポリアは、共に席を並べて食事するハソロに。

「ハソロさん。　アラン先生のお見舞いを私達だけでも出来ますか？」

アランが運び込まれた寺院病院は、兵士の警護管轄である。　オッペンハイマーをなくして見舞いに行けるか聞いてみた。

「難しいね。　アラン殿とオッペンハイマー様は重要参考人であり、兵士達が警護する最重要対象者だ。　あのショーターが、統括のフロイム殿に直接言ってそうした様でな。　見舞うのでも見張りが厳しい上に、時間の制限も有るだろうな」

「そうですか・・」

俯くポリア。　今日は、オッペンハイマーが都庁府に赴き、彼方此方で顧問や相談役を買っている部署に顔を出す予定で。　明日も忙しい。　ポリアとするなら、居なくなった冒険者達の事も心配だが。
今だに意識不明のままのアランが心配だった。

（・・・私、何を戸惑っているんだろう）

オッペンハイマーが言うに、フロイムの家はポリアの実家の親戚筋と深い縁が在り。　ポリアが名乗り出れば優遇は間違い無い。　しかし、フロイムをそうしてしまったら、ポリアの素性が公に成る可能性が有り。　それは、ポリアとしてはまだしたくない事だ。　あくまでも、一冒険者を貫いているポリアだから、周囲には最低限しか教えたくない。　統括をしているフロイムと云う人物を知らないポリアにしてみれば、自分の国内だから利用される恐れもあるのだ。

食事の終ったハソロはロビーにて、見送りに出て来たポリアに、

“一応兵士には言って見る”

と、残し。　ミハエルを伴って家へ帰った。

気も落ち着かないポリアの元に、フロマーに連れられたマシュリナが来たのは朝の食事後少ししてだ。　離れに戻ったポリアの元に、

兵士のおまけ付きでマシュリナが来た。　とても心配そうな困惑した様子で、ポリアに逢うなり間近まで来て。

「ポリア様、きっ・昨日・・家に兵士長と仰る方が来られました」

震える小声で言うマシュリナの顔を見るポリアは、ザワっとする不安感が身を走り。

「それで？」

と、話を聞く事に。

ショーターは、腹心のミズリーを伴って来たらしく。　訪ねる礼儀も無しに家に踏み込み、クシュリアントへ痛烈な言葉などを吐いてアルロバートの事について訪ねたらしい。　クシュリアントは、静かなままに受け答えをしたらしいが。　脅し文句で、立って歩けないクシュリアントを捕まえ取り調べる様な事も言ったと・・。

（おのれぇ・・、横暴にも程がある）

我が祖父の執事へ無礼な聞き込みをしたと云う事にカッと怒りを覚えたポリアは、兵士が何の話かを聞いてくるのに対し。

「彼方は、護衛が目的であろう？　私が身内と何を話そうが詮索の言われは無いっ。　大体、何時まで其処に居る」

と、貴族の態度を露に言い返した。

オッペンハイマーの遠縁で隣国の貴族とされてるポリアだから、ムカっと来た兵士だが下がらずには居れない。

ポリアは心配する仲間を他所に、マシュリナを連れて屋敷に舞い戻った。　膨大な本と研究資料に囲まれるオッペンハイマーの私室に入ったポリアは、スカーフネクタイを締めていたオッペンハイマーと夫の仕度の手伝いをする奥さんに会う。

「ポリアンヌに、・・マシュリナまでどうしたの？」

初めての二人の組み合わせに驚いた婦人が目をパチパチさせ。

「ポリアンヌ、何か有ったのかい？」

と、叔父が言って遣す。

「叔父様、クシュリアントを此処に連れて来ても宜しいですか？」

登庁の準備をしていたオッペンハイマーは、突然の話に驚いた。だが、ショーターの横暴な態度を聞き、準備の手伝いをしていた夫人が怒りを露にすると。

「構わない。　そうゆう事なら連れて来なさい。　フロイム殿には、今から私が掛け合う」

「叔父様、ありがとうございます」

ポリアは、また急いで離れに戻り。　仲間とクシュリアントを運ぶ為にマシュリナを連れて迎えに行った。

★★★

この日は、誰もが忙しくも悶々と心配ばかりが募る一日だった。

先ず動き出したのは、仲間が消えた冒険者達。　チームそれぞれで雲行き怪しく暗い空の下、街中を探し回る。

しかし、その街中も普段とは違っていた。　犯人の凶行で、馬車の急ぎ走行は規制され。　顔をフードなどで隠している人物を兵士が見掛けると人相検めをされる。　冒険者8名が行方不明と為った事が張り紙で店や酒場に張られ、情報提供が呼びかけられていた。厳冬の中でゆったりと時を刻むシュテルハインダーの街が、一変したように物騒な雰囲気に包まれた。

さて。　仲間を探す冒険者達だが、逆に事件の事を聞かれたり。話の種にと彼らを尾行する冒険者と公論するなどイライラするだけの一日だった。

一方で。

登庁したオッペンハマイマーは、真っ先に統括のフロイムに面会する。　自分の父親に仕えたクシュリアントを、紳士的な対応無く横暴に事情聴取したショーターへ厳重な抗議をし。　病気で動けない彼へ強引な取調べ等はさせないと、身柄を自分で預かると言った。

此処で解った事だが。　クシュリアントへの事情聴取が高圧的な尋問だと、ショーターの脅迫染みた暴言が外に聞こえており。　施しなど出来る財産など何も無いながらに、何かと周囲へ気を配っていたクシュリアントの奥さんを知る住民が苦情を訴えて来たらしい。

「オッペンハイマー殿、真に申し訳ない」

流石のフロイムも謝罪一つを添えてクシュリアントの身柄を預かる事に同意した。　間違って死なれては、フロイムも地位が危ないからである。

さて。　その頃に。

クシュリアントを連れ出そうとしたポリアだが、観念しているクシュリアントはこれを固辞した。　嫌がる相手を勝手に連れては行けないと思う一同だが。　ポリアだけは違った。　打ち棄ててあった物を組み合わせた様なクシュリアントの寝るベットの脇に座り、クシュリアントを必死に説得していたポリアだったが。　皆が言葉を失う中で、痺れを切らせたのかスクッと立ち上がった。

そして・・。

「クシュリアント、そなたに問う」

と、突然に凛とした貴族の口調に変わった。

「は・はっ」

クシュリアントもまた、ポリアの態度が生きていた頃のヨーゼフの如く思えて、ベットに身を起したままの状態ながら身を正して受け答える。

「クシュリアント。　そなた、我が祖父が初めて私とお前を対面させた折。　そなたへ、祖父ヨーゼフが何と言うたか覚えて居ろうな」

「はい。　我が孫ポリアンヌは、我が身と同じと・・」

「うむ。　クシュリアント、祖父は我が身と同じと言ったのは、私の言うことが自分と同じだと云う意味である事を理解してるはず、だな？」

「は」

「なら、何故に私に迷惑を掛ける？」

クシュリアントは、ポリア達に刃を向けた息子アルロバートを思い出し。

「息子めの事は・・」

と、頭を下げるのだが。

ポリアは、鋭く。

「違うで在ろうっ！」

その言葉の強さに、仲間もマシュリナも驚いた。　極夜が続く中で、ランプも点いて無い薄暗い部屋の中だが。　驚きポリアを見上げたクシュリアントの姿だけは、皆が影ながらハッキリ見えた。

「ポ・ポリアンヌ様・・」

弱弱しく云うクシュリアントへ、ポリアは。

「そなたの身を心配する叔父や叔母、そして此処に居るマシュリナ。

その心配を知り、急いで来た私の言いつけを無視するそなたは、主従に背く者と同じではないかっ」

「あっ」

小さく声を出したクシュリアントは、グッと下を向く。

ポリアは、クシュリアントの間近に踏み寄り。

「御主の身柄の事、祖父は叔父や母に頼んでいた。　その母への言伝は、私が持ち帰り伝えたのだ」

「へぇっ?!」

ヨーゼフが死んだ後に、何故か自分の身柄を引き取りたいと言って来たポリアの母親の事に驚いたクシュリアントだったが。　それは、ポリアにもしもの時には後を頼んだヨーゼフの意向だったのだ・・。

当時は妻を看病し、ヨーゼフへ最後まで仕えると移住を断ったクシュリアントだが。　今にポリアに言われて、その驚きは隠せない。

ヨーゼフの気遣いを知ったクシュリアントは、小刻みに震えている。

それを見るポリアは、

「良いか。　この命は、祖父に代わってこのポリアンヌがそなたに命ず。　・・・クシュリアント。　貴方の身の安全と、マシュリナの安全はこの私が引き受けます。　良いですね?」

最後だけ、クシュリアントに甘えていた頃の言い方に戻して云うポリアの言葉に、

「はい・・。　お任せいたします」

と、クシュリアントは折れて従った。

（嗚呼、何とヨーゼフ様と似た方だ・・）

クシュリアントの目には、貴族の口調で言うポリアと、仕事などで毅然とする生前のヨーゼフの姿が重なって見えてしまったのである。

まさか、こんなにも重（だぶ）るとは思わなかった。

態度を変え貴族の口調を使って喋るポリアの周りは、瞬時に空気が凛とする。　この様子を目の当たりにする仲間は、ポリアの中に真の貴族としての風格をまた見る気がする。

ゲイラーがヨーゼフを抱き抱え、ポリアが持って行く奥さんの位牌などを纏めた。

ポリアは、ヨーゼフの様子を気にするマシュリナへ。

「一緒に。　クシュリアントをお願いね」

「はい」

マシュリナは、クシュリアントが横暴な兵士の危険から救われたと安心した笑顔で返す。

その全ての有様を見ていたイルガは、ポリアの今の姿を主であるポリアの父親に見せてやりたい思いがした。　なんと立派に成ったか、である。

さて。

ハソロの指揮の下で、役人は冒険者達の捜索と事件についての聞き込みに奔走していた。　だが。　役人が幾ら聞き回っても、王立図書館などで見掛けられた姿を最後に、それぞれの冒険者達の目撃情報はプッツリ途絶える。　４人は、図書館で。　３人は、大型施設“キャタピコーム”（硬い殻の家）の彼方此方で。　チームに属して無い一人は斡旋所を最後に、である。

ただ、図書館での二人と大型施設での一人は、顔を隠したマントでスッポリ全身を覆った誰かと一緒だったと言う証言が聞けた。

ハソロがイエナスの他に二人の上級捜査官を指令に据え。　現場で聞き込む作業にイエナスも組み込んでやらせていた。　思い込みから、怪しい人物を勝手に推理して暴走しそうなイエナスを、下級役人達が頑張って抑えながらの聞き込みであったとか。

そんな中。　この街に紅いマントをした何者かを先頭に、６人の旅人が街の入り口に来た。　南側の首都へ延びる山道街道が雪掻きをする兵士達により開通し。　荷馬車や旅人と共に入って来たのだ。

★★★

当然、街に入る全ての門は検問対象で。

「そのマント達。　顔を改めさせて貰おう」

と、やや強気な兵士の言葉で止められた6人。

すると、紅いマントを纏う長身な者の後ろを行く黒いマントのやや低い背の者が。

「何で、兵士に偉そうな口調で言われなきゃ成らないんだい？　街に入るだけじゃないか」

と、女性の声で意見を述べる。　男っぽい口調で、少しトーンが低い。

同じく、白いローブとマントを着た後ろの者が、目だけ見える様相のままに。

「理由は在りますの？」

と、柔らかい物腰で言うのだが。　声は、男性なのか女性なのか区別の付き難いヘンな感じである。

兵士は、奇妙な者達だと思いながらも。

「今、シュテルハインダーでは学者を狙った殺人・誘拐事件が起きている。　事件の被害者も数多く、街の出入りには検問を敷いて対処しているのだ。　入る入らないに関わり無く、顔を検めさせて貰う」

すると、先頭の長身人物が。

「あらぁ～ん。　それじゃぁ～仕方ないわねぇ～」

と、身をクネらせて云うのだ。

聞いた兵士は、完全に野太い男の声が何故かオネェ調で喋るのに固まった。

「なっ・何者・・」

自然的に貞操の危機まで感じた兵士達。

紅いマントを羽織った長身の者が後ろを振り返り。

「みぃ～んなぁ、お顔を見せるわよぉ。　んふ」

その言葉で、６名が一気にフードを取った。　その顔を見た兵士達は、

「うわ〝ぁ～・・・うへぁぁ・・・うおぉっ」

と、一人一人がが上がり下がりを繰り返す口調に変わる。

先頭の長身な人物は、声を大きくして云うなら“明らかにっ！！！”男だ。　厳つく大きな面長の顔で、日焼けした浅黒い肌に骨ばった燻し銀の中年面。　なのに、アイシャドゥを厚みが出来る程にし、唇には塗った食った様なピンクのルージュをしている。

所が、その後ろには、パッチリとした目の１５・６の少女と云った

感じで、耳が鋭く目が黄緑色した亜種人の可愛らしい者と、釣り上がり気味の目に痩せた細身の強気な感じを見受けれる女性が居る。

「ん〃～？」

首を傾げる兵士達は、この一団が怪しい者なのか判断が出来かねた。

どうも受け入れがたい先頭の人物とその直ぐ後ろの女性らしい二人に対し。　更に後ろの三人は、女装した男性の様な男っぽい金髪の者や、４０近い年齢の大人びた黒髪の女性。　そして、澄み切った碧眼で高めの鼻にやや褐色の肌ながら色香漂う紅い髪の美女と云う取り合わせ。

（何だ・・こいつ等）

理解の出来かねる一団は、一部に見る所は麗しく。　また、別に目を向けると異界の住人の様な者達の集まりと云った具合。

そんな兵士達へ、先頭の明らかに男と思える者が体をクネらせ。

「強気なオ・ト・コ、嫌いじゃ無いわぁ～。　ね、通っていい？」

と、兵士の一人ににじり寄る。

「うわぁっ！！！」

寄られた男は仰け反り。　別の者が、

「ぼうっ冒険者なら気を付けろっ。　はい・入れっ」

と、許可を出す。

「ウコォン、入っていいってさ」

目の釣り上がり気味な男っぽい口調の女性が云う。

「解ったわぁ～」

と、ルンルンした足取りで街に入ろうとした先頭の男を見た、仰け反った兵士が。

「ウっ・ウンコだとっ？」

と、口走った瞬間。

歩き始めた他の仲間5名が立ち止まって。

「あ〝」

と、一斉に驚く。

同じく立ち止まった先頭の長身な人物は、後戻りして兵士の下に来ると。　いきなり兵士の胸倉を掴み上げた。

「うわぁぁっ」

驚く兵士に、

「“糞”じゃねぇっ！！！！　ウコォンだぁっ！！！　おんどれっ、二度と間違えるんじゃねぇぞっ！！！」

と、ドスの効き捲くった声で怒鳴る。

「すっ・すす・・しゅみませんっ！！」

裏返る焦り声で誤る兵士。

「フン」

雪の上に兵士を放るウコォンは、先ほどのルンルンした様子とは打って変わり。　ノッシノッシと大きな猛獣が歩いて行くが如く街に向かう。

後から続く仲間は、呆れたり首を傾げた様子で続くのだった。

最後。　顔は悪くないが、明らかに女装していると思われる金髪の白いローブとマントを身に纏う人物が。

「私達のリーダーが済みませんね。　代わって、謝罪いたしますわぁ」

雪に塗れた兵士は、震える唇で裏返った声のままに。

「はいっ・・ですわぁ」

他の兵士が、この兵士に近づくのを中断したのは何故だったのか・・。

行方不明と成った学者達の事を知ったポリア達が2日に渡って動く時、隠れた裏側では悪党達も暗躍していた。　見えない所で、犯人達はそれぞれに蠢いていた。

それは、ハソロを招いてポリアが話し込んでいた夜も更けた深夜の出来事である。

「いやぁっ！！！！　いやっ、止めてぇぇぇっ！！！！！」

暗がりの中で、女性の絶叫が木霊する。

「おいっ！！！　お前達は一体何なんだっ？！！」

直ぐに、低い男の声も上がった。

其処は、何処かの廃墟だった。　石窟寺院の様な古い遺跡が、打ち捨てられてしまった様な場所だろうか。　石の壁は所々崩壊し、表面が風化している様な様子で。　この寒い中でも、壁の多くは湿気で濡れて苔むしている。　そんな廃墟の広い一角に、冒険者らしき男女が転がされている。

「触らないでっ！！！　いやっ、いやよっぉ！！」

大声を上げる女性は、大柄の男に白いロープを引き千切られた。
少し丸みのある肉体の女性で、顔を見る限り３０代と思われる成熟し始めた良い顔だ。　下着姿を露にした雰囲気は、色艶も瑞々しい。
両手首をロープで縛られていて、そのロープは首にも回っている。
無理に体を動かそうとすると、首が絞まる様に成る拘束の仕方だった。

「キャーキャーうるせぇがなっ。　直ぐに殺してやろかぁ？」

悲鳴を上げたローブ姿の女性の衣服を毟る男が、ギラギラした目でナイフ片手に訛声で脅しを掛ける。　地方の訛りも滲むこの男、ゲイラーと戦った大柄のハンマー遣いだった。

一方で。

「縛られてンのに綺麗事言うな。　大した知識も無ぇ学者がよ」

と、垂れ目の真面目そうな皮のマントを纏った男性の前に屈んだのは、ゲイラーに細剣を弾き返された細身の悪党である。

縛られている真面目そうな男性は、この寒い中で裸にされそうな知識神を信仰する中年女性と訛声の大男を見て。

「止めろっ！！！　彼女だけは逃がすんだっ！！」

と、必死に大声で叫ぶ。

すると、細身の曲者男がスラりと細剣を抜いた。

「ホントうっせーなぁっ！！！」

苛立つ声と共に、真面目そうな冒険者男性の喉に細剣を突き付けた。

「はっ」

息を呑み、転がったままに身を硬直させた冒険者風の男性は、細身の男を見上げて。

「さっ・最初から殺す気で俺達を？」

髪が長く背中にまで届き揺れる細身の男。　壁に掛けられたランタンの明かりで見えるこの男の目は、非常に残忍な目つきだ。　垂れ目加減の目が、ギロギロと凶暴な光を宿すのが尚更不気味である。　黒い厚手の皮ズボンに、今はプロテクターなどを脱いで長袖の襟の在るシャツ姿だ。

細身の男は、真面目そうな男性を見下して笑い。

「あぁ、端っからそのつもりよ」

「くっ・くそう・・・」

その二人のやり取りを、手を止めて見ていた大柄の男。　屈んだ前には、手首と首を縄で縛られる黄色い下着を露にした女性が怯えていて。

「そ・そそ・・・そんな・・かっ神よ・・・」

と、涙を流した目で絶望的な縋りの言葉を漏らした。

その時だ。

「う〝ぎゃぁぁぁぁぁーーーーっ！！！！！！！！！！！」

ランタンの掛けられた柱と柱の間に見える暗黒の口の様に暗い階段の入り口から、寒い空気を切り裂いて絶命染みた男の叫び声が響いた。

「あ〝っ」

真面目そうな男性が怯える様に声のした階段の入り口を見て。　女性僧侶も目を向いた。

髪の長い細身の男は、声のした階段の方をニヤニヤと見て。

「あ～ぁ、カシラがキレた。　早速一人死んだな」

“死んだ”と聞いて、真面目そうな男性は憤りと無念の混じる顔を男に向け。

「私と彼女以外にも冒険者を攫ったのかっ？！」

女性僧侶のローブを引き千切った所で手を止めた大柄の男が、汚らしい笑みを浮かべれば。　歪んだ片目が不気味に細まり、見ている相手に嫌悪感を彷彿させる形相と為る。

「あ～、お前等の他にも招待したぜ？　男5人に、女一人。　しぃ～んぱいすんなぁ。　男は、用無しならすぅ～ぐに殺してやるださ」

と、云ってから。　大柄の男は、怯える女性僧侶を見て。

「ぐへへへ。　女は、すこぉ～し長生き出来るゼ。　用が在るのは、体の方だがンなぁ。　あはははは」

その嫌らしく薄汚い笑みを見て、辱めを受ける事を知った女性僧侶は恐怖でワナワナと顔を震わせて。　身動きの思う様に出来ない体を蠢かす。

「やっ・・・」

細身の男に細剣を突き付けられながらも、暴行を止めさせようと言葉を発した男性だったが。　声を上げた瞬間に細身の男も反応し、男性の喉笛を斬った。

「あぁっ！！！　そっ・そんな・・・いぃやぁぁぁぁぁーーーーっ！！！！！！」

大柄の男が迫って来た中で、激しく血を噴出させて呻き伏した男性を見てしまった女性僧侶。　必死に自分を護ろうとしてくれた同業者の末路が、こんなにも無残になろうとは。　そして、自分の肉体に伸びた手に対して出来たのは、泣き叫ぶ事だけだった。

階段の方からは、新たに若くトーンの高い男性の悲鳴が上がった。

「うぎゃっ！！！　助けてっ、し・しらな・・いぎゃぁぁぁぁっ！！！！」

拷問でも受けているかの様な悲鳴は、然程長くは続かなかった・・・。

ポリアがハソロと話した夜は、誘拐された者には地獄の様な夜だったのである。

★★★

その日は、オッペンハイマーが行政都庁府に出向いた日だった。
街に奇抜な冒険者達が来た昼過ぎから、昼下がりを過ぎた頃合だろうか。　寒い暗がりの牢獄の奥で。

「吐けっ！！　吐けぇぇっ！！！」

鬼の様な形相で、木の棒を手に折檻している者が居る。

「あぐぅ・・うぶぁ」

この凍える様な寒い中で、石の床に崩れたのはアルロバートである。
　上半身は衣服を着けて居らず、木の棒で殴られた打撲の痕が全身に付いて浮腫んでいる。　顔もまともな素顔とは云えない。　鼻血が飛び散り歪んだ鼻、口の両端から唾液と血の混じった物が幾度も乾いた跡を重ねてまた濡れてる。

木の棒を持ったショーターは、眉間にシワを寄せたままに見下ろし。

「フン。　強情な野郎だ」

狭い四角の部屋の中。　共に入り見届けているミズリーが。

「ショーター様、これ以上すると死にます。　午前に受けたフロイム様からの話では、こ奴の父親をオッペンハイマー様が引き取ったとか。　親子揃うなら構いませんが、一人で殺しますと後処理が難しいです」

これだけの拷問を前にして、顔色も声音も変わらぬミズリー。　どんな生き方をしてきているのか不気味な男である。

木の棒を脇に捨てたショーターは、

「フン。　“あのお方”から出来る事は全てしろと通達が有った。　コイツの狙った物が“あのお方”の求める物なら、狙ってる相手が解れば情報に成る。　それより、アッチの方はバレない程度にしておけと云えよ。　死体も一応は出せと」

「解りました。　ですが、御気を付け下さい」

「ん？　何がだ？」

「オッペンハイマー様の血縁は中央に多く、政府や王とも所縁の深い方々ばかり。　ハソロも古い貴族で方々（ほうぼう）に協力者が多い様です。　強引に事を焦（せ）いで、中央権力を呼び寄せる事に為りますれば、アノお方からのお役目が無になるかと」

ショーターは、ミズリーから話を嫌う様に視線を外し。

「解ってるっ。　だから、オッペンハイマーの屋敷に踏み込まないんだ」

と、云うと。　一人で苛立ち。

「しかし、本当に超魔法時代前の山岳王国の情報とはアレなのか？」

「・・・」

ミズリーは、黙って気を失ったアルロバートを見下ろした。

（まだ死んでくれるなよ。　お前の主が解るまでは、な・・・）

≪絶望との面会≫

そして、遂にその日は訪れた。　朝から深深と雪が降り始めた。風は無風に近く。　シュテルハインダーの街中を切り裂く様に分断して流れる川には、街中の雪解け水が流れ込み温度差で水煙が立ち上る。

冒険者の学者８名が行方不明に成ったと解ってから２日後。　街中を巡回警備する兵士により、街を二分する川岸に流れ着いた冒険者達の遺体が発見された。

川から雪の積もった土手岸に引き上げられた遺体と対面した冒険者達は、その変わり果てた仲間の姿に怒りを通り越した悲しみと衝撃を受けた。　男性は、酷い折檻と云うか拷問を受けた痕が全員に見られ。　女性の遺体は、まともに見られる物では無い程に暴行を受けた姿だった。

痣と傷だらけの姿に、ポリアやゲイラーなどは殺意を覚えた程だった。　ポリアとシスティアナは、枯葉や川のドロで汚れた遺体の顔を泣きながら綺麗に拭い。　死んだ仲間を悼み祈りを捧げる同業者と共に、システィアナは祈った。

「こ・・・こんな事って・・・嘘よッ！　ジーマン・・ジぃぃぃマぁぁぁーーーんっ！！！！！」

首を斬られて死した男の遺体に縋ろうとするリリーシャが、遺体の回収をする役人に止められる姿が煙る川面にぼんやり映る。

「クソッタレっ！！！　殺ッた奴等っ、絶対に許さねぇぇっ！！！！」

ブロッケンは、元の素顔が判らない程に殴られ傷だらけの仲間ヨレイムの遺体脇に泣き伏した。

チェインバースは、男なのだが暴行も受けた様子の見える痣だらけの従兄弟シビクの遺体を抱き上げようとして役人に止められ。

「嘘だぁぁぁっ！！！！！！　こんなのうそだぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！　シビクーーーっ、シビク死んじゃ嫌だよぉぉぉーーーーっ！！！！！！！！　わぁぁぁぁーーーっ！！！！！！！！！！」

と、もがき喚く声が、対岸へ見に来た冒険者達や街の人達にも居た堪れない程に悲痛な叫びと聞こえた。

現場に来たハソロとイエナスだが、イエナスは遺体を見て嘔吐してしまう。　ハソロとて、慣れていないなら同じだろうと思わずに居られない。

遺体を全て見回ったハソロは戦慄すら覚える。　長い捜査官人生の中で様々な死体を見て来たが、此処まで出来る相手を犯人とするのはそうにない事だと青褪めた。

（犯人は狂ってる・・。　嗚呼、これは異常だ）

冷たい川の中に浸かっていた遺体は、どれも硬直していた。　そして、遺体の中の一つに、また記号なのか暗号なのか、果てまた只の悪戯書きか解らない物の書かれた紙切れが在った。“丁寧に”とでも云えばいいのか、皮の胸当ての内側に入れられていた。　酷く締め付ける様に胸当てが装着させられているのに、兵士が気づいたのだ。

遺体を回収するように役人に命じたハソロは、その作業を見守っている。　其処に、下級兵士隊を束ねる副補佐の一人でショーターの腹心であるミズリーが来た。　ポリアと余り変わらない背丈の冷静と云うか、冷たい感じのするいい男である。

「ハソロ殿。　死体や事件関連の調査が纏まったら、こちらに連絡を貰いたい」

「解っている。　それより、都市の巡回をしている兵士方の不審者

等の情報が回って来ないのは何故だ？」

ハソロに噛み付かれた言い方をされた防寒具を鎧の上から纏うミズリーは、瞬時に斬り付ける様な目でハソロを見て。

「遺跡調査で我々などに仕掛けて来た者共との関連を調べる上で、我々はそちらと合同の任をしているまで。　学者を殺された事件はそちらの管轄だが、オッペンハマイー様が襲われた以上。　二つの事件が関連してるとも思える。　その為、確かな情報や捜査内容のみ、そちらへ報告するとショーター様がお決めに為った。　渡される情報だけに気を回せば良いのだ」

ハソロは、目の前に残酷な犠牲が出ているのにも関わらず。　こうも秘密を守る兵士達に怒りが込み上げる。

「そうか。　だが、これだけは覚えておけ。　御主達の不手際で何か起こった場合、ワシ直々に統括へ掛け合いお前達を捕まえ詮議する。　我々は、役人であろうが兵士であろうが調べる権限を持っているからな」

「フン。　お前などに調べられる覚えは無い」

と、踵を返すミズリー。

下級の兵士を束ねる隊長がショーターだが。　騎士の配下としてショーターが駐屯兵士を含めた一個大隊の兵士長に為ってから、兵士と警察局の溝は深まるばかりだ。　ハソロは、貴族でない上に固執した実力エリート主義のショーターを忌み嫌っていた。　だが、今の統括フロイムの息子へも剣術を教えるショーターは権威が強く。　騎士ですら無視出来ない所が有る。

（クソっ）

ハソロは、重要な証拠を押さえるショーターにイライラを募らせた。
残された物証や容疑者は、全てフロイムの頼みで兵士の方に預けて有る。

「うえ・・うう゛っ」

近場で吐き続けるイエナスの姿に、ハソロは目を向くなりに。

「この軟弱がぁっ！！！　まともに仕事が出来ぬなら帰れっ！！！」

と、怒鳴る。　だが、運ばれる遺体に体を戻すと、向こうの冒険者側から見てくるポリア達を見つけ。　静かに軽く一礼をする。

頷くポリア。

（済まない。　何も出来ずに・・・）

ハソロの声が聞こえて来そうで、ハソロの苦悩が伺えた。

ポリアは、このまま被害者の居たチームの冒険者達を斡旋所に戻しては、興味本位の情報収集で地元組の輩共に聞き捲くられる事が十分に理解出来る。

「ブロッケン、それに皆さん。　私が全員分の宿を借り受けるわ。
少し斡旋所からは距離を置いた方がいいと思う。　大部屋男女に分けて借りるわ」

４０人前後に成る宿代5日と云うなら、７・８千シフォンに成るだろう。　皆、遠慮するも。

「こんな時の為にかな。　私達が有名に成り出した最初の事件で大金貰えたの。　稼ぎは自分達でも出来るし、私達は宿代要らないから。　それより、噂が溢れて混乱すると役人の方が情報収集しずらいわ。　犯人が判ってる訳じゃ無いし。　少し休んで」

大型施設のキャタピコーム内に有る大衆宿屋にて部屋を借りたポリア。　即金で1万を払われた店側とするなら、ポリア様様だろう。

そして、ポリアは仲間を連れて斡旋所に向かった。　主に事の次第を伝える為だ。　ブロッケン達が居ないままに騒がれても困る。

だが。　斡旋所には、ポリアを新たな道に誘(いざな)う者が居るのだった・・・。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読ありがとうございます＾＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪それは彼からの言伝、新たなる先へ≫

ポリアは、斡旋所に仲間と共に入った。

「おぉっ、来たぜっ！！」

「話有るんだっ！！」

地元組の冒険者達１０名以上が、入って来たポリア達を見て群れる様に長椅子の彼方此方から立ち上がる。　奥に立つ主に向かって歩くポリア達の前に、彼らは下世話な褒め言葉を上げて立ち塞がった。

「伝説の冒険者さんのポリアさんよ、教えてくれよ。　現場で何が有った？」

「そうそう。　一流の冒険者だからって情報の独り占めは、いけな

いいけない」

「所で、ブロッケン達はどうなったんだよ？　川じゃ死体上がったんだろ？　どんなだった？」

次々と来る質問。

「・・さい」

俯き加減のポリアが、何かを言った。

「あ？？？」

最悪、脅しがてらでも何かを聞き出そうと考える輩共が、声を何人か合わせた。

その時だ。

「まぁ～ったく、薄汚い輩ってイヤねぇ～。　あ～、ウルサイウルサイ」

と、怒鳴ろうとしたポリアより先に誰かが声を発した・・。

ポリア達を含め、皆一同が声の方を向くと・・・。　斡旋所の主が居るカウンター近くに、数人の少し派手な井出達をした者達がテーブルを挟んで座っている。

地元組の一人である盗賊の様な無精髭男が向き直り。

「あぁっ？　カマ野郎が何言いやがるっ！」

と、ド強(ぎつ)い睨み目を向けて言葉遣いを荒げ始める。

だが。　ヌゥっと立ち上がったやや伸びた黒髪の長身な人物は、紅いマントを羽織り黒光りする鋼の鎧を纏った体をポリア達に向けて。

「誰が“カマ”だぁぁぁぁぁっ？！！！！！　俺は心も体も女だっ！！！！！　ブッた斬って遣ろうかぁっ？！！」

と、吼え上げた。

「なぁ・・」

その声と姿に驚いたのは、地元組の冒険者達。　筋骨隆々とした姿はゲイラーにも似ていて、その圧倒たる大声など迫力満点。　更に、顔は完全なブ男なのに、可愛らしく見せる為か頬に紅い化粧までしている顔。　確かに、“異種”な人物では有った。

「なぁ～んだありゃ、スゲ～の現れたな」

小声で呟くゲイラー。

「人・・・だろうな。　新しい新種・・ではなさそうな」

と、珍しくマルヴェリータの青筋以外に怯えるイルガ。

「・・・」

顔を背けて拒絶の意を示すヘルダー。

しかし、マルヴェリータは。

（ポリア、知ってる顔？）

（知らないわ）

（なんか・・、タイミング良過ぎる感じしない？）

（多分、待ち構えてたっぽい。　入って直ぐ地元組が私の名前云った時、視線みたいなの注がれる感じしたし）

実は、死体の上がった川で、ヘルダーが見られているとポリアに教えた。　確かに、対岸に人が集まり出した頃。　川沿いの道の上に歩くも黒いフードを被ったマントに身を包む何者かが歩いていたし。　大型施設に向かう前。　道に上がったマルヴェリータとヘルダーが、顔の判らない紅いマントの誰かに見られた。

ポリアは、気圧された地元組の隙に踏み込み。

「情報なんて無いわ。　ただ、誘拐された冒険者達が・・・遺体で見つかった。　それだけ」

地元組の悪党面した者や、ガラの悪い者が。

「嘘云えっ」

「そうやって情報を独り占めする気だろうっ？！」

と、喚くも。

ゲイラーは、かなり呆れた顔で。

「そんな重要な情報持ってたら、今頃役人に取調室へご招待されてるぞ。　頭が悪いな、顔以上に」

そう言ったゲイラーを見上げるシスティアナは、悲しみの目を潤ませていて。。

「ゲイラ～さん。　ケンカはイヤイヤです」

死体を見た上に、その遺体が信じられない程に痛めつけられていた事が、僧侶として以前にシスティアナにはショックだったのだろう。

珍しくゲイラーの言う事に釘を刺した。

ゲイラーもまた、システィアナの気持ちを知るだけに。

「あぁ。　スマン、システィ・・」

と、口を噤んだ。

ヘルダーやイルガは、威圧する様な憎らしい睨み目をしてくる地元組の者共に対し。　逆に憐れみの視線を向けていた。　喋れないヘルダーに代わり、イルガはポリアの後を追いながら。

「同業者が死んで、良くもまぁそうがっつけるモノだな。　それだけ情報をメシのネタにするんなら、犯人でも捜して来たらどうじゃ？　明日から生活の心配が要らない程に謝礼が貰えるかも知れんぞ」

其処に、マルヴェリータが。

「そんな勇気の在る事出来るなら、地元で屯なんかしないわよ。死んだ者の情報で金稼ごうなんて、死体漁りと同じだわ。　空気読めない上に、非常識・・・。　在る意味、犯人に一番近い人に説教だなんて、とっても勿体無いわよ。　イルガ」

言われた地元組の者共は、イルガとマルヴェリータにギラギラとした視線を送る。　堕ちても人、馬鹿にされれば悔しくも成る。

「何だとぉ？」

「言わせて置けばぁっ」

怒る地元組に対し、途中から口を差し挟んだオネェ口調の人物が笑い出した。

「アハハハハ。　可笑しいわねぇ～。　自分達から礼儀を弁えず死んだ同業者の情報を聞き出そうとしたクセに、言い返されると被害者ヅラぁ？　他のチームは、“次は自分達が被害に遭うんじゃないか”って思ったり。　打ちのめされて戻る被害者の居たチームを気遣って、あえてココに来てないチームも多いってのに・・・。　アンタ達って、芯まで腐ったゴミねぇ」

地元組の者達も、流石にこうまで言われると自分達の行動が恥ずかしくも成る。

「フンっ。　何だ偉っそうに・・」

「情でメシが食えるか」

「クソ・・・」

と、返す言葉を無くしていた。

ポリアは、大声を上げた人物に右手を上げて感謝しながら、主の立つ場に向かった。

「おう。　上に来な」

主は、ポリア達を4階に案内して話を聞いた。

行方不明となった8名の内、7名が惨殺と言っていい様子で死んだ事。　また、学者の遺体に紙で三角形の書かれた物が入っていた事。　そして、悲しみにくれる冒険者達は、キャタピコームの宿に泊めさせた事を次々に語ってから。

「マスター、少し見張って。　もしかしたら、怒りと悲しみで先走りするかも知れないから・・」

主は、ポリアが冒険者達を心から心配していると悟った。　その昔は、自分も駆け出しの頃は熱い冒険心を湛えていたのを思い出し。

「あぁ。　この上、あいつ等まで死なれちゃ敵わん。　だが、こう成ると犯人達をどう捜していいか解らないな。　まだ、あと一人遺体の見つからないのもいるし」

ポリアは、これ以上の遺体は御免だと。

「見つかるまで遺体にしないでよ・・」

と。　だが、言ったが語尾が弱くなって行くのは、やはり7人の遺

体を見てしまっただけに言い切れない心境が膨らんだ所為だろう。

主も。

「ま、生きてたらスゲーな。　逆に怪しい位だが・・、犯人に接近した者として生きてると有り難いかも知れん」

皆、主の言わんとしている意味は良く解った・・。

さて、1階に下りてみると、地元組の冒険者達の姿が見当たらない。

まだ居残るのは、口を差し挟んだ長身な人物とその一団。　その中で、立ち上がりポリア達を支援してくれたあのオネェ口調の人物がポリアへ向き。

「みぃ～んな出て行ったわぁ。　バツ悪そうにね」

ポリアは、その人物の間近に近寄り。

「さっきはありがとう。　私は、“ホール・スラス”のリーダーで、ポリア。　大声上げなくて助かったわ」

ポリアより頭一つ以上は背が高い人物は、紅いマントの前を解き、ゆったり紅茶を飲みながら頷く。

「ふぅ～、おいし～。　アタシは、“アマゾネシア”のリーダーでウコォン。　貴女方のお噂は、こっちに来て聞いてるわ」

そう言ったウコォンの後を繋ぐのは、紅い髪に碧眼の褐色肌をした美女で。

「私は、学者で剣士も兼ねてるレヴィックよ。　風のポリアさんに逢えるなんて光栄だわ。　事件が無ければ、お近づきに一杯交わしたい所ね」

紅の髪が背中や首筋に纏わる様な大人びた美女。　マルヴェリータと似た雰囲気が在るミステリアスな人物で、その豊満な胸元が見えているワーンピースのドレスの様な服装がまた色めかしい。

ポリアは、“学者”と聞いて。

「皆さんは、今日此処に？」

その答えは、尖った耳に黄緑色の眼をし。　ブラウンの髪が肩に凭れ掛かる可愛らしい少女の様な女性が受け答え。

「昨日のお昼よ。　ワタシ、ラファエル。　すご～い、ポリアさんと喋っちゃったぁ～」

ラファエルの無邪気な様子に、心が少し和んだポリアだが。

「レヴィックさん、学者なら気を付けてね。　今朝、誘拐された学者の皆が遺体で見つかったばかりだから・・」

褐色肌の美女であるレヴィックも頷き返し。

「えぇ。　昨日、他の冒険者達から聞かされたわ。　私を含めて、今だに街に残る学者は４人。　皆、警戒して仕事に向かえないみたいね」

其処へ。

「でも、アンタ達って犯人らしい冒険者崩れを撃退したんだろう？
相手の手の内ってどんなよ」

と、男っぽい口調で聞いてくる女性の声が。

「・・・」

ポリア達が眼を移せば、短めの黒髪をした眼の釣り上がり気味な女性を見る事に。

見られた女性は、

「あ、ワルい。　アタシはエアリノア。　仲間が襲われる危険も在るから、解る情報は欲しいのさ」

それには、ゲイラーが答え。

「俺は、ゲイラーだ。　よろしくな」

座ってるアマゾネシアの皆が頷いたり、手や持つカップを上げたりして返す。

ゲイラーは、少し変わったチームを見回しながら。

「相手の総数は不明だ。　だが、人数はかなり多いと思ってくれ。
自然魔法遣い、魔想魔法遣い、丸い針型のダガーを投げるスカウト能力に長けた奴に、ハンマーを使う大柄の野郎と、細剣を使う痩せた男。　今解るだけで、下っ端の悪党達とは少し違う奴等がコレ

だけ」

ウコォンは、仲間のレヴィックを見ながら。

「相手って組織的な多さねぇ～。　襲われたらあっぶなぁ～い」

ポリアは、直ぐに頷き。

「当たってるわ。　私達の捕まえた手下の一人を調べたら、世界的な勢力で組織的に犯罪を請け負う集団の刺青が在ったって言ってたわ。　それに、まだリーダー的相手を見てない。　冒険者と同じ技能を持つ者が、今言ったゲイラーの５人だけとは思わない方がいいかも」

アマゾネシアの面々は、実態として一度戦ったポリア達の話が生きた情報で在る事を知り。　同時に、相手がかなり大掛かりな組織集団だと言う事も理解した。

ウコォンは、ポリアに。

「貴重な情報ありがとう。　お礼じゃないけど・・、コレ」

と、手紙を取り出して差し出して来た。

ポリアは、手紙とウコォンを何度も見交わし。

「コレ・・は？」

ウコォンの正面に座るおっとりとした雰囲気で、中々上手な化粧を施す男性らしき人物が。

「わたくしは、自然神にお仕え致しますアチャランと申しますぅ。
実はぁ、わたくし達は雪山の山道街道で怪我した男女の冒険者に逢いましてねぇ。　その怪我をしたのが男性の方なのですが、貴女のお知り合いで、危険から逃げて来たと言いましたの。　そして、この手紙を届ける様に頼まれましたわぁ」

「・・・」

イルガやヘルダーは、声色は完全に男の良い声なのだが、何故かシスティアナの様に喋るアチャランと云う人物に絶句。　明らかに女装趣味な男性と思われた。

だが。　一同は、手紙の主は誰か直ぐに見当が付く。

「ポリア・・」

手紙を取らず動かないポリアの肩に、そっと手を差し伸べたマルヴェリータ。

「・・・追伸かよ」

ゲイラーは、複雑な思いに顔を歪める。

そんなゲイラーの手をシスティアナが触り。　そして、握った。

★★★

ポリアは、人気の居なくなった斡旋所の片隅に行き。　仲間と共にダグラスと思われる人物からの手紙を封から出した。　白い紙で封された手紙を開くと、少し震えた文字で綴られていた。

ー

ポリア達へ。

俺だ。　ダグラスだ。

この手紙を見る頃は、ポリア達も俺の犯した事を知ってると思う。
だから、告白する。

俺は、クリスティーと云う女と知り合った。　彼女は、或るチームから抜け出した女性だった。

俺とクリスティーは深い仲に成っちまったが。　彼女の居たチームのリーダーのカオフと、そいつの仲間のメズロって奴がクリスティーを取り返しに来てな。　暗い中、腕が似通って手加減出来ない中で、俺は二人を斬った。

どさくさでもう仕方なかったが、言い訳に為らん。　チームに迷惑を掛けない為にも、俺は逃げる事にした。　チームから離れた者の罪は、チームには問わないルールだからな。

だけど、この手紙はその事の告知じゃない。　俺達、逃げる途中の街中で急に襲われた。　盗賊の様な奴等だが、何人も居るし誰かに

雇われた奴等だ。

そして、街の南門前で襲って来た奴が、俺にこう言ったんだ。

“アルロバートを出せ。　お前達は、誰の差し金だ？　宝を狙うのは誰だっ？！！”

ってな。

どうやら、クリスティーと逃げる俺は、見張られていた上に女と秘かに逃げる曲者みたいに思われていた様だ。　一時的にポリアのチームに入り、宝とやらの情報を探る密偵の様に思われてた。　斬り合った相手の口振りを窺うに、そう思えて成らない。

ポリア。　あの遺跡調査で捕まえた男、だが。　確かに誰かに雇われた者で。　その男の身柄を求める輩が暗躍してる。

俺はもう戻れず。　ポリアやゲイラー達に手を貸せないが。　せめてもの罪滅ぼしに、この事を伝えて置くよ。　済まない・・ポリア。　ゲイラー、謝っても謝りきれんが、スマン

ダグラス

ー

手紙を読んだポリアは、何も知らされないままだった事に肩の力を

落として俯く。

行き場の無い怒りと親友の窮地を解らなかった自分の情けなさに、ゲイラーは握り拳を作って黙った。

だが、一同が言葉を失って黙りこくる中。　ポリアは顔を上げると。

「・・忙しいだろうけど、ハソロさんに逢わなきゃ。　冒険者同士の斬り合いは、喧嘩両成敗で役人さん任せに成るけど。　ロバートの事は無視出来ない。　今、思うと・・。　ロバートの体にも刺青が無いか調べて貰わないといけないわ」

陰痛な思いに沈むマルヴェリータだが。

「そうね・・。　クシュリアントさんの息子さんが、もしもオッペンハイマー様やアラン様を襲った相手と繋がりが有るのなら。　これは、事件解決の糸口に成るかも知れないわね」

イルガやヘルダーにしてみれば、ダグラスが抜けた経緯が解っても釈然としない。　だが、起こってしまったモノはどうしようもない事実である。

席を立ったポリアは、ウコォンの傍に行き。

「手紙、ありがとう」

ポリアを優しく見上げるウコォンは。

「恋人？」

そう言われたポリアは、どうしてか素直に首を左右に振れて。

「チームの一人だったの。　好きな女性と、・・一緒に成るみたい」

「そう」

「じゃ。　これから、事件を捜査してる役人さんに会いに行くから・・。　また、何か有ったら・・」

ポリアは、そう言い残して斡旋所を仲間と共に出て行く。

仕事を請ける雰囲気でも無くなってしまったウコォン達。　だが、ポリア達が出て行った後に、唯一ポリアと会話を交わさなかった物静かで俯き加減の年配女性が。

「どうして、用が在るのかしら・・・」

と、呟いた。

ウコォンを始めとした仲間一同は、ユマと云う名前のその女性を見る。

リーダーのウコォンは、

「確かに、ね・・。　用が在るなら、手紙を受け取りゆっくり読まずとも直ぐ行ってしまっても良かったハズだわぁ～」

胸元の肌蹴た加減が男目を惹きそうな美女レヴィックも。

「そうね。　もしかして、手紙を見たから行く必要が出来たんじゃ

ない？」

「かもねぇ」

ウコォンは、仲間の事を考えると直ぐに南に旅立つ事も考えた。
だが、自然魔法遣いのユマに因れば、明日から雪が降り。　その後にブリザードが数日に渡り断続的に続くと予測を聞いた。　ブリザードの中を、整備されたとは云え山間の道を通るのは危険である。
更に、もし其処で襲われたら・・・。

（残るのも・・行くのも、心配しかないわねぇ）

ウコォンは、懐の許す限りこの街に居る事を決めた。

≪悲劇の連鎖は続くのか・・・≫

ポリアは、今朝の死体発見で忙しい中だが、ハソロに直接会おうと警察局の施設を訪ねた。　一連の殺人事件で慌しい施設内に入ったポリア達は、見張りの役人に捕まり質問を受け。　それがハソロとの面会を早める結果と成った。

「お前達、冒険者か？　警察局に何の用だ」

ポリアは、施設内の刑事部内側の門前で、見張りをしている下級役人に問われた。　仲間の先頭に立つポリアは。

「済みませんが、私達はオッペンハイマー様のお屋敷に間借りさせて頂いてる冒険者です。　事件の事について、至急にハソロさんにお聞かせしたい事が出来まして、こうして参上致しました。　どうか、取次ぎ願いえませんか？」

「何ぃ？　冒険者風情が、態々ハソロ様に会わせろと云うのかっ。　この忙しい中で、誰が怪しいとも解らぬ中。　そんな事が出来るかっ」

困るポリア達だが、其処に通り掛ったのはポリアの事を警戒警備で見知っていた役人。　彼が話しを通して、ハソロはポリア達の来訪を知った。

取調室でも構わないと思っていたポリアだが。　ハソロは、ポリアの事情を知っている。　そのままハソロの私室へ通された。

「おぉ、ポリア殿」

私室に入れば、応接用ソファーやテーブル、絨毯に一応のソレと思える落ち着いたインテリアが配置され。　暖炉の前には、ハソロが立っていた。

「ハソロさん、ごめんなさい。　でも、至急どうしてもお伝えしたい事が出来て・・・」

ハソロに駆け寄るポリアの言葉に、ハソロは頷き。

「何の。　事件の事も含めて、貴女を邪険には出来ませんよ」

ポリア達を案内して去る下級役人は、

（珍しい・・。　あのハソロ様が美人だと優遇なさった。　あ、オッペンハイマー様の一族だからかな？）

と、思いながらドアを閉める。　厳格なハソロは、美人相手に下心で優遇などしない人物だった。　冒険者達の遺体が見つかった今日の昼前で、のんびり他人と会うなど在り得ない事であった。

さて。

「実は、ハソロさん・・・」

ソファーに座ったポリアは、先に遺跡の護衛調査で捕まえた曲者二人とアルロバートの事。　そして、その直後に殺された冒険者二人と、南門で殺害された冒険者風の人物の事件について語る。

「・・・」

ハソロの顔は、直ぐに捜査官としての厳格なモノに変わった。　全てを聞いた上で、手紙を受け取り。

「そうか・・。　だが、その実名の解ってる人物の詳細な報告を、私はショーターから受けては居らぬ。　なるほど、遺跡でポリア殿に捕まった者達と、学者達を襲う者達には不思議な共通点が在りそうだ」

と、ハソロは語った上で。

「ポリア殿。　貴女のチームのお仲間ですが、事と次第では指名手配を致しますぞ。　斬った相手が悪党の手先などで仕方の無い正当な防衛なら良いですが。　自ら進んで殺したと成るなら、これは捕まえる義務が発生致します。　そのアルロバートと云う人物と、一緒の曲者達が如何なる人物に雇われ、また如何なる用事で遺跡に居たり、お仲間だったダグラス云う人物とクリスティーと云う者を襲ったか。　隅々まで調べます」

ポリアは、何時に無い神妙な面持ちで深々と頭を下げ。

「ハソロさん。　アルロバート・・、いえ。　ロバートは、我が祖父の執事であったクシュリアントの子供です」

「なっ・・何ですと？」

「私とは、・・祖父から共に剣を習う間柄でも在りました。　そして、その父親であるクシュリアントは、今は叔父の屋敷に居ります」

「おぉ・・、何と云う事だ。　嗚呼・・この様な因果が巡るとは」

ポリアは、ショーターが酷い態度でクシュリアントに事情聴取をした事。　そして、ダグラスを襲った何者かが、執拗にアルロバートの身柄を求め。　また、ダグラスを誰かの密偵と間違えた様な言い草だった事を指摘。　その上で。

「ですから、ロバートの体に刺青が無いか調べて下さい。　それからロバートは、誰かに仕官の口利き

頼んだ可能性が在ります。　ですが、祖父の執事であったクシュリアントのお父上と云う人は、中央で不正を働き。　それが元で、クシュリアントは此方へ堕ち流れた身。　私の祖父の伝か、元々の実家が在った中央の伝以外に、クシュリアントの子供であるロバートが仕官の口利きなどを頼める相手は居ないと思うのです」

ハソロは、難しい顔で腕組みをし。

「ふむぅ・・。　確かに・・、不正で“都堕ち”した貴族に関わり合いたいと思う貴族は、恐らく殆ど居ないでしょう。　他に考えると・・。　例えば、その仕官の口を餌に、彼を事件に引き込んだとも考えられますが。　ポリア殿にお心当たりは？」

真剣な決意すら持ったポリアは、

「それは、解りません。　ただ、私は遺跡に関係が在るのではと思っています」

「アラン殿とオッペンハイマー様のお調べに成った？」

「はい。　ロバートがあの遺跡に近づくなと、私が地上部に残したダグラスとイルガに云ったとか。　あの遺跡と他の遺跡を長期に渡って調査すると、アラン先生が私達に新たな依頼として仕事を回したいとも仰っていました。　恐らく、ロバートを雇った人物が居るなら、あの遺跡についても関係が在る人物なのではないかと思えます」

「ふむ。　確かに、そう云えなくも無いですな。　しかし、そんな情報は、ショーターから一つも知らされて来て無い。　一体、何をしているんだか？」

此処で、ポリアは手紙を見てから此処に来るまで必死で考えた事を軸に。

「ハソロさん。　クシュリアントを強引に連れて行き、拷問すらも仄めかした兵士長のショーターと云う人物は、恐らく此処までの情報を得て居ないのでは有りませんか？　解っているなら、叔父や周りの貴族・高位の役人達に、ロバートの事を聞き回っていると思います。　ですが。　噂では、兵士は巡回警備と人相検めばかりしていると・・」

これを聞いたハソロは、大いに納得の頷きを見せ。

「それは、私も同意見だ。　ショーターの奴、極秘に調べて居る中で行き詰まり。　突破口を求めてヨーゼフ様の執事の方の下に行ったと思えます。　解りました。　私も、ポリア殿の情報を部分的に隠して調べてみましょう」

「お願いします。　それと・・。　ダグラスの事は、役人であるハソロさんに一任致します。　仲間ですが、人を斬った以上は、私達の個人感情で済まされる事では有りませんから・・・」

そう言うポリアの顔・・。　必死なまでに何かを堪える様子でもあり、決意をした様な顔でもあり。

（ふむぅ・・、余程に仲間思いならしい）

ハソロは、ポリアの心情を慮り、その苦悩を悟る。　もし、自分の身内か配下の者に同じ者が出たら・・。　実際に経験するだけに、まだ若いポリアが悩むには大変な事だと思えた。

さて。　一般兵士を束ねる兵士長は3人居るのだが、ショーターは？2で。　年明けの春前には、兵士総長にショーターが成ると噂される。

★★★

元々別の国で兵士をしていたと云うショーターを兵士にし、その護衛任務などで兵士長に抜擢したのがフロイムの様だ。　別の国の兵士であった後から、中央で兵士に取り上げられるまでのショーターの過去を知る者は居ない。

統括に就任する以前に、中央に出向いていたフロイム。　彼の護衛用人として雇われたショーターは、その剣の腕を買われて兵士に成り。　小隊長から大隊長に飛ばし就任し、連隊長として地方のシュテルハインダーに駐屯軍として派遣され。　そして、フロイムの統括就任と同時に兵士長に成った。　総勢数千以上の兵士が駐屯して。　ショーターの5連隊と他の小・中隊を含む一個大隊は、主に警戒警備・要人警護などを担当する。

下級兵士の長に成ったショーターだが、世渡りも中々心得て居る様だ。　今や、騎士並みの特別な一室を宛がわれる。　兵士長までは地方の財源から手当てが出るらしく、フロイムの息子や貴族の息子に剣術を教えるショーターは、何かと金が入る様で羽振りがイイら

しい。

ハソロが剣術に秀でた3名の配下を連れてショーターの元を訪れたのは、昼下がりの午後だった。　曇天の空から、ハラリハラリと白い雪が舞い落ちる頃で、寒さに厳しさが一滴加えられた頃である。

ショーターの部屋に有る暖炉は立派で、ハソロの部屋などに有る暖炉より一回り大きい。　その石の暖炉には、通常よりも多い薪がくべられていて。　壁には、幾つもの勲章代わりの旗が掛けられる。　床には高価そうな大きい絨毯、備わるデスクの黒光りが綺麗で趣が有る。　そのデスクを前に、ショーターは居た。　ナイフで紙を切り刻みながら、大窓を背に一人掛けチェアーに座ってハソロを待っていた。

（フゥ～。　ハソロのバカたれ、何しに来るやら）

前日に厳しく取り調べし過ぎた御蔭で、今日はアルロバートへの拷問を取り止めたショーター。　ミズリーとゾセアに兵士の指揮を任せたので、完全に暇に成っていた。

（はぁ～、脅し道具取り上げられたなぁ。　ど～するか・・）

一向に自分を雇う者を言わないアルロバートに、遂に業を煮やした彼は。　一度アルロバートの父親であるクシュリアントを詮議して。　その後何かいちゃもんをくっ付けては、吐かない息子の脅し道具としてクシュリアントを捕縛しようとしていた。　だが、その寸前でオッペンハイマーとポリアに阻止され訳で、今は非常に歯痒い心境である。

（全く、高々古代文字の解読に偉い時間の掛かるモンだ・・。　ハ

ソロとの面会を終えたら、アルロバート（野郎）にもう一度聞くか・・）

ナイフで紙を切り刻みながら、脳裏ではアルロバートをどうして遣ろうかと妄想していた。

其処に。　ノックがされ、

「ショーター。　話が在る」

何時もなら“殿”を嫌そうに付けるハソロが、今日は呼び捨てだった。

（なんだ？　今日は、奴さん偉くご機嫌斜めかよ）

ショーターは、面倒な事だと思いながらも。

「どうぞ。　鍵は開いている」

と、声を出した。

扉を開きショーターの構える部屋に入ったハソロは、ゆったりとした足取りながらショーターの向かうデスクの前に向かう。

それに合わせた様にショーターが。

「用件は早めにしてくれよ」

まだ４０前後どうかと云うショーターを見下ろす所まで来たハソロは。

「ショーター。　お前の元に、アルロバートと云う人物が捕われているな。　至急に用が在る故、会せて貰いたい」

「あ・・・」

ショーターは、完全に唖然とした。　フロイムを始め、方々には曲者の他言を言わない様に頼んである。　何の進展も無い今、アルロバートの事をハソロが知るのは考えられない。　遺跡の一件は、兵士に任すと命令を頂いてあったからだ。

完全に気を抜かれたショーターの顔を見据えるハソロは、

「おい、聞いているのか？」

ショーターは、想像もしていない展開に驚きながらも椅子に凭れ。

「これはこれは・・、捜査官の副総長殿が、領域無視の捜査とは・・」

と、嘲笑いはぐらかそうとしたのだが・・。

「ばか者っ！！」

ハソロの怒声がショーターの声を遮った。

「・・」

突然押し掛けられた上に、“ばか者”呼ばわりされてはショーターとて目つきが鋭く成る。

だが、ハソロは堂々とした姿で。

「いいか。　ワシ達が抱えてる事件の一つに、南門と街中で死んだ冒険者の事案が在る。　その犯人らしき人物が、女連れで早朝に襲われていたと云う目撃例が報告された」

「ほう・・。　俺達が遺跡から戻った翌朝に在った、アレか」

ショーターは、見つけたのが門を守る兵士だから良く覚えていた。

「知ってるなら早い。　実はな、その犯人と思われる者を襲ったのは、あの斬り倒されていた者の様なのだが。　争う際に妙な事を言い合っておったらしい」

「“妙”な？」

「そうだ。“アルロバートの居場所は何処だ”とな」

ハソロの口からその言葉が出た瞬間、ショーターはギョッとして。

「なっ・何だと？」

それを無視するハソロは、更に追い討つ様に。

「声を聞き、何やらいがみ合うその現場を見掛けたのは、郊外から朝市に物を売りに来る行商人と。　たまたま仕事に向かう途中の冒険者等２人。　迷惑に成りたくないからと、書面だけ密告箱に提出して逃げた様だ。　しかも、その人を斬って逃げた犯人とやらは、御主も知っておる遺跡へ護衛に向かったポリア殿のチームに居た、

ダグラスと云う剣士だそうな」

「っ？！！！」

ショーターにとってのこの話には、驚きの余り言葉を失った程だった。　あの遺跡に行く途中で会話を交わし、地上に残って曲者を発見したあのダグラスと云うのだから。

ハソロは、強気な眼でショーターを睨み見て。

「門を出る時にダグラスと云う剣士が襲われたのは、御主の受け持つ事案とぶつかるかも知れんが。　冒険者殺しは別件、痴情の縺れの様だ。　その関係が解り次第、事案の半分はそっちに移すにしても。　冒険者殺しの一件と今は一緒に捜査しておる故、納得の行く報告書を作る上でも面会はさせて貰うぞっ」

完全に不意打ちを食らった顔のショーターは、かわす言葉が見つからず。

「なっ・ならこっちに事件の事案をまっ・まま・回せっ！！　遺跡で襲われた件と合わせてしっ・調べるっ！」

だが。　一応は上に筋を通さなければ、案件を違う局部で移行など出来る訳も無い。　ハソロは、ショーターの焦りを見て攻勢を仕掛けた。

「大体、オッペンハイマー様が2度も襲われたと云うのに、何でその男の身柄及び証言の情報がこっちに来ないんだ？　今日に密告箱からの手紙を見て、オッペンハイマー様やポリア殿など方々に散々聞き込みして。　さっきやっとアルロバートなる者の情報が解った

わっ！！　おい、ショーターッ！！！　この捜査の遅れ、しっかり責任の所在を明らかにする上で、裁判部に報告する。　お前、場合によっては公安審議にも出廷して貰うぞ」

ショーターは、いきなりの話に青褪める。

「こっ・公安審議だとぉ・・」

怯えたショーターの理由は、至極簡単だ。　それぞれの街の統治を行うのは統括だが、唯一中央の所属領域なのが貴族・騎士の統括と裁判部である。

中央の王の勅命で動く騎士や貴族は、あくまでもその関係は統括や都政などとは“協力”と云う立場に当たる。　それぞれの街に住む貴族や配属された騎士を、その場所で何の役職に据えるかは統括の任命だが。　その権限は仕事に限ってで。　その都市に住んでいる貴族、そして駐屯兵の軍事的な指揮権を持たされる騎士は、また別の権限が在る。　ショーターも、そしてフロイムもコレが在るから、関係上ぶつからない様に仲良くする訳だ。

更に、裁判を開く裁判部は、特別な権限で統括も手出しは出来ない。　中央の勅命無くその権限を脅かそうものなら、即座に弾劾会議と弾劾審議が開かれて、その任を解かれてしまう。　つまり、国の監視の目の役割なのだ。

（コっ・コレはま・ままズイい）

古い貴族や騎士とも仲の深いオッペンハイマーの統括時代から、優秀な捜査官として。　そしてその顔の広い事でも有名なハソロを敵に回しては、今後が危ないと思い。　ショーターは、必死に心を落

ち着けると。

「そうゆう事なら、会せずには居れんな。　だが、今日は無理だ」

ハソロは、ズイっと前に踏み込み。

「何故だ？」

「うむ。　昨日までの取調べが祟ってしまったのか、あの者は体調を崩しての。　医者の話では、風邪と心労が祟ったのではないかと・・。　だから、明日以降にして貰いたい。　薬も与えたし、明日か明後日には取り調べも再開出来よう」

すると、ハソロはすんなり身を戻し。

「そうか。　それならば、御主の二の舞は出来ぬ。　今日は、引くとしようか」

ショーターは、何の事かと思い。

「何だと？」

すると、ハソロはニヤりと笑い。

「御主、そのアルロバートの父親だったか。　病床に伏せる歩けもしない人物を脅迫したらしいの。　アルロバート為る者を調べる過程で、御主の凶行も聞けたわ」

「んぐ・・」

ショーターは、悪い事を知られたと顔を歪める。　勢い余った行動だったが、作戦でも在った。　相手を追い込み、クシュリアントが憤り怒鳴り返してくるなら、何か侮辱された故にとか言っていちゃもんと付ける予定だったのだ。

ハソロは、完全にショーターの鼻っ柱をヘシ折ったと思い。　あえて普段の世間話でもするかの様な口調で。

「うふぁふぁ、住民からも統括部に苦情が行ったらしいの。　お前、易々と兵士総長に成れるかえ？」

知恵の回るミズリーが此処に居ないのは、ショーターには完全に誤算だった。

「では、面会が出来る様に為ったら連絡をくれ。　私は、今朝に上がった遺体の事も含めて忙しいからの。　早めに面会を頼むぞ」

ハソロは、そうショーターに言って部屋を後にする事に。

そして、部屋を出て行き際だ。

「おう、そうだった」

と、ハソロが言うので、まだ何かと思うショーターは身構えた。

「何だ？」

「オッペンハイマー様がの。　忙しい中で、自分の代わりにポリア殿や奥方様にアラン殿を見舞わせたいとの事だ。　私の許可も付けたが、一応言って置く」

自分の良い様にしていた領域を崩され、ショーターは顔を歪めながら。

「フンっ。　今だ意識不明のままのアランだっ、見舞いなどにケチを付けるかっ！　好きにしろっ！！」

怒鳴ったショーターは、完全に負けであった。

★★★

さて。　夕方に為り。

「ミズリー。　大変な事に成ったっ」

ショーターの部屋で、戻ったミズリーとゾセアが報告を終えた後。
ゾセアを帰らせて二人に為った所で、ショーターは少し前の事を全て語った。

「書面による密告ですか・・」

ミズリーは、ハソロの来た話にやや顔を曇らせた。

事件などの目撃情報を得る上で、警察局が街の彼方此方に作っている“密告箱”。　時折、下らない情報に混じって、とんでもない事

件が発覚する事もあって。　警察局は重宝している。

頭を抱えたショーターが。

「あぁ。　ハソロが今日に為って、急にその事を解ったのは、恐らく密告が在ったと云う証拠だろう。　そっと探りを入れた処に因れば、確かに遺跡の調査に同行したあのポリアとか言う美人のチームが、昼前に警察局の刑事部に来たらしい。　良く解らんが、ハソロが呼んだと云う話だ」

ミズリーは、雪で濡れた前髪を除け。

「ダグラスと云う仲間及び、遺跡でのアルロバートの事を聞いたに違い在りませぬな・・」

「多分は・・。　ミズリー、これからどうすれば良いか。　一応、アイツの拷問の傷跡は、魔法で消せる。　だが、まだ折れた骨などは完全にくっ付いてないし。　視る者がハソロなら、何をしたか解る。　ヨレヨレで、まともに動けないからな・・」

ミズリーからするなら、其処まで遣ったショーターが恨めしい。

だが、過ぎた事など気に掛けるのも時間の無駄である。

「・・・。　こうなったら、局所対処で行きますか？」

と、云うミズリーをショーターは見返し。

「殺る・・か？」

「あの者共に頼みましょう。　まだ数名街に居る冒険者の学者です

が、恐らく解読出来ますまい。　ハソロは、帰り掛け自分の馬車を住宅区内の大通りで止めて、其処から歩いて家に戻ると云いますから。　其処を襲えば、簡単でしょう」

「そ・そうかっ」

ミズリーは、此処で。

「ショーター様、ついでにですが」

「ん？　何だ？」

「えぇ。　明日のハソロの帰宅を遅らせる為に、一つ騒動を起しましょう」

「騒動？　誰か殺すのか？」

「はい。　病院で死線を彷徨ってるジジイを、です」

ショーターは、アランを殺すと聞いては驚きを隠せない。

「だが・・、アランなら解読が出来るかも知れんぞ？」

ミズリーは、至って冷静な面持ちで。

「それが、他にも見つかりそうです」

「ほ・本当か？」

「はい。　アランの愛弟子で、ルフィムアイリーンと云う娘が居る

とか。　アラン以上の才女として有名だったらしく。　数年前に結婚をして何処かに移り住んだとか。　明日にでも中央のアノ方の方に手配し、探して頂きましょう」

「おぉ。　漸く解読の兆しが見えたな」

「はい。　ですから、老い耄れは不必要です。　下手に目覚めても、此方の動きを気付かれるとも限りません。　どうやら、あの老い耄れは裏側に気付きそうだったとか。　不安要素の芽は、発芽仕立てでも摘み取りましょう」

ショーターは、深く頷き。

「お前に任せる。　上手く遣ってくれ。　ハソロが死ぬそれまで、俺は動かん」

「賢明なお考えです」

暗い外に雪が降る。　そんな様子が窺える窓の前で、ミズリーはショーターに一礼して下がった。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪絶望の淵に居ても、心を支える思い出≫

冒険者の学者達が遺体で見つかった日から、一夜が明けた朝だ。

「・・・」

オッペンハイマーがポリアを朝食に誘った。　だが、ブロッケンやリリーシャ達の仲間を悼む悲痛な叫び声が耳に、脳裏に残り。　憂鬱さが精神を支配し、ポリア達は食事が余り喉を通らなかった。特に、ポリアとゲイラーには、ダグラスの事が非常に暗い影を落としている。　追い討ちの様に・・・。

しかし、どんな不幸が続いても、朗報は来る様で。

「済みません」

朝の警戒・警備の交代で遣って来た役人の小隊長がポリアに謁見を求めて来て。　執事が承る。

「ポリアンヌ様、宜しいですか？」

「あ、ん？　何？」

初老の落ち着いた執事は、ポリアの脇に佇み。

「ハソロ様からの伝言だそうです。　アラン様のお見舞いは、“ご自由に”、との事です」

オッペンハイマーは、ホッとした顔で。

「おぉ。　ポリアンヌ、良かったね。　私も心配していたのだ。一々ショーターに断りを入れろと在ったが、これで大丈夫だ。　まだ、私は数日忙しい。　代わりに行って来て、様子を見て来て欲しい」

「はい。　叔父様」

外は小雪がチラついているが、風は少なく見舞いに支障は少ない。

其処に、奥方が。

「ポリアンヌ、行くのは構いません。　でも、残さず食べてからお行きなさい」

と。

溜め息を混じえた様子ながら、マルヴェリータが直ぐに。

「美味しい料理、残しちゃ悪いわね」

ポリア達は、静かに食べた。

さて、離れに戻り。　髪を普段通りに纏め。　白銀の鎧を着け、滑りに強い皮と鉄の組み込まれた白い具足を身に着けたポリア。　お見舞いと云う事で、鎧の下に着ているのは、紅いバロンズ風の刺繍入りの上着で。　下に穿くのは白いピッタリとフィットした白いズボン。　マントを羽織る前に、首に長いマフラーを幾重にか巻いて於いた。

（アラン先生・・早く目を覚まして頂けると嬉しいのだけれど・・。
このままだなんて・・、そんなの嫌だわ）

薄暗いの入りの様な部屋の中。　ポリアは、グラスランプの明かりを見る。

ポリアは、祖父が死んでからと云うもの行き場所を失ったかの様に人を避けた。　剣術をする時でも、イルガだけを従者にする。　時々、不意打ちの様に自分に結婚を申し込んだ貴族などが夕食の招待に馬車で来る。　一度、父親の親しい相手の息子だからとイルガと共に行き。　食事に眠り薬の様な物を入れられ、イルガと離れた場所に連れ込まれた事がある。　ベットの上に寝かされ朦朧とする中で、ポリアは貴族の息子に叫ぶ。

“おのれ・・、この舌噛み切って・・我が家と対立させてやるわっ！！！”

ポリアの強情な決死の姿に臆した貴族は、大慌てに成って医者を呼ぶ。　その緊急事態は、ポリアを探すイルガによって、薬を盛った若い貴族の父親が知り。　イルガと貴族の父親がポリアを助けてく

れた。

だが、それからポリアの男嫌いは拍車を掛け。　女だと舐めて言い寄る相手には、平然と剣を抜く様に成った。

結局、その男嫌いは今でも続いている様なもの。　好きなる相手は居ないし、言い寄られても何とも思わない。　Kと云う相手が現れたのは、強烈な刺激だった。　が、その刺激が強烈過ぎて、他が見えない。

男の居る所は、仲間以外で安心出来ると思える事は少なく。　同業者の羨望の眼差しや好意の目も好きには成れなかった・・。

だが。　こうして今此処に来て見ると、懐かしい人やアランなどの祖父と親しい人物が居て。　ハソロの様な人物が居て。　祖父が死に思い出しか無いと思って避けていたのが間違いだったと気付いた。　一人では無く安心できる人が生きていると実感した。　だから、我儘なのだろうが。　まだ、誰にも死んで欲しく無かった。　もっと喋って、一緒の時を過ごし、何かを共有したかった。

そんな思いを胸の中に湧かせるポリアの耳に、ドアがノックされた音と共に。

「ポリア、仕度出来た?」

「ポリしゃん、せ～んせお見舞いまいいこ～」

マルヴェリータとシスティアナの声である。

「うん。　今行くわ」

思えば、イルガと二人で出奔した様なままに流れて、ホーチト王国に行き着いた夕方。　昼間から飲んでマルヴェリータに絡む冒険者を、偶々斡旋所に出向いていたポリアが蹴倒したのが出会いだ。強引に掴み掛かられたマルヴェリータは、逃げる時に自分を囲んでいた酔った別の冒険者にぶつかって、剣の柄で手の甲を擦り血を滲ませた。　その手当てを申し出たのがシスティアナ。　マルヴェリータ以外は、皆がその日にホーチト王国の首都マルタンに着いたのだ。

（思えば、マルタやシスティとの出会いも平凡だけど、運命なのかな）

同じ男嫌いと云う共通点が在ってだろう。　熱い情熱のポリアと適当なマルヴェリータは、都度都度に渡って喧嘩しても、何故かお互いを気遣っていた。　死ぬほど飲んで語り明かし、愚痴をばら撒いてお互いの下着の趣味まで分かり合うからこそ、今では無二の仲間に成れた。

（絶対に最悪な終り方なんて嫌・・。　護れる物は護りたい・・・）

この一連の猟奇的とも云える凄惨な事件を野放しになど出来ない。　部屋を出るポリアの目には、最後まで全てを見ようとする気持ちが満ち始めていた。

「お待たせ」

食堂で待ってた仲間に合流したポリア。

その顔を見る仲間の面々は、気の失せた朝のポリアとは少し違って

いたと思えた。

≪闇に葬られ掛けた光は、ポリアの手に守られて≫

早朝と云う言葉がそろそろ似合わない頃。　街中は、暗いながらも仕事場へと出向く者や、雪が一気に降り積もる事を警戒し、買い物に出る人が居ると見込んでか早めに店開きや市場に物を運ぶ様子が窺える。

住居区の西側。　旧市街地との境の大通りが人の目の様に大型な石造寺院風の建物を避けてまた合流する。　すっかり雪に埋もれそうなこの建物は、“右翼院”と“左翼院”と呼ばれる斜めの左右対称の建物と、その二つの院を中央で繋ぐ“正面院“から成る大きな施設だ。

その施設の北側を遠めから見える公園内の林の中に、影の何者かが居る。

「あの施設か」

「そうだ。　入院する患者は、左翼院の二階から上に居る」

「殺る対象のジジイとやらは？」

「3階奥の個室だ」

「見張りは？」

「兵士二人だが、朝の陽が東に見える頃には交代で外す。　そうゆう風に引き継ぎをさせるから、その隙を狙え。　潜入するには、この服を着ろ。　医者や薬師が着る服で、職員が多いから気付かれないハズだ」

右の影が、左の影に衣服を手渡す。　衣服を受け取った影は、

「解った、面倒な人殺しはウザい。　金に成るヤツだけでイイ」

「だが、見つかった時は誰でもいいから数人殺せ。　騒げるなら、それに越した事は無い」

「解った」

「ま、一般の面会なんかはもう少し後だ。　人の出入りが多く成るまでは、待て」

「リョーカイ。　だが、今回はカシラも来るぜ。　冒険者7人殺してから、目覚めちまった。　夜にあの役人ブッ殺す為にも、俺や誰かが捕まっても困るから見張りに出張る」

「そうか。　だが、遣り過ぎるなよ。　泊まり込まれも面倒だ」

「いいじゃないか。　それなら、夜に騒ぎ起して、出向いて来る所を襲えばいい話だ」

「確かに。　だが、余り遣り過ぎをされても困るのだ」

「何で？」

「ショーターの行動が表沙汰に成らないのは、統括がフロイムだからだ。　だが、統括の指揮が不十分だと市民が訴え出てくると、その内裁判の部署が中央に連絡を取る。　もし、リオン王子などが出張って来たら、お前達でも敵うまい？　処理の未熟な上を引き摺り下ろすのは得策では無い。　仕事は、まだ序盤のままなのだ」

「ヘイヘイ」

「所で、一つ尋ねたい」

「ん？」

「お前達で、あのオッペンハイマーを護った冒険者達を殺せるか？　今では無いが」

「あぁ・・。　カシラが云うには、奇襲以外でまともに遣り合うなら広い場所が必要だってさ。　恐らく、総力戦に成るって」

「其処まで強いか？」

「らしい。　最近の有名に成り始めたチームの中じゃ、実力は随一

だとよ。　特に、デカい身体の奴と無口な奴は、もう一流の実力に踏み込んでるからな。　1対1（サシ）で戦えるのはカシラぐらい。　勝てる保障は無いとさ。　しかも、金に汚い所も無いし。　結束も強い。　更に、その知り合いは有力チームが多く。　隣の自治国では、あの“バブロッティ”や“スカイスクレイバー”の面々とも協力したって・・。　そうなると、下手に殺せば恨みを買う可能性が強いからな。　本当に必要に成るまでは、奴等に手出しはしたくないとさ」

「そうか・・。　オッペンハイマーの姪だか知らんが、面倒な奴等が来た物だ・・。　生じオッペンハイマーと親しいから、下手に手を出せば中央に応援を出されかねない。　・・・、解った。　とにかく、アランとハソロの殺しだけは頼む」

「へい」

影は、其処で話を切り。　闇に分かれた・・・。

ポリアの思い出と親しい人が居るこの街で、ドス黒い陰謀は渦巻いている。　その矛先は、またもやポリアの親しい者に向かって行く。

だが。　運命はどちらの見方でも無い。　ただ、近寄ったり離れたりと揺らめき動く波の様である。　そして、波の様な運命は近寄り出した。　オッペンハイマーとアランの襲撃の時の様に・・。

★★★

遠くの空が白む様な明るさを見せていた。　相変わらす雪は小雪ながら降り続き。　街には買い物などをしに出て来た人も見える。

「この間は馬車だから直ぐだと思えたのか・・。　意外に離れてるな」

ゲイラーは、住居区の外れまで来てそう思ったままに云う。

マルヴェリータは、大通りの道の真ん中を歩いて来て。　何度目かの雪を払う仕草をしながらに、横のポリアを見る。

「ねぇ・・、こんなに寒いのって在りなの？」

寒さ故か、女性陣の面々は顔が白い。　フードにマフラーをして目元以外は隠しているのに、寒さが染み込んで来る。　呼吸をする口を隠すマフラーが表面に氷の粒を浮き上がらせるので、雪がくっ付いて来るのだ。

ポリアは、寒がって動きが鈍い皆を見てから。

「此処は、北限の標高高い場所に在るのよ。　このぐらいの寒さなんて、まだ暖かい方。　年が明けた頃から、雪すら降らなく成る程に寒いわ」

「はぁ～、そんなに・・・」

黒いベールをマントコートの上に被り、白く長いマフラーを何重にも首筋や口元に巻いて。　別のマフラーをマントの下でドレスローブの上に巻くマルヴェリータ。　寒さに呆れたのは、この都市に来て何度目だろうか・・。

「ゆきしゃん、も～れつぅ～」

集められた道端の雪を触ったり、凍った石の路面を滑ったり。　無邪気なシスティアナは、今日も元気だ。　ポリアが元気に見えたので、悲しみを嫌って態とはしゃいで居る様にも見える。

そんな中。

ヘルダーは、イルガの肩を叩き。

「ん？」

と、見て来たイルガに通りのプレートを指差した。

「・・、旧・市街地？」

通りと区を隔てる石の壁。　その一部に、“此処からは、旧市街地”と。

イルガは、ポリアに近づき。

「お嬢様、あの旧市街地とは、最初の頃の街なのですか？」

ポリアとマルヴェリータが揃ってその壁に彫られた文字を見る。

「あら、古い街に“旧市街地”？」

と、マルヴェリータが言うのに対し、ポリアは。

「そうよ。　こっちは、此処に街が出来た最初の部分。　と言っても、お祖父ちゃんの話だと2番目らしいわ」

マルヴェリータは、その意味が良く解らず。

「“二番目”って、超魔法時代の後？」

「ううん。　その前」

「じゃ・・、更に昔に街が在ったの？」

「みたい。　その経緯は良く解らないけど、細い川に架けられた橋を渡って、旧市街地の更に西側に“本当の古い街”って名前が付けられた場所が在るの。　もう打ち棄てられて、年月の経過で朽ち果てる石の建物が一杯在る死んだ街よ」

「なんか、怖そうね」

「そうね。　私も見たのは一回だけ。　お祖父ちゃんが馬車で連れて行ってくれた時のみだったけど、怖かったわ。　風化と雪の浸食で色が変わってるまぁまぁ高い建物が、広範囲の彼方此方で崩壊してるんだもの」

イルガは“崩壊市街地”を思い。

「瓦礫の山ばかりなのですか？」

「違うわよ。　誰も住んでないだろうけど、形はハッキリ残る建物も在るわ。　話では、理由が在って棄てられたんだって・・」

「変わった街ですな」

「かも。　ま、温泉を街に張り巡らせて、雪に埋もれるのをなんとか防ぐ今ですら雪は積もるし。　古い棄てられた市街地（向こう）は、真夏でも街中に氷や雪が残るって云われるから。　異常に雪が降った中で住めなくなったんじゃない？」

「在りうる話ですな」

ポリアは、見えて来た寺院病院の影を見て。

「見えたわ」

住宅区のド真ん中。　旧市街地と新しい住宅地の狭間に在る寺院病院“双翼の宿木”だ。　中央の塔型の建物が医療施設の外来と、薬を処方して貰える場所に成り。　地下は、寺院の神々を祭る礼拝部分である。

大きい塔に成っているのは、その大部分が区分けされた温室で。中で薬草を鉢植えや庭園にて育てている為。　人口が増えるに従って、薬の不足が深刻化した。　その打開策として、この施設は作られたらしい。

さて、その中央院とも正面院とも呼ばれる塔型の施設から、鳥の翼の如く左右に北東・北西に伸びる施設が在る。　右の右翼院は、その全体が寺院で。　各神々を祭る礼拝堂やら宗教施設が在る。　一人旅の僧侶なら、宿を求める事も可能だし。　敬謙で派手やかな街の宿を嫌う厳粛な僧侶は、此処に宿泊する。　左の左翼院は、完全なる病人の収容と医師や薬師の詰め所であり。　施設で働く助手達の住み込める場所でもあるのだ。

外来の者を受け付ける頃。　正面院の門は開かれ、風邪をひいたり怪我をしたりする人が遣って来る。　外傷は、医師が診察して骨に問題なければ僧侶が魔法で治療する。　傷を癒すだけの魔法だから、病気などの診断は医師がする。　因みに、旅の僧侶などは、日雇いで治療に携われる。

ポリア達は、馬車が7台以上は並んで走れる広い道路を横切り、施設の在る雪に覆われた敷地に入り。　何十人と言う人が出入りをする大型施設の正面入り口に階段を上って向かった。

この施設は、この周辺では最大の医療施設でもある。　時には、隣国のスタムスト自治国から態々遣って来る人も珍しくない。　薬を分けてもらおうとする民間の薬師や薬屋も訪れるし。　また、逆に売りに来る者も居る。　午前中の開門時から昼前までは、一番人が多い時間帯なのだとか。

白い扉は押すだけで開く。　その中に入れば、寓話や神話をモチーフにしたレリーフが美しい柱を見せる大廊下に成り。　大廊下の先には、大型の暖炉で暖められたロビーに入る5つの階段が下っている。　直ぐに上に上がる階段が先にあり。　冷たい空気と暖かい空気の押し合いで冷気がロビーに入り憎い仕組みなんだとか。

「ふぅ～。　早くロビーに行きたいな」

皮の手袋を擦るゲイラーに、ヘルダーが呆れている。

他の客に戟槍が邪魔に成りはしないかと気を使うイルガが少し遅れている。

ポリアは、システィアナの雪を払い。

「あ～あ、手袋の外側凍ってるじゃない」

「ごめんなさ～い」

入る前に、雪は大廊下で落とすのが常識だ。　大廊下は、凍りにくいレンガの特別な白い物で、解けた水が染みて行く。　ロビーから先を濡らすと、掃除をする職員に睨まれるらしいと、叔父が言っていた。

その時。

正面院裏庭では、紺色のコートの様な上着に身を包み。　マスカーと云われるガーゼ状の布を逆三角折にして鼻や口を覆う男性が施設に入った。　眼の鋭い人物を見た裏庭で遊びだした子供の一人が。

「なぁ、あんな人居たっけ？」

「さぁ。　手伝いに来た薬師さんじゃない？」

「そっか」

と、雪を被った木に向かって走って行く。

「・・・」

紺色の衣服は、医師と薬師。　白い衣服は助手などの物。　僧侶は、洗ったローブを身に付ける事が義務付けられている。　裏口から入った男は、温室薬草園の一部に踏み込んだ。　暖かい空気で満たさ

れた室内庭園には、薬草を栽培・管理する野良仕事の様な土作業を黙々とする人たちが働いている。

「お～い、そろそろ傷薬の原料を上に上げてくれ。　５０束でいい」

吹き抜けの天井から、そう声が聞こえ。

「解った」

と、老人が上に向いて声を出す。

その作業をしている庭園の壁周りは、一段高い回廊だ。

（向こうか・・）

南側に人の雑踏が聞こえる。　男は、上目の俯き加減で奥に回廊を回りながら歩いて行く。

さて、ポリア達は階段を経てロビーに踏み込んだ　外来の人の問診をする個室型の受付が、広いロビーの左右壁側に在り。　正面奥には、傷を無料で治療する僧侶が控えた丸い部屋か在る。　天井は、紅いタイルの装飾が施された物。　床は、白い鏡のような絵の入った石。　壁は、ポリアの寝泊りする離れと同じレンガで、ロビーの左右には暖炉と休憩の出来る待合い場が在った。　壁の一回り大きい備わったグラスランプに灯る明かりと、天井に吊るされた大小のシャンデリアが昼間の様に明るく照らし出している。

左右の院に行く為には、奥の階段から行く必要が在るので。

「一応、兵士の人に声を掛けてから行きましょ。　あそこに詰め所

在るし」

ポリアは、仮設のカーテンの仕切りで囲まれるロビーの一角に作られた兵士達の休憩所を尋ねた。　ザワザワと人の出す音が広い広いロビーを木霊している中で。

「すいません」

と、カーテンの切れ目を裂いて中にポリアが入ると。

「ん？　何だ、早速来たのか」

其処には、背凭れの長い椅子に座るゾセアと、背凭れの無い椅子に並んで座る兵士2名が居る。

ムッとしたポリアは、冷ややかな目をゾセアに向け。

「当たり前でしょ？　襲われた次の日にお見舞いした以外、面会を拒否するなんて横暴だわ」

ゾセアは、鼻で笑い。

「フン。　警護の為だ」

「そう。　お仕事ご苦労様。　じゃ、行かせて貰うわ」

すると、ゾセアは。

「待て」

振り返る途中でまたゾセアに向いたポリアは。

「何？」

座るゾセアは、少し間を置いてから。

「今日は、交代が遅れる上に引継ぎで話が長い。　あの学者が心配なら、兵士の交代が住むまで居るといい。　命令ながら、警護対象者を一時でも一人にするのは気に食わん」

ポリアは、手際の悪い事だと思い。

「引継ぎの間に見張りを無しにするなんて・・、呆れた。　彼方の上ってあのショーターよね？　これじゃ叔父の身も危ないわ」

言われたゾセアは、ムカっと来たが。　確かに言ってる事は当たってる。

「解ってる。　だが、命令なんだ」

「いいわ。　兵士が入れ替わるまで居るわ」

ポリアは、それこそ心配だと直ぐにカーテンの外に出た。

さて。　あの男は。

（広い施設だ・・。　此処はロビーか。　クソ、手前の内階段か）

初めて来る場所なだけに、職員として動くには無用な気を使わなければ成らない。　間違ってロビーにまで出てしまった男は、向こう

の寺院施設から来た僧侶とすれ違い。

「お疲れ様です」

と、言われたのに対して無視をして戻った。

この差に、ポリア達は一足早く病棟に向かう回廊に入る。

一方で、男は職員用の廊下に入るも、裏方の事務や更衣室などが有る場所に出てまた行き方に苦労するハメに。

左翼院の一階は、家族や入院者が食事したり会話したりする広間や、慰安目的で芸を劇団が披露する開かれた場所だ。　部屋には窓が多く、明かりもちゃんと掛けられ明るい場所だった。　上に行く階段は3箇所に大きい階段が有り、ポリア達はこの院に入って直ぐに階段を上がる。

その階段を上がる中、マルヴェリータは。

「ポリア。　オッペンハイマー様のお屋敷では、絶対に傍を離れない兵士が離れるっておかしくない？」

イルガも。

「そうだな」

ゲイラーは、

「だが、不審者なんて簡単に入れないだろう？　俺達は兵士とオッペンハイマーの教授の許可あるからいいが。　他の家族なんて医師

とかと一緒で案内されてたし」

一般の入院患者が傷を治す為に寝泊りする二階に上がったポリアは、目の前を通る杖姿の怪我人などの通行を待ちながら。

「ま、とにかく後で叔父様に言いましょ。　私達は、只の冒険者なんだから」

ヘルダーは、確かにそうなのだが。

（でも、伝から言っても“只の冒険者”じゃないと思う・・・）

二階に来ると、明かりの量が少し暗く。　外がやっと白み始めた頃では、ちょっと暗い気がする。　だが、殆どの患者が動ける者ばかりで。　話し声や歩く音が廊下に響いていた。

この時、あの男は二階へ上がる階段を見つけた所。　挙動がヘンなので、助手に質問をされてしまった。

（クソババァがっ。　余計な事を聞かずに階段の有るとこ教えろって言うんだっ！！）

仕舞ったナイフには、血がベットリと付いている。　世間話好きの年配の助手にアレコレ言われ、イライラが募り殺す気に成った男。

人の来ない階段裏の物置に押し込み、刺したのだ。

ポリア達は、三階に上がり。　重態・重症などに区分けされた区画の中で、特別室とされる隔離個室のある場に向かっていく。　途中で、アランを看る医師に逢い。

「先生、アラン先生はまだ目覚めませんか？」

と、ポリアが聞けば。

「非常に危険な状態だね。　もう、６日程か・・。　年齢が年齢だからね、出血も酷く臓器の一部も傷付いた様だ。　今は、気が付くのを祈るしかない」

と、言われてしまう。

「そうですか・・」

医師は、アランの部屋の方を見て。

「そろそろ兵士が交代に下へ行くらしい。　水入らずの対面はその間ぐらいだ。　しっかり見舞って下さい」

「有難うございます」

ポリアは、こうして医師と別れてアランの寝ている部屋に向かった。

部屋とは、宿屋で云うなら二人部屋程の広さしかない。　それが、向きがそれぞれ別に区画内に点在している。　不幸も多い階だから、嘆く姿などを少しでも見せない工夫らしい。

「しかし、極夜の時期って薄暗いから気分も憂鬱に成るわね」

マルヴェリータは、壁に掛かったランプが小さめで、廊下が暗くてそう思う。

この時、男は三階に上がって来たのだが。

（何だ此処は・・、廊下が伸びるだけじゃないか）

窓側と壁側しか見えない真っ直ぐの廊下には、最も北西の階段から上ってきた為で。　各区画に曲がる入り口の見え難い方向からである。　元々が医療施設では無く。　別の目的で作られた建物であるのがその理由だが、この男にはどうでもいい事だった。

薄暗い廊下を気配を殺して男は歩く。

（ん？）

暗い曲がり角を曲がると、其処はトイレだった。

（違うっ）

男が苛立ちを強める頃、ポリア達は兵士に睨まれながらアランの部屋に入る所である。

「・・・」

見られたポリアは、珍しく。

「失礼だけど、何で睨まれる筋合いが有るの？」

その睨んで来た兵士は、先日ポリアの元にショーターが来た事を慌てて伝えに来たマシュリナを連れて来て。　マシュリナとポリアの会話を詮索した兵士だった。

「睨んではいない」

兵士は、見抜かれてムカついたのか。　前に向き直り言う。

「そ。　彼方達が不用意にアラン先生を一人にするってから、交代が終るまで部屋に居るわ。　正直、感謝ぐらい欲しいわね」

ポリアの一言に、更にムカムカし出した兵士。　だが、二人居るもう片方の兵士は、やや年配の人物で。

「そうか、なら丁度イイ。　おい、早く引き継ぎを済ませよう。俺、今日はカミさんと買い物行く約束有るんだ。　勤務時間超過してるし、もう帰りたいんだ」

ポリアに絡まれた兵士は、仕方無さそうに頷くと。

「解りました。　迎え来てませんが、行きましょう」

と、返す。

ポリアは、水入らずの時間を増やせたと思いながら。

「ごゆっくり」

と、部屋に入った。

兵士二人の足音が遠ざかっていく中。　ポリアは、数日ぶりにアランを見れた。　白い着替えの楽なローブ風の服を着て寝ているアランは、丸で昏々と寝ているだけで重症な人物とは見えない。

窓も無い部屋に散らばり、アランを囲んで見る仲間達。

医師が診察に来たばかりだからか、部屋には吊り下げられたランプに火が灯り明るかった。

「・・、ホント。　寝てるみたい」

マルヴェリータは、アランの顔に触れて見る。　人肌の温もりは有るが、やや冷たい。

システィアナは、アランの懐脇に膝間づいて祈り出した。

この面会が出来た時だ。　男は、ブツクサと小言を言う兵士と、宥める兵士の二人が廊下から下り階段に出てくるのを見て。

（アッチかっ）

男は、アランの寝かされている方向を理解した。　兵士が行ったのを確かめると、足早に廊下を兵士が出て来た方に入る。

（よし、もういいだろう）

さっき、助手の女性を刺したナイフを懐から取り出した。　鞘から抜かれたナイフは、鋭利で太さの有る刃渡りがやや長い物。　心臓を狙えば、易々と肉を切り裂いて到達する長さであり。　そして・・、ベッタリと乾き切らない血が付いている。

（・・何処だ?）

アランの部屋を探すこの男が、外側に掛けられた特別室の文字を見つけた時。　ポリア達は、アランの覚めない意識について話し合っ

て居た。　こんなに長く意識が戻らない人を見るのは誰もが初めてで、聞いた話だの昔の話などを引き合いにして居る。

その話し声を聞いた男は、

（チィ、誰か居やがる。　人数も多いみたいだな）

男は、薬師のフリをして近づこうと考えた。　もしバレたなら、誰かを人質に取る事も視野に入れて・・。

だが、此処がポリア達と悪党達のイニシアティブが一瞬逆転した時だった。

「薬の時間です・・・」

男が部屋に踏み込んだ。

（あっ）

何と目の前に居たのは、ポリア達。　しかも、全員が男を見たのだ。

男の殺気を秘めた目を見たポリア達は、何か不気味な雰囲気だと警戒した。

男が、

「投薬しますので、退室願えませんか」

と、何処か俯き加減に云うのに対し。

ポリアは、直ぐにシスティアナを庇う様に男の前に出て。

「この人は、意識が戻ってないのよ？　何の用意も無しに、どうやって投薬するの？」

この話に、男はグッと顔を擡げてポリアを凝視する。　この雰囲気が余りにも不自然で、ゲイラーとヘルダーがポリアの脇に向かう。

更に、廊下から吹き来る弱い風に乗り、男が背後に隠し持つナイフに付いた血の臭いがポリアに届いた。

「っ？！！」

ポリアは、ハッとした思いと剣を抜くのが連鎖反応の如く直結した。

「ポリアっ」

驚くマルヴェリータだが。

ポリアは、目を凝らし男を見る。　ポリアの剣は、男に向けられていた。

「貴様っ、何故に血の臭いを連れて来たっ？！」

鋭い質問の声は、男の使命感をブチのめした。

（クソっ、これじゃ無理だぁっ）

「あっ！！」

皆の前から男はバッと身を翻し、廊下へと飛び出して行くのだった。

驚いたポリア達。

「イルガっ、アラン先生をっ」

ポリアは、言葉を残して後を追う。

「なってこったっ」

アランを殺しに何者かが来たと察したゲイラーとヘルダーが後に続き。　システィアナは、イルガの元に。

マルヴェリータは、廊下に出ながら。

「タイミング良過ぎるっ。　交代の情報が漏れてたんだわ！！！」

と、叫んだ。

≪現れた悪は、終わり無く暴れて≫

ポリアがアランの命を狙う殺し屋と対面した時である。　一階のロ

ビーでは、ハソロと部下3名が来ていて。　兵士の引継ぎで見張りが居なくなるとゾセアから聞いていた。

「貴様達はバカかっ?!　そんな杜撰な警護が有るかっ」

ゾセアは、ぞんざいな態度で。

「大丈夫だ。　オッペンハイマー様の所に滞在する冒険者が面会に来ている。　彼らが交代の引継ぎが終るまで居るさ」

ハソロは、ムカムカした顔を充血させ。

「何だとっ?　民間の者に頼ったぁ?　もし何か在ったら、彼らが防いだとしても叱責物だぞっ!!!　そんないい加減な命令を突っ撥ねる意気地も無いのかぁっ?!」

ハソロは、ポリア達を信用していない訳では無かった。　何か起こり、それが最悪な事態の場合には、ポリア達を一時的にでも拘束しなければ成らない事態に陥る可能性も在る。　ポリアの身の上を知るだけに、そんな事など考えたくも無かった。

ハソロは、部下を連れてポリア達の居るアランの病室へと向かう。　左翼院に踏み込んだハソロは、其処で引継ぎに戻る兵士二人とすれ違う。

（本当にノーガードにする気か。　ショーターめ、昨日から連絡を遣さない割に、ミズリーを遅くまで話し込んだり。　ミズリーが早朝に朝に消えたりとチョロチョロ動きよって・・。　まさか、ショーターも事件に噛んでないだろうな?）

長年捜査官を遣って来たカンが、嫌な気配を感じ取る。　こうゆうカンが働く時は、決まって大事に成ったり被害が拡大したりするのだ。

さて、男の正体を見破ったポリアは、素早い足で逃げる曲者の男を二階にまで追って行った。

「どけぇっ！！！　邪魔だっ！！」

逃亡する男は、その手に握るナイフを平然と遣う。　廊下を走りながら、歩く患者や助手などを突き飛ばしたり、首筋を斬って殺したり。　何時もならさめざめしい外を見ながら、ぼんやり時間を経過させる病棟の左翼院が、この男の逃走で地獄と化した。

「あっ、大丈夫ッ？！　誰かぁっ、怪我人をっ！！！」

ポリアは、近場に倒れた男性の首筋から吹き出る血を見て、別の患者の怪我の具合を見ていた医師に付き添う僧侶に叫ぶ。

「何事だっ？！！」

驚く医師に。

「殺し屋が入って来たのっ！！！　とにかく治療をっ」

と、叫ぶ時。

「あ・ぐぶぶぅ・・・」

血を吐いて男性は死亡する。

「ポリアっ！！」

後から追い付いたゲイラーとヘルダーは、死んだ男性を見て。

「クソっ！！！　またパニックを起して逃げる気かぁっ！！！」

と、怒りを覚える。

ポリアは、このまま追っては人が傷付くだけだと。　人質を取られてしまえば戦えないと思い、外に出た所を攻めようと考えた。　ロビーには兵士も居るが、易々と討ち取れる相手では無いと思える。

「先生っ、裏からロビーや外に出る場所はっ？！！　外で討ち取りますっ」

遠くから、別に被害に遭う誰かの悲鳴が聞こえる。

医師は、廊下に飛び出し。

「途中の階段から下に降り、事務室の中と更衣室の中に脇と裏手に出るドアがあるっ！！」

ポリアは、ヘルダーを見て。

「事務室から外に。　ゲイラーは、更衣室から脇に出てっ」

二人は、こうなると理解は早い。

「オーケーっ！！！」

吼えるゲイラーに頷くヘルダー。

だが。　逃げる男は容赦無く患者を傷つけ。　アランを殺せなかった鬱憤を晴らす。

「クソっ！！　邪魔なんだよぉっ！！！」

流石は殺し屋の腕はいい。　走り抜け様に斬る動きや、突き飛ばした人を飛び越える仕草は俊敏だ。

「うわぁぁっ、何だありゃっ！！！」

「ヒィッ！！　人殺しぃーっ！！！」

「部屋に入れっ！！」

「殺されるぞっ！！！」

二階の廊下は、大パニックと成る。

逃げる人の中、怪我をした冒険者の男性が男に立ちはだかり。

「待てぇっ」

と、出た所で。

「ウルセイがぁっ！！」

逃げる男は、立ちはだかった背の高い男性の腕を斬り裂き、ヨロめ

いた所に心臓へ一突きを入れた。

「う〝ぐぅぅ・・」

逞しい肉体の男性だったが、成す術も無いままに崩れる。

（そろそろいいか）

男はトイレの在る踊り場の窓へ、ズボンのポケットから何か黒い石の様な物を取り出して投げ付ける。　窓が割られ、左翼院の側面に広がる施設の敷地に何かが飛び出した。

“パァーン！―

飛び出した物は、空中で破裂して甲高い破裂音を響かせた・・。

さて。　急に廊下が騒がしく成った所に、丁度ハソロも上ってくる。

「何じゃ？　何が起こってるんだ？」

“助けてくれ”だの“殺される”だの騒ぎ下に逃げる患者が居る。

ハソロは、大慌てで走って来た女性の助手を捕まえ。

「おいっ、どうした？」

掴まれても逃げようとする小柄な中年女性が、もう慌てふためくままに。

「あっ・ああっ・ひっひひ・人殺しっ！！！」

ハソロは、部下の3名に。

「おいっ、行くぞっ！！」

と、奥へ。

この時。　声を出さずに一人で男を追うポリアは、甲高い破裂音を聞いて。

（何っ？）

だが、怪我をした人の呻きも聞こえる。　再び追うポリアだが、その異常とも思える無差別な遣り方に信じられない。

トイレと階段の在る踊り場から下に向かおうとする男を見つけたポリアは、一気に走り寄って斬り合いに持ち込もうとする。　だが、男が少し手前でポリアに脇目を向けながら一階へと消える。

（あぁっ、もうっ！！）

悔しい気持ちのままに踊り場に来ると。

「ポリア殿っ」

ハソロの声が。

「あっ」

向こう側から走って来たハソロは、男の降りた階段を見て。

「今のが犯人かっ?!」

「はいっ、アラン先生を狙って来た相手ですっ!。　でも、身のこなしが素早いっ」

と、ポリアは階段を駆け下り出す。

ハソロも慌てて後を追いかける。

そして、この時に。

ロビーへ踏み込んでいた何者かが、兵士の居る場所に近づいていた。
黒いマントをすっぽり被り、コツ・・コツ・・と金属の具足の音を鳴らして・・・。

ゾセアは、やっとハソロと入れ替わる様に仕切りの幕を開いて入って来た兵士二人を見て。

「遅かったな。　では、引継ぎを・・・」

と、言い掛けた所で。

「うわぁーーーっ!!!!　人殺しが現れたっ!!!!」

と、第一声がロビーに木霊し。

「逃げろっ!!!!　此処から逃げろぉぉーーーっ!!!!!　人が殺されてるぅっ!!!!」

と、更に別の男性の声が上がった。

ゾセアは、低い可能性だと思いながらも危惧していた事が起こったのかと席を立ち。

「何事だぁっ？！」

と、言う。

兵士の戻って来た二人が驚き、直ぐに踵を返して幕を開いて外に出ようとした瞬間だった。

「おぶぅっ！！！」

ポリアに呆れられた若い兵士は、熾烈な激痛に言葉を吹いた。　自分が突然自分で無くなる様な意識が目覚める中で、視界には幕を貫いて何かが自分の腹部に突き刺さっている。

一緒の年上の兵士が、

「おいっ、どうし・・」

と、声を掛ける途中。　仲間の兵士の腹に剣が突き刺さっているのを見る。

「あ〝ぁっ！！」

一方で、立ち上がったゾセアや待機していた兵士も、交代に戻った若い兵士の背中から剣先が飛び出したのを目の当たりにしていた。

「な・何者だぁっ？！！！」

ゾセアは、剣を引き抜き叫んだ。

悪党達は、こうしてポリア達の前に再び現れた。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ポリア達の出会い書いたか忘れましたので、一応載せてみました＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾；

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪怒れるポリアの剣　雄々しきゲイラーの奮迅≫

遂に、悪党達が姿を見せた。

アランの命を狙った細身で身動きの素早い男を追うポリア達は、正面ロビーに出て驚いた。

「嘘っ！！　こ・こんな・・・」

もう、外来で来た人や外に逃げ出した患者などは、外で騒いでいる。

だが、ロビーには、医者・患者・僧侶の斬られた人々が大怪我をして呻いている。

また、別に目を移せば。　ゾセアの居た兵士達の休憩所では、仕切りの幕が床に落ち。　ゾセア以外の兵士の遺体が3体転がっていた。

「なっ・・なんじゃこれはっ！！！」

ポリアの後から出て来たハソロ達は、その凄惨な現場に唖然とした。

ポリアは、外に出る出口へと向かいながら。

「ハソロさんっ！！　寺院の僧侶と連絡を取って怪我人をっ！！！」

「解ったっ！！　ポリア殿も無茶はイカンぞっ！」

ハソロは、人命が一番だと寺院に配下の者を連れて向かう。　一人二人の僧侶では間に合う怪我人では無かったからだ。

さて。

混乱が増す中で、医者や助手に聞きながら裏手の外に出たゲイラーは、施設の左側面に出る。

「くっ、子供がいやがる」

外には、庭の敷地内で遊んでいた子供達が、建物内から悲鳴を上げて逃げだす大人達を見て固まっていた。

ゲイラーは、右回りで大通りに向かう中。

「怖い奴が暴れてるぞっ！！　逃げるっ！！！　他の建物に逃げろっ！！！　見つかったら殺されるぞっ！！！」

と、叫びながら子供達を逃がす。

“わっ！”っと子供達が逃げる時、建物の向かい側や彼方此方から悲鳴が上がる中。　逃げる悲鳴とは異質な声が在った。

「うひゃひゃっ！！　逃げ惑えーーーっ！！」

と、歓喜に似た声が上がって。　ゲイラーは、耳に聞き覚えの在る声だと見てみると。

（ん？　アイツ等っ！！！）

逃げる人々が大通りを走って居る中で、その人々を見ながら傍観を決め込み。　逃げ惑う人々の様子を見て喜んでいる二人。　薄暗い曇りの早朝の様な中だが、影に成らない場所に居た二人を見たゲイラーは、アランの家に押し入っていた悪党の二人だと解った。

二人も雪を強く踏む足跡に振り返る。

「あ〝っ！！」

驚くのは、背の高いハンマーを背負う男。

「チィっ、また出やがったっ！！」

と、舌打ちするのは、細剣を使う細身の男である。

「テクト、此処でやっがぁ？」

ハンマー遣いが、細剣遣いの男に言えば。

「エブール、当たり前だろ。　まだ、イーナムの野郎が逃げ出してねぇぇっ！」

ハンマー遣いエブールと、細剣遣いのテクトと云う二人は、ゲイラーを迎え撃つべく武器を抜いた。

ゲイラーの脳裏に、苦悩するポリアや泣いていたシスティアナの事が浮かび。

「お前等ぁぁぁぁっ！！！！　落とし前はキッチリつけて貰うぞっ！！！！」

と、気合いの大声を上げて大剣を手にした。

「う〝かぁ～」

「ふぅ・・」

テクトとエブールは、その裂帛の一声に身体へ怯えを感じる。　純粋に強い者の強い意志は、覇気として伝わるものだ。　人を殺す事に躊躇わない二人だが、その腕は確実に真っ直ぐなものでは無い。　完全に、ゲイラーに気圧される形で戦いに成った。

一方。　略施設の真後ろに出たヘルダーは、薬草栽培をしている植物園の裏手近くに出る。

「・・」

逃げる人の悲鳴などが、施設の表側から響いて来ている。

（不味い、パニックが起きている）

裏側の辺りを見ると、遠くの公園に避難して行く大人達が見え。

その後を追う様に、そっちに走る子供などが見える。

（とにかく、早く表に向かって回り込まなければ）

ゲイラーの居る左手では無く。　右手の方に走っていくヘルダー。

だが、寺院施設と成る突き出した施設裏には、疎らな木々と降り積もった雪が絨毯の様であり。　左回りに行くには、施設を迂回して行かなければ成らなかった。

急ぐヘルダーが施設に沿って側面に出た時だ。

「うわぁぁ～っ！！！　助けてくれぇぇぇっ！！！！」

と、一人だげポツンと走る毛皮のコートを着た男が、目の前を雪に足を取られながら逃げて行く。

（？）

ヘルダーは、丸で直ぐ後ろに追っ手が迫っている様な逃げ方をする男性に疑問を感じ。　直ぐに側面の方に走った。　視界の先には、立つ男が剣らしき物を持っていると思え、全力で走り寄ると。　その男の前には、雪に滑って転んだ様な女の子が居て。

「大丈夫かい？　直ぐ、楽にしてやろう」

と、剣を上に構え出す男が黒い影の様に見えていた。　目の良いヘルダーだから、光沢などの弱い光の反射で解るが。　黒いマントに黒い胸当てをし、腰周りには剣の鞘らしき動くものが見える。　明らかに、影の男は女の子を殺す気だった。

（非道なっ！！）

恐怖でヒクつき泣く事すら出来ない女の子の脇には、大人の動かない姿が在る。　ヘルダーの心の中に、噴出す様な正義感が燃え上がった。

「父親と同じ所に行けっ」

不気味な微笑すら浮かべた影の男は、雪の上に腰を落とした幼い少女に剣を振り上げた。　だが。　剣を振り下ろす前に、影の男の耳に雪を蹴る足音がする。

「むっ？」

ヘルダーの方を見た影の男は、鋭い跳び蹴りを見た。

「くっ！！」

不意打ちに近い間合いであった。　影の男は、咄嗟に剣を引いて宛がったが。　鉄の具足を履いたヘルダーの強襲の一撃を防げる訳も無い。　剣の平たい面を蹴り込まれ、胸に蹴りをそのまま食らう形で飛ばされた。

「・・」

着地したヘルダーは、雪の上に転がった影の男を見据えながら屈み。　女の子を立ち上がらせた。　そして、動かない大人を脇目に見ると、首筋を斬られて既に息が無い。

「くそっ!!　何者だぁっ?!!」

転がってマントや髪に雪を付けた影の男は、立膝で身を起してヘルダーに誰何する。　鈍い陽の光で漸く顔をハッキリ見えるその男は、日焼けした様な肌の武人然とした勇ましい男だ。　痘痕の後も残る顔で、鷲の嘴の如く曲がった鼻が印象的である。

ヘルダーからするなら、人を殺めて於いて誰何とは気に入らぬ。

「・・・」

女の子に、大声で呼ぶ大人達の方に行けと指を指したヘルダーは、身を立たせて目を細めた。

（これが悪党とは云え、人のする事かっ!!!　許さない・・絶対に許さないっ!!!）

ヘルダー同様に立った鷲鼻の男は、嗚咽の混じる泣き声をやっと放って逃げ出し始めた女の子を見る。　盾にとれるなら、と。

だが、ヘルダーがその視界を塞ぎ、ゆっくりと男に身構える。

「くそっ、せっかくの狩りがっ!!」

人殺しを楽しもうとして邪魔されたかの様な言動をした男は、一気にヘルダーを斬り倒そうと思えど。　いざ構え合うと、隙の無いヘルダーに踏み込む間合いが計れない。

「むぅっ・・」

男は、大きく一歩引いてヘルダーと見合う。

其処に。

「サヴュラー、ソイツは強い。　貴族の屋敷に居た冒険者の仲間だ。二人掛りで時間を稼ごう」

ヘルダーと対峙する男の後ろに、ヌッと乾いた声の男が現れる。

“サヴュラー”と呼ばれた剣士は、背後に少し顔を向け。

「ハンセン、コイツがか？」

すると、サヴュラーと云う剣士の脇に、厚手のマント風コートを纏った小柄で黒い布を顔に巻く者が現れる。　目元を見るに、意外に若そうな印象だ。

だが、ヘルダーは、その現れた人物を見て目を細める。

（コイツか・・）

その現れた男が手に持つダガーは、何と丸型の針の様な物。　そう、ポリアとイルガがオッペンハイマー邸の襲撃で動けなくした曲者二人や、逃げ出した曲者の手下を皆殺しにした相手だと推察出来た。

サヴュラーと呼ばれた剣士は、脇に来たハンセンと云う男に。

「二人掛りで足止めかっ？！」

と、焦りを込めた言葉を飛ばすも。　ハンセンと云う目元以外の顔

を隠す小柄な男は。

「そうだ。　コイツと大剣を使う大柄な奴は、相当強い。　セヴゥリンが居るなら勝てるが、俺達では互角かそれ以下だ」

サヴュラーは、少し驚いた様子の声で。

「じゃっ、セヴゥリンをっ」

此処で、ヘルダーが動こうとしたのに合わせ、ハンセンは丸い針型のダガーを投げる。　話し合う中で、ヘルダーの不意を突くつもりだったのだが。

「・・」

ヘルダーは、難なく鉄扇でダガーを弾き、宙を回って遊ぶダガーの柄に閉じた鉄扇を引っ掛け、回す回転で上手に操りながら投げ返したのだ。

「・・・おっと」

飛んで来たダガーを屈んで避けたハンセンは。

（おいおい、話以上じゃないか。　俺が自分のダガーすら受け取れないとは・・）

返されたダガーの鋭い勢いに、受け取る事が出来なかったハンセン。

ヘルダーが予想以上に卓越した技能を有すると判った。

焦るサヴュラーは、再度ハンセンに。

「セヴゥリンはっ?!!」

「表で、兵士の頭と斬り合ってる。　意外に向こうも楽しんでるみたいだ」

「くそっ、こんな強い奴が居るとは聞いてないっ!!　モグテルとモンマルトは?」

「さぁ、そろそろ来ると思う。　だが、博士(セオルギー)が間に合うかは微妙だな」

そう聞いたサヴュラーは、頻りに舌打ちを繰り返した。

ヘルダーとゲイラーが悪党達と相対する中。　ポリアもまた、その男と対する事に成る。

「大丈夫っ?!!　ねぇっ!!　しっかりしてっ!!!」

ロビーから外に出る大廊下を急ぎながら、倒れる人々に声を掛けるも何人かは死んでしまっていた。

(何で此処までするのっ!!!)

逃げる一人の男に、何人の罪無き人が殺されるのだろうか。　ポリアの心は、何時にも増して怒りに燃えた。　剣を抜き払い、心に憤りを叫ぶポリアに対し。　ブルーレイドーナですら掛ける声を躊躇った。

廊下を走り、外に飛び出すポリア。　だが、雪が舞い散る中、其処

で見たものは・・。

「うがぁっ！！！」

白い世界の大通りの上で、黒いマントを羽織る金髪の男に、兵士が胸を刺されて血を吐き倒れた。

間近に居たゾセアは、此処に来た最後の部下を殺されて怒り狂い。

「キサマ等ぁぁぁぁぁっ！！！！　あああ・・あああおのれぇぇぇぇっ！！！」

と、その男に向かえど、片腕に怪我を負っているのかマントの男に軽くあしらわれる。

ヨロめき尻餅を着くゾセアの背後には、血の滴るナイフを構えた病院の制服を着た男が居る。　アランを狙った男だ。

黒いマントを羽織る男は、ゾセアより少し高い長身だ。　その肌は、雪の如く白い女性の様な柔肌であり、癖の見える金髪は柔らかく首筋や耳元に纏わる。　切れ長い目といい、その見目の麗しさでは、人気な二枚目役者も顔負けしそうな貴公子然とする人物だろう。だが、その鋭い目つきには、殺しを楽しむかの様な狂喜すら滲み出ていて。　アランを殺そうとした男に言うのだ。

「イーナム、この役人を殺したらずらかるぞ。　また潜る前の余興だ、ズタズタにしてしまえ」

アランを狙った男は、口元を隠していた医療用のマスクを外していた。　どぎつい殺気を纏う目、ゾセアを見てニヤける笑みは、殺し

屋特有の残忍さが滲み出ていた。“イーナム”と黒いマントをした男に呼ばれた男は、ギラギラと殺気を宿す目をゾセアに向け。その手に持つナイフを閃かす。

「リョーカイ、頭（カシラ）どうも役人だの兵士だのってやつぁ～見てるだけでムカムカする。気が済むまで、ズタズタにしてやるさぁ」

黒いマントを羽織り。雪の中でも青い光沢が映える上半身鎧に、黒いズボンを穿く長身の男。この男こそ、悪党達を束ねる男ゼヴゥリンだ。その見目の麗しさは、ただ澄ましてて居るなら貴公子の様で美しい。だが、その内在する冷徹さと残忍さは、嘗てポリア達が出遭ったガロンよりも上手だろう。

（さて、高みの見物とでも・・ん？）

セヴゥリンは、剣を脇に下ろしてゾセアが殺される様子を見ている気だった。だが、背後から自分に視線が注がれるのを察し。まだ、逃げ遅れた獲物でも居るのかと思い、後ろの病院の入り口に顔を向けると。

「たぁぁっ！！！！」

一撃必殺の気合いと共に、ポリアが剣を構えて間近に迫っていた。

「なぁっ？」

長剣の一般的なブロードソードより長く、幅も刀身の太さも違う大降りの剣を上げたセヴゥリン。“ガキン！！！”と金属同士が激しくぶつかり合う音がし、剣を振り込んできたポリアと相対した。

「キサマぁぁっ！！！　アラン先生を再度狙うなど凶悪にも程が有るわっ！！」

蒼に翠が薄らと煌く風の力を感じているポリアの瞳は、セヴゥリンに対し殺意すら含む。

鈍く蒼翠色の光を帯びたポリアの剣を受け止めたセヴゥリンは、これまたそうそうに出会える美人とは思えないポリアを見て。

「ほほう。　これはこれは、有名なホール・グラスのポリア殿か。　そんな美しい顔をしてるとは、お近づきになれて嬉しいですなぁ」

ポリアとセヴゥリンが剣を合わせて睨み合うその様子を見たゾセアは、ポリアが出て来たお陰で二人を一度に相手にしなくていいと思うと。　怪我をして血の滲む肩の痛みを堪えながら、

「簡単には・・死なんぞぉぉっ！！」

と、イーナムに剣を振るう。

「おっと」

下がったイーナムを見て、我慢しながら身を立たすゾセア。　腰の下、鎧の途切れた場所に軽く刺された傷が在り。　肩から腕に掛けて衣服も皮膚も薄く斬り裂かれている。　しかし、部下の兵士４人全員を殺され、痛みも怒りで麻痺し鈍かった。

イーナムは、立ち上がったゾセアを見て。

「チィ、邪魔が来やがったか。　ま、手負いのテメェなんざぁ～俺

一人で十分だ」

と、せせら笑う様な笑みを見せた。

その直ぐ間近で斬り合いを始めたポリアとセヴゥリンだが。　押し合いではラチが明かず、お互いに蹴るなりなんなり隙を狙おうとする視線がぶつかる二人。　だが、その探る視線をお互いに嫌い、パッと押し合って離れ、また対峙する。

「フフフ・・、これほどに美しいとはな。　君も誘拐の対象にすれば良かった」

セヴゥリンがそう言うなら、ポリアは死んだ冒険者達を思い出す。

「やはり・・やはりキサマ達かぁぁぁっ?!!!!!!!!　学者達をあの様に惨い目に遭わせたのはっ!!」

「フッ。　俺は、タダ詮議したまでだ。　学者達を拷問したが、殺したのは内の二人。　女二人を食い散らかし、男の可愛いのに手を出したのは仲間さ」

そのセヴゥリンの言い方は軽々しく、殺すと云う文句に抵抗の“て”の字も匂わせない。　ポリアは、最も許せない相手だと感じ。

「二人も殺めて、キサマも同罪だっ!!!　国の法に照らし合わせ処罰させるっ!!!」

と、斬り掛かった。

だが、それは相対していたセヴゥリンとて同じ。　セヴゥリンとポ

リアは、同じ間合いで斬り込みあう。

ポリアが右から剣を振るえば、セヴゥリンも同じで打ち合い。　左、右と剣を打ち合ってから、セヴゥリンの突きを払う形で弾きながら踏み込んだポリア。　しかし、セヴゥリンも剣の弾かれた方向に飛び込んでお互いが擦れ違う。

「フンっ」

「せいっ！」

振り返り様で剣を振り込むお互いだが、そこもまた打ち合わせ。
ポリアの実力とセヴゥリンの実力が伯仲している。

今までその姿が殆ど判らなかった悪党達。　此処で、遂にポリア達と悪党達の総決戦とも云うべき戦いが始まった。

★★★

ポリアとセヴゥリンが戦う時。　ゲイラーは施設側面の広い庭で、エブールとテクトの二人を相手にして圧倒していた。

「うおらぁっ！！！」

エブールの振り込むハンマーを軽々と打ち返し。　その大剣を馬手（利き手・右手）だけで持ち、斬り込んできたテクトに一閃するゲイラー。

「うおわぁぁっ！！！」

細い身体で細剣を使うテクトは、その振り込まれた水平の薙ぎ払いを受け切れずに弾き飛ばされる。

「あっ、テクトっ！！　この野郎ぉぉおっ！！！！」

幾らか力は在ると自慢していたエブールだが。　この巨漢の剣士ゲイラーには勝てる気がしなかった。　テクトにゲイラーを釘付けにさせない様にするのが精一杯で、本気で殺す間合いまで踏み込めない。　渾身の力で振り込むハンマーを、意とも容易く弾き返される上。　突き、払い、斬るのどれもが鋭い剣筋で子供扱いされている様な彼だった。

ゲイラーの強襲にフッ飛ばされ雪の上を転がったテクトは、辛うじて細剣を手放さなかったのが精一杯。

（チ・チキショウっ！！　何でこんな強いんだっ！！！）

朦朧としそうな心身を踏ん張って起こし、グッと握った雪を左手で掴むと。

「食らえぇぇっ！！！」

と、ゲイラーの顔に投げる。

だが、テクトが動いた時に脇目で見ていたゲイラーは、雪を投げ付けるのに合わせて。

「そんなモンかぁぁーーーーっ！！！！！」

と、テクトに突進するのだ。

「あっ！！！」

投げた雪は、俯き加減に為ったゲイラーの頭部に当たり、目を塞ぐ事が出来なかった。　こうなると、テクトはもう逃げるしか行動が無くなる。　ゲイラーの強襲を受け、細剣が“への字”に曲がって来ていたからだ。

「テクトっ！！　にげっ逃げろっ！！！」

慌てたエブールは、テクトを追うゲイラーの後ろを追う事しか出来ず。　助けになど間に合わなかった。

同じ頃。

「うおっ、わぁっ！！」

ヘルダーに肉薄され、サヴュラーは剣で鉄扇の斬り込みを受け流し。　更にヘルダーが踏み込んで斬り上げる鉄扇を、身を捻って避けるのだが。　もう、その間合いはヘルダーに有利な間合い。　斬り返すより距離を取って仕切り直ししなければ、全てが後手後手に回りそうだった。

（このっ！！）

ヘルダーの背後に回ったハンセンと云う男は、顔を覆う布の隙間に見える瞳に殺気を含ませる。　ヘルダーに針型のダガーを突き立てようと、背後から迫ろうとした時だ。　サヴュラーが焦った様子で

引くのに合わせ、ハンセンに向かないままに左手の鉄扇を鋭く突き出すヘルダー。

「あっ！！」

ヘルダーに踏み込んで、首筋にダガーを突き立てようとしたハンセンだったが。　気合いすら発せぬままに鉄扇を向けるヘルダーが、自分を感覚的に捕捉していると解ってしまった。　危険を感じるのが早い分、相手に踏み込もうとした足が止まってしまった。

「・・・」

ヘルダーが顔をゆっくりと動かし、背後に立ったハンセンに向く。

ハンセンは、そのヘルダーの強い視線に思わず2・3歩引いた。踏み込まれたら、自分ではまともに相手に成らないと思えた。

「死ねぇぇいっ！！！」

ヘルダーの背後に向け、今度はサヴュラーが斬り込む。　ヘルダーは、少なく引いて斬撃をかわす。　刃風を顔に感じる中で、身をクルリと回しながらサヴュラーの左に回り込む。　元のヘルダーの居た位置の頭部を狙った軌道で、ハンセンの投げたダガーが駆け抜け、雪の落ちる空を刺した。

「ぬぅ！」

素早いヘルダーは、ハンセンをサヴュラーの背後にする為、サヴュラーの左肩を狙って鉄扇を振り上げる。　全力で身を動かしながら防いだサヴュラー。　ヘルダーと対峙すれば、お互いの立ち位置が

替わり。　ハンセンは、ヘルダーを見る為に動かざる得ない。

ヘルダーは、1対1の間合いにサヴュラーへと詰め寄る。

（チクショッ！！）

サヴュラーは、何時もの殺しの時の様に楽に殺せる相手では無いヘルダーに苛立ち。　冷静さを失いつつあった。

さて、ポリアは・・・。

ポリアとセヴゥリンの戦いは、白熱の一途を辿る。

「鋭っ」

「はっ」

振り込むポリアの剣と振り上げるセヴゥリンの剣が相打ち。　突き込むセヴゥリンの剣を払うポリアは、剣を持つ相手の手に狙いを定めて剣先を薙ぎ付けるも、相手も腕にした鉄の腕宛で受け払う。

ポリアが間合いを2歩引くと。　斬れたマントの腕辺りを見たセヴゥリンは、端正な顔を少し歪めた。

「全く、面倒な女だっ。　仲間が此処に来ないのは、貴様の仲間と戦っている所為だな。　現れるタイミング良過ぎるだろ？　騒ぎの後で来ればいいものをっ！！」

と、懐に左手を忍ばせ、ナイフをいきなり投げ付けるセヴゥリン。

何か言おうとしたポリアは、ナイフを払い落とせず大きく左へ飛び退く。

（今だっ）

勝てる為なら何でもするセヴゥリンは、これで先に斬り込めば間合いは自分の有利なモノに成ると確信した。　一気に攻め立てようとポリアに走り込む。

イーナムと鍔迫り合いを繰り返す手負いのゾセアも、脇目にポリアが斬り込まれると解った。

だが。

「風よっ！！」

飛び退いたポリアは、瞬時ながら風をイメージして剣を突き出す。
　ポリアの身体から、半円の方向に瞬間的に突風が吹き上げる。

ポリアの避け切れない角度から攻撃しようとしたセヴゥリンは、飛び込もうと跳躍し掛けたのだが。

「うおわっ！！！」

自分を押し飛ばす様な突風とぶつかり、宙を飛びながら押し戻される。　なんとかバランスを取りながら、手を大通りの凍った路面に付いて着地した彼だが。　ポリアとは更に距離が離れた。

蒼翠の風のオーラを目に宿すポリアは、ゆっくりと身構える。

立ち上がり、ポリアを鋭く睨んだセヴゥリンは。

「それが“風のポリア”の意味かっ！　煩わしい武器なんか持ちやがってっ！！！」

セヴゥリンの苛立った声が、冷たく引き締まった外の空を響いた。

微動だにしないポリアと、構え直したセヴゥリンが互いに睨み合う。

頬に雪が落ち、その雪が肌を滑りつつ水に変わるのを感じるポリア。　脳裏に、Kの姿が浮かび。　焦る相手を落ち着かせない様にと、態と微かに微笑み。

「見た目良くても、今の顔は薄汚いバカ面ね。　観念して、罪に問われなさいよっ」

「ほざけぇぇっ！！」

二人がまた駆け込み、一気に接近して剣を打ち合う。

セヴゥリンの斬り払いを屈んで避けたポリアは、低い体勢から素早く斬り上げる。　だが、セヴゥリンも左に引いて逃げると、片手一つでポリアの足を掬いに斬る。　ポリアは、フワリと跳躍して斬撃をかわし、右足でセヴゥリンの肩を蹴った。

転がり衝撃を幾分逃がしたセヴゥリンは立膝。　着地したポリアは立って、お互いにまた睨み合う。

イーナムの接近を剣で制し、有利な間合いを保とうとするゾセアは思う。

（あの女達が来たのは、俺にとっちゃ天の助けだな。　はっ・は早く援軍が来ないものか・・）

痛みと焦りからか、肩で息をするゾセアは限界に近かった。

さて。　ポリアとセヴゥリンが戦う大通りから先に、北門と北東の郊外へと続く通りの上で、異変が起こった。　雪の塊が持ち上がり、鋭い氷柱を形成したのだ。

「うひひ、あの美しい女剣士の鮮血は、どんなに綺麗だろうなぁぁ～」

古びた緑色のマントをローブの上に纏う魔法遣い風の男。　杖を持つ手は干からびた様な灰色の皮膚で、風ではためき捲れ上がったフードから覗ける顔もまた変わっている。　黒い墨の様な異質な眼球、大きく唇に垂れ下がった鼻は、普通の人には見られない特徴だ。戦うポリアから施設前の更に向こうへと離れた路上に居るその魔法遣いは、杖を擡(もた)げ。　宙に浮いた氷柱をポリアに向けようとしていた。

だが。

「んっ？」

魔力その物の現れを感じた魔法遣いは、病院の方を見ると。

「あら、気付いたのね」

丁度、施設内で怪我人を助けていたマルヴェリータが、其処には居た。　身体の回りに稲妻のカーテンを纏わせ、魔法を成立させていい

た。

「クソっ、あの夜の魔女かぁぁっ?!」

魔法遣いの男が驚いた。

マルヴェリータは、スッと杖を振るうと。　稲妻のカーテンが、放電する様に氷柱に襲い掛かった。

“バシュンっ!!!!!”

空気を震わす音が幾重にも轟き始め、マルヴェリータの魔法と氷柱がぶつかり、対消滅を起すかの如く魔法の氷柱が消えていく。

「マルタっ!!!!　来たのねっ?!!」

ポリアも、セヴゥリンも、その轟音で魔法戦が起こったと解り。
睨み合う中で、そっちを見る。

セヴゥリンは、苦々しい顔で。

「モグテルっ、モンマルトンとメンファルースのジジィはどうしたっ?!!!」

亜種人の魔族“デヴラメシアン”と言う種族の自然魔法遣いモグテルは、マルヴェリータに氷柱を壊され苦虫を噛み潰す口元をギリギリと震わせた後。

「博士（セオルギー）は解らんっ!!!!!　モンマルトンは、手下何人かと裏に回ってるっ!!」

セヴゥリンは、ポリアと構え合いながら。

「裏がカタ付くまでは持ち堪えろってかぁっ？！！！！」

マルヴェリータが稲妻のカーテンを守りに遣いながら、モグテルの間近に来る。　モグテルも再度雪から氷柱を生み出しながら。

「そうは上手く行ってないゾっ！！　裏の４人が来ないのは、こっちと同じく苦戦してるガらだんべっ」

マルヴェリータは、モグテルと云う男が生み出す自然魔法を見て。

「貴方ね？　あの夜に、仲間の曲者を魔法で殺したのは・・・」

と、モグテルに問い掛ける。

身体の回りに、ボンワリと黒い魔力を纏うモグテルは。

「あの夜の美人だな・・、俺の魔法ば打ち消したのは大したモンだ。だが、今日は殺してやるど」

と、気味の悪い顔をニタニタと歪ませる。

マルヴェリータは、目に赤紫のオーラを強く宿し。

「いい加減にして・・。　人の命をこんなにも無駄にして、楽に死ねるとは思わないでね」

彼女の身体の回りを囲む稲妻の魔法が、落雷でも起すかの様にバチ

バチと膨張する。　マルヴェリータが怒ったのだ。

モグテルの杖とマルヴェリータの杖が動いたのが同時。　マルヴェリータに向けて氷柱が数本飛び込むも、稲妻の魔法はマルヴェリータを守る。　マルヴェリータ自身も、襲い来る氷柱を打ち払うべく杖を振るう。　稲妻にぶつかって消える氷柱も有れば、マルヴェリータの放つ放電で打ち消される氷柱も在る。

人を超える氷柱と稲妻のぶつかり合いが、大通りで美しい光景を見せた。

★
★
★

この時。　ゲイラーは。

「そ～らよっ！！」

曲がったテクトの細剣を受け止めた直後。　彼の襟首を左手で掴んで振り回し、雪を被った木の方に投げた。

「おわぁぁっ！！！」

ゲイラーの怪力で投げられては、テクトの様な身軽な者など子供と同じ。　右の肩口を向けたままに木に激突し、肩に噴出す様な痛みを覚えながら雪と共に雪の積もった地面に落ちた。　完全に、ぶつけた肩の骨は砕けただろう。

「テクトっ！！！」

仲間に走ろうとする大男のエブールだが、その行く手をゲイラーに遮られ。

「退けぇぇっ！！！！」

と、ハンマーを振り回して突進する。

だが、ゲイラーからしてその闇雲な攻撃は、無意味なものだ。　大剣でハンマーをカチ上げて、ガラ空きになったエブールの腹に蹴りを見舞う。

「うブッ！」

蹴飛ばされたエブールは、勢いそのままに医療施設の壁に激突し。

「うご・・おぉぉ・・」

と、呻くだけに。

剣の構えを解いたゲイラーは、

「しみったれるなよ。　お前達は、何人もの人の命を奪い、冒険者達にあんな酷い真似をしたんだっ！！　命で償って貰う。　覚悟しやがれよっ！！！」

と、怒りを混じえた感情を露にする。

戦いが終わったと思えた其処に、システィアナの声が飛ぶ。

「ゲイラーさぁんっ、うしろあぶないですぅぅぅぅっ！！！」

「んっ？！」

振り向いたゲイラーは、少し離れた向こうの先に、杖を構えて剣の魔法を生み出している黒いローブの魔法遣いを見つけた。

「死ねがぁっ！！！」

前頭部のみに灰色の髪の毛を残す中年のギョロ目男は、青黒いオーラを目に宿して剣の魔想魔法をゲイラーに飛ばした。

「っ！！」

ゲイラーは、なんとか魔法を避けて雪の上に飛び退いた。　魔法は、ゲイラーを刺せないままに施設の脇を走り抜け。　大通り向かいの家の庭木に突き刺さる。　剣の魔法は、直後に衝撃波を生み。　家の3階までの窓ガラスを木っ端微塵にして、木を落雷に遭った様に半裂きに破る。

魔想魔術師のモンマルトンは、もう動けないテクトと、ヨロヨロとテクトに這い蹲って行くエブールを見ると。

「全ぐ使えないアホがぁっ！！　さっさ逃げれっ！！！！！」

と、怒鳴り散らすと、雪の上を走りゲイラーに近寄るシスティアナを見て。

「ガキの僧侶もいっしょがぁっ？！　二人纏めて殺してやンがっ。

想像のヂカラをぉぉっ、おが（俺）の魔法を限界にさせいぃっ！！　オーバーフォォスーーーっ！！！」

杖と共に両手を掲げたモンマルトンの全身から、淡い魔力が溢れ出す。

その姿は、北東側の施設裏で戦うヘルダーにも見れた。

「・・」

向きを変えようとしたヘルダーに、

「お前の相手は俺様だろうがぁっ！！」

と、サヴュラーが斬り込んで来る。

ヘルダーは、ゲイラーの応援には行けなかった。　ハンセンのダガーも油断できない上に、下っ端の曲者3人も応援に出て来た。　本気で攻めないと、彼等を撃退出来なかった。

そんな中。

「魔想のヂカラは、万能なるチカラ。　想像のヂカラよぉぉっ！！　敵をヤブル矢にガわれっ！！！！」

魔想魔術師モンマルトンが魔法の詠唱を叫え上げた。　その頭上には、巨木の如き青白く光る矢が浮かび上がった。

「デ・・でけぇぇ・・・」

システィアナと合流したゲイラーは、今まで見たことの無い程に大きい魔法に気が抜けた。

システィアナは、目を丸くして。

「あわわ～、まほ～さんのデッカくなる手法ですぅぅ」

ゲイラーは、あんな魔法を施設にぶつければ、アランの眠る施設ごと崩壊を起すと恐れた。

「システィ・・あんなの喰らった。　寝てる教授もイルガもヤバいぜ。　どうしたらいいっ？」

システィアナは、ゲイラーに微笑み。

「だいじょ～ぶです。　でも～わたしは～動けなくなりますから～」

「あ？」

ゲイラーがシスティアナを見ると、システィアナは杖を手に。

「慈愛の女神フィリア～ナさま、まほ～をはじく光の衣を御貸しくださぁ～い」

モンマルトンが限界に力を注ぎ込んだ魔法を成立させた時。　ゲイラーとシスティアナの周りに、ユラユラと揺らめく光り輝くベールが包み込んだ。　歌で表すベールとは、少し違っていた。

全身を震わせながら魔法を維持するモンマルトンは、頬にこの寒い中で汗を流しながら。

「魔法を打ち消す神聖魔法がぁぁっ？！！　おがの魔法のヂカラを受け切れるがぁぁぁっ？！！！！！　やれるもんなが、やってみがぁぁぁっ！！！！！！！」

杖を両手で持ち、出来上がった太く長い魔法の矢を、重い石でも持ち上げて投げるかの様な感じで飛ばしたモンマルトン。

システィアナは、杖を胸の前に持ち。

「ゲイラーさんは、わたしのたぁ～せつなひと。　ねむってるアラン先生も、まもるイルガしゃんもまもります。　フィリア～ナさま、悪しき魔法を挫くこの思い、うけとってくださいな」

システィアナの祈りが深まると、ゲイラーとシスティアナを包む魔法のベールは更に高く上がり。　煌く光は強くなった。

そして、モンマルトンの放った魔法の矢が、システィアナの生み出した魔法のベールにブチ当たる。

“ビシィィっ！！！！！！”

辺りに爆発的な音が広がった。　その飛び込んで来た魔法の矢が当たった一瞬、火花の様な魔法のオーラが打ち消しあう光が飛び散った。

「うぐっ・・・うぬぬぬ・・・」

鬼気迫る形相で杖を押し込むモンマルトンだが、生み出した魔法が神聖なるベールを貫けない。

「・・・」

一心に祈り。　静かに瞑想に入るシスティアナは、この凄まじい魔法の圧力を感じていないかの様な姿だった。

この様子は、気配でマルヴェリータも感じていた。　だが、魔力は勝れど魔法遣いとしての年数がその差を埋めるのか。　マルヴェリータとモグテルの魔法対決は互角である。　雪が降る中なのが、モグテルの魔法を生み出し易くしているのだろう。　モグテルの魔法の氷柱が途切れる事が無く。　また、モグテルはポリアを狙っているフシが見受けれた。　セヴゥリンと戦うのに必死なポリアが、此方に気を向けるのは難しいと理解するマルヴェリータは、システィアナの魔力にブレを感じないままを祈った。

（全く、数で上回られてる分面倒だわ）

稲妻をナイフの様に飛ばし、投げ付けられた氷柱を打ち壊すマルヴェリータは、今の現状の均衡は、ギリギリの所だろうと察していた。　何処かで戦う誰かが決着を着け、他に助けに回れる方が有利になると読んでいた。

その魔法遣い二人の戦いの傍で。

「ふっ、はぁっ！」

突きから斬り払いで間合いを詰めたポリアだが、

「この女（アマ）っ！！！」

セヴゥリンが剣を打ち払ってから繰り出す蹴飛ばしを避けて、横に側転してかわす。　そのポリアへ、追い打つ様に背後から、イーナムがナイフを突き込んで来る。

「きゃぁっ」

脇腹の所を鎧の上ながら突かれ、バランスを崩して驚くポリア。

上手く走れないゾセアを他所に、乱戦に変えたイーナムの奇襲だった。

「この卑怯者がぁっ」

ゾセアは、背中を見せたイーナムに斬り掛かるが。

「おっと、待った」

と、踏み込んだセヴゥリンが剣でそれを受け止める。

「このっ」

脇に腕を入れられたポリアだが、肘鉄をイーナムに繰り出して顎を打ち退かせた。

深く踏み込んだ為に避けれない肘鉄を喰らい。　ヨロめき退いたイーナムは、

「いでぇっ、クソっ。　鎧着てやがるかぁぁ・・」

と。　金属の上をナイフが滑った感覚に悔しがり、痛む顎を押さえ

てポリアを睨む。

ポリアは、直ぐにセヴゥリンに斬り掛かり。　打ち負けそうなゾセアを助けると、ヨロヨロのゾセアを庇って施設の入り口の方角に引いた。　セヴゥリンにイーナムが寄り、二人を正面に受けて対峙する形を取ったポリア。

セヴゥリンは、ポリアの意思を読み。

「イーナム、この女・・俺達を同時に相手するらしい」

少し血の混じった唾を路面に吐いたイーナムは、

「頭(カシラ)ぁ、女先に殺しましょうや。　この女剣士を人質に取れば、魔法を遣う女も殺せます」

「だな」

ポリアを相手に、二人が身構えた。

「ま・・待て・・・」

ゾセアは、ポリアの脇に出ようとするが、出血が多く成って来たのかフラフラに。

ポリアは、ゾセアを庇い。

「もういいわっ。　貴方まで死ぬつもりっ?!」

その隙を狙って、セヴゥリンとイーナムはポリアに迫った。

「お前の血を見せろぉぉっ！」

二足早くセヴゥリンが大きく振り上げた剣をポリアに打ち下ろし。

その剣を受け止めたポリアの首筋を狙い、イーナムが駆け込む。

だが、これはポリアの誘導だったと気付くのは、二人は後に成ってからだろう。

「風よぉっ！！！」

ポリアの声に応呼し、また風が突風を吹き上げた。

（やべぇっ！！）

間近で噴出す風の圧力をモロに食らったセヴゥリンは、見えない手で身体を押し返されるよに後ろにヨロめいた。　出来た事は、剣を下向きに構えて盾代わりにする程度。　先に踏み込まれて来たら、防ぎ切れるか解らなかった。

だが。

ポリアは、何太刀も振り込む必要が在るセヴゥリンを狙う無駄をしなかった。　風に吹かれてグッと動きが弱まり、踏み込みが止まったイーナムに大きく一歩を踏み出し。

「せいっ！！」

剣を振り下ろした。

「うぎゃぁぁっ！！！！」

滾る様な声が、風が強まり駆け抜ける大通りで上がった。

「あっ、イーナムっ！！」

声に驚いたセヴゥリンは、腕を押さえながら伸び上がったイーナムに近づこうとすれど。　ポリアがサッと剣を自分に振付けるので、彼女の間合いに踏み込めない。

「うわぁぁーーーっ！！！　腕がぁっ、腕がぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！」

ナイフを突き出そうとして止まった右腕が、スッパリと斬り飛ばされた。　少し離れた所に落ちた腕は、降り積もる雪を赤く染め出す。

「イーナムっ、先に逃げろ。　テメェぇっ！！！」

セヴゥリンは、ポリアとイーナムの距離を離すべく、素早い動きに変えて斬り込んで行く。

ポリアは、これでまた1対1でリーダーのこの男と戦えると思う。

（みんなは大丈夫かしら・・・）

ポリアの心配は、見えない仲間の事だった。

★★★

戦局は、ジリジリと一瞬一瞬変わり出す。

その最たる場所は、ゲイラーとシスティアナの居る場所だった。

「うぬぬぬ・・ガキがぁぁぁぁっ」

集中しながらも、自分の魔法を受け止めるシスティアナに渋い顔を見せるモンマルトン。

そのモンマルトンを援護すべく、曲者達の下っ端が5・6人が出て来たのだが。　ゲイラーは、システィアナを狙う輩に激怒。　魔法のベールから飛び出し、向かって来る下っ端を捕まえては、同じ下っ端に投げ飛ばし。　突き込まれたダガーを手っ甲で打ち払って、大剣の柄で殴りつけては自分の身長以上に飛ばし上げる。　システィアナに向かう為、ゲイラーの背後に回り込もうとした曲者は、ゲイラーの大剣のスゥイングを背中に喰らってブッ飛ばされた。

「うぎゃぁぁっ！！！！」

「なんだコイツはぁぁっ！！　ばっバケモノだぁっ！！」

雪の上に倒れ込み、痛みに喚く曲者や、その雄々しき戦い方に恐れを為した下っ端。　ゲイラーの相手では無かった。

「む」

残る相手とモンマルトンに目を向けたゲイラーが、

「待ってろよ。　ザコ掃除してお前に向かう」

と、剣を向けた。

これが、モンマルトンの集中の乱れを誘う。

（ヤベェがなぁっ！！！）

と、一瞬魔法よりもゲイラーに集中するしてしまうモンマルトン。

その時、魔法の圧力の緩みを感じたシスティアナは、その隙を狙って。

「マホ～さん、きえてっ！！！」

と、杖を振り上げる。

「あっ！！」

モンマルトンの振り込む杖から圧力が消え。　光のベールに押し留められていた魔法の矢が、ベールに侵食され始めた。

「やっ・ややべぇがっ！！！　に・・に・逃げろっ！！！」

モンマルトンは、全身に凄まじい脱力を覚えて雪の上に膝を崩す。

　見ている中で、システィアナの生み出した光のベールに浸食され矢先が消えた魔法は、そのまま衝撃波も生まないままに消滅してしまった。

（くそっ、やらかしてしもたがな・・）

疲労に因る冷や汗を顔にびっしょり掻くモンマルトンは、悔しさで顔を歪める。

悪党達にとって、この決着は敗戦濃厚と云う瞬間だった。　だが・・・、此処で突然に。

“カシャン・・カシャン・・・―

奇妙に乾いた音が聞こえて来る。　施設の敷地の北西側。　ゲイラーにやられたテクトをエブールが抱えて逃げた方向から、何体ものスケルトンが雪の中をやって来る。

ゲイラーは、システィアナに寄りながら。

「こんな街中でスケルトンだとっ?!!」

「さいあくですぅ～、あんこくまほ～を使える人が居るみたいでしゅ」

と、システィアナが言う。　凄まじい魔法のエネルギーを放っていたモンマルトンの魔力で、他の遠くの力が解らなかったのだ。　今感じるシスティアナの身体には、全身を這う様な不気味な暗黒の力が遠くに感じられ。　スケルトンの存在で蠢る闇の波動も感じられる。

一方で。

モンマルトンは、そのモンスターを生み出したのが誰か解った。

（来たがなっ!!　逃げるのは今しか無がぁっ!!!）

と、ヘルダーと戦う仲間を見る。

施設の北東側の裏では。

「うおわぁぁっ！！！！」

サヴュラーがヘルダーに蹴飛ばされ、１０歩近くは雪の上をフッ飛んだ。

「はぁ・・はぁ・・・、なんてこったっ！　噂以上に強ぇ・・」

ハンセンは、自分の投げたダガーを鉄扇で弾き落としたヘルダーが、サヴュラーの斬り込みを受け切った後に、鉄扇を畳んで鋭い突きをサヴュラーの肩に入れ。　ヨロめいた彼へ、跳び蹴りからの回し蹴りを見舞って大きく蹴り飛ばしたのに腕の差を見た。　もう、勝てる気など微塵も無い。　裏口から誰か逃げれば人質にも取れるが、誰も出てこない。

其処に、モンマルトンの声が。

「二人とも逃げろやぁっ！！！　博士（セオルギー）がモンスター連れて来たでぇっ！！」

ゲイラーも。

「ヘルダーっ、こっちにスケルトンが１０体近く来たぞっ！！！施設の中に賊もモンスターも入れるなぁっ！！！」

ヘルダーの気が、ゲイラーの方に向いた。

（しめたっ）

ハンセンは、サヴュラーに走り寄り。

「おいっ、ずらかるぞっ！！」

「あぁっ、っわ解ったっ」

サヴュラーに手を貸したハンセンは、サヴュラーと共にモンマルトンの方へ。

「・・」

それを見たヘルダーだが、二人を追い掛けてはモンスターをゲイラーただ一人に任せる事になる。

（街中では、モンスターの駆逐が優先かっ。　・・いや、あの元凶を逃がす訳には・・）

と、苦く思うと。　モンスターの見える所まで逃げる二人を追って見た。　だが、丁度モンマルトンに負い付いたサヴュラーとハンセンの前にも、２・３体のスケルトンが現れる。

（くっ、こっちにもっ！！）

ゲイラーの方に多く出たスケルトンの中に、色の変わったのも見える。　ヘルダーが判断に迷う中、モンマルトンを助け起こすサヴュラーが逃げ出そうとする中で、ハンセンが何かをしている。

（何だ？）

警戒したヘルダーの視界の中で、突然に黒い煙が地より噴出した。

（あっ。　・・・あれが噂のスモークトラップか）

植物の樹液と火薬を混ぜ、少しの間に黒煙を撒き散らす罠が在ると聞いた事が有った。　あの黒煙には催涙作用もあり、無闇に近づけば面倒な事に成るらしいとか。

（追っている暇は無いか）

システィアナの元に、ヘルダーも向かった。　他にまだ悪党の仲間が居るなら、流石に仲間に危険が及ぶと考えたからだった。

システィアナの様子を伺ったヘルダーは、中級の魔法を唱えた影響だろうか。　顔が苦笑いの様に為っている彼女が疲れていると悟る。　モンマルトンの強力な魔法を受け止めたのは、やはり骨の折れる作業だった様だ。

「モンスタ～さんをお願いしますぅ～」

と、ヘルダーの武器に神聖なる力を宿す魔法を施すシスティアナ。

先に魔法を掛けて貰ったゲイラーは、一階の施設の窓を開けて見て来たイルガを見つけ。

「オッサンっ、モンスターまで出やがったっ！！！　中の人を外に出すなぁっ！！！！」

「お嬢様はっ、如何したぁっ？！！！！！」

心配するイルガに、システィアナが。

「おもてにいましゅぅぅ～～～！！　ポリしゃんはだいろ～ぶっ、こっちの方がたいたいへ～んっ！！！」

イルガは、それを聞いて一安心し。

「そうか。　中の安全は任せろっ。　侵入して来た賊も叩きのめした。　ハソロ様も居るでな、手分けして守る」

頷いたゲイラーだが、スケルトンの中に不気味な緑色のスケルトンも混じる群れを見て。

「ヘルダーっ、もう一踏ん張りだ」

だが、もう肩で息をするシスティアナは、何故か施設に戻らない。

「システィ・・」

“戻れ”と言おうとするゲイラーだが、システィアナは。

「いやです～。　ポリしゃんの方にも、モンスターさんが回ってますぅ。　気配を感じれるわたしがここにいないと、こまりんですよ」

すると、ため息一つをしてゲイラーは。

「ふぅ・・。　よし。　じゃ～システィは少し休むんだ。　俺が守る」

すると、システィアナはゲイラーの背後に歩いて。

「解りましたです～」

ヘルダーは、緑色のスケルトンに目を奪われていた。　明らかに、普通のスケルトンとは異質な存在だ。

ゲイラーも。

「あの緑のスケルトンは、ちまっと強そうだな。　死霊のスケルトンと違って、ゴーレムタイプみたいだ」

システィアナが、

「そ～ですぅぅ。　ゴーレムさんです、すごぉ～く古いお力を感じますぅ～」

「システィ、こいつ等の生みの親は、ポリアの方か？」

「はぁ～い。　今、ポリしゃんと少しはなれたぁ～ところで止まってますぅ」

システィアナの話は、まさにその通りだ。

セヴゥリンと戦うポリア。　モグテルと戦うマルヴェリータ。　その二人の下に、スケルトン１０数体と“ブラッディ・ロア”こと、血の色をした赤いスケルトンが数体現れて。

「何で街中にスケルトンがっ？！！」

と、驚くポリアに、セヴゥリンが。

「ふはははっ、俺のブレイン（頭脳）が到着した訳だっ！！」

と、勝ち誇る笑みを浮かべる。

ポリアは、

「マルタっ！！！！　モンスターに気をつけてぇっ！！！！！」

スケルトンに入れ替わろうと身を引くセヴゥリン。　だが、更に後方の路上には、亡霊の如くボンワリと佇む何者かが現れる。　灰色をしたフォーマルなロングコートを羽織り、紳士が愛用する黒のハットを被った何者かは。

「セヴゥリン、苦戦中ですか？」

と。　か細い声なのに、少し老いた男性の声が彼の耳に響く。

セヴゥリンは、その声に振り返り。

「博士（ゼオルギー）っ、助かったっ！！！」

「セヴゥリン。　もう、此方に兵士と役人の一団が向かってる」

「解ってるっ、これだけ騒げばなぁっ！！」

「だが、兵士と役人の足止めには、スケルトン5体しか回せなかった。　早く逃げろ。　ハンセンやサヴュラー達は、もう逃げ出した

よ」

セヴゥリンは、今まで戦ったポリアに怒り狂った様な鋭い目を向け。

「だがっ、コイツ等を始末しないと後が大変だぞっ？！！」

しかし、博士（ゼオルギー）と呼ばれた男は。

「無理をするのは得策では無い。　エブールとテクトは、多分使い物に成らんし。　もうモグテルも疲れてる。　冒険者の数人を殺しても、然程の儲けにもならんよ」

悔しい目つきで、斬り落とされたイーナムの腕をチラっと見たセヴゥリンは、早くもスケルトンと斬り結び。　一体目の頭蓋骨を斬り飛ばしたポリアを見て。

「風のポリアぁーーーっ！！！　この決着は後で必ず着けるっ！！　俺の事を忘れるなっ、愛してるゼ・・・俺のマドゥミーナっ！！（下世話な愛人の意味）」

その声を聞き。　崩れるスケルトン越しに、悪辣な笑みを浮かべながら身を翻すセヴゥリンを見たポリアは。

「逃げるなぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

と、悲鳴とも絶叫とも聞こえる様な大声を上げる。

走り去るセヴゥリン。　同じく、スケルトンに後を任せて引くモグテル。

二人の後を追うポリアとマルヴェリータだが。　その行く手を絶ち塞ぐスケルトンに、戦わざるえない。

更にポリアは、剣を杖代わりにまだ外に居るゾセアを見捨てる事も出来ない。　悔し過ぎて、気が・・・遠退く様に思えた中。　悪党達は、雪の降る中を逃げて行く。

★★★

さて。　同じくモンスターと戦うゲイラーやヘルダー達は。

「どりゃぁぁっ！！！」

ヘルダーに緑色のスケルトンを任せ。　他の白いスケルトンを次々と薙ぎ倒したゲイラー。

「あっ！　あぁぁ～っ、ゲイラ～さぁんっ！！！！　まっくろ（暗黒）マホ～を遣うひとの気配がきえちゃいましたぁぁ～」

スケルトンの頭を突き砕いたゲイラーは、そう慌てる声で云うシスティアナに云われ。　直前に響いたポリアの大声が気掛かりで。

「システィっ、ポリア達は無事かっ？！」

「はぁい。　でも、ホネホネさんに囲まれてましゅ～」

ゲイラーは、白いスケルトンが残り3体と見るや。

「ヘルダーっ、ポリアの方に行けっ！！！　此処は、俺が受け持ったぁっ！！！！」

と、声と共に大きく大剣を振り込み。　スケルトン2体を豪腕の一撃で砕き散らす。

ヘルダーは、緑色のスケルトンが見舞うボロボロの剣を受け止め、鋭い蹴りをホネの顎に繰り出しフッ飛ばすと。

「・・・」

静かにゲイラーとシスティアナを見て、ヘルダーは頷いた。　そのまま表の大通りに向かって走しり出す。

起き上がる緑色のスケルトンを見たゲイラーは、注視する事も無く飛び掛って来た最後の普通のスケルトンを斬り上げて真っ二つにした。

さて。　起き上がった緑色のスケルトン。　頭蓋骨の中が黒いエネルギーで満たされて。　しかも、眼球らしき赤い光も見える。　見た目からも、ブラッディ・ロアやスケルトンとは明らかに違う。この緑色のスケルトンは、頭部・足腰・肩の骨などが変形して短くとも鋭く尖る。　両手に剣を持ったその姿は、確かに強そうな印象である。

雪の舞う中で、ゲイラーはシスティアナを庇う様に立ち。

「システィ、ホネホネの残りはコイツだけか？」

「はぁい。　裏側にいるのはぁ～、こ～の緑さんだけですぅ」

「よし」

ゲイラーは、此方に向かって来る緑色のスケルトンに剣を向け。

「後は、お前だけだ。　引導、渡してやる」

と、まだ淡く白い光を宿した大剣を構えた。

一方。　ポリアの元に応援に向かったヘルダーは、大通りに溢れたスケルトンと赤いスケルトンのブラッディ・ロアに囲まれているポリアを見つけ。

（数が多いなっ）

直ぐ様、背後を向けるスケルトン二体に走り寄ったヘルダーは、頭蓋骨を鉄扇の突きで打ち壊す。

ブラッディ・ロアの剣を弾き、

「風よっ！！」

と、守りの強風を起こしたポリアは、体勢を崩したブラッディ・ロアに踏み込んで、その頭部を突き崩した。

「ヘルダーっ、気を付けてっ！！　建物の影に居る可能性も在るわっ」

鋭く注意を飛ばしたポリアは、更に屈みながら踏み込んでスケルト

ンの斬り払いをかわし。　環に自分を囲むスケルトンの外に出ながらスケルトン一体の腰の骨を砕く。　乾いた音が上がり、上半身を空に上げたスケルトン。　そのスケルトンが落下する場所に向かったヘルダーは、旋風脚を繰り出して数体のスケルトンを蹴り飛ばし。
　着地に合わせて、広げた鉄扇にて落下して来たスケルトンの頭蓋骨を斬った。

ポリア達のチームの真骨頂は、個々の力以上に強固となるチームワークの戦いだ。

ポリアとヘルダーのコンビネーションは、二人が素早いだけに絶妙な息の合い方である。　マルヴェリータが魔法でスケルトンを全て撃退した直後。　ポリアとヘルダーの相手をするスケルトンの数は激減していた。

そして、ゲイラーも。

「そらぁっ」

斬り合った後に間合いを離れた緑のスケルトンに、ゲイラーは剣を雪の中に入れて雪を飛ばす。　大剣の広い幅で掬われた雪は、“バサッ”っと緑のスケルトンの顔に。　頭部を振るって雪を落とした緑のスケルトンが見たのは、大きく振り被りながら走って来たゲイラーであり。

ーカカツカツっー

威嚇の為に噛み合わせた歯が鳴らした音も、中途半端のまま。

「どりぁぁぁーーーっ！！！！！！」

渾身の上段からの斬り込みを繰り出したゲイラーの大剣を、緑のスケルトンは防ごうと剣を上向ける。　が、その動きは完全に遅れを取った。　辛うじて届いた剣先は意味を為さず。　振り下ろされたゲイラーの大剣は、ボロボロの剣先をヘシ曲げて右肩の骨を砕き斬った。

「終わりだっ！！！」

右腕を失った緑のスケルトンは、苦し紛れの様に左腕の剣を振り上げる。　だが、吼えるゲイラーは、全力で大きく体を回して勢いを付けた斬り上げを、緑のスケルトンの頭部に。

「わわぁっ」

緑のスケルトンの剣が振り上がるのに慌てたシスティアナだが。それは、無用な心配だった。

左腕の肘を裏側から大剣で斬られる形と成り、振り降りる左手のボロボロの剣は、ゲイラーに当たらない。　神聖なる力を宿したゲイラーの大剣は、斜めに緑のスケルトンの頭部を粉砕した。

勝負が在った。

表の大通りの路上でも、ポリアとマルヴェリータとヘルダーにて、トライアングルの形で囲まれる８体程のスケルトン。　見る見る破壊され、昼頃には戦いが終わった。

非常に犠牲が多く出た戦いは、事件解決の決定打とは成らなかったのである。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆

≪その不審は大きく　暗躍する者は息を潜める≫

兵士と役人総勢２００名の部隊が到着する頃。　ポリア達はモンスターを排除し、周辺のモンスター捜索をしていた。　マルヴェリータとシスティアナに加え、寺院に居た司祭や助司祭、寝泊りしていた僧侶など数名も加わってである。

ハソロも、役人３名に施設の安全を警戒させ。　イルガに引き続きアランを守って貰う代わりに、モンスター捜索に加わる。　少々剣も遣えるハソロは、施設に侵入した曲者数名と戦って斬り伏せた。

これ以上街に不安を残せるかと、雪の舞う中でも意気込んでいる。

さて。　兵士１２０名。　役人８０名の部隊が到着すると。　ハソロは、兵士部隊を率いるミズリーに雪の降る路上で食って掛かる。

「ミズリーっ！！！！　お前っ、何故にアラン殿を一人にする形を取ったぁっ？！！　こんな大それた襲撃など、計画性が見え見えだろうがっ。　内部情報が漏れている可能性は非常に強いっ！！　今

後、役人は独立した捜査を行うなっ。　ショーターに、全事件の詳細報告書を纏めておけと言っておけっ！！！！」

ミズリーは、冷静に。

「お前に指図される言われは無いが」

すると、ハソロは。

「構わん。　全ての経緯を裁判部に報告し、各政治運営部並びに要職の貴族・騎士様に打開行動を促す。　これだけの被害を出し、犠牲者も多い。　中央に連絡を取る事も仕方なしだ」

ミズリーは、その手段は治世を行う皆に、人事の刷新と言う言わば危機を招く事も在ると思い。

「中央が出張れば、フロイム統括以下、要職の方々の刷新も行われる可能性が在るが？」

すると、ハソロは怒りに燃える目を向け。

「キサマぁぁぁ・・・、自分の仕事を何だと思っているだ？！　あぁっ？！！！　我々、お前も含めた役人や兵士の無能で、此処までの甚大な被害を出し。　街中にモンスターを出すなどと云う不始末まで導いておいて。　未だに地位や身分を守る事が重大だと云うのかぁぁっ？！！！」

ハソロとミズリーの言い合いの中。　兵士や役人達ですらミズリーを異常者でも見るかの様な視線で見る。　何とも云い難い遣り切れぬ空気の中、皆の視線を自ら一身に集めたミズリーは、流石にもう

危機感を募らせる。

（チィ、被害が大き過ぎたか。　全く、この時にあの冒険者達が来ていたとは・・。　やつ等も逃げる為に大騒ぎしたんだろうが、追い付かれて仕方なくモンスターまでとはな。　計画が破綻しそうだ）

ミズリーは、事の大きさに頭が回らなく成りそうで、怪我をしたゾセアにも労いの言葉すら無かった。

寺院に居る僧侶の総出で、ポリア達が戦っていた間に治療を受けた者は１００名近い。　イーハンに斬られた人々や、再度アランを狙って進入した賊数名に患者が斬られたり。　死者は、１１人。　重体の者が２０人以上は居る。

モンスターの捜索は、この時で一段落した。

だが、被害や事件の状況を事情聴取するべく、役人が施設内で聞き込みを始める時。　外から此処に、巡回の兵士達が逃げる悪党達と鉢合わせして、内数人が殺されたと云う住民の通報が舞い込んで来たのである。

報告を受けたミズリーは、冷めた目で兵士を施設前の大通りに集め。

「逃げた悪党の討伐行動を行う。　我と一隊は、住宅区から東に。　他は、１００名を二手にして、賊の逃げた北西方面と北東方面に。　連中は、非常に危険だ。　魔法を扱われる様なら、情報だけで良い。　後に、情報を元に郊外の捜索を策戦化して行う」

その様子を見ているポリアは、施設の正面入り口にて、壊れた白い扉の所に身を預けている。　顔には、薄く斬られた傷も見えるし、

膝にも衣服諸共薄く斬られた痕が。　白いマントには、無数の斬られたり突かれたりした場所が見えていた。　冷たい風に顔を吹かれ、冷めた顔が雪で出来たかの様に白い。

「ポリア、傷の手当して貰いなさいよ」

彼女を探して、マルヴェリータが来た。　脇には、ゲイラーとイルガが居る。

だが、ポリアは視線を外さず。

「ねぇ、マルタ。　あのミズリーって男どう思う？」

疲労による影響か、感情の少ないマルヴェリータは、掃討行動に行くミズリーの部隊を見て。

「気味が悪いぐらいに冷静な人ね。　ま、今回は一番怪しいわ。ゾセアにアラン様を一人にしてでも引継ぎをしろと言ったのは、ショーターでは無く彼らしいし。　その個人的な話し合いの情報が、事前に悪党に漏れてるなんておかしいもの。　でも、それが故意か、盗み聞きしていた別の誰かが流したのか解らない。　決定的にコレって云う証拠は、無いわね」

「確かにね・・。　でも、あの冷めた感じって、なんかおかしいわ。仲間４人に、巡回の兵士まで殺されて、丸でそれはどうでもいいみたい。　ついでに云うと、彼にとってショーターが統括みたいな態度が、尚更気に入らないわ」

「どうしたいの？」

マルヴェリータに問われ、少し俯いたポリア。　だが、沈黙は短く。

「・・直接フロイムさんに掛け合って、ミズリーとショーターの素性調査を願い出るつもり。　もう・・、我慢できない」

イルガやゲイラーは、ポリアが本当に怒ったのだと解った。　これ以上の被害は、絶対に出さないとポリアが覚悟を決めたのだと・・。

もし、フロイムに素性を言えば、方々に知られる可能性もある。

中央に伝えられ、下手をすれば身柄の送致もあるかも知れない。

ポリアの父親は、ポリアの逃亡を非常に悔やんだと伝わっていたからだ。

だが、ポリアは腹を決めた。

ポリア達の事情聴取は、ハソロが直々に行う。

昼を大きく回り、また空が暗くなる頃。　捜索から戻った兵士達が施設を守る事に成るのだが。　ポリア達は、そのままハソロと一緒に馬車で街中に戻る。

ポリアの希望で先ず向かったのは、キャタピコームと呼ばれる総合施設だ。　大きな丘の様なドーム型の石造建築物で。　一階は、広大な商業店舗が犇く集合商店街であり、二階は、貸し店舗飲食店が広がり、バザーも行える場所も在る。　その上の階は、宿泊施設や賭け事などが行われる雑多な場所となる。

施設の中に、街がそのまま入った様な場所だ。　雪が多く降り積もるこの地域で、金の在る商人などは、此処と外に別々に店舗を持つ事を考えるのだとか。　一・二階は、冒険者や旅人や一般人が集まる繁華街と言っても過言では無かった。　この一階の一部に在る

トンネルを使えば、地下通路を経由して、斡旋所や、各大型施設に出れる。　雪が酷くなると、この地下通路が大通り代わりと成るのだ。

だが、流石に医療施設での騒ぎが伝わっていたのだろう。　キャタピコームの中に入ったポリアは、いつに無い人気の少なさに気が重くなったのは仕方の無い事である。

さて。　ここの宿に泊まっていた仲間を殺された冒険者達に会ったポリア達。　ポリアは、男性の居る大部屋に全員を集めた。　仲間を心配し、地元で家も在るブロッケンも居たので、好都合であった。窓側の外を伺ったポリアは、カーテンを閉め。　ランプの薄い灯りとなった部屋の中で言う。

「みんな、今日・・医療施設にまた賊が来たわ。　アラン先生を殺すつもりだったけど、私達に阻止されて、暴れながら逃げ出す気だったみたい」

ブロッケンは、直ぐに。

「捕まえられたのかっ?!!」

現れた相手の面子やその技能をポリア達は話した。　僧侶は、暗黒魔術師の存在に苦悩の漂う顔をするし、他の面々も手強い上に数も多いとざわめいた。

憎しみや怒りに混じり、まともに遣り合って勝てる気が起きない悔しさも覚えるブロッケンは、ポリアへ。

「あんた達と同じ力量じゃ、俺たちでは返り討ちに遭うな。　なんて不味い事だ。　しかも、俺等の街にモンスターまでっ！！　クソっ」

あの夥しいスケルトンは、どうやら墓地の骨を使った様だ。　近くの墓地に埋葬された骨が、根こそぎ無くなっていたし。　残った骨が少なかった所為だろうか、不完全な姿で這い蹲っていたスケルトンも居たと・・。　緑色のスケルトンと、赤いブラッディ・ロア以外は、現地調達で街の墓地の骨を使ったと見れた。

僧侶でリーダーであるリリーシャは、青褪めた顔を悲痛に変えて。

「あぁ・・、神よ。　この様な愚行はもう沢山です・・・」

と、呟く。

他の冒険者達は、仲間内で話し合う。　その内容は、

“これからどうすればいいか”

の、一点だ。

ポリアは、此処で。

「実はね。　役人側から冒険者に、昼夜の見回りに協力を申し出たいって意思が在るの。　今は、そう思うだけだけど。　上にお伺いを立てて許可されたら、警戒・巡回の仕事が来るかもしれない。兵士は、基本犯人の捜索に街の郊外まで範囲を広げるから。　依頼が来る可能性は強いと思って。　別の兵士達がそれぞれの仕事に向かうと、国境警備隊との交代も此処の兵士の管轄だから、手勢が薄

くなるから尚更見回りの必要が出てくる。　みんな、もし出来るなら、見回りに協力して欲しいの」

ブロッケンは、流石にこの街に住むだけに。

「当たり前だ。　俺一人でも見回るぞ」

仲間は、ブロッケン一人の問題では無いと協力に異論を言う者は居ない。

リリーシャ他も、敵討ちの為にも協力はすると言う。

ポリアは、なるべく冒険者同士で連絡を取り合い。　斡旋所を砦にして、犠牲者が出ない様に勤めて欲しいと言い残す。

実際、次の日には、この内容が仕事として斡旋所に回される事と成る。

キャタピコームを出たポリアは、次にオッペンハイマーの屋敷に戻った。　叔父は帰っていなかったが、襲撃の噂を聞いた叔母とマシュリナ、そして執事やフロマーは、もう気が気で無かっただろう。

無事なポリア達を見て、安心して泣き出した叔母だった。

ポリアは、叔母と抱き締め合ってから、離れに戻ると。　背負い袋の奥に仕舞っておいた白いマントを取り出す。　そして、袖の在る青いコートマントを叔母から借り受けて、都庁政府にハソロと共に向かう。

そのマントは、普通のマントでは無かった。

暗くなった夕方。

街の一角に聳える城が在る。　所々に伸びる搭の黒い屋根、白い外壁に囲まれた青い壁面。　異質な建築家が作ったとされる嘗ての領主の居城であり。　今は、都庁政府と成った“キャッスル・フォアージ”と呼ばれる施設だ。

その右の搭には、ポリアがアランを見舞いに行った事に憂いで、大急ぎで帰り仕度をしていたオッペンハイマーの私室が在る。　赤い絨毯か敷かれ、本棚が人一人しか通れない隙間で並んでいる。　その隙間にも、学術書などが積もられている。　オッペンハイマーが忙しく鞄に書類を詰めるデスク周り以外、人の入る隙間が無い様に思えた。

ーコンコンー

ノックがして、

「オッペンハイマー様、お客様です」

もう帰る所で来客とは、と、オッペンハイマーは手を止め。

「どなただ？　私は、急ぎたいのだが？」

「は。　姪御様のポリア様と、捜査官副総長のハソロ様です」

案内して来たキャッスル内衛兵の声に、オッペンハイマーは気が抜ける思いがして。

「・・・どうぞ」

扉を開いたポリアは、直ぐに中に入って。

「叔父・・、凄い部屋」

と、その本だらけの狭さに驚いた。

オッペンハイマーは、心配して胃がおかしく成りそうだった所にポリアが来て。

「はぁ・・。　心配していたんだ。　ぶ・・無事だったか」

と、ヨロヨロとチェアーに身を崩した。

だが、入って来たポリアは、午前の惨事を語り。

「叔父様、私は・・これからフロイム統括に面会します。　同席して頂けませんか？」

顔をポリアに向けたオッペンハイマーは、その意思を悟り。

「直訴するのかね？」

「はい。　ロバートの事も含めて、ショーターやミズリーに任せては置けません」

「身元を明かしてまでも？」

「これ以上・・犠牲者を出さない為にも。　秘密主義を貫くショーターとミズリーの素性調査を願い出ます」

アランを一人にする朝の引継ぎと、その合間を狙ったアランの暗殺未遂。　これは、出来過ぎている上に、内部情報が漏れている可能性が強いとポリアもハソロも指摘。　更に、兵士や一般人にこれだけ被害が出ているのに、騎士に警戒行動の指揮要請を行わない事もおかしい。　ハソロの知り合いの騎士は、何度もショーターやミズリーに騎士が総指揮を受け取ると打診したのに、フロイムを通じて言い包めて留意させていると告げたのだとか。

オッペンハイマーは、ポリアの決意と現状の不穏な気配を知り。

「解った。　ポリアンヌ、私に任せなさい。　どれ、そのマントを貸しなさい」

ポリアは、叔父の顔が引き締まるのを見て。

「叔父様、何を？」

「私が、脅しを掛けよう」

「え？」

「遺跡調査で、あのショーターと館長のスコットには屈辱を味わったからね。　今度は、私が味遭わせる番だ。　それに、この現状はこの街を愛する学者として、住む住人・貴族として、そして嘗ては治世を預かった元統括として見過ごせない」

「お・・叔父様」

「フフ、ポリアンヌ。　少しは、年配者に花を持たせて貰えないか？　いや、君の元気な姿を見て安心したら、俄然やる気と勇気が出てきたよ」

ポリアは、自分の祖父のヨーゼフが、息子である叔父を言うに“気弱い学者”と言っていたが。　それは、間違いだと見えた。

ポリアが畳んだマントをデスクに置くと。　オッペンハイマーは、スクッと立ち上がり。

「ハソロ殿、ご一緒願えるか？　捜査官総長殿と、主任騎士長にも同席を求める」

「ハッ。　この街に平穏を取り戻せるなら、何でも致します」

「有難う。　ポリアンヌ、仲間の皆さんと此処で待っていてくれ」

オッペンハイマーは、マントを大切に抱え、ハソロと共に部屋を出る。

狭い部屋の中に入ったマルヴェリータは、ポリアに。

「なんか、オッペンハイマー様って急に強くなったわね」

ポリアは、叔父の姿を見て。

「なんか、お祖父ちゃんに似て来たみたい」

と、鈍く微笑んだ。

ポリアの覚悟は、オッペンハイマーの意地に応援を加えた。

派遣される騎士を束ねる屈強な偉丈夫の主任騎士長ローラブラムス、ハソロの上司で痩せたインテリ老人の様な捜査官総長のグラーミランは、オッペンハイマーの話に二返事で了承をした。

もう、外は暗い。　一足も二足も早く夜が訪れていた。

統括執務室で、ショーターや腹心の政務官補佐などと会議を開いていたフロイムは、突然のオッペンハイマーの面会に驚き。

「廊下で会う」

と、廊下に出て逢った。

忙しいフロイムは、白い息を吐きながらやや早口で。

「オッペンハイマー殿、この忙しい時に何用だ?」

だが。　オッペンハイマーは、言葉より先にマントを開いた。　白きマントの背中の部分には、剣を口にする炎の鳳と、その下で輝く

太陽の紋章が。

「これが・・」

何かと尋ね様としたフロイムだが、見覚えの有るエンブレムが何かを理解した時。　彼の言葉は停まり、目は開いたままに成った。

オッペンハイマーは、フロイムの耳に顔を近づけ。

（フロイム、君も知っていたハズだよ。　我が父の下に、毎年姉の娘が剣の修行をしに来ていたのを。　君は中央に出向いていたが、生まれも育ちもこの街だ。　我が父ヨーゼフが剣の手解きをした娘は、孫の彼女しか居ない）

フロイムは、小刻みに震える顔をオッペンハイマーに向けた。

「な、何を？」

オッペンハイマーは、今度は声を普通にし。

「君と話がしたい。　中に居るショーター達を退室させ、ハソロ氏やローラブラムス殿などの話に耳を傾けて欲しい。　統括として、正しい判断を頼む。　その判断が偏ったなら、彼女も僕も、他の騎士や貴族も。　中央のセラフィミシュロード様に連絡を取るだろう。　フロイム、犠牲が大き過ぎる」

フロイムは、中央から離れたこの土地で、このエンブレムを目にしようとは思わなかった。　だから、その驚きと云ったらショック死しそうな程である。

幽霊の様に部屋に戻ったフロイムは、ショーターなどを戻らせた。
話が途中だと言ったショーターに、怒声すら張り上げた彼の心中は、乱れに乱れていたのだろう。

代わって中に入るハソロは、何が起こったのか解らない顔をするショーターを見て。

「ショーター、お前の観念する時が来たぞ」

と、部屋の中に入る。

そのハソロの言い草に、ショーターは不気味な確信を見た。

（不味い、野郎・・何かしやがったなっ?!!）

ショーターは、流石に感じ取る所は凡人では無い。フロイムの急変やハソロの様子から、自分が危うい立場に追い立てられる気配を感じ取った。自分とウマの合わない主任騎士長まで一緒と言うのが、彼にしてみれば決定打だっただろう。

（クソッ、ミズリーに相談しなければっ）

一体フロイムはどうしてしまったのかと首を傾げて階段を下りる政務補佐官達の間を押し退ける様にして、ショーターは兵士宿舎の方に戻った。

★★★

フロイムは、オッペンハイマーの連れて来た3人に話を聞かされ、その心はクチャクチャだった。

アランの命を狙った犯人が大勢の人を殺傷し、しかもその不手際や誘引の一因は兵士のミズリーやショーターに有ると言う。　このまま殺人事件が続けば、全ての責任はフロイムが負う事に成ると。

執務室のデスクで頭を抱えるフロイムは、オッペンハイマーに。

「オッペンハイマー殿、あのマントは・・ご一族がか?」

「ああ。　今、本人が君に直訴するつもりだった。　だが彼女は、今は身を隠している身。　私が代わったまでだ」

フロイムは、愕然とした顔で。

「ま・・まさか、君の離れに居る冒険者・・」

「そうだ。　君も知っているだろう?　政略結婚を嫌った彼女が、夜這いに来たフィアンセを叩き伏せ、もう家には戻らないと書状を残したのを。　彼女の父上は、娘に断絶を言い渡したが、本心では無い。　いや、もし娘が国内の憂いを届けたら?　いや、彼女を是非に養女にと欲しがったクランベルナード王に、その意思を認(したた)めた書状でも届けられたら?」

「あ〃・・・」

フロイムは、クランベルナード王が子供達以外で、“自分を父と呼

んで構わぬ”とすら許されたポリアの事を思い出し、背筋が凍える思いがする。

オッペンハイマーは、フロイムに、主任騎士長と捜査官総長の二人の指揮に依る捜査と言う形で、ショーターを主任から外し。　ショーターとミズリーの素性調査を行う事を打診した。

フロイムは、躊躇っていた。　自分が中央で推薦して彼を兵士（ショーター）にし、自分の腹心として此処までしたのだ。

「どっ・ど・・・どうしても、ショーターを・・外さねば駄目か？」

苦し紛れに言うフロイム。

だが、ハソロは言葉を少なめに。

「なら、ショーターと共倒れのお覚悟在りますな？」

と、聞かれては、自分可愛さも出て返事が出来ないフロイムだ。

大体、アランやオッペンハイマーが襲われた時点で、その指揮に騎士が出るのが当たり前。　オッペンハイマーを密かに迎えた晩餐会でも、フロイムの不手際や対処の遅さが指摘されていた。　もし、フロイムが騎士や貴族の不満を買い過ぎれば、こちらから裁判部を動かされ兼ねない。　オッペンハイマーは、同郷で後輩のフロイムを心配し。

「フロイム、この街の騎士や貴族、商人までもが君に不満を唱え始めている。　君が自分の手の内ばかりに固執すれば、その不満は裁判部に及ぶだろう。　君は、もっと人との折り合いを図るべきだ。

このままでは、君自身が君の意思に陥れられる。　どうか、一部の意見だけを聞くのは止めにしよう。　もう・・人が何十人と死んでいるんだ」

フロイムは、自分の思うままに動かない事全てを呪った。　だが、このままでは本当に自分は失脚して、罪にすら問われかねない所まで行きそうな気がしてきた。

「解った・・。　ショーターの軍は、一時主任騎士長に全軍預ける。街を脅かす者から、都民を守ってください。　後の事は、明日に・・」

フロイムの混乱は、仕方の無いものだっただろう。

騎士を束ね、私的に軍すら動かせる特権を持つ主任騎士長だが。やはり、統括との折り合いは図って置きたい所だった。　フロイムを部屋に残し、今日はそっとしておこうとオッペンハイマーは先に退室した。

★★★

さて。　自分の私室に戻ったショーターは、ミズリーを探す様に兵士に言った。　だが、ミズリーはまだ朝の一件の後処理で戻っていないと言う。

（仕方ない）

ショーターは、馬を引かせ。　この雪が本降りに成る中で単騎、馬を走らせた。

このショーターの行動は、焦りから来たものだが。　ミズリーが傍に居たなら、軽率だったと云わざる得ない。

何故なら。

「君、重要参考人であり、オッペンハイマー様を狙ったとされる賊が捕らえられている牢屋は、何処だろうか？」

廊下を巡回していた兵士は、主任騎士長のローラブラムスが、ハソロを連れてやって来た所に遭遇した。

背が高く、立派な鼻髭を蓄える武人然とした色黒の中年騎士ローラブラムス。　その何時も着てる赤い軍服は、兵士の間では“紅（くれない）の威厳騎士”とも渾名される男で、一目見れば解る。

癖の無い短い髪が上向く偉丈夫へ、サッと敬礼をした兵士は。

「は、地下二階の重要収容牢です。　ご案内いたしましょうか？」

「うむ、取調べもしたい。　私の私室に連れて来て貰えぬか？　手枷や足枷は不要だ」

「は、ですが・・問題が」

「ん？　ショーターの事なら、もう構わん。　今回の一件から、主任を外されたからの」

「いえ、違います」

ローラブラムスは、ハソロと見合って不審を抱き。

「どうした、連れて来られない事情があるのか？」

ハソロは、ショーターの云っていた通り風邪が悪化したのではと心配したが、事態はそれ以上に悪く。

「実は、ショーター様が厳しく取調べをし過ぎまして・・。　体の彼方此方の骨が砕けて、もう自力では立てません」

ローラブラムスは、厳格だが。　よほどの悪人でも無い限り、拷問など許さぬ大らかな男。　ショーターが身勝手に規律を破ったと聞いては、捨て置ける訳が無い。

「何だとっ！！　ワシは、取調べに規律を設けているハズだっ？！　誰が一介の兵士長に許可を出したっ？　どの騎士だっ？！！！」

ローラブラムスの剣幕に驚く兵士は、

「いっ・いえ・・、独断かと。　フロイム様の命の下・・」

「バカ者っ。　兵士の規律や責任は、この私に全権が在るのだぞっ？！。　フロイム様がどう云おうが、私を通さずして規律違反など以ての外だっ！。　今直ぐに軍医施設から医者を呼べっ。　それからアルロバート為る者を、私の私室に移動させろっ！！　勝手に死者など出されてたまるかっ」

そう、殺される前に、アルロバートが助け出された事だ。　これが、ショーターの運命を大きく変える事に成る。

助け出されたアルロバートを見たハソロは、その様子に気がおかしくなりそうだった。　顔は、骨が砕けたのか変形し。　全身の骨格が潰れてクニャクニャになっているのではないかと思う様な様子だった。　足など、座らせた際に力が入らず骨抜きの肉のみの様に左右に分かれて、自力で立つ力が入らない様な感じであった。　まともに座り続ける事も出来ない彼をして、今まで受けた拷問の酷さが伺えた。

「おぉ・・、なんと云う事だ。　こんな姿、ポリア殿に見せたらどう思うか・・」

大きい私室を二つ持つローラブラムスは、私的に客を招く部屋に彼を運び、ソファーに寝かせた。　そのアルロバートを見て、ハソロは思わずポリアの事を口にしてしまった。

すると、細い息ながら黙っていたアルロバートが顔を上げ。

「ポ・・ポリア・・？」

ハソロは、顔を起こして向いたアルロバートに。

「嘗て同じ師の下で修行したお方を覚えていたか？」

ボロボロの姿ながら、ハソロの言葉に、ポリアンヌとして修行していたポリアを思い出したアルロバートは。

「いっ・いい・・居るの・か？」

「あぁ。　お主が崩壊市街地で捕らえられた時、遺跡の中にはオッ

ペンハイマー様とアラン殿が居た。　兵士とは別に、そのお二人の護衛をしていた冒険者のリーダーがそうだ。　お主は知らずとは云え、ポリア様に剣を挙げたと同じだ。　そのお主の病弱な父親を守り、オッペンハイマー様のお屋敷に引き取ったのもポリア様だ。　お主、随分と不肖を仕出かしたな」

ハソロの話を聞きながら、過去と今の事を思ったアルロバート。　見えぬながら、父親の姿や様子が解る気がした。

様々な手配に動くローラブラムスの代わりに、部屋に居たハソロ。　気が動いたアルロバートに、更に話し掛けてみた。

「お主、その姿ではもう仕官も叶わぬだろうな。　だが、誰に頼まれて遺跡を見張ったのだ？　それだけは、言って貰わねばなるまいぞ。　今、この街では暗殺が横行し始めた」

ハソロは、持っていた残された証拠の図形を見せ。

「アルロバートよ、見えるか。　この図形の意味を知りたいが為に、１０人以上の学者が殺された。　その親近者も巻き込まれ、逃げる犯人に因って罪の無い者達も死んでいる。　連続殺人の犯人達は複数で、冒険者の技能を有している。　お主は、その一味なのか？」

ハソロは、その事を確かめる気で此処に居る。　医師の診断に立ち会えば、アルロバートの体を見れると思ったからだ。　刺青が在るかどうかを確かめる為に・・。

だが、顔を弱く振り被るアルロバートは、

「おれ・俺じゃ・・ない。　俺達は、ス・すすぅ・・スタ・ムスト・

じっ自治国の・・手の者だ」

ハソロは、何故に隣国の手がこの都市に回るのか理解出来ず。

「なんだと？　スタムスト自治国？　お主、斥候で来たのか？」

「ちが・・ちがう・・」

たどたどしい言葉で語るその話は、実に奇妙な話だった。　アルロバートの雇い主は、隣国スタムストの州都で商人も営む地主の人物。　その勢力の中には、州都の政治に関わる者も多い。　その男が、仕官を条件に、用人として雇っていたアルロバート以下護衛の３人に、数年間このシュテルハインダーに住み。　あの遺跡を見張る様に言い付けたのだとか。　深い理由は語られなかったが。　どうやら遺跡を盗掘か調査する手筈を整える気だったのだろう。　そして、アルロバート以下の人物を手引きし、その手下として動くゴロツキを紹介したのは。　なんと学者殺しの３件目で死亡した、大きな私営博物館の館長をしてたソービシェムと言う初老の男なのだ。

その事実を聞いたハソロは、何が起こっているのか解らなく成る。　博物館の館長をしていたソービシェムは、学者を狙った悪党一味に殺された。　だが、そのソービシェム自身も、何かを企てていたと云う事になる。

（ソービシェムの事と、このアルロバートの事は関連が在り。　学者を狙った一連の事件は、また別と云う事・・か？　深い・・、この事件は深いぞ）

ハソロは、事件の構図を今一度考え直して見る気に成った。

運命と言う言葉は、軽々しいものでは無いだろう。　まして、人の生死を運命で片付けるのも虚しいし、簡単な事では無い。

だが。　悪党達の運命は、調子の良かった途中までの軌道を外れ始めていた。　その最たる行動は、ショーターの軽はずみな行動だ。

だが、それとはまた別に、逆の最たる行動はポリアである。　オッペンハイマーと共に屋敷へと戻る気だった彼女だが。　待たされている間に戦いの中の記憶を仲間と反芻し、思い出した事が在る。疲れているのを押して、ハソロに再度会うまでは残ると。　この政治施設から離れた左側に立つ、大きな警察部の施設に移動し。　面識の有る役人を頼っては、ハソロの私室にて待たせて貰う事にした。

夜遅くまでアルロバートに付き。　主任騎士長のローラブラムスと話を重ねたハソロは、そのまま家に帰ろうと思ったのだが。　騒ぎの在った後始末や聞き込みなどの状況を聞くべく、まだ捜査官総長が残っているかどうかを確かめに警察部へと戻って来た。

この巡り合わせは、ハソロを。　その先の運命を変えるものだった。

若き上級捜査官副総長のホプキンスは、４０歳まで２・３年を残す男性だ。　その働き盛りの年齢から、体調を崩している総長グラーミランの命を受け。　代理としてバリバリと動いては、捜査官を総

★★★

動員して様々な手配を済ませていた。

其処に、ハソロが戻ったので、ローラブラムスとの遣り取りと聞かせて貰い。　更に、次の捜査方針の骨格を練り始める。

ハソロが上級捜査官副総長ホプキンスと話していると、其処に帰宅前の捜査報告書を持って来た下級役人が来て。

「あ、ハソロ様、お戻りでしたか」

「おぉ、今な。　今夜は、徹夜に成りそうだ」

と、苦笑いをする。

ホプキンスは、尊敬するハソロに。

「ハソロ様、どうか今日はお帰り下さい。　私が、これから夜勤で動きます。　明日、昼に捜査方針を決める会議を開きますから、それに間に合う様に御出で下されば」

捜査官として脂の乗ったホプキンスだ。　ハソロの弟子みたいな者で、一番優秀で思慮が深い。

「そうか、では・・・そうさせて貰うかな」

此処で、報告書を持って来た下級役人が、会話に口を挟めるタイミングを見て。

「ハソロ様、そういえば・・お客様がお待ちでしたよ」

ハソロは、こんな遅い時間に客とはヘンだと。

「一体誰じゃな？　グラーミラン様か？」

「いえ、今日の一件で活躍した冒険者達です。　どうしても・・ハソロ様に申し上げたい事が在るとか」

ハソロは、その話にワッと驚いた顔をして。

「バッカモンがっ！！！　なぁ～んでそれを早く云わんっ！！！お前ぇ、ポリア様はオッペンハイマー様の姪だぞっ？！　こんな遅い時間まで引き止めていたら、叱責されるわいっ」

「あっ、す・すいません」

ハソロは、ホプキンスに一言を置いて退室した。　私室に駆け込めばソファーにて、マルヴェリータの膝を枕にシスティアナが寝息を立てていた。

「おぉ、ポリア殿すまない・・。　少し、手配などが遅れて・・・」

と、云うハソロに、ソファーに座っていたポリアは直ぐに立ち上がると。

「ハソロさんっ。　過去のの事件で姿を消した、暗黒魔法の死霊呪術を遣うメンファルースと云う人・・。　もしかしたら、あの悪党集団の中に居るかも知れません」

「えぁ・・・」

ハソロは、急な話にポカンと口を空けた。

驚愕のハソロは、俄に信じられなかった。　だが、悪党達とそれぞれに戦った皆は、仲間同士で名前を呼び合う悪党達の名前と特徴を書き出した。　すると、どうしてもセヴゥリンが一度だけ、“メンファルースのジジイ”と云った人物が居ない。　だが、博士（ゼオルギー）と呼ばれる人物と、メンファルースと言う人物が重なるとポリア達は思えた。

深く話を聞くハソロは、同じく一緒に思え。

「そうか・・。　墓地の骨を遣っての仕業・・確かにアヤツなら遣り兼ねん。　しかし、その様な魔法を遣う相手と成ると、益々冒険者達に手を借りねば成るまいな・・。　魔法兵団は、中央のみの組織。　此処には、その様な者は少ない」

其処に、マルヴェリータが。

「ハソロ様。　冒険者に仕事を打診する一方で、医療施設に居る僧侶にも協力を求めては如何でしょうか？　早くこの事件を解決する上で、雪に閉ざされたこの時期。　街に居る者には、得意と成る分野で手助けを頼むのも一案かと。　何も、巡回や警備ではなく。　モンスターに対する助力ならば、引き受けて下さるかも」

腕組みするハソロは、役人だの兵士だのと敷居を高くする現状ではないと誰よりも理解していた。

「うぬぬ、確かに。　起こる事が大き過ぎて、モンスターなどとは手が焼けるでは済まない。　その案、ワシは賛成だ。　今から、ホプキンスに相談しておこう」

ポリアは、待った甲斐が在ったと。

「ハソロさん、来て下さって有難うございます」

「ほほっ、なんの。　それより、もう少しお待ち下され。　ワシと共に、大馬車で帰りましょう。　オッペンハイマー様のお屋敷まで送ります」

「はい」

ポリアは、ハソロともう少し話したかったので、そう返した。

ハソロは、ホプキンスの元に舞い戻った。　夜の見回りの陣頭指揮を取ろうと仕度していたホプキンスは、ハソロが戻って来たのに驚いた。

「ハソロ様、まだ残っていたのですか？」

「いや、ホプキンス殿、それが少し事態が悪い。　ま、聞いてくれ」

妖術も扱える暗黒魔術師のメンファルースの事を語り。

「僧侶に協力を求めてみる事と、墓地の見回りもしたほうがいい。　それから、冒険者に依頼をした後、請ける冒険者が居るなら、斡旋所に繋ぎが必要だろう」

「なるほど。　それは重要な証言ですな。　名前だけならいざ知らず、モンスターが出ている以上は含めて考えて然るべき。　・・解りました。　今夜は我々だけですが、一応兵士と合同で見回ります

ので、向こうの方にも連絡して置きましょう」

「あぁ、頼む。　君の事だから、万事安心して任せる」

「は、了解です」

「ふふ、何時までも部下の態度はしなくていいぞ」

と、笑ったハソロに、ホプキンスは笑い返し。

「なぁに、貴方の退職後にデカい態度させて貰いますよ」

「そうか、じゃ～後は頼む」

「お疲れ様です」

ハソロは、ホプキンスの部屋を出た所で笑った。

（いずれにせよ、アイツ等に跡を任せる時が近いな。　俺が駄目になっても任せられるヤツが居るってのは、不思議と有難いモンだ）

ハソロは、ポリア達の待つ私室に戻った。　帰る為に、私用の馬車では無く。　護衛用の大型馬車を使わせて貰う事にする。

ポリアと共に馬車に乗ったハソロは、ゆっくりとオッペンハイマー邸に向かって馬車を動かした。

ポリア特別編サード・中編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ポリア特別編サード・中編・最終話

ポリア特別編～悲しみの古都（オールドシティ）～中篇・古都で惹かれ合う絆・最終話

≪その襲撃は、悪魔が来る前の足掻き≫

雪が降る深夜の街中、ハソロとポリア達一行を乗せた馬車は警察部を後にした。

黒い大型の馬車の中は、３列のシートに成っていた。　一番後ろに座ったのは、システィアナを抱えたゲイラーである。　１列目には、ハソロと彼を挟む様にヘルダーとイルガが座る。　その席に向かい合う２列目には、ハソロと向かい合うポリア、隣にマルヴェリータが座った。

さて、動き出す馬車は、小降りの雪の中を大通りへ。

ポリアは、ハソロから手短にアルロバートの状況や話を教えて貰えた。

「ロバート・・、そんな酷い事に・・・。　嗚呼、クシュリアントになって云ったらいいのかしら」

俯くポリアは、心が痛かった。

代わって、マルヴェリータがハソロへ。

「では、その3番目の被害者であったソービシェムと言う方が、密かにスタムスト自治国の商人と通じていたと？」

疲れの見える顔を頷かせるハソロ。

「うむ。　彼の話を信じるなら、その様だな。　明日、アルロバート以外の者が隠れている場所に行き、接触を試みてみようと思う」

イルガは。

「そう云えば、アラン様もあの遺跡や周辺を捜索したいと仰っていましたな。　故人を余り悪く言いたくは無いが・・。　ソービシェムと云う博物館の館長殿は、嘗てはアラン様などの研究や収集品を盗み。　それを自分の功績にしていたとか・・・。　もしかして、アラン様を中心にして、二つの事件が一つの環の如く見えておったのかもしれませんな」

ハソロは、年の近いイルガに頷き。

「私もそう思う。　アラン殿の発見か、研究推測をソービシェムが盗み。　宝を求めた彼は、どうしてか隣国の商人と結託した・・。　一方で悪党達は、たまたまアラン殿と面識の深い優秀な学者を狙って殺人事件を起こしていて。　その中で、遺跡に向かったアラン殿とオッペンハイマー様の事を噂などで知り、その身柄を攫おうとした・・。　恐らく、こうゆう形に成っていると睨んでおる」

だが。　ポリアは、まだ不可解なままの図形が気に成り。

「でも、ロバートですら、殺人事件の現場や遺体に残された図形の事は知らない・・。　つまり、あの図形の謎は、此処まで来ても残ったままなんですね」

ハソロは、其処が一番痛い所。

「ですな・・、一体何なのか。　そもそも、何が目的で、何の意味があの図形に在るのか・・。　今一、悪党達の魂胆が解りません」

ポリアは、一番心配する所に踏み込み。

「あの・・・、ハソロさん」

「？　どうしました？」

「いえ、その・・事件の断片が見えて来た今なので、率直にお聞きします。　ダグラスの一件は、どうなりますか？」

この話に、ゲイラーも顔を上げた。

ハソロは、深く呼吸をしてから。

「・・、そうですな。　アルロバート達が雇い入れたと思われるゴロツキに襲われた事は、客観的に見ても彼等の勘違いであり。　暗躍していた者達が他国の手先と解った今ですし・・。　ま、事件の解明だけして、逃げた男女二人はお咎め無しに成りましょうな。　密かに手を回し、ソービシェムが死んだ事をスタムスト側の商人に伝え。　国境を侵して動く事に対して、此方から牽制をして終わる

と思います。　深夜に斬られた冒険者の二人も、深く聞き込んだ処によれば、叩けば相当に埃の舞う輩ですし。　今更逃げたダグラスと言う人物を追えど、此方としては面倒なだけ。　もし事件として手配して、徹底的にやると外交的に微妙ですからな。　ま、政治的に内々で済ます事ます」

「そうですか・・・」

ポリアの顔には、複雑な思いに喜ぶ事も、安堵する事も出来ぬと言う雰囲気が広がっている。

ポリアの俯き加減な様子を見つめるハソロは、その麗しいポリアに、年甲斐も無く少し意地悪してみたく。

「どうです？　お探しになり、詮議不問の事をお伝えしますか？」

と。

だが。　言われたポリアは、意外にも強(キツ)い眼の真面目な顔をして。

「いえ、このままで。　知らずのままなら、逃げるダグラスは・・・怯えて生きるでしょう。　それが、殺した相手と云うより、事件を犯した罪に対する償いの代わりに成ると思います。　悪人だからと簡単に殺めては、普通の人間は何(いず)れ心が・・・。　人が、壊れます。　知らないままに逃げるダグラスにとって、怯えが枷に成りましょう。　このまま、もう人を殺めず居て欲しいので・・・」

と、云うのだ。

ハソロは、静かに。

「随分・・悩んだ様ですな」

ポリアは、無言でまた俯いた。

ゲイラーは、ポリアの判断が正しいと思える。　だがら、異論も何も言わなかった。　ただ・・。

「？」

システィアナが、ゲイラーの手を握る。　その優しい温もりは、今のゲイラーには、暖炉の温もりより有り難いものだった。

（システィ・・、やはり俺の女神だな）

そう思えると、女の為に罪を犯したダグラスの事が、少しだけ理解出来た。

話題を変え様と思ったイルガは、ハソロに。

「しかし、これから悪党達も益々遣り難く成るでしょう。　何処かに潜伏するかも知れませぬ。　ですが、一体何処を探せばよいやら・・、面倒ですな」

「その事、その事だ。　犯人達は、各都市に入る門を護り立つ衛兵に見つかっていない。　この都市は、絶壁と石壁を利用して守られる城塞都市の側面も持っている。　なのに、奴等は神出鬼没に姿を現し、そして逃げる。　どこか、身を隠す場所が在るのだろう。　その場所を特定しなければ・・・」

ポリアは、神妙なままに少し顔を上げ。

「一番怪しいミズリーとショーターに、誰か見張りを付けるのがいいと思います。　こっそり泳がせれば、何かするかも」

ハソロもそれは解っていた。　だが、相手は兵士で役人でも微妙な気配りが必要だ。　そして、何よりも・・・。

「ふ～ん・・それはそうなんだがなぁ。　面倒な事に、兵舎に二人は居なかった。　とにかく、戻った彼等を見つけ次第、ローラブラムス様が軟禁すると仰っていたがな。　兵士の中にも、貴族や騎士の威厳を嫌って、ショーターに靡く者も居るとか。　下手な行動は、返ってどうなるやら・・」

其処に、御者が小窓を開き。

「そろそろ、オッペンハイマー様のお屋敷です」

ハソロは、小窓に向いて。

「ん、門前で停まってくれ」

「はい」

ポリアは、一日が何時もの倍以上の様な気がした。

「今日は、なんだか疲れました」

ハソロは、あの悪党達と死闘とも言える戦いをしたのだから、それは当然だろうと。

「しかし、あれだけの相手を戦って、今まで起きるのですからな。
ポリア殿も、お仲間の皆も若い。　私も、もう１０年若ければと思いますよ」

ハソロの弱音に、イルガやポリアが弱く笑った。

★★★

だが。　この日は、まだポリア達を休ませてくれなかった。

馬車が停まったので下りるポリア達。　見送りに、屋敷までと降りたハソロだったが・・。

兵士と役人がそれぞれに護るオッペンハイマー邸。　その玄関先の庭先で、焦ってウロウロしていた役人のが、開かれた大門を潜って来るポリアとハソロを見つけた。　屋敷全体が、この遅い時間帯にも関わらず、煌々としていたので。　見つける事が容易だったのだ。

（あっ！！　ハソロ様だぁぁっ！！！）

見つけたのは、あの貴族で世間知らずのイエナスである。　ハソロに目掛けて駆け寄って行く彼の姿は、新たなる闇の扉が開かれた証明である。

ポリアが、“屋敷全体に随分と灯りが灯っている”と珍しがって仲間に言った時。

（ん？）

ハソロは、雪の上を転げるぐらいに焦って来るイエナスを見つけ。

「お～い、イエナス君じゃないか。　どうした、そんなに急いで」

だが、イエナスは落ち着く処の様子ではない。

「たっ・たたた・・大変ですっ！！！！！！！！　ハソ・・はぁっ！！　ハソロさまっ！！！」

その慌て振りは、ハソロやポリア達に新たな緊張を齎した。　ポリアとハソロは見合い、イエナスの元に急ぐと。　雪の上で転んだイエナスは、オッペンハイマーの屋敷を指差し。

「ハソロ様っ！！　ごごっ・ご家族がぁぁっ、にげ・逃げて来ましたぁぁっ！！！」

イエナスの前に着いたハソロとポリアは、尋常では無い事態が起こったのだと理解した。　イエナスをそのままに、屋敷へと駆けてゆく。

屋敷の玄関を破る勢いで開いたポリア、その後に続くハソロ。　ロビーには、オッペンハイマー夫妻やフロマーなども居て。

「あぁっ・・アナタぁぁぁぁ・・・」

と、ハソロを見ては呻く細身の中年の女性が居る。　床に膝を着いて崩れかかる彼女の黄色いネグリジェには、ベットリと血が付着し。

その何かを抱える腕の中には、まだ１０歳に満たない男の子と女

の子が顔面蒼白で蹲っていた。

「どうしたっ、ノイスっ?!!」

女性に駆け寄ったハソロに、もう疲れきった様子のオッペンハイマーが。

「ハソロ殿の屋敷が襲撃されたらしい。　この方々は、用人のミハエルと言う人物の御蔭で逃げれたとか。　さっき、兵士数名が屋敷に向かった・・。　あぁ・・、まだ犠牲が出るっ」

「なぁっ・・・なんだとぉ?!!!!」

ハソロは、あまりの事に目の前が真っ暗と成った。

一方で。

話を聞いたポリアは、またもあの悪党達かと全身の血が逆流しそうな怒りを感じ。

「みんなっ!!　行くわよっ!!!!」

ゲイラーは、直ぐに外に引き返しながら。

「おぅっ!!!!　今度こそ捕まえてやるさっ!!!!!」

ポリアは、放心し掛けたハソロに。

「ハソロさんっ。　御者の方は、お屋敷の場所を知っていますかっ?!」

すると・・。　ハソロは、ワナワナと震えながら顔を左右に振り被り。

「私が・・私が案内するっ！！！　ミハエルはっ、わたしの腹違いの弟なんだぁっ！！！！！」

ハソロは、もう気が狂いそうな様子で叫び上げた。

ハソロとポリア達は、馬車に引き返した。　まだ、何も終わってはいなかったのだ。

★
★
★

ハソロの家は、オッペンハイマーの屋敷から、住宅区を縦断する大きな中通りを少し走った所に在り。　住宅区の東寄りの場所に在った。　馬車の中でハソロは、必死に祈る様にして震えていた。

その屋敷の近くに来た馬車が、急にスピードを落とす。　そして、小窓が開き。

「ハソロ様っ、路上に使用人のミッチが倒れておりますぞっ！！」

ギョっとした顔を上げたハソロより先に、ポリアが、

「馬車を止めてっ！！！　私達が先行するっ！！！！！」

と、鋭く言い。　既に起きているシスティアナとイルガを見て。

「システィ、此処を怪我人の収容場にするから、イルガと此処に居て。　イルガ、御者の人とシスティをお願い」

「はぁ～い、悪い人やっつけて～」

「御意。　此処は守り抜きます」

馬車の扉を開いたポリアは、仲間に声のトーンを少し落として。

「マルタ、ゲイラーと二人で、ハソロさんを守りながら来て。　ヘルダー、私と先行するわよ」

こうなると、ポリアのチームは一気に一丸となる。

飛び出すポリアと続くヘルダー。　後をゲイラー・ハソロ・マルヴェリータの順で出て。　マルヴェリータは、準備する光の小石をポリアとヘルダーに投げ渡し。　ゲイラーに一つ渡した。

左右を大きな屋敷と庭が垣根や堀で仕切られる住宅に囲まれた太い通りの上。　ポリアは、足早に馬車の前に倒れる人物に走り寄った。

其処には、降りた御者も居て。

「駄目だ、死んでる」

と、ポリアに言う。

ポリアは、剣を引き抜きヘルダーと頷き合う。

御者の男性が。

「ハソロ様の家は、少し先の黒い外壁に囲まれた左手のお屋敷だ」

ポリアは、左手を上げて応えると、ヘルダーと屋敷に走る。

ゲイラーの後ろに居たハソロだが、馬車に掛かるランタンや光の小石の明かりで見えた年寄りの使用人ミッチの遺体を見て。

「あぁっ・・ミミミ・・」

言葉もままならないままに、雪の残る路上に倒れた人物へ駆け寄った。

その小柄な年寄りの使用人の背中と、腕に見える斬られた傷は、共に致命傷と思えて深く。　此処まで逃げて来るのが、おそらく精一杯だったのだろう。

「ミッチ・ミ・・ミッチぃぃ・・」

もう子供の様に声を詰まらせては、呻き泣くハソロ。　その様子を見るゲイラーは、罪だの罰だの必要無く。　悪党達を八つ裂きにしてやりた気持ちで、胸が張り裂けそうである。

「マルヴェリータ・・、Kが・・、居て欲しいな。　Kさえ居たら・・・此処まで酷くは成らんだろう・・。　俺達は、どうしても無力だっ」

「ゲイラー・・、無いもの強請りよ・・」

言ったマルヴェリータですら、その思いは解る。

さて、先行したポリアとヘルダー。　ハソロの屋敷とは、真向かいに成ると思われた屋敷が明かりを付け、頻りに此方を伺う人影が窓前に居るのを見て。

（何か在ったのねっ？！）

ポリアは、先に来たハズの兵士が全く見当らないのに、嫌悪に似た不安を抱く。　自分達が此処に到着する前に、何か在ったのかも知れないと思えた。

ヘルダーと二人で、塀の切れ間に開いた敷地に入る門を潜った。

「・・・」

ポリアは、敷地の奥を指差す。

（了解）

頷くヘルダーは、広く左手に広がっている庭に向かう。

ポリアは、庭中央からヘルダーを確認しながら庭全体を伺う。

ヘルダーは、雪を被った欅や公孫樹の木が並ぶ塀沿いに奥へ。　途中で夥しい血の跡を見つけ、血を辿って兵士二人の遺体を見つけた。

（くっ、また犠牲者が・・。　我々が一緒に来れれば良かったのに・・・）

ヘルダーは、光の小石を動かした。　直ぐにポリアが来て、遺体を確認。

「死んで間もない・・。　ヘルダー、屋敷内に入るわ」

ヘルダーは、鉄扇を一本だけ左手に頷いた。

冷たい風が雪の積もった庭を滑る。　ポリアとヘルダーは、オーソドックスなレンガ調の屋敷に近づいた。　二階や庇付きのテラスも見える。　だが、明かりが全く見えないのが不気味だった。

（玄関が開いてるわ・・。　血の臭いもしてる・・、あぁ・・・ミハエルは無事なの？）

ポリアの心の中では、焦る気持ちと、敵の待ち伏せを考えて慎重に行かなければ成らない気持ちがジレンマを生む。　両開きの扉が限界まで開いて、暗黒の口を開けている様な感じだった。

そっと中に踏み込んだポリアとヘルダーは、左右の壁伝いに行く。　４歩行く所で、行く先の左手に扉が見えた。　木枠にガラスを嵌め込んだ扉だった。

其処で、スッとポリアの肩にヘルダーの手が乗った。

（俺が見る。　援護を・・）

頷くだけのポリアは、その扉の前まで行って辺りを注意した後に、光を扉に当てる。

ヘルダーは、ポリアの行動に合わせて扉の前に向かい。　扉に向かって右の壁に着いた。

「・・」

「・・・」

頷き合った二人。

（よしっ）

ヘルダーは、サッと扉を開いて屈む。

「死ねぇぇっ！！！！」

突然に闇を破って、殺気を含んだ声を発した覆面男がポリアに向かって出てくる。

屈んでいたヘルダーは、サッと起き上がりながら曲者の鳩尾に鉄扇を握った拳を突き入れた。

「わっ・ぶぐぅっ！！」

驚くと同時に拳を打ち込まれた曲者の男は、痛みに脱力して蹲る。
　そして、ヘルダーの手刀が首筋に落ちた。

此処で、闇に隠れていた曲者数人は、潜んでいる事が気付かれていると察知したのだろう。　屋敷の中で潜んでいた場所から飛び出し、ポリアとヘルダーに襲い掛かって来た。

ヘルダーの開いた扉は、倉庫の様な場所だった。　光を遮らない棚と棚の間の先には、居間と繋がるキッチンが見える。　竈や水瓶が奥の土間に在り、薪なども薄っすらと。　冷たい冷気が蟠る倉庫は、雪を地下に入れて一年中低温で保てる貯蔵庫代わりだ。

ヘルダーは、後ろからゲイラーの持つ光が近付いて来ているのを確認すると。　そのまま貯蔵庫に踏み込み、棚の影に隠れていた曲者に襲い掛かる。　すぐさま武器を握った曲者の腕を、鉄扇で斬り払い。　そのまま奥に走って、暗闇の土間に飛び降りた。

すると、

「わぁっ！！！」

「このヤロウっ！！」

と、出てきた曲者達。

ヘルダーは、一人で悪党を相手にする気構えで戦い始めた。

一方、ポリアは廊下に残り。　ナイフを手に突っ込んで来た別の曲者の手を、逆手に持った自身の剣の柄でカチ上げる。

「イデェェっ！！！！！」

硬い剣の柄で打たれては、誰でも痛い。　ナイフを宙に飛ばして喚いた曲者の顔を、ポリアは正拳で殴り倒す。

「このぉアマぁっ！！！」

屋敷の中から、勢いに任せて廊下に出て来た後続の曲者だが。　何の支障も無い様子で曲者を殴り倒すポリアを警戒し。　襲い掛かるタイミングを見失って、３歩前で立ち止まった。

ポリアは、止まった曲者を睨み。

「来ぬのか？　なら、此方から行くぞっ！！」

と、殴り倒した曲者の上に踏み出す足を乗せ、更に廊下の奥に踏み込んだ。

「うげぇっ！」

思い切り腹を踏み台にされた曲者は堪ったものでは無いだろうが、ポリアの怒りはそれ位で鎮まるものでは無い。　怒りを込めて、

「この下衆がぁっ！！」

と、一喝。　慌ててナイフを突き刺してくる曲者の手を斬り払い、絶叫を上げる曲者の腹を蹴り飛ばす。

屋敷の中で、凄まじい音を上げて乱戦が始まった。

だが、相手が下っ端の曲者では、暗い中でも分はポリア達に在る。

一階の戦いなど、ものの少しで終わった。　曲者８名が、彼方此方で再起不能に成って転がった。

戦い終えて、一階の部屋を隈なく見回ったポリア。

テラスや土間のキッチンなどから、裏庭まで見たヘルダー。

二人が見回って、兵士の遺体が3体程見つかった。　だが・・、ミハエルは見当らない。

入って来たゲイラーは、縄で曲者を次々と縛る。　喚く輩は、それこそ腕の一本でもへし折る凄みも付いて来た。

ポリアは、二階への階段をヘルダーと共に駆け上がる。　上がった階段と平行する廊下と、右手に折れる廊下が在る。　二人は手分けして各部屋を見回る事に。

ポリアが一番奥の部屋に辿り着き。　赤いシーツの掛かったベットを見ては、女性の趣味傾向が匂う部屋に入った。

すると・・。

「よぉ。　まぁ～た俺達のお邪魔しに来たってか？」

暗い部屋の窓を背に、顔を布で隠した小柄な黒いマントの人物が立っていた。

ポリアは、その男は悪党の仲間だと思って斬り込もうと身構えるのだが。

覆面の男。　いや、昼間はヘルダーと戦った丸い針型のダガーを遣うハンセンは、少し足を動かし。

「動くな、コイツが死ぬぜ」

と。

ポリアが下に目を動かせば、ハンセンの足元には、傷だらけで顔や衣服を血に染めたミハエルが呻いていた。　首に足を乗せられている。

この状況でハンセンは、絶対強者と成ったと確信した。

「うひぃひひ、今度は勝たせて貰う。　武器捨てろ。　胸、腹、顔って穴を開けてやるよ」

此処に来てこうゆう卑猥な意思が動くのは、やはり内面が堕ちているからだろう。

しかし、ポリアは冷静だった。　寧ろ、この状況で逆に閃いた。持っている剣を見せると、

「解ったわ、そっちに投げる」

ハンセンは、これには勝ったと思ったのだろう。

「うははははっ!!　その名剣を俺に遣すってかぁっ?!　コイツはイイぜっ!!!」

と、狂喜の声を上げる。

しかし、ポリアの心の中では。

（ブルーレイドーナ様、お願いします）

（良い閃きだな、良いぞ）

と、会話が行われた。　この意味を、ハンセンが理解出来る訳も無い。

「それっ」

ポリアは、ハンセンに受け取り易い高さ・速さで剣を放った。

「よぉ～しっ！！！！」

針型のダガーを左手に持ち替えたハンセンは、右手でその剣の柄を受け取った。　いや、・・受け取ってしまった。

インテリジェンス・ウェポンは、持ち主を定める。　そして、その持ち主以外を拒絶する。　その拒絶の仕方は様々だ。　呪いだったり、魔法を発動させ持てない様にしたり。

ブルーレイドーナの力は、“風”を基礎とするエネルギー。　当然、ポリア以外が持てば、風の力に因る反発を招く。

ハンセンが剣を持った瞬間、烈風の様な風の圧力がハンセンを襲った。

「っ！！！！　うおわぁぁぁーーーーーっ！！！！！！！！！」

飛ばされたハンセンは、上に持ち上げる様式の窓に背中から突っ込み、窓ガラスを粉砕して二階から外に投げ出される格好と成った。

ポリアは、ミハエルに走り寄りながら。

「下に悪党が落ちたわっ！！　誰か抑えてっ！！！！！」

と、全身の力を使う位の大声を上げる。

（外かっ？！）

別の部屋を見回っている所で、ハンセンの笑い声を聞いたヘルダーは、急いで引き返しポリアの間近に来ていた。　だが、その声を聞いて、手前の部屋の入り口から部屋に踏み込み。　既に破られている窓に向かって行くと、庇の屋根に飛び降りた。

一階からは、土間から勝手口から庭の側面に出たゲイラーが。

「何処だっ、フン捕まえてやるっ！！！」

と。

ハンセンの姿を雪の積もった庭の上でヘルダーが確認。　下に飛び降りた。

「う〝・・うぅぅ・・・」

呻きながら顔を上げたハンセンは、ヘルダーがまた現れた事に驚き。

「マジかよっ」

と、這い出して逃げようとする。

だが、この時。　マルヴェリータも、離れていたシスティアナも同時に。　屋敷の裏庭の方から、急激な魔力の膨張を感じる。

マルヴェリータは、昼間に現れた緑色のスケルトンである、古代のゴーレムモンスター“リザードバイター”と同じ気配を感じ。

「気を付けてっ！！！　ゴーレムマジックの気配がするわっ！！！！！」

と、叫んだ。

システィアナも、離れた馬車の車内で、

「あわわ・・まっくろマホ～さんのお力がしましゅっ」

と。

イルガは、ポリアの命が有る故に場を離れないが。

（お嬢様、ご無事で）

と、祈る。

さて。　這い蹲って逃げるハンセンの間近に迫ったヘルダーは、マルヴェリータの声に警戒して辺りを窺う。　すると、木製の人でも跨げる低い柵の向こう側から、何かが向かって来るのが解った。

（またモンスターかっ。　ゴーレムモンスターとは、その動く姿に変わるまでは気配が石像と同じなのか。　何とも厄介極まりないっ）

邪魔が入ると悟ったヘルダーは、先にハンセンだけでも捕まえてしまおうと、逃げるハンセンに走った。

・・・。　一方で。

二階でミハエルを助けたポリアは、辛うじて彼に息が在る事が救いだと思う。

「ミハエルっ、解る私(ポリア)よっ?!!　今、助けるわっ」

と、担ぎながら落ちそうな彼の意思を揺り動かし、気持ちを保たせる為に声を掛ける。

「あ・・・あぁ・・・。　あ・・に・・・、は・・そろ・・・」

ハソロの安全と家族の無事を心配してか、モゴモゴと呟くミハエル。

「近くに居るわっ!!　彼方のお陰で家族も無事よっ。　しっかりしてっ!!」

ミハエルは、それを聞き。

「よか・・よか・・た」

ポリアは、此処で安心されては困る。　背負う様にミハエルを担ぎ、

「彼方が死んだら、ハソロさんは仕事も出来なく成るっ!!!　生きて安心しなさいっ!」

叱咤しながら、運び出すポリア。

その頃。　ハソロは、死んだ使用人の遺体をやっと探し出し。　外

の庭に運んで再度確かめた。　まだ温い死んだばかりの遺体ばかりで、二人の老女と若者を見ては駄目だったと泣く。

泣きながらハソロが屋敷に舞い戻る所で、ポリアの声が。

「ハソロさんっ！！　ミハエルが生きてますっ！！！」

ハソロは、その声に目をガバっと見開き。

「ミハエルっ！！！」

と、ポリアの元に走り寄った。

さて、雪の積もった裏庭では。　ハンセンを取り押さえようとしたヘルダーだが、黒い塊が飛び掛って来たのに驚いた。　攻撃を避け、その相手を見ると・・。

（なっ・・何だ？）

見た事も無いモンスターが、其処には居た。　外観は黒い。　一見すると、獣の・・豹や虎などの骨なのだが、頭蓋骨が盾の様に幅広く。　その口は縦では無く、なんと横に動く。　鋭い１０センチは超える牙、猛獣並みの鋭い爪、蛇の如く長い尻尾を持った骨のモンスターである。

（何だっ？　こんなゴーレムも居たのか）

ヘルダーは、武器に魔法の加護が無い自分では、このモンスターを倒せるか理解出来なかった。

さて、ポリアと逢ったハソロが、背中のミハエルの姿を見て。

「今助けるぞぉぉっ！！　僧侶が居るから安心しろっ！！」

と、混乱した大慌ての声を掛けた時。

マルヴェリータは、勝手口から。

「ポリアっ、ゴーレムモンスターよっ！！！　貴女の剣じゃなきゃ確実に倒せないわよっ！！」

と、声を飛ばす。

それを聞くハソロは、ポリアへ。

「弟は、ワシが連れて行くっ。　ポポっ・ポリア殿っ！　近隣住民に被害が出る前にっ、モンスターを頼むっ！！！」

ポリアは、それが一番イイとハソロにミハエルを渡す。　青いコートマントにミハエルの血が付き。

「出血が酷いわっ、早くシスティの所へっ！！！」

と、言うと。　マルヴェリータの待つ勝手口に向かった。

ミハエルを背負ったハソロは、もう何時もの彼とは思えぬ必死な感情剥き出しの顔で。

「死ぬなぁっ、死ぬなミハエルっ！！！　あの三人の娘を、父無し（ててなし）にするなぁっ！！！　俺は、まだお前に兄としてしてやる事は幾ら

でもあるぞっ！！！！！」

と、叫ぶのだ。

（・・あ・・あに・・じゃぁ・・・・）

途切れそうな意識を巡らせるミハエルは、ハソロを兄と知って、初めて兄弟と云う思いを味わった気がした。

さて。

「うおっ！！！　早ぇぇっ！！」

猛獣宛(さなが)らの動きで走り回り。　突進や飛び掛りで攻撃して来る黒いスケルトンモンスターに、大柄のゲイラーは翻弄されそうだった。

ヘルダーも、その動きに互角でしか付いて行けない。　二人の攻撃は、ゴーレム特有の硬い身体で弾かれていた。

だが、其処にポリアが到着し。

「さ、一気に倒すわよっ」

と、声を掛ければ。

「真打登場ってかぁっ？」

と、ゲイラーも、ヘルダーも気力を漲らせる。

三人で牽制してモンスターを囲む。　モンスターが誰に狙いを定めても、脇と後ろから誰が斬り掛かるのだ。　モンスターも、囲みを

突破する事を優先して、その攻撃が緩慢に成った。

この隙を見逃す3人では無い。

先ずポリアが尻尾の鋭い先を斬り飛ばし、長い犬歯2本と左の爪を斬り飛ばせば、モンスターの攻撃も怖くは無くなって来る。

ゲイラーは、ヘルダーに見向いて。

「動き止めるぞっ」

と、声を発する。

頷いたヘルダーは、ゲイラーとモンスターの動きを見て、間合いを合わせた。

ゲイラーは、モンスターが注意をヘルダーに逸れている所で、一気に肉薄してモンスターの尻尾を掴み。　ゲイラーに向こうとするモンスターの背中に、今度はヘルダーが飛び乗る。

モンスターとしては、これは堪ったものでは無い。　直ぐにヘルダーを振り落とそうと暴れるのだが。

「おっとっ」

ゲイラーは、モンスターが飛び跳ねるタイミングを狙って、怪力で尻尾を擡げては後ろ足が雪の地面に着かない様にしてしまった。

これでは、モンスターの自慢と成る脚力が発揮出来ないだろう。

そんな状態で暴れるモンスターの肩の骨の間接に、ヘルダーは鉄扇

を左右に差し込んで動けなくしてしまう。

完全に動きを封じられたモンスターの正面に回ったポリアは、その盾の様な頭蓋骨を滅多斬りにして斬り飛ばし。　薄い骨の見えた所で、

「終わりよっ！！！」

と、剣を突き刺した。

ーガチガチガチ・・・ー

物凄い速さで歯を噛み鳴らしたモンスターだが。　頭部の頭蓋骨の中を満たしていた黒いエネルギーを突かれては、もはや動かなくなる道を直走るしか無い。　動きの完全に止まったモンスターは、冷気が吹き荒ぶ風に襲われパァッと灰に変わった。

≪堪える命と、去る命　悲しみに染まる古都に、遂に彼の悪魔が舞い降りる≫

ハソロの屋敷周辺は、深夜も更けてから騒がしくなった。

応援の兵士と、ホプキンスが直々に役人を連れて来たのは、システィアナが半死のミハエルの傷を塞いだ後だった。

その後。　ハソロ邸襲撃を聞き付け、ローラブラムスまでが応援に駈け付けた。　篝火が焚かれ、捕まえられた手下の曲者がその元に集められた。

だが、遺体の回収をする間に。　猿轡を噛ませた曲者の内３人は、不用意に轡を外した兵士のお陰で舌を噛み自決。　残りの曲者数人も、ホプキンスが手記で何かを聞き出そうとしても、喋る気は全く無いと言う素振りであった。

ハソロの家で泊り込む使用人は３人。　その３人全員が殺されていた。　若者は、ハソロが戻って来るまでミハエルと待つ気で居て、運悪く殺されたのである。

ポリアは、ミハエルの意識が途切れ掛けているので、主任騎士長のローラブラムスに掛け合い。　アランの身柄共々軍医施設に収容しては、医師を呼んで看病させたらと提案する。

ローラブラムスも、事件の被害者や捜査陣の方にまで悪党達の魔の手が伸びる現実に。

（確かに、その方が安全だな。　医療施設に兵士を派遣していては、連携も取りずらいし民間人にまた被害が及ぶ）

一応、昼間の襲撃で、その案は兵士からショーターに打診された。　無論、ショーターは聞く耳を持たなかった。　だが、ローラブラムスもまた、その兵士の話も聞いた手前である。　役人のハソロまで襲われると成ると、益々警戒を強めなければなるまいと真剣に思案する。

ローラブラムスは、ポリア達に。

「後の事は任せて欲しい。　君達には、今後も魔法も遣うあの悪党達の捕縛に力を貸して貰うかも知れないから。　今夜はもう帰りなさい。　ハソロ殿のご家族を預かって貰う今夜は、オッペンハイマー様のお屋敷の警備も強化する故。　その乗って来た馬車で、増強の兵士と一緒に向かうが良い」

ハソロとミハエルは、兵士の馬車で軍医施設に連れて行くと言う事に成った。

ポリアは、今は口を差し挟む気にも成らないし。　もう心身共に疲れたので、素直に帰る事にした。

ハソロの馬車が先に出て、それを見送ったポリア達。　意識の薄いミハエルを心配するハソロの姿が、非常に切迫したものだった事が目に焼き付く。

その後。　ポリア達は乗って来た馬車に乗り込み。　兵士２０人に騎士一人の分隊と共に。叔父オッペンハイマーの屋敷に帰った。

屋敷に戻ったポリアは、フロマーや執事と共に起きていた叔父に逢い。　騎士を紹介してから、

「叔父様、ハソロさんは無事です。　それから、ミハエルさんもなんとか・・」

「おぉ・・、そうか・・そうか。　それは良かった」

しかし、ポリアは疲れの滲む顔を俯かせ。

「ですが、使用人の４人は、助ける事が出来ませんでした」

叔父・オッペンハイマーは、そんなポリアが可哀想で仕方が無い。

誰かを助けようとすればするほどに何かを失い。　その喪失感に悩んでいると解るのだから・・・。

「・・、そうか。　ポリアンヌ、この事件は身体に悪いね。　多くの人が犠牲になり、誰かの大切な人が失われる・・。　今まで、シュテルハインダーに此処までの事件が起こるのは、私の記憶でもそうそうに無い事。　早く解決出来るように、私も協力を惜しまないつもりだ」

「はい・・」

「ん。　明日は、昼から私もアランの見舞いに行こうと思う。　とにかく、今日は休もう」

ポリア達は、疲れた身体に食事を入れる気にも成らなかったが。寝る為には、気が昂ぶり過ぎていた。　着替えを取りに行き、離れと屋敷の風呂で男女に分かれて身を暖め。　朝方に間近い頃に離れにて、皆で軽く食事をして横に成った。

ポリアは、悩みながら・・先の事態を憂いながら・・まどろみながら堕ちる様に寝てしまった。

だが、ポリアが長く休める時は続かない。　これが運命なのだろうか。　ポリアが内心で一番味わいたくない出来事が、此処に来て訪れたのである。

皆がどれ位寝た頃だろうか。　その知らせは、もう気が動転したフロマーが朝も遅い頃に離れに入って来て齎した。

「ポリアンヌさまぁーっ!!!　たったたた・大変だわさーっ!!!」

と、大声を出すフロマー。　余程に慌てなければ成らない事なのか、フロマーは雪の中を何度も転んで全身雪塗れである。

ハッと飛び起きたポリアは、寝巻きである白いワンピースの衣服のままに下に降りた。　窓の外は薄暗くも視界が利き始める頃だったが、離れの中では誰も起きていなかったから暗いままだった。

「フロマーっ?!!　一体何が在ったのっ?!!!」

マルヴェリータやゲイラー達も飛び起きて出て来る暗いリビングで。　束ねない髪のままのポリアの前に、フロマーは手を着いて座り込み。

「あああああっ、ポリアンヌさまぁぁぁ〜〜〜っ!!!　あ・アランさまぁがぁぁ・・死んでしまっただぁぁっ!!!!」

その言葉が、ポリアの全身から力を奪った。

「う・・うそ・・・」

気持ちが砕け呆然としたポリアは、そのまま床に崩れた。

「あっ、お嬢様っ」

イルガは、ポリアの元に走り寄る。

望まない不安が、皆の心中に在った。　それが、現実に成ったのである。

★★★

その頃。

「いいか。　ショーターとミズリーが姿を消した。　皆、解っていると思うが、警戒する中で怪しい者は、片っ端から面体を検めよ。　拒否する者は、最悪引っ張っても構わん。　それから。　もし見つけたとしても、ショーターとミズリーは容疑者として扱え。　最高権限を委ねられた私が命だ」

兵士宿舎脇の雪の積もった軍用広場で、徹夜のままのローラブラムスは、見回りや見張りの交代に向かう兵士に命令を下している。

昨夜から、ショーターとミズリーが消えた。

一部の兵士の証言では、医療施設の敷地で警備に残す兵士に命令を下すミズリーに。　馬で駈け付け、慌てた様子のショーターが会いに来たらしい。　そして、その後。　ショーターとミズリーの元に、下級兵士が急いで掛け付け、何か深く話し合っていたと言う。

その駈け付けた兵士は、朝方に捕まった。　取調べの中で、ローラブラムスがショーターの身柄を押さえる命を出した事を、ショータ

ーに告げた事を認めていると言う事だ。

兵士達は、街中を巡回しながら。　悪党達の行方と、ショーター・ミズリーの両名の捜索が主な任務に成りそうだった。

そして、同じ頃に。

警察局の依頼として、斡旋所にも捜査協力の依頼が入った。

ブロッケンのチーム、リリーシャのチーム、学者の殺されたチームの中、５チームが参加を申し出てきた。　他には、ウコォンのチームも参加を申し出て、その他に炙れていた３・４のチームも参加する事に。

毎日、昼と夜の交代で６チームが見回りに参加し。　休憩などは、兵士や役人が利用する場所を借りる事に成った。　やはり、相手が相手なだけに、冒険者にも兵士や役人が利用する場を共同で利用出来るようにしてある手配は、必要とされている証だった。

ウコォンやリリーシャは、ポリア達はどうなるのか気にしていた。
参加と云うより、もう捜査陣の一部に入るポリア達だから、参加と云う形に成るかは微妙だと云う判断で落ち着く。

今日の昼から、ウコォンとブロッケンのチームに、駆け出しの一チームを加えた３チームで見回りを開始する事になった。

斡旋所には、逆に兵士や役人も休憩を取れる事にしてあるので、商業区の休憩所と成り。　連絡が取り合える環境に成った。

だが、その日にポリアが斡旋所を訪れるなど無理だった。　叔父夫

妻と共に、仲間共々医療施設に向かう。

入院患者を受け入れたり、手術などをする左翼院の地下は、霊安室などが在る。　オッペンハイマー夫妻と共に、ポリア達はアランの遺体と対面する事に成った。

ランプが左右に灯るだけの薄暗い霊安室へと伸びる廊下は、非常に寒い空気が立ち込めていた。　その廊下を歩くポリアは、足取りが非常に重く。　ゲイラーやヘルダーは、ポリアが遺体と対面出来るか心配に見えた。

暗い面持ちで先に霊安室と踏み込んだのは、オッペンハイマー夫妻である。

「・・・」

寒さと悲しみに打ち震える夫妻。

寝台の上。　白い衣服を着せられたアランは、血色を無くしたままの顔が眠っている様に死んでいる。

「アラン・・あぁっ」

その姿を見たオッペンハイマーは、遣り切れない悲しみが込み上げ、横に顔を逸らす。　奥方は、夫に泣き付いた。

ポリアは、夫妻二人の後から部屋に入った。　髪の毛は、結わずにストレートのまま。　鎧も着けず、剣すらも落としそうな感じで手に持っているのみ。　白い婦人用コートを背中に掛けるだけで、その下はオッペンハイマー夫人から借りた女性用の黒いドレスだ。

気が失せてしまったポリアは、寝た時のネグリジェのままに出ようとしたので、フロマーが止め。　婦人が服を着させたのである。

「あ・嗚呼・・・、せ・・んせ」

ヨロヨロと寝台に進んだポリアは、決して起きる事の無いアランを見て辿り着けなかった。　絶対に目を開けると信じて、襲撃の後も気張って来たが・・。　此処に来て、遂にその元が断たれた。　アランの横たわる手前の冷たい床に崩れ。

「うっ・・ううぅ・・・。　私じゃ何も救えなかった・・、アラン先生も、捕まったロバートも・・」

と、蹲り。　静かに泣き出した。

「ポリア、そんな事無いわよ」

ポリア前に屈んだマルヴェリータが、ポリアを抱く。　その潤んだ目は、ポリアと共に悲しみに暮れていた。

泣き出したポリアの姿を見るイルガは、ゲイラーとヘルダーの間にて。

「嗚呼・・、ヨーゼフ様がお亡くなりに成った時と同じじゃ・・」

ゲイラーは、必死に抑えた小声で。

「クソっ・・、どっち道アイツ等に殺された様なモンだ。　何だって、こんな悲しい事ばかりが・・」

システィアナは、静かにアランの冥福の為に祈る。　声を上げぬが、その瞳からは大粒の涙が溢れていた。　ポリアの悲しみも解り。自身でもアランの非業の死は悲しいからだ・・・。

ヘルダーは、自分の命を張ってでも追い掛けるべきだったと、昨日の戦いを悔やむ。　やはり、主要メンバーの誰かは抑えるべきだったと・・。

冷たい部屋に、ポリアのすすり泣く嘆きが響く。　アランは、あの襲われた時から、目を一度も開ける事無く逝った。

★
★
★

夕方前。

ウコォンは、仲間共々役人の指揮官であるホプキンスに呼ばれた。
　場所は、斡旋所の３階だ。

ホプキンスは、キワモノと美女・美少女の混ざるウコォンのチームを見て唖然としたが。　その仕事をこなす態度は変えず。

「あ～、呼びたて済まない。　冒険者の君達に少々頼みたい事が在ってな」

ウコォンは、仲間を振り返って見てから。

「あ～ら、なぁ～にかしらぁ～？」

「ん。　実は、これから或る事件の重要人物と接触する。　万が一、その輩が悪党の場合も十分に考えられる。　もしもの為に、同行を願いたい」

ウコォンは、事が飲み込めず。

「“万が一”って・・どうゆう事ぉ～？」

同じ仲間で、男勝りな強気の女性エアリノアも、短めの黒髪の頭を掻き。

「何でハッキリしないのに、接触するんだい。　とっ捕まえればイイじゃないか」

ホプキンスは、あまり深い事は語れなかったが。

「実は、これは今の大事の事件とは、少しズレた別件なんだ。　だが、オッペンハイマー様とアラン殿と云う学者二人が、ポリアと云う女性の冒険者チームに護衛を依頼した学術調査に端を発した事件で。　今起こってる事件と螺旋の様に絡み合っている。　政治的に、事件は明るみにすると国家間の諍いにもなるからな。　此処で内々に処理したい訳だが、まだ確実に別々の事件として分けられるところまで調べが進んでいない。　だから、接触して真偽を確かめたい訳だ」

豊満な胸を持った美女のレヴィックは、麗しい流し目で。

「それなら、ポリアさん達に依頼するのが筋じゃない？　私達が、

彼女のお株を奪うなんて、とっても面倒だわ」

ウコォンも同意見。

ホプキンスは、少し俯き。

「確かに・・。　実はな・・、今は緘口令を敷いているがな。　昨夜、ポリアと云う女性のチームは、夜に襲われたハソロ殿と云う役人を助ける為に、あの事件の後も朝方まで動いていた。　それに・・、親しい御仁が今日の午前中に亡くなったらしい。　流石に、喪に服す人物を強引に引き出せないだろうと・・思うてな」

ウコォン達は、このホプキンスと云う役人が礼節や心の機微を理解する人物と見て取れた。

中年の自然魔法遣いユマは、

「ウコォン。　遣りましょう」

ウコォンも、静かに申し出を了承した・・・。

★そして、事態は終盤に堕ちて行

く★

寒さが、日々一段と厳しくなっていく年の終わりの月。　一年最後である星の月の中頃、シュテルハインダーの街は、怯えているかの様な静けさが散ばっている。

一見。　緩やかに事件は解決の方向に向かい出した・・、かの様に見えていた。　だが、その先の見通しは立たないままだ。

学者を狙った悪党達の目的は？　あの図形の意味は？

アルロバートを遣わしてまで、商人が欲した宝とは何か？

悪党達は、何処に潜伏し。　また、消えたショーターとミズリーの行方は？

そして、ショーターやミズリーの背後には、更に大きな影が見え隠れし。　その陰謀に巻き込まれた雪の山岳地帯に広がる古都は、不安の影に包まれている。

悪党達が潜伏して、姿を現さなくなって。　その不安は付き纏う様な不気味な静けさへと変わる。

そして、3日後・・・。

静かに雪が降り続く昼間だ。

（街道の雪掻きが済んで歩き易いな。　久々にヴォルグホアルダーの隠居面でも拝んでやるかぁ。　アランのジジイは、どうするかな

〜）

そう思うのは、街道を行く旅人である。　真っ白い雪の葺く街道上を、シュテルハインダーの街に向かっている。　もう、その入り口である大門が近付く。　その旅人の姿を、真っ白いミミズクが小枝に留まって見ていた。

その旅人は、少し変わっていた。　漆黒の襟がやや高いロングコートを羽織り、怪我でもしているのか顔には包帯が巻かれている。　雪で濡れた髪の毛は、丸で闇の如く黒く。　その黒尽くめの姿は、悪魔の貴族と見えるかも知れぬ。

この悪魔の訪れは、冬の嵐が吹き荒れる前触れだった・・・。

中篇・完＝後編に続く。

ポリア特別編サード・中編・最終話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ポリア編も中盤が終わり。　次は、セイルとユリア編か、ウィリアム編をお送りします＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ウィリアム短編

冒険者探偵ウィリアム短編　その1

1

ウィリアムとチームの一行は、マーケット・ハーナスに一月半程滞在する。　その中で、幾つもの仕事をこなし、また一気にチームの名前を有名にする訳だが。

しかし、ダレイ殺人事件の直後。　3日を経て次に受けた仕事は、たった二日で成功させたものの、内容を深く知るのは斡旋所の主と配下の者のみ。　周りの冒険者達には、その記憶は無い。

その始まりは、曇り空でムシムシとした夏の入りの昼間であった。

ダレイの事件の事で、ヘキサフォン・アーシュエルの街中は今だ役人が慌しく動いていた。　新証言や新事実で、逮捕者が文字通りに“芋蔓式”に出る。　事件を担当し、捜査指揮の中枢を担うミレーヌは、慌しい日々で辣腕を奮って居る頃だろう。

ウィリアムは、仲間を連れて街中を歩いていた。　曇り空の隙間から、ギラギラと太陽が光を振り撒き。　何処かの庭木には、煩い蝉の声がしている。　往来を行き交うごった返した人の様子は、蒸し

暑さに嫌気を感じている様で。　通りの店には、値段は張るが人気の高いブッカキなる清涼メニューが並び出していた。

ウィリアムの目指したのは、ダレイと云う老人が殺された事件の最大の被害者でもあり。　噂が渦巻く中心に居るエレンの元だ。

店の裏に回り、見知った老僕に訪問を告げてみると・・。

「あ、ウィリアムさん。　皆さんも」

見た目元気に出迎えてくれたエレンだが、母屋の店の営業は依然停止状態だ。　無論、脱税や不法な密輸の御蔭で、離れた場所の店も昨日まで営業停止だった。

だが、エレンが祖父の残した帳簿を元に、不正な輸入品を全て提出してしまった為。　密輸とは全く関係の無い部分の営業は、裁判が下されるまで続ける事を許される。　ミレーヌの寛大な気持ちの御蔭なのだろう。

ウィリアム達を迎えたエレンは、その後の事をウィリアムに話した。

ウィリアム達もまた、エレンがもう前に向いているのが安心の材料に成った。

そして、昼前にエレンに別れを告げて、斡旋所に向かう一同。

香水の匂いを纏うスティールに、ウィリアムが。

「スティールさん、子猫ちゃんは如何ですか？」

悪党の家でメイドとして居た女の子を助けたスティールは、そのま

ま彼女と関係を結んでしまった。　ウィリアムに聞かれると、突如ニヤけた顔をして。

「ヌフ・・ヌフフ・・・、あの娘さ。　脱ぐとすごぉ～いんだこれが」

呆れ笑いのウィリアムだが、スティールを非難する素振りは微塵も無く。

「確かに、見てからにそれは・・」

「だぁろぉ？　なっつってなぁ～、まずはお胸がよぉぉぉ～」

卑猥な話に、ロイムやクローリアやアクトルは閉口。　人通りの多い街中で、そんな男女の秘め事を聞くなど・・。

ウィリアムは、話術巧にメイドの女性の身の降り方に焦点を当てると、スティールは顔を正し。

「そこだよな。　ミレーヌの姉さんに頼んでみようかと思ってる。　ま、まだ捕まったローウェルのメイドって記憶が真新しいから、直ぐは働き口の世話ってのは難しいかな」

ウィリアムは、それを聞いて。

「んじゃ、仕事頑張りましょうか。　スティールさんの所帯運営の為にも」

「おっと、うぃりあむ～。　お前は、流石に人が出来てるぅぅ～。　綺麗な服でも買ってあげたいんだわさ、何でもいけるよぉぉ～」

スティールの言い草に、ウィリアムは微笑し。

「女性の為なら、頑張れますか？」

スティールは、ニヒルに。

「当たり前さ。　女の為に頑張らず、誰の為に頑張る？　女体が俺を待っている」

と、前髪を掻き上げる。

通りすがりで台詞を聞いた人がスティールを見て、バカを見るような顔をしている。

義兄弟の気違いを見続けてきたアクトルは、首を左右に振り。

「バカだ、コイツは。　治らない・・、一生無理だな」

ロイムやクローリアなどは、敵視に近い目である。

だが、スティールに言わせるなら、斡旋所の主の方がもっと“変態”と云う処らしい。　身体は女だが、白粉で真っ白に塗った顔は演劇で遣われる仮面（マスク）の幽霊の様で。　何時もシースルーの透けたベール服装に、薄っすらと見える下着姿。　見た目、オッサンかと思えるオカマちっくな顔は、気持ち悪いの一言だとか。　何より、美人だのブスだのと云う前の問題として、異常に上から目線が嫌いなのだと言い切る。

で。

その話題の主の前に、ウィリアム達は遣って来た。

「ふぅ～・・・」

煙管パイプで紫煙を吹く主のブレンダは、円形カウンターの中央に備わった大きな玉座の上で座って居た。　頭に被る薄黄緑の帽子は、顔に倒して被ると顔の半分以上を隠してしまう。　元はかなり有名な冒険者で、精霊使いのブレンザと云う主は・・。

「おや、もう来たのかい？」

と、ウィリアムを眼下にした。

「はい。　暇なのは、どうも面倒なんで」

ウィリアムが答えると。

「フフ、なるほど」

ブレンザは、そう頷き。　真っ赤な舌を舐めずる。

（ウヒィ～、気持ちワリ～ィィィィっ）

と、ビビるスティール。

（確かに、アレもゲテモノだな）

と、アクトルも気味悪く思える。

だが、またパイプを咥えたブレンザは、ウィリアムに不気味な流し目を向け。

「ウィリアム・・とか云ったね。　アンタには、本当に感謝してるよ。　余所者のアンタが活躍した御蔭で、斡旋所に屯してたアホウ達が仕事を選ばず受け始めた」

クローリアは、辺りを見回す。　初めて来た時や、報酬を受け取りに来た二日前のガヤガヤとした斡旋所が、今は嘘の様に静かなのに驚いていた。

ウィリアムも周りを見て。

「静かでいいですね。　でも、その様子だと・・駆け出しの仕事は随分と掃けましたか？」

ブレンザは、煙を口の隅から立ち上らせながら。

「そうさねぇ～、３・４割り程は」

「そうですか。　では、後一つ二つ請けてまた移動・・・に成りそうな」

と、腕組むウィリアム。

そんなウィリアムを、高台の様な玉座から見下ろすブレンザは。

「所で、ウィリアム。　アンタに一つ伺いたい事がある」

ウィリアムにして見れば、この主の性格にしては、“伺いたい”な

どとは敬語だと不思議に思いながら。

「何でしょうか？」

紫煙を吐き、ゆっくりと視線を巡らせるブレンザは、左手の敷地内観葉植物の植わったガラス越しの庭を見て。

「毒殺において、完全犯罪って可能なのかい？」

ロイムやクローリアは、事件の匂いがしてきて困る。

だが、ウィリアムは。

「真の完全とは、無いでしょうね。　ただ・・、錯覚や盲点などを突く小細工に惑わせられると云う様に、捜査陣が犯人に劣るなら、手玉に取られる“不完全”な完全犯罪は、確実に可能だと思います。　用は、犯人に至る、若しくは、犯人を決める客観的で決定的な証拠が無ければいいのですからね。　或いは、替え玉が居れば・・それでも」

「ふ～ん・・。　じゃぁ、魚介のスープで人は殺せるのかい？　市販の貝や魚で？」

スティールは、どうゆう意味なのかサッパリ解らず両手を挙げ。

アクトルも同意に頷く。

しかし、ウィリアムは、軽く考えてから。

「本当に市販の物を使ってと云う条件なら、カサゴの仲間や貝の仲

間に毒を持った種が居ます。　売り手が下処理を怠って、結果として人が死んだ・・・と云うのがセオリーですかね」

ブレンザは、煙管パイプを咥え。

「他には？」

ブレンザは、ウィリアムの言い方にいくつもの方向性が有ると読み取った。　だから、すんなりこう聞き込む。　この辺は、流石は元有名な冒険者であり。　物事を把握する能力もそれなりに高いとウィリアムに覗わせる。

「ええ。　貝や海草の極一部には、類似していて採取禁止の物が有ります。　見た目は相当似ていて、素人処か、漁師ですら見分けの付かない物も在るとか。　ですが、誤って食べると貝などは凄まじい猛毒で、直ぐに解毒しないと死に至ると聞きますよ」

ブレンザは、其処まで聞くと。

「成るほど、それは確かに怖いねぇ」

此処で、ウィリアムは軽くため息一つを吐くと。

「ふぅ。　主さんにしては回りくどいですね。　俺にそんな話を聞かせて、興味を誘う気だったのですか？」

ブレンザは、少し顔をウィリアムに向け。

（全く、人の腹を何処までも見透かすボウヤだよ・・。　ま、其処が魅力的なんだがねぇ～）

ウィリアムは、只クールに。

「回したい仕事が有るのなら、俺がチャレンジャーである以上は、与えられれば遣らざるえないです。　ま、恩でも売るために引き受けてもイイですがね。　報酬ぐらいは、それなりに見積もって下さいよ」

ブレンザは、的を獲たりとニヤリと口元を綻ばせて。

「ま、こっちの我が儘で、半年近く前の事件を回すんだ。　報酬は弾む」

「そうですか。　俺達は、然程チームの名前を広げて貰う必要は無いので。　その料金でも回して下さい。　それより、その事件の詳細は、どうすれば知り得ますか？」

すると、サークルカウンターの内側に居る無表情な若者が、スッと紙を出した。

ブレンザは、それを見て。

「その紙に最低限は書いてある」

「前と同じですね」

ウィリアムは、紙を受け取った。

紙を覗くスティールは、

「ど～れどれ？　お金持ちの・・貴婦人が殺されました。　私、捜査官のレナ・アーリュは、捜査官に成り立てで・・。　おいおい、なぁ～んか随分と脱線した個人情報が多い文章だなぁ～」

ブレンザは、呆れた顔を見せて頷き。

「そうそう、・・。　そのレナ・アーリュは、その半年前の事件で初捜査だった。　叔父のイフハハンと云う人物が非常に優秀な捜査官で、その男が病死してしまってさぁ。　なんとまぁ～その死んだ捜査官は、今際（いまわ）の際で、役人仕官学校を卒業したばかりのそのレナって子を、自分の後釜として上級捜査官に指名した。　アタシから見ても、その人選は間違いだと思うね。　ありゃ～只のアイドルでも作る為の顔だけ捜査官だよ」

スティールはその話に、スッとクールに前髪を掻き上げ。

「ほう・・、そう云うなら、本人は可愛い訳だ」

「あぁ、丸で少女の様だ」

スティールは、ニヒルな笑みを見せ。

「女性の窮地を救うのは、男の使命だな」

その後ろでは、クローリアは完全にそっぽを向き。

半目のロイムは、

「へんたぁ～い。　子猫ちゃんもう居るのに、浮気だ。　うわき～」

と、騒ぐ。

ウィリアムは、紙を見ながら。

（おいおい、全うな男の捜査官出せよ・・）

と、誰かに文句を言った。

★

さて。　ムシムシする初夏の空は、雲が増え始めていた。

鎧を脱いでいるウィリアムやアクトルは、事件絡みの仕事だからと落ち着いて居るが。　スティールは、一人元気で。

「う～ん、どぉ～んな子猫ちゃんだろか・・。　おしとやか系？　いやいや、捜査官に成るんだから、元気溌溂なボーイッシュ系？　うむむ、まさか・・・ウィリアムに似た冷静な方面かぁ？　うぬぬ、読み難いぜっ！！」

そんなスティールを、呆れ目で見るウィリアムからするなら、

（人相や性格を読めたら、アナタは神ですよ・・。　でも、捜査官初就任の初仕事で冒険者に依頼だなんて、学者を求めると云っても他力本願な感じしますねぇ～。　意外に、オッチョコチョイな人物とか・・・）

この予想が当たるかどうかは別に、ウィリアムは、自分の女運を呪う破目に成るのは確かだった。

さて。　ミレーヌも居る大きな捜査本部施設に遣って来た5人。
其処で、丁度出て来た黒い捜査官らしい井出達のミレーヌと、偶然にバッタリ出会った。

「あらっ、ウィリアムちゃんっ！！！」

大声で呼ばれ、ウィリアムは頭を抑える。

（おいおい、ど～してアナタまで“ちゃん”なんだ・・）

仕方無さそうにウィリアムは、さっさと済まそうと思い。

「ミレーヌさん、こんにちわ。　あの、レナ・アーリュと云う捜査官は、何処の辺にいらっしゃいますかね？」

ウィリアムの質問を聞いたミレーヌの顔は、見る見る卑屈な怨めし顔となり。

「ウィリアムちゃん・・・私って者が有りながら・・。　あぁっ、やっぱり若いコに浮気するのねっ？！」

クローリアやロイムは、修羅場が起こりそうな予感に数歩引いて行く。

ため息を吐くウィリアムは、

「ふぅ。　どうしてそう成るんですか？　斡旋所から次の仕事貰ったので、仕方なく来たんですよ」

だが、ミレーヌの乙女チックな泣き顔は納まらず。

「うそぉ～ん。　だってぇ、あんな可愛いレナなんかにぃ～、冒険者が逢いに来るなんてっ！　うぅ・・浮気だわっ！！！」

「はいはい・・、お仕事でしょ。　もう、自分で探しますよ・・・」

と、ウィリアムは廊下に入ろうとする。

だが、ミレーヌは泣き。

「行っちゃいや～ん」

と、追い縋ろうとする。

其処に、スティールが進み出て。

「姉さん、俺が慰めようか」

と、格好良く決めて見るのだが。

「うわぁぁ～ん。　バカは嫌いっ！！！！」

即刻宣言をされたスティールは、ガックリと項垂れて。

（ろ・・露骨だぁぁぁ・・・。　バカと云われて何度目か・・、そろそろ気持ちが折れそうな予感）

ウィリアムは、美女の叫びを背中に受けながら奥へと進み。

（全く、捜査官なんだからさ。　公私は、ちゃんと分けてやってくれよ・・。　益々ヘンに噂されるよ・・）

と、苦情を心に滲ませながら二階へ上がり。　丁度上がった場所の目の前、廊下を歩く年増の女性役人に声を掛けた。

「すみません・・お尋ねしても宜しいでしょうか？」

背が高く、小太りでごつい顔の女性役人は。

「あら、何かしら。　見た所・・冒険者？」

「はい。　斡旋所から捜査協力の仕事を頂きまして、レナ・アーリュ捜査官を尋ねたいのですが。　何処に行けばよろしいでしょうか」

尋ねられた女性の役人は、階段を上ってきたスティールやクローリアを見ながら。　ウィリアムの丁寧な対応に、冒険者にも礼儀を知っている者が居るのかと思いながら。

「この廊下を右に真っ直ぐ行って、奥の正面の扉の二つ手前に赤い扉が有るの。　其処が、レナ様の私室だよ」

「有難う御座います」

そう言ったウィリアムの後ろに、仲間の全員が揃った時だ。　場所を教えてくれた女性役人が、

「で～も、アンタ達も“風前の灯火”って云われてる部署に行くだなんて、随分と物好きだわね」

スティールは、アクトルなどと見合いながら。

「“風前の灯火”・・？」

聞き返されて、なんとも面倒な顔に成った女性役人は、

「そうそう。　もう就任から半年も経つのに、何一つ大きな事件を解決出来ないお荷物捜査官が、貴方達がこれから尋ねるレナ様。ま、お金掛けても手下役人が居着かないし、本人は可愛いだけの無能だし。　ど～しようも無い部署。　その内、人選の交代で只のお嬢様に成るんじゃないの？　御家は、商人も遣ってる大金持ちだしね」

と、足を動かし廊下を行く。

それを見る一同は、なんとも言い難い思いで。

アクトルは、女性の役人を目で追いながら。

「ミレーヌの姉さんとは、だ～いぶ逆の捜査官って訳か。　面倒事を解決する俺等だが、それでも嫌う面倒も有るが・・・。　ま、仕事だけ聞いてみようか」

ウィリアムも。

「ま、引き受けた以上は、仕方ないですよ」

と、廊下を右に向かった。

さて。　赤い扉を探して木造の廊下を行けば、確かに突き当たりの扉から二つ手前の扉が赤い。

「此処ですね」

ウィリアムは、表に螺旋の白い紋様模様が見られる扉見て言う。

ロイムは、自分を指差し。

「僕みたいな人が捜査官なのかな?」

と、言えば。　スティールは、ロイムの頭をクシャクシャと撫で。

「お前みたいに、下の毛が産毛みたいな娘でど~するよっ」

クローリアは、その全ての表現が卑猥だと思い。

（もう・・悪人と認定した方がよろしい方ですわ・・）

と、窓に向く。

アクトルは、とにかく話が先だとばかりに。“ゴンゴン”とノックした。

「あっ、はぁ~い」

その聞こえて来た声の幼さは、１０代前半の少女の様で。

スティールは、ウィリアムへ。

（おいおい、マジで口説くのは犯罪レベルの年齢か？）

（さぁ～。　何より、四方八方の異性を口説くのが人道を外れるかと・・・。　ですが、一応仕官学校出れる年齢なんですから、法に触れる年齢では無いと思いますが？）

（カタイよ、ウィリアムちゃん。　ギンギンに成ったアレぐらいカタいよ～）

（グニャングニャンに萎えたアレみたいなスティール師匠より、幾分はマシかと・・・）

二人の不毛な会話は、開かれた扉で中断と成る。

「何方様でしょうかぁ～」

現れたのは、薄い銀色の髪が桃色に映える女性だった。　癖の見えるフンワリとした髪は、その細い首筋や肩に緩く絡んでは戯れ。本当に背丈はロイムと似たり寄ったり。　大きく見開かれた目は、穢れ無き素直さを現す。　その少女と思える印象とは、随分ギャップのある突き出た胸に沿うリボンネクタイが良く似合っていた。

白いロングスカートに、白いジャケットを着て。　淡いピンクのブラウスを着たその愛らしい女性は、ウィリアムやその仲間を見回し。

「あの～、何か用でしょうかぁ～？」

と、首を傾げる。

スティールは、初雪を蹂躙する時のドキドキ感を覚え。

（う・・ウィリアムちゃんっ！！　ア・アレが起きそうだ・・。凄く・・凄くね、男として、汚して染めてみたい欲望に駆られるのは、もはや自然の掟だと思う）

（だったら、今から宿に帰ってイイですよ。　子猫ちゃんが居るでしょう？）

ウィリアムは、その目の前に居る女性の愛らしい様子に、本当に捜査官なのかどうなのか解らず。　仲間の某一名以外が固まってしまったのを脇目に見ながら。

「失礼。　自分は冒険者で、チームのリーダーをしてますウィリアムと言います。　貴女は、レナ・アーリュさんですか？」

すると女性は、胸の前で両手を組み。

「まぁっ！　もしかして、ミレーヌ様の下でご活躍された冒険者のウィリアムさんですのっ？！！」

ウィリアムは、“ハァハァ”言い出すスティールを疲れた目で見ながら。

「はぁ・・、そうですが」

すると、女性は満面の笑みで。

「あぁっ！　天は、私を見捨てなかったのですねっ。　斡旋所から

仕事を請けて下すったのでしょう？　さ、中へどうぞぉ～」

と、部屋に戻る。

狼の様な目つきに成ったスティールが、我先にと駆け込もうとすれど。

「まてい」

と、アクトルがその首筋を掴んで持ち上げる。

スティールは、空中を走り出し。

「アークっ！！　止めてくれるな、止めてくれるなっ！！！　オラの伸縮自在の棍棒が、元気一発を望んでるぅぅ～」

気にする気すら失せたウィリアムは、スティールをさっと潜って部屋に入る。

そのジタバタと動くスティールの足に、顔を蹴られそうに成ったロイムは思わず。

「危ないなぁっ、コノっ」

と、杖の短い方でスティールを突っ突こうとして、その先はダイレクトにお尻の辺りにスボっと刺さった。

「うおぉっ！！！」

と、下半身を突き出したスティールの間近には、ウィリアムの後に

続いて行こうとしたクローリアが居て。

「あ」

アクトルは、思わず声が出た・・。　スティールの下を潜って抜けた処で、此方を振り向いたクローリアの顔に、丁度スティールが腰を突き出したからである。

「・・・」

スティールの突き出された腰を面前にして、完全に固まったクローリア。

それを見て固まるロイムやアクトル。

刹那後。

「キャアアアっ！！！！！　不潔っ！！！！！」

と、スティールの局部を杖で殴ったクローリアが居た。

ウィリアムは、毎度毎度に騒々しい仲間に慣れ。　騒がしい方を見もしないで、部屋の奥に向かう。

一方で、喚き声や悲鳴を上げる残りのチーム一同を見るレナと云う女性は、目をパチクリさせ。

「あのぉ～、お戯れでしょうか？」

と、ウィリアムに尋ねる。

ウィリアムは、局部を殴られ顔が歪んで泣き呻くスティールを見て。

（何処までアホに成れるんだ？　究極のアホへの高みを目指す気ですかねぇ～）

と、思った後に。

「仲間同士のスキンシップでしょう。　ま、仕事の話は俺一人でも・・」

と、女性を見たウィリアムは、視界に女性が居ない事を確認。

（アレ？）

と、思った直後。

「私も仲間に入れてくださぁ～い」

と、声が背後から聞こえ。

「う〝ごぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！」

と、スティールの断末魔の呻きが上がる。

（はぁ？）

と、驚きも混じるままに、ウィリアムが声の方を振り向くと・・・。

「あ・・・」

クローリアの杖を持った女性が居て。　その杖は、スティールの局部に打ち込まれている。

（・・・死んだな。　子猫ちゃんの相手・・出来なくない？）

引き攣る口元をヒクヒクさせたウィリアムは、スティールに仄かな同情を送った。

★

全く配下の者の姿が見えない、レナ・アーリュの私室。　非常に本が多く。　窓を前にするデスクの両脇には、捜査資料などは無く。　古代文学や魔法物語などの本が多い。

死んだスティールをソファー脇に置くアクトルは、出されたティーカップをスティールに向け。

「飲むか？」

床の上で涙を流して微かに辞退するスティールは、男性としての自信を失っている様だ。

ウィリアムは、レナに。

「随分と本が在りますが・・。　事件の捜査資料などとかの保管は、此処でしてないんですか？」

レナは、その可愛らしい顔を凹ませ。

「はぁ・・。　叔父の意思を継いで、なぁ～んとか捜査官に成ったのですがぁぁ。　我が父も、母も、女は結婚して家庭に入るべきと決め付けましてぇ・・。　捜査官総主任で在らせられる知人に裏から手を回してしまって、わたくしに事件が回って来ない様にしているんですぅ」

ウィリアムは、凄まじく素直に。

「この部署、無駄じゃないですか？」

レナは、泣きそうな顔に変わり。

「コレでも、無くし物の捜索とかぁ～。　不倫や土地の売買などでの諍いなど、示談や仲裁には行きますよぉ～。　無くし物を探したりするのは、かなり得意ですしぃ。　事件をちゃんと回して貰えて、配下を雇えるならガンバレますぅ～」

ロイムやクローリアには、どうも子供のお遊びの様な感じが・・。

だが、ウィリアムは至って冷静に。

「では、事件の話を」

「はい～」

急に元気に成るレナへ、アクトルは。

「資料とか出さなくていいのか？」

と、尋ねるも。

「だいじょ～ぶです。　これでも、記憶力はイイんですぅ～」

と、レナは得意がる。

さて、話は半年前。　去年の暮れに起こった。

航海商人のイレグ・ポートマンと云う人物が航海で商いを終えて、一月ぶりに屋敷に戻ると。　何時も出迎える妻のジェミリーが出て来なかった。

（どうした？　メイドまで居ない）

イレグは、そのまま奥に向かった。　ロビーで再度声を出せど、誰も出て来ない。

玄関ロビーに、イレグと共に航海をして戻った男二人が荷物を運び込む。

イレグは、荷物を運び終えた二人を引き連れ、誰かを探して一階を歩くと。　少しだけ開いたドアが気に成った。　其処は食堂であり。

イレグは、妻の名前を呼びながら、手代として一緒に航海に出ていた中年の大男と、新しく雇った若者を連れて食堂に入った。

其処でイレグが見たのは、血を吐いてテーブルに倒れ込んだ奥方の

ジェミリーであり。　急いで厨房に行くと、食事の支給から奥方の身の回りの世話をする年増のメイドが、同じく血を吐いて死んでいた。

狂いそうな程に慌てたイレグは、直ぐに役人を呼びに行かせ。　賊でも侵入したのではないかと、各部屋を検め回ったり。　近所の家に、何か変わった事が無かったかと、凄い剣幕で聞き回ったとか。

その時。　その事件を担当したのは、倒れる直前のイフハハンであり。　レナは、叔父の片腕として、捜査員の一人として踏み込んだ。

此処まで聞いたウィリアムは、

（あの斡旋所の主のブレンザさんが云うに、非常に優秀な捜査官だったイフハハンと云う人が・・。　しかし、そんな優秀な捜査官が、何故にこのレナさんを片腕にしたのか・・。　第一、半年前の事件記録を全て覚えてる？　この女性、周りが云うほど無能じゃ無いんじゃないのかな？）

と、思いながら。

「成る程、上級捜査官のイフハハンさんに付き従って、レナさんが捜査に加わっていた訳ですか。　しかしその時には、捜査する役人さんは大勢居たのでしょう？　今・・・此処には誰も居ませんね」

と、話題を変える。

後頭部を撫で撫でするレナは、

「それがぁ～、私のお父さんがみぃ～んなお金で逃がしちゃったん

です」

「そうですか・・。　公私を混同するのに、財力まで投入とは、なんとも・・」

レナは、ウィリアムを見ては目をキラキラさせ、ウンウン頷きながら。

「そぉ～ですよねぇ～、私もそう思いますぅぅぅ・・・」

クローリアは、何故かこのレナに対し、フツフツと対抗意識が芽生える気がして成らなかった。

（何故でしょうか・・、この・・・何とも云えない胸騒ぎは・・）

だが、そんな事など露知らずのウィリアムは、表情に寸部の変化も見せずに。

「では、続きを・・」

ニコニコ顔のレナは、

「はぁ～い。　それでですねぇ・・・」

手広い仕事をするイレグは、結構な金持ちだった。　大型船を６艘も持つイレグは、荷物を運んで金を得る傍ら、自身でも商品を仕入れ。　船で運びながら移動行商の様な事をし、拠点を各国の大都市に幾つも持っていると云うやり手だった。

その奥方であるジェミリーは、肉体の素晴らしさは何処に出しても

見劣りしないのだが。　幼少期に高熱を出して死線を彷徨った経緯から、顔が少し歪んでいた。　しかも、その歪みは左側の眼と唇などに見られ。　本人は非常に気にし、外には殆ど出ない影暮らしの妻だった。

だが、この夫婦の仲は頗る良く。　夫のイレグに浮ついた話も無く。　レナなどが聞き込みをしても、夫婦の悪い噂は全く無かった。

さて。　年末の年の瀬。　ジェミリーとメイド以外に、屋敷には人が居なかったかと云うと、そうでも無い。　執事の中年男性に、力仕事などをしたりする下働きの初老男性。　近所から掃除や洗濯の手伝いに来る若い少女がそうだ。

しかし。　先ず住み込みで常時居るはずの執事は、母親の容態が非常に悪く。　イレグは、もしもの時は、母親の元に駈け付ける様にと言い置いてあり。　ジェミリーもまた了承していた。　そして、その通りに。　執事は病気の母親を看取りに、実家へ戻っていた。

次に、下働きの初老男性は、季節外れの台風で壊れた二階の手摺りを修理していて、誤って転落。　足と肩の骨を折って入院していた。

最後に、手伝いに来ていた少女だが。　奥方のジェミリーにて、お金と共に暇を出されていた。

ウィリアムは、此処でまた。

「それは、最後の月の何日目だったのですか？」

レナは、すんなりと。

「最後の１０日目ですね。　その二日後に、イレグさんが帰って来てます」

「なるほど・・」

レナは、ウィリアムに向き直り。

「でもぉ、この少女は怪しくありませんでした。　ジェミリーと云う女性の母親と、この少女の祖母が同じ教育学校に行っていた幼馴染でしてぇ。　この少女は、病気で身体の不自由な母親の代わりに、お屋敷に働きに来ていました。　本来なら、メイドでも雇って遣らせる仕事なのですが。　ジェミリーさんが母親から頼まれ、この少女を雇い入れたんだそうで。　年末年始は母親と一緒に過ごさせる為に、毎年早めに暇を出してあげていたそうです」

アクトルは、大した心意気だと思い。

「素晴らしい人だな、その奥方さまって人は」

レナも、ニッコリとして。

「はぁい」

だが、ウィリアムは。

「しかし、そのお陰で誰にも見られない不審な死を遂げた・・。事件だとしたら、無用心では在りますね。　所で、他殺か自殺が迷う様な証言は無かったのですか？」

レナは、軽くため息を見せると。

「そ～れが、い～っぱい有るんです」

「なのに、他殺と判断した訳ですか？」

「いえ、まだ断定はしていません。　自他殺不明として在りますよ～」

ウィリアムは、此処で。

（なんて事だ。　あの主さん、二重に嘘を云ったって訳か。　興味を態と惹かせる口調に、俺も騙された訳だ。　全く、遣ってくれるよ）

と。　ブレンザの術中に嵌ったと呆れるのだった。

ウィリアム短編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアムの短編をお送り致します。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

さて。　事件かもしれない不審死の話は、更に更に長い物だった。
　ウィリアムは、レナの語りがのんびりで、更に感情移入して表現が豊か過ぎるのに困り。

「あの、客観的な把握が先ずしたいので、資料を見せて貰えませんか？」

と。

レナは、もう夕方の日差しが茜色と成り。　部屋が明かりも無い中で、影の支配を受けて薄暗く為り始めたのに気付いた。

「あらら～、すいませぇ～ん。　ではぁ、屋敷に来て頂けませんかぁ～？」

ウィリアムは、資料が此処に無いのかと困り。

「あの、資料は公文書なのでしょ？　勝手に持ち帰っては、チョッ

ト不味いと思いますが・・」

レナは、自分の頭に手を遣り。

「てへ。　最近、また何か閃くかなぁ～っておもってぇ～」

そのどうしようもない表現を見たウィリアムは、もう“今日はどうでもしやがれ”と云う気分に成り。

「じゃ、此処で別れましょうか」

と、仲間に。

アクトルは、何を言い出すのかと思い。

「んぁ？　お前ぇ・・一人で家に行くのか？」

「ええ。　資料だけ読んで、さっさと宿に戻ります。　皆さんは、先に帰っていて下さい」

スティールは、ジト目で床から見上げ。

「浮気だぁ～、ミレーヌのお姉さまに言い付けるぅぅ～」

と、レナの真似をするが。

ウィリアムは、気にもしない様子で。

「俺に、色恋沙汰は必要無い物品です。　スティールさんに、ぜぇ～んぶあげますよ」

ガクリと床で崩れたスティールは、

「うぅ・・、俺の献身的な教育も・・このクールなヤツには全く通じないぃぃ・・・。　ウィリアムちゃんの凍えるハァ～トに、春は来ないのかぁぁ～」

ウィリアムは、其処でバッサリと。

「死んでも在り得ませんな」

と、言い切った。

ロイムとアクトルは、確かにその通りかも知れないと思う。

一方。　その断言は、クローリアからするなら微妙だ。　複雑な思いで。

（はぁ・・、なんかとても絶望的な一言ですわ・・。　ふぅ）

ウィリアムは、レナに。

「レナさんは、此処へは毎日馬車で？」

「はぁい」

「じゃ、後ろにでも捕まって立ちますか」

馬車の後ろは、使用人などが捕まって立つ幅が設けられている。

それは、大小の大きさに関わらずである。　ウィリアムは、住居区

などへの道のりなど大した事ないので、そうしようかと思う。

だが、可愛く困るレナは。

「うぃりあむさぁ～ん、そんなぁ～外でなくてもイイ～ですよぉ～」

しかしウィリアムは、それに何も云わずしてクルリと出口へ向くと。

（るっせーのが多いんですよ。　資料見て帰るんですから、何処に乗ろうと構わないと思いますが）

と、冷めた意見を心に吐き。　もうミレーヌのお陰で馬車のある厩舎も解っているので、一足先に向かうのであった。

スティールは、全く女性に心動かさぬウィリアムを思い。

「アーク。　ウィリアムちゃんに女性を救えるイイ人は、何処かに居らんだろかぁ～」

「フン。　女狂いは、お前だけで十二分だ」

ロイムは、ウィリアムの後を出ようとするレナを見ながら。

「すげぇ～・・。　十二分って、余り出てる」

スティールは、ロイムの言い方に引っ掛かるものを感じ。

「ロイム先生よぉ～、余りがどうだって？」

ロイムは、急にそっぽを向き。

「さぁ～、手に余るって事でしょ？」

「ほぉ～、ハァ～ッキリ言ってくれるじゃないか。　余り散らかして、ロイムにも余り食らわせてやろうじゃないのっ」

「意味解んなぁ～い」

可愛く言って無関係を装うロイムだが、スティールは目をギラギラさせ。

「ふはははっ、この街を出たら、次の街でパブにチョッコーだぁぁっ！！！　女体に塗れて遊ぼうぜぇっ！！！」

ロイムは、セコセコと歩いてアクトルの先に逃げて行く。

スティールは、一人部屋に残され高笑い（？）をしていた。

★

白い丸型のゴンドラ馬車に乗ったウィリアムは、レナと向かい合いながら。

（すげぇ～お姫様趣味だ・・。　確かに、後ろに乗らなくて正解かも・・）

女性の趣味が爆発している馬車は、貴族の貴婦人などが愛用する変

わったもの。　男として、その馬車に乗っただけでも身震えがでそうであった。

馬車の側面に付いた斜めの窓。　夕日が差し込み、港を一望出来るメインストリートを見るレナは。

「凄い馬車でしょ？」

と、やや大人びた口調で言う。

ウィリアムは、先ほどとは口調がガラリと変わったと思い。

「ですね。　貴族の居ないこの国ですと、政治を動かす商人がその代わり・・。　何処にでもこうゆう物がある物だなぁ～と」

レナは、愛らしさは残しながら、年齢に似合った優しさの滲む微笑を見せ。

「ですわ。　私の母上の趣味ですの。　小さい頃から、お嬢様として育てられる筈でしたが。　父の仕事の関係上、私は前妻の子なので。　一時、叔父のイフハハンさんに預けられたの。　だから、叔父から捜査のイロハは教わった・・。　でも、やっぱり女っていい様に扱われるんですのよ。　１４に成って、家に戻ったら。　直ぐにお嬢様教育の始まりだったわ」

そのレナの語りは、微妙に必要な部分を欠いている。　だが、ウィリアムは、それが態とだと思い。

（なぁ～んだ、この話・・。　丸で興味を惹いて欲しそうに、事実の一部を抜いて話してるじゃないか・・・）

と、思った直後。　ハッと何かに気付いた。

（ん？　斡旋所の主、ブレンザさんのした遣り方そのままか？。もしかして・・、二人は知り合いか？）

ウィリアムは、ブレンザが数ある仕事の中で、どうしてこの事件を自分に紹介したのかが見えて来た。　ブレンザが引っ掛けをして事件を回したのでは無く。　このレナが、ブレンザの見込む相手に興味を植え付けさせる様な回し方を頼んだのではないか。　と、そう思う。

イフハハンと云う人物を通じて、レナとブレンザが知り合いでもおかしく無いと思うウィリアムは。

「其方が本当のご自分を出されたと思いますので。　今、お聞きします」

レナは、大らかな女性の雰囲気で、

「はい、何でしょう？」

「斡旋所のブレンザさんとは、古いお知り合いで？」

レナは、スッと目を見開いた。　だが、その驚きの様子は仄かな一瞬で、また穏やかな目に戻ると。

「隠しても始まりませんわね。　えぇ、叔父の知人として、ブレンザさんが駆け出しの頃から知って居りますのよ」

「なるほど・・。　では、この事件に興味を持たせる為に、小細工染みた匂わせる様な言い方をブレンザさんに吹き込んだのも・・貴女とか？」

レナは、ニッコリ微笑み。

「流石に、敵いませんわ。　そうです。　事件を解決出来そうな方が居たら、どうにか興味を持って頂ける様にと言いましたの」

ウィリアムは、女性二人にして遣られたと苦く笑い。

「はは、そうデスカ・・」

と、繋げるだけ。

だが、レナは、ウィリアムを真っ直ぐに見て。

「実は、彼方達が3チーム目ですのよ」

「ほう、先に2つもチームが？」

「えぇ。　最初は、世界最高峰のチームと噂に名高い“スカイスクレイバー”の皆様でしたわ」

ウィリアムは、世界最強を謳われるチームの名前を二度目に聞き。

「本当ですか？」

「えぇ。　ですが、事件に興味は無かったらしく。　軽く事件の概要を聞いたら、直ぐにお断り為さいましたとか。　ブレンザさんが、

商談に失敗したと知らせてくれましたの」

ウィリアムは、もう一つのチームも聞いてみたくなって。

「他のチームとは？」

レナは、顔を困らせながらの笑みに変えて。

「冒険者の方々の事に詳しく無いのですが。　なんでも・・その筋では有名な・・ヴァ・リレ・・エル・・なんとかと云うチームですわ」

ウィリアムは、直ぐに有名なチームを思い付き。

「もしかして、“ヴァルモリレイ・ファオ・エルドラド”ですか？」

レナは、パッとスッキリする笑みに変わり。

「あ、ソレですわ」

ウィリアムは、顔を顰めて街を眺める窓に向き。

（おいおいおい・・・、あのチームは、頭脳仕事を請け負う有名株だぞ。　遺跡発掘やら、謎解きにはやたら強く。　しかも大人数のチームで、戦闘要員を別に、学者二人に魔法使いが５人も居る“ファランクスチーム”だったはず・・。　ブレンザさんも、凄いチームに声掛けたんだなぁ～。　レナってこの人に、それなりの肩入れしてるじゃないか）

ウィリアムの思う“ファランクスチーム”とは、１０人を超える大

所帯チームである。　馬車やテントなどを持ち、家族や大人数の仲間で移動する冒険者達の総称である。　全員が全員で仕事をすると云う訳では無いらしく、戦ったりするのは固定のメンバーなのだが。
　ブレイン（頭脳）として働く者や、大所帯を切り盛りするだけの仲間が居たり、社会的・家族的なチームだと聞いている。

そんなチームの中でも、“ヴァルモリレイ・ファオ・エルドラド”（無限に光輝く楽園へ）と云う古代名詞を付けたチームは、世界でも名の売れたチームだ。　遺跡調査や学術調査、物品捜索、捜索調査などに関しては、他の追随を許さないチームならしい。

ウィリアムは、何で断られたのかが知りたくて。

「どうして断られたのかが、とても知りたいですね」

「ウフフ、それが・・」

“人殺しなんか新しい事件に興味は無い”

「だそうです。　この街には、旅の補給で立ち寄っただけだったみたいなので、仕事をする気にはならなかったみたいですわ」

ウィリアムは、どうやら見捨てられた事件だと複雑な思いがする。

（なぁ～るほど。　断った2チームが凄いなだけに、成功させたら知名度の広げに苦労は要らないのね。　だからあんなに簡単にも、成功報酬の値上げに前向きだった訳か・・。　だが、本当に殺人なのか・・。　それとも違うのか・・。　慎重に考える必要が在るな）

ウィリアムは、殺された女性の姿を想像し。　レナに当時の様子を

聞いてみた。

さて。　白い馬車は、居住区の豪勢な住宅が立ち並ぶ区域に来た。

レナは、右手に首を傾げ。

「ホラ、この塀の中の屋敷が、私の家ですわ」

左に向いたウィリアムは、ピタリと凝固した。

（ん・・・。　アレ、この塀・・何時から続いてた？）

この馬車が沿う様に走っていた石壁の塀は、ちょっと前からずぅ～っと続いていた様な気がする。　そして、屋敷を見ると・・・。

（・・・、何処の城だ？）

その黄土色に近い黄色の外壁をした巨大な屋敷は、丸で四角い城だった。　人の住む家と云うレベルを超えた館風の巨城に、力が抜けたウィリアム。

レナは、その屋敷を眺めながら。

「我が家は、代々古くから“皇商１０傑”に入る家柄です。　元々、議会や政治を行う場の無かったこの国では、この屋敷がその最初の政治施設だったのです。　公平性と開かれた政治を行う為に、今の場所に政治の場が移行されましたが。　この屋敷は、“皇商最高実権の３家、オートネイル、アーリィ、サクソンブルクの３家にて話し合われ、文官として功績の高かった我が家にしようと決まったとか」

ウィリアムは、其処で重大な事に辿り着いた。

（え？　この人・・・まさかっ？　世界私営銀行のドン、アーリュリーレイ銀行の総元締め、ソルルナーダ・アーリィ家の正当な娘ぇぇっ？！）

世界の流通商人の総元締めは、商王とも呼ばれるオートネイル家であり。　世界の武器や衣服などの製作をする工業の王手が、発明女王と謳われた女性を祖に持つサクソンブルグ家。　そして、世界で運営される私営銀行の最王手は、“金の万人・政府資産の番人”と異名を受けたソルルナーダ・アーリィ家。　この3家は、“世界各国の王すらも凌ぐ”と云われる商業界の3本柱なのだ。　その一家の娘が、目の前に要るのである。

（ヤバイ・・ヤバイぞ。　帰ったら、スティールさんに注意しとかないとなぁ・・・）

もしも、スティールがレナにアホウな真似をしてしまったら・・。
暗殺者にでも命を狙われる可能性も十分に在る。

そしてウィリアムは、この馬車に乗り込む前から気に成っていた事に、漸く納得が行く。

「あ・・、あ～ぁ」

と、一人声を発しながら頷くウィリアム。

そんな彼を不思議に見返すレナは、

「如何なされましたか？」

「いえ、ね。　此処に来るまでに、この馬車を尾行する人が、街の彼方此方の物陰に居た様な気がしましたが・・。　もしかして、警備ですか？」

ウィリアムのこの一言には、レナは本当にビックリした顔で口に手を当てる。

「まぁ・・、私でも存在しか知らない警護の者を、彼方はお分かりに成りますの？」

ウィリアムは、レナの両親がどうして金ずくに、このレナに役人の業務をさせ無い様にしているかが解る気がしてきた。　この愛らしいレナだ。　求婚も多いだろうし、政略結婚に遣うにしても、何処に出しても自慢出来る。　そんな娘が役人で、しかも血生臭い捜査の最前線に居るのは、様々な意味で心配のタネでしか無いだろう。

（ハァ・・。　世の中に、こうゆう変わった方って多いんだな～・・）

ウィリアムから見るレナは、ある意味の奇人で在った。

優雅な草花や蔦を模った黒いアーチ門を潜り、馬車は花の咲き乱れる庭園の中に進んだ。

ウィリアムは、その花の咲き乱れる光景に一瞬事件を忘れ。

「凄い・・、幻の薔薇と謳われる“マリー・ロイナーフ”だ。　あっ、向こうに在るのはロイヤルローズ４世？　わわっ、寄生する薔

薇の“ブラッド・ワイソン”も在る・・。　おっ？　“至極の紅”と謳われた薔薇の“ワイナリーレッド・エンペラー”まで・・・。
何だ、この凄い薔薇園は？」

と、窓に張り付いては、その庭や温室に咲く薔薇を見て子供の様に驚く。

レナは、冷静沈着なウィリアムが、たかが薔薇でこう成るとは微笑ましいと。

「降りて見て行かれますか？」

「え？　あっ、事件が先で・・。　しかし、凄い薔薇の種類ですね・・。　薬師としても、学者としても、何と云うか・・血が踊る場所です」

レナは、穏やかに笑い。

「此処は、私の庭ですわ。　貴重な薔薇の一部は、医薬にも使われます。　父や母の様に、日々を楽しく社交的に生きるのも一つですが。　私は、この草花を愛して、医薬に役立てたいと思ってしています。　私の母は、医者の娘でしたから・・」

ウィリアムは、深く関わり合いたく無いので。

「そうですか・・。　ま、人の生き方は自由でイイと思いますから。
それも一つですね」

と。

だが、これだけ世界的に有名な家柄の人物が、医者の娘と結婚しているとは不思議である。　医者は、幾ら有名に成っても、その社会的地位は、薬師より上ぐらい。　大金持ちの医者なら解るが、本当に只の医者の娘だったとしたら。　結婚したとしても、その後に迫り来る障害が多難だったと推察出来る。　古い家柄の続く一族など、習わし・家訓・伝統・・・訳の解らないしきたりの潜む伏魔殿なのだ。

屋敷の裏手に在る厩舎に向かう中。　レナは、ウィリアムに。

「ウィリアムさんは、どうして冒険者に？」

もう、何時もの平静に戻ったウィリアムは、涼やかに。

「母も祖母亡くなりまして、一人に成りましたから。　身軽で、誰も悲しむ身内なども居ませんしね。　世界を見回って、見識や知識を深めようと思いまして。　正直、一介の冒険者です。　大した志など在りませんよ。　責任の在る身分でも無い、スラムの掃き溜めに居た俺ですからね」

と、軽い口調で云う。　レナと一線を画す為、自分を蔑んだウィリアム。

だが、レナには、ウィリアムが輝ける至宝の様に見える。

「生まれや育ちなど、大した要因では在りませんわ。　彼方の様な知性は、生まれ持った物では無く。　培われ、挫かれても曲がらない意思が在って光る才能。　彼方なら、必ず御自分の為すべき使命を見つけますわ」

「使命・・。　そうですかね」

ウィリアムの好きでは無い言葉だった。

レナは、触る事実を尽く読み切るウィリアムが凄いと思えていた。
だから、同じ対等な視線で会話の出来る相手と見せたかった。
だから、自分の秘めた過去を持ち出す。

「ええ。　正直、私も何度か冒険者に憧れ、斡旋所に行きましたの。
でも、直ぐに下々に見つかり、連れ戻されました。　ですから、
叔父の任命を受けた時は嬉しかったです。　でも、父の力には敵い
ません・・・。　私など、家柄だけが良い凡人の様です」

馬車が止まり、話を切って外に出たウィリアムは、雲が晴れた夕方
の夜空との境を見上げて。

（今日は星が綺麗だ。　明日は、暑いかも）

レナに連れられ、表に回ろうとする時。　ウィリアムは、直ぐに。

「自分は、裏から入ります」

御者の中年男が、それに直ぐ反応し。

「お嬢様、私が裏から中にご案内致します」

その一言に、レナは、ウィリアムに突き放された思いがする。　だ
が、正式な客として招待された者だけが正門を潜るのは、古い昔か
らの風習である。　それを弁えるウィリアムだが。　レナにしてみ
れば、対等に見る相手にこうされては、正直心痛い。

だがしかし、ウィリアムも解ってやっている。　こんな凄い家柄のレナと対等に付き合える自分で無い事は、スラム時代から異常な差別で育っているから、骨身に沁みる程に理解しているし。　こんな事や場所で、自分を対等に扱えと偉ぶる気も無い。　ただ、事件の資料を見に来ただけだ。　一つの流れに則り、さっさと用件を終えたい所だった。

★

国営図書館の様な広い広い書斎の二階で、蔵書の収められた本棚の森を見下ろせる場所に案内されたウィリアム。　全く下に人の気配すらない静けさが漂う中、メイドがシャンデリアに火を入れ。　窓側の丸いテーブルに案内されたウィリアムに対し、ケーキに紅茶も出された。

（お構い要らないっての・・）

帰りは、歩いて帰ろうかと思うウィリアム。

少し待って居ると。

「お待たせしました」

遣って来たレナは、資料の書かれた紙の束を出した。

「コレが、詳細です」

ウィリアムが先ず最初に目を付けたのは。　奥方が死んだ要因と成ったと思われるスープの模写と、具として遣われた貝の模写である。
　忠実に描かれた貝は、二種類在り。　色まで入れられ、今にも生きて出てきそうな模写の出来なのだが・・。

「コレは？」

ウィリアムに問われたレナは、

「資料にも書かれて在りますが・・。　“オオウミシマアサリ”と云う種類のアサリ貝です。　私も、この貝が使われたパスタやスープは好きですが。　毒物として特定されたのは、この貝でした。
料理に使われず、台所に在った金のバケツに入ったこの貝からは、非常に強い毒性が確認されたんです。　ですが、本で見てもこの貝に毒性は無く。　叔父や私は、この貝に毒を浸み込ませたと考えて捜査していました」

と、当時の事を思い出しながら説明をした。

だが、ウィリアムは、二つの貝の縞模様に色の違いが在るのを見逃さなかった。

「いえ。　毒物は、混入されたのでは在りませんよ。　この貝が出した毒です。　断定して言うなら、この右側の白の縞模様に、本来目にする食用の貝には在り得ない赤黒い縞の混じるヤツが、毒を吐いた犯人ですね」

レナは、テーブルの席に着き掛けた所で止まり。

「え？　でも・・その貝は養殖された物ですよ？」

ウィリアムは、右側の貝の模写をレナの方に差し出し。

「養殖をしている現場に行って、この貝と全く同じ模様の貝が在るか、御自分の目で確認して見るとイイですよ」

レナは、今まで誤った部分に光りが射し、動揺した様子で。

「あ・・、どうしてこの食用貝が、そんな猛毒を出すんです？　この貝は、世界でもポピュラーな食用の貝ですよ？」

事件の詳細な資料に目を落とし始めたウィリアムは、

「今から、５０年以上前の話ですがね。　フラストマド大王国の海辺の漁村で、住民の大量死事件が起こった事が在ります。　原因は、このアサリの異種が要因でしてね」

「このアサリが・・ですか？」

「ええ。　この“オオウミシマアサリ”ってのは、他の貝とも簡単に交配してしまう多様な繁殖力を持ちます。　元々の小さなアサリに、大振りに成るだけのハマグリを交配させて作ったのが、このアサリとか。　もう、養殖の歴史だけでも数百年在ると言われますが。　学者で知識の深い者から言わせるなら“毒貝の卵”とも言われます。　極一部の毒性を持った貝と交配させると、弱い毒性を持つ貝としても知られ。　その中でも、先祖返りの交配をすると、その猛毒性は毒キノコに勝るそうです」

「先祖返りの交配？　それは、どう言ったものなんですか？」

ウィリアムは、顔を上げず資料を読みながら。

「そうですね・・。　たとえば、元の小さいアサリを“１”と仮定します。　そして、交配させたハマグリを“２”と仮定しましょう」

「はい・・」

「１と２を交配させ、生まれたオオウミシマアサリを“３”に仮定し。　この貝に毒性の強い“４”の貝を交配したとして、その子供を“５”とした場合」

レナは、直ぐに紙にその事を書き出しながら。

「はい、解ります」

「この番号で仮定された貝の５番目と、再度４番目以前の貝を交配させる事を、古い言い方で［先祖返りの交配］と云うんです。　更に、それで毒性が増さない場合。　別の毒性の強い貝と３番目か５番目を交配させ、更に生み出した６，７，８番目と生まれた貝同士を交配させても、異常に毒性の強い貝が生まれる可能性が在ります」

必死に紙に書くレナは、

「貝の交配には、そんな危険が伴うのですか」

此処でウィリアムは、漸く顔を上げ。

「海に行けば、この種の貝は結構採れます。　ですが、野生のオオ

ウミシマアサリは、漁師の殆ど誰もが食べません。　その意味は、どの貝に毒が含まれるか解らないからなんです。　自然にその貝しか居ない漁場は、広い世界の海岸でも限定されているとか。　そうゆう場所以外では、養殖物しか食べられません」

「あ・・、なるほど」

「問題なのは、人を殺すほどの毒性を持たせるのには、方法がまだ在りましてね。　この毒性を持った貝を、劣悪な環境下に置く事です。　汚い場所で生き残る為に、毒性を貝自体が高めるんだそうです」

「まぁ」

「フラストマド大王国で起こった大量死事件は、貝を食べた為の中毒事件でして。　特別な条件が重なった環境下で起こったんですよ。　自然に取れる漁場に、異種の毒貝が赤潮などの影響で進入し。その交配で生まれた子供は、比較的浅い河口に住み着いた。　その頃、上流では山を崩した鉱山の発掘が行われていて、その採掘に際して泥が川を汚していました。　その条件下で、貝は毒性を増し。　それを知らずに、河口で採った食べた漁村の人々の身体に毒が蓄積して。　個々に致死量に達した人からバタバタと死んで、大量死を招いたとか」

レナは、街を流れる川に汚れなど見えない事から。

「でも、今回は人為的な物ですわね？」

「多分。　この赤い縞は、普通では入らない模様。　一個二個なら、自然で偶然と思われますがね。　バケツに入っていた貝の量が解り

ませんが・・・。　このスープの模写を見る限り、皿に入っている５粒の貝の内・・４粒が毒の貝。　普通に皿へと無作為に盛ったと仮定するなら、食用の物と毒性の物は半々ぐらいだったのでは無いかと推察出来ます」

「つまり、犯人は毒性を吐いた貝と、食用の貝を混ぜて食べさせたと？」

「でしょうね・・」

そしてウィリアムは、レナを放り出すかの如く無口に成り。　また、資料に目を落とす。

しかし、レナは、ウィリアムの邪魔をしなかった。　ウィリアムが読み終えるまで、静かに座って待っていた。　寧ろ、ウィリアムさえ居るなら、どんな難事件だったとしても解決出来そうな予感を感じたからだ。

読み終えたウィリアムは、眉間に指を当てて瞑目し。

「まさか・・・、自殺か？」

レナは、その呟きに。

「その推理は、死んだ奥様の方々への言葉からですか？」

と、問うた。

死んだ奥方のジェミリーは、極親しい友人だけに誘われて食事会やお茶会をしていた。　芸術の才能が高いジェミリーは、歌を唄った

り、絵を描いたりと一人の趣味が幅広かった。　声は美声で、描く絵は画家も顔負けの腕。　だが、その活動範囲は極狭い範囲で。彼女の才を人に見せる活動は、もっぱらその才能を認めた女性の友人達が行っていた。

さて。　人前に出て行かないジェミリーは、非常にイレグとの生活に悩んでいたらしい。　子供を求めるイレグに対し、自分と同じ病気の子供を生んだら迷惑を掛けると、夫婦の営みを遠慮していたらしい。　さらに、夫が愛人を持つ事も許容する様な素振りだったそうだ。

夫の事業が成功する中で、顔の事を気にして外に中々出れない自分を嫌い。　夫の支えとして仕事の出来ない自分を、非常に恥じていたと云う。

だが・・。　レナに問われたウィリアムは。

「いえいえ、証言は付属ですよ。　以前の問題です。　普段、質素な礼服を着て、人前に出ず慎ましやかに生きていた彼女ですが・・。　この死んだ日に限って、今までに見ない赤い派手なドレスを着ていた。　このドレス、お祝いなどで着る礼服と書いて在ります。もう寝るだけの夜に、こんな衣服に化粧をしっかり施して死んでいたなんて・・。　どうもヘンですよ」

レナは、事件当時を思い出し。

「確かに・・。　ご主人は、死んでいる奥様の姿を見て、誰か別の男性と浮気をされていたのではないか。　誰かに惑わされ、言い寄られて、お金でも取られていたのではないかと・・思っていた様です」

ウィリアムは、旦那の気持ちも解る気がする。

「でしょうね。　夜の添い寝を断られ、愛人を持つ事にも咎をしないなんて・・。　だが、もしかすると・・、これはもっと悲しい愛の悲劇かも知れませんよ」

レナは、自分の思った推理の一つに、それと思える筋書きが在り。
それを確かめようと。

「問題は、メイドさんが死んでいた事ですよね?」

ウィリアムも。

「はい」

レナは、資料を見つめ。

「料理を作ったのがメイドなら、味見は必ずします。　その時点で事件は発覚する筈なのに・・奥様が死んでいる・・」

ウィリアムは、ジェミリーの死んだ様子を思い。

「身を飾り立てた上。　毒を食べて苦しい筈なのに、喉を掻き毟ったり、何かを掴み荒らす様な苦しんだ形跡が、遺体にも、周りにも見当たら無い。　しかも、スープを溢したりした乱れも無く。　奥さんは、スープの脇に寝る様に座った状態から身を倒れ込ませている。　何か、作為の匂いも在りますが・・。　戸締りがしっかりしていた上に、玄関には夫婦のみが持った鍵で開く施錠もされていた・・。　毒を持った貝の出所さえ解れば、一気に隠れた部分が見えま

すね。　夫婦の知り合いや近親者などを徹底的に洗えば、見えて来る筈です」

レナは、真剣な顔で。

「明日から、再捜査ですわ」

と、気負いを見せた。

だが、此処でウィリアムは・・。

「冗談じゃない。　資料を手掛かりに、我々が聞き込みをしますよ。失礼だが、貴女に出張られては困る」

「どっ・どうしてですかっ?!」

「当たり前でしょう?　世界的に有名な銀行のトップとして居る大商人の娘である貴女が、我々と外で居たらどんな噂が流れるか・・。それに、歩くお金みたいな身分の貴女を、彼方此方と捜査の現場に連れ出せば、周囲に心配が増えるだけだ」

レナは、現実を告げられ。　グッと俯き拳を握る。

ウィリアムは、更に。

「大体、貴女の父親がもっとバカだ。　才能有る娘の手足で在った人手を奪い。　娘に深い苦悩と、お嬢様ぶる様な、自分を偽ざる得ない状況を生み出している。　人の親が、自分の子供の心に歪みを生む様な真似を平気で出来るのだから。　一般の我々からするなら、滑稽な親子劇を見せられているのと同じですよ。　もし、貴女が我

慢出来ず飛び出せば、更に心配は増えるでしょう。　また、親に負けて貴女が結婚したとしても、貴女は素の自分を失って苦しむ筈だ。

　自由に捜査出来る環境さえ与えておけば、貴女はミレーヌさんにも負けない捜査官として働け、捕り物などは有能な部下に任せれば事済むでしょうに。　お金持ちの下らない事情で、一つの事件すらも解決出来ない状況に追い込むなんて、公私混同甚だしいにも程が有る。　“公金の番人は、天命である”と仰って、不正を許さず民を第一に思った先祖を持つ一家とは思えない。　ま、今回は我々が手を貸しますが。　後は勝手にして下さい。　死んだ叔父さんも、あの世で貴女を指名した事を悔やんでいる筈だし。　自分の実家の情けなさに、墓石を涙で濡らしてますよ」

と、声を大きくして言い放ったのだった。　澱み無く、冷静な口調で淡々と言われると。　返って、怒鳴られるより、その言葉は厳しく聞こえる。

レナは、現実を理解するだけに、ウィリアムの言葉に対しての反論は出来ない。　自分の父親のした事に、同じ思いを抱いていたからだった・・。

ウィリアム短編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

冒険者探偵ウィリアム短編　その1－3

3

夜が更けるまで深い話し合いをしたウィリアム。　あの暴言の後も、レナと事件経緯について話し合った。

今・・・。

彼は、明かりの落ちた深夜近い街中を宿へと歩いて戻る。　そしてウィリアムは、尾行の気配を感じていた。

（まぁ～ったく、自分等の主の為に云った諫めも解らないのかよ）

ウィリアムは、気配で殺し屋や暗殺者の類では無く。　組織的に訓練された護衛集団や、密偵の類の気配だと看破していた。　そうなれば、相手は見なくても一目瞭然。　レナの一家を守る護衛部隊であろう。

ウィリアムは、態と大回りをしては、ヘキサフォン・アーシュエルの中央噴水まで遣ってきた。　広く、住み暮らす人の少ない場所を

選んだのである。

「面倒な忠誠心ですか？　それとも、命令ですか？　どっちにしろ、俺を尾行してどうするつもりなんですか。　ヘッタ糞な尾行で、俺を騙せるとでも思っているのですか？」

こう言いながら立ち止まって振り返るウィリアムの視界には、灯りなど持ってはいない。　だが、晴れた空の下、星明りで十分に黒い衣服の者を解っていた。

突然。　ウィリアムを４人の黒い衣服に覆面をした者達が囲む。

だが、ウィリアムは、寧ろ失笑すらして。

「フフッ。　黒い衣服を着て目眩ましですかぁ？」

と、言って。　正面の者の目を射抜く様に見つめると・・・。

「俺の後ろの人は、女性ですね。　右と左の人は、中年の男性だ。
だが、正面の人は、まだ若い男性ですね」

ウィリアムを囲んだ４人は、微かに身動ぎをする。　・・・当たっていた。

ウィリアムは、後ろに振り返り。

「女だろうと手加減はしないッスよ。　俺は、仲間のスティールさんとは違いますからね。　それから、匂いや身体のラインで性別なんて見当付くんです。　胸が出てる出てないとか、言葉を発しなければ解らないだなんて思わない事ですね。　さて、・・・眠いので、

さっさとしますか」

ウィリアムは、気配を一気に最小限に抑え、緩やかに移動し始めた。

「あっ」

「えっ？！」

「うぬっ」

ウィリアムを囲んだ４人は、夜とはいえ広い広場で囲んだウィリアムが、忽然と消える様な感じがして動揺した。

人が物の情報を目や耳で得ているのは、常識だろう。　だが、其処に居ると思い、認識する時。　その相手がどうゆう様子なのか、どう動こうとしているのか。　目の動き、姿、気配あらゆる所に気を配る。　戦いの玄人と成れば成るほどに、相手や周囲の気配に気を配り、相手の行動を察してどうするかの判断を下す訳だ。　暗殺者は、その身の気配を抑える事で、行動に移す際に何もしていない様な姿から、急激に動いた様な錯覚を引き起こさせる。

一番若いと云われた正面に居た覆面の人物に、ウィリアムは音も無く近付いた。　間近まで迫られてから気付いた相手は、到底対処のしようも無く投げ倒される。

気配の察知を鈍らせる事で、ウィリアムは相手の認識を後手後手にした。　ウィリアムを囲んだ左右と背後の三人は、意表を突かれてしまった訳だ。

「・・」

「・・・」

動揺しながら三人は視線を交わし、ウィリアムを叩きのめすべく立ち向かった。

声を出さない様に戦う訓練をしていると思われる覆面集団だったが、その実力はウィリアムには程遠い。　暗殺者としての修行をしてたウィリアムに、次々と投げられたり、当身を急所に受けて地に這い蹲った。

ウィリアムは、４人を路面に沈めてから。

「其処に居るのがオヤブンですか？　部下が遣られてるのに、のうのうと見物とはイイご身分で」

と、自分の来た方角のレンガトンネルの中に広がる闇を見る。　トンネルを作るのは、レンガで出来た歩道橋。　段に成った高台の家へ行く橋代わりである。

気付かれていると解った相手は、

「・・・貴様、一体何者だ？」

と、月並みな台詞を吐いて出て来る。　少し背の高い覆面の人物だ。

声は男、身体つきを見ても武芸に心得が在る。　剣術なのだろう。

両脇の腰には、バスタードソードが佩かれている。　ただ、尺のやや短い軽量化された物だ。　腕力さえあるなら、両刀で使える。

さて。

ウィリアムは、相手との戦いに於いて無用な手加減などしない。
寧ろ、徹底的に有利に持ち込む事を考える。

（ま、剣の腕はそこそこですかね）

と、現れた人物を見ながらも、這い蹲った一人に近付くと。

「おい、起きろ」

と、その人物の肩を蹴り上げた。

「う〝ぎっ」

小さい悲鳴は、肩の骨が外れたからだ。　ウィリアムに蹴り起こされた覆面の一人は、噴水の縁に転がる。

ウィリアムは、次に女性と思われる覆面の人物に踏み寄る。

これには、流石に現れたリーダー格の男も動揺し。

「おいっ、相手は俺だ」

だが。　ウィリアムは、転がった曲者の女性の右太股に足を置き。

「関係無いね。　これから、アンタが俺に半殺しにされる所を見る見物人作りさ。　冒険者が、みんなみんなフツーだと思ってるアンタ等に、変わった者も居るって教えてやる」

と、足に力を・・・。

「あひぃっ！」

小声ながらも、悲痛な叫びを上げた女性の右足が、ダランとする。

「関節外しただけですよ。　痛みに耐える訓練が甘いですね」

冷めたウィリアムの言葉が、呻く覆面の者に降りる。　確かに、今の悲鳴の声は女性だった。

ウィリアムは、残り二人も同様に肩と左足の関節を蹴っては外す。

「キ・・キサマっ」

怒りに声を震わせ、剣に手を掛けた覆面集団のリーダーだが。　目の前で凶行に及ぶウィリアムの気配を掴み切れず。“斬れる”と思えなかった。　それに、気配を消し。　無手で人を殺める術の意味を知るだけに、恐れも在ったのだろう。　全く動けなかった。

こうなるとこの相手は、ウィリアムにして見れば、暗殺者のセオリーとも云うべき術中に嵌った獲物も同然だ。　相手の弱い部分を突き、動揺や憤怒を誘発させて冷静さを奪う。　絶対的に有利な形で、相手を奈落の底に追いやる暗殺者の手法である。

「さて」

ウィリアムは、リーダーらしき人物に向いた。

「お前・・・暗殺者・・。　“ハナレ”かっ？」

鋭く云う相手に対し、ウィリアムは涼やかに。

「さぁ。　彼方が勝てたら・・・教えましょうか？」

その言葉で、リーダーらしき覆面の人物は剣を左右の手で引き抜いた。

だが、此処で。

（ま・・・負けっぱなし・・で・）

女性と思われた覆面の人物が、ウィリアムの踵を掴もうと手を伸ばす。　足を掴み、少しでもウィリアムを不利にしようと試みるのだった・・。

しかしそれは・・、逆鱗に触れる行為でしかない。　ウィリアムは、その手を見ずして瞬時に掴みをかわして、ガツっと鉄の踵で手を踏んだのだ。

「あ〝！！！！　いぎひぃぃ・・・」

踏んだウィリアムが、踵を捩(よじ)る。　女性と思われた覆面の人物は、骨の砕けた手の甲を踏み躙られて、熾烈な痛みに完全に戦意を捨てた。

ニタリと笑ったウィリアムだが、この覆面の曲者を殺すのは訳無い。

そうしないだけ、“手加減”をしているのだ。　寧ろ、不用意にレナの傍を離れ、自分を尾行するなどと云う馬鹿げた事をしたこの覆面集団に、返り討ちの恐ろしさを教えるぐらいの気構えだった。

リーダーの相手が斬り込め無い事に、ウィリアムは嘲笑う様に・・。

「その剣は、お飾りですか？　部下には軽装をさせて置いて、どうやら彼方はベルトプロテクターを着けていますね。　衣服の下に着込んでいても、微かな服の擦れ方で解りますよ」

心理的に揺さぶる為に、相手の隠してる物を言い当てるのは効果的だ。

結局、リーダーらしきこの相手は、そのままウィリアムに斬り込む。

それは、見ている部下達には、寧ろ幻想的な様子だった。

「くそっ！！」

右手の剣で斬り込んだ相手に対し、ウィリアムは左足を相手の腕に宛がって止める。　苦し紛れで、左の剣を振り込もうとする相手の懐に飛び込むウィリアムは、右足を相手の左脇に差し込んで、両足で相手の胸部を挟み込んだ。　そして、相手は左へと捩られる様に倒れ込む。　路面に相手が倒れる時、首は関節を極められ右を向いたままに、ウィリアム余った右手の指が・・・相手の両目に入る直前で止まっていた。

（殺される・・・）

リーダーと思われる覆面の人物は、動けなくなった。　剣を持った腕を微かに動かしただけで、指が目を突き破って来ると理解出来るからだ。　相打ちを狙うには、首を折られた時点で無理だし。　目を潰されても攻撃する自信が、自分に無かった。

ウィリアムは、徐に身を前に倒し。　相手の耳に口を近づけると。

（これでも手加減してやってるんです。　部下を連れて帰るのに、彼方だけ残します。　相手を見繕って安易に尾行するのは、もう止めた方がイイですよ。　もし、彼方に命令した人が居るなら、その人に伝えて下さい。　不要に俺を刺激するなら、次は頭を狙うと・・・）

覆面の人物は、ウィリアムが大体を察していると解った。　この若者は、野に放たれた危険な“トリックスター”（ジョーカー）なのだと・・・。

相手を自由にしたウィリアムは、何事も無かったかの如く宿に帰った。

★

次の日の朝だ。

宿の地下にあるレストランで食事をするウィリアム一行が居て。

「ふぁ～あ。　なぁ～んでぃ、レナちゃんとフシダラしなかったのかよ」

大欠伸をした後、乱れた上着をそのままに不適切発言をするスティール。

パンを千切ったウィリアムは、

「する訳無いでしょう？　相手は、世界的な規模で銀行を持つ超大商人の令嬢ですよ？　スラム生まれのわたくしめは、分を弁えておりますですぅ～」

子猫ちゃんの匂いを漂わせるスティールは、ぞんざいな座り方で水を飲みながら。

「ケッ。　そんじょそこらの学者より、遥かに頭脳のイイお前が。“分を弁える”だなんて笑っちゃうぜ。　突き抜けろ、ぜ～んぶひっくり返せ～」

アクトルは、それも一理と思いながらも食事に夢中。

スティールのムチャクチャな言い方に、呆れるロイムとむず痒い顔のクローリア。

しかし、当の本人であるウィリアムは、サラっとした物言いで。

「そんなに上手く行きますかね？　大体、あれだけ讒言したら・・」

“もう顔も見たく有りませんわぁ～”

「とか云われそうですがね」

レナの物真似などするウィリアムが珍しい。　だが、かなり冷めた目線で、全てを見ているとも感じられた。

しかしながら、ウィリアムをやさぐれた目で見るスティールは、

「バッカ言えぇ～。　自分より頭のイイ男に叱られたって、寧ろお前のスゴさと頭の良さに心酔しちゃうわよ～だ。　ミレーヌの姐さんに然り、島の女だってそうだったじゃねぇ～か。　金と豊かさに満たされる女で、しかも頭のイイ女ってのはな。　テメェの理詰め染みたプライドや思いを叱られたりしてコナゴナにされると、元の素顔が出てくんだよ。　修行が足らんな、弟子よ」

と、女に玄人らしい言い方をする。

パスタをクネらせるウィリアムは、素っ気も無い様子で。

「そぉ～ッスかねぇ～」

と、パスタを口に運んだ。

ウィリアムが何故にレナを扱下ろしたか・・。　それは、自分とレナの会話を聞いていた第三者が、あの場所に居たからだ。　何処かそっと見張れる場所から、自分とレナを監視、若しくは見守っていたのだろう。　だから態とレナの父親を扱下ろし、その内容を父親に届かせる狙いである。　昨夜に尾行を撃退したのは、自分に構うなど時間の無駄だと云う為だ。

さて。　食事を終えたウィリアムは、仲間を伴って警察施設に向かった。　一応、これから再捜査の聞き込みを始める旨を、律儀にレナへ言いに行った訳だ。　許可を正式に貰って置けば、後々何か在っても公を盾に使えるからである。

霧が咽ぶ様な朝の街。　朝から動く馬車も人も、事故が無い様にと緩慢とした動きであった。

施設間近に迫る時、石とレンガで風景が出来上がる中央の行政区大通りにて。

「ウィリアムちゃんっ」

と、ミレーヌの声がする。

振り返れば。　徒歩で勤めに出て来る人が大通りの脇を歩く中。
ミレーヌの馬車が、直ぐ其処にまで近付いて来ていた。

（頼みますよ・・・。　街中で“ちゃん”は止めて下さい）

ウィリアムは、そう思いながら窓から顔を出しているミレーヌ見る。
ミレーヌは、もう施設が間近だからウィリアム達と歩いて行く事にして。　馬車を先に行かせる。

ミレーヌを含めた一行は、歩きながら話をし出す。

「ハァ～、ウィリアムちゃんも災難ね。　あの、超お嬢様のレナが出した依頼を回されるだなんて・・」

しかし、ウィリアムはハッキリと。

「レナと云う方は、確かにお嬢様には違い有りませんがね。　洞察力や推理力と云う点では、ミレーヌさんより優れていますよ」

ミレーヌは、全く意識もしない言葉がウィリアムから出たのに驚き。

「ひ・酷いわぁ・・。　アタシって者が有りながら、あんな若くて胸が大きいだけの娘に肩入れするぅだなんてぇぇ」

と、イジケ出す。

だが、ウィリアムはあくまでも冷静に。

「彼女の普段は、親の目を欺く上に、失望させたくないという意思からの道化ですよ。　流石に、元は優秀な捜査官だった叔父のイフハハンと云う人物の傍で、密かにずっと事件に関わっていただけ有ります。　難しい毒殺事件の細部を、幾らかしっかり見通して居ました」

「え？」

ミレーヌは、漸くウィリアムが冗談を言う彼では無いと解る。　レナに対する所内の評価とは、全く逆の評価だ。

「なら、どうして閑職なのよ」

「親が裏に手を回して、女は結婚して家庭に入って居ればそれでいいと・・。　彼女の部署に人が居ないのは、親の影響で辞めさせられているからですよ。　大体、彼女の部署に、全く活動費が入れられて無いとか。　金が有るってだけで、公的機関を麻痺させるだなって、正直アホらしいにも程がありますね」

ウィリアムが本気で怒っているのだと理解したミレーヌは、レナの能力にウィリアムが太鼓判を押しただけに。

「ウィリアムちゃんのお墨付き有るのなら、私の部署に引っ張って

もイイのになぁ～」

ウィリアムは、真面目な話にまで“ちゃん”付きかよと思いながらも。

「それは素晴らしい案ですね。　彼女は、性格的に頭脳作業には秀でています。　ですが、捜査を突き進んで指揮する行動力に欠ける。　押しも斬り込みも出来るミレーヌさんとは、逆にウマが合うでしょうね」

聞いてるアクトルやスティールからするなら、たった半日でそこまで読み切るウィリアムが怖い。　だが、逆に信用も出来る。

さて。　ウィリアムから、レナの相談して来た事件の話を聞くミレーヌは、

「自他殺不明の案件をそのままにかぁ～。　・・って、その奥さんを亡くしたイレグさん？　未だに再婚相手も探さないし、お見合いの話を片っ端から蹴って、仕事と深酒しかしない人に成ったみたいよ。　可哀想に・・奥さんを愛し過ぎてたのね」

と、思い出すように教えてくれる。

ウィリアムは、粗方事件が見えて来ているだけに。

「重かったのですかね・・。　いや、旦那さん以上に、奥さんが愛し過ぎてしまったのか・・。　悪い人を只捕まえる事件に比べたら、途方も無いぐらいに遣り切れない事件かも知れません」

「それって・・どうゆう事？」

ミレーヌは、ウィリアムの云わんとしている意味が解らない。

しかし、ウィリアムは、そんなミレーヌを見て、少し悪戯っ子の様な笑みを見せると。

「御姐様。　先ず見て、推理能力は・・完全に負けてますねぇ～。
若いだけって娘に・・・」

ウィリアムの言葉に、キョトンとしたミレーヌ。　だが、直ぐに意味が解り出して。

「そんな事無いわよぉ～。　私だって脱いでも凄いんだからぁ～、試してみるっ?!!」

と、ムキに為ってウィリアムに絡み出す始末。

（関係ねぇ～ってよ）

煩そうにミレーヌから逃げるウィリアムは、一つの引っ掛かりを胸に抱いて居る。　恐らく、此処が重要な気がしていた。　只聞き込みをするより、見えない急所に為っている部分に斬り込む気だった。

★

レナの元に向かった一行は、早々と出て来ていたレナに遭った。

「よ、おはよ～」

スティールが気軽に挨拶するのに対し、レナは丁寧に頭を下げ。

「おはようございます」

と、しっかりとした口調だった。

ウィリアム以外は、昨日の緩いお嬢様の様なレナしか見てなかったから。　何か凄いギャップを受ける。

しかし、ウィリアムだけは冷静に。

「今日からは、素に戻りますか？」

レナは、穏やかな笑みで目礼し。

「はい。　昨日、父と母に自分の本心を伝えました。　私は、叔父から受けたものを生かしたいので、家を出ると」

「ほぉ～。　それは、まぁ～身内のお話ですからね。　それ以上は、無用です。　それより、捜査する上で聞きたい事が出来ましてね」

レナは、ウィリアムの対応にも大人しく従う様に。

「はい、何でしょうか？」

「捜査資料に、ジェミリーさんの家庭環境について、両親までしか有りませんでしたね？　彼女は、元々この街の住人で？」

「あ、どうでしょうか。　お父さんは、家具や楽器を作る職人だそ

うで。　母親は、近くの商店で武器屋を営む者の次女と・・。　それが、何か？　死んだ奥様や、残された旦那様の親兄弟、そして知り合いに、漁師は居ないと思います。　街の地下運搬水路の管理者だったり、港の管理をする者は居りますが・・・」

ウィリアムは、その話が出た所で目を細め。

「その事は、資料に書かれて有りませんでしたね」

レナは、今度は頭をしっかり下げ。

「正規の捜査が出来なくなった後の情報です。　叔父が亡くなり、直ぐに私を指名して頂いたのですが・・。　父の影響で捜査が続かなく成りまして・・申し訳ありません」

「俺に謝っても仕方ないですよ。　長々と事実を判れず、仕事に逃げて涙を呑む旦那さんに謝るべきでしょ？　ま、貴女の事だ。　もう、謝っては居るのだと思いますがね」

レナは、深く俯いた。　事件を捜査出来なく成ったレナは、イレグから頭ごなしに叱責された。　その様子は、憤りや理解の出来ない事態で心が乱れた彼の鬱積した感情が、レナに向けて爆発したと思える程だった。

その様子に、内心では相当な重荷を抱えて居ると察したウィリアム。　仕事に話題を移し。

「所で・・・今さっき小耳に挟んだのですが。　なんでも、イレグさんに見合いを勧めた人が居るとか・・。　奥さんが死んで半年足らず、微妙に早いですね」

「あ・・、それは」

顔を上げたレナは、直に説明を口から滑らせた。

「マーケット・ハーナスでは、特にですが。　商人をする男性は、早い結婚を望まれる風潮が有ります。　早めに身を固め、商売に精を出す為です。　ですから、奥様を亡くしてから半年での見合いは、然程の珍しい事で有りません。　ただ、イレグさんへの見合いは、厳密には奥様が亡くなられてから半年処か。　たった半月で申し出が有った様です。　無論、イレグさんは断ったそうですが・・」

ウィリアムは、其処でレナに斬り返す速さで。

「それは、早いですね・・。　一体、何方です？」

「それが・・・、ちょっと驚きでおかしい話なのですが。　死んだ奥様、ジェミリーさんの親友と云う“カトリィン”と云う女性です」

「その方の詳細な情報は？」

「あぁ・・っと、確か・・」

レナは、記憶を直ぐに呼び起こし。

「その女性は、小細工屋のお嬢様で、若い頃に一度近くの宿屋の男性と結婚しました。　ですが、４年しても子供が生めず、出されたそうです。　その噂で、中々他のお誘いの話が来なく。　幼い頃から教育施設で共に学んだジェミリーさんと編み物をしたり、絵の制作などの生活だったとか」

ウィリアムは、疑問が湧いたので鋭く。

「その方っ、もしかして・・・イレグさんと親戚とかでは？　血縁の近い間なら、姉の後に妹が奥さんに成るとか在りますよね？」

ウィリアムに言われ、記憶を更に呼び起こしたレナは。

「あっ、そうだわ。　確か、このカトリィンと云う女性の父親と、レグレさんの叔父が従兄弟に成ります。　イレグさんと血の繋がった叔母に成る方の旦那さんで。　確か・・・地下水路の管理を為さっていたかと・・・」

ウィリアムは、それで推理が繋がったと思える。　だが、最大のネックも見つかった。

「それは・・、なるほど。　ですが、俺達だとネックが一つか・・。　どうするかな」

レナは、ウィリアムが或る程度に事件を読み切ったのだと悟り。

「あのっ、出来る事は何でもしますっ！！」

と、思いに任せた勢いでウィリアムに言う。

ウィリアムは、冷静に脇目でレナを見据え。

「地下水路の底を攫えば、答えが見えて来るかも知れません。　只、運搬水路の底に敷く砂は、数年に一度入れ替えられるとか。　その入れ替えが行われていなければ・・、の話ですがね。　しかし、運

搬水路の運行を止めて攫う必要が在り、それを押して作業執行する捜査権が・・今の貴女に在りますか？」

そう問われたレナだが、既に決意を持っていた様だ。　弱気を見せず、ウィリアムに。

「この事件だけは、迷宮入りには出来ません」

「ですが。　俺の思惑が、本当に当たっているとは言い切れませんよ。　あくまでも、推理ですから」

「構いません。　今を逃して、この事件を解決出来る日は来ないと思います。　ですから、ウィリアムさん。　私の部下として、一時手を貸して下さい」

レナは、深く深く礼をする。　冒険者風情のウィリアムに、こんな真摯な礼節をする役人や有力者が何人居るか・・。　しかしレナは、それを示した。

すると、スティールが。

「よぉ～よぉ～ウィリアムちゃんよぉ～。　そう邪険にせんでエエ～じゃないのさぁ～」

と、絡み。

ロイムも、ぬるぅ～んとウィリアムに擦り寄り。

「そぉ～だよぉ～、レナさんも頭下げてるしぃ～。　これって仕事だしぃ～」

アクトルは、

「ウィリアム、さっさと終わらせようぜ」

と、言いながら。

（何だかんだ言って、ロイムもスティールも肩入れしやがったな）

と、心で笑う。　こうゆう時に成ると、この二人は仲が良くなるのが面白い。

ウィリアムは、一つ頷き。

「では、真っ先に地下水路の底を攫いましょう。　問題は、水路の中でも最も汚れの堆積しそうな場所ですよ」

面を上げたレナは、本当に嬉しそうに。

「はいっ」

と、答えた。

★

レナは、少し高齢に成る捜査官を束ねる捜査部門の長官に面会し、事件の解決の為に単独でも動くと言った。

いきなりレナに捜査開始を告げられ、二句が繋げなかった長官。
７０に成る高齢官僚で、名誉職に近い管理職だった。　痩せた身体に、司法をイメージした裁きの書を持つ賢者が刺繍された青い法衣を着た人物だが。　その妻は、レナの血縁に当たる。

「ああ・・・レナ殿、その捜査はもう良い・・」

何とか声を出した長官は、唖然としてしまった直後なだけに。　モゴモゴと、どもりそうな口調であった。　レナの身に何か在っても困るが、レナが手を汚して捜査するなど驚きものだ。

だが、レナの顔には、強い意思が現れていた。

「いえ。　一捜査官として、公私混同はいけません。　それに、今を逃して捜査の進展は無いと思いますので。　父には、昨夜に私から決意を言いましたから。　では、失礼致します」

と、部屋を出て行くレナに、慌てた老人の長官は。

「レっレナ殿っ！！！　どうしてもするなら、配下を組み敷きっ、しっち・しし指揮をっ」

レナは、長官に振り返り。

「私には、部下を雇う元手など有りません。　只働きなど、させられませんわ」

「ひっひひっ・費用は計上してあるっ！！！　後で資金配布書を出す故っ、とにっ・とにかく部下を組織してくれいっ！！！！！」

レナの突然の決起染みた動きに、長官も思考が麻痺してしまったのだろう。　席を勢い良く立ち上がり、大声を出した。

一緒の部屋に居る事務方の年配女性が、長官の様子に驚いて固まってしまった。

レナは、正式に許しが出たので。

「では、その様に致します」

と、微笑み。　一礼して退室して行く。

閉まったドアを見つめた長官は、ドサッと大きな椅子に腰を落とし、深く息を吐いた。　だが、次の瞬間には、この事をレナの父親に知らせないといけないと思い。

「あっ、あわわわわ・・・。　てっ・手配をおぉぉ・・・」

と、また慌てふためき動き出したのである。

さて。　ウィリアム達の下に戻ったレナは。

「ウィリアムさん、正式に部下の補充も許して頂きました。　今まで、密かに情報を持って来て頂いていた方々で、叔父の頃からの部下数人に声を掛けてみたいと思います」

聞いたウィリアムは、いきなりの事だったから逆にすんなり行ったのだろうと理解して。

「それは、お任せしますよ。　我々の及ぶ領域では有りませんからね」

「はい。　では、少しお時間を頂きますね」

捜査は、昼過ぎから本格的に開始と云う事に成る。

先に部屋の外に出たウィリアムは、錆付いた運命の歯車がまた一つ。
緩やかに動き出す音を聞いた。

レナが呼んだ者は、たったの６人。　元のイフハハンの部下は、正規の者だけで１００人を超えて居たと云うから。　他の者達はそれぞれ生き方を変えたり、別の捜査官の下に付いたりと成っていたのだろう。　だが、今回の事件に関しては、この人数でも十分だった。

強制捜査として、地下水路の捜索が行われた。　真っ先に見つかったのは、海の生き物で淡水には住まない黒い藻だった。　問題のアサリの食料で、塩分の希薄過ぎた水路の砂地に定着出来ず。　もう、僅かな量しか残っていない。

だが、その藻が見つかった事自体が異常だった。　船底の磨耗防止の役割や、ゴミの移動を少なくする目的で、水路の底に敷かれた砂とは。　全て浜辺の海岸から離れた場所から採取された、乾燥し切った物だからだ。

そして、次に見つかったのは、死んだ黒い貝。　繁殖期に毒を分泌する貝で、アサリの種類である。

捜索が続けられた夕方には、遂に水路の奥で問題の毒アサリが見つかった。　家庭用の下水の推量を一定に保つ為の引き込み貯水場の

底に、そのアサリは生きていたのだ。

ウィリアムは、真っ先に水路管理者の一人で、イレグの近親者だった男性を詰問した。　ウィリアムの鋭い質問に怒り、そして思わずと口走った言葉でボロを出す。

“俺が殺した訳じゃないっ！！！”

その一言は、ウィリアムに付入る隙を与えたのと同じであった・・・。

それから、2日後。　全てが明るみに成った。

★

全ては、ウィリアムの推測通りだった。

イレグの妻ジェミリーは、夫を深く愛していた。　いや、し過ぎていた。　遊びに来るカトリィンに対し、こう洩らす。

“不憫な病気を持った・・、自分の様な子供を生むかも知れないから。　私、とても恐いの。　夫の求めるままに、子供が作れない”

ジェミリーは、教養の有る真っ直ぐな女性だった。　事業で成功する夫に相応しい家庭を築いてあげたいが、自分に全て不安の要因が在ると自責の念に悩んでいたのだった。

処が、だ。

娘のカトリィンからその話を聞いた父親は、従兄弟でイレグの親戚筋に当たる地下水路を管理するこの男に相談した。　その相談とは、ジェミリーを自殺に追い込み、カトリィンとイレグを結婚させる事である。

小細工屋として、アクセサリーや武器などに、細かい装飾を施す仕事を細々とやっていたカトリィンの父親にとって。　イレグが息子に成る事は、もう願っても無い事だ。　商売を広げ、イレグに売買を手伝わせる事も出来る。

一方で。　イレグの親戚筋で、地下水路管理者をする人物も。　従兄弟がそうなれば、安い給金の役人をオサラバし。　従兄弟と一緒に商人が出来ると、自分勝手な夢を抱いてしまった。

たった一つの過ちを犯せば、あとは堂々と商人の街で胸を晴れる・・。　そんな欲望で団結した二人は、事件を起こすべく結託した。

イレグの親戚筋に当たる人物は、地下水路でアサリを育てた。　漁師の知人や親類から、密かに毒アサリの事を聞き出して・・。

一方でカトリィンの父親は、こっそりとジェミリーに会い。　娘のカトリィンが、イレグを間違って愛してしまっただの。　密かに関係を持ったなどと吹き込んだ。　心根の綺麗なジェミリーは、密かに生きて純粋だった分だけ、穢れを持たない女性だったのだろう。

親友と夫なら許せるし、自分の不肖な身体を呪うが故に、悩みながらも託す事を考えた。

ジェミリーが少しでも怒り、カトリィンに問い質せたら変わったの

だろうが。　カトリィンに何かと仕事を与えて、ジェミリーから遠ざけたカトリィンの父親には、抜かりが無かった。　世間から孤立して、夫が不在気味のジェミリーの元を訪れては、様々な脅迫や有りもしない噂を吹き込み。　そして、自殺を誘発させる文句を云うのだ。

実は、ジェミリー自身。　自分の家族筋から、子供を作る事に強い要求を強いられていた。　イレグと云う成功者を、親戚筋から手放したく無い欲求からである。　無論、両親にさえ、口酸っぱく言われていた。

ジェミリーは、それでも夫の将来と自分の至らなさを天秤に秤り。　親友で社交的なカトリィンなら、成功する夫を支えられると・・。　愛する夫の将来が、何よりも大事だった。　こんな醜い自分を受け入れてくれた夫の為なら、死をも厭わないと思ったのだ。

そんなジェミリーを、最後の不運が襲う。　流行り病を患った事だ。　夫が半月以上も居ない中、激しく咳き込み、高熱を出したジェミリー。　医者を呼んだ中で告げられたのは、自分の幼い頃に罹った病気は、子供に受け継がれる可能性が有ると云う事・・。

無論、この情報は、カトゥリンの父親が金で頼んだ事である。

事件は、そんな渦巻く陰謀の手が、純粋なジェミリーの手を引いて起こった。　アサリをバケツに入れて持ち込んだのは、カトリィンの父親である。　そして、ジェミリーは、最後の晩餐を迎えたのだ。

メイドの死亡は、どうしても自殺を止められず。　長年ジェミリーに世話に成った忠誠の証としての殉死と、ウィリアムは指摘する。　奉公する者と、仕えられる者の間には、時として非常に強い絆が

生まれる。

確かに死んだメイドは、ジェミリーに対して強い忠誠心を持っていた。　その事実は、自殺前に暇を与えられた少女が証言している。

　メイドの女性は、嘗ては夜の女で、犯罪に加担させられた経緯を持っており。　ジェミリーが雇うまで、非常に過酷な生活環境を生きていたらしい。　メイドや少女にとって、ジェミリーは、正しく女神の様な存在だったと・・。

事実が判った後のスティールやアクトルは、憤慨して先に飲みに消えた程。　ロイムやクローリアも、悲しい話に居た堪れずに、宿に帰った。

ウィリアムは、犯人の二人の逮捕。　そして、自供まで付き合った。父親の逮捕と同時に、事実を知った親友の中年美女カトリィンの嘆き様は、もう悲痛の極みを見る様で。　レナは、涙を覚えて顔を背けた程だった。

人の欲は、良くも悪くも燃えると直走る時が在る。　権力、金、名誉、栄光、成功、その甘美な豊かさの象徴は、時として人を狂わせる。　そんな人の弱く醜い部分に、穢れを知らず過ぎた無垢な心が狙われたのだ。

ウィリアムは、愛情も言葉が足らないと擦れ違う事を見せ付けられたと思う。

その日の夜は、初夏の割に冷えた星の輝く空だった。

さて、それから更に2日後。　事件を解決したレナは、凄い決断をする。　何と、捜査官の地位を辞退し、一下級役人として捜査の手先に成ると云う事だ。

これには、もう長官も親も相当に悩み、悶え抜く様な苦悩を味わっただろう。

だが、其処に救世主の様にレナを是非にと請うたのが、誰でも無い。
　あの女性捜査官ミレーヌである。

女性の上級捜査官であるミレーヌから、レナをブレインとして頭脳捜査官兼副官に欲しいと云う願いは、苦悩していた長官と父親にしてみれば、願ったり適ったりの渡りに舟。　レナの意思をどうこうでは無く、ミレーヌの申し出の有った夕方に即時決定する。

一方のレナも。　ウィリアムの親しい相手で、噂からして優秀な上級捜査指揮官のミレーヌに会い。　彼女と話し合って、直ぐに心が合致した。

「私で宜しければ、ミレーヌ様のお傍で」

商人として古い家柄のレナは勿論だが。　役人として代々古い家系のミレーヌとレナの取り合わせは、いい取り合わせだったのかも知れない。

先ほど、ウィリアムの解決したダレイ殺人事件から、余波を引いた

★

不正や癒着の事件も。　法律にも商業にも詳しいレナのお陰で、著しい捗りを見せる事に成る。

マーケット・ハーナスに、後々称えられる捜査官ミレーヌとレナの名活躍は、此処から始まるのである。

しかし、一方では。

これは、後々の余談で、ウィリアムは予期してレナに注意をしたのだが。　それでも救えない事実が有った。

一つは、最愛の妻を失った夫、イレグである。　イレグは、自分の所為でジェミリーを失ったと責め。　ジェミリーの一回忌に、その命を絶つ。　雪の舞う年の暮れ。　妻の墓の前で自決したその彼は、翌日に冷たくなって発見された。

更に、ジェミリーの親友だったカトリィンは、父親のお陰で凍える様な冷遇を周りから受ける事になり。　街に居た堪れなくなり、二ヶ月後には母親と共々夜逃げする事に成る。

レナは、自分の力で二人を守ろうと、度々両者に会い元気付けていたのだったが。　失ったジェミリーと云う人物の存在は、意外にも大きく。　そして、強い存在だった。

情とは、かくも儚く。　そして、強い絆を生むのだとレナに教える事と成った。

ウィリアム短編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム短編は、これにて一先ず終了です。

次回からは、物語の構成の進行上。　早く出来上がったK編を先に回し、セイルとユリア編、ウィリアム編、ポリア後編と云う流れで進行を予定します。

K編は、もう2話程出来上がっている状態なので、K編をお送りするのは、確定と云う事だけは云えると思います。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪海に轟いた伝説の男と、影に埋もれた伝説の男≫

寒い・・。

冷え始めた冬の荒れた海が、白亜の大型旅客船を波で持ち上げたり。
また、波の底へと揺り動かす。　強い風に吹かれて飛び交っていた小粒の雨が、薄暗く為った夕闇の中で雪に変わりそうな様相を呈していた。

この船の地下には、数階に渡って雑多なベットばかりが並ぶ共同寝所が在る。　古い木造の床や壁は、外見の美しい白亜の姿からは想像も付かない程に汚い。

ランプの灯りもまだ入れられて無いから、丸で暮れた夕闇の様な中で、鬱葱とした森に踏み込んだ様な暗さが広がっている。　酒気、隠れて吸われた煙草、男達の体臭、湿った木が吸った臭いが混ざり、何とも微妙な臭いが立ち込める。

此処は、非常に安い寝所だ。　地上部の二階から上には、様々な等級の寝室が数百も在り。　貴族や、商人や、一般の旅人などが宿泊しているのだが。　地下一階から似たような寝所の広がるこの場所は、最低限の運賃で船に運ばれる。　階級的に言うなれば、底辺の旅人が寝泊りする場所なのだ。

訝しげな人々の掃き溜めの様なその場所。　女性も紛れるが、大多数が男。　まっとうな人の道を歩んでいるのかと、疑いたくなる様な者ばかりが多く目立つ。　目付きの悪い訝しげな冒険者、黒いローブを頭まで被った怪しい者、痩せこけた薄気味悪い老婆、妙に爛れた雰囲気を纏う中年・初老の女性。　汚れた衣服を着る子供や、その親らしき家族。　社会の底辺で、その日暮しをする様な男の働き手など、その面々はそれぞれに・・。

二段ベットが狭い通りの隙間を残して、数多く敷き詰められた中。　洗濯物を吊るした紐が、ベットからベットへ、ベットから天井の梁へと伸びていたり。　壁際には、フックに掛かったボロ布の様な衣服が在ったり。　その雑多な様子は、まるでスラムの様だ。

さて、地下二階の暗い中。

長い黒髪を背中に流す女性は、豊かに突き出た胸元の3番目のブラウスのボタンと外し。　右手の指二つを差し込んだ。　そして、何かを取り出すと。　向かい合うベットの下の段で座り直した、黒い影の様な何者かに差し出す。

「コレ・・。　私の曽祖父が書き残したメモなの」

その透き通る様な女性の重み在る声は、大人びた姿を連想させた。

黒いシルエットの様な人物は、女性から受け取った何かを見る。
こんな暗い中で、何が見えるのか解らない。　だが、その渡された物を見つめる人物は・・。

「なるほど、この書かれた文章の意味は、場所を示している。　だが、東の大陸に渡らないとな。　魔法学院自治領の、カクトノーズに行く必要が在る」

闇に流れる声は、男の物だ。　静かな物言いだが、まるで何処までも聞こえて行きそうな澄んだ声だった。

女性は、今まで自分の一族が解読出来なかった文章の意味を、渡した紙を見て一瞬にして見抜いた様な男に驚く。

「そんなに・・簡単に解る事なの?」

相手の男は、紙を女性に返し。

「さぁ。　この意味は、古代から超魔法時代の始まる直前まで、世界の海を股に駆けていた海旅族(ウォーホランダリン)の文明を知らないと無理だ」

女性は、戻された紙を握り締め。

「ウォーホランダリンって・・、海賊の事でしょ?」

「ま、一般的には、海旅族は海賊の始祖と云われる。　だが、海旅族は、諸島王国を築いた文明人であり。　その地域で得ていた金や海域資源を奪われ、海を回遊しながら海賊に為らざる得なかった部族なんだ」

女性は、初めて聞く話で。

「そんな話、誰も知らないわよ？」

「当然だろう。　もう、海旅族の地上神殿などは、彼等の国を奪った者達に因って尽く破壊され。　その記憶が留まるのは、地図にも載らない諸島の外れに在る孤島の地下深く。　俺だって、数年前だがその神殿を見つけて、安置された記憶の石を見るまでは解らなかったさ」

女性は、声を押し低めながら。

「“記憶の石”・・。　貴方は、魔法が遣えるのですか？　見る所・・杖などの発動体を持っては居ない様ですか・・」

女性は、魔法遣いらしい。　彼女の脇には、ベットに傾けられた杖が有る。

「俺は、軽い基本魔法を遣えるだけさ。　基本魔法は、古代語さえ知っているなら、特有の魔法では無いから発動体も要らない。　それなりに扱い方を心得る必要は、有るがな」

「でも、古代の神殿に、あの様な貴重なアイテムがそんなに在るのですか？」

「古代の人々にとって、オールドアイテムの代名詞である“記憶の石”は、意思を、記憶を託す唯一の物。　古代神殿を見つけると、大抵出てくる記憶は、過去を知る重要な手掛かり。　まだ発見されてないと思われる神殿は、人の踏み込んでいない場所・・。　つまりは、非常に危険な所に在るわけだが。　確かに、手付かずの神殿

には多い。　ま、俺はそれを持ち帰らないがな」

女性は、人の知らない発見をして、それを世界に示して証明し。
学者の地位は、世間的に確立すると思っていた。　自分の一族は、
数多くの発見をし。　その功績から、世界で名を馳せた学者一族に
も成った事が有る。

だからか・・。

「そんなっ・・。　誰も知らない新事実ですよ？　学者として、人
に認められる最高の発見では在りませんか・・。　人の前に持ち出
さなければ、証明が出来ない・・」

しかし、影の様な男は。

「かもな・・。　だが、俺は有名に成る気も無い。　そして、その
証明をしたとして、だ。　古代の知識を、今の人間が何処まで正し
く利用出来るかは、疑問だ」

と。

女性は、少し俯き。

「それは・・そうかも知れませんが・・・」

「一つを例に挙げるなら。　話に出した海旅族は、今の海賊の様な
悪人とは違う。　人を殺めず、金持ちからしか取らず、自然と海を
愛した部族だ。　その部族を海賊としたのは、彼等の持つ自然の力
や、航海技術を欲した魔法遣い達だと云う。　彼等を陥れ、新たに
生み出した超魔法で、凄まじい殺戮をして行った・・。　俺の見た

記憶の石では、諸島の森を焼き、海旅族の住処を破壊し尽した魔術師達が見えた。　そして、その魔術師達が掲げた旗は、諸島王国・モッカグルの旗だったよ」

口に手を当て、黙る女性。　今も存在する王国だが、そんな野蛮で殺伐とした政治はしていない国である。

影の男は、女性の様子も当然と云わん頷きをして。

「驚きだろう？　今のモッカグルは、穏やかな情勢が有名な封建王国。　漁業と砂金と塩が有名なだけの国。　だが、未だに王家を守るのは、強力な自然魔法兵団を中心とした王国騎士団であり。　嘗ては、超魔法の時代が終わりを告げた時、国土の人口が9割減ったと云われる。　事実を踏まえるすれば、あの記憶は当て嵌まる」

女性は、紙を握った手を見て。

「では、カクトノーズに行けばいいのですね？」

此処で男は、女性に正しく向き。

「あぁ。　・・、どうだ。　カクトノーズに渡って、宝を探すなら。その宝を夢見て、時代を駆け抜けた男も誘わないか？　信用は出来るし、チームを組むなら、面子も欲しいだろう？」

女性は、魔法遣いの修行の為に、カクトノーズの首都に居た事が有る。　世界的に有名な魔法学院に、魔法遣いに成るべくして彼女も入学していた訳だ。　入学から、たった5年半で自然魔法を遣える様に成り。　卒業と同時に学者兼魔術師として、冒険者に成る決意をしたのだ。

さて。　カクトノーズの国には、学者が多い街や、魔法遣いが商人として住み暮らす街も在る。　其処には、学術的に研究をする者が多く。　歴史や、魔法や、魔法技術を遣った創作等に、彼等は日々を費やしている。　恐らく、この男。　Kと名乗る男が言う人物も、其処に居るのだと思われた。

「そうゆう方がいらっしゃるのですか・・。　カクトノーズの何処で、その方と会うのですか？」

すると、黒尽くめの男Kは、荷物を持つながら。

「これから、直ぐに。　此処では、君が面倒の種だ。　その誘う相手に掛け合って、使わない部屋を一つ借りよう」

女性は、いきなりの話に話が飲み込めず。

「え・・あ？　い・今からですか？　ですが、私はお金など・・」

立ち上がる男は、軽い言い方で。

「その辺は任せろ。　それとも、毎日襲われる危険の在る此処で、残りの日数を過ごすか？」

女性は、さっき自分を乱暴しようと遣って来た男達を思い出し。

（面倒は避けた方がいいわね）

と。

今、目の前に立つKと云う男が居なければ、自分は男達に乱暴されていたかも知れない。　女性は、このKと云う男を信じる事にした。
　一応自身も学者だが、自分一人で、謎に包まれた秘宝を探し出せるとは限らないし。　寧ろ、この男が云う事が本当に当たっているのか、知りたく成った。

「解かりました」

少ないながら、衣服などを仕舞った背負い袋を手にした女性・オリヴェッティは、暗い中でKと云う男の後を付いて行った。

★

旅客船の中でも最も大きい部類に入るこの船は、地上部に宿泊出来る客の数だけでも１０００人を超える。

その為、船の一階と二階。　そして、地下一階と一階の間の中一階は、地下に泊まる者などが、居る事を憚れる様な思いに駆られる世界が存在していた。

海上特有の強風で、小さな粉雪が乱舞する船の甲板に出てから、船の壁面を抜ける外廊下を行く。　オリヴェッティを連れたKと云う黒尽くめの男は、側面の入り口から一階に踏み込むと・・。　優雅な曲が流れ、丸で昼間の様な世界が飛び込んで来る。

「まぁ～ったく・・。　こんな金掛かる内装してるから、地下の寝泊まり料も高いんだ。　金持ちに、俺達の分でも払わせろよ」

包帯を顔に巻くKは、その豪華な内装に悪態を付いた。

赤い絨毯で敷き詰められた床。　旅人や冒険者に混じり、正装・ドレスアップした上流界の紳士・淑女が歩いている。　火を使う事を極力避けた照明には、明かりの魔法を閉じ込めたクリスタルをシャンデリアや、壁掛けのグラスランプに入れている。　影が出来るのは、本当に施設の一部や人の立つ足元ぐらいではないか？、と、思わせる程に煌びやかな明かりだ。

一階は、中地下一階の大ホールで行われる舞踏会や、楽師、旅芸人、役者などの行う芸が行われているホールを見下ろせる様にと、吹き抜けを幾つも持った階であり。　壁際には廊下部分が伸び。　奥に軽食から酒まで飲めるバーラウンジ、静かに暇を潰せる図書館も在る。

Kは、オリヴェッティに。

「腹は？」

オリヴェッティは、その中地下一階で行われる舞踏会に目が行っていて。　いきなり話掛けられしまって、返答を詰まり。

「えっ？　あ・・・お金無いから・・」

Kは、包帯の隙間から覗ける目を笑わせ。

「なら、気にするな。　ま、何か持って上に行こう」

「え？」

オリヴェッティは、この船では何をするにしても金が掛かる事を知っている。　だから、この包帯を顔に巻いた男の言動が、何も理解出来なくなりそうだった。

（気にするなって・・。　お金持ってるの？）

自分と同じ地下に寝泊りしていた男が、食事の料金を気にするな等とは驚きだ。

そして、一緒に行けば。　立食の出来るテーブルのみが置かれたホールと、注文を受けるカウンターが見えた。　カウンターの両サイドには、テーブルがオープンテラスのカフェの様に、奥目の一角に広がる飲食の場も見える。

夕方を過ぎ、丁度夕食時の真っ最中で。　一般客として宿泊する大勢の旅客が居た。　家族連れ、一人の旅行客、冒険者、吟遊詩人らしき旅人や、楽師、踊り子、旅芸人など様々な様相の人々が、広い絨毯の上のフロアを行き交う。

その様々な人々の出す喧騒を聞くオリヴェッティは、杖を握り直し。

「私は、何でも食べれます」

聞いたKは、短く。

「ん、待ってろ」

と、カウンターに向かった。

オリヴェッティは、間近に在る下を見下ろせる手摺り近くの角、鉢

植えの観葉植物脇に下がった。　青々とした長い草が、自分の背丈以上に伸びる。　ヒールを履く訳でも無い彼女は、女性としては背の高い方だが。　その自分の頭を撫でそうに伸びては垂れる植物は、何度見ても珍しいと思えた。

さて。

冒険者などがワイワイやりながらカウンターから席に移動して。
Kは、その空いたカウンターに向かう。

「おきゃ・・・」

鼻下にチョビ髭を生やし、7：3に分けた髪が白く成る部分を見せる中年の男性は、Kを見て手を止めた。　仕事着の白い料理人の衣服を着た彼だが、この包帯を顔に巻いたKの事は、直ぐに思い出せた。

「あ・・アンタ、あの・・あの時の・・・」

Kは、口元に笑みを見せ。

「久しぶりだな。　パンに、ハムとチーズと・・野菜を見繕って挟んでくれ」

調理人のその男性は、何故か極度に緊張し。　ゴクリと唾を飲んで。

「俺は・・もう足を洗ったんだ・・」

「あぁ、解ってる。　俺も、あの殺伐とした頃の家業は捨てた」

「そっ・そうなのか・・。　てっきり、俺は・・・」

「小悪党だったアンタを、今更殺してどうするよ。　真っ当に生きてるんだ、もう詮索などしないさ」

「そそそ・・そうか・・」

Kは、パンを出したり、ガラスのケースに入れられた具材を、ぎこちない手つきながらタングで取り出す調理人に。

「二人分を頼む。　これから上の船長を訪ねるから、立ち食いだ」

調理パンを作るその男は、少しほぐれた顔で。

「クラウザー様にか。　アンタも顔が広いね」

「まぁ、ね。　所で、あの子はどうした？　もう、１８ぐらいに成っただろう？」

「あぁ。　来月、結婚するんだ。　宿屋を営む家の長男の所に・・・。　花嫁衣裳ぐらいは、父親代わりとして出してやりたいからな。　借金してでも、なんとかするさ」

「出来る事は・・・か？」

「あぁ・・。　俺の、俺なりの罪滅ぼしだ」

「そうか・・」

「ホレ。　サービスで、一種類多く巻いた。　代金はいいよ」

男性の調理人は、ザラ紙（灰色の安い紙）にパンを包んで二つ出す。

Kは、それを受け取る前に。

「なら、コレは俺からの餞別だ。　今のアンタなら、コレで身を崩すまい」

と、光る石を出した。

「あ・・、こりゃ・・」

調理人の男性に差し出されたのは、二本指で掴める大きさのキュービックゴールドだ。　金塊の最小形だが、軽く見積もっても値段は数百シフォン以上するだろう。

「あ」

男性は、その金塊の受け取りを拒もうとしたが、もう目の前にKは居ない。

「身を崩すな。　アンタは、真っ当な道に戻ったんだからな」

Kの声だけが、何故か聞こえた。

（変わった・・・）

男性は、次の客が前に来るのに合わせて、キュービックゴールドを仕舞った。　内心に思うのは、悪魔の如く恐ろしかったあの男が、丸で神の如く穏やかに成っていた事である。　貰った金は、自分が

命を殺めてしまった者の遺族である娘に、全てくれてやる気だった。
悪友と云う親友の娘だ。その晴れ姿は、殺めた奴の代わりに見たかった。

Kは、男二人に声を掛けられていたオリヴェッティの元に向かう。

「すみません、仲間が来たので・・」

絡まれ困っていたオリヴェッティは、Kの姿を見れて足早に男二人の前から立ち去る。

Kを見返り、睨む冒険者風体のやさぐれた男二人。

（好きだねぇ～。つか、まぁ～ずその危ない面から直せ）

冒険者二人の睨み目を見ても、せせら笑いしか出なかったK。来たオリヴェッティにパンを渡し。

「ホレ。上に行くぞ」

「あ、ありがとう」

何も詮索されず、ヒョイとパンを渡される事が。オリヴェッティからすると、不自然過ぎる自然な様子で、彼女も拍子抜けしてしまう。だが、パンから香る鶏肉を焼いた香ばしい香りと、マスタードバターの香りがガーリックのタレに混ざり、食欲を突いて刺激する。

（・・・、男性の誘惑に勝てても、この誘惑には無理だわ）

朝から何も食べず、僅かな飴の欠片と水だけだった。　このパンの匂いは、正直嬉しかった。

★

Kとオリヴェッティが二階に上がれば、モダンな黒と赤を基調とした様相に、落ち着きの垂れ込める空間が広がる。

上に行く階段を求め、長い廊下に入れば。　等間隔で各部屋に行く扉や黒い壁側と、海を見渡せる窓ガラス側が現れ。　赤い絨毯の廊下を行けば、壁に掛かった瓦版、絵画、風景画と詩、各国の大型劇場で催される劇や音楽会の宣伝などが額縁で貼られ。　部屋に入る扉と扉の間を埋める。

さて。　操舵室や船長室の在る最上階の一つ手前の階へは、どの階段で行っても中央階段を最後に上らないといけないらしい。　Kは、大して船内経路図を見る事も無く。　最短で行く経路を歩んでいた。

三階に上がれば、幅広い廊下と、扉と扉の間隔が広い中部屋になり。　五階に上がれば、大部屋であるリッチな内装の個室が、廊下を隔てた個々に独立する。

余談だが、全7階と地図に表示される船内。　だがしかし、地下は隔離船室として階層に入っていない。　船内案内地図に載せる必要の無い、簡単な造りで有る事も確かだが。　船を運営する船主の、差別的な意思も含まれて居る様だ。　醜い部分を、地図にすら載せ

ないのは、権力を持つ人の見栄なのかもしれぬ。

五階へ上がる手前。　オリヴェッティは、黒いスーツにマントを羽織るナイスミドルな男性と擦れ違うのだが。　甘く流し目を受けて、返って嫌だった。

（なんだか、誘われるの気味悪い・・・）

大金持ちらしい身形の恰幅な初老男性が、嫌に露出の多い若く淫靡な金髪女性の肩を抱いて歩いていたり。　神経質そうなインテリ然とした貴族風男性が、休憩場でソファーに座って本を読んでいる。　室内で読めばいいものを、何で此処に来ているのかと思えてしまう。

何を見るにしても不安気なオリヴェッティに、Kは脇目を向けながら。

「変わった奴、多いだろ？」

「えぇ・・。　下の方が、居心地良さそう・・」

「はっ。　金持ちは、どうも少し何かズレていくみたいだ。　ま、長い船旅に成ると、だんだん普段のテメェが日常に出る。　女狂い、人付き合いの上手・下手、孤独好き・・。　意外にこの階層は、人間観察には持って来いだ」

オリヴェッティは、ふと見た方で目を見開く。　大きな窓を前にした廊下の曲がり角で、身なりの良い若者と、少し年増と思えるセクシーなドレスに身を包んだ女性の二人が、急に見つめ合う格好から抱き合い。　人目も憚らず、濃厚な口付けを交わすのを見てしまっ

たのだ。

（あ・・、嘘）

恥ずかしくなって、パッと目を背ける。　人前でのこうゆう行為には、なんとも嫌な思いを抱く。　初（うぶ）と云うより、男性やキスなどの肉体を重ねる行為に、彼女自身イイ思い出が無いのが原因かもしれない。

（何で・・嫌なのかしら）

まだ２０歳の自分だ。　熱烈な恋愛でもして、誰かと周りを忘れて愛し合う事が、決して悪いとは思っていないのに・・。

Kは、やや薄暗い明かりの照明のみが光る階段前で。

「さ、この上にクラウザーが居る。　海の兵（つわもの）とのご対面だ」

オリヴェッティは、不安な顔をそのままに。

「こ・怖い・・・人ですか?」

階段に一歩踏み出したKは、そのまま止まり。

「悪いヤツと横暴なヤツには、な。　君には、多分はぁ～紳士に見えるかも」

「そう・・そうですか」

Kは、口元を微笑ませて階段を上りだした。

オリヴェッティは、そんなKの背中を見て階段に踏み出す。

上の階に上がったKは、踊り場から真っ直ぐ扉に向かう境でオリヴェッティを待って。　そして、彼女を連れて白い扉を押し開いた。

いきなり扉が開いたので、操舵室の中で働く者達は、一斉にKとオリヴェッティを見て来た。

入り口間近の横に在る白い机に向かい、紙に何かをを書き込んでいた人物が居る。　小柄な体躯をして、着流せる白と蒼の模様で彩られたオーバーコートを着ていた。　その人物は、顔を上げてKとオリヴェッティを見ては、強面の右目に眼帯をした顔をKに向け。

「お客さん、いきなり入って来られたら困る。　用件が在るなら、下の支配人にでも言ってくれ」

しかしKは、操舵室を見回しながら。

「いや、支配人じゃ話に成らん。　クラウザーは何処だ？　知り合いだが、ちっと込み入った話が有る」

すると、小柄で眼帯をするイカリ肩の中年男性は、Kの方に踏み寄り。

「知り合いと云う証明は？」

Kは、苦い笑みを浮かべ。

「本人に逢わせりゃ解るだろ？　元、“P”（パーフェクト）と名

乗ってた男が来たと言えば、死んでなきゃ会うさ」

オリヴェッティは、その話を真後ろで聞いていて。

（パーフェクト？　この人・・・名前が無いの？）

と、思う。　コードネームで呼ばせる冒険者は居る。　だが、幾つも変えると云う事は、背中（かこ）に古い傷を持つと云う事でも有る。　一体、このKと云う人物が何者なのか・・。　オリヴェッティは、益々解らなく成った。

Kに向かって近付いた眼帯船員は、

「面倒な、下に居ろっ。　後で取り付くっ」

と、Kを追い出しに掛かるのだが・・。

「あっ・・・」

Kに掴み掛かったつもりだったのに、何故か空気を掴んでしまい。

つんのめる様にオリヴェッティの前に。

オリヴェッティもKが捕まれたと思ったのに、急に眼帯をした船員が見えたので。

「嘘っ」

と、驚いてしまう。

Kは、操舵室で船を動かす魔法遣いなどが、杖を構え掛けるのも見

捨て。

「クラウザー、姿見せろ。　海賊として貶められた海旅族の秘宝、探す気は無いか？」

と、声を響かせる。

すると・・。

「久しぶりに逢いに来たと思ったら・・、期待以上の手土産を引っ提げるな。　フフフ、お主と逢う時は、退屈と云う言葉はゴミ箱に入れないとイカン」

扉の左側。　曲がった内に有る階段から、老いた野太い男性の声がする。

Kは、その方に顔を横顔で向け。

「やっぱり、上の船長室だったか。　おいおい、まだ夜の始まりだぜ？　隠居じいさんみたいに早寝とは、驚きだねぇ」

と、軽口を叩く。

眼帯をした船員がそれを聞き、

「おいっ！！！　クラウザー様になんて口利きやがるっ！！！！」

と、怒り。

その声に反応して、屈強な体格をした船員2・3人も威嚇の様子を

伺わせた。

しかし、だ。　左側から歩いて来た男は、

「止さないか。　此処に居る全員が束に成ったって、その男は殺せない。“始末屋”・“闇の冒険者”として、世界の悪事や不可能な無理難題を全て解決した化けモンだ」

と、云ってから。　眼帯船員に目を合わせ、

「カルロス、少し血気逸り過ぎだぞ」

と、注意を云うのだった。

オリヴェッティは、Kを見て。

（え？　こんな細い人が？）

と、驚いた気持ちは、この場に居る全員の思いだろう。

一応、褒められたKだが。

「海の兵、下ろした碇の如くと称えられたアンタが、俺をそう云うかい？」

と、問題の人物に向く。

「うはは、昔の話さ。　お前さんみたく、現役バリバリと云うにはいかねぇ～よ」

そう豪快な言い方をする人物を見るオリヴェッティは、噂に聞いた嘗ては偉大な大船団の船長だった男を瞳に映した。

Kの前まで遣って来た男性は、Kより頭一つ半は高い偉丈夫だ。引き締まった身体つきは、嘗ての逞しい身体を伺い知る事が出来る。

白いマーメイドの刺繍を背に入れたロングコートを羽織り。黒いYネックのシャツに、白いズボン。船長のみが許される帽子は、独特な形をする黒くツバの立派な物。日焼けした肌、白くなった髪を後ろに流し、男らしさと頑固さの覗える顔は、何とも老いて尚も魅力の香る男前だ。渋みが効く、苦み走ったと云うのは、こうゆう人物を云うのだろう。

クラウザー・ウィンチ。世界の海を知り尽くし。時には大嵐を切り抜け、時には迫り来る幽霊船を振り切り。その身一つで、50を越す大船団を率いた“大海原の主”、“海の兵”と渾名され。頑固で男気溢れるその気の強さには、“下ろした碇の如く”と喩えられた。

クラウザーは、Kに。

「旅客名簿に、お前の名前無かったぞ」

Kは、ぞんざいな様子ながら親しげに。

「今は、“K”と名乗ってる。それに、泊まってたのは、地下だ」

その話を聞いたクラウザーは、驚く様な、呆れる様な顔で。

「おいおい。まさかお前さんが、特等室料金をも払えない訳無いだろう？今だに、ホレ。遊ぶ女連れて居るじゃないか」

と、顔でオリヴェッティを示す。

Kの愛人の様に思われ、困った様に顔を赤らめるオリヴェッティだが・・。

K自身は、ただただに苦笑い。

「クラウザー、止せ止せ。　名前を変えた以上、もう過去のバカは遣らかさん。　女も辞めた。　酒も、裏家業も、な」

クラウザーは、やはり苦労人だ。　Kの語りを聞いて、何かを悟ったのだろう。

「な～る、悪魔の様なお主だったが。　今は、丸で別人の気配・・。お互い、年月で変わったな」

Kは、そんなクラウザーの目を見て。

「クラウザー・・、アンタその目」

「ん？」

「保(も)ってどの位だ？」

クラウザーも、Kに自分を見透かされた事を悟り。　ホロ苦く微笑んでは・・、

「ふふふ。　後・・何度か桜・・雪を見れるかな」

Kは、小さく頷き。

「そうか・・。　ま、いいや。　それより、土産を持って来た」

と、云うと。　オリヴェッティを見て。

「オリヴェッティ。　クラウザーに、あの紙を見せて遣ってくれ」

「え？」

驚く彼女だが、Kは。

「大丈夫。　クラウザーは、俺より信用出来る」

「あ・・、はい」

オリヴェッティは、詩の書かれた紙を取り出し、クラウザーに近付いては差し出す。

クラウザーは、オリヴェッティの目を見抜いて。

「いい女だ。　北西の血を引く肌に、その知的で澄んだ瞳。　中々、意思の強そうな娘だの」

Kは、紙を受け取るクラウザーに。

「ホレ、５０年ほど前にか。　“嘘吐き”呼ばわりされた、あのロヴハーツ家の娘さ。　もう、彼女しか居ないらしい。　ハルベールの家族は」

オリヴェッティは、自分の曾(ひい)お祖父さんに当たる人物の名前を出され。　心底に驚き、Kとクラウザーを交互に見つめては。

「し・・知って・る・・・の？」

すると、紙に書かれた詩を見たクラウザーも。

「知ってるさ。　ワシは、特にな」

と、云いながら、詩を目で読み。

「・・・。　やっぱり、あの時尻尾を掴んでたのか・・。　俺も、今にこの意味が解る。　ふぅ・・・。　老い先短いこの場で、夢をまた見るとは・・・な」

染み染みと紙を見つめるクラウザーを見たK。　少しの沈黙を置き。

「なぁ、一緒に来るか？　在るか、無いか・・・確かめて見るか？」

クラウザーは、自分の元にKが来たのを不思議がった。　意味は解るが、自分の知る嘗ての悪魔の様だったKなら、こんな真似はしない筈である。　だから、自然と疑問が口を滑る。

「お主、ワシをわざわざ誘いに？」

微笑するKは、オリヴェッティを見て。

「彼女は、どん底まで落ちても諦めていない。　丸で過去のアンタの様に・・・」

と、云った処で話を止め。　今度は、クラウザーを見ると。

「アンタもまた、諦め切れないから船長をしてる。　こんな閑職の様な客船でもな。　心残りは、少ない方がいいだろ？　ン年前、俺に夢を語ったアンタは、未だまだ生きてる」

Kに見られ、俯き紙を再度見たクラウザーは。

「・・・まったく、苦笑いしか出ないぐらいに見透かされるな。だが、俺も最後に、男をもう一花咲かせられるかも知れん。　フフ・・・フフフ。　久しぶりだな、心が熱く為るのは」

Kは、今度は軽く笑い。

「はっ。　老けて呆けるには、チィ～っと早過ぎるさ」

クラウザーも、今度は本気でニヤリと笑い。

「ぬかせよ。　小僧に舐められるまでは、コチとら耄碌（もうろく）してないぞ」

Kとクラウザーは、不思議なまでに見えぬ意思の疎通をして。　お互いに笑うのだった。

オリヴェッティは、そんな二人が何処か面白く。　何処か、可愛いと思えた。

（なんだか、似てるわ。　この二人・・・）

と、微笑が滲んだ。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K編のスタートです。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪道は一つ　カクトノーズへ≫

夜。　船の一階では、パーティーも盛り上がり。　一般客の大半がショーや劇を観て居る頃。

クラウザーは、Kとオリヴェッティを連れて、随分と広々とした素晴らしい部屋に案内する。　Kが部屋の明かりを点けた。

オリヴェッティは、その豪華絢爛な部屋に案内され。

「あのっ！！　わ・私達・・・お金無いんですよ」

と、クラウザーに怯えた声で云った。

だが、中に入るKは。

「大丈夫だ。　どうせ、“開かずの間”だろ？　此処」

と。

クラウザーも中に入り。

「おう、そうだ」

と、言ってから、Kの点けた灯りの入ったシャンデリアを見上げ。

「使ったの半年前のわりに、魔法の水晶も生きてやがるな」

Kが魔法を発動させたのである。　Kは、開かれた入り口で突っ立つオリヴェッティに。

「早く入れ。　此処に人が入るのを見られるのはマズい」

「えっ？　あっ、はいっ」

オリヴェッティは、Kに言われて慌てる様に中に入る。

オリヴェッティが入った後、直ぐに廊下を確認してドアを閉めたクラウザー。

部屋の奥の窓脇に荷物を置くKは、

「オリヴェッティ。　この部屋の場所は、他言無用。　誰にも喋るなよ」

赤と金の糸で、薔薇の刺繍が施された素晴らしいソファーを見入るオリヴェッティは、Kに急に言われて。

「あ、え？　えぇ・・」

と、なんとか了解を。

Kは、窓の外を舞う雪を見てから、オリヴェッティに向き。

「この部屋は、訳有りの人を匿う部屋だ。　等級三ツ星以上の客船には、大抵こうゆう部屋が有る」

部屋を見回すオリヴェッティは、

「訳有り・・ですか」

「あぁ。　今、西の大陸以外は、国の情勢は穏やかだがな。　ドンパチやってた昔、諍いの起こってた国から、然るべき身分の方々が逃げて来たりした事有ったのさ。　王家の一族や、貴族の亡命。今だって、命を狙われる人物も、偶に紛れて来る。　様々な状況に合わせ、切羽詰った時に匿う場所が必要に成るのよ。　な、クラウザー」

暖炉に火の代わりに、船内の一部で使う蒸気で温められた風を取り込む穴を開けたクラウザーは。

「その通りだ。　数年前、どこぞのお姫様を連れて、御主が俺の持ってた客船に転がり込んで来たのが
。　それが実にいい例だ」

Kは、過去に触られ、知らん顔の様に。

「そうだったか？」

戯言と聞いた気のするクラウザーは、目を細めては呆れ。

「おいおい。　その姫様を食い散らかして、更に大事へしたのはどいつだ？」

「覚えてない。　求めて来たのは、向こうだし」

オリヴェッティとクラウザーは、二人して。

“覚えてるとし思えないが？”

と、細めた目でKを見た。

オリヴェッティは、部屋を見回し。

「しかし、この様に隠された部屋が在るとは・・。　ですから入り口が、壁の曲がった行き止まりに隠されいる訳ですね？」

Kは、すんなり。

「そ」

クラウザーは、奥の階段から船長室に行けるので。

「では、待っててくれい。　湯ぐらいは持ってくる」

Kは、部屋の奥に廊下が在るのを見て。

「なんだ、船長室と繋がってるのか？　なら、船長室から来ても良

かっただろうに。　まさか、アンタ以外知らんの？」

クラウザーは、４０半ば程も年の離れたＫにタメ口で言われると、平静のドスの利いた声に成り。

「当たり前だろがよ。　この部屋の事は、作った大工、船長、持ち主のみの情報だ」

「ほぉ～、覚えてなかった」

「お前ぇ・・、本来ならな。　この部屋は、一度使ったら部分改修して、入り口を変えるのが掟なんだぞ」

「部屋の存在自体の秘密を、限定した範囲にする為にか」

「そうだ」

「なら、何でこの部屋にしたんだ？　他の空き部屋でいいじゃないか」

クラウザーは、此処で微笑み。

「あの宝の話だ。　お前と長く話すに、一々下の部屋では面倒であろうが。　俺は、通い妻などしたくない。　７０過ぎてるんだぞ」

「はっ、プライド優先かいな」

「当たり前だ」

クラウザーは、Ｋにニヒルな笑みを見せ。　部屋の奥に在る廊下に

消えて行く。

見送ったKは、一人用のソファーに向かいながら。

「クラウザー、随分と嬉しそうだな。　ま、６０年近く追い求めた宝だからな。　それも、当然かぁ」

オリヴェッティは、自分達一家以外に、失われた秘宝を探す人が居るのだと知り。

「あのお方は、何で秘宝の事を・・」

ソファーにドッカリ座ったKは、オリヴェッティを見て。

「不思議か？」

オリヴェッティも、Kと話すべく3人掛けのソファーに腰を下ろし。

「えぇ。　だって・・、他の学者に幾ら聞いても、秘宝の事は御伽噺の様にしか思って居なくて・・。　海の漁師や、船乗りにだって聞き回ったのに・・」

血の滲む様な苦労と、女の身を狙われた過去。　答えが見つからず、一途に求める意地と一家の過去が無ければ、直ぐに諦めてしまうと思えた。

Kは、唐突にシャンデリアを見上げながら、オリヴェッティの耳慣れぬ言語で何かを喋る。　まるで、詩文を読む様で。

「ケイさん、その言葉は・・・、詩（うた）ですか？」

オリヴェッティに目を戻し、深く背凭れに身を預けてK。　優雅に足を組むと。

「君の持ってる紙に書かれた詩さ」

「え？」

「この語りは、似た様な発音で子守唄に変わってる地域がある。昔の詩として伝わっているがな」

オリヴェッティは、全く意味が解らなくなって。

「昔から伝わる子守唄・・・、それが秘宝の手掛かり？　もしかして、私の一族は、何か間違っていたのでは？」

Kの話を聞いて、彼女がこう言うのも無理は無かった。　何故なら、世界に古代の詩が幾つか伝わっている。　豊穣を願う詩、神々を讃える歌、子守唄、ハーヴェストを喜ぶ詩がそれだ。　今の言語に訳されている地域も在るが。　吟遊詩人や歌姫は、昔の古代語のままに歌う。　その古代語も、地方や大陸で異なっており。　理解するには、中々複雑な知識が必要となって来る。

衝撃を受け、今にも泣き出しそうに瞳を潤ませるオリヴェッティ。

　オリヴェッティは、自分の一族が間違い。　何も無い只の詩を、さも秘宝の手掛かりだと思い込んでしまったのではないかと思えた。

Kは、緩やかに微笑み。　左肘を肘当てに預けると。

「その逆だ、オリヴェッティ」

「え？」

「この詩は、海旅族が立ち寄ったと言い伝えの残る漁村や、港にのみ伝わる。　君の曽祖父ハルベールは、海旅族の事を調べ回っていた。　それが、ある時酔っ払って、今の言語で唄われていた子守唄を、古代語に変えてみたらしい。　すると、内容はちぐはぐで、文章に成らない事が解った」

「そんなっ。　では、この詩は一体？」

「ハルベールと云う人物は、古代語に変換する事で気付いたんだ。　元は別の詩だった物が、言語を知らない現地人に因って、間違った子守唄に摩り替わっていたのではないか・・・とな」

告げられた瞬間。　オリヴェッティは、恐らく曽祖父が気付いた時に感じた震えと衝撃を、自分も感じた気がする。　震える手つきで紙を持ち上げ、焦る手で広げる。

（この詩文・・、そう云えば子守唄じゃないわっ）

「星の泣く夜　金色の太陽　高き空に光る　　明ける陽は　子の後に昇りて望み　その佇む丘は　我が鏡を埋し場所」

書かれた詩文の様な文字を見るオリヴェッティ。　意味が解らないが、フッとKに顔を上げて。

「では、この意味が解るクラウザーさんは、貴方と同じ学者なのですか？　それとも、貴方が・・・」

「いや、俺が教えた訳じゃない」

「でっ・でも、あの人は曽祖父の事を知っている素振りだったわ・・」

Kは、中々帰って来ないクラウザーなので。

「クラウザーって男は、すんげ～苦労人だぁ」

唐突に話を変えられた。　オリヴェッティは、返す言葉を心の中で粗探しして。

「・・、それは、見てからに・・・」

「ん」

頷くKは、一呼吸置いてから。

「実は、な。　クラウザーは、親の顔を知らん。　生まれた夜に、孤児院に預けられたとさ」

「まぁ・・」

「だが、クラウザーの苦労にしてみれば、それは始まりに過ぎない。　6歳の頃、人扶出しに奴隷を斡旋する人攫いに孤児院を襲われ。　親代わりだった夫婦を殺された上に、孤児院の子供達共々と誘拐されたそうだ。　クラウザーは、その孤児院の最年少で。　殺された中年の夫婦とは、一緒の部屋に寝ていたらしい」

「じゃ・・・殺される現場も？」

「あぁ・・。　夫婦の男性は、直ぐに殺され。　殴り倒されたクラウザーの前で、奥さんは酷い仕打ちの上に殺された・・。　クラウザーの心に、初めて怒りと殺意が湧き上がった瞬間だったらしい」

「・・・、酷い」

オリヴェッティは、想像も出来ない有様だったと声が掠れた。　口元に手を当てた時、自分の身に襲い掛かった学者の事を思い出す。

「だな。　誘拐された後も暴れたクラウザーは、反抗する子供として、劣悪な環境で１２まで育った。　そんな環境下で、必死に生きたその希望は、親代わりだった二人。　そして、攫われた仲間達との絆だけだったとさ」

「酷い扱いだったのでしょうね・・。　想像もつかないわ」

「大抵の人がそうだろう。　だが、１２歳に成ったクラウザーは、遂に誘拐した悪党達を討つチャンスを得た。　生まれて初めて、人を殺した時だ」

「人攫いを？」

「おう。　こっそり逃げ出したクラウザーは、悪党達が飲む酒瓶に毒を混ぜた。　飲んだ奴等がのた打ち回る中で、仲間や一緒に囚われていた子供達を逃がし。　その山間に隠れた人攫いの塒である屋敷に、火を放ったみたいだ。　毒で苦しんだ人攫い達は、殆ど全員が死んだとよ」

オリヴェッティは、自分の過去が霞みそうな過酷な話だと俯く。

Kは、更に話を続け。

「逃げたクラウザーは、追っ手を恐れた。　仲間などは、大きな街の在る方に先に逃がし。　最後まで残ったクラウザーは、育ての親を殺した奴等に態々止めを刺すまで残っていたからな。　だから、一人だけ山越えをした。　血に飢えた獣から逃げ、モンスターから身を隠し。　漸く１５日後に、北の大陸の東方、マーケット・ハーナスの街道に出たとか。　其処から、漁村に流れ着き。　身寄りの無い子供として、寺院に助けられた」

「それから、船乗りを？」

「あぁ。　クラウザーの云うに、其処で船の操りを覚えた様だ。そして、１６歳の頃。　君の曽祖父のハルベールと会う」

「えっ？　曽祖父と・・本当に知り合いだったの？」

「そうだぁ。　マーケット・ハーナスの東側沿岸には、小さな小島が多い。　まだ、詩文の意味を解らないハルベールは、小さな島々を探検したいと漁村に滞在し。　そのハルベールに、小船を操る船頭として雇われたのが・・・」

と、Kが云い掛けた処で。

「ワシだ」

と、クラウザーの声がする。

オリヴェッティが、クラウザーの姿を確認する。　卵型の湯気上が

る薬缶を右手に、菓子やパン等の物をバスケットに入れた物も持っていた。

Kは、一階で貰ったパンを何時の間にか持っていて。

「クラウザー、話代わってくれ。　腹減った」

「ん。　紅茶は、向こうの引き出しだ。　カップは、その隣の棚だ」

「おいさ。　茶の用意は、俺がしよう」

二人の動きは、とても自然だった。　オリヴェッティから見ても、この年の差の離れた二人の男は、お互いにお互いを認め合っている様な。　そんな印象を受けた。

さて。

席を代わったクラウザーは、オリヴェッティの全身を見回し。

「君は、ハルベールとは随分違うの」

恐縮と初対面の緊張から、オリヴェッティはぎこちなく。

「そうでしょうか・・。　あ、男性と女性の・・性別の違いも在りますから・・多分」

自分で何を言ってるんだか・・。　そう思うオリヴェッティだが。

クラウザーは、好々爺の笑みで。

「いや、それ以前の問題さ」

「え？」

「君の曽祖父ハルベールを見て、村の誰もが協力を断った」

オリヴェッティは、話が見えず。

「それは、一体どうゆう？」

「ん。　君の曽祖父のハルベールは、冒険者のチーム一つを丸々雇って来た。　神経質そうな、少し怒り顔の紳士・・。　それが、ハルベールの第一印象だったよ」

オリヴェッティは、顔も知らぬ記憶に名前だけしかない曽祖父を想像し。

「あ・・。　何か、ご迷惑でも？」

クラウザーは、涼やかに少し鼻で笑い。

「フッ。　その存在自体が、ま・・迷惑と云えた。　何せ、外部の人間と言ったら、魚を買う商人が来るだけの漁村だ。　いきなり来て、沿岸に見える島の全てを捜索するから、仕事そっちのけで協力してくれと云われてもな。　皆、日課の様な漁師仕事も在るし。急に来た学者サマに協力するほど、社交的な開かれた村では無かったからさ」

オリヴェッティは、済まなそうに俯いては。

「あぁ・・・、そうですか。　父から聞いた話では、曽祖父のハルベールと云う人が、家財の全てを投じてしまったと・・。　秘宝を一番強く信じた人で、その為なら見境が無くなる人だったと聞いています」

「なぁ～る。　そのまんまだな」

「私の祖父も、父も、秘宝を探しながらトレジャーハンターをしていました。　小さな発見の功績は、ハルベール以前の先祖に塗られた、数々の不名誉で掻き消され。　僅かに見つけた財宝は、借金に消えました。　私が女だったばっかりに、返済能力は無いと判断され、家も・・本も・・全て取り上げられました。　私には、もう・・この紙切れ一枚しか無く。　唯一の財産です」

二人の間に、Kが紅茶を入れて出す。　貴婦人の装飾が入った白と桃色のカップがオリヴェッティで、雄雄しき騎士の紋が入った白と蒼のカップがクラウザー。

クラウザーは、苦労の人生を歩んでいる若き学者の彼女を見て。

「大変じゃな。　生まれる場が違えば、貴族も、商人も、様々在ろうに。　ま。　それが人の運命かも知れぬ」

「・・・ですね」

場がしんみりした。　Kは、パンを手に、壁に避けられた椅子に腰を下ろす。

クラウザーは、そんな何も云わぬKを横目に見て。

（随分変わった・・。　前なら、話を進める催促でもしたのに、の）

と、思ってから。

「さぁ、続きを話すか」

オリヴェッティは、そう云われて。

「あ、はい」

と、顔を上げた。

「島に行きたがったハルベールは、村民に断られた。　だが、ハルベール達が泊った宿場が、村の入り口に在ってな。　その宿屋の裏庭に在った納屋に間借りしていたのが、若い頃のワシじゃった。　１６のピチピチしたイケメンだったよ」

何とも穏やかな顔で、そんな事を平然と云うクラウザー。

Kは、パンを噛みながら横を向き。

（テメェで、ピチピチとか云うか？）

と、呆れ笑い。

オリヴェッティも、いきなりの話にキョトンとする。

オロヴェッティの顔が和らいだのを見て、クラウザーは話を続ける。

「そなたの曽祖父が、困り果てて宿に泊まった。　その宿を営むの

は、寺院に使える司祭殿の弟でな。　しかも、寺院と宿屋は併設され、同じ敷地に在った」

オリヴェッティは、経験上から。

「寺院と宿が一緒だったり、付随するのは、村では、結構多いですね」

「うん。　さて、その夜の事じゃ。　宿の食堂に食事をしに来た司祭殿は、ちょうど居合わせたハルベールの話を聞き。　同じく食堂の外れに居たワシに、船頭を斡旋して来よった。　ワシも、司祭殿一家には、相当に世話に成ったからな。　５００シフォンで、船の船頭を引き受けた」

「なるほど、それで知り合いだったのですか」

「あぁ。　島を回る中、流石に学者として優秀なハルベールは、島に伝わる昔話や、民謡を細かく書き留め。　船の上で、色々と思案しとったわい。　小さな孤島でも、隠れたモンスターも居る。　村の者は、態と魚の一部を海に撒き。　モンスターが人を襲わん様にしていたがな。　時折、迷って来る交易船が島に漂着し。　モンスターに襲われてしまう事も在った」

「では、祖父も？」

「ワシの記憶しているだけで、１０回は襲われたな。　一緒の冒険者チームは、まぁまぁだった。　ハルベール自身が魔想魔術を扱えたから、なんとか切り抜けてたって印象だったよ」

「・・・」

オリヴェッティは、歴代の一族の中でも、特に優れた魔力を持っていたとも云われる曽祖父を思った。

クラウザーも、また。　当時を思い出す事に懐かしさを覚えるままに。

「大雨や、冒険者達の怪我も有った。　全ての島を回って・・二月ほど掛かったか。　ワシの居た漁村に来る前にも、一月ほど別の村で滞在していたらしいが。　十分に用意したと云ってた、二十万シフォンもの旅費を使い切る手前頃だったな」

オリヴェッティは、額が額だと驚き。　口に手を当てるのが精一杯。

Kも。

（学者としては優秀でも、計画性と云うか拘ら無さ過ぎる性格なんだろうな。　すげぇ額だ）

と、苦笑が滲む。

クラウザーは、湯気を上げる紅茶を啜り。

「いい匂いだ」

と、Kにカップを持ち上げて見せてから。

「さて。　島を見回り終えてから、数日後のある夜。　ハルベールは、何故かワシを起こして、一緒に酒を飲ませた。　旅に疲れて来たハルベールは、最初に村へ来た頃の人物とは少し違っていてな。

秘宝に関する詳細な説明を、ワシに話した。　正直、冒険談込みだったから驚きだったな。　冒険者にすらしなかった話を、ワシにしたんだ」

オリヴェッティは、気さくさを感じるクラウザーを見て。

「なんとなく、解る気がしますわ」

「フフフ、そうか？　ま、武術の心得も無いワシだったが、櫂を片手にモンスターとも遣り合った。　ある意味、戦友の様な間が出来上がりつつ在ったのかも知れん」

「三ヶ月は、長いですものね」

「あぁ。　彼を見ていて、怒ってるか、平静か。　当時のワシは、見分けられる様に為ってたからな。　あはは」

オリヴェッティは、クラウザーと云う人物の魅力に触れ出した気がする。　なんとも飄々とする部分と、豪儀と云うか豪快と云うか、大きさをも持っている人物だと思える。　確かに、一緒に行動を共にするなら、こうゆう人物は信用出来て安心だろう。

微笑を取り戻したオリヴェッティに、クラウザーは。

「先ほど見せて貰った紙。　あれに書かれていたのは、その村で唄われていた子守唄だ。　あの夜、酒を飲みながら、ハルベールは言った」

“この歌、不思議な事に他にも在るんだ。　海旅族が利用していた海岸近くの漁村で、此処とは大陸の正反対。　西のギャンブルで成

り立つ王国付近でだ・・。　大陸の左右に分かれた場所でも、海を挟んだだけなら、隣同士。　恐らく、何らかの繋がりが在りそうだ”

「とな」

「それが、この詩ですか？」

「あぁ。　子守唄を書いた手帳を見るハルベールに、ワシは言った。　似たような詩で、歌の曲調も一緒なら、言葉に何か共通の意味が在るんじゃないか・・とな。　ハルベールは、それに同意して笑った。　だが、詩を見ている内に、何かを閃いたのだろう。　急にグラスを置き、他の国の漁村で書き取った子守唄と合わせ、何度も見比べた。　そして、当時のワシに言ったのさ」

“オ～ルモ・ソシア・フォモナム”

「とな。　その意味は、ワシには解らないがな。　喜んでいたのだけは、確かだった」

オリヴェッティは、世界共用の古代の言語だと解り。

「“良く遣った、友よ”？」

と、言語訳を呟けば。

Kは、口のパンを飲み込み。

「・・当時のハルベールって人の気持ちからすなら、“でかした、相棒”。　・・かもな」

クラウザーとKは、お互いで見合っては食えない笑みを口に浮かべた。　クラウザーは、Kからオリヴェッティに顔を移しながら。

「フン、なるほど。　様子を思えば、まぁ、そんな所か」

と、言ってから。

「何かに気付いたハルベールは、一気に酒を呷って」

“私は、これから研究だ。　好きに飲め”

「と、部屋に消えた。　次の日も、次の日も、ハルベールは何処にも行かず。　部屋に篭りっきりに為った。　ワシは、それが5日も続いたから心配に成って、朝の漁をした後に宿に尋ねて行った。　すると、冒険者達が、先に村を去る所だった」

オリヴェッティは、紙を見ながら。

「これに気付いた？」

クラウザーは、頷く。

「冒険者は、もう用無しだったらしい。　俺を部屋に迎えたハルベールは、発狂しているんじゃないかと思うほどに元気でな」

“見つけたっ！！　次の手掛かりを見つけたんだっ！！！　あははははっ、秘宝は目前かもしれん”

「と、喜んでいたよ。　深くは話してくれなかったがな。　どうやら、集めた子守唄を古代語に直して、食い違いやらなんやらを調べ

たとか言ってた。　最初、子守唄を古代語に変換すると、支離滅裂な文章に成るから、古い文句じゃ無いって言ってたのにな」

と、クラウザーは、オリヴェッティがテーブルに置いた紙を見つめ。急に少し淋しげな目を送り。

「せっかく、何とか訳せたのに・・・。　海に詳しく無かったから、この詩の意味が解らなかったんだろうな」

オリヴェッティは、広げて置いた紙に書かれた詩を見つめながら。

「意味？　私も、この書かれている意味が解りません。　教えて頂けませんか？」

クラウザーは、Kに向き。

「言うか？」

Kは、パンに夢中で。　急に畏まった口調で、

「いえ。　若輩は、先輩に花を持たします」

と、言うのである。

「なぁ～にをぉ？　急に畏まった口調で、何を言いやがると思えば・・。　面倒だと素直に言えばいいだろうに、食えない奴め」

「じゃ、面倒」

「全く、何とも素直じゃ無い若輩だ」

「クラウザー、女を待たすな。　嘗てのベットの中で、女を待たせたか？」

「いやぁ」

引き合いが厭らしいと思うオリヴェッティは、何とも笑えない。

しかし、クラウザーは、ニコリとオリヴェッティを見て。

「星の泣く夜　金色の太陽　高き空に光る　　明ける陽は　子の後に昇りて望み　その佇む丘は　我が鏡を埋し場所」

「この詩の最初の一行」

“星の泣く夜”

「とは、流星の事だ。　遥か昔から、俺達船乗りは星を観察し、その位置で航海図を作った。“星が泣く”と表現される流星は、５年に一度来る大量流星の“アドゥリマナ”の事さ」

オリヴェッティは、その流星群は知っていた。　今から7以上年前、魔法学院に居た頃に見ている。

「解ります。　学院に居た時に見ました」

「そうか、魔法遣いだったな」

「自然魔法です」

「ふむ。　だが、その流星が見えるのは、東の大陸のみとは知っておったか？」

「えぇ、一応は・・」

「ん。　さて、次の二行“金色の太陽　高き空に光る”だがな。流星の見える夜で、金色の太陽とは無茶苦茶の様だが。　これも古い航海用語だと知ってなければ、不味い。“金色の太陽”とは、第二の月を指す」

「“第二の月”・・。　あの、各月の最後の１０日だけ東の空に現れる、一般の月より小さな月ですよね？」

クラウザーは、紅茶の入ったカップを取り上げ、

「ん～、実にイイ匂いだ」

と、Ｋに視線を投げてから。

「そうだ。　金色の太陽とは、航海士が目安にし易く。　暗い夜でも、太陽の如く夜空に輝く第二の月を讃えた言葉だ。　この文句も、かなり古い昔から使われていたらしい」

クラウザーとＫの下らない遣り取りの時に、何とも口を挟めず。合間を保つ為に、貰ったパンを持ったオリヴェッティだったが。クラウザーの話に興味を惹かれ、持ったそのままの姿で。

「あのっ、その続きは？」

と、急ぐ様に云うと。

クラウザーは、ニコリとまた笑い。

「パン」

「え？」

「握り潰しているよ」

「あっ」

Kに貰ったパンを、グッと握り潰していた。

クラウザーは、笑みを絶やさず。

「やはり血は争えんな。　腹の虫が時折鳴っているのに、興味が先行とは。　貴女も、まさしく学者の血だな」

「・・・」

恥ずかしくなって、顔を赤く染めながらパンを齧ったオリヴェッティ。

Kは、クラウザーの持って来た菓子パンをカリカリに焼き上げた物にまで食べ進め。

「おいおい、ジサマが若い女子（おなご）をからかってど～するよ」

「いいじゃないか。　女子の可愛い所は、老人で見てもイイモノだ」

「かぁ、好き者が」

「御主に言われたく無いわい」

オリヴェッティは、脱線する二人を見て。

（似た者同士だわ、この二人。　私、一緒に居て大丈夫かしら・・・）

菓子パンを齧るKは、

「後の意味は、・・“明ける陽は”とは、文字通りの太陽。“子の後に昇りて望み”とは、流星と第二の月が同時に現れた朝に、陽の昇った方角を見る。　最後の“その佇む丘は”とは、太陽の影が通る線上の中に在る丘と云う意味。　“我が鏡を埋し場所”は、太陽と第二の月と流星を映す場所。　そんな所は、世界でも一箇所。　カクトノーズの北。　諸島が集まり、太陽の紋章の如く形作られた“サニー・オクボー諸島”だけだ」

一気に言われ、オリヴェッティは意味が解り切れず困惑。　クラウザーに至っては、

「お前。　さっき、“若輩は～”なんたらと云っただろうが」

「フン。　老いたジサマは、喋りも耄碌でトロい」

「このっ、若造がぁ」

其処に、オリヴェッティが。

「あのっ！！！！！」

と、声を。

Kは、何故か神妙になり。

「お爺様、最後の説明が必要みたい」

と、クラウザーに手を差し出す。

口元をワナワナさせるクラウザーは、

「お前ぇぇ、尻拭いだけワシか？」

「好きだろ？　尻拭い」

「喧しいわいっ！！！」

クラウザーはのその様子は、フテ腐れるジサマそのもの。　本気で怒るものでは無い。

オリヴェッティは、そんなクラウザーへ。

「あの、“太陽の影が通る線上”とは、一体何ですか？」

顔をオリヴェッティに向け、平静に戻すクラウザーは。

「ん。　この世界で航海をするのに、重要な気象事実を把握する必要が在る。　その中でも、“太陽の影”と呼ばれるものは、非常に重要だ。　実はな、太陽が月に隠れる時、何故か決まって同じ線上

を通る。　月と太陽が、何百年に一度、重なるのだよ」

「それは、解ります。　ですが、“影の線”とは初耳ですわ」

「そうか。　確かに、一般的には必要無い知識じゃな。　だが、この符合も非常に不思議なんじゃがな。　月に隠された太陽が通る線は、決まってモンスターが暴れる。　海に素潜る漁師の話では、その部分の海は非常に深く。　人が潜れない上、一度沈んだ全てが浮かび上がれない“死海の淵”とも呼ばれる」

オリヴェッティは、今まで聞いた事も無い話に、また食べるのを忘れ。

「そんな意味が・・。　あぁ、何もかもが初めて聞く事ばかりです」

「その線上の何処かには、何でも嘗ての大昔。　夥しい数のモンスターを、なんと魔界から呼び寄せる巨大な搭が生えたなどと云う伝説も在る」

「カオス・ゲイト（ファンタム・ゲイト）が・・、そんな事が？」

オリヴェッティにふと見られたKは、クラウザーの話の補足の様に。

「今も移動しながら、南西の海域を動く魔の島・アグラッド・フォーバナー。　その太陽が月に隠される時になると、何故かあの島は、“影の線上”に移動するって話だ。　魔の神竜が眠るモンスターの巣窟、生けるモンスターの子宮とも謳われた島が、その線上に移動する以上。　何か在るんだろうな」

クラウザーも少し顔を引き締め。

「航海士として、その影の線を通る時は、非常に注意せんといかん。太陽が月に隠れていない普段でも、その線上は闇の力の支配を受ける。　大型のモンスターで、船を沈めるクラーケンやテンタクルスを始め、幽霊船や、ホラーニアン・アイランドに気を付けねばな」

オリヴェッティは、読んだ本からの知識を引いて。

「それは、あの・・移動する島の事ですか？」

「あぁ、そうだ。　魔の島以外にも、モンスターの力で漂流する島が在る。　亡霊や死霊の巣窟で、襲われたら大変だ。　島の接近に早く気付けたらいいが。　只の島と見間違えると、忍び寄る様に行く手を塞ぎ。　船を破損させ、動きを止める。　島に船が密着して止まったら、一巻の終わりじゃ。　モンスターに襲われ、生きる全てが殺される。　何度か、死滅した船を見掛けた事が在るわい」

驚くばかりのオリヴェッティは、更に最後の行に踏み込み。

「詩の最後の行ですが・・。　“我が鏡を埋し場所”とは、どうして島なのでしょうか？」

「オリヴェッティ、君は、カクトノーズの北方。　海岸から１２０里に在る太陽の島々へ行かれた事は、無かったのか？」

「すみません。　学院時代は、勉強と生活費を稼ぐ下働きの毎日で・・」

「そうか。　先ほど、あの口の悪いカラスが言った“サニー・オクボー諸島”とはな」

Kは、その自分の形容のされ方に苦笑い。

（根に持ってるなぁ～）

だが、クラウザーは続け。

「別名を、太陽紋の島とも云い。　中心に在る“目の島”から、四方八方に大小の島々が点在している。　だがな。　目の島の中心は、すり鉢の様に成っていて。　その場所は、丸い鏡の様に雨水を貯めた湖がと成っている。　その湖は、夜になると光る海月（クラゲ）の影響からか、白く濁った様に光るんじゃ。　だが、その水面は全てを映し。　流星も、太陽も、第二の月も映す上に、影の線の基点に為ると云われてる。　そして、その湖を囲むのは、森と草原に覆われた丘で。　更に更に、その周辺で一番高い場所なんじゃ」

「なるほど、それは詩の通りの場所ですね」

Kは、其処でまた補足を入れて。

「オリヴェッティ。　カクトノーズの図書館は、歴史書の宝物庫と渾名されるぐらいに書物が多い。　だが、なんでもサニー・オクボー諸島の詳細は、シークレットで閲覧出来ないとか」

「あ、確かに。　神々の操った魔法辞典などとも合わせて、人の目の触れない書物にあの島の歴史が在りましたわ」

「実は、あの島。　海旅族の拠点の一つだったとも言われる。　島には、倒潰した神殿跡も在るって云うしな。　行って見る価値は、大有りだ」

オリヴェッティは、そうゆう事だと更に不安が浮かぶ。

「でも、そうなると・・」

「島に上陸出来るか、不安か？」

「はい・・」

これには、今度はクラウザーが。

「立ち入り禁止区域では無いぞ。　ワシも、数年前に行ってる」

オリヴェッティは、此処で更なる疑問が脳裏を過ぎる。

「上陸は出来るのに、歴史は閲覧不可って・・・。　なんだか、へンですね」

Kは、包帯から覗ける口元をニヤリとさせ。

「色々、ジジョーが在るんだろうよ。　ま、大方の理由は、何処の国でも同じ話さ」

クラウザーとオリヴェッティの見るKは、事態を見透かして居る様な余裕が見えた。

そして、行き先は決まった。　それは、世界でも指折りの古い歴史を持ち、魔法を扱う全ての者が通った学院の治める国。　魔法学院自治領カクトノーズ。

今まで誰も見つけられず、そして信じて来なかった秘法を探す旅が、
此処から始まるのである。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪不思議な少年は、驚きの人？≫

オリヴェッティは、緩やかに目を覚ました。

（あ、朝・・・）

隠し部屋の豪華なダブルベットに寝ていた彼女は、白いシーツの上で身を起こす。

（・・・寝てる）

ソファーに寝ているKは、動かない。

クラウザーの姿も無い。　おそらく、船長室に戻って居るのだろう。

起きたオリヴェッティは、黒いカーディガンだけ肩に掛け。　船長室に向かう廊下へと出て行く。

（昨日は、夢を見てるみたいだった・・・）

いままでどう足掻いても解らなかった事が、Kとクラウザーに由って次々と解り。　今まで行く道が見えなかった闇の様な道筋に、一筋の光明が射した様な思いがする。　心の震えが止まらず、ベットに横に成った後に涙が溢れた。

暗い廊下に入り、左に曲がって少し歩くと。　上りの階段が見えた。

（大丈夫かしら・・・）

船長のクラウザーしか知らない部屋に泊まっている以上、どう身動きしていいのかも解らない。　だがら、階段上の明るい船長室と思われる部屋へ、階段の手摺りが見える手前からゆっくりと上に上がり出す。

「・・・」

柵状の手摺りの隙間に顔が届き、オリヴェッティは部屋を覗いた。　やや狭いが、一人の部屋としてはまぁまぁと云う広さの部屋が見えた。

机を前に、背凭れの高い椅子に座っていたクラウザーは、ヒョッコリと顔を出したオリヴェッティを見つけ。

「おう、どうしたお嬢さん」

クラウザーの態度が普通なので、部屋に上がったオリヴェッティ。　クラウザーの前まで来て、

「あの、食事やトイレとかどうしたら?」

すると、椅子をオリヴェッティに向け大らかに構えるクラウザーは。

「自由でいい」

「え？　あっ、でも・・・」

「大丈夫だ。　部屋の入り口は、大波の揺れの影響で壊れたと云えば良い。　今回の航海が終わったら、どうせ船体自体を改修に回すからな。　部屋との出入りだけ派手にしなければ、それで構わん」

「・・そうです・・か」

曖昧な返事のオリヴェッティの気持ちを察したクラウザーは、柔らかく笑い。

「ま、あんまり気を詰める必要は無い。　ただ、航海日程が延びる。　一月ばかり延びるから、暇を持て余す覚悟だけはしておいてくれよ」

「え？　ギャンブル王国・シェバステグナー（巨大な盛り場の意味で、王国を示す通称の一つ）を出た以上。　真っ直ぐカクトノーズへ行くのでは無いのですか？」

クラウザーは、雪が舞う窓の外を見て。

「それがな、ツキの無い事に、予定より早く寒波と嵐が降りて来た。　北の大陸の最西端は、季節によって海が凄まじい変化を見せる。　このまま西回りでカクトノーズの首都に向かえば、この大型客船でも無事では済まん」

「海が・・そんなにですか?」

「おうよ。　昨日、君が寝た後。　あの包帯カラス（ケイ）と話し合ってな。　“シュウェーブ・バーンテック”が起こる可能性が、非常に強いと判断したまでよ。　乗客を殺す訳にも行かぬしの」

「シュウェーブ・バーンテック・・。　あの、３大陸の彼方此方で、挟まれた海域でのみ起こると云う、大渦潮の事ですか?」

「あ～、それは違う。　強風と海流のぶつかり合いで出来る巨大な渦潮の事は、一般に“ヴォルテクサー”と呼ばれている。　しかし、この先の海域は、３つの海流と吹き荒れる強風がぶつかる影響からだろうがな。　巨大な渦潮（ヴォルテクサー）が起こっては、大波に押し込まれて打ち消される。　その繰り返しから、揺り動く波が激しくぶつかって、爆発する様に突き上げる現象が起こる。　それが、“シュウェーブ・バーンテック”だ。　大渦潮に入っただけでも、凄まじい大波と渦で揉み砕かれてしまうし。　なんとか渦を避けても、鋭く大きな槍と変わらない波の突き上げが、激しく海面を襲う。　そんな場所に船が入ったら・・、解るであろう?」

「はい・・。　どちらにしても、船は大破しますね」

「そうだ。　こんな寒い海で、その様な場所に投げ込まれたら、人など瞬時に死んでしまう。　だがら、来た大陸の沿岸を沿うルートを逆戻りして、マーケット・ハーナス方面から南下する計画に変更した」

「なるほど。　それでは、日程が更に一月はかさみますね」

「あぁ。　先ほど、ワシ等の船より前に旅立った船が、こちらに引き戻して来た。　伝書鳩で交信をして見たら、どうやら、相当に波が荒れていたとな」

「そうですか、安全は何よりも大事ですものね」

「ま、秘宝は寝て待て。　だな」

オリヴェッティは、了承をして。　直ぐに。

「あの、只の間借りでは悪いので。　代わりに、何か手伝えませんか？　下のお手伝いとか、私で良ければ致しますけれど」

「おう。　なら、各部屋の清掃でもしてくれるか？　老婆と若い娘の二人でやってるから、結構大変なんだ」

「こんな大きな船を、たった二人でですか？」

「あぁ。　普段は、客が居る部屋だけだからな。　多くても、半分と埋まらない。　だが、引き返せば、客の数は４割ほど増すだろう。　新たに応援を雇うにしても、クルスラーゲの交易城塞都市、“クルーセルダシア”にまで戻る必要が在る」

「解りました。　直ぐに、お手伝いさせて下さい」

こうして、オリヴェッティは働く事に。　のんびりするＫとは対照的で、室内清掃の女性二人と共に、和気藹々と暇を潰したのである。

二人は、祖母と孫の間柄。　クラウザーの知り合いで、働かせて貰っているとの事だった。

泣く子も黙る海の兵のクラウザーの紹介と在り、オリヴェッティに変な色目を使う船員も少なく。　夜になれば、クラウザーとKの苦労話や、経験談を聞ける。　オリヴェッティにとって、何とも穏やかで心地の良い数日だっただろうか。

穏やかに成ったオリヴェッティの顔は、微々たる変化を見せ始めた。　美しさと云うべきか、気品が見え始めたのである。

クラウザーは、言わぬが不思議だった。　彼女に手を出す事も無く、飄々と生きる影の男が・・。　確かに、変わっていたのである。

★

それから、１０日後。

北の大陸の南岸を、一路東へと逆戻りし。　ギャンブル王国の首都を経由して、宗教王国クルスラーゲの交易都市である、クルーセルダシアにまで戻って来た。

港に船が碇を下ろすと、大勢の客が降りた。　補給と船内清掃。　そして、これから先の航海の日程を、停泊する各船の船長達が話し合うなどの用事が多く。　クラウザーの船も、３日間の逗留が決まっていた。

さて。　過去に例を見ない最大規模の大船団の船長として、大商人にも引けを取らない莫大な財産を築いたクラウザーだが。　その財産の半分以上は、個人的に随分と散らしている。

例えば、こうゆう不測の事態が起こると、一番大変なのは地下に泊まる者達。　ゴロツキなどはいいが。　世界を回っては、日雇いの鉱夫などで生きる者や、貧しい移民は生活費に困る。

クラウザーは、こうゆう時。　貧しい者には身銭を与え。　食料補給と入れ替えで捨てる物を、無料で料理として振舞うなどをする。

クラウザー自身が、非常に苦労していた一時を忘れていないからだ。　ケチな船長とは違うから、尚の事好かれるのであろう。

街に散って行く人々、船に残る者達それぞれに。

船員は、交代で船を見守る警備に付く。　港を守る役人3人も応援に来て、逗留の準備が整う。

良く晴れた冬晴れの下。　冷たい風に吹かれ、Kは甲板に居た。

高い船体の上からは、港を一望出来る。

そんな彼を探し、甲板に出て。　Kを見つけたオリヴェッティは、甲板を歩きながら。

「ケイさん、街へ出ますか？」

冬風に前髪を揺らすKは、オリヴェッティに向く事も無いままに。

「あぁ。　どうだ、斡旋所にでも行くか？　クラウザーの加盟は後に、先にチームを結成するのは構わないぞ。　誰か、一緒に加えられる者も居るかも知れんし」

「はい。　私も、それを考えていました」

遣って来たオリヴェッティに向くKは。

「そうか。　クラウザーは、チームの名前なんかに拘りは無いとさ。注文を付けるとしたら、俺のリーダーだけは嫌だとよ」

と、笑う。

オリヴェッティは、困った笑顔で。

「そうなると、私がリーダーですか」

「当然だろうに。　財宝を求めるのは、君とクラウザーだ。　俺は、探す手伝い人。　浮浪者と変わらないゼ」

オリヴェッティは、こんなに知識の深い浮浪者が居るものかと呆れてしまう。　だが、Kに感謝してる事には変わりは無い。　お陰で、クラウザーの様な素晴らしい人物にも逢えた。

「では、早速船を下りましょう」

「あぁ」

船体脇に掛けられた移動階段を降り、港に降りた二人。　積荷を運ぶ馬車や、滑車付きの台に物を乗せて運ぶ人が多く見られ。　その間を縫う様に、冒険者や旅客が移動している。

Kは、オリヴェッティに。

「斡旋所の在る場所は、解るか？」

「ええ。　実は、シェバステグナーで船に乗るのでは無く、此処で乗ろうとしたんです。　ですが、新米の方や、仲間を募るチームが居なくて・・。　もう少し先にまで行って見ようと、乗船を止めたんです」

「そうか。　なら、案内は不要だな。　ま、カクトノーズまで無理して仲間を増やす必要は無ぇ～し。　クラウザーは、ああ見えて片手剣を結構扱える。　二人だけの結成でも、十分だ」

「はい」

大きな船着場を幾つも持った港を行くと、なだらかに蛇行して上るレンガ舗装の道に為る。　クルスラーゲの南部沿岸は、神々の戦いの時に。　大地震とハリケーンに因る津波で、岸壁から内陸に伸びる山が削り取られた台地と言い伝えられる通り。　非常に国土が凹凸している。　平面の様な土地でも、高台から見下ろせば斜面であり。　土が非常に固く、水捌けの悪い場所である。　街や村なども、そうした土地に合わせて作られている為、非常に坂や段々が多い。

オリヴェッティとKの少し前で。

「しかし、馬車が無いのは不便ね、アナタ」

「あぁ。　まぁ～良い運動だと思って行こう」

貴族風のドレスと礼服に身を包む夫婦が、斜面の坂を上りながら言い合っている。

オリヴェッティは、Kに。

「此処の斜面では、港で動く馬車が消えるのが不思議ですね」

「あ？　あぁ、馬車か。　向こうの岸壁に空いた洞窟の奥から、移動魔法床で上に上げてる」

「あら、知らなかった」

「クルスラーゲ産の馬は、早く走るのには適すがな。　馬力の弱さと、足のモロさもピカ一。　この急な坂を行かなくて済む様に、そうしてるらしいな」

「はぁ～、勉強になります」

乾燥する冬なのに、大地まで乾燥して硬い分、冷えだけは足元から上がってくる。　旅人や旅客は、暖かい場所を求めて足早になり。　海からの突風が吹く中で、女性は皆スカートを抑え。　どうも歩きずらそうな様子だった。

Kは、髪やスカートまで抑えるオリヴェッティを見て、

「女は、そうゆう所、面倒だな」

「ですわ」

切り立った岩盤の壁と海に面した岸壁に挟まれた坂道を上りきると、レンガ造りの建物が視界に飛び込んで来る。

すると。

「久しぶりの地べただ」

「そうだね」

とか。

「ねぇ～、飲みにいこ～」

「いいな。　クルスラーゲって、ワインが有名だったよな」

とか。

「少し見物して行くか？」

「いいわね」

「此処って、大きい都市だからな。　色々、見物出来る名勝とかありそうだ」

など。　上りきった者達が、それぞれに話し合いながら街中に散っていく。

Kとオリヴェッティは、開けた広場に出て。　活気が喧騒と成って聞こえる中。

「ケイさん。　チームの名前は・・・本当に自由でいいのですか？」

「あぁ、君がリーダーだ。　好きに付けてくれ」

「はい、では行きましょう」

行き交う馬車や人を避け、広場を突っ切ると、緩いアーチを描いた石橋が見える。　橋の下には、また広場や街並みが見え。　街が複雑な段を重ね、道が入り組んでいるいるのだと理解できるのだった。

馬車に追い抜かれながら、橋を渡ると。　ドーム型の丸い店の前に、冬でも咲く花の小さな花壇を設け。　庇代わりの楠が、日陰を作る店が見えた。　その次には、橋から末広がりで奥へ奥へと左右に街並みが広がり、幾つも分岐した道が、複雑な街の中へと伸びてゆく。

右手の店沿いに、奥へ行くと。

【出会いの酒場・ダブルブッキング】

と、看板を掲げた3階建てのレンガ造りの店が見え。　その隣は、宿屋街に入る入り口だった。

オリヴェッティは、迷わずその酒場へ向かう。　Kもまた、何の異論も見せない様子。

冷たい風の吹く街から、酒場に入れば。　昼前にも関わらず、結構な人数の客が居る。　カウンター前では、冒険者や旅人が多く。吟遊詩人や踊り子の姿も見られた。　港に戻った船からの客が、暖炉の在る酒場へと雪崩れ込んだ様だった。

オリヴェッティは、前に来た時よりも活気溢れる店内に、少し目を見張った。

一方で、Kは。

「随分と騒がしいな。　ま、酒場・・・」

と、言葉と共に一方向に顔を巡らせた所で、何故か止まる。

オリヴェッティは、Kに。

「ケイさん、何か食べますか？　朝からまだ紅茶だけでしたよね？」

と、云うと・・。

Kは、オリヴェッティに。

（なぁ、風のエネルギー感じないか？　風のそのもののエネルギーだ）

と、何時の間にか顔を近づけては、そう囁いて来る。

「え？」

顔が間近になったので、思わず驚いたオリヴェッティ。　焦って顔を離し、店内を見回しながら・・。

「あ、いえ・・。　外の強い風が・・・」

と、言い掛けたのだが・・。　Kが見た方向と同じ所で、ピタリと顔と言葉が止まる。

「あ・・、あの方。　ローブの上からマントを羽織ったあの方から、風のエネルギーのそのものの様な・・。　純粋なエネルギーを感じますわ。　なんだか、とても微かな感じなんですのに・・」

Kは、オリヴェッティに。

「待ってろ」

と、云うと、その人物に近付いていった。

入れ替わり立ち代り、果汁や紅茶や酒を貰う客がごった返すカウンター中央。　その人の溢れ動く所から右に少し離れた場所に、不審なエネルギーを発する何者かは居た。　カウンターに向き、Kには背中しか見えない。　白いマントに、青いローブを羽織り。　ローブのフードを深く被る何者かは、グラスに入った黄色い果汁を飲んでいた。

Kは、その人物の右脇に立ってカウンターに就くと。

「オメェ、何で此処に居る？」

と、いきなりの伝法な言い方をしたではないか。

すると、フードを被った人物もKに向き。

「ケイさんに会いに来た～」

その声は、若々しい少年の声で。　言い方は、親しげである。

Kは、頭一つ低い相手に向き、やや目を細めては。

「お・ま・え・なぁっ。　４・５歳のガキが、ノコノコ一人で出てくるなよっ」

と、声を抑えながらも叱る様な口調で言う。　どうやらKは、相手を解っている様子。

すると、相手の人物はKにしがみ付き。

「ねねっ、コノ果汁代、奢ってぇ。　お金持ってないし～、丸一日飛びっ放しだったの」

Kは、呆れた目で相手を見つめ。

「お前、端っからそのつもりだったのか？」

「うん。　てか、ケイさんの乗ってる船が港に着いてて、ケイさん甲板に居たからさ～。　酒場で待ち伏せしてみた～」

「なぁっ・・。　通りで、なぁ～んか偉い力を抑えたエネルギーが匂ってると思ってたら・・。　お前かよっ」

「ねぇ～ねぇ～、ケイさん。　一緒に、ぼ～けんしよ～よ」

そう強請られたKは、急に頭痛を催し。

「あぁ・・、最悪のお荷物だ。　つ～か、お前の母親は、この事知ってるのか？」

「うん。　ケイさんの所に遊びに行くって、デンゴンをモンスターに頼んで置いた」

ギョっとしたKは、なんともいい加減な伝言だと恐ろしくなった

「バッ・バッカたれ。　頼んだって、ガルーダか誰かにか？」

「おい～」

軽いノリで云う少年の様な人物。

Kは、完全に力が抜けて行く様な疲れを覚える。

（おいおいおい。　コイツの居ない事知った母親が、まさか人里襲うとか止めてくれよ・・・）

Kは、起こり得る事態を急速にアレコレ想像しては、相当厄介な事まで思い浮かび、背筋が寒くなる。

Kと何者かが、なにやら親しげに話し始めた様子を見たオリヴェッティは。

（知り合いなのかしら。　もしかして、駆け出しの誰か？）

と、思い。　二人に近付いて行く。

さて。　若い声の相手と本気で話し始めたKは、流石にやや怒り気味に。

「お前、マジ帰れよ。　面倒事に成ったら、どうする気だ？」

「だいじょ～ぶ。　ケイさんの事だけは、ママも信用してる」

「タレバカっ、そうゆう問題じゃねぇっ」

其処に、オリヴェッティが。

「ケイさん、この方とはお知り合いですか？」

と、間近に遣って来る。

その声を聞き、オリヴェッティへと振り返る何者かは、指でフードを上げた。　そして、オリヴェッティを見ると、

「うわぁ～、びっじ～ん。　ケイさん、酷いなぁ～。　ポリアさんが居ながら、新たにこんなキレ～な人をぉぉぉ～」

Kは、ポリアも彼女じゃないので。

「おいおい、勝手な誤解すんな。　って、何でお前がポリアを知ってんだ？」

「話せば、ヒジョ～に長いッス」

何者かに、“美人”と評されたオリヴェッティだが。　その何者かを見て、

「まぁ・・」

と、逆に目を奪われた。

フードを上げた相手は、１５歳をどうかと思われる若者だった。

だが、白い女性の様な肌をし、蒼い髪は長く、背中の服の中にまで伸びている。　蒼翠（そうすい・青緑）に光る透明な瞳は、吸い込

まれてしまいそうに美しい。　柔らかい声も耳に心地よい、そんな美少年がその何者かであった。

オリヴェッティは、チームを組むのは何時でも出来ると。

「ケイさん、下で何かを一緒に食べませんか？　お金なら、有ります。　ケイさんが航海中の船で、3日程カジノバーのディーラーを勤めた分と。　私が清掃で得たお金を、朝にクラウザーさんか貰ってます。　お知り合いなら、積もる話も御在りでしょ？」

Kは、若者を此処で甘やかせば付け上がると思い。

「な・・」

“無い”言い掛けたのだが。

「はいはぁ～いっ。　積もり積もって山になってまぁ～すっ」

と、若者が先んじて反応し、言ってしまうし。

また。　オリヴェッティも微笑んでは、美しい若者を見つめ。

「私は、オリヴェッティ。　これから、ケイさんとチームを組む予定なの」

と、言ってしまうのだ。

二人の様子を見たKは、

（ヤバっ）

と、思ったのだが。　それは、もう後の祭り。

若者は、Kより先に動き。

「いいなぁ～。　ボクもチームに入りたぁ～い。　ボク、リュリュ。
オリヴェッティのお姉さん、ボクもチームに入れて、ね？」

と、オリヴェッティに甘え付く。

Kは、ワナワナと震え出し。

（オメェ～よぉぉぉ、帰れってっ！！！！！）

と、怒りを募らせるのだが・・。

オリヴェッティは、若者リュリュを見つめ。

「危険な旅に成るかもしれないわ。　怪我しちゃうかも知れないのよ？」

と、親身に、優しく云うも。

「だいじょ～ぶ。　ボク、自分を守るぐらいカンタ～ン。　オリヴェッティのお姉さんの事も、ボクが守ってあげるよぉ～。　こ～みえて、ボクって強いよぉ～。　武器要らないしぃ～」

と、格闘をする真似事を見せるリュリュ。

もう全てがイヤで、顔に手をやるKは。

（あぁ・・。　お前のは、人間離れした身体能力で暴れるだけだろが・・。　魔法も遣えるだろが、威力もハンパないだろうに・・。　此処で遣ったら、街がすっ飛ぶよ）

と、ゲンナリ。

オリヴェッティは、リュリュに微笑み。

「へぇ～、リュリュ君て強いんだ。　とにかく、何か食べよ」

「わぁっ、オリヴェッティのお姉さんってやっさし～。　ドッカのミイラとは、イレモノが全然ちがうぅ～」

そのリュリュと云う若者の様子に、Kは、これからの旅の前途多難を予期した。　母親が来たら・・・大騒動に成るだろう。　リュリュは、そうゆう者なのだから・・。

★

「・・・。　それ食ったら、帰れよ」

Kは、４人分ぐらいの食事を食べるリュリュに言う。　もう、６つの大皿が空いていた。

「ヤダ・・もぐもぐ・・。　ぼ～けんするまで、・・もぐもぐ・・・

帰らない」

リュリュと云う若者は、ニコニコしながらオリヴェッティの脇で、凄まじい食欲を見せていた。

3人が居るのは、酒場の下に在る一階の食堂。

Kとオリヴェッティは、2階の酒場から入ったのだ。　酒場の下が飲食店で。　その更に下。　地下一階が、斡旋所である。　酒場の上にも、夜だけ開く酒場なども在った。

不貞腐れる様なKは、苦虫を噛み潰してジャリジャリ云わんばかりに渋い顔。

オリヴェッティは、凄い食欲のリュリュを見て呆れていた。

紅茶にケーキをチビチビとやるKは、頬杖をして窓脇からリュリュを見ながら。

「お前、な。　・・思い出作りなら、大人になってからでイイだろうに。　何で、今からすんだよ」

リュリュは、激しく動かしていたスプーンを止め。

「大人に成ったら、ケイさん死んでるじゃん。　知り合い居ないんじゃ、詰まんない」

「・・、それもそうね」

Kにしては、気疲れからか精彩の無い返事である。

オリヴェッティは、二人の会話に驚き。

「ケイさん・・、何処か悪いのですか？」

「んあ？」

「リュリュ君が大人に成る頃には、死んでるって・・」

意味に気付いたKは、ホロ苦い笑みで。

「チョイと意味が違うよ」

「え？」

「あ～、細かい話は、船に戻ってからしよう。　コイツを連れてるんじゃ、街の宿屋じゃマズイし」

「えぇ～？　風が入らない船に泊まるのぉ～？」

と、リュリュが批難の視線をKに向ける。

Kは、ムカっとした目で。

「お前の母ちゃん来たら、首根っこ掴んで直ぐ出せる場所がイイんだよっ」

「ふぇ～ん、キビシ～」

「当たり前だ、バカ」

Kは、リュリュと云う若者に、偉く厳しい態度を見せる。　オリヴェッティには、少し不可解であった。

そして、オリヴェッティは。

「所で、ケイさん。　リュリュ君をチームに加えても、問題は無いのですか？　見た所、杖も武器も持っていない様ですが・・」

すると、Kは窓の外を見て。

「君の好きにしろ」

「え？」

「俺がリーダーなら、許可しない。　だが、リーダーは君だ。　君の判断で、決めてくれ。　どの道、コイツの面倒は俺が見る。　ま、戦う事に関して言うなら、コイツは一流過ぎる程だ」

オリヴェッティは、まだ少年の様なリュリュを見ては。

「はぁ・・、そっ・そうですか」

と、逆に判断が出来なく成り、生返事しか返せない。

口元に食べかすを着けるリュリュは、オリヴェッティに向き直り。

「オリヴェッティのお姉さん、ね～入れて。　大丈夫、迷惑掛けないからぁ～。　ホラ、お金無いけど、コレなら在るし」

リュリュは、そう言っては懐を漁り。　握った手をオリヴェッティに差し出す。

「え？　ん・・何？」

突き出された手の中の物が気に成ったオリヴェッティは、受け取る仕草で両手を広げると・・。　石ころの様な物が、４つ程乗った。

「・・・、何ですの？」

光る色の混ざる石で、所々に結晶か見えた。

Kは、それを脇目に見て。

「お前、お袋さんの懐からくすねて来たのか？」

「違うっ、ボクが拾ったのっ」

その一言を聞いたKは、今度はちゃんと石を見て。

「ほ～。　だが、いい原石だ。　ルビーに・・サファイアとエメラルド・・・。　残りは、ピングダイヤか。　カット次第で、万単位の金に成るな。　無論、１個だけで」

オリヴェッティは、手に持っているのが宝石の原石だと解り。　何処にどうしていいか解らず、驚きの顔をKに向けて。

「いっ・・一個で、万ですか？」

Kは、紅茶のカップを手にしながら。

「斜めから見て、光の入りがいい。　中に亀裂が入ってない、純度の高い一品だよ。　カッティングが良ければ、その辺の店で売ってる同型の物より高値で売れるかも」

「まぁ・・・」

オリヴェッティは、本気で驚き。　リュリュを見ては、

「リュリュ君。　こんな高価な物を、一体何処で？」

また食べ始めたリュリュは、

「もぐもぐ・・山で。　崩れた崖とか見れば、結構落ちてる」

何とも信じ難い話で、目を見張るオリヴェッティだが。

Kは、のんべんだらりと云った口調で。

「んだろ～な。　お前の居る山は、人の手が入れない鉱物資源の宝庫だしなぁ～。　ま、そんな欠片、お前の御袋さんの貯蓄から見たら、砂利みたいモンだろうしな～」

リュリュも食べながら。

「そうそう・・んぐ。　ママ、すんごいデカい原石持ってるよ。岩みたいなの」

Kは、軽い調子で笑う。

オリヴェッティは、そんなKも、こんな原石を持って来たリュリュの事も解らなく。

（何？　え？　何？）

と、疑問ばかりが浮かんで困り果てた。

オリヴェッティが困っている中、リュリュは。

「ケイさん、モグモグ・・。　人間の食べるリョーリって、“マジ美味し”だね」

「お前、そんな言葉を何処で覚えるんだ？」

「ママ繋がりで、ポリアさん達から」

「ハァ～？　つか、ポリア達ってそんな言葉使わんだろう？」

「でも、酒場とかで見る周りのボーケンシャとか使ってるよぉ～」

「はぁぁ～・・、お前さ。　もう少し、マシに覚えろよ」

「だってぇ～、響きがイイ～ん」

「不良クソガキだな」

「おませさんと云って」

「バカ、。　大人びた事を“おませ”って云うんだ。　お前のは、悪い真似」

「きびし～」

「フン」

「でも、塩以外で何かを食べるって凄いね。　なんか、しんせ～ん」

そんな言い草を聞いたオリヴェッティは、リュリュが普段に何を食べているのか気に成ってしまい。

「リュリュ君、何時もは何を食べてるの？　お母さんの手料理？」

すると、リュリュは。

「ん～、ド～ブツの生肉とか～」

その自然すぎる言い草に、Kは思わず紅茶を吹き。

「ブッ！！　っく、バカっ。　本当の事を、・・ズケズケ言うな。クソ、窓に掛かった」

と、手拭で窓を拭く。

リュリュは、ぷうっと膨れ。

「だぁってぇ、マジじゃん」

オリヴェッティは、“生肉”と聞いては捨て置けず。

「んまぁ、自分の子供に生肉だなんて・・」

Kは、話がややこしく成ると思って。

「おいおい、オリヴェッティ。　後で全て話すから、聞き流せ」

「でもっ、生肉なんて食べたらっ・・」

Kは、窓を拭きながら。

「解ってる、言わんでも。　だが、そうゆう次元の問題じゃないんだ」

と、窓を拭き終わって、また紅茶を口に含んだ。

その瞬間。　リュリュは不思議そうに二人を見ながら。

「でも、モンスターとかの一部も美味しいって」

と、言ってしまい。

Kは、吹かずに強引に飲み込んだ紅茶を気管に入れ。

「うぐっ・ゴホゴホゴホ・・・」

と、噎せては激しく咳き込み。

オリヴェッティは、凄まじい爆弾発言を聞いては、リュリュを見て硬直する。

そんな二人の事など、露知らず。　リュリュは、Kに皿を向け。

「ねね、このアジツケって云うんでしょ？　コレ、何で出来てるの？」

激しく咳き込むKは、それ処では無い。

「う〝っ・・ゲホゲホっ・・おま・・おまぇ・・ゴホゴホ・・。しっ・・仕舞いにゃ・・ごほっ・っく。　シバクぞ・・」

「え？　なぁんでぇ？」

辛さからKは、本気でギラっと睨み。

「つ・次、ナめた事云ってみろ。　ふっ・・・船に縛り付けてやる」

怒られたリュリュは、怒られる意味が解らない。　横で、カチンコチンに固まっているオリヴェッティを見ては。

「何？　何がいけないの？」

と、聞くのだった。

リュリュを見たくないKは、もう頭痛が慢性化しそうである。　脇目には、今のリュリュの発言を聞いてしまったのか、近くのウェイターが立ち止まって居るのが見える。

（はぁ・・、お荷物を抱えるのは、オレの宿命か？）

Kは、手をやってはリュリュに、“黙って食え”と、ジェスチャーした。

結局、リュリュの持って来た原石は、全てオリヴェッティの懐に仕舞わされた。

オリヴェッティは、意味が解らないままにチームの編成をし。リーダーを自分としたチーム、“アーリストゥン・シェバイス”（曇らない心眼）と云う名前を付けた。

無論、リュリュもメンバーに加えたのである。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪Kとリュリュはマブダチ？≫

チームを結成し、夕方前に船へと戻ったKやオリヴェッティ。

「はぁ・・。　コイツは、本当に疲れるオニモツだ」

夕日に成り掛けた陽の姿が、甲板に上がった三人の遠く彼方の水平線を色づかせ始めていた。　Kは、着いて来ているリュリュを見て、何十回目かのため息を吐いた。

リュリュと云う美少年は、プゥっと顔を膨らませ。

「なぁ～んでよ～。　保護者、シッカリ説明して」

一緒に仲間に成れた事を非常に喜び。　初めて街中を訪れた田舎者の様なリュリュは、見るもの珍しいものアレコレに質問をして来た。

オリヴェッティは、年下で何も知らないリュリュに、色々と教える事を苦とも思わないが。　Kは、保護者代わりでアレコレ突かれるから機嫌が悪い。

「ルッセぇ」

Kは、何処か本当に嫌がっていた。

（どうしたのかしら・・）

オリヴェッティには、どうも其処が腑に落ちない。

船の上に上がると、甲板で炊き出しをする仮小屋が出来ていて。
地下の船内に泊まっている客が、列を作って並んでいた。

Kは、珍しい光景だと見るオリヴェッティに。

「ありゃ、クラウザーが遣らせてるのさ。　船内食料の残りで、痛んではいるがまだ食べられる物を集めて、タダで振舞ってる。　身銭の乏しい地下の客が、腹を空かせたりして悪さしないようにって考えての事。　クラウザーって男は、苦労人であり、大きい男さ」

すると、リュリュはKを見て。

「ケイさんも、ボクを助けてくれたよね～。　何百匹ってモンスターに囲まれたボクを、とぉ～、てやぁ～って、カァ～ッコ良く」

リュリュに褒められても呆れしか出ないと云った顔のK。

「アホウ。　お前が死んだら、御袋さんが暴れるだろう。　人間に相当な敵意を持ってたあの当時だ、トバッチリを食う村だの町が有っちゃ～困るだろがぁ？」

「えぇ～っ、ママってそんなに人嫌いなのぉぉお？」

Kは、ワナワナした手でリュリュを見ると。

「お前が馴れ馴れし過ぎるんだっ！！　ノコノコとこんな場所に来クサってからにっ！！！」

後頭部を撫で、照れるリュリュは。

「エへへ～」

「褒めて無ぇっ」

苛立ったKは、朝と夜だけは船内で立食の食事が出るので。　リュリュとオリヴェッティを置き、サッサと船内に戻ろうとしてしまう。

「あっ、ケイさぁ～ん、まってぇ～」

オリヴェッティは、邪険にされてもリュリュがめげない様子に、随分とKに対する信頼が厚いと思えた。

そして・・。

（所で。　な・何百匹ってモンスターを相手に・・・勝ったの？　まさか、ケイさんて凄い冒険者？　あぁっ、クラウザーさんが云ってた事って、本当に本当なのねっ？！！）

初めてクラウザーを見た時、クラウザーはKを“化け物”と云った。

その言葉は、本物なのだとオリヴェッティは思う。

どうして、一人なのか。　どうして、有名に成る事をしないのか。

どうして、知識が深いのか。　オリヴェッティは、底知れぬKの奥深さに、惹き込まれてる自分を見つけた。

さて。

船内のバーラウンジや、食事を頼めるカウンターに向かうKは。

「リュリュ、此処では猛食するなよ。　船は、一旦港を出ると、次の港までは補給が出来ない。　お前一人で、何十人分と食べられると困る」

Kの脇を軽快にステップして行くリュリュは、笑顔のままに。

「はいは～い。　食べないなら、食べないで風のエネルギー貰いまぁ～す」

「あ、お前にはその手が有ったな。　何で、人の食い物に手を出すんだ？」

「美味しいから～」

「カァ～、味占めやがってからに・・」

さて、後から遣って来るオリヴェッティの分も含め、またカウンターでパンを頼むK。

「わぁ～、人いっぱい」

リュリュは、冒険者達や旅人などが何十人、いや、百人以上は集まるホールを見回して。　その様々な格好の人々に、興味の目を巡ら

せていた。

Kは、注文してから。

「長いパンに挟んで貰うから、３つで我慢だぞ」

「うんうん」

オリヴェッティが合流し、リュリュを連れて壁際に。　其処でオリヴェッティは、冒険者達が壁に集まっているのも見つけ。

「何かしら」

と、リュリュを連れて行って見る事に。

集まった冒険者達が入れ替わり立ち代りで見るのは、クラウザーの出した仕事の応募だ。　明日と明後日、船内清掃に２０名。　船の動力である魔力水晶体にエネルギーの魔力を込める者、４０名。　船体清掃に、１０名。　雑務に、５名を雇うとしている。　賃金は一律で、一日５０シフォン。　二日遣る者は、倍貰える。

リュリュは、どれを見ても何が何だか解らず。

「センナイ・・え？」

と、張り紙を見て困るばかり。

そんなリュリュが可愛く思えるオリヴェッティは、一つ一つ丁寧に説明してやった。

Kは、パンを受け取り。　借りたバスケットに入れて貰った。

（アイツ等、一体何処・・・。　ん？）

振り返って二人を捜そうとしたKは、同じく冒険者の群がる壁を見つけ、その方に向かった。

オリヴェッティの脇に来たKは、数歩離れた場所から張り紙を見て。

「早速、応援応募が出やがったか。　下手に急ぎで大勢の人を雇うより、楽な手だ。　ま、早めに寒波が南下して来たのは、確かに予定外だった」

オリヴェッティは、その声でKに気付き。

「あ、見ました？　明日、リュリュ君と魔力を注ぐ仕事をしようと思います」

すると、Kはギョッと目を見開き。

「バカっ、コイツは別なのにしてくれ。　魔力水晶体がブッ壊れる」

オリヴェッティは、目を丸くして。

「はぁ？」

顔を歪めたKは、

「いいから、上に。　リュリュ（コイツ）の事を教える」

と。

リュリュは、身を捩り。

「いやぁ～ん」

と、おどける。

そんなリュリュの姿に、フツフツと湧き上がる苛立ちを覚えるKは、

「全く、ポリアの何見て覚えてくるんだかっ」

と、階段の有る方へ。

リュリュは、Kの後をスタコラと追い掛ける。

張り紙をを再度見たオリヴェッティは、またもや意味が解らずに困った。

（こ・・壊れる？　あの、魔力水晶体が・・・ですか？）

船を動かす動力は様々だが、最も高性能で自由自在に船を操れる動力は、魔力を衝撃波・爆出噴射のエネルギーに変える魔力水晶体である。　この魔力水晶体は、非常に高額で。　大型船を作る費用の半分が、その水晶体の費用だとか。　クラウザーが、教えてくれた事である。

さて。　この水晶体。　長旅の航海に付ける物は、１００人以上の魔術師の魔力が必要と云われ。　港では、その仕事が良く斡旋所に来ている。

オリヴェッティは、Kの云う意味が良く解らず。　首を傾げながら後を追った。

★

部屋に戻った一行をクラウザーが待っていた。　ワインの入ったガラスのデキャンターをテーブルに置き、ソファーに座って飲んでいた。

入ったKは、直ぐににアルコールの香りを嗅ぎ付け。

「クラウザー。　ワインを航海中に飲むとは、なぁ～んか有ったか？」

「有ったも有った。　ワシの雇い主が、ワシ達よりも前に戻った船を強引に行かせたらしい。　大きく南下したルートで行けとな」

リュリュと共に入ったKは、クラウザーの前まで来て。　パンの入ったバスケットをテーブルに置いてから。

「相当な自殺行為だな。　南下ルートは、魔の海域の一つ。　大荒れの海域に入った途端、船が大破するゼ」

ワインを呷ったクラウザーは、怒りを飲み込む様に。

「あぁ・・。　後に戻って来た船が、その破損した一部と死体を回

収してた。　海を知らん大バカがっ！！！！」

Kは、瓶入りの果汁を奥の戸棚へと取りに行きながら。

「アンタ、何で自分の船団を捨てた？」

この質問より一瞬先に、クラウザーはリュリュを見つけ。　Kの質問と語尾を被らせる形で、

「あ？　おぉ、お仲間も一緒か？」

と、自分を不思議そうに見つめるリュリュを見つめた。

後から来たオリヴェッティも部屋に入り、ドアが閉まった。

Kは、丁度良いと。　コップを棚から取り出しながら。

「クラウザー、それからオリヴェッティ。　今の内に云って置く。　そのリュリュには、正直気を付けてくれ。　万が一にも、正体がバレない様にして欲しい」

クラウザーは、いきなり何の話だと思った。　オリヴェッティを見てから、またKを見て。

「何だ？　また、どこぞの貴族とか王家の誰かか？」

Kは、果汁の瓶のコルクを指先で引き抜きながら。

「いやいや、そんなハンパなモンじゃ無い」

「あ？」

「そのリュリュは、風の神竜ブルーレイドーナの子供だ。　年月年齢で云えば、まだ４・５歳だろうな」

Ｋの話を聞いたオリヴェッティとクラウザーは、一瞬何を云われたのか理解が出来ない。

オリヴェッティが先に、Ｋやクラウザーを見回し。

「あ・・・あの、かっ・風の神竜・・て？」

クラウザーは、ワインを注ぐのも忘れ。

「確か風の神竜って云やぁ・・、フラストマドからホーチト・スタムストなんかに跨る魔の森の奥地。　神々と魔王の戦が在ったって云う山に住むとか云う、ドでかいドラゴンだろ？　一・二度、天を飛ぶ影だけ見た事が有るが・・・」

戻って来たＫは、コップと瓶をリュリュの前に出し。　リュリュは、長いソファーに座って食べ出す。

手の空いたＫは、クラウザーに向き。

「俺は、数年前にその山に行ってな。　モンスターに殺され掛けたコイツを見つけ、助けた経緯が有る。　コイツは母親に似ず、この通り人に興味を持ってるみたいだ。　変化の呪術で人に化け、こうして遊びに来やがった」

クラウザーは、どうゆう気持ちでリュリュを見ていいか解らない。

「おまっ、あの人間嫌いと云われた神竜の子供だろっ？　大丈夫なのかっ？！！」

リュリュと一緒の席に座るKは、食べるリュリュを見て。

「俺の所だから、安心してんだろな。　フツーなら、街を破壊してでも探し回るハズだ。　つか、居る場所は直ぐに解るハズ。　迎えに来ない所を見ると、遊ばせるみたいだな」

クラウザーは、子供を殺された恨みで、過去には国一つを滅ぼし掛けたと噂されるブルーレイドーナだ。　“遊ばせる”と云われても、爆弾を抱える様な事だと青褪める。

「おいおい、遊ばせるって・・。　公園や野原に子供や孫を連れて行くのとは、訳が違うぞ」

「仕方ない。　下手に追い返して、目の見えない所で危ない目に遭ったら、それこそ大変だ。　秘宝探しが終わったら、俺がまた連れ帰る」

と、Kはリュリュの頭をクシャっと撫で。

「全く、迷惑極まりないガキだ」

リュリュは、美味しそうにパンを齧りながら。

「えへへ～」

と、笑う。

オリヴェッティは、Kの脇に座り。

「ケイさん。　リュリュ君は、ドラゴンなのですか？」

Kは、コップに果汁を注ぎながら。

「あぁ。　風のエネルギーそのもので生まれた、最強の神竜種に属したドラゴンの一匹。　コイツの魔力で魔法をぶっ放したら、この船なんぞ一撃で木っ端微塵だ」

クラウザーは、ホロ酔いも一気にすっ飛ぶ衝撃を受け。

「なっ・・なぬぅ？」

「マジマジ。　能力は高いが、未熟さはまだ幼児みたいなモンだから、精神的な集中が全く成ってない。　常に全力で魔力使うからな～。　威力は、ハンパ無ぇよ」

「な・・なんとデンジャラスな・・」

クラウザーは、Kが居ては退屈する暇が無いと呆れてしまった。

オリヴェッティは、リュリュを見てやっと全てが腑に落ちた。

（あぁ・・、それでモンスターとか生肉を・・・）

と、先ほどの爆弾発言の意味を理解した。

Kは、クラウザーに。

「まぁ、コイツの面倒は俺に任せてくれ。　なるべく一緒に行動するし、オレかオリヴェッティから離れない様に云っておくから」

丸で、腫れ物の様な存在のリュリュを見るクラウザーは、老いた顔を疲れさせ。

「あぁ・・。　頼むから、母親を呼び寄せる様な真似は勘弁してくれよ」

Kは、流石のクラウザーでも、リュリュには度肝を抜かれたらしいと見て。

「アンタでも、流石にビビるんだな」

と、薄笑う。

「当たり前じゃろうがっ！！　大体、お前ぇっ。　あんな人の踏み込めない秘境の奥地に居る神竜などと面識が有るなど、普通じゃないぞっ。　ま・全く、エライ奴とワシも知り合いに成ったモンじゃわい」

それからと云うもの。　オリヴェッティとクラウザーは、Kにじゃれ付くリュリュを頻りに見ては、首を傾げたりしていた。

特に、Kに対してリュリュが全く遠慮を見せず。　また、Kも遠慮しない二人の様子は、お笑い役者芸人の様な滑稽さと、心を互いに通わせ会った雰囲気が在り。　Kの意外な一面が見えている気がして、面白かった。

さて。　次の日。

午前中のいい頃合。　オリヴェッティは、クラウザーと共に、募った魔法遣いや僧侶と船体の地下へ。　動力部に有る魔力水晶体へ魔力を注入に行く。

地下５階の動力部は、金属で作られたスクリューに、衝撃を伝えて回したり。　専用の部分から爆裂して推進力を生み出す独特な船の心臓部。　立ち入るには、船長と副船長だけが持つ鍵で踏み込まなければ成らない場所に在った。

オリヴェッティは、中型船に装着された魔力水晶体への魔力注入には、以前に加わった事が在ったが。　その時は、操舵室から注いだ。

だが、水晶体を初めて見る今回は、水晶その物を目で見る事に成る。　金属の部屋に安置されていて。　その高さだけでも、自分の３倍以上。　大きな水晶を囲むのに、自分が何人も必要な大きさだった。

（これが、魔力水晶体・・・、なんて大きな水晶なんでしょう。傷や曇りも微塵に見当らないわ。　凄い・・・）

初めて見る大きな水晶に、目を奪われてしまった。

クラウザーは、３０名ほどの魔法遣いや僧侶達を見回し。

「では、この注入球の水晶から送り込んでくれ。　一気に注ぎ過ぎ

★

ると、立ち眩みを起こす。　脱力加減を考えて、交代で頼む。　見張りと詳しい説明は、操縦を担う操作員の魔術師達が教えてくれるだろう」

と、云った。

大きな魔力水晶体の周囲には、手を当てて魔力を注ぐ小さな水晶体が在った。　立って水晶に手を翳し、魔力を送り込むスペースが、計５つ。

オリヴェッティは、真っ先に注ぎ込むべく、先頭で進み出た。

さて、その頃。

船体を見上げる港で、

「リュリュ、船体の掃除だ。　はしゃぎ過ぎるなよ」

と、Ｋが居て。

「は～い」

と、布で出来たモップを持つリュリュが居る。

監視で出てきたのは、数名の管理船員とあの眼帯をした小男の副船長カルロス。

冒険者１３名に、下働きの船員１５名を一緒にして港に立つ中。

カルロス自身は、白亜の船体をバックに立ち。

「では、今日は、船体の半分を洗って貰う。　冒険者達は、汚れや海草など、付着物を落としてくれ」

と、云ってから、船員達を見ると。

「船員達は、外装の塗装に向かえ。　前日までの航海で、漂流物に船体が結構ぶつかっている。　油分塗装を怠れば、直ぐに錆びる。　念入りに傷を樹脂で塞ぎ。　しっかりと塗装してくれ」

今日も外は冬晴れ。　海からは、冷たい風が吹き付ける。

リュリュは、清掃の為に散開すると、Kと一緒に最後尾に行く。

「ケイさ～ん、この大きい船さんの、何処まで掃除すんの～？」

Kは、何の気なしに。

「届く所までだよ」

すると、リュリュは。

「んじゃ～、上までだね～」

Kは、変な返答が返って来たので。

「んぁ？」

と、リュリュと見ると・・。

「ほぉっ！！！　とぅ！！！」

リュリュは、荷物を運ぶ馬車や旅客が他の船着場に見える中。　風の力を遣い、船体上部まで凄い跳躍をしていた。

「・・・」

Kは、無言で拳を握る。

“ゴンっ！！！”

鈍い音がして。

「バカガキ、目立つなよ。　おらぁ～、オマエの母親ほど甘くは無ぇ～ぞ」

冷め冷めとしたKの言葉が・・・。

頭を抑えたリュリュは、その場に蹲り。

「ひぇ～い・・、痛ヒぃぃ」

しかし、清掃に入ったKは、剣とモップを遣う。　無造作の様な素振りに見せながらに、キレイに汚れを落とす。　普通、剣など使えば、船体に傷を付けるだろう。　だが、そんなヘマをする彼でも無かった。

船員から、Kが剣を使っていると聞き。　驚いてすっ飛んで来たカルロスだったが。　船体に傷を付けず、丸で撫でる様に付着したフジツボ等をこそぎ落とすKの手練を見て。

（こっ・ここ・・こりゃぁ～本物だぁ・・。　クラウザー様（親方）よりも、ずっと・・ずっと・・・）

ある意味、負けた様な意識を植え付けられたカルロスがKの後ろから去り。　昼の休憩を挟んだ午後。

粗方の清掃を終えたKとリュリュの元に、クラウザーが遣って来た。

Kは、気配だけで察知し。

「どうした？　なぁ～んか優れない顔をしてるな」

穏やかな気配の時のクラウザーとは違い、少し気が苛立った彼だと察する。

船体を眺めるクラウザーは、

「おうよ。　悪い話が続いてる」

Kは、首をクラウザーに向け。

「どうした？」

苦虫を噛み潰した様な顔のクラウザーは。

「俺の弟子で、４０半ばに成る船長が居るんだが。　改修の決まってたボロ船で、強引にもう一航海に出されたらしい。　木造の中型客船だが、造船されてから５０年。　相当な老人船だ」

「行き先は？」

「マーケット・ハーナス」

「ふぅん。　いい話じゃ無ぇな。　俺たちがこの港に来た時、東の海上には雨雲が広がってたらしい。　リュリュ（コイツ）が云ってたから、間違い無い。　ボロで、冬の荒波をやり過ごすのは大変だろうな」

クラウザーも、リュリュの脇に来て。　彼の落とした海草を見つけ、足で海に落としながら。

「あぁ。　船長のヤツは、航海士として腕はいい。　だから、危ない橋を渡らされる。　全く、商人からすると、ワシ達は使い捨ての道具みたいなモンだ」

Kは、昨夜の質問をせず。

「航海法、変えられないのか？」

クラウザーは、苦々しく笑い。

「はぁっ。　役人は、人の命より金の餌が大好きさ。　各国の議会に話は出るが、商人の負担が増えると何処も却下。　裏で、随分な賄賂が回ってる」

その、どうしようもない話に、Kも鼻先で笑い。

「フン。　取り返しのつかない大事に成るまで、決めなきゃ後が無くなる所までは無理だな」

「あぁ」

リュリュは、クラウザーに。

「ねぇ。　もうオソウジ終わっちゃったよ？」

「みたいだな。　上で、何か手伝うか？」

「いいよ～」

素直なリュリュを見て笑ってから、クラウザーはKに。

「上に来てくれ」

と。

「あぁ、解った」

Kは、安物の短剣を仕舞い。　モップを海水で洗い始めた。

さて。

Kとリュリュを呼んだクラウザーは、雑務ではなく。　操舵室へと向かった。

仕事を終えた操縦士の魔術師達や、後を管理の船員に任せたカルロスも居る。　そんな中で、クラウザーは、Kとリュリュを部屋中央の机の前に立たせ。

「この地図を見てくれ。　一枚は、世界の地図。　二枚目は、明日・

明後日にこの街を出る船の航路図。　三枚目は、数日の気候を書いた天構表だ」

Kは、地図を広げ。

リュリュは、クラウザーに。

「良くわかんない」

クラウザーは、笑って頷く。

「ケイ、明後日の朝に、我々は出港する予定だ。　何か、意見は？」

聞かれたKは、リュリュを見てから。

「明後日の朝は、多分天候良くないゼ？　大陸から来る風は、天候に準じて変わる。　二日ばかり日差しのイイ天候が続いてた。　風の変わり目は、リュリュ、何時だ？」

聞かれたリュリュは、意味の解らない地図に首を傾げながら。

「明日のよ～る～。　夕方から、クモクモ出るよ」

「やはり、な。　んで？　明後日の朝は、風が荒れるだろ？」

「う～ん、スッゴク」

Kは、クラウザーに向き。

「船体掃除は、明日は早めに終わらせた方が無難だ。　明後日の朝

がヤバイし、風向きを考えると・・。　明日の夕方以降の出港も、俺に言わせればイイ判断じゃない。　早めるか、遅らせるか、どっちかだな」

クラウザーは、ニヤリと笑い。

「俺と同じだ。　夜、港に居る船長達が挨拶に来る。　そう云っておこう」

Kは、その何枚か在る地図の一つを見て。

「しっかし、あの孤群と言って良い諸島ショーウィンって、意外に此処から近いな」

Kの話を聞いて、クラウザーも地図に目を落とし。

「あぁ。　島民５００人ぐらいの漁村が一つ在る島以外は、全部岩山みたいな島が在る所だろ？」

Kは、その地図上に小さく点在する島々を指差し。

「そう。　此処、何でも、この島民が居る島の山には、半獣半人のハルピュイアが住んでるんだろ？」

「あぁ。　フラストマドの北、古代都市の山には、同じ姉妹種族のケライノア。　東の大陸にも、確か同じ姉妹種族のオキュペティナが居る。　どの彼等も、何故か人と一緒に暮らしてるみたいだな」

聞いて頷いたKは、それはそうだと云う様子で。

「確かあの種族は、生まれる全てが女でさ。　人間のタネが無いと、妊娠出来ないんだ」

それを聞いたクラウザーは、聞いて納得の大きな頷きを返し。

「あ～ぁ、なるほどな。　それで、たまぁ～にハルピュイアを攫う悪党が？」

「そう。　あの種族は、エルフやエンゼルシュアの様に声音が美しい。　しかも、胸や局部は人間と同じだろ？　金で客相手させようと狙うアホウが、たまさか攫うのさ」

クラウザーは、馬鹿な事だと目を細め。

「全く、女を真っ向から口説く事も出来ん虚(うつ)けが、そんな事に金を出すんだろうさ。　大方、告白の仕方も知らん貴族辺りじゃないか？　そんな相手を買うのは」

「いやいや。　相手が相手だ。　浮気に成らんと思って、買うバカ結構居るゼ？」

下世話な話だが、これも風俗。　Kやクラウザーは、寧ろ一般知識の様に語り合う。

カルロスは、女性の航海士や船員も居るので。

「おいおい、そんな話を此処で・・」

と、窘める。

弱く目を笑わせたKは、

「スマン」

と、云って置いて。　クラウザーに向くと。

「な。　さっきの話に出た船、嵐に遭うのこの海域のやや北辺りだ。もしかしたら、船が壊れても助かりそうじゃないか？」

クラウザーも、地図をマジマジと見て。

「おぉ、そうだな。　あの島には、魚の買い付けで定期船が行ってる。　漂着さえ出来れば、十分に・・。　だが、改修をしてないだけで、壊れ切った船では無いからな・・。　無事に切り抜けてると信じたい所だよ」

Kも、

「アンタの弟子だしな。　腕の見せ所だ」

クラウザーも、何処か嬉しそうに頷いて見せた。

★

Kとリュリュの予想は、ものの見事に当たった。

次の日。

昼頃までは、良く晴れていたのに。　昼下がりから、大陸側からのやや暖かい風が来て。　港で風が舞う様に成ると、天気は一気に急降下。　夕方には、パラパラと冷たい雨が降り始め。　真夜中には、強い風が吹き始める。

さて、深夜。　揺れる船の中。

「ケイさ～ん、オフネがゆれてるぅぅぅ～」

と、ソファーに寝るリュリュが言い。

「寝ろ。　明日は、昼に出港だ。　それまで、俺は寝る」

別のソファーに寝るKは、リュリュに背を向けて毛布に包まっていた。

一人で広いダブルベットに寝るオリヴェッティは、リュリュの声に毛布とシーツを被った。

（どうしよう・・、ドラゴンなのに）

急に気に成るのは、リュリュだ。　無邪気なままに、昨日から自分と一緒に寝たがるリュリュ。　中身が子供なだけに、身体に甘えられると弱い。　初めて兄弟と云うか、弟が出来た様に思えるオリヴェッティは、リュリュが可愛くて仕方無くなって来た。

そんな中。

「よいしょ、よいしょ」

暗い部屋の中で。　リュリュは、自身の寝るソファーを動かし始め、Kの寝るソファーに近付ける。

寝返りをして、薄目を開けてその様子を見つけたKは。

「おいおい、近付くな。　お前、鼾ウルサイんだから」

「イイ～じゃん。“男ドウシ”でしょ？」

「はぁ？」

近付け終えたリュリュは、ソファーの上に寝ながら。

「ポリアちゃんの所に居る大きい人が、男ドウシならなんとかって寝てた」

Kは、直ぐにゲイラーだと気付き。

（何が起こってるんだ？　あいつ等・・趣向が変わって来たんじゃあるまいな）

と、意味が解らず、怖くなる。

実は。　と或る時、野宿をするのポリア達が、街道に作られた東屋の様な石造りの小屋に寝泊りした時だ。　身体の大きいゲイラーが、狭い部屋の中。　システィアナと隣り合って寝るのを恐れ。　イルガの方に移動して、窮屈になっただけの話なのだ。

Kは、随分とポリアの事に詳しいリュリュに疑問を抱き。

「お前、何でポリア達にそんな詳しいんだ？」

「え？　ケイさんが、ポリアさんにママのゲキリンあげたじゃん」

「おう、まぁ」

「そのゲキリン、ポリアちゃんの剣の中に入ったの」

「それも知ってる。　だから、お前の母親は、ポリアの剣を通してポリア達が解るんだろ？」

「そそ。　んで、ボクもママの身体に触れてると、見えるの」

「かぁ～。　ガキのクセして、覗きとはいけ好かねぇ～な」

すると、リュリュは身をソファーから乗り出し。

（ね。　ポリアちゃんと、マルヴェリータちゃんて、オッパイすごいよね）

Kは、まぁ～た爆弾発言をしたと顔を引き攣らせ。

「このぉ・・エロガキ。　何処まで見てるんだよ・・」

コソコソ声で言うリュリュは、顔を赤くしながらも興奮して。

（だぁ～ってさぁ、オフロってのに入る時、ぜぇ～んぶ見えたのぉおぉっ！！！）

引き攣った呆れ笑いしか出ないKは、

（もし今度逢ったら、教えておくか。　全く、竜族の男は好色とは言ったモンだぜ）

と、思う。

身振り手振りで、Kにポリアとマルヴェリータの胸の大きさを勢い良く教えるリュリュ。

その内、

“ゴキン”

と、鈍い音がして。

「はよ、寝ろ」

と、Kは向こうを向く。

頭を殴られたリュリュは、

「うぐぐ・・、せっかくおじえてるのにぃ～」

と、呻いていた。

所々だけ聞こえるオリヴェッティは、何を話しているのかが微妙に気に成り。　寝返りを繰り返しては、聞き耳を立てていたが・・・。

その内、リュリュとKが寝静まってしまい。

（はぁ・・、何ですか。　この、同姓で無い詰まらなさって・・）

と、ため息を漏らすのであった。

さて、夜が明けた。

早朝の終わり頃。　まだ眠いのに、目を覚ましてしまったオリヴェッティ。　揺れ動く船の音と、激しく打ち上げる波の音でである。
強風が吹き荒れ、波を岸壁などに打ち付ける轟音が聞こえたのだ。
船長室に行けば、クラウザーも渋い顔で港の海を見つめていた。
船の出港など、無論無理であった。

起きた一同は、隠し部屋でクラウザーも含めて軽食を取る。

明かりをつけない薄暗い部屋で、吹き荒ぶ風の音を聞くオリヴェッティは。　ふと、思い。

「ケイさん」

リュリュと二人で並び、甘いパンを齧るkが。

「ん？」

「あの・・、リュリュ君って風の神竜ですよね？　この風、どうにか出来ないのですか？」

すると、クラウザーも。

「あ、そうゆう手も有るか」

と。

だが、Kは。

「駄目だ。　それは、しない方がいい」

「どうしてですか？」

「神に近い能力を持つ神竜だろうが、所詮は世界を巡る精霊の流れの一部だ。　気象とは、様々な精霊の力が絶妙に絡み合って、全てが一つで出来ている。　嵐をどうこうしようとすれば、リュリュはケタ外れの魔力を遣い、直ぐに気絶しちまうよ。　どんな気象も、大地と空と海が息づくエネルギーの流れ。　それを身勝手で制しようなんて、傲慢な考え方だ。　嵐は、静かに過ぎるのを待てばいい。　雨も風も、季節と共に命を営む力なんだ」

オリヴェッティは、自分が我が儘を思った様で。

「すみません・・」

と、謝る。

「ま、風の神竜のコイツが居れば、来（きた）る気象は千里眼の予期の如く知り得る事が出来るからな。　対処に余裕が出来るだけでも、有り難いと思えって事よ」

リュリュは、キラキラさせる尊敬の眼差しでパッとKを見つめ。

「さっすがぁ、かぁーっちょええ～」

すると、Kはリュリュを睨み。

「オメェ。　もし、ママのお出迎えで海が荒れたら、責任取れよ。
甲板で、みんなに土下座１００回だからな」

カチっと固まるリュリュは、

（チョ～怖いッスヨぉぉぉ～）

と、母親に来るなコールを思った。

クラウザーは、窘められたオリヴェッティを脇目で見てから。

「だが、もし操ったとして。　そんなにペナルティが有るとは思えないが？」

すると、Kは肩を揺すって。

「ヘッ」

と、笑うと。

「コイツの母親なら、楽に操れようがな。　リュリュは、まだまだ子供。　風や暴風雨を堰き止める事は出きるだろうが、後は大変だぞ。　川の水を堰き止めたと一緒で、何倍にも成って遣って来る。
夏に来る台風の何十倍ってハリケーンが来て、直ぐに街が壊れるよ」

「そうか。　未熟に操るとは・・そうゆう意味なのか」

クラウザーは、Kが言う意味が解る。　川の水を堰き止めて、貯まった水量が多ければ多いほどに濁流となるだろう。　それが、風で起こる訳だ。　今以上に強い風などが来れば、街は崩壊してしまう。

Kは、リュリュがガバっと取ったパンを横目に見て呆れながら。

「そう。　自然は、台風でも、大雨でも、キリにいい所で纏めてる。人間や動物にとっては過酷でも、自然にとってはキリのいい処。なんとかそれに耐えうる物を作っときゃ、それでいい訳だ。　船も、家も、街もな。　強引に歪ませれば、そのしっぺ返しを食らう。ほどほどが一番って訳ですがな」

そう言ったKは、完全に何処か冷めていた。

オリヴェッティは、Kを外した視線の視界で捉えながら。

（ハァ・・。　嫌われたかしら）

と、思った。

港の船を大いに揺らし、波止場代りの入り江を作る岩壁をも越える程の荒波を生み出した強風だが。　早朝も過ぎた頃に成ると、落ち着き始める。

先に出港予定だった中型客船が戸惑う中で、クラウザーは風が穏やかに成るのを見越し。

「カルロス、出港の合図を出せ。　もう、直に風は止む」

操縦士達の前でカルロスは、どの船も動く気配が無いのを望遠鏡を見ながら。

「いいんですかい？　もう、出港して？　あっし等は、昼過ぎを予定したハズですゼ？」

クラウザーは、操縦士として動力を動かす魔術師に合図を送ると。

「このまま昼過ぎを待ったら、各船が近付き過ぎる連結出港に成る。古いタイプの風と魔力の両方を使う客船も紛れる中で、込み入った出港は事故の元だ。一番大きいこの船なら、この風なかでも十分に出て行ける。航路を2日南寄りに退いて行けば、後から来る足の早い船と接近する事も無いだろう」

クラウザーが言った後、一緒に操舵室に来ていたKが。

「今の時期。クルスラーゲ東方の溝帯砂漠沿岸は、朝晩の気温差で霧が出易い。変に曇った後なら、尚更だ。霧の中で船が近付いても中々解らないからな。クラウザーの判断は、間違いじゃない」

カルロスは、まだ若いKに言われては、何処か腹立たしい感も有るが。常人離れした才を見て居るだけに、何も言えなかった。

「出港準備っ。合図の汽笛を鳴らせっ」

操舵室内の窓から、船員が白旗を振る。外に居て、準備をしている船員に合図を送ったのだ。

外れた所の窓前に立っていたオリヴェッティとリュリュは、見下げ

る甲板で船員達の動きが慌しく成るのを見ていた。

空が晴れた頃合で、クラウザーは船を出した。

昼過ぎまで海を行けば、風も穏やかに落ち着き。　晴天の心地よい船旅を満喫できそうな冬晴れと成る。

甲板に出入りが許されると、乗客や旅芸人が出て。　演奏が行われたり、社交場として話し合う客が景色を見る緩やかな時間が流れ出したのである。

それから、２日。　海も穏やかで、クラウザーの船を時折追い越す船が見えるだけで、何事も無い日々が過ぎる。

だが、そんな穏やかな船旅が急に緊迫した状況に陥ったのは、出港から３日目の夜事だった・・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪不安の蔓延る海≫

危険な海域を通る航海を避け。　来た航路を戻る形で、北の大陸の南側沿岸を沿う様に航海をするクラウザーの船。　クルスラーゲの交易都市を出て、3日目の夜の入りである。

操舵室の窓から外を見るカルロスは。

「クラウザー様、凄い濃霧ですな」

と、不安を覗かせる言葉を漏らす。

夕方から、穏やかだった北からの風が南からの風に変わり。　最も大陸から離れた海域に達する明日を前に、不安を齎す濃霧の中へと入った。　陽の光を遮る程の濃霧の中に入った船は、目隠しをされたのも同然。　クラウザー達船員は、コンパスと経験を頼りに、速度を落とした状態で航海を続けている。

カルロスの言葉を受けるクラウザーは、静かながらも言葉鋭く。

「カルロス、気を引き締めろ。　今夜は、見張りを少し増やせ」

その言葉に、カルロス以下船員達がクラウザーを見る。

操縦士の女性魔術師が。

「クラウザー様、モンスターでも出るのですか？」

「いや、そうでは無い」

「では、何故に見張りを？」

「いや、な。　さっき霧が出始めてから、客の僧侶数人が気分を悪くした。　ワシは、若い頃に2・3度ホラーニアン・アイランドや幽霊船に襲われ掛けた経験がある。　ヤツラは、霧の後に出没していた。　もし、この霧がその予兆とも云えなくない。　航海には、必ず念には念を入れる時が来る。　だから、そうするんだ」

カルロスは、船の警備を担当する船員に目を向けた。　向こうも、頷いて受け止める。

クラウザーは、夜遅くまで起きる事にして。　一階のホールや二階の高級ラウンジなどを見回った。　霧に不安を見せる客が出るのを見越し、自ら出向いて落ち着きを促す。

一方で、ダンスや音楽を見たがったリュリュを連れ、一階まで降りていたK。

人の多い場所を見回っていたクラウザーは、そんなKを見つけた。

食事の出来るラウンジ前で、中一階の広いホールを見るリュリュと共に、手摺に身を預けて居るKに近付き。

「珍しいな。　御主が、人の多い所に居るなど」

果汁の入ったグラスを持ったKは、脇のリュリュを見てやって。

「コイツが、ダンスを見たいとせがむからだよ」

クラウザーは、リュリュを見る。　目を輝かせて、下で行われる手品やダンスなどに見入っているリュリュが居た。

（なんだかんだと、コイツも面倒見のイイ奴だ）

と、Kを見て思う。　しかし、直後にKへ身を寄せるクラウザーは、顔を引き締めて。

「なぁ、僧侶が相次いで気分を悪くした。　何か、悪い前触れではないかな」

Kは、アッサリ頷き。

「んだ。　此処から東南に離れた場所。　其処に、幽霊船か悪霊島（ホラーニアン・アイランド）が居る」

クラウザーは、目を凝らしてKを見て。

「本当か？」

Kは、果汁を一飲みしてから。

「あぁ。　感じ方としては、微か。　恐らく、向かって2日は掛かる場所だ。　普通で行けば、先ず遭遇しない」

「そ、そうか」

「だが、気に成る」

クラウザーは、Kの言う事なだけに。

「何がだ？　言ってみろ」

「ん～、普通よ。　幽霊船や悪霊島ってのは、こんなに遠くでは感じられないんだ。　幽霊船は海に沈んで居たり。　悪霊島は、島に近付き擬態する。　動かない状態のアイツ等は、精霊の波動を抑えるからな。　俺だって、もっと近付かないと解らん。　だが、今は解るんだ」

「お前、それはつまり・・」

「そう。　ヤツは、動いてる。　これだけ遠くからハッキリするって事は、獲物を見つけてる可能性も在るな」

クラウザーは、顔色を曇らせた。

「この船でなければイイがな・・」

すると、Kは。

「いや。　恐らく違う船だろう。　この航路の南下は、コンコース

島を経由する航路の一つなんだろ？」

クラウザーは、手摺りに身を預け。　南側に指を向けると。

「あぁ。　北の大陸の西側の国から、東の大陸に船を出す場合の一般航路だ。　１０日から、１４・５日でコンコース島に着く」

Kは、その指の向きを見て。

「・・、少しズレるな。　感じるのは、向こうだ」

と、自身も指を向けた。

クラウザーは、そのズレを見て。

「角度にして、１０℃ぐらい。　確かに、コンコース島へ行く航路から少しズレている。　その方向は、ホレ。　この前に話した、孤群諸島の在る方向だ」

Kの目が、其処で細まった。　直ぐに反応した様な、斬り返しの間合いで。

「おい、クラウザー・・。　もしかして、もしかするぞ」

「ん？」

「ホラ。　アンタの弟子の船・・・」

クラウザーは、グッと目を見開き。　そのまま、固まった。

果汁を飲み干したKは、はしゃぐリュリュを見てやってから。

「航海法では確か・・、モンスターに襲われた船を助けちゃいけないんだったよな？　ミイラ取りが、ミイラに成らない為に」

緩やかに俯き出すクラウザーは、

「そうだ・・」

と、呟くのが精一杯だった。

海上で孤立した船がモンスターに襲われた場合。　乗っている冒険者などが優秀でも無い限りは、助かる可能性は限りなく低い。

（嗚呼・・、まさか）

導き出された予測に、クラウザーは絶望に身を抱かれた気がした。

★

霧が立ち込める中、朝を迎えた。

オリヴェッティが起きて、クラウザーの居る船長室に向かうと。

昨晩、遅くまで起きていたクラウザーは、もう起きていた。

「おはよう御座います。　昨日、かなり遅かったのに。　お早いですね」

テーブル前に座ったクラウザーは、オリヴェッティに驚き。

「おっ、おお。　あ～、おはよう。　いや、霧が濃くてな。　乗客に不安を感じる者も多く、こっちまでな」

オリヴェッティは、自分とリュリュが寝た後。　Kを船長室に呼んだクラウザーなだけに、“何か不安でもあるのではないか”、と、思っていた。

その意味が周知に成るのは、霧が晴れた昼である。

珍しく、操舵室にK達を居れっ放しにしたクラウザー。

カルロスなどは、部外者が居るのは気に食わない様子である。

昼食を操舵室内の、クラウザーが詰める指令場で済ませたKは。

「クラウザー、霧が完全に晴れた。　奴等、獲物に狙いを定めた可能性強いぞ」

緊張の顔を解かないクラウザーは、椅子に座ったKに。

「やはり、霧は関係在るのか」

「あぁ。　濃霧でも、奴等の吐き出す“瘴霧”（ノウズミスト）は、独特だ。　奴等の動く周りは、魔の力と闇の力が混ざり、温度が下がる。　其処で発生する濃霧には、奴等の纏う瘴気が含まれるんだ。　それに隠れて、獲物を探して回り。　襲う時に、霧を風に乗せ方々に切り離す」

「何で、そんなに回りくどい事を？」

「簡単な話さ。　風を捕まれたら、奴等より今の船は早い。　先回りするために、姿を隠す隠れ蓑にしてるんだよ」

「では、晴れたと言う事は・・・」

「あぁ。　もう、襲う相手が補足出来たんだろうな。　しかも、今は意外に近い」

「なぁ、なんだとっ？！」

大きく驚いたクラウザー。　その声に、カルロス達が一斉に顔を向け。　操舵室の外れで、椅子に座っていたオリヴェッティやリュリュも二人を見た。

二段ほど高い指令場の床に備え付けられた大型チェアーから、勢い良く立ったクラウザーは、険しい顔で。

「何処だっ？！」

Kは、南東に指を向け。

「この方角。　感じ方からして、船で四半日と掛からない所だ」

クラウザーは、一気に焦り出し。

「なんだとっ？！！　昨日は・・」

Kは、慌てるクラウザーを見て。

「落ち着け、クラウザー。　奴等は、恐らく深夜から朝方に掛けて、海に潜ったんだ。　早い海流に乗り、先回りをしたんだろう」

クラウザーは、一段高い指令場から窓の外を見た。

（解っていても、助けられんっ！！！！）

Kも窓の方を見て、

「警戒しろ。　恐らく、奴等と狙われる船が出会うのは、俺達の乗ってる船から目視出来る可能性が在る。　奴等、“二つの獲物”を狙ったんだ」

Kのその話を聞き、クラウザーは最悪の事態を理解した。

「ま・・まさか・・、この船も？」

「そうだよ、クラウザー。　俺達の居る海域は、アンタの見せてくれた地図からするなら、陸地から断続的に続くラグーンを形成する浅瀬の外側。　小型商業船や、中型貨物・旅客船なら、浅瀬ギリギリの早い潮の流れに乗り込めるがな。　この大型船では、浅瀬付近へは無理だ。　幽霊船を操るのは、海で死んだ船長などの亡霊を従える死霊や悪霊。　モンスター相手だからと、奴等が船や海に詳しくないなんて無いんだぜ？」

「なんだとっ？！　だがっ、昨日の距離では、此方の船など見えないハズだっ。　それとも奴等は、こっちが見えてるのか？」

「多分。　“見渡し”の魔法は、魔想魔術や暗黒魔法の高等呪術。

見えている可能性は高いし、親玉のモンスターも相当に強い。第一、こっちはクソ多い人が乗っかってる大型客船。　生命波動を稲妻の様な大音量で発生させている様なモンさ。　この海の上でそんなもんは、高位のモンスターなら直ぐ解る。　奴等は、ソレを求めて彷徨う狩人と同じだからな」

クラウザーは、死ぬかも知れない恐怖が間近に差し迫っている事に震え。　Kをギリリと見て。

「お前、解ったなら何で・・・」

すると・・。

クラウザーを見たKは、フッと口元を微笑ませた。

（なぁっ・・）

この非常事態の中で、尚も余裕で笑えるのが不思議だった。　クラウザーは、思わず焦りを忘れた。

Kは、緩やかな声で。

「クラウザー。　アンタ、助けたい・・だろ？　航海法からするなら、片方が狙われても助ける事は出来ないだろうが・・。　両方狙われたら、助け合ってもイイんじゃ～ないか？　ドサクサだしなぁ～。　要は、相手を潰せばイイ話だしさ」

と、クラウザーの目を見抜く。

クラウザーは、簡単に言ったKの狙っていた魂胆を見せられた気が

した。

（コヤツ・・、俺の為に？）

椅子を巡らせたKは、緊急事態だとだけは察して居るカルロスや、他の船員達を見回しながら。

「クラウザー。　アンタが俺を、“化け物”と称した。　その褒め言葉に、今応えようか。　・・、旅の道連れに来る仲間が、終始塞ぎ込んでる時化た冒険なんざ～詰まらないからな」

と、言うと。　カルロスに視線を合わせ。

「これから、俺が向かって来る幽霊船に乗り込む。　別の一隻の船も助けるから、このまま航海してくれ。　もしかしたら、助ける船は壊れてる可能性も在る。　余分に客を収容出来る準備だけしてくれ。　表立った余計な警戒は要らないゼ？　下手に騒ぐのは、無駄だからな」

と、席を立った。

“幽霊船”と聞いたカルロスは、もう気がおかしくなる様な驚きと焦りを滲ませ。

「なぁっ・何だとぉっ？！！　お前っ、フザケてるのかぁーーーっ！！！！！！」

操舵室に、金きり声の様な怒声を叫び上げた。

Kを高みに見上げる船員達の顔は、緊張と怯えに満ち始めたもの。

オリヴェッティに到っては、杖を持つ手を微かに震わせながら。

（ゴ・ゴゴ・・幽霊船（ゴーストシップ）って、世界で船を沈める悪霊の巣窟に成った船でしょ?!!　今まで助かった事例なんて、ほんの一握りだけだわっ!!!）

自分の知りうる知識を引いて、この船に差し迫る緊急事態に恐れ戦く。

だが、階段を使ってカルロス達の居る場に下りて来たKは。

「デケぇ声出すな。　客に聞かれた、無駄にパニックだ。　誰も、アンタ等に期待なんかしないさ」

と、カルロスの前を歩き抜け。

「お〜い、リュリュ。　一暴れしに行くぞ」

と、リュリュに声を掛ける。

緊張し始めた周囲を見回しながらも、何が起こってるのか今一解ってないリュリュは・・。

「ケイさぁ〜ん、何処に行くの〜?」

と、暢気な質問をKに返し。

「海の上に、亡霊の集まった船が在るんだ。　その船に、この船と別のもう一隻の船が狙われてる。　ちょっくら行って、ブッ潰して

しまおう」

と、Kも、何の差障りも無い様な言い草で言うのだ。

操縦士の魔術師達や、カルロスの周りに居た船員達は、その場違いな空気を出すKに言葉が出ない。

「わぁ～いっ、モンスタ～退治だぁ～。　イクイク～」

一人ではしゃぎ出すリュリュは、ルンルン気分でKの方に歩み出す。

Kは、立ち尽くすクラウザーを見上げると。

「クラウザー、魔術師や僧侶達が騒がないように手を回せ。　そろそろ、勘のイイ奴等は気が付く筈だ。　それから、向こうの船が壊れてた場合も想定して、客室に人を入れられる用意も頼む。　あと、緊急用の船を借りるゼ。　こっちから乗り込むからよ」

その、まるで食事の注文でもしているかの様な言い草。　聞いたクラウザーは、Kでなければ気狂いだと思う。　呼吸を整える為に、少し間を置いたクラウザーは。

「・・解った。　それだけでいいか？」

「あぁ。　所で、脱出用の船は、幾つ在る？　横付けされてる2隻だけか？」

「そうだ。　一般の小船よりは、二回り大きいヤツだがな」

「了解した。　んじゃ、そろそろ行く。　手配は早くしろよ。　金

持ちは、一端騒ぎ出したら、アホみたいにウルサイ。　俺とリュリュのする事は、知られる必要も無い事だからな」

言ったKは、首を回らせオリヴェッティを見ると。

「どうする？　暇つぶしに、来て手伝うか？　スリルだけは味わえるゼ」

「え？」

聞かれたオリヴェッティは、クラウザー以下船員や仲良く成り始めた操縦士の魔術師達に見られた。

だが、Kとリュリュが行くのであるなら、リーダーの自分が逃げる訳にいかないと。

「はい、行きます。　先に襲われる船は、別の船なんですね？」

「多分な」

「では、一般の方を助ける為にも、行きます」

「ん。　じゃ、下に下りろ。　ホレ、その右奥の扉は、甲板まで降りてる」

リュリュは、スキップをして非常用の連絡階段に出る扉に向かい。

「わ～いわ～い、ゆっれい退治～ゆっれい退治～」

リュリュの後を歩くKは。

「リュリュ、お前は怪我するとメンドーだから、立ち見でもいいぞ」

「や～だやだ、ケイさんみたいに戦うんだぁ～」

「やるのはいいが、怪我するなよ。　ピーピー泣かれるのは、面倒だ」

「泣かないモンっ。　男の子なんだぞぉ～」

Kとリュリュの雰囲気は、何処かに遊びの探検に行く子供の様な雰囲気すら醸し出す。　これから、モンスターと戦う者達の様子では無かった。

Kの後を行くオリヴェッティは、不安げにクラウザーを見上げたり。　言葉を忘れた様な船員達を見る。　本当にモンスター退治に行くのか、実感が湧かない自分が居るのを持て余す気分であった。

先に非常用の扉を開き、高い場所に在る操舵室から下に降りる階段の踊り場に出たリュリュは、冷たい風に吹かれ。

「イイ～風さん。　わぁ～、此処って高ぁ～い」

Kも、外の狭い踊り場に出ては、

「全く、これだけ金を掛けた船の割に、脱出階段は連結梯子って・・。　バカじゃないか？」

と、二階づつ下の外付け廊下に降りる梯子階段を見て呆れた。

リュリュは、嬉しそうにさっさと梯子階段を降り出す。
Kに到っては。

「面倒だな」

と、オリヴェッティの出て来た目の前で、１０階建てに相当する高みから、梯子を使わずに飛び出した。

「ケっ！！！」

目を飛び出さんばかりに驚いたオリヴェッティは、Kの飛び出した方の手摺に飛び付く。　高さの恐怖も忘れて下を見れば・・。　Kは、梯子階段を下りた下の踊り場の手摺に掴まっていた。
そして、丁度Kの居る踊り場に降りたリュリュがKを見つけ。

「あ～、ケイさ～んずるぅ～い～」

「俺はイイの。　オリヴェッティとゆっくり来い。　船を風で動かすのは、オマエなんだからさ」

「ふぇ～い」

オリヴェッティは、やはりKとリュリュは人を超えた何者かだと確信した。　Kの突拍子も無い行動に、全く驚かないリュリュもリュリュだ。

（はぁ。　とんでもない方々とチーム組みましたね・・、私）

あまり高い所が好きでは無いオリヴェッティだが、仕方なくその梯子階段を下りる事にする。　海風が強めに吹き付け、降りる瞬間から怖い。　長いが、タイトな白いスカートを穿いていて、今日は正解だったと思う。

先に飛び降りたKは、甲板の上に。

濃霧の影響で、甲板には客の誰も出してない中。　Kを見つけた下働きの船員がやって来て。

「お客さん、今は甲板には・・」

と、言って来るのに対し。　Kは、

「緊急事態だ。　クラウザーの頼みで、脱出用の船を二隻借りたい。何処に在るのか、教えてくれ」

下働きの船員達は、クラウザーと肩を並べて対等に話す黒尽くめの包帯男を噂にしていた事も在り。　Kの言葉を聴き。

「緊急事態だって？」

「あぁ、厄介なモンスターが近くに居る。　チョイト行って、撃退してくるのさ。　ま、この船に近づけると面倒だから、こっちから出向く。　このまま、客は外に出すな」

“モンスター”と聞いては、下働きの船員も顔を驚かせ。

「どっ・何処にっ？！」

「まだ、少し離れてる。　目で見えたら、大変な事になるぜ。　モンスターの事は、俺達に任せろ。　とにかく、俺達がモンスターの方に向かったら、悟られない様に静かにクラウザーへ指示を仰げ」

「あっ・あぁっ。　脱出用の船は、後ろの右側だ。　ロープで括り付けてある」

甲板の後尾に向いたKは、その船員に。

「解った。　じゃ、リーダーの女性と若いのが、この緊急避難用の梯子で降りて来るから。　俺の居る脱出用の船に案内してくれ。　俺は、先に行ってる」

Kは、甲板の後尾へと向かった。

オリヴェッティとリュリュが降りると、Kに言われた船員の案内で脱出用の船に案内される。

先に船に乗り込んでいたKは、甲板の縁に回してあったロープで船の前後を繋いでいた。

脱出用の船に射した影に気付いて、上を見上げたK。　覗き込んで来たリュリュとオリヴェッティを見て。

「行くぞ、船に乗れ」

オリヴェッティは、まだ海に降ろしても無い船を見て。

「えっ？　あっ、でも・・」

と、言うのだが。

「わ～い、モンスタァ～退治だ～」

と、リュリュがヒョイと縁から飛び降りる。

「わぁっ」

驚く船員だが、リュリュは難なく船に着地。

Kは、少し高さの在る中。

「受け止めてやるから、早く」

と、オリヴェッティに言う。

甲板に出たオリヴェッティは、死霊系モンスターや亡霊モンスター特有の禍々しい闇のオーラを、右手から仄かに感じる。

（本当に居るんだわ・・、行かなきゃ）

と、勇気を持って甲板の縁から下に飛び降りた。

オリヴェッティを抱き止めたKは、直ぐに降ろし。

「リュリュ、前の船に乗って風で運べ。　俺は、後ろで櫂を使って舵取りをする」

「“舵取り”？」

意味の解らないリュリュに、Kは抜く手も見せずして船を繋いだロープの繋ぎ目を斬った。

「きゃっ」

いきなり落下し始めた船に、オリヴェッティは驚くも。

船員が身を乗り出して見下ろす中。　二艘の木製である脱出用の船は、バシャンっと飛沫を上げて海面に落ちた。

しがみ付くだけで精一杯だったオリヴェッティは、顔や髪に波にぶつかった飛沫を受けたが。　立ったままのKとリュリュは、余裕の態度でバランスを取り。　何事も無かった様に動き出す。

Kが先に。

「説明は後だ。　風で波の上を走れ、リュリュ」

「ういういさ～」

応えたリュリュは、ニコリと微笑み。　闇のオーラがする方に向くと、その目を蒼翠のオーラで光らせる。

瞬間。

（はっ）

船にへばったオリヴェッティの身体を、貫く様な風の力が駆け抜けた。　濁り無き強く爽やかな風が、自分を抱きしめた様な・・。

そんな感じを受けた。

二艘目の後尾の縁際に立ったKは、船を漕ぐのに使う櫂を海に差し込む。

「ケイさ～ん、いっくよ～」

「オーケーっ、ぶっ飛ばせっ！」

「はぁ～い」

そのやり取りが終わった時、突風の如き追い風が吹き始め。　三人の乗った船は、大型客船の脇を走り出す。

「えっ？　えぇっ？！！」

勝手に動き出した船に驚くオリヴェッティ。　乱れる髪を押さえ、船の脇を見れば。　海上を疾走する風の流れを見た。　精霊や魔法で生み出される自然のエネルギーを、光と色と言う視覚的に見える自然魔法遣いの目には、蒼翠に光る風の流れが、船を前に前にと突き動かす様子がハッキリ見える。

（すっ・・凄いっ！！！）

瞬間的に魔法で生み出す風より、もっと純度の高いエネルギーが。　海を吹く風を集めてはレールの如く道を引いて、船を猛スピードで走らせ始めたのだ。

船員の数人が甲板の縁から、下の海上に降り立ったK達の乗る船を見下ろす。　丸で、早馬で駆け抜けてゆく一騎の如く。　考えられないスピードで走り出した船は、直ぐに大型客船を追い抜き。　一

路南東を目指して疾走してゆく。

見ていた船員の一人は、完全に呆気に取られ。

「すげぇ～・・、ハヤブサや海燕が飛んで行くみたいだ・・・」

と、彼方へ去って行く船を見送った。

★

K達が消えた船内では、操舵室が異様な警戒の雰囲気に包まれていた。

クラウザーは、カルロスに航海の予定をこのまま守るように言い置いて。　自ら管理船員2名を引き連れて、足早に船内を回り始めた。

先ず、クラウザーの元に来たのは、Kと会った船員だ。　2階に在る、高額宿泊者専用のカジノバーに入ろうとしたクラウザーを見つけた下働き船員が。

「船長、クラウザー船長っ」

と、小走りに走り寄って来る。

クラウザーは、その小声に近いものが乱れているのを聞き。

（Kから聞いたか）

と、悟りながらも。

「ん？　どうした？」

と、穏やかに対応をしてみせる。

クラウザーの前に走り寄って来た船員は、辺りを見回しながら押し殺した声で。

（あの、ゆっ・幽霊船がぁぁ・・）

聞いたクラウザーは、事も無げに。

「あぁ、解ってる。　ワシの知り合いが、対処に向かった」

「嗚呼・・。　脱出用の船を・・・やっぱりそうなんですか」

「ん。　だが、油断は禁物だ。　客が騒がぬ様に平静を装いながら、しっかり監視をしてくれ」

微かに震えるその船員は、ピシッと直立不動の体勢をし。　胸に拳を当てては、上官に対する敬礼を見せ。

「は。　各船員にも、そう伝えます」

「頼む」

クラウザーは、自身の不安を億尾にも見せず、その船員を見送る。

そして、クラウザーはカジノバーに入った。　優雅な音楽が流れるやや暗めの落ち着いた証明の中で、貴族や商人などの客が遊んでいる。　普段通りなカジノバーの様子を伺ったクラウザーだったが。

場を去ろうとした所で、入り口に立つ管理船員から。

「船長、お客様が」

と、声が掛かる。

「ん？」

振り返れば、４・５名の僧侶や魔法遣いの男女が、顔面蒼白だったり、恐ろしく緊張した顔で立っていた。

（遂に、感づいたか。　此処は、俺の正念場だな）

船の上でパニックが起こると、孤立無援な上に逃げ場が無いので、客は狂った様な行動を起こす事が在る。　クラウザーが船員の下っ端で働いていた頃。　そうした場面に幾度となく遭遇した。　だから、どんな事が起ころうとも、腹を括ると落ち着ける。　クラウザーは、大らかな姿で廊下の待合ロビーへと出た。

「お客さん、御揃いでどうされましたかな」

クラウザーが言えば、青いローブを纏った若き魔術師の男性が。

「船長っ、南東にモンスターの気配が」

と、今にも大声を上げそうな声音で言う。

その一言を皮切りに、僧侶達が幽霊船かホラーニアン・アイランドの存在を仄めかす。

クラウザーは、軽く頷き。

「あぁ。　存在は、昨夜から解っているよ」

魔術師の男性は、カァーっと血の上るのが見て解る程に顔色を赤らめ。

「アンタ、わっ・解っててそんな・・ゆ・・悠長に？」

クラウザーは、大した事では無いとばかりに。

「あぁ、そうだ。　雇った優秀な用心棒が、既に幽霊船を潰しに向かってる。　実力は、このクラウザーが良く解ってる人物だ。　大騒ぎし、客に伝えたら混乱して面倒に成る。　それが、どうかしたか？」

僧侶の大人びた女性は、白いローブのフードを上げて。

「向かった方々は、そんなに強いのですか？　今の内に、速度を上げて逃げては如何でしょう？」

クラウザーは、それ来たとばかりに。

「逃げる？　何処へ？」

と、ややからかい気味におどけて言う。

背の高い、赤い神官服と鎧を纏う偉丈夫の初老僧侶は、

「決まってるっ、陸へだっ」

と、指を指した。

クラウザーは、何ともばからしいと言う素振りを見せて。

「馬鹿を言うな。　それこそ、死にたいのか？」

「ぬっ。　なんだとっ？」

相手の焦った顔色を見回したクラウザーは、近くの大きな額に入れられた地図の方に向かい。

「我々の現状を説明してあげよう。　こっちに来て、地図を見るといい」

誘われた冒険者達は、皆が緊張した重い足取りでクラウザーの後を着いて行く。

世界地図の前に来たクラウザーは、冒険者達を一瞥してから。

「良いか。　我々は、昨夜から北の大陸のやや西側で、大地溝帯付近の海域へと入った」

と、砂漠の広がる溝帯を指差した。

「・・・」

冒険者達は、真剣な目で食い入る様に見て来た。

クラウザーは、更に続け。

「この溝帯沖の海域は、ラグーンが遠浅の海を形成していて。　この大型客船は、そのラグーンの切れ間に開けた幅狭い潮流の水路上を通っている。　船を航路から外せば、浅瀬に乗り上げ座礁。　強引に速度を上げれば、舵取りが上手く行かずに複雑なラグーンの岩肌に衝突する。　陸に向かって脱出用の船で行けば、モンスターの鮫鷲（サメワシ）や、ウツボの“死を招き”（カーミング・デスター）に襲われ全滅。　奇跡的に陸に辿り着いても、今度は砂漠に住む飢えたモンスターが相手。　逃げるなんて、到底無理だ。　それこそ、空でも飛ばなきゃな」

若い女性僧侶は、もう絶対絶命なのだと床にヘタり込み。

「あぁ・・、神よ」

と、言うのだが。

クラウザーは、何の悲観もした様子を見せず。

「済まないがな。　我々は、海に関しては素人では無い。　幽霊船が出ようが、モンスターが出ようが、嵐が来ようが、それに対応する手段は持ち合わせている。　今さっきも言った様に、対処の手段は講じている。　本当に危険なら、君達より先に我々が慌てるよ。　無用に悲観されたり、騒がれても困るのだがな」

先程、クラウザーの言葉に怒った若き魔術師は、クラウザーの余裕が理解出来ず。

「私は、そんなに楽観出来るアンタが信じられない」

と、睨むのだが・・。

クラウザーは、ハッタリも必要だと思い。

「フン。　この海の兵と称されたクラウザーは、お前達の様な駆け出しの冒険者に見縊られる程、落魄れちゃ～いないさ。　大体、お前達如きが騒いで、何が出来る。　過去、こうした状況で危険なのは、客が騒いで面倒を起こす事が殆どだ。　玄人に指図をするなら、それに見合う実力を持ってからにしろい。　高々海の上で幽霊船のオーラを感じたぐらいで、状況も調べず逃げるだのと騒ぐしか能の無い言われ方をしたんじゃ、こっちが迷惑だ。　返り討ちにするぐらいの実力も無いなら、引っ込んでて貰おうか？」

歯切れの良い言い草で、啖呵を切られた冒険者達。　生じ有名なクラウザーなだけに、その姿は堂に入る。　蔑まれも、気風がいいと返って説教にも繋がるのだろうか。　冒険者達は、無理やり騒ごうとした自分達を省みる気持ちを持った。

年配の戦女神を信仰する神官戦士は。

「では、大丈夫なのだな？」

クラウザーは、事も無げに。

「あぁ。　幽霊船は、我々の前に先回りしようとした様だが。　そ

れに失敗している。　このまま進めば、夕方を待たずして北上するルートに船が向き。　そして幽霊船を振り切れる。　ま、差し向けた手勢が、先に駆逐するかも知れぬがな。　それより問題は、別に在る」

まだ若々しい僧侶に成り立ての様なあどけなさが残る、黒髪の女性が不安げに。

「何でしょうか？」

「いや、直接関係は無いが・・。　ワシ達の居る方向に向かって、別の船が来ている様だ。　伝書鳩で、救難の文をよこした。　差し向けた手勢が、もしそれを助けて来たら・・全く面倒。　客が増えても、利益が出ない。　もし襲われていたとしたら、船毎助かって欲しいモンじゃと、な」

航海法の有名な部分を知っていた若き魔術師は、それに違和感を示し。

「助けていいのか？　航海法では、違反だと思ったが？」

「解釈を間違えるな。　襲われている所に、態々別の船が出向いて助けるのは違法じゃ。　じゃが、幽霊船を撃退した後、只の壊れた難破船を助けずに捨て置く訳には行くまいよ。　第一、我々も狙われておるのは確か。　同じ危険に遭遇した中で、脅威が去った後も助けぬのでは、それも違法に成る」

「なっ・・なるほど。　航海法では、確か・・・モンスターに襲われている船を、別の船が向かって助けに行くのが不法・・。　客や積荷の安全を第一にとの観点から・・だったな」

「そうだ」

二人の会話を聞いた老いた神官戦士は、理解を示して頷き。

「つまり。　モンスターの脅威が排除されたり、同じ脅威に晒される場合は、また違うと言う事か・・」

クラウザーは、敢(あえ)てその解釈に理解を示し。

「ま、こっちから脅威に近づく事はせん。　言葉通り、逃げるが勝ちだ。　だが、対処を講じた先で、様々に道は分かれる。　その場その場、有効な対処を迫られるって所だ。　ささ、無用な不安は要らぬ。　船内で寛がれよ。　旅芸人なども多く乗っている故、今日は昼からショーを催す。　夕方にでも成れば、全てにカタが着いていよう」

クラウザーの語りで、冒険者達は落ち着いた。　最も感受の鋭い冒険者達を安心させる事は、後から気付く冒険者達の説明役にも成ろう。　少々、ハッタリや虚実の混同した内容だが。　クラウザーはKを信用しているので、何て事無いと思った。

冒険者達を戻した後も、クラウザーは船内の方々を回り。　無用な混乱を避けるあらゆる手を講じた。

先ず。　昼過ぎから、クラウザーの肝いりで行われる無料の演劇ショーと、誰でも参加出来る公開カジノイベントをでっち上げ。　旅人や、冒険者達の不安を散らす措置を取る。

次に。　夕方には、地下の下々にも食事を只で振舞うとして、噂話

の関心を一方に逸らす。

恐らく、Kがモンスターを排除したとしても、助けて来た客船は無事では済まないだろうと先読み出来た。　もし、何らかの救助や助力を行えば、次の立ち寄るホーチト王国の王都、大交易都市のマルタンにて、過分に補給を余儀なくされるだろうと思われた。　だから、消費出来る物は消費し、補給の出来る口実を作る事にしたのである。

クラウザーは、全てをKに託した。

あの包帯を巻いた下の素顔を知るクラウザーは、Kの恐ろしき実力も目にしている。　幽霊船如きに、この船が沈んでも死ぬ男では無い事は理解していた。　だから、船の命運を半分預けたのである。

クラウザーは、不思議とKを思う。

前の彼なら、自分の弟子の事など捨て置いただろうし。　余計な事をしない非情な男だった。

だが、今は違っている。　こんな非常事態の中でも。　Kやリュリュ、オリヴェッティと居る事で、一人の人間として、まだ若かった頃の生き生きとした気持ちが甦って居た。　久しぶりに、生きる一瞬一瞬が楽しいと思える自分が居た。

（楽しいなぁ・・。　こんなに血が熱く物事を真剣に考えるのは、久しぶりだ。　アヤツ等が戻るまで、じっくり待つとしようか）

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪クラウザーの弟子　ウィンツの決意≫

海上の上空で、魚を狙うワシが急降下を辞めた。　狙いを定めた所に、猛スピードで近づく何かを見たからだろう。

「・・・」

二つ並んだ船の二艘目の後尾に立ち、グングンと風に乗って加速する船の舵を切るのがKだ。　櫂を海に入れ、うねる船をコントロールしている。

時折、波にぶつかり、“ブワン”と跳ね飛ぶ船。　オリヴェッティは、何度驚きの嬌声を上げたか解らない。

だが、舵を取る櫂を腰に据えたKは、ただ一点。　向かう先を見つめている。

霧が晴れ、青い空の下。

（あぁ・・、もう乗ってた客船なんか見えないわ）

オリヴェッティは、遥か彼方に消えた大型客船が見えなくなっているのに、不安を感じてしまう。

しかし、先頭の船では。

「イェ～イ。　ヒャッホ～」

と、跳ね上がる船に喜ぶリュリュが居る。

Kは、リュリュに。

「リュリュ。　ヤツラのボロ船に乗り込むは、俺だけでいい。　着いたら、近くを行く襲われてる船にオリヴェッティを連れて上がれ。船に乗ってる人を、お前が守れ」

リュリュは、はしゃぎなら。

「はいは～い」

オリヴェッティは、ボンボン持ち上がる船に蹲りながら。　その疾走する音に負けない声を出す為に、悲鳴に近い声でKに。

「なっ・何でギリギリに助けにっ?!!」

Kは、前を見ながら。

「ヤツラは、目標の間近まで海に潜って近づくんだ。　潜ってる時は、早い潮流に乗る事も有るから捕捉出来ない。　狙いを定め、海面に浮上して来るのを待ってたのさ」

「じっ・じゃっ・・キャァ！　じゃあっ！！　私達の乗ってた船が狙われてたって、ウソぉっ？！！！」

オリヴェッティは、態と狙われていたと言って。　巻き込まれた形を話作り、襲われる船を助ける口実を作ったのではないかと思った。
何故なら、まだまだ自分達の乗る大型客船と幽霊船は、こんなに離れているからだ。

Kは、船のバウンドで大変そうなオリヴェッティ見下ろし。

「違う違う。　幽霊船は、正しく二つの獲物を狙ってる。　これから助ける船を襲うだけなら、もっと早い場所で待ち伏せするさ」

「ではっ、どっどどどうしてっ？　今に？」

「クラウザーの弟子とやらは、何らかのアクシュデントで航路から外れ。　南よりの諸島に流れてしまった。　船をどこまで直したのか知らんが、航海が出来る所までは修理したんだろう。　俺達の乗る船が行く一般航路に向かうべく、今は北上しているんだ」

「では、そのまま行けば、私達の乗っている船とっ？！」

「そう。　確実に鉢合わせするな。　船が軽い分、これから助けに行く向こうの方が早い。　北風が吹く大陸とは違い。　暖かいこの海域は、南よりの風が吹いている。　風を捕まえて置けば、夕方・・・いや。　昼下がりの遅くには、お互いが見えるだろう」

「まさかっ！！　其処まで尾行してくる気？」

「そうゆう事。　幽霊船の方が、やや強い南風を捕まえている様だ。クラウザーの弟子が操る北上する船と、ジリジリ幅を狭めながら。俺達の乗ってるクラウザーの船に目掛けて、目標に定めて居るかの様に、一直線に向かって来てる。　恐らく、二隻が合流する近くで、先ず北上しているクラウザーの弟子が操る船を襲い。　そのまま、俺達の船も襲う気だろうな」

Kの説明を聞いたオリヴェッティは、幽霊船を操る相手が随分と海や船に詳しいと思う。

「あっ・あ・・あのっ！！！　幽霊船を操るモンスターって、そんなに航海術に・・キャッ！　・・・ハァ。　あ・・詳しいんですかっ？！」

波にぶつかった勢いで、大きく揺さぶられたオリヴェッティは、もう疲れ始めた顔。　Kに何とか向って、聞くのが精一杯な様だ。

オリヴェッティを見て、薄く笑みを見せたKは、また前を向いて。

「幽霊船を存続させてるのは、強力な力を持ったゴーストモンスターだが。　その手下として船を操作しているのは、生前は船乗りだったり、船長だった幽霊を集めた高位のゴーストだったりする。航海術などの深い知識をそのままに残した彼らは、船を存続させるモンスターの忠実な僕（しもべ）として、生きた人の乗る船を狙う」

「まぁっ、生前の技能が・・」

「魔法を扱えるゴーストが居るのが、いい例だ。　ゴーストが何故に、自然魔法や精霊魔法を使えないのかは、生きているエネルギーを呼べるのが、生きた人間だからって話さ。　魔想魔術は、創造の

産物で。　ゴーストでも、思念が強くハッキリしていれば使える。
　それに、魔力は死人でも普通の人でも変わらず存在し続ける。
だから、悪魔やゴーストの一部には、より強い魔力や力を得る為に。
　死んだ人のソウル（魂）を食うのも居る」

ソウルイーターと呼ばれる部類のモンスターには、魂を食い成長をし続ける様々なモンスターが居ると、オリヴェッティは聞いた事が在る。

（なんて知識の深い・・。　本当に私がリーダーでいいのかしら）

オリヴェッティは、自分ではKに何も言えないのではないか。　自分は、リーダーでも只のお飾りに過ぎない気がする。

所が・・。

リュリュが、突然に。

「あ」

と、はしゃぐのを止めて言葉を発した。

波の上を走る音が凄い中、オリヴェッティはその声を耳に掠めたので。

（え？）

と、リュリュを見ると・・。

Kも舵を取りながら。

「不味いぞ。　幽霊船が、いきなり向きを変えた？」

オリヴェッティは、今度は驚きで。

「えっ？！！」

と、Ｋの方を振り返った。

★

老朽化した木造船“シー・フランク”の舵を取るのは、クラウザーの手元で１０年を過ごした男、ウィンツ・ボクマンである。　４０過ぎの男ながら、やや童顔の面は若く見える。　大きく丸い瞳は特徴的で、魚眼に似た雰囲気があった。　やや小太りながらもガッシリとした身体で、２メートル近い大男ながら。　古い手で回す舵を取らせたら、クラウザーも認める繊細な舵取りを行う玄人だ。

萎びた青いバロンズ風のコートを羽織り、船長特有の黒いツバの広いキャプテンハットを被るウィンツは、３階の操舵室から窓枠だけとなった窓を見上げた。

（このまま、真っ直ぐか）

船の前方、カモメなどよりも遥かに高い空に、鳥の様な影が見える。

しかし、あの影は只の鳥では無かった。　半獣半人と言う特異な

姿をした種族のハルピュイアだ。　手は、大空を飛ぶに適した翼であり。　足は、鷲や鷹の様な鋭い鉤爪を持っているが。　顔や肉体は、人間の女性と云う、モンスターに近い生き物なのである。

ハルピュイアの影を見上げたウィンツへ。　大き目の羅針盤を片隅で見る若い船員は、汗や垢で汚れた顔を向け。

「キャプテン。　しっかり北東方面に北上しています。　恐らく、夕方には航路に戻れるかと」

ウィンツは、ひとつ頷き。

「解った。　なんとか助かりそうだな」

と、返した。

十日近く前の事。

老朽化が激しく、魔力水晶体による動力が死んでいるこの船で、もう一度航海をしろと言われたウィンツは、雇い主に激しく噛み付いた。

だが、冬特有の風が強い嵐の様な雨が近づく航海を、ウィンツ以外の誰も怖がって尻込みした。　そして、雇われ船長達は、腕の良いウィンツに押し付けて来た。

遣りたくない航海だったが、自分以外に出来る人材が雇われ仲間に居なかったのだ。　一番安全に航海をして、乗客と船員を無事にフラストマド大王国まで送り届ける事が出来るのは自分しか無いと思い。　渋々ながらも引き受けてしまった。

冒険者３０名、一般客４７名を乗せたシー・フランク号は、航海二日目で嵐の中を揉まれ。　舵が利かなく成って、船の一部が岩の突き出た島に掠って損傷。　成す術も無いままに、１日漂流して、漁村を持つ島に行き着いた。

島に一つだけ存在した漁村の人々は、幾度と漂流して来た船を相手にして来た海の漁師達とその家族。　ウィンツ達を温かく迎え入れ、船の修理まで手伝ってくれた。

さて。　ウィンツ達を手伝ったのは、漁村の人達だけでは無い。流れ着いた諸島の中でも、船に使う木材は貴重なもの。　それを取るのは、漁村の人々と一緒に協力して漁を手伝うハルピュイア達だ。　灰色の艶やかな羽根を持つハルピュイアは、皮のコルセットベストにショーツやパンツで、人としての身体の部分を隠した姿をする。　手足が人なら、ショーパブにでも居そうなセクシーな女性そのものだった。

ハルピュイアは、人との関わりを深く持った半獣半人で、人と共に漁をし。　その分け前を、自分達の住む断崖の岩穴の住居に持ち帰ったり。　季節毎に諸島のアチコチで取れる果実や、ハーブを物々交換の物品として利用し生きている。　美しい美声の声音で、ハルピュイアは人間の言葉を喋るのだ。

ウィンツの船を航路へと誘導してるのも、そんなハルピュイアの一人。　島の人々は、ハルピュイアを大切にし、決して“一匹”とは数えない。　ハルピュイアを捕らえようとする人間には、断固たる姿で戦うのだとか。

先導してくれるハルピュイアの影を見上げたウィンツは、

（人間よりも慈しみ深い半獣人族か・・。　危ない航海の船長なぞ辞めて、あの漁村で穏やかに暮らしたほうが気が楽だな・・・）

と、思う。

大嵐の時に濡れた上にボロボロに成った地図が、机の上に散らばっている。

地図を無くしたウィンツに、船が多く通る航路までの案内を買ってくれたハルピュイアは、“マキュアリー”と言う名前の美しい者だ。
　母親を人に攫われ、漁村の人が彼女を育てたらしい。　悲しい運命にも挫けず、人を嫌わないマキュアリーに、ウィンツは一目惚れしそうだった。

飛んでいるマキュアリーの影を見上げて、ウィンツが思い返すのは、４日前の嵐を抜けた朝の事だ。　舵が思う様に利かず、破け掛けた帆を張って漂流していたウィンツの船。

何処かに停泊出来る島は無いかと、船首に立って望遠鏡を覗いていたウィンツの前に、突然マキュアリーは現れた。　魚を買い付けに来る船とは明らかに違うシーフランク号を、マキュアリーは怪しんだのだ。

だが、マキュアリーの姿に驚く素振りも見せなかったウィンツ。
ハルピュイアの事を知っていたからだ。

赤い艶が陽の光の当たる黒髪に生える、うら若い１８・９の娘の様なハルピュイアのマキュアリー。　いきなり現れた瞬間。　ウィンツは、妖精や精霊が人の姿を借りて現れたのではないかとすら思え

た。

凶悪なモンスターと間違えそうになる船員や、客の冒険者を宥めたウィンツは。　疑うマキュアリーへ船が壊れた事を告げた事で、漁村の場所を教えて貰えたのである。

さて。　島に有る漁村と諸島以外は、マキュアリーにとって外の世界と言って良かった。　大陸の事を知りたがる彼女は、気の大らかなウィンツに度々話し掛け。　悪い気のしないウィンツは、何かと朝晩話合った。　お互いの身の上話までし合って、マキュアリーの母親の事を聞いたウィンツ。

“大陸に戻ったら、俺が探してみようか”

攫われた母親の事を、ウィンツは探してやりたかった。　漁村で過ごした最後の夜、マキュアリーに言った言葉だ。

だが、マキュアリーはその申し出を静かに断る。　続けて出て来たマキュアリーの話は、ウィンツの男義と正義感を揺さ振るものだ。

ハルピュイアは、同じ獣人族の種類でも人と交わりの深い一族で。　その反動は、肉体に押し寄せているのだとか。　妊娠をすると、赤子は人に近い姿をして生まれる為。　非常にエネルギーを使う。　ハルピュイア達は、４０歳過ぎぐらいまでしか生きられない身体な上に、生涯で妊娠出来る回数も２・３度なのだとか。　そんな身体を人に攫われ、欲望の捌け口の代償に使われたら・・・。　攫われたハルピュイアの寿命は、持って１・２年と言う話は、嘘では無い。

ウィンツはその話に、久しく寝かし付けた正義感を燻らせ、横暴な

人間に対して怒りを覚えた。

（同じ人間でも、ムカつくな）

船長でも雇われで、自前の船や船員も持たない自分は、いい様に扱われる道具に過ぎない。　だから、船長として好きな航海に出られるのだからと、不条理にも怒らず、不満の殆どは飲み込んで来た。

だが、この話には、正直我慢が出来なかった。

思わず怒ったウィンツの姿は、マキュアリーには好感良く見えたのだろう。　外部の人間と初めて長々と話したマキュアリーだが、随分年の離れたウィンツに案内まで買って出てくれた訳だ。

前日の朝に漁村を出立し、丸一日航海をしているウィンツ。

マキュアリーは、海に潜った岩などの障害が在りそうな場所では、目立つ様に数度旋回して教えてくれるし。　ラグーンの様な場所では、余裕を持った距離で、方向の修正を飛ぶ向きで教えてくれる。

夜は、速度を落とした船の地下で休み。　その入り口は、ウィンツが見守る。

（今日の夕方で、彼女とはお別れか・・）

ウィンツは、マキュアリーとの別れが淋しく思えた。

しかし、だ。　異変は、そんな昼頃に遣って来た。

上空に高く舞い上がっていたマキュアリーが、何故か急に高度を落として来たではないか。

ウィンツは、何事かと思い。

「ジョベック、舵を頼む」

と、若い船員に言い。　舵取りを代わると、年配で足を悪くした船員頭のブライアンの肩を叩いて、彼は廊下に出て行った。

「ブライアンさん、どうしたんでしょうか？」

舵を握った細身の青年ジョベックは、硬太りの先輩船員で、天辺ハゲのブライアンに問うた。

「さぁ、ハルピュイアが降りて来たからな。　なぁ～にか在ったかもなぁ」

「もしかしてっ、別の船？」

「だといいな」

二人の会話が交わされる中。　廊下を走って甲板に出たウィンツ。　船首の方に降りて来たマキュアリーの方に駆け寄った。

一方、長い赤く艶やかに靡く黒髪をした美しい娘の様なハルピュイアのマキュアリーは、翼で風を受けてフワリと甲板に降り立つ。　そして、ウィンツの方に振り向くと。

「タイヘンっ、直ぐに引き返してっ！！」

と、歌声の様に美しい声を張り上げた。

マキュアリーの目の前まで来たウィンツは、

「一体どうした？」

マキュアリーは、翼そのままの右腕を東に向け。

「向こうに幽霊船が居るわっ！！」

ウィンツは、海の危険でも一番恐ろしい“幽霊船”と聞いて。

「何だってっ？！！！」

と、東の海に顔を向けた。

マキュアリーは、酷く脅えた様子で。

「漁村なら、聖なる結界が張られてるから助かるわっ。　海の上じゃっ、皆殺しよっ！。　幸い、向こうは結構近くに居るのに、こっちに気付いて無いみたい。　逃げれば、何とか成るわっ」

しかし、船長として経験の長いウィンツは、青褪めた顔で首を振り。

「気付いて無いハズは無い。　幽霊船は、数十里離れた場所でも、先の船や人を感じるらしい。　それに、無理だ・・。　漁村に戻るには、向かい風と成る。　風に逆らう航海では、このボロ船じゃ逃げられない・・。　戻るにしても、１日以上掛かる。　最悪だ・・」

マキュアリーは、空を見上げながら。

「私、助けを呼びに行くっ。　もう少し先に、別の船が居るかも知

れないっ」

と、羽ばたこうとする。

しかし、ウィンツは、そんな彼女の肩を掴んだ。

「駄目だ。　それだけは、出来ない」

ウィンツの一言は、マキュアリーには驚きだった。　再度彼に向いて、

「どうしてっ？！」

一人で決意を固めるウィンツは、東の海を睨み見て。

「海の上で、幽霊船に狙われた船の殆どが死滅する。　他の船を呼べば、死ぬ仲間を増やす様なモンだ。　航海をする船長の掟でも、幽霊船などのモンスターに遭遇した場合。　助けを呼ぶのも、行くのも禁じられているのさ。　被害を最小限にする為にな」

マキュアリーは、そんな絶望的な掟など恐ろしいとしか思えない。

「そっ・そんな・・、おかしいよっ！　助けを呼んじゃイケないだなんてっ！！」

ウィンツは、それでも船長としての意地は捨てられない。

「仕方ない。　幸い、この船に乗ってるのは少人数だ。　後で島に遣って来る商業船に乗って、クルスラーゲに戻ると言う客は大半で、君の住む漁村に残った。　今、この船に残るは、少なくなった１０

人程。　この船を囮にすれば、漁村の方々に貸して貰った小船に客を乗せて、ラグーンの先の小島にでも逃がせる。　俺がこの船を操縦し、幽霊船に突っ込むから。　マキュアリー、君は、小船を誘導してくれないか？」

ウィンツに驚く様な事を頼まれたマキュアリーは、激しく顔を振り被った。

「いやっ、そんなの嫌よっ！！！　私のお母さんを探してくれるって言ってくれた人を、このまま見捨てるだなんてっ！！」

だが、ウィンツは冷静だった。　マキュアリーの肩を両手で掴むと、彼女の目を見て。

「マキュアリー、変だと思わないか？」

感情的なマキュアリーは、涙すら浮かぶ強いめでウィンツを見つめ返し。

「何がっ？！」

「幽霊船は、獲物を見つけたら直ぐに襲ってくるのが普通だ。　君の目に、幽霊船はどう見えた？　襲って来る様子だったか？」

「・・いえ。　この船より少し先を、同じ方向に向かって・・・」

その言葉は、ウィンツには確信を与える物だった。　ウィンツは、自分達の目指す筈の北東を見据え。

「そうか・・。　恐らく、我々の進む先に、別の船が来ているのだ

な。　幽霊船の奴等め、態と船がお互いに見える所まで襲わない気なのだ。　一人でも多く、生け贄を求める気なのだっ」

ウィンツは、このボロ船を嫌って下りた冒険者の中に、魔法遣いや僧侶が居た事を今更に悔やんだ。

今、航海している船に乗る冒険者は、チームがバラけたらしい若い戦士と、学者で剣士の女性のみ。　他は、新たな働きの場を求めて移住する家族３人と、目つきの宜しくない浪々者らしき男性２名。　そして、年配の男性旅人１名と、吟遊詩人と踊り子。　客は、計１０名。

ウィンツは、ぐずぐずしては居られないと思う。　もし、この船が他の船が見える所まで行ってしまえば、巻き添えをし合って、皆殺しにされてしまう。　少しでも生存者を増やす為には、誰かが犠牲に成る必要が在る。

（俺だけで、俺だけで十分だっ！！）

ウィンツは、直ぐに動いた。　助けを呼ぼうと願うマキュアリーを抑えながら、甲板を行き操舵室に向かって。

「ブライアンっ！！！　ジョベックっ！！！」

と、二人だけの管理船員を名指しで呼ぶ。

操舵室に居た二人は、ウィンツの大声に驚き。　窓枠だけの窓から顔を出した。

ウィンツは、二人を見て。

「幽霊船が間近に居るっ！！！」

と、言い放った。

「げぇっ？！」

「ひやぁぁぁーーーっ！！！」

驚く二人に、ウィンツは怒声の如き声で。

「ブライアンっ、手下の船員２人と一緒に、漁村で借りた船に客を乗せて脱出の準備をしろっ！！　ジョベックは、同じく手下船員４人と協力して、船に積める最大限の食料を運び出せっ！！！　客と船員達は、このマキュアリーが案内するっ！！」

恐怖で震えるジョベックは、窓枠にしがみ付きながら震える声で。

「きき・・キやプテンはぁぁっ？！！！」

「俺がこの船毎、襲って来る幽霊船の囮に成るっ！！！　この先は、船が頻繁に行き来する航海路だっ！！！　あの海の道まで、幽霊船を案内する訳にイクかぁっ？！！！！　正念場だっ！！　気合を入れろっ！！！！！」

ウィンツは、流石にクラウザーの弟子だけ在った。　その冷静な判断とは裏腹に、手下を叱咤して気合を込めるだけの情熱や気持ちを持っていた。

船員としては、かなり経験の長いブライアンは、ウィンツの行動に

意気を感じ。

「応っ！！！　任せて下せぇっ！！！！」

と、５０を迎えた身体を起こして吼えたのである。

考え直してと叫ぶマキュアリーを他所に。　ウィンツは、リビングや食堂と成る二階の屋根に上って、窓枠から操舵室に上がり込む。

そして、舵を握ると、一気に大きく右へ切った。　船は、小回りで旋回し、南東方面に向き。　更に、更に南へ向いた。

船が一転して南へと逃げる方面に向いた直後。　ウィンツは、慌てて遣って来た冒険者の二人と面会した。

灰色のロングコートに、全身を包む鎧のプレートメイルを着た大柄な男は、片手用のハンドアクスを三振りも扱う戦士のビハインツ。

ちょっと面長の顔ながら、細い目や大きい鼻などが、顔の潰れた様な印象を与える老け顔の人物だ。　ブラウンの髪は短く、剛直な気性を伺わせる。

もう一人は、学者ながら細剣を腰に帯びる女性である。　長い金髪を知恵の輪の様に結って垂らすのだが、服装は男装の様な凛々しき美剣士とも見える。　艶やかな赤いコートには、花の刺繍が素晴しい。　名前は、ルヴィアと云った。

操舵室に踏み込んできた二人を見たウィンツは、

「おう、お二人さん。　大変な事に成った。　悪いが、船員達と協力して、逃げる準備をしてくれ」

ガラガラ声の戦士ビハインツは、

「アンタはどうするっ？！！」

舵をする輪を、軽く二度叩くウィンツ。

「この船で、幽霊船に体当たりする。　皆が逃げる時間は、稼ぐつもりだ」

ハルピュイアのマキュアリーが、必死に考え直してとウィンツに言う。

学者で剣士のルヴィアも、やや貴族調子の言い方で。

「船長が死んだ所で、我々が助かるとは限らないのでは？」

と、意見を言うのだが。

ウィンツは、決意を固めた顔で。

「少しでも大陸から離れ、お前達が航海路に逃げる間に、向こうにダメージと生け贄をくれてやるまでさ。　それしか、君達を助けられない」

「だがっ」

と、犠牲を嫌って言うビハインツへ。　ウィンツは、顔を怒りの形相に変えると。

「バカヤロウっ！！！！　航海路はっ、数多くの船が行き来する海

の街道だぁっ！！！！　奴等がのんべんだらりと俺達を進ませるのは、他に巻き添えで引き込む船が近くに居る可能性を示してンだぁっ！！！！」

ウィンツの話に、ビハインツとルヴィアは言葉を失くす。

前を向くウィンツは、冷静を取り戻そうと顔だけを歪めながら。

「巻き添えを出す訳には・・・、船長として絶対に許されない。アンタ達を見す見す死なせられもできねぇしな。　犠牲を最小限にするしか、今は方法は無いんだ・・。　早く、この船から離れてくれ・・。　時間が無いんだからよ」

一人に成ってるビハインツとルヴィアだが、仲間意識や人情の無い冒険者では無かった。　ウィンツの必死な意気込みが、事態の切迫した緊張を伝える。

二人が黙ってしまった中で。

「キャプテーンっ！！！　てぇへんだぁぁぁっ！！！！」

と、ブライアンが走りこんで来た。

ウィンツは、直ぐにブライアンを見つめ。

「どうした、何か有ったか？」

“ゼーハー”と息をするブライアンは、硬太りの身体を揺すって海に指を向けると。

「くっくくく・・」

「落ち着け。　ハッキリ言わないか」

「あ・・くっ黒い霧に包まれた何かがぁっ！！！」

その言葉にハッとするウィンツは、操舵室後部の窓枠に走り寄った。

ルヴィアとビハインツも、彼の後を追う。

皆が見る窓枠の外。　海上の遥か彼方に、黒い何かが見える。　海全体では無く、その一部だけが黒い。

歯を食い縛ったウィンツは。

「噂通りだっ。　昼間に船を襲う時、幽霊船は黒い靄で狙う船を包み、その行く手を阻んでしまうと聞く。　奴等、やっぱり近いこの船を標的に据えてたんだっ！」

すると、学者のルヴィアは。

「それだけじゃないハズ。　あの靄は、闇の結界なんだわ・・」

と、眉間にシワを寄せた難しい顔をして言う。

ビハインツは、ルヴィアに。

「どうゆう事だ？」

「陽の下では、死霊系や亡霊系のモンスターは活動がしにくいのだ。

でも、あの結界の中に狙う船を閉じ込めてしまえば、自由にモンスターを差し向け襲わせる事も可能と成る。　幽霊船を操ってるモンスターは、凄い高位のモンスターだ」

その時。　後からまた手下の船員が来て、ブライアンに何かを言う。

話を聞いてギョっとしたブライアンは、

「キャプテンっ！！　こんな時に大事だっ！！！！」

振り向いたウィンツに、ブライアンは続け。

「あの客として乗ってた放浪者の野郎等、ドサクサに紛れて客から頂いた運賃を持ち逃げする気だっ！！！　今、船長室から出て来たその二人と、ジョベック達が逃げる小船の奪い合いを上でしてるって・・・」

「何だってぇっ？！！！」

これには、流石のウィンツも思考が止まる程の驚きを感じた。

ビハインツは、ルヴィアを見て。

「二人で取り返そう。　このままじゃ、取り返しがつかない事に成るっ」

頷くルヴィアも、

「当たり前だっ！！　そんな身勝手なヤツ、先に幽霊船のエサにしてくれようっ」

と、即座に了承だった。

ウィンツは、二人に。

「皆の逃げる船だ。　必ず奪い返してくれ」

二人は頷いて、ブライアンの空けた廊下に飛び出して甲板に向かった。

舵を取りに戻ったウィンツは、

（肝心な時にツイてない・・。　親方の言う通りだぜっ！！）

と、舌打ちする。

十代後半でクラウザーに弟子入りしたウィンツは、航海士として船長としての知識・技術を習得するのは、非常に早かった。

だが、クラウザーは、彼を中々独り立ちさせなかった。　他のウィンツと同じ年頃の者を、己の船団の各船を率いる船長にしても、ウィンツだけはさせなかった。

ある航海上の夜。　別の見習いが、クラウザーにその事を問う時。

ウィンツは、その受け答えの内容を聞いて驚いた。

クラウザーは、質問にこう答えた。

“アイツは、才能だけなら俺より上さ。　度量も、器量もある。

恐らく、十分に船長として通用はするな”

“では、どうしてクラウザー様は、ウィンツさんを手放さないんで？　各小さな船団を率いる船長にしてもいいと、自分は思うんですがね”

“・・、口で説明するのは難しいんだが・・。　言い方を解り易くするなら、ヤツには運が無い”

“運？　あの、博打とかで重要なヤツですか？”

“おうよ”

“そんな物が、船長には必要なんですかい？”

“おいおい、運をバカにしちゃ～いけねぇよ。　例えば、嵐を予期するのは、知識と経験だ。　だが、そんな中に突っ込まされる依頼が舞い込んで来るとも限らない。　幽霊船やホラーニアン・アイランドの様なモンスターに遭遇するんだって、一つの運次第・・だろ？”

“まぁ・・そうでしょうが”

“世間的な意見からすると、船長ってヤツは腕と技能と度胸と言われる。　だが、その三つの条件を揃えた優秀な奴でも、時として死ぬ者も居れば。　劣って居ても、死なないヤツも出てくる。　その命運は、ツキってヤツよ”

“んじゃ～、ウィンツさんは、そのツキが無いんですか？”

“そうだ。　アイツを副船長に据えると、必ず何かしら起こる。

一人で解決出来る範囲の面倒事なら、それでイイがな。　それがそうも行かなくなると、実に危険だ。　船長は、多くの船員と、積荷や旅客を預かる。　運の悪いヤツに任せたら、安全なものも安全で無くなる時が必ず来る”

クラウザーは、こう言った。

それを聞いた十数年前。　ウィンツは、クラウザーもヤキが回ったと飛び出す決意を固め。　金を積む商人の引き抜きの話に乗っかった。

だが、結果はクラウザーが正しかった。

独り立ちしたウィンツだが、その船長人生は波乱に満ちたものだった。　雇われて半年して、雇い主が偽者の商品を輸入して店を潰した。　その積荷を運んだのは、誰でも無いウィンツ自身。　その次に雇われた所では、一番大きな船を動かしていた時に海賊に襲われてしまう。　客の女性の大半と、積荷を奪われてしまい。　責任を負わされた彼は、クビにされて投げ出された。　三度目と雇われた所では、長く船長を出来た。　が。　彼を雇う商人の座が、親から息子に譲られると。　インテリ然として、人を駒としか見ない息子とウマの合わないウィンツは、煙たがられ解雇させられた。

そして、四度目の因業な雇い主に雇われた末の、今回である。

（嗚呼・・、親方の言わんとしてる意味が、今頃に解るなんてなぁ・・。　しかも、俺も死ぬ運命だ。　全く、ツキが無いのは仕方ない）

クラウザーの元を離れた他の船長達とは、確かに巡り合わせは大きく違っていた。　御蔭で、腹を括る速さだけは人一倍に成れた。

ウィンツは、皆を逃がしてから少し逃げ回り。　追い付かれた後は、幽霊船に船毎体当たりして死のうと考えた。

★

さて、ブライアン達を伴って、老朽化の目立つ甲板に出たビハインツとルヴィア。　飛び出す様に甲板の上に出た二人は、“わーわー”と騒ぐ方に顔を向け。　後から出て来たブライアン達よりも先に二人で見合って、甲板脇の通路に踏み込んでゆく。

所が・・。

「クソったれっ！！！！　もどれぇぇぇぇぇぇっ！！！！！！」

若い男性の大声が、海上の上に響き渡った。

ビハインツとルヴィアには、通路の先で縁から乗り出す若い船員と他の客が見える。　何かを必死で言っているのを見て。

（まさかっ？！）

と、二人も甲板の縁から身を乗り出し、海を見下ろすと・・。

幽霊船から逃げるこの船と枝分かれする様に、一艘の小船が離れて行く。

「あばよっ！！！　幽霊（ゴースト）にヨロシクっ！！」

と、小船を漕ぐ背の高い男が、自分達をからかう様に言ってよこし。

その男と向かい合うもう一人が、

「コイツは返すぜっ！！　ヒャッハーっ！！」

と、海に人を突き落とした。

すると、甲板に居た女性が。

「キャァっ！！　アナタっ」

と、口走る。

小船から突き落とされた者は、必死に海でもがき出す。

「たっ、うぷ・・助けてくれっ！！」

若い船員ジョベックは、右腕を抑えた様子で。

「はっ・早く・・ロープをっ！！　暴れる音を嗅ぎ付けて、サ・・サメがくるっ」

下働きをする繋ぎを着た船員達は、大慌てでロープを用意し出した。

ルヴィアは、直ぐにジョベックに走り寄った。

「船はあの一艘だけっ？！　・・って、酷い怪我っ」

ジョベックの右腕には、斬り付けられた傷が出来ていた。　汚れた白い上着の一部を、真っ赤に染める程の出血であった。

怪我に因る痛みから、ねっとりと脂汗を掻くジョベックは。

「ク・クソ・・。　アイツ等・・船長室の金を奪って・・逃げ・・・。　すま・済まねぇ～・・キャプテンっ」

と、言い。　涙を浮かべる。

その近くでは、泣きじゃくる女の子が背中の衣服を引き裂かれたままの姿で、母親らしき女性に縋り付いていた。

逃げた二人は、最初この少女と母親を奪い人質にしようとした。

だが、咄嗟に庇った父親が身代わりに成ったのである。

さて、引き上げられた家族の父親を見たルヴィアは、ブライアンに。

「他に逃げ場は？」

斬られた船のロープを手繰るブライアンは、真剣な目で。

「解らねぇっ、キャプテン次第だ」

と。

ルヴィアは、ビハインツを見て。

「船長に言いに行こう。　このままでは、何れ・・」

と、云う言葉を途中で止める。

甲板の上で、二人は立ち尽くす踊り子達を見た。

幽霊船を包む黒い靄は、ハッキリと目視出来る様に成って来たのだ。

船員や客達が、その靄を見て立ち尽くしていた。

急いで操舵室に戻った二人は、舵取りをするウィンツに事を告げる。

「何てこった・・、このままじゃっ。　クソったれがっ！！」

脱出用の船を既に奪われてしまった事に、ウィンツは憤りを隠せなかった。

ビハインツは、南側の外を指差し。

「帆を張って、とにかく逃げようっ」

顔を回らせたウィンツは、操舵室の入り口に見えたジョベックが大怪我をしているのに驚く。

「ジョベックっ、お前どうしたっ?！」

ブライアンと他の下働きの船員に支えられるジョベックは、泣き声で。

「キャプテン、す・すす・・すんません。　奴等に船・・奪われちまった・・。　身体張って止めたんだがっ、奴等はぼ・冒険者崩れ

だった・・」

こう言われて思えば、ウィンツも逃げた二人には不気味さを覚えていた。　ハルピュイアを見る目が不気味だったし、何かと客の中でもコソコソと孤立していたのだ。　恐らく、手配でもされる輩の類だと思えた。

「いい、気にするな。　ブライアン、ジョベックの手当てをしてやれ」

「へい。　ですが、この先は一体？」

ウィンツは、また振り返り。　遠くにハッキリ見える靄を見て。

「この先には、“船の眠る丘”と呼ばれるラグーン地帯が在る。無理に入り込んだ船が、尽く座礁する所から付いた名前だ」

「知ってやす。　一度乗り上がったら、二度と海に戻せない場所ですな？」

「おう。　だが、俺はクラウザー様と一緒に居た頃。　とある理由から、あのラグーン地帯に入り込んでしまった事が在る」

「マ・マジですか？」

「あぁ。　だが、実はな。　あのラグーンは広大だが、切れ間から海の続く中に入ると、獣道の様な切れ目が縦横無尽に走っていて。　コンパスさえあれば、この船の大きさなら縫う様に進んでいける。　その中に入れば、幽霊船もやり過ごせるし。　上手く南西に抜ければ、漁村の在った島にも近道出来るはずだ」

ルヴィアは、目を見開き。

「助かるな」

と、ビハインツと頷き合う。

だが、ウィンツの顔は、非常に難しい顔のままで。

「だが、障壁が多大だ」

ジョベックは、痛む顔のままに。

「そ・そうですよっ。　だっ・だって風は・・」

ウィンツも頷き。

「そう。　風が南風。　帆を張って風を掴み、早く進めない。　海流も不規則で、上手く乗り切れないのが現状だ。　今、何とか進めているのは、修理出来た風で回る風水車輪のお陰さ。　だが、船体脇に付いてる風水車輪だけでは、風を味方にするのに不十分。　更に、前の嵐の時で、非常用の人力で漕ぐ大櫂もヤラれてる。　ラグーンに入る前に、幽霊船に追い付かれる可能性も十分に強い」

ルヴィアは、最早イチかバチの勝負だと悟る。

「出来る事は、祈るだけなのか・・」

と、一瞬でも逃げ切れると喜んだ自分が、実に間抜けに思えた。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪最強のゴーストバスター　此処に降臨・・だよ（リュリュ）≫

海上を疾走するKやオリヴェッティを乗せた船は、ドス黒い靄の塊を見つけた。

（嘘っ！　こっ・・これが・・・幽霊船っ？！！）

晴れた昼下がりの夕方に差し掛かる目前の空の下。　オリヴェッティは、黒い靄の塊の上一帯だけ、雷雲が蟠るのを見た。

灰色というより、くすんだ鉛色の雨雲は、絶えず落雷の様な音を伴った稲光を発し。　その雲にまで届こうと云う靄。　丸で、靄の壁と雨雲の屋根を持つ、巨大な城が海を動いていると思えるのだ。

その靄に近づくと・・。　不気味と云うべきか、丸で胸騒ぎを掻き毟りたくなる様な闇の波動が、息づく胎動の様に木霊して感じられるのが解る。　オリヴェッティは、強い波動に気を引き締めた。気をしっかり保たないと、恐怖が心に居座って動けなくなりそうな・・。　そんな畏怖すら、この靄からは感じられる。

そして、靄の掛かる所に近づくと、リュリュは身構えた。

急にリュリュが身構えるので、オリヴェッティが何事かと思う時。

ーヴア〝ア〝アァァァ〜ー

不気味な呻き声が聞こえ。　人の悩み苦しむ様な顔をしたゴーストが、フワ〜リと青黒く光って現れたではないか。

「モッ・モンスターっ！！」

驚くオリヴェッティは、船底に転がしたままの杖を手に取った。

が。

それより早く、リュリュの両手が淡く蒼翠のオーラに光り。　空気を裂く音を奏で、半透明なオーラで出来た爪が現れる。　リュリュは、引き締めた顔で目を凝らし・・爪を振るった。

オリヴェッティの目が、見開いたままに止まる。

（斬った・・、亡霊（ゴースト）を・・、爪で）

群がる様にリュリュに纏わりついて来たゴーストだが、リュリュに素早い爪に斬り裂かれて消えて行く。

一般武器を持たず、魔法も使わずしてゴーストを倒したリュリュ。

Kは、靄の中に船を走らせる風が、一気に弱まったのを解った。

闇の波動が垂れ込めた海面にぶつかり、風の力が弱められている所為だろう。　だが、風の力が強いから、そのまま靄の中にまで船が進むのだ。　リュリュの力と、この船を動かす主の力は、微妙にリュリュの方が強いらしい。

リュリュに戦いを任せても、何の動揺も見せないK。　“子供”だの、“ガキ”だの言っていた彼だが、リュリュの能力に一つの安心を持っていると云えよう。

さて。　緩やかに靄の中に突入する中で、最初に見えて来たのは、何かの影。

Kは、舵取りを止め。

「リュリュ、交代だ。　俺がボロ船に乗り込んだら、右側先に離れ。直ぐ其処に居る船に近づけ」

と、云ってから。　オリヴェッティの肩を軽く掴むと、前のリュリュの船に乗り移りながら。

「オリヴェッティ。　助ける船に乗り込んで、船長に事の次第を説明してくれ」

オリヴェッティは、震えそうな唇を強張らせ。

「それ・それだけ？」

「後は・・・、そうだな。　靄を伝って、船を襲う為に遣って来るモンスターの排除のみ。　リュリュが一緒だから、まずは大丈夫だろう。　只、逃げる船の進み方がなんだか変だ。　壊れてるかもな

ぁ」

リュリュも。

「海面を伝わってる波紋がヘンだよねぇ～。　左右に震えてるみたい」

「だな。　蛇行し始めてる所を見ると、船の上にモンスターが乗り込んでいる可能性も有る。　二人も、気を引き締めろ」

真っ黒い靄の壁の中は、意外に視界は良好だ。　その内、靄を抜け切ると、高さの有る古い船が見えて来た。　甲板に出る建物は、操舵室のみで。　船体の幅は中型船なのに、高さだけは大型船並みの船だ。　船体の所々に穴が開き、部分部分が壊れている。　マストを形作る三本の太い柱は、どれも軒並みヘシ折れている様だ。　確かに、藤壺や磯巾着のこびり付いた船体などは黒ずんでいて、海底から引き上げられた沈没船の様な姿の見たとおりの幽霊船だった。

幽霊船を見たリュリュは、

「うひゃ～、スンゴイね。　ボ～レイさんの塊みたい」

オリヴェッティも、そのリュリュの表現の意味は解る。　闇の力が蟠り、船全体を取り巻いている。　感受的な感覚を研ぎ澄ませると、返って受け止め過ぎて気絶しそうな程に感じられてしまうだろう。

それ程に、闇の波動が強いのだ。

Kは、船が幽霊船の船体下に近づいたのを見計らい。　壊れている船体の穴の開いた場所から突き出した木の板に、軽々と飛び上がる。

（凄い・・・）

見ているオリヴェッティは、その飛び上がった高さですら、自分の倍以上は有る様に見えて。　Kの見せぬ能力の高さに、限りが有るのか解らない。　どうして、自分がリーダーでいいのかが、解らなかった。

一方。

ただ壊れて乗っているだけの木の板に飛び乗ったKは、手前の海側に板をずらしたりする様子も無く。　丸で体重が無いかの様に歩いて、船体の中に入って行った。

それを見送ったリュリュは、オリヴェッティを見て。

「んじゃ、いくよぉ～」

ハッとKの行った方から我に返ったオリヴェッティは、

「えっ？　あ、えぇ」

リュリュは、モワモワと回りに漂い近づいて来るゴーストを、また風のエネルギーで生み出した爪で斬り裂くと。　海上を駆ける風の力を強めて、二人の乗った船を先に進ませる。

「・・・」

心配になり、Kの行った穴を見たオリヴェッティだが。　炸裂する光の様な強い力が一瞬だけ鼓動し、穴の周囲に蟠る闇の力が、丸で削り取られる様に弱まったのを感じた。

（戦っているんだわ。　一瞬の煌きの様な力・・・なんて神々しいんでしょう）

その瞬間、実感出来た。

“Kは、絶対に負けない”

と・・。

リュリュは、幽霊船の脇を抜けながら、船の甲板にドス黒い闇と魔の力を持った何者かが居る事を悟る。　そして、その周りに、次々とモンスターが生み出されている事も。　逃げる船に向かって伸びる暗闇の靄に中には、ゴーストの呻きや鈍い光が感じられている。

（い～そご）

数の多さに、リュリュも少し怖かった。　助けた船の人が、殆ど死んでいるのではないかと思えたからだった。

★

K達が幽霊船に辿り着く少し前だった。

「船長っ！！　もう駄目だっ！！！」

操舵室の後部窓から、ブライアンが叫んだ。　幽霊船を取り巻く靄が、この船の直ぐ其処に伸びて来ているからだ。

波とぶつかる難路の逃げ道を行くウィンツは、追い風や向かい風の力を使って回る風水車輪の軋みを聞いて焦っていた。　風の受ける方向で、前回りや後ろ回りをして前に進める様に工夫された風水車輪だが。　強い海流や波に逆らう形では、回転が鈍って軋む。　その音が、ギィギィ・・ギシギシと聞こえているのだ。

「諦めるなっ！！　ラグーン地帯は、もう直ぐ其処なんだっ！！！」

見上げる空には、マキュアリーが先行している。　頻りに前を翼で示し、水平線の直ぐ先にラグーンが見えていると訴えている様だ。

怪我をして動けないジョベックは、片隅で蹲る。　出血が酷く、やっと血の出は鈍ったが、出た量も衣服を染める血で解る。　早急に手当てし、医者が僧侶の手を借りなければ死んでしまうと思えた。

甲板後尾に出ていた下働きの船員が、

「靄がぁぁっ！　靄が掛かるっ！！！！　わっ、わぁぁっ、ゴーストだぁぁっ！！！！！」

と、大声を上げた。

（チィっ！！！　追い付かれたぁぁっ！！！！）

ウィンツも、此処まで来て限界とは悔しい。　少しでも先に逃げ様と思う気持ちが、焦り拗れて思考を鈍らせた。

丸で、逃げる船を捕まえる黒い大きな掌の様に、広がりながら忍び寄って来た靄。　下働きの船員達６名と客などが一緒に成って、服やマントや麻袋を振り靄を退けようとしていたが。　遂に、靄は船の後尾にフワフワと辿り着く。

靄を振り払おうと近くに走った船員の目の前に、仄かに蒼黒い光や青白い光に暗い緑の筋を光らせるゴーストが見えた。

「うわぁぁぁーーーっ！！　モッ・モモモモ・・モンスターだぁぁぁっ！！！！」

その苦悩するゴーストの顔を見た家族連れの客である父親は、娘を抱き抱えて船内に逃げようとする。

其処で、マントを捨てたルヴィアが。

「船長っ、このまま逃げろっ！！！！　モンスターは、我々が引き受けるっ！！！」

と、鋭い声を発する。

ビハインツも、船員や客達に。

「逃げろっ！！　前の甲板に逃げろっ！！！」

と、両手にアクスを握った。

（チクショウっ！！！　只の武器で・・・）

ゴーストを普通の武器で倒せない事は、十分に理解している。　歯

軋りをするビハインツに、

「使えっ」

と、ルヴィアが差し出したのは、取っ手の付いた薬壺だった。

「これは？」

と、聞き返すビハインツに、ルヴィアは。

「聖水だ。　武器に掛ければ、少しはゴーストを切れる」

「おぉ、成る程。　これで斬れる、助かる」

左のハンドアクスを脇に抱えたビハインツは、ルヴィアから壺を受け取った。

ルヴィアも、自身の細剣を引き抜き。　もう一つの聖水の壺を開いて、剣に掛けた。

重い舵を支えるウィンツは、

「大丈夫なのかっ？！！　ゴーストに普通の武器は効かないだろうっ？！！」

と、大声を掛ける。

ルヴィアは、靄がジリジリと向かってくる方に走り出しながら。

「聖水を持っているっ。　武器に使えば、この通りだっ！！」

と、女声を張り上げ、靄の中に見えたゴーストを一振りで斬り倒した。

窓枠にへバり付いていたブライアンは、その光景を目の当たりにし。

「き・・斬ったぁぁ・・。　ゴっ・ゴゴ・・ゴーストを・・斬ったぁっ！！」

ブライアンの大声を聞いて、少しでも足掻く手段が出来た事を知るウィンツは、

（何がなんでも逃げてやるっ！！）

と、心に叫び上げた。　戦う二人の為にも、最後まで諦めたく無かった。

しかし、事態はどんどん悪化してゆく。

「うわぁぁっ！！　中に入って来たぁぁぁっ」

怖くて、一人で地下の船室に逃げた旅人の男性は、ヨレヨレのツバ広帽子を何かに引っ掛けたとベットの上で見上げると。　なんと其処には、壁を擦り抜けてきた亡霊の顔が見えていたのである。　大慌ててベットから転げ落ちる彼は、廊下へと飛び出した。

一見、ただ彷徨うだけの亡霊だと思うが。　その恐ろしさは、攻撃態勢に入ると解る。　ピカピカと光り出し、呻きが喚きに変わると・・・。

ーピシっ！！ー

空気を切り裂く音と共に、部屋の中に備えて有る花瓶が宙を飛んだ。
ポルターガイストである。　思念を念動波に変え、窓を割ったり花瓶を飛ばしたりする。

この攻撃の最大の特徴は・・・。　甲板の後尾で、その威力が伺える。

「ビハインツっ、気をっ・・・」

鋭く言い放たれ掛かったルヴィアの注意は、途中で遮られた。　自分の目の前を、強力な思念の波動が飛んで行った為だ。

「うおおおっ！！！」

目に見えない衝撃波を突然に食らったビハインツは、馬車にでも撥ねられたかの様にフッ飛ばされ。　甲板の縁へと転がった。

ーウワアァァァァァっー

船の甲板後尾には、小さい亡霊に囲まれた、一際大きな亡霊が居る。
雄叫びの如く呻き、ウネウネと伸び上がった。

そう、亡霊達は集まり、その力を増幅出来るのだ。　この亡霊に取り囲まれると、人の精神を慄かせて絶望させる“恐怖の囁き”を行う。　恐怖に魅入られた心は、短い間に亡霊から切り離し。　僧侶の魔法や、踊り子・吟遊詩人の歌う魂静めの歌を聴かないと、自我が壊れてしまう恐れが出てくる。

「くっ、はっ」

近づく亡霊の一匹を突き、更に回り込んできた亡霊を振り返り様に斬り上げたルヴィアは、ビハインツの元に走り寄った。

「おいっ、大丈夫か？」

鉈の様なブレード型のハンドアクスを手に、少しヨロめきながらも膝を上げたビハインツ。

「だい・・大丈夫だっ。　クソ・・ゴーストのクセに、・や・・遣りやがるゼ」

完全に飲み込まれた後尾先端を見るルヴィアは、

「集まったゴーストは、力を強くする。　集まり出したゴーストは、優先的に斬った方がいい」

「そ・そうか。　ゴースト系と戦うのは、これで二回目なんだ・・。腕が足りねぇ～な」

と、ビハインツは苦し紛れの気持ちを吐いた。

ルヴィアから見て、ビハインツの腕前が駆け出しとは思えなかった。
恐らく、今まで相手にしたモンスターの方向が一方的なだけで、戦う能力の劣りとは思えなかった。

立ち上がったビハインツと、彼の脇に構えたルヴィアだが。

ーバァーーーーンっ！！！！ー

と、凄い破壊の音が耳を劈く。

「わぁっ」

「うおっ」

音と共に、大きく揺れた船体。　体勢を崩した二人は、粉々に成って散って行く木の破片が舞い上がったのを左に見た。

「一体何だぁっ?!!!」

舵を大きく取られて、船体が傾き横倒しに成るのではないかと思える程に驚いたウィンツ。

足を取られながらも、甲板の縁に跳び付いたルヴィア。　船体側面を見下ろした所で、視界にとんでもないモンスターを入れ。

「不味いっ!　“ニーブガイスト”だっ!!!!!」

と、海上に声を響かせた。

ーウワウワウワウワァァァ・・・。　シネ・・シネ・・・シネェェェ・・・ー

男だか女だか区別の付かない不気味な声が、幾重にも重なった様な恐ろしい声が響く。

膝を甲板に崩しながらも、近寄ってきたゴーストを斬り払ったビハインツは、

「何だそらぁっ?!　そりゃっ!!」

と、また向かって来るゴーストを斬る。

ルヴィアは、いきなり震える声で。

「あああ赤い・・大きなゴーストだぁっ!!　大きな人の頭蓋骨が、炎の様なエネルギーの中に浮いている亡霊モンスター・・・」

そんなルヴィアを見返すビハインツは。

「強いのか?」

問うたビハインツは、自分の質問に対し。　脅えた目を向けて来たルヴィアを見て、相手にしているゴーストなど足元にも及ばないモンスターなのだと解った。

（最悪だぜっ!!　此処までかぁっ?!）

ビハインツは、海に飛び込んでも逃げる事など出来ないと解っていた。　命を捨てる時が、此処に来たと思い。

「仕方ねぇ、死ぬまで暴れ捲くるしかねぇな・・。　行くぞおぉおぉっ、オラァァァァァ!!!!!!!!」

立膝の体勢から、立ち上がるのと同時に走り出したビハインツ。目指すは、更に大きく融合しようとしているゴーストにだ。

「待てぇぇっ!!!」

ルヴィアは、ビハインツの姿に驚き。　竦み掛かった身を立たせた。
彼女の脳裏に、過去の記憶が甦る。

前に一度、“ヂュラハーン”に出会った時、その恐ろしいオーラに逃げる事しか出来なかった。　高位の僧侶が3人も居るパーティに入っていた彼女だが、リーダーが死んでチームがバラけたのである。
正直、亡霊に対しての対処する知識は持ち合わせるが。　何度も恐ろしい目に遭った亡霊や死霊を相手にするのは、嫌だった。

だが、もうそんな事を言ってられない時なのは、彼女も解っている。

（今、跡(あと)を行く。　ロアーダ、私を待っていろっ）

彼女の居たチームのリーダーであった神官戦士ロアーダ。　無骨で不器用な男だった彼は、貴族の家を飛び出し冒険者に成ったばかりの、二十歳そこそこのルヴィアを仲間にしてくれた。　腕前を問わず、仲間として色々教えてくれたロアーダ。　彼は、何事にも真剣なルヴィアに恋心を抱き。　幾度と告白を重ねて来た純粋な人間だった。

だが。　ルヴィアも理由が在って。　２５に成る今まで、男性に不慣れな生活を貫いてきたルヴィアは、その告白に結局は応えられなかった。

大怪我をした仲間の一人を助け、デュラハーンから逃げた自分。
殿(しんがり)と成って、仲間を逃がして死んだロアーダ。

彼が死んで初めて、自分もロアーダを好いていたと悟ったルヴィア。

残ったチームの仲間達が、もう一度一緒にチームを組もうと言って来た。　だが、ロアーダを見捨てた面子で、のうのうと冒険など出来ないと思ったルヴィア。　自分の弱さを恥じ、再結成の話を蹴ったのである。

ビハインツの捨て身を見て、ロアーダの姿を見た気がするルヴィア。　逃げる場所が無いと解っているだけに、此処で散る決意を固めたのだった。

「最後まで・・・諦めはせぬっ！！！」

再び、気炎を吐いて亡霊の群れの中に飛び込むルヴィア。　この亡霊達を守り、また守られるのが靄の様だ。　亡霊達を斬り倒せば、息を吹き掛ける程度だが、靄も薄まる。

纏わり付く亡霊を倒し捲くった二人。

一方で、地下の船室を見て来たブライアンが、操舵室のウィンツの元に戻り。

「キャプテーーーーンっ！！！！　赤いバケモノがぁぁっ、船体の壁を壊し回ってるっ！！！！！！」

おぞましい亡霊を見てしまった彼は、もう発狂寸前の様な顔をしていた。

船の推進力を生む風水車輪が壊れたのを、ウィンツは舵の揺らぎから解っている。

「ブライアンっ！！！　もういいからジョベックを連れて行けっ！

！　甲板の前にっ、行けぇっ！！！」

この緊急時でも諦めもしないで。　そして、船員を第一に考える船長を、ブライアンは初めて見た。

「キャプテン・・死ぬのは、みんな一緒ですぜ・・・」

縋る様に、前に出て言うブライアン。

すると、ウィンツは鬼の様な怒りの形相を見せ。

「バカやろうっ！！！！！　ラグーンに逃げ込めたとすればっ、俺が死んでもお前達が生きてりゃ何とか成るっ！！！！！　望みってのはなぁっ、死にゃ諦められんだっ！！！！　せめて死ぬまでっ、男なら喰らい付けぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！！」

バランスを失いそうになる舵を、必死に堪えて握るウィンツ。

ブライアンは、死ぬ最後でいい船長に逢えたと思い。

「解りやしたっ。　客の安全は、アッシが必ずっ！！」

と、気を失い掛けているジョベックを担ぎに向かい。　操舵室を出る時に、敬礼をしてブライアンは出て行った。

ーアァァァ・・・ウワァァァァ・・・・ー

亡霊の呻きが、ウィンツの耳にも大きな声で聞こえ出す。　パッと見上げた窓の外には、近場にまで下りていたマキュアリーの姿が見える。

最悪、マキュアリーに幼い少女だけを託そうと考えたウィンツ。

戦い続ける冒険者の二人が気になり。　絶望的な戦場と化した後尾を振り返り見た。

ウィンツが振り返る手前。　死に物狂いで戦うルヴィアとビハインツは、亡霊の蔓延る靄に包まれてそうだった。　纏わり付く様に、自分達を取り囲む亡霊達の呻き声。　船体が部分部分で壊される度に体勢を崩し。　そして、亡霊達に取り巻き付かれるのを、必死に振り払うかの様に斬り捲る。

そして、ビハインツが融合しそうな亡霊を斬り。　ルヴィアが、別の亡霊に細剣を突き込んだ瞬間。

（あっ！！）

驚愕に近い見開いた二人の目は、亡霊を擦り抜けるだけしか出来なくなった己の武器を見た。

（此処まで・・・だな）

（終わった・・。　今、逝く）

戦う手段を絶たれた二人の目が、静かに交錯し。　靄に完全に包まれる二人を、ウィンツは振り返る所で見た。

「にげ・・・・・」

言葉を吐き出すのと同時に、噴火する様な絶望の焦りを覚え。　ウ

ィンツは、思わず舵を握る事を放棄し掛けた。

その瞬間である。

ウィンツの視界の中で、靄が爆発する様に一気に吹き飛ばされた。

靄に包まれた筈のルヴィアとビハインツが、千切れ飛ぶ靄の後に見えたのである。

「・・・あ・・。　どう・・した?」

ウィンツは、事態の理解が出来ない。　成るべき方向とは、全くの逆の予想外の事態だった。

すると、

「とぉ〜〜〜〜」

と、間延びした若い少年の声がして。　ローブを身に纏った者が、女性らしき誰かを抱えて後尾の甲板に着地したではないか。

（えっ?!　俺はぁぁ・・・幻・・・見てるのか?）

ウィンツは、終に自分もおかしく成ったと思った・・・。

★

亡霊達。　そして、幽霊船の襲撃は、此処で終わりを迎えた。

壊れた幽霊船の船体に入り込んだK。　海水が彼方此方に沁み、海草を生やしたボロボロの船内に於いて、彼は身体の回りに美しい黄金のオーラを纏わせ。　迎え撃ってきたスケルトンやゾンビの群れを、駆け抜けるままに瞬殺して塵に返す。

ーオオォォォォ・・・ー

自分に向かって来る事を躊躇うゴーストを見るKは、不敵な笑みを口元に現し。

「人間を殺す目的で生み出されたんだろう？　ビビったって、お前らチビる事も出来無ぇんだからな」

と、ゴースト達にゆったりと歩み寄り。　後退さるゴーストに、指を弾いてはエネルギーをぶつける。　次々と消える仲間に慄き切ったゴースト達は、破れかぶれの様なままに一斉にKへと襲い掛かるのだが・・。

一瞬で消滅させられてしまった。

代わって。

甲板に風の力で飛び乗ったリュリュは、オリヴェッティを降ろすと。

「オリヴェッティのオネ～サンって、ホ～ントやわらかぁ～い」

恥ずかしい事を平気で言うリュリュだ。　オリヴェッティは、少し顔を赤らめ。

「変なコト言わないの」

「はぁ～い」

目の前で、完全に場違いな会話をするリュリュとオリヴェッティを見るのは、覚悟を決めた筈のビハインツとルヴィア。

「・・・あ」

「・・・あの」

二人に声を掛けられ、ハッとして。

「あ、あら・・。　いらっしゃったのですか」

と、苦笑いするオリヴェッティは、二人に一礼し。

「助けに来ました。　乗客の皆さんや、船の船員さんは大丈夫ですか？」

と、言う。

その彼女に対し。

乗って来た船を繋いだロープを、何処かに結ぶ所を探そうとしたリュリュは、女性の様に美しい男性の様な感じのルヴィアを見つける。

彼女の着るコートの開かれた首周りを見て、膨らむ女性らしき胸を見ると・・。

「わわっ。　この人もオネ～サンだぁ」

と、ルヴィアの前に進み出る。　そして、

「ねね、オネ～サンでしょ？　ココ、オッパイだよね？」

と、いきなりルヴィアの胸を指差したリュリュ。

「まぁっ、ちょ・リュリュ君っ」

と、驚くのはオリヴェッティ。

「なぁ・・」

張り詰めた極限の緊張が解けない中で、いきなり変な事を言われたルヴィアは、返答に困って硬直した。

が・・。

フッと顔を緩ませるルヴィアは。

「あぁ、私は女だ」

と、子供相手の様に言った。　ゴーストと靄が千切れた事の方が、嬉しかったからだ。

そんな中、ウィンツの声が。

「おーいっ、一体どうなってるっ？！」

と、聞こえる。

ルヴィアは、オリヴェッティに事の次第を聞こうと。

「お・・」

と、何かを言い掛けた。

其処で。

ーウワ〝ア〝ア〝ァァァっ！！！！ー

凄まじい雄たけびとも、喚き声とも聞こえる声が轟き。　ルヴィア達の脇、甲板縁の外側である宙に、真っ赤な炎の塊が現れた。

「まぁっ！」

オリヴェッティは、丸で人の背丈を軽々越えた髑髏（されこうべ）が、紅蓮の炎に包まれているかの様なモンスターの出現に杖を構える。

「くっ、まだ居たのかっ」

と、リュリュを庇う様にしてルヴィアは剣を構えた。

「くそうっ、コイツがニーブガイストかっ！」

ビハインツも、ルヴィアの脇に出た。

太陽の光に包まれた夕方前の甲板の縁に、おどろおどろしい頭蓋骨の姿をしたモンスター“ニーブガイスト”は現れた。　ブルブルと

震えて、何処と無く苦しんでいる様に見え。

ーオ・・オノレ・・・ハラダタシイニンゲンガァァァァー

と、甲板の上に圧し掛かる様に進んで来る。

だが、リュリュが。

「ウッサイなぁ～～。　せっかく、びじ～んのオネ～サンと挨拶してるにぃぃ～」

と、ルヴィアの前に出るのだ。

「コラっ、危険だっ」

と、焦ったルヴィアが、リュリュの腕に手を伸ばし掛けた時。　吹き上がる風の感触に驚き、思わず手を引っ込める。

（な・・何？）

更に驚かされたルヴィアと、二人を見るオリヴェッティやビハンツの目の前で。　スタコラと進み出たリュリュは、その本領を発揮する。

「ユ～レイのぶんざいでぇ～。　ケイさんとマブダチのボクに歯向かおうなんて、センネンはやいのだぁ～」

凝らしたリュリュの瞳に宿るオーラの光が、一際強く成る。

ーナッ・ナンダっ！　コノツヨキジュンスイナチカラハッ？！ー

ニーブガイストは、リュリュから感じるエネルギーの波動が、生半可な強さでは無いと感じれたのだろう。　予想外の相手に、驚く事が先になってしまう。

そして、

（嗚呼・・。　なんて聡明で強い風のオーラ・・・）

オリヴェッティは、戦ぐ爽やかな風の力を、幾重にも強く重ねた爽快感さえ迸る風のオーラを感受した。　その身に、ある種の快感に似た嬉しさを感じる。　長き冬を耐え、暖かな春の日差しと柔らかな風を感じる様な感覚だった。

さて。　オーラを全身に纏ったリュリュは、両手に煌く風のエネルギーを集めると・・。

「オマエなんか～きえちゃえっ！！」

と、その両手をニーブガイストに向けて押し出した。

「うわっ」

「何だぁっ？！！」

眩しい蒼翠のエネルギーが迸り、ルヴィアも、ビハインツも、リュリュの手とニーブガイストを直視出来なくなった。

リュリュの手から放たれた強烈なエネルギーの波動は、膨張する様にニーブガイストを押し潰す。

ーウガガガァァッ！！！　コンナ・・ジュンスイナ・・カゼノ・・・ー

逃げる事も出来ないニーブガイストは、エネルギーに貫かれ。　巻き起こる風圧と共に掻き消されて、消滅してしまった。

その衝撃で揺れる船だが。

遠目から、その一部始終を見つめていたウィンツ。　舵を握る事も忘れ掛けた中で、リュリュを見て。

「す・・・すげぇ」

と、呟くのが精一杯だった。

眩しさから開放されたビハインツは、ニーブガイストが消えているのを確認して。

「あ・・・、あ？　あ・・いねぇ。　助かった・・のか？」

ルヴィアも、腰に手を当て可愛い高笑いをするリュリュと、消え去ったモンスターの跡を交互に見て。

「の・様だ・・・な」

と、信じられないままの空回りした緊張感に惚けてしまう。

オリヴェッティは、そんな二人に。

「よく頑張りましたね。　もう、大丈夫ですわ。　さ、逃げる準備をしましょう」

ビハインツは、いきなり現れたオリヴェッティの言葉が飲み込めない。

「あ？　貴女は、一体誰だ？　に・逃げるって・・一体何処へ？」

ルヴィアは、やや冷静に。

「そうだ。　しかも、まだ幽霊船が動いてるっ」

と、黒い靄の渦巻く方を指差した。

ニコやかに笑むオリヴェッティは、

「大丈夫ですわ。　あちらには、私達よりもっと強い方が乗り込んで居ます。　逃げる為の船も用意しましたし、私達が乗船している大型客船も、皆さんの帰りを待ち侘びてます」

と、二人を見た。

この時、事態の様子を伺いに、船首甲板の方から操舵室を覗くブライアンとマキュアリーが居て。

「キャ・・キャプテン？」

ブライアンの声に、ウィンツはリュリュ達の方に釘付けに成ったままで。

「ブライアン・・舵を持て。　どうやら・・助かったみたいだ」

と。

「えあっ？！！」

驚いたブライアンは、慌てて二階の屋根に上り。　ギシギシと木の部分を軋めかせながら、操舵室に入る。

舵を代わったウィンツは、急いで甲板の後尾へと向かった。

オリヴェッテイと話すルヴィアは、一人単身で乗り込んだKに驚き。

「バっ・バカなっ！！　亡霊亡者や悪霊や死霊の巣窟の幽霊船に、一人で乗り込むなど・・気狂いだっ！」

一方で、リュリュの運んで来た船二艘を見下ろしたビハインツは、

「とにかく、この船もヤバい。　丁度、持って来た船が二艘有る。下に有る船に乗り込んで、一艘で避難し。　もう一艘で、幽霊船に行った誰かを助けよう」

と、焦ってそう言う。

だが、リュリュは。

「そんなのいいよ～。　助けが必要なのはぁ～幽霊船に乗ってるモンスターだって」

と、Kの真似の様な軽口を叩いてみせた。

ウィンツが此処で、ルヴィアの後ろに来て。　ルヴィアは、暢気なリュリュに何かを言おうとした。

しかし、此処で好転した事態は、最後の追い込みに向かう。

魔法遣いのオリヴェッティと、魔法の力を感じる事の出来るリュリュは、幽霊船の方から急激に爆発する様な力そのものの波動を受け。

「まぁっ？！！」

「うわぁ～おっ」

と、声を上げて振り返る。

ビハインツ・ルヴィア・ウィンツは、そのままの位置で見えた。

幽霊船を覆い尽くす黒い靄が、いきなり強烈な爆風でも受けたのか四散していく様を・・。

その場に居た5人の内、リュリュ以外の者は甲板後尾の縁に飛び付く。　何が起こったのかを知りたくて、驚きの衝動に突き動かされるままに。

リュリュは、直ぐに解った。

（ケイさん元気だぁ～）

強まる南風と波の影響で、略その場に止まったシーフランク号。

一方で、シーフランク号に船体を横向きにする幽霊船は、靄を失っ

て丸見えに成った。

「カァ～、なんて古い型の船だ・・・」

と、ウィンツが驚く。

何故か、小雨が降る幽霊船の回り。

ルヴィアは、幽霊船の船首近くに、誰かが立っているのを見つけ。

「人かっ?!」

と、声を上げた。

其処には、全身黒尽くめの男が、ギラギラと滾る様な黄金のエネルギーを手や身体に纏わせ、ユラ～リと立っていた。

しかも・・。

ギョっと目を見張ったビハインツは、黒尽くめの何者かの方を指差し。

「お・おい・・おいおいっ!!　あの男が掴んでるのは・・ロトンフラッパーとミジュルホムガニスじゃないかっ!!!!」

海に生息するモンスターも数多いが。　死霊バエと言う人並みに大きいアブのモンスターの種類の一つが、“ロトンフラッパー”と言う。　腐った様な頭に、黒ずんだ緑色の身体をした肉食アブで、群れて海辺周辺の洞窟や無人島に巣食い。　エサを探して住処周辺を飛び回る。　テリトリーに入り込んだ船を集団で襲い、人の身体

を唾液で溶かしてその液を吸うモンスターだ。

もう一方のミジュルホムガニスとは、体長１０メートルを超えるウツボのモンスターだ。　蒼白い頭に、脂漏化した様なブヨブヨの身体で、小船に乗る人などを海に突き落として食べる。

Kの右手には、首の無いロトンフラッパーの羽が持たれ。　千切れた身体が、黄土色の体液をダラダラと垂れ流している。　そして、左手には、大人の頭程の大きさをした蛇の様な、ミジェュホムガニスの頭部だけが握られていた。

そのモンスターをも惨殺している様なKの姿は、悪魔そのものに見える。

さて。　信じられない光景を見るルヴィアは、Kの前に見えるモンスターを知っていた。　ドス黒い液体の様な身体で、人型をしている。“シャドゥ・バノォード・アビス”。“アビス”（魔界の俗名）を受けるだけあり、最高位に属する亡霊モンスターだ。　人を甚振り、嬲り殺しにするのがその思念で。　悪辣にして非道、陰険にして残虐な行為を好む。

だが・・。

ルヴィアの見るそのモンスターは、脅えているかの様に見えた。黒尽くめの何者かが、その手に持ったモンスターの残骸を甲板に落とし。　シャドゥ・バノォード・アビスに一歩近づくと。　絶対強者的な力を示すゴーストモンスターが、ぶれる様に身をたじろがせるではないか。

（まさ・まさか・・。　あの凶悪な思念の塊であるモンスターが・・

脅えてるのか？　・・そんなバカなっ！！　４人もの高位の司祭を相手に、丸で支配者の如く振る舞い立ち向かって来るあの・・モンスターがっ？！！）

そして、その一瞬は訪れた。

Kに向かって苦し紛れに魔法を放ったシャドゥ。

だが。　Kは、なんと暗黒魔法の念動波を掴み。　そのまま握り潰す。

怒り狂った様に黒いオーラを迸らせ、狂人の様な唸り声を轟かせKに襲い掛かるシャドゥだったが。

「終いにしようや」

と、呟いたKは、その身を消した。

次の瞬間、シャドゥの背後に現れたKは、シャドゥの頭部を鷲？みにし。

「船毎、海底に沈んでろっ！！」

と、掴んだ左手にオーラを集めながら、シャドゥの身体を甲板に叩き付けたではないか。

その時、何かが周囲に広がった。

“ブォン！！！！！！！！”

と、広大な範囲で空気を震わせる、目に見えない何かが・・。

叩き付けられたシャドゥは、黄金のオーラの侵食を受け。　砕け散る甲板と共に、海に向かって船底へと突き抜けて行く。

「わぁ～お、ドはでぇぇ～～～」

一人ではしゃぎ、Kの活躍を喜ぶリュリュ。

圧倒的な、一方的戦いであった。　皆の見る中で、シャドゥの突き抜ける勢いと共に幽霊船は前後に壊れて、船首側と操舵室を伴った後尾側に分かれてしまう。　どんどんと砕け行く裂け目を上にして、傾いて行く幽霊船。　船首と後尾から海に潜らせる様に、沈み始めるのだ。

「あっ、ケッケイさんっ！！」

オリヴェッティは、Kがどうするのかと焦るのだが・・。

「・・・」

傾く船の砕けた船体の縁をスタスタと歩くKは、慌てる様子も無く。　割れた船体の一部から飛び散った木の板を海に蹴落とし。　沈み込む船が海に潜るギリギリで、浮かぶ板に飛び移る。

リュリュ以外の４人には、その全てが在り得なかった。

しかも、Kは何かを抱えている。

はしゃぐリュリュが、大声でKに何かを呼び掛ける中。

（ホントに・・凄い）

オリヴェッティは、その全ての様が凄すぎて気が抜けてしまった。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪師弟再会　だけど、まだ残ってる問題がぁぁ≫

木の板に乗り、海面をリュリュの起こした風で滑って戻って来たK。

リュリュ達が乗る襲われた船へ、横付けされた救出用の船から伸びるロープ一本を、片手と足だけで登って来た包帯男に、ルヴィアもビハインツも掛ける言葉を失っていた。

「ケイさ～ん、かぁぁぁっちょえぇぇぇ～」

帰還したKを見て、はしゃぎ跳んで喜ぶリュリュ。

だが、甲板に下りたKは、外見がボロボロに腐食した金属の箱をリュリュに見せ。

「面白いモン見つけたゼ。　次の立ち寄り都市で、お前の胃袋を満たしてやるよ」

「えっ？！　なになに？」

「中身は、帰ってからだ」

そんな兄弟の様なKとリュリュを見るオリヴェッティは、緊張感が全く無いと困り果てた顔で居て。

（あの・・・何しに来たのでしょうか？　問題が・・・忘れ去られていると思いますが・・・）

と、別の悩みを見出した。

さて。　はしゃぐリュリュと、幽霊船を蹴散らしたKに。

「あ～・・・、話いいかな？」

と、ウィンツが声を掛ける。

箱を下ろしたKは、ウィンツの顔を見て事態を理解してないと解った。

「なんだ。　聞いてないみたいだな」

Kに緩やかな足取りで近づきながら、Kの姿を見回したウィンツ。
もしかして、Kもモンスターなのではないかと疑りたくなる。

「何が、だ・・ろうか？　先ず・・・君達は・・何だ？」

Kは、ルヴィアやビハインツを見て。

「乗り込んでる面子は、これで全員か？」

「いや、船首の方に十数名。　操舵室に・・船員が一人居る」

応えたウィンツに、Kは視線を合わせ。

「アンタが、クラウザーの弟子か」

と・・。

恩師の名前が出た事で、ウィンツの顔は一変。

「あ〝っ？　おや・親方を・・知ってるのか？」

「あぁ。　この船の巻き添えに狙われたのは、クラウザーの乗る客船さ」

「あ〝っ？！！　ほっ本当かっ？！」

ウィンツは、目を本当の魚の様に丸くして驚く。

薄く微笑むKは。

「幽霊船の動きが、どうもおかしかったからな。　二隻の船が狙われてると踏んで、それとなく助けに来た」

急に狼狽えるウィンツは、

「だ・だが・・・俺達は助けなんか・・・」

「あぁ。　そう。　呼んでない。　俺達も、表向きは助けに来た訳じゃない」

ルヴィアは、話が転じて意味が解らなくなり。

「おいっ、い・意味が・・」

Kは、操舵室らしき場所に居るブライアンを見つけたりしながら。

「表向きとして、俺達は幽霊船を潰しに来た。　アンタ達を助けるのは、表向きでは“ついで”・・だな」

その意味を理解出来たのは、船長であるウィンツのみ。

「嗚呼・・。　航海法に触れない様に、俺達を助けに来たのでは無いとするのか・・。　なんてこった、此処まで来てクラウザー様に・・親方に手間を掛けさせちまった・・」

恩義と責任を感じるウィンツは、ガクリと項垂れる。

Kは、笑みを絶やさず。

「それより、面倒だからこのオンボロ船を沈めてしまえ」

直ぐにKを見返すウィンツは、魂胆を知る。

「我々は、あくまでも難破して遭難した者に成った方がいいのか？」

「そりゃそうさ。　幽霊船を相手にしても、この船を生かしちゃ～・・在らぬ嫌疑をクラウザーが背負うぜ？　船は先に大破し、俺達は

偶々にアンタ達を助けた・・・。　その流れが、一番面倒が無い」

ウィンツは、グッと言葉を飲み込んだ。

船を預かる船長として、船を沈める責任は大きい。　そして、海の男たるプライドも有る以上、仁義や培った責任感からジレンマを生むのは当然だった。

だが、Kは。

「アンタの働きは、十分さ。　それとも、此処で死人出たのか？」

「あ・・いや」

ウィンツは、一度難破し。　島で船を修理した事などを全て語った。

Kは、小船を奪って逃げた二人を聞いて、何とも面倒だと云う困った顔をすると。

「おいおい、マジかよ。　この先の小島とラグーンに有る場所は、人食いカマスのバラクーダが回遊してる所だぞ？　そんな人の漕ぐ小船で、あのデカいカマスの群れから逃げ切れんのか？」

ウィンツは、それを聞いて。

「あっ！　あの辺りは・・確かに」

と、その事を思い出した。　幽霊船の御蔭で、すっかりその事を忘れていた。

Kは、後頭部を掻き。

「其処まで面倒は、流石に看切れねぇってよ」

横で、リュリュも真似をし。

「ねぇ～ってよぉ～」

ウィンツは、一人重症のジョベックを思い出し。

「あ、その争いで怪我した船員が居るんだっ。　僧侶・・居ないか？」

Kは、薬師でもある。　様々な薬を持っているので。

「じゃ、俺が応急の処置だけしよう。　早く、客を下の船に。　夜に成ると、モンスターが血の匂いを嗅ぎ付けるぞ」

「あぁっ、解った」

ウィンツは、自分のプライドを曲げる決意をした。　恥を忍んでも、男としてクラウザーに土下座するまでは、どうしても生きなければと思った。

ニーブガイストに壊された船体脇から、木の板を船に渡して客と船員を移動させる。

一方で、かなり出血していたジョベックは、失血による昏倒寸前。

Kは、傷を見て。

「あ～ぁ、コイツはヤバい。　どれ、さっさと縫って応急処置しちまおう」

と、紙の束を留める針と糸を取り出し。　消毒薬代わりの酒に浸すと、伸ばした親指から中指ぐらいまでの長く裂けた傷を、手早く縫い付けた。

夕方の朱色が、海を染め出す頃。

「いいぞ～、リュリュ。　北にぶっ飛ばせ」

全員を乗せた前の船にリュリュが立ち。　後ろの船に舵を取るKが乗り。　満員と成った船が、風に押されて海上を走り出す。　背後には、船体の船底に穴を開けられ、沈み行くシーフランク号が見えていた。

ただ・・、オリヴェッティは。

（お客さんと船員の方々・・・耐えられるかしら・・）

モンスターや肉食の魚類に襲われない為にも、有る程度の速さで行く必要が在る。　疾風の如く走り出した船からは・・。

「ひゃあああーーーーっ！！！　落ちるぅぅぅーーーーーっ！！！！」

「うおおおおおーーーーーっ！！！！！」

「怖いよぉーーーーっ！！！！！」

と、様々な声が上がった。

ま、Kは・・・無視したが。

★

夜に海が染められ、深い藍色の闇に染まった水面には、満点の星空から降り注ぐ光が淡く届く頃。

「帰って来たぁーーーーーーーっ！！！！！」

クラウザーの乗る船の甲板で、松明を持った下働きの船員が、戻って来たK達の船を見て一声を上げた。

直ぐ様その一声は、空洞の金属パイプである連絡官を通じて、ブリッジである操舵室に響いた。

全てに於いて半信半疑のカルロスは、その一報に肝を冷やしたものだ。　何故なら、K達が逃げたんじゃないかとか、幽霊船なんか嘘じゃないかと陰口を言っていたのが、カルロスだったからだ。

盛大なパーティと音楽。　そして、真剣勝負のカジノや、数字当てゲームに沸いていた地上部の船内には、その船員の上げた一声も聞こえていなかっただろう。

助けられたシーフランク号の客や船員を見たのは、無料配布の食事を受け取りに来た最後の地下乗客の一部のみ。　クラウザーは、食事配布の頃合を早めにしたのが、そうゆう形に成った。

さて。

助けられた客は、地上部後方の非常用ドアから船内に入り、バーラウンジの片隅へ抜ける。　そのまま客通りの殆ど無い通路を通って、宿泊出来る客室の広がるに階層に上がり、クラウザーの用意した各部屋へと案内された。

クラウザーは、Kの戻った事を聞くや。　カルロスを呼んで、後の事やパーティーなどを仕切らせる傍ら。　足早にウィンツの顔を見に行った。　やはり、内心では心配して堪らなかったのだろう。

怪我をしたジョベックを救護室に運んだウィンツは、僧侶に手当てを任せて廊下に出た。　5階の別室である救護室から出たウィンツは、伸びた廊下の向こうから来るクラウザーを見て。

「嗚呼・・・」

と、クタクタと身を崩し、その場の床に平伏する。

そんな彼の目の前まで来たクラウザーは、嘗ての弟子を見た。

（コイツ・・随分と疲れて・・・）

人の顔には、苦労が滲み出るものだ。　ウィンツの姿を見ただけで、人生経験の長いクラウザーは、その苦労の一抹を見抜いた。　何処と無く気力の萎えた雰囲気や、膝を素直に折った様子は、クラウザ

ーに弟子の苦労を教えるに足りる。

「ウィンツ・・、大変だったな」

クラウザーは、穏やかに、そして抱きしめる気持ちを言葉にして掛けた。

すると、俄かにすすり泣くウィンツは、顔を上げ。

「真に・・真にありがとうございました・・。　乗客と船員のいの・命・・まま守れましたぁっ。　おやか・・いえっ。　クラウザー様には、なんとお礼を・・」

今の彼を見るまでのクラウザーの目には、意気揚々と自分を超えて見せると言った若きウィンツの姿しかなかった。　だが、この目の前に居るのは、確かに苦労を重ねた愛弟子である。

「ウィンツ。　今更、ワシに“様”付けてどうする。　ワシも、お前と同じ雇われの身だ。　“親方”で構わぬさ。　さ、身を上げろ。　老い耄れに、いい年した船長が土下座なんかするな」

久しぶりに叱られた気のするウィンツは、汗と汚れの付いた顔を上げて。

「親方・・済まない」

ヨロヨロと立ち上がるウィンツにクラウザーは近づき、怪我などを確かめながら。

「怪我なんかは無さそうだな・・。　さ、上に行こうか。　後で、

案内した船員達の部屋も教えておこう」

「はい。　助けてくれたお返しです。　次の街までは、自分に何でも言って下さい・・」

「はは、助けられた今に言うか？　お前もまだ若いな」

笑うクラウザーを見て頭を下げるウィンツは、もう居ないKを思い返し。

「親方。　我々を助けたあのケイって人は・・・何者ですか？」

「フッ。　人間の分際で、化け物みたいに強い冒険者さ。　数年前に、チョイト縁が有ってな。　今回、お前を助けて貰った」

「そうですか・・。　明日にでも、再度礼を言わせて貰いたい」

「ふはは、大して気にしない男さ。　大きな噂にしたがらないから、軽くでいいぞ」

と。

助けられ密かに客と成った者達は、酷い船酔いの様な状態の者が殆どだ。　この船の船員達が生活する三階の奥。　乗組員共同生活場に連れられたウィンツの船に船員達も、客同様に殆ど潰れてしまった。

さて。

「所で、何処まで着いて来る気だ？」

秘密の隠し部屋に戻ったK達は、リュリュのマントに隠して連れて来たマキュアリーにそう言った。

「・・・」

神妙なマキュアリーは、どうにもウィンツが心配ならしい。

Kは、窓の傍に佇むマキュアリーを脇目に、どっかりとソファーに座ると。

「大丈夫だ。　クラウザーは、弟子を悪い様にするヤツじゃない。　アンタ等ハルピュイアは、一部の金持ちの男共からすると、性欲を満たす道具としか見られない。　余計な面倒を起こさない為にも、さっさと島に帰れよ」

Kの言っている事は、確かな現実だった。　だが、マキュアリーは黙っている。

リュリュは、ハルピュイアのマキュアリーをソファーから見て。

「ケライノアと似てるね～。　向こうは、翼が赤いけど」

Kは、リュリュに向き。

「お前、あっちの種族は知ってるのか？」

「うん。　ママに誰か逢いに来た。　なんか、珍しいモノが手に入った～って」

「ほ～。　そんな交友あるのか」

「さ～。　ホラ、ママって風の神様みたいだし～」

「あぁ～・・確かに、な」

そんな二人を他所に、疲れたオリヴェッティもマキュアリーが気に掛かる。　危険を冒してまで、この船に来たがったマキュアリーの事が、同じ女ながらに解りかねなかった。

（一体・・・どうしたのかしら・・・）

しかし、Kは大体の理由を推し量れていた。

（全く・・。　生き物ってヤツは、色恋沙汰から逃げられない定めなんかねぇ～）

静かに、しかも意地らしい娘の様なマキュアリー。　彼女が此処に居るのは、恋しい男に何かまだ言いたい事が有るのだ。　彼女をもう見ない包帯男は、それを薄々と素振りなどで解った。　だからか、もう一肌脱ぐ必要が有ると実感していた。

部屋に戻り、皆が一息着く・・。

魔法を遣い通しだったリュリュは、軽く菓子を食べる途中で寝てしまった。

別室の狭いバスルームで、身体を拭いたオリヴェッティ。　衣服を黒のドレス風ワンピースに改めると、Kの煎れた熱い紅茶を飲んで、ベットに入る。

ソファーに寝るリュリュに毛布を掛けたりしたKは、窓辺に立つマキュアリーに。

「ま、ゆっくりしろ。　明日は、助けたオッサンにでも挨拶して帰れよ」

と、言い残し。　クラウザーの居る船長室の方に消えて行く。

「・・・」

Kを見送ったマキュアリーは、立ったままに顔を羽根の中に隠す様に眠るのだった。

★

船長室に上がったKは、クラウザーとウィンツが共に居るのを見つけた。

弟子が助かったからだろうか、随分と元気なクラウザーが居て。

「おう、カラス。　ウィンツを助けてくれて、感謝するぞ。　全く、嬉しいね。　航海中じゃないなら、ワインでも浴びたいくらいだ」

ウィンツは、Kに。

「本当に助かった。　他の船員に代わって、礼を言うよ」

と。

Kは、二人を見比べ。

「師匠より、弟子の方が礼儀を弁えてるな・・。　フッ」

と、鼻先で笑う。

Kの表現に、壁の無い笑みを浮かべた二人。

だが、Kは更に続けて。

「しかも、弟子の方が色男だ。　連れ帰った女に、随分と惚れられてる。　まぁ～ったく、師弟揃って女好きだな」

と、余ってる客椅子に腰掛けた。

急に意味の解らない話になり。　クラウザーは、ウィンツとKを交互に見て。

「あ？　何の話だ・・」

ウィンツも、Kを見てからクラウザーを見てやり。

「俺は・・・別に」

と、イマイチ飲み込めず口を濁した。

ニヤリと笑うKは、そんなウィンツを見ながら。

「窓に佇む女は、誰かさんを慕ってて帰るに帰れない様だ。　人の欲望に晒されない為にも、何とかしてやったらどうだ？」

この話に、ウィンツは直ぐ意味が解り。

クラウザーは、全く解らなく成る。

「あ・・いや、俺は・・・そそ・そんなつもりは・・その」

気恥ずかしさから、しどろもどろの弁解を言い出すウィンツ。

そんな彼の脳裏には、マキュアリーの顔が浮かんでいたハズだとKは解る。　だが、Kは、此処で少し真顔に成り。

「ハルピュイアなどの種類ってのは、子孫を残す為に時として望まない男とでも交わる。　一昔前、鳥獣人と交友の有った村では、繁殖の道具として若い男を差し出す風習まであったそうだ。　だが、下に居る彼女は、望んで出来る。　アンタ、一肌脱いでやったらどうだ？　殆ど人間が虐げている彼女達だが、偶には人が幸せをくれてやってもいいんじゃ～ないか？」

と、真面目な口調でウィンツを見て言う。　言い方は砕けているが、その語りは穏やかながらも、諭す様なニュアンスが含まれる。

一方で。　話を聞くクラウザーは、まだマキュアリーが居る事を知らない。

「おい、一体どうゆう事だ？　“ハルピュイア”だって？　この船

に・・乗ってるのか？」

「あぁ。　下に居る」

クラウザーは、驚いてウィンツを見る。

「ウィンツ・・お前まさかっ？」

Kは、軽く笑って。

「ハッ。　おいおいクラウザー、ヘンな勘違いするなよ。　どうやら、嵐で難破してたアンタの弟子の船を見かけたのは、若いハルピュイアらしい。　村で、二人は仲良くなったらしいな。　あのテリトリー以外の人を警戒するハルピュイアが、態々航海路までの案内を買ってくれたとさ」

急に俯いたウィンツは、クラウザーに。

「・・そうです。　マキュアリーと言うハルピュイアの娘で、幽霊船が来なかったら・・。　俺達は、彼女の案内で一般航海路に戻れたでしょう。　俺達の命の恩人・・です」

クラウザーは、少し驚きながらも頷きを見せて。

「ほう・・ハルピュイアになぁ・・。　お前、そのお嬢さんにホレたのか？」

恥ずかしい事をストレートに聞かれたウィンツは、むず痒い顔で返答に困る。

様々な経験を積んだ人生の長いクラウザーだ。　そんなウィンツを見て、この男も満更でも無いと読めた。　が。　それが解ると、今度は同じ男ながら情けないと困った顔をしたクラウザーは、４０を過ぎたウィンツを見てやり。

「何だぁ～、お前よ。　好きなら、そうと彼女に言えよ。　俺の手の下に居て、学んだのは航海術だけかよ」

なんとも反論のし難い言われ様だ。　ウィンツは、自分が若くしてクラウザーに弟子入りし立ての頃は、一夜の浮夜を流す兄弟子が腐る程に居たのを思い出す。　懐に金が入ると、夜の酒場に繰り出して。　夜の女性とベットまで共にし、毎朝化粧の匂いを漂わせる強者が一杯いた。

このクラウザーとて、それこそ結婚した後は身持ちも硬かったが。　その前までは、“毎日、夜を過ごす女性の顔が違っていた”などと武勇伝を囁かれた男だ。

“酒と女は、海の男には付き物”と言う世界で生きたウィンツなれど。　彼は、どうも硬い性格の様だった。

Kは、クラウザーを見て。

「おいおい、クラウザーさんよ。　何だ、この晩生な弟子は。　師匠だろ？　その辺も教えとけよ」

と、軽口を叩けば。

「あ？　あんなモン、男が男に教えられるかよ。　女と夜の冒険するのは、男の醍醐味だろうが」

と、クラウザーが返す。

するとKは、ニヤリと口元を曲げて。

「ちげぇねぇな」

と、伝法に返した。

しかし、だ。　顔を神妙にするウィンツは、徐にクラウザーへ。

「だが、親方・・」

と、マキュアリーの身の上や、ハルピュイアの生涯を語り。

「俺は・・未だ身体の何処かに、船長としての未練を残してる。男親として一緒に居てもやれないのに、そんな無責任は出来ない」

と、言うのだ。

所が、いきなりクラウザーは、ウィンツの話を鼻で笑って飛ばす。

「ハッ。　なら、定期的に船で逢いに行けばいい話しだろうが。それこそ、ラブロマンスの出来上がりだぞ、ウィンツ。　お前、彼女に聞いてみろよ。　相手がどうして欲しいか、聞いてから考えろ」

と、言ったクラウザーは、冷めた紅茶のカップを手にすると。　急に顔を平静に戻して。

「お前に言っておくが。　俺の船には、下世話な金持ちも多い。

ハルピュイアなんぞ乗せてるのを知ったら、金ずくでも欲しがるバカも居るだろう。　早く、彼女を島に戻す事を考えるこった。　お前の恩人を、汚らしい欲望に晒させるのも気に食わん」

後を繋ぐKも。

「そうだな。　この船の金持ち連中と来たら、冒険者の女にやたら色目遣いやがる。　面倒が起きる前に、な」

「で・でも・・・」

俯くウィンツ。

クラウザーは、弟子の不甲斐無い姿に呆れ。

「おい、ケイ。　そうゆうのは、もっと早く言えよ」

呆れ笑い気味のKは、

「あ？　言ってどうなる？」

「それなら、二人を個室にでも閉じ込めてしまえばよぉ～」

「お～、それいいなぁ～。　窓も出入り口も板で打ち付けちまうか？」

「おうよ。　どうせ改修するんだ、こんな船なんぞな、派手に痛め付けてやっていいんだゼ？」

Kとクラウザーの会話は、なんともいい加減と言うか、奔放と言う

か。

だが、その後に言うクラウザーは、また真顔で。

「ウィンツ。　お前、何時から人の気持ちを解らなく成った？　明日も明後日も手伝い要らない。　そのハルピュイアの問題を解決するまで、船員として働くのはお預けだ」

Kは、そう言うクラウザーの顔が、何処か喜んでいると思えた。
久しぶりに、親方としての自分を取り戻しているのだろう。

（さぁ～て、どうなるやらなぁ～・・・）

ほくそ笑んだKは、俯いているウィンツを見ていた・・。

★

次の日。

朝になり。　前日の盛大なパーティーで疲れた乗客達は、殆どが寝静まっているか。　部屋に篭っているかだった。

早朝が終り。　太陽が見上げる角度に向かっているのを、ウィンツは見晴らしのいい甲板後部の展望高台で見ている。　疲れで中途半端に眠っただけで、朝早くに起きてしまった。

（全く・・、歳を取った所為だろうか。　親方も砕け過ぎてる・・・）

先程ジョベックの様子を見に行った彼は、起きて来ていたブライアンと会って話をした。

実は、クラウザーがマキュアリーの事を聞いた直後に、ウィンツだけ使わない客室に寝泊りを決めた。　人気の無い奥間に成る部屋で、４階の個室を宛がってしまった。　他の船員達と一緒で良かったのに、何とも驚きの処置である。

他人の姿の全く無い展望高台で、ウィンツはマキュアリーの事を思いながら海を見つめてると・・。

「ウィンツさん・・」

耳に纏わり付く忘れられない声・・。　考えていたマキュアリーの物だった。

（はぁ・・）

ウィンツは、複雑な気持ちで振り返った。

「起きたか、・・おはよう」

目の前には、緑のローブを足元まですっぽり被ったマキュアリーが居た。　ウィンツは、彼女の全身を見て思わず。

「はは。　そうしていると、人の娘みたいだ」

と。

ニコっと微笑むマキュアリーは、ウィンツの横に来た。

「この船、おっきいですね。　こんな大きい船、初めて見ました」

「そうか？　ま、一番大きい部類の船だからな。　俺でも、この船の船長はやった事ない」

海を見て、二人の沈黙が流れる。　何も話さない沈黙は、心を、言葉を、体中に溜め込む時間なのかも知れない。

そして・・。

マキュアリーが、少しして。

「・・ウィンツさん、お願い・・・聞いてくれませんか？」

「あ？　あぁ。　命の恩人である君の願いなら、何でも聞くさ」

マキュアリーは、ウィンツを見て。

「私ね、人間って、島の人以外・・みんな怖いって思ってた。　お母さんを攫ったのも人だし・・、魚を買い付けに来る他所の人も、私を見る目が怖かった・・」

「そうだな。　人間は、怖い。　我が儘な欲望で、・・掟や、法や、プライドを無くすと何でもする・・。　悪いモンスターの見本みたいかも知れないな」

「でも、イイ人も居るよ・・。　私・・見つけた」

「あぁ。　島の人達は、イイ人達だな・・。　ん？　“見つけた”？　・・誰だい？」

「うん。　ウィンツさん・・・」

素直にマキュアリーに言われ、恥ずかしくなるウィンツは。

「俺か・・。　イイ人・・かな？」

「うん。　カッコいい」

お世辞にも見栄えのする自分じゃないと、ウィンツは十分に解っている。“カッコいい”などと言われ、むず痒い気持ちが身体を駆け巡る気がした。

「カ・カッコいいか？」

「うん。　私には・・。　だから・・お母さんの事はいいの・・。只・・ウィンツさんとの子供が欲しい・・・」

マキュアリーは、そっとウィンツの腕に寄り添う。

自分の胸辺りと同じぐらいの背が低い、小柄なマキュアリーだ。

ウィンツは、可愛いマキュアリーを見て。

「俺の・・か？」

「う・・うん・・。　島では、みんな好き嫌い言う暇が無いから、

年に一度の祭りで、若い村の人と・・。　でも、私は怖い。　お母さんの事も有るから・・、好きな人以外は・・怖い」

ウィンツは、女性との経験が無い訳では無かった。　酔った勢いだの、寂しさから憂さを晴らす夜なら、今までに何度か過ごしている。　しかし・・、恋愛での情事は無かった。　だが、マキュアリーを泣かせる事は、男として嫌だった・・。

彼女の肩を抱いたウィンツは、吹っ切れた。

「いいぞ。　年に数度かも知れないが・・・島に会いに行く。　俺も・・君が好きだ」

と、自分の傍に引き寄せた。

そんな二人の姿を、高みの窓から見守っているのは・・。

「なぁ～んだ、遣れば出来るじゃ～ないか」

と、K。

「おいおい、俺の弟子の中でも一番出来るヤツだぞ。　バカにするな」

と、真面目な顔のクラウザー。

船長室の裏窓から、心配したクラウザーに釣られて二人を見ていたが・・。　その顔を、横のクラウザーに向けるKは。

「そいつは優秀な事で。　相手がハルピュイアって所も、新しいね

ぇ～」

クラウザーも、Kを見て。

「“新しい”って、何だ？」

「いんや。　ハルピュイアと人間のロマンスなんざ～そうそう無い。天使種族やエルフ種族の様に、何れ共に生きる時代が来るかもなぁ～って・・な」

と、Kは、ウィンツとマキュアリーの居る方に顔を振ったのである。

「・・、悪くない話だな」

クラウザーは、Kもイイ事を言うと微笑んだ。

Kは、其処で。

「さてと。　後は、お宝でも拝みますか～」

と、手を擦る。

「あ？　あぁ、幽霊船の中に有った箱の事か？」

「そう。　箱の形状は、かなり古いものさ。　恐らく、超魔法時代の後期かも知れない」

「ほぉ～、そいつは拝みたいな」

「見るか？」

「勿論」

二人が秘密の隠し部屋に移動する時。甲板の外では、ウィンツとマキュアリーが寄り添い歩いていた。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪船旅は続く　そして、マルタンへ≫

さて、その後。

リュリュは何と、オリヴェッティとルヴィアの間で手を繋いでいる。

「るんるん～。　オネ～サンといっしょ～」

腹の減ったリュリュにせがまれ、一階のバーラウンジに降りたオリヴェッティ。　其処で、ルヴィアに出会った。

リュリュに礼を言ったルヴィアは、船酔いで死人の様に成ったビハインツの様子を語った上で、オリヴェッティやKに色々と話を聞きたいと申し出る。

オリヴェッティは、秘法の事は隠しながらも。　或る学術的な遺跡を回る旅をしていると云って、席に座って食べながらルヴィアと話し合って気が合った。　Kも怒らないだろうと、秘密の隠し部屋に彼女を連れて行く事にする。

これに喜んだリュリュは、二人の女性の間に入り。　手まで繋いでこの通りである。

さて。　タイプの違った美人二人と共に部屋に戻ったリュリュと、宝箱らしきボロ箱を開けようとしていたKとクラウザーのタイミングは重なる。

扉を開いたリュリュは、Kとクラウザーを見つけて。

「あ〝ぁーーーっ！！！　ボクの居ないところで見ちゃうなんてずる～いっ！」

と、頬を膨らませる。

Kは、

「チィ。　なぁんだ、帰ってきやがったかよ」

と、舌打ちし。

クラウザーは、またも別の誰かを連れたオリヴェッティに。

「新顔かよ」

と。

Kは、顎でルヴィアをしゃくって見せ。

「アンタの弟子の船に乗ってた冒険者。　話したろ？　ボウレイに

殺されそうになってた二人」

「おうおう、ウィンツが言ってたあの二人の片方か。　中々の美人じゃないか・・・、女だろ？」

クラウザーの前に来たオリヴェッティとルヴィア。　そのルヴィアは、名の通ったクラウザーを見返して。

「あぁ。　私は、女だ。　名は、ルヴィアだ。　高名なクラウザー殿に直に会えるとは、光栄だ」

此処で、Kはあえてツッ込まなかったが。

クラウザーは、ルヴィアの腰に佩く細剣を見て。

「いい鞘だ・・。　だが、その柄に掘り込まれた紋章・・、貴族か？」

と、言ってしまう。

ルヴィアの顔が、キュっと引き締まった。

と。

Kは、宝箱を開けたがるリュリュを払いながら。

「クラウザー、他人の面倒を突っつくなよ」

「おぉ、スマン。　それより、中を見ようか」

ルヴィアは、自分の詮索を止めさせたKを見て。

（そうか・・、解ってたのか・・・）

と、心の中で呟いた。

ムクれるリュリュを他所に、箱の鍵穴にナイフを入れてこじ開けたK。

開かれた中身が気になる皆は、テーブルに近づいて中身を見る。

「おぉ・・・こりゃぁ～凄いっ！」

クラウザーは、宝石と金で出来た宝剣の短剣を見て、感嘆の声を上げた。

ルヴィアも、金と宝石で出来た記念メダリオンのガラッドが数枚見えて。

「何と・・、ガラット硬貨がこんなに・・・」

オリヴェッティは、魔力の篭った銀の柄をした伸び縮み可能なステッキ型の発動体や、初めて目にする数十枚の金貨に驚いた。

Kは、それぞれに。

「宝石は、どれもホンモンだな。　ホレ、クラウザー」

と、クラウザーに宝剣を渡し。

「超魔法時代のガラッドだ、王国の紋章の他に、魔法を扱う魔術師が描かれてる」

と、ルヴィアにガラッドを渡し。

「随分長く放置されていても、力を失って無い様だ。　魔法の詠唱を助ける精神安定の呪術が吹き込まれてる」

と、オリヴェッティにステッキを。

そして、

「リュリュ、これが無いとメシ食えないんだぞ」

と、金貨をリュリュに渡す。

「わぁ～、次の街で、お腹いっぱ～い食べれるぅぅ～」

と、金貨を持って踊り出すリュリュ。

さて。

Kは、箱の底の片隅に見えた菱形の手の平に収まる水晶体を見つけ。

（記憶の水晶・・か）

と、脇に向いて中身を確かめる事にした。

「・・」

目を閉じ、水晶の中身を覗くと・・・。

（あ〝っ？　な・・・なんじゃこりゃっ？！！！）

見えた記憶に、呆れと下らなさを覚えたK。　見進めたが、見えるのは似た様な光景ばかり。

（おい・・・、も・もすかすて・・・コレはぁ・・・）

Kは、金持ちの金の使い方が陰気臭いと力が抜けて来た。

クラウザーは、Kに。

「おい、それ水晶だろ？」

顔を抑えるKは、弱く頷いて。

「あぁ。　記憶の水晶だ」

オールドアイテムの代名詞を聞いたクラウザーは、童子の様な探究心を込めた目で。

「おいおい、凄いじゃないかっ！！　何が見えるっ？　歴史的な何か・・・こう凄いの見えたかっ？！」

弱弱しく首を左右に振ったKは、

「いや・・。　別の意味で、凄いのは見えた」

そのKの言い草に、

「？」

意味の解らない顔を示す４人。

クラウザーは、女性二人を見てから。

「中身は、何なんだ？」

クラウザーに水晶を渡したＫは。

「女の裸ばぁ～っかり」

「・・・」

オリヴェッティ・ルヴィア・クラウザーは、Ｋの言葉に目を点にし。

リュリュは、顔を赤くしてしまう。

水晶を見るクラウザーは、生じ男なだけに意味が薄っすらと解り。

「・・長旅の間の・・慰みに・・・使ってたのか？」

宝箱の内側に張られた赤い布が、一角だけ色褪せた部分を調べ始めるＫは、

「多分なぁ～。　船の中で、オネ～チャンを引っ掛ける勇気が無かったか・・・、見てくれが悪いのを自覚してたか。　何れにせよ、エロっぽい女の色んな秘め事が続いてら。　見てるだけなんて、アホくせぇ～事だ」

と。

クラウザーも、見れないが疲れた顔に変えて。

「おいおい、こんなお宝持ってて、この水晶の中身はねぇ～だろうがよ」

そこに、リュリュが興味津々の顔で。

「クラウザーのおじちゃん、それ貸してぇ～」

Kは、ギロっとした目と顔をリュリュに向け。

「エロガキっ、調子に乗るなよっ」

「いいじゃんっ」

慌てたオリヴェッティは、リュリュの教育に悪いと、クラウザーの後ろを通り抜けて記憶の水晶を取り上げる。

「あ？」

取り上げた彼女を見たクラウザーの目の中で、お姉さんぶったオリヴェッティが。

「リュリュ君っ、こんなモノを欲しがっちゃ駄目。中身は、今直ぐに消しますわ」

調べの手を止めたKは、

「あぁ、好きにしろ。　ただ、記憶された内容は長いぞ」

と、だけ言った。

実は、記憶の水晶に刻まれた内容を消去するには、少し内容を見る必要が在る。　部分部分で見て区切る必要が在るのだ。

記憶を消そうとしたオリヴェッティだが、突然見えた男女の羞恥に塗れたベットシーンに。

「嫌だぁ・・・、なんて・・まぁ」

と、顔を赤らめて声を出す。

首を左右に振るKは、

（知らねぇ～ぞ、悶々して寝れなくなっても）

と、苦笑いして調べを進めた。

Kは、宝箱の内側に隠された古い紙をも見つけた。

ルヴィアは、Kがどうして紙を見つける事が出来たか・・より。
どうして探そうと思い立ったのかが聞きたかった・・・。

だが、内容を読んだKは、見つけた紙の内容を誰にも教えなかった。

誰が聞いても、

“いずれ、教えるよ”

と、しか。

クラウザーは、Kの態度から微妙な何かを感じ取ったのだろう。
一度聞いたきり、それ以上は何も言わなかった。

宝箱に入っていたのは、ガラッド硬貨8枚。　各国の一昔前の金貨80枚。　伸び縮み可能な上に、魔法を発動する時に精神の安定を得られる白いステッキに、猥らな映像の入った記憶の水晶。　宝石を鏤めた宝剣に、指輪が二つ。　そして、紙。

Kは、もう所有者の居ない物だと、亡霊達と戦ったビハインツとルビアに金貨10枚をくれてやり。　ステッキを丁度いいからと、例の記憶の水晶と共にオリヴェッティに。

Kの行動は、素早い。

紙の疑問を引き摺るオリヴェッティやルヴィアを他所に。

「クラウザー」

「ん？」

「アンタの弟子・・・また路頭に迷うのか？」

「・・・。　多分、今回の一件で責任を取らされるだろうな。　アイツを雇ってる主は、海運商人の系列じゃ相当に意地汚い男らしい。
自分が行かせたのにも関わらず、責任は船長に押し付ける。　そうゆう人間だと聞いた」

「だが、責任は重いだろう？」

「多分。　被害の責任は元より、乗客から預かった金を奪われた事に重きを置くだろうな。　負債を背負うのは、アイツだ・・」

「んで？　アンタは、それを肩代わりする気と？」

「・・、老い耄れの心配や気持ちを、人前で晒すなよ」

クラウザーは、リュリュやオリヴェッティやルヴィアの前で言われて、正直苦笑い。

Kは、クラウザーを見返し。

「船長ってのは、随分と不当な扱いを受けているモンだ・・。　腕はイイのになぁ～」

と、Kは、此処で更にオリヴェッティに。

「オリヴェッティ。　君に残りのガラッド硬貨とゴールダーを預ける」

言われたオリヴェッティは、金貨５０枚以上とガラッドを見て。

「えっ？！」

こんな大金を預かるなど、考えられない。

Kは、淡々と。

「君がリーダーだ。　基本的に、コノ手の収入物は、君に預ける」

Kにこう言われるオリヴェッティは、Kの得た凄い物をお下がりで受け取っても嬉しくない。　寧ろ、いきなり財宝を与えられる様で、気分的に怖いぐらいである。

「あぁ・・あ・・私には・・・こんな大金は・・。　お金が無いなら、仕事を請ければイイ訳ですし・・。　だっ・誰かの為に・・・」

Kは、首を回らせて金貨やガラッドを見ながら。

「一文無しに成ったんだろう？　これだけ有れば、ぜぇ～んぶ取り返せると違うかい？」

すると、オリヴェッティは、真剣な顔をして。

「要りません。　新しい財産は、これから、私自身が作ります・・。　貴方がチームに居る間に、私自身が一つ大切な物を手に入れてから、自分で何とかします。　今の私には、他では決して出会えない貴方一人で、十分過ぎる宝物・・。　リュリュ君や、クラウザーさんと一緒に冒険を出来るだけで、本当に十分です」

オリヴェッティは、ゴールダーとガラッドを見て。

「これは、私よりもっと必要な人に・・・」

Kは、少しだけ口元を微笑ませて、そして金貨とガラットを見ながら口を動かすと。

「んじゃ、その通りにしようか・・。　ちょいと、面白い事考えた」

クラウザーは、苦い笑みで。

「おいおい、掻き回すのも適度にしてくれよ」

と、言えば。

Kは、ガラッドを一つ持って。

「恐らく、俺の目に狂いが無ければ・・・コイツはマニアにはバカ高い値で売れる」

Kは、クラウザーに顔を向け。

「クラウザー、弟子の事・・・俺に任せてくれないか？　その代わり、独り立ちして貰うがよ」

「どうする気だ？」

「アンタ、アハメイルに残ってるウォーラスを覚えてるか？」

「ウォーラス・・・、懐かしい名前だな」

「だろうな。　アンタの、元ライバルだからな」

「・・・、だが。　ヤツももう・・」

「あぁ。　前に直接会って、身体の事は聞いたよ。　だが、この金有れば、色々とさ」

クラウザーは、その名前の男の今を知っていた。　だから、返って心配で。

「お前、何を？」

「いや、面白い事さ」

Kは、ゴールダー金貨を数枚取り。

「とにかく、コイツはオリヴェッティが持っとけ。　リュリュのエサ代だ」

家畜みたいに云われたリュリュは、プゥ～っと膨れて。

「“エサ”ってやぁ～だぁ～」

Kは、細めた目でジロっと見て。

「お前の猛食はっ、エサで十分だっつーのっ！！」

「ヒィ～」

Kに怒られて脅える素振りのリュリュは、ルヴィアの後ろに逃げてはお尻にピッタリと引っ付く。

「おっ・コっ・コラぁっ」

恥ずかしがるルヴィアが、嬌声の様な声を上げて急に女性らしくなる。

Kは、内心。

（女の方が喜ばれそうな・・・。　まぁ、誰にって事じゃないがな～）

と、ガラッドを見て何かを考えた・・。

★

それから、数日。

ウィンツは、マキュアリーと部屋へ一緒入ったままだった。　部屋から出てくるのは、ウィンツだけで。　マキュアリーは、篭ったままに姿を見せない。

オリヴェッティは、リュリュを連れ、毎日部屋の掃除の仕事を無給で手伝ったり。　暇な時間は、Kが一緒に居たがらないので、ルヴィアやビハインツと一緒に居た。　三人の経験はそれぞれがバラバラで、お互いに話す経験談が新鮮だった事も有る。　まるで、一つのチームの様に一緒だった。

Kは、一人で甲板に居たり。　クラウザーに呼ばれて操舵室に居たり。

だが。　時として、顔を包帯で隠したまま。　望まれて、衣服を変えてカジノのディーラーをする夜も有った。　顔には、欠けたデザ

インの仮面を着けて・・・。

イカサマの必要が無い程に賭け事に強いKは、玄人のギャンブラーには好まれる。　Kが態と、ギリギリの試合を演出してやってる訳でも無いが。　強いKを相手にしようとプロじみた腕前が揃うから、中々ツキだけでは上手く行かない頭脳戦が展開し、ギャラリーにも好評である。

カードと云う有り触れたゲームで、金持ちの男女が四半日もカジノテーブルに釘付けに成るなど、中々滅多に無い事だ。

クラウザーが、自身の裁量で公開カジノを開くと、ディーラーのKと賭け事に慣れた者達が熱戦を魅せる。　冒険者達や、旅人も加わるから、熱が入るとリアリティー溢れるステージショーの様な熱気が渦巻いた。

即興で、様々な楽師や踊り子や旅芸人が協力し、大掛かりな演劇を披露する催しも行われていた。

長旅で疲れ出す頃の客達だが、その異質な雰囲気に疲れを忘れて楽しく過ごしていた。

さて。

明日には、ホーチト王国の王都で、交易都市でもあるマルタンに着くと云う昼過ぎ。

ハルピュイアのマキュアリーが、一人で船を去った。　夕方からは、雪が降ると云うのを聞いたウィンツは、マキュアリーの身体を第一に考えて昼過ぎにしたのだ。　天候の不順が無ければ、マルタンに

到着するギリギリまで一緒に居たかった二人だろう。

見送りに出たのは、ウィンツだけ。

Kとクラウザーは、船長室の裏窓から見ている。

幸せそうに、何度もキスを交わして・・。　抱きしめ合った二人だが、一時なりとも別れなければならないのは、辛そうに見えた。

船に残されたウィンツには、まだしなければ成らない事が山積みに成っていたのも事実。

クラウザーを雇っている商人は、拠点をフラストマド大王国とマーケット・ハーナスに持ち。　それぞれの支店的拠点を交易都市に構えている。　いや、海運商人の殆どが、このタイプだろう。

だが、クラウザーの様に最新式の船を乗れるのは、極一部。　世界で金に物を言わせ、魔力水晶を使った船で船団を築く一部の商人達。

彼らの使った船の中古払い下げが世に出回り出して、まあまあの商人や船長が使い出しているのが、今の現状でもある。

世界を走る船の総数から言うなら、風と海流に頼った船が半数以上を占めているのも当然と言えよう。

沈めてしまったウィンツの船は、云わば“改造船”。　壊れた動力の魔力水晶を安値で引き取り。　適当に修理してボロ船に積み込んだ“マガイ物”と云っていい。　魔力水晶体は、魔力を閉じ込める器だ。　だが、水晶体が損傷していると、魔力を飽和し切れず壊れてしまう。　乗客や積荷の安全を考える真っ当な商人は、そんな継ぎ接ぎ改造などまずしない訳で。　航海法の網を金などで潜り抜け、

荒稼ぎをする悪辣な商人がやる手法なのだ。

ウィンツの雇い主である商人は、今はホーチト王国に居る。　元はフラストマド大王国や、マーケット・ハーナスに店を構えていたらしき事も囁かれる。　素性や生い立ちの解らない不気味な男だった。

この説明を聞いても解る通り。　ウィンツを雇う商人とは、人を人と思う人間では無かった。

北風に吹かれて、鈍い速度を維持したクラウザーの船は、クルスラーゲの交易都市を出港してから１０日以上を掛けて、ホーチト王国の王都で、最大の交易都市でもあるマルタンに到着した。

そう。　此処は、Ｋとポリア達が出会った場所である。

クラウザーは、此処でも４日の停泊を決定する。　寒波の影響で、マルタンが早々と雪化粧し。　フラストマド大王国へ行く海上が、大時化の状態が続くと連絡を受けたからだ。

船を下りる客達は、すっかり雪化粧したマルタンの街へと出て行く。

クラウザーは、船員達に船を任せ。　カルロスと二人で、雇い主の支店本部が有る港の出向所へと向かった。

まだ、薄っすらと雪がチラつく中だ。

昼を丁度迎えた、今。　街に出ようとするオリヴェッティとリュリュに、数日で仲良く成ったビハインツとルヴィアを加えた４人が、甲板から備え付けの移動階段を降りる。

後から出て来たKは、甲板に居るオーバーを羽織ったウィンツを見つけて。

「よぉ」

と、声を掛けた。

蒼白い冷め冷めとした冬の海を見つめていたウィンツは、厳しい顔をK向け。

「あぁ・・。　これから、街に？」

Kは、ウィンツに歩み寄ると。

「まぁ、な。　そっちは、絞られに行くのか？」

事態を見透かされたウィンツは、苦痛の滲む笑みで。

「あ・・解っていたのか。　・・・恐らく、全ての責任と債務を、この俺は擦り付けられるだろうな」

同じく海を見るKは、

「アンタの雇い主・・、ジョンソン・マイランダーだったな？」

海を見るウィンツは、良く知っていると思って。

「ウチの雇い主は・・有名人だな・・・」

と。

すると、Kは。

「あぁ、相当の・・・な。　どれ、俺も連れて行ってくれないか？」

ウィンツは、パッとKを見て。

「俺と・・一緒にか？」

「俺は、野郎がマーケット・ハーナスに居た頃に顔見知りなんだよ。個人的に、用が有ったんだが・・・、姿消しやがってな」

（此処で知ったが、いい頃合いさ）

Kは、この一言を言わずに心で・・。

鋭くなる彼の目には、不気味な光が宿っていた。

Kは、オリヴェッティ達と別行動で、ウィンツの後を着いて行く事に。

港に下りたウィンツは、乗って来た大型客船を見上げて。

「大きいな・・。　親方の下を飛び出した時は、いつかこんな船の船長をしたいって思ってたが。　自分の思い上がりで、それを台無しにしちまった・・」

同じく見上げるKは。

「仕方ないさ。　人生なんて、そんな誰でも上手く出来てない。

色々あるさ・・、色々とさ」

「あぁ・・・、そうだな」

二人は、馬車などが荷物の上に雪を載せて行き交う港から、降りた乗客に混じって街中に向かった。

薄曇の寒空の下。　まだチラつく小雪の中を二人して歩く。　人が多く出歩く街中に入り。　ミンクやモグラなど動物の毛と皮から作られる帽子に、コートやオーバーを着た人々が集まる商店街を歩く中で。

「そう云えば・・」

ウィンツは、少し照れながら。

「マキュアリーが、君に礼を言ってた・・」

と、Kに。

「あ？　俺が何かしたか？」

「いや・・、その・・・何だ。　俺を・・俺達を助けてくれた事に・・」

「あ～。　ホレた男が助かって、無事に一緒に成れたんだものな。　そりゃ～まぁ、確かに」

マキュアリーと熱い夜を過ごしたウィンツだ。　こう云われると、その記憶が甦る。

「おいおい、人前で言うなよ」

「はっ。　照れる必要あるかよ。　ま、あのハルピュイアには、アンタが必要だった・・。　アンタ無しだったら、一生恐怖を抱いて生きたかもしれない。　良かったじゃないか、あんな可愛い女出来て」

ウィンツは、その言葉が水の様に心へと流れ込むのを感じる。　マキュアリーは、一見するとシッカリしているいい娘だ。　だが、やはり母親の居ない寂しさを抱えていたのだろう。　二人で眠る中で、自分の胸に唇を押し当て。　互いに通わせる愛情を感じようとして離れなかった。　また、ウィンツも、そんなマキュアリーが愛おしく、離せなかった。

心に傷を負った二人だが、その求める相手が合致していたのだろう。
　時間が経つのさえ忘れ、お互いに求むるままに、数日があっと言う間に過ぎていた・・。

別れは、怖い。

だが、ウィンツには、マキュアリーが離れて幸せで居るなら、自分にどんな災難が降ろうと逃げる気には成らなかった。　後は、責任を取らされるだけだとしても・・。

斡旋所へと行く道の更に幾つか先。　長い生活用品などの店が立ち並ぶ道に入り、長々と様々な石造りの建物が乱立する街中の三叉路に、“ジョンソン海貿”は有った。　三階建てをしたの６角柱型の店舗であり。

“何処よりも安く、迅速が一番”

等と、窓には紙が張られていた。

Kは、藤の蔦をイメージした看板や、赤い外壁の建物を見回し。

「へぇ・・、あの因業野郎め。　随分とコソコソする手口を覚えたな。　こんな感じイイ店を構えるたぁ～な」

ウィンツは、Kに。

「この店は、元は別の者が所有していたものだったらしい。　俺の雇い主が、奪ったとか・・取り上げたとかな」

Kは、呆れる素振りのままに頷き。

「はぁ～ん、ヤツらしい」

入り口の扉を開いたウィンツは、肩の雪を払って中へ。　後を行くKは、雪を何時払ったのか・・。

「いらっしゃ・・、あらっ、ウィンツさんっ」

受付に立っていた年配らしい雰囲気の男性が、ウィンツの顔を見て驚いた。

「・・」

中を見るKは、赤い絨毯や落ち着いた黒のインテリアを見て。

（ヤツの趣味じゃねぇ～な。　丸々と本当に奪いやがったかよ）

左隅の暖炉にくべられた薪が、パチパチと音を出す。

ウィンツは、受け付けに立つ正装をした痩せた男性に近づき。

「ジョンソン様は、上か？」

ちょび髭を鼻下に生やし、老け気味な中年と云う印象のヒョロ細い受付の男性は、何処か脅える様に頷き。

「あ・あぁ・・。　また、変な女を借金で連れ込んでる・・・。アンタ、どうして帰って・・・。　船・・・遭難したんだろ？」

「もう、耳に？」

「当たり前さ。　クルスラーゲの灯台管理から、こっちの方に連絡在ったよ。　魔法の伝達交信でも、船に乗ってた客から苦情が来てたって・・・。　近々、国の御偉いと会うとか云ってるゼ。　・・・ヤバイよ、逃げた方がイイ」

声を押し殺して云う受付の顔は、どんどん何かに脅えたものに・・・。

Kは、上に居る人物が、自分と関わった数年前と何等変わり無いままに生きていると思えた。

ウィンツは、Kに。

「先に、俺が行かせて貰う」

頷き返すKは、

「あぁ。　たが、俺が行ったら黙ってろ。　ま、先に報告してしまえよ」

と。

Kの言う途中の意味が解らなかったウィンツだが、素直に。

「あぁ」

と、受付の脇の壁に開いた階段へと向かった。

白い壁に挟まれた階段は、手摺が鋼鉄ながらに洗練された磨きとオブジェに模られた確かなもの。　職人が作ったものだと解る見栄えだ。

折れ曲がった階段を上り切ると、木の扉が正面に見える。

（さて。　殺されないだけでもマシ・・・だろうな）

ウィンツは、そう思って深呼吸すると、扉をノックした。

すると・・。

「おう、誰だ？」

と、低い威圧的な男の声が聞こえた。

「ウィンツです。　只今、戻りました」

すると、一瞬の沈黙が流れた後に。

「・・・入れ」

と、声が掛かった。

扉を開いたウィンツは、

「失礼します」

と、声を掛けた。

先ず目に入ったのは、上半身に分厚い装甲の鎧を着て、片手に長柄の戦斧を持った用心棒の姿だった。　口回りに髭を生やし、冒険者の戦士の如く武装している。

「入れ。　ジョンソン様がお待ちだ」

と、声が掛けられた。

用心棒の前を抜け左に向き直ると、其処は広々としたリビングだった。　黒い絨毯が一面に敷かれ、右手の窓側は、通りに面した外を見渡せる。　窓の前には、壁に備わる引き出しを多く備えた台続きで。　花瓶やインテリアの置物などが見えた。

「おう、ウィンツ。　ノコノコと帰って来たモンだな」

ウィンツの目先、数歩先に、ガラスのテーブルを前にしたソファーがある。　そのソファーで、背凭れに片腕を預けて偉ぶった様な姿

をして座る者が声を出した。

ウィンツの目は、その人物を中心に、周りの光景をも捉える。

ソファーに座るのは、黒い髪をオールバックにした中年男性だ。
鼻筋の通りはまずまず良い方で、鋭く釣り上がった目は、高圧的な気性の激しさを伺わせる。　褐色の肌をした顔は、なかなかふてぶてしい面構えと見れる。　首元が見えるモスグリーンのバスローブに似たガウンを羽織り。　下には、寝巻きの様な青いズボンを穿いていた。

だが、ソファーには、彼だけでは無い。

「ねぇ・・。　パパァ～、お客さんの前で、恥ずかしいわぁ」

と、その座る男に甘える女性が居る。　金髪の胸が大きい女性で、黒の透けた部分が多い下着のスリップに、下半身は何も着けず。ガーターベルトに黒いストッキングのみという井出達なのだ。

「おうおう、そうだな」

ウィンツに偉そうな態度を見せるそのソファーの上の人物は、膝などに掛けるチェック柄のタオルを手にし。　ウィンツにお尻を向けて、前を隠す様に甘えた女性の腰周りに掛けた。

「・・・」

女性の魅惑的な身体だが、人前と云う中でする格好では無いと思うウィンツは、視線を外しながら左右を見る。

部屋のソファーが有る両サイドの壁には、柱を背に剣を佩いた用心棒らしき若者と、杖を持った人相の解らない人物が居る。　炙れていた冒険者なのか知らないが。　こんなに用心棒を雇うなど、普通の店では考えられない。　いや、露骨過ぎるのが返って不気味で、ソファーに座る人物の素性が怪しまれる。

ソファーに座り、勝者の如く偉そうに女性の腰を抱く男。　その前に置かれたテーブルを挟んで、間近に来たウィンツは、膝を折って絨毯に。

「ジョンソン様。　クルスラーゲで私は、こうなると言ったハズです。　もう、あの船は魔力水晶を使った動力が死んでいた。　古い船なら、マストやセイルがしっかりしているから航海も可能だったが。　あの船は、中途半端物・・。　嵐の中を行けば、遭難するのは目に見えていた。　それなのに、俺に行かせた。　船が駄目なんだ、こうなるのは必然だった」

そう云うウィンツの話を、さも詰まらなそうに聞くジョンソンは、

「あ～ぁ・・。　俺の所為ってか？　それなら、お前の裁量で出港を遅らせればイイ話さ。　少し出て、何処かで隠れてりゃイイ話だろう？」

ウィンツは、詭弁だと思った。

船に乗せるべく集められた乗客は、安い賃金で早く着くと云う振れ込みに集まった者ばかり。　だから、クルスラーゲの出張所に来ていたジョンソンの部下は、ジョンソンの命令を守って自分に伝えた。

“今直ぐに出港しろ。　期限内に、必ずマルタンに行け”

と。

さて、ウィンツとジョンソンは、離れた場所にそれぞれが居た。
なのに、この二人が意見を直接交わす事など無理の様に思える。
実は、それを可能とする物が存在しているのだ。

各国の大きい交易都市の港には、魔法の力で交信の出来る施設が有る。“記憶の水晶”と並ぶオールドアイテムの一つで、今はもう作れない物だとも云われている。超魔法時代の産物とも、古代の神々が生み出したとも伝わる“以心伝心の秘書”が、それだ。

この物品は、斡旋所を運営する冒険者協力会の方が多様されている。
そう、斡旋所の正式なる主だけが持つ事を許されるあの本だ。
“以心伝心の秘書”は、そのオリジナルに成ったアイテムだ。

書いた内容が、基点となる場所で魔力の文字と成って。契約で結ばれた同じ本に伝わると云う仕組みに成っている。

扱うのは、斡旋所以外では、港の施設のみ。一回の使用で、幾らか金を取られる上に。使用する時間は、専用の砂時計が尽きるまでと定められており。その管理は、斡旋所のみと決められている。
見つかった数も少ない事から、いまだに配置さてない国があるくらい。

もう少し、このアイテムの深い所まで語りたい所だが。何れ、また何時か。

さて。無茶な航海など、するだけ無駄と云うウィンツの抗議は、その以心伝心の秘書で度々ジョンソンに伝えられた。

だが、高圧的なジョンソンの意思は、似た様な性格の部下商人に伝えられ。　結局、ウィンツは行くしかなかったのだ。　他の雇われ船長達は、ウィンツにしか出来ないと皆逃げた。

ウィンツは、口調からジョンソンが自分に全てを被せるのだと解った。

ジョンソンは、腰を抱く女性に。

「ライナ、ベットに行ってな。　コイツとの話が終わったら、たっぷり苛めてやるから」

「はぁい、パパ」

中々の低いイイ声をした淫靡な気怠さを携える金髪の美女は、タオルを腰に巻いたままに立ち上がる。　そして、ソファーの脇を抜けて奥に行くと、左側の開かれたままのドアの中に消えて行った。

女性が居なくなると、ジョンソンは両足をテーブルの上に投げ出し。

「おい、ウィンツ。　捨てられたテメェを拾ってやったのは、一体誰だ？　大して使えもしねぇ手下の船員を、俺はぜぇ～んぶクビにしようとしてた。　だが、お前が船を動かして面倒見るって云うから、仕方なくクルスラーゲに向かわせたんだ。　俺に楯突くってならぁ・・・オメェ借金を全部払え」

ウィンツは、覚悟を決めた静かな物言いで。

「俺の借金は、船を修理した費用だ。　アンタの持ち船の修理費用

を、云われるままに操る船長以下船員におっ被せるなんて、只の横暴だ」

ジョンソンは、そのニヤける顔に悪辣な雰囲気を漂わせると。

「おう～、そうかい。　だが、今回の全ての責任は、お前と船員に償って貰うゼ。　明日、港を管理する役人に会って、そう報告する」

ウィンツは、鋭い視線をジョンソンに向けると。

「船員には、関係無い話だろう？」

「フン。　なら、お前の肩にぜぇ～んぶ背負わすゼ」

ウィンツは、思った通りになったと思った。

ジョンソンは、無造作に指を折り始め。

「船の購入代金、駄目にした被害額・・他の船員に払う金・・。ま、2・3十万が掛かるだろうな。　お前、無給で働いて貰う。死ぬまでな」

この男がホーチト王国に来て、まだ3年にも満たないだろう。　金の遣い様が上手いのか、こうゆう問題を幾つ起こしても、ジョンソンには役人の手が伸びない。　寧ろ、ジョンソンの御蔭で何人の船長が首を括り。　また、金を借りた者が身を破滅させただろうか・・。

訴えようとした船長や船員は、行方不明になっている。

黒い噂も絶えないジョンソンは、ウィンツを見て。

「逃げようなんて思うなよ。　お前の素性は、粗方解ってるんだ。
お前が逃げるなら・・、そうだな。　お前の親方だった・・あの有名なクラウザーとか云う男に・・・」

ウィンツは、グッと拳を握り。

「関係無いだろうっ!!」

「・・・そうかな？　お前の事を世間に言い触らし、駄目な船長を作った親方に責任を求めるだけだ。　関係無い訳無いだろう？」

船長と云う家業は、人気や噂も影響する。　下手に変な噂が付いたり、役人の在らぬ嫌疑を掛けられても嫌われる所が在る。　世情が変わり、政治に国民が参加出来る世の中に進むにつれ。　商人と云う財界の世間と、貴族社会や政治が近くなり。　そして、まだその関係は曖昧で、陰湿な部分を含むだけに。　変な噂を流れるのは大変な事だ。

完全に上から人の足元を見るジョンソンと云う男に、ウィンツは、怒りに任せて拳を握る。　悔しさや憤りが身体を満たし、殺されてもいいから目の前の男を殺してやろうかと思った。

その様子に、見ていた用心棒達が身を構えようとする。

だが、その空気は、一声で一変した。

「悪い、失礼するゼ」

と、急に扉が開いていて。　Kが中に入って来たのである。

「あ？　誰だぁ？」

ジョンソンは、包帯を顔に巻いたKに目を凝らした。

「おいっ、此処を何処だと思ってるんだっ？！」

突然の様に、Kが目の前現れたと思う長柄の戦斧を持った用心棒は、断りも無く入って来たKに掴み掛かろうとした。

が。

「うわぁっ」

何処をどうされたものだろうか。　フワっと浮き上がった身体は、宙で一回転し、絨毯に敷かれた床に叩きつけられる。

「おのれっ」

「何者だっ」

剣士の用心棒が剣の柄を掴み。

魔法遣いの用心棒は、杖を構えて魔法の詠唱をし始めた。

だが・・。

“ゴトっ”

と、音がして。　足元を見た魔法遣いは、自分の杖の先に備わった発動体の水晶が、何故か床に落ちたのを見て驚いてしまう。

ウィンツは、魔法遣いの脇の壁に、ダガーが深深と突き刺さっているのを見て。

（ケイが・・投げたのか？　い・一体・・・何時？）

と、その早業に言葉が出なくなった。

「この野郎ぅっ！！！」

用心棒の剣士は、一気にKへ向かって踏み込んだ。　剣を引き抜き、建物内なので突きを見舞うべく右に構えながら。

だが、更に早く用心棒の目の前に姿を現したK。　一瞬消えた様になったKだ。　完全に目標として見失い、間合いを計れず立ち止まる用心棒に、Kは左脇から踏み込んで相対していた。

「フッ、遅いんだよ」

Kは、そう声を掛けるのと同時に、剣士の足を払って蹴倒す。　ドスンと背中から倒れた剣士は、もう気を失って、白目を向いていた。　その剣士の着る軽鎧の胸部が、鈍器の様な物で殴られたかの如く陥没しているが原因だろうか。

余りの流れの速さに、驚くままに固まったウィンツとジョンソン。

Kは、奥の部屋からこっちを覗いてる女性をチラリと見る。　金髪で、２０半ばから３０頃の女性で、ジョンソンに靡タイプには見え

なかった。

ウィンツの見た様子の彼女と、今、Kに脅える彼女の印象が、微妙に異なっている。　それをKが知っていたら・・・、一体どうなっていたか。

さて。

Kは・・・。

「おい、ジョンソン。　昔の知り合いに、随分な対応だな。　オメェ、俺に殺し屋２００人近く嗾けた過去を忘れたのか？」

と、テーブルの上に足を上げる。

ジョンソンは、自分を威圧する様に見て来るKの話にハッとして。

ワナワナと震える口のままに、

「お前・・まさ・ままま・・まさかかか・・・」

Kは、更に彼へと身を近づけ、上から見下ろす様な態度を見せながら。

「思い出したか？　まぁ、話が早くていいや。　んでな、お前の雇う船長か、この野郎」

と、ウィンツを顔で示すと。

「海の上で、俺の乗る船の近くまで幽霊船を案内しやがってよ。御蔭で、関係無い船が沈没する大事に到る所だった。　話を聞けば、

お前がボロ船を出させたって聞いたが？　本当か？」

ウィンツは、何がどうなっているのか解らない。　只驚き、見ているしかない。

だが、ジョンソンは別だ。　顔面を恐怖に脅える形相に変え、もう今にも逃げ出しそうな素振りなのだ。

「あわわわ・・・そっ・そんな・・滅相も無いっ！！！　俺・おおれはっ、頃合をみっ・見て船をだだだ・・出せと・・」

Kは、大仰に頷き。

「あ～ぁ。　んじゃ、コイツが悪い訳だ」

と、ウィンツを睨む。

「そっそそそうだっ！！！　責任は・・コイツに・・・」

ジョンソンは、震える手でウィンツを指差す。

Kは、透かさず。

「だが、コイツの親玉はテメェだろうが。　大体、多額の借金まで有んだろう？　今踏み込む前に聞こえたゼ？」

「いっ・いいっ！！！！　借金なんかナシだぁっ！！　今っ、コイツはクビにしたんだっ！！！　あ・・アンタのすっすす・しき・・好きにしたらいいっ！！！」

「あ～、そ」

「そそそ・・そうだっ。　アン・アアンタの・・・自由だ」

ウィンツは、どうしてこんなにジョンソンと云う男が、Kに脅えるのかが解らなかった。　ただ、顔見知りである事には違いないのだと・・、ジョンソンの素振りからも伺えた。

Kは、ウィンツを冷たい目で見ると。

「んじゃ～、この船長を貰って行くぜ。　煮るなり焼くなり、俺の勝手にさせて貰う」

「いいっ！！　こっ・ここっ殺してくれて構わんっ！！」

Kは、確約を取り付けたとほくそ笑み。

「おう、船長。　さっさ立て。　お前には、色々とツラ貸して貰う所有るんだからよ」

と、足をテーブルから下ろす。

ソファーから、背凭れを支えにして立ち上がるジョンソンは、逃げ腰の笑った膝のままに。

「いけ・・行けっ」

と、ウィンツを追い出す身振りで指図をする。

其処で、Kはスッと動いた。

ジョンソンの胸に、指を突いたのだ。

途端。

ウィンツは、体当たりでも食らったかの様に突き飛ばされるジョンソンを見た。　強い力でぶっ飛ばされたかの様なジョンソンの身体は、食堂として備わる奥間のテーブルに突っ込んだ。

机を破る音と共に、

「うぎゃっ！！！！！」

と、ジョンソンの悲鳴が上がる。

「きゃぁっ！！」

際どい格好をしていた金髪女性も、テーブルを壊したジョンソンに驚いて声を上げた。

凄い音を立てて、木製のテーブルクロスの掛かったテーブルを壊したジョンソン。　そんな彼に、Kは

「おいおい、指で突かれただけで吹っ飛ぶなよ。　身体に気を付けな、特に・・・酒にはな」

と、踵を返した。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪深夜の真実・前　男達の生きた道　隠し通した絆の素顔≫

Kの御蔭で、急に自由になってしまったウィンツは、建物を出た所でKを見た。

「あ～・・・、助かった」

と、呟く様に云ってしまった。　まだ、Kのやった事が激し過ぎて、混乱が気持ちを支配している。　思うままに、言葉が出ていた。

すると、Kはウィンツを見て。

「別に。　俺は、半分本気で言ったまでよ」

「・・・どうゆう意味だ？」

「アンタに、別の仕事を頼みたい。　だから、まぁ・・・利用されて欲しいって事さ」

そう言うKを見たウィンツは、またも意味が解らず。

「・・・解る様に教えてくれ。　俺は、アンタの頼みなら出来る限り・・・」

気持ちを込め出すウィンツの言葉を遮り。

「ま、船に戻ろう。　今夜は、ウルサイあのガキ達も街に泊まるし。　クラウザーも居ない。　アンタと、二人きりで話し合いたい事が有るんだ」

ウィンツは、Kの雰囲気がまた変わったと思った。　ジョンソンを威圧した彼でもない。　リュリュやオリヴェッティ達と居る彼でもない。　そして、自分の師であるクラウザーと居る時の彼でもない、そんな様子なのだ。

「・・・解った」

歩き出す中、すれ違う少女二人をやり過ごしたKは。

「恐らく、あの助けた船員達もクビなんだろ？　支えてやるのは、アンタしかいないだろうな」

「・・かもな。　ブライアンは、昔の怪我が元で足が悪いし・・、ジョベックも腕の怪我が完治しても後遺症が残るって云うしな。　ま、アンタが居なかったら、確実に止血もままならず死んでいたらしいから。　生きてるだけでも儲けもんだろう」

二人で並び歩き出す視線の先。　雪に染まった街は、何とも云えない独特の雰囲気が有る。　そして。　サラサラと降る小雪から、ぼ

たぼたと降る雪に変わる空を見上げたK。

「俺の尻拭い・・なんだがな。　俺じゃ～無理なんだ。　だが、クラウザーの認めたアンタなら、出来るかも知れない。　俺の今の旅は、過去の清算と・・罪の償いさ」

ウィンツは、あの最強無比の強さを誇るKが、急に弱くなる姿を見た。

「・・・、アンタでも弱まるんだな。　バケモノかと思ったが・・、だいぶ人間臭いな」

口元を緩め、髪に雪を乗せるKは。

「はは、そりゃそうさ。　リュリュみたいなクソガキに、遊ばれて絡まれてるオレだぞ？」

そんなKを見るウィンツは、つくづくKは不思議な男だと思った。

さて、その頃。

「んん～・・・、おいちぃ～～～」

リュリュが、満足そうに大きなサイズのケーキ1ホールを平らげ様としている。

ケーキなどのデザートを専門で作る職人が、個人で開く飲食店に入っていたオリヴェッティ達。

オリヴェッティやルヴィアは、カットされたケーキや、果物を工夫

して野菜とサラダにしたものをゆっくり食べるままに。　目の前で繰り広げられる、リュリュの大食いを見ている。

「はぁ～、何度見ても凄いわぁ・・・」

と、ため息交じりのオリヴェッティに。

「いやいや、この食いっぷりは、流石にあのケイにも負けないな」

と、笑っているルヴィア。

自身も甘党だと自負するビハインツは、リュリュに張り合ってケーキを1ホール頼んでいた。　ま、まだ半分ほどしか減っていないが・・。

ルヴィアへ、オリヴェッティは。

「あの。　今夜は、みんなでゆくっりとお風呂の有る宿に泊まりませんか？　明日は、この国の図書館などに行きたいんです。　市内観光なんかもしてみたいので、ご一緒して下さい」

食べるビハインツは、

「いい観光に成るな。　この街の中心にある植物園や動物園は、移動式のガラス屋根をした倉庫に包まれる。　薄暗いが、冬ならでわの植物は、見ていて中々面白いぞ」

オリヴェッティは、そう云うビハインツへ。

「良く知ってますね」

「あぁ。　この国は、オレの故郷さ。　まぁ、オレの出身は、もっと左の国境都市だがな」

「あ～、なるほど」

リュリュは、其処で。

「モグモグ・・ボクもこの国だよ・・。　もっと・・山奥だけどね・・モグモグ」

ルヴィアは、紅茶を啜りながら。

「ほう。　近いのか？」

まだ、ビハインツやルヴィアは、リュリュの正体を知らない。

オリヴェッティは、“マズイ”と思い。

「あっ、リュリュ君っ！！　夜は、何が食べたい？」

と、引き攣った顔で話を切り替える。

フォークを上に向け、思案にクビを揺らすリュリュは。

「う～ん・・、お肉がいいな～。　血のポトポト落ちる生肉とかぁ～、おっきいカエルのモンスタ～とか美味しいんだよねぇ～。　どっか無いかなぁ～」

その要望に、ルヴィアとビハインツはギョッとした顔のままに硬直。

（まぁっ）

慌ててオリヴェッティは、

「リュリュ君、そぉ～んなレアなステーキは、そっそうそうに無いわ。うふ・ふふふ・・・」

と、周りを見ながら口を濁す。

「・・・」

出来上がったケーキを運んでいたウェイトレスや、ケーキの下準備をするカウンター内側の主まで固まっていた。

キョロキョロするリュリュは、

「なぁ～んだ、ないんだぁ～」

と、安穏とした言い草でケーキの残りを食べきる。

「はぁ・・・」

横を見てため息を吐くオリヴェッティは、

（マズイわ・・、バレる日は間近かも）

と、不安になった。

さて。

夕方までまだ少し時間が有る頃。

港の東側。　寺院の様な石造建築の佇まいをする施設内の、小さな一室。“以心伝心の秘書”で、交信を行う魔法遣いを介して、雇い主と色々打ち合わせをしたクラウザーは、大きく胸を撫で下ろした。

使用を終え。　速やかに金を払って部屋を出て来たクラウザーは、次の使用者である商人らしき初老の人物とドア前で擦れ違う。　磨き上げられた石の廊下を行くクラウザーに、待っていたカルロスが近寄り。

「クラウザー様、向こうは如何にと？」

微笑む安堵を見せたクラウザーは、

「どうやら、幽霊船の被害者は、別にも多く出ていたらしいな。幽霊船の撃滅を、主は喜んでおった。　悪天候などの支障続きの航海だから、万事ワシに任せると。　フラストマドの近海は、更に吹雪いて大変だそうだ。　安全第一、難破などしないようにゆっくり来てくれとな」

「そうですか。　他にも・・そんなに」

「あぁ。　被害を大きく云えば、渡航する利用客や荷物の輸送量が激減する。　商人達の中には、その事を船長達にすら隠す者も・・・な」

「なぁんとっ？！」

「いやいや、怒るなカルロス。　船に殆ど乗らぬ商人など、目先の利益が先んじる。　それも仕方の無い所よ・・。　ま、最近南に頻繁に出没した幽霊船は、あのケイが潰してくれたからな。　これで、少しは安心材料が増えると云うものよ」

「は・・・」

「補給はともかく、寒波の影響で航海路は大時化だ。　おそらく・・、最低でも４日は船が出せん。　ホーチトの南岸にある王都マルタンですら、この雪だ。　安全には、倍も倍々も気を遣おう」

「そうですな。　マルタンの左右には、幾つもの川が流れて海の水が薄まる。　ヘタをすれば、氷の塊が出来る可能性もありますな」

「うむ。　何十年来の寒波になれば、その可能性もあるな」

「では、今夜は・・・港の船宿宿場へ？」

「うむ・・、他の船長の話を聞く為にも、その方がいい。　恐らく、一度出港した船でも戻って来る船もあろう。　他の船長とも、もっと話し合おう」

クラウザーとカルロスは、港の一角にある古く立派な屋敷へと向かう。　許された船長達が集う集会場と宿が一体化した施設で。　停泊をする船の船長が集まる場所だった。

雪が舞うマルタンの街を、観光気分で行くオリヴェッティ達。　温泉の有る広い敷地を持った宿に宿泊を決めた。

つまり、船に戻ったのは、Kとウィンツのみであった。

★

夕日が、雲に隠れたままに沈み。　暗く寒い夜が訪れた。　雪は、静かに街へ舞い降りる。

Kは、帰り掛けで買い込んだ物を持って、隠された部屋へとウィンツを伴って戻った。

「ほぉ・・、シークレッツ・ルームか。　流石に、下手な客船の部屋とは格が違う・・」

ウィンツは、部屋を見回して、部屋の素晴らしさに素直な感嘆を漏らした。

パンなどの入った紙袋を、円くシンプルなデザインのテーブルに置いたKは。

「まぁ〜、下手な船だと物置みたいだからな。　この船は、それなりに気を・・遣ってるってことさ」

「あぁ・・」

「さ、椅子に。　今夜は、喧しい面々が居ないからな。　俺も、気

が楽だ」

「寂しくならないのか？」

薄く笑って云うウィンツに、Kは。

「恋人の去ったアンタほどじゃないさ」

「そこを突くか、一番弱いな・・・」

背凭れの長い椅子に座ったウィンツの前に、歩み寄っていたKがワイングラスを置いて。

「アンタ、クラウザーの弟子だっただろ？」

Kを見返すウィンツは、

「了承が必要か？」

「いいや」

と、ワインの瓶を紙袋から取り出したKは、音も無くコルクを引き抜き。

「恐らく、キャプテン・ウォーラスは知ってると思う」

注がれるワインへの礼を忘れ、ウィンツは。

「ウォーラスって、あの“疾風船団のウォーラス”か？」

「あぁ、知ってるだろ？」

「当たり前だっ。　あ・あぁ～・・ウチの親方とライバルで、その所持した最新式の船十数艘から成る“疾風船団”は、荷物輸送の早さでは世界最速だと謳われた程だぞ」

「だな。　だが・・・ウォーラスがもう船長で無い事は？」

「知ってる。　何でも、禁制品を伴った抜け荷輸送に一役買ったとか云う話で、船長としての全ての権威を失ったとか・・・。　もう、６年以上前の話だと？」

Kは、もう調理されたパンや、チーズの塊を取り出しながら。

「・・・、では。　ウォーラスとクラウザーは兄弟弟子で・・・、クラウザーがライバルに到る元凶・・。　いや、そうなる事をしてしまったと云う過去は？」

その話に、ウィンツは口を空けて。

「あ・・・は？　どうゆう事だ？　ウォーラスは、世界最大の船団を築いた親方に名声が傾き、その所為で嫉妬したのだろう？」

手にグラスを持ちながら、テーブルの近場にソファーを寄せようと足で引きずるKは、背中をウィンツに向けた状態から、顔だけ後ろに反らし。

「クラウザーは、そう言ったか？」

ウィンツは、自分の兄弟子達や周囲の船員達からそう聞いていた。

だが、クラウザー本人からは、一度としてその様な事を聞いた事が無いと思い出し。

「いや・・。　だが、俺達はそう聞いている。　兄弟子や、周りも・・。　ウォーラスの船の船員からも、そう言われて絡まれ、二・三度大ゲンカした事だって在ったぞ？」

ソファーに座るKは、ワイングラスを見て。

「恐らく、理由はどっちも言えなかったんだろうな。　クラウザーは、非道と罵られるだろうし。　ウォーラスは、男として最大の恥を晒す事が出来なかった・・・。　意気地やプライドを張るのも仕事の内・・・。　海の男のヘンな柵（しがらみ）に縛られたが故だ」

ウィンツは、どうしてKが今更にそんな事を言うのかが解らない。

「なぁ・・、何が言いたい？」

Kは、リンゴの果汁を詰めた瓶を取り出し。

「これから言う事は、もうクラウザーとは関係無い。　だが、俺の頼みをアンタに言うに当たって・・、クラウザーとウォーラスの過去は、踏まえて貰えた方がいいと思う。　俺がアンタに頼みたいのは、もう先行きの無いそのウォーラスを、死ぬ前に救ってやって欲しいって事だ」

急に言われ、一瞬言葉を出せなかったウィンツ。

「・・・、何だって？　アンタ・・掟破りのウォーラスを・・・俺に助けろと？」

ウィンツの声には、意味が解らない故の困惑と少しの憤りが膨みかけた様子が伺えた。　海の男として、一番やってはいけない罪に手を染めた者を助けるなど、同業でも恥だと言われて育って来た。いくらKの頼みでも、それには譲れないものが疼き出す。

果汁をグラスに注ぐKは、雪の降る静かな夜の様に澄ました声で。

「ウォーラスは、実は罪に手を染めてない。　俺が・・・彼の船で禁制品を見つけたんだがな」

「アンタが？」

「あぁ。　実際の処、ウォーラスは知らずに輸送の片棒を担がされてたんだ。　だが、自分の船員をそっくり罪と関係無いとする代わりに・・・事実を一人抱えて闇に消えたんだ・・。　その船員を引き受けたのは、アンタの親方。　裏で手を回して、自分の息の掛かった船団に引き取らせた」

ワインを忘れたウィンツは、目を凝らして驚き。

「何で親方がっ？！　罪を犯した船長の手下だって、同じ様に蔑まれるハズだろうに？」

「・・・。　ウォーラスは、寧ろ騙された側。　深い知り合いの商人に騙されて、人買いの手伝いをしてた。　行く当ての無い孤児や・・片親を亡くして路頭に迷う家族を働かせる為に、一隻分の客船を動かした。　だがそれには、巧妙に旅人や家族を装い、客と紛らわせて運ばれる人買いの連れた子供や、若い働き手・・・そして女達。　みんな、バレたら殺されると脅されたり。　貧しい家族を助ける

為に、金と身代わりで望んで売られる者。　必死で、旅客を演じてたんだよ」

「じゃ・・じゃっ、あの噂はっ?!」

「噂の大半は、嘘。　マーケット・ハーナスとフラストマドの街中で、奇妙な発狂事件が起こってな。　薬の出所を探し回って突き止めたのが、不審な旅客に扮した若い男女。　俺は、その怪しい奴等が乗る船へ密航に扮して乗り込み、その現場を突き止めた」

「それが・・ウォーラスの?」

「そうだ。　と、言っても。　その船は、クラウザーやウォーラスの兄弟子が運航していた船で。　ウォーラスは、貧しい人が働き場を探し易い様にと、旅客船を貸していたに過ぎない。　しかも、その兄弟子と結託してた商人の背後には、貴族や所の悪党などが噛んでいた。　そして、その中には・・・クラウザーの奥さんの・・弟が居た」

クラウザーの身内に近い人間が居た・・・。　ウィンツには、その話は衝撃的過ぎる。

「そっそ・そんなっ、・・うっ・・嘘だろ?」

「其処で、どうしてもクラウザーと、ウォーラスの仲違いの訳が必要に成る。　ま、話すからワインでも飲んでくれ。　少し長い話だしな」

もう平常では居られない話だ。　慌てる素振りでワイングラスを持ったウィンツは、グッとワインを呷った。

Kとウィンツの話が、深く深く堕ちて見えない部分に近づく頃。

宿屋では・・・。

「オーケイっ！！！！　紳士淑女が何だってんだっ！！　軽快にダンスでも踊って楽しもうぜぇっ！！！」

「イエェ～～～～～～いっ！！！！！！！」

宿と提携をする酒場が、４つの宿の境に設けられている。　その中では、ピアノやハープを軽快に奏でる楽師や、派手な衣装で歌を歌う奇抜な吟遊詩人が、ステージの上で激しい動きの踊りを披露している。　そのダンスを見るリュリュは、嬉しそうに歓声を上げるのだった。

「やっほ～～～～いっ！！！　いいぞぉぉ～～～～、空でも飛んじゃえ～～～～～っ」

一方で。

「何だ・・・これが音楽か？」

カルチャーショックを受けるルヴィアは、宿に落ち着いて風呂に入った後だから、白い優雅なデザインのコート風ローブに身を包んでいる。　解いた髪が膝まで長く、随分と女性らしい。

鎧を脱いだビハインツは、黒い上下の井出達。　だが、だいぶに酒を飲んでいて、リュリュと肩を組んでは、

「いいぞいいぞっ！！！！　脱ぐかっ？！！　アレでもコレでも見せちゃおうか～～～っ？！！！！！」

と、壊れている。

そんなリュリュとビハインツに何も云えず。

（何だか、凄くウルサイわね）

と、苦笑いのオリヴェッティは、ドレス風の普段着であった。

中年から若い客達が集まり、ワイワイ騒ぐ酒場。　若さ弾ける美しい女性が、赤を貴重とした露出の多い魅惑的な衣装で踊る様子に、リュリュはもう騒ぎ捲くり。

「サイコ～～～っ！！！！。　ケイさんいねぇぇぇぇ～～～っ！！！」

と、大喜び。

オリヴェッティは、Kが居ない事にチョットだけ嬉しくなかった。

★

客船の一室で、核心に踏み込む話がウィンツに語られ出した。

クラウザーと云う男は、老いて尚も魅力を感じる渋い男だ。　だがそれは、老いた今に限った事では無かったのである。

生まれて直ぐからの境遇も有るが、盗賊を自らの手で倒した事に加え。　オリヴェッティの曽祖父との冒険などで、本人の人間が磨かれた所為も在るだろう。

気の短い海の男には珍しい落ち着きと、潜り抜けて来た人生の荒波が大らかさを彼に具わせた。

知らぬ人間からするなら、カリスマ的な存在と見えるクラウザーなのだろう。　だが、クラウザーとは、文字通りの“玄人”“苦労人”なのである。

そんなクラウザーだが、フラストマド大王国とマーケット・ハーナスに拠点を持っていた老練の船長に弟子入りしたのは、１９歳の頃。　その時既に、兄弟子としてクラウザーより二つ年下のウォーラスも、下働きの船員として働いていた。

クラウザーは、兄弟子ながら裕福な商人の三男に生まれたウォーラスが、非常に真面目な人物だと思って好いていた。

逆に、年齢に見合わない落ち着き。　そして働きながら教えられる事を、丸で真綿が水を吸う様に覚えるクラウザーに、ウォーラスもまた一目を置いてくれた。

二人は、将来は各々で大船団を持って、それぞれの夢を抱いて世界を駆け巡りたいと大望を語り合ったとの事だ。

さて。

クラウザーの結婚は、船団を持ち始めた３０前後らしい。　ウィンツが弟子入りした頃は、もう結婚していた。

だが、クラウザーとウォーラスがライバルの様に成ったのは、ウィンツもクラウザーが結婚した前後の様だとは聞いていた。

確かに、この時。　ウォーラスは、商人である実家の援助を貰い。個人で巨額の高速運搬船を買い入れ、優秀な船長としての技能を活用し始めた。　マーケット・ハーナスから東の大陸に行くのに、中継点コンコース島を経由しない航路で輸送をし始めた頃であり。一方のクラウザーは、数隻の大型船を抱え出した頃。

二人の船長としての向かう道筋が、ハッキリと別れた頃でもあった。だが、Ｋの話は、二人のライバル関係は、実はウォーラスの一方的なライバル視する行動が元であり。　クラウザーは、ウォーラスの事をライバル視していないと云う話だ。

ウィンツも、ウォーラスの事を話さなかったクラウザーを覚えている。　周りの船長仲間に炊き付けられたとしても、一度として彼をバカにするような話を、クラウザー自身から聞いた事は記憶に無い。

（そう云えば・・。　親方は、兄さん達がウォーラスの事をバカにしたら、逆に叱った記憶が・・・）

何時も叱る時は、大声で一撃の雷を落とすクラウザーだが。　その時だけは、低い声で睨み付ける様な、本気の憤りを見せたのを思い出す。

そう。　正しくこの二人には、シコリが在ったのだ。

その原因は、クラウザーの妻である“リドリー”なのだとKは言う。

リドリーは、フラストマド大王国の中流貴族の父親と、愛人であった商人の娘の間に生まれた庶子である。　問題なのは、リドリーが長女と云う立場である事。　そして、貴族の父親と結婚していた正妻が子供を儲けたのが、リドリーが１５歳にまで育った頃なのだ。

先ず。　生まれたリドリーは、乳離れと同時に半ば実母と引き離された。　貴族の父親と結婚していた正妻は、継母としてリドリーを育てる事になったのである。

そして、正妻の女性が弟を生むまで、父親の一族もリドリー以外に家を継ぐ子供が無く。　更に、母親の家である商人の家にも子供が恵まれず、リドリーしか両方の跡継ぎが居なかった現状が続く。

１５歳まで、双方の家に取り合い状態で居たリドリーは、弟の出生を非常に喜んだ。　自分を認め切れない正妻の貴族である継母に、密かに弟誕生の喜びと共に実母の家に去ると別れを告げた。　貴族の父親は、可愛い一人娘ながら、跡継ぎとしての男児が生まれてしまったので。　面倒を避けるべく、リドリーを実母の下に返した。

だが・・。

リドリーと腹違いの弟を生んだ正妻は、病気で呆気無く死んでしまう。　残された長男は、僅か3歳。　リドリーの父親は、娘ながらに頭脳の明晰なリドリーと、愛人関係を続けた娘の母親を正式に身請けし。　商人の家を自分の一族に融合させ、リドリーを将来の主にして勢力の拡大を狙った。

リドリーを跡継ぎにするならと、母方の両親も納得。　リドリーには、その後に実母が生む弟も誕生し、二つの家の融合化は上手く事を運んだかに見えた。

しかし。

死んだ正妻の一家は、一族の繁栄の為に出した娘が死に。　後添えに商人の娘を入れて、正妻の生んだ長男を持て余し始めたリドリーの父親に恨みを募らせた。

リドリーは、見た目華やかな美しさと言うより。　スマートで一歩控える慎ましさと、知的な印象の魅力を備えた才女と成り。　後に続く弟達3人より期待されてはいたが、両親に不審を抱いていたのである。

リドリーは、死んだ正妻の女性に同情をする人間性を強く持っていた。

腹違いながら、分け隔て無く弟達に接したリドリーは、正妻の生んだ弟を母親の様に面倒見ていた。　愛情希薄な両親に代わり、まるで恋人の様に愛して接していた。　正妻の一族は、リドリーの存在を嫌いながらも、一族の血を引く正妻の子供に期待を寄せたのである。　彼がリイドリーよりも立派になって超えれば、もっと優秀な人物になれば・・・と。

しかし、リドリーを将来の主にしようと思う両親とその一族は、正妻の生んだ弟を遠くの学院へと入れて、リドリーから引き剥がす。
　リドリーに結婚を促す目的も在ってだろう。　リドリーと長男の年齢は離れている。　リドリーを早期に結婚させるとしても、父親

から娘に家督を継承させる上で面倒は欲しく無い訳だ。

さて、リドリーの婚約者には、下手な貴族の阿呆では無く。　今の時代を切り開ける能力が求めらたと云って良い。　つまり、実利主義的な観点だ。

その槍玉に上がったのが、船長としても優秀であり。　実家の商売を一気に手広くしようとしていた、最速運搬船の船長ウォーラスだった。　彼の実家である商家は、先ず先ずの規模と財産を所有していた。　そして、マーケット・ハーナスの治世にも関わる親族が多い。　ウォーラスほど、リドリーの家に都合のいい相手は中々他に居ないと思われた。

ウォーラスの家としても、リドリーとの結婚は渡りに船。　貴族と云う名誉と、勢いの在る商家と提携できる訳だ。　ウォーラスが双方の家の店先に並べる商品や、取引する商品を一括で運んでくれれば。　輸送費を安く出来るので、他の輸送費に金の掛かるライバルを出し抜ける。

本人同士に話は伝わらないままに、結婚の話はトントン拍子で進んだのは当然である。

或る日、先にとリドリーには、見合いと相手の事を教えられた。　しかし、リドリーは人並み以上の才女である。　父親の言い成りで、操り人形の如くウォーラスに嫁ぐのが嫌だった。　家は、弟達に任せ、最もしっかりした者を軸に運営した方がいいと思っていた。

世の中は、まだ女性を軽んじる傾向にある。　しかも、ウォーラスと結婚したとしても、それは自分とウォーラスの両親達が画策した形に填まるだけ。　人間としてのお互いの幸せも考えず。　只勢力

を拡大し、只規模を膨らませるだけの謀略結婚としか思えなかった。

利巧なリドリーは、何れ結婚したとしても、自分もウォーラスもそのジレンマに悩む日が来ると思った。　そうなれば、利害だけで結ばれた家は滅茶苦茶に成ると予想したのである。

こんな彼女だ。　真面目で、やり手なバリバリのウォーラスより。　大らかに時勢を見つめ、弱い船員をも掬い取って働かせる人間味の濃いクラウザーに、その心情が行ってしまうのも仕方の無い事かも知れない。

と或る夜。　フラストマド大王国の貿易都市アハメイルで開かれたその晩餐会は、商人と商いをする貴族へ、個人船団を持つ船長達を紹介する一席だった。

いきなりの見合い話をその日に聞かされ。　リドリーを紹介されたウォーラスは、その礼儀を弁えたリドリーに一目惚れしてしまった。

だが、リドリーの瞳は、どんな貴族や商人にも堂々と接し、対等に立ち向かう少し醒めた様子のクラウザーに向いていた。

リドリーは、晩餐会以前にもクラウザーを見知っていた。　航海中に事故で死んだ兄弟子の家族を養い。　自分の知人の店に、未亡人と成った奥さんを働かせる口利きをしに来たと云うのだ。　クラウザーは、弱い立場の者に手厚い気を傾ける。　その姿勢の噂に、彼女は心酔し始めていたのである。

煌びやかな晩餐会の席で、クラウザーを見たリドリーは、次々を娘を紹介される彼を見ていた。　美しい娘を嫁がせようと、クラウザーに紹介する商人達の魂胆を、何処と無く嫌うクラウザーは淡々と

していた。

一方で。　リドリーの気持ちを悟れないウォーラスは、この夜に婚約を前提にリドリーの家と提携する事を決める。

さて。　晩餐会が一番盛り上がった頃。　これ見よがしにクラウザーへ娘達を紹介する商人達だが、能率と利益優先を押し付けると噂される商人に飼われるのを嫌い。　晩餐会の途中で、会場を抜け出すクラウザーが居た。

体調不良を理由に、同じく晩餐会を抜け出しその後を密かに追ったリドリーは、この夜に変身した。　なんと、夜の女を装い。　クラウザーが歩いて帰る所に現れ、一夜の誘いを掛けた。

突然に誘われたクラウザーだが。　よく見ると、淫靡で爛れた感じの或る夜の女には無い魅力を、現れたリドリーに感じた。　軽いやり取りを重ねた後、彼女を宿に連れてしまう。

何の事情も知らぬクラウザーは、初めてだったリドリーに驚くのだが・・。

“娼婦にならなきゃいけないの・・。　貴方に、初めての男に成って欲しくて・・・。　一夜だけ・・、一夜だけでいいから・・・”

と、弾ける若く瑞々しい肉体を差し出すリドリー。

クラウザーも、夜の女とは違う新鮮な女性の魅力に溺れる気に・・。

しかも、弟を助けたいとの云う意地らしいリドリーに、人間として興味を覚えたのである。

・・・。

何も知らぬウォーラスは、リドリーと結婚出来ると思っていた。船長として、リドリーの家を助ける傍ら。　時々屋敷へと立ち寄っては、彼女を誘うのだが。　どうにも反応が微妙で解らない。　夜の逢引に誘っても反応は無いし。　気持ちを伝えても、曖昧にかわされる。

その内、二月ほどして・・。　別の商人から、リドリーが度々に朝帰りをすると聞き。　遂に、現実を知る事に到る。

リドリーは、夜に成るとあくまでも娼婦を演じる。

逆に、彼女と逢うクラウザーは、リドリーが余計な汚れを覚えなくていい様にと、彼女を自分の愛人の如く金で養って居るかのように思わされていた。

更に、リドリーは高い教養を備えていた事。　これが、二人の絆を生む事に・・。

落魄れた貴族と嘘を言う彼女の言葉を、完全に信用していたクラウザー。　一夜を共にする傍ら、リドリーから様々な教養を教わる。　礼儀や、貴族のしきたりに始まり。　普通では意味の解らない様な雑学や、世情など・・。

更に。　字は大体読めるが、正式に書く事が出来なかったクラウザーは、彼女から教わる事に。　それまでのクラウザーの文字は、“棚から文字が零れ落ちる程に汚い”と云われていた。　だから、書き物は他人任せだったクラウザー。　航海の無い時は毎夜愛し合い、ベットの上で文字を習う。　彼女の御蔭で、正式な書類の作り方ま

で習った。

クラウザーと夫婦の様な、先生と生徒の様なやり取りをし。　その一時に安心と、幸せを覚えていたリドリーの狙いは、無論金では無い。　惚れたクラウザーに逢いたい、そして共に夜を過ごしたい一心なのだ。

クラウザーも、今までに出会ったことの無いタイプのリドリーなだけに、彼女に男として本気に成っていた。

だが。　婚約を願って、彼女を思い続けていたウォーラス。　弟弟子のクラウザーの愛人として、共に宿に消えたリドリーを見て、どう思ったのだろうか。

次の日、クラウザーと別れたリドリーを待ち伏せした彼は、狂う寸前だったのかも知れない。

しかし。

リドリーは、家を継ぐ気も無く。　弟に全てを預け、自分はクラウザーの愛人として生き。　その全てが明るみに成る頃には、自分なりの決断を下すと云った。　欲望に塗れた一族を嫌い、喩え愛人でも愛した男に添い遂げると誓いを立てた女性。

その意気地を見たウォーラスは、自分の気持ちを吐き出せ無かった。　クラウザーとは、何処までも対等に遣って来たと思ってた自分が、完膚無きまでに負けたと思い知らされた一瞬だった。

ウォーラスは、その決断の中には彼女の“自決”も含まれると解った。　娼婦に見せて、クラウザーに近づく彼女だが。　普段の彼女

には、清廉な気高さも垣間見える。　もし、クラウザーとの結婚が出来ず、肉体関係すらも拒絶された後。　恥を罵られたり、生きて浴びる世間の言葉を無にすべく。　何らかの行動を起こすと・・・。

或る夜。　ウォーラスは、リドリーに内緒でクラウザーを港へと呼び出した。

全ての事実を聞いたクラウザーは、ウォーラスに土下座した。　そして、自分は船長を辞めると覚悟を示す。　何処までの兄弟弟子としての分は守って来たクラウザーは、全てを捨てようとする。

だが、クラウザーの抱える船員数や、社会的な衝撃を考えたウォーラスは、自分が身を引くと決めたのである。

“リドリーを幸せにしてくれ・・。　俺は、彼女の家を引っ張る”

此処で、ウォーラスとクラウザーの決別たる別れが・・。

ウォーラスは、全てを胸に仕舞い。　更にライバル的な関係を二人の間に築いて、リドリーを二人が愛した事を封印した。

リドリーの逢引を密かに手助けしていたと、ウォーラスはリドリーの家族に嘘を付き。　勘当されたリドリーは、クラウザーが抱き上げた。

その後、生涯妻を娶らなかったウォーラスの心には、リドリーの事が在ったのだろうか・・・。

だが、問題は残っていたのだ。

リドリーの弟達の中でも、正妻の残した弟は歪んだ環境で育ち。リドリーの愛情も虚しく、その性根が曲がってしまった。　分割された商業力を保持出来ず、悪党達や悪徳商人とつるむ人間に堕ちる。

そして、仲間が密かに始めた禁制品の売買や、人攫い・人買いの悪事に加担し。　そして、ウォーラスを騙す事態を招いてしまうのだった。

ウォーラスの船が、悪事の片棒を担いでいたと噂が立った時。　クラウザーは、密かに彼と連絡を取った。　二十数年ぶりに・・。事実を知ったクラウザーは、兄弟子は騙されたんだと、周りに声を上げると決めようとする・・。　役人や知人に申し出て、全ての関係を調べ直して貰おうとした。

だが、しかし。

ウォーラスは、自分をクラウザーが擁護しては、世間の中傷にクラウザーもリドリーも巻き込むと押し留める。　真面目なウォーラスは、硬い部分を持っている。　自分の子分と言っていい船員達とその家族。　そして、表に出なかったリドリーの事を含めてクラウザーに任せ、全部一人で背負う事を決めて、片棒を担いだと自供した。

クラウザーは、涙を呑んだ。　兄弟子の気持ちを心で握り締め、何日も酒を呷って航海が出来なかった。

だが、もうウォーラスは自供している。　悔しさや憤りを、兄弟子の思いと共に心に閉じ込めたクラウザー。　当時、最盛期であった己の大船団を幾つかに分け。　自分の息子達、自分に付き従う船長達に分散した。

その作業の中で、足らぬ船員の穴埋めにと、遠回しにウォーラスの配下の船員達を雇って組み込み。　世間で浴びる罵倒の渦に消されるウォーラスを、静かに見つめていた。

港を旅立つ或る日。　汚い格好をした兄弟子が、一瞬だけクラウザーを見送りに来て。　その後、旅人から彼の手紙を受け取ったクラウザーは、延々と綴られた感謝に泣き叫びそうだった。

その後。　自前の船団を操る引退前のクラウザーは、気の抜けた老将の様だったとか。　殆どの作業を若い船員や、船長候補に任せ。　何時も何時も、海や単調な景色の続く空を見上げていたらしいと。

ウィンツは、クラウザーとウォーラスが、男の友情で堅く堅く結ばれているのだと解った。　師が、何故にライバルのウォーラスを、自分の部下に罵られて怒ったか・・。　その真意は、今でもクラウザーには、最高の兄弟子がウォーラスなのだと・・。

（親方・・・、アンタって人は・・。　二人で、必死に女一人を守るのかよ・・。　嗚呼っ、親方に会えた俺は、誰より幸せ者だな・・）

マキュアリーの事で、自分を叱ったクラウザーの言葉が甦る。

“お前、何時から人の気持ちが解らなく成った?”

クラウザーは、確かに人の心が解る男だった。

表立って唱える正義や、隠し事をせず真実を明るみに出す事も正しき事かも知れない。

だが、犠牲を払うだけが正しさだろうか。　クラウザーは、兄弟子のウォーラスと沈黙を貫いた。　守るべき者を、守る為に。

ウィンツは、今夜は寝れそうに無かった・・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪深夜の真実・後　雪の中の隙間風　寒さの沁みる夜は死が香る≫

クラウザーの過去を知ったウィンツは、全てを聞いた上で、Kに聞く。

「俺に・・・何が出来る？」

粗方を話し終えたとソファーに横に成るKは・・・。

「ウォーラスは、酒と疲れで身体がボロボロだ。　もう・・今年を生き延びたら・・・、来年は越せないだろうな。　だが、未だに海に未練を持ってる。　ヤツは、自分の中に残した物を継がせる誰かを、何かを探してる気がする。　アンタ・・・、ウォーラスに体当たりでぶつかってみないか？」

「“ぶつかる”・・・だと？」

「あぁ。　俺は、正直な事を継げて、ヤツにアンタを紹介する。

ウォーラスの気持ちがどう動くかによっては、何らかの行動を見せるだろう。　クラウザーの愛弟子で、一番の腕を持つアンタに気持ちをぶつれれたら・・、ウォーラスも心残りが少なくなる。　俺がぶっ壊したヤツの船団と地位だがな。　一つの納得は、得られる・・いや、着けれるかも知れない」

椅子をKに向かわすウィンツは、心に疑問の湧くままに。

「最近、・・その・・・逢ったのか？」

「夏に・・チラっとな。　正直、不憫だった・・。　落魄れた姿より、船乗りとしての気持ちを残してる事に。　俺はあの時不正こそ暴いたが・・、人一人救ったかどうかすら解らない。　持って逝くモノが多いにしても、心残りは少ない方がいい。　クラウザーの心残りを含めて、出来る事はしてやりたい」

「親方も・・・？」

「ん。　クラウザーも、普通にしてるが保って・・・2・3年。それ以上は、運と体力次第だろう。　目の様子や、身の動きからして、腹の中に腫瘍（コブ）が出来始めてるんだろうな。　いい年だしな・・・」

ウィンツは、クラウザーの身体故に慌て。

「ならっ、今直ぐに医者へっ」

「いや。　多分、前に一度手術してる筈だ。　恐らく再発なら、身体の彼方此方に出来始めてるさ。　もう、医術や魔法でどうこう出来る段階じゃない。　クラウザーとて、生じ普通の身体じゃない。

酷使して、鍛え抜いた身体だ。　一旦落ち目に入ると、無理を無理の上塗りして来た苦労が噴出す。　緩やかに、しかも確実に悪くなって行くんだよ。　無駄に闘病を強いるより、好きな事をさせた方がイイ」

ウィンツは、丸で諭されている様なKの語りに。

「だから・・、親方は船を降りると？」

「・・元々、クラウザーに夢が在った。　船乗りに成って、まだ誰も見つけた事の無い宝を探す夢がな。　俺と一緒のオリヴェッティも、その夢を追ってる。　在るのか・・無いのか・・、決着を見てみたいんだろうよ」

「そうか・・・」

落ち込むウィンツに、Kは。

「気にするな。　もう時代は、アンタ達の世代から若い者に移行している。　今更、ウォーラスやクラウザーが出張った所で、それは逆行だから意味無い。　あんた等は、あんた等なりの。　老いたクラウザーやウォーラスは、それなりの夢を見るのさ」

「そうか・・・。　アンタ・・、何処か親方に似てるな」

ウィンツは、Kの成熟した様子がクラウザーと似てると思った。

Kは、手を軽く上げてヒラヒラさせ。

「よせよ。　俺は、まだジジイじゃない」

と、語り疲れたかの様に、目を閉じた。

★

夜は、真実を人の横に置くと云う。　陽の差す昼間は、明るみに出される様な真実・・・。　だが、夜は違う。　見えぬ宵闇の中、心の中に問うのだ。　味わった何かを、選択して過ぎ去った過去を、そして・・・その正邪を。

クラウザー自身。　何度その時を味わっただろうか。　毎日思う苦悩が、時と共に薄らぐ分。　ふと思い出す時は、涙を伴う時が在る。

（ウォーラス・・・）

Kに名前を出されて以来、クラウザーの脳裏にその面影が漂う。骨張った厳しい顔つきなのに、やや面長で目が可愛い。　バカを付けていいぐらいに真面目なのに、商売と云う裏表の道を純粋に突き進もうとした男。

雪の降る夜は、空気が凍り。　されど、シーンと静けさの聞えそうな、その張り詰めた空気に、降り注ぐ雪が音成らぬ音を奏でる様な雰囲気が在る。　その静けさが、昔を思い出せる様に、心の記憶の扉を開かせる。

大きな円形の施設の北西。　船長達が寝泊りする部屋の一室。　灯

りは既に消え。　物音など、離れた所でまだ起きる船長達が話す声が微かに聞こえる程度。

「・・・」

窓のガラス戸の向こう側から、雪の降る音が聞える中。　クラウザーは、目を覚ましていた。

（ケイ・・、ウォーラスをどうする？）

ふと、また気に成った。

クラウザーが３０に成る頃まで生きた師、サミュエル。　ガリガリに痩せた身体からは、想像も付かない程の体力を見せる船長で。元は海賊だったり、強制労働を強いられた囚人の鉱夫だったりしたと云われる人物だ。

その男とクラウザーの出会いは、指して特別な経緯でもない。

弟子にしてくれそうな船長を探し、１９歳のある日に、フラストマド大王国のアハメイルに遣って来たクラウザー。　寒さも治まった春先、誰の紹介も無く、大型船の船長達に断られ続けたクラウザーは、野宿をするしかなくて港の片隅に蹲って寝ていた。

街が眠る頃合に成ると、酒の匂いをさせ、街から帰って来る船員達。

そんな遅い夜更けに、クラウザーへ。

「おい、アンちゃんよぉ」

と、掠れた酔い声が掛かった。

クラウザーが見上げると、其処には老い耄れ染みた一人の男が。
片目が略潰れ、口元は左側に歪んでいた。　ガリガリに痩せた顔は、亡霊の様に見える。　篝火の灯る船の前で、男は蹲っているクラウザーに。

「アンンタかい？　今日一日、彼方此方の船に弟子入り頼んでたのは？　船乗りなんざ～、不当とお友達に成る仕事だぁ？　お前みたいなイイ面構えした若いのは、商人でも目指せ。　その方が、利巧だぞぉ～？」

だが、クラウザーにも目的が在った。　だからクラウザーは、云った。

「自分は、親も家も何も無い。　商人なんか、俺が育った孤児院を襲った人買いと同じ仲間だ。　俺は、船乗りに成りたい。　世界の海を渡り、まだ誰も見つけたことの無い宝や、歴史を見たいんだ。
　小船を操る事は出来るけど、大きい船は知らない。　この手に、どんな船でも操れる技術を刻みたいんだ」

クラウザーの見る男の貧相な顔は垢染みて、取って付けた様なゴマ斑の髭。　ヨレヨレで変な臭いのするキャプテンハットをしたその男・サミュエルは、

「・・・来い。　コキ遣われて殺されるまでに、技術を覚えな」

と、クラウザーを掬い取ってくれた。

次の日。

「おい、クラウザー。　お前の兄貴を紹介してやる」

サミュエルは、船員の中でも滅多に夜遊びに出ない堅物を、船の片隅で過ごしたクラウザーに紹介した。

「おい、ウォーラス。　コイツが新入りだ、挨拶しろ」

髪の毛を短くして、赤い布で巻いた若者が。

「俺はウォーラス、よろしくな」

と、手を差し出した。

その若者の顔つきは、丸でクラウザーより年上のの様な老け顔なれど。　その双眸は、真っ直ぐな少年と云って良く。　生真面目そうで純朴な若者と見取れる、それがウォーラスだった。

麻布のズボンに、半そでのボロシャツを着たクラウザーは、その差し出された手をガッシリ掴んだ。

「クラウザーだ、よろしく」

その様子を見てたサミュエルは、クラウザーに。

「いいか、クラウザー。　ウォーラスはまだ17歳だが、お前より2年も早く船乗りをやってる。　兄弟子は兄弟子だ。　年上だろうと、お前は下だぞ」

云われたクラウザーは、頷いて再度。

「兄さん、よろしくお願いします」

と、頭を下げた。

それから、クラウザーの船乗り生活は始まった。

だが、不思議と周りの船員から見ても、クラウザーが素人とは思えなかった。　船上で使う言葉に慣れているし、力仕事も難なくこなす。　特に、荷物の積み込みの速さと正確さは、新入りで既に玄人だった。　揺れる船内の倉庫。　荷物の重さを理解し、置く所を考えないと航海中に荷物が動く。

ウォーラスは、毎日教える事を毎日同じ速さで理解してゆくクラウザーに、人間として興味が湧いた。

賭博や娯楽で国を成り立たせる国に荷物を運び、また別の積荷が在る故に数日の停泊をした。　その最初の夜。

別の国の王族が来たので、盛大な花火がカジノが行われる本殿に打ち上げられた。

「キレイだな・・」

港の船で、他の船員の仕事を押し付けられていたクラウザーが、手を止めて云う。　港から見える花火が、クラウザー初の花火だった。

一緒に働いていたウォーラスは、

「此処の国じゃ、何かと花火は打ち上がる。　クラウザー・・、お

前は船乗りに志願する前は、何をしてた？」

青い繋ぎの様な衣服に身を包むクラウザーは、ロープを束ねながら。

「17までは漁師してたんだ。　俺、天涯孤独の身で、漁村に拾われたから」

「そうか・・、若い頃から偉いな」

「船乗りになりたくて、最初マーケット・ハーナスに行ったけど。船着場で半年働いたのに、誰も口利きしてくれなくて乗れなかった。　だから、こっちに・・。　ウォーラスの兄さんは、どうして船乗りに？」

「ん？　俺か。　俺の家は、実言うと商人なんだ」

「え？　商人・・・、それなのに・・船乗りを？」

クラウザーにとって、商人とは偏った世界の住人と思えていた。過去に見た人買いや、漁村に魚を買い付けに来る偉そうな男達。そして、マーケット・ハーナスで、貴族みたいに威張る商人達しか見ていなかったからだろう。

ウォーラスは、花火の上がる星空を見上げ。

「俺の家は、マーケット・ハーナスでも中流だ。　更に上に上るには、船を自前で動かす力が必要なんだ。　世界の交易路は、海も陸も決まりきった流れで固まってる・・。　だけど今や、陸は馬車しか無いだろうが。　海は、新しい魔力水晶体を使った高速船が使われ出してる。　あれをいっぱい持って、高速船団を組織すれば、も

っと早い輸送が可能と成る。　食料や水の補給をしないで、北の大陸から東の大陸に物を運べるかも知れない」

クラウザーは、輸送の事はまだ良く解らず。

「それって、凄い事なのか？」

すると、ウォーラスは胸を張り。

「当たり前じゃないかっ。　今、北の大陸から東の大陸に行くには、コンコース島を経由する航路だけだ。　その日数は、どんなに早くても半月以上。　下手をすれば、一月近く掛かる」

「なるほど・・。　まだ俺は、北の大陸の沿岸輸送しかした事無いからなぁ」

「そうか。　まだ、来て一月足らずだもんな」

ウォーラスは、港の先に見える海を指差し。

「クラウザー。　世界の海は、季節毎にその顔を変える。　この北の大陸の最西端であるこの国から、更に西。　東の大陸に向かう海が、夏の終りから秋に掛けて穏やかに成るのは、知ってたか？」

「いいや。　そうなのか？」

「あぁ。　その時期だけは、かの悪名高い大渦潮も収まり、荒れ狂う波も比較的穏やかなんだ。　寒波が押し寄せる冬の到来まで、この航路は東と北の大陸を繋ぐ最速航路。　秋の実りを早めに収穫して、互いの大陸に輸送すれば利益は上がる。　ウチの親方は、昔か

らの風と波に頼るこのボロ船を使うが。　俺は、違う物を遣いたい。
そして、世界に先駆けた新しい交易商売をしたいのさ」

クラウザーは、そんなウォーラスを見て共感した。　そして、商人も人それぞれだと知るのである。

「兄さんも、大きい夢が在るな。　確かに、未知の先を行く話だ」

語った事で少し興奮気味のウォーラスは、落ち着き払うクラウザーに。

「クラウザーっ、お前には夢が在るか？」

すると、クラウザーは力強く頷き。

「在る」

「何だ？」

「俺は、或る冒険者達を連れた学者に会った。　その人は、海賊と謳われた昔の民の秘宝を探している様だった。　その男から、世界の広さと謎の多さを聞いた・・。　俺も、何時か海に出て世界を巡りたい。　そして、誰も見つけれなかった宝を探し出したい。　その為には、金も船も必要だ。　だから、世界最高にして、最大の船団を作りたい。　何時か、宝を見つける為に・・」

どでかい夢だった。　大風呂敷を広げても、まだ面積が足りない様な・・。　だが、聞いたウォーラスは、自分以上に夢を広げるクラウザーを気に入った。

「クラウザー、なら・・競争だ。　どっちが、先に夢を実現するか」

「解った。　負けないぞ、兄弟子でも勝ち負けは譲れない」

「俺だって。　後から入った弟弟子に、先を越されるかよ」

二人は、この日から仲間を超えた親友になった。　そして・・。

一年・・また一年と季節や時が過ぎる。

腕のいいサミュエルは、飛び込みの仕事が多かった。

或る時は、急な荷物の運びを依頼され。　荒れ狂う台風が近づく中、難しい輸送を強いられ。

またある時は、誰も行きたがらない場所に荷物を取りに行かされ、幽霊船に狙われた。

また或る時は、季節外れの嵐を避けた古い遠回りの航海路を行く事に成り。　当時暴れていた海賊に襲われ。　逃げながらも、剣を取って戦った。

クラウザーは、フラストマドやマーケット・ハーナスに戻ると。女遊びの傍らに、剣術を学び出していた。　元々の筋は良かったのだろう、上達も早かった。

ウォーラスも、隠れて何かを習っていた様だった。

海賊に襲撃された時。　簡単に船を奪えると思っていた海賊達は、ウォーラスやクラウザーを軸に徹底した反撃をする船員達に撃退され。　船を巧みに操るサミュエルの腕で、まんまと逃げられたので

ある。

そんなこんなの航海を幾度と経験する二人。

この二人が本当に有名に成ったのは、幽霊船から逃げ、海賊船を撃退した直後。

海賊から荷物を守ったサミュエルに感謝した商人が、サミュエルに自前の酒場で好きなだけ飲めと申し出てくれた。　この時偶々だが、サミュエルの付き合いで大衆酒場に二人が揃って付き合った。

其処で。

「おいっ、罪人のジジィが居るぜ？」

「うはぁ～クセークセー、囚人臭ぇぇ～」

と、別の船乗りが騒ぎ出す。

サミュエルは、腕は確かだが過去の傷を汚点にされ。　商人直々の“お抱え”に成る船長や船員のエリート達からは、かなり嫌われていたのだ。　生じ腕がイイだけに、仕事で比較されるのが嫌なのだろうし。　危険な時期の航海を渋るお抱え達に代わり、サミュエルなど個人営業の船長達に仕事が回る。　そこで、難なく航海されては、逆にお抱え達は腕を疑われる。

そんなこんなで、サミュエルは評判を落されながらの船長人生を送っていた訳だ。

しかし、クラウザーとウォーラスの二人は、強烈な個性を光らせる

双璧だった。　だから、やっかみすらも、名声に変わって来ていた。

さて。

酒場で絡まれるクラウザーは、元々の気質で騒ぐだけの輩など相手にもしないし。　真面目なウォーラスは、サミュエルが反応しないのに、自分がしゃしゃり出るのは出来ないと我慢してた。

だが。

遂に、他のサミュエルの手下船員が挑発に乗って怒り、広い酒場を巻き込む乱闘に発展。　だがこの時。　剣術で鍛えたクラウザーと、密かに格闘技を嗜んでいたウォーラスは、乱闘を鎮圧してしまう。

その武勇伝によって名が揚がる事に拍車を掛ける様に。　二人は、“船員取締り”・“副船長”・“仕船船長”（船団内の一隻を預かる船長）と格上げされ。　腕もいいから、更に更に名前を売った。

ウォーラスが２２歳。　クラウザーが、２４歳に成る頃。　二人は、サミュエルの持つ一番早い船を二隻別々に任されていた。

真面目なウォーラスは、港に戻ると一族の支店に勤める商人や親類の者が出迎える。

クラウザーは、家族が居ない代わりに、夜の店や街角に立つ女達が出迎えに来る。　顔の整ったクラウザーは、歓楽街の知れ者に成っていた。

二人が、完全に船を任され個別に運行する様に成ると、サミュエルはクラウザーに自分の代行を頼む様に成る。

ウォーラスは、独立して自分の家の家業を手伝うと読んでいたからだ。　クラウザーの方が、職人気質の様な義理人情は在ると見込まれたのかも回りは言ったが。　それは違う。　ウォーラスには、商人と云う自由の利かない家がある分だけに、利益を外した余裕に拘れないとサミュエルが解っていたのだ。

そして、二人の別々の道へと進む日が訪れる。

船長として、一年を過ごした二人に、サミュエルは引退を告げた。
　もう、酒・煙草の御蔭で、身体がボロボロであった。

引退を言った夜。　二人が初めて一緒に乗ったボロ船で、サミュエルは二人とワインを交わし。

「クラウザー。　もし、海旅族の事を知りたいのなら、もっと海を学べ。　古く昔から伝わる航海の歴史には、不可解な物や、何百年に一度しか起こらない事を伝える用語も多い。　お前は、利巧だが学が無い。　俺と同じだ。　自分で、もっと学んで考えてみろ」

と、言う。　そして、ウォーラスを見ると。

「ウォーラス。　お前は、過去に傷を持った俺の事を今日まで師事してくれた。　正直、嬉しかった。　お前の家は、商人だ。　時として、汚れ事や政（まつりごと）で面倒を抱えるかも知れん。　お前の良さは、その真面目さで。　悪さも、その真面目さから来る硬さだ。　“堅い”のはいいが、“硬い”のは良くない。　もしもの時は、クラウザーを頼れ。　柔軟な考え方は、時として頑な思いより強い。　立派に、夢をして退けろ」

所々の言葉を崩すサミュエルの過去は良く解らなかったが、学の無い人物では無かった。　二人の事を、良く見抜いていた。

サミュエルは、陸に上がって一人の余生を送る。

クラウザーやウォーラスは、何かと金や食べ物や薬草などを携えて訪ね。　看取ったのは、クラウザーとウォーラス二人でだ。

この直後。　数日して、ウォーラスとクラウザーは、リドリーの待つ晩餐会に招かれる。

二人の師が亡くなったのは、親友同士の二人が互いに顔を合わせなくなる3ヶ月前の事だった・・。

★

夜の長さは、不思議なものである。　永遠の様に感じられたり、夜明けが待ち遠しかったり。

一人で眠れないのは、クラウザーだけではない。

個室で寝ていたオリヴェッティも、一人で色々と考えていた。

（あぁ・・・、どうしよう。　ビハインツさんと、ルヴィアさんを

誘ってもいいのかしら・・。　でも、秘宝の話は・・・どうしよう）

Kは、全て自分に任せると言った。

リーダーは、オリヴェッティだと決めているKとクラウザー。

文句を言われる事は無いのかも知れないが、オリヴェッティはリーダーなど初めて。　何処までが良くて、何処までが悪いのか解らない。

“仲間を増やしていいのか”

と、Kに聞くのもなんだか違う様な・・。

しかし、これから先。　探す秘宝を巡り、Kやクラウザーに迷惑を及ぼすのも悪い。

（はぁ。　誘うつもりで街に連れ出したのに・・・、コレじゃ馬鹿だわ）

リュリュを寝かし付けてから、部屋に戻ったオリヴェッティだが。

妙に暇な空気に返って眠れなくなってしまった。　アレコレと考える事は、今までで初めてのことばかり。　何とも、考えが纏まらない。

オリヴェッティは、潔さも決定も早い方だと思っていた。

だが、慣れぬ事では、こうにも悩むものかと困ってしまった。

しかし、何より一番不思議なのはリュリュである。　人を嫌い、街

すら襲った風の神竜ブルーレイドーナ。　その子供であるリュリュのKに対する信頼度は、一見しても深い。　何故なのか、オリヴェッティの今の所の最大の謎である。

さて・・。

その夜の深夜は、大雪が降る夜だった。　静かに雪に閉ざされつつ在る街の一角で、凶暴な牙が蠢いていた。

街が完全に寝静まった頃である。

「ふぅ・・・」

Kが昼過ぎに脅しを掛けたジョンソンが、あの一件の在ったリビングの奥の一室。　下着姿の女性を行かせた部屋から、バスローブ一枚を羽織っただけで出て来た。　ランプも灯っていない暗いリビングには、もう誰も居ない。

「はぁ・・はぁ・・・」

ベットの上では、全裸の金髪女性が激しい情事の直後で、息も荒くして失神しかけていた。　露になった豊満な胸には、白い液体が垂れて見えている。

女性を散々に弄んだジョンソンは、

（クソったれっ！！！！　まだ、身体の震えが治まらねぇ・・・。
あのバケモノっ、今頃に姿見せやがってっ）

と、内心でKを憎み。　そして、慄いた。

ジョンソンは、まだ３０前の頃に、マーケット・ハーナスで暗黒街を作ろうと画策した事が在る。　麻薬や盗品の密売や、暗殺を請け負う代わりに、街に勢力圏を作ろうとしたのだ。

その阻止をしたのが、Ｋである。

Ｋは、２００人と云ったが、正式には２９０人もの刺客や殺し屋、堕ちた冒険者を金で掻き集め。　Ｋを街の港に在る倉庫に呼び出して、ジョンソンは殺そうとした。　だが、結果は正反対。　雇った刺客や殺し屋達は尽く破れ、失禁をして命乞いをしたジョンソンは、役人に捕まった。

実は、今のジョンソンは脱獄逃亡犯なのである。

Ｋに一度潰された時は、仰々しく“ジョンヘンダーソン・ハホルビー・マインアンダーソン”と言う貴族風の偽名を使っていた。　今名乗っている“ジョンソン・マイランダー”とは、適当に本名を捩ったに過ぎないのだろう。　似たような名前を付けていた御蔭で、悪辣な商業の遣り方と繋がってＫにバレたのだ。

Ｋに昼過ぎに会って、ジョンソンは殺されると思った。　指先一つで突き飛ばされた後、震えの治まらない彼は、“ライナ”と呼んだ女性をベットに引き込んだのである。

（あの死神が此処に・・。　クソっ、この国でも潮時かぁっ？！！）

恐れ、苛立ち、混乱が彼を襲い。　長く情事に耽った彼は、喉が渇いてリビングへと出て来たのだ。

（ちきしょうめ・・・）

窓の手前に備えられた台の上。　デキャンターに残された若い白ワインを持って、苛立ち任せでコルク代わりのガラス栓を引き抜き。
そのまま一気に呷ったジョンソン。　そして、明かりが漏れる寝室を脇目に、ニヤりと不気味な笑みを浮かべ。

（へっ、あの女中々じゃねぇ～か。　元僧侶の割りに、大した乱れっぷり。　どうせ殺すにしても、飽きるまでは甚振ってやる・・。
恐っかない目に遭った後なだけに、あの身体は・・・）

と、卑しいニタリ顔を見せる。

だが・・。

果汁そのものの味わいが強く甘さを残したワインが、喉を通って腹に染みて行く・・。　もう一口飲もうとした、直後だった。

「う〝おあ〝っ！！！」

突然、身を潰される様な痛みを覚えたジョンソンは、喉から下の胸を抑えて声を絞った。　叫ぶと云うより、激しい激痛で呻きもがく様な嗚咽を出したのである。　デキャンターを床に落とし、ガックリと膝を折って蹲って行く。

「ガハァッ・・・うがぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

目の両端が裂けそうなぐらいに眼を見開くジョンソンの瞳は、一気に充血して今にも飛び出しそうな様子を見せた。　激しく苦しみ。
Kに突き飛ばされた自分が壊したテーブルが、そのままに成って

いて。　そのテーブルの残骸に倒れ込み、もがき足掻く彼だった。

そのジョンソンが苦しむ異様な音に気付いたライナと言う女性は、まだ荒い息のままに布団を身体に当て。　ベットを降りた。

「ど・どうした・・の？」

暗がりのリビングを見たライナは、何かを掴み上げる様に伸ばしたジョンソンの手だけを見て。

（な・何っ？！！）

と、ベット一つでもう間一杯と云う寝室の入り口。　壁掛けのグラスランプを引き抜いて。

「ね・・ねぇ・・・」

と、ジョンソンに近づいた。

その顔が見える所まで後半歩と云う所で、ライナの鼻に血の匂いが漂って来る。

（ままさ・まさかっ？！）

一歩踏み出し、灯りが届いてジョンソンの顔が見えた彼女は、グラスランプを落さない様に持つのが精一杯だった。

「はっ・・はぁ・・・はぁぁぁ・・・」

あまりの光景を目の当たりにし、急激に乱れ詰まる呼吸。　恐怖に

膝が笑って、その場にヘタリ込むライナ。

ジョンソンは、もう絶命していた。　目、鼻、口、耳・・顔のあらゆる穴から血を噴出させ、眼球を飛び出させる様に・・。

ライナは、アルコールの匂いを嗅ぎ、傍に転がるワインがポトポトと零れるデキャンターを見て。　昼間に、Kが言った言葉を思い出す。

（ひ・ひひ・・昼間の・・・あの人が・・・・）

脳裏には、包帯を顔に巻いたKの姿が浮かんでいた。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

年内にK編終わるかなぁ～＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪十数年に一度の大雪の中　様々な皆の一時≫

夜が明けた。

クラウザーは、カルロスと共に早朝も終わる頃に船へと戻って来たが。

「ケイ、此処に居るのか？」

と、一人で寝続けるKに元に来て云う。

「あぁ。　御偉いジサマは、今日もどこぞに顔でも出すんか？」

ソファーに横に成ったままのKへ、クラウザーは肩を竦め。

「隠し事が出来んの。　夜中に、海が荒れていて戻った船も在るらしい。　他の船長や商人が来る寄り合い場が在る。　其処に、少し泊まろうかとな」

背凭れ側に向かうKは、

「分散した自分の船団でも?」

「・・、あぁ。　ワシの息子が、孫を乗せてな」

「なぁ~る。　声が少し焦って早口だ。　この船は、弟子にでも任せたらどうだ?　アンタより、ツキ以外は良さそうな・・な」

クラウザーは、焦りを悟られたと思いながらも。　少しも嫌に思わず。

「ウィンツにか・・。　ま、ワシの船団なら、そうしたな。　だがこの船は、他人の船だでよ」

「そうか・・・」

深読みをするクセに、こうゆう所では突っ込んだ質問をしない。なんとも、歯痒さを覚えるほどに節度が利いている。

「・・・」

黙って動き、Kを一人にしたクラウザーは船長室に上がった。　操舵室に踏み込めば、ウィンツやブライアンが掃除をしようとしている。

「おいおい、ウィンツ何を?　俺の船じゃねぇんだ。　金も出さないのに、下働きなんぞ・・」

だが、ウィンツは、モップを手に動き出し。

「親方、色々ありまして。　俺・・コイツ等と共に解雇されちまった」

「あ゛？」

クラウザーは、ウィンツが沈めた船を含め責任を取らされて、借金を背負わされた形で奴隷化されると思っていたのに・・。　それが、アッサリと解雇と聞いては驚くしかない。

少しぎこちない雰囲気のウィンツは、

「ホラ・・、向こうで寝てる男が・・・俺を自由に・・」

「ケイが？」

「そう。　ま、その・・・フラストマドにまでは、このまま行きたいんだ、親方。　俺達を、その間だけでいいから働かせてくれ」

突然の驚きも、納得と軽いため息で解(ほぐ)すクラウザーは、

「ふぅ～・・。　色々、起こす男だわな。　まぁ、昔よりは人間臭くていいか。　・・解った、カルロスと留守にするから、船の事は他の手下と一緒に頼む」

ブライアンは、有名なクラウザーに会えて感激し。

「ありがとうございますっ。　あっ・ありがとうございますっ！！」

と、苦労を刻む肥えた身体を小さくするほどに頭を下げた。

クラウザーは、もう捨てたハズの昔の船団を組んでいた頃を思い出しながら、下へ先に向かったカルロスを追う形で操舵室を後にする。

（なんだかな・・。　身体が・・少し熱いゼなぁ）

必死で働いてた若い頃の自分。　そして、ウィンツの若い頃を思い出し、心に温もりが湧いた気がする。

階段を降りて、Kが寝ている部屋に行く隠し扉をチラリと見たクラウザーは、食えない笑みを出し。

「バカ」

と、声を出さずに言った。

さて、こんな中。

朝から苦労してるのは、オリヴェッティ。

リュリュは、Kが居ないので張り切る様に暴走を見せ。

「ヤダあ〜、ボクまだ子供なのぉ〜。　オネ〜サン達とオフロってのに入りたぁ〜い」

と、朝風呂に行こうとしたルヴィアやオリヴェッティと一緒に女の浴場へ来ようとするし。

「へェ〜、“フリーサービス”って、全部食べてイイんだぁ〜」

と、自由に料理を取って食べる“オープンスタイル”で用意された一般客向けの料理を、全て一人で食べようと頑張り。

更に。　その、見た目の良さで別の客の貴婦人を誘惑するし。

オリヴェッティは、面倒を見るのに疲れ。

（ケイさん・・・躾って・・どうしますの？）

と、青筋を額に浮かべていた。

ルヴィアは、リュリュのエネルギッシュと云うか、猛烈な行動力に呆れを通り越し。　目が点に成る程の脱力感を覚え。

一方で、ビハインツは逆に感心し。

「うむむ、こうも奔放に生きれるとは素晴らしいっ。　俺も、是非見習わねば・・・」

と、頷いている。

宿の従業員に睨まれながら、身を縮めて外に出たオリヴェッティは、ビハインツの案内で先ず服を買える店に向かった。

この世界では、それぞれ新品の服を買うのは仕立て屋などを巡り、体系に合わせて服を揃える店で買うか。　古着を直して安く売る、文字通りの古着屋に行くかのどれかに成る。　オリヴェッティは、新品など何年も買った事が無く。　寒い一時期を過ごすのみだからと、安い古着屋へ連れて行って貰う事に。

古着屋と云っても、吹き抜けの広く高さも或る倉庫の様な場所に、何万と云う古着を無造作に畳んで、飾り気の無い陳列棚に置いてあるバザールの様な場所も在れば。　洒落た店構えで、仕立て屋などが直営するしっかりとした店も在る。

女同士で、ルヴィアとオリヴェッティは気が合い。　長々と店を覗いては、リュリュを着せ替え人形の様にしたり。　ガウンやマフラーやコートなどを試着して回り、久々に女性らしい事をする。

リュリュは、相変わらず女性の衣服に興味を持ったり。　他の冒険者風の客や、住人の女性に擦り寄っては、オリヴェッティとルヴィアに怒られたりしていた。

ビハインツは、リュリュと一緒に行ってみたが・・・。　変体でも見るかの様な女性の視線に、一撃で粉砕された。

リュリュに蒼いマフラーと、手編みのミトン風の手袋を買い与え。　自身とルヴィアには、下着と上に羽織るコートローブを新調し。　ビハインツは、頭に被る帽子と、鎧の下に着込むベストを買った。

午前で疲れたリュリュとビハインツは、王立図書館に行く昼過ぎは、昼寝時。　図書館の待合場でグースカ寝始める。

出店で買った温かい紅茶で暖を取り。　ルヴィアと共に、モンスターや古文学を調べるオリヴェッティは、Kの言っていた事を復習したり。　東の大陸に必要な知識を探したり。

ルヴィアと探したい事や、調べたい事を話し合い。　お互いに、分厚い本を持ち集めては、調べながらアレコレと。

「ルヴィアさん、一つ聞いても？」

二人が席を並べる前のガラス張りの窓の外は、断続的に雪が降る。

飢えられた背のかなり低い樅の木が、真っ白に雪化粧していた。

「ん？　何だろうか？」

「ケイさんが戦う時に見せた黄金のオーラって、なんでしょうか？」

「私も、それが・・。　似た様なものでは、“体気仙”（たいきせん）と呼ばれる格闘体術の一つが、それだ。　体内に流れる生きた生命波動を、魔法の様な使い方で具現化出来るようだ」

「なるほど。　それを体得出来れば、ケイさんの様に使えると？」

「いや・・、其処が解らない。　この・・、“体気仙”の説明を読む限り、あのように攻撃的な用途では無く。　主に、ダメージ軽減や、恐怖（フィアー）に対する緩衝効果。　手や足にオーラを纏わせ、普通では格闘技の効かぬゴーストモンスターにぶつける事で、それなりのダメージを与える事が出来る様だがな」

「そうですか・・。　ケイさんは、完全に攻撃に使用していましたね」

「あぁ。　呼吸をする様にこの体術を会得出来るとだが。　魔法の様に、至近距離の敵になどに波動を飛ばして、攻撃の手段には出来ると書いては在ったが・・・、あのケイ殿のソレは、尋常ではない」

更にルヴィアは、古い文献を漁り。

「しかし、“影の線”が知りたいとも言って居られたが・・。　このような一文と、挿絵・・。　天文学的な説明は、然程の量の無い半ページだけだな」

一緒に調べてるルヴィアも、“影の線”については、今日に初めて知った。　太陽が月の影に隠れる時は、恐ろしき天変地異が起こる時と在り。　航海をする船乗りは、様々な気象の変化を観察する必要が在ると書いてある。

“影の線”が通る道の簡単な地図には、モンスターの活動が活発化し。　過去に異常とも云える事件を引き起こしたと説明が・・。

調べれば調べる程に、半端な説明ばかりが見つかり。　Kの知識力の深さが、更に解る気がした。

夕方、図書館を出る頃には。

（ルヴィアさんやビハインツさんも、チームに誘ってみようかしら。もし、宜しければ・・・）

と、決めた。

今夜。　もう一泊してゆっくりしながら、この気持ちを伝えて見るを考えたオリヴェッティだった。

★

寒波の影響でか。　雪が止む切れ間が見えず。　曇天の空は、闇を早める。

あの、ジョンソンが死んだ部屋は、別の遺体も揃い。　二体の遺体が、部屋に転がる。

一つは、ワインを飲んで死んだジョンソン。

だが、ジョンソンがKに脅されたソファーの上には、何と受付に立っていた中年の男性の遺体も転がっていた。　黒い正装の上着とコートを貫いた刺殺痕は、刃渡りの長い中型剣以上の物で刺された痕だ。

部屋には、誰も居ない。　用心棒も・・。

いや、奥のジョンソンの遺体の場所まで来れば、もう一つ遺体が・・・。　ライナと言う女性を、ジョンソンが嬲り尽くしていたベットの上。　背の低い若者で、身なりの中々良さそうな者が死んでいる。

一体、あれから何が在ったのだろうか・・。

そして、ライナと云う女性は、何処に消えたのだろうか。

白い雪が、古い街を純白に染める。　だが、その雪の下には・・、誰にもまだ悟られない事件が蠢いていた。

その一端は、歓楽街の片隅で動いている。

雪が降る飲み屋の集まる大通り。　冒険者や、旅人に、働く一般人が混じり。　ガヤガヤと往来の喧騒を生み出す。　店の看板を照らすランプや、街頭の灯りで昼間の様に明るい中・・。

白い女神の刺繍が入ったローブを着て、フードを深深と被る女性らしき者が。

「スミマセンが・・」

と、微かに声を震わせながら、白い息を吐いて冒険者５・６人の一団に声を掛けた。

「あん？　なんだぁ？」

結構酔った女性剣士は、自分を心配する仲間を止めて、僧侶らしき女性の声に応じる。

「私、人を探してます・・。　ユリアンと云う４０歳前後の剣士を知りませんか？」

酔っている女性剣士は、

「知ってるか？」

と、仲間に聞く。

「いやぁ」

「さぁ」

と、仲間が返すと。

「悪いぃ～、知らないねぇ・・」

すると、女性の声をした僧侶は。

「では、顔に包帯をした冒険者らしき人は？」

と。

すると、背の低い痩せた中年のマントを羽織る者が。

「顔に・・包帯？　そんなの・・去年だったか？　居たなぁ・・・」

すると、また別で、戦女神の刺繍を入れたマントに、腰へ剣を佩く神官戦士で、ガッチリとした体格の女性が。

「あ～、ホラ。　風のポリア達と・・一緒に居たヤツじゃないか？　グランディスの面々を助けたとかの、あの時だ」

と、云えば。　別の魔法遣いらしき男性が。

「あ～、そうなの？　俺、解らない。　今年の頭に此処に来たから」

と、返す。

去年と聞いて、女性の僧侶は。

「私、数日前に街中で見掛けたのですが・・」

リーダーらしき酔った剣士の女性は、

「それならぁ～斡旋所にでもいきなぁ～・・。　明日、聞いてみるといいさぁ～」

と、呂律の回らない口調で返す。

「そうですね・・。　すみません」

僧侶らしき女性は、頭を下げた。

白い息を吐き、杖も持たずして歓楽街の人混みに消えゆ女性僧侶。

その姿を見送る酔った冒険者達は、直ぐに宿屋街の方へと進み出す。

その話題に上がるのは、一気に有名に成る階段を駆け上がり出したポリア達の事であった。

だが・・。　別の通りでは。

「チョットいいか？」

眉間に痘痕が見える中年の冒険者が、３人連れの冒険者に声を掛ける。　太い刀身のバスタードソードタイプの剣を腰に帯び。　印象としては、炙れて斡旋所に屯する冒険者の風体だった。

「何でしょうか？」

話を受けたのは、礼儀正しそうな青年剣士で。

痘痕を持つ見栄えの宜しく無い冒険者の男は、

「女を捜してる。　僧侶・・・杖も持ってない女だと思うのだが。
見た事は無いか？」

すると、片刃の長柄ニードルランスを短くして背負う憮然とした女戦士が。

「何でそんな女を捜すんだ？　何か、悪い事でもしたのかい？」

と。

「アンタ達には、関係無いさ」

若い剣士は、尋ねて来た男性に一礼し。

「その様な女性は、斡旋所にも居ませんでしたよ。　面倒は困るので、これで失礼します」

と、痘痕男の脇を通り抜けた。

若く背の低い少女の様な魔術師が、恐々とした顔で痘痕男を見て何かを呟く。

（チィ）

歩き去る3人の冒険者を睨んだ痘痕男は、情報が無い事に苛立って居る様な感じだった。

・・・。

さて、船の中。

ウィンツは、Kと一緒に船内ラウンジに居て。

「なぁ、アンタの過去ってどんなだったんだ？」

と、パンを齧る。

クラウザーは、船内で音楽や演劇をを行い。　船に残る客を楽しませる芸人達には、軽い褒賞を出していた。　その報酬目当てにして、旅を続ける楽師や歌手が、中一階で歌を歌っていた。　その音楽を聴きに、客が一階の廊下やラウンジに集まっていた。

ウィンツを前にして、テーブルに座りパンを食べ、ゆったり時を過ごすKは、その集まる客達を見ながら。

「忘れた。　チョイト病気に罹って、この通り」

と、包帯を巻いた顔を指差す。　洗い晒しの包帯を顔に巻いているKだ、ウィンツも。

「辞めたのは、病気が元で記憶に影響が？」

「んま、そんな所か。　それに、殺伐とした生活なんて、長く続かねぇ～よ」

「確かに・・。　所で、お仲間は・・今日も街に？」

「多分なぁ～。　気が通えば、あのアンタの船に居た二人も仲間に誘うかも・・・知れん」

「いいのか？」

「いいんじゃぁ～ないか？　俺は、なんだかんだ云ってもリーダーじゃ無いし、お宝の有無が決着したら、どうせ抜ける。　クラウザーだって、同じだろうし・・。　リュリュだって、いい加減家に帰さないと・・。　オリヴェッティの今は、仲間が皆有限だ。　しかし、あの二人を加えれば、一人残されずに済む。　丁度イイんじゃないかと思うがな」

「イイ女だろう？　アンタ、男として狙わないのか？」

ウィンツは、マキュアリーの手前で言えた自分では無いが。　思わず口から出た。

Kは、面倒臭そうに。

「もういい。　今は、長く一緒に居る物を欲しくない。　人も、物もな」

Kは、ゆるやかに言う。

だが、聞いたウィンツには、少し物悲しく聞こえた。　何処か、吐き捨てる様な印象を受けたのだ。

オリヴェッティもまた、Kやクラウザーやリュリュが、一時期だけしか一緒に居ない事は承知していた。　だからこそ、自分で招いた誰かを見つけたいと思う事は当然だと思う。　親しい誰か、気の合う誰か、自分と長く冒険者として居てくれる誰かだ。　そして、自分が、相手に・・仲間にと認めた誰かが必要だった。

その点に於いて、あのルヴィアやビハインツはピッタリの相手だったのかも知れない。　今まで、彼方此方のチームに入って、一時を過ごすだけの日々とは違っている。　オリヴェッティも、形として誘い易い二人であった。

Kは、オリヴェッティのマイナス面も見抜いていた。　学者として、一族は汚点を背負い。　はっきり名前を出して、チームを組む事すら憚られていたオリヴェッティ。　だが・・、いや。　もう歴史と云う時の流れほ中で、オリヴェッティの家の汚点すらも過去の事だ。　知らない・・または、忘れている者も多いだろう。

固執してしまっているのは、世間の仕打ちを受けた本人のオリヴェッティであり。　そして、オリヴェッティの過去が、そうさせている。　もう、今にそんな事を拘るのも時代遅れだとKは解っていたのかも知れない。　だから、彼女を態とリーダーに据えたのだろう。

オリヴェッティが自分の手で、これからの自分の道を作り易い様に・・。

Kがオリヴェッティにリュリュを任せるのも。　オリヴェッティにリーダーとしての自由を与えるのも。　オリヴェッティに歩かせる為なのかも知れない。

今まで、流れながら何処かのチームになんとか入れて貰っていたオリヴェッティには、行動の自由も無ければ行き先を決める決定権も無い。　増して、誰を信用し、また誰に一緒に秘宝を探す旅を打ち明け、共に目指して良いか解らなかったハズだ。

オリヴェッティ自身が、秘宝に関する情報を持たない分、全ては絵

空事の様な物だったから。　それは仕方の無い事だったのかも知れない。

今。　オリヴェッティは、初めて立っている。　自分の足で冒険者達と話し、自分の意思で何かを見極めようとし出している。　この傍に、ご意見番の様にKが居てやるのは意味が無い。

そう。　Kと出会ったオリヴェッティは、精神的に、冒険者としての独り立ちの時期を迎えていたのだ。

この夜も街で宿を求めたオリヴェッティは、個室二部屋と二人部屋を取った。

ビハインツとルヴィアを個室にして、リュリュの面倒を見る上で二人部屋にしたオリヴェッティ。

「わぁ～い、オネ～サンといっしょ～」

リュリュは、オリヴェッティと一緒に泊まれると喜んでいる。

塔型の宿で、全１０階。　一階のロビー奥には、浴場と軽く休憩して飲食出来る共同リビングだけがある宿。

外で食事を済ませた一行は、宿に泊まって。男女に分かれて風呂を共にした。

オリヴェッティは、入浴後にルヴィアとビハインツの二人に話が在るので。　出たら、暖炉で暖める共同リビングに居て欲しいとだけ告げた。

オリヴェッティは、ルヴィアと二人で風呂に。

裸の二人が身体を洗う中。　一度乾燥させたバラの花びらが入れられた大きな浴槽から、バラのいい香りが大浴場に漂う。　身体を洗い、桶で湯を汲むオリヴェッティに。　手に石鹸と塩の泡を混ぜた物を付け、直接身体を撫で擦るルヴィアが。

「話とは・・“仲間”にか？」

身体中を洗った洗剤で塗れさせたオリヴェッティは、頷きながらお湯を浴びる。

「えぇ」

「なら・・、そんなに改まって告げる事でも無かろう？」

お湯を汲むオリヴェッティは、白濁としたお湯を掬いながら。

「私ね。　・・チョット目的が在って冒険者してるの。　今日、“影の線”の事調べたでしょ？」

「あぁ。　それが？」

「私の一族って、超魔法時代以前から栄えて、海賊に落ちた“海旅族”の秘宝を追ってたの・・。　私も、その秘宝を探してる・・。　没落したウチで、最後に残った遺品。　・・・それが、その秘宝の手掛かりなの」

「面白そうな話ではないか。　秘宝か・・・、一体、どんな物なのだろうか・・」

遅めの時間帯で、他に浴室へと入る女性が居らず。　オリヴェッティィは、濡れた髪の毛を裸体に纏うルヴィアが、確かに綺麗だと思いながら。

「地元じゃ、私の家は気の狂った一族だと云われたわ。　家も土地も本も失って・・、放り出された。　秘宝の事を他の土地の学者に聞こうとして、女だから軽く見られて襲われた・・。　何度・・・人に魔法を使ってしまったか・・。　誰に聞いていいか解らず・・・5年も各地を旅して回ったわ。　騙された事も一度や二度じゃないし・・」

お湯を浴び始めたルヴィアは、手を止め。

「随分危険な目に遭っているな・・、良く無事でいたものだ」

すると、オリヴェッティは唇を噛み。

「そんなキレイな身体じゃ・・ないわ」

「・・・そうか」

同じ女だ。　オリヴェッティの様子から、何が在ったかは解る。
オリヴェッティの人格を知るだけに、ルヴィアは憤りも同時に覚えた。

オリヴェッティの洗い流した褐色の肌は、お湯の拭いを掛けられ艶やかな肌理を見せる。　湯が石鹸を洗い落として現れる、艶かしい肉体。　褐色の肌をした胸だが、その乳房は桃色で若々しく見える。
知的な優雅さも漂うオリヴェッティ・・、こんな美人が一人で旅

をするのだ。　確かに、危険も付き纏うのは当然だろう。

一方。　ルヴィアも、また・・。　服を着ている時のスマートな身体つきとは思えない肉付きの良さを伺わせる裸体。　女性として、育ちの良さから魅せるその凛とした姿は、異性の目を惹くに十分。

　オリヴェッティの苦労は、なんとなく感じ取れた。

そしてルヴィアは、オリヴェッティの髪の間、肩と腕の境目に傷を見つける。

「この傷は？　変わった傷跡・・・？　これ・・歯型か？」

「えぇ・・」

「人に噛まれたのか？」

「・・」

黙ったオリヴェッティ。

ルヴィアは、よもやＫがしたとは思えず。

「それは、ケイのした事・・では無いであろうな？」

「え？　あ・・勘違いしないで。　コレ・・１８の時の傷よ。　襲われた男性に数日監禁されたの・・。　私を自分の妻にしようとして・・・、傷物にするつもりで、噛み付いてきたわ」

「なんと横暴な・・・」

「・・、正直・・怖かった。　肩や、足や・・腿の内側も・・。乳房とか噛み切られないだけ・・マシだったのかも」

「良く・・助かったな？」

「その監禁した学者に妹さんが居て・・、彼女が私を逃がしてくれたわ。　でも、怖い体験だなんてそれだけじゃないわ。　ホラ・・、一緒のチームに入るのだって、男性ばかりのチームに入るのって・・無理でしょ？　他にも・・旅の仲間を見つけようと思って・・・逆にチームを組んだ相手に・・狙われた事もあるし・・・」

「オリヴェッティ・・お主そんなに」

少し泣きそうなオリヴェッティは、笑顔を浮かべ。

「ケイさんにも言ってない話だから・・内緒」

歪んだ顔の作り笑いを浮かべるルヴィアは、

「解ってる」

先にと、湯船に滑り込むオリヴェッティ。

「直ぐ・・・秘宝が見つかるかは解らないわ。　でも、私は、探したい。　ケイさんが、曽祖父の残した詩の意味を教えてくれた」

洗い流した身体を、オリヴェッティの隣へと沈めたルヴィアは、肩を並べ。

「あの男か・・。　幽霊船を一撃で沈めるなど、普通では無い。

嘘を教えられても、信じたくなるな」

「・・・在るのか。　無いのか。　行き着く先まで、行って見たいの。　ケイさんが居る今なら、行けそうな気が・・・する」

ルヴィアは、オリヴェッティが何故に仲間の誘いを改めたか解った。

「私は、いいぞ」

「えっ？」

「一緒に、何処までも・・。　どうせ、政略結婚だの、権威増幅の見合い結婚だのが嫌で、家を捨てた私だ。　世界の何処か、歴史に埋もれた秘宝を探すなど願っても無い」

ルヴィアは、オリヴェッティを見て。

「探そうじゃないか。　その秘宝とやらを・・」

オリヴェッティは、長年一族が探した物であるから。

「ウチの一族は・・・百数十年も探したわ・・。　もしかしたら、二人で御婆ちゃんに成るかも」

「ふっ」

と、笑ったルヴィアは、

「最後は、杖でもついて行かねばなるまいか？」

見合った二人は、互いに杖を持った自分を想像して、お互いで笑い出した。

風呂から出た二人は、待っていたリュリュとビハインツに合流。ある程度を話したオリヴェッティは、ビハインツにもチームへの誘いを掛けた。

「面白そうだな。　まぁ、キミがリーダーなら文句は無い。　あの包帯を巻いた男も気に成るし、加えて貰おうかな」

と。

リュリュは、

「やった～、オネ～サンがふえたぁぁ～」

ガウンローブに身を包むルヴィアは、リュリュに。

「そんなに嬉しいか？　なら、貴族の躾を教えてやっても良いぞ」

オリヴェッテゥは、幅の広い椅子に座りながら。

「それって、厳しいのですか？」

「あぁ。　ビシビシと」

（え　ぇ？）

話の雲行きがおかしく成る事に、違和感を覚えたリュリュははしゃぐ途中で止まり。

「まぁ、是非お願いしたいわっ」

と、声を弾ませてオリヴェッティが了承した事にビビリ。

（あれ？　なんか違う・・・）

この背筋に冷たい物が流れる気分はなんであろうか。　此処に、Kは居ないのに・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪不穏と平穏の狭間　Kとライナの・・・≫

K達を乗せた船が、ホーチト王国の王都マルタンで停泊して3日目に成る。

マルタンの街の影に蠢く悪意を動かしたのは、誰でもないKだろう。

そう、ジョンソンを体術の闇型（ヤミカタ）と呼ばれる急所を突く仕業で殺したのだ。

正式には、“秘殺誅・気孔死”（ひさつちゅう・きこうし）と云うもので。　生命波動の流れの集まるツボを壊す所業である。　暗殺者ですら使えぬ秘術で、気の巡る気脈を正確に突くなど・・。

Kはその技を用いた。　用は、ジョンソンがお尋ね者だからだ。

生死を問わないお尋ねの賞金首に成っていたのである。　オリヴェッティやリュリュの手前、生活に困って居る訳でも無いし。　名を広める事もしたくなかったから、暗殺したただけ。　それに、斡旋所の主とは、ポリアの一件で知り合う仲に成った。　ジョンソンの賞金を受け取りに行けば、どんな事態が待つか解らない。

そう、係わり合いを嫌ったが故であった。

だが。

事態は、別の一面を秘めていた。

その部分がKに向かって集まる切欠は、斡旋所でである。

北の山まで行かないと大雪など滅多に無いマルタンが、寒波の影響で雪の朝を迎えた午前中。

「あ～、チームに加盟な。　え～っと」

マルタンの斡旋所の主をしている男は、Kとポリアの出会いの話でも書き記した大男である。　硬太りの厳しい中年と見受けれるのは、顔がゴツくて年齢が顕著に解る風貌では無いと云うだけ。　実年齢は、もう５０半ば近くへ踏み込んでいる

一階の広いフロア。　その中央に在る円形カウンターの内側に陣取る主は、ガッシリとした古い木の椅子に座って仕事をしていた。

朝から、チームの加盟や削除の仕事に追われ。　今さっきは、雪掻きの急募依頼を駆け出しの冒険者２０名程に回したばかりであった。

また、別のチームのチーム解体と、新チーム結成を受け。　黒い表を見せるノートに書き込んで居る。

其処へ。

「お父さん、依頼の張り紙が出来たわ」

と、女性の穏やかで優しい声がして。

「マァマ～、ジィジィ～あわぁ～」

と、幼い子供の声までする。

カウンター前に集まった3人の冒険者達と共に、主（通称：マスター）も女性の声のした方を向く。

「おう、オリビア。　済まないな」

主は、僧侶の服を着て1歳を過ぎたぐらいの子供を抱く女性から紙を受け取った。

「これ、頼む」

同じ円形カウンターの内側で、下働きとして手伝う３０前後のバンダンをする男性に紙を渡す主。

だが、書く手を動かさず。

「ライリー、ママとお手伝い偉いな～」

厳しくふてぶてしい面構えをした主が、目じりを緩めて女性の抱き抱える子供に笑った。

見ている冒険者達からするなら、

“気持ち悪い”

なのであろうが。　孫が出来たからには、この一癖持った主とて“お祖父ちゃん”に成る訳で。　こうゆう一面も出て来る訳だ。

そう、子供を抱えるのは、Kが率いる合同チームに助けられたオリビアであり。　二階で、張り紙を作ったり、二階の特別依頼の場を任されているのは、オリビアの夫で“グランディス・レイヴン”のリーダーであるサーウェルスなのだ。

サーウェルスは、半年此処で主の補助として暮らし。　動き易い季節の半年だけは冒険者として動く事を決めた。　時折、腕の足りないチームに一人で加わったり。　力仕事に精を出して身体を鍛えている。

以前のサーウェルスに比べ、落ち着きと見識が備わりつつあり。何時も悪い口しか見せない主だが、サーウェルスが行く行くはこの斡旋所の主と成ると思っていた。

サーウェルスとオリビアは、まだ２０の半ばを過ぎるぐらいで若い。　斡旋所の主であるオリビアの父親は、なんだかんだ言いながらも３０半ばを過ぎる頃までは、冒険者を許す気でいた。

だから・・。

“フン。　子供が出来た身分で、未だに冒険者とは情けない。　とにかく、お前達の身に何か有ったら、ライリーはワシが引き取る。　だが、一人じゃライリーも可愛そうだ。　後、３・４人は兄弟を作れ”

こんな事を夜に言う主は、孫の存在が満更でも無く。　娘夫婦に長く居て貰いたいから云うのだろう。　サーウェルスやオリビアの方が、言い草に呆れて慣れて来た。

この一年後。　ポリア達がフラストマド大王国に向かったと聞き。　その後を追って冒険に出たサーウェルスとオリビアのチームは、セイルとユリアが関わる一件で活躍するのは、ご承知の通りである。

さて。

チームの決裂をして、二つに分裂したチームの処理を終えた主。

「はぁ・・。　暖炉3つも炊いてるのに、寒さが堪えるなぁ・・。　いい加減、雪も打ち止めにして欲しい所だ」

と、焼けた石を入れた火鉢に手を寄せる。

カウンターの内側に屈んで、火鉢に手を向ける下働きの男も。

「ですね。　そう云えば、朝に聞きましたが。　あのジョンソンが殺されたそうですよ」

「あ゛？　あの海運業の・・えげつないヤツか？」

「はい・・。　しかも、受付の人と、毎朝料理を作りに来る若い料理人も一緒に・・。　金とか奪われていて、強盗じゃないかって」

主は、その時点で目を細め。

「強盗・・。　だとしたら、相当な腕だな・・。　あのジョンソン

とか云うヤツ、斡旋所に来てた意地汚いが腕の立つ“はぐれ”を2・3人雇ったハズ。　そいつ等を出し抜いて盗むんだからな、相手は手練(てだれ)の賊だろう・・」

すると、オリビアが子供を連れて二階に上がったのを確かめた下働きの男は、カウンター周りに誰も来ていないのを確かめた上で。

「ダンナ・・、実はですね。　強盗を働いたのは、その用心棒を引き受けた奴等じゃないかって話ですゼ？　朝、チョイト小耳に挟んだ情報ですが、昨日から姿が見えないらしいんで」

主は、話が随分だと更に前屈みに成り。

「おいおい、そいつぁ～物騒だな。　ま、アイツ等は金に意地汚い亡者だ。　月極めで十分に貰っても、目の前にそれ以上の金を見せられたら、多い方に飛び付く輩。　そんなヤツを雇う方がどうかしてる」

「ですね」

其処に、離れた場所から。

「うはぁ～っ、雪がいっぱぁ～い」

「本当だ。　北の大陸とは、こうも雪が多いものなのか？」

「いやいや。　普通なら、この辺は年明けに少し降る程度。　今年は、異常に寒い」

「ですわね。　私も、旅をしていて此処までの雪は、スタムスト自

治国か、フラストマド大王国の王都でしか経験が在りませんわ」

と、色様々な声がする。

身を上げた主と下働き。

入って来たのは、オリヴェッティ達である。

リュリュは、広いフロアを見回して。

「うわぁ～、なんか広ぉ～い」

と、物珍しそうに云う。

主は、その言い草に。

（ガキか？）

と、呆れた。

だが、壁に貼られた張り紙を見る冒険者の内、魔術師の数名がリュリュを一瞬見返ったのは・・。　おそらく、Kやオリヴェッティと同じ理由だと思われる。

オリヴェッティは、カウンター前に進み出て。

「すみません、お願いが在りまして」

と、ルヴィアとビハインツの加盟を打診したのである。

理由を聞く主は、適当に説明された話を聞き。

「ほぉ～、船で仲良くなぁ・・。　ま、大雪で足止め喰らってる中だ。　どうだい、雪掻きの仕事でもしてみないか？」

と、誘いも付ける。

ビハインツは、ランプの明かりが灯っていても薄暗い館内から、雪が降る外を見て。

「何十年来の大雪だものなぁ・・、手伝ってもいいぞ」

と、云った。

オリヴェッティは、一日だけならと引き受ける気持ちを持ったのだが・・。

主は、オリヴェッティのチームを確かめた時、チームの参加している名前に驚くべき人物が居るのを見つけ。

「なぬっ？！！！！」

と、思わず大声を・・。

驚いたのは、オリヴェッティやら他の冒険者達。

震える手をそのままに、顔を上げた主は鼻水まで垂らしたままに。

「こ・この面子の“ケイ”って・・、かっかか顔に包帯をした・・・黒服の？」

オリヴェッティは、凄まじい技能を有するKだけあると思い。

「まぁ・・、やはり有名な方なんですのね？　はい、一時だけですが、東の大陸へご一緒するために入って頂きました」

だが、その実力の一端を聞いていた主からするなら、“有名”などと云う範囲では無い。　かのポリア達と別に二組の冒険者チームを合同で率い。　自分の娘とそのチームを救出してきたバケモノである。　あの魔の森マニュエル、そしてモンスターの巣窟と化した山に分け入り、怪我も無く帰って来た。　サイクロプスや、悪鬼巨人のギガンテスを一刀一撃の下に倒したその神技的な剣術で、悪党冒険者のガロンを殺した男だ。

「あ・・あ～・・・」

Kは、有名に成る事を嫌って、途中で合同チームを抜けている。
彼の詳細な話を率先して語るのは、タブーであった。

（おどろいた・・、こんな所で名前が・・。　ヤツ、あれから世界の彼方此方に出没してるのか・・・）

加盟の作業をし始めた主は、

「で？　ヤツは、今何処に？」

「船ですわ。　港に停泊している船の中で、ゆるりと寝て過ごしていると思います」

「・・・、そうか。　会ったら、俺が礼を言っていたと伝えてくれ。

娘と孫をありがとう・・・とな」

ルヴィアは、何事かと思い。

「意味が解らぬ。　何の事だ？」

加盟を終えた主は、冷や汗を掻いたハゲ頭を撫でながら。

「本人に聞くか、ポリアにでも聞け。“風のポリア”・・、ヤツを良く知るお嬢様よ」

「かっ・・風のポリア・・・。　あの、一気に有名に成る階段を駆け上がった貴族の？」

そう。　ポリアがフラストマド大王国の貴族で、５大公爵家の筆頭の家柄である事は、つい最近の秋に明らかと成った事実だ。

結婚をさせられそうに成ったポリアは、結婚式の当日。　自分の父親であり、リオン王子の下で全軍を預かる軍事総都督を始めとする幾つ物もの肩書きを頂く人物と剣を交え。　集まった来賓者達の前で打ち負かしたと云われている。

ポリアは、堂々とウエディングドレスのままに会場を仲間と去ったとか。　リオン王子の手引きで国外に脱出したとか。　様々な噂が出回った。

一つハッキリと云える事は、ポリアが自由の身と成って冒険者を続けている事だ。

一年後、サーウェルスやオリビアが出会うまで、ポリアは更に更に

旅を続けて行く。

ルヴィアは、風のポリアと面識が在る云うKに驚くのだが・・。

此処で、リュリュが。

「そうだぞ～。　ケイさんは、すご～く偉いんだじょ～。　ポリアちゃんとか、マルヴェリータちゃんとか～、びじ～んのおねいさんと、いっぱい、いっぱぁ～いお知り合いなんだじょ～」

と、さも自分が偉いと云う雰囲気で胸を張る。

「・・・」

オリヴェッティとルヴィアは、どう反応していいか解らないままで硬直する。

一方のビハインツは、

「噂に聞くが。　ポリア殿って、そんなに綺麗なのか？」

リュリュは、何故か顔を赤らめ。

「すぅぅぅぅぅ・・・・っごくびじ～ん」

と、恥ずかしそうに体を揺り動かすリュリュを見て。

（か・・カワイイ・・。　・・はっ）

オリヴェッティは、思わず気持ちが緩んだ事に気付き。　一人で、

オタオタとして咳払いをしてみたり。

「？」

ルヴィアは、オリヴェッティが急にリュリュを見つめたり。　直後にオタオタし出して何事かと思う。

其処で。

少し離れた壁際。

「ホラ。　今、向こうで話しに出てる風のポリアって人を助けて有名に成ったのが、その包帯を顔に巻いた黒尽くめの男だ。　確か・・・、“ケイ”とか名乗ってた様な・・・」

「なるほど・・、すみません」

白い僧侶が着るローブに、赤いマントを羽織ったフードを深く被る人物は、女性の声で魔術師の女性に一礼をした。　朝から斡旋所に現れたこの女性は、何故かKの事を聞き回っていた。

広いフロアでは、声が響く。　主の出した声は、フロアに響いていた。

（港・・・船・・・・）

そう聞えただけでも、女性には収穫だったのか。　そのまま、外に向かって行く。

「おいおい、本当に雪掻きを引き受けてくれるのか？」

主と、オリヴェッティ達が話し合いをし出す頃には、その顔を隠した女性は外に出た。

「・・・」

外に出た女性僧侶を、冷たい仕打ちをする様に冷気と風が吹き付ける。

緩い港を見渡せる高台のカーブ前に有る斡旋所の館。　その館を出た女性は、入念に左右を伺いながら。　左手の街中へ向かう通りでは無く、斡旋所の裏手に回る道へと消えて行く。

彼女が、あのジョンソンに抱かれていたライナだ。

だが、何の為に・・・Kを。

★

昼を過ぎた頃。

港では、雪を伴った海風が吹き荒れ。　港の船は、大きく揺れていた。

ウィンツは、自分と共に船に残った船員達で船を港に固定する作業

をしていた。　大型の碇を幾つも沈めて、それを船の彼方此方から降ろして重みで固定をさせる作業と同時に。　ロープで、船が横滑りしても左右に振れない様にする。　こうする事で、台風の様な暴風でも大丈夫なのだ。

その仕事に付き合うK。

「・・・」

船員達が見ている前で、強風に吹き付かれても全くヨロめく様子も無い彼。　力自慢の船乗り４・５人で持ち上げる石の碇を、腰の軽い動きと片手だけで海に投げ下ろす。

防寒着で更に膨れているブライアンは、Kの姿に。

「アンタ・・、何してそうなるんだよ」

Kは、足が不自由ながらに気張ろうとするブライアンを見返し。

「そんな体で、男の意地を通すアンタの方が大したモンだよ。　病んでるのは、胃か？　酒は、量を少なくしてお湯や牛乳で割れ。茹でた野菜や、豆か・・貝のスープを飲む様にしな。　まだ、病気は初期だ。　足の骨はもう元に戻せないが・・、胃は戻る」

片手で掴める太さとは思えない大縄を降ろすKは、無理を押して手伝うブライアンに言う。

ウィンツの部下は、皆が一癖在りそうな顔だ。　だが、目が変わりつつある。　ウィンツと共に放り出された身なのだが。　自分達を守るウィンツに人間として義理人情を感じているのだろう。　無給

ながら、目が活き始めている。

Kは、ウィンツにクラウザーの面影を見て。

（流石・・一番の弟子だ・・・）

と。

これから、ウィンツ達は、長い使い捨ての人生から這い上がる可能性を秘めた道を踏み出す。　Kは、そんなウィンツ達に、なんとなく同情していた。　包帯を巻く前の彼では在り得ない事だっただろうが。　だが、Kも自分の気持ちを偽る気も無い。　人は、時が流れて変わるのだ。

頭に雪を載せるKは、凍り付く甲板の手摺などを見て。

「しかし、此処でこの大雪は珍しい・・。　こんなに長く雪が降るとはな、明日までは船の出港は無理だろう？」

ブライアンも、荒れる海を見て。

「確かに・・。　海に氷が出来たら、大型船でないと出港はとても無理だ」

「流氷の所為か？」

白い息で顔が一瞬煙り見えない寒さだ。　ブライアンは、何度も頷き。

「んだ。　流氷は小さいだろうが、更に海に氷が張る。　小さい船

では、氷を割って進めず氷に乗り上げちまうさ。　斜めになった船は、風に弱い。　簡単に転覆もあるんださ」

「なるほど、そりゃ怖い。　足の速い小型船は大変だ」

ブライアンは、理解力の鋭いKには話しし易いと感じ。

「そうさ。　それに、アンタの言った通り。　重い氷は、海面に硬い部分を沈ませてる事も有るんだ。　小さな流氷も、小型船や木造の中型船ならバカに出来ねぇ。　ぶつかったら、船が壊れる。　先ず、大型船が先行して、航路の氷割りをしなきゃならんが。　港を見回した限り、一番大きな船は、この船ともう一隻ぐらい。　クラウザー様のこの船は、どうしても先に出なきゃならんだな」

Kは、碇を沈め終わったので。

「クラウザーが判断するさ。　助けた船長（ウィンツ）と一緒に、オッサンも頼むよ」

と、云うと。

「あぁ、勿論だぁ。　クラウザー様の下で働けるなんて、一生の思い出だ。　キャプテンの師匠だし、恥は掛けられねぇよ」

Kは、下に降りたウィンツを見に、ブライアンと縄梯子に向かった。

ブライアンは、片足が不自由ながらに縄梯子を降りる。

続いて降りたKは、吹き上げた海水が風と寒さで霙の様に凍りながら吹き荒ぶ様子に。

「すげぇ～な、フラストマドの北側の海辺みたいだ」

と。

だが。

その吹き上げる波の飛沫が、ミスト状の白い氷の飛礫を作る港の通り上で。

（ん？　・・・人か？）

Kは、この１３番港に曲がって歩く人影を見つけた。　まだ、大型船数隻分の距離を離した向こうだが。　Kは、気配を感じ微かな姿を見つけていた。

（この吹雪で戻る客が居たか・・・）

思ったKだが、近づいてくるその姿の揺り動きが、どうも微妙で気になる。

しかも・・・。

姿をハッキリ見えた時。　その誰かは、右手に割れたワインのガラス瓶を持っていた。

尋常な様子では無いと感じたKは、作業をしているウィンツ達に声を掛けずにその誰かに近づいて行く。

Kと近づいて来た誰かが互いに４・５歩を歩けば擦れ違える距離に

来て。

「・・・」

白いフードから金髪の漏れる何者かは、ローブと羽織るマントの胸の部分を押さえてながら、少しだけ上向いた。

Kは、誰か解った。

（野郎の・・・情婦か）

自分が殺したジョンソンだ。　恨みを持たれる事も当然在り得る。

Kの前に居るのは、ライナと呼ばれていた女性だった。　ライナは、割れて先の尖った黒いワイン瓶を両手に持った。

途端。　彼女の羽織っていたマントが風で飛ばされた。　強風は、彼女のフードにも入り込み、金髪を吹き上げフードを捲り上げる。

Kもまた、黒いコートの裾などを風に激しくはためかせながら、黙って彼女を見た。

だが、更に・・。

ローブの内側には、胸元に開く隙間を結びとめる内紐が在る。　ライナの着るローブは、その内紐が切れてたかどうにかしているのであろう。　港に吹き付ける強風によって、彼女のローブの胸元までが開かれたのだ。　白い肌をした首筋から下がった彼女の豊満な胸の上部が、ローブが開かれた事で晒け出た。

その胸元を見つめたKは、目を細めた。

「・・・あな・・」

風で喋る事すら大変な中。　ライナが、“貴方”と言おうとした時である。　Kが、ゆったりとした動きで一歩を踏み出した。

「っ！　動かないでっ」

驚いたライナは、手に持った割れたワイン瓶を前に突き出し構えた・・・。

が。　彼女の視界から、忽然とKが消えた。

「っ?!!」

二重に驚いた彼女の右側から。

「失礼するぞ」

と、男の声がして。

驚いたままに右側へと振り向いたライナは、胸に触れられる感触を覚えた。

「・・・」

包帯を巻いた顔をするKの姿を、目と鼻の先程に間近に見たライナは、震える顔のままに俯く。　すると、自身の左胸の乳房から少し上の所に、包帯男の指が置かれていた。

（わ・・わたし・・死ぬのね）

ライナは、今の状態をジョンソンの時と重ねた。　このまま、突き飛ばされ海に・・・。

しかし・・。

Kは、ライナの肌の上を指で撫で擦り。　そして、指を胸から離すと・・。

「これは・・・」

と、呟いた。　一指し指と中指を幾度か擦り合わせたKは、ライナを見る。

その声は、風に掻き消されそうだが。　ライナには、ハッキリ聞えた。

「・・そ・そうよ」

と、恐る恐る顔を上げたライナ。

Kは、彼女の目を見つめて事態を悟り。

「どうやら、俺の仕業で何か起こったか・・。　堂々と会いに来ない所を見るに、面倒事か・・事件か?」

ライナは、言葉も発せず。　涙を一筋流して頷いた。

「・・、解った。　話を聞こう。　街に出る」

作業に追われたウィンツ達は、白く吹き荒ぶ霧の中の出来事を誰も知らなかった。

★

雪が降り続いて、一番困っているのは商業区の店だった。　街中に隙間無く立てられた建築物は、雪の重みに耐えられるが、雪を降ろす場所は通りでしかなく。　通りに雪が降り積もり過ぎたり。　屋根上で凍ってしまうと、天窓などが開かず天日干しなどの作業が出来なくなる。

しかも、屋根が斜めに成っている屋根の平屋の様な小さい店では、雪に埋没してしまう可能性も。

雇われた冒険者達の一団は、住居区に役人と向かって雪降ろし作業をするが。　大部分の冒険者達は、商業区に回された。

オリヴェッティにべったり甘えるリュリュは、此処でも暴走しようとしてオリヴェッティに手を焼かせた。　若い別の冒険者に言い寄るし、雪を魔法でブッ飛ばそうとする。

だが、いざ作業に入るとリュリュは別格。

店の屋根に上るのは、裏から風の力で飛び上がるし。　スコップで

雪を掬う処か、風で吹き飛ばそうとする。　スコップを使わせても、ビハインツの3倍の馬力とスピード作業して、石の天井にスコップを突き刺す失態のおまけ付き。

「うぬぬ・・、負けられん」

気合いを吐いたビハインツは、馬車馬の様にリュリュと雪降ろしを競い。　夕方にはヘロヘロにへばってしまった。

それでも、汗を掻いたオリヴェッティやルヴィアに纏わり付くリュリュは、流石は神竜の子供だけあって元気過ぎる。

「ねぇ～ねぇ～、オリヴェッティのおね～さん。　今夜も、何処かに食べにいこ～」

甘え付かれ、その美しい美少年の面持ちで強請られるとオリヴェッティも弱い。

「今夜もですか？　一度、船に帰らないと・・」

「イイじゃん、オヤドに寝泊りしなきゃいいんでしょ？」

「う～ん・・、そうだけれども・・」

オリヴェッティは、Kにビハインツとルヴィアの加盟を言いたくて、困った。　4日は停泊すると決まっているので、もう一日は宿に泊まれる。　だが、長くKを1人にしておくのも悪いと思える。

しかも、オリヴェッティにはもう一つの不安が・・。

今朝、リュリュがオリヴェッティのベットに潜り込んで居た。　その上、自分の身体に抱き付き、胸に甘えていたのである。　驚くのは当然だが、リュリュは知能が発達した幼児と同じ。　母親の元を離れている今は、母性を感じられる親しい誰かに甘えたがる。

オリヴェッティがリュリュの甘えを受け入れてしまった心情には、そのリュリュの実情を知る故の女性的な甘やかしが有り。　更に、航海中に見たあの記憶の石の中身の影響も有るだろうか。　赤ん坊に弄られる様に、リュリュが寝ながら自分の胸に甘えてるのが驚きでも嫌では無い。

しかも、リュリュの傍に居ると、自然魔法を扱うオリヴェッティは、自然の風のエネルギーそのものに抱かれる感覚を覚え、何とも心地良いのだ。　下手をすると、癖に成りそうな安心的な快感が有る。　愛した異性と共に抱き合い、全てが許されて心穏やかに眠れるのと似ていると云えようか。

そんな訳で、オリヴェッティはリュリュをKに預けたいのである。　手遅れに成る前に・・・。

（はぁ・・。　でも、この目に弱い・・・、私って年下好みなのかしら）

オリヴェッティは、自分を見上げるリュリュの目が怖かった・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪【前】　引き裂かれた二つの魂　雪の街に悲しみが満ちる時・・・≫

船から、Kが消えた。

後から気付いたブライアンとウィンツは、港を離れる前だから、Kも街でのんびりするのだろうと思って気にしなかった。

逆に、夜の入りに飲食店で飲み食いしたオリヴェッティ達。　一緒に働いた別の駆け出しチームも誘い、ワイワイガヤガヤと楽しい時間を過ごしていた。

誘ったのは、いずれも23歳から17歳と云う若い者達だけのチームだ。　6人と云う人数と、バランスの取れた戦力の面々で。　“ディオス・ペノラード”（どこまでも突っ走れ）と云う古い演劇の題名を、そのままチーム名にした彼等。

女性と男性半々の彼等は、リーダーを若き男性魔法遣いのシェローナゥが務めている。　灰色の髪を短くした上に、フードをしてバンダナを巻くシェローナゥ。　ニキビがまだ残る顔は、純粋な印象の

村人の様だ。　しかし、元気で活き活きとした喋りは明快で、雪掻きを一緒にして気が合った。

他に、自然魔法を扱う背の低い引っ込み思案の少女の様な印象を受けるのが、ロロ・カルカッテ。　大剣を扱う太った戦士のニッチョフ。　手先が器用で盗賊の様な技能を持った学者で、剣士も扱える細身の女性クロナ。　“夜のしじまのエリス”と云う珍しい神を崇める若者で、口の軽い僧侶のザボッセ。　剣士で、一風変わった“剣殺し”（ソードキラー）と云う剣を佩く年長者の女性ライラック。

聞けばこの6人、それぞれが放り出された面々だと云う。　金の取り分に厳しいチームや、リーダーの強引な方針に従えない。　人生の流転から元盗賊と云う生い立ちがあり、その噂を聞いたリーダーが嫌って出された者。　他に、一時のみの、頭数揃えにチームに入っていたなど。　初めてチームを組めるのは、自然魔法を扱うロロだけだ。

リュリュは、ロロやクロナに興味を示して、ズケズケと質問を繰り返す。

一方で、ルヴィアとオリヴェッティと云う中々の美女二人に、口の軽いザボッセや、シェローナゥは話を投げかけた。

ニッチョフ・ビハインツ・ライラックは、互いに戦士や剣士と云う立場から会話を重ねた。

大雪と云う影響以外、然したる話題も無い中で。　他愛ない内容から、旅先の事など様々な話が飛び交う。

さて・・。

合わさった１０人が一つの会話に到った。

それは、ルヴィアが。

「そう云えば、此処に居ないケイと云う仲間が居るのだが。　何でも、風のポリア殿と面識が在るとか。　２年近く前、どうして風のポリア殿は突然に有名に成り出したのだろうか？」

と、云う一言から始まった。

ロロ以外の面々は、このホーチト王国に長く居る3人を中心に、幾度かモンスターとの戦いも経験した者達だった。　それなりにも冒険者事情に通じた面々の様で、その当時の事を知っていた。

先ず。　シェローナゥが、カリカリに焼いた魚の中骨を手にしながら。

「俺がこの街に来た時、“風のポリア”なんて異名は無かった。ポリアと、その仲間のマルヴェリータの二人が有名なのは、絶世の美女二人が揃ってるって噂されるだけ。　正直、殆ど仕事も回して貰えない屯組みだったんだぜ」

フラストマド側から渡って来たロロは、影の薄い村娘みたいな素朴さで。　女らしさの薄い、物静かなままの様子から。

「そうなんですか。　私が学院を卒業する頃には、“風のポリア”様のお名前は聞きましたよ。　今年の初めぐらいでしたか」

でっぷりとした身体をのニッチョフが。

「確かに、シェローナゥの云う通りダス。　ポリアどんは、此処から北に有る町で行方不明に成った若い娘を探す仕事を引き受けたッス。　そいでもって、丁度その時に町へ出て来たモンスターを退治したんダス。　町の森の奥には、ふる～いお城が在ってぇ。　其処に、とんでもねぇ～モンスターが巣食ってたど。　そのモンスターを排除したのは、ポリアどん達のチームに加わっていた包帯を顔に巻いた男だどか。　名前はぁ～・・わかんねぇダス」

ルヴィアとオリヴェッティは、見合って頷き合い。

「ケイ殿だな・・」

「恐らく・・」

ニッチョフの後に話を繋いだのは、僧侶のザボッセで。

「だぇけんどさぁ～、その後はおでれぇ～たよなぁ～。　今、斡旋所の手伝いしてるグランディスのリーダーのサーウェルスと、結婚した僧侶のオリビア達が魔の森マニュエルに行ったまんまになってさぁ～。　その救出の為にって合同チームを作るった上に。　ポリアのチームと、ゲイラーのチームと、後・・誰だっけ？　魔想魔法を遣ってたクソ生意気な野郎の・・・、あ。　そうそう、フェレックだ。　あの三チームで、助けに行ったんだよ」

シェローナゥが、補足とばかりに。

「そのチームのリーダーだったのが、包帯を顔に巻いた男だった。　助けて戻った時には居なかったし、居ないヤツの噂は流せない。　しかも、ポリア達も誰もが当時の事を話そうとしないから、良く

解らない事だらけだがさ。　北の町で最強ランクのゴーストモンスターを倒し、あの魔の森やモンスターの巣窟と成ってる山にポリア達を連れて行って、また死人出さないで戻したって事を考えると・・」

ライラックは、ビールを一気に呷ってから。

「・・、凄腕」

クロナは、其の頃は人を殺めずに身包みを奪う追い剥ぎをしていた頃だった。　だから、良くは知らないと云った顔で。

「そうなのか？」

と、ライラックに問う。

焼いたジャガイモの薄切りを手に摘むライラックは。

「私は、ホーチト王国に来る前は、クルスラーゲに居たんだ。　向こうでは、ポリア殿が有名に成り始めた頃、ステュアートと云う若者がリーダーとなるチーム“コスモラファイア”が、突然に有名に成り始めようとしていた。　何をしたかは良く解らないが、交易運河の流れる都市で、秘密裏に行方不明に成った兵士達の行き先を突き止め。　北方の山間に開いた洞窟の奥深く、地中に湧いたカエルのモンスターの群れを一掃したと・・」

シェローナゥは、その話を知らず。

「え〝っ？！　マジで？」

「あぁ。　その事件から、王都での国家転覆未遂事件。　その事件に付随した、２０年昔の女性の自殺事件も、彼らが解決したとか・・。　そして、ステュアートのチーム内で、彼に助力をしていたと噂されるのが、その包帯を顔に巻いた男らしい。　黒尽くめながら、相当に強いと・・」

ニッチョフも、その話は知らず。

「ほへぇ～。　んだば、その包帯を顔に巻いたってダンナは、凄い冒険者なんだな～」

ライラックは、色男に似た女の顔を真面目にし。

「話に、その包帯を顔に巻いた男は、クルスラーゲの大臣や騎士とも通じていたとか・・。　一体、どんな人物なのか、話をしてみたいものだな」

オリヴェッティは、ルヴィアに。

（ケイさんは、面倒とかイヤそうなタイプですから、話すのは止めた方が良さそうですね）

（多分・・。　だが、噂だけでも凄い人物だな。　ま、幽霊船を一撃の下に沈めたあの力を見れば、全てが納得出来る）

ビハインツは、リュリュが何も云わないので。

（リュリュ、何か云わないのか？）

すると、ウズウズした様子のリュリュは。

（ケイしゃんに、余計な事云うなって脅されちゃったのぉ～）

（なるほど、それは怖いな・・・）

ビハインツは、その話を聞いて尻の穴が引き締まる思いがする。
断崖絶壁を見下ろした時の恐怖心に近いものが・・・。

オリヴェッティは、そこで線引きしようと。

「なるほど、凄い方なんですのね・・。　一時とも、チームに入って頂けただけでも嬉しい限りですわね。　所で、皆さんはずぅ～っと北の大陸にいらっしゃったのですか？　我々は、東の大陸に移動する途中なんです」

と、話題を変えようとした。

だが、ザボッセは、

「なぁ、その包帯を巻いた男に会えないかな。　俺、当時の話を聞いてみたい」

これには、シェローナゥやライラックも同意を示す。

オリヴェッティは、軽はずみに聞いたと困った。

代わる様に、ルヴィアが。

「余計な話をせず、寝てばかり居る。　恐らく、此処の皆で押し掛けても迷惑とするだけだろう。　何せ、我々も深い話は何一つ聞け

ぬのだ。　本人が嫌がっている以上、会わせる手段が無い」

すると、ちょっとキツイ印象の長い赤髪をしたクロナが。

「嫌がる相手に、知らぬ我々がズケズケと会いに行くのも無礼なんじゃないか？　大体、デカい事件には、おいそれと他人に云えない裏事情もあるだろう？　聞いたって、教えてくれないんじゃないかい？」

その一言に、皆が黙った。

★

夜も更けたマルタンの街中。　深々と雪が降る中で、顔を露にしたライナが一人で歩いている。　真新しい青のマントを羽織り。　首元には、ハイネックの黄色い衣服が見えている。

「・・・」

少し俯き加減で、どこか虚ろな目の運び。　一体、Kと何処に消えていたのだろうか・・。

店に入る素振りも無いライナは、金髪の頭に雪を乗せ。　人通りの少ない方へと歩き続ける。

彼女が、大衆的な宿と酒場の融合した店の脇に曲がった。

その姿を、大衆向けの大きな酒場の先、飲み屋の店先に置かれた樽の陰で見ている人物が見つけた・・・。

（見つけたっ、あの女（アマ）・・・、やっぱり男を捜してうろついてやがったかっ！）

そう思うのは、垢染みた肌の色黒い顔をした男だ。　ライナを探して聞きまわる男の仲間だろうか・・。　マントに身を包んで、装備は良く解らないが。　腰脇に突き出るのは、剣の類の柄。　冒険者・・・、若しくは身を崩した何物かと見受けれる。

この男。　直ぐにライナを追わず、その樽の置かれた酒場の裏に回った。　店脇の勝手口を開き、カウンター前に立つ目つきの悪い主人に。

「探したぞ。　尻尾掴むから、所々で繋ぎを頼む」

「・・・」

酒場の主人は、何も言わずに頷いた。

ライナを見つけた男は、急いでライナの後を追いかけた。

雪の降る街中だが、古いホーチト王国の首都であるマルタンにも、闇の一面がある。　住宅や市民の生活圏となる区域と、商業区の狭間。　過去の大地震で陥没した一帯は、狭いながらに放置されている。　此処は、浮浪者や盗賊などの住処になっている場所で、地元の住民でも近寄らない。

時々、移住してきた移民が紛れ込んだり、死体が出たりと不審な雰囲気が渦巻いていた。

街中を縫う様に歩き、都度都度の門で後方を確かめるライナは、この場所に向かっていた。

（うひひ・・、あの辺に隠れてたのか・・。　全くをもって好都合だ）

尾行する男は、ライナがどんどんと人気の少ない方へ向かうのにほくそ笑んだ。　曲がる角の雪を踏み、そこに火薬の様な黒い粉を少量撒く男。　この粉は、微かに異臭を放つ上に、不凍の一面を持つ。

尾行をする時に、盗賊などが目印に遣う。

繁華街の賑わいが、喧騒に変わるまでに離れた頃。

日中だけ人の溢れる卸店や、貿易商などの事務所が多い所まで来ると、もう建物から漏れる明かりすら少なく。　人の息づく気配すら無い。

ライナは、灯りすら持たずに静々と雪の敷き詰まった道を行く。

新雪が降り積もるので、キュ・キュとその踏み進む足音が微かに起きた。

彼女を尾行をする男は、物陰からライナを見張りながら。

（あぁ・・今に襲っちまおうか・・。　イヤ、一応は金で頼まれてるから順番は守らないとヤベぇかな。　んん・・・、だが、流石はあのジョンソンのダンナが見初めた女だ。　イイ面してからによ・・。　あぁっ！！　早く捕まえてぇ～ぜっ）

貪欲な男の野性を滾らせるこの男は、ライナを甚振る事しか頭に浮かばなくなって来ていた。　ライナを見つけたら、存分に楽しんで殺すと云う前提の約束を交わしている。　金で雇われた中、その建前で順番を守る必要が在るのだが。　雪の中を歩くライナの顔を見て、男は欲望を掻き立てられてしまっていた。

そして、またライナを尾行しようと物陰から出ようとした男の肩に、何かが乗った。

「っ？！！」

不意を突かれた様な驚きを覚え、パッと振り返った男の目の前には、影の様な大男が居て。

（気付かれちゃいないな？）

と、小声で声を掛けられる。

男は、雇い主の一人の声と判断し。

（ダンナ・・、脅かさないでくだせぇ）

（フフ、すまん）

ライナを尾行していた男は、ライナの曲がった門の方を顎で示し。

（向こうに。　このまま行けば、ブレイク・サーズ（壊れた一角）の所に行きやすゼ）

マントにフードをした大男は、

（そうか。　なら、先に追え。　俺は、他の二人と合流して追う）

（了解）

（殺す事を条件に、最後はお前にあの女をくれてやる。　人に気付かれず追い詰められる場所までは、悟られずに尾行しろよ）

（解ってますよ、任せてくだせぇ）

男は、暗い中で卑しい笑みを浮かべて云い。　ライナの後を追って、通りへと出た。

その後、姿を見た大男は、

（精々頑張れ。　お前の楽しむ時間は、俺達が十分に味わってやるからよ）

と、不気味に微笑んだ。

さて。

ライナは、顔を少し強張らせながら、灯りの消えた建物の間を歩いていた。

この先に、通りの右側には暗黒街に近い崩壊した区画が有る。　地盤沈下して、崩れた家や転がった建物などがそのままに。　時々、大声で喚き上がる野蛮な声がしたりする。　１０日ほど前にも、此処で死体が出た。

ライナは、Kとこの区域の中で待ち合わせをした。

（私には・・私には・・・・）

ライナの気持ちを必死に奮い立たせているのは、たった一つの希望だ。　その希望だけは、決して失いたくはなかった。　だから、Kの言い成りに成ったのである。

ライナの右側、続いた建物の並びが突然途切れた。　深い闇の淵が広がり、遠く向こうまで真っ暗に見える。　その闇の一角に沿う道端は、人がどう頑張っても這い上がれそうに無い斜面となっている。

（あぁ・・、神よ）

その崩れた通りの一部に、なだらかな斜面で暗部の街へと降りる道が出来ていた。　ライナは、何度も神に祈りを捧げ。　そして、その斜面に足を踏み入れたのである。　雪で滑る斜面を、瓦礫の破片で作られた手摺を頼りに下り、なんとか壊れ掛かったレンガ通りに来れた。

其処で。

（後ろを振り返るな・・。　尾行してるヤツが、降りようとしてる）

ライナの耳に、Kの声だけがする。

（本当に・・この人・・）

ライナは、自分を狙う相手を誘き出す為にエサに成れと云ったKが、

自分を陰ながら見守っていたのを悟った。

Kの話は続き。

（そのまま、壊れた下水道沿いの道を行け。　左右二股に分かれる所の手前に、階段を降りて行ける壊れた寺院が在るから。　其処に入れ。　なぁ～に、心配するな。　もう、此処の暗黒街を仕切る頭には、俺が面通しをした。　アンタを襲うのは、付狙う奴等だけさ）

ライナは、こんな街の暗部と繋がる者共の頭と顔見知りであるKが、只の冒険者とは思っていない。　しかも、もう自分を襲わない様に手を回したと・・。

（私は、一人じゃないっ）

守らなければ成らない者が居る。　ライナは、心を強く持った。どんなに体が疲れていても、まだ動ける。　死ぬまで、諦めきれない。

ライナを其処まで支えるのは、自分の産んだ赤ん坊だ。

歩き出すライナ。

そのライナを見ながら、こっそりと斜面を下る男。

Kの張ったワナに、暗躍していた悪党達が誘い込まれていた・・・。

★

ライナは、子供を人質に取られ。　そして、ジョンソンの愛妾に成った。

ライナがこの街に来たのは、子供を産んで１ヶ月頃の１０日前。宿に夫のユリアンと子供のマリーを連れて泊まった。　その夜、食事に出掛けた帰りに、悪漢に襲われた。　夫と引き離され、子供を奪われたライナは、死か・ジョンソンの愛妾と成るかを迫られたのである。

僧侶である以上、その精神は清くと教えられる。　神に許され魔法の加護を得た者にとって、この理不尽な選択を迫られ、赤子を守る為にと妾の道を選んだライナの心は、もうボロボロだ。　それでも、母親としての母性や精神が、辛うじてそれを支えていたのである。

Kは、港でライナの胸元と見て、ジョンソンの横暴で染み出た母乳の痕跡を見つけたのだ。　そして、自分のした事で、何かが起こったと読んだ。

Kの知人で、街中で飲食店を営む夫婦の下に行ったライナは、全てをKに話した。　聞いたKは、只一言。

「解った・・・」

と。

それからは、ライナに何を詮索する訳でもなく。　赤子を助けるべく、ライナを付狙う輩を誘い出そうと云った。

実は、ライナは逃避行中の身だった。　夫のユリアンは、何故か追っ手に追われる身分で。　知らずに冒険者として一緒のチームに属したライナは、４０絡みの渋い紳士的なユリアンに惹かれて、身篭った。　子供を産む為に、何処かで“根降ろし”として、生活を続けようと話し合った二人。　だが、その居場所を探す旅中で、こんな事態に成ってしまった訳だ。

ジョンソンは、母親に成ったばかりのライナを責め嬲り、母乳を搾り出す事でサディスティックな欲望を満たしていた。　ライナは、何度赤子に与える乳を搾るなと嫌がったか・・。

自分に起こった理不尽より、今は逢えなくなった赤子が心配なライナ。　ジョンソンが生きて居た時は、毎夜授乳の時だけ逢えていた。

だが、Kがジョンソンを殺した夜から、全く逢えていない。

泣きながらでも、我が子にお乳を与える時間だけが、ライナの心の拠り所であるのに・・。

あのジョンソンが殺された深夜。　ジョンソンの遺体を見て呆然としていたライナは、急に誰かが入って来た気配に身を隠した。　大きい棚の開き戸の中にである。

入って来たのは、用心棒に雇われていた3人である。　何時もなら、其処に黒いローブをスッポリ被った女性らしき者が居て。　ライナは、束の間の母親としての働きが出来る。

所が、入って来たのは三人だけの様で。

“おいっ、ダンナが死んでるぞっ”

“クソっ、あの女も居ないっ”

“もう契約まで行きそうな時に、ダンナも居ないで。　しかも、あのガキの母親を生かしておいたらヤバいぜ？”

“どうする・・、ラムド？”

ラムドとは、ジョンソンの身辺警護をしていた剣士の名前だ。

“そうだな・・。　とにかく、ダンナの死を直ぐにバレちゃ不味い。　俺らは、過去に幾つも傷が有る。　役人に詮索されたら、斡旋所あたりから情報が漏れて真っ先に疑われる”

“確かに・。　ロッパー、何かイイ考えは無いか？”

ロッパーと云う名前は、用心棒の魔法遣いである。

“それなら、先ずは・・・。　ズスタ、お前は朝に此処に居て。受付のオッサンと、料理人の若いヤツを殺せ。　ダンナの遺体を見つけられては、朝には通報される。　居ないあの女に罪を擦り付けたいが、あの女自体も殺さなきゃならねぇ～から。　前後を考えると、発見を少しでも遅らせる事が最善だ”

ズスタと云うのは、あの長柄の戦斧を持った男の名前であった。

その話を聞くライナは、生きた心地がしなかった。　略裸で、隠れているしか手が無い状態なのだから。

しかし、三人の話は更に進み。

魔法を遣うロッパーの声で。

“ラムド。　俺ともう一度、奴等の溜り場に行こう。　あの昼間の包帯男、なんかダンナと関係有りそうな感じだった。　下手に船員とかに手が回ると、俺たちに飛び火する。　あの奴等と話し合って、さっさと事を運んでしまおうぜ”

“それしか無いか・・。　確かに、昼間の船長達も殺した方が、俺達の面体を知ってる奴等を消すにいいが・・。　あんな強い包帯男が一緒じゃ手出しはヤバイ。　とにかく逃げる為にも、早くガキの始末で金を得る筋を付けねぇ～とな”

ズスタは、其処で。

“長くダンナの死を隠すなら、どっかに死体を埋めた方が良くないか？”

すると、ロッパーが。

“何処にだ？　血の痕を外に残す事に成るし。　ダンナと受付の朝の打ち合わせは、仕事上不可欠。　俺達が嘘で隠しても、仕事が滞って直ぐにバレるさ。　ダンナの我儘は、周知の事実。　前にも、料理人や受付の二人を次の日まで飲みに連れ出したりしてた。　殺して、有耶無耶にしちまった方が無難だ”

それにはラムドも乗っかり。

“ズスタ。　ロッパーの云うとおりにしろ。　俺達の雇われた成り行きや、あの女の存在を深く知る二人だ。　生かしてベラベラ喋られたら、それこそ面倒・・。　口を封じてしまえ”

“わかった。　んじゃ、あの女の捜索を知人に頼もう。　歓楽街を根城にしてるゴロツキに、何人か知り合いが居る”

“大丈夫なのか？”

“探して貰うだけさ。　見つけたら、どっかで始末しちまえばイイ”

“だが、金も必要だろう？　見せかける為にも、少しは前金を渡して置かないと”

“金なら、三階の金庫に有るじゃないか。　それに、逃げたあの女は上物だ。　女の身体をエサにすれば、意地汚い奴等だからホイホイ話しに乗って来るさ”

“そうか・・、ソイツは名案だ”

“よし、じゃ～金庫を開けよう”

“鍵の有る所は、確か・・・あの女を食ってた寝室だったな”

こうして、少しの間。　３人が屋探しをする音がしたり、何やかんやと音がした。

暖炉の御陰で、最初は寒さも緩かった部屋だが。　金を運び出す頃には、彼方此方に人が出入りして温度が下がった。　ライナは、震える自分の息を殺すのが精一杯だった。

そして、男達が去った後。　ライナは、其処を飛び出して、壁に掛かったローブ一枚と。　男達が落した金庫の中身の金を僅かに持っ

て、建物内から逃げたのである。

役人に申し出ようとしたライナだが、役人を手が回ったら逃げるしかないとも言っていた男達。　最も足手纏いに成る自分の子供は、格好の人質で有ると同時に、身の危険な存在だ。　それなら、あの包帯を顔に巻いた目立つKを探して、ジョンソンを殺した事を盾に取り。　ジョンソンの事や、あの用心棒達の情報を聞き出そうと考えたのである。

ライナは、Kがジョンソンを嘗ては裏切ったかなんかした仲間だと思っていた。　だが・・、まさかジョンソンがお尋ねの脱獄逃亡犯とは思っても居なかったのだ。　お尋ね者を殺しても、何の罪にも問われない。

Kを縛る手立てを失ったライナは、気持ちを落した。

しかし・・。

Kは、急にギラギラとした目を小部屋の窓に向け。

“あのクズ野郎が・・・。　もう、3日か。　誰かの世話が無いなら、赤子は危ないな”

と。

ライナは、子供が痩せたり、折檻を受けた様子も見ない数日だったので。

“恐らく、誰かが世話をしてくれていると思います。　でも、何かの話が付いたら、殺すと・・”

Kは、久しぶりに怒りが身体を駆け巡る気分を覚え。

“どうせ、あの悪党の下のバカ共だ。　始末した後で、事件は役人に任せればいい。　少し、此処で休んでろ。　夜に成ったら、奴等を誘き出す為に歩き回って貰う。　赤子の為だ、あと少し・・・危険を我慢しろ”

このKの言葉に、ライナは耳を疑った。

（この人・・、私の為に動いてくれるの？）

夜。　迎えに来たKは、ライナの衣服まで飲食店を営む夫婦に頼んでおいてくれた。　下着すら着ていないままのライナは、手足が凍傷に・・。

Kは、休んだライナに、指輪の発動体まで用意して。

“自分で癒せ。　少ししたら、出るぞ”

と。

ジョンソンの死後。　温かい部屋と、食、そして僅かの休息。　ライナは、その時間を娘に与えたかった・・。　娘と迎えたかった・・。

夜の街に出たライナは、突然にKの姿が見えなくなった。　驚くライナの耳に。

（俺の格好は目立つ。　俺は、隠れてアンタを尾行するから、とに

かく歩き回れ。　誰かの尾行が付いたら、行く道の指定をする）

Kの声だけが響いた。

街中を暫く歩いたライナは、Kに尾行者が現れた事を聞き。　言われるがままに、此処まで・・。

そして、今。　暗闇の中を歩くライナは、左右に分かれる道の前に来た。　左手に、大人の半身ほど沈んだ敷地へと下る階段が見える。

ライナは、Kに言われるがままに階段前に。

雪の敷き詰まった庭の先には、少し右に傾いた石造寺院が影の様に見えている。

（ここね）

部分部分の壊れた凍り付く石階段を5・6段下り。　更に、建物に向かって地面が見えない雪の上を歩いて行く。　少しヨロけるライナだが、もう心は座っていた。

（良いか。　寺院の中は、もうだだっ広い広間が有るだけだ。　奥に行って、其処で待て）

Kの声が耳元の後ろに聞え、微かに頷くライナ。　何故か、身体を彼に支えられている様な気さえした。

（アンタを尾行する男の他に、顔を隠した何者か3人が来てる。恐らく、ジョンソンの用心棒をしていた冒険者達だろう。　奴等が中に踏み込むまでは、俺は様子を見てるから。　もし、尾行の男が襲う様なら、隠れてる知り合いが助ける）

ライナは、静かに、微かにまた頷いた。

真っ暗な夜の中で、人気の無い裡捨てられた寺院は不気味な静けさを放っている。

「・・・」

ライナが寺院の入り口に来て見れば、入り口の枠が在るだけで。木の扉の残骸すらも無い。　足を中に踏み込ませると、闇に食べられる様な感覚を覚えた。

ライナがコツコツと靴の音を立て、雪の舞い込んだロビーへと進んで行く。

尾行をして来た男は、そっと入り口の外脇に身を潜めた。

真っ暗な寺院の中の一番奥。　本来なら神の像を祭る場所には、空虚な空間がポッカリと開いていて。　其の前には、古びた祭壇の名残の様な物が残っているだけであった。

ライナは、その場で膝間づいた。　何の神を祭っていたのか、それを示すものが見当たらないが。　寺院で在るなら、神を祭る神殿の代わり。　優愛・慈愛の女神を心に思い、我が娘の安否を祈る。

母親として、娘の安全だけを祈るライナの眼には、涙が音も無く浮かんでいた・・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

１２月３１日に怪我をして（マヌケな私）、挙句に携帯を壊し。
身動きが取れない正月を送っていました（泣笑）

そろそろK編の第一幕が終了となります。　次回は、セイルとユリア編をお送りする予定です。

ただ、長時間座ると足腰に痺れと痛みが出ますので、やや掲載スピードが落ちます。　真に申し訳御座いません。

入試などの試験が始まり出す頃で、学生さんの息抜きにでもなれば幸いです。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪【後】　・・・Kと云う魔王が現れる≫

かなり夜遅く。　船に戻ったオリヴェッティ達は、Kが居ないのに少し驚いた。　置手紙も無いし、Kの少ない荷物もそのままだった。

「こんな夜更けに、居ないなんて・・。　何処へ？」

オリヴェッティは、Kが何処に行ったのか気に成った。

だが、一緒に部屋に来たルヴィアは。

「街に出たのであろう。　この雪では、出港も遅れる可能性が高い。　誰か、知人にでも逢いに行ったかも知れぬ。　今度は、我々が待つ側なだけだ」

ルヴィアは、オリヴェッティの頼みで、今夜から一緒にこの部屋に寝泊りする気でいた。

ビハインツは、一人で個室に入って寝ていた。

リュリュは、たらふく食べた直後なので、目を手で擦り。

「ねむひぃ・・」

と、ソファーに毛布を取って向かう。

オリヴェッティは、温かい空気を取り込める配管の口を開き、大き過ぎるベットにルヴィアと一緒に寝る事に。

その頃。

繁華街の賑わいも収束し、ポツン・・ポツンと飲み屋街の明かりが落ちる頃。

ライナが静かに娘に祈りを捧げて居ると、背後の離れた場所から声がした。

「やっと見つけたゼ。　ダンナのシミ臭せぇ～女が、何処に逃げ回ってたんだかな」

と、嫌悪を覚える様な言い草。

（来た・・）

ライナは、その声が“ラムド”とジョンソンに呼ばれていた剣士の用心棒の物だと解った。

ライナに向かう足音が幾重にも重なる中。

「探したゼ。　ガキと一緒に、あの世へ行きな」

と、“ロッパー”と呼ばれていた男が言う。

ライナを尾行してきた男とは違う3人の男達が、ライナに向かって寺院の中央辺りまで踏み込んだ時。　スクッと立ち上がったライナは、振り返り様に。

「私の赤ちゃんは何処？　殺すと云うなら、私と赤ちゃんを同時に殺しなさいっ」

ライナは、娘のマリーが生きているかどうかの一つしか気持ちが無かった。　娘を失ってまで、生きたいとは思っていない。　ただ、娘の姿を見たかった。

ライナの声に、3人の男達は立ち止まり。

「さぁ～な。　生きてるかどうかなんて、お前ににはもう関係無いさ。　此処で、死ぬんだからな」

一番声の印象悪いズスタが言う時。　彼等の背後から。

「そいつは困る。　どうしても、吐いて貰わにゃ～な」

ライナは、真っ暗な中でKの声が響いたのを聞いて。

（どうするの・・・）

思った時。

「うがぁっ」

「ぎゃぁっ」

「げぶっ」

と、三様の声が一度に起こったのを聞いた。

闇の中、呻く男の声に重なり。

「おい、赤ん坊は何処に居る？　吐かないなら、地獄を見せてもイイぞ」

と、Kの声が涼やかに恐ろしく聞こえた。

ライナは、何故かKが怒っていると解った。　声の響きが、微妙だが明らかに違う。

「だ・・誰がお前なんかに・・・」

ロッパーと云う男が、右からそう声を絞り出した時。

「そうかい・・。　なら、こっちも相応の対処を取らせて貰う」

と、Kが言った。

Kは、直ぐに。

「ライナ、其処に居ろ。　直ぐに終わらせる」

Kは、あくまでも静かにそう言った。

暗い中で、何が起こったかは見えないライナだったが・・。　Kは、どうやら男達3人を外に連れ出したらしい。

雪の上に男達3人を投げ出したKは、ロッパーと云う魔法使いの男と、ズスタと云う大男の口に雪を強引に押し込み。

「少し黙ってろ。　直ぐに順番が回る」

と、小さく言い放ち。　そして、ラムドに向かって言った。

Kが彼にした事は、“拷問”と云うには甘すぎる。　汚い遣り方で生き抜く彼を、直ぐ様に恐怖で脅えさせ。　そして、全てを喋らせるに至った。

「まっまま街のっ・はずれぇぇぇ〜〜っ！！！　農村区にっ、ふ・ふふ・・風車が3つ・・丘の上の家だぁっ！！！！！　やつ・等、住民ブッ殺して・・・中に・・。　ガキ・・と、おお・女・・・と見張りがふっふ・二人っ！！！！　頼むっ、助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

深夜の宵闇の中で、リーダー格のラムドがあっさりと喋ったのを聞いた他の二人は、どんな心持ちだっただろうか。　悪党同士の諍いに金で手を貸し、捕まって拷問を受けた事もあるラムド。　口の堅さと恐怖に対する精神力は、並外れている彼だった。　その男が・・・ものの少しで脅えきって・・・。

ラムドを雪の上に投げ出したKは、

「生きてるのか？」

瞬きすら出来なくなってKを見るラムドは、激しく頭を縦に振り。

「まっ・まだ・・は・は・はな・しが纏まって・・・無い」

Kは、ラムドを見下ろすままに。

「で？　何で、あの彼女の一家を狙った？」

雪の積もった寺院の庭の上で、寒さに震えるのか、それとも恐怖にか解らないラムドは、ガチガチと噛み鳴らす口元のままに。

「詳しくは・・しっ・しら・・知らないっ。　ジョンソンのダンナがっ・・裏の・べべ・別件で・・ううっ受けた話だっ」

「でも、つるむ為に結託の話を通したんだろう？」

「あああ・・あぁ・・、俺達は・・あのっ・・・女を・・・」

Kは、寺院を指差したラムドを見つめ。

「下っ端に成り下がった訳か？」

「だだだ・だって・・・つか・捕まったら・・・」

「そうか。　だが・・俺に殺されるより、役人に捕まった方が楽だろう？」

ラムドは、激しく頭を縦に振った。

Kは、寺院の方を見て。

「パゴサナル、もういい。　俺は、赤ん坊を助けに行く。　このアホの始末は、アンタ任せにするぜ」

すると・・。

「解った」

寺院の裏手や、敷地内の別の建物の物陰から、人影が何人も現れた。

人影は、ラムド達に近づき、直ぐに縛り上げる。

Kの前には、小柄で目つきの鋭い５０絡みの男性が現れた。　黒い痛みの見えるマントを纏った男ながら、その身に隙は見当たらない。

引き結ばれた口には、厳しさと荒々しさが垣間見れ、眼に宿す光は不気味なものがある。

黒尽くめの何者かに縛られたラムドは、その宵闇の中で小男に向き。

「まさか・・、この一帯を仕切る暗黒街のボス・・。　“残渣のパゴサナル”かっ？」

Kの前に立った小柄の初老男は、ギロリとラムドを睨み。

「お前に通り名を呼ばれる筋合いはねぇ。　生まれたばかりの赤子を金のネタにするなんざ、ドブの残り滓の俺でも毛嫌いするわな」

小柄な初老の男は、黒尽くめの何者か達に。

「連れてけ。　コイツ等は賞金首みたいなモンだ、役人に突き出して明日の酒代でも稼ぐとしよう」

Kは、そう言った男に。

「助かる。　貸しにしといてくれ」

と。

すると、小柄な男のパゴサナルは。

「なぁに、アンタに命を助けられた上に、アイツの命まで助けて貰った。　アイツは、今じゃ俺の娘の父親代わりなんだろう？」

「まぁな」

「フン。　なら、これぐらいじゃ・・・昔の借りを返した内にすら入らないさ」

「そうか・・。　さて、子供助けないとな」

呟くKに、パゴサナルは。

「アンタ・・随分変わったな。　あの時は、偶々に助けられた訳だが・・。　今は、見ず知らずの親子を助けるってか？　全く、信じられんな」

Kは、相手を見返し。

「おたくも、だろう？　昔なら、あの捕まえた奴等側だったろうに・

・。　今じゃ、此処を治めて筋を通してる。　汚い世界でも、ソレが在るか・・無いかは、偉い違いだ」

すると、パゴサナルは雪を目身うけながら顔を歪ませ。

「俺を此処に連れて来たのは、アンタだ。　ま、俺が生きるには、此処を仕切る以外に術は無かったが・・。　だが、底辺を生きる者達も必死だ。　この場所に来て、確かに身勝手では生きられなかった・・・。　だから、かもな」

寺院へと歩き出すKは、

「なら、全うしてくれ。　娘の晴れ姿でも、心に思い描いてな」

初老の印象を深く目じりに皺を寄せたパゴサナルは、

「・・・あぁ」

と、寺院へ向かうKの背中を見送り。

「赤ん坊を奪ったのは、ジョンソンの手下で、この区域から締め出されたクズ中のクズだ。　生かしておけるのは、誰も居ない」

その声に、Kは、軽く手を上げて寺院の中に入った。

★

ホーチト王国の王都マルタンの郊外には、農地が点在する区域がある。　海が近い場所では、潮風で作物も限られるが。　北西と北東の草原や丘一帯は、農地として耕されいた。　冷害や水害などで作物の収穫が少ないと、人の多い街は直ぐに飢える。　その対策で作られた古い農業区域だった。

街の中心へは、歩いて少し掛かるが。　城壁の外周に囲まれた街の一角ではある。

その農村の入り口の丘。　此処には、もう隠居した農家の老夫婦が住んでいるハズだった。

だが・・。　その農地のど真ん中に小さく盛り上がった丘の上。風車３つに囲まれた木造の古い家には、こんな夜更けにも関わらず灯りが付いていた。

その家の窓辺で、外を伺う男が居る。

「ったく、アイツ等遅っせぇ～なぁ～」

顎に古い切り傷が見え、浅黒い肌をした顔は怖いぐらいの威圧感が伺える。　悪党面の男が、暖炉の温かさが溜まる部屋の中に戻り。

「たかが僧侶の女一人殺すのに、朝方まで掛ける気か？」

頑丈さだけが取り得の様な木の机を前に、毛布や布に包まれた赤子を抱く女性が、醒めた目を悪党面へ向け。

「あ～んたみたいに、アイツ等も女に汚いんだろうからねぇ～。

朝まで、弄ぶ気なんじゃないのかい？　母親と子供を殺すなんて出来るんだ、どこまでもアンタ等は人間が腐ってるんだろうね」

と、やや爛れた口調で、避難がましく言う。

悪党面の男は、ギロっと赤子を抱く女を見て。

「モナ、ガキを世話する内に変わったか？　夜の盛り場で客取りしてた娼婦のお前が、そんな棘の効いた口を利くなんざ～気に入らねぇな」

垂れ目がちで、やや化粧の濃い中年女性のモナ。　胸元が大きく開いた赤いロングドレスに、金のチェーンネックレスをし。　耳には、蒼い宝石のイヤリングまでしているハデな姿・・。　顔を見ても、随分醒めた印象ながら、細い足首や腰つきには似合わない胸やお尻の肉付きは、色香を溢れさせていた。

モナは、自分に近寄る悪党面の男から目を逸らし。

「アタシは、金さえ貰えればイイ話さ。　だが、この子をどうするか決まってないんだろう？　相手方に売れるなら、高い身代を取れるかもしれないじゃないか。　大事な金蔓だから、丁重にしてるのよ」

そう言って、赤子をに目を移すモナは、虚ろな目つきで眠る赤子を覗き込む。

モナに近づき、寝ている赤子の顔が覗ける場所まで来た悪党面の男は、モナの胸元を見下ろしてから彼女の耳に顔を近づけ。

「ケッ。　ガキも用が無いなら、さっさと殺すからな」

と、言葉を吐いた。　身を戻した悪党面の男は、酒の有る土間の広がる方に歩いて行った。　内心では・・。

（ガキもそうだが、モナも足手纏いだな・・・。　分け前をやる相手でも無い・・・、いずれはガキと一緒に・・・）

と。

この男を含めて、ジョンソンとグルに成った悪党達は5名居る。
その中でも、ジョンソンの手先として悪事の依頼を請けたり、ジョンソン本人へ繋ぎとして対面していた３０半ばの男がリーダー格だ。
　モナに恐ろしい言葉を言ったこの男も、その下っ端に成る。

だが、彼らは焦っていた。　ジョンソンが急死し、僧侶の母親が逃げたと言う。　何時、役人に手が回るとも知れない中。　儲け話が半端に成って、大金をせしめて逃げられるか。　それとも、役人に嗅ぎ付けられて逃げるか。　その境に居る。

リーダー格の男は、その話を纏め様と出ずっぱり。

仲間の二人は、そのリーダー格の男と共に行き。　赤子を隠しているモナの護衛として一人。　周囲の見回りや、連絡の繋ぎをしている男が一人。

正直、ジョンソンの飼い犬だった用心棒達3人は、僧侶の母親を殺すぐらいにしか価値が無い。　逃げるには、腕の達つ者が欲しい所なのだが。　それ以上に、彼等は悪い意味で顔を知られ過ぎている。
　集団が大きく成れば、何を行うにしても目立ち始める。　彼等を

外で歩かせる目的は、バレた時の的代わりに近い。

ジョンソンの妾だったモナが、ジョンソンの死にも動じず此処に居るのは、彼女が金目的でしか無いと誰もが思っていた。

さて。

悪党面の男は、土間の広がる奥の壁際、窓の下に備えられた竈の前に置かれた丸太を椅子にした所に腰を下ろした。

「年寄りがやってた農家の割に、ワインはたらふくありやがる。潜伏には、丁度いい所だぜ」

この家の持ち主である老夫婦は、もはやこの世のものでは無い。馬や牛の繋がれた納屋の中、その糞に塗れる様に棄ててあった。時期に馬や牛は、餌を求めて啼いた。煩いので、牛も馬も殺されてしまった。

この悪党面の男も含めた5人は、あの陥没した区画の暗黒街ですら鼻抓みに出された男達である。　金に対する意地汚さと、極悪非道さは目に余ると云う理由だ。

悪党面の男が、一人ワインを飲み始めた直後。

「変わりは無いか？」

裏手の勝手口が開き、口元を隠した細身の何者かが現れた。

土間に居た男は、ワインの瓶を挙げ。

「ジラン、なぁ～んも変わり無ぇぜ」

入って来た男は、頭髪を雪で凍らせていて。　ワインを飲む男に歩み寄りながら、チラっと赤子とモナの居る方を見る。

「・・・」

モナは、椅子に座って背を向けたままだ。

（丁度いい）

ジランと呼ばれた男は、そっとワインを飲む男に近づいた。　そして・・・。

（おい、朝方に向こうの二人を始末しろ）

ワインの瓶を片手にした男の目が、一気に殺気を孕んで光った。

（殺っていいのか？）

（あぁ。　どうやら、話が付きそうだ。　先方は、あの男の一件で払った金が精一杯ならしい。　金を安く見積もって、ガキを始末する話に傾きそうだ）

（身代には成らねぇってか？）

（そうだ。　念のため、母親を始末しに行った冒険者達の連絡を待つバウンスを待て。　母親が始末出来たなら、もうガキを生かす必要は無い）

（うひひ・・、そうかい）

ワイン瓶を持った男は、ニタリと笑ってモナの居る方を見た。

ジランと云う男は、直ぐにまた出て行った。

少しして・・。

「へへ・・、モナ」

ワイン瓶を持った男は、ニヤニヤした顔で居間の方に戻って来た。

赤子を抱き、目を瞑っていたモナは。

「・・なぁによ、私に構わないで。　アンタ、赤子の鳴き声嫌いなんでしょ？　私が赤子を放したら、途端に泣き出すわよ」

と。

この数日、モナは常に見張りとしているこの男から、下心の篭った視線を向けられていた事は解っていた。　だが、初めて下心が言葉にも含まれたのを薄っすらと感じ、嫌に気味悪く思えた。　だから、釘を刺す意味でこう云ったのだろう。

しかし、ワイン瓶を持った男は、瓶をテーブルに置くと・・。

「別に、泣いたっていいさ。　・・黙らせればイイ」

と、モナの首に手を滑らせた・・。

この瞬間、モナはハッとして。

「アンタっ?!!　もう殺す気なのっ?!」

と・・、振り返った。

「・・・・」

爛れた悪女の様なモナの瞳の中には、悪辣な笑みを浮かべた男が居て。

「驚くこたぁ〜無ぇだろ?　お前を殺す訳じゃないんだから」

モナが大きく動いた事で、布や毛布に包まれた赤子が泣いた。

悪党面の男は、ギロっと赤子を見下ろし。

「うるせぇガキめっ。　乳だのクソだの世話遣らせてたが、此処で終わりだ」

と、モナの腕に手を伸ばす。

「お止しよっ!!!」

モナは、赤子を守る様に男の手を遮り、赤子を抱えて立ち退いた。

モナに払われた男は、怒りを顔に表し。

「オメェ・・・意味解ってンのかぁ〜?」

と、刃渡りのやや長い短剣を引き抜いた。

モナは、暖炉の前から赤子を抱えたままに右へ右へと逃げ。

「やっぱり、気が変わったわ」

そう言って、表の扉に向かうままに逃げ出した。

「このアマっ!!!!」

男も一気に殺意を剥き出しにしてモナに向かう。

内鍵代わりの衝立を外したモナは、蹴破る様に薄い木戸を開いた。

冷たい空気がサッと彼女を襲い、家の中へと押し込む。雪がまだ舞う外に飛び出し、雪の積もった道へと走り出すモナ。しかし、女の赤子を抱えた逃げ足など、高が知れている。外に走り出したモナが、雪で埋もれた畑に挟まれる雪道を走り出したが直ぐ。足を雪に取られ、体勢を崩した。

其処にモナの後から飛び出して来た男が近寄り。

「ガキ諸共死にやがれっ」

と、剣を・・。

「う〝っ・・」

モナの背中へと刺さった剣が、体内を通って表の腹部を突き破った。

「うひゃっ!!　死ねぇぇっ」

泣き喚く赤子の声を攫う強い風の中。　狂気に悦した男は、確実にモナを殺すべく剣を捩った。　内臓を傷付ける為に・・。

「あぐぅぅ・・・」

内臓を切り刻む火傷の様な痛みに悶えたモナは、ブッと口から血を・・。　肺にまで傷が及んでしまった為だ。

剣を男が引き抜くと、赤子を抱いたままに、雪に倒れこむモナ。

「ら・・だ・め・・・」

死の匂いを伝える自分の血の匂いが解る中でも、モナは赤子を抱き竦める様に微かに動こうと・・。

そんなモナの姿を見下ろした男が、モナの身体に覆い被さる様に中腰で近づき。

「死んでまでガキを守るってか？　無駄な事をっ！！」

と、モナの心臓諸共に赤子を刺そうと剣を振り上げた。

其処で。

“ドン”

・・・。　鈍い音だ。　だが、モナの耳にもその音は聞こえた。

モナの上に覆い被さる様に居た男が、強風で飛ばされる枯葉の様に

宙へ持ち上がった。　左のこめかみに、丈の短い短剣を刺して・・。

暗い闇夜の支配する雪の敷き詰まった畑に、道沿いの柵を越えて転がる男。　衣服や髪の毛に雪を纏わせ、動きが止まった時には息は無い。

その直後。　モナの元には、

「おい、刺されたのか？」

と、耳慣れない男の声がした。

「あ・だ・・れ」

モナは、抱えたままに雪に埋もれそうな赤子を出そうと、動けない身体を動かす。

其処へ、

「マリーっ！！　マリーはっ？！」

と、ライナの声が。

Kがライナを連れて馬で駆け付けたのだった。

モナは、ライナの声を聞いて。

「あ・・あか・・ちゃ・・・」

と、自分を覗き込む顔の良く解らない誰かを見上げた。　暗い中で、

しかもKは包帯をしている。　失血で視覚が失われ始めた彼女に、Kの人相を確かめる余裕など在りはしない・・。

Kは、直ぐに赤子を取り出しライナへ。　そして、仰向けにしたモナの傷口に手を伸ばす。

「チィっ！！！　内臓が切られてズタズタだ。　コレでは、普通の治癒魔法ぐらいでは治せないぞっ」

腸の一部が、血と一緒に切れて飛び出しているのをKは確認したのだ。　普通の魔法では、傷を塞ぐ事は出来ても、千切れた内臓などまでは元には戻せない。

赤子の安否を確認したライナは、まだ息の在るモナを見て。

「ケイさん、彼女を家の中に。　私が、なんとかします」

Kは、縫合手術も出来ない程に内臓が損傷していると解るので。

「癒しの魔法では、到底無理だぞ」

すると、ライナは。

「更に上、完治の魔法を遣います。　今の私なら、出来る」

Kは、ライナの抱える赤子を見て気付き。

「しか、手は無さそうだっ」

と、雪でモナの傷口を冷やし、直ぐに彼女を抱えた。

ダラダラと血を流すモナは、もう意識を失っていた。　失血に因るショックの死が間近に迫っていた。

家の中にモナを運び込んだKは、頑丈な木の机に彼女を寝かす。

ライナは、蹴飛ばされて転がる椅子を起こしモナの間近に置くと、泣くままの我が子を置いた。　そして、Kと入れ替わる様にモナの前に立つと、目を瞑る。

「貴女がマリーを守っていたのね・・。　何の痩せも、怪我も無いマリーを見れば・・・貴女のした事が解るわ・・」

ライナは、集中し始めた。　モナが犯人の一味で在ったとしても、彼女に感謝し・・そして助けたいと強く願える。　神聖魔法は、只の帰依した気持ちでは中途半端な効果しか生まない。　その感情の揺ぎ無い強さが、奇跡の力を高める。

Kは、辺りに注意しながら、モナとライナを見た。

（母親たる愛情を持ちて、本当に穢れ無き思いは奇跡の力を高める。　どんなにあのジョンソンのゴミに汚されても、この母親の気持ちは汚せなかったか・・・）

それは、一瞬の様な奇跡だった。

「神よ・・、フィリアーナ様。　未熟な私を母親として、温かき光の様な命を授け下さった事に感謝をいたします。　この者に、我が子を救った私の慈悲を与え給え・・。　完全なる癒しを・・・今・・此処に」

神聖治癒の魔法でも、完治の秘術は高等魔法の極みに位置する。
下手な駆け出しの僧侶が唱えても、その気持ちと信仰心だけでは中途半端か、失敗に終わるだろう。　だが、慈愛・優愛の女神フィリアーナは、数少ない地上に残った女神で。　人との間に子供を産んだ女神。　母性に対する思いを汲み取る意思は、他の神の比ではなかったとか。

ライナの静かな全身全霊を掛けた大魔法は、眩い光を彼女の手に与え。　そして・・・、傷を塞ぎ。　破れた内臓を元に戻した・・。

「・・・・はぁっ」

大量の血を溢れさせ、息が止まり掛けたモナの口が、再び呼吸の仕草をして落ち着いた。

「で・・出来たわ」

ライナは、そう呟いて気を失った・・。

★

「はぁ?!」

「あえっ?」

「何だっ？！」

オリヴェッティ・リュリュ・ルヴィアが驚いて跳ね起きたのは、もう朝方の頃だろうか。　まだ真っ暗の部屋の中に、急に赤子の泣き喚く声が入って来たのだから・・。

Kは、シャンデリアに明かりの魔法を掛け、室内を一気に明るくした。

「・・・」

ポカ～ンとして、入って来たKを見たオリヴェッティ達3人。　その眼に写るのは、Kが赤子を背にして、二人の誰かを抱えて来たと云う様子だった。

「ど・どうしましたの？」

と、言う寝る時の黒いドレス風の服のままのオリヴェッティへ。

「悪い、この二人を寝かせたい。　ベットを空けてくれ」

と、Kが。

急いでベットを明け渡すルヴィアだが、Kの背負う赤ちゃんを見て。

「あ・・赤子なのか？」

Kは、ベットにライナを寝かせた後。　薄笑いを浮かべ、

「母親は、疲れて気絶した。　お二人さん、女なら乳は出ないか？」

と、ルヴィア・オリヴェッティを見る。

「バっ・バカっ！！」

「出る訳っ・・」

と、恥じらい顔を赤らめる双方。

Kは、モナも寝かすと、気を失っている二人の女性を見つめながら雪で濡れた髪を掻き揚げ。

「フッ、だろうな」

ルヴィアもオリヴェッティも、モナの衣服が血で汚れているのを見つけ。

ルヴィアが、

「ケイ・・、この御仁は怪我をっ？！！」

と、云えば。　オリヴェッティも続き。

「医者・・僧侶の手配をっ」

と。

Kは、慌てる二人に。

「もういい。　怪我は、治ってる」

「え？」

「あ？」

驚く二人を前に、赤子を背負う為に遣った帯を解くKは。

「先に寝かせた女は、僧侶だ」

女性二人は、ライナを見た。

Kは続け。

「母親の愛情ってヤツは凄いね。　悪党に剣で刺され、内臓を切り刻まれたこっちの女の傷を、完璧なまでに治した・・。　“信愛の恩恵”・・、子を持つ親で。　その愛情の宿った思いが傾けられた時、慈愛の女神フィリアーナが及ぼす奇跡と聞くがよ。　何度みても、凄い効力だ」

Kは、泣き上げる赤子を腕に抱いて見て。

「いい大声だ。　この子は、きっと美人でイイ女に育つぞ」

気を失ったライナとモナ。　そして、赤子をオリヴェッティ達に託したK。　事情は後回しで教えるとまた出て行った。

実は、連絡の繋ぎで戻って来た悪党の一人を捕まえたので、モナとライナを安全な場所に移しに来たのである。

Kは、そのまま夕方まで戻らなかった・・。

夜が明けると、何かと忙しくなるオリヴェッティとルヴィア。

「おはよ。　何か・・・」

ビハインツと共に、部屋に入って来たウインツが赤子の鳴き声に驚く。　二人に説明するだけで四苦八苦した。

オリヴェッティは、朝に旅客の人々を巡り。　乳の出る女性を探して赤子を落ち着かせた。

リュリュは、一気に女性が増えた事で興奮していたが。

“リュリュ、この４人を守る為なら、何してもいい”

と、Kが任せた事を何より喜び。　何かと合間に赤ちゃんをあやしていたのが印象的だった。

昼に起きたライナは、オリヴェッティ達から説明を受けた。　そして、Kのした事の全てを教えた。　ジョンソンの暗殺から、マリーを助ける一件まで・・。

死んだ様に呼吸する以外は寝っぱなしのモナは、昼間も起きずに寝続けていた。

さて、夕方にKが戻った。

★

「いや～、疲れた」

雪で衣服までを濡らし、戻ったKはどっかりと一人用のソファーに座る。

どう声を掛けていいか皆が困る中。　ルヴィアが、腕組みをして。

「随分遅かったな」

と、脇に立つと・・。

「あぁ。　知り合いの将軍に会って役人に手配させた上に、犯人達の確保まで手伝ったからな。　御蔭で、事件の中身がぜ～んぶ解った」

ライナは、Kの左側へ歩み寄り。

「ではっ、ユリアンの居場所は？」

Kは、ライナを脇目に見て。

「知りたければ全てを教える。　だが・・、先に言って置くぞ。アンタの旦那は、アンタと子供をゴロツキに売り渡した。　・・それに、生きちゃいるが、もうアンタの手の届か無い場所に向かってる。　聞きたいのなら、覚悟だけしろ」

一気に只ならぬ話と成り、赤子をあやすリュリュと何故か居るビハインツは、真剣な顔に・・。

オリヴェッティは、Kの様子に。

「良くないお話・・・ですの？」

頷くKは、宙を見て。

「頗る・・、いや。　最悪？」

ライナは、顔を強張らせた。　だが、全てを聞かないと心のけじめが付けられない。

「・・・教えて・・下さい」

事の発端に始まり、全てをKが語り終え夜に落ちる頃。　ライナは、打ちひしがれる様に泣いていた。

オリヴェッティやルヴィアは、怒りや同情で無言となり。　リュリュとビハインツは、自分達を気に入ってか笑う赤子を見て虚しく成った。

Kは、語り終えた後に。

「まぁ～・・、男は諦めろ。　ロクでも無いバカなんぞ、さっさと忘れてしまうがイイさ。　アンタには、まだ男なんか霞む程の宝を持ってるからな」

と、ビハインツの腕の中に居る赤子を見た。

Kを見るライナは、泣きながら。

「私・・無理かも・・」

と、言うのだが。

Kは、ハッキリと。

「先ず、大丈夫だね」

と、言い切る。

ルヴィアは、解ったばかりの最中で、それは無いと。

「そうは言い切れんだろうが・・」

すると、Kは。

「あのな。　赤子の面倒を見ていたとは云え、その寝てる女は犯人だぜ？　その女に、中等魔法すら遣えない母親が、感謝と慈しみの思いだけで治癒の高等大魔法を成立させるなんて、フツーに無理だって。　よっぽど愛情が深く強くなきゃ、神が手を貸すかって～の」

Kは、ライナに目を遣さずに。

「子供を助けてくれた悪党を許せる気持ちが在るなら、子供を育てるのなんか簡単だ。　アンタが身を滅茶苦茶に汚されても、心が汚れなかった証が其処に在る。　信じていた男が駄目でも、アンタにはまだ信じれるものが幾つも在る証だ・・。　赤ん坊は、アンタを救う神からの贈り物だ。　救いの手は、まだアンタの背中に差し伸べられている。　下らない男一人の為に、その手を払うな」

ライナは、床にへたり込んでいたままからKを見た。

いつの間にか、Kもライナを見ている。

「アンタの愛情や慈しみにをくれた赤子を駄目にする価値が、ユリアンとか言う男に在るか？　アンタの心に残る男への愛情は、何時しか生きる道の行き先で満たされるさ」

此処で、赤子が泣いた。

Kは、ビハインツの腕の中の赤ちゃんを見て。

「ホラ。　何時までも厳つい兄さんのツラは見飽きた～、腹減った～って言ってるゼ」

「・・・」

ライナは、泣く我が子を迎えに立った。

Kは、ライナは大丈夫だとだと解った。　その意味は、後日に解る。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪雪が止み。　そして、船は動く≫

Kが戻って、話を終えた後。

「・・・」

ライナが赤ちゃんを抱き、授乳を始めた。　悲しみに暮れる暇など、子育てには無い。　ライナの悲しみなど、今のマリーにはどうでもいい事なのかも知れない。　寧ろ、母と自分が今を繋げるなら、其の外の全てなど二の次と云う事か。

いや、前に進むと云う事は、そうゆう事なのかも知れない。

さて。

授乳時に人が多いのも悪いと思ったオリヴェッティは、ルヴィアと共にビハインツやリュリュを連れ、夕食をするために一階へ行く。

今夜は、船に乗る楽師達や踊り子が合作を興じるとかで、少し場を外そうとした訳だ。

Kは、長いソファーに座って横になり。

「疲れた・・。　寝る」

と、リュリュが勝手に使っていた自分の毛布を取り返して寝てしまう。

そして・・。

「うぅ・・ん」

静かに成った部屋の中で、モナが目を覚ました。

「あっ」

ガバっと跳ね起きたモナは、直ぐに自分のお腹を触れる。

寝ているKが、モナを見えていない筈なのに。

「そこの母親に感謝しろ。　フツーなら治る筈の無い怪我を、奇跡の力で治した」

モナは、近くに立って赤ん坊に乳を飲ますライナを見て。

「あ・あか・・。　無事だったんだね・・、良かった」

と、顔を俯かせた。

Kは、

「悪いが。　役人にオタクの事を言うのも面倒だから、死んだ事にした。　悪党に、赤ん坊を守って刺されたとしておいた。　役人も、極悪な凶悪犯とジョンソンの一件で忙しく、オタクなんかどうでもいいみたいだな。　この船に乗れば、フラストマドまでは行ける。　そこで、勝手にやり直すんだな」

と。　そして、黙った。

Kの言い草は、彼を知らない人間からはいい加減で気に入るものでは決してない。　モナは、ベットのシーツを掴み。

「勝手な・・、誰が助けてくれって・・・」

と、憤る言葉を漏らす。

しかし、ライナはモナに近寄り。

「神が、貴女を助けたのです」

モナは、ライナをジロっと見上げ。

「神？　そんなお話の中のものなんて・・」

だが、ライナは腕の中の我が子を見て。

「貴女が、この子を守ってくれた・・。　だから、私は貴女に慈しむ心を向けれた」

モナは、顔をライナから背け。

「アタシは・・その子が金蔓だから世話したんだ・・。　助けようだなんて・・そんな甘い事はっ」

と、悪ぶった言い方をする。

しかし、モナを見るライナは、それが嘘だと解る。　今のモナには、厭らしい気配や、悪意の様なものが見えないからだろう。

「この子のおしめ、凄くまめに代えられていましたね。　肌に、汚い処が見られない。　襲われる前同様に笑うし・・、痩せ衰えた様子も・・・、傷付けられた処も無い。　赤子は、何も出来ない泣くだけの生き物。　愛情なくして、こんな甲斐甲斐しい世話など出来ないと思います」

モナの心を見透かして言ったライナとて、乳房から口を僅かに離し穏やかに眠たそうな様子を見せる赤子を見て、この今泣き叫びたい中でも安らげ。　そして、微笑める自分が居る事にそっと気付く。

「少し見ない間に、何度も笑う様になりました。　こんなに、日に幾度も笑うマリーは初めて・・」

モナは、躊躇う素振りながら、ライナを見て。

「そっ・・それよりさ。　母親のアンタは・・これからどうするんだい？　もう、夫の男は・・戻らないと思うよ」

涙を浮かべながらも、赤子をゆっくり揺り動かし背中を刺激し。

そして、ゲップを見たライナは、

「解っています・・。　さっき、あの寝ているケイさんから全てを

聞きました。　マリーは、私が育てます」

「そうかい・・。　で？　身体は・・大丈夫なのかい？　あのジョンソンって男も、用心棒だった奴等も、アタシ等女には汚かったはずだろう？」

ライナは、モナも暴力を受けたのだと察した。　ジョンソンなどがどうゆう性格をしているのか、モナが知っている事が、それを証明すると言っていいからだ。

「体の彼方此方が痛いです・・。　心は・・・この子が居なかったら保たなかったかも」

眠りに付くマリーを見る中で、言うライナは暴力に耐えた日々を思い出してしまった。　子供を起こさない為にも、泣く事も堪える彼女の肩が微かに震える。

モナは、自身も女身でありながら、今も、今までも成す術無いと俯き。

「・・そうかい。　母親は・・・強いね。　確かに、子供は生きてる。　奪われないだけ・・マシかもしれないね」

その語りに、ライナは母親に成り損ねた女の姿を見た。　ベットの隅に腰を下ろし、Kの寝るベットを見てから。

「貴女も、子を宿した事が？」

モナは、母親の腕で静かに眠るマリーの寝顔を見て黙った。

ライナも、また。

だが、健やかに、穏やかに眠るマリーの顔を見るモナは、心の奥底の記憶を思い出す。　ポツリ・・またポツリと身の上話をし始めた。

天災で幼い頃に親を失ったモナの人生は、娼婦として過ごす女の良くある話だった。　だが、客との間に子供を宿しても、娼婦に僅かな金を払うだけの雇い主が産む事を許す訳も無い。　堕胎させる微弱な毒を飲まされる悪質な習慣は、世界の暗部に今だ残る事実だった。

モナは、２０代で４度も降ろされた。　３０代に入って、妊娠所か・・月ものすら来ない身体に・・。

子供を宿すと、女の体も母親の準備をし始める。　それを途中で勝手に奪われる事は、性根のまともな女なら悶える様な悲しみを産む。　幾度、失った我が子を思って、自然と涙を流した解らないモナだ。

モナは、今にマリーの寝顔を虚ろな目で見て。

「最初・・ジョンソンの旦那から金でこの子を面倒看ろって渡された時・・、正直、嫉妬したんだ。　私の子供は・・身勝手に奪われてしまって生まれも出来ないのに・・、何で今になって・・・他人の子供をって。　でも・・でも・・・。　泣かれて、仕方なくあやした時・・胸を・・・弄られて。　初めてお腹に出来た子供を奪われた時・・・まだ半年も宿してないのに・・奪われた後にさ。　涙・・涙みたいに・・お乳が出たの・・思い出して」

モナは、静かに泣きながらに声を詰まらせ。

「嗚呼・あぁ・・アタシなんかに、・・この子・・・笑うんだよ。
自分の赤ん坊すらまともに・・ま・まも・・守れなかったアタシなんかに・・。　・・・日に日に・・この子可愛くなって、娼婦でもないアンタが甚振られて・・。　この世に、神の救いなんて・・無いって思ってたのに・・」

モナの嘆きを前にライナは、絶望を抱えていたモナのお腹を静かに優しく触れる。

「・・・ごめんなさい。　私の掛けた完治の秘術が、貴女を癒しました。　昔には戻せないけど・・身体は戻ったはずです。　今からなら・・貴女でも産める・・・」

涙を落すモナは、その言葉に目を見開いた。　涙が跳ね、膝に落ちた。

「そ・そんな事・・・」

「今更って・・思いますよね。　本当に、ごめんなさい・・。　でも、マリーを守ってくれた貴女を助けたくて、凄く難しい大魔法を遣ったの。　一心不乱だった・・でも、神は願いを聞き届けてくれた」

「い・いま・・？　今になってなんてっ」

声を大きく上げそうに成ったモナ。

その彼女を見つめ。　そして、そっとお腹をを擦るライナは・・。

「遅いと思う、でも・・・手遅れじゃないって思えるの。　貴女の

望んだ事じゃ無いのは、・・謝るわ。　でも・・でもね。　マリーを愛しんでくれた心は、捨てないで欲しいの」

モナの見るライナは、涙目で。　その姿は、懇願している様にも。

手を離したライナは、マリーを見て。

「夫に捨てられても、この子に・・」

“貴女の命を守ってくれた人が、私以外にも大勢居る。　心を曲げちゃ駄目よ”

「って、言いたい。　貴女の事、感謝をもって教えたい」

モナは、言葉を返せずに押し黙る。　モナの心の中で、様々な記憶や思いが混ざり合う。　怒り、悲しみ、嬉しさ、そして絶望。　完全に醒める様にして、日々を繋ぐべく金を求めて男に身体を渡して、床から床へと夜を這いずり回った過去は、決して消せる訳が無い。

だが、生きる事。　そして、昨日今日動かされた心の躍動は、凍えきったモナの心に、僅かな春の訪れを齎す波紋を起こしている。

何時しか自分のお腹を触れるモナは、何事も言わずに。

少しして、近くで汽笛が鳴った。　また、一隻の船が港に到着したのだろう。

ライナは、そっとマリーをモナに差し出すと。

「トイレに行きたいの。　貴女にも、何か食べるもの買って来るわ。マリーをお願い、起こしたくないから・・」

一瞬震えたモナだったが・・、マリーを受け取るままに。

手拭いを洗う気なのか、ライナは遣った手拭いを取って部屋を出た。

見送ったモナは、自分の腕の中で眠るマリーを見ていた。　モゴモゴと動かす口や、ニギニギと動く拳が愛くるしい。　見つめていて、飽きないモナは無意識に。

「・・・、可愛い子」

と。　涙と混同した思いで歪んだ顔が、マリーを見て徐徐に和らいで行く。

すると。

「・・だな。　母親に似て、美人に成るかも」

Kが言った。

「あ・・」

起きていたのかと思ったモナに、Kは。

「“モナ”・・、オタクの呼び名。　確か、この国の俗称的な言葉だったな。　飲み屋に居る女や・・娼婦なんかの括った呼び名だったか・・」

モナは、男のKに言われてグッと顔を俯ける。

Kは、更に続け。

「でもな。　この名前ってさ、実は昔に居た女が由来なんだぜ？」

「え？」

思わずの反応で、顔を上げた彼女に。

「元々、ある大貴族の一人娘にモナっていてな。　才色兼備をそのまま人にした様な女で、学者顔負けの知識と、麗しい容姿、完璧に弁えられた礼儀作法から、世界中の王侯貴族から求婚されたってよ。　だが、な。　最愛の男を、嫉妬した別の男に奪われてから、人生を変えた女なのさ。　毎夜、そのモナって女はパーティーに出席し、一人身の若い貴族や学者と哲学や歴史の解釈を論じ、誰と構わず選んだ男と床を共にしたんだとか」

「そ・そんな人が居たの？」

「あぁ。　モナは、生涯旦那を作らず。　自分の美貌が老いに負ける前に、美しいままで居たいって自殺したって話さ。　サラっと聞くと変な女かも知れないが、本心は違ってたんだろう。　愛する男を失い、自分を欲した他の男を恨んだ。　だから、大金積まれても誰かの女では無く。　誰とでも寝て、女の本心を見せ付ける為に敢て・・な。　今じゃ、その娼婦の様な一面だけ残って、大事な本人の思いなんか忘れ去られてしまった・・」

モナは、その本当のモナの気持ちが解らないとは言えない。

「・・・男って、何時も身勝手で残酷ね」

「かもな。　・・オタクにも、本当の名前在るんだろ？　そろそろ、本当の名前で生きてみたらどうだ？　今、オタクを縛った糸が切れた。　纏わり付く柵の糸は消えていないだろうが、風に舞う枯葉みたいに自由だろ？　駄目元で、いっぺんだけ上見上げてもいいんじゃ～ないかと思うぜ。　・・その腕の中の子供にしてみれば、汚れたオタクでも大切な命の恩人と成る」

「でも、アタシは・・」

モナの内心に、過去の全てが縛り付く様で。　新しい生き方など、出来無そうで怖い。

「脅える必要在るか？　オタクの抱える子を産んだ親は、男に汚されても心を汚さなかった。　だから、オタクを助ける魔法を唱えられた。　身体なんて、生きてりゃ幾らでも汚れる。　だが、心は真っ直ぐにすれば、幾らでも清められる」

「・・・」

モナは、マリーを見つめる。

Kは、最後にと思い。

「生きたその赤子を抱いただけで、オタクは憎しみや過去の悲しみで枯れた心を潤わせた。　まだ、立ち直る一面を持っている証さ。　過去は、あくまでも過去、塗り替えられはしない。　でも、今は変えられる。　この数日、色んな運命の今が変えられたのがいい例だ」

と。　後は、モナが決める事だと思った。

だが。

モナは、マリーを見て堪えきれないままに。

「アタシなんか・・・そんなに強く生きられないよ・・・。　子供も居ないし・・、みぃんな奪われた能無しさ。　母親に成り損ねて・・のうのうと生きる・・ゴミなんだよ。　赤子は、親を選べない。　失ったお腹の子供だって、アタ・・アタシなんかに宿らなけりゃ・・・」

モナの話を聞くKは、昔を思い出していた。　そして、声を押し殺して泣くモナに。

「親が子を選べないとか・・、子が親を選べないとか・・。　そんなの、言い訳だ。　アンタだって、見てきたハズだろう？　夜の女として働く者にだって、時として家族があり。　未熟さ・・、いや、自分の我儘から子供を死なす親・・。　逆に、男の前では爛れた女なのに、金を掴んで家に戻れば普通の母親に変わる女も居る」

「・・男なのに・・」

涙目のモナは、頭が混乱していた。　Kは、随分と女の内面を知っていると思え、それを認めるのが躊躇われた。

すると、Kはソファーに起きていた。

「見てきたからな・・」

モナは、チラっと見たKの背中を見て、目を向けたままに。

（・・この男・・・泣いてるの？）

自分の目に溜まる涙の所為でそう見えたのか・・。　だが、何度見てもその背中には、悲しみでも背負っているかの様な憂いが見え隠れしている。　不思議な男だった。

Kは、少し脇を向いて。

「前にな、行きずりで娼婦とその子供を助けた事が在った。　親子して、別々の病を患って胸を病み。　互いに咳しながら・・・血を吐いてな。　毎日の僅かな生活の糧を得て、身体を癒す場所を求める為、母親は壊れた身体を売ってた。　旅をしながら、街を変えながら・・」

「一番下の人間だね・・。　病気持ちの女なんて、客も一度で嫌がる。　客が取れなくなったら、街を変えるしかないから・・」

「・・、ああ。　もう、その二人は手遅れでな・・俺は、その二人を看取った。　だが、子供は・・・7歳で死ぬそのときまで笑顔でさ、母親に・・“ありがとう”って・・・感謝して逝った。　産んでくれた事を、素直に感謝して逝ったよ。　泣いて悔やんでた母親も、最後にはその言葉に救われてた。　俺は、あの時だけは確信した。　この子供は、望んで・・この母親に産んで貰ったんだとな。

母親も、身体をすり減らしてその子供の感謝に応えた。　“選べない”んじゃないさ。　俺があのライナを助けたのには違いないが、母親として俺に繋がる運命を手繰り寄せたのは、母親として必死だったライナ本人。　その子供だって、ライナを母親として望んで、小さな心で決めて生まれたと思うゼ」

モナは、寝ているマリーの顔を手で軽く触れた。　触られた事で、また・・モゴっと口を動かす。　マリーの頬を撫で、小さな手に小指を当てると・・。　ニギニギと手をを動かす。　マリーの手に小指を入れてみると、その温もりが伝わる様で。　可愛くて・・可愛くて・・・。

モナの内面が、壊れそうな程に熱く揺らいでいた。　Kの話を聞いて、反発出来ない自分を見つめ出したモナが其処に居る。

「・・喉が乾いたな。　紅茶、飲むか？」

モナは、か細い声で。

「この子の・・母親の分も」

「解った・・」

Kは、一つ下の階に在る給仕場に向かった。

モナは、マリーを抱きながら問うた。　自分の気持ちを・・自分に。　逃げ続けるべきなのか、立って上を向いてみるのか。　マリーを見ながら、問うた。　問うた・・・。

その部屋にライナが戻ったのは、その直ぐ後。

Kは、少しの間戻らなかった。

★

「お・・おい・・。　お前、何をし始めたんだ?」

次の日、朝には戻って来たクラウザーは、女性が増えて賑やかなシークレット・ルームに肩が落ちた。

リュリュは、マリーを抱えてクラウザーの前に来ると。

「ホラホラ〜、ジィ〜ジ」

紅茶を飲むソファー上のKは、眠そうな目で。

「色々在ってさぁ〜。　客が・・増えた」

ウィンツの身柄を自由にする所から、その後の事件の話を聞いたクラウザーは、何よりもKに呆れた顔を向け。

「お前・・本当に病気じゃないのか?　前のお前なんか・・それこそ一人救って、5人不幸にする様なヤツだったろうに。　何だ、ぜぇ〜んぶ助ける人に成っちゃったのかよ」

クラウザーの口から、“成っちゃった”とは笑える。

せせら笑いを浮かべ、目を細めるKは。

「仕方ないだろう?　んじゃ、誰か見殺しにした方が良かったか?」

リュリュの抱く赤子を見るクラウザーは、

「信じられん・・、悪魔が神に変わったみたいだ・・。　おかしい、なんかおかしい」

「ウルセエ。　それより、出港は？」

「ん？　今日の夕方前だ」

Kは、リュリュと見合い。

「妥当か・・。　数日は雪が少ないし、強い風も減るからな」

操舵室のデッキでは、カルロスがウィンツに礼を述べていた。　船の管理において、見事に働いていたからだ。

船の各階には、続々と客が戻り始めていて。　出港に向けた準備が行われていた。

もう、ライナとモナに脅威は無く。　この部屋じゃなく、ルヴィアの居た部屋に移る事も容認され。　その移動をルヴィアとオリヴェッティが手伝う。

夕日が冷たく澄んだ空を赤紫に染め、暗い夜の訪れを示す空に星が見える頃。　汽笛を鳴らしたクラウザーの船は、出港した。

さて・・・。

静かに成った部屋で、Kは紅茶を飲んでいた。

其処へ、船長室から降りて来たクラウザーが見え。

「お、紅茶か。　一つ、ワシも貰うかな」

Kは、テーブルの上に用意されたティーセットからカップを一つ表に返し。

「クラウザー、何かと迷惑を掛けた。　済まない」

一人用のソファーに座るクラウザーは、

「お前に似合わない言葉だな・・。　ま、犯人側の女を助けたのには疑問を思ったが・・、赤子を助ける為に裏切ったと聞けては、な。・・・、女は水物。　いや、母性ってのは、強いものか」

紅茶を注ぐKは、静かに。

「だな」

カップを手にしたクラウザーは、その香りに。

「いい香りだ・・、そこの棚に在るヤツか？」

「あぁ、一手間加えてあるだけさ」

香りと啜った味で、ワインが入ってるのはクラウザーでも解る。だが、ワインティーのそれとは、どうも赴きが違う様で。

「これ・・ワインが入ってるのか？　・・だが、にしては酒っぽくないな」

「熱湯にワインを落して、少し待ってアルコールを飛ばしてある。少し醒めたその湯で、長く煮出した紅茶さ。　そこの棚に在ったワインで、一つ助けた二人に似合ったワインが在ったからな。　昨夜、これと同じものを二人に出した」

味わいながら飲むクラウザーは、紅茶の香りを感じながら。

「確かに、女性らしい味わいだな」

「あぁ。　・・所で、フラストマドには、何日停泊する？」

カップを置いたクラウザーは、深く腰を沈め。

「ん、短くで3日か。　客の半分を降ろすし、魔法学院領土に行く人を集めなければならん。　このままでは、チョイト足が出過ぎる」

「確かに、ちぃ～っと日数食ってるからな。　高級部屋を借りる金持ちにでも乗って貰いたい所だ」

「そう、その事よ」

クラウザーは、少し黙っていたが・・。

「そう言えば・・、あの赤子の母親。　旦那も襲われたとか言ってたが、旦那はどうなった？」

ティーポットから紅茶を自分のカップに注ぐKは、そのままに。

「どうもこうも・・。　今頃、フラストマドとホーチトの国境都市

に着いた頃じゃないか？」

背凭れに首を預けていたクラウザーは、少し顔を起こし。

「あ？　無事なのかいよ」

と、訊りを交えた。　素直に驚いたからだろうか。

「当たり前だろう。　ライナを襲ったジョンソン連中の目的は、旦那であるユリアンとか云う男の身柄確保。　ライナと娘は、とばっちりを食ったってだけだ」

「とばっちりって・・・おい。　母親の女をかどわかし、娘の赤子を盾に犯してたのは・・・只の遊興ってか？」

クラウザーは、ムカムカっと来るままにKへ聞き返した。

「そうだ。　当初、ユリアンって男を捕まえて、或る貴族の家に届ければ良かっただけの依頼だった。　だが、ユリアンと云う男には、ライナと云う女と赤子まで・・。　腐り切ったジョンソンは、それを聞いて金を多くせしめ様とライナと赤子を誘拐したんだ。　ユリアンと云う男が貴族で、彼の身柄を欲したのも貴族出の商人だったからな」

「理由は、一体なんでじゃ？」

「どうでもいい内容さ」

と、Kはクラウザーに全てを語った。

ユリアンと云う男の名前は、偽名だ。　彼は、ホーチト王国とフラストマド大王国の国境都市に根付く名門貴族の次男だった。　顔が良く、習った剣の腕前も悪くない彼だが、次男である以上は家督など継げない。　しかも、若さ故の反発から冒険者に。　実は、ユリアンは後妻の連れ子で、正式な血統では無いのだとか。

何処にでも有る話のようだが、趣が変わるのは此処から。

ユリアンの実家を継承した長男夫妻は、地元でも名の売れる程に勤勉で真面目な貴族だったとか。　しかも、その一族の本家は、フラストマドの王家に近い侯爵筋で、そこに事件の根幹が在るのだった。

3年前。

その本家の当主が死去した。　妻には娘二人しか居らず、その二人も既に嫁いでいる。　本家筋に、分家の当主が売り込み合戦を始めた。

だが。

仮の当主となった奥方は、流石に上流貴族の出だけあり、野心旺盛で金を使って売り込みに来る分家の面々を毛嫌いした。　そして、唯一分家としての分を守り通すユリアンの兄の一家に目を付ける。

息子2人に、娘4人。　時期当主の跡取りも在り、方々の貴族に出す誼を見込める娘も多く。　本人とその妻が至って真面目。　正に、望む跡継ぎがその一家だった。

直ぐに・・、では無く。　侯爵本家は、幾つもの式儀を分家筋に任せ、その取り仕切る姿を見せた。　中でも、何の無駄も無いユリア

ンの兄一家が確かな一家だと周りに知らしめた上。　去年に家督相続の申し出を出した。　最初は固辞したユリアンの兄だが、本家の当主代行である婦人にに懇願され。　分家より、本家を守れと周囲の説得も在り、今年の夏に申し出を承諾した訳だ。

さて。

こうなると、問題はユリアンの実家の家督が宙に浮くと云う事。

これに目を付けたのが、もう死んでいたユリアンの母親を出した家だ。　同じホーチト王国の貴族で、分家出の商人だったユリアンの実の祖父は、ユリアンを呼び戻してその家督を継がせようと思惑を立てる。

ユリアンを金で手を回して探させる一方。　ユリアンが見つかったなら、早期に身を固めさせる為に落魄れた貴族の娘で、気立てや美しさの栄える若い娘まで探しておいた。

しかし、いざとなって余計なオマケの存在が居た。　そう、ライナとその子供のマリー。

ジョンソンは、ユリアンに妻と子供が居ると知って、ユリアンの身柄を押さえると強請りを始めた。　ユリアンの身柄引き渡しに、報酬の増額を求め。　金をせしめた事に味を占めて、ユリアンの血を引くマリーを身代に、更なる金を要求した訳だ。

ライナは、直ぐに殺す手はずだったが、母親としての魅力が女らしさを増しさせていたのをジョンソンは見初め。　モナの代わりの愛人にしてしまったと云う所。

此処まで聞いたクラウザーは、Kに怒りの顔を向け。

「カラス、良くやった。　ちきしょうめ、ウィンツの事も含めて、ワシが叩き斬っても良かったわえっ」

と、息巻いた。

しかし。

運命は、其処から変わった。

ウィンツの一件で、Kがその中に入ったからだ。　ジョンソンが死んだ御陰で、ライナは逃げ。　そして、悪党達はトントン拍子で進んだ脅しと儲け話が消えかかる事に焦った。

ジョンソンの影の手先として働いていた悪党の頭目は、狡猾なジョンソンを失って交渉を難航させた。　そして、早期に逃げるべく、安い金で赤子と母親の抹殺の代金で手を打とういう事になり掛けていた。

ま、Kによって全ての陰謀と計画は瓦解したが。　国境を越えて逃がされたユリアンは、お咎め無しになる。　ユリアンの祖父は、もう隠居して小口の金貸しをしているだけだと云うから、裁きにはその老人のみが首謀者として掛けられるだろうが。

クラウザーは、腸の煮えくり返る様な憤りを覚えながら。

「んで？　ユリアンとか云うそのアホウは、実家に帰ったって訳かよ。　あ？」

「そうだ。　若くピチピチの美人を娶れて、待望の貴族の実家を継げる事に喜んでたらしい。　なんせジョンソンにな、邪魔になってくるライナとマリーの事をどうしたらいいか訪ねたのは、男親のユリアンとか云うその男からだそうだ。　ジョンソンは、その一言で計画を転換。　更に、金をせしめる策を考え始めたとか・・。　俺に言わせたら、別れて正解さ。　そんな男と一緒に居たら、何れ今回の謀略が無くても、ライナと赤子は捨てられてた気がする」

「うむ・・、ワシも同感だ」

「つ～か。　本気で邪魔に成ったら・・・、父親に娘が殺される可能性も・・・な」

「在りうるわい。　そんな薄情な男じゃ、全くを持って・・・。しかし、そうなると何処までも可哀想なのは母子。　寧ろ、此処で決別出来て正解かも、の」

「あぁ。　だが、ライナの心に付いた傷は大きく深い。　娘が居なかったら、自殺してかもな」

「なるほどのぉ、僧侶じゃから尚更じゃな」

クラウザーの語りが落ち着き、ジサマ染みて来る。

Kは、紅茶を啜ってから。

「聖職者は、厳格な教えのみで帰依し、魔法の加護を得る。　だが・・、教えられる事では、汚された後の苦しみは拭えない。　・・神ってヤツは、妙に味付けを変える様だ」

「あ？　どうゆう事だ？」

「モナ・・。　ライナに、モナを引き合わせる運命さ。　ライナは、モナに同情してる。　モナも、その逆に。　その二人の間に居るのが、赤子のマリー・・。　辛辣な運命を用意しておいて、微妙に優しさを残してる。　運命なんて用意を神がするなら、どうも面倒な仕方だと呆れるよ」

すると、クラウザーはKを見つめ。

「それを云うなら、お前と云う救済者を引き合わせた采配に、ワシは拍手を送ろうかな。　無実の母子が救われ、俺の弟子のウィンツが自由になった」

Kは、クラウザーが食えないと失笑。

「はっ。　俺は、自分のした事の後始末をしただけさ。　ン年前、ジョンソンのアホを生かした俺の不手際のな」

「なにを・・。　お前、其処でそんなガキみたいな」

「いいじゃないか。　アンタより、十分に若い」

クラウザーは、褒めた自分が詰まらなく見える言い草に。

「おいおい、そうゆう問題かよ」

と、目を細めた。

次の日。

「うわぁ〜、バリバリいってるぅ〜」

晴れた朝。　海に張った氷を頑丈な船体の前部で割り進むので、衝撃による転落防止に船首甲板には客を出さない様にと指示が在る中、Kとリュリュだけが船首に居た。　氷の張り付く手摺の外、海面は凍り。　氷を割って進む船を見るリュリュは、白い息を出して珍しそうに見下ろす。

Kは、リュリュに。

「リュリュ、アレ」

「ん〜？」

リュリュは、Kの指し示す方向。　海上の彼方に、氷の島の様な尖った形の物を見る。

「ケイさん、アレなぁ〜に？」

「氷の浮島、“流氷”よりも大きい氷山ってところだな」

この寒い中、マントのフードすら外して然したる厚着でも無いリュリュは、物珍しそうに目を輝かせて。

★

「コオリで島が出来ちゃうの～？　スゴイスゴ～イ」

「確かに、凄い。　上に見えている島のン倍ものデかい氷が、その下の海に沈んでる。　この船でも、ぶつかったら壊れる」

リュリュは、風の流れや潮の流れは、真っ直ぐその氷山へ向かっているので。

「ケイさん、このまま行ったらヤバヤバ～？」

Kも、あっさりと。

「ンだな」

「壊しちゃおうっか」

「大丈夫だろ～、クラウザーはポンコツ船長じゃねぇ～し」

「でも、あかちゃんノってるしぃ～」

「やるなら、今やらんと。　あの大きさの氷山を壊すには、相当の力が必要だ。　近くで壊したら、砕ける爆風で船が危うくなるぞ」

すると、リュリュはフワッと風の力で浮いて。

「んじゃ～いく～」

と、氷山に向かって飛び出した。

Kは、喜び勇んで飛ぶリュリュを見送り。

（随分と人に慣れちまったなぁ～。　全く、危機感をどう教えていいやら・・・）

リュリュの様な神竜の子供は、その莫大なエネルギーから時として人の悪意に狙われた。　欲望に目を奪われた者と、それを阻止しようとした者。　そして、神竜を巻き込んだ歴史は、平坦な信仰対象だけのモノではない。　過去に、幾度か神竜の子供は殺され、人と神竜の絆は壊され、摩擦を起こした事例がある。

事に、ブレーレイドーナの過去とは、悲惨な例だ。

人間が欲望の果てに、世界に二つと無い精霊の力の篭った神器を作ろうと企み。　そして、ブルーレイドーナの卵を奪った。　怒り狂ったブルーレイドーナは、その卵を取り返そうと奪った者達の逗留していた街を襲う。　だが、ブルーレイドーナを脅迫した盗人達の誤りで卵は壊れ、四散した風のエネルギーを吸ったブルーレイドーナは怒りで暴走した。

住人の全てを失った街の他、その後のブルーレイドーナの暴走と、嘆きによる長き暴風雨。　ホーチト王国・フラストマド大王国・スタムスト自治国に及んだ被害は、代償と云うには軽過ぎる悲惨さであった。

ブルーレイドーナは、後に話し合いに来た賢者に言う。

“ヒトナドミタクモナイ。　ワタシノセイカツケンニフミコムモノハ、スベテコロス”

と。

その時から世代を超えて、Kが何かの理由でブルーレイドーナの棲む山に入り、リュリュを助けた。　その数年後には、ポリア達と・・。

Kに助けられ、母親の与えた逆鱗によって人の生活を見ていたリュリュには、母親の味わった悲しみより興味が先行している。　特に、Kとポリアには、丸で友達か幼馴染のお兄さんお姉さんと云った親近感を持っているようで、Kとしては微妙な思いだ。

「・・・」

リュリュの向かった方角から、蒼いエネルギーが光って見えた。

（おいおい、なんちゅう～力を・・・）

呆れて見ていたKの視界で、彼方に見えた氷山が小さくコナゴナに散った。

直後。

轟く爆音の様な強風が、海面の凍った氷を粉々しながら疾走して向かって来たではないか。

「ヤバ」

Kは、スっと船首で手を前に翳すと・・。

耳を劈く不思議な音がした。

最も大きい大型旅客船が、眼に見えない力で押されて動きを止める。

「・・・」

Kが手を下ろすと、船の左右に分かれた強風・・。　いや、爆風の疾走は、更に海上を駆け抜けてゆく。

“ザブ～ン”

船が激しく波を立てて落ちた。　今の風の力で、少し宙に持ち上がったのだ。

「きゃあああーーーっ」

「うわぁぁぁぁーーーーーーーっ」

船内から、客の悲鳴が無数に上がる。

その声を聞いたKは、そ知らぬ顔を横に向け。

（し～らね）

と、思いながらも。　戻ったリュリュに魔力と集中に纏わる講義が必要だと再認識した。　Kのお勉強会が、この日からまた始まる。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪アハメイルまで、短くも長き旅≫

リュリュが氷山の浮島を壊した翌日の午前。

「ホラ、しっかり集中せい」

K達が泊まる部屋の中で、特訓が行われていた。

「うむむ・・・」

胡坐を掻いたリュリュは、Kを手本にイリュージョンの魔法を繰り返していた。　グラスや瓶をイメージして具現化。　その数を増やしたり、大きさを変えたりする。

一緒に練習するオリヴェッティは、リュリュの魔力の強さに驚いたり。　Kがイリュージョンを天才レベルで使いこなすのに呆れ果てた。　Kは、然程の集中を要さず、部屋の宙にグラスを無数に浮かべる上。　多角的・多段的にグラスを具現化してみせ、更には拡張・縮小・消去を自由自在に行える。　下手な高位を謳う魔術師より、

Kの出来る事は凄い。

一方。　まだ精神年齢が幼く、集中力に欠けるリュリュは、魔力を消費して一気に数を増やしたりは出来るものの。　集中して、少ない魔力の消費で数を増やしたり、減らしたりする事が難しい。

宙に出来た無数のワイン瓶を消してしまったリュリュは、床に寝転がり。

「ぐわぁ～ん。　ケイさぁ～ん、むづかしいよぉ～」

と、弱音を吐いた。

Kは、床に座ったままソファーに腕を預けた様子で。

「リュリュ、何度も繰り返せ。　お前の魔力なら、自然魔法だけでなく、魔想魔法も遣える」

横に成ったリュリュは、

「ケイさ～ん、どうしても必要なの？」

ビハインツやルヴィアが居ない中で、Kは淡々とした言い方で。

「あぁ、必要だ」

オリヴェッティは、少しリュリュの肩を持ちたくなって。

「ケイさん、今直ぐに出来るように成る必要は無いかと思いますが・・。　リュリュ君は、まだ子供なのでしょう？」

しかし、Kは詰まらなそうに外を向くと。

「コイツの母親も含めて、人目の触れない所に居るならそれでいい。だが、人前に出ては、子供だからなんて言い訳にも成らん。もし、リュリュが魔法を暴走して唱えれば、人に被害が及ぶ。リュリュが好んで抱く赤子にも、知らずと被害を与える事となる。リュリュが何かを起こして、もし被害を出したら・・」

「・・・」

オリヴェッティは、何も言えなくなった。

リュリュは、身体を起こして。

「うぅ・・、人の姿ってタイヘンだぁ～」

と、また訓練を開始する。

「リュリュ、人の居る場所にこれからも来たいなら、魔力の制御は出来る様にしろ。鋭い爪を出して、赤子や女を抱き抱える様な事は、お前も、お前の母親にも面倒を招く」

「ほわぁ～い」

その様子を見るクラウザーは、リュリュが子供ながらにKに言わんとする意味を理解しているのを見知った。ドラゴンの子供なれど、妹の様にマリーをあやし、女性に対して素直な様子を見せるリュリュが、非常に興味深い。

（人と同じ考えを持つモンスター・・。　同じ生き物である事には、変わり無いと云う事か・・。　しかし、その橋渡しを自然としとるKは、さっぱり不思議な男よなぁ）

と、しみじみ傍観していた。

さて、午後に入り。

クラウザーは、Kを連れてデッキに。

リュリュとオリヴェッティは、ルヴィアやビハインツの居る下に。

3階の一部には、ゆったりと寛げるリビングフロアがある。　囲んだり、向かい合ったテーブルとチェアーや、窓の外を眺める長椅子。　一階のラウンジで買った物は持ち込めるし、紅茶などの飲料は此処でも飲める。

夜泣きをするマリーの面倒などで疲れるライナを休ませる為、マリーを抱いたモナが其処に居た。　人見知りの少ないマリーは、大声で喚く事などでも無い限り、育て易い赤子だった。　何処までも醒めた感じのするモナがだが、マリーを抱く時だけは微かに笑顔を見せる。

「赤ちゃんって、かわいい～」

と、マリーを見る一緒に来たリュリュ。　オリヴェッティやルヴィアは、ビハインツと共に雑談に興じる。

モナは、過去の殆どが使役される生活で、他人の過去などと思ったが。　決死の覚悟でモンスターなどと戦う経験話には、別世界を覗

く様な興味をそそられた。　マリー以外に笑顔を見せない彼女だが、醒めた顔は少し形を潜めた。

前日のリュリュの魔法のお陰と、風邪の様な流行病などもあり。リビングフロアに人は少ない。

モナは、オリヴェッティにやや素っ気無い言葉遣いで。

「アンタ達・・このまま何処まで行くんだっけ?」

「東の大陸まで・・。　フラストマド大王国を出たら、長く船旅になりますね」

「そうかい。　じゃ、コンコース島を経由して、東の大陸に行く訳かい」

「はい」

「じゃ、次の港でお別れだねぇ」

「ですね。　モナさんは、どうしますの?」

モナは、マリーを見下ろしながら。

「アタシか・・、何をして生きてイイんだかねぇ・・。　今まで支配されて、彼方此方で飼い慣らされて来たアタシなんか、突然自由になっても・・生き方が解らないよ」

ビハインツやルヴィアには、長年強制された人生を歩んだモナに掛ける言葉など見つからない。

だが、リュリュは。

「赤ちゃんって、誰でも産めるの？」

と、モナの腕の中に居るマリーの手を撫でて云う。

モナは、１５・６には見えるリュリュから、意外な幼い言葉が出たと呆れて笑い。

「女なら、誰でも産めるさ」

すると、リュリュは屈託の無い笑顔で。

「じゃ～、モナおね～さんも産めるんだ」

モナは、ハッと息を呑んだ。

リュリュは、マリーを見て。

「赤ちゃんいっぱい居るとイイねぇ～。　可愛いし～、淋しくないし」

いきなりの事に驚いたオリヴェッティは、リュリュに何か云おうとするのだが・・。

「・・そうだねぇ。　赤ちゃんも、一人だと淋しいもんね。　いっぱい居た方が、仲良く楽しいかもね」

と、モナはマリーの手に指を絡める。

「モナおね～さんや、ライナおかあさんの腕の中って、優しいところなんだね。　赤ちゃんがイイキモチ～で寝てるもん」

リュリュの見た目にずれた発言は、モナには悪くないようだ。

「ウフフ。　優しい所か・・、マリーちゃんにはそうかもね」

モナの顔は、この二日で少し変わった。　夜の女特有の憂いが、少し薄まった様で。　何処か、いい年齢をした女性に見える時がある。
　ルヴィアやオリヴェッティの瞳には、マリーと過ごす時間はモナにも必要なのだと感じた程だった。

★

人の人生とは、不思議なものだ。

外に出ない人には、それなりの。　出る人間には、それなりの運命が待っている。

Kとて、誰とて、そんな人の運命など用意は出来ない。

そして、その運命に手を伸ばす気が在るかどうか・・。　その小さな繋がりが結ばれた瞬間、人の運命は廻る。

モナのKとライナに救われた命、そしてマリーに癒される時が、モナ・・。　いや、アムリタと云う女性の運命を導いた。

夜になって。

Kが乞われ、ディーラーとしてカジノに立っていた。

リュリュ達は、ライナと共に一階ホールに降りていた。　クラウザーのお陰で、顔パスで。

モナは、人を避けて４階後部の展望テラスに出ていた。　寒い風が吹き、曇った空は黒いぐらいだ。

「・・・」

暗い海を眺めるモナは、ルヴィアに貸して貰った赤いカーディガンを纏い。　リュリュから借りたマントを羽織るだけでいる。

一人に成って、アムリタはモナの名前を捨てる気持ちを固め始めた。
今さっき、一人旅の裕福そうな紳士の男性が、金で一夜の遊興を求めて来た。　アムリタは、マリーの顔が浮かんでしまい、冷たい言葉を残して紳士を帰した。

（金をぶら下げる男なんて・・・）

アムリタは、もう金で男と寝るのは嫌だった。　しかし今は寒い風に吹かれ、凍える身体の軋みで心の悲しみを凍らせようと思う。
未来が不安で、どうしようにも無いのも現実。

そこへ。

「お客さん・・、中へどうぞ。　これから、少し吹雪きますよ」

アムリタは、掛けられた声にハッとして振り返る。　廊下の扉を開いているのは、汚れた船員服を着た若い感じの男だった。

「あ・・ごめんなさい」

見回りをしていたジョベックは、此方を振り返ったアムリタへ。

「新しい乗客さんだね。　今夜から明日の昼過ぎまでは、船内に居て下さいって船長命令出されてます。　お客さんに何か有ったら困るんで、中へどうぞ」

アムリタは、ジョベックの元に。

アムリタと入れ替わりに外に出たジョベックは、丸いガラス窓の付いた扉を閉めてベランダを見回す。

（・・この人・・・）

アムリタは、ジョベックが片腕を畳んだままにぎこちない歩みで進むのを見て、目の前の船員は怪我でもしてるのかと思った。

戻ったジョベックが中に戻ると、まだ立っていたアムリタを見て。

「お客さん、どうしました？」

アムリタは、ややジョベックの半身を見てから。

「怪我してるの？」

自分を卑下して頭を下げる態度を見せたジョベックは。

「ええ。　傷はもう治ってるんですが、後遺症というか・・、障害が出てます。　見苦しかったらすいません」

「そう・・」

「上に泊まってる包帯を顔に巻いたお客さんに助けて貰ったんで。　ホントなら、死ぬ所だったですか・・生きてるだけでも儲けモンです」

アムリタは、Kを思い出して。

「アナタ・・も」

ジョベックは、身体を上げて。

「あ・・・、“も”って？」

あっと思ったアムリタは、強張る顔で。

「いや・・、ちょっと私もその人に助けて貰ってね。　この船に・・乗せて貰えたから」

「あぁ、そうでしたか。　あの人凄いなぁ～。　人助け出来るって・・いいですよね。　俺の様な様に成ったら、もう人助け処か助けて貰うばっかりで・・」

照れる様に、しかし有り難いと見せるジョベックを見るアムリタは、Kが自分以外にも人を助けていると解り。

「ねぇ。　少し話し出来ない？」

急に言われてしまった感の有るジョベックは、ポカンとして。

「・・。　あ・・・俺とですか」

「ええ。　その助けられた話、聞かせてくれない？」

ジョベックは、妙に色艶の漂うアムリタに気を奪われた。　だが、仕事も残る上に客と親しくするのは咎められる事もある。

「あぁ・・いや。　俺達船員は、お客さんと馴れ馴れしくは・・」

と、断りを示した。

アムリタも、K繋がりで興味が湧いてしまった自分がらしくないと思い。

「あ、まだ・・・仕事してたのよのね・・・。　ごめんなさい、我儘だったわね」

ジョベックは、頭を下げ下げして。

「すいません」

と、外の見回りに向かおうと廊下を先に行った。

此処で、身なりが良く身体の大きな肥えた男と、廊下のぶつかる角に向かったジョベックが出くわした。

ジョベックは、手前で立ち止まり階段へと向かう道を譲った。
だが・・。
「ん～？　おい、アンタぁ～」
酔った声を出した客は、ジョベックを見て云う。
「はい、何でしょう？」
下手に出たジョベックだったが。
恰幅な身形の良い中年男は、ジョベックの歪な身体の動きに何かを感じたのか。
「お前・・身体壊れてるのかぁ～？　キチンと挨拶してみろ」
と、偉そうに高圧的な態度を見せて言う。
ジョベックは、出来る限り姿勢を正し。
「御気に障りましたら、すいません」
と、頭を下げる。　だが・・、神経を痛めたジョベックは、正しい礼が出来なかった。
「フン」
酔った男は、突然に鼻で一つ息をすると、アムリタの見ている視界

の中でジョベックを蹴り飛ばしたではないか。

「まぁっ」

驚いたアムリタの視界の中で、蹴り飛ばされたジョベックは壁側に激突。　大きな音を立てて床に転がった。

酔った中年の男は、床に転がったジョベックを見下げ。

「こんな豪華な船の船員に、お前ぇ～みたいな壊れモンが居るなんて気に入らんっ」

と、更に踏み込んだのである。

アムリタは、苦しみながらも声を上げないジョベックを見て、思わずに身体が動いた。

「チョット待ちなよっ！！」

中年の男は、声に首を巡らせる。

「・・・。　なぁんだ、女かぁ」

ジョベックを蹴った男に睨まれたアムリタにしてみれば、こういった金持ちの高圧的な男を相手にさせられて生きて来た。　自由になった今、こうして見ると腹が立つ。

ジョベックの元に来たアムリタは、キツイ視線で中年の男を見上げると。

「客だかなんだか知らないが、抵抗も出来ない船員をイジメて憂さを晴らすのかい。　男のクセに、みみっちい事するんじゃないよっ！」

アムリタの上げた声で、部屋へ帰ろうとした客なども彼方此方から顔を見せる。

其処で、ウィンツとブライアンが他の船員と共に来た。

人が集まって来た事で、ジョベックを蹴り飛ばした中年の男も居心地が悪く成って来たのだろうか。

「フン、醜い。　醜態を晒す船員など、見たくもないっ」

と、階段を上がり始める。

アムリタは、急に震えるジョベックに屈み。

「アンタ、大丈夫かいっ？」

と、様子を見ると・・。

頭部を激しく激突させたのか、ショックで鼻血を出した上に、一時的な痙攣症状を引き起こしたジョベックは、ガクガクブルブルと全身を震わせるままに。

「かっ・かかかか・・・かあ・・かかか・・・」

と、言葉を震わせてる。

「どうしたっ、ジョベック?!」

「大丈夫かっ?」

走り寄って来たウィンツは、慌ててブライアンとジョベックを抱えて船員医務室へ運ぼうと。

アムリタは、ハッとKを思い出し。

「あのケイって男・・。　薬師だって云ってたね」

ウィンツは、今はディーラーとしてカジノに立つKを知っているだけに。

「ダメだ。　ケイは、今は親方の頼みでカジノのディーラーをしてる。　高等船舶客のお相手だ、途中で止めさせるには・・」

「何をこんな時にっ」

アムリタは、そんな事は関係ないと動いた。

Kは、玄人の客相手にカードゲームをしていた。　もう、顔見知りばかりになった頃合で。　アムリタが来た事に少し驚けど、話を聞いて直ぐに。

“お客さん、チョイト面倒事だってさ。　また、明日にでも”

と、云えば。　客達も、Kの見事なディーラーに惚れ込んで来ているので、明日の約束を喜んで切り上げさせて貰えた。

アムリタから話を聞いたKは、船内を歩きながら。

「傷は治ったが、身体の状態は中途半端なんだ。　壊れた身体に慣れてない所で衝撃を受けたから、身体の利きがショックを受けたんだろう。　早く薬を飲ませないと、本当に壊れ切るな」

船員医務室に入ったKは、医師の真似事が出来る僧侶の男性とジョベックの治療に入った。

Kは、誘眠作用の有る弱い弱いの麻薬に神経痛に効く薬を混ぜて飲ませる。　少しして、ジョベックの痙攣は治まり。　Kは、彼の全身を少し触診して、とにかく休ませる様にとウィンツに告げた。

アムリタは、自分の事を知る数少ないKとウィンツに。

「あの蹴った男はどうするんだい・・。　人一人をこんなにして、見逃すのかいっ?!」

と、喰って掛かる様に。

Kは、アムリタが少し変わったと思いながら。

「それは、クラウザーと話す。　それより、良かったら此処に居て、彼の様子を見ててくれないか。　震えながら、母親の事を言っていた。　死を覚悟して、心底から脅えたんだろう。　起きたら、ショックに脅えたり、塞ぎ込む・・」

Kは、ジョベックが震える声で言う意味を理解していた。

“母ちゃん、すまねぇ・・”

ジョベックがそう言うのは、死を感じたからだろう。

モナと云う名前を捨てたアムリタは、寝るジョベックを見て。

「金持ちってのは、こんな事しか出来ないのかい・・。　何も悪い事してないってのに・・・」

切羽詰った事に追い込まれた場で、アムリタはその本性を見せ始めた。　マリーを助けた彼女は、どうやら真心を見せた様である。

ウィンツは、Kを廊下に連れ出し。

「なぁ、いいのか？　この女性（ひと）・・借りて」

と、影で言う。

「大丈夫だ。　悪い女じゃない」

「だが・・、悪党の手先だった女なんだろう？」

「金も無いジョベックを、悪い女が助けに入るかよ・・。　それより、仕事に戻れ」

Kは、ウィンツを仕事に戻し。　自身でライナの元にアムリタの事を言いに行き。　その後、デッキに向かった。

ジョベックが目覚めたのは、朝方だった。

だが。

「うわぁっ！！！！！」

跳ね起きたジョベックは、もう錯乱した様になり。

「あわわっ！！！　はっ・はっ！！！」

と、呼吸を激しく乱し、まともに喋れないままに脅え出した。

部屋続きの奥で寝ていたアムリタは、椅子に座って目を閉じていたKと共に急いでジョベックに近寄る。

Kが、

「大丈夫だ、もう大丈夫だぞ」

と、落ち着かせようとして言うのだが。　ジョベックの“ひきつけ”を起こした様な震えと脅えは、全く治まらない。

アムリタは、ジョベックに抱き寄り添い。

「しっかりしなっ、もう大丈夫だから・・。　もう大丈夫だから・・」

母親の事を狂った様に言うジョベックは、また薬で眠らせないといけないと思われた程。

だが、Kの言葉より。　アムリタの抱きしめが徐々に効果を現した。

「あ・・・あああああ・・・」

目の焦点が少し合って来たジョベックは、アムリタの覗き込む真剣な目を見て次第に落ち着きを見せ始め。　そして、それと同時に激しく慟哭するようにアワアワと泣き出したのである。

「大丈夫・・大丈夫だから・・・」

と、ジョベックを抱きしめてKを見るアムリタに、Kは“そのまま”の仕草を。　彼女は頷き、そして続けた。

Kの知らせを受けてウィンツが見に来た時、ジョベックは昏睡するように横に成っていた。

旅客船は金持ちが乗る事も多い分、こうした船員に対する暴力も多いとか。　ジョベックを看ながらその話を聞くアムリタは、何処にも格差による暴力が存在するのだと思い知った。

その後。　目覚めないジョベックを看てウトウトするままに居たアムリタは、悩む間を奪われたままに至る。　ジョベックの容態が気に成り、入り込む様な悩む時間を与えられなかった。

★

ホーチト王国のマルタンを旅立ち、５日目の早朝。

まだ夜の様に外が暗い中で、アムリタは仮眠から起きた。

あれから、一度ジョベックは起きたものの。　死にそうになった恐怖が大きかった所為か、食事も出来ない程にオドオドして緊張し、薬でまた眠りに落ちた。

この時になって、初めてジョベックは失禁をした。　取替えをKが考え、手伝ったアムリタに。

“余程に怖かったんだろうな。　一日近くも身体が強張っていた証だ”

と、言っていた。

休む以外、なにかとジョベックが可哀想で、看病しながら時折震えるジョベックの手を擦ったアムリタ。　見知らずの若者だが、Kと関係が在ったり、同じ船に居候している様な雰囲気から親近感は湧いていた。

眠い目を軽く拭いて。

（はぁ・・。　世の中も末だわ・・）

と、虚ろに思いながら起きたアムリタは、ジョベックの様子を窺いに。　すると、ジョベックは起きていて、目を開いたままに薄暗い明かりの天井を見ていた。

「起きてたの？」

声を掛けてみるアムリタに、ジョベックは弱く頷いた。

「あ・・ありがとう」

弱弱しく吐き出したジョベックの言葉に、アムリタは安心して。

「災難だったわね・・。　あの客、数日前も別の船員に手を挙げてた人みたい・・。　船員も、あんな客ばっかりじゃ身体持たないわね」

頷くジョベックは、また・・。

「ありがとう・・」

と。

その声を聞くと、アムリタも何か聞き返したくて。

「お母さんの事言ってたみたいだけど・・、国に残してるの？」

ジョベックは、首を弱く左右不対象に動かした。

一般的に国許へ母親を残さないとは、亡くなったか、もしくは移住したか。　こうゆう身の上話を経験上重ねる事もある仕事だったアムリタは。

「・・。　居ないの？」

「はい・・・」

ジョベックは、貧しい村の出。　金も身寄りも無い母親は、病弱で

死んでいた。　ジョベックは、その冷たくなった母親と三日暮らして居たらしく。　死人の冷たさは知っていた。　あの男に蹴られた時、急に身体が冷たくなる感覚を覚え、母親の様に死ぬのだと感じたらしい。

ジョベックの様な働き盛りの若者が、ジョンソンの様な者の下で出す安い給金でも働くのは、いい加減な船長の下働きに付くしかない現状が在ったのだろう。

だが・・・。

アムリタが何よりも驚いたのは、ウィンツが見舞いに来た時だ。

身動きも出来ないジョベックは、ウインツに迷惑を掛けた事にひたすら謝り。　ウインツの部下を辞めると言った事だった。

「バカ野郎。　お前一人ぐらい、俺が面倒看てやる。　一緒に此処まで来て、お前を見捨てられるかっ」

と、ウィンツは怒るままにまた仕事に戻る。

ウィンツの気持ちも最もだったが・・。

ジョベックの目覚めを知り、安心したウィンツが去った後だ。　Kが持って来たリンゴや梨を剥くアムリタは、細かくしてジョベックに食べさせながら。

「ホラ・・。　ねぇ、無理しなさんなよ・・、その身体じゃ～まともに働けないよ」

と。

だが、夜が明けて船内に客が動き出す頃。

ジョベックは、船員の現状を知らないアムリタに、助けられた経緯を話した。

ジョンソンの呪縛から逃れ、独立した様に一人に成ったウィンツだが、その実態は船も保有しない船長だ。　商人に雇って貰うか、船持ちの船団に雇って貰うしかない。　そうなると、どちらにせよ賃金は交渉に成るだろう。　怪我をした船員は、その交渉では負の査定対象に入る。　ウィンツにブライアンの他船員として経験を買えるのは、誰も居ない。　ブライアンだって足の怪我と熟練の経験は相殺で、賃金としては一般船員ぐらいしか貰えないだろう。　其処に今のジョベックが加われば、交渉自体を敬遠されかねないのだ。

アムリタは、ジョベックの話を聞いて。

（確かに、誰に迷惑を掛けて生きたいだなんて・・思わないね。
でも、このままじゃ・・）

この若者にすら、自分以上に未来は無いと思えた。

フラストマド大王国の交易都市アハメイルまで、遅い速度で１０日近くを掛けた。

その間、アムリタは名前を完全に戻し。　そして、ジョベックの看病に落ち着いていた。

Ｋやライナなどが見舞いに来る他、ジョベックの身の回りを世話し

続けたアムリタは、若いながらに必死に生きて来たジョベックを可愛いと思い始めたのは、男と女の情の通いからだろうか。

ジョベックは、母親の様な一面を持つアムリタに感謝を繰り返した。自由に生き始め、人の感謝を受ける事に満ち足りた気持ちを見つけたアムリタは、働いてジョベックを助けてやりたいと思った。　何より、性根を曲げてないジョベックは、普通に良い青年だった。

家族も居ない幼い頃からの苦労、そして雇われの苦労を互いに滲ませる二人には、歳の差より同情や労わり合いが先んずる。

互いの身の上などは、同じ時を過ごせば上るもので。　アムリタが悪ぶって元娼婦と云う事を聞いたジョベックは、顔色を変える事もなかった。　寧ろ、天災で親を亡くしたと聞いた時、アムリタに涙を見せたジョベックは、純粋な感情をそのままに。

その部分部分を見ていたKは、自分の言葉より確かな誠意を見せたジョベックと、看病をするアムリタの取り合わせを気に入った。

（人の縁なんざ、何処で好転するか解らねぇ～モンだ。　しかし、あんなに愛情深い女がライナの他に居たとはね。　ゴーストシップのお宝の使い道が、また一つ決まったなぁ～。　ウィンツのオッサンには、一肌脱いで貰うとしよか～。　・・・全く持って、どんな状況でも誰かを思い歩む生は、死より強い）

Kの仕業で不幸を背負った人が集められ、所々で小さく運命が回る。

やや醒めた面とは裏腹に、アムリタと云う女の内面は自由を得て、新しい人生を見つけれそうな様子だった。

そして。

アハメイルでKは、全てに決着の糸口だけ見つける事を望んだ。

生きるのは本人で、決着と新たな生き方は本人達が切り開いていく必要が在る。　だが、強引に変えたKである以上、その糸口だけは模索してやる気構えだった。

快晴の冬晴れの昼。　遂に、アハメイルへと船が入る。

Kは、オリヴェッティにだけ金の使い道をどう考えているのかぼんやりと明かし。　そして、一つ一つ動く事にするのだった・・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

バカみたいに早く出来たので、２・３話だけペースを上げます。

インフルエンザが流行している様ですが、御気をつけて。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪アハメイルに入港し、都市の騒ぎに沸く午後≫

もう一年が終わろうとしていた。

年末年始を都市部で過ごそうと、アハメイルの街に地方などから富豪や商人や貴族が家族と押し寄せていた。

港に着いた船に、街の中で行われているパレードの音が聞えている。

船の上で、クラウザーは船員達を集めていた。

「年末と年始の二日は、自由にする。　だが、迷惑に成る様なハメは外すな。　まだ、最後の航海を控える。　今日と明日は、船の整備に働いてくれ・・・」

船員達は、カルロスの指揮の下でそれぞれに動き出した。　湾の中は、塩分が低いのか氷で埋め尽くされている。　高さの有る甲板では、風の影響も有って冷え込みが非常に厳しかった。

金の在る客は、暇だと街中に繰り出してゆく。　流石に等級の高い部屋に泊まる金持ちは、自由を楽しむかのようだ。

代わって、冒険者などは斡旋所に行こうと話し合って出てゆく。懐の寂しさを紛らわせたいのだろう。

クラウザーは、地下船内の清掃も決めた。　病気の蔓延を防ぐ為にだ。

甲板でカルロスの分けた船員分隊へ、細かく命令を出すクラウザー。

彼に近寄ったKは、短く。

「んじゃ、良い年明けをな」

Kは、港の近くに宿を借りる為に動くオリヴェッティ達とも別れた。　働くウィンツを夕方に迎えに来ると言ったKは、街中に消えて行ったのである。

客の世話と船主の連絡を控えたクラウザーは、ウォーラスの居場所を知っているKを気にしていた。　ウィンツに、Kが何をさせようとしているのか・・。　ウォーラスは、このアハメイルの何処かに住んでいる。　だが、何処に住んでいるのか解らなかった。

もう、クラウザーとウォーラスの糸は切れていた。

・・。

雪の積もった街中で。　太い通りの十字路では、その幅の広さを利

用してお祭り騒ぎと解る出し物が行われている。　曲芸やサーカス、似顔絵書き、大掛かりな大道芸、マジック。　王国や、世界の安定した平和を祝うパレードなども。

ステージを持つ酒場では、営業と共に吟遊詩人や歌姫が歌い。　劇などをする旅の一座や踊り子なども、昼間から踊る。　立派な劇場と席数の多い観客席を備えた飲食店は、宿との提携でお客を引き込む為に一年のサービスとして料金を安くするらしい。。

全ての店が活気付いて、アハメイルが一番騒がしい時を迎えるのが年末年始。

フサフサした動物の毛が付いたフードを被り、コートやマントを着たオリヴェッティ達４人。　賑やかな街に出た中でリュリュは、人が溢れ返り、賑やかな大都市の雰囲気に目を輝かせた。

「すごいっ、おね～さんがいっぱい居るぅぅ～～」

着飾った貴婦人や若い娘が日傘を刺して、従者や伴侶を伴い歩くのが見えている。　この寒い中でも、ドレスなどは胸元が広く、動物の毛皮で作られたマフラーなどで隠すだけの女性も少なくなかった。　逆に、キッチリと首元まで襟を整える女性も、見目麗しく着飾っていてイイ。

リュリュは、オリヴェッティの手を繋ぎながら、彼方此方の女性に目移りしていた。

「はぁ～、これが噂の“アハメイルの開花”か・・。　なんて賑やかなんだろうか」

ビハインツは、前にも訪れた事の在るアハメイルが、更に賑やかになった様子に目を奪われている。　年末年始のアハメイルは、“開花した都市”と賑やかさを謳われる。　確かに、来て見れば一目瞭然だと解る。

彼方此方で、ショウの始まりなどを告げる花火が上がり。　駆け込み客を誘う客引きの威勢の良い声が発せられている中で。　貴族として毎年訪れていた経緯の在るルヴィアは、物珍しく見るリュリュやビハインツなどとは対照的に微妙に醒めていて。

「何時見ても喧しい限りだ。　その昔は、年末年始は粛々と家族で過ごしていたと云うのに・・。　何時からこうなったものか」

と、昼間から飲んで謳う男達に訝しげな視線を向かわせた。

そんなルヴィアと肩を並べるオリヴェッティは、賑やかさを嫌う素振りも無く。

「起源は解りませんが、年末年始に貴族がパーティーを開いていたのが一説の様です。　貧しい人たちにも、年末年始ぐらいは施しをしようとする習慣は、クルスラーゲや魔法学院カクトノーズでも在りましたし・・」

「ほう。　魔法学院では、年末年始はどうして居るのだろうか？」

「個人差が激しいですね。　故郷に帰省する方もいらっしゃれば、ご家族と合流して此処に来る方。　私の様にお金の無い者は、勉強をしたり・・・。　そう、先生方の開くナイトパーティーに赴くとか」

「なんと・・・。　魔法遣いの先生が？」

「えぇ。　魔法で催し物を行ったり、マジックの競争などが行われたりしますね。　学院で年末の夜に行われるパーティーは、カクトノーズに住む富豪達の寄付によるものです。　結構夜遅くまで開かれ、楽しいものですわ」

「うむむ、魔法の競争・・中々面白そうな」

色々話し合いながら混雑する商店通りに入れば、威勢の良い路上の叩き売りが目に映る。

特に、武器防具を目当てにした冒険者が多い。　値切る者、疑う者、値踏みして、主の視線を伺う者などで、通りの大半は通れない状態だった。

「おうおう、此処に在るブロードソードは、鍛冶屋工場の多いスタムスト自治国の一品だ。　この通り柄に、その証拠となる焼印も押してあるぜっ。　フツ～なら６００以上はするが、年の瀬の感謝値だ。　一本４００シフォンでいいぞっ！！！」

と、威勢の良い商人の声に。

「おいおい、元取れてんのかっ？！！」

「そうだそうだっ、紛い物と違うのかっ？！」

と、イチャモンを付ける冒険者の数人。　特定の場所で行われるバザーなど以外では、普段の街中などではチョット見られない喧騒だった。

また別の一方では、骨董品や古びた武器防具を露店に出す怪しいローブ姿の商人も居る。　不気味に顔を隠し、怪しげな薬なども売っている。

他には、

「ね～ね～、冬って液体の薬が長持ちするのよ～。　少し値が張るけど、モンスターと戦うなら必要じゃない？」

と、若若しい娘がポーションなどを入れた薬瓶を片手に、やや可愛げの在る甘い声を出していたり。

しかし、通りを変えるとまた別の一面もあり。

この時期に合わせ、逆に野菜や肉を高く仲買に売る農家なども居るのだろう。　商店の裏では、売り込みに来た農夫らしき者と交渉する商人の姿も見られ。　細い路地など含めて、何処も彼処も人だらけ。

「あ～？　この時期にキャベツかい？　凍みてるんじゃ～ないのかよ」

「いやいや～、雪の中に埋もれた野菜は、どれも凍らない様に甘さを増すんだ。　ホラ、一つ齧ってみなさんよ」

「・・・、あ～ホントだ。　歯応えもイイねぇ～」

「見た目はマズイが、味はイイのさ。　遣うなら、調理する料理人の腕次第なんだよ」

「よし。　んなら～・・２０は欲しい。　彼方此方に納めたいからね」

「荷台に、ざっと４０玉は積んであるよ。　一玉３シフォンは欲しい、纏めて買ってくれるなら少し安くしてもいいけど」

「・・ヨシッ、全部買う。　店先に並べるから、中に入れるの手伝ってくれっかい？　代わりに、全部で１５０出す」

「あぁ～、ありがとう。　助かった」

村などから個人で売りに来た者は、雪に閉ざされた中で塩や薬をこうして金を得ては手に入れているのだろう。　農家なら大抵の物は作れるだろうが、金を基本にどうしても買わなければいけない物も有る。

人の並ぶ行列に揉まれながら見回り疲れたオリヴェッティは、昼下がりの街中から抜け出そうと斡旋所を覗く提案をし。　ルヴィアが同調して決まった。

延々と続く行列を遅々と進み、夕暮れまでまだと云う空の下で斡旋所に到着すれば・・。

「昼過ぎから・・、もう入店可能ならしいな」

男性ばかりの冒険者の一団が、バニーガールの看板を指差してガラス戸を押し開くのを見たルヴィア。　実に怪しからんとばかりの言い草だ。

ビハインツは、飲み屋だと思い違いした過去を思い出すと。

「はじめて見ると、絶対にパブだとしか思えないよな～」

リュリュは、ビハインツの腕を引き。

「ねっ、ねねっ。　ビハツーのお兄ちゃんっ、アレってオネ～サンの居るお店でしょっ?!!」

と、一段と元気な声を・・。

困った作り笑いをするオリヴェッティは、黒い柄のステッキを持つ手を下に動かし。

「オホホ。　リュ・リュリュ君、此処は地下に斡旋所が在るのよ。下に・・」

ルヴィアも透かさず。

「そうだ。　こんな明るい内から、この様にはしたない女性の居る飲み屋などへ行く訳無かろうに」

二人の女性に入店拒否を突きつけられたので、瞬時にブー垂れた顔をしてみせるリュリュは。

「え〜、そんなのつまんなぁ～い。　オネ～サンに会いに行こうよぉぉぉ～」

隣で、ウンウンし掛けたビハインツは、路上に残る雪よりも冷たい視線を2名から向けられ。

「・・・、リュリュ。　今は、仕事でも探してみようじゃないか。
オネ～サンには、お金が有れば何時でも会える」

どうにかしたいリュリュは、ビハインツを見上げ。

「ビハツーのお兄ちゃんっ、二人に負けちゃだめだよぉぉ～」

「スマン。　正直、二人がコワイのだぁぁ～」

リュリュとビハインツの詰まらない馴れ合いを、薄目を開けて窺うルヴィアはやや怒り気味。

「おのれ・・、どいつもこいつも・・・。　こうゆう輩が居るから、何時までも女はいい目を見ないのだ」

と、ボヤキまで出る始末。

さて。

地下に在る斡旋所に踏み込んだオリヴェッティ達だが・・。

「ふわわわわぁぁ～、此処ってオシゴトをうけられる所なのぉ～？」

リュリュは、煌びやかな大きいシャンデリアのぶら下がる天井や、広くダンスでも出来そうなホールに驚く。

最初の自分と同じ感想だと思うオリヴェッティも、

「本当に。　冒険者の方々が先に居ませんと、何処かの高級レスト

ランの会食場みたいですものね」

ルヴィアも、同意と一つ頷き。

「確かに。　しかし、降りる階段の所に屯する輩が嫌な感じだ」

と、閉じた扉を睨む。

ビハインツは、先を歩き出しながら。

「ほっとけ、気にするだけ面倒だ」

と。

所が・・・。

年末の忙しい時期で、少しでも何か稼ぎをしようと集まった４００名以上の冒険者がごった返す中。　パーティー会場の様に配されたテーブルと椅子の林を奥に進むと、左手の壁側に有るテーブルに威厳を醸す一団が居た。　他の冒険者がチラチラ見るのだが、少し遠巻きに其処だけポッカリと別世界の様。

ルヴィアは、ビハインツへ軽く肘突きを入れて。

「あの一団は・・一体何なんだ？　随分と有名そうな雰囲気だが・・・」

「さぁ～。　周りの反応を見るに、そうみたいだな」

だが、リュリュと来たオリヴェッティは、その一団を知っていた。

「まぁ、あそこに居る方々って、“バブロッティ”の一団ではありませんか？」

と、小声で。

通称を魔物殺し（モンスターキラー）と謳われたチームは、バブロッティと云うチーム名の６人だ。

天辺だけ禿げ上がった頭をして、日焼けした顔に渋みの備わった厳の様な中年戦士。彼がリーダーのギルディ・アズロンダル。六角を模る棍棒の武器“スタークィンダー”は、金属で出来た刃も有する得物である。交錯する黒のベルト状をしたブレストメイルを上半身に着込み。龍の紋章を刻み込んだ黒いマントは、所々の破れた古着。しかし、その静かなる座った姿とは裏腹に、モンスターを相手にするなら豹変したかのように凶暴な戦士と変わるとか。

次に。白い肌をして物静かな笑みを湛える青年は、何処か切れ者らしき狡猾さが窺える印象だ。杖も持たない魔法遣いで、右手に填める指貫の金属手甲が発動体。魔想魔術の攻撃魔法においては、先ず５本指内で名の出る人物だ。“駿魔のハザック”と聞いて、魔法遣いに知らない者はまず居ないだろう。ハレーザック・ベン・フーニが彼の名前である。彼が有名なのは、魔想魔法の異端を遣えるからだとか。

次に。褐色の肌をして、真一文字に結ばれた黒きルージュの栄える唇。身長と変わらぬ黒髪を自由に伸ばすままに、赤い神官服を着た弓遣いが、戦女神アテネ＝セリティウスに仕える神官狩人のサデュア・ホロバン。年齢不詳の女性ながら、無口には理由が在るとか。リーダーのギルディとは結成時からの付き合いならしく、

彼女の意思はギルティが知ると云われるぐらい。

次に。　剣ながら、独特の反りを持つ“カタナ”と呼ばれる長剣を佩くのは、ノブナガ・ヒロエツと云う変わった名前の東方諸島出身の剣士。　男の癖にポニーテールの様な髪型をして、バブロッティの中では一番の美男。　３０そこそこの顔つきは、厳しい修行や冒険者生活で鍛えられた威厳が備わる。　黄色肌の偉丈夫で、“斬速ノブナガ”と云う異名があり。　居合い抜きの太刀筋は、世界でも指折りの速さらしい。　１対１の戦いでは、目を瞑って気配だけで敵やモンスターを倒すとか。

次に。　手に貴婦人用のシルクグローブを填め、黒い葬儀用の婦人ベールを意味深に被り。　面体の解らないままに、黒いドレス風の皮コートに身を包むのが、モナリサ・リロマージン。　鞭、投げダガー、細剣を使う器用者であり。　薬学・サバイバル知識も豊富なブレインの一人。　身体能力にも優れ、その俊敏な動きで振るう細剣捌きは、ダンスをしている様だとも。

最後は、フルフェイスのマスクをした面体・性別不明の格闘家ノエビム・ギャザード。　腕に填めて遣う“ファング”と云う鉤爪武器の達人だ。　高音のか細い声を出すこの人物は、白く厚手のマントと繋ぎの衣服を着るので、性別がどっちなのか判らないままなのだとか。　ギルディと何等かの因縁が有ったらしいが、今ではギルディの信頼厚い仲間と云う事だ。

流石に有名なチームの面子だ。　奇抜さだけでも一筋縄で行かぬ猛者の集まりで、その物静かなチームの雰囲気も、周りの一般冒険者から見ると“異質”の一言。

「ん～、アレが有名なバブロッティか・・・。　流石に、貫禄ある

な」

感心するビハインツの脇で、ルヴィアもそのチームの発するオーラみたいなものを感じて。

「確かに、確かに・・」

しかし、Kが基準のリュリュは、何が良く凄いんだか解らず。

「なぁ～んか、お顔の解らない人ばっかりぃぃ～」

と、首を傾げる。

其処で、各テーブルで屯する冒険者達の一般請け負いカウンター側に居る者達が。

「出て来た・・・」

「アレが・・・」

「はじめて見た」

などと騒ぎ出す。

急に、カウンターの在る前方が騒がしく成ったのに気付くリュリュは、騒がしくなった方にピョンピョン飛び跳ねて。

「え？　なになに～？」

と。　魔法を遣えば、風の力で浮き上がる事も出来ようが、Kに人

前では魔法を遣うなと云われ。　自身でも納得しているリュリュは、幼く若い男の子の様な素振り。

（か・・・可愛いですわ・・）

オリヴェッティは、リュリュの仕草の方が気に成ったり・・。

さて、地下の特別・上級依頼を請けれる“開かずの子供部屋”から出て来たのは、世界最高の名高いチーム“スカイスクレイバー”（摩天楼）の面々だった。

柔かい金髪をした長身の貴公子然とした美男の剣士アルベルト。蒼い瞳に薄紅の唇は、世界最高峰の剣士に更なる箔を付け加えること間違い無いと云える。　グレートハイブラスランダーと云う大剣と長剣の間の剣は、聖なる力を宿したマジックブレードの一級品。　やや反りも有る剣で、彼以外には扱えないと謳われる。　剣の愛称は、セルレイデュース。“清らかな至宝”の古代地方名詞だとか。　白き狼の刺繍が入ったコートに、白銀のスレンダーメイルを着るその姿は、“白き稲妻”だとか、“白銀の天狼”だとか謳われるのだ。

その他の面々は。

先ず。　剥げた頭に何時も耳付き皮帽を被る老人で、司祭服に似た前掛けを持つ衣服姿の魔法遣いは、魔想魔術と自然魔法の両方を操れる両魔使い（ハイブリッダー）。　“叡智のイナフ”と称された賢者だ。　アルベルトの良き相談相手で、ブレインを担う博識学者。　何かを捜し求めて、アルベルトのチームに加わっているとか。

次に。　白いピアリッジコート風の神官服に身を包むのは、アメジ

スト色の瞳をした愛らしい笑みを湛えた美人の僧侶リルマリア。
漆黒の三つ編みにされた長い髪に、抜けるような肌理細かい色白の肌は天の与えた賜物。　大司祭レベルの神聖魔法遣いと云う噂で、カクトノーズの司教長マルズロフの長女である。　アルベルトとは恋仲とも言われ、彼女を憎む女性は多いとか・・。

次に。　タワー・フポロンドと云う髪を上に立てた髪型をするキツイ目付きの女性は、元盗賊のアジョリナ。　白味掛かった金髪と、肌色のまだ若く見える美女とも云えなくないアジョリナ。　細身の体つきながら、身体能力の高さと投げナイフの正確さは天下一品と噂される。　喧嘩っ早い性格と、思い込みの激しさからトラブルメーカーならしいが。　２００人を超える盗賊を束ねていた実力は伊達では無い。

最後に。　深い褐色の肌に短い天然パーマが掛かる頭髪をし、アルベルトより頭二つ高く。　武人然とした厳格な顔の全身鎧姿をするのは、戦士のサンザルガ。　得物は、大剣の先が斧に成るアクスソード。　棒術・格闘・アクス・大剣を操れる猛者で、バブロッティのリーダーであるギルディとは下積み時代の友とか。　腕前は、略互角と云われる。

この５人が、スカイスクレイバーの面々だ。

「終わったか・・・」

テーブルに就いていたギルディが、アルベルト達の登場で席を立った。

屯組みや駆け出しなど、一般冒険者の枠から抜け出せない冒険者達の目の前で、有名二大チームが出会っていた。

アルベルトの前に出向いたバブロッティのリーダーであるギルディ以下仲間達。

「久しいな、ギルディ殿」

アルベルトが小声で言えば、ギルディも少し顔を解(ほぐ)し。

「あぁ。　お互い、ま～だポリア殿などに抜かれていない様だ」

其処で、アルベルトの近くにて、腕組みしていた口の悪い元盗賊のアジョリナが口を挿み。

「なんだと？　アタイ達が、何であんな美人だけが取り得の貴族に負けなきゃいけないんだいっ？！」

と、言葉端を荒げる。

しかし、同じアルベルトの仲間である賢者イナフは。

「何を偉そうに・・。　御主など、何度戦ってポリア殿に勝てまいよ。　卑怯な手を使えば別じゃが・・な。　今のポリア殿は、正に剣士として成長期。　剣の腕の真っ直ぐさは、アルベルトに似とるわえ。　大体、夏に不意打ちの勝負で負けたであろうに、偉ぶった口利きは慎め」

と、静かな語り草で嗜めた。

「フンっ」

アルベルトは、ソッポを向くアジョリナを一瞥だけすると。

「ギルディ・・、知っているか？　俺達の他に、凄まじい手練（てだれ）の流れ狼居るらしいぞ」

「あぁ～、確か・・黒尽くめの男だろう？　秋に、その男の現れた此処を訪れた」

「知っていたか」

「うむ。　顔は良く解らぬが、野党に落ちた冒険者などを混ぜた盗賊数百を、たった一人で斬り伏せたらしい。　スター・ダストのリーダーに聞いたが、ポリア殿が深くを知るバケモノだとな・・」

ギルディの話に、少し顔を伏せがちにしたアルベルトは。

「ギルディ。　この世には・・超えられない壁が存在するのだろうか・・・」

「どうした、お前らしくも無い弱気だな」

其処に、アルベルトの脇に控えていたサンザルガが半歩進み出て。

「実は、その男のしたと思われる殺人の被害者を眼にした。　あの悪名挙がったガロンだ」

「おぉ、死んだらしいな」

アルベルトの語るガロンの死に様に、バブロッティの面々も驚いた。

「そんな使い手が・・・この世に居ると？」

普段無口な剣士のノブナガだが、凝らした目をそのままにアルベルトとサンザルガに聞き返した。　ガロンの斬られ方が、同じ剣を扱う者としても信じ難い有様だと思ったからだろう。

アルベルトは、ガロンの死に様を思い返し。

「もし、我々が駆けつけたのが斬られた直後なら、マリアの魔法で助けられたかも知れない。　急所を斬りながらその相手を生かすなど・・、人でないなら悪魔の仕業だ。　万が一にも敵に回したら、此方が殺される。　ポリア殿の言う通り、全てを弁えた者だと願う」

バブロッティの面々も、アルベルトの仲間も、天才の褒め言葉を欲しい儘にしたアルベルトの口から弱気な発言が出た事に、驚き以上の印象を受けた。

下の地下二階へと向かうギルディは、

「天辺ってのは、手の届かないモンなのかもな」

と、歩いてゆく。

バブロッティの面々を見送ったアルベルトは、周りから注目されながらも気にしない素振りで。

「行こうか」

と、テーブルの列に集まる冒険者達の方に向かった。

アルベルト達を一目見ようと遠巻きながらに集まった冒険者達。
だが、逆に進んで来られると、自然と道を譲るべく左右に動いた。
道が出来、そこを歩むアルベルト達。　しかし、冒険者達の壁に挟まれながら外を目指すアルベルト達だったが・・。

「あら・・、貴女は？」

アルベルトの脇を平行するリルマリアは、オリヴェッティの顔を見つけて足を止めた。

同じく歩みを止めたアルベルトは、

「マリア、どうした？」

皆の注目を一身に集めたオリヴェッティは、恐縮する様に一礼し。

「覚えていて下さいましたか・・。　お久しぶりでございますね」

と、リルマリアに云うのだ。

驚くビハインツは、オリヴェッティに後ろから。

「知り合いか？」

「えぇ、至らない私達のチームをお助け下さいましたの・・。　2年以上前の事ですわ」

と、脇を向いて云うオリヴェッティ。

アルベルトも思い出した様で。

「あぁ、あの時か。　マーケット・ハーナスの北方で、モンスターの異常発生が起こった時だったね」

リルマリアは、優しげに柔かく頷き。

「えぇ。　お仲間の方が逃げた中、残った二人の魔法遣いさんがモンスターの進行を食い止めて居ましたでしょう？　あの片方の女性ですわ。　名前は、確か・・オリヴェッティ・・・さん？」

「はい。　覚えていて下さるとは・・、真に恐縮です」

しかし、一方で。　賢者イナフは、オリヴェッティの後ろから顔を出しているリュリュに目が奪われていた。

（こっ・・この気配はっ？　微かだが、自然には在り得ない凝縮された風の力は、神竜の・・・。　彼の者は、子供・・・か？）

口に出せない驚きを覚えたイナフだったが。　アルベルトは、オリヴェッティと一声二声交わし。

「では、知り合いにも逢うので、これで。　また逢えたなら、声を掛けてくれていい」

と、先に歩む。

オリヴェッティと握手まで交わした聖女リルマリアは、少し名残りを残した様子で。

「では、失礼しますね」

「はい、リルマリア様もお健やかに」

立ち止まったままのイナフを鋭く見たアジョリナが。

「ジイサン、行くよっ」

と、声を上げる。

「あっ？　あぁ、ああ・・・」

アルベルトの後を追う様に行くイナフは、赤い杖を付きながら俯いてしまった。

（ワシは・・見誤ったのか？　ポリア殿の他に、“天燐の相”を持つのはアルベルトだと思ったのだが・・・。　まさか・・まさかワシは・・・）

★

「しかし、驚きだったな。　あのアルベルト殿と面識が在るなどとは・・・」

テーブルに座ったオリヴェッティ達。　ルヴィアは、それしか頭に無かった。　いや、ビハインツも同様である。

アルベルト達の去った後の余韻が香る斡旋所内で、未だにコソコソと噂話をされながら視線を受けるのはオリヴェッティであった。

冒険者に成ったオリヴェッティが旅立ち、数年。　ある時加盟させて貰えたチームは、フラストマドの北側からマーケット・ハーナスに入った。　街道を南下して首都のヘキサフォン・アーシュエルに入り。　懐に吹き抜ける隙間風を止めるべくその日に請けた仕事は、北の山を抜けた森の偵察。　モンスターが急増したとかで、薬草などを取る狩人が被害に遭い。　その調査の為の仕事だった。

だが。　偵察依頼は、当時の主であったブレンダが見込んだ5チームにそれぞれ頼んだ。　炙れていた冒険者も数名各チームに加わり、戦力としては増強出来ていたと思う。

だが。　5チームは、被害の起きたくぼ地の様な谷型の森へ、競争する様にルートを分けて潜入。　連携も協力も出来ない形でモンスターに襲われ、チームがそれぞれに四散して大被害を出した。　協力すれば良かったのだろうが、当時のそれぞれのチームリーダーが手柄を焦った。　モンスターを幾らかでも駆逐し、他チームより成果を過大に挙げようと目論んだのである。

森の中には、一匹でも駆け出しチームがそこそこ梃子摺るモンスターが何匹も潜んでいた。　大昔に小さなカオスゲートの開いていたと伝わる場所だった所に、原因不明のイービルループが出来上がっていた。

“イービルループ”現象とは、非常に魔と闇の力が淵の様に溜まった場所と場所が繋がれる事で。　戦争が頻繁に起こっていた時代では、死人の塁を築いた場所に出来たヘイトスポットなどが変化する

と伝わる。　戦争が起こらず久しい今では、先ず起こり得ない事だと思われる。

さて。　そんな事など知らないオリヴェッティのチームは、森から溢れ出そうなモンスターの群に次々と鉢合わせしてしまうのだった。

各チーム、それぞれに実力程度には戦ったと思う。　だが、数が多すぎた・・。

その中でも、モンスターが村に近づくのを食い止めていたオリヴェッティ達のチームは、連戦の末に真っ先に逃げ出したリーダーを皮切りに、９名も居た大所帯ながら、踏ん張って残ったのは４名。内二人は、逃げ損なって死亡。

危うく死に掛けたオリヴェッティ達を救ったのは、禍々しい森の気配を読切り。　ブレンダを諭したアルベルトのチーム。　他のルートには、今居るバブロッティが向かい。　他にも、増強して認められたチームが二つ加わった。

アルベルトのチームは、モンスター出現の原因であるイービルループをリルマリアが塞ぎ、モンスターの出現元を断ち切った。

しかし、モンスターの多さに原因究明までは至らなかったのである。

その後は、一月も残ったバブロッティの面々他、訪れた冒険者達の活躍でモンスターはかなり駆逐され激減したとか。

オリヴェッティは、正しい評価を受けず。　リルマリアなどに別れを告げて、西に移動した。

アルベルト達の活躍を基本とした長い話に感心するルヴィアは、頻りに頷き。

「流石に・・、素晴らしい活躍だな」

と、アルベルト達の功績を称える。

そんなルヴィアとは違い、暇で周りを見るリュリュは・・。

「ケイさんの方がスゲー。　だって、ま・・・」

“魔王を倒した”と言おうとして、Kに余計な事を言うなと言われているのを思い出し。

「ま・まま・・・魔じゃなくて、幽霊船とか潰せるし・・・」

と、苦しく言い換える。

その不自然な言い換えを見逃さないルヴィアは、細めた眼でリュリュを見つめながら。

「御主、な～にか隠して居らぬか？」

必死に凄い速さで首を左右へ振るリュリュ。

オリヴェッティとビハインツは、残像が残るほどに速い動きを見て。

（はっ・速い・・・）

と、二人揃ってリュリュにビビった。

所で。　このアハメイルを含め、世界の大都市では年末から年始にかけて、仕事は目まぐるしく入れ替わる。　小銭でもいいから金を求めるチームが増えるからだ。　なるべく遠出せず、賑わう間を楽しめる様にと、簡単で遣り易い仕事が一気に裁けるのがこの数日と云う訳なのだ。

金の有るオリヴェッティは、焦る他の冒険者達の事情を知るに、仕事を請ける事を躊躇う。　必死に仕事を請け負おうとするチームに、結局は遠慮した。

その頃。

夕方の色合いが高い建物の側面を染め。　都市を支配し始めた夕暮れの影が冷え込みを呼ぶ。

港に停泊したクラウザーの船では、清掃が終りブツブツと文句を垂れたりしていた地下の乗客が戻る姿が目に入る。

その船内で。　ジョベックの見舞いをしようとしていたウィンツは、船員医務室の前に来た。

「あ・あの・・。　アムリタさん」

ジョベックの声がする。

（あの女・・何故か一緒に居るな）

ウィンツは、モナと名乗っていたアムリタの素性をKから聞いていた。　正義感も強いウィンツだから、アムリタの事は信用してなか

った。

聞き耳を立てていると・・。

「なぁにさ」

と、やや醒めたアムリタの声がして。

「あの・・長々と・・看病ありがとう御座います」

「いいのよ。　どうせ外を出歩くお金も無いし、する事も無くなったし・・。　私みたいな女に感謝を言ってくれるなんて、今はアンタぐらいだわ」

と。　普通に聞くなら、人生に醒めた気の無い女の口調だった。

しかし、ジョベックは気にしていない様子で。

「もう直ぐ、一年が終わりますね。　船を下りる時には、ウィンツさんに・・お別れ言わないと」

ウィンツは、ジョベックが自分の足手纏いに成らない道を選ぶ気だと解り。

（アイツめ・・）

と、出て行こうとするのだが・・。

「言わなくて・・いいんじゃないかい」

と、アムリタが・・。

（何？）

また、動きを止めたウィンツ。

「でも・・、このままでは・・・」

と、ジョベックが声を弱めて言うのに対し。

「話を聞くと、アンタとあのウィンツって船長は仲間なんだろう？」

「はい」

「なら、傍に居ておあげよ。　仲間なら、何かで役立てるかも知れないじゃないか・・」

「で・でもっ、こ・ここんな身体じゃ・・・」

塞ぎ込む様なジョベックの声に、アムリタは淡々と異論を投げた。

「いいかい？　あのウィンツって男は、男気もある真面目な男さ。アタシみたいな怪しい女を訝しげに思い、一緒に居るアンタの身を心配してる・・。　何処までもアンタの一生を考えてる」

「はぁ・・・。　でもっ、あ・アムリタさんは、悪い人じゃないですよ」

「それは、今は・・・、さ。　汚い道を歩んだ人間ってのは、一生その闇を引きずるもんだよ。　例え真っ当な道に戻っても、過去は

変えられない・・。　ウィンツって男は、その辺もよぉ～く知ってるのさ」

「・・・、はい」

「そんな男だ。　アンタみたいな仲間が居れば、これから頑張る上の意欲に繋がるハズさ。　アンタが変わらず頑張るなら、あのウィンツって男も応えてくれるってモンさ。　アンタは、あの船長さんから離れちゃいけないと思う。　身を崩してないだけに、誰かに悪く騙されない為にもね」

醒めた口調で、何とも素っ気無い言い方をするアムリタ。　だが、ウィンツは、この時に初めてアムリタの言葉から温情の様な匂いを嗅いだ。

（この女・・・）

ウィンツは、Kがアムリタは大丈夫だと言い切った意味を少し理解した。

部屋の中では、寒さで冷える事を心配し。　身体を動かせないジョベックの手を擦り、冷たくなり掛けた手を温めるアムリタが居た。

手を擦って貰えるジョベックは、静かに横に成りながら。

「アムリタさんて、温かいですね・・・。　死ぬ前に握ってた・・母ちゃんの手みたいだ」

ジョベックにそう言われ、思わず手を離し掛けたアムリタ。

「バカ・・」

と、アムリタが言った時。

「居なく成らないで・・・」

と、ジョベックが続ける。

手を離す事も、動かす事も躊躇われたアムリタは、１５は年下のジョベックに言われ、思わず驚いたままに唖然と・・。

一方のジョベックは、自分の身体の事をＫから聞いていた。

「包帯男さんから、自分の事・・・聞きました。　僕、あんまり永くないそうです」

この事実に驚いたのは、アムリタもウィンツも同じ。

「なっ・何を言うんだいっ」

と、無意識にジョベックの手を再びしっかり握ったアムリタへ、ジョベックはやや泣き声に成りそうな様子で。

「でも・・・、本当みたいです。　前の怪我で壊れ掛けた身体が、こっここ・この前の事で・・・更に壊れたみたいなんです。　身体半身が冷たいの解るし・・・、あれから片目が少し・・ぼやけてる。　永く持って、１０年とか・・」

アムリタは衝撃を受けて、ジョベックの手を思うままに強く擦り。

やや感情の表れた声で、

「だい・大丈夫さ。　頑張れば・・もっと生きられるって」

と、ジョベックを覗き込む。

すると、涙を目に溜めたジョベックは、ぎこちなく首をアムリタに向けて。

「・・・はい。　でも、アムリタさん」

「ん？　なんだい？」

ジョベックは、微かに身を震わせながら。

「あ・・あの・・・、ぼっぼぼ・・・」

「ん？　ハッキリ言いよ」

「ボクの・・支えに成って・・・くっ下さい」

ウィンツは、その言葉に目を見開き動けなくなった。　少し前に別れたマキュアリーを思い出してしまう。

ジョベックに気持ちを告げられたアムリタは、時間を止めた。

ジョベックは、もう止め処無い思いを吐き出す様に。

「いき・生きるっ、ががが・・頑張る・・・支えに成ってくだしゃいぃ・・・。　貴女が・・イイんですっ。　みすて・見捨てないで・・・下さい」

ジョベックの詰りながらも縋る言葉は、更に続いた。
其処で、ウィンツの肩に何かが触れ。
「？」
振り返ったウィンツの目の前には、Kが居た。
（なりに任せろ。　あの男は、本気なんだ）
小声で言うKは、立ち去る様に踵を返した。
ウィンツは、アムリタに告白をするジョベックを思い浮かべ。
（俺の立ち入る事じゃないな・・・）
と、同じく踵を返した。
驚いたアムリタ・・。　金を払ったからと強引に抱かれた事など幾らでも有れど、こんなに懇願された事は無かった。　罵倒されて、相手の我儘のままに叩かれていた過去の自分が、今にこんな若い男から求められるとは・・。
（・・変わる、か。　アタシ・・少しだけ普通の女に成ったんかねぇ）
Kが自分でも変われると言い、ライナは自分に変われると願った。
その意味を、アムリタはジョベックに見せられた気がした。

（こんな若い男なのに・・初心にアタシなんかに・・・）

だが、そう思うと可愛く思える。

「・・・解ったよ」

アムリタは、鼻水を垂らして必死に言うジョベックに気恥ずかしさを覚えて言う。

「え・・」

固まったジョベックに近づき、手拭いで鼻を拭ってやるアムリタは。

「解ったって言ったんだい。　もういいから、落ち着きなよ」

「はい・・は・はいぃ・・・」

アムリタは、ジョベックの手を擦り続けながら。

「全く、場を知らない男だこと。　恥ずかしい言葉ばっかり言って、驚くじゃないかい」

「すすす・・すい・・すいません」

だが、ジョベックを見るアムリタには、薄っすらと笑みが有った。

その直後である。

「いでででっ、足っ・足がぁっ！！」

細い金属の杭を膝に刺してしまった船員が運び込まれた。　一緒に来た僧侶の男性を手伝うアムリタは、大声で喚く船員に。

「煩いっ！！　大の男が、これっぽちの怪我で大声出すなっ」

と、消毒を手伝い。　魔法で治癒するまで付き合っていた。

・・・。

夕暮れの港に降り立ったKとウィンツ。　船を一瞥したKは、

「あの若いの、俺より立派だ。　本気で女一人でも愛せるなら、もうバカには出来ねぇ～一端だぜ」

ウィンツは、同じく船を見返り。

「俺は、まだまだだなぁ～。　アイツより長く生きてるのに、あの女を疑うしか出来なかった」

歩き出すKは、

「ま、人それぞれさ」

と、だけ。

ウィンツは、静かにKの後を歩いた。

一方では、甲板の上から。

（・・・。　ケイ、ウォーラスを頼む）

Kとウィンツの行く姿を見送るクラウザーが居た。　何処か寂しそうな、何処か済まなそうな彼が居た。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

まだ、正式に出していなかったと思いますので、２チームの紹介を載せておきます。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪過去を抱いて死の淵に向く老人≫

夜に成ったアハメイルは、何時も以上にライトアップされて、商業区から文化区までが明るく成っていた。　何時もより明るい印象の街灯ランプは、この数日間だけ使う油の品質が代わり。　街中でも普段はランプだけしか明かりを灯さないのに、金の在る店は魔法の明かりを閉じ込めた水晶を用いる。

もし、鳥に成って空からアハメイルを見たら、光が溢れて美しい光景を見れるだろう。

普段は馬車が往来している太い道路は、馬車の通行禁止によって店の明かりに挟まれ。　そこを練り歩く様々な人が楽しんで居る様子を見せてくれる。

普段は貴族や富裕層だけの住む区域に居る者達も。　この数日は下々を伺いに来た様な感じで、お供や家族と共に賑わいを楽しんで歩いている。

アハメイルの街が、何時も以上に活き活きとしていた。

★

ウィンツを伴ったKは、酒屋で軽く食べる物やワインなどを買った。
一応、上着にと厚手のコートを着て来たウィンツだが、海風に吹かれて寒くポケットに手を入れて店先で待つ。　これから尋ねるウォーラスは、重い病気だとKから聞いていた。　だから、店から出て来たKへ。

「おい、病人を見舞うのに・・・酒か？」

港や海沿いに伸びる海岸通りを歩き始めたKは。

「もう、手遅れなんだ。　今更に身体を気にしても始まらない。　正直な所、今夜死んでも驚けないね。　昼過ぎに従兄弟を尋ねたが、最近は身体の具合が更に悪いらしい。　何も食べず寝ている事も多い様だと」

「・・・、そこまでか。　なぁ、親方を連れて来た方が良くないか？」

「無理言うな。　今更にクラウザーが逢っても、ウォーラスには辛いだけさ。　ウォーラスは、クラウザーに全てを預け、運命の糸を切ったも同然。　今のウォーラスに、クラウザーは毒でしかない」

困惑するウィンツは、

「俺なら・・いいのか？」

そんな彼を見るKは、呆れるままに口元を崩し。

「おそらく」

その曖昧な言い方にウィンツは言葉を見失い。　込み上げる気持ちをのままに、もやもやし始めた声で。

「お・・・いや。　な・・なんだ、そのいい加減な曖昧さは。　“おそらく”ってよ・・」

「いや、本当に・・そのままだ。　クラウザーとウォーラスは、根本が食い違ってる。　だが、アンタはまた違う。　だから“おそらく”、なんだよ」

ウィンツには、Kの言わんとしている事が良く解らなかった。

結構歩いた。

商業区を行き過ぎ、住宅が並ぶ所まで来ると。

「向こうだ」

Kは、海側を指差す。

ウィンツは、明かりの無い方を指差したので。

「あんな真っ暗な方か？」

「もう世捨て人と同じさ。　ただ、船に対する愛着は残してるんだろうなぁ。　もう遣われてない古いドックの後ろに在る、船上げ倉庫に居る」

「あんな所に？　夏はまだいいだろうが・・、冬の今頃じゃ暖炉でも無いと凍死するんじゃないか？」

「過酷な場所と解っていても、行く所が他に無いのさ。　堕ちる処まで堕とされたウォーラスを微かに生かしてるのは、ウォーラスの無実を知る者。　俺とクラウザーを抜けば、他にはウォーラスの従兄弟しかいない」

「その人が・・今まで面倒を？」

「あぁ・・。　隠れて、時々食べ物なんかを届けてる。　元は、片腕として副船長をしてたみたいだ。　少し前にウォーラスを尋ねた時、俺と再び再会して・・・。　フッ、喰って掛かられた」

（当然だろうな・・。　客観的に、ウォーラスさんを追い落とす事をしたケイだ）

ウィンツには、寧ろその従兄弟の気持ちが一番解る。　Kの事件に対する仕様や証言によっては、クラウザーには迷惑が及ぶだろうが、ウォーラスが全てを失う事も無かったかも知れない。

住宅の立ち並ぶ区域へと伸びる道と、海岸沿いに伸びる道が別れ。　街灯も無い海岸沿いに向かった。

ウィンツがまだクラウザーから独立する前は、此処に大きく敷地を

取って修理ドックが有った。　今のクラウザーが船長として運行する巨型の船は入らない古い船の修理ドックで、そのドックの裏手には、広大な倉庫郡が広がっていたのだ。

今では、もう遣われない船を仕舞いっ放しにしてある数列の倉庫を残し、大半の倉庫は壊され、住宅の敷地にされている。

星空が広がる寒空の下。　古びた大型の倉庫が建ち並ぶ中を少し歩いた所で。

「ウォーラス、俺だ」

倉庫の裏手出入り口を叩いて言うK。

少しの静けさが隙間を埋めて。

「・・・入れ」

と、掠れた声で老人の声がした。

Kは、戸を開く前にウィンツに顔を向け。

「少しだけ、中の内側に立っててくれ。　警戒させないために」

「解った。　驚かせても悪い」

軋むボロ戸を開けたKと中に入れば、弱い弱い絞った明かりでランプが正面壁に掛けられていた。　入った先は、左右に廊下が伸びていて。　右側の奥には、水瓶らしい黒い大瓶と、朽ちた木樽が置いてあるのがなんとか見える。

Kは、ウィンツをランプ前に残すと。　やや明るさが窺える左の廊下を行き、直に壁の向こう側へと曲がった。

この倉庫の床は、地面剥き出しの土間だ。　広く吹き抜けた中、少し倉庫の真ん中へ踏み込んだ場所に火が見える。　地面を掘り石を敷き詰め、簡易的に作った竈代わりなのだろう。

「お～、夏に来たと思ったら、こんな死に損ないに逢いにまた・・。　態々寒い中、有り難いね」

皺枯れた声とは、こうした声を言うのか・・。　老いた声が、弱弱しくも乾いて聞える。　火の有る竈の前に、朽ち掛けた古木を横にした物を椅子にする老人が居た。

「ウォーラス、差し入れ持って来た」

近づいたKは、酒の瓶が入った紙袋を持ち上げた。

「おぉ・・、助かるなぁ。　マベルのヤツは、俺の身体を心配しくさって酒を持ってこねぇ。　こりゃ、有り難い」

喜んだ老人を誰でも直視出来る間近まで来たK。

（確かに、更に悪化してるな・・・）

目や顔を診るに、それが窺えた。

その老人は、正しく家も無い浮浪者と同じだった。　垢が染みきった肌は、皮ごとポロポロに成って剥がれ掛け。　その下に見えた肌

は、感染(かぶ)れや寒さで赤くなっている。　白くなった頭髪は、乱れ放題でボサボサ。　皺を刻む顔は、頗る血色の悪いやや浮腫んだ感じがしていた。　医術に心得など無くても、この老人は身体が悪いと推察出来そうなものだった。

Kは、海岸通りの商店先に掛けてあった厚手のコートも購入していた。

「寒くないか？　少しでも温かくするのに使ってくれ」

と、コートと酒瓶の入った紙袋を老人に渡す。

「・・・、お前・・」

受け取った老人の衣服は、もう汚れて黒ずみ。　彼方此方を擦り切り、何枚着ていても防寒効果が有るのか解らない物だ。

Kからコートとワインを受け取った老人は、確かに顔付きは悪くなかった。　身綺麗にして紳士風の衣服を着せれば、中々悪くない様子だと思える。　目の輝きは失われている様に思えるが、物を見定める目や人を見る目には光が霞む。

「ま、座れよ」

Kは、老人・・いや。　ウォーラスの勧めで、火に向かう別の木に腰を下ろした。

ウォーラスは、酒とコートを持ち上げ。

「お前、まぁ～だ俺に悪気を感じているのか？　気にするな、もう

いい・・。　お前があの時止めなかったら・・、俺は、最悪の所まで悪党の片棒を担いでいたかも知れねぇ～んだ。　人を見る目の無い俺の責任も有る。　・・・差し入れは嬉しいがよ、あんまり気を遣うな。　もう、直に俺は死ぬんだ」

ウォーラスの声は、確かに落ち着き払っていた。　聞いていたウィンツは、

（なんて落ち着いた声だろうか・・、本当に腹を括ってる）

と、解った。

口元を解すKは、炎に片手を差し出し。　コルクを歯で引き抜くウォーラスに・・。

「解ってる・・。　だが、テメェが追い落とした人間の中身が真っ当なら、人の一面を辛うじて残す悪魔だって同情するさ」

またウィンツは、そのKの声に。

（後悔じゃない・・、やるせなさか）

と。

ウォーラスは、軽く乾杯がてらにワインを持ち上げて見せると。
ワインを素飲み（ラッパ呑み）にして、深く味わう様に一息ついた。

「フゥ～・・。　しかし、お前も物好きだな～。　この年の瀬だ、一緒に過ごす女にでも不自由してるんと違うか？」

「はは、もう女も酒も要らないさ。　只の捨て鉢人生、知り合いに逢うぐらいしか遣る事無い」

「はは～ん、お前さんがねぇ～」

Kは、此処で。

「今な・・、冒険者のチームに加わってる」

「ほぉ」

「昔の誼で、クラウザーの船に乗せて貰ってる」

「・・・、そうか。　アイツは元気か？」

「今の所は・・・。　だが、アンタと似たり寄ったりで、内腑（ないふ）に腫（シコリ）が出来てるな」

すると、ウォーラスは声を少し焦らせ。

「直にヤツもっ？！」

「多分・・」

「そ・・そうか・・・。　クラウザーには、長生きして欲しいんだがな・・・」

Kとウォーラスの会話を聞くウィンツは、ウォーラスの本意が、何処までも憎しみなどに支配されていない大らかなものと解る。

（こうなっても、こんなに親方と似た人が居るのか・・・。　勿体無ぇ）

しんみりするウォーラスへ、Kは。

「クラウザーの夢・・、覚えてるか？」

「・・あぁ。　海旅族のお宝を探す・・・だったな」

「そう。　実は、その手掛かりを持って、一族が没落するまで捜し求めた学者が居てさ。　その最後の末裔である若い娘が、俺のチームのリーダーだ。　クラウザーは、今回の船旅を最後に・・・一緒に探す旅に加わる」

そう言うKに、ウォーラスは喰えない顔を向け。

「お前ってヤツは・・。　俺の弟弟子に、ケジメって云う引導渡す気かよ。　死神みたいな真似を・・・」

鈍く笑うKは。

「アンタにも、引導を渡しに来たんだ」

ウォーラスは、グィっとワインを含んでから、やや大きく構えるままに。

「んぁ～、俺にだとぉ？」

「あぁ。　今な、後ろの壁の裏に、クラウザーの元で修行した弟子が居る。　クラウザーの弟子の中でも、腕は一番だとか」

「ほぉ～。　んじゃ、ヤツの息子か？」

「いや」

「違う？　・・・んじゃ～分けた大船団の一つを任された誰かか？」

「いや、違う」

Kの言っている事が嘘だと思ったウォーラスは、何とも下らないと。

「なら、ソイツは嘘を言ってるぞ。　クラウザーの弟子で腕のイイヤツは、みぃ～んな名の通ったヤツに成ってる。　他じゃ～、マーケット・ハーナスの大商人に仕えてるバッファー、モーガイフ、ジョーンダー。　この港じゃ、ヤツの率いた大船団の分割組みが主流・・、他には居無い。　断言してもいい」

と、言い切る。

だが・・。　緩やかな眼差しで炎を見つめながらKは、やや笑み。

「それが、一人だけ異端の経緯を辿った大馬鹿が居るのさ」

と、云うと。

「いいぞ。　出て来てくれ」

と、後ろに声を掛けた。

ウォーラスは、Kの声に呑むのも忘れる様子で壁側を見る。

歩み出たウィンツは、ウォーラスと炎を挟む形で対面するまでに進むと。

「初めて・・お目に。　親方、クラウザーの弟子だったウィンツと云います」

と、挨拶した。

ポカ～ンと見上げたウォーラスは、抜けた歯茎すら見えるままに。

「・・・みすぼらしいヤツだなぁ～。　ま、座れ」

「失礼します・・」

ウィンツは、古びた切り株の椅子に腰を下ろした。

★

「ん～、おいちぃ～」

骨付きの大振りな肉の塊を香ばしく焼いたものを、モシャモシャと食べるリュリュ。

チームの全員が、それなりに衣服を正していた。　安目の宿は、何処も満杯で質の良い宿を取るしか無かったオリヴェッティ。

マルタンの街を出た頃のクラウザーの予定では、早めにアハメイルを出港し、船上で年越しを祝う予定だったのだが・・。　海の氷の具合が酷く、日程がずれにずれた。　夕方に聞いた話では、これから年の瀬3日に加え、年越しを迎えて更に3日はこのアハメイルに逗留するとか。

他の船の出入りや、雇い主と話して決めた結果なのだろう。

さて。　キチンとしたテーブルマナーの好まれるレストランを内に抱えた宿だ。　リュリュにも、それなりのマナーを教えなくては成らない。

白いタイトなピアリッジコートを着たルヴィアは、リュリュの横で食べる様子を窺いながら。

「ホラ、フォークやナイフを汚したままにクロスの上に置くな」

とか。

「海老は、殻を砕き過ぎると散らかるぞ」

とか、しっかり教えている。

しかし、リュリュは・・。

「はぁ～い」

手取り足取りの様にルヴィアが身近で教えてくれるので、ルヴィアにべったり。

（なぁ～んか、仲良しですわね）

オリヴェッティは、リュリュの逆隣で様子を窺うだけ。

ビハインツは、オリヴェッティやルヴィアの作法を見真似る。　鎧を縫いでそれなりのコートを着た上で、スカーフネクタイをオリヴェッティにして貰った。　広いレストラン内を見回すに、紳士的な正装した客以外では、他の冒険者客より様になっている。

そして、此処には・・。

「良く寝てるわ。　この子、私より物怖じしないみたい」

と、マリーを連れたライナも。

オリヴェッティは、宿を取るのに人数が多い方が得だと知ったので、気晴らしを含めてライナを招いた。

事件の影響で影を背負ったライナだが、マリーを育てる事には本気の意思を持ったのだろう。　過去を振り返る仕草は人前では見せない。　新しい生活が始まれば、ライナは強く生きれるだろうと思えた。

ライナと会話をするビハインツやオリヴェッティは、少しでもライナを支えてやりたくなった。

リュリュは、今やライナに。

「ライナお母さん、赤ちゃんと一緒に冒険しよ～よ。　チームで居

ればイイんだよ」

と、勝手な発言をする。

苦笑するライナは、

「私だけなら、それでもいいのだけれど・・。　でも、他に上手く仕事見つけれないと、それも仕方ないかも」

と、云う。

“赤子を連れた冒険者”

奇抜なチームではある。　だが、人数の多いファランクスチームでは、そうゆうチームも存在するのは事実。　それにしても僧侶は、寺院の他に僧兵や医者の助手としては求められる。　上手い具合にそういった仕事の口を見つけれるか・・。　重要な問題だった。

その頃、別の場所では。

リオン王子が居る軍部の要塞の様な建物。　その一室で、リオンとアルベルトが会っていた。　やや明るい軍服を着たリオンは、応接用のソファーに座ったアルベルトを前にして。

「アルベルト殿、久しいな。　前の頃から、３・４月は経っていたかな？」

「王子、そうですね。　年末年始は、この街で過ごそうかと立ち寄りました」

リオンは、脇にテトロザまで座らせていた。　流石は剣名で有名な者達、お互いに見知って付き合いはそれなりに深い。

だが。　アルベルトを見るテトロザは、以前のアルベルトには無い陰りを見透かし。

「アルベルト殿、お顔が優れませぬが・・。　どうかしましたかな？」

紅茶の湯気を見つめるアルベルトは、声を低くし。

「実は・・・。　去年からポリア様の伝で、その・・凄まじい剣士の存在を知りました」

リオンは、剣士と聞いて。

「ほお、・・実は私も凄い人物を知った。　して、アルベルト殿の知る人物は、どんな人物ですか？」

「恐らく、秋にこの都市で徒党の群れを斬った人物だと思います」

パッと自分を向くテトロザを見て、リオンは。

「テトロザ・・・あの黒尽くめの男だ」

頷くテトロザも、アルベルトに。

「その御仁が、どうされました？」

アルベルトは、ガロンの死を克明に語り。

「今まで・・自分の剣は、上り詰め始めたと思っていました。　噂の剣神皇や斬鬼帝の方々に近づいたと・・・。　だが、あのガロンと云う者の斬られ方を見て、決して超えられぬ壁を見た気がします。　人の手練では無い・・・。　正直、目指す目標を見つけたの同時に、神業の粋を見せ付けられたと思います」

テトロザは、今にアルベルトが悩む時期に差し掛かったのだと読み取った。

リオンは、寧ろアルベルトに思いが近く。

「確かに・・。　秋に、俺もその手練を見た。　大勢の悪党が惨殺されたが・・・、斬られた者を見てな。　その・・・思わず・・美しいと思ってしまった。　傷跡・・血の出方・・どれも及ぶ所では無いとな」

テトロザは、そう言い合って俯く二人を見て。

「失礼ですが・・・、お言葉を宜しいですかな?」

名を轟かす二人は、先輩として剣豪と謳われたテトロザを見上げる。

老い始めた皺の目立つ顔をしたテトロザの表情は、落ち着き払ったもの。

「私がこう云うのもどうかと思いますが・・。　御二人は、そのままで良いと思います。　私も斬られた悪党を見ましたが、あの技量は悪魔か・・バケモノ。　あの様な剣技は、リオン様やアルベルト殿には不要だと」

リオンは、素直に。

「人であれと？」

と、聞き返せば、テトロザは頷き。

「そうで御座います。　あの剣技を手に入れる代償は、人を捨てる修羅や悪鬼の道。　御二人の思われる使い手は、その道を使いこなし切っているのかも知れませぬが。　誰が手にしてもそうなるとは思えませぬ。　あの斬り方の主は、過去に人もモンスターも無数に殺め、殺め、殺め尽した者と見抜けます。　その様な道は、リオン様やアルベルト殿には渡れませぬ」

テトロザの言葉に、リオンも、アルベルトも黙った。

死体の後処理をしたリオンは、役人から相談された。　あの様に人を斬れる者を、自由にのさばらせていいのかと・・・。

二人の若き剣士に、一つの波紋を投げたバケモノ。　そのバケモノは、古い倉庫に居た。

★

ウォーラスの向かいに座ったウィンツへ、ワインを含んだウォーラスは。

「ウィンツ・・・、確かに聞いた事有る様な・・。　お前、今は何処で船に乗っている？」

ウィンツは、首を左右に振り。

「全てを失いました。　今、親方のご好意で此処まで乗せて貰いました。　これから、仲間の船員と雇い主を探そうと思っています」

訝しげにウィンツを見続けるウォーラスは、どうも気に入らないとばかりに。

「お前、随分と生っちょろい事を言うなぁ。　自前の船は？」

「・・・無いです。　少し前まで雇われの身でしたが、幽霊船と出くわして沈めました」

ウォーラスは、何とも渋い顔をして。

「なんだぁ～お前。　情っけねぇ～ヤツだぁ～、逃げる事も出来なかったのかよ。　クラウザーの有能な弟子が、それじゃ～聞いて呆れるな」

俯いたウィンツに、Kは事情を話した。　補足する様に細かく事情を吐露するウィンツの話も聞いて。

「全く、なぁ～んてクソ真面目なアホだ・・。　その使えない悪党のジョンソンだか言う輩の話にも、確かに一理有るぞ。　お前、何で出港した素振りで近場に停泊しなかった。　状況を悪く報告するとかで、出戻っても良かっただろうに・・」

ウィンツは、海流の流れや寒波の異常な速さを指摘。　そして、乗客が無理な触れ込みで集められた者達ばかりで、状況的に難しかった事を再度語った。

その様子を見つめたウォーラスは、少し声を正し。

「確かに、お前さんの海の見立ては正しい。　船がポンコツのガタ船なのもしょうが無ぇ～だろうがぁ・・、何よりも気に入らねぇのは、よ。　クラウザーの弟子たる者が、そんなアホウの三下に成り下がる事自体だろうがよ。　お前、船分けもされないままに飛び出したのか？」

と、叱り付ける様な言い方に変わる。

ウィンツは、クラウザーの元を飛び出した経緯を語ると。

「うははっ、あはははは～～～っ！　こいつは愉快だっ！！　馬鹿だっ、大馬鹿を久しぶりに見たぁっ！！」

と、ウォーラスは大笑い。

Kは、素直なままに。

「やっぱり、アンタもそう思うか？　俺も、正直に事実を聞いて思った」

二人の言い草に、少しムッとしたウィンツ。

「現実だ、しょうがない」

と、横に向きながら云うと・・。

「馬鹿ヤロウっ！！」

突然にウォーラスがウィンツを怒った。

驚いたウィンツに、ウォーラスは怒った目を向け。

「おめぇ、その前の兄弟子を見てねぇーのかっ？！」

と、ウォーラスは畳み掛けたではないか。

「え？」

何故にこうも怒られるのかが解らず、唖然とするしかないウィンツだ。

ワインをまた飲んだウォーラスは、ウィンツを睨み。

「クラウザーって男はなぁ、本当の苦労人だっ。　その弟子一人一人の性格や、その運気を見計る眼にも長けていた。　お前の兄弟子だって、それなりにクラウザーが見計って独立を示唆したはずだろうがよっ。　えぇっ？！！　違うけっ？」

ウィンツは、昔を思い返し。

「確かに・・仰る通りです」

「はんっ！！　テメェの腕を過信して、親方の眼を黙殺したんだ。

蛆虫みたいな船長人生も仕方無ぇ～だろうがよ」

此処でウォーラスはまたワインを含むと、声をどっしりとさせ。

「俺はな、クラウザーにその部分だけは絶対に勝てないと確信してた。　クラウザーってのは、人を見る眼に掛けては玄人や占い師より勝る。　直属の弟子で、それも解らねぇのが大馬鹿って言う証拠だぜぇ」

ウィンツは、深く項垂れた。　クラウザーの商売敵で、最大のライバルと思っていたウォーラスに、自分の師匠であるクラウザーの正しさを説かれたのだ。　今にして、何も言い返せない。　現実的に実証された事実だった。

だが。

「おい、ホラ」

と、ウォーラスの声が・・・。

ウィンツが顔を上げると、もう一つのワイン瓶を差し出すウォーラスが居た。

「・・・俺に・・ですか？」

聞き返すウィンツに、ウォーラスは瓶を揺らし。

「他に誰が居るんだ。　こっちのミイラは、酒を飲まん。　ま、とにかく呑め」

ウィンツは、その仕草にクラウザーと似た雰囲気をまた感じ。

「頂きます・・・」

「お前、俺とクラウザーの関係（こと）は、コイツから聞いたか？」

コルクを齧るウィンツは、頷きを一つして引き抜く。

「そうかい、な～ら話は早い。　俺は、正直な所でクラウザーに何一つ勝てた試しは無いと思ってる。　コイツは、本心だ」

先ずとワインを含んだウィンツは。

「・・・。　ですが・・、疾風船団で世界最速の荷運びをしたと聞いてますが？」

「あぁ、アレか。　あんなの、船が同じならクラウザーでも出来る。　でも、クラウザーはしなかった。　何故だか解るか？」

ウィンツは、クラウザーの心構えなどを云い。　更に、船を早く運行しても、それを出来るのは春の終りから冬の前まで。　時期が時期である上に、波以上に早く移動する為に揺れの多い。　そんな状態での輸送で運べる物には、確かに様々な制限が入る事を指摘した。

ウォーラスは、本腰を入れて話をし出し。

「そうだ、その通り。　リスクを過大に背負っての運行だ。　全ての物流に適用できないのが、正に難点の一つ。　他に、俺の通っていた海運ルートは、潮の流れに乗ると早いがな。　途中の海が荒れ

たら最悪のルートでもある。　天候、運、腕、どれに於いても普通の船長では無理なんだ。　そんな危険なルートを俺が開拓した御蔭で、他の海を良く知らない商人は、テメェの抱える船長にそれを押し付ける。　つまり、一人の英雄染みた行為が、他の者の命を危ぶませる結果を生んだ。　クラウザーは、それを理解していたんだ。
　だから、俺と同じ真似をせず、安全で時期に合った航海を心掛けたんだ」

更に続く話・・。　ウィンツは、ウォーラスの話に真剣に成っていた。　丸で、教育を受けている様で、弟子時代の学ぶ気持ちが自然と湧き上がる。

その二人の様子に、Kは。

（やっぱり、同じ熱い血と気持ちを持ってるな・・・）

と、見透かし。　余計な口を差し挟まない。

ウィンツに自身の体験した危ない経験を語り。　そして、ウィンツにその場合の切り抜け方を問うウォーラス。　ウィンツは、真剣に考えて答え。　ダメ出しを貰ったり、褒められたり。

ウィンツとウォーラスの話し合いは、時折大声のものになったり。
　時には、笑い合う話になったり。

中でも、女性の話に成り。　ウィンツの彼女がハルピュイアと聞いたウォーラスは、大いに喜び。

「お前ぇ、なっかなかの男前じゃないかよ。　あのハルピュイアをなぁ～、こりゃイイや」

と、ウィンツを赤面させる。

その後。

ウォーラスは、クラウザーの妻と成った愛おしい女性の事を口にし始め。

「俺は・・、今でもリドリーを抱かなくて正解だと思ってる・・・」

ウィンツは、マキュアリーを思いながら。

「愛していたのでしょう？」

すると、ウォーラスは弱弱しく頷き。

「あぁ。　・・思いは、クラウザーにも負けないさ。　だが、・・そうさなぁ。　思いを押し付けても、リドリーは俺の子を生んでも、俺に愛情を向けなかっただろうさ。　それに、歪んだ彼女の義弟は、どう転がっても悪事に加担しただろうさ。　どの道、俺と結婚したらリドリーは不幸に成ってたな」

「・・・、そんなもんでしょうか。　リドリーさんとウォーラスさんが一緒に成れば、普通に行くと・・ウチの親方は廃業していたと思いますが？」

「・・・だからだ」

「え？」

「クラウザーを廃業に追い込む切欠は、リドリーが作ったも同然・・・。　そうなれば、彼女は命を絶っただろう。　俺もクラウザーも、真っ当に仕事出来ねぇ～さ。　リドリーって女は、その覚悟が出来る。　俺とて、親友で弟弟子のクラウザーを失うなんて・・・無理だ」

ウォーラスは、その充血した目に涙を光らせる。

ウィンツは、ウォーラスと云う男の気持ちを、目の前にして熱く・・純粋に感じた。　正直、このままにしておくには惜しいと切に・・・。

ウォーラスは、ウィンツを見て。

「俺は、クラウザーとリドリーに全てを託せた・・。　今、何度も思っても、な。　自分の部下をバラバラにせず、リドリーに迷惑を掛けない今に出来た事を嬉しく思ってる。　全てを預けたクラウザーには、・・済まなかったともな」

「そうですか・・。　親方は、・・貴方の悪口を嫌ってました。俺達が言うのでさえ・・・。　今に貴方に会って、その意味が解りました。　親方も、逆に心配だったでしょうね。　親友であり、兄弟子の貴方の事を・・・」

ウィンツの話に、涙を流しながら弱い笑みを見せるウォーラス。

「はは・・、懐かしいよなぁ。　クラウザーとは、一緒に夢を語り合ったからなぁ～。　二人で肩を組んで、安い酒を朝までかっ喰らったりなぁ～。　アイツとの出会いってのは、俺の・・・俺の・・宝だよ」

深夜の冷え込みが倉庫にも遣って来る。

だが、暖かな心の温もりを握ったウｘ一ラスとウィンツには、その寒さなどどうでも良かった。

・・・。

その夜。

奥のベットに移動と成ったジョベックが居て、薄暗い部屋で自分の手を擦るアムリタに。

「あの・・アムリタさん。　寒いですから・・も・もう・・・寝て下さい」

ジョベックの看護をするアムリタの様子は、確かに優しかった。

ジョベックにしてみれば、アムリタに無理はさせたくない。

化粧もせず寝不足気味のアムリタは、少し老けて見えるかもしれない。

だが・・。

「そうだねぇ。　んじゃ、隣に寝かせて貰おうか」

と、アムリタはジョベックと床を共にしようと・・。

驚いたジョベックだが、身体を動かせる自分では無いだけに。

「あっ・ああ・・アムリ・・・」

声を上ずらせたのだが。

ジョベックの横に寝たアムリタは、静かな口調で。

「静かにおし、離れるなって云ったのはアンタんなんだよ」

と、言い聞かす様な大人びた声。

「・・・はい」

アムリタに抱かれたジョベックは、何も言えなく成った。

一方で、最初の子供が生きていれば、ジョベックぐらいだと思うアムリタは・・。

「アタシさ・・・、昔に子供を産めなかった。　アタシの願いは、一人でもいいから・・子供が欲しい」

ジョベックは、アムリタの腕の中で静かに頷いた。

この日の夜は、船に泊まる者にとっては静かな夜だった・・。

★

年末年始。　騒がしいアハメイルの街が、少しだけ静けさを取り戻す時が有る。　それは、騒ぎ疲れた人々が眠る朝方。　最後の月に入り、雪が良く降ったアハメイル。　年の瀬が迫る今に、珍しく晴れ間が続いた。　ピンと張り詰めた空気が凍る様な朝だった。

昔話に花を咲かせるウォーラスは、ウィンツやKを相手に朝まで話し続けた。　燃やす薪が無くなるまで話、竈には熾きと成りつつある炭だけが赤く燃えているのみ。　もう、炎は出ていなかった。

「おいおい、朝まで元気だな～。　ウォーラス、本気で養生すれば一・二年生きるんと違うか？」

Kが、起き続けるウォーラスに小言臭い事を言えば。

「なぁ～にをお前らしくもねぇ。　病気を知るテメェは、俺の寿命ぐらい知ってるハズだろうが。　今更に、そんな戯言言うな」

「・・全く、腐れジジィがよ」

Kは、ウォーラスの目を見て、自分の気休めを言い返されたと疲れた。

だが、それでもウィンツは、クラウザーの大切な兄弟子あるだけあり。

「ウォーラスさん、それでも少し休んだ方が・・」

と、心配を。　何もかも包み隠さないウォーラスと語らい、もう一人クラウザーが出来た様な印象さえ受けたのだ。

すると、ノロノロと立ち上がるウォーラスは、

「はんっ。　クラウザーのガキ弟子に心配される必要も無ぇっ」

と、ワイン瓶を逆さに残りの滴を飲み干し。

「おう。　俺と同じ運命を読めねぇ～バカ野郎ぅ・・、こっち来い」

と、だけ言うと。　倉庫の表に向かって行く。

ウィンツは、どうしたらいいかとばかりにKを見る。

Kは、ウォーラスの方に首を巡らせるのみ。

頷いたウィンツは、ウォーラスの後を追った。

大きな左右に押し開ける滑車付きの木戸を押すウォーラスには、押し開くその力は無く。

「・・・」

ウィンツが手伝って開き、外に。

「うははーっ。　眩しいなコイツめ」

古いドック脇の海岸沿いに出たウォーラスは、眩しいまでに明るい日の出を見てそう言う。

そんな彼の脇に立ったウィンツも、眩しい朝日を見た。

すると・・・、突然に。

「ん・・・」

ウォーラスは横に左手を伸ばし、ウィンツに何かを差し出した。

「え？」

ウォーラスを見たウィンツは、そのままから視線を巡らせて差し出された物を見た。　それが大きな錠前の鍵らしき物だと解るので。

「あの・・コレは？」

金属の太い鍵を揺らすウォーラスは、老いた顔を少し厳しいものにして。

「俺の船で動かねぇのの唯一残したのが、この倉庫並びの右外れに残ってる。　今時に自前で船も持って無ぇ～んじゃ、胸張って船長とは言えないだろうが。　くれてやるから、ちった～立派になってクラウザーに恩返ししろい。　断るなんざ・・許さねぇぞ」

「・・・」

クラウザーの兄弟子であるウォーラスの言葉を受け、ウィンツの全身をゾワっと駆け巡った鳥肌。　恐れ多いぐらいに震える手で、徐ろに鍵を取る。　込み上げる感謝と、済まなさ・・。

「こんな・・すいま・・・」

と、鍵を握り横を見たウィンツに視界に、立って居る筈のウォーラ

スは・・居なかった。

「あっ、ウォーラスさんっ！！」

ハッとして更に下を向けば、吐血して蹲る様に倒れ込んだウォーラスは、既に右脇に居るKが抱える様にしている。

「か・かん・・しゃ・・すっ・すぅるぜ。　たくせ・・る・・・アホ・あ・・ありが・・と・・よ」

絞り出すその言葉を聴くKは、緩やかにウォーラスを下に座らせ。
身を崩した時に肩から落ちた新しいコートを取り、またウォーラスの肩に掛ける。

「これぐらいしか出来ない・・。　本当に、済まなかった」

Kの後悔が、その短い言葉に全て集約されていた。

ウォーラスは、横に転がる様にKに向き。

「じゅ・じゅう・ぶん・・・さ。　・・う゛っ、うぐぐ・・がはっ！！」

内臓が破れたのだろう。　多量に血を吐き、ウォーラスはそのままに目を閉じた。　ウォーラスの名前を叫ぶウィンツは、もう必死でKに処置を頼むが・・。

「もう手遅れだ。　今、ウォーラスは死ぬ」

「そ・・そんなっ！！　親方・・・おやか・た・・だって・・・」

クラウザーとせめて逢って欲しかったウィンツ。　鍵だけ託されても、返せるものが今は何も無い。　こんな終わり方など、あまりにも可哀想過ぎると思える。

Kとウィンツに看取られ、ウォーラスは吐血から程なく死んだ。
自分に縋り付く様にして、“死ぬな”、“死んじゃダメだ”と必死に声を掛けるウィンツの手に、ウォーラスは弱弱しい手を掠る様に置き。　2度、微かに叩いた直後だった。

“船を頼む”

そう云われた様なウィンツ。　鍵を手にし、その様子を見るしか出来なかった・・。

「あああ・・。　そ・そんな・・・うわぁぁぁぁぁぁーーーーーーーっ!!!」

激しく石の下を叩くウィンツ。

Kは、ウィンツの叫びを止めなかった。　座って抱えるウォーラスの顔は、苦労の多い人生の割に安らかで。

（辛い人生だったろうにな・・。　苦しいハズなのに・・、コレぐらいの事で安らかな面してやがる）

Kから見ても、ウォーラスには何かの満足が有ったと知ることが出来た。　それは、船を託せる誰かを見つけれたと云う事だろう。

疾風船団を率いたクラウザーの兄弟子ウォーラスは、年を越さずし

て息を引き取った。　クラウザーの弟子であるウィンツに、残した物を託して。

叫び上げた後、無力感に支配され掛かったウィンツ。

だが・・。

「見て来いよ、託された船を・・。　今からアンタの船なんだろう？」

Kに言われたウィンツは、涙で濡れた目に力を込めて鍵を見た・・。

「・・そうだな・・、み・見てくる」

大粒の涙を流しながら、ウォーラスと語り明かした昨夜を鍵と共に握り締めたウィンツは、倉庫の列の前を進み始めた。

ウォーラスを抱えたまま、朝日を見るK。

「・・ウォーラス。　今日のアンタの目利きは、間違って無いと思うゼ。　アンタとクラウザーのバカ弟子は、何処に出しても劣り無い一端の船長だ。　アンタの夢も、船も、しっかり受け取るさ」

Kは、心配だったのかも知れない。　ウォーラスが、誰に看取られる訳も無く死ぬ事以上に。　心に何かを残したままに死ぬ事が・・。

死神のKが間に合わせたのか、それともピリオドを打たせたのかは解らない。

だが、時はまだ進む。

「え？　・・・葬儀ですか？」

驚いたライナは、寝るマリーを抱えて話を聞いた。　Kは、朝もまだ早い頃にライナを尋ねて来たのだ。

前日、ライナを迎えに来たオリヴェッティは、ウィンツを迎えに来たKと鉢合わせしていた。　一応、Kにも宿の事を言って置いたオリヴェッティ。　Kは、余計な説明を必要としないライナを頼った。

しかし、その後・・。

本来なら、これは意味が無いだろう。　でも、死んだ人間より、生きた人間を考えるに・・。

「クラウザー、ウォーラスが死んだ。　今から、街外れで葬儀する。来たけりゃ来い」

Kは、クラウザーも尋ねたのだ。

突然・・突然すぎる訃報だった。　甲板の上で、クラウザーがKに掴み掛かる姿を見たブライアンやカルロス。　普段のクラウザーでは、有り得ない姿だ。　ウォーラスが死んだと云う事で、何が起こったのか尋ねるクラウザーだったが・・。

★

（ウォーラスは、ウィンツに思いを託せた。　アンタには託せ無い事だが、ウィンツには出来た。　兄弟子だったんだろう？　静かに見送ってやってくれ・・・）

Kの囁きに、どうしようも出来なくなった気持ちだけが残り、膝を崩したクラウザーが甲板に居た。

朝も大分に過ぎた頃。　街の中心では、劇の始まりを告げる花火が上がった。　まだ数日の騒ぎを残している。　天候の良さから、人々が昼を前に街中へと出始めていた。

そんな街中の喧騒が聞えてくるアハメイル北部の墓場。　人気の無いこの場所に、何故か墓を用意してあるKで、棺と飾る花が・・。

参列は、クラウザーにウィンツと、そしてウォーラスの従兄弟。

Kは、ウォーラスの着替えから全てを行い、棺に寝かせる。

レクイエムを歌い祈りを捧げるのは、マリーを近くに居るリュリュ達に預けたライナだ。

ウォーラスの遺体と直面したクラウザーは、嘘び泣くままに涙を隠さず。

「・・・、ウィンツ。　お前、なっ何か・・話したのか？」

「はい・・。　ウォーラスさんは、最後まで親方の事を頼ってました。　全てを親方に預けれた事も、罪など全てを引き受けた事も含め、自分に悔いは・・無いと」

「あ・あにさん・・・」

クラウザーの口から、修行時代の頃の言葉が迸る。

棺に縋る様に身を崩すクラウザーに代わり、俯くウィンツの脇に来たのは・・従兄弟の男性である。　６０を過ぎた苦労人の様な顔で、涙の跡が残るままに。

「義兄(にい)さんから、鍵を預かったそうだね」

「はい・・。　朝方に」

「そうか。　その鍵は・・・ウォーラス義兄さんが、託す相手が居無いと・・。　墓場まで持って行くしかないと言ってた鍵だ。　今では病気を患い・・身体の悪い私では、その鍵で封された船は操れないと嘆いてた。　でも、クラウザーさんの弟子なら、貴方なら大丈夫だろう。　どうか・・義兄さんの代わりに・・あのマピューラを復活させてくれ」

「マピューラ・・。　あの・・・蒼い船体の船の事ですか？」

すると、クラウザーが顔を上げ。

「ウィンツ・・おお・覚えとけ。“マピューラ”ってのはぁ・・、在る場所の海で・・満月が二重にも三重にも映る現象だ。　海面に映る月が・・海の・・・青さを薄っすらと宿す。　あ・・あにさんの・・一番好きな・・海の神秘よっ」

泣き声で教えてくれたクラウザーを見つめたウィンツは、再び鍵を握り締めて。

「はい・・、心に刻みました」

ウォーラスの墓の管理は、従兄弟の男性とクラウザーが引き受けるという事に成った。　知り合いの多いクラウザーだ、嘗てのウォーラスの部下だった船員にも顔が利く。　それが一番いい事だろう。

多くの理由も聞かず、葬儀を手伝ってくれたライナ。　墓に納棺する前に、眠るウォーラスの死に顔を見て。

「とても安らかな御顔ですね・・」

と、だけ。

クラウザーは葬儀を終えると、従兄弟の男性と語り合い。

「カラス。　年明けの後も、３日は逗留すると決まってる。　やるべき事がまだ在るなら、ウィンツを頼むぞ」

と、船に戻って行く。

従兄弟の男性とも別れたK達。

思いを鍵に託したウォーラス。　それを受け取ったウィンツは、鍵を見つめながらKに聞いたのだった・・・。

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K編も、残す所1・2話に成りました。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？

K長編・秘宝伝説を追い求めて～オリヴェッティの奉げる詩～第1幕

≪運命を預かった紡ぎ手は、朽ち掛けた夢を動かし廻らせる≫

クラウザーと従兄弟の男性が去った。　墓の入り口の脇に広がった所には、溶けないままの雪が集められた。　そこに立ち竦むウィンツは、預かった鍵を見て。

「なぁ・・。　どうして・・ウォーラスさんは、俺なんかに鍵を・・。　大事な船を、預けてくれたのだろうか。　俺が、親方の弟子だからか？　それとも・・、もっと大きな理由が在るのだろうか？」

と、Kに聞いた。

鍵を見つめるウィンツを、静かな眼差しで見つめるK。

ライナは、自分が此処にはもう不要だと理解し。

「ケイさん。　では、私はこれで。　マリーが心配なので、お先に皆様の所に行かせて頂きます」

そう言ったライナを見ずに、Kは頷き。

「ありがとう、余計な詮索無くやってくれたから、滞りも無い。本当に、助かった」

微笑むライナは、

「ま。　貴方から、その様に丁寧なお礼が出るとは・・。　少し、助けられた借りを返せましたわね」

と、頭を下げて。　そして、墓地の外へと行く黒いバラを模ったアーチゲートを潜って行く。

ライナが消えた後。

「・・・」

鍵を見続けるウィンツに。

「全てを語る時は、ウォーラスに無かったが・・」

と、Kは、再び言葉を紡ぎ出す。

ウィンツは、Kに向く様に顔を起こす。　ウォーラスの意思を、少しでも多く知りたかったからだ。

腕組みしたKは、墓場の古い墓石などを眺めながら。

「ウォーラスの弟子にその船を預ける事は、様々な弊害を及ぼす。最も腕が良く、しかもウォーラスと関係の薄い者・・。　そして、

その鍵で封された船を預けるに足りる気持ちを持った男・・。　それは、限られた出会いの中で、ウォーラスにはアンタしか居無かった訳だ」

「・・、そ・そんなに・・・複雑な事情が？」

「あぁ」

「頼むっ、お・俺にも・・・解る様に・・」

Kは、ゆったりとした仕草で頷く。

二人は、墓の外側の遊歩道を歩く。　墓地の外周に植えられた樹木を巡る遊歩道だ。　道路は古いレンガを敷き詰めたもので、歩道の左右には木々が間隔を開けて植えられていた。　桜や、牡丹など様々な木々が、いまだに雪を被って歩道に並んでいた。

遊歩道を歩き始めたKは、雪に埋れかかった枯れ草と歩道の境を見下しながら。

「ウォーラスの家と、クラウザーの奥さんである女性の複雑な環境は、前に語ったよな？」

「あぁ」

「俺が事件の裏を暴く直前・・。　その頃のウォーラスは、大変な量の運航船を扱ってた。　恐らく、普通の船の倍の量が課せられていただろうか・・。　ん、そう思ってくれていい」

「なんでまた・・・、そんな量が？」

「実は、クラウザーの奥さんの実家である商家と、ウォーラスの実家の商家が統合を画策し始めていた。　より、効率的に。　より、一括した手広い商売。　要は、勢力拡大戦争みたいなものだ」

「では・・その両方がウォーラスさんを頼って？」

「そう。　仕事の過多で金は入る。　だが、金で新たに船を増やせど、厳しく過大な運行量により、船を任せるだけの腕前を持った船長を育てると云うか、後輩指導が行き詰まっていた・・」

そこだけ聞いただけで、ウィンツには、それが見えるかの様に解る。
幾ら仕事を覚えても、有能だからと一気に船長とは行かないのだ。
登録とか、そうゆうものでは無く。　船長として行う仕来りも有るし、付き合う関係に顔見せの様な事も有る。　見切り発進の様ないい加減な判断では、それこそ、自分の様な者を増やすだけだ。
船長として船を預かると云う事は、動かす全てを半独立した立場で行う事なのだ。

更に、船を多く持てば持つほどに、その運行から管理も忙しく成る。
それを束ねる船団長ともなれば、船長として自他共に認めれるだけの見極めも無いままに、忙しいからと誰かに船長を遣らすなど行く訳も無い。　次々と船を出して輸送を行わなければ成らないウォーラスは、相当に神経を使ったはずだろう。

Kの続ける話は、ウィンツの推察を裏付けしていた。

「アンタなら、その意味が解るだろう？　何せ、間違いが許されない日々の連続で、ウォーラス自身が精神的に追い詰められたんだろう。　酒の量も増えたらしいし、船員に必要以上の大声を上げる事

も珍しく無かった・・。　処が、逆に仕事を頼む双方の商家は、ウォーラスを自分の勢力下に取り込み、相手の足を奪おうとする根回しなども、その頃にし始めていたらしい」

「なんて事だ。　それではっ、ウォーラスさんは・・ますます板挟みじゃないかっ？」

「その通り。　俺が事を暴いて、両方の商家はバラバラに成った。　ウォーラスは、本音で清々した部分も在ったらしい。　開放と云えば、確かにされた形だからな」

「・・」

ウィンツは、なんとなくその意味が解る気がした。　だが、納得が行くと云うよりは、何とも気の重い事だと思える。

Kは、ウィンツの持つ鍵を見て。

「アンタの預かった船は、ウォーラス本人が操っていた船だ。　それが故に、もし・・ウォーラスの直属の弟子だった誰かが、その船に乗る事になれば・・。　事件前からの誼を伝に、事件でバラバラに成った商家の連中が言い寄って来るとも限らない・・だろう？　ウォーラスが一手に引き受けていた取引先を突っぱねる事は、ウォーラスの弟子で、それを上手くあやし切って船を動かせるヤツが・・ま、見当たらなかった。　それが、大きな理由の一つ」

「・・・なるほど。　ウォーラスさんも・・それは悩むな」

Kは、ウォーラスの身に成った様子で悩むウィンツを見て。

「でも、他にも理由が在るんだ」

「他にも・・か？」

「あぁ。　ウォーラスは、自分の師匠に言われてた。“困ったら、クラウザーを頼れ”、と」

「あっ、それは・・。　でも、それが理由なのか？」

ウィンツに緩く笑むK。　ウィンツは、その笑みが解らなかったが・・。

「アンタは、クラウザーの弟子だ。　壊れていても自分の船をクラウザーに預けるのは、過去の色々な事や、自分の嘗ての弟子が居る手前にも難しい。　だが・・、その弟子で無名のアンタなら、気兼ね無く頼れて納得が出来る。　自分が負けを認めた男の、優秀な弟子・・・。　遠回りにウォーラスは、師匠の教え通りにクラウザーを頼ったんだよ。　アンタは、今朝死んだウォーラスから見ても、クラウザーに似た腕の在る船長って事よ」

そう言われたウィンツは、気恥ずかしさと共に、ウォーラスの気持ちを汲み取る思いから心が揺さぶられて俯き。

「からかうなよ・・。　俺は、そこまでは・・」

Kは、更にからかう様に。

「んなら、鍵を捨てるか？」

と、投げ掛ける。

ウィンツは、思わずパッと顔を上げ。

「誰がっ」

その怒った顔を見ると、Kは笑って。

「はは。　多分捨てたら、アンタはクラウザーにぶちのめされるゼ」

どこまでも気持ちを見透かされたウィンツは、やや不貞腐れた様に後頭部を掻く。　そして、鍵を見ると。

「とにかく、船を直す金を作らないとな」

此処で、大きく一つ頷いてKは立ち止まり。

「なら、作りに行こう。　疾風船団復活の選別ぐらい、俺がくれてやるさ」

簡単に言ったKだが。　同じく立ち止まるウィンツは、Kにムズムズと歪む不安な顔を向けて。

「おいおい、簡単に言うなよ。　あの船は、今でも最も高価な魔力高速船だぞ？　壊れた修理費を軽く見積もっても・・そう、１００万シフォンは必要だ。　そんな金、何処に有る？　幾らアンタでも、数日で作れる訳無いだろう？」

１００万シフォンとは、凄い大金だ。　確かに、余程の金持ちでも無いなら、そんな金など持ち合わせる訳が無い。

しかし・・・。　Kは、ニヒルな笑みを口元に浮かべ。

「俺に付き合え。　金ってのは、有る所には有るモンなんだよ」

ウィンツは、そんな金をKでも用意出来るとは思わなかった。

（ウソだろ？）

それしか、頭に浮かばなかった。

★

昼。

Kと合流したオリヴェッティ達。　甘い物を食べさせる店に、全員が集まっていた。

「ひゃ・ひゃひゃひゃ・・・百・・ひゃ・百・・・」

百万シフォンを作りに行くと聞き、ビハインツは気絶しかけて目を回していた。

ビハインツをツンツンするリュリュ。

代わって。　席に座り、甘いタルトとアップルティーの湯気を見るルヴィアは、大きなため息を出してから。

「・・、で？　一体、何をして金を作るのだ。　百万など、簡単に作れる額とは思えないが？」

Kは、腰のサイドパックを指差し。

「ホレ、このメダリオンと宝剣が在るだろうがよ」

ハッとするオリヴェッティは、吹き出しそうになった紅茶のカップを口から離し。

「あ・あの・・ガラッドですか？」

「そうだ～。　あのメダリオンは、フツーの物じゃ～無いって言ったはずだ。　この街ぐらいのオークションに出せば、その存在価値や歴史的価値を理解したアホウが居るからなぁ～。　恐らく、１００万を超えて来る可能性も・・」

と、紅茶に手を伸ばす。

Kの口から途轍もない額が軽く出たと思うウィンツは、首を捻りながら。

「そんなに凄いものだったのか・・。　だが、そう上手く行くか？」

紅茶を軽く含んだKは、カップを置きながら。

「その筋に偉いマジなコレクターを知ってる。　そいつに、これか

ら持っていこうと思う」

マリーを抱えるライナは、Kの人脈の広さに目を丸くしながら。

「その方は、そんなにお金持ちなのですか？」

「あぁ。　マジで、ふざけてるぐらいに金を持ってる。　何せこの街で、貴族や商人だけに開放する会員制の個人オークションを主催するプラーノだからな」

ビハインツは、ルヴィアに。

（な、プラーノって・・何だ？）

ルヴィアは、そんな事も知らないのかと云う顔をビハインツに向けると。　同じく興味津々と云った顔のリュリュが居て、仕方ないと思いながら。

「オホン。“プラーノ”とは、大っぴらに誰でもに物を売る者とは違う売り手の事だ。　特に、オークションや、高級品などのみを扱う会員制商売をする秘密商人を指す。　ま、中には、小口の商人や仲買の上に立つ大商人も、そう自称する輩が居るがな」

ケーキを食べたKは、ルヴィアを指差し同意を示し。　紅茶でケーキを流した後に、話の後を繋ぐ様に。

「・・、その通り。　・・、他には、個別に特別注文を受けての個人取引をする商人も指す」

聞いていたウィンツは、なんとか理解出来る範囲で情報を纏め。

「では、つまりは・・オークションを主催する商人に、そのガラッドを売り込もうと云う訳か」

「そうだ」

しかし、ルヴィアは難しい顔をして。

「だが、知り合いと云う御主は、その商人と面識以上の付き合いでも在るのか？　それだけの商人ならば、警備に当たる門番から、用人や護衛する剣士なども多いだろうに。　真っ向正面から出向いて、面通しして貰えるのか？」

Kは、ルヴィアの意見などクソ喰らえとばかりに。

「さぁ～、本人とは結構面識あるが・・。　咎められたり、面会拒否喰らうなら、ウゼーの蹴散らせばイイ話しだと思う」

と、またケーキを食べる。

リュリュを除く全員は、

“正面から強行突破もします”

と、云ってるも同じKの言動に青褪めた。

面白そうと喜ぶリュリュは、Kにズイっと近寄って。

「ねねっ、それってパァ～っと行くって事でしょっ？！！」

「・・うむ」

「わぁ～い、突っ込もう～」

喜ぶリュリュに、ルヴィアが。

「意味が違うっ、何をする気だっ?!」

やや安穏とした様子のKは。

「大丈夫だろ。　どうせ、悪い事する訳じゃねぇ～し、盗みや奪いに行く訳でもねぇ～しさ」

そんないい加減なKの言い草を見たオリヴェッティは、背筋がガクガクと震える。

（あぁ・・、怖い。　貴方が強引に出向いて商談など・・、この世で一番悪質な押し売りだと思いますわ・・・）

そんな皆の驚きや脅えなど知らん事のKは、紅茶を残すのみとなり。
窓に仕切られた外の大通りを見て。

「つ～か、売り込む相手はウォルターのアホゥだぜ。　業つく学者貴族の野郎なだけで、大して凄いヤツでも無いぞ」

と、ぞんざいに言うのだが・・・。

オリヴェッティは、名前を聞いて直に目を丸くして。

「え〝っ?!!　た・尋ねるって・・ウ・ウウ・・・ウォルター・・

アイゼンハワード・バスチューナ様なんですのっ？！！！！」

と、思わずの大声。

仲間の皆や客の視線を向けられ、オリヴェッティは、“あ〝っ”っと思わず自分の口を手で塞いだ。

ウォルター・アイゼンハワード・バスチューナ。　齢１２歳で当主となった侯爵で、その若き頃の芸術的な才能は、紛れも無い天才と謳われた。　演劇・歌劇・指揮者に、リュートやピアノ演奏者・画家・・と、その才能の美的感覚は、更に食にも通じるとか。　２０歳で、初の大掛かりな大舞台の全てを取り仕切り、マスター・ウォルター“完璧なウォルター”と絶賛されたのである。

彼は、３０過ぎから美術品などの収集家としても頭角を現し、金を集める為にオークションを主催する事にしたのだ。　だが、その目利きの鋭敏さから、数々の贋作を見破り。　贋作を売りまわる悪党組織から狙われた経緯も持つ。

オリヴェッティに説明を受けたルヴィアは、Ｋにやや身を乗り出し。

「そのウォルター殿とは、お幾つほどに成るのだ？」

「さぁ～。　７０はとっくに過ぎたジジィだぜ。　ま、見た目は５０過ぎにしか見えないだろうがなぁ～。　野郎のカリスマ性には、未だに美女が吸い寄せられるとか・・。　愛人の数、幾ら居るか解らんね。　それこそ、一夜を共にした女の数なら、キラ星と言ってもいいんじゃないか？」

ルヴィアは、何でそんなウラ話まで知っているのかが気に成る。

「随分とウラ事情に詳しいな・・。　一体、どうゆう関係なんだ？」

「フッ、気にするな」

Kのお得意が出た。

★

と、云う訳で・・・。

Kを先頭に、一同は大きな屋敷の正門前に来た。　貴族や商人の一部のみが住み暮らせる、上流階級のみが犇く区域の一等地である。

「なんと・・大き過ぎるだろうが」

と、頭を抑えて言ったルヴィア。　その左右に見渡す限りに続くスカイブルーの外壁をした建物を見て、自分の育った立派な屋敷が掘っ立て小屋に思えた。

腕組みし、屋敷を見回すKは。

「ったく、金有るよなぁ～。　毎度見ても、この屋敷のデカさはアホらしい。　人一人が住むのに、このデカさが必要か？」

Kの脇に居るリュリュは、もうやる気十分で。　風のオーラを漲ら

せるままに、

「ケイさんっ、蹴散らすってこのオウチっ?!!」

慌てたオリヴェッティは、リュリュに抱き付き。

「ち・違うのよ。　蹴散らすのは、オウチじゃないのよ。　はいはい、落ち着きましょうね」

ライナは、自分を拉致したジョンソンを思い出す様で。

「大きな家って、何だか嫌ですわね」

と、マリーをあやす。

ビハインツとウィンツは、似たり寄ったりに固まって突っ立つのみ。

（な・なぁ。　アンタ、１００万できると思う・・か?）

と、ウィンツがビハインツに云えば。

（わか・・解らない・・・。　中に入るのも、無理・・・の様な）

屋敷を囲む外壁。　レンガ造りの低めな壁の上に、鉄格子調の槍を模った格子壁が積み上げられている様で。　レンガの壁から、更に人の高さを優に超えて伸びている。

雪が敷地内や、外壁の縁に残るのが見える景観は、決して悪く無いのだが。

先ずは、と、立派な屋敷を見学していると・・。　覗いているのを気付かれたのか、屋敷の玄関が開き。　黒く正装した格好ながら、腰にサーベルを帯刀する大男が出て来た。　ビハインツよりも頭半分高く、逞しい肉体は、鎧を下に着込んでいるのではないかと思う程。　鍛え上げられた胸板の厚さは、圧巻と云うか流石である。

その後、背の低い背むした小男も出てくる。

「出て来た・・」

ルヴィアが云うと。

「お前達、何者だ?」

と。　先ずは、お決まりの様な文句が聞え。　先に遣って来た大男が、門越しの向かいに対峙した。

Kは、物怖じをする気配も無く。　何処か謙っている様子も見せず。

「昔、“P”（パーフェクト）と名乗ってた男が来たと、ウォルターに伝えて欲しい。　用件は、古いガラッドの買取を申し入れたい、とな」

大男は、ぞんざいな態度をする如何にも怪しい人物丸出しのKを睨み、ムッとした顔色に変わりながら。

「貴様、我が主を呼び捨てにするのか?　我が主は、この王国でも侯爵に在らせられる名家。　呼び捨てとは、無礼であろうがっ」

しかし、大男の背後に来た背むしの小男は、Kを見て目を細めると・

・。

「ロズウェル、この男達を通せ。　その包帯を顔に巻いた男は、数年前に主を救った恩人ぞ」

威勢良く捲くし立て様としていた大男のロズウェルは、罵声を吐き出し掛けたままに固まった。

Kは、背むした小男に。

「トライド・・だったか？　あの時以来、身体に変わり無いみたいだな」

シルクハットを被り、タキシードの正装した小男なれど。　髪は白く、鼻は潰れ、そして皺くちゃの肌。　どう見ても、老人である。

ロズウェルと呼んだ大男の前に出る背むし男のトライドは、格子門の鍵を外しながら。

「お恥ずかしい話し、ウォルター様に雇われましてな。　それ以来、この通り元気に・・・」

「ははっ。　ウォルターの命を狙ったアンタでも、義理人情は理解出来るってか？　だから、前に言ったろう？　ウォルターは、暗殺するに意味の有る人間じゃないってな」

執事か召使の様なトライドとKの会話に。

「え〝っ？！！！！」

と、真っ先に驚きの声を上げたのは、大男のロズウェル。

だが、トライドと云う小男は、深く頭を下げ。

「御仕えいたしまして、その意味が解りましたよ。　ささ、中へ。
ウォルター様を特別扱いしない稀少な気狂いは、貴方ぐらいですからな」

開かれた門に進み出すKは、然して怒る様子も無く。

「言われたな、コイツは」

先に行くKとトライド。　その二人を見て、どうしていいものか解らぬままに立ち竦む一同。

Kが離れたので。　ルヴィアは、大男のロズウェルに。

「我々も・・入って良いのか?」

ポカ～ンとするロズウェルは、カクンと頷くのみだった・・・。

・・・。

その素晴らしい豪邸たる中のロビーだけで、ビハインツは気絶しかけた。　青を基調に、白を使って明るさを窺わせる石の柱・・壁・・天井。　吹き抜けたロビーの上は、5階かそれ以上に突き抜けた開放感が望め。　床に描かれた絵は、泉や緑栄える森に戯れる天女や妖精達。　見た事も無い世界が広がって居る様で、理解が付いて行かない。

ロビーだけで、ひっそりとした屋敷一つが入ってしまいそうな広さ

が窺え。　その左右の部屋に向かう扉は、水や氷を表す絵を描いた見事なもの。　扉を開いた次の部屋は、一体どうなっているのか・・。　胸高鳴る期待感すら思わせる。

「す・すげぇ・・・」

呻く様に言ったウィンツも、自分の価値感覚が崩壊しそうな趣を見て、もう只只に圧巻としか思えなかった。

ロビーで待つK達に。

「おぉっ、其処に居るのはっ！！」

と、低音な男性の声が聞えた。　ただ、その声はやや老いが含まれる様だったが。　響き、発声、アクセントのどれを取っても、思わず相手を見てしまいたく成ると云うか。　劇場で役者が言う台詞の様な感じがした。

声を辿る様に、ロビー奥の優雅な螺旋大階段を見る一同。　丁度、踊り場がロビーと対面で作られている場に、何者かが居た。

Kは、遠くに見える人物に向け。

「ウォルター、俺にそんな出迎え必要か？」

階段を降り始めたのは、白い正装に身を包む男性で。

「ははは、君は私の恩人だっ。　そして・・、ん～最大のライバルでもある。　その神々しい強さ、その水鏡の如き聡明で鋭敏な感性。　女性に数々愛されたカリスマ性に、冷たき凍るその気持ち。　そ

う・・私が、例えるに芸術や美術的な神に近き者とするなら・・。
君は、戦う・・流離う・・修羅・悪魔に近き神の様な男だっ！
フフ・・、君の顔を見る度に驚かされる。　今日は、私をどう驚かすのだっ？！」

喋りながらKの目の前に来たその人物を見るほかの一同は、７０を過ぎた人物とは思えなかった。　白粉を塗ったような白くさめざめしい肌、気位が高く聳えていそうな気性を思わせる高い鼻、後ろに流す髪は真っ白の白髪なれど。　そのエメラルドの光を宿す瞳は、鋭敏な感性が溢れる様な、まだ鬼気迫る生気を宿していた。　斜めに上がった芸術的な目と眉、体型の崩れ一つ窺わせない身体。　ある意味、完成された彫像の様な人物が居た。

Kは、一枚のガラッドを取り出し。

「大した事をしに来た訳じゃないさ。　アンタの身銭を奪う為に、コイツを見せびらかしに来た」

と、ガラッド硬貨を差し出すのである。

高い位以上に、天才と誉め称えられた貴族ウォルターは、そのガラッドを見て。

「ぬっ！　ぬぬっ！！」

と、二段階に分けて踏み込み。

「おぉ・・まさかこれはっ！」

と、派手な驚きを発しながらKの手からガラッドを受け取った。

金を基本に、純度の高い銀を隙間に鏤める様にして土台を形成し。
表に、魔法を扱う魔術師の勇姿を描き。　裏には、王国の紋章を元にした絵が描かれている。　魔術師の杖、服、帽子には宝石が使われ。　魔法の描きも、宝石で出来ている。　しかも、裏の王家を示す絵にも、ふんだんに宝石が鏤められている。

「ウォルター。　これが何か・・アンタなら解るよな？」

震える手つきでガラッドを見つめる初老姿の貴族ウォルターは、突然に横に向いて頭を抱える仕草を見せ。

「あぁっ、解るともっ！！　我が、同朋よっ。　これは・・超魔法時代に作られた、我が国のキ・ネ・ンっ、硬貨だっ」

一人で興奮したウォルターは、突然に劇場で演技をする様に体を動かし、ポーズを決める。“キ・ネ・ン”の所は、指揮者がタクトを振る様な感じさえ見せた。

それを真似するリュリュは、

「この人おもしろ～い」

と、大喜び。

ウォルターに微妙な視線を送るオリヴェッティは、リュリュを捕まえて。

（ダメでしょ、真似しちゃいけません）

そのウォルターの様子に、何か気狂い染みたものを感じるルヴィアは、Kの脇に寄り。

（この御仁・・頭の具合でも悪いのではないか？）

と、小声で言うと・・。

バッとルヴィアを見たウォルターは、ズンズンと踏み込みながら指を振り込む様に何度も向け。

「見た目の良さに関わらずっ、何たる口の悪さっ！　怪しからんっ、礼儀が成って無いっ、それが貴族の振る舞いかっ？！」

と、来たかと思いきや・・。　突然、紳士的に一礼をして。

「フンっ。　無礼者にでも、礼儀を弁えるのが真の貴族だっ」

と、様を見せ付ける。

Kは、見慣れても呆れる余りに。

「お前の劇場人生は、他人から見たら気狂いだって～の。　それより、フラストマドのがソレ。　後、マーケット・ハーナスのも有る。　それと、ホーチト王国の昔の王家筋の護身短剣が一振り。　３点で、１００万欲しい。　出せないなら・・・」

と、Kが言うのに対し、ウォルターは“喋るなっ！！！”とばかりに、右手を翳した。

「よい・・。　買おうっ。　だが買う前に、入手の経緯を述べよ。

これほどの品だっ、さも・・さもっ苦しき冒険の果てに手に入れたのだろうっ!!　我は、その・・その冒険譚が記憶に・・欲しい」

何処までも演じる劇の様な動きで言うウォルター。

リュリュは、その真似が面白くて止められない。

ライナも、リュリュの動きに微笑むマリーを見て。

「笑ってるわ・・」

脇目でその様子を見ていたウォルターは、素早いターンでマリーに顔を向けると。

「赤子・・だと？　冒険に・・・赤子っ!!　あぁっ、未熟で幼稚な赤子だとっ?!!」

と、大げさに驚く。

だが、Kは。

「ウォルター。　話を聞きたいなら、何処かの部屋に案内しろよ。　それから、赤子は最も神に近い存在だ。　俺達の様に、薄汚れちゃいない」

「なぬっ?!　こっ・このっ!!　この赤子がぁっ?!!」

「お前、いっぺんは認知して子育てでもしてみろよ。　純真無垢で、穢れを知らない頃の赤子は、女を強く変える要素を持つ。　男など、女を支えきれないなら只のお下がりだ。　お前が吐き捨てた女も、

中には子供で立ち直ったのも居ただろう？」

「ぬぅ・・・」

「生命の世代を次に繋ぐのは、命だけさ。　その大切な命が、赤子。　ウォルター。　命を育てる苦労でもすれば、今まで見捨てていた演目も演じられるんと違うか？」

カリスマ性高きウォルターは、Kから思いもせぬ言葉を投げられて静止した。　包帯を巻いてから、Kと深く語り合った事が無かったのだ。　彼の目から見ても、Kが変わったと思えた。

★

応接室に通された一同。　何処の大ホールかと思える広さは、もう想像の届く所では無かった。

紅茶を飲むKは、壁画が描かれる天井・・絵ばかの壁を見て。

「このムダ屋敷、貴族や商人相手の宿にし腐ったら、結構儲かるんと違うか？　まぁ～ったく、無駄、無駄、無駄の限りだな」

と、平気で云う。

その時。　奥の扉を開いて遣って来たウォルターが、K達の居るソファーに辿り着くまでに少々の時を要した。　それ程に、この部屋

の横は長かった。

「よしっ。　では、聞こうか！」

手を何故か意味深に仰ぎ上げるウォルター。

リュリュは面白がって真似するし、マリーは少し笑う。

もう慣れたとばかりに薄目を向けるKは、ウォルターに向かって。

「ウォルター、時間を取らせるのは構わないが。　夜まで世話しろよな」

すると、鋭い目をKにギラリと向けたウォルターは。

「フンっ、そうなるなら、当然だ。　そのぐらい、赤子の分まで含めて面倒を見るっ。　それより、経緯を話せっ」

全く老人っぽく無いウォルターに、だんだん慣れて来たビハインツは。

（世界で稀に見る狂人かもな・・）

と、思う様になり始めた。

幽霊船の話しのみならず、Kは秘宝の事まで語ってやる。

優雅に足組みし、やや斜に構えた態度で聞くウォルターは、実に静かなままに話を聞いた。

そして、話が終り。　紅茶を啜るままに余韻に浸ったと思いきや・・。

「先ず、何よりも素晴らしきっ。　出会いっ、冒険っ、人の織り成す人生っ。　全て、全てだっ！！　全てに於いて、同朋よ。　君は、エクセレンッテッ！！！」

丸で、指揮者がタクトを振り上げる仕草・・。　真似るリュリュは、何度も繰り返し。　オリヴェッティとルヴィアに止められていた。

しかし、もうウォルターは自分の世界に入っていて。

「あぁ・・秘宝を探す、壮大なロマンっ！！　海旅族は、古代史に残る反逆の海賊とも謳われる。　だがっ、各地に残るはっ、遺跡を壊してまた遺跡を造ると言う矛盾っ！！　東の大陸に見られる古い遺跡の数々を見るに・・・。　一国の主張する事が正史と成るのは、強者の歴史が正しいと言う歴史の一面を窺う行為に過ぎん。　一つの手掛かり、一つの真実は、歴史を覆すかも知れない。　是非、是非に終わったら、私に旅の経緯をお聞かせ願いたい。　旅の成否に限らずだっ」

と、鋭い仕草でオリヴェッティを指差した。

「え？」

オリヴェッティは、突然に言われて驚く。

「あ・あのっ、ケッ・・ケイさん？」

どうして良いか解らず、反射的にKを頼る様に見るオリヴェッティ

だが・・。

「イイんじゃねぇ～の？　コイツ金と暇を持て余してるし。　御代でも貰って、長々と聞かせたれよ」

その少し気の無い言い方は、何ともいい加減なもの。

「は・はぁ・・・」

オリヴェッティは、コレしか言葉が出せなかった。

するとウォルターは、Kに手を差し伸べる様にして。

「しかし、貴様だっ。　幽霊船を壊滅させ。　その中に在った宝を持ち帰るっ!!　今・・この世界に居る冒険者達でも、同朋よっ。　貴様と同じ事の出来る者は少ない。　ん～、限りなく、少ないっ。　しかも、極悪人を始末し、こんなにも多くの人生を光へ導く・・・。　全く、全くっ」

感動しているのか、目頭を押さえて俯くウォルターは、何とも見ていて面倒な人である。

しれ～っと紅茶を飲むKは、カップを差し出し。

「しかしよ、お前。　一つまみ数百シフォンする紅茶を、此処で出すか？　そんな暇なら、冒険者にでも成れよ。　お前、カクトノーズで魔法の修行もしたんだろう？　魔想魔術と、“異端”使えるんだしさ」

その話に、ウォルターは即座に反応し。

「おーっ、貴様と云う男はっ」

凄い高額な紅茶を飲んでいる事に驚く一同は、Ｋの言い方にウォルターが怒ったと思う。

しかし、Ｋに伸縮可能な杖を伸ばし、ズィっと先を向けるウォルターは、ズバリと。

「其処だっ！！！　其処が、貴様は他と違うっ。　他の者なら、私の才能に敬意を払い、そんな事は言わないっ！！　冒険者っ、はっ！！！　この私がっ、７０を超えて今にっ？！！！　それも良かろうっ！！　ならっ、明日に斡旋所に行こうではないかっ！」

一気にとんでもない話に飛び火し、大慌てで一同が混乱。

「おいおいっ、話がどうなってるっ？！！」

と、ウィンツは驚き。

「いえっ、そっ・そそ・・そんな滅相なっ？！！」

「真に受けるのは止めてくれっ！！」

と、慌てるオリヴェッティとルヴィア。

一人。　やんや、やんやと嬉しそうなのは、リュリュのみ。

しかし・・。　人の話など聞いちゃ居無い様子のウォルターは、今度はウィンツを睨む様に見返し。

「それにしても、あのウォーラス殿から鍵をっ？　その手に託される者が・・この私の前に金を求めに来るとは・・。　フン、真に愉快っ。　１００万など、ガラッド二つ交換でくれてやるわっ」

このウォルターの態度に、今度はKやリュリュ以外の皆が時を止めた。

Kは、事情を全て知るだけに。

「そういや・・、アンタはどっちとも知り合いだったな？　クラウザーとも、ウォーラスとも」

ウィンツは、初めて聞く話に、二人を交互に見る。

ウォルターは、天井の壁画を見上げ。

「そうさっ。　私は、二人の師であるサミュエル船長と昵懇の仲だった・・。　我は・・若くして姿を隠しっ、魔法学院へ入学っ！！　また時には姿を隠しっ、別国の姫君との恋愛っ！！　私の青春の忍び旅は・・、あの船長によって成し得たと言って良かったっ！　そう、良かった・・・」

最後に何処か、しみじみと偲ぶ様子を窺わせるウォルター。

ウィンツは、朝のウォーラスを思い出し。

「貴方は、俺の親方やウォーラスさんとも・・」

「そうだ。　その大きく広き心・・。　クラウザーとはっ、称して

その通りの海の様な、山の様な男よっ。　代わって、その突き進む気持ち・・、時代を切り開く行動が風の如きウォーラスっ。　二人は、確かに一時代の海に似合う男だったっ！！」

此処で、ウォルターは素早く指先をウィンツに差し向け。　突く様に何度も指し示し。

「その二人が認めた君っ！！！　金は遣るが、名を汚すなよ？　良いな、良いなっ？！」

と。　その最後の言い方は、貴族のソレそのままであり。　脅迫と云うか、何処か強く約束する事を思わせる言い方だった。

「はい・・。　肝に」

一礼をしたウィンツは、自分が狭い世界で動いていた事を見せられる様だった。　確かに、これ以上自分を粗末には出来ない気がした・・。

ルヴィアやオリヴェッティは、ウォルターと云う人物は、

“只の狂ったジサマ”

では無いと解る。

（変わった老人だな）

（えぇ・・。　でも、仲間になんて・・・、あぁ・・どうしたら）

（嫌なのか？）

（ルヴィアさんっ。　リーダーは、私なんですよっ?!）

（フッ。　ケイ殿が居るチームだ、それぐらいの苦労は必要であろうに）

（んっ、もうっ。　からかわないで下さいませ・・）

オリヴェッティは、ルヴィアにまでからかわれて困る。　ウォルターの様な人物が加わってしまったら・・、自分はどうしたらいいか更に困る。　リュリュだけでも大変なのに、ウォルターなど居たらと思うと・・。　もう想像を絶してしまう。

ルヴィアは、困るオリヴェッティを見て微笑んだ。　予測の付かない今が、他では味わえない特別な今の様な気がしたからだ。

ビハインツは、紅茶を遠慮する事も恐れ多いし、飲み切るのも勿体無い気がして、カップを持ったままに思案のしっ放し。

ウォルターの真似をして喜ぶリュリュと、それを微笑み見るライナや笑うマリー。

どうやら、動き出す冒険の船に乗る面子が決まりつつ在った・・。

さて、しかし・・。

冒険とは予測の付かないドラマの連続である。　しかも、最強のトラブルメイカーにして、処理者のKを伴い。　オリヴェッティの旅は、一体どうなるのだろうか。

明日の風は、どう吹くのだろうか・・。

オリヴェッティの奉げる詩～第１幕＝完＝

K特別編　秘宝伝説を追って　第一部　？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

K編がやっと終りました。

次は、セイルとユリア編ですが、資料の纏めが難航しているので、ウィリアムの短編を挟んで、掲載致します＾＾；

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

超不定期特別で奇跡な座談会？（ウソです）　2

エターナルの外伝的な座談会。　今回は、Kさんが主人公です。
パラレルワールドならではのおバカ劇をお楽しみ下さい。（作者）

東京都内の某所喫茶店にて、知人からバイトを頼まれたKさん。
そこに訪れる“きゃらくた～”との他愛ない会話。
物語は、K編3部の終わった直後。　場所は、都内某所。

登場人物

K

作者（ゴミレベルのアホ）

ポリア

システィアナ

ジュリア

匿名係

エロールロバンナ

何処かのおじ～さん

ゴルドフ

他、数名。

喫茶店“えろ～る”。

如何わしい宗教信者のエロールロバンナは、東京都内に店を構えていた。新興宗教団体“ケ●の穴”に入信している変わり者である。

“ケイちゃぁ～ん。チョット会合で二・三日店空ける事に為ったのぉ～。ね、バイトしていってよぉ～。売り上げあげるからぁ～”

カラダを左右にクネらせるエロールロバンナに頼まれ、仕方なく店に立つ事にしたK。

「いらっしゃい」

包帯を巻いた顔はそのままに、衣服はカジュアルシャツに黒いジーンズ、黒いエプロンをしてやる気の無さそうなマスターを演じていた。

（ったくよぉ。　作者のＢＫ、最近違う性癖にでも目覚めやがったか？　エロールが、思いっきりカマじゃないか・・・。　気色の悪い・・・）

入って来た客に声を掛けながら、一昨日に貞操の危機を覚えた事を思い出すＫ。

先月、作者を伴って銀行に突入した御蔭で、銀行強盗と間違えられた。　ま、警察沙汰は半歩手前で未遂に終ったものの。　精神に大ダメージを受けた作者は、

“伊豆へ行く・・・”

と、言葉を残して姿を消したまま音沙汰が無い。

コーヒーを煎れるＫは、目の前のカウンターに座った老人の客に。

「何にしますか？」

と、聞くと。

黒い部分が殆ど失せた白髪の髪を、四方八方へと爆発させた様に乱す老人は、Ｋの背後に在る棚に並べられた世界各種のコーヒー豆を見ながら。

「うぅ～ん、そぉ～ねぇ～・・・アタシに似合いそうな“ぐぅあてマラ”を」

「はい、では少々お待ちを」

サイフォンを使ってコーヒーを作ろうとするKは、

（来る客も変わってる・・・。　何処が似合うのか解らんが、何で“マラ”だけ巻き舌なんだよ）

だが、その老人の客にコーヒーを出す頃。

「済みません。　失礼します」

と、真面目な口調の誰かが扉を開き。

「杉〇さん、お店に入るのに挨拶要ります？」

と、若い雰囲気の男性の声がした。

「いらっしゃい」

Kが向けば、オールバックに眼鏡をした小柄な中年・・いや、もう少し上とも見受けれる男性と。　真ん中で前髪を分け、化粧をした様に白い肌の３０そこそこと思える男性が、共にスーツ姿で立っていた。

Kを見て、眼鏡を掛けた男性の方が目を大きくさせ。

「あ、神〇クン。　マスターが変わってますね」

と、Kに人差し指を向ける。

二人を見たKは。

「エロールなら数日居ないゼ。　会合だって言ってたな」
眼鏡をした男性は、どこかはにかむ笑顔で、左手を前に出し。
「あっ、そうですか。　いえ、毎日此処のコーヒーを飲むのが、私の日課でしてね～」
Kは、どうでもイイとばかりに。
「そ。　で？　飲むの？　飲まないの？」
「あ、コレは失礼。　コーヒー、レギュラーとブルーマウンテンで」
「解った。　好きな席に掛けて～クダサイ」
新たに豆を挽く作業に入ったKだが、其処に別の客が。
「あら、本当に居たわ」
少し低めの通りの良い女性の声である。
「いらっしゃい・・・、て。　何だ、ジュリアか」
白いパンツスーツに身を包み。　胸元だけ谷間が見える所までブラウスを開き、輝くダイヤペンダントが眩しく見える。　顔の美貌も然る事ながら、そのスタイルの良さもまた素晴らしい美女である。
だが、Kは一瞥しただけで、コーヒーを作る作業に目を戻す。
「何だとは、随分と釣れないな。　そなたが来てくれないから、べ

ットの隙間が淋しいのだ。　エロールからメールを貰って、此処に居ると云うから逢いに来た」

と、Kのまん前の席に向かうジュリア。

「あ、そ。　つ～か、エロール何処に行ったんだ？」

ストゥールに腰を下ろし掛けたジュリアは、怪訝な面持ちで。

「え？　知らぬのか？」

豆を挽くKは、知らされてないので。

「おう、会合に行くとか何とか・・・」

ジュリアは、腰を下ろすと。

「見合いだ」

その一言に、Kはピタリと手を止め。

「カマが見合いぃ～？　桜のバイトとかか？」

「いやいや、その・・・同じ趣味同士のホットな見合そうだ・・」

Kは、周りを見て恥ずかしそうに云うジュリアの、“ホット”と云う言葉に、凄まじく卑猥な響きを感じ。

「あんのアホウ、帰って来るなっ」

と、エロールに対して苦虫を噛む顔に為る。

ジュリアは、少し顔を赤らめながらも汚い話だと云う雰囲気で。

「何でも、ヘルダーから紹介して貰ったとか」

「はぁ？。　ヘルダーって、新宿で焼肉風俗店を経営してるアイツ？」

「らしい」

「ジュリア、お前さん警察官だろ？　付き合う仲間、少しは選べよ」

すると、ジュリアはジトっとした目をKに向け。

「そなたが傍に居らぬから、こんな店に知り合い求めて通うのだ。ケイ、生活の面倒は見る故、私のマンションに来ぬか？」

ブルーマウンテンの豆を挽くKは、呆れた笑いで。

「おいおい、俺はヒモに成るのかよ」

「ヒモでも縄でもロープでも良い。　私の傍に縛られてくれるなら」

ジュリアを視界から外したKは、奇妙な寒気を覚え。

（縄だのロープだのが違う響きに聞こえるのは、俺だけか？）

その様子を見ていた眼鏡をしやや小柄のスーツ姿の男性は。　テーブルで向かい合う化粧をした様なスーツに男性に、密やかな小声で。

（神○クン、痴情の縺れですかねぇ。　事件の予感がします）

（杉○さん、他人の事ですよ）

（スイマセンねぇ～、細かい事が気に成ってしまう。　僕の悪いクセですねぇ～）

と、云う眼鏡を掛けたスーツ姿の男性の目が。　何故かエロ目に成るのか。

（全く、好きですね）

一緒の化粧をしている様な男性は、呆れて水をコップに注いだ。

さて。

Kが、二人のスーツ姿の男性にコーヒーを作り終えた直後である。

「えぐっ・・えぐぅぅ」

泣きながら入店する客が現れ、Kがその客を見ると・・・。

「あ？　作者・・ってアンタっ！　何でトランクスにランニング一枚なんだよっ！！！　今日は、東京でも気温５℃とかの真冬だぞっ？」

デブでチビでイカ臭くて、うだつが上がらないオタクな作者が泣きながら入って来た。

「うえぇぇ～ん、お茶ぁ～」

Kは、呆れた様子で。

「おいおい、此処はコーヒー専門だってよ・・」

「びえええーん。　お客なのにぃぃぃっ！！！」

一気に喚き泣き叫ぶ作者。

Kは、その丸裸一歩手前の姿をみて。

「ってか、アンタ何で全身土で汚れてるんだ？　見るからに金も持って無さそうだし、客じゃねぇ～だろうが。　あ？」

作者のその弛み切った身体の情けなさに、ジュリアは他所を向き。

（醜い・・・、見たくない）

と、ボヤく。

すると、作者は泣きながら。

「わかぁったぁぁ～。　んじゃ～歩いて帰るぅぅ」

Kは、またこの格好で外に出るのかと驚き。

「うぉーいっ！！　お前の実家って千葉の片田舎だろっ？！！　その格好で行く気かぁっ？！！」

「うえぇぇぇ～ん。　だぁってぇ～」

Kは、仕方無さそうに濡れた手ぬぐいを用意し出しながら。

「い～から、此処座れ」

と、ジュリアの一つ席を空けた隣に招く。

「あい・・・」

３０半ば目前のオッサンが、オヤジ狩りにでも遭ったのかと云う感じの無残な様子。

Kは、濡れたタオルをカウンターに置いて。

「伊豆に行ったんじゃ無かったのか？　ホラ、身体拭け」

「えぐ・えっぐ・・・、ありまと」

「“ありがとう”だろが。　んで？　一体何が有ったんだ？」

身体を拭く作者は、トランクスの中にまでタオルを入れ。　それを見たジュリアが驚き、Kの用意した御絞りを投げ付ける。

「バカっ！！　汚い事するなっ！！」

鼻水を垂らす作者は、痣も見える顔を俯け。

「いいんだぁ～、どーせ僕なんか」

ジュリアは、半ケツ出して身体を拭く作者から顔を赤らめそっぽを向き。

「そうゆう問題じゃ無いわよっ！！！　セクハラじゃないっ！！」

と、女性口調に戻って怒鳴るのだが。

Kは、ジュリアに。

「俺等の作者って、存在自体がセクハラだから意味無いぞ。　セクハラの上塗りしたって、いい所の公然猥褻罪ぐらいだろ？」

ジュリアは、赤く為った顔でKを見て。

「芸能人だって逮捕されるのだぞっ！！」

Kは、怒るジュリアから目を逸らし。　情けない姿の作者を見る。

「んで？　作者、一体どうした？」

身体を拭く作者は、愚図る鼻声で。

「伊豆に・・行ってましたら。　峠で・えぐ・山賊に・・・・」

Kは、ガックリ肩を崩し。

「今時に、“山賊”だぁ？　居るかよ、そんなの」

「居ましたよぉぉぉ。　ゴルドフとぉ～・・・」

その名前を聞いたジュリアは、顔を引き締め携帯を取り出しながら。

「あの賊めがっ!!　今もその様な真似を・・・、捕まえて無期だっ!!」

と、吼える。

そんなジュリアを薄目で見るKは、完全に呆け。

（ハァ、前に下着ドロ専門のゴルドフに、買ったばっかりのおニューの勝負下着持って行かれたの根に持ってるなぁぁ～）

一方。　作者は、チっさいミニのアレと丸いのをハミチンしながらジュリアに向き。

「是非・・是非に逮捕して下さい・・・」

ジュリアは、真っ赤な顔で作者に指を向け。

「貴様っ!!!　その情けなく使い物に成らないイチモツを仕舞わぬかっ!!!!　さもないと、ゴルドフと一緒に務所ブッ込むぞっ!!!」

「はぁ～い」

作者は、ゴソゴソと手で仕舞う。

Kは、お茶を作りながら。

「作者、手は拭け・・・。　んで?　奪われた物は?」

「はい・・、全財産が入った財布と・・・身包みと・・筵？」

カップに急須を傾ける手を止めたKは。

「む・筵？　何だ、何に使ってたんだ？」

「え？」

手を拭く作者は、平然と。

「何って、寝袋に決まってるじゃ有りませんか」

ジュリアとKが、ピクリとも動かなくなり。

作者は、しみじみと。

「うぅ・・。　宿代無いから、浜辺でオーシャンビュー気取って寝ようと思ったのに・・。　筵奪われたら、寒くて寝れないッスよぉ～・・・」

だが、Kはそれ以前の問題だと。

「お前ぇぇッ！　Ｂｋの最終進化系かっ？！！　あんな物を身体に巻いて浜辺で寝てたら、土左ェ衛門オリジナルじゃないかっ！！！　人が見たらソッコー警察呼ぶわっ！！」

すると。　其処に、先ほど入って来た二人組みが来て。　眼鏡を掛けた小柄な男性が。

「あの、今、“警察”と仰いましたか？」

Kは、いきなりの割り込みに気が抜け。

「あ？　ああ・・、言ったが？」

すると、眼鏡の男性と化粧をした様な男性は身を正し。　眼鏡の男性が、懐から何かを取り出すと。

「私、警視庁“匿名係”の“杉〇　右キョー”と申します」

化粧をした様な男性もライセンスを見せ。

「同じく、“神〇　損”と言います」

Kは、首だけクルリとジュリアに向け。

「こちら、何処の詐欺師さんだ？」

だが、ジュリアはテーブルに頭を抱えて凭れ込み。

「あぁ・・・、警視庁の生ゴミだ」

「生ゴミ？」

「そうだ。　匿名で捜査して、犯人だけ捕まえてくるドあほ」

「犯人だけ捕まえて来る？　その間の経緯は？」

「秘密だ・・・」

「おいおい、そんなんでど～やって起訴するんだ？　起訴状処か、証拠資料の調書作れないだろう？」

「ん。　だがら、いっつも裁判が長引く。　検挙率？1だが、不起訴・無罪に成る確率もぶっちぎりの？1。　正直、警察の信用を失墜させる諸悪の根源だな・・・」

Kとジュリアの会話に、杉〇は割り込み。

「おやおや、それはお言葉が悪いですね～。　我々は、ただ一生懸命に仕事に励んでいるつもりなんですがねぇ～」

Kは、お茶を作者に出し。

「とにかく下がれ、黙ってコーヒー飲んでろ」

二人は、同じ動作で頭を下げ。

「失礼します」

と、席に戻る。

ジュリアは、作者に向いて。

「それで？　被害の金額は？」

熱そうにお茶を一口啜った作者は。

「2円」

ジュリアは、思わず腰に装着しているコルトパイソンに手を掛け。

Kは、恐ろしく貧粗な値段にせせら笑いすら浮かべて。

「フ・・フフフ」

と。

作者は、そんな二人を見ずに会話を続け。

「片道分の切符買ったらお金無くなってしまいました。　帰りは、自分のおでこに、クロイヌ大和の輸送シートでも貼って。　料金は着払いにすれば、何とかなるかなぁ～と思ってました」

Kとジュリアは、フツフツと沸く怒りを抑えながら。　Kが、

「身包みも奪われたんだったな。　上下か？」

作者は、何の気無さそうにKを見て。

「いえ、トレンチコートをイメージした雨合羽を奪われまずだ」

一瞬、時間が止まった様なKとジュリア。　辛うじて口を動かすKが。

「おま…。　お前、雨合羽の下が…その今の格好か？」

作者は、腹が減って居るのか、砂糖の入った瓶を引き寄せながら。

「そです。　あれこれ着ると洗濯面倒なんで」

ジュリアが…コルトパイソンを抜く。

Kは、目で構え様とするジュリアに。

（店の中だっ、止めいっ！！）

と、制し。

「なぁ、作者。　ゴルドフもおバカじゃ無い。　そんなきったない物狙うか？」

「だって」

“オイ作者っ！！　乞食王のマルフェイス様と、その御子息で王子様のマリック様に出演料は無いのかぁっ？！！！！！！”

「って言われまして。　作者自体が貧民なのに、高額な出演料なんて…って言ったら、身包み剥がされました。　トランクスとランニングは、臭くてショボいから要らないって…」

Kは、ジュリアへ。

「スワットだ。　スワット向かわせろよ」

ジュリアは、Kに小難しい顔を向け。

「御主、蚊の２・３匹にバズーカを使う気か」

「だって、全然活躍して無いだろうが。　少しは働けよ税金ドロ」

「しかし、あんな部隊を投入する相手には成らぬ」

「テロ組織エロカイダとか名前付けて、爆破予告来たって通報しようぜ」

ジュリアは、コルトパイソンを仕舞いながら。

「まぁ～面白ろそうだがのぉ…。　一公務員としては、気が引ける」

其処に。

あの“匿名係”の二人がでしゃばり。

「スミマセン。　犯人の逮捕は、この我々が」

Kは、ニコニコと前に出て来た二人を見て。

「要らん。　コーヒーでもシバいてろ」

杉〇と神〇の二人は、素直に一礼して下がりながら。

（杉〇さん、僕達要らないみたいですね）

（神〇君、今日に限った事では有りませんよ）

（ですかね）

さて、伊豆の何処かの山の森…。

ミカン箱を3段ほど積んだ上に胡座を掻く者が居る。　偉そうな態度で、何処かの社長の様な雰囲気で居る。

禿げた頭、小柄な体躯、キツい目、彼がマルフェイスだ。

その脇に、一段低いミカン箱の上には、垢じみた顔ながら、ちょっとイけた優男が居て。　マルフェイスに向かい、

「ねぇ～パパぁ～」

「ん？　何だ、息子よ」

どうやら、マルフェイスの脇に居るのが、息子のマリックの様だ。

「パパぁ～、何時になったら社長に返り咲いてくれるの～。　早くジュリアと結婚したぁ～い」

その話に成ると、苦虫を噛む渋い顔に成ったマルフェイスは。

「今暫く待てぇい。　円高のお陰で、偽造偽札が思う様に売れん。バレ難い様に旧札使ってるが、どうも上手く売れないのだ」

マリックは、パソコンも無い自分達で偽札作りとは賢く凄いと思い。

★

「パパぁっ！！　パソコンもプリンターも無いのに偽札作りって渋いね～」

「おう。　ゴルドフめに、記憶を頼りに旧１円札や１０円札を、態々木型から彫らせた版画を墨で写し取って作らせておる。　原点に返ったやり方だ」

「凄い凄いっ！！　ウンコチシンってヤツだねっ！！」

「息子よ。　それを言うなら“温故知新”だ」

「うぉっ！！　パパぁって物知りぃ～」

マリックに褒められ、得意げのマルフェイスはふんぞり返る。

その直ぐ近くの森の中…。

夕方の日差しが木洩れ日に成る茂みの中。　筵の上に正坐し、江戸時代の浪人の様な人物がせっせと錆びた釘を動かす。

マルフェイスとマリックの会話が聞こえ、手を止めた浪人は。

（今日もお二人は、仲良くやっている様だ…）

「…」

彼が、ゴルドフ。　白髪混じりの髪を短くした頭に眼帯をしている。

木箱を机にして、ボロ木の板に何かを彫っていた。

そして、彼の周りの木々には、凡そ紙幣とは程遠い物品が紙に写し取られて乾かされている。　パッと見ては、解体した魚の魚拓の様な物だ。

（我が御家の再興の為には、今は我慢の時。　作者殿には悪かったが、マルフェイス様が欲しいと言われた故…）

程近い所から、小波の音がして来る。

（さて、そろそろ港や海岸を見回って来るか。　何かお二人の口に合う物でも落ちて居ると良いがのぉ…）

ゴルドフは、物拾いに出掛ける事にした。

港の漁港に行くと。

「おう、浪人さん。　今日は、貝が売れ残った。　食い切れないから持って行くかい？」

と、競り市の行われる漁業センターを掃除するおじさんが言って来る。

赤い夕日に照らされたゴルドフは、深深と一礼し。

「忝い（かたじけな）・・。　明日の漁業に成功と感謝を祈り捧げます」

丸で牧師か神父の様な事を言うゴルドフ。

笑う漁師は、

「この前は、海に落ちた子供助けて貰ったからな。　ま、恩返しだよ」

その頃。

マルフェイスの目の前に、黒いスーツを着て様変わりしたマリックがいる。

「パパ、んじゃ～行って来る」

「おう、息子。　そのホストなんたらと言う場所で稼いで来るのだな？」

「うん。　ボクって“破格”らしいんだよ」

「“破格”と付くとは凄いな、息子よ」

「うん。　皆、低い賃金の“万”らしいんだ。　でも、ボクだけ特別な“無償”なんだって」

「・・・“無償”？」

「うん。　後で纏めて辞める時にお金が貰えて。　スッゴクお得な給料ならしいんだ。　お店では、可愛い女性も偶に来るしね」

マルフェイスは、マリックが何か勘違いをしている様に思え。

「息子よ。　“無償”の意味を知っているのか？」

「うん。　多分、特別でしょ？」

マルフェイスは、何不自由無く最近まで育った息子に涙が出た。

（ううぅぅ・・息子よぉ～）

そんな父親の悲しみを他所に。　マリックは、スキップしながら出勤していく。

★

さて。　夕方に為った喫茶エロ～ルでは・・・。

Kは、目の前に居るジュリアとポリアに向かい。

「お前達、何時間居んだよっ」

12杯目のお茶の御代わりを貰う作者は、マルヴェリータと共に座って居り。

「まぁ～まぁ～、いいじゃないですか」

Kは、ワナワナした口元を震わせ。

「“タダ茶”をシバくお前が言うかぁ？」

マルヴェリータは、静かにコーヒーを飲みながら。

「ケイ、少し短気に成ったんじゃない？」

マルヴェリータの真似をして、肉の厚みで合わせ切らない股を窄めた作者も。

「短気かしら」

Kは、歯軋りするままに不気味な笑みを浮かべ。

「作者、随分と横のおねーさんに飼い慣らされてるじゃないか」

すると、マルヴェリータは、一つ頷く。

「聞き分けはイイ人よ。　調教も順調だわ」

作者は、テーブルに伏せて。

「わん」

Kは、マルヴェリータに飼い慣らされている作者に呆れ、もう無視を決め込もうとする。

「所で、ケイ。　何時に成ったら返事が貰えるのだ」

と、退屈そうなジュリア。

昼前から遣って来たポリアは、ジュリアに鋭い目を向け。

「さっきから何回その回答を無視されてるのよ。　仕事サボってる

しさぁ～」

「仕事のしてないプーに言われる筋合いは無いな」

白いワンピース風のチュニックに、水色のパンタロンジーンズを穿きこなすポリアは、ムカっとした顔になり。

「一応はモデルじゃいっ！！　忙しい刑事じゃケイの相手なんか出来る訳無いじゃん。　マリック辺りがお似合いじゃない？」

ジュリアは、鋭い視線をポリアに向け。

「言うてくれるな、小娘」

「年齢あんま変わらないだろ、ババァ娘」

Kの目の前で、不毛な戦いが始まろうとしている。

離れたテーブルでそれを見てる二人は、

（杉○さん、なんか女性同士の争いが始まりましたよ）

（神○君、中々見応え有りますね。　怪獣映画さながらですっ、最後まで見届けましょうか）

そんな中である。　突然に扉が開き。

「ポリア～、酒買って来たぁぁぁぁーっ！！！」

と、システィアナが入ってくる。

Kは、持ち込み禁止と書いてある店内に、酒の瓶や缶ビールなどを大量に買い込んで来たシスティアナを見て。

「おいおいおいおいいいいいっ！！！！！　コーヒー店で酒なんかシバくなぁぁぁーーーーっ！！！！！」

Kさんの苦労は続く・・。

それから2日後。

朝である。　店内の奥に備わる４２型３Ｄテレビより、スーツを着て正装したスティールがニュースを読んでいた。

ー次のニュースです。

伊豆で無許可で風俗店を経営していた店主。　ホロー・オフグリ容疑者が逮捕されました。

尚、店の従業員で、率先して女性を誘惑していたと見られるマリックと云う男も逮捕されたそうです。

関係者に因りますと、このマリック容疑者は、近くの藪に住む浮浪者のマルフェイスと云う父親を持った人物で、払われる事の無い契約で社員となり、次々と・・・。　ー

そのニュースを見ながらカップを拭くKは。

（エロール、早く帰って来いよ・・・。　あ～、アレから不思議と俺の不満で意気投合して、ジュリアのマンションに泊まりに行った

まんまポリアとシスティアナが帰って来ないなぁ～。　ジュリアに留置所でも入れられたか？）

そこに、更なるニュースが伝えられる。

ー続きまして。　同じく伊豆にて、大量の下着を盗んでいた男が逮捕されました。

男は、自分の素性を“人の良い浪人”と云っており。

近隣の住民の話では、最近海で溺れた子供を助けたり、痴漢を捕まえるなどのヒーロー的存在だったという事です。

尚、先ほどのマリック容疑者とは主従関係である様で、警察では関係を調べて・・・ー

Kは、ニュースを見て口元を引き攣らせた笑みを浮かべた。

（ドイツもコイツも好きだねぇ～）

そして、マルヴェリータに引き取られた作者も行方不明だった。

鎖に繋がれ、飼われる作者を想像したKは。

（ミニ豚と犬の中間に堕ちたかな～）

しかし、更に2日後のエロールが帰ってくるまで、消えたキャラの行方は不明のままだった。

タダ・・、今日も何故か。

「おはようございます。　杉○　右キョーです」

「おはようございます。　神○　損です」

Kが、貰ったバイト代で新たな旅をしようと新幹線乗り場に立つ時。
其処に、この二人が現れたのだった。

（俺・・・何したっけ？）

Kが頻りに首を傾げるままに乗車する。

Kと“匿名係”を乗せたリニア新幹線“萌え太郎”は、名古屋に向かうのだった・・・。

超不定期特別で奇跡な座談会？（ウソです）　2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

笑える一時を生み出せたら幸いです。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域

ウィリアム編～続編・新たなる魔域へ

ウィリアムは、若き捜査官レナと共に悲しい事件を解決した。

そして、レナの副官就任の日である。　レナの持ち込んだ依頼を請けてから、ざっと8日目であった。　ミレーヌの屋敷にて、レナやウィリアム達を招いたパーティーが行われたのだ。

「あの～、行きたくないんですがねぇ～」

夕方、アクトルとスティールに両腕を抱えられ、ズルズルと引き摺られるウィリアム。　どう見ても理解の行きかねる一行が、居住区の通りを歩いている。　通りを擦れ違う住民などが、ウィリアム達を見てヒソヒソと・・。

その一行の中で。　スティールのお陰で随分明るく成ったメイドの女性が、クローリアとエレンの間で笑って何か話していた。　レナの持ち込んだ事件を解決した報酬が多かったので、スティールが“子猫”と云っている女性に綺麗なワンピースを買ってやった話だろうか。

ウィリアムは、スティールに小声で。

（ミレーヌさんに、アノ事をご相談しますか？）

（おう。　お前が姐さんの機嫌を取れ。　世話代の代わりに、貢物じゃ）

その返事を受けて、深い溜め息を漏らすウィリアム。　今日は仲間と別れ、朝から図書館巡りや街中の散策を楽しんでいたのだが。　パーティーの招待を知らされたアクトルとスティールに、出会い頭ソッコーで捕まったのだ。

（メンドクセぇぇ～・・。　もう、嫌じゃぁぁ～・・・・）

心底萎えるウィリアム。　せっかく、依頼として事件以外の仕事を回して貰える約束を、かの斡旋所の主であるブレンザに取り付け。　明日に依頼を聞きに行くと云うのに・・。

（冒険者らしくしようよ・・）

そう愚痴るウィリアムの気持ちは、皆の服装にも掛かって来る。

何せ。　スティールとロイムは、貸衣装から正装の一式を借りて貴族の様だし。　クローリアですら、淡い栗色のドレスの上に、女神の刺繍が入ったカーディガンを着るめかし様。　アクトルは、サイズが合わずに断念しただけで、ウィリアム以外は楽しむ気で全開だ。

エレンは、直々にミレーヌの招待を受けたので、一緒に来た。

ウィリアムは、鬱葱とした空気を払うのは構わないが。　自分を巻き込むのは勘弁と云う思いだけだった。

さて、１０日ぶりぐらいにミレーヌ屋敷を訪れると。　あのローウェルの屋敷には、今だに役人が見張りとして立っていた。

「・・・」

急に黙るエレン。　身体の弱った実の母親は、ミレーヌの指定した寺院にお預けのままであり。　育ての母親であるルイスは、獄中だ。　後１０日もすれば、罪が決まるだろう。

屋敷を鋭く一瞥したスティールが。

「潰してしまえっ、こんな屋敷っ！」

同じく屋敷を見たメイドの女性も、ローウェルのお陰で女性としては酷い扱いを受けていた方だ。　屋敷をもう見たくないと云う素振りが見られた。

アクトルは、直ぐに。

「行こう」

と、ウィリアムを引き摺る。

ミレーヌの屋敷に着いて、玄関先で執事の初老男性と挨拶を交わした一行。　どうやら、ミレーヌの知人で、ミレーヌのお陰で結婚をする男女が居て。　親戚筋のミレーヌを頼り、ミレーヌの屋敷の社交場と別の広間を借りたいと申し出て来たらしいのだ。　だから、レナの事も有るし、捜査関係者との顔合わせや、色々を考えて会う機会を作ったらしい。

スティールは、音楽の流れる右手を見て。

「んじゃ、向こうはその結婚パーティーですか？」

奥ゆかしい身動きで会場を向く執事の男性は、頷き。

「はい。　いらっしゃる皆様、本当にお綺麗な女性が多く、とても驚きました」

その話をを聞いた瞬間、スティールは、もうエレンと子猫ちゃんの肩を抱いていて。

「行こうか」

と、会場の方に行こうとする。

非常に嫌な悪寒を感じたウィリアムは、驚くままにスティールの腕を掴み。

「ちょちょっ、お話はどうするんですかっ？！」

「ええい、お前に任す」

「スティールさんっ」

「大丈夫だよ。　どうせ大勢居るんだ。　ミレーヌの姐さんの友人って言えば、先ずバレないってさ」

そんな二人の遣り取りを見た執事の男性は、軽く笑い。

「別に構いませんよ。　ミレーヌ様は、広い会場に様々な人を呼んで居ります。　楽師の一座や旅芸人も居りますので、皆様がご一緒

でも、何の問題も有りませんよ」

アクトルは、酒を望む顔で笑み。

「飲めるのかな？」

「はい、十分に用意しております」

アクトルは、ロイムやクローリアに。

「小難しい事は全てウィリアムに任せて、俺達も行くか」

と、云うと、ウィリアムに向き。

「アレの見張りは任せろ。　色々話有るかも知れないし、お前はゆっくりしてこい」

ウィリアムは、完全にハメられたと思い。

（なんだよ、俺だけかよっ！！）

と、ヤケ気味に成りながら。

「あの～、ミレーヌさんはどちらですか？　会場ですか？」

執事の男性は、左の扉に向いて。

「今、向こうでレナ様と貴方をお待ちです」

（ま・待ち構えてるのかよ・・・）

磔台に上る気分のウィリアムは、仕方なしと思い。

「では、失礼して」

「ご案内します」

執事の男性に案内され、入った部屋は食堂の脇の客間だった。　部屋の中には、ミレーヌやレナに加え、ミレーヌの部下数人が居た。
　その部下の中には、レナの召集した配下の男性も見受けられ。
ミレーヌは、レナごと、レナの部下も吸収したのだと解った。

実は、レナを引き受けるミレーヌに、予算の上乗せが在った。　ミレーヌの部下が多ければ、レナが率先して現場で汚れる事は少ないと言う事からである。　ミレーヌは、ウィリアムに相談したのだが。
　ウィリアムは、それを受けた方が得策だと含ませた。

さて・・、ウィリアムの顔を見たミレーヌは、パッと表情を明るくして。

「あらっ、ウィリアムちゃんっ！！」

その大きな声。　部屋に入ったウィリアムは、瞬時にむず痒い顔に。

ミレーヌの参謀副官を長年務める初老の男性は、ウィリアムの顔を見ながら。

「あはは、ミレーヌ様のお気に入りが来た様ですな」

と、からかう様に云う。　正直、ウィリアムには大迷惑な話だ。

ミレーヌの前に来たウィリアムは、

「お気に入りでは、世間的にマズイと思いますが・・」

と、言うのだが・・。

ズンズンとウィリアムに踏み込むミレーヌは、顔を感情豊かな怒り顔に変え。

「それでイイのよっ！」

と、自分勝手な気持ちを押し込んで来る。

呆れるしか無いウィリアムであり。

レナや役人のそれぞれは笑っていた。

ミレーヌは、後はパーティー会場にて呑ませる方向で役人達を行かせ。　レナと二人で、ウィリアムに話し合いを申し出た。

★★★

「ウィリアムちゃん、今夜は泊まって行く？　レナも一緒だし、丁度イイでしょ？」

と、乙女ちっくなミレーヌ。

苦虫をガジガジ噛む様な渋い顔のウィリアムは・・。

（何が、“丁度いい”んだ？　何をするんですか？）

と、思いながらも。

「いえ、今日は意地でも帰りますよ。　明日は、斡旋所に行く用事が在りますからね。　それより、レナさんの副官就任、おめでとう御座います。　ま、ミレーヌさんには、俺よりも似合った相手ですから。　これからも、お二人で頑張って下さい」

ミレーヌは、もう悶える様な仕草で。

「んっ～もうっ！　ウィリアムちゃん以上の相手なんて、この世の何処にも居無いわっ？！！」

「・・・」

頭痛のする頭を抑えるウィリアムと、あまりのイケイケぶりに笑うしか無い困ったレナが居た。

が。

ウィリアムは、レナに。

「ですが、あの事件の関係者には、細かく気を配って下さいよ。特に、犯人と成った方の家族、そして・・一人で残された旦那さんに」

レナは、直に顔を真面目にして。

「はい、解ってます」

「ジェミリーさんの愛情は、非常に強いものでした。　残された旦那さんは、一人に成ってその大きさが重く圧し掛かります。　この罪にも似た重さは・・一生を左右するはずです。　出来るなら、死ぬ前のジェミリーさんに会えたら・・。　そう、思ってしまうほどです」

レナは、ウィリアムの気持ちの深さに心が揺さぶられた。

（この方は・・何処まで深い方なのでしょうか）

行きずりの冒険者とは、決して思えない。　恐らく、ジュエミリーが死ぬ前に出会えていたら、ウィリアムは全力で自殺を阻止したかも知れない。

ミレーヌは、深い深いため息を吐いて。

「はぁぁ・・・。　ね？　ウィリアムちゃん、愛する女性を一人にしちゃいけないって解ったでしょ？」

白けるウィリアムは、ミレーヌを見て。

「それより、俺達はこれからも仕事を請けて、度々ここを留守にします。　出来るなら、スティールさんの預かった女性の身の振り先をお願いします。　流石に、俺より女性に優しいスティールさんの御蔭・・。　随分、笑うように成りました。　ですが、土地に居付

く事無い自分達では、その世話だけは無理ですから」

「解ってるわ。　まだ少しほとぼりを冷ます必要あるけど・・。
彼女なら、いい仕事先見つかると思うわ」

ミレーヌは、其処は力強く言う。

レナは、笑顔を見せ。

「ウィリアムさん達は、本当に優しいですわ」

と、言うのだが。

ウィリアムは、暗くなる庭を望む様に横の窓を見て。

「そうですかね・・」

「ええ。　誰の目から見ても」

すると。　ウィリアムは、パーティー会場の方を見て。

「なら、仲間に感謝しますかね」

と、涼しい言い方をして見せる。

「え？」

と、聞き返したレナ。　一瞬、ウィリアムが別人に変わった様な印象を受けたのだ。

ウィリアムは、ミレーヌやレナに身体を戻すと。

「いえ。　俺一人だったら、今の状況まではしなかったでしょうね。
事件を解く事はしても、あまり人のその後に力を貸すのはしませんでしたから。　スティールさんも、ロイムも、アクトルさんも、不思議と俺の心を動かす様な事をしてくれるんですよ。　おそらく、気が合うんでしょうね」

レナとミレーヌは、ウィリアムの素朴な気持ちを聞いたような気がした。

緩い笑みを浮かべたウィリアムは、

「意外に、俺もまだまだ変わる要素を持ってるんですね。　人と交わるって、本当に凄い事なんだと実感させられます。　・・無論、御二人も含めてね」

何処か、自虐的なニュアンスがウィリアムの言葉に含まれ。　ミレーヌですら、笑えなかった・・。

ミレーヌは、真面目な顔をして。

「ね、ウィリアム君」

「はい？」

「レナが只者じゃ無いって、何処で解ったの？」

「あ～・・・話しませんでしたっけ？」

ウィリアムは、自分を注目するレナを見てから。

「最初の話し合いを持った時に、違和感の様なものは感じましたかね。　手下が誰も居無い上に、私室が本だらけ・・。　でも、その割にお荷物部署と言われていながら、何の手柄も失敗も無い。　話を聞く内に、記憶力が良く。　人の内輪揉めなどを個人で解決されていた・・。　ちぐはぐ過ぎて、ある意味凡人の平静とは違う様な・・・。　でしょ？」

「なるほど・・。　確かに、他を探しても同じ人は居無いわねぇ・・」

「えぇ。　例えば、人がバカと云うにしても、“バカ”と思わせる要因が在る訳でして。　しかしそいつは、普通にバカか、変わったバカか、その他良く解らないバカとか、色々在ります。　見て、聞いて、人として知り合って見ると、その本質が見えて来ます。　ま、人の目を当てにした噂など、真偽を確かめる判断材料の一部に過ぎない訳ですよ。　問題は、自分の目で見て、聞いて、知って、どうか・・じゃないですか？」

ミレーヌとレナは、確かにそうだと頷くしか出来ない。

ウィリアムは、レナを見て軽く失笑すると。

「でも、レナさんにはしてやられましたね。　確かに、貴女に逢うまで、貴女の事を理解するなど無理ですが・・。　ブレンザさんと釣るんで、二重に騙された訳ですか。　事件の事を匂わせる事すら引っ掛けに使うだなんて、中々の策士ですね」

レナは、褒められている様な気分になり、頬を赤らめ。

「いえ・・、誰かに気付いて欲しくて・・必死でしたから」

ウィリアムは、ミレーヌとレナを見て。

「多分、お二人はお似合いですよ。　丁度、お互いに欠けた部分を補える。　ミレーヌさんの配下は、しっかりした仕事の出来る人が多いし、レナさんの手足には丁度イイ人材だ。　これで、俺も手を貸す機会が無くなる訳だし、気楽に別の仕事を回して貰えそうです」

“まぁ”

っと言う様な顔をした二人。　ウィリアムに、憎まれ口を言われた様で笑えた。

ミレーヌは、直に。

「ねぇ、ウィリアム君。　冒険者で、綺麗な顔立ちのヒュリアって若いコ知ってる？」

「あぁ・・、斡旋所に居ましたね。　随分と気品の在る顔立ちをした方でしょう？」

「そう、お金持ちの御曹司なんだけどね。　昨日、貴方より優秀だって、私の所や他の捜査官の所へ売り込みに来たわよ。　何か有ったの？」

ウィリアムは、あの気位の高そうなヒュリアの顔を思い出し。

「さぁ～。　地元で一番の実力だとか言ってましたから・・、今回

の我々の事が気に入らないんじゃないですか？」

ミレーヌは、何処か疑る面持ちで。

「でもぉ、ブレンザは・・」

“アレは、顔だけがイイだけで、中身はペテン師と同じさ。　顔の良さだけを売り、人でなしを平気に出来る。　信用の置けないと言う言葉が、そのまま人に成ったのと同じだ”

「って。　正直、私は遠慮したわ」

何もフォローのしようが無い話に、ウィリアムはやや横を向き。

（へっ。　噂通りに“バカ”って事ですか。　逢う必要の無い、噂をそのまま信用出来る逸材ですかね）

と、心の中で毒を吐いた。　ミレーヌの元に、自分を売り込む彼の姿が想像できた。　何とも、順序の違う行動であると思える。

レナは、ウィリアムに近寄り。

「ウィリアムさん、私・・。　今日から、ミレーヌ様の下にお世話になりますの」

と。

ウィリアムは、何か誘惑染みた匂いを嗅ぎ。

（だ・・、だから何だよ？）

と、言葉を繋げられなかった。

パーティー会場では、例の如くスティールがハッちゃけていて。
美人・ブス関係なく口説こうとするし、アクトルは酒を水の様に飲むし。　ロイムは、呑まされて泣きじゃくる始末。

クローリアは、うっとりと新婦を見ながらスティールを粛清していた。

ウィリアムは、何も言わず。　静かに、静かに、酒を呑む。

酔ったミレーヌがスティールにキレても・・。

泣き上戸のロイムと、笑い上戸のレナが意味の解らない会話をしても。

アクトルがスティールの死に損ないの姿を肴に、愚痴ろうとも・・・。

スティールの逃げ回るのを見て、近所から来た子供などが追いかけっこをして大騒ぎに成っても・・。

（知るか。　俺の知った所じゃないっ！！！）

迷惑を全て黙殺して、深夜までチビチビと呑み続けた・・・。

ウィリアムが意地でも宿に帰ったのは、自分の言った事を通す為か。
それとも、ウィリアムでも怖いものが有るからなのか。　スティールの“子猫ちゃん”は残したが。　決して太っている訳でもない

のに、意外に量感の有るクローリアの寝たままを抱き上げて帰るウィリアムは。

「結構・・・重いなぁ～」

スティールの死骸に近いものを引き摺り、酔い潰れたロイムを背負うアクトルは、それこそ不適切発言だと思って苦笑いを浮かべた。

★★★

次の日。

昼間。　人通りの多い、港の見える段々の街を望める大通り上で。

「う゛ぅ・・痛い・・・」

頭を抑えるクローリアが太陽の明るさを嫌い、フードを深く被った。

「・・・」

もう歩く死体の様なロイムは、かなり気分か悪そうである。

澄ましているのは、ウィリアムのみ。　今日は、全員が完全武装した旅回りの姿であり。　ウィリアムは、クローリアが呻こうが、ロ

イムが泣き言を言おうが無視である。

昨日の乱れっぷりは、ウィリアムも少々お怒りと云う所なのだろう。

アクトルは、服を乱しながらも様に成るスティールへ。

「しかしよぉ、お前達もよくもまぁ～・・好き勝手に出来るよなぁ」

二日酔い丸出しの眠たい目を見せるスティールは。

「仕方ねぇ～だろうがよぉ～。　レナちゃんのお祝いだし、結婚だって云うんだろう？　ハデに、ぷわぁぁぁ～～～っとやらにゃ～」

其処へ。　ウィリアムは、やや鋭い目を向け。

「へぇ～・・お祝いですか」

ウィリアムにキツい視線を向けられたスティールは、少しヤバそうだと察知し。

「おっ、おうよ。　なんかぁ？」

ウィリアムの左眉が、ピクピクと動いていて。

「結婚式のお祝いで、新婦を口説こうなんてしますかねぇ～。　しかも、すこぉ～し新婦さんも乗りそうでしたし？」

気まずさをダイレクトに感じ始めたスティールは、居心地悪そうに他所を見ながら。

「じょ・冗談に決まってんだろうがぁよ。　あの・・その・・何だ。　初夜前に、ヨメさんがこ～何だ。　ノリ気の方が・・いいだろうが。　新郎だって、その方が・・その～何だ。　緊張しないで済むだろうがよ」

アクトルは、もしクリスティーとの結婚が現実に成ったあかつきには、この不逞の義兄弟を監禁する事を誓った。

さて。

斡旋所にて、ブレンザに会うと。

「ふぅ。　おや、今日は・・随分とまぁ～変わった様子じゃぁ～ないかい？」

普段通りに煙管を咥えるブレンダは、ロイムやクローリアを見てそう言った。　朝風呂をしたウィリアム以外、身体から酒気が漂っている。

ウィリアムは、詰まらなそうな顔を見せて。

「ま、自業自得ですよ。　それより、次のお仕事は決まっているとか？　伺いたいので、説明をお願い致します」

煙管を口から離したブレンザは、ウィリアムを見下ろし目を合わせて。

「実は、少々危険な仕事だよ。　北の森に出向いて、この時期にのみ実る“樹香”（じゅこう）を採取して来て欲しい」

ウィリアムは、仲間達以上に顔つきを正し。

「“樹香”ですか・・。　調子の合う様に、昨日調べたモノです」

ブレンザは、様々な視線でウィリアム達を見る屯組みや、仕事に炙れた冒険者達を見回して。

「実は、北の山に広がる渓谷森林地帯には、近年モンスターが多くてね。　2年前・・いや、もう少し前だったか。　イービルループだかが出来てて、モンスターを大量に運んで来ちまった。　スカイスクレイバーやバブロッティ他、腕の有る冒険者達の御蔭で、絶対数は相当減ったがねぇ。　繁殖も確認され、以前の平和な森じゃなくなっちまったって訳さ」

ウィリアムは、その情報を先に仕入れていたので、驚きはしなかったが・・。

「では、欲しい“樹香”を教えて下さい」

その一言が出た所で、ブレンザは、ジっとウィリアムを見た後に。

「・・・、出来るだけ」

と。

漠然とした言い方で、ロイムやスティール達は見合い。　周囲の冒険者達も、少しザワついた。

だが、ウィリアムは・・。

「・・なるほど。　狩人などが安全に取りに行けない場所なので、需要が激高してる訳ですか。　少しでも長い間、採取の依頼を出したくない訳ですね？　ですから、出来るうる限りの量を・・」

ブレンザは、意思を読まれても素直に。

「済まない。　実力に見合うのが、今はお前さん達しか居無い。他のヤツ等じゃ、確実に犠牲が出るんだ。　ウィリアム。　お前さんなら、多種の樹香を集められるだろう」

ウィリアムは、サラリと返す口調で。

「報酬は？」

「採取量に関係無く。　成功で、５０００。　量と種類に応じて、最高は、１５０００。　危険手当は、追加に含む。　只、持ち寄った樹香は、商人達も見るから。　内容次第では、それ以上に成るかも知れない。　昨日、香料や薬の大店・仲買達から、相当の額の提示が有ったよ」

スティールは、久しぶりに腕が鳴る依頼だと思い。

「イイねぇ、俺は乗った」

アクトルも、即座に。

「俺も」

仲間を見たウィリアムに、ブレンザは続け。

「それと、森の様子を見て来て、在りのままを報告して欲しい。今回は、内容が内容だ。　一時的なチームの増員も、此方としても考えてある」

スティールとアクトルは、以前に二人で此処を訪れた際に。　その当時のスカイスクレイバーやバブロッティの活躍を聞いていた。そして、その仕事に加わった別チームとも、実際に話を聞いて知っていた。　何チームもの参加で、やっと押さえ込んだモンスター。　ブレンザが心配するのも、確かに頷ける。

ウィリアムは、ブレンザを見て。　いや、見据えて。

「それは、ブレンザさんが認めた腕の・・・ですか？」

「あぁ・・。　その辺の素人や、モンスターを見て逃げ出すアホウじゃ困る」

その声に、周囲が瞬時に静まった。

今、斡旋所に居る仕事に行かない冒険者達には、この発言にチクリとする心当たりが在るのだろう。　実情を知るブレンザに云われては、首を竦めるしか無いと云う処だった。

頷くウィリアムに、ブレンザは続け。

「色々の事情で、チームがバラけた者を４人集めた。　どれも、腕は悪くない。　ウィリアム、アンタがリーダーなのは絶対としてあるから。　しっかり纏めとくれ」

「了解しました。　で？　その方々は？」

「うん。　二人は、“根降ろし”だ。　今、こっちに向かってる頃だろう。　他の二人は、この街へは朝来たばかり。　食事を取ってる」

ウィリアムは、急ぐ事でも無いので。

「では、待ちましょうか」

ブレンザは、ウィリアムの方が、地理以外の全てに於いて把握していると思い。

「あぁ。　後ろの奥に待合場が在るから、其処に居てくれ。　一応、朝に作らせた書面依頼を渡しておく」

また、感情の蠢きが微塵も無い、若い配下の男性が紙を出す。

ウィリアムは、サークルカウンターに出された紙を受け取り。

「では、奥にて待ちますか」

と、裏手に回り出す。

屯する者達、思う様に仕事をこなせないチームには、ウィリアム達ですら眩しい存在だった。　ダレイの殺人事件を解決し。　何の事件か解らないが、レナの持ち寄った事件も解決。　役人と一緒に居たウィリアム達だ、人だかりに集まった冒険者達には、その姿が見られていただろう。

短期間に、幾つもの依頼をこなし。　回される依頼。　自分達で選

び、望む依頼。　今回の様な、特別な依頼をこなせると成れば、斡旋所側からして好ましい。　嘗ては、殆どの有名チームがこの階段を駆け上る。　ウィリアム達もまた、同じ要素、同じ道を行く。

しかも、彼等なりのスタイルと、駆け抜け様で・・。

★

ドアの無い区画だけされた待合の場。　向かい合った固めのソファーや、窓側に並ぶカウンターと木材の円椅子。　チームで、思い思いの場所に腰を下ろした一同。

カウンターに向かって座り、依頼の紙を見るウィリアムは。

「確かに、依頼主側が焦ってますねぇ。　樹香の種類の指定より、とにかく少しでも量が欲しいとあります。　これは、チョット気合いが必要ですね」

アクトルは、スティールと水瓶から水を汲み。　使い回しのカップを使って水を飲みながら。

「何故、そう解る？」

ロイムやクローリアですら、気が向いた。

紙を見るウィリアムは、

「森の事は、狩人や地元の薬師などが一番知っています。　狩人などは、大型のモンスターでも無いなら、逃げる対処ぐらいは心得てますからね。　普通にモンスターの居る森ぐらいなら、こんなに逼迫した現状を窺わせる文面など無いハズ。　おそらくですが、森の現状は、頗る宜しく無いんじゃ～ありませんかね」

スティールは、アクトルを見て。

「アーク、久しぶりに来たな」

「おう。　事件絡みばっかりの仕事だったが、今回は大暴れ出来るかな？」

まだ二日酔いの続くロイムは、ローブの肩口を片側やや崩しながら。

「ウィリアムぅ、“樹香”ってな～に～」

クローリアは、ややシャッキリしない顔で。

「今しがた、主さんは・・“実る”とか。　特別な果実かしら？」

皆の視線が、疑問の回答を得たくてウィリアムに向かった。

「“樹香”とは、樹液の固まった物の俗称ですよ。　松脂（マツヤニ）とか、色々在りますが。　特に、発酵度の進んだ物を指します。　用途は、香水・薬・料理・アロマ蝋燭の蝋・・、それからハーブなどの弦楽器の潤滑剤などなど多岐に。　初夏の樹香は、ある程度水分を保っていて、効用の高いものが多いんですよ。　真冬か、今頃が収穫期ですね」

軽く考えたスティールが。

「つ～か。　輸入とかしないのか？」

「一応は、交易で流通はしてますよ。　ですが、特定の産地が限定された物以外は、それなりに自給出来る自然が各国に残ってますからね。　普段から、そんなに無理に大量輸入しなければ成らない現状では無い・・。　そんな感じですかねぇ～。　俺の住んでいたコンコース島でさえ、近隣の島などの自前で確保は出来ますし」

「ほぉ～」

アクトルは、此処で。

「でもよ・・、この状況は２・３年前からだろう？　輸入してもイイ感じはするがな～」

ウィリアムは、依頼の書類を読み終えた処で、皆の方に身を回して向くと。

「それもそうですが、栽培も少々難しいんですよ。　まぁ、各国で自前の需要分を確保して、若干の余りを流通させているに過ぎない現状ですからね～・・。　いきなりこんな風に欲する国が出来ても、簡単には量が増えるとは行きません。　樹香は、出来の早い物で３年。　長い物では・・１００年に一度みたいなものも在りますし」

アクトルは、すんなり頷き。

「そりゃ～無理だ。　うん」

モンスターにビビるロイムと、それをからかうスティール。
だが。
ウィリアムは、皆を前にして。
「ですが・・、気に成るのは“イービルループ”ですね」
クローリアは、僧侶なだけに真剣な顔で。
「ですわ。　封印されたから良いものの、開いた事事態が大事です」
ウィリアムも同意見で。
「です。　大体、マーケット・ハーナスにカオス・ゲートが開いたなんて、伝説の創世記時代ッスよ。　モンスターも殆ど居なくなったハズの森で、何で開いたのか・・・。　戦争遣ってるのは、西の大陸の真ん中だけで、こっちは平和ですからねぇ」
ロイムは、背筋に寒気を覚え。
「それって、自然的に出来た～って訳じゃないって事ぉ？　なんか、怖い」
スティールも、流石にロイムをからかう気も無く。
「つまりは、誰かが開いた？」
アクトルは、後を取り。

「若しくは、その要因を作った、か。　持ち込んだ・・、か」

腕組みして頷くウィリアムは、平静より真剣な眼差しで床を見つめ。

「どうにせよ、勝手に開いたとは考え難い。　誰かが開いたのなら、その目的は何でしょうかね？　世界的に、平和な今を転覆させようとか・・。　大事なら、勘弁願いたい処ですね」

その言葉に、仲間一同は目を凝らした・・。

ウィリアム続編・新たなる魔域（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

一部のメモリーに物語の一部が残っていたので、合間を繋ぐ意味で掲載します。　ウィリアム編ですが、モンスターとのバトルが大半なので、今時期に調整してお送りします。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域　2

ウィリアム続編〜新たなる魔域へ

仕事を請けたウィリアム達は、待合場で待っていた。

最初に来たのは、背が低く。　ずんぐりむっくりとした体型の中年男性だ。　身体に似合わぬ月輪の様に湾曲した剣ショーテイルを背負う形で装備し、黒い鎧を上半身に着ている。　剣は、特注の物で、普通のショーテイルより太く長い。　だが、それ以上に、髪の毛がヤマアラシの様に長く、顔が特徴的だった。

「いや〜、遅くなったゴス」

低い声で、訛りを窺わせる語尾。

ウィリアムは、席を立ち。

「どうも。　今回の仕事を任されたチームリーダーのウィリアムと言います」

と、進み出れば。

丸いタブが垂れた耳に、潰れた下がり鼻、円みを帯びて垂れた眼じりをしたその男性は、汗を腕で拭きながら。

「あぁ、こりゃぁ〜ご丁寧にダス。　ワイは、マラザーフと言いン

でガス。　おっ母が咳しちまぁって、薬ばぁ～飲ませデから来たガス」

スティールは、独特な容姿や喋り方に。

「はぁー、オッサン・・ドワーフかよ」

マラザーフは、そう言われて。

「そンダス」

僧侶であるクローリアは、それよりも遅れた理由の内容が気に成り。

「私は、フィリアーナ様に仕えるクローリアと申します。　あの、お母様の具合が悪いなら、無理をしなくても・・」

すると、ドワーフと云う亜種人族のマラザーフは、クローリアに向き。

「勘違いしな～でガス。　おっ母は、ワイの嫁さんダス。　それに、アンタ達の採りに行く樹香が、おっ母の薬なんだわ～。　どうしても、一緒に行くダスよ～」

ウィリアム達は、これはしくじれないと思う。

次に現れたのは、食事をし終えた二人。

一人は、長い黒髪を身に纏う様に、身体の前面と後ろに流した女性だった。　身体にピッタリとしたスレンダーメイルを着た戦士で、腰から下も金属製の具足などで武装している。　短い槍のスピアを

背中に背負い、腰にはショートソードを佩く。　見ては良い感じながら、やや強気な面持ちで、生意気そうな雰囲気も漂う若い娘だ。

もう一人は、５０代に最低でも届きそうな男性である。　丸で、怒っているのでないかと言った顰めっ面。　古びたボロい杖を持ち、ウィリアムと同じくらいの背丈だが。　丸で、“何処かで遭難でもして来たのでは？”、と思える程にボロのローブを着ている。

先に、女性の方が中に入って来て。

「リーダーは、誰？」

と、棘の効いた口調で聞いて来る。

前髪を掻き上げたスティールが立ち上がるのを、アクトルが抑え付け。

「俺が、リーダーのウィリアムです」

と、ウィリアムが名乗り出れば。

「アタシは、戦士のリネット。　知り合いのブレンザさんから言われて、加勢するわ。　正直、噂なんて信じないからね。　殺人事件を解決するのと、モンスターとの戦いを潜り抜ける仕事なんて、全く違う。　足手纏いなんて、ゴメンよ」

と、歯に衣着せぬ物言い。

呆れ笑いをしたウィリアムは、一礼し。

「了解しました～」

所が・・。

初老の魔術師が進み出てきたら。　ウィリアムは、その男性を見て一言。

「へぇ、麻薬の匂いがしますね」

初老の男性は、進み掛けた所でピタリと止まった。

アクトルやスティールは、ウィリアムとの出会いで薬に関わる事件が多い事もあり。　その魔術師を素早く見た。　ロイムやクローリアも驚き、ウィリアムを見てからその初老男性に向き。　マラザーフとリネットは、ほんの少し身構えた様子で向きを変えたのである。

「・・・、薬だ」

男性が言えば、ウィリアムも頷き。

「ですね。　麻薬の他に、消炎鎮痛剤に使われるキクの根の匂いも・・」

男性は、黙るのだが。

ウィリアムは、更に踏み込み。

「その薬は、一時の痛み止め・・。　治す薬では在りませんし、これほどに匂うとは・・。　少し、量が増えているのでは？」

初老の男性は、やや俯きながら胸を擦り。

「少し・・・胸を。　特効薬には、樹香が必要じゃと」

ウィリアムは、その男性の顔や全身を見て。

「どうでしょう、俺に診せてくれませんか？」

男性は、鈍く目を上げて。

「薬師・・・か？」

と。

スティールは、その割れた声に何か具合の悪さを感じたので。

「オッサン、コイツの薬は、効き過ぎぐらいに効く。　騙されたと思って、いっぺん診て貰えよ。　つか、病人を抱えては面倒だ」

その男性は、困る面持ちを周りに向けながら。

「・・・。　リーダーが言うなら、致し方在るまいな」

ウィリアムは、皆に目配せを。

アクトルは、直に立ち上がり。

「人の身体を見るのも悪い。　外に出るか」

スティールも立ち上がり。

「んだな。　リネットちゃんの事・・二人きりで知りたいね」

リネットは、立ち上がったクローリアに。

「コイツは、バカか？」

と、尋ね。

「はい。　比べる相手が見当らないほどの・・」

と、クローリアは素直に答える。

ロイムは、口を手で抑えながらニヤニヤした顔で出て行き。

「ロイムせんせ～、なぁ～んか文句有るみてぇじゃね～かぁ～」

と、スティールが追って出る。

「面白～な面子ダスね～」

マラザーフも続き。

「最近、仲が良すぎる」

と、アクトルも。

カウンター前の椅子に魔術師の男性を座らせたウィリアムは、

「では、診せて貰います」

と、診察をした・・。

触診をして・・。

男性に服を着させたウィリアム。

「あの、薬をどう言って頂いたんですか？」

と。

「うむっ・・・」

男性は、顔を苦しくさせた。

そして・・。

「その・・、ま・真に・・恥ずかしい事だが。　別の街で・・そのっ、夜を女性と過ごしてな・・。　終わった後に・・少ししてその・・・胸が痛く成り・・・」

どもる様な声は、恥を晒したく無い裏返しだろう。　聞いたウィリアムは、軽く頷き。

「それで、痛み止めだけを貰ったんですか？　強引に、痛みを止める物だけを・・」

「あっ・あぁ。　その・・なんか・わわ悪い病気だと・・困る訳で・・その」

モゴモゴと云う男性の困り果てた顔。　怒った顔は、心配と腹と胸焼けの酷さが原因らしい。

やや呆れたウィリアムだが、穏やかに笑うと。

「失礼ですが、お酒が相当好きみたいですねぇ。　しかも、脂っこい物も」

言われて、即座にギョっとして眼を丸くする老いた男性。

「あ・・あぁ」

「口の中や喉の荒れ、タンの発酵した様な臭う息、様々な様子からして・・少し、特有な肺病を拗らせてますね。　咳を我慢している様子ですが、人に感染るものでは在りませんよ。　それから、胃に炎症が出ています。　薬を正しく調合して貰っていたら、一月で治る物ですよ」

「そっ・そうなのか？　変な・・病気では無い？」

「えぇ。　御歳ですしね、遊ぶのも年齢に合わせた方が・・。　肝ノ臓・腎ノ臓が相当に疲れています。　今のお体に、あの薬は返って毒ですよ」

男性は、急に安堵した様子を見せると顔を赤らめ。

「あ～お恥ずかしい。　実は、フラストマドの首都で、随分と報酬の良い仕事を請けれまして・・。　屯３人と、バラけた者二人の６人で成功させました。　久しぶりに懐が暖かくて、ハメを外し過ぎまして・・。　ついつい、酒場の女性と意気投合しまして。　酔っ

た勢いで、少しの追加料金で楽しめると言われて、そのまま過ごしたのですが・・。　なんとも」

と、その男性は、恥ずかしさや苦笑を交えて話す。

ウィリアムは、随分素直な男性だと笑み。

「気持ちは解りますがね。　それで勘違いして、更に間違った薬を貰っては・・」

「いや、何か悪い病気だと思い込んで・・。　その～・・、急に怖くなりましてな。　死ぬのではないかと、悶々しながら此方を目指したのですが。　旅の途中で、何度も痛みが来まして。　途中の衛星都市で、金を突き付け、その・・薬を貰いました次第で」

ウィリアムは、この初老男性が面白く思えた。　恐怖から開放されると、何とも屈託の無い顔をする。

ウィリアムでも調合出来る薬なので、後で薬屋を巡ろうと約束を交わした。　男性の名前は、ラングドン・マイニール。　自然魔法を扱える老練冒険者だった。

話し合いが一段落した所へ、スティールが顔を覗かせ。

「ウィリアム、最後の一人も来た」

と。

ウィリアムは、頷いて見せて。

「解りました。　では、外に出ましょう。　北の森へは5日は掛かるそうなので、これからそのまま向かいます。　少々店に寄るので、買い物は其処で」

「おう」

ラングドンは、ウィリアムに。

「このまま・・発つのか？」

笑うウィリアムは、ラングドンの心配を察し。

「大丈夫。　森に近い村まで、馬車を用意して下さるようです。少し揺れますが、歩かなくてもいいのですよ」

「あぁ・・、そうか。　昼前に主から話を聞いて居る時にも痛みが来て、全て聞いていなかった」

ウィリアムは、最後に遣って来たレンジャーの男性と共に、皆で外に向かった。　見送る様に視線を交わしただけのブレンザは、一つ頷いただけだった・・・。

★★★

それから、3日が過ぎて・・。

幌馬車のやや大型の物が、黄土剥き出しの街道をゆったりと走っていた。

もう夏の暑さが実感出来る。　連日の快晴で、馬に無理はさせられない。　水場や休憩の出来る立ち寄り施設では、必ず休憩を入れ。　夜は、しっかり休む様にしている。

パッカ、パッカと云う馬の足音を聞く中で、昼過ぎ。

「いや～、嘘の様に痛みが無い。　本当に、助かった」

ラングドンは、治った様に快調な身体を感じて、ウィリアムに礼を言う。

夏の風が草原や疎らな林の広がる間を走っている。　ウィリアムは、はためく幌の間近に座っていて。

「いえ、良くなってなにより。　自分は学者なので、モンスターが出たらお願いしますよ」

と、笑う。

「おぉ、その時は、このラングドンは頑張りますぞ」

少し調子の良いラングドンだが。　確かに培った経験が見せる落ち着きは、アクトルやスティールから見ても感じが出ている。

一方で。　スティールに絡まれ、イライラしているばかりのリネットは、クローリアやマラザーフの傍で睨みを効かせていた。　実は、ドワーフと云う亜種人族は、大地の神や自然を司る神を信仰してい

るとかで、神聖魔法も幾らか遣える。　癒し手が二人居るのは、安心材料だった。

代わって、アクトルと緩い会話を重ねているのは、やや小柄の３０絡みといった感じのカタニス。　日焼けした肌に、中々スッキリとした面長の男性で。　目の真っ直ぐさや、落ち着きの窺える様子は、自然と好感が持てる男性だった。

彼は、狩人であり。　薬草採取や動物を狩りし、細々と生計を立てていた。　知り合いの薬屋から頼まれ、道案内やもしもの場合の学者代りとして同行する事になったらしい。

旅立つ初日の夕方。　馬車に乗り、その中で薬の調合をするウィリアムの様子を見て、その技能の熟練度を推察出来たのだろう。　ウィリアムに、アレコレと質問したり、聞いたりとはしなかった。

寧ろ。

ウィリアムが、彼に森の情報を聞くと。　適切で、詳細な情報を述べる。

時々ウィリアムと会話する彼は、お互いに気が合う感じだと思わせる様子でもあった。

さて・・。

「リネット、俺の何が悪い？」

嫌われるスティールが言えば。

「全部っ、存在自体っ！！」

と、キレるリネット。

しかし、スティールは前髪を掻き上げ。

「それは、丸で“愛してる”と言ってるのと一緒だ」

「アンタっ、どんな神経してるのよっ?!！　気狂いじゃないのっ?！」

そのやり取りは、滑稽過ぎて笑いの種。

マラザーフなどは、面白過ぎて毎日笑っている。

ロイムとクローリアは、チームの恥を晒す様で疲れていた。

そして、その更に二日後。

「ほお～。　此処が“モンチン村”か。　結構人が居るな」

アクトルは、降ろされた所から村のメインストリートを見て。　若い村人や、年寄りなどが行き来しているのに目を見張った。　丁度昼下がりで、畑に村人が出掛けていてもいい頃合いなのだが。

馬車を降りたカタニスは、念の為にと持って来た皮袋の束を纏めた物を背負いながら。

「このモンチン村は、砂金や琥珀が取れる川が近い。　他の村に比べて、住人が多く。　村だが、４０００人ぐらい住んでいるんだ。

森林峡谷に踏み込みやすい場所でもあり、狩人も多く住んでいる。
ま、今はモンスターの影響で、砂金や琥珀の量も思う様に取れないって話だ」

すっかり健康を取り戻したラングドンは、村の北側一帯に望める森を見て。

「随分モンスターも増えたのだな。　全く、原因が解らんとは、面倒じゃわい」

スティールを牽制して降りたリネットは、ウィリアムに迫り。

「チョットっ！！！　あの男をナントカしてよっ！！！！」

と、怒鳴るも。

もう成れたウィリアムは、耳を指で穿り。

「成れると、意外に可愛いかも知れませんよ」

と、他人事。

降りて来たスティールは、顔に手をやり。

「凄いね、俺。　俺の魅力は、男女の差無く通じるんだ」

クローリアは、既に降りた後で。

（でしたら、男性と御結婚なされたら如何かと）

と、無視。

同じく、先に降りていたロイムは、

「うぎゃ、スティールさんて、どっちもイケるのぉっ?!!」

と、お尻を押さえた。

ロイムをギロリと睨むスティールに対し。

笑うマラザーフは、ノシノシとウィリアムに近寄り。

「んだば、宿を探そうダス」

マラザーフの奥さんは、妹や母親と居るので、一人ではない分心配は少ないが。　治療薬無しのままでは弱ってしまう。　穏やかな人柄のマラザーフだが、やる気は人一倍であった。　到着した日に森に入る気で居た彼だったが、ウィリアムやカタニスに諭されて、今はこのように落ち着いている。

ウィリアムは、ラングドンとカタニスを連れて、村の彼方此方を回ると言い。

他の面々は、手分けをして。　全員分の食料から必需品を揃え、宿を押さえる行動に動く。

一同がまた揃うのは、夕日も落ちた頃で。　村の中心にある酒場でだった。

最初に、スティールに絡まれるクローリアとリネットが宿にて宿泊

を決めた後。　軽く村を見回り、宿屋の裏手に成る酒場に入る。

「シッシ、離れろっ」

と、スティールをあしらうリネットは、広い大衆的な酒場の女将を見つけ。

「済まない、１０人ほどで食事したいんだが」

と、声を出す。

木造の大型酒場で、村で唯一の酒場。　メインストリートに面した一番良い立地に在るだけあり。　もう、農家の家族連れや、鉱夫と思える男達数人の客が居た。

スラリとしたやや長身の中年女将は、少し草臥れた感じのする様子。　酒場奥のカウンターの先に二つ在る大型のテーブルが在る方を指差し。

「なら、向こうに行きなよ。　処で。　料理は、大鉢や大皿で料理を出した方がいいだろうか？」

クローリアは、それに反応して。

「はい。　食べる方も居るので、出来ればお願いします」

と、返す。

大きな十字型のテーブルに向かい、三人で席を取ると。

「おーい、そこの三人」

と、声が掛かり。

声に向くスティールが見れば、鉱夫らしき呑んだ男達の一人が手を上げていた。

「ん？　何か用かい？」

ホロ酔い顔をした４０前後の鉱夫は、リネットやクローリアを指差し。

「随分とキレイなオネ～チャン達だな～」

と。

こうゆう雰囲気を好きでは無い女性二人は、男の方に向かないが。

スティールは、慣れているだけあり砕けたもので。

「俺のジョノカさ。　そっちの景気はどうだい？」

同じテーブルから非難の目と苛立ちの目を向けられるスティールだが、鉱夫は疲れた様に首を左右に動かし。

「わり～なぁ～。　森にモンスターが居るからよぉ～、今日も砂金取りが中断しちまった」

「そうかい。　明日から、仲間と樹香を採りに森へ行くんだ。　倒せる範囲でモンスターは倒すから、ボチボチやろうや」

「お～、ソイツは助かる。　ウチの村ですら、今年で狩人が5人も怪我しちまってる。　薬が高騰しないように、いっちょガツーンと頼むわ」

手を上げて了解したスティールは、女将の持って来た手拭いで手を拭きながら。

「随分と影響出てるな。　こりゃ、マジで気を引き締めたほうが良さそうだ」

注文を聞く体勢の女将だが、スティールに。

「気を付けなよ。　先月、アンタ達と同じ依頼を請けた冒険者達がおっ死んだばかり。　悲惨な話は、よしとくれ」

と、逆に注文を付ける。

ニヒルに笑むスティールは、女将を見返し。

「生きて帰る。　ウチのリーダーは、その辺のとは格が違うゼ」

「どうだかね。　で？　注文は？」

リネットは、スティールが随分とウィリアムを信用していると思い。

横のクローリアに顔を寄せ。

（コノ軽いヤツ、リーダーを信用しているのだな）

過去を思い出すクローリアは、

（信用するまで学習させてますから）

と、さり気なく。

聞えていたスティールは、水を飲みながら。

（俺は、犬か？）

と、首を竦めた。

その後、買い物を終えたロイム・マラザーフ・アクトルの三人が加わり。　最後は、村人に話を聞き回ったウィリアム達３人が加わり。　全員が揃う。

席に全員が座る頃は、酒場に客が多く成った頃で。　ガヤガヤと騒がしい中だった。

座ったウィリアムに、近くの席に座ったカタニスが。

「随分と慎重な事をするのだな」

と、言えば。

「怪我を為さった狩人の皆さんを見れば、大体の凡そが想像出来ます」

と、ウィリアムが返す。

肉の塊を切るスティールは、ウィリアムに。

「何だ、怪我した狩人の所に行ったのか？」

手を拭くままにウィリアムは。

「はい。　ま、行ったと云っても、病院と寺院です。　今だ、怪我した狩人さんが居ると聞いたので」

「収穫は？」

「モンスターは、相当の多種に亘って蔓延っている様です。　怪我をした人は、皆が怪我の治癒を遅らせているとの事。　恐らく、唾液などの体液に毒や強酸を含む種類が多いのですね」

「ふわ～。　お薬いっぱい必要だな」

「えぇ」

アクトルは、新たに買って来た物を指折って云い。

「なんとか仕入れた分で保ってほしいな。　結構、高かったゼ」

ラングドンは、受け皿を取りながら。

「他にも随分とモンスターの被害が多い。　このままでは、村も危ういな。　ちと大形かも知れんが、結界を張る事も考えた方が良いかもな」

頷くカタニスは、ビアを頼んでから。

「しかも、悪い話だ。　我々が向かう樹香の多い場所に、被害が集

中してる」

ウィリアムは、受け皿に野菜を取りながら。

「恐らく、人が分け入る場所に、モンスターが寄って来ているからでしょう。　明日からは、油断は禁物ですね」

アクトルは、大きなグラスでビアを呑みながら。

「ぷは～。　しかし、こりゃ～本当に成功させるのは骨が折れるぞ」

マラザーフも、同じグラスを持って。

「んだんだ。　したども、どうしても成功させなダス」

しかし、命辛々逃げてきた狩人の話は、予想よりも事態の深刻さを証明していた。

ウィリアムは、食事をしながら皆に。

「要注意のモンスターは、擬態を特異としている肉食カメレオン“エビナスカムフラ”の他、吸血・肉食植物。　炎を吐き、双頭の頭を持つグリーンドラウネス他、群れる習性のモンスター。　変わった処では、歩く大型キノコのモンスターの“ポイズンポルニマ”。　森の中でも転がる岩の様に襲って来るナメクジの“スリリニーシッダー”。　話を聞くに、丸で東側の魔域と呼ばれる“ダロダト平原”やその周辺に棲むモンスターの様です」

リネットは、自然魔法を扱えると聞いていたラングドンを見て。

「だが、樹木のモンスターは火に弱いのだろう？　火を吐く以外のモンスターなら、魔法で切り抜けられそうだな」

と、楽勝そうな様子を述べる。

しかし、ウィリアムがやや困った視線を彼女に投げたのに対し。

話に上げられたラングドンは、渋い表情で。

「そう簡単に行くか。　地形や環境を考えて言って欲しいのぉ」

ロイムが、当然の様な口調で。

「だよね。　下手に火を使って、山火事起こしたら仕事処の話じゃ無くなるよ」

頷いたラングドンは、肉を食べてから。

「そうだ。　しかも、森の密集した場所では、風が呼び難い。　火事が起こったり、水に弱いモンスターと対峙しても、飲み水すら無い状況なら魔法を発動させ難い。　自然の力が強く影響し、様々な反響を示す我が自然魔法は、いい加減な認識の下で頼られてものぉ・・・」

云った手前に、場を悪くしたと思う顔色のリネットに対し、スティールは素直に。

「んじゃ～、魔法を扱う意味で、水袋に水は欠かせないし。　火を使うなら、昼間でもランタンか松明が必要な訳だ」

肉を細かく切るラングドンは、

「そうじゃ。　ま、雨が降れば水の魔法は強く威力を増し。　強風の時は、風の魔法が強い。　大地が剥き出しの山では、土の魔法は発動させ易く。　しかも、威力が安定する。　大地を走る“龍脈・地脈”と呼ばれる精霊力の巡る近くでは、魔法の威力が格段に増すぞ」

と、説明をくれてやる。

「はーっ、それは凄いな。　・・でもオッサンよ、ペナルティとかは無いのか？」

「無い事もないの。　魔法が強力に成ってしまうだけ、集中してやらないとな。　罷り間違えば魔法が暴走したり、仲間を傷付ける程に強く発動させてしまう。　結果、自然を痛め付けたり、返って被害を出す事も・・の」

「なるほど。　強過ぎる分だけ、制御が面倒って訳ね」

「うむ」

其処で、話の切れ目に口を出したのは、ドワーフ種族のマラザーフ。　ウィリアムに、確認事項として尋ねたい事が在った。

「ところで～、リーダーさんはぁ戦わンダスか？　森ン中に入ったら、隊列はどうしまんダス？」

軽くワインで口を湿らせたウィリアムは、野菜の炒めたものをパンに挿みながら。

「先頭は、俺とカタニスさんですね。　リネットさん、マラザーフさん、アクトルさんは、隊列の中か後ろにする魔法使いさん3人の守りを優先して下さい。　斬り込みは、スティールさんが宜しいですかね」

「んだか～。　解ったダス」

スティールも。

「オーケー。　俺の華麗なる剣捌きで、かる～くモンスタ～をあしらってやるさ」

だが、またしてもリネットが。

「リーダーさん、戦えないのに前へ行くのか？　怪我なんかされたら、それこそ面倒なんだが」

と、文句を。

アクトルやスティールなど実力を知る面々は、苦笑いすら浮かべる。

当の槍玉に上がるウィリアムは、しれ～っとした物言いで。

「その辺は大丈夫ですよ。　逃げ足の速さには、相当の自信が在りますから」

「はぁ？」

思いも寄らない返答が返って来て、思わず口を開けたリネット。

代わりに。　吹き出しそうに成ったり、喰えないと笑うのはチームのメンバーだ。

スティールは、ワインに切り替えた直後で。

「ははっ、確かにお前の逃げ足は天下一品だぜっ」

と、陽気に言い。

意味が違うと思ったロイムは。

「え〝ーーっ、逃げ足って云うの、アレ～？」

アクトルは、そのロイムに。

「そういや。　逃げ足だけなら、ウチのロイム先生も負けないな」

と、言い。　一時加入のラングドンやマラザーフを笑わせる。

ウィリアムの暗殺闘武の技は、口に出しても伝わらない。　見るに限る。　チームの一同は、それが理解出来ていた。　だから、こうして何も真実を云わなかったのだ。　純粋に戦うなら、アクトルとウィリアムが一番強い。　スティールが、そう思っていたほどだから・・。

ウィリアム続編・新たなる魔域　2（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域　3

ウィリアム編

次の日の朝。

宿屋や村長の口利きで厚意に預かった。　昨夜に飲み食いした酒場にて、朝の食事を取る面々である。

只、起きた面々と、起こされた者の顔が、微妙に違っている様だ。

「何で・・ブツブツ」

スティールは、妙な起こされ方をして機嫌が宜しくない。　夢の中で。　可愛い娘と果てしなく壮大な・・（？）恋愛をしていた所で、突然にブレンダが出てきてた。　言い寄られて恐ろしい目に成った直後。　更に、大量のオカマまで、溢れる湯水の如く出現したのである。

実は。　もう起きる頃に成っても全く起きないスティール。　それに怒ったロイムが、スティールの耳際で適当な事を吹き込んでいたのだ。　その所為か、夢には不気味な面々が溢れ、スティールは驚いて飛び起きた。

「何時までも寝てるからだよ」

ま～るで他人事の様に云うロイムの斜め目線。

ジロっと見返したスティール。

「オメェ・・後で覚えてろよ」

睨まれるロイムに、スティールの事を頼んだ本人であるアクトルは、緩く笑って。

「一人でガーガー爆睡してるのが悪い。　お前、揺すっても起きねぇ～から、俺がロイムに相談したんだよ」

カリカリに焼いたパンをガシガシと齧るスティールは、

「ウルヘェっ・・、んぐんっぐっ。　何で選りによってあのオカマ主なんだよっ！！　どうせなら子猫ちゃんとか、それクローリアとか、それこそリネットでもイイだろうがぁっ？！」

と、喚く。

下らない話で機嫌の悪くなる一方のリネットは、細めた目をそのままにスティールを睨み。

「まてっ、何で夢にまで登場しなければ成らないんだよっ？！　夢の中で一体何をする気だっ？！」

と。　機嫌が悪い所為か、言葉遣いが女性らしく響く。

そのリネットの横では、無視して食事をするクローリアが居る。

ウィリアムは、なんとも面倒と云う顔をしていて。

「はぁ～、何処に行ってもメンドーな人だ。　いっそ、モンスターのエサにしようかな」

と、呟いた。

やや、せせら笑う様なラングドンは、ウィリアムに向け。

「リーダーとは、かくも面倒なものよの」

と、云えば。

「えぇ。　ま、迷惑の１２割は、見て解る通り一人なんですが・・。面倒見切れないですよ」

カタニスやマラザーフは、朝から元気な面々に苦笑しか無かった。

さて。

斡旋所の依頼内容を聞いて、ウィリアム達の下に村長が来た。　宿代などは面倒見るから、村の分の樹香も欲しいと云うのだ。　ウィリアムとカタニスは、薬草の類などの要求も聞き。　代わりに、怪我人が出たときの運搬に使う馬車や、後で薬が必要な場合には、なるべく安く譲って欲しいと交渉を。　村の村長は、快諾をしてくれた。

食事を終えて、宿に戻った面々。　普段着などの衣服を残す為、宿屋の奥の保管場を借り。　農作業に農民が出払った頃に、カタニスの案内で村の西部を流れる川へと向かった。

森の木々に囲まれる川は、小砂利の敷き詰まった川底なども窺える

清らかな水だった。

川のせせらぎを聞くスティールは、川を見て。　自分の膝くらいまでの深さで、３０歩どうかと云う川幅をした川から、ず～っと山の方を見る。

「此処から、向こうの森に行くのか？」

カタニスは、川の元へ指を向け。

「そうだ。　この先は、山と森に繋がっている。　昨日のラングドンさんの話を聞くに、水が近ければ魔法も発動させ易いだろう。飲み水も確保出来るし、怪我をしても直に洗える」

続く様に、ウィリアムも。

「樹香は、樹齢の高い木ほど良質と云われ、適度に湿気が在る方がイイんですよ」

もう、真面目な顔のスティールは、

「おし、んじゃ行こう。　森の中で野営しなきゃならないとしても、初日が肝心だ」

と、中々な事を言う。

ウィリアムは、カタニスと並んで歩き出しながら。

「頼りにしてますよ」

と、スティールに。

「ま、お前の出番が回るまでは、気張る」

スティールも、素直にそう返した。

ロイムやアクトルは、二人の間に見えない握手の様な雰囲気を感じる。　クローリア以外の男性のチーム４人は、それぞれに男同士の信頼が見え隠れする。

ラングドンやマラザーフなどは、それが少し羨ましい様な。

朝に、モンスターの遠吠えが聞えたとの事で。　少し下流に在る砂金や琥珀を取る場は、今日は休みならしい。　村に近いこの場所からでも、警戒は怠る事は出来なかった。

川に沿って歩き出した一行。　大岩から小さい石までが転がる川原。　白い石が多く、上を見上げると伸びた木の枝が庇を作る。　風も爽やかで、良い気候だった。

だが。

川を上流へと上り始めてから、少しして。

「ん？」

大岩が右手に近付いた所で、ウィリアムが足を止める。

スティールも足を止め。

「今、遠くでなんか・・」

と、云うと。

ウィリアムは、スティールの見ている対岸の川向方向とは逆。　自分達が歩いている川沿いの先を見て。

「何か・・気配がします。　少し先の・・大岩の辺り」

ロイムは、杖を握り締めてその方を見る。

「ホントだっ!!　ウィリアムっ、岩の裏側になんか居るっ」

ラングドンも、

「随分と気配を消しておるが・・、確かに何か」

その時だ。　ウィリアムは、急にガサガサと蠢く森の一部を指差し。

「対岸の川向からも、何か来てますっ」

スティールは、早くも剣を抜き。　川の所々に突き出た石の上に飛び乗った。

ウィリアムは、対岸へ向かうスティールに。

「なるべく、川にモンスターの死骸を入れないで下さいっ。　村人の飲み水でもありますからっ!」

「おうっ」

スティールは、先制されないように川向の対岸へと移動。

アクトルは、殿のマラザーフに。

「守りを任せる」

と、云ってから。

「俺は、岩の右側に回るから、ウィリアムは左から」

武器すら持たない様子のウィリアムは、直に。

「はい」

と、云って。　カタニスに。

「何時でも射る準備を」

もう、弓を手にし、矢を番えられる体勢に入りつつあるカタニスは、ロイムやラングドン達を庇える間合いに下がった。

そんな中で、リネットだけが。

「おっおいっ」

勝手に何もかもが決まって行く様で、武器も持たないウィリアムが出張る様子に驚く。

そんな様子で慌てるリネットへ、クロ一リアが。

「ウィリアムさんは、大丈夫。　それより、必要なら直に、スティールさんへ加勢出来る用意を。　ロイムさんが、サポートいたします」

リネットがその声に周囲を見れば・・。　ラングドンが、アクトルとウィリアムのどちらも窺えるカタニスの脇に出ていて。　ロイムは、対岸のスティールのサポートに回るべく、杖を握って川岸に近づいていた。

（何だっ?!　命令もされてないのに・・）

リネットは、焦った。

先にモンスターと交戦するのは、スティール。　森の木々が揺れ動く音が近づいて来たと思いきや。

ーシュューッ!ー

甲高い声を上げ、枝の上から川沿いに飛び出して来たのは、何と足の長いカニである。　長く黒い鋏を持ち、左の鋏が大きく人を楽々と鋏み込めそうなほど。　黒味がかった丸い形の甲羅は、ヤドカリに近い姿で。　大きな蝸牛の様な目が、頭部からやや斜め上へと突き出ている。

「うひょー、カニかよっ」

と、目を見張るスティールに。　ロイムは、応(こた)え。

「森に潜むカニのモンスターだよっ!!　凄く獰猛で、動物の肉が

好物なんだっ！！」

片手を上げて了解を示すスティールは、

「ロイムっ、チビって逃げんなよっ」

と、自分に向かって横歩きして走るカニへ向かった。

「一人でっ・・」

と、焦り。　スティールに助太刀しようとしたリネットだったが。

それより早く、ロイムが。

「魔想のチカラよっ、飛礫を生み出せっ！」

と、魔法を唱える。

（コワイけど・・この杖があればっ）

ロイムの杖から、優しき波動の蒼いオーラが満ちる。　かの有名に成る事を拒んだ天才魔法遣いオルロック。　彼の作った杖は、ロイムの心に湧く恐怖心を薄め落ち着きを促す。　ギュっと集中したロイムの生み出した飛礫は、強くしっかり光って具現化されていた。

その頃。　右回りで行くアクトルより、二呼吸先に岩の向こうへ躍り出たウィリアムは、大岩の裏側にギョロリと動く目を見つけ。

「エビナスカムフラだっ」

と、川沿いを更に先へ走った。

ウィリアムの判断は、素晴らしかった。　狙い澄ました動きで、粘液に満たされた長い舌を飛ばすエビナスカムフラ。　ウィリアムの臭いを嗅ぎ、舌を伸ばす用意をしていたのである。　走らなければ、ウィリアムは舌の直撃を受けて居ただろう。

ーシュ！ー

空気を切る音がして、エビナスカムフラの伸ばした舌がウィリアムのわき腹に寸部及ばず、空を突く時。

「ガラ空きだゼっ！！！！」

と、アクトルが戦斧を上段に構えて踏み込んだ。　太陽の光を屈折させる、特殊な液体塗れの身体をしたエビナスカムフラだが。　その毒々しい赤紫色をした舌の色までは、変えられない。　アクトルの振り下ろす戦斧を喰らって、川原の上に落ちた。　更に、止めを入れるアクトル。

対岸では、カニのモンスターの目を斬り飛ばし、長い足を掬いに斬り払うスティールが居て。　足を斬り払われたモンスターは、宙で反転し。　丸い甲羅を川原へと打ち付ける。

「それっ、それっ！！！」

ロイムの飛ばす飛礫を喰らい。　甲羅を砕かれ、目をやられる他のカニのモンスター。

「でかしたーっ！！」

スティールは、壊れた甲羅の下に脈打つ青緑の臓器を発見。忙しく左右に暴れるカニ、二匹の間を駆け抜け。そこを断ち斬った。

ーシュシュシュ・・・ー

泡を吹き上げ、暴れるカニだったが。直に動かなくなる。

初戦と云うべき戦いは、余裕の内容だった。

★

再び集まり、川原を歩く一同。

感心した表情のマラザーフは、スティールに。

「いい腕ダス。素早かったダスな～」

歩くスティールは、ヘラヘラした様子は無く。やや顔を笑ませ。

「あぁいうモンスターは、俺の相手さ。でも、甲羅は硬かった。オッサンがハンマー仕えたら、前に呼んだな」

「あぁ～。オイの得物は、通常より何倍も太い特注品で、重みと圧力でも殴れるだよ。次は、周りを見て加勢するダス」

その時。ラングドンは、斧を見ながらアクトルに。

「見事な腕前。　斧は、魔法の武器の様だな。　一瞬、森と大地のエネルギーが感じられた」

アクトルは、辺りを警戒する上で、斧を担ぎながらの姿。

「みたいだ。　ま、斧（コイツ）は、幽霊やガイコツにも効くからな。　重宝するぜ。　・・それより、周囲にはモンスターの気配は？」

「いや。　素早い戦いだったからの。　気付いて来ている気配は、今の所は無い」

「そうか・・。　しかし、スゲ～能力だぜ。　舌と目玉以外、倒すまで良く解らなかった」

「うむ。　気付いたリーダーに、感謝かの」

先頭を行くウィリアムへ、カタニスが。

「しかし、よく解ったな」

辺りを見るウィリアムは、

「川のせせらぐ音と違う音が聞えたんですよ。　おそらく、モンスターが攻撃態勢に入る時に出る、一種の威嚇音に近いものかと。あれが聞えてなかったら、ヤバかったですね」

と、返す。

カタニスは、レンジャーとして森に入る自分ながら。

（敵わないな）

と、思った。　耳の良さ、目の良さ、気配を感じる感性、そしてその全ての情報を素早く判断に繋げる知性。　自分の及ぶ処では無いと思ったカタニス。

一人不満顔は、リネットである。　ムスっとして、喋らない。

雰囲気でそれを察するスティールは、リネットに。

「加勢するタイミングが解らないなら、魔法使いを守る事に徹していいぞ。　誰かが守らないと、敵に有利なこうゆう場所では、本当に危険だ」

「・・・」

それでもリネットは、黙ったままだった。

ウィリアムは、スティールに。

「スティールさん。　ブレンザさんが腕を認めてる人ですから、大丈夫ですよ。　それより、特攻生け贄係なんですから。　喰われる時は、最初でお願いしま～す」

と、云えば。

聞いていたロイムは、スティールを汚い物でも見る顔で見て。

「うわ・・・。　食べたモンスターが、急にスケベに成ったりして」

軽く吹いたアクトルは、

「上手い。　スケベなモンスターか、見てみたいな」

と、感想を追加。

スティールは、笑う皆を見て。

「ゴルァ！　俺は毒かっ？」

と、云うと。

自分のチーム全員が、確実に頷く。

「ガク・・・」

項垂れたスティールだった・・。

が。

少し歩いた所で、ウィリアムとカタニスがまた足を止める。　今度は、奇妙な“カサカサ”と云う音が川原の上から聞えて来る。

アクトルは、斧を構えて。

「何の音だ？」

と、前方へ目を凝らした。

その直後である。

ウィリアムは、川原に黒い紐の様な物が這うのを見つけ。　それが、前方を埋め尽くす様に見えた時。

「あっ！　川原に棲む肉食のハサミムシ“骸這い”だっ」

スティールは、直に前へ出て。

「どうするっ？」

ウィリアムは、水辺に住む“骸這い”だが、水の中を泳げない事を思い出し。

“対岸へっ”

と、言おうとしたのだが。

「ワシの出番じゃ」

と、一足先にラングドンが出た。

集団より3歩ほど前に出たラングドンは、杖を川に向け。

「ふむぅっ・・水の力よっ、我が呼び掛けに応呼せよっ！！」

と、川原に振り戻す。

すると・・。　突然に川の水の一部が伸び上がり。　ラングドンの杖の動きに応じて、川原へと飛び出して来た。

「すごっ」

ロイムが驚く中で。　ラングドンは、杖を振り上げると。

「水よ、蛇の如く伸びて壁となれっ」

飛び出して来た水は、川原に浸み込む事も無く。　川原を横断する様に一線の帯と化した。

「ぬぅっ、はぁっ！！！」

ラングドンが杖を振り回し、前方へ突き出す。　すると、水の帯は、川原を舐める様に転がって行くのだった。

「はーっ、こりゃスゲ～」

スティールも、その魔法には圧巻と云った処。

回転しながら川原を進む水の帯は、すぐそこまで迫ったモンスターの群れを飲み込み始めた。　大人の手の平程の体長をする、ハサミムシのモンスター。　しかし、水に飲み込まれると、その回転する水流の圧力で倒される。　モンスターを次々と飲み込む水の渦。それを、更にまだ向かってくるモンスターを迎えるが如く、前へと進めたラングドン。　そして、群れて現れたモンスターを全て飲み込みきった処で。

「ほいさっ」

と、水ごと持ち上げた。

「・・・」

静かに見守るウィリアムだが。　この涼しい川原で、ラングドンが汗を顔に掻き始めたのを見逃さず。

（相当に集中する魔法だ・・、中等の応用が混じった魔術かな？）

と、行方を見守り続ける。

空中で球体と成った水。　それを、思い切り川原へ叩き付ける様に、杖を振り下ろしたラングドン。　水流の回転と水圧の御蔭で、肉食ハサミムシのモンスターは、駆逐された。

直後、向かい風を受けたウィリアムは、

「先を急ぎましょう。　モンスターの死骸から、強い匂いが出ています。　下手すると、集まって来たモンスターに囲まれる」

と、皆に云い。　それから、ラングドンへ。

「お疲れ様です。　流石に、素晴らしい威力ですね」

顔に流れる汗を拭うラングドンは、

「いやいや、これしきでは恩返しとは言えまい。　ま、若い者に負けたくないが、少し歳かのぉ。　汗が出たわい」

と、更に腕で頬を拭った。

川原を上がる事、更に。　太陽が昼に差し掛かり。　周囲に気を配りながら、軽く食事を取った一同。

川原の石に座るスティールは、ウィリアムに。

「まだ一つも見つけられないのか？」

大岩に凭れて食事をするウィリアムは、少し離れた森の境を見て。

「まぁ～、薬草の類はチラホラと」

「あぁ。　草は、摘んだ瞬間から鮮度が落ちるんだったか。　んじゃ、帰りだな」

「ですね」

しかし、ウィリアムは、川原を見つめているウチに。

「え？　アレ・・なんでしょう？」

と、遠くを指差す。

「モンスターかっ？！」

鋭く声を上げて立ち上がるスティールや、リネット。

目の良いウィリアムは、スティールに。

「ホラ・・歩いている様に見えますよ」

「あぁ・・、みたいだが・・人か？」

「さぁ・・」

と、ウィリアムは首を傾げ。　川岸まで歩いて行く途中で。

「うわっ・・黄色い肌してる」

と、見えてきた事を言った瞬間。

「それはブッカーだっ！！」

と、カタニスが弓を手に遣って来る。

ウィリアムは、初めて聞く名前に。

「モンスターですか？」

と、聞き返しながら、モンスターを見る方に気が向いてしまった。

急いで矢を取り、番えるカタニスは、

「魔界の住人の亜種らしい。　混血小鬼（アギィージャ）と呼ばれる種族だとかっ」

と、矢の射程範囲に入った処で放った。

ーオッ・・オッ・・ー

変な息を吐く声を出しながら遣って来たのは、本当に黄色い肌をした人型の生き物である。　みすぼらしい髪をしながらも、頭には数

本の棘の様な角が生えている。　筋肉質の裸姿で、口には収まり切らない犬歯の様な牙が、上下に食み出ていた。

カタニスの放った矢は、緩い放物線を描いて。　“ブッカー”と云う、遣って来た人型の亜人の顔に命中する。

ーハゴォォっ！！！ー

二匹来たウチの先頭に命中し、黒ずんだ血らしきものを流して蹲る一匹。

だが、もう一匹は一気に走り出し、対岸の向かいに遣って来た。

「うわぁっ！　顔は人じゃないよぉぉっ！！」

と、驚いてマラザーフの後ろに逃げるロイム。

ギラギラと燃える様な狂気の目は、モンスター特有と云うべきか、共通のもので。　カタニスが放つ二の矢を、何と自分の腕で庇い。　腕に矢が刺さったままに成りながら、川原に落ちている拳大の石くれを掴む。

ーオオッーー

そしてなんと、カタニス目掛けて石を正確に投げて来た。

「なっわっ！」

驚いたのは、矢を取り出したカタニスで。　屈んで何とか避けたのだが、その投げられた速さは、早い。

ウィリアムは、直に。

「気を付けてっ」

と、云いながら、深みの在る川に足場が見つからないので困る。

ロイムが杖を側め。

「こんなモンスターも居るのぉぉぉ？」

と、云うと。

「魔想のチカラよっ、無数のダガーを生めぇ！！」

と、十数本の半透明なダガーを生み出し。　パッとマラザーフの影から躍り出て、石を投げて来るブッカーに飛ばした。

全身に魔法のダガーを受け、それが弾けて衝撃波を生む。　けたたましい絶命を上げた対岸のブッカーは、ロイムの魔法で崩れたものの。

「おいっ、蹲ってたのが逃げるぞっ」

と、ラングドンが云う通り。　最初にカタニスの顔に矢を受けたブッカーは、目の前の森の中へと飛び込んで行く。

石を避けた面々の中でも、最初に見つけたウィリアムは、驚きと呆れを顔に滲ませ。

「あんなのも居るのか・・。　初めて聞いたモンスターって・・興味が湧きますねぇ」

アクトルに守られたクローリアは、そんなウィリアムに。

「観察なんてしないで下さいまし・・。　はぁ・・怖かった」

と、やや非難を示す。

カタニスは、周囲の安否を確かめながら。

「以前に聞いたのだが。　別の冒険者の学者に因ると、最近生まれた新しいモンスターらしいと、な」

聞いたウィリアムは、深く考え込み。

「なるほど・・なるほど・・・」

興味が先行していると見受けられるウィリアムに、ロイムは近寄って。

「人でも、もっと警戒しようよぉぉ～。　ウィリアムが一番警戒無かったよっ？」

だが。　ウィリアムは面を上げると。

「もしかして・・。　此処には、オークやゴブリンなどの悪魔や鬼の住人が、極めて少数に孤立して住み着いているのではないでしょうか。　人を攫うだけの数が無いので、似たり寄ったりのモンスター同士が、交配を・・」

学者でも、好奇心や知的欲が強過ぎるのも考え物であろうか。　ウィリアムの様子に、スティールは笑って頷くと。

「お前、モンスターの集落なんかみっけたら、先ず観察しそうだな。倒すとか、駆逐するより」

皆の呆れた視線を見返したウィリアムは、

「・・・かも」

と、苦笑いでそう言った。

★

さて。

昼を過ぎて。　夏の長い陽が、まだまだ傾かない昼下がり。

警戒した様子の一行は、川原から森の中へと踏み込み始めていた。

草も生い茂らない、暗く湿気の篭った森の中。　煩く蚊が近寄ってきて、しっかり塗った筈の虫除けの薬も、汗で肌から剥がされる。

風が吹き込めない森の中は、様々な木々が鬱蒼としていた。

モンスターに警戒する皆の中、ウィリアムが。

「有りましたね。　樹香です」

と、太い木の上を指差した。

濁った黄色の樹液が、枝の付け根の部分に固まっているのを見たスティール。

「あれか」

真っ直ぐに伸びる白い樹皮の木で、樹香の見える所までは上らなければならない。

アクトルが上を見上げ。

「結構高いなぁ」

だが、細工をしたロープを取り出すウィリアムは、涼しい顔で。

「直に終わります」

と、ロープを別の枝に投げた。

「上手いな」

カタニスは、一回で絡めるウィリアムを褒めたが。

ウィリアムは、軽く手を上げるだけ。　直に木を上り出す。

ラングドンは、その身の軽さを見て。

「なるほど、確かに身の動きに無駄が無い。　逃げ足に自信が在るのも、頷けるわえ」

と、感心する。

ロイムと見合うスティールは、互いに笑っていた。

さて、ウィリアムが木の上に上ると・・。

「この高さからだと、樹香の位置が解ります。　皆さん前。　この木を越えて、進行方向二つ目の白い木の下まで移動して下さい」

と、ウィリアムは作業に入る。

マラザーフは、ウィリアムがナイフを取り出したのを見て。

「ほえ～。　そんなに硬い物なんダスか？」

同じく見上げていたリネットが。

「ではないか？」

と、素っ気無く返すのに対し、カタニスが。

「樹香とは、樹液の固まった物が何年も水分を含んだり乾燥したりして、その純度を増しながら凝固した一部分を指すのだ。　一々樹液の固まりをそのまま取っては、重くて持ち帰れる量は少ない。彼は、その必要な部分だけを削り取る気なのだ。　さ、確かに向こうの木のほうが周囲が開けて見易そうだ。　彼の云う通り、周囲を警戒し易い所へ行こう」

と、説明をしてくれる。

ロイムは、感心した様子で。

「ウィリアムって、凄いよねぇ～。　何で、ボクやスティールさんなんかを、チームに入れてくれてるんだか・・。　もっと優秀な仲間を集めてもイイのにね」

と、歩き出す。

すると。　スティールは、格好をつけた顔で。

「それは、俺とロイムがセクシ～だからさ。　アイツは腕だけで無く、人間の価値を解るオトコなのよ」

引き攣る笑みを浮かべたクローリアは、ズバリ。

「スティールさん・・価値が在りますの？」

歩き出した一歩目で固まるスティール。

アクトルは、歩き出しながら。

「その理論から行くと、ロイムは別にしても。　お前に対しては、目利きが節穴って事の証明にしか成らん気がする。　義兄弟として、ガキの頃から一緒に居る俺は、お前の価値の重さを感じた事ないぞ」

スティールの前を通り過ぎるリネットは、只。

「バカ」

と。

涙が出そうなスティールは、

（ウィリアムぅぅ～、早く返って来てぇぇぇ・・）

と、願った。

木の上に上がったウィリアムは、拳の様に丸い樹液の固まりを削り。
下方に白く固まった樹香を削り取って。

（次に行きますか）

と、太い枝の上を歩いては、ヒョイっと次の枝へと飛び移る。

その音を聞き、上を見る皆。

少し開けた場所に着いた一行だが。　ウィリアムを見ないのは、アクトルとスティールのみで。

アクトルが。

「なぁ～んか不気味だ。　ウィリアムより、周りに注意した方がイイぜ」

と、云えば。

「あぁ。　奥に入ると、なんか腐臭に似たカビ臭さないか？　気味悪いぜ」

と、スティールも。

ウィリアムも、木の上で次の樹香を採ろうとしていると。

（あれ？）

次に向かう木だけを確認したつもりだったのだが、何か違和感を感じた。　それが何かは解らなかったが、景色が変わって見えたのだ。　大きな変化では無かった。　だが、何かが違って・・。

その時。

アクトルは、スティールの前方の木を見て。

「スティール・・」

「ん？」

「その木・・・もっと遠くじゃなかったか？」

言われて木を注視するスティールは、周囲と何か雰囲気の違う黒っぽい木に。

「・・なんか、近い・・」

と、下を見た。　すると、７・８歩先の木の根が、上に浮いて地面を這う様に動いていた。

「ヤベっ！！　こいつモンスターかっ？！」

驚くスティールが剣を引き抜くのに合わせ、マラザーフが前に踏み出し。

「魔術師わぁ太い木にっ」

と。

狭い範囲内だ、乱戦は必至である。　魔法遣いは、魔法の遣い処が難しい局面であった。

アクトルは、カタニスの前に踏み出し。

「皆を頼むっ」

と、不自然に垂れ下がって来た枝を斬り上げる。　スッパリと枝が斬られた直後、その木はグルリと向きを変えた。

「わっ！！！」

思わずの反射的に声を上げたのは、ロイム。

だが、ロイムが驚くのも当然だろう。　黒ずんだ木の樹皮には、棘の様な針が多数突き出た部分が有り。　其処には、腐った人の死骸が・・・。

木の上からその様子を見たウィリアムは、

「“ニードルスポイルト”ですっ。　棘や枝に気をつけてっ！！」

と、降りる体勢を整えるのだが。

スティールは、このぐらいの奇襲は想定内であるので。

「わぁーーったっ！！　ウィリアムっ、とにかく採取を優先しろっ！！」

マラザーフも。

「早く森を出れる様に、そのままダスっ」

と、ウィリアムを制す。

アクトルは、戦斧を下からのカチ上げで振り上げ、幹前面に伸びる針の部分を斬り飛ばし。　スティールは、降りて来る枝を斬り払う。

モンスターの全体を見回すクローリアが。　木の上の方に、枝に護られた顔の様なコブが突出しているのを指差し。

「か・顔がっ」

と、言うと。

ウィリアムは、上から。

「それが弱点ですっ！！！！」

と、鋭く伝える。

カタニスが弓を番える前に。

「このっ！！！」

スピアを構えたリネットが、顔の様なコブに目掛けて投擲した。

その寸部手前である。　規格外のショーテイルの先端を構えて、モンスターを転ばそうと突進したマラザーフが居た。　ズンっと突進を根元近くに喰らった為。　モンスターがコブを護るべく伸ばしていた一部の枝が、揺さ振られて引っ込まった。

其処で、リネットの投げたスピアが、顔の様なコブの口の様な部分にグサリと突っ込み。　後頭部を思わせる後ろまで突き抜けたのである。

ーギシギシギシっ！！！！ー

その一撃を受け、俄かに激しく動き出した枝や根。

アクトルは、モンスターへ思いっきり踏み寄り、側面から斧を振り込んだ。　ザックリと幹に斧が降り込まれた衝撃を受け、グラリと傾き倒れるモンスター。

“バタァ〜〜ン”

地響く様な振動を伝え、モンスターは倒れる。　走ったスティールは、削ぎ落とす様にコブを切り離した。　然程の暴れも無く、ドロドロと黒い体液を流してモンスターは動かなくなる。

寄って来たマラザーフは、スピアを拾い。　軽く振ってコブの様なモノを投げ飛ばすと。

「イイ腕ダスな」

と、後から遣って来たリネットに投げて渡す。

「フン」

“それ程でも無い”とばかりに、鼻を鳴らす彼女だが。　スティールとアクトルの二人には、自然と目が向く。

（確かに、この二人は強い）

悔しい部分も有るが、自分より腕は上だと認める戦い方だ。　素早く動き、的確な斬り込みを見せるスティール。　状況判断が良い上に、相手の動きを読んで攻撃をブチ込むアクトル。　対照的だが、動きの連携が出来ていた。

（この二人が要だな。　あの素早いだけで頭脳的なリーダーと、魔法を操る二人は脇役みたいなものか）

リネットは、そう判断した。

３種類の樹香を集める事が出来るこの森で、ウィリアムとカタニスが樹香を集める。　樹木のモンスターには幾度か襲われたが、魔法も駆使して切り抜けた。

日が暮れるまで集めたので、ウィリアムは一旦村に戻る事にした。

峡谷の様な場所に、森が点在すると云う場所には、此処からまだ少し行かなければ成らない。　採取した樹香は、十分に乾燥したものばかりだった。　手間も掛けず保存の利く種類だったので、無理に

夜営をする必要は無いと判断した訳だ。

しかも、村長に頼まれた薬草も、後回しにしていざ採れないのでは悪い。

ウィリアムの判断は、ラングドンやカタニスには無理の無いものだと言われ。　マラザーフやリネットも、然して反論はしなかった。

村に戻った夜遅く、雨が降る。

次の日の夕方まで降った雨で、リネットも戻って正解だったと思った。

ウィリアム続編・新たなる魔域　3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回の話は、途中から微妙に竜種が登場するので。　大まかの内容が出来上がっていた関係も在り、気合いが出て早い仕上がりです。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域　4

ウィリアム続編～新たなる魔域へ

ウィリアムとカタニスは、雨の上がった夕方に来た村長と面会していた。

森に分け入った初日。　二人掛りで結構な量を採った。　帰った夜に、薬草と樹香の一部は引き渡しておいたのだが。　何故か一夜明けて雨も上がった夕方に、村長と他二人の男性が遣って来る。

今、村長と一緒に来た薬師や道具屋の店主などと、ウィリアム、カタニスの両名が引渡しと共に情報交換をして話し込んでいた。

その話は、村長の頼みで貸切と成った酒場の窓側の隅で、随分真剣に行われており。　軽く呑んだり食べたりする一行には、口を差し挟む隙の無い様子だと思えた程だ。

薬草などは、村や町の薬師。　若しくは、道具屋などが乾燥や抽出を行う事が多い。　狩人などは、草を最低限度の処理だけして売るが、大きな街に運び込まれる形はそれぞれである。

何が話の中心かと云うと、薬師と道具屋などの主が、自分達も同行したいというのである。　生じ有能な冒険者が来たので、此処で護衛を買って貰い。　余分に採取をしたいと云うのだ。

だが、散策初日で、危険が多い事を証明された森である。　ウィリアムやカタニスも、無責任に引き受ける訳には行かない。

斡旋所へ仕事を通して、キチンとした段取りを踏んで欲しいと云うウィリアムやカタニスに対し。　スケベ心と云うか、便乗しようと熱心な薬師や道具屋側。　両者を取り成し、村の現状を伝える村長と云う構図である。

アクトルやリネットの注文したビアを届けに来た女将は、呆れた顔で離れたその様子を見て。

「全く・・どうしても懲りない連中だよ」

大きなグラスを持つアクトルは、女将の言葉に不穏な気配を感じ。

「どうゆう意味だ？」

溜め息を出した女将は、話し合いを見ながら。

「先月に来た冒険者達は、あの薬師や道具屋の勧誘を引き受けたのさ。　でも、どうやら森の中でモンスターとの戦いに成った時、冒険者達の形勢が不利に成ったと見えたのか。　・・恥ずかしい話、真っ先に逃げ出したのはアイツ等なんだよ」

この話にリネットは、聞き捨てならないと。

「見捨てたって訳？」

頷く女将は、薄汚い輩を見る目で。

「逃げた若いのに聞いたけどね。　あの二人、冒険者のリーダーが言う事聞かずに勝手に騒いで、挙句の果てに見捨てて来たらしいよ。

チャッカリ薬草は、幾らか持って来たらしいしね」

スティールの顔が、少し冷たいものに変わり。

「なぁんだ・・。　村の為に頑張って損した気分だな」

女将は、スティールを見て。

「でも、あの粘る二人は、元からの村の者じゃないんだよ」

と。

ワインを舐めていたロイムは、

「違うのぉ～？」

と、驚いた。

「そうさ。　あの二人は、元々村を出て行った家族の子供とかでね。首都の方で成功した商人の手先として、薬なんかの原料確保に来てるんだよ。　表向きは、村の発展の為とか言って住み着いたケド。村長や村の有力者に金をばら撒いて、狩人から薬草なんかを多く仕入れてる。　正直、あの二人が来てから、薬の値段そのものが上がった。　村のモンとしては、出て行って欲しいのが本音だと思わ」

アクトルは、ウィリアムに食い下がる男二人を見てから。

「しかし、村長もそんなのに弱いのか。　どうしようもないな」

と、漏らす。　自分の父親の影響も在る故、筋を通さない者はいけ

好かないと思えてしまうアクトルだ。

女将は、一応頷きはしたものの、少し黙ってから。

「・・。　でも、しょうがない。　村長の娘って体調が優れなくて、虚弱なままにもう３０過ぎた。　高い原料の薬を、あの二人から安く手に入れてるから・・。　頼まれれば、嫌とは言えないんだろうね」

マラザーフは、自分の奥さんの事が在る手前に、何も言えない気分に成る。

アクトルは、スティールに。

「おい、女だぞ」

と、言うのだが。

醒めたスティールは、ワインを飲んでから。

「・・。　関係無いね。　その村長か、娘の頼みならイイが。　そんな金の亡者みたいなヤツ等のダシに使われるのは、正直気に入らねぇ」

リネットも。

「同じだな」

黙っていたラングドンは、薬師と道具屋の声が荒く成り。　罵る様に成ったのを聞くと、

「困った輩達だ・・。　己達で解決出来もしないクセに、若い者を相手に喚きよる」

スティールは、去ろうとした女将に。

「ちょい」

と、呼び止め。　振り返った女将へ。

「処で、元々から村に居る薬師や道具屋は？」

振り返って、この質問を受けた女将の顔ゆきは頗る悪く。

「廃業寸前・・。　森に入れない上に、交渉権を村長経由であの二人に奪われた。　殆ど薬草なんかを回して貰えないみたいよ」

スティールは、むず痒い思いのままに怒って顔を歪め。

「死ね・・。　ゴミ屑がよ」

と、漏らす。

クローリアは、言葉が過ぎると思い。

「スティールさん、それは・・」

「・・・」

スティールは、クローリアから視線を外した。

アクトルは、今更ながらに。

「なぁ～んか、あの斡旋所の主が大形にウィリアムを頼った理由が、此処に来て見えてきたなぁ～。　確かに、こんな様子じゃ～普通のチームを幾ら回してもキリ無ぇ」

聞えてくるウィリアムの語りは、冷静で淡々としていた。　もう、薬師と道具屋の魂胆を見抜いているのだろう。　やや怒り気味のカタニスに比べ、完全に冷め切っている。

ウィリアムは、物別れでも構わないと。

「責任の持てない事は、お断り致します。　それから、森の現状などの情報も求める斡旋所の要望も在るので。　この村での出来事は、全て報告させて貰います。　正直、噂の操作など無理ですよ。　情報が食い違えば、斡旋所は本腰で調査するでしょうから」

睨む様な顔の初老の薬師と、小太りな中年の道具屋。

項垂れて居るのは、村長である。

先に席を立ったのは、薬師と道具屋の二人。

白いものが混じる短髪の薬師は、

「村長っ、村で金を出して、もっと有能な冒険者を雇えっ！！　こんな腰抜けなどっ、使い物に成らんわいっ！！！」

と、罵り。

道具屋の男も。

「そうだそうだっ！！　中央に訴えて、村長の交代をして貰おうかっ？！　この非常時に、村の者より冒険者が偉そうで、村長が何も言えないなど恥ずかしい限りだっ！！！」

と、偉そうに。

ウィリアムは、涼しい顔色で前を見ながら。

「何処の村でも、高額の金を請求される冒険者への依頼は、村の長である方が決めます。　言葉尻を聞いても、村人の視線を見ても、余所者の様な貴方方には、そんな偉そうな事を言う筋合いは有りませんよ」

出て行こうとした薬師と立っていた道具屋が、この一言でウィリアムに睨みを向けた。

ウィリアムは、暗殺者の技能を修得する上で、殺気などを感知するのはお手の物。　顔を微動だにせず。

「その様に殺気を向けられても、困ります。　斡旋所に戻った際、貴方方と繋がりの深い薬屋や商人に抗議しましょうかね。　今回の依頼は、一人二人の依頼では無く。　街の大店の集まりからですから。　勝手に村で薬や原料を独占しようとする行為が行われているなら、物議は避けられないので？」

ウィリアムを睨んだ二人は、顔色を曇らせた。　自分達の行為が中央に伝われば、前面で非難を浴びるのは元締めの大店である。

ウィリアムは、最後に。

「しゃしゃり出るのも、周りを見てやりませんとね。　それこそ、本当に薬の需要が逼迫した緊急時なら、物議ぐらいでは済みませんよ」

と、一撃を突き入れる。

二人は、何も言えず憤慨を溜め込むしか無かった様だ。

スティールは、その様子を横目に。

「酒の肴に最高だね。　アイツの毒舌は、歯切れがイイ」

アクトルも。

「全くだ」

リネットは、狡猾で口の上手い者は嫌いな方なのだが。

「うむ」

と。

さて。

二人が外に出て、一人に成った村長は、改めてウィリアムに誰かの同行を頼むのだが・・。

ウィリアムは、あくまでも冷静に現状を分析し。

「村長さん。　我々も、その依頼を請けたいのは山々です。　ですが、あの様な村を掻き回す方々が居る中で、その依頼を安請け合いは出来ません。　何より、村長さんを信用出来ても、村人の全員を信用出来ないからです。　この一つの出来事で、村の方に死人でも出たら・・。　村長さんの地位をも危ぶませます」

村長は、老いた顔を俯かせ。　ウィリアムの話に頷いた。

「ま、出来る範囲内で薬草などは持ち帰ります。　依頼は、それでも十分かと。　あの彼等の言い成りになる意味が、村長さんに何か在るんでしょうが。　それが本当の意味で、為に成っているのか疑わしいですよ」

と、ウィリアムは突き付ける。

ウィリアムの言い方は、確かに厳しい。

スティールは、

「でた」

と、首を竦める。

マラザーフは、顔を曇らせ。

「アレはないダス」

リネットも、どっちつかずである。

村長は、娘の病気の事を話すと・・。

「あ～、それは“子不幸”ですね」

と、ウィリアムは言い切った。

黙る村長に、ウィリアムは続け。

「愛する親心でしょうが、それならしっかりと街で医師に診て貰うべきですね。“診て貰った”だけでは、解決しませんよ。子供さんの心が真っ当なら、父親が自分の御蔭で村の治世に手心を加えてるなんて・・耐えられないんじゃありませんか？」

村長は、返す言葉が無く。

ウィリアムは、涼しい眼で村長を見て。

「もし、あの二人の事を念頭に置いて、更にモンスターの事で村人全体が貴方の村長を疑問に思う様に成ったとしたら。最終的にその全ての事は、心配や心労として娘さんにも圧し掛かりますよ。恐らく、今の現状を娘さんに相談されて無い・・。違いますか？」

村長は、小さく頷く。

ウィリアムは、吹き抜ける天井を仰ぎ。

「親の気持ちは、それで構わないでしょう・・。でも、あの帰った二人にしては、それは利用の価値を値踏みしての品物でしか無い。それに価値が無くなったら、アッサリ捨てられるでしょうね。

そして、今さっきに」

“村長を変える”

「だの言う。　もう、村長の貴方より上に立った気分で居る言い回しです。　村長さんの娘さんに、どれほど重要性を持って見ていらっしゃるのか・・。　切られるか・・、決断をするか。　いずれ、村長さんか、向こうかがその選択を迫られる時期が来ますよ。　モンスターが居なくなるまで、村には脅威が迫ったままなのですから。　その選択の結果が最悪の場合、村長さんの娘さんは・・・どうなりますかね？」

老いた村長の一人娘は、歳が行ってから出来た末っ子である。　その娘に村長が父親として注ぐ愛情がどれほどか・・。　それは、親でなければ解らないだろう。

席を立つ村長は、

“考えてみます”

と、ウィリアムに言う。

ウィリアムも、また。

「責任の持てる事は、全力でやらさせて頂きます。　森の捜索中は、常に薬草の採取は出来る限り。　他、相談が在るなら聞きます。　貴方は、一人では無いハズだ。　村人や、少数の兵士も預けられている。　もっと、周りを信用してイイと思いますよ」

と、付け加えたのだった。

村長は、深深とウィリアムに頭を下げて出て行く。

皆の居る席に戻ったウィリアムは、仲間それぞれから気持ちに沿った視線を向けられる。

リネットやマラザーフからは、あまり気分の良くない視線を向けられるし。

ロイムやクローリアやカタニスは、困った視線である。

しかし、ラングドン、スティール、アクトルは、平静の視線で。

スティールが、座ったウィリアムに水を注いでやりながら。

「ウィリアム。　あの村長、あんましもう長くないんでないの？」

貸切状態で、近場に居た女将が顔色を変えた。

だが・・、ウィリアムは淡々としていて。

「でしょうね。　今回、我々は大店の集まりから依頼を請けたので良かったですが。　もし、あの怒鳴った二人と繋がりの在る方のみの依頼であったら・・。　村長さんに強引にでも我々へ仕事を押し付けさせるか、出来なければ村長さんを脅すぐらいの事をしたと思います。　村長さんの横暴が目立ってくれれば、いずれは中央の役人が来ますね。　村長さんの立場は、我々に関係無くこれからは苦しく成りますよ。　あの二人の言い成りに成ってるとね・・」

アクトルは、手拭きの布をウィリアムに差し出すと。

「お前、それが解ってるから断ったのか？」

チャレンジャーとして、斡旋所の回す依頼は全て請ける気のウィリアムなれど。　依頼に成らないものは、別である。　いや・・それ以上に。

「えぇ。　あの二人の我儘の増長を許せば、村長さんにどんな事を言い出すか解りませんからね。　彼らには、村長さんは権力を持つ傀儡・・。　その癒着が大っぴらになってしまえば、村に派遣された役人か。　村の人から密告されますよ。　そうなったら・・、村長さんも、病気の娘さんも終わりッスよ」

ラングドンは、その意味が解る。　重々しく。

「早い判断が求められるのぉ・・。　前回の冒険者達の犠牲が有って、今回の依頼における冒険者の腕を吟味する選別が行われた。　このまま我々が、あの村長をいい様にしようとする二人の言い成りを請けたとして。　万が一にと云うか・・もしもの事に成れば、次からは斡旋所も依頼自体の受付を渋るであろうし。　村の現状の調査も行われるかも知れん。　そうなれば、村長殿はもう首も回せない状態に成ろうし。　あの二人などは、真っ先に逃げ出すわい。　残される病気の娘は・・どうなるやらな～」

スティールは、ワインを呷ってから。

「いっつも犠牲は弱いヤツ。　偉そうに牛耳って醜く足掻くのは、金持ちや権力持ったヤツ。　見苦しい世の中だ～こりゃ」

淡々と頷くウィリアムは、静かに食事へ動きながら。

「とにかく、今回の仕事を成功させるに限ります。　採取量が多ければ、中央の店も催促を緩めるでしょう。　原料が足りなくなる一時を凌げば、他の村からも原料などは運ばれるでしょうしね。　足りない分は、後からでも他のチームがそれぞれに仕事を請け回れば、森に潜むモンスターを討伐したりして、現状が良くなるかも知れませんし」

リネットは、ウィリアムのその言い方が気に入らず。

「随分と楽観視だな。　その保障が何処に在るんだ？」

と、強い視線を向けるも。

スティールは、ワインをグラスに注ぎながら。

「リネット、俺達はただの冒険者だ。　権力を持ってる訳でも無いのに、そんな先をどうしようも出来ねぇ～ってよ」

野菜をバリバリと食べたアクトルも。

「・・そうだ。　もし、村長以外の誰かがこの現状を密告したら、一番苦しい立場に立たされるのは、病気の娘を抱えた村長自身だろう。　俺は、病気の娘を抱えた村長を、これ以上追い詰める事などしたくないゼ」

漸くリネットは、ウィリアムがそこまで解っててあんなキツい言い方をしていたのかと解り。

「リーダー・・、アンタ・・そこまで解ったから、あんな言い方を

してたのか？」

スティールは、親指でウィリアムを指し示し。

「ウチのリーダーは、その辺の読みの深さはタダ者じゃないぜ？」

アクトルも。

「そうだ。　でないなら、前に色々請けたあんなこんがらがった事件を解決出来ない。　ま、口は少しキツいがな」

リネットやラングドン達は、少しづつウィリアム達チームの実力を理解し始めた。

★

次の日

朝に食事をしに酒場へ向かうと、何時もの様に客が入れられていた。

席に座るウィリアムに、村人が近づき。

「薬草アリガトよ。　ウチのババァの薬が間に合った」

だの。

「痛み止め、ありがとうね。　ウチの旦那、モンスターに怪我させ

られて困ってたの」

だの。

スティールが奥様に言い寄るのは、クローリアとロイムにて阻止されたが。

「なぁ。　村長の助けもしてくれよ。　悪い人じゃないんだ」

と、言うのには、チームの誰もが何も言えなかった。

ウィリアムは、自分達を乗せて来た馬車の御者二人に樹香の管理を任せた。　何せ、あの薬師と道具屋の二人は、持ち帰る予定の樹香まで狙っているフシが見られたからだ。

さて。

今日からは、森林峡谷へと向かう事を前提とした。　向かうだけで一日は必要だ。　予定では、帰りを含めて４日を目標にする。

また西側の川原を上り、上流を目指す。

途中では、またカニのモンスターの群れに襲われたが、マラザーフとリネットが薄い切り傷を作るぐらいで。　問題も無く峡谷入り口に在る洞窟へと辿り着いた。

夕方。

深く深く切立った崖を前にする丘の上。　結界が張られた洞窟を休憩の拠点とするのだが・・。

「あ～、蚊に喰われたぁ～。　カイ～」

腕をボリボリと掻くスティールは、洞窟の入り口で虫除けの草を焚くウィリアムに。

「なぁ、薬くれい」

「焚き終わったらあげます。　掻かないで、患部を水布で拭ってキレイに」

「おい～」

同じく、背中を喰われたロイムは、杖を握りながら。

「うぅ～ん・・掻かない・・掻かないぃぃ」

と、我慢している。

一方のアクトルは、カタニスと崖間近から周囲を見回して。

「凄い峡谷と森だな・・。　こんなの初めて見たゼ」

と、感嘆していた。

丘の上の様な場所から、左右に深く切り込み落ちる岩壁を見せる渓谷。　深い谷底に向かうのだが、その谷底へと向かう切立った断崖は、途中途中に突き出すテーブルの様な空中に浮く台地があるのだ。

台地は、空中に浮いた盆栽の様に小さな森を形成し。　風の吹き抜ける谷を彩る。

同じく見るカタニスは、その渓谷を指差し。

「此処は、非常に特徴的な地形だ。　年間を通じて雨が多いのに、この状態で吹き抜ける風が、台地の森の乾燥を速める。　その為、固有と云うか、独特の自然を作り出している」

「なるほどなぁ～」

「モンスターが出てくるまで、一つの景色美を楽しめる名勝にも成っていたんだ。　旅人を狩人などが案内し、副収入も得られていた。　全く、なんでこの奥に、突然モンスターを産む穴が開いたやら・・」

アクトルは、それ以上に気に成る事を思いつき。

「処で、あの台地まではどうやって行くんだ？　一々ロープを使って、上から一ヶ所づつ回るのか？」

「あ、いや。　台地の裏側に成るのだが。　峡谷の内側には、天然の自然洞が縦横無尽に走っている。　観光の名勝でもあったから、手摺代わりのロープや、台地に向かう道標も残る。　それを頼りに行けばいい。　岩の裏側から、所々の台地へと抜けれる」

「モンスターは？」

「小型のものばかり。　寧ろ、谷底の森や、谷の上から左右に茂る森の方が怖いな。　ただ、大型の飛行モンスターだけは、要注意だ」

「ウィリアムは、その事を知っているのか？」

「知っている。　その情報を纏めて追加記述された本を、首都で読んでいた様だ。　それから、怪我をした狩人からもその話を聞いているし。　冒険者に成る以前にも、もっとモンスターの多い頃に森に来た冒険者から、色々と話を聞いていたみたいだな。　正直、驚くほどに緻密な知識を得ている。　現場で、再認識しながら修正するぐらいなんではなかろうか」

アクトルは、どんな知識力だか怖くなる。

（全く、勝てるのは生きてる経験のみってか）

苦笑いしか浮かばないアクトルは、ウィリアムを見ると・・。

「ロイム、此処で背中出しちゃダメだって」

「うぅ～んっ、カユい～っ！」

薬を塗るスティールが、ロイムの後ろに回り。

「手形作るべよ」

「やだぁっ」

と、逃げるロイムが居て。

「二人して、騒がないでよ～」

と、呆れているウィリアムが見える。

観光にでも来ている様な緩さが見られ、

（アイツ・・なんでこのチームがいいのかねぇ）

ウィリアムに付き合いの良さに笑いしか無い。　そうゆう処は、不思議な人物だった。

さて。

「コラっ、手形付けさせろっ！！」

「イ・ヤ・ダっ！！！」

と、追い回すスティールと喚き逃げるロイム。

膏薬を持つウィリアムは、げんなりして。

「日が暮れる前に食事したいんですがね。　・・騒ぎでモンスター来ますよっ？」

クローリアは、実力行使だとスティールを殴ろうと構えれば・・。

「わっ。　辞めますっ」

と、スティールは逃げる。

みんなの元に戻る足のアクトルは、特にじゃれ合うスティールとロイムを見て。

（此処に来るさっきまでの真剣さは、何処に行った？）

と、思い。　警戒を微かに残した気持ちのままに周りを見る。

すると・・。

「ん？」

峡谷の上、鬱蒼と生い茂る山の森の方から、黒い影が小さく見えていた。　此方に来ている様で、不気味な感じだった。

ロイムの背中に薬を塗り始めたウィリアムへ。

「ウィリアムっ、何か影が来てるっ！　モンスターじゃないかっ？」

皆が、一斉にアクトルへと向いた。

「本当かっ？」

「気付かれたかっ？」

「チィっ、もう暗くなるゾっ」

と、アクトルの方に走る面々が居て。

「ヤバ、気付かれた？」

と、スティールが顔を顰め。

「僕の所為じゃないよぉっ」

と、ロイムが困る顔をした。

ウィリアムは、膏薬の詰まった細い筒を仕舞いながら。

「ホラ、面倒になりましたでしょうにっ」

と、アクトルの方へ歩き出す。

夕日が随分と傾く中。　ワサっ・ワサッっと羽ばたく羽音が聞えて来る。

影の集まりを見るウィリアムは、指をロイムに向け。

「ロイムっ、魔法の光を遣ってっ！！　切らさないでねっ」

と。

「わわっ、待ってっ！」

ローブを下ろす前に下着の乱れを直していたロイムは、慌てて杖を拾う。

影しか解らないリネットは、ウィリアムに寄り。

「モンスターかっ？！」

「はい。　夕方に成ると餌を探して飛び回るヤツで、“コウモグラ”だと思います」

「コ・・モグ？　ややこしいっ」

「いえ、コウモリの羽根や身体をしたモグラです。　嗅覚は良いのですが、目は光に弱いとか」

と、正しい説明をしたウィリアムは、此処で皆に。

「魔法使いは、ロイムの周りに。　他の皆さんは、自由に撃墜してくださいっ。　洞窟の前では無く、此処の丘の上で退治して下さいよっ！！　強い臭いを、寝泊りする洞窟の前に残さない様にっ」

コウモリらしき大きな影を確認するマラザーフは、

「守りはイイダスかぁっ？！」

「はいっ、俺とカタニスさんで十分ですっ！」

「解ったダスっ」

そこで、ロイムは杖を持って念じ。　パァーっと明るい光を杖先から放つ。

光によって、遣って来るモンスターの顔が見えた。

剣を引き抜いたスティールは、キザキザの牙を生やした大型犬の頭をした様なモグラが、膜の様なコウモリの羽を羽ばたかせて遣って来るのが見える。

「おいおい、こんなブキミンなモンスター有りか？」

戦斧を構えるアクトルは、面倒そうな相手だと思いながら。

「見て、目の前に居るんだから“有り”だろう。　お前、呼び寄せたんだから気張れよ」

それに、リネットも乗じて。

「本当だっ、一人で相手をしろっ」

と、スピアの真ん中を回し、長さを変える。

前髪を弄るスティールは、

「女の相手がしたい気分・・・って、来ちゃったし」

と、頭上間近に迫ったモンスターを見る。

バサバサと羽音を立てるモンスターは、結構大きい。　羽根を広げた横の長さは、アクトルが両手を広げた幅に匹敵する。　体は平べったく、潰れた楕円の様だが。　羽根は広い。

その数、２０前後。　数頭づつ、群れて遣って来た。

後方に下がり、ロイムの周りに集まった魔法使いの面々と、ウィリアム、カタニス。

カタニスは、ウィリアムへ。

「後方支援か？」

「えぇ。　薄暗い中で相手が飛行していますが、羽根を破れるなら

射抜いて下さい」

「解った」

ラングドンも。

「ワシもか？」

ウィリアムは、辺りに警戒を配りながら。

「いえ。　こうなると、戦う事で別のモンスターを呼び寄せる可能性が強いので。　我々は、背後の森を警戒しないと。　挟み撃ちにされては、困ります」

「なるほど」

ウィリアムは、ロイムの生み出した魔法の光で、狙いを上手く定められないコウモグラを見ながら。

「魔法の支援は、恐らく要らないでしょう。　ラングドンさんの魔法は強力ですので、ロイムが手を塞がれる今は、集まる他のモンスターを排除する一撃に」

言われたラングドンは、ウィリアムの状況判断の速さと正確さに、

（なるほど、魔法で守りを固めるか。　ワシの魔法の音で、居場所を知らせる真似は良い事では無い。　仕方ないと云う処まで、戦いの騒ぎを小さくしたい訳か）

と、思う。　一気に倒せる数でも無い上、自然魔法は音が大きい。

ウィリアムは、その辺の長短も考えている様だ。

「はっ、そらそらっ！！」

リネットがスピアの届く範囲に降りて来るモンスターを突き刺す。
アクトルは、柄の長さを生かした斬り上げなどを見舞い。落ちたモンスターに止めを入れるスティールやマラザーフ。

其処へ。

ーグギギっ。グギィイイっ！！ー

高音域の悲鳴を上げ、羽根にカタニスの矢を受けてバランスを崩すモンスターも現れ。

「そぉーれぇっ！」

太く大剣に近いショーテイルの振込みを見舞うマラザーフが、当たったモンスターを重みで地面に落し潰し。

スティールは、矢で羽を破られたモンスターがバランスを崩し。
その飛行能力に衰えを窺わせると解るや。

（羽根を斬り破った方が早いっ）

と、判断。

「リネットっ、羽根だっ。翼の幕を突き破れっ！！」

と、低い位置に降りて来たモンスターに斬りかかる。

呼び寄せた様なスティールに指図されて、リネットも気が苛立つ。

「解ってっ・るっ！！！」

突き込みをかわされ。　スピアを引かずに、そのまま飛ぶ横のモンスターに叩き付けるリネット。

見る見る数が減る感じで、この戦闘は楽だと見えるのだが。

しかし・・。

ウィリアムは、森の広がる方を見ているウチに・・。

「やっぱり、寄って来たかな」

と、目を細める。

ウィリアムの一言で、ハッと後ろを振り返ったクローリア。　広がる視界は、離れた森まで開けた丘の上のみ。　洞窟の有る一部の岩壁以外は、距離を離して森が目立つ。

急に。　ガサガサっと森の茂みが動いたと思うと・・。

「あ・・」

其処には、ブタの様な醜悪たる顔をした人型の怪物が。

「オーク・・ですか」

確認して云うウィリアムは、ゆっくりとした足取り動き出す。　現れた2体のモンスターと対峙する様にして、クローリアの前に歩み出た。

ラングドンが杖を構え。

「魔法でカタを付けよう」

と、云うと。

ウィリアムは、森の左側を指差し。

「微かですが、向こうから随分と大きい羽ばたきの音が・・。　少しガタイの大きいモンスターかも知れません。　ラングドンさんは、そのモンスターを全力でお願いします」

「だがっ」

と、焦るラングドンへ。

脇を見る様にしたウィリアムは・・。

「たかがオーク2体、俺一人で十分ですよ」

と、前に向き直る。

ーグゲェ。　グゲゲェッー

倒木の一部を割って剥ぎ取った様な棍棒を手にするオーク。　クローリアの匂いを嗅いだ所為か、走れない早歩きの様な姿で向かって

来た。

2体のモンスターを向かえるウィリアムは、薄く笑った。

（皆さんの戦いを見てて、血が騒ぎますねぇ・・。　俺も、スキモノですか？）

ウィリアムは、腰のベルトの一部から何かを引き抜いた。　同時に、“カチッ”と、足の具足からも音がした。

「え？　・・何ですの？」

クローリアは、ウィリアムの手にしているモノが解らなかった。

其処に。

ーシギャアアアアアアッ！！！！ー

鋭く大きな咆哮が聞えた。

「新手かっ？！」

声の方を見るスティール。

ラングドンは、

「ワシが相手をするっ！！！　そのコウモリを寄せるなぁっ！！！！」

と、杖を手に声の方に走った。

大きな翼から生み出される羽音を響かせて来たのは、長い首と尻尾をした“テイルバウスト”と云う翼竜種だ。　その長さは、長柄のランスに匹敵する尾で、先端は鋭い鉤爪状だ。　広げた翼と体は、“コウモグラ”の5倍以上は有ろうか。　蛇の様に長い首自体でも大蛇の様なのに、顔は列記としたドラゴンの面構えである。

ウィリアムは、オークを目前にして。

「一気に倒して下さいっ。　口から、強酸のミストを吐き出しますっ！！」

ラングドンは、今日がここ一番だと思い。

「おうっ！！！　我が魔法の真髄を見せようっ！！」

と、杖を振り翳し。

「天を流るる風よっ、今こそ我が全身の呼び掛けに応じ給え。　渦を巻くは水だけに非ず。　風こそ、その王者なりっ。“暴風の狂舞”（トゥルネード・ラプシュデナス）っ！！！！！！！！！」

と、大声を張り上げ、天を全身で仰ぐ様に向いた。

すると・・。　ラングドンの前に四方八方から疾走する風が・・、丘の短い草を削る様にして集まり出し。　凄まじい音を上げて伸び上がり、竜巻を形成し出す。

咆哮を上げ、ラングドンの間近へ来ようとしたテイルバウストだが。　急に湧き出す大木の如く高さへと成長を続ける風の強さに、動き

を留めた。

「キャっ、す・凄い・・」

直視出来ない程に強く吹く暴風に驚くクローリアは、その巻き上げる草をズタズタに細かくする竜巻を細めた目で見て畏怖すら覚えた。

ーシギャアアアーーーーッ！！！ー

空中で羽ばたき、ラングドンを襲おうとするテイルバウストは、右に回ろうとしたりするのだが。　ラングドンは、ピッタリと相手に風を突きつけ、モンスターを動かさない。　動けないのに、モンスターは焦れる様に咆哮を上げる。

それは、テイルバウストが大きく鎌首を持ち上げ、強酸を吐き出そうとした時。

「来るかぁぁっ？！　お前の最後だぞっ！！！！！！！」

ラングドンは、杖を大きく前に振りつけた。

テイルバウストが鎌首を前に突き出し、大きく口を開けた処へ、竜巻が突っ込んでくる。　吐き出された黄緑色の霧。　だが、風に霧は巻き取られてしまう上に、その霧を纏った竜巻にテイルバウスト自身も引きずり込まれ始める。

ーシギャアアーーーーっ！！　シギャギャアアアーーーーーーーーっ！！！！！ー

後退する動きも虚しく、風の渦に吸い寄せられ巻き込まれるテイル

バウスト。　大暴れをして、尻尾を振り回すのだが・・。

「うぬぬぬ・・・・はぁぁぁぁぁーーーーーーーーーっ！！！！」

額に血管を浮き上がらせるほどに唸ったラングドンは、大きく杖を振り上げ、旋回させて高く高く突き上げた。

ラングドンの動きに合わせ、竜巻が渦の回転を変える。　激しく速度を上げて回る真ん中。　テイルバウストの動きを封じる為の様だ。　逆にやや緩慢に緩まった上と下の渦は、ぎゅーーっと幅を狭めてゆくのだった。

間近に居るモンスターを倒しきったアクトルは、その強大な魔法に目を凝らし。

「凄まじいっ、高等魔術かぁっ？」

その威力は、一目瞭然。　骨をへし折る轟音を上げ、テイルバウストの長い尾と、首が複雑に折れ曲がり。　遂には千切れて？ぎ取られた。

「し・・しぃ・・・仕舞い・じゃぁぁっ！！！！」

何処か苦しみながらもニヤっと笑みも窺わせながら、大声を上げたラングドンの杖は峡谷の方に振られた。　丸で天を流れる風の川と化す魔法は、死んだテイルバウストを峡谷の空中に運んだ。

「うぐ・・・、はぁはぁはぁ・・ん・・はぁはぁ・・・」

魔法が空気に還るのと同時に、ラングドンはガクリと膝を落とした。

「あぁっ、大丈夫ですかっ?!!」

クローリアは、ラングドンを心配して向かう。

オーク2匹を倒したウィリアムは、

（風の大魔術・・、凄い腕してますねぇ）

脇目にラングドンを見て、幅の広い頼れる人物だと思った。

ウィリアム続編・新たなる魔域　４（後書き）

どうも騎龍です＾＾

ウィリアム続編も折り返しとなります＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域　5

ウィリアム続編～新たなる魔域へ

巨大な大岩の下に潜る様な形で、地下に入り込む様な洞窟が作られいた。　其処は、魔法の結界に護られていた。　かのスカイスクレイバーの司祭リルマリアが、仲間を休める為にと作った結界である。　岩の自然洞だが、中々広い洞窟内で。　小さく焚き火を熾したウィリアム。

洞窟内に、皆がそれぞれに焚き火を囲む形で腰を下ろした。　夏の入りでも、山はやや冷えた。

「ふぅぅ・・。　久しぶりに、大魔法の入り口を使こうたわえ」

ラングドンは、疲労が滲む顔を微笑ませる。

「すいません。　お疲れさせまして」

ウィリアムが謝ると。

「いやいや、リーダーの薬で身体が元に戻った御蔭さ。　久々に、こう～燃える様な気持ちの昂ぶりを感じて、出来るかと思うた。　まだまだ、若いモンに負けんぞ」

ラングドンは、快心の笑みを出した。

干し肉を炙るロイムは、洞窟を見回して。

「でも、何でこの洞窟って安全なの？　リルマリアさんが結界張ったのって、3年近く前なんでしょ？」

それには、クローリアが応える。

「先程、私が結界強化の魔法を遣いましたの。　この洞窟は、リルマリア様が張った後も、度々他の方々に利用されたのでしょう。立ち寄った僧侶が魔力を注いで、こうして結界を維持させています」

アクトルは、便利だと感心し。

「僧侶って、こんな事も出来るのか。　大したものだな」

しかし、クローリアは首を左右に振ると。

「いえいえ、僧侶の誰でも出来る事では有りません。　普通、結界を張るのは、中等魔法が遣える方なら可能です。　ですが、その継続期間は魔力や信仰心などによりけりです。　フィリアーナ様の御身を模る何も無いこの場所で、他の僧侶の魔力を注がれるだけで数年も結界を保たせるなど・・。　それこそ、大司祭でもなければ難しいと思います」

横に成って乾燥したパンを齧るスティールは、

「さぁ～すがに歩く伝説。　遣る事も、残す物も半端無いね」

と、他人事である。

しかし、此処でリネットは、ウィリアムにズバリ。

「リーダー、アンタも戦えるんだね」

顔色も変えぬウィリアムは、水を少し含みながら。

「・・当然でしょ？　何もしない学者なんて、居ても居なくても変わらない様な足手纏いですよ。　ま、弱ったオーク2体ぐらいなら、ナントカ」

スティールとアクトルは、見合って食えないと笑い合う。

コウモグラに頬や手の甲を引掻かれ、クローリアに傷を塞いで貰ったリネット。　ウィリアムの素っ気無い言い方に、難とも不満げな様子であり。　食事をしたりする傍ら、殆ど塞がった傷痕に指を当てていた。

だが。

カタニスは・・。

「それでも、大したものだ。　オークの死体を見たが、外傷が殆ど無い。　眉間にと、こめかみに刺し傷らしきものが有っただけだ。　あれは・・格闘の技かい？」

と、火を弄って薪を入れる。

細かい傷痕に、痒み止めを塗り込むマラザーフも。

「そぉンだよ～。　ラングドンさんがあのデカいの倒しちゅう～間

に、もうオークは死んでたダス。　随分と早業な気がするダ～スよ」

流石に、ブレンダが見込んで揃えた面子である。　何が凄いかくらいは、容易に感じ取る実力を持っている様だ。

だが、ウィリアム本人はと云うと・・、シレ～っと緩い食事をするのみ。　暗殺闘武の事を云う気は無い様だ。　見られたらしょうがないのだろうが、自分から言う気は無いのだろう。

ウィリアムは、幅が細く厚みも薄いカタールダガーと云う反りを持った短剣を両手に、踵の具足から飛び出す短い刃を用い。　向かって来たオークを、直に倒していた。　ラングドンの魔法がド派手だけだった為に、誰にもその様子を見られなかった・・。　そんな処である。

ウィリアムは、虫除けの粉を洞窟の入り口に撒いて有るので、余計な心配は必要無いと思い。

「ふぁ～。　さて、疲れたので寝ますかね」

と、荷物の何かを枕にと引き寄せる。

逃げられたと思う皆は、それぞれの思い思いにする。

カタニスは、今日も一応目に付いた樹香などはウィリアムと採取したので、その仕分けや、保存をして。

リネットやマラザーフは、もう休む構えだ。

ロイムとアクトルやスティールは下らない話をして笑うし。　クロ

ーリアは、結界に相当魔力を注ぎ込んだ様子で、ラングドンと同様に眠たそうにしている。　夜の入り頃で、夏とは云えど朝まではたっぷりと有る。

「あ、剣は大丈夫かな？」

と、スティールが自分の剣を見れば。

「・・・」

黙りながら、リネットもスピアを確かめたり。

アクトルがマラザーフに。

「その剣、随分と変わってるな」

「そうダスね。　自分用に特注したものダス」

と、話し合ったり。

晴れた夜は、半月を夜空に灯していた。

★

朝に成り。

目覚めたクローリアは、起き出しているリネットやマラザーフなどを見てから。

「あら・・、ウィリアムさんは？」

リネットは、首を傾げ。

「今起きた処だが、見当たらない」

目だけ覚ましてたアクトルは、

「さっき出て行ったなぁ。　真夜中に、外の離れた場所が騒がしかった。　モンスターの有無でも見に行ったんじゃないか？」

マラザーフは、ギョッとして。

「ひ・一人で・・ダスかぁ？」

「逃げるだけなら、一人の方が気楽だろう」

話し声で目を覚ましたラングドンは、

「どうした？」

と、寝ぼけ眼を擦る。

クローリアがウィリアム不在を云おうとすると。

「戻りました」

と、ウィリアムの声が聞こえて来る。
アクトルは、横に成った体勢から。
「おう。　どうだった～？」
火の傍に来たウィリアム。
「随分モンスター来てたみたいですね」
「やっぱり、なぁ～んか唸る声してたからな」
「皆さんの倒したコウモグラ、もう千切れた翼膜や遺体の一部しか残ってませんでしたよ」
「ほ～。　オークは？」
「血の跡のみですね」
「少しは、腹が膨れたか？」
「一部は・・・　死体や血の臭いが残ってますから、新手が来ないウチに散策へ出た方がイイですよ。　早くしないと、明日の午後とかには雨も降るかもしれません。　何か、空気が随分と潤んでる」
「そか。　最低でも、峡谷の散策は、雨までに終わらせたいな」
「はい」
其処で、スティールが顔を起こし。

「ウィリアム・・」

と、神妙な顔で名前を呼ぶ。

アクトル以外は、何事かとスティールを見た。

ウィリアムは、淡々とした何時もの声で。

「はい？」

と、返すと・・。

スティールは、真剣にウィリアムを見ると。

「・・スゲ～腕が痒いっ！　薬くれぇぇぇーーーっ！！！」

聞いたウィリアムは、仕方無さそうに荷物に向かい。

「そんなに量塗っても、効きませんよ。　患部を、キチンとキレイにしないからですよ」

「どーでもい～ってっ！！　塗ってくれいっ！！」

ロイムは、その場にコテンと転び。

「なんで・・そんなに真剣に言うのさぁ～」

クローリアは、またバカが発症したと目を細める。

一時加入の４人は、ポカ～ンとして黙っていた。

ウィリアムの面倒見の良さに、イイ年したスティールが甘えている様なものである。　其処に起きたアクトルが横槍を入れ、ロイムがスティールを言葉で突っつく。　呆れたクローリアが無視をする、何時ものチームが此処に居る。

一体感が在る・・。　見ている４人は、そう思えた。　自分達が思う無駄な緊張感が無い。　５人が、お互いに信頼を持ち合っている証なのかも知れない。

さて。　食事を終えて。

「では、此処に今夜も泊まりますから。　残しても構わない物は、置いても構いませんよ」

ウィリアムは、そうだけ言って洞窟の外に出た。

アクトルは、余計な食料をシッカリ布に包んで置くし。

ロイムは、パンツのスペアを持っていくかどうかを悩んで、スティールにからかわれる。

リネットとクローリアは、無用な物を確かめ合って同じ袋に入れて置いた。

皆が出るのを待っていたウィリアムは、カタニスの案内で森林峡谷の裏側を行く自然洞に入った。

「なるほど・・これが・・・」

黒々とした光沢を窺わせる鉱石質の洞窟が広がる。　緩く下るままに行くと、峡谷に突き出たテーブルの様な台地に抜ける隙間が壁に見えた。

隙間から外の台地を見るウィリアムは、

「細い木が多いですね。　樹香が出来そうな木は見当たらない」

アクトルは、ピンポイントで捜索に踏み切る方が良いと思っているウィリアムを察し。

「んじゃ、次に行くか」

「はい。　この先の突き出た場所、結構茂っててイイ感じですね」

スティールは歩き出し。

「次だ、次」

しかし。　次の台地を見てもそれほど高い木が在る訳では無い。

スティールは、隙間からこじんまりと纏まって生い茂る林を見て。

「ウィリーアム、さっきと変わらない気がーするんだがー」

台地側に抜け出たウィリアム。

「変な言い方しないで下さいよ。　限られた栄養しか無い場所で、そんなに木がバカみたいに育つ訳無いじゃありませんか。　台地に

生える特有と云いますか、固有種を狙ってるんですよ」

今一解っているんだか・・いないんだかのスティールは、腕組みして考えながら。

「つまり・・俺みたいなスペシャルな木？」

手の届く小振りの木々から樹香を採取し始めるウィリアムは、詰まらなそうな口調で。

「スティールさんみたいなのは、“固有”と云うより“爪弾き”じゃ～ないっすか？」

酷い形容に、失笑したりして笑う皆。

スティールは、腕組みをを解いて。

「俺ってそんなに異端？」

と、少しでも良く言わせようとするのだが。

「えぇ。　限りなくバカに近い・・バカ？」

「あぁ・・ダイレクト過ぎる・・・」

落ち込んだスティールを他所に、ウィリアムは細い木の曲がり部分に出来た小さい樹香を採る。

一緒に採取へ加わるカタニスは、今採取するのが気が付かなかった樹香であり。

「これは知らなかった・・」

「図鑑で調べましたが、結構値が張るものらしいですよ」

と、ウィリアム。

ウィリアムとカタニスが台地を回って採取する樹香は、“樹”と云う区分に留まらない。　多年草の茎に出来るゴマ粒の様なもの。日陰に生える苔や茸の乾燥して硬結晶化したものなど様々。

幸いにモンスターにも出くわさず。　昼過ぎまでに、結構な量が採れた。　急ぎであり、昼の休憩や食事は軽くだけ。

午後に入り。　峡谷の向こうと此方を繋ぐ回廊の様なつり橋を渡る。　但し、つり橋と云っても普通の橋では無い。　低い谷底近くに突き出た岩と岩の間に出来た洞窟を行く。　上り下りは当たり前、横に螺旋を描く様に崩れた部分を抜ける為に、身体の大きなアクトルやマラザーフは苦労するし。　毒蜘蛛などの虫にも気を付けなければ成らない。

抜けたウィリアムは、峡谷に向かって右側より。　渡って来た左の方が、洞窟の幅も高さも大きい事に気付き。

「此方は、モンスターでも悠々と通れますね。　気をつけましょうか」

その云った先から、あのウィリアムが珍しがった“ブッカー”に遭遇した。　黄色い肌をした狂人の様なモンスターであり、結構数も居た。

鋭い爪を武器に、力任せに突っ込んでくるブッカー。

スティールは、踏み込んで抜き打ちに先頭のブッカーの腕を切り落とし、二の振込みで斬り倒す。

アクトルも一振りで倒すのだが・・。

別のブッカーを刺したリネットだが。　踏み込みが浅くて刺さりきらず、力んで倒そうとするのだが・・。

「くそ・・このぉぉ」

逆にブッカーにスピアの先を握られ、力の押し合いに。

此方の峡谷側の壁には穴が開き、まだ沈まない日差しを受けて光を通す。

乱戦で魔法を遣うのを見定めるラングドンに対し、ロイムが粋な行動に出る。

「魔想の力は、創造の力。　創造は、我が想像より生み出されん・・。　ダガーよっ」

ロイムの頭上に、無数のダガーが生み出される。

しかし、此処からがロイム初の試みだった。

（助ける・・助けるんだ・・・）

生み出した後、じっくりと集中すると・・。　ダガーは、ロイムの頭上高くに持ち上がる。

そして。

「それっ！！」

ロイムがリネットの相手をするブッカーに目掛けて杖を振ると・・。　無数のダガーの内、一本だけが飛んで行く。　ブッカーに向かったダガーは、片目にグサリと刺さり。　魔想魔術特有の衝撃波を生み出した。

「うぁっ」

驚いて引いたリネットだが、ブッカーは確実に顔を抑えて攻撃が出来ない。

（今だっ）

ロイムは、魔想魔法の応用に踏み込んだ。　生み出した多数の魔法を、意思と集中で細かくより分け自由に放つ。　これは、想像の正確さと、研ぎ澄まされた集中力が成せる事で。　いい加減に大きく具現化した魔法を放つ事や、やたらに魔力を消費して限界の魔法を撃つのとは、一線を画す。

「それっ・・えいっ！！」

次々と魔法で生み出したダガーを操り。　ブッカーの足を狙ったり、突進を止めたり、誰かに集中しに行こうとするブッカーを足止めしたり。　攻撃を防御に使い始めたロイム。

ラングドンの脇に居るウィリアムは、ロイムの判断に。

「上手い使い方ですね。　ロイム、随分と恐怖心を克服してる」

「ふむ。　確かに。　魔想魔法は、狭っこい所でも、中々使えるのがイイ処だわい」

ロイムは、全てを撃ち切ってブッカーを殆ど手負いにした。

「はぁ、はぁぁ・・・。　これってぇ～、チョットしんどいかも～」

大きく肩で息をして、少し膝を折ったロイム。

歩いてロイムの元に行くウィリアムは、ロイムの肩に手を置いて。

「ナイス、ロイム。　凄く魔法の幅が広がったね」

と、前線に出る。　もう、カタニスも矢を随分使っている。　戦いが長引くのは宜しく無いが、ロイムが魔法を終えるまで待っていた。

ブッカーを3体相手にするアクトルと、4体相手にするスティール。

だが、その二人と対するブッカーの背後には、マラザーフが回り込んでいて。　気の散っているブッカーは、精神的に分散された戦いをしていた。

問題なのは、ブッカーの腕力に負け。　マラザーフの応援範囲から外れてしまった、リネットである。　5体の手負いに囲まれ、ピンピンしてる一匹と1対1に成りそうな。

「マズイなっ」

矢を立て続けに放ったカタニスは、筋肉質のブッカーの身体が硬いのに唸った。

其処で。

「行きます」

と、声だけがして。

「あ？」

と、脇を見たカタニスは、走るウィリアムの残像の様な一部だけしか視界に入らなかった。

ウィリアムは、リネットの性格を判断し。　出来うる限り手は出さない様にした。　リネットは、気が強い上に、チームプレイに慣れて居無い。　恐らく、人数の少ないパーティに入っていたか、指図をする誰かから一点の役割しか与えられていなかった様な素振り。

どうこう云うより、考えさせる方がイイと判断していた。　だが、こうなっては別である。

リネットを囲みそうなブッカーの集まりに走り寄ったウィリアムは、既にカタールダガーを抜いていた。

リネットは、ウィリアムの参戦を気付く余裕など無い。　ウィリアムの走って来ている方で、ピンピンしているブッカーにスピアを突き出し。　腹を刺して押し込んだ。

其処でウィリアムは、フワリと跳躍。　ブッカーを飛び越え、リネットの頭上をも一回転で越えると。　その回るままの踵落しを、別のブッカーの脳天に見舞った。

ーブガァっ！！！！ー

具足の踵に仕込まれた刃が出ていて。　一撃でブッカーを倒す。

驚くのは、ウィリアムが突然に飛び越えてきたと思うリネットと、人間の女を相手に興奮していた手負いのブッカー達。

「そらぁっ！！」

刺したブッカーをいなして、引き抜いたスピアを叩き付けるリネット。

“余計な真似を”

思い立った言葉だったが・・。

「あ・・」

目の前では、掴み掛かって来るブッカーの顎に、逆手に持ったカタールダガーを突き刺し。　自分の脇へ走り抜けようとしたブッカーの眉間に、同じくダガーを刺すウィリアム。　更に、抜いて半歩引くウィリアムに、倒れる二匹の隙間から襲い掛かろうとしたブッカーだが。

「・・」

右側正面から先に来るブッカーと、パッと体を入れ替えながらに首筋を切り裂き。　左から飛び掛ってくるブッカーへ跳躍し、ブッカーの両手の平をダガーで刺して無力に。　地面に落ちるブッカーの首を捻り落として、瞬殺するウィリアム。

もう残すを一匹づつのアクトルとスティールは、ウィリアムの早業に唸り。

「仕事速ぇ～」

「夜まで時間無いってかぁーっ」

と、一気に双方の相手をするブッカーを斬り伏せた。

驚きと、衝撃。　手が止まってしまった、マラザーフとリネットとカタニス。

ラングドンは、その凄絶な格闘術に、

（なんと・・恐ろしい）

と、畏怖を抱いた。

ダガーの血を拭き取るウィリアムは、

「夕方までに粗方を終えましょう。　さ、先を急ぎます」

と、だけ。

スティールは、剣を仕舞いながら。

「ウィリアムちゃ～ん、今日はやる気あるねぇん」

「もう、夕方まで時間無いッスよ。　スティールさんこそ、手抜きしてませんか？」

「俺の腕にケチ付けるの？　俺は、何時でもハートフルっ、ソウルフルだっつーのっ！！」

「女性だけ・・でしょ？」

アクトルも戦斧を担いで。

「ちげぇねぇ。　コイツ、今は楽してたな」

と、余裕の表情。

クローリアは、少しブッカーが可哀想に思えながらもチームに合流。

ロイムに至っては・・。

「スティールさんっ、リネットさんの戦いチラチラ見てたでしょ？　絶対イイ格好しようとしてたよっ」

歩き出すウィリアムの後ろで。

「うるへぇっ、何時でも助太刀に行く気だったんだよっ」

「ウッソだぁ～。　ニヘラニヘラしてるように見えたモンっ」

「このガキャぁ～」

そんな場違いの雰囲気立ち竦むのは、他の４人。

真っ先に歩き出すラングドンは、

「とにかく行こう。　今は、仕事が最優先だ」

と、３人に。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

見合う３人は、それしか無いと動いた。

★

ウィリアムが強いと解ったリネットは、何も強気に云えないままに成っていた。　恐らく、心の何処かで自分より弱いと決め込み。学者風情と蔑んでいた部分も有ったのだろう。

とにかく洞窟を歩き。　手摺代わりのロープを頼りに、洞窟内部を上へ下へと動く。　モンスターが出れば排除する。　台地の外で飛

んで来るモンスター在れば、ロイムやラングドンの出番。　逆に、洞窟内なら至近戦メンバーの出番と。　入れ替わり立ち代りで、連戦を潜り抜ける事に成る。

至近戦は、狭い故の横幅に限度有る洞窟内。

洞窟の壁やアクトルの身体を踏み台に、跳躍してモンスターに回り込んだり、奇襲をする遊撃隊と化したウィリアム。　一方で、斬り込み隊長として、牽制と攻撃を上手く行うスティール。　3人の息が合い、マラザーフやリネットは立ち回りに苦しんだ。

リネットは、夕方前に堪らず。

「リーダー、我々に役割の指示をしてくれ」

と、云うのだが。

リーダーのウィリアムは、

「そんなの気が散りますよ。　自分の武器と身体を解れば、どの間合いが合うか解りますでしょ？　解らないなら、我々とモンスターを挟み撃ちにしたり、牽制して敵の連携を絶つなどのサポートでも構いませんよ。　大がかりな戦闘では有りませんし、モンスターが多種な戦闘でもありません。　戦局を見るのは、結構優しいはずですよ」

と、だけ。

スティールも、此処までは大した事では無いと云う態度で。

「リネットもマラザーフのオッサンも、自由でイイ。　確実に、一匹一匹仕留めるだけでも十分だ」

代わって、アクトルはやや優しく。

「“自由”を任されてるって思ってイイぜ。　別に危ない様なら、こっちが補助に入る。　ただ、意固地に無理をするな。　それは、身勝手だ」

一番の年長者であるラングドンは、そんな会話を見て。

「ふはは、一番難しい事じゃわい。　ま、こんな混戦では、一々リーダーとしてあれやこれやと指揮するに値場面でも無いの」

ウィリアムは、臨機応変にスティールと共に、弱い者や危ない処へ応援に入る余裕を持っていた。　どうこう指図するより、自分で動いた方が楽なのだろう。

チームとしての戦いに馴染んで居無いマラザーフとリネットは、それが逆に困っていた訳だ。

戦いと採取をするウィリアムは、夕暮れには略無言で。

細かい怪我を繰り返すリネットやマラザーフは、クローリアに世話になる。

午後からの戦いで大汗を流した一行。　寝泊りする洞窟に戻る頃には、蚊や虻の類と喧嘩状態に成っていた。

「くわぁ～。　エラい喰われたなぁ」

スティールは、腕や膝をボリボリしている。
クローリアも腕を食われたらしく。
「森の蚊って、少し大きいですわぁ・・。　痒い」
スティールは、クローリアへススっと近寄り。
「クローリア・・大事な所は喰われてないかい？　俺が届かない所をか・・・」
クローリアの肩に手を回し、其処まで言い掛けたスティールだが。
クローリアの杖の太い部分を、突き上げる様に喰らって顔を陥没させる。
「・・・しゅみましぇん」
謝る言葉が様に成らないスティール。
ウィリアムは、洞窟内に虫除けを焚く中で。　入り口で絡み合うその二人を見るに。
（あの懲りない処・・お金儲けに回せたら凄いのにな・・・）
と、思っていた。
さて。　食事よりも薬を塗ったりするのが先に成る。　ウィリアムは、何故か涼しい顔。

スティールは、採った樹香を選り分けるウィリアムに。

「お前ぇ・・どうしてそんなに喰われない？」

ウィリアムは、アッサリと。

「虫除けの臭いを、衣服にも付けているからですよ。　皆さん、煙たいって逃げるから・・・」

衝撃を受けるスティールは、もう焚いてしまった後なだけに。

「早く・・・云えよ」

「旅立つ前の日と、昨日も言いましたが？　臭いのはイヤだと仰ったのは、何方様でしたっけ？」

醒めた視線を頂いたスティールは、その場で土下座。

「ははぁーっ、　わ・わたくしめでございますー」

リネットは、鎧を縫いで。　クローリアと薬を塗り合った後に。

「リーダー。　正直に言って、やはり指示が無いと困る」

その苦言を聞いても、のんびりと水を飲むウィリアム。　その後、少ない樹香から、木の皮で作られた袋に詰めながら。

「長い期間の仕事ならいざ知らず。　たった3・4日でコンビネーションなど無理ですよ。　大体、お互いに一緒に寝食を共にして、戦いながらお互いの特性を知り。　そして仲間意識が有るから、的

確な指示が効くんです。　リネットさんは、そうゆう意味では素人に近い。　一人で何でもしようとするし、仲間の相手にするモンスターの数すら見て居無い。　一匹を倒した後、他の仲間を見る余裕すら無い。　そんな人に指図をすると、俺は胡坐かいてないといけない。　今回の様な場合は、リネットさんを指示して動かすより。　身動きの早い俺か、スティールさんがサポートに回った方が早いです。　気にせず、普段通りに。　寧ろ、指示を待っているような迷いが不要です」

マラザーフは、顔の頬に薬を塗りながら。

「だから、自由にしろダスか？」

「はい。　御二人の内、マラザーフさんは守りにも気が向きますが・・。　その技量や身のこなしから護れる範囲は、1人か2人。　リネットさんと合わせて、今回のメンバーの護りに丁度イイ。　広い森では、お二人には護りを任せましたが。　狭い場所では、モンスターを通さなければイイ訳ですから。　矢も少なくなったカタニスさんに警戒を頼んで、今日みたいな戦い方をした方が実力を発揮します。　ラングドンさんの魔法が強力ですから、護衛を多くする必要も薄いですしね」

アクトルは、其処でリネットへ。

「ウィリアムは、どうこうして欲しい時は言う。　その時以外は、自由でイイのさ。　ま、次の相手に向かう時ぐらい、周りを見る気持ち在れば十分だろうさ。　俺達も、この一月と半ぐらいか。　そうして来た」

スティールも続き。

「そうそう。　大体、戦いなんて、何をするかは大まかで決まってる。　敵を倒す、ヤられない様に逃げる、仲間が危ないなら助ける・・。　自分で仲間を思う気持ちが有ると、自然に見れる様に成るし。　また、助けようと思う。　今回は、そっちは飛び入りみたいなモンだしなぁ。　こんなもんでイイと思うゼ」

そう言われて俯くリネットは、何かが不満ならしい。

ウィリアムは、そんな彼女を見ずに。

「と云うか・・。　リネットさんを除いた3方の素性は、大体解りますが。　リネットさんだけ、一人って変ですよね？　一人の冒険者って雰囲気が見られない。　どうして、ソロに成ったんです？」

「・・・、はぁ～」

深い溜め息を吐くリネットは、クローリアやロイムなどと視線を交わすのから逃げる様に横を向き。

「捨てられたのだ・・。　アタイの組んでたチームと、別の腕のイイチームの間で、合同話が持ち上がった。　事の発端は、あの有名な風のポリア殿を見習って、少し難しい仕事を合同で行った事。その末、意気投合した者達だけで、新たなチームを作る事に・・」

スティールは、リネットの勝気な普段を見れる上で。

「そのチームに馴染めなかったのか？」

「いや・・。　アタイは、個人的に先行し、斬り込みを率先してや

っていた。　だが、アタイより腕のイイ槍遣いが、向こうのチームに居たのさ。　長柄の使い手は、二人も必要無い・・ってね。　分け前にも問題も有るし、なにせ新たなチームのリーダーは、女と酒に凄く甘いヤツ。　言い寄って来たアイツを、アタイは罵倒して嫌われた・・と云うトコロだ」

やや呆れ気味のアクトルは、スティールに。

「お前2号？」

「バカ云え、リネットみたいな女を嫌うか」

その二人の話の後。　リネットは、顔を少し起こし。

「チームに馴染まなかったのは、アタイが悪い。　小さい頃から根降ろし冒険者の武人一家で育ったから、世間的に何を話していいか解らないし。　友達も殆ど居無い中で冒険者の事情にも疎くて・・、冒険談議をするのも苦手だ。　チームで孤立するから、せめて戦うだけは率先してと思ったが・・。　この通り上手く行かなかった」

ラングドンは、なんとも無骨な女だと思いながら。

「しかし、斡旋所の主とは知り合いだったのだのう」

小さく頷くリネット。

「実は、二年以上前にこの森でモンスターが発生した時。　村を護る守備依頼を請けた或るチームに、アタイは入れて貰えた。　アタイの兄貴は、ブレンザさんと同じチームに居たんだ。　だから、あの時は便宜を図ってくれて・・・。　今回も、事情を話したら加え

てくれるって・・」

ウィリアムは、そんなリネットを見て。

「面倒ですねぇ。　なんなら、ラングドンさんも含めて、気が澄むまでウチのチームに入りますか？」

と、簡単な口調で言う。

ラングドンも、リネットも、マラザーフやカタニスも、言ったウィリアムを見た。

スティールは、格好を付けて。

「フッ。　俺は構わないさ・・。　女が増えるイコール、俺のシアワセだし」

チーズを千切るアクトルも。

「んだな、面倒くさいから・・それもいいか。　どうせ、信用出来ない人間でもなさそうだし」

ロイムは、口に手を当て。

「うわわ。　もっと賑やかになるぅ」

クローリアは、すまし顔で。

「一人ヘンタイがいらっしゃいますが・・。　それでもイイのなら歓迎しますわ」

と、スティールに醒めた目を向けた。

リネットは、急に困った顔で。

「あ・・いや。　あ～・・・かっ・考えさせて・・貰う」

と、だけ。

逆にラングドンは、大いに微笑み。

「ワシの身体を保養する薬師と、美人のクローリアちゃんが居るなら完璧じゃわい。　ワシとて、後どれくらい冒険者なんぞやってられるか・・。　最後は、シッカリとチームに入って見るのも良かろう」

カタニスとマラザーフは、リネットがどうするのか気に成った。

しかし、アクトルは。

（珍しいなぁ。　アイツ、俺等と居るウチに生臭く成るんじゃないかぁ？）

ウィリアムの小さな変化が見えた様な気がする。

だが・・。　最後の一日は、激しい戦いが待っていた・・。

ウィリアム続編・新たなる魔域　5（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

前回のセイルとユリア編の前編の手直しと読み返しが終わり、ゆるりと製作に踏み込みました。

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域　6

ウィリアム編

「右だっ！！　右から来てるぞっ！！！」

カタニスが叫ぶ。

「クソっ！！　またかっ？！」

焦るリネットは、倒したカニのモンスターの脈打つ臓器に刺したスピアを引き抜く。

森林峡谷では無く、此処は山の奥。　峡谷を形成するのは、山の中腹を切る河の跡。　その山側の中に分け入った最終日。　流石にモンスターが蔓延ったと云われるだけあり、モンスターが多い。

まだ陽の高さは、昼まではまだまだと云った所。　それなのに、もう5度も戦いを強いられ。　6度目は長い戦いに成った。

真上を見上げなければ上が見えない様な太い木々が、やや間隔を開けた形で育つ森の中。　初日にも遭遇したカニのモンスターが、此処ではワラワラと。

（何でっ、くっ！！！）

内心に焦って舌打ちするのは、リネットである。

此処に居無いウィリアムは、樹香を採るべく木に登っている。もう、モンスターを排除してから・・など悠長な状態では無い。採取をウィリアムに任せ、その間にモンスターを排除しなければならない遭遇頻度。

森に入る前。ウィリアムは、リネットへ。

“モンスターを倒せば倒す程に、大きな音を上げる程にモンスターを引き寄せます。問題は、守りと攻めのバランスを考える事。リネットさん、戦うにしても、仲間との距離感を考えて下さい。”

自分に斬り込み役を任せてくれた事を喜んだリネットだが。いざ戦うと、直にモンスターを迎えに行ってしまう。距離が開けば、仲間の応援も難しく。開いた距離の間に新手が来たら、自分を心配しなければ成らない仲間に迷惑を掛ける。正しく、今はその状態。逃げたモンスターを深追いして、離れた距離の間に新手が入った。

「下がるダスよっ！！！」

木の陰から姿を現したは、マラザーフであった。リネットに向くカニのモンスターの背中を、彼の得物である特注のショーテイルで押し潰す様に斬り潰した。

「すまないっ」

日陰でジメジメした場所を好むらしいカニのモンスターは、この白い肌をした巨木の密林を巣にしていた様だった。

その一方で。

中々渋い事をするのは、ラングドン。

「フン、そいっ」

ストーンヘリンジと云う岩を生み出す自然魔法を唱え。　その岩を以ってしてカニの攻撃を防ぎ。　岩を存続させたままにバリケードを作ったり。　スティールは、その内側で侵入するカニを倒し。

アクトルは、その外側でリネット達と迎え撃つ。

ロイムは、魔力の消耗を少なくする為に、カニの甲羅を砕く魔法にのみ専念。

其処へ、上からウィリアムの声が響く。

「皆さんっ、数量が多く取れましたっ!!。　このまま、南西方面の林の方に移動しましょう。　左へっ」

と。

ウィリアムの指示を聞くラングドンは、

「よしっ、ワシが魔法で壁を突き出す。　一気に逃げるぞっ」

と、皆へ告げて。

「大地の力よ、我を護る石壁をっ」

戻ったリネットとマラザーフの後ろ辺りで、地面がガリガリガリっ

と隆起し、人の倍を超える高さの石壁が現れた。　二人を追って来たカニの一匹は、その岩の隆起に巻き込まれて飛ばされる。

逃げ出すロイムやクローリア。　二人を護る様に、スティールとカタニスが走る。

「ラングドンさんっ、逃げるダスよっ！！」

「おうっ」

一気に西側の低い木々が疎らに生える場所に逃げ込む。　林になる場所にて、２・３匹のカニを撃退すれば、カニもそれ以上は追って来なかった。

「よっと」

北側から合流して来たウィリアムは、やや膨らんだ小袋を二つ肩に掛けていて。

「大丈夫でしたか？」

と、皆に。

スティールは、

「おう。　土産とか有る？」

と、軽い事を云う。

「無理です」

と、返したウィリアムへ、ラングドンは森を見返しながら。

「しかし、しつこいカニだったわい。　だが・・此処までは、何で来ないのかの？」

下枝に手が届く棘の在る木を、ウィリアムは指差し。

「この木、柑橘系の匂いを出すらしいんですが。　どうもこれが嫌いみたいですね。　今、俺が降りた所に向かって来たカニが、木に近付いた途端に急に嫌がりました」

爽やかなレモンの様な匂いがするので、アクトルは木を見ながら。

「ほぉ～。　こんなイイ匂いなのに、勿体無い」

その意見にロイムは、やや非難がましい目を向け。

「助かりましたよぉ～。　はぁ、少し休みたい」

仲間同士で辺りを見回したり、怪我の有無などを確認するそんな中。

ウィリアムは、柑橘系の匂いがする木を見て。

「でも、この木の実も、樹液も、実は猛毒ですからねぇ～。　モンスターも、毒は嫌いなんでしょうね」

と、言う。

匂いの良さに釣られ、思いっきり木を触ってみたスティールは、その話に驚き急に離れて。

「早ぉ言えっ！！　うわぁっ、毒付いたかなっ？！」

と、両手を見たり、服で擦ったり。

ウィリアムは、一人で慌てるスティールを見ながら。

「休むのは、もう一踏ん張りしてからだね」

と、云うと。

「カタニスさん、楓などの紅葉樹の樹香を探しましょう。　そこは、恐らく二人でも探せます」

「解った。　此処からなら、北西だ」

「解りました」

カタニスの樹香や薬草の知識は、やや一般的な部類に偏りが在る。
広葉樹の樹香は一般的なので、種類と量を見込めると判断したのである。

まだ探すと知ったロイムは、ブーたれた顔で。

「はふぅぅぅぅぅ」

と、剥れると。

其処へスティールが、ノッシノッシと遣って来て。

「このワガママ子供、俺の手を喰らえ」

と、手を向けて来る。

「うわぁぁ～っ」

逃げるロイムは、まだ元気そうである。

代わって、リネットは考え込む。

（・・解っているのに、どうして一人でっ）

モンスターが一匹二匹なら、今のままでいいのだろう。　以前は男ばかりのチームの中で、一人だけの女で在った。　バカにされたくないからと、敵しか見て来なかった。　いざ、こうして纏まりの在るチームに入ると、自分の欠点が丸見えである。　捨てられた意味が解るから、尚更悔しくで力む自分が居た。

毒を持つ木は、尾根と成る日当たりの良い一部分にのみ群生するのみ。　その先には、落葉広葉樹の森が広がっていた。

枯葉や折れた小枝が足場を埋め尽くす上に、朽ちた倒木なども在って移動が面倒である中で。

「ん・・いい樹香が在った」

と、カタニスが上を見て云うと・・。

行く先の木陰に、ウィリアムは動く影を見つけ。

「カタニスさん、あの高さならお一人でも十分ですね？　モンスターが居ます」

「何っ？」

カタニスも、ウィリアムに見る先を見た。

もう戦う気構えに入るスティールは、カタニスの肩を握って。

「上に上れ。　下は、俺達が受け持つ」

「あ・あぁ」

上り易い木なので、カタニスは急いで木に跳び付いた。

森の奥をウロウロしているのは、紫色の傘に黄土色の斑点模様を持つ茸である。　ウネウネと身体をくねらせながら、白い茎の身体で歩いている。

少し脅えているロイムは、ウィリアムに。

「ね・ねぇ・・。　怖い顔とか・・無いよねぇ？」

「無いよ。　ただ、今は見えないみたいだけど、突き刺さる触手を持ってる。　身体から出る強い酸で獲物を溶かし、その解けた液体を吸うみたい。　問題は、茸の傘は粉状の神経毒を持ってる。　近づいて戦うのは、凄く危険だね」

魔法を先手にと思うラングドンは、杖を握り直し。

「ならば、此方から攻撃を・・」

しかし。　ウィリアムは、何故か手を翳してラングドンを制す。
茸の姿をしたモンスターが、此方に気付いて居無い様子なので。

「いえ。　向こうから気付いて、此方に近付いている訳じゃ在りません。　周囲に居るモンスターに居場所を知られたく無いので。
このまま、様子を見ましょう」

ウィリアムの言う通り、茸のモンスターはそのまま左の奥へと消えてしまう。

そこへ、カタニスが上から。

「この先の木にも、樹香が見える。　リーダー、登れるか？」

ウィリアムは、周りの木の密集具合から。

「此処は、戦うに面倒ですね。　皆さん、戦うのは極力控えましょう」

と、言い。　四方八方を注意しながら周囲を警戒する様に言って木に登った。

しかし、それでもモンスターは遣って来る。　少しづつ進んで採取を繰り返すうちに・・。

木々の密集する隙間の様な場所で、スティールやアクトルなどに護られる様に居た魔法遣い達。

その中ロイムは、

「わっ！！」

と、声を上げた。　マラザーフの脇に生える木に、上から何かが降りて来たのを見て驚いたのである。

同じ方向を見ていたスティールは、狭い間合いの中で切羽詰るままに。

「マラザーフっ、左だっ」

「んダっ？」

驚きながらマラザーフが木を見上げると。　急に姿を見せたのは、牙の様な棘を口に持つ蛭のモンスターである。　擬態に近い能力で、木の幹に色を似せて近付いて来たのだった。

犬ぐらいの頭なら丸呑み出来そうな丸い口を開き、マワザーフに飛び掛ったモンスター。

マラザーフは、ショーテイルを盾にする様に宛がうのだが。　かなり重いモンスターの身体を、そのまま預けられる様に飛び付かれた為か。　勢いに押されて、バランスを崩してもんどり打つ。

倒れてハッと前を見ると、目の前には蛭の開かれた口が。

（ヤバイダスっ！！）

思うと同時に出来たのは、左腕を庇う様に動かす事ぐらい。

しかし、その直前。　逸早い反応で走ったスティールが、抜き打ちにその長いミミズの様な身体の頭部を斬る時。　振り返り様で最も近かったリネットが、スピアを反射的に蛭の口に刺し込むのと同時。

マラザーフの顔を目掛けて伸びた蛭の口は、スピアに刺されて伸び切れないままに。　そして伸びる首らしき部分の付け根を、スティールに斬り飛ばされた。

「・・・」

首を斬られバタバタともがくだけの太く伸び縮みする胴体が、マラザーフの上からゴロンと落ち葉の地面に転げ。　マラザーフは、間一髪の危機を切り抜けた。

「た・助かった・・ダスぅ～」

刺した首を遠くへ投げ飛ばすリネットは、

「間に合って良かった。　先程の借り、返せたかな？」

と、言葉を置く。

剣を杖にして身体を起こすマラザーフは、

「あぁ、助かったダスよ」

と、安堵に満ちた顔を見せた。　だが、直に顔にヒリヒリと痛みを覚えるのである。

「あっ・痛っ・・。　ヒリヒリするダス」

木の上から降りて来たウィリアムは、マラザーフに歩み寄りながら。

「マラザーフさん、。　顔に付いたモンスターの体液を、直に拭き取って下さい。　そのモンスターは、体液に微弱な酸の毒を含みます」

「えっ?!　あぁ、道理デ～」

腕で拭うマラザーフだが、ベロりと薄皮の皮膚が一緒に剥がれた。

ウィリアムは、クローリアを指で呼ぶ。　消毒をしてから、魔法で傷を小さくするのだ。

その後。

「うほっ、コイツがドラゴンかよっ?!」

赤々とした身体の大きなワニの様なモンスターに、スティールは驚いた。　首が蛇の様に成っていて、頭には一本の角が在る。　大型の亀の様な丸みの在る甲羅と、ワニの皮の様なゴツゴツとした皮膚の外観を持ち。　見てからにタフそうなモンスターだった。

「歩行竜種のレッドシェラーですっ。　顔や背中の鱗は非常に硬いので、足の付け根や首の付け根をっ!!　弱点は、腹ですっ!!」

然程に大きいモンスターではないが、それでも体長はクローリアなど軽く超えるし。　体高など、ロイムの胸元に届きそうなくらいである。　木の上から言うウィリアムに、スティールはモンスターの

噛み付きをかわしながら。

「こんなのが裏返るのかよっ?!」

と、慌て気味。　頭を狙ったが、非常に硬く剣が弾き返されたのだ。

「このっ」

「ソ〜りゃぁぁっ!!」

リネットとマラザーフが両端に回って挟み撃ちに、四肢の付け根を狙いに行くと・・。

“ガツンっ!!!”

火花を上げて、甲高い音が響く。　モンスターは、急に膝を曲げながら足を縮めたのだ。　甲羅の様な背中に武器が当たり、火花を上げたのである。

密集した戦いで、ロイムもラングドンも魔法の使用を躊躇った。

其処へ、アクトルがモンスターの後ろに回ると、戦斧の柄を地面に刺し。

「うおおおおおおりゃぁぁぁぁーーーーっ!!!!」

モンスターの尾っぽを捕まえ、自慢の怪力で引き摺り出したのである。

驚いたのはモンスターであろう。　ニュっと四肢を出して、踏ん張

った。

こうなれば、リネットやマラザーフも遣り易い。　左右からモンスターの四肢の付け根を刺したり、斬り付けたり。

手足をやられ、ジタバタし出したモンスターを見るアクトルは、モンスターの踏ん張りが甘くなったと感じて。

「スティィィーールっ、しくじるなよぉぉぉっ！！！！！！」

と、倒木の根元にモンスターの尻尾の付け根を引き乗せ、一気に裏返そうと捻った。

「おぉっ、ゴれはぁっ」

マラザーフは、自分の方にやや傾く様に背を向けたモンスターを見て、絶好の好機だと確信。

「リネットっ！！　首ダスーーーっ！！！」

と、モンスターの腹に剣を捨てて飛びつく。

「解ったっ」

声掛けられたリネットは、マラザーフに向く長いモンスターの首にスピアを突き込み、その動きを牽制。

そして、クルンと裏返りにモンスターが成る時。　白く柔かい腹目掛けて、スティールは飛び込んだ。　グサリと剣が深深と突き刺さり・・・。

「くたばれぇぇぇぇっ！！！！」

スティールは、一気に首の方に剣を動かし斬り裂いた。

絶命の叫びが上がる。　モンスターは、赤っぽく半透明でドロドロした体液を流して、次第に動かなくなる。

「ふぅ・・」

と、一息付くスティールは、剣を引き抜き。

「何てカッテー身体だよっ」

と、剣を見た。　少し刃が曲がっている。

お互いの腕力を認め合うアクトルとマラザーフの脇で、自分に驚くリネット。

（か・身体が勝手に・・動いた）

マラザーフの声に、逼迫した緊張感の中で反射的に反応した自分が居た。　なによりも、必死に一緒に戦おうとしていた自分が居たのは、確かである。

その時。　大型のイタチに似たモンスターが、皆の方に忍び寄っていた。　モンスターの頭上から飛び降りたウィリアムは、首筋を切断して着地。

“ドサ”っと云う音に驚き、その方を見た一同は・・。

「随分と此処もモンスターが多いですね。　樹香の採取・・控えた方が良いのかも知れません」

と、言い。　反りの在るダガーに拭いを掛けるウィリアムが見えた。

だが、スティールは、真面目な顔を向け。

「ウィリアム、量的にどうだ？　思う量までは、頑張ってイイぞ。　こんな場所、あの斡旋所に居るチームには無理だ。　俺達でも、ギリギリに近いんだからな」

アクトルも、スティールの意見に同調する頷きを見せて。

「そうだ。　なるべく、お前とカタニスの解る種類は集めよう。　もう少しなら、奥までも行ける」

やや厳しい顔のウィリアムは、二人の意見も良く解る。　だが、仲間の疲れ具合や、戻る事を考えてしまって言葉が出ない。

其処に、リネットが。

「リーダー。　もう少し採取したらどうだ？　アタイなら、まだイける」

「・・。　では、もう少し採取しますか。　では、向こう。　大きな古木が、何本か見えます」

木の上に上がって見えた景色を考え。　ウィリアムは、樹香の在りそうな木の方を指を指してそう言った。

その直後。　結構高価な値のするレッドシェラーの角を、この状態でも採取するのを忘れない彼。　皆、危険の中でも逞しき若者だと思った。

ラングドンが不安で見上げた昼頃の日差しは、曇り始めた雨雲の影響で遮られ始めた。

★

昼下がりまで粘ったウィリアム達。

転がる岩の様に獲物へと近付くナメクジのモンスターや、ゼリー状でドロドロした膜のモンスターなどを何とか切り抜けた。

ウィリアムは、やや遅れたものの、やはり雨が来ると解り。　一旦、寝泊りする洞窟へ戻る事決める。

だが・・。　本当の危険は、此処に待ち構えていたのである。

小雨が降り始めた中で、洞窟までもう目の前と云う丘の上。　スティールは、見慣れぬ影を指差し。

「う・ウィリアム・・、ありゃ～何だ?」

ゴロゴロと雷すら鳴る中で、長い胴体をした生き物が天を見ている。

問われたウィリアムは、その生き物がモンスターだと直に解るのだが・・。　薄暗く成り始めた夕方で、色が判らなかった。　しかし、ピカっと稲妻が走った時、その光を受けてモンスターの体が光った。　その光を見た瞬間、ウィリアムの顔が俄かに変わり始めた。

「えっ?!!!　今の緑がかった・・金色?　あ・アレって・・。いや、そんな・・まさ・・。　本物・・凄いっ！　グリーンドラウネスの大元に成る古長寿種・・“オールドヒュペリオン”かもっ!!」

ウィリアムの学者気質が出た様だ。　皆に見られながらも、戦う事を一瞬忘れていた彼。

まだ夕日の明るさも少し残る中で、その長くしなやかに動く身体は金色。　双頭の顔は、蛇と云うよりは竜らしき感じだ。　そしてその目は、眼球と云うより宝石の様な黒い眼。　長くしなう髭は、長首竜種特有のモノであった。

ーウガァァァーーーっ!!!ー

稲光が光る天に向かう様に、咆哮を上げたモンスター。　ビリビリとした威圧感を感じる皆である。

ウィリアムは、洞窟の在る方にイタチに似たモンスターが見えているので。　現状を分析して、

「待ち伏せされてた・・。　初日に戦ったモンスターの血の臭いで、此処まで徘徊してきたんだ・・・」

と、独り言の様に言う。

その時、カタニスが。

「不味いっ、向こうの空にも影が見えるぞっ」

と、森林峡谷の方に指を向ける。

危険な戦いに成ると感じたクローリアは、焦る様子で。

「一旦、洞窟へ逃げましょう」

と、ウィリアムに言った。　戦いで、皆が疲れ始めて居るのは、怪我を治す彼女が良く心得ていた。

しかし、ウィリアムは、

「いえ、モンスターを全て排除しましょう」

と、返すのだ。

「ほんき・・ですの？」

「はい。　あのドラゴンは、今日戦った種とは違い、非常に知性が高い・・。　前に本で読んだ記述では、咆哮を上げてモンスターを呼び寄せる習性が在ると・・。　しかも、獲物が死ぬまで、絶対に見逃さない狡猾な行動をするとか」

「ですがっ？！」

と、焦り出して言うクローリアだが。

直に口を差し挟むラングドン。

「ワシは、リーダーに賛成じゃ。　この嵐の中なら、咆哮も邪魔されて遠くに届かん。　前にも、モンスターを呼び寄せるヤツで、危うく全滅し掛けた経験が在る。　今、此処で見たモンスターの量なら、ワシ達でも切り抜けられるっ」

と、濡れる顔を拭った。

アクトルは、これでこそ冒険だとばかりに緊張の笑みを見せ。

「スティール、血が踊るなぁ」

「当然っ」

返すスティールも、濡れる前髪を掻き上げた。

覚悟を決めたのか、ウィリアムは、カタニスに樹香の袋を渡し。

「俺とロイムは、カタニスさんとクローリアさんの逃げ道を作ろう。
他の皆さんは、オールドヒュペリオンと飛んで来るモンスターへ。
更なるモンスターの合流が追い付いて来る前に、殲滅を狙って下さいっ！！！！」

と、指示を出した。

「おいさっ！」

「やるかぁ」

と、走るアクトルとスティール。　続くリネットの後ろから、マラザーフとラングドンが追って行く。

大型のイタチの様なモンスターの前へと進むウィリアム。

「あのモンスターは、早く逃げる獲物ほど狙います。　樹香を長く湿気に晒せませんから、ゆっくりと洞窟に急いで下さい。　クローリアさんは、怪我人の為に洞窟内で待機を」

と、此方を窺うイタチの様なモンスター数頭と、４人の先頭に立って対峙する。

結界の張られた洞窟の近くから、ウィリアム達の方に歩み出したモンスターの群れ。

一方では、もうオールドヒュペリオンと戦闘は始まっていた。

大岩すらも巻き付けようかと云う長い胴体に、細く鳥類の様な３本の指を持った四肢を持つ。　稲光で光沢を見せる鱗は、薄っすらと緑がかった金色。　確かに、見るだけでも威圧感を感じるモンスターである。　此方から近付いた事で、オールドヒュペリオンは警戒し始めた。　体の鱗が、脈打つ様に鈍く光り出したのだ。

オールドヒュペリオンに向かった面々は、相手が警戒をし始めた所で止まった。　凡そ、十数歩手前。

アクトルは、森林峡谷の方から“キィキィ”とモンスターらしき声を聞えるので。

「ラングドン、空から来るモンスターを頼めるか？　俺達じゃ・・」

アクトルが其処まで言うと。

「皆まで言うな。　空から来るモンスターは、ワシが全て潰してくれよう。　お主達は、あのドラゴンを見事倒せ」

スティールは、オールドヒュペリオンの左に回り込む様に歩き出しながら。

「ジイサンっ、俺の背後を一緒に。　森林峡谷側に回り込むまで、護る」

了解と頷くラングドンは、スティールの後ろに回った。

アクトルは、マラザーフとリネットを見て。

「どんな攻撃するか解らねぇ。　しっかり見て攻めろよ」

頷く二人を見てから、

「んじゃ、向こうもおっぱじめたし、こっちも行こうかぁっ！！」

と、双頭のドラゴンへと踏み込んだ。

先に、引けない間合いへと踏み込んだアクトルやスティール達が、強烈な威厳を見せ付けるオールドヒュペリオンと戦い始める時。

クローリアとカタニスを護るウィリアムに向かって、二匹のイタチ

に似たモンスターが襲い掛かった。“シーカーボルボン”（這い寄る毛）と云う名前で、前足の爪が鋭く。顎の牙など犬の比では無い。

「うわっ！！」

いきなり走って来て、ウィリアムに飛び掛るシーカーボルボンに、ロイムは焦って魔法を唱えられなかった。

だが。

驚くロイムを始めとした面々が見ている中で。モンスターの飛び掛りに合わせて、背中を後ろに深く反ったウィリアム。ウィリアムの上向いた対面上を飛び越すシーカー達が、着地を待たずして絶叫と云っていい悲鳴を上げて地面に落ちたのだ。

身を元に戻すウィリアムの皮のプロテクターには、飛沫した血の様な跡が見て取れる。

其処で3人が目にするのは、喉元から腹に掛けて綺麗に引き裂かれたシーカーボルボンだった。

ウィリアムは、左右の手にカタールダガーを手にしている。そして、ジリジリとにじり寄るシーカーとの距離を縮める為に、自ら間合いを詰め出し。

「今の内に、洞窟へ」

と、洞窟の方へダガーを持った左手を伸ばした。

「行くぞっ」

「はい」

カタニスとクローリアは、伴って洞窟の方に逃げる。

ロイムは、ウィリアムと対面するシーカーを一掃しようと。

「い・一気にっ」

と、無数の飛礫を生み出す。

ウィリアムは、其処で。

「ロイム、俺の右真っ直ぐの森が揺れてる。　多分、モンスターが飛び出してくるよ。　魔法は、そいつの出会い頭を狙って」

「う・うん」

魔法を放とうとしたロイムは、急に言われてグッと腹に力を込めて踏ん張った。　意思を緩めただけで、魔法が狙ったモンスターに飛び出してしまいそうだった。

（向こう・・向こう・・・。　出て来た・・瞬間）

心を落ち着け、魔法をどうするかのイメージを再想像する。　中々骨の折れる事で、集中が足らなければ魔法が消滅したりする。

だが、ウィリアムもギリギリで言ったのは、背後でリネットとマラザーフの呻きを聞いたからである。　見て現状を確かめたかったが、

間近に迫った素早い動きのシーカーを侮れない。

同時の時。

「うわぁっ！！」

「んダァァァっ？！！」

大声を上げて、ヨロっと後退したリネットとマラザーフ。　オールドヒュペリオンの鞭の様に撓う、平たい尻尾の攻撃を食らいそうに成った為。　咄嗟に武器を構えて宛がったのだが、防いだ尻尾が当たる瞬間“ビリィ！”っと、痺れる様な痛みを感じたのだ。

声に驚いたアクトルは、防いだ二人が武器の構えを外して、手を小刻みに振り回す素振りを見て。

「どうしたぁっ？！」

と、双頭の片方を牽制する。

「し・痺れたダスよっ。　コイツっ、尻尾に帯電してるダスっ！！！」

其処で、もう片方の頭に炎を吐かれ、大きく飛び退いたスティールが居て。

「アチチっ！！！！　ウハァーーっ、ハンパねぇ！！」

と、受身を取りながら喚く。

髭を鞭の様に撓わせ、アクトルに集中してくるオールドヒュペリオン。

「ほっ、そりゃっ」

斧を小回りに振り払って髭を弾き、刃を上向きに素早く突き入れるアクトルだが。　右の頭を退かせた直後、口から煙を上げる左の顔が自分に向く。

（マズっ！！）

相手の攻撃の強打が来ない半歩以上に飛び退き。　更に吐き出された炎を避けるべく、大きく右へと飛び退いたアクトル。

「リネットっ、行くダスっ」

「解ってるっ！！」

アクトルですら余裕の無い相手だ。　自分達が頑張らなければと思った二人だったが・・。

二人は、大きく一歩を踏み出した所で、下から鈍い光を感じた。

「ぬわんダスっ？」

「えっ？」

見れば、自分達の武器が淡い白色の光を帯びていた。

マラザーフが後ろを見ると、其処にはクローリアが居る。　杖を構

え、目を瞑っていた。

「何が起きた？」

と、マラザーフを見たリネットへ、目を開いたクローリアが。

「“護の淡光”です。　魔法の効果などを緩める神の赦しです」

二人は、これで痺れを軽減出来ると頷き合い。

「助かったダスっ」

「必ず勝つっ」

と、アクトルに攻め込むオールドヒュペリオンへと向かった。

「クローリアっ、早くっ」

洞窟の入り口付近で言うカタニスへ、クローリアは向き。

「もう一人に魔法を施しますっ。　早く、樹香を洞窟へっ！！」

と、今度はスティールに向かう。

さて。　アクトルに向かったオールドヒュペリオン。　そして、その後ろに回ったスティールは、その自由自在に動く尻尾に苦戦していた。

鋭い尻尾の先端を刺し込んできたのを避け、隙を突いて掬いに斬り上げるのだが。　クネクネと不規則な動きで避けられる。　やや胴

体寄りの尻尾が繰り出す押し込む様な体当たりを受け、剣で防ぐと・・。“バシュっ”っと、感電する様な衝撃を受けてしまうのだ。

「うわぁっ！！」

全身に針を刺す様な痛みに驚き、ただ後退するハメに。　其処へ、一気に伸びて来るのは、尻尾の鋭い先端を突き刺す攻撃が、また。

痛みに耐え、身を捩って回避し。　何とか握る剣を片手に、攻撃の来ない間合いまで逃げるだけに成る。

「助太刀ダスっ」

「クローリアに魔法を掛けて貰えっ！！」

と、マラザーフとリネットが合流し。　スティールは、危なきを脱した。

「ふぃ～、痛ぇぇーっ！！　何だよっ」

喚いたスティールは、特に衝撃を受けた痛い右手を振る。

其処へ、クローリアが来て。

「スティールさん、剣を。　あのモンスターは、身体の一部に帯電する体質を持っている様です」

「“帯電”だってぇ？　カァ～、ウィリアムはそんな事・・・」

真剣な顔のクローリアは、子供染みた非難だとばかりに。

「戦った事の無いモンスターを、知熟するなど無理ですわ」

「そりゃそうだ・・」

剣を差し出す中で、スティールはラングドンを見ると・・。

「大いなる風よっ！　うねりっ、食らう一陣の竜となれぃっ！！！」

帯状の風を呼びては、丸で生きた生物の様に操り。　コウモグラの集まりを次々と打ち落とす。　風の襲撃を食らって、翼膜をズタズタにされてしまっていた。

（流石なジィサンだぜ）

感心して、今度はウィリアムを見ると。　新手として、森から現れるブッカーやワームのモンスターを、ロイムが出会い頭の所を魔法で倒し。　ウィリアムは、シーカーの応援を含めた数頭の群れを、一人で相手にしている。

（・・アイツ、マジだな）

スティールは、動き出すウィリアムが一瞬だけ消える様な感覚に襲われ、暗殺の術を使っていると解る。　無理無く攻撃を避け、背中に乗り掛かる様に首を攻め。　噛み付きを避けながら、ダガーを急所に突き入れ相手の動きを封じる。　目を潰されたり、四肢を斬られてしまったモンスターは、ウィリアムの敵では無くなる。　暗殺闘武を会得するウィリアムの、本領発揮と云った所だ。

「スティールさん、施しました。　皆さん共々、ご無事で」

云われたスティールは、アクトルなどを見て。

「おう。　終わったら、熱いキスでもしてくれよ」

と、軽口を叩けば。

洞窟に行くクローリアは、

「貴方だけは、犠牲でも構いませんよ」

と、言葉を置いて行く。

（カァーっ！　ウィリアム以外は、男要らないって事ですかい）

取り付く島も無いような気分を捨て、スティールは、オールドヒュペリオンへと向かった。

三方で始まった戦いだが。　何処も直に決着が着くとは行かない。

ウィリアムの所には、陸路で森を移動し忍び寄って来たモンスターが次々と。　シーカーボルボンは、群れる上に嗅覚がいい。　倒すと、ロイムの居るほうに新手が来たりと、頭数が減ったり戻ったりの繰り返しだった。

一方。　ラングドンの所には、空中を飛んで来るモンスターが押し寄せていた。　早く曇った御蔭で、丁度餌を探しに出て来たモンスターの群れが呼び込まれている。　面倒なのは、鮫の様な頭を持つ鷹のモンスターで。　高々と獲物を狙って旋回する。　その様子を見て、羽根を持つ猿のモンスターや、コウモグラが集まる。　魔法で一気に倒せる半面、強い魔法を遣う為に音が出る。　峡谷は、そ

の地形から音が響き渡り易いので、自分から居場所を知らせている様なものでもあった。

稲光が繰り返され、雨が降り続く。

ラングドンは、水の細い矢を生み出す魔法を唱え、空に飛び上がった鮫鷹を殲滅させた。

「ふぅ・ふぅ～・・」

中級の魔法を連発するなど、最近では無い事だった。　疲労感に、気が抜けそうに成るのを堪えるラングドン。

しかし、一匹のコウモグラが、ラングドンの右脇に回り込んでいた。　峡谷の崖を手前に、少しだけ離れて魔法を唱えていたラングドンにとって、注意の反れているこの状況は危険だった。

洞窟内部に樹香を置いたカタニスは、クローリアを残して雨の降る外に出て。　ラングドンへ応援に行こうとしたので、そのモンスターが見えて居た。

「ラングドンさんっ、右っ！！！」

その不意を突く声に驚いたのは、寧ろラングドン本人で。

「あっ、あぁっ？」

と、右を向けば。　バッサバッサと羽ばたくコウモグラが、その鋭い鉤爪を振上げて居た。

「なぬっ」

焦るラングドンだが、彼の経験としての判断は、確かなものが在った。　若い頃は、運動も嫌いでは無く。　魔法遣いと云えど、早歩きながらに一日を歩くのも出来る方。　この緊急時に、経験が身体を動かせた・・。

「ぬぐっ」

杖の太い頭を握り、迫るコウモグラ目掛けて刺し出した。　間に合うと見切るには至らないが、咄嗟の防御行動としては、上出来だった。

コウモグラの鉤爪は、ラングドンの顔の額を薄く斬った。　しかしそれは、極めて薄皮一枚だけ。　代わって、コウモグラの片目辺りに、突き出された杖の先端が刺さる様に押し込まれている。

「あっ」

驚くカタニスの視界の中。　よろめいて後退するラングドンと、濡れる草むらに落ちて暴れるコウモグラが・・。　ラングドンの額から出た血が少し飛び散ったのを、ハッキリと見たカタニス。　矢を矢筒から抜きながら、急いで走り始める。

しかし、幾度も窮地を潜り抜けた場数の豊富なラングドン。　血が額から顔へ流れるも動じず。　その場に屈むと、指二本を草むらの地面に刺し。

「大地の力よ、穿(うが)てっ！！！」

と、目を凝らす。

刹那・・。

暴れるコウモグラの居る地面が、ブルブルっと揺れたかと思うと・・。　長剣ほどの尖った岩が、コウモグラを突き刺しながら一気に伸び上がったではないか。

「・・・」

コウモグラを見ながら立ち上がるラングドンへ、カタニスが駆け寄り。

「大丈夫かっ？　さ、傷を治しに」

と、云うのだが。

ラングドンは、峡谷の方に向き直り。

「まだ、モンスターは来る。　ワシだけ、この場から逃げられん」

「何を云ってるっ、アン・・」

ラングドンの対面側に回ったカタニスは、ニヤリと笑うラングドンを見て、思わず言葉を止めてしまった。

「な・・何が・・、笑ってるぞ？」

すると。　暗雲垂れ込めた空の遠くに、飛行する影を見つけるラングドンは、あの二日前に戦った翼竜種のモンスターだと確信して。

「御主は、楽しいと思わないか？　冒険者として、これほどに全力を出し尽くす場所も滅多に無いわい。　痛みより・・モンスターを前に、心躍る自分が居る。　さぁ、あの獲物は、ワシの相手だっ！」

追い込まれた中で興奮すると、ラングドンと云う人物は、戦闘愛好的な思考に偏る傾向が在った。　その故に、駆け出しの冒険者などを中心に、普通の他人には嫌われる。　だから、中年に差し掛かる頃は、一人狼であった。　生死を掛ける戦いでは、寧ろ嬉しいと思える彼故に。

だがそれは、ウィリアムも同じなのかも知れない。

「・・」

ブッカーの背後に忍び寄り、ロイムに向かおうとするモンスターの急所を斬る。　戦う術を手に入れ、この差し迫った場所で全力を尽くす事に、悦びを見出しているのかもしれなかった。　モンスターの血を顔に飛沫かせ、その毒で皮膚がヒリヒリと痛むだろうに。顔や体の所々に、薄い掠り傷を作る彼は、微塵の苦痛すら浮かべないままに、次のモンスターへとスタスタと向かう。

近くのロイムは、と云うと。　また、森からカニのモンスターが４・５匹出て来たのを見つけ。

「もぉぉぉっ、うっざいんだよぉぉぉっ！！！」

と、無数の剣を生み出し、自分の手前に進み出たモンスターの集まりに落とした。　魔法を身体に受け、その衝撃波を食らって８匹近いモンスターが蹴散らされる。

ウィリアムは、大きく肩で息をするロイムに近付き。

「ロイム、森が動かない。　気配をオーラで感じてて」

「はぁ・はぁ・・うっ・ウィリアムはぁ～？」

オールドヒュペリオンを見たウィリアムは、歩き出しながら。

「決めて来る。　もう、終わりにしないと・・。　俺も、疲れた」

「・・絶対キメてよぉぉぉ～。　魔法、もう撃てないぃぃ」

この期に及んでロイムは、リーダーとして信頼しているウィリアムに駄々を・・。

ウィリアムは、親指を立てて了解した。

呼び寄せられたモンスターが、もう現れなくなった。

それは、ラングドンが受け持つ空中も同じ。　やや翼の破れては居るが、一昨日よりガタいの大きいテイルバウストを、再度相手にする事に成ったラングドン。　高等魔法を遣わず、ストーンヘリンジを幾つも生み出しては、身の周りを回らせる。

ーシギャアアアッ！！！ー

咆哮を上げ。　ラングドンに襲い掛かるテイルバウスト。

しかし、怪我をしたハズのラングドンは、冷静そのもの。　その長

い尻尾の一撃を、二つに並べたヘリンジで受け止め。　隙を見ては、別のヘリンジの一つをテイルバウストの腹に打ち込む。　一撃を喰らって咆哮を上げるテイルバウストが、得意である強酸のミストを吐こうとすると・・。

「待ったぁぁっ」

と、杖を押して、ヘリンジを開かれた口に突っ込ませる。　カウンターの様な間合いで一撃を喰らい、大きく仰け反ったテイルバウスト。　その隙を見逃さないラングドンは、守りを捨ててヘリンジを全てモンスターの近くに浮かせると・・。

「フンっ、そりゃぁぁっ！！」

横一列に並べたヘリンジで、テイルバウストに激突させる。　ぶつけた魔法を更に存続させるのは、生中の魔法遣いでは出来ない。

最後は、

「止めじゃぁぁーーーーっ！！！！！！」

強烈なダメージを受け、グッと下に落ちる様に下がったテイルバウスト。　その頭上に二列に整列させたヘリンジを、一気に下へと落としたラングドンだ。　カタニスが見守る中で、“ズバァァ”っと轟音を上げて、何かが裂ける音がした。

ーギャワァァァァーーーーーっ！！！！！！！ー

テイルバウストの大絶叫が、峡谷を揺るがそうかと思える程に響いた。　左右の翼が、ヘリンジに因ってこそげ取られる様に千切られ、

空を飛ぶ能力を奪われてしまったのである。

「おぉ・・す・凄い」

見ていたカタニスは、そのまま谷底へと消えるテイルバウストを見て呟いた。

だが・・。

「や・やったか・・」

その言葉のままに、ラングドンはバッタリと倒れる。

「なっ、おっ・おいっ！！！！」

大慌てのカタニスは、ラングドンを洞窟へと連れて行く事しか頭に無くなった。

さて。

一番の苦戦は、オールドヒュペリオンを相手にしていた４人だろう。
双頭以外の胴体は、常に帯電し、生半可な攻撃は硬い鱗が弾く。
片方の頭は、前に突き出た槍の様な角を有し、炎のブレスを吐く。
別の片側の頭に生えた角は、後頭部に向かって二本生え。　その口からは、放電をする。　四肢は細く短いが、掴み掛かる力は非常に強い。

こんなモンスターを相手にするなど、アクトルとスティールが居なければ自殺行為かもしれない。

現に。

アクトルと一緒に連携攻撃をしていたリネットだが。　ブレスで左右に分断された上に、片側の頭と1対1を強いられる。　そして、鋭い一本角を激しく突き付けられ、脇腹の鎧を掠り破られてしまい。　角が脇腹をも直接舐めて、斬られる様な傷を負った。

「うぐっ！！」

ヨロめくリネット。

「リネットっ！！！」

慌てたアクトルが叫び。　同じく慌てた男達が、オールドヒュペリオンの注意を、リネットから逸らそうとするのだが・・。

草むらにスピアを捨てて転がったリネットは、更に炎で追い討ちされて、片足を焼かれるハメに。

「ギゃぁっ！！！！」

滾る様なリネットの絶叫が上がった。　金属の具足を穿いているが、熱を防ぐなど完全には無理だ。　繋ぎ目に炎が入り、火傷の痛みが烙印を押される様に染み付く。　濡れる草むらに、リネットは更に更に転がって苦しんだ。

さて。　残る男性3人だが。　挟み撃ちにはしている格好なれど、やはり冒険者として腕が鈍っていたのだろうか。　マラザーフも、尻尾の打ち付けを食らい転んだ所で、特注のショーテイルを尻尾で絡め取られてしまう。

「このっ」

と、振り解こうとするマラザーフの全身から、急に靄が立ち上り。

微かにマラザーフも震え出す。

それを見たスティールは、微弱ながらに感電し出していると解り。

「剣を離せっ！！！」

と、マラザーフに叫びながら、捨て身に近い間合いまで斬り込む。

アクトルの武器は、運良く森と大地の精霊の加護を得ていた。　だから、雷の力を相殺出来る。　しかし、他の面々は、武器をオールドヒュペリオンの身体や尻尾に当てるだけで、感電から来る痺れの痛みを受ける。　クローリアの魔法でも完全に相殺出来ない為に、徐々に攻撃の手数が減ってしまっていた。　そしてその隙を突かれて、二人がまともな戦力に成らなくなってしまったのである。

しかし。

（くそぉぉ・・、こ・此処まで来て・・負けるのかぁぁぁぁっ？！！！！）

痛みと悔しさから、雨で濡れた顔に涙を流すリネット。　スピアと、ショートソードを杖代わりにし、自分を庇う様にして戦うアクトルを見た・・。

が。

（あ・・・）

オールドヒュペリオンの向こう側に、ウィリアムが見えた。　しかも、彼は自分を見て、片手で上に投げる仕草をしている。

（スピア？）

リネットは、杖代わりに近いスピアを揺すってみた。

“コクン”と、ウィリアムは頷く。

リネットは、ウィリアムに何か考えが在るのだと解り、頷き返すと・・。

「それぇぇぇっ！！！！」

自分が転ぶのも厭わず、左腕の有りったけの力でスピアを宙へ投げた。

後ろに引きずって下げたマラザーフの前に出たウィリアムは、投げられたスピアに合わせて、一気に走り出して飛び上がった。

転んだリネット。　そして、斧の側面で、ブレスを吐こうとしていたオールドヒュペリオンの片方の顔を、必死でブッ叩いたアクトル。

二人は、空中でスピアを受けたウィリアムが、双頭の左へ目掛けて落下して来るのを見た。

それは、轟く稲妻の音に負けない音で。

“ザシュっ！！！！”

凄い音を立てて、双頭の左をスピアで貫き。　そのまま地面に刺し止めてしまったウィリアム。

「貰ったぁぁぁぁっ！！！！！！！」

痛みに大きくつっぷした右側の頭は、アクトルの攻撃を見る余裕など無かったであろう。　低い位置に引き戻された右の頭部へ、一気に踏み込んだアクトルの戦斧が、渾身の一撃とばかりに叩き込まれ。　破竹の如く、右の頭を真っ二つに斬り割ったのである。

（か・勝った・・・）

濡れた野原に砕ける寸前の体勢で見ていて、頭を草むらに寝かせたリネットは、そう確信した。

一方。　顔を横に野原へ寝かせ、“アフアフ”としか云わないマラザーフは、剣を弱弱しく2度叩いて拍手をして見せる。

雨に濡れたが、何とか死人を出さずに済んだ。

ウィリアムは、皆が歩けるまでは洞窟で休む事に決める。　戦い抜いた誰もが、動ける状態では無かったからである。

ウィリアム続編・新たなる魔域　6（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム続編・新たなる魔域　最終話

ウィリアム特別編

ウィリアム達が洞窟を出たのは、次の次の日だった。

無理をするつもりは無かったウィリアムだが。　全身を火傷の様な水ぶれた姿ながら、マラザーフは奥さんの事が心配だと言い張り。

ラングドンも、今日を逃すと雨の中の帰りに成ると進言。

判断を迫られたウィリアムは、スティールとアクトルの状態を聞いた上で。　リネットが調子良い事を判断材料にして、村へと戻る事を決めた。　リネットの怪我の治りが早く、雨の御蔭で思った以上に火傷の怪我は悪くなかった。　クローリアが二日間癒しの魔法を定期的に遣い。　ウィリアムは疲労回復の薬を皆に配った御蔭だろう。

一同揃って外に出た。　前々日に倒したモンスターの死体に、殆どモンスターが集まった形跡は無かった。　やや薄曇りの空だったが、日差しは雲の切れ間から強く降り注ぐ。

ヨロヨロのマラザーフにアクトルが手を貸し。　魔法の遣い過ぎで虚脱気味のロイムとラングドンは、もう戦う気の失せた様子。　帰る事を決めたウィリアムは、スティールやカタニスに頼るしかないと思っていた。

だが。　オールドヒュペリオンと戦い、まだ少し手が震え気味のス

ティールは、

「リネットかクローリア・・、俺の手を治すのに胸を貸してくれ」

と、発言し。　本当に死滅されかかったのを見たウィリアム。

（懲りねぇ～）

もう、何も云う気が起きない。

所が、だ。

問題が発生したのは、村に着いてからだった。

それは、モンスターと戦う事無く帰れたと思った夕方。　やっとこさの様子で、宿に帰ると・・。

「おっ！　あぁ・・・帰ってくれたかっ」

と、馬車を操る御者二人が縋り付く様に来た。

その様子にウィリアムは、予想出来る範囲で。

「もしかして、初日に採取した樹香を・・盗まれました?」

と、探って見たのだが。　所が、事態はもっと悪い。

「違うんだっ。　確かに樹香を狙いに来たヤツ等は居た・・。　だが、その事を企んだ首謀二人を、村長が手打ちにっ。　死んだ片方の男は、俺やアンタ等を雇った大店の一人で、大商人カーディフさ

んの親戚なんだよ・・」

この話の内容には、ウィリアムでも目を丸くしたほどである。

「え？　一体、何が在りました？　もう少し詳しく」

御者と宿屋の女将の話である。

ウィリアム達が樹香採取に本腰を出した、４日前。

宿の一部に保管していた樹香を狙って、賊が侵入した。　元々、御者の男性の一人は、冒険者だった経験が在り、。　この宿の主は、村に近付くモンスターと戦う腕っ節が在った。　夜に進入した賊だが、二人に呆気無く取り押さえられてしまった。

さて。　役人に突き出す為に、先ず曲者の面体を検めると・・。その賊数人は、砂金採りの労働者だった。　他の村からや、首都の方から来た雇われ者ばかりで。　あの村長を使って無理をさせようとしていた二人から、多額の金を貰っての犯行だった。

しかし、その頃。

村長は、娘の身体が一向に良くならない事に疑問を抱いていた。そして、ウィリアムに諭された事も在り。　娘の飲んでいる薬を、元々から村に住む薬師に見せた。　すると。　その薬は、一言で言うと興奮剤に近い薬で、健全な者が疲れた時に飲む滋養強壮薬でしかないと・・。

恐らく、村長は縋っていたのだろう。　娘を助けれると、僅かな可能性に。

しかし、それは裏切られていた訳だ。　怒り狂った村長は、中央から派遣されている兵士を借り、村を混乱させた罪で二人を捕まえ、盗みの首謀者として斬って捨てたらしい。

村長の権限で、村を乱したり扇動する様な者は、一存での処罰が出来るとか。　叩けば埃の出る二人だからと、感情に任せて・・。

村の大半が迷惑していた二人だ。　村長の行動の行き過ぎも、村人には酷く映らなかったのだろう。　村長は、もう引退を決めた様で。
　中央に、新たなる者の任命を望む書簡を送ったと云うのである。

ウィリアムは、村長をその後見たのかと質問するが、誰も首を左右に・・。

（マズいっ）

ウィリアムは、村長が死ぬ可能性が在ると示唆。　そのウィリアムの勘は、正に当たっていた。　兵士を同行して村長の屋敷を尋ねると、丸で心を失った人形の様に放心した村長が居た。　ウィリアム達が話掛けると、村長は壊れそうな様子のままに奥の部屋を指差し助けを求めてきた。

村長の指先には、隣の部屋が開かれたまま。　駆け込んだウィリアムは、ベットの上で微かに呻く女性を見た。　間違った薬の御陰で、逆に体調が乱れていたのだろう。　急に激しい発作を引き起こした娘さんは、瀕死の状態であった。

村長は、娘と無理心中しようとしたのだが、二日も決心が着かず。
　遂に、娘が苦しみ出し、殺すに殺せなくそのままに・・。

一緒に来たスティールの手を借りたウィリアムは、村唯一の医者の元へ、村長の娘を担ぎ込んだ。

村の医者は、かなりの高齢な人物であった。　その老人の医者は、村長の娘の病気を知っていたが、薬が無いと・・。

だが、薬師としての技能は、天才と云って良いウィリアムだ。　この数日に掻き集めた薬で、その薬を作った。

正に、薬を飲ませる時は、間一髪だった。

終わった後、村長の胸倉を掴んで叱り付けたウィリアムを見て、スティールはウィリアムの温かさを再認識した。　レナ一件で、なんとも遣る瀬無い事態を暴いている。　何度もそんな事を味わいたい者等、そうそう居無いだろう。

娘の容態の落ち着きを聞いて、神に許しを請う罪人の様に、泣き・・泣き、泣き抜いた村長が居たのである。

ウィリアムとスティールが宿に戻ったのは、もう朝方だった。　何とも慌しい一日だった。

次の日には、のんびりする事も無いままに、樹香を荷台に乗せて戻る事にするウィリアム。　薬の調合を医者に伝えたウィリアムは、医師の他に兵士、酒場の女将、村長の親しき人に後を頼んだ。

そして、昼過ぎの小雨が振り出す中、荷馬車に乗り込んで村を離れたのである。

それから、数日後。　まだ小雨が降る街道を走る馬車の中である。

幌が風に動く手前側に対面して座るは、ウィリアムとスティール。

二人、なぁ～んとなく雨の降る外を見ている。

スティールが、ウィリアムを見ずに。

「なぁ・・ウィリアム」

と、云えば。

ウィリアムも、

「えぇ・・、まぁ」

と、緩慢な口調で返す。

スティールが、更に。

「だなぁ・・。　ん、イイねぇ」

と、云うと。

ウィリアムは、

★

「悪くない・・感じでしたね」

と。

リネットやマラザーフ達は、何を言い合って居るのか解らない。

唯一解るのは、アクトルである。　細めた目でそんな二人を見て。

「意外に、いや・・何処までもスキモノだな」

じれったく思えたロイムは、面倒なので。

「スティールさん、さっきから何言ってるの？」

と、聞くと。

「ヌフフ・・」

と、不気味な笑みを浮かべるスティール。

リネットは、ヘンタイが笑ってると思い。

「気味が悪い」

クローリアも。

「ですわ。　どうせ、女性の事でしょう？」

アクトルは、其処へ。

「どうせ、村長の娘だかが可愛かったんじゃ～ないのか？」

と、言ってみた。

急にニヤニヤしたスティールは、両手を厭らしい手つきでニギニギさせて。

「そぉ～ぬわんだよねぇ。　年齢の割に童顔なのにさぁ～、胸が大きくて・・ヌフフ」

ラングドンは、思わず。

「何じゃ、見たんかっ？」

と、好奇心を丸出しの反応をして、リネットとクローリアに睨まれた。

頷くスティールは、更なる厭らしい手つきで。

「あぁ・・、昨日の夜。　だって、ウィリアムが触診するし～。医者ン所まで付き合っちゃってさ・・」

と、回想を語る。

「全くっ、何たる不埒なっ」

「ホント、最低ですわ」

リネットとクローリアは、嫌な話に顔を背ける。

だが、雨の中でウィリアムの回想も在った。　瀕死の彼女に自分を宛がい、兵士を下げさせて村長を部屋に押し込んだスティール。どうしたら、彼女は助かるのかを必死で自分に問うた。　ウィリアムは、スティールの声に後押しを貰う様な勢いのままに、次々と事を進めた気がする。

自分の娘の元で泣いていた村長に、スティールはこうも言った。

「アンタさ。　イイ歳してほとほとバカだな。　真っ当な意見を無視して、あんな金回りだけがイイ奴等の口車に乗ってよ。　金さえ有ればってモンで、命が助かる訳でも無いだろうに・・。　親は、アンタだけなんだろ？　最後まで、ちゃんと一緒に居てやれよ」

村長の胸倉を掴み叱った自分の言葉以上に、スティールの言葉は、村長に堪えたはずだった。

（ま、イイ部分なんてくすぐったいだけッスからね・・）

目の前で、ヘンタイ人間を演じるスティールが手に取る様に解るウィリアムは、余りの解り易さにせせら笑いすら出る。

湿気の多い風で、モンスターの体液で爛れた顔の所々がヒリヒリとする。　仕事の裏表の遣る瀬無さを感じるウィリアムと仲間を乗せた馬車は、雨の街道をひた走った。

そして、更に数日後。

午前中にヘキサフォン・アーシュエルに戻ったウィリアム達。　仕事を請けてから、２０日近く経過していた。

斡旋所にウィリアム達が戻っただけで、軽いどよめきが起こった。
　地元の屯組みや、あのヒュリアなどは、仕事にしくじって他国に逃げたと噂をばら撒いていただけに。　大量の樹香や、希少なモンスターの一部位を持ち帰ったウィリアム達に、何も言えなくなった。

ウィリアム達が、ブレンザへ森の現状を報告する中で、煙管を放置する程にブレンザが驚く。

「何だって？　あの・・オールドヒュペリオンまでも居た？　た・倒すのに苦労したろう？　アイツは、身体に帯電する上に、他のモンスターを呼び寄せる」

スティールは、薬や武器・防具の材料に使われる角を持ち上げ。

「あぁ。　手は痺れるし、エラい強かった。　正直、泣きそうだった」

と、ヘラヘラした態度で云う。

しかも、ブッカーの様な新生種が多いのには、ブレンザは困った顔をする。

「うぅ・・、他にも採取の依頼が来てるのに・・」

ウィリアムは、今回一緒に行ったカタニスやマラザーフを見て。

「上級者以外は、経験の在る人と一緒に行かせるべきですね。　それから、森の奥へ行かせるのは、極力避けるべきですよ。　どうしてもと云うなら、大掛かりに結界を張って、イービルループの出来

た辺りを封印するしかありません」

マラザーフは、ブレンザへ。

「ほんなら、オイラはこれで。　おっ母の様子が心配ダスから。報酬は、後で受け取りに来るダス」

と、皆にお別れを告げて一旦別れた。

興味も在るカタニスは、大店の主達を待つ。　自分達の採って来た物が、どれぐらいの印象を与えるのかと。

ブレンザは、ザワつき煩い周囲を見回し。

「喧しいねぇ。　騒ぐ暇が在るなら、依頼でも請けな。　これから、チョイと忙しい。　今日は、屯なんかよしとくれ」

主の判断は、かなりの強い権威を持つ。

ウィリアム達の活躍に刺激され、何でもイイからと仕事を請ける気のチームやら、成功・失敗の報告をする為に待つチーム以外は、渋々ながら斡旋所を出て行った。

ウィリアムを睨む様に出て行くヒュリアは、イライラして仲間に当り散らしながらである。

そして。

ウィリアム達の到着が知らされた後、昼過ぎだろうか。　１４・５人の商人達が次々と到着。　昼下がりに全員の到着を待って、採取

されたモノは公開された。

その一声は、“オー”だの“ワー”だのと歓声に近い。

ブレンザは、依頼を特別な形で請けていた。　依頼元は、この大店達だが。　依頼の受付と仲介をする斡旋所に、全ての事を一任するのを大条件とした。　これは、普通の依頼と似通っているが、実は大変な違いが在る。

それは・・。

樹香を品定めする大店達へ、ブレンザは言う。

「今回は、本来なら危険極まりない依頼を、優秀な冒険者にゴリ押しで遣って貰った。　先に言った通り、樹香の量を均等化し、今の値段に応じて依頼承り分のみの物品を回すよ。　過分量は、斡旋所で引き取る」

厚手の皮服に、動き易い商人の好む服装をする小太りの中年が。

「主さん、そりゃ～酷い。　樹香は、全て我々に売って欲しい」

ブレンザは、ウィリアムが思った以上の量を採って来た事を逆手に。

「おや、あんた達は、多かれ少なかれこれぐらいだと相場を決めて、報酬の金を出したに過ぎない。　相場以上の働きが有ったら、過分の物は斡旋所の物にすると・・。　最初の契約で、そう言い交わしたハズだよ。　契約にも、そう明記してある」

すると、背の高いタキシードを着た紳士風の男性が。

「それはそうだが・・、これ以上薬の値段を上げる訳には行かないんだ。　半分以上の量が余ってるんだろう？　我々に売って貰えないか？」

次々に要望を言う商人達。　ブレンザは、カウンター前に集まった商人達の雁首を見回し。

「なら、今夜にオークション会場へ来なよ。　前に手に入った薬草分と合わせて、競をしてあげよう。　それで、勝手に競り落とすがイイさ」

大店達は、“競”と聞いては自分達の領域だと思い。

「よし、オークション会場だな」

「絶対に開いてくれよ」

「必ず参加する」

と、次々に口にする。

遠目で見ていたウィリアム達は、ブレンザが強か者だと呆れた。

大店の商人が金を置いて解散しようとする時。

「チョイト、カーディフさん」

ブレンザは、背が低く若い紳士風の男性を呼び止めた。

新興勢力の大店であるカーディフは、ブレンザに振り向く。

「何だ、主さん？」

ブレンザは、煙管を咥えながら。

「御宅さん、村に手下を派遣してるみたいだねぇ～。　今回、随分と冒険者が迷惑を貰った様だよ」

と、意味深な細目を向ける。

少し痛い所を持ち出されたという顔をする、カーディフと云う男性。

「だから、何だ？　そ・そんなの・・どの商人もやってるさ。　狩人や・・薬師を抱えて、薬を調達するなど・・。　と・当然ではないか」

ブレンザは、ゆる～く頷くと。

「そうかい。　でも・・その二人、数日前に死んだらしいよ」

この一言には、カーディフの顔はガラっと変わり。

「なぁっ・な・何だってぇっ？！」

村長の娘に偽った薬を渡し。　しかも、今回の依頼を妨害する様な盗みまでを主導したなどとは、全く知らなかったカーディフ。

細目を窓に向けるブレンザは、紫煙を噴き。

「斡旋所としては・・役人に申し出る。　後で、それなりの罰金を払って貰うよ。　拒むなら、協力会が然るべき手を回すだろうねぇ」

冒険者協力会は、裁きに対して金などでは買収されないのは鉄の掟。

この徹底した態度は、冒険者の歴史上、国を揺るがす事もあれば、時の大商人と内紛染みた争いを繰り広げた事も在る。　未だに、勝手に依頼を冒険者に回し、不正や悪行を斡旋所に押し付ける様な輩は、人知れず暗殺されるとか。

商人であるカーディフは、ブルブルと震え出し。

「幾らっ・幾ら出せば逃げれるっ?!」

と、血相を変えた。

横を見るブレンザは、

「まぁ・・、それなりに頂こうかね」

と。

「わわわっか・解った。　今・・用意出来る金額は・・よ・用意する」

夏の今に、斡旋所が冷え込んだ。　尋常な話では無かったからだ。

商人達が帰り。

再びブレンザの元へ集まるウィリアム一同。

ブレンザは、涼やかな声で。

「明日に、もう一度来ておくれ。　報酬を渡す。　宿代が無いなら、アタシの知り合いの宿を取って置くよ」

ウィリアムは、カウンターに残された樹香や薬草を見て。

「随分と残しましたね」

煙管を咥えて、燻らせるブレンザは頷き。

「あぁ。　あのバカ共に全部くれてやったら、下に回る時は倍額だ。　夕方に、安いルートの競に落す。　これだけの量が有れば、少しは保つだろう。　北西・北東・東の森でも、樹香は採れ始める。　それまでを繋げれば・・」

「そうですか」

ブレンザは、ウィリアム達へ首を巡らせると。

「しかし、大したモンだねぇ。　依頼以上に、村の頼みを聞いて来るなんざぁ・・。　あのカーディフって男から巻き上げた分から、多めに報酬だすよ。　それから、モンスターの部位も競に掛けて、それなりの手当てを回すからね。　ま、明日の昼過ぎには、金も用意出来よう」

ウィリアムは、ブレンザを見て嬉しそうだと見て取れ。

「そんなに面白かったですか？」

「あぁ～。　成果が優秀過ぎて、名前を広める資金も必要無い。頼んだ以上の成果、後処理もシカッリしてるからね。　云う事無い」

そんなブレンザへ、スティールが。

「所で、あの村長に、カーディフって野郎の事は飛び火すんの？村長辞任すって言うし、迷惑は困るゼ」

微妙な話だと、おもむろな動きで視線を外す様に横を見るブレンザ。

「どうだろうか。　ま、何らかの癒着が在るなら、理由はどうあれ・・全くお咎め無しとは行かないだろうねぇ～」

スティールは、不満を浮かべた顔で。

「金の在るヤツは、裏に回ると不幸しか作らないな・・。　弱みを突かれる相手は、堪ったモンじゃねぇ～よ」

同じ思いのウィリアムは、短く。

「ですね」

と、云うと。　ブレンザに顔を戻して。

「では、宿を手配してくれませんか？　それから、明日に此方のラングドンさんと、リネットさんが、チームに加入する手続きもするので。　それだけ、含んでおいて下さい」

ブレンザは、吹き出す紫煙を止め。

「・・、引き取り手が出て来るとはね。　世の中、色々だよ」

と、呟き。　煙管をカッと玉座の様な縁に打ち付け。

「解った。　夕方にでも、“メルレード宿屋”に行きな。　今から手配を向けるから、いい部屋を用意させるよ」

ウィリアムは、エレンの事が気に成っていたので。

「解りました。　では、知人に会ってから向かいます」

ウィリアム達は、外に出る事にした。

★

エレンの元を尋ねたウィリアム達は、必死に悲しみを堪えながらも目を赤くさせた彼女に会う事に。

没収が決まった、店と家の一緒に成った居間に、老僕のポルスに案内された一同。

「ウィリアムさん、あり・あ・・ありがとう・・ございます」

嗚咽に喉を詰まらせるエレンは、黒い喪服のドレス姿。

スティールだけでなく、元のチーム一同。　何が起こったかを理解

した。

ソファーに座り、俯くウィリアムは。

「もう、お亡くなりに・・」

「・・い、はい・・・。　一昨日、ミレーヌ様からの・・連絡で、危篤・・と」

寺院と病院の併設された施設へ入院していた、エレンの実母であるソレア。　夜霧の影響で、夏風邪が増えたヘキサフォン・アーシュエルで、その患者から貰ったのだろうか。　高熱を出し、咳き込みながら息を引き取った。

寝ずに看病したエレンは、母親から抱え切れない程の感謝の言葉を受けた。　たとえ、一月も一緒の時を過ごせなかったとしても、今生の最後で出会えた事に感謝すると・・。

エレンを必死に護った育ての母であるルイスにも、彼女は感謝を重ねた。

エレンは、もしかすると家財などの全てをを失うのかもしれないが。　今まで引き裂かれていた絆は、繋ぎ止めれそうな気がした。

ウィリアム達が訪れたこの日は、ルイスの移動の日でもあった。

労働刑、１８年。　ミレーヌ達を束ねる長官からは、死刑が妥当だとも声が上がった。　ケウトは、死刑と云う終身刑。　ローウェルは、死刑を前提に裁判の審議が行われている。　エレンには、役人側も情状酌量の余地が大いに在ると判断されたが。　ルイスに対す

る見方は、人それぞれに偏った。

ミレーヌは、エレンを護ろうとしたルイスの母親としての気持ちを汲み。　１０年少しの刑を打診したが。　密輸などの影響に加え。　ダレイの言い成りに成った時期、ローウェルに唆された部分を厳しく見る裁判部と、揉めに揉めた。　そして、死刑・終身刑は免れたものの、１８年と云う長い労働刑をかせる所で、裁決が決まった。

何も知らないルイスは、朝の送致前にエレンと会えた処で。

“お母さんを、大切に・・”

と、呟く。

エレンは、ソレアが死んだ事を告げた上で。

「ずっと、帰りを待ってます。　これ・・私の縫い直したものだけど」

と、冬は寒い北の監獄村に連れて行かれるルイスに、厚手のカーディガンを手渡した。

本来なら、北門の罪人が出る門には、見送りは出来ないのだが。　少しだけ猶予を与えたミレーヌは、その受け渡しも目を瞑った。

まだ霧が立ち込める街中で。　エレンは、ルイスを見送ったのである。

全ての話を聞いた一向は、重い雰囲気に包まれた。

スティールは、苦し紛れで。

「大変だったな、大丈夫か？」

と、エレンに。

正直、ポルスや使用人夫妻は、そんな状況じゃないと顔を伏せるのだが・・。

涙を浮かべたエレンは、ウィリアムに。

「ウィリアムさん・・、実は・・」

エレンの店で、大型の店内に買収した店を一纏めにした別店舗が在ったが。　その保持存続は、認められるとの事。　それから、向日１５年は、店舗の増補は出来ないと。　そして、船の操業許可を取り消されたのだとか。

「エレンさん。　どうやら・・砦一つは、手元に残るんですね。これから、再出発ですね」

ウィリアムは、これからはエレンが主として、難局の人生を渡るのだと思った。

頷くエレンは、ウィリアムに深く頭を下げて。

「ウィリアムさんには、本当に感謝します。　・・事件を解決出来なかったら、今頃私も・・母二人も、ローウェルさんとケウトさんに消されてしまったかも。　でも、ウィリアムさんの御蔭で、希望を残せました。　これからは、私が全部を護って・・義母を待ちま

す」

エレンは、ウィリアム達一同に。

「本当に、ありがとう御座います」

と、再度・・・。

スティールは、女の強さをまた垣間見た気分で。

（強ぇ～・・。　こうゆう女にだけは、敵わないな・・）

と、思った。

ウィリアム一同が帰る時、エレンは見送りに出て。

「食料品は、私の店にして下さいね。　ちゃ～んと、オマケしますから」

と、云う。

ウィリアムは、エレンの強さに。

（受け継いでる・・、ご両親の芯の強さを）

と、笑顔を返して別れたのである。

ウィリアム続編・新たなる魔域　最終話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム編が終わりました。　次は、セイルとユリア編の旅立ちの章最終話に突入します。

２年を経て、アクセス数が５００万近くに成り、これからも本に出来るまでは頑張って掲載してゆこうかと思います。

では、ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終話

≪緩やかな一時は、なだらかに流れ行く≫

深々と雪が降り始めた大都市アハメイル。

ハレンツァが死んだ事をまだ知らないセイル達。　マーリが用心棒として連れて来た冒険者達は、非常に結束力の強い者達で、セイル達が昼夜警戒する必要は無かった。　出来た暇を持て余すので、斡旋所で仕事を回して貰ったのだ。

仕事を請けたセイル達一向は、貴族や商人などか住み暮す区画へと入り込んだ。　街灯の作りも洒落ているし、道も歩道と馬車などの走る車道との区別が付いている。　外壁や垣根に囲まれた広大な庭を有する家が、道形に続くのだ。

雪が積もり出す昼間は、屋根に立つ使用人が居たり。　庭木の手入れに勤しむ庭師が居たりする。

マントにフードをする一同とは別に、通りには優雅な衣服の貴婦人達がパラソルを差したり、御付きの者に差させたりして、通りを歩

く。　馬車の往来も頻繁で、年末に向かう年の瀬らしい雰囲気であった。

セイル達は、通りを行く人達に怪しまれながらも、斡旋所で教えられた住所へと向かっていた。　途中、警戒に回る兵士達に道を聞き、そこまで案内して貰えた。

白い外壁の丸みを帯びた建築物。　雪化粧した芝の庭。　伯爵ロンザリンド家の家は、立派な物だった。　二階、三階の窓には、レースのカーテンが閉まり。　尋ねても留守の様な静けさが有ったのだが。

「すみません。　冒険者の者ですが～」

と、セイルが声を出して、入り口の大扉を叩いた。　庭に入る門は開かれていたので、屋敷の前まで入って来たのだ。

直ぐに。

「何方様でしょうか？」

と、扉は開かれ。　丸渕のグラスを掛けた年配女性が現れた。　黒い礼服のドレスを着て、強く結ばれた感じのする唇は、気位の高さを示す。　垂れ目にも、強さが見受けられた。

セイルは、フードを取り。

「ロンザリンド様の御宅は、此方でしょうか？」

「ええ、そうですわ」

「私は、斡旋所で仕事を請けましたセイルと申します。　依頼主のアローズ様にご面会願いたいのですが、出来ますでしょうか？」

現れた女性は、セイルを見てから。

「私は、執事のメアリーと申します。　では、ロビーにてお待ち頂けますか？　主は、偏頭痛持ちでして。　今、お休みです。　お伺いを立てますわ」

セイルは、一礼を重ね。

「ありがとう御座います。　では、中で待たせて頂きます」

全員がマントの雪を払い、暖炉の在るロビーに入った。　玄関であると同時に、待機の場でもあるロビーは、その様相に家主の気配りが窺える。　寒い地方では、待たせるお客の為にも、ロビーにそれなりの配慮を見せるのが基本なのだ。　ロビーを広くか、奥行きの在る形にし。　温かい物を飲める場所には、暖炉を置く。

メアリーと云う執事の脇に控えていた若い男性に案内され、白い石の中に絵が施されたロビーに連れられたセイル達。　メイドの女性二人に見られたセイルとアンソニーは、一瞬で彼女達を虜にした。

「此方で、お待ち下さい」

ロビーの階段の脇には、壁に絵が掛けられた幅広い廊下が伸びる。　その奥には、待合いの場と暖炉が有った。　街をデザインした手織りの大きな絨毯の上に、テーブルと椅子も配されている。

「ハァ～、寒かったぁぁ」

ユリアは、暖炉の在る階段脇のスペースに行く。　赤い厚手のズボンに、動き易い衣服を重ね着した彼女は、マントを立て掛けのハンガーに引っ掛け、暖炉に手を伸ばしたのである。

「ユリアちゃん、はやいよ」

笑うセイルに、呆れ笑いのクラーク。

アンソニーは、寒さも関係無い身なので。

「いや、本当に寒さを感じない。　全く、思わぬ恩恵だ」

と、椅子へ優雅に腰を下ろす。

紅茶が出され、一呼吸が置かれた。

少しして、執事のメアリーが現れた。

「セイルさん。　それから、皆様方。　奥様がお会いになるとの事なので、二階へいらして下さいませ。　ご案内致します」

一同は、二階へ行く白亜の階段を上がり。　広間の一室へと通された。　黒の絨毯が敷かれた部屋で、壁という壁に絵やら何やらと・・・。

メアリーは、窓の前。　揺り篭の様な木の椅子に座った人物に近付く。

「奥様、冒険者のご一行がお見えに成られました」

すると、薄暗い外を眺めていた人物は、静かに。

「そう・・、此処へ」

と、老いた声を出す。

「皆様、此方へ」

メアリーは、セイル達をその人物の脇に招いた。

セイル達が来ると、その人物は喪服の様な黒いドレスを着て、未亡人が赦される黒いベールを被る。　一向は、曇天下の鈍い陽の傾きの中で、老いた女性を見た。

セイルは、そのベールに包まれた女性が不思議で一礼だけ・・。

ベールをした女性は、緩やかな首の動きで皆を見ると。

「どうも。　私の頼みを聞いてくれる方が、やっと来たわ。　寒い中、ご足労に感謝します。　この家の当主で、アローズ・ルハメリ・ロンザリンドと申します。　お見知りおきを」

「ご丁寧に、恐れ入ります。　リーダーのセイルといいます」

喪服の老いた婦人アローズは、

「冒険者って、随分ガサツな方々が多いって聞きますの。　でも、無縁な方もいらっしゃるのね」

と、セイルやアンソニーを見ては、緩やかにそう言うと。　前を向き。

「依頼とは、幽霊退治ですの。　街の外に在る農場区域に、私の家が所有する小屋が有りましてね。　その小屋に、夜な夜な幽霊が出るとか・・。　何時から出るのか、どうして出るのか解りませんが。　亡き夫の買い入れたもので、手放す前に清めて置きたいの。　どうか、調査をお願いします」

セイルは、先頭に出て。

「失礼ですが、元々からの所有物・・では無かったんですか？」

貴婦人アローズは、少し俯き。

「えぇ。　結婚した夫は、１０も歳の離れた農家の経営者でした。　この大都市に何か災害が在っても、食料を絶やさず供給する国の農業政策に携わり。　大きな国営の農場を任されていたの。　でも、去年に・・事故で死んでしまって・・・。　この度、娘夫婦に家督を渡そうと思いましてね。　余分な屋敷などを清算して、隠居しようかと・・。　そしたら、農場管理者の方から、幽霊が出るって聞いたの」

「そうでしたか・・。　でも、幽霊の目撃は、つい最近の事なんでしょうか？　今まで、依頼を度々に出された訳では無いですよね？」

「えぇ。　依頼を出したのは、先月か・・先々月ですわ。　依頼を出す少し前に、突然幽霊が出るって聞いたものだから・・。　でも、目撃は昔からの様です。　管理者に聞けば、夫が買った後から、働

き手が幽霊を目撃していたとか・・。　でも、モンスターなのかどうか解らず、ズルズルと今日まで来たそうよ」

アンソニーは、セイルに。

「少し変だね。　元々から、幽霊が居た屋敷を買ったようだ。　元は、誰が持っていた物なのだろうか」

セイルは、そのままアローズに向き。

「以前の所有者は、お解りですか？」

アローズは、首を弱く左右に振り。

「確かなことは、何も・・。　小屋の事を管理していたのは、カツーニと云う不動産商人だそうですが、もう生きては居無いの」

「病気か何かでですか？」

「・・いえ。　その・・刑死です」

ユリアは、“ケイシ”と聞き慣れぬ言葉に頭を捻る。

セイルは、ユリアを見てからアローズに。

「刑死・・って、処刑されたのですか？」

「はい」

アローズの返事に、ユリアは驚き。　アンソニーやクラークも、目

を見張る。

不動産商人カツーニは、春にアハメイルを襲った激震“ホロー殺人事件”と、その余波で芋蔓式に解明された“オグリ公爵不正事件”に関与していた一人であった。　ホローの組織下で、随分とあくどい地上げをした上、禁制の薬に手を出していたとか。　リオン王子の指揮下で、在る程度の埃を叩かれた所で死刑にされたそうだ。

アローズは、深い溜め息を見せ。

「はぁ・・。　実は、夫もその方とトラブルに成っていました。決まっていた別の土地の売値を吊り上げようとしたとかで、随分と激しい口論もしたとか・・。　夫が死んだ今に思えば、下水路に落ちた死など不自然死ですが。　もう・・、悩み・・憤りも疲れましてね。　隠居を決めましたの」

セイルは、大体を理解したと思い。

「解りました。　では、明日から昼間に出向いて見ます。　幽霊を祓えるなら、試みて見ますね」

「すみませんね。　前に、僧侶の知人にお願いしたのだけれど、小屋に入る事も出来ないままだって・・。　幽霊に、小屋が占拠されているみたいだったそうだから・・。　頼る人が居無いので、お願いします」

アローズは、深深と頭を垂れて一礼した。

「しっかし、なぁ～んで今頃に退治？　旦那が生きてる時じゃ～ダメだったのかしら」

雪の降り続く通りに出たセイル達。　夕闇が迫る暗がりの中で、フードの墨にモジモジと隠れるサハギニーを見せるユリアが一言。

クラークも、頷くが。

「恐らく、何か理由が在ろうが・・。　とにかく、幽霊とやらを確認しなくてはな」

セイルは、アンソニーへ。

「幽霊なら、アンソニー様で十分ですね」

身体に回したマントを包む様に持ったアンソニーは、

「だね。　思念だけの霊でも、話は聞ける。　留まる理由を知れば、対処も考える事が出来よう」

と。　伊達に、ノーライフ・ロードに変化した彼では無い。　死霊系の下位モンスターなら、操る主が居無い限り自由に言い成りへと出来よう。

ユリアは、横目でアンソニーを見て。

★

「ふ～ん。　女性を誑かす以外に、一応は特技有るんだ？」

「・・・」

バツが悪く無視をする様に横を見るアンソニー。

そんなアンソニーを見て、苦笑しか出ないクラークやセイル。

アンソニーの虜に成った宿屋の中年女性シンシア。　毎日、アンソニーと共に居た御蔭で、随分と痩せて太めな中年美女に成りつつ有る。　今日は、シンシアの変わりように、従姉妹の女性がパーティーの分割主催を持ち掛け、２・３日は忙しいとの事。

ユリアにとっては、“ヘンタイ王子”としか見られないアンソニーは、彼女に強く出れる訳も無く。　自分の女癖の悪さの事で何を言われても、負けるしかなかった。

宿に戻った一同は、食事を終えて。　ユリアとクラークを連れ、セイルがマーリの営む美術館へ顔を出しに行くと。

「・・・」

一人で外に出たアンソニーは、雪化粧した広い庭を夜の闇にも関わらず散策。　怪しげな気配が潜んで居無いか確かめた。

そんなアンソニーが、借りの屋敷へと戻ると・・。

「あ、アンソニー様」

リビングには、身奇麗にしたシンシアが。　随分と痩せたシンシア

は、穏やかで控えめな美女に見え出している。

「シンシア、忙しかったのでは？」

「あっ・・その」

問われたシンシアは、何時もの服装とは少し違っていた。胸元が少し広く見える青いドレスに、ネックレスをしている。髪の毛は後頭部に結い上げ、少し崩した様な感じが艶やかだ。

急にモジモジしるシンシアに近寄ったアンソニーは、彼女の顎に手を伸ばして。

「あ」

小さく驚いたシンシアの顔を、自分に向けた。

「美しくなりましたね・・、温かみを残したままに。益々、手放したくなくなるじゃ在りませんか」

と、唇を奪う。

「・・・」

もはや、シンシアに抵抗の色は微塵も無い。求めるアンソニーのはずが、何時しかシンシアが求める様になり。二人の口付けは、激しさを増した。

アンソニーは、息苦しさで口を離したシンシアを抱き抱え。

「少しの間、乱れさせてあげましょうか」

と、言えば。

「嗚呼・・嬉しいですわ」

と、恍惚とした瞳で呟くシンシア。

彼女を寝室へと連れ去るアンソニー。　二人は、愛欲の炎に身を任せた・・・。

≪いにしえの・・幽霊屋敷？≫

アローズの依頼を請け、次の日には馬車でアハメイルの郊外へ。

曇り空の下、雪の街道を北西方面に行けば、街の外の一角に、大農園地帯が作られていた。　国が運営する農業地帯で、その運営や指揮は、農場を割り当てられた貴族が所有者となり、農家を家族単位で雇い作らせている。

農場地帯に入ったセイル達だが、雪化粧した畑に、農夫やその家族が出ているのに驚いた。

ユリアのフードに隠れる様に、肩にサハギニーと水の花精霊である

“水中華”が顔を見せていて。

先に、サハギニーが。

「はぁ～、雪の中でも働いてるのかよ」

と、言えば。

「仕事が在るのよ。　アンタみたいに暇じゃないのさ」

と、顔の在る花で喋り、蔦の様な茎の身体をクネらせる水中華。

アンソニーは、雪の下に残した野菜を掘り出している農家達を見て。

「雪の下に置かれた野菜は、凍らない様に甘さを増すんだとか。

恐らく、時期をずらして街に出荷する野菜なのだろう」

しっかり整備された畦の様な一本道を歩き、作業する農家の男性に縁からセイルは近寄ると。

「あの～、ご苦労様です。　ちょぉ～っと、イイですかぁ？」

「ズルズル・・ん？」

鼻水を啜り、中腰の体勢から身を起こす男性。　３０の終わりか・・４０そこそこと云った感じの農夫だ。　空気の冷たさに、顔が赤く。

日焼けした顔が、風の強さで顰めている所為か、少し老けて見える。　重そうな厚手の黒いコートに、上着や帽子をする農夫らしい人物。

「なんだ？　冒険者かいよ」

と、云う農夫へ、クラークが。

「済まぬが。　この辺に、“幽霊屋敷”と云われる家屋が在るとか。
我々は、その幽霊を祓いに来た」

「お～お～、ロンザリンド様の区域だな」

「うむ。　此処から近い場所に在るはずなのだが」

「あ～、それなら。　ホレ、向こうの防風林の先だよ」

「あぁ、木で見えなかったか。　これは、失礼した」

農夫の男性は、セイル達を見て。

「いやは～、あの幽霊達を祓うモンが来るとはねぇ～。　大して迷惑してなかったからなぁ～、だーれも屋敷に近付かないだけで、ほったらかしのままだど」

クラークと見合うセイルが。

「では、皆さんも幽霊を見たんですか？」

すると、男性は驚く素振りも無く簡単に。

「あ～ぁ、昼間でも通り掛ると、窓からこっちを睨む幽霊が見えたりするんだよ。　あの屋敷は、もう新しい宿舎が出来てから、去年の夏まで使ってたがな。　ロンザリンド様がお亡くなりに成ってか

らは、だぁ～れも居無いハズだ。　浮浪者が入り込んでるなら、大抵何か食い物を探す様子が在るがな。　最近は、そんな感じはまぁ～ったくねぇ。　何せ、あの宿舎の管理監督をする現場長が、幽霊にビビって屋敷を取り壊そうって喚いてる始末なんだぜ？」

「そぉ～なんですか。でも、幽霊なんて出る要素が在るんですか？」

「いやぁ・・。　あ～、そう言えば・・」

「何ですか？」

「この区域で暮す一番長寿の農夫に、グレゴリオって爺さんが居るんだがな。　その人が言うには、農地に変わる前は、此処は国の作業工場だったらしいとか云ってた。　もう、３００年前とか、４００年前とかの昔らしいがな」

「そうですかぁ・・。　そのグレゴリオさんは、今も宿舎街に住んでいますか？」

「あぁ。　青い屋根の長屋で、防風林通りの並びに住んでるよ。農作業の生き字引みたいな爺さんだが、若い頃に冒険者してたとかでさ。　アンタ達みたいな冒険者が尋ねれば、喜ぶと思うぜ。　結構気さくな爺さんだし」

「わっかりましたぁ～。　態々、色々と教えて下さってありがと～ございます」

「おう。　まぁ～、刺激の無いこんな場所だから、冒険者なんかと話できるのも話しのタネよ」

農夫の男性と別れた一行は、一列に並んで植えられている高い杉の木が見える方に歩き出しながら。　セイルは、アンソニーへ。

「アンソニー様、此処が元は工場だったとは、本当でしょうか？」

すると、アンソニーは農夫の居る方を振り返って見てから。

「どうだろうか。　この一帯は、大昔から様々な事に利用されて来たとか。　最初は、戦争をする為の武器工場の集合体とも聞いたし、雅が持て囃された貴族社会の絶頂期には、装飾品やドレスなどの飾る衣服が作られたとかね」

ユリアは、そんな面影も留めない農地を見回し。

「結構ワガママにコロコロと・・。　国王って、かなりいい加減で流行に流され易いんじゃない？」

「あははは・・」

笑ったセイルやアンソニーだが。　アンソニは、直に。

「最大の理由は、それが国益に成るからだろね。　売れるなら、作る。　所詮、国も金が無いと成り立たない。　一般市民から搾り取ったんじゃ、その内革命が起きるよ。　我が国は、滅んでいった国、交替して入れ替わる様々な国を見てきたから、そうゆう部分はしっかりしてるよ」

クラークは、一流英才教育を受けた身故に。

「それは、国を護る故の帝王学にも入っているのでしょうな。　い

ままで続く古い国が故に、新しい事や世界の流れを逸早く吸収する。
我が国の王族も、是非に見習って欲しい」

「おや、クラーク殿。　そんなに、水の国では古い学問が？」

「ええ。　一部分、国の古臭い風習を押し付ける所が在りましてなぁ～。　兄に嫁いだ嫁は、兄が死んだら弟以外とは契りを結ぶな・・や。　まぁ、訳の解らない躾教育ですぞ」

「ほほ～う、それは私の時代の慣例ですな」

「ま、家を護る意味では、それも仕方なしでしょうが。　弟の夫婦を別れさせてまでなど、バカらしい。　それなら、後家を分家にして。　弟の夫婦に家督を移すとか、最良の方法を考えるべきですな。
他にも、化石の様な習慣や慣例を教えられ、冒険者に成った後で恥を掻きました」

アンソニーは、クラークの様な人物が面白く思えた。

「ま、家を、家督を護るのが貴族の鉄則ですからね。　本人達の意思を無視する事も、昔は当たり前だったのですよ」

セイルとユリアは、そんな二人の話に耳を傾け。　あ～だこ～だと言い合った。

防風林の長い壁の向こう側に出ると、其処には人の集落と云って良い街が在った。　古い石造建築の建物や、レンガ造りの長屋などが集まり。　街の中を歩けば、酒場も在れば安い寝るだけの簡易宿も在る。　広場の雪を使い、子供達が遊んでるし。　商店の軒下では、農家の奥様達が喋っていたり。

「結構賑わいありますね」

と、セイルが云えば。

クラークも。

「ですな。　この街にも、結構な人が住んでいる様ですな」

と、街を見て頷く。

ユリアは、セイルに。

「ねぇ、真っ直ぐ幽霊屋敷に行くの？」

「う～ん。　先ず、さっきの人の話に出た御爺さんに会う。　昔ながらに住んでる人なら、屋敷の過去の何かを知ってるかも知れないし」

「ふぅ～ん、まどろっこしいね」

「まぁまぁ、大した回り道じゃないよ」

途中で住人らしき人に話をして、細かい行き方を教えて貰った。

その家は、防風林に沿った長屋続きの真ん中に在った。　放し飼いの鶏を追い掛ける様に、雪の積もった長屋前の細い通りを行くと・・・。

「あ、此処だ」

セイルは、目印の番号が刻まれたドアを見つけた。
区画番号と、長屋の並び番号が刻まれたその家は、同じ長屋の３番目であった。
ノックをしたセイルは、
「すみませ～ん。　グレゴリオさんは、いらっしゃいますかぁ？」
「はいよ～。　何方だい？」
そんな声がして、扉が開かれる。　現れたのは、かなり高齢と見受けれる老人だった。
「なんじゃぁ？　見ない顔だな。　武装しちょるし・・冒険者か？」
セイルは、訳を話して情報を求めた。
頭は略と云ってイイ程の短い髪が残るハゲ頭。　背はヒョロっと高く、９３と云う高齢者には見えない。　円く大きい目は、しっかりと見開かれ。　腰の曲がって居ない姿は、“矍鑠”（かくしゃく）と云う言葉そのものだった。
暖炉の焚かれた部屋に戻ったグレゴリオ老人は、セイル達を招き入れ。　そして、椅子に座って話をしてくれた。
問題の幽霊屋敷を“小屋”と称したアローズ婦人だが。　実際の大きさは、その言葉の思う所では無い大きさを持っていた。　高さ４階、横の部屋数６０。　寄宿舎として改築されたその屋敷は、転々

と人手に渡って、アローズの夫で5人目だった。

さて。

この寄宿舎。　見た目は大して古くは無いが、骨組みや地下倉庫などは、一昔前に建てられた作業場だったと云う。　フラストマドは土地が大きい分、その恩恵も多い。　固有の蚕や虫から取れる生糸は、シルクの宝石と謳われた事も在るとか。　数百年前に、その工場の母屋だった場所が、その幽霊屋敷。

グレゴリオの祖母は、１００歳まで生きたそうで、農場化される前から、一族伝いにその事を聞いていたらしい。　しかも、あの一棟だけ建物が残された事にも、意味が在った。

昔、絹織物生産が絶頂期を迎えた頃。　昼夜を問わず生糸は紡がれ、機織り機でドレスやインナーとしての肌着が作られていた。　その各工程や工場を任されたのは貴族で、大変な数の人が働いていた。

だが、生産数を上げる為に、工場には固い岩盤を掘削して作られた地下工場も在ったとか。　其処で働かされていたのは、人攫いに遭った子供や女性、難民などだったらしい。

得てして、人を働かさせての隠し事は、人の扱いが悪ければ露呈するのは当然だ。　奴隷以下の扱いを受けていた人々の死骸などがら、黒死病や赤痢の様な感染病が発生。　この区域を病魔が襲った。突然の異常事態に、国が動いた。　調べが入り、その一件は露呈。

多くの貴族が処罰を受けた。

その時、高価な絹を産む蚕などは死滅。　長年掛けて品種改良された“黄金虫”は消え去ったのである。

だが・・。

病気は、アハメイルの街をも汚染。　大量の死者を出した。　その被害を受け、アハメイルには、数年に亘って貿易が途絶えると云う被害も生んだ。　交易が出来なければ、大都市の人口を支えるあらゆる物が不足する。　餓死者、病死者、子供とお年寄りが大勢死に、アハメイルの人口が半減したとさえ云われる。

セイルは、本で読んだ内容だと、密航船に乗った避難民から出たと書かれて在ったと記憶している。　だが、この大惨事は、本にも載っていた。　どうにも、こうゆう歴史的事実は、曲がって伝わる。

グレゴリオの聞いた事だが。　祖母や先祖からの話では、病気の出た工場は、燃やし尽くされたハズと聞いた。　だが、何故かあの建物だけは骨組みが残り。　そして、改築されて寄宿舎に成ったのだと教えてくれた。　元々から、幽霊の目撃はされていたようだ。だが、今回ほど幽霊が姿を見せる事は無かったとか。

グレゴリオは、言う。

「ワシが思うに、幽霊達は怒ってる。　何に怒っているかは解らないが。　あの屋敷は、ロンザリンド様に渡ってから、幽霊の目撃が無くなった。　徘徊する少女の霊や、機織りの音も一時はピタリと止んでいた。　だが、去年辺りからか、また出始めた」

セイルが質問し。

「あの、カツーニと云う不動産商人が、元の売主だとか」

「おぉ、よ～知ってるな？　ありゃ～あくどい商人でよぉ、その前

に持ってた貴族の娘をどうにかして、あの屋敷の権利を手に入れたらしい。　他にも、この区域の不良共に禁制の薬の味を教えたりしてなぁ。　始末してくれたリオン王子には、感謝感激ぃ～ってくらいじゃよ」

何処か間延びした喋りをしたり、飄々としたり。　中々の捌けたオジイサンであるグレゴリオ。

「あの～、ロンザリンド様以前の元の所有者の方は、幽霊に悩まされていたのですか？」

「いんや。　目撃はされていた。　だが、悪さをする訳でも無い。　それに、それまでの目撃は、夜や人気の居無い頃。　ビビってる奴は居たが、何か悪さをされた者は居らんかったよ」

「なのに、今は占拠ですか？」

「うむ。　聞く所に因ると、ドアが開かないそうだ。　中に入ろうとした現場の長は、窓ガラスを割ろうとしたのに、ダメだったとか」

腕を組むアンソニーは、その話を聞いて。

「ナルホド。　幽霊達が居座り、他を拒絶しているのだ。　一種の結界に近い状況だな」

ユリアは、ムカっと来て。

「そんなの、国で何とか出来ない訳？」

問われた形のアンソニーは、ユリアへ。

「貴族が申し出れば、落ち度に成る。　自力で解決しておかないと、購入者が責任を負う必要が出る。　この農場に権力を残したいのであれば、自力解決しないと」

ユリアは、訳の解らない責任転嫁だと呆れ果て。

「メンドー」

グレゴリオも続いて。

「メンドー」

セイルは、アンソニーが居る手前で。

「仕方ないですね。　強行突破だけして、お話聞きましょう」

アンソニーも頷き。

「それが早いな」

グレゴリオは、セイルとアンソニーを交互に見て。

「アンタ等、誰と話するんだ？」

二人は、同時に振り向き。

「幽霊と」

と、声を揃えた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です。

いやはや、親近者の不幸や大地震と立て続けに遭い。　今は、停電とＰＣの不調に悩まされています＾＾；　随分掛かりましたが、前回のウィリアム編の様にベースが出来上がって居た訳では無いので、今回は苦労しております＾＾；

では、ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪昔と今≫

セイル達一向は、この国立農場定住民区域の北側に在る問題の屋敷へと向かった。　この国立の農場でも一番新しく開拓された区域の近くに向いて、その大きな寄宿舎は在った。

「ふぁ～・・、デカ」

デ～ンと姿を見せた寄宿舎に、ユリアはポカンと一言。

そろそろ昼間となろう頃。

楽観視するセイルとアンソニーは、遠めに街の人も見ている中で。

「アンソニー様、居ますね」

「うん。　凄い数だ。　１００人・・２００・・いや、もっと居る」

霊気を感じる事が出来ないクラークは、セイルに。

「セイル殿、幽霊がそんなに居るのか？」

「はい。　もう、なんか～足の踏み場も無いぐらい」

ユリアは、肩に居るサハギニーと見合って。

「幽霊って、集合するのね」

「ユリア～、それでも居過ぎだろー」

しかし、４人が話していると・・。　“バン”と、突然に勢い良く扉が開く。　大きい引き戸の玄関ドアが、独りでに開いたのだ。

驚くユリアやクラーク等とは別に、セイルが。

「凄い効き目だぁ、アンソニー様の事を感じたのかな？」

アンソニーも。

「の、様だね。　閉じ篭る敵意の様な気配が、急に薄らいだ。　中に入ろうか？」

「ですね」

アンソニーとセイルが、二人並んで開かれた扉に一歩足を踏み入れると・・・。

入った処で二人が止まった。　ユリアとクラークは、鈍い陽の光が差し込む入り口から中を覗き込むと・・・。

「うわっ、ユ～レイが敬礼してるぅぅ～」

と、驚くユリアと。

「ふむぅ」

と、唸ったクラーク。

先に入った二人の視界には、土下座して床を埋め尽くす幽霊の姿が無数に見えていて。　その一番前にて、敬礼の姿勢を取る兵士らしき者の亡霊が居た。　皆、死んだ直後のままなのだろう。　平伏の体勢から顔を上げている者は、大怪我をした顔だったり、また衣服に血をベッタリ付けていたり。

敬礼を見せる半透明の亡霊と思われる兵士姿の者は、片目を血みどろにしながら。

「おっおお・恐れながらっ！！　さるっ！　高貴なっ！　方とっ！！　わっ・我々はぁっ・・この・・こっ・この場に住まう者達でぇぇぇぇありまーーーすっ！！！」

上ずり、緊張をしているのだろうか。　そのアンソニーに対して言う幽霊の言い方は、何とも滑稽な喜劇を見ている様な雰囲気が在った。

幽霊に対して、恐怖心を微塵も湧かないセイルは、横のアンソニーへ。

「アンソニー様、お願いしま～す」

と。

「うむ、解った」

と、了承したアンソニー。

「あああああ・・・」

脅え出した幽霊達は、一歩踏み出したアンソニーが恐れ多いと震え上がったのである。

ユリア曰く、“ヘンタイ王子”と云われるアンソニーだったが。その行動は、王子らしい物だった。　平伏していた幽霊達を見回すと。

「皆の者、私は、訳在って不死の王と成った者だ。　だが、心は人として生きている。　即ち、我が此処に来た目的は、そなた達の話を聞き。　そして、何か解決の糸口は無いものかと模索しにである。　皆の者を、我が配下に加え様と云う趣では無い」

こうして始まった話し合いである。　話し合いと成ったら、幽霊達の態度は更に仰々しいものに変わり。　奥間の広間に椅子が並べられ、話をする名代として一人の中年の男が現れた。

頭に酷い怪我を負い、片足が千切れそうに成っている中年男性である。　そのボロボロの衣服を纏った生前の姿をする者は、椅子に座ったアンソニーに対し床へ平伏し。

「恐れ多きながら、不死王様。　私は、古い昔に奴隷民の長をして

おりました者で、名をセドリックと申します。　不死王様に、申し上げます。　我々は、此処がまだ製糸工場で在った頃に、この場で働かされていた者達であります」

「うむ。　その様だな」

「は。　我々は無慈悲な仕打ちの上、仲間が倒れて死んでいきました。　その我らが遺体すら放置され、此処から大規模な病気が蔓延いたしました。　我々は、奴隷として貴族が密かに連れ込んだ不法の民でした。　我々の存在が公に成りそうな頃、貴族達は発覚を恐れて・・地下の奴隷民の住居を爆破して、崩落で埋めてしまったので御座います。　我々は、死んでも死に切れず、こうして亡霊に成った次第で御座います」

「なるほど・・。　だが、この様な長い時間存在し続け、全くモンスターに変異しなかったのは何故か？　見た所、邪気も少ないが」

「はぁ。　我々の死を哀れんだ過去の高僧が、埋め立てて新たに此処に建物を築く際、鎮魂の慰霊碑を作ってくださいまして・・。最近新しくこの屋敷を買った貴族は、我々の慰霊碑に毎日僧侶の祈りを捧げて下さいました」

「ふむ・・。　では、今にこの屋敷に立て篭もるのは、理由が在ると？」

「はい。　我々の慰霊碑と、この屋敷を取り壊し。　此処を台地にすると・・。　我々にとって、骨身の埋まる此処は、慰霊碑は、未練の原点で御座います。　この床の木を剥がしっ、埋め立てられた土砂を掘り返せば・・・骨が無数に埋まっております。　せめて・・せめて慰霊碑だけでも残しっ、骨身を埋葬して欲しいと・・・」

「ふむ・・。　そうゆう事ならば、私に良い考えが在るよ」

アンソニーは、度肝を抜く様な提案を出した。

それは・・。

この農場区画に、真昼間だと云うのに恐怖が走った。　それは、数百体のスケルトンが出現した事である。　皆を外に出したアンソニーは、暗黒魔法で死んだ皆をスケルトンにすべく。　魂を戻して、甦らせたのであった。

ユリアとクラークが、この区画に立つ幾つかの寺院に居る僧侶を呼びに行って戻った時。　もう、屋敷の周辺は騒然としていた。

だが、スケルトンとして甦らせたアンソニーは、遣って来た僧侶達に細かく事情を伝え。　その骨を分割して粉にして埋葬し。　其処に、それぞれの慰霊碑を作る様にと指示をだしたのである。

最初は発狂しそうに驚いた僧侶達であったが。　可哀想なのは亡者達であり。　彼らをゴーストや死霊にさせない事は、必要だと悟ってくれた。　何より、幽霊に困っていたのは、定住区の僧侶も同じ。

どうにかせねばと、話し合っていた所でも在ったとか。

さてそれは、異形の者の進行だった。　誘導され始めたスケルトン達は、整列して農民達の街中を歩く。　騒ぎに出て来た兵士達も、セイルがテトロザの名前を出したので、驚きながらもスケルトンの整列の見張りとして平行した。

住民が一旦は家に入ったものの。　危害の無い亡者と云う事に、今

度は怖いもの見たさでまた外に出て行進の後を追うと・・。　先ず一つ目の寺院の敷地内に入った夥しいスケルトンは、一糸も乱れず整列して待つ。

セイルとアンソニーが寺院の責任者と面会して、慰霊碑の建てられる場所で敷地の一部を見繕って貰った。

穴を掘るのは、ユリアだ。　土の精霊を呼び出し、やや深い穴を開ける。

アンソニーは、レクイエムが唱えられるので、自身も苦痛を味わう中でも、顔色乱さずに。

「では、散骨してゆく。　皆の者、ご苦労であった。　ゆるりと、この地で眠るが良い」

と、一体一体スケルトンを穴に飛び込ませ、呪術を解いて骨の粉に変えていった。

うろ覚えながら、セイルやクラークも祈りとレクイエムを歌う。

いつの間にか騒然とした街が、厳かな雰囲気へと変わり。　鎮魂の為と、慰霊に遣って来た街の住人は、蝋燭の明かりを捧げて祈ったり。　また、供物代わりの野菜を捧げに来ていた。

３つの寺院に散骨を終える頃は、もう暗い夕方だった。

最後に飛び込むべく残ったセドリックと云う亡者は、アンソニーと街の住人に一礼を示し。

“憎しみで残ったはずでしたが、何時しか生きていたいと錯覚する様に成っていました。　もう少し・・もう少しと思って、ズルズルと・・・。　ロンザリンド様が亡くなられたと聞いて、亡者ながら後がどうなるか不安で・・。　ですが、こうして正しく・・多くの人に弔って貰えるとは思いませなんだ。　人の心を残した不死王様。　このご恩は、死人ながら一生忘れません。　ははは・・、今にして思うと、何があんなに憎かったか・・。　忘れてしまった様な気が致します・・・”

こう言い残しては、穴に飛び込んだセドリック。

骨の彼を見下ろすアンソニーは、王家の者として哀悼の意を示す姿勢を示し。　そして、彼を粉にした。

不思議な空気に驚く人々を残し。　セイル達は、役人の主任を伴ってロンザリンド邸を訪れた。　夜とは少し非礼になるが、事の終結に対する報告をした。

そして、セイルは・・。

「もし、よろしければ。　慰霊碑の建設に一役買って頂けませんか？　死んだ幽霊の方々も、亡くなった御当主に感謝をしておりました。　土地をどうするのかは自由ですが、手に入れた者として、一つの区切りの勤めに成ると思いますよ」

変わらぬ喪服姿のアローズ婦人は、

「そうね。　家督を譲る上でも、それは必要ね」

と、云った。　そして、セイル達に重ね重ねのお礼を述べた。

さて、この日。　最後に向かうのは、テトロザの元である。　迷惑を陳謝し、事態の収拾の報告をした。

テトロザと云う人物は、リオンと似た所が在る。　曲がった事も嫌いだし、物事に真面目だ。　アンソニーの表れに畏敬を示し。　もと国のしでかした不始末の収集に、酷く感謝を返した。

一緒に来た役人の主任は、テトロザと対等に話すアンソニーやセイルなどに肝を潰し。　今回の一件に、冒険者の手伝いながら兵士が協力した事に対して、一言の賛辞を送ったテトロザを見た。　頭を下げられた主任の役人は、もう生きた心地のしないぐらいの恐縮と驚きを受けた。

≪衝撃と共に、忍び寄る悪意≫

その日は、仕事をこなしてから一日を置いた日である。

「はぁ～、４０００か。　大して身体を動かしてないケドさ～。結構大事だと思うんだよね～」

晴れ間の見える冬空の下。　斡旋所から出て来たセイル一行の中で、ユリアがボヤく。

クラークは、駆け出しらしい仕事を経験していないユリアへ。

「ユリア殿、この程度の報酬なら、４人で分ければ一人１０００．まずまずと云う所ですぞ」

「つぅ～かさぁ、コレなら、上の一般依頼で良かった気がするけどぉ～」

ユリアは、金云々より、依頼のレベルが気に入らないらしい。　何とも、偉そうである。

苦笑するセイルへ、アンソニーは寄り。

「しかし、この数日何も無いな。　どうやら、尾行のあの者の死で、曲者たちの目晦ましには成った様だね」

と、言うのだが。

セイルは、少し顔ゆきを曇らせ。

「一応は・・」

「ふむ・・、、まだ心配かね？」

「と、云うより。　あの宝物を狙った依頼の元が、尾行者の死で断たれた訳では有りません。　寧ろ、どうゆう風に此方へ辿り着くか・・。　それが心配ですね」

「なるほど」

「僕が一番危惧しているのは、ハレンツァさんです。　全ての情報

を知っていますし、事件の解決に動いています。　相手方にとって、一番の目障りで情報源・・。　リオンが居るから大丈夫だと思うけど、狙われる危険性が大きいと思います」

「確かに、それは云えるね。　怪しい動きが権力層の中に居るのが不気味だ・・。　恐らく、首謀者もその近くに居るのだろう」

「はい。　恐らくですが、僕たちに何か危害が及ぶとするなら、何か悪い知らせや前触れが在ると思います。　そうならないまま、リオンが来て。　笑ってこの街を去れれば・・いいのですけれど」

犯罪を請け負う組織に狙われたセイルだ。　祖父のエルオレウが直に手を下して、孫のセイルの誘拐を阻止した以上、その手口やしつこさなどの現実を知るのだろう。　ユリアやクラークには見られない不安を、彼は持っていた。

その予想は、的中していたのである。

夕方。

軍事施設のテトロザへ、昼夜を強行してきたリオンの手の者が密かな面会を求めて来た。

そして、夜の事だ。

食事を宿の方で終えたセイル達は、アンソニーを残してマーリの元に来た。　やはり、一日一回は顔を見せて、安心を得て何かを話し合いたいからだ。

さて、セイル達が解決した冒険談を聞いたマーリは、

「ナルホド。　それは、凄い解決の仕方だわねぇ・・。　でも、同じ国の貴族として、逆に感謝だ。　一応、お礼を言わせて欲しい。　ありがとう」

と、セイルに頭を下げた。

ソファーに座るユリアは、肩に光の精霊であるセーラ・シェリールを乗せながら。

「マーリさんがお礼を言うのって、なぁ～んかヘン。　結構古い昔の事だし、別に頭下げなくても良くない？」

だが、マーリは、ユリアへ。

「いやいや、そうゆう風に割り切れないよ。　貴族なんて、周りが遣ってると、自分も大丈夫だと感化される風習が今も強い。　ウチの当時のご先祖様がどんな人物か解らないが・・。　記録には、昔から政府の割り振る事業には関わってた。　もしかしたら、似たような事に首を突っ込んでいたかもしれない」

クラークは、そう言うマーリへ。

「この頃は、もうマーリ殿のお家も侯爵で？」

「そうだね。　ウチは、公爵筋の分家だから。　結構古い。　３・４００年前なら、バリバリの侯爵だったと思う」

頷いて了承を示すクラークの後を、またマーリは受けて。

「大体、未だに事なかれ体質や、感化されて貴族の身分を傘に着たお偉方主義を貫く貴族も多い。　アタシも、今まで随分と筋の通らぬそんな風習や醜態を見てきた。　今に、セイルへお礼の一つしたって、誰も悪く言わないよ」

と。

しかし、そんな語らいが中断を余儀なくされるノックが在り。　マーリの応答に合わせて、執事の男性が入って来た。　その足取りは些か速く。　セイルやクラークは、少し緊張をしたのだが・・。

「マーリ様、失礼を・・」

「ん。　どうしたの？」

「は。　只今、王宮騎士団の近衛副騎士団長に在らせられるテトロザ様が、此処へお見えに・・」

「え〝っ？！」

と、驚くマーリとは別に。　セイルは、執事へ。

「あのっ、もしかして僕達に面会ですか？」

執事は、セイルの読みが鋭いとばかりに。

「はい」

クラークと見合ったセイルは、少し俯き。

「何か有ったんだ・・」

と、呟く。

マーリは、急ぎの事だと悟り。

「テトロザ様を此処へ。　それから、この部屋の周りに誰も近づけるな。　兵士や雇いの見張りじゃなく、アタイの居るチームに見晴らせて」

「は、畏まりました」

急激に訪れたテトロザの訪問は、風雲急を告げるものと成る。

足早に入室をして来たテトロザは、アンソニーの姿が見えない事に先ず触れ。　そして、マーリと入れ替わりで主の席に座ると。

「セイル様、心して聞いて下さいませ。　ハレンツァ様が、一昨日にお亡くなりに成られました」

その一言を聞いた一瞬、時間が止まった様に皆が固まった。

「嘘・・嘘でしょっ?!!」

と、驚くユリア。

クラークも、テトロザに身を近付け。

「殺害されたのですか?」

と、話に踏み込む。

「はい。　あの此方に運び込んだ宝物と、セイル様他、皆様の居場所を聞き出そうと曲者が、ハレンツァ様の下に押し入った様で御座います」

「嗚呼、何たる事だ・・」

クラークは、あの王国の盾と云われ、自分達と一緒に墓地で曲者と戦い。　一歩も引かなかったハレンツァが死ぬとは、正直に思っても居なかった。

だが、セイルは・・。

「ダーク・チェイサス・・」

と、俯く。

クラークやユリアの視線がセイルに向かれると、テトロザも。

「知っておいででしたか・・」

「はい。　昔、僕が幼い頃に、今回と同様の犯罪組織に狙われた事が在りました。　その中でも、暗殺者に似た技能を有する者と、その組織された“闇の追跡者”（ダーク・チェイサス）は、集団性が強く厄介だと・・。　ハレンツァ様は、剣の腕も確か。　高が曲者の集まりでは、そうは簡単にやられませんよ・・。　最悪だ・・、何であの宝物を欲しがるのかが、全く解らない」

セイルは、苦悩するように犠牲者が出た事に気を落とした。

テトロザは、近くに立つマーリへ顔を巡らせ。

「ミカハリン卿、これからは一層の警戒を持って頂きたい。　もしもと在らば、一度あの宝物を軍部に移動する事も考えねば成りませぬぞ。　リオン様は、どうやら何か犯人に対しての覚えが在るとの事ですが・・。　何せ、相手も貴族とか。　調べは慎重に慎重を重ねる事に成り、今暫くは、気の抜けぬ日々が続くかと思います」

執事と見合ったマーリは、

「私の事だけなら、その心配も突っ撥ねる所だけど。　博物館には、毎日大勢の見物人が来るからね。　確かに、柔軟に対策を考えた方がイイ」

「はい・・」

「だけど、移すにしても。　仰々しく移すのは、イイ事じゃ無いと思う。　どうにか、こっそり移さないと」

「それなら、良い場所が御座いますぞ。　軍部には、私とリオン王子と、腹心の派遣された近衛騎士の分隊しか知らぬ隠し倉庫が在ります。　其処に移せば、宝物は安全かと」

セイルは、テトロザに、リオンが何の覚えが在るのかと聞いた。　テトロザも、リオンから来た言伝をそのまま教えた。

“セイル。　この一件は、裏の調べが済めば早く解決出来よう。だからセイル達には、少しだけ我慢をして欲しい。　ハレンツァ殿の遺言では、一連の曲者達と２００年前の事は関連が在る様だ。

だから俺は、もう少し王都に残って、アンソニー殿や兄上殿のした粛清の一連を洗ってみる。　２００年前の事件だが、それほど時間も要さず調べか着くだろうから。　それまで、待ってろよ”

言伝を聞いて、考え込むセイル。

マーリとテトロザは、宝物の安全確保に向けた話に入る。

とにかく、ユリアとクラークは、アンソニーへこの事を伝え様と云う。　セイル達は、戻ってアンソニーへこの事を伝える事にした。

妙に温かい風が吹き、寒い空気をかき混ぜる夜の外。

靄の中でセイルは、薄曇の夜空に浮かんだ月を見上げては、呟く様に。

「態と、追っ手を誘導した方が良かったのかな・・。　ハレンツァ様、せっかくアンソニー様に謝れたのに・・・」

そんなセイルを見るユリアは、心根の優し過ぎるセイルを理解していた。

「セイル、悲しいけどサ。　後の祭りは、意味無い」

「うん・・」

闇の中で、セーラは消え。　代わりに、闇玉が現れていて・・。

「クソっ！！　何だってあのジイイサンが殺されるンだよっ！！

ユリア、オイラは、犯人達を許さないぞっ！！　ギッタンギッタン

にしてやりたいぜっ」

「うん。　闇ちゃん」

クラークは、一時なりとも行動を共に出来た事を誇りに思う。　だが、後悔が消えない。

しかし。

セイルは、宿の正面入り口が在る大通りの前まで来た時に。

（えっ？！）

と、通りの左右を急いで見た。　霧とも靄とも云える中で、往来を行く馬車の馬蹄の音が響き。　馬車にぶら下がったカンテラの明かりだけが、遠くに、近くにと見えている。

「セっ・セイル？」

「どうされましたかな？」

クラークとユリアが、突然に慌てる様な素振りのセイルに驚くのだが。

セイルは、街灯の並ぶ夜の靄が、霧に代わり始めた通りを何度も確かめる様に見る。

（何だろうっ。　凄く怖い気配がしたっ）

通りに出るか出無いかの所で、背筋を舐められる様な悪意を感じた

のである。

「あああ・・、ユリアちゃんっ」

声を上ずらせるセイルは、背後を行き交う馬車にも眼をくれず。
ユリアに掴み掛かる様に振り向くと。

「ねっ、この左右の道の隅に、人のオーラ感じないっ?!　霧の中でも、人の生命波動は違って見えるでしょ?!　ねっ?」

「えっ?!　うわっ、いきなり言われてもっ」

慌てるユリアは、闇玉に。

「ヤミちゃんっ、何か感じる?」

すると、闇玉は右に細い線の様な指を向け。

「今、向こうに人が居た。　スゲー近くに。　でも、走ってる。
波動が感じられないぐらいに、早く遠ざかってるゼ」

セイルは、その話に。

「嗚呼っ、馬車か何かだっ」

と、力を落とした。

その意味は・・。

早急にアンソニーと会ったセイルは、いそいそと宿の方に戻るシン

シアとは入れ替わりだった。　すっかり痩せて来たシンシアの麗しさには、ユリアやクラークも疲れた上に呆れ気味である。

間借りしている屋敷に入れば、上着のボタンを適当に留めるだけのセクシーなアンソニーが居て。　居間のソファーに彼を見たセイルは、ユリアやクラークとは様子が違う。

「アンソニー様。　今夜は、もうシンシアさんは来ないですよねっ？」

と、鋭く聞く。

「ん？　・・あぁ。　彼女が・・何か？」

事態を知らないアンソニーだが、ユリアは少し苛立ち。

「アンソニー様ってホントバカっ。　遊びで居る訳じゃ無いのに・・」

と、ソファーへ座る。

「？　怒っているのかい？」

どうして怒っているのかが解らないアンソニーだが・・。

セイルは、クラークに目配せををすると。　クラークは、心得ているとばかりにカーテンを閉め。　自身一人で外に顔を出した。

この間にセイルは、アンソニーに小声で。

「アンソニー様、中央から知らせが来ました。　残念ですが、ハレンツァ様が殺されたそうです」

突然の訃報を受け、カッと見開いた眼をそのままに。　背凭れに伸ばしていた手を引いたアンソニーは、みるみる変わった真剣な顔で。

「“殺された”だと？　一連の曲者か？」

「恐らくは。　どうやら、宝の行方を知りたがった者の襲撃らしいと・・。　今、マーリさんとテトロザさんが、宝の移動を検討している所です」

「なんだとおぉ・・、おのれぇ」

アンソニーは食い縛り、眼に魔力のオーラが燃え上がる。　本気で憤怒したのだろう。

セイルは、更に。

「アンソニー様。　今さっき、宿の手前で明らかに見張っていた者が居ました」

アンソニーは、セイルにグッと迫り。

「してっ、相手は?!」

「霧の中で、馬か馬車を使われました。　恐らく、僕たちの捜索をしている手の者が、間近に動き回っていると思います。　何れ、此処は近い内に引き払わないと、いざとなったら迷惑が・・」

アンソニーは、セイルへ。

「暫し様子を見るのはダメか？　我々なら、返り討ちも出来る。誘い込むには、見つかったままの方がいいのではないか？」

セイルは、ハレンツァの死で塞ぎ込むユリアを一瞥してから。

「それは、危険な賭けに成りますよ」

「どうゆう事だ？」

と、アンソニーが聞き返す所に、クラークが戻り。

「簡単な事です。　相手方は、一度は我々と戦っている。　そして、恐らく一度は、尾行を撃退した事も理解している・・。　そうゆう事です」

アンソニーは、セイルとクラークをみて。

「つまりは、次の襲撃は大掛かりなものに成ると？」

頷くセイルは、とても緊迫した顔付きで。

「それだけでは・・。　人質を捕られたり、下手すれば凶悪な殺し屋や暗殺者を差し向ける可能性も、視野に・・。　ハレンツァ様が殺されたのです。　それなりの実力を持った誰かが、今度は相手ですよ」

「うぬぬ・・、そっ・そうかっ。　それは不味い」

「何より、今回の首謀者は、王侯貴族の内部に手を回せる誰か。資金や権力にも、困らない者かも知れません。　とにかく、テトロザさんと打ち合わせをして、リオンが来るまでは小康状態を保たないと。　被害を一般に出しては、取り返しが付きません」

アンソニーは、自分に頭を下げたハレンツァを思い出し。

「おのれぇ・・、何者かっ?。　彼の様な者を殺めるなど・・、王家に敵対するのも同じだっ」

と、怒りを吐き出す様に云うのだ。

処が。　セイルは、その一言にハッとして。

「あっ・・、そうか。　リオン・・だから少し・・・」

セイルの反応には、ユリアやクラークも目を向ける。

アンソニーは、セイルへ。

「何の事だ?」

冷静に成ろうとするセイルは、アンソニーの飲んでいた紅茶のカップを持ち。　そしてグッと飲んだ。　そして、大きく深呼吸してから。

「いいですか、テトロザさんの下に着いたリオンの言伝ですと・・」

“セイル。　この一件は、裏の調べが済めば早く解決出来よう。だからセイル達には、少しだけ我慢をして欲しい。　ハレンツァ殿

の遺言では、一連の曲者達と２００年前の事は関連が在る様だ。
だから俺は、もう少し王都に残って、アンソニー殿や兄上殿のした粛清の一連を洗ってみる。　２００年前の事件だが、それほど時間も要さず調べか着くだろうから・・”

「と、云って来たそうです」

俯き鼻水を啜るユリアは、それはさっきも聞いたので。

「グズ・・。　それは、さっきも聞いた」

クラークも、怪訝な顔で。

「それが・・何か？」

セイルは、皆を見ながらアンソニーに指を向け。

「今の、アンソニー様の言葉です。　“王家を敵に・・”」

アンソニーは、今一に気付けず。

「それが、どうかしたか？」

「はい。　リオンが、何でアンソニー様の昔を調べるのか。　それは、ハレンツァ様が言った最後の言葉だと・・。　恐らく、ハレンツァ様同様に、後々で王家に許されて戻った貴族の誰かが、曲者を差し向けた可能性が在るのでは？」

ユリアは、肩のサハギニーと見合って。

「そうなのかな？　でも、戻された貴族って、みんなハレンツァ様みたく心を入れ替えたんじゃないの？」

しかし、クラークは、そうとも思えない。

「だが、あのヘンダーソンとか云う貴族といい、我らを案内したりした太った貴族といい。　王家に忠誠を誓っている様に見えて、ハレンツァ殿のしようとしていた事には、どうも否定的な印象を受けました。　リオン王子とも親密に成るハレンツァ殿に対し、ああも強気で居るヘンダーソンと云う貴族は、どうも胡散臭い気がしますな」

アンソニーも。

「いや、セイル君の推理は、強ちズレてもいない気がする。　グランベルナード王も云っていたがな。　貴族の一部には我々の頃の様な・・と云うべきか。　王家より、貴族や王国政府に強い権力を持たせる事を再復興する。　そんな未来を理想とした、主権移譲を画策する一派が居るとか。　戻された一族だけでは無く。　我が兄によって追放された一族の末裔が、密かに現存の貴族に入り込んでいる可能性も捨てきれない」

「えっ、そうなの？」

何だか良く解らないややこしい話で、困惑したユリア。

セイルは、アンソニーへ。

「あの。　追放された貴族の方々は、どの方も高位な爵位の方だったのですか？」

「ん？　あ・・あぁ。　全て、侯爵か・・伯爵階級だ。　権力的には、当時の高位の政務官や大臣クラスの者ばかり。　内の一人は、王の交代後。　数年は王に付き従って、王の命令に口出しの出来る“後見大臣”も居た」

クラークは、未だに自分の国ではその大臣席が在り。　閑職と云うか名誉職ながら、それ相応の権力誇示をしているだけに。

「それは、確かに怪しい・・。　して、その一族は？」

「ああ、“チェロキナージュ家”と云う一家で、古い王家筋の侯爵だった」

セイルは、直に。

「明日、テトロザさんに会って、その一族を含めて内情を聞きましょう」

「あぁ・・、そうだね」

冷静を取り戻したアンソニーだが、顔を抑え。

「しかし何てことだっ、彼を死なせるとは・・。　せっかく、マリーの憎しみを、彼を許す事で捨てようとしたのに・・。　まだっ・・、犠牲が必要なのかっ？！」

アンソニーの怒りは、彼にとって良い事では無い。　負の感情が強過ぎれば、モンスター化が進行してしまうかも知れないのだ。

「アンソニー様、今日は休みましょう」

と、云ったセイルは、ユリアにも。

「ユリアちゃん。　もう、今日は寝よ。　明日は、彼方此方に動いたりするかも知れないから」

「うん」

セイルに付き添われて立つユリアは、逸早く部屋に・・。　でも、閉めたドアの向こうから、ハレンツァを悼む余りに我慢し切れず、嗚咽の様な声を出し。

「ユリア～、仇討とう。　なぁ～」

と、サハギニーが云っている。

セイルは、短い期間だったが、知り会えたハレンツァを殺めた相手が許せない。　ユリアまで泣かせ、悔しさに握る拳が在った。

一方。

「一杯飲まないと、眠れ無さそうです」

と、クラークがブランデーを取りに行く。

「・・」

云って動いたクラーク。　彼の背中を見つめたアンソニーは、酒の仕舞われた戸棚の前でクラークが止まり。　ジッと一点を見つめ出

したのを見て、彼も本心は怒鳴り上げたい衝動があるのだと解った。

（この諍いは、負けに出来ぬ。　何としても、暴かねば・・）

アンソニーは、セイル達と居る今なら、それも出来ると思った。

ハレンツァの死の悲しみは、リオンや王家の者だけは無く。　彼を知る者や、下に居て習った騎士達も同様だった。　だが、まだまだこの事件はうねり、暴挙を孕む。

その結末がどうなるかは、事件に向かう者達に委ねられていた・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪第二の犠牲。　戦うべき見えぬ影に対峙して・・≫

ハレンツァの死が、セイル達に伝えられた次の日。　悲しむ暇も無い様な慌しさが、セイル達を襲った。

アンソニーも加えた４人は、出された朝食も残して。　シンシアに手配して貰った馬車にて、マーリの屋敷に向かったのだが・・。博物館の周辺は、開館前の朝から人が多く集まっていた。

理由は、簡単且つ、衝撃の事態。

昨夜。　マーリの営む博物館の外で、兵士の惨殺された。　収容された遺体の身体には、切り刻まれた痕も在り。　相手は、非常に凶悪な犯人だと推察される。

兵士の死に際の大声が上がった真夜中の頃には、まだ館内にテトロザとマーリが打ち合わせで同席しており。　テトロザに付き従う騎

士3名が、マーリの仲間である冒険者4人と一緒に死体の転がる現場へと駆け付け。　その直後には、テトロザとマーリが到着。　斬られた兵士は、息を引き取ったばかりであった。

巡回の他の兵士の証言に因ると。

“何も知らぬっ！！！　お・・お前達な・などに・・。　ぐわぁっ！！！！”

と、叫ぶ兵士の声を聞いていたとか。

朝に合流したセイル達。　テトロザは、セイルやクラークには位の上の態度を崩さず、ユリアには親愛なる対等の姿勢を示し。　そして、アンソニーに至っては・・。

限られた一部の関係者だけが揃う場。　昨夜に、ハレンツァの死の経緯が告げられた応接室である。　マーリと執事。　テトロザと腹心の高位騎士一人。　そして、セイル達のみと云う中で、テトロザはアンソニーへ臣下の態度を見せ。

「アンソニー様。　此度は、この様な事件まで及ぼし、真に情けなく。　このテトロザは、何とお詫びをすれば良いか。　宝物は勿論、この館も厳重に警護致します」

膝を折り、叱責も覚悟と云う姿だった。

アンソニーの身分をまだ知らぬマーリや腹心の高位騎士は、テトロザの態度に驚いた。

だが、アンソニーは、リオンの剣の師であるテトロザへ。

「テトロザ殿。　その様な態度をされるな。　それより、死した兵士は何を聞かれたのだ？　宝物の事しか思えないが」

と、自らも腰を落とし、テトロザの眼を見て聞く。

「はっ。　詳しい事は解りませぬが。　殺された兵士3人共、何か折檻された形跡が・・。　一連の流れから考えまするに、宝物の事かと」

「そうか。　この犯人を炙り出す為に、我々は一部の王家の品に関して口を閉ざした。　相手方は、リオン王子に因ってその縁の品が始末された事を知らぬ。　此処まで来て探したいのだ。　真犯人の狙うのは、我が身に預けられていた王子の印字と軍事命令行使権の有する紋章だと思う。　あぁ・・、兵士の家族に何と詫びればいいか」

「は。　兵士達は、階級を上げ。　家族には、特別任務に対する恩賞の支給を致します。　説明は、この私が直に行きますので」

「そうか・・。　過去の時なら、この私が行かねば成らぬが・・。　今は、それは迷惑だな。　しかと、頼む」

「はっ」

ユリアは、今にアンソニーの心の広さが見えた気がする。　末端の兵士の家族の心配をする王子など、リオン以外で始めて見た。

（口に出さないだけなんだ・・。　みんな、セイルみたいに考えてるんだなぁ・・）

さて。　宝物は、もう移動の手筈を整えた。　お偉方の乗る馬車に見せ掛けた馬車で、軍部に運び込む手筈である。

博物館の閉館を2日間決めたマーリは、テトロザへ。

「テトロザ様。　運び込んだ宝物の事、世間に内緒のままで？　人の多い頃合いに押し込まれでもしたら、それこそ・・」

すると、其処にセイルが。

「あの～、何処かに運んだ事にしましょう。　そして、其処に我々が居ればいいのではないですか？」

テトロザは、ギョっとして。

「セっ・セイル殿っ。　まさか・・囮に成る気で御座いますか？」

と、セイルの魂胆を知る。

マーリは、ピンと来て。

「そうか。　其処に兵士の見張りを付けて、それらしくすれば・・犯人を捕まえられるかも」

アンソニーは、セイルに。

「来るか？」

セイルは、即座に返し。

「からくりがバレなければ・・恐らく」

と、云い。　ユリアやクラークを見た後で。

「思うに、これからが情報戦を含んだ相手方との心理戦に入ります。それなら、大掛かりに嘘をでっち上げ、細かな嘘を隠して行かなければ・・。　それに、昨夜。　僕達の行動を探る気配が在りました。　見られた以上、このままあの宿に居ては・・・」

テトロザは、急激に事態が動く気配を、音が聞える様な思いで感じた。

「何と・・。　無理に兵士を回しては悟られると思い。　宿には兵士を回しませんでしたが・・、もう」

アンソニーとセイルは、互いに見合い。

「セイル君。　偽りの運び込む場所は、どうしたら良いか？」

「それは、地元の名士でも在るマーリさんに頼みましょう。　隠れて手配されている様に見せ掛けないと・・。　宝物を運び出す時には、二重に三重に欺く手を回します。　我々は、一旦姿を消す形で、その場所に・・」

「うん。　では、今、此処で作戦会議だな」

「はい」

クラークは、見えぬ敵に対し、決闘も望む所とばかりに勇躍し。

「此処から、これからが正念場ですな。　我々を嗅ぎまわる輩を何としても捕まえねば・・。　此処で捕まえれば、リオン王子の働きにも追い風に成りまするし。　その全ては、ハレンツァ殿への敵討ちにも成りましょう」

ユリアは、“ハレンツァの敵討ち”と聞いて。

「うん。　狙われているのが私達なら、私達が囮に成るのが一番だよ。　もう、他の人の犠牲は嫌だ。　ハレンツァさんと兵士さん達で十分っ。　セイル。　絶対に負けたくないよっ！！！」

ユリアの声は、セイルの心の引き金を引く。　頷くセイルは、テトロザへ。

「テトロザさん、今回で決着を着けてください」

全てを踏まえ、この街にいる犯人を誘引する準備の道具は揃い始めていた。　テトロザとて、こんなチャンスは二度と無い事だと理解出来る。　だが、一方では。　セイルやアンソニーの素性を知る自分なだけに、この二人他４人を囮にするのには気が引ける。

（嗚呼・・、この様な賭けをせねば成らないのか。　もし、セイル様やユリア殿に何か有ったら・・、取り返しが付かぬ）

鉄の忠義と、平和に対する信念の意思を持つテトロザだが。　セイルとユリアを相手には、その意思が揺らぐ。　クランベルナード王の友人でも在るし、あの世界最高の商人の孫で在るセイル。　しかも、幼い頃からリオンと親友で、リオンが全く気兼ねしない弟妹の様な二人だ。　ハレンツァの死で、リオンも悲しみを持っただろう

に、これ以上の悲哀を続ける訳には行かない。
だが、アンソニーは、黙っているテトロザへ。
「テトロザ殿。　今は、隠れて動く時だ。　気にするな。　このセイル殿の仲間は、強い」
この一言は、テトロザの心の天秤の傾きを促した。
「・・・はっ。　ならばこのテトロザ、全力でお手伝いをいたします」
貴族のマーリにして見ても、テトロザの態度は異質。　だが、セイルやアンソニーの気品は、何処か常人離れしたものが在る。　この様子を見て、深く詮索する事より他のすべき事を見出せた。
「ウソの隠し場所なら、任せときなさい。　人気の少ない旧貴族区の一部に、使ってないアタシの一族の廃屋が在るの。　掃除や・・運び込む為の準備に2・3日掛かるだろうけど、用意はさせる」
準備の為の道具は、全て揃った。
★
その頃。　リオンは、ハレンツァの末っ子で一人息子のエリウィンと共に、内密に調べを推し進めていた。

“二百年前の追放された貴族の内情を調べろ”

ハレンツァの云った意味を理解したリオンは、嘗て当主を斬首の刑に処され。　追放を一時受けた一族の全てを調べていた。　正式に王家に許されて戻ったのは、侯爵家3家と、伯爵家が1家。　だが、今に続くのは、その内の2家だけである。　他は、全て何処かの家に吸収されて行った。

セイル達に、ハレンツァの死が報告された夜の事。

一般の立ち入りが禁止された場所。　特別封印書庫の書斎に篭るリオンとエリウィンは、膨大な家系図の仕舞われた書庫の中で、一つ一つ調べて行った。　一つの問題を、エリウィンが教えてくれた。　それは、何の理由でか解らないが。　ハレンツァに圧力を掛けに来たヘンダーソン侯爵と、クシャナディース公爵の事である。

リオンは、商人の一面も持った衛星都市の貴族であるクシャナディースが、たった数年で一気に公爵まで上り詰めた事が気懸かりであった。　流暢な気品高いデザインの机に向かっていたリオンは、顔を上げ。

「エリウィン殿、少し宜しいか？」

エリウィンは、父親の死で気が立ってたのだろう。　殆ど休みも無く、調べを進めている処だった。

「はい？　王子、何でしょうか？」

頬杖をするリオンは、家系図の巻物を横に置き。

「うん。　実は、ハレンツァ殿圧力を掛けたと云うクシャナディース卿の事だが」

「あぁ、はい」

「彼は、元々軍人系の一族に列する子爵であった。　偶々、剣の腕と馬術を買われ、そこそこの軍法律令にも明るいので、先陣を切って攻め込む部隊の長に・・。　だが、其処で示された爵位は、“伯爵”だ。　彼の軍隊は、特殊な部隊でテトロザが鍛える。　何の働きも見えない彼が、その後に侯爵を受けたのは・・どうしてだろうか？」

「あぁ、王子はクシャナディース卿の事を知らないのですね？　表向きは、地方都市の財政を立て直すのに一役買い、地方都市の教育や・・貧困者救済に尽力したとか・・。　ですが、内情はウソに近く。　王の側近の貴族大臣の幹部を買収した様です。　何でも、相当の金銭が撒かれたとも・・」

「何だとぉ？　地位を・・金で買ったと申すのか？」

「噂では・・その様に。　ですが、皇族のお嬢様をを娶った事には、父も首を傾げておりました。　あの大貴族の御当主と、下級貴族の側室との間に生まれた姫君は、別の方に嫁ぐ予定が在ったとか・・」

「誰だ？」

「はい・・、確か・・・。　公爵家１０氏の方々の中で、序列８番目のロイヤリマナフ卿のご子息だと思いましたが・・」

リオンは、真剣に一点を見つめ。

「ヘンだな。　私は、今年の年始挨拶で、彼の御当主エォロワーク殿にお会いしたが、ご子息のそんな話は聞かなかった。　輿入れの日取りなどは、噂に？」

「いえ。　両家のお二人は、まだ１８歳同士で、ロイヤリマナフ卿のご子息は、まだ勉学の学習院をご卒業していませんでした。　御結婚の日取りが決まるのは、ご子息が何かのお役目を頂く年末が過ぎてからだろうと・・」

「フム。　なのに、その姫君たる令嬢は、クシャナディースの妻に成った。　そして、公爵の足掛かりが出来上がり、オグリ公爵の一件で格上げか・・」

「はい。　ですが、その辺でも相当の金が動いたと噂も」

「真か？」

「はい。　その噂を裏付ける様にか、娘をクシャナディースに出した序列最下位の公爵家ハルツベリモント卿は、随分贅沢な暮らしをし始めた上。　元手が何処からか出たのでしょうが。　高価な宝石や貴金属を扱う商人を、そのままそっくり買収したとか」

「それはまた・・。　金額にしたら、相当な額だろうな」

「はい。　結構羽振りの良い店だったとかで、一部のお噂には、１千万シフォンを超えていたとも・・」

「なんと云う額だ・・。　ま、それは噂の事で、現実には数百万だ

ろうが、それでも異常な額だぞ。　クシャナディース殿の下に行った姫君とやらは、随分な乗り換えをしたものだ」

「いえいえ、それが輿入れの祝賀も開かれて無い様です」

リオンは、その形式に拘る貴族なら、位に関わらず大抵は通る道を外れたと云う事を聞き。

「まさか・・、強引に？」

「可能性は・・。　父が圧力を受けた事を聞き、私もそっと周囲に聞いてみました。　すると、そのクシャナディース卿の奥様は、一度も外に出られてお顔を近所に見せた事が無いとか・・。　お隣の方だった勇退騎士で在られる貴族の方の話では、泣き声が聞えた夜も在ったと」

リオンは、難しい顔のままに。

「貴族の内情を公に調べるには、何かの口実が必要だ。　益して、公爵の一族とも成れば、明確な口実が必要と成る」

「ですね。　しかし王子、私も質問して宜しいでしょうか？」

「ん？　気兼ねは要らぬ。　自由に聞いてくれ」

「は、では。　ヘンダーソン卿は、どうしてあのお役目に？」

「あぁ、彼か。　彼は、母方の親戚なのだ。　前に居た老人の親戚が病気で倒れてな。　その後、母と従姉妹に当たる一族の甥にも成る彼が推挙された。　確か・・、ミグラナリウス侯爵家のご老体か

らだ」

「ミグラナリウス卿ですか・・。　確か、もう恩年９０に届くお方でしたよね？　父とは、浅い付き合いが在る方でした」

「うん。　あの一族は、母の祖父に当たる曽祖父とも付き合いが在った御仁だ。　だが、俺は好かぬ」

「どうしてですか？」

「あの老人は、本心を明かさぬ不気味さがある。　しかも、未だに息子へ家督を譲りながら、彼方此方へ遣いを出しては付き合いを広める。　何処かの席では、俺に、出しゃばりはお控えなされとか言うたらしい。　父が、何とも腹の読めぬ相手だと苦笑していたわ」

エリウィンは、後ろに並べられた家系図の書庫を見返し。

「では、ミグラナリウス卿の一族も調べてみましょうか？」

「あぁ。　今夜も、朝まで掛かりそうだ」

「王子。　いざと云う時は、王子が指揮されませぬと困ります。調べ物等は私に任せて、少しお休みくださいませ」

「はっ。　毎日徹夜を続ける御主を置いて、寝所に戻れようか」

「ですが、そろそろ王子も身を固めませぬといけません」

月並みな説教を持ち出され、呆れた笑みの困り顔をするリオンは、妻帯者には勝てぬ。

「全く、父と似た事を言われたな。　俺の様な突き進む者には、家族など危ない人質を抱える様なものだ。　テトロザとて、過去に何度も家族の危機を招いた事か・・」

すると、エリウィンは真っ直ぐな顔付きでリオンを見返し。

「ですが、励みにも成ります。　孫の出来た事を知った父の笑み・・、未だに鮮明にと思い出せますから」

リオンは、ハレンツァの顔を思い出し。

「そうか・・」

エリウィンは、葬儀の直後からこの場所に入り浸っている中で。

「王子」

「ん？」

「父のことは、今はこの王都だけの話ですか？」

「いや」

「何処に、お達しを？」

「ワダルの街に居る腹心の経由で、テトロザの元に。　恐らく、今夜辺りに知らされると思う」

「宮廷魔術師の方のご協力で？」

「うむ。　こんな時の為に、迅速に情報を伝える方法を用意しておいた。　アハメイルには、ハレンツァ殿とは縁の在る者達が居るからな」

「？　そんな方が？」

首を傾げるエリウィンへ、リオンは素直に。

「ハレンツァ殿が、父から受けた命で知り合った者達だ。　一人は、ハレンツァ殿やそなたの一族の過去を知る者も居る」

「その様な方が・・今に居るのですか？」

「・・・」

黙ったリオンだが、手伝って貰うからにはアンソニーの事も知っていて貰いたい。

「・・、エリウィン殿。　実はな・・・」

≪動く闇の手・・・≫

セイル達とテトロザやマーリがこれからの作戦を考える同時期。
あの老人の下には、ラヴィンと云う曲者達の頭目の他に、もう二人の男が一緒に面会をしていた。

玉座の様な椅子に座った高齢の老人と思われる人物が鎮座し。　座の在る壇上から降りた脇に、控えて床に膝を折るラヴィンが居る。

老人の前、低い石段3つほど降りた所に、冒険者風体の長身の偉丈夫が一人。　その後ろやや右に、礼服をしっかりと着こなした中年の紳士が一人居る。

片方の偉丈夫は左の腰に長い長剣を佩き、上半身は厚手の金属鎧を着たままだし。　下半身は、金属と皮からなる腰当や具足などで武装していた。　顔は、細かな斬られ傷痕が多く、鋭い目付きは凶暴そうな印象を受ける。　何より、肌は垢染みていて、生活の堕落振りが窺える。

一方の紳士は、シルクハットにマントを着込み、左片目に眼鏡を掛ける小顔のインテリ風で。　鼻髭を流暢に生やしている。　この紳士、然程に背も低くなく見てくれも悪くないが。　その笑みや視線を窺うに、随分と狡猾そうな喰えない表情を有していた。

ラヴィンは、鎮座する老人へ。

「御主、向かって右手の前に立ちますのが、“ジェノサイダー”のリーダーでレプレイシャス殿で御座います。　左手の奥の方は、マーケット・ハーナスの商人で、闇の方の取引も出来るソルフォナース殿で御座います」

老人は、この日の昼前に思っても見ない客二人を紹介され。　今、

初顔合わせの二人を見ては・・、フードの被った頭をやや擡げ。

「そうか・・。　では、お話を聞くとしようかな」

と、先ず冒険者風体の偉丈夫、レプレイシャスに。

「どうやら、我々の提示した報酬が気に入らないらしいのぉ～。何度連絡を入れても、報酬を変えろとか。　焦れて、直接交渉に参った次第かな？」

すると、レプレイシャスはラヴィンを一瞥してから、老人と思われる人物に向かうと。

「全く意味が解ってねぇ～な」

「フム。　と、云うと？」

「我々の望むのは、安住と権力。　だから、相応の褒美を遣せと云っている」

この一言を聞き、老人らしき人物は理解に往った。

「ほほ～ぅ、そうゆう事か。　お前達の望みは、爵位か役職と云う事か」

ラヴィンは、その話に眼を見張った。　殺し屋等のお尋ね者で、地位や権力など無縁である。　暗殺者の様な秘められた者達ならいざ知らず。　平気で一般人を殺す殺し屋に、地位や役職等と云った日の目など居られる場所では無い。

レプレイシャスは、腕組みして鎮座する相手を見る。

「やっぱり、アンタの方が読みが深い。　俺の仲間ってのは、言うなれば只の狂人だ。　人を殺し、その血を啜る事も平気で出来る。　だが、俺ともうの一人ブレインの男は、元々は宮廷仕えの貴族だ。　普通の殺し屋とは、そのなり方が違う。　もう一度・・もう一度っ、日の目を向かえ。　濡れ衣で貶められた地位を、我が手に取り返したいのだっ」

鎮座する人物は、身を少し崩してゆったりさせると。

「そうか・・。　だが、問題は多いぞ。　先ず、他の仲間をどうするか。　更には、御主を引き上げたとしても・・我々の望みが叶うまでは、手下として手を汚し続ける事になるぞ？　第一、今までの罪をどう拭い去るか・・・。　その全てが決着に至るまで、影に身を潜めて貰わねば成るまい。　一年・・二年は、自由を奪われたままに成るぞ？」

レプレイシャスは、ぞんざいに上向き。

「フン。　今まで、１４年を汚れた家業で生きて来た。　一・二年ぐらい、大した長さでは無い」

「そうか。　だが、何故にその事を直接伝えなかったのだ？」

「バカ云え。　俺の仲間は６人居るが、別の一人を抜いてこの家業から足を抜く気の奴は居無い。　俺の本心を知ってるのは、一人だけだ。　そんな仲間が居る前で、本当の言えるか？　回りくどい言い方だろうが、誰かに解ると思ったんだがな」

「なるほど・・、だが、此方の手配した交渉の相手も、お前の仲間と同類だった様だな。　その様な要求とは、露も気付かなかった様だ。　私に届く声は、もっと値を吊り上げるばかりだと・・」

「フン・・、身分も脳みそも使えないアホウは、言い回しも気付かないらしい」

鎮座する人物は、見えている皺の刻まれた口元を緩ませ。

「フフフ、どうやら見込みが在るな。　レプレイシャスとやらよ。　貴族に成る為、この王国の大儀を復興する為に、我に力を貸してはくれまいか？　先ずは、アハメイルに持ち去られた過去の王族の遺品を、見事持ち帰って貰いたい。　その褒美は、御主を行く行く取り立てるものに成ろうぞ」

「解った。　だが、今回は派手にやるぞ。　その相手も殺すし、俺の仲間も殺す。　成功の為に、犠牲も出すからそのつもりで居ろよ」

「おぉ、それは構わぬ。　何事にも、犠牲はつき物。　あのクランベルナードに加担し、博物館を営む貴族の娘も、何もかも葬れ。　どうせ、目撃者など面倒の種じゃ。　一般の市民だろうが、役人だろうが、邪魔に成る者は全て殺せ」

レプレイシャスは、国に仕える貴族の言葉では無いと思い。

「恐ろしいジジイだな。　貴族のクセに」

「うははは、この王権制度の国は腐っている。　腐った制度の腐った民も、腐った制度の腐った役人も、我にしてみれば使えぬゴミ同然。　その様な輩達は、死んで当然だ」

「アンタ、まさか国家の転覆でも狙ってるのか？」

「・・・そう問われるなら、“半分は”と、答えて於こうか」

「チィ、まぁ立身出世が見込めるなら仕方ないが。　アンタみたいな輩が居るんじゃ、この王国も長くねぇな」

「フン。　抜かせ、小悪党。　さ、十分に働いて、取り立てる手柄を上げよ」

鎮座する人物は、横に顔を向け。

「ラヴィン。　レプレイシャスと細かな打ち合わせを済ませよ。どうなっておるか、後で聞く」

「は」

レプレイシャスは、ラヴィンが立ったのを見ると。

「良いか？　俺を見縊るなよ。　この覆面の野郎ぐらい、一人で訳も無い。　裏切られた時は、死ぬまで暴れてやるからな」

と、言い残す。

ラヴィンに連れられて下に消えるレプレイシャスを見送ったフードの人物は、足音が遠ざかったのに合わせて。

「怖い怖い、フフ。　さて・・・」

と、今度はソルフォナースに顔を向ける。

「どうも、ご面会が出来て、嬉しゅう御座います」

まるで白粉を塗った様な顔に赤い唇をしたソルフォナースと云う紳士は、大形な挨拶をして見せた。

鎮座する人物は、声を平静に戻し。

「はて？　ワシは、御主の事を良くは知らぬが？」

「でしょうな。　ですが・・。　近年で、北方のシュテルハインダーで、別の悪党を雇い。　古の財宝を探させた経緯を知る私めには、ご老体のお噂は・・死んだホローよりかねがね」

鎮座する人物は、静かに成った。

★

別室に移動したレプレイシャスとラヴィン。　地下の倉庫の様な場所で、右手の先には陽の光も差して来ているが。　倉庫は薄暗く、カビ臭さと共にワインの匂いが満ちていた

レプレイシャスの脇には、黒いフードを被った何者かが居て。　そ

の二人と対峙する形でラヴィンが居る。

ラヴィンは、黒い影の樽に腰を預けながら。

「今、宝物を運んだ奴らの足跡を追っている。　見つけたら、余計な真似をせずに待てと言って在るがな。　今回の配属された盗賊などは、どうにも手柄を焦り過ぎる。　面倒な事を起こさねば良いが・・・。　さて、アンタと会うのは、これで二度目だが。　まさか、地位を求めるとはな」

腕組みし、辺りを窺うレプレイシャスは、下らないと思い。

「今までは、雇い主が俺の求める要素を持ってなかったか、阻止されただけだ」

「ほう」

「前には、スカイスクレイバーの奴らに事件を暴かれた事で夢が頓挫したし。　その前は、“P”とか名乗る謎の男に阻止された」

ラヴィンは、眼を驚かせ。

「おいおい、それってあの闇の解決人の“P”（パーフェクト）か？　良く、生き残れたな」

「幸いさ。　その男は、当時の加担してた悪事を暴いた際、雑魚を役人に任せて、元締めの貴族の方に行ったんだ。　偶々別件で動いていた俺達は、ソイツに当たらず逃げれた」

「そうか・・、しかし、な。　殺し屋の身分から出世を求めるなど、

気狂いとしか思えない。　面が割れて居るのだろう？」

「それは、ソレだ。　良く似た誰かを殺せばイイさ」

「・・・」

黙ったラヴィンは、幾ら何でも此処まで無理な夢を見るバカを初めて見た気がしたと思うのだが。

先に口を開くレプレイシャスは、ラヴィンを上からの目線で睨み付け。

「所で、相手はガキも混じってるとか。　そんなの相手に、お前等が出し抜かれるのかよ。　世界に轟く裏組織が、聞いて呆れるゼ」

「見た目だけならな。　だが、面子は凄まじく強い」

ラヴィンがそう言ったので、レプレイシャスと云う人物は言葉を停め。　彼の眼を確認した上で、

「本当か？」

と。

頷くラヴィンは、墓地で剣を交えたセイルを思い出し。

「先ず、リーダーの若者は、あの剣の腕で世界に轟いた剣神皇エルオレウの孫だそうだ。　俺も直に剣を交えたが、実力も応用もアンタと互角レベルだと思う。　アンタに勝てる要素見出すとするならば、経験・・・だな」

「なっ・・・」

言葉を失ったレプレイシャス。　だが、直に眼を輝かせ。

「面白い。　なら、そのガキを殺しただけでも箔が付く」

「あぁ。　しかも、一緒のガキの女は、精霊遣い。　凄いのは、その異能だ。　一般の精霊遣いには、それぞれ個人に合った属性が在り。　また、呼び出せる精霊の種類にも限りが在るのだとか。　だが、その女のガキは、全ての精霊を呼び出せる要素を持った逸材ならしい」

「へぇ」

「他、あの有名なエンジェル・スターズのリーダーだったクラークも居る。　後、謎の人物で、高位の魔想魔法を扱う格闘の達人もな」

「おいおい、そいつぁ～凄ぇ相手じゃないか」

「あぁ。　情報が確かなら、今、この王都に滞在してる“ホール・グラス”、“グランディス・レイヴン”の二チームに、実力を比べられる面々だそうだ。　結成から数日もしないで、王に謁見まで果たしているしな。　強ち、噂が先行しているだけとは思えない」

説明を受けたレプレイシャスは、個性の光が眩い者達が集まったチームだと理解し。

「そいつは、確かに攻めあぐねるな」

「ん。　相手が相手だ。　我々も、宝物の情報を聞き出しにくい。　だから、ヤツラの居る場所の周囲に手を回し、宝物の在り処を探し出そうと考えている。　お前達が協力してくれるなら、ウチの殺し屋部隊と共に押し込める。　是非、協力願いたい」

「・・・、いいだろう。　そんな強い奴が相手なら、暴れ甲斐が在る。　仲間を抹殺するのにも、ソレぐらい強い方がいい。　アイツ等は、タガの外れた獣同然だからな」

黒いフードを被る何者かは、静かに頷いた。

ラヴィンは、これでセイル達に真っ向からでも挑めると目処を付けた。　このレプレイシャスの率いる悪辣なチームは、世界でも指折りの凶悪な冒険者達。　過去には、騎士の率いる一個大隊を殺した事も在るのだ。

セイル達に忍び寄る魔の手もまた、その力を増し始めていた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

遅ればせながら、更新です＾＾。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪表の側　裏の側≫

その時は、昼を過ぎた頃だった。　セイル達がマーリの元に勢揃いで遣って来た後で。　もう、一通りの打ち合わせが終わった後だ。

軍部に詰める名誉騎士で、リオンとも親交の深いラッファボー伯爵と云う人物が居る。　７０に届くのも目前と云う年齢ながら、老い始めて尚も矍鑠とした姿で。　その年に入隊してくる新米兵士に、初期訓練と形式儀礼を指導する役目に就いている。　その人物が仰々しくお供の馬車数台を従えては、マーリの博物館に遣って来た。

「おお～、テトロザ殿。　何とも、面倒な事態じゃな」

博物館の正面ロビーにて。　テトロザと面会をするグゥマナス・ソージン・ラッファボー伯爵は、ツルツルに禿げた頭に毛皮の帽子を被り、軍服の上に厚手で襟に動物の毛が付いたオーバーを着ていた。　小柄ながらも鍛え抜かれ、スッキリとして居る初老の人物と見受

けれるラッファボー伯爵である。

「グゥマナス殿、馬車の手配に感謝致します」

天井が高みへと吹き抜けて、ロビー中央に向かってサークル状の階段が盛り上がる様な内部ロビー。　底冷えのする中、人気の無い静けさが支配する広いロビーにて。　伯爵に出逢ったのは、テトロザとマーリのみ。

テトロザが大きく深く一礼をすれば、手を出したグァマナスは、万事を心得ており。

「なぁにを。　リオン王子と、そなた。　そして、私の仲ではないか。　リオン王子が中央で踏ん張ってるなら、我々は此処を死守するのが仕事。　此度は、何も聞かないままに手配を済ませる用向き。　此処で、御主の馬車に乗って軍部に戻る」

話を聞くマーリは、テトロザがもう最低限の手回しをしていたのだと理解した。

「忝い」

テトロザの挨拶一つを受けたラッファボー伯爵は、上着の襟を立て。　軍人特有の白い帽子を、御付きの騎士から受け取ると・・。

「そら、こうしてな」

と、付け髭までを用意して、テトロザに似た雰囲気を出した。

テトロザは、密かにマーリの博物館に隠れ込むつもりで、ラッファ

ボー伯爵にこの事を頼んだ。　仰々しい馬車は、宝物を新たな場所に運ぶと思わせる見せ掛けに近い。

実は、セイル達とマーリの信用の置ける者達だけで、こっそりと運ぶ仕度を整え始めている。　一方で、普通の従業員と、一度は運び込むのを手伝って貰った作業員を合わせ、偽の宝物を運び出す仕度作業も行っている。　彼らは、騙されているとは知らずに、秘密裏の作業として、運び出されたと見せ掛けられた宝物箱を、せっせと裏口の片隅に運んでいた。

テトロザとマーリの仕掛ける二重の欺きは、もう始まっていた。

セイル達は、壊れ物や紛い物を運び出す幌馬車に宝物を乗せ。　偽りの作業をする者達は、ラッファボー伯爵の連れて来た大形な黒い馬車数台に乗せる運びである。

マーリやテトロザも、曲者を捕まえた訳では無いのが悩みだ。　動きが解らないまま、此方が見張られている状態。　博物館の従業員の中に、もう曲者や雇われた者が紛れ込んでいるとも限らない訳である。　相手の何も把握出来てない状態で、セイル達やテトロザなどに出来る事と言えば、欺くぐらいの事だ。

年末の今。　アハメイルの街には、各国の貴族などが遊びに押し寄せて来る。　芸人や踊り子など、集まって来る人の数だけでも膨大だ。　マーリの博物館は、人気も高く。　此処で宝物を護るのは、得策では無い。　寧ろ、人気が無くなる旧貴族区は、打って付けであった。

問題は、何処まで欺き。　宝物を秘密裏に軍部へ運べるか？

欺いて運び込む場所を、何処まで悟られずに居れるか。　一番安全な流れは、リオンが真犯人と云うべき影の首謀者を突き止める事であり。　依頼の料金が払われなくなる事態が起これば、組織は手を引く。　そのパターンが、何よりも望ましい。

だが、しかし。　もう、宿を特定さて掛かったと思えるし。　兵士を急襲して、情報を聞き出す強行も異常だ。　その事を踏まえると、宝物の存在が相手に特定された場合。　相手は押し込んで来る可能性も強い。　もし戦いに成ったら、一般人を巻き込むのは最悪の事態だと云うのは、携わる全員の一致事項である。

セイル達やテトロザやマーリも・・。　それだけは、どうしても避けたいのである。

狙う側と、狙われる側。　それぞれに相手の動きを想像し、姿を隠した戦いが始まり出した。

・・・。

そしてそれは、外を見れば解る。

空が、昼を回ると雪雲の厚みを増す。　北の大陸は、南端でも冬には雪が結構降るのだが。　フラストマド大王国は、国自体が北に上がり、南は半円状に引っ込んでいる。　其の為、真冬ならば南の港であるアハメイルでも、雪は多く降り積もる。　毎日の天気が目まぐるしく変わる事もしばしばだ。

さて。

「・・・」

マーリの博物館を黙って見上げた男が居る。　そのガッチリとした男は、人の行き交う雪の舞いそうな大通りで紅茶を売っていた。

マーリの博物館の周囲でも、西側の通りは大通り。　この学術的にも粋の集まった区域は、人の行き交う流れを止めるのも難しい。しかも、日中に鋭い眼をした兵士を大通りで仰々しく行き来させるのも、返って人目を惹く。　だから、テトロザも人気の無くなる夕方までは、兵士の殺された通りと、博物館に入る表の通り以外は自由にさせてある訳だが。

世界でも、一番多くの人が住み暮す街であり、毎日大勢の人々が集まり、また各地方へ散るアハメイルだ。　日に起こる事件も多数だし、殺人も話しに聞くに珍しい事でも無い。　犯罪も多い分、街が、何処か物騒な物事に慣れっこの様な一面を覗かせる。

直ぐそこの通りに曲がった所で、兵士が二人も殺されたと云うのに。　その出来事を押し流すかの様な人ごみが出来る大通り。　屋台の様な出店が通りに面した植木の下で、細々とした営業をしているのが見えるのも普段の光景なのである。

そんな訳だ。　もし人ごみの中で博物館を監視する何者かの姿が在ったとしても、兵士が見つけるのは難しいだろう。　マーリの博物館は、その外装も立派で人目を惹き。　高さも有るので見る人など無数。　兵士やテトロザの悩みの種でもあるだろう。

昨夜に、兵士を勢い余って拷問した者とは、別に。　悪党の手先は身を変え、博物館を探っている。

露店の店で紅茶を買う為に、店の厚着をした店主に近付くのは、や

さぐれた冒険者風体の中年男。

「ストレイトティーを」

「はい」

周りを確かめる冒険者風体の男は、顔を店主に近づけて。

（昼、何台かの馬車が入ったな・・）

木のコップに紅茶の熱いのを入れる店主は、仕事を続けながら小声で。

（あぁ。　裏側からは、毎日出る廃材を運ぶ馬車が・・。　行き場は、ゴミ捨て場だとよ）

（調べるか？）

（念の為に・・。　今夜、忍び込む）

（馬車は、何台だった？）

（二台・・。　普段は、一台から三台って言うからな）

（普段通り・・か）

紅茶の入った木の器を差し出す店主が。

（ん。　所で、聞き出しは？）

紅茶の入った器を受け取り、砂糖漬けされた乾燥の果物を選ぶ冒険者風の男は、声音静かに。

（難攻してる。　日雇いのクセに、妙な忠誠心を持ってるゴミが多い。　あの宝物の話に切り替えると、急に口を噤みやがった。　金に意地汚いヤツを見つけて聞かないと、こっちの素性がバレる）

（そうか・・。　初めてだな、こんなに手間が掛かるの）

（あぁ・・）

二人は周囲を見ながらも、何度か博物館を見る。　建物の大きさだけでは無く。　その内部も難攻不落の名城の様な様子に見えた。

そんな内部では・・。

セイル達は、テトロザとマーリに在った時点で、もう宿に戻らない事を決めた。　アンソニーの手紙を持った執事の遣いが、シンシアの下に赴いた。　シンシアの悲しみの顔は、手紙を届けた執事の遣いが見た。

だが、アンソニーの手紙を見て、シンシアは静かに。

“アンソニー様へ、無事にまた、戻る事をお待ち致しますと・・”

と、告げたそうで。　その言葉を聞いたアンソニーは、夜の入りに静かに瞑目して頷くのみ。

そして、それから2日が過ぎて行った・・。

臨時の休館を二日作ったマーリの博物館。　その休館二日目の深夜である。

博物館から雪の降る深夜に。　静かなるまま物音も、話し声も微かに、３台の馬車が出た。

馬車を通りまで見送りに出たのは、誰も居無い。　静か過ぎて、馬の鼻息や馬蹄の音も響き少なく。　カンテラを灯さないままに行く馬車は、闇に溶け込んで居る。　路地に出て、左手の大通りへでは無く。　右の軍部へ向かう方面に走る馬車。

（出たっ！！）

隣の別の美術館の内側。　庭木と壁に鋏まれ、裏手の勝手口のドアが内側に張り込んで居た何者かは、そう思ってドアを少し開いた。
　博物館の表門から、やや細めの通りを行く馬車の列を確認すると、直にドアを閉め。　馬車と平行する様に、壁に沿って走って行く。

馬車の先頭が、左右に分かれたやや大通りの道に出て、左に曲がった。

（よしっ、見失うもんかっ！！）

何者かは、太い枝が壁の上に伸びる葉の無い木に飛び付き、黒い服

★

装に擬態の効果を得て。　スルスルと上っては、真っ暗な雪夜の道を行く馬車を確認。　身を屈めながら、そっと壁の上の庇の上に上がって、馬車を行き過ぎさせてから、道に下りた。

馬車は、早く走れば大きな音を立てるだろう。　しかし、雪の舞う中を走る馬車は、何故かゆったりと走る。

この後、少しして。

「いいわ。　行って」

マーリの博物館の裏口から、目立たない幌馬車が出た。　態々、マーリ自身が裏口通りを伺い。　馬車へ安全を伝えて、見送りに立つ。
弱い火のカンテラを持つ執事も一緒である。

馬車が裏口通りに出るのに合わせ、太い大通りと、裏口の通りの交わる物陰にて。

（むっ。　やっぱり、さっきのは囮かっ？！）

日中に屋台の様な出店で紅茶を売っていた頑固者そうな人物が。
今は、マーリの博物館の裏道を物陰から見張っていたのである。
表に動きが在ったのは解っていたが、バカみたいに飛び付くのも怪しいと見張っていたのだ。

（フン、手の込んだ事を。　だが、その位はお見通しだ）

店主をしていた男は、ローブのフードを深く被り。　３台の馬車が出て行った方向とは、全く逆の自分の居る方向に幌馬車が向かって来たのを確認。　幌馬車が海沿いの方に曲がったのを見届けると、

建物の間を抜ける裏道を行き始めた。　この街の地理に相当の自信が在るのだろう。　酒の入っていた大樽や、木箱が積まれている事も当たり前な裏道だ。　その道を使ってゆったりでも馬車を追うなど、完全なる尾行の玄人（プロ）であろう。

二重に間を置いて博物館を出た、其々の馬車。

そして、その後を追う者達。

先に出た3台の馬車は、貴族区に向かって分散した。

追っていた何者かは、闇の中で2人に成っていて。　先頭の馬車と二台目の馬車を手分けして追った。

馬車が入り込んだのは、大小立派な庭と建物をそれぞれに有する貴族区。　今では、商人もステイタスを求めて住み暮すので、その規模はかなりの広範囲だ。

馬車は、貴族区に入った途端に走る速度を上げた。

（あっ、なっ！　クソっ）

焦った尾行者だったが。　一応の為に、仲間が大体の区域の出入り口を見張っている。　下手に追う姿を晒してまで、馬車を尾行する危険は出来ないと判断をした。　待ち伏せでもされたら、自分達が危ない。　この二日で、かなり綿密な尾行命令が出されていた結果だろう。

（仕方無ぇ、轍でも追わせるか。　繋ぎと連絡だけ取って、見張りに戻るしか無さそうだな）

尾行者は、貴族区の方に配置された見張りと連絡を取る事にした。

さて。　問題は、幌馬車の方だった。

ゆったりとした走りで、海沿いの道を走る幌馬車。　馬の吐く息が白く。　雪の舞う中で寒そうだが。

「・・・」

裏道を行く店主は、走って道の門で馬車を待ち。　見えると、先んじて回り込む。　手伝いに、組織の何人かが所々に居る手筈で。恐らく、自分の他にも馬車を尾行しているだろうと思われる中。

（何処へ行く気だ？　このまま行ったら、旧海運倉庫の跡地か、住宅区の分かれ道だな）

海沿いの大通りと行く馬車は、そのままずっと真っ直ぐに・・。

だが。　店主は、追って行く内に気付いた。　馬車の行く道の物陰に、人影が在る事を・・。

深夜でも、物乞いなどが物陰に寝ている事は多い。　だが、海沿いの道の木の陰などには、冬にそれは無い。　道に隠れる影はしっかりと立ち、影に成りながら隠れている。　だが、その気配は、玄人である彼には薄っすらと読めた。

（まさか・・、こっちが囮か？）

そう心に湧いた疑念は、馬車を追い掛けるウチに不安を齎す。　潮

時を探るしか、思考が働かなくなりそうな思いを堪える。　何故なら、馬車の通る道に尾行者が立つなど有り得ない。　雪の中の走行とは云え、御者も闇に目が成れる。　木陰に人が立っていれば、上手く隠れないと見つかる可能性が有る。　そして、自分の仲間が尾行している雰囲気では無いのだ。

（・・一体、あの気配は何だ？　俺達の仲間じゃ無さそうだし。別に雇われた奴らにしても、あの隠れ方は尾行じゃ無いぞ）

更に店主が気に成るのは、馬車の向かう先である。

（不安だ・・。　この馬車は、住居区や旧倉庫跡に用が在るのか？　まさか、ボロ倉庫に隠す気・・。　だが、管理はどうする？）

馬車を見張る何者かが通りに隠れるなら、何処までも尾行は可能だ。　だが、この走る馬車を見守るかの様に居る影。　それが意味するのは、何か。　店主をしていた人物は、馬車も陰もが気に成る。

しかしこの時、更なる動きが。

テトロザの指示を受けた兵士達は、騎士と一緒に成りながら数人で小隊を組み。　マーリの博物館の周辺の見回りを強化し始めた。馬車が出た後にである。

先に出た3台の馬車の尾行を諦め、博物館の見張りに戻って来た何者かだったが。　松明やランタンを使って、通りに面した店の間の物陰まで見る兵士の見回りを見る事になる。

（あ〝っ？！！　何だっ？！）

その見回りは、潜伏者を探し出そうとする素振りが在り在りとしていて。　先程の馬車の出る前とは、明らかに見回り方が違う。

（どうしたっ?!　まさかっ、誰か捕まったかっ?!!）

数隊の部隊が、博物館周辺の人気の無い道路側を、それこそ備に捜索する様に見回るので。　戻って来た何者かは、見張る為に隠れるタイミングを見失った。

（クソっ・・・、仕方ないか。　今夜は、引き返そう。　なんかおかしいが・・。　博物館が逃げる訳じゃないし、見つかるよりマシだぜ）

急に動きが在ると思ったら、今度は見回りの激変である。　見つかって捕まるのは、最も避けなければ成らない事だった。

≪そして、静かなるままに消えて≫

馬車が出た次の日から、マーリの営む博物館は再開されている。　新しい古書などが展示となり、また大勢の客が来ていた。　博物館の内部に、警戒警護として兵士が居る以外、内装などに目立った変化は少なかった。

が。　再開されてから、二日が経過した頃。　一つの異変が明らかに成った。

閉館していた二日間の昼などには、マーリと共に姿を見せていたセイル達の姿。　それが、再開されてからは、館内の全てから消えている。　応接室・・会議室・・地下保管庫などからも。

そして、雪もチラつきそうな夕方の事だ。

マーリの営む博物館から、辺りを警戒して出る男が一人。　みすぼらしい中年の４０男で、小太りながら卑屈な印象を受ける。

（急げ、急がねばっ）

もう入館客が少なくなる暗くなり始めた空の下。　博物館から出る客に混じって出るこの男は、昼間に博物館の所々に積もった雪を運び出し、下水に捨てる作業をしていた一人。　顔は、去年からこの街に住むのでマーリも見知る。

この男は、博物館を出ると大通りに出ては、繁華街の方に向かった。

やや俯きながら、急ぎ足のこの男が向かったのは、繁華街の中でも一番賑わう通りの酒場だった。　構えも大きく、５階建ての店内は、客を席へと誘い酒を配るウェイトレスも居るし。　男相手に接客する派手な衣装の女性も居る。

夜の女性は、店が雇うケースも在れば。　個人の出入りを自由にさせている店も在る。　此処は、後者の方に成るのだろう。

その店の前で。

「はぁ～、一仕事終わったね～」

「あぁ。　今夜は、パーっと飲もうぜ」

「サンセ～」

「宿代も結構稼げたし、年末までにもう一仕事するまえの景気付けしようぜ」

冒険者の一団がこんな会話をしながら、意気投合する様子で店に入った。　その後も、旅人や働きから帰りの者が酒場に入る。

冒険者達の後。　数人を経て、酒場に入ったみすぼらしい小太りの男は、

「いらっしゃいませ。　お客様、お一人でしょうか？」

と、入り口に立つ若いウェイトレスに声を掛けられる成り。

「こっ・個室だ。　予約で、４０１号の部屋の人に会いたい・・」

やや震える声のままに、そう言った。

「承りました～」

若いウェイトレスは、色々な客を相手にしている手前、この様な男性を相手にしても顔色を変えず。　４階の個室フロアへと案内をした。

個室は、家族のみとか。　恋人とか。　商談など、様々な用途に使用される。　廊下の左右に、壁を形作る曇りガラスの仕切り内側に

は、個室が在り。　各個室の入り口の木のドアに付く丸い窓は、カーテンが掛けられる仕様と成っていた。

「此方で御座います」

ウェイトレスへ礼も言わずに、案内されたままに部屋のドアを開けた小太りの男。

開かれた中に居るのは、身形だけ少し良くした商人風の男が居た。
　スカーフネクタイをし、柄物もＹシャツに黒皮のチョッキを着る姿は、商人の流行の一様なのだが。

「やぁ、良く来てくれた」

二人が向かい合うだけのテーブル席が置かれた個室。　その中で先に居て待つ男は、紳士っぽい左右分けの鼻髭をしている。　しかし、堅気の仕事をしてるとは思い難い、どうも目付きの宜しくない３０過ぎの男性である。

「モルガンさん、お話が在ります」

中に入り、そう言う小太りの男。

“モルガン”と呼ばれた男性は、手を差し出し。

「ま、ドアを閉めて、其処に座り給え」

と、言葉を選んでいる様な雰囲気で言う。

小太りの男は、慌てて。

「あ、はいっ」

と、ドアに振り向き。　控えていたウェイトレスに、

「ちゅっ・注文は・・後で・・」

と、ドアを閉め。　窓にカーテンまでした。

ウェイトレスの若い女性は、何とも怪しげな雰囲気で閉めた客に。

（んっ、もう！　ウチの店で、ヘンな商談とか止めてよねっ）

と、ヒールの踵を返す。　何度も、事件に関わる事も在った。　働く方からするなら、こんな客は願い下げであった。

だが。

部屋の中で、対面にモルガンと云う男の前に座った小太りの男は、黒い着古したオーバーを脱がずにいきなり話をし始めた。

「大変なんですっ」

「どうした？　落ち着き給え。　ゆっくり、話をしてくれ。　さ、水でも」

銀の水差しから、コップに水を汲んでやるモルガン。

「あっ・ありがとうございます」

小太りの男は、注がれた水を一気に飲み干し。　白い純白のテーブルクロスが敷かれたテーブルへ、コップを戻して。

「実は・・、例の４人が忽然と姿を消しました」

その話が出た瞬間、モルガンと云う男が眼を鋭くした。

「本当か？」

「ええ。　閉館していた時までは、確かに居たんです。　ですが、一昨日に仕事に行って見ると、全く影も形も無くなっていました。　二日間待って見ましたが、日雇いの仲間内でも首を傾げる者が居るぐらいで・・。　どうやら、再開された日には居無いみたいです」

「・・、そうか。　それは、悪い知らせだな。　で？」

「はい。　４人の行き先を、それとなく兵士や執事さんに聞こうと思ったんですがね。　口止めの命が出ているらしく。　あの４人の事に対しては、兵士や使用人さんも無言でして・・。　突っ込んで聞く雰囲気では無く。　とにかく、こうしてお知らせに来た訳です」

「なるほど。　宝物の事も、奴等の泊まっていた宿の話も出来なかった訳か」

「はい。　あの運び込まれた何かの事に携われたは、マーリ様の気を許された一部の館員や作業員だけでして。　彼らは、マーリ様に厚い忠誠を持っております。　金で動く事は無く、聞き出すには別の手を考えなければなりません」

「どうやら、その様だな・・。　所で、お前の他にも、似た様な輩

を金で雇ったんだがな。　解ったか？」

「あ、はい。　結構、普通に聞き回ってたのが何人か・・・」

「あからさまにか？」

「えぇ・・。　一人は、兵士に逆に質問され返されたみたいです。何故そんなに、あの４人の事を聞くのか・・と」

手を組み、テーブルの上に置くモルガンだが。　その手は落ち着きを失って、小指がテーブルを打つ。

小太りの男は、モルガンがイラついているのだと解った。

このモルガンと云う男が、直に部屋を後にし。　酒場の奥間の窓から飛び降りて消えた。

さて。

深夜に近付き、客が大分に帰った頃。　酒場の個室は、一番最初に客だし作業が開始される。　まだ残っている客をやんわりと終いにさせるべく、ウェイトレスと支配人が一緒に回る訳だが。

仕切りだけの在る3階の多人数用のテーブルを回った二人は、４階に上がると。

「４０１？　使ってたのか」

と、云うのは、初老の支配人。　個室使用の有無を記帳する紙の束を捲り。　曇りガラスの壁に鋏まれた廊下を歩きながら、直後ろを

付いて来るウェイトレスに。

「この部屋・・、注文在ったかね？」

「さ～。　私は、今日は入り口担当だったんで・・」

「そうか」

と。　部屋の前に着いた支配人は、ノックをして見るが・・無言。
ドアを開けて。

「おきゃ・・・」

と、云い掛けた途端、噎せ返る血の匂いが部屋から吐き出され。
テーブルクロスを真っ赤な血で染め上げ、小太りの男が床に横たわっていた。

「キャアアアアーーーーっ！！！！！！」

驚いたウェイトレスの女性が、その場にヘタり込んだ。　首筋を深深と切り裂かれた小太りの男は、既に絶命していたのである。

この夜から次の日の朝に掛け、殺人が十数件在った。　その中の４件は、マーリの博物館に日雇いの仕事を貰いに来た浮浪者などで。
警察役人の捜査は、テトロザの命を受けた者の手配で、密かに行われる事に成った・・。

★

「バカヤロウっ！！！！」

「うわっ！！」

何処かの暗い廃屋の中。　かなりの大柄で太った男が、細身で痩せたボロの布マントを着た何者かを殴った。　力強い腕力で殴られた方は、ゴチャゴチャした埃と蜘蛛の巣だらけの家具などの在る隅にまで飛ばされる。　そして飛ばされた何者かは、家具に当たり大きな音を上げた。

動物の毛にビッシリと覆われたオーバーを着て、頭部を黒いバンダナで隠し、如何にも悪党面と言える顔付きの大柄で太った中年男は、大いに苛立ち。

「クソっ！！！　兵士を殺して情報ナシじゃっ、警戒されるお膳立て作っただけじゃねぇーかっ！！　ブツの情報は、もう軍部にも知れてるハズだっ！！！　あぁっ、チキショウっ！！　移動でもされたら、金が貰えねぇ処じゃねぇぞ！！！」

傍に在る破れたソファーをも蹴り飛ばし、荒い鼻息を撒き散らす太った大柄の男。

当たって壊したボロ家具の残骸を落とし、ヨロヨロと立ち上がった細身の何者かは、頭を振りながら。

「す・・すいやせん・・。　まさか、兵士があんなに口の堅いヤツだとは・・」

太った大柄の男は、闇の中でそう言った男の声をする何者か睨み目を向け。

「アホぅっ、だから言った筈だっ！！　この都市の警察役人は生っちょろいが。　リオンとテトロザに指揮された軍の兵士は、他の国の兵士に比べて士気が高いっ。　況して今の状況からするに、口の堅い選ばれた兵隊に警護させてる可能性も在ると・・・」

「すいやせん・・すいやせん・・・」

頻りに謝る細身の男。

「もうイイっ。　もう・・、今は手を出すな。　とにかく、小さな事も見逃さない様に、お前も一緒に手下全部で見張れ。　いいかっ、バレるなよ？　中央から、ラヴィンの野郎が応援連れて来るだろうから。　アレが来るまでは、これ以上の騒ぎは面倒だっ」

「はいっ、すいやせん」

すると、大男は細身の何者かに。

「所で、何か他に情報は無いのか？」

「へい。　マイルのヤツに因ると、ラヴィンの旦那が言ってやしたガキと大人の冒険者達は、貴族御用達の宿に泊まってるみたいだとか」

「本当なのか？」

「いえ。　宿に入る所まで見届けようとしたらしいんですが・・」

「感付かれたのか？」

「へイ。　何でも、近付き過ぎたとか言ってやした」

「クソっ。　今回は、相手が悪いぜっ！　あのクルーガですら尾行に失敗して、マイルも感付かれる。　その有名な・・クラークだかか？　大した野郎だなっ」

大柄の男は、冒険者の間では名前の売れているクラークを名指しで褒めた。　苛立つが、自慢の部下が尽く尾行に失敗しているのが、その感心に繋がる。

だが・・。

「いえ。　感付いたのは、リーダーのガキらしいんで・・」

「なぁにぃぃーっ？！！！」

この者達の会話を聞くに。　王都アクストムからアハメイルまで、セイル達を尾行しようとして。　途中で捕まり損っては、自殺した何者かの仲間なのだろう。　セイルは、まだ１５・６の子供の様なリーダーと聞いていただけに。　感付かれたのがセイルと解ると、また、イラっとした顔をする大柄な男だが。

「カシラ、聞いてくだせぇ。　噂だと、あの４人のヤツラは、チーム結成して半月もしないで上級の依頼を請け負ったとか。　俺達もしかして、勝ち目の無いヤツラを相手にしてるんじゃないですか？　だって、見張ってる博物館には、あのテトロザが来ましたゼ？」

有名なテトロザの名前が出ると、大柄の男は苦虫を噛み潰す。

「全くっ。　リオンが居無いウチだと安請け合いしたが。　コイツは、とんだ大事に成りそうだぜっ」

「はい・・。　出来れば、逃げたいですよ」

大柄の男は、逃げ腰の発言をした細身の何者かを睨み。

「なぁにを弱腰なっ。　今回は、辺境のコソ泥みたいにチイせぇグループの俺達まで借り出された。　組織に、俺等が出来る所を見せ付けて、一気に縄張りを拡大するチャンスなんだっ。　ダーク・チェイサスの本体と、3国を股に駆けた“ジェノサイダー”の奴らが此処に来る前に、俺達だけでも有益な情報を掴むのが必要なんだっ」

大柄の男に寄る細身の何者かは、どうしても解せず。

「カシラ。　何だって、そんなに焦ってらっしゃるんで？　この仕事に対してだけ、オカシイぐらいにマジじゃねぇ～ですか」

すると、大柄の男は黙った。　何かを言い掛けながらも、グッと言葉を飲んでは、横を向く。

ローブとフードで顔の見えない細身の何者かは、

「カシラ・・、何か不味い事でも在るんでスか？」

と、更に。

下手にこう突っ込まれて聞かれ。　話を嫌う様に、細身の何者かから顔を背ける大柄の男。　だが、少し思案してから。

「・・・ま、一蓮托生だからしゃ～ないか。　コイツは、秘密の命令だ。　これから話すのは、お前の中だけに仕舞っとけ」

「へい」

「今回の組織からの呼び出しは、“限られた契り”って言う最重要の召集だ」

「・・普通の命令とは、違うんですかい？」

「この命令が発動されるとは、俺も夢に思わなかったがな。　組織に加担する悪党達でも、この招集命令は絶対なんだ。　しかも、逃げたり、仕事が破綻する失敗を犯した場合は、その失敗した悪党集団は丸々抹殺される」

「げぇっ？！！　ま・ままま・・マジですか？」

「あぁ。　だから、今回の仕事で負けは許されないんだっ。　クルーガの失敗で、見失った落ち度が在る。　今回のお前の失敗で警戒されただろうから、もう後が無いだろう。　とにかく、何らかの強力で有益な情報や、ヤツラの弱点に成る様な何かを見つけねぇ～とマズイ」

「かっ・カシラ・・」

大柄な男の切羽詰った話に、痩せた何者かは従うしか無かった。

大柄の太った男は、間近に来た細身の男を見て。

「使い捨てに引き込んだゴミは、ちゃんと始末したんだろうな？」

「へい。　雇い工作に出したモルガンには、足が着く前には殺せと命じてありやす。　繋ぎがまだ来てないんで、新しい情報が有るかは解りやせんが・・」

「いい。　とにかく、俺達の所に役人や兵士が来なきゃ、な」

「解ってやす。　ですが、馬車の行き先は、片方解りやせんぜ？」

「だな・・。　その、住宅区の奥の廃屋に行った幌馬車は、抑えてあるのか？」

「へい。　見張りは、付いてやす。　でも、貴族区に入った馬車は、姿を消したそうでして・・」

大柄の男は、何か誘い込まれている雰囲気を嫌い。

「ケッ、貴族区の何処に行きやがったか。　似たり寄ったりの馬車が多いあそこで、見失った馬車を探すだなんて面倒くせぇっ！！」

「ですが、カシラ」

「ん？」

「一人、轍を追った奴が居ましたが、貴族区の奥で見失ってまさぁ。もしかして、そのまま外に逃げられたんじゃ・・」

その言葉に、大柄の男は目を鋭くさせ。

「縁起でもなぇ・・。　あの区域から、外に出れるのか？　怪しい馬車の情報は、外から来たのか？」

「いえいえ。　ただ、貴族区の奥には、デカい屋敷の廃屋が点在する古い貴族区が有るとか」

「そうなのか？　なぁ～んでまた、そっちを捨てたんだ？」

「詳しいことは、アッシにも解りやせん」

「・・・」

黙った大柄の男。

細身の男が、沈黙に新たな命令の芽を見出し。

「カシラ・・、気に成りやすかい？」

「あぁ。　博物館を持ってるってのが、随分と古くから由緒ある貴族なんだろ？　そっちに、元の屋敷とか無かったのか？」

「さぁ・・、その辺までは・・」

「とにかく、虱潰しに全部調べろ。　貴族御用達の宿とやらにも、誰かやれ」

「へい」

セイル達を、宝物を追う者達は焦り。　暴れるに等しい蠢きをしている。

そう、セイル達の姿が消えたからだ。

この意味は、追う者達には由々しき事態だった。　兵士が護るマーリの博物館を襲う事は、もう王国政府に正面から抗争を仕掛けるのと同じ。　そんな事態に成れば、どっちが負けるかは一目瞭然である。

追う側からするなら、セイル達を押さえて。　宝物の在り処を聞き出したい処だった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪突き詰められて行く真実は　その影を留める≫

セイル達が隠れる。　そして、その姿を追う者達が暗躍する。

だが。　一方では、リオンとエリウィンの調べは、遅々としながらも一つの真実へ向かい始めた。

その一端が発したのは、セイル達の下にハレンツァの訃報が届けられた翌日。　夕方が近付き、外が夜にもう変わっていた頃であった。

「ふぅ」

特別な権限が必要な書庫に戻ったリオンは、父親や兄を気遣って戻った。

「王子、お疲れ様です」

一人で調べ物を続けていたエリウィンが、リオンの訪れにそう言っ

た。　かれこれ数日此処に篭るエリウィンだが、家族と共に父親の喪に服せず。　また仕事の極秘性から外出も出来ない。　渦中の中心に近いエリウィンが家族の居るポリアの屋敷と、此処を往復するリスクは途轍もなく大きい。　其の為、彼は自ら進んで隠れたままにしている。　家族には、一応別件の仕事が有ると言って置いた。

リオンは、手に持つ籠（バスケット）を持ち上げ。

「うむ。　ホラ、食べ物を持って来た。　疲れただろう？　少し休憩しよう」

エリウィンは、座した状態から頭を垂れて。

「お気遣いありがとう御座います」

「まぁに、気にするな。　此処は、メイドや下々を入れられん。それより、父上の気落ちが心配だ。　兄上は、意外にも気丈に振る舞い出しているがな」

「陛下が・・。　トリッシュ様には、王に就く前の試練ですね。しかしながら、我が父の事を、そこまで・・」

エリウィンは、恐れ多いながらも嬉しい様な・・、また悲しい様な・・。　複雑な思いに、押さえていた憂いが溢れ出そうに成った。

リオンは、父親の死に直面しながらも、涙を隠して調査に加わっているエリウィンも心配だった。

「そなたには、今回の頼みは辛いな・・。　他に適任者が居無い・・、協力に感謝する」

と、エリウィンを見る。

エリウィンには、厳しくも甘い父親との思い出が棟に詰まっている。

今、泣いては、父に叱責を受けるだけと解っていた。

「・・いえ。　今は、父の出来なかった事を致すに邁進するのみで御座います。　父が殺された今、その犯人とその策謀を明るみにしなくては・・・」

リオンは、頷くだけで。　パンとミルクの入った瓶を入れたバスケットを、静かにテーブルに置いた。

エリウィンは、悲しみを紛らわす為にも、と。

「王子。　今朝方から調べていて、とても不可解な事が有ります」

「ん？　何だ」

「えぇ・・」

エリウィンは、何枚かの古い家系図を出し、それを右から順番に並べると。

「先ず、一番右手に有りますのが、サージネル様の家系図です。始祖は、初代王家のご一族に繋がる分家で御座います」

「あぁ、我が血筋に近いはずだが」

「問題なのは、ミグラナリウス卿の方。　先ず、サージネル様の４

５９代の御当主に成るダイイム様ですが。　何故か奥方のエミリア様の素性が、全く解らないので御座います」

リオンは、キナ臭い匂いが出て来たと片目を動かし。

「ほう」

「そして、このお二方のご息女が、ミグラナリウス卿の家に養女として入ります。　そして、他国の・・ステロイザス家のご子息を夫に迎えて、家を存続させているのです」

「・・・」

リオンは、ミグラナリウス家の家系図を見て。

「不思議だな。　その頃に、本家には男子二人に娘も居る。　早期死亡の事も書かれて居無いと云う事は・・、態々養女を貰い。　その養女に家を継がせた？」

エリウィンは、しっかりと頷く。

「はい。　しかも、ミグラナリウス卿のこの頃は、丁度あの例の事件が起こった直後で。　我が一族も含めた数家の貴族が、当主は斬首の上に一族は国外追放の刑を受けた直後なのです」

「ほう・・それは、興味深い」

エリウィンは、もう色褪せた歴史の中でも、丸で謎のまま黒く残る暗部にブチ当たったと思い。

「王子、如何いたしますか？」

「調べたいな・・。　だが、そんな昔の事を、一体これ以上にどう調べるか・・」

リオンは、首を傾けて考える。

エリウィンは、家系図を見ながら。

「王子」

「ん？」

「何処まで解るかは解りませんが。　一つ、手掛かりを探り進む方法は御座います」

「本当か？　して、その“方法”とは？」

「はい。　今日までの王国の歴史の詳細は、この後ろに有る歴史書鑑と言う物に書き残されています。　王暦史実の年度史には、お役目に就いていた全ての貴族の事柄も書き記され、有った出来事も。　その辺から調べて、人物の繋がりなどを書き出して見るのです」

エリウィンの話を聞いたリオンは、回りくどいが確かな狙いだと。

「なるほど・・、現実的に解る事柄と、当時の貴族の影響や関係を図解にすると？」

「はい。　数日は作業に必要でしょうが。　当時の事を理解出来れば、ある程度の推論なども出来ようかと・・・」

「そうか。　ならば、調べよう」

「は」

リオンは、随分とこうゆう調べ物に詳しそうなエリウィンを見返し。

「しかし、驚いたな。　エリウィン殿が、こうゆう事に長所を持つとは」

「いえいえ、父の教育です。　寧ろ、トリッシュ様の方がもっと・・」

「何？　兄上がか」

「はい。　トリッシュ様は、一見するとひ弱そうに見えますが。歴史を正しく見捉える勇気は、人一倍だそうです。　父は、幼きトリッシュ様が取り巻きの文官に捻じ曲がった事実を吹き込まれ、正史との食い違いに悩んで居られた時に、助言をしたとか。　それ以後、トリッシュ様はご自分で正史を暗記し。　一人で史実を書き記しては、自分だけの正史録を御作り上げたと云ってました」

「・・・兄が、なぁ。　知らなんだ、そんな事・・」

「リオン様とトリッシュ様は、ご趣味からしても、事実に向かっての動き方が違いますからね。　リオン様は、身体を動かして知り。　トリッシュ様は、出来事から読み知る。　父が申して居りましたが、私もトリッシュ様は王に相応しいと思います。　リオン王子がどうこうでは無く。　トリッシュ様は、その器に有りますから」

リオンは、自分の知らない兄の側面を彼らが見ているのだと知り。

（兄上も幸せ者だ・・。　なら、我は兄を護る剣に成るのみだな）

エリウィンと共に作業を続けるリオンは、嘆く父と兄をそうさせ。

そして、王国の大切な家臣を奪った首謀者を、絶対に逃がす事は許されないと思った。

だが、明くる日の午前。

人とは、何処かで誰かと繋がる。　況して、エリウィンなどは繋がりも多い。

リオンの申し出を受けて、密かに作業に没頭するエリウィンだが。

ハレンツァの子供であるその姿は、常に相手方からも探される。

家族や、付き合いの有る貴族からも。　エリウィンが帰って来ない事を心配した家族は、折り良く居合わせたトリッシュ王子に掛け合った。

“済みません。　当主であるエリウィンが、何か仕事が有ると戻ってきません。　安全なら、手紙なり何なり連絡が欲しいのですが”

と・・。

実は、エリウィンの出仕する姿が見えない事に脅えるクシャナディースが、ヘンダーソンに相談し。　ヘンダーソンが手を回し、喪に訪れた文官に進言させた事でこうなった。　つまりは、彼らもエリウィンが何処に居るか、今は何をしているのか知らないのである。

ハレンツァの息子で、ハレンツァ以上に真っ直ぐなエリウィンだ。

もし、彼に自分達を疑われたら、面倒な事だと二人も思っていたのだろう。

ハレンツァの家族は、ポリアの一族の家に預けられている。　近く埋葬されるハレンツァの遺体も、まだ預けられているハズだ。
その傍にエリウィンが居無いのは、どう考えてもおかしい。

それは、遺体と家族を預かるポリアでさえ、エリウィンが喪に服す期間を留守にするのが変だと思っていた。

ポリアも、エリウィンに面会したいので、家族が申し出に伺うのには賛成したのである。

柔らかな金髪を肩や背中に回す頼り無さげの青年が、王宮を歩き回って居た。　メイドや貴族に会うと、エリウィンの事を聞いて回る。
リオンと似た背丈ながら、その身体は細く華奢な印象であろう。
青い上質のズボンに、王国の紋章が背に刺繍された制服の様な上着を着た知的な美男。　これがトリッシュである。

王宮のメイドなど女性達からすれば、護って貰いたいならリオン派。
護ってあげたいなら、トリッシュ派と云う具合に、この王子二人は宮中の女性の人気を二分している。　普段から穏やかで、おっとりした性格のトリッシュなのだが。　今は、ハレンツァを失った悲しみから、少し気が落ち着かず仕舞いであった。

「あらっ、王子」

出仕していた女性貴族の文官は、仕事をしている部屋に入って来たトリッシュに驚く。　黒い礼服のドレスの裾を靡かせ、トリッシュに向き直っては一礼を示した。

「あ、エリウィンを見なかったかい？」

「えっ？　あぁ・・、ハレンツァ様のご不幸からは、御見掛け致していませんが」

「そうか・・、」

彼方此方を訪ねては、エリウィンを探し回るトリッシュ。

トリッシュのこの動きは、クシャナディースやヘンダーソンには有り難い事だろう。　トリッシュが探すので、丸で王宮にハタキを掛け回って居るのに等しい。　エリウィンも、これでは出て来ずには居られないと思った。

クシャナディースの王宮私室にて、ヘンダーソンは暗がりの外を窓から見て。

「どうですか？　あのトリッシュの慌て様」

すると、ぞんざいな態度で椅子に座るクシャナディースは、その広い私室の天井を見上げ。

「愉快だ。　エリウィンも補足して、ほとぼりを待って脅しを掛けねば・・」

「ですな。　ですがエリウィンは、両王子とも仲が宜しい。　少し手を回し、遠ざけてからが望ましいですな」

「ん。　だが、エリウィンが生き残ったのは面倒だ。　どうにか、

始末出来ないものかの」

物騒な事を平気で言うクシャナディースである。

ヘンダーソンは、

「クシャナディース様、それは御口が過ぎますぞ。　その様な態度は、努々表に出されるな」

「・・解って居る」

ヘンダーソンは、ミグラナリウスの老人が、何故にこのクシャナディースを選んだか解らない。　扱い易いが、軽薄で粗暴な面が目立つ。　もう少し貴族として品が有ればいいのだが、どうも気性的に貴族でも、宮廷仕えの似つかわしくない人物だと思っていた。

（ま、コイツもあの御老からするなら、使い捨ての駒だろうがな。　だが、我々の計画の中でも、トリッシュを思う様に出来るまでは、公爵の権威を保って貰わねば・・。　当面は、私が支えるしか無いな）

ヘンダーソンは、あの老人の計画に当初から参加していた。　途中から選ばれたこのクシャナディースには、不満が多々。　だが、他に言い成りになりそうな者が居なかった。

最初、計画に引き込む貴族の名簿には、あのオグリ一族も有った。　だが、本人も家族もバカ揃い。　クシャナディースは、知らされずに名前を挙げられた貴族の中では、比較的イイ方なのだ。　つまり、それだけ大概の貴族が王家に忠誠を誓っていると云える。

窘められ、少ししょ気た様に黙るクシャナディース。

ヘンダーソンは、目下の外の廊下を行くトリッシュを窓から見ながら。

「所で、ご子息の出来は如何か？　せっかくの姫君です。　早く認められた子供を御作りなさいませ」

と、云う。

一気に不満在り在りな顔をするクシャナディースは、

「解って居るっ。　そのうち、・・それなりに作るっ」

と、押さえた声音で吐き捨てる。

脇目にクシャナディースを見たヘンダーソンは、噂は本当だと確信した。

（やはり・・、か。　夜な夜な襲って居るのだろうが、お体の強くない姫君だったからな。　こんな粗野な男に襲われては、出来るモノも出来ないと云った所か。　昼間は、泣いて過ごす奥方と云うが・・、当然かも知れぬ）

ヘンダーソンの恐れるのは、このクシャナディースの爵位格下げである。　クシャナディースの格上げは、もう公爵の娘を娶った事を楯にしたゴリ押しで。　方々に金を掴ませては、なんとか格上げにこじつけした様な処。　もし、大金を叩いて輿入れさせた奥方が、病気や自殺で子供も出来ずに死んだら・・・。　クシャナディースの爵位は、直ぐに取り下げられる可能性が強い。　いや、今となっ

ては、リオン等にハレンツァの脅し件でクシャナディースの事が耳に入っているなら、確実に追い込まれるかも知れない。

（リオンめ・・。　昨日、コイツ（クシャナディース）の格上げについて、私に内緒で隠れて調べまわっていたとか云ったな？　早くこのバカの子供が出来なければ、後々で面倒が起こりそうな・・）

ヘンダーソンは、実務的にあの老人の手足として動く。　だけに、出来の悪い駒は困る。　クシャナディースは、そうゆう意味では非常に出来の悪い駒だった。

窓に立つヘンダーソンは、自分の身が危うくなりはしないかと内心では心配だった。　無論、計画に当初から加わっているだけに、自分が切り捨てられるとは思っては居無い。　何か、失態などの落ち度が無い限り、老人が認めた後継者を後に支え。　最終的には、自分が影の黒幕に代わるとさえ目論んでいた。

ヘンダーソンの視界から消えたトリッシュ。

（頼む。　我々の傀儡として、十分に働いてくれい。　トリッシュ王子、頭の良い御主だけでも・・な）

ヘンダーソンは、身近で過ごすだけ在り。　トリッシュの理知的な性格は理解していた。　利用するなら、そうゆう人物が良かったと思った・・。

≪虚偽と焦りの狭間で、兄弟は一つに≫

ヘンダーソンの応援も有ってか、ハレンツァの死が暗殺でも有るから。　トリッシュの周りの付き人までが、エリウィンの存在を求めて王宮を探し始めていた。

リオンとエリウィンも、其処は理解している。　だから、極秘の捜査を誰にも教えなかった。　リオンの配下のたった数人だけが知っている事で。　その者達は、王都内に出払っていた。　内々にしてきた事が、此処に来てマイナスに変わる。

王宮の離れに在り。　王家の者とその許しを得た一部の者が立ち入れる区域から出て来たリオンは、寝不足の祟った疲れ目を擦り。食事を取りに王宮の表に出て来た処で、エリウィンを探すメイドに出くわした。

「あっ、リオン様っ」

「おお、元気だなぁ」

「それ処では御座いませんわっ」

「ん？　一体どうした？」

「それが・・。　先日お亡くなりに成られあそばしたハレンツァ様のご子息が、最近見当たらないと・・。　ご家族が、喪に服さず何

処に居るのかと心配されています」

「なぁっ・・、それで探し回っているのか？」

「はい。　トリッシュ様は、お昼前にご家族と面会をされて、所在の解らないエリウィン様が非常に心配だと・・。　今、王宮の中をお探しに回っておいでです」

（これはっ）

リオンは、しまったと思った。　ハレンツァの事を調べる上で、そちらに夢中に成り過ぎた。　こうゆう事をテトロザ等に任せきりなので、いざとなると手が回らない処が出て来る。　誰かの手回しで騒いでるとは思えなかったが。　それでも、ハレンツァの死から４・５日近くは経過している。　エリウィンが家族に何かを伝えたにしろ、多くは云えないから心配されても仕方が無い。

リオンは、し様に困った。

メイドが行き、廊下を歩くうちに兄のトリッシュと会う事に。

「あぁ、リオンっ」

血相を変えたトリッシュと、どうして良いか解らず困ったリオン。

二人が出会った。

近付いてきたトリッシュは、

「リオン、エリウィンは何処だろう？　国葬の夜から戻らぬままだとか。　何処を探しても居無い・・。　まっ・まさか、彼も何か危

うい危険に巻き込まれたのではないか？」

と、リオンへ。　その顔からしても、相当に心配している様子だった。

ヘンダーソンとも親交の深い取り巻きの付き人が、トリッシュの後ろに控える手前。　リオンは、本当の事を此処では云えないと思って迷う。

（どう致すべきか・・。　兄に知られるのは構わぬが、外部に知られるのは不味い）

リオンは、ハレンツァを失っている。　このまま、もしエリウィンをも失うのは、兄や父に深い深い衝撃を与えると嫌う。　だが、此処でリオンも逆に、何かを犠牲に差し出す必要が有ると思い。

「・・。　いや、兄上、俺は良くは知らぬ。　只、ハレンツァ殿は、父の命で何かを調べていた様だ。　エリウィン殿も、その事を心配していた。　彼は、何かを調べて回っているのではなかろうか。ハレンツァ殿の敵討ちに・・」

トリッシュは、顔を悔しさと悲しみに歪め。

「あぁっ、ハレンツァを殺めた相手をかっ？！　ならっ、私もっ」

トリッシュの今までなら、こんな事を言うなど有り得ない事だろう。　だが、トリッシュは、ハレンツァの死が堪えていた。　そして、王国の盾と自分を称したハレンツァを殺された事は、王家の一員として恥ずべき事だと思っていたのだろう。

そんな兄・トリッシュの憤る顔を見たリオンは、逆に思う。

（兄上なら、もしかすると・・・）

リオンは、トリッシュの後ろに付く御付の者を見て。

「済まぬが、兄上と二人にしてくれい。　必要なら、父上にも会わねば成らぬし、少し二人で話をする」

と、云った。

ヘンダーソンから、トリッシュの傍を離れるなと命令が出ていた。

当然、二人はトリッシュの身柄を護ると云う仕事を盾に拒否する訳だが・・。

リオンは、二人に鋭い視線を向けると。

「何だとっ?!　王家の者に盾突くかっ?!」

と、叱責する。

驚いたのは、トリッシュだろう。

だが、トリッシュが取り繕う暇を奪い。　リオンは、更に。

「己ら、ヘンダーソンの回し者では在るまいな?」

と、云う。

トリッシュは、王室御用取次ぎ役の一人でも在る用人のヘンダーソ

ンの名前が、リオンの今の口から出た事で混乱した。

「リオンっ、ヘンダーソンがどうしたんだ？」

「兄上、実はな。　ハレンツァ殿が、父上に命じられて、と或る事を調べてるに当たっていたのだが。　何故か、ヘンダーソンとクシャナディース卿が二人揃って、突然に圧力を掛けて来た事が在ったらしい。　それも、ハレンツァ殿が殺される２・３日前だとか」

「なっ、それは・・真かっ？！」

「あぁ。　エリウィン殿から、国葬の夜に聞いてな。　俺も独自に聞き回ったら、その事を見たメイドや騎士が居た。　内容を良く解らぬウチに、俺から表沙汰にはしたく無かったが。　何か変だ。俺は、その事を含めて直々に調べをしたいのでな。　近い内に、父上に許可を貰おうと思っている。　エリウィン殿が見つかり次第、彼も同席の上でな」

リオンの話に、トリッシュは衝撃を受けた。　そして付き人の二人は、ヘンダーソンと昵懇の二人だと知っていたので。

「何だっ？　ハレンツァとヘンダーソンは、何を話したっ？！」

と、慌てるままに振り返り、二人に尋ねる。

「えっ」

「いや・・我々は・・・何も」

口を濁す中年の小男と、ノッポの太い付き人。

リオンは、トリッシュに。

「兄上、その話もしたい。　俺の私室で、話せぬか？」

と、云えば。

「解ったっ、今直ぐにでも」

と、トリッシュが応える。

これは、リオンの賭けだった。　その話し合いが予断を許さないと内容と思わせられたなら、こうする事でヘンダーソンやクシャナディースが動くのではないかと思ったのだ。　無論。　もう二人には、優秀な見張り付けてある。

トリッシュは、二人の御付き人へ。

「とにかく、二人はエリウィン殿を捜しなさい。　私は、リオンと話をするから」

と、命令を出す。

「ははははっ・はいっ」

「了解致しましたぁっ」

二人は、この場の居心地の悪さに、逃げる様にトリッシュの歩いて来た廊下を逆に歩いて行く。　その慌てた駆け足の様な姿を見送るリオンは、この二人の行き先は大体読めていた。

二人と成った処で、リオンはトリッシュへ。

「兄上、お耳を・・」

「え？　なんだい？」

エリウィンの居場所を聞いたトリッシュは、全身の力を抜く様に肩を落とし。

「何と・・その様な処にか？」

「うむ。　だが、さっき言ったのは、嘘では無い。　だから、彼と二人で調べていたのだ」

「それなら、そうと・・」

「言えない。　ハレンツァ殿を殺めた者が、何処に居るか解らぬしな。　それに、色々と面倒な事が在るのだ。　とにかく、俺の私室に。　俺は、彼の分の食事を持って来る」

何とも不満ばかりが募るトリッシュは、リオンに。

「リオン・・お前は、何処までも・・・」

「王家を護る為なら、俺は剣に成る。　ハレンツァが居無い今は、剣と盾だ」

と、歩き出すリオンだった。

ランタンの薄明かりが広がる書庫にて。　リオンの案内によりエリウィンと逢ったトリッシュの顔は、何と言えば良いか。　男ながら涙を流し。

「無事だったか・・。　そなたに何か遭ったら・・・、ご家族に何と言えばいいか解らなかった」

と、零し。　リオンの用意した椅子へ腰を崩した。

直立し挨拶をした後のままに、その光景を見たエリウィンは、恐れ多いながらも自分の不肖を詫びた。

リオンとエリウィンの二人から、亡きハレンツァの関わった出来事を聞くトリッシュ。　アンソニーの事件に然り、今回の王家の遺品を巡る騒動に然り、何か不気味な働きが在るのは一目瞭然であった。

そして、ハレンツァが調べて途中で途切れた事件の経緯を、残された証言や詳細を綴った書面で読むトリッシュは、リオンへ。

「リオン。　そのセイル殿達の御一行は、大丈夫なのか？　話からして、未だ王子の印字や紋章の入った遺品を処分してしまった事を知らない犯人だ。　必ず、その方々を狙うだろう」

「兄上、テトロザに頼んであります。　只、相手がどう出てくるか・・。　我々も含め、誰も安全とは言い切れません」

★

「そうだね・・。　なら、今・・解決すべき問題は、リオンとエリウィン殿調べている事の答えと・・。　後は、どうにかご家族を安心させる事だ」

と、エリウィンを見る。

迷惑を掛けたエリウィンだ。　それには、先ず手を打たなければ成らない。

リオンは、直ぐに。

「兄上、今・・・思い付いた。　ポリアに頼もう」

「え？　ポリアンヌに？」

トリッシュが彼女を呼び捨てにするのには、色々と幼い頃からの経緯がある。　ある意味、リオンとポリアは兄妹の様だが。　トリッシュとポリアは、弱い兄とその兄を仕方なく助ける強い妹の様で。

二人は、どうもポリアには頭が上がらない。

リオンは、ポリアは信用出来るので。

「そうだっ、彼女が居たっ！　ポリアンヌなら、人目を気にせずに自由に動けるし。　あぁ、何とも打って付けだっ！！」

トリッシュは、女性の、しかも妹の様なポリアの身の上を心配した顔をして。

「おいおい、リオン。　彼女まで巻き込むのかい？」

「大丈夫。　彼女自身も強いが、仲間も強く信頼が出来るっ」

と、リオンは太鼓判を押す。

一方で、心配をするのはエリウィンで。

「リオン様。　聞く所に、ポリアンヌ様の仲間とは冒険者とか・・。
お金で買収とかされませぬか？」

これには、リオンは憤るより吹き出し。

「ふっ。　エリウィン殿、それは在り得ぬ。　ポリアンヌの仲間は、仲間の為なら身体を張れる。　正直、冒険者なんかにしておくのが勿体無い程だ」

と、言った処でリオンは、トリッシュに。

「兄上、此処の作業は、兄上に任せたい。　俺は、やはり動く方が性に合っている。　ポリアンヌと連携して、ハレンツァ殿の配下の者も引き入れ捜査をしたいのだ」

トリッシュは、そんな弟を見返し。

「一度言い出したら聞かないリオンだ。　“ダメだ”と云っても、無駄だろうね」

と、困った顔をしてみせる。

「兄上、頼むっ。　ハレンツァ殿の仇を討たせてほしい」

と、頭を下げたリオンだが。

「リオン。　ハレンツァは、我々王家の親愛なる友人だ。　お前一人で討とう等とは、思い上がりもいい所だよ。　大体、お前は何時も私をのけ者にする。　王家を、王国を護るのは、王族の使命だ」

叱られたリオンは、兄を見て。

「・・済まない。　だが、国王になるべき兄上は、危険には晒せない」

すると、トリッシュは、直ぐに。

「兄は、弟を犠牲にして王と胸を張れるかい？　自分だけ綺麗で、何も感じない僕かい？」

「う〝っ、そ・それは・・・」

言葉に詰まるリオンなのだが。　言ったトリッシュは、エリウィンの調べ書き留めた紙を見るなりに。

「リオン。　捜査とポリアンヌへの連絡を頼む。　それから、僕の事は“閉じ篭り”にして。　後、父上には話を通した方がいい。父上の協力が在れば、僕の仕出かしてしまった騒ぎも鎮められよう」

と、言うのだ。

リオンは、トリッシュが大人びた顔をしているのに驚き。

「あ・兄上・・」

「うん。　此処は、僕とエリウィン殿に任せなさい。　但し、ハレンツァの仇は、僕も一緒に取るからね。　僕の・・師だ。　彼は、僕の人生の師なんだ」

何時もは優しげでおっとりとしたトリッシュは、微笑を崩さない。
だが、今の彼は真顔だった。

（兄上・・本気なのか？）

自分が護ろうとする兄が、急に強く見えた瞬間だった。

トリッシュの言葉を受けたリオンは、弟としてこれからは兄の下に成る事を思い。

（“王子”としての兄弟は、此処で一旦お預けだ。　よし、見ていろ。　俺達に、付け入る隙が在ろうと、易々とは挫かれぬ所を見せてやるっ）

トリッシュから受けた言葉を、“命”として受け取ったリオン。
直ぐに部屋を後にし。　昼下がりの微かに残った薄陽が木漏れる空の下で、慌しさが溢れ返る王宮に戻った。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪リオンの駆け引きと、闇の裏舞台の騒動≫

さて。　トリッシュが引き起こした騒動は、リオンが王宮の表に戻っても続いていた。　その慌しさは、今度は逆にリオンには都合良く。　戻っていた密偵や情報を探す手下が戻ってたので。　私室にて打ち合わせを済ませてしまった。

そして、後は父親とポリアに面会するだけと成った彼であり。　暗がりの広がる王宮に出たリオンは、真っ先に父親であるクランベルナードへ謁見に向かった。

極夜と云う気象現象が、夕暮れを夜に変える。　平地で夕日の沈む彼方を見れば、淡い陽の残り香の様な明るさを伺えるが。　四方を湖や森などに囲まれる盆地の様な王都アクストムは、薄暗くなり始めるのも早かった。

冷え込む夕方。

国王執務室に引き篭もりがちのクランベルナードは、食事の量も少なく。　妃であるリオンやトリッシュの母親を心配させていた。

折りしも、クランベルナードに謁見を申し出たのは、ヘンダーソンの方が早く。　クランベルナードへ、リオンの専横が目立ち過ぎると密告を受けていた最中だった。

執務室のデスクの前に座り、頭を後ろに凭れさせる国王である。
その顔は憔悴し、寝不足の顔を虚ろにしたクランベルナー王は、

「リオンにも、アヤツの思いが在ろう・・。　好きにさせてやれい」

と、言うだけ。

しかし、食い下がるヘンダーソンは、

「陛下っ、リオン王子の横暴は、丸で自分が時期王にでも成ったかの様・・。　トリッシュ様の権限を無視した発言などは、目に余りますっ！！」

と、声を上げた。

トリッシュの傍に付けた二人が、リオンとのやり取りをヘンダーソンに伝えて来た。　トリッシュを動かしては、エリウィンの居場所を炙り出し。　そして、自分達の事を調べる回るリオンの動きを、ついでに乱そうと考えていただけに。　トリッシュの傍に付けた二人を引き剥がされるなど、ヘンダーソンにとっては“横暴”としか思えない。

近くの赤い暗幕の裏には、奥方も堪えた様子で控えていた。

（あぁ・・、リオン。　何を考えているの？）

王妃には、自分の影響を保持できるのには、ヘンダーソンの身も在ってと思っている。　何を画策する訳では無いが。　王妃である自分の云う事を聞いてくれる手足が、ヘンダーソン。　トリッシュやリオンなどの王子の行く末を憂いで居る王妃からすれば、ヘンダーソンはキレる用人なのだ。　そのヘンダーソンと我が子が仲違いなど、見たくない事態なのである。

其処へ。

「随分な言われ様だな。　俺が、何時に兄上を蔑ろにしたか？」

と。

この場の誰もが知った声だ。　クランベルナード王は、顔を前にし。　ヘンダーソンは、膝を折った態勢から後ろへ。

静かに開かれていた扉を潜り、リオンが入って来ていた。　薄暗い国王執務室なれど、声だけでも解るリオンの登場は、場の雰囲気を引き締める存在感が在った。

疲れたクランベルナードは、噂の渦中に居るリオンの登場に。

「リオン、未だ話中だぞ。　物事には、順序が在る」

と、弱い声で窘めを促した。

が。

歩み進むリオンは、ヘンダーソンが此処に居る事に利を見出した。

「父上、ならば・・。　何より私が先です」

クランベルナードは、何事かと。

「どうゆう事だ？」

「はい。　実は、ハレンツァ殿が亡くなる直前です。　このヘンダーソンとクシャナディース卿が伴い、ハレンツァ殿に圧力めいた話をされていたとか。　父上から、最近の不穏な出来事の調査を命じられた私としては、その事を強く問い質したかった所です」

そう言ったリオンは、此処でヘンダーソンへ。

「ヘンダーソン。　ハレンツァ殿へ、何を申された？」

と、問い質しに掛かった。

ヘンダーソンは、ムッとした顔をして。

「幾ら王子とは言え、言い掛かりとは卑怯なっ。　私が、クシャナディース様と一緒に、お亡くなりに成られたハレンツァ様を脅したと申しまするかっ？！」

クランベルナードも、話が話なだけに。

「リオンっ、それは実証が在って言って居るのか？　噂を真の様に言い、疑いを向けている訳では在るまいな？」

だが。　リオンは、ヘンダーソンの目に向けた視線を外さずに。

「父上、今に解りましょう」

と、だけ言い。　ヘンダーソンへ一歩寄って。

「ヘンダーソンよ。　その時の話の内容は、今は亡き父親殿から聞かされたエリウィン殿以下。　立ち聞きをしていたメイドに等に、大方聞かれて居る。　話に因るなら、ハレンツァ殿が冒険者と一緒に持ち帰った品。　その中にの物にどうこうとか。　一体、どうゆう事か？」

と、踏み込んだ詰問に入る。

すると、ヘンダーソンも口を返さずには居れなかった。　此処で正当な理由を出し、ハレンツァに疑いを向けるのがイイと。

「・・それは、王から受けた命令に因る末に御座います。　私は、あの旧王子邸から持ち帰った品々の管理を、此処におわすクランベルナード王陛下から直に承りました」

リオンは、ワナに掛かったと思い。

「ほう。　して？」

「えぇ。　しかし、一緒に運び出しに関わった兵士に因りますれば、持ち出した宝物には王子の印字等の品が在ったらしいと・・。　ですが、私に渡された品物には、その様な物は何一つ在りませんっ！　もしっ、ハレンツァ殿が勝手に抜き出したのなら・・、彼は反

逆すら考える者なのかも知れませぬ故に。　私は、公爵家クシャナディース様の立会いの下、その事を問い質しに面会したまでに」

ヘンダーソンがそう言うのに合わせ、クランベルナードの目がギュッと細まった。

そして、リオンも目を細める。

口を先に開いたのは、クランベルナードで。

「ヘンダーソン。　御主には、詮議を掛けられる身覚えは無いのぉ・・。　話は、此処まで。　控えよ」

と。

何かを言おうと、クランベルナードへ振り返るヘンダーソンだが。

「ヘンダーソン、控えよ」

と、クランベルナードは、直ぐに繰り返した。

「・・・、は」

反論した手応えが中途半端のままに、ヘンダーソンはこう言われた。

丸で、追い払われた感じである。

リオンは、ヘンダーソンが出てゆくまで見送る。

そして、戸がが閉められた。

デスクを鋏んで対峙する親子。

やや俯き加減のクランベルナードは、リオンへ。

「今の言葉・・どうゆう意味だろうか？」

「父上、偽りの裏返し・・・かと」

「ふむ」

「ハレンツァ殿は、アンソニー殿の身分を記した印字や王子の権限を証明する紋章の品を密かに抜き取り。　そして、私に直に預けました。　何でも、アンソニー殿が目覚め、この城に来た夜。　何者かが入れ替わりで、封印区域の内部に侵入しています。　モンスターに食われた遺体を密かに検めましたが、貴族の手の者と兵士らしき装備の者などが・・」

すると、クランベルナードはグッと顔を上げ。

「リオンっ!!!　この国はっ、そんなに乱れているのかっ?!　この平和は・・ただ在るのでは無いぞっ!!!!!　どれ程・・どれ程の犠牲が昔に有ったかっ・・・。　まだ・・まだ何かを策謀せねばなるまい時世かっ?!」

リオンは、ハレンツァを犠牲にした事に、自責の念を抱く父親の叫びを聞いた気がした・・。　だが、現実は解決を見て居無い。　父の為、兄の為、リオンは・・・。

「父上。　これが策謀だとしても、我々兄弟が取り除きます」

「リオンっ・・」

「今、ハレンツァ殿へ父上が命じた任務を、ご子息であるエリウィン殿へと引き継がせ。　その手伝いを兄上がして居ります」

「なっ・・」

驚くクランベルナードの思いは、暗幕の裏に控える王妃も同じ。トリッシュが、自分から何かを率先して行うなど、非常に珍しい事だ。　況して、不穏な危険に対して動くなど、今までの彼では在り得なかった。

リオンは、更に続け。

「父上、兄は・・。　いえ、時期王に成られるトリッシュは、私に捜査の実施を再度命じました。　我が兄弟二人で、ハレンツァ殿の仇及び、この不穏な事件の糸引く者を捕まえます。　どうか、今暫くは、知らぬ存ぜぬを決め込んで下さい。　それから、エリウィン殿を捜す宮中を、父上の御力で沈めて下さいませぬか？」

だが。　クランベルナードは、トリッシュに大した驚きが終わって居無い。

「あ・あの・・トリッシュが、そう言ったのか？　あの・あ・・トリッシュが？」

リオンは、一歩下がっては控えて。

「はい。　弟として、時期に王に成る兄上の命は、どう在っても偽れませぬ」

クランベルナードは、リオンがもう一線を引き。　王子として、弟として、これからも兄を支える覚悟が出来上がっていると見た。父親として、これほどに嬉しい事は無い。

「・・わっ・わわ・・解った。　それがトリッシュの命と在らば、それに従おう。　私は、エリウィンに蜜命を出したとして、これから数日はハレンツァの喪に服して篭る」

こう言ったクランベルナードは、リオンをしっかり見て。　瞳より一筋の糸を零しながらも。

「これから王宮の事は、お前と、トリッシュで仕切れ。　喪に服している間・・この父をっ・・政務に引き摺り出す事は、絶対に・・どうあっても罷り成らんぞっ」

今まで、リオンに事を任せる事は在っても、トリッシュには無かった。　病気がちで、ひ弱な印象の長男トリッシュは、王と王妃の過保護の傘に在った。　父として、王として、トリッシュとリオンの両名にこう言える時が来ようとは。　時期王をトリッシュに譲る時期を窺っていたクランベルナードにしてみれば、それは大変に嬉しい事である。

「はっ。　仰せの通りに」

「うむ。　して、セイルやアンソニー殿などは安全か？　ユリアやクラーク殿に、この国の汚事（おじ）で危険を及ぼすのは悪い。　しかと、アハメイルにも通達を出せ」

「はい、心得て居ります。　もうテトロザにその事を頼んで在りま

すれば。　明後日には、交代に向かう兵を増強して、腕の立つ騎士数人にも臨時の召集を」

「うむ。　全て任せる」

リオンは、一礼をして。

「父上、これで失礼致します」

「大儀であった。　トリッシュに頑張る様伝えよ。　お前も、怪我など無い様にな」

「は」

下がったリオン。

一人に成ったクランベルナードの元に、長年連れ添った王妃が寄る。

「アナタ・・」

「大丈夫だ。　ハレンツァの犠牲の影で、息子や若い貴族の成長を見せられるとは・・。　だが、ハレンツァの犠牲を無駄に出来ぬ」

「えぇ・・」

「お前には悪いが、これから起こる事は目を背けれぬぞ。　誰が首謀者であれ、誰が関わっていようが、私は断罪の行為だけは弱めぬ。　トリッシュへ引き継ぐ前の大仕事だからの」

「・・・」

黙る王妃は、言葉が繋げない。　ヘンダーソンは、自分の家系に繋がる者。　彼が疑われるのなら、その周辺。　つまりは、自分と身近な誰かも加わっている可能性が出て来る。　ヘンダーソンへ何も詮索をせずに返した我が夫の様子からして、怪しかった。

だが。　トリッシュが自分から何かに動くなど思いもしなかった。

ハレンツァとは対等に話すのが当たり前だったトリッシュにとって、今回の事件は成長に繋がったらしい。

（あぁ、何事も無きに・・）

悪い予感は外れ、良い部分の兆しだけを望む王妃。　都合の良い事なれど、人としての切なる我儘であろう。　そう、願いだった。

・・。

宮中では、トリッシュまで消えて騒ぎが拡大し掛けていた。

だが、クランベルナードが命令を出して、騒ぎは収まる。　そして、正式に数日の喪に服す宣言がされ。　王と王妃は、離宮に退去。

宮中の運営は、トリッシュとリオンの二人に任せられ。　その核として任命を受けたのが、ポリアの兄の二人。　長男のアルフォンヌと、次男のルシャルルム。

剛健な容姿ながら文武両道で、まだ３０半ばにして若き政務大臣を務めるアルフォンヌ。　そして、法律・祭事の大臣である策士・切れ者のルシャルルム。　この二人は、ポリアに会わなければ“不動の志士”と噂されるほどの堅物なのだが。　ポリアには、全く頭が上がらないバカ兄貴らしい。

王子側、王側、どの方面とも中立で。　貴族の中でも最も権威の高い公爵筆頭の家から、臨時の代理大臣が選出された。　この急激な変化に一番驚いたのは、クシャナディースとヘンダーソンだろう。
　もう帰宅しようかと云う矢先で、次々と王から命令が出されたのだから。　王室御用取次ぎ用人としての肩書きを持ったヘンダーソンが、全くの不知の中でである。

クシャナディースの私室で会った二人。

慌てているクシャナディースは、

「ヘンダーソンっ!!　今に発令された内容を聞いたかっ?!　何故っ、我に教えぬっ?!!」

と、ヘンダーソンに詰め寄る。

「解らぬっ!!　私にも、何がなんだか・・」

唖然として頭の中が混乱するヘンダーソンは、クシャナディースに詰め寄られてもどうしようも出来なかった。

ヘンダーソン以下、遠ざけられたお傍用人や役目に就く貴族などが揃い。　夜に成る頃に、国王執務室前に詰め掛け王に面会を求めど、騎士と兵士に阻まれ返された。

「命令をお聞きに成られていなのかっ?!!　どの様な用件だろうが、全てセラフィミシュロード様の御両名に通して頂きたいっ!!!」

押掛ける貴族達が、王への面会を阻まれ。　苛立ちの極みから王の近くに居る権威を振り翳そうとするが、全くの無駄だった。　何せ、騎士と兵士はリオンの手の者で。　その命令は、王から直に。　誰も逆らえない。

しかも、その支配の全てがポリアの家に集まった。　これは、リオンの計らいだった。　リオンとポリアの兄は、非常に考え方も似た王家を基準とし、王家に帰順した忠誠の念を持つからであった。

★

リオンは、後戻りは出来ない賭けを仕掛け。　父親を動かして、宮中をかき乱した。

乱れた縮れたものは、それぞれに元に戻ろうとする。　大抵は、成りを潜めると云うか、混乱を収める上で鎮まるものだ。　だが、その混乱で何らかの不利益を被る者が居るとするなら、その者は不利益を回避すべく動く。　表立って動かなくても、闇に紛れ、平静を装いながらも動く。

リオンは、ネズミの如く動く悪い虫を退治に掛かった。

そして、此処に動くネズミが一匹。

あの老人の下へ、変装した姿でヘンダーソンが訪れていた。　普段の気取った刺繍の入れられたマントなどは着て居らず。　街人風の

衣服に姿を変えてだ。

夜更けに近付く最中。　急な訪問で起こされた老人は、ヘンダーソンの格好を見て。

「ふふ、何だその姿は？　何か有ったか？」

玉座の様な椅子に座る老人が言うのに対し。　数段の階段を隔てた場所に膝間付くヘンダーソンは、示し合せたハズのクシャナディースが居無い事に不安を感じながら。

「御老っ、大変でございます」

「ん？」

宮廷内で起こった事を聞く老人は、その皺くちゃの顔を厳しいものにして。

「・・・。　ヘンダーソン、それは真か？」

「はっ」

此処に、ラヴィンはもう居無い。　あのジェノサイダーと云う暗殺集団と共に、南のアハメイルへと旅立ってしまった。　積荷の所在を突き止め、欲する物を持ち帰る為に。

「ヘンダーソンっ、まさか・・・露呈したのでは在るまいな？」

苛立ちを言葉に隠す老人は、そう身を乗り出さんばかりに云う。

老人の顔を恐れから直視出来なかったヘンダーソンは、少し身じろぎして引き。

「いえ、そこまでは・・」

と、言ってから、今度は縋る様に顔を上げて。

「ですがっ、リオンとエリウィンめは、少々感付いて居ります。私とクシャナディース卿でハレンツァに例の物の在処を聞いた事が、それに繋がったかと・・」

「なんとっ？　うぬぬっ、バカめがぁっ」

「申し訳在りませぬ。　やはり、苦労してでもトリッシュに聞かせるべきでしたっ」

「・・・」

歯軋りをした老人だが、ヘンダーソンへ。

「で？　我に近付きつつ在るのか？」

「いえっ、そこまでは。　恐らく、私とクシャナディースに・・」

「で？　如何するつもりなのだ？」

「はぁ。　最悪、クシャナディースに罪を着せて抹殺し。　私は、逃げる形を・・。　御老さえご無事であれば、企ては如何様にも出来ると思います」

「くっ、リオンとエリウィンの小倅を始末出来れば良いが・・。それをしたら、もう騒ぎは静まらぬ。　此処は、それしか手が無いか？」

「かと・・・。　ですが、上手く過去の王子の遺品さえ手に入りますれば、クーデターも可能かと。　今は息を潜めながら、その双方を狙い伺うに限ると・・」

「うぬ。　それに賭けるか」

「所で」

「なんだ？」

「あの始末をしている連中ですが・・・」

「あぁ・・、ラヴィンの残した一団か？」

「は。　よもやとは思いますが・・、エリウィンの身の回りに手を伸ばして居ませぬと心配してますが？」

「なぁにを。　ハレンツァの倅を預かるのは、セラフィミシュのご一族じゃぞ。　かの一族に手を出したとすれば、我の大義名分が砕け散る。　それは、断じて在る筈の無い事じゃ」

「おぉ・・。　それを聞いて安心致しました。　今、宮中の主は、トリッシュとリオンであり。　その手足として仕切るのが、かのご一族の若き次席御当主の兄弟両名。　もし、何か在りますれば、我々の息の根は止められましょう。　私の加担が解れば、それは王妃様にまで飛び火し兼ねぬ事態。　其処までは、・・今は其処までは

出来ませぬ」

「解って居る。　王妃のご一族は、我とも遠縁。　その繋がりが証明される今だからこそ、我は新生を狙って居るのじゃ」

「では、今晩はこれにて。　火消しに動きますので、御老はこのままに。　あのアハメイルに向かった者達から、何か知らせが在りますれば、呼び出しを」

「おう・・、方々に回す元手は在るか？」

「はい。　未だ、前に頂いた物が」

「おぉ、そうかそうか。　もし必要なら、取りに参れ」

「は」

老人は、ヘンダーソンを労う様に立ち去らせた。

（うぬぬ。　ハレンツァを殺したのは、些か早とちりだったか。今は、ラヴィンなども居らぬ。　アレの残した残党では、暴れるか殺し続けるのが関の山。　事態を収拾するなど、出来様ものか。ラヴィンが戻るまでは、このままの状態を貫く以外に無いのぉ。ヘンダーソンよ、上手く立ち回れ。　お前を始末する時は、我の安全が確実のものと成った時よ）

覚悟を再確認する老人は、右手の引っ込みに控える礼服姿の中年男へ。

「もう、今夜は休む」

「は。　では、寝室へお連れ致します」

長身で礼服姿の男性に立たせて貰う老人は、裏手の階段に向かいながら。

「所で、この二日程ユーシスが見えんが？」

「それは、ジャニス様の所かと」

「何と？　離れの中屋敷か？」

ヨチヨチと歩く老人へ手を貸す礼服姿の男性は、階段に気を配りながら。

「はい。　御命令を護ろうとしたユーシスですが、お孫のジャニス様に気に入られ過ぎた様ですぞ。　ヘタをすると、丸一日以上監禁され、男女の情事を強要されているとか・・」

「ふふ、アレもまだ若い故の。　ユーシスの調教され切ったカラダは、離れ難い魅力だ」

老人の手を引く礼服の男性が。

「連れ戻しましょうか？」

と、聞くのに対し。

自分が手解きをしたクセに、老人は驚くほど嬉しそうな笑みを浮かべ。

「放って構わぬ。　あのバカ孫は、父親にも、我にも似ぬ気狂い故な。　此方の屋敷に来られたら、迷惑で仕方ない。　ユーシスで釘付けに出来るなら、それも良かろう。　あの画策好きなジャニスには、丁度良い目晦ましだわえ」

「・・・承知致しました」

階段を降りて、寝室へ連れられた老人は、部屋の中に備わった手摺に身体を預けると。

「よいか？　この事は、内緒じゃ。　ワシの息子に知れたら、ちょいと厄介だからの？」

「はい。　心得て居ります」

「うむ。　情け無い事に、ワシの息子はどいつもこいつも不甲斐無い。　ジャニスの父親とて、アハメイルで国防に携わり、リオンの腹心を気取る阿呆・・。　他のバカは、ワシが自ら手を下して始末するに及ぶ愚か者じゃった。　気狂いの孫であるジャニスの子供には、ワシの意思を受け継がせるべく教育を徹底させねばなるまい。　９０を越えて、未だに心の落ち着く日々が来ぬとは、何とも虚しき事よ」

この話を聞かされる礼服の中年は、この老人こそが時代にそぐわない外れ者だと解っていた。　だが、高額の報酬に加え。　元は殺し屋の様な落魄れた自分を、今は用人に取り立ててくれた恩義も捨てられない。

「もう遅い頃合い。　早めに休まれませ」

「おうおう。　そうさせて貰うかの」

手摺を伝い、ヨチヨチとベットに向かう老人。　この老人は、見ての通りに移動が不自由。　部屋など広くても、殆ど入り口とベットの往復なので、部屋に改築の手が入っていた。

大きなベットに向かった老人を見届け、中年の礼服男性はドアを閉める。

（主の酔狂も困ったものだ・・。　まさか、此処まで手を伸ばしていたとはな・・）

この男性は、一時期別の仕事を与えられ。　本家のこの家には居なかった。　だが、ユーシスに新たな命令を出す中で、手が足りないと戻された。

正直、老人の言う国家新生の企画草案を聞き。　この男性は、夢物語を語っていると思った。　だが、自分を引き立てた人物で、もう抜き差し成らぬ所まで行動を共にしている。　老人の頼みで、老人の愛人が産んだ次男や三男を殺したのは、この男であった。　迷いも少なく、老人の語る酔狂を国に言い立てると脅して来た息子達だ。　殺して、然るべき相手だった。

が。　世界的に暗躍する悪党集団を雇い入れ、本当に国家転覆の様な真似事に邁進する老人には、この男性ですら少々手に余る。

（困った・・、どうすればいいか）

迷うに、答えの出ない事だった。

さて。　また別の場所では・・・別の影が動く。

その夜も更け始めた頃。

不穏な気配を、ハレンツァの死と云う形で知る国民だが。　王都の民の多くは、喪に服す証の黒い紋章を模ったブローチやワッペンなどを喪章とし。　国葬を受けたハレンツァの死を悼んだ。

ハレンツァは、その異名も然る事ながら。　クランベルナードやその前の王の窮地を、言葉通り身を挺して護った。　国を揺るがす事態になり兼ねない事も在ったし。　また、市民とも良く接し。　困窮する家族の若者などを、自分の組織する兵士に登用する事もした。　彼が勉学の面倒を見て、役人に成った者も居る。

貴族の中では、威張り散らさない庶民派の人気格の一人だっただけに。　斡旋所ですら、喪章を戸に張った。　斡旋所の主は、過去にハレンツァと事件を共にした事も在るだけに、当然の行いだったであろう。

そんな、ハレンツァの喪に服す王都には、酒場の営業も早め早めの店仕舞いが行われる。　普段より早い時間帯だが、無頼のゴロツキや冒険者を相手にする陰湿な裏路地の酒場以外が店仕舞いをし始める頃。

★

「おい」

王都の商業区中央。　やや寂れ、細々と営む店が並ぶ目抜き通りから外れた路地で、明かりも見えぬ夜の闇が支配する通りの一角。
真っ黒のローブ姿をした何者かが、突然の様に声を掛けられた。

「・・・」

何者かは、雪が左右の店の壁際に集められた通り上で振り返る。
すると、影の誰かが立っていた。　闇夜に慣れた目で見る限り、数人の集団の様だった。　自分を呼び止めた声は、明らかに男である。
数人の先頭に立つ声を掛けた誰かは、人通りの全く無い小道を行く何者かに。

「お前、誰の差し金で俺らを嗅ぎ回ってる？　依頼主を云え」

と、低い声で脅しを掛けた。

身じろぐ何者かは、何も言わずに逃げ出した。　明らかに、相手が誰か察しが付いた様に・・。

「逃げ切れると思うのかっ？」

鋭い口調で言ったのは、集団の先頭に立つ誰か。

その言葉は、只の脅しでは無かったと逃げた何者かが知るのは、直後。

「っ？！！！」

曲がり角へ向かって急いだ何者かだが、自分が到達する前に別の誰かが現れ。　行く手を塞がれたと解る。

「余計な真似をしやがる上に、諦めも悪いか？」

逃げた何者かの背後へ、先に現れた数人の誰かが近寄り。　先頭の男の声をした者が、こう云う。

「・・・」

前後の行く手を塞がれた何者かだ。　この路地は、建物と建物の間が狭く。　ヘタをすると雪に詰まって通れない場合が在る。

（仕方ないっ）

一か八か。　何者かは、右手の雪に封鎖されていない建物と建物の間に逃げようとするのだが。

「おっとっ！！！！」

黒いローブ姿の何者かが駆け込む前に、集団の先頭に立つ誰かが右手を振り上げた。　シュっと空気を切り、宙を走った何か。

「う〝っ・・・」

逃げようとした何者かの項に、鋭い何かが刺さった。

ドサッと道脇の雪の盛られた所に倒れ込む何者か。

「いいんですか？　急所でしたよ？」

倒れた何者かの背後に回り込んでいた影の誰かは、集団の先頭に立つ者へ言う。

倒れた何者かに近付く集団の先頭を行く誰かは、

「構うこたぁ無い。　どうせ、コイツも口を割らん。　それにジジィが死んで、まだ動かす奴なんざ～察しが付く」

「息子ですか？」

「多分な」

数人の影の誰か達は、倒れて呻く何者かを取り囲んだ。　うち一人が、倒れた何者かを軽く蹴飛ばすのだが。　全く反応が無い。

「死んだか。　ま、聞き出せなくてもいいや。　命令が有り次第、押し込む」

すると、屈んで刺さった刃物を引き抜いた一人が。

「え〝っ？！！！　マジですか？」

と、驚くのだ。

「なぁんだ？　怖いのか？」

すると、また別の誰かが。

「カシラ。　死んだジジィの家族が居るのは、あの“風のポリア”って異名を取る冒険者の家らしいですぜ。　腕の達者な使用人も多いみたいですし、当主も相当の腕前とか。　別の方法を取った方がイイんでないですか？」

「バカやろう。　正面からダメなら、放火するなり、人質取るなり遣り方あんだろうが」

「あぁ・・、そっちですか」

「全く、強い誰かでビビってどうする」

「へい。　ですが、勝手に大事は不味いんじゃないですか？」

「フン。　貴族の依頼は、制限が多くていけ好かねぇ」

刃物を投げ。　逃げる何者かを殺した誰かは、拭いを掛けられた刃物を奪う様に受け取り。　暗い夜道の一方へと歩き出す。

真っ暗な中で、その後姿を見る手下らしき集団は、

（・・・タカが外れてるゼ）

（何で、アイツがカシラに成れたんだ？）

（知らねぇ。　前のカシラは、野郎に殺されたって話だ）

（・・・）

（俺達も、そろそろヤバいな）

（あぁ。　組織に加担してる以上、逃げれもしない。　潮時には、逃げてぇ～よ）

（全くだ）

こんな会話をしながら、闇に消える残りの集団。　まだ、狂気の跋扈は続いている。

大きく二手に、王都と南の大都市に分かれた陰謀の手。　セイル達。

そして、リオン王子は・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪ポリアの居場所≫

ポリアは、今だにこの王都に残っていた。

さて、Kに語ったポリアの名前の一部は、非業の死を遂げた悲恋の女性剣士のものである。　一族の者のサードネームを摩り替えたもの。　正式には、ポリアンヌリファール・アルネクリス・セラフィミシュロードが正式である。　“セラフィ”家とも略されるが、その意味は“天の仕の加護”の意味で、ミシュは、“最高位”の古代文字の略。　ロードは、言うまでも無い王侯貴族の最上位の称号の呼び名の一つ。　ポリアの一族は、王族の中でも世界最古であり、存続する王侯貴族の中でも最古の大貴族である。

つまりは、古代の魔と神が入り乱れた大戦でも活躍した戦士の末裔でもある訳だ。

そして、今。　様々な大臣などを歴任したポリアの父親は、去年か

らアハメイルで行政権を持っては、リオンの片腕として政務をしている。　だが、その家柄の信頼から与えられた軍事的権威は、将軍を束ねる総帥の権限と同じもの。

もし、仮に現国王や時期の王と成るトリッシュ。　それに近衛騎士団長と総軍指令の肩書きを持つリオンに、何かの事態が在り。　軍事権限を行使出来る最高権限者が不在に成った場合が出たとする。　すると、ポリアの家を継ぐ当主がその代行を行えるのだ。　王の一族。　若しくは、その座に近き者を借りの王に立てた上で、総軍を動かし戦争まで行える。　万に一つ。　王に相応しい者が王族の生存者に存在しない場合は、５大公爵が話し合いを設け。　其処で異論が少なければ、ポリアの家の誰かが王に即位できる。

このポリアの代々の家督には、長男だから座れると言う訳では無い決まり方が在る。　過去には、男子の血を残らず絶やし、女子の血筋に婿を迎えた事も在るほど。　つまり、ポリアの家に生まれる事は、他の貴族とは違う意味合いを持つ。

その旧屋敷は、王都に幾つか在り。　母方の屋敷が貴族区の中央に一つ。　父方の旧本家と成っていた大屋敷が、王城に間近な場所で広大な土地を有して聳え立つ。

この旧本家屋敷は、借りと云う格好でポリアの兄が二人住んでいる。　だが、この屋敷の所有は、もはやポリア名義。　ポリアへ強引な結婚をさせようとした父親だが、去年に舞い戻ったポリアが結婚をド派手に蹴り。　そのゴタゴタでポリアの帰る場所の無くなるのを心配した兄弟３人が、父親の威厳を無視してこの屋敷の名義をポリアに変えた。

新しく中央の王都へ召還され、大役のお役目に就く事と成った兄弟

達は、母方の家と仲良くしながら旧本家を護っていた。

ポリアの父親は、もうポリアに対して父親らしき権威を失っている。
　妹狂いの兄弟に軒並み反発され、奥方に支えられながら自分の仕事をするのみの生活だった。

ま、その経緯は、後日に何処かで語ろう。

さて。　まだ、リオンの話を受け、国王がハレンツァの喪に服すと離宮に引き篭もった日の夜である。

夜も随分と遅くなってから、ポリアの兄の次男だけが馬車で騎士二人を引き連れて帰った。

長い敷地内の石畳の道を戻って来る馬車。

そのカンテラの明かりを見て、執事以下使用人達が出迎えに待つ用意を・・・。　と、何時もの形式的な出迎えが始まると思いきや、出迎えに出て待つのは、執事と数人の用人やメイドのみ。

一方。　その広さだけで、下手な小さい屋敷など入ってしまいそうな・・・。　そう思わせる広い空間を占めるロビーへ、中央の大階段を降りるのは、ポリア。　普段着の白い衣服ままだが、剣を腰に帯び。　イルガを従えて階段を降りて来る。　執事達が門を開いたりする音を丁度聞き、兄を出迎えようかと気が向いたのである。

しかし、それまでの使用人全員が起きての仰々しい出迎えを無くしたのは、ポリアの一言。

“一々寝てる使用人まで起こす必要在る訳？”

ポリアの睨みを受けた兄弟は、即刻見送りや出迎えを簡易的に変えた結果が、たった数人の出迎えである。

エリウィンの家族他、ハレンツァの一家全てを護る為に、自分の屋敷へと招き入れたポリア。　悪党に何人も傷付けさせない為に、自身も仲間とこの屋敷に逗留する事を決めていた。　偶に気付けば、こうして兄の帰りに出迎えるが、仲間やハレンツァ一家の気兼ねはさせない。

さて。　表の大扉前に馬車が到着し。　門へと上がる階段に横付けされた馬車から、ポリアの兄妹で次男のルシャルルムが降りる。　知的で喰えない策士の様な苦味走った色男の彼は、齢（よわい）２０歳で王国法律や外交制約などをを全て諳んじ。　更には、あらゆる裁判にも立ち会う権限を持つ。　その物事を冷徹なまでに読み解く所から、冤罪になりそうな事件を白紙に戻し。　再捜査を発令する事も平気で厭わない。

“歪みを許さぬ法律の申し子”

等と囁かれる冷血漢とも。

「・・・」

降りたルシャルルムへ、執事の老人が一礼し。

「お帰りなさいませ。　直ぐ、食事も湯も用意出来ます」

と、言えば。

「そうか。　では、湯を先に。　それから、お客が居る。　ポリアンヌに会うから、用意を」

と、全く感情の篭らない冷たい声で言い放つ。　知らぬ人が見たら、何と醒めた口調の人物かと思うのだが・・・。

「ルシャ兄様。　私に客ですか？」

ポリアが、丁度階段を上がった扉の狭間に出た所で言う。

すると、

「んっ？　嗚呼っ、ポリアンヌぅ～っ！！！！」

突然に、ルシャルルムが色めき立った声を上げ、執事を無視して跳ね除けようとばかりに動き出す。

（は・始まった・・）

使用人達一同の落胆に似た思いが、声に成りそうな程に一つに成って上がる。

馬車を降りたルシャルルムは、礼服に似た正装にシルク地のマントを靡かせた姿で階段を2段飛ばしで駆け上がり。　ポリアの前に来ると、ポリアの身体を見回して。

「大丈夫だったかいっ？！　御腹空いて無いかい？　夜はしかり食べたかい？　眠くないかい？　イルガはちゃんと言う事聞いたかい？　外を出歩いたりしてないよな？　誰か、変な男に色目を使われたりしてないかい？　これから一緒に、何か食べるかい？　云々・・

・」

凄まじい勢いで、思うままに話し始めたルシャルルム。

「・・・」

見るに耐えない兄の情け無い姿に、目を細めたポリアは頭を抱えた。

後ろに控えるイルガは、こうなったらポリアの声以外は聞こえなく成るルシャルルムに疲れ。

（う～ん。　久しぶりに見ても、う～ん・・・）

だが、長男はもっと凄いから、一人なのがまだいいと思えた。

ポリアは、細めた目で兄を睨み。

「あ～に～う～え～」

と、声を低くして威嚇する様に言うと・・・。

殺気じみたポリアの気配を感じ、ハッとしたルシャルルム。

「あっ、あああ・・・、済まぬぅぅぅ～」

と、その場に頭を抱えて蹲る。

使用人や騎士などは、通常のルシャルルムの姿とは明らかに違うその様子に呆れるばかり。　誰か別人を見ているみたいで、身動きすら出来ない。

ポリアは、変わり果てた兄へ。

「所で？　お客って誰？」

「あ、おぉっ、忘れてた。　お前を見たいという同僚さ」

ポリアはおろか、イルガですら、この夜中に間近の頃合いに、そんなどうでもイイ用事で客が来るなど失礼にも程が在ると思うのだが。

ルシャルルムは、馬車の脇で腕組みをする黒いローブの何者かを見て。

「彼だ。　ま、私の心許す同僚だから、快く会ってやって欲しい」

と、言う。

ポリアとイルガは、その顔をフードに隠した人物を見る。

（何と云う・・、この様な夜更けに顔を見たいなどと・・・）

不満と云うか、無礼を嫌うイルガだが・・。

案内をされ、頷きと共に腕組みを解くその人物は、大扉前の階段を上がり出した。

（あ！）

ポリアは、その身のこなしや背丈などで、誰か直ぐに解った。　そして、諦めた顔色をし。

「ま、ルシャ兄さんの“ご友人”なら仕方ないわ。　別室で、ゆっくり話ししてあげるわよ」

と、デレデレする兄を見返す。

「あぁ～ポリアンヌ、何と優しい妹だぁ～」

今にもポリアへ抱き付きそうなルシャルルムだが、ポリアはさっさと翻り。

「イルガ、お客さんと会うわよ。　奥の特別な応接室で接待してあげるから、熱湯持って来て」

「はぁ？」

イルガは、一体何事かと思うのだが・・。

ポリアは、歩き出しながら手を振り。

「いい？　熱湯よ。　冷たい厨房の竈に掛かってるヤツを、そのままだからね。　沸かすの面倒だけど、到底直ぐに飲めない不味い紅茶出してあげるわ」

何とも意味の解り難い事を言うポリアの後を、ただ着いて行くロープの人物は、ガックリと肩を落とし。

（おいおい、俺が猫舌だって知ってるだろうに・・。　本当に、煮くらかした紅茶を出すんじゃあるまいな？）

この人物、ポリアと好みを知り合う仲なのか？

ポリアは、無用心にも面体の解らない人物を連れて、正面の大階段の脇を通り過ぎ。　裏手左の扉から廊下へ。

だが、流石は世界最古の大貴族の筆頭であるポリアの屋敷だった。　廊下に出れは、正面の壁一面がガラス窓。　雪化粧した中庭を見れ。　廊下に敷かれた一枚絨毯も黒い最上質の一級品である。　天井の高さや、古い様式のレリーフが天井や柱に描かれ、屋敷そのものが美術品の様な物である。

ポリアは、廊下を左に折れて応接室に。　一緒に後を着いて来た面体の解らない人物を一室に通すと、ポリアに従う様に着いて来た別の年配使用人に。

「もういいわ。　今夜は、寝て。　後は、私とイルガがやるから」

「え？　あ・・ポ・ポリアンヌ様、お一人で・・お会いに成られるのですか？」

「大丈夫よ。　変な真似したら、裸で外に追い出すから」

「あ・・・はぁ」

初老に入ろうかと云う使用人は、面体の解らないローブ姿の人物を怪しんだのだろう。　何せ、ポリアの美貌は二つ並べるのが難しい程。　マルヴェリータの様な魅力的な大人びたのも素晴らしいが、ポリアの綺麗さはずば抜ける。　だけに、毎日貴族が御近付きに成りたいと面会に来るし。　それを追い返している彼らからするなら、心配も一入だろう。

「では、今夜はこれで・・」

渋々の様に引き上げてゆく彼を見送ったポリアは、部屋の中に戻った。

ドアの在る部分以外の四面を本棚に囲まれ。　然程に広くも無い部屋なのだが。　入って来た奥の手の本棚に行くポリアが。

「一国の王子様が、態々下々の家に来るのに変装するの？」

と、言うと。

「バレてたか」

と、ローブのフードを脱ぐのはリオンである。

ポリアは、本棚の中列。　黒く重みの在りそうな本を奥に押し込みながら。

「身体つきで解ったわ。　リオン。　私が１２から１６まで、アンタとも修行してたのよ？　最も、普通に子供時分から付き合い長いしね」

と、言えば。

微笑んだリオンは、一つ頷いて。

「言えてる」

だが。　其処で、本棚がゴリっと動いて奥に引っ込む。

「ほう。　隠し部屋か？」

少し驚いたリオンは、そう言うと動いた本棚の方に向かった。　見れば本棚がずれた間には、人一人通れる暗い廊下が広がっていた。

ポリアは、壁掛けのランプ一つを手にすると。

「そ。　この下は、地下街に出るの」

リオンは、“街”と聞き。

「地下・・街？」

「そうよ。　このお屋敷の地下は、硬く厚い岩盤で出来た避難用の地下街に通じてるの。　使われて無いけど、むか～し戦争時の避難場所としてのね」

「其処で・・・話すのか？」

「あ～、私が１４歳の時に偶然見つけてね。　イルガと二人だけで、その一角に秘密基地みたいな隠れ家作ったの。　心配しなくても大丈夫、キレイだから」

リオンは、ポリアが随分と自分の来た意味を理解していると思う。

「秘密の話をしに来たのは確かだが・・・、凝るな」

「なぁに言ってんのよ。　ウチの使用人の下男二人は、雇い入れ先

がヘンダーソンの口利きなのよ」

リオンは、ヘンダーソンの名前が出た事に驚いた。

「本当か？」

「兄さん達の話だと、このお屋敷に上のアル兄さんが住み始める時に、向こうが遣わしてくれたみたい。　要職に就く兄さんだから、連絡係と云うか取り込み口だろうって」

呆れたリオンは、相手の目論見を解っていて許したのかと訝しげ。

「解ってて、そのままに？」

「うん。　その二人を逆に見張れば、色々と好都合なんだって。ヘンダーソンとの間に波風を立てると、変な因縁を王様や王妃様に言うでしょ？　甘んじた様に見せ掛けて、逆に利用させて貰っているってさ」

「なんと・・、流石に冷静沈着が有名なアルフォンヌらしい」

「ホ～ント。　アレで、私に対してもっと醒めてるとイイんだけれどね～」

暗い廊下に向かうポリアとリオン。

ポリアの話では、今さっき返した初老の使用人の下に成るのが、その遣わされた二人とか。　あの返した初老の使用人の話を聞けば、勝手に動き出すかも知れないからと。

もう、この屋敷を護る剣術に秀でた何人かの用人が、二人を絶えず見張っているらしい。　此処最近のヘンダーソンの要求は、アルフォンヌとルシャルルムも何かと煩く思っていたとか。　何か裏が在るのではないかと、二人で話し合って居た所なのだとか。

さて。　狭い石の階段を伝って地下に降りると。

「此処は・・・」

リオンは、急に外に出た様な開放感を覚える。　シーンとした静寂と暗闇が支配をする夜の外へ出た様な・・。

「リオン。　こっちよ」

潜り出た壁沿いに歩き出すポリアで。

後を追い出すリオンだったが。　直ぐに此処が外では無いと解った。　空気に動きが感じられず、薄く見える足元のしたには、白い埃の様な堆積物が見える。　だが、右手に広がる空間に、何か塔の様な歪みを見たので。

「もしかして、ポリアンヌ・・。　此処が計画で作られた“アマントシェルティタ”（潜る格納庫）かい？」

「そうよ。　このまま向こうに行けば、王城の方にも行けるみたいね。　ただ、街の方はもう崩落で潰れて、その後土砂を入れて埋め立てたみたい。　此処は、上に乗っかってるのが蓋って云うか、屋根代わりの我が敷地のみだから」

「・・、初めて足を踏み入れたよ」

「へぇ〜。　王都一の探検家だったリオンでも、まだ知らない所在ったのね」

「あぁ・・。　だが、あの黒く聳える影が彼方此方に見える感じがするんだが？」

「それは、建物よ」

「建築物が在るのか？」

「うん。　岩の柱の中を刳り貫いて、上を支える柱で在りながらも、人が入れる部屋に成ってるのよ」

「ほう。　ん〜、一回見て回りたいな」

「凄い広いわよ。　向こうの奥に行くまでって、此処から王城の表門を通って、ヴィクトリーロードに行くまで在るぐらいに長いもん」

「なんだ？　キミは行ったのか？」

「えぇ。　イルガと二人で、何度かに分けて探検しちゃったわ」

「チィ。　教えてくれればイイものを・・・」

ポリアは、子供みたいな事を言うリオンに呆れ笑いを見せて。

「リオンと剣術を練習してたのって、南のアハメイルじゃない。こっちに来るのを偉い嫌ってたの・・・誰だっけ？」

「う〝・・それは」

リオンは、テトロザと共にその頃は指令副長官か何かの肩書きで、アハメイルに赴任。　兄に王の座を渡すと云う意思表示も在るが、見合いの様な晩餐会やパーティー三昧の腑抜けた日々を毛嫌いしていた頃だった。　アハメイルから王都アクストムに帰るなど、仕方の無い国式行事の年末年始の式典ぐらいで。　格段の用件でも無い限りは、冒険者として旅をするか。　副指令の肩書きで、軍事訓練を乱発するか。　とにかく、暴れん坊の名を欲しい儘にした彼だった。

ポリアの家の土台とも云える石の壁が左手に消える時。

「ホラ。　正面に見えたアレ」

「ん?」

リオンが前方を見ると、薄っすらと影が立体的に凹凸を見せる。何か、建物が在るのだろうか。

「屋敷か何かか?」

「そうよ。　有事の際は、あそこがうち等5大公爵及び王族が集まって、対策を話し合ったり命令を発する司令場と成る別邸なんだって。　まだ、モンスターが襲来してた頃から計画だから、年月はとんでもない経過をしてるだろうけどね」

近付くにつれて、それは宮殿の小さなものと解る。

「こんなものが・・な」

「最近、ウチの書庫でその文献を兄さんが見つけてね。　この前に文献で調べたら、何度か地下都市の目的用途が変わるに当たって、密かに改造の工事してたらしいよ」

外壁を潜り抜ける大門前に立つポリアは、

「此処・・・王都に来た時のアタシの避難場所だった・・」

と、しみじみと云う。

リオンは、強引な逢引を強要され掛かったり、犯されそこなったりと、女身故に、変な危険も多かったポリアの片意地を張った生き方を見て来ている。　あの兄で在る二人が今もポリアを心配するのは、その悪い手が幼い頃からのものだったからだ。

（ポリアンヌの苦労もまた、俺達王族と変わらないな）

過去にリオンはその手で、ポリアを連れ去ろうとした貴族の息子を斬って捨てた事もある。　生じ剣術が好きなポリアなだけに、その身を連れ去ると成ると大掛かりに成ろう。　イルガも傍に居るから、本当の力付くか、卑劣な策謀で。　美貌が際立ち過ぎて、年配・の男性からも変な好まれ方もした彼女だから、仲の良かったリオンでも妹の様に心配した。

確かに、特にこの王都では、ポリアは別格である。　リオンの父親である国王クランベルナードがポリアを欲し、養女にしたがった経緯がその原因。　しかも、リオンやトリッシュとも平気で会えるポリアは、権力拡大を狙う貴族からするならこの上ない存在。　正直、家を飛び出して冒険者などしているなんて、口だけではどう転んで

も信じられない所なのだ。

リオンは、ポリアを在る意味本当に妹の様に思っている。　一緒に剣術を磨いた間でもあるが、父親である王が娘を欲していた所も在るだろう。　もし、ポリアの身に何か在れば、単身で火中にでも飛び込める。

不思議な魅力を持った妹の様なポリアだから。　リオンやトリッシュも頭が上がらないのである。

さて。

大門を潜ると、石で出来た宮殿の一角に明かりらしきものが。

ポリアは、

「さ～すがはイルガ。　理解してるわ」

と、云った。　扉の無い宮殿の入り口を潜り。　埃の体積した謁見の広間を抜けて、右手の扉の枠を潜る。

「ほお・・、これは」

リオンは、寒いながらに声を出した。　今まで見えていた白い息が伸びるのが、見えなくなる。　宿屋の５人部屋に相当する部屋に、ソファーや椅子が置いてあり。　奥間の古い竈には、火が入れられていた。

「ポリしゃんっ、此処ってすっごごぃいいーっ」

先に座ってたシスティアナが、子供の様に輝かせた目で云って来る。
システィに微笑んで頷いたポリアは、
「イルガ～、みんなも連れて来てくれたのね？」
一方。　竈の前に立つイルガは、
「はい。　此処に来る前に、庭で皆に見つかりまして」
と、言ってから。　顔を見せているリオンへ。
「ようこそ。　汚い所ですが、ソファーなどは綺麗ですから。　空いている所へどうぞ」
ポリアは、急に温かいこの部屋に仲間が全員揃っているので。
「みんな、リオンよ。　私に態々会いに来たみたいだから、な～んか話在るみたい。　事に因ったら協力するから、一緒に聞いて」
と。
壁際の一人席に座るのは、深緑のスカーフベールを頭と肩に回す魅惑の美女マルヴェリータ。
「イルガ。　顔の見えないお客って・・リオン様だったの？」
「みたいだ」
イルガは、今解ったのでそう返した。

他には、鎧などは脱いで剣だけ持って来たゲイラーも居て。　システィアナとヘルダーの間にて、大き目の三人で長掛けのソファーに座っていた。　リオンへ頭一つ下げた後に。

「しっかし、こんな凄い秘密基地かよ。　ポリア、スケールがケイみたいだ」

横で頷くヘルダー。

天然の岩盤を刳り貫き。　手を掛け宮殿に仕立て上げたこの建物。　部屋数も多いが。　一階の部屋の所々にベットなどを置いて、ポリアは休憩場所として遣っていた。　いや、貴族の習慣が色濃いこの王都で、此処がポリアの逃げ場と云うか。　居場所だった。

システィアナは、秘密基地を鵜呑みにしており。　何故か、興奮している。　もし暇を持て余そうものなら、この宮殿はおろか地下都市の方まで行ってしまいそうなソワソワ感を見せているのだ。

イルガがお湯を沸かし。　ポリアは、紅茶の茶葉が入った入れ物をイルガの脇から取りながら。

「リオン。　その一人席にでも座って」

「あぁ・・、大きな椅子だな？」

木で作られたその椅子は、普通の椅子より二周りは大きい。

「うん。　父方の祖父のよ。　少し壊れてたから、バラして直したのを此処でイルガと組み立てたの。　凄い時間掛かったわよね？」

イルガは、一つ頷き。

「ですな。　釘も必要ない組み立て方なのに、お嬢様が釘を・・・」

そんな話に、

“そうだったかしら？”

と、言わんばかりに首を竦めるポリアであり。

見て呆れ、肩を竦めたリオン。

座ったリオンに、ポリアは言った。

「そのよゆーの顔を見る限り。　姿の見えないエリウィンさんとかに、何か危険が在った訳じゃなさそうね？」

「あ？　あぁ。　実は彼には、国葬の夜からハレンツァ殿のしていた仕事を引き継いで貰った。　父親の敵を討つ事にも成るから、必死に成ってるよ」

マルヴェリーラは、心配する家族を見ていただけに。

「それなら、もっと安心の出来る一報でも下されば・・」

だが、そこにポリアが。

「ハレンツァのおいじちゃんが受けたって・・。　もうあの人は、引退した騎士とかが席を置く老院に入ったハズでしょ？　それって、

アンソニー様の一件に関係有り？」

リオンは、流石に王族とも気兼ねの要らない付き合いが出来る姫君を見て。

「ご名答だ、ポリアンヌ。　父上が、信頼の出来る数少ないハレンツァ殿に頼んだのだ・・。　兄トリッシュの理解者であるハレンツァ殿だからな。　権力にがめつい貴族の中では、あの方は中立で在るし。　何より王族を、そして兄を第一に考えるからな。　確かに、俺から見ても適任者だ」

と、言い。　更に、ハレンツァの一族が、嘗てはアンソニー王子とその兄である国王に追放された一件を語って聞かせた。

話の最中ティーカップに紅茶を注いだポリアは、石質感丸出しの低いテーブルに運び。　リオンの話が終わると。

「そっか・・、じゃ～極秘の仕事だったんだ」

「あぁ。　此処だけの話だが。　セイルに護らせた宝物の中身に、アンソニー殿の身分を示した物を全く残してない。　だが、暗躍する何者かは、在ると思い込んでいる。　宝物を欲する何者かを極秘に調べ、首謀者を動く手下から手繰って行こうとな。　ハレンツァ殿が、密かに私の元に王子の証などを持ってきては、そう話し合った」

紅茶を手にしたポリアは、イルガと座るソファーに腰を下ろし。

「その所為で、自分の命を落とした・・」

最悪の事態に至っただけに、リオンは言葉を繋げず、黙った。

だが、ゲイラーが少し憤り気味に。

「王子、そこまでする必要が在ったんですか？」

と、問うと。

「・・・、全ては兄上の為よ」

マルヴェリータが直ぐに。

「時期国王に成られる？」

「あぁ。　父は、数年以内に王位交代を考えている。　兄上は、内面は別にして、表はひ弱そうに見えるし。　人の話を聞く穏健派・・・。　国難になりそうな不安要素は、出来るだけ父の時で減らしたい。　我が一族の総意・・・。　無論の事、ハレンツァ殿も我々と同じ様に思っていた」

ポリアは、平和に成った今で。

「今の平和は、商人の台頭で少し混乱も在るけどね。　結構・・、悪くないと思う。　でも、それを覆したい誰かが居るのね？」

「恐らく」

と、言うリオンは、更に続けて。

「と云うか、今は王族に強い権限が在る。　だが昔は、有事の際以

外は王族は象徴であって、代わりに貴族が国政運営全ての権限を持っていた。　一部の強権主張派には、その返り咲きを期待する者も・・・」

「なんか、すっごい下らない・・・」

そう言うポリアが、世界最古の貴族出なのが皮肉に成るかもしれない。

だが、リオンは、ポリアへ。

「ポリアンヌ。　今、エリウィン殿に兄上が協力し、過去の事を洗っている。　ハレンツァ殿は、エリウィン殿を逃す前に言った。“過去の追放された貴族を調べろ”と。　あの兄上が、自分から協力をして来た。　父上は、その全てを知って、俺達兄弟に王宮の全てを預け。　そして、キミのお兄さんにその舵取りを任せた。　もう・・、こうなっては後には退けない。　ハレンツァ殿を殺害した者を含め、その首謀者も潰す。　どうか、その事が片付くまで、エリウィン殿のご家族を預かって欲しい」

ポリアは、短く。

「解ってるわ」

リオンは、ポリアの仲間一同にも頭を下げ。

「皆にも、迷惑を及ぼす事になるが、この通りだ」

ゲイラーやヘルダーは、一国の王子が自分達の様な者に頭を下げるなど在るのかと思う。

リオンの様子を見て、マルヴェリータは、
“男は勝手だ”
と、つくづく思うのだが。
ポリアは、リオンへ。
「もういいわ。それより、調べは何処まで進んでるの？」
リオンは、ポリアに事を隠す気に成らなかった。
ハレンツァの言っていた追放を受けた貴族の内、今に残るのは2家となり。ハレンツァにヘンダーソンとクシャナディース卿が圧力を掛けた事等を話す。
ポリアは、話にヘンダーソンの名前が出て。
「ヘンダーソン・・ね。ホント、名前聞く度に嫌に成るわ」
と、嫌悪を目に露にした。
システィアナが。
「ポリしゃん、その人ってわる～い人？」
と、聞けば。
イルガは、飲みかけた紅茶の手を止め。

「お嬢様が、初めて決闘を挑んだお方だ。“試合”だの、“手合わせ”じゃない。本気でな・・」

リオンは、結構古い話で思い出し。

「あぁ・・、ポリアンヌと彼は、ある意味因縁の間柄だな」

と。

更にその意味を尋ねたマルヴェリータやゲイラーで。リオンやパリアが話すその内容は、こうだ。

ポリアが８歳ぐらいだろか。幼い頃に謁見した国王に気に入られ、気儘に王都の王宮を動き回れたポリア。この頃から剣の使い方を父方の祖父に頼んだり、リオンの兄のトリッシュと居るハレンツァに頼んだりしていた頃だった。

さて、こんな元気なポリアが宮中に居る間、ポリアが好んで世話をせがむメイドが居た。アメリス婦人と云う４０歳を優に超えた女性で、でっぷりとふくよかな容姿をした大柄なメイドだった。確かに、お世辞にも美しい人物では無かったが。大病を患い寝たきりに成った夫を抱えながらも、宮中で働き。その大らかで慈しみ深い母性愛は、当時のポリアには何より嬉しかったものだった。

ポリアを護り続けるイルガは、この女性と大変に仲良く。何度もポリアの我儘に困ると、アメリス婦人に相談した程だった。

二人の子供を産んだアメリス婦人は、活発で片意地を張るポリアの心を和ませる数少ない人物だったと言っていい。

だが。

彼女が仕事に追われ、背後を通ったヘンダーソンに気付かなかった事が起こった。　ヘンダーソンは、王族の目の前ではその成りを潜めるが。　貴族と一般の者の線引きを異常に拘る所が在った。　そのヘンダーソンの付き人は、気付かなかったアメリスを怒鳴り叱責した。

アメリス婦人は、必死に謝ったらしい。

だが、彼女を首にすると言い放ったヘンダーソンへ、彼女は縋り付いて許しを請おうとした。　その時、慌てて手を伸ばしたアメリス婦人の爪が、掴もうとしたヘンダーソンの手を薄く切った。

血の滲む手を見て激怒したヘンダーソンは、人目の無い場所だった為に暴力を振るったらしい。　殴られたアメニス婦人は、鼻血を出して壁側に片付けられた椅子の群れに突っ込んだ。　運の悪い事に、片目に椅子の足が・・・。

ポリアは、二月程してから王都でアメニスが死んだ事を知った。　大怪我をしたアメニスを、ヘンダーソンは放置したらしい。　怪我が酷く、瀕死に近い様子で連れ込まれた寺院で、即座に魔法で傷を塞いだのだが。　折れた椅子の木片が残っていた傷は、その後に化膿したらしい。　魔法で傷口は塞げたが、目の奥で化膿した膿までは治せる訳も無く。　寝たきりのままに半月で、アメニスは息を引き取った。

ポリアの性格からして、ヘンダーソンを許すなど到底在り得ない。　宮中の中、ヘンダーソンを国王の目の前に呼び出し。　クランベ

ルナードを見届け人として、ポリアは勝手に決闘を申し込んだ。

ヘンダーソンも、たかが幼い少女とポリアをそれまで見ていたが。剣を抜き払い、引き止める王や王妃にハレンツァも居る中で、自分を斬る気構えで居たのには心底驚いた様だった。泣き叫び、自分の刑死も厭わないと暴れたポリアの悲しみは、如何様だったか・・。

結局、アメニスが家族に話した事実は、証人も居無いので証明が出来ず。ヘンダーソンは、メイドが勝手に転んだと主張しぬいた。

しかしこの瞬間より、ヘンダーソンがクランベルナードに見えぬ距離を置かれたのは、事実である。ポリアの気構えを理解し、ヘンダーソンの言い訳を国王が信用し切らないが為だろうと、密やかに噂が立ったほどだった。ヘンダーソンは、専ら王妃の御傍用人として存在する事に成る。

以来、王宮に来たポリアの前に、ヘンダーソンが姿を見せるのは極稀で。ポリアも、ヘンダーソンだけは長年の仇敵の様に対峙して、何時までも歩み寄りを微塵も許さなかった。

さて。アメニスの子供は、実は二人とも女性で。彼女の夫の面倒にと、ポリアが自分の持ち金を出した事も在る。ポリアの面倒見の良さは、この出来事で芽を伸ばしたと言えよう。

そして何を隠そうか。アメニスの長女は、ポリアの長兄に使え、王宮に従う執事の奥方に成っている。今でも厨この屋敷の房を仕切る料理人の一人だった。ポリアへ要望を告げたり、世間話や相談をし合える関係で。メイドなど使用人女性の中でも、チョット格上の存在なのである。

そして、その次女は才色兼備であり、ポリアの兄を通じて貴族に嫁いでいる。　一般の女性が貴族に嫁げるなど、チョットした出世の様なもので。　ポリアとポリアの兄三人の身の回りを世話していた次女は、ポリアにも意見を静かに言える有能なメイドであった。今の旦那に成る貴族の男性に見初められた彼女だが、分を弁える上で結婚を幾度も断る。　その結婚を決める前と云ったら、もう相手に土下座を幾度させたか。

アメニスの二人の娘は、非業の死を遂げた母親を思いながらも。ポリア一家には、母親譲りの穏やかな態度と礼節を以って接した。　ポリアが、貴族ながら一般の人を差別しない目を養ったのも、これが大きな要因の一つであった。

アメニスの事を思い返したポリアは、リオンへ。

「リオン。　私、ヘンダーソンを獄中にぶち込めるなら、どんな協力も惜しまないわよ。　アイツに泣かされた宮廷仕えの人、ホントに何人居たか・・・」

「俺も、それには強く同意したいね」

そう言ったリオンは、紅茶を飲んだ。　王家の一人として、ヘンダーソンを快く思って居無い言い回しである。　人や相手の位で態度を帰るヘンダーソンは、王子達も好まざる相手だった。

だが。　その後に渋い顔をするリオンは、カップを見ながら。

「しかし、正直な所だ。　ヘンダーソンとクシャナディースの繋がりが、今一解らんのだ」

と、いい。　クシャナディースが何処からかの影響を強く受け、公爵に成った事や。　その口利きに、何人かの貴族が関わっている事も云う。

ポリアは、こうゆう事を突き止めるのに敏いリオンを知るだけに。

「解ってないの？　リオンにしては珍しいわね」

「本当に、申し訳ない。　それが、影武者や馬車の替え玉などが巧妙なのだ。　あの二人、何処からか帰って来るのは目撃させるクセに。　行く場所を特定させない配慮だけは、相当に気を遣ってる」

「目星は？」

「ん。　挨拶回りや・・祝賀の席などで交際をする貴族を絞り込んだのだが、どうもな。　一人、別格で怪しい人物は居る」

「誰？」

「ミグラナリウス卿のご隠居だ」

するとポリアは、ヘンダーソンの時よりも更に嫌な顔をして。

「わぁ～、あのモンスターか」

「知ってるのか？」

「知ってるも何も・・。　ねぇ、イルガ」

ポリアに言われたイルガは、何とも難しい顔で。

「えぇ・・」

リオンは、イルガに。

「イルガも知っているのか」

「はい・・。　もう、１５年以上前に成りましょうが。　或る祝賀の席で、お嬢様の護りをしていた頃に・・一度だけですが」

「たった一度で、今まで覚えているとはな・・。　随分と印象の在る出会いだったか？」

するとイルガは、主であるポリアを一瞥してから。

「いえ、一番嫌な印象で御座います」

と、リオンへ

「ん？」

興味を引かれたリオンが聞き返す素振りを見せれば、其処へポリアが。

「あのオジイチャン、まだ１０歳ぐらいのアタシに言ったのよ」

“ポリアンヌ姫、御家の当主に成る気は御座らぬのか？　貴女の様な強い当主は、貴族界でも面白きこと。　その気在らば、私に声を・・。　・・ふっ、ふぁふぁふぁ、冗談じゃがの”

何とも気味の悪い話で、リオンは目を凝らし。

「フム・・」

「あのオジイチャンだけは、ソッコー死んで欲しかったわ。　今に思い返すと、凄く欲望を掻き立てる言い方するの。　私は気味悪かったケド、野心の強そうな貴族とは仲良かったみたい」

「そうか、そんな事が在ったのか」

「だって、あのとき・・。　記憶が確かなら、あのオジイチャンが私に、自分の孫と結婚しないかって言った後よ。　ホラ・・今年の春先に刑死した5大公爵の・・え～～っと・・・」

「オグリ公爵か？」

「あっ、そうっ！　その人が、態々あのオジイチャンに慇懃な挨拶に来たのよ」

リオンは、オグリ公爵に繋がる匂いを感じて、妖しい繋がりを思って目を細める。

イルガも。

「あぁ・・、確かに。　その公爵様も、お嬢様にご子息をご紹介しましたな」

「うん。　あの一家は、親もバカだけど子供も一緒。　初めて顔を合わせた私に、その公爵の息子が何て言ったと思う？」

リオンは、あえて困り気味に首を竦める。

“俺の子供産みたいか？”

ポリアがそう言った瞬間、リオンは目頭を押さえ。

「フッ・・フフフ・・・」

と、肩を揺らす。

「笑い事じゃないわよ」

と、嫌がるポリアだが。

「いやっ・・くっくっく・・。　ポ・ポリアンヌに・・そんな・・・。　いの・命知らずも・・いい所」

と、リオンは笑い出す。

ポリアの気の強さは、幼い頃からだ。　年上の男相手だろうが、ポリアにそんな事を言ったら蹴飛ばされるだろう。

リオンは、余程に面白いのか。　腹を抱え。

「キ・キミに・・くっくく・・・。　それで・・ど・どうんた・・どうしたんだ？」

リオンに笑われ、気に入らないポリア。　目を細めてはリオンに、

「身体で教えてあげようか？　あの時以来、バカ息子は二度と来なかったわよ」

目に涙を浮かべたリオンは、

「悪かった・・。　あ～、面白い」

と、云う。　だが、涙を拭くと・・。

「少し笑って、気が晴れた。　外に出れるとは、何とも有り難い事だ」

と、続けるのだが・・。　ポリアを再度見る目は、もう仕事をする目で。

「だが、兄上とエリウィン殿が調べている事は、この事件の真相に直結するとは限らない。　多分、まだケリが付くまでには時間が必要だろう」

「・・、それはイイけど。　宝物を運んだセイル君達は大丈夫なの？　中身を知ってるのは、彼らも一緒よ？」

「あぁ。　その点は、大丈夫だと思う。　ハレンツァ殿の国葬の前に、ワダルの街へ早馬を出させる手配を取った。　今頃は、テトロザが彼等を護っていると思う」

すると、ポリアは俯く。　今回もアノ、例の犯罪組織が絡んでいる。　北方の都市で、昨年の始めまで大勢の犠牲者を出した事件に関わっていただけに、心配は消えない。

ハレンツァとセイル達が、墓場で襲われた時に捕らえた者は、何故かその後に自決をされていた。　リオンが見張りの役人へ直々に問い質しても、彼らの猿轡を取った者が解らない。　ポリアが北の古代都市で出遭った組織の輩と同じである。

ポリアの祖父と親交が深かった学者アランが殺され、その他に大勢の死人が出た事件。　彼らの手口は、凶行を平気で行える集団も用意出来る。　その結果、北の街では人質を多く奪われ苦戦し。　今回は、ハレンツァが殺された。

「ポリアンヌ・・どうした?」

と、問うリオンへ、マルヴェリータが。

「王子、私達も・・北の古代都市で同じ犯罪者組織と対峙しました。その・・、犠牲者は侯爵様だけで終わりましょうか?」

リオンは、前にもポリアから聞いていた事だし。　自分も暗殺者に狙われた経緯が在る。

「あぁ。　表立った犠牲者は、これ以上出無いと思う。　一部・・・危惧する事は在るが・・」

ポリアは、Kの力を借りて前は切り抜けただけに、同じ犯罪組織が相手と思って気を引き締めた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪抉じ開ける側と封じる側≫

ポリアにリオンが言って、臭わせた不安要素。　それは、ハレンツァの手下として調べに動いていた者達である。

ハレンツァの葬儀後、リオンは彼らと接触を図るべく、自分の手の者を王都に忍ばせた。　だが、確かにヘンダーソンとクシャナディースを調べる誰かが居るのは解るのだが。　用心をしている所為か、彼らと接触が図れない。　そして、それだけでは無い。　ヘンダーソンやクシャナディースの周囲を嗅ぎ回る者を、何者かが始末しようとしていると。

リオンが聞いたエリウィンの話では、確かに4・5人のハレンツァに忠誠を誓う手の者が居ると云うことなのだが・・。

王宮を幾度も騒がせた次の日。

ポリア達と深く話し合い、そのまま一晩を過ごしたリオン。　明く

る朝に、見えぬポリアを心配するルシャルルムと共に馬車に乗り、身を隠す形で王宮に戻ったのだが・・。

私室にて、明かりも無い部屋にリオンが入れば。

「・・・リオン様」

と、少し篭った声がする。

机の近くに或る優雅な街灯に似せたランプへと向かい掛けたリオンだが、声に反応し。

「アッシュか？」

「は」

昨日の夕方にも会っているので、随分と早い帰還に期待を寄せるリオンで。　暗い中でも、明かりを点けずのままに。

「もう戻っていたのか。　何か、収穫でも？」

「いえ・・。　それが、妙な事が在りまして」

「何だ？」

リオンの手足となり、様々な隠密行動をする影の配下を束ねるアッシュが語るには・・。　今朝方。　街の二箇所で、身元不明の男性遺体が見つかったとの事。　身分を示す物を全く持ってなかったのだが、その姿は隠密行動をする様な格好で有り。　彼が一人を調べると、懐にかなり立派な短剣を忍ばせていたとか。

リオンは、嫌な予感を覚え。

「してっ、その遺体はっ？！」

「は。　一つは私めが見つけましたので、密かに収容させました。　もう一つは、警察役人の下に。　そして、これがその短剣で御座います」

アッシュは、暗い部屋の中で短剣をリオンの机に置いた。

「そうか・・、遺体の調査は私が行おう。　引き続き、ハレンツァ殿が指揮していた手の者を探す事と。　ヘンダーソン及びクシャナディースの内を探れ」

「は。　ですが、向こうも掃除屋を散らばせている模様。　争いに成りませぬ様、慎重に進めさせて頂きます」

リオンは、ハレンツァを殺害した集団も居るので。

「そうだな。　ハレンツァ殿を殺害した一味かも知れぬ。　下手に戦わずと良い。　居場所だけ、なんとか着き止めよ」

「は。　では、最後にもう一つ」

「何か？」

「何でも、２・３日程前でしょうか。　面体や容姿を隠した１０人前後の面々が、馬車で王都を離れたとか。　立派な馬車で、通行検めの騎士が止めましたが。　然るべき身分の方の所有する馬車だっ

たらしく、そのまま南方に向かうべく出立した様です」

「そうか・・」

「では、これにて」

「待て、アッシュ」

急に呼び止められる形に成り、アッシュは珍しいと思いながら。

「・・は？」

「危険な任務だが、無理を通すな。　危うければ、此方が王道の手を使う。　今回は、内々の事では済まなくなりそうだ。　それを皆に伝えておけよ」

「・・・、有り難き配慮を。　然らば、出ます」

「ん、大儀だ」

気配は、直ぐに消えた。

リオンもまた、直ぐに部屋から出て動いた。

まだ、朝の暗い中。　先ず向かったのは、死体の保管される警察役人の施設。

王城の西側。　凍結しかかった水路を越えた所に、中々立派な構えの大型施設が在り。　石で作られたその施設は、王城さえ無ければ見栄えがすると思える。

リオンは、知り合いの上級捜査官を捕まえ、早朝に収容された遺体の所在を聞いた。

「リオン様のお知り合いですか？」

「いや、そうでは無い。　ただ、内々に不審者はこの目で調べたいのだ」

勘の鋭い者なら、リオンが何を調べているかは想像が出来る。

「・・・。　では、何も聞かずにご案内いたしましょうか」

「あぁ、済まない」

以前にも書いたが。　この国では上級捜査官と、その部下の下級捜査官に役職が別れている。　その上級捜査官が朝に一度集まる部屋は、大部屋に区分けを作る様な仕切りを設けただけの場。　此処で、新たに起こった事件の報告と、その事件に当たる者が決められる。

その朝の会議が終わる前に、リオンが此処を訪れてた訳で。　他の捜査官にも、リオンが来た事が解った。

チラチラと見る他の捜査官から、リオンは珍しいが近付きたい存在であろう。　だが、リオンは貴族至上主義など毛頭も無く。　彼が頼るのは、能力と人間性の在る者。　偉ぶる者や無能で出世欲だけが強い者等は、軽い挨拶で打ち止めを食らわされる。　上級捜査官達の中でも、貴族と云うだけでお役目に就いてる者達は、リオンに頼られる捜査官へ羨望の眼差しを向けた。

そんな視線など気にも留めないリオンは、案内で地下の更に寒い保管質に向かった。

「今、明かりをお持ちします」

保管室前で、真っ暗な廊下からさめざめしい明かりの漏れる見張り場へ入る捜査官。

「・・・」

黙るリオンは、霊気が放たれる壁に凭れ寄り。

（面体を見ても誰と解らぬだろうが。　何か、手掛かりに成れば・・・）

リオンは、此処に来て全てに不安要素が出現し、困惑の中に居た。

ハレンツァの手の者を一人も特定出来ず。　また、接触すら叶わない。　リオンの配下の先端で動く者は、もう1・2度襲撃をされていた。　それなりの訓練を受けた隠密行動のプロであるから、死なずに逃げおうせたのだが。　相手も殺しには腕が有り、自由に捜査が出来ないらしい。　リオンにして見れば、その邪魔をする者を辿りたい所だが。　捕まえるのも一苦労する相手らしいのだとか・・。

其処へ。　ランプに明かりを入れて持ってくる捜査官は、リオンが随分と浮かない顔をしているのを見て。

「リオン様、お体の加減が優れませぬか？」

と、白い息を随分と伸ばす。　それだけ、此処は極寒の中だった。

「いや、心配事が多くてな」

「それなら、私もお手伝いを致しましょうか？」

身を壁から離すリオンは、

「いや、結構」

と、やや冷たく言う。

捜査官の男性は、少し沈む笑みで。

「済みません。　出過ぎた言葉でした」

と、云えば、リオンは・・。

「いや。　優秀な捜査官を、汚らわしい輩に殺されては困る。　今回は、少々危険過ぎる輩が居るのでな」

男性捜査官は、その殺された者の槍玉に名前を出さないだけで。

沈黙ながらに“ハレンツァ”の事が在ると解った。

「・・・では、入りましょうか」

「あぁ、頼む」

重そうな鉄の扉が開くと、かび臭い異臭が微かに香ってくる。　この保管庫は、壁の外に雪を厚く入れる事が可能な保冷庫。　だが、真夏になれば、冷たく保たれると云っても秋の終わり頃の夜ほど。

身元の判明しない遺体は、此処に何日も置かれるから少しづつ腐敗する。　その匂いが壁に沁み込み、こびり付いて洗っても消えないのだ。

だが。　流石に冒険者としても経験を積むリオンだった。　臭いに顔色一つ変えず、男性捜査官の気遣いも浅くかわし、案内された遺体に向かう。

「この御仁か」

「はい。　商業区の中央から少し外れた小道で、屋根から滑り落ちた雪に上半身を埋没させたままに倒れておりましたとか」

リオンは、もうフードを取られて、仰向けにされている半裸の遺体を備に調べ見ては・・。

「死因は、この項に在る刺殺痕の様だが・・・。　他に傷の無い所を見るに、暴行などは受けてないな」

「その様で。　もし殺されたとしたら、逃げる後ろからナイフか、ダガーを投げ込まれたとも。　突き立てられたとも・・」

リオンは、その傷口を見て。

「ナイフの様な薄いものでは無い。　これは、投擲に適したダガーの類だ。　それから、恐らくだが投げ込まれたのだろう」

「解りますか？」

「傷口に抉った様子は無く、刃物を引き抜く時に付いた線上に成る

皮膚の裂け方。　手に持って刺したら、もっと傷口が深くなるし突入角度が違うはずだ。　腹立たしいが、この投げた者は中々の技量を持っていると視た」

「そうですか。　剣の達人で在らせられる王子が言うのでしたら、確かかも知れませぬ。　して・・、このご遺体はどうしましょうか？」

立ち上がったリオンは、

「そうだな。　取りあえずは・・このままで事件性を探るのがイイだろう。　犯人が解りそうなら、直ちに俺へ連絡をくれ。　もし、危険な使い手が相手だと、捕り方である此方に死傷者が出る。　私が、密かに手伝う」

「え？　王子が・・ですか？」

「ん。　今回の俺が調べる一件は、かなりの権力層に通じる可能性が在るのだ。　警察役人の皆だけでは、相手が悪いかも知れぬ。俺が証人で居れば、誤魔化しが効かぬだろう」

「・・・解りました。　では、連絡は・・・ヘンダーソン様で？」

「それは、不味い」

「では、どちらに？」

「直接に私で構わぬ。　私が居無いなら、ルシャルルム殿にでも繋ぐと良い」

「えっ?!!!　セ・セラフィミシュ・・様へですか?」

「あぁ。　恐れる必要は無い。　私の片腕だ」

「・・・は」

リオンは、死んで顔の筋肉が緩んでいるのだが、無骨者と云う印象を受ける中年男性の遺体を見て居ながらに。

「では、手を洗わせて貰えるか?」

「はい、直ぐにぬる湯を用意致します」

男性捜査官は、先に出口に向かう。

リオンは、死体の中年男性を見下ろしたままに。

（被害は・・ハレンツァ殿だけで十分なのだ。　何故、誰かに頼みを知らせぬのだ・・）

と、踵を返すのだった。

その後。　彼の持ち物であった短剣を借り受け。　そして、アッシュが収容しておいた遺体も検めたリオン。　二人が持っていた短剣は、隠密組織に遣わされる一品の類で。　一度、柄の底を火で炙り、刀身に文字や言葉を暗号にした物が浮かぶ。　それを鏡などで反転させれば、浮かび上がった物は紋章で、ハレンツァの下印（古代文字に因る略式印）だった。

リオンは、死んでいた二人をハレンツァの手の者と断定した。

（やはり・・か。　彼等を狙って、何者かが動いている。　恐らく、その狙っている輩は、ハレンツァ殿を殺害した者達。　そして、この一連の首謀者へと繋がっている。　どうにかして、其処へ辿り着きたいものだが・・）

まだ、胸の内を駆け巡る不安が収まらない。　この犠牲が何処まで増えるのか・・・。　リオンは、その広がりを最小限に留めたいと願った

★

王の不意を突く様な命令が繰り返され、乱れた王宮内と王国政府だが。　一夜が明けると、徐々に落ち着きを取り戻し始めていた。

やはり、ポリアの兄の政治的な采配が細部に向かって伝わり始めた事。　そして、国王の態度に帰順して、ハレンツァの喪に服す貴族が多く出た事が要因だろう。　中立で、家柄や格差で差別しなかったハレンツァに気遣われ、王国政府の隠然たる上下関係が根強く残る中を安らげた者も少なくないらしい。

ハレンツァの様な人物は少ないが、上に立つ者に居るのは在り難い。

年末に向け、もう１０日も無いと云う最中。　出仕する貴族の数が半減近くなり。　寧ろ政務官などに通達を出せばある程度根回しが効く訳で。　ポリアの兄も、その辺は上手く動いている様だ。

さて。

ヘンダーソンが老人と会ったままに姿を消した。

彼は、馬車を変え衣服を変え、道を変えて行方を晦まし。　今は、貴族区と住居区の境で、王都の外れにある石積みの基礎から作られた隠れ屋に居た。　其処には、ラヴィンの残した悪党集団の頭であるモジューロゥも居る。　そして、こっそり遣って来たクシャナディースも。

昼前の鈍い朝日の様な光が、雪雲の幕を通って王都を薄暗い程度に染める。

隠れ屋の二階。　大した家具らしい物も無い中で、家屋部分の木の壁に凭れるクシャナディースは、悪党集団の頭であるモジューロゥが地下に行っている中で。

「ヘンダーソン。　御老にはお伺いを立てたのか？」

と。　顔に被せる様にフードだけを被り。　軽装の鎧と貴族の衣服はマントで覆い隠す井出達だった。

すると、木箱に布を掛けただけの椅子に座るヘンダーソンが、衣服の上から着るローブのフードを深く被った様子で頷き。

「昨夜に。　クシャナディース殿には、このまま普段通りに。　御老は、あわよくば5大公爵決定に伴い、貴殿の公爵階級の格上げも考えて居られる。　事無きままに、早く御子を儲けよ・・・との命令だ」

クシャナディースは、繰り返される事で苛立ち。

「解って居るっ。　・・とにかく、年明けにはなんとか孕ませる」

ヘンダーソンは、顎だけが見える顔をクシャナディースに向け。

「苛立つのは構わぬが、姫を壊すなよ。　クシャナディース殿・・・、いや。　御主に在る価値は、然程に高くない。　子供が出来て、初めて高まる御身の価値・・、妻に感謝して接するが良いわ」

クシャナディースは、ヘンダーソンの物言いにカァっと来た。　やっと公爵の地位を手に入れ、あの老人の意向に従う道を大きく進んだ。　下爵に成ったヘンダーソンに、こうも身の程を弁えろと云わんばかりの注意を受けては、気に入らないにも程が在る。

「・・・」

黙るクシャナディース。

其処へ。

「おいおい、殺気が溢れてるな。　お互い仲間なんだ、ヨロシクやろうぜ」

と、声がして、部屋の奥に在る階段から誰かが上がって来た。

二人が見れば、短い髪をした中年男がそうだった。　頬に刺し傷の古傷を見せ、左の眉が皮膚ごと削ぎ落とされた様な傷跡を残すのみ。

その影響か、左の目は異様に細目である。　少し身体の厚みが在

るガッシリした人物。　黒皮の交錯したベルト鎧に、ヨレた衣服の上下を着た如何にも怪しいと云った様子である。

ヘンダーソンは、声も冷ませ。

「余計な拍子取りは要らぬ。　それより、ハレンツァの手下を二人ほど殺ったのは、確かなのであろうな？」

モジューロゥは、ワインの瓶を片手にニタりと笑い。　カーテンの掛けられた小窓に、いい加減な足取りで向かいながら。

「あぁ～、確かだ。　アンタ等二人の事を嗅ぎ回ってるなんざ～、その死んだジジィの手下ぐらいだろう？」

ヘンダーソンは、あくまでも冷静に。

「そうか、ならいい。　但し、無用な真似をするなよ。　派手に暴れられては、此方も手が回せぬ」

ワインの瓶を傾けたモジューロゥは、左腕で口を拭いながら。

「余計なことぉ？」

と、窓の前に背を向け、寄り掛かった。

「そうだ。　狙うのは、我々の周囲を嗅ぎまわる輩だけでイイ。無用に、死んだハレンツァの家族を探るなっ！！！」

これには、クシャナディースも何事かと。

「どうゆう事だ？」

と、両者を見る。

かなり暗い部屋の中だが、薄っすらとお互いは見える中で、モジューロゥは無視する様にワインを呷る。

だが、ヘンダーソンは、厳しい口調を崩さず。

「先日。　セラフィミシュロード様の旧本邸付近で、怪しげな人物がうろついていると見回りの兵士が報告し。　王都警備隊が出動する事が在った。　ラヴィンは、その様な不手際は起こさぬ。　お前が手下を不用意に差し向けたのであろうっ？！」

モジュールゥは、あやふやな態度で、“さぁ”と手を上げるのだが・・。

ヘンダーソンは、モジューロゥを睨み。

「良いか。　もし、万が一にもあの大貴族の屋敷に手を出そうものなら、お前は組織を裏切ったと報告するからな」

と、まで云ったのである。

モジューロゥは、どうも大袈裟だとばかりに。

「おいおい、国家を覆すなら、アンタ等以外の貴族なんざ～どうでもイイじゃないか」

すると、流石に重大さを解るクシャナディースが、背中を預けるのを

を止めて。

「バカを申すなっ。　あのセラフィミシュロード様の一族は、世界の貴族と縁の在る最古の貴族だぞっ？！　一国の王とて、あの貴族の家には手も出せぬ・・。　国に爵位を送られて養われる貴族とは違い、あの家は王家に寄り添い協力すると古の碑にまで記述が在るのだっ！！」

と、声を荒げる。

ヘンダーソンは、今一事を飲み込めて居無いモジューロゥへ。

「いいか。　もし、あのハレンツァを保護するご一族が叛旗を翻せば、言い分に因ってはそれだけで国家が覆る可能性も在る。　もし、モンスターなどが世界にまた蔓延る様な事が在り。　あのご一族が世界に討伐の檄文でも飛ばせば、各国の騎士や貴族が馳せ参じるだろう。　各国の王、世界を動かす商人とも対等以上に接する事が赦された唯一の貴族。　それが、かのセラフィミシュロードなのだ。　お前が身勝手に手を出して見ろっ。　世界の腑抜けに成りつつある貴族が、名誉だの権威だのを誇示して、各国の議会すら動かすわっ」

と、云うのである。

流石に驚くモジューロゥ。　そんな話は、聞いた事が無いとばかりに。

「おいおい、マジか？」

「当たり前だ。　毎年、アハメイルに逗留した貴族は、誰に逢うの

を名誉に思うか？　アハメイルの祝賀を取り仕切るセラフィミシュロード当主よっ。　我が国の王都は、国王が。　アハメイルは、かのご一族が当地せしめた事情からも、その立場が対等であると解ろうがっ。　アハメイルの歴史には諸説在るが、年末年始の祝賀をし、病気や盗賊の影響で荒れていたアハメイルに根を下ろし。　健全たる国家を支える都市を築くと、総帥として志状を認めた過去のセラフィミシュロード当主のご意向は、今のアハメイルの繁栄に繋がっているのだっ！！　馬鹿者がっ・・。　世界の貴族と、我が王より頻度多く面会するのだぞ？　どちらに、人気が在るか・・一目瞭然ではないか」

ヘンダーソンの話を聞き。　クシャナディースは、公爵格上げ後に一度だけ拝謁したポリアの父親である当主を思い出す。　剣術に秀でて、その厳格たる威厳はリオン以上。　５０を過ぎ、６０に届こうと云う頃合いなれど、その偉丈夫としての趣きや存在感は圧倒と云って良い。

（・・、大丈夫なのか？）

今に思えば、老人とヘンダーソンは、あの一族を旗頭に持ち上げ。　自分やヘンダーソンなどの一族で過去の絶対貴族主義圏を再確立し。　そして、王を象徴に戻すとしている。　だが、自分の逢ったポリアの父親は、王の前ながらに言った。

“良いか。　公爵とは、王族を間近で護る血族の壁だ。　王と国を護れぬなら、貴族など要らぬ。　新たなる公爵に成った以上、共に血を飲む覚悟で拝命した爵職を全うせよ。　御身が不埒な事をせば、我ら貴族全てが堕ちたと思われる。　努々、忘れる事無い様に頼む”

この言葉を受け、クシャナディースは対面を終えた。　だが、全身

にびっしょりと掻いた汗は、その威厳から受けた重圧感を物語る。

（俺は、このままで大丈夫なのか？　もし、あの一族が我らと対峙する事に成ったら・・、勝ち目は？）

ヘンダーソンの説明を受け、クシャナディースはポリアの家が何故に別格なのかを知る。　だから、怖くなった。　今の王や王子をポリアの家が遠ざけているならまだしも、近き間柄にある。　老人は、絶対的権力の魅力は、全てを人間を魅了し離さないと云うのだが・・。　果たして、そう上手く行くのだろうか・・・。

クシャナディースは、まだ老人が自分に落ち度が見えないと称して、急ぎに子供を儲けろと云っているのだと思って居るのだが。　だがヘンダーソンが云ったのは、上手く行った場合の流れを繰り返しているだけに過ぎない。　ヘンダーソンは、クシャナディースに全てをおっ被せる事も視野に入れ、彼を不安がらせない様に云っている。

しかし、実際はクシャナディースを切り捨て計画を中断させるか。　続行するかの瀬戸際に来ている。　ラヴィンがもし王子の権威を示す何物も持ち帰らない場合は、計画は宙に浮く。　ハレンツァを暗殺せずのままで在るなら、其処から違う方向性も考えられよう。　だが、ハレンツァを殺して、予想以上の騒ぎに成った。

正直、老人やヘンダーソンも、一度追放を受けたハレンツァが国葬にされるとまでは思わなかったのだ。　国王が、国の意で追悼の儀式を行うぐらいだろうと思っていたのに・・。　王子達、他の貴族からも、国葬に対しての異論が出ず。　騒ぎ過ぎと王に申し出たヘンダーソンは、回りから見ても浮いた存在である。

その様子を傍観したクシャナディースは、どうもヘンダーソンが浮

き始めたと不安を持った。　ヘンダーソンの近親者である執務官でも、ヘンダーソンの言う事に順じなかったからだ。

ヘンダーソンの話とこの悪党達の無礼極まりない動きには、到底着いていけないと思うクシャナディース。　此処から、今直ぐにでも立ち去りたくて。

「とにかく、嗅ぎまわる犬の始末は、事を荒立てない程度にして貰いたいな。　それから、我らが夫婦の事は、此方に任せて貰いたい。　以上だ。　下手に長く留守にしては、返って怪しまれる。　俺は、此処で失礼する」

クシャナディースは、今更ながらに自分のしている事に自信を持てなくなりそうで困った。　此処に居て、気が休まる事等無いだろう。　だから、足早に戻る事にする。

「・・・」

「・・・」

見ていたヘンダーソンとモジューロゥ。

クシャナディースが下に降りて、裏手の扉から出て行く。

窓のカーテンを少しずらし、クシャナディースが隠れる様にして遠ざかって行く所まで見たモジューロゥは・・。

「あのダンナ、随分とビビっておいでだぁ～」

すると、それまで黙っていたヘンダーソンが。

「今更怖気づいた所で、ヤツには何の対抗手段も持ち合わせて居無い。　それより・・、いざと成ったら、あの男を殺す。　お前達に、出来るか？」

ワインを汚く傾けたモジューロゥは、顎をクシャナディースの去る方へ向け。

「あのダンナ、腕は中々だ。　殺るなら、手段は選べないぞ」

「そうか・・。　ヤツの新妻は、高貴な貴族の血筋だ。　出来るなら、その時は逃がしたい」

すると、カーテンを閉めたモジューロゥは、ニタニタと笑み。

「そいつはぁ～難しいなぁ。　俺達は、もう一月以上も女や遊びに行けてねぇ。　そんな初々しいオンナ見たら、興奮して手を出さずには居れ無ぇ～ってさ。　うへへへ」

ヘンダーソンは、耳を疑った。　命令を無視するかの様な云われ方で、どうもラヴィンとは違うのが困りものだと思う。

「チィっ、意地汚いカスがっ」

吐き捨てる様なヘンダーソンの言葉に、

「何とでも云えよ。　俺達を長く雇いたいなら、それなりの犠牲は覚悟して貰わにゃ～困る。　好き勝手してきたゴロツキが、今更に統率も統制も取れた軍隊って訳には行かねぇさ。　ま、その新妻ってのと、ダンナの家のオンナ全部は、可哀想に・・・させて貰う。

それが飲めないなら、あのダンナを殺るのは難しいゼ？」

と、モジューロゥはワインを貪る。

「何だとぉ？　キサマ・・・雇い側に楯を・・・」

流石にヘンダーソンが苛立つと。

口を腕の衣服で拭ったモジューロゥは、

「おいおい、勘違いしなさんな」

と、少し意味深に返すのだ。

「何がだっ？！」

「悪いが、あのダンナを、この大きな街中で殺すと成ったらよ。前にダークチェイサスの奴らがジジィを殺した様に、人気の無くなる夜を狙うしか無ぇ。　だが、貴族の居る場所は兵隊の見回りも在るし、俺達盗賊の集まりだけで遣るなら、それなりのエサが必要なんだ。　腐った手下共が、それこそ欲望の虜に成って無我夢中に成るぐらいのな・・。　そうしないと、一人二人が斬られただけで、強い相手にしり込みする」

「・・・、その欲望を焚き付けるエサに、貴族の娘を差し出せと？」

「おうよ。　普段なら手が出せない高嶺の花なら、多少の危険も仕方なしと思うさ。　ま、殺すと成りゃ～毒も使うが。　俺が見立てても、あのダンナを殺るまでに手下数人は失う覚悟をしないとな。　失うと踏んだ手下の取り分と、野郎共を狂わすエサ・・・。　も

しもの時は、手を打って貰いたいねぇ～。　へっ・へへへへ・・・」

汚らしい笑いを漏らすモジューロゥ。　根っからの盗賊らしいこの男は、全身が欲望で出来ているらしい。

黙ったヘンダーソンは、困った。

（うぬぬ・・、あの娘には色々と利用価値が在る。　クシャナディースが死んでも、子供を孕ませれば公爵筋の隠し子として利用も・・。　多額の金を払って、このゴミ共のエサに払い下げるのは我慢成らぬ）

ヘンダーソンは、貴族と云う地位に異常な価値感を持っている。その彼にとって、例え、物の様に手に入れた女性でも、あの姫と云える女性を差し出すには、相当にプライドが揺らぐ。

「・・・その件は、決定して居無い今は保留にさせて貰おう。　それより、リオンの手下も動いている。　気取られ、足元を掬われるなよ。　お前達には、組織の方に多額の金を毎年送っている。　その事、忘れるなっ」

モジューロゥは、交渉が芳しく無いと思いながらも。

「ヘイヘイ、解ってる。　俺達も、今回は特別な召集で来てるんだ。命令には、ちゃぁ～んと従いますってモンさ」

「フン。　どうだかな・・」

立ったヘンダーソンは、ラヴィン以外の悪党が此処まで荒んでいるとは思わなかっただけに。　このモジューロゥの態度には、些か気

分を害した。　こんな者達を相手にしている自分が、一貴族として恥ずかしいと思える。　逆に言えば、それだけラヴィンは上下関係も弁えられる存在であり。　頼りに成った。

（こんな輩を頼らねば成るまいとはな・・。　クシャナディースよ、上手く事を運べ）

ヘンダーソンは、国王にも敵意に近い悪態を思いながら、この塒を後にした・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です。＾＾

PCの調子の関係で、一日遅れての掲載と成ります。　済みませんでした。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪徐々に迫るその時の手前≫

「うはぁ～、寒い」

白い息と共に小声を出して手を揉むユリアは、瓦礫と化した壁の上に立つ。　崩れた壁の残骸に影を差す残った古い石壁の影から、辺りを窺っていた。

荒れ果てた土地が広がる中で、放置された古い屋敷などが遠くにチラホラ見えている。　不思議な事に、何が在ったのか屋敷や塀が何処も彼処も半壊していたり、崩壊していたり。　まるで、“廃墟と化した街”と云える光景が広がっていた。

瓦礫の大半は雪に埋没し、生えている一本の孤立した様な木は、どうも生気を失って枯れているかの様に雪の中に佇む。　今日も小雪が舞い、風がやや強い。　この無人の屋敷だけが取り残された区域では、益々寒さが身に沁みる。

ユリアは、この場所に移って今日で三日。　この場所が、何でこんなに精霊の力を感じないのか怖く成っていた。　その理由を知るセイルとアンソニーは、テトロザと共に出ている。　二人は、リオンの経過報告を聞きに出ていた。

マーリは、この場所を不要に成ったからと云った。　一般には、商業区が海沿い方面に大きく拡大し。　土地として古い柵と貴族支配の強いこの旧貴族区は、次第に住む人が減り。　商業区に近付いた今の場所が栄えたと。　そして、此処にも病気の蔓延等が在り、居続けた年寄りが死に。　入れ替えが起こったのだと。

確かに、此処には少しだけ人の住む場所が在る。　前の仕事でも行った貴族区と、この旧貴族区の境辺りには、確かに人が住んでいる。　しかし、マーリの屋敷が在る奥地は、全く人の住む気配が見えない。　何故、こんなにも屋敷や土地が放置されたのか。

さて。

マーリの屋敷は、円形の石壁の塀を巡らせた中に、六角の塔型の母屋を基準とし、そして五角形と八角形の建築物が所々に繋がる変わった屋敷だった。　六角の母屋を取り囲む屋敷の土台に当たる一階が、八角形の屋敷で在り。　その二階には、五角形の屋敷が・・。　何処か神殿建築を臭わせる設計で、古くに好まれた屋敷であるらしい。

だが、その屋敷を取り囲む石壁の半分は崩壊し。　放置された屋敷自体も、所々に壊れた様子を見せる。

ユリアは、クラークやマーリの使わした男手と共にニセの宝物を隠

した。　中央母屋の地下で、埃臭い場所に・・。

しかし、罠は二重三重に張り巡らせてある。

このマーリの旧屋敷には、セイル達と数人の役人が居るだけ。　表立って警備しているのは、海岸沿いの住宅区の一部で。　元は、旧倉庫だった所に作られた不用品や廃棄物を集めて置く襤褸屋。　管轄は国の物なので、テトロザが急遽手配した。

もし、廃材置き場の方に賊が押し込み。　其処で一網打尽に出来れば、それで丸く収まる。　このマーリの旧屋敷は、賊の捕縛に失敗した時の二の手なのだ。　セイル達に、無用な危険を近付けたくないテトロザの配慮と云えよう。

ユリアは、闇の精霊や雪と風の影響で出て来る精霊以外が出て来ない様子から、この場の過去に疑問を抱いた。　丸でアンソニーの眠っていた屋敷の周辺と似ているのだ。

（まぁ～ったく、何でこんなに寂れるのよ。　こんなの、普通じゃないわ）

そう思いながら、フードで顔を隠し。　マントを確り留めてコソコソと母屋の建物に戻っていく。

今は、昼前。　クラークは長年の経験から、保存の持ち運べる食事でも色々とこさえる。　ユリアは、少なく熾した火の影響を心配して、見に出て来た次第。

かなり大きい屋敷で、それだけでも目立つと思うユリアだが。　屋敷の方に戻り掛けたユリアだが、この荒涼した雪に埋れる区域にて、

生き物をオーラを近くに感じて・・。

（えっ?!!!）

と、立ち止まった。

「・・・」

こんな場所だ。　人が歩いていると、生命波動のオーラが良く解る。

（かっ・隠れなきゃ・・・）

慌てるユリア。　ユリアの肩に現れていたサハギニーが、“隠れろー隠れろー”と云わんばかりにアタフタする。

壁にへばり付いたユリアは、

（サハギニー君・・・、ど～しよ）

すると、サハギニーは、

（ワイが先ず見るからっ。　ユリアは、其処にいろーっ）

と、急いで飛び降りる。

ユリアと精霊達は、言葉を交わさなくても意思の伝達は出来るし。
　ユリアが心を赦さない者には、基本的に精霊は見えない。　魔法遣いが単にユリアを見れば、精霊の力をぼんやりと蟠りとして感じるだけだし。　同じ精霊遣いでも、“精霊が其処に居る”としか感じられない。　ユリアの持つ異能は、それだけ特別なのだ。

（サハギニー君、気を付けて）

（おっ・オイサ～）

サハギニーは、ユリアの肩から飛び降りた所で滑りそうになり、アタフタしながら雪で殆どが覆われる瓦礫の上によじ登って行く。

今しがたユリアが見ていた壁際に、コソコソと向かうサハギニー。

一方のユリアは、自分から遠く離れる事も出来ない精霊達なだけに、サハギニーの向かった方に、カニ歩きをする様に一歩・・・一歩・・・と注意して動く。

サハギニーは、ちっさい足でエッサエッサと雪の上を走り。　山の様な斜面を登って、壁際に戻った。

（あ、何か居るっ）

サハギニーが見ると、この屋敷の壁から少し離れた向こう。　元は敷かれたレンガで道が在ったと思われる通りを鋏んだ先。　半壊して雪が舞い込んだ屋敷の中に、二人組みのマント姿をした何者かが居る。

（なぁ～んか怪しいヤツラだっ）

サハギニーは、ユリアに振り向き。　間近に迫ったユリアへ、

（ユリア～、誰か居るぜぇっ）

サハギニーの元に着いたユリアは、恐る恐るチラっと見てみると・・。

「おい、本当に此処かぁ？」

「さぁ～、大きな屋敷だと聞いたが」

半壊した屋敷から出て来た面体の解らない二人が、男の声でそう言い合っている。

（居るって、近っ！　サハギニー君っ、アレ・・どぉ～見ても兵士さんとかじゃ無いよね？）

（んぁ～、ど～見ても見えないなぁ）

マントを着て、顔まですっぽりと覆う二人は、もう枯れきった木の下まで来て。

「つぅ～かよ。　人の居たのって、ど～見ても貴族区とこの元の貴族区の境辺りじゃないか。　確かに隠れるにはイイ所だが・・逆に此処じゃ～目立つだろう？」

「確かになぁ～。　あっ、おい」

「ん？」

このやり取りにユリアは、何か気付かれたのかと思い。　サハギニーと一緒に、“ビクンっ！！”としたのだが・・・。

「そういや～さ、此処って幽霊が出るらしいゼ」

「なぁ・・マジかよ」

「あぁ。　何でも、古い貴族の怨念がモンスター化して、何度か冒険者に退治依頼が舞い込んだらしい」

「おいおい、そりゃ～薄気味わりぃ～じゃねぇ～かよ」

「こんな所に、人が好んで来る訳無ぇ～って」

「だな。　しかも、どの屋敷も半壊か、崩壊してらぁ。　こんな所、他に無いゼ。　とにかく、一旦戻ろう。　オラぁ寒くて、もう手足が震えてる」

「同感だ。　向こうの廃棄場の方が、よっぽど怪しいゼ」

そう言い合う二人。

ユリアは、自分達を捜す誰かだと思って怖くなる。

幸い、セイルと云う賢い青年は、簡単に此処を探られない様に考えた。　運びこむに当り、足跡が消える様に裏口だった場所から入り。　馬車の轍なども、しっかり消した。　運び込んでから、断続的に降り続く雪の御蔭で、跡もすっかり消えている。

セイルとアンソニーは、廃材置き場が先に引っ掛かる可能性が強いし。　万が一、マーリの博物館がまた襲われては困ると。　移動するテトロザに付き添い、警戒しているのだ。

後３・４日すれば、リオンの居る王都から騎士と、リオンやテトロ

ザと共に冒険者の時も一緒に居る仲間が来るらしい。　上位騎士の中でも最強のワイナー・トルティー。　魔想魔法と、気孔系格闘戦士のハイブリット遣いであるミント・トルティー。　リオンの恋人らしい王宮僧兵団の若き逸材、ローズマリー。

彼らは、冒険の時には名前を変え。　リオンと共にスター・ダストのチーム名で旅をする。

リオンは、情報源として最有力のセイル達を護るべく、自身の手の内でも最強のカードを遣したのだ。　それは、もう直ぐ王都と此処アハメイルは、年末年始の祝賀ムードで最高潮に達する。　王都は、ハレンツァの一件で沈黙しているが、アハメイルはそうは行かない。　この大都市で騒ぎを起こされたら、それこそ大変なのだ。

ユリアは、周囲を確かめながら、怪しげな二人が貴族区の方に向かうのを見て。

（見つからなかったぁ～っ）

と、安堵する。

一方のサハギニーは、

（捕まえなくてイイのかぁ～？）

と、不安げに云うのだが。

（セイル達も居無いのに、此処で捕まえたらヤバくない？）

（そぉかぁ～？）

サハギニーと共にユリアが見ている中で、面体の解らぬ二人は遠ざかった。

ユリアは、サハギニーを肩に乗せ。　クラークの元に急いだ。

ユリアは、壊れた壁の一部から、こっそりと八角形をした外回りの建物内に入った。　そして、迷宮の様な部屋と廊下を抜け、中庭に出る。

「おぉ～、ユリア殿。　遅かったですな」

丁度、水を作るのに雪を鍋に入れていたクラークと鉢合わせだった。

「くっ・くくくクラークさんっ」

慌ててクラークへと駆け寄ったユリア。　そして、そのユリアの肩で騒いでいるサハギニー。

「？」

クラークは、頬を紅くさせて慌てるユリアを見て、何か在ったと読み。

「ユリア殿、中へ。　さっ、中で聞きます」

クラークは、ユリアを母屋である塔型の屋敷へと導き。　自身も入って戸を硬く閉めた。

この屋敷には、二人の他に役人2名と兵士3名が居る。　男4人だ

が、１人は女性。　深夜にこっそりと遣って来るセイルとアンソニーに付き従い、兵士二人づつ交代で入れ替わる。　だが、この女性の役人は、帰る家は寄宿舎だからと一緒に居てくれる。　何でも、彼女も孤児だったらしく、同じ境遇のユリアを案じてくれる。　口数の少ない２０後半の落ち着いた人物だった。

そんな兵士と役人達は、高い塔の上に二人と、下の広い一階部分との二手に分かれていた。

が、上からもあの遠ざかる二人が見えたらしい。　ユリアが入る前に、既に下りて来ていた。

ユリアは、クラークも含めた皆に事を伝えると・・。

「うむ。　ユリア殿、手を出さずに正解ですぞ。　その二人を捕まえれば、此処で何か在ったと知らせる様なもの。　セイル殿やアンソニー様が居無い今に、それは返って危険です」

古びた家具が壊れ掛けていたり。　深い色合いをした赤紫の絨毯が綻んでいたりする広いロビーは、同時に居間でも在る様だ。　蜘蛛の巣が張っていた暖炉には、薪が少なく燃やされる中。　クラークの周りに集まった一同は、見張りを塔の上だけにして。　夜までは見張りも極力控えて息を潜めようと話し合う。

交代している男の兵士を除き。　女性の兵士とクラークやユリアは、セイルの話を思い出した。

“悪党集団は、組織に呼ばれてもそれぞれグループで活動するのを基本とするそうです。　ただ、そのグループに指揮をする誰かで、“コア”と呼ばれる指令官を軸に活動するとか。　そのコアが此処

に居無いなら、彼らは別々に動き回って居ると思います。　ですが、コアが居るなら、組織的に攻撃を仕掛けて来るでしょう”

セイルは、流石に一度襲われているだけある。　後に祖父から聞いた事を、しっかり覚えていた。

そして、

“問題は、先に此処を見つけられない事。　此処が見つかり、仮に襲撃を受けたら。　宝物がニセ物と解ると、大方取る手法はもうマーリさんの身柄に切り替わると思います。　此処も、そして必然的に廃材置き場の襤褸小屋も、ハッタリだと解ってしまうからです。

そうなれば、我々かマーリさんを強引にでも誘拐する手段に出て、一般の人に被害が・・。　リオン王子がカタを着けるまで。　もしくは、段階的に相手方にダメージを与え。　グループを一網打尽にするか。　大胆に動けない程に弱められさえすれば、時間を稼げるでしょう。　相手の何も把握できて居無いままに、マーリさんの下に手伝いに来る日雇いの方にも犠牲が出ました。　情報を見せないだけでは、危険は回避出来ません。　これからが、正念場。　派手では在りませんが、鎬を削る探り合いに成りますよ”

と。

セイルは、家柄から帝王学とも云える学問を受けていた。　ある意味、相手の心理を読んで人を動かす教育も、教育と商人と云う家系から培われ。　更には帝王学の一環で、簡単な用兵学も学ばされている。

セイルの見立てや状況分析は、同じ教育を受けたクラークやアンソニーからしても同感だった。　ただ、此処からはもう探り合いで。

現場の局所対処に成る。

今はまだ、リオンの正式な指令が無い状態で、一連の警戒・警備行動はテトロザとリオンの間の話。　テトロザも表立って動くに限度がある為。　遊撃隊の様な冒険者のセイル達は、ありがたい存在でもあった。

そして。

この数日、普段よりも悪党達が騒いでいるのが気に成る所だ。　役人達が捕まえた悪党達は、余裕の態度でふんぞり返っている。　犯罪に至る動機も曖昧で、非常に捜査が混乱している。

これは、在る捜査筋の裏情報で、確認など取れないものだが。　何処からか、裏社会に金が流れているらしいという事だった。　ある程度の遊ぶ金が入っているから、生活に困る事も無く。　また、傷害や盗みで捕まっても然程の罪には問われないからと、悪党達も高を括っているらしいのだ。

テトロザは、裏社会に金が流れる時は、何時も治安が乱れて良くない事が起こると解って居た。　流石の彼でも、不安を隠しきれない様子だった。

セイルは、今回の一件が関わっていると、小さく呟いたとか・・・。

★

一方で。　同日の朝。

「トリッシュ様、起きられましたか？」

特別な書庫に篭るエリウィンは、朝なのか遣って来たトリッシュに挨拶をした。

「エリウィン、無理をしてないかい？」

「はい。　昨夜は、少し深く寝ていました」

「そうか、それは良かった。　私も少し眠り過ぎたよ」

と、軽食を運んで来たトリッシュは、衣服も改めて居無いままである。　今は、朝もだいぶに過ぎた頃で。　高さの在る王城の一室から窓を見れば、遠くの空が白んでいたらしい。

雑談を交わしながら椅子に座ったトリッシュは、昨夜遅くまで書き出したものを眺めだし。

「しかし、よくよく調べてみると、我が王国の貴族の系図も怪しいものだね」

「はい。　この様に複雑とは、私めも驚きで御座います」

「問題なのは、“アルグレット”侯爵の血族だ。　あの粛清で、プッツリと消えている」

トリッシュとテーブルを挟んで対峙する様に座るエリウィンも。

「はい。　あの追放を受けた貴族の中で、最もお許しが難しかったアルグレット家で御座いましょうが。　歴史の表舞台から、こうも完全に抹消されているとは・・。　逃げたご家族は、まだ安定を保っていた頃の西の大陸へと逃げたらしいですね・・」

「うん、その様だね。　でも、この家族は気に成る」

「え？」

トリッシュは、読んだ書物の重要な部分を抜き出して書き留めた物を見て。　何度も目で読み返しながら・・・。

「アルグレット侯爵の処刑された当主には、男子は一人も居無いんだ。　その代わりに、女児が５人」

「ほう、丸で我が家の様な・・」

顔を上げたトリッシュは、エリウィンの家庭事情を知るだけに。

「そうだね、エリウィンまでは、全員女性だものね」

「はい」

軽く頷いたトリッシュは、また顔を俯けると・・。

「変なのは、この追放された家族がたった3人だけだと云う事。使用人などを含めても、追放時に港まで護送されたのは、この記録に因れば１０人に満たない」

アルグレット侯爵家は、王を輩出出来る公爵家とも近い一族であり。

その追放時に於いて、一番勢力の在った侯爵なだけにエリウィンは・・・。

「それは、確かに変ですね。　我が家ですら、追放時に付き従った者が３０名近くと記述が在りますが。　それより、此方が少ないとは・・・・」

「それから。　アルグレット家は、ミグラナリウス家など幾つかの総本家でもある様だね」

「えっ？」

「表立った家名分けの記述は書かれて無い。　でも、古い記述を読み返すに、最初から貴族として表舞台に居たのは、アルグレット家だよ。　どうやらその娘を貰い、政治的手腕を買われたとして貴族の仲間入りしたのが、あの老人の一族であるミグラナリウス家だ。　名前が役目に出てくるのは、今から１０００年ほど前だね」

「な・・何たる事だ」

一緒に調べていたエリウィンは、ミグラナリウス家の家督相続に何回か怪しい部分が在るのを見て、何だか気味が悪いと思っていた。　リオンに語った他にも。　自分の子供では無く、養子や婿・妻に貰った者が継いでいるのである。

「トリッシュ様。　もしかして、ミグラナリウス家は、アルグレット家の分身では在りませんか？」

「・・・、そう思っても変では無いね。　ただ、ミグラナリウス家創設後に、アルグレット家から一度も養子や結婚の記述が無い。

この家系図に出て来る名前が偽りか、若しくは別の手が在るのか。
とにかくこの二つの家は、お役目も似通った領域が多く。　議会などでは、同じ主張派に属している。　此処まで来ると、共に手を携えていると思えるね」

「益々怪しい・・」

「そうだね。　でも、明確な決め手が見えない。　もう少し、この粛清前までの議会録なんかを見て、時事録を検める必要が在りそうだよ」

「は」

だが。　トリッシュは、また別の記述も記憶していて。

「でも、不思議だ・・。　ハレンツァの家は、元は外来の貴族なんだね」

「そうなのですか？」

「うん。　その昔、我が王家と二分する王家の大元、レオ＝ゴブロッド家に嫁いだホーチト王国の姫が居てね。　彼女に付き従って遣って来た騎士へ、我が王家が“サー・リジェネリック”（将校の特別な贈り名）を授けたらしい。　それから・・５００年後。　レオ＝ゴブロッド王家を二分する内紛が在って、其処で両家を焚き付け諍いに導いた貴族を斬ったのが、君のご先祖だよ。　そして、侯爵家の御嬢さんを貰って、ハレンツァ伯爵に成ったんだ」

トリッシュの語りで、エリウィンは過去の先祖の功を聞き続けた。
時には、戦争に逸る王を諫めたり。　時には、騎士としてその命

を捨ててまでモンスターなど戦い。　また時には、国を揺るがす国難の時に、王国の為に身を捧げたりした事が在ったらしい。　追放を受ける切欠は、他に追放された貴族の一つと血縁が強まり。　時の国王の我儘に近い改革の速度を緩めようとした結果だとか。

トリッシュも王子である。　アンソニーの兄が妻を強引に殺められた事には、同じ男性として同情をした。　だが、実際に行われた改革の中身は、王の感情的な公私混同の部分も多々在り。　改革の全てを賛同出来るとは思わないと、最後に添えた。

聞いているエリウィンは、亡き父が自分に護るべき道筋を示している様な。　トリッシュを支え、心から王に仕える事が役目だと再認識させられる様な気持ちに成った。

二人は、此処で引き続きの調べ物を続けた。

★

「あぁ嘆かわしい・・実に嘆かわしいっ」

声を震わせ、握る羽根の付いたペンを机に突き立てるのは、あの老人だ。　ミグラナリウス８４世。　本名は、ジャーチル・ヘドウィグ・ミグラナリウス。　彼もまた、ハレンツァ同様に名前を呼ばれない人物の一人。　だが、ハレンツァと大きく違うのは、彼自身が名前を棄て。　ミグラナリウスを使っている点であろうか。

さて、この老人が怒りに身を震わせているのは、返礼の挨拶を書こうとした矢先であった。　予てから計画の思想に協力的だった貴族

へ、自分の下に一度挨拶に来て欲しいと書状を書き送ったのだ。
だが、その返事はどれも裏切りに近いものだった。
ー　　ミグラナリウス殿、ご機嫌麗しゅうに
今、国家の大老とも言うべきハレンツァ殿が亡くなり。　年末年始の祝賀行事まで、我が家では彼の喪に服す事に成りました。
王の威権の問題と、この問題は別物に御座います。
どうか、喪を終えて新たな年を迎えてから、またお互いに顔を合わせたいと存じます。　ー
老人と予ねてから親しく付き合う貴族出、初老の当主が返した書状だ。
ミグラナリウス老人が会いたいと書状を書き送った者は、１５家。
その全ての返答が、この内容に似通っている。　中には、王では無く。　貴族を代表するハレンツァの死を受け、老人とバカ話に興じるなど出来ないと云った関係解消とも取れる内容も有る。
老人からするなら、王族擁護に回った裏切り者のハレンツァなどどうでもいいのだが。　他の貴族は、計画の薄皮を夢物語の様に聞いていたに過ぎない。　老人の思う協力者と云う想像図が、大きく壊れた。
老人は、ラヴィンが傍に居無い今、急に孤独を味わう様で怖くなる。
こんな時なら、あの“バカ”を名前に付けてもいい様なオグリ公爵でも、傍らに居るのを喜べそうな所だ。

さて。

そんな事から気落ちするミグラナリウス老人を、そっと開いたドアから覗くのは、老人に仕えるあの中年男性である。　コート風の礼服を着て、スカーフネクタイとベストも着こなし、中々の似合い様。

だが・・、その顔は曇っている。

（どうすればよいか。　俺は・・、裏切りをしなければ成らないのか？）

老人以上に心が乱れる用人の男。　彼の懐には、差出人不明の手紙が在る。　いや、差出人は誰かなど直ぐに見当が付いている。　その相手が問題なのだ。　そう・・、恐らくはこの老人の孫で、“気狂い”と云われるジャニスであろう。

ー　マクファーソン・レンドル殿。　フフフ・・・、君に良い知らせを。

昨日から、君の末の息子が消えているだろう？

いやいや、案ずるな。　彼は、今はと或る所でノンビリとしている。　用件が決裂するまで、彼は絶対安全と云っていいから。　まぁ、気楽にしたまえ。

用件とは、至極簡単だ。

これから、指定された日の深夜。　私の手の者と会って、話を聞いて欲しい。　そして、その話を快諾して欲しいのだ。　君がその願

いを叶えてくれるなら・・ご子息は無事に帰す。

フッ。

正直、殺しなど面倒だから嫌いだ。　だが、君が拒否をすると云う事は、此方にもそれなりの飛び火を覚悟しなければ成らない訳で。

そのつまりは、大変だ。

日にちは、明々後日の夜。　君の住む離れから近い厩舎に行く。恐らく、この手紙を読めば、私が誰か想像がつくと思う。

当日、良い返事を期待するよ。

では、頭の腐った君の主には内緒で宜しく。

追伸。

其方が差し向けてくれた美女は、在り難く頂いた。　だか、もう返す気は無いので、そのつもりで。

では、腐った老人には、くれぐれも内密に頼む。　ごきげんよう・・・。

―

この気取った書き回しは、ジャニス以外には考えられなかった。

（なんたることだ・・・）

マクファーソンは、気のおかしいジャニスに息子を攫われたのだ。

昨夜、口のモゴモゴとしか言えない妻が、手紙を手に上の子供達

と泣いていた。

マクファーソンは、老人に相談しようとしたのだが・・。　今の状況では、何を相談しても気に留めないだろう。　仕方なく、どうしたらいいか悩んでいた。

ジャニスの元に行かせたユーシスは、戻らないままに4日を過ぎた。　恐らく、ジャニスに監禁されているのだろう。

何故、老人がユーシスをジャニスに遣わしたか。　それは、ジャニスが有る意味潔癖の性格で、異性をゴミと考える性格が災いしてだ。　この老人は、行く行くは自分の家を含め、ミグラナリウス・クシャナディース・ヘンダーソンの3家を公爵にして、5大公爵に3家をねじ込ませようと画策している。

この計画に当たり、爵位的階級と云う意味で向上意欲が無い老人の息子は、リオンの飼い犬に近く。　違う意味で狂人の如く振る舞い、欲望を別に向ける孫のジャニスは、老人の傀儡には成り得ない。

老人は、ジャニスの子供を教育し、自分の分身を生み出したかった。

老人は、その思考を祖母から叩き込まれたらしい。　実は、ジャニスの母親とはとても欲望の強い女性で在り。　老人の息子に嫁ぎながらも、この老人と関係を持ち続けた悪女に近い。　本来なら、ジャニスも母親の教育でそう成る予定だった。

が。

ジャニスは、生まれながらに異才を放つ神童と云われた。　そして、彼は自分を洗脳しようとする母親を、物心付く幼い頃から軽蔑視し

ている。　まだ、彼と父親の会話は、何処にでも在る反発する息子と、言い聞かせたい父親の構図と云えた。　しかし、母親とジャニスは、生まれながらにウマの合わないと云うべきか。　生理的に相反する母子だった。

その答えは、乳飲み子のジャニスを乳母に棄て。　もっぱら夫の留守中に、実の夫の父親と姦通する母親の性格から来ているとマクファーレンは思う。

そして、ある時。　マクファーレンが老人の影の手先から、一応は堂々と用人に成り立ての頃。　惨劇は起こった。

この家の螺旋階段にて、ジャニスの母親が転落死を遂げる。

物音と悲鳴を聞きつけ、メイドや自分が現場に向かうと・・・。首の骨を在らぬ方向へ回し、血を吐いて死んだジャニスの母親が居て。　階段の上には、まだ8歳のジャニスが佇んでいた。

マクファーソンの見たその時のジャニスは、異様なまでに無表情で。　慌てるメイドや騒ぐ下男達を見ても、何一つ動じる事も無い様子だった。

結局、母親の死を重く受け止めたのは、老人だけ。　元々から仲の悪かった旦那は、薄々と実の父親との姦通を感付いていたし。　一人息子のジャニスは、母親を親と思っていなかったから、死んでも悲しむ訳も無い。

一年して、ジャニスをアハメイルへと連れた父親は、別の温和な貴族女性と再婚している。　リオンとテトロザの付き合いからの見合い結婚らしく、この老人は結婚式に出席しなかった。　この時から、

老人と息子の半疎遠状態は続いている。

ジャニスは、非常に勉学の成績は優秀であり。　芸術には優れ、描く才能は天才だと評価。　１６の自分から、父親の伝で、王都の芸術教育の学校へ通う事に。　２０前で、絵と建築設計のデザインでは、並ぶもの無しと云われた。

王都に戻っても、この専横激しい老人とは全くウマが合わず。　離れた別邸をアトリエ兼住まいとして、彼は借り得ている。　その金も、父親の懐から出た物と自分の才で稼いだ金で賄っている。　芸術界でジャニスは、将来アハメイルに住む鬼才ウォルターの跡を継ぐとさえ云われる。

実際。　ジャニスの才能を見抜き、王都の洗練された芸術学院へ入学を勧めたのが居る。　Ｋの知り合いで現れた、あのウォルターその人だ。　孤高を好む上に我儘で、回りを軽視するジャニスだが。　唯一本物の貴族と敬愛するのが、そのウォルターなのだ。

そして、このウォルターもまた２０前後の若い頃に、当時は中年のミグラナリウス老人と出会っている。　当時から天才で通っていた彼だから、老人も仲間に出来れば心強いと思ったのだろう。　アハメイルにて開かれた祝賀祭に同席させて、彼に貴族至上主義を説いてみた。

一方のウォルターは、老人の下心が潜んでいるとは知らず。　親しい仲間から執拗に誘われて、気晴らしのつもりで来た祝賀の席で。　嘗ての老人に囁かれたウォルターは、上っ面で楽しむ素振りの貴族達を前にして、突然にこう言っている。

“王都とは、雪に閉ざされているのが悲しい定めだな。　大海を知

らぬまま池に飼われた魚が、大海原を泳ごうと夢見ている。　貴族の庭の小池に住む鯉が、大海原の何を語れようっ。　冬の厳しい寒さを自力で生き抜かぬ虫の卵に、冬の厳冬を生き抜く生き物達の何を語れようかっ！！。　嗚呼、古えからの名家だけを振り翳す小物が、世界を春に導く王の険しき道の何を知り得るのか？！。　・・・実に下らん、此処は化石の会合よ”

ウォルターは、老人に取り巻く様に諂い、老人の語る持論に賛同する貴族達へ言い放ち。　老人を一瞥だけして、祝賀の席を去った。

この王都で、決まりきった時を過ごしつつ過大な夢を持った老人を皮肉ったのである。　貴族としてプライドの高いウォルターだが、クランベルナードとは変わった意味で仲が良い。　時折、古い形式に拘る王家を批判するウォルターだが。　リオンとは、皮肉を交えて腹を割った話し合いも出来る男だ。　アハメイルの流行や商人の台頭を目の当たりにし、世界の流れの本流を肌で感じる鬼才には、ミグラナリウス老人が既に白骨化した化石と同じと思えたに違いない。

そして、その意見を賛同したのが、他ならぬ老人の孫であるジャニスなのだ。

老人は、水と油は合い寄れぬと解っているだろうに。　ジャニスを飼い慣らすべく、ユーシスを送った。

しかし、それが老人の思惑通りに行くかと云うと・・・。

固執して行く者は、あらゆる意味で何か大切な部分を軽んずる。老人は、身近な家族さえ軽んじているのだ。　その歪は、何処までも矯正される事無く続いている。　そして、歪に耐え切れなく成った関係は、耳に聞こえぬ音を伴って壊れて行くのだ・・。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

そろそろ、セイルとユリア編も終わりに近付いてきました。話の完成度が高い主人公のものからと成りますので、ご了承下さい。

また、エッジスタにて、ファン登録して下さった皆様、此処をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとう御座います。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪欲望に魅入られる者達・噴出す脅えと蟠る情欲≫

王と王妃が離宮へ離れて3日ほどすると、政務へ出仕する者が半減していた。　休んだ大抵の貴族は、急を要する仕事では無いのか、王に従って喪に服すと許可を願い出た者ばかり。　仕事の在る者は、やや寂しくなった王宮に出仕していて。　日々の仕事に勤しんでいる。

王都で行われる祝賀に向け、国内の貴族か王都へと集まる。　来るに聞くはハレンツァの訃報に、喪に服す王と王妃の事。　国葬が行われた広場に、地方の貴族達が花を手向けたりしているのも目立ち始めた。

身分の低い貴族や政務官として職に就く者も、亡きハレンツァを偲んで寺院に祈りを捧げたり。　家族で国葬の行われた記念碑に出向いたり。　王都の彼方此方で彼の死を悼む者が、それぞれに在る。

それは、ハレンツァの人徳が高かった事を示す様で在った。

だが。

そんな中。　無断で出仕しないままの者が居る。　貴族が住み暮す区域でも、王城から離れた北西の区域に、雪の中で佇む変わった屋敷が在る。　広い庭を四角く囲う格子の塀だが。　その塀越しに、何処の方角から見ても同じ様な面構えをして見える屋敷が在るのだ。

そして、朝からまた雪が降り始める中で。

「えぇ～いっ！！！！　早く脱がぬかっ！！」

と或る一室にて、怒声を張り上げた誰かが居る。　誰であろうか、それはクシャナディースであった。　彼は喪に服す訳でもないのに、軍人としての仕事を放棄したかのように屋敷に居た。　円形の変わった屋敷を持つ彼は、その屋敷の中庭に塔型の離れを作り。　今は、新妻と共に其処に住んでいる訳だが・・。

自身の寝室のベットが横たわる間近で、上半身を裸にして叫んだクシャナディースが仁王立ちしている。

「あああ・・お・お許しを・・」

豪華なシャンデリアが煌々と灯り、真新しい青い絨毯が敷かれた広い寝室。　彼を目の前にして、床に伏せて許しを請うのは、まだ１６・７と思える様な若い女性だった。　運動などした事の無さそうな華奢な体つきで。　白いネグリジェから透けて見える肉体は、肉付きが少ない細身。　この様な細身の娘が令嬢と云うか、姫と育てられたのでは、偉丈夫のクシャナディースに怒鳴られたら、それこそ恐れ戦いて何も出来なく成るだろう。

だが、何故か怒っているクシャナディースは、ギラギラと滾る様な目を尖らせ。

「お前が我が子を生む気が無いからっ、ワシはヘンダーソンの様なヤツにバカにされるのだっ！！！　さぁっ、少しは休んで居ただろう？　脱げっ、脱がぬかぁっ！！」

クシャナディースは、自分の背丈からしたら、丸で子供の様な女性に掴み掛かった。

「あぁっ、お許しをぉぉぉーーっ」

「ウルサイっ！！！」

クシャナディースに胸倉を捕まれた女性は、軽々と身を起こされる。
その顔は本来なら愛らしさが際立ち、花園にでも居て蝶や花と戯れているならさぞ絵に成ろう。　だが今は、脅えを露にして強張り、口元には薄っすらと痣が見えていた。

そんな彼女を、丸で殺し兼ねない睨み目で見るクシャナディースだが・・・。　彼女に同情の念も持たぬ野獣と変わりは無い様に見える。
涙目の彼女が幾ら滴を落せど、クシャナディースには何の訴えにも成らないのは明白だった。

そして、部屋を扉一つ隔てた廊下には、中年の礼服を来た執事か、用人らしき男性が倒れていた。　顔には、真新しく殴られた痕が診られ。　鼻がやや曲がり、鼻血を床に流している。　彼は、クシャナディースの妻と成った姫に付き従う者だった。

恐らく、ヘンダーソンに注意を受けて苛立ったのだろう。　不満を

をぶつける様に、昨夜から妻を抱いたクシャナディースであったが。
朝方に一人でベットを離れ、眠れぬままに酒を飲んでいた。そして朝になって少しすると、性欲を持て余す野獣の如くまた寝室へと遣って来たのだ。

彼の妻に従う用人として来ていた男性は、廊下でクシャナディースとばったり鉢合わせした。酔ったクシャナディースは、性格が変わって野蛮に成る。そんな状態で夫婦の営みなど、殆ど暴行に近い。用人の男性は、もう少し休ませて欲しいとクシャナディースを諫めた。

だが、寝ずに酒を飲んで居たクシャナディースだ。もう判断の鈍った彼は、無頼の悪党と変わりが無い。諫めも聞く耳持たず、彼を殴り倒して寝室へと踏み込んだ次第である。

男性との経験も知らず、純粋に初恋の恋愛を重ねていたらしい妻の彼女にとって、金で売られた相手が悪過ぎたと云えようか。

時として、貴族社会にはこうゆう事が起こる。望む相手が強引だと、少女の内から３０も４０も年上の男に嫁がされる事も屡(しばしば)。それが幸せな方向なら良いが、悪い方向では目も当てられぬ訳で。

妻の泣き叫び許しを請う声が、衣服を裂かれ、欲望に狂う男の荒ぶる声に掻き消される。

恐らく、この場面を見る限り。誰もがクシャナディースを“極悪人”か、“気狂い”の様に思うだろう・・・。

しかし、クシャナディースとて、それ程オグリ公爵の様なバカでは無い。あの老人が自分に公爵の姫を嫁がせたのは、己の影響下に

末永く置ける高位の貴族・・・と云う足掛かりが欲しいが為。　公爵の血を引く訳でもないクシャナディースなど、云わば種付けに用意された雄馬に等しいのである。　クシャナディースの子供が生まれ、公爵家存続が世間に認められなければ、あの老人の望みは叶わず。　布いては、自分の価値も消え失せる。

妻を強引に抱くクシャナディースは、それだけ焦っていたのだろう。

　自分に必要価値が無くなれば、只の金食い虫として汚名を受けるだけでは済まされない。　下手をすればあの老人から切り捨てられ、殺されるかも知れない。　剣の腕は達(たつ)クシャナディースだが、長く深い付き合いをして来た高位貴族家は、この王都に他は居らず。ヘンダーソンと老人の采配に乗っかる、云わば新参者なのだ。

この女性に対して見せる彼の苛立ちは、最近のヘンダーソンが吐く嫌味からで在り。　それは、通じて身の安泰を願う危機感からだった。　もし、いざと成れば。　この妻と成ったうら若き女性も、口封じに殺される可能性も有る。　あの老人の性格からして、それは容易に想像出来る。

正直な所、クシャナディースも出世欲が僅かに勝って、なんとかあの老人に加担しているが。　計画に引き込まれる前の頃は、ヘンダーソンと老人を怖がった位だ。

だが、一度走り始めた計画に加担した以上、もう逃げる事は許されない。　そう、自分が持つヘンダーソンや老人の弱味など、向こうにして見れば取るに足らぬもの。　自分を表で動かす操り人形にしたのだ。　ヘンダーソンや老人は、計画に加担する以前の自分の裏側まで知っている。　喧嘩をしても、勝ち目の無い相手なのだ。

（云えぬがっ、お前も托生の運命なのだっ！！　子を産めぇぇぃ

っ！！！！）

クシャナディースは、目の前の女性を孕ませる事に目の色を変えた。
生きる為に、生き残る為に、自分の身を安泰にする為に・・。

女性の許しを請う声が微かに窓から漏れていたが、それも次第に聞えなくなった。　雪は、この日も深々と降り続ける。

・・・。

此処で、もう一人の動向が問題だった。

それは・・・。

薄暗い部屋である。　高い場所に在る窓から、白んだ昼間の陽が微かに差し込み。　その牢かと思われる部屋の周囲は、古びて黒ずむレンガ張り。　部屋の片隅では、使い込まれた暖炉に熾きが出来ている。　その炭が焼け、半分燃えた薪の乾くパチパチとした音が妙に部屋に響いていた・・・。

部屋の中央に目を移すと、白い何かが蠢いている。

「じゃ・・シャニス・・さ・まぁぁ・・、もぅ・・もう・・おゆる・・しを・・・」

幽かな声が、薄暗い部屋に放たれる。　その白いものは、全裸の女性であった。　張りの在る胸を露にし、長い金髪を背中に敷いて乱していた。　部屋の中央に築かれた石の祭壇の様な台の上に、その

女性は横たわる。　力無くもがく手は、鋼鉄の棒に鎖と手枷で固定され、頭上へと伸ばしたまま・・。

その女性の脇には、長い丈のガウンだけを羽織る裸体の男性が居た。　少し無精髭を生やしているが、やや細身の身体は無駄の無い様子で。　女性の寝かされている直ぐ脇に置かれている水瓶から、金柄杓に汲んだ水を飲むと。

「ユーシス。　お前、解ってるだろう？　まだ、俺が元気だって事を・・」

と、また水を汲み。　そして口に含むと・・、寝かされている女性に迫り、口移しで水を飲ませるのである。

そう。　この男が、あの老人の孫であるジャニスだ。　顔は青年らしい風貌で、キツイ視線と卑下な印象を与える口の歪ませ方を直せば、中々の男前。　何処かカリスマ的な風貌を臭わせる雰囲気が在った。

一方、裸のままに居る女性は、あの老人の下に居た女性ユーシスの様である。　白い肌に然り、その肉感の魅力的な身体に然り、確かに男の目を惹くに値う容姿だった。

だが・・。　彼女の胸を見るに、相当遣われ男性の相手をして来た様な柔かさが在り。　この身動きを封じられている中で、弱弱しくも嫌がり逃げようとする印象を受けるが。　しかし、その顔はもう恍惚と呆けて、何処かこうゆう事に至って尚も悦んでいる様な印象も・・・。

口移しに水を飲ませたジャニスは、そのままユーシスの唇を飽き足

らず奪い。　彼女が少し荒く呼吸をし出すと、放し・・。

「フン。　あのジジイにとことん教育されたお前だ。　これぐらいの交わりなど、まだ半端って所だろう？　その悦ぶ顔・・・、イイなぁ～」

ジャニスは、そう言ってガウンを脱ぎ、水瓶近くの籠に放る。　そして、ユーシスの上に覆い被さった。

ユーシスとジャニスの顔が間近に成り、汗で湿った彼女の髪を触るジャニスは・・。

「ユーシス、お前は違うオンナだ。　あのクソジジイに慣れたのも、その快楽に溺れるが為だろう？　国家の力関係を変えるなど、今は時代が許さぬさ・・。　あんな昔の威光に縋るオンボロは棄てろ・・、俺に乗り替われ」

そう強者の様に上からの面持ちで言うジャニスを見つめ、妖艶にニタリと笑うユーシス。

ジャニスは、そんなユーシスを見て狂喜を身に感じ。

「それでいい・・・それでいいのさっ」

と、ユーシスを貪り始めた。　白い肌に盛り上がる胸を、手と口で奪うジャニス。

すると・・、クネリクネリも弱弱しくもがくユーシスだが、その顔は笑みに満ち。　ジャニスのする事に、もう堪えられる悦びを味合わせられていると云った様子でしか無い。　妖艶な美しさを持つこ

の女は、一体どちら側に従っているのか解らなかった。

このジャニスと云う男。　祖父には“気狂い”と云われ。　父親には、“変人”と云われている。

それもその通りで。　母親の死に際は、階段の上で澄ましていたし。　人の死ぬ姿とは、文学的に書かれるそのままなのかと云う疑問を、本当に池に人を突き飛ばして溺れるのを観察しようとしたり。　絵を描く事で集まった学習生の前で、いきなり自分が裸と成って布一枚だけ前に付し。　デザインの元にしろとポーズを決めた事も在る。

更には、父と行ったアハメイルでの生活で、暇だからと金で雇った冒険者に無理難題な仕事を請け負わそうとするし。　下水道に流れた人の死体に集まったスライムの模写をしたいと、勝手に行くし。　傾いた会社を苦に、自殺しようとしていた男性と組んで商品開発で一山当てた事も。

だが、その無謀にも見える彼だが、数理計算の知識は中々のもので。　暗算の処理も速ければ、算段を立てるのも早く。　そして、建築の設計から、描き出すデザインの才能は周囲が認めている。　更に、意外に弓を使わせると、集中力の高さから的を外さぬ腕前が在る。　ある意味の天才肌だった。

彼は、もう寺院の設計や新しい文化施設の建設を終え。　その計算された幾何学的美術要素から、若いながらに高い評価を得ている。　彼は、欲望と美と思考に夢中であり。　自分の祖父が企てる様な計画は、もう今の時代にそぐわないと読み切っていた。

ユーシスの胸を弄り、やや汗さえ匂う身体をも舐める彼の脳裏で。

（・・んははははっ、クソジジイめっ！！　俺を骨抜きにしたと喜んでいるだろうがなぁ～。　この通り、テメェのオンナを物にされてるとは思わなだろう。　ジジイの計画の裏で、俺の計画が進んでいる事も知らないとは・・。　長生きし過ぎて、頭にヤキが回ってる。　ユーシスは俺のものさ・・、この家もな。　どこぞの公爵の姫だってぇっ？！！！　そんな汚されても居無い雌など要るかっ！！！　人の歴史は、汚れと再生と破滅・・・。　このユーシスの様に、汚れても尚に美しく壊れたものこそが素晴らしい・・・。　見てろ、ジジイ・・。　お前の思い通りに、俺らや世界が回ると思うな）

と、自分の祖父への憎しみめいた思いを吐き捨てるのだ。　祖父に対抗すべく、理知的に画策を巡らし。　その知的に計算する事に因って生じる興奮を、抱くユーシスに向けるのであった。

確かに、一般の人と比べるに、彼は随分と変わっている。　だが、彼の思想は先端に在った。　王ですら、もう古いと思う彼だが。　今に王を廃すれば、世界は混乱し国同士の戦争が起こる。　そうしたら、軍事権を持つ貴族階級が戦争を支配し、王の位置が彼等と入れ替わるだけとも解っていた。　自由で、我儘の許される思想社会の到来は、もっともっと後だとも・・。

果たして、強引にも昔に還ろうとする狂気が強いのか。　それとも、先端の思想から、新たな世界を描く鋭敏なる思想が強いのか。　狭い一つの家族と云う枠の中で、世界の将来を描く二つの人間が摩擦を起こす。

それは、どうゆう結末を迎えるのだろうか。　この事件の中で、それはどんな糸を引くのだろうか・・。

そして。　出仕しない者の中には、ヘンダーソンも居た。

喪に服す素振りで休みを貰った彼だが、家に戻っても家族等と会う事も無く。　離れである小さい別邸に篭り、昼前の少し明るく成った頃に身支度を整えて馬車に乗った。　尾行されても構わないのか、馬車でゆるりと揺られて動く。

昼間に迎える少し前から、昼下がりまでの少しの間の夜明け。　その頃にヘンダーソンが最初に向かったのは、前当主が一時的に危篤に陥ったサージネルス家。　5大公爵の序列3番目にして、王族に縁の繋がりが深い公爵家だった。

だが、ヘンダーソンは、其処で思いも因らぬ待遇を受ける事に成る。　尋ねたロビー先で彼を迎えたのは、今の当主である若い女性で。

“ヘンダーソン殿、悪いのですがお引取り願います。　祖父は、ハレンツァ様の喪に服したいと、誰とも会いたくないそうですわ”

王家の執務官であり、御傍用人の地位を口に出してまで食い下がろうとしたヘンダーソンだが、二日前にポリアンヌが逢いに来たと聞いては、諦めるしか無かった。　クランベルナードの一番お気に入りであるポリア。　彼女が自分を嫌っていたのは有名であり。　彼女が此処を訪れるなら、誰も彼女が嫌う人物を相手にしないと解ったのだ。

サージネルス家の若き当主である女性は、ポリアとも年齢の近い人

★

物であり。　また、ポリアの家とも新密度が高い。　危篤に陥ったホファンは、最初先々代の当主として居た。　５０を過ぎた所で、頭のキレる酒好きな息子へと家督を譲り渡した訳だが・・。　その息子が、酒が祟って早世する。

これだけ聞けば、そんなに込み入った事でも無いとお思いに成られるだろう。　所が・・。

結構好き勝手な事をしたホファンの息子は、最初の妻を気に入らず追い出し。　貴族出の人妻を誘惑した上に、愛妾として囲った。　だが、その愛妾に自分の娘が生まれて間も無く、大病を患い呆気なく死んだ息子。　更に巡りあわせか、彼の後を追って自殺した愛妾。　周りに何も言わせない気の強さを持った情夫が死に、人妻は残されて茨の後生を過ごす事を受け入れられなかったらしい。

そんな流れで、この屋敷に戻って貰った妹の一家に助けを借りつつ、再度家督を自分に戻したホファンは孫娘を大事に育てた。　その孫娘が、幾つか年下ながら、通う学院で一緒だったポリアと仲良くなったのは、リオンを通じて。　今では便りが無くとも、ポリアがホファンの危篤を聞いて訪れる間柄なのだ。

実は、本人には自覚が無いのだが。　ポリアは、ある意味で貴族界の異端児に近い。　彼女の訪問を心待ちにする大貴族は多く。　ヘンダーソンは、やや嫌われ者に入る。

立ち去る事を余儀なくされたヘンダーソンは、雪が舞う外に出ながら。

（何たる事だっ！　あの跳ねっ返りが動いているっ？！！！　クソっ、小娘との親密さを望む貴族は、私などを遠ざける・・。　うむ

む・・・これはいかん）

自業自得なのだが。　ポリアが王都を離れるまでは、自分の行動範囲が自然と狭められ出したと思うヘンダーソン。　貴族からの門前払いなど、流石に今のお役目に就いて初めてに近い。　胸の内に湧き上がる苛立ちを押さえ込むだけで、彼にして見れば精一杯だったであろう。

高位の貴族は、得てして冒険談議などが好きだ。　ポリアのチームは、リーダーの彼女を中心に名前も売れているし。　ついこの間も、アンソニーの一件で強力なモンスターを退治している。　ポリアと交際を持つ老貴族などは、そんな話を聞きたがってポリアに手紙を出していたのだ。　ハレンツァの死の前から、王都に居るのは知れ渡って居たポリアだ。　その催促や挨拶状が旧本家邸に届けられ、気が向くと彼女は出向いていた。

更に。　其処でハレンツァが死んだと成れば、その家族の身柄を引き受けているポリアである。　彼女に一時的に避難したご家族の様子を聞いたり。　また、その協力を申し出たりして、ポリアの家と親密な関係を築きたいと思う貴族が多くて不思議は無い。　彼女に手紙を出す上で、貴族同士の讒言を避ける為にも、ヘンダーソンと表立って仲良くする時期では無かった。

そう、王の傍に居れない取次ぎ用人・執務官などと・・・。

この事を密かに噂として聞いていたヘンダーソンなだけに、王が離宮へと消えた今。　彼女に嫌われた自分が、今更に恨めしく成って来た。　だが、その全ての原因は彼に在る。

仕方なく次にヘンダーソンが向かったのは、王妃の実家である。

自分と親戚筋で、歳も近かった王妃であり。　何かと用人の自分を頼った王妃だ。　此処なら、邪険にされず根回しが出来るとヘンダーソンは思った。

しかし、王妃が本格的に王と喪に服してしまった手前、王妃の実家もそれに習って喪に服すのは礼儀である。　況して、ハレンツァは孫の王子達の模範と成る良い教育係のような人物。　彼を亡くした後の喪に服す中で、軽々しく客と会うなど無礼に値う。

一応、王妃の兄で当主代理に面会は出来たが、ヘンダーソンがどうにか王妃に会えぬものかと相談すると・・。

「何を云うかと思えば・・ヘンダーソンっ。　君は、我が一族の者成れど、この時にその様な非礼を良くも抜け抜けと云えたものだな。　王の側近者である君は、誰にも増して亡きハレンツァ殿の喪に帰順し。　王が、我が妹である王妃と共に離宮より出られるまで、屋敷に篭って祈り居るのが務めであろうっ。　一刻を争うかも知れぬと云う用事で在ったが、一体何だ？　我に云えぬなら、只今、ご命令で王宮を預かるセラフィミシュロード様の両名に、その火急の用事とやらの話を通すのが筋であろうっ！！！」

と、叱られる始末。

「それは、そうですが・・」

言葉を濁すしか出来ないヘンダーソンへ、真面目で堅物の当主代理は更に苛立ち。

「緊急でない用事なら、即刻立ち去れぃっ！！！！　我が一族の名前に泥を塗る様なら、私は承知せんぞっ！」

と、まで。

王妃の家系は、古い貴族筋では有った。　だが、一時の昔に誇った威勢に比べれば、その栄光は遥か昔の事と言って良い。　王妃として、一族の者が輿入れ出来た今だが。　一族としては、出世に拘るより先ず貴族として名前負けしない威厳と、王家に対する忠誠を持つ事が一番。　王妃の一族として、恥を見せない様に。　後ろ指を指されたり、王妃に余計な気遣いをさせない様にする事が大事と思っている。

一族の中でも頭の回りが良く、事務処理に秀でたヘンダーソンは或る意味で一族の誇り。　その彼が、王や王妃に帰順した行動を取らないのは、王妃の兄である彼には我慢成らなかったのだろう。

クランベルナードが何故に喪に服したか、その意味を理解し始めたヘンダーソン。　追い出される様に本家を後にし。　馬車に乗り、別の貴族を尋ね様とするヘンダーソンだが・・。　その車内で。

（うぬぬ・・、これが狙いではないかっ！！　この様な空気の中で、隠れて何かを行おうとしても波風が立つっ！！　これでは、動けば動くだけ怪しまれるっ）

ヘンダーソンが思う画策は、古びた礼儀と云う物に因って自然と阻止される方向性を見せた。

（嗚呼・・。　我々の計画は、一体何処から狂っていたのだろうか・・・）

馬車の中で、ヘンダーソンは思い悩んだ。

思う様に立ち行かなく成り始めた画策。　馬車の中で項垂れるヘンダーソンは、計画を最初から思い返し始めた。

思えば、此処までの道のりは長かった。　まだ若いヘンダーソンは、あの老人の口添えも在り。　結婚したばかりで、右も左も解らぬ王妃にも味方が必要だろうと云う観点から、王室執務官の下っ端に配属された。

だが。

強力な権力を望むヘンダーソンとあの老人の関係は、更に以前からの付き合いであり。　クランベルナードへ王妃に成る親戚を引き合わせろと命令を受けた時から、計画は動き続けて来た。

王妃の子供は、３人。　その何れかを洗脳しようとした最初の計画は、ハレンツァや若きポリアの様な外部の存在で邪魔された。　リオンと云う暴れん坊は、騎士としての道や兄を思う心情を鉄壁に鍛え上げ。　テトロザと二人で、ヘンダーソンと老人の撒く悪しき芽を、片っ端から摘み取って来たのである。

王妃の親戚筋で、王妃と遠からぬ従姉弟と云う立場を利用し、着々と執務官の中の階級を上がるヘンダーソンだったが。　どうにも同じ叛乱分子の芽を増やし切れないままに来た。　自分の家族や極近い親近者を手元に寄せ、王家の近場と成る仕事に斡旋して権力の安定は図れたぐらいだろう。

何よりポリアに嫌われたり、王子達と親密な関係を築けなかったのは、致命的だったのかも知れない。　トリッシュには、ハレンツァや他。　リオンには、テトロザや他。　その下の三男は、姐的なポリア他の親密な者が居て。　ポリアに嫌われた時点で、クランベルナードにやや遠ざけられたりして、王子達との距離が埋まらなかった。

一方。

そうしている内に。　ヘンダーソンの行う部分的な根回しが、途中から芳しく無いと読み取ったあのミグラナリウス老人であり。　今度は、貴族に足掛かりを作ろうと画策したのである。　極悪商人ホローと繋がり、あのバカな公爵のオグリ等も影響下に収めた。

だが。　ホローと老人の繋がりは、商売相手の域を出なかった。

ホローは、老人が密かに語る絶対権力を持つ貴族社会の中で、自分の存在は下に成ると理解。　計画が成功したあかつきには、貴族に取り立てると云われたのだが・・。　同士としての繋がりは遠慮し、多額の金と引き換えに。　ホローの悪徳商人としての勢力拡大と、捜査機関から手が回らない様にそれなりの内通者たる貴族や役人の手配を受けるだけに留まった。

つまり、ホローはそれだけ現実主義者だったのである。　名誉や家柄に縋り拘るより、儲ける事を画策する方が好きだったのかも知れない。

ホローを支配下に収め切れない老人は、他の悪徳商人とも繋がりを模索し。　その中で知ったのが、あのクシャナディースだ。　勢力を拡大し掛けた地方商人を無実の罪で陥れ、商業ルートの乗っ取り

をしたクシャナディースは、老人には悪くない人材だった訳だ。
だが。　ここ近年でその金蔓も一気に減った。

一つの要因は、リオンとテトロザ。　二人は、何かとキナ臭い事件には首を突っ込み。　老人が商人を通じて荒稼ぎをしようとする悪事や、貴族の権威を強固にしようとする画策を潰して来た事が挙げられる。

更に。　オグリ公爵と老人の繋がりを知らなかったホロー・・。
いや、ホローには、老人の足を舐める貴族など気にするに値しない。
　老人も含め、貴族は全て金蔓としか思っていなかった訳だが。
そして、人として使い物に成らないオグリ公爵が、まさかあんな格好で係わり合いを持っていたとは・・。　ヘンダーソンと老人も驚くしかなかった。

老人は、公爵として護らねば成らぬ物を、安直に易々と身代にしたオグリ公爵に憤り。　また、それを金儲けにしようとしたホローが、自分では到底手に負えないと判断した。　老人は、ホローに王家の宝物をオグリ公爵へ返却する様に手紙を出した。　だが、ホローがこの金を産む物品を手放す訳は無かった。　多額の金を積んでも、名誉をチラつかせてもホローは応じなかったと云う事実。

老人は、密かにヘンダーソンから手を回させ、ホローが行う盗品売買を露呈させ。　更には、ホローの飼う野党の群れとの仲違いを画策した。　其処で、通り掛った様に関わる別の貴族も居て。　老人は、一見すると陰ながらホローを擁護すると見せ掛けながらも。
一方では、ホローの手下として縛られた悪党達へ叛旗を翻す様な唆しを仕掛け、遠くから糸を引く形で葬ろうとしたのである。

その計画は、まんまと成功した。　通り掛りの冒険者の活躍で、上手い具合にホローとオグリが一網打尽と成り。　また、オグリ公爵の口から老人の事が漏れる危険性も在ったが。　其処は抜かりの無い老人である。　密かに手を回し、兵士を通じて精神を乱す薬を飲ませた。　貴族の気持ちの引き締めを狙うリオンは、オグリ公爵の刑の執行を早め様と厳しい取調べを課し。　連日の取調べで可笑しく成り始めたと思われたオグリ公爵は、早い段階で処刑と成った。

この一連の危険の芽を摘み取る計画に当たり。　ゆっくりとクシャナディースを公爵まで引き上げる計画が、公爵へ一気に押し上げる計画に移行した。

金で買収する公爵家の姫は、最初はオグリ公爵のバカ息子に嫁がせようと云う内々の計画だったが。　父親に輪を掛けたバカである息子では、頼りに成らないとヘンダーソンが進言。　格上げを遂行中だったクシャナディースだが、早々に公爵まで強引に老人が押し上げる事に決めた。

さて。　その計画と同時進行で途中から推し進め始めたのが、アンソニーの屋敷に有る王子の証を示す印字の調達であった。　老人がどうしてそれを知っていたのか・・、ヘンダーソンも知らない事だった。

計画当初は、手下をを封鎖区域に忍び込ませ、密かに旧王子の屋敷を家捜ししようと云う計画だった。　だが、いざ見張りの者を眠らせて封鎖区域に進入出来たと思いきや、想像を絶するモンスターが蔓延り。　更には、アンソニーの屋敷は何と魔法で封印されている。

これで、最初の計画は中止を余儀なくされた。

其処で、下調べを進めたヘンダーソン。　其処から解った事は、以

下の密約。

元々から、モンスターの棲む森や湖である事は解って居た歴代の王は、斡旋所と密かな契約を結び。　斡旋所へ年間で纏まった運営補助費を出す代わりに、封鎖区域で暴れるモンスター在らば、これを速やかに討伐させていたのだ。　更に、湖や森で増えるモンスターを討伐させ、その数を縮小させると双方で約束をした事を知る。

この事実を知った老人は、予てから悪事を助ける組織と連絡を取り合っていて。　長年に亘り、ヘンダーソンと右腕・左腕としてきたラヴィンと相談。　急遽計画を変更し。　子供を封鎖区域に遣らせゴタゴタを起こしては、冒険者にアンソニーの屋敷までの道を作らせる事に・・。

何とか、子供達を封鎖区域に侵入させる事に成功。　数組の冒険者を飼い犬にして、セイル達が子供達を救出したと聞き。　アンソニーが出て来た事は知らぬが、クシャナディースに封鎖区域の見回りを申し出させる。

王は、それを保留にしたが。　モンスターが外に出る事を相当に恐れても居たので。　ヘンダーソンとクシャナディールの長時間に亘る押しにより、見張りを手の内の者と交代させる事に成功する。

実は、この間にアンソニーが現れ、王は事態を知る。　リオンがアンソニーを助け、とにかくアンソニーをどうするかと云う難問が立ち塞がり。　クランベルナードも、煩いヘンダーソンとクシャナディースに折れたと云う内容だった。

見張りを交代出来た事で、ヘンダーソンは計画を達成出来ると思った。

所が・・。　夜に捜索へと向かわせた手の者は、またもやモンスターに食い殺された。

一人だけ大怪我をして逃げ帰った者により、またも失敗を知ったヘンダーソン。　計画を先頭で仕切る上で、この知らせには打つ手なしと呻いた。

しかし、だ。

此処で、王が上手く動いてくれた。　自分達の望む物を、冒険者を使って持ち出してくれると云うのだ。　ヘンダーソンは、王妃に取り入って王と接する機会を増やして居た事が、此処で功を奏したと思い。　セイル達の身分を知らないので、クランベルナードに宝物の管理の重要性を示唆。　その御蔭で、やっと宝物の管理を任される事に成った。

やっと計画が上手く行くと思ったヘンダーソンなのだが・・。

ラヴィンが封鎖区域で宝物強奪の襲撃に失敗。　しかも、預けられた宝物は、どれも王子の所蔵する美術品や宝物のみと来た。　ハレンツァは意味有り気に、王子の印字や軍事権を示す物など無いと云うのだが。　しかし、兵士に聞けば確かに在ったと・・。　しかも、宝物を護る冒険者達が、王と親しいセイル達と云う点に気を揉んだ。

ヘンダーソンは、何とか綻びは在れど上手く行っていた計画が、大詰めの処に差し掛かって尽く破綻する事に苛立ち。　そして、疲れ始めていた。

今の状況では、表立って動けない。　どうにかして王妃にだけでも

面会し。　王の魂胆や、人前に出て来なくなったと云われるトリッシュ、姿の見えないエリウィンの居場所などを聞き出さなければと思う。　だが、こうなると動けば動くだけで目立ち、警戒しているリオンはおろか、その命を聞くポリアの兄二人に目を付けられてしまうだろう。

ヘンダーソンは、ラヴィンが去った今。　残された組織の手下が無粋で、何事も強引にするだけで事足りると思ってる輩らしいので困った。

（ぬぬぬ・・、ラヴィンめが残れば良かったものを・・。）

ラヴィンは、もしも王子の権威を示す印字等が見つかった場合を想定し、一番信頼の出来る自分が行く事にしたらしい。　それだけ、あの面体も人数も解らぬ殺し屋集団ですら信用が出来ず。　また、組織の集めた悪党達も、一枚岩の結束力が無いと云う事なのだろう。

次に向かう屋敷も間近と云う頃。　遂に、ヘンダーソンも心配が計画遂行の一念より勝り。　馬車の内側から、外に声を掛ける小窓を開くと。

「おい、別邸に戻れ。　ちと、用が出来た」

無言で頷く御者は、馬に鞭を打ち。　先の曲がり角を曲がって、何処かの貴族の家の脇を行く。

断続的に降る雪が、また本降りに成りつつあり。　もう直ぐ、平和だった1年と、未来の平和を願っての年始を祝う祝賀祭の時期が近付いていた。

ヘンダーソンは、遂にこの式典の手配からも遠ざけられた。　ポリアの兄から、その式典は王宮を預かる王子以下、今の執行部が執り行う事にしたと通達を受けたからだ。

焦るヘンダーソンは、自分の身の振りを考えねば成らない所が近い気がして来る。

あの老人には、目の前に居る建前で忠節を尽くす様な事を言ったが。　内心では、そこまでの覚悟など在りはしない。　最終的には、一族を捨て。　あの老人とクシャナディースを囮にしてでも、自分が助かる方法を模索すべきと思う。

そう考えると・・・。

（もしかして、ラヴィンが居無いのは好都合か・・・）

と、思えて来るヘンダーソンだった・・・。

だが、それはあくまでも最終的な事態の話。　今は、まだどうにか成る処だと思える。

（ラヴィン・・、どうせなら印字か紋章を持って参れ。　王子のソレが在れば、王都以外の軍隊を密かに動かす事は可能・・。　南方のアハメイルと他でクーデターを起こせば、国が混乱する。　混乱さえ起これば、それなりに手立ては在る・・・）

焦りに責め立てられるヘンダーソンは、追い詰められ始めて。　少しずつ壊れ始めていた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪本当の事実に近付く王子達≫

見えない不安に駆られ、ヘンダーソンが自宅に引き返した後。　夕方を過ぎ、王都はすっかり夜と成った。

特別な書院に篭るトリッシュとエリウィンの元に、リオンが食事を持って来た。　前日に、身体を拭いて衣服を改めたエリウィンは、随分とさっぱりした顔で調べ物をしている。

さて、３人が揃って。

テーブルにそれぞれが座る中で。

先ず、エリウィンが、リオンへ。

「王子、家族は元気でしょうか？」

流石に、国葬の夜からもう１０日近くが経過した。　エリウィンも、流石に家族が心配だった。

「エリウィン殿、安心されるが良い。　ポリアンヌが上手く言ってくれた様だ。　今は、年末と年始の祝賀まで、ご家族は喪に向かって心を落ち着けている。　恐らくはヘンダーソンから回されたと思われる政務官の使いが行ったそうだが、喪に服すと門前で返したそうだ。　今日に聞く様子だと、もう騒ぐ事もあるまい」

「ありがとう御座います」

「うむ。　祝賀までには、早く事件を解決したい所だ」

そう言うリオンへ、トリッシュが。

「リオン。　外の様子はどうだい？　何か、起こっているのかな？」

すると、リオンはあの死体から取り出した短剣を見せも出しもせず。

「いや。　今の所は、小康状態だな。　ただ、一つ妙な事が解った」

「ん？　何だろう」

優しげで温和な美男顔を弟に向けたトリッシュへ、リオンは難しい顔を見せると。

「実はな、兄上。　クシャナディース卿に嫁がされた女性と、元から恋仲とされたロイヤリマナフ卿の御子息・・。　どうやら、二人だけの話だけだったらしい」

結構専らの恋仲と噂されていた二人だ。　エリウィンとトリッシュは、リオンへと釘付けに成った。

今朝である。　リオンがロイヤルマナフ卿こと“エロワォーク”と云う当主に逢って、それとなく確認したのだが。　恋仲と熱を上げていたのは、二人だけだったらしい。　女性の父親にしてみれば、隠し子に近かった娘なだけに。　ロイヤリマナフ卿の様な由緒有る家に嫁いで、それこそ片付いてくれるのは、正直有り難いと言った所だったらしいのだが。　貰うエロワォークにしてみれば、身分の低い愛人との間に生まれた隠し子など、正妻として身請けするに足らず。　それこそ、ハエを追い払うぐらいの毛嫌い様で要らないと言った様子なのだ。

恋に燃える二人は、結婚を前提に付き合っていると周囲に言っていたが。　当主のエロワォークは、それには断固反対をしていたらしい。

トリッシュは、どうも変な話だと思い。

「何だか、どちらもその女性かい？　彼女を疎んじているみたいだね」

聞かれたリオンも、何とも気に食わないと頷き。

「あぁ。　クシャナディース卿に嫁いだ姫だがな。　産みの母親が、貴族として地位が低いからと云うのが原因で、屋敷の離れに軟禁される様に隠して育てていたらしい。　教育を施す為に、仕方なく通わせていた学習院で、ロイヤリマナフ卿の御子息と知り合ったとか。　ただ、その付き合いも最初は人目を憚ってらしいし。　その御子息も、彼女がクシャナディースに嫁いだ今では、彼女の事など気にもしてない様子だそうだ」

性格の真っ直ぐなエリウィンは、どうも気に入らない話だと。

「一人の人間として、どうも納得の行かぬお話ですな」

王子として生きるトリッシュも、自身の性格として優柔不断な所が在るものの。　曲がった事や不貞は嫌ならしく。

「そうだね。　でも、人妻に成ったら・・諦めも必要かも知れないよ」

と、正論を口にする。

リオンは、持って来た果汁の入った瓶を手にして。

「それが、その嫁いだ女性の運命と云うのも、また微妙な話なのだ。　クシャナディース卿に嫁いだ娘は、元々はオグリ卿の息子に差し出される予定だったと云う話が有ったらしい。　彼女は、噂でオグリ卿の息子のバカさを聞いて、他の誰かに逃げたくて。　予てから面識の在ったロイヤリマナフ卿の御子息に言い寄った・・。　こんな噂が在る」

自分も果汁が欲しいと、リオンにグラスを二つ差し出すトリッシュで。

「ん～、随分と面倒な話だね。　何処までが本当なのか・・・」

リオンは、自分を含めて3人分のグラスに野苺の果汁を注ぎながら。

「調べの進み具合では、どれも本当みたいだ。　確かに、オグリ卿からの輿入れの要求は在ったと。　但し、仲介人は・・・ミグラナ

リウスの御老体みたいだがね」

エリウィンは、立ち上がってトリッシュにグラスを差し出し。　リオンがグラスを取ってから、最後にグラスを手にしして。

「また、あのお方ですか」

リオンは、乾杯の仕草を見せながら。

「あぁ、気に入らないを通り越して、呆れるぐらいに出て来るジサマ・・と云う所だな」

トリッシュは、リオンに苦笑いを向けて。

「口が悪いね」

だが、リオンは、

「いや。　それだけで済めばいいが。　クシャナディース卿から恐ろしい金額の金が出て、女性は嫁いだのも事実。　どうも、彼の格上げに絡んで、色々と符号が合い過ぎる気がしてる。　その一連の事に関して、ヘンダーソンが根回しに動いていたとの証言も在る様だ。　兄上、これはもしかすると・・。　俺達は、とんでもない大きな陰謀を引っ張り出している可能性が在るやも」

すると、トリッシュは間を置いて頷いた・・。

「リオン・・、今さっき、解った事だけど。　ミグラナリウス家は、過去にハレンツァ家と共に追放されたアルグレット侯爵と、非常に親密な間柄にあるみたいだよ。　それは、在る意味の映し身だと思

う」

今度は、リオンとエリウィンがトリッシュに釘付けとなった。

エリウィンは、思わず声を上げ。

「トリッシュ様っ・・、何かお解りにっ?!!」

リオンも。

「兄上、とうとう突き止めたか?」

二人に見られるトリッシュは、今まで見ていた古い家系図に、養子や廃嫡などの説明を抜き出して書いてある物を、テーブルの真ん中へと置き。

「結論から言うと、ミグラナリウス家は、アルグレット家なんだ」

リpンは、話が飲み込めず首を傾げ。

「ん・・、一族を貰って、貴族に成ったから?」

「いや、それ以降もだ。　家系図を一見すると、アルグレット家にミグラナリウスの誰かが。　そして、その逆で、ミグラナリウス家にアルグレット家の誰かが養子に行った事は殆ど無い。　でも、二つの家は、幾つもの貴族家に養子や養女を送り、その全てが各家の当主に成っている。　そして、其処に養子・養女を送り付け。　その子供を、当主の座を受け継ぐ誰かが無くなる時に、受け入れている」

リオンとエリウィンは、家系図の長きに渡るその証を見た。　あの粛清の時。　追放された別の2家。　及び、沈黙を護って連座しないままに、ミグラナリウス家を筆頭とした系列の貴族が居たのだ。

トリッシュは、その家系図を解り易く、自分なりに書き出したものも見せ。

「正しく、あの粛清の時、アルグレット家の娘3人は、消えていて。　何故か、親戚筋の家に子供が増えている。　その子供は数年後に、ミグラナリウス家を始めとしたアルグレット家と縁の深い3家に、それぞれ養女として迎えられ。　それぞれが領家の貴族筋を婿に迎えて、なんと当主を・・・継いで居る。　僕の推理が正しいなら、ミグラナリウス家以外の2家は、家を存続させられなかった様だけど。　ミグラナリウス家に後を託したんだと思う」

「兄上、真か？」

「今、隠棲しているミグラナリウス老人だけど。　母親を、アルグレット家の血を存続させて来た疑いの在る家の一人娘に当り。　祖母は、ミグラナリウス家に後妻として入った女性としている。　でもこの祖母もまた、吸収と云う形で、もう一方のアルグレット家の血を存続してきた家の最後の娘に成るんだ。　ミグラナリウス老人は、アルグレット家の残された血を集約して産み落とされた人物と云ってもいい」

エリウィンは、興奮した様に。

「ですがっ、証明は難しいのでは在りませんかっ？」

トリッシュは、他に集めたスクロール状の紙を指差し。

「全てに於いて、関係している核はアルグレット家。　関係する家は、全てアルグレット家の血を分けて貰って貴族と成り。　そして、アルグレット家に忠随した政治活動を行っているんだ。　証拠は無いけど、この追放時の裏側で、3人の養女と成る娘を育てていたとされる寺院。　この内部記録なんかを見れば、その全貌が明らかに成ると思う」

リオンは、なんとも掴み切れないむず痒い話に。

「一体、アルグレット家とは・・何なんだ?」

と、漏らす。

「リオン。　アルグレット家は、ポリアンヌの家の下に在った古来の貴族みたいだ」

「本当か?　兄上・・」

「ん。　創世神話記で邪神や魔王を追い払った中で、民を率いて各軍勢を指揮した王家。　その王家は、世界の国に散った。　だが、フラストマドを建国した王家には、双子の兄弟と、妹が居て。　双子の兄弟は、それぞれ今の王家の2家に成る。　そして、その妹の夫であり、双子の兄弟とは従兄弟に成るのが、それがポリアンヌの家とされる。　しかし、アルグレット家は、そのポリアンヌの家の一族の親戚なんだけど、元は名前が違ったらしいよ。　と或る時に、あの家の当主が国に叛旗を翻し、当主の弟がそれを粛清した。　そこで、アルグレットと云う名前に変わるみたいだ。　昔から、貴族の権威を異常に誇示する一家でね。　貴族主義最盛の時代には、高額な税に反抗した民衆を虐殺した経歴も或る。　貴族社会の崩壊時、

あの粛清前には異常な法案をも提出しているよ」

リオンは、兄の広げたスクロールを見て。

“貴族の地位及び権限を永遠に保障し、王もその権限を侵すことを赦さない”

“貴族社会を崩壊。　若しくは、そうさせようと市民が扇動をするなら、これを極刑に値する処罰を以って鎮圧出来る”

と、異常な考え方を示す法案の原案論を過去に出したと見て、余りの強権ぶりに驚いた。

「何だと？　これでは丸で、自分達が神の様に振舞っているみたいじゃないか」

「そう言っても過言じゃない。　ポリアンヌの家は、王都とアハメイルの行政に、協力と云う任命によって参加してるけど。　アルグレット家は、公爵家に楯突かないだけで、お役目の権限を私物化して来た様子が窺える。　それを可能とする様に、位の高い家や王家筋に妻を多く送り出してる。　隠しても隠し切れない程に露呈する遣り方だから、相当強引に押し付けてたかもしれないよ」

「なんたる事・・只の業つくだっ」

２０半ばを過ぎようと言うリオンだが、気質からかこうゆう処は青臭い一面を覗かせる。

だが、兄のトリッシュは、リオンのこうゆう部分を好いていた。

「リオンは、真っ直ぐだからね。　でも、これはこの一家に限った事じゃ無いよ。　昔は、我らが王家も、他の貴族も同じ事を強いた時期も在る」

「だがっ、兄上っ。　今は、その様なっ！」

憤るリオンの気持ちを、トリッシュは和らげる様な頷きをして。

「うん。　でも、変われる者と変われない者が居るのは、世の常。　それを、王家が指針を出して、時の流れを味方に矯正して行くしかないんだ。　一人でどうこう出来る事じゃない。　しようとすれば、このアルグレット家の様な強制的な事に繋がる」

「ん・んん・・」

返す言葉が無かったリオンだが。　今に成って、初めて兄とこんな事を真剣に話し合ったと思う。

（兄上は、その様な考えを持ち続けていたのか・・。　これなら、そう易々と他の考えに染まったり、流されたりしないな。　知らなかった・・、兄の本当の気持ちなど）

リオンは、諭された様に言われ、兄の気持ちを知る事と成った。　あまり多くを語らない兄で、何時も儚げに微笑んでいるから、もっと軟弱と思っていたのだが。　意外に、しっかりとした芯と云うべき軸と云うか、考えを持っている様だった。

リオンは、自分達兄妹を見守るエリウィンを見てから。

「とにかく、その寺院に行って調べてみるしかなさそうだ」

トリッシュも、

「裏づけは必要だね。　でも、大きくしないように、リオン。　力押しは、時として悪い印象しか与えないから」

「あぁ。　解ってる、兄上」

エリウィンは、そこで。

「しかしながら、ミグラナリウス家は、此処最近に重要なお役目が少ないですね」

トリッシュは、それにも理解が行く様子で。

「当然・・かな」

「え？」

「ミグラナリウス老人は、若い頃に人一人を殺めているんだ」

「ほっ、本当ですか？」

「我が父から聞いたよ。　貴族社会を嫌う男性で勉学だけで出世して、政務官として法務部に務める男性が居た。　若い頃のミグラナリウス老人は、嘗ては法務部の政務役人に成っていたんだがね。上司で、貴族と云う事を実力の査定に入れない彼を、役人に取り立てられた時から嫌っていたみたいだよ」

リオンが、焦る様に。

「手に掛けたのか？」

「焦らない、リオン。　違うよ。　ミグラナリウス老人は、自分の一つ下で才能ある一般の政務役人が、彼より先に出世したのに腹を立てたみたいだ。　闇討ちにしようとしたみたいだが、暗闇の中で二人居てね。　年上の政務官は、その才能在る若い彼に見合いを薦めよう、帰りに飲み屋に連れた帰りだったらしい。　そこで、強盗を装った悪漢が、二人を襲ったんだが。　その若い彼は、剣の腕も悪くなくて。　悪漢は、間違って逃げ惑うだけの上司の方を斬り倒し。　若い彼に取り押さえられた。　その悪漢は、警察役人に捕まってから、ミグラナリウス老人の執事に頼まれたと供述したとか」

「何とっ？　それで、次第はっ？！」

「うん。　ミグラナリウス老人に嘗て仕えていた執事は、自殺したと」

「何と・・そんなバカなっ！。　それではっ、丸で自分が遣ったと言ってるのと同じじゃないかっ！！」

「そうだね。　ミグラナリウス老人の言い分だと。　執事の彼が、貴族である自分を軽視した人材配置をされた事で、侮蔑を感じての主従愛に因る犯行だと擁護した。　年上の上司を、彼は詰った。だが、上司である彼の人事配置は、誰から見ても間違いは無いと・・。　それで、ミグラナリウス老人は、余暇候補に回りお役目を取り上げられたんだ。　表向きは、執事のした事に対する連罪として・・」

「当然だっ、益々あの老人が怪しく思えるっ」

リオンの強い声に、トリッシュもエリウィンも頷いた。

トリッシュは、その上で。

「でも、当時に事件を聞いたハレンツァの父上殿や、周囲の人々は思っていたらしい。　ミグラナリウス老人が執事へ命じて。　バレた上に殺す相手を間違えたから、執事の男性は、詰め腹を切らされたんじゃないか。　ううん。　内に秘めた気性は、相当に激しいミグラナリウス老人だったから。　彼が、執事を殺したんじゃないか・・ってね。　現実、ミグラナリウス老人へ仕えていたその執事は、然程に気性の荒い人物では無かったと云う証言が殆どだった」

リオンは、昔から怪しい老人であるから。

「俺は、それを信じるっ。　あの老人は、腹の中から黒い」

トリッシュとエリウィンは、同意出来たがハッキリと頷くには証拠が少ないと思うに留める。

その中で、リオンは思う。

（しかし、そうなると・・・。　やはり、ハレンツァ殿の手の者を殺めるのは、老人の雇った相手か？　ヘンダーソンうやクシャナディースが、あの老人と何か関係が在るのか？）

こう思うとリオンは、エリウィンに事を伝えられないと再度思う。

父親の手の者が殺されている実態を知れば、エリウィンは居ても立っても居られない。　エリウィンが外に出られると、彼の身が危うくなる気がするのだ。

リオンは、トリッシュが他にも調べた事を教えてくれるのに耳を傾けた。

≪目前に迫る中で≫

それから、丸一日が経過した。

家に篭りきったヘンダーソンは、誰の連絡も受けず。　老人の下にすら赴かなかった。

一方で。　王子達とエリウィンが、密かに自分の過去を暴こうとしてるなど思っても居無い老人は、家に居て次の知らせを待っている。　時間を余すミグラナリウス老人は、商人のソルフォナースと再度面会していた。　また、あの玉座の様な椅子が在る間にて。

「ソルフォナース殿。　御主が私のする事に協力したいと云う気持ちは、有り難くお請けする。　して、その望みは何だ？　先日の話し合いでは、何も申さなかったが？　金を儲ける事が本分の商人が、よもや酔狂で多額の金を棄てるなど有るまい？」

片目に眼鏡を当て、喰えない微笑を湛えるソルフォナース。　口元の笑みが妖艶で、不気味な色気が溢れる。　マントで顔を少し隠す様にした彼は、老人へ。

「御老様。　これから申しますお話は、此処だけの事に・・」

本心が聞けると期待するミグラナリウス老人は、強かな笑みで返し。

「良かろう。　我とて、同士無くして何も出来ん」

「では・・。　私めの望みは、世界を操る悪の糸を作る事で御座います」

「ほう。　それはまた、大胆な夢よのぉ」

「ウフフ・・。　あのラヴィンとか申す者が組する犯罪組織ですが・・。　他の組織を含め、それぞれ大陸に散り。　縄張りを主張する悪党の寄せ集めである今の組織形態は、面倒で堪りません。　冒険者が仕事を請けるのは、協力会と云う一元化された組織であるからこそ、今日まで成り立つ事。　我は、それを見習い、悪い依頼を金で請け負い、仕切りまわす組織を作りたいので御座いますよ」

聞いたミグラナリウス老人は、策謀好きな自分だけに。　このソルフォナースの云っている事が嘘で無いと見抜いた。　目を見れば、相手の腹の内に秘められた野心が覗ける。　この人物は、そうゆう意味では底なしの悪と云えた。

「フッ・・、ふふ・ふわっわっわ」

笑ったミグラナリウス老人を、ソルフォナースは困った顔で見て。

「冗談では御座いませんぞ」

「いやいや・・これは失礼した。　誰も、嘘などとは思うて居らぬ」

ソルフォナースは、喰えない笑み顔で眉を片方上げ。

「本当でしょうかねぇ・・」

「本当じゃ。　なら、賢き同朋よ。　今、御主はこの状況をどう読む？」

「そうですねぇ。　御老を護る上で、身代わりが一人必要かと」

「“身代わり”・・とな」

「はい。　御老の身元に、捜査の手を遣さない為には、罪を擦り付ける誰かが必要かと。　ただ、問題は・・二重にすべきと存じます」

「“二重”・・とな？」

「はい。　それに使えるのは、あの貴族で御老に御仕え致します二人かと」

「フム。　ヘンダーソンと、クシャナディースか？」

「はい。　片方に、もう一方を始末させますれば・・先ずは、捜査の方向性がダブり。　そして、残った一方を始末すれば・・、それで終わりまする」

「ふむ・・。　だが、まだアハメイルに向かったラヴィンの首尾がどう成っているか解らぬ。　今此処で、その様な強行は必要有るまい？」

「そうでしょうか？」

「と、云うと？」

「リオン王子を始め、御老の始末した貴族の手の者がまだ動いているとか。　そして今だに、死んだ貴族の息子とやらも表に顔を見せて居無い・・」

「そうらしい」

「もし、私が捜査をする側なら、始末した貴族の手の者と連絡を取ろうとします」

「確かに。　重要な情報源と成り得るからのぉ」

「はい。　ですが、其処がまだ繋がって居無いのなら。　尚更、捜査の目を他所に向ける手立てを講じて置きませんと。　ラヴィンの首尾が上手く行ったとしても、内々にその後も上手く行くとは限りますまい。　欲しい物を手に入れるのに、随分と騒ぎになれば・・」

「向こうも、それなりの対処をするか？」

「はい」

「じゃが、どちらもこれからに必要な二人じゃ。　今切れば、今までの苦労が泡と成る」

「それは、もう過ぎた事で御座います。　御老を取り巻く環境は、もう二極化かと」

「それは・・どうゆう意味じゃ？」

「御老の求める物が手中に収まれば、あの二人が必要でなければ成らないと云う事態には成りますまい。　逆に、物が手に入らず。そして捜査の手が表立って及べば、二人が裏切るとも限らないかと」

この話には、ミグラナリウス老人も頷ける。　ただ、相当に金と月日を費やしてきた計画である。　少なくても、クシャナディースに子供が直ぐ出来そうかどうかだけでも確かめて置きたかった。　クシャナディースの命などどうでもいい。　それこそ、妻が懐妊してさえいればそれでもいい。　子供を手元に引き取り、思う様に使える可能性も有る。

また、ヘンダーソンを切るのも決断が要る。　王の傍に居る彼であり。　彼の親族で、王室執務官に成っている者達とは面識が無い。　しかも、ヘンダーソンを切れば、彼が王宮内の形勢した勢力は、全て無に帰すだろう。

「・・、ソルフォナース殿。　腹を割って全てを話すがの。　どちらも切り難いのじゃ・・」

そう言った老人は、有る意味困った。　自分の手や足であるラヴィンやヘンダーソンが居無いのは、盲目で耳が聞えないのと一緒。自分の用人を使えば、一人で食事をするのも大変な老人なのだ。

若かれし頃に起こした一件で、家の威勢すら失い掛けたミグラナリウス老人である。　二の轍を踏むのは御免だった。

老人は、ソルフォナースを相手に相談を深めてゆく。

その日・・・。

★

クシャナディースは、寝室で寝ていた。　あの時から、酔いに任せて妻となる女性を相手にしていたのである。　丸一日、断続的に相手にしていた訳だ。　朝方まで、酒を飲んでの行いである。

彼の妻と成った女性は、名前を“エリー”と云う。　朝も大分に過ぎた頃。　ボロボロに成ったエリーは、髪を振り乱して身を引き摺る様にベットを抜けた。

クシャナディースがエリーを抱くと、何も出来ないメイドなどは、せめてもの慰めで風呂などの仕度だけはしておいてくれる。

こんなエリーだが、クシャナディースの妻と成った以上、もう帰る所など無い事は承知済み。　父親となる公爵の男は、酔った弾みで自分の母を襲い。　遊びのつもりで一夜を過ごしただけに、自分が出来た事を困ってしか居なかった。

幼い頃からエリーは、公爵の血を受けてしまったが為に父親に引き取られたのだが。　認知などされない様な扱いで、軟禁された生活であった。　唯一外に出れるのは、学院に行く時。　そんな生活から逃げたくて、彼女は自分を可哀想と思ってくれた若い貴族の息子と恋に落ちた。

が。

周りの認識は、二人が作り上げたものだ。　相手方の親は、過ちで生まれた自分を蔑み。　正式な妻とは迎えられないと云って来た。　恋人と愛し抜いている事を見せつけ、どうにかしようと思ったのだが。　それはエリーの甘い考えだった。

結局、去年の初めに、オグリ公爵の息子と見合う約束を交わされた。　噂で聞く相手の印象は、自殺を考えたくなるほどの悪いもの。　恋人に、自分を連れて逃げてと錯乱し掛けた様に言ったのは、有る意味切羽詰ったからだろう。

しかし、急に相手が変わったのは、今年の春を前にした頃。

エリーの強引過ぎる要求に、恋人も嫌気付いて来た所であった。

正直、エリーは身体が強くない。　彼女は、恋人に何度も抱いて欲しいと頼んだ。　自分の生まれ方は褒められたものでは無かったが。　同じ事でも起きない限り、自分は見も知らぬ誰かに嫁がされる。　しかし、恋人である相手方は、非常に真面目な青年で、女性を相手にするのも生真面目過ぎる人物だった。

春を待たずして、エリーはクシャナディースと見合いさせられた。

“見合い”と云うが、それはもう初夜を交わすための嘘。　酒を飲まされ、酔って分別も付かなくなった彼女は、クシャナディースに操を奪われた訳だ。

自分の身に起きた不幸。　それは、どうしてか恋人の男性に伝わっていた。　彼女の身の上を心配する彼だったが。　同時に処女を奪

われた事に、若い頃特有の潔癖症から距離を置き始めたのも事実。

結局、学院の教育課程が終わり。　同時に、クシャナディースに引き渡された。

寝室を全裸で出て、待っていてくれたメイドに支えられ風呂場に向かったエリー。

だが。

彼女が毎日泣いているのは、クシャナディースに乱暴されているからと云うのが理由では無い。　クシャナディースは、ただ強引なだけだからだ。　同意でなら、彼との営みは暴行には値しない。　問題は、この結婚に至る全てだ。　普通の対面も無いままに、強引に踏み躙られた初夜。　一般貴族の女性なら、互いの家族が集まっての挨拶やら、輿入れの儀式を通じて結婚の儀に向けた様々な行為。　女として、普通に何一つ扱って貰えない全てが恨めしいのである。

白い大理石の湯殿。　広い間の中央に、大きな噴水を持った風呂が有る。　エリーは、痩せた身を湯船に浸からせ。　そして、身体を洗う。

「奥方様、大丈夫で御座いますか？」

若い少女の様なメイドが、自分を心配しながら身体を洗う布を差し出してくる。

「ありがとう・・・、大丈夫よ」

毎夜、夫に抱かれる訳だが。　エリーは、酔って居無いクシャナデ

ィースを然程に嫌いとは思わない。　クシャナディースは、声が大きく見た目が剛健に見えるから、少し怖いが。　酒を呑まなければ、普段は語り合うのも悪くない人物なのだ。　毎夜毎夜、クシャナディースは酔い。　そしいて、自分を襲う様に迫ってくるのが怖いのだ。

（嗚呼・・旦那様は、何かお悩みなのでしょうか。　毎夜毎夜、浴びる程に呑まなければ成らないなんて・・・。　私は、結局子供も満足に身篭れない女なのかしら）

こんな言葉は、クシャナディースの口からは意外なのだろうが。

“俺は、お前を買った。　だが、お前を棄てる真似はしないぞ”

連れて来られた日に、言われた言葉だ。

だが、エリーが泣いている訳に、もう一つ在る。

彼女の母親が、死んだ。　エリーと引き離された母親は、エリーの父親を誘ったと決め付けられ、“不貞”の烙印を押されてしまった。　不倫相手の男が護るなら、随分と扱いが違うのだろうが。　全く護ってくれる人も場も無い彼女は、使用人すらも居無い生活で。　親戚の伯母に養われ、日陰で一人ぼっちのままに死んでいった。

エリーは、自分の身を呪った。　クシャナディースの傍に居れば、一応は苦労は無い。　だが、自分を誰も普通に扱ってくれず。　また、クシャナディースの元に来た途端、母親が死んだと・・。

迷惑を恐れてか。　エリーの父親は、全てをクシャナディースに言う事を、使用人を通じてエリーに禁じて来た。　一応、死んだ母は、

墓には入れられたらしいが、全く葬儀らしい事もされなかったと。

泣きたくないのに、色々と悲しみが積み重なって涙が出る。

円形の綺麗な湯殿の縁に身を上げ、布に石鹸を付けて身体を洗うエリーだが。　一目しか見た事の無い母親が可哀想で。　また、何も出来ない自分が悲しくて。　自然と・・涙が零れるのだ。

彼女が泣いているのは、高い塔型の上。　寝室でである。　一部の塀際と屋敷は近く。　窓を開けている時に泣くと、声が漏れ出ていたらしい。　クシャナディースへ用が有る者が訪れると、彼女のすすり泣く声が聞こえたり。　クシャナディースが不在で、エリーが面会をしなければ成らない場合は、赤く腫らした瞳は目立つ。　時々、酔ったクシャナディースが不満をぶつける様に、自分や使用人達に怒る時も在り。　エリーは、涙を堪える合間を見出せずに居たのだ。

エリーは、自分が何も言わずに泣く事で、クシャナディースに在らぬ噂が付き纏っているのも最近知った。　泣くのを止めなければ・・。

（お母さん・・、どうして死んじゃったの？　私、やっと少しは普通に成れたのに・・・）

そう思いながら、箱の中で育てられた小鳥の様なエリーは、身体を洗って風呂から出た。

エリーは、これでも最後のプライドは護ろうとしている。　どんな事が在っても、此処を逃げないと。　最悪な事に、父親以外に頼る者は無く。　また、恋人だった男性は、別の貴族の女性と見合いを

するらしい。

もう、誰も頼れない。　いや、あの父親は憎らしいだけで、自分の母の葬儀すらしない無礼者。　元の恋人では、自分など護れる訳も無いし。　自分の境遇からしても、恋人だった彼と共に歩むのは、茨の様な場所だろう。　何より、自分がクシャナディースに抱かれた事を知ってからの彼は、何処か余所余所しく。　もう、自分に気持ちが向いて居無いのが解った。

エリーは、もうクシャナディースしか居無いのだと、理解していた。

だから・・。

エリーは、勇気を振り絞って賭けて見る事にする。

「・・・」

衣服を改め。　そして、再度寝室に戻って行く。

廊下を戻る中で、自分に付き従って来た用人が顔を怪我しながらも。

今は、クシャナディースに近寄るのは止めたほうがイイと、護る様に忠告してくる。

黒い絨毯が真ん中に敷かれた廊下で、エリーは用人の男性に。

「いいの・・大丈夫よ。　それより、顔は大丈夫？　さ、今の内にお医者様の所か、寺院に行きなさい。　旦那様が寝ているウチなら、少し抜け出しても大丈夫ですよ。　後は、私が何とかしますから」

華奢で、可憐で、非力なエリー。　用人の中年男性は、部屋に入る

彼女を止められなかった。

雪が止んだ昼間。　窓際に立ったエリーは、カーテンを開いて外を見る。　薄暗い夜明けの様な世界は、一面に白。　遠くの住宅区が広がる上空を見つめたエリーは、静かに小さな勇気を胸の中で握り締めた。

そして、更に少しして。

「んん・・・あぁ～・・」

クシャナディースが起きた。　裸のままに寝た彼だが、眼を覚まして起きると・・。

「ん～？」

羽毛の入った布団を上げると、横にガウンがズレ落ちた。

（エリーのか）

女性用のフリルが袖や裾に付いた青いガウン。　何時もなら、エリーは用人の男性に護られて、彼女の私室に閉じ篭っているハズ。自分には、布団が被るだけのハズなのだが。

「お目覚めでしょうか？　お水、召し上がりますか？」

「・・・」

クシャナディースは、エリーがコップに水を汲んで差し出す姿を見る。

「おぉ・・」

コップを受け取ったクシャナディースは、一度エリーを見てから、水を飲んだ。

「ん」

コップを返すクシャナディース。　それを受け取り、傍の台へとコップを置くエリーは・・。

「旦那様、お願いが・・2・3在ります。　今、お話を宜しいでしょうか？」

言われたクシャナディースは、初めての事で何も言えない。　脅える様に過ごすエリーは、自分に話し掛けて来た事など一度も無かったからだ。

カーテンの閉まった窓を見るクシャナディースは、エリーに。

「今は？」

「もう、夕方が間近です」

「そうか・・」

何時もなら、メイドが用意だけしてある衣服を、公爵で在ろうと云うのに自分で着るクシャナディースだが。　今日は、エリーが羽織るナイトガウンを広げるので。

「お前に着せて貰うのは、初めてだな」

と、背中を向かせる。

ガウンを肩に掛けたエリーは、着易い様にしながら。

「旦那様。　どうか、使用人を傷付けるのは、お止め下さいませ」

「ん？　俺がか？」

「はい・・。　昨日、朝にサイザーを殴りまして、大怪我を・・」

酒が切れたクシャナディースは、意外にも素直で。

「それは、悪い事をしたな。　では、医者でも・・」

「いえ。　今、出向いています。　使用人を怪我させれば、旦那様のお名前に傷が・・。　どうか、これからは・・・」

「そうか。　解った」

短く答えたクシャナディースだが、半分情けなさを感じながらも。

もう半分は、妻らしいエリーを感じて、不思議な気持ちだった。

毎日会話も無い生活で。　酒を飲んでは、酔った勢いで押し通す毎日だったから、こうして声を掛けられると本当に不思議な感覚だった

柔かい寝巻きのズボンを穿いたクシャナディースは、もう一杯水を貰ってから。

「エリー。　此処には、お前だけか？」

水差しを台の上に置くエリーは、静かに。

「はい」

「そうか・・。　で？　他に、何か用件は？」

「はい・・。　実は、旦那様に折り入ってお願いが・・」

「難しい事か？」

「・・・多分」

「何だ？」

「はい・・。　実は、私が此処に来る2日前。　母が・・危篤に」

これに驚いたクシャナディースで。

「何だとっ？　お前が来る前って・・半年も前じゃないか」

「はい」

「それで、容態は？」

「誰も・・手を差し伸べてくれませんでした。　それから・・3日後には・・」

クシャナディースは、全く知らなかった事で。

「何で今頃っ?!　お前・・半年も黙ってたのか?」

「はい・・。　私が妾腹の娘で、母が身分の低い貴族の娘・・。私の父は、私と母の存在を・・消したかったに違い在りません。私も、知ったのは、此処に来た次の日です」

「な・何だと?」

「済みません・・。　父は、旦那様に何も言うなと・・。　母の存在を疎んじていた父は、母が私に引き取られるのを・・嫌がったのだと・・・思います」

エリーは、今まで黙って来た事を、一つ一つクシャナディースに告げた。　泣かない様に、必死に堪えてである。

「そうか・・それでお前は泣いていたのか・・。　俺はてっきり、結婚が嫌だとばかり・・・」

エリーにとって、どれも喜ぶべき事では無い。　だが、輿入れなど儀を行えば、母親に自分の結婚を噂に教える事が出来たかも知れない。　また、密かに母親へ、自分が何か手を差し伸べられたかも知れないのに。　結局、何も出来ぬままに来た事が悲しいと教えた。

「旦那様・・密かに手を・・・回して。　は・母の遺体を・・・貰えませんか?」

クシャナディースは、エリーの言わんとする意味が解る。　下手に遺体を引き取れば、エリーの父親に波風を立てる。　クシャナディースの今の立場を思えば、それは宜しくない。　せっかく、最下位

でも公爵に加わり、別の公爵家と縁続きに成った訳なのだから。

（コイツめ・・。　俺の立場を考えて言い出せなかったのか。　ふむぅ）

クシャナディースからすれば、エリーの秘めた心遣いが意地らしい。

「なら、この敷地の裏。　池の有る庭に、墓を隠して作るか？　流石に、表立っては無理だが。　この敷地内なら、お前が毎日会いに行けるだろう？」

「えっ？　旦那様・・」

エリーは驚くが。　クシャナディースがこう云ったのは、不思議な事では無い。　クシャナディースは、反骨精神を以って成り上がる以外に、今の様な出世する道が無かった。　クシャナディース本人も、育ちは平坦なものでは無い。

そんな彼だが、意外に情にはモロい一面もある。　政略結婚だが、エリーを本当に全て物として見ていると云う訳でも無いのだ。

「そう云う理由なら、お前の泣く大元を一つぐらいは何とかしてやる。　毎日泣かれては、この先が面倒だからな」

エリーは、自分の願いがすんなり通じた事に、スゥ～っと力が抜け。

「あぁ・・」

と、声を出しては、顔を両手てで覆う。

クシャナディースは、エリーが不憫に思え。

「何で、もっと早く言わなかったか」

「済みません・・旦那様の体面を思うと・・。　私は、もう帰る場所の無い様なものですから」

「ん・・」

エリーの事を知るクシャナディースは、これからを考えるに。

（成り上がる道は、何ともな・・。　ハレンツァを殺す事を決めた御老は、いざと成ったら俺やエリーも殺すのだろうか・・。　ハレンツァの息子も、殺されない様に家族とすっこんでれば良いのだ）

身勝手な事だとは、クシャナディースとて解っている。　だが、欲望と云う乗り物に因って、目的を果たそうと邁進するが故だ。　何かを犠牲にし、何かを踏み躙って来なければ成らないのが、策謀の道である。

（最初で最後・・。　地方の故郷で商人を陥れた時は、そう思うたのに・・。　御老に魅入られ、云われるが儘に来て見れば、幾つの死体を乗り越えて来ただろうか・・。　俺もエリーを娶れた事だし、これ以上の危ない橋など渡りたく無いのだがな）

ミグラナリウス老人が、あっさりとハレンツァを殺してから。　クシャナディースは、心が落ち付かない。　しかもラヴィンですら、裏家業の人間としては不気味なのに。　最近では、また新たな悪党達が老人の周りに集まって来ている。

自分は人間として、老人に遭うまでは相当に悪い方の人間と自覚しては居たクシャナディースだが。　老人を取り巻く不気味な者達の存在は、想像を超えていた。

（エリーが子供さえ出来れば、俺達夫婦は安泰のハズだ。　知らなかったとは云え、最近呑み過ぎて勝手が過ぎた・・。　少し、酒を控えるか）

クシャナディースは、国葬によって鎮まった王都が元気に成る前に、エリーの望みをこっそり叶えてやろうと思った。

人間は、社会の中で幾つも顔を持つ生き物だが。　クシャナディースは、ミグラナリウス老人やヘンダーソンからすると、まだまだ情も通じる生っぽい人物であった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪宴の前≫

クシャナディースは、雪の中で顔を隠し。　自分の配下の者を連れて夜に無縁墓地の園を訪ねた。

雪が降る夜で、寒さが身に染みる。

だが。　無縁の遺体を引き取りたいと寺院に掛け合い。　エリーの母親の事を僧侶に告げると・・。　僧侶の老婆は、祈りを現し。

「あの女性は、特に不憫なご遺体でした。　医者にも診て貰えず、数日は遺体を放置された様です。　そうでしたか・・、あのご遺体の女性にご息女が・・。　では、夜分でしょうが、遺体を持ち運びなさいませ。　まだ、木棺も完全に腐ってはい無いでしょうから」

クシャナディースは、面体を隠し名前も明かさぬままながら。

「許可を出してくださるか。　これは、忝い。　なるべく音を出さず、始末を付ける故。　この事は、他言には・・」

「え～え～、解っていますよ。　あのご遺体の女性の事は、少々ですが存じ上げて居ります。　余計な事を言うのは、後々にご面倒でしょうからね」

寺院を管理するこの老婆の対応に、クシャナディースは、何もかも在り難いと思った。

墓地の一角を掘り返えしさせたクシャナディースは、半白骨化した凍える遺体を新しい立派な棺に移し変え。　それを馬車で運んだ。

母親の亡骸の到着で、エリーが棺に張り付いて泣き出したのは言うまでも無い。

地下の冷たい場所に安置して。　年が明けたら、祝賀の行事が終わり、王都が静まる頃に墓を建てるとエリーに誓ったクシャナディースである。

「旦那様・・この様にして頂き・・エリーにはもう何の未練も御座いませぬ。　一日も早く、旦那様の足元に土台を築ける様に、子供を産みたいと思います」

ハレンツァが死んで間も無くの頃まで、ヘンダーソンやら老人と共にして心が尖ったクシャナディースだが。　エリーのこの一言に、落ち着きをを見出せると感じる。

（焦りすぎていた・・か。　まさか、エリーに感謝される時が来ようとは思わなかったが。　これで、後は御老の望みを叶えてやれば、我は安泰だろう。　御老さえお亡くなりになれば、あの孫殿などではヘンダーソンの言う事に耳を貸すまい。　ヘンダーソンだけになれば、それなりにし様が在ると言うものよ）

クシャナディースは、王宮内から締め出された格好のヘンダーソンは、権威の維持に一苦労して、これまで通りの威勢は張れないと見越した。

問題は、長寿を保つミグラナリウス老人である。　だが、クシャナディースも、老人の息子がアハメイルでリオンに近い軍部の軍人で在る事は知っている。　更に、孫のジャニスが老人と敵対に近い間柄で在る事も。　老人さえ死ねば、もうクシャナディースには、ヘンダーソンだけと成り。　自分が公爵として地位を確立すれば、何れはヘンダーソンも相手では無くなる。　正直、エリーがこうなれば、もう貴族絶対主義などもどうでもいい。

クシャナディースの脳裏に、ミグラナリウス老人の訃報を求める願望が出来始めていた。

★

一方。

毎夜。　役人などが街中を巡回する影で、姿を隠した者達の攻防が続く。

王都郊外の湖にも近い森の中。　雪が大人の腰近くまで体積している雪深い森の中で、

「逃げろっ。　逃げ切れっ、ジョンっ！！」

「ワロマープ殿っ！！」

「早く逃げないかっ！！」

ズタボロのマントを着て、フードに顔を隠す何者か二人が逃げている。

「逃すなっ！！」

「へいっ」

「殺した分だけ金になるっ。　見逃すんじゃないぞっ！！」

命令口調で、逃げる二人を追う黒尽くめの集団を指揮するのは、独特の声からあのモジューロゥであろうと思われる。

影ながらに動くハレンツァの手の者は、総勢６名。　その内、既に３人が殺されていた。　残りの３人も、誰かと連絡を取りたかったのだが。　役人や政務官に中に、ヘンダーソンや老人に密告をする内通者が居た。　殺された一人は、その内通者に謝って接近してしまったのである。

王都の中に居て。　ハレンツァの手の者は、影ながらに悪党では無い。　一般人でもなく、冒険者や旅人でもなく、悪党やゴロツキでもない。　ハレンツァの庇護が在って、身を隠し通せていた彼等だ。

ハレンツァが居なくなった後、個別にバラバラで潜伏していれば、微かに動いても怪しまれる。

実は、ハレンツァの執事である老人の甥が、ヘンダーソンに因って買収されていた。　ハレンツァの密偵を、それとなく全員調べ。情報を渡して金を得ていた訳だ。　ハレンツァの襲撃時、情報源だった甥も殺されている。　完全なる口封じと言う訳だ。

ある程度の人相や背格好がばれている。　ハレンツァの密偵達は、圧倒的に不利であった。

密偵達の長であったジグムは、もう殺されてこの世の人では無い。　警察役人に収容され、リオンが死体安置所で検めた遺体がそうである。

今、モジューロゥ一味に追われて逃げる二人は、ハレンツァに使えていた者の中で一番若い３０半ばに成るジョナサンズ。　通称、ジョン。

そして、４０の終わりに成った男で、ハレンツァに仕えて居た年数では一番の古株であるワロマープ。

二人は、郊外の森に逃げ込んで居たのだが。　ワロマープが連絡を取ろうと森を抜け出した事で、手下を多く散会させて捜索するモジューロゥに見つかった。

そして、森に引き返してしまったワロマープであり。　騒ぎを聴いて、ワロマープを助けようと隠れていた場所からでてしまったジョン。　今、二人は、逃げるしか無い状況である。

「クソっ、雪がぁっ」

脛を越える雪に足を取られ、逃走に苦しむワロマープは、元は殺人

を犯した犯罪者である。　ゴロツキの若者時代、自分の女にしていた女性を巡って、別のワルと争い。　そして、殺めた。　だが、死刑でも構わないから、お腹に子供の居る女を助けて欲しいと懇願した彼で。　その現場に居合わせたハレンツァが、彼を“死んだ生き人”として助けたのである。　ハレンツァに恩義を感じたワロマープは、終生影としてハレンツァに尽くすと密偵に成った。

「ジョンっ！　湖だっ、飛び込めぇぇっ！！！」

どんどん雪深くなっていく森の中を、雪を掻き分け逃げる二人。
二人が逃げるのは、右側を斜面に湖まで下る山の森林地帯。

「ワロマープ殿っ、そんな無茶をっ」

直ぐ近い所まで追い着かれそうに成った時、ナイフが飛んできた。
ジョナサンズの頬を、ナイフが掠めて痛みが走る。

ワロマープは、一気にジョナサンズに近寄り。

「バカ野郎ぅぅぅっ！！！！　追っ着かれたらどの道終わりだっ！！　ダメでも逃げる可能性を捜せぇぇっ！！！！！！！！！」

「うわぁぁぁぁーーーーっ！！！！！！！！」

ワロマープの体当たりを食らって、ジョナサンズは針葉樹林が生える急な崖にに近い斜面へと突き飛ばされる。　塊の雪ごと足を踏み外すジョナサンズは、斜面の宙へと投げ出された。

夜目の利くモジューロゥ達だが、これには驚きで。

「あ〝っ！！　クソったれがぁっ！！！！」

ワロマープは、逃げるままに雪を巻き上げて。

「うわわわわわわわぁぁぁぁぁぁぁーーーっ！！！！！」

と、大声を上げる。　振動で雪崩でも起きないかとの悪足掻きだ。

モジューロゥは、石くれが結んである硬い紐を取り出すと、足場が悪い中でワロマープに投げつけた。

ワロマープの脇を飛んだ石くれで、

「こんなのが当る・・」

と、石くれを見たワロマープだったが・・。　モジューロゥが手首に捻りを加えて紐を引く。　引っ張られると同時に、ワロマープの顔面に飛び上がる石くれ。

「っつお！！！」

何とか石くれを避けたワロマープだが、彼を追う黒尽くめ達がナイフを次々と投げ出し。

「い〝っ！！！　うぎゃぁっ！！！」

肩に一本が突き刺さり。　態勢を崩し掛けた所で、背中にまた。

モジューロゥの一味が、雪の中に倒れ込んだワロマープを見てみれば・・。

「おいおい、当たり所が良すぎだぜぇ～」

と、ニタリ顔を作るモジューロゥ。

ピクピクと血を流して動くワロマープで、肩と背中の他に首にもナイフが刺さっていた。

「カシラ。　落ちたヤツはどうしやしょうか」

黒尽くめの手下一人に言われれば、

「決まってんだろう。　これから追うぞ」

「へい」

すると、一人の黒尽くめが。

「カシラ。　遺体の見張りはどうしやす？　昨日、ガンダの阿呆が尾行されてたらしいじゃねぇ～ですか」

モジューロゥは、夜の雪が舞う中で。

「思い出させるなっ。　あのバカ・・、のこのこと尾行者を近くまで誘導してきやがって・・」

昨夜の事だ。

ハレンツァの手の者を捜していたモジューロゥが、もう朝方が近い頃に手下をバラけさせ。　そして、一人で住居区の郊外に在るアジ

トに帰ろうとしていた時だ。　アジトに向かう不審な気配を感じ、先回りしてみれば。　子分で酒癖の悪いガンダと云う男が、酔った足で尾行されていたのである。　無論、モジューロゥがそれを赦す訳も無い。　ガンダは、還らぬ人としたが、尾行者は直ぐに消えた。

今日のモジューロゥは、それが故に機嫌が悪かった。

「見張りはいい。　それより、落ちた奴を捜せ」

「へい」

「了解」

「わかりやした」

数人の手下が、闇の中に散っていく。

モジューロゥは森の中を振り返り、気配を探した。

（昨日、アレからなぁ～んか気味が悪ィんだよなぁ。　尾行されてる様な・・）

こう思うモジューロゥ。　だが、その勘は当っている。

モジューロゥの居る場所から、登って来た下方に下がった木の上に、青いコートの様な衣服を着た者が隠れていた。

覆面をして、目だけ見える様にしているが。　目や肌を見るに女性らしい。

（落とされた男は、アッシュ様が助けに行ったみたいね。　あのリーダー格の男は、相当な手練・・。　行かせると不味いわ）

この女性は、アッシュの手下だ。　リオンの命令で動く隠密部隊の一員である。　自分の尾行をモジューロゥが疑っている事を観て、モジューロゥの力量が窺える。　ナイフや特殊な武器の扱いにも長けた悪党ならしいと。

この夜。　ハレンツァの手の者を隠れ追うモジューロゥ達を、リオンの密偵の一員である彼女が初めて補足出来た。　だが、この女性が仲間に連絡を取る間に、追う者と追われる者は、森の中に。

正直、尾行や情報収集が主のこの女性。　戦う腕は、一般の冒険者と然して変わらない。　モジューロゥの手下は、流石に腕を磨いている者達。　女性は、先んじて尾行を続けるのみだった。

今さっき、アッシュとその部下二人が追い着き。　丁度、崖に突き落とされたジョナサンズの様子を見た次第。　アッシュは、この女性に目配せをして、崖の方に下りて行った。

アッシュ達が崖に落ちた男性を助けるのに、モジューロゥの存在は危険と思う女性の密偵である。　腰のベルトに挿し込まれた細いダガーを取り出し。　少し離れた木に投げつける。

（気のせいか・・）

と、手下を追おうとしたモジューロゥだが。　風も殆ど無い中で木が揺れ、枝に乗っていた雪がドサッと落ちたのに。

「んっ？」

モジューロゥの反応は、早かった。

（今、何か気が立ったな・・・）

雪が落ちて振り返ったのでは無い。　木に刺さるダガーと同時に気付いた。　闇の中で、何かが動いた気配を読んだのである。　手を振り上げる時に切る空気の音や、ナイフを投げる時に出る音なども悟られる要因になる訳だが。

「おーーーーーーいっ、気を付けろっ！！！！」

突然に、モジューロゥが大声を上げた。

（えっ？！）

これに驚いたのは、尾行をする女性。　想定外の行動に、思わず身じろぎをしてしまう。

モジューロゥは、１０・・数本先の木からだけ雪が落ちたのを見ていた。

「ほほ～、正直だねぇ～」

ニヤりと笑ったモジューロゥは、ゆっくりと歩き出し。

「やぁ～っぱり、誰か尾行してたのか。　ついでだ、面でも拝ませろ」

と、言い放つ。　相手に動揺や、行動を促す心理的な揺さぶりだ。

（不味いっ。　完全に気付かれてるっ?!）

雪が降るから、月は出ていない。　動かなければ見えないだろうが、雪を落とした事で場所を特定させる可能性も在った。

密偵の女性は、息を殺して木にへばり付いた。

「どこだろ～な。　身体を切り刻んで・・心臓を突いてやるゼ」

モジューロゥは、動き安さを念頭に来た雪の少ない部分を選んで、雪の落ちた辺りを目指す。

だが。　そこで突然に・・。

「カシラァァーーーっ!!!　野郎を助ける輩が居るっ!!!」

「クソっ!!　新手だぁっ!!!!」

斜面の方から、手下の声が響いてくる。

モジューロゥは、その声が切羽詰っていて途切れる様に聴こえてくるのに、戦っているのではないかと思った。

「チィ。　もう、向こうに行ってたかぁっ」

モジューロゥは、急いで斜面に向かっていく。

斜面に向かうモジューロゥを見て、

（嗚呼・・良かった）

と、安堵した彼女。　戦闘経験の無い訳ではない女性だが、モジューロゥの気配は不気味だった。　恐らく、何度も人を殺してきている悪党の中の悪と云った気配。　自分では、まともに遣り合ったらまず勝てないと解った。

（アッシュ様、霍乱に回ります。　どうか、ご無事で）

リオンの密偵達は、遂にハレンツァの手の者と接触に成功したのである。

モジューロゥが斜面を降りて行けば、所々に負傷した手下達が呻いていたり。

「クソっ！！　クソクソクソっ！！！！！」

モジューロゥが更に追えば、不自然な逃げ方をする者に追い着く。

「このや・・あぁっ？！！」

顔の解らない何者かに縛り上げられた手下が、湖の畔の方へと引っ立てられている。　しかも、斜面から落ちた者で、自分達が殺そうとしていた人物が、既に小船で運ばれようとしている最中であった。

小船に灯る弱く絞られたカンテラの明かりに照らされ、船の中でぐったりしている者が見えたのだ。

「まぁてぇぇっ！！！！！」

怒鳴るモジューロゥだが、彼に立ちはだかる黒覆面の何者か。

「丁度いい。　お前が首領か？」

覆面をしたアッシュは、コート風の衣服を閃かせ。　モジューロゥに対峙して、少し短い中剣を構える。

（むっ。　コイツ・・）

踏み込もうとしたモジューロゥだが、その隙が無く手前で止まった。

湖の畔で、水の温度が高いから雪が重い。　アッシュの足、モジューロゥの足に、雪が着いた。

「・・・」

モジューロゥを見て、戦闘態勢に入る無言のアッシュ。

「へぇ、出来るじゃねぇ～か」

と、鎖鎌を手にするモジューロゥ。

アッシュの背後では、合流してきた女性の密偵が、アッシュが手離した縛られたままの悪党に駆け寄る。

モジューロゥは、

「お前かっ！！　さっき俺を牽制したのはっ？！」

と、アッシュの脇に視線を送るのだが。

アッシュは、モジューロゥの視線を遮り。

「お前の相手は、この俺だ」

と、見合う間合いから、牽制の間合いへと踏み込む。

「くっ」

分銅の着いた鎖の先端を握り、鎌の刃先をアッシュに向けるモジューロゥだが。　二人の者に運ばれる手下に気が行ってしまう。

「フンっ」

アッシュが、その隙を突いて踏み込んだ。　火花が上がり。　斬り込んだアッシュの剣を、モジューロゥは弾いて大きく引く。

広い場所で戦うならいいが。　細い木々が疎らに生えるこの場所では、モジューロゥにとって相手が悪い。

「チキショウめっ!!　お前等は一体誰だっ!!」

モジューロゥは、大声と共にアッシュへ鎖を投げ付ける。　避けたアッシュだが、サッと引っ張るモジューロゥで。　分銅が唸ってアッシュの頭に撓った。

だが、アッシュもそれは想定内で、屈んでかわすと分銅を馬手（利き手）で掴んだのである。

「なぁっ」

モジューロゥは、アッシュが避けて態勢を作る間に、あわよくば船に向かおうと思った。　だが、鎖を捕まれては、対処に困る。

（とにかくっ）

モジューロゥは、得物を捨ててでも行こうと思う。

だが、アッシュはそれを先読みする様に。

「むんっ」

鎖を不意に引っ張った。

「おっ!!　こ・・の」

思わず引っ張られる格好で、ハッと武器を握って引き返すモジューロゥ。

船に、ハレンツァの手の者と、捕まえた悪党が乗せられた。

（間に合わねぇかっ!!）

モジューロゥは、踏み込んできたアッシュに専念すれば・・。

「ふんっ、コラぁっ!!」

鋭い振込みで、アッシュに鎌を薙ぎ付け。　アッシュが身を引いて避けると、今度は鎖を引きバランスを崩しに掛かる。

アッシュは、鎖を手放して踏み込もうとするが。

「おっと」

モジューロゥの鎌が、自分に向かってピッタリ向いている。

船が漕がれる音がして、遂に二人だけの戦いに落ち着く。　お互いに、腕は互角だと思えた。

★

そして、別の場所では・・。

「ジャニス様、何処ですか?」

ミグラナリウス老人の執事と言ってよいマクファーソンは、深夜に屋敷から離れた厩舎に居た。

この馬小屋の先には、手入れされた森林公園の様な場所が続く。北東にそのまま進めば、ジャニスの住まう別邸に行くのだ。

ジャニスの持つ別邸は、ジャニスが買う時にの所有者が違っていた。
　この広大な森林公園を含め、元々はミグラナリウスの所有地だったが・・。　今の老人が事件で隠棲に追い込まれ、生活費の工面から売られた訳だ。　その敷地を、まだ幾らか借金は残るもの、全て買い戻したジャニス。　祖父に対する当て付けであり、喜んだ祖父

を無能の骸とこき下ろした。　同じ一族が所有する土地ながら、完全な線引きがされる地続きの一角なのである。

暗い闇夜の中で、馬の鼻息などが聞こえるだけの馬小屋のはずが・・。

「来たか。　マクファーソン、遅かったではないか」

厩舎の裏口に立つ黒い影から、ジャニスの声がする。

ジャニスに近付くマクファーソンだが。

「うぐっ・・・」

急に首筋へ冷たい物がくっついた。　刃物の感触を良く知るマクファーソンだ。　首筋に当てられた物が、刃渡りのやや長い短剣の類だと理解する。

だが、マクファーソンが不意を突かれた以上に驚いたのは・・。刃物を差し出している者から、極身近な人物の好む香水の香りがしたこと。

「っ?!!　まさかこの香水・・ユーシスか?」

すると、闇の中から。

「ウフフ・・・。　流石は、マクファーソン殿。　私の香水の匂いが・・お解りに成りますのね?」

驚いたマクファーソンは、唸る様に。

「うぐぅ・・裏切ったのかぁっ?!」

と、低い押し殺した声で言うと。

「“裏切る”？　さぁて、何の事かしらぁ。　私は、命令でジャニス様に近付いた。　でも、ジャニス様の方が一枚上手だっただけよ。　私が・・飼い慣らされただけ」

耳を疑う様なセリフが吐かれ、マクファーソンは観念した。

「・・殺れ」

だが、ユーシスは、何かを取り出すとマクファーソンに握らせる。

（・・紙？）

マクファーソンは、感触でツルツルした紙の様だと思うと・・。

「ジャニス様。　例の物を渡しましてよ」

と、ユーシスが言えば。

「そうか。　では、用件を言う」

ジャニスの声が、マクファーソンに向けられた。

話を聞くマクファーソンは、目の前が真っ暗に成った。　夜の闇では無い。　絶望によるショックからである。

ジャニスは、用件を述べると。

「ユーシス、帰るぞ。　お前との約束を果たさねば成るまいからな」

と、ジャニスは去る様相を見せる。

一方。

マクファーソンに近付いてきたユーシスは、マクファーソンの耳に口を寄せ。

（もう、力関係は変わってるわぁ。　ミグラナリウス様では、新しい未来は無い。　んふぅ・・、わかるぅ？　ワタシ・・凄い興奮してるの。　下半身が熱くて・・濡れて・・我慢できないわぁ。　ミグラナリウス様の魅力より、ジャニス様の方が上よ）

ユーシスは、こう言って得物を離しながら引いて行く。

息子を人質に捕られてる手前で、マクファーソンは動けない。

マクファーソンに背を向け。　お尻を振りながら妖艶に歩くユーシスは、手を振りながら。

「じゃぁ、後始末はお任せするわぁ。　私は、ジャニス様に苛められてるから、朗報を期待してるわよ」

ユーシスを見送るマクファーソンは、馬のブルルと云う声を聞きながら膝を折る。

（こんなっ・・こんな最後かっ?!!!!　俺の最後は・・・こん

な・・・）

ガクリと跪いたマクファーソンは、手に握らされた物を握り締める。
　怒りから捨てようと振り被ったが・・・、息子を助けるには捨てられなかった。

ジャニスは、確かに策士だった。

その本性と度胸と鋭敏なる才能を、マクファーソンは見せ付けられた。　確かに、裏で糸を引くだけの老人とは違う恐ろしさが在る。

藁の散らばる地面を片手で握り潰すマクファーソンは、人生最大の選択を迫られる事と成った。

老人は、ソルフォナーズと親密に密会を続けるばかりで、ヘンダーソンとクシャナディースが面会に来ない。　老人の傍を離れられぬ身のマクファーソンは、相談出来る相手を失っていた。

そして・・・。

身を隠すヘンダーソンは、逃げる手段を講じ始めていた。　自分の手打ちの筋から、リオンの命を受けた者達が、ヘンダーソンや老人といった者達の身辺を露骨に洗い出していると報告を受けたからだ。
　リオン自身が、老人の援助を古くから受けていた寺院に赴くなど、先ずは在り得ない事態。

ヘンダーソンは、様々な事態を想定し。　もう、自分達の計画が漏

れているのではと恐れ始める。

ヘンダーソンは、本気でクシャナディースを消す事を本気で考え始めた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪宴の前・後≫

この日は、アハメイルでも大きな動きが在った。

それは、ラヴィンとレプレイシャスがアハメイルに入った事である。

警戒の厳しい最中だったが、ヘンダーソンの息が掛かった兵士の誘導に因る。　黒いローブに身を包むジェノサイダー達と、覆面に黒い皮のコート姿のラヴィンは、商業区の奥地に蟠る（わだかま）暗黒街へ向かった。

毎夜、大きな劇場がフィナーレに打ち上げる花火が夜空に開く中。

闇に紛れる黒い一団が商業区の裏道を歩く。

ラヴィンは、花火の明かりで夜道が見え易いので、遠くで煩い花火を見返り。

（闇には、明かりは嫌われる。　何れは、俺達の暗黒の時代が訪れ

る）

そんなラヴィンの脇に居たレプレイシャスは、花火の音に。

「うるせぇなぁ。　年末年始のバカ騒ぎを壊してやりたいゼ」

と、憎らしげな感想を吐く。。

すると、レプレイシャスの真後ろに居る背の高い者が。

「リーダーよ。　それなら、俺に命令しろさ。　派手に殺し撒くってやるゼ。　いひひひ」

その背の高く男の声をした者の横に居る何者かが。

「宜しいな。　血は、最も麗しいワインと同じ。　啜ってしまおう・・啜ってくれよう」

と、気味の悪い女言葉の様な言い草をする。　声は、甲高い男の美声なのだが。

ラヴィンは、誰かに見られる前にと歩き出し。

「何れ、全ては壊す。　行こう」

と、ジェノサイダーの面々を促した。

ラヴィンの向かったのは、暗黒街の一番危ない地帯だ。　下手な悪党等では、偉そうに彷徨かないような所で。　悪党組織の縄張りが建物一つ単位で出来ている場所。

ラヴィンの前に、何時の間にか現れた案内役の覆面人物は、

「お待ちしていました。　ラヴィン様ですね？」

と、カンテラを持ってラヴィン達を迎える。

「あぁ、ご苦労。　各徒党の長は、集まっているな？」

「へイ。　一昨日に、全員揃いまして」

「一昨日だと？　遅れたのは、どの徒党だ？」

「へい。　クドゥルのダンナが率いる一味です」

「クドゥルめぇ・・。　強行役だからと俺達に合わせたか？」

「あ、いえ。　最近の警備の厳しさから、見つからない事を最優先にしたらしいですが」

「・・・まぁ、いい」

「では、案内します」

アジトと成る建物が在る廃屋に行くラヴィンとジェノサイダー。

雪で覆われた街路を少し歩いて案内されたその建物は、石造建築の平屋の屋敷の様な大き目の建物だった。　その入り口が在る場へ、石の段を降りて行こうとした時だ。

「お～、真っ黒な集団サンですか。　ゾロゾロとこんな所を歩くなんざ～逃亡者かぁ？」

「うひゃひゃぁ～、年末でクッセ～流れ者が増えた増えた～」

酔いが混じる大声で、３人連れの無頼が通り掛かりを装って難癖を付けて来た。

「おい、こち・・」

案内で現れた男が、３人を制止しようとすると・・。

「いい」

ラヴィンがそれを制止。　そしてラヴィンは、レプレイシャスの仲間に。

「暴れてなくて血に飢えているなら、此処で気晴らせ。　どうせ、殺しても役人すら来ない」

と、言った。

ラヴィンの半歩後を歩く形で停まったレプレイシャスは・・。

「いいのかよ。　あ～あ」

絡まれた事に怒る訳でもなく。　また、無責任に放任する様な言い草しかしない。

７人で構成されるジェノサイダーの面々らしいが。　その内の３人

が酔っ払った悪党どもに進み出ると・・。

酔った悪党3人は、マントの前を開いて各々が腰に下がる得物を見せ。

「おいおい、俺達とやる気みたいだぜ?」

「へぇ～、命知らずもいいところだな」

「怪我じゃ終われないぜぇ」

と、嘲笑う。

ラヴィンは、その絡んで来た無頼の3人の余裕を見て。

（この一帯に塒を構える輩の下っ端か・・。　小さい組織に胡坐を掻くのも、程がある。　仕事中は黙らせる為にも、丁度いい見せしめに成ろう）

ラヴィンは、ジェノサイダーの力量の断片を見たい所も在り、ソレを許可したのだ。

「やんのか、ゴルァ?!!」

無頼の中でも一番大柄な強面が、ハンドアクスと云う片手用の斧を構えて見せると。　ジェノサイダーの
中で最初に歩き出した猫背の者が・・。

「アージャスビア・・ウルクラスマム・・・ソエビアカ・・モノブっ!!　いでよっ!!　フレイムアウハントよぉぉぉぉぉぉぉぉ」

枯れた声を不気味に間延びさせるその男の声に、案内の者が持つカンテラが応えた。

「うわわっ！！」

カンテラを持つ案内が驚いたのも無理は無い。　カンテラの外周を構成するガラスが瞬時に勢い良く壊れ、なんと生き物の様に炎が溢れ出したのだから。　案内の手を離れたカンテラは、雪の積もる踊り場に転げ落ち。　溢れ出た炎は、何やら呪文を唱えた男の前に舞い降りた。

「あ～ん？　手品かぁ？」

悪漢は、炎がモヤモヤと人型に象って揺れ動くのを見てこう云うのだが・・。

人型に姿を留めた炎は、”オアオア”と云う口の動きで顔と見て取れる部分を有し。　モゴモゴと口を動かす姿は、何か言葉を喋っている様にも。

不思議と思うラヴィンは、レプレイシャスに。

「炎の精霊か？」

「あぁ。　ハイニーズは、炎の精霊を呼べる。　頭は子供みたいだがな、喜怒哀楽が支離滅裂に成ってるから、敵と見なす相手には歯止めが効かん」

「ほう」

そう二人が言い合う中で、

「そおおおれぇぇぇぇぇぇ、こげこげこげぇぇぇぇぇぇ～」

ハイニーズは、まるで子供が喋る様な様子で、短い杖と云うか木の棒とも見て取れる物をグルグル振る。

すると、突然に炎の塊が前進し、ハンドアクスを構えて見せた無頼の男に襲い掛かった。

「わぁっ、なっ・なぁんだぁぁっ?!!!」

3人の無頼は、その炎に迫られた事で左右と後方に散る。

口をモゴモゴと動かす炎のモンスターは、ハンドアクスを持った無頼に伸び上がる様に襲い掛かった。　暴れる様に振り込まれたアクスは炎の身を斬る事も出来ず。　炎の精霊の身に無頼の男の手が呑まれる。

「ぎゃっ!!　熱いぃぃっ!!!!!」

喚いて手を引く大柄の無頼男だが、引く手と同じ動きで自分に炎をが抱き着いて来る。

「うギャァァーーーっ!!!!!!!!」

灼熱の炎に抱き付かれたら、誰でも悲鳴を上げるに違いない。　ジュっと焦げる音が沸き上がり、頬や額が急激に火傷をし。　衣服や皮のプロテクターが焼けて燃え上がる。　あっと云う間に無頼の男

は炎に包まれてしまった。

「おわぁっ」

「お・・・」

無頼の2人の仲間が、ハンドアクスを持った者に寄ろうとしたが。

「んがががぁぁぁ・・・・・・」

何と、燃える男の体を這いずり回る炎が、絶叫を上げる口の中にスルスルと入り込み始め。　しかも、炎の一部がその抱き付いた男の頭を鷲掴みにして、グっと上向きに擡げた処で、悲鳴を上げる口の中に更に炎が入り込むのだ。

炎に包まれた身は雪の上に倒れて白い湯気を上げる。　そして、人の焦げる凄まじい異臭が立ち上り、驚いた仲間の二人は近づく事も出来ない。

仲間二人が呆然と見ている中で、ブルブル・・ビクビクと身体を焦がしながら痙攣する無頼の男は、次第に内から身を焦がして動かなくなった。

すると。

「オホホホ・・、見ている場合かえ?」

小太りで頭髪を布で巻いて纏める無頼の背後に、先程に女言葉を使っていたローブの人物が近寄っていた。

「あ゛っ！！」

大きく口を開いた小太りの無頼だが、そのまま口に手を当てられたままに押し倒された。

「もぐぅ！！　ふぐぅぅぅぅ！！！！！！！」

篭った声が、鈍く篭れる。　腹部に、幅の狭い長さだけがある剣が突き刺さったからだ。

ラヴィンは、その手際の鮮やかさに。

「殺し屋の様だな」

レプレイシャスは、無頼を惨殺し始めた女言葉の者を見ながら。

「ヤツは、在る意味で獣だ。　デイヴは、金持ちの商人の息子でさ。身代金目的で誘拐された過去が、今の性格を目覚めさせた原因らしい」

「ほお～、犯罪に巻き込まれてか」

「あぁ。　誘拐されて、監禁状態に成った後。　ヤツの身の代として要求された金額が多額で、監禁が長期に亘ったらしい。　犯人は、最初からデイヴを殺す気だったらしくてさ、水すら与えずに置いたから飢えに飢えた。　それまで、何の不自由も無く暮してたお坊ちゃんだったんだが・・、監禁の間に凄絶な暴力も振るわれたらしい。
そして、アイツの精神がぶっ壊れたその時に、犯人の不手際が起こった」

「“不手際”？」

「あぁ。　なんでも、ヤツが弱ってるから、甚振りながら殺そうとしたんだ。　だから、縄を解いたんだ」

「ほう」

「だが、その時既にアイツは、もう飢えて理性の消え失せた獣だった。　だから・・・ホラ」

レプレイシャスが顎で指し示す。

ラヴィンは、目の前で見える光景を見て。

「なるほど・・・。　相手の犯人を食った訳か」

レプレイシャスも頷き。

「おう。　喉笛に噛み付き、犯人の肉を喰らった。　その時、飢えが限界を超えてたんだろう。　ヤツぁ、肉より血が・・美味いって思えたんだと」

レプレイシャスが言い終える頃。

「あああああぁぁぁぁぁっ！！！！！」

闇の中で、獣の様な奇声を上げては無頼の男の腹部に顔面を押し付け、まるで犬食いをする様な者がいた。　この人物が、デイヴ・・。

一瞬手前まで、女言葉を使っていたとは思えない。　雪の上に倒れた無頼の腹辺から、雪が黒ずんで行く。

グチャ・ピチャっと云う音が闇の中で聴こえる中。　レプレイシャスは、フードを取り。

「犯人を食って助かったヤツだが、もう心が人には戻れなかった。
親や友人を食う鬼と成り、役人に追われて街を出た訳さ」

以前にこのレプレイシャスが、自分の仲間を気狂いの集まりだと言った。　ラヴィンは、その意味が今に解った。

「あっ・あっ・・嘘だぁっ！！　そんなぁぁぁぁーーーっ！！！」

人が人を食うなど在り得ない。　そう驚いた最後の無頼の小男だが。

「逃がすかよっ」

と、背後から声がして。

「ハヒィっ？！」

最後に残った無頼の小男は、戦慄に怯え背後に向くのだか・・。
振り返った背後に誰も居ない。　そして、小男が右に顔を回すと・・。

「痛っ！！！」

頬に何かが刺さって痛みが走る。

「痛いか？」

耳元でまた声がして、

「わぁっ！！」

と、恐怖が心の中に居座ってしまった無頼の小男で。　大慌てで後ろを振り向くと・・。

背が高く、黒いローブを被った面体の判らない者が立っている。

「痛いぞぉ～、もっと痛いぞぉ～、泣き叫べっ！！　喚き倒せっ！！！！！」

と、まるでからかいながら相手を甚振る様な口調である。

そして、頬から痛みを伴って流れ出る物が自分の血だと解った無頼の小男は、後退りをしながら。

「ヒィィっ！！！！！　わぁっ・わぁぁぁぁーーーーーっ！！！！！」

と、大声を上げて逃げようと必死になった。

が、黒いローブの何者かは、右手に持つ太く丸みのある変わった刃物を投げ付けた。　闇の空を裂いて走る刃物は、背を向け逃げようと走り出した無頼の小男の右肩に突き刺さる。

「ひぎぇっ！！」

突き刺さった勢いと痛みから、踏み出した足が縺れて大きくすっ転ぶ無頼の小男。　雪の敷かれた上を転げた小男に向かっていくロー

ブの何者か。

レプレイシャスは、少し先の暗がりに成って、悲鳴を上げながら近づいて来た何者かから逃げようと這い蹲る無頼の小男の方を見ながら。

「アイツは、元は殺し屋のゴストン。　相手を殺すときに・・」

と、ラヴィンへ説明をする最中で、

「んがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーっ！！！！！！」

何か口を塞がれたままに、拷問でも受けて責め抜かれている様な絶叫が上がる。

レプレイシャスは、その声を聞いて。

「あ～ぁ、始まった。　ラヴィンよ、お前が餌を与えるからだぞ」

ラヴィンは、無頼の小男がどんな目に遭っているのか今一解らず。

「何をしているんだ？」

と、レプレイシャスに問う。

「あ？　アレは歯を抜かれてるんだ。　一本残らず。　それが終わったら、爪に移る」

「ほう。　随分と恐ろしいやり方だな」

「あぁ、奴は好きなんだ。　人の絶叫が、歌の様に聴こえるらしい。
叫び声が、人の声の中で一番美しいと思ってるみたいだ」

狂ってるとは云え、それでも随分と変わっていると思うラヴィンは、先に隠れ家へと入ろうと階段を降り切る。

レプレイシャスは、人を消し炭にするまで燃やそうと、炎の精霊を働かせるハイニーズに歩み寄って行きながら。　少し離れた傍で、頭を狙うデイブに向き。

「デイヴっ！！」

と、鋭く言う。

「・・・」

口の回りを血だらけにした、面長のデイヴがレプレイシャスを見る。
長めの鼻が曲がり、死人の様に白い肌をした青年の様な人物だった。　踞った体勢から、瞳孔の開いた狂気の瞳をギロギロとさせてレプレイシャスを見る。

レプレイシャスは、微塵の怯えも見せず。

「頭は止め。　お前、狂い切って手に負えなくなるぞ。　生きて遊びたいなら、その一線は後に取っとけ。　そろそろ仕事の話を詰めるから、中に入れ」

「・・・」

レプレイシャスを見続けるデイヴだが、レプレイシャスが目を細め。

「デイヴ。　チームが危険に曝されるなら、お前を斬る」

と、言うと・・。

「・・」

デイヴは、遺体から離れ出す。

「ハイニーズ、ゴストン、殺しは依頼がくればいくらでも出来る。さ、殺しを止めて中に入れ」

レプレイシャスに言われ、二人も動きを止めた。

ハイニーズは、大柄の無頼の8割を燃やした所で止め。　ゴストンは、闇の中でまだ生きている無頼の小男にトドメを刺す。　因みに、ゴストンの持つ短い丸型の刃物は、燃える炎を象った“フレイミンカッター”と呼ばれる近距離格闘用の武器である。

レプレイシャスは、路上の雪の上に転がった遺体をそれぞれに見て。

何とも気味が悪いと向きを変える。

この異常な者共が、世界でも5本の指に入る凶悪なチームの”ジェノサイダー”であった。

・・・。

外から見ると、その建物はみすぼらしい感じだが。　中は中で、殺風景な何もないフロアなだけだった。　蝋燭の置かれる木箱や、壁際に使い古した長い長いソファーが有るなど以外は、埃臭い広い広いフロアが有るだけなのだ。

壁際に並べられた長椅子のソファーに座るのは、ジェノサイダーの面々のみ。

部屋の中央に有る木箱の間近には、ラヴィンが覆面をしたままに居て。　その周囲で、二つ有る蝋燭の光が届く範囲には、数名の者達が2・3人単位で固まり。　少し纏まりが離れながら、ラヴィンに向いて立っている。

「それじゃ、報告を聞こうか。　捜索を命じられたのは・・ロイジャーの一団か」

ラヴィンの右手に立つ3人の男達。　中でも太った大男が、暗い横を向きながら。

「今、運んだ奴らを探してる」

ラヴィンは、ピッタリとその男性に向きながら。

「ロイジャー、珍しく見逃したのか？」

「知るか。　突然に訳の分からん事に成ったんだ。　何でも、中央でド豪い事が有ったらしいじゃないか。　その知らせが届いたみたいで、その直後に国の奴らまで加わっての失踪だ。　何がなんだか、こっちが困ってる」

すると、コツ・・コツと床を鳴らして歩み寄るラヴィンは、背の高い大男の悪党を目の前にする。　頭に布を巻いて、冒険者に近い格好のロジャーへ近づくと。

「話に聞くと、お前のよこしたクルーガーが、尾行に失敗したとか・・」

「みたいだな。　ガキに侮って失敗したとか。　ただ、それでも行方はしっかり押さえてた。　宝物の運び込まれたらしい博物館と、奴らが泊まってたらしい宿も」

「ほぅ」

「しっかり調べて、人質を取ろうと計画した矢先に消えられた。情報が足りないから、不測の事態には対処も困る」

「ふむ。　だが、焦った手下が、無理やりに役人を殺したそうだな。街中を見ても、その御陰で警戒が更に強化されてる。　これでは、何をするにしても面倒だ」

そのラヴィンの話に合せ、左側にいる背の高いニヒルな顔立ちの中年男が。

「ホントだぜ。　街に入るのにエラい苦労した」

と、嫌味を効かせる。

太った大男は、舌打ちをして横を見る。

しかしラヴィンは、

「クドゥル。　それ以前に、もっと早く入る予定だっただろう？　ロイジャー達と一緒に行動しろと命令を出したハズなのに、その遅い行動には目に余る。　此処で、雇った殺し屋達に命じて始末させようか？」

ニヒルな印象の中年男は、そのラヴィンの冷血な話にやや大きい目を細め。

「本気で言ってるのか？　組織の命令に、今まで何度も応えて来たってのによっ」

「当たり前だ。　今回は、此処十数年は発令されなかった召集が掛かってる。　今までの手柄や、功績など酌量の余地に入らない。それだけ、今回の案件は力を注いでいると言う事だ」

「・・・」

軽口をたたいたニヒルなやさぐれ男も黙り。　ラヴィンは、大男に向き。

「それで、運んだ四人が居ない訳か」

「あぁ。　もう少し突っ込んだ調べ込みが出来れば良かったんだがな。　その四人が宿から消えた事で、もう箝口令も布かれているらしく、宿の従業員への聞き込みが思わしくない。　リオンが居ない分、テトロザがマジに成って色々働いてる。　軍内部でも、内通者の届かない権限で動いてるから、内情を知れないんだ」

ラヴィンは、計画を立てようと思い。

「何でもイイ。　解る範囲の事を教えてもらおうか」

「複数の場所に張り込みをしてる。　先ず、博物館には変な動きがないか探らせている。　後、住居区の片隅に有る廃棄場には、深夜に何かを運び混んだと思われるから張り込みをさせてる。　他には、宝物を運び込んだ場所を探す上で、博物館の持ち主一族が昔住んでいた旧貴族区の周辺も探らせている」

「成果は出そうなのか？」

「正直な所を言って、博物館からの情報流出は難しい。　兵士をウチの手下が焦って殺してるし。　運び出しの情報を貰った博物館の日雇いも、仕方なく口止めに始末してる。　その御陰で一部の者のみで情報を出さない様に警戒しているから、もう後は踏み込むしか無いな。　それから、廃棄場にも常時兵士が居る。　張り込んでる手下から聞くには、数が潜んでるかも知れない。　態と俺達を誘い込む罠とも受け取れるな」

ラヴィンは、それを聞きながら俯いていたが。　３呼吸ほど間を開けてから、

「それなら、その二箇所には踏み込もう。　待ち伏せが予想されている物置場には、雇ったジェノサイダーに行ってもらう。　博物館の方には、寄せ集めのゴロツキをクドゥルに指揮してもらおうか」

手下を抱える頭目でもあるクドゥルは、その命令に目をギラギラさせ。

「あ？　俺に捕まれ云うのか？」

一々説明が必要なのが煩いラヴィンは、軽い溜息をした。

「ふぅ。　クドゥル、お前の持つ本隊は切り札だ。　寄せ集めのゴロツキさえ見限れば、お前なら捕まらずに逃げれる。　奴らを慌てさせるのが狙いだが。　宝物の有無を確かめる所まで出来るなら、踏み込め。　そうゆう指揮に長けるお前に任せるんだ」

叱責をさっきに受けたと思うクドゥルなだけに、失敗は許されないから不満が顔から溢れていた。

ラヴィンは、真ん中に立っている物静かな覆面の一人に向くと。

「リエル。　お前の仲間は手勢が少ないから、手下は旧貴族区の捜索に向かわせろ。　そしてお前自身は、クドゥルに付き添って襲撃を手伝え」

すると、リエルと呼ばれた覆面の人物は、何も言わずに頷くだけ。

背はさほどに高く無い人物だが、どうも隙の見えない者でもあった。　ただ、挨拶すらも喋らない人物で、会話も出来ないらしい。

クドゥルは、リエルと云う者を見て。

「ラヴィン、コイツは一体誰だ？　呼び寄せる悪党なら、他にも幾らだって居るだろう？　もっと手勢の多いのだって居たはずだ」

言い掛かりだとラヴィンは腕組みをして。

「今回の一件は、ただ数だの力だのを求めればイイと云う内容では

ない。　他の集団は統率が低く、しかも暴れ回るしか能の無いゴミだ。　戦争をする訳でも無い。　とにかく、手に入れる物さえ此方に獲られればそれでイイのだ。　統率の取れない集団など、今回の仕事には向かないのだ。　集団の盗みや情報収集に於いて、ロイジャーの一味が一番優秀だ。　クドゥル、お前の率いる集団が一番戦闘能力が高い。　そしてこのリエルの抱える集団は結束力が強く、ある程度の暗躍行動も出来るし、リエル本人の剣の腕も中々だ」

クドゥルは、覆面のリエルを睨み見て。

「コイツがぁ？」

頷くラヴィンは、話を早める為に。

「下らん品定めは必要ない。　寧ろ、踏み込んだ先に兵士が居た時の事でも考えろ。　俺は、今回の仕事に当って、お前の手下は必要とするが。　お前自体は、さほどに必要とは思わない」

クドゥルは、その言われ様に怒りが全身に沸き上がる。

「なぁにぉぉぉっ？」

「冗談では無い。　お前は、あの者共の頭目で有ると云う指揮能力が有るから、それで呼んで有るだけだ。　お前が実力を発揮すれば、三下の指揮でも十分に力を振るえる。　余計な感情は要らん。　今回の功績が高ければ、お前も俺と同じ立場に推薦出来る」

クドゥルは、その貶されているのか、褒められているのか解らない言われように黙る。

ラヴィンは、大男のロイジャーに。

「解った範囲で博物館の地図を書いてくれ。　確認次第、様子を見て日取りを決める」

大男の頭目であるロイジャーは、

「ラヴィン。　今回は、こっちも被害が多い。　後、何の位この仕事に関わればいいんだ？」

と、悪党面を神妙にして聞く。

すると、ラヴィンは、ロイジャーを目だけで斬る様に見ると。

「それは、この仕事が終わるまでだ。　お前の一味は、今回の一件に深く踏み込んで調べてる。　此処のカタが着いたら、次は王都に向かわせる」

「本気かぁっ？！　それじゃ、何時に成ったら解放されるか解らないだろうが」

「ロイジャー。　もう身に沁みて解っただろうが、今回の召集は本当に面倒な仕事だ。　多額の金を組織に納金されているから、断ること無理だしな」

ロイジャーは、難しい顔で頷くのみ。　だが、内心では・・。

（俺達・・何処まで付き合わされるんだ？）

嘗ては悪党としてもひよっ子だったロイジャーが、召集の事に関し

て噂を聞いた事が有る。　それは、

“最悪な召集の時は、逃げれるなら逃げろ”

と。

詳しい理由は教えられなかったが、話をした老練な盗賊は顔を厳しくして言った。　他の噂では、仕事が失敗から頓挫して、大きな盗賊集団が消えたとだけは聞いた。

ロイジャーは、３０人以上の仲間を抱えるだけに、今後は更に気が抜けないと緊張する。　このラヴィンは、以前にも仕事にいい加減な集団を暗殺で潰した経緯を持つ、本当に非情な男であることを知っていたからである。　普通、特別な召集でもないのに、大きな失敗が無い限りその様な事は無いらしい。　だが、このラヴィンは別だった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪表と裏の攻防≫

朝が来る。　昨日も、一昨日も来た。　当然の毎日。　毎日と云う繰り返しは、変わらない。　だが、その一日一日の内容は、当たり前の事ながら変わる。　起こるべき出来事も、変わってゆく。

朝方。

暗い夜のような中で、湖から引き込まれる水が水路を流れる入口が有る。　王城の北側の山の麓を流れる川から引いてくる水が、王城を取り囲む堀へと注ぐ水路に入る場所であり。　石で造られた人工の整備された水路に変わる場所であった。

この川は、地下温水や、河川に面する街から流される温泉水に因って、どんなに寒くなっても凍らない川である。　冷え込みが厳しい朝から明け方と成る昼手前頃になると、水煙が上がって水面が見れない程なのだが。

「んぐ・・」

川縁の雪が積もり野原が見渡せる場所に在るのが、水路の管理をする者が来る小屋で。　其処には、石で出来た船着場が在るのだが、人気の無いこの頃合いで川の中から船着場へと手が伸びた。　今にも力が抜けそうな手は、斬られた傷痕も見えるもの。　その人物は、厚手のコート風の衣服に切り裂かれた痕を見せたアッシュだった。

しかし、小屋には弱い灯りが灯っていて、アッシュが身を半分水面に出した処で、小屋の扉が突然に開いた、

「アッシュ様ですかっ?!!」

小屋に身を隠して居たのは、ハレンツァの手の者が襲撃されていた時、モジューロゥ達を追跡していた女性である。　アッシュとの合流場所で待っていた彼女だが、こんなアッシュを出迎えようとは驚きである。

「う〝うう…」

船着場に身を上げようとするアッシュへ近寄り、大慌てで助ける女性の密偵。　辺りに気を配りながら、明かりの灯る小屋の中にアッシュを連れ込んで見ると。

「あっ」

蒼いコートは、動きやすい様に細かな網目のチェーンを編み込んだ特殊な物で。　腕の無い者の仕業では、ダガーに斬り付けられ様とも簡単に切り裂け無い代物なのである。　だが、アッシュの全身には、１０箇所を超える傷痕が出来ていて。　しかも、その全てがコートの鎖を切り裂いて付けられたものだった。

アッシュの部下である女性は、アッシュの身の怪我を確かめながら。

「アッシュ様っ、あの者と闘ったので御座いますね？」

体を動かせない程に疲労した様子のアッシュは、ズブ濡れの覆面を解けさせ気味に部下を見て。

「お・恐ろしい・・てだ・てだれ・・だ。　あ・あい・・打つかくご・・で、互いに・・この様よ」

「では、向こうも深手を負っている訳ですね？」

「う・うむ。　だがっ、わっ・・私より傷は浅ぐっ。　なか・・まに、たったた・・助けられた」

女性の部下は、もうアッシュを何処かに運んで手当てしないと危ないと判断し。

「アッシュ様。　夜に助けた方は、今頃にリオン様に面会していると思われます。　今は、もう喋らずに…」

アッシュは、リオンから命じられた最低の仕事を出来たのだと思い。

「そ・・そうか…」

と、気を失った。

「アッシュ様っ！！　いけないっ、出血がまだ止まっていないっ」

アッシュへ最低限の手当てをする部下の女性は、焦って繋ぎの為に待つ仲間の元に向かった。　背負ってモタモタしていたら、アッシュの命に関わって来ると思われたのだ。

アッシュは、彼女が呼んできた仲間に運ばれ、リオンの手配が利く寺院へと運ばれた。

モジューロゥと闘ったアッシュは、長い時間を闘っていたのである。
　ある意味、それは死闘と云っても良かった。　アッシュも、モジューロゥの左手の指を数本斬り落とした。　一見するとアッシュの方が優勢に見えるが。　アッシュの負った傷の数が多い。　互いに広い場所で闘っていたいたら、先にアッシュが深手を負って斬られていたかも知れない。

さて。

朝に起こされ、王城の一角に在る隠し部屋に呼ばれたリオンは、私室でハレンツァの手の者が救出された事。　そして、アッシュが酷い怪我をした事を聞かされた。　密偵の副官的存在の覆面男から告げられたリオンは、座った椅子から身を勢い良く立たせ。

「してっ。　双方の容態は如何にっ？！！」

「はっ。　アッシュ殿の傷は多数にて、出血も多く昏睡の状態に。
　ハレンツァ様の手の者もまた、腕と肋骨を折り、追っ手の投げた刃物に塗られた神経の毒にて意識が戻りません」

リオンは、今此処で双方を死なすには行かないと。

「ならば、助くる為に医者を呼ぶっ。　傷を塞ぎ、徹底した看護の

元に置くのだ。　ハレンツァ殿の手の者を死なせては成らぬ。　アッシュもまた、同様だっ。　金を惜しむなっ、バレても構わぬぞっ」

「しかし、大仰にしては・・」

と、密偵が諫めると。　リオンは、怒りの形相を露にして。

「喧しいっ！！！　俺の私兵と手の騎士も護衛に出すっ！！！　これ以上の犠牲は要らんっ！！！！！！！」

と、大声を出したのだ。

「はっ」

リオンの怒りを受けては、密偵の男性も従うしか無かった。

ハレンツァの手の者を必死に助けるのは解るが、アッシュも同じとは考えが及ばないだろう。　だが、アッシュとリオンの関係も、一筋縄では無いのである。

そして、この朝は事態が大きく転ぶ時でも在った。

それは、あの宝物を運んだ御者が、遂に王都アクストムに戻ったのである。

ヴィクトリーロードと呼ばれる王都の正面玄関と云って良い通りが在る。　横幅だけで、馬車が何台横になれるか解らない長さで、王城の正門前まで一直線に伸びる道である。　道の左右には、佇まい

様々な大型店舗が並び。　街路樹も等間隔に植わった見目麗しい、一直線の道。　雪化粧をした木々と、店と、道が織り成す風景美は、世界でも指折りの名所としても知られる。

暗い朝。

多数の馬蹄の響きが、ヴィクトリーロードに積もる雪に因って収められている。　騎士数名が率いる兵士の大隊が歩いていた。　その最後尾にて、騎士二人に挟まれ、兵士に取り囲まれながら行くのが、あの御者である。　馬車を引く馬が7頭程に増え。　後ろで引かれる馬も整列して３０頭を超えていよう。

実は。　交代の騎士や兵士と共に王都へ帰還する途中。　ワダルの町に立ち寄ると、兵士と騎士の予備人員の召集が届けられた頃だった。　この御者を護衛する一団は、王都からワダルへ到着する交代兵が到着するまで、用心してワダルに駐屯した形をとった。　その時、馬の入れ替えも行われ、病気や年老いた馬、繁殖に回す馬を王都に運ぶのを任された御者だった。

しかも。

ワダルの町にて、御者を狙う襲撃が一度だけ在った。

この一件の危機を防いだ護衛の騎士達は、テトロザの命が本当に危険を含んだ物だと実感。　その後、最後尾にお供を引き連れる様な、御者を隅に置く甘い護衛の様子は無くなった。　ワダルの町で過ごす残りの数日、王都に向かう旅先。　常に御者の男性を守る形態で行軍し。　リオン王子の極秘任務をしたと途中で聴いた騎士の隊長は、冷や汗を顔に浮かべたのは云うまでも無い。

御者を護衛して王城に入ると、騎士の隊長は、彼が御者としての仕事を終えるまで数名の兵士と見守り。　その後、ハレンツァと親交厚いリオン部下で在る執務官に謁見。　一連の命令の終了と、御者の身柄を引き渡した。

御者の男性は、王室行政参謀室と云う政治参謀部の一席を任される傍ら、リオンの政治・事務的な意味で片腕を担うアンサムス伯爵に会わされた。　５０前の日焼けした人物で。　温厚そうなスマートな印象の貴族だ。　髭も蓄えず、何処にでも居そうな平凡な人物に見える。

アンサムスは、御者の男性を待合い場のソファーに案内すると、騎士隊長である別の人物の召集を文官に命じた。

白い壁と壁を彩る国旗や絵画や装飾的オブジェの武器、そして北と南に暖炉の灯る落ち着いた広い参謀部室。　８名からなる参謀部の副管長がアンサムスである。　黒白（こくびゃく）の模様を魅せるピアリッジコートを着て、下に正装の出で立ちを窺わせる。　紅茶を煎れたアンサムスは、穏やかな面持ちで。

「この通り、私以外に誰も居らん。　ハレンツァ様の喪に、大半が服しているのでな」

と、御者の男性に言えば、御者の男性は、恐れ多いと頭を何度も下げ。

「そうですか、この度は帰還が長びいて済みません」

「いやいや、それは気にせずとも良い。　旅の間の経緯は、全て聞いておる。　ワダルから馬を世話して連れてくる御者が高熱をだし

てな。　お主と、他の者二人を頼ったまでよ」

「あ、知っておいででしたか」

薄暗い中、紅茶と菓子を御者に出すアンサムスは、

「うむ。　お主の一族についても、ハレンツァ様から聞いていた。
リオン王子が、この仕事が終わった
あかつきには、翌年を待って処分を撤回すると云う。　これからは、
汚名も雪げる様に成ろう」

と、物静かな語りを崩さずに云う。

御者の男性は、長旅で少し窶れた顔を引き締め。

「あぁ・・、そうですか。　その様に御威光を賜われるだけで、私
も、命懸けの任務を全う出来た事に誇りを持てます」

と、深く頭を下げる。

アンサムスは、御者の男性を見て頷き。

「御身の曽祖父と祖父が起こした不祥事は、若い頃に王へ成りあそ
ばしたクランベルナード国王陛下により裁かれたのだったな」

「はい・・」

「それから３０年。　爵位消失を受け、随分と大変で在ったろう。
今回の命をお主に授けたいと言ったのは、ハレンツァ様だ」

「へぇ？！」

驚いて顔を挙げた御者の男性に、アンサムスは続け。

「お主の兄であり、警察局部の捕り物役として働く者の長男と、ハレンツァ様の末子であるエリウィン殿が、同じ学院の学友なのだよ。しかも、厩舎馬番のお主が世話した馬を、幾度か借り受けたエリウィン様やハレンツァ様であり。子息同士で親交の在るお主の兄上殿からの推挙で、お主を推薦された様だ」

知らなかった事実に、御者の男性は頭を下げ。

「そのような縁の巡り合せからでしたか。あぁ・・、年老いた母にっ・ろ・・朗報を伝えられまする」

と、感涙に言葉を詰まらせ始めた。

いつの時も、罪人に対する世間の目は冷たいものだ。その苦労を見て来たエリウィンが、時折に触れ。御者である彼の事や、仕事に真面目な御者の兄の事を父親のハレンツァに言っていた。ハレンツァもその事が有って、彼をリオン王子に指名した。汚名を雪ぐ気持ちが強いと聞いていたので、任務も忠実で全うすると見込んでらしい。

アンサムスは、泣く彼を見ながら。

「だが、これからが本番だぞ。今、あの宝物に関わる誰もが狙われておる様だ」

その話に顔を上げる御者の男性は、

「それは、・・真で御座います。　わぁ・私も、ワダルで襲われて御座います…」

「うむ。　だから、お主の家族には、密かながらに護衛を付けさせておる。　だが、親戚筋とまでには行かん。　それに、如何なる時も警戒せねば成らないから、油断は出来ん。　お主達兄弟の妻や子供達は、別の場所に移動させる手筈を整えた。　だが、お主の母親殿はご病気であるし。　実父の事が在る上、気丈な貴族の方でいらっしゃるから、移動せず囮になる成る覚悟すら持っている。　これから帰るお主からも、御母上を説得して欲しいのだよ」

その話を聞いた御者の男性は、ハッとして言葉を失った。

彼の一族は、つい３０年近く前まで、貴族としてアンサムスと同じ伯爵を頂いていた。　彼の曽祖父と祖父は、金で監査の手を緩める汚職をしていたのである。　しかも、御者の彼の母親が、その実子に当たり。　プライド高い母親は、貴族を剥奪されても尚。　息子の二人に貴族としての心構えや、王国に忠誠を誓う教育を施した。

そして、貴族として、国に忠義を示す気質は並々ならない処の在る女性であった。

貴族の中でも忠義の念の強い者は、王族と王国に身を捧げる覚悟が出来ている。　それは、理屈云々では無く。　貴族と云う地位を頂くに当って、それだけの覚悟と気構えを持つのは当然と云う。　云わば古い騎士道精神や、貴族教育の流れが未だに残る風潮からだろう。　御者の母親は、云わば薄汚い“汚職”と云う汚名を着せられ、その汚名を恥じる気持ちから気高く在ろうとする一念に筋金が入っていた訳だ。

「解りました。　では、これから直ぐに・・」

と、云う御者の男に対して、アンサムスは頷き。

「家まで送る。　本日には、移動の手筈を取る故な。　出来る限り早く頼む」

「はっ。　一族の安全まで御計らい頂き、感謝の言葉しか御座いません」

そうする内に、アンサムスの呼んだ大柄の騎士隊長が来た。　御者の男性は、騎士隊長と共に家に帰った。

★

御者の男性が家に戻る頃は、昼を前にした薄暗い空模様の頃。

彼の家は、王都の住居区の外れで、南方の貧民が多く住み暮す場所に在った。　兄の夫婦と自分の妻や子供を合せ、１２人が狭い間取りの家に暮らしていた。　石造建築の四角い味気ない家で。　周囲も似たり寄ったりの大小の家が点在する場所である。

こんな場所だから、兵士が見守るにも支障が出るのは当然だった。

貧民の住み暮す下町に来る頃。　騎士隊長は、御者の男性に。

「恐らく、其方の兄上が夜勤から戻り次第、居場所を変える手筈と成っている。　もしかすると、もう始まっているやも知れん」

「随分と急ぐのですね」

「ん。　当事者である其方だから云うが、お主の運んだ物品に関わった者が、今までに何人も被害に遭っている。　宝物を狙う輩からするなら、この王都では、今はお主が一番の有力な情報源かも知れないのだ」

「つまり、狙われる可能性が高いと？」

「そうだ。　ハレンツァ様の御親族の方々も危ないと、セラフィミシュロード様の御家に避難されているしな。　此処の処、数日は殺人も多発している。　とにかく、被害の拡大だけは避けねば成らん」

すると、御者の男性は、非常に覚悟めいた顔をして。　雪がちらつき始めた中で。

「騎士様。　私めは、何が有っても情報は口外しません。　例え、捕まっても」

騎士隊長は、御者の男性を見返し。

「リオン王子は、これ以上の犠牲を出す事。　それ自体を嫌っている。　お主からの情報の漏洩など、心配しては居らぬ」

「…」

御者の男性は、静かに俯いた。　だが、母親は、国の仕事には忠義

と信念の一念を持って臨めと彼に教えた。　表には出さなかったが、彼の心にはその教えが居座っている。　礼節や節度は、徹底した教育で叩き込まれた。　だから、自分が宝物を狙う輩からするなら、情報源に為りうると理解出来た。

（母上。　俺は、貴方の子です）

此処に来るまでに、町で一度襲われ掛けた彼。　もう、覚悟が出来始めていた。

彼が騎士隊長と家に戻ると…。

「ん？」

御者の男性の家を少し遠目に見れた騎士隊長は、まるで無人の廃屋の様に扉が開かれた様子に違和感を覚える。　周りの塀と云う仕切りすら無い住居の密集地なのに、その家だけ人が住んでいるとは思われない様子だからだ。

「待て」

騎士隊長は、御者の男性を止め。

御者の男性は、開かれっぱなしの家を少し離れた先に見ながら。

「どうしましたか？」

と、問う。

騎士隊長は、剣を留める金属の留め金を外しながら。

「妙だ。　兵士が一人も居ない」

「え゛？」

「中を見てくるから、此処で待て。　何か有ったら、声を出すんだ」

「はいっ」

騎士隊長は、ゆっくりと家に近付いて行く。　確かに、騎士隊長の勘は当たった。　家の中に顔を覗かせれば、兵士らしき様相をした者が3人程倒れている。

「むっ、これはっ」

家の中を伺いながらも、倒れている兵士に近寄ると。

「おいっ!!　しっかりせぬかっ?!」

声を掛ければ、呻く兵士。　生きてはいたが、外から入る明かりに見える彼の手が、紫色に変化しているのが見えた。

（いかんっ、これは毒かっ?!!）

兵士の身を検めた騎士隊長は、背中にダガーが刺さった傷を見つける。

「くそっ」

家の中を見れば、暖炉の火が灯るままに争った形跡が窺える。

「母上殿っ?!　大丈夫ですかっ?!!!」

大声を上げて、隣の寝室へと踏み込むのだが・・・。

「ぐっ、しまったっ!!!」

簡素な木造のベットに寝ていた筈の老婆が消え。　近くには、兵士が一人倒れている。

騎士隊長は、兵士の一人を抱えながら。

「オーバーンっ!!!　オーバーン聴こえるかっ?!!!」

と、大声で御者の男性を呼ぶ。

怪我をした弱る兵士４人を一箇所に集めた騎士隊長は、外に待たせた御者の男性を迎えに出た。

が。

「居ない?」

姿が見えず、彼の待たせた場所に走る騎士隊長。　待たせた場所の雪が、異常に踏み取られて地面が見えている。

「な・・何たる事だっ!!!」

騎士隊長は、彼が拐(かどわ)かされたと理解した。

直後。　大通りを行く荷馬車を呼んで、兵士を医者の元に運ぼうとした騎士隊長の元に。　兵士3人と戻ってくる男性が居て。　この彼が、警察役人の下級捜査官に就く御者の兄と成る人物だった。家族を安全な場所に移動させた兄は、弟と二人で残る母親を説得しようと思って来たのである。

騎士隊長から話を聴いた兄は、

「母上も一緒に連れ去られたっ！！　嗚呼っ、母上の云う事を聞いたのが裏目に出たっ！！！！」

騎士隊長と話す兄は、そう言って嘆く。

“とにかく、一家の長として、子供達や妻の安全を第一に考えなさい”

兄弟の母親である女性は、非常に落ち着き払った言葉でそう云ったらしい。　最近、殺人が多くて、何か危ない雰囲気を感じていた兄は、母親の言い付けを受け。　先ずは、自分の家族と弟の家族を安全な場所に運ぶ事にしたのである。

兵士4人が居た事に安心を得た彼だったが・・。　まさか、極夜の時期ながら白昼に襲われるとは、驚きだった。　不安は在ったが、直ぐに弟と騎士隊長が来ると云うので、油断したと云える。

そして。　兵士の余剰人員も掻き集めた騎士隊長は、周囲の聞き込みと捜索を開始。　アンサムスに緊急事態を告げた。

その中で、兵士の一人が。　雪舞う王都を動き回る騎士隊長に、

「隊長、一つ伺っても宜しいでしょうか」

「んっ？！　至急の用事かっ？」

苛立つ騎士隊長へ、兵士は少し怯えながら。

「あ・あの・・重要な事か解りませんが。　召集に応じた兵士や怪我した兵士の他に、一人見当たらない者が居ます」

「何ぃ？」

「２０日程前にアハメイルから戻った者で、５日前頃から我々の任務に加わった筈なのですが・・」

雪を頭やマントに着ける騎士隊長は、兵士に詰め寄る様に接近し。

「そ奴は、兵舎の者か？」

「解りません。　調べてみましょうか？」

「・・・ふむ」

これに引っ掛かった騎士隊長は、兵士の二人を警察役人の施設に向かわせた。　警察局に戻った御者の兄が、誘拐事件として操作を求めている頃であろうと判断。　自分の命で、彼に兵士二人と捜索に当たれと命じたのである。

昼過ぎの王都アクストム市内に、兵士が慌てて走り回る様子が目に付く様に成った。

その頃。

ずた袋の大きい物に入れられた御者の男性オーバーンは、急に何処かで降ろされた。

騎士隊長が家に入った直後。　棍棒の様な何かで殴られ蹌った所で、轡を嵌められた上に蹌った自分を強引にずた袋に入れる何者かが居た。　朧気な感覚だが、複数の人物が居たと思えた。

その後、担がれて荷馬車の荷台へと放り込まれた。　自分も御者で、幼い頃から馬の扱いはしてきた。　臭いや動きで馬車の荷台だと云う事ぐらいは直ぐに解る。

「くっ・・ぐう」

呻く彼だが、ずた袋の上から縄でグルグル巻きにされてしまったらしく。　全く身動きが出来ない。

馬車は、何処かに入り込み。　御者の男性は一度別の馬車に乗り換えさせられた。　今度は、後ろに荷物を入れる場所を持つ乗用の馬車である。

そして、それからまた馬車は走り出し。　そして、随分と走った。
そして、やっと停ったと思ったら、何処かの冷たい場所に運び込まれたのである。

「おいっ、早く聞き出すぞ」

男のドスの利いた声がして、

「へい、今」

オーバーンの身を包んで居たずた袋の上が下げられ、顔だけ出せる様に成った。

「んぐぅ」

視界が開けたオーバーンだが、依然としてこの場所は暗かった。そのまま大男らしい影に担がれ、階段を上がる。　すると、薄暗いながらランプの灯りが灯る部屋に上った。

「ん〝っ?!　んんんんーっ!!!」

瞬時に呻くオーバーン。　部屋の片隅でランプの灯る下に、ぐったりとする老いた母親を見つけたからだ。

ローブにフードで顔も服装も隠す大柄の人物は、オーバーンを乱暴に床の木の上に放る。

「ぐふっ」

ドサっと置かれて、転がったオーバーン。　落とされた衝撃で咽せる彼の目の前に、引き摺る様な足が有る。

「・・・」

見上げてみると、腕や顔や足に布で包帯代わりの手当てをした悪党顔の中年男が居る。

実は、これがモジューロゥだった。　アッシュと闘って、相打ちに

なりそうだったモジューロゥだが。　手下の応援が来て、なんとか助かったのである。

「コイツかぁ～?!　例の御者ってヤツはぁ?」

怒りや憎しみが声に混じる言い方のモジューロゥ。

連れて来た大柄の男が、

「へい。　間違い在りません」

と、言えば。

「そうかぁ～、よぉ～し」

大柄の男に、轡を外す様に命令したモジューロゥ。

口が自由に利ける様に成ったオーバーンは、何よりも先ず。

「母上っ!!　大丈夫ですかぁっ?!!」

と、大声を。

すると、モジューロゥは杖代わりの木の棒を、いきなりオーバーンの顔に叩き付ける。

「うがぁっ!!!」

ぶたれて転がるオーバーン。

「大声出すなぁ。　あんまり聞き分けが悪いなら、お前の母親をブッ殺すぞ」

モジューロゥが脅しめいた言葉を吐く。

だが、呻いて気を確かに持とうと頭を振ったオーバーンは、痛みを堪えて擡げる顔をモジューロゥに向けると。

「お・お前達の狙いは・・、私のは・・運んだ荷物の事・・か？」

モジューロゥは、言う前から話に出た事で、早々に話が着くと思い。

「おお～、こりゃぁ～イイ。　話が早まりそうだ。　そう、お前の運んだ荷物についてだ」

すると、オーバーンは、ほくそ笑む顔で。

「そう・そうか…。　どうやら、まっ・まだ見つかって無いらしい」

モジューロゥは、足を引き摺り近付きながら。

「おうよ。　だから、教えて貰おうか？　何処に運んだ？　何処に在る？」

と、聞く。

オーバーンは、気を失っている母親を見てから、間近に来たモジューロゥの足元に唾を吐いた。

「ペッ」

そして、やって来たモジューロゥを見上げるオーバーンは、

「私は何も知らん。　とんだ見当違いで誘拐をしたもんだな」

と、笑みを浮かべる。

相手に余裕の笑みを見せられるモジューロゥは、頗る憎たらしい。

目じりをヒクヒクと動かすままに、

「お前ぇ、何がそんなに嬉しいんだ?」

と、木の棒をオーバーンの顎に押し付ける。

オーバーンは、グリグリと顎を突かれても、覚悟は決めてるとばかりに。

「おま・え・・達が、もうに・げら・・れ・・・ない。　いまご・ろ騒ぎになっ・成ってる」

モジューロゥは、危険な賭けを承知で、仕方なく危ない橋を渡る行為に出ただけに。　御者ごときに指摘されては、正直な所で腹が立つ。

「そんなことはぁ解ってるんだよっ。　だから、吐けぇぇぇぇぇぇぇ・・」

木の棒の先をグリグリと押し付け捻り回す。　擦れてオーバーンの皮膚が削れ、血が滲む。

だが。　オーバーンは、

「あ・生憎・・しゃべるつ・・つもり無い。　口がじっ・自由なら、何時でも・・自決出来る」

と、強気に。

御者の態度に、絶対者としてのプライドを刺激され。　怒りに身体震えるモジューロゥである。

「このぉクソ野郎っ！！　お前の母親を嬲り殺してやろうかぁっ？！！」

辛うじて声を抑えて言うモジューロゥだが。

オーバーンは、決意を秘めた目で睨み返し。

「私の母親は、拷問などに屈する事を教えなかった。　落魄れたとしても、私は貴族の心を持った母の子だ。　お前が母を殺すと言うなら、此方が先に死んでやる」

と、口を噤む。

その様子に危険を察知したモジューロゥは、

「このっ！！！」

と、杖代わりの木の棒を振り付けた。

「ぶぐっ」

舌を噛む前に阻止されたオーバーンであり。　オーバーンの頬を木の棒で突きながら、轡を再度しろと命じたモジューロゥ。

モジューロゥは、今まで何でも力づくでやって来た節が有り。　こういった事で、思惑が頓挫する事を何よりも嫌う。　仕方が無いので、母子共に拷問する事に決めた。

一方、その頃。

事態を聞いたリオンは、王都に在する将軍の手元に置かれる筈の兵士を数百名ほど召集。　自分が指揮を取り、エリウィンも覆面させた上で借り出し捜索に乗り出した。　夕方に成り、陽も完全に落ちた夜の様な頃合いで。　雪が吹雪く気配すら見せ、寒い中である。

この時。　リオンの兄であるトリッシュは、歴史的な事実を纏めた書類を作成した上で、ヘンダーソン及びミグラナリウス老人の調査をする事を極秘に決めた。

実は、あのクシャナディースに腹違いの娘を出した公爵ハルツベリモント卿。　彼に買収された商人と云うのが、貧民街に生きていて。　彼の妻と娘は、半ば強引にメイドとしてハルツベリモント卿の愛人にされていた。

財産と妻子を奪われた商人は、リオンの密偵と接触した事で、言われの無い讒言を受けて財産を買収されたと語る。　何故なら、彼が買収の代わりに貰い受ける筈の巨額な大金は、知らない悪徳商人に巻き上げられた。　その相手の営む店の名前は、ホローの営む貿易組織である。

ウィリアムの解決した事件に関わり、その後始末をしたリオンが居るのだ。　ホローの営む商業組織を軒並み潰したリオンであるから、その名前を知らぬ訳が無い。

しかも、ハルツベリモント卿に、シフォンと同対価の金を払ったのがクシャナディースでは無く。　彼の営む店の懐でも無い。　以前から政治的な金の流れの中で出てくる存在不明の大店で、ミグラナリウスの一族に寄付をする店の名前で送られたのだ。

トリッシュは、リオンにこれで政治的に表から捜査が出来ると言った。

リオンは、これ以上の犠牲は要らぬと、自ら先頭に立って指揮をする。　自分が表でこの事件を解決することに尽力し。　世間の目を自分に向ければ。　兄トリッシュがポリアの兄二人と内情捜査をする上で、目立たない働きが出来ると考えたからだ。　ミグラナリウス老人に然り、ヘンダーソンに然り、クシャナディースに然り、今は蚊帳の外で王宮内に出て来ない。　絶好のチャンスが此処に出来上がっていた。

長年に渡った陰謀に向け、　遂に捜査の手が動き出したのである。

だが、危険が薄らいだ訳では無い。　寧ろ、強行的な凶暴さを牙むいて、関係者を狙う動きを見せていた。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪殺戮者達の宴≫

年の最後まで後少しと云うほどにまで迫った頃。　年末年始の賑わいを掻き消す事件は、その日に起こった。

場所は、三箇所。

一つは、昼に既に起こった王都アクストムでの御者と母親の誘拐。

別の二つは、セイル達の居るアハメイルで。　宝物を運び込んだと見せ掛けた物置き場に在る襤褸小屋と。　そして、マーリの博物館への襲撃。

交易都市アハメイルで起こった襲撃のどちらで起こった事も、手口から見ても大胆不敵なやり方で。　双方とも、明らかに冒険者の技能を持った者が絡んでいた。

先ず、物置場として廃棄された物を仕舞っておく倉庫と云える小屋

から。

まだ深夜と云っていい頃合いだろう。　セイル達を抜いて、兵士だけで見張っていた襤褸小屋に、突然魔法が打ち込まれた。　炎の魔法らしく、小屋の中が一気に炎で包まれ、廃棄物が炎上したのだ。

　元から廃棄物の物置として使われた小屋で、埃と燃え易い家具などの壊れた物が在るだけに。　其処に大火球が投げ込まれたら・・、瞬時に廃棄物が燃えるのは当然だろう。

見張っていた兵士と、隠れて待機していた上級兵士が驚いたのも無理は無い。

闇夜に紛れる様に黒いローブを着て、面体が解らないままの5人の者達が小屋に近付いた。

先頭に立って踏み込むのは・・。

「もえもえもえろぉぉぉぉぉ～、ぜぇ～んぶもえろぉぉぉ～」

炎の精霊を操るハイニーズである。　大きな火球を襤褸小屋に飛び込ませた跡の穴から小屋に踏み込むと、身の回りに炎の輪を生み出した。

「出たぞっ！！！　取り押さえろっ！！！！」

組織された上級兵士数名と騎士3人の潜伏隊は、ハイニーズに向かって燃える倉庫内でも果敢に向かっていった。

だが、ハイニーズは炎の輪を波動の如く飛ばし、潜伏隊を蹴散らす。

そして。

「構う事は無いっ！！　存分に殺せっぇぇぇ！！！！」

と、声を挙げたのは、ハイニーズの後から踏み込むレプレイシャス。

その後、次々とジェノサイダーのデイヴ、ゴストンに続いて、初老の剣士デュナウドも加わっていた。　ジェノサイダーの中でも、レプレイシャス、レイ、デュナウドの3人は一角以上の剣士であり。

その腕は、日々の鍛錬で磨かれた騎士を相手にしても、決して退けを取るものでは無い。

レイと魔想魔術師のサロペンは、博物館の襲撃に回っていた。　だから、此方はジェノサイダーの5人のみと云う事だ。

「おのれぇぇっ、怯むなっ！！！　いずれテトロザ様の応援が来るっ！！　それまでに持ち堪えるのだぁぁっ！！！！」

炎の鞭と化したハイニーズの魔法に吹っ飛ばされた騎士のリーダーが、臆病風に吹かれて踏み込めない兵士を叱咤するように云う。

だが、テトロザは、相手が魔法を遣う事も視野に入れ、無理やりな戦いは避けろと指示を出していた。　処が、統制の取れている兵士や騎士でも、其処には人間としての心情も滲む。　魔法で攻撃され、ホウホウの体で逃げただけと成っては、リーダーの騎士もプライドが保てない。　まだ30半ばの騎士は、命令を出して無理を押した。

「うおぉぉぉぉぉーーーーーっ！！！！！」

抜刀した兵士とリーダーの騎士は、周りが燃えるのも無視してハイニーズに向かって行った。　ある意味、ジェノサイダーの入って来

た場所が一番安全な逃げ道でも在る。　逃げる血路を開く意味も在る突撃だったが、これは最悪の結果を生む事と成った。

「先ずは魔法を遣うアイツを斬るんだぁっ！！」

「一人で向かうなっ！！」

「結束ーーっ！！！」

見張りの兵士や隠れていた兵士合わせて十数名が、ジェノサイダーの一味をを取り押さえようとしたのだが・・。　人に対して魔法を遣う事を躊躇わないハイニーズ。　そして、レプレイシャス達もそれぞれに武器を遣う。　訓練を受けた選りすぐりの兵士６名が、反撃されて直ぐに意識不明の負傷。　残りの兵士達は、逃げるだけで精一杯と云う状態に陥った。

その騒ぎは、近場に在る海沿いの警備施設に待機していた軍隊にも知らされた。　通報を受けた待機中の軍が急行してみれば、現場に残された兵士は何れも惨殺されていたのである。　テトロザが連絡を常に取るようにしていた兵士は、襤褸小屋に押し入る前、先に殺されたので連絡が遅れたのだ。

この時、襤褸小屋は既に半焼以上に焼け落ち。　小屋の中は引っ掻き回されて、其処に火の手が回って更に炎上していた。　襤褸小屋と言っても、ある意味の倉庫で。　何時までも燃やしておいては、火の手が飛び火する可能性も在る。　遺体の全回収より、消火を優先させなければ成らない状況だったのは云うまでも無い。

「火を早く消せっ！！！」

「周りの建物に飛ぶ火させるなっ！！！！！」

「水だぁぁぁぁっ！！　これ以上ゴミや遺体を燃やさせるなぁーーっ！！！」

駆け付けた軍が浮き足立つ程の事態で、大声が次々と上がる。　深夜がまだ明け方に近付く頃合いで、住居区の市民を起こす騒ぎと成った。

一方。

時を同じくして、マーリの博物館に賊が押し入った。

博物館の敷地を囲う塀。　これを破るべく撃ち込まれたサロペンの魔想魔術が、争いの口火を切る合図に成った。

マーリの組織する私兵と云える雇われの腕に覚えの在る用人達が、開いた穴から侵入してくる賊をそれを迎え撃つ。

だが、相手は５０人近い賊と、ローブに身を包み指揮をする３人の何者かと云う大勢。　辺りのしじまを破り、凄い喚き声が上がった。

フードをして顔を隠し、ローブに身を包むリーダー格の３人を相手に、組織されたマーリの警備団は負かされ掛けた。

館内を守るマーリの仲間を中心とした一団と、常に館内に寝泊りしていたマーリが合流して、暗夜の博物館外は更に争い激しい戦場と化したのである。

「何者かっ！！！　我が博物館を襲撃など、何たる狼藉っ！！！」

マーリは、自身の得物と成る軍用剣（サーベル）を手に、細剣を扱うリエルに斬り掛かり。　止めを刺され掛けた警備隊長を助ける。

マーリの仲間5人や雇われた冒険者3名は、腕っ節の強い賊や、悪党の頭目であるクドゥルとジェノサイダーのメンバーであるレンの足留めをした。

更に此方には、テトロザと彼の側近の騎士数名からなる待機兵士十数名が居た。　喚き声を聞き、見回りの騎士と兵士。　そして、マーリの屋敷内に身を潜めて、執事などを守るテトロザが動いた。

テトロザは、騒ぎに驚き命令だけ出して出るマーリの代わりに、宝物の有った地下倉庫へメイドや執事を逃がして安全を確保してから。　兵士数名と騎士を博物館内部に散らし、逃げ込んでくる負傷した者を助け。　窓などから侵入してくる賊を、確実に斬り伏せながら外に出る。

そして、外回りの警備から戻った高位騎士数名の働きもまた目覚しいもので。　数で押されていた勢いを挟み撃ちすることで盛り返し。　外に出てきたテトロザと応呼しては、リーダー格の3人を含めた暴れる賊共を打ち返す勢いも付けた。

あのラヴィンに命じられ、ゴロツキを騙して押し込み強盗に見せ掛けたクドゥル。　そして、彼の片腕として、クドゥルに向ってくるマーリや冒険者を食い止めるリエル。　そして、ジェノサイダーの副リーダーとして、参謀の様な働きをするレンと云う人物が主軸だったが。　テトロザともう一人の高位騎士は、この三人を含めた４・

5人の手練を相手に激しく打ち合って劣勢に追い込む。

巨漢の悪党二人が、テトロザを相手に負ける。　これを見たクドゥルが、退きながら。

「いかんっ。　テトロザが出た」

それに応える様に、レンと呼ばれるフードを深く被る者が。

「逃げるに限る」

そのレンの声は美しく、女性か男性か区別のつかない感じであった。
その引き締まりの有る中性的な声に頷きを返すのは、悪党二人と3人掛かりで高位騎士を相手にしていたリエルだ。

「・・・」

夜の闇の中でそう言い合う二人と、逃げるタイミングを見たリエルで。　リーダー格3人が逃走する事で、賊の残りは指示もなく戦うハメに成る。

本当なら、外壁の塀を壊しまくって、放火をして混乱を促す手筈だったサロペンだったが。　四方の一面に当たる壁を何回か壊した直後、火を放とうと賊二人と放火をする所で、見回りの騎士と兵士の一団に出食わしていた。　距離が有れば魔法も放てようが、兵士3人が素早く並んで槍を一列に構え突き込むランスウォールの一手に、それが叶わず。　逃げる事が最優先と成ってしまっていた。

分が悪くなる此処で、流石にラヴィンの見込んだクドゥルの判断は早かった。　軽い興奮剤の様な薬を仕込んである酒を振る舞い、闘

争本能を煽り立てて有った賊達に向け。

「逃げろっ！！！！！　四方八方に逃げて、誰でも殺し捲れぇぇっ！！！！！　騒ぎがデカくなればっ、兵士や役人も混乱するぞっ！！！」

と、嘯いて逃げる。

もう、酒で酔い。　更に薬の作用で、常人としての思考能力の低下した賊共。　闇夜の劣勢の中で散り散りに成りながらも、クドゥルの出した指示を実行し始め様と言い合うのだ。

リーダー格の誰かは捕らえようと思っていたテトロザだが、これには不味いと思い。

「賊の逃亡を許すでなぁーーーいっ！！！！！！！　敷地から出る曲者はっ、問答無用で斬り捨ていぃっ！！！！！」

と、リーダー格3人の相手を諦める。

怪我をさせても狂った様に暴れる賊が相手だ。　騎士達は、それなりに腕も有れば戦えているのだが。　兵士や警備団には、当然ながら怪我人も出る。　施設内に怪我人を連れて行ったりして、徐々に応戦の手は減る中でのこの事態。

死に物狂いの獣の集団と化す賊の残党と、決死の覚悟で破壊行為を止める兵士や騎士。　その戦いは、明け方前に決着を見たが。　兵士や騎士に死傷者を出す結果に成る。

事態の収拾をするテトロザも、流石に此処までの事を相手がすると

は予想をしても。　被害が多く、頗る表情の険しい境地に至る訳だ。

（うむむ、これは非常事態だ）

と、朝方に駐屯軍の全部隊を動かす決意をした。

軍の応援が来る事で、廃棄場の襤褸小屋も襲撃された事が解るし。

賊の死者が何十人と出て、平穏なアハメイルとは言えなくなったと思えた。

★

アハメイルで襲撃が起こった頃。　王都アクストムでは、モジューロゥとその仲間の数人は、ミグラナリウス老人の元に出向いていた。

ヘンダーソンもクシャナディースも面会に来ない中で、ミグラナリウス老人も焦りが出て来たのだろう。

怪我をしたモジューロゥと、その手下を玉座の様な椅子が配された間に呼んだミグラナリウス老人。　幅の有るマフラーを幾重にも首から肩に回している服装で、

「おぉ、呼び寄せて済まない。　何でも、ハレンツァの馬鹿者の手下を葬るのに、其方も怪我をしたそうじゃな。　して、守備はどうじゃ？」

モジューロゥも、流石に老人を前にしては膝を折り。

「へい。　実は、一人だけ相手側の密偵に渡ってしまいました」

老人は、ギョっとした目で。

「なんじゃとっ?!」

モジューロゥは、悔しながらも続け。

「今は、宝物を運んだ御者を誘拐して、在処を吐かせている所でござぇます」

老人は、騒ぎに成っている街中の事は、夕方に手の者から聞いたので。　思わず椅子から身を乗り出し。

「バカめがぁっ!!　ハレンツァの手の者を始末出来ずにその様な事を仕出かしたら、お前たちに国の手が伸びるではないかっ?!!!　ヘンダーソンは・・ヘンダーソンがそう指示をしたのかぁっ?!」

憤り、焦り、恐れ、感情の滲む老人の声が、幽かに震え出す。

頭を下げるモジューロゥだが。

「はい・・。　指示は、前にされたままの内容でやっとります。とにかく、宝物の運び込んだ内情だけ調べ、一度姿を消そうかと思っとりますがぁ」

控えた脇の暗幕の裏に、あの不気味な商人ソルフォナースが控えているのを見た老人であり。

「・・」

静かに頷くソルフォナース。

（やはり、手は早く打つべきじゃったか・・）

老人は、限られた情報しか無い中で、現状から推察して事を指示するしか手が無いと云う事を思い知った。

そして・・、やや落ち着きを窺わせる老人は、口を開くと。

「・・よし。　それは許す。　聞き出せたなら、そのままアハメイルに迎え。　そして、ラヴィンに助力するのじゃ」

何故、怒りを鎮めたのか解らぬモジューロゥは、片手で頭を下げ。

「はい」

「じゃが・・」

此処での老人の言葉が更なる用事を窺わせたのに、モジューロゥは顔を挙げる。

「はい？」

すると、ギラギラとした怒りの含む目をした老人が。

「良いか、去る前に一仕事をしてゆけい」

と。

その異常な光を宿した目を見返すモジューロゥは、背筋に寒気を覚えながら。

「なっ・なんでしょう？」

「ん。　ヘンダーソンを殺せ」

「は？」

「ヘンダーソンは、もう要らぬ。　アヤツに捜査の手が回れば、ワシの元に直ぐ手が届く」

モジューロゥは、ヘンダーソンからクシャナディースの始末を持ち掛けられていただけに。

「あの・・、デカい方のダンナじゃないんですかい？」

老人は、腰を深く席に戻し。

「いや、クシャナディースを殺せば、公爵に手が出たと更に悪く成る。　寧ろ、ヘンダーソンを殺せば、見せしめに成り。　クシャナディースもまた、私の元に尻尾を振りに出てくると云うものよ。恐らく、もうヘンダーソンはお役目を解かれる時に来ている。　一番切りやすい処で、我の元に来ぬ輩共に丁度良い見せしめに成る上。　更に、ワシに捜査の手が及ぶ危険性の有る者を摘み取るのは、今講じれる策の上でも良策。　ヘンダーソンは、長年仕えたが故に知り過ぎているしのぉ」

「でっ・でわ・・ヘンダーソンの旦那を殺せはイイんですね？」

「うむ。　ハデに殺しても良いぞ。　逃げる上で、攪乱に使えるならそれでも構わぬ。　それから、話を聞いた後の御者の処理は、内々に頼む。　探す目標が既に無いのは、一番の労力の無駄。　巷を慌てて走る兵士共には、丁度良い盲ましに成る」

老人がそう言ったのに対し、モジューロゥは思う。

（そうか？　これだけの騒ぎに成ってるのに・・。　だが、逃げる前にやれば・・確かにそれも・・・）

この王都に長居する訳でもないので、モジューロゥはその計画を十分に利用させて貰おうと考えるに至り。

「では、これで。　これから、一気に締め上げて吐かせます」

「おう、そうかそうか。　では、アハメイルに行く様なら、ラヴィンに早く戻る様云うて欲しい」

「へい」

下がって消えるモジューロゥ。　ミグラナリウス老人は、モジューロゥを返した後。

「ソルフォナース殿、どうやら貴殿の云うた通りに成った様じゃ。　こんな・・こんな事なら、早うにどちらかを殺すべきじゃった。　ハレンツァを始末した直後に、の」

老人の前。　段の下に出たソルフォナースは、モジューロゥの消え

た後を見て。

「ですな。　しかし、騒ぎが妙に大きいのが気に掛かります。　御老。　こうなっては、一度は王都を出る事も視野に入れた方が宜しいのでは有りませぬか？。　まだ、御当主の遠縁に当たる血筋が、過去に亡命した国に残るとか。　その者を計画に引き込めば宜しいかと思いますが・・」

すると、ミグラナリウス老人は、渋い顔をして。

「それは、嫌じゃ。　この王都を出ると云う事は、それこそ逃げると云う証・・。　あの事件から２００年・・２００年じゃっ。　もう、我らに光が当っても良い。　良い筈じゃっ！」

駄々っ子の様な事を云う老人。　生まれてから、母親にその事を言い含められて９０年である。　自分でその事を計ろうと、法律に携わる役職を希望して就けど。　それも上司に因って思い叶わず。　従って、微かに続く遠縁のヘンダーソンを魅了し、計画を立ててきた。　此処で計画を頓挫させて、しかも逃げるなど出来ようか。

ソルフォナースは、それでも説得に掛かった。

★

事態が大きく畝ねった日から、明くる日の早朝。　テトロザが後処理に負われている中。

リオンは、山の捜索にまで兵を向け。　自分でも一休みだけして、

捜索を続けようと王宮に戻った時。　暗い大広間のロビーを行くリオンの前に、黒い影が控えて居た。

リオンは、一緒に戻った騎士の数名を共にしながら。

「誰か？」

すると、アッシュを助けた女性の密偵で。

「リオン様、失礼ながらお知らせが」

「リュジュか？」

「はっ」

「どうした？　まさか・・アッシュの身の上に何か在ったかっ？！」

「いえ。　先日お助け致しましたあの御仁が、意識を取り戻して御座います」

「誠かっ？！」

「はい。　リオン様が直々に御会いに成られるか、御伺いに参りました」

リオンは、直ぐに。

「よし、行く」

騎士達を休ませる傍ら、リオンは疲れ知らずで保護した男性の居る

寺院へと向かった。

ハレンツァの手の者は、名前を変え、一般の病人として中央に在る寺院に匿って在る。　軍医施設と併合された大型寺院であり。　気絶した彼を地下の通路から運び込み、一般の病人として個室に入れてある。　傍には、絶えずリオンの手の者でも腕の達つ二人が見張りをしていた。

リオンが寺院に行けば、全身に手当てされた姿を見せる男性が寝ていて。　リオンが声を掛ければ、驚いて動かせない身をモゾモゾと動かし。

「こ・・これ・・は、リオ・ン・・さま・・・」

仲間の男性に突き落とされた時に、腕と肋骨を負傷した彼だったが。　衣服を取って見れば、彼方此方に傷を負っていて。　しかも、あのモジューロゥの手の者の投げる刃物には、神経系を侵す毒も塗って有ったらしく、思った以上に重症だった。　だが、こうして生きてリオンに会えると、感極まって涙を落とす男性である。

リオンは、今までの経過を話した上で、何か情報を掴んでいるのかと訪ねた。

傷だらけの男は、リオンの前だからと平伏しようとしてはリオンに叱られ。。　寝たままの体勢から、辿たどしい口調ながら事と次第を話し出した。

ハレンツァは、子供達の事件を調べさせていたらしい。　その中で、最初に手掛かりが出てきたのは、魔術師に扮した者が子供を脅した現場から少し離れた場所で。　その風体にソックリな何者かが、時

折出没すると云う情報だった。

その情報を追う内に、その変装をする前だろうか解らないが。　その場所に在る廃屋に、時折出入りする冒険者風体の者が居た事を突き止める。　リオンの率いる軍とポリア達が、封鎖区域に蔓延っていたモンスターを掃除した頃だ。

そして今度は、別の何処かにもその怪しい冒険者風体の人物が出入りしている事まで突き止めた所で、ハレンツァが殺されてしまったのである。

司令塔を失った彼等は、何とか息子のエリウィンに面会したかったらしいのだが。　リオンに呼ばれたままに戻らず、連絡が付かない。　仕方なく捜索を続けようとすると。　今度は、自分達を探す悪党の一団が現れたりして、もう捜索処では無くなった。

何より彼等が驚いたのは、自分達の素性の大半が相手に露呈している事。　そして、立ち回り先を押さえられていた事だった。

この数日の間に、もう助けられた彼以外の全員が殺されていた。　行方の判らない一人は、今も冷たい下水路に沈んでいるのだ。

さて。

生きた情報として、その冒険者らしき男が出入り場所を聞けたリオン。　その場所は、住居区と貴族区の交わる境で。　王都郊外の縁際に有る家だと云う。　下がった地下に一階を持ち、二階・三階部分は常にカーテンが窓を締め切って誰が住んでいるのか判らない。　しかも、周囲に聞き込んだ所に因れば、ヘンダーソンの血族が偽名で買った家らしい。

リオンは、その場所を聞き。

（まさか・・、連れ攫われた御者の親子も其処か？）

怪しい荷馬車が走っていったのは情報として聞けた。　その荷馬車が消えた聞けたのが、中央公園とその周辺の文化区域であり。　その場所を中心に、必死に探し回っていた捜査陣であるが。　もし、何か工夫を凝らされていたとしたら、幾ら探しても見つからないだろう。　それなら、王都の中で怪しむべき所は、全て調べて潰していくに限るとリオンは判断。

「解った。　ゆるりと休むが良い。　何れは、エリウィン殿に面会させる」

「まっ、真で・・御座いますか？」

「うむ。　だが今は、其方の身も狙われる現状だ。　今暫くは此処で、一般の病人として身を隠すのがいい」

「は・・はい」

寺院を出たリオンは、王宮に戻って。　朝方に兵と騎士で小隊を４部隊編成し、その場所を目指して手分けし向かった。　朝方だが、まだ暗い闇を利用し、見回りの兵を装う様に静かなる行動を言い聞かせた。

そしてこの時。

ミグラナリウス老人の元から帰るモジューロゥは、ヘンダーソンの

家に向かった。　彼は家の場所を知っていたし、彼が居る事を確かめようと思ったのである。

ヘンダーソンの屋敷に辿り着いたモジューロゥは、足を引き摺るまに一人で面会に行くと云う。　敷地内に侵入の手伝いをしろと手下に言えば、手下の一人が。

「今、殺してしまったら如何です？」

と、云うと。

「バカ、まだあの強情なババァと御者から話を聴けてねぇ。　こっちを殺して騒ぎに成ったら、逃げる時間稼ぎが苦しくなる」

「あ・・、なるほど」

「それに、あの御偉いさんの周りには、剣の腕が達つ用人が二人程居るんだ。　手負いの俺以外で、たった3人じゃ乗り込んでもしくじる可能性が強い」

「んじゃ、何で今に？」

「所在の確認と、雰囲気を探るんだ。　あの老人に面会に行かない以上、なぁ～んか企んでるとも限らねぇだろ？」

「あ、なるほど」

モジューロゥは手下に手伝われ、雪の敷き詰まったヘンダーソンの家の敷地へと忍び込む。　普段なら縄等使わないし、他人の助けなど借りるモジューロゥでは無いが。　今はそうも言って居られない。

モジューロゥは、嘗ては自分の長で在った頭目を殺し、強引に頭目の地位を奪い取った成り上がり。　手下には、信頼して全てを任せられる腹心が無く。　しかも、自分から率先して動かないと、油断から寝首を掻かれるとも限らない不安が、常に彼を付き纏う。裏切りを重ねた身故の、被害妄想だ。

ヘンダーソン家の離れ屋敷まで来たモジューロゥは、手下を木々の影に隠してヘンダーソンを訪ねた。　折しもヘンダーソンは起きていて、面会は容易だった。

屋敷内に招き入れられたモジューロゥは、貴族の家にしては簡素で落ち着いたロビーから続くリビングに来る。

暖炉の脇に置かれた一人掛けのソファーに、偉そうにして足を組み座るヘンダーソンが居て。　しかも、珍しくフードの無いナイトガウンの衣服で座っていた。

「モジューロゥ、・・随分と情けない姿だな。　まさか・・、しくじったのか？」

一応、膝を折ったモジューロゥ。

「へい。　あのジジィの手の者を見つけたんですが、保護する何者かに奪われた次第でして・・スイマセン」

間近の小さな丸い台にワインを置くヘンダーソンは、ワイングラスを手にしながら。

「はぁ～ん。　それは恐らく、リオンのバカタレが動かす密偵だろう。　これは、容易な事態では無いなぁ・・・」

「すいやせん」

再度謝るモジューロゥ。　その様子を見るヘンダーソンは、細めた目で見据えながら。

「その様子だと、昼から騒ぐ兵士などの一件もまた、お前達の仕業か？」

「へい。　宝物を運んだ御者が戻って参りましたので、話を聞く為に誘拐したんでさ。　兵士が常に見張っていたんで、ソイツを強引に潰してからして退けました」

ヘンダーソンは、上から見下ろす目を気味悪くさせ。

「やはり、お前達はラヴィンとは違うな。　こんな大騒ぎに成っては、もう誰も沈静化は出来ん。　で？　どうするつもりだ？」

「へい。　さっき、あの御老体に面会しまして、宝物の情報を聞き出したらアハメイルに向かえと」

此処で、ヘンダーソンは目をグっと細め。

「それで、他には？」

その声と目で、モジューロゥはヘンダーソンが警戒しているとハッキリ解った。

（やべぇ、この野郎・・それが目的だったか）

自分の後ろに一人。　そして、ヘンダーソンの脇に一人。　隙の無い中年の用人が控えて居る。　自分の身体が不自由なだけに、下手な事をすれば殺されかねない。　モジューロゥは、こんなに簡単に自分と面会したヘンダーソンの魂胆を窺い知った。　ヘンダーソンは、自分と語らい問い質しては、老人の真意を探ろうとしたのだ。

「あ・・、いえ。　ラヴィンとジェノサイダーの一団が戻ったら、クシャナディースの旦那をどうするか決めると・・」

その一言を聞くヘンダーソンは、ニタリと笑みを浮かべて。

「そうか、そう仰ったか・・」

急にヘンダーソンが怖く成り、冷や汗を全身に掻き始めるモジューロゥ。　余りにもその笑みが不気味で、自分の命が此処で終わるのかと思った程。

だが、ヘンダーソンは、頻りに頷き。

「そうか、そうか、それは良い事を教えて貰えた」

モジューロゥは、雰囲気を変えようと。

「ヘンダーソン様よ。　御老体が顔が見えない事に不審がってましたゼ？」

ワインを一口含むヘンダーソンは、

「・・、そうか。　だが、今は動く時に無い。　ハレンツァを殺した御陰で、その喪に服す国王の示した静けさが、怪しい者をかえっ

て炙り出す結果を招いている。　年明けまでは、静かにするのが一番だ」

この話に、

（ほぉ～。　んじゃ、今少しは黙って居るって事か。　なら、襲い易い）

と、思うモジューロゥ。

ヘンダーソンは、モジューロゥを見据えながら。

「所で、仲間はどうした？」

「あ・・はぁ。　お屋敷の中に入れるのも無粋ですから、外に待たせて在りますがぁ・・。　何か？」

「いや。　その姿で一人戻るのは、見付かり易く困ると思うたまでよ」

「これは、お世話を・・」

何時に無くモジューロゥが言葉を選び、謙る。

（流石にあの御老体の傍で、長年に亘って謀（はかりごと）をしてきただけあらぁ。　スゲェ～鋭い・・。　こっちの思惑がバレてなきゃいいがぁ・・・）

モジューロゥは、それが心配だった。　帰る事を告げると、ヘンダーソンは態々ワインを薦めて来て。　モジューロゥが一杯だけ飲み

干すと。

「御老のお気持ちを伝えに来てくれて感謝する」

と、言ったので在った。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪加速度的に終焉へ向かう結末の糸…≫

朝方。　極夜の朝が夜を引き伸ばす頃。　闇に紛れ、静かに行進する一団が、貴族区と住居区の境に伸びる道を行く。

「ご苦労さまです」

その一団を率いる者とすれ違う時、敬礼をしたのは巡回の警備兵４人。

「うむ。　ご苦労」

小さい声でそう返すのは、１０名前後の兵士と、一人の上級兵士の副官を従えた騎士の男性で在った。　フルフェイスも可能な、プレートスーツメイルと呼ばれる全身鎧を着る重装備指揮官の騎士。

その騎士が、普通なら兵士を連れて歩き回る時間帯では無い。　だが、昨日に起こった誘拐事件は劇的で、しかも噂が一気に広まった。　その一件の御陰で、巡回の兵士達も“何事か”を尋ねる事もない。

だが。

この騎士の率いる兵士の小隊は、他に3方からも一点を目指して進んでいたのだ。

騎士達が目指すのは、或る家である。

この騎士達の動きを、運命的に見付けれた者が居る。　それは、ヘンダーソンの元に寄り道したモジューロゥ達数名の悪党だ。　昨夜から、モジューロゥの手下３０名弱が隠れ家のあの屋敷に集まっていた。　斥候役や武装部隊も全員を呼び寄せたのは、モジューロゥが今後をどうするか伝える為だ。　御者から宝物の在処を聞き出せたなら、強引にでも身を隠す事を進言する部下も多かったが故の指示である。

しかし、それがリオン達捜査する側に利益を齎した。　王都の彼方此方に散っていた悪党達を一箇所に集めた事に相当し。　一網打尽出来る絶好の機会を与えたのだから。

処がまた、寄り道したモジューロゥが騎士の一団を見掛ける事で、逃げる事を最優先にしろと彼に教える事にも成る。

夜道をコソコソと道を選び、隠れ家に戻る途中のモジューロゥとその手下数人。　曲がる予定の道を、１０人以上の金属の具足を付けた者達が行く足音が行くのに驚いた。

（隠れろっ！！）

杖の代わりである木の棒を持ったまま、邸宅を取り囲む石塀に身を寄せたモジューロゥであり。　彼に代わって、先の通りの交わる場所に忍び足で向かう手下。

こっそり見に行った手下がモジューロゥの元に戻るなり、兵士と騎士の一団らしいと告げた時。　暗い中でモジューロゥは云った。

「にっ・逃げるぞっ！」

仲間をどうするのかと驚く手下達だが、モジューロゥは気付いた。

そう。　捜査の手が広範囲に及ぶなら、先ず見つかるとするなら老人の元から戻る自分達だ。　多くの巡回警備兵と接触を迫られる。

だが、今の見掛けた一団は、巡回警備する兵士達は違い、明らかに何処かに向かっている。　此方に捜査の手が伸びる形で、兵士が向かう場所は一箇所しか考えられない。　そう、自分達の潜む家である。

引き摺る足も忘れる様な慌て様のモジューロゥは、ラヴィンと合流して策を練ろうと云うのだ。

「カシラっ、仲間を全部見捨てるんですかっ？」

「そうですよっ。　暴れて逃げましょうぜっ」

雪の敷き詰まった通り上で交わされる押し殺した声での会話は、白い息が黒く伸びて冷え込みの厳しさを物語る。

だが、モジューロゥは、両目をギラギラと光らせ。

「馬鹿野郎っ」

と、一人の胸ぐらを掴んだ。　ナイフなどの装備がマントの下で動き、小さな音を立てる。

手下の男は、目だけ見える自分をこれ以上無い程に睨むモジューロゥに怯えた。

今にも彼を殺しをしそうな程に怒りを募らせた感情的な目で、手下を睨むモジュ－ロゥは云った。

「お前ぇぇっ、現場にリオンや騎士の大隊が来てたら全滅だぞっ？！　勝って逃げ切れる可能性がっ、包囲された状態でどう在るんだっ？！　あぁっ？！！」

「しっ・ししししかしっ・・」

言う手下の話を途中で封じる様に、モジューロゥは強く踏み込んで揺らすと。

「ウルセェっ！！　俺達が此処で全滅したらっ、アハメイルに誰も知らせないままに手が向くぞっ！！！！！　ラヴィンやあのジェノサイダー達を含め、集まった野郎どもが殲滅させられるっ！！　今回の召集は失敗が許されねぇっ！！！！！　お前っ、集まった悪党を板挟みで全滅させるつもりかぁっ！！！！！！」

押し殺してはいる声だが、力が入って返って掠れる。　手下達は、モジューロゥがもう憶病風に吹かれたのだと思う。

背後に立つ一人が、

「それでも頭目かぁっ！！！」

と、声を荒らげた。

モジューロゥは、背後の手下をに脇目の睨み目を向け。

「とにかくっ、俺一人だけでも生き残るのが先決だぁっ！。　今を逃げなきゃ、どの道召集された悪党全員が口封じに皆殺しに成るっ」

その一言を合図に、遂にモジューロゥの日頃からの横暴や専横に嫌気がさしていた手下共の我慢が、限界に向かって舵を切った。　モジューロゥの言い方が悪かった部分もあろうし。　手下達は、今回の召集の意味を秘密にされていた為に、さほど深い意味まで把握して居なかった所為もあるだろう。

モジューロゥの左手後ろに居た一人の手下が、

「アンタは元々余所者だからそう云えるんだっ！！！　俺達はっ、前の親分の頃から一緒に危ない橋を渡って来た仲間だぞっ？！！　そんな簡単に見捨てれるかぁっ？！！」

と、云えば。　モジューロゥが胸ぐらを掴む者も。

「そうだっ！！」

と、モジューロゥの手を払い退ける。

「テメェ等っ」

モジューロゥが怒りに身を任せて、得物をチラ付かせようと鎌の柄を握ると。　仲間を助けたいからと、手下の者の一人がダガーを抜くと。　他の者共も次々とモジューロゥへと刃を抜いた。

「なぁっ?!　おっお前等っ?!」

奇妙な誤解が生じ、孤立したモジューロゥが驚く。

モジューロゥが窮地に立つ。

その頃…。

リオンの率いた一団が南方から来る。　先に着いた3組の小隊は、モジューロゥ達が潜む家を取り囲んでいた。

(準備は良いか?)

一気に攻め込む前に、リオンが3方の騎士を集めて確認を取る。
了解して散る騎士達。

リオンは、自分の率いた隊の副官として付いて来た中年の騎士に向け。

「私が先に単身で踏み込む。　聞いた処。　家に踏み込める入口は、低い掘り下げられた一階部分に、表裏の二つ。　後は、二階の裏手に造られた浮き橋からの勝手口のみ。　窓はどれも小さく、踏み込むのに合う入口では無い」

と、確認をすれば、副官の騎士が頷いて。

「はい」

「私が二階部分の勝手口から侵入する故。　その騒ぎでの混乱を上手く使って忍び寄れ。　恐らく、私の登場で、誘拐された母子は人質に立てられよう。　二階に悪党どもが集まったなら、一気に下から攻め込むのだ」

騎士の男性は、緊張の面持ちで。

「誘拐された御者の二人は、強行に突入して大事に成りませぬか？」

すると、リオンも眉に力の篭る目で見返し。

「慌てさせる事に終始を得れば、相手方も人質と言う利用価値から処断に至る判断が鈍る筈。　一気に私が捨て身で斬り込む。　此処で悪党達を殲滅する心を持て」

と、念を押した。

騎士の男性は、リオンが覚悟の一念を秘めていると解って。

「はっ。　では、一命を賭して当たります」

「うむ。　誠に切羽詰った任務で済まない」

「いえ。　このような大事、騎士に成ったからには当然に事。　寧ろ、王子と任務を共に出来る事を光栄に思います。　御者の親子は、殺される前に助けましょう」

「よし。　ならば、配置についてくれい」

「は」

クシャナディースとヘンダーソンが訪れていたこの家は、郊外の僻地の様な場所を整地して建てられた家だった。　石垣を積んで造られた一段高く造られた一階部分が、凹んだ地面に埋没し、通りから一階へと坂道の入口が作られている。　距離も差ほどに無く、城塞を担う高い壁に向けた屏を家の背後に持つ。　屏に登る専用の階段も近い為か、家の裏手には固められた高い通りが有るのだ。　そしてその通りから、５歩程の石造の橋が家の二階部分に伸びるのだ。

リオンは、灯りが窓から漏れる二階か三階に、人質の二人が居る可能性が強いと斥候の兵士から聴き。　王都に騒ぎが散らばる前に、急襲して一気に潰そうと決めた。

決意を秘めたリオンの行動は早かった。　一人で裏手の高い通りから回って、雪がチラチラと見える中で家の二階に通じる橋を渡る。

小雪がチラチラとまた風を伴って落ちる中、王都に働きに出る人の姿がチラホラと見え出し。　朝一で開かれる競りや市場の準備なども始まる頃であった。

或る伯爵家の前に伸びる通りの上で、モジューロゥが手下を相手に囲まれ刺される時。　朝方の静寂を破って、リオンが二階の裏口を蹴破って中に入った。

リオンの方は、短期決戦の様相に入り、鮮やかな手際とも思える運びだった。

「悪党共っ、我はリオン。　人質の親子を解放し、神妙にいたせっ！！」

その一声を放って、慌ててダガーや長剣を手に迫ってくる悪党達を斬り伏せる。

急な襲撃を受け、モジューロゥと言う指揮官を欠いた悪党達は、リオンの登場に混乱の極みに達した。　予想される通り、人質の親子を盾にしようとしたのだが。　瀕死に近い程まで御者を甚振り、高齢の母親もまた意識不明の様子。　人質として盾にするにも、動かすに楽では無く。　リオンが3階に駆け上がるまで脅せなかった悪党達。　リオンが3階に上がって親子を見つける頃には、騎士と兵士の部隊が出口を塞いで家に雪崩込んだ後であり。　３０余名の悪党達の７割が討ち取られた後である。

家で湧き上がった怒号の嵐に、周辺の家の者も飛び起きた。

だが、その人集りが出来上がる頃には、御者の親子は救出された。
　状況の判断が付かず、狼狽えるままに人質を盾にした悪党達は、親子を殺して良いのか判断が出来なかったのだ。　その状態をリオンに見透かされ、斬り込まれたのである。　リオンの捨て身とも云える豪胆な突撃で、親子の周りから引き離された悪党達。　騎士と兵士の圧倒的な圧力に屈し、殲滅されてしまったのだった。

商人達や、その手代で目利き達が競りに望む頃。　逃げ惑い、ヘンダーソンの屋敷へと戻ろうとしたモジューロゥが路上で殺され。
人質と成った親子が救出された。

たった数名だが、捕らえた悪党達の詮議。　頭目が見当たらないの

で、、街中に悪党達の残党探しを行う捜索隊が急遽組まれた。　一般の家庭が目を覚ます頃合いに成れば、モジューロゥの冷たくなった遺体も見付かり。　見回りの役人に収容された。　東の空が明るくなる昼前に近付く頃まで、雪に染まった王都が異様な慌ただしさに包まれる。

そんな状況は、直ぐにミグラナリウス老人やヘンダーソンの元にも届く処と成った。

ミグラナリウス老人の元を、朝方に離れたソルフォナース。　話疲れた老人は、孤立化して一人だった。　自室で睡眠中に老人。　その情報を受け取ったのは、ジャニスから何やら脅しを受けていた執事代わりのマクファーソンである。　老人と密会していた悪党共の頭目らしき人物が殺され、その悪党達も壊滅。　もはや捜査の手が老人に伸びると思ったマクファーソンは、決行を余儀なくされた。

あの夜、ユーシスから渡された毒物の包みと共に渡された紙には、こう書かれて在った。

ー我が一族の存続の為に、祖父を殺せ。　君の家族の面倒は、私が見る。　殺したあかつきには、連絡をくれー

この文字を見たマクファーソンは、連日悩んだ。　子供を奪われ、嘆き窶れる妻。　意味が解らず、狼狽える子供。

老人に仕えながら、しかし老人を殺す事ばかり考える彼に。　老人も不気味な気配を覚え、必要な時以外はメイドなどを傍に呼ぶ。

だが。　もう猶予は無いと思うマクファーソンは、老人の部屋に踏み込んだ。　元は殺し屋で在ったマクファーソン。　老人の枕元に

向かうと、白いカバーに包まれた老人の遣う枕を力づくで引き抜き、寝ぼけたままの老人の顔へと押し付けた。　そして、ナイフを心臓に突き立てたのである。

声も出さないままに、ミグラナリウス老人は息絶えた。

「・・・済みません」

獣の様な目をギラギラさせたマクファーソンは、入口を閉じてジャニスの元に向かったのだった。

★

さて。　王都が立て続けに起こる事件で慌ただしく動く中で。　トリッシュは、ミグラナリウス老人に多額の寄付をしていた大店の内情を調べる事に奔走していた。

エリウィンは、リオンの計らいで悪党達を取り調べ。　ハレンツァの死に対する一件を調べる任務を正式に受けて動く。

これだけでも、ある意味大事件。

だが。　まだ蠢く悪党達も残存するなかで、動き出した運命の歯車は止まりを知らない。

モジューロゥを殺した手下達４人が、王都郊外の外壁間際にて。

見回りの兵士を率いる騎士に人相検めを受けて、武器を手に争うのが昼下がり。　直ぐに騒ぎに成り、駆け付けた他の警備隊に囲まれ斬られる事を選んだ悪党達。

更には、夕方を目前にした頃。　王宮の衛兵に、火急の取次ぎを求める中年男性が来た。

「あのっ、至急にリオン王子に謁見を願いたいっ！！　私は、ヘンダーソン様が用人のシダルマンで御座いますっ！！！」

大声を上げて、尋常では無い慌て方をする用人のシダルマン。　衛兵が要件を聞くと、ヘンダーソンの一家が殺されたと云うのだ。メイド3人、執事や下男が5名。　ヘンダーソンの妻と、子息・子女が2人だと云う。

殺人事件でも貴族の一家が皆殺しなど、然々に有り得ない事だ。慌てた衛兵は至急の取次ぎを立てて、リオンにシダルマンを面会させたのである。

王宮3階に有る一室でヘンダーソン一家の惨殺を聞いたリオンの顔は、もう晴れ間に大雨でも来た様なと云った感じに驚いた様子で。

「まっ・・真かぁっ？！！」

と、大声を上げた程。

一緒にこれからの事を話し合っていた腹心のアンサムスや、高位騎士の中高年男性達も容易では無い事が起こったと思う。

直ぐ様にシダルマンと面会をすると動いたリオンは、王宮の玄関と

成るロビーの先にある謁見の員室へと通す様に命令した。

王宮3階の会議室から足早に、アンサムスと高位騎士一人を伴って廊下に出たリオン。　流石に顔には疲労も少し窺えるが、それ処では無いと云った気構えの見える表情である。　下る階段に向かったリオンは、階段前の廊下を向こうからやって来るルシャルルムが目に入り、

「おぉっ、ルシャルルム殿っ！」

と、声を出す。

ルシャルルムは、丁度良いタイミングでリオンに会えたと。

「王子、丁度良い処に。　実は、少々お話が有りましてな」

リオンは、

「後に回せるか？　実は、一大事がまた起こった。　不測の事態だ」

リオンの前に来るルシャルルムは、普段と変わらぬ冷たき表情のままに。

「如何致しましたかな？」

「それが、ヘンダーソンの御一家が惨殺されたのだ」

その話を聞いたルシャルルムは、片眉だけを軽く上げ。

「ほう・・。　それは、確かに火急の大事ですな。　して、通報者

は周辺の住民で？」

リオンは、首を振り。

「いや、用人のシダルマンと云う者だ」

その説明を受けたルシャルルムは、斜め下に視線を移し。

「ふむぅ。　王子、その謁見に私も同席致しましょう」

と、云ったのである。

仕事にしか興味を示さない男でも有るルシャルルムが、こうゆう事に首を突っ込むのも珍しい事なのだが。　リオンからするなら、切れ者のルシャルルムがこう云うのは有難く。

「おお、それは助かる。　貴殿が一緒に居るのは、次を案じ察するに容易い」

と、連れ立った。

さて。

王と王妃が座る座が据えられた奥間の謁見の一室。　赤い絨毯が敷かれ、王・王妃の座の後ろには、三面鏡の様な窓が有り。　中庭を見渡せる様に成っていた。　此処は、急な事情で密かに謁見をする一室で、さほどに広い部屋でも無かった。

リオンとアンサムスとルシャルルムがシダルマンと相対す形で、高位騎士はシダルマンの右手に少し離れた場所にて立つ。

黒い皮のコートを着て、肩などを雪解けで濡らす長身の用人シダルマンは、膝を折ってリオンを迎え。

「火急の大事にて、無理な面会を申し出ました事を御許し下さい」

リオンは、事が事なだけに。

「その様な前置きは良いっ。　早く次第を話せ」

と、云った。

ヘンダーソンが朝から消えた。　そして、昼前に数名の黒尽くめの曲者が押し入って来て、家族は殺されたらしい。

少し長い語りであったが、真剣に聴くリオンとアンサムス。

もう外が暗く成り、シャンデリアの灯りが煌々と灯る部屋。　シダルマンが全てを話終えて、犠牲が多大に出たとリオンが口を噤む。

しかし。

シダルマンの前に進み出たのは、ルシャルルム。　リオンやアンサムスも見ている前で、彼は美しい刀身のサーベルを引き抜くと。

「おい、嘘はそれぐらいにするんだな」

と、シダルマンに剣先を向けた。

「なぁっ」

「お待ちっ！」

驚くリオンとアンサムスが動き掛けた処だったが、ルシャルルムはシダルマンを見据え。

「御主、その賊が襲って来た時は、何処に居た？」

と、口先鋭く問う。

睨む様な眼をルシャルルムに向けるシダルマンは、

「納屋に・・」

「御主、納屋に居たなら、騒ぎを聞付け駆け付けた筈であろう？」

「御意に」

「ヘンダーソン殿には、御主の他にももう一人腕の達つ用人が居ったな？」

「は・・、バストラーダ殿です」

「二人して闘ったのか？」

ルシャルルムがこう聞くと、シダルマンの口が開かない。

リオンとアンサムス、そして、驚きの表情のままの高位騎士は、シダルマンの返答を食い入る様に待つ。

「…その通りで御座います」

「ならば、何処で闘った？　屋内か？　外か？」

また、シダルマンは少し黙ってから。

「…双方です。　屋内から、斬り結んで外へ」

ルシャルルムは、シダルマンの衣服を見て。

「お前、ヘンダーソンから云われなかったのか？　ちゃんと工作をしろと…」

“工作”と云う言葉出た処で、リオンが。

「ルシャルルム殿、惨殺は嘘か？」

シダルマンから視線を外さぬルシャルルムは、

「惨殺されていたのなら、下手人は此奴でしょうな」

と、云う。

リオンやアンサムスの驚きの顔は当然だが、ピクピクと眉を動かしたシダルマンの顔がガラッと変わった。

「何の言い掛かりをっ？！！！！」

と、シダルマンが云うのに対し、冷たき微笑を浮かべるルシャルルムは言う。

「良いか。　惨殺の舞台で斬り結んだなら、御主の腕なら衣服に刃の打ち合った時に飛ぶ異物が付着する。　具足には、雪を踏んだ跡少なく、汚れも底周りのみ。　何より、御主の剣から微かな血の臭いがしておるのに、その首に巻かれたネクタイに血の飛沫した跡が微塵も見えぬ。　そのスカーフネクタイは、此処に来る前に結んだ物で在ろう？　雪が舞う中に急ぎで飛び出した形跡が、御主から微塵も見えぬわ」

シダルマンの顔が、ルシャルルムの話の進みに合わせて苦しく成るのが解る。

「御免」

高位騎士の４０代男性が、腰から外され脇に置かれたシダルマンの剣に手を伸ばす。

「ぐっ」

剣を取られまいと手を動かそうとしたシダルマンだが。　半歩先にルシャルルムの剣先が喉笛に密着して、剣を取る事が出来なかった。

高位騎士が剣を鞘毎に取れば、ルシャルルムが。

「抜いて見れば、刀身が血煙で曇っておりましょう」

と。　剣を黒い鞘から抜けば、その長剣は血を拭った後に脂肪で曇る現象が起こっていた。　しかも、手元の部分には、血が凝固してながらヌラヌラと堆積する残りが見える。

リオンは、それを見て。

「この痕跡は・・、何人もの血が混ざって出来る様子と類似しているな。　しかも、悪党と斬り合っただけで逃がしているにしては、剣に着く血の跡が酷い…。　明らかに何人もの人を斬った剣だ」

ルシャルルムは、シダルマンの目を見据え。

「ヘンダーソンは何処だ？　彼が逃げる上で、行方不明の偽事件でも捏ち上げる為に、この様な凶行を行なったのであろう？」

こう問い詰められたシダルマンは、瞬きも出来ない程に緊張した面持ちで。

「何を・・そのようなぁ…」

声も震え出し、最後まで言い切れない。

全てを見切ったルシャルルムが、冷たき微笑を浮かべて。

「フン。　昼を前に、我が屋敷にヘンダーソン殿が遣わした使用人二人が、突然に暇を申し出て消えた。　後を尾行すれば、何処に行ったかな。　そろそろ、行き先を突き止めた我が家の使用人が、妹の居る屋敷に戻る頃合いだろうよ」

と、云うと。　ギョっと目を見開いたシダルマンは、硬直したままに成った…。

ルシャルルムは、リオンに脇目を向け。

「丁度この一件を、兵士を指揮する王子に任せようと思いましてな。先程、捜して居りました。　何とも都合良くこの者が来た上に、一家惨殺とは…。　どうか、冷静に捜査を続けて下さいませ」

リオンは、シダルマンを捕らえて置き。　アンサムスと兵士や警察役人を連れて、夜にヘンダーソンの屋敷へと向かった。

ヘンダーソンの屋敷に向かってみれば、真っ暗な屋敷が廃墟の様に在った。　松明では火事も在ると、カンテラなどを用意して踏み込めば、其処には死体の散らばる地獄絵図が在った。

自分の子供すらも犠牲に敷いたヘンダーソンに対し、リオンは堪えきれぬ怒りに身を震わせる。

ヘンダーソンと云う男は、元から家庭を持つと云う意味では不能の男だった。　妻の産む我が子を、物としてしか見てない様子で。夫婦生活も冷めて、妻が別の男性を相手にしても気にしない。　もう、彼の目には、権力しか見えていなかった。

だが。　それにしてもこれは酷い。　唯一の生き延びたメイドの娘は、井戸に飛び込んで凍死寸前で助け出された。　うわ言を云う彼女は、

「ようにん・・さまが・・よ・よ・・にんさまが・・・」

と。

リオンは、直ぐ様ポリアの元に迎えば、ポリア達がヘンダーソンを捕える為に馬車で向かっていて。　リオンと入れ違いで、ポリアの用事を受けた使用人が王宮の兄の元に事情を伝えに出ていた。

王都から離れ、南に少し。　川に渡された石の立派な橋。　その川沿いから雪に染まる森の中に入って、少し行った場所に有る洞穴にヘンダーソンは居た。　用人の一人バストラーダ。　そして、ポリアの家に遣わしていた使用人のノッポと太った男の二人を従えて。

外の茂みには、馬が４頭ばかり繋がれている。

洞穴の中で、焚き火を熾して暖を取るヘンダーソンは、用人のバストラーダへ。

「のう。　シダルマンは、どの程度で戻ろうか」

冷徹な無表情を浮かべる無精髭の厳ついバストラーダ。　凶行をした動揺など微塵も無い様子で。

「恐らく、夜に成ってからでしょうな。　今夜は、夜間に旅立ちと成りましょうから、今は御休みに成られませ」

「うむ」

ヘンダーソンは、一旦は国外に逃げようと試みていた。　老人を裏切る事にしても、この国に居残りたいとは思わなかった。　ヘンダーソンも、それなりのコネを国外に持つ。　老人の各資金の在処も知っていた。　逃げても、差ほどに困る事など無い。　寧ろ、無理やり体裁を繕う意味で養っていた家庭と云うモノを、どんな形であれ処分出来た事に気楽さを覚えている。　これが、ヘンダーソンの本質だった。

ヘンダーソンは、自分の画策が上手く行ったと確信していた。　朝

方にモジューロゥが直々に会いに来た事で、彼は予知めいた感覚で危険を察知した。　この時期にモジューロゥが会いに来るなど、どう有ってもおかしい。　会って見れば、妙に仰々しく普段のモジューロゥでは無かった。

ヘンダーソンは、モジューロゥの態度に何か隠した陰謀の臭いを嗅いで、話を聴く事に。　その中で、クシャナディースを殺すと出た処で、明らかに変だと悟った。　今、クシャナディースを殺すのは騒ぎに成り、非常に面倒だ。

モジューロゥの率いる悪党達はやや強引で、動かすのに目立つ。此処に来てクシャナディースを殺しても、波風を立てるだけで利益として得るモノは少ない。　寧ろ、王から遠ざけられ、身の振り先も微妙な自分が狙われるのが定石。　自分がどれだけ老人の裏側を知っているか考えれば、クシャナディースなど大した事では無い。

ヘンダーソンは、モジューロゥが自分の所在を確かめに来たと看破した。　逃げる事を決めるに至る決定打を得たのだ。　しかも、昼前には、モジューロゥの率いる悪党達が殲滅させられ。　モジューロゥらしき者の遺体も回収されたと。

この一連の情報を、一部は未確認ながらも受けたヘンダーソンは、凶行を決意する。　家族と使用人を捧げ物にして、逃げる手段を講じたのだ。　自分の父親も殺せと命じた彼は、もうこの国に未練は無かった。

だが。

ヘンダーソンの逃げ場は、もう無かった。

夜に入って少し。　突然に馬の走る馬蹄の音が近くに止まったと聞け。　様子を見ようと外にでた使用人の二人。　その二人をマルヴェリータの照らす魔法の灯りで見つけたゲイラーが、

「居たぞぉーーーっ！！！」

と、一声を挙げる。

ゲイラーとヘルダーがその二人を取り押さえようと戦う中。　マルヴェリータから光の小石を受け取ったポリアは、純白のマントにズボン姿で、川沿いの奥に一人向かった。

システィアナとイルガは、念の為に残して来ている。

洞穴から出るヘンダーソンとバストラーダだが。　入口に立たれたポリアの御陰で、ヘンダーソンは逃げれない。

「クソっ！！！　じゃじゃ馬が出しゃばりおってぇぇぇっ！！！！！」

ポリアを見て喚くヘンダーソンだが。　メイドを殺したヘンダーソンを見るポリアの目のキツさも、尋常では無かった。　ポリアは、過去の事も有るから問答無用で斬り掛かる。　バストラーダは、ポリアをヘンダーソンと挟み撃ちにしようと、斬り合いながら体を入れ替えた。

が。

ポリアは、洞穴の入口にいる居るヘンダーソンに飛び掛る。　剣術に大した腕も無いヘンダーソンは、腹部に柄の突き込みを受けて洞

穴内に飛ばされた。

「ヘンダーソン様っ！！！」

驚くのは、バストラーダ。　転がったヘンダーソンは、顔を焚き火に入れてもう半狂乱に陥る。

「ひぎゃあああぁぁーーーっ！！！！！！　熱いぃ！！！」

それを見届けたポリアは、ヘンダーソンが無力化した事でバストラーダを迎え撃つ。　モンスターと戦いを重ね、死地を潜り抜けてきたポリアの剣の前に、遣えるだけの剣術では技量に劣る。　バストラーダは剣を叩き折られ、ポリアに負けた。

「これまでかぁっ！！！」

雪の降る森の中で、舌を噛んだバストラーダ。　悪人ながら、ある意味で誇りを捨てなかった彼であった。

だが。　火傷に苦しむヘンダーソンは、ポリアに命乞いをした。　プライドも何もない、何とも惨めで憎たらしい姿である。　其処にリオンの率いる捕縛隊が到着して、ポリアは一家を皆殺しにした事を知る。　彼女はもう我慢が出来ずに、ヘンダーソンを殴り付けた。

「キサマぁぁーーーっ！！！！　己の家族を殺して命乞いかぁぁっ！！！！！！！！！」

雪の街道にて、ヘンダーソンを力の限りに殴るポリア。

あまりの勢いに、彼を殺してしまうのではないかと止めに入ったリ

オンや仲間達で。

「ポリアンヌっ！！！　ヘンダーソンは王家が裁くっ！！！！！
事態が大き過ぎるのだっ、抑えてくれいっ！！！」

本当なら、自分が斬り捨てたいリオン。　喚いて怒り狂うポリアの心が、痛いほどに解った。　だが、事は国家を揺るがす事態に成る。
　ポリアの一任で始末は付けられなかった。

例えヘンダーソンの家族でも、こうした事態に成れば怒れるポリア。代わって、泣き叫び命乞いを続けるヘンダーソンに、兵士でも自決ぐらいしてみせろと思った。

だが。　この一年でフラストマド大王国を最も揺るがした大事件は、まだ終わらない。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

そして…。

ヘンダーソン達が王都に連行された。

王都では、会話を許して自白させようとするエリウィン達が、悪党達に自決されて事を聞き出せずに困っていた処だった。

そして。　ヘンダーソンを始めとして次々と捕まった者達の取り調べが、警察役人の建物の彼方此方で始まる。

そんな中だ。

リオンと共に戻って来たポリアは、泣いたり喚いたりしながら連れて行かれるヘンダーソン達を、薄暗い建物内の廊下で見つめていながら。

「似てる…」

と、呟く。

脇に立つリオンが、

「ん？　ポリア、何て言った？」

と、聞き返すと。

ポリアは、仲間の見ている前で、リオンに振り返り。

「リオン。　この犠牲の多い状況って、一昨年の暮れからシュテルハインダーの街で起こった事件と似てる」

ポリアの真剣な眼差しを、その鬼気迫る様な顔を見たリオンは、直ぐに言葉が出ない。

寧ろ、二人から2・3歩離れた場所に立つマルヴェリータが。

「そうね。　宝物を狙った事といい、被害が大きいといい、悪党達が集まってる事も似てる。　何か…権力の絡んでいそうな状況までも似てるわ」

ゲイラーは、その時はKが最終的に全てを片付けた事を思い返し。

「あの時・・、ケイは言ったよな？　あの事件の先には、何処か離れた場所から続く糸が在るって…。　事件を引き起こす大元の元凶は、別の遠く離れた場所に在って。　金や権力なんかでその糸を動かしてるって…」

リオンは、ポリアを見て。

「まさか…、ヘンダーソンがその元凶とでも？」

リオンを見返すポリアは、顔を微動だにせず。

「かも。　リオン…徹底的に調べて」

ポリアやシュテルハインダーの捜査機関を通じ、北の古都で起こった事件の全容を聞いていたリオン。　確かに、ポリア達の云う事が引っ掛かった。

「ポリア、その点については、全て任せてくれ」

「うん、リオンに任せる。　ハレンツァ殿の敵も在るけど、これはもうその事だけでどうこう云う問題じゃない…。　中途半端にしないでね」

「恩に着るポリア。　それから、まだエリウィン殿の一家が安全とは云えぬ。　ポリア、済まないが…」

リオンの気持ちを察するポリアは、手を出して喋りを遮り。

「解ってる。　もう夜も遅くなってるし、私達も屋敷に戻るわ。昨日から、グランディス・レイヴンのサーウェルス達も泊まってるから、留守を長くするつもりも無いわ」

リオンは、心強いチームが此処に居たと思い出し。

「そうか。　サーウェルス達に、俺から宜しくと伝えてくれ」

「うん」

ポリア達一行は、冬の王都らしい雪の中を、馬車に乗り込んで帰って行く。

リオンは、この一連の事件が何処まで波及し、どういった事件が炙り出されるか。　その事に徹底した調査をしようとする決意を胸に、兄トリッシュを始めとした者達が不眠不休で働く王宮へと戻った。

この一連の裁きや事実の解明は、Kとポリアが共に解決した古都の大事件に繋がる。　故に、全ての決着は、その事件の解決を描いた上で、最後に書き著したいと思う。

今回の主役へと、その話の場面を移行しよう。

≪追い詰められたセイルが用意するのは…≫

世界で最も領土の大きいフラストマド大王国。　その国内でも、二つの大都市で巻き起こる事件。

アハメイルでは、被害を最小限に食い止められた事で、朝には騒ぎを収拾出来た。　テトロザが先ずはと、セイル達の隠れ住む古城に駆け付けたのは、襲撃を受けてから少し経った昼前。　海から吹く風が、湿った空気を運び。　大陸に蟠る寒気の影響で、アハメイルに大雪を降らせる頃だった。

その旧き昔には、マーリの一族が住んでいた古城の中央。　塔の形をした建物内にて、知らせを受けたセイル達。　博物館が襲撃を受けたりして犠牲が多く出た事に、ユリアは泣いて蹲る。

アンソニーとクラークは、椅子に座ってテトロザと向き合うセイルの後方に立って聞いていた。

「…と、こうゆう現状で御座います」

セイルは、テトロザから説明を受け。　普段は優しい笑みを湛える美しい表情が、今は感情を亡くしたかの様な面持ちで在る。　俯くままに、

「そうですか…。　やっぱり、出る処に出るしか無いみたいですね」

と、云うので。　テトロザは、セイルに返す様に。

「と…、申しますと？」

セイルは、悪党達が残した置き手紙を手にしていて。

「下手に時間稼ぎをすれば、相手も何をし出すか解りません。　ですから、決着を着けるんです」

そう言ったセイルを見るテトロザは、よもやまさかと思い。

「セイル様、まさかあの悪党達と戦うつもりで御座いますかっ？」

セイルは、残された手紙と事態を踏まえ。

「しか、ないです」

この一言を聞くテトロザは、あまりの事に口を噤んだ。

悪党達が残した手紙には、宝物を引き渡さないと破壊行為を行うと書いて有った。　しかも、残虐行為に於いては、世界でも指折りの定評が有る“ジェノサイダー”の名前で。　このチームは、過去に幾度と破壊行為で大火災を起こしたり、惨殺行為に及んだりと悪名高い。　言った以上、必ず行為に及ぶ確信が持てる相手だった。

しかも、相手方は人質を取った。　その事実を確認すべく、セイル達が泊まっていた宿に行けば、昼間から見えない者が居ると云う。

その者とは、シンシアの下に付いて、使用人やメイド達を仕切り回す使用人の長に就く女性だった。

実は、この使用人達の長に居座る女性とは、男爵の娘に成り。　年齢としては、シンシアなどより5つは上に成る。　非常に上下に厳しい女性ながら、顔を分けて遣うのが上手で。　シンシアに・・と云うより、エメラルダの一族に取り入って居る。　痩せる前のシンシア同様にふくよかな体型の彼女は、アンソニーが消えてから塞ぎ込みがちで表に出ないシンシアの代わりを勤め。　偉そうにいい気に成っていた訳だ。

だが。

その女性がシンシアの代理として、港に貴族を迎えに行く途中で、突然に行方不明に成った。　それが、襲撃の起こった日の昼間の事である。

テトロザが密かに確かめれば、急に姿が消えた女性の事で、エメラルダの周囲は騒ぎに成っていた。　その消えた女性と同行する形で、彼女を港まで乗せて行った馬車と。　その馬車を操る御者や、女性に付き従った男手までが消えていたからだ。

置き手紙には、宝物を運んだセイル達と親しい女性を誘拐したとの事なので。　この誘拐は、人を間違えての誘拐に成る。　本当の事を知らないままのシンシアは、優れない体を押して働き。　消えた彼女の捜索に、この忙しい中で働き手を割いて向けているとか。

テトロザから全てを聞いたセイルの決断は、早かった。　ジェノサイダーと直接戦う腹を決め、テトロザにこれから動いて貰いたい行動の旨を伝え。　テトロザとセイルの作戦会議が始まった。

テトロザとしても、迂闊に表立っては動けない。　変に兵士を動かした大掛かりな捜査で、街を虱潰しに調べて回る事をしうるなら。　人質の命は亡き者となり、この年末の賑わいを見せる街で暴れ回り、破壊をすると書いてある。　手紙の内容から、もう事態は切羽詰ったものと成ったと判断。したテトロザは、セイルと綿密な打ち合わせをした上で、一人で出ていった。

兵士数名が見る中。　塔型の建物の1階に居るセイル達は、リーダーである若者の周りに集まって居る。

セイルの左脇後方に佇むアンソニーが、自身の手を握り見て。

「どんな相手でも倒す。　王国と市民、そしてシンシアに対する驚異は、どんな事が有っても排除したい。　それに、私の持つ物に纏わる悪意など、此処で潰さなければ先の旅は出来ぬ」

と、云えば。

セイルの右脇後方に立つクラークも、自身の槍を見て。

「あの悪辣非道なジェノサイダーと関わって、このままのさばらすなど、このワシのプライドが許しませぬ。　戦うと云うなら、全てを一念に賭けましょう」

と、覚悟を見せた。

セイルの前には、薄暗い中でユリアが立っている。

「セイル・・負けたくない。　これ以上の犠牲は、要らないよ」

強気の彼女が目を赤く腫らせて、云う声を震わせている。　犠牲が出た上に、シンシアの身の回り、マーリの身の回りに危険が襲った事に対しての感情が、この言葉や顔に集約されている。

セイルは、ユリアの手を貰って。

「ユリアちゃん。　・・一回で決めるから、頑張ってね。　人を相手に戦うけど、手加減は無理だよ」

「うん。　大丈夫…、悪いヤツなんかに・・やられたくないから」

今のユリアの肩に、珍しく精霊が居ない。　ユリアが出現を嫌がったのかも知れない。

セイルは、もう行動の順序を決めていた。

ユリアから手を離すと、

「アンソニー様。　此処は、ユリアちゃんとクラークさんに任せて。　明日には、マーリさんが仲間を連れて来るでしょうから。　作戦を行う上でも、我々は詰めに…」

と、立ち上がる。

アンソニーは、目に魔力を薄っすらと浮かべ。

「失敗は許されぬ。　だが、君の様な策士が仲間とは心強い。　この計画、必ず成功に導こう」

殆どがモンスターに堕ちて、心だけが人で在るアンソニー。　その妖しくも畏怖すら呼ぶ姿には、兵士達が怯えた程で在った…。

★

雪が強くなり。　例年以上にアハメイルの街を白くする。

襲撃を受けたマーリは、執事のヘレーニム以下、戦えない使用人やメイドを軍部に移動させた。　その上で、古くから仕える剣術に秀

でた用人3人を指揮に据え。　動ける者だけで、警備隊を組織した。
夕方には、冒険者のチーム4チームも警備隊に加わったのだが。
その中には、新しく金で雇った冒険者チームが2チーム。　その一組は何と、あの高飛車なアジェンテと云う女性冒険者の率いるサルヴァートゥーレの一団だった。

少し時を戻した昼過ぎ。　斡旋所にチームの要請をしに向かった用人と共に、マーリの元に彼女等が来た事にマーリが驚いた。　金を積んだ事より、この大騒動に興味を惹かれた彼等が、我先に警備を引き受けてくれたとか。

博物館の応接室にて、ソファーに座っていたマーリがアジェンテを見て。

「アジェンテ？　どうしたのぉっ？！」

と、驚く声を出す。　何故なら、同じ学者で強気な性格も似るアジェンテとマーリは、距離を置いていた。

その理由は、まだお互いが２０歳前後の頃に。　遺跡調査の名目でマーリの雇ったチームに、同行したいが為にとリーダーへ色香を使って加盟させたアジェンテが居て。　その後の旅先で、マーリとアジェンテは幾度も大喧嘩した経緯が在る。　とにかく発見の手柄や、収入品の権利を、あの手この手で手に入れようとしたアジェンテ。
元々の契約は、全て情報を集めて捜索費用を負担するマーリに、発見しうる物品の所有権は全て預ける筈だったのだ。　仕事の契約内容を聞きもしなかったアジェンテは、駆け出しで功を焦っていた。

この仕事の中で、アジェンテの我儘から強いモンスターを目覚めさせ。　戦って勝ったはいいが、大怪我をしたマーリ他冒険者達。

この決着は、アジェンテの除名は勿論だが。　斡旋所から、冒険者のリーダーに厳しい罰が与えられた。

アジェンテは、この一件以後も色香を武器にしたが。　自分がリーダーをしないと気が済まなく成り。　マーリもまた、信頼の出来る仲間を持つ事に気を傾ける様に成る。

そんなこんな事が在り。　それ以来、どうも顔を合わせても会話に至らない間柄の二人だった。

さて。

タイトで短い皮製のスカートを穿き。　ミンクか何かの動物の毛が、襟首周りから腹辺りまで着いているロングコートに身を包む学者アジェンテ。　派手な出で立ちで仲間を引き連れる彼女は、マーリを見返し。

「随分と物騒な事件に巻き込まれてるじゃないかい。　事件の内容が知りたくてね、こうして参上したまでよ」

喧嘩した頃に比べて、随分と大人に成ったマーリだ。　直ぐに顔を冷静に戻し。

「アジェンテ…、下手したら死ぬわよ？」

と。

コートの裾から生足を魅せるアジェンテは、腕組みしてソファーに座るマーリを見下ろし。

「内輪で物騒を抱え込んだのかい？　アンタがそんな覚悟を顔に出すなんて…、よっぽどだろう？」

マーリは、隠す必要の無い部分だと。

「事件の裏には、世界的に大きな犯罪組織が関わってるわ。　事件の中身は、国を揺るがしかねない事。　決着が着く２・３日だけ、手を貸して貰える？」

マーリが神妙にこう言った事で、アジェンテも真顔に。

「話だと、この施設を警備するんだろ？」

「そうよ。　不本意だけど、私、明日は仲間と此処を留守にするわ。だからアジェンテ達は、いざって時は主力に成るわよ」

襲撃を受けた主が、博物館を留守にするとは聞捨て成らないアジェンテ。

「此処を留守って？　何処に行くんだい？」

「貴族としての体裁を繕う所よ。　大きな事件まで起きたから、出ない訳には行かないの。　一応、これでも当主だから」

マーリの眼と、アジェンテの眼が噛み合った。

「…。　もし、アタシ達が仕事を断ったら？」

と、アジェンテが揺さぶれば…。

「そうね。　もう一度斡旋所に遣いを出すわ。　この対応や話の内容に、嘘偽りは無いから」

と、マーリはサラリと言ってよこす。

アジェンテは、マーリを瞳に入れて動かさず見守った。

マーリは、冷静な態度に終始し。　アジェンテに何を臭わす態度も見せない。

アジェンテは、普段に会えば自分を遠ざけるマーリの様子が、今は見えないと思い。　これは、嘘じゃないと判断して。

「・・ん。　引き受けよう。　3日と云えば、丁度年末最後の日。仕事が終わった後は、貴族の持て成しでもして貰おうか？」

その偉そうな要求を聞いたマーリは、笑みで頷き。

「いいわよ。　事無きで終えたら、仕事に関わった冒険者の全員を泊めて、此処でパーティー開いてあげる」

アジェンテは、マーリの眼を見たままに。

「なら、お互いに無事で終えたいものだな」

と、言えば。

「そうね。　何度も襲撃なんて受けたくないわ」

と、マーリが苦笑いを返す。

マーリの仲間で在る女性の僧侶が、アジェンテ達に博物館の裏に広がるトイレや寝る場所を案内する頃。　マーリは、テトロザからの手紙を受け取っていた。　応接室にて、手紙の内容を見たマーリは、薄く眼を閉じ。　物思いに堕ちた。

……。

事が、一般人を大きく巻き込んで大事に成った。　犯人を捜し出したい処の軍部や警察局部なれど、それをすれば今度は無差別で死人が出る事に成るだろう。

恐らく、軍部はもう見張られている。

セイル達、そしてテトロザが席を軍部も悩む。　犠牲を払うか、悪党に屈服するか、この二者択一を迫られている。　マーリが眼を通した手紙に書き込まれた内容は、唯一その二者択一の選択肢に、第三の選択肢を捩じ込む方法だと思った。

（仕方無いわね）

ここまで来た以上、それなりの犠牲や危険と云う代償は何処かで払う必要が在る。　それならば、最小限で発端と成った者が払うのが筋と言えよう。

マーリは、殆ど寝ていない中、気持ちを引き締めて仲間の冒険者を呼びに向かった。

≪選んだ選択肢では無く。　強引に作った選択肢≫

襲撃の噂が広がる街中に、深々と雪が降る。

物騒な事件が有った文化区域から、馬車で行くこと少し。　離れた商業区での酒場では、その襲撃話が持ち切りで。　少しでも詳しい噂を持つ者が、“奢り”と云う旨い汁が吸える様子が見えた。　ゴロツキに近い者、炙れた冒険者、裏事情を聞き込んだ者など、金や酒に変えて勝手なことを言い触らす。

また、外の往来を行き交う人混みの中で、金持ちや貴族が偉そうに闊歩し。　事件の噂を話し合っては、まるで遠く離れた国で起こった事をさも怖がる様な。　軍部が犠牲を最小限に抑えた事で、噂だけが売り回られ。　その往来を見るに、賑わいが衰えている様子は無かった。

だが。

酒場が、普段より夜遅くまで最高潮を保つ頃。　商業区の中程で、暗黒街にも近い通りを歩く者が一人。

この者、黒いマントともローブとも見て取れる服をスッポリと被り、面体は判らない。　だが、店から洩れる灯りも殆どない路地を、一人で行く。　この暗黒街周辺に成る場所に一人で来たのなら、中々

の度胸と云えるだろう。　フードの上や肩に雪を乗せ、周りを見ずに建物の間を抜ける道を行くこの者は、一体…。

さて。　この何者か、石で出来た階段を数段上り、つづら折りに成る短い坂道を行き。　港沿いへ向かう急な坂道の上に架けられた石橋の上に着た。

すると…。

「ほぉ～、ノコノコと来るとはねぇ～。　軍部ってのも、案外脅しに弱い様だ」

言葉端をいい加減な口調で締める、聞くに荒くれた雰囲気を窺わせる男の声。　この声の主は、橋の向こう側の物陰から現れた。　月明かりも無い闇の中、出て来た男の声をした者も、やって来た黒い姿の何者かも、互いに灯りを持ち合わせない。

すると、黒い衣服をすっぽり被った人物が。

「宝物の在処は、博物館では無い。　博物館の持ち主で在る一族が嘗て住んでいた古き古城に、明日の昼に運び込むと云う事だ」

と、言う。　その声、どうやら女声である。　少し篭っているが、中々上品な声音の女性と思えた。

橋の中腹に進み出た男の方が、

（おいおい、いい声した女だぜっ？！）

と、卑しい妄想を働かせようとする時。　黒い衣服の何者かは、そ

こで踵を返し。

「約束通り、軍部にはこの事を伏せて在る。　だが、これだけは言って置くそうだ。　あの宝物の中に、貴様達が望む物は何もない。　只の、王子縁の品が在るだけだと…」

その黒い衣服の者に、興奮し出した男は狙いを定め。

「へっ、それは見るまで解らなねぇ～さ。　さ、俺と此方に来いよ」

と、歩み寄った。

処が。　黒い衣服を着た者は、サッと雪の積もる前の方に飛び退き。

「阿呆。　私は、言伝を伝えに来ただけだ。　何で貴様の様な者に、見す見す拐かされなければ成らんのだ？」

この態度に、現れた男はいきり立ち。

「お前ぇっ、俺の言う事が聞けないってのかぁっ？！」

と、鋭い声を出す。

だが、相手の黒い衣服の人物は、逆に冷めた口調で。

「フン。　お前の様な輩が来ると、向こうも読んで居たのだろう。　だから、金で私を雇った上に、下らん言伝を頼んだのだ。　私は、約束を果たすまで。　お前が何を言おうが、関係無い」

と、取り付く島も無い程にキッパリと言い切る。

これに、男は更なる苛立ちを強め。

「このアマぁぁっ！　お前が云う事を聞かないならっ、生かして在るババァをブッ殺すぞっ?!!　それでもイイのかぁっ?!　あぁっ?!」

ある意味この様な脅しなど、誰の目から見ても下らないに程が在る。

この男、勝手にペラペラと良くも喋れるものだ。

しかし、それでも黒い衣服の女性は背を返し。

「私は、仕事をしに来ただけだ。　お前が何をしようが、それは雇い主の貴族と交渉するがいい」

男は、去ろうとする相手の捨て台詞に驚き。

「何だとぉっ?!　おっ・おいっ、待てっ?!」

だが、女性は歩き始め、折り重なる様な道を歩きながら。

「どうやら、誰かを既に拐かして居る様だな？　何とも卑劣な…。お前の様な輩が犯人の一部では、そのババァとやらも長生きは出来まい。　これからまた会う雇い主には、折れて言い成りに為る必要が在るかとでも報告して置くか」

と、言いながら坂道前の階段に着き。　そこで歩を止め、橋の上の男を見上げる黒い衣服の女性で。

「精々、後は気を付けるんだな。　お前の様な者など、サッサと役

人に捕まるといい」

と、橋の上の男に言葉を残し。　来た道の方に向かって階段を降りる。

「あっ、おい待てっ」

女性の後を追おうとした男だが、橋を行き過ぎた所で歩を止める。

「クソっ！！　本人が来ると思ったのにぃっ、声は似てるが別人かよっ！」

この男。　マーリの周辺を探っていた悪党の一人で、マーリとその仲間の事も調べ上げる役目をしていた。　マーリの容姿も知っていれば、その仲間で若い僧侶の女性も見ていた。　マーリの女性らしさがそれぞれに在り、男の欲情を滾らせて見ていた訳だが。　今夜か、明日か。　此処に来るのは、マーリだと予想していた。　残した手紙には、彼女を指名したからだ。

だが、それは違った。　男の目から見ても、来たのは雇われた何者かだ。　人質のことに関しても、何の躊躇いも見せず。　また、事態の行方に、大した憂いも懐いて居ない様に見えたからだ。

処が…。

いや、違っていない。　実は、確かに今の人物はマーリなのだ。

少し距離を離した物陰に、彼女の仲間が隠れて見守っていただけで。

彼女は単身で、指定の呼び出された場所に来ていたのだ。　今の遣り取りは、セイルの指示であり。　間近でマーリの声を聴いた事も無い悪党に、声音を変えたマーリの声が、彼女の普段の声と結び

付く直感力が無かっただけだ。

しかし、目の前に来た女性を逃した彼にも、大事な仕事は在る。脅迫した相手から聞いた意思を、ラヴィンの居る場所に運ぶと言う役目だ。

姿を偽ったマーリを追わず、この男は暗黒街の方に歩き出す。　無論、辺りに気を配り、気配を十分に窺いながら…。

しかし、用心をしている男を追う影が在る。

一つは、暗い空中を跳ぶ様に動く建物の屋根に。

もう一つは…。　後ろを特に警戒して、建物の物陰に隠れたりする男の前方。　一定の距離を置き、待ち伏せする様に。　この尾行は、プロや上級者のする遣り方である。　相手が何処に行くか見当も付いていない中で、この様な尾行の遣り方は得策では無い。

だが。　尾行を警戒する男は、頻りに後ろを警戒している。　彼の脳裏には、覆面をしたマーリの残した先程の言葉が残ってしまって居たのか。　それとも、“尾行”が後ろからするだけのものとでも思っているのか…。

雪が降る暗夜は、暗躍には格好の条件と云える。

男は、二つの影が尾行する事も気付かず、暗黒街のアジトまで行ったのである。

ジェノサイダー達が隠れる、あの石造の廃屋屋敷。　其処には、各悪党一味達の手下共、１０数人足らずも一緒に屯する。

その屋敷入口が開かれ、雪を頭に載せた男が入ってきた。　麻布のマントに、みすぼらしい衣服を重ね着した服装で。　旅人の姿にも似ているが、男の顔は、何とも嫌な目付きに汚い皮膚が印象的な悪党面である。

雪を払うその男に、只だだっ広い部屋の処々で屯していた者達が集まって来た。

「おい、ノノス。　守備はどうだった？　泡良くば…現場に来た女を連れて来る気だったんだろ？」

“ノノス”と呼ばれた男は、雪に濡れた栗色の癖っ毛を掻き上げながら。

「それが駄目だった。　あの貴族女め、要件を他人に言伝する様に頼んだみたいでさ。　一応来たのは、声からして冒険者の女らしいが…。　ありゃ～結構ウデが達つ。　下手に手を掛けたら、斬り付けられたかも知れねぇ」

ずんぐりむっくりの小太りな悪党が、

「なっさけねぇ～なぁ」

★

と、云うが。

「おいおい、俺は、ラヴィン様に頼まれてんだ。　それが無けりゃ～言伝に来た女を尾行してたさ」

不毛な悪党同士の会話が続こうと云う雰囲気の中で、後から来たレプレイシャスが。

「ラヴィンは、別の隠れ家の下見に行った。　要件は、俺が聞こうか。　相手の出方は？」

と。

ノノスと云う男は、悪党達と共にレプレイシャスに向いた。

元貴族らしいこのレプレイシャスは、所々に綻びや汚れの見える黒いピアリッジコートを着る。　赤い皮のベルトで留める腰回りには、長剣の他にダガーなども射し込まれていた。　鎧や子腰当てなどを脱いで居るが、背も高いから威圧感が在る。

ノノスは、少し警戒の色を顔に浮かべながらも。

「イイぜ。　どうせ、ブツの在る場所へ踏み込むのは、アンタ達が主だからな」

と、前に進み出る。

ラヴィンは、事が大事に成るだけに、どうしても逃げる時の為に強行が出来る部隊を温存したかったらしい。　クドゥルの率いる部隊は、装備も揃って腕もある。　例え兵隊相手でも、一個師団など大

部隊を相手にしなければ、戦って即座に全滅に至らない。　ある意味、逃げる時程気を遣う。　ラヴィンは、逃げる時の切り札を残したかったのだ。

ラヴィンの思惑を叶えるには、このレプレイシャス率いるジェノサイダーが必要不可欠で。　戦に発展しない間は、彼等が強行的な行動の全てを行うと決めて在った。

ノノスから話を聞いたレプレイシャスは、

「あ？　その屋敷だかって、誰かが一度見たって聞いたが？」

と。　一応、今までの細かな経緯は、ラヴィンと一緒に全て聞いた彼だ。　一度、斥候の役目を受けた悪党が、その旧貴族区に在るマーリの一族所有の城だか屋敷を見たと。

ノノスは、

「俺の仲間が行った。　只、今夜の話では、“運び込む”と」

レプレイシャスは、明日の昼に運び込むと云ったので。

「ふぅ～ん。　襲撃したデケェ～博物館に無くで、明日に話の場所へ運び込む…。　話のツジツマを縫い合わせりゃ、今は何処かに隠してる訳だ。　その～、何とか王子の宝物とやらは？」

「多分は…」

レプレイシャスは、随分と筋書きが出来てる話だと思い。

「なぁ～んか、その話が気に入らねぇ～。　これからでもいい。その旧貴族区の指定場所に、誰かを張らせろ。　もしかしたら、罠を張ってるかも知れないぞ」

ノノスは、有り得ない事でも無いと。

「あぁ。　これから、一度見に行った事のあるヤツが交代で来るから。　ソイツと一緒に誰か行かせる。　旧貴族区は、夜にはモンスターも出るって噂の場所だからな。　冒険者でも無い奴を、一人では行かせられない」

レプレイシャスは、何とも渋い表情を見せ。

「まぁ～ったく、悪党も唯の人って訳だ」

と、憎まれ口を。

ジェノサイダーの他の面々は、暇さえ有れば寝ている。　起きているのは、レプレイシャスと面体の解らないレイと云う人物だけだ。
その顔を覆面で隠すレイは、隅からその一部始終を見ている。
ジェノサイダーの面々の中で、一番得体の知れない人物であった。

所が、此処でもう一人、ジェノサイダーの面子が眼を覚ます。　切れ長の目に、細い顔。　鼻から上を見れば、中々のイイ男面なのだが…。　鼻は、左肩上がりの豚鼻。　口は、尖った感じで、顎が人一倍長くしゃくれているのだ。　このひと度見れば、早々には忘れない顔立ちをしているのが、魔想魔術師のサロペン。　冒険者だったが、魔法を人に遣う事に躊躇いが薄く。　この道に自分から望んで堕ちた人物だ。

レプレイシャスは、頭を掻きながら。

「サロペン、まだ寝てていいぞ？」

と、云うのに対し。　身を立たせ、悪党達の集まる方に歩き出すサロペンは…。

「目が覚める…。　なんか、あまり遠くない所に、死霊モンスターが居る様な気配がする」

と。

レプレイシャスは、人の多い街の中心だと思って。

「おいおい。　２・３日前にそこで殺した三下が、もうゴーストにでも成ったとか言わないよな？」

だが、天井を見上げるサロペンは、眉を潜めては不気味がり。

「そんな弱いモンスターの気配じゃない様な…。　この辺の近くに、ヘイトスポットでも在るんと違うか？」

「バカ云え。　こんな街中でヘイトスポットが有ったら、それこそ大騒ぎだ。　暗黒街の悪党共が、蜘蛛の子散らすみたいに逃げ惑う」

サロペンは、屋敷の周囲に蟠る気味の悪い気配に、気まずい顔を浮かべて水を飲みに右隅へ。

レプレイシャスは、サロペンの感覚に間違いも少ないので、外に出て見ようと。

すると…。

「う〜ぅ〜、寒っ！」

「酒くれ」

と、４・５人の悪党達が入ってくる。

こうなると見張りが先だと、レプレイシャスは外に出るのを止める。

それから少ししして…。

旧貴族区に、見張りをするためにと出ていった３人の悪党達。　その３人の後を、また影が尾行し始めたのだった。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険

3

第一章・旅立ちの三部作・

最終編

≪決められる前に、決める≫

いよいよ、荷物が旧貴族区に運ばれる日が来た。

静けさが広がる朝。　極夜の区域からは抜け出すアハメイルは、冷め冷めしい曇りの朝を迎えている。

その頃。

巡回警備以外に、軍部は目立った行動を取らず。　役人は、今までで捕まえた悪党達の取り調べなどで、朝から慌ただしい仕事を強いられている。

また、連日の遊び疲れが祟る中弛みの頃合いで、街中は人気も少なく静けさが強い。　早朝から働く限られた者以外、街に人の姿は見えない有様であった。

一方。　年末の馬鹿騒ぎを大金で支える者達…。　貴族や大商人の多くが住み暮す貴族区に眼を移せば、何処も寝静まっていて。　起きているのは、昨夜に降った大雪を処理する下働きの下男や、屋敷内で動くメイドぐらいだろうか。

処が…。

馬蹄の音が通りに響き、雪化粧をした貴族区を走る馬車が一台。行先を見るに、向かうは貴族区の奥へ。　朝帰りにしては遅い頃合いで、芦毛の馬が2頭で、乗用の一番小さい車両を引いている。

馬を操る御者は、低いハットに雪をチラホラと乗せ、黒いロングのオーバーを着る。　襟を立たせているのだが、顔をしっかりと見せる様な姿では無く。　どうも、俯き加減で辺りを警戒している。

この馬車。　不思議な事に、旧貴族区との境に或る石積みの壁沿いに、北西方向に向かう。　貴族区と旧貴族区の境に或る壁を北西に向かうと、荒廃した昔の墓地などが見える場所に行くのだ。　人気も無ければ、家が或る訳でも無い。　荒廃した平地に、大小様々な区画に区切られた墓地跡が見えるだけなのだが・・。

走る馬車から見て、左手に続いていた貴族の屋敷の列が、途切れ途切れに成り始める頃。　右手に続いていた積み上げられた石の壁が、急に古く壊れかかった様な粗末さを窺わせる様に為る。　すると、急に馬車は、走るのを止めた。

黒い石造建築で、派手さの無いと見受けられる屋敷の裏手。　石垣と庭木で、屋敷からも、また馬車側からも互いが見えない場所で、御者は席を立ち。　そして雪で地面が見えない通りに降りた。　降りても警戒は怠らず、用心を重ねた上で馬車のドアを開いた。

黒い上質のマントを纏い、気取った雰囲気を醸し出す白のシルクハットを被った初老の男性が、ステッキも持たず馬車を降りる。

「此処か？」

御者の男性は、鋭い視線を辺に向けながら。

「そうです。　あの石垣の壊れた部分から、敷地内へ」

マントの腰の辺りに、武器と思われる出っ張りを窺わせる初老の人物。　顔つき自体は、キチンと整髪された鼻髭といい、スッキリとしたナイスミドルとも云える紳士面なのだが…。　その斬り付ける様な目、高慢さの窺える高い鼻は、どうも近寄り易い印象では無かった。

馬車に乗っていた紳士は、顎を遣って。

「そこから歩くしか無いのか？」

と、御者に云えば。

「そうですね。　旧貴族区への一般的な門は、全て兵士の管理と成ってる様で…。　時間が許したなら、門を開く様に脅しを掛けれましたが。　運び込まれるのは昼で、受け渡しが今夜。　下手に動けば、勘づかれるとも限らな次第でして」

「そうか…。　面倒だな」

「では、私は此処で。　馬車を見守ります」

「手筈は？」

「石垣を超えて右手に向かって行けば、手引きの者が居ると思います」

「で？　お前は、此処にず～とか？」

「いえ。　人の住む家の裏なので、この先の打ち捨てられた寺院の裏に居ます」

初老の紳士は、白いものが混じる髪を首筋に窺わせながら、顔を石垣に向け。

「レプレイシャスの命令だから変装して来たが、これなら門番の兵士を殺して入った方が容易いぞ？　まぁ、今はそうも云えぬがな」

と、歩き出す。

初老の紳士は、曲がりの強い見通しの利かない通りを左右と何度も確かめた上で、崩れた石垣の間から体を横にして入った。

「…」

石垣を越えれば、見えるは左を中心に雪が積もった雪原である。
枯れ木が所々に生えて見え、何かの括りを示す格子柵が所々に壊れ、雪の上に少しだけ姿を見せる。　それこそ残骸の様なものが突き出て見えるだけ。　替わって、右手を見ると…。

（ん？　アイツか）

右手には、崩壊した家の瓦礫や、半壊した屋敷が遠目に見えている。
その方角に、黒い何者かが立っていた。

初老の紳士は、雪の上を滑る風にマントを揺らしながら、黒い何者かの方に向かって歩いていった。

その、少し後。

その場から、旧貴族区の奥に向かう事、約半里（約1キロ）。崩壊した建物の瓦礫や、壊れた柵等で囲われたすり鉢状の場所にて。
先程の初老の紳士と、黒い覆面に蒼い厚手のマントを羽織る何者かが戦っている。

その二人の様子を見るに、明らかな劣勢は初老の紳士と思われる人物で。

「クソっ！！　罠とは卑怯なっ！！！！」

と、覆面をして顔を判らなくする相手に、歯軋りして喚いた。頬に薄っすらと斬り傷を作り、シルクハットも何処へやら。完全に余裕を失ったその顔は、負けを意味していた。

紳士は、この覆面の人物にマーリの一族が住んでいた嘗ての屋敷に案内すると言われ。此処まで来てみれば、突然に戦いを挑まれた次第。この場に来るまでは、腰の低いコソコソとした悪党下がりだと見えた覆面の人物だが。いざ斬り合いに為ると、一筋縄で行く相手では無い事に驚かされた。

紺色の布で覆面をする者は、安物の長剣を正眼につけ。

「“卑怯”…。　目的の為には手段を選ばず、廃棄場に火を放って兵士さんを殺したでしょうに…。　自分にだけ都合良く云うなんて、流石は悪名高い冒険者チームの一員ですね」

この声、少し篭ってはいるものの、明らかにセイルの声だった。

そして、セイルに襲われているこの初老の紳士を装った人物は…。

ジェノサイダーの一人である、”デュナウド”だった。

「おのれぇぇ…」

大声を上げても、誰にも聞こえない場所に誘い出された彼は、突然に襲い掛かって来たセイルに完敗状態。　作りの良い幅広の長剣バスタードソードを、右手に構えるデュナウドだが。　眼を見るに若そうな少年と青年の間と思われる相手に、全く歯が立たない。

「ふんっ！」

雪の上でも構わず踏み込み、セイルの顔に一撃を薙ぎ付けたデュナウドだが。　軽く引いて見切ったセイルは、素早くデュナウドの左手に踏み込む。

（不味いっ！！）

デュナウドの斬り込みは、彼の繰り出した一撃必殺。　渾身の斬り払いである。　完全に剣を持った手が流れた瞬間に懐左手に踏み込まれては、防ぐ手段が無かった。

「はぁっ！！」

掛け声と共に、セイルの左手に持つ剣が振り上がった。

（ぐぶっ！！）

そこに走ったのは、痛みは痛みでも焼ける様な衝撃。　デュナウドの左腕より、肩まで衣服が裂けて血が飛んだ。

勝負は、此処で決まった。

痛みに体勢を崩したデュナウドは、左腕を斬られてもまだ遣れると、右手の剣を防ぎに側める。　だが、振り上げたセイルの剣が、返す形で其処に振り降りる。

「ぎゃぁっ！！！」

滾る様なデュナウドの声が上がる。　右手の甲が斬られ、指へと繋がる骨３本が切断された。

「このぉぉぉ…、おま・・お前…」

剣を雪の上に落としたデュナウド。　膝を折って雪に跪き、苦し紛れにセイルへそう云うと。

「荷物を運んだ冒険者…って言ったら、解ります？」

構えを解いたセイルは、デュナウドの眼を見て言った。

（あ〃っ）

デュナウドが眼を見開いて驚く処に、セイルは踏み込んだ。

「がふっ…」

デュナウドの鳩尾に、セイルの持つ剣の柄が突き込まれたのだ。
痛みに呻きながらガクリと崩れるデュナウドは、薄れゆく意識の中で。

（つ・・つえぇぇ…）

デュナウドが弱かった訳では無い。　不意を突かれ、自分の間合いを確保出来ないままに、相手の剣術に呑まれた。　心が落ち着かないままでは、本領も発揮するには難しい。　永らく一人で剣の腕を磨く事に久しかった彼は、その辺の怠慢が命取りだったのだろう。

セイルは、近くに潜ませた兵士の男性三人を呼んで、デュナウドの止血だけすると。

「では、手筈通りに」

見張りの仕事から駆り出された兵士の三人だが、セイルの剣の腕に驚いて居る。

「はっ」

「心得ております。　この者は、密かに兵舎へ運び込みます」

「しかし、本当に御一人で行かれますか？」

覆面を解かないセイルは、短く。

「はい…」

と、だけ残し。　一人で、デュナウドと来た方に戻っていく

セイルが何故にデュナウドを待ち伏せ出来たのか。　これは、一体どうゆう事か。

★

実は…。

昨日。　テトロザから襲撃を受けた事と共に、残された手紙を見せられたセイルだが。　手紙に宝物を渡して確認が取れたら、女性は返すと書いて有る事に着目して。

「テトロザさん、犯人がこう云う以上。　宝物の引渡しの現場に、人質の女性を連れてくる可能性は低いと思います。　現場に連れて来て奪い返される危険を伴う行為は、一番の面倒ですから」

困るテトロザも、また。

「はい。　それは、十分に承知して居ります。　このジェノサイダーと云う輩共は、非常に殺戮を好むとか。　私の見立てでは、宝物を引き渡したが最後。　誘拐された女性は、直ぐに殺されまする」

セイルとテトロザの意見が合致したその話に、ユリアがパッとテト

ロザを見る。　相手の言い成りに成れば、そうなる可能性は高く無いと思われたが。　セイルは、人質の女性を救う手立てを思い付き。

「でしょうね。　悪名高い彼等ですから・・。　ですから、その一番厄介なジェノサイダーを、結託する悪党達から切り離しては？と、思うのです」

打ち明けられたテトロザは、

「前から動いている悪党と、ジェノサイダーを…ですか？」

と。　その顔は、半信半疑と云う感じである。　何せ、相手の事が殆ど解らないからであろう。

所が、セイルは真剣な顔をテトロザに向けるままに、こう云う。

「はい。　ジェノサイダーを討てば、今度はこの事件を考える者達が、我々に対して直接出ざる得ない。　それに、ジェノサイダーさえ討てば、手下か見張りによこした悪党の尾行が出来ます。　短期決戦で、一気に事態を収拾させる策を取らないと」

テトロザも、それを聞けばセイルの意図を読めて。

「つまり…。　ジェノサイダーだけを倒し、悪党の一味は捕まえず逃して、その後を追う。　そのダシに、ジェノサイダーを態と誘き寄せて、戦いを挑むと？」

「はい。　人質を取った相手側には、此方の出方に対処する優位さが在ります。　無理をして動くより、捜査機関や襲撃した場所を見張る方が楽。　彼等も目立たないまま、此方の出方を窺う様な選択

するでしょう。　此方が下手に動けば動くほどに、全てが筒抜けに成り。　況して人質を取られている以上、時間稼ぎなどの下手な小細工は通用しない。　だから、マーリさんと計って、本当に此処へ宝物に似せた物を、何でもいいですから輸送したと見せかけて下さい。　そして、相手にその情報を流して下さい」

テトロザは、誘き寄せるしかないと思いつつも。

「ですが…」

セイルは、そこで眼を鋭くして。

「もう、相手は待ちませんよ。　リオンの運ぶ首尾より先に、此方が負けたらどうする気ですかっ?!」

珍しく声が大きく成ったセイル。

テトロザも、返す言葉が出ない。

其処に、アンソニーが。

「して。　今後、我々はどうするのだ?」

セイルが、直ぐに。

「僕とアンソニー様で、マーリさんを見張ります」

「ん?　“見張る”…とな」

不思議な事だと言いたげなアンソニーで。　それは、聞いているク

ラークやユリアも同様。

セイルは、テトロザに向くと。

「悪党の尻尾を掴むには、言伝をする時は絶好の機会。　密かに我々二人で、その悪党を逆に尾行するんです。　アジトまで行けば、それでよし。　今までは、此方が調べられる番でしたが。　今度は、逆です」

アンソニーは、危険な行為だが。　相手の内情を把握出来ると思い。

「なる程、それは妙案だ」

セイルは、更に。

「相手方の出方を少しでも盗み聞き出来れば、裏も掻けます」

と。

死んでいるアンソニーはまだ別にしても、セイルやユリアなどをダシに遣う事に気の引けるテトロザだったが。　切羽詰ったこの状態を打破出来る案が浮かばず、とにかく動くしか無いとセイルやアンソニーに言いくるめられた。

こうして、セイルの目論見通りに、マーリが変装して悪党に会いに行った後を追い。　悪党の尾行に漕ぎ着けた二人。

所が…。

あの夜。　レプレイシャスが情報を疑り、旧貴族区へ見張りを派遣

した事で。　セイルは、大胆な一手を実行した。

深夜の闇を利用し、旧貴族区に向かう3人の悪党。　彼等が、見張りの立つ旧貴族区へ通じる門をどう潜るか…。　これを見届けたセイルとアンソニーは、悪党3人を捕らえた。

組織に忠誠を誓った彼等だが、アンソニーが魔法の魅惑魔術で恐怖に戦いた一人を支配して、受けた命令を聞き出した。

良く聞こえなかった彼等への命令では、明日の朝にジェノサイダーの一人が様子見に来ると…。

これを聞いたセイルは、下手な誤魔化しが効くかどうか解らなかった。　ジェノサイダーのチーム事情を、的確に把握出来て居なかったからだ。　そこで、見張りの真似をして誘き出し、捕らえようと試みた。　セイルの手応えでは、デュナウドが弱いとは思って居ない。　気を引き締めてかかれた分だけ、セイルに落ち着きが出て。　それが優位を齎したに過ぎない。

セイルは、この相手方の行動に穴を開けた。　もし、このまま手を打たずに、放置したらどう成るかと考えた。　だが、警戒されて、暴れる行為に出られる事が何より恐い。　しかも、相手方の悪党グループを統括する要（ラヴィン）が、何処に居るか解らない中だ。

（欺ける所まで、欺いてしまおう）

セイルは、ジェノサイダーを潰せるまでは、何処までも欺こうと決めた。

デュナウドの送致を任せたセイルは、アンソニーの待つ場所へと向

かう。　アンソニーが来なかったのは、必然的に他に悪党の仲間が居たと云う事。　あの旧貴族区と貴族区を隔てる新旧の壁の切れ間。

そこで二人は、二手に別れて待ち伏せて居たのだから…。

壁の切れ間から貴族区に出たセイルは、互いに連絡を取り合う場所に指定された木の元に。　すると、根元に出来た虚に、手紙が在る。

ー西側の道を行くと、廃墟と成った寺院が在る。　そこで待つー

アンソニーは、馬車を追った。　もう打ち捨てられた様な古い石造寺院の在る敷地に入った馬車は、その寺院の影で隠れる。　物陰で見ていて、動く気配が無い様子から。　旧貴族区に入った者を待つのだろうと思い、　戻って、手紙を隠した。

手紙を回収したセイルは、寺院と隣り合う貴族の家の壁沿いから、迂回して隠れながら寺院へと近付いた。　寺院の敷地に入ると、闇の様な寺院の建物から、アンソニーの手が見えた。

さて。　真っ暗な寺院の中で落ち合ったセイルとアンソニー。

（遅かったな、大丈夫かい？）

と、云うアンソニーに対し。

（済みません。　捕まえるのに、少し時間が掛かりました）

と、セイルが返す。

（おぉ、捕まえたのかい？　流石だね）

（ですが、これからが博打です）

セイルは、一人で寺院の外に出ると、徐にバレバレの警戒を見せながら馬車に向かって行くのだった…。

≪イチかバチか≫

馬車でデュナウドを此処まで運んだ悪党の一味である男は、馬を操る席に隠れる様にして待っていた。　襟の高いオーバーコートで顔を隠し、炯炯とする目だけを視界に巡らす。

（遅いな…）

雪が止んだだけの曇天の空だが。　此処に来てから、随分と明るく成った気がする。

其処に。

（んっ?!）

雪を踏む音が近付いてくるのが耳に触った。　車体に隠れる様に、少しだけ顔を馬車の脇に出せば…。

（誰だ?）

覆面をした何者かが、此方に近付いて来るではないか。　しかも…。

（何だ…、見張りに行った仲間か？　しかし、何という警戒の仕方だ？　周りをキョロキョロ見るだけで、自分の歩みに気を使ってる素振りも無い。　しかも、顔に覆面とな…、素人にも程が在ろうに）

その近付いてくる相手のしている事が、全て幼稚な作業と思えた男。

素人の仕草を丸出しで、全てが気に入らない。　さて、此方に近付いてくる覆面の人物が、丁度木陰に入って車体の脇に差し掛かった時。

「何者だ？」

と、男は席から雪の上に飛び降りた。

「っ？！」

ビクンと驚いたのは、覆面の相手。　踏み出した足を滑らせ、その場に腰を落としてしまったのである。

男は、覆面の人物に近付くと。

「お前…、俺達の仲間か？」

すると、覆面の人物はガクガク頷き。

「ロムズさんに・・やっ・雇われましたぁ」

語尾を恐れから上ずらせる覆面の人物。

（なんだ…、こんな部外者を雇いやがったのか？）

男は、見張りに向かった男の一人の名前が出て、何と杜撰な行動かと呆れた。　今回の仕事に関しては、極力部外者を利用しないのが鉄則。　ラヴィンとクドゥルがゴロツキを襲撃に使ったのは、完全な捨て駒と割り切ってだからである。

覆面の人物は、雪の上で座り。

「あっ・あの…。　ジェノサイダーの方から、貴方に伝言を預かってき・ききっ来ましたぁ」

男は、サディステックな目の鋭さを覆面の者に向け。

「“伝言”？　そんな話は聞いてないぞ」

「そっ・それがぁ…。　昨夜ですがぁ、見張りをしていたオイラなんですがね。　少し離れたボロ屋敷で、ロズムさん達がゴーストに遭ってしまいましてぇ…」

男は、確かにモンスターが夜に出ると聞いていただけに。

「チィっ！　それで？」

「はぁ・・。　先程来たジェノサイダーの方が、怪我したロズムさんと、もう一人を足手纏いだとききき・きっ・・斬りまぁしたぁ」

この話を聞いた男は、使えない様なら見張りを変えると言っていたレプレイシャスの事を思い出す。

（そうか…、その命令も受けていたか）

と、思いながら。

「一人は残ってるのか？」

「はぁい。　そ・それで、このまま…夜まで見張りを続けると仰るんでさぁ」

「…、で？」

男は、眼を細めて云えば。

「へぇっ？！」

と、オドオドした様子で聞き返す覆面の者。

「何か、変わった動きは無かったのか？　何の為の見張りだと思ってるんだ？」

と、上から高圧的な物言いで、男は覆面の者に聞く。

「へっ・へぇっ」

パッと大慌ての様子で頭を下げた覆面の者。

「きっ・昨日の夜からっ、槍を持った誰かが何人か…。　あああっ・後、確実に誰か居ますぜぇ」

「見たのか？」

「いえっ。　ですが・・、内庭の中に立つ塔型の建物に、夜に為ると薄明かりが…」

「…、お前が確かめたのか？」

「へい。　外側の建物は、内部が結構崩壊してまして。　其処は、偶に誰かが見回りに来るぐらいでさ。　ですから、その建物に忍び込んで見張ってました」

「フム。　その外側の建物とは、侵入し易い訳だな？」

「へい。　ロズムさんが言うには、北側の建物に入り易い壊れた場所が、襲撃には使い易いとか言ってました。　確かに、壁が大きく壊れてて、軽く壁を跨げば入れる場所なんすけど…」

男は、そう云う覆面の者を見つめ、少し間を置いた。

その間。

（全く、素直に事が運ばないとは…。　嘘かどうか真偽を確かめるか？　だが…。　こんなド素人みたいな動きのヤツに、あのジェノサイダーの一人が負ける訳が無いだろうし…。　朝には、何やら博物館に運ばれた様だし、博物館の動きさえ見張ればいいか…）

と、思う男。　実は、昨夜に新しい交代兵士の大隊が到着した。　しかも、兵士の交代等の移動も予測されるから、アハメイルの市内に幾つか在る警備兵の駐屯地の見張りや、“核所”と呼ばれる街の政治を司る中枢を更に見張る必要が在る。　何か動きが有るなら、直ぐにジェノサイダーに動いて貰う必要が在るからだ。　だが、そ

の見張る手が足りない。　この男も、デュナウドが戻ってアジトに帰ったなら、直ちにその見張りの応援に行く手筈だったのである。

モンスターと戦うだけの腕が在る訳でも無く。　長く待った気分の男は、見張りをデュナウドに任せようと思う。　ラヴィンとレプレイシャスに報告し、その後の采配を仰げばいいと思った。

覆面の若そうな声をした者に、男はドスの効いた声で。

「解った。　が・・、いいかっ?!　お前は逃げるなよ」

と、云う。

覆面をした者は、情けない様子で土下座し。

「はっ・はいぃ。　弾みで盗みを繰り返して、此処まで逃げてきた身なんです。　金に成るなら、何でもしやすぅ。　手配書きが回ってるんで、別の国に逃げたいんでさぁっ」

その姿を見た男は、よもやまさかこの覆面の人物が、既にデュナウドを捕まえたとは思えなかった。

「・・そうか。　なら、良く聴け。　受けた仕事を放棄するなら、どんな事が有っても組織が狙う。　今回の仕事を上手くこなしたなら…、俺が組織に口利きしてやる。　どうせなら、悪党の一味に成った方が無難だぞ」

覆面の者であるセイルは、再三再四に頭を下げ。

「スンマセン、スンマセン、助かりますっ」

優越感を知り、格差を知ると、人間性の低い者は相手を見縊る。
完全にセイルの偽りを飲み込んだ男は、辺りを見回し。　そして、
覆面の者を足で小突く。

「あぁっ」

雪の上に転がった覆面の者。

馬車に乗る気を見せ、動き出す男は言葉荒く。

「何時までも座ってんだっ。　早く見張りに戻れっ」

セイルは、ヨロっと態と弱々しく立ち上がり。

「へっ・へいっ」

と、頭を下げた。

馬車の運転席に登り掛けた男は、

「また後で、誰かが繋ぎ連絡を受けに来るだろう。　今夜は、寝れないと思えっ」

覆面をしたセイルは、頭を下げ下げして背を見せる。

それを見た男は、その簡単に相手へ背を向けた事が不用心過ぎて、
今回の一件が終わったなら始末しようかと思った程だ。

また、別の場所でその一部始終を見ていた王子は…。

（フッ、何という迫真の演技か。　アレでは、私でも騙される）

建物の中から見ていたアンソニーも、セイルの芝居に目を見張った。
ジェノサイダーを誘い出す為に、自身を蔑ませてでもと云う気持ちが見えていた。　セイルは、唯一点に目的を見据えて進んでいた。

★

馬車を操っていた男は、暗黒街に在るアジトへと戻った。　まだ、昼に成らぬ頃で。　報告を受けたラヴィンとレプレイシャスは、互いに眼を交わす。

ラヴィンは、レプレイシャスへ。

「どうする？　誰かを差し向け、仲間の安否を確認するか？」

すると、彼は気も無さげに。

「いやぁ、いい。　どうせ夜には行くんだ。　デュナウドは俺と同じ力量だから、危なかったら逃げる位は易い。　それより、朝方に運び込まれたとか云うブツは、まだ移動させて無いのか？」

「いや、まだ無い」

レプレイシャスは、剣の柄を触りながら。

「ま、運ばれたかどうかは、デュナウドが現場を見張るからな。真偽は、何処かで解るさ」

「…随分と楽観的だな。　敵の内情は云ったハズだが？」

レプレイシャスは、顔を見せぬラヴィンへ。

「実力は…な。　だが、此方の手の内が悟られている訳じゃ無いし、攻め込まれる雰囲気も無い。　ビクビクする必要も無いし、こっちには人質が居る。　こっちが打った先手の効力は、相手方には十分に事足りる武器だ」

ラヴィンは、そこで言葉を止めた。　人質とした女性は、別の隠れ家に監禁して在る。　太った年配の女性だが、此処に詰める悪党達やジェノサイダーの面々には、甚振りに最適なエサに近い。　非常時も考え、今は生かして置く必要が有るので、此処に置かなかった。

ラヴィンは、ロイジャー率いる悪党集団を市内へ散らばせ、必要な場所を見張らせている。　先日の夜に、ジェノサイダーに小悪党を殺させた御陰で、街に巣食う組織に与しない悪党の集団は成りを潜めて居る。　ある意味、我が物顔で隠密行動が可能ならしい。　ロイジャーの手下は、酒場などを繋ぎの場にして、素早い情報網を確立していた。

ラヴィンは、これから街を牛耳る幾つかの悪党一味の内、二つの頭目と面会をする予定だ。　脅しを掛け、手伝わせようと云う腹で在る。　ホローが死んでから、この街の暗黒街の勢力図も少々変わりつつある。　ラヴィンは、あわよくば組織に引き込もうと考えていた。

ラヴィンは、此処に詰めるロイジャーの手下を一人呼び。

「いいか、旧貴族区に行って、詳細を確かめて来るんだ。　出来れば、場所の情報をもっと深く」

ラヴィンの前に腰を屈めて進み出た中年の傷を顔に持つ悪党は、

「へい。　解りやした」

と、直ぐに出ていく。

ラヴィンは、レプレイシャスへ。

「俺は、リエルとその手下を引き連れて、そのまま深夜まで戻らん。運び込まれた一報が入ったら、お前に任せる」

レプレイシャスは、顔を隠して物静かに佇むリエルと云う頭目をチラりと見てから。

「女とどっかに行くのか…。　いい気なもんだ」

ラヴィンは、性欲の欠片も無い言葉で。

「此処を根城にする悪党達の新参と会ってくる。　手は、多いほどにイイ」

レプレイシャスは、その魂胆を直ぐに見破る。　仲間の方に踵を返しながら。

「なぁる。　手数を増やすのと同時に、いざって時の捨て駒を確保する訳だ」

「察しがいいな」

「まぁな」

ラヴィンは、背を見せて隠れ家の片隅に帰るレプレイシャスを見るままに。

「一つ言って置くが、リエルは女でも無ければ男でも無いらしい」

これには、レプレイシャスも気に留めて振り返る。

「何だと？」

「両性具有（アンドロギュヌス）らしい。　しかも…、顔の半分が男で、半分が女…」

レプレイシャスは、初めて聞く話で。

「おいおい、悪党の前にモンスターじゃないか？」

と、悪い口を。

ラヴィンの横に居るリエルは、ピクリともせずに居るが。　リエルの手下は、渋い表情で少し違う方に顔を動かす。

ラヴィンは、首を少しだけ動かしては、

「モンスターとは、口が悪い。　だが、下手に刺激をしないで欲し

いのは、本音だ。　性的に興奮すると性格が入れ替わり、使い物に成らなく為るとか」

レプレイシャスは、リエル見ながら。

「へぇ～、…ちぃ～っと見てみたい気もするが…」

「その時は、暇な時にしてくれ。　今は男だが、女の性格に切り替わると好色に成る。　三日は相手をしないと、殺されるぞ」

レプレイシャスは、何という絶倫かと。

「三日ぁ？」

今度は、ラヴィンが外に出る素振りで振り返ると。

「そうだ。　今まで、相当数の男や女が餌食に成ってる。　女のリエルは、虐待を非常に好む快楽強行者に変わるらしい。　観たいなら、仕事を終えてからにしろ」

話を聞いたレプレイシャスは、首を竦めて。

「そりゃ～遠慮させて貰う。　まだ、死にたくないんでね」

ラヴィンは、一言。

「そうか」

と、だけ残してドアを開ける。　冷たい空気が、雪を連れて吹き込んで来た。

ラヴィンの後ろ行くリエルは、出る前にレプレイシャスをチラっとだけ見てから出る。　見られたレプレイシャスは、いい知れぬ悪寒を背に受けた。

（…異常だな。　見られた瞬間、獲物に見られた感じがしたゼ）

自身の仲間に異常者が多い分、その感性も磨かれている。　ラヴィンや他の悪党とは違う、異質的な異常者の雰囲気が見られて感じ得た。　リエルと云う頭目が、何故に頭目で居れるのか…。　その意味は、そうである事で必然と云う訳だ。

そして、ラヴィンが出て行ってから少しして。　昼が過ぎる頃に為ると、博物館から馬車二台が出たとの情報が舞い込んで来る。

決戦の場所は、確定したのである。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

私的な諸事情により、更新が遅れます。

ご愛読、有難う御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終編

≪運は、天命に流される≫

セイルがデュナウドを捕らえた時点でも、両者の事情を踏まえると。
その運命の天秤は、略平衡を保っていると云っていいだろう。

だが、その均衡を壊す出来事が、昼に起こった。　それは、宝物と偽った物を、再度旧居城へと運ぶマーリ達の乗る馬車に。　宝物と見せかけて運ぶ馬車の車輪が、街中で壊れたのだ。　車輪のスペアは、車体の底に部分分解されて備え付けられていたのだが、それを取り替えるには、少々の時間が掛かる。

確かに、これを受けたマーリは、幸先が悪いと内心怯えた。

だが、この出来事が大きく運命の天秤をセイル達に傾けさせたのだ。

それ意味は、旧貴族区に様子を見に行ったあの中年の悪党に関係が在る。　ラヴィンに命じられて、旧貴族区に見に行った彼が、セイルと会ったのは昼下がりの午後。　日差しが夕日に成り始める少し

手前で、昼食を終えた人々が一休みも終えて動き出す頃合いであり。
昼下がり街に活気が出る頃だろう。　主婦は、子連れで買い物に出掛けたり、働き手は昼を過ぎて一番精力的に仕事をする姿が溢れる。　日中の内に買い物を済ませようとする客が、一番ごった返すそんな頃合い。

この時。

「おい」

マーリの一族が嘗て住んでいた古い古城を見張る何者かを、雪に半分埋もれた石壁に影に見つけた悪党のミカロは声を掛けた。　彼は、ロイジャーの徒党に与する一人で、普段は押し込む店の斥候調査の役割を任されていた一人。　角張ってやや捻くれた訝しい顔付きながら、歳相応の風格も在る４０半ばの男。　短髪の頭を布で覆い、垢の染み込んだ皮膚は、刺さくれた様に皮が剥げる部分も見える。
ボロのずた布で作られたマントを纏いながら、セイルの扮する見張りに近付いた。

「わぁっ」

思わず大声を上げそうに成った…と演技するセイルは、既にこの人物の接近をアンソニーから教えられていた。

「バカっ。　声を出すな」

声に驚き、セイルの姿を壁に押し込む様に隠すミカロで。

「すっ・すいやせん。　元々が追われてる身なもんで、どうもビビって…」

セイルの演技か上手いのか。　この荒廃した場所がその雰囲気を作るのか…。　ミカロも、怯えるセイルの姿に見縊った訳で。

「で？　先に来たジェノサイダーのダンナは？」

見回す限り、デュナウドの姿が見えない。

セイルは、此処が一番の正念場だと思い。

「あの…、寒いから街に…」

「あ？」

ミカロに聞かれ、怯える素振りのセイルで。

「あ、温かい物…買ってきて下さるとかで」

ミカロは、立っているだけで寒さが体に突き刺さるこの場に。

「確かに、こんな場所で見張りは辛いやな」

と、漏らす。

此処で、また見張りを続けようと壁際に行くセイルで在り。　この覆面をしたセイルの素性をある程度把握しようと気持ちを持ったミカロ。

だが、此処で、遅れてマーリとその仲間達を乗せた馬車と。　宝物を乗せて来たと見せ掛ける馬車が、タイミング良く到着してきたの

である。

「あっ、馬車が…」

小声でそう云うセイル。

「んっ?!」

驚き、セイルの詮索を忘れたミカロ。

二人が見る中で、遠くの壁が崩壊した割れ目から、馬車が二台敷地に入るのが見える。

ミカロは、

「チィっ、遠いな」

と、云うのに対し。

「なら、近くに行きやしょう」

と、云うセイル。

「あぁ?」

驚くミカロだが、此処はセイルも弁えている。

「今は、見張りの兵士らしき奴らが、外側の建物の見張りを終える頃だと思いやす。　壁の裂け目から入って、見える場所に近づけるチャンスですぜ?」

ミカロは、この場所の地理的な感覚の一切を持たない。　だけに、少しセイルを頼り。

「お前、解るのか？」

セイルは、このために建物の内部を全て見回り把握した。　ユリア達の居る中庭の塔型の建物は勿論。　その外周を成す、八角形の一階を成す建物、二階の五角形を成す建物の双方を備に見回って把握した。　この状況に導き、自分を如何に悪党達に信用させるかと騙す為に、そうした。

「へい。　外周の建物だけは、全て把握してござんす」

ミカロは、馬車が入った事で、それを疑うより頼った。

「おし、そりゃいい。　見える場所に案内しろ」

「解りやした」

セイルは、ミカロを引き連れて壁の裂け目から用心に用心して入る。　実は、馬車が来たなら、この外周の見張りを止める様に兵士に言っておいた。　だが、その事を悟られない為にも、自分が相当に発見に対する危機感を持っていると、悪党相手に見せつけなければいけない。　セイルは、勝って活路を見出す最大限の工夫をしていた。　余計な工夫はせず、ただ一向に…。

セイルがミカロを最初に案内したのは、五角形の建物で在る二階の南東。　表の庭の見える場所である。　建物内部は、崩壊した天井や、壁で隠れる場所は多い。

（ほぉ～、こいつはイイ）

割れた壁の裂け目から、隠れながら盗み見れる部屋に入ったミカロは、馬車を降りて宝物と思しき宝箱を運ばせるマーリとその仲間の冒険者を見る事に。

セイルは脇で、

（兵士は、４・５人から少し増えました。　７・８は居るかと）

と、有益な補足をすれば。

ミカロは、屈んだ体勢からセイルを見上げ。

（そうか…。　護りを固めた所を見ると、運び込まれたブツも怪しいな）

（へい。　あの…）

（ん？）

（夜には、押し込みを掛けるんですかい？）

ミカロは、運び込まれる宝物をまた見出し。

（ジェノサイダーの一団と、少数で腕の達つ一団が来る。　お前や、居ない旦那の面子を入れても、１０・・７・８…、いや２０人ぐらいって処だ。　恐らく、直ぐにカタが付く）

セイルは、ミカロに近寄り。

（あの～、死んだ奴の身銭なんかは…貰ってイイんですか？）

聞いたミカロは、大仕事を前にしてみみっちい事を云うセイル扮する相手に呆れた。

（お前なぁ…）

だが、一方で。　内心にコイツをどう扱うのかの末路を知らないだけに、小銭でやる気を出させてキチンと始末が出来るならそれでもイイと思えて来て。

（……ま、仕事が終わった後にしろ。　一部の女は、生かして連れて帰るかも知れん。　死体荒しは、お前にくれてやろう）

（あ・ありがてぇ）

セイル見せる様子に、ミカロは小事だと呆れた。　宝物と思われる物品が運び込まれたタイミングが遅れた事で、セイルの素性など後回しに成ったのである。

外周を形成する八角形の建物に運び込まれた宝物の箱は、そのまま中庭の六角の塔へと運ばれていく。　セイルの案内で場所を変え変え、隠れながらその一部始終を見ていたミカロ。

その後。　マーリ達が中庭の建物から出てこなく成ったのを見届けたミカロは、冬の早まった夕暮れが始まる中で、セイルを伴って元の壁の裏まで逃げ隠れた。

「おし、いい情報が得られたぞ。　お前の案内で、中に侵入する経路も決まった」

と、セイル扮する見張りの肩に手をやり、喜々とした顔のミカロは云う。

セイルは、下手に。

「お役に立てれば何よりです。　しかし、ジェノサイダーの旦那は遅いですね」

ミカロは、もうどの道押し込む手筈であった場所なだけに、このセイルが扮する者に見張りを任せきり。　デュナウドは、ゆっくり休むのだろうと思い込んでいた。

「別に、そっちはいい。　今夜には、もう押し込むのは決定だ。お前が見張ってれば、他に人が居ても邪魔なだけだ。　それより、深夜頃にまた来る。　それまでは、此処で見張ってろよ」

此処で、セイルは…。

「あ～、あの…」

ミカロは、口答えかと思い。

「ん？　何だ？」

と、眼を細めて上からの視線を送る。

セイルは、建物の方を指差し。

「深夜は、寒いんで建物の中に居ます。　出来れば、建物の中にまでは来て頂けると…」

ミカロは、夜の暗い中では、確かに見張りは間近に成ると思い。

「そうだな。　あの破れた亀裂は解りやすく、夜でも俺が一緒なら案内は要らん。　ま、お前は中で中庭の建物でも見張っとけ」

と、承諾した。

セイル扮する者は、ペコペコと頭を下げた。

だが、これでセイルは襲撃に立ち会わずに済む。　セイルの冒す危険は、予想以上の成果を上げそうだった。

アンソニーが、立ち去るミカロを見送った直後に、セイルの元に現れる。

「セイル殿、行かせて大丈夫なのか？」

覆面を取ったセイルは、曇り空の空が赤く夕暮れに染まる彼方に消えたミカロを見送り。

「なんとか、此方の思惑に沿う情報を与えられたと思います。　今夜、深夜に襲撃が来るそうです。　もう、我々は、迎え撃つその準備に入りましょう。　今夜が、もう白黒を着ける時です」

ミカロの尾行は、テトロザが何とか回してくれた隠密行動をする部隊の者が追っている。　セイルから、ジェノサイダーが居る居場所

は知ったテトロザだが、大掛かりに部隊を動かす事はまだ出来ない。

テトロザは、密かにポリアの父親に会い、事の詳細を伝えて兵士の総指揮の了承を得た。　リオンの不在の中で、全ての権限を預かるポリアの父親は、有能なテトロザに全てを任せた。　自分が表立って動いたり指示を出せば、悪党達に直ぐ判るだろうし。　また、毎年行う年末年始の祝賀会を変更すれば、それだけで噂に成るからだ。

テトロザは、兵士部隊を配置する準備に追われている。　以前にも、ホローの時に使った地下水路等の通路には、既に悪党達の監視の目が入っていた。　此処で、考え抜いた末に、古い地下水道と坑道の一部を遣う事にした。

今、テトロザは、限られた隠密部隊を斥候として動かし、兵士の行かせる道の確保に忙しい。

一方。

悪党達は、水路の交わる大きな分岐点にのみ見張りを置いている。
　これは、手数が足らない為だ。

更に。　テトロザやセイルに運が見方する。

それは、ラヴィンと地元の悪党集団の話し合いが決裂に向かった事だった。

暗い廃屋の様な飲み屋の中で、ランプに入れられた蝋燭が弱々しい炎を上げる。　折れて転がるストゥール、腐って崩れたカウンター。
　どんなに客を入れても２０人も入れば満員に成る様な酒場の跡でだった。

ラヴィンは、リエルとその部下数名を連れて、漸く話し合いの場へと来れた。　昼頃に向かった指定場所では、ジェノサイダーに殺させた3人の敵討ちにでも来た様な雰囲気の悪漢達に囲まれた中。詰まらぬ小細工のされていそうな酒を出された。　何も手を付けず、ラヴィン達は静かに長々と待たされた。

そして、夕方も暗くなった頃。　やっと頭目達が会うと云う事に成って、今度はボロの廃墟に案内された訳だ。

ランプに火を入れたのは、力自慢を見た目に解る男の悪漢である。　そして、崩れたカウンターの向こうに、二人の偉そうな男が現れた。

「待たせたな」

と、先に入って来たのが、背が高く鼻髭を蓄えた長髪の男で。　蒼いスカーフネクタイをして、白いコートを貴族の如く気取って着ている。　後から入ってきたのは、煮ても焼いても食えないと思える笑みを浮かべた小太りの男。　商人と思える衣服の出で立ちである。

カウンターを挟んで、ラヴィンと二人の男の話し合いが始まった。

ラヴィンは、組織に加われば利点も多いと口説くのに対し、二人は何で組織に縛られる必要が有るのかと反論。　ここ最近の組織の動きは、悪党の社会を統べる様な支配力を見せ付け。　もはや、使役に近いと誰もが思っている。

ホローが盗賊団を作っていた裏には、ラヴィンに因って裏の悪党社会が横行に対して眼を瞑る様に仕向けていた部分が在り。　それが

崩壊仕掛けてる今の裏社会では、悪党達も徒党を作って一大勢力圏を作ろうと動く。

ラヴィンの誘いに、二人の頭目は明らかな嫌悪を見せたのである。

ラヴィンは、ジェノサイダーの存在をチラつかせるも、二人は偽って冒険者を募り。　悪名高く、その討伐のあかつきに齎される名声や報酬をエサに、戦い抜くと言い張る。

平行線を辿る話し合いの中で、ラヴィンは言いくるめるのは無理と判断した。　自分達組織の事を悪党達に判らしめるだけの腕の達つ無頼が、嘗てはこの場所に居たが。　今は、アハメイルなどには居ない。　組織の威光を背にしていた悪党集団は、リオンの手で壊滅させられた。　ホローの様な金権を示す金蔓も居ない今は、確かに不利な時節である。

（仕方がない…。　今は中立だけを約束させ、後で背くゴミを潰して行く事にするか…）

ラヴィンは、組織に与する者達の仕事が終わるまで、無用な手出しを控える事をだけを飲ませようとする。

処が。

寧ろ悪党達からするなら、組織の影響で兵士達や役人が暗黒街に踏み込む機会を与えていると云う。　組織の働きとやらが、一番稼ぎどきの今を邪魔していると。　しかも、我が物顔で地方の悪党達が街を彷徨き、兵士を挑発していると云う始末。

ラヴィンは、此処で頭目のこの二人を殺してしまいたい処だが。

一緒に連れてきたリエルの一団は、ジェノサイダーの襲撃に付き合わせたかったし。　此処で大騒ぎを起こせば、それこそ色々と面倒に成る。

「解った。　では、明日にもう一度話し合いをしよう。　此方も、見合う何かを用意する」

ラヴィンは、やや控えた声でこう云った。　頃合いは、日が暮れた夜の始まりである。

頭目の二人は、今夜が明けたら余所者を探す行為に出ると云う。これ以上自分達の権益を奪われるつもりは無いと…。　ラヴィンは、特にニヤニヤする小太りの頭目からは、ホローに似た嫌な気配を覚え。　もう、云うだけ手段に訴える手を用意しているのではないかと、勘繰った。

司令としてのラヴィンは、ミグラナリウス老人から請けた仕事を成功させる事を、何よりも最優先にしなければ成らない。　此処で新興勢力の悪党達と、小競り合いに時間を費やすなど馬鹿らしい。だから、今夜の襲撃で宝物の有無に白黒を着け、さっさと王都へと帰ろうと思う。　流石に、老人の傍を長く離れるのも悪い。

物別れと云う形で終わる話し合いに、組織の在り方が今の裏社会に溶けきらないと感じるラヴィン。　まさか、新興勢力の頭目風情に脅し返されるとは思わなかった。　だが、兵士の方とは違い、人質が有る訳でも無ければ。　また、力づくのゴリ押しで従わせるに足りる戦力が此処に無い。　ラヴィンとリエルの一味で五角に戦えるだろうが、被害も出るし今後に支障が出る。

（不気味だ…）

ラヴィンが思うのは、頭目二人が物別れでも構わないと強硬姿勢を見せれる根拠だ。　組織の勢力範囲は、世界規模。　それは、この二人の頭目も知らぬ訳では無いだろう。　それなのに、強気で出てくる姿が、只の虚勢や強情から来る無謀とは思えない。　ラヴィンは、その辺も調べさせようと思う。　ここまで来て、不意を突かれて足元を掬われては、ラヴィンも組織に見下されるからである。

ラヴィンは、小さな廃屋を取り囲む多勢の悪党達に見送られながら、雪がまた降りそうな暗雲の夜をリエル達と帰る。　リエルには、戻り次第ジェノサイダーと行動を共にする様に言い渡し。　自分は、別に動くと言い渡した。

≪ジェノサイダー…出る≫

ジェノサイダーのリーダーであるレプレイシャス…。　いや、真の本名をガルシア＝レプレイマー＝シャリングと云う貴族出の彼は、ラヴィンの早い帰りに危機感を強めた。

リエルの一味を従える事は了承したものの。　処の無頼から不意打ちなど受けたくは無いので、アジトを此処からもう一つの場所に移す様進言。

ラヴィンは、その場所をリエルが知るだけに。

「解っている。　だから、お前達にリエルを付き従わせるのだ」

と、少し余裕の無い言い方をする。

…此処からは、彼の名称を本名のガルシアに変えて。

ガルシアは、冷え込みが厳しく感じられるアジトで。

「んで、お前は襲撃に来ないのか？」

と、ラヴィンに。

「お前に任せる。　俺は、クドゥルとその部下を連れて、街に散るロイジャーの仲間を当たる。　どうも、あの頭目二人の態度が気に係る」

ラヴィンは、余裕の無い様子のままに、また外へ。

ガルシアの前に居たリエルは、初めて彼に喋り。

「さっきの集団の中に、冒険者が…居た」

その、若く綺麗な男性らしき声は、ガルシアには悪いものでは無かった。

「ほう～、喋れるんだ」

そう云うガルシアに対して、リエルは更に。

「魔法遣いも居た」

無視された感の在る雰囲気の中で、ガルシアは少し投げ遣りに。

「大方、屯組みの冒険者を寄せ集めたんじゃ～ないか？　ゴミが幾ら集まろうが怖くは無いが、御宅等だけじゃ～面倒に成る。　ま、襲撃が容易い内容で有るなら、帰りにソイツ等を殺すか。　逃げるのに面倒は、追われる時には困るからな」

リエルは、アジトに残っていた手勢も集め、全１２人をガルシアの前に集め。

「宝物の運び込まれた場所が解っているなら、今すぐ行かないのか？」

しかし、まだ動く気配を見せぬガルシアは、片隅に戻りながら。

「人の多い時間帯に動けば、俺達も目立つ。　街がある程度寝静まった頃の方が、俺達の暴れる頃合いよ。　流石に下手に動いて兵士をマジにさせて、テトロザや腕の達つ高位の騎士に当たると面倒だ。　先ずは、宝物の中身が最優先。　ラヴィンは、それが確認出来ないと不味いらしい」

「…」

リエルは、ガルシアの背中を見て無言の刺を送る。

「怒っても無駄だぞ」

と、云うガルシア。　だが、ガルシアも考えが在り、それを覆す気も無い。

街が年末を残す処一日と成る夜を、バカ騒ぎ色で染める。　花火の数は日増しに増え。　雪の溶け残る大通りを闊歩する人々の数も多ければ、街角を賑わす芸人の数もまた然り。

一方で、ロイジャーの集団を基本に、軍施設や役人の居る施設を始め、見張りは継続されている。　ラヴィンの動きで、明日には一旦アジトに身を隠す事が伝えられてゆく中で。　見張りの状況は、逐一と云った感じで伝わり。　細かい回数でガルシア・リエルの潜むアジトに報告が来る。

ガルシアは、もう仲間には武器の手入れを示してある。

リエルは、仲間とその様子を見ているだけ。

「リエル。　激戦も想定した用意はしろ。　真っ向でぶつかっても構わない用意をな」

ガルシアは、かなり真剣な声音で云った。　リエルは、寝込みを狙う襲撃と聞いているだけに。

「何故だ？」

広く寒いフロアの中、灯りの数も足りず薄暗い部分が多い。　木箱の上に、剥き出しの蝋燭が灯されている前に居るガルシアは、剣を抜いて見ている。

「ハッキリとした確証は無い・・。　が、罠も在りうる」

壁際に蹲っていたリエルは、直ぐに立ち上がり。

「何故？」

すると、長剣の類に入る武器で在る、引っかかりの様な刃の出っ張りを持つ変わった剣を見るガルシアは、表情を一つ変えずに。

「静か過ぎる…」

と。

「意味が解らない」

少し慌てた感じリエルは、ガルシアの間近に行く。

リエルの仲間は、それをじっと見守った。

ガルシアは、剣を備に見て刃こぼれ等を確認しながら。

「リエルよぉ、幾ら人質を取られたからってな。　国の連中ってのは、そんな簡単に負けを認める黙り（ダンマ）はしねぇ。　この動かない静けさは、下手すると向こうの作為の現れかも知れん」

リエルは、少し形の違う両目の視線をガルシアに突き刺したままに。

「予測出来ても、乗り込むのか？」

すると、此処でガルシアが不気味に余裕を残す視線をリエルに向け。

「まぁ…、想定内だからな。　下手に兵士が居るなら、魔法で殺す」

「…」

リエルは、ジェノサイダーの中でも一番まともに見えていたガルシアが、実は一番の知能犯ではないかと思えた。　この男は、何のためらいも無く、狂う事も無く人を冷静に殺せると判断した。　流石は、ジェノサイダーを率いるだけは在る。　…いや、狂った者達を率いるだけ、彼が一番狂っているのかも知れない。

（レプレイシャス……喰ってみたい）

ガルシアの事を認める事で、リエルの中で異質な別の者が蠢いた。
　彼女…いや、今は彼か。　だが、その目がやや緩み、妖しげな艶やかさを浮かべたのは事実である。

だが、ガルシアの読みも確かなものである。　もう、この場所は逆に見張られている。　報告に来る人の出入りなどが数えられ、明日にも成れば繋ぎの潰しも可能に成るだろう。　何処から来る情報が多く、何処から来る情報が少ないか。　少ない場所は、折り合いを見て兵士側も潰していく。　今までは完全な優位を確立した組織側が、今度は追い詰められる番に変わろうとしている。

そう、人質の居場所がまだ判らない処が、兵士達の動けない要素を保持している。

そして…。

街中が深夜に落ちて、人の往来に区切りが出始めた事を聞くガルシアは、仲間に向かって。

「そろそろ出るぞ。　殺す時になった手加減は要らねぇ、全員ブッ

殺す。　ハイニーズ、燃やせと言ったら、燃え残しは許さん。　デイブ、ゴストン、殺した相手は、誰かまわず好きにしろ。　生半可に死体を判る様な残し方をするな。　後から死体を見た奴が、誰か判らない様に。　見た奴が戦慄に怯え、俺達と戦う事に対して躊躇する様にしろ」

精霊魔術師のハイニーズは、“ウアウア”と言いながら頷くし。
殺戮狂愛者のゴストンは、身悶えする様に。

「声が・・早く声が聴きたい…」

と。

デイブに至っては、瞳孔の開いた眼をリエルやその仲間に向け。

「喰える・・人が喰える…。　頭も、目も、ドクドク動く心臓も喰える」

と、今にも飛び掛って来そうな様子を見せた。

交代で休むロイジャーの手下は、ジェノサイダーの面々が喜々と喜ぶ姿を見て、生きた心地のしない恐怖に犯された。　病気的な侵食より、暴漢に犯される様な畏怖を覚える。

リエルは、手勢１２人を引き連れ、ガルシアに従った。

黒いマントに身を包み、外に出る一行…。　フードで顔を隠すガルシアは、リエルの一味と仲間を引き連れて繁華街に近い場所へと。

もう深夜と云う事で、酒場は開いているが。　往来を行く人は、通

りの大きさや場所に応じて様々に成る。　遅くまで開く酒場の周り以外の通りは暗がりと成り。　闇が増えていた。

その中で、ガルシアは次々と馬車を襲う。　飲み屋が在る通りに面した脇道などに、主などを待って停車する馬車を襲い。　御者を殺し、時には中に乗り込んでいた者も犠牲にした。

「いいか、死体は通りのド真ん中に放り棄てろ」

死体を放置しては、直ぐに犯行がバレると思われる。　だが、これもガルシアの狙いであり。　死体の事で騒げば、役人はそっちに集中する。　兵士もまた、そうせざる得ない状況にしようと云う事だ。

御者も出来る悪党に一台の大型馬車を任せ、リエル達を先に行かせたガルシア。

更に。　後を追う馬車を調達しながら、もう従業員などの居ない店の外側にハイニーズの精霊魔法を撃ち込み。　深夜の街に先制攻撃を加えたのである。

老人の御者を殺し、首を切り落として喰らうデイブに、

「デイブ。　行くぞ」

馬を操れるガルシアとレイが馬車を支配し、デイブを急かせた。

繁華街の酒場から、魔法が撃ち込まれた異常な爆音を聞き付け人が出てくる頃。　ガルシアの操作する馬車が、仲間を乗せて貴族区に走り出した。　リエル達を乗せた馬車の御者は、デュナウドを運んだ御者であり。　ガルシアを道案内をするのは、ミカロだった。

遂に、ジェノサイダーが動いた。　向かうは、セイル達が待ち受けるマーリの一族が嘗ては住んでいた居城である。

この狂気に染まった殺人集団を、セイルはどう迎え撃つのか…。

そして、その勝敗の結果は…。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、有難う御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

最終編

第一章・旅立ちの三部作・つき≫

≪セイルの思惑、成功に

深夜。　ジェノサイダーが街で暴れ出した頃。

仮眠を取ったセイルは、寝ずに兵士達と見張りを続けたアンソニーに礼を云った。

「済みません、勝手に休みまして」

塔型の中庭に有る建物内にて。　窓際に佇むアンソニーは、笑みを薄く。

「なに、死人は寝る必要も少ない。　起きている疲れは無いからね」

暖炉に弱く炎が熾る。

セイルが起きた事で、中庭の塔型の建物一階に一同は集まっていた。
兵士を指揮する男性一人に、一般兵士7名。マーリの率いるチームも居る。暖炉の間近で、椅子なども置かれた広間部分に皆が居る。

黒いピアリッジコートに黒塗りの軽鎧を着けたマーリは、セイルへ向き。

「で？　これからどうする？」

セイルは、仮眠している間に何度も届いた見張りの知らせを全て聞いた上で。ジェノサイダーが動く少し前の最後の様子から、もう直ぐ此処にジェノサイダーの一味が来ると予想した。

「最善の策で攻めましょう。此処は、今は見張られていません。ですから、兵士の皆さんはこの敷地から出て、敷地に入る表門の向かいに在る朽ち掛けた屋敷に隠れて下さい。もし、戦いの声が上がったら、出来るだけ不意を突く形で攻撃して下さい」

兵士を束ねるのは、色黒で筋骨隆々とした体格の分隊副長ボビー氏である。セイルの話を聞いた彼は、金属製のアーメットヘルムを片手に。

「解った。相手の背後を攻める事を心掛けよう。テトロザ様から、全ては君に従えと命令を聞いている。その命令は、必ず達成する」

セイルは、ボビー副長に頷きを贈ってから、今度はマーリに向き。

「マーリさん、手勢は総勢何名ですか？」

仲間と護衛の一人を見るマーリは、

「私を入れて7人だ。　仲間の5人に、用人補佐で一番剣の冴えが鋭いカルカッテを連れてきている」

と、言い。　セイルに采配を仰いだ。

マーリの仲間を見るセイルは、肉弾戦に強き者はマーリを含めて4人だと思い。

「マーリさん達は、外側の屋敷に入る大扉の外。　左の壁際に有る納屋に隠れて下さい。　相手が我々を確実に潰すなら、後ろから入って、只攻撃を仕掛ける様な真似はしないでしょう。　一番可能性が有るのは、表と裏からの挟み撃ち。　宝物を手に入れる事を一番に考えているなら、裏から入る攻撃は奇襲にすると思われますから」

マーリは、その話に腕組みして。

「フム、有り得ない話では無いわね。　で？　私達は、その表に来た一団を迎え撃てばいいのね？」

その理解に、セイルは自分の仲間を見て。

「それだけでは、相手を逃がす可能性も在ります。　それに、聞くにジェノサイダーには、精霊魔法を遣う者と、魔想魔術師も居るとか。　魔法をこの建物や、外周の建物に撃ち込まれては大変です。　ですから、僕以外の仲間も同行させます。　魔想魔術師は、此方のアンソニー様と。　精霊遣いは、此方のユリアちゃんとぶつかる様に仕掛けて欲しいんです」

セイルの話に、マーリやらユリアなども眼を見張る。　マーリが直ぐに。

「何だと？　では、セイル君はどうするの？」

壁側によけた椅子に立て掛けられた安物の剣二振り。　それを見るセイルで。

「僕は、一人で外周の建物に潜みます。　奇襲にゾロゾロ裏か来るとは思われません。　一番暗殺の能力に長けた２・３人が来ると予測します。　僕は、逆にその侵入者を迎え撃ちます」

「本気っ？」

マーリの思わずの一言。

クラークがセイルに寄り。

「私も同行します」

と、云うのだが。

セイルは、クラークに右手を出し。

「それは困ります」

ユリアは、セイル一人で勝てるのか心配で。

「セイル…何で一人で？」

「うん。　相手が殺しのプロで集団なら、強い相手を確実に削る必要が在る…。　昼間に、一人は捕まえられたけどね。　聞いた所では、他に剣に秀でた相手が3人は居る。　相手がどう襲撃してくるかは、この目で見極めた上で戦わないと。　僕一人なら、裏手に忍び込んで見極められる。　相手が少人数なら、狭いあの場所は僕に有利だし」

クラークは、食い下がろうと。

「ですが、御一人では…」

セイルは、危険は承知と云った顔で。

「クラークさんの槍は、狭い場所では本領が発揮出来ない。　しかも、僕と攻撃を入れ替えての連携には、あの崩壊した部分の多い建物内部では狭く。　不利を招き兼ねません。　他の人では、アンソニー様以外に共を出来る人は無く。　逆に、魔術師の魔法を魔法で相殺出来る上に、意識を乱せる魔法の遣い手であるアンソニー様は、魔想魔術師を潰せる最強の相手。　だから、僕と行動を共にするより、リスクを削る意味では表に回した方が上策です」

ユリアとアンソニーは、セイルの思いが良く解った。　魔法を人に向かって平気で遣える者は、戸惑いも手加減も無い。　この戦いの中で、セイルは剣士でも唯一魔法に対抗出来る手段を持ち合わせている。　だが、兵士の皆を含め、他の者は魔法を無力化する術を持たない。　マーリの仲間には、僧侶が二人に魔想魔術師が一人。　だが、暗殺者などの凶悪な者を相手にした経験は無い。　強烈に強い強欲や殺意・・悪意。　こうゆう意思を前にすれば、恐怖が先行する。　セイルは、死人を一人も出したくないと云う思いから作戦

を立てているのだ。

アンソニーは、この場に居てセイルを見る皆を前に。

「彼が言いたい事は、相手が悪意や殺意に染まった狂乱者達であり。無闇に魔法を乱発されたら、死人が出る事を恐れていると云う事だ。　クラーク殿を此方に回すのも、前に在った襲撃を聞いても解る通り。　相手が強いからだ。　裏から、こっそりと2・3人だけが来るなら、セイル君の云う通りにするのが望ましい。　信じて臨むか、疑って乱すか」

と、ユリアを見る。

ユリアは、言わずとしれてると。

「セイルの云う事に、今まで間違いは無かったわ。　アタシは、セイルがそうしろって言うなら、そうする…」

すると、セイルは剣を取りに動き。

「では、もう動きましょう。　此処に敵が来るのも、もう直ぐかと思います」

マーリは、仲間を見て頷いた。　もう、議論をする時間も無いと思えたからだ。

クラークは、セイルを見て心配しか浮かばない。　そんなクラークの肩に、アンソニーが手を置き。

「さ、行こう。　もう、賽は投げられたのだから」

アンソニーの言葉に、クラークは眼を伏せる。

（これも運命か。　やはり、あの剣神皇の祖父を凌駕する器なれば、命を危険に晒し続けねば成らないのか…。　降りかかった火の粉とは云え、まだ１６のセイル殿にこの戦いは厳しい。　だが、生き残る余地が無いとも云えん…）

クラークは、いざとなったらセイルの助けに向かう事を胸に秘める。

さて。

役人の一団を束ねるボビー副長は、雪が止む暗闇の庭に出る。　表門の在る外庭に出れば、雪の敷き詰まった一面と、建物や敷地を嘗ては囲った高い壁の部分崩壊した様子がもう闇に紛れて。　只只、寒い空気が支配する暗闇と静寂の世界であった。

「行くぞ」

兵士を大勢殺害した悪党や凶悪な冒険者との戦いを前に、兵士の７人は皆が余裕の無い顔をしている。　ボビー副長は、セイルの指示に従って闇の向こうに朽ち掛けて佇む屋敷へと向かった。

一方。

「いよいよだな」

白い息を吐き、気を引き締めるマーリの一声。

セイルを抜いた一同１１名は、中庭から兵士の一団と外周の建物に

入ったのだが。　其処から建物の中を歩いて北東方面の勝手口に回る。　嘗ての勝手口は、ドアを成していた物は朽ち果てて無い。その枠を成すブロックの様な石組みの壁も、奇妙に歪んで壊れかけていた。

マーリを先頭に外に出た一同。　マーリの仲間は、誰もが無口で喋らない。　やはり相手のジェノサイダーの名前に怯えているのが伺えた。

マーリが、自分の入るチームを2・3呼んだのだが。　その中の4人は、先の襲撃で怪我をしてしまった。　マーリを信頼し、結束力も高いチームそれぞれだったが…。　博物館を襲撃された時、薬の影響も有る賊は獣の様に狂っていた。　女性を見ればあの争いの中でも興奮して、獣の如く半狂乱で襲い掛かろうとするし。　武器を叩き落とそうが、負傷させて行動力を奪おうとしても。　爪や歯を立て襲い掛かって来た賊共は、確かにモンスターと似た恐ろしさが有った。

あの異常な賊を相手にした戦いで、マーリと付き合いの長い冒険者達も憶病風に吹かれた。

今回マーリの連れてきた仲間は、怪我人を抜いた中での寄せ集めである。　その中でも僧侶は、一人は信仰厚い女性の僧侶だが。　もう一人は、知識の神を信仰する学者で、信仰よりも知識欲が強く魔法の強さはさほどでは無い。　僧侶二人は、怪我人を助ける役に。　魔想魔法が遣える男性には、皆の視界を保つ為に光を頼む。　他のマーリ以外で、剣や武術の腕を期待出来るのは、剣士の女性アニー、戦士で棍棒や格闘術を嗜む無口でノッポの男性ホアキン、そしてマーリの護衛係に成ったカルカッテだ。

カルカッテは、マーリの命令と絶対的な使命が有り。　また、博物館を襲撃した賊を討ち果たすと云う意義が有る。　しかし、冒険者の面々は、パトロンとしても自分達を頼るマーリへの友情や義理人情だけが意義であり。　本心としては、危なくなる前に手を引きたい部分も有る。　彼等の目に、セイル達は迷惑な存在としか映っていない。

貴族で在るマーリは、その辺の思慮を推し量る所は鈍かった。　襲撃の影響も有り、そこまで頭が回っていないとも云えるだろう。

さて。　外に出て、辺りを警戒しながら忍ぶ様に進むマーリ。

勝手口を出たクラークが、アンソニーやユリアの前を歩く。　すると、急に右脇を行くカルカッテから。

「貴方は、槍を遣うのか？」

と、聞かれ。

「如何にも」

と、短く答えた。

カルカッテは、セイルの素性や自分たちの事を知らないのだろう。

「私は、マーリ様に従う。　貴方のリーダーとか云うあの若者に従う気は、無い」

クラークは、それでも同じ事だと思う。　だが、此処でそんな議論をするのは無意味とも悟り。

「それでも良い。　この危機を脱するには、皆の協力が不可欠だ。
今は、勝つ事にのみ専念するだけよ」

淡々と言われたカルカッテは、貴族としては格式の高いマーリの家に仕える自分で。　それに見合った剣技を身に付けたと云う自負が、何故か揺さぶられた。　静かなクラークが強い事は、カルカッテも肌で解る。　だが、あの少年の様なセイルが強いとは、彼には思えない。　自分より弱いセイルが、単独で裏を張るなど不安であった。

だから。

「私の見る所、貴方の方がずっと強いと思える。　裏から強者が来るなら、何故に貴方が行かぬのかが解らない」

これから気の抜けない戦いを前にするクラークは、的外れな物言いに返す言葉が見当たらず。

「…」

と、黙った。

ユリアは、そのカルカッテの口調にムッとしたが、これから戦う方が心配で言葉も出ない。

アンソニーに至っては、セイルの強さが解らないのは当然だと理解している。　セイルが巧みに隠しているし。　彼の強さは、まだ固まりきった成熟に達していない。　寧ろ、今燃え上がったばかりのマグマと同じだと思っている。　アンソニーのカンでは、セイルがこの戦いで死ぬとは思えない。　寧ろ、もっと羽ばたきそうな気が

するのだ。

さて。　嘗て昔、納屋の隣に在る下働きが住んでいた石造の小屋。
その入口にマーリは立ち。

「この中に。　中から窓を窺えば、篝火の置かれた広場が見張れるかも知れぬ」

外周を成す建物の正面玄関前。　大扉の前は階段が在り。　その階段前は、馬車を横付け出来る広場に成っている。　見張りを置くに丁度良い広場は、焚き火が残され。　まるで見張りが続けられているかの様なままに成っている。　兵士がちょっと前まで居た様な形跡が、外周の建物の表門前に残されていた。

入り込んだ小屋の窓に、もう窓は嵌っていない。　暗闇の此方から、篝火の焚かれた正面の広場はよく見える。

ユリアは、中に入ってから窓の外を見て。

「よく見える。　いい場所に小屋が在るのね」

すると、後から入ったアンソニーが。

「昔から貴族の馬車には、ランタン等の照明器具が完備されていたんだ。　庭や表の玄関先が見える位置で有れば、主が夜遅くに戻っても出迎えるに容易いだよ」

「ふ～ん、どこまでも御主人様が中心なのね」

「主従とは、そうゆうものなのだよ」

「ふぅん」

フード着きのマントを羽織るユリアは、杖を握って小屋の奥に向かう。

ユリアは、まだセイルと同じ１６歳。　少女の様にも見えるユリアを見るマーリの仲間は、これから起こる戦いに子供が必要なのか…。

　不安と迷惑を浮かべたそんな顔を見せる。　マーリが居ない場所なら、何か言い合いでも起こりそうな所だろうか。　それこそ、子守りにアンソニーとクラークが居る様な感じなのだろう。

さて、二手に別れ、潜むのは終わった。

最後に、剣を腰に一振り佩き。　もう一振りは、手に。　セイルは中庭を出て、壁の切れ間から外周を成す建物の一階に踏み込む。白い息を抑えて歩くセイルは、ミカロに教えた亀裂に向かった。崩壊した壁の御陰で、吹き抜けに一部屋が廊下から見える場所の直ぐ近くである。

セイルのカンは、危険を強く伝えていた。　殺す事を前提に攻める相手は、卑怯な手も躊躇わない。　特に、ジェノサイダーのリーダーは、情け容赦など微塵も持たないと云われる。　セイルも大金持ちの家で、噂や情報が下手な一般人より遥かに集まりやすい環境に居ただけに。　その聞けた噂を総合しても、非道と云う意味では天才的な一団が相手だと理解している。

テトロザの持ってきたジェノサイダーの情報でも、犠牲を生む事に肯定的で、仲間を使って殺して暴れ回らせる事に掛けては徹底的。

　時には町を滅ぼし。　兵士の分隊を皆殺しにした事も一度や二度

では無い。　殺す相手の家族を犠牲に巻き込み。　家や屋敷のみならず、周囲に被害を出す事も当たり前。　若い女性の受けた被害は、それは筆舌に尽くせぬ有様だとか。

しかし、セイルはその話を聞く内に、ジェノサイダーの手口にパターンが在るのを見た。　先ず彼等は、魔法を使って騒ぎを起こしたり、先制の一撃を与えてくる事が多く。　建物の中に押し入る時は、特にそうだ。　しかも、何れの手口を聞いても、非常に使用人の死に絶える事が多く。　ジェノサイダーの到来は、彼等が去ってから解る事が多い。　セイルからするなら、大抵これは不思議な事で。

　この様子は、騒ぎを恐れて、皆殺しをする悪党や強盗集団の手口に酷似している。

（恐らく、魔法で騒ぎを起こして、逃げたり知らせに向かう者から順を追って殺してる。　挟み撃ちや、包囲網を敷いて、皆殺しを狙ってるんだ…）

こう思ったセイルだけに、それをさせる訳には行かなかった。

セイルがジェノサイダーと直接関わるのは、今回が初めてだ。　だが、間接的に…なら、今回が初めてでは無い。　実はこのセイル、ジェノサイダーに対する一つの遺恨が在る。

殺し屋集団としてのジェノサイダーの結成は、もう１０年を超える程に古く。　かなりの活動が続く。　しかし、その加わる面々は、時を重ねる毎に増えたり、減ったりしているらしく。　その悪行は、マーケット・ハーナスでも在った。

セイルがまだ１０歳の頃。

セイルは、非常に使用人とも仲が良く。　母親と父親の影響から、ユリアや孤児院の子供と商業施設に遊びに行く事も屡々だった。

そんなセイルだが。　特にセイルの家の系列に与する運送業者に、セイルへ海の事を教えてくれた男が居る。　独り者で、船乗り一家の長男ながら非常に無口で、結婚もしないで船長をしていた中年男性だ。　港へこっそりと遊びに来たセイルを、唯一人短い言葉で叱り飛ばした人物であり。　セイルは、逆に人間として真っ直ぐな相手だと感じた。

しかし、その男の動かす船が、ジェノサイダーに襲撃されて炎上し掛けた船を助けに行った。　内海に停泊していた超大型客船が炎上し、その助けに向かった船長の男性も巻き込まれて殺された。　無惨に斬られ、帰らぬ人と成ったその男性だが。　セイルの祖父は、自業自得だと一蹴した。　しかも、勝手な行動だと言い。　祖父エルオレウは、その男性の一家が営む運航船を扱う店を、自分の傘下と成る系列から切ったのである。

マーケット・ハーナスの国政を務める商皇１０傑。　その長を務めるエルオレウは、船を出して警察役人が返り討ちに遭ったにも関わらず。　逃げたジェノサイダーをまた戻らぬ限り、国としては構うなと云ったとか。　自分の既得権益の領域に関わらない限り、時として平気で対処をせぬ所が在る祖父。　ウマの合わないセイルからするなら、祖父の行いもジェノサイダーも許せる相手では無かった。

ユリアも、ジェノサイダーが殺した事を知らないだけで。　慕う船長の船を迎えに、セイルが港へ行く事も知っていたし。　セイルが海の事を知りたくて、日焼けした無口の船長に色々と尋ねていた事も記憶に在るだろう。

セイルにするなら、敵討ちが出来る機会でも在った。　そして、祖父の見逃した相手を潰せる機会でも在る。　セイルにとって、ジェノサイダーは単なる火の粉では無かったのだ。

この裏の事情は、酷く複雑で在り。　また、後々にセイルも知る事に成るので在る。

≪血戦の火蓋は、静かに切り落とされる≫

マーリの一族が嘗て住み暮らしていた居城。　その背後に回る様に、影が南方から忍び寄ってきた。　ジェノサイダーの一団と、リエルの率いる一団。　そして、道案内に駆り出された御者をしていた悪党と、ミカロが一緒である。

ミカロがセイルと在った外壁の裏側に到達した悪党の集団。　レプレイシャスと名前を偽るガルシアへ、リエルが寄り。

（奇襲を仕掛けよう）

と、云うと…。

黒いコート風のマントに身を包むガルシアは、ニタリと笑みを浮か

べ。

（いや、二手に別れる。　一隊は、大勢で正面に周り、ハイニーズとサロペンが魔法をブチ込んでから慌てて出てきた輩を殺して行け。　裏からは、俺とレイが行けばいい。　中庭の塔に隠された宝物を確かめに向かいながら、知らせに走る奴を殺していく）

リエルは、挟み撃ちで逃がさない気なのだと解る。

ガルシアは、更に仲間に寄り。

（ハイニーズ、サロペン、手加減は要らん。　建物の正面をブッ壊せ。　ゴストン、デイヴ、出てきた者は残らず殺せ）

眼を血走らせ、もう殺戮する事を予想して興奮し出すジェノサイダーの面々。

再度リエルに向くガルシアは、

（お前達は、俺の仲間の討ち洩らしを殺せ。　建物に入ったら、誰一人として表から逃すなよ）

と、云う。　その低い声は、もう戦闘態勢に入っている証であり。　割合に悪くない見てくれのガルシアが、殺意を目に宿して悪魔の様に云うのだ。

流石のリエルも、ある種の畏怖を感じて身震いを覚える。　リエルは頷くだけで。　脳裏では、

（これがこの男の本気か。　なる程、これは怖い）

と、動物的な感覚から感想を浮かべる。　今のガルシアには、リエルも卑怯な手を使わなければ勝てる気がしない。　それ程の残虐性が、眼や顔に窺える。

真っ暗な中で、もう庭と他の敷地が雪で境も解らない。　仄かに表の方が明るく見えるので、外周を成す建物の正面広場前には、兵士が陣取って居ると予想出来たガルシア達。

（行けっ）

顔を動かし命令したガルシアの言葉に、ハイニーズ、ゴストン、サロペン、デイヴが動く。

リエルは、ガルシアへ。

（なら、表に回る。　建物の中で、見張ってる仲間と落ち合うのだろう？　宝物が有る時は、此方が預りラヴィン様に届けるからな）

ガルシアは、頷くだけだった。

リエルの率いる一団が、先に動いたジェノサイダーの面子を追う。

ガルシアの脇に出たレイと云う人物が、

「で？　中で落ち合うの？」

と、云うと…。

ガルシアは、その質問に答えず。　ミカロを視線と顎で呼び、目の

前にミカロが来ると。

「その亀裂に案内しろ」

「へい。　こちらです」

セイルに案内された時と同じく。　ミカロは、八角形を成す一階の建物に侵入出来る壁の亀裂へと、ガルシア達を案内すべく先行し出す。

昼過ぎに通った雪の踏み固められた道を行く。　膝上まで積もった雪の中で、明らかに人の行き来が有ると解る。　裏手に向かう影に成る場所だが、レイは随分と踏み固められた道だと怪訝に思うのだった。

美しい美声を放つレイと云う面体の解らぬ者が、ミカロの後を行く。　碧眼が闇で色が解らず、不気味な深みの有る眼だけが見えている。　ガルシアが後を行き、その後ろに付いたのが御者をしていた男。

だが。

ガルシアが、不意打ちの如く振り返った。

「っ?!!!!!!」

御者をしていた悪党は、口にガルシアの握っていた雪を押し当てられ。　腹部には、鋭利な刃物が刺し込まれた。

「…」

流石に人を殺し慣れたガルシアである。　悪党の男の腹部に刺した刃物を激しく抉り回しながら。　絶叫を上げようとする男の口を押さえ、口の開く隙間に雪を押し込みながら俯かせる様にする。　声が出ない仕様で殺す技で、雪の上を走る風の音が強い一瞬を狙った行動だった。

微かな呻きや嗚咽の断片が耳に触った気がしたミカロは、何か在ったかと振り向こうとすると…。

「亀裂は大きいのか？」

と、ミカロの視界を塞ぐレイが云う。

「あ・・いえ。　人一人が入れる程度でさ」

「なら、私が先行して入る。　何処だ？」

「はぁ」

ミカロは生返事を返すと、気味の悪い感覚を背負いながら亀裂に向かう。

この時ジェノサイダーの面々は、雪の積もった屋敷脇の庭で在ったと思われる場所を行き。　表庭の比較的雪の積もりが浅い場所に回った。　庭の中でも、元の正面ロビーに向かう花道であった付近は、兵士や馬車の往来が有ってか雪が薄い。

そして…。

外周を形成する母屋の建物。　其処に入る大扉の前は、幅広い３０

段以上の階段が残され。　馬車が停車する広場には、兵士が見張りの為にと焚かれた篝火が3つ程置かれる。　表庭からその広場に踏み込む通りには、花道を飾る石のアーチがボロボロに風化しながら残っていた。

その様子をハッキリと確認出来る所まで、庭から迫ったジェノサイダーの面々。

もう、声を押し殺す事も止めた彼等で。

「ハイニーズ。　ご丁寧にランタン代わりが有るぜぇ」

サロペンは、炎の精霊を呼び出すに遣う火が、篝火で事足りると云えば。

「ううううあああああ～、ひぃぃぃぃぃ～。　あつあつのひひひひひひ……」

知らぬ者では、ハイニーズの感情が解らないだろうが。　ゴストンは、得物の武器を引き抜き。

「ハイニーズも御喜びだぜ。　焼いてっ、刻んでっ、滅多刺しだぁっ！」

後から来たリエルは、相手を見る前から喋るなど有り得ないと思う。

（なる程、確かに狂ってる）

ガルシアと云う切れるリーダー無しなら、共に行動するのは命取りだと思えるリエルだ。

しかし、早く殺戮を始めたいデイヴは、サロペンに迫り。

「早くするのよっ！！！！　さもないとお前の心臓を抉りますぞっ？！」

瞳孔の開き切った不気味さ極まりないデイブ眼が、殺気を孕んで迫る。　男の女言葉が、不気味に響く。　しかし迫られたサロペンは、驚く事もなくニヤニヤと喜んでいて。

「うひひひ、俺とハイニーズが一番手だ。　後手は後ろで見ていろさぁぁ～」

と、躍り上がる様に篝火の在る方に走る。

その様子を見るリエル一味は、何処にでも居るワルガキ達が暴れる様な雰囲気を感じた。　人を殺す前にして、こんなはしゃいで悪態を見せる彼等が非常に狂って見える。

所の不良ワルガキが、悪さをして騒ぎ喜ぶ様な素振りで走るサロペン。　その後ろを、両手を広げる様に左右へ開き、ボロマントをはためかせる様にして追うハイニーズが居る。

篝火の焚かれた明るい大扉の玄関前に、サロペンとハイニーズが到着する。　デイヴとゴストンは、先に行く二人が潜った石造のアーチを、二手に別れて外側から周囲を警戒しながら進む。

この時、サロペンの杖が持ち上げられた。

「ヒャハハハっ！！！！　滅落したこの辺は、死人の気配がプンプ

ンしてらぁっ！！！！！　此処は死人が良く似合うぜぇぇーーーっ！！！！」

そう歓喜の叫び声を上げたサロペンの眼が、ドス黒い血の色のオーラを帯びる。

一方。　ハイニーズは、短い杖を持ちながら篝火の元に。

「お先に行くぜっ！！！！　破壊を齎す魔法の剣よぉおおおおおおっ！！！！！！！！！」

朽ち掛けた木の大扉が、少し高みの階段上に見える。　城と言って良い外観の屋敷の大扉に向かって、サロペンは剣の魔法を撃ち込もうとしたのだ。　青白い光を放ち、サロペンの頭上に大男並みの大剣が形造られた。

大扉前の広場に入ったデイヴとゴストンは、辺りを見ながら誰か出てこないかと注視する。

「いけぇぇえーーーーーーーっ！！！！！！」

サロペンが杖を振り下ろし、剣の魔法を飛ばす。　デイヴやゴストンの後ろに追い付いたリエルは、飛ばされた魔法が大扉を突き破ると確信した。

が。

闇の中を何かが走った。　黒い稲妻を帯びた何かが、放たれた剣の魔法の行く手を阻み。　大扉へと上がる階段に所で、

“ビシィィっ！！！！！！”

っと、空気を震わせる振動を上げた。

「うぉあっ！！」

「どぅおおわわぁぁぁ」

間近に居たサロペンとハイニーズは、その不意打ちと云える現象に驚いた。

デイヴは、黒い稲妻が飛んできた方を見て。

「何者ですのぉぉっ？！　姿を見せなさい…、殺してやるぅぅっ！！」

と、殺気を込めた声を投げる。

すると。

「全く無粋にも程が有る。　学院にて、魔法の正しい使い方を習わなかったのかな？」

広場の左奥。　篝火の灯りの影響で真っ暗に見える闇の中から、アンソニーが浮かび上がる様に現れた。

死人の顔色ながら、貴賓の溢れた美しい顔立ちをするアンソニーを見て。

「う・・そだろ？　コイツ・・モンスターだっ。　死人だぞっ？！」

と、サロペンが云う。

驚いた様に体を揺らすハイニーズは、篝火の中に杖を入れ。

「いでおっ、モロ・バビリオぉぉぉンっ！！」

と、炎を引き摺り出す様な仕草をすると。　篝火の炎が風の方向も無視し、急激に上に燃え上がる。　すると、炎の中から真っ赤な火に包まれた蛾が現れたではないか。　火の粉を鱗粉の様に落としながら、人の顔程の蛾が飛び立つ。

「せ～れ～まほおおおだぁだぁぁぁぁ～」

ハイニーズが杖をグルグル回せば、宙を飛ぶ炎の蛾は弱々しく落下しそうに成りながらも動く。　アンソニーに腹を見せる様な姿勢に成った炎の精霊は、炎を纏う鱗粉を飛ばそうと羽ばたいた。　所が、羽ばたきも束の間、精霊の動きが宙で止まる。

「おいっ、ハイニーズっ」

ゴストンが何をしてるのかと言い寄ろうとすると…。

「あうあうあうあう…。　しぇ・・しぇいれいがぁぁぁ」

突然にハイニーズは頭を抱え、その場に蹲っているではないか。

リエル達も前に出てきた中で、アンソニーの後ろから。

「いい加減にしてよっ！！！　精霊だって生きてるんだからっ！！

！！　消耗品みたいに扱うならっ、精霊遣いなんかしないでよっ！！！！！！！」

ユリアの大声である。

「なっ、何だァっ？！！」

宙で動きを止め、静止していた精霊を見るサロペンは、蛾の姿をした精霊が煌めく火の粉に変わり。　そして篝火へと戻っていくのを目にした。　今まで見たこともない現象で、何が起こったのか解らない。

アンソニーの脇に出てきたユリアは、右の肩に水の精霊である水蜘蛛と宿し。　左の肩には、炎の鳳が浮いている。

サロペンも魔術師の端くれである。　遣う事にばかり生きて、感じる事を怠ってきた彼だが。　ユリアの召喚している精霊の属性ぐらいは解る。

「バカな…。　反属性の精霊を従えるっ？！」

一方のユリアは、怒りを目に表し。

「精霊魔法は、破壊の為の物じゃないっ！！！　これ以上、精霊を悪用させないんだからっ！！」

ギラギラろ眼を見開くデイヴは、ユリアとアンソニーを獲物とみなし。　得物であるナイフを手に歩き出す。

だが。　今度は其処に、長柄の槍を携えたクラークが現れ。　ユリ

アやアンソニーの脇から、大きく前に踏み出して来ると。

「なんと云う汚れた眼(まなこ)よ。　理由は在ろうが、己らの所業は許せぬぞ」

と、デイヴの眼を見据えた。

「…」

ピタリと立ち止まったデイヴは、クラークの眼力に留められた格好である。

狂喜して攻め込んできたと云えるジェノサイダーの面々と悪党達だが、たった3人の登場で静寂に堕ちる。

リエルは、数の有る手勢を広げ、3人を見るのだが。

「意外に易く誘き寄せれたな。　宝物を狙うクズ共めが」

マーリの声がして、ユリア達3人の周囲に、潜んでいた全員が合流した。

デイウは、戦闘態勢が相手も万全であると見て。

「罠だわ…」

と、呟いた。

頭を抱え、震えるハイニーズを他所に。　殺気と陥れられた感覚から、ワナワナと口を歪ませるサロペンが杖を握る。

所が。

緊張が高まる中で、攻め入って来た悪党達の後ろの闇が、急に殺気を孕みながら蠢いて来る。

「はっ。　誰か来るっ！！　しかも・・大勢？！」

リエルの部下の一人が、雪を踏む音を背後に感じて振り返った。

表庭の向こうから、何かが近付いて来たのだった…。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

8月中でセイル編を終わらせた後、またお送りする内容の整理に入ります。

ご愛読有難う御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終話

≪止まらない事態に　窮鼠は、どちらか≫

「リエルっ。　首尾はっ?!」

マーリの一族が、嘗ては住み暮らしていた居城。　その正面玄関に当たる大扉の前に、階段を下った場所が広場に成る。　そこで対峙したユリア達3人にマーリの仲間を加えた一同と、ジェノサイダーの4人と行動を共にするリエル率いる悪党集団。

所が、冒頭の言葉を発して其処に現れたのは、ラヴィン率いる別の集団だった。

「新手か」

短く呟くアンソニーに対し、驚いた様子なのはリエルやジェノサイダーの面々。　リエルは、思わずに。

「ラヴィン様、如何致しましたか?」

両者が対峙する場所に現れたラヴィンは、まだ戦いが始まっていないのを見て。

「詳しい話は、後だリエル。　直に、此処へ兵士の大隊が到着するやも知れぬ。　早くこの者共を殺し、宝物の有無を確認しろっ」

デイヴは、屍蝋化した様な青白い顔をラヴィンに向け。

「何を焦ってるのさっ？！　罠を仕掛けたコイツ等をっ！！！」

と、金切り声を上げる。

しかし、今までに無い程に焦るラヴィンで。

「喧しいっ！！！　我々は、酷く危うい立場に居るのだっ！！！！！！」

と、声を張り上げたのだ。

冷静に見れるアンソニーは、クラークの脇に進み出ながら。

「どうやら、此方に援軍が向かって居る様だ。　援軍の到着まで、暫し堪えていれば助かるかな」

と。　雪の上を走る風が、アンソニーの纏う上質のマントをはためかせる。

何故、ラヴィンが此処に現れ。　そして、どうして焦って居るのか。

実は…。

あの夕方にラヴィンと交渉に出向いた悪党の一味は、密かに役人や兵士と密通を結んでいた。　仲間の一部は、表向き怪しげな店を遣っていたり。　暗黒街に近い場所で、飲み屋などを営む者が居る。

その者を動かし、ラヴィン達の事を兵士へと密告させていた。

更に、ロイジャーの一味が連絡を伝え合う繋ぎの場をも、兵士へ通報していたのだ。

ラヴィンが手下を連れて、商業区の彼方此方に在るその繋ぎの場を回る中で。　ロイジャーの一味の一人が、見回りの役人から身元の詮議を受ける羽目になった場所に遭遇する。　これは、ラヴィンと交渉に臨んでいた悪党が仕掛けた罠であり。　その繋ぎの場に居た悪党は、軽はずみにも人質の事を言ってしまうのだった。

ラヴィン率いる悪党数名が物陰に隠れて見ている中で、ロイジャーの手下と兵士の争いが始まった。　騒ぎに、繋ぎの場に居た3名の手下も出て来る。

（チィっ！！　何とも具合いの悪い間で…）

人の往来も在る中で、その争いにラヴィンが入るのもはばかられた。

逃げる事を祈りながら見ている中で、巡回の兵士も現れ、その場に居た4人が全て拘束された。

（ふむ、これは釈放要求を出すしかないか）

困るラヴィンは、捕まえられた一味を脅しで釈放させようと思う。

所が…。

街の中の所々で、兵士や役人に身元の詮議を受け、争うロイジャーの一味が次々と捕らえられている実態が解った。

“明日になったら…”

夕方過ぎの話し合いで相手が云った言葉が、騙す為の言葉だったと悟るラヴィンで。　地元にとぐろを巻く小悪党を捕まえては、賑わう街の裏で締め上げてみると…。　あの博物館の襲撃に借り出した悪党の使い方を挙げ、地元の悪党組みが組織への反抗心を煽っていた。

確かに、ラヴィンはロイジャーやリエルの部下を使って、アハメイルの盛り場を回わらせ。　嘘の儲け話でゴロツキや地元の悪党を釣っては妖しげな薬を飲ませた上に、襲撃の現場へと刈り出した次第である。　結局あの襲撃では、街で調達したゴロツキの全員が死亡した。　釣りの話を怪しんで断った街のゴロツキや悪党からするなら、使い捨てに仲間や同業者が使われた形である。　しかも、何やら怪しげ薬を遣い、正常な判断力を奪ってだ。　組織の力より、自分たちの自由を取った街のゴロツキや悪党達。　ラヴィン率いる組織の一味を、役人に売り渡す事で排除しようと考えた…。　そんな所なのだろう。

ラヴィンは、アハメイルから直ぐに逃げる事を考えた。　ロイジャー以下捕まっていない仲間を集め、見張りを止めさせた。　もうこの作戦は、失敗と言って良い。　とにかく、このマーリの一族が嘗ては住んでいた居城に移されたと云う宝物の真偽を確かめ。　ゴリ押しで逃げようとラヴィンは決めたのだ。　今、クドゥルの一団は、もう一つの隠れ家に向かっている。　人質を確保する為である。

自らこの場に来たラヴィンは、戦う間合いを忘れ掛けたリエル達を動かす意味で、ロイジャーの手下に。

「殺せっ!!　数で踏み躙れいっ!!!!」

と、自身でも抜刀する。

すると、この声に聞き覚えの有るユリアが。

「あっ、コイツはセイルに墓場で負けた人だっ」

クラークは、承知とばかりに槍を突き出し。

「うむ。　御主が首謀者か、主導をする者だな?　前に負けた相手に、数で当たれば勝てると思うのか?」

クラークの動きに、デイヴとゴストンが動き構える。

ラヴィンは、ユリア達3人を見て。

「またお前達か?　リーダーの小僧は何処だっ?!!　此処で、前の墓場の借りを…」

と云うのだが。　何故か、言い掛けた言葉を止める。

固太りの大男であるロイジャーが、その雰囲気を嫌い。

「おい、何だっ?　早く殺っちまおうっ!!」

と、云うのに対し。

（何故…あの小僧が居ない？）

ラヴィンは、セイルの姿が見えない事に不信感を爆発させ。　サッとリエルに。

「おいっ、レプレイシャス達はっ？！」

この短い間に、早いテンポで余裕を失い慌てるラヴィンを初めて見るリエル。　興奮と緊張と予想外の連続に、男とも女とも解らぬ口調に入り混んだリエルで。

「えっ？！　あぁ・・、裏に…」

この一言を聴き、全てを粗方予見出来たラヴィンは、ユリアやクラークを睨み。

「うぬぬぬ…、己らっ！！！！　我らを謀（たばか）ったのかぁっ？！！」

謀られた事に気付くラヴィンは、何時に無く取り乱して大声を上げる。

此処で。

「槍を構えーーーーーっ！！！　前ぇっ！！」

後からやって来たラヴィン達の真後ろ。　庭の暗闇から、急に男の必死の掛け声が上がった。　集結した悪党達が声に驚くままに振り返る時に。

「うおぉぉぉーーーーーーーっ！！！！！！」

数人の声が合わさった様な雄叫びが突っ込んで来る。

「なっ！！」

完全に虚を突かれ驚くラヴィンの声に、ロイジャーの手下の声が被る。

潜伏する兵士を束ねる副隊長のボビーは、新手が来た事で動いたのだ。　隙を突ける今に、先制攻撃を仕掛けたのである。　不意を突けたこの先制は、一気にこの場を戦場に変えた。　闇を破る兵士達の突撃は、長柄の槍を有利に導く。

「うがぁっ！！」

「ひぎゃぁぁーーーっ！！！」

横一線に並んで突撃を繰り出した兵士達の槍は、ロイジャーの部下5人を突き倒す。

「殺してやるわぁぁっ！！！」

兵士に狂った眼を向けたデイブであり。　武器を構えたゴストン。

だが…。

「ワシを忘れるなぁっ！！」

クラークは、左右に長短の槍とスピアを構え、ジェノサイダーの二

人に走り寄る。　一番凶悪なこの二人を足留めし、兵士にマーリ達が応援に行ける隙を作る。

一方で、リエルの手下にマーリ達が走る中。　リエルとサロペンの前に、アンソニーが近付いていた。

「貴様二人は、この私が面倒見よう。　魔法で人を殺させはせぬ」

杖を構え掛けたサロペンは、冷や汗を顔に浮かべて固まる。

（あ・・有り得ねぇぇ…。　最高位の不死者がぁ、いっいい・意思を持ってやがるっ！！）

間近にするとアンソニーが何者か。　魔術師の端くれであるサロペンは、理解出来る。　反属性の精霊を同時に扱う少女に、初めて遭遇した意思を持つ最高位の不死モンスター。　数多くの人々に恐れられたジェノサイダーの一人で在るサロペンが、今度は恐怖する番だった。

一気に争う怒声が沸き上がる中で。

「うぅぅぅぅ…。　やめろおおおおーーーーーーっ！！！！！」

蹲っていたハイニーズが、何かを振り払う様に立ち上がった。　ユリアを前にして、狂った様に篝火へと身を向ける。

「もえもえもえろぉぉーーーーーーーっ！！！！！！！」

篝火に向かい、聞き取りにくい奇声を上げて何かの呪文を唱えるハイニーズ。

それを聞いたユリアの顔が、苦痛に近い形で歪んだ。　ユリアの片方の肩に宿る火食鳥が、ユリアへ嘴を寄せ。

「最悪ではないか。　精霊の力だけを引き出し、己の意思の分身を生む下法を扱う輩とはの」

ユリアの目が、スッと潤み。

「うん。　今…火の精霊が死んじゃった」

ユリアと精霊達の目の前で、篝火の炎が沸騰する液体のように蠢き。
　ドロリと垂れ流れる液体の様に、ハイニーズの前へ移動する。
その炎は以前に悪漢を焼き殺した時と同じ様に、“アオアオ”と悶える様な人形に立ち上がるのだ。

ハイニーズは、全身をブルブルと震わせながらも、強い見えぬ力へあがらうかの如く両手をガバァっと上に上げる。　その大きな動きに合せ、戦いの怒声が巻き起こり始めた表庭を走る風に吹かれた所為か。　ズレたフードが頭から外れ、少し歪むハイニーズ顔が露に…。　血走った眼は、余裕の無いを通り越し。　死に物狂いの心境を表していた。

ユリアは、杖を握る手に力を込めながら。

「この状況で、火の写身を生み出すなんて…無謀過ぎるわっ。　アンタの耳に聴こえる精霊の声っ！！　それはっ、アンタを呼ぶ声なんかじゃないっ！！！　今までアンタが犠牲にしてきた精霊の呪いよっ！！！！！」

どうしてユリアが怒ったのか。　ハイニーズの魔法がどうゆうモノなのか。　それは、後で解る事。

さて、セイルの方では…。

「これでいいのか？」

「あぁ」

ガルシアとレイが、壁に走った亀裂を前にして佇んでいる。　二人の足元には、雪の積もった中を走る道に倒れ込む人らしき影が横たわっていた。

朝にセイルが捕らえたデュナウド。　彼を連れて来た御者役の悪党に続き。　セイルの変装した小悪党に、都合のいい情報を吹き込まれたミカロまで殺されたのである。　御者を殺したのが、ジェノサイダーのリーダーであるガルシアなら。　ミカロを殺したのは、レイと云う面体の解らない美声の持ち主だ。　肺を剣で刺されたミカロは、血を吐いて声も上げられずに絶命した…。

レイは、碧眼だけが覗けるマスクの様な布の隙間から、壁に走った人一人入れる亀裂を見て。

「では、我々は宝物を確かめよう」

すると、何故かガルシアがレイの後ろにピタリと張り付き。　この状況の中で、レイを抱き竦めるのであった。

「これで、俺達も元に戻れる。　お前と一緒に成れる日に、一歩近付く…」

レイの耳元に唇を押し当てこう云うガルシアに対し、嫌がる素振りなど見せぬレイで。

「解っている…。　ガル、私の身は、御主の子を宿す為だけに在るのだ。　早く…早く再興を、の？」

夜の闇の中で、ガルシアの目がギラギラと男の欲望を滾らせていた。
　表の方から、微かに人の声がしている。　だが、ガルシアは気にも留めず。

「あぁ。　では、中に入るか」

と、レイに耳打ちする様に問い掛け。

「うむ。　私が先行する…」

解放されるレイは、亀裂に向かって少し身を屈め。　暗闇の建物内部を窺う様に見て、徐に頭を入れた。　セイルが其処に待ち受けているとも知らずに…。

ガルシアは、ある意味でチームの仲間を犠牲にする事を企てていた。
　表から声が聴こえるまでのんびりしているのも、余裕であるのと同時に。　宝物を守る者の気を全て表に回す為である。　仲間と一緒に行かせたリエルが、ラヴィンからどうゆう指示を受けているかは知らないが。　この一戦で仲間を始末する事は、ラヴィンも先刻承知だ。　もし、戦いで生き残った仲間在れば、ガルシアが自ら手を下す気で居た。

しかし…。

もし。　悪党達側の目論見が一瞬にして水泡に帰すとしたならば。
それはやはり、セイル以下仲間の3人が居たからであろう。

セイル達の旅立ちで訪れた王都アクストムにて、アンソニーを目覚めさせる事態を招いた一瞬から。　今日のこの日までの運命の流れは、結末に向かって一陣の風の如く流れ始めていたのかも知れない。

★★★

亀裂から暗い中を覗いたレイ。　気配を伺った上で、左足を亀裂に踏み込ませた。　人一人通れる亀裂だが、やや斜めに入っている。
背の高い方に入るレイやガルシアでは、すんなりと入れる訳には行かなかった。

「気をつけろよ」

ガルシアが云うのに対し、頷くだけでレイは身を亀裂に入れる。

そして。　レイの頭が建物内へと潜り抜けた時。　静かに影がレイに走り寄った。

「ん？」

気配と云えば良いか。　それとも、走る人影に動かされた空気の流れと云うべきか。　レイは、その感じた何かを確認しようと、右足

を引きながら建物内にて。　後ろに振り向いた。

（あ〝っ！！）

間近に居た影を見て、声を上げる事も無いままに驚く時。　その影の持つ何かが、闇の中で閃いた。　それは、用心をして踏み込んだレイにしても衝撃であり。　同時に、左足に走った痛みは、麻痺してすぐには解らなかった。

「あぁっ！！！」

予想外の悲鳴に似たレイの声がして、ガルシアが亀裂に寄るまでの間。　剣を持ったセイルは、レイの倒れ込む前方へと駆け抜ける時であり。

「レイっ、なぁっ？！！！」

ガルシアが亀裂からレイを呼ぶに合わせて見えたのは、影ながらレイの最後であった。

ガルシアが亀裂を覗こうとした時に見たのは、倒れるレイの弱い太刀筋が闇を斬った所で。　レイの安否を確かめようと亀裂に齧り付いたその瞬間。　左手で身を起こし、何者かへ剣を投げ飛ばそうとするレイで。　その剣を投げようとする右手を巻き込む形で、腰を屈めた影が剣を振り切った所であった。

「レぇぇぇぇイっ！！！！！！」

ガルシアの声は、ピュっと空を斬り裂く音と共に鳴いたレイの喉笛を掻き斬られる音を消した。

「うぐぅ…」

冷たい床へ崩れるレイ。　斬られた手と握る剣は、壁の壊れた洞穴の様な奥の闇に消え。　硬い床に落ちて転がる音を奏でる。

この一瞬の出来事は、レイとセイルの瞬間的な判断が織り成したモノである。

埃と氷の粒が、床や外気の入る壁に吹き敷かれた八角形の建物内にて。　レイも一角の剣士であり。　左足をふくらはぎ辺りから切断されて倒れ込むとは云え、剣を抜き払う覚悟と技量ぐらいは持ち合わせている。　倒れ込むレイも苦し紛れに反撃をしようと、蠢く影を抜き打ちに斬ろうとする…。

一方。　レイの背後で剣を振るったセイルは、レイの倒れる前方へと走り抜けた。　ガルシアの侵入を予想した上で、レイの抜き打ちの一撃に備えるのと同時に、相手を牽制して制圧する為に。　レイを無力化して、あわよくば人質にしようとしたのである。

所が。　レイを斬ったセイルは、屈めた腰を上げながら。

（近すぎたみたいですね…。　手だけを斬りたかった…）

と、思う。

レイがセイルに剣を飛ばす事さえしなければ、セイルは二の太刀を振り向き様に振るわなかった。　セイルの走る背を弱く斬った動きに比べ、無理やりにセイルを剣で刺し殺そうとしたレイの最後の一手が鋭すぎたのだ。　咄嗟に振り向き、腰を屈めて返し打ちにした

セイルの剣の切っ先は、レイの喉笛に届いてしまった。　闇夜の中で、しかも技量が拮抗している。　もはや、簡単に手加減の利く環境でも無いのだ。

「レイっ！！　レイ返事をっ…」

ガルシアが亀裂を潜った。

「はっ？！」

レイを斬ってしまったセイルは、ガルシアが入ってくるまでレイしか見えていなかった。　人一人を殺める結果を招いたのだ、セイルとて平気とは云えない。

「レイっ、起きろっ！！！」

夜目も慣れたガルシアである。　暗くても倒れたレイを解らぬ訳では無い。　血の臭いの立ち込める中で、レイの体を抱き起こす。

「…」

言葉も発せないレイを確認したガルシアは、野犬の様に狂った眼をセイルへと向けた。

「貴様ぁぁぁ…。　俺らを嵌めやがったのかっ？！」

セイルは、その眼を闇の中で見据えている。

「我々を殺しに来たのでしょう？　どちらかが倒れるのは、定めです」

セイルの若い声を聞くガルシアは、レイを片隅に伏して。

「ラヴィンの言ってたガキは、お前か。　何てガキだぜぇぇぇぇ～・・おい。　切り刻んでも収まらないぐらいに、腹立たしいがぁ。…ガキとはとても思えねぇ鋭い剣筋してらぁ」

と、その場に立ち上がる。

怒りに狂いそうなガルシアだが、セイルにレイが斬られた事については納得がいった。　蝕して解るレイの傷は、スッパリと斬れた物である。　力任せに斬ったぐらいで、傷痕は綺麗に成らない。　角度、間合い、足腰と手、そして斬る事に対す心がせめぎ合う中で発揮される太刀筋は、剣士の力量を表す。　斬られた事を確かめるべく触ったレイの斬れ痕は、ガルシアも自身の経験に無い美しさが在った。　これ以上の斬り傷は、ガルシアも数える位にしか知らない。　しかも、同時に手首を骨ごと切断しているのに…。

見えぬ暗闇の中で、影だけで見えるセイルを睨むガルシアは、予てから用意しておいた固形燃料を取り出す。　そして、火打石を一つ取り出すと、慣れた手つきで壁に打ち付けた。

「？」

セイルが音に警戒し、一歩引く時。　ガルシアは、飛び出した火の粒を固形燃料を持った手で受け止めに。　固形燃料の表面は、火が付きやすい様に半かに蒸発をさせ、ガス溜まりの気泡が出来ている。　僅かな火種や、夏の熱い日差しを鏡などで反射させても発火する。　冷たい空気が張り詰めるこの場所でシュっと音が立てば、ガルシアの左手が燃える様に火が上がる。

「…」

「…」

マントを着たセイルは、顔をガルシアに向かわせた。　ガルシアもまた、そのセイルの美しい顔を見る。

見合った二人。

無言だが、動きが無い訳では無い。　燃える固形燃料を石の床に落としたガルシアは、レイの遺体の上だと云う事も解っている。　セイルに斬られたレイの衣服が、溶けて燃える燃料の影響を受け。白い煙を上げ始める。

「…燃やすんですか」

斬った本人のセイルだが、遺体が燃えると思うに堪らずに聞く。

「あぁ。　俺以外の誰にも、コイツの身元を判られたく無いんでなぁ」

と、ガルシアはニヤリ顔で返すのである。

そのガルシアの顔を見たセイルは、レイと云う人物に対する彼の情念の様なものを感じた。　自分の物を、他の誰にも取られたくないと云う思いを…。

しかし今度は、ガルシアがセイルを見た感想を口にする。

「マジだ…。　その眼…、その一度見たら忘れられねぇ桃光眼。前に一度だけ見た、あのエルオレウ・オートネイルと同じ。　マジで、あの剣神皇の孫かよ」

嬉しそうな、しかし信じきれない様な、ある種の運命を感じる様子に近い感情を見せたのである。

「あの一族以外にも、この眼を持つ人は居ますよ」

他人事の様にセイルがこう云うのに対し、ガルシアは首を振りながら笑み。

「止めろ。　サシでこれから決闘するのに、嘘は要らん」

と。

「…」

セイルは、ガルシアに差し込められたと云う感覚を受けた。

ガルシアは、レイを殺されたのに饒舌で。

「あははは、何年前だろうなぁ～。　ホーチト王国で、お前のジジイに殺され掛かった。　だが、あのジジィは、俺を助けやがったよ」

この話は、セイルには聞捨て為らず。

「嘘だっ」

と、思わず云う。

「嘘なモノかよ。　俺達が暗殺して回った金持ちの中に、あのジジィにとって煩い相手が何人も居たんだとさ。　商売敵を殺した儲け分で、一度だけ見逃すって言いやがった」

その話に、セイルの目が少し伏せ目に変わる。　ガルシアの口から、セイルの聴きたくない真実が出たと思った。　祖父のエルオレウは、非常に冷血な一面が在り。　悪事でも自分にとって有益であれば、必要悪と受け止めるのだ。

（やっぱり…）

祖父を毛嫌いする感情から、セイルの全身にカァっと血が駆け巡る。

レイの衣服が燃え始めると、スラリと先端が広がり鉤型の返し刃の付いた剣を引き抜くガルシア。　その剣の先で、レイの衣服の上に落とした固形燃料を掬い。

「だが、俺はお前を見逃さねぇぞ。　レイ（コイツ）の仇と、俺の剣の腕に箔を付ける意味でもな。　あぁっ?!!」

と、声と共にセイルへ投げ飛ばした。

内側の壁が壊れたりして、瓦礫の破片なども散らばる幅広の回廊。　外周の母屋の外側に走る回廊は、所々は庭を吹き抜けで伺えた場所でも在った。　今や、その昔の面影を部分部分に残すのみである廊下の中で、セイルはガルシアへと走った。

セイルが燃える固形燃料を潜り、ガルシアに目掛けて一直線に斬り

掛かって来る姿を見て。　ガルシアも喰えない笑みを浮かべ。

（へっ。　予想外だ…。　読まれてたかよ）

魂胆が空振りしたと思い、急ぎで剣を構える。

「たぁーーっ！！！」

鋭い掛け声と共に、セイルの剣が右斜め下からガルシアを襲う。
受け止めるガルシアが力勝負の押し合いに持ち込もうとしても、刃を噛み合わせたセイルは、ガルシアの脇に摺り抜けた。

（クソっ）

またも思惑がズレ。　ガルシアは間合いと取るべく、セイルの抜けた方に身を翻しながらに片手で剣を一閃。　セイルは、大きく跳んで奥へと逃げた。

ガルシアへ向き直るセイルと、相対するガルシア。

ガルシアは、固形燃料の燃え溶ける物をセイルに斬らせて、セイルの周囲に火を振り撒かせようと思った。　だから、斬り易い様な高さに投げたつもりなのだが、セイルは固形燃料を潜ってきてしまった。

逆にセイルにしてみれば、読んだつもりはない。　決着を着けるべく、燃料を斬るよりくぐり抜けて、交刃の間合いへと踏み込んだに過ぎなかった。

しかし、二人の初太刀の交わりは、五分で終わる。　ガルシアにし

てみれば、素早いセイルの動きは驚異であるが。　その太刀筋の速さと鋭さにしては、受けた圧力は思ったより軽い。　才能や身体の際立った部分が突出しすぎて、身体全体に実力が合わさっていない感覚が直ぐに解る。

一方、セイルは逆で。　ある意味で全力の斬込みを簡単に受け止められ、脇に抜けて死角を突こうとしたのだが。　ガルシアは間合いを生むべく、後手に回った様に見えてもしっかり一撃を振り込んできた。　相手の慣れた経験が為す捌きに、今一歩踏み込めずに逃げた形で在った。

自分より頭一つか、二つ近い背の差を持つ相手を見据えるガルシアで。　レイの持つ固形燃料にも引火し、いよいよレイが本格的に燃え出して嫌な臭いが煙に混じる中。

「全く…。　なんて天稟だぜっ！　一、二年遅く出会ってたら、完全に俺の負けだ。　体の成長が、発揮する才能に同化しちゃいねぇ～のが幸いだ」

云うガルシアの肩に張り付く氷が、レイの身体から上がる煙で溶ける。　急激な温度差が生じ、レイの周りでは凍る床が水滴を生む。

「…」

黙って見る中で燃える相手が敵でも、流石にセイルは嫌だった。　しかし、ガルシアはレイの傍から無闇に踏み込んで来る気配も無い。　ある程度燃えるまで、傍に居る気配だ。

（…大切な人だった？）

何となく、セイルはそう感じれる。

「どうした、来い」

ガルシアは、様子を見てくるセイルを誘う。

だが、セイルは迂闊に踏み込めない。　自分にしっかりと剣を向けたガルシアに、先程の様な隙は無いからだ。　背の高い相手であるなら、懐に踏み込む必要が在る。　だが、下手に背の高い相手と剣を噛み合せれば、背の低いセイルは分が悪い。　セイルが奇襲をする上で、大きな目の付け所は燃えるレイの遺体だ。　ガルシアを揺さぶる上で、これ以上の一手は無いかも知れない。

しかし…。

（他に何か…）

やはり、出来る事と出来ない事が在った…。　咄嗟の出来事で人を斬れても、卑怯な手は使えない。　セイルとガルシアを五分にするのは、姿勢にも問題が在る。

この甘さは、どう左右するのか…。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

お盆に近づき、手が思うように動かないこの頃です。　震災から半年近いのに、特番などを見ると気持ちが思うようにコントロール出来ないのは、情けない限りです。

色々な意味で、お悔みを此処に残します。

空に見える流星が綺麗なのが、何とも複雑でした。

ご愛読有難う御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終話

≪相、打ちて　【前】≫

ガルシアの放った火の手。　セイルに投げられた固形燃料は、熱でドロドロに成っては壁や床に飛び散り燃える。　壁を伝って落ちる炎が、埃や風で隅に集められたゴミに引火していた。

しかし。　一番激しく燃えているのは、セイルの一刀で死んだレイだろうか。

「…」

「…」

セイルとガルシアは、凡そ7・8歩の距離で対峙している。　セイルの眼から見ても、ガルシアが火の消える前に決着を決めようとしているのは解る。　黙って立っているが、その目に強い殺意が集中しているのが解った。

「…、行きます」

スルスルっと歩いて距離を詰めたセイル。

「来い」

大きくその場で剣を構えたガルシア。

5歩まで踏み込んで、サッとセイルは走る格好から左に跳躍した。

「?!」

斬り込んで来る・・と、セイルの目で理解したガルシアだが。　いきなり壁に跳躍し、目の前の間合いから外れたセイルの行動に焦り。

「このっ」

壁を蹴って飛び上がり、ガルシアの脇を抜けようとするセイル。
一呼吸の遅れを取り、慌てて斬るガルシアだが。　その刃は、マントの縁を斬ったにすぎない。

ガルシアの右後ろに着地したセイルは、その場でクルリと回り。

「やっ。　はっ！」

振り向き様に、鋭い声と共に大きく上から斬る。

しかし、ガルシアも身を半回転しながらに引いて、寸前の処で剣を打ち当てて防ぎ。　セイルの二の手である掬い斬りにも、剣を振り下ろして受け止める。　ガルシアは、此処で剣を押し込む様にして押し合いに入る。

「っ！」

打ち合わせた事で剣の勢いを殺されたセイルであり、力を込めながら前にジリジリと踏み込み始めたガルシアと睨み合う事に。

殺気の漂うニタリ顔のガルシアは、セイルの眼を見て射抜く様で。

「腰の力ってのは、腕力に勝るがよお…。　体重までぇぇ掛けられると、俺の方が強いわなぁぁぁぁっ」

力の掛け合いで剣を引けば、間合いや攻め方でどちらかに優劣が生じる。　今の立ち位置や間合いを見るに、セイルが引けば、ガルシアは牽制と先手を征すべく突いてくるだろう。

「んんんん…」

力を出して、均衡を保とうと必死のセイル。

「おおおお…」

剣を押し込んでバランスを奪うべく力むガルシア。

セイルの剣が、打ち合わせた高さから頭一つ下がった時。　急にガルシアの力が勝って、グっと押し込めた。

（なにっ？！）

嫌な優り方で、ガルシアも腕に掛けた力を弱める時。　剣から力を抜いたセイルが、その場で跳躍したのが同時。

「うおっ」

剣の戦いながら、格闘術さながらの回し蹴りをガルシアに放つセイル。　ガルシアは、仰け反って引くのが精一杯。　セイルが見合うまでの間合いを生じさせた形で、両者はレイの燃える遺体の脇で対峙する形に成った。

（ガキがっ！）

斬り合いで喧嘩殺法を繰り出すのは、ガルシアの常套手段。　それを相手にやられては、ガルシアも気に入らない。　剣を握る手に力を込め、一気に斬り倒そうとセイルに踏み込んだ。

「そらぁっ！！　コイツめっ」

大きく斜めに斬り込んだガルシアの一撃は、受け合わせたセイルの剣を弾く勢いであった。　セイルを踏み込ませない様にと、受け止めたセイルに蹴たぐりを入れ。　横に逃げたセイルに振り向き、上段からの一撃を見舞う。

すると。

“ガキーーーン”

甲高い音が、閉鎖空間に近いこの場に響いた。　セイルの剣が、刀身半ばで叩き斬られたのだ。

（斬ったっ！！！）

武器を壊せたと思ったガルシアは、一気にセイルを押せると確信した。

一方のセイルは、自分に投げられた固形燃料が燃える辺りに退こうと。　素早く交刃の間合いから飛び退き、更に大きく後ろへステップをする。

「逃がすかぁぁっ！！！！」

セイルの身軽さに付いていく事が出来ないと判断したガルシアは声を出して、左手で腰の脇に備えるダガーを引き抜く勢いのままにセイルへ投げた。

が。

空中で“ガキン”と金属がぶつかる音がして、ぶつかった何かは別々に壁の方に飛び。　ガルシアと近い所の床に何かが落ちる。　ガルシアの投げたダガーと一緒に、セイルの斬られた剣が床に転がっていた。

（まさか…）

その転がるダガーと壊れた剣を見て、ガルシアは焦り驚く様にセイルを見る。　背中に差した剣を新たに抜くセイルが居て、慌てた様子も無い。　ガルシアは、若いセイルがどうゆう育ち方をしたのかが疑わしかった。

（アイツ、どう見てもガキ…だよな？　俺と同じ考え方をしてる？　いや…、有り得ねぇだろ？）

床に転がる剣とダガーは、ガルシアに近い位置に在る。　詰まりは、セイルが、ガルシアの行動に反応したのでは無く。　セイルの投げた壊れた剣の軌道と、ガルシアの投げた剣の軌道が重なったに過ぎないと云う事が現れていた。　ダガーを投げたガルシアは、セイルの顔を狙った。　その軌道に壊れた剣が噛み合うなら、剣を投げたセイルは、ガルシアの胸を狙って投げたと云う事だ。

今の出来事に対し、ガルシアが驚くのには意味が在る。　それは、ガルシアもまた、幼少の頃から剣術を正規の手解きとして受けていた経験が在るからだろう。

純粋に剣術を習うなら、剣が壊れても投げ出すと云う行為に至るには、それなりの場数が必要だ。　咄嗟の中で、身体が正規の習い事の範囲を踏み出して、戦う得物で在った剣を捨てる…。　自分の得物である物を、壊れたとは云え機転が利いた選択肢を選ぶ。　それは、正規の剣術を習う者には中々至れない処だ。　矢が無くなったからと、簡単に弓を捨てる者が少ない事と同じだ。　壊れたとは云え、剣術で戦うなら剣は持つべき物と云う意識が先んじる。　剣を取り替えるにしても、だ。

長年、生死を掛けて殺す事に人生を費やしたガルシアであり。　そのガルシアが、常套手段として行う剣術から外れた邪道の行為を、セイルは齢（よわい）１６で出来るのだ。　甘い考え方が在る一方で、咄嗟にガルシアが行う手段に、セイルは同じ実力で返して来るのが驚きでしかなかった。　まだ、新たな剣を抜く為に、壊れた剣を持ったままに守りながら逃げる方が、セイルの年齢に似合った行動だろう。

命を掛けた闘い。　それを強いられた中で、セイルと同じ年頃の者が同じ事を誰でも出来る訳では無い。　口で云うなら誰でも出来るだろうが、この緊張感の中で冷静にそれを選択して、為す。　それ

には。心身にそうさせるだけの経験や感性が備わる必要が在る。

（チキショウめっ！！　更になまくらみたいな安物なんか引き抜きやがってっ！！！！　切り刻んでも飽き足らねぇぐらいに生意気なっ！！！！！！）

セイルの構えた剣を見て、ガルシアが更に苛立つのもまた当然かも知れない。　剣士たるもの、力量に似合った剣を持つのは普通の意思。　何もかもがちぐはぐなセイルの為すことに、ガルシアも舐められて居る様で腹が立つ。　もう一度剣を叩き折って、そのまま斬って捨ててやろうと意気込んだ。

セイルに向かって、猛牛の如く勢いで走り出すガルシアであり。
静かなるセイルもは、剣を構えて迎え撃つ体勢に入った。

★

「そんなものかぁぁぁぁーーーっ！！！！！！」

冷たい風が空気を凍てつかせる。　その凍える空気を揺るがす怒声は、クラークの声。　暗殺に慣れるデイヴとゴストンを相手に、一見すると不利に見える槍を巧みに操り。　二人と応援に来る悪党達を圧倒するのだ。　踏み込んでくるゴストンに長柄のランスを突き付け、短いスピアでデイヴを赤子の如くあしらう。

「ちきしょう！！！　コイツ強えぇっ！！」

「そうだっ、ガキの女を襲えっ！！！」

と、斜めに構えた背後を通り抜けようとする悪党を、その場で一転する薙ぎ払いでブッ飛ばすクラーク。　長柄のランスに二人の悪党が叩き打たれ、ユリアとは反対の方に飛ばされた。

「こっ・・こんな事ってぇぇ…」

力量の差を見せ付けられ、狂気の表情を忘れかけるデイヴ。　姐御言葉が上擦る彼など、仲間でも見た事の無い様子だった。

「これが本物の冒険者がぁっ？！」

一方のゴストンの声も、完全に弱音に変わる。

ジェノサイダーの持つあの恐るべき狂気が、真の強さの前には通用しない事が証明されていた。

例えば。　アンソニーを相手に、ラヴィン、リエルとその手下数人、そしてサロペンが囲んで戦う。　だが、素早い動きが真骨頂のリエルやラヴィンの筈が、瞬間移動の魔法を瞬発的に遣うアンソニーを相手にすると完全に惑わされていた。

しかも、アンソニーへ魔法を使おうとするサロペンだが、最高位のモンスターであるアンソニーに睨まれるだけで精神を乱される。　恐怖に戦き、精神の集中が出来ない。　しかも、リエルとラヴィンが間合いを計って遠ざかれば、アンソニーは直ぐにサロペンを見るのだ。

「うわぁぁーーっ！！！　くっ・来るなぁぁぁっ！！！！！」

アンソニーに睨まれるだけで、もう怯えるままに逃げ腰と成るサロペンが居て…。

（何と…、本当にモンスターなのか？）

その存在するだけで、えも言われぬ恐怖を覚えるアンソニーを相手に、ラヴィンもどうしていいか思考能力が回らずに居る。

リエルに至っては、仲間をアンソニーの後ろに行かせてユリアを人質に取りたいのだが。　アンソニーに背を向けては、誰も勝てる気がしないのである。

「この私ごときを前にしただけで、怯えて魔法も扱えぬのか？　天下を脅かす暗殺集団が聞いて呆れる。　キサマの実力など、初心の冒険者以下だな」

アンソニーと対面で睨まれ、足がガクガクと噛って杖がまともに握れなくなるサロペン。　助けを求める様に、ラヴィンの連れてきたロイジャーの仲間を見れば…。

「私の博物館を奇襲したクセにっ、お前達の本当の姿はその程度かぁっ？！！　其処に直れっ、斬って捨ててくれる！」

気負うマーリが悪党一人を負傷させ、散り散りに成って反抗するぐらいしか出来ない悪党の手下を見ると。　威勢の良い言葉で、多勢にも関わらず相手を罵倒する。

（ヤバいっ！！　俺の間近に、誰も居ねぇぇっ）

リエルの手下も、リエルの背後に下がって前に出れない始末。　サロペンを守る余裕の在る者など、誰も居なかった。

さて。

篝火の周囲で、激しく戦う者達が散開している中で。　1対1の対峙…、別世界を築く二人が居る。　ユリアとハイニーズであった。

冷たい雪もチラつく深夜。　外を時折駆け抜ける冷たい風に吹かれ、フードの捲れ上がったハイニーズがユリアを睨んで喚く。

「お～～まえはぁぅうるさあああああいぃっ！！！！　しねっ、しねしねぇぇぇ～～～～～～っ！！」

声が張り、ハッキリとした声は濁声が割れている様な…。　両手を天に壊れかけの杖を翳すと、一刀両断の様相で杖をユリアへと振り下ろすのだった。　すると、炎の人形の前で炎で燃え上がり、人も一呑みしそうな火球が出来上がる。

「いげぁぁぁぁぁ！！！」

ハイニーズの聞き取りにくい罵声の様な声に反応し、火球はユリアに飛んでいく。

だが。　強い眼のユリアは、それに驚く事もない。

「火食鳥。　水の力が強いけど、お願い」

ユリアが願えば、ユリアの肩の上に佇み浮いていた火食鳥がフワリ

と飛び上がり。　ユリアに向かって来る火球に飛び込んだのである。

その瞬間。

「あ〝がぁ？！」

口を開いて驚くハイニーズ。　火の精霊である火食鳥が勢い良く飛び込んだ火球が、ユリアに届かず瞬時にボワーーーーっと燃え広がったからである。　更に、燃え広がった炎がキラキラと輝いて、時間が停ったかの様に炎の全てが静止した直後。　耳慣れぬ奇怪な鳥の鳴き声が上がると共に、今度は急激に燃え広がった炎が一点に収縮する。

「炎の精霊が…かっ火球をのみ・・飲み込んだ…」

アンソニーの魔力に怯える魔想魔術師のサロペンは、その光景を見ていて何が起こったかを口にした。

燃え広がった炎の跡には、火食鳥が現れて飛んでいる。

口をワナワナを動かすハイニーズは、何ふり構わない動きで間近の篝火に飛び付いた。

「うわぁぁぁ

「うぎゃっ！！！」

「熱チィ！！　うわっ、燃えるぅ！！　燃えてるぅっ？！！！」

クラークに薙ぎ倒されて立つことの出来ない悪党の上に、炭に成りかけた薪と石炭が掛かり。　燃えやすいボロマントや衣類を燃やし出した。

「いけないっ」

炎で人が死ぬと思ったユリアは、水の精霊に消火させようとするのだが。

「もえっ、もえーーーーっ！！！」

呪文の様に燃える事を願うハイニーズが間近で早く。　悪党3人の衣服に付いた炎は、一気に炎上し出したのである。

それを見たユリアは、こんな非道な事を平気で出来る事に驚いて。

「止めてぇぇーーーーっ！！！」

と、叫ぶ。

だが、悪党を焼いて燃え上がった炎は、生き物の様に蠢き出し。
炎の勢いを弱める人形に飛び込んで行くのだった…。

「オアオアっ、オアァァァァァァァ！！！！！！」

炎が加わる事で身を震わせ、グッ、グっと膨張する炎の人形。　更

に一回り大きく成り。　ユリアが少し見上げる様に成った。

ハイニーズは、焦げ付いた悪党の死体などに目もくれず。　ユリアに殺気立った眼をひん剥くと、

「いげぇっ、もやせぇぇぇ！！！　みぃんなもやせぇぇぇ！！！！」

と、杖を振り向ける。

精霊のみならず。　悪党とは云え、人までも犠牲にするハイニーズに、ユリアは怒りが爆発しそうだった。　ワァっと湧いた涙で潤む眼を鋭くさせて、

「最低っ！！！　こんな精霊遣いなんて、居ない方がマシよっ」

ユリアの逆る声に、精霊達が心配そうに彼女を見上げたりする。

炎の人形を操り、ユリアを焼き殺そうと差し向けるハイニーズだが。　前に、悪漢を殺した時。　更には、廃棄場を襲撃した時の様な、悦びを現した声では無かった。　明らかに切羽詰まり、苦し紛れに刃向かう様な言い方をしている。

ハイニーズが杖を向けたと同時に、ノソリ・・ノソリとユリアへ向かう炎の人形。

だが、険しい眼を凝らすユリアが杖を右に側めると…。　何故か火食鳥が姿を消し、水の精霊で在るサハギニーや水蜘蛛がユリアの足元に移動する。

ハイニーズは、ユリアを歪んだ顔に在るギョロギョロとした目で見

つめ。

「おでのセイレイわぁぁぁぁ、おまでのセイレイよおりつおいどぉおおおおおおおおおお！！！！！！！」

と、右足を前に出し。　炎の人形の後を追って、ユリアに近付く形で踏み出して行く。

所が…。

怒りの眼をハイニーズに向けるユリアは…。

「アンタの目の前に居るのは、本当の精霊なんかじゃ無いわっ！！！！！　もうっ、これ以上の精霊を犠牲にする真似なんてっ……させないんだからっ！！！！！！！！！！」

張り裂けんばかりの声をもって、チラリチラリと舞い落ちる粉雪の舞う天に杖を擡げたユリア。　その大声に、クラークやアンソニーも彼女を見たし。　何事かと、敵もユリアを見る。

炎の人形は、ユリアに向かいながら炎の千切た欠片を浮かばせては、それを飛ばして火の粉が降り注ぐかの如く攻撃をする。　所が。皆の目の前で、普段は見える筈の無い精霊二体が青いオーラを纏って、火の粉からユリアを護る。　降り注ぐ炎の欠片は、燃えながらユリアに届こうとする前で、ジュっと云う音を立てて青い水の力のオーラに消されてしまう。

そんな攻防の中だ。

「命を繋ぐ水よっ。　恵みと裁きを天秤に測る水の上位精霊よっ！

！！　火を征し、破壊を治める力をっ、いま此処に示せっ！！」

そのユリアの声が空に木霊する時、その周囲に沸き上がる力にサロペンが度胆を抜かれる。

「なんて力だぁっ！！！！　この場の雪が遠くまで応呼してっ、スゲェ水の力が湧き上がって来てるっ？！！！」

逃げ腰のサロペンの云う意味が解らないのは、アンソニーを警戒しきれずにユリアを見ているラヴィンやリエル達。

一方。　アンソニーは、ユリアを見つめ。

（これが、精霊に愛される力か。　あの年頃で、上位精霊の最高位に位置する精霊と繋がり始めた。　これは……いでる）

この旧貴族区に積もる莫大な雪。　その雪に宿る小さな小さな水の力が、強き心で願うユリアの応呼に応じ。　大洪水で流れる鉄砲水の如き水の力が、爆発的にユリアに向けて集まり出しているのがアンソニーにも解る。

チラリと見ていたクラークは、ユリアからジェノサイダーの二人に顔を戻すと。

「喧嘩を売った相手が悪かったな。　お前の仲間の精霊遣いも、時期に倒されよう。　さ、突っ立ってる暇は、ないぞっ！」

余裕の無いゴストンとデイブは、自慢にすら思っていた仲間の魔法攻撃が本来の力を発揮されず。　こんなにも追い込まれるものかと狼狽えるしかない。　苦し紛れに連携しても、慌ててダガーなどを

投げたりしてみても。　クラークは、二人の為す事を失敗に至らせるのだった。

アンソニーとクラークが、ユリアに誰一人も近付けぬ勢いで相手を圧倒する中で。　ユリアの周囲に集まる水の力が、深い青の色を光らせる。　周囲を照らしさえするその光は、魔想魔術の青白いオーラとは違う。　純粋に何処までも青い、晴れた日の湖や海の美しい青であった。

そして、ユリアを護るサハギニーと水蜘蛛の力が、ユリアの周りに集まり出した水の力を得て。　更に、更にと強まり、幾重にも折り重なるベールが風に揺らされ、遠くに靡く様に広がり出す。　その水の力の前に、見えない壁にぶつかって前に進めない様な素振りの炎の人形。　炎の人形の後ろに後３・４歩前まで歩いたハイニーズも、立って居られない強風に吹かれている様な感じで体が立ち止まる。　ユリアを護る青い水の力が強まるにつれ、炎の人形も、ハイニーズもそうなった。

「まっ・魔女かぁっ？！！」

「足元のアレなんだぁぁっ？！！！」

「バケモノを呼べる人間かよぉっ！！」

悪党達が、ユリアの姿に浮き足立つ時。　ユリアは、真剣さと感情が極限に昂った眼をハイニーズに向けて。

「その力、清楚にして穢れ無き水の女神〝ヴォレイティ・レナース〟よ。　我が心の声に……、応えてっ！！！！」

強く投げかける声と共に、目の前に杖を振り向ける。

その瞬間。　凍てつく様なキーンとした空気が壊れんばかりに張り詰めて、時が止まる様な感覚が広がった。

戦う手を進めるクラークやマーリ達に対し、解り得ない現象に慌てる悪党達が居る。

だが、ユリアの精霊を呼ぶ声に、瞬時に反応したのは炎の人形。
動きが完全に止み、悶える様なままに止まっている。

そして…。　その炎を生み出した男も、また。

「お・・おおおお…。　おうっ・おあがががががががががが……」

ハイニーズの全身の力が一気に抜かれた様に成り。　雪が落ちては溶ける広場の石の床に両膝を崩して、やや天を向き。　小刻みに震えながら、口をぽっかり開いてしまったではないか。

クラークが槍でデイヴを押し退け、ゴストンに狙うを定める時。
アンソニーは、理解の出来ない光景に苦しむリエルとラヴィンを横向きに見て。

「さぁ、現れるぞ。　精霊の命を無駄に殺して来た者を裁く、水の精霊がな」

背後の後方で起こる事を、見ずに言い表すアンソニー。

やや離れた場所からアンソニーの言葉に合わせて、ユリアとハイニ

ーズを見るリエルとラヴィンは、変化が現れるのと同時に。

「なにっ？！」

「嗚呼っ！」

と、声を。

ユリアの杖が差し向けられた場所に、何故かダイアモンドダストが現れて空を清める。

刹那…。

天から落ちる一糸の青い光が、キラキラと煌めく氷の粒の中を反射して行く。　ユリアの倍の高さは在る空間に、空気中に浮かんだ氷の粒に反射する青い光の糸が、何と籠状の檻を形成するではないか。　そして。　青き光を纏いながら、白銀のオーラを眼に宿すユリアの前で、その檻が甲高い音を奏でて壊れたのである。

「あ、あああ…」

「何がお・おっ・・起こってるんだぁ？！」

デイヴやゴストンの周りで。　ユリアとハイニーズに近い場所でそれを見た悪党達は、幻想的な光景に戦う意思を失った。

青の光で出来た檻が、粉々に砕けた氷の様なままに空中に留まる中で。　突如として、青い光を纏う麗しい美女が現れた。　青い二枚の翼を背に、青い水で出来た様な優雅なドレスを纏い。　青に光る長い髪を空に棚引かせる、天女の様な幻想的な美女であった。

ラヴィンは、その現れた美女が何者なのかが理解出来ない。

「誰だ…。　アレも、せっ・精霊なのか？」

一方のリエルは、眼を奪われ。

「き…綺麗」

と、呆然とするしか無い。

アンソニーは、ユリアの方を一瞥しただけで。

「解らないのか？　あのお前達の仲間が、彼女を怒らせた。　その怒りと嘆きを知り。　精霊の中でも神の力の一部として生み出された・・水の精霊が応えて来たのだよ」

動けないハイニーズ。　そして彼の生み出した炎の人形が動けないのを、ラヴィンは見て。

「なんだと…。　そんな事が・・人に出来るのかっ？！」

するとアンソニーは、紅く黒いオーラを眼に宿すと…。

「そんなに驚く事でもあるまい。　お前達の前には、その呼び出された精霊と対等のモンスターが居るのだからな？　さ、そろそろ決着を着けようか」

不敵な言葉を生んで、闇の力を強めたアンソニー。　その恐怖を与えるオーラの前に、ラヴィンとリエルは武器を身構える余裕すら持

てない。　アンソニーは、他の兵士や冒険者も居るからだろう、あえて本領を発揮しない様にしている。　彼が本気を出せば、この場の殆どの者が恐怖に竦んで精神を乱すか、壊してしまうだろう。

アンソニーとクラークがセイルの思惑を成して、完全に敵陣とユリアとの距離を生む中。　現れた美女の精霊は、透明で水面の様なサークレットをした髪を触れながら。

「ユリア・・、貴女の声が聞こえましたよ。　私に、何を願いますか？」

と、美しい声を響かせ、その青の美女はユリアに聞く。

強い瞳のユリアは、その美女を見上げ。

「レナース、呼び出してごめんなさい。　でもこれ以上ね、炎の精霊を殺させたくないの。　あの炎を消して…。　殺されて力だけ奪われた炎に、安らぎの消滅を与えて。　…お願いっ、モンスターにさせないでっ！！」

ユリアの迸る様な叫びを聞く水の女神は、ゆっくりとした動きで炎の人形を見る。

「…。　人は、困った生き物ですね。　“エレメンス・パ・ペッタ ーヌ”・・ですか。　本来は行なっては成らぬ邪法なのに……。　しかも、人を焼き殺した魂までも吸って…。　これは早く消さなければ、モンスターとして動き出すのも時間の問題だわ」

呼び出された水の美女は、ユリアへ顔を戻し。

「では、魔法で消すわね。　ユリア、精霊浄化の魔法を遣いなさい。
私が、炎を拭います」

美女と視線を合わせるユリアは、安心を得た顔色を浮かべて。

「有難う、レナース」

と、頷き。　涙の滲む目元を袖で拭うと。

「じゃ、いくよ」

ユリアが炎の人形とハイニーズに向けば、水の女神も向き。

「さ」

杖を水平に構え、眼を閉じるユリア。　炎の人形から発せられる嘆きを心に受けながらも、救いたい一心で…。

「暴走した自然の力よ。　心を無くした精霊よ。　・・聞こえる？
貴方の暴れる力を受け止める、反対の力を…。　荒ぶる事に心を失っても、浄化される事で安らぎに戻れる。　さ、委ねて。　相反する力は、貴方を滅ぼす力では無い。　・・そう、鎮める救いの手よ」

ユリアが穏やかに掛ける声。　その詩を囁く様な物言いに合せ、呼び出された水の精霊である美女が宙を歩く。　そして、炎の人形の前にに来ると、御髪を撫でてその手を差し出した。

すると…。　炎の人形が微かに震え出す。　震えが顕著に見える様に成った時、今度は湯気を全身から立ち上らせるのだった。

「さぁ、もう御休みなさい。　理の枠から外され、暴れてはダメよ」

水の女神が言葉を発すると、炎の人形は更に激しく震え。　そして湯気を出しては、その体積を縮めてゆく。

「ハイニーズっ！！　しっかりおしよっ！！！」

勝つ為には仲間の支援が必要だと、苦し紛れにデイヴが叫ぶのだが。

そこへサロペンが。

「無理だぁっ！！！　上位精霊にはっ、ハイニーズ（やつ）の精霊は刃向かう事も出来ねぇっ！！！！　負けだっ！！　俺達の負けだぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

と、怯えた声で叫び上げる。

その声にデイヴが何かを云う前に。　遂にクラークの掬いに殴り付けた短いスピアの一撃を、ゴストンがモロに腹部へと受けて体が跳ね上がる。　激烈な衝撃を受け、瞬間的に息が強引に押し出てくる。

「ぶっ！！！！！」

クラーク程の男が、全く手加減もしていない一撃だ。　冷たい広場の床に落ちたゴストンであり。　内蔵に損傷を受けたのか、唾に血を交えて激しく咳き込んで吐き出した。

「ふんっ」

それを見下ろすクラークは、更にゴストンの首筋へとスピアの手加減した一撃を撃ち込む。

「…」

白目を剥いたゴストンは、そのまま動かなく成った。

「ゴストンっ!!　ゴストンっ!!!!」

男の姐御言葉を出すデイヴは、やはり真の強者とは云えない人物なのだろう。　魔法で一撃を見舞った上の奇襲や、人を惨殺しての畏怖を見方に付けれない彼は、羽根をもがれた蛾の様なモノに近い。

（クソっ、こうなったらっ!!!!!!）

デイヴは、間近で戦うマーリを人質にしようと向きを変える。

「ぬっ、させるものかっ!!」

デイヴの視線が自分から外れた事に反応するクラークは、走り出すデイヴの足に目掛けてスピアを放った。　先端が三角垂に近い槍のスピアは、投擲にも適した短い槍。　重いランスとは違うので、投げると刃先の部分が重いだけに勢いが付く。

「はっ?!!」

悪党一人を殴り倒したマーリは、周囲を確認しようとする過程で直ぐ側に近付いたデイヴを見て焦った。

が。

デイヴの前に出した右足の腿の裏を通り、又の間に入ったスピアが左太腿にグサリと刺さる。　縋れる勢いでスピアの刃がずれ下がり。

「ぎゃぁぁっ！！！！」

肉を斬られる痛みに、デイヴは悲鳴を上げて前にもんどり打った。

「マーリ殿っ！！」

クラークの一声が上がれば、気合いを呼び戻すかの様に眼を鋭くさせたマーリ。　デイヴの武器も手を離れていないので、金属のブーツを履いたままの右足で踏み付ける。

「ひぎゃっ！！」

デイブの片手の甲から骨の折れた音がしたが、死んだ兵士や負傷させられた警備兵に比べたら…。

「終いにしろっ！！！」

マーリは、踏み付けた右手に加え、デイブの左手をスッパリ斬った。

「い〝ぎゃぁぁぁぁぁーーーーーーーっ！！！！」

デイヴの絶命に近い絶叫が、小雪が舞う暗い夜空に木霊する。

無力化する為の仕様だが、マーリの怒りも向けられた一撃だった。
　セイルやクラークの様な力量に至らないマーリでは、サーベルの刀背打ちで気絶させられたか解らない。

其処に、ユリアの声が。

「鎮まりなさいっ」

と、聴こえて来る。

クラークが顔を向ければ、炎の人形が塵も残さずに消滅した処で。

「おぉ、あの炎の化け物を消した…」

そう呟くクラークは、肩で息をするユリアも確認出来る。

「ユリア殿、大丈夫ですか?」

離れた所で頷くユリアは、

「クラークさんっ、早く他の悪い人を捕まえなきゃっ。　セイルが心配。　僧侶や魔法遣いの人は、わ・私が護るから…。　皆をこっちに」

チラリとクラークが視線を背けると…。　ユリアの離れた後ろには、マーリの残る仲間が怯えた顔で立ち尽くしている。

（早く決着を着けねばいかんな）

闇夜に紛れる兵士などは、どうなっているか判らない。　マーリの残る仲間や連れてきた用人は、頻りに声を出している様だ。　激しく斬り結んで居るのだろう。

「ユリア殿っ、如何為さるかっ？」

「魔法で閉じ込めるっ。　殺さなければいいんでしょっ？！」

「解り申したっ。　では、悪党を一箇所に集める様にします」

「お願い。　私がケリを着けたら、セイルをっ」

「無論っ」

ユリアと互いに頷きを見合うクラークは、マーリの方に向かった。

さて。

アンソニーと戦うリエルやラヴィンは、自ら得意とする暗闇に引いた。　何故なら、サロペンが。

“モンスターだから戦っても無駄だっ！！　とにかく俺達だけでも逃げようっ”

と、云うのに。　追い詰められて余裕を失ったラヴィンは、苛立ちから激怒。　逃げ様にサロペンの首を斬り裂いてしまった。

血を撒き散らして、入口に通じる階段へと倒れたサロペン。　その様子を見たアンソニーは、意外にも嫌悪の眼をラヴィンに向け。

「仲間の命すらも何とも思わないのか？　…事件解明に必要ではない身なら、この手で葬ってやりたい処だ」

と、ラヴィンを睨み付ける。

暗がり手前で振り返るラヴィンは、焦っている手前で本性が剥き出しに成り始める。　覆面から覗ける眼が、不気味で異常な程に鋭かった。

「喧しいぃっ！！！　計画に支障を来す者は、全て殺すのみだっ！！！！」

妖しく光る眼を細めるアンソニーは、シルク地のマントで身を包み。

「ほう。　では、死人で在る私を、高が人の貴様が倒せるか？」

「ウルサイっ！！！！　来いっ！！！！」

篝火の範囲の外に下がろうと退くラヴィン。　更にその後ろには、リエルとその部下数人が従う様に闇に紛れている。

だが…。

妖しく微笑むアンソニーには、程近い距離で誰が何処に居るかが丸見えであった。　闇に下がろうとしたラヴィンの目の前に、アンソニーはフワリと魔法を遣って現れる。

「化け物がぁっ」

引き抜いていた剣をアンソニーの腹に突き立てようとするが。　明らかに不自然な処で、ラヴィンの剣の勢いが止まる。

（ぬっ？！　何だっ？）

柄を握るラヴィンの手は、まだ脇腹すら通り過ぎて居らず。　剣を押し出そうとするのだが、硬い壁にでも突き立てているかの様に前に進まない。

実は、ラヴィンの突き出した剣の切っ先を、グローブの填る左手で捕まえているアンソニー。

「フッ。　仲間に選んで貰った衣服を、簡単に傷付けて貰っては困る」

ラヴィンへそう云った瞬間、アンソニーは右手で剣を殴り。　驚異的な力で剣を割った。　その殴る勢いのままに、踏み込みながらラヴィンの懐に背を合わせるアンソニー。　割れた剣の切っ先を握ったままの左腕で、ラヴィンの腹に肘鉄を食らわす。

「む〝ぶっ！」

手加減はしているアンソニーだろうが。　本領を出してモンスターと化す彼の力は、人間の比では無い。　残像すら残しそうな素早い踏み込みから繰り出される格闘術は、それだけで破壊力を秘めた一撃と成ろう。　丈夫な皮製のプロテクターを纏って居なければ、ラヴィンの肋骨は粉々に砕かれて居ただろう。

骨が折れた痛みや呼吸も止まる衝撃に、老人の様に腰を曲げて後退りしようとするラヴィンだが。

「おっと」

アンソニーは背を向けたままの体勢から、脇を過ぎる剣を右手で掴んで引き戻す。　そして、いつの間にかラヴィンと対面の体勢に戻

ると、切っ先を棄てた左手で彼の顎を掴んだ。
すると。
「あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁ…。　ぎゃっ・やめ……いぎゃいいいいっ！！！」
アンソニーに握られた顎で、ミシミシと骨が軋む。　アンソニーに持ち上げられるラヴィンは、痛みと嘗てない恐怖に堪らず暴れる。
そこで、剣が持たれるアンソニーの手が素早く引っ張られた。
この同時で。
“ラヴィン様っ”
と。　闇の中で折り重なる二つの影が見えるリエルは、何か危険な事が起こっている事に慌て。　この一声を出して、リエルがラヴィンを助けに行こうとするのであり。
“バキィっ！！”
と、その直後に、奇っ怪な音が走るのと連なっていた。
「あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁぁっ」
喉を詰まらせるラヴィンの濁声が、異様な雰囲気を撒き散らして始めた。
そして此処で、ラヴィンの元に走ろうとしたリエルの部下が。

「うぎゃぁっ！！」

と、叫ぶのである。

瞬時の中。　立て続けに次々と起こる事に対し、もうしていいか対処出来ないリエル達は、立ち止まるしか無かった。

ラヴィンを襲ったアンソニーは、顎を握り潰され様として痛みに抵抗するラヴィンが握る剣を、一気にもぎ取る勢いで引き抜いた。剣を放そうとするより、握る力が抜けきらなかったラヴィンの右腕は、強い力で引き伸ばされた。　その勢いで、肘・肩で繋なぐそれぞれの腕の骨が外れてしまう。　これが、喉を詰まらせながらの異様な声をラヴィンが出す結果に成る。

更にアンソニーは、向ってくるリエルとその部下3人の気配を読んでいた。　だから、一番大男の部下に目掛けて、ラヴィンより奪った剣を投げたと云う処。　切っ先すら無い剣だが、瞬く間の勢いで投げられたのだ。　剣は、大男の左肩に直撃。　その大男の身体を刀身が貫き、鍔が体に引っ掛かる形で大男は１０数歩後方へとブッ飛ばされてしまったのである。

恐るべき短い間に、立て続けて起こる事に驚くばかりのリエル達。
　仲間の一人が叫び上げた事で、ラヴィンに向かう足がその場から先に動かせない。　そしてリエルが何より不思議なのは…。

（どうして…。　どうして相手が見えない？　・・嗚呼っ、ラヴィン様が持ち上げられているのも、その影で何となく判るのに…。持ち上げてるあの男が…影にも見えないっ！！！）

リエル達は、暗い闇の中でアンソニーの妖しき眼だけしか判らない。

その不気味に光る眼が見えても、夜に慣れたプロの夜目が、アンソニーの体のシルエットの何処も見えないのである。　流石に人殺しも簡単に行うリエル達が、篝火も近い闇で人を判らないなど…。
しかも、目で其処に居ると解っていて、判別出来ないのだ。

こんな事は、リエルもその部下達も経験の無い事だった。

さて。

左側に持ち上げたラヴィンを見ずして、リエル達に向きながら立つアンソニー。　圧倒的な強さから与える恐怖を闇に漂わせながら。

「殺しはせぬ。　だが、後で我が恐怖の魔法で、その貴様達が企てる真意を激白させてくれよう。　我が国の忠臣を殺めた罪…。　命ぐらいで償えると思う無かれ、悪党どもよっ！！！！」

と、ハレンツァを思うアンソニーは、怒りを声に込めた。

「…」

リエル達がその強大な魔の力に怯える瞬間。　アンソニーは、暴れるラヴィンの左腕すらも捻って使えなくする。　そして、残る悪党を潰すべく、ラヴィンを庭の雪の上へと放った。

顎の骨が壊されたか、外されたかして口が閉まらず。　雪に覆面の顔を埋めたラヴィンは、痙攣して突っ伏している。

「あがぁ・・あがが…」

アンソニーを間近にして、恐怖の魔力も受け止めてしまったのだ。

痛みか、恐怖からか、血走ったラヴィンの目には涙が浮かび。
身動きの出来ない様子からして、意識が正常なのかすら解らない。

一度。　アハメイルに来る途中まで尾行された相手を、捕縛出来る所まで追い詰めながらも自決されているアンソニーだ。　同じ轍は踏まないと云う想いで、ラヴィンの自由を粉砕したのである。　ハレンツァを失った悲しみ。　アンソニーは、密かにそれを爆発させていたのだった…。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

明日か、明後日に後編が続きます。

ご愛読、有難う御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終話

≪相、打ちて　【後】≫

呼び出された水の女神は、癲癇（かんしゃく）かひきつけでも起こしているかの様なハイニーズに眼を向ける。　ブルブルと震えながらも呼吸を荒くして、虚空を見上げたままに膝を着き。　両手を左右に開いたままに、ただ・・ただ…。

「何という事でしょう…。　もう、命の灯火が消え掛かっているのね。　今まで精霊を殺して来た呪いが、魂を蝕んで侵食してるわ」

ユリアは、怒りを孕む眼で。

「自業自得だよっ…。　火食鳥も・・泣いてた」

精霊と心が通うユリアだ。　精霊の気持ちが、痛いほどに伝わる。

炎に宿る精霊が、ハイニーズの呪術でその精霊としての形を壊される時。　悲痛な絶命の声が聴こえていたのだ。　精霊と同調するユリアには、火食鳥の嘆きが我が身の様に伝わって来ていた。

ユリアがハイニーズを無力化した頃。　マーリ達や兵士が、悪党どもと激しく戦う場所で。

「大丈夫かっ?!」

槍の一撃で悪党一人の肩を刺しながら突き飛ばし、スピアで小回りの利く別の者を打ち据えたクラーク。

「ボビー副隊長がっ」

「さっきからおかしいんだっ」

刃向かう気の在る悪党を相手にする兵士二人が云えば。

「こっちもっ、カルカッテがフラフラしているっ!!!」

「何かの魔法かっ?!」

と、マーリと、その仲間が次々に口走る。

小太りの悪党が襲って来る。　ダガーの突き込みを槍で弾いては、ヨロめく相手を蹴倒すクラークで。

「此奴共は、武器に毒を仕込むっ。　傷を負わせられたならっ、直ぐに下がれぃっ!!!」

と、兵士達を圧倒し掛ける大男のロイジャーに向かって行く。

先の不意打ちで、完全に先制を取れた兵士やマーリ達。　だが、1

0人を負傷させても、まだ相手に数では分が在った。

マーリの見込んだ用人カルカッテは、相手が悪党風情だと舐めて掛かったが故の負傷だが。　ボビーは、兵士を誰一人倒されまいとして。　兵士達の装備する長柄の槍のスクラムを活かす為、自らは剣を抜いて踏み込んで来た悪党達を塞き止めた。　その無理をしたが故に、多勢に囲まれる危険を幾度も迎えた末の負傷であった。

悪党達とて、短剣は投擲仕様の物と、至近距離の武器を使い分けている。　特に投擲仕様のダガーは、確実に神経系を侵す毒が塗られれている事が多く。　今回に至っては、ラヴィンからの指示で、全員が塗っている。　更に中には、得物の武器にも塗る者も…。

クラークは、怪我人を引かせ、兵士を護りに回した場合。　マーリやその仲間を入れても、４対２０前後に成ると。　そんな劣勢に至ると思っても、

「兵士の者はっ、負傷者と主だった敵を捕縛して下がれっ！！　護りは、このクラークが引き受けるっ！！！！」

と、下がらせようとしたのだ。

一方のマーリも、カルカッテの事が心配であるし。　暗闇を利用しようと、篝火の灯りの範囲の堺にチラチラする悪党が不気味で怖い。

「クラーク殿っ、闇に入ってはバラけ過ぎるっ！」

此処で、剣を手に向ってくる悪党を、

「やぁっ」

と、マーリはやり返してから。

「離れ過ぎては、下がってる魔法遣い達も危ないっ」

と、更に声を出した。

大男で、ユリアなどからするなら、見上げる様な悪党集団の頭目ロイジャー。　彼の振るう長剣を、鋭い振り払いで強く弾き返すクラークだが。　マーリの言わんとする事は、十分に解っている。　誰よりも先に出て、皆をユリアの方に退かせる為に、殿（しんがり）と成る気であるだけだ。

「解っておるっ！！　ユリア殿の方に全員退けぃっ！！　一気にカタを着けるぞっ」

この、“一気にカタを着ける”。　この夜の闇に響く言葉は、悪党達にも聞こえた。

ボビーを護り、マーリ達より先に退く兵士達は、途中でデイブとゴストンだけは捕まえて引き摺る。

マーリは、その様子を伺ってから、

「下がりなさいっ。　さっ、篝火の方にっ」

と、仲間を促しながら、カルカッテを護る。

ジリジリと引きながらも皆を護り、堅牢にして鉄壁の盾と成るクラーク。　そのクラークを、睨みながら攻めるに攻められぬ間合いを

保って追うのが、悪党の残党達。

頭目ロイジャーは、クラークに一人では歯が立たないと思うが。
仲間やリエルの手勢も含めて２０人ぐらいが集まったのを確認すると。　欲望と悪意・殺意がギラギラと滾る憎しみめいた眼をひん剥き。

「“一気にカタを着ける”ぅ？　遣れるモンなら遣って見ろっ！！！！！　どうせ死ぬぐらいなら、一人でも多くブッ殺してやるさぁっ！！！！　さぁっ、続きを始めろぃっ！！」

と、怒声で捲し立てた。

この時。　怪我人が見えた事で、ユリアはセイルに向かう手が何時に成るか心配に成る。　セイルから、ハイニーズの事を含め託されたユリアだから。　この場に来た仲間に死人など無く、一安心してセイルを見に行きたいとも思う。

「レナース、もう少しだけ力を貸してね」

と、杖を握り締めながら水の女神に云うと。　そのまま仲間と下がりながら、此方に来ようとしるマーリの方に向かうのである。

「あっ、危ないですよっ」

「おっ、おいっ！」

待機する僧侶や、魔法の光を杖に宿して掲げるマーリの仲間が、ユリアの行動に驚くのも無理は無いのだが…。

水の女神を宙に携え、兵士達の前に出るユリア。　カルカッテを連れるマーリの仲間が過ぎた所で止まると。

「凍える冷気よっ、敵を包む檻に成ってっ！！」

サハギニー、水蜘蛛がユリアの左右に浮き。　ユリアの頭上には、水の女神が浮かんで魔法を繰り出す。

頭目のロイジャーが、その右手に在る剣を前に振り出して。

「野郎どもっ、殺っちまえっ！！」

と、号令を掛ける時。

「おうっ！！」

と、声を返した大柄の悪党の前にて、急に何かが現れた。

「わぁっ」

クラークの脇に見えるユリアに目掛けて、一歩を踏み出そうとした目の前に何かが生える様に現れたのだ。　応呼した悪党は、勢い余って現れた物に顔をぶつける。　痛みと冷たさがぶつけた部分に感じると云うのが、その男の感想であろう。　現れたのは、透き通る様な太い氷の柱であった。

「あっ？　何だ、この柱はよっ」

別の悪党が、現れた氷柱を見て云う。

だが。　その現象はそれ一つでは無い。　篝火の灯りが届く範囲に出てきた悪党達の周りに、次々と透明な氷柱が地面より天に向かって生えていく。　悪党達を一箇所に集める様に。　そして、逃がさない様に。

「おぉっ、氷の柱が…」

驚くクラーク。

「凄い、悪党を固まりから逃がさない様に生えてくる」

マーリもまた、魔法に感嘆を見せた。

悪党達が次々と生える氷柱に驚き、一箇所に固まって囲まれて動けなく成る頃合い。　ユリアは杖を大きく振り回し。

「全員凍えちゃえっ!!　唸れ吹雪っ」

と、更に呪文を繰り出す。

「おいっ、一体何だコレっ?!!」

「逃げれねぇっ!!　閉じ込められたっ」

「柱の隙間探せよぉっ!!!!　壊せねぇのかぁぁっ?!!」

悪党達が大きく騒ぎ、氷の柱を壊そうとしたりする中で、その周囲に吹雪が巻き起こる。　雪を伴った風が吹き始めたら…。　マーリやクラーク達の面前で、悪党達を取り囲んだ氷柱さえ見えなくなる程に激しい吹雪が…。

「あ・・こんな…」

「これが精霊魔法か…」

マーリの仲間や兵士などが、その凄絶な魔法の有様に驚くばかりで。

「助けてくれぇぇーーっ！！！」

「わぁーーーーっ！！！」

「寒いっ！！！　あぁっ、寒いっ」

吹雪に呑まれた悪党達は、もう死に物狂いの様な助けを呼ぶ叫びを上げる。

「ん、うぅ・・」

強力な魔法を維持する事で力み。　小さく呻くユリアは、マーリ達や兵士の皆を見て。

「ま・魔法を止めるからっ。　悪い人・・・つか・つつ・・捕まえてよっ」

と、苦しそうに。

今のユリアは、必死な感情から上位精霊を呼び出したものの。　この雪が多い場に助けられて呼び出せるのであって、決してユリア自身の実力が伴ってるとまでは云えない。　ユリアが上位の精霊を呼んでも、その呼び出せる間は限られるだろう。

仲間のクラークは、ユリアやセイルから精霊魔法と精霊についての事を幾分聞いていた。　だから、ユリアの精神に圧し掛る疲労が、既に限界に来ていると看破出来た。

「ユリア殿っ、もう良いっ!!　後は我々が捕まえ、セイル殿に助太刀するっ」

頼れるクラークの言葉に、歪む顔を綻ばせたユリアは杖を下ろし。

「もういいわ・・ありが・とう」

と、その場に崩れるのだった。

「ユリア殿っ」

「チョットっ？」

慌てるクラークとマーリだが。

「ユリアは大丈夫よ。　さ、早く捕まえて」

水の女神は、クラークにそう云う。

それを見ていたフラフラのボビーは、解毒の魔法を受ける最中ながら。

「ば・バカ・・ものっ。　任務を・・すっ・遂行せぬ…かぁ」

と、自分を心配して集まっている兵士達へ、叱りつける様に云うの

である。

「はっ。　皆っ、行くぞっ」

男の色白な兵士が、動ける5名の仲間に云う。

「はっ。　ボビー副隊長っ、ご無事で」

「任務、遂行致しますっ」

兵士達は、此処が最後の踏ん張り処と敬礼を胸に翳し、悪党達の方に向かって行く。

身動きの出来ぬボビーだが、剣は手から放さず。

「まだ・・、これしきの・・」

と、向かった兵士達を見送るのである。

兵士が動いた事で、それを見たマーリも動ける仲間を見て。

「捕まえるっ。　魔法の光をこっちに」

と、魔術師の仲間を指で呼んだ。

マーリ達と兵士の一団がロイジャー達悪党集団の残党の元に向かう。

クラークは、膝を着いて大きく肩で息をするユリアに駆け寄り。

「ユリア殿っ、大丈夫かな?」

白い息を絶え間なく吐くユリアは、この寒い中でも声が出ず。　頷くに留まる。

クラークの視線は、怪我人に移り。　悪党数人とジェノサイダーの仲間は、身動きの出来ない拘束に至っている。　用人カルカッテは、もう建物の壁に凭れて動けない状態だが。　副隊長ボビーは、無言の我慢で悪党達を見張っている。　残った兵士一人と、男女の僧侶が強ばった緊張の面持ちで見張りをしていた。

（なんとか制圧に至ったか。　アンソニー殿は、一人誰かを逃がして。　そのまま追跡を試みる様だから、直ぐにセイル殿の元に向かわねば…）

状況に一安心を得たクラーク。

そんなクラークの間近に、闇玉がフワリと現れ。　更に、サハギニーがトコトコとやって来る。

闇玉は、クラークの右肩の宙でフワフワと動きながら。

「オイっ、槍のオッサンっ！　早くセイルを助けに行ってくれ。ユリアとあの仲間は、オイラが護るっ」

サハギニーも。

「槍の友よっ！！　敵を逃がしたり、セイルに何か有ったら大変だっ。　此処は任せて、セイルへ助けに行ってくれ」

「・・解った。　ユリア殿や、皆を頼む」

クラークが云えば、闇玉は見えぬアンソニーの方を向いて。

「あの王子サンは大丈夫だぜぇっ。　残り二人…、いや。　一人に成ったっ！」

クラークは、アンソニーの方を向き。

「そうか。　なら、心置きなく行けるっ」

と、立ち上がる。

闇玉は、ススッとクラークの前に出れば。

「あの死んだジイチャンの敵討ちだっ！！！　ヘマして敵を逃したらっ、毎日扱き下ろすからなっ！！」

と、感情を露にして、モワモワと動く。

そんな闇玉を見るクラークは、精霊が人に感情移入している事に少し驚きながら。

「当然じゃ。　必ずセイル殿を連れて、敵を捕まえるわいっ」

クラークがマントとバロンズコートを二重に閃かせ、建物内部に戻るべく階段に向かう。

その光景を見ていた水の女神は、ユリアの脇に居て。

「あの生まれたての精霊が…、人に感情移入するなんてね」

強力な魔法を使った事で、一気に襲う疲労に言葉を出せないユリアだが…。

「ウルセェっ。　ユリアのダチは、オイラのダチに為る時も有るんだよっ！」

と、闇玉が水の女神に言い返す。

水の女神の脇に飛び出すシェイドが居て、

「水の女神様。　生まれたばかりのあの子の口の悪さ、許して下さいませ」

と、云うのに対し。　水の女神は、寧ろ言葉遣いなど気にしても居ないと云った眼差しで、また闇玉を見る。

「いえ、いいのよ。　でも、生まれて間も無い子が、こんなにも早く確固たる意思を持ち始めるだなんて…。　光の子セーラと同じく、不思議な事だわ…」

水の女神の眼の中で、闇玉とサハギニーが既に縛られた動けない悪党の方に向かう。　魔法と云う特別な行為以外は、人に干渉する物理的な行動は起こせない下級精霊なのだが。　ハレンツァの事を口にして、憤りを悪党達にぶつけているのが印象的である。

水の女神は、その不思議だと思える眼差しをそのままに、へばったユリアを見たのだった…。

さて。　一方で。

「おーいっ、もう寒さで凍えて、悪党どもは動けないぞっ。　武器を取り上げ縛り上げろっ！！」

兵士の一人が、全身に白い氷の粒を被って凍える悪党達を見る。
あの檻と化した氷柱は、既に消え失せ。　猛烈に渦を巻いて起こった吹雪も、嘘の様に止んでいる。　凍死寸前の悪党達は、刃向かう処の状態では無かった。

マーリは、悪党達が腰に下げるロープなどにも眼を向かわせて居て。

「縛る紐が足らぬなら、相手の持ち物を利用しなさい。　一人も逃すなっ、刃向かう様な容赦も要らぬ。　少々の手荒い真似も許す故、全体に逃すなっ」

「了解」

「解った。　しかし、精霊魔法ってスゲェ～な」

「あぁ。　この人数の相手を、簡単に制圧したんだからな」

マーリの仲間は、無駄口も動かして作業に移る。

兵士達は、此処の安全を早く確立しようと。　身動きの出来ない悪党達を次々と引き摺り、縛る事に黙って動いた。

粗方のカタが着く時には、リエル以外の悪党達を動けなくしたアンソニー。　闇の中で見るに、逃げ腰のリエルがダガーを抜くのが、

ハッキリと見えるアンソニーであり。

（頃合いだね。　人質の居場所を、早く突き止めなければ…）

と、思い。　セイルから借り受けた日用の片刃ナイフを抜いた。

逆に、相手の居場所が目の光だけと云うリエルは、仲間がもう応答しない事に焦っていて。

（いけないっ！！！！　自分だけでも逃げなきゃっ！！）

感情が女性に入れ替わりそうなのだが、女王様の気質の性格が表に出ない。　恐怖に怯える事が何よりも先んじて、人格の入れ替わりも狂って出来ない始末ならしい。　毒をたっぷりと塗ったダガーを、光る相手の眼に目掛けて投げた。

アンソニーは、飛んできたダガーを右手で掴み取り。

「返す」

と、日用のナイフを投げる。　闇夜の空を走るナイフは、リエルの左上腕部に突き刺さり。　衣服を破り、肉を斬って飛び抜けた。

「あうっ！！　馬鹿なぁぁっ！！！！」

しかし、驚くは此処からだ。　痛みと共にヨロめいたリエルは、何を思うか雪の庭に蹲る。　アンソニーが間近に居るのは承知のハズなのに、逃げるは愚か、武器すらも雪の上に放り出し。

「駄目っ！！！　いやっ、いやぁぁーーーーっ！！！」

と、叫び上げたのだ。

アンソニーの見える視界では、リエルが大慌てで雪を掴んでは、苦痛に堪えながら傷口に押し当てる仕草をする。　敵と相対する中で、相手を無視する程に慌ててそんな事をすると云う事は…。

（あの者の様子からして、この投げられた武器に付着する毒とは、相当に人にとって危険な物の様だな。　人に遣う分には気が咎めぬ様だが、流石に自分が受けると現状の事もそっちのけ…。　何とも愚かな者共よの）

アンソニーは、改めて毒の塗られたダガーを忌み嫌い。　足元に近い場所に気絶するリエルの手下を見ると、皮の鞘に納まるダガーを蹴り飛ばした。　留め金が壊れ、遠くの庭の先に消えてゆく。

リエルが別のダガーで、腕の傷口の肉を僅かに抉って呻き上げる間。　アンソニーは、動けなくしたリエルの手下を見て回り。　余計な武器をベルトごと奪ったりした。

（だ・ダメだっ。　もう…逃げるしか無いっ！！！）

腕の傷口を押さえるリエルは、もう此処から少しでも遠くに行く事しか頭に無くなった。　此処に攻め込んだ時まで、ジェノサイダーがやり過ぎる事ばかり考えていたのだが…。　現実は、そんなに甘くは無かった。　寧ろ、此処に裏から入ったガルシア達が来ないのが、非常に不気味である。　もう捕まったか、若しくは来れない様にされたか。　敵として相手にするアンソニーやクラーク等の力量からして、何れかとしか思えなかった。

さて。　少しだけ時を戻そう。

ユリアがハイニーズを動けなくして、精霊魔法の禁忌で生み出された炎の人形を消滅させようとする時。

「うらぁっ、はぁっ！」

裂帛の気合いを持って斬り込まれたガルシアの剣を、セイルが少ない動きよけて。　続け様、ガルシアの剣が跳ねる様にセイルの首に目掛けて横殴りに払われる。　屈みながらセイルは、ガルシア脇に斬り掛かる。　しかし、ガルシアも左手で投擲用のダガーの柄だけを持って、腕を交差させる格好で剣を防いだ。

二人から少し離れる所では・・。

レイの遺体が相当に燃え。　更にセイルへ投げ付けられた固形燃料が、そろそろ燃え尽き様としている。　廊下の内壁に等間隔で設けられた仕切りの様な出っ張りの角。　そこに、風などで寄せられた枯葉や木の枝など体積したゴミが、引火してジワジワと燃えるのも見えていた。

そんな灯りが届く範囲内で、二人は闘っている。

技と速さが光るセイルに対し、使い込まれ染み付いた剣術で戦うガ

★

ルシアは、打ち合う数だけで２０数合。　互いによけた手数も入れれば、倍は手合わせているだろう。

王都では、ラヴィンの腕を買った様な言い草のガルシアだったが。
　やはりその腕は、若い頃に修行を積んだ物が残るだけ在った。
剣だけに頼まない喧嘩殺法や、ダガーを投げる等の卑怯な手も平気で遣う彼だが。　その実力は、流石にラヴィンより一枚上手で在るとセイルは感じる。

更に。

頬を薄く斬られた紅い筋を作ったりして、フードやマントのあちこちが斬られるセイル。　また、ガルシアも、頬や金属の腕輪から外れる腕に細かな生傷を幾つも作っており。　そんな二人を玄人が見れば、薄皮一枚を削る死闘の攻防を繰り広げているのが窺えるだろう。

「このっ」

「んっ！」

生意気なと、右手だけで剣をセイルに薙ぐガルシアに対し。　両手で剣を持って打ち合わせたセイル。

「このぉぉぉっ」

上から乗せられる格好に成った事で、ガルシアは体重も掛けてセイルを剣で押す。　セイルは背が低い分だけ、剣を潰される様な格好で押し込まれた。

力をグイグイ込めるガルシアの目が充血して、ギョロリとした眼をセイルに向けると。　セイルは、躰を右に傾け。

「はっ！！」

押し込む事に集中し過ぎて、力に掛かる方に身体が泳ぎそうなガルシアの腹部を蹴る。

「おうっ・・」

体勢を崩して下がるガルシアだが、セイルも攻めずに間合いを取る。
　今の押し合いで手首に重荷が掛かり。　少し感覚が鈍ってしまったからだ。

「ふぅ…」

大きく一呼吸をしたガルシアは、剣を握り直し。　そしてセイルを睨み付けながら、何とも苦い笑みを浮かべた。

「やるなぁ。　一応は鎧着てるのに、蹴りの衝撃が腹に滲みたぜぇ？　所でお前よ、何でそんな安物の剣なんか持ってるんだ？　まさか、相手を舐めてるのかっ？！」

手首の痺れが薄らぐ中、セイルは時が欲しく…。

「家族には、内緒で飛び出して来たんです。　そんな高価な物品を持ち出す暇、在りませんでしたよ」

すると、ガルシアは憎たらしいとばかりに横を向き。

「けっ」

と、唾を吐くと。

「お忍びで旅する割にゃ～チームの名前がビック過ぎらぁ。　此処で俺に勝ったら、一気に羽ばたけるぜっ」

と、前を向き。　大きく前に踏み込んで、セイルに向かい出す。

ガルシアが話を遣って不意を突く事を想定していたセイル。　相手が動き出した事で、痺れが取れかかった腕に力を込め、ガルシアとの間合いを見ながら踏み込む。

しかし。

腕の力が入りきらなかったセイルの剣は、斬り合わせる具合いに鈍りを見せた。　踏み込みの間合いは一緒。　先に反応して突きを繰り出すセイルだが、手首に力が入らない分伸ばす速さが遅れる。

逆に。

「ふんっ」

と、後の先を受ける様な間合いで反応し。　突きを見切ったガルシアが、鋭くセイルの剣を斬った。

鈍い“ガキン”と云う音に反応し、パッと退いたセイル。

確かな手応えに不動のガルシア。

（斬られた…）

と。　セイルは、完全に切断された剣を見る。

対して。

「よう、急に鈍ったじゃねぇ～か」

と。　ガルシアは、勝ちを確信した笑みを向ける。　セイルには、もう代わりの武器が見えないからだ。

（マズい…。　他に手段は…一つしか無いのに）

セイルは、折られた剣を見て背筋が凍った。

セイルの内心を読めたと思うガルシアが、一歩を踏み出すと。　警戒したセイルは、大きく引いた。

辺が少し薄暗く成り始めた中で。　ガルシアは、殺気と歓喜を混ぜた狂喜の眼をセイルに向け。

「うははははっ、一瞬の油断が俺に運を付けたな。　さぁ、どう遣って殺してやろうかっ。　あぁっ?!!」

勝った気に成ったガルシアは、持ち前の残虐な気性が顔を擡げた。

セイルを徹底的に甚振り、切り刻んでやろうかと思ったのだが…。

「まだだっ」

声を上げて、セイルは更にポーンと大きく退いた。

二人の間は、１０数歩に至る。

ガルシアは、セイルがまだ諦めを窺わせない言葉を吐いた事で、踏み出した二歩目で立ち止まる。

「？　お前、ふざ・・」

負け惜しみか、ハッタリをかます気かと罵ろうとしたのだが。　フードを取ったセイルのその眼が、美しい紫色のオーラに輝くのが見えた。　自分の仲間のサロペンが、魔想魔法を遣う時に酷似していると瞬時に判断出来る。

折られた剣を見たセイルは、精神を集中させ。

（エンチャンターでも…魔術師でもない。　魔想の力を、元から在る物に這わせて武器を生む。　僕の…僕だけの力っ！！！！）

セイルの精神が、疲れた中で研ぎ澄まされる。　前に、アンソニーの眠る居城の地下にて、ケルベロスストライカーと云う強敵を相手に、未知の領域に踏み込んで魔力を爆発発揮させた。　一かバチの行為で、セイルの体が疲弊し。　その結果、魔法の剣を遣う事が躊躇われていた。

が。　もう、余裕は無かった…。

神官戦士でも無いセイルが、魔力を眼に浮かばせる。

「おっ・・お前っ。　魔法が遣えるのかよっ」

固定概念を覆す光景であり、ガルシアは毒気を抜かれる思いだ。

セイルは、瞬間に瞑目し。　もう、他に手は無く。　全力を持ってガルシアを倒す事にだけ、一念を置いた。　本来、攻撃を主とした魔法を、如何なる事情に於いても、に遣う事は、一般の考え方からして良い事では無い。　だが、その一線を踏み越える時が来た。

「魔力よ。　魔想の力を借りて、一時の形を成せ。　具現は、我が意思なりっ」

カァっと眼を見開くセイルの声に、蒼白い光が壊れた剣を覆う。そして、魔想の力が折れた部分から先に伸び。　ガルシアの眼に映る中で、信じられない剣が生み出された。

「な・あ？　魔法の・・剣だと？」

殺し屋として、世界を股に掛けたガルシアであり。　冒険者として、最初は放浪者と成った彼だが。　魔法で剣を生み出す剣士など聞いた事が無い。　剣術に魔法を乗せるのでは無い。　剣を生み出す魔法で造られた剣で、剣術をするのだ。

セイルは、魔法を遣い存続させる為に精神的な負荷を受けるのだが。魔力の御陰で剣が手に馴染み、重さを感じない利益も感じる。

（行ける。　少しの間なら、これで行けるっ！！）

戦えると思えた。　セイルは、此処で一気に勝負を着けようと。

「行きますよっ。　勝負は、まだ終わってないっ！！！」

弓弦が放たれる様に、素早い踏み出しからガルシアへと駆け寄るセイル。

（クソっ、あんな奥の手が在るものかっ？！！）

驚きが強く、心が落ち着かないガルシアは、動転したままに。

「せいっ！」

ガルシアと略頭が揃う高さに飛び上がるセイルは、腰のバネが利いた鋭い薙ぎ払いをガルシアに見舞う。

「小癪なっ」

と、セイルの繰り出す剣を斬り払おうとしたガルシアだったが…。

剣と剣が噛み合った一瞬。

「うおっ」

ガルシアの剣が、剣撃とは思われぬ別物の力に弾き返される様な衝撃を受けた。“バギーーンっ！！”と云う音と共に、跳ね返される力で大きく仰け反る様に後退したガルシアである。

着地して剣を見るセイルは、

「魔法の力が、炸裂するエネルギーを維持してるんだ」

と、感想を口にするのに対し。

弾かれた衝撃で、手が痺れるガルシアは堪ったものではない。　セ

イルを鋭く睨み、ワナワナと口が歪む。

「テメェ・・、こんな奥の手持ってるのに、最初っから使わねぇのかよっ！！！！！　ったく、何処までも俺様を舐めやがってぇぇぇ…。　死に晒せやぁぁーーーーっ！！！！！！！！！！」

剣士として、勝てると思うたびにその意思を覆されるのも嫌なものだろう。　二度も剣を折る度に勝てると思え。　その都度に覆される。　襲撃した身であり、あまり此処に長居出来るとは思っていないガルシアで。　しかも、誰も此処に来ない事に焦りも出てきた。

そして…。　レイを殺したセイルを、だ。　負けて倒せないのは、ガルシアにするなら悔しいにも程が有る…。

しかし、だ。

ガルシアが動く事で、再び交刃の間合いに踏み込んだ互い。　セイルが、身を半回転させる様に斬り払えば、有りったけの力で殴り付ける様に剣を打ち合わせるガルシア。　だが、それでも剣が噛み合うと、ガルシアの剣は弾かれる。

見えない強い力に弾かれた直後にヨロっと後ろに一歩引いて、何とか持ち堪えたガルシアだが。

「鋭っ！！」

軽いステップで半歩踏み込みながら、更に旋回して斬り上げるセイルの剣。　その切っ先が、ガルシアの胸板辺りを斬った。

「んぐっ！！！」

初めてガルシアが、体勢を崩して大きく後退した。

（手応え在ったっ！）

セイルは、確かに斬った感触を手に覚える。

セイルの前、数歩先。　燃えるレイの遺体が、黒焦げて燃える部分も少なく成った中。　胸を押さえたガルシアは、鈍い苦痛を感じて立膝で居る。

「…、クソ」

マントと鎧の上に置いた手を見れば、黒ずんだ液体で濡れている。鎧すらも切断された格好で、胸部を少し深く斬られているらしい。渋く舌打ちしたガルシアは、自分の遣った事だが。　無残な姿に変わり果てたレイを見て。

「なぁ…。　どうやら、俺等の夢は叶いそうに無いぜ。　こんな所で、信じられねぇぇ・・クソガキに出遭っちまった」

もう、燃える炎の灯りも少なく成り、天井が薄暗く成った。

剣を下段に付けるセイルは、ガルシアからまだ揺るぎない戦意と云うか。　自分に向けられた殺気を感じる。

（来る…。　この人に、説得なんて通じない）

人殺しの“悪道”と云うか、殺伐とした道を貫いたガルシアだろうが。　最後に見せるその姿は、戦い抜くだけの覇道に通じる気配だ

った。

「もし、負けたとしても。　お前になら、仕方無いか…」

と、ガルシアは立つ。

薄暗い中で、ヌルリと不気味にセイルを見るガルシア。

その気配に、人の殺気としては異様な執念が含まれる不気味なものが含まれる様で。　背筋に寒気を覚えたセイル。

（無理・・、無理だ。　僕には、この人を手加減して捕まえる技量は無い。　・・決まる。　どっちかが、死ぬ）

セイルは、この後の一瞬で何方かが死ぬと予想した。

そして・・。

「うるわぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーっ！！！！！！」

もはや、それは人の咆哮では無い。　ガルシアが獣の様な声を上げ、セイルに向かった。

相手を見たセイルは、ガルシアの右脇に抜けるのが、斬り交わす中で最高の一手だと直感する。

そして…、その一瞬を時を刻んだ。

一撃必殺の一念を秘め、大きく上段に振りかぶって肉薄して来たガルシアであり。　剣を握るガルシアの手首が動き出す一瞬を見切り。

跳ね跳ぶ様にガルシアの右、狭い間へと剣を薙ぎ払いながら抜けるセイル。

「…」

「…」

剣を振り下ろしたガルシアの前に、セイルは居ない。　立ち尽くすガルシアの右後ろに、青白く光る壊れた長剣を払い抜いたセイルが居た。

力強く凝らす眼のセイルに対し、ガルシアの眼は…死んだ様に成っていた。　グラリと体が揺らぎ、その場に崩れたガルシア。

「み・・見事」

と、俯せた体勢から呟くだけで、血を吐いて動かなく成った。

極限に張り詰めた緊張の糸が、風に解け散る花弁の様に消え飛んで行く。

「……ふぅぅ・・」

セイルの剣に纏わる魔法が、剣の形の影を描いて消えていくのだった。

「セイル殿ーーーっ!!　大丈夫ですかっ?!!」

クラークの心配する声が響いて来る。

（勝った・・、切り抜けられたんだ）

そう思うと。　短い間とは云え、魔法を維持して存続させ続けた代償が、全身に津波の如く襲ってくる。　魔法の修行をしっかり積んだセイルではない。　攻撃の魔法を剣に乗せるより、格段に精神疲労を負う行為をしたツケは酷いものだった。

その場に膝を崩したセイル。

処が。　此処で奇妙な事が起こる。

クラークがセイルを見つける前に、弱い炎の灯りで生まれるセイルの影が、何故かダブって片方が動いた。　セイルの影から抜け出した影は、レイやガルシアの踏み込んできた亀裂を抜け。　粉雪が舞う夜の闇に消えて行ったのである。

この影、なんなのだろうか…。

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

次か、その次で最終話と成ります。

ご愛読、有難う御座います＾人＾

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3

セイルとユリアの大冒険　3

第一章・旅立ちの三部作・最終話

≪その後…≫

雪国の中でも、冬にカラリと晴れる日は少ないフラストマド大王国。
しかし、この日は珍しく綺麗に晴れた。

「…」

セイルがゆっくり眼を開くと、其処は見慣れない場所だった。うっすらと柑橘類の香りがして、ボンヤリと視界も明るい。

「あっ、目を覚ましたっ」

このユリアの声が、間近で聞こえたセイル。鉛の様に重たい体だが、首を動かして左に向けると…。ベットの上で寝ているらしい自分の枕元に、ユリアの仲間である精霊達が居る。サハギニーや水蜘蛛。セーラ・シェリールも居るし、宙に浮いてテングが此方を覗いてきた。

「ダイジョブかぁ」

声だけだが、闇玉の声がする。ぼんやりとする視界。なんとか

理解出来る所では、どうやら何処かの部屋で、ベットの下に闇玉が居るらしい。

少し重い瞼を半開きにしたセイルの視界に、ガバッとユリアが顔を見せて。

「アンタねぇ～、何時まで寝るのよっ」

朝の光を入れてる部屋の中で、セイルは呟く様に。

「僕・・そんなに……？」

立ち直り腰に手を当てるユリアは、安心と呆れの混じる顔で。

「もう、ブッ続けで４日。　年初めのパレードとか、色んなイベントも終わっちゃったよぉ～。　ん、もうっ」

態と少し悔しがって見せたユリアは、

「んじゃ、クラークさんとか呼んでくるからね。　寝るなよっ」

と、ドアに向かう。

ユリアから余り離れられない精霊達は、皆が消えたり離れようとする中で、セーラだけは残った。

ユリアが退室して、精霊が消えた中。

「セ・ラちゃん。　ユリアちゃん…寝てない？」

セイルが聴けば、セイルの枕元に御人形さんの様に座って、光る花を触るセーラは小さく頷いた。

「うんっ。　セイルが心配で、眠れなかったみたい。　うたた寝しても、短くて…。　セイルが起きないから、みぃ～んな心配してたわよ」

セーラの話を聞くセイルは、記憶を辿るのだが。　ガルシアを斬った辺りで記憶が無い。　クラークに背負われた様な気がする…。それが限度である。

セイルがぼんやりしていると、右側の窓に風が拭きつけたのだろう。　ガタガタっと窓が動いた音がした。　セーラは窓を見たが。　セイルは、白と青のチェック柄の天井を見上げたままである。

（斬って倒す以外は、僕には無理だった…。　クラークさんを回せば・・、ううん。　槍であの狭い空間は難しい…。　先に僕が斬った人と二人を相手にしたら、クラークさんでも危なかった）

不思議である。　己自身の人間性と云う意味では、二人を斬った事に強い罪の意識を感じている。　だが、二人を斬った手は、身体は、不思議な達成感と云うか。　成し遂げた満足感に近い手応えを覚えている。

あの夜の闘いの中。　先に斬った人物の足を攻め。　後から入ってきたジェノサイダーのリーダーの男を警戒して、倒れた人物の前に出て身動きを征しようとした。　だが、抜き打ちの一撃を躱（かわ）した直後、二の手で突かれると感じた時。　振り返るタイミングは、あの間合いでしかなかった。　早ければ・・は、無く。　遅ければ、刺されたかもしれない。　振り向き様に振り払った剣は、相手の手首

を斬って。　相手が突く為に使わない手で、前に身を持ち上げた為に切っ先が喉に…。

（これが、剣士の宿命…）

剣術を子供の頃から嗜む様に成ったセイルは、実家が営む稽古場に来ている冒険者や風来の武術家と気さくに話した事が幾度も在る。

冒険者に然り、剣術などの腕を磨く武術家に然り、人の命に関わる事で負い目を背負ったと云う人が何人も居た。　悪党とは云え、人を斬ったと云う事。　モンスターなどに襲われた人を救えなかったと云う事。　己の腕を頼みに生きる上で、最も根深い葛藤を齎す要因だと云う。

特に剣士は、その人口も数多く。　また、各国が兵士や騎士に覚えさせる個人武術の類では、最も重視される分野だ。　テトロザの様に、その剣技一つで近衛騎士の副団長まで上り詰める者も居るし。

自分の祖父の様に、剣の腕の名声で、存在自体が誉れに値する人物に成る事も在る。

嗜む人口数が多く、憧れる武術の最高峰が剣術。　しかしそれ故に、武器を扱う人格が伴うかどうかは千差万別。　ジェノサイダーのリーダーであるあの男が、そのいい例の一つである。

初めて人を殺めた事に、セイルの若き心は答えを見いだせる訳も無い。　静かに、あの夜の事を考えるしか無い。

其処へ、廊下を来る足音が幾つも近付いてくるのが聞こえた。　勢い良く扉が開き。

「うん。　まだ寝てないとイイんだけどね」

と、ユリアの声がする。

ユリアの知らせを受け、アンソニーやクラークがテトロザと共にやって来たのだ。

が。

ユリアの後から、テトロザが入り。　クラーク、アンソニーと続く訳だが。　セイルは、アンソニーに対する感受的感覚で、ハッキリと彼を捕える事が出来た。

「アンソニー・・様？」

セイルの一声に、喜びの言葉をもってセイルの脇に座ろうとしたテトロザは、動きを止める。

代わって、セイルの寝るベットの足元を回り。　セイルの左手に迂回するアンソニーが。

「うん。　言いたい事は、良く解るよ」

と。

クラークとユリアは、お互いに見合ってセイルとアンソニーの成り行きを見た。

その中でアンソニーは、何よりも色々な話が山積していると思ってか、テトロザへ。

「座っていい。　彼に、事の詳細を話して下さい。　私の事は、後からでも構わぬ」

テトロザは、セイルとアンソニーが何を言い合いたいのかが解らず。話の順序の流れを探ろうとしていた。　だが、アンソニーにこう言われては、

「は。　では、先に失礼致します」

と、セイルの寝るベット脇に置かれた背もたれの細長い木目の椅子に座るしか無い。　座って見れば、半開きながら、セイルは眼を開いている。　テトロザは、リオンの心情もしっているからか、大いに安心した顔で。

「セイル様、お目覚めは如何ですか？」

リオンからセイルを頼まれたテトロザからするなら、この目覚めは何より心待ちにした出来事だろう。　幾らセイルとユリアが冒険者に成ったとは云え、彼の知り合いはクラン王やリオン。　今回の事で何か有ったら、テトロザも心苦しく。　これから後、政務が手に付かなかっただろう。

「あ・・、少し弱ってるだけですね。　気分は、悪く無いですよ」

弱々しい笑みを浮かべるセイルを見て、テトロザは深く頭を垂れ。

「今回は、御助力有り難き事に。　先日、王都におわすリオン様より、数回に亘って早馬が来まして。　王都では、今回の策謀に関わった全ての者が摘発され、そして裁可が下されたそうで御座います」

「え？　もう・・、裁きが？」

セイルは、流石に早い裁きだと驚いた。

その経緯は、簡単に掻い摘むとこうである。

リオンは、ヘンダーソンを締め上げて、事の詳細を聞き出した。

が、その次の日。　何という事か。　ミグラナリウス老人と、執事の二人が死んだと云う一報を、孫のジャニスから受けた。　リオンが兵を率いて老人の屋敷を訪れると、ジャニスが一般の役人を見張りに立てて、現場を保存させて在った。

リオンの様な剛健たる人物に、天才肌で芸術家の極みの様なジャニスは合わないが。　リオンの下の弟とは、芸術的な趣味からジェニスとは親交が在る。　ジェニスと祖父の犬猿たる仲は、リオンもジャニスの父親から聞いていた。

リオンが現場を見た後で、ジェニスが作った執事マクファーソンの遺書が役人から渡される。　国家顛覆を夢見た老人の鬼気迫る様子と、その片棒を担がされたマクファーソンの苦悩が、その遺書には克明に綴られていた。

ジャニスは、リオンへ。　マクファーソンの国家に対する忠義と、主従に対する忠義の板挟みで自殺した事を告げ。　その心を踏まえた上で、彼の家族に累が及ぶ事は無い様にして貰いたいと願い出る。

　これからも、国家が安泰を維持するには、マクファーソンの様な者が必要だと。

即答出来る事では無い申し出だが、無碍にも出来ないと思うリオン

は、とにかく二人の遺体とこの一件での目撃者当と王宮に連れて行く事にする。

ジャニスが計画した祖父の抹殺は、完璧な仕上がりで幕引きをする。
また、ジャニスは、マクファーソンの家族を養う事に。　情に流される彼では無いが、情を逆手に取る事はする。

また、ミグラナリウス老人の家督は、伯爵に格下げをされながらもジャニスの父親に踏襲される事になる。　この寛大な処置は、ジャニスの父親が、テトロザの片腕としてアハメイルに於ける事件の収束に尽力した事と。　ジャニスや父親には、老人と同じ反逆の意思が微塵も無い事。　そして、忠義の為に散ったマクファーソンの気持ちを組み、彼の行いを手本とする裏が在っての事だった。

一方で。

ヘンダーソンが捕まった事を受け、クシャナディースが自ら出頭した。

が。

クシャナディースは、裁きに因って寛大為る自決の裁きと成り。
王家の沙汰がどう回ったのか、御家は断絶されなかった。

それ所か。　それとは逆に、クシャナディースに嫁いだエリーの実家であるハルツベリモント家が、突然の沙汰に因って断絶に追い込まれた。　表向きの罪は、オグリ公爵とクシャナディースに共謀し、宝石商人の家を陥れた事。　更には、ミグラナリウス老人の謀に知らずながら手を貸していた事が挙げられた。

さて。

何故だろうか。　エリーの家に、ハルツベリモント卿の家族が預けられ。　クシャナディース家がその統合公爵家に成ったのである。　一般の人が見るに、エリーが妊娠した事に同情でも集まった様に思えるのだが。　厳しい沙汰を平気で断行するリオンとポリアの兄二人からして、そんな甘い訳が無いと云う処。　その本当の意味を知るのは、王家や政務上層部の極一部で。　その他では、ポリア達だけだろう。

そしてやはり、この一件で最たるに注目すべき出来事は、ヘンダーソンの処罰である。

年始の祝賀の席でだが、クラン王は、貴族の処分としては最悪の“王裁”を行うとした。　詰まりは、王自ら剣を持って、貴族の罪人を処するのだ。　この罪は、貴族としては最も重い刑罰で、無論の事ながら罪は家族にも及ぶ。　本人は、王直々で打ち首と成り、家族は一切の財を持てずして永久追放処分。　更には、例外無くこの名前の爵位は創られない。　存在を抹消される屈辱の刑なのだ。

だが、これは当然。　寧ろ、ミグラナリウス老人とその一族がそう成らなかった方が、ある意味不自然と言えよう。　だが何より、年始の祝賀の時、出席した一同を驚かせたのは…。　あの気弱な王子トリッシュが、少し体を弱めていた王の代わりを申し出た事。　そして、リオンの差し出した名剣にて、ヘンダーソンの首を…斬った事である。

この一件。　ハレンツァに剣の手解きを受けたトリッシュの為すのも、王族でも在る彼だから一理在ると思われるだろうが。　実は、非常に今後を占う大事件であった。　“王裁”は、定められし内容

からするなら、王が決め、自ら行うのが慣わし。　だが、今回は、申し出たトリッシュがまだ王子であり。　トリッシュに剣を差し出したリオンは、トリッシュに臣下の跪きをもって敬意を示した。リオンに王位を狙う気が無く。　次期国王は、王裁を身代わるトリッシュで在ると示さんばかりに。　そして、クラン王がトリッシュにその役を任せた事もまた、それを示す。

泣き叫ぶヘンダーソンに、トリッシュの手で裁きが下された。　王都に居て祝賀へ出席した貴族や臣下へ、未来の王家の在り方を示す様子が其処に在った訳だ。　弱々しい取り入り易いと思われたトリッシュの姿は、その場に無く。　また、リオンを担ごうとしても、それが無駄で有るとする様子も伺えた。　出世や王家に取り入る下心を持つ者にとっては、その出来事は目を見張るに値する出来事だった。

ヘンダーソンは、早々に裁可を下されてしまったが。　リオンは、もう少し対処に追われる立場として、王都に残る事を決めた。　クシャナディースの自決を見届け、トリッシュノ手を煩わせる事を粗方始末するのが目的だった

此処までを聞いたセイルは、ハレンツァを思い出して。

「ハレンツァ様も、トリッシュ様やリオンの姿を天から見ているでしょう。　王国の血筋が揺るぎない絆をもって、そう対処したなら…。　きっと、喜んでますよ」

その話を受けて、王家に仕える一人としてテトロザは、熱くなった目頭を押さえ。

「はっ。　私も・・そう思います。　ハレンツァ様には、老い先が

短い方の私めが、何れは死んだ後に伝えまする」

セイルは、弱く微笑み。

「気が…早いですね」

と、云うと。　テトロザは、少し弱々しい素振りで目を拭い。

「え、はは・・。　もう、年寄りに・・近いですからな」

そう弱気な事を云うテトロザとしても、兄を慕う行動をとったリオンの姿が、朧気ながらに眼に浮かぶのだろう。　リオンが王子として、分を弁えた姿を示した事が誇らしい。　ハレンツァと云う大きな犠牲を払った以上、その弔いに相応しい決着が着いた事が嬉しいのだ。

テトロザは、次にこの大都市アハメイルでの事に触れ。

「悪党以下、罪人は全て捕まえてに御座います。　セラフィミシュロード様の御裁可の下で、全てに処罰を出し終えました」

と、云うのに対し。　セイルが。

「でも、あの悪党組織の口は・・匆匆に割れなかったでしょう?」

と、云うのだが。

其処へ、腕組みして立つアンソニーが口を挟み。

「それは、私が手を貸したよ。　闇の魔法には、相手の口を割らせ

る良い魔術が在った。　組織の内情に通じた二人ばかりを、その術中に堕とした」

それを聞いたセイルは、

「そうですか。　それなら、裏は取れますね」

と、納得する。

頷いたテトロザが、また話を受け取り。

「はい。　今の所、王都から来る経緯の内容と、悪党の供述に食い違いは在りません。　しかし、あの犯罪を導く組織ですが、中枢が何処に在るのかが解りませぬな。　首謀者のラヴィンとか云う者の供述では、世界に幾つも在るとか…」

セイルは、此処で眼を閉じ。

「向こうだって、数百年以上も世界を暗躍して来た組織です。　末端で動く首謀者を一人捕まえた所で、壊滅に至る程は脆く無いでしょう。　・・でも、この大きな国で陰謀を阻止出来たのは、大きい成果だと思いますよ」

「なる程。　それもそうですな」

客観的に受け止めるテトロザは、それは正論だと素直に受け止めた。

その上で。

「しかし、収穫も有りましてな。　我が国フラストマドに於ける拠点の数箇所が判明致しました。　リオン様のお越しを待って、制圧

に乗り出そうかと思います。　今回の様な策謀は、もう懲り懲りですから」

再び薄目を開けたセイルで。

「それは、リオンとテトロザさんが謀るなら、成功するでしょう。
その拠点を根城にする悪党集団を、今回で潰せたのですから。
向こうは手薄。　軍が動けば、一溜りも無いかと思います」

「セイル殿のお墨付き在れば、リオン様も頑張りまする」

物事の先を読む目を持ったセイルやテトロザには、大体の先は見える。　手抜かりが無ければ、ある程度の成果は期待できた。

★

テトロザは、経過を語って仕事に戻る。　本来は忙しい身で、冒険者の事などを気遣う暇など無い筈なのだが。　セイルが眼を覚まさない事に、仲間と同じ心配を傾けていた。　リオンとセイルの関係がどれほどに深いか…。　この事からも、窺い知る事が出来た。

さて。

話疲れたと云うセイルは、軽く水を飲んだりスープを腹に流して落

ち着くと。　クラークやユリアに、少しは気晴らしをして欲しいと云った。　もうそろそろ年末年始の祝賀ムードも消える。　まだ余韻が残る内に、有り金を使い果たす気負いで堪能して欲しいと。

セイルが起きた事で、返って元気の出たユリア。　お供にとばかりに、渋るクラークを引き連れ。　まだ賑わいの在る街に出て、何か食べる物でも買出しに出ると云った。

所が…。　何故か、アンソニーは残った。

…。

セイルの寝る部屋で、アンソニーがテトロザの座った椅子に居る。
　セイルの方を見ず。　壁側に向かって…。

二人の居る部屋に、暫し沈黙と云う調べが流れる。　静まり返った部屋の中で、聴こえるのは風の音や廊下を行く足音など。

少しして、その静まりの幕を開けるかの様にセイルが。

「アンソニー様、人を……食べたのですか？」

と、問うた。

俯き加減で、床の木目を見下ろすアンソニーは、短く。

「解らない…」

と。

アンソニーの手は、若々しい肌を見せる。　顔も、喉元も、肌が確実に若返っていた。　その身から、抑えていても感じれる魔力は、あの闘いの以前とは比べモノに為らず。　とても強く凝縮された気配であった。

あの襲撃を迎え撃った夜。

アンソニーは、態とリエルを逃してその後を追い掛けた。

リエルは、貴族区に出ると乗ってきた馬車に乗り。　調教の行き届いた馬の引く馬車を走らせた。　手綱を引く手は下手だが、右か左に引くのは解っている。　馬車は、夜の通りを直走り。　途中で静止しろと云う役人の一団や、見回りに出ていた兵士の静止も振り切り。　別の隠れ家が在る住居区の北側に広がる旧地区に向かった。

しかしアンソニーは、もうその馬車に乗り込んで居た。　リエルが何処まで行くのか。　人質の無事を確かめるのが先決だと思ったから、隠れたままで居た。

リエルの向かった場所は、旧商業区と住居区の区別が無い場所で、古い無人の屋敷なども残る場所だった。

古い高さの在る神殿に似せた屋敷。　その敷地に馬車を入れて、大分に庭を走った所で止まって転げ降りるリエルを、アンソニーは捕まえてしまう。　夜の中で、その屋敷にはクドゥルの手下２・３人と、人質の太った女性が居た。

アンソニーは、自分の両手両足が既に干枯らびて居るのを知ってて、人質の救出を試みた。　リエルが馬車を無謀に走らせた事で、その止めに入った兵士が曲者を見つけたと騒いで居た。　何とか人質だ

けでも助け、後は兵士を見つければ事足りると判断してである。

実際。　この行動は成功する。

アンソニーの魔力の前に、人の2・3人など赤子に等しい。　馬車に人質を乗せ、捕まえたリエルや悪党は屋根に縛った。

馬車を走らせ通りに戻り。　リエルの後を追って、曲者探しをしていた兵士の一団に合う。　人質の女性を引渡し、テトロザの名前を出して後を頼んだ処までは覚えていた。

が。

しかし、その後の記憶が無い。　間を開けながら云うアンソニーの話は、おぞましい内容に踏み込んだ。

「実は、セイル君。　その後、私は・・朝に。　港で気を失ってる所を発見された。　人質を引き取った兵士の話では、私は見えない悪党達を捜して別れたらしい」

「……」

セイルは、何も尋ねずに黙る。　その沈黙が素直で、まるで納得しているかの様な雰囲気が…。

さて。　アンソニーも追っていたクドゥルの一味は、見張りの付いていたアジトにも現れて居なかった。　朝に成り、捜索の手は街道にも及んだ。　しかし、前日から街道を巡回していた特別警戒隊と、新たに派遣された兵隊が合流しても、怪しい一味は見つからなかった。

漸くクドゥルの一味が見つかったのは、年末最後の日の夜。　下水道にモンスターが現れたと云う報告から、兵士が入って解った。　悪党一味の集団と思われる死体が、下水道の北側。　地下水脈に続く古い坑道付近で発見されたのだ。　その血の臭いを嗅ぎ付け、大型のネズミに似たモンスターが、坑道の奥から下水道に侵入してきたらしい。

モンスターは、騎士と兵士にリオンの派遣した仲間が合流して倒した。　だが、肝心の悪党達の遺体は、回収されなかった。　バラバラで、とても回収に至る形ではなく。　その血みどろの惨劇と言って良い状況に、兵士達ですら吐き気を催し。　テトロザでも気分が悪い惨状で、回収処の話では無かったのも理由だろう。

テトロザは、その遺体の残骸を坑道の奥に入れ、行き止まりに埋め込んだ。　持ち物の残骸だけを証拠品として押収したのである。

不思議なのは、誰がこんな事を…。　どうして、こんな悲惨な様子に成ったのか…。　今回の事件で、最大の謎が残った。

兵士に連れられ、ユリア達も休む軍医施設に運ばれたアンソニーだが。　彼を見たマーリの仲間の魔法遣いは、悲鳴じみた声を上げて逃げた。　更には、疲れて気絶する様に寝ていたユリアも、寝ている部屋の中で隣の部屋に運ばれようとするアンソニーが近付いた瞬間に飛び起きた。

何がどうではない。　最高位の悪霊、死霊など、不死の亡者が放つ強い魔力をアンソニーが持っていたからだ。　ジェノサイダーや悪党達の襲撃を受けた時までの力と比べたら、その感じ方は桁が違っている。　更に更に、クラークですら、フラフラで自分では動けな

いアンソニーを見ながら。　その感じられる雰囲気の違いに、ギョっと眼を見張った程なのだ。

一日経ち、眼を覚ましたアンソニー。　眼を覚ました時、全身に沸き上がる力の漲る様子に、自分でも自分がどうしたのか解らない。

ユリアに理由を問われても、答える記憶が無かった。

この三日で、力の制御が上手く行く様に成り。　有り余るエネルギーを隠せる様に成った。　取り調べに参加し、テトロザの立会いの下でリエル他、悪党の頭で在るロイジャーやラヴィンの口を割らせたが。　すんなりと吐かせた魔法の冴えに、自分でも意味の解らない恐ろしさすら覚えた。

アンソニーが経過の全てを語ると、セイルは静かに。

「アンソニー様が御自分から何かをしたので無いなら、それでいいと思います。　その力の使い方は、アンソニー様自身が決めるべきです」

と、在るがままに許容する。

返ってアンソニーは、ユリアが自分をしつこく問い質した様な事をしないセイルに驚き。

「セイル君、君は…」

と、何かを聞こうとするのだが。　見るセイルは、平静のヘラヘラした笑みに近付いた顔で居て。

「解らないんですから。　無理に考えても、…ね」

「…」

確かにその通りで、何も云えないアンソニーは、それ以上を云う材料が何も無かった。　自分で自分に何が起こったのか、サッパリ解らないのが本当だからである。

話す事が無く、二人は黙る。　少しまた、沈黙が流れた。

が。　こんな時程、アレコレと考えるもので。　アンソニーは、クラークとテトロザが揃って言っていた事を思い出す。

「・・あ、そう言えば…」

「はい？」

「いや、な。　セイル君が斬った二人なんだが」

セイルは、斬った感触を思い出しながら。

「何か？」

「ん。　君の剣が、二つとも折られて居たとか。　だが、二人ともしっかりとした斬れ方で、傷口も鮮やかだったと言っていたのを思い出してね。　燃えた女性らしい人物も、顔が残っていたから解ったんだが。　斬れていた事が、それが不思議だと皆が言っていた」

その話を聞くと、セイルは当然だと思う。

「確かに、そうですよねぇ～」

「君が、二人を斬ったのだろう？」

「えぇ。　実は、魔法で剣を再現したんです」

「？　再現…、詰まりは…剣の魔法で倒したのかな？」

アンソニーですら、言ってる事を直ぐに飲め込めないと云う事に、セイルは少し苦笑して。

「いえいえ。　僕は、魔法を遣えるまで修行してません。　想像の力で、魔力から剣を再現したんです。　刀身を半分折られた剣を元にして、魔力で剣を作った…と云えばいいのかな？」

アンソニーは、それこそ聞いた事の無い話で驚き。

「そんな事がっ、でっ・・出来たのかい？」

「はい。　・・ですが、魔法を扱う訓練が足らない所為ですね。魔力を具現化して、扱うだけで精一杯。　強引に魔力を使い過ぎたので、この通り倒れてます」

と、情けなくセイルは笑って見せる。

アンソニーは、まじまじとセイルを見て。

「・・確かに、確かに君は、逸材だ。　元気に成ったら、魔力のコントロールを促すイリュージョンを教えよう。　君なら、訓練次第でもっと強く成る。　ユリア君では、そうゆう意味では相手に成らないだろう？」

するとセイルは、大いに頷き。

「はい。　ユリアちゃんて、雑念多いし。　生まれながらに扱えるから、そうゆうのしないんですよ。　出来れば、訓練の仕方を教えてください。　道場って、武器遣う人しか来なかったし。　あは・あはは」

そんなセイルを見て、フッと笑み、アンソニーは思う。　セイルとユリアなら、最悪の場合に自分がモンスターと化しても、その場で倒せる力が在ると。　自分が無益な人を傷付けない様に、最後の決断をしてくれる者だと。　彼等と居れば、人の心を保てる様な気がする。

セイルとアンソニーの囁かな笑いが、その狭い部屋を満たした…。

その頃。

「ヘックシュンっ」

店の前や道に雪が多く残る中。　出店なども並ぶ商業区の通りを行くユリアが、クラークに向いた所でクシャミをする。

「わっ、ユ・ユリア殿っ」

バロンズコートの上に、薄い生地の黒いマントを羽織るクラークだが。　マントの一部に鼻水が付いて、別な意味で唖然とするしかない。　自分のチームでリーダーをしていた頃では、有り得ない失礼で在る。

他の人には見えないが、クラークには見えるユリアの足元に居るサハギニーが、集められた雪を指差し。

「汚い・・。　槍の友よ、雪で拭った方が良いのではないか？」

余りの仕打ちに、固まったクラークに対し。　鼻を擦るユリアは、皮の手袋に鼻水を付けながら。

「クラークさん、ゴメン。　あ〝ぁ～、セイルか誰か、絶対になんか言ってるわぁ～」

と、いい加減な言い訳を。

（…、ワシは・・これしきの事では、めげんぞ）

悄気げた様子で、通行人をよけながら雪の元に行くクラーク。

「おいおい、ユリア。　クシャミぐらいは、人に向けるな」

通りの往来も激しい場所で、他人には見えぬ精霊に叱られるユリアであり。

「だぁってぇ～・・」

と、傍から見るに、誰も居ない路上に向かって言い訳に成らない口答えをする。

今の彼等を見る限り、緊迫した襲撃を潜り抜けた様子は微塵も感じられない。　だが、眼を覚まさないセイルを心配して、殆ど睡眠を取らなかった疲労の翳りが、目元や頬に薄く見られるだけだ。

しかしながら、未来を勝ち取った側は、先を行かねば成らぬ。　ユリアもクラークも、襲撃を乗り越える中で感じた心の明暗を胸に仕舞う。　前に進みながら、それを問うて行くのだろう。

こうして、大国を揺るがした大事件は、過去に薄らぐ事に成った。

≪新たなる伝説に成る兆し。　新生・勇躍の翼は、再び羽ばたく≫

新たな年に入って、６日目の朝。

「う〜、まぁ〜た雪だよぉ」

寒そうに厚手の洗い晒した緑のマントを羽織るユリアは、白い息を吐いてどんよりとした空を見上げる。

ユリアの右肩に居るサハギニーが。

「ユリア、気候風土は仕方無いと思う」

と、言い。　左肩でコロンコロンしている闇玉は、

「オイラは、昼間でも出やすいからイイけどなぁ～」

と、まんざらでも無い様だ。

元気に成ったセイルだが、テトロザが国庫から幾らか謝礼を払うと云った申し出を断った。　冒険者は、仕事で稼いで幾ら…である。

もう、身銭も少ない彼等で、“何か仕事でも～”と斡旋所に向かう最中であった。

商業区を刻む網の目様な大小の通りをクネクネと行く中で、もう年末年始の騒ぎは随分と収まり。　裏道を歩くと、一時期混みあった出店の並んでいた通りが、急に寂れてしまった様な印象を受けるのだった。　空模様が良くない所為か、道行く人もマントやローブにフードを被り。　賑わいの去った建物の集まるこの場所が、廃墟に見える場所も在る。

クラークは、アンソニーと肩を並べながら。

「しかしながら、何度見ても不思議ですな。　あれだけ人が集まって溢れ、もう人の居ない場所など何処にも無い様な年末年始の騒ぎが、数日で嘘の様に元へと戻る。　人と富が一箇所に集約される此処は、世界でも一番の都市ですな」

「確かに。　後何年続くのか知りませんが、一つの歴史のうねりが此処に在るのでしょうね。　我が国が平和を主張する国で在り続ける限り、この賑わいが続く事を願うまで…ですよ」

そんな事を語り合う大人二人に、セイルは振り返り。

「しかし、クラークさんが、あのジェノサイダーのリーダーらしき人の素性を知ってるなんて…。　驚きですね」

と。

実は…。

セイルがガルシアを斬り、気を失った直後。　セイルを見つけ、彼を背負って外に出たクラークは、テトロザが率いる軍が応援に来た事を知った。

ユリアや怪我人と一緒に、セイルも馬車で軍医施設に運ばれた後。　兵士達の案内役と成り、テトロザと共にガルシア達の遺体の転がる場所に向かったクラークだったが。　回収されたガルシアの顔を見て、彼の名前を口走ったのだ。

今、頭や肩に雪を乗せるクラークは、怪しい空模様を見上げながら7日前の事を思い出し。

「えぇ。　あの者は、我が国の貴族で在った者で御座います」

セイルは、過去形で云うクラークの表情が、少し険しく成ったのを見逃さず。

「“在った”…。　今は、違うんですね？」

クラークは、深く頷く。

「あのガルシアと云う男は、政治的に軍事的圧力をもっと行使しよ

うと云う“高圧派”でしてな。　私が冒険者に成って数年後、国の国防と経済を監視する政務部の下官に取り立てられたのですが。内部機密を、政治から遠ざけられている過激な思想の貴族に流したとか。　その情報を元に、政府高官の地位を狙う貴族が、国の財政を預かる政務官を脅すネタとして利用したらしく。　結局は、後に行われる一斉摘発の対象者に、あのガルシアと云う男も成りました」

アンソニーは、今日まで自由の身で居た事を踏まえ。

「それで、その男は逃げたのですか？」

クラークは、自国の不手際を語るのがもどかしく思いながらも。

「はい。　セイル殿が先に手を下された女性は、異国の貴族の御息女でして。　お互いに、許嫁とその相手と云う間柄、摘発時に女性が手を貸して逃亡したのです。　私の姪が、若くして輿入れすると云うので、一時だけ仲間を連れて帰郷していた最中に在った出来事でした」

ユリアは、目を丸くして。

「へぇ～、お嫁さん候補なのに、剣術が強かったんだぁ」

クラークは、鈍く横を向き。

「許嫁の娘は、家が没落しかかって居たようでして。　気が強く、伸し上がる気迫も旺盛なガルシアに、夢を託して心酔していたとか・・。　貧しい貴族の娘が、花嫁修行の手習いだけでは生きていけないと、その・・剣術を習っていたそうです」

アンソニーは、ある意味で見上げた心意気だと思いながら。

「しかし、夫婦で揃って殺し屋とは・・、何とも虚しい」

「いえいえ、アンソニー様。　あの二人は、正式にはまだ夫婦では御座らぬ」

「ん？　では、異国の貴族の娘が…どうして相手方の家に？」

「はぁ。　これは、我が国の不手際を晒す様ですが。　我が国の経済の内部事情を、あのガルシアと云う男が手に入れ。　そして過激な貴族に流す一方で、許嫁の娘が自分の国の重臣へ売り込んで居たらしいので」

「なる程、その娘が利用されていたのか。　政治の駆け引きの道具・・だね」

アンソニーは、流石は王子なだけに直ぐに読めた。　無論、セイルも同様である。

クラークは、別れては、また合流する裏通り・中通りを行く人が、この悪天候で誰もが寒そうにしているのを見ながら。

「はい。　高額の金銭と、地位を餌にされて居た可能性が…。　ですが、事が公に成り、どうも相手国は彼女を切り捨てたらしく。彼女の家は、直ぐに取り潰しにされた様です。　数年して、私自身が冒険者としてその国を訪ね、彼女の生家を探しましたが。　全くをもって、墓すら移されてしまったらしく。　もう、その事情を知る人も殆ど居ませんでした」

セイルは、腕組みしては前を向き。

「証拠隠滅の工作でも在ったんでしょうか」

アンソニーは、静かながらも確信を持って。

「違いないね」

ユリアは、何だか小難しい話だと。

「あ～ヤダヤダ。　難しい話って、どれもきったない」

直情な意見だが、同じ思いのクラークがそれに同意して。

「真だ。　胡散臭い謀（はかりごと）が多過ぎるわい」

と、策謀に塗れた当時の過去を嫌う。

セイルやアンソニーは、それが現実の駆け引きだと知っている手前、何も言わずに黙った。

とにかく、その情報はテトロザに告げてある。　テトロザも、話が話なだけに驚いたらしい。

さて。　何だかんだと話している内に、斡旋所が見えてきた。　パブの看板の上にも雪が積もり、薄着の女性の絵が寒そうに見えた。

４人が斡旋所へ迎えば、同じく斡旋所に入る冒険者の一団が、何故か先に道を譲って来た。

セイルは、素直に。

「どうも～」

と、云う。

アンソニーは、譲ってくれた中に居る若い女性の魔術師を優しげに見返しながら。

「失礼する」

と。

所が、何か異質な視線で見られたので、ユリアは頭を下げるだけだったが…。　暗がりの階段を降りる途中でも、集り相手を探す目付きの嫌な冒険者風体の者達が、セイル達を見た途端に道を開ける。

４人は、前に来た時とは明らかに違う雰囲気に包まれながら、あの煌びやかなパーティー会場の様に見て取れるフロアに入った。　すると、間近のテーブルに集まる冒険者の一団が、セイル達の訪れに気付いた。

「おいっ、アレだ」

「え？」

「ジェノサイダーと悪党集団を壊滅させたチームっ」

「あ゛っ、ブレイヴ・ウィング？」

「そうそう、スゲーよなぁ」

「クラークさんだけが凄い訳じゃないんだぁ・・」

テーブルに着く一団が噂話をし始めると。　その色めき立った話し方に気付き、壁に寄り添って立ち話をしている一団等も、セイル達に気付く。　中には、セイル達が地下の“開かずの子供部屋”に案内された時に、カウンターのダンディな男性受付へ噛み付いたチームも居た。

「うわっ、何？　何で見られる訳ぇ？」

ユリアは、カウンターに向かう先を埋め尽くす冒険者の皆が、此方を一斉に見てくる事に驚き出す。

セイルは、ヘラヘラした笑みで。

「さぁ～。　かなり有名な暗殺集団を倒したからじゃない？」

頷いたクラークは、慣れた様子で。

「ま、その様な処だと思います」

アンソニーは、自分達を見てはあーだこーだ云う冒険者達を見ると。

「ふむ。　矢張り、相手も有名な悪党だったのだな。　こんなに噂に成るのは、そうに違いない」

と、何とも客観的な意見を云った。

ユリアは、一々これからこーなるのかと思うと、どうも面倒な思いがする。

（鬱陶しい～、噂する暇有ったら、なぁ～んかすればいいのにぃ）

セイルが先立ち、クラークと共に冒険者達の間を抜けようと歩き出す。　テーブルの間を抜けて行くと、急に右手に座っている人から。

「よ、お疲れ」

と。　男性の声である。

セイル達が声に導かれて見れば、マーリに協力するチームの一つで、博物館の警備に参加していた面々が其処に居た。

あの襲撃を撃退する際に、マーリと一緒に来ていた戦士の男性も居て。　頬に、薄っすらと傷痕の名残りをまだ残しながら。

「いやいや、元気な姿を見れて安心した。　マーリが心配していたぞ」

笑顔のセイルは、返す様に頷いて。

「今朝、寝泊りしている軍医施設で会いました。　マーリさんも、元気そうで何よりでした」

「そうか。　会えたなら、安心だ。　昨日まで心配して、結構煩かったんだ」

すると、襲撃時に魔法の光を翳していた魔想魔術師の男性が、深い

青のフードを取り。

「所で、奥で賞金を受け取りなよ」

と。

賞金と聞こえたユリアは、何事かと。

「へぇ？　賞金って…何？」

笑顔の魔想魔術師は、自身の腰に下がる金袋を触りながら。

「君達が倒したジェノサイダーは、世界的な御尋ね者。　一人一人に高い賞金が掛かってるし、チームの壊滅と、全員確保で生死に関わり無く特別報償が在るってさ。　一応、僕達もその一部だけを特別に貰ったけどね。　相当額の礼金が在るって」

ユリアは、それを聞くと…。

「うわっ、丁度いい～。　クラークさんのマントとか汚しちゃったしぃ。　貰ったお金で、衣服を買い替えようよ。　アンソニー様の服、結構シミとか着いて汚く成ってるしさ。　セイルとかも、ボロくなったし」

それを聞いたクラークは、“是非っ”とばかりに頷き。

「それは良い提案ですなっ。　拭った雪も中が汚れていて、拭った後にどうも気落ちしましたから」

と、ユリアを横目に見る。

アンソニーは、シミの目立つマントを見て。

「構わないが・・。　安物は嫌だよ」

と、サラリと我儘を。

セイルも、ひと月ばかりでかなりボロく成った衣服を見ると。

「悪くないですね。　ついでに、折れにくい剣も欲しいです」

クラークとユリアは、同時に手を打ち。　先にユリアが、

「そう言えば、ま～た全部折られたんだっけ？」

と、云えば。　クラークも続き。

「金額が如何程でも、まぁまぁの剣は買えるでしょう。　是非、そうした方が良い」

そうこう言い合う内に、王都にて封鎖区域に於けるモンスターとの闘いに参加した冒険者達が、有名に成り始めたセイル達と親交が欲しくて話し掛けて来る様子が続く。

話も適当に、カウンターの前に４人が進み出ると、ダンディな受け付け男性がセイル達を見れば…。

「…」

無言で、左手を白い扉の方に差し向けた。

流石にクラークですら、こんな短期間で上位の仕事を受けれる部屋に顔パスに成るなど聞いた事が無いし。　また、その経験も無い。

（もう、羽ばたくのか…。　同じチーム名で世界を一瞬で駆け抜けた、彼のお二方と同じではないか…）

人の欲望の汚さに嫌気が差し。　有名への階段を上り詰め掛けた処で棄てたクラークには、ある意味で心地よい運命の裏切られ方でも在る。

生い立ちはそれぞれだが、在るべくして運命に導かれた４人のチームには、“勇躍の翼”が必要なのかも知れない。　力強く、明日に向かってのみ羽ばたく翼だ。

彼等が動けば、勇躍の翼は羽ばたく。　凡ゆる窮地を潜り抜ければ、更に力強く…。　更なる高みへ…。

その先に、如何なる困難が待ち受けようと。　くぐり抜けた試練は、全てが新たなる伝説を刻む記憶に成る。

此処に、後に語り継がれる新生・ブレイヴ・ウィングの軌跡の始まりが在った。

＝セイルとユリアの大冒険・序章…完＝

二人の紡ぐ物語～セイルとユリアの冒険～3（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回のお話は、様々な支障が内容が一部曖昧になり、大変に苦しい作業でした。　ですが、敢えて残ったデータにブラッシュアップを掛けずに話を作れたので、後から改訂版として、全てを書き直すべースが作れたとも思って居ります。

さて、次回は、ウィリアム編と、K編を続け。　年末か年始には、遅れっ放しに成っているポリア編の後編をお送りしようかと思います。

東日本大震災以後、自然災害が続いて、何とも心苦しいニュースが多いですが。　一人でも読んでくれる方が在る限り、エターナルも続いていけると思って居ります。

ご愛読、有難う御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

それは、街角の知らぬ間に潜む悪意

1

≪夏の暑さを嫌って≫

夏の日差しが、昼間の高さに至る頃。

フラストマド大王国とマーケット・ハーナスの国境の中部。南方国境都市ブルジョミンより、北北東に数十里の所。元は、川が流れて居たらしい場所で、渓谷が干上がって道と化す街道が在る。道の左右は、赤茶けた岩盤が剥き出し、剣を逆さにした様な岩肌が目立つ山が挟む。

強い日差しが照り付ける湿気の無い乾いた道は、砂が風に運ばれる程に乾燥していた。

その岩山に挟まれた街道を、数台の馬車が南東に向かって走っている。その馬車を脇に寄って遣り過す冒険者の一団が在り。その一団の中でも、かなりの大男と見て取れる人物が、麻布のフードを指で上げながら。

「おい、ウィリアム。本当に、この先は涼しいのか？」

と、先頭で歩き出す人物に喋りかけた。

青く薄いマントに身を隠すウィリアムは、皆の方に振り返り。

「この先は、少し急な上り坂に成るそうですが。　この先の高原に築かれた中継都市のロファンソマは、湖を有する涼しい避暑地だそうです」

すると、杖を着く人物が灰色のフードを上げ。

「行った事の在るワシが説明しただろうに。　ロファンソマは、世界的に有名な避暑の都市で、北風が止まない気候風土から、“北風に抱かれる地”としても有名じゃ。　冬は、ちょいと雪が積もる豪雪地じゃが、夏は過ごすのに最適の場所じゃよ」

と。　新しくチームに加わった一人で。　自然魔法を扱うラングドンが、暑さに疲れた老い顔を非難がましくしてみせた。

筋骨隆々とした戦士アクトルは、渓谷街道を見て。

「なら、もう少し頑張るか」

と、歩き出す。

一番後ろで、ロイムの右手に居る白いローブ姿で杖を持つうら若い美女が。

「辿り着く前に、干枯らびるのは御免ですわ」

と、汗を拭った。　天然の赤毛が麗しく、陰りの在る色香が年齢以

上に成熟させた美貌を備わせる。　また、男性の目の惹かれる所が丸みを帯び、何とも男心を擽る彼女はクローリアである。

代わって、青いローブを纏って、ハァハァへばるロイムの左。　白いマントを羽織り、全身鎧を纏う勝気な印象の若い女性が、クローリアに。

「貴女で干枯らびるなら、私はもう骨と皮しか残らぬ」

新しく加わった槍遣いの戦士リネットが、軽い憎まれ口を云うと。

クローリアは、苦笑し。

「それもそうですね」

と。

顔以外の全身を覆う鎧に身を包むリネットは、伸縮可能なスピアを片手に。

「ロイム。　随分と汗を掻いているが、大丈夫か？」

と、若いロイムを気遣った。

「ハァ、ハァ、・・はい」

スティールに、前の日に酒を相当飲まされたロイムで。　酔いも醒め切らない内に旅立った御陰で、もうヘバっていた。　リーダーのウィリアムが、自分を気遣って何度も休憩を入れるのが悪く思えるロイムは、辛そうでも文句も少なく歩いている。

先頭を行くウィリアムはそれを見て、隣を行くスティールに。

「スティールさん、ジェラシー感じてロイムを苛めるのは止めて下さいよ」

黒いフード付きのマントを羽織るスティールは、何故かリネットと仲が良く成り始めたロイムが気に食わないらしい。

「へんっ、早くへバれ。　俺が背負ってやるっ」

その一言を聞くウィリアムは、内心に・・。

“仲がいいんだか、悪いんだか”

と、溜息を思う。　前を見たウィリアムは、街道の中腹に在る巨大な洞窟が岩陰を作る休憩所を見て。

「あそこで、昼にしましょうか」

と、仲間に云った。

ウィリアム達一行がどうして此処に居て。　そして、避暑地として有名な交易都市に向かっているのは、何故か。

ウィリアムが懐に入れている書簡が、その理由と言っていい。　ただ、これは公式な依頼ではなく。　非公式で、斡旋所の主であるブレンザからの頼み事であった。　依頼の主は、ミレーヌとも親交が在る政務官で、避暑に行った大商人へ宛てた手紙ならしい。

ウィリアムがもう仕事の量が減った事を踏まえ、そろそろフラストマド大王国へ戻り。　其処から、陸路で西に行くか。　それとも、海路で別の国に行こうかと話し合って居た所に舞い込んできたものだった。

避暑地への移動は、仲間の全員が賛成した。　特に、ラングドンの話に食いついたスティールが、もう全員を引き摺る様な勢いで行こうと決めつけた。

ロファンソマと云う都市は、旧き頃は湖の湖畔を中心とした漁業と農作物を出荷する別名の町であった。　其処が、夏にとても涼しいと云う事を聞いた昔の大貴族が居て。　自ら王に願い出て、領主として君臨したのがロファンソマと云う名前の起源だと云う。　詰まりは、その都市は、フラストマド大王国の領地なのである。

さて。

ラングドンが話したのは、この後の事で。　美味しい田舎料理と涼しい場所と云う触れ込みで、ロファンソマは、夏季の避暑地として有名に成った。　特に好まれるのが、絶え間なく吹く北風の爽やかさ。　そして、夏に泳げる遠浅の湖畔である。

ロファンソマの湖畔は、山側と街側と云う区別が在るのだが。　山側は、漁民などの生活区域で、一般の旅行客が遊び半分で入れる浅さでは無い。　しかし、街側の畔は、非常に浅く。　５０歩以上湖に入って座っても、大人の半身が浸かる程度と云う浅さ。　しかも、波が非常に穏やかで、泳げない人でも水遊びが出来る。　しかも、人の体の汚れなどを目当てに、湖にしては色取り取りの魚が泳いでいて。　海で泳ぐ習慣が一般的では無いこの世界でも、湖では別と成る。　貴族の体裁を繕う大人達が、童心に還る様に遊べるのだと

か。

そして、湖畔の水遊びは、家族、子供、女性が中心で。　ネグリジェや下着の様な水遊び用の服を着たうら若い女性達が、夏に成ると湖畔に目立つ。　裕福な街娘や、夏季の学業休みに貴族の娘などが来るのだとか。

こんな話を聞いては、スティールが黙って居る訳が無い。　ウィリアムの一切の意見を無視したスティールが、ブレンザに承諾を突き付けた。

ま、ヘキサフォンアーシュエルは、海沿いの大都市だが。　今年は、例年に増して南風に湿気が多い為か、寝苦しく、昼間も蒸し暑い。　更に。　別の国から腕の在るチームが、２団もやって来た。　ウィリアム達とも仕事を回される順位が拮抗して、競争に成り始めて居た処。　悪くない依頼の数も底が見え始め、街を移るには丁度良い頃合いと云えた。

これが移動を決めた要因なのだが。　最後のひと押しをしたのは、ブレンザが“タダ”でよこした情報がそうだ。

“ロファンソマの周辺では、最近大きな地震が在ったらしいよ。山間の奥に在った遺跡に通じる道が開けたとか。　向こうに屯してたチームが、その調査に出て二月は戻らないとの情報も在る…。しかも、捜索のチーム派遣は、既に４回。　どのチームも戻って来て無いからねぇ。　腕の達チームを欲しがってたよ”

冒険者として、こんな情報は聞捨てなど出来ない。　アクトルやリネットは、この話に乗った。　ウィリアムとラングドンは、遺跡調査に興味が向いていた。

・・ラングドンの場合は、スティールと同じ理由でも十分だと皆は認識している。

さて。

昼間の岩陰で休む一行。

「ロイム、顔が真っ赤だ。　向こうに地下水の湧く泉が在るから、もうっと水を汲んでこようか？」

リネットは、何だかんだと面倒見は悪くない。

「ハァ、ハァ、ずみまぜん・・」

丸みを帯びた岩に寝転がり、ロイムはバテバテ。　二日酔いで、灼熱の日差しが強い旅路は危険である。　汗を掻き過ぎたりして、体調が急変する事も多いからだ。

ウィリアムは、これから二日間は山に向かう山間街道を登るので。

「ロイム。　リネットさんが水を汲んできたら、この薬を飲んで。高山病に成られると、困るから」

「あい～・・」

杖を弱く縦にして、プルプルと揺さぶるロイム。

そんな様子を見るスティールは、クローリアとリネットを独り占め

するロイムが気に入らないらしく。

「軟弱者めがっ」

と、他所を向く。

間近で、干肉を切り取り、乾燥させたパンに乗せるアクトルは、呆れた顔で在り。

「お前、ロイムを苛めてもモテんぞ。　いい加減、諦めろ」

「フンっ」

「まぁ～ったく、自分で自分の格を落としてる様なモンだぞ？」

「ウルセェ」

女性の事に為ると、まるで子供の様な一面を見せるスティール。
別に本気でやっている訳では無いが、どうも面倒な事に繋がるのがアホらしいとアクトルは思う。

昨夜は、この峡谷街道の入口に当たる町のイーダで一泊した一行だが。　此処からは、3日の道を野宿で行かなければ成らない。　時折、馬車が通るが。　最近のモンスター出没情報の所為か、馬の走る速さが、心無しか早い。

そして、たった今も…。

馬蹄の音がすると思ったスティールとアクトルは、遠くから走ってくる馬車を見る。　どんどん近付いてくると思えた馬車は、黒塗り

の車体を持った乗用の馬車で。　曲がり角に為るこの岩陰の休息所を、急な格好で曲がるのだった。

「・・・」

「・・・」

アクトルとスティールは、無言で馬車を見た。　車体の窓に、白い羽根の扇を揺らかす貴婦人が見えた。　厚化粧で、白いドレスの一部が見えなければ、貴婦人とは云えない女性とも見れた。　馬車の中から見返して来るその婦人の目は、何とも云えない嫌な目付きであった。

さて。　長めに休憩を取り。　この日は、夕方で野営基地の築かれた山林地帯の入口にて休む事に。

同じ野営基地に在る砦の様な施設には、街道警備の兵士が騎士と泊まった。　東屋の様な野営施設には、旅人は４人。　更に、馬車を連れた商人が３人で、その連れも含めると７人が居た。　冒険者と云えるのは、旅人の内、二人だけで。　チームとしては、ウィリアムのチームのみが居た。

夜の入りの事。

東屋の様な６角の石で造られた野営基地が幾つか合わさった外れに、兵士と騎士が休む砦に近い建物が在る。　その裏手に井戸が在り。
　兵士共々共同で遣って、それぞれが胃を満たす作業に取り掛かったりしている。

ウィリアムは、軽く食事をしてから。　風が夏にしても湿気じみて

るのが気になり、気候を体感すべく外に出た。　秋を知らせる虫の鳴き声はまだ無く。　生暖かい南風が、峡谷街道の方から吹いてくる。

（今年は、夏が少し長いかな・・。　春先も、雨が不規則だったし。
　でも風は、台風のヤツかもなぁ。　明日で風が変わらないなら、ロファンソマにも何れは来ますね）

夏の虫が煩く鳴き始め、平地よりは気温が下がるのが早いのだが。
　夜の入りと在って、まだ蒸し暑い。
煩い羽音を鳴らし、ウィリアムの顔に近付く蚊。　緩慢とした動きで、その蚊を捕まえるウィリアム。　一度握った手を放すと、街道を跨いで向かいの林へと向かう。

この時、馬車の音が峡谷街道から聞こえた。

（遅ればせながらの、泊まり客ですかね）

そう思うだけで、林の散策に向かうウィリアムだった。　夜の林を動くのは、学者としてウィリアムの趣味であり。　月明かりも在る今夜は、その行動に適していた。　昆虫、植物を夜に観察するのは、昼間と違う顔が見られるからだ。

現に。

（ん？　羽音が違う蚊？）

林に踏み込んで数歩。　似ているが、少しトーンの高い蚊の羽音に、ウィリアムは気が動いた。　音を発する小さな物体を捕まえ、器用に暗い中でも細い足を摘んで見る。　月明かりに、鈍い緑の光が見

えた。

（これ、もしかして“翠蚊”（スイカ）じゃないかな？　確か、特殊な出血熱を媒介する事が在るって読んだなぁ）

その蚊は、翠と薄い黄色の縞模様を腹に帯び。　丸い胸部は、翡翠の様に鮮やかな緑色をしている。

更に、ウィリアムは、“ミィーミィー”と動物の子供が発する音を、木の幹から聞く。　月明かりが木々の枝の隙間を通り、暗い林の地面を所々照らす中。　その音を出す方にそっと行ってみると…。

（うわ、木の幹の表皮を喰い破って、セミが…）

ウィリアムの片手と似たような大きなセミが、メキメキと小さな音を立てて木の表皮を食い破って居る。

このセミは、イナカオウジゼミと云う吸血蝉である。　人を襲う事は稀だが、子供は注意が必要な昆虫である。　血を吸うのは、飛べるオスだけで在り。　メスは、飛ぶ羽根を持たず。　羽化した場所で、卵を腹に持ちながらオスの飛来を待つだけの変わった生活をするとか。　メスを早く見つけたオスは、４・５日の間に体力の続く限り交配を続ける事が出来るらしく。　高い栄養を血液から得ると考察されている様だ。

だが。

ウィリアムの目の前で、木の幹に擬態した大型のトカゲが、幹に出て羽を乾かし始めたセミを襲う。　夏の暑い温度で、トカゲや亀の類も活発の様だ。　図鑑や資料でのみ読んだ自然の営みが目の前で

起こり、観察するウィリアムの学者としての知識欲を満たして行った。

月の見える位置が、斜めに上がり。　ウィリアムがそろそろ戻ろうかと、林を戻り野営施設に向かって少しして。　月明かりが注ぐ林の中で、自分を呼ぶ声を遠くに聞くウィリアム。

（ん？　スティール・・さん？）

すると、遠くで。

「ウィリアムっ、何処だっ？！」

今度は、アクトルの声がする。　切羽詰る焦った声に、ウィリアムは走った。

アクトルとスティールが、ウィリアムを呼ぶ。　その声にどんどんと近付くウィリアムは、先ずはアクトルに近付いた。

「此処です。　どうかしましたか？」

木を数本隔てた距離まで近付いた所で、そう声を出したウィリアム。

「居たっ」

と、アクトルが言えば。

「何処だっ？！」

と、スティールが声かける。

林の中、月の明かりが差し込む開けた隙間で、アクトルを迎えたウィリアム。　ウィリアムを見つけたアクトルの顔は、相当緊張した顔だった。

「ウィリアムっ、直ぐに戻れ。　病人が出たんだ」

「え？　ラングドンさんですか？」

「いやいや。　後から着た馬車に乗った家族で、旦那が泡吹いてブッ倒れた。　白目剥いて、もう意識が無いみたいでよ」

其処に、スティールも来て。

「おいおいっ、説明なんざ行きながらでいいだろう？！」

こうして、ウィリアムは野営施設に戻った。

野営施設の兵士や騎士が寝泊りする二階部分。　小さめの円卓が置かれた場所に、頭の全面が禿げた人物が寝かされている。　太った体型で、青白く成った顔は、４０の終わりから５０代と云った感じの男性だ。

「アナタっ、しっかりしてっ」

「パパァーっ！！」

足元に縋るのは、金髪のまだ若い感じのする女性で。　その脇には、金髪の４・５歳と思える男の子が、身なりの良い格好で居る。

気を失った男性の面倒を見るのは、この野営施設の裏で生活する狩人の男性と、僧侶として居合わせたクローリアだ。

「脈が低下してますわっ」

と、クローリアが慌てれば。

「もうダメだっ。　こんな症状は診た事が無い」

と、狩人の男性もお手上げ状態。

壁際で見守る３０半ばと云う雰囲気の騎士は、蓄えた鼻髭を触りながら。

「食中毒か、それとも何か病気だろうか…」

と、兵士の二人を従えて話すのみ。

其処へ、ウィリアムが階段を遣って上がってきた。

「どうしました？」

部屋に居る一同の顔が、若きウィリアムの顔に向かう。

クローリアが、

「ウィリアムさん、この方がっ」

と、太った男性を見る。

ウィリアムが寝かされた男性の顔を見ると。

「もうダメだ。　体温がかなり下がってきてる」

と、背の高い男性で、ボサボサ頭に伸び放題の髭をした狩人が言ってきた。

狩人の男性と入れ替わる形で寝かされた男性の脇に立つウィリアムは、口から泡を吹いて倒れた男性を見ると、その痙攣すら弱まる男性の口から沸き上がる臭いを嗅いで、ハッと顔を上げた。

「大量の水をっ！！！　これは毒だっ」

階段の所で止まっていたアクトルとスティールは、その一声に動いた。　井戸に向かったのである。

「毒だってぇ？！」

驚く騎士に対し、ウィリアムは・・。

「説明は後ですっ。　布などが在れば用意して下さいっ！！　それからっ、桶などもっ」

そう云うウィリアムは、体の痛みも伴うツボを押し始める。　血行を上げ、体温を上昇させる為だ。

処置をしながら、ウィリアムは奥さんらしい若い女性に向け。

「ご家族ですかっ？　倒れられたのは何時ですっ？！」

急に聴かれた奥さんは、もう涙で嗚咽する喉を動かしきれず。　吃って、混乱する記憶を必死に呼び起こす。

倒れたのは、少し前だ。　馬車の中で、急に気分が悪く成ったらしく。　此処で休憩しようとした矢先にだとか。

「おいっ、ウィリアムっ！」

「水だっ」

アクトルとスティールが、木の桶に井戸の水を汲んできた。

ウィリアムは、奥さんや騎士を見ると。

「一カバチの勝負です。　荒療治で行きますよ」

と、鋭い視線を送った。

水を旦那へ強引に飲ませるウィリアムは、直ぐに旦那の腹を強く押して吐かせる。　ゲーゲーと云う嘔吐を繰り返し、白濁した泡の混じる戻し水に、回数を重ねる毎に血が混じる。

「…」

もう、殺しに掛かって居るか、拷問の様な光景に、奥さんは怯えて固まって動けない。　子供は、泣いてその場にしゃがみこむ。

吐いた水を見ながら、コップで水を流し込むウィリアム。

「もう毒が、胃の内部を傷付けてますね。　もう少し放ってたら、

血を吐いて死ぬ処です」

旦那を押さえるスティールは、壮絶な現状にも関わらずに冷静で。

「助かるか？」

水を胃まで届かせる為に、一度身を起こす作業をアクトルとするウィリアムは、

「血の混じる量がまだ薄いので、胃を洗い切ればなんとか。　でも、この国でプルナウス・ローズの核を見るなんて、思いもしませんでした」

と、彼を寝かせて水を吐かせる行動に入った。

苦しさから、抵抗に似た暴れが手足に見られる旦那の男性で。　押さえ込むアクトルとスティールは、吐き出した水の堪った廃棄ゴミを入れる木の樽を見た。　汚れた水の中に、楕円形の赤黒い小さな粒が浮いている。

「この黒っぽい粒がそうか？」

と、スティールが聞くと。

男性を寝かせ、口元や喉を拭うウィリアムは頷く。

「はい。　黄梅の仲間ですが、バラやカーネーションに似た花を付けるのがソレです。　実は、アンズとイチゴの間の様な酸味が特徴ですが。　その味を消し飛ばす程の渋みが嫌われ、食用ではありません。　問題は、その種の中の中心に在る核。　中身の白い部分が、

少量でも厄介でしてね。　人や動物の胃に入ると、胃液と混ざって毒となり。　胃の内側を溶かしては出血させ、身体のあちこちを犯します」

アクトルは、壮絶な作業は終わったのだと思い、一安心して。

「しかし、そんな毒の元を何時飲んだんだかな？」

ウィリアムは、男性の目を見たり、脈を取りながら。

「そうですね。　不思議なのは、吐き出した核がどれも噛み砕かれていません。　この核の外皮は非常に硬いので、その外皮が溶けるまでは無事だったのでは・・と思うのですが。　どうやって飲み込んだのか…。　それが不明です」

と、言いながら、目でクローリアを呼び。

「何ですか、ウィリアムさん」

と、彼女が来ると。

「クローリアさん。　この胃の上に手を翳し、癒やしの魔法をお願いします。　何度か分けて施せば、傷も塞がり、自然治癒の効果が高まるはずですから」

「はい、解りました」

クローリアが魔法を唱える行動に移る時。　奥さんが恐る恐るとウィリアムに近付く。

「む」

女性との絡みが発生するとスティールが反応した瞬間、彼はアクトルにふん捕まえられた。

平常時なら、目がパッチリと開いて感じの良さそうな美人の女性が、恐る恐るの足取りでウィリアムに近付き。

「あっ・あ・・あの。　しゅ・主人は…？」

水で手を洗うウィリアムは、口を塞がれながら持ち上げられ、ジタバタしながらアクトルに下へと連行されていくスティールを見ながら。

「一応、飲んだと思われる毒は、ほぼ全て吐き出させました。　水に混じる血の量からしても、さほどに胃は傷付いていないかと思います。　只、太った身体から見ても、心臓などに負担が掛かって居た為。　毒の作用で、急激に低下し始めた脈一つ取って考えても、心臓の運動にも強い影響が行ったかと思われます。　明日までに先ずは意識が戻れば、一峠を越えたと云えますかね。　とにかく、意識の回復を待つしか無いですね」

「そうですか…。　嗚呼、毒だなんて…」

白いハンカチを手に、顔を覆う女性。

ウィリアムは、騎士の男性と視線を交わしながら。

「所で、あの木の実は何処から？」

「あ、・・。　確か、昼下がりに飲んだ薬だと思います」

ウィリアムは、もう一度吐き出された水の入る樽を見て。

「アレを、薬・・ですか」

涙を拭う奥さんは、弱々しく頷き。

「はい・・。　最近、動悸がするとかで、うちの主人が買い求めて来た物です」

と、言ってから、ウィリアムに近付き小さな声でボソボソと…。

それを聞いたウィリアムは、死んだ様に眠りに落ちた旦那の方を見て。

「ま、お気持ちは解りますね。　ですが、何処から買い求めたやら…。　あの核は、火傷に利く塗り薬の原料以外は、違法な薬の主原料でしか無いんですがねぇ…」

嫌な感じだった。　そう、事件の臭いがしたのだった…。

★

クローリアの魔法が終わるのを待っていたウィリアムは、騎士の男

性に詳細を聴かれた。　倒れた主人とその一家族の住むマーケット・ハーナスは、もう此処では国外に成る。　騎士の男性に追従するご意見版の老人兵士とも話し合い、事の詳細を綴った書簡と共に、兵士と騎士が近隣の街へ家族を連れ。　向こうの役人へ引き渡したらどうかと、そうゆう話で纏まった。

男性は、担架で下の階の別室に戻され。　家族も、そこで一夜を過ごす事に成るとか。

兵士達の寝泊りする野営施設に、クローリアとリネットが女手として残り。　ウィリアムは、仲間の元に戻った。

六角の東屋の一つに、仲間は占拠する様に休んでいた。　ウィリアムが入ってきたのを見て、ランタンを点けっ放しにしておいたスティールが。

「お、戻りなすったな？」

石の床に寝転がる皆。　ロイムとラングドンは、疲れて地響きの様な鼾を立てている。　眠れそうに無いのは、アクトルやスティールの方の様だ。

ウィリアムは、入って近くに座り。

「しかし、急に服毒事件だなんて、何とも…」

アクトルが寝そべりながら。

「誰かが飲ませたのか？」

スティールは、少し複雑に考えてか。

「自殺じゃね？」

煩い鼾が近いと、ロイムの方をチラリと見たウィリアムで。

「どちらとも言えませんね。　御者の御老人以外は、下働きの若い下男とメイドの少女のみ。　下男は外で馬車に掴まっていたそうですし、メイドの少女は奥様と子供の後ろに居たとか。　馬車の中で飲んだのなら、自分か・・。　若しくは、ご家族が関わっていると思えますがね」

アクトルは、ウィリアムの見解が聞きたくて。

「お前は、どう思ってる？」

「俺ですか・・。　俺は、何とも」

その物言いが冷めて居ると思えるスティールで。

「判断は出来ないってか？」

「当然ですよ。　薬の仕入れは、御主人がご自分でとか。　理由を聴けば、年の離れた奥さんとの間に、もう一人女児が欲しいからと云う事で。　元気を維持する薬をを求め、あの毒を手に入れたとか。　ですが、此処ではそれを確かめる事は無理ですしね。　我々が必要以上に首を突っ込む事も出来ない状況ですし・・」

スティールは、それを聞いては男が騒ぐと。

「アッチをギンギンにってか？　薬に頼る様じゃ～もうヤバいんじゃね～の？」

アクトルは、目を細め。

「代わりにって、お前が手を出すなよ」

「出したいっ」

「アホぅ」

ウィリアムは、その不毛な会話を聴き捨ててから。

「ですが、奥さんはもう妊娠してますゼ。　それも、極々の最近で、本人も気付いてないかも知れませんがね～」

スティールは、悔しそうに驚き。

「なぬっ。　妊婦は・・主義に反する」

一方のアクトルは、本当に驚きの顔で。

「ホントかよ？」

荷物を枕に寝るウィリアムは、やや気怠い頷きをして。

「えぇ、目や身体の動きで。　下で待っていたメイドの少女が奥さんの体を酷く心配していたので、少し様子を聞いて察しました。ま、今に言っても仕方が無い事ですし。　その内、自覚します」

スティールは、左右から老人と若者の鼾が床を伝って来るのが気に入らない。　だから、話がしたくて。　また、ウィリアムに疑問を投げ掛ける。

「所で、何で必要以上に関知しねぇの？　事件だで～っ、ウィリアムちゃん！」

「バカ言わないで下さいよ。　我々は、一応は仕事で来てるんですよ？　自分から他の事件に首突っ込んで、書簡を届けるのを後回しにする気ですか？」

「いやぁ～、だけどさぁ」

スティールとしては、あのウィリアムが魅せる事件解決時のカリスマ的雰囲気が見たい。

しかし、当の本人はやる気無しのご様子で。

「いいです、スティールさん。　ロファンソマは、マーケット・ハーナスと交流衛星都市に成ってますが、その統治権も所有権もフラストマドに在るんです。　マーケット・ハーナスから来たあの家族の事が事件なら、それはマーケット・ハーナスで解決されるべき。　裏も取れない此処で首突っ込んでも、迷惑にしか成りませんよ」

「あら、そ～なの？」

無知っぷりを見せるスティールに、アクトルが。

「“治外法権”だ、バカ。　俺らの村の北に在った町では、坑道の一部が隣の国に繋がってるからって、採掘が何度も中断したじゃな

いか。　時折、応援で行った村人の坑夫が、その中断に巻き込まれて稼ぎ半分で何度帰ったか…」

ウィリアムは、アクトルの話に興味がそそられ。

「へぇ、そんな事が有るんですか」

「おう。　まぁ、焼き物に遣う器の原料になる土ぐらいならいいが。それこそ純度の高い鉄鉱石や、価値の在る宝石となりゃ～国は必死に成る。　基本、採掘された物の権利は、半分は国行き。　デカい鉱石の在る場所や、純度の高い物が出たら大臣が視察に来やがるんだぜ？」

ウィリアムは、金の臭いに釣られて来る虫だと。

「それこそ、金喰い虫がやって来るんですねぇ」

アクトルも、苦笑いで過去を思い出しながら。

「そうだ。　あの欲望に染まった大人の目は、正しく意地汚い金喰い虫だよ」

聞いていたスティールは、思い出すのも嫌だと。

「やめやめ、あんなキショい役人の話なんか」

アクトルは、嫌な想い出しか確かに無いと思って、話を変え。

「だが、ウィリアム。　そうなると・・、この服毒の一件は、家族を向こうに送り返して、か？」

「当然です。　下手をしたら、これは殺人未遂事件かも知れません。　このまま御主人が死んだら、“未遂”が取れて殺人事件。　マーケット・ハーナスで、しっかり調べて貰ったほうがいいとは、騎士の方に言いました」

「なぁる」

スティールは、それでもウィリアムの個人的な意見を聞きたくて。

「でも、お前の正直な予想はどっちだ？　自殺か、それとも他殺未遂か？」

少し考えたウィリアムは、スティールの顔が見える左に寝転がり。

「…、そうですね。　今の現状を踏まえると、他殺未遂が有力でしょうか」

「犯人の特定までは、無理だよな？」

「当たり前ですよ。　でも、御主人が自殺するなら、普通は御一人の頃合いを見るでしょう。　家族の前で、しかも旅行に行く途中でなんて、自殺だったら当て付けか、何か理由が出てきます」

「なるほどね、確かに。　あの家族を見るに、そんな様子は見えないもんなぁ」

「はい。　しかも、あの毒と成る梅の核を、噛まずに飲み込んでいたのが気に掛かるんです。　硬い核ですが、飲み込んで何時までも胃袋に在る訳では在りませんからね。　長い時間が経過すれば、核

の外皮が溶ける前に排便として出てしまいます。　もしも事件で、誰かの策なら。　あの太った旦那さんを亡きものにしたい誰かは、確実に胃で毒にする方法と事実を知った者。　少なくても、そういう分野で腕の在る人物・・。　若しくは、その人物を巻き込んだ誰かでしょうね」

スティールは、其処まで聞くと身を半分起こし掛け。

「・・、なぁ。　お前でなくて、事件は解決出来んのか？」

するとウィリアムは、気にしない様子で寝る体勢に戻り。

「さぁ。　一応、ミレーヌさんの事を知り合いだと教えましたよ。　手紙を宛てるレナさんには、俺の見解も匂わす形で文書にするつもりです。　ま、あの二人が捜査するなら、なんとか成るとおもいますがね」

「ほほぅ。　察しが付いてるのかいな」

「レナさんは、相当頭イイですよ。　まだ若いってだけで、経験次第では誰も及ばない知能捜査が出来ると思います」

すると、急にスティールがほふく前進でウィリアムに突撃し出す。

「ほらぁっ、ほらぁぁ～っ！！」

いきなりの事に、アクトルは気味悪く引く。

（なっ、いきなりなんだぁ？！）

ウィリアムも、不気味な声に驚き。　急に迫ったスティールから逃げようと反対側へ転がり。

「なんですかっ？！」

と、警戒。

ジト目で、今にも恨めし気なゴーストに成りそうなスティールで。

「あんんんんなに巨乳でっ、しかも可愛いーーーーーーっレナちゃんだぞっ？！　お前が寝床で全部の手解きをすりゃイイでねぇ～～のっ？！」

「…」

「…」

ウィリアムも、アクトルも、どう見ても自分が遣りたいが、出来ないから言ってるとしか思えないスティールにあきれ果てた。　どう言葉を発していいか解らず、二人して硬直したまま。

スティールは、悶々としたレナに対する欲求不満を、ウィリアムに向けるべく訳の解らない事を更に言い出す始末。

「はぁぁ…」

アクトルは、義兄弟の片割れが、もう芯まで腐ったと呆れて寝る。

何故か、急に疲れて来た。

一方。　更に喧しいのが出現した事で、ウィリアムもげんなり。

（クッソぉ・・。　鼾以上に煩いモンスターが出た）

恨み言をブツブツ云うモンスターが居る限り、自分は寝れない事を覚悟した。

その少し離れた処では、スティールの恨み言を跳ねかす障壁でも張っているかの如く。　大鼾を掻くロイムとラングドンが居た。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今、ウィリアム編と、その合間に入れる番外短編のKの話を制作中です。　年末までは、ウィリアム編が主流と為る予定です。

ご愛読、有難う御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

それは、街角の知らぬ間に潜む悪

意　2

≪波乱に満ちた朝…。　そして、ロファンソマへ≫

朝。　夜明けが来て、朝日が昇るなら。　目覚めは、清々しいに限る。　だが、其処に不安定な要因が重なると、そうも云えない時が来る。

“ガオオオオオーーーーーーーンっ！！！！！！！！”

このモンスターの発した爆発的な咆哮が、野営所東屋と野営施設に居る皆の目覚ましだった。

「はっ？！」

「何だぁっ？！」

スティールとアクトルが飛び起き、ロイムとラングドンも寝ぼけ眼で身を起こす。

誰よりも早く飛び出したのは、ウィリアム。　朝霧がまだ残る林に挟まれた街道の上に出れば、砦に似た兵士や騎士などが寝泊りする野営施設のすぐ脇に、大型のモンスターが。　しかも、かなり興奮していて、頻りに臭いを嗅いでいる。

（不味いっ、昨日の処置で出した血の臭いに寄ってきたか?!!）

倒れたと運ばれて来た男性に対し、昨夜ウィリアムが解毒の処置をした訳だが。　ウィリアムは、血の混じる水は、崖の様な裏手の奥に早く棄てたほうがいいと伝えた。　だが、兵士がその水を井戸の近くに置きっぱなしにしていたのだ。

それを知らないウィリアムは、昨夜の血の臭いがまだ施設に残り。
その臭いを嗅ぎ付けて来たと思い込む。

「何事だぁっ?!」

「モンスターが居るぞっ!!」

兵士や騎士が寝泊りする施設で、次々と驚きや焦りを含んだ声が上がる。

それを聞くウィリアムは、人に被害が出る前に倒すしかないと思えた。　兵士や騎士に期待するのは、御手に成ると判断したのである。

「スティールさんっ、アクトルさんっ、出番ですっ!!!　マンティーロガですっ!!」

大声を出してから、モンスターの注意を外らす為に走ったウィリアム。

現れたモンスターは、大型の猛獣モンスターのマンティーロガ。
青い身体に、鋭い毒針を持った長い尻尾を垂らし。　見た目は、虎かライオンのメスを窺わせる容姿である。　このモンスターは、亜種のそのまた派生種で。　大元の原種は、マンティーロガよりも大きく、翼を持つマンティコア。　このロガですら、背丈でアクトルの二人分は在る。　原種のマンティコアは、その数倍とも云われるのだ。

「チィっ！　こんな街道でマンティーロガだってかっ」

鎧も着けず、斧だけ手にアクトルが出れば。

「ヤツの尻尾は毒針付きだっけ?!　厄介な相手が目覚めの相手とはねっ!!」

もう剣を抜いた状態で持つスティールは、アクトルに危険を促す上でこう言った。

二人が井戸の方に迎えば・・。　野営施設からモンスターを引き離す様に街道に誘い出して、素早い動きで翻弄するウィリアムが居た。

スティールは、長い尾っぽの先の毒針が地面に垂れ伸びているのを見て。

「アークっ、俺が尻尾を斬る。　その隙に、腹に斬り込め」

アクトルも、その手段が一番安全だと。

「オーケーっ。　昨日の旦那の二の舞は、こちとら嫌だからなっ」

ロガの脇に回る為に、街道の脇に外れるアクトルに対し。　スティールは、全力で走った。

ロガの尻尾は、非常に長く。　尻尾の長さが、体長を上回る程。その為、針で相手を刺すのは、止めの一撃のみで。　獲物が捕まらない限り、奇襲以外では尻尾の針を使うことは無い。　その尻尾を切断するチャンスは、正しく後ろからの奇襲であった。

尻尾間近まで、何も言わずに走り寄ったスティールは、ブルンブルンと地面付近で動く大蛇の様な太さの尻尾に剣を振るった。　スッパリと、針を先っぽに付けた尻尾が切断され、宙を飛んで近くの草むらに落ちていく。

“ギャオオーーーーーーっ”

急に咆哮を上げ、暴れる様に後ろへと後退りをし始めるマンティーロガ。

それを面前で見たウィリアムは、アクトルやスティールが来たのだと思い。

「斬っても尻尾は気を付けて下さいっ！！　尾っぽにはっ、毒線が相当通って居るらしいですからっ！」

その言葉通り、バタンバタンと暴れる尻尾のその切り口から、灰色掛かった白い泡の様な液体が撒き散らされる。

「そうゆうのはっ、早く云えっ」

大きく横に退こうとするスティールで、言葉尻で飛び退いた。　街道の上を転がり、脇の草むらと為る切れ間にて立て膝に起きる。
視界の街道上に飛び散る毒液は、地面をジュゥ・・と黒く変色させた。

（マジかよっ?!）

マンティーロガは、そのまま暴れ馬の様にウィリアムへと街道を突進。　避けたウィリアムは、アクトルの居る方に逃げてくる。

其処へ。

「全く、朝から何たるモンスターが出るんじゃ?　マンティーロガなど、魔の森周辺以外でしか見たことなど無いぞい」

と、街道の上を歩いてくるラングドンと。

「うわわ、ホントに図鑑で見たモンスターだぁ〜」

驚くロイム。

ぐっすり寝て元気を取り戻したロイムは、直ぐに前で出て。

「ラングドンさん、僕が先に足留めしますから」

と、先に立って杖を構える。

ラングドンは、街道に見える自然を見回し。

「うむ。　大地の力で始末する故に、動きをしっかり止めてくれい」

と、応えた。

離れた向こうで振り返るマンティーロガ。　此方に向くロガを見てから、ロイムは杖を側めて目を瞑ると。

「あ〜ぁ〜怖い・・。　魔想の力よ・・我が想像を具現せよ。　細かなる礫よ、現れっ」

ロイムは、扱い易い礫の魔法を唱える。

この時。　マンティーロガは、地響きすら感じられる重い走りで、ロイムに向かって走り出した。

強い魔法を使おうと考えるラングドンは、目を凝らし集中しながら。

「ロイムよ、怯えて今に放つな。　頃合いは、見計らうに限るっ」

怖くて、今にも直ぐに魔法を放ちたいロイムだったが、ラングドンに言われて少し頷く。　大魔法遣いの杖から溢れるオーラを心に受け、しっかりと突進してくるマンティーロガの顔を見たロイムだった。

“ウガァァーーーーっ!!!”

狂暴な咆哮を上げるマンティーロガだが、その顔は女性的な猿に近い印象で在る。　闇の力に染まる瞳の色さえ無ければ、さほどに怖い顔では無い。　が、耳まで裂けた大きな口から覗ける鋭い牙を見ると、恐怖しか思いは浮かばないのは当然であろう。

ロイムは、マンティーロガが林のアーチが掛かる街道から、この野営施設の在る開けた方に出てきた頃合いを見計らい。

「いっけぇぇぇぇっ！！！」

と、杖を振って礫を飛ばした。

マンティーロガの眼に向かって飛んだ魔法は、ロガの大きな眼とその周りに当って小さな炸裂を起こす。　流石に、硬い皮膚に魔法がぶつかり弾けても、皮の表皮が剥がれるぐらいだが。　眼や目元の柔かい部分に当たれば、皮を破って青紫の血を撒き散らす。

“ウガァ！　グオオオーーン！！”

血が眼に入り、明らかに嫌がったマンティーロガが、ロイムやラングドンと１０数歩前と云う所で突進を止める。

ラングドンは、魔法を行うに丁度良い所だと。

「よし、力が集まってきた。　行くぞいっ」

と、杖を大きく擡げ、旋回させると。

「大地の力よっ、我が敵を穿つ硬き硬き針と成れぃっ！！」

詠唱の様な言葉と共に、杖を大きく上に振り上げるラングドン。

すると、マンティーロガの腹の下に為る地面が、泡立つかの様に震え出す。

マンティーロガが、激しくもがいて眼に纏わる血を振り払い。　損

傷の少ない左目で、カッとロイムを睨んだ。

その時…。

突き上げる幾つもの岩の針が、マンティーロガのやや白っぽい下腹部へと突き刺さった。

“グギャァァァーーっ！！！！！！！！”

その吼え声は、誰の耳にも絶叫に聞こえただろう。

次々と隆起する岩の針は、マンティーロガを持ち上げる様に串刺しにする。

そして、最後には…。

「止めじゃっ」

ラングドンの一言と共に、アクトルの太い腕の様な針が、マンティーロガの胸部に目掛けて突き上げた。　ロガの弱い唸り声は、瞬時に消える。　突き刺さった針は、口から外に突き出すまで伸びていたからだった。

…。

「いやいや、助かった。　感謝する」

後からノコノコと外に出てきた騎士の男性は、生きた心地のしない顔を蒼白にさせていた。　まさか此処で、こんな大型のモンスターに出会うとは思わなかったのだろう。　ウィリアム一行に、握手ま

でして礼を云う始末。　本当なら、自分達が率先して戦わねばならない処だろうに・・。

モンスターの出現で、また興奮と怯えに駆られた昨日の家族で。
その傍にいたクローリアと護りに残っていたリネットが、出発間際に成って仲間の元に戻ってきた。

ウィリアムは、少し疲れた顔のクローリアに。

「どうでしたか？　もう、呼吸は安定しましたか？」

東屋の様な建物の中で、床に座ったクローリア。

「えぇ。　でも、ご家族の方が疲れてますわ。　戻るまで、心持ちが挫けなければいいのですけれど・・」

すると、何故かスクっと立ち上がるスティールで。

「それはいけないな。　元気が無いのは、不味い。　よし、俺がちょっと…」

外に出て行こうとするスティールを、バキバキ・ボキボキと手を鳴らして待ち構えるアクトルとリネット。

（おやぁ？　一人増えましたねぇぇぇ・・）

そう思うスティールが、直後に縛られて引き摺る荷物にされたのは、仲間全員一致の事で在った。

それから、二日後。　まだ陽も真上に成らない午前。

「着きましたね。　門が見えて来ました」

と、生い茂る森の中を通る街道の先を指さしたウィリアム。

北の大陸の東西南北は動き回ったアクトルも、初めて来る街に。

「風は涼しいし、湿気を帯びて心地いい。　首都や大都市ばかり回って仕事探すのが基本だが、こうゆう観光みたいな旅も悪くないな」

と、素直な感想を述べるのだが。

その隣で、俯いているスティールが。

「ふぅ～ん、そーなんだぁ。　人を縛ってさぁ・・、半日も引き摺って行く非道な人がねぇぇ…」

と、非難をボソボソと…。

ラングドンは、その胡散臭い雰囲気に呆れ。

「ほれ。　もう直ぐ下着みたいな服を着た若い娘が、わぁ～んさか居る街じゃぞい」

と、耳打ちすると。

★

「ふんっ」

いきなり、ビシィっとするスティールで。

「過去は、もう過ぎた事だ。　俺には、今から明日と云う美しい未来が在る。　行こう、女体の待つ水辺へっ！」

急に元気と成ってズンズンと歩を早めるスティールは、ウィリアムに並び。

「弟子よ、宿を直ぐに決めようか。　目的は、何時も一つっ！！」

「……」

その元気さにヒクヒクと顳かみを引き攣らせるウィリアムは、街で無用な波乱が待っていると覚悟した。

クローリアやリネットは、もう知らん顔でロイムを交えてアレコレと話す。

アクトルは、ラングドンへ。

「爺さん、アイツを元気にさすな。　面倒しか起こさないヤツなんだからよ」

しかし、そう言われても他人事の様に微笑むラングドンで。

「ふん。　辛気臭いツラなど、見とっても詰まらんわえ」

と、アクトルの言葉を鼻で飛ばした。

ウィリアム一行を追い抜き、荷馬車が先に向かって行った。　街道から入る門には、衛兵１０人程が警戒する監視所が在る。　門の内と外に、数人の警戒をする兵士が先ず。　次に、門の内側に、道に沿う形で人相を見る監視小屋に入る数人が居て。　更には、高い門の中程に作られる監視場に、も、兵士が入って森や街道を監視していた。

門に近付いたのに合せ、兵士が多く居るのを丁度良いとウィリアムは、門の脇に立つ守衛の兵士に近付き。

「すいませんが・・」

と、声を掛けた。　実は、あのモンスターの現れた野営所で、騎士から頼まれた言伝が有り。　それを、此処の詰所で行う事にしたのだ。

案内に出てきた兵士に付き添われ、門を潜って左側に建てられたレンガ造りの詰所の中に入ったウィリアム一行。　二階建ての詰所の奥で、立派な繋ぎの制服を着た警備隊長の５０代と思われる男性に面会した。

テーブルを挟んだ向こうから、

「伝言を頼まれた冒険者か。　ワシが、此処の警備隊下級兵士を束ねる隊長のセトル＝ガウだ」

そのガウ隊長は、見るからに兵士らしい人物であった。　小太りだがガッシリとした大柄の体は、過去に鍛え抜いた訓練の培いを窺わ

せ。　陽に焼けた色黒の肌から鼻髭を少し白くさせた様子は、しっかりと人生を歩んできた苦労人の様にも見て取れた。　強面の顔は四角く、田舎育ちの頑固者にも見れるが…。

ウィリアムは、服毒事件とモンスターの出現を告げる。

すると、ガウ隊長の顔が少し和らぎ。

「おお、そうか。　別隊とは云え、我が同朋が助けられた様だな。　しかし、そのような大型のモンスターが…。　いや、良く知らせてくれた。　感謝致す」

と、意外にも素直な一面も見せてくる。

「いえいえ。　それより、此処は昔からモンスターが多いのですか？」

と、ウィリアムが問い返すと。　ガウ隊長は、顔を不安に曇らせて。

「うむ。　それがな、近年に成ってからなのだ。　北方の山深くに隠された遺跡が出現してから、急にモンスターが増えてな。　最近では、戦闘に成って兵士に被害が及ぶ事も在る」

ウィリアムは、マーケット・ハーナスで“イービル・ループ”が開いた一例を挙げ。

「もしかしたら、その遺跡が何らかの原因を生んでいる可能性も高いですね。　調査などは、行われているのですか？」

「一応は、な。　だが、昨年の末から、何度か冒険者チームを斡旋

所も派遣したらしい。　だが、何れも帰らず。　また、捜索隊として編成した合同チームも、帰らずだったらしい」

これには、ウィリアムを始めにチーム一同が仲間の顔色を伺った。

簡単に流せる事態では無いからだ。

「それは・・、少し不安な情報ですね」

俯き加減で思慮をするウィリアム。

ガウ隊長は、ウィリアムへ。

「済まないが・・」

こう言われたので、顔をガウ隊長へと戻すウィリアムで。

「はい？」

「我々兵士は、近年までの平和でモンスターとの戦いに慣れて居らん。　大型のモンスターなどが出したと有らば、斡旋所などに応援を頼む事も有ろう。　若しもの時は、力を貸して欲しい」

この申し出を聞くウィリアムは、仕方のない事だと思う。

「構いません。　そうゆう意味では、我々の方が経験も多少在ります。　街に居る間は、手間が開く限りお手伝いさせて頂きます」

ガウ隊長は、軍人らしからぬ柔軟な態度で頭を下げ。

「忝ない」

と、顔を上げると。

「兵士と云う軍人で、こんな弱気な事を云うのは間違いかも知れぬ。だがワシは、この国の地方に在ったマゾフド村出身で、モンスターには一際の敵意が在るのでな」

すると、一同は納得の顔それぞれで。　ウィリアムは、頻りに頷き。

「確か……過去に在ったモンスターの進軍で踏み潰された、有名な村ですよね？　場所が悪くて、魔の森近くに在った村だと聞いていますが・・」

ガウ隊長は、鈍くも深く頷き。

「うむ・・。　ワシが、まだ4歳の頃だ。　今でも、あのモンスターの驚異が忘れられんのだよ…。　あの時も、兵士や騎士だけでは分が悪く。　高名な冒険者のチームが多数討伐に加わった。　ワシは、逃げてきたこの街で、討伐から戻った兵士や冒険者に拍手を送った経験が在る。　だから、さしてお主達を毛嫌いする気持ちは無い。　ま、何事も無く、この美しい街で観光を楽しんで欲しいのが本音だ」

ウィリアムは、そう言ってくれる彼に好感と敬意を持ち。　思うままに感想を述べる気に成ったので。

「そうですね。　この街は、国外からも観光に人が来るとか。　モンスターの被害が起これば、政治的にも微妙な重みを持つ可能性も在りますでしょう。　何か脅威が有らば、冒険者でも遣って構わないと思います」

ガウ隊長は、政治的な意味合いも理解しているウィリアムの物言いに。

「ふむ、若いながらに敏いな」

と、言ってから。　仲間の一同を見回してから。

「この街の宿は、大抵が酒場を持った宿でな。　どこも、天然の温水を引き込んで浴場を用意する。　湖が湧き水で出来ている程に豊富な水が、これまた美味くてな。　味のいい野菜や果物も採れるから、造られる酒も美味い。　外来の客が多い分だけ、美女も居る。　ま、ゆるりと汗を流してくれい」

と、気さくな話を残した。

ウィリアムも、姿勢を整えた上で正しく一礼して。

「ゆっくり湖などを見物しながら、酒を頂きます」

練れた人格、苦労して培った広い人間性は、他人の人格も推し量れる。　ウィリアムと、このセトル＝ガウは、互いに中々の人物と見えぬ握手を交わした格好で別れた。　その証拠に、監視施設の外に出たウィリアム一行を、二階の窓から見送ってくれさえしたガウ隊長だった。

さて。

晴れ渡る青空の昼頃。　街路樹が豊かに生える趣に満ちた市街地を行くウィリアム一行。　観光都市のロファンソマは、自然が目立つ

都市だった。　森林公園や、花園を数箇所に持ち。　通りや建物も、黒・茶・白灰・赤茶のレンガを使った作りと成っていた。

旅人や馬車の往来も多く。　また、旅人や旅客が、気軽な格好で街中を観光しているのが目立つ。　活気は、溢れる程に在るという大通りで。

「リーダー、一つ尋ねたい」

と、リネットが歩きながらに問うて来る。　スティールが食い込んで来て、自分でも答えれるんじゃないかと喚くのだが。　無視したリネットは、

「先程、あの詰所で不可解な事を言ったが？」

その一言の意味が見えないウィリアムも、煩くへばり付くスティールを無視して。

「はい？」

「いや、な。　モンスターの被害で、政治的な事がどうこう・・。関係ない様に思えるのだが？」

すると、アクトルも。

「そうだな、モンスターが人の命令を聞く訳じゃないしなぁ」

軽装ながら幾分身なりの良い人々が、多く行き交うのが見受けられる公園が脇に見える中で。　ウィリアムは、通りの中央を行く高級そうな馬車を見送りながら。

「この街、観光の意味では有名らしいですよ。　お忍びで、諸外国の貴族の方々も来るとか・・。　もしその中に、有力貴族だったり、王族だったり居たら…。　そして、モンスターの被害に巻き込まれたりしたら大変じゃないですか？　しかも、最近までモンスターなんか居なかったのに、近年に急に出現ですよ？」

少し考えたラングドンは、素直に。

「勘繰った考え方をする輩なら、何か有ったら文句も云うやもの」

国同士の国交事情に疎過ぎる仲間を思い、ウィリアムは少し呆れ調で。

「ん～、いえいえ。　そんな緩い状況でも無いと思いますよ。　国境都市にモンスター討伐とは云え、明らかに目立つ大部隊を送り込むのも波風立ちますし。　かと言って、出没するモンスターの被害に、微妙な地位の国賓や、お忍びで来ている貴族・王族が巻き込まれたら大変ですよ。　一番平和を訴える大国で、そんな事は有っては成らないことです。　下手な難癖付けられたら、争いに発展しますよ」

リネットは、その意味が良く解らず。

「そんな事をする輩が、何処に居るのだ？」

ウィリアムは、素直に生きてきたリネットは、政治や商業の暗部を知らぬままに居るのも当然だと理解しながら。

「一杯居ますよ～。　商人の中には、戦争や争いが多額の富を生む

と理解する者も少なからず存在します。　各国では、今の平和な現状維持を王族が唱えて実践していますがね。　権力を握る一部の有力者は、領土拡大や世界的権威の獲得に、露骨な征服戦争や武力行使も厭わないと云う思想を持った人が居るんですよ。　これがまた・・ね」

それを聞いていたアクトルは、フラストマド王国で起こった事件を思い出し。

「そう言えば、ウィリアムとスティールの巻き込まれた事件も、政治的に関わる大きな事件だったなぁ」

ウィリアムは、走る子供達が通りの脇道に入って行くのを見つめながら。

「それだけじゃないですよ。　もう数年前に成りますが、俺が居た島で、あんな子供が４人も殺害されましてね。　事件の根っこを暴いたら、コンコース島の主権を顛覆させようとする、西の大陸から来た者の仕業でした」

同じく子供を見ていたリネットは、まだ５・６歳の子供だと知り。

「何たる非道なっ?!　その子供達が何をしたと云うのだ…」

と、憤る。　内面は優しいリネットで、その一面や女性らしさを表に出す事をして来なかっただけ。　幼い子供が殺されるなど、見たくも無いし聞きたくも無い事だった。

だが、ウィリアムは、寧ろ少し冷めるぐらいに淡々として。

「それが、暗殺計画を聞かれたと勘違いしたんです。　子供達が秘密の隠れ家として使っていた廃屋で、その話をしていたそうで…」

ラングドンは、争いの絶えぬ西の大陸が齎す不穏な空気が、時折別の大陸に忍び寄る事を知り。

「他の国まで争いに加担させる気か…。　何とも汚い輩共じゃ」

しかし、ウィリアムは、寧ろ更に冷めた口調で。

「実は、各国の商人も、一部の方々がもう加担してます。　人身売買や、禁制品の密輸。　戦争をしている部族や独立部隊に、それぞれ別の顔で近付いて、物資や武器を売っている…。　平和なこちら側で、貧しい下に回らず余る物が・・、実際にそうゆう所に高値で売られるらしいです。　未だに、西の大陸で近年作られた工芸品を始め、高値で取引出来る西側産出の宝石なども、市場で新たな物品が取引されている。　西側との商売の取引で、そうゆう物が金の代わりに間へ入るんでしょうね。　そして、そうゆう腐った奴ら程、金を回す所を心得てる。　摘発を逃れる為に差し出される金品が、見て見ぬふりをする何処か・・誰かの懐に入って行く訳ですよ」

「……」

黙ったリネットを始めに、仲間の一同が押し黙った。　然るべき地位に在る者だと云う事は、直ぐに解る。　だが、自分達とは住む世界の違った者達で、どうすることも出来ない領域であった。

ウィリアムは、更に。

「そうゆう方々からして見れば、世界が平和で在り続ける要因を守

っている役人や王族は、云わば目の上のタンコブ。　そしてですが、そんな方々を平時には手を出しにくくても、こうゆう外国に遊びに来ている時は、また別。　互いに根っこが外国なら、事件を起こしても解決に至りにくく。　また、明らかに成っても、解決に時間が掛かる。　モンスター騒ぎが起こっているなんて、それこそ付け入るに最適の隙でしょうよ」

此処でウィリアムは、少しだけ顔を脇に向けて後ろを意識させる様子で。

「そう思うと…。　潜ってきた門に、立正の兵士が４人。　門の上の監視場に３人で、下の監視場にも３人。　施設の中にも、隊長さん以外にも４・５人の兵士が居ましたね。　他の国に置き換え照らし合わせて考えでも、この警備は首都並みの警備ですよ。　詰まりは、それだけ警戒をしてるんです。　多分、以前にも何か在ったのかも知れませんね」

ウィリアムの話を聞き、アクトルはこの街を前にも訪れた事の在るラングドンに。

「街への入口は、俺達が来た以外にも在るのだろ?」

「うむ。　ワシが覚えている限りでは、南方、南西、東側、北西…。　今潜ってきた門を加えても、５つは在る」

「そうか。　それぞれに結構の見張り立てるとするなら、この街に駐屯する警備兵は数千は居るかもなぁ」

「居るじゃろうな。　街道警備・・各地方の町や村に行く派遣の巡察兵。　山岳・森林の守備兵。　諸々考えたら、結構な数が必要じ

ゃ。　モンスター騒ぎが起こってから、増強したって話じゃぞ」

「なるほど…」

ウィリアムは、コンコース島に居ても、各国からの事情が流れてくる事に敏感であっただけあり。　他にも、各国の不穏な事件を口にした上で。

「平和って、ただ在る・・ってモンじゃ～ないんですよ。　平和な中では刺激が少ないですからね、強硬姿勢な主義や、高圧的な意見が強く見られる。　ですが、ね。　一度崩れたら、平和程幾ら望んでも取り戻せない願いは無い。　やっと取り戻した時、どれだけの犠牲が出たかを知るんです。　事件でも、同じ。　欲望や思惑に駆られて、自分が正義の中に居る様な気さえする。　自分が登り詰めたり・・、新しい境地を切り開けると、脆い未来を美しく幻想的に誤解する。　その為に払った犠牲や命の重みなど、恐ろしい程に軽んじてね…」

犯罪などと関わりの少ないリネットは、今一飲み込めずウィリアムに。

「そんなものなのか？」

と、聞き返す。

緩やかに頷くウィリアム。

「最初に云った子供達の殺人。　実は、続きが有りましてね。　殺された子供の一人の母親が、その事件の首謀者で在る商人の家族を、自分の命と引き換えにと皆殺しを計ったんですよ」

「えっ？！」

驚くリネットに、口を抑えて言葉を失うロイムとクローリア。　スティールやアクトルやラングドンも、只為らぬと云う面持ちに移行していた。

初めての街を歩きながらも、ウィリアムの眼は何処か遠くで。

「事件の解明をした翌日。　もう悲しみと憎しみで狂ってしまった母親が、商人の越した新しい家を燃やして・・。　逃げ出してくるメイドやら家族を、剣で…。　数日は嘆き悲しんで、飲まず食わずで居たあの弱った体の何処に、人を殺す程に強く長剣を振り回す力が有ったのか…。　いや、憎しみや怒りが、全ての肉体的限界を無にさせたのかも知れません。　役人の方々と俺が駆け付けた時は、もう手遅れでしたよ。　悪魔みたいに高笑いする母親は、最後の最後に商人の一人息子を刺した。　俺達が見ている目の前で、自らも燃え盛る屋敷の中。　窓が取れて丸見えのリビングでででしたね」

リネットは、もう理解出来る範囲を超えてしまった。　ショックすら受けたままに。

「その・・母親は？」

「燃え死にましたよ。　体が燃えてるのに、恨みを晴らせたと喜んでね」

余りの内容に、リネットは俯き。

「壮絶・・だな」

「無惨に子供を殺された事で、もう狂ってしまったんだと…。　子供達を直接殺害した人物は、金で雇われた殺人快楽者でしてね。子供達の遺体が、もう直視出来ないぐらいでしたから・・。　それぞれの親は、もう遺体を見たと同時に泣け叫びましたよ。　今でも、俺の耳にあの泣き叫びの声が残ってます。　罪を犯したるものは、それ相応の罰を受けるんですね」

やり切れなさと苛立ちが募るアクトルが、其処で口調を少し荒っぽく。

「当然、捕まったクソ商人も死刑だったんだろ?」

「えぇ。　でも、その処刑前に死にましたけど」

「あ?」

「捕まってる時に、家族の焼死惨殺事件が有りましてね。　自分の家族を、無惨に報復と云う形で失い。　自分の責任を痛感した商人の方も、嘆きと自責の念から狂いました。　自分で舌を噛んで…手当ての甲斐無くそのままでした」

スティールは、青い空を仰ぎ。

「最悪の最後ってヤツか・・。　犠牲を多く敷いた分、戻ってきた痛みが壮絶過ぎたんだな」

同じ感想を心に抱く皆は、口を噤んだ。

涼やかな風が街路樹の枝を揺らし、幅広い通りを行く一般人の笑顔

が眩しい。　平和であるからこそのこの日常であり、それが揺さぶられるなど誰も思っては居ない。　でも、そう思えないのが平和の証で有り。　また、明日からもその不安が無いと信じれる方が良かった。

そんな光景を見るウィリアムは、

「ま、色々有るんでしょうけどね。　我々冒険者は、世界の歯車に加わって生きる…。　だからこそ、そんな世界の闇の一つも払ったっていいでしょうよ。　平和な世界に、それなりの恩恵も受けてるんですから」

仲間の皆が、別の噴水公演を右手の開けた場所に見て、遊ぶ子供や語らう人々などを見つめた。　悲しすぎる話に心が重く、少しでも楽しそうな、日々の普通が見たかったのかも知れない。　確かに、ウィリアムの云う通り、自分達の力で除ける脅威が其処に有るなら。　体を張って止める事も、遣って然るべきだと思える。

そこで。　スティールがスルスルと前に出て、ウィリアムの左肩に手を置き。

「ウィリアム、そこで相談なんだが？」

「はい？」

少しキザな俯き加減のスティールで。

「ん。　この街の安全を見回る上で、早く宿を決めないか。　キャッキャ云ううら若い女性達が、悪い事に巻き込まれたりしたら大変だ…。　俺達が、見守らねば成らん。　ん、それが一番だ」

この雰囲気の流れから、こんな言葉を云う人間の気が知れない。
そう思うクローリアやリネットなどは、冷めた目をスティールに向けるのだが…。

一番クールな筈のウィリアムは、何故かフッと微笑むと。

「ま、それもいいでしょうかね。　有名な湖って奴を俺も見たいんで、早く宿を取るとしますか」

この一言に、スティールはニンマリして。

「弟子よぉ～、解ってるねぇ～」

ウィリアムは、威勢の良い店先の掛け声が聴こえる方を見ながら。

「でも、その前に書簡を届けて、斡旋所に行きませんとね」

スティールは、先刻承知とばかりに。

「金が無ければ、ナニも出来ぬ。　うんうん、いきまひょ」

呆れながらも、その軽薄さが逆に笑えるウィリアムで。

「しかし、スティールさんはオオカミですからねぇ。　女の子を見に行くのでも、首にロープはもはや必須ですよ」

スティールは、ウィリアムにニュル～ンと絡み出し。

「おいおい、師匠に向かってそんなご無体なぁ～」

「いえいえ、今までの経験に基づく結果・・じゃないでしょうか？」

「ウィリアムぅぅ」

抱きついてさえ来るスティールに、鬱陶しいと言わんばかりの視線を向けるウィリアムで。

「止め、絡まないで下さいよ。　それより、どんな宿にします？」

パッとウィリアムから離れるスティールは、道を行く若い女性を見ては・・。

「あっ、それなら女の子が居るヤド～」

「却下」

「んなら、呼べるヤド～」

「勘弁」

「仕方無いっ、連れ込めるヤド～」

「宿代個室で、一人払いでお願いします」

もう懐が寂しいスティールは、バッとウィリアムに向いては指を向け。

「お前っ、一緒に仔猫ちゃんの生活費を置いてきた仲じゃねーかっ。お互いに懐ジョーを知ってる間で、そんな無慈悲な事を云える

のかっ？！」

「さぁ～。　連れ込むんなら、迷惑は勘弁ッスね」

「カァーっ、これだから弟子レベルの奴ぁ～よっ」

どうしてこんないい加減な話に移行出来るのか・・。　流石に、ラングドンですらついて行けない展開である。

でも、ロイムはしみじみと。

「ウィリアムって、そーとースティールさんを甘やかしてるよねぇ」

アクトルも同意見。

「云える」

ラングドンは、ウィリアムと云う人物を推し量るにまだまだ時足らずと思う。

（暗殺の格闘技を遣うのに、あの知識力は確かに学者を超える。薬学と医学のその技術もまた…。　不思議な若者も居るものだのぉ～）

と、思う。　これから、どうこの若者を自分が見ていくのか。　それが、逆に楽しみにも思えた。

さて、それから一行は公園を軽く見回ったりしてから、地方都市ならでは賑わいを商業区に入った。　冒険者や旅人に混じり。　明らかに軽装と云うか薄着の服をした者達が、果実や野菜の並ぶ市場に

ごった返す。

「すいませ～ん、この果物って地元産ですかぁ？」

短いヒラヒラのスカートや、片足の際どく見える腰掛けの布の様なスカートを穿いたうら若い女性達が居て。　店先に並ぶ小さな紅い果物を物色していた。

他にも、家族連れの人達も。　メイド連れや使用人を連れた格好で、薄着の出で立ちで気軽な買い物を楽しむ光景が広がるのだ。

頭に果物の乗った籠を乗せて歩く人や、手押しの荷車を運ぶ人々などが、直に売り込みを店に掛けて居るのも見える。

ウィリアムは、その活気を見て。

「悪く無いですねぇ～。　こうゆう人の賑わいは、好きです」

一方。　薄着で、肩や首筋が露出する衣服の若い女性を見回すスティールが、獣の様な目付きをギラギラさせていて。

「はぁ、はぁ、早く・・宿をおおおお・・」

女性で在るリネットやクローリアからすると、とうてい若い女性などにモテなそうなスティールだと思うのみ。

所が、ラングドンも・・。

「ん～、あんな若い嫁さん居たらのぉ～。　冒険者なんぞ、今直ぐに止めるのにのぉ～」

と、スティールと似た様に物色するのである。

少し離れた後から着いてゆくアクトルとロイムは、スティールやラングドンを見ては、互いに顔を合わせて苦笑いだった。

所が…。

「あら、キミ」

ロイムの前に、女性の声をした誰かの影が射した。

「むっ?!」

「なぬっ?!」

ラングドンとスティールが、その声の色っぽさに瞬く間の反応をする。

そんな中。

「えっ?　あ・・」

いきなりの事で、どうしていいか解らないロイムの前に立つのは、ロイムより頭一つ以上は背の高い大人びた女性だった。　緩やかに曲がる黒髪が、長く胸元や背中に這い。　スタイルも良く、スラっとした生足が、スリットの深いヒラヒラしたスカートから伸びていた。

「キミ、冒険者ぁ?」

女性の喋る語尾が甘やかに弛み、性的な魅力を纏って耳に忍び込んで来る。

女性を見たロイムは、いきなりの事も在ってガッチガチに緊張し出す。

「あ・あぁ・・はっ、はいぃ」

そんなロイムを見たスティールが、その間に入ろうとするのだが…。

「のごぉっ」

襟首を掴まれてしまい、首が苦しく為る。

（誰がぁっ?!）

と、見れば、それはウィリアムで。

（まぁまぁ、ロイムに話した女性なんですから・・）

と、耳打ちされる始末。

「ふごっ、ろひむぅ・・」

口まで塞がれたスティールは、二人の会話に絡めずもがき出した。

さて。

大人びた女性は、ロイムの視線に少し屈んで合わすと。

「この街には、観光ぉ？」

ビシッっと身を正したロイムは、もう冷や汗を額に溢れさせ始めながら。

「はっ・はいぃっ。　しっ・しごし・・仕事のついでにかかかかかか…」

顔を赤らめ、明らかに女性慣れしていない様なロイムの素振りに、女性は微笑む。

「そぉ～なんだぁ。　私、クララ。　向こうの飲食店街で、“アマリルム”ってお店に勤めてるのぉ」

クララと云う女性に目を合わされて、見つめ合うままのロイムはもう沸騰しそうな顔で。

「そっ・そうですか…。　じっ・じじ自分はぁー、ろっ・ロイムといぃ～いまーすー」

と、会話に成りそうも無い緊張した棒読みの様な物言い。

もがくスティールをふん捕まえるウィリアムは、微笑すら浮かべてそれを見ていた。

クララと云う女性は、ロイムのその姿が可愛く見えたのか。

「緊張してるんだぁ～、かっわいぃ～」

と、開いているロイムの左手を、自身の左手で握ってくる始末。

「あわっ！」

驚くしか出来ないロイムへ、クララと云う女性は・・。

「夕方には、お店開くから。　お仕事が終わったらぁ～、お金持って遊びに来て。　ロイムちゃんには、私がずぅ～っと付くから。　・・ねぇ？」

クララと云う女性が、首を緩やかに傾げて云うと…。

「はいっ！！　お金全部持ってっ、うっ・うう・・・伺いますぅっ！！！」

ガクンガクン頷いて、約束を交わすロイム。

流石の光景に、クローリアやリネットも呆れて見ているだけに留まってしまった。

ロイムの手を放すクララだが・・。　立ち上がって、ウィリアムと足掻くスティールを見ると。

「・・あ、えっ・・え〝っ？！」

と、急に驚く顔へと変貌したのだ。

ガチンガチンに固まったロイムの表情が、少し和らぐ瞬間でも有り。

アクトルやラングドンが、何事かと思う。

スティールは、クララと云う女性の視線がウィリアムへ釘付けと成ったのを見て、もがくのを止めた。

（知り合い？）

そう仲間の誰もが思う中で。

「あっ、そそ…そんな、まっ・まさか……」

急に震える左手でウィリアムを指差し、右手で口を塞ぎながら、クララと云う女性が狼狽える素振りすら見せたではなか。

すると、ウィリアムが女性相手で珍しく。

「どうやら、元気そうですね。　色仕掛けの魅力にも、相当に磨きが掛かっておいでの様ですし」

と、知っている様な少し親しげな素振りでそう云ったではないか。

今度はこの語り掛けに、

“え〝っ？！！”

と、仲間一同がウィリアムに驚く時で在った。

クララと云う女性は、ロイムを見てから。

「まさか・・、ウィリアム…の仲間？」

と、またウィリアムを見る。

「えぇ。　そうです」

と、ウィリアムが云うと・・。

「あ・・いあや・そっその…」

と、更に更に狼狽え出すクララで。

「もうあの稼業は、とっくに足を洗ったんだよ？　ほっ、ホントだよっ？！　店・・みっ・店の呼び込みは、ひひひ・昼間でもするよ…」

と、言い訳をし始めたではないか。

何事かを知りたくて、ラングドンはクローリアに近付き。

（あの女性は、リーダーの知り合いか？）

と、小声で聞くのだが。　困惑するのは、クローリアも同じで。

（さ・さぁ・・）

と、返すのみ。

そんな中でウィリアムは、クララを見ながら。

「解ってますよ」

と。

それを聞くクララは、ピクっとして。

「えっ？」

と、ウィリアムの眼を見つめてしまうのである。

相手の眼を見続けるウィリアムは、クララの右腕を指差し。

「利き腕で、ロイムの手を握らなかった。　あの稼業を続けているなら、今は右で触って・・左でしてたでしょ？」

その言葉に、クララと云う女性は右腕を触り。

「・・そうだね」

と、苦痛が香る顔色に変えた。

ウィリアムは、ロイムを見てから。

「“アマリルム”ですか・・。　甘い果実の名前ですね」

「あっ、え？」

急にウィリアムが喋った様な気がしてか、ハッと顔を彼に戻すクララは、聞き取れなかったので驚くばかり。

ウィリアムに掴まれたままのスティールは、そんなクララを見て。

（この女・・過去に犯罪をしてたな。　ウィリアムを見てからの顔

が、ロイム時の顔じゃねぇ）

と、事情が読めてきた。

ウィリアムは、回りの通行人からも見られ始める中で。

「地元のお酒とか有りますか？」

と、クララへ投げる。

「あ・・、えぇ。　色々有るわ。　発酵乳と割ったリキュールは、店の売りよ・・」

只只、微笑のウィリアムで、クララの返答に頷くと。

「少し、この街に逗留しますんでね。　行ける日に、夕方から伺います」

その言葉を受けたクララと云う女性は、言葉を無くして立ち尽くす。

ウィリアムは、仲間へ。

「さて。　仕事を終わらせて、宿を探しに行きますよ」

と、スティールを放しては、歩き出すのだった。

「……」

クララと云う女性に見送られる形で、ウィリアム達は屋台や出店の並ぶ市場の通りを行った…。

「なぁ、どうゆう知り合いなのだ？」

何度目だろうか。　どうしても知りたいリネットが、ウィリアムに聞く。

「さぁ、そのうちに」

同じ言葉でまたはぐらかすウィリアムで、窓型をドアにしたような入口の斡旋所に入った。　この街の斡旋所は、ちょっと通りを入った所に在る飲食店の様な建物だった。　外からの見た目には、レンガ作りの四角い建物であり。　若者から旅人なども入りやすそうな、何処か落ち着いたクラシカルな雰囲気が在る。　店の前には花壇が有り、明るい黄色の庇まで付く建物が斡旋所とは思えなかった。

入口が動いた事で、呼び鈴が奏でる綺麗な音色が響く。

先頭で入ったウィリアムは、中を進みながら店内を見て。

（へぇ、大人の人が行くバーみたいな雰囲気・・だけど？　椅子もテーブルも無い・・・・の？）

壁掛けのランプが曇ガラスなので、少し照明の抑えられた雰囲気が落ち着いている。　一見すると、落ち着いた飲み屋か、茶屋の様な場所なのだが。　店内には、冒険者らしい者が誰も居らず。　また、

★

椅子やテーブルすらも無い。

すると。

「おや、此処は初めての冒険者さん達かい？」

少し草臥れた感の在る、年配女性の声が聞こえてきた。

入った皆が声の方を向くと、店内の中央に屈強な大男が動くサークルカウンターが有り。　その一角に、何処にでも居そうな一般家庭の奥さん風の女性が佇んでいた。

しかしながら。　ウィリアム達からするなら、その前掛けをするふっくらした中年女性が、斡旋所に居る事が異質だと思える。　無造作に後ろで纏めた茶色の髪が、細い枝の様にあちこちからハミ出し。　着ている衣服も、継ぎ接ぎの部分も見える一般民の物。　化粧の様子はまるで無い顔は、肌に歳から来るシミが目立っていた。

「あれが、主じゃい」

ラングドンが、ボソっと云った。

カウンターの在るフロアは、他に何もない石を敷き詰めた床である。　窓には、カーテンが備わり。　部屋の角には観葉植物も在るだけ。　本当に斡旋所なのか。

ウィリアムは、カウンターの内側に立つ女性と向き合い。

「セフティ・ファーストのリーダーで、ウィリアムと云います。　ヘキサフォン・アーシュエルのブレンザさんから依頼を受けまして。

その完了報告をしに伺いました」

その言葉を受け、黒い皮の表紙をした本を取り上げる女性の主。

「ブレンザからねぇ。　あの色者が、他人を信用してそんな使いを…」

ブツブツ言いながら、何かを書き込む女性主だが…。

「あら、有ったよ」

内容に目を通した主は、細めた目をウィリアムに向けて。

「手紙は？」

「もう、捜査本部の在る施設に預けました」

「そうかい、早いね」

「いえ」

「ブレンザから、アンタ等に２０００の報酬が約束されてる。　他に、報告は？」

ウィリアムは、服毒事件は横に置いて。

「そう～ですね。　来る途中の野営施設で、マンティーロガが現れました。　何とか倒しましたが・・」

その話に、タンクトップの白いシャツを着る屈強な男手二人が、ウ

ィリアム達に向く。

女性主は、細めた眼の片方を上げ。

「“倒した”ぁ～？！」

と、疑りのニュアンスを含めた言葉を差し出してくる。

ウィリアムは、それでも淡々と。

「真偽を疑うなら、後で戻る街道警備の騎士様にでも伺って下さい。ま、もう４・５日は戻らないと思いますがね」

「どうしてそう云える？」

ウィリアムは、やけに疑り深い主だと思いながら、仕方なく服毒事件の事も語った上で。

「この通り、ロガの毒針は高値で売れるので採取しました。他に、薬の原料として、毒液・・。それから、武器などに使われる物で、ロガの爪と牙も採取しました。ヘキサフォン・アーシュエルの去り際が、何かと色々物入りだったので。倒したモンスターの体は、倒した冒険者の物。ですから、採取させて頂きました」

眼を見張る女性主は、ウィリアムがカウンターに出した物に手を伸ばし。

「ちょいと・・」

マンティーロガの毒液が入った大瓶を取り、その蓋を開けて臭いを

嗅ぐ。

「ん・・、新鮮な毒だ。　これなら、相当の薬の元に出せる」

そう言って、ウィリアムの差し出した物を全て見て。

「よし、ウィリアムとか云ったね」

「はい」

「この物品、こっちに捌いて欲しい。　即金で、前の報酬と合わせて１００００シフォン出そう。　金が入用なら、上乗せで１０００・・いや、２０００は出す」

そんな主の顔を見るウィリアムは、直ぐに高額な値段を出す察しが着いた。

「ん～。　どうやら、依頼達成の期限が迫る仕事の中に、この物品を必要とするものが在る・・。　そんな所でしょうかね？」

「ふぅ～」

深い溜息をして見せる主で。

「察しがイイね。　明後日までの期限で、毒液を頼まれてる。　他の物品は、オークションに出して運営の費用を蓄えたいのさ」

主の面子を保つ事は、金以上に得るモノは大きいとウィリアムは判断し。

「いいでしょう・・１００００で構いません」

主も、男手の働き手も、釣り上げをしないウィリアムを見返した。

そんなウィリアムは、主人の女性を見返し。

「１００００の代わりに、少し色々と尋ねさせて下さい。　色々と聴きたい事もありますし…」

と、談話に入った。

それから少ししして…。　斡旋所を出る頃は、もう夕方で在った。

「ふぅ。　少し遅く成ったが、流石に我らがリーダーは抜け目がないぞい。　結構有力な情報も在ったのぉ」

ウィリアムの後ろに着くラングドンが言えば、アクトルは当然だと。

「そうゆう意味に関しちゃぁ～、ウチのリーダーは一筋縄じゃない」

リネットは、クローリアと肩を並べながら。

「なぁ、どうして最高額を貰わなかったのだ？」

と、聞いた。　少しでも金を多く貰う事の方が、抜け目ないと思えるからだろう。

「それは、斡旋所の主さんの面子を保つ為でしょう」

「はぁ？　初めて来た街の？」

少し直情で正直な様子を窺わせるリネットが、クローリアからすると可愛いと思い。　フッと微笑みながら。

「色々と、その運営に気を遣う斡旋所の主人です。　他所から来た冒険者に、自分達の事情が苦しいからと報酬を軽々しく吊り上げられては、後々に良い噂は立ちません。　あの斡旋所、地下に屯するスペースが在るそうですが。　我々が話している間、奥の階段の上がり際まで別の冒険者が来ては、此方の様子に聞き耳を立ててましたわ。　屯する人達は、斡旋所の主でも付け込む隙を窺うとか。ウィリアムさんは、その辺は相手を思います」

「ふむ・・。　リーダーとは、そこまで見通すものなのか」

「ウィリアムさんは、其処までしますわ」

「なるほど」

「それに、面子を保たせれば、次に回して貰える仕事も悪く無いかも知れませんしね」

「あ、そうか」

リネットは、ハッと気付いた様に頷くと…。

クローリアは、ウィリアムの背中を見て。

「ウィリアムさんは、職業を挑戦者にしています。　最悪、斡旋所の主が回す依頼には、どんな内容でも拒否を持てません。　その辺の噛み合いを考えても、知らない間柄で初対面な主さんを敵に回す

のは、やはり得策では無いと思いますわ」

「なる程・・、一々頷ける」

そう思うリネットは、ウィリアムを改めて見る。　ロイムやアクトルと話し合いながら、先を行くスティールやラングドンの合いの手に気を配るウィリアム。　先程まで、鋭く主へ情報収集をしていた彼とは、また少し違う趣で居るのが不思議な印象であった。

また、夕方の中通りを戻り。　宿屋が集まる噴水広場周辺に戻った。　色の入ったグラスランプの街灯が、噴水広場を明るく彩る。　噴水広場は、屋台の店が集まる場所らしく。　酒を飲みだした働き手や、冒険者の一団も見受けられる。

ロイムは、いい匂いがしてくるので。

「一回は、此処で夜を食べたいよね～」

と、言いながら。　楽師と踊り子が所々で踊る準備をし始めて居るのを眺める。

此処でスティールは、ウィリアムと肩を並べ。

「で?!!」

と。

ウィリアムは、強い口調で何事かと。

「はぁ?」

すると、スティールはウィリアムに向き、ガシィっと肩を掴むと。

「クララさんのお店に行く事だぁっ。　何時にするんだっ?!」

何を言いたかったを理解するウィリアムは、ギリギリと力を込めて握られる肩が痛くて半笑いに成り。

「あはは・・、明日辺りでいいんじゃ～ないっすかね。　いてて…」

スティールは、鋭い眼に歪む口で。

「お前とぉぉ～、あんのクララとか云う女性のカァ～コを、店でじいいいいいっくりと聞いちゃるでなぁ」

「はは・・そうですか」

疲れた笑いのウィリアムは、横を見てスティールを見ない。

興味津々のロイムは、パッとアクトルへ向いて。

「面白そうですね」

しかしアクトルは、苦笑いだった。

（ま、どうせ事件絡みだろうな。　アイツ、あの女を逃したのか…。
それとも、逃げられたのか。　その辺は、聞いてみたいかな）

事件が絡むと、人の因業を見る。　アクトルからするなら、それを経験でも多くは聴きたいとは思わない。　因業の影には、悲しい事

が多いからだった…。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム？の最初数話は、？の話全てに関する序章に近いものに成ります。　ちと、長い話に成りますが、のんびり読んで頂ければ幸いです＾＾

大型の台風の後、急に気温が下がり。　随分と寝やすい夜が来て、風邪など引かない様にと思うこの頃です。

ご愛読、有難う御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

それは、街角の知らぬ間に潜む悪意　3

≪湖と生きる都市・ロファンソマ≫

青い大きな大きな湖が、緑海と思える広大な山林の中に見える。
山を越えてきた鳥が見たら、其処は羽を休める最高の水辺に見えるだろう。

水郷都市とも云えるロファンソマ。　その象徴たるこの湖は、今の名前で“ロザリア湖”。　嘗ての領主の妃の名前である。　だが、土地の人々は、“アッソド＝ファムラタ”（偉大なる水鏡）と云う古代の名前を用い。　完全に国立都市と化した今では、その両方の好きな名前で良いと云う事に成っている。

さて。　朝の陽が大分上がり始める頃。　湖の南側では、白い砂浜の様な湖畔が広がっていて。　温度が上がる陽の上がった頃から、人が出て各々が水浴びに興じ始める。

「つっめたぁ～い」

「水掛けちゃうよっ。　ホラホラ～」

「遣ったわね～」

色違い、デザインの違う明るい水遊び用の衣服を着る女性達が、水辺のアチコチで黄色い声を上げたりして戯れている。　他の都市では、こんな光景ははしたないのだろうが、此処では街を彩る華に成るのだ。

「んんん…、堪らんねぇ」

湖に来たスティールは、鎧やプロテクターも外して剣のみ。　黒いズボンに、白い長袖を巻くり上げた姿で、その光景を公園広場前からニヤニヤとして見ている。

「フン。　しっかり監視してやるからよ」

その脇には、アクトルも居て。　仁王立ちしては、監視の体勢を整えていた。

一緒に来たロイムやラングドンが、リネットやクローリアと共に砂辺に降り。　湖の間近に向かっている。

スティールは、隣のアクトルを見上げ。

「あの～、自由でイイんじゃ～ないっすかね？」

と、ビビるままに云うのだが。

「バカ云え。　お前の迷惑は、こっちにも飛び火するんだっ。　港で、腰が抜ける様な借金をこさえたバカは、何処の誰だっけか？」

ガックリ項垂れるスティールで。

「其処かぁぁぁ…」

「ったり前だ」

こう云うアクトルだが、本気で何処までも監視する気は無い。　ただ、少しは自重しろと言いたいのだ。

さて、湖畔の白い砂辺に眼を移すと・・。　遊ぶ人々が浜辺の様な湖畔の砂地に寝転んだり。　家族で来て、使用人に仕度をさせては、午前から穏やかなティータイムを楽しむ者も。　そして、心地よい風の吹く場所なだけに、砂地に生える大きなシダを日傘にして読書をする者も居た。

湖畔の白い砂地を歩くロイムは、女性が街では見ない露出度の高い衣服で、無邪気に遊ぶ姿が綺麗に見え。

「あぁぁ…、イイなぁ～」

と、見とれ。

ラングドンも。

「うむぅ。　骨を埋めるなら・・此処かのぉ」

と、二人して女性ばかりを見る始末。

「全く、男と云う生き物は・・」

呆れるのは、何時にない軽装のリネットで。　七分丈の紅いズボンに、少しヘソを出した所で余りを横にして縛る長袖姿。　明るい黄色の長袖に、胸元までボタンを外し、下に着るインナーの薄紫色のシャツが艶かしい。　鎧を脱ぐと、鍛え抜かれた体がスレンダーで、男としては見る価値が有ると思えるプロポーションで在る。

普段通りにローブ姿のクローリアは、リネットに向いて。

「でも、リネットさんは、この場所が似合いますわよ」

「ん？」

「鎧を脱いだ姿は、とても素敵です」

「・・そうか？」

自分の姿を見るリネットは、その意味が解らない。　これが普通なだけに、当たり前で解らないのだろう。

だが、湖畔に来る者の中には、少し気取った若い男達もいたり。軽装の冒険者らしき者達も居る。　そんな男達から見ると、淑やかなクローリアと、少し強気そうなリネットの二人は、遊んでいる女性達とは違う色眼鏡で見えるらしい。　何度か声を掛けられて、嫌に成ってしまった二人で。　湖畔を前に商売をする屋台の群れへ、一人食べ歩きに向かったアクトルの後を追う事に為る。

その頃。

「え～、スティールさんって、そんな凄いチームの一人なんですかぁ？」

「やだぁ、憧れる」

「剣が上手でカッコイイなんて、何かずる～い」

「アタシも、剣術習って冒険者したい」

早速、４・５人の若い女性を捕まえたスティールは、少しキザな様子で会話を流す。　アクトルと離れて直ぐに、もう獲物が釣れた様で在った。　色々と経験してきたスティールの冒険の話に、ネタ尽きが来るのも一日では無理だ。　上流の閉鎖空間に居るお嬢様達にしてみれば、下々の事情や冒険談議に事欠かないスティールのお話には、怖いもの見たさの様な興味しか湧かない。　砂辺に座り、キザな台詞や細かい気遣い。　そして、少し官能的な内容も含む経験を語り、女性達の心をガッチリ掴み始めていた。

「ねぇ。　スティールさんて、お幾つなんですか？」

と、白い水着にから食み出でそうな、豊満な胸をする女性が寄り添う。

「ん？　俺か？」

二人が急速にくっ付く姿に、他の女性も負けじと話掛けて来る。

（フッ・・、俺の魅力爆発だね。　悪いな・・ウィリアム）

何が悪いんだか…。

★

さて。

姿の見えないウィリアムは、一人で湖の北側に在る住居区域に来ていた。　ロファンソマの街中でも、北西部の貴族区と、中央に広がる商業区以外は、街の人が住まう場所なのだが。　ウィリアムは、地元の土着の人に会いに行った。

青いズボンに、珍しく明るい黄色の長袖を着るウィリアム。　朝一番に、一人でバザーに向かって、汚れた古着を売り払い。　新しく買った古着が、コレだった。

冒険者は、所々で衣服を買い換える。　新しい物など、高いだけ。　寧ろ、様々な物が一同に集まる、自由市場で古着を買うのが丁度いいのである。　モンスターの戦いや、請けた仕事で衣服も傷付く。　個人の好き好きにも寄るが、ウィリアムやスティールは、他の国や土地に移ると買い換える様にはするタイプ。　ロイムやアクトルは、綻びを直すタイプであった。

さて。

湖を取り巻く森林公園。　その中を通っている遊歩道のレンガ道を行くと。　湖の北西の開けた高原の野原では、半分が開拓されて農

業地に変わっていた。　其処から、東に抜けて山を前にする森林地帯に入ると・・。　森を虫食いの様に開き、北の奥の山の麓まで点在する此方の住居郡が見えた。　聞いて回る話に因れば、在る集落では、薬草や貴重な植物、鑑賞・売買用の花などを育てる所有らば。
　湖に近い集落では、専らの漁師の集まり。　湖の左回りを行きながら、その様子を見ながら話を聞くウィリアムで。　薬草の知識の交換や、此処でしか見られない植物を見せて貰う。

冒険者が突然来る訳だし、人によっては拒絶も喰らう。　だが、ウィリアムにしてみれば、それは承知で
在った。

が。

山の方に少し入った場所で、針葉樹林を中心とした林の中。　薬草にかけては、この辺の集落でも一番と云われる一族の家を訪ねて。
　そこで見せられた、青黒い瓜に。

「あ～、これは高原に実るスイカですね」

長身の痩せた老人は、長い顎鬚をそのままに。

「解るか？　基本的には、食用では無い」

ウィリアムは、珍しい物に眼を見張りながら。

「えぇ。　皮は、乾燥させて胃薬や痛み止めの混合用に使われますよね。　果肉は、苦味と甘味が在って、同じく乾燥させては粥などに。　滋養効果が高いですから…。　でも、実、その物を観るのは初めてです」

老人は、素直な白い眼をウィリアムに向け。

「詳しいな。　確かに、薬師らしい」

「あはは、ご理解頂けて良かった」

ログハウス調の丸太で作られた二階建ての家の前。　家庭菜園の様な畑が、林の所々に点在する森の中。　北には、雲が頂に掛かる山が背景に為る中で。

「ま、座りなさい」

と、長い巨木を半分に切った様なテーブルと、切り株が置かれ椅子に為る所を薦める老人で。

「すいません、失礼して」

と、腰を下ろしたウィリアム。

二人は、緩やかに流れる時間の中で、薬草の事情についてあれこれと話し合う。

その話の中で。

「実は、麻酔に遣う薬の一部が枯渇していてな。　今、斡旋所に依頼を出しているのだが、中々」

「麻酔・・ですか。　原料は、モンスターの毒とか？」

大抵の薬草や毒草は、此処で揃いそうなもので。　無い物となると、動物・怪物の物に為ると予想しての返答である。

「おお、解るか。　いやいや、相手が大型のモンスターらしくての。昔は、西側の村などから流通していたのだが、最近では求められる量が増してのぉ。　過分では無いが、斡旋所に頼んで求めてみたのだ。　明日が期限なのだが…、聴きに行った孫が直ぐ戻るなら・・無理かもの」

ウィリアムは、昨日に売り渡した斡旋所での主の話を思い返し。

（この人が・・、あの期限が迫った仕事の依頼者かよ。　意外に、世間は狭いですね～）

と、思いながら。

「高い追加料金を後で請求されないといいですね。　モンスターが強いと、斡旋所の主さんの中には、追加料金を払わせる方も居るらしいですから」

と、話を繕うと・・。

「ふぁっふぁっふぁ、それは困るのぉ～。　だが、斡旋所を営むのは、ワシの姪っ子でな。　多分、それは無いと思う」

「・・・・・」

ウィリアムは、思わず口を開けた。　まさか、身内の依頼とは…。

（ほ・・ホントに、面子のみを保つ買取りだったのか…）

ウィリアムは、次期に来る朗報を一々云うのも気が引けて、薬草の話を続けた。

この老人と話をする内に、別の老人がやって来た。　頭は完全に禿げ、腰も曲がって杖を着き。　黒っぽいローブを着た人物で。

「マドーナ、元気か？」

山道を来て、庭の菜園脇から顔を出したその老人を見て、ウィリアムと話す薬師の老人が立ち上がり。

「おぉ、シロダモ。　これは久しいな。　ワシは、眼が良く見えん以外は変わりない」

シロダモと云うやって来た老人は、ウィリアムを脇目にして。

「魚が今年は豊漁でな、近いうちに薬草との交換をして欲しいと思うて来たのじゃが…。　お客さんがいらっしゃる様じゃの」

すると、マドーナと呼ばれた薬師の老人が。

「うむ。　冒険者のウィリアムと云う若者だ。　学者で、薬師の知識が高い。　此処に、地元特有の薬の元を見に来た様じゃ。　他の国を回って来ているから、他所の冒険話を聞かせて貰っておる」

「ほう、それは面白そうな。　ワシも加わろうかの」

「うむ。　さ、こっちに座るがいい」

ウィリアムは、新たに現れた老人の眼が、自分を値踏みする様な疑りが在ると直ぐに解った。　が、田舎の人には、知らぬ余所者を嫌う人も少なく無い。　知らぬ互いだから、どう思われても仕方が無いと思う。

さて。

薬師の老人が、ウィリアムへ。

「所で、先程の続きを聴きたい。　マーケット・ハーナスの北方に、モンスター討伐と樹香採取に行った続きを」

「はい」

最後のドラゴンの下級種との決戦などを語るウィリアムに、この場から他所の国へ動いた事の殆ど無い二人の老人が質問を繰り返した。　薬効のハーブが入った紅茶が何時しか出され、甘い砂糖漬けの果物などが口休めに成った。

殺人事件などは、人の過去を晒す故に語らぬが。　股聞きの冒険談議でも、老人達にとっては新鮮でも在る。　薬草の話や冒険話をしている内に、昼が過ぎた。

ウィリアムは、森の高い木に日差しが遮られるのを見上げ。

「此処は、どの木々も高いですね。　随分と樹齢を重ねる大木も見れますし、人の手が入っているとは思えませんね」

すると、長話で気を許し始めたシロダモ老人が。

「若者よ、自己紹介をするが。　ワシは、湖周辺の漁師の長もしていた事が有るシロダモと云う。　この辺の森は、殆どが切り開かれた様に言われておるがな。　実は、切り開かれたのは、ほんの一部での。　この山に近い集落は、火山が大昔に落した焼けた岩石の跡地なのだとか。　森が焼けた・・、云わば剥げ地を集落にした格好なのだとか」

ウィリアムは、深く頷いては。

「なる程。　だから、どの畑も整地されて無い様な歪な広さなんですね？」

この返しに、マドーナ老人が代わって。

「そうじゃよ。　この高く聳える杉や檜に守られ、朝露の過度を防ぎ、夏の日差しを程よく浴びて。　本来なら高原と森林の間に育つ筈の薬草を、此処でも栽培出来るのじゃよ」

「へぇ、大昔からの生活が、此処に根付いての有り様なんですね」

「うむ、そうじゃ」

すると、漁師の長で在ったシロダモ老人は、ハーブの効いた紅茶を啜ってからこの話に加わり。

「若者よ。　お主が此処に来る途中に、渓谷の跡地がそのまま街道に成っておる場所が在ったじゃろ？」

「あ、はい。　元は水が流れていたとは思えない程に、暑い所ですね」

「うむ。　あの場所は、ワシ等の先祖様が此処に住まう前の古い古い大昔は、本当に川だったと言い伝えられておったそうな。　所が、山が胎動してあの場所だけ持ち上がり、上流から続く川と段差が生まれ、寸断されたそうじゃ」

ウィリアムは、通ってきた渓谷街道の事をよくよく思い出し。

「そうなると・・、元からあの渓谷は、かなり深い渓谷だったのですね。　それが大地の営みの胎動から持ち上がり、雨雲を遮断する程になってしまった・・。　渓谷街道の入口で聞きましたが、あの街道に雨が降るのは数十年に一度だとか」

「おお、流石に情報を良く求めておるわえ。　そうじゃ、あの渓谷街道に雨が降るのは、数十年に一度。　大雨と強風を伴った嵐が来た時だけじゃ」

薬師のマドーナ老人が。

「ほう。　それなら、今年はどうじゃろか。　例年より蒸し暑く、山から吹く風の流れがやや弱い。　嵐が来そうな感じじゃぞ」

「うむ、今年に来る可能性は十分じゃな」

ウィリアムは、寸断された川の方が気に成っていて。

「あの、寸断された上流の川は、どうなったのですか？　それに、川が寸断された以上、上流域と、元の下流域と軋轢などは無かったのですか？」

杖に両手を置き、少し感心した様に眼を開くシロダモ老人が続けるには・・。

「うむ。　元々、その頃までこの森に在った湖は、水溜まりみたいなモンじゃったとか。　伝承では、渓谷が年々水を細くし、枯れるに従って下流域に集中していた集落や村が消えていった。　水を求めてこの森に入植したワシ等の先祖様は、森の民になるしか無いと思うて居ったとか」

マドーナ老人も。

「古い文献には、此処が湖に成ったのは、山の神様のお怒りが有ったと在るな。　確か、湧き水の貯まる場所を、我々が尽く奪ったからだと」

「昔話だと、そう成っとる。　じゃがこの湖は、大地が沈下して出来上がった様じゃ。　若い頃にの、王国の中央から来た学者さんと知りおうて。　ワシが協力を申し出ては、船を出しては湖に潜り。　湖の地形を調べた事が在る」

「ほぉ～。　お前、昔はそんなに好奇心旺盛だったのか？」

「ふん。　新たなる薬草を求めては森の奥に住み込みし、家族を放ったらかしたどこぞのバカと一緒じゃ」

「かっかっっかっ、似たものじゃの」

マドーナ老人の笑いに、薄笑いを浮かべたシロダモ老人で在り。

同じく微笑むウィリアムへ二人が向いては、話は続きに入り。

「この辺の深い湖の際は、硬い硬い岩盤が剥き出しに成っとる。一緒に調べた学者さんが云うには、渓谷の一部が隆起した御陰で、川の水が何処からか地下に入り、地下水として此処に湧いていたのだと。　更に、かなり大きな地震と、火山の噴火などが有り。　大地がこの湖の形に落ち込んだと云う話じゃ。　今でも川から湖へと注ぐ水は、一度地下を通って此処に湖を作るべく湧き出ているとか。　現に、湖の際の岩盤から、所々で水が沁み出しておる。　王国から来た学者さんは、その後に冒険者を雇い。　山の北東に分け入り、地下に落ちる滝を見つけたらしい。　山から続く川が、大地の裂け目に滝と成って落ちているのじゃ。　その水が、此処で湧き出して湖を形成しとる」

此処まで云うと、シロダモ老人は感慨深い様子で。

「ワシ達にとっては、本当に神様の恵みと云っても良いの。　大地の神様、水の神様は、ちゃ～んとワシ達生きるモノを助くる場所をお創りに成られた」

これに同調するかの如く、マドーナ老人も空を見上げては瞑目し。

「有り難い・・、有り難い事じゃ」

シロダモ老人も、少し項垂れ。

「こうして毎年、魚と云う糧を得られる。　本当に、有り難い事じゃ」

二人の感謝を見たウィリアムだが、その川の上流の話に興味をそそられた。

「あの、その地下に落ちる滝って、此処から何の位の場所に在るのですか？　この目で見てみたいのですが…、不味いですかね？」

すると、二人の老人は見合う。

シロダモ老人は、王国から来た学者も行った道なので。

「此処から、山を3日ほど行った場所だそうだが…。　別に、行くのは悪いと言わんじゃろう」

すると、マドーナ老人が。

「それなら、少し間を置いたらどうじゃ？　今、南の空が怪しい。明後日辺に、嵐が来るやも知れぬ。　それを過ぎたら、私の息子に途中までの案内をさせよう。　欲しい薬草を、そろそろ取りに行って貰おうかと思っていたしの。　お主達が一緒に付き添ってくれるなら、モンスターと出会っても安心出来そうじゃ」

ウィリアムは、確かに空の雲の流れに違和感を覚えていた。　時折、黒い千切れ雲が南から来始めた。　思った通り、台風と云う嵐が来る可能性も在る。

「そうですね。　ま、此方も仲間に相談して、少し仕事もしてみての噛み合いで決めます。　薬草が欲しいなら、我々は何時でも護衛は引き受けますよ。　商業区の、“マルロード・ア・ロジル”と云う宿に滞在してますから」

「ふむ。　なら、今出している依頼を取り下げて…」

マドーナ老人が、そう言いかけた時。

「おじぃ～～ちゃ～～んっ！！！」

と、まだ子供の印象が残る声がする。

話をしていた一同が声の方を向くと、三本松が並ぶ山道から、オーバーオール風のズボンを穿いた少年が駆けて来る。

マドーナ老人は、ウィリアムに。

「孫のジョンだ」

と、言ってから。

「ジョン、元気な声を出してどうした？」

駆けて来た少年は、手提げの着いた丸い瓶を持っていて。

「見て見てっ、頼んでおいた原料が、こ～んなに手に入ったよぉっ」

１２・３歳の少年は、ガラス瓶に入った薬の原料を見せる。

マドーナ老人は、大瓶に入った液体を見て。

「ほぉ～、随分と取れたものだな」

「うんっ。　オバさんが云うには、東から来た冒険者が、モンスターを倒して持ってきたんだって。　マンティーロガって云うんでしょ？　この毒を持ってるの」

「うむ。　人の何倍も在る大きなモンスターらしい」

「うわぁ～、そんなモンスターを倒して毒を持ち帰るって、凄く強い冒険者達なんだね」

好奇心に眼を輝かせる少年に、マドーナ老人は。

「ジョン、それを地下倉庫に仕舞っておくれ。　明日、ワシの作業を手伝っておくれよ」

「はぁ～い・・」

元気な返事を途中で止めたジョンと云う少年は、祖父の前に居るウィリアムに眼を留めた。

マドーナ老人が。

「この方は、冒険者のウィリアムだ。　我々と同じ薬師で、知識も深い」

「・・こんにちわ」

目礼をするジョンに、ウィリアムは会釈して。

「こんにちわ。　この辺の珍しい薬草を、お祖父さんに見せて貰ったりしてました」

頷くジョンと云う少年は、頭だけ下げて家に向かう。

マドーナ老人は、ジョンを見送って微笑み。

「アレは、人見知りが有ってな。　知らない人には、何時もあの調子じゃ」

同じくジョンを見送ったウィリアムは、空に顔を上げ。

「そろそろ、ここも薄暗くなりましょうね。　夕方に為る前には、仲間の元に戻らないと」

「おお、そうか。　なら、斡旋所に何時でもいいと云う内容で、薬草採取の仕事を出そうかの。　どうせ、屯しとる輩はその知識も無ければやる気も無い。　主の姪に、旨を伝えておこう」

立ち上がるウィリアムは、微笑み。

「了解しました」

すると、シロダモ老人も立ち上がり。

「では、ワシもこれで失礼するかな」

「おぉ、そうか。　シロダモ、気を付けてな」

「うむ」

シロダモ老人は、ウィリアムへ。

「所で、若者よ」

「あ、はい？」

「御主の泊まっておる宿の一階に、大きな酒場が入っておるじゃろ？」

そう聞かれたウィリアムは、確かに大衆的な酒場でも大きな酒場が一階と二階に亘って広がっていると思いながら。

「えぇ・・、何百人とお客が入れる酒場ですよね」

「おうじゃ。　あの酒場の料理人は、ワシの末の娘夫婦が切り盛りしておる」

「へぇ、そうなんですか。　昨夜に食べましたが、魚料理が凄く美味しかったですね」

「まぁ、の。　ワシの知り合いが此処の漁師から魚を買って、其処に卸しとるで」

「なる程、活きのいい新鮮な魚を扱っている訳ですね。　シロダモさんは、時折行くのですか？」

すると、シロダモ老人は、少し口を濁し始めながら。

「ん・・。　所で・・そのぉ・・。　まぁ、同じ街の中じゃが。これが、意外に近くて遠い場所での。　孫娘の顔を見たいんじゃが、中々忙しくて向こうが来んのじゃ」

「はぁ・・」

急に話が見えなく成った気のするウィリアムが生返事をすると。

シロダモ老人は、禿げた後頭部を掻き。

「今頃なら、午後の漁が終わる頃じゃろ。　御主、上等な魚一匹持っていって、序に魚でも仕入れに来いと言ってくれぬか？」

他人もいいところのウィリアムだ。

「あ…、自分が・・ですか？」

「嫌かえ？」

「いや、そうでは無くて…。　余所者の自分で、それが務まります？」

すると、苦笑いの表情をしたマドーナ老人が。

「シロダモ、また喧嘩したのか？」

「う・うむぅ」

頬りに頭を撫でるシロダモ老人。

ウィリアムは、親子喧嘩だと聞いて。

「そうなんですか？」

「うむ・・」

マドーナ老人は、ウィリアムへ。

「若者よ。　このシロダモの孫娘は、その辺にそうは居らん美人での」

「はぁ」

「シロダモの末娘夫婦は、また一人娘じゃから異常に可愛がって居る」

「はぁ」

「それでの、美しい一人娘にヘンな虫が付かない様にと、箱入りにしておるのじゃ」

「はぁ～」

「漁師なんてのは、見れば解るが厳つい男の集まりだで。　其処に、一人娘を往かせられんと娘夫婦は云うらしい」

「……」

事情が解るにつれ、呆れたウィリアムは、思わず。

「あの～・・、それならシロダモさんが泊まりに行けば～・・・・・」

すると、シロダモ老人がムッとした面持ちに変わり。

「誰が行くんじゃっ。　自分の娘じゃが、あの娘は気味が悪い程の顰めっ面じゃい。　美しく優しい孫のジュリエットを見に行くならまだしも、あんな強情で我侭な娘など見に行きとうは無いわいっ」

何とも面倒な話をされたと頭を抱えたウィリアム。

（おいおい、何だそりゃ）

大体、箱入りにしていたら、さすらいの冒険者風情である自分が面会出来る訳が無い。　更なる一番の気掛かりは、スティールが居る事。　ある意味のジョーカー的な存在が居る以上、そんな美人の事に関わるのは面倒に繋がりそうな気がする。

（ま、魚を親に渡して、旨だけ伝えようかな…）

ウィリアムは、出来る事だけで引き受けようと思った。　マドーナ老人の手前でも有るし、無碍に断るのも悪いと思ったからだ。

だが・・。

この一連の通じ合いが、この直後にとんでもない事へと繋がっていようとは、ウィリアムでも察知の出来ない運命の導きと云えただろう。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、有難う御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

それは、街角の知らぬ間に潜む

悪意　４

≪ウィリアムを呼び込む、事件からの声≫

夕方。　美しい夕日が、湖を赤く染める。

「……」

人気が殆ど無くなった湖畔の砂辺を、ウィリアムは歩いている。

戦ぐ風が冷たく、もう水浴びをする陽気では無い。

（波…か）

海でもない湖なれど、打ち寄せては返りゆく波が、“サワッ・・・サワッ”と湖畔で調べを奏でる。　波打ち際を行くウィリアムの背後から、二匹の白と黒の猫が“ニャーニャー”と追いかけて来ていた。　シロダモ老人から強引に持たされた獲れたての魚と、日干しした開きの魚の匂いに釣られて居る野良猫だろうか。

「ダメダメ、これはあげられないよ」

湖の南側から、北側を見ると。　山を背景にする自然の風景美が素

晴らしい。　一人で、そんな風景を見ながら歩く湖畔は、確かに味わうに価値が在る一時をくれている気がしたウィリアム。

だが、ウィリアムを運命が暇にさせないのは、挑戦者として旅立った宿命だからだろうか…。

「うぉぉーーーいっ、ウィリアムっ！！」

湖畔から街に砂辺を戻った方から、スティールの大声が。

「はぁ？」

今頃、若い女性でも捕まえて、“良い事”にでも興じていると思っていたスティールの声に、ウィリアムは嫌な予感を覚えた。

ウィリアムが砂辺を街に向かって行くのに対し。　もう屋台などの出店が消えた大通り脇の広場から、ウィリアムの方に向かって駆けて来るスティール。

ウィリアムは、その慌て様からして直感し。

「スティールさん、何か事件でも有りましたか？」

ウィリアムの１０歩手前程で、止まってハァハァと息をするスティールは手を前に出した。

“待ってくれ”

そう言っているのだろう。

「ふぅ」

溜め息と共に、スティールとの距離を縮めたウィリアム。

膝に手を置いて、呼吸を整えたスティールが身を起こすと・・。

「ウィリアム、殺人事件だ。　お前を呼びに来た役人が居るぞ」

「？」

ウィリアムにとっては、スティールの前半の話は驚きでは無い。

が。　後半の言葉は、全く飲み込めない。

「どうして、俺が呼ばれるんですか？」

焦るスティールは、切羽詰った様子で。

「とにかく、宿に戻ろうゼ。　歩きながら話す」

「解りました」

夕日に染まる大通りに上がり、レンガ造りの４・５階の建物が片側にだけ並ぶ通りを行く二人。

スティールは、自分を警戒して猫が追って来ないのを見てから。

「ウィリアムよ、前に逢ったフラックターって役人を覚えてるか？」

懐かしいと云うには時が浅いが、忘れられない事件で在った下級捜査官に名前に。

「えぇ。　ジェリーさんの事件で、我々に捜査状況を説明してくれた方ですよね？」

「おう。　ソイツが、今、此処に居る」

「はぁ？」

ウィリアムは、ジェリーの事件で下級捜査官だった彼を思い出し、どうして此処に居るのかが解らない。

「俺もさっき出会って驚いたがよ～、アイツあの後に出世してやがった」

「“出世”・・」

「あぁ。　何でも、広域に渡る事件を捜査する中で、捜査の大元をしてる場所から、地方に出向して事件の情報を集める捜査官に成ったらしい」

「へぇ。　それって、結構な権力持ってますよ。　地方に来ても独立した捜査権限と、兵士や役人を借り受けれる権限も有ると聞きました」

「おうおう、そうらしいな。　んで、アイツがお前を頼って来た。　どうしても、力を借りたいとさ」

「・・何処で、俺が此処に居ると聞いたんでしょうか。　昨日、書簡を届けた辺りですかねぇ…」

考えるウィリアムに、スティールは首を振り。

「いやいや、今朝だと。　お前が湖を回る為に、左回りの遊歩道を行っただろ？」

「えぇ。　湖の脇の森林公園の中を通って」

「その時、其処に聞き込みに向こうも行ってたらしいぜ。　お前が遊歩道に入っていくのを、本人が見てたってさ」

「ふぅ、そうですか」

スティールは、ウィリアムが背負う枝にぶら下がるモノを見て。

「所で、その臭うのは何だ？」

「干した魚ですよ。　こっちに持ってるのが、獲れたて」

「何だぁ？　漁師の元にでも行ってたのか？」

「えぇ、まぁ。　俺達が泊まっている宿の酒場在りますでしょ？　そこで働く料理人の夫婦の親御さんに会いましてね。　コレ、届ける様に頼まれました」

すると、スティールが顔を困らせ。

「ウィリアムよぉ、お前・・今回の事件には呼ばれてるぜぇ」

「はぁ？」

ウィリアムも、奇妙な言い方に想像が届かない。　だが、次のスティールの口から出た言葉は、流石に衝撃的であった。

「昼間、その料理人の夫婦が参考人として連れてかれた」

「えっ?!」

「おっでれ～たで、スゲェ美人の娘が居てよ。　何か疑いかけられたか知らないが、両親揃って連れて行かれてさぁ。　わんわんと泣いてたよ」

ウィリアムは、流石にスティールの云った言葉をそのまま感じる。

（ホント、呼ばれたかなぁ）

そう思いながら。

「で?　スティールさんは、その慰めに頑張った・・と?」

すると、スティールは悔しがり。

「それがよぉ～、聞いてくれよっ!!　アークに邪魔され、リネットとクローリアが家に連れて行っちまったんだよぉぉぉぉ」

「ははははは・・、そりゃ～そぉうでしょうねぇ。　んで、他に女性の収穫は無かったんですか?」

すると、スティールはケロっとして。

「いや、残り数日は此処に滞在する予定の、お金持ちの女の子数人

は確保した。　一人とは、今夜にムフフ」

「……」

ウィリアムは、スティールを観る眼をジトっと細める。

「ウィリアム～、そんな羨ましそうな眼をするなよぉ～」

「いえ。　羨ましいなんて想いませんよ。　ただ、迷惑は自分持ちで頼みますよ」

「わ～てる、みなまで言う～な」

ウィリアムは、それでと。

「所で、あのフラックターさんが、直に俺を頼りたいと言う理由はなんでしょうかね」

「いや、そこまでは言ってくれなかったなぁ。　とにかく、昼過ぎに捕まった料理人の夫婦を助けるにも、或る殺人事件を解決しないといけないらしい。　でも、地元の捜査をする役人は、剛直な捜査ばかりして参考人を片っ端から捕まえて締め上げてるみたいだ。下手にネを上げる奴が出たら、犯人で無くても犯人にされそうな様子だってぞ」

「無茶苦茶な捜査ですね」

「でも、誰が殺されたか知らないが、捜査を担当する上級捜査官だかの“刑事官”がゴリ押しでやってるらしいで」

「しかし、そんないい加減な捜査で、良く事件を解決出来ますねぇ」

「んだな～。　冤罪だらけ違うかぁ？」

「全くです」

…。

二人は、そんなこんなと話をしている内に、賑わう噴水広場へと戻ってきた。　チームで泊まる宿は、噴水広場を真ん前に望める立地にある。　書簡の報酬が多かったので、少し良い宿にしたいと云う仲間の意見を尊重した結果だった。　この宿でも、一泊の値段が６０シフォン前後。　見た目にしては、手頃な料金で。　中には、入浴の料金も入っているとの事だった。

ウィリアムとスティールが宿に入ると、左手の酒場の方が騒がしい。

「なぁ～んかウルセェな」

スティールが先に覗くと…。

「おいっ、マルセイが捕まったってマジか？」

「おう、ジュリエットはどうなるんだろう」

「わかんねぇ～」

こんな話が、近くのテーブルで飲む労働者３人から聴こえる。

「…」

無言のままに、スティールが奥の料理を注文するカウンターを見ると…。　何やら詰め寄る人の様子と喧騒が聞こえていた。

後から来たウィリアムは、別の間近のテーブルで飲む5・6人の労働者に近寄り。

「すいませんが…。　向こうが騒がしいんですけど、何が有ったんです？」

すると、前歯の掛けた厳つい年配者が。

「何もどうも。　料理人の夫婦が揃って捕まっちまったんでよ。今日から数日は、この酒場は酒のみとさ。　外の屋台から料理は持ち込み出来るがぁ・・。　なぁ」

そう投げ掛けられた別の大柄な中年男性が。

「うん。　此処のオヤジが出す魚料理は、そのへんの料理とは一味違う。　この酒場の料理も込みで、此処に泊まる客も居るぐれぇ～よ。　その料理が出てこないんじゃ～、触れ込みで泊まった客や・・此処を常連にしてるヤツとかは、キレるがなぁ」

当然と思うウィリアムは、2・3頷き。

「あ～、なる程。　そうですか・・、コレどうしよう」

労働者は、ウィリアムの持つ魚を見て。

「ほぉ～、日干しじゃないか。　何処から買ってきた？」

ウィリアムは、軽く事情を話す。

「かぁ～、あの料理人の夫婦って、元は凄腕の漁師だったシロダモさんの娘夫婦だったかいよ。　魚の目利きに掛けては、誰もが一目置く料理人夫婦だったが・・。　なる程なぁ～」

それを聞いた、また別の労働者が。

「それなら、噴水広場で屋台を出してる店で、魚料理屋をしてるレイノスって奴に渡しな。　アイツは、元は此処で料理の修行をした一端の料理人よ。　腐らせるぐれぇ～なら、その方がいいと思うゼ」

これは良い事を聞いたと思うウィリアムで。

「有難う御座います。　そうさせて頂きます」

と、礼を述べて外に向かう。

見ていたスティールは、

「ウィリアム。　俺達の部屋で、フラックターの使いが待ってる。早めに頼むゼ」

「わかってますよ」

外に戻ったウィリアム。　噴水広場が真ん前の宿であるから、出れば直ぐに賑やかな屋台の群れが広がる訳だ。

「…」

空を見上げたウィリアムは、薄雲が広がるのを見て。

（空気に潤みが出てきてる。　明日は、朝から雨かな）

屋台を出す主人を回り、レイノスと言う人物を探してみる。　すると、地酒のワインを立ち飲みで出す老婆から。

「あ～、レイノスぅ？　あの小僧なら、向こうの宿の近くで出してるよ」

と、ぶっきらぼうな物言いで云われる。

「こ・小僧・・ですか」

そう口に出したウィリアムを、ジロっとした薄目で見てくる老婆は、汚れた継ぎ接ぎの衣服で手を拭きながら。

「あ～に言ってんだい、アタしゃもう９０だよ。　お前さんも含めて、６０までの男なんざ～みぃんな小僧だよ」

「そ・そうですか。　失礼しました」

「ふん」

鼻息で自分をあしらう老婆と別れたウィリアム。　広場に出された屋台と、長椅子・簡易的な椅子に座る人々を縫う様にして、自分たちの泊まる宿の噴水を挟んだ向こう側に行った。　すると、魚を焼く香ばしい匂いが有り。　匂いを出す屋台の内、ウィリアムは一つの屋台に近付いた。

「…」

見れば、鉄板と炭火の焼き場を狭い屋台の中に用意して、物静かな青年が黙々と魚を調理している。　魚を鉄板で焼くにしても、香草を遣う物とタレを引くモノを丁寧に分け。　堺に態とコゲを作り、タレが香草焼きの方に来ない様にしている。　炭火で焼く方も、丁寧に切込みを入れられた魚が、大きさや炭火の強さに合わせて串焼きにされていた。

（此処かな）

その調理をする人物は、黒い上下で、上着は半袖の斜め止めのボタンをしている衣服であり。　短い短髪に、青いバンダナを巻いていた。　ロイムより少し高いくらいの小柄な男性だが、日に焼けた顔は中年の印象を受ける。

ウィリアムは、魚の調理が終わるまで待っていた。　木の椅子に座り、噴水の際に沿って置かれた簡易的な丸テーブルにて、魚料理を待つ客に出し終えるのを待った。

日暮れ。　空の大半が暗くなり、西の一部が赤みを残す頃合い。

「すみませんが・・」

ウィリアムが声を掛けると、次の魚の下処理をしようとしていたその男性が顔を上げた。

「いらっしゃい・・」

張りの無い掛け声であった。

「自分は、冒険者でウィリアムと云います。　レイノスさんですか？」

「え？　あ・・はぁ」

「この魚・・、扱って頂けると助かるんですが…」

魚を見ると、男性は眼を少し大きく開き。

「いい開きの日干しですね。　これは、地元の物ですね？」

「えぇ。　実は、色々と有りまして…」

ウィリアムは、正しく事情を説明する。　すると、男性は驚き。

「え〝っ?!　おっ、親方と女将さんが・・捕まったって?!!」

「いえ、まだ参考人と云う事なんで、時期に釈放されると思います」

ナイフを握る手が浮ついて、男性は横に置いた。

「そうですか……。　そうゆう事なら、その魚は受け取りましょう。　出来の悪い弟子でしたが、魚を腐らせるなと女将さんから教わりましたんで」

「すみません、感謝します」

すると、レイノスと云う男性は、ウィリアムへ。

「あの、本当に大丈夫でしょうか。　お嬢さんが、近いうちに見合いをすると聞きました。　親方と女将さんは、お嬢さんを非常に大事にしております。　何分、お嬢さんはとても御綺麗な方なので、周りから変な誘いを掛ける貴族や商人とかが多いらしいんで・・一人だと心配なんですが」

「自分は見た事がありませんが、仲間の女性二人が自宅まで送り届けたとか。　大丈夫だと思いますよ」

「あぁ、そうでしたか・・。　すみません、色々と訪ね返しまして」

とても気弱そうで、真面目な印象を受けるレイノスと云う男性。
ウィリアムは、どうして独立したのかが気になった。　だが、それをゆっくりと聞く暇は無く。

「では、これで失礼します」

「あ、態々済みません」

独立の理由に因っては、魚を突っ返されてしまう事も考えたウィリアム。　だが、態々頭まで下げられて別れる事に。

（こんな真面目な人が、慕う親方の元を易易と離れますかねぇ。何が在ったか・・気になりますが。　俺の踏み込む処では無いですね）

ウィリアムは、足早に宿へと戻った。

男5人が寝泊り出来る5人部屋。　白い壁には、緑の風景画が塗り

込まれた様な感じで書き込まれていて。　広々とした感覚は、空間とインテリアの配置に気を使っていると思える内装だ。　手頃な部屋にしは、小さなシャンデリアが天井に備わり。　食事も可能な四角いテーブルが、仕切りの無い隣部屋に或る。

６０シフォンの値が破格とも思われる部屋の中で。　白髪と成った髭に口元を隠す老人捜査官が、入ってきたウィリアムに向かった。　黒い上下の繋ぎは、国の制服だろう。　胸には、フラストマドを象徴する杖と剣の刺繍が或る。

「ワシは、刑事部捜査官のマッジオスだ。　君が、ウィリアムかね？」

ウィリアムは、少し待つ事に痺れたと云う感じの老人を前にして。

「はい、お待たせしました」

と、一礼した。

威圧感の見える捜査官マッジオスと云う人物は、ウィリアムと同じぐらいの背丈をした老人である。　真っ白の髪を見るに、もう年齢は６０を軽く超えていると思われた。

ウィリアムは、奥のテーブルに手を差し伸べ。

「向こうで話を聞きましょうか」

と、云うと。

「いや。　このまま、捜査本部の或る局部に出頭して貰いたい。

フラックター様が、直ぐにでも現場を見せたいとの仰せだからの」

ウィリアムは、随分と急な話だと思い。

「急ぎますね。　何か、理由でも？」

すると、マッジオスと云う老人は、眼を鋭くさせ。

「お主が何をして、フラックター様に気に入られているかは知らぬがな。　我々は、忙しい。　本来なら、お前達の様な冒険者などに構う暇など無いのだ。　つべこべ詮索せず、さっさと局部へ出頭して貰おうか？」

その眼を見ていたウィリアムは、マッジオスと云う老人の目から嫌悪を感じた。　が、それが丸々自分達に向けられていると云う訳でも無い。　待つ事にイライラしているのは解るのだが・・。

「なるほど。　でも、我々も理由なく出頭させられる筋合いは有りません。　フラックターさんが用事在ると云うなら、自分から足労するのが筋かと思いますがね」

ウィリアムは、カマを掛ける意味でこう云うと・・。

更にムッとした面持ちに変わるマッジオスは、

「うむむ・・、平民出で何が少しの手柄を立てたフラックターといいっ。　我儘を通すお前達といいっ。　ワシはっ、どうしてそんな奴らを相手にせねば成らんのかっ。　命令だっ、出頭せぬなら捕まえるまで」

と、実力行使に。

部屋に居たラングドンとロイムとスティールが驚いた。

このマッジオスの姿を見たウィリアムは、フラックターがあの手柄を言い触らして権力を振り翳している訳では無いと察知した。　リオン王子直々の前で、フラックターは働いた。　これは名誉な事であり、出世したら自分の権威を示す上で口にしていい。　それを、このマッジオスが知らないとは、フラックターも真面目に仕事をしているらしい。

「来いっ」

と、ウィリアムの腕を掴むマッジオス。

「おいっ」

「乱暴は止すんじゃ」

止めるスティールやラングドンへ、ウィリアムが。

「行ってきます。　後を頼みますよ」

と、だけいい置いた。

★

ウィリアムは、素直に街の南西部に在る警察局部の施設に連行されて行った。　警察捜査局部とは、石造建築物の丸い大型の建物で、暗い夜の中では不気味に見える。

前日も行った場所だが、夜に向かう道はまた違った印象を受けた。　連れて来られる間、通りで擦れ違う人の数はどんどん少なく成って行く。　夜には、人気の無くなる場所なのだろう。　大通りと、交わる中通りにのみ街灯が灯るのみ。

ウィリアムは、右手に荒縄を括りつけられながら、引っ張るマッジオスへ。

「此方は、夜になると暗いですね」

「…」

所が、マッジオスは全く無言だった。

サークル状の警察局部に連行されたウィリアムは、煌々と明かりの付くロビーから大階段を上がる。　途中で擦れ違う下級役人などが、マッジオスへ敬礼を見せる。　この施設内は、以外にも明るい雰囲気で。　歩く人々が制服の役人でないなら、何処かの城の内部とも見受けれる様な感じを受けるだろう。

3階まで上がり、其処から重厚な趣の在る前まで長い廊下を引っ張られた。　マッジオスが足を止めた部屋の前には、扉にしては随分と大きめな扉が美しい木目を見せていた。

「フラックター様、ウィリアムと云う者を連れてまいりました」

扉の前でマッジオスが言えば、

「ご苦労様です、中に通して下さい」

と、あのホロー殺人事件で、現状説明をしてくれたフラックターの声がする。

（本人に間違い無い）

ウィリアムは、一体フラックターに何が起こったのか。　そう考えると、此処で急に興味が湧いてきた。

連行の為に縛った縄を解くマッジオスは、ウィリアムを睨みながら近付いてくると。　急に声を低くして。

「中に入れ。　無礼な真似をしたら、牢屋にブチ込むからな」

ウィリアムは、何の事情も知らずにこう云うマッジオスが可笑しく思え。

「はい、精々気を付けます」

と、薄笑いを浮かべて扉を押し開く。

マッジオスが、薄笑いを見せるウィリアムに対して憤る中で。　広い専用の個室の中に居た人物が、ウィリアムを見る。

「やぁ、久しぶりだね。　リオン王子様との一件以来だ」

と、立派な黒い制服に身を包むフラックターが、態々自分からウィリアムへと近付いていく。

（なぬ？　今・・あの若造何て云ったっ？！！）

マッジオスの耳に、“リオン王子”と云ったフラックターの言葉が、二度と消えぬ烙印の様に焼き付く。　そして、一体何が在ったのかと、激しく想像が沸き起こるのであった。

一方。　部屋の中に踏み込んだウィリアムは、向ってくるフラックターに。

「随分と出世しましたね」

と。

顔付きは変わらないままに、身なりが良くなったフラックターだが。

「いやぁ、辞退はしたんだけどね。　ロレンツ様に、下から上がる者の手本に成って欲しいって、そのまま押し切られてしまった」

ウィリアムの前に立ったフラックターは、身分など気にせずに深く頭を垂れた。

「済まないが、リオン王子様へしたように、今度は私に手を貸して欲しい。　短期間に解決して、義兄様を助けたいんだ」

マッジオスは、その場で硬直する様に立ち尽くした…。

（冒険者に、あんな丁寧に頭を下げた…）

…。

扉をウィリアムが閉め。　部屋に有るソファーに二人で向かい合う様に座ると、フラックターは説明をしてくれた。

今日から、３・４日前。　コリンと云う名前の老婆が、街の南東部に在る家で殺された。　小さな家が密集する場所で、古いレンガ造りの家がブロックの寄せ集めの如き様子で立ち並ぶ下町らしい。

さて。　問題なのは、この老婆が金貸しをしていたと云う事実。殺された家から、貸した相手の一部の帳簿が発見された。　金貸しの生業を長くしてきたらしい老婆らしいのだが。　貸す元手の金、担保として必ず取る貴金属や土地の証書などが見当たらないのだとか。　故に、殺しの動機は、金銭のトラブル。　及び、老婆の隠し持つ資産目当てと云う結論に至っているらしい。

今、捜査の主任から外され、自宅待機に成っているフラックターの義理の兄とは、別に。　昼間に連行された料理人の夫婦。　他、数名の疑いを掛けられた貴族や商人や一般人は、新たに捜査の主任と成ったキキルと云う人物に締め上げられて居るらしい。

フラックターは、強引でいい加減な捜査しかしないキキル捜査官では、事件を解決出来ないと思った。

何より、事件当日にフラックターの義兄は、老婆の住む区域の間近に在る所まで出向いている。　他の事件を調べるためだが、老婆の死体が見つかる前日で在った事と。　老婆から、まぁまぁの金額を家族に内緒で借りていたのが不味かった。　今、一番疑われているのがフラックターの義兄で。　帳簿に名前の有った者を締め上げる

のも、彼の他に在る疑いの目を潰して行く為ならしい。

更に、周囲が驚く事が有る。　今までいい加減で、杜撰と怠惰的捜査しかしなかったキキルと云う捜査官にしては、今回の働き方は異常な程だと云う。

フラックターは、ウィリアムなら犯人を見つけれると思ったらしい。
　ウィリアムもまた、フラックターの立場からして、事件ばかりに行動を割けない身の上を推し量り。　遣れるだけは遣ると約束をした。

ウィリアムは、幾つかの疑問を持ったまま、フラックターの用意した馬車に乗り込んだ。　本当は、先ずはと地下の保冷庫で遺体を見たかったのだが、一足違いで医者の検分に出されたらしい。

避暑地で、夜が肌寒いこのロファンソマでは、夏風邪も多く。　異国の外来客が交わる為に、他の病気も多いらしい。　医者でも、遺体解剖の出来る優秀な者は、それなりに忙しい身なのだろう。　国から払われる微々たる金で、他の儲かる業務を先送りには出来ない事情が在った。　遺体の解剖は、大抵が数日先に成るのが通例ならしい。

さて。

馬車に乗り込んだウィリアムとフラックター。　安物の狭く揺れる車内にて。

「フラックターさん、王子やロレンツさんにお変わりは？」

「いえ、皆は元気です」

「それは何よりで」

「えぇ。　ロレンツ様は、ウィリアムさんの事を良く口にされてました。　洞察力や推理力より、物事を一つ一つ汲み見る備な気持ちを皆に解きます」

「はは、それはロレンツさんでもしている事でしょう？」

含羞むフラックターだが。

「えぇ。　でも、冒険者でも出来る事を、役人が出来ないのは情けないと・・」

「なる程。　本来、役人の方々が好かない冒険者を挙げて、ライバル意識的な側面から促している訳ですね」

「流石は・・。　ウィリアムさんの事を、普通に解いても効き目が無いとロレンツさんは申していました」

「でしょうね。　自分は、生まれや育ちも、他人とは少しズレてますから」

こう云うウィリアムを見るフラックターは、ウィリアムの生い立ちに興味を持った。

が。

「フラックターさん、所で」

一呼吸の間を置いて、ウィリアムが返す様に聞いてきた。

フラックターは、ハッとして。

「えっと？　はい、なんです？」

「義兄さんは、お金を何の用で借りたのですか？」

すると、馬蹄と車輪の音が聞こえ、話し声など外に聞こえない状況なのに。

「あの、小声で済みません。　恥を晒します」

と、言ってくる。

「ほう」

「実は、私の姉が、メイドの身から義兄とその義母上様に乞われて輿入れ致しました」

「“輿入れ”と云う事は、お相手は大きな商人か・・貴族？」

「はい。　この街に永く住まう子爵家で御座います」

「へぇ、それはそれは」

「私自身は、平民というか下級役人の家でしてね。　年の離れた姉様が貴族に嫁いだ御陰で、すんなり役人にも成れた方なんですよ。　身内に貴族が居れば、その名前を出せるんですが。　ウチの父親は、姉様の家に恥を掛けるのはするなと言ってます。　ですから、

自分も表に出した事は有りません」

「なるほど」

「ですが・・。　もう、１０数年昔の事なんですがね。　義兄が酔った勢いから、別の貴族の娘に手を出したそうなんです」

「それは・・また」

「はい。　何でも、まだ姉様と結納を済ませる前後の頃で、建前として侯爵家様の晩餐会に招かれた時らしいです。　そして・・ですね。　その当時で、相手の娘さんが身篭りましてね・・。　生まれたのが娘なんですが、相手の女性は子供を孤児院に棄てたんです」

「貴族の裏話としては、有りがちな話ですね」

「みたいですね。　もしその子が男の子なら、今頃は跡目争いにでも使われそうですが。　・・で、義兄様は、それを知らなかったらしいんです。　けれど、数年前にそれを知り。　密かに逢っては、生活の面倒を看ていた様なんですが…」

「はい、はい」

「その娘が、結構な才女でしてね。　親として、どうしても学習院に入れたいと思い立ったらしく。　多額の金を、必要としたんです。　家の金を使うと、家の家財に眼を光らせる義母上様にバレますので。　一生掛けてでも返す気で、老婆から金を借り受けたらしいのですよ」

「ふむ、親心ですね」

「はい。　事件で明るみに成りまして、そりゃ～義母上様が烈火の如くお怒りに・・。　しかし、私の姉様は出来過ぎと言いましょうか。　そんな子供が有るなら、何故に早く身受けしなかったかと・・。　不貞より、親の責任を怒りましたそうです」

「フラックターの御姉さんと云う方は、人間が出来てますね。　普通、嫉妬しそうなものですが・・」

「はい。　でも、姉様は姉様で、若い頃は、酒でしくじる事の在った義兄様なら、それぐらいは在りうると思っていたそうなんです」

「はぁ～・・、それぐらいは想定内だったと？」

「はぁい。　何せ義兄様は、その・・顔がよろしい方で、異性から特に見栄えのする方なんです。　社交的な場に出れば、他の女性に色目を使われても不思議では無いと。　これは、私も同じです」

「なぁる」

「正直、しっかりして大らかな姉様を気に入ったのは、義兄様の義母上様でしてね。　義兄様も、何かと家では我儘も通りません」

「それはそれで、男としては肩身が狭いですね」

「はぁ。　寧ろ、その監視の眼を緩ませて卒なく遣っているのが姉様でして・・」

ウィリアムは、フラックターの姉と云う人物に興味が惹かれた。
只美しいとか云うより、そうゆう人間的な魅力に興味が行くウィリ

アムである。　そして、更に次の疑問も浮かんで。

「ですが…。　何を担保にして、お金を借りたんですか？」

すると、聞かれたフラックターは、少し首を傾げては不思議がり。

「それが・・。　これも、疑いを向けられる要因に成っているらしいのですが。　義兄様は、貴族としての証で、家紋を入れた特製の護身ナイフのみだったと云うんですよ」

「それだけですか？　まぁ、身分の保証には最適の物品ですが・・、価値は微妙でしょう？」

「えぇ。　ケチで、がめついと云う噂の老婆でしたが。　借り受ける理由を、老婆の手先として聞き取る男が居まして。　義兄様は、その男に言っていたのですが・・。　義兄様の言い訳を聞くと、老婆が急に現れましてね。　不思議と金を貸してくれたそうで。　ま、逃げるなとは、念を押されたらしいですがね」

これには、ウィリアムも腕組みして。

「ふむ、それは変わってますね」

「はい」

ウィリアムは、フラックターの手に入れた資料の他に、こんな細かい情報も見載せないと云う心境だった。

金貸しの老婆が殺されたと云う事件。　一体誰が犯人で、どんな模様に成るのか。　その解明は、ウィリアムの手に委ねられようとし

ていた。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

冒険者探偵ウィリアム

それは、街角の知らぬ間に

潜む悪意　5

≪事件の現場に残る跡、それは手掛かり≫

馬車で揺られる事少し。　商業区の中を突っ切り、街の南東部に広がる住居区域の中心部に来た。　馬車が停まり。

「フラックラー様、現場に到着しました」

御者の役人が、車体の前に付く網野目をした小窓を開けて言ってくる。

「ありがとう。　では、案内して欲しい」

「心得て居ります」

外に出たウィリアムは、高さの無い家が密集する中に通る大通りへと降りた。　街灯も無く、家からこもれるぼんやりとしたランプなどの灯りもが、稼ぎや身分に合ってか弱々しい。　遠くまで夜空を見渡せる場所であるが、星は雲のカーテンに隠されていた。

（確かに、下町ですね）

レンガ道路の造りが雑で、歩く足にやや凹凸感が伝わってくる。それでも、隙間なくはレンガを詰めて、接着用の粘土でも合わせて敷いて有るのだろう。　雑草が隙間から出ている様な、荒れ果てた感じは無かった。

「いや～、流石に真っ暗。　しかも、道が悪いよ。　お尻が痛い」

ヨロけて降りるフラックターは、貧しいながらも育ちはお坊っちゃんの様な印象を受けた。

木の短めの柄をした槍を持つ役人が、馬車を停めて降りて来る。二人居て、残る一人は馬の見張りである。　馬泥棒は、馬が陸路交通の要で有る以上、何処にでも起こりうる犯罪の一つだった。

さて、その被害に遭った老婆の家と云うのが、また歩く所に有る。　下町の貧民街の真ん中付近らしく。　何処の道から入っても、クネクネと細い道を行かねば成らない。　家と家が左右に隙間少なく並び。　パッと見て、闇夜の中では壁と思える様な場所に、真っ暗な空間が在るだけの様な夜の道である。

しかも、こんな家が寄せ集められた密集地だ。　少しの大声でも出せば、差ほど弱まる事もなく外に筒抜けと成る訳で・・。

「おいっ、酒は無いのかっ?!!」

「アンタ、もう止してよ」

「ウルセェっ!!」

「キャっ、……」

こんな会話も聴こえるし。　他では、男女の交わりの声が漏れてくる所も有る。　所では、酔っ払った男女の喧嘩の声もした。　それだけ、夜が深まりつつ有る頃合いだと云う事だが。

「はぁ、何処も下町は凄いな。　隣同士の家がくっついてるみたいだし、路地が狭くて街灯も無い」

暗い中でブツブツ言い、顔を顰めるフラックターだが。　こんな様子は、島で慣れきったウィリアムである。　フラックターが驚くのが不思議と思え。

「フラックターさんの住んでいた家は、こうゆう場所では無いのですか？」

周りを警戒するフラックターは、やや小声で。

「違いますよぉ。　一応、役人の住める官舎区の一軒家で、狭いながらも庭ぐらいは有りましたよ」

「なるほど」

ウィリアムは、一つの曲がり角から家の前に走る脇道の先に、一人ポツンと立っている少年を闇夜の中で見た。　恐らく、家に入れない訳でも有るのだろう。　だが、これが自分の居た所では当たり前。　無用に関わる事もせず、見過ごして行く。　面倒も最後まで看ないのに、短絡的な情けで口を利いても仕方が無いのを解っていた。

さて。　随分と密集地の奥に入り込んで。

「此処です」

と、案内されたのは、明かりの点いた石造りの平屋。

入口が開かれっ放しの様子に、ウィリアムは不審に思い。

「入口の戸は・・、壊されたのですか？」

すると、役人の男性が何処か困った様子を見せて。

「はい。　キキル刑事官が、立て付けの悪い戸を蹴り飛ばしまして…」

捜査をする人間が、現場を荒らすとは些か変わっている。　ウィリアムは、気性か、そうゆう場面だったのかが良く解らない。

「ふむ。　・・そうゆう人なんですか？　それとも、最初に踏み込んだ？」

「いえ、どちら違います。　いや・・、正直良く解りません」

これには、ウィリアムとフラックターも。

「はぁ？」

「何だって？」

と、声を出す。

役人の無精髭が目立つ中年男性は、壊れた戸の無い入口でウィリアムやフラックターを見て。

「それが・・。　キキル刑事官と云う方は、今まで事件の現場に来た事が無い人です。　基本的に、部下の好き勝手に捜査させ、犯人を決めつけると直ぐに裁判へ。　冤罪で判決が下された事例も多く。　何度か冤罪が認められ、職務停止を受けた事も・・。　今回は、殺された老婆の名前を聞いた直後、現場にすっ飛んで来て、その・・・」

ウィリアムは、今回に限って有り得ない事例が起こったのだと理解して。

「詰まり、現場に最初に踏み込んだ訳でも無いのに、ドアを蹴り壊した訳ですか・・。　しかしまぁ、良くそんな方がその地位に居れますね？」

すると、フラックターが。

「キキル刑事官は、家柄がいいんですよ。　任命権を持つ統治責任者が、前は父親。　今は、弟と成っていて、恐らくクビに出来ない様にしてあるのでしょうな」

頭痛がしそうなウィリアム。　こんな事が平気で在るから、貴族社会は政治学者などに言わせると無用で。　商人から言わせるなら、扱い易い腐界（不正の渦巻く場所）と云われるのだ。　だが、もうウィリアムの眼は、早くも其処に異質性を見出している。　それを確認すべく、役人の男性へ。

「あの。　もしかして、キキルと云う刑事官は、仕事に対して完全にやる気が無いのでは？」

すると、役人は大きく頷いて。

「はい、そうなんですよ。　ですから、態々此処に来た事が驚きですし、イライラしてドアを蹴るなど想像もしてませんでした」

「…」

ウィリアムは、それを心に留める。

（これは、今までは無かった事・・。　今回に限って・・そうした…。　その理由は、何だろう…）

そう思いながら。

「とにかく、中を案内して下さい」

「はい。　では、此方へ」

家の中に入る役人の男性曰く。

「一応、そのままに成っています。　押収された物は、一部の者の貸し付けが書かれた帳簿だけで。　関係無いと思われる物品や他には、手を付けてません」

と、云った。

が。

ウィリアムとフラックターが踏み込むと。　食事をする四角テーブル他、見て直ぐに家具を把握しきれる簡素な部屋が、随分と荒らされている。　壁に沿って置かれたと思われた食器棚が倒されていて、皿や少ないカップが粉々に・・。

同じく捜査官として下働きをしてきたフラックターは、その現状に。

「これは、凄い惨状ですね・・。　相当に焦って何かを探したんでしょうな」

と、云う。

しかし、役人の男性が。

「あの・・、それが…」

と、口を濁すので。

「ん？　どうしたんですか」

と、フラックターが問うと。

「確かに、我々が通報を受けて来た時。　棚は倒され、少ない本棚も乱れていました。　ですが、此処まで散散たる様子にしたのは、キキル様です」

「なっ、何？」

驚くフラックターは、そのまま言葉が出ない。

だが、ウィリアムは、その現状を見て。

「つまり、キキルと云う刑事官も此処にきて、犯人と同じく何かを荒々しく探し回った・・？」

役人の男性は、逆らえない身をもどかしくさせる様に俯き。

「はい・・」

そこでウィリアムは、フラックターに。

「あの」

と、声を掛ければ。　有り得ない事に驚いたままのフラックターは、もう嬌声に近い声で。

「へぇっ？！」

と、聞き返す。　理解の行かない事ばかりに、フラックターも焦り困惑している為だろう。

ウィリアムは、聴き易い様にと少し声を穏やかにして。

「この状況は、犯人と・・キキルって方が作り上げた訳でしょう？」

「あ・・あぁ。　そっ、そうだね」

「と、云う事は、・・詰まり犯人と、キキルと云う方は似たもの・・。　キキルって刑事官の方も、此処に居た老婆と関わりが～・・在

るんじゃ在りませんか？」

この一言に、フラックターと役人の男性は激しく眼を噛み合せる。

「ま、まさか」

と、狼狽えて云うフラックターに対し。

「いえ・・、否定は出来ません。　捜査費用の流用は疎か、事件で押収された金品に手を付けて、謹慎を何度か受けた方ですし。　金貸しの取立てが警察局部にまで来て、斬り付けたと云う噂もありますし…」

フラックターは、嘗ては自分の上司も裏金を貰って捜査に私情を挟んでいたが。　此処にも似たような者が居るのかと呆れ。

「はぁぁぁ・・、どうして僕の行く先々でこんな…」

だが、ウィリアムはそれだからこそと。

「フラックターさん。　事件に対しての我々の捜査は、まだ始まったばかりですよ。　内部の汚職なら、他に被害が出て。　隠せ切れなく明るみになり、そのままダラダラと解決されるより。　内部からの自浄能力で解決しないことには、住民などに対してケジメが着きません」

「あ・・、そうですね。　スイマセン」

気を持ち直す為に、自分の顔を擦るフラックター。

捜査の手を伸ばすウィリアムは、役人の男性へ。

「遺体は、何処にどうして在りましたか？」

鋭い指摘をしたウィリアムの言葉に、男性は聞き入っていた。

「あっ、は・はいっ」

言われてはハッとして、居間の中央に敷かれた紅い絨毯を指さす。

「此処です。　此処に、仰向けで倒れて居ました。　ただ、後頭部を何かで殴り割られて居るのに、胸にも貫通しかけた刺し傷が有りまして…」

ウィリアムは、腰を降ろす場所に敷いたり、椅子かソファーに敷く用に作られた柔らかい絨毯が。　何故か床に敷かれているのが気に係る。

「この絨毯は・・、此処に敷かれていた物だったんですか？」

「いえ。　この家を訪れる者で、金貸しの仕事を手伝う者に聞き込んだ所。　この絨毯は、近くに倒されている、あの一人用のソファーに敷かれた物だと言っていました。　本当なら、何方も寝室の在る隣の部屋に在った物らしいですね」

「そうですか・・。　所で、血の痕が少ないですね」

現場を見るウィリアムは、頭を割られた上に、心臓まで刺されたと云う割には、周囲に見る血量が異常に少ないと見える。　臭いもするのだが、殺人の行われた現場にする独特の臭いでは無いと思った。

今までの経験上から来る特徴と、この現状の有様が噛み合わずに気に入らない。

役人の男性は、捜査官の様な物言いで現場を見て、聞いてくるウィリアムが何様か解らない。　だが、フラックターが、ウィリアムの質問は、自分の質問と同じと思って欲しいと言われているので。

「はい。　それは、此方も気になってます。　同じ同僚の中には、殺された現場は別じゃないかと云う者も・・」

「一部の方だけがそう仰ると云う事は・・、大半の方は、此処が現場だと思って居るのですか?」

役人の男性は、しゃがみこみ。　そして、絨毯を捲る。

「我々が到着した時。　この絨毯がぐっしょりとした感触で重かったんです。　しかも、下の床を見て下さい」

役人が捲る床には、黒ずんだ液体が木の板を敷き詰めた床に染み付いている。　臭いからしても、血で在るのだが・・。

その光景を見たウィリアムは、直ぐに絨毯を捲り上げたままにして欲しいと、役人の男性へジェスチャーする。　そして、黒い染みの周囲に眼を向けながら屈み込み。

「何ですか、この二重三重に薄まりながら広がるシミは・・。　え?　これは、水じゃないですか?」

と、念入りに指で床を触れ出した。

「あっ、勝手な事は・・」

と、云う役人に。

「いいっ、彼の遺ることに手を出さないで欲しい」

と、言い切るフラックター。

「はぁ・・」

ウィリアムを良くは知らない役人の男性である。　事件の現場は、捜査する役人からするなら、事件可決までは誰にも触れられたく無いテリトリーに成る。　それを、素性も解らない若者に触られたく無いのは、普通に考えて当然かもしれない。

だが。

黒ずむシミが年輪の様な歪な輪を生んで、しかも、端に向かって薄まるシミを見て、ウィリアムは確信する様に。

「これは、血と水が混じってますね。　しかも、この黒ずんだ血、一度固形化した血が再度溶けた様な感じですよ」

と、意見を述べ。

「すみません、絨毯を戻して下さい」

と、役人の男性に云う。

「はい・・」

なんの意味が在るのか解らない役人の男性だが・・。

今度は、絨毯の濡れた処に近付き。　絨毯の伸びる繊維を万能ナイフで選けては、下地を見るウィリアム。　そして、老婆の遺体が在った場所を備に見てから。

「やっぱりだ」

恐る恐るの様に間近に近寄るフラックターは、早く何かが知りたくて。　気持ちが言葉と成って、口から外に出る。

「何がですか？　何が“やっぱり”なんですか？」

役人の男性に教えられなくても、ウィリアムは遺体の心臓部が在った場所の絨毯を指差し。

「見てください」

フラックターも、役人の男性も其処を見る。　絨毯にかなり顔を寄せれば。　其処には、まだ水分を持っている血の固まりの小さな物が入り込んでいた。

確認した二人が、身を持ち上げているウィリアムを見れば。

「普通、日中の暑さからして。　夜が涼しいとしても、流れ出した血が大量でも、殆どが血糊の様な状態か、絵の具が固まる様に凝固します」

役人の男性が、先に。

「そう言われれば・・。　昨日の別件で起こった刺傷事件でも、かなりの血が広がった現場でしたが。　思い出すと半日でかなり乾いてました」

フラックターも。

「まぁ、そうだろうね」

また絨毯に前屈みと成って近付いたウィリアムは、血の固まりをナイフで突っつき。

「普通の血が飛び散り凝固すれば、絵の具が乾いた様に成りますでしょ？　でも、この血糊は、血液が固まってから落ちた様な・・。　こいつは、既に死んだ遺体から出たものです。　しかし、異様にヌラヌラと湿っている。　これは、絨毯に染み込んでいるのが水だからですよ」

フラックターは、

「み・水・・」

と、一番濡れた絨毯の部分に指を押し当てる。　そして、付着した物を見ると。

「・・確かに、血だ。　だが、エラく濃度が薄い様な気がするな。　ベットリしないし、色が薄い」

役人の男性も、フラックターの指を見て。

「そうですね・・、誰も触れて見るまではしてなかった…」

ウィリアムは、役人の男性に。

「所で。　刺された心臓の傷は、かなり抉られた形跡が有りませんでしたか？」

役人の男性は、直ぐにウィリアムを見返し。

「よっ、良く解りますねっ？　遺体を見ても無いのに…」

「いえね。　犯人は、傷口の内部を刺した後に少し抉ってる事は、此処を見れば解るんですよ。　ホラ、臓器らしき肉片も見えます」

此処でフラックターは、顔を歪めて。

「あ・あの・・、処でウィリアムさん。　死んだ遺体から血は出ないと思いますが・・。　市場から買ってきた生肉を切っても、血は出ませんよね。　死んだ遺体を後から傷付けたなら、どうして・・血が？」

「えぇ。　ですから犯人は、傷口にお湯を掛けたんですよ。　此処で死んだ様に少しでも思わせる為に。　普通、肉片には血がべっとりと付着します。　ですが、よく見てみるとこの肉片は、血が拭われた様に付着が少なく綺麗なんですよ。　しかも、少し不自然に白い色をしてます。　この状況を見て判断するに、そう思えるのですよ。　遺体の胸の幹部を見れば、もっとハッキリした事が云えます」

「え〝っ？！」

驚く役人の男性に、ウィリアムは続け。

「スイマセン。　この絨毯も押収してください。　そして、医者に見せた方がいいですよ」

役人の男性は、パッとフラックターを見る。

頷くフラックターは、

「君、言うとおりに。　彼の云う通りなら、殺人の現場が変わる。事件を捜査する上で、これは明らかにしなければ成らない事だよ」

「あ、はいっ」

ウィリアムは、証拠として重要な物に為りうる為に。

「馬車に戻る時に、そっと畳んで運びましょう」

と、云った。

「そうだね、うん。　そのほうがいい・・いい」

フラックターは、ガクガクと頷いて了承する。

さて。

家の東側。　仕切りとしての壁に少し隠す形で、右手に在る竈や水瓶の置かれた炊事場が在る。　ウィリアムは、炊事場と、居間の奥から左手に入る寝室を軽く見て確認だけすると。

「所で。　現場を聞きまわっての証言や、気になった事は有りませんか？　借りた資料には、そのへんが全く書かれていないので、教えていただけると助かります」

「あ・・はい」

役人の男性が云うには…。

通報が在ったのは、朝も陽が上がり始めた頃で。　発見者は、隣の住人。　扉が開きっ放しに成っているを見つけ、此処に住む老婆が居るなら有り得ない様子だと中を覗いて気付いた。

通報に因って役人がこの家に踏み込んだ時、家の中は荒らされていた。　家具の凡ゆる物に移動された跡が在り、戸棚や背丈の低い本棚は倒されていた。　そして、昼にこの現場へキキル刑事官が現れ。　ドアを壊したり。　現場を引っかき回しては、粗探しをすると云う暴挙を働いた。

彼が捜していたのは、老婆から金を借りた人物が、担保にと預けた物品と借りた証拠の証文である。　何故、キキル捜査官がその存在を知っていて、また、それを探しに来たのかは解らないとの事だ。

聞き込みで入った証言は、死体発見の前日に老婆が出掛けるのを見られていた事。　老婆の元には、時折男性が足を運んできていた事。　この二点が、重要な証言だと踏んでいるらしい。

ウィリアムは、其処まで聞いて。

「先ず、前日に被害者が姿を見掛けられたのは、昼とか・・夜ですか？」

「いえ。　朝だそうです。　少し足が弱っていた被害者の老婆は、杖をついては大通りの方に向かったとの事でした」

「なる程。　後の証言で、男性が来ていたと云うのは、細かく言いますと？」

「それが、不特定多数・・と云う訳でも無い様な。　しかし、顔触れは１０人以上と思えます。　時には、労働者の様な者も有れば、紳士的な男性も居たと。　背格好から、見た印象も多種で、知人は多かったと思っております」

「そうなると・・、金貸しに絡んだ顧客か。　若しくは、それ以前からの付き合いが在った男性・・、と云う訳ですか？」

「恐らくは・・。　他に女性が来る事も在った様ですが、近所付き合いは殆ど無いそうで。　誰が知人なのか、目下捜査中と云う事に成ります」

横に成ったままの一人用ソファーの前で。　証言を元に考えるウィリアムは、下に俯きながら。

「・・そうですか。　では、殺された被害者の過去は？」

「良くは解って居ません。　金貸しの手伝いをしていた男二人ですが。　一人は、騙されて借金を背負わされた中年男のオズワルド。　もう一人は、頭の回りが生来につき悪い、デクの棒な男のソナーンと云いまして。　老婆が二人を拾い上げ、金貸しの仕事を手伝わせる代わりに養っていた様です。　二人が老婆と出逢ったのは、もう中年から初老に成り代わった頃の様でして。　二人とも、被害者

の過去を深くは知らないとの事です」

ウィリアムは、それは少し変な感じがする。

「本当でしょうか？　全く解らないとは、少し不思議ですね」

すると、役人の男性は、言い返す様に。

「これは、証言からですが。　二人とも、老婆には素直に従っている感じだったと云います。　また、二人を連行して話を聞いた自分としては、嘘を言っている様には思えません」

「なる程。　仕事上の関係は？」

ウィリアムは、役人の男性の云う事を、反論や意見無しに受け入れた格好から、更に聞く。

「あ～、デクの棒の様な男のソナーンは、腕っ節の関わる仕事をして。　もう一人のオズワルドは、表向きの顧客対応に従事していた様です。　金に厳しく、仕事に情を挟むなと厳しい老婆でしたが。　二人には、不自由の無い金を渡していた様でしてね。　借金を背負わされた男は、その借金を老婆が肩代わりしたとの経緯から、まるで従者の様な仕えようと見えました」

「そうですか・・。　その御二人は、今は拘留されているんですか？」

「はい。　キキル様は・・」

役人の男性は、一度フラックターを苦く見て。　何とも言いにくそ

うにしながら。

「その・・、ラインレイド様の容疑が固まるまでは、重要参考人の全員を拘留せよと云う命令が…」

ビクンとしたのは、フラックターだ。

「なっ何ぃっ?!　義兄様の容疑が固まるまでだとっ?!!」

ウィリアムは、キキルと云う刑事官は、どうしてもフラックターの義兄を犯人にしたいのだと理解した。

（どうして、そこまで？　それにしても、あの床の下はどう成ってるんだろう・・）

ウィリアムは、脇目に暗い寝室を見ていた・・。

この時、外ではサラサラと云う雨音がし出した。　早くも、雨が来たのである。

★

次の日の朝。

建物の並ぶ軒下を通り、大通り沿いを通って朝帰りしてきたスティ

ール。“ムフフ”には、しっかり行ってきた様子で在る。　昨夜夜半から降り続くシトシト雨の中を戻ってきたので、衣服の上半身は濡れていた。

「ふぅ～」

濡れた頭や衣服を軽く払い、直ぐに垂れ落ちそうな滴をロビーに入る前に落とす。　そして、押戸の入口を開いて薄暗い受け付けの在るロビーへと踏み込み。　其処から、毎晩賑わう酒場を見れば、全く人気のない空間が広がっていた。

ウィリアムが云うに、この誰も居ない虚無が好きだと云う。　人の賑わいが、活きる人のエネルギーを直に見て感じられるのは当然だが。　毎日賑わう場所が、一時だけ静寂に包まれるのもまた、同じだと云うのだ。

（なぁ～んにもねぇ。　アイツらしい好み・・かね）

そうだけ思うと、顔見知りになりつつある受付に出てきた従業員に挨拶し。　黄色い石の階段を登って行った。

（ウィリアムは、大丈夫だろか）

昨夜に出掛ける際、ロイムやラングドンに批難を浴びた。　だが、ウィリアムと云う人間を知り出すスティールにしてみれば、これぐらいの事で窮地に陥るウィリアムでは無いと思っている。　次の日まで戻らないなら、それから少し慌てても問題は無いと踏んでいた。

それは、部屋に戻ると明らかに成るのだが。　その前に…。

「おはようございます」

「おはよう。　ご苦労さん」

階段で、早朝から働く支給係の少女と擦れ違う時に、笑みを浮かべ挨拶を交わしたスティールで。

「あっ、お客さんズブ濡れじゃないですか・・。　コレ、お部屋に御配りするタオルですが、お一つどうぞ」

と、メイド姿の少女が白いタオルを差し出してくれれば・・。　スティールは、キザながら穏やかな微笑で受け取り。

「ありがとう。　気が利くね」

と、御礼の言葉を返す。

「いえ、私の仕事ですから…。　ではっ」

そう云う少女の顔が、少し照れているのが解るスティールで。

「朝からイイ笑顔をありがとう」

と、更に声を掛ける。

支給の仕事をする少女が、下の階へ逃げる様に走っていくのが可愛く思えた。

さて。　仲間が寝泊りしている部屋に帰れば、もう起きていたウィリアムが奥の部屋に座っていた。

（戻ってら）

そう思うスティールは、グーガーと寝ているロイムやラングドンの中に、アクトルが居ないのが気になった。　そして、髪の毛をタオルで拭きながら、ウィリアムの居る部屋に向かう。

「おや、スティールさん。　ムフフから、ご帰宅ですね」

物静かな物言いで、落ち着き払った声音のウィリアムである。

「おう。　お前が、あの程度で泣き寝入る性格じゃないのは、こちとら十分に承知だ。　ムフフから戻って居なけりゃ、少し心配しようかと思ってた」

「察しがイイですね。　何か飲みます？　お湯は、貰いましたよ」

「おう。　んじゃ、ハーブティーでも頂くか」

ウィリアムは、少しおどけた笑みをスティールに向け。

「いいんですか？　せっかくの女性の匂いが、紅茶の香りにすり代わりますよ」

どっかり椅子に座るスティールは、キザに微笑み。

「へっ、紅茶の匂いぐらいで消える様な、薄っぺらい夜じゃ無かった。　の～みつ過ぎる位だったから、少し余韻を薄めたいのさ」

ウィリアムが微笑み流すままに紅茶を作れば、スティールは寝てい

る二人の方を見て。

「アークが居ないな」

「あ・・あぁ。　何でも用心棒替わりで、数日女性陣に付き合う様ですよ」

「はぁ？」

茶葉をお湯の中で、穏やかにくゆらせるウィリアムの説明に因ると・・。

両親を連れて行かれたジュリエットと云う女性だが。　リネットとクローリアが家に連れて帰れば。　其処には、ジュリエットに思いを寄せる貴族や商人の使いやら、本人が待ち構えていたらしい。

両親を連れて行かれた事で、もう泣いて動けなく成ったジュリエットであり。　それを見た貴族や商人のバカ息子達は、心配と云う口実を理由に、ズケズケと家の中に入り込む勢いだったとか。

家には、ジュリエットの父方の祖父が一人で居たのだが。　もう脅しすら見せる様子の貴族の息子などに、言い返す事も出来ず怯えてしまった。　慰めると云う口実を盾に、余りの無礼な行動で。　しかも、ジュリエットを何処かに連れ出そうと言い出すバカまで現れる始末。

老いた祖父は、困ってクローリアとリネットを頼ったらしい。　クローリアは、心配に成ってアクトルを呼びに来たのだとか。

スティールは、出された紅茶に、香りの付いたラベンダーシュガー

を入れながら。

「かぁ～、アークが用心棒って・・」

ウィリアムは、素直に。

「適役で・・」

と、言いかけた処に、スティールが被せる様に。

「俺が行きたかったっ」

愛情の捌け口として、既に数人確保している上に。　此の上、まだ欲しがるかと呆れては、眼を細めるウィリアムで在る。

「の～みつなムフフして来たんでしょ？　下半身は、一つしか無いんですよ？」

すると、ギリっとウィリアムを睨むスティールが。

「喧しいっ！　５人や１０人で萎えるオレじゃねぇっ」

「はぁ・・」

余りの絶倫アピールに、正直ゲンナリしたウィリアムだが。

「処で。　事件の方はどうだ？」

と、スティールに聞かれると、真顔に変わり。

「えぇ。　少し日数の必要な展開に成りそうな・・。　ま、解っている事を云うなら、捜査を担当する役人の長は、どうも滅茶苦茶な事をしたがってますね」

「“無茶苦茶”？」

「えぇ。　すんなり云うなら、態と冤罪を生もうと・・」

すると、スティールの目が斬り合いの時の様な鋭さを生み。

「“冤罪”？　・・ジェリーの時みたいにか？」

ウィリアムは、フラックターの姉が嫁いだ家の事情から、今回の事件までの経緯を語る。　すると、スティールは、ワナワナする様な顔色で。

「全くっ、人が人らしい事をしようとする時に限って、下らねぇ邪魔が入るんか。　うざってぇ、その役人を斬っちまえっ」

「それが出来るぐらいなら・・ね」

「まぁな。　歳喰っても、お偉方のバカ息子じゃ手出しもムズイわな」

「はい」

ヤケ酒をする様に紅茶を飲むスティールは、カップを皿の上に置くと。

「ウィリアム、絶対に解決しろよ。　一昨日のお前じゃないが、防

げる悪意は潰せる。　必要悪なら、俺が手を汚したるわ」

性根が真っ直ぐで肝も座ってるスティール。　思慮の至らなさは在るが、純粋さも失っていない処は、ウィリアムも嫌いではない。

「解ってますが。　・・俺が、スティールさんの手を汚させる様な解決の仕方は、しませんよ」

「フッ、だろうな。　で？　手は、足りてるか？」

ウィリアムは、昨夜は寝てないスティールであるのを理解してる上で。

「来ます？　捜査の間は、捕り物でもない限りは見てるだけですよ」

「この雨じゃ、湖にムフフ相手が来ないさ。　暇潰しには、丁度いい」

頷くウィリアムは、脇目にスティールを見て。

「俺が願うまで、緊急時以外で剣を抜かないで下さいね。　フラックターさんの立場も在りますし」

「おう」

その返事を聞くと、ウィリアムは笑みを浮かべては優しい声で。

「いい子ですねぇ～」

バカにされた様で、ムスっとするスティールは、

「おい、俺は犬か？」

と、口を尖らせた。

ウィリアムは、更に微笑んでは、

「御手」

と、右手を出す始末。

「にゃぁ～っ」

スティールは、猫の鳴き真似付きでウィリアムの手を叩いた。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ウィリアム？長編の、第一部。　探偵編に入ります。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

潜む悪意　6

それは、街角の知らぬ間に

≪雨の中で…≫

「しっかし、お前と俺の組み合わせって、雨の日が多くねぇ？」

灰色をした、皮張りの傘をさすスティールとウィリアム。　ロイムとラングドンが良く寝るので、宿に置いてきた。　二人は、フラックターの詰める警察局部へ、労働者が仕事に向かうのに合わせる様にして歩いて行く途中であった。

スティールの軽い言い掛かりに、しれぇ～っとするウィリアムで。

「俺の所為では在りませんよ。　誰かさんが、女性を潤わすからじゃないですか？」

その淫らな表現に、スティールはニヤリとして。

「弟子よ、今日は冗談も冴えてるな」

流石にこの表現で褒められても、大して嬉しく無いと云った苦笑いを浮かべたウィリアム。

だが、真顔に成ったスティールは、事件の事を考えながら。

「だが・・。　始まったばかりとは云え、昨日の事を聞くに遣る事が多いなぁ。　ま、お前が遣るのは、推理や現状の整理・・。　後は、証拠の炙り出しだろうがよ」

ウィリアムは、良く解ってると思い。

「スティールさんの脳でも、経験を重ねると成長するんですね。その通り」

「お・ま・えっ、少しは目上に口を慎めぇぇいっ」

「尊敬出来る目上以外は、出来ません」

「はんっ。　・・だが、金貸しの婆さんの過去ね・・。　下働きとか、娼婦とかは、言うに月並みだろうがよ。　住んでた所からして、苦労してそうな婆さんだな」

「ですね。　あの住まいの在る場所といい、近所に固定の知人が殆ど居ないといいね。　ですが、金に厳しい割には、優しい面も在る様で…。　本当に、苦労はされている方だったのかも知れませんよ」

「だが、殺された理由は別にして、物取りの様な感じだがなぁ。荒らされた割には、何も奪われた形跡が無いってのが変だのぉ」

「・・、それには、もう目星がついてます」

スティールは、驚く様な話に眼を向け。

「んぁ？　もうかいよ」

「えぇ。　ですが、其処を暴くにしてもですよ？　今は、俺やスティールさん以外では、フラックターさんだけしか信じられませんからね。　今直ぐに暴いた所で、それが決定打に成るとは思えないんです。　なぁ～んか、今回の事件も二重・・三重に隠れた奥がありそうな感じがするんですよねぇ」

スティールは、そう云うウィリアムを脇目にして。

「お前のそうゆう勘は、神懸かってるからなぁ～。　だが、簡単な事件では無い様な感じがするな」

「えぇ」

二人が歩く通り上には、雨具代わりのローブを来た人の疎らな往来が見える。　時折走り去る馬車の馬が、うっすらと白い息を吐いている。　標高の高い場所に在るこのロファンソマは、夏でも雨が降れば肌寒く成る。

「しかし、雨が降ると寒いなぁ。　うぅっ。　上着が欲しいゼ」

スティールが寒がると、改めた衣服のウィリアムが、しっかり下着を着込んで居るので。

「そうですかね。　長袖ですし、それほどでも」

と、話す内に左手が開け、大型の円形の施設か見えてくる。

スティールは、その白亜の大型施設を遠目に見て。

「しっかし、公園みてぇな中に、あんなデッカイ施設必要かねぇ」

「あの施設には、一部に軍部の部署が入ってるそうですよ。　政治犯や、捕虜などが出来た時に拘留するとか」

「ほう」

「後、公園の様な内部の奥は、開けた場所でしてね。　何でも、兵士の訓練場に成っていると、フラックターさんが言ってましたね」

「共同なのね」

「ですね」

二人は、雑談を交えながら、施設に向かって中に入った。　フラックターにウィリアムが面会したいと云えば、入口の見張りが昨夜の馬番をしていた役人の男性だったからだ。　すんなり通して貰えたのには、スティールも無言で感心と云うか、驚きを思う。

暗がりと成らない様に、朝からシャンデリアには蝋燭が灯り。　壁掛けのランプにも、弱めた炎が灯る。　役人が不粋に思える城の様に綺麗なエントランスロビーを行き、正面奥の大階段へ向かって内部を行く二人。

美しい乳白色の壁、一つ一つに模様の描かれた床を見回したスティールが。

「なぁ～んか、綺麗な内部だな」

と、差し掛かる階段へと片足を上げた。

「えぇ。　見た目は・・。　でも、少し複雑に成るこの内部の造りを見るに、用途は軍事目的と言いましょうか、警戒警備の施設の様な気がします」

肩を並べ、階段に上がるウィリアムが云うので。

「そうかぁ？」

と、スティールは再度内部を見回して見る。

階段を上り始めながら後ろに軽く振り向いたウィリアムで、説明に移った。

「はい。　正面入口から見ると、この大階段しか眼に入りません。　一階内部に通じる廊下や大廊下は、死角に成る場所に通っています。　この大階段も、螺旋階段が四角を描く様に真っ直ぐでは無い。　これは、大勢の侵入者が来ても、直ぐに上に来させない小細工の一つなんだとか」

「そうなの？」

「えぇ、本で読みました。　時間を少しでも階段で稼げば、上に居る方々が気付いてから行動を起こすのに時間が出来ます。　剣や武器を取る、逃げる、他の者に知らせる、その行動に移る時間なんて、少しの時間が有れば最低限出来ますからね」

「ほぉ、そんなもんか」

「こう云った城や館の姿で、石が使われるのも理由が在ります。壊し難いし、燃え難い」

「そらぁ～、そうだ」

各階に向かう通路が踊り場から伸びるだけで、階段は吹き抜けの上へ続く。

「ウィリアム。　フラックターの居る階は？」

「3階ですね」

「結構上在るが・・、何階建てなんだ？」

「聞いた所では、7階だと」

「下には、メシ食う所も在るのかね？」

ウィリアムは、スティールが空腹なのかと思い。

「だから、何処かで食べていきますか～って聞いたでしょうに？」

「うぃ。　急に腹減ってきた」

3階まで上がると、ウィリアムは、フラックターの居る部屋へとスティールを連れていく。

「フラックターさん、ウィリアムです。　入っても宜しいでしょうか？」

と、大扉の前で声を掛けた。

すると・・。

「どうぞ、御入りください」

と、大人びた女性の声がするではないか。

ウィリアムも、スティールも、眼を見張ってお互いに見合う。

「失礼致します」

ウィリアムが扉を押し開けば・・。

「此方へ、どうぞ」

と、二人をソファーに案内する女性が居た。

「はぁ・・」

「はい」

二人は、少し影に成る女性に近付き、ソファーに腰掛ける中で明らかに成る女性を見た。

二人が見るその女性は、パッと見て美人と云う顔の女性では無かった。　が。　少し切れ長で大きな瞳をし、気持ちの緩みが伺えない

薄く微笑する唇。　知的・・と云うべきか、礼儀や物事への振る舞いを弁え、大人の淑女としての全てに親しみが深いと窺える人物である。　クリーム色の髪をローレルの様に結い上げる髪型は、少し昔の貴族女性に流行った髪型である。　見た目の年齢は、４０前後だろうか。　目尻に、相応の皺がうっすらと見えた。

二人が会釈だけしかせず、静かにソファーへ座ったのは、その女性が気に入らなかったのでは無い。　その女性の立ち姿がキリッとして乱れがなく。　また、淑やかさと貴賓が備わる雰囲気を、会話で乱したくなかったのかもしれない。

ウィリアムとスティールが並んで座ると、女性も対面の席へ腰を下ろし。

「私は、フラックターの姉に成ります者で、エリザと申します」

と、頭を下げてくる。

ウィリアムとスティールは相手を知り、思わずハッとした。　驚くだけのスティールだが、ウィリアムは直ぐに一礼して。

「これはご丁寧に。　身分を弁えず、先に座りまして済みません。　自分は、冒険者をして居ます、ウィリアム・オリンスターと云う者です。　此方は、仲間のスティールさんです」

すると、フラックターの姉であるエリザが、二人を見て。

「お二人の事は、弟より聞いて居ります。　この度は、我が夫の落ち度を助けて欲しいと弟が頼ったとか。　お力添えを頂き、誠に感謝を・・」

ウィリアムは、フラックターが居ない事が気に掛かり。

「いえ。　フラックターさんとは、アハメイルで面識が在るので。
所で・・、フラックターさんは？」

「弟は、今は下に。　直に戻ると思います。　私の分も含めて、軽い飲食の出来る用意を取りに行ってます」

「あ、これは済みません。　我々の様な者にまで、ご迷惑をお掛けします」

すると、エリザは乱れない真っ直ぐな眼をウィリアムに向け。

「いえ、いいのです。　元はと云えば、夫が正しく責任を果たさず。
また、それを読み取れず、今日まで引き摺ってしまった私共の至らなさが生んだ出来事ですから。　親として、腹や何だが違うと、子供を隠して育てるなど情けない事。　罪無き子供を、日陰に隠して埋もれさすなど、親のすべき事では有りません。　貴族の名を頂きながら、自分の子供の身より体裁を繕うなど情けない事だと思います」

何の躊躇いも無く、そう言い切ったエリザ。

スティールは、そうは簡単に行く話でも無いと思い。

「すいません。　俺は、生まれが低いから口が悪いのは許してくれ。
確かにそうだけど、夫として隠し子を簡単に表に出来ないのは、心情的に仕方無い様に思えるんですが・・」

すると、エリザは首を振り。

「それは、本人の身勝手です。　こっそりとでも隠して面倒を見るぐらいなら、ちゃんと引き取るのが責任だと思います。　私は、常常に夫に言って居ります。　恥をかくより、人でなしをする方が、遥かに人として間違って居ると。　隠して隠し続けて構わない事も多いでしょうが。　人の一生が掛かる事に、見栄や体裁を気にしたり。　影を差す様な真似をするのは、不義、不仁の行いです」

ウィリアムは、其処に割って入り。

「所で。　ラインレイド卿が密かに育てられていた御息女とは、今も学習院に？　確か、お金を借りて入れたのが、去年か今年かは解りませんが・・春先とか。　夏季の今は、休みで戻られると思うのですが・・」

エリザは、その話に眼を穏やかにして。

「今、離に戻って居ります」

「“離”？」

「えぇ。　丁度、夫が謹慎を受けました。　この期に、父親としてしっかり対峙して欲しいと言いましたので。　夫も、人目を不忍に話が出来ると、離に」

スティールは、それは違うと思い。

「家族に成るんなら、一緒じゃないと・・」

エリザは、また首を左右に振り。

「昨日まで他人だった様な存在で、しかも父親しか知らなかった子供です。　年も１６歳と微妙な頃。　一つ一つ、順を追って整理させなければ、本人が曲がってしまう。　今、気落ちした夫は、弱っくなった分だけ素直です。　言いたい事、確かめたい事、子供と親がお互いを見るのに、他はまだ邪魔ですわ。　私は、二人が壊れない様に見守るのが、今の自分の勤めだと思って居ります」

スティールは、その意味が良く解らない。

だが、ウィリアムは、何とも良く出来た女性だと思える。

「奥様は、新しい娘さんが可愛いのですね？」

すると、エリザは何の詰まりの無い様子で頷いた。

「えぇ。　息子ばかりで、女の子が居ない家族です。　夫によく似たあの子は、一目で気に入りましたわ。　少し気丈で、とてもハッキリとした性格・・。　しかも、臆する事もなく、堂々とこの家に来ました。　あの子は、これからが必要です。　過去を跳ね返せる眼をしています。　それに、魔力も高いらしいので、あの子が云う様に魔法を習わせたいと思います」

ウィリアムは、とても不思議だった。　この目の前の女性には、人間臭さが無い様な気がする。　まるで、教えの中から出てきた様な人物で、こんなにも素晴らしい人が居るのかと思う。

「其処まで、割り切れるんですか。　素晴らしいですね」

すると、エリザは笑を薄め、少し遠い目をすると。

「割り切れてる訳では有りません。　我儘で、大切な物を壊したく無いだけですわ」

ウィリアムも、スティールも、その静かな本音の切れ端を聞いて何も言えなかった。　エリザにも、様々な心持ちが在るのだが。　それを表に出すだけが仕様では無いと、雰囲気で言われているに等しい。

沈黙が間を埋める。

だが。

その静寂を破り、勢い良く扉が開いた。

一斉に、ドアを見た部屋の中の一同。

「あっ、ウィリアムさんっ」

顔を見せたのは、フラックターである。

「おはよう御座います」

と、ウィリアムが正しく言い。

「昨日ぶりだな」

と、スティールが気さくに云う。

「フラック、もう少し静かに扉を開けなさい」

立ち上がるエリザは、弟の方に向かった。

「すっ、済みません姉様」

エリザに頭を下げるフラックターで、その後から手伝いで手押しの給仕用台車を押し運んで来る役人男性が居る。

ウィリアムは、それが昨夜に事件の現場に同行してくれた役人だと解り。

「あら、夜勤のままに残ってたんですか？」

台車を中に押入れ、ドアを閉める役人の男性は、

「事件が頻発していて、手が足りないんです」

と、閉めきると。

「あの、先に伺いたい事が」

役人の男性から、ウィリアムへ聞き返される。

ウィリアムは、何事かと思い。

「はい？」

すると、役人の男性は、ズンズンとソファーの方に向かって来るではないか。

見ていたフラックターは、それに慌て。

「おっ、おいっ。　彼は違うって！！」

何事かと思うスティールが、ウィリアムと近付いて来る役人の男性を見る。

その中で。

「君は、犯人では無いよね？」

唐突な一言が、役人の男性から出た。

「…」

黙るウィリアムであり。

「おう？」

と、顔を歪めるスティール。

役人の男性は、対面のソファーの背辺りに立ち。

「君が云う通りだった。　遺体に熱湯を掛け、血が流れ出た様に思わせた様だって。　更に再度溶かした血をその場に撒いた形跡が在ると、医師が。　心臓付近の抉られた傷は、死んだ後に付けられたモノで。　しかも、胸部の皮膚が火傷していた。　熱湯に因る火傷で、死んだ後から掛けられたそうだ」

ウィリアムは、眼を一回瞑って。

「そうですか、・・やっぱり」

と、眼を開く。

スティールは、役人の男性が何をもってウィリアムを犯人扱いするのか、全く理解出来ないのだが。

「オッサン。　コイツを疑うのは、かなりの筋違いだ。　コイツは、小さい頃から薬師の修行を積んで、医者の助手もしていた経験が在るらしい。　しかも、この国じゃ～ないが、幾つもの事件を尽く解決して来た過去もな。　死体を・・検死だか、検める眼は、下手な医者より上かも知れないゼ」

信じられないと云う身動ぎの役人の男性で、

「本当なのか？」

と、スティールに聞き返すのだが。

スティールは、フラックターに首を振ってから。

「そこの御偉い奴が、何で出世したか知らないのか？　要因は、此処に居るウィリアムが、国を揺るがし兼ねない大事件を解決したからだぞ？」

「え〝ぇっ？！」

役人の男性は、驚いたままにフラックターを見る。　ロレンツやリ

オン王子が、あのホローの事件を解決したことは、既に地方でも有名に成っている。　冒険者・・旅人・・交代で入れ替わる兵士などに依り、噂と成って響いて来ていた。　その中でも、フラックターは異色の活躍をもって、今の地位に出世したと云う情報も含まれたし。　また、事件解決の裏には、頭脳明晰な冒険者の力が在ったとも・・。

（この若いのが・・、あの公爵家が絡んだ一大事の事件を解決に導いた？　と・・云う事は、リっリオン王子か・・テトロザ様には御面会してる可能性がぁぁ・・）

やっとウィリアムの存在を理解し始めた役人の男性で。　近々、数日の周辺視察として、リオンが各都市を回る事も思い出す。　この事は、早馬で前持った通達として、五日前に知った事だ。

役人の男性は、フラックターが何故に彼を優遇したか理解した。眠気も覚める様な素早い敬礼をして。

「済みませんでしたっ」

と。

だが、ウィリアムは・・。

「あの・・。　それより、貴方が云った事を詳しく知りたいのですが・・」

フラックターの姉が、ウィリアム達にまで食事の支給を買って出た。慌てて辞退しようとするウィリアムと、何とも言えずに困るスティールなのだが。

“夫の濡れ衣が晴れるかどうかの時。私には構わず、捜査の事に集中して下さいませ”

エリザは、そう言って支給に動いた。支給の形を終えた所で、エリザは全てを理解する様に無言で一礼を交わしただけで。静静と家へ帰ってゆく為に退室した。

フラックターの代わりに役人の男性がエリザを見送る為に、警備も買って出ていく。

紅茶の香りが蓄積し出す部屋には、ジェリーの事件で一緒に成った3人だけが残された。

フラックターは、姉の思いを誰よりも強く理解している。だから、余計な雑談無しで、老婆の遺体の検死報告をした。

ウィリアムの見立ては、ピッタリ一致した。老婆の遺体には、死後に熱湯に近いお湯を掛けられた形跡が在り。それは、抉られた心臓付近を中心に、だと云う事だ。絨毯を濡らしていたのは、やはり水。血は、固まった物が熱湯で溶かされた物と判断出来るらしい。

★

ウィリアムは、聴き終えると頷き。

「でしょうね。　凶器が無く、遺体は不自然な場所に、不自然な形で在った。　血を床に撒くまでの工作は出来ても、壁などにまで撒く量が無かったか。　或いは、その工作をするまで余裕が、犯人に無かったか…。　どちらにせよ、殺害の現場は別に在る筈です」

フラックターは、ウィリアムを心底頼る気で。

「ウィリアムさん、これからどうします？」

「そうですね・・」

紅茶を一口啜ったウィリアムは、湯気を見ながら。

「金貸しをしていた老婆が、後ろから殴られています。　犯人は、そっと老婆の背後に忍び寄ったか・・。　或いは、老婆が背後を許せた相手かも知れません」

「なる程」

「家では無い場所に出掛けて行き。　そこで、背後を襲われた・・。　話からして、頭の傷が相当に酷いとか。　かなりの血液が周囲へ飛び散った筈なのに、その現場を見つけられた通報が、今だに無い訳ですよ」

「詰まりは・・、他人から見られない。　または、見付かりにくい場所で、コリンと云う老婆が殺された訳ですよね？」

「そうです。　遺体が発見される前の日、老婆は足が悪いのに何処へ行ったんでしょうか。　色々と知りたいので、今在る証拠を検めたいですね」

フラックターは、この言ってる意味が解らず。

「はぁ？　“今在る”・・ですか？」

ウィリアムは、フラックターをしっかり見て頷き。

「そうです。　押収された帳簿とやらと、拘留されている人達・・」

「あっ、・・嗚呼」

言われて気付くフラックターで。　まだ、任される役職に似合う思慮が足りないと云えるだろう。　ま、成長も見込んで、ロレンツは彼を指名したのだろうが・・。

しかし、ウィリアムは、直ぐに。

「ですが、捜査の主任がキキルと云う人物で在る以上。　フラックターさんの権限で、何処まで踏み込めるかは……微妙ですよね？」

フラックターは、一々頷くばかりで。

「そうですねぇ・・。　初動で動いた役人は、誰の下にも付かない一般役人ですが。　証拠品の管理や参考人を抑えているのは、キキル刑事官の直属の部下。　私が掛け合っても、すんなり会わせるかどうか・・」

「ふむ・・」

ウィリアムは、正式な役人では無い。　勝手に現場周辺に聞き込みを行える様な、独立した特権が在る訳でも無いし。　基本的には、役人が捜査するのが正当な捜査だ。　だが、まだモヤモヤとして、確かめたい事が山積している。　その一つ一つを、これからどう片付けて行くかが問題だった。

考えるウィリアムにも、切り札は在る。　だが、その切り札を相手に取られない形で手中に納めたい。　下手すると最悪な事態としては、事件を担当する捜査陣諸々が犯人に成る可能性も在る。　慎重に事を進めなければ、有益な証拠を全て消される可能性も有るのだから・・。

二人が黙る中で、スティールはふっと思う事を口にする。

「所でよ。　昨日にウィリアムを迎えに来たあのオッサンは、誰なんだ？　強引に引っ張って行ったが、ちと勝手過ぎないか？」

フラックターは、眉間を撫でながら。

「あ～、あの方は、マッジオス副刑事官と云いまして。　我が義兄様が任されていた捜査陣直属の副官です。　気丈で、何事にも猛牛みたいな性格で取り組む方でしてね。　主に、捕り物や情報集めを任されていた方ですよ。　直情が災いしてか、主任的な立場を任せて貰えなかった方らしいです」

「ほう。　んで、何でそのオッサンをウィリアムを迎えに置いていった？」

「実は、昨日の昼間まで、私も自分の仕事に逐われてまして。　私がどうしても迎えに行きたいので、一緒に行ってくれるのを誰かに頼もうと思い、彼に。　義兄様を助けたいのは、彼を含めた義兄様の部下の共通の想いだと思いましたし」

「ふぅ～ん。　その割にには、強引だね」

「でしょうね」

苦笑いで云うフラックターであり。

それを見るスティールは、何処か情けない様な気がしてか。

「解ってたのかよ」

と。

すると、少し溜め息混じりで俯くフラックターは、何とも頼りな下げな様子で。

「あのマッジオスって方は、分家ですが男爵家の家長。　位が上で、代々遣える義兄様には従順ですがね。　一般人でも一応は身内に成る自分にすら、男爵家として威風を向けるプライドの高い方でも有るんです」

「ほう、それはクソ面倒な話だな」

「えぇ。　今回は、自分の方が役職上の権威が上で、しかも義兄様を助けるにウィリアムさんの力が必要だと云う話から従ってくれましたが。　もう、無理でしょうな」

「下らん」

「本当に・・」

二人が話を終える時。

ウィリアムは、また聴きたい事が出て。

「そう言えば、あの役人さんも熱心ですね」

フラックターは、今日も一緒の男性役人かと思い。

「姉様を見送りに行った彼ですか？」

「えぇ」

「それはそうですよ」

「理由が有ると？」

「はい。　彼は、次の月から、義兄様の捜査陣に加わる予定だった方ですから」

「なるほど・・」

スティールは、冷めかけた紅茶を啜った所で。

「専属の役人に成ると、給料違うのか？」

「基本的には、変わりないんですが・・。　先ず、初動の役人は、事件を解決まで捜査出来る訳も無いですし。　次から次へと、初動捜査をし回ったり、兵士との合同で見回りをするなどの下働きばかりなんですよ。　やはり役人で有る以上、関わった事件を解決までやりたいのは本音ですし。　仲間と云う輪の中で共同作業をするのは、只の役人には無い人の輪と言いましょうか。　繋がりが在ります」

「名誉つぅ～か、気持ちの問題みたいなモンか？」

「えぇ。　ハッキリ言って、初動捜査で犯人を挙げられればしてやったりですがね。　現行犯でも無い限り、初動の役人が手柄を挙げられる機会など、匆匆に有る訳ないんですよ。　犯人を挙げたり、事件解決の功労は手当てに反映させられます。　直接的には、捜査陣に配られる活動資金なんですが。　捜査陣に加わると、追加的な手当てが刑事官から出るんです。　名誉的にも、給料的にも、捜査陣に加わる方が絶対にイイ訳ですよ」

スティールは、役職の裏側に有るしきたりの様な物を見る様で嫌だった。

が、ウィリアムは、更に。

「でも、どうしてあの方が？　もしかして、初動で犯人を挙げたとか？」

フラックターは、読みが鋭いとウィリアムに向いて。

「流石に。　彼は、今までに見回りで泥棒や強盗を何度か捕まえた功績が在りますし。　先月に、連続した放火犯を捕まえたらしいん

ですよ。　ですから、彼を義兄様の捜査陣に加え、義兄様の捜査陣へ運営費の追加が決まっていたそうです」

スティールは、フラックターの兄に指名が行った事が凄いと思い。

「ほぉ～。　んなら、御宅の義兄さんって、此処じゃ割と出来る方なのか？」

すると、フラックターは少し胸を張り。

「バカにしないで下さいよ。　義兄様の捜査陣は、この施設に置かれた１５の捜査陣の中でも、犯人を捕まえた数が一番なんですから。　一般の役人からでは、一番組したい捜査陣と言われています」

「なぁ～る。　今回のしくじりが無ければ、アンタも出世した身分で会えたし。　お祝いのパーティーかなんかでも開けた訳だ」

ウィリアムも、スティールも、これには頷くだろうと思っていたのだが。　急にソファーへ背を丸めながら落とすフラックターは、少し苦笑いで。

「どうでしょうか・・。　出世はしましたが、周りはそう扱ってくれません。　ま、僕などは、まだまだ見習いの様な者ですから・・。　正直、本当に認められるには、もっともっと時間が掛かると思います」

ウィリアムとスティールは、そんな力なく云うフラックターを見ては、お互いに眼を交わす。　フラックターはフラックターで、色々と或る様子で在った。

スティールは、この自信の無さは良くないと思う。　だが、付けるのも、取り戻すのも、身につけるのも自分だ。　変に言葉を多く掛けて、思わせるだけでは意味が無い。

「ま、まだまだ、これからだな」

ウィリアムも。

「そうですね。　さて、それでは・・・」

と、話し合いを更に進めようとした所で。

「あら？」

と、廊下の方を見た。

スティールも、ウィリアムの反応に合せ。

「何か・・、大声しなかったか？」

全く聞こえなかったフラックターは、キョトンとして。

「えっ？　そんな声なんかしましたか？」

と、体を捩って後ろに向く。

すると、騒ぎでも起こっている様な声が聞こえだし。　その声がどんどん近付いて来たかと思うと…。

野太い男の声で。

「責任者は居らんのかっ?!」

すると、今度は対応している男性の声で

「あのっ、御面会の手続きをっ」

また、野太い声がして。

「やかましぃっ、家族に会うのに御面会の手続きも有るかっ!!」

また、対応する声が。

「キキル様は、今は捜査に出掛けて居ります。　どうか、少し間を於いて…」

もう、その言い訳がましい対応に、野太い声が更に怒り出して。

「この無能めっ!!!　あの噂に酷い怠け者のキキルがっ、捜査に出るなどあるものかぁっ!!!!!　それが本当ならっ、それこそ怪しい事じゃわいっ!!!　もういいっ、刑事総括長のアリマに問うっ」

「そっ、それはっ」

こんな遣り取りが、廊下を行きながら廊下の奥へと向かって行く。

ウィリアムは、スティールを見て。

「実に気になりますね。　キキルとい名前も出てましたし」

スティールも、ウィリアムを見て。

「なぁ～にが起こったかなぁ」

二人は、何か企む様な目で、フラックターを見る。

「えっ？　えぇっ？！！」

フラックターは、何をするのかと怯えた。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

どんどん、定期的に話を掲載していきます＾＾

番外編のK編を同時進行で制作していますが。　１０月下旬掲載で、進めています。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

潜む悪意　7

それは、街角の知らぬ間に≪突発的に起こる不自然なる騒動≫

突如、廊下で起こった騒ぎ。　それは、ウィリアムに予感を与えた。
　この事件を素早く解決する緒（いとぐち）だと。

フラックターを迫立たせたウィリアムは、廊下に出て立ち竦む役人の一人を捕まえる様に言含める。

フラックターは、廊下でオロオロとしている痩せた役人を見つけ。

（ウィリアムさん、なら・・あの人にしましょう。　彼は、キキル刑事官の下で働く者です）

ウィリアムは、申し分ないと頷いた。

大廊下の片側。　長い廊下の所々にポン・・ポン設けられた窓が、やや高みの角度から、鈍い陽の光を廊下へと伸ばす。　その窓側に寄って佇む気弱そうな小柄の中年男が、一人でモジモジ・オロオロとしていた。

スティールは、近付く事で見るその小柄な男が、役人と云う仕事が勤まるのかと思える程に痩せているので。

（おいおい、こんな奴が悪党相手に立ち向かえるのかよ）

と、内心に呆れた。

その小柄な男性、気弱そうな印象もさる事ながら。　ガリガリに痩せた容姿に纏う正式な繋ぎの制服もダボダボして、腕や足の裾はまくって有る。　顔ものっぺりとした瓜顔で、それが干からびた様に痩せているのだ。　見た印象からして、キキルと云う刑事官の小間使いではないかと思える。

ウィリアム達より二歩先を行くフラックターは、その男に近付き。

「スイマセン。　今、廊下で大声が聞こえましたが・・、どうしましたか？」

声を掛けるフラックターを、その気弱そうな男性が見れば。

「あっ、・・いや・・その……」

明らかに、少し警戒した顔をする。　謹慎中のラインレイド刑事官とは、義理の兄弟に当たるフラックターの事は、この男性も知っているらしい。

フラックターは、邪気の無い笑みの顔で。

「今、キキル刑事官は、外に出ていると言ってましたが・・。　自

分は、先程に下で見かけましたよ」

すると男性役人は、大いに慌て。

「え〝っ?!　本当ですかっ?!!」

「はい。　容疑者などを収容した地下房の階段へと…」

すると、その気弱な男性は卒倒しそな素振りで伸び上がる。　背の低い男性だが、それが飛び上がりそうなのだ。　まるで、脅かされた野うさぎが藪から飛び出す様で有る。

「あわわわっ、マッ・不味いっ!!」

その小柄な役人が、廊下の向こうへと振り向こうとするのだが。フラックターは、その男性の腕を掴み。

「あの、何が有りました?」

すると、慌てる男性は、もうその手を振り解こうと。

「放して下さいっ」

と、云う。　明らかに慌て、何かを隠していると思われる素振りであった。

だが、捕まえるのは、ウィリアムやスティールの手も在り。

ウィリアムが。

「随分と慌ててますねぇ。　先程行った大声の主に、キキル刑事官の居場所を言いに行きましょう」

と、フラックターへ言ってから。　今度は、捕まえている小柄な男に。

何を言いに行こうとしたかは知りませんが。　地下の牢屋へ行く理由は、貴方が知って居そうな感じですね。　一緒に行きましょうか」

男が最も嫌がる事と思える事を、穏やかな顔をして云う。

慌てた男性は、その申し出を聞いた瞬間に。

「え〝〝っ？！！」

と、目を丸くして固まるのだ。

その顔の滑稽さと来たら。　スティールは、顔芸をする芸人の様で、思わず失笑仕掛ける程。

ウィリアムの提案を聞くフラックターは、確かにそれがいいと。

「そうですね、急ぎの用事なら、そのほうがいい」

と、同意する。

捕まった男性は、ウィリアムとフラックターを何度も見交わしては、もう口元を歪めてフラフラに為り。

「放して下さい・・。　お願いしますから、放して下さいぃぃ」

フラックターは、ウィリアムと目配せを交わしてから。

「今、此処を通ったのは、一体何方ですか？」

すると。

「嗚呼・・、キキル様…スミマセン」

気弱そうな男性は、そう呟くと。

「軍部の規律・詰問役で有る監査位に就く方です・・。　お・お兄様が捕まって……」

不思議な事も有ると、フラックターは思い。

「何かしたんでしょうか？」

すると、気弱な男性は、涙を浮かべて。

「だからっ！　・・あの老婆殺害の事件で・・関係者としてっ！！」

と、声を荒らげる。　言いたくないのに、言わされている様な感じでだ。

だが。　これには、フラックターやウィリアムも何が何だか解らない。　フラックターは、更に。

「一体、何方なんですか？」

「そっ其処まで聞くんですかぁっ？！」

すると、ウィリアムは袖を引き。

「これは、益々引き渡した方が宜しいのでは？」

と、フラックターに問う。

これには、もう小柄な男性が泣き出し。

「やめ・・止めてっ。　云いますっ、云いますぅぅ。　宿屋の夫婦と一緒に捕まった・・魚屋の主です」

と、云うと…。

ウィリアムは、ハッとして。

「あ・・、ジュリエットさんを送り迎えしていた御者の男性？　確か、大柄な初老の商人・・だった様な……」

フラックターも、確かに報告書で読んだと。

「あぁ・・、その人か」

すると、気弱な男性は、非力ながらももがき出し。

「もうっ、放して下さいよっ！！　キキル刑事官にっ、この事を報告しないとっ！！」

と、ピーピー小鳥が煩くする様に言い出す。

其処へ、エリザを馬車に乗るまで見送ったあの男性役人が戻って来て。

「一体、どうしましたか？」

と、尋ねて来る。

フラックターは、どうしていいものかと。

「ウィリアムさん、どうしましょ」

「何を言ってるんですか。　この彼を、その軍人さんが向かったお偉方の所に連行しましょう。　万が一、彼がキキル刑事官に何か言ったら、逃げ出すかも知れませんよ」

「あ〝っ、そっ・そうですね」

こうして、気弱な男性役人のムムナンを伴い。　あの捜査を手伝って貰っている男性役人のジャンダムと共に、刑事部総括責任の長であるアリマ長官を訪ねていく事にした。

この施設は、軍部・刑事部・裁判部の三部が入っていて。　それぞれに独立した管轄に成っていた。　正直、刑事部と裁判部は、付き合いが認められておらず。　また、軍部と刑事部は、警備上の付き合いから、仲が良い。　刑事部の総括責任者と、軍部の上層部は貴族が殆どなので、非常に仲が良かったと言えよう。

キキル刑事官が独断で強引な捜査をしている事で、その仲に石を投げて波紋を呼びそうな事態に成りかけていた。

役人ムムナンを伴ったウィリアム一行が、４階の統括室を訪ねた時。
部屋の中では、凄まじい剣幕で喚く中年の偉丈夫と。　困惑に面食らって、椅子に座る老人が居た。

喚く偉丈夫は、如何にも武人然とした印象の人物で。　その発する声も轟々と勇ましく。　上質な背凭れの長い椅子に座る老人を、声だけで圧潰さんばかりの勢いだった。

其処へ。

「失礼します」

部屋に付く男性秘書官が、ドアを開けて広々とした趣有る統括室に声を出す。

「なっ、何じゃ？」

と、灰色の立派な制服に身を包む老人が声を返し。

「おいっ、今は立て込んで居るのだぞっ！！」

と、紺色の軍服に身を包む偉丈夫が、水を刺されて苛立ちをぶちまける。

重厚な容姿と光沢の美しい机を挟んで居るその二人へ、秘書官は続け。

「ですが、キキル刑事官の事の様でして・・」

軍人らしき偉丈夫は、“キキル”の名前を聞いた途端。　ギロリと眼を光らせては、秘書官の方に体を向いて。

「何だとぉっ?!」

同時に。　顎に細い髭を垂らす老人長官も、また。

「何用じゃ?」

と、用向きを聞く体勢に成った。

「は。　中央よりお出でのフラックター様が、キキル刑事官の配下の者を連行したと。　廊下では、キキル刑事官は出払っていると聞いたらしいのですが。　フラックター様は、2階の牢屋に向かう別階段当たりで、キキル刑事官を見掛けたと云うのです」

偉丈夫と老人は、互いに眼を交わす。

何も言わなくなった雰囲気が異常で、困惑の秘書官は半身に成りながら。

「今、後ろに居りますが・・、如何致しますか?」

と、その場に問うた。

偉丈夫を見て頷く老人は、直ぐに。

「入れるのじゃっ」

と、声を飛ばした。

……。

その頃。

街を東西へと貫き。　湖の前を通り抜ける大通りの東側。　何家族もが住める集合住宅の高い建物も並ぶ中に、ジュリエットの実家が在った。　茶色のレンガが外壁を造り、屋根は落ち着いた黒の平らな円屋根である。　円筒の3階建てで、周囲の四角い住宅に比べると、目立つ建物では在る。

その一階にて。　雨が窓を打ち、伝う雫が下へと降りるのを見る女性が。

「はぁ・・」

と、溜め息をつく。

一階の窓から外を見るのはクローリアである。　家を取り囲む様に集まった馬車の異様さに、呆れて溜め息をするのだ。

（こんな事が、お話以外で起こるなんて・・）

美少女ジュリエットに、求婚を願い出る貴族や商人の息子に加え。　いい年をした大人ですらうら若い美少女を求めて、こうして馬車に従者を乗せて派遣している。

何で此処までするのか・・。　と、思えるのだが。

今まで、彼等はジュリエットに出会える事が無かったらしい。　両親は、ジュリエットを箱飼いするようにして、専用の御者と馬車を雇い。　少数の女性のみが通える学習院へと通わせていた。　貴族のレディが、勉強と礼儀を学べる場所らしく。　基本的にその敷地内へは、限られた男性以外は入れない。　詰まりは、男子禁制の場所ならしい。

確かに、そうそうは居ない美女のジュリエットだが。　今まで外に出る時は、未亡人などが被る黒い帽子を被り。　通学時ですら、顔は良く見えないままに過ごさせていたらしい。　噂だけに聞く美女と云うジュリエットで、今までは防御壁の様に両親が守っていた。

が。

今回に至り、初めてジュリエットの顔が見えた訳だ。　噂に違わぬ美少女の美貌に、想いを寄せていたドラ息子などは、一気に色めき立って興奮している。　ある意味、一過性の異常が起こったと言っていい。　綺麗な女性なら、他にも居る訳で。　別に、ジュリエットが神の如き力を持っている訳でも無い。

だが、求めてきた男達にとっては、金を積んだり権力をチラつかせたりしてまでも求めたジュリエットであり。　素顔がベールを脱いで露に成り、障壁が無くなった事で暴徒の様に暴走していると言って良かった。

さて。

「クローリア。　外の様子は、どうだ？」

温かい紅茶の入ったカップを二つ持つリネットが、寝泊りを許される二階から降りてくる。　一階には、人を近寄せぬ為と、警戒する意味で灯りが無い。　庭を窺える窓以外は、殆どしっかりと戸締りされ。　忍び込もうとするなら、何処かの鍵を破らなければ成らない状態なのである。　薄暗い広間には、肌寒い空気だけが垂れ込めているだけだった。

「はぁ～、異常ですわ。　役人の方々が昨日は居ましたのに・・。　今では、姿形も見えません。　何かしらの権力が働いたとしか考えられませんわ」

テーブルにカップを置いたリネットは、聞くのも嫌だと云う首振りをして。

「下らん。　男とは、どうしてこうも下らないのか」

同意の気持ちが強いクローリアは、苦笑いで。

「ですが、恋心も併せ持たないなら、男女の関係も子孫を残す事も難しいですわよ。　確かに、この状況は異常ですが…」

クローリアの覗く窓から、一つ奥の窓に近付いたリネット。　少しだけ顔を乗り出し、隠れ見る様に外を伺い。

「だが、中には我々にまで言い寄った阿呆も居たではないか。　目当ては、上に居るジュリエットだろうに。　金を出すからだの、穢わらしいにも程が在る」

「それは、確かに」

馬車が壁を作る様にして、大通りから枝分かれる路地を占拠する様子を見たリネットは、窓から少し離れては上を向き。

「しかし、今の時勢にあの様な箱入り育ちの者が居るとはな・・。正直、両親が死んだら、生きていけるか心配だ」

クローリアは、リネットが他人を心配するとは面白いと薄く笑った。

薄暗い中で、二人は外を伺いながら色々と話をする。　何時しか紅茶は冷め。　もうカップの底に僅かに残るのみと為って行った。

雨音が次第に強く為りつつ有るのに気付く頃には、もう昼と成っていた…。

★

その日の昼。

警察局部では、かなりの混乱が起こっていた。

その端は、軍部の内部規律の乱れを正したり、捕虜等の詰問・調査をする軍部の監査役が。　言い掛かりに近い理由から拘留される兄との面会を求めた事から始まる。

この兄というのは、元は軍人だが。　事故が元で片足・片目を悪くした人物で。　伯爵の家柄ながら、家督を弟に譲り。　好きな商売をしながら、穏やかに生きる御仁らしい。　名前をオルトリクスと云う。

そのオルトリクス氏は、馬の扱いにも長け、実に実直で大らかな性格を乞われ。　ジュリエットの夫婦から、ジュリエットの送り迎えなどを頼まれていた。　元々から家が裏手と云う間近同士で在ると云う事と。　過去には、幼女の頃のジュリエットを付け狙うタチの悪い男を、このオルトリクス氏が捕まえ懲らしめた経緯も在った。

なにより、身体に障害を負うオルトリクス氏は、魚の目利きが出来なかった。　その肩代わりを、ジュリエットの母親が代行している。　商売と料理人と云う意味で、しっかりと共同していたお互いなのだ。　しかも、オルトリクスの一人娘は、ジュリエットの両親から料理の手解きを受け。　今では、交易商人と結婚して、大きな店を持つオーナーでも有る。

この関係を聞けば、この両家族が如何に深い繋がりで歩んで来たかが解るだろう。

さて。

ジュリエットの両親が逮捕されるに当って、金貸しの老婆に会う場に立会人としても出席したオルトリクス氏。　キキル刑事官は、その素性も良く確かめず、強引に捕縛。　一応は貴族の身内と知ったが、もう家督を放しているので、勝手な判断で拘留したのである。

ウィリアム達がムムナンを連れて、刑事部を総括する長官アリマ氏に面会し。　同時に、オルトリクス氏の弟で、サゼルハイム家の家

督を受け継ぐハイドゥン卿に出会う事に成った。

ムムナンが頑なに口を閉ざす中。　一連の流れを聞く前に、キキル刑事官をアリマ長官の前に連行する事態に成ったのだが。　いざ探せば、キキルは姿を消していた。　背丈が高く、カマキリの様な容姿のキキル刑事官は、非常に目立つ。　呼びに行った役人と一歩違いで、部下数人を連れて外に出たと云う話しが聞けた。

処が。　問題は、それだけでは無い。

強引に拘留されていた人々が解放されたのだが、酷い暴行を受けた者が多数居た。　見張りをしていたキキル刑事官の部下が、状況も知らずに現れたハイドゥン卿やフラックターに脅迫じみた言葉を投げ掛け。　実の兄が暴行を受け牢屋に倒れているのを見て怒り狂いそうなハイドゥン卿は、愛用の軍刀を引き抜く。　怒声が牢屋の並ぶ階を木霊し。　警察局部の内部で、軍人とが役人がを捕り物にする事態へと発展した。

薄暗い岩の部屋である牢屋は、環境が宜しくない。　怪我人を診たウィリアムは、傷が化膿しているのを見て、鋭い口調で緊急事態を訴えた。

ジュリエットの両親は、最も最近に老婆から金を借りた人物である。　しかも、当夜のアリバイを捏造しようとして、嘘の証言を強要したらしく。　拒んだ夫婦二人と、その言い掛かりに反論したオルトリクス氏は、酷い暴力の痕が見られた。

また、老婆の金貸しを手伝っていた二人もまた、老婆殺害。　若しくは、老婆殺害の情報を聞き出す為に、許可も取らずして折檻をされた様だった。

大男で、知恵の回らないソナーンは、顎の骨が壊され。　治っても、まともに喋れない程。

一方のオズワルドは、感染症に至って高熱を発していた。

この時、ウィリアムが始めて怒りを顔に浮かべ。

「酷すぎる・・」

と、眼を鋭くさせた。

それを見るスティールは、同じ思いながら。

（これで、ウィリアムも本気に成るな）

表向きに正義感が見えるのはスティールだろうが。　本質的に人間の汚い歪みを憎むのは、ウィリアムの方である。　その逆鱗に触れたなら、どんな悪党も首を洗う必要が有るとスティールは思っていた。

一般の医者に入って貰う事で、軍医施設として稼働している施設に、掴まっていた人々が緊急で運ばれた。

キキル刑事官の捜索が、別の刑事官の元で始まる。　アリマ長官が、そうゆう風に命令を出した。　ロファンソマを治める統括長官にも、兄であるキキル刑事官を匿わない様にと云う要望書も出した。

そして、ゴタゴタに対して、様々な手が動き出す頃。　ウィリアム達とフラックターが、アリマ氏の元に再度呼ばれた。

其処には、事の始末までを見届けようと、ハイドゥン氏も立ち会う。

午後の昼下がりだった。　少し降り方の強まる雨が続き。　風が南から吹き始め、少し暖かく感じられ始めた頃合い。

アリマ長官の机の前に立つフラックター。　ウィリアムとスティールは、その後ろに立つ。

キキル刑事官の暴走を知り、酷く困惑したアリマ長官である。　愛用の円帽子もズレ掛けていて。

「ふぅ～、中央からお出での、情報集積部長フラックター殿。　この度は、我が内部の非道を知らせてくれて、感謝致す。　所で、貴殿は何用で・・動いて居るのじゃろうか。　この非道を、中央へ報告する為かのぉ」

アリマ長官の内心を想い、姿勢を正すフラックターで。

「今回は、中央で起こった或る事件の情報収拾に参りました。　ですが、アリマ長官もご存知でしょが。　キキル刑事官の携わった今回の事件で、我が義兄様が疑われました」

もう冷めた紅茶を、喉を潤す意味で飲んだアリマ長官。

「・・確かに」

「キキル刑事官は、今まで仕事を本気にした事が全く無い人物であったのに。　今回に限っては、異常な思い込みで義兄様に罪を被せるべく、冤罪も構わない様な命令を出して動いて居ます。　これは、

今までに無かった事で在り。　また、そうせざる得ない状況が在ったのでは？　と、そう思えて成りません。　ですから、我が義兄様の濡れ衣を解き、正しい解決を行われる様な情報を集めようと思い立ち。　今回は、仕事の傍らで、行動に出ました」

「ふむぅ」

瞑目するマリマ長官は、考えに落ちる。

そこで。　アリマ長官の横に置かれた椅子に座っていたハイドゥン卿が、何故か立ち上がり。

「だが、フラックター殿とやら。　いくら事情が有ろうが、その様な冒険者の力を借りるとは・・。　些か、不可思議だと思われる」

すると、顔を強ばらせるフラックターは、少し力む様にして。

「ハイドゥン卿っ。　私とて、これでも役人の端くれ。　その辺に居る冒険者の力を、過信して借りる気など無いっ」

と、言い切る。

ハイドゥン卿は、アリマ長官の脇に来て。

「ならば、何故に？」

フラックターは、ある意味の才能を見込んでウィリアムを頼った。
　ロレンツやリオンが褒めたウィリアムであり、尊敬もしている。

だから・・。

「貴族のハイドゥン卿なれど、このお二人には敬意を払うべきですぞっ。　同じ貴族の犯した巨悪の過ちを、見事に解決されたのだから」

と、強く言った。

この言葉に、アリマ長官は眼を開き。　ハイドゥン卿は、ウィリアムとスティールを見た。

「この二人が・・か？」

と、云うハイドゥン卿だが。

アリマ長官は、フラックターを見据え。

「確か、フラックター殿が手柄を挙げたのは・・公爵殿下オグリ卿の関わる事件でしたな？」

フラックターは、この二人きりしか居ないからと覚悟し。

「そうです。　あの時、一人の若い女性が、犯人に仕立てられました。　その無実の罪を王子に訴え、見事解決まで導いたのが、此方に居るウィリアム殿」

ハイドゥン卿とアリマ長官の目が、ウィリアムに向かった。

フラックターは、更に続け。

「この街で、ウィリアムさんを見掛けて運命だと思いました。　自

分一人では、今だに未熟で。　義兄様の無実をどう晴らせば良いか解らず、困っていました。　ですが、其処に彼が見えた。　しかも、部屋の外で控える役人のジャンダム殿。　そして、昨夜に検死を行なってくれた医師に聞けば、このウィリアムさんの能力が解りましょう」

「能力・・とな？」

「はい、長官殿。　遺体も無い現場を見て、彼は今の現場が殺害の現場では無い事を言いました。　犯人が行なった小細工も、見事に言い当てました。　彼は、薬師としての技能で、リオン王子の目の前で悪徳商人ホローが隠す禁制の薬を見破り。　此処に至っては、医師の手伝いをしてた経緯から、不自然な現場の違和を言い当てました。　彼が協力するなら、この事件も解決出来ましょう。　優秀な義兄様居らぬ中で、彼抜きでは事件の解決が何時に成るか解りません」

フラックターは、気負うぐらいに胸を張り。　自分には、ウィリアムが居れば…。　と、云う様な、絶対の自信が有るぐらいの様子で言う。

その話を黙って聞くスティールは、フラックターが必死に頑張ってると思えた。

（アハメイルで会った時とは、少し違って来てらぁ～ね。　役職に就いて、成長してんだなぁ）

さて。

そんなフラックターを見つめたアリマ長官は、静かに俯いて溜め息

を一つ吐き。　その後、顔を上げて思うままに言葉を述べた……。

★

午後が過ぎてゆく中。　ウィリアムの予想通り、嵐でも来そうな強い風が吹く。　重々しい雨雲が垂れ込め、鉛色の雲が生き物の様に蠢いて流れていた。

何時もは賑わう街中も、この天候では人が少なく。　うら若い女性や家族連れが集まる湖にも、人気が全く見えない。

昼間に白んだ空が黒々とし出して、夕方に近付こうと云う頃合いだろうか。

ジュリエットの家にて。　リネット、クローリアの女性二人が、他愛ない話やこれからの事を話込んでいる最中に。

「なぁ、相談在るんだがよ」

と、アクトルの声がする。

女性二人が声の方に振り向けば、アクトルが暗がりの階段の所に顔を見せている。

「何だ？」

「何か、妙案でも？」

一階に降りてきたアクトルは、小難しい顔をして来て。

「この際だからよ。　俺達が泊まってる宿に、彼女を連れていかないか？」

女性二人は、キョトンとしてからお互いで見合い。　また、アクトルに顔を向けると、先にリネットが。

「御老人は？」

「一緒に。　先に宿へ話付けて、金を払おう。　俺達の部屋は、運のいい事に隣だろ？　親が働いてる宿だし、向こうの方が見張る役人も少なくて済む。　女の役人でも一人二人居てくれれば、後はリネットやクローリアが居れば大丈夫だろう」

クローリアは、馬車が通りを占拠しているのを見て。

「ですが・・」

ジュリエットの事で、此処に押し込められていると云う事実からして。　黙って居るのが嫌になり、頭痛のしそうな頭を抱えるアクトルで在り。

「とにかく、ウィリアムに相談しようゼ。　流石に、この状況は面倒だ。　アイツが役人と一緒だから、アイツの伝から役人の偉いさんに掛け合おう。　俺達だけじゃ、何れ権力でこられたら大事に成るぞ」

昨日には、家から追い出そうとした時。　大声を出して、権力を振り翳さんばかりに息巻く貴族の息子たち。　その出来事をリネットは思い出し。

「確かに、我々を排除するとか言ってたな」

リネットと見合うクローリアは、外に出るのも怖いので。

「ですが・・、どうやって？」

「そうだなぁ～、それが問題だ」

三人三様で考え込むのだが。　そうこうしていると…。

「あら？」

外が急に騒がしく成り始めたと、クローリアが窓の外を見る。

「どうしたのだ？　何か在ったか？」

と、リネットも外を見れば。　何故か、馬車から次々と御者や従者らしき者が降り。　大通りから伸びる脇道を、大通りの方面に向かって歩いていくではないか。

クローリアは、御者や従者等の黒い衣服の男性達が、少し変わった繋ぎの制服を着た役人らしき数人に追い立てられ出す様子を見て。

「まぁ、役人の方が・・」

と、声を出した。

同じく、見ていたリネットも。

「ほう、こんな事が…。　流石に、住宅区の通りを占拠しているのが通報でも受けたか？　漸く、役人が追い払いを始めた」

アクトルは、これは有り難いと。

「よし、役人にもう一度掛け合おう」

と、表玄関のドアに向かった。

クローリアは、リネットに。

「これで、少しは安心出来ますわね。　正直、昨夜は寝てませんの」

クローリアの言葉を受けたリネットは、窓の外を見ながら。

「ま、目の下に出来た隈を見れば解る」

「まぁ」

窓に移る顔を慌てて見るクローリアは、横に向いて両目を揉み出した。

さて。

ドアを開け、小雨が続く外に出たアクトルだったが・・。

「お・・、あっ？」

“おーい”と声を掛けようとした時である。　退いた馬車が在った場所に、何とウィリアムの姿を見て驚いた。

一方、ウィリアムもアクトルに気付き。　軽く片手を上げた。

「こらっ。　通りを勝手に占拠するなど、幾ら貴族でも罷り成らんっ。　苦情も多数寄せられているっ、早々に立ち去れぃっ」

役人の服装とは少し違う者達が、声を出す。　アクトルがよく見ると、それは兵士で在った。

「…」

流石に、兵士が来ては体裁が悪いと、ジュリエットの出待ちをしていた馬車の郡が散り出した。

ジュリエットの家の庭を歩いてくるウィリアムは、小雨の中でアクトルと会う。

「おいおい、ウィリアム・・。　兵士か?」

「はい。　通りを占拠する馬車の列に、周辺住民から苦情が来てましてね。　兵士の一団が、その聞き取りに警察局部へ来たんですよ。　役人さんは、貴族の威光に逆らえず戻ったと云う事なので。　今度は、兵士さんが追い払うと云うんでね。　丁度いいと思って、こうして御迎えに上がりました」

「“御迎えに”って・・おい」

ウィリアムは、ジュリエットの居る三階の窓を見上げ。

「捕まった彼女の両親から依頼を受け、警護や護送を引き受けていたのが軍人の親族だそうです。　その親族も殺人事件の参考人として捕まったので、ちと警察局部で騒動が起こりましてね。　今、ゴタゴタが続いてます」

アクトルは、何のこっちゃと驚きで。

「あ・・、あぁ。　詰まり……、どうゆう事だ？」

事を迅速にしたいウィリアムは、左手をアクトルに差し出し。

「いえ、細かい話は、馬車の中で。　とにかく、彼女を連れ出して下さい。　フラックターさんが、一時的な避難場所を確保して下さいましたよ」

「フラックターって、中央から来た役人の？」

「そうです」

アクトルは、良くは話が飲み込め無かった。　だが、ウィリアムのすることに、一々聞いてる間は無いと感じ。

「話してくらぁ」

「はい。　外で待機してます。　馬車も在りますから」

「おう」

アクトルは、直ぐに背を向け、家の中に逆戻りしたのである。

南から来る嵐は、何の前触れだろうか。　混乱か、それとも…。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

秋が来て、雨が多くなり、。　涼しくて小説も書きやすいこの頃です。

迷い込んできた子猫と、家で生まれた子猫が走り回る様に為り。
パソコンがボコボコにされる中で製作しています＾＾；

年末に、ポリア編を掲載したく書き進めてまいります。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

潜む悪意　8

それは、街角の知らぬ間に

≪嵐が近付く中で≫

風が強くなり、生暖かい風が肌にまとわりつく様な感じに成ってきた。　時折、激しく降り付ける雨が、これから来る嵐を予感させる。

ウィリアムの登場により、閉じ込められている状態を解放されたアクトル達。　ウィリアムと一緒の馬車に乗り込もうと云うアクトル達である。

さて。　別の馬車に乗せられたジュリエットを見たウィリアムは、今にも萎れそうな可憐な華を見る様で。

「だいぶ萎れてますね。　ああ云った方には、何の栄養が必要だか・・」

と、冷淡な呆れ口調だった。

先に馬車に乗り掛けるリネットは、それに同意出来て。

「本当だ。　一輪植えの愛でられた花が、飼い主を失った様子でしかない」

まだ外に居るアクトルは、高さの在る建物が多い住宅区が見渡せる通り上で。　ポツポツと顔に来る雨をよけながら。

「しかし、何処に行くんだ？　まさか、両親と同じ牢屋・・か？」

ウィリアムは、アクトルがブラックジョークを云うのに苦笑いして。

「違いますよ。　フラックターさんが、女性の役人の方が住まう場所に、匿う為の一部屋を借りる話を付けてくれたそうです」

「ほぉ・・、顔が広いな」

「彼の御姉さんは、この地元でも旧くから威勢を保つ貴族の家に嫁いでいるとか。　恐らくですが、親戚などが近い場所に居るんじゃないですか？」

役人の全面協力を窺い、アクトルは少し構える様に。

「おいおい、話が大きく成ってきたな」

馬車に仲間が乗り込めば、狭い車内ながら今までの経過を説明をするウィリアム。

走り出す馬車に揺られる中で、リネットが。

「では、老婆を殺した犯人が、その消えた警察役人なのだな？」

と、決めつける。

アクトルは、頭が天井にぶつかるのが嫌な顔のままに。

「多分、逃げたんだからな。　そうなんじゃないか？」

所が。　それをウィリアムは疑問にする。

「果たして、そうでしょうかね」

護送用の馬車である為に、車内には小さな窓しか無く。　押しても少し開くだけの窓。　その窓に張り付く雨粒を見るウィリアムの眼は、何処か遠い様子である。

隣に座るクローリアは、ウィリアムへ。

「違うんですか？」

車内持ち込んだ槍が鬱陶しそうなリネットも、アクトルも、多くを語らないウィリアムに目が移る。

アクトルが、問う様に。

「おいおい、犯人は別かよ」

「いえ。　ハッキリとは言えません。　ですが、手口が妙に鮮やかなんですよね」

「“手口”？」

聞き返すアクトルを、女性二人が見て。　また、３人の目がウィリアムへ。

窓を見るウィリアムは、そのままに。

「此処に来る直前に、引き取り手の無い被害者の遺体を地下で見ました。　胸部から心臓を突き刺され、胸部の内部を抉られてました。ですが・・」

その被害者の様子が語られると、クローリアは祈る。

「嗚呼、そのような酷い事を…」

リネットは、殺してからまた遺体を傷付けた事に苛立ち。

「とことんふざけた真似だっ」

だが、一人冷静なアクトルは、話の続きが聞きたくて。

「どうゆう事だ？　それぐらい、誰でも出来るだろう？」

すると、ウィリアムが眼を横目にアクトルの方に送り。　そして、首を二度横に降ると・・。

「人の心臓を抉るにしても、刃物の入った傷を酷く押し広げずして遣るのは、プロもプロの仕業。　内部の損傷からしても、暗殺者などが好む曲刃のナイフです。　血をお湯で溶かす小細工も、キキル刑事官と云う人の性格からしてちょっと不自然な気がします。　恐らく、事件当夜のキキル刑事官の所在確認をすれば、犯人か否かの判断は付きますよ。　俺が感じるに、彼の現実的な罪は、冤罪未遂

と冤罪を作った事。　そして、参考人を暴力的に取り扱った事だと思いますね」

聞いている三人は、ウィリアムがどうしてそう思うのかが解らない。
もう、普通の人の判断領域を越えた所に至ると感じられた。

視線を窓に戻したウィリアムは、黙る3人へ続け。

「キキル刑事官と云う人物は、今回の事件までは怠け者だった。
今回の事件まで、捜査もしなかった。　捜査に絶対に関与せず。
事件と云うか、仕事に関心すら見せなかった。　なのに、今回はそうした。　それは、老婆が死んで何かそうせざる得ない状況に陥った・・。　と、云うだけの気がします」

アクトルは、返す様に。

「おいおい、だがよ。　ソイツは、以前から借金取りが来たり、その取立て相手に剣を抜いたりしたんじゃないか。　そんな狂暴な奴なら、犯人と言っていいだろう？」

「俺が思うにですね、手口が違う気がします。　今回の事件は用意周到で、今だに殺害現場が解らない様な殺し方をしています。　しかも、遺体を態々家に運んで、お湯を掛けたりする等の小細工まで。
キキル氏と云う方が本当に犯人なら、もっと感情的で在るべきですし。　また、凶器は分かり易いと思いますね。　第一、老婆から金を借りたかどうかは別にして。　老婆の抱える取立て役が、キキル刑事官に接触していた事実が無い。　昼間に捕まった彼の部下から話を聞いても、その証言は有りませんでした」

ウィリアムは、敢えて“キキル氏”と最後に付けた。　彼の私生活

に踏み込んだ意味で、だ。　その性格からして、伴侶も長居出来ないのは理解出来る。　家族からすら煙たがられる彼にとっては、取り巻きの様に寄ってくる部下ぐらいしか相手が居なかった。　キキル氏の家は、地方の鉱山を始め巨額の利権を生む国営事業へ、管理者としても食い込んでいる。　鉱物の一部を横流ししたり、息の掛かる人出し稼業を働かせたしているので、貴族の中でも最も富裕な方に在るらしい。

昼間、キキル刑事官の部下数人が捕まった。　ウィリアムは、その中でもキキル刑事官と休暇も行動を共にする一人に話を聞いた。キキルの休みの付き合い相手は、仕事の部下である。　だが、キキル刑事官が老婆を知っている雰囲気は在ったらしいが。　その被害者の抱える男から、取立てを受けた事は無いとハッキリ云った。

リネットは、ならば何故にキキルと云う人物が動いたのかが解らず。

「では、そのキキルと云う男は、何でそんな違法も甚だしい事をしたのだ？　その根本が解らぬ」

“全くだ”とばかりに頷くのは、アクトルやクローリア。

ウィリアムは、首を軽く傾げて。

「どうなんでしょうかね。　ま、その事実も何れは解りますよ」

アクトルは、踏み込む言い方で。

「見込み有るのか？」

ウィリアムは、やけに冷静な顔をアクトルに向けた。　それだけだ

った。

さて。

宿に仲間を送り届けたウィリアムは、そのまま警察局部へと戻る事を告げる。　今日も戻れるか解らないと告げた。

強く降り始めた中で、雨のカーテンが宿の入口に掛かる。　アクトルが、開かれた馬車のドアの先に居るウィリアムへ。

「おいおい、スティールは？」

それを問われると、捜査の顔をしている割には珍しく軽い笑みを浮かべるウィリアムで。

「今は、仮眠中ですよ。　捜査に興味が在る様なので、付き合いたいと」

すると、リネットが。

「ならっ、我々も連れて行かぬかっ」

と、云うのだが。

ウィリアムは、淡々とした表情に戻り。

「今、皆さんが来られても、フラックターさんに迷惑を掛けるだけです。　必要な時は、直ぐに手を借りに来ますよ」

と、言い。

「すいません、お願いします」

と、ドアを閉めながら御者に声を掛けた。

動き出す馬車を見送るリネットは、憤りを隠さず。

「何で、一番不届きな者が…」

だが、アクトルは…。

（全く、俺より相性がイイんじゃないか？）

と、呆れるだけだった。　ま、自分の様な大柄な者や、ロイム・リネットの様な煩い者がノコノコと付いていくのも邪魔になるのは明白だ。　捜査と云う意味で、ウィリアムに合うのはスティールで在ると理解は出来た。

処で。

ウィリアムを乗せた馬車は、何故か途中商業区の中をで迂回し。道を変えて街の南側へと向かった。　商業区を中心に、南下に広がるのは住宅区と小さな鍛冶屋や、薬業者などの製造業が広がる場所である。　店に卸す売り手や、店側の我儘を近場で引き受ける装飾着業者も多い場所だ。

馬車が狭い路地を走る頭上には、隣の建物の窓に向かって紐が伸び。

　晴れた日には、洗濯物などで埋めつくされるし。　子供が路地上で遊ぶ光景も普通に見える。

夕方の暗がりに、建物に挟まれる迷路の様な場所にウィリアムが何故来たか・・。　それは、或る聞き込みをする為である。　今、スティールは本当に仮眠を取っている。　フラックターも徹夜続きで、似たり寄ったり。　小さい事は、自分ですると決めたウィリアムで。

「着きました」

と、ウィリアムに声を掛け。　広場に停めた馬車から降りたのは、同じく徹夜続きの役人ジャンダム。　雨を弾く厚手の黒いコートを羽織り、ウィリアムの捜査に付き合う為に、志願して付いてきた。　運転席に座る3人の内。　一人は、役人のジャンダムで。　もう二人は、兵士の若者である。　ハイドゥン卿が付けた、云わば見張り役と言っていい。

さて。

ウィリアムが、何故に此処に来たかったか。

それは、老婆の家から押収された借金者の記録帳簿である。　この記録に因ると、フラックターの義兄の他、ジュリエットの両親などの記載が在り。　青い厚紙を表紙に束ねられた紙には、一つの共通点が有る者が載っていると云う事実である。

それを確かめるべく。　ウィリアムは、数ヵ月内に金を借りた家を訪ねる事にした。　フラックターも同行させるつもりだったが。　アリマ長官に演説した後、捜査は地元の役人に遣らせる様にと言われてしまった。　代わりに、夜からは、あのマッジオス副刑事官が合流する手筈に成っている。

ウィリアムは、雨に濡れながら一軒の装飾屋を営む夫婦に面会した。

役人が来た事で、老婆が殺されている事を噂で知っていたのであろうか。　４０半ばの夫婦は、かなり緊張した様子でウィリアム達を出迎えた。

★

それから、夜も耽け始める頃。

強風がロファンソマを襲う。　大粒の雨を伴った強風が、建物や木々へと打ち付けられる。　水と風が闇夜に音を出す。　何時もは大勢の客と働く女性などで賑わう酒場は、黄色い声を出す雇っている女性が集まらず。　また、客も来ないと云う有様で、宿と番(つがい)に成る店以外は、早々と店仕舞いを強いられていた。

生温かい風が、涼しい夜を何処かに吹き飛ばしてしまっていた。

フラックターの宛てがわれた部屋に居るスティールだが。　フラックターと席を並べては、少し遅めの食事をするソファーの向かいには、ムスっとした顔で黙るマッジオス副刑事官が居る。

「スティールさん、まだ食べますか？」

役職に構わず、スティールと対等な様子で軽食を食べるフラックターが、パンと挟む具の乗るトレイを薦めて来た。

「おう。　ウィリアムの分は、有るよな？」

紅茶のお代わりを注ぐフラックターは、“勿論”とばかりに頷き。

「一緒に話を聴きに行ったジャンダムさんの分も」

「なら、頂こう。　爆睡して、腹が減った」

二人の様子を、ジロっとした目で見るマッジオス。　役職上では、フラックターの方が遥かに偉い。　正直、権限の領域を踏まえれば、義兄をも凌ぐ。　そんな役職の者が、一冒険者と肩を並べるなど…。

マッジオスからするなら、何とも苛立たしい事である。

其処へ。

入口の扉が開き、ウィリアムと役人のジャンダムが戻ってきた。

「中々似合うではないか」

と、ジャンダムが言い。

「済みません。　少し、お借りしますね」

と、ウィリアム。

元から居た3人が見れば、ウィリアムの上着が黒い長袖長襟の衣服に変わっている。　ジャンダムも、衣服が繋ぎから、上下に別れた制服へと変わっていた。

そのジャンダムの制服を見たマッジオスは、指を差し向け。

「お前っ、その制服は何だっ？！」

と、いきり立つ様子で云う。

すると。

ジャンダムは、マッジオスの前に進み出て。正しい敬礼をすると。

「マッジオス副刑事官殿。本日、アリマ長官の命により、ラインレイド様の捜査陣へ正式に配属されました」

マッジオスは、寝耳に水と云う驚きの顔で。

「何だとぉっ？！　では・・、ワシ達への命を預かったと云うのはっ、キサマの事かぁっ？！！」

「はっ」

部外者もいいところの下級役人に、アリマ長官は大切な言伝を預けたと云うのだ。マッジオスからするなら、これは服務規定違反に近い衝撃であった。

が。

ジャンダムは、３０半ばを過ぎた顔を引き締め。

「これより、アリマ長官殿の言伝を伝えます」

「むっ」

マッジオスは、焦茶色の立派な制服に身を包むままに、身を捩ってジャンダムに食らいつく様に見た。

「以後。　これからの捜査は、フラックター様の命令に従い。　此方のウィリアム氏の助力の元で、マッジオス様が進めよ。　・・との事です」

「ぬぁにぃぃっ?!!」

驚くマッジオスへ、ジャンダムは更に。

「尚、配下や手下は、私を含めた者以外は、駐屯軍内部監査役のハイドゥン卿の私兵を借りろと云う事で御座います。　今、早駆けの兵士5人が到着し、下で待機しております」

「なっ・一体・・それ・・なぬぅ?!!」

事態が飲み込めないマッジオスは、何がなんだか解らない事に顔が歪みきった。

其処へ、タオルで髪の毛を拭いていたウィリアムが。

「キキル刑事官が消えたのは、もうお耳に?」

と。

マッジオスは、横からの唐突に近い質問に構えが失せ。

「おっ・・おう」

「逃げたか、隠れたかは解りませんが。　その家柄と親族が、この街の政治の中枢に噛んでます。　その権威から逸れる役人は、極僅かだと聞きました。　ですから、貴方以外の皆さんは、アリマ長官直々の命令で、特別任務に当たるそうです」

「と・・くべつ？」

「えぇ。　暴行を受け、入院した参考人の警護。　ラインレイド卿の身の回りを護る役。　それから、キキル刑事官の配下で、行方を眩ませた役人数名の捜索だそうで」

「ワシだけ・・が？」

「一応、手柄はラインレイド卿の捜査陣へ譲る手筈ですから・・」

マッジオスは、フラックターやジャンダムを何度も見る。

ウィリアムは、更に。

「ラインレイド卿の疑いが晴れ、キキル刑事官が掴まれば障壁が薄くなります。　そうなれば、ラインレイド卿を職務に戻せるそうで。　そうなった時、このジャンダムさんと、誰か責任者的な引継ぎ役が居れば、捜査に戻りやすいとか」

マッジオスとて、貴族の端くれ。　今の状況で、見える恐怖はキキル刑事官の本家が持つ権力である。　その権力が及ばないのは、今の中で裁判部。　そして、独自の強い権限を与えられた軍部の一部だ。　アリマ長官は、権力層で乱れが少ないままに、この事件を穏便に解決したいと腹を決めたと解る。

「……」

マッジオスが、ウィリアムとジャンダムを見る。

敬礼を解かないジャンダムは、

「マッジオス様。　この若者は、非常に優秀です。　今回だけ、ラインレイド様の為と騙されて下さい」

と、申し入れる。

急激な展開。　衝撃的な現実。　マッジオスは、普段の構えがそれで吹き飛んだ。

「・・、アリマ長官の命令なら……致し方有るまいな」

この街で、最も権威の有る家の一族が絡むと云うのだ。　マッジオスとて、何の拠り所も無くして、キキル刑事官の弟などが出て来られたら何も出来ぬ。　それが解っていたから、上司ラインレイド卿が謹慎を食らっても、更に上の上司へ立て付かなかったのだ。　事件を任されたのが、よりによってキキル刑事官だったからだ。

（アリマ長官の選んだのが、寄りにもよって…。　だが、中央から派遣されているあの若造の力は、確かに無視出来ん）

萎える様に折れるしか無いと思うマッジオスなのだが。

ウィリアムが加わった事で、フラックターはデスクに備わる椅子を持ってくる。

「おっ・・重いよ」

慌てて手を貸すジャンダムだが。　腐りにくい木を選び、職人が手塩に作った一品だ。　重さも中々であった。

さて。

上座の様に、ティーテーブルを左右に分ける様に見える場所に座ったフラックターで。　右手のソファーに、どっしりと居座る様なマッジオス。　その横に、少し控える形で座ったジャンダム。　左手には、ウィリアムとスティールが並んで座る。

フラックターは、口に付くケチャップを拭いながら。

「ウィリアムさん。　所で、夕方に何処へ行ってたの?」

ウィリアムは、キキル刑事官の元に押収されていた借金者の内情を記帳された帳簿を出す。

「これに書かれた人の家に行って、事情を聞いて来ました」

マッジオスは、そんなものを…と云う顔で見たが。

「理由は・・、参考人が重体だからですか?」

と、問うフラックターに対し。　ウィリアムは、温い紅茶を含んでから。

「と、云うよりですね。　この帳簿に名前の有る者は、全て理由が同じなんですよ」

「はぁ？」

「へ？」

「？」

フラックター、スティール、マッジオスが、各々に意味不明という顔をする。

スティールが、まっ先に。

「金貸しから金を借りる以外に、理由は無いだろう～がよ」

マッジオスも。

「その通り」

と。

だが、ウィリアムは。

「いえいえ、借りる事では無く。　その借りる必要を生んだ事態に、特定の同じ間柄の者が絡んでると云えばいいでしょうかね」

マッジオスも、スティールも、顔を歪め。

「まどろっこしいっ、パッと云わぬかっ！」

「言ってる意味がわかんねぇ～」

と、次々に感想を云う。

ウィリアムは、帳簿を広げると。

「この帳簿に記載された方は、全て金を借りる理由に娘さんが絡んでます」

フラックターは、義兄の隠した娘の事を思い返し。　マッジオスやスティールは、固まった。

ウィリアムは、ジャンダムに眼を向けると・・。　頷くジャンダムは、

「口を挟みます」

と。

マッジオスやスティール等、3人の目が、ジャンダムへ向かう。

「初動の捜査で、殺された被害者の雇っていた手の者二人を抑えました。　取り調べをしたのは、自分です」

ウィリアム以外の3人の視線が、此処でまちまちに交わされる。

ウィリアムは、重要な話なので。

「続けて下さい」

と、促す。

「はい。　二人の男に話を聞きました。　何方も金貸しをしていた話をしました。　その話は、食い違う事は無く。　それぞれに、遣っていた事を普通に話したと思います」

マッジオスは、踏み込む様に。

「で？」

「はい。　金を貸した相手の事を聞きましたが、老婆は必ずとある店に相手を呼び。　応対をする役の男に話を聞いて、貸すか、貸さないかを見極めていたそうです」

「自分で対応しなかったのか？」

「はい。　被害者は、もう足が弱り腰も曲がり始めと云った高齢に為り。　自分では、パッとした対面では圧しが利かないからとの事で」

「・・ほう。　で？」

「金を貸した理由より、基本的には返せるか・・返せないか。　また、担保が見合う物かどうかに絞って、貸す相手を判断していた様です」

「そんなの、当たり前ではないか」

「は。　ですが・・、例外が在ったと」

スティールも、マッジオスも、これには目が張った。

マッジオスは、微妙に気になると。

「“例外”だと？」

「はい。　金を借りる理由が、子供とか。　その、家族に為るとき、時として姿を表し。　そして、相談を聞く時が在ったと・・」

「ほう」

するとジャンダムは、ウィリアムを見る。

それに合せ、３人の目がウィリアムに移ると。　ウィリアムは、帳簿を触り。

「此処に書かれて居るのは、先程も話した通りに娘が絡む理由の借主です」

“それで？”

と、ばかりに。　３人は、聞く事に集中して姿勢を正した。

ウィリアムは、皆に問う様に。

「普通に考えても、他の理由で金を借りた方が圧倒的に多い筈・・。　では、他の帳簿は何処に？　どうして、分けた？」

こんな質問をされても、３人は被害者の老婆では無い。　理由が解る訳も無く、視線を宙に巡らせるのみ。

ウィリアムは、更に。

「不思議なのは、この帳簿に書かれた人達だけに、金に厳しい老婆が査定を緩めたとか。　つまり…」

と、言いかけると。　スティールが後を奪う様に。

「そりゃ～死んだ婆さんにも、それなりに家族が居たからじゃないか？　手心を加えるって事は、裏返せば同情してる訳だし。　そんな金貸しの人間が同情するなんざぁ～・・同じ境遇だからとしか。　なぁ？」

と、フラックターに振る。

「えっ？！　あ・・そっ・そうですね」

慌てる様に云うフラックターは、義兄の事に気が行っていた。　義兄は、この殺された老婆と、どうゆう形で話をしたのかを想像し始めていたのだ。

スティールは、眉間にシワを寄せ。

「ちゃんと考えろよぉ～。　前みたいに、上の命令聞いてりゃイイ人間じゃ無いんだかんな」

「わっ・解ってますよぉっ」

マッジオスは、その二人を無視して。

「ウィリアムだったか。　で？　その理由は、解ったのか？」

「いえ。　正直、被害者の過去が解らず。　また、被害者が殺される前までの立ち回り先が、今だに不透明なので。　只、一つだけ、不自然な場所が在ります」

「“不自然な場所”？　何処だ？」

「被害者の家。　寝室です」

マッジオスの他、フラックターやジャンダムも、ウィリアムを見た。

マッジオスは、ジャンダムへ。

「本当かっ？」

と、鋭く問うのだが。

「いえっ・・私は・・」

ジャンダムは、意味が解らずに答えを返せない。

ウィリアムは、マッジオスへ。

「今の所、暴かれて無いなら、自分しか解って無い事だと思います」

「？　なら、どうして解る」

ウィリアムは、その場に居るジャンダムに。

「ジャンダムさん、寝室に火を掛ける場所は？」

パッと聞かれたジャンダム。　不意にだったので、背を伸ばし。

「あ・・、一応は、ランプが」

そんな事などと思うマッジオスは、ウィリアムへ。

「寝室に灯りを入れられるなど、何処でも当たり前ではないか。今どき、下町のボロ屋でも当然だぞ」

すると、フラックターとジャンダムが見合い。

「あ〝っ」

二人が思い出すのは、被害者である老婆の家。　寝室には、火を入れられるランプらしき物は無かった。

普通なら、蝋燭を掛ける簡易的な蝋燭立てぐらいは、有っても良さそうなのに。

ウィリアムは、まるであの家に居るかの様に。

「それだけじゃない。　他にも、寝室には不自然な点が在ります」

見てないスティールは、探る様に。

「お前・・、何を見つけた?」

すると此処で、ニヤリと口元を捻るウィリアムは、皆を見て。

「今夜は嵐です。　あの老婆の家に行けるのは、今夜が丁度いい。

どうです、これから行きませんか？　その不自然を見に」

マッジオスは、“猛牛”と異名を取るままに。

「おしっ！　臨む所は、今ぞな」

と、拳を作って応えた。

「え？　この嵐の中をかい？」

と、聞き返すフラックターだが。

そこで、いきなりまた、入口が開いた。

「遅くなったな。　嵐の中でも行ける馬車を、こうして用意したぞ」

突然に現れた人物。　それは、ハイドゥン卿その人だった。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ウィリアム編・？

冒険者探偵ウィリアム

潜む悪意　9

それは、街角の知らぬ間に

≪短いながらも、長い嵐の一夜　【前】≫

ウィリアムと云う人物は、“機”を良く理解していた。　状況が良しと有らば、少々の疲労など無視出来る精神力が備わっていた。　聞き込みから戻った夜。　そろそろ深夜に近付こうと云う頃合いながら、ハイドゥン卿に頼んでいおた事が動き。　状況が狙った処に至った瞬間、動く事を決める。

激しい風雨の最中。　二台の黒い大型の乗用馬車が、街の南部に向かって行った。

一台の馬車に乗るのは、ハイドゥン卿を始めとした、役人の面々。　もう一台の追送する馬車には、ハイドゥン卿の付き人と思われる男性二人に、ウィリアム達二人と、ジャンダムが乗る。　付いてくる兵士達は、二台の馬車の後方に掴まっていた。

立派な黒と青それぞれのバロンズコートに身を包む二人の男性は、

対峙する様に座るウィリアムとスティールを見ていた。

先に、型の作りが礼服の様な黒いバロンズコートに身を包む中年男性が、対面に座るウィリアムに。

「これから行く所に、何が在るのだ？」

と、聞く。　長めの髪を正しくオールバックにするその男性は、ハイドゥン卿から“スミニク”と呼ばれている。　鍛えた肉体に無駄も隙も無さそうで。　傍める右手には、青い柄の長剣が携えられている。

ウィリアムは、静かに。

「行けば、解ります」

と、短く濁す。

一方。

「中々の剣だな。　特注かね？」

スティールが携える剣を見て聞くのは、短い髪をした２０代と思われる落ち着いた男性だ。

「あぁ、ちょいと金が多く有った頃に、既存の形の物を特注に鍛え直した」

嵐の夜道を飛ぶように駆け抜けていく馬車の中から、外が見れる小窓を見るスティールが返した。

「そうか、剣の造りを見るに、良い鍛冶屋が鍛えた様だな」

青い格式を重視したデザインのバロンズコートを着る男性が、穏やかな顔でそう云う。　やや高さが目に付く鼻に、抜ける様な白い肌の男性で。　髪を長くすれば、スティール同様に女性受けそうな美男である。　“スミニク”と呼ばれる男性より、頭半分高く。　ウィリアムやスティールからするなら、少し見上げる視線に成る人物だった。

この若い美男の名は、“ラディオン”。　スミニクも、ラディオンも、護衛を兼ねた用人として、剣術等の武術に嗜みが有る様だった。　ラディオンは、白い柄の槍を携えている。　その槍を見るに、スピアの部類に近く。　上下のどちらかから、槍先が出るタイプの物と思われた。

ウィリアムとスティールの間には、正しく座ったジャンダムが居る。　ジャンダムは、この対面して座る二人が立派な人物と思われた。

（流石は、ハイドゥン卿の従者様だ。　落ち着いているし、心構えもしっかりしている）

ジャンダムが関心するのには、目に見えた一つの出来事が根幹と成っている。

先程。　警察局部の施設を出ようと、1階のエントランスロビーに降りた時だった。

「これはこれはハイドゥン卿様。　こんな夜更けにお出でに成られた上に、お急ぎでお出掛けですか？」

ウィリアム達の全員も居た面前で、でっぷりと肥えた大樽の様な禿げ男が近付いて来た。

その男を見たハイドゥン卿は、あからさまに嫌悪の視線を向け。

「ロナロイス殿か。　我々は、職務遂行の一連で動いておる。　一刑事局の総務を預かる御主に、全てを話さねば為らぬ理由は無い」

と、完全に突っ撥ねる様な物言いだった。

近付いてきたロナロイスと云う男性は、首と云う部分が完全に消え失せ。　まあるい顔が、肥えた大柄の体の上に乗っかっていると思っていい人物。　この街の商人でも１０指に入る大店の一族で有るロナロイスは、キキル刑事官と極親しい間柄で有る。

午前に姿を消したキキル刑事官だが。　確証の無い証言では、ハイドゥン卿が怒鳴り込んで来た直後。　このロナロイスが、こっそりと二階の地下牢に向かう通路へと入っていくのが見掛けられたとも有った。　証言の全ては、アリマ長官を始めに皆も聞いている。

ハイドゥン卿がこのロナロイスを忌み嫌うのは、キキル刑事官と仲が良いと云う事も在るのだが。　それに加え、前々から政務を司る役人の微罪を度々に見逃すロナロイスは、キキル刑事官の一族の犬と噂される男。　監査をすると云う役職も有るが、曲がった事が嫌いなハイドゥン卿は、それが気に入らないとかで。　このロナロイスに要件が有るときは、殆ど誰かを使いを出す事で用事を済ませていた。

さて。　ロナロイスが歩いて来て、ハイドゥン卿の間近に近付こう

とした時だ。

「そこで止まって貰おう」

ハイドゥン卿を護る様に、従者のスミニクが間に立った。

そして、ロナロイスの歩を止める様に、スミニクから数歩前の所に出るのがラディオンであり。

「済まないが、これから急ぎます。　我が主のすることに、一役人が馴れ馴れしく言い寄るのは止めて頂きたい」

と、ラディオンは云う。

感情を打ち消して、ニタリと笑うままに立ち止まるロナロイスだが。

それ以上近付く事は無かった。

ジャンダムは、ハイドゥン卿が外に出るまで、微塵の微動も無くロナロイスの前から動かなかったラディオンを見て。

（これが、貴族の従者と云うものなのか。　胆が据わっていると云うか、身を呈して主を護る盾の様だ）

と、関心した。

馬車に乗っても、堂々としながらも落ち着いている。　一番下っ端で、毎日を職務に明け暮れる日陰の自分とは、この従者二人は大きく違う存在だった。　ハイドゥン卿と云う者を護る事で、酷く光って見える存在だと思えた。

さて。

スミニクとラディオンは、ウィリアムとスティールを見て顔を動かさない。

一方。

ウィリアムとスティールは、二人に視線を合わさず。　また、話を続かさずに、淡々と黙っていた。

馬車が走る外は、明かりを灯した店など無い真っ暗な商業区の中で。
　区内を縫うように建物の犇めき合う道を突っ切り。　強風をやり過ごす為に、込み入った道を馬車は延々と走った。

ウィリアム達が泊まる宿では、もう皆が寝てしまっているだろうか。
　そんな夜更けの中で。

もう一台の馬車の中では、貴族で在るハイドゥン卿が一人で前のシートに鎮座する様に座り。　その相対する向かいには、マッジオス副刑事官とフラックターが間を空けつつも席を一緒に座っていた。

「・・、ほう。　あの若者は、そんなに切れる人物で在ったか。冒険者にしておくのは、ちと勿体ないのぉ」

ウィリアムに興味を持ったハイドゥン卿は、フラックターにウィリアムとの出逢いなどを聴きたいとせがみ。　軽くだが、ホロー殺人事件の経緯を聞いていた。　聞けば聞く程に魅力をウィリアムに感じ、出来たら自分の片腕にでも引っ張りたいと思う。

マッジオスは、本人が居ない前で。

「ですが、高が冒険者。　どこまでが実力か、まだまだ見定める必要が有りまするわい」

と、嫌味を乗せる。　嫌味と敬語が混ざり、語尾がおかしくなっていた。

処が。　ハイドゥン卿は、マッジオスを見ると。

「だが、その若者の導きで、キキルの馬鹿者に暴行されていた兄を早く救い出せた。　キキルは、一足違いで逃げたがな。　あの若者と、このフラックター殿が来なければ、事態の収拾にはもっと遅れて対処していたであろう」

マッジオスは、苦虫を噛む顔で在るが。　格上のハイドゥン卿が認めるなら、それも仕方無いと。

「まぁ・・、そうでしょうな」

「うむ。　更にな。　かのウィリアムと云う若者、キキルに暴行された者達へ適切な救急処置をしてくれた。　さっき聞いたのだがな。　彼の病人の見立ては、医師は完璧だったと…。　何処の医者が診たのか、と、聞き返された。　同業者の腕のある者が認めるのは、確かな実力の証だ」

ハイドゥン卿が強く認める事で、フラックターは安心した顔に成り。

マッジオスは、何も言えず不満の貯まる顔に成る。

そして、ハイドゥン卿の話は、更に自宅待機と成ったラインレイド卿の事にも踏み込み。

「それに、だ。　ラインレイド卿には、事情はどうあれ早々に復帰して貰わねば成らん。　キキルを捜査するなら、尚更だ」

と、強く云う。

義兄の事が出て、フラックターはその理由を聞きたく。

「どうしてでしょうか？」

「ん？　フラックター殿は、義兄殿の歴（学歴や成長過程）を知らんのか？」

「え？　あ・・、姉様が結婚してからの事が、多く・・」

「そうか。　ラインレイド卿は、の。　２０の頃まで、王都の大学学術院に通っていた。　剣術もこの街で手解きを受けた後、向こうでは〝王国の盾〟と称されるハレンツァ様に師事を仰いでいた」

マッジオスは、上級学校にギリギリ入れた自分なので。

「幼き頃から、ラインレイド様は優秀だったのです」

と。　その言い方は誇らしげで、まるで主従関係を見せる様だ。

頷くハイドゥン卿は、更に。

「だな。　そして、その数年後に、全く同じ道程を歩んだのがキキルの弟よ」

マッジオスも、フラックターも、これには眼を張った。

フラックターは、聞いたことも無い話で。

「へぇ・・。　キキル刑事官の弟様とは、そんなに優秀な方なんですか？」

「おう。　だが、その成績は、御主の義兄の方が上だった。　歳は少し離れては居るがな。　街の行政の長に成ったキキルの弟も、何事にも先輩と成るラインレイド卿には、年配者としてだけではなく。　同師・同学の先輩と後輩の礼儀を持たねば成らん。　だからこそ、キキルの事を突っ込んで捜査するなら、ラインレイド卿が適任なのだ。　我々ですらこうして捜査するにも、実際は波風が立つ。　だから、こんな夜中に動くのだ。　とにかく、早くラインレイド卿に復帰して貰わねばな」

平民と貴族の狭間で、義兄の事を多くは知らないフラックターである。　初めて聞く話に。

「そうなのですか・・。　過去は、未来の行く末に色々と関係するものなのですね」

「そうだな。　もし、ラインレイド卿の歴が変わっておったら。今回の件では、もっと厳しい窮地に追い込まれていたのかも知れんぞ。　そうなればキキルも、ラインレイド卿に対して、何の気掛かり無く無実の罪を押し付けられた筈だからな」

フラックターは、何故にキキル刑事官が躍起になり、義兄を陥れる計画を邁進させていたのか。　少しだけ理由が解った気がした。

（そうか、義兄様と市政統括にそうゆう関係が発生していたから、直接に手を出せなかったのか。　だから、捏造してでも事件の犯人に仕立てて、罪人にしようとしたんだな）

二つの馬車の中で、それぞれに様子が在る。　馬車は、下町の広がる区域へと踏み込んでいた…。

★

その頃。　警察局部の大階段裏にて。

「おぉ、良く来れたな」

あの太った総務のロナロイスは、階段の裏に潜む小男に気付いた。　急にカツカツと床を叩く音がしたので、誰も居ないのを何度も確認しながら階段に近付いた結果だ。

「ロナロイス様、その後の経過は？」

階段の裏に近付いたロナロイスに声掛けるのは、小柄ながら軽快な雰囲気を持つ警察役人の制服を来た男だ。　色黒だが、見た目はまだ若い青年である。　制服がかなり濡れているのを見るに、この嵐の中を歩きで来たのだろうか。

ロナロイスは、廊下や階段を見て人気が無いのを確認し。

「来い」

と、首を巡らせると、トイレに向かった。

小柄な役人は、ロナロイスの後ろに隠れる様に追従する。

ロナロイスは、ノッシノッシと歩きながら。　もう灯りの落とされた薄暗い廊下へ曲がり。

「キキル様は、ご無事か？」

小柄な男性役人は、小声で。

「はい。　今は、郊外の地下へ隠れて居ます」

廊下の先に、ポツンと明かりが点く場所が有る。　トイレの入口で、中も弱められたランプが点いている。

ロナロイスは、トイレに男性役人と入り。　大便器の在る個室の中に男性役人を入れた。

「戸を閉めろ」

自分は入らず、戸を閉めさせたロナロイス。　もう一度廊下を見に行き、それからまた戻ると。

「事態は、楽観の出来ぬ処だ。　一応、手は回されている様だがな。　ハイドゥンや中央から来たラインレイドの義弟を始末しても、流石にキキル様が安泰とは行かぬ。　アリマ長官が、方々に手を回さ

れた」

「何と…。　キキル様の弟君のお力添えが有っても、ダメでしょうか」

まだ若い役人の声は、まるで臣下の礼儀を知っている者のそれである。　キキルの事を、この状況でも心配する素振りが窺えた。

先程。　ハイドゥン卿の前に、平然と進み出ようとしたロナロイスだが。　今は、面影は大分に変わっている。　酷く困惑した表情で。

「そうだな・・。　始末が終わって、ラインレイドを陥れた後。騒ぎの熱りを冷ます意味で、少し王都か・・アハメイルに休暇で御旅行でもされた方が良い。　一年もすれば、時が事実を洗い流そう」

「そこまでの大事とは…」

「いや、仕方無い。　ハイドゥンとラインレイド。　それに、中央から来たラインレイドの義弟を始末すれば、いや応なしでも波風が立つ。　中央から本腰を入れた監査が来る前に、キキル様をこの都市から離さなければ…。　このままでは、ジョエル様にまで類が及ぶ」

この一言に、若い役人は驚き。

「そっ・それは…」

ロナロイスは、廊下に注意の視線を巡らせながら。

「うむ。　それだけは、何が何でも避けねば成らん。　先代のマク

バ様から、我々に依頼された事だ。　キキル様をどうこうせぬなら、有耶無耶にするしか手は無い。　そのためには、少し大事でも始末は必要だ」

「…そ、そうですか」

“始末”と云う物騒な言葉だが。　その対象が貴族である。　若い役人の男性も、大事に成るのは理解出来る。　だからこそ、悩む様な受け答えに成るのだろう。

一度耳を済ませて辺りを窺ったロナロイスは、個室の様な仕切りに口を寄せ。。

「とにかく、キキル様に伝えよ。　私か、手の者が迎えに行くまで、潜伏を続けて欲しいと。　始末が終わる前に出て来られては、事態の収拾にはには更なる非常手段が必要に成る・・とな」

「は・・はい」

ロナロイスは、また廊下を見に向かい。　誰も居ない事を確認すると、またトイレに戻り。

「いいか。　私が入口に立っているから、横の窓から外に出ろ」

「は、解りました」

「いいか、この嵐の中だ。　この敷地の中を巡回する兵士は少ないだろうが、敷地を抜けてからも気を付けろ。　街中の巡回警備は、アリマ長官とハイドゥンの手が回り。　何時もより、分隊を多く出している」

「解りました」

ロナロイスは、廊下に出る所に有る流し場に立ち、太った体で入口を塞ぐ様にすると。　水亀の水で手を洗い出した。

「……」

便座の個室からそっと出た若い役人は、ロナロイスに会釈だけすると。　窓を大きく開けて出ていった。　強風と雨が窓から入り込む先を見つめるロナロイスは、肥えた体を揺すって歩き。　窓を閉める動作に移る。

（上手く行くのか…、解らん。　キキル様を・・逸その事……。　いやいや、大恩有るロチェスター家に楯突く事は、間違っても許されんな）

思うロナロイスの顔は、ハイドゥン卿に見せた不気味な顔では無かった。　まるで、苦悩に心焦れる一人の人間だった。

…。　一方。

暇を持て余すままに、宿で寝るアクトル達。

嵐の影響で眠れずにいたロイムは、灯りも落とされた部屋で暗い天井を見つめている。　窓が風に吹かれてガタガタと鳴り。　雨が時折に叩き付けられる音が、なんとなく怖い。

隣の大きめなベットに寝るアクトルは、精神的な疲れに眠りを妨げ

られていて。　少し蒸し暑い空気に、不快感を感じて眼を開けていた。

「ロイム、寝れないのか？」

ロイムは、自分と同じくアクトルが眠れてないのを解り。

「アクトルさんもですか？」

上半身を下着で寝るアクトルは、上に掛ける薄い布団を剥いでいて。

「ん。　変に疲れて、酒も飲んで無いから寝れない」

すると、ロイムが。

「僕・・胸騒ぎがするんです」

と。

アクトルは、暗い中でロイムを見て。

「何だって？」

宙をみているロイムは、気持ちが何処かに行ってしまっているかの様な口調で。

「今夜、ウィリアムが危ない気がするんです」

アクトルは、今度は顔を少し擡げ。

「“危ない”？」

ロイムは、暗い中で言葉のみに。

「感じるんです」

と、言った。

すると、其処にラングドンが加わり。

「もしかすると、“プレディクセンス”かも知れんな」

ロイムとアクトルは、反応するかのようにラングドンに向く。　アクトルは、何か不吉な事なのかと。

「何の力だ？」

“センス”は、大抵は能力と云う意味だからだ。　アクトルが聞けば、ラングドンは落ち着き払った声で。

「精霊魔術師と魔想魔術師は、時としてに予言の力に優れる事が在ると云うな。　魔想魔術師は、仲間意識が強くなればなる程。　その素質に左右されるが、予言が出来る様に成る事が有る。　最初は、予感と云うか、胸騒ぎなのだが。　年齢と経験を重ねると、かなりの的中率と現実味を持って予言出来る様に成ると云う。　ま、普通の者では、予感めいたもの止まりで行くのだがの。　お主達は繋がりが深い故に、その力が働き掛けているのかも知れぬ」

アクトルは、それだとウィリアム達が危ないと思い。

「マジかよっ」

と、身を起こす。

だが、ラングドンは起きず。

「落ち着け。　今、ワシ等に出来る事は無い」

アクトルは、立ち上がり。

「あぁっ?!」

「今夜も帰らぬと云うのは、夜に何処かへ出掛けるからじゃろう。
恐らく、書簡を届けた警察の役人が居る場所に、ウィリアムやスティールは居ない可能性も有る」

「だがよぉっ」

声を抑えながらも、危ないと思うとアクトルも焦る。　居ないなら、行った場所を聞けばいい話だと思う。

しかし、それでもラングドンは慌てず。

「今回の事件は、聞くに複雑で大変そうじゃ。　部外者が動いて騒げば、要らぬ迷惑を起こす。　あのウィリアムは、そうは簡単に死ぬ男では無いわぇ。　逃げた役人の家は、偉い貴族なんじゃろ?
攻める手順を間違えたら、只では済まんぞえ」

ウィリアムの様に思慮が廻るアクトルでは無いだけに、何も言えずに黙る。

其処に、ロイムが。

「アクトルさん、大丈夫。　僕が心配なのは、襲われるかも知れないってだけ。　相手がウィリアムだから、大丈夫だと思う」

と、少し弱く頼りなさげな声で云うのだった。

アクトルは、スティールも強いし。　ウィリアムは、更に強いと理解はしている。　今、此処で騒いでも、何がどう出来るのか解らない。

「…、天候が悪いからよ。　心配させる様な事云うなよ」

と、腰をベットに戻す。

ロイムは、只小さく。

「ごめんなさい」

と、云う。

何か別の事を考えたいアクトルは、ラングドンに。

「爺さん」

暗い中から、ラングドンの低い声で。

「ん～？」

「そのなんたらセンスってのは、本当に当たるのか？」

「さぁ。　ワシは、プレディクセンスを得るまで仲を深めた仲間を見た事が無いからな。　知識として知っているに過ぎんよ。　だが、予言そのものは実在するようじゃな」

すると、ロイムが。

「うん。　予言は、有るよ。　僕も、お爺ちゃんの弟に為るオジサンに言われたもん」

“来ると解ってたよ。　ま、後は自分次第じゃ”

「って。　僕がカクトノーズの学院に入学して来るのを、僕が生まれた時に感じたんだって」

アクトルも聞いて知っていた。　ロイムの祖父の弟とは、魔法学院カクトノーズに住まう魔法遣いの中では、かなり人物だと。　どれほど偉いのかは、ロイムもハッキリとは知らないらしい。　ロイムと云う人物が、そうゆう上の事をあまり気にしない性格で在ると云うのと。　そのロイムの後ろ盾と成った人物も、あまり他言にするなと口止めしたからだ。

「そうか…。　だが、漠然と云われると、逆にモヤモヤして寝れん」

アクトルは、荒い動きでベットへ横に成った。　何か有った場合にと、飲まずに居た事を酷く後悔した彼だった…。

さて。

ウィリアム達は、殺された老婆の家に向かった。　ハイドゥン卿の私兵が二人馬車に残っただけで。　馬車の外に掴まって乗ってきた兵士４人は、そのまま付いてきた。

１２人と云う人数だが、流石に嵐の中だ。　水を弾くコートを羽織るそれぞれが闇に紛れるので、誰に見つかると云う訳も無く。　雨が一端弱まり、また本降りに成る前に家に着いた。

「ご苦労様です」

キキル刑事官の部下の代わりに、兵士が交代で見張る事に為った事件現場。　先んじて明かりを灯しに来た兵士一人が、先頭で入って来たハイドゥン卿に敬礼をした。

「ふぅ、酷い雨だな。　ご苦労である」

先に来ていた兵士は、入って右手に物を掛ける場所が在るので。

「は、お気遣いありがとう御座います。　上着は、此方に掛けて雨水を切りますので、お貸し下さい」

「おぉ、そうか」

上着を脱ぐハイドゥン卿だが。　ウィリアムは、そのまま井戸の在る左手側に回って向かう。　スティールも、それに着いて行く。

「ウィリアム、井戸か？」

「えぇ。　この井戸、円型じゃない」

雨の中で井戸を見たスティールは、その井戸を見て。

「あ～、マジだ。　つか、この井戸の形って・・」

ウィリアムは、スティールに濡れたフードを被ったままに向いて。

「坑道でも、こうゆう形の空気穴在りますでしょ？」

「おう。　アークに聴きゃ～解ると思うが」

「ですね。　さ、中に入りましょう」

最後に老婆の家に入ったウィリアムとスティール。　建物の中では、老婆の寝室に入る前に皆が集まっていた。

ハイドゥン卿は、手持ち用のカンテラを翳し。

「ふむ。　本当に明かりを置くのに必要な物が何もないな。　寝室には珍しいが、寝る為だけと云う事か？」

すると、フラックターが。

「ですが、ハイドゥン卿。　此方に出された椅子といい、ベットの脇に置かれた机といい。　凡ゆる物が移動された形跡を残すのに、どうしてベットだけはその形跡が無いのでしょうか？」

「ほぉ・・。　これは、確かに」

カンテラを片手に寝室の内部へと入るハイドゥン卿は、元に直された机の上にカンテラを置くと。

「何かを探すなら、ベットの下も当然探す筈だな。　シーツや布団には相当な乱れが在るのにも拘らず。　ベット自体に動かした形跡が無いのは、確かに不自然だ」

兵士二人がベットに近付き、それを持ち上げ退かそうとする。

しかし…。

「ふっ！」

「ん〝んーっ！！」

何処にでも有りそうに見える簡素な木のベットだが、大の男二人掛りでも全く持ち上がる気配すら無い。

「兵士が二人も掛かって、なにを…」

腕力には自負が有りそうなマッジオスが近付き、ベットの下に手を入れて持ち上げようとするも。　軋むベットは、全く動く気配すら無かった。

フラックターは、床にベットを動かない様に備え付けるなど見た事が無く。

「うわ・・、全く動かない」

其処に。

「では、我々も」

「ですな」

ハイドゥン卿の護衛兼用人であるラディオンとスミニクが加わろうとする時。

「無駄な事は止めましょ。　それは、仕掛けの為に備え付けられてるんですよ」

と、ウィリアムの少し砕けた言い草がした。

一同の顔が、居間への入口に向かう。　薄く濡れた上着を叩くスティールと、ウィリアムが入って来る所だった。

ハイドゥン卿は、怪訝な顔を示し。

「“仕掛け”だと？」

ウィリアムは、頷くだけでそのままベットの足回りを通り過ぎ。この部屋に一つだけ在る壁の出っ張りに向かった。

「この部屋の中で、最も不自然なのは・・動かされた形跡の無いベット。　二番目は、家を形成する上でなるべく対角線上か、対にする様に造られる筈の壁柱ですが。　この部屋では、此処に一つしか無い」

フラックターは、部屋を見回し。

「あぁ、建物の強度を保つ為に、重さの掛かる所を太くする壁か。柱の様に張り出す、出っ張りの事だね？」

ウィリアムは、カンテラの方を見て。

「それから、３つ目。　其方の壁の下。　よ～く見ると、何故か床の木と、壁と当たる部分が奇妙にすり減ってます」

その話に、ハイドゥン卿は、直ぐにカンテラを手にして壁際を見る。

ハイドゥン卿の周りに、マッジオスやフラックターもやって来た。

疑うマッジオスは、しゃがんで壁と面した隅を触り。

「んん…？　ん～・・この縁の具合いは、確かに摩耗している様な……、のぉ？」

と、フラックターやジャンダムに向く。

フラックターは、カンテラの明かりの照り返しで今一解らないのだが。　ジャンダムは、しっかりと頷き。

「そうですね。　僅かですが、床の木の縁部分が磨り減り、防腐・撥水の為に塗った樹液の塗料が剥げてます」

マッジオスは、ジャンダムをマジマジと見て。

「解るのか？」

「は。　自分の生家は、樹液を発酵させて塗料や飴を作る職人です」

マッジオスは、それを継がない彼を見て。

「稼業を継がずに、役人か？　お前、次男か？」

ジャンダムは、図星の様に頷く。

「ワシと同じか」

すると、フラックターも。

「一応、自分も次男です」

ハイドゥン卿も合せ。

「私もだ」

4人が、それぞれを見る奇妙な間合い。

ウィリアムは、其処に水を打つ様に。

「そこ、ずっと居ると危ないですよ」

ハイドゥン卿がまっ先に振り返り。

「この場が、か？」

「えぇ。　皆さん、ベットよりも此方へ来てください」

マッジオスやジャンダムは、何が起こるのかと怪訝な顔で動き。

ハイドゥン卿は、何とも理解の行かない様子だった。　スミニクと

ラディオンの両名は、観察をする様な眼をして、何かとウィリアムを見つめていた。

そして。

皆が退くと。　ウィリアムは、石の壁に付けられたランプや蝋燭立てを備え付ける土台と成る金具のみが在るのを指差し。

「土台と成る金具は此処に在るのに、此処にランプは無い」

マッジオスは、胡散臭そうに。

「こんな下町の家だぞ。　金がな…」

と、言いかけて。　老婆の稼業を思い出しては、声が止まる。

ウィリアムは、更に続けて。

「この金具、元は何かが付いていたと云う形跡も無い程に有りの侭。なのに、よぉ～く見ると、表面が汚れている。　この表面の摩耗の仕方やくすみは、手で永きに亘って触られて来た感じですね」

と、金具を触る。

ハイドゥン卿は、カンテラを持ち上げ金具を良く見ようとした時、ウィリアムの手が金具を触れたままに上へと動いたのを見た。

「動いた・・」

すると。

“ガクン”

と、何かが動く音が。

フラックターは、ベットが下がったのを見て。

「うわわっ、ベットが動いた…」

皆の目がベットに向かう時、ウィリアムはベットへと向かう。

「おかしいと思ったんですよねぇ～。　この家の脇に在る井戸って、坑道や地下施設に空気を入れる時に作られた“空道”と同じ形してるんですから」

スティールは、ハッと思い出し。

「あぁ。　マジだ」

ハイドゥン卿も。

「“空道”？　あの、先ず坑道や穴を掘る時。　定期的に空気を取り込む穴を作る・・、空気の井戸と呼ばれるアレか？」

ウィリアムは、ベットが一段下がったのを見て。　ベットが更に下へ押せるのでは、と判断して。　足元に成る縁を触りながら。

「えぇ。　もう、今は鉱山などでしか見られませんが。　まだ街が大きく作られ始めた頃まで遡ると、井戸と空道を区別するために、その形を変えて石で作ったそうです。　只の穴では、地震や大雨で

空道が埋まります。　穴が壊れない様に、石で作る。　更には、空道は菱形か、四角で。　内側を見ると、人が上れる様に手足を掛ける出っ張りが上まで設けられてるんです。　今しがた見ましたが、大分にすり減った形跡が有りました」

と、云うと。　ベットを押した。

すると、先程までハイドゥン卿やマッジオスなどが立っていた床が、急にグっと跳ね。　壁側に持ち上がったではないか。

「おっ」

「何と」

「ほぇ～」

驚く声が上がる中で、ウィリアムは上がった床の元に歩いて行くと。

「やっぱり。　これは、“道守”に任されていた地下への階段だ」

スティールは、ウィリアムの脇に行って。

「“道守”っていや、空道とかを管理する奴だろ？　俺の村にも、道守の一族が居たで」

「へぇ、今でも田舎には残るんですね」

ハイドゥン卿は、ウィリアムの隣に並ぶ場所に来て。　地下へ降りる古い石階段を見ると。

「本当に、何か在った…」

と、呟く。　そして、この事実を直ぐに察して居た若者を見つめる。

「ウィリアムよ。　この穴は、何か重要な意味が在るのか？」

一方。　言われても階段を見下ろすウィリアム。

「昔は、水道を引くのに苦労したそうです。　坑道を掘る様に、体を酷使して穴掘りをする職人が居て。　その職人達の命を預かるのが、“道守”と呼ばれる者だったそうです。　道守は、空気の穴で在る空道を管理し。　街が出来上がった後は、街に引かれる水の管理をしていたとか」

ハイドゥン卿は、カンテラを更に照らす様に階段へと向け。

「街が出来た後も、か？」

何故か、神妙な面持ちで階段を見るウィリアムで在り。

「はい。　街が出来始めた頃は、今のように世界の大半が平和では有りません。　あちこちで内乱が起こったり、領土の削り合いが行われていたとか。　その当時で、街を攻める方法の一つが、飲水を立つ事。　井戸に毒を入れても、流れる川の様に作られる井戸ですから、直ぐに水は綺麗に成ります。　が、地下水道には、必ず水を一定量貯水する水瓶に似た淵が有りまして。　其処に毒を入れられると、流れに洗われずに井戸水を薄く永く汚せるそうですよ」

「だが、それでも毒は薄まる筈では？」

すると、ウィリアムがハイドゥン卿を見返し。

「水の流れを塞き止めるのと同時に行えば、被害は甚大ですよ。スタムスト自治国が内乱時代に、その手法で街一つが潰された過去も在ります。　この国でも、毒に因る事件がアハメイルなどで多発しました。　地下水脈を止め、毒を流す手法でね」

「…」

ハイドゥン卿も軍人の端くれで在る。　軍の戦法の下法には、毒を使った過去の事例に習う物も在り。　それは、使っては為らぬ禁止戦略の一つと成っていた。

ウィリアムは、階段に眼を戻すと。

「国が代わって統治者が変わっても、道守は狙われ続けました。街の地下を征す事は、街を陥落させる力が在ります。　逃げ道、水道、地下蔵。　見えない地下は、色々な用途で使われ。　混乱期には、街を攻める最初の場所として狙われた頃が在ると。　次第に、国は街の地下を知る道守を役人に取立て、国の管轄にして行った。　街を領土として、貴族が支配していた時代から、国が街を管理する様に移行すると共にです」

「…なる程」

超魔法時代の詳しい事は良く解らないが、残る歴史書などをを見る限り。　街を治める貴族の離反が、国の保つ勢力を大きく左右した歴史は、事実で在り。　栄える土地を求め集まる人が、貴族が、街を最初に築いた頃からの話で有る。　国が街・町・村と規模を測り定め。　国の役人が管理を始めたのは、ほんの２・３百年前からの

事だ。　貴族統治時代からの残り物が、こんな所に在ったのである。

ウィリアムは、井戸の方を見て。

「あの空道は、そのまま井戸として利用されたんでしょうが。　この階段は、埋められずに残ってたんでしょうね。　殺された被害者は、それを知って隠し部屋にでも遣って居たんでしょうか…。　この奥に、何が在りますか解りませんが…。　それが、一つの事件を解く鍵に為るといいですね」

スティールは、その場にしゃがみこみ。

「ん～、ウィリアム的な言い方をするなら…。　妙に涼しい風が来てるから、どっかに続いてるな。　ついでに、階段に埃が少ない。　誰かが行き来してた証だな」

と、推理の真似をする。

フラックターは、笑えない顔をで。

（見れば解りますよ）

と、思った。

ウィリアム編・？（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

一日遅れですが、更新です。

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1609g/

エターナル・ワールド・ストーリー

2011年10月30日08時04分発行